
世界をめぐる、銀白の翼

武闘鬼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界をめぐる、銀白の翼

【Nコード】

N1043L

【作者名】

武闘鬼人

【あらすじ】

第一章 Grand Prologue

主人公を殺し、世界を食らおうとして、さまざまな世界を回る「奴」
それを追う一人の青年、蒔風舜

さまざまな世界で、蒔風は勝ち続けなければならない
世界を、救うために……

でもそのたびの行き先は、きつと
さあ！楽しく熱くかつこよく！！いってみよう！！

第二章 Lost Heroes

と！！そうして世界をめぐるって救った時風。
しかし、そうは問屋がおろさない。

一つになった新たな世界で新たな事件が！！

レッツネクスト、はーじまーるよー！！

第三章 クロス X

そして世界は安定した。

しかし！！悲しいかな、悪と言うものはなくならない！！

世界が交錯し、物語が新たに生まれる。

救えるものを、根こそぎ救え！！

第四章 RE：BIRTH

戻ってきたぜ時風舜！！

今回の事件はなんなんだ！？

兵器、機関、死の商人
彼らはそれらを振りまいていく。
そして現る、対翼人兵器

自らの魂

自らの存在

そして、自らの誇り、信念、覚悟

男たちは、新たに踏み出す。

「自分」を、取り戻せ

ゴォー！ファイツツツ！！

検索用：AIR CLANNAD リトルバスターズ！ 仮面ライ
ダー クウガ アギト 龍騎 555（ファイズ） ブレイド 響
鬼 カブト 電王 キバ デイケイド W ^{ダブル} 涼宮ハルヒの憂鬱 ら
きすた うたわれるもの タユタマ バカテス 魔法少女リリカル
なのはA's なのはStrikers とある魔術の禁書目録
ファイナルファンタジー7 ひぐらしのなく頃に Fate/st
ay night 真・恋姫†無双 11eyes 真剣で私に恋
しなさい！！ Angel Beats！！

組み合わせせてなんか独自にいろいろ型作ったり、それで軽く喧嘩みたいなんやったことあるし……

「びみょうにつよいんじゃね？」とか中二なことをいまだに考えている、変人奇人の極みの人間。

「」の中がひらがなになるくらいにはおかしい。

今は友人数名とカラオケで最高にフィーバーして出てきてみんなとそのまま横浜あたりをブラブラしている。

喉が痛むのはそのため

でも俺もよくやるよな〜

後半二時間は俺一人で歌ってたな。

「おまえ一気に三曲連続で入れて手加減なしで歌っててなんでさらにあんなにトバせんのだ？」

「オレのテンションに限界はねえのさ！」

「馬鹿かてめえ」

「あっ！」

「どうした」

「またテンションあがってきた。テンションギヤハハな状態だ！」

「うつせえ馬鹿！誰かこいつ止める！」

「どっやってだよ」

「息の根でも脈でも何でもいい、止める！街中で恥ずかしい！！」

「あっはっはっは！！」

「やつほくくう、蒔風にT U D U K E！！」

「巻き込むな！巻き込まれんな！！」

どうでしょうか？俺は、そして俺たちはいろいろはっちゃけたメンバーなのさ

話し相手は最高に気の合う仲間達。高校からの親友。

どれが俺の発言かは、まあ察してくれ。テンション高いの全部だ。そんな風に街をみんな歩いてた

そしてその時にやってきた。

まあ、世界の終わりってのはあっけないっていろんな漫画とかアニメとかゲームでお決まりの言葉だから言いたかないけどさ、言わせてもらおう。

世界の終わりはあっけなくやってきたんだ

.....

急に隣にとまっていた車がポーンと跳ねて落ちた。
川の水が何人かを飲み込んでいった。
看板が落ちて悲鳴が上がった。

街中でティツシユ渡されるくらいあっけなく・・・なんの前兆すらもなく、やってきた。

それくらい、当たり前のように俺たちの目の前にそれはやってきた。

そしてあいつがあらわれた。

ゴシヤゴシヤの街を歩いてきた、そいつ。
街の状態など一切気にしないで、普通に歩いてきた。

まず気になったのはその黒い人影。顔が見えねえなって思ったら本当にただ黒くて、多分近づいてもわかんねえと思う。
全然顔がわかんねえ。

でもノツペラってわけじゃねえ。
なんだろうな、顔にずっと影がかかって微妙に誰だかわかんないシンとかってあるだろ？あんな感じ。

んで、現在に戻るんだが・・・

オレの10メートルくらい前で止まってこう言ってきた

「貴様がこの世界の最重要人物か？」

気付いたら地面に張り付いていた。

どこを殴られたかも、あまりにも鮮やか過ぎて感じられない。

皆命に別状はないようだが、今すぐ逃げられるようでもない。

これは・・・まずい

あいつは今もまた目の前から10メートルくらい先に立っている。
余裕のつもりか、くそったね。

「この世界、”No Name”の力に合わせて、フルパワーなんぞ皆無なんだぞ？もうちつと楽しませろよ」

この世界？のーねーむ？フルパワーじゃない？

そんなことを考えているオレの視界に、ぶっ倒れている仲間が入ってきた。

みんなオレと同じ感じだ。すぐには動き出せない。

みんな、やられてる。

奴の声が聞こえる・・・

「死ぬ、名前は・・・蒔風・・・か。蒔風舜、オレの力の増幅のために、世界を崩壊させるために、死んでくれ」

・・・ああん？

んだよそれ

「んだそれ！？」

「？」

「てめえは自分の目的のために」

ググッ

「おれ達をの存在を、おれ達の意志を、ぶっ潰すつてのか!?!」

ギチッ

「ああ、だがオレの中で生きるぞ?そして新しい世界で生まれ変わるんだ」

・ふざけるな・

「ふぬ?」

てめえがなんのつもりでここに来たかは知らねえし、何の目的でこんなことをしたのかも知らねえ。

何言つてんだかもよくわからねえがわかることが一つある。

おまえは仲間を傷つけて、関係ない奴を巻き込んで、しかも他者の命と意志などお構いなしに殺すつてことだ。

てめえはおれの敵つてことだ!

「おおー、よく立つなあ。お兄さん感心だ」

畜生が……

「ま、時風……」

ふと、足元のダチの一人が俺に声を掛けてきた

「逃げ、ろ。あれは・・・普通じゃない・・・」

逃げろって？

ああ、おまえらが見知らぬどーでもいい一般人ならそうしてたな。ただどな、幸か不幸か、おまえらは俺の親友なんだ。

それを見捨てて逃げちゃあよ、俺はその時点で俺じゃない。

俺が時風舜であるために、ここは・・・

「友人が逃げろと言っているのに、逃げぬとは。さすがは最重要人物と言ったところか」

「ちげえよバアカ。オレが逃げねえのはよ、ここで逃げたら、顔向けできなくなっちまうだろうがよ」

「そいつらの親にか？それはむd」「ぶはっ!」「???」

「ああわりい。いや、ちげえちげえ。全然ちげえ。お前わかってねえなあ・・・」

ザッ

一歩近寄る

ズリッ

すると影の男は一步後退し、時風から距離をとった。

いったい何が彼の足をさがらせたのか。

恐怖ではない。この男より力は強い。

気おされてでもない。一般人の出すようなものよりも強い迫力があるが、そんなになるほどでもない。

では・・・なぜ？

その疑問を振り払うかのように影の男は問いただす。

「一体・・・何に対して顔向けできないというんだ？」

「そりゃあ、おまえ・・・・・・・・・・」

・明日の、自分の面にだよ！・

T o b e c o n t i n u e d

t h e d a y s 崩壊 序章 (後書き)

どうも武闘鬼人です

この作品は中二なオレが頭の中に溜めにためまくった中二な話を形にしたものです

楽しんでいただければ幸いです

では主人公性説明なんかを(結構重要かも?)

名前: 蒔風 舜

読み: まいかぜ しゅん

好きなこと: アニメやゲーム、楽しいこと、特撮

嫌いなこと: 誰かの意志が理不尽に潰されること

性格: 基本的には気さくで愉快な人。でも時にすごい悟ったような大人になるし、時にはすごく熱くなる。つまりは一定してない。故に話し方も気分で変わるし一人称も一定しない

エセ哲学者を自称し、高二の頃になんとなしに「死と生」について考えていたらそのまま死を理解してしまい、死に対する恐怖が無くなってしまった

でも痛いのは嫌だし、死ぬ気もない。

「なんだこれ」

おや居たのかい

「いたよ！ってかなんだよ死を理解したって。はずかし」

まあそう言うな。お前のことなんだからさ

それに名前はあの「時風 瞬」からきてるんだぜ？
十分だろ

「それはマジか！よっしゃ、ならばずかしくねえ」

よかったあ

ま、君が彼ほどかはまだまだわかんないけどね

「次の話は「奴」との戦い、そして覚醒だ」

無視された・・・

ではまた次回

t h e d a y s 崩壊 ～覚醒～ (前書き)

このthe daysの世界はあと二、三話は続きます

t h e d a y s 崩壊 〱 覚醒 〱

さて

とりあえずは立ち上がった。
大見栄も張った。

でもあいつのほうは絶対強い。それはわかる。
まず勝てない。

だから今のところ方針としては、あいつをここから引き離していか
ないと。

今死ぬわけにはいかないからな。
俺はともかく、こいつらが死んじまう。

なんてことを考えてどうしようか悩んでいると、

「はっはっはっは！いいな！今のお前、最高にカッコよかったよ！」

あいつが楽しそうに笑っていた。

そして次の瞬間つまらなそうな顔をして、

「だから主要人物はよ……」

わけのわからないことを言う。

だが、あいつが言っていることを考えるより、ここを離れるほうが先

だという結論を導き出した。

俺って頭の回転はいい!!

……言ってる場合か。

まず、奴に向かって突っ込んでいった。

男は怪訝な顔（みたいな感じ）をしながら、顔面に一撃必殺である拳を繰り出して来る。

ブアッ、ズシャアッ！

その拳をかわして、奴の背後にまわり、そのまま一発だけ裏拳をかわして距離をとった。

たしかあいつの狙いは俺だと言っていた。

つまりこうやってちょっかい出してちまちま逃げてりゃあいつは俺のほうに来る。

そうやって仲間たちから離れた場所まで行ってあとは時間稼ぎだ。警察やら軍隊やら出てくるだろうから、それまでの辛抱。

「ほら、こいよ！怖気づいたか？楽しい鬼ごっこじゃれこもうぜ
「！」

さらに挑発。しかしやつは攻撃しては来なかった。

「時間稼ぎで治安機構が来るまで待つ、か。まあ及第点だな。悪くはない。だけどこの現象がこの地区一帯だけだと思ってるんじゃないのか？」

「？」

「空に入っているひび。あれは今この世界で空を見上げればどこでも見れるし、崩壊はいたるところで起きているんだぞ？来るわけないだろうよ、警察や軍隊なぞ。ほかのところの被害でてんでこ舞いだ。この騒ぎが起こってからすでに十分たっているのに誰も救助に来ない時点でおかしいと思うべきだったな、それに・・・」

ゴグアツ、バガア！

気づいたらオレの体がビルの壁にまで吹き飛ばされた。

さらにはガラガラと瓦礫がのしかかってくる。

そして身体が完全に埋まり、隙間から奴が見えた。

オレがぶつかつたところだけが崩れたようなので、そこまで大量の瓦礫ではないから死ぬほどではないが、それでも意識が朦朧としてくる。

「言っただろう？そもそもオレはフルパワーが出せてなかったんだ。

この力を手に入れてまだ日が浅くてな。いままではまあ、慣らしだっただんだよ。さてつと・・・こうしてオレはまた新たな世界を食らうのであった。チャンチャン・・・？ 聞こえてるか？」

聞こえてるよ畜生。

あゝくそ・・・このままおわるのか？

どんどんあいつの声が遠くになっていく。

力が、欲しい。

敵がどんな力を持って、どんな攻撃をしてこようと、守りきれぬような、そんな、力が・・・

きたりするのか？」

「ちがいますよ（汗） とりあえず私は神ではないですね。それに近くはあるけど。」

それからあなたは死にかけている状態だけど、まだ死んでいない。その直前であなたにこうしてコンタクトをとっているだけです」

ふーんと思いつつながら、オレは手を挙げる

「はい、先生」

「どうぞ」

「それであなたがコンタクトした理由は何ですか？」

「いろいろスルーしていきなり本題ですか」

「だってつまりは『そこらへんは後で説明するからとりあえず本題』ってことだろ？」

「・・・そうなんですけどね。話受け入れすぎじゃないですか？私のお話というのはスバリ、あなたにあいつを止めてもらいたいですよ」

「いや、そりゃあ・・・」

「嫌なのですか？」

「嫌じゃないですけど、おれじゃあいつには勝てません。どうせ見てたんでしょ？」

「ええ」

「だったら話は簡単じゃ……」

「しかし勝つ方法があります」

「……マジですか」

「マジです。」

あなたはこの世界にしながら、死とはどういうものかを知っている人間ですね？」

「？ん、まあ知っているけど、どうせくだらない妄想の域だろ？」

「いいえ、あなたは一つの真理に辿りついています」

「……はあ？」

「まったく、あきれますよ。好奇心ひとつで齡十六歳で死を理解したことよって、人としてどこるか生物としてその理から外れた者あまりこのような言い方は好ましくないのですが、ようは異端者となった者。だからこそ、この鍵をあなたは受け取る事ができるはずです」

そう言つて自称神（仮）が手を転がすように差し出すと、そこには一つのカギがあった。

物質に見えるけど、わかる。

これは、概念だ。

「この鍵はあなたの力の扉を開く鍵。細かい説明はやはり後ですが、これでもしかしたら、あいつを倒すことができるかもしれない」

「はぁ……それは、非常に魅力的なんだが、大抵こういうものには代償があるものでしょう？」

「ええ、あなたがこの鍵を手にするならば、あなたは世界の理からの外れる、真の異端者になります」

「……………」

「それでもいいならッ!？」

話が途切れた。

そりゃそうだ。オレは話が終わる前にその鍵をつかんだんだから。

瞬間、鍵は光を放ち、消えていく。

そしてオレの体の芯のほうから、カチリ、となにかが開いた音がした。

あきれたような声を出すしかない神様（仮）が頭に手を当てる。

「まったく、少しは悩まないのですか？」

「悩んだってしょうがねえよ、あいつは『世界を食らう』って言ってたんだ。多分あのままじゃよくわかんねえがみんな死ぬ。だってだよ、目の前にある可能性を、掴むしかないだろうが。」

人としてだろうが生物としてだろうが世界の理だろうが、何から

でもはじきやがねってことで。だけど、オレのこの最高にクソだけでもすばらしい世界は、守らせてもらっせ

「……覚悟の、上でなのですね」

「……そんな大層なもんじゃない」

「ともかく、そうならばもうかける言葉はありません。」

「おう、あとで詳細な説明頼むな」

「もちろんです、では」

「ああ」

そして視界が戻っていく。
さ……戻ろうか。

- - -
- - -
- - -

影の男は時風を吹き飛ばした先の瓦礫の山を見て、これで終わりか、というような、少し残念そうな顔をしながら、腕を振るった。

すると男の体から体長二メートルほどの三匹の真っ黒な獣が現れる。

男がもう一度腕を振ると、それが号令であったのだろう、三匹は

一斉に駆け出し時風が埋まっているであろう瓦礫に猛然と迫って行った。

そして瓦礫に飛びかかり、その中に埋まる時風にその牙を突き立てようとしたところで

突如として三匹の漆黒の獣は黒い霧となって霧散した。

男の表情が変わる。

少し、身構える。

ガラガラと山積みになった瓦礫が崩れていく。

もう立ち上がれないであろうダメージを受けたであろう時風がその体を起こしていき、立ち上がる。

もはやその体に傷は見当たらなかった。服はボロボロのままだったが、身体のほうは回復していた。

そして先ほどとは明らかに違う一点に男の視線が集中する。

足がまた一步後退した。

しかし先ほどのように、もはや理由がわからぬわけではなかった。むしろ理由ははっきりした。時風の背中一点の違いによって、男の疑問は解消された。

しかし男の顔は苦虫を噛み潰したような表情になる。

「まさかこんなことになるとは……この世界ではこのようないとはご法度だろう!」

その視線の先には時風が立っており

その背中には

白と銀の混ざった輝きを放つ銀白ぎんぱくの翼が、光をまき散らして、大きく羽撃たいていた。

「チクシヨ・・・それは・・・まさか！」

「さあて、と・・・」

「“No name”に貴様のような・・・」

「はじめるか？」

「翼人が！存在したというのか！・・・管理者だな・・・やっ
てくれるな！」

「明日の俺に顔向けするために、よ」

銀白の翼人がニツ、と笑う

今ここに

長い長い

銀白の翼人の伝説が、始まった

t o b e c o n t i n u e d

t h e d a y s 崩壊 〽覚醒〽 (後書き)

さて、やっと覚醒ですね

蒔風「やったぜおれええええ！」(以下「内はこのいつ)

おめでとう！さあここからが楽しく、そしておれにとっては辛いことになるぜ！

「でもきちんと書けよ？駄文でもなんでもしっかり書けよ？」

書きます書きます書きますともさ

さて、次回のまたその次回あたりでこのt h e d a y sの世界の話は終わり、いよいよ異世界にいきますよ！

「まだあと二、三話も先の話をしてどうするよ」

おっとしまったぜ

あ、なおこれからこの話は、かなり複雑な設定になっていくことかと思われま

この私の拙い国語力では表現しきれずに理解不能なところも出てくるかと思われま

しかもこの主人公の持つ信念というか主義はいろいろと上げ足取りみたいになっています

それらの中でもし疑問点があったら質問してくださいなるべくすべてに回答いたします

「まったく、わかりにくい事になるならかえりゃいいのに」

そうするとお前の人間像がめちゃくちゃになってしまうのだよ

「あー、じゃあがんばってくれYO」

もちろんろん

「今回はこの世界での一応の決着、そして自称神（仮）の説明が入る」

長くてめんどくさいけど、この世界観の説明ってことになるのですみませんがご一読ください

「あとこいつの勢いが乗ればそのまま旅立ちます」

なおこの次回予告は次回の内容と合うかどうかは分かりません

「おい！」

それ逃げろッ！

でわでわ、また次回に〜

t h e d a y s 崩壊 ほとんど説明だなこりゃ (前書き)

結構大変だ…

文章に起こすのがこんなに大変とは……

マジたくさん書いてる人尊敬します

t h e d a y s 崩壊 くほとんど説明だなこりゃく

「大きな力を得ると思ってはいましたが、まさか”銀白の翼人”とは」

先ほどの白い空間で、影の男いわく「管理者」の女性が時風を見て啞然としていた。

「やはり、これはこうなるべき物語だということですか？」

.....

「くそ、もう少しだったのに、管理者めえ」

「管理者？あの女性のことか？」

「はん！お前なにも知らずに力を得たのか？」

「ああ、何も知らねえよ。あの人のことも、お前のことも、この翼のことも。だけどこの力でおまえを倒せるのなら・・・問題ねえよ。それに、あとでいろいろ教えてもらおう事になってるしな」

「確かに、その力なら俺さんを倒せるかもしれないな。だが、初めて手にした力をぶっつけ本番で使って、うまく勝てんのかあ？」

「お前わかってないなあ、いいか？こういう状況はな？大体パワーアップしたら苦もなく勝てるようになってんだよ」

「だが、敵はさらに強かったーっていくこともあるぞ？」

「じゃあ、試してみつか？」

「いーいだろう、こい、貴様を殺し、世界を食らい、オレは理想を手に入れる！」

「……………」

「……………うおおおおおおおおおッ！」

バゲアッ

二人は一気にその距離を縮め、拳はぶつかりすさまじい爆音を生み出した。

だがその場に二人の姿はなく、既に空中に舞い上がっていく

「おおおおおッ！獄・炎！」

「なにッ？」

「弾！」

ドゴッ！！！！！

男が地面から飛び出し、蒔風の顔面に重い一撃を叩きこむ！！

「ブッ！」

蒔風が仰け反り、半歩後ろに下がる
その姿に男も血を流しながら嗤った

「調子に乗るからだ！直撃ならまずかったが、がんばってそれだけは避けてやったぜこんちきしょう！」

「つつあ！てんめ、痛そうな声出しで悶絶してたじゃねえか！」

「何のことかな？」

「しらばっくれた！？何て野郎だ」

ギユアアアアアア

蒔風が手のひらを上に向け、蕎麦屋が担ぐような形に腕を曲げる
するとその上に大量の水が集まってきて、巨大な水の塊が出来上がる

「おらあ！圧水掌！」

ザツツツプアアアアアアアア

頭上からその大量の水が叩きつけられて男は潰され、吞まれ、倒れる。

「てめえが力を得たのがどれくらいかはわかんねえが、まだ扱いきれないんだろ？」

オレはこの力の使い方がよくわかるぜ？頭の中に流れ込んでくるんだ。俺とお前の力の総量はイーブンってところか？だから扱える分、今なら俺のほうが強い！」

本当に今はだけどな、と付け加える蒔風に男が応える

「グツ、はあ、はあ、はあ。そうか、貴様は鍵によってその力を・・・確かに、強い、わけだ。だがそんなことよりいいのか？・・・はやく、オレを倒さなければ・・・世界が崩壊するぞ？」

確かに、そこらじゅうがビキビキといているのが何となくとだが感じ取れる。

このまま長引かせるのはまずいようだ

「まだまだボコし足りないんだが、この世界のことを考えると、終わらせる必要があるようだな」

「確かにそうだろうな・・・だがっ！」

「！」

「オレはこのままトンズらすんぜ！時間さえたてばこの世界はいずれ終わる！そうすりゃオレの勝ちだ。オレはこの世界を壊して食えればそれでいいんだからな！」

「待てこらー！」

「はっはっは！アデュー！」

そして男が前を向いてその場から離脱しろうとしたその時、男の体がガクンと身体が揺れた

?????なんだ?どうした?

いや、わかっている。この原因はわかっている。

オレがこんなことになる理由はたったひとつしかない。

だが認めたくない。

二個目の世界でこんなことになるなんて、いきなり出鼻がくじかれるなんて!

駄目だ振り返るな、振り返ったら現実になる!

しかし男は振り返った。本人も分かっていたのだろう。見ようと見まいとその脅威が迫っていることは間違っていないことを!

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!」

「ああああああああああああああああああああああああ!」

蒔風が男の後襟をつかんで引き寄せる!

「こ・れ・で・お・わ・り・だ!」

「ちつくしょうがあああああああああああああ!」

堅く強く握られたその拳が男を砕かんと振り下ろされる!

信じて、それを形にしているのです。

そしてこれらの世界・・・物語には必ず主人公、我々管理する者からは「最重要人物」と呼ばれ、またそれを取り巻く人物などを「主要人物」と言います。

「ん？確かあいつ俺のこと・・・」

はい、あなたもまたこの世界の最重要人物、主人公なんですよ？
ほかの世界ではあなたを取り巻く環境が何らかの形で作品となっているんです

「なんか、恥ずかしいな」

まあまあ。

そしてそれらの世界は主人公と中心に構成されて行きます。
いわば主人公は世界の中心なのですよ

こう思ったことはありませんか？

『なんで主人公はこんなにも色々とあるのだろう』と

しかしそれは逆です。『そのようなことがいろいろある人間が主人公となる』のです

つまりなるうと思えば誰でもなれるのですよ、主人公には

それで彼のことになります。

彼は自分の世界でそれなりに普通に暮らしていました

しかし彼はある時、これらの世界の構造に気付いたので

そして彼が調べた結果彼は・・・

脇役でした

「脇、役？」

ええ。そうですね、さしづめ「学生G」とか「通行人Z」とかそんなものですかね

「GとかZって」

それほどまでに彼は脇役だったんですよ。

そして思いました

なんで俺は主人公じゃないんだ？と

「待ってくれ。あいつはそんなに駄目な奴だったのか？」

いいえ？彼は決して悪い人間ではなかったんですよ。

どこにでもいるようなごくごく普通の人間でした

しかし彼は知ってしまったのです

そして、自分のほうが優れているんじゃないか？

ほかの世界で自分は適当にあつかわれているのはなんでだ？

もしかしたら俺だけでなく俺の友人たちもないがしろに扱われてるんじゃないか？

だれも・・・俺のことは知らないんじゃないか？

「それは・・・奴の勘違いだし、どうにかできるんだろう？主人公と友人にでもなればいいじゃないか」

そうであることは彼も知っていたでしょうがもう止まりませんでし

た。

結果、彼はその世界の最主要人物を殺し、世界を壊してしまいました

「あれ？主人公が死んだら世界が崩壊するのか？主人公が死ぬような話はたくさんあるけど、その後も物語・・・世界は続いているぜ？」

いいえ、ただ最主要人物が死ぬだけでは世界崩壊のトリガーにはなりません

重要なのは世界はどのように成り立っていることを理解したうえで殺害することです

故に、彼の世界は崩壊し、そして彼はその世界を、自らの内に取り込んだのです。

彼のすべてを含めた、世界を。

彼は世界を取り込み、壊れました。今はただあらゆる世界をとりこんで、それを再構築して、新たな世界を作り出そうとしています。

世界一つのエネルギーは莫大です。それこそ翼人一人に匹敵するほどの、ね

「そうそう、でき。この力とあの鍵はなんだったん？あいつも翼人とか言ってたけど」

さて、世界は大まかに分けると五つに分類されます
すなわち

『何の変哲もない日々がただ淡々と過ぎていく世界』

『人が何らかの特殊な力を得ている世界』
『科学技術が異常に発達している世界』
『基本的には普通の世界だが、強い人の想いが奇跡を起こす世界』
『秩序を失った黒い世界』

これらは順に

” no Name ” ” フォルス ” ” ライクル ” ” 輝志^{きし} ” ”
LOND ”

と呼ばれてます

「統一性ないな」

そもそもがバラバラの世界の区分ですからね
せいかいはこれらの属性をいろいろと組み合わせているのです

そうですね、いくつか例をあげてみましょう
『涼宮ハルヒの憂鬱』という世界があります

「あ、知ってる知ってる」

でしょうね。

この世界は上つ面は” no Name ”ですが、それに” フォルス ”、” ライクル ”が入り込んでいます。
あとはほんの少しの” LOND ”ですかね

「あの世界はそれなりにしっかりしてるぞ？それでも” LOND ”があるのか？それに宇宙人とかの存在はどうなんだ？」

宇宙人や異世界人は日本人とアメリカ人の違いのスケールアップにすぎません。

この境界を越える方法によって分類されます。

あと、大体の事件が起こったりするようなのは”LOND”に分類されます

もうひとつの例を

『ひぐらしのなく頃に』という世界では、”輝志”と”LOND”
がすべてを占めていますね

「なるほど」

あなたがいた世界は”no Name”です。そこにおいてあなたのように力を得るとはどのようなことかわかりますか？

「そういう世界なんじゃないの？もともと”ライクル”が入ってたとか」

いいえあなたの世界は純粋な”no Name”です。それはあり得ません。

人は本来力を持っているのです。ただ生まれ落ちた世界によってそれは変わってきます。

”no Name”にいる人はみな扉が閉じている状態なのです。そこで渡したあの鍵を使ってあなたの扉を開けたのですよ。

力をすんなり使えたでしょう？それはもともと持っていた力だったからですよ。

「ああ、だから代償は世界の理から外れるだったのか」

はい

「でもほかの世界の奴に頼むこともできたんじゃないか？なんで世界の理を外させてまで俺に？」

それは、彼の正体が……

.....

管理者が口を開いて「奴」名前を言う。

その名はよく知る「あいつ」だった。

.....

「なるほど、そりゃ俺が適任だな」

ええ、そしてその翼、翼人についての説明をいたします

そもそも、翼人の翼は、力を使役するもののひとつのリミッター解除装置なのです。

莫大なエネルギーを使う時にはその反動を吐き出すための「なにか」が必要になります

「車の排気口みたいなの？」

そうです

それがあの翼です

翼人になる人間は限られており、誰でもなれるようなものではありません。

また、生まれも関係ありません。

翼人の翼は物理的なものではありません。だから、翼が生えていてたあなたの服の背にも、穴は空いてません。まあそれで攻撃することもできますけどね。

翼人はいくつかの世界に一人という低確率で現れます。しかもその持ちうる力の大きさから、一生のうちはその力に目覚める者は、ほんの一握りです。

そして翼人となるものにひとつだけ共通点があります。

それは

「それは？」

良くも悪くも、人に意思を尊重するものです。ただ一方的に叩くにしても、相手の意志を知った上で、理解したうえで否定してきます。故に翼人は素晴らしい善人とも呼ばれますし、とんでもない悪人もいわれることもあります

「つまりはすべての理解者ってことかい」

ええ、理解なしには否定も共感もできませんから。

そして翼人の翼はそれぞれ色が違い、またつかさどる人の想いも異なります

あなたの色は確か銀白でしたね？

「ああ、この色は何の思いなんだ？」

それはあなたにしかわかりません
色と想いの組み合わせも、一致しないのです。

「んじゃ、ちょっと待ってくれ……ハアっ！」

バサア

なにもここでやらなくても……

「いーじゃんいーじゃん。んーっと、俺の翼は……希望、人の願
い、言っちまえば欲望だそうだ」

！？やはり……あなたは規格外ですね

「これで説明はおわりですか？」

ええ……「んしょっと」

「そういえばなんでさっきまで響くように話していたんだ？」

「それっばいでしょうっ？」

「なるほど……（つくづくノリがいいな）」

「ではあいつが向かった世界に行ってきたもらいましょうか？」

「まっつてくれ、そこまでやるのか？…！」

「何を言っているのです。そうしなければあなたの世界は本当に崩壊してしまいますよ?」

「……なんでさ」

「一度「奴」のような脅威にさらされた世界というのは、その後にはワクチンのような防壁を張るのです。」

「奴」ならば破れるでしょうが、それには莫大なエネルギーがかかります。」

世界によつては新たな物語によつて再度入れることもありますかね。そこであなたは世界を守ろうとしていくのですから、その世界にはすんなり入れます。その状態で戦えば……。」

「俺が勝つから、無駄になる。だからあいつは一度失敗した世界には入り込まないって?」

「その通り。ですが彼がほかの世界を食らい強く……つまりはバージョンアップしたらその防壁は効きません。彼は素通りしてしまします。しかもあなたを遥かに凌ぐ力を持って」

「それじゃ、オレは、」

「ほかの世界まで「奴」を追い、勝ち続けなければなりません。ただ一度の敗北も許されません。まければあなたの世界だけではなく、ほかの多くの世界の崩壊につながります」

「……いいぜ。」

「え?」

「なんだ？その意外そうな顔。いいぜつてのよ。やってやるさ。」
「奴」が「あいつ」だってんなら俺に勝てない道理はねえ。世界を救
つてやるさ。」

「いいのですか？どれほどの旅になるかもわからないのですよ？」

「おれさ、昔からヒーローが好きでさ、それでも救いきれないキヤ
ラとかが居るのとか見ると悔しくてさ。もしヒーローになったら絶
対こつしよつってきめてるんだよな」

「どのようなことを？」

「いいか？よく聞いとけよ？」
「救えるものは根こそぎ救う！」
「っ
てな」

「・・・あなたの覚悟。確かに聴きとどけました。ではこれが世界
へのゲートです」

すると白い光に包まれたゲートが現れ、「Gate Open . . .
the days」という声が聞こえた

「おおすげえな」

「それと・・・ああ、来たようですね」

「なにが？」

「あなたの武器です。どんな武器だかはわかりませんがきつとそれ

なりのものが来ますよ」

「あそこまで強くなってさらに武器かよ」

「あなたは勝ち続けなければならないのですよ？強すぎて悪いことはありません」

「む、たしかに」

そんな風に話していると、刀が四本落ちてきた。日本刀である。柄のところそれぞれ「風」「林」「火」「山」と書いてあった

「四本も？こりやすげえ……」

「これは、まさか……！おそろく、まだ来ますよ！」

「へ？」「ひゅんひゅんひゅひゅん ととととつ

間抜けな声を出した蒔風の目の前をさらに四本の刀が落ちてきた。あと数？前に出ていたら彼の旅はここで終わっていただろう。

「あつぶね！」

今度のはトンファアの形をしていて、本来相手を殴るための横の棒の箇所には、刃が付いていた。

日本刀をトンファアと合体させたような形をしていた。殴りさまに相手を切れそうである。

とつての先についている球にそれぞれ「天」「地」「陰」「陽」と

書いてある

さらに四本、最後に三本、落ちてきてそこで終わったようだ

さらに落ちてきた四本は、直径三十センチぐらいの円を四分の一にしたようなものでそれぞれに青龍、白虎、朱雀、玄武の意匠が彫りこまれていた。

最後の三本は、幅が二十センチほどの、ありきたりな西洋剣の形をしている。

しかしそれぞれに獅子、天馬、麒麟の意匠が彫りこまれている。

「十五本!?なんでこんなに・・・」

「・・・十五天帝。まさかこの刀の持ち主がこんな形で、しかも何もなければ”no Name”で・・・」

「???十五天帝?」

「ええ、この剣は十五本一刀の合体剣です。その一つ一つもすごい性能を持っているのですが・・・」

「・・・そのとおりです」

「「!!!???」」

いきなり男が現れていて、二人は驚いた

「・・・いきなり失礼いたします。・・・あなたが我らが主ですか?」

「我らが主？何の主？」

「ああ．．いきなりでわからないのですね．．．わが名は青龍。
主よ．．あえて光栄だ」

「えっと」

「．．．私はそこに刺さっていた青龍の絵のついた剣の変化体です」

「ふえ？」

「．．．ほかに、白虎、朱雀、玄武があります。大きな獣の姿の
獣神体．．．このような人型の人神体．．．待機状態の剣神体の三
つの体系がございます」

黙々と語る青龍に圧巻されてしまう蒔風は

「お、おう」

としか言えない。なんかさっそくへタレてきている

「．．．我ら四刀、龍虎雀武^{りゅうこくすゑぶ}．．．よろしく願います」

「説明下手だな、青龍よ」

と、そこにまた男が一人

「．．．獅子か」

「またでた!？」

「また出たとは失礼な。私は獅子。そこにあった西洋剣の体をした三本の剣のうちの一つだ。まあ、青龍たちと形が違っただけで同じだ、そうだな・・・召喚獣だと思ってくれていい」

「ああ、なるほど」

「ほらな？青龍。このように簡潔に言うのだよ。だがまあ三形態の説明はめんどくさかったからな。その手間は省けた」

「・・・気にするな」

「ふっ、寡黙で謙虚な奴よ」

「えっとさ・・・」

「では挨拶も済んだので我らはこれで」

「・・・必要となった時、呼びたいと思った時。お呼びください」

「ああ・・・わかった」

「「では」」

といて二人はそれぞれの形に戻ってしまった

「では武器も手に入れましたね。おそらく相手も今頃は十五天帝と対となる剣を得ているでしょう」

「これでまたイーブンってわけか」

「やめますか？」

「じょーだん（笑）じゃ、行ってくるぜ」

「ちなみに向こうの世界に行ったら、あなたの世界で得た作品世界の知識は消させていただきます。おもに登場人物とか、話の流れとかですね」

「えー？知ってたほうが有利じゃない？」

「向こうの世界の人間も生きています！プライバシーの侵害、ダメ、絶対」

「納得。そりゃ確かにいけねえ」

「でも必要な情報は送ります」

「どっやって？」

「頭に」

「頭に？」

「ええ」

「わかりやすいなそれは」

「ああ、それと、向こうでの移動手段としての足はどうしますか？」

「バイクを一台と車一台ありゃいい」

「バイクはともかく車の免許は？」

「そんなもんいるのか？」

「まあいいでしょう。運転の仕方は頭に直接送り込みます」

「あんがと」

そして彼は旅だった

まずは最初の世界へ……………

……………

光のゲートをくぐってついた先は坂道のふもとだった
両側に桜の木がたくさん植えてあった

「満開になったら凄そうだな」

季節は秋ぐらいだろうか。

気づくと俺の服は高校の制服に変わっていた

内ポケットをまさぐると転校手続きの用紙が入っておりクラスは三年D組となっている

学校名は・・・

「私立光坂高校、か」

そして頭に情報が流れ込んでくる

「CLANNDDの世界か」

t o b e c o n t i n u e d

the days 崩壊 ほとんど説明だなこりゃ (後書き)

さて、やっと来ましたよ、ほかの世界！

蒔風「本当にな」

でも次にはお前の能力の設定を出すつもりなんだ

「話にはいかないのかよ」

管理者さん「あのすみません、わたしの出番はもう？」

ええ、ありませんよ？

この話が完結するころに……

管「ざっけんなよ！名前もまだ決まっていけないでしょうに！」

蒔「たしかになあ。地の文でも自称神（仮）とか管理者とかな」

管「あげくただの女性の時もありました……しくしく」

んで、どうしたいの？

管「私を出せ！人間になって蒔風についていく！」

蒔「ウエ！？」

そこ、オンドウルしないで

いや、そりゃ話の流れ的に無理っていうかしたくない

何よりオリキャラは「奴」とこいつで十分じゃ！

蒔「そういえば結局「奴」って誰なんだ？いやまあオレはもう知ってるけどさ」

管「おらあ！作者そんなんでいいのかあ！？」

あー、それは中盤で明かしますから待っててよ

管「てめえおら、私をだせい！管理者なのに！」

管理者はなおのことこっち側にいてもらわないと・・・
ん？ひらめいた！（ピコーン）

このあとがきのオレの話相手にあなたを採用します！

蒔「あれ？オレは？」

来たい時に来れば？

蒔「つめてえ」

管「やった、やったよ！アリスはやりました！私はなんとか出番を手に入れたー！」

蒔「あ、名前アリスって言うんだ」

なおここでのアリスさんは本編には関係ありませんよ

蒔「さて次k「さて次回わ！」とられたよう」

管「ついに旅立った時風、さてこの世界でどのようにたちまわるの
でしょうか」

ではまた次回

この街の、願いの叶う場所へ・・・

設定 **まずは武器編**

【武器編】

- 天剣 - 十五天帝

十五本の刀剣で一セットの合体剣

さらに細かく4、4、4、3本での組み合わせがある

どれも組み合わせの互換性があるので思いのままに組み立てられるが、組み合わせた結果が使えるものであるとは限らないので、使われない組み合わせもある

どこにつけられるかは決まっており変更不可

組み立てるときにはカチャカチャと組み立てるのではなく（クラウドの合体剣みたいではなく）、一つに合体する（融合といったほうが近いかもしれない）。

また常に帯刀されているわけではなく、蒔風の意思に反応して、現れる。（キープレードみたいに）

「風林火山」

日本刀の形そのまんまである。四本

蒔風の両方の腰に二本ずつかけられている

柄の部分にそれぞれ一文字ずつ字が入っておりそれがそのまま名前になっている

柄と柄のお尻の部分を組み合わせ可能で、二本にしてバトンのように振り回して攻撃できる。

敵を切り裂くことに向いており、斬撃を飛ばすことも可能である

なお、「林」には防壁を張る力が、「山」には治癒の力が宿っている

「天地陰陽」

トンファーを模した刀。四本

取っ手の先についている玉にそれぞれ一文字ずつ字が入っておりやはりそれがそのまま名前になっている

蒔風の両腕の前腕の内側と外側に一本ずつ、取り付けられている。取っ手は折りたたみられて邪魔にはならない

取っ手の先と先を組み合わせて相手に向けて使う

こんな形

二本が

合体して

こうなる

相手を突き刺すことに向いており、突きの斬撃？を飛ばせる

「龍虎雀武」

「りゅうこざくぶ」と読む

それぞれ直径三十？程の円を四分割したような湾曲剣。四本
蒔風の両方の脇下に取っ手が前に二本、後ろに二本、それぞれ向い
て収納されている

一本一本に青龍、白虎、朱雀、玄武の意匠が彫りこまれている

なおこの形はあくまで待機状態であり開放するとそれぞれ異なった
形となる

青龍 剣「青龍刀」

白虎 釵さい「白虎釵」

朱雀 槍「朱雀槍」

玄武 盾げんぶじゆん「玄武盾」

の四つである

解放状態での組み合わせも可能だが、あくまでこの四つの間だけに
なる

待機状態で組み合わせると円盤になり、投げつけて攻撃することも
可能

その形態の多さからもっとも多様性に富む

また呼びかけに応じ、名前の通りの神獣が出てくる。

「獅子天麟」

「ししてんりん」と読む

幅二十センチの西洋剣。このセットのみ三本である

蒔風の背に一本は真っ直ぐ、二本はクロスした状態で鞘に入って居る
それぞれに獅子、天馬、麒麟の意匠が彫りこまれている

組み合わせるとバスターソードの形になる

叩き伏せるという攻撃に向いている

巨大なものを破壊するときには重宝する

龍虎雀武と同じように呼びかけに応じ、名前の通りの神獣が出てくる。

蒔風「こりゃまた凄いな」

おっと待ってくれあくまでこれは【武器編】だぜ？

蒔「まだあんのか!？」

ほら、おまえはやってた 管「獄炎弾とかさ!」ウエイ!?

蒔「おお管理人さん」

管理人？「ちがう！アリスって呼んで！」

こういう場面で出てこないといけないからね

アリス「そうなんですよ、ちなみにこの武器強すぎじゃね？とか思ってるそのあなた！そんなことはありませんよ」

蒔「そのあなたって……いるのか？読んでるやつ」

それを言うなよ！読んでほしいよ！こんな駄文だけどさ！

蒔「確かに主人公としては読んでもらいたいな。そういえば「奴」もなんか手に入れてるみたいなこと言ってたけど？」

ア「そうですね。さまざまな世界に多くの武器がありますが、その中でも特に強力な剣はそれに対となるものが存在するんですよ。まあ大抵は概念的なものであったりするんですけどね。十五天帝にはきちんと存在します」

つまり「奴」も十五天帝と同じような力を持つ武器、おそらく剣を手に入れてるだろうな

蒔「うーわ、面倒くせえ」

そういわないでさ。で、どうする？

このまま能力編いっちゃう？

ア「こんがらがらから次にしなさい、わけなさい」

蒔「絶対そのほうが出番増えるしね」

そういうことんか

っていつか後書き欄でもないのにそれっぽくなっているぞ？

ア「いーじゃん、いーじゃん・・・いーじゃん!」

蒔「すげーじゃん、って言いたかったけど内容に合わなかったみたいですなあ」

次は能力編だよ!

蒔「おいらの強さはどこまで伸びる?」

設定 能力編だよ！（前書き）

本当にめんどくさくてしょうがない

設定 能力編だよ！

【能力編】

《属性》

「獄炎」
ごくえん

炎と爆発の力。

灼熱の力で相手を焼き払う。

力をためる動作は胸の前で両手をボールをなでるように回す

「圧水」
あつすい

水と勢いの力

大量の水で相手を押し流したり叩き潰したり押し流したりする。

敵を無力化させるときに便利。

力をためる動作は手のひらを上に向け、顔の横に持ってくる

「雷旺」
らいおう

電気と爆ぜ散る力。

雷の力で相手を地形ごと巻き込んで吹き飛ばす。

力は他のものと同じだが、方向性を決めるだけで、あとは勝手にその先のものを吹き飛ばしてしまうので使い勝手が悪い。

威力を弱めればコントロールも多少出来るがたいした威力は出ない力をためる動作は両手の指を組み合わせてそれを引き離して、手と手の間に溜めていく

「土惺」どせい

土とうねりの力

その圧倒的な重量で相手を押しつぶす

圧水と違い相手を「倒す」ではなく「斃す」になってしまったため。

やはり使いにくい

力をためる動作は両腕を後ろ斜めに突きだして、引き抜いてくるようにあげていく

「絶光」ぜつこう

光と射抜く力

瞬間的な貫通力に優れているが、強いのは正面だけで、横からには弱い。

しかしそれを無視出来る貫通力と、スピードを持つ

力をためる動作は右手の指を指を伸ばしてそのまま引いて力を込める

66

「混暗」こんあん

闇とひきつける力

発動させた面に重力を発生させる

しかしもっぱら使われることはなく、他の属性同士を組み合わせるときをつなぎとして使われることが多い。（例：獄炎と土惺を組み合わせるときに、まず混暗を作り、そこにこの二つをぶち込んで混ぜる）これはひきつけるという重力の力による特性である
力をためる動作は下に手のひらを向けてかざす

「嵐風」らんぷう

風と舞い上がる力

しかし、蒔風はこの力を気持ち程度しかもっていない。つまり、攻

撃にこれだけでは攻撃に使えない。
せいぜいがある場にそれっぽい雰囲気と作り出す程度である。
しかし、十五天帝によって斬撃と飛ばす際に、作り出すための真空
と、方向のコントロールには欠かせない力である。
使うことはないので力をためる動作はない

《系統》

「弾」だん

溜めこんだ属性を凝縮し、相手に投げつける
一気に膨れ上がるので、獄炎での威力が一番高い
打ち出す動作は思いつきり投げつけるようにする

「掌」てし

大量に集めた属性を相手の頭上から落として打ちのめす。
打ちのめした後に押しやっていくために、圧水との相性が一番良い
打ち出す動作は手にひらを上に向け、相手を押しつぶすように思いつきり振り下ろす

「砲」ひょう

手に集めた属性を前方に打ち出す（かめはめ波みたいに）
前方に居るものをなぎ払うことから、雷旺での使用が最も強い。
打ち出す動作は指を爪のように曲げ、そのまま相手に手のひらを突きだす。

しかし雷旺の場合はコントロールが難しいため、両手でその手を作り、手のひらどうしを向けて、そして相手につきだす。
普通に打ち出すと前に向かって拡散してしまって威力が落ちる

ためである。他の属性は普通に打つても大丈夫

「竜」

巨大な竜の形（バオウ・ザケルガの様な）に固めた属性を相手にぶつける

なおこれで作られた竜には超高度な追尾能力が付加されており。敵を追い続ける。

他の属性でも威力は高いが、飲み込み、押しつぶすことと、相手を選択して攻撃できることから、土俵で形作られることが一番効果的で有効である。

打ち出す動作は相手を認識して、両手を標的に向かってバツ、とクロスさせる

「尖」

腕の細さ程度の砲撃を相手に打ち出す

衝突面が小さく、スピードもトップクラスなので、絶光での威力が絶大である

打ち出す動作は指を真っ直ぐそろえて、相手にまっすぐ突くように伸ばす

「陣」

名前の通り周囲に属性の場を作り出す。

あくまで足場だけなので、混暗ぐらいでしかたいした威力は発揮されない。

さらに足場がないと発動は不可能
発動の動作は両手をパツと広げる

上にあげた《属性》と《系統》を組み合わせて攻撃していく
その際の技名は《属性名》 + 《系統名》

例：雷旺砲、土惶竜など

また使用する動作の手順も同様に組み合わせたものである

慣れていくにつれて、動作はしなくても済むようになるが、しっか
りやったほうが威力は高い

蒔風「・・・・・・・・・・」

アリス「・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・

蒔「多すぎじゃ！こんがらがるわこんなもん！」

ア「いいじゃないですかあなたは！出れるんだし！」

蒔「でれりゃいいならここでがまんしろよ！」

ア「黙れ勝ち組め！」

てめえらづるせえぞツコリア！

蒔、ア「ごめんなさい」

よし許す。

蒔「いやでもさ、これはいくらなんでも多すぎないか？」

ア「たしかに、いくら勝ち続けるためとはいえ、これは……」

なにをおっしゃいますか！力があるからといってそれをバカスカ使うとでも？一番そのシチュエーションに合ったものを使いますよ！

ア「ちなみに基準は？」

どれを使ったら熱く決められるかなってこと

蒔「熱いのはいいよな！」

だよな！いいよな！かつこいいいな！

蒔「かつこいいのは正義！」

ジャステイス！

蒔「FU-FU-！」

いえー！

ア「二人が盛り上がりすぎて暴走したのでここからは私が。こんな
にめんどくさい設定をここまで読んでくださってありがとうございます
ます。これらの力を使って、時風は世界を救っていきます」

多分でも他の世界でまた力をつけたりしそうだよね」

時「これ以上増えんのか!？」

ア「帰ってくるの速いな!」

まあねん。いや、まあ仮の話だけだよ。

時「かつこいいのにしてね?」

あつたり前さ!

時「いよつ、さすが作者!」

いやつふう!さすがオレえ!

ア「また逝きましたか、次回から本格的な「CLANNADの世界」
での活動ですお楽しみください」

ちなみに一つの世界にいつ時間は世界によって長かったり短かった
りします。

もしもあなたのお気に入りの作品が短かったり、いらぬのが下手
に長かったりしたら・・・申し訳ございません。

では、ここでおしまいたしましょ

ではまた本編で

CLANNAD ～邂逅～（前書き）

8話（有紀寧編の最後）のあとの話になります。

アニメも原作もやったけど、うる覚えになってしまっている……

間違いがあったら教えてください（泣）

CLANNAD へ邂逅へ

この世界に降り立った時風は、とりあえず書類に書いてあった光坂高校に向かい職員室に向かった。

どうやらこの転校は急に決まったものらしく、なんと一昨日来た話なのだそうだ。

そのくせクラスはA組とかではなく、なんと中途半端なD組だった。

しかもプロフィールにはろくに書かれていない。

おそらく世界が時風をこの世界に置くための「役割」なのだろう。

時風舜、19歳。今更になって高校生。見た目はまだそれで通るのがわずかな救いか。

教師に連れられて三年D組に向かい、HRで簡単な自己紹介を済ます時風。

後ろの席の方で金髪童顔の生徒が「なんだよ男かよ。急な転校性は普通女子だろ」とブチブチ文句を垂れてグダっていた。

（俺もその意見には賛成するし、それは夢だ。が・・・オレは自ら夢を壊してしまったようだ・・・）

内心がつくりとしている時風が気を取り直して考える。

（それよりも・・・この教室に標的とされる最主要人物がいるのだろうか？）

そんな事を考えていると、教師が席を教えしてくれたので、その席に向かい、おとなしく座る。

「えーっと、クラス委員は・・・藤林だったな。急な転校だからいろいろ教えてやれ。蒔風君も、わからないことがあつたら彼女に聞くんだ。」

蒔風を席に送り出しながら教師が言う。

そして、進路相談とか三者面談とかの説明をして、HRが終わった。

HRと授業の合間の時間。

その間に女子生徒が蒔風の席に近づいてきた

「あ、あのう・・・」

消えそうな声で話しかけてきた彼女にあいさつしようとする蒔風だが、いかんせん名前がわからない。

「あー、えつと・・・」

「あつ、わ、私クラス委員の藤林 涼つて言います。」

「あ、どーもどーも。転校したての蒔風舜つて言います。よろしくどーも」

「は、はい。よろしく願いたします」

「いやいやこちらこそっ！（ビシィー！）」

「ひえっ！っっ、こちらこそ！」

といったところで、一人の男子がやってくる。

「おい藤林。いつまでやるつもりだ？それと、こいつはおとなしめな奴だから、あまり大きなリアクションはとらないでくれ」

「（むう、確かにそんな感じだな。すまないことをしてしまった。）
そうでしたか・・・（しよぼん）えっと、名前は？」

「ああ、気にすんな。ただのこいつのアドバイザーだ。」

「彼は岡崎朋也君って言います。」

「どづも、岡崎さん」

「よせよ、同年代だろ？岡崎でいーよ」

名前を勝手に言われたことにたいした反応もせず、岡崎という男は手をひらひらと振りながら自分の席に戻っていつてしまった。どうやら無意味なやり取りをしていた蒔風達を止めに来ただけだったらしい。

「藤林さん。わからないことがあったらよろしくお願いします。」

「はっ、はい！まかして下さい！」

こんなやり取りで締めくくり、授業が始まり、昼休みになり、午後の授業が始まり終わり、放課後になった。

「さあって。どうしようかな」

帰りのHRが終わり、蒔風は自分の席で鞆の中をぐそぐそとあさってみた。

ちなみにこの鞆は蒔風がこの世界に来た時にすでに持っていて、勉強道具なども一通り入っていた。用意周到な世界である。

そうして漁っていると、教科書などに押しやられて底の方に一枚の紙があった。

「入部届け？」

それは部活動に入るための申し込み用紙だった。

書き込むべきところにはもうすでに書き込みが済まされており、部活名の欄には「演劇部」と書かれていた。

……この部に向かえ、ということなのだろうか。

善は急げと演劇部の活動場所を探し出そうとした蒔風だが、早くも障害にぶち当たった

部室の場所が、わかりません!!!!

教室で聞くころにももう誰もいなかったから聞きようがない。

どうしようかと思いつながら校内を徘徊していると、小さな影を視界にとらえた。

第一生徒発見！

向こうも時風に気づいたらしく、こっちに向かってきていきなり指をさしてきて、叫んだ。

「変人がいます！学校をうろろろしている変な人です！」

いきなりだった。

その少女は本当に高校生か？という背丈に、星型の木の彫り物を持っている。

変な人。確かに校内うろろろしてれば変な人だ。というか時風は基本的に変な人だ。

しかしこう言うということは、時風はさっきから見られていたということである。

これはまずい。これでは「奴」にいつ寝首をかかれるかもわからない。

「どうしたんですか！・・・はは、んこの風子に恐れをなして声も出ませんか！」

その声に当初の目的を思い出し、時風は質問をしようとして口を開いた。

「おお！そつだそつだ、風子っていうのかい？えっと「なぜ風子の名前を知っているのですか！？まさかエスパー？未知との遭遇ですか！？」・・・」

未知との遭遇はエイリアンですよお嬢さん

「さつきから自分の名前連呼してればそりゃあ・・・」

「しまった！風子としたことがこれは不覚・・・ッ」

蒔風が呆れながら、ふと彼女が手に持つ彫り物を見て、思いついた。

（あーどうしよう、この子めんどくさいぞ。そう言えばなんでこんな星型のを・・・いや、待て。この彫り物、まあ星だろうが、おちよくってみるか・・・）

「ひとでの彫り物かい？」

「！！！！！！変なこと言ってごめんなさい！あなたは素晴らしい人です！」

そんな反応されては蒔風も困惑するだけだ。彼も大概に変人なのだが・・・

「（ええー！ー？もうわかんないよこの子。冗談で言ったのに）えっとだな！風子さん！」

「！！はい！何でしょう！」

急に礼儀正しくなった風子に対し

おお・・・なんでこんなに急に従順になるんだこの子は？？
と思いつながらも部室の場所を聞く蒔風。

「演劇部ってどこで活動してるか知ってるか？」

「知っています！風子についてきてください！」

そう言って風子は歩き出した。これで迷わずに済む。
そしてほどなくして演劇部の前に到着した。

「では！風子はこれで！」

「ん？ああ、ありが・・・と？」

振り返るともうそこには風子はいなかった。

いったいなんだったのだろうか？

と、思いつつも、本来の目的を果たすべく、時風は演劇部部室に入って行った。

「えっと、ここって演劇部であってますか？」

中に入っていく

中には見知った顔が三人いた。岡崎と藤林と金髪童顔である。

「時風君じゃないですか。どうしたんですか？」

「いや、来てみただけなんだけどね」

と、面識のある藤林が話しかけてきた。

すると同じような顔をした、しかし気は強そうな女子が近づいてきた。

「あんた誰？・・・ああ、今日急に転向してきたっていう奴？入部希望者？」

「まあ、そんなところですかね？・・・」

「ああ、あたしは藤林杏。こっちの椋とは双子であたしが姉ね。・・・

・おい！部長ー！入部希望者だぞう！挨拶しなさいよー！」

と奥のほうに声を飛ばして誰かを呼びだした。

すると部長と呼ばれた気の弱そうな女子がうつむいて何かをつぶやいていた

岡崎もそばにいる。

??なんて言ってるんだ？あんぱん？

「え・・・えつと、演劇部の部長をやっている古河渚です。入部ありがとうございますぞいまふっ！」

と言いながら手を出してきた。握手か。

しかし大丈夫なのか？噛んでしまうような演劇部って

と思いつながら伸ばされた手に握手する

すると情報が頭の中に流れ込んできた

彼女は・・・最主要人物に最も近い主要人物か・・・さしづめ主人公の彼女ってところか？

主人公が女なら親友ってとこだが多分・・・

「ああ、こいつあがり症だな。さっき自己紹介したよな。岡崎だ。」

とそこで岡崎が話しかけてきた。なるほど、噛んでしまったのはあ

がり症か・・・本当に大丈夫か？

「ああ、どうも。それで「あー！てめえは美少女転校生をの夢を粉々に打ち砕いてくれた奴！」は？」

「うるさいぞ春原」

「岡崎はいいよな！渚ちゃんみたいな可愛い彼女が居るんだから！」

「す、春原さん・・・可愛いなんてそんな・・・」

やはり岡崎と古河はつき合っているようだ。となると岡崎が最重要人物か？

思考は春原の叫び声に寸断される

「そこに美少女転校生が来てくれればこの部に引き込んで、あわよくばいい関係になっちゃったりできたかもしれないのに！こいつはその夢を打ち砕いたんだぞ！」

ああ、そういうこと・・・こいつモテねえな。

「じゃあこいつといい関係になればいいじゃないか」

「ちょっと待て岡崎！なぜオレを指さす！？」

教室で一度だけしか会ってないのに、いきなりこんな風に巻き込んでくるなんて、こいつできるっ！

「なんでですかああああ？僕そんな趣味ないですよッ！それなら凶暴で恐ろしくてもこっちのほうを・・・」

ヒュン、ゴッ

「いがあああああああああああ！」

なんだ！？辞書が飛んできて金髪童顔・・・春原とかいう奴に飛んでったぞ？

「あんたらしい加減にしなさいよね！新入部員の紹介ができないじゃないの！」

こっちの・・・杏が投げたのか？恐ろしい威力だ。

「・・・なんでやねん」

「なんでそこになんでやねん！ことみ！あんたの突っ込みは遅すぎる！ってちがうちがう、そんな場合じゃない・・・」

「えっとみなさん、落ち着いてください。この人の紹介を聞きたいですし・・・」

「僕は落ち着いてなんかられん」ゴシッ「・・・」

「静かになつたわね。じゃあ私と涼と朋也はもう知ってるでしょうから他の人から自己紹介していきましよう。ほら、あんた」

本当に恐ろしいな・・・あいつすっ飛んでったぞ。静かにはなつたが。あとあんたって・・・

「えっと、今日三年D組に転校してきた蒔風舜です。よろしくお願
いします」

「あつ、よろしくお願いします。古河渚です。クラスは三年B組で
す。演劇部の部長をやらせていただいています。来てくれてありがと
うございます」

「こんにちは。初めまして。三年A組の一ノ瀬ことみです。趣味は
読書です。もし良かったらお友達になってくれると嬉しいです。」

「はい、一ノ瀬さん。願います。」

するとフルフルと首を振り、

「呼ぶ時はことみちゃん」

と言ってきた

「ああ、ではよろしくです。こ、ことみちゃん」

いかん、名前で呼ぶのはなんか慣れないな

「まあ、これぐらいかしらね」

「なあ、あいつは？」

「あいつは春原よ」

「それだけ？」 「それだけよ」

「へ、へえ……」

「ねえあんた。どうしてこんな時期に部活動に入ろうなんて思ったのよ」

「えっ？」

「だってあんたも三年でしょ？あたしらもそうだけど、受験やら就職やらあるでしょう？なんで？」

ああ、まあそうだろうな、こんな時期に今更部活だもんなあ……さて、どうしようか……

「それは……失った青春を取り戻すためさ！」

その瞬間。

空気が凍った。盛大に外した。これは……まずい

まずいぞこの場をどうにかする能力は十五天帝にもないぞッ！

「まあいいわよ。ちょっと気にしただけだし。」

「あ、うん・・・(なかったことにされてしまった)・・・それで、今日はどんなことをしてたの?」

「えっとですね、今日はというか今日もと言いますか・・・」

「私たち、学園祭でもう劇をやっちゃって。それにもう卒業だし・・・」

「というわけよ。入るのはいいけど、やることないわよ?多分」

「まあそれでもいいですよ」

「ふーん」

そう、ここに最重要人物であろう岡崎が居るなら、この部に身を置くことは必要なのだ。

やることはむしろそっちなのだし。

それからみんなと会話して、春原が目覚め、パシられて、戻ってきて、落とされて、またみんなと話して、あっという間に下校時刻になってしまった。

それと、みんなと話しているうちに岡崎とも握手をした。やはり彼が主人公だったようだ。

そして、

「じゃあもう帰りましょうか」

と古河が言つとみんなは、

「そうだな、これ以上遅くなると、おっさんも心配するしな」

「あたしらも帰るかあ。行くわよ涼」

「あ、待ってお姉ちゃん」

「みんな、さよなら。あしたまた、あいましょう」

全員帰る支度をして各々帰路についていく。

「俺も帰りますっかねっと。春原は？」

「いいのよ」

「いいのか」

そしてみんなと別れてオレは寮に向かっていった。

どうやら俺の寝場所はそこにあるらしい。

こうして一日目が終わる……と思っていた

が、感じたのだ。「この世界」に異なるものが侵入してきたことを。

「来た……か」

おそらく奴のほうが先にこの世界に向かっていたのだろうが、多少ずれたのだろう。

この世界では運が良かったってことらしい。もしかしたらこれらは「奴」が先に入り込んでるってこともあるだろうしな。

そしてオレは意思を固める

それは戦いは幕のあがる合図だった。

決して両者に意思の疎通があつたわけではないが

それはぶつかり合う火花ではなく、満天の星空の下で、「奴」と蒔風の二人だけがただ、漠然と感じ取っていた

t o b e c o n t i n u e d

CLANNAD ～邂逅～（後書き）

さて、CLANNADの世界にきましたよ！

アリス「ねえねえ、生徒会長とか、寮母さんとか、パン屋さんとかは出さないの？」

出したいんだけどねえ

パン屋さんは出しても生徒会長さんとか寮母さんは出しにくいかも、次の話では「奴」と戦う予定だし

ア「はやくない？」

だって「奴」は世界を食らうことが目的なんだぜ？

やってきて、次の日に襲いかかるのは普通だろ？

なんせよっぼどじゃないと奇跡の起こらない”輝志”なんだからこの世界は

ア「この世界はその分類なのね」

そう

CLANNAD

分類は”輝志”99%に”LOND”が1%だな

ア「”LOND”が入るの？」

渚の正体不明の病気とか朋也の暗い家庭環境とかな
本当にすこしだけどね

ア「なるほど、”LOND”はそういうものかね」

そうだよ

純粹な”輝志”はないんじゃない？

ア「たしかに……」

しかしなかなか執筆時間つとれないものだね。
三日に一度くらいで更新する人は凄いな

ア「あなたは一話一話を少しずつ書かずに一気に書くからでしょう
一日に少しずつ書けばいいのでは？」

ダメなんだよなあ。勢いが出た時に一気にやらないとノらないんだ
よ。

ア「ご愁傷さま。そういえば時風は？」

今寝てるよ、寮で

ア「世界に言ってる間はこちらに来れないんですか最初はいたのに」

ほら、あそこはまだあいつ自身の世界だったし

ア「ご都合主義ですね。その設定も今考えたでしょう」

いいじゃんつじつまが合えばなんとかなつ．．．．．と思う

ア「新米が何を言っているのか．．．」

すみません

では次回また会いましょう

この町と、住人に幸あれ

CLANNAD ～日常と幻想、そして開戦～ (前書き)

ちりー | 田中びす

CLANNAD ～日常と幻想、そして開戦～

この世界での一日目が終わり、「奴」がやって来てから夜が明け、二日目が始まった

あいつは必ず岡崎を狙って来るはずだ。

そう考えた時風がとろつとした行動は岡崎の家に張り込むことだった

しかし……

「やべえ、わかんねえ」

はい、今オレ時風 舜はまた迷子になっております

畜生、岡崎の家くらい情報くれよ、世界さんよ

仕方がないので学校前の坂の麓で待つことにした

そうしていると、だんだんと登校する生徒が増えてきて、待ち続けて十五分ほどしたところで、岡崎と古河と一緒に登校する姿が見えた。

周りの生徒には全く怪しまれなかった。

ダンボールかぶってたからな

そこでオレは隠れていた茂みから出て、五メートルほど前を歩きな

がら、岡崎たちを意識の範囲内に入れた。

そうして歩いていたら、どうやらあちらが気づいたようで、古河が挨拶してきた。

「蒔風さん、おはようございます」

「おお、おはようございます古河さん」

「渚でいいですよ。皆さんそう呼んでますし」

「あー、な、渚さん？」

「はい」

ダメだ。やっぱり名前で呼ぶのは慣れない。

「よう」

「おお、岡崎。最近どうだ？」

「特にないぞ。っていうか昨日あったばかりで最近もなにもないだろ」

「ん、まあな。でもほら、社交辞令社交辞令」

なるほど、特に異常はなかったようだ。隠しているわけでもなさそうだしな。

「お、そういえばお前パン好きか？」

「ん？特に嫌いなわけじゃないけど」

「じゃあこれやる、と岡崎が二、三個パンをよこしてくれた

昼飯は買うつもりだったし、資金はたくさんあるから金に困っているわけでもないが、こういうのは素直にうれしいな

「ありがとうな」

「あ、朋也くん、そのパ「気にするなよ知り合いのパン屋にタダでもらったんだ」・・・もう」

「ん、じゃあありがたくいただくぜ」

「ああ」

そんなこんなでクラスの違う渚と別れて、俺達二人は教室に入っていく。

そしてHRが始まり、午前の授業が終わり、昼休みに入る前に春原が登校してきて、岡崎と話し始めた

「岡崎っ！なんで僕を置いていくんだよ！」

「お前誰だ」

「あのその知らないフリやめてくれませんかねえっ！？すごく傷つくんですけどっ！」

「悪かったよ。だからそんなに顔を近づけるな」

「ふっ、やっぱりお前でも、僕の友達のポジションを失うのはおしいよな！うんうん」

あいつやっぱりモテねえだろ。あと馬鹿だ

「今から昼飯だろ？」

「あ、僕なにもないや。ま、渚ちゃんのお弁当をもらっし、いっか」

「杏にボコボコにされるぞ」

するとギギギと春原の首が傾き、ホント？、と岡崎に問いかけた。

ちなみに岡崎の目もかなりマジだった

「んー、あー！」

と春原はなにが思い付いたようでオレの方に歩いてきた

「なあ、お前、僕よりあとに演劇部に入ったってことは僕の後輩だよな」

「まあ、そうなるのかな」

「よし！今から僕が言うことに逆らうなよ！」

「やだ」

「逆らうなって言ったたるおー！」

「なあ岡崎。こいつどうすればいい？」

「杏を呼んでこい」

「よしー！」

「よし！じゃねーよ！なんだなんだあ？お前僕が怖いのかあ？女子の力を借りるようなチキン野郎かあ？」

春原がチンピラのようにケンカを売ってきた！

「ああ？てめえもっぺん言ってみよおかあ？」

時風はメンチを切って春原に凄みをきかせた！

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

春原は戦意を削がれた！春原はへたれた！春原の敗北！

「まったく、何してんのよ」

「杏」

「ほら、昼飯食べに行くわよ。あんたも」

「ああ、行く」

どうやら俺のこともかるうじて演劇部の仲間として受け入れられたようだ。

あまりからまないけどな。しかたないけど。

そうして俺たちは杏に連れられ演劇部部室まで行き昼飯を食べた。

なお、昼飯には岡崎からもらった「メカニックパン」なるパンを食べた。

パンとは思えないほど硬くて、食べるのに難儀したが、まあ俺だし、何とか食いきることができた。後ほど計測したら鉄分がとんでもない量入っていた。

そういうものなのか？鉄分って

さすがにひとつでギブアップして、残りの二つのうちの一つは春原にあげた。

食えないと騒ぎ出したところで杏がもうひとつを投げつけた。

春原の口にクリーンヒットし、そのまま食道に流れ込んで詰まったようので、水を飲んでもふやけず、このままでは春原が死んでしまうので思いっきり腹を殴って一命をとりとめさせた

そうして午後の授業も終わり放課後である。

今日は皆それぞれに用事があったようなので、部活はないそうだ。

ちよつどいい、このまま岡崎の家を調べて今日から張りこもう。

俺の世界みたいになるのはまっぴら御免だからな

そうして岡崎は渚と一緒に下校した。

その後をついていくオレ

すると二人はパン屋さんの中に入って行った。

ここが岡崎の知り合いのパン屋ってところか？

と思い店名を見てみたら「古河パン」と書いてあった

ということはこの渚の家か

ちよつどいい。ここもチェックしておこう。

ついでにあのパンの創作者の顔を見ておこう。

そう思い店の中に入ると

エプロンを制服の上からかけた姿の岡崎と渚が店番をしていた。

「お前らが店やってるのかよー!!??」

「あ、蒔風さん。どうしたんですか？」

「い、いや、今日食べたメカニックパンっていうのが愉快過ぎてな、
どんなパン屋が見に来たんだ。」

「でもなんでうちのパン屋にピンポイントに？」

「春原に聞いた」

あとをこっさり付けてきたなんて言えない。言えるわけない！

だから適当なスケープゴートを用意した。春原……便利な子!!

「あいつか……で？感想は？おまえ普通に食ってたけど……」

「ああ、おれは何とか大丈夫だったが、春原のあの反応を見てわか
るとおり、あれは常人じゃとてもじゃないが食えない。硬すぎる。
人を殺せるな。まあ味は悪くなかったがな。あんなパンどうやって
作ったんだ？」

といったところで後ろでヒック、という声が聞こえた。

振り返ってみると渚に少し年齢を重ねたような女性が、目をウルウルさせて立っていた。

「わ、私の・・・」

「私の？」

「私のパンは、人を殺せるような必殺仕事人みたいなパンだったんですね~~~~!!!!」

「!!!!?????」

「さっ、早苗!どうしたんだ!?また誰かに泣かされ・・・うお!待て早苗!おれは大好きだぞお~~~~!!!!」

「!!!!????!!!!????!!??」

「お、おかあさん!おとうさん!」

「お母さん!?!お父さん!?!若いなおい!」

「ああ、驚いたか。あれが渚の両親だ。アホ親子だ。見ていて面白いぞ。とくにおっさんがな」

「はあ・・・そういえば、もう遅いが、岡崎、お前は帰らなくていいのか?」

「大丈夫ですよ。朋也君はうちに住んでますから」

「ふえ？」「」「？」

「ばっ、渚！」

「どうしたんですか？朋也君」

「んなこといきなり言われたら戸惑うだろ！」

「ああ、なるほどね。親公認の中ってことか」

「えっ、それは」

「お前、理解速いのな」

「そりゃまあ、理解しなきゃいけないのでね」

「……どういふことだ？」

「気にすんなよ。んじゃ、オレはかえるな」

「気をつけてな」「お気をつけて」

「おっ」

そして俺は帰路につくふりをして、前にある公園の茂みの中に身を潜め、ジッとした。

これからここで見張るか……

そうして三十分後、渚の両親が帰ってきて、パン屋も閉まった。

さらに見張りを続けていると、家から二人、誰かが出てきた。

岡崎と渚か？なんか話してるけどよく聞こえないな……

Side 岡崎

今日も渚は演劇の練習をするらしい。

なんでも、せっかく新人部員が入ったんだから、また何かやりたいんだそうだ。

「でもあいつ、なんかおかしな奴だよな」

「蒔風さんのことですか？」

「ああ、なんだろうな。昨日来たばかりなのに、不思議となじんだっていうか。でもなんかそれでもみんなから外れてるよな」

「ふふっ」

「なんだよ」

「やっぱり朋也君はやさしいですね。昨日来た転校生を気にかけてあげるなんて」

「寝る」

「あー！待ってくださいよー！」

「・・・嘘だよ。でもな」

「はい、不思議な人です。まるで・・・」

「まるで?」

「外から来た人・・・みたい?」

「そりゃ、転校生なんだから外から来たんだろ?」

「うゝゝゝん??」

そういつてうなる渚。仕草がいちいち可愛らしいな。アホ毛もミヨンミヨン揺れている。

ブルっ

今日は寒いな、ソロソロ家に戻るか。

練習はしてないけど、このままじゃ体調を崩す

「渚。今日はやめて家に入ろう。風邪ひいちゃう」

「あ、じゃあ一回だけ」

「はいはい、一回だけな」

そうやって渚は電灯の下に立つ

そしてあのセリフを言うのだ。俺があいつの練習を、最初に見たときのあのセリフを。

それは、始まりのセリフだった。

S i d e o u t

渚が街灯の下に立ち、偶然か、こちらのほうを向き、言葉を紡いだ

「もし、よろしければ…」

それは……

「あなたを……」

とても幻想的な空間を作り出し

「あなたを、お連れしましょうか」

そしてきつとこの言葉からこの物語は始まったのだろつと連想された

「この町の……願いが叶う場所に」

その瞬間

「奴」が渚の首をはねようと闇の空から落ちてきた

「っ！」

ギャリン！

その凶刃を俺はとつさに天地陰陽のうちの一本を引き抜き、手刀で受けるように弾き飛ばした。

「！！！！渚あ！」

「は、ふえ、と、朋也く……」

「動くな！！！！」

ギイーン！ギャンチンキンギャリリリリ、ギャアン！

最後の一太刀で、風林火山の「林」を抜き放ち、奴との距離をとる。

そのすきに渚を抱え、岡崎のほうに連れていく

「渚！大丈夫か、渚！おい蒔風どういふことだ！なんでお前がここにいる！あいつはなんで渚を！……くそっ、警察を、その前におっさんを……」

「それはできないようだ」

「なんでだよ！すぐそこだぞ！」

「この公園を包むように結界が張られている。出れない」

「結界？何言ってるんだしっかり説明を・・・」

ブオン

その瞬間、蒔風が渚と岡崎を包むように簡単な結界を張った。

これで流れ弾に当たる事はなくなるだろう

「お、おい！」

「青龍、説明してやってくれ」

「・・・御意に」

結界の中に青龍を潜り込ませ、岡崎と渚を任した蒔風は、「奴」ほうに向かっていく。

「待てよ！おまえ、一体なんなんだよ！」

岡崎は蒔風に問いかける、せめてそれぐらいは答えろ、と

渚はまだ何が起きたのかよく理解できていない。

無理もないだろう。いきなり視界の外の頭上から襲いかかれたのだ。何が何だかわからない。

しかし自分がとんでもない脅威にさらされた事は判るらしく、いまだに体が震えている。

そんな二人に、時風は立ち止まってこういった

安心しろよ、大丈夫だと言わんばかりに、自信満々にこういうのだ

「気にすんなよ。ただの……」

……ただの世界最強だ……

銀白の翼人、始動

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

ついに戦闘に入りましたねえ

アリス「生徒会長は？寮母さんは？」

出なかったねえ

ア「そんなんでいいのかよ」

だってこの時期だったら智代は生徒会の仕事で演劇部には顔出さな
いだろうし、美佐枝さんは時風があんまり寮にいないし。

ア「・・・ファンに殺されるぞ」

オレだって・・・出したかったよ・・・

ア「でも古河夫妻は出てたわね」

なんとかね。

話の構成上、岡崎と渚が一番の柱だから、その周辺ぐらいしか描写
できないからな。

時風は言ってしまうば「奴」の狙う最重要人物か、それに近い主
要人物を守ればそれでいい

だからその周辺以外には干渉しないんだよ。

ただでさえ異端者で異世界人、しかも世界の分類も違うんだからさ

ア「なるほどねえ」

でもこんな説明で納得してもらえとは思っていません。だから

ア「だから？」

とにかくごめんなさい、と………ね

これは完全に自分の文才のなさが招いた結果ですので、みなさんどうか温かい目で見てください

ア「私からもお願いします」

さて次回は

ア「ついに始まる「奴」との戦い。奴の使う武器とは？そして世界の意志が呼応するとき、強き力がもたらされる」

と、なっております

ではまた次回

透き通る、夢を見ていた

CLANNAD く戦闘終了、その後としまして（前書き）

皆さんどうやって執筆時間をとっているんでしょうね

CLANNAD 〱 戦闘終了、その後とそして

「奴」と俺が公園の真ん中で対峙する……

オレは風林火山の「風」と「林」を抜き組み合わせ一本にし、同じように「火」と「山」を組み合わせて構える。

「やっぱりおまえが手にしたのは「十五天帝」だったか」

「そういうおまはんの武器はなんてんだい」

「オレのは「魔導八天」だ。よろしく、ねっ」

「さいですかい。……なんでお前この世界に来てすぐに行動しなかつたんだ？」

「ふん、世界によって構築が違うのだ。それを解析し、いかように食らうかを算出せねばならなかつたんだよ」

「あつさり教えてくれんなのな」

「その程度、出し惜しみしてどうする。

……それにしてもまあなんと、また、邪魔してくれたなあ、おい」

「当たり前だ。この世界を、貴様の好きにはさせない。それ以前に、あいつらは俺の友人だ」

「ふん。出会って二日しか経ってないというのに、友人か。よくそれで命を懸けられるもんだ」

「あいつらのためでもあるし、オレの世界のためにもだからなあ！」

バツ

と俺が一気に間合いを詰める。

風林火山を振り回しながら、「奴」に迫る。

「奴」は腰の高さ辺りに魔導八天のうちの三本をプロペラのように回して剣撃をうける。

走り、飛び、転がり、跳ね、交差し、打ち合う。

「ラア!」「フン!」「オリヤア!」「ツツ」「ハア!」「ラッセ!
!」「オウツ!」「ダア!」

お互いの気合がぶつかり合う剣撃が公園の中だけで響いている……

Side 岡崎

「……………というわけでして」

俺と渚は青龍とかいう男から事の顛末を聞いた

他の世界からきた蒔風は、あの黒い奴から他の世界の崩壊を防ぐためにやってきたそうだ。

そして俺たちがそのトリガーらしく（なんでも俺たちは世界の中心らしい。信じられないが）それで俺たちを守るためにこの公園で張つてたそうだ。

「だったら最初から話せばよかつたんじゃないや」「信じますか?」
「いや」

「わ、私も、この光景を見ていなければ、信じられませんし」
「

渚も落ち着きを取り戻してきたみたいだな。

この結界の外では蒔風が戦っている。俺も何か……

「……いけません。ここにいてください」

「なっ」

「……大体考えることはわかります。主を……助けに行きたいのしょう?しかしあの場は……あなたたちの居るべき日常いほじょうではありません。ここが安全……です」

「で、でも……」

「……その気持ちだけで十分でしょう。大丈夫です主は……
世界最強ですから」

S i d e o u t

互いに攻め、互いに受けて、二人は空に舞い上がる！

それでも二人は止まらない。打つ切る削る！

ギギギギギギギギツギイギギツギギギンン、ガツギイ！

と最後に思いつきり打ちつけ合い、刃が交差し、組み合って、そのままの体勢で二人が落ちてきて、

ドツツン！！！！

思いつきり大地に足を踏みしめる。

数秒ほどその体勢で固まるが、「奴」の蹴りが蒔風の腹部にめり込みその体を吹き飛ばす。

「ゲボアツツア！」

蒔風は後ろに飛び、どん、と岡崎たちの居る結界にぶつかり寄りかかり、片手を結界に伸ばし、それで体を支える。

「はあ、そういえばお前さん、結局オレを追ってきたのね？」

「ゲツホ、・・・ほつといたらいろんな世界も・・・オレの世界も壊されちまうからな」

「安心しろ。その後にみんなが主人公になれる世界を作る。そうすれば誰もないがしろになんかされない、素晴らしい世界になるんだ。どうだ？誰もが幸せになれるんだぞ？いい世界だろう」

「・・・それは・・・だめだろうよ」

「あん？」

「何もせずに幸福を得るってか？馬鹿馬鹿しい、へどが出る！そんなものはいらねえ。「幸せな地獄」なんてな、必要ねえよ」

「生まれた時から主人公として生きてきてこれた運命を持つ奴に、言われたくねえなあ」

「生まれた時から主人公だ？馬鹿かてめえ、生まれた瞬間から描いた物語なんざねえだろうがよ。あらかたの物心ついた頃からだろうよ。主人公だからあれこれいろいろあるんじゃない。あれこれいろいろある奴が主人公になるんだ！運命なんて簡単な言葉で主人^{おれたち}公の未来を決めるんじゃないよ！」

「所詮そんなものは貴様だから言える戯言だ！」

「ちがう！幸せってのはな、他人を蹴落としてでも、手に入れられるかどうかってぐらい大切なもんだ！現に他人を蹴落とせば手に入るなんてものじゃないしな！」

「誰もがステージに立てるわけではないだろう！だから俺は誰もがステージに立てる舞台を用意するんだよ！そのために、そこをどけえ！殺してやるぞ！最^{しゅじゆう}主要人物！」

「……このバカ野郎が……」

蒔風が怒気をはらんだ声でぼそりと唸る。

「いいか？こいつらはな、舞台に立つことすらもままならなかったんだぞ！部活は廃部状態、相談できる友達はいねえ、経験も知識も何もねえ！でもそんな状況でも、こいつらは舞台に立ちたいっていう強い願いで動いた！そしてステージに立つたんだ！お前の言う世界は素晴らしいのかもな、でもそれは、こいつらのような奴の努力を踏みにじる行為だ！おれはそれを許さない。オレは！銀白の翼人！おれの翼のつかさどる人の想いは希望……人の願いだ！」

蒔風は自分でもなんでこんなことを言っているのかもわからない。情報が来たわけでもない。ただ、そんな気がしたのだ。

こいつらは、必死だったと。

彼らがその願いをかなえるために、走り回っていたことを……

もしかしたら彼はもともと知っていたのかもしれない。

しかし、それは誰にもわからない……

グツと右手の拳を胸の前で握り、そして打ち払うように一気にその手を振り下ろす！

「かいよく開翼！！！！」

バサッ

その瞬間

蒔風の背に、銀白の翼が現れた

「銀白の……翼人……っ！」

「……オレはお前を許さない。こいつらのためにも、絶対に、だ！」

ダンッ ギイン！

風林火山を構えなおし、蒔風が「奴」に迫る。

「奴」の体勢が崩れたところで蒔風が舞う。
その舞は華麗なる剣撃

「いくぞ！かまいたちきりえんぶ鎌鼬切演武！！！」

ザアッ！

無数の斬撃が蒔風の廻す風林火山から放たれ、「奴」を追いこんでいく

一つ一つが大変な威力だろつに、思ったのは凄さより美しいということだけだった。

そうしてると結界が消えて、時風がやってきた

「よし……とどめを刺そうぜ！」

「は？」

俺たちに戦う力はないんだが？

そういつと時風は、笑顔でこういった。

「大丈夫だ。お前らも、一緒に、この町せかいを守るつぜ」

Side out

「いくぜ！WORLD LINK！！」

そう言つて時風は岡崎の肩をポン、とたたいたその瞬間、どこからか声が聞こえてきた。

【CLANNAD】 - WORLD LINK - WEAPON -

そうすると、地面から光がポツポツと雪が降るようにそして大量に
浮かんできた

「さあ、この町の、願いをかなえよう」

その光は「奴」を覆い尽くし、その動きを止めた。

「な、んだこれは！」

「これはWORLD LINKだ。世界だってお前に抵抗するんだ
よ」

「ぶっ、っぶ、あ」

「よし、行くぞ岡崎！お前の想いを強く念じる！」

「あ、ああー！」

【CLANNAD】 - WORLD LINK - FINAL
TACKS

また声がすると、巨大な光でできた剣が蒔風の手握られていた。そしてそれは岡崎の手にも。

「これが俺たちの力だ。行くぞ岡崎！」

「よし！おおおおおおおおお！」

「あああああああああああああ！」

この町にいるすべての人の、今この場の状況はわからなくても、この町を思う気持ち、力となる！町もまた、守るために、力を発揮する！その想いを、町は・・・この町の幸せのために！

蒔風と岡崎が、一気に駆け、「奴」をその想いでたたき切る！

の世界にいたのはたったの二日・・・もう三日目になっているけど、それくらいだしな」

「あの、じゃあ何かお礼を」

「ストップ。お礼が欲しくてやったわけじゃない」

「で、でも・・・」

「ふう、岡崎、渚」

「ん？」「は、はい」

「お前たちにはこれから大変なことが多く起こるかもしれない。しかし忘れるな、さっきの力を。この町はあれだけの力を持って、お前たちを見守ってくれている。そして、この町の人々も、な」

「はい！わかりました！」

「でもなんでそんなこと・・・」

「ではな、二人とも。この世界はもう大丈夫だろう」

「あ、ああ、じゃあな」

「おう、渚。もう部活にはいけないけど、ごめんな」

「大丈夫です。これからもがんばります！」

「ははっ。ん、じゃ」

「なあ！」

「ん？」

「ありがとな！本当に、ありがとうー！」

その言葉を受け、蒔風はにっこりと笑い、歩いていく

「Gate Open . . . CLANNAD」

目の前に、光のゲートが開きそれをくぐる。

さあつて。次の世界は？なんだろう？

.....

次の日、岡崎が学校に行くと蒔風は転校したことになる。経った二日だけの転校で、教師も生徒も驚いていた。

その話はすぐに噂になり、放課後にはほとんどの生徒が知っていることになった。

だが、その転校生がだれか、という明確な情報は誰も知らなかった。

「噂の転校生って、あいつのことよね？」

演劇部部室で杏が言う。

ことみは噂のことを知らなかったし、春原はさっき来て知ったばかりで、驚いていた。

「時風君、転校しちゃったの？」

「あいつへんな奴だったよな。来たときからいなくなるまで。あいつの部屋寮にあつたらしいんだけど、荷物が何もなかったそうだけ？」

「そ、それは怖いですね・・・」

ことみ、春原、椋が時風のことを話している。

「ねえ朋也、あんた何気によく話してたじゃない。何か知らないの？」

杏が岡崎に聞いてきた。

しかし岡崎は、知らねーよ、という。

きつと言ったところで信じてもらえないだろう。

そうして数日が過ぎるとそんな噂は日常に押し流され、忘れられていった。

しかし、二人だけは覚えていてる。

岡崎はあの剣を握った感触を。

渚は目の前で羽ばたいた翼の美しさを。

彼の強さを忘れない・・・

彼は今、どの世界で戦っているのだろう・・・

.....

蒔風がゲートをくぐり、次の世界に降り立つ。

降り立つ先は、新たな時代の始まり。

みんなの笑顔を守るために戦った、2000の技をもつ男の世界である。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

CLANNAD 〱 戦闘終了、その後とそして〱 (後書き)

蒔風「いやあ、終わった終わった」

おつー、そしてボタン

蒔「どうしたんだ？」

戦闘描写がむずかしいー

蒔「あー、ほら。だれてないで、技の説明でもしろよ」

わかっ「私がやるよ！」・・・やって

アリス「あんたが来ると目立たなくなるからね！こついつとこつで派手に行くわ！」

蒔「いろいろとすげえよ、あんた」

ア「どうも さて、といきますよー。

説明しよう！鎌鼬切演武とは、蒔風が風林火山によって作り出した斬撃を飛ばし、攻撃する技である！ただ飛ばすのもあれば、「四季早々」のように決まった型をとるものもあるし、「短撃」で一発で攻撃することもある。

つてもんだい！」

ではまた次回

からっぽの星、時代をゼロから始めよう

クウガ へ 接触へ (前書き)

大変なことを忘れていた・・・

詳しくは後書きで

この世界に着いたとき、まずしたことは身の回りを確認ダァッ！！
服装はスーツになっていて、なんと警察手帳を持っていたんだァッ
！！

所属は「未確認生命体合同捜査本部」だそうダァッ！！

未確認生命体・・・グロンギという名称の彼らは、「ゲゲル」と
称した殺人ゲームを長期間にわたって行い、大量殺戮を繰り返した。
そのために、警視庁に未確認生命体合同捜査本部が設置され、未確
認生命体と戦っていた・・・らしい。

その時点で「クウガの世界」だと言うことはわかった。
クウガが何だかはわからないがね。

そうして警視庁に来たオレは受付の人に「未確認生命体合同捜査本
部ってどこですか」って聞いたんだ。

そしたら怪訝そうな顔されて、お待ちくださいと言われて待つこと
15分。こわいかおの刑事さんに連れられてここにいる。

身の回りの物は没収された。
虚偽の疑いで逮捕だそうだ。

たしかに虚偽なんだからなにも言い返せない。

だからと言っていきなりこれか？
世界め……謀りおつたか！？

ガチャ

思い悩んでいると取調室の扉が開き、一人の男性が入ってきた。

「おお、悪いな一条。あいつが帰ってくるってのにな」

「大丈夫ですよ杉田さん。五代が帰ってくるまで、まだ時間があります」

一条、と言う名を聞いて、この人が主要人物であることがわかる。便利だなおい。

一条 薫

未確認生命体合同捜査本部にて、幾度となく未確認生命体と戦ってきた刑事。

現在は長崎県警に所属……か

情報が流れて来るトリガーはまちまちのようだ。
もっとサクッと来てくれるかな？

いちいち驚くんだけど……

「で、この人が？」

「ああ。受付に「未確認生命体合同捜査本部はどこですか」って聞いたらしい」

「そうか……だが、未確認生物による事件は終わった。だからもう捜査本部はない。ただの勘違いだろう？それだけで逮捕か？」

「いや、逮捕の理由は違う。こいつが警察手帳を持っていて、所属が捜査本部になっていたってところだ」

「それは……だがしかし、さっき彼の所持品を見てきたが、すべてしつかりとした本物だった……所属をのぞいてな」

「ああ。だからとりあえず虚偽ってところで連れて来たんだ。なにかあると思っつてな」

「あの……オレが対策室にかつていたっていう可能性は……」

「「ない」」

「即答ですか……（泣）」

「って言うのも、オレも一条も、捜査本部にいたからだ。そしてお前のことは知らない。なのに所属が捜査本部。怪しむのは当然だろ

「？」

「君が何を考えているかは知らない。だが決して悪い気は考えてないんだろっ？」

「どうしてそう思うんだ？」

「この人の目が、なんとなく五代に似てるんですよ。見た目じゃなく、雰囲気が」

「あいつに？そうかあ？」

「で、だ。正直に話してもらえないかな。未確認生物なんてものを相手にしてきたから、少しくらい突拍子もない話でも、理解できると思うけど」

・・・ふう、どうやら話さなければ解放してもらえないかな。

そうしてオレは話しはじめた。

異世界から来たこと、敵がいること、この世界の人間が狙われること。

一通り話終わってから、杉田さんが口を開いた。

「どんな話かと思えば、かなりぶっ飛んだ話だな。新しい未確認と戦いに来ましたって方が説得力あるぜ？」

「だが、それが本当なら・・・誰が狙われる？」

「おいおい一条！信じんのかあ？」

「あ、そうだともう一つ」

「なんですか？」

「クウガって、なんのことか教えてもらえますか？」

「「！！！」

「？」

「その名を、どこで？」

「この世界に着いた時に、クウガの世界って情報が」

「・・・なあ一条」

「ええ・・・狙われるのはその「クウガ」なのか？」

「おそらくは。「クウガ」とは？人の名前ですか？」

「いや、だが・・・」

「我々とともに戦った男の別の呼び名だよ。・・・会いに行くか？」

「！！一条！！」

「大丈夫だ。お前も、そこまで本気ではないだろう。こんな逮捕だから調書も取らず、話を聞こうとしたんだろ？」

「……………まあ、な」

「確かあいつはあと二時間後にはポレポレにいるはずだ。行くとかえっと……………」

「蒔風です。蒔風舜」

「蒔風さん。ではいきましょう」

「はい。ありがとうございます。杉田さん、お騒がせして申し訳ございませんでした。それと、本気で逮捕してくれなくて、ありがとうございます」

ペコリ、と一礼してから私、蒔風舜は一条さんに連れられて、「クウガ」なる人物が来るといふ喫茶店、ポレポレに向かった

.....

山道を一台のバイクが走っている。

乗っている人間は二十代前半くらいの男性。

ヘルメットの下の顔には、ウキウキとした笑顔があった

（一条さんにおやつさん、それにみのりに桜子さんは元気にしてるかな）

彼の名は五代雄介

ここだけの話、彼がかつて多くの怪人たちと戦ってきた、仮面ライダークウガである。

彼は今、冒険の旅から帰ってきたところだ。

ちなみにおやつさんとは彼の居候する喫茶店、ポレポレのオーナーで、みのりとは彼の妹である。

さらに桜子とは本名、沢渡桜子。彼が変身するクウガに関しての古代文字の解読をして、彼の戦いをフォローした人物だ。

そんな久しぶりの友人との再開に、彼は胸を膨らませていた。

「この分なら予定通りに……………ん？」

道の真ん中に人がいる。

こんなにもよい天気で、視界ははっきりしてるのに、良く顔が見え

ない。
おかしいと思いつつも、基本お気楽な彼は特に気にせずそのまま通り過ぎようとした。

そして

男を抜こうとしたとき、男の手にいつのまにか大きな剣が握られていて

その剣が五代の愛車、ビートチェイサーごと真っ二つにしようと思いついてきた！

轟っ！！

「!?!?!っ!っわぁ!」

寸でのところでかわした五代だったが、敢え無く転倒し、身体が道に投げ出された。

とっさに受け身をとって軽い擦り傷だけで済んだのはさすがはクウ

ガといったところだろうか。

片膝をつき、軽く構えながら五代が叫んだ。

「なんだお前!？」

その声には若干の怒気が含まれている。

それはそうだ。

剣が本物でなくても大惨事だったろうし、本物なら自分は死んでいた。

しかし多くのグロンギと戦ってきた感性が、剣は本物であり、目の前の人物が自分の命を狙っているのは明らかである、と告げていた。

だから何をするんだ、ではなく相手の正体を知ろうとした。

目の前のジンブツは、得体が知れなさすぎる。

「オレのことはいい。貴様、仮面ライダークウガだろ？それだけで十分さ」

そう言って男が近づいて来る。

五代は驚愕した。

「仮面ライダー」が何だかは知らないが、「クウガ」は間違いなく自分のことだ。

自分がクウガであることは、特に隠してはいなかったので、一条を始めたとした警察関係者や友人の何名かは知っている。

しかし彼らがそのことを他人に簡単に言うとは思えない。

「お前、未確認の生き残りか!？」

だからこの問いに行き着いた。

そもそも自分をクウガと最初言ったのは未確認、グロンギたちだったからだ。

だが男は即座に否定した。

「未確認? ああ、グロンギのことか。違う違う。オレはただお前を殺し世界を喰らうだけだ」

その言葉に五代は再び驚愕する。

未確認はグロンギであることを知っている?

確かに、未確認に関して調べていた桜子は古代文字から奴らを「グ

ロンギ」と命名した。

だが世間一般、マスコミでは「未確認」としか呼称されていないし、警察内でも「未確認〇号」という名称だった。

それを一発で未確認「グロンギだと呼んだこいつはいったい何者なんだ？

さらには世界がどうのこうのと言っている。

何を言っているんだ？

五代は次第に混乱してきた。

しかしそれ以上に命の危険が迫っている。

戦おうにも自分の腹部にあるアークルはまだ〇号、最強のグロンギ、ダグバとの戦いの破損から回復していない。戦うつもりもなかったから特に気にしてなかったが、このままでは自衛もできない。

ビートチェイサーには警棒がついているが、あの剣に対抗できないだろうし、取りに行くにも距離が離れ過ぎている。

「ま、クウガといっても今はただの人間だな。終わらせようか」

「まずい！」

そう五代が身を強張らせる。

しかし、

そのとき不思議な事が起こった！

五代の腰にアークルが完全回復した状態で現れたのだ！

「なに？」

「くっ。(バツ)変身！」

とにかく戦うにしても逃げるにしても、変身するしかない！

そう思った五代は迷わず変身した。

そして彼は光に包まれ、立ち上がる。

なぜアークルが再び復活したかはわからないが、また戦わなければならぬのか。

彼はマスクの下で一瞬悲しげな顔をして、まっすぐ相手を見据える。悲しげな顔はマスクには表れず、凜々しい姿の古代リントの戦士がただ構える。

彼の名は、仮面ライダークウガ。

皆の笑顔のために、悲しむ顔をつくらぬために、戦ってきた、戦士！

「っち！厄介な！」

ブワッ！！！

奴が接近の速度を速め、一気に近づいてきた。

奴の振るう剣がクウガの腹部を貫こうと突っ込んで来る！

それをギリギリのところまで避けるクウガだが、掠めたらしく、うっすらとその装甲に傷がついている。

奴はさらに攻撃を続けてくる。

「くっ、おわっ、はぁっ！」

クウガは避け続けていくが、奴の猛攻に、ただえさえかわせるかどうかの攻撃が、さらにかわすのが困難になっていく。

しかし相手も決定打が決まらないのに業をを煮やしたのか、大きく剣を振り上げ、叩き落としてきた。

だがクウガもそれを避けられないわけではない。むしろその瞬間が来るかどうか勝負だった。

バガアっ！

と荒くコンクリートでならされた道路を砕いた剣は、地面にめり込んだ。

引き抜くのに一秒程かかる。

そしてその一秒がクウガの狙いであった。

クウガは奴が振り上げだ瞬間からビートチェイサーの方に駆け出して行く。

今は逃げるしかない

五代のバイク、ビートチェイサー2000の最高速度は時速420
?である。

生身では耐えられなくとも、クウガに変身した今ならおそらくその
スピードで走っているだろう。

それでも追いつけるには追いつけるが、追いつく途中で都内に入り、
警察が出て来て、最悪時風を相手しなければならぬ。

つまり奴のこの計画は

「ちっ、失敗か・・・」

というわけである。

しかし、奴は残念そうでもなく

「んじゃ、第二計画に移行しますかね」

と呟き、その場から消えた。

t o b e c o n t i n u e d

クウガ く接触く（後書き）

しまった！！忘れてたよ！WORLD LINKの説明をしていなかった！！

アリス「そんな大事なことを忘れるなよ！っていつかANGEL B EATS!?!?!」

よくわかったな、飴をやるっ

ア「わーい、じゃなくてWORLD LINKの説明をしなさい」

はいよ

WORLD LINKとは、各世界で蒔風が一回だけ発動できない大技である。

世界の意志とつながり、その力を引き出して使う。

世界の象徴ともいえるような技や武器が出て来て、それで攻撃するのだ！

また「奴」がある世界の「なにか」をとりこんでいたら、それを破壊することもできる。

しかしどの世界のWORLD LINKも大ぶりなものが多く、最後の一撃にしか使えない。

当然、世界ごとに能力、形態、効果、すべてが異なる。

- WORLD LINK - \ WEAPON \ は、各世界での力を引き出す。またキメ技のための前準備でもある。

そして - WORLD LINK - \ FINAL ATTACK \ にて、最大の攻撃をぶつける

大きく三つの形にその効果は表れ、

? 最主要人物や主要人物に力を与える、その世界の人物主体の場合
(この場合の使用者の負担は一切かからない)

? 時風に最主要人物、又は主要人物の力を付加し共に攻撃する、時風に力をつける場合。

? 最主要人物と時風の力を合わせ、新しい一つの武器(力)を作る、
どちらの力も使う場合

がある。

ア「ようは世界ごとに一回だけ出せるすげー技ってことでしょうか?」

そのとおりですねはい。めんどくさくてごめんなさい。

ちなみに【CLANNADの世界】でのWORLD LINKは

- WORLD LINK - ~ WEAPON ~ で町の意志の光のなんか綿みたいのを出してあいつの行動を止めて、

ア「描写適当ですね」

- WORLD LINK - ~ FINAL ATTACK ~ で光の大きな剣でぶった切るのですよ

このパターンは？ですかね。

ア「ですかねってまた適当な」

この小説もノリで描き始めたものだからねえ。

こんな中二な話が俺の頭にあるんだぜって友達に言ったら、「書けばいいじゃん」って言われて書いたからね。

ア「さらりと誕生秘話を・・・」

そんな大層なものじゃないって

ア「といふかなんでこんなに大事なこと忘れたんです？」

鎌鼬切演武の説明書いたら終わってた〜ってなって説明した気でいた

ア「このド素人が！」

すみません!!!

では、次回予告をどうぞ〜!!

ア「いきなりの「奴」の襲撃から何とか逃げ延びた五代。そして時風との出会い。さらに「奴」の第二の計画とは？」

お楽しみに！

ではまた次回

だから見ていてください。俺の、変身！

クウガ く脈動く (前書き)

思った通りに書くのって大変だ・・・

クウガ く脈動く

「奴」の五代襲撃から一時間後

五代雄介なる人物を待つ間、オレは一条さんから五代さんについての話を聞いていた。

聞けば聞くほどあってみたくなくなる人物だ。

どうやら妹さんがいるらしいが、働いている保育園で待ってるらしい。

喫茶店ポレポレのオーナーからコーヒーを飲みながら彼の到着を待つ。

このコーヒーも旨いが、五代さんのコーヒーはもっと旨いらしい。

そうしていると、程なくして喫茶店の扉が開き、一条さんが迎える。どうやら五代さんが到着したらしい。

「おお、五代！予定より速いな……ってどうした！？服がボロボロだぞ！」

「一条さん、オレ、今さっき襲われました！」

「なにっ！？」

「世界とか訳のわかんないこといつてきて……それは本当か！？」
「……あ、あなたは？」

「ああ、紹介しよう。彼は時風舜といってな……」

そうして一条さんがオレの事を五代さんに説明してくれた。
その際、オーナーがいるので外の駐車場まで三人は出てきた。

やはりこの五代雄介と言う人が最重要人物のようだ。

「は、はあ。世界を、ですか？ちょっと信じにくいです。でも……」
「・」

「でも？」

「オレを襲ってきた奴も同じようなことをいってました」

「間違いないな。「奴」だ」

「それに一条さんも信じているみたいですし、信じます」

「そんな簡単に!？」

「信じられるなら、信じた方がいいでしょう?」

「やべえ、かつけえ」

「つか、器の大きな人だ。」

「ありがとう」

「いえ、どうも。あ、一条さん、そういえばベルトがまた復活したんですよ」

「ベルトが復活?」

「五代がクウガに変わる際に必要な物だ。破損して、使えなかったんじゃない?」

「オレにもなにが起こったのか・・・わかりません。そうだ時風さん、なにかわかりますか?」

「うーん、おそらくは「世界」がやったことだと思う」

「世界が？」

「ああ、「奴」の力は強大だからなあ。それに対抗するために失われた力を復活させたんだと」

「それでクウガの力が……」

「ああ。あと、「奴」は何か言っていなかったか？」

「世界を喰らうって言ったくらいで他には……」

「手がかりはなしか……」

プーッ、プーッ、プーッ

そう話しているとビートチェイサーに警察無線が入る。

「奴」に襲撃されたことから、何か起こったなら、と五代が回線を開いておいたのだ。

《警視庁から各局へ通達。科学警察研究所が何者かに襲撃された。犯人は武装している可能性がある。繰り返す、犯人に武装の可能性あり！！十分に注意されたい！》

「科警研が！？」

「科学警察研究所ってなんだ？なにがある？」

「クウガの事とか、未確認の事を研究して、サポートしてくれていたところですよ！」

「・・・「奴」、か？もしかしたらクウガの情報を得るために？
一条さん、研究所ってどこですか！？」

「一条さん、オレも行きます！蒔風さんは着いてきて下さい。なに
か乗り物は？」

「あ、そういえばバイクを貰ってたんだ・・・よつと」

蒔風がふっ、と腕を振るうと、クルクルと回りながらそこに一台の
バイクが現れ、ドッ、と着地した。

「す、すっげー」

「ま、ますます信じるしかないようだな」

そしてちょうど駐車場に出るところで、二台のバイクと一台の車がきた。

「やはり来たか……」

それに乗っていたのは蒔風と先程山道で逃した男と車にランプがのっていたので、おそらくは刑事であろう男だった。

「やあやあ諸君！遅かったな。オレっちの目的はもう果たされてしまったぞ？」

と、自慢げに「奴」が手にした物を三人に見せつける。
それはケースに入った何かで、それを見た瞬間、五代の顔色がサアツ、と変わった。

「あ、あれは！」

「どうした五代？」

「あれはダグバの、零号のベルト！」

「なんだと！？なぜこんなところに！」

「知らなかったのか？最後の戦いのあとに、密かに回収され、ここに保存されていたのだよ。甚大な被害を出したとはいえ、古代の知的生命体の一部だし、人類の進化のきっかけがあるかもしれんしな。研究者なら放つてはおかないだろうな」

「……………」

「なるほどねえ」

驚きでまともに動けない二人に変わり蒔風が口火を切る。

「で、お前はそれでどうするつもりだ？まさか人類の進化ってやつを促すのか？」

「それも面白そうなんだが、これの使い道はもっと別にある」

「それが何だかは知らんが……………やらせると思つか！！」

ゴッ！！！！！！

蒔風が「奴」に突っ込んでいく。

その手は「風林火山」の一本「風」にあてられ、攻撃範囲に入るや否や、「奴」を居合切りで切り伏せる！！！！

………はずだった。

しかし「奴」はその柄を足で踏みつけ、そのままジャンプし蒔風の側頭部に蹴りをぶちかます！！！！

ゴガッ！！！！、と強烈な音がして、蒔風が研究所のほうへ吹き飛んでいき、壁に当たり、中に突っ込み、いくつにもバウンドしていく。

「ぐっ、あぐあああ……っ！！」

そうしてまだ半分空中に浮いている状態の蒔風の背後に「奴」が廻りこみ蒔風を掴み上方へと投げつける。

グツ、ベキベキベキ、バガツ!!!

天井がいともたやすく砕け、時風の体が五メートルほどの高さに放り出される。

かすむ視界に時風が太陽をとらえた時に、そこに奴のシルエツトが浮かび、そこから落ちてきた「奴」は時風を踏みつけそのまま地面に着地する。

いや、着地なんてもんじゃない。あれは墜落と言っていいレベルのものだ。

ポツグア!!!!!!

「ぐぶえツ、つがっは!!!!!!」

蒔風を踏みつける「奴」はここで初めて剣を抜く。

「魔導八天」

その刀身は美しく、素晴らしく、一点のゆがみも傷もなく、整った形をしていた。

しかし行うその所業は、間違いなく歪んだものだった。

「ちょうどいい。ここで死ぬか？」

「奴」がその剣を振り上げ、蒔風の首を撥ねようとしたところで

バンバンバン！！

その刀剣が激しくぶれた。

「なに！？」

「奴」が視線を向けた先には、クウガのフォームの一つ、風の戦士、ペガサスフォームに変身して、ペガサスポウガンを構えた五代がいた。

フォームによって周囲のものを己の武器に変えるクウガは、おそらく一条から拳銃を借りたのだろう。

そしてペガサスフォームの能力、超感覚をもって、「奴」の振り下ろす魔導八天を撃ちその軌道をそらしたのだ。

その瞬間を逃す時風ではない。

「はあ、っ！白虎！！」

そう叫んだ瞬間、時風の右脇の前部に龍虎雀武のうちの一本、「白虎」が現れ、一瞬で大きな獣の姿へと変わり、「奴」を弾き飛ばした。

「ぬう！！」

「大丈夫ですか！時風さん！！！」

クウガが時風のもとによる。

その姿はすでに基本的なマイティフォームに戻っていた。

超感覚という便利な力を使うペガサスフォームは、そのエネルギーの消費が激しいので、約五十秒間しかその姿を維持できないのだ。五十秒たつと強制的に変身は解除され、二時間は変身不能になってしまう。

「あ……ああ、げふっ……なんとか、な」

白虎を元の剣の姿に戻し、鞘に納めて、クウガに寄りかかる。

白虎たちの姿はこの世界であまり堂々とさらすものではない。

「ち、ますますもって面倒な……まあいいさ。当初の目的は果たした。ここで戦うのもイレギュラーだしな。これさえ手に入れば今はいい。あとはこいつをふさわしい場所でゆっくりと……な」

「行かせるか……ッ！」

「蒔風さん!!動かないで!!」

「そつだぞ蒔風。動かないほうがいい。今ここでやりあってもそん

なお前じゃ勝てないし、俺もおまえを倒して終わりだ。それ以上はできないだろうよ。やはりいったん引くことになる。そんな面倒なことはしたくないんだよ」

「てめえ、一体何を……」

「ま、そこにいるクウガが最高の力を発揮すれば話は別だろうが・
・そうなられる前にここは退散するでしょうかね。じゃあねーー
ー！」

そういつて、フシュツ、と「奴」はどこかへと消えた。

あとにはボロボロになった時風と、変身を解除して立ちつくす五代、そしてその戦いの一部始終を見ていた一条だけが残された。

空には不気味なほど明るく太陽が輝き、サンサンとこの惨状を照らしていた。

クウガ く脈動く（後書き）

アリス「あいつ強いじゃん!!!」

そりゃ強いよ!!!

ア「前の世界でぼこぼこにやられてたのに・・・反撃したの一回くらいいじゃなかった？」

まあ、最初だし、シンプルに行こうかなってね

ア「本音は？」

戦闘描写が大変で書ききれなかった。

ア「ヘタレですね。これだからあなたの書く戦いはいつも一方的なんですよ。」

面目ない

では今回はこの辺で

ア「さて、「奴」のたくらんでいることは?? 時風の体は大丈夫なのか？」

あ、多分大丈夫

ア「ここでいっちゃんですか！！？！？」

まあねー

ではまた次回。

だってオレ、クウガだもん！！

クウガ　く期間く（前書き）

前書きいららないですか???

アリス「ここで聞くな!!!」

クウガ 〱期間〱

「奴」の攻撃にボロボロになったオレは、五代さんの掛かり付けの医者がいるという、関東医大病院に、二人に連れられて向かった。

「椿！椿いるか！？」

一条が声を荒げてその人と呼ぶ

すると一人の男性が出てきた。

椿 秀一

関東医大病院の司法解剖専門の医師である。

一条の気の許せる友人でその関係から五代がクウガであることを知る人物であり、彼の戦いをサポートした。

「ん？一条か、どうした・・・五代！帰ったか！おいおいそいつはどうしたんだ！」

「説明はあとだ。椿、彼を診てやってくれ。あと念のため五代も」

「また面倒事かよ・・・もういいけどさ」

そういつて時風と五代は診察室に入っていた

そして診察と治療が終わったのだが・・・

「五代。どーなっている。なぜまたベルトが復活しているんだ。それに一条！こいつ、あー、時風だっけか？もうだいたいの怪我は治っているぞ。担ぎ込まれたときはあからさまに折れていた骨もつながらはじめている。五代以上の回復力だ。何者なんだ？」

「それは・・・だな。言っているのかどうか・・・」

「・・・わかった。いーよ。今は聞かないでおく」

「椿？」 「椿さん？」

「なんかまた巻き込まれてんだろ？科警研が襲撃されたって聞いたしな。関係してんだろ？」

「あ・・・ああ」

「だったら早く終わらせてこい。そしてそのあとに聞かせてもらおう。こんなことがあった、って笑い話でな」

「椿、すまん」

「そう思つたら早くケリつけてこい」

「ああ」

「はい！」

そうして椿が会議室から出ていく。

蒔風がまだ目覚めないの、二人だけで話が進む

「あいつ、ダグバのベルトをどうするつもりだ……」

「なあ、五代。第三号の事を覚えているか？」

「あの蝙蝠みたいなたっけ？」

「ああ、確かあいつは零号のベルトのかけらを取り込んで自らを強化していた」

「まさか……あいつも！」

「それが本当なら、おそらくその通りだろうな……」

「蒔風（さん）！」

「ここは……病院か。一条さん、五代さん。ありがとうついでにま

す

「身体は大丈夫なのか？」

「普通の人間より頑丈にできてるんで・・・平気です。まだ全快ではないんだけど・・・な」

「でも、本当にダグバのベルトを丸々一つ取り込むなんて、できるんですか？」

「「奴」は既に一つの世界をその身体に取り込んでいる。時間はかかるだろうが、不可能ではないだろうな」

「たしかに、「奴」は相応しいところでゆっくり・・・とか言っていたからな・・・だがその場所は・・・」

「い、一条さん、もしかしたら」

「あそこ・・・だろうな」

「あそこ、とは？」

「すべての未確認・・・グロンギが封印されていた、長野県山中の古代遺跡」

「もしくはその周辺の森だろう」

「確かに、相応しい場所だな・・・」

「一条さん！すぐに・・・」

「ダメだ」

「どうしてだ蒔風！「奴」は今長野にいる。今が攻めるチャンスだ！」

「勝てないぞ、「奴」には。普通の状態のオレと「奴」が同じほどの力を持っていて、それで今オレは戦うには無理がある。さらにあいつは今も力を増している。五代一人じゃ勝てない。そんな相手に警察が向かって、叩き潰される」

「じゃあ、どうすれば……」

「オレが回復してから五代さんと一緒に「奴」を叩く。骨がくっつくまで、あと四日つてところか」

「その間にベルトの取り込みが終わったら……」

「そうならないのを祈るしかない。本当なら五代さんを連れて行きたくはないんだけど、オレ一人じゃ勝てないからにやー。ま、それでも勝たなきゃならんのやけどのう」

「蒔風さん……」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

クウガ 〱期間〱 (後書き)

アリス「この後書きは、御覧の通りアホの提供でお送りしております」

いきなりひどいなおい！

ア「最近一本一本短くない？話数どんどん増えてくよ？」

流すなし！

ア「長砂氏？一体誰のことを言っているのですか？」

んな人間はオレだって知らねえよ！

何これ。作者いびって楽しいか！？楽しいのか！？楽しいんですか
！！！？？

ア「三段活用オツーWWW」

・・・どうやら貴様にはお灸をすえてやらねばなるまい

ア「(ビクッ)な、何をするつもりですか？」

リマジの響鬼の世界に送り込んでコードネームを【おごひびき驚鬼】または【ちゅうき楽鬼】にしてやる

畜生……俺たちの……夢が……

ア「っていつか全く関係ないよね、この後書き」

面白い後書きを目指しています

めざせ時雨 恵一さん

ア「騒がしいだけでしょ、これ」

そしてタグには「後書きが本編」！とある！

ア「タグなんかないでしょうが……2525動画じゃあるまいし」

でも、いいよね……たのしいの

ア「まあ、楽しいのはいいですけど」

だから……もう……ゴールしても……

ア「ダメです。ダメ！」

ひでえ

ア「貴方が言いますか」

おかあさ〜ん……この人ひど〜い。マジ困るんですけど〜

ア「お母さん今ここにいないだろうが……しかもそんな言葉で話

すのか!!??」

そんなわけではないでしょ

ア「ああよかつて」

おつごらあ!!母さんよおおお!!洗い物手伝ってやるつか
ごらあ!!!!

ア「ヒドッ……くない!!ひどくないよ!!??言葉づかいはひ
どいけど」

それが私クオリティ

さてこんなことはさておいて

ア「さておくことにグダグダと……」

……次回は!!!!??

ア「そして訪れる四日後。この世界での決着」

ではまた次回だゴラア!!!!

ア「ひつぱるな!!!!」

頂上疾走俺が超えてやる 超変身、仮面ライダーダークウガ

クウガ く出発く

ブオオ

「蒔風さんはこれが終わったらすぐに旅に出るんですか？」

「あー、大体12時間はいても大丈夫だけど」

「オレ、次は寒い地方に行こうと思ってるんです。前は南の島に行きましたから」

「良さそうですね、それ」

「はい、色んな人の笑顔が見れて、楽しいです」

キキィ、ブオンブオンブオンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンン

「じゃあ、やっぱオレもこのまま出発になるのかな」

ザッザッザッ

「そうですね・・・次はどんな世界に？」

ザッザッザッ

「それはわかんないんだよなあ」

「構わないさ」

「じゃあ、行ってきます」

「……五代！」

「??？」

「どんな姿になっても、自分を見失うなよ……」

「大丈夫です。オレは……倒すためじゃなく、みんなの笑顔のために、戦いに行きますから」

「なら、大丈夫だな……行ってこい！」

「はい！」

そして二台のバイクが出発した

「奴」がクウガの首を狙うのを蒔風が防ぎ、空いた「奴」の腹にクウガの蹴りがめり込む！

「奴」は後退するが、蒔風がそれを許さない。

先日のお返しとばかりに「奴」の背後に回り、玄武盾で思いつきり上空に殴り飛ばす

そこには既にクウガがマイティキックを準備してジャンプしていた

「オオリヤアア！」

「グムッ！」

ドガア！

「奴」が蒔風とクウガを一気に責め立ててくる。

そして剣を構え、二人を一気に吹き飛ばしにかかる!!!

「おらあ!!!ホームラン!!!」

しかし二人もそう簡単にはやられない。

蒔風が跳び、クウガがしゃがむことでそれぞれかわし、クウガはパンチを、蒔風はキックをぶちかます!!!

それを「奴」は足と手を使い器用にかわし、いなしていく。

ザッザアア

「奴」が二人から距離をとって叫ぶ

「ふむ、なるほど。さすがに蒔風がいるんじゃ二人相手は厳しいな。

・・・だ、が、な。ふおおあつ！」

バン、バン、バンバンバンバンバンバンバンバンバンバン
ンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンン

「奴」がうずくまり、力を込めるそうして起き上がると、肩から角をだし、頭からも四本の角を・・・ダグバのような姿と化した。

「「っ！」「」

「どどっしたっ！こいよっ！」

といい「奴」が蒔風に手を向ける。

すると、蒔風の身体が一瞬で炎に包まれ、その身を焦がす！！

ガギイ！

時風が青龍刀を振るい、「奴」は武器を構えず、素手でそれを受け止める。

「！？」

「今のオレにはこんな事もできんだ。あともうひとつ。「」の肩の下ゲはな、常に高エネルギーのプラズマを放出していてな、さっきの炎もそれによるものなんだが……」

「なっ、しまっ」

「時風さん！離れて！」

「近づくだけで切り裂かれるそうだ」

ドパッ！

そう「奴」が言い終えると、時風の全身が切り刻まれ、いたるところから血が噴き出した。

「ぎ、ギアアアアアアアッ」

「時風さん！オオオオオオオオオオオオ！」

「がつ、来るな！五代！」

「無駄、だあ！」

ボグアッ！！！！！！

「ゲツブアアアア！」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガ！！！！！！

「奴」が時風を救おうと走るクウガを一瞬でなぎ払う。

「いいぞお！！最高だ！！おれはこの世界を喰える！！！！！！」

「それは……させない」

「なに??？」

「絶対に、させない!!!」

「ふ、五代雄介。貴様、みんなの笑顔を守りたいんだよな。だった
らオレに任せる。オレが世界を再構築すれば、本当に誰も悲しまな
くて済むんだぞ??？」

「それは違う!!!」

「なにがちがうと????」

「みんなが笑顔になるのはいいことだ。それは本当だ。お前が目指
すものは素晴らしいのかもしれない」

「ならば……」でも!!!」「……」

「でも！そのために今この世界にある笑顔を消していい理由にはならない！！！！」

「そのとおりだ・・・」

「！！大丈夫ですか！蒔風さん！！」

「ああ・・・なあ！聞いたかよ！！これが五代さんの覚悟だ！！彼が守るのはこの先の笑顔のためだ。お前も先の笑顔を求めるんだろうが、この人はさらに「今」の笑顔も守り通せる男だ！！先だけしか見ず今を見捨てる貴様に、俺たちは倒せない！！なあ、五代さん！！！！」

「・・・・！！（コクン）」

「そんなものは今が幸せな奴の戯言だ！！！！」

「戯言かどうか、見せてやるさ！！！！開翼！！！！」

バツサア!!!

「おめ、めじじい!」

【KAMEN RIDER KUUGA - WORLD LINK
- WEAPON -】

「五代さん!」

「はい!!見ていてください!!オレの、変身!」

グオオオオオオオオオオオオオオオオ

「はああアアアアアアア!!!!究極変身!!!!」

黒煙がクウガを包んでいく

そしてそれが晴れた時、彼は、究極の姿に変わる。

しかしその姿は

この世界では発現されぬ姿！！！！！

「これは……ビリビリ！！？？」

ここに、この世界ではあり得ぬ、仮面ライダークウガ ライジング
アルティメットフォームが立つ！！！！

「馬鹿な！！！！それはこの世界のでは………」

「WORLD LINKをなめんじゃねえよ……いくぜ、五代さん……」

「はい……」

二人が「奴」に掴みかかっていく

その力は、ダグバの力を取り込んだ「奴」をも凌駕する！！！！

「なっ、があ……はなっせ！！」

「では」

「要望通りに！！！！」

「「おらあああ！！！！」」

「ぐおおおおおおおおおお！！！！」

蒔風が放り投げ、クウガが宙へ飛ぶ！！！！

空中で切りもみ回転して落ちてくる「奴」にパワー100tのパンチが撃ちこまれる！！！！

「ぬぐ。(ガッ)ぐあああああああああ」

二人の周囲をそれぞれ炎が円形に地面に現れ、さらに稲妻がほとばしる！！！

「ぐ、な・・・ぜ」

「どうやらオレに力を付加するパターンのようなな。クウガのこの力をコピーしてオレのほうにペーストしてるだけだ。こっちの威力も本物だぜ！！！」

「ババツ！！」

二人が跳躍し、「奴」に向かって蹴りを放つ！！

「俺たち二人分の！！！」

「技を食らええ！！！」

「くそおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！！」

クウガはマイティフォームに戻り、時風は翼を消した

「終わっ……た？？」

「ぐ、まだ……だ」

「！！！！」

「終われる、かあ！！」

すでにユラユラと消え始めている「奴」が、魔導八天が組み合わせの一つ、「鬼人^{きじん}」と手に、時風にすさまじい勢いで駆け出してくる

「天馬！！！」

蒔風はそう叫び、自身の背中の上から右下にかけてある天馬を抜き、それに応じる。

そして

二人の姿が

刹那の瞬間すれ違い

ギヤリイイイイイイ………ン

五メートルの間をあけて止まる

蒔風は両手を突き出し膝を曲げて低い位置に

「奴」は両手を蒔風と同じように突き出し、こちらは体重を前にか

け、立っている

大体こういうシーンでは、どちらが勝ったのかわからないものだ。

だが、五代には、どちらが勝ったかは一目瞭然であった。

時風の手には先ほど握られていた「天馬」がない

しかし、「奴」の手にはしっかりと「鬼人」が握られている

そして

蒔風の「天馬」が、「奴」の胸に突き刺さっていた

「ぐ、あ・あ・あ・あ・あ・あ! ! ! !」

ポツツツ! ! シュウウウウウウ

そうして、「奴」が一瞬ではじけ飛んで、きえた………

[Gate Open . . . KAMEN RIDER KUGUKU]

「 . . . はは。五代さんも」

「行ってらっしゃい!」

「んー!?!」

「 蒔風さん!」

そうして二人は一言三言、言葉を交わし、共に去っていくとする。

「 いやなに」

「 なにを」

「 ああ、ちょっと待ってくれ」

「 では、蒔風さん、オレはこれで」

.
.

それは自分が完全に発見され、なおかつ逃げ切れないことを悟ったのか、急に大きくなり、反撃してきた。

「うわっ……あれ??思ったより強くない……」

どうやらその影はたいした戦闘力をもっていないようだった

「でも何があるかわからないから……超変身!!」

クウガは近くの木の手を拾い、構え、その姿をいかなる攻撃にもひるまない、最高防御力を持つタイタンフォームに超変身した。

ギギイ、ギイ!

影は攻撃を仕掛けてくるが、タイタンフォームには効かない。

その後あっけなく切りつけられて、消滅した。

「何だったんだあれは……」「奴」が残したもの??でもあんなに弱かったし……」

その後、悩みながらも、五代は旅に出た。

そして、この出来事はこんなこともあった程度に収まってしまった。
・
・
・

クウガ く出発く（後書き）

デ・レ・レ・レ・レンー！ガシュッ、ピューン

アリス「ディケイドの終わり方？」

よくわかったな、飴をやろう

ア「レモン味がいい」

ほら

ア「ありがとうー！！」コロコロ（ほれにひてもは

きちんと話しなさい

ア「んー、（ゴクン！）それにしてもさ

飴を飲み込んだ・・・??

大丈夫か??

ア「平気平気。後でまた出して舐めるから」

人間ポンプか!!

ア「それよりなんか思わせぶりでしたね」

クウガの最後？

ア「ええ。あれ何なんです???」

終盤まで明かしません

ア「終盤まで見てくれるかどうか・・・」

オレは信じる!!今までのアクセス数を!!!

ア「私も応援します!!」

ありがとう!!

蒔風「やっとこっち来れた」

もう終るぞ????

蒔「さてよ!!なあ、オレのあの四日間とか描写してくれよ!!--!!」

それはいつか

蒔「この野郎めんどくさがりやがって・・・」

ア「まったく、うるさい主人公ですね」

時「ここ来んのやめようかな・・・」

では今回の世界を

【仮面ライダークウガ】

構成：”no Name” ”ライクル”

最主要人物：五代雄介

- WORLD LINK - } WEAPON } : クウガをライジング
アルティメットフォームに

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : 時風
に同様の力を付加しダブルキック

224

です

ア「”ライクル”??」

ああ、別に未来的なものじゃなくても、超古代の技術だろ??あれ

ア「なるへそ」

さてと、よろしく

ア「はいはい。次の世界にきた蒔風。そこで彼は災いと言われ?？」

ではまた次回

蒔「主人公なのに主人公なのに主人公なのに主人公なのに……」

ただの人間には興味ありません!!!

涼宮ハルヒの憂鬱 ㄱエンター イン グループㄱ (前書き)

今回の世界は消失後です。

涼宮ハルヒの憂鬱 ⅴエンター イン グループⅴ

「ふう………」

クウガの世界を出て、俺がたどり着いたのはどうやら学校の教室・
・いや、部室のようだった。

………

たった一つの問題を除いて、オレのこの世界での行動はいきなり順
調だった。

最主要人物がだれだかいきなりわかったし、主要人物たちの情報も
きた。

ちなみに服装はこの高校のものであろう制服を着ていた。

たしかにいいさ、手間が省ける。

ただどさ、これはないんじゃないですか???

到着地点にそのご本人たちがいるなんてさあ!!!

「お、おまつ、どごつ、は？なんっ？？」

「ほっ……」

「きゃあ！！ど、どなたですかあ……！！??」

「……」

オレの目の前にいる四人はそれぞれ反応が違った

一人は見事にテンパっていて

一人はなんか感心してて

一人はバタバタと慌てだし

一人は分析するような眼でこちらを見ていた

「ふむ……もしかして、あなた異世界人……とか言いませんよね???」

「はあっ!!???」

おとなしそうな男がいきなり核心を突いてきやがった!!!

「おい!!古泉!!こいつ本当に???」

「涼宮さんが掲げていた奇天烈項目のうちの、宇宙人、未来人、超能力者はもうすでにいるのですよ?この登場は遅すぎるくらいです。それとも、満を持して、ということなのでしょう?」

229

「……おい、おまえ。本当に異世界人か???」

「待ってくれ!!!なんでお前らそんなに理解が早いんだ!!???」

「なんてことはありませんよ。あなたがこの世界に来た理由は、おそらく涼宮ハルヒという人物が原因でしょう???」

「いや?違っけど」

「そうですか・・・いや、あなたが知らないだけかもしれないですね・・・あ、それと、あなたに敵意はないんですね？」

「ないけど・・・」

「ああ、それはよかった。いきなり戦闘に入るのはいささか厄介なのでね。異次元からの侵略者じゃなくてよかったです」

「そんなこと言ってる場合か古泉。・・・で、お前さんは本当に異世界人なのか？」

「ああ。この世界の外から来たってことになるからねえ」

「長門、本当か??またなんかお前の親玉がやらかしたんじゃないのか？」

「違う。彼の言っていることは事実。彼の存在座標は、この世界とは異なっている。」

「つまり??」

「一般的に、彼は異世界人と呼ばれるカテゴリーの人間。また、肉体の構造は我々と変わらず、体内の状態からみて、彼に敵意は存在しないと思われる。」

「そうか・・・」

「しかし・・・断定はできない」

「なぜだ？」

「彼はこの世界の人間ではない。故に、どのような力をもっているか、わからない」

「十分だよ。長門」

「（コクン）」

そうして長門と呼ばれた少女は、ふたたび読書に戻るかと思いきや、天井のほうを向いて止まってしまった。

「えっと・・・で・・・さ」

「ああ、自己紹介がまだでしたね。僕は古泉。古泉一樹といいます。このSOS団の副団長をやっています。よろしく」

「あ、オレは蒔風舜。って、SOS団って何だ？」

「その説明はのちほど、そしてあちらの方が」

「あ、あのう。朝比奈みくるといいます・・・」

「あ、どうも」

「お、お茶をどうぞ」

「ありがとうございます」

「そして彼女が・・・」

「・・・長門有希。」

どうやら天井観賞から帰ってきたようだ。

「・・・情報統合思念体から報告があった。」

「お前の親玉から？」

情報統合・・・なんだそりゃ??

「先ほど、彼とは違う存在がこの世界に侵入してきた」

「なんだと!?!?」

「そして今は行方をくらまし、どこかに潜伏している・・・」

「どこだ!!どこであいつを見失った!!」

「それは・・・」

長門が口を開こうとした瞬間に

「あんたたち!!あたしがいない間に何騒いでんのよ!!!!」

バン!!と扉を豪快に開き、一人の女子生徒が入ってきた。

そして部屋の状態を見渡し、オレを疑うような顔で見て

「だれよあんた」

なんて聞いてきた。

「あー、この生徒だけど・・・」

「そんなのは見ればわかるわよ!! 学年は? クラスは?? なんてここに来たの? 答えなさい!!」

「まくしたてないでくれ!! えつと・・・」

「ん? でもあなたの顔見たことないわね・・・本当にうちの生徒?」

なんでこの世界の奴らはこう鋭いんだよ!!!

「あー、ハルヒ。彼は明日からの転校生でな、その前に学校を見て来てここにたどり着いたそうだ」

まだ自己紹介していない男が、オレの事をいろいろと説明している。

「ふうん。で、なんでここに来たの?」

「ここの人達がなんとも面白そうって聞いたもんでな」

「入団希望者ってこと? あんた、不思議な力を持つてるの?」

「ああ、そ」「涼宮さん、今日は彼も来たばかりですし、時間も遅いです。」「なんだ?」

「彼をこれ以上引き止めるのはかわいそうです。ですから、また明日彼には来てもらうということにしましょう」

「まあ、そうね・・・古泉くんの言い分も尤もね・・・わかったわ!明日、なんか見せてもらうからね!」

そういつて「団長」と書かれた席に涼宮が座る。

「あれ?あんな名前は?自己紹介とか済んだ?」

「蒔風だ。蒔風舜」

「オレの紹介だけまだだったな。オレは「そいつはキョンよ」「おい!」

「なによ。あんなだけ自己紹介してないって言うからあたしが言ったんじゃない」

「くっ。改めてオレは・・・」

「よろしく、キヨン」

「定着しちまったじゃねえか!？」

そうして、まだ少し残るらしいSOS団のメンバーを残して、オレは部屋を出る。

その際、古泉から一枚のメモ用紙を渡された。

そこには、8時に市営公園に来てくれるように書いてあった

.....

「おい、来たぞー」

「ああ、こつちです」

そして時間通りに公園にオレは到着した。

そこには涼宮を除いたSOS団のメンバーがいた

「待たせたか？」

「いいえ、時間ちょうどです」

「なんであの場で止められたのかの説明とかをお願いしたいんや。頼むで」

「関西の方だったんですか？」

「うんにゃ、気分さね」

「適当だな！」

「では、説明しましょう」

そうして古泉が説明を始める。

途中途中で情報も頭に流れ込んできたから、内容はしっかりと伝わってきた。

どうやら彼等は人生を面白可笑しく過ごそうとする涼宮ハルヒに集められた人間だそうだ。

涼宮の目的は宇宙人とか超能力者、未来人に類する不思議で遊ぶ事らしい。

そして涼宮ハルヒは面白そうな人間を集めた。

しかし偶然か、必然か、集められた人間はみな本当に普通ではなか

った。

どうやら彼らによると、これは偶然ではなく、涼宮ハルヒの力によるものらしく、それは涼宮が意識的にしろ無意識的にしろ、願いを現実化するというとんでもないものだった。

しかも涼宮本人はこの能力を知らず知らず行使しており、不思議なことがそうはない、と思ってるらしい。

だから、彼女には様々な不思議現象をひた隠しにしなければならぬ。自覚した彼女がなにをいしたすかわからないからだそうだ。

オレが涼宮に説明するのを止めたのはこのためか。

面倒だな。元凶に知られないように問題を片付けるのは。

そして彼等は様々な事件を解決してきたらしい。

「と、こんな感じですね。僕の機関の思惑などを省いて説明したつもりですが、大丈夫ですか？」

「ああ、大体わかった（世界の情報もあったしな）」

「朝比奈さん、長門さん。今の説明に付け足すことは？」

「ないです」

「問題ない」

「オレ!!!??」

「待ってください。彼は普通の一般人ですよ?」

「うん、そうだよ。彼は普通の人間だ」

「え?」

「最主要人物だからと言っても特殊な人間であるわけではない。普通の人間が主人公の話もあるだろ?」

「なるほど」

「あ、あのう・・・つまりキョン君の命が狙われるって事ですよね」

「そうだよ!ここにいるのまずくないか!??」

「たぶん大丈夫。いま「奴」は世界の構造を割り出しているだろうから、来ないと思う」

「世界の構造?」

「世界によっていろいろ違ったりするだろ?それを割り出さないと世界を壊しても取り込むことが非常に困難になって、ほとんどが消えてしまうんだ。だから今「奴」は世界の構造を割り出している」

「それはどれくらいかかりますか?」

「長門さん。「奴」が来たのは何時頃ですか？」

「今日の17時48分」

「となると大体明日の18時くらいかな」

「では明日の放課後に一気に攻めてくると？」

「いや、少なくとも涼宮の近くにいる時は大丈夫だ」

「なんでだ？」

「涼宮の前でお前を殺す。それはあからさまに非日常だ。「奴」が特別な力を使おうと使わまいとそれは涼宮の精神に大きなショックを与える」

「なるほど。それで世界の構築が変わってはせっかく今算出しているのが無駄になる、ということですか」

「もしくは、新しい世界を作られるかもな。つまり「奴」も俺たちも、涼宮にばれないように事を済ませなければならぬ」

「では、今は安全なのですね？」

「うーん。確かに「奴」は動けないし、今殺しても世界は食えないけど……」

ヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァン！！

なんでこんな状況でしかこんな風にならないんだ!!

「ほら、あれ」

蒔風がなんか指さして言ってきた。

あん？なにがあれだっ？？

蒔風が指をさしたほうを見た

そこにはグネグネした黒い塊が次々と分裂して15個ぐらいに分かれた。

「あれ、何だかわかる人拳手——」

わかんねえよ!!!

「おかしいな、お前らのだれか、確率としてはキヨンが今までに遭遇した脅威のほすが」

俺が受けた脅威？そんなもん、ハルヒと出会ったこと以外に何がある。

あいつにかかわったせいで俺はトンデモ現象にかかわり始めたんだ。今となつては納得してるけどな。

まずあいつに話しかけて、SOS団を立ち上げ、部室を占拠し、朝比奈さんが拉致られてきて、古泉が転校してきて。

ここから一気にきたんだよな。長門にトンデモ話を聞かされ、朝比奈さんが驚きの正体を明かし、そして朝倉に……朝倉???

「おいおいおい……まさか、冗談だろ？」

分裂したグネグネがどんどん人型に近づいてくる。

わかつちまった。いまこそ自分の判断能力の高さに嫌気がさしたことははないね!!

なんであんなピカソの絵よりグネグネのでわかつちまったんだよ!!

「心当たりがあんのか？」

「あれは……」

「対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイス」

長門、初対面の人間にいきなりそれは……

「なるほど、じゃあお前の同類？」

わかんのか!!!???

「さっき説明受けたからそりゃわかる」

おれはいまだによくわからんのだが

「情報統合思念体が、この惑星の人類とコンタクトするためにかつて創造した端末。しかしあの個体はすでに消去されている」

「その記憶をもとに大量生産したつとところかな。多分性能は能力こそ欠けてても、パワーなんかのステータスは底上げされてるぞ。で、あいつなんてんだ？対有機なんたらなんて長い名前以外にもあるだろうよ」

「・・・あいつは前にオレの命を狙ってきたやつだ。ハルヒがどう動くかとか見るためにな」

「あー、急進派ってやつか？」

「そう。そして彼女の個体名は・・・」

「「朝倉涼子(だ!)」」

S I D E o u t

グマママママママママママママママママママママ

「うわー。どンドン形がしっかりしてきたよー」

目の前の影がついに立ちあがるところまで出来てきて時風が面白そうに呟く。

246

「なあお前らってどれくらい戦える?」

「僕の力は使えるようですね。しかし普段の十分の一程度ですが」

「大丈夫なのか?」

「あの程度なら。それにこの程度で十分だということなんでしょう」

「長門さんは?」

「問題ない」

「うん、よし。朝比奈さんなんかはなにか？」

「わたしは武器は持ってないです危ないですし・・・」

確かにこの人に武器は危ない。背中から打たれそうだ。

蒔風がそう思ったとか思わなかったとか。

「おれは一般人だからな！！」

「わーってるよ。でも、お前が狙いなんだからな。あいつらは」

「ど、どうするんだ??」

「戦争を!!!一心不乱の大戦争を!!!」

「おい!!」

「さあー、テンションあがってまいりましたあ!!...」

グオン

「な、長門？」

「そこなら安全」

長門が戦えないキヨンと朝比奈さんをバリアで包む

「おお、これなら大丈夫そうだな！・・・さっつて！！いいか（女子らしいけど）この野郎ども。俺がいる限り、こいつに手出しはさせん！！はあああ・・・力を借りるぜ！！」

バツ、ヴォン！！

そう言つて蒔風が腰に手を当てるとベルトが現れた。

そして構えをとり・・・

「変身！！」

カチツ、ヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァンヴァン
アアア・・・パアン！！

蒔風が叫び、変身する。その姿は・・・

「よっしゃあ！！仮面ライダークウガ！！熱く燃え上ーがる！！」

「蒔風さん、その姿って・・・」

「ん？知ってんの？」

「確か、僕の記憶では、子供のころのヒーロー番組の登場人物でした」

「あー。この世界で物語になっただけなのか。五代さん。いや、前の世界がこの世界でさ、力を借りてんのよね。まあか借りると言うよりはコピーしているって感じかな」

そう、蒔風が前の世界で五代と別れるとき、五代は「蒔風の旅の安全」を願ってくれた。

そして蒔風の翼は人の「願い」を司る。

その五代の願いを蒔風が力として受け取ったのだ。

蒔風は他の世界の力をいくらでも借りられる（今まで出会ってきたものの中で、なおかつ蒔風に味方するものからだけだが）

その力は一つの力につきトータル十五分間の使用制限があるが、使用者が蒔風になっているので、それなりに強くなっている。

「な、なるほど……」

「ほら、くるぜー!! いや、行くぜー!! こっからスーパーヒーロータイムだ!!!」

t o b e c o n t i n u e d

涼宮ハルヒの憂鬱 ㄱエンター イン グループㄱ (後書き)

アリス「アリスと！」

作者のー！

「ドキドキ！クッキングー！！！」

ア「さて始めました「アリスと作者のドキドキクッキング」お送りするのは私アリスと」

作者の二人でございます

ア「では早速、始めましょう。まず豆を用意します」

え！？何の豆！！??

ア「そして植えてから水をかけます」

そっからなのか！！???

ア「この土は良さそうなので、いいものができそうです」

オイ！ムシシツツエナイデイナンツオクアイユエ！

ア「そしてサイバイマンが誕生しました」

何してんだよー！！

ア「基本襲いかかってくるので気を付けてください」

ドキドキすんのそこかー!!

ア「ハッ、ダアっ!! (ドーン) へ、きたねえ花火だぜ」

それ違うしー!!

ア「さて、後書きを始めましょうか」

そ、そうですね・・・

ア「今回はハルヒの世界ですか」

そーですね

ア「また強くなりましたね、蒔風」

そーですね

ア「しっかり答えてくださいね」

はい。

えーっと、蒔風が借りた力を使うときは自分自身の力は使えません。

翼はもちろんのこと、獄炎などの能力、十五天帝なんかも使えませ
ん。

その能力だけしか使えなくなります。

だから借りた力を二つ同時に、ということも無理です

ア「無理に使うと??」

使えません。無理に使うとすることもできません。

もしできるとしたら本当に蒔風の体は、それぞれの「願い」がぶつかりあって崩壊します。

ア「願いが蒔風のためのものであっても?」

はい

ア「でも基本蒔風強いから……」

まあ、ほとんど問題ないんですけどね

ア「それと前回の予告と違いましたよね。災いなんて言葉でできてないですよ?」

・
書いてるうちに、あれ?災いって言葉入れにくくない?となり……

ア「まったく……」

すみません……

ア「あ、あと……」

またですか。なんですか？

ア「蒔風の性格とかはあったけど、基本的な身長とかの紹介ってなかったよね」

・・・・・・・・・・・・・・・・さあ！！蒔風の紹介タイム！！

ア「あ！！この野郎、忘れてやがったな！！」

蒔風舜

身長：175？

体重：75？

顔：いたって普通の青年。それなりに整っているが、そこまでではない。本当に普通。高校生くらいならなりきれぬぐらい。

眼鏡をかけていたが、手術で視力が回復していて掛ける必要なし。しかし一度眼鏡をとって見た時、友人からあまりパツとしないと言われ、伊達眼鏡をかけている。

身につけているもの

財布：布製の財布。中学生の時から愛用品。ズボンの右のポケットに入っている。家のかぎが付いていたが、今は代わりに自身の覚醒の時に使った鍵のストラップのようにつけている

音楽プレイヤー：言わずと知れたiPod。左腰にあるベルトにつけられたポーチに入っている。今まで蒔風がやったゲームやアニメなど曲が入っている。しかし蒔風はどれが何の曲かわからない。120GBのクラシック

携帯電話：水色の携帯電話。ズボンの左のポケットに入っている。今まで訪れた世界での友人との写真がおさめられている。

ちなみに携帯もiPodも充電は切れない。

ア「なんかフツ」

いいんだよ。ふつうで

ア「つてかこんな話数が二桁に言ったところでやる事じゃないですよね」

本当に申し訳ございません

ア「眼鏡とか絶対読んでる人考えてないよ」

すみません！！

ア「じゃあ、いきますよ？」

お願いします（原稿を渡す）

ア「朝倉コピ」と戦う時風たち。退けるがその後の「奴」の行動は
!?!?!?!日和ひよつたな」

あい、すみません

ではまた次回

世界を大いに盛り上げる、ジョン・スミスをよくしく!!

涼宮ハルヒの憂鬱 ～ワンダー ヒューマン～ (前書き)

ハルヒが全然出せない・・・どうしよう

涼宮ハルヒの憂鬱　〜ワンダー　ヒューマン〜

「オリヤア！」

ドカツ

パアン

朝倉コピィとの戦いが始まって二分。

やっと三体目を倒したオレは古泉と長門さんに叫んだ

「やられるとこいつら弾け飛ぶぞ！しかもグジグジしてまた復活しやがる！」

「はあ！それはっ！わかってますっ、が！」

古泉が赤い球体を飛ばしながら、所々で息を吐きながらかえしてくる。

一度に殲滅だあ？

「古泉！できそうか？」

「僕、ふっ！にはできません！」

「長門さんは？」

「妨害があるために実行不可」

「蒔風さん。ふんっ！できませんか？」

「できるけどどうせならクウガで倒したい！」

「そんな理由ですか！？」

そうして、ないかな〜と考えると・・・あ

「あ、あつたよ。殲滅技」

「本当ですか！もっふー！！」

「長門さん。3キロ四方を吹き飛ばしても、この空間は大丈夫ですか？あと堪えられるバリアは張れますか？」

「バリアは可能。あと、この空間は物理的な方法での破壊は不可能」

朝倉コピ―は復活する間もなく焼き払われ。一人残らず消滅した。

と、それと同時に異空間も消えていた。

.....

「ふうふう……はぁ……これが、「奴」の力ですか……

」

「古泉。大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。しかし敵が細かい分、神人より厄介でした」

「まあ、今日はこの程度だろうよ。後は明日つてところかな」

「そういえば、蒔風はどこ住んでんだ？いざという時に知っておきたい」

「オレとしては一緒に泊まってくれたほうが楽なんだがな」

「何が悲しくて野郎で固まらなきゃならんだ。で、どこだ？」

「駅近くのマンションだ」

「そのマンションってさ……あそこか??」

「んー、そう、だね」

「な、何号室だ??」

「あん?505号室」

「そこ、朝倉が住んでた部屋だぞ。ちなみに、長門が同じマンションに住んでる」

「……………キョン!うち泊まれよ!安全だぜ!?!?」

「馬鹿野郎!余計に気が滅入ったわ!!」

「なんか事件後のアパートに住んでる気分でいやじゃなかよ。それに一人はさびしい!!」

「男に言われてもなんも思わんわ!!」

「しかし、確かにそれが合理的なのは確かです。今日はいいとして明日からどうするのですか??」

「う……………」

「「奴」は寝ている間にお前をズシュツ!!とやってそれで終わりだぜ?」

「だけどハルヒにばれたら……………」

「それは僕のほうで手をまわしておきます。緊急事態ですからね。機関も動くでしょう」

「世界云々の話を信じてくれる人たちがいるの？」

「そう言わなくても、涼宮さん関連で動いている組織は同じように彼のことも気にかけています。新参の名も知れぬ組織が早とちりして暴走したことにします」

「あつ。わたしそのままのこと報告しちゃいましたあ。大丈夫でしょうか？」

「大丈夫ですよ、朝比奈さん。貴方の上司は……多分知ってますから」

「ふえっ？キョンくん、わたしの上司を知ってるんですか？」

「ん！？いやあ。朝比奈さんの上司ならそうかなって思ったくらいですよ。ははは」

「……？ちょっと待ってください。朝比奈さん、未来とは今まで通り通信できるのですか？」

「えっ？はい、できますけど……なにかいけなかつたですかあ？」

「いえ、そういうわけではなく。もし「奴」に世界を破壊されているとすれば、当然、未来もなし崩し的になくなります。しかし朝比奈さんは未来と交信できる。つまり「奴」はこの世界を壊せなかつた、ということになりませんか？いえ、もつと言ってしまうと、僕たちがどのように動いたかを教えてもらえば……」

「そりゃ無理だ古泉。オレと「奴」はこの世界において完全にイレ

ギユラーなんだ。この「物語」に本来存在しないキャラクターなんだよ。だから俺たちは涼宮ハルヒに関係がないんだ。現れるべくして現れるなら、関係してないとおかしいだろ？つまり、この世界の未来も、俺たちのことを知らない。「未来」もひっくるめて、「この世界」だからな」

「そうですか……」

「おいおい。だから勝手に納得するなよ！！肝心の俺が置いてけぼりじゃないか！」

「説明しだしたらきりがなし、お前はこの世界の構造を知りたいわけじゃないだろ？」

「そこまでは……」

「だからお前が知ってりゃいいのは、自分の命が狙われているってことだけで十分だ。本来、こんなもん背負わせるものじゃないんだけどな」

「……」

「で、どうしますか？とりあえず今日は解散しますか？もう23時です。汗も流したいですし、僕としてはお開きにしたいのですが」

「そうすっかな。キョン、明日までに決めとけよ??」

「ああ……ん？なんだ長門」

「これを」

「なんだこれ」

長門がキヨンに防犯ブザーのようなものを渡している。

「貴方の命が危険にさらされたときに作動する。……貴方にはこれを」

「ん？」

そして蒔風と同じようなものを渡した。

「あちらのほうで作動したら、貴方は瞬時に彼の居る場所に転送される」

「おおー！！ありがとう！！」

「ありがとな、長門」

「（コクン）」

「んじゃ、おやすみなさーい」

「では僕も」

「……………（スタスタ）」

「じゃあ、キヨンくん。気を付けてくださいね？また明日」

「あ、はい。また明日……」

「そこで！！おれは襲いかかるチンピラどもをバツバツとなぎ倒していったわけよ！！」

そこで俺は涼宮に自分の売り込みをしていた。何としてもこのSOS団には入らにゃならん。じゃないと監視が大変だし。まあ「奴」が手を出してくるとは思わないけどな。

「へえー、あんた凄いのね。で、それであなたはこのSOS団にどうやって貢献するの?」

「ボディーガードさ！！このSOS団は聞くところによれば世の中の不思議を探してるそうじゃないか。だけどそういうのはX・ファイルしかり未知との遭遇しかり、何かと狙われてしまうもんだ。そこで襲いかかるエージェントから俺がみんなを守るのさ！！」

「うーん・・・じゃあ！あなたは団員じゃなくて警護官ってことでいいかしら？」

「ああ、構わないさ」

よかった、どうやら近づけたようだ。

「なあハルヒ。なんで団員じゃないんだ？」

「団員はあたしとあなた、有希にみくるちゃんに古泉君だけでいいのよ！それがあたしたちSOS団よ！」

ふーん、この五人つてのがいいらしいね。楽しそうじゃないか。

「して団長、今日の予定は？」

「そうそう！あたしね、思ったのよ！今までいろいろやったわ！夏休みには夜空を見て宇宙人を探した。映画では未来人を主人公にしたし、超能力者も出した。でも、今まであたしたちが手を出していないジャンルがあったのよ！！！」

「一応聞くが、なんだ？それは？」

「異世界人よ!!!」

とまった。おもに俺が。ビシツときたね。

おーおーキョンが面白い顔してこっち見てる。

いやでも、こつこつ話は聞いてたからいいんだけどね？いきなりこつこつされると、さあ。

「お、お前は異世界人と何をしたいんだ？」

「遊ぶのよ!!!異世界旅行に行ってもいいわね!!!」

「お、おい待てよハルヒなんでいきなり異世界人なんだ？ホムンクルスとかでもいいじゃないか」

「バカねキョン。あたしが四月に行ったこと忘れたんじゃないの？」

キョンが、お前も今日思い出したるうちに、という顔をしている。

「あたしはね、「宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら」って言ったのよ!!!でも来ないから自分で探したしいろいろやった」

「それでいいじゃねえか」

「向上心のない人間はすぐに墮落するわよ！！でね、異世界人だけ触れてないなーって思ったのよ」

「……で、結局おれたちは何をやらされるんだ？」

「それはもちろん、異世界への行き方を探すのよ！」

そうして俺たちは街に出た。

なんでもこのようなものは結構起るらしく、適当にぶらついて時間をつぶすだけの時間になるらしい。

無意味に時間を過ごし、集合し、それで今日は解散した。

それから30分後、俺たちは昨日のように公園に集合した。

「それで、うちに来んのかい？」

「ああ。そっちには長門もいるしな。家には新入部員の歓迎会でそのまま泊まるって言ってる」

「ほ、本当に大丈夫なんですか？その人が攻めてきても」

「大丈夫だ。俺がいるからな。それに「奴」はおそらく今晚来る」

「たしかに、準備が済み次第、すぐに実行するのは基本ですからね。それにしても不思議だ」

「ん？」

「いえ、あなたに会ったのはつい昨日のことです。まだ24時間も経ってないのに、我々はあなたに程度は軽くても、ある種の信頼を寄せている。これは不思議なことですよ」

「……もしかしたら、の話だけだな」

「なんででしょう？」

「この世界で「仮面ライダークウガ」は一つの作品として知られている。同じように、お前たちの話も、どこかの世界で作品になっている。その作品を、オレは読んだことがあるのかもしれない」

「それは・・・」

「もちろん、記憶はない。おれはお前らのことは知らなかった。あの作品の誰々だ、なんてこともわからない。だけど、無意識のうちに気に入られるようにふるまっているのかもしてないな」

「さてよ。でもさ」

「なんだ？キヨン」

「結局そんな風にできるってことはお前はもともといるんな人に対していい人ってことだろ？本当にそんな人間じゃなかったら、そんな風にはふるまえないだろうしよ。たぶん、そんなことがなくても、おまえは打ち解けてただろうし、今そんなこと言ってもしょうがないだろ」

「そ・・・っか。・・・いやあ！ありがとうな！キヨン！！お前いいやつだわ！！」

「いてっ、叩くなよ！！」

「本当に、不思議ですね・・・さて部屋に行きましようか」

「え？」

「僕も泊まりますよ。そのほうがいいでしょうし、何よりも上からそう仰せつかつてるもので」

「あのう、あたしも長門さんの部屋にお邪魔するつもりだったんですけどお……」

「みんなで泊まりか……なんか涼宮がかわいそうだなあ」

「いいのかよ？」

「しかたねえだろ。それに、最主要じゃなくても主要人物がこんだけいるんだ。これなら「奴」もこっち狙いで来るだろうよ」

「困、ですか」

「そういうのは好きじゃないんだけどな。仕方ないだろ」

「まあ、そうですね。涼宮さんが狙われる可能性は？」

「ないだろうなあ。あいつ、オレのこと目の敵にしてるから、オレのほう狙ってくるだろうし」

「そうですね。「奴」のことに詳しいのですね」

「まあね。まだ三個目の世界だけど、あいつのことは大体わかったやうんだよなあ」

「まあ、こんなところで話しててもしょうがない。いったん俺の部屋に集まって、みんなで飯だー！」

「ちなみに何を？」

「もちろん」

ガサッ

蒔風がその手にビニール袋を持って言った。

「鍋だ」

t o b e c o n t i n u e d

涼宮ハルヒの憂鬱 ～ワンダー ヒューマン～（後書き）

アリス「オンリーワン止まりの野郎ども！！私がナンバーワンだ！！」

SMAPの名曲をそんな風にネタにするな！！！！

ア「だってあの曲事あることに流れるからもう聞きあきたんですもの」

う・・・たしかに・・・

ア「ねーねー、二人だけじゃつまんないよー。蒔風はいいからなか他の世界の人連れてきましょーよー」

ほらほら、飴あげるから

ア「んー、（ゴクン）もーいっこー」

そんな舐め方する子にはもう飴はあげません！！！！

ア「んおっ、コロコロ」

人間ポンプをするな！！！！今更とりつくったって遅いわ！！！！

ア「ごめんなさい」

じゃあよろしく

ア「SOS団お泊まりか〜い（ハルヒ除く）。ハルヒがいなくても大変なことになるかも!？」

ではまた次回

禁則事項です

涼宮ハルヒの憂鬱　くパーティー　アンド　デストロイ　く

鍋が始まった。

え？描写が簡単すぎ？

いいじゃないか！

「まずみんなに確認を取りたい」

「なんだ？」

「普通にすべきか闇にすべきか」

「普通にやれ！」

「そこが問題だ」

「そこっていうのがお前の頭なら正解だよ」

「多数決だ！」

「聞けよ！」

「普通がいい人」

五人の手があがる

「お前も普通でいいんじゃないか！」

「ほら、もし闇の方がいって人がいたら・・・」

「基本的におらん！」

「その方が面白そうなんだが」

「鍋の本来の目的をしっかりと果たせよ！」

「キムチでいいか？」

「はい、かまいません」

「え？キムチって？あの？」

「……………」
「……………」

「あっさり決めやがった。普通だ。本当に普通だ。なんだっただ
よ……………」

「じゃあ始めますか」

S I D E
キョソ

そうして鍋が始まった

「お、うまい」

ハルヒの鍋ほどではないが、結構うまい

長門がどんどん食っていつてる。

あの身体にどういう構造になってんだ？

「宇宙になってるのかもしれないね」

フードファイターかよ

「ふうー、ふうー。あむあむ・・・辛いけどおいしいです」

朝比奈さん、貴女のその仕草でお腹いっぱいです！

「（パクパクパクパクパクパク）」

「おおー、よく食べるな」

蒔風が長門の食いつぷりに感心している。

長門の食い方はなんかこう機械的なんだよな。

でも、心なしかいつもより口に含んでる時間が長くなっている気がする。

ダパダパダパダパダパダパダパ

そんな音がして蒔風の方を見たら、キムチ鍋のもとを自分のお椀に注いでやがった。

そんなにかけて大丈夫か!?

「辛いのが大好きなのさ!」

辛党なんだな

「甘いのも辛いのも好きだけど、どちらかをいえば間違いなく辛いのが好きだ」

そんだけかけてりや疑いようもないわ

「ほら、おまえも（ダパダパダパダパ）」

「何するんですか!?!?!?」

「いやあ、なんかあんまり食ってないような気がしてな」

蒔風が古泉のお椀にも大量に注いでいく。

古泉め。普段いじられてないからな。焦ってるぞ。

「くっ、貴方はどうです？辛いのが好きでしょうっ？」

「別に好きでもないわ！！！」

古泉、笑顔が怖い。

あとオレを巻き込むな！！

「僕だけじゃひどいと思いませんか？SOS団の仲間じゃないですか」

「仲間だと思うなら一人で背負ってくれ」

「（ダパダパダパ）」

「てめえ！！何やってんだ！！古泉！！この野郎「グッジョブ！」じゃねえよ！！」

「困くるっ」

「いえいえ。っていつかすべてあなたのせいなんですけどね」

「図りおつたなああ……!!」

おのれ、蒔風の罾か……!

「古泉」

「はい？むぐっ……」

「うまいか……？」

「ヒャララララララ……!!」(ビクンビクン)

「おい、大丈夫かよ……古泉……古泉……!!」

まあそんなこんなで時間は過ぎていった

朝比奈さんは涙目になってたなあ。可愛かったけど。

そしてオレも食べはじめた。

もちろん、普通の辛さをな

あんなんじゃとても食えん

普通のをしっかりいただきましたよ

腹が減っては戦は出来ぬとは、昔の人はよく言ったもんだ

S I D E
o u t

.....

「あと少しですね」

「ふう食ったなあ」

「お腹いっぱいです」

「もう入らん」

「……………」

古泉、みくる、蒔風、キヨンが、まだ少し残っている鍋をみてギブアップ宣言

長門がまだ食べられそうだが、押し付けるのは気が引けるので、誰もなにも言わない。

ちなみに古泉は蒔風に食わされた事を覚えてなかった……………

「もう19時ですね。「奴」は本当に来るんですか？」

「来る、間違いなく」

「なあ、来ない方がいいだろ？少なくとも俺は「ごめん」ごむるね」

「まあ、とりあえず片付けますか」

「そうだねー。片しますかー」

「……………」

長門が窓の外をジッと見つめる。

「長門……どうした」

「……………来た」

「……ふんっ……」

ガッシャー!

長門の言葉を聞くやいなや、時風が掴んでいた鍋を思いつきり外に
向かって投げつけた

投げつけられた鍋はUFOのように回転しながら飛び、窓ガラスを
粉々に砕く。

そして外にいるであろう標的に向かって猛烈な速度で突っ込んで・
・

その空間に消えた。ぶつかると音も、落ちる音も聞こえない。

代わりに

「おいおい、食べ物を粗末にすんなよ」

夜の闇の中から声が聞こえた。

「奴」が光の範囲に入ってくる。

その手にはいつの間にか食べたのが、綺麗になっている鍋が握られていた。

その鍋を時風にむかって投げる。

「うまかったよ。ありがとうな」

「はん！お粗末さまっの」

「時風……こいつが？」

「お、こんばんは主人公。殺しに来たぞ」

「どっちらそのようですね」

「長門さん、頼む」

「了解」

ブオン！

「おっと、仲間外れはだめだよ」

「な!？」

「私たちもですか!？」

「まったく、意地が悪いぜ。戦えるやつだけ結界内に閉じ込めるなんて」

そう、時風が長門さんに頼んでいたのは、自身と「奴」だけを隔離する事だった。

しかし失敗した。

「奴」はキヨンだけでなくみくるをも引きずりこんだのだ。

「………こつなったら仕方ねえ。古泉、長門さん。その二人をたのむ」

「わかりました。御武運を」

「あんがとね」

「ふ、やはりお前とはどうしても戦わなければならんか」

「涼宮を狙えばよかったじゃん」

「それはー、つまらん！貴様を叩き潰したいんだよお、オレはなあ
あ」

涼宮ハルヒの憂鬱　くパーティー　アンド　DESTROY　く（後書き）

やっとなのはとフェイトのねんどろいどゲットしたぜ!!!

アリス「どこ行ってもなかったもんねー」

秋葉原まで言っつてやっつと手に入れました。

やっぱアキバはいいな

ア「雨が降ったりやんだりで面倒くさい天気だったけどね」

しかもジツトリと湿気が高いから無駄に暑いし

なんか今年の夏はスッキリとした暑さじゃなさそうでいやだな。

ア「ですねー。・・・こんな普通の雑談しててもいいの？」

いいんじゃない？

こんなのもありさ。深夜にならないとテンションあがらないし

ア「そういっつもんですか？」

テンション自体はあげられるけど、不完全燃焼になって、気持ち悪くなる

ア「やめたほうがいいですね。そうだったあなたは手に余りますし」

次の楽しみは予約したダブルのヘッドホンかな

ア「仮面ライダーの？」

そうそう。パソコンのヘッドホンがもう結構寿命でぞ。

ア「それは楽しみですね」

そろそろよろしくね

ア「はい。次回で「奴」と戦い、旅立つ時風。WORLD LIN

Kは？次の世界は？一体なんだ？」

ではまた次回

YUKI・N > また図書館に

涼宮ハルヒの憂鬱　〜時風舜の激闘〜

「打滅星！」

「イヤッハー！強いパンチ！」

ゴガアッ！！！！！！！

お互いのパンチがぶつかり合い、その威力を相殺し合う

二人は離れ、時風は風林火山を、「奴」は魔導八天を構える

「踊れ踊れ〜！鎌鼬切演舞、四季早々、春・花吹雪！」

「そおりゃあ！真つ二つよー！」

ズバン！

「奴」を取り囲むように回るいくつもの斬撃が一降りのもとに掻き消される。

しかし時風は止まらない。

「春が終われば夏が来るう！四季早々、夏・津波！」

ババババババババババババツ！

再び作られた斬撃が、今度は高く積み上げられ、一気に「奴」を押し潰す！

が、しかし

「こんな力技はなあ！オレが弱ってからやれや」らマアアアア！「

轟ッ

バアアアアアン

その津波が弾け飛び、周囲を切り刻んでいく

「さあて、夏が終わってどーなるん!? 何来るん!?!」

「おあああああああああああああ! あ秋風え!」

次の斬撃は連なって、ぶっとい筒状の形をして向かっていく!
言うなれば斬撃砲!

「おあああああああああ!?!?!?!」

その「秋風」を「奴」は魔導八天の内の三本を使い搦め捕り、時風の方にかえしていく！

「なんとおー！？くつそ、もう一丁！」

自分に向かってくる「秋風」に、時風は「秋風」を再び放ちそれを打ち消した。

「ほらほら最後に冬だぞ？早くしてよ」

「いいぜえ・・・動くんじゃねえぞ！冬・霜柱あ！」

シヤアアアアアアアアアアアアアアアアア！

斬撃が地面スレスレを飛んでいく。

そして「奴」の足元に着いた瞬間、一気に上昇する！

「ぬ、おっ！？」

「どうしたよ！？お待ちかねのもんだぜ！？」

「だが、しかあし！！！」

バツパン！

「な、突き破ってきただと！？」

「ふっふう！もう大体お前のことはわかってきてんだよ！」

ガツキイ、ゲグツ

蒔風の風林火山と「奴」の魔導八天がぶつかる。

お互いに動けない。

ならば動けるものを出しにかかる!!!

「はあっ！いけえ！白虎！青龍！」

「ならば！ケルベロス！迦桜羅！」

カルラ

ドドドドン！！！！

その状況からお互いに召喚獣を繰り出す

蒔風は青龍と白虎を

「奴」は三首の巨大犬、ケルベロスと、火を纏う巨大な怪鳥、迦桜羅を繰り出した

それに蒔風は驚愕する

「なっ、ケルベロスはともかく、迦桜羅だと!？」

「そっだ!かつてインドにいたという伝説の巨鳥!別名ガルダ!
こいつは、かつてな……」

「!!!!!!!!!!すざあああああく!!」

「その伝説で龍や蛇を喰らった!そいつの天敵だ!!」

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

キヤオオオオオオオオオオオオオオオ!

そこに「奴」は更に火竜・サラマンダーを召喚^だしてきた。

ケルベロスには白虎、玄武、麒麟

迦桜羅には朱雀、天馬

サラマンダーには青龍、獅子がぶつかる。

「怪獣大戦争じゃあ！」

無限に広がる隔離空間に縦横無尽に巨獣たちが暴れ回る！

- - -
- - -
- - -

S I D E キョ ン

すげえ。大怪獣総進撃かよ。

やっぱあいつもただもんじゃねえってことかい。

「すごいですね。僕たちが出る際はなさそうです」

「助けにはいけねえのか？」

「この防壁を張るのに情報をつぎ込んでいる。ここからは動けない」

「長門さんが全力を出して、しかも防御にまわらなければなら
ないとは、すさまじいですね。因みに出たらどうなりますか？」

「私もあなたも、2・34秒から3・01秒の間につぶされる」

長門、それは出たら終わりじゃないか？

S I D E o u t

「おおおおお！……！大鵬たいほう！……！」

蒔風が組み合わせた天地陰陽で突きを飛ばし、さらにその後続、後続とつながり、巨大なひとつの円錐型となり、「奴」に向かって突っ込んでいく。

「ぐあああああああああ！……！」

「決まったあ！……！」

「まだ、だよつ！……！」

「何！？ぐお！……！」

もうもうと上がる土煙の中から「奴」が思いっきり飛び出してきて、
蒔風にケンカキックを入れる。

「ぐっ」

「素晴らしい技なんだけどさあ、勢いばっかじゃ駄目だぜ？」

一撃はまだ大したことはなかった。

だがここまでも戦闘で次々とあしらわれ、そのすきにチマチマと攻撃を入れられていた蒔風は、結構限界に近いところにいた。

「おいおい、蒔風。どうしたんだよ。お前世界最強だろ??」

「奴」があざけるように蒔風に言う

「く、そ、ミスった、なあ……やっぱテンションに身を任せるには……はっ、いきなりすぎたわ」

ポロポロの体でめり込む地面に体を預けて蒔風がぼやいた。

ぐ……身体が……動かない……

「はん。いい感じに乗せられるからだ。まったく……」

「なん、だ？……心配、でも……してくれてんのか？？」

「まつさかあ！！ただよ、お前も、あそこの中に隠れてるやつらも、なーんか勘違いしてるって思うと面白くってよ」「よ」

「なに……が……？」

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

キュルルルルルルルルルルルルルルルルウウウウウウ！！！！

ドンっ、バアアアアア・・・ゴゴゴン・・・

青龍たちが戦っている音をBGMに「奴」が語りだす

「そっちの奴らもよく聞いとけよ!!? いいか? お前ら揃いも揃って涼宮ハルヒがすべての現況みたいなこと考えてんだろ?」

「ああ・・・古泉から聞いた話じゃ、っーーーーー!!! そんな・・・ところだ」

「無利するなよ蒔風。もうお前の負けだよ・・・ひひひひひひ。ふう、その話から間違ってたよ・・・」

S I D E キョソソ

「間違ってたんだよ・・・」

「奴」と蒔風が会話している。

数メートル離れているところだから、よく聞こえないはずだが、どうやら長門が音を拾ってくれてるらしい。

「涼宮ハルヒに特別な力があって、彼女の思い通りに現実が歪む。それはおおむね正しい。それが彼女が発信源なのか、それとも見つけていくだけの存在なのかは分からない。だがな、そこにいる最主要人物はな、そんな状況を求めてたつて知ってるか??」

「本当ですか?」

オレの隣で古泉が確認してくる

「いつのことだよ?今じゃ納得してるが、望んでなった立場じゃねえぞ」

「まあこれはオレの推測なんだがな、自信はある。そいつはな、嘗てはヒーローだとか謎の組織だとか、そういう面白い世界にあこがれて、行きたがった。しかし気付いた、自分がそんなところに放り出されても何の能力もない自分は太刀打ちできない」

「それは、つつつはあはあはあ……よくわかるぜ。おれも……そうだったからなあ」

「回復してきたな……おらあ!!!!」

「ぐぶつ!!!!ぐううううううううああ!!!!」

「で、そいつは考えたんだよ。転校生みたいに急に出会ったやつが実はそういうやつで、自分はフォロー役にまわればいいと。自分はその戦いを脇からのぞいてればいいと、な」

『!!!!!!』

「どうだ？今そいつがいるのはそういう立ち位置だろうか？オレの考えでは、そっこのほうが元凶なんだがなあ……」

「あなた・・・まさか・・・」

「待つてくれ！！！！おれはそんな人間じゃない！！！！なんの力もない一般人だ！！！！」

「涼宮ハルヒだってそう思っている。いや？もしかしたら、お前と涼宮ハルヒの両方の力が作用し合っているのかもな。まあつまりはお前自身がどう思おうと、お前がそういうやつだということは変わらないんだよ！！！！！っ、そういつた最主要とか主要人物の勝手な都合で物語が進む、世界がかき混ぜられる！！！！気に食わねえ。世界に居るのはためえだけじゃねえってのによ！！！！」

どうやらこっちの声も聞こえてきたようだ。

だがそんなことよりも……………

おれは…………オレは本当にそんな奴だったのか???

朝比奈さんは未来からやってきたのも、長門が作られたのも、古泉に変な力が宿ったのもオレのせいなのか??

オレは…………今までのオレは…………

パンツ!!!!

「間違えんなよ……………」

S I D E o u t

「奴」がキヨンに向かってその推論をぶちまけ、激昂している。

そのすきに蒔風はバリアのほうにズリズリと這いながら近づき、そのバリアを叩く。

中にいるキヨンがビクッ！と蒔風のほうを見る。

「間違えんなよ……」

「お、お前……ボロボロじゃないか……大丈夫か？長門……！
治してやれないのか……？」

「可能だが推奨はできない」

「なんでだよ……！」

「「奴」がいる。防壁を解いたら、終わり」

「大丈夫だよ……ありがとな……さあて、てめえ、いい加減なこと言ってるじゃねえぞ!!」

「ん？結構筋が通っていたらろう？」

「ああ、筋は通ってる。確かにそれが正しいのかもしれない。オレにそれを否定する要素はねえよ。けどな、それが確定であるという確固たる証拠もねえだろうが!!!!」

「ま、蒔風……」

「こいつが何をしたかとかは関係ねえ。でもな、いままでがあったからこうやってこいつらはここにいるんだ!!!!」

「……」

「誰がどうじゃねえんだよ。ハルヒがいて、キョンがいて、長門さ

んに朝比奈さんに古泉がいて!!!それがこいつらSOS団なんだよ!!!それもわからないお前にいい言葉を教えてやるよ……」

「【自分がどんな存在かは、自分で決めることができる】らしいぜ?」

「時風……!!」

「こいつはこいつだ!!今いろいろやってんのは涼宮だろうし、解決してんのはこいつらだ!!わかることはそれだけだし……それだけでいい!!」

「確かに……」

「古泉？」

「たとえばあなたが元凶だとしても、僕の力は涼宮さんが与えてくれたものですからね。今のあなたは一般人。それで十分でしたね」

「私の仕事はあなたの安全を確保することと、涼宮ハルヒの観察。最初からそれだけ」

「長門……」

「キョンくんは協力者ですけど、時間の流れに関与できません。だからこそ、いろいろお願いされるんだと思います」

「朝比奈さん……」

「ふん！美しい友情だなあ！！主人公よ！！殺したくなってるわ！！」

「させるかよ！！おいてめえら、ちんたらやってんじゃねえぞ！！」

「・・・御意！」「おっけー！！」「了解です！！」「了解じゃ！！」「了承！」「おっし！」「いくかあ！」

蒔風の叫びに、龍虎雀武・獅子天麟が応える！！

ケルベロスが玄武に向かい、その牙を突きたてる

しかし玄武の防御力は亀だけにあって最高峰である。

その三つの顎門あごが噛みつくことも、その装甲は碎けない！！

そこに白虎がその爪をもって横腹を裂き、麒麟が思いつきり踏み砕く！！

ケルベロスは腹を裂かれて背骨を折られ、実体化できなくなっ
て消える。

一方、迦桜羅との戦いは空中戦である

迦桜羅と朱雀がその体を炎に包み、幾度も幾度もぶつかり合う。

そこに天馬の蹄が襲う。

迦桜羅は今までもこの攻撃をかわしてきていた。なのでまた同じようにかわそうとする。

しかし今度は違った。パターンを見切った朱雀の嘴が、迦桜羅の翼を貫いた！！！！

キュロオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

最後に、「奴」と時風である。

召喚獣たちを戻し、バリアの中からキョンを引っ張って言った。

「行くぜ、キョン。おまえに、一回だけ非一般人ってのをやらせてやるよ」

「はあ？」

「おおおおお！！開翼！！そしてえ！！」

【Suzumiya Haruhino Yuttu】 - WO

R L D L I N K - \ W E P P O N \

蒔風がWORLD LINKを発動させる

すると、キヨンの眼の色が変わった。

なにやら右が青で左が緑だ。

「なんだなんだあ!!!??」

「あーキヨン、なんか撃ってみて?」

「はい?お前まさかこれ・・・」

「はい、キヨンビーム!」

「うをぉ!」

「またかよ!!」

炎の中で動けない「奴」に再びキョンが向く。

「奴」はとっさにガードをとった。

しかしきたのはレーザーではなかった。

シユパン!!ズパパパパン!!

「む?ぬあああああああああああああああああああああ
あ!!」

その体が今度はスタスタのバラバラにされる。

今放たれたのはカッターのようだ。

「これなんだよ!!」

「気にすんなよ!!世界最強の特殊能力だと思え!!」

「何が何だか・・・」

「とにかく!!あいつを倒せる力ってことだ!!終わらせるぜ!!」

【Suzumiya Haruhino Yuutu】 - WO
R L D L I N K - } F I N A L A T T A C K }
}

そしてそんな声がして、あたりが少し暗くなり、空が灰色に染まった

「ぶ……がああああ……」

ぶしゅうううううううううう……

叩き潰された「奴」は、細切れのまま消えていった。

空間にひびが入り、最初の隔離空間に戻ってきた。

さらに長門がその空間を解除し、元の部屋に戻ってくる。

「これで終わりですか？」

「ああ、間違いなくな」

「そういえば怪我は??？」

「大丈夫だったの」

「今治す」

「んお？長門さん、ありがとう」

「い
い」

「蒔風……」

「なんだよキヨン」

「なんか……ありがとな」

「いっての。俺がやりたいただけだから」

「でも……ありがとな」

「あなたは、行くんですか？」

「んー、やっぱねー。この世界にそんなにいなかったしね」

「そうですね」

「大丈夫だよ！この部屋とかのことは多分世界が修正効かせてくれるからさ」

「いえ、お礼をしたいなと思ひまして」

「ははは、その「想ひ」で大丈夫だ。しっかり力になってくれるさ」

「??」

「こつちの話さ」

「これから家帰んのもなんかなあ」

「あ、明日までは大丈夫だと思うから、この部屋は」

「そうなのか？」

「たぶんねー。世界もそこまで意地悪じゃないだろうし」

「じゃあ、予定通りオレは泊まるか」

「僕は……すみません。機関のほうに報告を入れなければなら
ないの」

「私もおうちに帰って報告しなきゃ……」

「私は部屋に戻る」

「すみません、どうやらあなた一人になってしまつようです」

「大丈夫だ。この歳で寂しいってこともないしな。それに……」

「それに？」

「オレは普通の一般人だ。こんな面白集団と寝るイベントは性に合
わん」

「ふっ、そうでしたね。では、僕はこれで」

「おやすみなさい」

「……また、明日」

そして各々帰っていく。

「じゃ、俺も行くかな」

「ああ、行って来い」

「送り出されるって・・・いいな」

「そうかもな」

「仲間を大事にな!!」

「言われなくれもそーするわ!!」

「ははははははは」

Gate Open . . . Suzumiyaharuhin
O Yuuttu

そして時風はゲートをくぐった

部屋にはキヨンが一人残る。

時風が割った窓はすでに長門が修復してくれていた。

そして風呂に入り、歯を磨き、寝間着に着換えて、布団に入った。

布団の中でキヨンは考える

いろいろあつたな……

でもそんなことがあっても、人間ってのは眠くなるし腹も減るもん
なんだから、現金なもんだ……

オレは普通を謳歌する人間だ。

いくら周りに変な奴が来ても、オレはこっちの人間さ。

その立場だからできることとか、楽しめることってあるだろ？

だからこの立場でできることをやるのだ。

ま、今やるべきこととしては、明日ハルヒにどう説明するかを考え
ましようかね……

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

涼宮ハルヒの憂鬱　↳ 時風舜の激闘　↳ (後書き)

アリス「ハルヒが出てなかったことに関するいいわけは？」

すみません、ありません

ア「確かに設定上出しにくいのはわかりますけど、結局ハルヒが出たのは前半の二話だけじゃないですか。そこをどうにかするのが作者の力の見せ所でしょう」

ほんとすみません

ア「あと、キヨンが実は元凶とかの話は??？」

勝手に考えました。でも思ってみればそうじゃね？

ア「確かにそうだけど、原作で否定されたらどうするのです?？」

だから言ってたじゃん。推測だって

ア「うまく逃げ道を作りましたね。そういえば時風は????」

あ、描写忘れてた

蒔風「いたのになあ。ねえ、俺っていたらやりにくい？」

普段いないからやりにくいです

ア「本編キャラは帰れー！！！」

お前らひどいな！！！！

ア「てめえ本編だけに出てろよ。こっちは私の場所なんだよ！」

蒔「へっ、そんな幻想はぶち殺「獄炎弾！！」オレの技————
！！！！！」

おい……いいのか？

ア「大丈夫って書いていて。そうすれば大丈夫になる」

蒔風はブツ飛ばされましたがギャグ的な要因で大丈夫でしたと

蒔「いやあ、焦った焦った」

ア「そこで本当に大丈夫になるんですね……」

それが作者の力

【涼宮ハルヒの憂鬱】

主な構成：“no Name” 15%、”ライクル” 40%、”フ
オルス” 40%、”LOND” 5%

最主要人物：キヨン（本名不明）

- WORLD LINK - } WEAPON } : キヨンにみくるビー
ム付加

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : 神人
召喚

ア「%まで入れたんですね」

こっちのほうがわかるかなと思って

蒔「事件性あるのって、全部”LOND”だからなあ」

ア「そういえばあの【自分がどんな】のセリフってさ」

ああはい

「ゴジラ ファイナルウォーズ」のものですよ

ア「やっぱりですか」

まあ蒔風は「こう言うセリフをはっきりと覚えてるわけじゃなくて。なんとなく出てくるだけだからね。」

んじゃあ、まあ、こんくらいかな。

あとよろしく

蒔「なんか最近おとなしいねえ」

ア「燃え尽きたんでしょ。次回、蒔風はオタクと出会う」

蒔「簡単すぎだろ!!!」

ではまた次回

貧乳はステータスだ！！希少価値だ！！

らき すた くそんなある日く (前書き)

アリス「始まるザマスよ」

蒔風「いくでガンス」

「奴」 「……………ふんがー」

いいのか！？この配役！！！！

らき すた くそんなある日く

ここは陵りょう桜おう学がく園えん高こう等と部ぶ

わかるように言えば泉こなたたちが通っている高校である。

天気は晴れ。五月なので、いい感じの日和である。

今は昼休み。3年B組のクラスでこなた、つかさ、かがみ、みゆきの4人が昼食をとっている。

「……できく、くさくつてさー」

「分かるわかる」

「そういえばこなた、このクラスに転校生が来たみたいじゃない？この時期に面白いわよね？」

「あーうん。きたよ。今はいないみたいだけどね」

「ふうん・・・あ、あんたこの時期の転校生だからって変なこと言
ってないでしょね」

「お姉ちゃん、変なことって？」

「いや、こいつのことだから、変な時期の転校生に『謎の転校生！
？超能力者！？』とかネタを言ったんじゃないかと思ってね・・・」

「まさかー。あたしはそんなに誰かれ言わないよー」

「どーだか。そこんとこあんたは不安なのよ」

「ふふふ。あ、でも・・・」

「どうしたのよみゆき」

「いえ・・・その・・・」

「ああ。みゆきさんが言いたいののはあれのことだよな？」

「こなちゃん、あれってなんだっけ？」

「自己紹介のときのだよ」

「なによそれ。やっぱあんた何かやったんでしょ？」

「えっと・・・やったといいますが、やってしまったといいますが・
・・・」

「はあ？みゆきまでわけわかんこと言って……いいから教えなさいよ」

「『こなちゃん、教えて？』って言わなきゃ教えな〜い」

「うぐっ、ゲホゲホッ」

「おお、かがみん、食べ物をそのタイミングで詰まらすとは……やるね！〜！」

「（ゴクン）うれしくないわ！〜！で、その自己紹介がどうしたのよ」

「『ただの人間には興味ありません！〜！』って言ったんだよ??」

「やっぱり言ったんかい！〜！」

「転校生が」

「転校生がかよ！〜！」

「うん……こなちゃんが『興味のあることって何ですか?』って聞いたからね?」

「そうそう。さすがにびっくりしたよー」

「そいつどんな奴よ」

「いや、相手は男子だし、やっぱりなかなか話の輪に入れなくってさー」

「あんだとなら意気投合できそうじゃない。そもそも気にしないでしょ?」

「いやいやかがみん。あたしはこう見えてもなかなか繊細なのだよ」

「ぶつとくたくましく生きてるように見えるのはあただけか?」

「それにすぐに男の子たちに囲まれちゃってたから。いくらこなちやんでも入りにくいっぽかったよ?」

「なんかつかさ、バカにしてない?」

「えっ!?してないよ」

「つかささんはきっと、誰とでも仲良くなれる泉さんでも難しいとおっしゃりたかったのですね」

「そうだよこなちゃん!」

（ ） さすがだ。心得ているよ。みゆきさん!（ ）

「あの、なにか?」

「いや、みゆきの大きさに改めて感心したところよ……」

「たしかに、みゆきさんはいろいろ大きいですからなあ」

「親父な発言はやめい!」

そこからまた話題が変わっていき、昼休みが終わると、かがみは自分の教室に戻っていき、授業が始まった。

そうして授業が終わり放課後になり、珍しく4人でこなたの買い物に付き合っていた。

アニメ、ト、ゲームズなどのアニメショップによって次々と目的のものを購入していくこなた。

かがみもライトノベルを数冊買い、つかさとみゆきは店内を面白そうに眺めていた。

そうして買い物も終わり、カラオケによって行くところか、帰ろうかと話しているところである。

「あ、ゆうちゃん？うーん、まだわかんないんだよねー。遊んで帰るかもしれないし・・・うん、うん・・・わかったよー。じゃーねー」

「ゆたかちゃん？」

「そ、あつちは今ひよりんの家で集まってるんだってさ」

「みなみちゃんとパーティちゃんも？」

「そうそう、だからうちらもカラオケに言って親睦を深めよう！
」！

「じゃあいく？はやくしないと時間無くなるわよ？」

「なんだあかがみん、乗り気じゃーん」

「うっさい！！」

「まったくかがみんは・・・なんだろうあの人・・・」

「なによ？まったくだらないことじゃないでしょうね」

「ちがうよ、あの人・・・なんか・・・」

「ん？なによ。まさかあんたひとめぼれとか？」

かがみがからかうように言いながらこなたの言うほうを見る。

そこには確かに人がいた。街の道の真ん中に立っている。

この道は全部歩道でなので車の邪魔などになっているわけではない。
人もたくさんいる。

しかし、気づいたらただの「そこらへんの人」には見えなくなっていた。

そいつ黒い人影をしていた。顔がはつきりと見えず、まるでずっと影がかかっているようだった。

それが近づいてきて、言った。

「貴女が泉こなたさんですね？」

「あなたなによ……なんの用よ」

かがみが庇うようにして前に立って言う。

「ああ、その庇うような態度。どつやらあっていたようだ。間違っていたらことですからね。では……」

そうして男が振りかぶり、

「この世界の最主要人物ってことか」

ブァッ!ー!ゴウっ!ー!ー!ー!

・ そういつて「奴」がその拳を力の限り振り下ろしてきた……

止めている。

「へっ、気にすんな。ただの世界最強だよ」

そう、その男は答えた。

「蒔風・・・舜・・・だっけ？」

「おお！覚えてくれていましたか！つとお！！」

ばしっ！

二人が距離をとり離れて、「奴」が結界を展開させて4人と蒔風を閉じ込める。

「この結界・・・好きだねえ・・・」

「いらんものを巻き込みたくなかったからな・・・それにしても貴

様……どこにいた!？」

「バカ野郎が、お前が現れれば、蒔風さんはどこにでも!！」

「えっと、蒔風……くん？」

「ん?えっと、泉さんだっけ?あと、高良さんと、柊さん。あと……」

「あ、あ、あ、あたしも、ひ、柊よ。柊 かがみ。そのこの姉よ。そんなことよりあんた何よこれ!!説明しなさいよ!」

「んあー、あとでな。今は無理だな」

「なんd「か、かがみ……」なによ!!!」

「いまは……任せたほうが……」

「~~~~~っ!わかったわよ!待つわよ!!!」

「サンキューさん」

そして時風は「奴」に向き合った。

「はぁーあ、ちくしょう。せつかくすぐりに行動できたつてのによー。
邪魔すんなよな」

「そうそう、おまえ早かったな……なんでだ」

「この世界はただの純粋な”no Name”。解析など一瞬で済むわ」

「お前の世界も”no Name”だったんだっけか？」

「……そんなことはどうでもいい」

「さいですか。だけどこの世界は、いやこの世界も喰わせないぜ？」

「やるか？」

「やらいでか」

あっけなくやってきた世界の終わり

しかし今回はこいつがいる。

「もうあんなことにはならせないぜ!!」

誓いを胸に、翼人・時風、”no Name”に立つ

t o b e c o n t i n u e d

らき すた くそんなある日く（後書き）

アリス「どうも、アリスです」
作者です

ア「短いし展開早いですね」

この世界は最初からこのように短くいくつもりでしたから

ア「なんでまた？」

それは次の話して蒔風と「奴」とも会話に出てきますから・・・

ア「でも純粋な”no Name”でしょ？蒔風のもとの世界と同じじゃないですか」

そう、蒔風の世界と全く同じと言ってもおかしくないんですよね。

主人公が違うだけで。

ア「ほーっ」

あとタイトルにも思い入れがありますね

ア「ん？」「そんなある日」「？なるほどね」「

蒔風の世界のときのタイトルと同じなんですよね

ア「たしかにおもしろいな」

そう思ってくれるといいなあ

ア「おもしろいと言えば最近面白い後書きしないね」

なかなか難しいもんでして。面白い文章って言うのは。

ア「当然ですけどね」

そう、面白い事を書くのは難しい。それは当然のこと。だから面白い作品は凄いと私は思うのですよ。

ア「なんか真面目ー」

ちなみに作者の好きなお菓子だけはたけ この里のスティックのやつです。おっきくなって竹になっちゃった、っての。

ア「どうでもいい情報！！！」

お願いね

ア「いきなりの「奴」の襲撃。”no Name”。蒔風は超えられるのか？」

ではまた次回

バルサミコ酢

らきすた　く崩壊、させない」

「よお……」

「おお……時風よ。せつかくあつさりと終わらせそうだったのによ」

「なんで隔離した？オレの世界のときみたいに、街ごと吹き飛ばせばよかったじゃないか」

「なに、ここの辺にいたのはほとんどが脇役だ。オレはそういう奴らには優しいんだぜ？」

「オレの世界では全部ぶっ壊してくれたくせにか？」

「ああ、あのときね。だってお前なんだもの。腹立つだろ？」

「他の人を脇役扱いしてる時点だよ、お前はそいつらを見下してるんだぜ？わかってんのか？」

「はん！おれはな、あいつらのことを気にはかけてやる。不必要な手も出さん。けどな、同時に哀れだと思ってるんだよ。自分がステージに立ててないことすら認識できてないあいつらをな」

「だから全員をステージにつてか？」

「そうだよ。俺ってやつさしー、だろ？」

「そのために流される涙を貴様は知ってるのか？」

「最^{じゅうせいり}主要人物の涙など知らん。そんな奴らのそんなものなんて気にかける必要あるかよ」

「て、めえ」

「蒔風……くん？言いたい何の話を？」

「こなたがおずおずと話しかけてくる。やはり気になってしまっただろう。」

「後ろのほうでみゆきとつかさが怯えており、かがみが信じられないような眼で蒔風を見ていた。」

「おう、あの野郎はな、お前らを殺してこの世界を喰うって奴だ。だから俺が助けに来た」

「ちょっと待ちなさいよ！！なんであたしたちなのよ！それにあんたは……」

そこに「奴」が割り込んでくる。

「はっはっは！お嬢さん方！！教えてあげようか！！てめえらはこの世界の中心人物なんだよ！！だからてめえらを殺せばこの世界は壊れる。そのためにオレはここに来たんだよ！！」

「な、世界とか、わけわかんないこと言っただんじゃないわよ！！せかいのちゆうしん？？そんなの、知らないわよ！！」

「ではこの状況をどう説明する？それに、貴様の目の前のその蒔風も、別世界の人間だぞ？それをお前は知っているはずだ」

「かがみ！！どういうこと！？」

「蒔風さんを知ってたんですか？」

こなたとみゆきの問いに、かがみが答える。

「あたしは・・・確かに知ってる。でも会ったことはないわ。それにあんたは読まないから知らないでしょうけど・・・」

「？」

「蒔風舜っていうのはライトノベルの主人公の名前なのよ」

「でも……あの作品は……こんなんじゃ」

「ああ、俺が壊したからな。で？そういったうえでお前らはこいつを信頼できるのか？この覗き見とも言えるようなこのくそ野郎をよお！！」

「ほんとう……なの？本当に……」

「はつきり聞いちまえよ！！本当に知ってんのかつてよ！！あーんなことからこーんなことまで、こいつは知ってたはずだぜ！！」

「そんな……」

「蒔風くん……」

「あんだ……っ」

「えつと……」

蒔風が言葉に出さず悪態をつく

畜生……あのやろっ、彼女たちにオレを信じさせないことによつてWORLD LINKの発動をさせないつもりだな。

「奴」が今回蒔風にいきなり襲いかからないのはこいつだったことである。

WORLD LINKは最主要人物を通して世界に通じ、その力を借りるものだ。

そのためにはその世界の最主要人物と蒔風が、それなりに知り合い、少しは信じられるような、友人にならねばならない。

「奴」がいきなりしかけてきたのも、その時間をとらせないためであつた。

そして今度はこなたたちの心を揺さぶり、信じさせないことによつてその発動をさせない作戦なのである。

「……そうだな、一つ言わせてもらえば、オレはこの旅に出る際にそのような作品に関する記憶はなくなっている。本当にお前らのことは知らない」

「そんなの……信じられないよ……」

「ふっ……ありがとな……」

「えっ!？」

「泉さん、あなたは一瞬でも信じようとしてくれた。こんなあやしき大爆発のやつをよ。まあ、それだけで今んとこは十分さ。……
……十分、戦える」

「戦つって……」

「オレはこの世界を、自分の世界に重ねていた」

「えっ!?!」

「オレの世界は守り切れなかったんだよ。お前らみたいに、力がなかったから」

「へっ……だから蒔風。お前は这个世界を意地でも守るってんだよな。わざわざそいつらをバリアで守らず、己で守りきって終わらせるのも、お前の世界のリベンジだろ?」

「……………」

「お前さんの世界も、この世界も純粋な、完全なる”no Name”だ。そしてこの状況も、考えてみるとあの時と同じだなあ」

「ああ、そうだ。あつけない終わりの襲来。力無き世界。この世界はオレの世界と同じだ」

「だからこそ守りたい……か?ふん、自己満足だな。貴様はあの時自分の世界を救いきれなかった。あの世界はまだボロボロだ。二度と修復できんかもなあ……………」

「だから……だからこそ!オレはこの世界を守る!いつさいの傷もつけさせねえ。この状況を乗り越えなきゃならねんだ!」

「そのためにそいつらを巻き込むのか?最低だな……………」

「なんとも言えよ……オレはこいつらを守る。たとえ頼まれなくても、信じてくれなくても、オレはこの場を乗り越える!!!そう

しなきゃ俺は、世界最強なんていい切りにくいからなあ!!」

「信頼もなく、WORLD LINKもできないお前なんざ、他愛もないわあ!!」

「いく・・・かあ!!!!」

そうして蒔風が「奴」にむかう。

そのとき

「大丈夫だよ」

「・・・はい？」

「奴」に向かっていこうとする蒔風に、こなたが声をかけた。

「蒔風くんは危ない私たちを助けようとしてくれた。味方ってこと

でしょ？」

「・・・まあ、そうだけど」

「じゃあ大丈夫。わたしはあなたを信頼するよ。っていつかあたしじゃーどーにもなんないからお任せしますー!!」

「そんなんで??」

「こなたがそういうなら・・・いいわよ」

「え?」

「こいつが言うからだからね!! 私はまだあんたを全面的に信じたわけじゃないんだからね!!」

「おー、かがみんはツンデレだねえ」

「うっさいわよー!!」

「わたしも、お姉ちゃんが信じるなら」

「わたしも」

「高良さん、柊さん・・・」

「こんがらがるから名字だけはやめてくんない?」

「ああ・・・かがみさん・・・ありがとうございます」

「あたしも、こなたでいいよ」

「私がかまいません」

「あ、あたしも」

「みんな・・・まだ出会って全く時間の経っていないおれを・・・
・本当に、ありがとう・・・っ」

「・・・あーもー湿っぱいわね!!!倒すなら倒す!!!守るなら
守る!!!あんた特別な力もってんでしょ!!!??さっさと終わらせ
なさいよ!!!」

「おー、かがみんぜっこーちよーだー!!!」

「なぐるわよ!!!」

「なにを和気あいあいとしてんだお前ら・・・」

「なに？あつというまに仲直りつてか？ふざけんよ。そんな都合のいいことがホイホイ起こつてたまつかよ・・・主人公だけがこんなに簡単に問題を解決して！！ほかの奴らは何年も悩むようなことを！！！！やっぱいけすかねえ。てめえたち最高にム力つくぜ！！」

「だから言つてんだろがよ！！そういうことができるやつが主人公になるつてよ！！主人公だからできるつてわけじゃねえ！！」

「そんなこと・・・知るかああアアアアアアア！！！！！！！！」

「奴」が迫る。しかし恐怖感は微塵もなかった。

「では早速、いくぜ、こなた。この世界を・・・守るぞ」

「いやあゝ、こんな状況に出会えるんなんて貴重ですなあゝ」

「動じてないのかい！？すげえな！！」

「だつて大丈夫なんでしょー??」

「あ・・・つぶ。あはははははは！！そうだ！！！！だいじょうぶだ、オレに任せろ！！大安心だぞ！！」

「でしょー??あはははははは！！！！」

勢いがなくなり、バランスを崩した「奴」に、時風の拳がめり込む。そう、普通の拳が。

「ぶっ……ああん？なんだ？そのパンチは……効かねえぞ！
！」

ブンッ！！ゴス！！

今度は「奴」の拳が時風の腹に命中する

「?????」

「ガフッ」

その攻撃に、時風がよろめく。よろめいた、だけだった。

「おい……何をした」

「はっ、っは！！わかんねえか？今この空間はな、まさに普通ノーマルにな
ってんだよ」

「なに!？」

「今の俺も、お前も、元の世界にいたような、”no Name”
の住人と同じ程度の力しかない!!」

「なんだと!!!」

「おら行くぞおー!!」

バキッ!!ゴスツッ!!!!ゴッ!!!!!!

蒔風の攻撃が次々と「奴」命中する。

しかし「奴」にはたいして効いてないようだ。

その攻撃を無視して、蒔風に蹴りを放つ。

だが蒔風はその蹴りをしっかりと受け、反撃する。

それでも「奴」には大したダメージにはならない。

「元が違つようだなあ、蒔風。そんなんじゃお前、ボコボコにしたくなつちやうだろうよ!!」

「奴」の猛攻が始まった。

突き、蹴り、掴み、投げ。

さまざまな攻撃に、蒔風は全力で受けていく!!!!

次々と受け流し、かわし、反撃に転じる!!

しかしその攻撃はいずれも「奴」を倒すには至らない。

「どうしたどうした!!よけてはつかで効かない攻撃してんじゃねえぞ!!」

ゴッ!バキッ!!ガッ!!

「奴」の攻撃も徐々にあたってきている。

それでも蒔風は倒れない!!!!

この世界を守る、その想いをこの胸に宿す限り!!!!

「蒔風くん!!!」

こなたたちの声援が飛ぶ。
がんばって、負けないでと。

「大丈夫だったの!!!」

「どの口が言うかあ!!!」

ゴッ!!!バシイイ!!!

「奴」の蹴りを受け、後退する蒔風。

そして言う。

「大丈夫だ!!!勝ち続けてやる、お前らがそう願うがぎり!!!」

そしてそれは誓いであった。

「守ってやる!!!俺がそうしたいと思っがぎり!!!」

そして最後にささやかな願いを……

「ただし!!!何よりも熱く!!!楽しく!!!カッコよくだ!!!」

蒔風が左手を引き右手を一気に前につきだした。

そしてその手に集まった光は刹那の瞬間に蒔風と「奴」の距離を無とし、その体を撃ち抜いた!!!

ゴオオオオオオオオオオオオオオ!!!バシユン!!!!!!!

そして、「奴」の体に穴があき、「奴」はその変形しきった身体のために、一言も発することもできずに、消えていった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

「奴」が消えると、その結界も消えて、元の街に戻ってくる。

時間はさほどたつておらず、こなたがゆたかに電話してから3分と経っていなかった。

一行はその場で話すのもなんなので、当初行く予定だったカラオケに入る。

「で？結局あんた何なのよ??」

「だーから。説明したつしょ??世界最強だった」

「説明になってないわよ!!!」

「あたしは何となくわかったよー」

「あんたはそりゃそういうものに興味があつて少しは耐性があるか

「らでしよが!!」

「私も大体わかったんだけど・・・」

「つかさも!!??」

「わたしもわかりましたよ?」

「みゆきまで!??」

「かがみももうわかってるんでしょ?そんなはつきりとわかんなくとも大丈夫でしょ?」

「たしかに・・・そうだけど」

「はつきり知りたい気持ちはわかる。だけどそこまでして知る必要はないよ。別に世界をどうとかってんじゃないでしょ?」

「なによ、わかったわよ!!あーもう、歌う!!あたし歌うわ!!」

「おーかがみんいいぞー」

「わーーーーー!!!」

そうしてカラオケボックスで、二時間を過ごした時風は、こなたたちに切り出した。

「じゃあ、そろそろ行くかな」

「もう行くの??」

「あんまりいないほうがいいのさ。それに、次の世界で待ってるやつがいるかも知れないし」

「そっか、がんばんなさいよ?」

「がんばるがんばる!!絶対負けないさ。オレは乗り越えられたんだから!」

「Gate Open . . . raki sut a」

「おっと、んじゃあな」

「じゃねー!」「また来なさいよ!」「ありがとー」「ありがとー」「ごさいました」

そうして蒔風はゲートをくぐった。

誇りを胸に、これからも大丈夫だと笑いながら

.
.
.
.
.

ゲートをくぐったその先で、蒔風は身の回りを確認した。どうやら東京のどこかのようだ。

そして懐に身分をあらわすようなカードが入っていた。

そこには「たけし猛士 関東支部 時風舜」と書いてあった。
そこで情報が流れ込んでくる

「猛士……鬼？……ああ……」

「仮面ライダー、響鬼か」

t o b e c o n t i n u e d

らきすた　↳崩壊、させない↳（後書き）

【らきすた】

構成：“no Name”　100%

最主要人物：泉こなた

- WORLD LINK -　↳WEAPON↳：全能力封印

- WORLD LINK -　↳FINAL ATTACK↳：与えられた攻撃を本来の威力に戻す

もう寝むう……

アリス「なんで……こんな時間まで？」

もうだめだ……

よろしく……

ア「じかいは番外編……次の世界を楽しみなひとごめんなさい……」

ではまた次回

蒔風「空白のページを埋めよう」

番外編　く辛い、喧嘩、歌唱く

【仮面ライダーダークウガ】く辛党く

「奴」との戦いまでの四日間。

時風はポレポレに居候していた。

「また来てくださいねー！」

今時風はポレポレで手伝いをしていて、五代は料理をしていた。

時風の怪我は戦闘は無理でも、このような普通の生活には問題ない程度に回復していた。

「時風さん、ちよつと」

五代が時風を手を振って呼ぶ。

ちよつどお客もいなくなったところだったので、時風は厨房に入る。

「なんですか？」

「これ、味見してもらえますか？」

「んお？これは、カレー？」

「そう、名付けて、雄介スペシャル！」

「旨そうっすね」

「もちろん！ただいつもおやつさんとななちゃんばかりに味見してもらってるから、違う人にもと思って」

「なるほど・・・ま、辛いもん好きのオレとしては嬉しいな」

「さあ！食べてみてください！」

五代が自信満々にカレーを差し出してきた。

「んじゃ、いただきます！」

スツ、パクリ

モツキュモツキュモツキュ

「どつですか？」

「ンマア〜イ！」

「やった！」

「しかし辛党のオレとしてはまだまだ辛さが足りない」

「そうですか・・・でもこれはみんなにも食べてもらいたいか
ら・・・」

「ああ、すみません。大丈夫ですよ。このままでも抜群に旨いす
から！」

「うーん、そうだ。蒔風さん特製スパイスを作りましょう！」

「オレさん特製スペシャルスパイシーパウダーをですか！？」

「そうです！そうすれば自分の好きなように辛さを堪能できますし
」！

「よし！早速作りましょう！」

「あ、レシピを書き留めておかなきゃ！」

そうして5時間後、二人は蒔風特製スペシャルスパイシーパウダー
を完成させた。

「ひえー！ー！ー！！！」

「おめえらうつせえぞー！ー！！！」

「え？」「はい？」「おや」

三人くらいのチンピラが肩を大きく振りながらやってきた。

「あんないかにもな奴らいんのかよ」

「おそろく、涼宮さんかと。あなたがいろいろ狙われるとか言っからですよ」

「オレのせいだよー！」

時風と古泉が小声で話していると、チンピラ達が言ってくる。

「なにこちやこちや言ってるんだよ。てめえらつるさいんだよ。ギヤギヤ騒いでんじゃねえよー！！！」

「ああ、それはすみませんでした。おい、戻ろうぜ」

「さてやあ。迷惑料で有り金全部よこせやコラマ。ひっひっひっひ」

「あと、殴らせる。イライラすんだよ・・・」

「へっ、楽しそうに笑いやがって・・・いいよなあ、お前ら」

「どうすんだよこの状況！」

「なあに、任せておけ・・・すみませんねえ。こんな往来でもな
んです。そこにある公園の倉庫裏でお支払いしましょう」

「分かってんじゃねえかよ・・・」

「早くこのイライラを何とかしろ・・・」

「ヘラヘラと・・・笑ってんなあ？おい」

時風とチンピラ三人が見えないように倉庫裏に行く。

<ここからは音声のみでお楽しみください>

「さて、まずいっぱっ、ブガッ！」

三分後、蒔風は倉庫裏から出てきた。

後でキヨンと古泉が倉庫裏を見たが、そこにはもう誰もおらず、何かがあった形跡すら残ってなかったらしい。

次の日、川を流れる三人のチンピラが、朝のニュースに流れ、ハルヒの好奇心をくすぐったとか。

【らき すた】くカラオケのときく

「奴」との戦闘が終わり、カラオケボックスに入った蒔風たち。

「なに歌うー？」

「蒔風さんは何を歌いますか？」

「じゃあ、これ」

「仮面ライダークウガ」

「特撮!?!」

「おおー、五代さん映ってる映ってる」

~~~~~

「得点は・・・82点か」

「高っ!?!」

「あたしも負けられないね・・・これダア!?!」

「God Knows・・・」

「なんかせこい気がする!?!」

~~~~~


「やたー！87点！！」

「すげえな！！」

「これはツツこんでもいいのか？」

「すごいね、こなちゃん。じゃあ……これ！！」

「バレンタインディ・キス」

「前も歌ってたよね」

「前はこなちゃんのほうがすごかったから……」

「バレンタインディ・キッス！！！！！！」

「二人揃ってだまっとれ！！」

~~~~~

「67点か。悔しいです！」

「つかさ、そのネタはやめなさい。顔芸になるわよ……」

「悔しいです……！！」

「沈めるわよ!!!」

「かがみさんはなに歌うん？」

「あたしはこれよ」

「えみりんのテーマ」

「「ネタだ!!!!!????」」

「なにがよ!!!!!」

~~~~~

「78点ね」

「まだまだよのう、かがみん」

「はい、次みゆきね」

「かがみさんのスルーだあ-----!!!!!」

「えつと・・・」

「俺もスルーかあ-----!!!!!さみしい!!俺さみしい!!」

「耐えるんだよまいまい!!それがあたしたちボケの宿命さあー!!」

「！」

「三十路岬」

「渋……………」

「しかもうまい！…！」

「みゆきさん「じつじつのうまいんだよねえ」

……………

「ふう…………どうでしたか？」

「93点…………おれは、まだまだだったんだな」

「大丈夫だよまいまい！！最高に熱かったぜえ…………」

「ありがとうこなこな」

「なによさつきからあんたらの呼び方」

「「友達ですから！！！！」」

「わたしは…………つかつか？」

「じゃあ私は、みゆみゆですか？」

「え！？その呼び方に乗り気なの！？」

「なぐんだい？かがみくん。呼ばれたいのかい？」

「ぐっ~~~~~」

「さてよ？「かがかが」って言いにくいぞ？」

「じゃあ、「がみがみ」？」

「それは・・・間違っていないような気がするけど（スパァン！！！！）間違ってるから変えよう」

「じゃあかがみは「かがみ様」で」

「おお！！かがみ様！！！！」

「かがみ様~~~~！！！！」

「うっさい、やめ！！！！」

そうして時間があつという間に過ぎていったとき。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d?
?
?
?
?

番外編　く辛い、喧嘩、歌唱（後書き）

今回は短編ですよ!!!

アリス「描写されなかったあいだを書いたんですね？」

そうそう

物語に関係はないけど、あったら面白いかなってところをね

蒔風「総じて楽しい時間だったぜ」

これからもいくつかこういう風になってくかも知れません

蒔風「やらない世界もあるのか？」

それはあります

でも極力入れていきます

ア「がんばれ!!!」

蒔「がんばれ!!!」

がんばんべー!!!!!!

じゃあ三口

ア「さあ、次は本編に戻るよ！響鬼の世界、出会う翼人！」

いろいろ説明はするけど、わかんなかったらwikiを見るんだ！！

蒔「投げんなヤー！！」

鍛えてますから！（シユッ）

響鬼 く迫る脅威く

今時風は甘味処「たちばな」という店に来ている。

そこである人物が来るのを待っていた。

そして30分後、御手洗団子を食べながら待っていると、目当ての人物がやって来た。

「どうも、おやつさん、いる?。」

「ああ、響鬼^{ひび}さん! 父上^{ちやうじ}なら下の資料室に」

「ん、サンキュー」

「あの、すみません」

蒔風がそこで声をかける。

響鬼さんと呼ばれていた男が振り返る。

「ん？なんでしょ？」

「えっと、響鬼さん、ですか？鬼の」

「おや！鬼を知ってるの！？最近正体ばれすぎてんじゃない？」

「響鬼さん！またばれるようなことを！？」

「ああいや、オレは響鬼さんに会うのは初めてですし、正直「鬼」が何なのかも知りませんよ？」

「は？じゃあなんで・・・」

「あー、うん。どこか別の場所がいいんですが・・・」

「じゃあ中入っちゃってよ」

「響鬼さん！？そんなわけわかんない人を・・・」

「まあまあ、まずは聞いてみないと。話はそつから。でしょ？」

「それは・・・そうですね・・・」

「んじゃ、来てくれ。ああ、青年、名前は？」

「蒔風舜」

「ん、オレは響鬼ってんだよろしく。（シュッ）」

そして響鬼に連れられ店の奥に進み、階段を降り、資料室と呼ばれる部屋に入る。

そこには眼鏡をかけた50歳くらいの男性が、もう二人の男性と調べ物をしていた。

「ども、こんにちは」

「「響鬼さん！」」

「お、響鬼。ん？その人は？」

「まさか響鬼さんまた弟子つすか？」

「はっはっはっ！いや違うんだよ轟鬼^{とどろき}。なんか変な風にオレのこと知ってるらしくてさ、話をしに来たんだよ」

「響鬼さんを知っている？」

「うん。らしいんだよね」

「あの、二二二って・・・」

「ん？ああ、「たちばな」の地下、と言うより猛士たけしの関東支部って
言った方が正解かな？」

「猛士関東支部？たしか・・・」

「??？」

「これなんですけど・・・」

時風が懐から紙を取り出す

「なになに？」「猛士 関東支部 時風舜」？

「おやっさん、それは？」

「どうやら、彼はここの所属、みたいだねえ」

「そんなはずはないっすよ！自分、ここに長く通ってますけど、こ
の人に会ったことないです！」

「僕もですね」

「威吹鬼いぶきもか。おやっさん、どうなっているんですか？」

「それは彼に聞かないとねえ」

「はい、説明します。そのためにここに来ましたからね」

「頼むよ」

「ラジャです。とりあえず、この世界に……」

.....

蒔風が説明を終えると、轟鬼が立ち上がって叫んだ。

「世界とかなに言ってるんですか。そんな話信じられないでしょう！
響鬼さん、威吹鬼さんも信じられないっすよね？」

「まあ、にわかには信じにくいよな」

「ですよねえ！しかもなんすかこの紙は。名前と所属だけであとの
欄はスツカラカンじゃないすか！」

「うーん、紙は、本物なんだけどねえ。蒔風くん曰く、役割、だっ
け？たしかに、それなら説明つくけど」

「そうですね、僕もまだ信じられませんか」

「響鬼は、どう思うっ？」

「うーん、たしかに突拍子もない話だけど、彼が嘘ついているとは思えないんですよね」

「そっか・・・蒔風君、なにか、証明出来るようなことって、ないかな？」

「そうですね・・・最近変なことって起きてないですか？終わったはずのことが始まったとか、昔のなにかか復活したとか」

「！それはたしかにあるねえ。他には？」

「ふう、じゃあ・・・十五天帝！」

「パァン！」

蒔風がその名を言うと、十五天帝が現れた。

「これは・・・」

「すっげーっすー！」

「たしかに我々の知らない力だね」

「そうなると思います。まあ、世界云々の話は信じてくれなくても大丈夫ですよ。とりあえず大変な危機が迫っているってことは、知

「ついでにください」

「いや、信じるよ」

「事務局長？」

「なにより、彼の目は、嘘をついていない」

「ありがとうございます」

「さて、今度はこちらが説明する番だね」

「お願いします」

.....

「ここ、甘味処「たちばな」は、鬼を支援する組織、「猛士」の関東支部である。」

「おやっさんと呼ばれる、立花勢地朗たちばないちろうがこの関東支部の事務局長だ。」

「姫と童子という二人の怪しげな男女が、人間を餌に化け物「魔化魍」まかもうを育て上げ、さらに暴れる、ということがあられるらしい。」

その魔化魍を人知れず退治するのが「鬼」と呼ばれる人たちである。

「鬼」には己の体を鍛えに鍛えあげて、その肉体を変化させることによってなることができる。

ちなみに響鬼、威吹鬼、轟鬼などの名はいわゆるコードネームであり、本名ではない。

普通鬼になるには弟子になってから数年間修業してなる。

響鬼も弟子をもってるらしいが、今は猛士の総本山の吉野に行っているらしい。

姫と童子はともかく、魔化魍は鬼の放つ「音撃」でしか倒すことができない。

音撃とは、鬼たちの放つ清めの音による攻撃である。

音撃には太鼓、管、弦の三種類があり、ここにいる響鬼、威吹鬼、轟鬼がそれぞれ該当する。

鬼たちは全国の猛士のメンバーから情報を得て、魔化魍を退治し続けているのだ。

そしてつい半年前、「オロチ」と呼ばれる現象が起き、魔化魍の異常大量発生が確認された。

その異常に対し、響鬼、威吹鬼、轟鬼の三人が、見事その現象を抑えたのだった。

しかし、最近また魔化魍の出現が多くなってきており、他の鬼の人達も疲弊しきっており、なにが起こってるのかを三人は調べていたのだ。

「なるほど……」

「でも正直なにがなんだかわかんないんすよね……」

「おそろくは、「奴」です」

「時風くんが追ってきているっていう？」

「ええ、どうやらその魔化魍つてのを大量発生させて、響鬼さんを疲弊させたところでやるつもりなんでしょう」

「なんかオレそんな、世界の中心っていうのがわかんないんだけどね。オレが殺されたら世界が壊れるって言っても自覚ないんだよね」

「でも、「奴」に殺されなきゃ世界は壊れないんすよね？だったらオレが響鬼さんを守るっす！！」

「ここに何百匹もの魔化魍が襲いかかってきても？」

「うー！そ、それは・・・」

「まあ、それでもいいです。とにかく狙われてるのは響鬼さんっていうのがわかっていただけければ」

「んー、なんかなあ」

「で、とりあえず「オロチ」を止めましょう」

「そうだね。そのためには・・・」

「響鬼さん！！威吹鬼さん！！轟鬼さん！！」

「どうした？日菜佳^{ひなか}」

突然さつき店で響鬼を迎えたおやっさんの娘、立花日菜佳が血相を変えて飛び込んできた。

彼女も猛士の一員であり、響鬼たちに魔化魍の情報を与えたり、対抗策を講じる、重要なメンバーの一人である。

「い、いま連絡があったんですけど、弾鬼^{だんき}さんと勝鬼^{しょうき}さんと裁鬼^{さいき}さんが魔化魍に倒されて重傷だって！！！！！！」

「なに！？」

.....

（三日前）

とある山奥の遺跡

そこに「奴」は立っていた。

「奴」は時風の来る前にこの世界に入っていたのだ。

ここにある遺跡は「オロチ」の現象を止めるために、大地に直接清めの音を流し込むための巨大な太鼓である。

半年前、ここで響鬼がこれを使用し、大地を清め「オロチ」を止めた。

「すばらしい、ここからなら直接この世界にオレの波長を流しこめる……ハア……！」

ドーンドーンドーン……！！

「奴」が行動を始める。

その世界を食らうために

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

響鬼 く迫る脅威く（後書き）

今回は平成のアマゾンと呼ばれた、響鬼の世界！！

アリス「そんなことはどうでもいい。貴様は豚か？それが問題です」

おかしいだろうよ！！

ア「うるさいですよバカ」

バカだとお！！？

ア「ああもう、あなたを「バカ」という日本語で表現すること自体「バカ」という言葉に失礼ですよ」

ひどくない！？

ア「しかし「バカ」としか言いようがないのですからしかたなく言ってるのです」

じゃあ言うなよ！！俺がお前に何をしたよ！？

ア「本編出せよ！！」

無理だよ！！だからこの場を設けてるんじゃないか！！

ア「足りない！！アリス欲求不満で死んじゃう！！！！」

おとなしくしてなさい！！飴あげるから（ガブッ）アッーーーーー！！！！！！噛むな噛むな！！！！

ア「ほーんーぺーんー！！！！」

うっさい！！ほら、重要な次回予告を！！

ア「うーーーーー。次回……本編に、私、参上！！！！」

作品も内容も違う！！！！

あーもー、ではまた次回！！

少年よ、旅立つのなら 晴れた日に、胸を張って

響鬼 く待ち受ける闇

響鬼たちと蒔風は病院に来ていた。

倒された鬼たちの内、勝鬼と弾鬼は意識がなく、集中治療室において話どころか面会も出来ない。

しかし裁鬼は身体は動かせないものの、まだ意識はあり、話をする事が出来た。

「裁鬼、一体なにがあった？お前ら三人が纏めてやられちまうなんて」

「響鬼さん……違かったんです。あの魔化魍は……普通じゃなかった……」

「どういふこと？」

「最初は……順調だったんです……でも、途中から、馬鹿に強い……いや、あれは強いなんてものじゃない……俺達が、鬼だと思ってしまうほど、凶悪だった……」

「そんな……裁鬼さん！しっかりしてくださいよ！相手は魔化魍でしょ！？音撃で倒せなかったんですか！？」

「ああ、そいつはなんとか三人で倒したんだ……三人がかりで、何とか……でも、その後に……あんなのがいるなんて思いもよらなかったんだ……」

「なにが……出たんですか？」

蒔風が聞いた。

裁鬼は蒔風の存在には疑問を持たず、答えた。

いや、もしかすると、そんな余裕はなかったのだろう。

「三首の……巨大な犬が……あれは、ありえない……あんな魔化魍……みたことが……」

そこまで言っていると裁鬼は気を失って眠り込んでしまった。

「裁鬼さん！」

「大丈夫だ。おそらく話し終えて、気が抜けてしまったのだろう」

「でも、裁鬼さんたちが見た魔化魍って、なんなんすか!？」

「首が沢山あるのはいくつか知ってますが、巨大な犬となると……」

「ケルベロスだ」

蒔風がその正体を言う

「は？ケルベロス？」

もちろんその名前は何度か聞いたことがあった。しかしそれは魔化魍ではなく完全にフィクションのものであったはず。

蒔風がさらに説明をする。

「そう。まあ、「奴」の使役獣だ。ディスクアニマルみたいなものです」

ディスクアニマルとは、鬼たちが使う調査、探索、戦闘等に使える他目的武器だ。

元は円盤型で待機しているが、起動させると鷹、狼、猿、蛇、蛙などを模した形に変形して動き出し、鬼の意志に従って活動する。

それを知った威吹鬼が驚愕の声を上げる

「つまり「奴」は化け物を飼ってるってことですか!？」

「魔化魍だけでも三人を凌駕するほど強いのに、さらにそんな化け物までいるなんて……勝ち目ないっすよ〜!」

「いや、大丈夫です」

「どうして?」

「オレも同様の召喚……使役獣を所持しています。オレのと「奴」のとは全部出し合っても互角。それならまっすぐぶつかり合った方がいいたろっから、そこはホイホイと使ってこないだろっかと」

「うーん、でもさ、そんだけ強いなら、なんで三人を倒すだけにしたんだろ。こっ言っちゃ何だけど、殺そうと思えば殺せただけだよ?」

「おそろく、誘ってます」

「誘う?」

「三人がやられた場所。そこは確か・・・」

「半年前、俺達が儀式を行った場所に近い。というか三人はその遺跡を調べに行ってたんだ」

「そこに・・・「奴」がいる」

「!?!?本当につすか!?!」

「はい、ここまで鬼に甚大な被害が出れば、あとは自然と儀式を行える鬼は絞られてくる。そして響鬼さんは太鼓の鬼で一番の手だれです。そこで「奴」は響鬼さんを殺すつもりなんですよ」

「じゃあ、響鬼さんは「たちばな」にいてください!」

「轟鬼・・・」

「そんな「奴」のところになんかわざわざ行く必要ないっすよ!自分達がなんとかします!」

「普通の「オロチ」ならそれで大丈夫かもしれませんが。しかし今回は違います」

「なにがですか?」

「「奴」がいる。まあその間はオレが守ればいいんですが……今回の「オロチ」はその遺跡から「奴」が自分自身の波長を流し込んだことよって起こったものでしょうし……」

「そんな！」

「清めの音を叩き込めるならその逆のものも出来るはずですよ。まあ言うほど簡単なことじゃないが、「奴」ならやってのけるだろうでしょうし」

「……………」

轟鬼は絶句している。

清めの音を叩き込むだけならば、弦の音撃戦士の轟鬼でも簡単なことである。

427

しかし大地に叩き込むとなると、太鼓を極めた響鬼程の者であっても大変なことである。

それをこの世界に来たばかりの者が、しかも清めの音ではないものを送る。

そんなことをやっている「奴」に対して具体的な脅威を感じたのだ。

響鬼も威吹鬼も、轟鬼程ではないが、驚いていた。

「オレには清めの音を叩き込むような太鼓の技は持ってない。かといつて響鬼さんは「奴」に対抗できない。なら答えは簡単だ」

「まさか！響鬼さんと蒔風さんの二人でやるつもりですか!？」

「自分たちも行くつすよ!！」

「……わかりました。では周辺に湧いてくる魔化魍の駆除をお願いします。オレは「奴」を」

「んで、オレが太鼓だな？」

「はい。響鬼さんをオレが守ります。轟鬼さんと威吹鬼さんには護衛をつけるので、その者と一緒に動いてください」

「よし!!そうときまれば、明日行くか!!」

「明日ですか!？」

「善は急げって言うでしょ?はやくどこにかしないと、弾鬼たちは倒れちゃってんだからさ」

「それもそうですね」

「よぉ〜っし!!がんがりますよぉ〜!!……!」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

響鬼 く待ち受ける闇く（後書き）

アリス「そこにさっそうと現れる私!!!」

なんだ!?

ア「余裕ぶっこいてる「奴」をボコボコにして、私は次の世界に!!!」

蒔風どうすんだよ!?

ア「次回作に期待でいいでしょう?」

ダメだよ!!!

ア「本編!出せ!」

もうお前のキャラがわからない!!

ア「そういえば感想を制限なしにしたんだっけ?」

なにこの唐突な自然な話題

ア「やだこわい、何言ってるのこの人」

オレはお前が怖いよ

そうですね、感想を受け付けるようにしました

ア「へこむことになるかもしれないのに・・・」

言わないで下さいよ・・・

じゃあどうぞ

ア「世界を清める音撃炸裂！！！」

ではまた次回

僕たちには、ヒーローがいる

響鬼 くめぐる翼

次の日、時風は響鬼、威吹鬼、轟鬼と共に例の遺跡に向かった。

「四人とも、気をつけてくださいね」

「たちばな」の玄関先で日菜佳、おやっさんが送り出してくれた。

日菜佳が火打ち石をカッカッ、と打ち鳴らし、武運を祈ってくれた。

「んじゃ、行ってきます！（シュッ）」

「日菜佳さん、オレ、頑張るっす！」

「では、行ってきます」

「ありがとうございます、日菜佳さん」

それぞれが挨拶を交わし、響鬼と威吹鬼はバイクに、時風は轟鬼の車に乗せてもらって、出発した。

景色が都会のそれから徐々に大自然のものとかわり、四人は山の腹の荒れ地に着いた。

「ここですか？」

「そう。あそこに円形の台みたいのがあるでしょ？あそこから音撃を直接大地に打ち込むんだ」

「それにしても、ここまでなにもなかったのですが……」

「なんか、怖いっすね」

「油断しないと、やられてしまいますよ。そうだ、今のうちに……
よっ」

蒔風が声をかけると、玄武、朱雀、白虎が人の姿をして現れた。

三人とも蒔風と変わらないくらいの歳に見える。

玄武は亀だからだろうか、老齢な雰囲気が出ていた。
その腰に玄武盾を引っ掛けて持っていた

朱雀は柔らかな青年で朱雀槍を、白虎は常に楽しそうな少年のような青年で、脇に白虎釵を掛けていた。

「蒔風さん、彼等は？一体どこから……」

「ああ、俺も「奴」みたいに使役している、召喚獣がいてね。彼らはその人の姿です」

「人の姿ってというのは？」

「もちろん、大きな獣の姿にもなります」

「本当に違う世界の人ですね……」

そう彼らのことを説明していると、玄武、朱雀、白虎が蒔風に確認をとってきた。

「我等が護衛を？」

「まあ、確かにそれが最善策でしょう」

「僕たちにまかせりゃだいじょーぶい！ね？玄武のじっちゃん」

「白虎よ、じっちゃんと言うな。私はまだそんな外見は歳くつとらんし、実際の年齢もお前らと変わらんぞ」

「なあ、三人とも、任せていいのか？」

「舜はちよつと待つて。玄武はじつちゃんなの！ーじゃん、あだ名あだ名」

「納得いかん」

「まあ、いいじゃないですか。白虎だって慕ってくれてるわけですよ」

「……むじむじ」

「おい、お前らちよつといいか？」

「うむ？」「はい」「はい」

「これから大事な分担を言おうと思うんだが………白虎？」

「え！？あ、あの、その………」

「よくもまあこつち差し置いて……（くわっ!!）」

「ひい！しゅ、舜？人間の顔の構造上なっちゃいけない顔になってるよ!？」

「白・虎？」

「ごめんなさい！許してえ！」

「はぁ……気をつけるよ？」

「りょーかい！」

「では、轟鬼さんに玄武、威吹鬼さんに朱雀がついてくれ。白虎はオレと一緒に響鬼さんに」

「玄武さん、よろしくっす!?!」

「この身の限り守ろっぞ」

「では朱雀さん、行きましようか」

「ええ、準備は万端です」

「では、行きましよう響鬼さん」

「おう、頼んだぜ」

「まっかせてください！僕と舜が二人係なんだよ？だいじょーぶですって！」

「はははは……はあ」

ピイン、キイイイイイイイイ……

カシユン、ピユイイイイイイイ……

ガシユ、ギャアアアアアアア……

響鬼、威吹鬼、轟鬼がそれぞれのへんしんおんさ変身音叉、へんしんおにぶえ変身鬼笛、へんしんきげん変身鬼弦を鳴らす。

それを額の所に持っていくと、響鬼が炎に包まれ、威吹鬼は風に覆われ、轟鬼は雷に囲まれた。

そしてそれらを払うように腕をふるうと、それらはかき消え、鬼に変わった響鬼たちがいた。

「おおー。それが？」

「そう、それが鬼って奴だ」

三人の変身も終わり、三組に分かれて荒地を進んだ。

荒地地といってもまだ植物は多くあるので、それに隠れる形で進んでいく

響鬼組は真つ直ぐに遺跡に、轟鬼組は右、威吹鬼組は左に少しずつ開きながら足を動かす。

そして、遺跡にもう少しで到着するところで……

「何にも来ないねー」

白虎がぼやいて時風にあきれた視線を向けられた。

しかし本当に何も来ないで、遺跡に到着してしまった。

「こないねえ」

「ま、まあ、来ないなら来ないでいいんですけど……」

「もう始めちゃったら？」

「そうだな、始めつかあ！」

そして響鬼が太鼓をたたき始める。

その遺跡を響鬼が叩くたびに、大地が清められていき、「オロチ」の現象が引いていく……

「おいてめえらなにやってんだあ—————!!!!」

『!!???!?!?!』

「蒔風、あいつが？」

「はい、「奴」です……おい、何やってんだって?てめえが始

めたことの後始末に来てやったんだよ！」

「あんたが蒔風さんの言ってたやつつか!? もう遅いっすよ!!
これで「オロチ」はおしまいっす!!」

右のほうから轟鬼が「奴」に向かって叫ぶ。

「はあ? いいんだよ、別にそんなん。オレとしては響鬼がここに来てくれれば僥倖なんだよ。だけどよお・・・」

「だけどなんだよ? 今の今まで何やってたんだ?」

「てめえら、こんな朝早くから来てんじゃねーよ!!!! 思っくそ寝てたわ!!!! そこ!!!! いい加減太鼓たたくのやめ!!!!」

「・・・・・・はあ?」

「おい、蒔風。あいつ・・・」

「魔化魍の……大軍!?」

「これで「オロチ」は終わりじゃないんすか!?!」

「バカ野郎どもめ、そう簡単にやらせると思ってたのか?その遺跡にたたきこんだのはオレの波長だ!!清めの音で消しきれず、それでも送りつけられれば、耐えきれず噴き出るのは当たり前だろ!!」

「てめえ、最初からこれ狙いで!?!」

「遅れてきたのもこのためか!?!」

「………そうだ!?!」

「寝坊はマジだこいつ!?!」

「ええい、そんなことはどうでもいい。結果オーライだ!?!…ケルベロス!?!」

ガアアアルルルルルル!?!?!

「奴」の後ろから漆黒の体躯をうならせて、ケルベロスが飛び出してきて、響鬼を狙う。

「白虎お！！！！！」

「おっ……………けいッ！！！！！！」

がああああああああああああああああ！！！！！！！！

白虎が瞬時に獣神体となり、ケルベロスを喰いとめる。

玄武と朱雀も向かおうとするが、ノツゴ、オトロシ、イッタンモメなどの巨大な魔化魍らが襲いかかり、手を離せない。

「ケルベロスだけか？」

「それだけで十分だ。貴様こそ、他のは出さないのか？」

「……………白虎……………ケルベロス、倒せとは言わない。
喰いとめられるよな!!」

「あつたり前だ!!」

「よし!!!!ああああああ!!!!!!」

【KAMEN RIDER HIBIKI】 - WORLD LIN
K - WEAPON -

時風がWORLD LINKを発動させる。

すると時風の手にも、太鼓の音撃を打ちだすための撥はち、音撃棒おんげきぼうが現れた。

「響鬼さん!!オレが「奴」の波長を追いだします!!響鬼さんは

時風と響鬼が音を叩き込む。

すると徐々に地面からわき出てくる魔化魍の数が減少し、ついには出てこなくなった。

「やった!!!」

「後はここにいるやつらを倒せば終わりっす!!!」

「シメるぞ!!時風!!」

「おお、響鬼さん!!」

「「はあああああああああ—————」

時風と響鬼が両手をあげ、最後の一撃を叩き込む!!

「はぁっ……!!」

ドンドン……!!

その最後の一撃で「オロチ」は完全に被われ、さらに遺跡の中の「奴」の波長も消えた。

「ガッ、グウウ!!おおア!!」

「奴」の身体から火花が散った。

どうやら遺跡の中の「奴」の波長をたどって、音撃が流れ込んできたようだ。

「ちいい……ぶ……てめえ、邪魔くせえやあ!!」

「ぐあ……」「ぐあ……」

「奴」が青龍と獅子を投げ飛ばし、ケルベロス、迦桜羅、サラマンダーを戻し、その場に残った白虎、天馬、麒麟に向け、「奴」自信をあらわすような、真つ黒な波動砲を打ち出し、なぎ倒した。

二人と三体は、食い止めることができていたとはいえ、かなり疲弊しきっており、その一撃で刀の姿に戻り、時風のもとに帰ってきた。

「ふうふうふう……はあああああああ……はははははははは……！集え魑魅魍魎の化け物どもよ！！お前からオレの波長でここまで強くなっただから、オレの力にもなってもらうぜえ……！」

ギョッギョギョギョギョギョギョギョギョ……！

ゴギャー……！！ブルルルルルルルル……！！

コカッ、コココッココココッコ……！！

ピギャーピギャーピギャー……！！

魔化魍どもが「奴」の周辺に集まり、その身を寄せていく。

「あいつら、なにをするつもりっすか?!?!?」

「くっ!!」

ドンドンドン!!

威吹鬼がラツパの形をした銃、音撃管おんげきかんを構え、鬼石を魔化魍に打ち込む。

そしてベルトにつけられている、音撃管の先端部分を取り付け、音撃を放つ。

「音撃射・疾風一閃おんげきしゃ しゅうふういつせん!!」

ププアーーーーー………プア!!

バアアアアン！！！！

魔化魍に打ち込まれた鬼石が、音撃管から発せられる音に共鳴し音撃を体内から響かせ、その体を落ち葉や土塊となって粉みじんに散らした。

しかしまだ多くの魔化魍が「奴」の周りに集まっている

「威吹鬼さん、やってもきりがありません！！」

「しかし！！」

「あれをまとめるのは「奴」です。一つになって固まったところを狙ったほうが、一気に殲滅できます！！！！」

「それは、たしかに……」

「でも、それだと……」

「大丈夫です。WORLD LINKの最後を、まだ見せていない！！」

ギャアルルルッララララララララララアアアアアアアアアアア
!!!!!!!!!!!!!!

「どつやら、終わったようだな」

そこにはもはや魔化魍なんて生易しいものはいなかった。

怪獣、そう、怪獣がいた。

身の丈が三十メートルほどの、大きな魔化魍の三倍近い大きさに、多くの魔化魍を取り込んで、巨大な姿となっていた。

「ばあああああああああああ!!!!!!!!!!」

「奴」の咆哮とともに、その胸元にある無数の口から、白虎たちをなぎ払った波動砲が打ち出される。

周囲が一瞬で吹き飛ばされ、時風たちは大地を転がっていく

しかしその眼には絶望など映っていない。

あるのは、勝ち気。ただそれのみ!!!

「終わらせましょう、響鬼さん!!!」

「てめえら、この巨体に、音撃が響かせきれぬわけねえだろうが！」

「侮るなよ？」

「ふん!!! WORLD LINKの威力をもつてしても……」

「ちげーよ。この人をだよ」

キューーーーーイ!!!

そう一声何かが鳴いたのが聞こえると、一羽の鳥のようなものが剣を持って飛んできた。

鳥はディスクアニマルの内の一つ、あかねたか茜鷹

剣は響鬼の強化武器、おんげきぞうふくけん音撃増幅剣・アームドセイバー装甲声刃である。

それを響鬼が受け取り、構え、刀に告げる。

「響鬼、装甲!!!」

その掛け声とともに響鬼の体が紅となり、多数のディスクアニマルが響鬼の体に飛びつき、その体に装甲されていく。

その体を鍛え上げるかのように炎がその体を包み込んで、晴れた時、そこには響鬼の最強形態、アームドビレキ装甲響鬼が立っていた。

「僕たちが「奴」を引きつけます!!!」

「威吹鬼さん、行くつすよ!!!」

威吹鬼と轟鬼が「奴」の巨大な身体にぶつかっていく。

両側から挟みこんで攻撃しているが、いかんせん攻撃が効いていない。

しかし、「奴」の行動の邪魔はできているようである。

「響鬼さん!!」

「おう!はあ!!」

オン!オオオオオオオン!!!

響鬼がそのベルトに取り付けられている直径十センチ程度の円盤、
音撃鼓おんげきこ・爆裂火炎鼓ばくれつかえんづつみを投げつけ、「奴」にセットする。

すると小さな音撃鼓がたちまち大きくなり、「奴」の巨体を隠してしまうほどに巨大化して、「奴」の動きを封じ込める。

「がつ!なにい?・・・振りほどけない!!!!」

威吹鬼が鬼石を打ち込み、

ザシュツ、ズドツ！！

轟鬼がギターの形をした武器、
音撃弦・烈雷を突き刺して

時風と響鬼が太鼓の前に立ち準備が整った

「いくぜ！！」

「おお！！！！」

「音撃打・豪火連舞の型！！！！」

「音撃射・疾風一閃！！！！」

その体が音撃によって崩されていき、所々がすでにえぐれている。

「どどめだ……！」

【KAMEN RIDER HIBIKI】 - WORLD LIN
K - FINAL ATTACK

響鬼と時風が下がり、距離をとる。

すると時風の手から音撃棒が消えた。

「鬼神覚声……！」

響鬼が装甲声刃アイムドセイバーに自らの声を告げる。

音撃刃おんげきじん・鬼神覚声は、己の声をダイレクトに音撃に変換し、それを刃として切り裂く技である。

蒔風が風林火山の一本、「火」を構える。

すると響鬼と蒔風の刀身が炎に包まれ、目の前に「鬼」の一字が現れる！！

「はあああああああああああああああああああ
！！！！！！！！！！」

ゴゴウツ！！！！

二人が剣を振り下ろし、光輝く斬撃が飛ぶ！！

「やった!!!」

「一件落着ですかね」

「みんな、お疲れ!!!」

「ありがとうございました」

響鬼、威吹鬼、轟鬼は顔だけ変身を解いている。

「時風はもう行っちゃまうのかい？」

「うーん、まだ居たいんですけどね。どうも「奴」は待ってくれませんか」

「そうつすか……」

「さっきの儀式で音撃をあれだけ送り込みましたから、おそらく三か月は魔化魍の出現はめつきり減るはずですよ」

「裁鬼たちもそれくらいには復帰してるだろうから、間に合うな」

「少ない人数でのローテーションにならなくて済むってことですか？」

「ですね」

「おおー！ー！ー！」

「ありがとな、蒔風。次の世界も、がんばれよ」

「大丈夫ですって。鍛えてますから！ー！なんて」

「ははははははは！ー！それなら大丈夫だな！ー！」

「応援してますよ！ー！」

「その想いで、お礼は十分です。しっかりと俺の「力」になります」

「んじゃ」

「では」

「Gate Open . . . KAMEN RIDER HIBIK
I」

そして蒔風もこの世界からいなくなった。

「さつて、帰りますか！」

「あ、オレ、おやつさんに連絡してくるッス」

「轟鬼は元気だなあ」

「響鬼さんもまだ現役でしょう？」

「いやいや、時風の不思議な力があつたから立ててるだけで、あんな音撃出したら三日は動けないよ」

「響鬼さん！！電話ですー！！」

「ん？誰からだ？」

「京介君がー！！何で自分を呼ばなかったのかってー」

「ああ、なんか悪いことしたな」

「しつかり説明してあげてくださいね？」

「オレがー？勘弁してよもう」

響鬼たちが帰路につく。

響鬼 くめぐる翼 (後書き)

アリス「蒔風くんやー!」

蒔風「おいちょー!」だまつて!!--!」は「返事はいらぬから!!--!」
「.....」

ア「さあ、後書きを始めましょう!!--!」

あいつはいいのよ

ア「誰のことですか?」

.....女つて「わい

ア「それは違います。女ではなく、「私」が強いです」

蒔「もういいか?」

ア「あー!!--!ダメダメしゃべっちゃ!!--!」

いいじゃないもう

ア「いいの!!--!こいつシカト!!--!」

.....シカトされる悲しみを知らないで貴様そんなことをの
うのこと.....

ア「ひひひひひひ!!--!文章故にお伝えできないのがよかったと思

えるような怒気と哀愁を漂わせた表情を！！」

蒔「おまえはやっちまったな」

ア「ええ、触れてはならないものに触れてしまったようです」

蒔「謝つとけよ」

ア「はい……ごめんなさい。ただ、出番をとられるかと思って……」

そっか……いや、いいんだよ！！（グシグシ）気にしてないよ！！

【仮面ライダー響鬼】

構成：“フォルス”40%、“no Name”25%、“ライクル”15%、“LOND”20%

最主要人物：響鬼（本名、ひだかひとし日高仁志）

- WORLD LINK - 〈WEAPON〉：蒔風に音撃棒の装備

- WORLD LINK - 〈FINAL ATTACK〉：鬼神
覚声を蒔風にも付加

ですね

ア「じゃあ、次回予告いきますよ」

よろしくー

ア、「ゲートをくぐるとそこはとある村の薬師の家の前だった」

ではまた次回

子どもの頃の夢は 色褪せない落書きで

うたわれるもの　く姉妹との出会いく

夜

蒔風はある村に着いた

「なんだここ。服装もシンプルだな」

蒔風がこの世界での服装は、民族衣装のようなものだった。

「オレはどこに行けばいいのかなー？」

そう蒔風がぼやくと、空にキラリとなにが光った。

蒔風はそれに気付かない。

そして落ちてきたそれが……タライが蒔風の脳天に直撃した。

ゴガン！

「ナツ、パア！？おおお？……（ボタン、キュー）」

その一撃で蒔風は意識を失った。

「うちの前に倒れてたんです。びっくりしましたよ。朝外に出たら人が倒れていたんですから。多分、あれが頭にぶつかったんだと思います。でもどこから……」

エルルウが指差した先に蒔風の意識を奪ったタライが置いてあった。

底の方に「Present for You」と書いてあった。

世界がこの状況を作るためのお膳立てをしてくれたってことかよ・
・ありがたいがなんかムカつくなあの子

「そつえばマイカゼさんってここじゃ見かけない感じの人ですよ
ね？尻尾もないし……」

「尻尾？」

「ええ、尻尾」

どうやらこの世界の人間には動物のような耳、尻尾などが付いているらしい。

「そつえばさっきの子は？驚かせてしまったようだけど」

「あの子は私の妹でアルルウといます。人見知りか激しくて。アルルウー！お客さんに挨拶しなさい！！！」

「別にいいですよ」

「でも・・・あ、アルルウ」

そう話しているとアルルウがこっちに近づいてきた。

おっかなびっくりだが、興味は持ってくれているらしい。

「はは、こんにちは、アルルウ。俺は蒔風ってんだ。よろしく」

「・・・ん、アルルウ、です」

「はい、どうも、アルルウ。んで、エルルウさん。なんでまたわざわざオレを拾ってくれたんで？」

「私、薬師なんです。だから倒れてる人を見ると助けなきゃって・・・」

「なるほど・・・んっ」

その時、蒔風に情報が流れ込んできた。

どうやらこのエルルウ、アルルウ姉妹は、最主要人物に一番近い主要人物のようだ。

最主要人物の名はハクオロ。しかし名前だけでそれ以外の情報は入ってこなかった。

「えっと……いきなりですみませんが、エルルウさん」

オレは姿勢を正してエルルウに訊く。

「ハクオロ、という人物に心当たりはありませんか？」

「ッ!?!?!」

「おとーさん？」

「そ、その人は……」

「知ってるんですか？」

「え、ええ。知ってます。しかし、今はいません……」

「なぜですか？その人って何をしてる人なんですか？」

「ハクオロさんは……この国の……トウスクルの皇オウルオでした。」

「おうるあ？王様ってことか。しかし”だった”とは？」

「その後、いろいろあって、ハクオロさんはいなくなっちゃったんです」

「なるほど……しかし、その皇オウルオと親しいあなたがなぜ小さな村の薬師を？」

「私はハクオロさんの近くにいたかった。家族でしたから。だから、私は待つてるんです。この、私の居る場所で、ハクオロさんを」

「そう……ですか……」

「だいじょーぶ。おとーさん。帰ってくる」

「え？」

「と、言ひと？」

「森が、言ってる……」

「森が？」

「この子は『森ヤマナマツナの母』で、動物の意志とかを聞きとることができません。アルルウ、どつういふこと？」

「わかんない。きゃっほーっ」

そうやってアルルウがオレの手を引いてきた。

外に連れ出されると、昨日は闇夜で見えなかったが、今見ると、壮大で、美しい、大自然がそこにあつた。

アルルウがオレの裾を引いて何かを差し出してくる。

「これ、ハチミツ」

どうやらアルルウの好物のようだ。

「ん、ありがとう」

ハチの巣ごと食べるのには驚いたが、どうやらこれが普通らしい。

普通に食べるより甘かった。

そうしてアルルウと一緒に遊んでいると、一頭のウマがやってきた。

ウマといっても「馬」ではなく、ウオプタルと呼ばれる二足歩行のトガゲのような動物だ。

よかった、こつという情報が瞬時に流れ込んでくるといちいち驚かなくて済む。

どうやらそのウマに乗っているのは大柄な男のようだ。
いかにも武人、といったような男で、エルルウに用があるらしい。

「姐さん！！いますかい！？姐さん！！！」

「な、なんですか？クロウさん。そんなに慌てて！！」

「姐さん！！！！聞いてくれ、そ、総大将が、総大将が復活できるってよー！！」

「え？ハ、ハクオロさんが・・・？」

「そうだ！今みんな皇都にいる！！姐さんたちが最後だ！」

「それは・・・本当なんですか！？」

「ああ、一昨日来たへんな男が、この國の失われし皇オウルオを害なく復活させようって来たんだ！！そいつ、俺たちの知らないような術を使うから、絶対だってよー！！」

「そんな・・・ハクオロさん・・・」

「どーしたの？」

「おお！！小さな姐さん！！聞いてくれよ！！実は・・・あんな誰だ？」

「失礼、オレは時風というものなんだが、その変な奴つての風貌を教えてください」

「あん？ああ、また姐さんに助けられた人か？すまねえが、後にしてくれな……」

「そいつが実はお前らをだましているとしたら？オレの知ってるそういう奴だとしたら？どうする？」

「あんた……いつたい……」

「俺もハクオロという人に会ってみたい。しかしその怪しげな人物も気になるんだ。教えてくれ」

「クロウさん、教えてあげてください」

「姐さん？」

「この人、何だか、普通じゃない気がするんです。でも、信頼もできる。そんな感じが、するんです」

「それは……」

「マイカゼ、悪い人じゃない」

「小さな姐さんまで……分かりやした、お教えしやしょう。そいつは……」

「全身が影で覆われたようなやつでしたよ」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

じゃあ、ザーボン？

ア「なんで？なーんーで鳥山ワールド行くの？」

ブツ オフで全巻読んだからね

ア「よくもまあ……」

んじゃ、この辺で

ア「次回、「奴」は一体何をたくらむ!？」

ではまた次回

オボロ防壁!!

うたわれるもの　く暗躍する者く

今オレ、蒔風舜はエルルウさんの乗ったウマを追いかけている。

しかし結構な速度だぞ。

まあ、それだけにハクオロという人の人望の大きさがわかるんだが。

「……………(じく)」

アルルウがこつちを見ている。

ちなみにオレは勝手にこの行動している。

完全な部外者のオレはまだ世界の説明もしてないし、連れてってくれ、とも言えなかったし、こつちやってついてくしかない。

やだなあ

ストーカーみたい

……………やだ、ゾクゾクしてきた

ともかく、森の母とはすごいもので、こっそりつけてるオレの方を
何度かじゅっ、と見ている。

多分アルルウが乗っている大きな白い毛の虎、ムツクルが感づいて
教えてるのだろう。

さっきアルルウに教えてもらったときに知ったのだが、ムツクルは
ムシカバ森の主と呼ばれる者で、小さな頃にアルルウに拾われたらしい。
だからあんなに懐いてんだなあ。

そんな説明口調で考え事をしながら走っていると、大きな都が見えて
きた。

ここがこのトウスクルの皇都らしい。

エルルウさんたちがいかにも宮殿、みたいな建物に入って行った。

オレも早く侵入しなきゃな

「奴」が何するかわかったもんじゃない

「ふうっ、土惶」

ボコッ

土俵の力を使い、地面に穴を開け、潜っていく。

城壁を越え、大きな木の根っこが見えたので、そこで地上にあがる

「ふう〜い、よっこいしょういちと。あ、よっこいしょういちって言っちゃった」

………バカなことやってないで行こう。

衛兵の監視をかい潜り、宮殿の中に入っていく。

「一番でかい部屋に行けば、いいのかな〜」

そつつぶやいて、オレは宮殿の中心を目指した。

実はオレ、派手な戦闘好きで得意だけど、一番の得意はこつこつ隠密行動なんだよねー

おっと、ここかな？

最初にエルルウが口を開く

「ハクオロさんが蘇るって本当ですか？」

「まだ、わかりません。しかし、可能性は大きいです」

それにベナウイが答える

「聖上にまたあえるのですね!？」

「でもそんな簡単に信じていいんですの？怪しい方と聞いてますが」

トウカとカルラがさらに聞く

「うーん、確かに怪しい人だったけど……」

「私たちの知らない術を使うこともたしか。彼が言うには、違う世界の力だそうですが……」

それには法術に秀でたカミュ、ウルトリイが答える

「だけど・・・ハクオロさんが封印を望んだ理由が・・・それを無視して・・・」

「そうですね。主様の意志を考えると、このままの方が・・・」

「確かに、聖上は自分がこの世に下手な力で干渉しないように、己の半身と共に眠りつつづけることを選択しました。そうになると・・・」

「エルルウ、カルラ、ベナウイが難色を示していると、そこに声がした

「大丈夫ですよ」

「あ、あなたは・・・」

「ベナウイさん、あの人か？」

「ええ、聖上を復活させると言っていた人物です・・・なにが大丈夫なのですか？」

「ふふふ、あなた方の主、ハクオロ皇の事情はわかっています。空蝉、でしたかな？その邪悪なる半身を消滅させ、ハクオロ皇を復活させる。そうすれば問題ないでしょう？」

「おうわっ!」

蒔風が驚きながらも着地すると、周りには二刀を構えるオボロ、弓を引くドリイ、グラア、方術を構えるウルトリイ、カミュ、腰の刀に手を添えるトウカがいて、囲まれてしまった。

ちなみにクロウはベナウイの前に守るように立ち、エルルウ、アルルウはトウカの後ろに回っていた。

「マイカゼさん!?!」

「あん? さっきのあんちゃんじゃねーか。こんなところだなにやってる?」

「いや、そいつが……」

「皆さん! やつは私の敵です! 様々な世界を巡る私をいつも邪魔してるのです!」

「いやまあそうだけどさ、一旦話を……」

「問答無用! ! せえりゃあ! !」

オボロが業を煮やして切りかかってくる。

蒔風は天地陰陽の内二本を抜き、上下から迫る刃を受け止め、身体を回転させ離れる。

そこにドリイ、グラアの弓が放たれるが……

「(ダンッ!) 畳返し!!!」

バコッ!!

いきなり蒔風を隠す程度の大きさに、床が跳ね上がって壁になり、その弓を防ぐ。

「なにっ!?!」

「なんだその術は!?!」

「術じゃなくて技です。柔術の畳返しを床だとか地面でやってるだけですよ。まあオレは足でやってますが」

蒔風はそう説明するが、柔術なんて言われてもこの世界には存在していないので、彼らはちんぷんかんぷんである。

「ハッ!!!」

「っ!!!(ギイン!!!)」

さらにトウカが攻めてくる。

その流れるような攻撃を、それに合わせるかのようにかわしていく蒔風。

「くっそ！…なあ、どう思う？…白虎」

蒔風が己の剣に話しかける。

白虎はその剣の状態で応答する。

・音声の言葉じゃダメならもうやることは一つでしょ・

「だよなー……いいぜー！…っちだー！」

「ま、待て！…！」

蒔風が一気にジャンプし向かってくるオボロホ飛び越える。
空中で回転しながらドリィ、グラァの弓をはじき、外にでる。

外は広い演習場になっており、そこで軍隊の訓練などを行っているの
だが、今はいない。

「とっつ、と。へへ（クイクイ）」

「あの野郎舐めやがって！！（ダダダ）」

「若様！！待ってください！！！」

「私たちも行きましょう！！！」

「うん、お姉さま！」

「某たちも行くぞ！！カルラ！！」

「いいですわよ、トウカ。骨のありそうな方じゃないの」

そう言って他の者も全員が演習場にでる。

「奴」の姿はもうそこにはなかった。

「観念しろよ……おまえ、兄者の復活を拒むたあどういふことだ
！！！」

「だーから！！話を聞けっての！！まったく……やっぱしゃー
なしだな」

「なにをするつもりだ！」

「お前らと戦って、オレが勝ったら話聞いてもらうからな！！」

「てめえが？俺たちに？寝言は寝て言えや！！」

「さて、レッツ肉体言語タイム……力を借りるぜ！！」

「仮面ライダー、響鬼」

音撃棒をクルクルと回し、両手に構え、時風は猛る。

「さ、始めましょーか、尋常に……!」

t o b e c o n t i n u e d

うたわれるもの ～暗躍する者～（後書き）

アリス「作者さん、作者さん。質問です」

はいなんでしょうか

ア「携帯でこの小説を読むと括弧が多すぎてめんどくさい気がします」

ああー、確かにそうかもしれません。

私としてはパソコンで読んでいただければ幸いかと

ルビ振りなんかでも楽しんでるんで

ア「なんか裏設定ってないの？」

いきなり素に戻るなあ……

ありますよ？

ア「おせーておせーて」

えっいですね

時風は各世界に三日か二日、長い場合は今ん所は五日くらいしかいません

ア「今のところは、ですか？」

はい

世界が入り組んでくるとその世界にいる時間も長くなりますから長くいることになる世界も出てきます

ア「たとえば？なんの世界？」

残念ながらそれは言えませんが。

まあ一つの世界に、いくつもの世界を内包した世界なんかだと、長くなりそうです

ア「なるほど」

そして世界と世界を繋ぐゲートを蒔風がくぐって、次の世界に行きます。

それはまるで一瞬のように描いていますが、実はその間に、蒔風には二週間ほどの時間がたっています。

しかし現実では一瞬。故にあのような描写になるのですよ。

ア「すげえ今更な、壮大な裏設定！！じゃあ蒔風はもう・・・」

ええ、最初の自分の世界から【CLANNAD】には時間はたっていないので、そこからだと・・・

五回なので、二ヶ月半ですね、経っています。

ちなみに蒔風の肉体自身は成長せず、十九歳のままです。

ア「その狭間の空間で蒔風は何をしてるの？」

今までの世界の情報をまとめたり、修練を積んだり、元の世界のことを思っています。

ア「うわ・・・それって・・・」

ああ、あと、悪と正義だとか、生と死、人間の根源などについて考えています。

ア「壊れちゃわないの？」

蒔風はすべてを本気で理解しようとしています。

故に至高の理性と最高の狂気を、あわせもつ必要があるのです。

ア「へ、へー」

ってかしてんでしょ？

ア「まあねー。でもこつやって聞くと・・・」

そっだよ

ア「今更やる話じゃないよね」

う・・・

ア「また書き忘れてて、あ！これ書き忘れてた急いで書かなきゃ！
！ってなっただんでしょ？」

あうあうあう……

ア「ダメ野郎ですね」

この小説を読んでくれているみなさん。

こんな計画性皆無の作者で申し訳ございません。

今この場をもって謝罪いたします。

これからもこのような至らぬ点もあるかもしれませんが、どうか温かい目で見てください。

ではお願いします

ア「響鬼に変身し、戦う時風。「奴」の目的は？」

ではまた次回

ハクオ口殿！後を、後を頼みますぞ！！

うたわれるもの 〱 戦闘・守護の決意 〱

「なんだ、その姿は!?!」

「気にすんなよ。誰からくるんで?皆で来んのかな?」

「貴様などオレ一人で十分だ!」

「オボロさん!」

「エルルウは下がってる!」

バツ!

蒔風にオボロが迫る

オボロは軽業師のような身軽な動きで蒔風を翻弄する

ギィ!ギャリリリリリ!

蒔風は音撃棒でそれをすべて受けきる。

「なに!?!オレの攻撃がみきられて!?!」

「鍛えてますから！フンツ！」

ドカカッ！

「ぐうう！」

音撃棒がオボロの腹部に減り込む。

その一撃でオボロは吹き飛んだ。

その身軽さとスピードのために鎧をつけないオボロはモロに喰らい、悶絶する。

「ぐっ、あ……」

「くっ、次は某が！」

「トウカさん……だっけ？いいぜーいいよー！」

「はあっ！」

トウカが一気に迫り、居合切りを時風に放つ

「あっぶー！」

時風が後退しながらそれをかわす。

「はああああああ（ポツポツ）……………はああ！」

そして音撃棒の先端に気を込め、それを炎とし、トウカに投げつける

トウカはそれに驚くが、凄まじい剣速でその炎を霧散させた

霧散した炎の向こう側から時風が音撃鼓を投げつけ、トウカにセツトする

オン、オオオオオオオン

「ぐ、なに？これしきい！」

「音撃打・爆裂強打の型あ！」

トウカが音撃鼓に捕われながら時風に切り掛かる

が、実力を発揮しきれない状態では敵わず、時風はその斬撃を弾き、力の限り太鼓に撥をぶちあてる！

ドダゴンー！

「うぐあっー！」

ドサツ、ドオン！

トウカの体が飛び、音撃によって爆発が起こる

「トウカさーん！！！」

「大丈夫ですよ。威力は抑えていますし、爆発も演出程度です。気絶してるだけですよ」

503

離れた所でカルラはクロウに話し掛ける

「クロウ、あなた行きます？」

「出来れば御一緒願いてえな」

「よろしくてよ。さて、行きますわよー！」

「応ー！」

カルラが大きく跳び、蒔風の手前の大地に向かい大剣を叩き付ける！
カルラの大剣は剣と言うよりも金棒に近く、斬るよりも叩き潰して
引きちぎる物である。

ドツガア！

地面が否、大地が砕け、粉塵が舞う。

その中からクロウが日本刀を肥大させたような大剣を蒔風にぶちあ
てる！

蒔風はそれをガードするが、あまりの威力に地面を転がり、飛ばさ
れる

「ちっ、時間もあつし、そろそろ……」

カアアアアアア……

蒔風の体に戻っていく。

「あら、諦めましたの？」

「いえいえ。むしろこれから・・・獅子天麟！」

蒔風がその背に三本の剣をだし、抜いて合わし、一本の大剣、バスターソードの形をした獅子天麟をその手に持つ

「!? 一体どこからだした!?!」

「だーから、気にすんなっての。では、大剣祭だ。はあああああああ!」

蒔風がクロウに突っ込んでいく

クロウは蒔風の攻撃を予測して、防御する。

はたしてその動きは正しかった。

蒔風が剣で攻撃したならば、だが。

蒔風は獅子天麟を突き of 体制で構えていたが、それをクロウに行き着く前に地面に向け、突き立てる。
そして棒高跳びのように獅子天麟を飛び越え、全身のバネを使い渾身の飛び蹴りをかました。

そこに切り掛かるカルラの剣を、後ろ回し蹴りで弾く。

カルラの手が痺れ、大剣を落とすことはないが、動かせなくなっていた。

「とどめに!!力を借りる!!」

その手に赤い玉が現れ、蒔風がそれをカルラに投げつける。

とっさにカルラは大剣を手放し、その攻撃を避けるが、さらに第二射が襲いかかり、爆発した。

「くああああああああああああ!!!!」

「くっ、カルラ!!」

「らあ!!さらにだ!!!!」

ギアン、ギイイイイイイイイイイ・・・バツ、バアアアン!!

「仮面ライダー、轟鬼。えいやあ!!!!」

ドムッ

クロウの腹部に音撃弦を突き立て

「音撃斬・雷電激震!!」

時風が音撃弦を鳴らす。

その音撃はクロウの鎧に響いて、それを弾き飛ばす!!!

ドパン!!!

「うがつ!!!」

そこで時風は変身を解く。

「さ、お次は誰だい!?!」

ベナウイの方を向いて時風が言う。

しかしベナウイは首を振り、

「これ以上あなたと戦ってもこちらに勝ち目はありません。それに、私はあなたの話も聞くつもりでしたし」

「ん?そうですか。いやあ、ありがとございます!!!」

「いえいえこちらこつそ」

「あん？ぬつがあ！！！！！がああああああああ！！！！」

そこに「奴」が現れ、蒔風の背を斜めに切り裂く。

血があふれ、地面を染めていく。

「マイカゼさん！！！！」

「あなたは・・・・・・ッ！！！！なんてことを！！！！」

「言つたる？そいつはオレの敵なんだよ。殺さなきゃーなんねえのよ。おわかり？そんなことより早くハクオ口皇を起こしに行きましょうぞ」

「断ります。まずこの人に治療。それから話を聞いてからです」

「うち！！まあいい。この騒動中に封印の場所は調べたし、お前らに用はない。とっとと復活させてサクッと殺すか」

そういつて「奴」は虚空に消えていった。

.....

「奴」が消えてから時風はすぐに治療室に運ばれた。

オボロたちはその場ですぐに目を覚まし、自分の部屋に向かった。

今ここにはエルルウ、アルルウ、ベナウイがいる

「ぐ、があ……あいつつ……」

「マイカゼさん!!動かないでください!!」

「エルルウさん……ありがとうございます。でも「奴」が……」

「話をしてくれるのでしょうか?それからでも遅くはないはずです」

「えっと……」

「ベナウイです。今はこの國の皇^{オウルオ}をやってます」

「あ、どうも王様。おれは、時風……っって言います」

「だいじょーぶ？」

「おーう、アルルウ。大丈夫だぞー。お兄さん強いからねん！っ
てて」

「だから動かないでください」

「あっ、はい」

「痛くないの？」

「痛いけど、がんばります！ー！蒔風強い子！がんばる子！ー！」

「動くな！ー！ー！」

「」（ビクク！ー！）ごめんなさい・・・」

そうして蒔風の治療が一通り終わり、謁見の間に連れてこられた。

「おい、お前大丈夫なのか！？」

「ええ、おかげさまで」

オボロが話しかけてくる

「しかしすみません。話を聞いてもらうためとはいえ、結構ボロボ

「にしてみたい……」

「ああ、それな……」

「それはもういいんですのよ……ああ、わたくし、カルラといいますの」

「どうも、蒔風です。もういいとは？」

「あなたの実力は高かった。それは私たち全員を殺せるかもしれないほどに」

「あー、それは」

「だが、あなたは某たちが怪我をしないように戦ってくれた。こちらに非があったというのに……」

トウカが引き継ぎ、先を話す

「しかし某もまだまだ未熟だ……あのようなものを少しでも信じてしまうとは……！」

「ああ、その……気にせんでください」

そうして、ぎこちないが何とか和解した蒔風に、ベナウイが切りだす。

「で、話をしてくれるのですね？」

「はいな。聞いてもらいますよ」

そうして時風は話し始めた。

いろいろと疑わしい話であったが、先ほどの戦いで力を見た彼らは、意外とすんなりと信じてくれた。

「ハクオロさんを……殺す？」

「そう。そうすれば「奴」はめでたく世界を食らい、さらなる力を手にすることができる」

「なるほど……今聖上は永久の眠りに付いている。つまり、何人も手を出すことができない。だから……」

「兄者を復活させてから、殺すって言うのか！？」

「そうだろうな。しかし、そもそもなぜハクオロさんは封印されたんだ？」

「そうですね・・・少し長くなりますが・・・」

そして今度はベナウイが説明を始めた。

ハクオロはエルルウに助けられた人物である。

彼は記憶喪失で、そのままエルルウの家で暮らした。

しかしその國の皇オウルオがあまりにひどく、ついに長老が殺されてしまい、村人が謀反を起こした。

そのときの指導者がハクオロで、今の國のなりたちである。

トウスクルという國の名は、殺された長老の名で、エルルウ、アルルウの祖母だったそうだ。

そうして國を立ち上げたハクオロだが、さまざまな戦いに巻き込まれて行く。

その途中で、ディーという若者が現れた。

それはハクオロの半身である存在が、ディーに憑依したものであった。

実はハクオロは大いなる存在、「うたわれるもの」、この世界の神

話でウィツアルネミテアと呼ばれる神のごとき存在だった。

デイーは戦乱こそが人間を進化させるものであると戦いを煽り、ハクオロはそれに真つ向から反対した。

そして封印の地、オンカミヤムカイの最深部においてデイーを倒し、同化し、自らがこの世に相容れぬものとして、自ら封印されることを望んだ。

そうして彼は封印され、いまでも眠り続けている。

「……なるほどな……ならばなおさら復活を止めなければ」

「はい。やはり聖上は封印されたままのほうか……」

「ベナウイ！！貴様兄者がこの世界にはならないというのか！
」

「違います。私も、聖上には帰ってきてほしいと思います。しかし、聖上が自らの封印を願ったことを考えれば、あなたもわからないわけではないでしょう！」

「そうか……そうだよな。いや、すまん、兄者がいないと言われたものか……」

「いいんですよ・・・それで、「奴」というのはどのようなようにして聖
上を復活させるのでしょうか」

「無理やりだろうな」

「無理やり?」

「待つてください。ハクオロ様が封印されているのは我が国、オン
カミヤムカイの最深部。そう簡単に破られるものではないですし、
それに無理やりなんてしたらハクオロ様が!!」

オンカミヤムカイの第一皇女でもあるウルトリイが信じられないと
声を上げる

「いいえ、「奴」はやりませぬ。そもそも、「奴」はハクオロさんが
その手で殺せればいいのですから、身の安全など気にはしません」

「そんな・・・」

「しかし、オレが・・・させませぬ」

「マイカゼさん?」

「オレはそのハクオロさんって人はよく知らない。だけど、その人
がその意志を貫いたのなら、オレはその意志を守る」

「・・・」

「案内してください。その封印の地まで」

「じゃあ、私も・・・」

「エルルウさんは残ってください」

「いいえ、彼女は必要です。行きつくまでに堅固な扉があり、エルルウさんでしか開けられません」

「それに俺たちも行くしな」

「は？ちよつと待ってくれ。「奴」は危険だ。そんな危ない所にみんなで行っては・・・」

「行きます」

「しかし・・・」

「行きますよ」

「あー」

「我々の意志は崩れません。我々はその方の封印を見届けたもの。我々が行かなくてはなりません」

「・・・まったく、主要人物ってのはみんな頑固なんだから・・・」

「???で、どうするんですか？」

「わかった、全員で行きましょう。でも！決して一人にはならない
てくださいね！！」

「分かりました」

「では準備の出来次第ここを発ちます。急いだ方がいいですよ」

そうして全員が支度を始める

「ふう、さて、守るもんが増えちまったな。ははは、いやーまいつ
たまいった」

そして数分後、時風たちは砦を出た

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

うたわれるもの 〱 戦闘・守護の決意〱 (後書き)

お金がないです

アリス「今月のお金はねんどろいどに消えましたからね」

今週末に超電王見に行きたいのに・・・

ア「お金が入るまで待ちなさい」

残念だなあ

ア「ゼロノスどうだったんですか？」

面白かったよー

ただ映画館の案内でニヤリとしてしまった

ア「なんで？」

いや、タイトルが長すぎて、しっかり言えてなかったWWW

ア「タイトル長いですもんね。なんでしたっけ」

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダーThe MOVIE

超電王トリロジー〜ゼロのスタートウィンクル〜

です

ア「なっが」

そしてチケット切ってもらって誰にも聞こえないようにそれをスラ
スラ言ってるオレ

ア「うっわ〜〜」

さてさて、第二弾では言えんのかな〜〜

ア「性格悪!!」

ライダーはかっこいいですね

じゃあ、ヨロです

ア「「奴」の思惑通りにハクオロは復活してしまい・・・???」

ではまた次回

うたわれるもの　く　白き皇

「ふう、はああ。なかなか重い……これじゃあいつら来ちゃうじゃん」

オンカミヤムカイ最深部

ハクオロが封印された地に、「奴」はいた。

すでに蒔風を切り捨ててから二日

そろそろ来る頃だろう。

早くこいつズッコ抜いてぶっ殺さなきゃならん

「知ってはいたが、封印堅いし、こいつ重いし、このままやっちなおうか？」

すでにハクオロが力を解放させた、うたわれるもの・ウィツアルネミアの巨大な体躯の半分は地面の魔法陣から出てきていた。

「でもこのままやっちなおと、上手くやれるかわかんないしなあ。めんどいがやるしかないようだな！」

「待あてえ！」

「おっ？」

ヒイン！ギャギン！

龍虎雀武を組み合わせた円盤が「奴」の目前に飛来し、その進行を阻む。

「来ちまったか。いや、速いほうかな？」

「貴様、許さんぞ！」

「蒔風！なんだ？そいつらまで連れて来たのか！」

「当然です」

「兄者を封印したのがオレ達なら、それを守るのもオレ達だ！」

「だそつですよ」

「は、さいですか。まあこの際だ。もういい、このままこいつをぶつ殺す！」

「ヤバッ！」

時風が駆ける。

しかし「奴」の方が近く、魔導八天の凶刃がハクオロに迫る。

ズブアツシヤア！

「奴」が全力を持って両断する。

その勢いでついにウィツアルネミテアの全身が出て来てしまい、完全に二つに別れてしまった。

しかしそこから血が流れることはなく、両断されたそれぞれが形を変え、二人の人間となった。

一人は顔に仮面をつけ、一人は背に翼が付いている。

「ハクオロさん！！」

「デイー！？」

「どつちが！！」

「仮面のある方が聖上です！」

「了、解ッ！青龍、掻っ攫え！」

「御意！」

蒔風の右前脇から青龍が飛びだし、ハクオロの身体を回収する。

「奴」はハクオロの方に青龍が向かったのを見ると、そちらではなく、もう半身の方に向かった。

「ハクオロさん、ハクオロさん!!」

「おとーさん、起きる!!」

「エルルウさん、下がって下さい」

「マイカゼさん、なにを？」

「着付け薬だ。雷旺!!」

バツンッ!

蒔風がハクオロに電流を流す。
ハクオロの身体が一瞬ビクンと跳ね、やがて唸り声をあげ、目を覚
ます。

「む、むう……」

「ハクオロさん！」

「え？エルル！？ブアッ！」

エルルウとアルルウがハクオロに飛びつき、喜びをあらわにする。やはりなんだかんだでも、再会はうれしいらしい。

ちなみにオボロもつかみ掛かろうとしたが、ハクオロの跳ね上がった足に蹴られ、悶絶している。

あそこはいてえな

「感動の再会の途中で悪いんだが・・・ハクオロさん、ですか？オシは・・・」

「うん？ああ、時風舜だろう？眠ってる間に見ていたよ。いろいろと迷惑をかけたようだ」

「さすがうたわれるもの。話が早くていい。今から「奴」を潰します。危険ですので、離れていてください」

「いや、私も戦う」

「おおっ？」

「今・・・「奴」が私の半身を取り込んでいるようだ。徐々に繋がりが断ち切られていくのが解る。あれは私の半身だ。私がやらねばならない。それに・・・」

「それに？」

「あいつは私の封印を解いた。その落し前は、つけさせてもらう」

「あー、わかりましたよ。まーた護るもん増えたな。にしし」

「自らの勝率を下げるとは愚かだな時風」

「奴」の声が響く。

その姿は先程のウィツアルネミアのものが黒くなったものに変わり、身長は20メートル程になっていた。

「そもそもそいつに仲間はいらん。そいつは神といってもいい力を持っているのだぞ？その力で様々な人々を自らの意志で自由にいじくり回し、成長させていく。そいつは誰とも関わっちゃならないんだよ！周りの人間はお前の気分次第で……なあ？はははははは！てめえみたい存在がいなけりゃ、戦いは起こらなかつた！違つか！」

「違うなあ!」

「なに?」

「戦いはどうあっても終わらないさ。0にはできない。だが、彼はそれでも戦いを止めようと戦った!0にできなくても、限りなく0に近づけるために!・・・なあ、ハクオロさん」

「なんだ?」

「もう一度、あの人たちとともに生きてみてください。あの人たちは・・・あなたと暮らしていけないほど、弱くはない」

「・・・」

「・・・信じてあげろよ!!!あんたにどんだけついてきたやつらなんだよ!!!あいつらを、正しく導いてやれよ!!!ウィツアルネミテアの半身ではない、たった一人のトウスクール皇、ハクオロとして!!!」

「・・・うむ!!--!!」

「なあゝに開き直ってんだよ!!!」

「奴」が蒔風たちに迫る。

その巨大な拳で大地ごと吹き飛ばしにかかる。

「あああああああ!!!十五天帝!!!!!!」

「マイカゼさん!?!?!」

蒔風の叫びにすべての剣が呼応する。

獅子天麟をベースに、まず龍虎雀武が一本ずつ刃の方に背びれのよ
うに取り付けられていく。

そして取っ手のところにはトンファー型の天地陰陽が鞘に収まった
状態で取りつき、四角い輪を作り、より両手で持ちやすく。

最後に風林火山が、「風」「林」「火」「山」の順にそれぞれの背
の方に刃が付き、柄がなくなり、獅子天麟の先端につく。

これこそ禍々しき正義と伝説で語られる、十五天帝の姿である。

その刀剣で「奴」の拳を弾き飛ばし、さらに襲いかかる拳を今度は弾けず、受け止める。

ブシュー！！！！バダバダバダ・・・

「いぎつ！！！！くおおおおおおおおおおあああああ！！！！！！」

「マイカゼさん！！！！」

「背中から血が！！！！」

「なぜ避けなかった！！！！」

「ばーか。避けられなかったんだよ。思いのほか深く切れていたみたいだねえ。ひっひっひっひっひっひっ！！！！」

「奴」が蒔風にとどめを刺そうとその口に炎をためていく。

「蒔風!!!!!!!!!!」

ハクオロが蒔風の状態を見てすでに駆け出している。

「奴」は炎の充填よりハクオロの方が早いと感じるや否や、即座に天井を崩してきた。

ドガ!!!!!!!!ガラガラガラガラ……

「奴」が天井を崩し、蒔風たちをみんなまとめて瓦礫の下敷きにする。

「はっはあ!!!下敷き完了!!!これで……ガウッ!?!」

その瓦礫の中から腕が伸び、「奴」を殴り飛ばした。

さらに銀白に輝く翼が、瓦礫を吹き飛ばす。

「てめえにできんなら俺にだってできらあ……ッ!!!な、が、なに……なぜ……」

「奴」の動きが止まる。しかし、ハクオロの動きは止まらない。

その強大な腕の爪で、牙で、その標的を拳の餌食に!!!

「ばっかだなあ。混ざりもんのお前さんに、ハクオロさんを止められるわけないっしょ?」

【UTAWARERUMONO】 - WORLD LINK - W
EPON

その声と同時に、エルルウの髪についている白いリングが輝き、巨大化した。

そしてそれは「奴」の体を抑え込む!!!

その姿が歪なものであると、阻止するよつに!!!

カルラの大剣で頭部を叩きつぶす!!!

そして「奴」を束縛していたエルルウのリングが爆発し、その体を吹き飛ばす!!!!!!

煙が晴れ、「奴」の姿が見える。

腕も足も頭もなく、ただの黒い塊になっている「奴」が、どうやっているのか声を発する。

「なかまに……頼るのは……弱者の証拠よ……昔からよく……言われるだろ？」

「それは違う!!!」

蒔風とハクオロが叫ぶ。

「私は決して一人ではここまで来れなかった。皆を先導し、時には私が導かれ、そうしてきたから私がいる!!!そうして歩んできたことは、決して弱いことじゃない!!!」

「いいか？弱いから仲間になる。確かにそれはあるだろう。否定はしねえ。だがな、仲間ができるってことは同時に守るもんが増えるってことだ！！仲間を守るのは強い奴だ！！だから仲間が多い奴ほど、強いんだよ！！仲間を作った瞬間に、そいつらを守る想いが、人を強くするんだ！！！」

「仲間が弱さの証拠なんて言ってる貴様に、この強さは得られない！！！！！！」

【UTAWARERUMONO】 - WORLD LINK - F
INAL ATTACK

オボロたちの武器が元に戻り、今度は蒔風の十五天帝が巨大化した。

「む、これは・・・」

「使え！！これが俺たちの、仲間を守り、また守られる・・・その誓いの力だ！！！！！！」

「いくぞ！！！！！！」

- - -
- - -
- - -

「オレの信念が揺らぐ、か。だがその時まで俺は貫くぜ？・・・その時がきたら、また見つけて、立て直すさ・・・」

「ん？どうした？蒔風」

「いや、なんでもない」

「兄者はもう封印されなくてもいいんだな！？」

「そうだな。「奴」に取り込まれたハクオロさんの半身は、完全に消滅した。こう考えると、「奴」が取り込んでくれてよかったかな」

「ああ、そうでもしなきゃ、「奴」は滅びないだろうしな」

「それに、その余波かもしれないが、ハクオロさんも完全ではなくなっているな」

「えっ！ハクオロさんが？」

「うん。能力や仮面なんかは変わらないけど、死なないということではなくなっただけだね」

「つまり・・・」

「つまり私も、君らのように寿命で普通に死ぬことになる。永遠の時は終わった」

「そ、それじゃ、ハクオロツ、さんはッ、うつつつ、グズッ」

「よかったですね」

「ああ、君のおかげだ、蒔風。お礼をしたいところなんだが・・・もう行くのだろう?」

「はい」

「マイカゼー」

「ん?なんだい?アルルウ」

「これ」

「これは・・・ふふ、ハチミツか。ありがとう」

「~~~~。」

「あら、アルルウにしてはすんなり別れられるのね」

「マイカゼーには、また会えると思う」

「~~~~~~~~?」

「わかった、今行くよ。ましろ」

そうして一組の、永遠を生きるであろう若い男女が走り出していった

t o b e c o n t i n u e d

うたわれるもの ～白き皇～（後書き）

アリス「今回どうしたんですか？更新遅れたじゃないですか」

蒔風「そうそう、どうしたん？」

学校が・・・早くて・・・睡眠時間に・・・

ア「あーなるほど」

蒔「確かに友人にも早いつて言われてたもんな。お前の更新」

なんかこう、毎日アクセス数みると、この人たちが読んでる！！
はやく書かなきゃ！！ってなって・・・

ア「そうして書くべき設定を忘れるんですね？分かります」

蒔「本末転倒じゃん。それならもっとしっかり書いて更新すれば？」

もうほとんど日課になっちゃって・・・

ア「今更変えられないと」

蒔「そういえば、最後にどう読むのかわからない漢字出てきたけど？」

漢字？

ア「太転依って何て読むんですか？」

ああ、教えないです

分かる人はわかるので

分からない人は興味があれば調べるでしょうし

そしてどんな世界か下調べができれば楽しめるじゃないですか

ア「丸投げ？」

蒔「丸投げだな」

うっさい

蒔「でもこんだけいろいろ行くと、この世界わかんないっていう読者もいるんじゃない？」

大丈夫なように一応説明は入れているんですが……

本当に興味がなければ、お勧めはできませんが、飛ばしてもいいよ
うな気がします

蒔「おい!!」

でもきつとこんな文章を読んでくれる人はやさしいはず!!

分からなければWi iとかで補完していただけるとありがたい!!

ア「うわさいってー」

蒔「そうやって丸投げすっから・・・」

すみません

ではお願いします

ア「次の世界で蒔風が会うのは退魔の霊能を持つ者!」

ではまた次回

あなたとひとつになるために 生まれてきました

どうも神社の裏手らしい

さて、ここから先はとんとん拍子だ

神社に出る

なんかあつたらしい

誰か二人が駆け出した

ゲート先の神社にいたなら主要人物？

追いかける

なにかを止めてる？

なにかがオレに気付く

追っかけてきた

こつこつ訳でオレはいま走ってます

「走んのは嫌いじゃないから構わないけどん！飽きた！時風は飽きたわ！」

止まろうと後ろに迫るなにかを見た

流れてきた情報によるとあれは太^た転^ゆ依^{たい}という、まあ妖怪^{たいてい}みたいなやつらしい

今オレを追っかけてるのは猿^{さる}みたいな太^た転^ゆ依^{たい}だ。
しかし色が黄色を基調になったカラフルなもんだ。

手に持っているバナナはさっきの二人がなんか言っていたが、どうやら盗んだものらしい。

あの二人は太^た転^ゆ依^{たい}の問題解決のコンビなのか？

《……せ〜ん》

「ん？」

《……みませ〜ん。すみませ〜ん！聞こえますか？》

「なんだなんだ!？」

《いまテレパシーで貴方に話し掛けています》

「ああ、なるほどね。さっきの人ね」

《はい》

「唐突な自己紹介タイム！オレ、蒔^ま風^{かぜ}舜^{しん}。Are You na
me」

《み、泉戸裕理みとゆりです》

「おお、それで泉戸青年。あいつ盗っ人なん？」

《え？は、はい》

「捕まえんの？」

《そうですが・・・あなたはそのまま走って来て下さい！決して手を出さないで下さい！》

「うーん。そう言われると手を出したくなるのが人の性」

《待って下さい！危険です！》

「大丈夫だ。手加減・・・」

《あれはそんなことしません！》

「いや、オレがする方」

《は？》

「早く来てね」

《待つ（プツン）》

ズシャ、ザザッ！

蒔風が止まり、太転依が突っ込んで来る。

「猿相手なら彼が一番かな？」

パン！

蒔風の手中で光が弾け、そこに鉄扇が握られる

「ハクオロさん、力借りますよつ。せいっ！」

パカァン！

蒔風がその鉄扇を開き、太転依の頭を面で叩く。

キキユ！？

太転依がちよつとした悲鳴を上げる。

「これは帰してもらいましょ」

鉄扇を纏め、手の甲に当てる

太転依はバナナを落とし、時風が拾う

キィ！キィ？キィキィキィ！

どうやらバナナを奪われたことに怒っているらしい。

「こらこら、もの盗っちゃだめでしょー？」

時風が優しく諫める。

しかし太転依は暴れ続ける

このままではいずれ周りに被害がでるだろう

「……………やめろ。傷つきたくはないだろ？」

ズアアッ

時風が、顕現させずに龍虎雀武、獅子天麟の気配を放つ。

そのすさまじい気当たりには、太転依は暴れるのをやめ、萎縮しておとなしくなった。

「よーしよしよし。おとなしくなったね」

時風が優しく猿を撫でる。

「あなた……今何をしたのですか??」

「んん?」

振り返ると、そこには時風が見かけた二人がいた。

「オレ? あー、睨みつけただけだよ」

「本当に……ですか?」

「その声は……泉戸裕理?」

「あ、はい。泉戸裕理です」

「ほう……ほうほうほうほう」

「な、なんですか?」

情報が来た。

「いいよ」

「ん。で、裕理の身が危ないから、オレが守りまっせ、ということ」

「さすが！裕理さんはやっぱりすごい人なんですね！」

「ははは、実感ないなあ」

今、泉戸裕理の家でもある神社に来ています。

そこで俺は事の顛末を話して、まあ何とか納得をしていただきました。

裕理の隣にいる女性は泉戸ましろ、という名前だそうだ。

なんでも、裕理とその友人たちが、多くの太転依を封じていた遺跡を壊してしまい、あふれてきてしまったそうだ。

そして、壊れた遺跡から、それらの太転依を封じていた、きくろみか綺久羅美守毘売みのひめという太転依が現れ、何とかしてほしいと言いつつ残したらしい。

そしてその綺久羅美守毘売の生まれ変わりとして誕生したのがましろさんだそうだ。

いまは裕理や、他の太転依とともに、人間と太転依の共存に向けて頑張ってるそうだ。

「と、なると・・・お応龍しゅうりゅうたちにも知らせたほうがいいですね」

「応龍？たち？」

「ましろの他にも、三強という大きな力をもつ太転依がいて、知り合いなんですよ」

「今から呼んでみましょうか・・・」

- - -
- - -
- - -
- - -

数分後、なんと五人もの人間が（うち二人は太転依らしい）集まった。

白いスーツ姿のホストのような風貌の応龍

小さな女の子の姿をした、着物姿のぬえ鶴

何だか大きめのひよ子？を頭の上に乗っけてるたかなし小鳥遊ゆみな

如何にもお嬢様みたいな雰囲気おの如月美冬

あとは元気っこっぱい河合アメリ

この五人である

「三強って聞いたんだけど、五人いるぜ？」

「ああ、三強名のは・・・」

「俺、応龍と」

「鵜であるわしと」

「ゆみなさんの頭の上に乗っている鳳凰です」

「あ、でも鳳凰さんは鳳と凰っていう二羽で一組なんです。で、ここに今いるのは鳳さんです」

「で、後のお三方は？」

「ゆみなは、お兄ちゃんの義妹です」

小鳥遊さんは一時期、泉戸家に預けられてたらしく、裕理の妹同然だそうだ。

「なるほど、身内ね」

「で、あたしはユウの幼馴染で、こいつの監視役」

河合さんは昔から裕理と知り合いだそうで、応龍とコンビ？みたい

なものらしい

「わたしは、鵜の保護者だ」

如月さんは鵜を預かっている、裕理の友人だそうだ。

「なるほどねー。なんだ、うまく共存できてんじゃないですか。ここにいるのは各種の太転依の長なんですよ？」

「でも、なかなかむずかしくて・・・」

「オレは綺久羅美の考えに完全に賛同したわけじゃねえからな」

「もう、ヨリトモ!！」

「ヨリトモ??？」

「応龍のあだ名だよ」

「はーん。で、さっき説明したとおり、身の回りにおかしなことが起きたら、自分でなんとかせずに、オレに連絡してくださいな」

「はん！てめえが俺たちより強いかどうかもわかんねえのに、そうですかと頼れるかよ」

「それに八衢やちまたはそう簡単に死ぬようなからだではないぞ？」

「八衢？なんだ？そりゃ」

「僕の持つ「退魔の霊能」の正体ですよ。僕には生まれつき、太転依などの力を撃ち消してしまう能力があるんです」

「まるまると付き合いたしてから、すごく強くなったんだよね？」

「そうそう。で、ましろを消してしまいそうになったり・・・」

「大丈夫なのかよ」

「今は平気です。僕自身の体をそういった神通力を扱える身体に変換して、コントロールできるようになりましたから」

「それじゃあ、つまり・・・」

「今僕は太転依と人間との中間の存在ですね。ましろもそんな感じですよ」

「まで。太転依は永遠といってもいい時間を生きるものだ。お前は不老不死なのか？」

蒔風が厳しい表情を浮かべる。

その視線に一瞬ひるむが、裕理は億さず話す

「いいえ。確かに不老ではありませんが、怪我などをすれば死ぬこともあります。不死ではないです」

「そっか・・・はあくあ。よかったよかった」

「よかった？」

「そ、よかった。死ぬことのないなんて言われてたら、おれ、どうしてたかわかりませんでしたよ」。ははは！！」

「でも、もう裕理さんに勝てるような存在は、いないといつてもいくらいに強いんですよ？」

「そんなにか……」

「で、だ。俺としちゃあ、てめえの力がどんくらいか計っておきたいんだよ」

「ほう……オレの力を測る……か。大きくでたな」

「ああん？」

「それじゃまるでオレが弱いみたいじゃない」

「……お前、どんくらい強いつもりだ？」

「世界最強」

「……いいぜえ。三強が、この応龍が相手してやるよ。綺久羅
美！結界張つとけ！！」

「もう！応龍！待ちなさい！！」

「いいですよ、ましろさん」

「時風さん……」

「舜でいいですよ。そっちは名前を呼ばせてくれてなのに、なんかねえ」

「舜さん、応龍は……とても強いですよ」

「へーきへーき。伊達に世界を救ってないから」

「早くこいやあー!!」

全員で神社の境内にでる。

ましろが結界を張り、神社を隔離する。

さらにその内部に、裕理が時風と応龍以外の皆を結界で包む。

準備は整った

「本気で来いよ……!!」

「こっちのセリフ、だ」

いまここに、時風VS応龍の戦いが始まる

t
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

タユタマ ｝走る、止める、戦つゝ（後書き）

大変だ！！うたわれるものの世界説明を忘れたよ！！

【うたわれるもの】

構成：” no Name ” 50%

” フォルス ” 30%

” LOND ” 20%

最主要人物：ハクオロ

- WORLD LINK - ｝ WEAPON ｝：全員の武器を巨大化させ、切りつける

- WORLD LINK - ｝ FINAL ATTACK ｝：十五天帝を巨大化させとどめ

アリス「前回あれだけ忘れないように言ってたのに……」

本当にすみません

あと十五天帝の組み合わせがわかりにくいと言われました

ア「複雑ですからね」

でも、そこを想像できるのが小説の楽しいところ！

ア「キタ丸投げ」

.....

ちなみにこのタユタマの世界は、ましろルート基盤ですが、いちおう他のルートも踏まえている、ということでお願ひします

ア「CLLANNADのアニメにみたいな？」

そうそう

ア「タユタマのアニメって言えばいいじゃないですか」

アニメ版見てない.....

原作はFDまでやったのに.....

ア「ファンに殺されるぞ」

新月の夜は気をつけます

それから、後書きの最後に入れる言葉が出てこない

ア「本当に殺されますよ？」

誰か教えてー！！

まあ、ではどうぞ

ア「勃発！蒔風対応龍！！やるのは蒔風かそれとも？」

ではまた次回

私はいつでも、どんな時でも、裕理さんの味方ですから

(とつくに) 一万アクセス突破記念 く「奴」の部屋く

「奴」

「よう……こんにちはだぜ」

盛り上げてくださいよ

「奴」

「断りたいな……といつかなんだこの部屋は」

いやあ、アクセス数を見てみたら、一万を六千も超えてたことに気づいてね

唐突に出してみました

「奴」

「もうそんななのか……で、なんで俺なんだ？あのクソ野郎とか管理者を出せばいいじゃないか」

こっちのほうがおもしろそうだった

「奴」

「きさま……早く続きを書けよ……」

じゃあ書いてよ

「奴」

「はあああ……いい加減にきなさいよ……!」

お、おう!?

「奴」

「オレの名前も出さないし、どういつわけ!？」

我慢しろ。

「奴」

「早く俺様の活躍を書けやあ!!!そいで主人公ぶちのめしてやっからよお!!!!!!」

勝てなくせに

「奴」

「おま……確かにそうかもしれねえけどよ、そこはちつとは応援しろや!」

うん、それ無理

「奴」

「……もういい……俺の知り合いよんでやる……」

いたの?

「奴」

「いるわ!!!(ブルルルル)あ、オレオレ。え?名前?今出せないんだよ。はあ!?!仕方ねえだろ!?!だまれやこの我様野郎!!!」

おい、までよ！！！切るな切るな！！！（ピッ）……………」

プフー！。知り合い？

「奴」

「だ・ま・れ・や。次行くぞ（プルルルル）おー、久しぶりだなー。うん、おれおれ。大体わかんべ？ん？ゼロ殺す？ああ、手伝ってやるかろこつち来いよ。うん、場所な…………頼むぜー（ピッ）」

今度はよべた？

「奴」

「今こつちに（ヒュルウウウウウウウ、ドオン！！）来たみたいだ」

誰呼んだんだよ！！！！

???

「来てやったぞお！！！」

「奴」

「おお、ベリアル。来たか」

なに呼んじゃってんの！！???

「奴」

「紹介しよう、こいつはウルトラマンベリアル。異世界の友人さ。こないだゼロとかいう生意気な野郎にやられたらしい」

ベリアル

「いらんことを言つな。で、俺様、来たはいいが何すればいいんだ」

「奴」

「ふははは、俺様の出ているこの小説がアクセス数が一万を超えてたらしくてな。そこで記念に俺様の部屋が開設されたのだ。お前は
そのゲストNO・1だ」

ベリアル

「一万だと？その程度で俺様を呼ぶな！！」

その程度って言わないで！！！！

それにこの小説読んでる人で彼のこと知ってる人が・・・

ベリアル

「いないとでも？俺様、あのウルトラ兄弟をバツバツとなぎ倒して言っただぜ？知らんという奴はブツ飛ばすぞお！！」

うわぁ、何て野郎だぁ！！！！

「奴」

「そついや、俺さんはウルトラ関連の世界には行くのか？」

さぁねえ

平成ライダーで手一杯かもねえ

ベリアル

「ウルトラまとめろや」

と言いましても・・・

「奴」

「俺ら二人を敵に回すつもりか？」

俺は作者だぞ！！！貴様らが勝てるはずなどないだろ！！！！

ベリアル

「俺様はこの作品のキャラじゃないぞ」

ここにいたらもう関係ないね

作者パンチ！！！！

「奴」

「ぶふ！！」

作者光線！！！！

ベリアル

「ぬああああ！！！！」

悪は滅びた・・・

ってわけでみなさん、なんだかんだでこの小説も多くの人に読んで

(とつくに) 一万アクセス突破記念 く「奴」の部屋 (後書き)

ベリアルさま呼びたかっただけかも・・・

なんかすみませんでした

タユタマ く寝床が！??

「」おらあ！」「

ドツガ！

すでにお互いが戦い始めて5分

見た感じでは互角の勝負である
しかし……

「はあ、はあ、はあ」

「ンッンッ」

応龍の息は切れており、蒔風は鼻歌を歌うだけの余裕がある

始まって二、三分はまだこうではなかった。

互いが互いの攻撃を打ち消しあい、見事な攻防をしていたのだ

応龍が飛び上がり、雷が唸り、輝きの中から巨大な龍が現れた

「それが真の姿か！さすがにでっかいねえ！」

「応龍！やりすぎです！」

「黙れ！綺久羅美！このまま嘗められてたまるかよ！オレは最強の太転依、応龍だぞ！！！」

「大丈夫だ。嘗めてなどいない。すごいと思うぞ。それだけの強さを安易に破壊なんかに使わない時点で、お前は十分に強さ手に入れている。だけどな」

「なんだ？言ってみろや！！！」

「・・・だけど残念。オレの方がもっとすごい！（ビシィ！）」

「ぬかせや餓鬼があ！」

轟っ

応龍がその体で時風を押しつぶさんと突っ込んでくる。

「やっぱり、空飛んでて鱗があつて、妖怪ならこの人でしょ」

シパン！

蒔風の手の中に笛が現れる

それを吹き、振るい、その身体を風が巻く！

「ぬぐ！？」

突進してきた応龍は、その風に阻まれてしまう

「変身中の攻撃は無効なんだぜ？・・・はあ！」

スパア！

そして手刀で風を断ち切り、姿を変えた蒔風が現れる！

「仮面ライダー威吹鬼」

「なんだそれは！？」

「気にすんなよ。はっ！（ドンドンドン！）」

「がっ！？・・・あん？なんだあ！そんな豆鉄砲でオレに勝てるっても・・・思ってたのかあ！」

バババババババババ！

その口から雷が吐き出される！

蒔風は地面を転がりながらも、その電撃をかわしていく。

「うわあ！くっそ、ぬわ！はっ！（ドンドンドン！）」

かわしながらも応龍にむかって打ちこんでいく

「効かねえってんだよ！」

「いっ！？あびびゴゴゴゴゴゴゴゴゴ！」

「命中！どおだあ！もう終わりか！」

その電撃から解放され、立ち上がって蒔風が息を吐く

「なんちゆう電力だよまったく・・・だがこっちだって、無駄にパカパカ撃ってたわけじゃあない！」

「ああ？」

「（カチリ）音撃射・疾風一閃！」

ププー、パーパラパララー、パラッパッパッパーー、プア
！！

「な、ぐがああああああああああ！？」あ！」

ドン！ドンドンドン！ドツガア！

応龍に撃ち込まれた鬼石が共鳴し、爆発する

その巨大な身体が大地に倒れふし、人の姿に戻る

『ヨリトモ』

「ちょっと待て。なんでここで叫ぶ名前がそっちなんだよ！」

「ツツコム余裕があるのかい。流石だな」

蒔風は感心しているが、実際応龍の体力は限界である。
立ち上がるのにも20秒程かった。

「もう終わりです。お腹減ったしご飯食べよーぜ」

「ここで折れたら、三強が泣くだろぅが・・・」

「だけど〜〜」

「（カツ）い今だ！」

「んあ？うをあ！」

バババババババババババババババババツ！

応龍が蒔風の懐に入り込み、掴みかかった腕から確実に意識を奪える程の電流を流し込む。

しかし・・・

「優しいな、あんた」

「な!？」

「ここで本気の、殺せる程の攻撃でなく、オレの意識を奪う程度の電流にしてくれている。けどな・・・」

「チイツ!」

「オレにや雷旺あるし、そもそも殺すくらいの電流じゃないと気絶しないぜ?」

578

ドッ

手刀を的確に応龍の後頭部にあて、意識を奪う。

倒れるその体を、蒔風が支える。

向こうから、ましるやアメリ、裕理らが駆け寄ってくる。

そこにはテント一式と、GOOD LUCK!と書かれた看板が立っていた。

「ウソダンドドゴーン!!--!」

「ま、時風?・・・」

「なんと言っているのですか?」

「あ、ああすまない。取り乱した。いや、なんか叫ばずには・・・ま、大丈夫でしょう!」

「空元気だよな?」

「・・・はい」

「時風さえよければ、家でねる?」

「そうですね!裕理さんを護るなら近い方が言いでしょうし!」

「(ズーン)ありがとうございます・・・」

そうして三人は家に戻り、裕理の父親に適当に説明し、時風は泊まらせてもらった。

タユタマ く寝床が!?? (後書き)

ウロウロウロウロ

アリス「どうしたんですか？」

忘れてる設定とかないかな？

ア「知りません」

そんなぁ・・・

みなさん!! わかんないことあったらドンドン聞いてくださいね!?

ア「この小説にそこまでの価値があるのか・・・」

なんであなたはそうやって自分の小説を卑下するんですか!?

もうちょっとくらいよいしょしてください!!

ア「だって私いないし」

それは仕方ないでしょ・・・

ア「ええ・・・もうそろそろ諦めています

終盤にあるという出番に期待しますよ」

そうしてください

ア「次回、「奴」が来ます」

簡単だな

ア「あなたが言わせるんでしょ」

俺はちゃんと

「泉戸家で目覚めた蒔風。この世界でついに「奴」が動き出すその手段とは？放て！WORLD LINK!!」

ッてやってるじゃん

ア「毎回同じですよね？大体」

.....

ではまた次回

ア「逃げんなあー！ー！！」

繋いだ手が離れずに祈る気持ちは いつか誰かに伝わって

タユタマ く願いの翼く

次の日、ましろたちが学校に行っている間、時風は掃除、洗濯と家事をこなしていた。

「泊めてもらってなんもしないのは嫌だからな」

そうやって午前前は瞬く間に過ぎていった。

裕理の父、裕導ゆどうはなにやら集会やらで今日は家にはいないらしい。

ちなみに裕理たちが出かけたあとに、なにか気付いていたのか、裕導に詰め寄られてすべてを話してしまっている。

しかも「そうかい」の一言で信じてくれているのだから、ただ者ではない。

蒔風が神社の境内を掃いていると、応龍がやってきた。

「お前、いちいちそんなところまでやんのか？」

「んん？」

蒔風はいま、境内に敷かれている石の隙間の小石をとっていた。

「暇なんだもん」

「だからってやるかよ」

「お前もアメリカさんちの池ん中に住んでんだろ？そんなくらいの掃除はするだろうよ」

「あんなもん仮住まいだ。いつか出てってやる」

「それでも今は住んでんだから、それくらいしなさい」

「つつせえよ。そんな話しにきたんじゃねえしよ」

「？」

「なあ、お前の言う「奴」ってのは、お前と同じくらい強いのか？」

「オレが最強だ。あんな奴たいしたことない・・・と言いたいが、「奴」とオレの力の総量は同じだし、正直各世界での協力がなけり

「や勝ち続けらんないと思う」

「じゃあ「奴」ってのがこの世界のなにかを利用することは……」

「まああるな。今までもあったし」

「じゃあよ、この世界で利用されんのは……」

「太転依たちか？ いやしかし裕理には退魔の霊能があるからいみないだろ？」

「あいつの心配なんかしちやいねえよ。オレは太転依が利用されな
いかが気になんだよ」

「さいですか」

「なんだ、その目は……ん？」

「どうした？」

「いや、なにか……」

「些細なことでも構わん。どうした？」

「太転依の……気とでもいうのか、なんか力が乱れてやがる」

「……確か太転依は命のエネルギーがそのまま形になった生命体
だったな」

「そんなもんだが……」

「行くぞ応龍」

「あ？」

「「奴」だ！動いてやがる。手伝え！出来んなら結界頼めるか！」

「オレはそういうチマチマしたの苦手なんだよ。あのチビなら得意だ」

「チビ？」

「鵜だよ」

「じゃあ呼び出してくれ！急ぐぞ！」

時風も力の乱れを感じ取り、その方向に走り出す。

応龍も、鵜とましろにテレパシーで連絡しながら時風を追う。

.....

.....

「集まれ〜集まれ〜オレのもとに〜。ちよいちよいちよいちよい
ちよい、いよう！」

「奴」が訳のわからない踊りを踊っている。

正直気持ち悪い

「さてと、そろそろ十分かな？」

「奴」の周りには一面に弱った太転依が多く倒れていた。

「エネルギーもたくさんもらえたし、こんだけやったらあいつも気
付くだろうし・・・ん？」

ブアアアアアア

空の色が変わり、「奴」の周辺一帯を結界が覆う

そこに時風と応龍が駆けてくる。

どうやらこの結果は、別のところから鵜が発動させたらしい。

「貴様、なにをしている？この太転依たちはなんだ！」

「応龍！蒔風さん！」

「あ、ましろさんに鵜・・・なんで裕理が来ている！危ないでしょ！」

そこに裕理がましろと鵜を連れてやってきた

「僕の事だ！！ましろや応龍、蒔風に任せて自分だけ安全圏にいるなんて、出来るか！」

それを見て、「奴」がぼやく

「愚かな主人公だな」

「なに？心掛けは立派だと思っが？」

「そもそも心配いらんないんじゃないか？そいつは死なないんだろ？じゃあいいじゃねえか。たくさんポコポコニさせてくれよ。」

「んなことさせるわけねえだろうよ」

「それにだ……そいつは皆死んでいく中で、どんどん先に行っちゃう。そいつは共に生きる友人を捨てたような奴なんだよ！そいうつくそ野郎がおれは嫌いだ。そうやってポイポイと自分の都合で周りを捨てるような最主要人物が嫌いなんだよ！！！」

「そんなもん、ただのお前の僻ひがみだろうが」

「うっせえ！！！」

ゴバツ！

「奴」の鉄拳が唸る

そこで応龍が間に入るが、いとも簡単に吹き飛ばされてしまう

「応龍！」

応龍は木の根もとにぐったりと座り込んでしまった。

「ふうう、やはり純粋な命のエネルギーたる太転依。素晴らしいな。あの三強の一角をいとも簡単に沈められるとは」

「あの子たちになにをしたんですか！」

「いやあ、エネルギーをギリギリまで吸わせていただきました。全部吸うと消滅しちゃうから、調節に厳しかったです」

「全部吸わないのはなんでだ？いや、やってくれという訳じゃないけどな」

「太転依の存在はこの世界の重要なピースだ。それが一斉に消えたら、世界構築の比率が変わっちゃうだろう？」

「でも、こいつら死にかけてる・・・お前はこの苦しみがわからないか？」

「どつせいつ殺せばオレの一部になるからな。前払いつてとこだよ」

「お前……その利子、高く付くぜ……」

「はん!!!!……らあ!」

「奴」が波動砲を撃つ。

それを蒔風が拳で弾き、絶光を撃つ

「奴」も魔導八天でガードして、そのうちの一本を裕理に向かって投げつける。

空気を切り裂いて飛んでいくそれを、蒔風が獅子を投げつけ弾いた。

それを「奴」が空中で拾い、返す手で波動砲を放つ。

蒔風が獄炎砲でそれを打ち消すが途端、波動砲が分散し、裕理に向かっていく。

「裕理!!!!!!」

「裕理さん!!!!!!」

「くっ!はああ!!!!!!」

咄嗟に裕理がガードするが、護りの結界は砕け、命中してしまう。

「裕理さん!」

「八衢!!!!!!」

「う、あ……はあはあ……大丈夫。これくらいならまだ治癒できるよ」

分散したことで、結界で一瞬止めたからか、致命傷には至らなかったようだ

しかし、裕理の中に疑問が残る

「でも……あいつ、太転依の力を利用しているのに、僕 능력じや消せないのか?」

それに「奴」が答える

「当たり前だ。オレのエネルギーと混ざり合ってたんだ。まあ多少は打ち消されちまうが、完全には消させねえ。前の世界じゃ混ざってミスったが、今回はそうはいかない、よっ!!」

ビュン!

「奴」が再び魔導八天を投げつける。

しかし今度は

その場にいる裕理、ましろ、鶴、応龍の四人同時にだ

「防げるか！？なあ！」

「クソ！開翼！」

蒔風が銀白の翼を拡げ、動き出す。

応龍、鶴に迫る剣、計四本を走り抜けざまに畳返して防ぎ、ましろに迫るのを蹴り飛ばす。

しかし「奴」のパワーが乗ったそれは、蹴りの反動で蒔風を吹き飛ばす。

吹き飛ばされた蒔風が大木にぶつかり、その木を薙ぎ倒す。

裕理に剣が迫るまで、あと0・76秒

蒔風はその翼を羽ばたかせ、飛び出していく。

「泉戸、裕理の……生きる覚悟を、そんな……クズみたいなもんと……一緒に、すんな……」

「蒔風！」

「こいつはな……たしかに、多くの人達と出会い、通り過ぎていって……しまうだろう。他の人を、置き去りにして……・しまうだろう」

「だが、こいつはそいつら、を……忘れない。これまでの時間を、今この……瞬間を、これから先の……新たな出会いと別れを！こいつは、忘れない……絶対に！こいつは愛する者のために、すべてを背負う覚悟を……したんだ！」

「自らの世界に見切りをつけて、自分で断ち切った貴様に、こいつを嗤う資格はない……」

「なん・・・だと？」

時風が立ちあがり、祈りのように謳う

-. -. -. -. 願いを -. -. -. -.

「??？」

-. -. 皆の願いを。我、銀白の翼人。司りしは人の願い。その想いを
我が糧に。その想いこそがすべての源!!!!!! -. -.

「これは・・・」

「輝ける希望を!!!!!!」

バサア!!!!!!

その背に再び翼が舞い、時風を光が包み込む!!!!!!

「皆の願いを!!!!!!」

ギユアアアアアアアア!!!!!!

……ツツパアアア!!!!!!

光がはじけ、蒔風の周りに粒子となってドーム状に覆う

そこに立つ蒔風は、すでにその身に傷はなく、完全に回復した姿があった

「バカな……あれだけの傷……どうやって……」

「皆の願いが……オレに力をくれる」

「な……」

「忘れたのか？俺は銀白の翼人。願いを司る翼。お前を倒してほしいと願う裕理たち、そしてその太転依たちの大きな願いが、この力の源だ」

「お……ま」

「まあ、使い方は基本的には全回復してくらいにしかまだ使えないが……」

「死ねえ!!!!!(バウツ!!!!)」

WORLD LINKが発動し、ましろの髪がすべて白く変わり、
巨大な槌が現れた。

そこに「奴」に奪われた太転依たちの力が流れ込む。

「す、凄い力です!!!!」

「こんなエネルギーを操ってたのかよ……」

「まだまだのはずだろ？」

そして次にましろ、応龍、鶴、上空を飛ぶ鳳凰、そしてここにはい
ないゆみな、アメリ、美冬までもの力が流れ込んでくる。

「どうだ？これが皆の力だ。人間も太転依もねえ、この世界を守る
意思是、変わらない!!!!」

【TAYUTAMA - Kiss on my Deity -
- WORLD LINK - FINAL ATTACK -】

「いつけえ!!!!裕理!!!お前の覚悟を、その願いを!!!!」

「この…想い!!!!皆の力に、皆と一緒に!!!!」

「叩きこんでやれ!!!!」

「“絶対”なんてない。ただ、“絶対”という名の覚悟があるだけさ」

「……貴様の“絶対”が……どこまで続くか……楽しみだな……」

「オレが勝つさ。いつまでもな」

シューウウウウウウウウウウウウウウウ

.....

「行くんですか？」

「おう。なんか最近あいつ気味悪い言葉残していくからさ」

「傷は大丈夫なのか？」

「へーきへーき。翼人をなめてはいけません」

「おい、蒔風……」

タユタマ 〽 願いの翼〽 (後書き)

タユタマ編、終了です!!

蒔風「いや、大変だったよ」

アリス「大怪我してましたからね」

【タユタマ - Kiss on my Deity -】

構成：” no Name ” 15%

” フォルス ” 80%

” LOND ” 5%

最主要人物：泉戸裕理

- WORLD LINK - 〽 WEAPON 〽 : ましろの大槌に皆の力を集める

- WORLD LINK - 〽 FINAL ATTACK 〽 : それを最大の威力で相手にぶちかます

さて、みなさんに最初に言っておきます。

次は龍騎の世界です。

ア「言っちゃうんですか？」

時風「説明しなきゃなんないことがあるからな」

はい

龍騎本編（TVシリーズ）で戦いが終わりましたね。

そのあとが少しオリジナル入ってます

私の考えでは

最後の願いで、願われたことは、「ライダーバトルがなかったことに」としております

ア「だから最後に皆が生きていたけど、神崎兄妹は出ていなかった」と

時風「神崎って誰？というのは次回でなるべく紹介していくからな！」

それと今回の新技を

時風はその世界の皆の願いのエネルギーをその翼で受け取り、己のエネルギーにできます。

これは翼人ならだれでもできることです

ア「まあ、翼人の数自体かなり少ないんですよ？」

なかには、勇気や、絆といったものをエネルギーにする者もいるとか」

蒔「そして、応龍、鳳凰だな？」

あの召喚は特別でして、蒔風の体力気力共に全快でないと使えません

ア「つまり十五天帝なんか出した後だと？」

使えません

蒔「パンチ一発でも？」

使えません

だから使いどころが難しいんですよ。

毎回毎回あんな願いを集めてもらえませんしね

ちなみに青龍たちの大まかな大きさは三〜四メートルくらいですが、この二匹はゆうに十二メートル程あります。

ア「でかいですねえ」

蒔「そろそろ予告でしょ？」

ア「では・・・嘗て戦い、勝利した男に出会う蒔風。しかし肝心の最重要人物がそのことを見な忘れていて!？」

ではまた次回

戦わなければ 生き残れない

龍騎　　く記憶のない戦いの記録く

オレが世界に降り立ってから、すでに二日が経過していた。

最主要人物の名は城戸真司

その名を調べてわかったが、どうやらOREジャーナルという出版社に勤めるジャーナリストのようだ。

更にわかったことは、かつてミラーワールドという鏡の中の世界で13人もの仮面ライダーが最後まで勝ち抜けば願いが叶うと、己の願いをかけてバトルロワイヤルを繰り返した。そして彼は仮面ライダー龍騎として戦った。

しかしそれを本人に尋ねたら

「かめんらいだー？ミラーワールド？なんですかそれ？あ、うちに投稿する方ですか！」

という反応だった。

彼が生きているならば、彼が優勝者じゃないのか？
なぜ忘れているのか

そういうわけで彼を尾行している

.....

おっと喫茶店に入ったようだ

喫茶店の名は花鶏^{あとり}。

小さいが雰囲気の良い店だ。

そこで城戸さんはコーヒーを頼むが、紅茶しかないと言われ、紅茶を頼む。

紅茶は苦手だがなにも頼まないのは不信に思われるのでオレも一応頼む。

城戸さんが紅茶を飲み終わり、喫茶店を出る。
オレも勘定を済ませ、店を出ようとする。

が、入れ代わりで入って来た男に肩を捕まれ、留められてしまう。

「おい貴様。何故城戸をつける」

「……ほお」

どうやらオレが城戸さんをつけていたのに気付いていたらしい。

この場ではなんなので、場所を公園に移す。

「で、なんでオレがあの人をつけてると？」

「一昨日と昨日、城戸を花鶏で見た時に、お前塀の外から中を窺ってただろ」

どうやらこの男、秋山蓮あきやまれんは花鶏に住み込みで、と言うより、居候しているついでに店を手伝っているらしい。

そりゃ気づかれるな。

にしても敵つい眼してんな

「あー、じゃあ城戸真司さんの知り合い？」

「ああ。ま、あつちは知らないが・・・」

「？まあいいや。なあ、仮面ライダー、もしくはミラーワールドという単語を知っている、かあ！？」

その質問にたいして、蓮がいきなり藪風につかみ掛かってきた。

「お前、どこでその言葉を知った」

「放して放して！！・・・ふう、知っているんですね？そのことを。では、城戸真司が仮面ライダー龍騎であることは？」

「！（カチャ）」

蓮が手の平に収まるくらいの黒い名刺入れのような物を取り出して構える。

「ん？ああ、それがライダーデッキか。あんたもライダー・・・
ふむ、ナイトか・・・」

「・・・・・・・・」

蓮が訝^{いぶか}しげな表情をしながらも説明した

13人のライダーバトル

多くの人間がその戦いで命を落とした。

ある者は愛するものを救うため。

ある者は邪魔者を消し、利益を得るため。

ある者は戦いを楽しむため。

ある者は自らの命を救うため。

ある者は戦いをやめさせるため。

ある者はゲーム感覚で。

ある者は英雄になるため。

ある者は復讐のため。

ある者は楽な生活のため。

ある者は満たされるため。

ある者は妹を救う男の指示で。

ある者は自らを確かな存在にするため。

ある者は人を守り、戦いを止めるため。

熾烈な戦い、苛酷な潰し合い。

様々な想いと力が入り乱れ、秋山蓮・仮面ライダーナイトはライダ

ーバトルに勝利した。

そして願った

「ライダーバトルがなかったことに」

・・・と

どうやら蓮の願いは昏睡状態の恋人を復活させることだったらしいが、その原因がライダーデッキなどを作り出した科学者の実験だったそうだ。

故に彼らはすべてを忘れて蘇った

いまは共に戦ったもの、潰しあった者のことを忘れ、生活している蓮だけは勝利者だったので、記憶もライダーデッキも持っている、というわけだ。

「そうか・・・ん？」

「・・・!」

時風と蓮が何かに気付いた。

癩かんだかい音が頭に響き、なんらかの脅威が迫っていることを知らせる。

「この音は……」

「ミラーワールドのモンスターが近くにいる証拠だ。しかし……ああ、ライダーデッキを触ったからか」

ライダーでない者も、ライダーデッキに触れることで、ミラーワールドのことを知覚できるようになるのだ

「らしいな。ってか、じゃあモンスターが！」

「（コクッ！）」

蓮が厳しい表情で頷く。

「方向は……こっちか！」

その方向は……

「城戸が向かった方向だ……（バツ）」

蓮と時風が走り出した

その気配の先に、戦いがあると知って。

t o b e c o n t i n u e d

龍騎　く記憶のない戦いの記録く（後書き）

前回も言った通り、このようになっていきます

アリス「ご都合主義ですね」

こうでも解釈しないと・・・

ア「まあ私としては文句はありません」

最近小説活動が楽しくなってきた

ア「やっつとですか!？」

早く世界を回り切り切りたいな

ア「当分先でしょう。めぐる世界は30以上はあるんですから」

それにめっちゃめっちゃ長くいる世界もあるしね

ア「そうなりますかね」

まだまだ旅は続きます

ア「次回、時風は城戸真司のもとに駆け付ける。そして・・・」

ではまた次回

人を守るためにライダーになったんだから、ライダーを守ったって
いい!!!

龍騎　く蘇る記憶く

「うわあああああああああー！」

城戸さんのものと思われる悲鳴が聞こえる。

ショーウィンドーのガラス

そこの前で異変は起こっていた。

そこに駆け付けると、いま正に蜘蛛の化け物・ディスプレイパイダーが城戸さんをガラスの中に引きずり込もうとしており、たどり着いた瞬間に城戸さんがガラスの中に消えてしまった。

ミラーワールドは鏡でなくても姿が映り込むなら構わないらしい

「今のが!？」

「ミラーモンスターだ(バツ!)」

キィィン、カシィン

蓮がガラスにライダーデッキを向け、ベルトが腰に現れる。
そして構えをとり

「変身！」

カシユツ、キイイイ・・・パリイ！

デッキをベルトに挿入し、仮面ライダーナイトに変身する。

「お前は？」

「多分行ける」

時風がミラーワールドに向かう意思を持ちながらガラスを触ると、指が入りこんだ

「（ライダーでなくても行けるとは・・・異世界の者というのは本当かもな）」

「どうした？」

「いや、行くぞ！」

バシユ、バシユン

鏡の中に二人が突撃する

そう思い目をつむるとそんな機械音が聞こえてきた。

目を開けると、目の前に今度は蝙蝠の化け物が現れた。

「なんなんだ！なんなんだよ！？」

しかしそいつはオレを庇うように飛び回る。

「城戸！大丈夫か！？」

後ろから二人の人影が走ってきた。

一人はこないだ来た人だ

だけでもう一人は変な格好していてわからない

「蒔風、城戸を連れ出してくれ」

「おうよ。城戸さん、こっちに」

なにがなんだかわからないうちに、さっき襲われた場所にまた鏡を通って戻って来る。

「大丈夫ですか？」

「はあ、はあ。なああなた。あれはなんなんだよ……教え……
つつう！」

「いませつめ……どうしましたか!？」

なんだ……頭が……痛い？

違う……オレはこの光景を知っている？

「が、あ……」

「城戸さん？城戸さん！」

うるさい

少し黙っててくれ……

デッキ……ライダー……戦い……止める……龍騎……蓮……

手の平に何かが現れる

「それは……ライダーデッキ!？」

隣の……時風が驚きの声をあげている

ああ、わかったよ……

そういうことか……

S I D E o u t

城戸さんが立ち上がる

デッキをガラスに向け、構え

「変身！」

ベルトに挿入し変身した

仮面ライダー 龍騎

人を守ると願ったライダーが！！

そして龍騎はガラスに向かう

戦いの場に

友のもとへ

の剣、ウィングランサーを手渡してくる

それをも使い、二刀で受けていくが、間に合わない！

このままではやられる！

- Trick Vent -

トリックベントで分身を三人作り出し、そいつらに任せ猛攻から抜け出す。

しかし分身はいとも簡単に掻き消され、再びモンスターが迫る

これしかないな・・・

フォン

デッキからカードを取り出し、ダークバイザーに挿入する

- Final Vent -

「ふっ、はあっ！...」

一気に飛び上がり、剣を真下に、脚に添えるように構えモンスター

に向ける。

そして契約モンスター、ダークウィングがマントと化して背中に付く。

そして身体をドリルのように覆い、敵を貫かんとする。

飛翔斬

いままでもこの技で多くのモンスターを、敵を貫き撃破してきた。

しかし

ギシャアアアアアア!

プシアアアアアアアアア!

デイスパイダーが糸を吐くいてくる

その程度の糸、飛翔斬の回転の前には無力だ。当たったところで散らして終わりだ。

しかしこのモンスターはやはり、普通のものとは違った。

真正面ならばナイトに効果などなかっただろう。

しかし糸は、真正面を逸れ、側面に当たる

糸を弾き飛ばせず、自分から糸を巻き取ってしまい、大地に墜ちる。

「な・・・グアア！・・・ツガ！こいつ、本当にただのモンスターか!?」

普通のモンスターならばこんな戦法をとることなどない。しかし、そんなことは些細な問題であった

いま正に蓮は死を覚悟した

しかしその瞬間

- Strike Vent -

ドゴアアアア!

炎の塊がナイトに迫るディスプレイを弾きとばす。

蓮は首を回し、炎の来た方向を見た。

そこには、赤き龍がたたずんでいた。

そしてそれとともに幾度となく見てきた、あのライダーが歩いてくる。

秋山連が、唯一友と呼べる男が！！！！

「り、龍騎？……城戸お！！」

コクリ

龍騎は言葉を発さずに頷くと、カードを取り出し、左腕の召喚機・ドラグバイザーに入れ、スライドさせる。

- Final Vent -

龍騎が構え、腰を落とす。

ドラグレッダーが龍騎を囲むようにまた、力を溜める。

「ふっ、おおおおおおおお！！」

そして高くジャンプし、ドラグレッダーもそれに合わせ、回りながら上昇する

頂点に達し、龍騎が蹴りの体勢をとり、ドラグレッダーはその龍騎に炎を吐きつける！

龍騎が烈火に包まれ、眼前の敵に迫る！！

モンスターが糸を吐きかけるが、すべて炎に焼き尽くされる

更に八本の脚で防ごうとするが時風が放った紅い光球が飛んできて、その脚を粉碎する

そしてファイナルベント・ドラゴンライダーキックが炸裂し、デイスパイダーを爆発と共に消し去った

- - - - -

戦いが終わり、ミラーワールドから出てきた三人。

「城戸……お前……」

「蓮。オレ、全部思い出したよ」

「何故だ……何故記憶が戻った？」

「世界が必要だと判断したんだろう」

「世界が？」

「「奴」という存在に立ち向かうために、失われた力と記憶を戻したんだろ」

「うん、そうみたいなんだ。時風のことは記憶が戻った時に知った・
・にしても蓮」

「なんだ」

「あんな風にライダーバトルを終わらせるなんて、オレは思い付かなかった。ありがとうな。おかげでオレも・・・」

「ふん、オレは恵理が一番喜ぶ結末にしたただけだ。お前らのことは、
ついだ」

「フフツ、そうかよ」

「で、早速だが・・・」

「あ、待つてくれ時風。どうやらもう一人記憶と力が戻った人がいるみたいなんだ」

「なんとまあ。誰ですかい？」

「城戸・・・まさか・・・」

「ああ。多分蓮が思い出してる人と一緒だと思う」

「その人は？」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

龍騎　↳蘇る記憶↳（後書き）

さて、ここで龍騎系のライダーの説明をしましょう

彼らはカードを使って戦うライダーです。

カードをそれぞれのライダーの持つバイザーにベントインして読み込ませ、その能力を発動させます。

アリス「アドベントとか、ソードベントとかありましたね」

アドベントは契約モンスターを召喚するカードで、ソードベントはまんまソードを装備するカードです

ア「ちなみに契約モンスターとは・・・各ライダーは何らかのモンスターと契約して力を得ており、そのモンスターはまちまちです」

龍騎ならドラグレッダー、ナイトならダークウィングですね

ア「あと、トリックベントはナイトだけのカードで、分身を作り出します」

ストライクベントは手甲状の武器を装備するもので、龍騎の場合は火炎を相手にぶつけます。

ア「このくらいですか？」

そうですね

ア「こっからハツチャケていきますよ!!!!」

ウエーイー!!!

ア「次回!!!最初の荒れくれライダーが動き出す!!!!」

いきなり切られたヤツホイ!!!!

で〜はま〜たじ〜かい〜

戦え!!それがライダーとなった者の宿命だ!!

龍騎 く復活の狂戦士く

「北岡法律事務所」

有罪を無罪にする男と言われる弁護士、北岡秀一の自宅兼事務所である

大きな窓ガラスを背に、デスクに座るスーツ姿の一見すると気さくで社交的な男、北岡秀一が口を開いた。

「で、また戦うっての?」

事務所を訪れた時風、城戸、蓮の三人に、北岡は渋い顔をして言った

「まったく、思い出さなくてもいい面を思い出しちゃってうんざりしてるのに、しかも世界の崩壊?勘弁してよ。ね、ゴローちゃん」

北岡が傍らに立つ、秘書である由良吾郎に話し掛ける。

彼もどうやら関係者として、記憶が戻っているらしい

北岡秀一

かつて仮面ライダーゾルダとして、不治の病に侵された自分のために永遠の命を望み戦った男である。

ライダーバトルがなかったことになり、その病も残るかと思われたが、どうやらそれすらも無くなってるらしい

「ま、あいつも刑務所にいないみたいだし、そんなもんでしょ」とは北岡の談

そして由良吾郎

北岡秀一の秘書兼ボディガードを勤める。

かつて北岡に裁判で救われたことから、先生と呼び慕い、ライダーバトルでは北岡の私生活のサポートをした

「ま、たしかにお前には、結果的とは言え病気の件で借りがあるわけだし・・・それに世界が壊れちゃ人生楽しめないしね」

「それはなによりだ」

「ところで・・・そっちが時風舜かい？ヒョロツちいねえ、ホントに戦えんのかい？」

確かに時風は少しばかり細身である。

しかも着痩せするタイプで、初対面ではそこまで強くは見えない。

「大丈夫だ。奴の實力は本物だ」

珍しいことに蓮が他人を高めに評価するならば大丈夫だろうと北岡も納得した。

「で？城戸が狙われるんだって？なんでまたこんなやつが……」

「なんだよ……悪いかよ」

「いや、ある意味適任かもな」

「ま、確かに。厄介ごとを背負い込むって意味ならこれ以上の適任はいないな」

「チエツ、やつぱこんなんかよ……お前らやつぱ嫌いだよ！」

久しぶりに話すので話題は尽きない。

が、そこにあの耳鳴りに近い音が響く。

そして部屋に立てかけてあったガラスから、モンスターのものと思われる溶解液が吐き出された

それは北岡の座っていた椅子に向かい、北岡はとっさにかわした。

モンスターの気配を追い、ミラーワールド内の廃工場にたどり着いた
そこには人影がユラユラと立っていて、こちらを見据えていた。

その顔は仮面で覆われ、表情は確認できないが、その視線には確実に殺気が含まれていた。

そしてその姿が明らかになると三人は驚愕した

「「「!!!!!!」」」

「?どうしたんだ?あれは・・・ライダーか?」

そう、ライダーだ。

紫を基本としたカラーで、契約モンスターの形状であるコブラを模したライダーがそこにいた

何人ものライダーを葬った男が、そこにいた。

「王蛇……だと？」

「貴様、まさか……」

「浅倉あー!!」

「はああああ……北岡あ、てめえとの決着をつけてやる……」

あさくだけし
浅倉威

かつて仮面ライダー王蛇として戦った男。

しかし願いなどなく、ただ戦いを楽しむために戦った、戦闘狂。

その凶暴性は留まることを知らず、放火、殺人、強盗と、その犯罪歴を挙げればきりが無い。

家族すらも自ら放った炎で殺している。

しかもその理由が「イライラしていたから」といい、蓮や北岡に「人間じゃない」いわしめた男。

その罪は北岡すらも無罪に出来なかった。

浅倉はそのことで北岡に逆恨みをしており、それ以来ライダーということもあり、執念深く襲ってきた。

「なぜだ……何故浅倉にライダーの力と記憶が戻っている!？」

「はっ、わけのわからん奴がイラつきを消す方法があるのかなんとか言ってるな……。だがそんなことはどうでもいい！北岡と……。あと戦いをなくしやがった秋山とか言う貴様をぶっ殺す……。戦え。……戦え！！」

- S w o r d V e n t -

王蛇が杖状の召喚機、ベノバイザーにカードをベントインし、コブラ型の契約モンスター・ベノスネーカーの尾を模した黄金の突撃剣・ベノサーベルを振り回し走ってくる

「おらぁ！！！！」

「クソっ！！」

「チッ！！」

- S w o r d V e n t -

- S h o o t V e n t -

ナイトがソードベントで剣を、ゾルダがシュートベントでキャノンを取り出し、応戦する。

「くっ!!連!!北岡!!」

「城戸さん!!俺たちも……」

「お前らはこっちだ……」

カッン、カッン、カッン……

黒い影が現れた。

そのシルエットは龍騎と全くと言っていいほど同じものだった。

しかし、そのボディは黒く、龍騎とはまったく違っていた。

「お前は……龍騎!!??」

「いや、違う……その姿……リュウガか!!!!」

「リュウガ?」

「そうだ！！先のライダーバトルで、貴様らと遭遇することのなかったライダー。それをこの俺が世界の記憶を読み出し、このデッキを復活させた！！！」

- Advent -

「奴」が、リュウガがアドベントで黒龍・ドラブラッガーを召喚する。

- Advent -

龍騎も同じようにドラグレッダーを呼ぶ。

龍と龍とがぶつかり合い、グルグルと回りながら応戦する。

- Strike Vent -

- Strike Vent -

「こつちも行くぞあ！！！」

「はあ！！」

「ちい、獄炎砲！！！」

龍騎とリュウガのストライクベントにより、業火が繰り出され、時風の獄炎砲が龍騎を後押しする。

しかし……

「このオレが！！基本スペックは龍騎を上回ったりリュウガに変身し！！放ったこの技！！その程度で崩されッかアアア！！！」

「うああああッ！！！」

二人の炎が徐々に押し戻され、ついにリュウガのストライクベントをくらってしまう。

ナイトとゾルダも、ただえさえ浅倉の驚異的な戦闘能力と身体能力で性能が上がっており、さらに「奴」によって底上げされている王蛇に非常に苦戦していた。

「はあ、はあ……」

「ふう、ふう………ッ！」

- Final Vent -

ゾルダがファイナルベントを発動させる。

エンドオブワールド

契約モンスター・マグナギガの全身から放たれるミサイルやレーザーによって敵を一掃するものだ。

その爆発は、まさに世界の終わりといわれる程で、一面を一気に爆発で巻き込むのである。

それを王蛇に放った。

ゾルダもナイトもこれで終わったと確信した。

確かに終わっていたかもしれない

王蛇の性能が「奴」によって上げられてなければ

- Final Vent -

王蛇がファイナルベントを発動

空中からベノスネーカーの毒液の勢いを乗せて放つ必殺の連続蹴り・
ベノクラッシュを放つ
バタ足のように脚を振るい、その連続りで多くのライダーの命を奪
った。

そして王蛇は・・・浅倉は信じられないことをした

マグナギガの放つミサイルを、その蹴りですべてはじき返したのだ
！！！！

「なっ！？ぐあああああああ！！！！！！！！！！」
「うぐあああああああああ！！！！！！！！！！」

二人の体が宙を舞い、数十メートルまで吹き飛ばされる

マグナギガの放つミサイルは総数は三十近い。
それをすべて蹴り返すほどの性能もパワーも、たとえ王蛇でも持つ
てなかった。

恐るべきは「奴」による強化か
本来覆されくことのないものを、覆してしまったのだから

「蓮!!!!北岡!!!!」

「今助けに・・・なに、動けな・・・」

二人が王蛇によって吹き飛ばされるのを見て、助けに行こうとする
が、その場から動けない。

足元を見るとリュウガの炎が固まり、蒔風と龍騎の足を固めていた。

- Final Vent -

「まずい！！！！」

「くそっ！！外れるおおおお！！！！！」

リュウガの身体が宙に浮き、飛び蹴りの体勢をとる。

そして後ろからドラブラツガーが炎を吐き出し、急突進してくる！！！！

「おおおお！！！！！」

バギン！！！！

時風が力任せにその拘束を解く。
そして「火」で龍騎の拘束も砕く。

だが間に合わない、リュウガはすでにその眼前に迫っており……

ゴオ！！ドツがあああ！！！！！！！！！！

時風と龍騎が吹き飛ばされ、爆炎に覆われる。

「やったか？……」

煙が晴れると、そこには四人の姿はなかった。

「逃げられたか……」

「おい……あいつら逃げたぞ……このイライラをどうしてくれる!!!戦ってないと……ドンドンイライラしてくんだよ!!!」

「次で終わるさ。あいつらも無傷じゃない。むしろかなりの怪我をしたらろつ。次で……終わらせる」

「すぐに追って……そして、祭りを始めようぜ!!!いま、お前と始めてもいいんだぞ……」

「待てよ。オレが世界を再構築できれば、ずっと戦いの続く世界にもできる」

「わすれるな……」

「ふふふ、さて。奴らはどこに逃げたのか……ひっひっひっひひ、くくく、かかかかかか!!!」

二人のライダーも、廃工場から消える。
狙った獲物を追い続ける……

ピシユン！！！

「グツ」「おおあ！！」「っあ」「ぬうっ」

四人が鏡から転がって出てきた。

彼らは爆煙に隠れ、身体を引きずるようにして、ここ喫茶店・花鶏に逃げてきた。

「くそっ。王蛇のスペックが前回と違いすぎる！！」

「奴」によってデッキが復活させられたから、底上げされたんだろう・・・にしてもあのリュウガは反則だろ・・・」

「あんなライダーもいたなんて、知らなかった」

「俺たちの知らないライダーもいたんだろうが、あの黒いのは情報すらなかったぞ・・・」

「それよりどうすんのよ。勝ち目なんてあるの？」

「とりあえず俺は「奴」とぶつからないとなりません」

「王蛇は……」

「俺と北岡、城戸でやる。いけるか？」

「オレに指図しないでちょうだい。でも、浅倉とは決着付けたかったし、いいよ」

「でも、どうやって勝つんだよ！」

「俺はまだ切札を使ってない。勝機はまだある」

「じゃあ、オレが「奴」を相手してるあいだに三人が王蛇を……」

「ああ」

「ふ。まあ、俺一人でもいいくらいだ」

「なに言ってるのよ。オレが決着付けるんだから」

「とりあえず怪我を治さないと」

「ここは浅倉も知らないから、しばらくは大丈夫だ」

「当然「奴」も知らないはずだから、ここで傷をいやしてから……
だな」

「あ、ゴローちゃんに来るように言わなきゃ」

北岡の事務所は浅倉に知られている。

北岡は吾朗を呼び出すために、携帯を取り出した。

城戸は蓮に包帯を巻き、蓮と時風は対策を講じる。

しかしいずれここも「奴」にばれる

刹那の休息

どこまで回復できるのか……

t o b e c o n t i n u e d

龍騎　く復活の狂戦士く（後書き）

ふう、最近暑かったり寒かったりで大変ですね

アリス「そうですね。でも最近は暑くなってきて夏って気がしますね」

夏といえば祭りだ！！コミケー！！

・祭りの場所は・・・どこかあ？・

ア「今何か聞こえましたよ!？」

気のせいさ

ア「なんかここ怖くなってきてる・・・いつの間にか壁に得体の知れないものかかっていますし」

ああ、あれ？あれはある筋肉自慢からもらったバーベルで叩きつぶした壁だよ？

ア「形がぐしゃぐしゃで逆にインテリアかと思いましたよ!！」

逆に、ってことは普通にひどいってことだよな

ア「・・・はい」

あそこは後で直すからいいの

ではどうぞ

ア「ついに見つかる時風たち、そして戦い。今回のWORLD
INKは？」

ではまた次回

そこに正義などない。あつたのは、ただ純粹な願いである

龍騎 く願いのカードく

あれから四日

蒔風たちは今も花鶏に隠れている。

もちろん食材などの買い出しには行くが、最新の注意を払っている。

この店のオーナーはちょうど四日前、蒔風たちが敗北したあたりでアマゾンに旅行に出たそうだ

今のところ、「奴」や浅倉の姿を確認はしてないし、されてもいない。

「ふう、大体の怪我は治ったな」

「しかしどうする。いつまでもここに隠れてることはできないぞ」

「こっちから打って出るか？」

「あっちがどこにいるのかわからないのに？」

.....イン.....

『!!--!!--!!--』

何かが聞こえた

あの響くように高い耳鳴りのような音が

キィィーンキィィーンキィィーン.....

「せーつと、見つけた.....」

「来たかい。ならやろうか……」

「さあ！祭を始めようか！」

「手筈通りに。オレが「奴」を」

「オレたちは浅倉をやる」

「では……行くぞ！雷旺掌！！」

頭上に大量の雷旺が集まり、それがリュウガと王蛇に向かって落ちる。

一瞬、二人の動きが止まる程度の攻撃だが、その間にそれぞれの相手に向かっていくことができた。

「三人掛かりか……いいぜ、楽しめそうだ！だが……」

「城戸！」

「気に食わんがこうしないとライダーの力も記憶も無くなっちまうからな……貴様は邪魔だあ！！」

- S w o r d V e n t -

ガッ、ゴガッ！

ガシッ、ブンッ！

「う、ぐあ！うわあ！？」

王蛇が龍騎に切り掛かり、その身体を掴み、蒔風の方に投げつける。

「城戸さん！」

「これでちょうどいいな。ふはあああああ……」

リュウガの装甲や仮面の隙間から黒い影が湧き出てきて、すっぽりとおおい、ベルトとバイザーを装着した「奴」と姿を変えた。

「やはりこの方が出力はあがるな」

「くっ、やっぱりこうなのか・・・城戸さん、二人でやりましょう」

「でも浅倉は！」

「二人が負けると？」

「・・・・・・・・殺しても死なないかもしれない」

「ですよー」

こうして戦いが始まった

S I D E 王蛇VSナイト&ゾルダ

- S w o r d V e n t -

- S w o r d V e n t -

- S h o o t V e n t -

ナイトと王蛇が剣を構え、ゾルダが細長いキャノンを構える。

しかし、やはり王蛇のパワーは凄まじかった。

ゾルダがキャノンを撃ち、その直後にナイトが飛び掛かる。

それに対し王蛇はゾルダのキャノンをナイトに打ち返し、ナイトを打ち落とす。

更に撃ってくるゾルダにアドベントでサイ型のモンスター、メタルギラスを召喚し、ゾルダを吹き飛ばす。

「ぐあつ！！ば、バカな・・・それは他のライダーの・・・ガイのモンスターのはずだ！！！！」

「そんなこと知らねえよ・・・とにかく戦ええ！！」

王蛇が自らのモンスター以外のメタルギラスを操れるのは、以前のバトルで仮面ライダーガイを倒したわけだからなのだが、もちろん今はガイに変身していた者は生きている。

しかしこの王蛇のデッキは「奴」が記憶がら作り出したもの。ゆえに、浅倉が王蛇の力として覚えているそのままが出て来るのだ。

「ぐ・・・う、ああ・・・」

「秋山！！大丈夫か！？」

「・・・ああ・・・いくぞ・・・」

フォン、パアン！！

ナイトが一枚のカードを取り出し、ダークバイザーが砕けるように弾けると、ダークバイザーツバイへと形を変えた。

そしてそこにカードをベントインする。

- SURVIVE -

そしてナイトが風に包まれ、その姿を現すと、ナイトはナイトサバ
イブへと強化変身した。

- N a s t y V e n t -

ナイトがナスティイベントを発動し、ダークウイングが姿を変えた
ダークレイダーが飛来し、高周波をまき散らしメタルギラスを退か
せる。

「大丈夫か？」

「それ、こつちが聞いたんだけど、ねっ！！」

ドウン、ドウン……！！

王蛇に向かってキャノンを発射する。

王蛇はそんなことは気にしないとお構いなしに、ガードをベントインする。

- Final Vent -

王蛇の腕にメタルゲラスの頭部を模したメタルホーンを変えにつき出したまま、メタルギラスの肩に足をのせ相手に向かって突き出すように立つ。

そしてメタルギラスが猛スピードで突進し、相手を貫く、ヘビープレッシャーがナイトに迫る。

- F i n a l V e n t -

ナイトもファイナルベントを発動させる。

ダークレイダーがバイクに変形し、そのまま、風をまとって相手に突っ込む。

両者が正面からぶつかりあった。

爆発が起き、反対側にナイトがダークレイダーに乗り駆け抜ける。
王蛇の姿はない。

しかし

- F i n a l V e n t -

「なにっ?!?!??」

どちらもファイナルベントだった。
しかし、本来ならばサバイブで強化変身したナイトの方が上回って
いたはずなのだ。

そう、本来ならば。

今の王蛇は、サバイブの強化変身すらも凌駕する!!!

エイ型のモンスター、エビルダイバーを召喚していたのか、それに
乗り、ふたたび突貫してくる!!!

そして王蛇のハイドベノンがナイトに炸裂する!!!

タッチの差でゾルダがとっさにナイトに向かって砲撃し、ナイトの
体がズレる。

「ぬあああああああ！……！！！」

ナイトの身体が砲撃の衝撃でずれ、王蛇の直撃は免れたが、それでも十分な威力を誇り、サバイブが解け、通常のナイトに戻ってしま

「は、もっと楽しもあか……！！！」

王蛇が一枚のカードを掲げる。

「な、そのカードは……！！！」

「隙だらけなんだよ……おかげで最高に楽しくなりそうだ……！！！」

ナイトのサバイブが解けたのは、ファイナルベントを立て続けに食らってしまっただけではない。

王蛇はハイドベノンの瞬間に、ナイトのダークバイザーツバイを破壊し、サバイブ・疾風・のカードをかつぱらっていた。

そして最悪の事態になってしまった。

- SURVIVE -

王蛇がカードを使う。

その身を風が覆い、サバイブに強化変身する。

その肩周りからは牙が生え、胸元は大きく前に膨れ上がり、左腕がコブラの首の形の手甲とほぼ一体化したバイザーとなっていた。

そこに蒔風が風林火山で霧を吹き飛ばしながら突っ込んできた。

「一気に視界が良くなったね!!!」

「ぬかせや、切り刻むぞ!!! 風林火山!!!!!!」

ギギイン!!!!!!

「奴」をはじき、離れたところで

「鎌鼬切演武、単!!! 撃!!!!!! 剛!!!!!!」

ゴッ、バキヤキヤキヤ!!!!!!

蒔風が、一切の切れ味を捨てた打撃のみの単撃切演武、「剛」を放つ。

その攻撃に「奴」は吹き飛ばされ、大地を滑っていく。

「ぐっ……っはぁ……!! いくい、一撃。だが、今の俺には効かないよん……!!」

「終わりなんて言っていないぜ? ……鎌鼬切演武、四季早々、春・花吹雪」

ブズア……!!

「奴」を斬撃が覆い切り刻んでいく。

「さらに……土惺竜……!!」

ゴバツ……!!

竜の形をとった大地が、花吹雪の終わったばかりの「奴」に向かい突っ込んでいく……!!

「はっはあ！！！」

- Advent -

ドラブラッガーが現れ、土惺竜を阻止する。

「土惺竜を阻止するとか本来ならあり得ないだろ……」

「それが俺様クオリティーさ」

「じゃあ、その品質……確かめようか！！！」

蒔風が「奴」に向かう

さらに龍騎が蒔風の後ろから駆け寄る。

ブンッ！！！！

蒔風と「奴」の拳がクロスし、お互いに反対の手で受け止める。

そして同時に離し、凄まじい早さでの攻防が始まった。

時風が突き、受け、突き、蹴り、殴り、掴み、投げ返され、体をひねり、着地し、関節を決めようとし、外され、蹴られ、身を返し、体制を即座に取り直し、殴り殴り殴る！！！！！！

「おおおお！！！！みつほろほし三滅星！！！！」

ダゴンダゴンダゴン！！！！！！

時風の渾身のパンチ、打滅星を三連続で放つ。

それに「奴」はよろめき、時風が背後にまわり「奴」をがんじがらめにする。

- Strike Vent -

炎の中にいる時風に龍騎が訪ねる

「はあ、はあ、はあ……時風!!!!大丈夫か!!!!」

「うつく……大丈夫さね……それより、「奴」はどこに……
・最後の火球まで確実に食らってるはず……」

龍騎が時風に駆け寄る。

最後の火球の衝撃で、「奴」を離してしまったらしい。

時風自身も、強がっているが、実際には結構ボロボロだったりする。実は時風は先日のリュウガの攻撃の傷がまだ完全に癒えていなかった。

龍騎をかばい、かなりのダメージを負ったのだから、当然と言えば当然だった。

キョロキョロと見回しながら「奴」を探す時風と龍騎。

「どっどこにいる……!!出で来い……!!」

「ふうふう……おいどこだぁ……!!」

そして蒔風の背後から声が聞こえ、その背中にコッソソと何かがあてられる

「じゅー」

- Strike Vent -

「あ……」

ドゴオアアアアアアアア!!……!!

蒔風の背中から超至近距離でストライクベントが放たれる。

蒔風の体が漆黒の炎に包まれ、肉の焼けるにおいがしてきた。

「燃えろよ燃えろ……よ……蒔風この野郎……」

のもとへ歩く。

「奴」が龍騎に言う

「戦いを止めるためと戦ったようだが……残念だなあ。そうやっていつもいつも最^{しゅじゅ}主要人物の願^{たい}いばかりピックアップされて他の奴の願^{たい}いなんか間違^{まちが}ってることにされる。酷いよな。他の奴らの願^{たい}いだって間違^{まちが}ってるわけじゃないのにさ。だからお前^{まへ}ら嫌^{きら}いなんだよ。如何にも正しいみたいにしてよお!!!!!!!!!!!!!!」

「奴」が龍騎に最後の一撃をかまそうとした時

「バカ言ってるじゃねえぞあ!!!!!!!!!!!!!!」

燃え盛る炎を消し飛ばし、龍騎に馬乗り状態の「奴」に時風がドロップキックをぶちかました。

- F i n a l V e n t -

隙をみてゾルダが王蛇と「奴」にファイナルベントを放つ。

しかし、二人にはもはや効かず、爆発の後に何事もなかったように二人が立っていた。

「つてえな。なんだよおめー。邪魔すんなよなー。いーかげん死ぬよー」

「奴」が時風に蹴られた部位をさすりながら言う

「ガブツ、うぐ、バハアツ！（ボダボダボダ）てめえ、城戸さんが
どんだけ悩んだのか知らねえだろ……。人の願いなんざなあ、全
部叶うわけ……。ねえだろうが！！……。それでも人を
守るといふ……。その、願いのために……。戦いを止める
ことは、間違つて……。ない！！！」

全身焼けていて血をダボダボとはき出し、言葉を発する度にゼヒユ
ーゼヒユーといやな呼吸音がのどからしてきていたが、フラフラに
なりながらも時風は叫び続けた

「自分の願いをかなえるために、誰かの願いを犠牲にする……。
そうしないと叶わない願い……。確かにそうだった……。この
ライダーバトルは、ゲヒツ！！ヒューヒュー……。確かに
そうだ！！！！そんな他人を蹴落として手に入れる……。幸福

は・・・間違っている！！！！」

「だがそいつらは自らの願いのために他人を・・・」

「ああそうだ。でもな・・・願いつてな、そうしてでも叶えたいものなんだよ・・・そうでもしないと叶わないんだよ！！！！だから人は日々戦っているんだ・・・決してかなわない願いに向かって走ってたんだよ！！！！」

「では貴様は・・・ライダーバトルを肯定するのか？」

「違う！！確かに願いをかなえようとすることは・・・戦いだ。しかし、本来ならそこから這い上がっ・・・ツゴ、があ・・・・這いあがってもう一度足掻くチャンスがなければならぬ！！！！ライダーバトルは命を奪い、そのチャンスすらをも殺す！！！！故に間違っている！！！！だから城戸さんは止めようとしたんだ！！！！」

「願いは必ずしもかなわないもの・・・か。いいのか？貴様がそんなこと言って」

「俺は願いを司る、銀白の翼・・・オレに力を与えてくれるのはなあ、夢に向かって走り続ける、その力だ！！！！輝きだ！！！！！！たとえ叶わなくても、願い続けてくれる、その思いだ！！！！」

ばっつさあ！！！！！！

「人は夢を追い続ける。願いを胸に宿し続ける！！！！それは、知っているからだ！！！！たえかなわなくても、その夢を抱いて、そこに向かっていくことは、なによりも素晴らしく、輝いているってことをな！！！！！！」

「そしてだからこそ……お前を許さない……城戸さん、見せてやりましょう……俺たちの、願いを！！！！！！」

「ああ！！！！！！」

- SURVIVE -

龍騎がサバイブ・烈火・のカードを使い、龍騎サバイブに強化変身する

【KAMEN RIDER RYUKI】 - WORLD LINK
- WEAPON -

蒔風の手に計六枚のカードが現れた。

そしてこの場にいる五人のライダーのデッキからも、計七枚出でくる。

「なに!?!」

「オレのカードが!?!」

「なにをする!?!?!?!」

「きさま……」

それらのカード十三枚が一枚のカードに変わり、龍騎の手に収まる

「……………よし！！！！！！」

- - ADVENT - -

龍騎の新たなバイザー、ドラグバイザーツバイにカードをベントインする。

すると十三人のライダーの、すべてのモンスターが召喚された！！！！

「な……………ばかな！！！！！！」

「む……………な、なに！？」

その瞬間、王蛇と、分かりにくい「奴」の装着するリュウガのバイザーとデッキの色が落ち、ブランク体になってしまっている。

「モンスターを奪われたんだ。そりゃそうなる」

「しかし俺たちは大丈夫だぞ？」

「それは……俺たちは仲間だからだ！……！」

さらに龍騎の手にカードが一枚
それをベントインする

- - UNIT VENT - -

ユナイトベントの効果により、すべてのモンスターが一つとなった。

マグナギガを中心に置き、ドラグレッダーとドラブラツガーの二体が双頭の頭となり

その背にはエビルダイバー、ダークウイング、白鳥型のブランウイング、不死鳥型のゴルドフェニックスが張り付き翼となって

両腕にはカニ型のボルキャンサーと白虎型のデストワイルダーが

両脚にはレイヨウ型のギガゼール、カメレオン型のバイオクリーザが

【KAMEN RIDER RYUKI】 - WORLD LINK
- FINAL ATTACK -

龍騎の手に再びカードが

そのカードにはすべてのライダーの紋章が描かれていた。

- - FINAL VENT - -

「おおおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!
!!!!!!」

龍騎がモンスターの尾に飛び乗り、打ち上げられ、モンスター自身も飛びあがる。

そして龍騎の両足の裏をその両腕でたたき付け、同時に二龍が炎を吐きかける!!!!!!!!!!

爆発が起こり、半径三十メートルが吹き飛んだ。

その中で「奴」は消滅し、王蛇とリュウガのベルトは砕け、消えてしまった。

.....

「はああ、これで・・・大丈夫なんですか？」

「そうですね。「奴」はこの世界から消えました」

「で、こいつどうする？」

「しるか」

足元には完全に伸びてしまっている浅倉が転がっていた。

「こいつも記憶はなくなっただけ？」

「「奴」がいなくなったから、もう記憶はないっすね」

「このままほっとくか？」

「まあ、それでいいかな」

「蒔風は行くのか？」

「行ってきますかね。あ、ミラーワールドは完全に閉じられたわけではありません。微妙なほころびがまだあります」

「だがそれも徐々に閉じていつているんだろ？」

「なら俺達でなんとかしようぜ！！」

「相変わらず……うるさい奴だ……」

「なんだよ、やっと人を守るためだけに戦えるんだから、いーじゃねーかよー！」

「ほら、蒔風も、行くならさっさと行け。そして厄介事を追っかけるんだろ？」

「そうですそうです。ではこれで」

[Gate Open . . . K A M E N R I D E R R Y U K I]

蒔風がゲートをくぐり、次の世界へと向かうことになった

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

龍騎　く願いのカードく（後書き）

アリス「あれ？作者がいませんね」

蒔風「あー、そのベッドで寝てるってさ」

ア「まあいいですけどね」

蒔「今回は短編」

ア「今までの響鬼く龍騎の世界であつたちよつとした話を紹介」

ア・蒔「ではまた次回」

さあ、空白のページ

番外編 く夢、虹、宴、IFく

【仮面ライダー響鬼】く出会う夢く

病院を出て、次の日に「奴」のいると思われる遺跡に行くこと決まり、どうせなら今のうちに街を見たいと思った時風は、街をぶらついている。

響鬼たちは明日の準備をしているが、時風は基本手ぶらなので、抜け出してきた。

商店街を歩いて、本屋があったので、立ち寄った。

見たことのあるような気がする本や漫画があったが、時風はライトノベルのコーナーに向かった。

「オレの作品はないのか」。ちょっと読んでみたかったな」

そういつて順番に見ていつて、次の通路に入る。

そこは参考書などが並ぶエリアで、なかなか人がいなかった。

そこで蒔風は面白いものを見た。

高校生ぐらいだろうか？

今の時間ならまだ制服のはずだが、彼らは私服だった。おそらくサボっているのだろう。

そしてカゴの中の漫画を自分の鞆の中に詰め込んでいる。

万引きである。

「あーあ、見つけた」

「「!!」」

二人が蒔風に気づき、脱兎の如く走り出す。

レジの店員が鞆から零れた漫画をみて、待ちなさい！と叫ぶが止まるわけがない。

そのあとを蒔風が追いかける。

「わぁりいごはいねーがー！アハハハハハ！」

しかも面白いおもちゃを見つけたような楽しそうな笑顔である

本気で追えば一瞬なのだが、二人と付かず離れずの距離を保って走りつづける。

「っち！なめてんじゃねえぞコラア！」

急に二人が反転し、蒔風に向かう。

しかも一人はナイフを持っている

「追っかけっこおわりかい？」

「コラア！」

しかし蒔風はどっこ吹く風で、その態度がさらに二人をイラつかせる。

一人が蒔風にナイフを突き出すが、靴の裏で食い止め、その手を捻り地面に押さえ込む。
その際に身体を反し、もう一人に後回し蹴りを顎にクリーンヒットさせ、昏倒させる。

「やっぱ「オレ、スゲエ」とか思ってる馬鹿野郎を叩きのめすの・
・楽しんで」

二人を本屋に突き出し、警察に預け、蒔風が再び街をぶらつくのと、一人の男子高校生がこちらを見ていた。

「ん？どうしましたか？」

「あ、いえ。さっきの捕物がすごかったなって……」

「すごかった、か……耳が痛いよ。オレはさっきの捕物を楽しんでいたんだ。まあ、正義感つてのもあったけど、一番の理由はそんなもんだからね」

「でも、なんとかできる力を持っていることは凄いです。理由がなくても、僕には素晴らしいと思いました」

「君のような純粋な高校生が、いるもんなんだな……やっぱ世界は捨てたもんじゃないな」

「え？」

「いや、ありがとうな。こんなやつが素晴らしいなんて言ってくれない。君、名前は？オレは時風舜ってんだ」

「僕は安達明日夢です。よろしく時風さん」

時風は彼が最重要人物に近い……いやもう一人の主人公だとは知らない。

「そうか、医者になりたいのか」

「はい、前は違う道もあったんですけど」

「ま、それが君の夢なら、願い続け、頑張るんだ。そうすれば叶うさ」

「なんか……ありがとうございます。初対面なのにこんな話聞いてもらって」

「なあに、願いなんてんなら、オレの領分。難しいものからくだらないことまでなんでも相談にのるぜ」

そして30分後、二人は別れた。

「さて、帰りますかね」

あんな奴がいるんだ

世界はやらせないぜ？

明日は決戦だ

【うたわれるもの】（道中にて）

「カミユチー、こっちー」

「もー、ムツクル速いよー。あとマイカゼさんも速すぎー！」

「遅れちまつぞー！」

現在、ハクオロの眠るオムカミヤムカイに向かっている道中で、一旦休憩を取っている場所の近くの森の中で、アルルウ、カミュ、蒔風の三人が入っている。

なんでもハチミツの匂いがしたとアルルウが言うので、採りに来たのだ。

「あつた」

「えっ、どこどこ？」

「ありゃあ、結構高いな」

三人が見上げると木の上に蜂の巣があった

あんなとこのハチミツの匂いがあるって……

「じゃ、採ってくるね」

カミュが飛び上がり、蜂の巣の前まで行く。

そこでうまくやってハチミツをゲットし、降りてくる。

「アルちゃん、鬼……」

「さすがエルルウさんの妹……」

ザッパアン！

三人と一匹が飛び込み、蜂がその上を二、三回旋回し、去っていく。ちなみにハチミツは湖の側の茂みに置いたので無事だった。

「ううびしょ濡れ……」

「ムツクル、大丈夫？」

「ヴオフ……」

「みんないいか？ちょっとこっちに……ふっ、圧水！」

パシヤン

蒔風が圧水で服やムツクルの毛に染み込んだ水分を吸い上げ、湖に戻す。

「すっごーい！」

「乾いた・・・」

「ま、こんなふうにもできるよ」

パアアア

蒔風が水を上手く散布するするとそこに虹が現れる。

「「おお」

「うん、いいかないいな」

「ん、これ」

「お？ハチミツか・・・うん、採れたては美味しいな！」

「そろそろ戻る？」

「そうだね。そろそろ時間だ。行こうか、アルルウ」

「ん、きゃっほーう」

蒔風たちがエルルウたちの元に戻る。

酒を盛った応龍が心配になるくらいに大笑いする時風

「時風さん！落ち着いて下さい〜」

「ちきしょう！「奴」はオレが倒す！絶対に〜〜世界はやらせん！
ウィツ！それについて〜〜皆に言いたい！」

な、なんだ？と全員が注目する

「感じるんだ……感じるんだあああああああああ！！！！」

「なにをだよ！！」

「マンゴーの囁きに耳を傾げるんだ……そうすれば世界の真理・
……月の裏側の納豆王国が見えてくる……はっ！月の
カエルは元気ですかー！！！！????」

グルグルグルグル……バタン！

『ええ〜!?!』

時風がグルグルと回り倒れる。
完全に潰れている。

このあと、時風は目覚め、酔い覚ましも兼ねてましろと裕理について行ったのだが、その先の衝撃で一気に覚めたとか。

また翌日、信じてしまったのか、マンゴーを抱えて眠る美冬を鶴が発見し、何日かからかわれたとかなんとか

【仮面ライダー龍騎】〜北岡シュミレーター〜

「そついえば令子^{れいこ}さんは僕の事覚えてないんだよね」

「奴」から隠れて二日後、北岡がそんなことを言い出した。

因みに北岡が言っている令子さんとは、真司の勤める出版社「OR Eジャーナル」の記者、桃井令子のことである。

「令子さん？ああ、多分知っていても世間一般の評判ぐらいにしか知らないでしょ」

「なんだ？どうした？」

「それはいけない。せつかくあれだけの時間を共に過ごし「共には過ごしでないだろ」愛を語り合い「お前だけがな」並々ならぬ関係を築いたというのに！！」「仕事だけの関係な」さっきからうるさいよ城戸！秋山！！」

「なるほどね・・・そりゃ悲しいな。知っているのに知られないなんて」

「でしょ？やっぱりわかってくれるか！！」

「でもやめとけよ？今は危険だ」

「う~~~~む・・・なら城戸！！！！」

「な、なんだよ」

「お前、令子さん役な」

「はあ!?!」

「この戦いが終わったら、俺は令子さんに挨拶に行く。しかし、その時に怪しまれちゃ意味ないでしょう? だからここは今の令子さんを知る城戸、お前の力を借りたい」

「なに?じゃあ俺はお前の行動に対して令子さんがとるであろうはんのを示せばいいのか?」

「そうだ」

「やだよ!?!」

「馬鹿馬鹿しい」

「ならば今行くぞ」

「蒔風、あいつどうにかしてくれ」

「城戸さん、やるんだ」

「蒔風!?!?!」

「なんか面白そうだ」

「ま、確かにここにずっといては気が滅入るからな」

「蓮まで……他人事だからって気楽だよな!?!」

「多数決で決まったんだ。協力してもらおうぞ」

「はぁ・・・分かったよ」

T A K E 1

「どうも」

「ドナタデスカ」

「おや、美しい。オレの名前は北岡秀一、その男の知り合いです。こうして出会ったのも何かの縁。どうですか、一緒に食事でも」

「コレカラシユザイナandes。シツレイシマス」

「・・・・・・・・・・カーーーーーット!!!!!!!!!!」

「どうした」

「もっと感情こめてくれよ!.....棒読みにもほどがある!.....!」

「分かったよ。顔近づけんな」

「城戸はいますか？」

「どなたですか？」

「おや、美しい。オレの名前は北岡秀一。こうして（以下略）」

「これから取材なんです。失礼します」

「ではお送りしますよ！！！！」

「結構です」

「お茶です」（蒔風乱入）

「（！？）おや、ありがとう。だけでもう行くから」

「うちの社のお茶が飲めないんですか！？」

「（令子さんは自分の会社を愛している！？なんてプロ意識なんだ令子さん！！！！）いえ！！！！いただきますよう」

「城戸はいるか」（蓮乱入）

「蓮！！どうした！？」（真司による一人二役）

「いや・・・北岡、お前もいたのか」

「なんだよお前ら！！！！出てくんない！！！！」

「いきなりやってきてなんですかあなたは!!!!」(真司が女声を
作って)

「貴様ら、もういい!!!!帰る!!!!」

「送ると言ったのは嘘なんですか!!!!??」

「くっ、確かに令子さんならいいそこだ!!!!(いえ、令子さんも
一緒に行きましょう)」

「俺も取材だから一緒に……」

「城戸役はいらなんだよ!!!!令子さんだけでいい!!!!」

「彼は私のアシスタントよ!!!!」

「最悪だな、北岡」

「秋山はしれつとすんな!!!!」

「お茶入りまーす」

「蒔風はもうお茶いいから!!!!」

「うちのお茶が「しつこい!!!!」なんですかあなた!!!!」

「もう一杯どうですか?お茶」

「いらねーよ!!!!」

「三つ奴に出してくれ」

「おっけー」

「秋山お前え!!!」

「取材行かないんですか!?!」

「もう役はいい!!!お前ら、ちょっと面貸せや!!!」

「もどりました……先生、何やってるんですか?」

そこに買い出しに行っていた吾朗が戻ってくる。

目の前の光景は凄かった

北岡が秋山に飛びかかろうとして、それを時風が止める
真司が囃し立てて、蓮は我関せずと紅茶を飲んでいる。

北岡の服は乱れ、脱げかけている

「うんざりだ!!!このバカ!!!友達ゼロ人!!!」

ピクッ

二人の動きが止まる

真司と蓮が黙ってデッキを取り出している。

「なんだ・・・やるか!?!」

「やってやらあ!?!?!」

「売られたケンカは買ってやる」

そのまま変身してミラーワールドに行く。

蒔風は残った。

「大丈夫なんですか?」

「大丈夫でしょ。別につぶしあったからって願いが叶うわけがじゃないし。気分転換且つ憂さを晴らしですよ」

「はぁ・・・」

番外編 〈夢、虹、宴、IF〉（後書き）

アリス「今回は番外編ですね」

蒔風「いや、恥ずかしいやらなんやらのエピソードが・・・」

ア「響鬼では明日夢くんに会ってましたね」

本編で出てない、ってか時系列的に出れないからね

ここで出ました

蒔「森の中でのひと時。あれは気持ちよかった。水が冷たくてさ」

ア「蒔風、子供に人気ありますもんね」

保育園とかに行くと大変だろ

蒔「みんなひつついてくる。あいつら底なしすぎる」

ア「タユタマの世界で、あんた酒飲んだんですか？」

蒔「正確には飲まされたんだ」

「一九歳だけど、もうそんなの関係ない存在だしねえ

ア「にしてもわけわからなかったですね」

時「俺もだ……後で聞いてわかったんだ、あれ」

そして龍騎

ア「北岡さんってあんなキャラでしたっけ？」

時「みんなでいじくりまわしたらああなった」

かわいそうだったなあ

ア「北岡ファンごめんなさい」

さて、次回は本編に戻ります!!!

『お楽しみに〜』

「総員ペンを執れ！」

テストで召喚戦争!?

バカとテストと召喚獣 ㄱ 出会いと名乗りと調査依頼 ㄱ

「転校生の蒔風舜だ」

ここは教室

二年のFクラスだ

学校名は文月学園

オレはこの学校に転校した生徒として今ここにいる。

「お前の席はあそこだ」

担任の先生に促され座る

ちなみに席と言っていたが、あるのはちゃぶ台だった

「……なにこれ。イジメ？」

「あとでクラス代表から説明してもらえ。HR始めるぞ」

HRが始まった。
終わった

もっと説明しろ？

だって本当にこんなもんなんだもん！

一人の男子生徒が歩いてくる。どうやらクラス代表らしい。

「よう。オレがFクラス代表坂本雄二だ。災難だな。よりによってこんなクラスに入るなんて」

「転校だから仕方ないさ。オレ、蒔風舜。でさ、早速聞きたいことがあるんだが」

「なんだ？」

「試召戦争ってなんだ？」

「ああ、それな」

雄二が（下の名で良いと言われた）試召戦争の説明をしてくれた。

ここ文月学園では、革新的な学力低下対策として「試験召喚システム」を初めて採用した学校である。

科学とオカルトと偶然によって完成した「試験召喚システム」
なぜ試験なのかというと、召喚獣の強さが、テストの点数によって
変わるからである。

この学園のテストの点数に上限はない。
制限時間内ならば、難問でも答えていくだけでも点を上げられるのだ。

そして試験召喚戦争、略して試召戦争とは、クラス対抗で召喚獣を
用いた戦いをし、勝てばクラスの教室を交換できるのだ。

なおクラスの備品はランクで分かれており、成績優秀者上位50名
の在籍するAクラスには黒板でなく大型スクリーン、さらには各生
徒に個人用の冷蔵庫、エアコン、ノパソにリクライニングシートに
システムデスクと至れり尽くせりなのだ。

蒔風の在籍するFクラスは最低ランクで、座布団ガタガタしてる（綿がほとんど入
ってない）に卓袱台である。

「なるほどね。それなら勉強して召喚獣強くして戦っていい設備の教室に行きたがるわな」

「そついうことだ」

「雄二ー。どうしたの？」

「おう、明久。お前は人の話を聞かないんだってことをな」

「え？なんでいきなり貶されたの？僕！！」

「HRで鉄人が言っていただろ。俺はクラス代表として転校生に説明しなきゃならなかったんだ」

「え！？転校生！？」

「オレオレ。ってか本当に訊いてなかったんだな・・・」

「それだから授業も聴けず、学園最下位の成績になるんだろうが」

「バカな！！！僕が最下位なんて！！！」

「いい国作るっ？」

「そんなのは政治家の仕事さ！！！」

「以上がこの吉井明久という人間の説明だ」

「よくわかった」

「え！？なに？なにかやっちゃった！？」

「明久、何を騒いでおるのじゃ」

「……明久……どうした」

「授業始まるわよアキ。ん？転校生じゃない」

「明久君、早速友達になつたんですか？」

ゾロゾロと人が集まってくる。

この吉井明久という男、バカでも自然と人が集まるんだな。

「おお、なんじゃ転校生の蒔風か。ワシは木下秀吉じゃ。秀吉と呼んでくれ」

「……土屋康太」

「ウチは島田美波よ」

「姫路瑞樹です。よろしくお願いします」

「えっと、島田さん、土屋、姫路さん、秀吉……くん？」

「バカな！？秀吉の性別を見破った！！！？？」

「違うよ蒔風くん！！！！」

「どうした、吉井。あ、あと俺はなんとも呼んでいいぞ？」

「秀吉は第三の性別「秀吉」なんだ！！！！男とか女とかは超越してるんだ！！！！」

「おぬしはなにを言ってるのじゃ明久！！！？？」

「確かに、木下君はズルいです！！！！」

「そうよ！！ウチより胸があるじゃない！！！！」

「待つんじゃ島田！！それは誤解じゃ！！ワシはれっきとした男じゃ！！！！なんならここで証明を……」

「だ、ダメだよ秀吉！！みんなが見てるよ！！？」

「それがなんじゃ！！ワシは男じゃ！！そんなもの気にしないのじゃ！！！！」

「いや違う。ムツツリーニが失血死してしまう！！」

「（グツ！！！パシャパシャパシャ！！！！）ダバダバダバダバ……ガクツ」

「ムツツリーニーーー！！！！！！」

「ムツツリーニ？」

「ああ、こいつは「寡黙なる性職者」だ。ムツツリーニと呼ばれる」

「本名なんだっけ？」

「つち……や……こ……う……た……」

土屋康太改めムツツリーニが輸血パックで血を補充している。

「そうだな……明久、蒔風に召喚獣がどんなものか見せてやってくれないか」

「え？なんで僕が？」

「お前ほど召喚獣の扱いに長けたバカはいないからさ」

「雄二、いま何かほめ言葉でない単語が聞こえたよ？」

「ああ、「いい」意味だな」

「いい意味で、って付けねばいいってもんじゃないよ!! 悪意がそこにあるよ!!」

「悪意なんてお前に抱くわけないだろ」

「そ、そうだよな? 僕たちは友達だもんね!!」

「抱いているのは殺意だ」

「常になのかっ! 僕はつねに狙われてるのか!?!」

「いいから召喚しろ。許可はオレが出す。《機動》アウェイクン」

雄二のつけている白金の腕輪が光り、フィールドが小さく展開される。

「あれ? 召喚許可は教師じゃなきゃ出せないんじゃない?」

「この腕輪は特別だな。教師でなくても許可を出してフィールドを展開できる」

「はあ……じゃあいくよ? 《試験召喚》サモン!!」

吉井の足本に幾何学的な魔法陣が現れ、試験召喚獣が現れる。学ランに木刀を持った姿で、大きさは80センチ程度か。

「これが試験召喚獣だ。これからお前も戦力になるかもしれないから。よく知っておいてくれ」

「おう。で、触れんの？」

「まあな。つても明久のは特別でな。「観察処分者」だから触れるんだ。普通の召喚獣は物に触れない」

「観察処分者？」

「ふふん、観察処分者っていうのはね、この学園でただ一人。最も「バカに」優れた僕だけの、雄二！！なんで僕の評判を落としたいの！？」

「お前の不幸がオレの幸せだからな」

「でさでさ、この召喚獣って実際どれくらいつおいの？」

「つおいつて・・・まあ、こんななりだがかなりの力をもっているな。明久の点数でもサッカーゴールくらいは簡単に持ち上げるぞ」

「わかたよー。で、こいつを倒せばいいんだよな？」

「まあな、でも生身の人間じゃ・・・」

「せりゃ！千脚せんきゃく！・・・」

ドガガガガガガ！！！！

「せんぎやく旋脚！！！！」

バシンバシンバシン！！

蒔風が蹴りでの突きを繰り出し、さらに回転しながらの蹴りを当てていく

「い、痛いッ！イタッ、イタアアアアア！！」

「ちょ、ストップストップ！！」

「およ？大丈夫か？」

「観察処分者の召喚獣へのダメージや疲労は何割かフィードバックするんだが……説明が省けたな」

「吉井、大丈夫？すまないなあ」

「うう、親切心が心にしみる」

「やったのは本人なんじゃがのう……」

そうして授業が始まり、時間が過ぎていく……

「・・・まあいいさ。あなたのクラスに一人転校生が来ただろう？」

「蒔風のことか？」

「そうそうそんなガキだったね。で、これがそいつの転校手続きなんだが・・・」

「なんだ？別に普通だが」

「そこに書類手続きだとか、全国模試とかの成績が書いてあるだろうっ？」

「ああ。そこそこだな」

「問題は点数じゃないんだよ。この学園は試験召喚システムの実験場でもあるんだ。そうホイホイと転校生が来るわけがない」

「だが現に蒔風が転校してるじゃないか」

「だからおかしいと思って調べたんだよ。そしたらどうだい、全国模試の名簿に、蒔風舜なんて名前はなかったよ」

「・・・どういうことだ？この書類は偽物ってことなのか？」

「いや、その書類は間違いなく本物さ。だからこそおかしいんだ」

「なるほど。存在するものとデータが合わない。しかも両方とも本物ってことか」

「だから調べてくれないかい？あんたはなかなかできるからね。なんなら、何人が協力者を求めてもいいよ」

「別にしてやる義理なんざ無いが……まあ、一つ貸しだからな」

「構わないよ。さ、用はすんだよ。さっさといきな」

「うるさいババア長だ」

「聞こえてるよー!!」

t o b e c o n t i n u e d

バカとテストと召喚獣 ｝出会いと名乗りと調査依頼 ｝（後書き）

しまった・・・また忘れてたよ・・・

【仮面ライダー龍騎】

構成：”ライクル” 80%

”フォルス” 5%

”LOND” 15%

最主要人物：城戸真司

- WORLD LINK - ｝ WEAPON ｝：全契約モンスター召喚 & amp; 合体のカード

- WORLD LINK - FINAL ATTACK : ジェノサイドライダーキックを発動

ア「あーあ、やってしまいましたね」

またやってしまった・・・

ア「ま、気を取り直して、今回はバカテスの世界!!! 今回の世界の時系列は？」

そうすねえ・・・どこら辺だろ？

あらかたの登場人物が出てきて・・・確実に一巻以降だからねー

名言は致しません!!!

ア「ああ、とにかくバカテスの世界ですよ、と?」

そうそう

あ、後最後の一文は言葉とかじゃなくて一生懸命考えたオリジナルのバカテストです

ア「がんばりましたね。ま、そんなもんでしょう」

あれ?今回は文句言わんの?

ア「?ええ」

さみしい(シヨボーン)

ア「はあ・・・次回「雄二、時風を問いただす」」

ではまた次回

【スポーツに関する学生アンケート】
野球と聞いて想像することはなんですか？

木下秀吉の答え

イチロー、巨人、WBC

教師のコメント

日本人ならまず知っている野球の代名詞ですね

姫路瑞樹の答え

青春、部活、甲子園

教師のコメント

まさに学園生活のページです。

姫路さんもそんな青春を送れるといいですね

島田美波の答え

テッドボール

教師のコメント

どうしてあなたの回答はこつ物騒なんですか？

その他の全F組男子の答え

『『『野球拳』』』

教師のコメント

上記三人以外の全員の答えがこれのなのに対し、先生どうしたらいいかわかりません
しかし、嫌いではないです。

西村教諭のコメント

後で先生も一緒に指導室に来てください

バカとテストと召喚獣　〜答えと不信と戦争開始〜

次の日

蒔風が登校すると、雄二がやってきた。

「よ」

「おう、オハヨー雄二！」

「なあ、いくつか聞いていいか？」

「なんだよい？」

「お前、前の学校ってどこだ？」

「おおっとオ、キツイの聞いてくんね」

「どこなんだ？」

「答える前に、聞かせてくれ。なぜそんな質問を？」

「お前が答えてくれると言っなら言おう」

「別に構わにゃいよ。そこまですて隠すことじゃにーからにえー」

「なら言おう。学園長が転校書類でお前を怪しんでいてな。聞いて来るように頼まれた」

「なるほどのう。わかりましたい！では、学園長室に行こうかね」

「今からか？」

「学園長の用事だろ？大丈夫でしょ」

そうして時風たちは学園長室に向かった。

.....

「で、素直に話すってのかい？」

「そそ。で、誰彼構わずに話して良いようなもんでもないから、この部屋にしました」

「で、なんで僕が呼ばれたの？」

この部屋には藤堂カヲル、時風、雄二の他に、明久、美波、瑞希、秀吉、ムツツリー二の五人までいる

「時風が連れて来てくれって言ったんだ。他の奴は別について来てもいいと言ったら来たんだろ？」

「さて、役者は揃いましたな。ではお聞かせしましょう。時風舜の、一世一代の頑張り物語を」

そうして時風が説明を始め、終わると、雄二が口を開く。

「病院いけ」

「そうなるよねえ」

「流石に信じられるわけなろう」

「……明久が実は頭いいと言った方がまだ信じられる」

「信じられないか……」

「そうだよ！僕みたいなんでもない普通「より遥か下」の人間が
つて雄二！いらぬこと言うなよ！」

「たしかに吉井は普通……な人間だ」

「その空白を埋めて！何も言われないのも響く！」

「だけど最主要人物の条件にはそんなもの関係ない」

「他の世界だとかそんなもの信じられるわけなんざないさね。あんな、書類の偽装で下手すりゃ国家権力のお世話になってもらうよ？」

「そりゃあ……お？」

「なんだい」

「災い転じて福と成すってか？」

「なにがだい」

「来たぞ」

ブアアアアアアアアアア！

部屋の雰囲気が一瞬で変わる。
一面が色落ちしたようになった。

「なんだこれ!？」

「「奴」が来たな。んじゃこれから証明しようか!」

ドットン!

ガリアアアアアアアアアアア!

そして学園長室の壁を破壊し、巨大な三頭犬が現れた

「な!？」

「キヤアアアアアアアアアア!」

「何じゃあれは!」

「蒔風!あれはなんなのさ!？」

「「奴」の使役する召喚獣、ケルベロスだ!」

「召喚獣!?!」

「この世界のモノとは違う!?!なにかあってーとゲームとかの方に近い!?!……皆伏せろ!?!」

ブアア!!

ケルベロスが大木ほどもある腕を真横に振るう。
蒔風は皆を伏せさせ、ケルベロスに飛び掛かる。

「せえりゃあ!!脚砲きゃくほう!!」

ズドンッ!!

蒔風の強烈な後ろ蹴りが胸元に命中し、校庭に落ちるケルベロス
どうやら結界の範囲は学校をすっぽりと包んでいるようだ。

「そこで見てな、オレっちの活躍!!」

蒔風が校庭に飛び降りる。

他の全員が崩れた壁から校庭の様子を伺う。

「さて、召喚獣ってなら、こいつだ!」

パア!

手の平にカードデッキが現れる

蒔風は後ろの窓ガラスに振り向かないで腕だけを出し、デッキを向ける。

蒔風の腰にベルトが現れ、右手を左上に突き出し、叫ぶ!

「変身!」

カシュツ! キュイイイイン、パアアン!

「あ、あれは」

「仮面ライダー!?!」

蒔風が龍騎に変身すると、明久たちが驚く。

「この世界でなんかの作品になってんのか……ま、やるっか！」

ガリアアアアアアアアア！！

- Advent -

「頼んまつせ」

ギヤアアアアアアアアアア！！！！

蒔風がドラグレッダーを呼び寄せ

ケルベロスにドラグレッダーが絡みつきその動きを封じる。

「さ・ら・に・だ《- Strike Vent -》こいつは熱いぜ
？おりゃあ！！！！」

ドラグレッダーが離れた瞬間にケルベロスを炎が襲い、爆発が起きる。

「これで最後ですのじとよー！ー！」

- Final Vent -

「とっ！ー！ー！」

蒔風がドラゴンライダーキックを発動させる。

しかし、爆煙の中からケルベロスが飛び出してきて、ドラグレッダーと蒔風を弾き飛ばす。

ゴゴン！ー！ー！

蒔風とドラグレッダーが叩きつけられ、ドラグレッダーは光の粒子となって消えてしまった。

「ぐっお・・・ああ！ー！消えたあ！ー！そう簡単じゃあ、いかんかね？なあおい！お前の主人はどこにいったい？」

しかしケルベロスはそんなことは知らんとばかりに時風をにらむ。

「はん……（ペア！）だったらこいつさね（パン！）」

変身を解き、今度は巨大な槌を取り出す。

「四本の足で駆けるものには、こいつがいいんだっけ？」

ガLLLLLLLLアアアアアアアアアア！！！！

突進してきた。

それをジャンプしてかわす時風。そして槌を叩きつける。

バガン！！！！！！

ゴフツ!? ガララルルル……

ケルベロスがふらつく。

槌を消し、蒔風がケルベロスの方に指を組み、向ける。

そしてその手を離していくと、バチバチと雷旺が溜まっていく。

「あんた一人にやるよーなもんじゃないんだけどもね……! 喰ら
つとけや……!」

ズツ、ババババババババババ……!……!……!……!……!

「雷……!……! 旺……!……! 砲……!……!」

バガガガガガガガッガガガガガガ、ゴゴゴゴゴゴゴゴ
ゴゴゴゴゴゴ……!……!……!……!

大地を幅二十メートルは削ぎ落とし、百五十メートル先まで抉ったその砲撃は、ケルベロスを文字通り粉碎し、跡形もなく吹き飛ばした。

「はああ。こーなるから最高能力での締めはなかなかめんどくさいんだよなー……っ」と

蒔風が明久たちのところに戻る。

「大丈夫かい？」

「あ、ああ……」

「信じてくれたかい？」

「お、おう……」

「そりゃあよかった」

「それよりこの損害どうすんだ？」

「大丈夫だと思うよ？ケルベロス倒したし、結界が解ければ……」

「時風が話していると、空間に色が戻ってきた。」

「壊れた大地も、壊れた壁も、すべて何事もなかったかのように元に戻った。」

「ほらね？」

「は、はは……」

「ま、待ってよ！！じゃあ僕が狙われるのは本当なの！？」

「あ……」

「そうですっ！このままでは明久君が危ないです！！」

「吉井なら大丈夫だ」

「そ、そうか！時風が守ってくれるもんね！」

「いつも狙われてるようなもんだろ？」

「失礼な！僕はそんなに……」

「アキ？なんでウチの方を見るのかな？」

「なんでもないよ」

「ま、吉井はオレが守るから大丈夫だよ」

「それにしてもそんなことが本当にあるとは……」

「本来ならあり得ない。オレはこの世界に存在しえないものなんだ。だからなるべく早めに片をつけたいなどか思っているのじゃぞる」

「そうか……」

ガラガラガラ!!!

「たっ、大変だ坂本!!!」

ひと段落ついたかと思ったら、学園長室の扉を開け、Fクラスの須川という男子生徒が飛び込んできた。

「どうした須川。何かということこっちの方が大変だったんだが」

「なにを言ってるんだ？それより聞いてくれよ!!!」

「まあ落ちつけ。話はそれからだ」

慌てる須川をなだめ、改めて聞き直す。

「それで？なにがあった？」

「ああ、取り乱してすまない。実は・・・」

「Bクラスが試召戦争を仕掛けてきやがった！！！！！！」

t o b e c o n t i n u e d

バカとテストと召喚獣 く答えと不信と戦争開始?? (後書き)

アリス「すみませんが今回は作者が逃亡したために後書きは私一人です」

と、言うわけで「」は省きました。

さて、こう毎回毎回書いてるとそろそろ後書きのネタが切れたとが、何書けばいいかわからないとかうなった挙句にですからね。

そうですねー

そうそう、今日私マンガ版のインデックス禁書目録とレールガン超電磁砲読みましたよ!!

マンガ版だと姫神さん出てないんですよー。 可愛いそうですね

レールガンはアニメまでみたいですなー。

今度見てみますよ。

では次回のことでも言いましょうか

始まった試召戦争。 その裏に暗躍するのはやはり……

とのことですよ。

でわでわ、また次回に！

【歴史】

（ ）の中に入る言葉を答えなさい

1588年に豊臣秀吉がたした法令は（ ）狩りである

姫路瑞樹の答え

刀狩り

教師のコメント

正解です。有名すぎて姫路さんには簡単だったでしょうが

土屋康太の答え

秀吉狩り

教師のコメント

クラスメイトのことを考えて心は痛まないのですか？

吉井明久の答え

オヤジ狩り

教師のコメント

ごめんなさいトラウマをいじらないでください

西村教諭のコメント

あとで先生はカウンセリング室に来てください

バカとテストと召喚獣 〱会議と護衛と黒い影〱

Bクラスが攻めてくる

この情報はすでに学園中に広まり、皆驚きを隠せないでいた。

本来試召戦争は下位クラスが上位のクラスに教室環境改善のために仕掛けるものだ。

つまりBクラスがFクラスに戦争を仕掛けても、正直メリットはない。

しかももし負ければ設備交換。

どう考えてもおかしなものである

「じゃあなんでBクラスは攻めてきたのさ？」

明久が雄二に聞く

今は昼休み。

屋上にFクラスの主要メンバーと時風が集まって話し合っている。

「Bクラスの代表はあの根本だ。俺達への復讐とかそんなところだと思っただが……」

「しかしそれは根本一人の感情じゃろう？あやつにBクラスの皆が

乗ってくるかのう?」

「根本って誰さん?」

「Bクラスの代表なんだが……」

Bクラス代表・根本恭二

卑怯な手を使う奴として有名で、Bクラスのメンバーからの人望も低い。

かつて試召戦争でFクラスに負け支持率は更に下がり、敗軍の将として辱め(女装させられたまま下校。更には写真集まで作られた)を受け、Fクラスにはそれなりに恨みがある男だ

「まあ、秀吉の言う通り、そこがわからん。あの根本に、しかも個人的な理由の試召戦争にBクラスの奴らが乗るわけがない」

「Bクラスの奴らも脅迫させられてるんじゃない?」

「奴ならやりかねないが……それだけの手段があるとも思えない。とにかく、情報を待つしかないな」

現在、ムツツリーニがBクラスに斥候に向かっている。皆その情報待ちなのだ。

「……報告」

「ムツツリーニ！Bクラスはどうだったの？」

「みなのお目がおかしかった」

「おかしいとは？」

「催眠術の類いの可能性がある」

「催眠術！？」

「なんでそれがわかるのか疑問だが……」

「ちょ、それシャレにならないじゃない！警察沙汰よ！？」

「確かなのか？」

「正気でないのは確か」

「……どういうことだ……根本は最低最悪の人間だが、催眠術なんてことが出来るような奴じゃないはずだ」

「先生に報告するべきです！」

「待ってくれ」

「時風？」

「試召戦争は明日開戦だよな？」

「相手方はそう言ってきたな」

「ちよつと時間をくれないか？」

「まさか・・・「奴」つてのが？」

「わからない・・・だから調べる」

「調べるのが間に合わなかつたらどうする？」

「もし「奴」なら今騒ぐと策を放り捨てて攻撃してくるかもせれないからな・・・下手にやめないのでそのまま開戦してくれ。明久には護衛をつかせる。念のために、他のみんなにも・・・これを」

「これをつて・・・剣じゃないか！こんな危ないもの・・・」

時風が「青龍」を取り出し明久に渡そうとする。

「あ、確かに。だつたら・・・小獣召喚」

ポン、とかわいい小さな音がなると、子犬程度の大きさの、しかもデフォルメされたチビ青龍が顕れた。

「「かわいい」」

美波と瑞希がチビ青龍を抱え上げる。

「青龍、モテるじゃないか」

「……困ります……」

「喋った!？」

「ああ、こいつはオレの召喚獣……お前らのとは違つがな。の、青龍だ。明久の護衛に付ける」

「わたらの護衛はどんなやつなのじゃ？」

「興味あるかい？」

「他にもいるんですか!？」

「早く見せて!」

「はいはい……小獣召喚」

更に蒔風が他の召喚獣を小獣で出す。

「じゃあ、お願いね」

『了解』

結果として雄二に玄武、秀吉に白虎、美波に天馬、瑞樹に朱雀、ムツツリー二に麒麟があてがわれる。

「こいつらは基本的には目につかないようにいるから、見えなくても心配するな」

「そうなんだ……」

「ちょっと残念です……」

「……人の目のないところなら呼び出せば来るけどな」

「主!？」

「だってあんな顔されたら……ねえ？」

「いーじゃん、女の子みんなかわいーしさ!この子もかわいーし」

「白虎君。彼は男子だぞ？」

「ええ!？」

「驚かないでくれんかのう……それにしても時風はワシが男とわ

かっていたようじゃが・・・」

「大体わかるわ！！確かに女っぽくてそんじょそこらの女子よか可愛いけど・・・」

「それはそれで傷つくのじゃが・・・」

「秀吉は男だとわかったさ。てかそんなもわからなきゃ「奴」の気配なんかわからん」

「蒔風！！いや、舜！！これからは舜と呼ばせてくれんか!？」

「いいけど・・・」

「あ、じゃあ僕のことも明久でいいよ」

「それは構わんが・・・名前ですんではずかしいと思うのはおかしいかな？」

「まあ、最初はそうかも知れないけど・・・」

「もう慣れたしの。これがデフォじゃ」

「オレもちつとずつ慣れつか・・・ま、おれはこれから早退する。先生にはうまく言っといてくれ」

「分かった」

「では・・・ちよびばー!」

「ッ!?!うわああああ!?!」

「逃がすかよ。お前がいたんじゃ邪魔なんだよ。もうちっとおとなしくしてくれ」

二人を追う人物が背後から現れ、話しかけてきた

「あそこまでやるんて……お前は……ッ」

「世界のためだよ」

「なにがだ!?!この……」

「まあいい、そいつからこの世界の情報も大体得た。用済みだ、まとめて死ね」

「なん……」

キュボッ!?!……ゴガゴゴン!?!……!

バカとテストと召喚獣 ～会議と護衛と黒い影～（後書き）

作者が帰ってきません

何やってるんでしょうね、まったく……

ま、こうして勝手に後書きできるからいいですけど。

はやく帰ってこないかな～～～お姉さん暇だ～～～

次回、試召戦争開始……って前回もこんなこと言ってたな

次回予告はあくまで予想といってもこれはひどいですね

短いですし

ではまた次回～～～

【世界史】

デカルトの残した有名な命題「コギト エルゴ スム」の日本語訳を、括弧の中に言葉入れて完成させよ

（ ）（ 思う、ゆえに ）（ あり

姫路瑞樹の答え

我思う、ゆえに我あり

教師のコメント

正解です。

いかなるものを疑ったとしても、この自分自身の存在は疑いようのない事実だということですね。

吉井明久の答え

小汚いと思う、ゆえにスムーズに掃除する必要あり

教師のコメント

あなたは何を言ってるのですか

西村教諭のコメント

先生は早く机の上を整理してください

バカとテストと召喚獣 くバカと想いとそのつながりく

Bクラスとの試召戦争が始まり、Fクラスで明久たちが集まっていた

「蒔風はどうしたの？」

明久が不安そうに聞く。

しかしそれに答えられるものはない。

「わからん。だが連絡が無い場合は試召戦争を始めておけと言っていたからな」

「しかしわしらだけで大丈夫かのう」

「蒔風の召喚獣がついているから大丈夫だろう」

「今は人がいなくなるなんて、ないですよね……」

「だからいまムツツリーニに情報収集と一緒に麒麟から話を聞いてもらっているんだ」

「……戻った」

「どうだったの？ムツツリーニ」

「麒麟が言うには昨日から連絡がつかないらしい。あと、Bクラスだけど、さっき動き出すよつなことを言っていたから……」

「そうか……第一中隊は廊下で展開しろ！Bクラスを食い止めるんだ！」

雄二の号令に皆が動き出す

「時風……なにかあったのかな……」

「とりあえず今は試召戦争だこれで負けたらみかん箱だぞ」

皆で時風を心配しながら、出て行ったFクラスメンバーを見送り、一旦腰を落ち着かせる

そして明久が席に座ると瞬間

廊下が吹き飛んだ

「・・・・・・・・・・は？」

「なにが起きた!？」

「ほつ、報、告・・・・・・・・廊下に展開していた部隊が全・・・・・・・・滅・・・・・・・・」

「なん・・・・・・・・だと・・・・・・・・!？」

雄二たちが廊下を覗く

多くの人が倒れている中をBクラスの人間を率いて根本が歩いてくる。

倒れている人の中には巻き添えを喰らったBクラスのメンバーもいただけで無く教師すらも含まれていた

しかし、根本はギラギラした笑みを浮かべ歩いてくる。

後ろのBクラスメンバーは仲間も倒れているというのに見向きもせずフラフラと根本のあとをついて行く。

「なんだよ……これ……」

「試召戦争で本人が傷つくことなどありえんはずじゃ！」

「しかもBクラスの仲間まで……」

「ヒドイです……」

「根本……貴様ア！なにをした！」

「ふふふ……いけ」

『……』
《試験召喚》
『……』

ズアズアズア！！

地面の幾何学模様の魔法陣から試験召喚獣が出てくきて、生き残ったFクラスメンバーと明久たちにジリジリと迫る。

「教師もいないのになぜ召喚できるのじゃ!?!」

「雄二！あいつら普通じゃない！」

「くっ、誰か学園長を呼んでこい！！他は行くぞ！《試験召サテ……

そこまで叫んで雄二が止まった。

いや、雄二だけではない。

明久たちやFクラスメンバーまでもがそれを見て固まった。

別になにかおぞましいものを見たわけではない。

別になにか恐ろしいものを見たわけでもない。

彼らが見たのはたった一つの仕草であった。

そう、召喚獣の一体が、足元にある壁が欠けて出来た小石に当たり、それを退かして来たのだ。

本来、召喚獣はもの凄い力を持っている。

学園最下クラスの明久の召喚獣でもサッカーゴールを軽々と、ヒョイツと持ち上げ移動させられるぐらいに。

しかしそれでも大丈夫なのは試験召喚獣は物体には触れられないからである。

床はなんらかのコーティングで突き抜けないようにしているが。

それが小石を退かした。
つまり召喚獣だけでなく、人にも触れられるということ。
しかもパワーはBクラスの点数。
足元に転がる生徒と教師

それを理解した瞬間、驚きで固まった彼らの表情ををすぐに恐怖のものへと変えた。

『うわあああああああああああああああああああ！！』

一人が叫んで教室に駆け込むとそれがきっかけで他のFクラスのメンバーが一気にそのあとを追う。

Fクラス側の廊下が一瞬でガラガラになる。

しかし、明久たちは残っていた。

雄二は根本を見据え、明久は美波と瑞希を他の人に潰されないように庇い、ムッツリー二と秀吉は明久で庇いきれない部分をカバーし

ていた。

「逃げないのか……まあ、楽にはなるな」

「根本!どういつつもりだ!」

「どういふもなにも……」

「このクソジャリども!なんの騒ぎだい、これは!?!」

そこに藤堂カヲルがやってきた。

誰も学園長室に呼びに行かなかったはずだが、これだけの騒ぎになれば流石に気づいたようだ。

明久たちの方に寄り、問い詰めようとするが雄二が先に口を開いた。

「ババア！！そいつら普通じゃない！」

「普通じゃないだつて？」

「そいつらの召喚獣、物に触れられるぞ」

「なんだつて？」

「しかも教師のおらぬ状況で召喚しおつたのじゃ！」

「な……」

「話は終わったかい？」

ババババツ！！

一旦動きの止まっていた召喚獣が再び動きだし、明久たちに襲い掛かる。

「食い止める！《試験^{サモン}召喚》！！！！」

ドドガア！

学園長を教室の方に押しやり、明久たちが立ち向かう

そして明久たちの召喚獣がBクラスの召喚獣とぶつかる。

さらに青龍たちも姿を現し、小獣状態で迎え撃つ。

「青龍！？」

「ぬあああああ！！！！この姿では……全力が出せぬ！！」

「でもでも、舜との連絡がないんじゃどーしよーもないじゃんよー
！」

「このまま凌ぐしかないでしょう。幸い、相手の召喚獣は我々ほど強くないようでしょうし」

青龍、白虎、朱雀が叫ぶ

「どうしても時風と連絡は取れないのか!？」

「無理だぞ、雄二殿!! なぜだか知らぬが主との交信が切れてこちらから呼び出せないのだ!!」

「ってかそれは何度も言っただろうが!!」

雄二の問いかけに玄武と天馬が答える。

そして、美波と秀吉の悲鳴が聞こえた

「きゃああ!!」 「うわああ!!」

「美波!! 秀吉!!」

どうやらこの空間での召喚獣に反映される点数の教科は自由に決められるようだ。

扱いに慣れている明久、最近かなりの成績を修めている雄二、もともと学年トップクラスの瑞樹は全教科で挑み、保健体育の点数で特殊能力持ちのムツツリー二はそのまま保健体育で挑んでいる。

しかし美波と秀吉はBクラスの召喚獣に押され、召喚獣を倒されてしまった。

点数はまだ残っているが、残り一ケタと、もはや死に体である。

天馬と白虎が駆け寄る

「大丈夫か!？」 「ごめん!! 守り切れなかったよ・・・」

「ウチらはいいから、アキの方を!!」

「ワシらの方は問題ないのじゃが・・・ 明久が狙われるとまずいぞ!!」

はたして二人の言うことは確かであった。

雄二、ムツツリー二、瑞樹には敵が六人ずつ付いているというのに、明久には十五人も付いていた。
先ほど美波と秀吉を攻撃した召喚獣も、用は済んだといわんばかりに明久の攻撃に加わっていた。

玄武、麒麟、朱雀はそれぞれ雄二、ムツツリー二、瑞樹についており、小獣のせいかそれでも苦戦していた。

それなのに明久には二倍以上も敵がいるのだ。

「確かにそうだけだよ!!!」

「このまま二人をほっとけないよ!!!」

「ウチらは教室に逃げるから」

「明久のフォローを頼みたいのじゃよ」

「それは・・・あつ、おい!!!」

「待つて〜!!!」

そう言つて二人は教室に戻つていった。

その体は召喚獣をやられたときにおこつた衝撃に巻き込まれて、フラフラだった。

「・・・天馬」

「なんだ、虎ガキ」

「あいつ・・・許せない」

「虎ガキ。それは許さん」

「天馬!!!」

「あいつは・・・オレが一番許せねんだよ。だから俺がやる。お前は明久のとこいけ」

「ボクがやるんだ!!!」

「いや俺だね」

「この駄馬!!!」

「なんだとこの漂白野郎!!!」

「がー!!!じゃあ早い者勝ちだ!!!」

「待てコラア!!!」

白虎と天馬が飛びだした。

白虎がリードするが天馬が追い抜き、根元に到達する。

白虎はそれに気づくとすぐさま明久の方にコースを変更した。
そこまでふざけてはいられない

「助けにきたよ!!!さつて・・・おまえら、覚悟しとけよおおお
お!!!!!!」

「む・・・白虎がキレているな・・・」

「美波と秀吉は!?!」

「大丈夫だよ!! 教室に戻った!!」

「そうか・・・ってうわぁ!!!!」

「明久!!」

戦いは止まらない
そして止まらないことにいらついている人物がいた。

「お前らもういい。ちんたらするなら、消える」

根本である。

その手をスイツ、と横に振ると電池がキレたようにBクラスの生徒達が倒れた。

「なんだ!?!」

「どうしたんだ・・・」

「なんでみんな倒れちゃったんですか!？」

「……催眠が、解けた？」

「ほう、よくわかった、なっ!!!」

轟ッ!!!

根本が駆ける。

その進行を小獣たちが食い止めようと立ちふさがるが、根本の体に当たっただけで弾かれてしまった。

明久たちの三メートル手前まで駆けてきたところで、根元の姿が消える。

そしてキョロキョロト見渡す明久の目の前にフッ、と現れ殴り飛ばす。

「ゲフッ!!!ガ……ア……」

「きゃああああ!!!明久君!!!!!!!」

「明久アアアア!!!!!!」

「明久!!!!!!!!!!」

「死ね」

ドムッ

根本が廊下に転がる明久を踏みぬき、砕けた廊下が粉塵を上げる。

「そん……な……」

「あ、明久……」

「あ……」

瑞樹が口を半開きにして目を見開いて、それでも目の前の光景が見えてないかのように焦点はあっていなかった。

雄二は膝をつき、拳を廊下に叩きつける。

ムツッリーニは頭を抱えブンブンと振る。

粉塵が晴れる

三人は思い切り目をそらした。そこにあるのが現実だと認めたくないと叫ぶかのように

しかしそこにあるのは紛れもない現実である。
そして

「一体何に目をそらしてるんだい？」

その声もまた、現実であった。

その声は悪夢^{けんじつ}を吹き飛ばした。

その声は希望^{げんじつ}を運んできた。

その声は確かにあつた。

現実だって救いがあると、それを確かにするかのようにな……！！！！

「さんざんど突いてくれたなおい」

「キッ、サマ……」

ゴゴン!!ゴゴン!!ゴガガガガガ!!!!!!

そうして十分に距離をとったところで、戦いが再び始まる。

S I D E 明久

なんとか・・・生きてるよ？

蒔風が・・・助けてくれた・・・

「明久君!!!」

なんだろう、姫路さんがこっちぬ向かって走ってくる。

教室の方からは秀吉と美波まで・・・

大丈夫ですか？とか怪我はない？とかみんな聞いてくる。

「大丈夫だよ・・・それにしても、美波まで走ってきてくれるなんてね」

「ウチは・・・ウチはアキが死んだら誰を殴ればいいのかわかんなくなっちゃうでしょ！？だ、だからよ！！！！」

こんな時まで僕の命を狙うのかこの人は

「それは・・・勘弁だなあ」

「む？どうした明久。気の抜けた顔しおって」

「仕方ないだろう。あんなことに真っ向から巻き込まれたんだ。こんな風にもなる」

「あんなことって・・・」

「なんだ？忘れたのか？」

失敬な。僕だってそれぐらい覚えてる。

たしか、Bクラスが攻めてきて、戦って、いきなり殴られて、殺されそうになって・・・それで・・・

「！！！！！蒔風は！？」

「あいつは今・・・戦っている」

そんな・・・だったらこんなところで寝てられない！！

「ダメですよ！！明久君！！」

姫路さんが止める。

「あんなところに言ったら死んでしまいます!! 蒔風さんは勝てるって言っていました!! だからここで待ちましよう?」

「そうよ!! アキが行ったって何の役にも立たないんだから!!!」

ひどいなあ、二人とも。確かにそうんだけどさ・・・でも・・・いかなくちや

「なぜだ? 明久」

「雄二・・・」

「お前が行くというなら、そのわけを話せ。納得できなきゃいかせネエ」

「はっは・・・簡単だよ・・・理由は・・・」

「理由は?」

そうだよそんな理由なんて決まってる。

「僕は今までも、鉄人から脱走したり、雄二をおとりに使ったり、卑怯なことか沢山してきた」

でも、それでも!!!

「友達が僕のために戦ってくれているのに、ここでのんびりなんかしてられるか!!!」

そつだよ。みんなそつだ。

なぜか姫路さんも雄二も、秀吉も美波もムツツリー二も、いつもは僕をメタメタにして、偶に逆に僕がして。でも本当に僕や、他のみんなが貶されたりすると本気で立ちあがってくれるじゃないか!!

「だから僕は行くよ。蒔風は僕の友達だ。友達のために僕は行くんだ。勝ち負けなんか関係ない!!!」

そつだ、勝ち負けなんかどうでもいい。僕は見たんだ。余裕そつにしていたけど、僕をかばつた時、蒔風の顔が激痛に歪んでいたんだ。それなのに蒔風は「奴」と一緒に行つてしまった。

「蒔風はあのまま勝てるかもわからないのに僕らのために命を懸けて戦つてるんだ!!」

「.....」

「だから雄二、そこをどいてくれるかい？行かなくちゃならないんだよ」

「.....明久」

「なに？雄二」

「その言葉が言えてなきや、オレがお前を殺していたよ」

「え？」

「行くのはお前だけじゃねえよ。俺もつれてけ」

「わしも行くぞ」

「・・・オレも」

「アキ・・・」 「明久君・・・」

「二人は残って・・・」

「わたしも行きますっ！！」 「ウチも行くッ！！」

「え？え？」

「そうですね・・・友達の、ためですもんね！！」

「アキだけにかっこいいことさせられないっての」

「覚悟はいいか？明久」

「雄二・・・ああ、行くこう」

廊下の騒ぎを聞き付けて、他の生徒や教師が来た。

試召戦争用に作られた校舎だから、騒ぎが浸透するまで時間がかかった見たいだ。

僕たちは蒔風の向かった方に進む

邪魔はさせないよ

友達が、待ってるんだ。

S I D E o u t

ゴキン!!!!

「ぐおおおおあああああああ!!!!!!」

蒔風が転がる。

頭からは血がダラダラと流れ、背中は真っ赤に染まっている。

右頬は腫れあがった跡がある。口が切れ、血が出たため腫れは引いたのだろう。

息は荒く、右足は折れているようだ。

「自信満々に言ってくれたようだけど、なんだあ？このざまは!!!」

「うつせんだよ!!!この豚野郎が!!!!!!いいかあ、このくらいのハ
ンデがちょうどいいと思ってたんだよ……」

「主人公の吐くセリフではないな」

「フウフウフウフウ……」

「言葉もないのか？」

「ガッ……ツア……」

ゴガン！！！！

「奴」の蹴りが蒔風を吹き飛ばす。

壁に叩きつけられ、体育館が揺れる。

蒔風の体はズルズルと壁に寄り添って崩れた。

「終わりだなあ」

「ッ！！！！おおおおおお！！！！！！」

「なにっ？」

「土惺竜！！！！！！」

蒔風が構え、土惺竜を放つ。

そう言つて「奴」が笑つ。

しかしその笑いは、勢いよく開け放たれたドアの音によつて遮られた。

「蒔風!!!」

「おまえら……ノコノコ殺されに来たかあ!!!??」

「……あき……ひさ……」

「大丈夫!？」

「大丈夫……なわけあるかと言いたいが実は大丈夫だあ!!!……
・ガツ……つ~~~~つあ……」

「無茶するな!!!」

「なんで来たよお前ら?オレに殺されるつてのがわかんねえのか?
バカなの?ねえ、死ぬの?」

「確かに僕はバカさ!!!でも、何が間違つてて、何をやらなきゃいけないかぐらいはわかる!!!」

「明久……」

「僕は友達を助けに来たんだ！！それはバカでも、絶対に忘れちゃいけないことだ！」

「ッ！！！！まずい！！！！」

「よくいつてくれた、明久！！」

【Baka to Tesuto to Shoukannju】
- WORLD LINK - WEAPON -

「《試験^{サモン}召喚》！！！！！！」

明久が召喚獣を出す

その瞬間、明久の召喚獣の頭上に表示される数字が、最初から3065となっていた

「明久……お前その点数は!？」

「え？なんで!？」

「それはな、お前のテストの点数じゃねえ」

時風が立ちあがりながら言う

「その数値は友がお前を想い、またお前が友を想うその力だ!!!」

そう言いながらも数値がどんどん上がっていく。

そして次第にあまりのカウントのスピードに数字が読み取れなくなり、グルグルと回り出す。

そして一つの形となっていく、最後には となる!!!!

「ふ、ぎ、け、ん、なあああああ!!!!!!!!!」

「それはよお、お前さん……」

『「うちの台詞だ!!!!!!!」』

【B a k a t o T e s u t o t o S h o u k a n n n j j】

そして「奴」は二等分にされたまま地面にめりこみ、そして霧のよ
うに消えていってしまった。

.....

「いたいいたいって!!!!!!」

「こんな怪我してんだから、しっかり治療しなさい!!!!!!」

「でも、右足、繋がりがけてますよね？」

「まあね。でもここからがまた長いんだよね」

「まったく……終わったと思ったたらすぐに行くなんて言うんじゃない
から……」

「……せめて治療くらいさせろ」

「はいはい。分かりましたよー。ところでさ、今更だけど崩れた廊
下とか壁とか体育館って大丈夫なのか？」

「ま、そこら辺はババアも事情を知ってるだろうし、俺たちの証言
で今回根本は無実だとわかってるんだし、正直に言わないにしても、

それなりの言い訳をしてとりつくろってくれるさ」

「幸い、この学園は試験校だからね。そういった資金はあると思うよ?」

「じゃから心配することはないと思うぞ? 根本も大したことなかったみたいじゃし・・・ほれ、包帯巻き終わったぞ」

「こつちも終わったわよ」

「美波ちゃん、凄いですね。私怖くて見ることもできませんでした」

「まあ、アキにいろいろやってるからね。そういうのは見慣れてるって言うか」

「嬉しいんだか悲しいんだかわからなくなるなあ、それ」

「ん、よし。みんな、ありがとうな」

「よしてよ。友達でしょ?」

「は、確かにそうだ。ふふ、じゃ、俺は行くわ」

「こつちは、まあ任せておけ」

「ごめんな。本当なら俺から話しておくべきなんだが・・・」

「いいんじゃないよ。気にせず行くのじゃ」

「あいつがほかのところで暴れるんでしょ?」

「早く行って、助けてあげてください」

「ああ、行ってくる」

「……………(ボンボン)」

「あ？他の世界のエロ本は……………持ってこれないし送れないなあ」

「(ブンブンッ)……………そんなこと言っていない」

「さすがだよ、ムッツリーニ……………」

「ではな」

[Gate Open . . . Baka to Tesuto to
Shoukannn . . .]

「行っちゃったね」

「そつだな」

「吉井イ！！坂本お！！！貴様らが今回の主犯だということとはわかってんだあ！！！！おとなしく出てこいどこにいる！！！！」

「ゲツ！？鉄人！？」

「むっ、そこかあ！！！！」

「うわあ！！鉄人が来た！！ってかなんで！？」

「鉄人！！ババ・・・学園長から話聞いてねえのかよ！！！！」

「聞いてはいないがこんなバカのことするのはお前らしかおらん！！！！」

「逃げるぞ明久！！！！」

「分かった雄二！！！！こんな冤罪で捕まってたまるか！！！！」

「逃がすかアアア！！！！」

そうして再び始まる日常

彼らは再び走り出した。

「いい加減にあきらめろ！！！！」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

バカとテストと召喚獣 〳バカと想いとそのつながり〳 (後書き)

【バカとテストと召喚獣】

構成：” no Name ” 50%

” ライクル ” 30%

” フォルス ” 20%

最主要人物：吉井明久

- WORLD LINK - 〵 WEAPON 〵：想いを召喚獣のパワ
ーに

- WORLD LINK - 〵 FINAL ATTACK 〵：十五
天帝装備・それに見合った大きさに変化

今回これだけですごめんなさい BYアリス

アギト ～闇からの忠告～

レストランAGIT

今日はOPENではなく、貸し切りの札が出ていた。

そしてこの場には三人の男が集まっていた

則ち、津上翔一、葦原涼、氷川誠である

かつて人類の行き過ぎた進化を恐れた存在、闇の力の放つアンノウ
ンと戦ってきた、仮面ライダーアギト、ギルス、G3-Xである

「で、本当に始めるのか」

「はい！もちろんです。これからもアギトの力に目覚める人はたくさん出てくると思うんです。だから実際に悩んで苦しんだオレや葦原さん、そしてオレたちと長く接してきた氷川さんとでアギトの会を開いてそういった人を導いていこうかと、前々から思ってたんですよ」

「それは素晴らしいことです。しかし、どうやってアギトに目覚めた人を見つけたんです？」

この場合の「アギト」とは仮面ライダーアギトのことではない。人類の進化の可能性、すなわち超能力に目覚めた者のこと、もしくは目覚める現象のことである。

しかしその力はあまりに大きく、かつて人間を想像し愛してもいる存在「闇の力」はそんな人間たちを危険とみなし排除していたのだ。

その闇の力も今は退き、アンノウンの出現はなかったのだが……

「とりあえず二、三人は目星がついていますから……」

「しかし……最近またアンノウンの目撃情報が多々見られるようになったようですね……」

「そうですねですよ。こっちも仕事中来られて何度困ったことか」

「僕もまたG3ユニットに戻りましたし……」

「しかし俺や津上が到着する頃には全滅させられていたな……誰だ？」

「新しいアギト……か？」

そこまで話したところで、客席の角が輝き、声が聞こえた

《人よ、アギトよ。聞きなさい》

そこには黒いセーターを着た、中性的な顔をしたもの大人しそうな男がいた。

「!!!!!!!!!!お前は!!!」

「闇の……力」

「ばかな！津上さんが倒したはずでは……」

そう、この男こそアンノウンを送り、アギトとなる可能性を持つ人間を危険として排除してきた男である。

いや、男という表現は間違いか。この存在は半ば神のような存在なのだ。

《私はもはやアギトを襲わぬ。あるヒトとの賭けをしていてな……》

「なんだと?」

「そんな奴がなんの用だ!」

《アギトはヒトと共に生きて行けるのか、ヒトはアギトを受け入れられるのか。それを確かめるために、あなたたちには生きてもらわねばならない》

「だからなんだと！・・・」

《この世界に邪悪なるものが入り込みました。わたしの遣わした者も敗れ、世界の終わりが近づいています》

「それでアンノウンが・・・」

「むしろお前がやってるんじゃないのか！アギトを持つ人を襲ってるんじゃないのか!？」

「そう簡単に信じられるとも思ってるのか?・・・」

《そのものが現れた最新の場所を教えます。私はアギトの・・・人間の可能性に賭けてみることにしたのです》

「おい待て！」

《頼みましたよ・・・》

そう言って男は消えてしまった。

まるで最初からいなかったかのように

「……………どつする」

「あいつの罠かもしれない。行かないほうがいいと思います」

「オレも同意見だ。どう考えても怪しすぎる」

「でも、だったらこんな回りくどいことしますかね」

「確かに……………アンノウンの大群で攻めればいいものを……………なぜ？」

「津上、お前どうしたいんだ？」

「……………とりあえず確かめます。本当ならその悪い奴を倒さなきゃならないし、罠だとしても放っておいたら大変なことになる」

「では、行きますか？」

「仕方ない。こうなると津上は止まらん」

「じゃあ、行きましょう！…！」

津上と葦原はバイクに、氷川は車に乗って闇の力が示した場所に向かう。

.....

「……か」

蒔風が調べ物をしている。

ここは林の中である。

さっきまでここで「奴」が戦っていたようだ。

この世界にきてすでに二日、「奴」はなんとかこの世界の勢力・ア
ンノウンと衝突している

「この世界の……闇の力ってのか？は、「奴」がどんなモノか何
となくわかってるらしいな」

蒔風が林の中でしゃがみ込み調べる。

「あの野郎どこ行った？」

蒔風が地面に手を当て探る

すると手元が輝き、何かを読み取り始めた

探し出すのは「奴」がどっちに行ったかだ。

S I D E ライダー・S

ブオン、キキイ！

蒔風から離れた所にバイク二台と車一台がやってきた。

降りてきた三人の男が蒔風を見つけ、驚く

「本当に・・・いた？」

「待つてください。一般人かもしれない」

「なんだ？手元が光ってるぞ」

「あれは？」

「わかりません。でも、アギトの力は感じられないです」

「ならば本当に……」

「異世界の力？」

「ということがあいつが……」

「行きましょう！」

ババツ！！

葦原と氷川が茂みから飛び出し、蒔風に掴みかかった

S I D E o u t

「よし、あつちか」

蒔風が「奴」の向かった方向を探知し、そちらに向かおうとするど、茂みから飛び出した二人の男につかみ掛かられた。

「うひゃあ？なにが起きだ」

突然の出来事に無駄に訛った

そんな蒔風の口調を無視して、馬乗りになっている葦原が聞いた

「貴様！違う世界から来た人間か？」

「はい？え？なんで知ってんの？（。。；）」

「っ！やはりか！」

ガバツと蒔風を立たせ、殴る葦原

「痛っ！なんだよ！」

「貴様の思い通りにはさせん！（バツ）変身！！」

ヴァン！

葦原がギルスに変身し、蒔風に襲い掛かる。

「アガアアアアアアアアアア！！」

「なんなん？なんなんだ？なんなんなんん？」

「オオア！」

バギッ、ドゴッ！

「ブツ、ガッハ！いきなりなにすんだ！」

「ここに世界を崩壊させる邪悪なる者がいると聞いて来てみたら、
貴様がいた！」

「しかもどうやらアギトの力ではないようです。身柄を拘束させて
もらいます！」

ギルスと、拳銃を構える氷川が言う
それに対し時風は小さく悪態をつく

「決定的ってか。確かに「奴」がさっきまでいたみたいけど・・・
」

「なにをブツブツ言っている！」

ギルスが一気にその跳躍をもって時風に掴みかかった！！

ガッ、ガッ、ガシツゴロゴロゴロゴロ

蒔風とギルスが組み合い、転がる
蒔風はその勢いでギルスを投げ、

「緑のライダーかい。なら!!」

パア!!

蒔風の手首に変身鬼弦が現れ、それを用いて轟鬼に変身する。

「よっし・・・張り切っていくつスよー!!!!」

「くっそ!!!!」

ギルスの爪と音撃弦・雷電が火花を散らす。

「芦川さん!!!!（バツバ!!）はああああ・・・変身!!!!」

そこに津上が駆け付け、アギトに変身する。

「やっべー！フンツー！（ドッ！）」

「グガッ！！」

雷電をギルスの腹に突きたて、音撃を送り込む。

「音撃斬・雷電激震！！」

ギター之音が鳴り響き、突きたてた場所から火花が散り、ギルスが倒れる。

「葦原さん！！！！」

「ん？おおっ！？」

アギトが掴みかかり、投げとばす。

蒔風は変身を解いて着地した。

「なんだよあんたら！！世界を壊すのはオレ、ぬっはあ！？」

「やっぱりあなたが！！絶対にさせない」

蒔風の話す途中で、実にいいタイミングでアギトのパンチが襲いかかり、変な風に理解されてしまう。

「あー、もー！！いいぜ、いつペンブツ倒す！！それから話を聞いてもらっぞ！！（バツ、ヴォーン！）変身！！」

蒔風が今度はクウガに変身した

そしてイライラした声で言う

「人間の進化だか可能性だか知らねーが、所詮カテゴリーはまだホモサピエンス止まりだろーが。蒔風は、その上を行くぞ。人間の定義を外れてっからよお！！！！！」

クウガの姿に拳銃を構えた氷川が、四号？・・・などと言っていたが二人には届かないようだ。

カチツ、フオオオオオン・・・ヴァーン！！

アギトの右腕が赤くなりフレイムフォームに変わり、そのベルト・オルタリングからフレイムセイバーを取り出す

「ふっ、超変身！！！！」

一方クウガはタイタンフォームに超変身して、近くの棒きれを拾いタイタンソードに変える。

「はああああ!!」

ギイン!!

二人の剣がぶつかり合う。

しかしタイタンの防御力と、攻撃の重さに敵わず、弾かれてしまう。

さらに蹴りを織り交ぜながらクウガが攻める。

本来このような動きはできないはずだが、このタイタンは時風が変身しているものだ。

通常のクウガとは比べるべくもない。

アギトはそれを超越感覚でかわしていくが、素早い動きに向いたフォームではないため次第に追い詰められていく。

「そこだ!!」

アギトの背が木に当たる。

追い詰めたクウガと、追い詰められたアギトが同時に叫んだ。

クウガがタイタンソードを突き出すと同時に、アギトはストームフォームに変わり、オルタリングからストームハルバードを取り出し、そのままクウガに突き出す。

タイタンソードが剣なのに対し、ストームハルバードは両先端に刃のついた槍である。
長さの違いは目前であり、クウガが突っ込んだ衝撃をカウンター気味に食らう。

「ゲフツ！ーっちーならこっちは……」

クウガの姿が青く変わり、ドラゴンフォームになる。と同時にタイタンソードはドラゴンロッドと変わった。

「アギトと同じような変わる力……いや、似ているがやっぱり違う！」

「こっちはクウガだからねえ。そりゃ違うってのよっ、とお……！」

ガガガガガガ！……！！

クウガドラゴンフォームがロッドをダイナミックにブン回し、クルクルと回転していき、時には止まり、コンパクトに振りまわして攻撃を仕掛けていく。

しかしアギトはひるまない、クウガの回転に合わせて、うまくかわしていく。

さすがはスピードと俊敏性に優れたストームフォームだ、と言っておこつ。

そしてここぞで大振りになった時、グラウンド・ストーム・フレイムの三つの力を一つにした、トリニティフォームに変わり、フレイムセイバーとストームハルバードで切り殴り飛ばす。

ドラゴンフォームはスピードや跳躍力に特化するために、攻撃・防御力を捨てたフォームだ。その代わりにドラゴンロッドを装備しているのだが。

ゆえにその衝撃に耐えられるわけもなく、軽々と吹き飛ばされる。

「ドゥツガツハ!!!へっへっへ・・・フウ」

「ハアハア・・・グウウ・・・」

クウガはたった二撃打しか喰らってないが、相手はアンノウンや闇の力と戦った男。やはりダメージはそれなりであった。アギトもさんざん攻撃を食らい、結構ぼろぼろである。今までの反撃も、破れかぶれに出したものだっただけ。

「さあて、終わらせますかい!？」

「フツ、ハアアアア・・・（カチツ）」

ヴァン!!!ヴォーン!!!

クウガが黒の金の姿、アメイジングマイティフォームに

「津上さん！！！！！！」
「津上！！！！」

変身の解けた葦原と、氷川が叫ぶ。

爆炎が晴れた先に、膝をついて肩で息をする変身の解けた時風と、地面に倒れている津上がいた。

「オレさんの勝ちだ！！」

「まだ僕が！！！！」

「グッ、オレもまだ戦えるぞ！！！！」

「よつてえ！！！！！！」

時風が二人を威嚇するように大声を出し言葉をさえぎる。

「話を聞いてもらいますよ？そ・も・そ・も！！オレは世界を守りに来たんだ！！お門違いもいいとこだ！！」

「「・・・・・・・・・・は？」」

その言葉に、二人は固まってしまった

と、ぼやく「奴」がいるのは瓦礫だらけの崩れたビル群の一角である。

「そろそろいい加減にしてくれないと……ん？はぁ……またかよ」

うんざりしたように「奴」がその方向を見ると、複数のアンノウンのシルエットが見えた。

「いいぜ……かかってこいよ。オレをそんな簡単に倒せると思うなやぁ……!!」

爆発が起きる。

黒い波動にのまれ、アンノウン達が消え去った。

そして「奴」の姿も。

これから何をしますのかは、「奴」自信以外誰も知らない。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

アギト く聞からの忠告(後書き)

きゃーーーーーー!!!!!!

iPodがこ・わ・れ・たーーーーー!!!!!!

アリス「数日間いなしと思ったらそんなことが・・・なんでですか？」

編集していた

取り出そうとiTunesの取り出しボタンを押す

勢い余ってダブルクリック

何とiTunesとの同期が始まる

iTunesはからっぽなので焦る

キャンセルできない

焦って回線を引き抜く

見てみるとデータはあるのに全部その他扱いになっていた

「データはあるのにオーディオやビデオと認識されないんですか？」

そうなんだよー

今までも五、六回落としてるから、中身もガタガタなのかもね。

ア「買ったのいつでしたっけ？」

去年の六月

ア「ちょうど一年じゃないですか！ーしかも壊すの速！ー！」

うるさいうるさい！ー！

しかもめんどくさがってバックアップなんてとってないし
データ取ったCDはいくつか売っちゃったし・・・

ア「手元にはない者は買いなおさなきゃならないんですね？」

ですすね

ア「ま、ドンマイです。次回は、説明する時風、そして仲直りかー
らーの！？」

ムチャブリシナイデーー

ではまた次回

前回最後の忘れたので二個
しかも二個目長い・・・

目覚める、その魂

私は、人間の側からアギトを滅ぼすための使者としてあなたを復活させた。

・・・だが、その必要はなかったようです。
人間はいずれ、アギトを滅ぼします・・・

いや、あなたは人間を作りながら、人間の何を何も知らない。
人は、アギトを受け入れるだろう。人間の無限の可能性として・・・

・・・では、見守ってみましょう。あなたのことが正しいかどうか・・・

人間とは何なのか。もう一度、この目で・・・

ああ。きっと俺が・・・勝つぞ！

アギト ～最悪のシステム～

「って訳なんですよ」

蒔風が説明を終える。

林の中での衝突から津上が目覚めるのを待ち、落ち着いて話せる場所に移ろうということになり、四人はレストランAGIT に戻っていた。

「ではあなたはその「奴」を追って来て、ちょうど我々と鉢合わせしてしまったと……」

「……すまん」

気まずそうな氷川と謝る葦原に、蒔風はへらへらと笑い

「ま、紛らわしかったのはこっちもだし、お互い様ですよ。いやー、それにしてもやっぱり強いですね!」

「お前の方が断然強いだろう」

「確かにそうですけど……」

「否定も謙遜もしないんですね・・・」

「葦原さんも津上さんも、まだあれよりも先の力があつたでしょう？」

「・・・わかるのか」

「わからいでか」

「みなさん、できましたよー！」

厨房から津上が料理を運んでくる

「レモンのスパゲティです」

「レモンのスパゲッティー!？」

「違いますよスパゲッティです」

「いや、オレはスパゲティーだったと記憶するが・・・」

「まあ、なんでもいいじゃないですか!とにかく、食べてください
「よ

「レモンの・・・か」

「ああ、津上さんの料理は奇抜なものがほとんどですけど、とてもおいしいですよ」

「へえ・・・（パクリ）ん！うまい！酸味がいい感じに聞いていて、それでいて爽やかな感じ！」

「でしょでしょ！？いやあ、よかったよかった」

「にしても津上さんは気にしないん？」

「なにをですか？」

「いや、オレ散々殴ったからさ」

「いえいえ、むしろこっちの勘違いだったんですから！ほらほら、どんどん食べてくださいね！」

四人はその後雑談をしながら食事をする

「それにしても津上気づいているか？」

一段落したところで芦原が口を開いた。

「ん(ゴクン)はい、アンノウンですよね」

「ああ、さっきから出ては消えの繰り返しだ」

「「奴」を追っているな。間違いなく」

「というか津上さんも葦原さんもなんで言わないんですか!？」

「今回アンノウンの目的は人間じゃないからな」

「逆にアンノウンの気配を追えば自然と「奴」には辿り着けます。その前に腹ごしらえしないとでしょう?」

「しかし、「奴」は津上を殺すことで世界を取り込むんだろ?なぜここにこない」

「「奴」はバカみたいに強烈強大な力をもっているが、それはオレと同じか、それより少しだけ上程度だ。しかもこの世界では津上さんたちがいる。だから確実に勝つために利用できる何かを探しているのだからうな」

「だけどアンノウンたち闇の力は「奴」の事を知っています。利用できるものがあるのでしょうか・・・」

「大丈夫ですよ!オレたち三人に更に蒔風さん。それに今はG5ユニットっていうのもあるんでしょ?それだけあれば問題無いですって!」

「G5?」

「G5ユニットはG3ユニット解散後に出来た部所です。再び現れるかもしれない新たな敵や未確認に対抗するために日々訓練をしていますよ」

「でも氷川さんはG3-Xですよね？」

「僕はもうあれに慣れてしまっただけで……こないだG5を装着して動いてみましたけど、全然で……」

「でもそのあとG3-XでG5と模擬戦したら圧勝だったじゃないですか！」

「最新式に勝ったんだ。大したものだ」

「なるほど……で、なんで5なんですか？」

「え？」

「なんでG4ではなくなっただんですか？」

「あれは……存在してはならないものだからです……」

氷川が説明を始める

第4世代型対未確認生命体強化外骨格及び強化外筋システム・GE
NERATION - 4

通称・G4システム

かつてG3の開発者が更なる強化を目指し設計した機体

しかし、その使用には人を人と思わぬような副作用があった

まず装着者は最初は大丈夫でも、最終的には必ず死ぬ。

搭載されたAIが最も有効な行動を選択し装着者を動かすため、その負荷に耐えられないのだ。

しかも装着者が死んでもスーツがその体を動かし戦いつづける。

つまりはスーツを動かすのに人体というパーツが必要、ということである。

また、超能力者を利用したESPシステムと連動させることで、相手の行動の予知をすることが可能である。

そしてその超能力者もいずれは死ぬという、装着者と超能力者を消耗品として扱うシステムだったために、封印された。

前回、自衛隊の一部隊が暴走してG4システムを設計図を盗み、作り出しアギト達に牙をむいたのだ。

「その時は何とか事を治めましたけどね……」

「あのシステムは厄介だったなあ〜」

「と、なるとそれを利用してくるかもな」

「え？」

「「奴」にとってそんな負担などないに等しい。真の意味でG4システムを使いこなしてくるだろうな」

「ではまた・・・超能力者が利用される!？」

「いや、あくまで「奴」はその場に残る記憶から作り出すだけだから、それはない。それでも性能は生かされるから恐ろしいけどな」

「となると・・・あの研究所に!？」

「行きましようか？」

「・・・調べに行きましょう。「奴」がいるなら叩きつぶす。いなくてもその場にしみ込んだ記憶を利用できないようにする」

そうして彼らはかつての地獄へと向かっていった

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

アギト く最悪のシステムく（後書き）

アリスです

ごめんなさい

また作者が逃げました

今回は、研究所に巣食う者

ではまた次回

お前はアギトではない。何故これほどの力を……何者なんだお前は！

ただの……人間だ！！

アギト く地上での溺死く

山に囲まれた林

更にその中のすすきの生える平原に研究所はあった。

「ここ……か」

「では行きますか」

四人が到着し、早速中に入る。

津上、葦原、時風はそのまま進む。

「待つてくださいよー」

氷川は万が一のためにG3-Xを装着して行く。

「やっぱりG5の連中も連れて来た方が調べるのは速いんじゃない

か？」

「危険過ぎる。本来ならオレ一人で行きたかったんだがな」

というわけで、G3トレーラーと、二、三人のオペレーターを残し、四人は進む。

ゲートには黄色いテープが貼ってあり、鍵もかかっていたが

「ちょいや」

蒔風が「風」で簡単に鍵を壊しゲートを開ける。

中はかつて氷川たちがG4と戦ったときのままだった。

壊れた壁、割れたガラス、ひっくり返った車両。

そして最深部のコンピュータ制御室まで来てしまった。

部屋の中は踏み荒らされ、遮断目的のガラスが碎けて散らばっていた。

「この部屋は？」

「この部屋のあのシステムに超能力者の人を繋いで、G4に予知の結果を送ってたんです」

「その予知をもとに最善の行動をAIが弾き出す……か」

「まあ、「奴」はいないみたいですよね？」

「いないな……本気で気配消されるとわかんなくなるけど、そこまでやると「奴」が動いた瞬間にわかるからな。実質「奴」は動くん」

「じゃあ、この場の記憶つてのを封じて、G4を使えなくしましよ
う」

「だな」

時風が床に手を当て、記憶を使えないようにプロテクトをかけていく。

時風が途中、ん？と何か違和感に引っ掛かったが、滞りなく作業が
終わる。

「呆気ないですね」

「なら早く帰るぞ。ここにいると嫌なことを思い出す」

「?なにかあつたんですか?」

「この戦いでオレは一回腕を切り落とされたんだ。いい気はしないだろ」

「げ、そりゃ痛いですね」

「まあ、ギルスのおかげでなんとか再生出来たが、もう二度とやりたくないな」

「G4強烈だな」

「いや、オレはG4とは戦ってないぞ」

「へ?」

「G4とは津上さんも戦いましたが、本格的に戦ったのは僕だけです」

「じゃあ・・・なんで?」

「オレと葦原さんは乱入してきたアンノウンと戦ってたんです」

「アリみたいな奴らだつたな」

「待ってくれ!! だったらここには……」

「じゅーとー。つまりはそゆーと」

ズブアアアアアアア

声が出た瞬間、床から湧き出るようにアリ型のアンノウン、アント
ロードが出現して来る。

「……!? 変身!?!?!?!?!」

津上と葦原がアギトとギルスに変身する。

蒔風が壁を蹴り貫き、少しでも広い場所にでる。

それぞれが交戦しながら声を飛ばす

「やられた！！！！！」

「これは……このアンノウンは倒したはず！！」

「「奴」がこの地の記憶から作り出したレプリカだ！！！！性能はオリジナルと同等かそれ以上だ！！」

「記憶を使うのは封じたんじゃないのか！！！！」

「G4に関してはな！！何かおかしいと思ったんだよ。処理するときにもG4以外の記憶があったしな！！」

「なんでそれほつといたんですか！！」

「オレが手を出せたのは事前にG4のこと知ってたからだ！！知らないことには手を出せん！！」「奴」は間違いなく天才だよ。こうやって記憶を読み取って使いこなすことに関しては超一流だ！！」

「お褒めの言葉ありがとございませ〜す」

『!?!?!?!?!?』

そこに声が響く

壁を崩し続け、たまにはすでに崩れた壁を通過し、四人はトレーラーの止まる駐車場まで出てきていた。

そこは半分外になっている構造で、四人をアントロードが囲み、身動きが取れなくなってしまったところだ。

「奴」が姿を現す。宙に浮き、足を組んで座っている姿勢でだ。

「オレさんがG4使うと思ったっしょ? 違う違う。この大軍こそが欲しかったのよ!」

アントロードは蟻の、しかも軍隊アリのアンノウンだ。

雑兵の歩兵クラスが数百、行動隊長クラスの赤い個体が数十、そしてそれらを取り仕切るかのように輪の外に女王アリのクイーンアンロードがいた。

その動きはまさに一つの獲物に群がる蟻そのものであり、ただでさえ厄介な上に数で攻めてくるからたちが悪い。

アンノウン最大の特徴としては人間には絶対実行不可能な方法を用いる殺人、通称・不可能犯罪である。

そしてアントロードの殺人方法とは……

「やれ」

「奴」が短く命令すると、アントロード達が一斉に口から何かを吐き出す。

「伏せろ!!!」

ビシャシャ!!!

時風たちの頭上で液体がお互いにぶつかり、弾ける。

「なんだこれ……」

「数で潰せ。時間をあまりかけるなアリども」

シャアアアアア！！！！

アントロード達が一斉に襲いかかって来る。

四人は再び分散し、戦う。

G3-Xはガトリングを辺り一面に撃ち続ける。

その弾幕からは一体も逃れることはできない。

だが後続の者が次々と襲いかかり、徐々に後退していく。

一方ギルスはエクシード、アギトはバーニングとなって応戦する。

それなりの数を撃破していくが、やはり多勢に無勢

いつ終わるともわからないマラソンをしているようなものだ。

蒔風は三人が追い詰められるところに入り、押し戻していく。

隙を見て奴に向かおうともするが、アギトに加勢し凌いだら次はG3-X、次はギルス、またG3-Xに行き、アギトにと、きりがない。

しかしその均衡も破れる。

クイーンアントロードが蒔風の背から三又の槍「黄泉の鐙」あひみで蒔風を貫いたのだ。

「蒔風！！！！！」

蒔風はちょうどギルスの援護に入っていた。

混戦のため、小回りのきく「天」と「地」を使っていたが、それが仇となり防げなかったのだ
さらに誰よりも動きまわっていた蒔風の体力にも限界があった。

「ゴフツ？ゲツバアア！！！」

「そこだ！！蒔風を狙ええ！！！！！」

アギトやギルスが蒔風によるうとするが、ロードたちに防がれる。

そしてアントロード達が一斉に集まり最初に放った液体を飛ばした。

それはすべて時風の顔面に命中し、ある現象を起こす。

「ブツッブ！！ガ？ゴ、ゴボボボボオオオボ！！！！！」

「時風！！！」

時風の口元から気泡のようなものが漏れ出る。

.....

時風は今、溺れているのだ。

「チクシヨウ！！時風！！！」

「時風さん！！！！！！！」

さらにそこにロードたちが飛びかかる。

さ、行ってみよー！！

ア「溺れる時風、どうやって脱出するんだー？？」

ではまた次回

Ready to Go Count ZERO!! 仮面ライダー
アギト!!!

「ゴホゴホツ、エホツ！ハアツハアツハアツ！」

そこから蒔風が出てくる。

何かを担ぐように右腕を曲げ、手の上には圧水の力で集められた水球が浮いていた

「肺の中の水を抜き取ったか」

「フウフウフウ……ツ！ガブツ！」

「蒔風さん！」

「……づがみざん……」

「まずい……一旦退却を！」

「してほしくないなあ。メンドイだろ？」

「つく！」

「オレが時間を稼ぐ」

「葦原さん、ダメですよ！」

「しかしこの大群をどうすれば！」

「な、あ……ウォーターカッターっでじってるか？」

「は？」

三人が蒔風を庇うように立ち、目の前にはアントロードの大群。退けばすぐに圧殺されてしまうほどの脅威

そんな中で一番死にかけの蒔風がボソボソと言った。

蒔風を見ると、水球は左手に移され、そこから糸が伸びている。実際には超極細の水なのだが、パツと見ただけではわからない。

そして伸びた先は蒔風の右手人差し指の先端。

蒔風は指をアントロードに真っすぐ、左手で弓を射るような体制をとる。

「伏せろ！」

ビィィィィィィィィィィ!

三人が伏せる瞬間に指先から水が放出され、アントロードを切り刻んでいく。

目が覚める。

蒔風たちは五メートル程の高さで柱に一人ずつ縛り付けられ、身動きの取れない状態にある。

「お目覚めかい？寝坊だぞ、蒔風え！」

「奴」が宙で笑う

足元を見ると、アントロードがウジャウジャとうごめいていた。

「蒔風さん！」

「大丈夫か！？」

横を見ると、変身の解けた津上と葦原がやはり縛られていた。

氷川はスーツが上手く剥げなかったのか、G3-Xのまま縛り付けられている。

「大丈夫なもんかよ」

「奴」が蒔風に近寄り、上半身の衣服を剥ぎ取る。

「!!!!!!!!!!」

そこには、先程クイーンアントロードに貫かれた跡と、大小様々な傷跡、さらに開きかけた傷、血で滲んだ包帯が見えた。

「やっぱりな。貴様回復しきってないだろ？オラ！」

「イギツ！ガツブア！」

「奴」が蒔風の鳩尾に拳をめり込ませ、蒔風が苦悶の叫びと表情を浮かべる

「ふん、おかしいとは思っていたんだ。いくらか時間が経つてるとはいえ、あれだけの損傷を回復しきっているとは思えないってな」

「どういつことだ！」

氷川が「奴」に叫ぶ。

「奴」はそれに答えた。

「簡単なことだ。蒔風に限界が近いつてことさ。幾つもの世界で戦い、負傷してきた。ま、途中で回復を何度かしてはいるがな。それでもやはり限界が来てしまう」

「そんな・・・そこまで？」

「さっきのウォーターカッターだってそうだ。こいつはいざとなれば、自らの力を変換して水が無いところでも生成して使うことができる。だがそうしなかった。さらには指先まで裂けるしまつ」

「今にして見れば、ここ最近のワールドリンクも貴様自身は何もせず、最重要人物に任せただけのものばかりだったな」

「奴」の推測。

それは外れてはいない。

確かに蒔風の体はボロボロだ。

しかし……

「ガブツ……で？」

蒔風が口を開く。

「あん？」

「だからどうした」

「ほほう」

「オレがどんだけ死にかけようが、それがてめえの勝因になるわけじゃねえだろうが……」

「死にぞこないがよくいう」

パチン

「奴」が指を弾くと、時風の縄が切れる

時風の体が重力にまかせて落ちていく。

「食え。跡形も残すなよ」

「奴」が命じ、アントロードが時風の落下地点に殺到する。

そして時風が落ちると、

着地点周辺のアントロードが押し潰されるように地に伏せた。

「な、に？」

二人が再びエクシードギルス、アギトバーニングフォームに変身し、
蒔風に駆け寄るが

「三人とも！後ろに下がれえ！！又ウアアアアア！！圧水掌！！」

蒔風の構える手に水が生成され集まる。

頭上に集まった莫大なる量の水は、蒔風の振り下ろす動作によって、
残りのアンノウンたちを押し流し、壁に激突させる。

それでもなお水は襲い掛かり、影に押しやられたアンノウンと、後
から流れてくるアンノウンとぶつかり合い、一気に爆発する。

そして最後の一体を「風」で斬撃を放ち倒す。

「まだそれだけの事ができるか蒔風！！」

サアアアアア……………

そこに日の光がさす。

「やっとか……………問題だ。オレがなぜ……………一旦混闇陣を、発動さ

せたと……思っ?」

「な……まさか……雲すらをも捉えたというのか!」

その光を受け、アギトの装甲が殻のように剥がれていく。

アギト・シャイニングフォーム

その輝きは、可能性。人類の無限の未来の輝き!

そして時風が開翼し、さらなる切札を!!

【KAMEN RIDER AGITO】- WORLD LINK
- WEAPON -

時風の背の翼が粒子となって散る。

その粒子はアギトの背に宿り、ふたたび翼として顕現する!!!

「(まずい……あれは闇の力すら恐れた人類の可能性……それにあいつの翼が付いたら!!!)(ツツツチイ!!!)」

「かましてやれ……」

【KAMEN RIDER AGITO】 - WORLD LINK
- FINAL ATTACK -

「ハアアアアアアア……」

アギトの足元に紋章が輝く。

そのエネルギーを右足に込め、その翼をもって上空へと飛びあがる
!!!!

「ハッ!!!オオオオオオオオオオオ!!!!!!」

そしてキックの体勢をとると、「奴」までの直線上に、五つの紋章
が浮かび上がる。

一つ目はアギトの、二つ目はギルス、三つ目はGX、四つ目は
もはや存在しないライダー・アナザーアギトのもの、そして最後に
シャイニングアギトの紋章であった。

バツサア!!!!!!!!ゴオウ!!!!!!!!

「ハアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

「寝ぼけんなアリども!!!!!!!!!!せめて盾にはなりやがれ!!!!!!!!!!」

ズグアアアアア!!!!!!!!

再び作り出されるアントロード・レプリカ。

しかし止まらない。

止まるわけがなかった。

その身に宿すのは人の未来。

背にあるものはその希望なのだから……

「ぬっがああああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドドオオオオオ・・・

爆発が起き、「奴」が無様に転がる。

シュウシュウと身体が消えかけている。

頭を振り、手を当てながら、それでも立ち上がるつと顔をあげるが

「愉快だな。愉快ついでに死んでおけ」

パン

時風が「奴」の目の前に立ち、至近距離から撃った。

G3-Xの装備品である銃、GM-01 スコーピオンで一発だけ。

その一発の銃弾で「奴」ははじけ飛んで、消えた。

「は、だから言っただろ……お前の勝因にはならない……
つて……な……」

それだけ言っただけで、時風が倒れる。

「時風さん!!」

「時風!!」

「大丈夫ですか!」

三人が駆け寄り、時風を揺する。

しかし時風は目覚めない。

三人の声がだんだんと遠くなり、時風の意識は闇に沈んだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「じじは……」

「あ……翔くん!!目が覚めたよー!!」

「（バタバタバタ）蒔風さん!!目が覚めましたか!!」

「傷は大丈夫なのか？」

「本当によかった!!」

「あ……じじは……」

蒔風が目覚めるとそこはどつやらどつかの一軒家の寝室のようだった。

「じじは僕が前にお世話になっていた家です」

「風谷真魚かみやまなです。身体、大丈夫ですか？」

「彼女が治してくれたんだ」

「治したって……」

「彼女は超能力者で、僕も何度かお世話になってるんです」

「オレも命を救われた」

「生き返らせるのはもう無理ですけど……怪我の治療くらいなら何とか」

蒔風が自分の身体を見て、手を見て、グーパーグーパーして身体を確かめる。

「すっげえ……ありがとうございます!!!」

「しかし……今回はありがとうございます」

「ほとんど蒔風に戦っても立ってばかりだったな」

「俺たち……蒔風さんの足手まといにしかならなかったですね……真魚ちゃんがいなかったら死なせてしまっていたかもしれませんが……」

「いや……俺一人でもやられていた……最後のあの一撃。あれはオレでは出せない。だから津上さんたちがいて本当に助かりました」

「まあ、あれから二日も寝てれば身体もそれなりに治りますよね」

「二日!?!?」

「ええ・・・どうしました？」

「大変だあ・・・オレすぐに行かないと!!!」

「待ってください!!確かに傷は治ってますけど、まだ安静に・・・」

「「奴」は次の世界に行ってしまったてるんです!!やばいやばい・・・次の世界が多重世界だといんだが・・・」

「多重世界？」

「一つの世界の中にいくつもの世界が内包されている世界です。ほら、異世界に飛んだ〜なんてものがそんな感じですよ」

「へえ〜」

「でもそんな世界そうそうないですからね。では、ありがとうございますでしたね。ありがとうございました!!!」

[Gate Open...KAMEN RIDER AGITO]

「あ、まって・・・」

「すまん!!一分一秒が惜しい!!」

「蒔風さん!!!ありがとうございます!!!」

しかし今夜はいつもと違う。

街の一部が結界に包まれ、その中で戦いが繰り広げられている。

「ハアハアハア」

「もういいよ！！君は僕を置いて逃げて！！！」

一匹のフェレットが言葉を発する。
それを抱えて逃げる小さな人影。

「そんなことできな「僕は足手まといだ！！君だけなら逃げられる
だろう！？」……………」

ドオン！！！！

後から追ってきているモノは、異形のモノだ。

灰色のもやみたいのから、触手の生えた化け物だ。

「そうだな…………足手まといは捨てるか……………」

「ッ！！そう…………だよ…………それがいいんだ……………」

「だから……オラ!! (ブンッ!!)」

「え? うわあああああ……」

小さな人影がフェレットを投げる。

その小さな姿が飛んでいって見えなくなる。

飛んで行った彼はその先で一人の少女と出会うのだが、それはまだ誰も知らない

「さてと、足手まといもなくなったし……」

背後に迫る化け物に小さな人影が言った

「ブチノメさせてもらいましょか。覚悟しろよ? オレの全力全開は、ちっとばかりキキきすぎるぞ!!」

t o b e c o n t i n u e d

アギト　↳死にかけのWORLD　LINK↳（後書き）

終わりましたな。アギトの世界！！

アリス「今回蒔風かなりまずかつたんじゃ？」

ですねー

というか、蒔風に与えられた「勝ち続けなければならない」という条件がまず異常なんですよね

ア「そんな人はまずいませんもんね」

それをしなきゃいけない蒔風は相当つらいですよね……

ア「あれ？そういえば世界が一つ終わったのに彼来てませんよ？」

ああ……それね……

ア「……まさかあなた……」

めんどくなりました

ア「このダメ作者！！でも私は許します」

なんで？

ア「出番増えるし」

このダメ管理人

【仮面ライダーアギト】

構成：” フォルス ” 70%

” LOND ” 30%

最主要人物：津上翔一

- WORLD LINK - } WEAPON } : アギトに銀白の翼を
付与

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : それ
からのシャイニングライダーキックスペシャル

さて、次の世界は長くなります。

よって後書きの最後の言葉がネタ切れになる可能性大です。

ア「名言っていっぱいありそうじゃないの？次のって」

だって次の世界はストーリー丸々使いますもん。

ア「おや、今までののは話が終わった後に介入していたのに？」

そついう場合もありますよ

ではござい

ア「次回、ついにキタ！！魔法少女！！！！」

ではまた次回

風は空に星は天に　そして不屈の心は　この胸に！！！！

なのは　　突然の襲来なの？

どうもこんにちは、高町なのはです。

ついでにだまでは普通の小学三年生だった私ですが、最近魔法少女になってしまいました。

違う世界からやってきたユーノくんと一緒に、危険な古代の遺品、ロストロギア・ジュエルシードを回収するお手伝いをしています。

そんな魔法少女のお仕事に慣れてきたある日のことなのですが・・・

.....

「なのは！...こっちだ！...」

「うん...」

私は今、ユーノくんと一緒に森の中に来ています

ユーノくんっていうのはジュエルシードを追っかけてやってきたフレットで、私の魔法の先生です。

森の中って言っても、実は友達のスズカちゃんの家の裏なんですよね
スズカちゃんのおうちにアリサちゃんと遊びに来ていたんだけど、
途中でジュエルシードの反応があって抜けだしてきちゃいました。
うー、さっきまでいろいろとお話してたのに〜。こないだのテストのこととか、転校生のこととか……

でもしょうがないよね……

それで、駆け付けた先でユーノくんが張ってくれた結界の中で見つけたのは……

883

みゃーん

「う……」

「お……」

ズシンズシン……

「あ、あれは……」

おっきな子ネコちゃんでした。

大きさが十五メートルぐらいの大きな子ネコちゃんでした。

「た・たぶん・あの猫の大きくなりたいていう願いが正しく
かなえられたんじゃないかなと……」

「そ……そつか……」

大きくなるって違うと思うけど……

さすがいろんな願いを叶えるけど、その方法に問題のあるジュエル
シード……

「でも、このままじゃ危険だから、早く封印しないと」

「そうだね……あのサイズじゃ、すずかちゃんも困っちゃうだろう
し……」

あの猫ちゃん、よく見たらすすかちゃんの飼っている猫のうちの一匹だ。

「襲ってくる様子もないし、ササッと終わらせちゃおう・・・レイジングハート、お・・・」

ギョオオオオオオオオオオオ
ドパン！！

みゃああん！！！！

レイジングハートを起動しようとしたら、何かが飛んできて子ネコを攻撃してきた。

誰！？

そう思って飛んできた方を見ると、そこには・・・

「バルディッシュ、フォトンランサー、連撃」

《Flier fin》

空を飛んで、子ネコに近づく。

するとあの子からの魔法攻撃が飛んできた

《Wide area protection》

防御魔法を張って、それを防ぐけど、庇いきれない！！

子ネコの足元に打ち込まれて、子ネコが倒れてしまった。

それに合わせて地上に降りる。

近くの木にあの子が降りてきた。

遠くてよくわからなかったけど、私と同じくらいの女の子？

「同系の魔導師・・・ロストロギアの探索者か」

あの子・・・怖い・・・
なんて・・・さみしそうな・・・

「バルディツシュ・・・」

《Scythe form Setup》

「バル・・・ディツシュ?・・・」

それがあの子のデバイスの名前みたい

そのバルディツシュが鎌みたいな形に変わった。

そして足をすくうように切りかかってくる!!!

《Evasion・Flier fin》

レイジングハートのおかげで空中に飛んで回避できた。

危なかった〜〜

それにしても・・・速い・・・
私よりも・・・ずっと強い!!!

《Arc Saber》

さらに攻撃が来た。

斬撃を飛ばすよつにくるくると回りながら魔法攻撃が飛んでくる!!!

《Protection》

とっさに防御してさらに上に上がるけど、追ってくる!!! 避けられない!!!

ガキイ!!!

だからレイジングハートで受け止めたけど・・・やっぱり速い！！！！

「なんで・・・なんで急にこんな・・・」

「答えても、多分・・・意味がない」

そんな・・・そんなことないよ！！！！

「くっ！！」

ガン！！！！

距離をとって、あの子のデバイスが最初の形に戻る。

《Device form》

《Shooting mode・Divine buster
tandby》

お互いにデバイスを向けあって止まる・・・

あの子……やっぱり私と同じくらいの子だ……でも……

みゃーん……

え？子ネコちゃん？

なのはがそつちに気を取られていると、少女のデバイスに魔力が集まり

「……………」

《fire》

ドン!!!!!!!!!!

ドカアアアアア!!!!!!!!!!

爆発が起き、なのはを巻き込む。

「なのは!!!!!!!!!!」

ユーノが叫ぶ。

撃った方の彼女はこれで終わったと思った。

だが……………

「呼ばれなくても!!!!!!!!飛びでて現れじゃじゃじゃじゃーん!!!!!!!!!!」

「え？」

「は？」

「……？」

三者三様に驚いている。

なぜならさつきまでいなかった人物がそこにいたのだから。

その人物の身長はなのはより少し高いくらいか。

砲撃からなのはを守ったようである。

「あ……………っ！……きみは……………」

ユーノがその姿をはつきりととらえ、また驚きの声を上げる

「きみは前に助けてくれた子!!!」

「おーう、フェレット君。あときの怪我は大丈夫かい!!!それと・・・」

彼が振り返り、なのはの方を向く。

そこでなのははこの少年がだれだかわかった。

「転校生の・・・蒔風くん!!!??」

「そのとーりり!!!」

パンパン、と手を叩いてから再び少女の方に振り返る蒔風。

「なのは!!!彼を知ってるの!??」

「えっと・・・うちに来た転校生なだけで・・・ユーノくんも知ってるの?」

「なのはに最初にあつたあの夜に助けてもらったんだ。でも・・・」

「おお、あんときな、ブン投げて悪かったなあ。あの後あいつらぶちのめそうとしたらピンク・・・いや、桜色だな。魔法光が見えてよ。そしたらあいつらそっち行っちまうんだもの」

「じゃ、じゃあああるときユーノくんが言ってた助けしてくれた人って・・・」

「俺さんだよ」

「私と同じ年なのに・・・」

「ん？ああ、この姿ね・・・それは・・・」

「それよりも！！・・・なんで君がこんなところに！？きみは・・・何者なんだ！？」

「へへっ、そんなことはこの場において些細な問題だ。そんなことより・・・おい君！！黒いが影みたいなやつ知らないか！？」

「・・・知らない。あなたも・・・ジュエルシードを狙って？」

「そっか、知らんか」

「あれは危険なものなんだ！！それがわかって・・・」

「やめとけよ」

「な！！！」

「ありゃ挺こ子でも動かないぜ？」

「それは……」

「一つ一つが強大な「魔力」の結晶体で、自覚の有る無しにかかわらず周囲の生物が抱いた願望を叶えるロストロギア、ジュエルシードか……」

「渡さない……それは……私に必要なだから……」

「はん……こっちはクラスメイト襲撃されたんだ!! そのまま黙ってはいそうですかなんて行くと思ってんのかい!？」

「だったら……ちからづくで!!!!」

ブオン!!!!バキ!!!!

最初の音は少女がバルディッシュを振るう音

そして二個目は、時風がそれを蹴り、軽くはじいた音だ。

「!!!!!!」

「手加減なしだよ。ハアアアア……変身!!!!」

ヴァン!!!!

「仮面ライダーアアアアアア！……アアギトオウ！……ってか、変身すれば元の大きさになんのかい……！」

「なにあれ！？」

「まほう！？」

「違うんだよなあ……ま、説明は後ですよ」

「大きくなった……変身魔法？」

「うーんやっぱりちっと違うんだよな。ハッ」

アギトがトリニティフォームになり、少女に切りかかる

それをバルディッシュで受けとめるが、止めきれず、地面にまで降りてきてしまう。

「そっからのライダー……！！キ……ク……！！」

「!!!!!!」

《p r o t e c t i o n》

バチい!!!!!!

「ぬっ、おお!?!」

「くっ」

少女の展開したバリアで、ライダーキックが弾かれ、両者共にバラスを崩す。

少女が体勢を戻すと、すでに蒔風は変身を解いて接近していた

「ッ!?!はや……」

「力を借りる!!!!!!」

蒔風が一瞬だけ薄く光って、少女の肩をガシッとつかむ、そして借りた力を発動させる!!!!!!

「貧乳はステータスだ!!!!!!希少価値だ!!!!!!」

なのは予想外の状況におろおろしていると、少女がジュエルシー
ドを封印してしまった

「ま・・・まで!?!?!」

「まって・・・あなたのなM」

「ジュン!?!?!」

なのは言い終わらないうちに、少女は去って行ってしまった。

二人とも、それを見ていることしかできなかった・・・

「ユーノくんあの子は・・・」

「たぶん、僕がいた世界と同じ世界の住人だ」

「そう・・・なの・・・」

「それよりも、彼は何者なんだ？」

「あの子より強かったよね……」

「蒔風……だっけ？」

「うん、蒔風舜君。そっかあ、ユーノくんを助けたのって蒔風くんだったんだ」

「そういえば彼、出会ったときに変なことをいつてたな……」

「なにを？」

「主要人物とか、なんでちっこいんだとか……」

「そういえば姿が変わった時にも「元の大きさ」とか……」

「でもこのままじゃ……」

「とりあえず……運ぼうか」

「すずかちゃんになんて言おう……」

そうしてユーノの魔法で近くまで運び、庭に差し掛かるところで降りし、みんなを呼ぶ。

侵入者だと騒がれ、すずかやアリサからも怪しまれたが、なのはの弁解で何とかことなきを得た。

「あ・・目が覚めたんだ!!」

あとからなのは、月村すずか、そしてフェレット・・・ユーノが入ってきた

「あーそっか、オレ倒れて・・・」

「あんた!! 転校生の蒔風でしょ!?! なんであんなとこいたのよ!!」

アリサがすごい剣幕で詰め寄ってくる。

それもそのはずである

アリサやすずかはかなり凄い大金持ちの家の子だ。

ゆえに、誘拐などに狙われることが多かった。

そんなすずかの家にいたという蒔風は、怪しまれて当然である

そんなアリサに蒔風は

「冒険したかったから」

なんて答えた

「……はあ!？」

「冒険したかったからだ!……世界はでっかい宝島!……そうさ今こそアドベンチャー!……!」

「バカかあんた!……!」

「アホとって!……!」

「ダメだこいつ!……!」

「まあまあ……」

「二人とも落ち着いて……」

「とにかくだ、俺ってこの町に来てまだ間も無いからさ、いろいろ歩いて回ってたのよ」

「それでウチの敷地に？」

「セキユリティーがあつたはずよ!……」

「ん？金網が破れていてそっから入ったんだよ」

「そうなんだあ」

「そうなのだ」

「すずか!!信じるの!?!」

「うーん。どうだろ。なのはちゃんは?」

「えっ?わたしは・・・大丈夫だと思うよ?」

「そんな・・・なのはまでえ」

「じゃあどうやってたら信じてもらえますかねえ」

「・・・そうね・・・じゃあ・・・」

ドーン!!

「これで決めるわ!!」

「おい、その嘘発見器はどこから出した」

「気にしたら負けよ」

「そ・・・そうか」

「えーっつと・・・よし、準備完了!!!ぜんぶNOで答えてね」

「びび〜んとうびび〜い!」

「いくわよ〜。あなたは侵入者である」

「ノー」

ピーーーー

「アウトオ!」

「まてまてまて!!オレが侵入してしまったのはわかってんだろ! ?問題はオレが誘拐とか考えてるかどうかならう!」

「そ・・・そうだったわね・・・じゃあ、あなたは犯罪目的でこの家に来た」

「無論、ノーだ」

.....

「本当のようね・・・」

「ふっ」

「よかった〜」

「いやホントにね。『誤解が解けてよかったよ』」

「!!--!」

『これ、念話ってんだろ？便利だねえ』

『なんで・・・やっぱり魔法関係の！？』

『それはおいおい説明しますよ』

「でも、もうこんな時間だし・・・」

「そうだね、もう帰る時間ね」

「あ、じゃあオレも帰ります」

そうして、なのはとその兄の恭也、アリサ、蒔風は月村家のリムジンで送ってもらった。

「ここですよ」

アリサを下した後、高町家へと向かっている途中で、蒔風が声をかけた。

「え。でもこっつて・・・」

「公園だぞ」

なのはと恭也が驚く。

確かにそこは公園で、周りに家は見当たらない。

「大丈夫ですって。では・・・」

そう言っつて蒔風は降りて行ってしまった。

「・・・怪しいな」

「お兄ちゃん？」

「なのは、あの子確か転校生なんだよな？」

「そうだけど・・・」

「あの歳であの動き・・・普段の行動に出るほどに染みついてい・・・
・・・いたい・・・」

「どづしたの？」

恭也がブツブツと何かを言ってるが、なのはには聞き取れない

「なのは。追っぞ」

「え!？」

「あの少年に興味がわいた」

「お、お兄ちゃん？あ、待ってよ〜。すみません、待っててもらえますか？」

なのはは運転手に頼んでから、恭也を追う

恭也はすぐに見つかった。

公園の茂みの向こうに時風がいるようで、気に隠れて様子を見ている。

なんか唾然としているようだが……

なのはもそっと近寄って覗きこんだ。

そこには……

「あるっ晴れった日ーのことーまほーいじょーのゆーかいがー
ー……」

蒔風がいた

しかもそれだけではない

テントが張ってあった。

テントのちよつと離れたところに、グツナイ！！（笑）とかかれた
看板が割られて捨てられてる。

蒔風が桶とタオルといくつかの衣服をもっている。
これから銭湯に出かけるみたいだ

蒔風が桶から石鹼を落とす。

拾って顔を上げた時に、なのはと目があった。
同時に、恭也にも気付く

「……………」
「……………」
「……………」

「……………ナズエミデルンデイス!!!」

「?!?!?!?」

「ハッ!!!すまない、取り乱した……」

「えっと……蒔風くん？」

「何でしょうか高町さん」

「なのはでいいよ。……」のテントは？」

「オレン家だけど」

「え……………?!?」

「君はそんなところで暮らしてるのか!?!?」

「あ、高町さんのお兄さん」

「恭也でいいよ」

「ええ、まあ……こんななりじゃホテルは無理ですし……」

「……………親は?」

「空に……行きました」

「そ、それは……」

「今どこの辺飛んでんだろ。飛行機落ちなきゃいいけどなー」

「旅行!？」

「いいえ、パイロットです」

「二人揃って!？」

「いえ、母はフライトアテンダントです」

「死んだみたいに言うな!!」

「はぁ……すみません」

「……で、こんなところに?」

「家はどうしたの?」

「人生これ、サバイバルだ!!って言われました」

「凄い環境だね……」

「……君、うちに来てみないか?」

「え?」

「こんな状況を見て黙ってはられないよ」

「マジすか!! 助かります!! あなたは神か!？」

「それほどでもないよ……」

「ま、待ってよお兄ちゃん!!」

「ん? どうしたなのは」

なのはは狼狽している

そりゃそうだ、昨日までクラスメイトだったのが急に同居人になってしまうのだから。

しかも一般人ではないらしい

それになのはだつて女の子なのだ。

男子が急に来ても困ってしまう。

「???? よくわからんが…… 蒔風くん、では来てくれ」

「はいな、ではちゃちゃっと片付けますかね」

そうして蒔風と恭也はテント一式を片付け、先ほど待たせたリムジンに乗せ、三人で高町家に向かった。

家について恭也が事情を説明する

そこでなのはこんなことを考えていた

「（大丈夫、大丈夫。お父さんもお母さんもそう簡単にオーケーするわけが……）」

「うん、いいよ」

「嘘お!?!?」

「なんだ、なのは。彼に公園生活をしろというのかい?」

「う……」

そう言われては言い返せない。

蒔風は家にある道場で寝泊まりすることになった。

「さて、条件通りにしてもらおう?」

「え?条件?」

「なんだなのは、聞いてなかったのか。蒔風くと恭也で一手手合

わせ願うとிட்டただろう」

「彼の動き一つ一つを見ればわかるよ。彼は強い。そこで家での居候の代わりに、一戦やってもらおうというわけさ」

「ま、いいですけどね」

二人が木刀を構える

戦いが始まる………終わった

「早あー!!」

「つ……強い……」

勝負は一瞬だった

恭也が攻め込み、上段から振り下ろす。

蒔風は上に木刀を放り投げ、その木刀を白刃取りする。

そして動きの止まった恭也の脳天に、先ほど放った木刀が命中したのだ

それだけだった

「オレの呼吸に合わせて飛び込んで、白刃取りだと?………しか

も完璧に……」

白刃取りというものは言うほど簡単なことではない。

なにせ相手の動きに反応して手を出すのでは遅いのだ。

相手の重心、腕や足の筋肉の動き、視線の先。

その他諸々を観察し、はじめて実行することができるのだ。

「蒔風くんの勝ち!!!!」

そうして、恭也と蒔風は別々に風呂に入り、寢床についた。

『ユーノくん……』

『うん、彼に話を聞いたら、今だね』

なのはがユーノを抱え、そつと部屋から抜け出し向かう先は時風のいる道場。

「来たかい」

「お話・・・聞かせてもらえるよね？」

「おっけーおっけー。なにから話すかね」

そつして時風が話し始めた

t o b e c o n t i n u e d

できたらでいいですからねー！！！！

調子乗ってすみませんでしたあ！！

ア「そういうはこの話は無印？それとも劇場版？」

似てわかるように無印です。

実は劇場版に進めたかったのですが・・・

ア「ですが？」

細かいセリフなどがうる覚えでして・・・

ア「ああ、DVD早く欲しいですよね」

そうそう、そっちの倉庫バンクにも無くてさ

ア「へえ・・・ってか今の発言意味わかりません」

ま、すっるーしてよ

そういうわけで無印です

でも、演出とかSLBとかの迫力は劇場版のまま想像してください

ア「劇場版を無印で補完してるようなものですね」

そんな感じをお願いします

ア「次回、説明入りまーす。そしていい湯だな」

ではまた次回

リリカル マジカル！！

なのは、男の戦いなの？」

時風があらかたの説明を終えた。

ユーノが口を開く

「じゃあ、君がいたのはどこの管理外世界なんだ？」

「違う違う。そういうのも引ってくるめて違う世界からきたんだ」

「どづいつことなの？」

「いいか？つまりだな」

時風が紙を取り出して二つの丸を書く。

「こっちの右の方がオレがいた世界。で、こっちの左の方がなのは
つちの世界」

「うんうん」

「オレはこの間を飛び越えて来たわけだけど・・・」

時風がなのはの世界の方の円の中にさらに幾つかの丸を書き足して
いく

「こんな感じなんだよ。幾つもの世界が内包されている世界。それがこの世界。で、オレはそれよりも高い次元で世界を越えてきたんだ」

「そんなことが・・・」

「僕たちが行き来する世界よりも高次元の・・・」

「私と同じ年なのにすごい」

「いやいや、オレは年上だぞ」

「・・・え？」

「オレはもつと年上なんだよ。ただ「奴」が狙ってくる以上、オレはなのはと接触しなければならぬ。でも、大きな男の人が小学三年生に近づいていくのは無理がありすぎる」

「そ・・・そんなこと」

「いきなり知らない人に「君は狙われてるんだ。お兄さんが助けてあげよう」って言ったらどうするよ」

「デイバインバスター」

「だろ？」

「なのは!?!」

「ち、違うよユーノ君。例えばだよ、例えば」

「だからこんななりだがオレは同級生じゃなくてお兄さんなんだよ」

「えー？でもそんな感じしないし・・・」

「おい・・・まさか・・・」

「同級生だと思ってるよ？私は」

「あ・・・ま、いつか」

「それで、なのはが狙われてるって？世界を喰らうって」

「そうなんだよ。「奴」はなのはを狙ってくるだろうね」

「じゃあ今も危ないんじゃない？」

「いやあ、かなり先まで大丈夫だと思うよ？」

「なんで？」

「いったら？この世界は多重世界だ。で、世界を解析するのも当然時間がかかる」

「だから当分は大丈夫？」

「そゆことだよ。だから今は当面の問題に集中しようか」

「ジュエルシードの回収・・・」

「それからあの子……名前……聞けなかったな……」

「ジユエルシードを追ってりゃまた会えるさ」

「そう、だね」

蒔風との話が終わり、なのはは自室に戻りベッドに入る。

眠気はすぐにやってきた

.....

「温泉街……ですか？」

「そうそう。行くからね」

次の日の朝。朝食をとっている時のこと

高町家の家長、高町士朗さんに今度の連休に、温泉街に家族旅行に行く旨を伝えられた。

高町家の経営する喫茶「翠屋」は年中無休なのだが、連休の時には店員さんに任せて家族旅行に行くのが定番らしい。

「そうですね。では留守は任せてくださいー!!」

ま、「奴」も動かないだろうしね。

この家の安全は私が守ろうー!!

「なに言ってるんだい？君も来るんだよ？」

は？

「・・・今何と？」

「だから、舜君も来るんだってば」

「まてなのは。なんだそれは。舜君ってのやめてくれ。くすぐったくなる」

なのはは朝起きた時からオレのことを「舜君」と呼ぶ。
まあ小学生なら普通かも知れんが・・・

「えー？だっってお友達でしょう？」

ぐっ!!

や、やっぱりなんか主要人物たちは名前で呼び合うのが普通みたいになってる。

慣れようとも思うが・・・いまいちうまくいかない

「それよりも、君は今はこの家に住んでいる。仮にも今は家族なんだから」

「行くんですか?というか、行ってもいいんですか?」

「なにを遠慮するんだい?」

「いやまあ、行ってもいいと言われれば行きますけど・・・」

「じゃあ決まりだ。」

「あ・・・はい。分かりました・・・」

決まってしまった

そして学校に向かう。

私立聖祥大附属小学校3年生

それがこの世界でのオレの肩書だ。

しかし小学校の授業なんかまともに受ける気もしないのだが……

今は高町家に居候の身。

ここで俺が授業フケたりしたら確実に土朗さんに連絡が行く。

そんな迷惑はかけられない。

だから俺は授業中はずっと別のことを考えたり、ノートに落書き、借りた力の残り時間の算出などをして時間をつぶした。

世界の構築を解くのも楽しそうやってやってみたが、すぐに飽きてしまった。

そうして昼休みである。

「えーーーーー!!!???こいつもくんの!?!?」

と叫ぶのはオレの右隣のアリサ・バニングス。

ちなみに正面に月村さん、左にはなのはだ。

机を二つ並べて四人で昼飯を食っている。
最初は屋上に行こうかとも思ったのだが、なのはに引きずられてきてしまった。

ちくしょう、弁当人質にするのは卑怯だ。

こいつオレが実はもっとお兄さんだって完全に忘れてんな？

そして食べながら話していると連休の話になった

どうやら月村さんとそのメイドさん、それとアリサ・バニングスも旅行に来るらしい。

「な・ん・で！！こいつもくんのよ！！」

「お父さんが連れていくって」

「はあ？ちよつとなのは。いつ決まったのよ」

「今日の朝だよ？」

「今日の朝って・・・まさかあんた！！」

「舜君はウチに住んで「バツ、なのは」の」

「止められなかった・・・」

「そんな！！あんた！！なんでくんのよ！！ってかいんのよ！！」

「俺だった遠慮したさ。だけど土朗さんが「今は家族だからね」って言うてくれたんだから、いやだというのは失礼になる」

「~~~~ツ！！時風舜！！あんた旅行先で変なこととして台無しにしたらただじゃおかないからね！！」

「心配するなアリサ・バニングス。そういうのを盛り上げるのは得意中の得意だ」

「時風くん、そういうの好きなんだ」

「任せてくださいよ月村さん。楽しく行きましょう！！いえ~~~~い~~~~！！」

「さすがでいいよ？うん、いえ~~~~い~~~~！！」

「ほら、なのはも、いえ~~~~い~~~~！！」

「い、いえ~~~~い~~~~！！？」

「あ~~~~も~~~~！！！！！！！！！！」

そうして当日

向かう先は海鳴温泉。

そこで二泊三日の温泉旅行だ。

大体いつもの定番らしい

『わーーーーー!!!!』

温泉街につくと女性陣が声をあげる。

やはり女性にとって温泉というのは素晴らしいものなのだろう。

「早速行こうよ!!」

「まずあれに入りたい!」

「うんうん!!」

女性陣は早速入るらしい。

さて、オレも入ってこようかねえ。

するとなのはがユーノを連れて行くこととする。

「なのさんや。動物は入れてもいいのか？」

「ん？大丈夫みたいだよ？」

なるほど。ペット同伴オーケーというわけか。

じゃあオレも入った……ピキューーン!!!!

『ユーノ!!!!』

『え!?!な、なに舜?』

オレはユーノに念話で話しかける

これは……まずいかもしれない!!

『おまえ、温泉って何か知ってるのか!?!』

『え?よく聞かされてないけど……』

『いいか……温泉というのはな、巨大浴場なんだ。このままではお前、女湯に連れ込まれるぞ』

!!

「ユーノ!!お前それでいいのか!?!」

「キユ?」

「女湯に連れ込まれ、目の前に恥ずかしい光景が広がるんだぞ!?!」

「ちょっと!!フェレット相手に何熱くなってるのよ!?!」

黙っててくれアリサ・バニングス

これは戦いなんだ

オレの紳士魂をかけた戦いなんだよ!!

「こっちへ来い、ユーノ」

「だめ!ユーノくんは一緒にお風呂入るの!?!」

チィ!!なのはやアリサ・バニングスの裸体になど興味はないが(正直妹みたいなもんだからな)なのはの姉、高町美由希さんやすずかの姉、忍さんの裸体を貴様一人に見させてたまるかあ!!!!

「ちょっと・・・凄いいことになってるわよ・・・」

「血の涙流し始めたし・・・」

「わ、わかったよ。ユーノくんは舜君に預けるよ・・・」

「よっし!!ばっちり洗ってやつからなあ!!ユウ~~~~~ノオ」

~~~~~く~~~~~ん」

『ひい！?』

そうしてユーノを連れて男湯に向かう。

やはり男同士はいいよなあ!!

……コッチってわけじゃねえからな

「ふう————」

『はあ————』

カポ————ン

「よく考えなよ。あっち行ってみる。お前いたたまれなくなるぞ」

『うん・・・冷静に考えたらそうだよね・・・ありがとう』

「いっせ」

『いい湯だねえ』

「あ”あ~~~~癒される・・・」

カポポーーーーーン

.....

え？オチ？女湯シーン？

ねえよそんなの



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

なのは、く男の戦いなのか？（後書き）

アリス「長年いろいろ言われてきたユーノ覗きのシーンがなくなる  
とは……」

同い年の蒔風がいる以上は女湯に行く必要がないからね

ア「本音は？」

覗くなバカ野郎

ア「正直ですね」

実は蒔風に覗かせることも考えました

ア「な!？」

でも本人の希望で却下しました。

それに蒔風はロリコンではありません

ア「そうですね」

さてさて、次は？

ア「夜、魔法少女の戦いが始まる」

ではまた次回

全力全開！！

なのは くちよつと言い過ぎなの

夜

なのはとユーノは布団から抜け出した。  
ジュエルシードの発動を感知したのだ。

「行こう！ユーノ君！」

「うん！」

なのはは私服に着替え宿を飛び出す

「いい月夜だ。そんな夜に散歩とは、優雅だねえ、なのは」

「！！・・・なんだ、舜君か」

なのはが声のした方に振り向くと、屋根の上で足を組んで時風が座っていた。

そこから飛び降りてなのはに聞く

「ジュエルシードか？」

「うん・・・もしかしたら、あの子も」

「二人とも、急ごう。もう動き出してる！」

そして目的地まで駆ける

.....

光の柱が夜を照らす。

「あれは！」

その光を見てなのは思った。

「あの子が・・・いる？」

「もう一人の魔法少女か」

「あーららー。あーららあーら」

「あ？」

「あぁっ！」

そこにはすでにバリアジャケットを展開したあの時の魔法少女と、赤みがかった髪の女性がいた

「子供はいい子でって・・・言わなかったっけか？」

女性の方が小馬鹿にしたようにいつてくる

「ムカ。なのは、この人しってる？」

「温泉であった人だよ・・・でもまさか・・・」

「ジュエルシールドをどうするつもりだ！それは、危険なモノなんだ  
！」

ユーノが叫ぶ。

ジュエルシールドの発掘者として、その危険性を知りえる彼だからこそ出せる叫びだった

「さあねえ。答える理由が見当たらないよ」

のらりくらりと言葉を紡ぐ女性。

しかしその目は笑っていない。

「それにさあ。あたし親切に言ったよねえ。いい子でないと、ガブツといくよって！」

「なに言ってるんだか」

「はあ？」

「人をいきなり襲撃する子の方がよっぽど悪い子だよ」

「あなた・・・何者だい？管理局の人間・・・じゃないね。魔力も感じられないし・・・雑魚は引っ込んでな」

「雑魚は・・・か。聞いてないのか？お前のご主人様を圧倒したのはオレだけ？」

「！？本当かい？」

女性が少女に振り向き問う

「うん・・・」

その答えを聞いて、女性の表情が険しくなった

「あなた・・・ゆるさないよ」

「問題ないぜ。そいつぁ予想通りだもんね!!」

「ッ!!!!!!!」

ガッ、ベキベキベキベキ!

オオオオオオオン!

女性の姿が大型犬よりも一回り大きな四足の獣と変わる。  
その体毛は髪と同じ燃えるような赤毛だった

「やっぱりな……人ではないとは思ってたが」

「あいつ、あの子の使い魔だ!」

「使い魔?」

「使い魔……動物と魔法契約を結び、主人は魔力を与える代わりに、使い魔はその存在のすべてを賭けて主人を守る……か」

「あんたホントに何者だい?……先に帰ってて……すぐに追いつくから」

使い魔が少女に促す。  
しかし

「逃がすと思うか?」

「あんたも言っただろ?すべてを賭けて主人を守るってね!」



ゴウツ！

使い魔が飛び掛かる。

しかしユーノが防御魔法でそれを防いだ。

「なのは！あの子をお願い！」

「させるとでも、思ってたのかい！！」

「それをさせるのが今やることならな・・・なのは！こっちは大丈夫だ！！なに、かわいいわんちゃんじゃねえか」

「いくよ、舜！」

「いや、オレは行かんよ」

「は？」

カアアアア！

「まずい・・・移動魔法！？」

「ちよ、舜！」

「大丈夫だあ。戦力をつけるからさあ」

パシユ!

光と共にその場から、使い魔、ユーノが消える。

そして二人の魔法少女と少年が残された。

「空間転移魔法・・・良い使い魔だね」

「ユーノ君は使い魔じゃないよ。私の大切な友達!」

「それより、使い魔の方はいいのか?」

「アルフは・・・負けないから」

「アルフってのが。使い魔ちゃんの名前」

「・・・で、どうするの?」

「話し合いで・・・なんとか出来るってこと・・・ない?」

「私はジュエルシードを集めなきゃいけない。あなたも同じ目的なら・・・」

「つまらん御託はいい。話し合えるのか?話し合えないのか?」

「・・・戦うしか・・・ない」

「そういうことを決め付けなかったために！話し合いつて、必要なだと思っ！」

「話し合うだけじゃ・・・言葉だけじゃ・・・きつと伝わらない」

「言葉にしなきゃ伝わらない思いもあるが？それに、もししないで勝手に諦めてんじゃねえぞ、ガキ」

「ガ、ガキ！？」

「どうせわかってもらえないと誰が決めた。お前自身じゃねえか。そりゃ伝わんねえよ。お前に伝える気がないんだから」

「それは！」

「ヤダは墮落者のセリフ、無理は無能のセリフだ。やろつとすれば出来るくせにこれを言う奴はそういう奴さ」

「ッ！！」

「本当に嫌なら仕方ないし、無理ならしょうがないけど、違っだろ？」

「なにも・・・知らないくせに！！」

「知らないさ。だから話せと言っている」

「舜君・・・ちよつと言い過ぎ・・・」

「そうか？」

「ハアッ！」

蒔風がなのはに振り向くと、そのすきに少女がなのはの背後に回り、奇襲してくる

なのはは空に飛ぶことでそれを逃れる。

「オレを狙うと思ったんだがなあ」

「私の目的は、ジュエルシードだから」

少女が感情を殺した声で言う

そしてなのはに向き

「……………賭けて」

「え？」

少女がなのはに語りかける。

「賭けて。お互いのジュエルシードを、一つずつ」



ドガア！！

その時、空が魔法光に照らされる。

黄色い砲撃と桜色の砲撃がぶつかり合うが、桜色の砲撃がそれを押しやった。

「なのはさんもやりますなあ」

「なのは・・・強い！」

「でも、甘いよ」

砲撃の跡には少女の姿は無い。

なのはがその姿を探すと・・・いた。

少女が上空・・・否、天空から急降下で飛んでくる！

《scythe slash》

少女のデバイスが鎌の形体になる。

あまりのスピードに反応仕切れず、バルディッシュの魔力で作られた刃がなのはの首筋に当てられる。

その刃は電撃を帯びており、バチバチとはぜていた。

「うつ……く……」

《put out》

音声と共にレイジングハートがジュエルシールドを少女に差し出す

「レイジングハート!?なにを……」

「きつと、主人思いのいい子なんだ」

そして少女はジュエルシールドを手中におさめると、蒔風に向かい構える。

「なんだよ。オレにはそいつを奪い返すつもりはないよ」

「……フツ!!!」

ズアツ!!!

少女が襲いかかり、蒔風がひらりとかわす。

「なんだ。感情的になってきたじゃないの。いいぜ。そついつ反応

は大好きだ」

「あなた・・・嫌い!!」

「（ガガーン!!）ショックだ・・・お兄さん大打撃だよ・・・」

「ハアツ!!!!」

ザシツ!!

「でもさ、おまえいい顔してんぜ？さっきまでの人形みたいな顔とは大違いだ」

「!?!」

「人も想いつてのは素晴らしいもんだね」

「舜君!!私も・・・」

なのはが駆けよろうとするが、時風がそれを止める。

「なのちんは脱落しちったっしょ？ま、見ててくださいですよー」

「くっ!!」



少女が大空に飛び、魔法陣を展開させる。

そして砲撃の準備に入った

「ねえ!!!あなたの名前は!?!」

「???」

そこでなのはが口を開く

今でなければ・・・聞けないと思ったから。

「フェイト。フェイト・テストロッサ」

「いい名前じゃないのよ。フェイト運命、ね」

「私的なm・・・」

「・・・ッ!!!バルディッシュ!!!」



蒔風の組んだ指の離れた間から電気が爆ぜる。

「オレがこんな、ちみっこい身体で制御できるかわからんからな。片手でだ」

そうしていつもの雷旺砲の構えでなく、片手だけつきだす、普通の砲撃の構えになる。

「サンダァー……!!!!」

「こんなところで遊んでないで……」

「スマツシャァー……!!!!!!!!!!」

「お使いすんだらさっさとおうちに帰りなさい」

蒔風の目前までフェイトの砲撃が迫る。  
しかし、それはかき消されてしまう

「拡散式!!雷・旺・砲!!!!!!」

ズツ！！！！ドブア！！！！

蒔風の腕から放たれた雷旺砲は、扇状に広がり砲撃も、フェイトも呑み込んでいく。

「フェイトオ！！！」

「怪我はしてないはずさ。連れて帰ってやりなさい」

「ッ！！この借りは・・・必ず返すよ！！！！！」

「楽しみにしてる」

ガザっ！！！！

アルフが茂みの中に飛びこみ、姿を消す。  
主人が倒れるその場所に駆けるために。

「舜！！なんであのままジュエルシードを取りかえさなかつ「いいの、ユーノくん」なの？」

「あれは……あの子の……フェイトちゃんものだよ」

「そう、フェイトは卑怯な手を使ったわけではない。真っ向から挑んで、それを手にした。それを奪うことはオレにはできん」

「それでも……」

「分かってんだろ？ユーノ。でも、お前はその立場上、言わざるを得ないんだよな」

「うう……」

「ま、人を踏みつぶすようなことをしない限りは、オレはその人の願いを尊重すんのさ……（ボソツ）翼人としても、な」

「え？」

「ユーノくん、ごめんね……」

「い、いや！なのはは悪くないよ。それに、舜のいうことももっともだし……」

「帰ろっか」

「そうだな、明日もあるんだ。旅行を楽しまないとな」

「そうだね。帰ろっ」

三人は宿に戻る。

部屋の前で分かれ、それぞれの部屋に入る。

（よく聞き取れなかったけど・・・翼人？・・・まさか・・・  
ね）

ユ一ノは布団の中で、さっきの蒔風の言葉を思い出していた。

しかしもう夜は遅く、夢とともにそれは忘れていってしまった。

t o b e c o n t i n u e d

なのは　くちよつと言い過ぎなの（後書き）

ア「正直時風かきまわしただけですよね」

まあ、本来なら彼なしでも回る物語だから

ア「時風・・・いらない子？」

コラア！！！！

ア「それに小3まで小さくなって・・・なにがしたいの？」

言わないでよ！！！！

ア「グダグダと書きやがって・・・」

あなたキャラ変わってませんか！？

ア「更新だって遅れてたし」

iPod壊れたから買いなおして編集してたんだ

更新待ちの皆さま、すみませんでした。

ア「誰も期待してないさ」

あんたもう帰れよ！！

ア「出番を奪う気か？」

あなたが僕にはわかりません!!

ア、はーい。次回は、市街戦だよ〜」

えーい？わからないよーいーこの人ーいー

ではまた次回

伝えたい思いがあるんだ



なのは　～それは怒りの叫びなの～

旅行から帰ってから、数日後

学校でのこと

「いい加減にしなさいよ！」

教室にアリサの声が響く

「さつきからブーツとして、上の空で！あたしたちといるのがそんなに退屈なの！？」

「あ……」

それはなのにはかけられた言葉だった。

実際、なのははフェイトの事を考えており、実生活に身が入ってなく、アリサやすずかとの会話も聞き流してしまっていた。

「そんなにブーツとしたかったら、いくらでも一人ですてなさい！」

「アリサちゃん！」

教室を飛び出すアリサとそれを追うすずか。

なのは「めんね」と呟くが、その声は届かない

.....

「アリサちゃん！」

さすががアリサを追うと、アリサは階段で立っていた。

「なによ」

「なんで怒ってるのか、だいたい解るけど……あれは言い過ぎだよ」

「だってムカつくじゃない！悩んでるの見え見えなのに……なのに！何度聞いてもあたしたちには何も言わない！」

「でも、なのはちゃんが言わないことなら、私たちは待つしか……」

「だからそれがムカつくのよ！何も出来ないかもしれないけど、少なくとも、一緒に悩んであげられるじゃない！」

「アリサちゃん……」

「んあ？どつした？」

そこに蒔風が通り掛かる。

あれだけの声で話せば気になるものだ

「あんた！」

「ひえ？」

「あんた、なのはがなに悩んでんのか 知ってんの！？」

「あー」

「いや、あんたが来てからなのはがボーツとする時間は長くなってきた・・・あんたなの？あんたのせいなの！？」

アリスが蒔風の肩を掴み揺さぶる。

その瞳は涙が潤み、今にも零れてしまいそうだ。

（たしかに・・・なのはが悩んでるのはフェイトの事だな。オレが来たのが同時期だから、怪しまれんのは当然・・・か）

「なんとかいいなさいよ！」

「・・・オレが知ってんのはなのはが悩んでること。それと、それは簡単なことじゃないって事だ」

「……あんだ……知ってんのね」

「なんとなくな。それでいいなら、話す？」

「聞かせてもらおうじゃないの」

三人が屋上に上がる

「なのはの悩み……か。話す前に一つだけ約束しろ。こっちが答えられないと言ったらそれ以上の追求はしないでくれないか。なのはに聞くのもなしだ」

「……わかったわ」

「んふ……そうだな。なのはの悩みはな、ひよんなことから知り合った女の子の事なんだが……なんて言うかな……」

「いいならいいなさいよ」

「アリサちゃん怖いわよ？（裏声）」

「（ガシッ）話しなさい」

「はい。……その女の子、もしかしたらな、話し合えばわかり合えるかもしれないんだが、なかなか心を開いてくれないんだと」

「なによそれ」

「なのは曰く、とても綺麗で、冷たい目をした女の子」

「……」

「その子を……なんとかしてあげたいんだそうだ。でも、どうすればいいのか、わからないんだろーな」

「そんなこと……相談してくれば……」

「出会い方が普通じゃなかったんだよ。人には言いにくい状況でな……」

「それは……」

「悪いが、それに関しては答えられない」

「……わかった」

「だから、なのはを責めないでやってくれ。あいつ、今全力で考えてるんだ。あいつ一人でやらせてやってくれ」

「ほっとけて……言うの？」

「いや、アドバイスとかはしてやってくれ……にしても……」

「な、なによ……」

「お前、なのはのこと大好きなんだな」

「な・・・なななな！？うっさい、バカ！」

顔を真っ赤にして、屋上を飛び出すアリサ

「面白いやつちゃんー」

「舜くん、ありがとう」

「知りたい、があいつの願いだっただからな・・・戻るか」

「うんー！」

.....

「このーバカなのは~~~~」

「ひぁーひゃめてアヒサひゃ〜ん）。。(;」

教室に戻ると、アリサがなのはのほっぺを引っ張ってグニグニしていた

「悩ん、でんなら、いいな、さいよー！」

「ア、アリヒヤちゃん？」

「蒔風舜からだいたい聞いたわ。だからよくわかんないけど、あたしはこれ以上聞かない。だけど、言わせてもらおうわ!」

「え?」

「そもそも、あたしが遠慮するなんて、らしくなかったわ!」

「ア・・アリサちゃ・・」

「友達になっちゃいなさい!」

「え?」

「あたしが言いたいの、それだけ!だからもう、ウジウジすんな!」

「アリサちゃん・・」

「解決、かな?では・・」

蒔風がなのは近づいていき、頭をポカんと叩いた

「うつつ!な、なに?」

「友達に心配かけさせんなバカ。お前隠し事出来ないんだから、できただけ頼れ」

「でも・・」

「無理、か？あの子にも言ったが、それは無能の言葉だぞ？」

「!?!」

「あの子に話してって言ったお前が話すことやめてどーすんのよ」

「舜……くん」

「オレが言いたいのはこれだけさ」

そういつて蒔風は自分の席に座る。

すぐにチャイムがなって、授業が始まった。

そして放課後、なのはがアリサとすずかに話があると教室に残った

蒔風は残らず、先に帰った

(三人でじっくり話し合いなさい)

そしてなのはも帰宅する

その顔はスッキリとしていた。



「吹っ切れたな。話したん？」

「魔法の事とか、フェイトちゃんのこととは上手く隠して、ね。でもそれよりもみんなでごめんなさい大会だったなあ」

「お前、幸せもんだよ」

「うん！」

そうして二人と一匹はジュエルシード探索に街に出る。

しかし、簡単に見つかるものでもなく、あっという間に暗くなってしまう。

「タイムリミットかなあ・・・」

「大丈夫だよ。僕がもう少し残ってさがすから」

「待てユーノ。お前は街の危険を知らないのか？」

「え？」

「こんな街中をフェレットがチョロチョロしてたら簡単に捕まるぞ。最悪保健所行き。そうじゃなくても、野良猫、ネズミがお前に襲い掛かるぞ」

「大丈夫だよ。ユーノ君はただのフェレットじゃないし」

「でもそれらの処理しながらは探せないだろ」

「うー」

「あー」

「だから今日は・・・」

その時

空気が変わった

魔力が街を包み込む

「これは！」

「なんだ？」

「なに？これ！」

「この辺りにあるジュエルシードを強制発動させる気だ！」

「こんな街中で！？人もいるのに！」

「無茶苦茶するなあ・・・対策は？」

「広域結界を！・・・くっ、間に合え！！」

ユーノが結界を展開し、関係者のみをその中に取り込む。

「レイジングハート、お願い！」

結界の発動と共に、レイジングハートを起動させ、バリアジャケットに変わるなのは

「よっし・・・いくかぁ！」

「うん！」

「よし！」

そして街中の、光が空に伸びる場所に向かう。

「ジュエルシールドが発動してるぞ！」

「なのは！あの子より先に封印して！」

「了解！」

なのはの封印魔法がジュエルシードに伸びる

そしてそれが着弾すると同時に、黄色い魔力光を放つ封印魔法も着弾した

「！！！！リリカル、マジカル！」

「ジュエルシード、シリアルXIX！」

二人が離れた距離で、同時に叫ぶ

「封、印！！！」

二人の砲撃がまた同時命中し、ジュエルシードはおとなしくなった

おとなしく光るジュエルシードを眺めながら、その離れた先の向こうにいるフェイトを思いながら、なのはは考える。

（アリサちゃんにも、すずかちゃんにも、思ったこと言えなくて、喧嘩になっちゃって・・・そういえば、二人と友達になったのも、喧嘩してからだったな・・・）

「なのは！早く確保を！」

ユーノがなのはに叫ぶが

「させるかい！」

アルフがなのはに飛び掛かる。

ユーノが防御魔法で防ぎ、アルフを弾く。

「白虎・・・自由にやれ。でも、あんま怪我させんなよ？」

「オツケー」

蒔風がユーノとアルフが向かった先に、白虎を投げる

ユーノの防御魔法が解けると、そこにはフェイトが近くの宙に立っていた。

（目的が同じならぶつかり合うのは仕方ないかもしれない・・・だ

けど、知りたいんだ！)

「こないだは、自己紹介できなかつたね。私、なのは！高町なのは！私立聖小大付属小学校三年生！」

「同じく！蒔風舜だ。世界最強さ！（キラッ）」

《scythe form》

しかし、関係ないとフェイトがなのはに刃を向ける。

「またやるのか・・・」

「舜君・・・私にやらせて」

「なのは？」

「知りたいんだ。私自身が。どうしてあの子があんな寂しい目をしてるのか」

「なら、存分にやれ」

「ありがとう」

そうしてなのはとフェイトの、三度目の戦いが始まる。

.....

「なんだいあなたは!!」

アルフが目の中の男に忌々しそうに叫ぶ。  
その問いに男は陽気に答えた。

「ボク? ボクチンは白虎さ。フェレット君を助けるのっさ!!」

ドウッ!!

白虎がどこからか釵を取り出し、アルフに切りかかる。

それをかるうじて牙と爪で弾くアルフ。

(このままじゃ押し負けるね・・・)

そう考えた瞬間に、アルフは打って出た。

白虎の攻撃をすんでのところかわし、その肩口に噛みつく。

『言っただろう? ガブッといくってさ!!』

噛みついて口がふさがってるために念話で交信する。が・・・

パシィン!!!!

アルフの体が巻きつかれる

「な・・・バインド!?!」

「ボクを忘れちゃ困るよ!!!」

ユーノの束縛魔法がアルフの動きを止める

「ふふん」

白虎が楽しそうに鼻歌を歌う

「な・・・」

「いいね。もっと楽しく行こうよ!!!ハッ!!!」

その瞬間に、白虎の体が聖獣体へと変わる。

一瞬で体長が五メートル近くまで大きくなり、アルフを吹き飛ばす。

「あああああああ!!!!!!」



「え！？なんだ！？これ！！」

「でか・・・すぎんでしょっよ！！」

「そーいわれてもー」

「白虎！！！！」

「あ、舜ーー」

「戻れ。あとはオレが」

「はいな」

蒔風がやってきて白虎を戻す。

「舜！！なのはは！！？」

「フェイトと戦ってる。助けにはいけないな。なのはが決めたことだ」

「そう・・・」

「だから俺たちはさ。外野を黙らせとこっか！！！！」

「ああ！！」

「力を借りんぜ？」

パン！！

蒔風の手に巨大な槌が握られる。

「はあああああ！！！！」

そして力を開放させる。  
髪が白く変わる。

「なんだいそれは！？」

「他の世界の力さ」

ドゥーン！！

蒔風が大地をたたく

あまりの振動にアルフは立てず、空中に逃げる。

「とつたあ！！！！」

そこに蒔風が炎をまとい、槌を振り上げ、迫る！！

「モグラたたきの気分を味わいなあ！！！！」

ドブン！！

槌はアルフの頭上に迫っていた。

しかし、アルフの主はあのフェイトである。

そう簡単にはやられず、すんでのところであわした。

しかしその風圧で、コンクリートの大地に叩きつけられる。

そこに二人も降り立ち、構える。

場所はなのはたちの戦う空のすぐ近くだ

いくつもの閃光と、いくつもの飛翔音、そしていくつもの言葉が交わされる

二人の声が聞こえてくる

「…………たしは！！…………のために…………」

どうやらなのはは自分のジュエルシードをあるめる理由を話しているらしい。

自分の周りの人を守るために

そのために自分はジュエルシードを集めて、ユーノに返すんだ、と。

「これが！！私の理由！！！！」

「…………私は……………」

それを聞き、フェイトの口が開く

しかし…………

「フェイト！！言わなくていい！！！！」

「!?!」

「なに!?!」

アルフが叫ぶ。もう、諦めたような声で。わかってくれる人なんか、いないと。まるで、フェイトではなく、世界に叫ぶように。

「優しくしてくれている人たちに囲まれて、ぬくぬくと暮らしてきたやつらなんか、話すことなんかない!?!」

その発言に

「ッざっけんじゃねえぞ貴様あ!?!?!?!」

蒔風が吠える。

それはアルフの叫びよりも、獣に近かった。

「そうやってフェイトを遠ざける気か? そうやってフェイトを孤独に突き落とす気か!?!? てめえ、主人を守る使い魔だとか言いながら

よ、一番大事なもん守れてねえじゃねえか!!!」

「うるさいよ!!!あんたみたいにへらへらしてる奴に、帰る場所がつかないところのフェイトの気持ちかわかるわけない」

「アルフ!!!」

「帰るところだと・・・貴様・・・イヤガッタナ・・・」

ズオツ!!!!!!

空気がどす黒く変わる。

瞬間、蒔風はアルフの首筋を抑え、地面に押しつけていた。

「帰る場所だと!?!そこがつかいだと!?!だつたらてめえがなんとかしてやれよ。使い魔だろうが!!!まだ何とかしようがあるじゃねえか!!!主人の笑顔も安穩とした居場所も守れネエクセに、調子乗ったこと言つてんじゃねえぞ!!!!!!」

「ガ・・・あ?」

「オレの帰る場所はな・・・オレの世界はな!!!!もう崩壊しかけて帰ることもできねえんだよ!!!それでぬくぬくとだと?貴様らの方が、よっぽどぬくぬくしてんだよ!!!!!!」

「家に……帰るたびに……フェイトが、どうなってるか、知らないから!!! だからそんなこと言えんだ!!!」

そこで時風はアルフを離し、のどが張り裂けんばかりに叫ぶ

「だったら言えよ!!! お前はフェイトが大好きなんだろう!? 命をかけて守りたいんだろ!? お前はきつといろいろやったんだろ? なでもだめだった。そこで諦めて、グダグダしてきたのはお前の責任だろうが!!!」

「!?!?!?!」

「フェイトのことを想うなら、時には主の命にも逆らえよ!!! あらゆる手段を使えよ!!! それに、命懸けてやつただろうがよ!!!」

そこで、ジュエルシードに異変が起きる。

いきなり力が噴出し、軽い暴走状態に入ったのだ。

二人同時の封印が、逆に堪えたらしい。

フェイトはとっさにジュエルシードに向かって飛ぶ。  
それを追うのは。

そして二人のデバイスはぶつかり合い、ジュエルシードを挟んでガキッ、と組み合わせる。

そして光の爆発が起きた。

爆発といっても、衝撃のみで、なのにもフェイト両者とも、吹き飛ばされたが怪我はない。

しかしこれでジュエルシードは完全な暴走状態に入った。

「!!!!フェイトオ!!!!!!」

アルフの叫びで、フェイトに注目がいく。

フェイトはジュエルシードに近づいて行っていた。どうやら、カづくで抑え込んで封印するようだ。

バルディッシュはデバイスモードに戻されており、その手にはない

「バカ野郎!!!!!!」



蒔風が駆けだす。

すでにフェイトはジュエルシードをその手で包みこんでいる。

「止まれ・・・止まれ!!」

しかし、手の部分のバリアジャケットはすでに裂け、手が裂けるのは時間の問題だ。

「くっ・・・」

「そのままにいる」

「!!!!!!あなた!!!!!!」

「オレがそいつに働き掛けて抑える。暴れないようにそのまま抑える」

「・・・・・・・・・・」

フェイトは頷いた。

こうするしか、今はない

「歪みはあれど、願いをかなえるジュエルシード……だったら……  
……我が翼に共鳴せよ」

時風がボソボソと呟く。

フェイトにはよく聞き取れなかった。

「我、銀白の翼……オレの力に同調しろ!!ジュエルシード!  
!……!」

ゴオオオオオオ!!……!!

光が一層強くなる。

しかしさっきのような衝撃はなく、むしろ温かいものだった。

その光の中で、ジュエルシードを抑え込みながら二人が話す

「なあ、お前のその背中 of 傷さ」

「!……!」

今までフェイトのマントで、背中は隠れていた。

しかし、ジュエルシードの衝撃で、マントははじけ飛んでしまっていた。

「家に帰るとつらい……か。その傷は戦闘のではないな。鞭の……しかも一方的な傷……」

「関係、ないよ……」

「……そうだな……お前はオレのこと嫌いだもんな。これ以上は聞かんよ」

「うん……」

「だけど……はいそうですかと切り捨てるほどオレはくだらない人間でもない」

「え？」

「シュバン!!」

蒔風が「山」でフェイトを切る。

しかし、そこに傷はできず、逆に背中傷は消えてしまった。

「癒しの剣さ。オレの持つ、ただ一つの優しい剣だ」

「なん……で」

「ん？」

「なんで……助けるの？」

「うーん。実を言うと、助ける必要はなかったかもしれないんだ」

「え？」

「オレはこの世界のイレギュラーだ。放っておいてもこの世界は順調に回る。つまり高みの見物しててもいいんだ。「奴」が来たら、戦えばいい。でも介入する。ま、あまり大きなことはしないけどね。なるべく元の形を崩さないようにな。だからお前からも無理にジュエルシードを取り上げもしない」

「（「奴」？よくわからない・・・そういえばこの人、結局どこの何者なんだろう・・・）だったら、本当に助けなくてもいいんじゃないの？」

「でもさ、目の前で嫌なことが起きたらオレは助けるって決めてんのさ。世界がどうかよりも、な」

「.....」

「だから助けた。簡単に言っちゃえば、助けたいから助けたんだ、だな」

「そんな理由で？」

「人の行動原理は、驚くほど簡単なんだぜ？さ、終わるぞ」

「え？う、うん」

「願いの宝石、ジュエルシード、銀白の翼が命じる・・・封印」



が残され

その姿を、一匹のフェレットが見ていた。

t o b e c o n t i n u e d

なのは　〜それは怒りの叫びなの〜（後書き）

アリス「今回時風キレたーーーー！！！！」

長い世界だからできることぞ！！！！

今まで短かったからね。

ここまで突っ込んだこと書けなかったのさ

ア「なるほど〜〜他に長くなる予定の世界は？」

大体わかるっしょ？

ア「いいなさい」

ダメだ！！！！

ア「このへば」

冷たい！！！！視線が冷たい！！オレ何か間違っただこと言いましたか！！？

ア「いいえ？ただ私の機嫌を損ないましたが」

それで俺は世界中を敵に回したような視線を向けられてるんですけど

ア「私は管理者ですからね」

世界と同義だったの？

ア「まっさかー。そこまで傲慢じゃないよん」

だよねー！！

ア「私は管理するだけ。神でも世界そのものでもありませんよ」

え？なんか真面目？

ア「いつも真面目ですよ」

おーっとお

作者今驚いてますよー

ま、次回の方よろしく

ア「次回、管理局、介入」

ではまた次回



やばいネタ切れたー！ー！？

なのは、悩んで決めて、戦うの。

戦いの夜が明けて

高町家道場内、現蒔風の寝床

朝早く起きたなのは、昨日のことをもう一度よく考えようと思いを  
落ち着かせるために、ここに来ていた。

しかし……

「なんて恰好で寝てるの……」

道場の隅は蒔風の寝床になっている。

どうしてか蒔風は壁に背をつけ、床に肩をつけた、半分逆立ちみ  
たいな恰好で寝ている。

そしてなぜか傍らには「愉快だ」と書かれたメモがあった。

それを見ないように正座をして、考える

(昨日の衝突で、レイジングハートは傷ついちゃったし……フ  
イトちゃんとしっかりとお話しできなかったな……)

「あれ？なのは？」

「お姉ちゃん……」

そこになのはの姉、美由希がきた。

毎朝稽古のために、走りこみの後道場に来て練習してるのだ。

「お父さんとお兄ちゃんは？」

「ちよつと遠くまで走りこむってさ」

「そう……ねえ、あれ……」

なのはが蒔風の方に向いて聞く

「ん？ああ、あれね。もう気になんなくなっちゃったよ」

「あ、あはは……ねえ、お姉ちゃんの稽古、見ててもいい？」

「いいよ。あんまりおもしろいものじゃないと思うけど」

そして美由紀が稽古を始める。

それを眺めながめっていると、ユーノから念話が入る。

『なのは？どうしたの？こんな朝早くから』

『ちょっと、眼がさめちゃったから・・・それでね、私、考えたんだけど・・・』

『ん？』

『やっぱり、私フェイトちゃんのこと気になるの』

『気になる？』

『凄く強くて、冷たい感じもするのに、綺麗で優しい目をしてて。でも、すごく悲しそうなの・・・』

『んで、どうしたいんだ？』

『舜君？』

なのはは 蒔風の方に目を向ける

今は普通に布団にくるまっている

『起きてたの？』

『まね。な、一番重要なアドバイス。アリサ・バニングスからもらったろ？』

『でもあの子・・・聞いてくれるかどうか・・・』

「・・・おはようございます。美由希さん」

「ん？おはよう！舜君」

蒔風が起き上がり、今起きたように立ち上がる。

「オレも・・・ちょっとだけいいですか？」

「え？いいけど・・・」

蒔風が道場の、美由希から少し離れたところで立つ。

そして動き始めた。

美由希との組み手でなく、ひとりで動くようだ

その動きは派手ではなく、むしろ軽やかなもの。

日の光にあてられて、まるでスポットライトにあてられてるようだ。

しかし、一瞬で動きが軽やかなものから重い一撃一撃の動きに変わる。

その眼前には本当に敵がいるかのようで、その一撃はあらゆるものを粉碎する意思が感じられた。

そして再び軽やかに

今まで攻撃した相手をいたわるかのような動きだ。

そして最後に一礼して、蒔風は止まった。

なのはも美由希も、その動きについて目がいつてしまっていた。

「すつご〜い！！さすが兄さんに勝っただけあるねえ」

「いや・・・寝起きでまだちょっと本調子じゃないんですけどね・・・  
・・・『どうだった？』」

『え？』

『本気の動きつてのがさ、どういうもんか。今のはまだ本気とは言えないけど、それでも、オレがどう思っただ動いたか、何となくわかったかい？』

『えつと・・・最初にやさしく・・・諭さとして、それから思いつきり戦って・・・』

『で、最後に大丈夫か？と問いかける。わかるもんでしょ？それと同じさ』

『同じ？』

『本気で動けば・・・本気で相手とぶつかれば、その想いは、相手に響く』

『そう・・・かな?』

『そうさ。現にフェイトはなのはに本気でぶつかってきて、それでははフェイトがどんな想いなのか、断片的にわかってるんだろ?』

『・・・なんとなくね』

『だから、お前も悩まずに、ぶつかるんだ。いや、悩んでもいい。でも、ぶつかるときだけは、お前の伝えたいことを本気でだ。その時は、悩んじゃいけない』

『・・・うん!!!』

- - -  
- - -  
- - -

数日後

なのはたちはジュエルシード封印のために、公園に結界を張って、戦っていた。

今回取り込んでしまったのは、公園の木だ。

レイジングハートを向け、対峙するのは。

その後方から無数の魔法弾が飛来し、樹獣に向かう。  
しかし、バリアを展開され、当たらない

その魔法弾の来た方向には、フェイトとアルフがいた

「生意気にバリアなんか張ってるよ」

「今までのより、強い」

樹獣が敵の数が増えたことを確認すると、その根を地面から引っこ  
抜き、鞭のようにしならせなのはに向けて叩きつけてくる

《Flier fin》

なのははそれを上空に飛ぶことで逃れ、時風は動かなかった。

「レイジングハート!! もっと……もっと……もっと高く!!」

離れた所からは

「アークセイバー……いくよ、バルディッシュ」



《Arc saber》

バルディッシュの魔力刃が回転しながら飛び、根を裂き、本体に当たる。

しかし、バリアに阻まれダメージが通らない。

急に蒔風を押しつぶし、大地に伏せていた根が吹き飛ぶ。

「まったく・・・だから何なんだっつものよ」

蒔風はその体にちょうどいい大きさに縮んだ風林火山を構え、ぼやいた

上空で根の追撃のなくなったのはがレイジングハートを樹獣に向ける。

《Shooting mode》

「撃ち抜いて!!! デイバイン!!!」

《Buster!!!》

なのはのデイバインバスターが樹獣の上斜めから命中するが、やはりバリアに阻まれる。

「貫け、轟雷!!!」

《Thunder smasher》

ドウッ!!!

さらにフェイトのサンダースマッシュャーが真正面からあたる。これもバリアに阻まれる。が

「さて、お兄さんもやりますか」

この少年がいる。

「派手に行くぜ? 吹き飛ばべ!!! 獄.....炎.....」

ズギユウアアアアアアアアアア……！！！！！！

蒔風がとんでもないエネルギーを集める。

そしてそれが一気に凝縮され

「だあああん！！！！！！」

蒔風が投げつけ、樹獣に命中する

当然それもバリアに阻まれるが、しかし

「BON、だ！！！」

ギユオツ！！ズゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

一気に膨れ上がった火球が、樹獣を飲み込む。

そして爆発が起きた。

蒔風がとっさに「林」でバリアを張り、爆風からなのはたちを守る。

爆発の後には、衝撃と爆風が抑えられたために、どこまで続くかもわからないような大穴があいていた。  
普通ならおそらく、公園から少し離れたところまでがクレーターになっただろう。

そして、そこには宙に浮く活動の止まったジュエルシードが

《Sealing mode, set up》  
《Sealing form, set up》

二人のデバイスが同時に姿を変える

「ジュエルシード、シリアルVIEI!!」

「封印!!」

そして、ジュエルシードを中心に、光が広がり、二人とも一瞬目をそらす。

が、すぐにデバイスを構える。

二人はちょうど、ジュエルシードを挟んで立つ。

「ジュエルシードにはあまり大きな衝撃を与えない方がいいみたい」

「そうだね・・・こないだみたいになったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュも、かわいそうだもんね」

「だけど・・・譲れないから」

《Device form》

フェイトがバルディッシュを基本形態に戻し、構える。

「私はフェイトちゃんと話したいだけなんだけど・・・」

《Device mode》

なのはも、レイジングハートを基本形態に戻す

なのはの眼には、迷いはない

そこには、たった一つの想いがあった。

「私が勝ったら、お話、聞いてくれる？」

なのはの問いに、フェイトは答えない。  
答えは、言葉ではなく、行動で

二人が同時に飛びだし、ぶつかり合う!!

衝突した場が光り、それが晴れると……

「ストップだ!!!」

新たに現れた少年が、そのデバイスでバルディッシュを抑え、もう一方の手でレイジングハートを掴んでいた。

「ここでの戦闘は危険すぎる!!!……時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ!! 詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「くっ」

「時空管理局……」

「なんだそりゃ？」

地上ではアルフ、ユーノ、時風が各々声を上げる

クロノと名乗る少年が、二人とともに地上に降りてくる。

「なあなあ、時空管理局って何なん？」

そこに時風が近づいて訪ねる

「知らないのか？まあ、それは後だ。まずは二人とも武器を引くんだ。このまま戦闘行為を続けるなら、」

クロノが言葉を言い終わらないうちに、砲撃が飛んでくる。

「フェイト！！撤退するよ！！！！離れて！！！！」

フェイトが離れ、砲撃が飛ぶ。  
その砲撃を離れてかわす三人。

フェイトは爆煙の中、ジュエルシールドに手を伸ばすが……

ドシューシューシュー!!!

クロノの放った光弾で撃ち落とされる。

アルフが落ちていくフェイトをその背に拾い、地上に降りる。

そこにさらにクロノが追撃をかけようとする。

「ダメえ!!!」

「やめろ!!!少年!!!」

なのはがその間に立ち、蒔風がクロノを掴み背負い投げの要領で地面に投げつける。

クロノは一回転して着地し、そのすきにアルフはフェイトを連れて逃走した。

「君!!!公務執行ば「今何で撃った」は?」

「今何で撃ったと聞いている」



「なんでって・・・あのままではジュエルシールドが奪われていた。だからそれを」

「止めるために、か。しかしバインドという拘束魔法があるだろう。なぜそうしなかった」

「煙で相手が見えなかったんだ。仕方ないだろう!!」

「そうか・・・しかしそのせいで一人の少女が傷ついたな」

「・・・」

「オレが言いたいのはそのただけだ」

「・・・くっ」

クロノがジュエルシールドを回収する

と、モニターが現れ、そこに一人の女性が映っていた。

『お疲れ様、クロノ』

「すみません。片方、逃がしてしまいました」

「ま、大丈夫よ」

「あの、一つ聞いていいですか？」

『なにかしら?』

蒔風が艦長と呼ばれた女性に問いかける

「時空管理局って・・・なに?」

『うーん、それを含めてちょっとお話聞きたいから・・・クロノ、その子たちをアースらに案内してくれるかしら』

「了解です。すぐに戻ります」

そうして、なのは、蒔風、ユーノは、アースラへと連れて行かれた。

ここから物語は加速する

t o b e c o n t i n u e d

なのは、悩んで決めて、戦うの。(後書き)

アリス「今回、時風後半空気でしたね」

いな……

ア「やったことは樹、焼いてからクロノ投げて質問しただけ……」

言うなッ!!!

わかってますよ!!!それくらいさあ!!!

でも……どうすればよかったんだよ!!!

ア「わたしを出せばいいのでは?」

却下

ア「即答!?!」

当たり前だ!!!

え?なに?

その長いこと言わなかったから今言えばぽろっといくかと思ったのにつて顔!!!

ア「何のためにおとなしくしてた?」

こいつ策士だ――！！！！

ア、「次回、今度は時空管理局に説明だ！！」

ではまた次回

想いつかな――！！！！

なのは、くまたまた説明なの？

時空航行船、アースラ内

蒔風、なのは、ユーノはクロノに連れられ、ここに来ていた。

『ユーノ君、ここって一体・・・』

『時空管理局の次元航行船の中だね。簡単に言うと、いくつもの次元世界を自由に行き来するための船だよ』

『あんまり簡単じゃないかも・・・』

『つまり、違う世界に行くための乗り物ってことか』

『そうだね』

『そうなんだ・・・』

「ああ、バリアジャケットとデバイスは元に戻しても大丈夫だよ。あと君も元の姿に戻ったら？」

「あっ、そうですよね・・・って、元の姿？」

なのはがバリアジャケットを解除しながら疑問を口にする

「そうだね・・・んっ」

ユーノが光と共に元の姿に戻る。

なのはと同じくらいの歳の、少年に姿を変えた。

「ユーノっち！そいつが人の・・・ああ、違うか。そっちが元か」

「そうだね。舜に会ったときはもうフェレットだったからね」

「え？え？・・・ええ~~~~~」(。；(「

「どうした、なのは。豆がハトポツポしたような顔をして」

「それを言うなら鳩が豆鉄砲食らったじゃ？」

「おお！それぞれ！」

蒔風とユーノがさも当然そうに会話をする。

しかし、なのははガタガタと震え、ユーノを指さして慌てはじめた

「じゃなくて！ユ、ユ、ユ、ユーノ君って・・・嘘、そんな・・・

ええー!?」

「あ、なのはは知らなかったんだっけ」

「え?なのはは最初に会ったのはこの姿じゃ……」

「最初からフェレットだったよー!」

「だから温泉でいったろ。こいつは男だっけ」

「そういう意味だったの!?」

「うーん……あ!そ、そうだったね!この姿は初めてだったね……」

「そっくだよね!」

「そしてなのはちゃんはそんなユーノを部屋に入れたまま堂々と着替え、あまつさえ女湯に連れ込もうとしたんだよね( )」

「っ!!!(カア~~~~~)」

バシバシン!!バジル!!

次の瞬間、ユーノは叩かれ、時風は叩かれた上にバジルを突っ込まれた。

「な、ん、で〜〜〜」

「お前は自業自得だ。なんでオレまで・・・しかも何故バジル？」

「早くしてくれないか？」

そんなこんなでクロノが先を促すので、三人は先に進む。

扉が開いた先には

「なにこれ？」

「和風？」

「わふ〜）> <（／／」

「どうしたの？舜君」

「いや・・・」

そう、和風だった

盆栽が並び、ししおどしがあり、茶道のセットが置かれている。





る。

「あの・・・ロストログアってなんですか？」

なのはが質問をし、

「ああ。異質世界の遺産・・・って言うても、わからないわよね」

「ん？・・・ああ、大体わかったよ」

「え？」

蒔風がいきなり言うので、リンディもクロノも驚く。

蒔風が話し出した

「つまりはいろんな世界の、昔のよくわかんないモノのことを、ロストログアと言うらしいな」

「そ、そうね」

「で、安全なものなのか危険なもののかもわからないから、こっつして回収すべきもの・・・でもあるんですよね？」

「そうだが・・・君は知らなかったんじゃないのか？」

「ん？ああ、ま、そこは気にしないで・・・すみません話の腰を折ってしまって」

「いいえ・・・で、あなたたちの集めているジュエルシードは次元干渉型のロストロギアよ」

「いくつも集めて起動させれば、次元断層が起き、大変なエネルギーが起きる」

「ああ、なのはとフェイトのデバイスがぶつかったときのあれか」

「そうだ。たった一つの発動でも、あの威力・・・複数起動させたら、どうなるか・・・」

「でも・・・それを抑え込んだ者がいるの」

クロノとリンディが時風の方を見据える

「・・・え？オレ？」

自分を指さしながら時風が素っ頓狂な声をあげた

「そうだ。君はあの黒衣の魔導師・・・フェイト・・・とかいったか。あの少女とともにおこなったといっても、それを抑え込んだ」

「さらには強引にならまだしも、我々の知らない方法で、しかも同調して」

「???強引なほうが大変なんじゃないんですか？」

なのはが当然のことを聞く。

大きな力を無理やりねじ伏せるのは確かに大変そうだ。

それにクロノが応える

「止まれ、って願えば、多少だがそれが叶う。だから多少強引にやる方がまだ易しい・・・と思うんだが・・・」

「あなたは何者なの？魔力もないのにあの戦闘力・・・」

リンデイの発言のあとに、クロノがモニターを出し映像を映す。

そこには先ほどの獄炎弾を撃つ蒔風に、数日前のフェイトとともにジユエルシードを抑え込む姿があった。

「教えてくれないか？」

「いいよん」

「こつちもそれなりの・・・はい？」

クロノが断られることを前提に会話を進めようとするが、蒔風がそれを粉碎した。

「いいっての。隠す必要はないでしょ。そうだねえ・・・」

そして今度は蒔風が説明を始める。

「奴」のこと、世界を回ってること、自分のまわる世界の次元などを

「僕たちの世界よりも高次元を!？」

「そそ」

「信じ……られるか……」

「あなたたちはどうなの？信じているの？」

「僕は……この話を聞いた時には正直信じていませんでした。なのは狙われるなんて、突拍子もないし。最重要人物なんて言われなくてもわかりませんでした。でも」

「でも？」

「今は信じています。舜の言うことのすべてがわかったわけではありませんが、それでも、彼は信じられる人間だと、僕は思います」

「私も、信じてます。私が狙われるって言っても、実感ないけど……」

「そう……」

「確か時空管理局って、世界間を取り締まる警察みたいなもんなんですよね？」

「そうだが」

「だったら、エリアサーチの機材とかありますか？」

「あるが・・・どうするんだ？」

「いえちょっと。借りられるなら、「奴」を探してみようかなって・・・」

「無理だ。第一、こちらの文字がわからないだろう」

「あ、その心配は大丈夫です。おれ、言葉には強いから」

「どういふことかしら？」

「違う世界をめぐる、当然言語の違う世界もあります。でも、その世界でも活動を迅速に行うために、ある能力があるんです」

「ある能力？」

「全言語同時翻訳です。どんな言葉や文字を見聞きしても、俺の意志ですべて日本語に聞こえるし見えます。その逆のまたしかりです。オレがどんな言語で話そうとも、相手はその人が意識している言語で聞こえます。だから、文字の心配はないんですよ」

「そ、そうなのか・・・しかし、無理だ。いまはジュエルシードの探索に使っている。他のことにはとても・・・」

「ああ、ああ、いいよ。無理言ってるのはこっちだから」

「そう……それで、ジュエルシードのことですが、このことは私たち、時空管理局が受け持つことになります」

「だから、君たちは元の世界で、元の世界に戻るといい」

「え!？」

「このことを忘れて、元通りの生活に戻るといい」

クロノが優しく言う。

その通りなのだ。

この事件は時空世界に大きく影響を及ぼしかねない事件だ。  
民間人であるのはたちを巻きこめないし、どうこうさせるべき事件でもない。

「でも……」

「なのは……」

「ふう、正論だな」

「舜君？」

「正論すぎる。確かに、素人が口出できる事件ではないようだ」





夜

ユーノと蒔風がレイジングハートを使いアースラに交渉していた。

曰く、なのはの魔力や蒔風の力は管理局にとっても利益なる。だから、この件に協力させてほしいと。

『なるほど・・・中々考えてますね』

「それに、「奴」が現れた際に、管理局の人がいると、助かるしな」  
横から蒔風が話す。

「「奴」は結構派手に暴れる。戦いの後の処理なんかを手伝っても  
らえると、助かるしな」

『あなた・・・勝てるの？聞いた話じゃその人、かなり強いらしい  
んじゃないの？』

「今まで勝ってきた。これからも。オレは世界最強だからな」

『・・・思ったんだけど、君は本当にに九歳か？』

クロノが蒔風に聞く

「ん？実はオレさんは、十九歳なのよん（キラッ）！！」

『・・・冗談はさておいて』

「そんなあ〜」

クロノが時風を一蹴し、リンディが話題を元に戻す

『そうね、そういうことなら協力してもらいましょう』

『母さ・・・艦長!!』

『戦力は多い方がいいし・・・ね。クロノ執務官』

『はい・・・』

『条件は二つよ。三人とも、身柄は一時時空管理局の預かりとすること』

「ん。それと?」

『それから指示を必ず守ること。よくって?』

「・・・」

「わかりました」

蒔風が頷き、ユーノが答える。

こうして、なのはたちの協力が決定した。

その晩、なのはは蒔風とともに母の桃子さんに、魔法のことなどは伏せて、できる限り説明した。

「お母さん……」

「そうね……なのはがまだ悩んでるなら、危ないって止めるけど……でも、もう決めちゃってるんでしょ？」

「うん……」

「ちゃんと、最後までやり通すって、決めたんなら、しっかりやりなさいね？」

「うん……ありがとう、お母さん……」

「舜君も、行くの？」

「はい」

「だったら、なのはのこと、よろしくね。舜くん、見た目より大人びて見えるから」

「必ず、守ります。でも、多少の無茶までは、やらせてあげたいんです」

「それはもう……！やらせてあげてね？あの子がこんなにもめり込むこと、なかったから」

「はい……」

その晩、蒔風となのはは、アースラに向かった。

なすべきことを、なすために。

なのは、〜またまた説明なの？〜（後書き）

はい、今回も蒔風空気気味でしたね

アリス「そうですね〜。そうそう、一つ質問を」

なんででしょう

ア「蒔風のする「説明」って、どの範囲まで説明してるのですか？」

ああ、それですか

一、「奴」が世界を食らうために、最主要人物を狙ってること

二、自分が「奴」を追って、いくつもの世界をめぐるっていること

程度ですね

ア「ということは蒔風の知る「奴」の正体や、蒔風の世界がどうなってるのかは説明してないんですね？」

してないですね

彼にとって、嫌な記憶ですから

だから、「説明をした」といった描写があつたら、このことだと思つてくれて結構です。

ア「「奴」って誰なんだろうね〜」

あんた知ってんだろ

ア「ですけどね」。淒く話したいです」

だめ

ア「わかってますよ……」

どうした？

ア「……「奴」の正体は鷹野「ばか—————!!!」」

って、いまなんて言おうとした？

ア「鷹野三四」

ひぐらしのなく頃に!?

ってか、嘘つくなよ!!

大声出してまで妨害しちまったじゃねえか!!

ア「でもあり得そうじゃないですか？」

まあ……できないな

でも女性じゃん

ア「ほら、そこは世界を取り込んで曖昧になったとかで」

あ、なるほど・・・違うけどね

ア「ま、違いますからね」

そんなこと言ったらいくらでも言えるじゃん。

セフィロスなんてモロだし

ア「救われなかったリインフォース!!」

理樹を死なせてしまった恭介!!

ア「暴走した違う次元の長門!!」

恋姫無双の左慈!!

ア「世界の破壊者デイケイド!!」

とまあ、それこそいくらでも

IFの世界から引つ張り出せば無限大に

ア「キリないですね」

ないね

ア「ちなみに今言ってた作品 行くんですよね?」

ハッ!!

ア「あーあ、ばらしちゃった~~~~」

みんな!!今のは忘れてくれえ!!!!

ア「ネタばれを嫌がる読者もいるだろうに……」

ああああああああ!!!!!!

ア「次回、海上大決戦!!!!」

ああああああああ!!!!!!

ア「ではまた次回~~~~」

あああああああああああ!.....!!

ア「まだ言ってるのかい!!!!!!」



なのは、正義があるのはどこになの？」

それから数日間、ジュエルシード回収の効率は上がって、順調に数を伸ばしている。

いま、鳥に宿ったジュエルシードを回収したところだ

「うーん、二人とも中々優秀ね」

「なのはの才能はハンパないですからね」

「将来、うちに欲しいくらいだわ」

「わかります」

「で、君はいかないのか？」

リンディと時風が話しているところに、クロノが割って入る。

「オレが行っちゃうと簡単に解決しちゃうからなあ……」

「よっぽど自信があるんだな」

「そりゃもつ。ここはなのはの成長の為、サポートに回りますよ」

そして、クロノと一緒に、オペレーターであり、執務官補佐でもある通信士のエイミィの元に向かう

「この子・・・フェイト・テストロッサ、だっけ？」

「そう、かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」

「大魔導師？そいつの血縁ってことか？」

「そう、大分昔の事だけど、ミッドチルダの中央都市で、魔法実験中に事故を起こして、追放されてしまった、大魔導師・・・でも・・・」

「でも？」

「この名前が本名とは限らないし・・・」

エイミィが検索をかける

しかしモニターには表示されない

「あー、見つからないよー」



ノ君と舜君もいるし……」

「なのは……」

「アホう」

ポカン

「あにゃ！なにをするの〜!?!?」

「一人に慣れるとか言うな。寂しいなら寂しいと言え。それを受け止められないくらいほど、オレもユーノも弱くない」

「そつだよ、なのは」

「お前らには帰れる場所があるんだ。寂しがる必要はないだろ？」

「舜君……」

「舜……」

『オレの帰る場所はな……オレの世界はな!!!もう崩壊しかけて帰ることもできねんだよ!!!』

なのはとユーノは先日の蒔風の叫びを思いだしていた

ガシツ、と時風がなのはとユーノの肩に腕を回し元気づける。

「ああ、あんま気にスンナよ？じゃ、オレはそろそろ行きますわな」

そうして時風が立ち上がり、去っていく。

「舜君……ユーノ君！」

「どうしたの？なのは」

「頑張ろうね！そして、一緒に帰ろう！」

「なのは……そうだね。あの子、フェイトも一緒に」

「うん……うん！」

.....

「検索をかける？でも……」

「大丈夫ですよ」

オペレータールームで席に着いているのはエイミィではなく時風である。

フェイトを探し出すと言って変わってもらったのだが

「相手は高性能な魔法を使って逃げてるんだよ？」

「だったらこっちは・・・世界一パソコンと相性の良いインターフェースの力を借りるか」

カアアア・・・

蒔風が一瞬光り、モニターに向かう。

そしてその指が動き出した。

あまりのスピードに、指が片手で十本あるようだ

「ひえ~~~~~！」

「足跡を見つけた」

「はや！」

「今追っている。もう少し・・・これは・・・まさか!?!?!いや、でも!?!?!」

そこで、赤いランプが光り、アラームが鳴る

「やはりなのか？」

「！そ、そんな！！あの子たち、なにしてんの！？」

.....

海鳴市海上の上空

アースラのメインモニターにはそこにいるフェイトとアルフを映し出していた。

海中のジュエルシードを見つけるために、強制発動させているようだ

リンディとクロノがモニター越しに見ている中、ジュエルシードが発動する

「始まったか！？」

「フェイトちゃん！！！！あの！私急いで現場に.....」

蒔風、なのは、ユーノが駆け付ける。

しかし、クロノは

「行く必要はないよ。放っておけば、あの子は自滅する」

「え!？」

「ほっ」

なのはと時風がモニターに目をやる。

「海の中のジュエルシードを六つも強制発動させて、体力を結構削った上に、封印までしようとしているんだ。どうしあっても彼女の限界を超えているよ。自滅しなくても、弱ったところを捕縛すればいい」

クロノの説明通り、もうすでにフェイトは疲れ果てているようだ。動きが鈍り、荒れ狂う竜巻をかわし切れていない

「私たちは、常に最善の選択をしなければならないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが・・・現実よ」

「でも・・・」

リンディの言葉に、なのはがうなだれる。



「フエイトちゃんが!！」

「まさに正論だな。ここで無理に手を出す必要もないな。正しい選択だ」

なのはの叫びを蒔風が打ち消す

「舜君!？」

「舜、わかつてくれるのか？」

「オレだっていくつもの世界を守ってきたんだ。それくらいわかるさ。それは正しい判断だよ」

「舜!!!！」

そんな舜の発言にユーノが叫ぶ。

「だってさ、あんなところに行ってみろ。並の奴じゃ怪我してどうしようもなくなるぞ?かえって邪魔になるよ。いやあ、いい作戦ですな。向いてますね、軍師とかに」

「ありがとう」

「でも……でも!!!！」

さらに蒔風が口を開く

「そうなんだよねえ。そこで、でも！だ！……！！！」

「??？」

クロノが疑問の表情を浮かべる

「軍師に向いていても、人を守るには向いてないな。それに並の奴なら無理だけどな。なのはは並じゃないぜ？」

「舜君？」

「行きたいんだろ？行ってやれ」

「舜！！何を言っている！！！！」

「だめよ！！あなた、さつき自分で言ってたじゃない！！！！」

「ああ、確かに正しい判断だ。しかし！！！！決して最善などではない！！！！ユーノ、なのは、行け！！！！」

「あ、ありがとう！！舜君！！！！」

そうして、なのはとユーノが出ていく。  
向かうは結界内のフェイトのもとだ

「何をしている！……！！！」

「何をしてるだと！？こつちの台詞だ弱者どもめ！！！！こんな手段を最善なんて言つて、バカじゃねえのか！？こんなもの、最善なわけないだろ！！！！！」

「なんだと！？」

「お前は、自分の力不足のために、あの現象を利用してしようとしてんだろ？はん！！！！本当に強いなら、現象抑えてフェイト無事に捕まえるくらいのことしろよ！！！！！」

「君は……君も、世界を守ってきたんだろう！？なぜわからない！？」

「わかつてるから腹立ってんだ！！！！……本当なら俺はここにいらなくてもいいんだ。「奴」出てきたら戦えばいいんだからな、。それでもオレは、物語を知らぬ間に崩すかもしれないのにここにいる。なぜだと思つ？」

「くつ、わけのわからな……」

「答えは簡単！！オレが強いからさ！！どんなことになつても、どんな状況でも、負けず、屈さず、救い出す！！！！そんな強さを求めてオレは手に入れた！！！！もっと力があれば、もっといい方法があった、なんてことがないように！！！！」

「そんなの……強引だ！！！」

「強引だろつが構わない！！これはオレの正義なんだよ！！ずっと

そうだったんだ！！！！ずっとそうしてきたんだ！！！！そうやって救ってきたんだ！！！！力がないためにできなかった最善の方法を逃さないために！！！！確かにこれはお前らにとつては最善かもな。お前らの力じゃ、これが限界かもしれないな。でも違うだろ！？まだまだ力もつてんだろ！？俺やなのはやユーノだっているじゃねえか！！！！なんでそこで諦めんだよ！？それに、解決解決って、お前らそんなに解決するだけが大事なのかよ！？てめえらは解決するために行動してんのか？規則に書かれたことを守るために悲劇を食い止めるのか！？違うだろ！！！！正義があつて、そのために行動するんだろが！！！！！！てめえらの正義は、分厚い本にあんのか、その胸にあんのか、どっちなんだ！！！！本にあんなら持つてこい。今すぐここで燃やしてやるよ。だけどな！！！！！！」

ドン！！！！

時風が自分の胸を叩き宣言した

「ここにある正義ってのはな、どんだけ燃えても消えないものだ！！！！絶対になくならないものなんだ！！！！その信念を間違えちゃいけないんだ！！！！さあ、答えてもらおうか。お前らの正義はどこにあるのかを！！！！お前らは何を守りたいのかを！！！！」

そしてモニターを指さし叫ぶ

「お前らが止めたかった悲劇ってのはよ、あそこにあるものじゃない

いのか？それを止めるために、みんなここにいるんだろー！？」

みな、蒔風の言葉を聞く。

そうだ。任務優先であの子を見捨てようとした。

自分たちはの正義はそこにあるのか？」と

「正義を語るんなら、味方も敵も、どっちも救って見せてみるよ！  
！！潰すより生かす方が難しいんだ。だったらそっちをやってみせ  
るよ！！お前ら、大きな力があるじゃないか！！それなのにでき  
ないのは弱者の証だ。攻撃されたからって、反撃するという安易な  
方法をとってあの子を傷つけた奴を切札なんて言ってるお前らと、  
あの子もジュエルシードもどっちも救うために駆けて行ったなのは  
とじゃ、なのはの方がよっぽど強いし正しい！！！！」

「しかし、我々には失敗は許されません。失敗すれば、他の世  
界が消えてしまいます。現実には甘くないんです！！」

「だからなのはやオレや、ユーノがいる！！そういったものをフル  
に使いもしないで、できないとか言ってるんじゃない！！！！」

蒔風はリンディに対しても叫ぶ。

その胸の己の正義を語るために。

「それでもここで俺を取り押さえてなのは連れ戻そうというなら、  
いいだろう。それがお前らの正義なんだと解釈しよう。なに、正義

なんて人それぞれだ。それは構わない。だがな、ただで通れると思  
うなよ？ここに立つは銀白の翼人！！くんなら五百は死ぬ覚悟で  
来い！！！！！！」

「な……」

「翼人だと！？」

「すべてを、どんな状況からも救いだすために、世界最強になった  
んだ！！オレの信念、救えるものは根こそぎ救う！！！！オレは救っ  
てやるぜ。時空管理局は、何が救いたいんだ？人か！！世界か！！  
両方が！！！！」

それだけを言っつて、蒔風が踵を返し、出ていく

「……どこへ行くんだ？」

クロノがそれを呼び止める。

蒔風は振り返らずに答えた

「救いに。オレは弱くないからな。難しいことでも、やってのける  
さ」

「……僕にも……できるだろうか」

「クロノ？」

リンディがクロノの変化に気づく。

時風がクロノに聞きなおす

「なにが？」

「君のように、すべてを救うことが……」

「さあね。でも、諦めたら0%だ。でも、諦めなければ、可能性はいくらでもある。それに、お前には仲間がいるじゃないか」

「……」

「エイミィさんも、リンディさんも。なのはにユーノ、もちろん、オレも。これだけじゃ、足りないかい？」

「……いや……十分だ。僕も行こう。気になることもあるし」

「クロノ!!!」

「すみません、艦長。でも……僕の正義はこの胸にあるみたいで  
す」

「クロノ……」

「行こうか」





「さて、後はフェイトをどうにか連れて行って。話を聞くだけだな」

「ああー!!」

近づいていくと、なのはとフェイトが話している声が聞こえた

「友達に、なりたいんだ」

「あ………」

どうやら伝えたいことは伝えたようだ。

時風が近くに寄る。

「おお、言えたか？なのは」

「舜君……それに、クロノ君……ごめんなさい!!!勝手な行動して!!!」

「僕も・・・だからね」

その瞬間、アースラのアラームが鳴る。

それはなのはたちにも届いた。

『次元干渉、来ます!!!!あと六秒!!!!』

「!!!!」

「なに!?!」

「え?」

「母さんツ!?!」

そして、海上に紫の雷が落ちる。

それはフェイトに直撃し、悲鳴を上げさせる。

「あああああああああああ！！！！！！！！！あ……………」

しかしそれは途中で止まる。

蒔風が雷を弾き飛ばし、止めたからだ。

しかし、いまだに空は唸っており、第二派を予感させた

「フェイトが言うなら……………母さん、だっけか？なるほど、てめえが、すべての現況……………」

蒔風が怒りに燃える

ゴロゴロゴロ……………

「貴様の雷、撃ち落とす！！！！」

バツン！！！！バガガガガガガガ！！！！！！！！！！

時風がその手に雷旺を溜める。  
すべてを吹き飛ばす、最高出力の技を！！！！

「雷旺砲！！！！！！」

ズツガ！！！！

ビシヤア！！！！

ドツ！！！！バガンバガンバガン！！！！！！

二つの雷がぶつかり合い、まき散らされていく。

あまりのエネルギーに、他の者は少しも動けなかった。  
動けば、いつ雷に貫かれてしまうかわからない。

「なかなかじゃねえか、だが！！！！ああああああああ  
ああ！！！！！！」

バツサア！！！！！！

蒔風の背に翼が現れる

「オレをなめんな！！伊達で世界最強名乗ってんじゃ、ないんだよ！！大魔導師だか何だか知らねえが、お前の勝因にはなりやしねえ！！！！」

ズッガン！！！！ドドオオオオオオ………

蒔風の雷旺砲が紫電を撃ち消す。

「フェイトちゃん！！！！」

なのはが叫ぶ。

見るとフェイトが落ちていっていた。

あの最初の一撃に耐えられなかったようだ。

落ちるフェイトをアルフが拾う。

さらにジュエルシードも取るつとするが



つながります。周りの人を、危険にさらしたかもしれないんですよ？」

「う……………」

「しかし、今回は結果的に得るものがありましたし……それに、見失っていたモノも見つけられました……………」

「艦長……………」

「だから、今回のことは不問とします。しかし、二度目はありませんよ？」

「二度目があったら吹き飛ばしてやる」

ドゴン!!!!!!!!!!

時風が三人から同時にド突かれる。

「舜君!!!言い過ぎだよ!!!」

「まったく…………君を見直したと思ったのに……………」

「舜は少し過激すぎるよ」

「ふふふ。時風くんはね、凄く素晴らしいけど、ロクな人間じゃないんだよ」

「偉そうに言うな!!!」

「まあ・・・その辺にしてくれませんか？」

「すみません」

「あい。改めて、すみませんでした。あんなに騒いで

蒔風だつてわかつてるのだ。

リンディは最初から不問にするつもりだった。

しかし、艦長という立場上、ポンと許すわけにはいかない。  
だからこんな厳しいことを言ってるのだ、と

「いいんですよ、もう。それより、聞きたいことが

「なんですか？」

「翼人・・・なんですか？」

「・・・はい」

蒔風の表情が少しだけ堅くなる

「あれが、翼ですか・・・」

リンディが先ほど雷旺砲を撃った蒔風をモニターに映す。

「ん？あれ？そつえば、翼人を知ってるんで？」

蒔風の質問にユーノが答える



「翼人は、伝説の時代よりも前の時代……アルハザードの歴史でも一番古い部分に書かれたものだ。でも……まさか舜が……」

「そこには、ただ一言。「翼人、救世主にして破滅の者」と書かれています」

「その翼人が、君だというならば、君はレアスキルどころかロストロギアだ」

「オレがあ？」

「あなたは翼人について知ってるのですか？」

「多少は」

「では……なぜ？」

「……話さないと、ダメですか？」

「話したくないなら、構いません。ちなみに、この部屋での話は、私たち五人しか聞いてません」

「まいったな……そう言われると、嫌なのに話したくなるな……」

蒔風が本当に悲しく、嫌そうな表情をする。

「……わかった。話すよ。あれはオレが世界とかそんなの知らない

かった時だ・・・オレの世界に「奴」が来てな。オレを殺そうとしてきた。その時のオレには力がなくて、死にかけの状態にまでボロボロにされた」

「・・・・・・・・」

「だけど、そこで世界の管理者と名乗る女性から自らの力の扉をあける鍵を渡され、覚醒した。それがこの力だ」

バサア

蒔風が開翼する。

今は光ってはいないが

「それ以来オレは「奴」を追って、戦っている。翼人の翼は人の想いをそれぞれ司っているらしい」

「ひとの・・・想い？そもそも、翼人にはその・・・管理者がすれば誰でもなれるのか？」

「いや、オレがたまたまそうだっただけさ。なるもんじゃないさ。翼人なんて。そういう奴は少なからず世界からズレているからな」

「それで、舜君の翼には、どんな想いが？」

「人の願いだ」

「願い？」

「よく言えば希望。悪く言えば欲望だな。それを力にすることがで

きる」

「舜は銀白のって言ってたけど、他にはあるの？」

「オレは知らないけどな。人ごとに違うらしい。っても、翼人の存在自体超希少だからな。いくつかの世界にやっとな一人、くらいらしい」

「へえ〜〜〜」

「そして改めてあなたに問いたい」

「何を、ですか？」

「あなたは、私たちの、味方でいいのよね？」

「当然です」

「でもまさか伝説の話の中でも伝説といわれる翼人をお目にかかれるなんて・・・翼、触ってもいいかい!？」

「ど、どうしたんだ？ユーノ・・・って、あひゃうう!?!?!」

ユーノが時風の翼に触る。

すると時風が変な声をあげてのけぞってしまった

「あはは!?!あひゃうう、だつて!?!」

クロノは笑い、ユーノはさらに観察する。

「これは……！興味深い……羽を貰ってもいいかい！？」

「やめろ……！」

ユーノはあのジュエルシードを発掘したのだ。

このような伝説の代物を見て、黙っていられるわけがない

時風が翼をしまうが、ユーノは引き下がらない

そんなことを10分くらいして、次の話に移る。

「さて、問題はこれからよ。クロノ」

「はい。エイミィ、モニターに出してくれ」

『はーい』

そこでエイミィが通信で会話に加わる

そして映し出されたモニターには、ひとりの女性が映っていた

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

なのは、正義があるのはどことなの？（後書き）

アリス「今回、長っ！！！」

どうしてもきりのいいところが見つからなかった……

ア「そういえばこの小説ではフェイトの虐待シーン描かれないですよね」

まあ、あくまで蒔風中心なんで

ア「本音は？」

あんなひどいシーン書けない！！

背中傷でいっぱいだったのに！！

ア「あー！なるほど。あとそれと」

はいはい

ア「前回の小説を読んだ友人から、「なぜバジル？」とのことですが」

ああ、あれですか

バシンバシン！って打とうとしたら、片方がバジンになってね

もうバジルでいいや、とあまりました

ア「何そのどうしようもない理由！？また何かのネタかと思いましたがよー！！」

そんなものではない

ではよろしく

ア「はあ・・・次回、アルフの脱走あります」

ではまた次回

封印すべきは忌まわしき器 ジュエルシード！





ばかだなあ

オレたちに自分の作品の大切な主人公を預けてくれる人なんかいるわけないだろ？

「奴」

「いや・・・こういうの完全に番外編だから蒔風と管理人じゃなきゃいいんだが・・・」

そうなん？

「奴」

「おい！！もつといるんな人に感想送ってコミュニケーションを広げろよ！！！！」

・・・怖いんです

「奴」

「はあ？」

今まで散々読んでた作品の作者様に、今更感想とか送るのが怖くて仕方ないんです！！！！

こいつ今更感想かよ、みたいになったらどうしよう！？

「奴」

「いや・・・みなさんそんな人じゃないと思うぞ？」

そう思うぞ！！でも俺ってそういうのダメだから・・・



- ガーター -

.....

「奴」

「見てみたか？」

うあああああああ！！！！！！

「奴」

「では仕切りなおして、ほい」

- ストライク！！ -

「奴」

「よし！！！！」

なんの！！ほりゃ！！

- ストライク！！ -

よっしゃ！！！！

《そうして順調にゲームを進める二人。しかし……》

肩が……腕があアアア！！！！！！

「奴」

「ゴリユゴリユいっとなる……これはやばい……」

《無理して強引にブン投げてきたために、一ゲームで二人とも沈んだ》

「奴」

「やっぱり・・・ゲストいないと・・・」

無理さ・・・

それに、オレが読んでない小説からきたらどうする？

「奴」

「それは相手もわかってくれるだろう・・・」

失礼じゃないか!!!

「奴」

「お前に合わなきゃしかたないだろう」

そうですね・・・

みなさま、この「世界をめぐる、銀白の翼人」もアクセス数が五万を超えました。

システム復旧したらいきなり五万越えを確認。  
驚きました。

なのはを原作に入れたらアクセス数の伸び率が半端なかったです。  
やっぱりなのははすごい。

しかし、この小説がここまで続いてきて、ここまでアクセス数が伸びたのも、ひとえに皆様のおかげです。

現在はリリカルなのはの世界。

まだまだ世界は回って行くので、どうかよろしくお願いします!!!!

あと、蒔風を使いたい方がいらっしやったら、気軽に声掛けてください。

あんな男でよければ、いくらでもお貸しします。

アリスでも、「奴」でもいいですよ。

では、全然やってなかったけれど、「奴」のボウリング場、おわりま〜す。

自分からは感想とかいけないダメダメな人なので、感想、お待ちしています!!!!

なのは、〜戦う理由がそこにあるの〜

モニターに映し出されたひとりの女性

彼女についてクロノとエイミーの説明が入る

「名前、プレシア・テストロッサ。私たちと同じ、ミッドチルダ出身の魔導師にして、研究者」

「専門は次元航行エネルギーの開発。かつての実験の失敗で、ミッドチルダの一部を吹き飛ばし、その身を追われた人物ですね」

「過去の登録データと、さっきの攻撃の魔力が一致したから、まず間違いなさそうです」

「そして……フェイトちゃんのお母さん……」

「確かに、フェイトは母さん、と言っていたな。だが、とてもじゃないが良い顔はしてなかったな。むしろ怯えた感じだった」

「うん……」

「エイミー。彼女について、もっと情報を集めて」

「了解です!」

リンディがエイミィに指示を出す。

が、しかし

「……ダメです。家族構成やこれまでの足取りのデータは綺麗サツパリなくなっています。本局に申請したので、一両日中にはデータがそろつかと」

「そう……ありがとう」

「フェイトの背中には傷があった」

「え？」

蒔風の発言に皆が注目する

「しかも魔法戦やジュエルシードの封印の際の怪我じゃない」

「それはどういう……」

「そういえば、アルフさん、言っていました。フェイトちゃん、家に帰る度に辛いつてみたいなこと……」

「更に言うと、傷の元は、鞭によるものだと思うんだ」

「ま……まさか……!」

「まさかだと……いいけどな」

「……とにかく、今はあの二人とも、あれだけの魔力を使つてすぐには動けないはず。アースラのシールドも補強しないといけなし、なのはさんたちは一旦、帰宅した方がいいでしょう」

そう、あのとときのプレシアの雷による攻撃は、アースラにもあつたのだ。

「でも……」

「なのは、休むことも必要だよ」

「それに、アリサ・バニングスやすずかに連絡入れないと、心配させちまうぞ」

「うん……」

ユーノと蒔風が説得する。

今焦つてもしょうがない

そうして、なのはたちは一旦帰宅した。

.....

「フェイト……フェイト!!」



世界の狭間にある、プレシアの根城「時の庭園」

そこにアルフの叫びが響く。

駆け寄る先には傷つけられたフェイトが倒れている。

つい先ほどまで、フェイトはプレシアに鞭打たれていた。

あれだけの好機に、なにをポケットとしていたのかと

アルフには信じられなかった。

あれだけ頑張ったのに

あれだけ歯を食いしばってたのに

フェイトがそれでも頑張るの理由は！！

睨みつける先にはあの女の部屋がある

『フエイトのことを想うなら、時には主の命にも逆らえよ！！！！あ  
らゆる手段を使えよ！！！！それが、命懸けってやつだろっがよ！！  
』！

あのときの・・・蒔風だっけ？

あの少年の言葉を思い出した。

そうだね・・・

あときは聞き流したけど、その通りだね・・・

フエイト、ごめんよ

でも！もうダメだよ！我慢出来ない！

ドオン！！

考えたのは最初の一瞬だけ

あとはこの私の使命のままに！！

吹き飛ばした扉を潜り部屋に入ると、あの女がいた

「あああああ！！」

私はあいつに飛び掛かった。

障壁を張られたけど、関係ないね！

今のあたしは、いつもと違う！！

バキィ！

障壁を破り、胸倉を掴む

ぶん殴りたい衝動を、言葉に変えて叫んだ

「あんた！あの子の母親だろう！？あの子が何のために戦ってるのか、知ってんだろ！？あんなに一生懸命な子に、なんであんな事を！！」

フェイトがあんなにまで頑張ってるのはあんなの為なんだよ！

なんであんたはそんなあの子にあんな仕打ちするんだよ！

「自分の為に頑張ってくれている娘に、どうしてあんな事できるだよ！！」

しかし、プレシアはなにも言わない。

しかし目は語っていた

・・・クダラナイ・・・

その瞬間、プレシアの魔法が腹を撃ち抜いた。

「ぐっ、ああああ!!」

部屋の隅まで吹き飛ばされる  
口の中に血の味が広がる

「全く・・・あの子は使い魔の作り方が下手ね。感情剥き出しじゃないの。それに、あなたわかってるの？私はあの子の母親よ？」

「関係、ないね」

「なに？」

「あたしの主人はあんたじゃない、フェイトさ！フェイトの為なら、あたしは何でもする。そのためならフェイトの母親でも、あんたは私の敵だ!!」

「・・・はあ、ダメね。（ボソッ）やっぱり、人形が作った使い魔なんて、不完全極まりないわね」

「え？」

「あなた、もういらぬわ……消えなさい!!」

まずい……消される!

ドッゴン!!

バラバラバラバラ……

プレシアの攻撃で部屋の一部が吹き飛び、穴が開く。  
そこにはアルフの姿はなかった  
プレシアはアルフを消し去るつもりで攻撃したので、得に疑問には  
思わなかった

プレシアはフェイトにアルフは逃げ出したと伝えた。  
フェイトは信じてはいなかったが母の言うことに口答えは出来な  
かった



「あんたも、来たければ来てもいいのよ?」

アリサが蒔風にも声をかける。

「マジで?でじま、マジでじま!?」

「古いわよ!?!」

「行かせていただきます!?!お嬢様!?!」

「お?いいわね!?!もっと崇めなさい!?!」

「ははー!?!」

「あっはっはっはっは!?!?!」

蒔風がいつのまにか大きな葉っぱのうちわを取り出し、アリサを扇あおいでいる。

「アリサちゃん、ノリノリすぎ・・・」

「あ、そうそう。あと、大きな犬拾ったのよ」

「どんな犬なの?」

「えっとね、オレンジ色で、額に宝石見たいのが付いてた」





『なのは、彼女からは僕が話を聞いておくよ』

『オレも。何があつたのか聞きたいんだ』

『うん、お願い』

なのはが二人と家に入る。

蒔風はもうちょっと様子を見てみたいと残った

そして蒔風は普通に、二人は念話で話す

『どうして君がここにいるんだ？』

「フェイトはどうした。何かあつたんかい？」

『……この会話、管理局の連中も聴いてるんだろ？』

『……ああ、管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。正直に話してくれるなら、悪いようにはしない』

クロノがアルフに通信で話しかける。

その言葉は純粹な想いから来ていた。

『……わかったよ。話すよ。代わりに、フェイトを、フェイトを助けてやってくれ……』

「「「当たり前だ」「」」

三人の声が揃う。

そしてアルフが話しだす。

フェイトがジュエルシードを集める理由。

それは彼女の母親、プレシア・テストロツサの指示だった。

プレシアは何らかの目的のためにジュエルシードを集めている。

フェイトは、母親のためと一生懸命に頑張った。

しかし、プレシアはそんなフェイトを見ようとしぬい。

さらには集まりが悪いと、鎖で吊るし、鞭を打ち、フェイトに仕事をしていた。

しかし、アルフから見ればお仕置きとは言うばかりの、ただの虐待。自らの憂さ晴らしにやってるようであった。

そんなフェイトにアルフは何度もこんなことはやめよう、と訴えていた。

しかしフェイトは、母さんのためだから、母さんを困らせちゃ駄目

だから、と今まで頑張ってきた

アルフは、そんなフェイトを救うために、ついにプレシアに牙を剥くが、返り打ちにあい、ここまで逃げてきたのだそうだ

「なんでそんな無茶したんだ」

『あなたの言葉さ』

「オレの？」

『あんた言つたる？主人のために命懸けでつてさ。だからあたしはフェイトのために、やっと立ち上がったんだ……。でも……。』

その声が、悔しさにわなわなとふるえていく

『でも……。なにもできなかった……。フェイトを守るんだって言うても、結局負けて、フェイトを置き去りにして……。今、フェイトは一人ぼっちなんだよ……。なんで……。なんであたしは弱いんだ……。使い魔なのに……。あの子を……。守れない……。』

「守れるぞ」

『え？』

「弱いなら、頼れ。管理局は立場上、難しいかもしれないが、オレやなのはフェイトを助けるつもりでいるんだからな。頼れる仲間には、おまえの強ささ」

『舜、見くびらないでくれ。管理局だって、フェイトを救うために全力を尽くす』

『僕もだ。僕の力は弱いかもしれない・・・でも、この思いは誰にも負けないつもりだ』

「はは。どうだ？あつという間に味方ができたぜ？」

『あ・・・う・・・うっ・・・』

「世界つてのはさ、確かにクソつたれなことがたくさんあるさ。でも、絶望するほど救いがない世界なんて、ないんだ」

『あああ・・・』

「大丈夫だ、安心しろ。救いは確かにここにある」

『うっ、うっ・・・ありがとう・・・フェイトを・・・頼む！！・・・』

『なのは、聞いていたかい？』

『うん』

通信で話を聞いていたなのはが会話に入る

『管理局はこれより、プレシア・テストロッサの逮捕及びフェイト・テストロッサの保護に全力を注ぐ』

『私たちは？』

『僕たちはプレシアを追うから、もしそれまでにフェイトが現れたら、君に一任する』

「お、クロちゃん太っ腹」

『それが一番いいと、僕も思う。なのはにしか、できないと思う』

『彼女と一番長く戦い、話し、出会ってきた君なら、彼女を救える。任せたよ』

『はい！！！！』

そして翌日の、夜が明けるとき

なのはたちは家を出た。

昨夜にもう家族に話してはあるので、問題はない

なのはは駆ける。

フェイトに、答えを聞くために。

途中でアルフも合流した

己の主を救い出すために。

ユーノはそれを見届ける。

これからのことが、確かにあつたと証明するために

蒔風はなのはを見守るつもりでいる。

何者にも、これから起こることの邪魔をさせないために

そして、海に面した公園につく。

そこで心を澄まして待っていると、やって来た

フェイトがそこに現れる

大切な母親ひとの笑顔が戻ると信じて

そして二人は言葉を交わす。

お互いのジュエルシードをすべて賭け

最初で最後の本気の勝負

そして、想いを伝えるために

二人の魔法少女の、最後の戦いが始まる。

しかし、ここまで来ても、まだ

この物語はプロローグにもなっていない

t o b e c o n t i n u e d

なのは、戦う理由がそこにあるの。(後書き)

さあ、ついにここまでかこつけましたよ!!

アリス「ここから一気に最後まで行くんですね?」

そうかな?

ア「あれ? なにかあるんですか? プロローグがどつとが」

さあね~~~~

ア「うわ、ムカつきますね」

それはお楽しみに!!!

今回はこの辺で

ア「次回、決着、そして……」

ではまた次回



この手にあるのは、  
撃ち抜く魔法。  
涙も痛みも、  
運命も

なのは、全力全開！！そして謎の影なの、

フェイトとなのはが飛び上がる。

二人の戦いが始まった

言葉はもはやなく

輝く魔法と二人だけが飛び交う戦場

砲撃においてなのはが勝利

接近戦においてフェイトが勝る

離れて撃ち

近づき攻める

互いが互いに仕掛け、かわし、防ぎ、飛ぶ

戦いの舞台から離れた公園

そこに蒔風たちはずっといた。

「なのはは勝てるだろうか……」

ユーノが不安そうな声を出す。

「どちらとも言えないな。なのはは確かに強くなったし、魔力量も大きい。フェイトの方は経験値が高いからな」

「フェイトは、スピードで動き回って相手の懐に入り込み、攻撃する近接戦闘を得意としているんだ」

「なのはは離れたところからの砲撃と、その精度がすごいから、当たればひとたまりもない」

蒔風が中立的な意見を

アルフがフェイトの、ユーノがなのはの持ち味を述べる

「つまりは……自分の領分で攻撃しきった方が勝つ、か」

「でも……フェイトは……」

「ん？」

アルフがさらに先を言う

「それ以外が苦手なわけじゃないんだよ」

その瞬間、フェイトのバインドがなのはを捕らえる。

「！！捕まった！」

「まずい……フェイト、本気だよ！！」

『なのは！いまサポートを……』

ユーノが叫んだ。

しかし

「だめえ！！」

なのはが叫ぶ

「一対一の、最初で最後の、全力全開の勝負だから！！だからこころは、一人でやらせて！！」

『でも……フェイトのそれは本当に……』

「ゴチャゴチャ言うな！！なのはは、一対一での本気の勝負と言って、フェイトもそれに応じたんだ！ここで手を出すことは、オレが許さない！！お前らも、あいつらの顔に泥塗りたくないだろ？」

アルフがなのはの身を心配し、忠告しようとするがそれを蒔風が押し留める。

「でも……」

それでもなお心配なのか、アルフが声を出す。

そこで蒔風がなのはに問う

『なのは、行けるよな！？』

それに答えるなのはの声は、絶対に退かない覚悟が込められていた

『当然！！まだまだ諦めないよ！！！！』

動けないなのはの目の前で、魔法の力が溜まっていく。

(絶対に・・・負けない!!!!!!)

《Phalanx Shift》

「フォトンランサー、フランクスシフト。撃ち碎け・・・ファ  
イア!!!!」

そしてフェイトのフォトンランサーが命中していく。

何十、いやその数は百に届くであろう数の砲撃がなのはを襲い、爆  
発になのが吞まれる

フェイトの顔に、苦しげな表情が現れる

「なのは!!!!」

ユーノが思わず叫んだ

しかし、その声にはだれも答ええない

更なる追撃の為に、フェイトが魔力を溜める

そして、爆煙が晴れたその先に、なのはがいた

まだ電撃が身体に残り、少し痺れるが問題はない。

なのははその砲撃に耐えきっていた。

レイジングハートの補助と、なのはの成長が、それを可能なものとしていた。

「バインドって、攻撃のあとなくなっちゃうんだ・・・」

なのはが多少の痺れが身体から抜けたことを確認すると、レイジングハートをフェイトに向け、叫ぶ

「じゃあ、今度はこっちの、」

《Divine Buster》

「番だよ!!!」

なのはの砲撃がフェイトに放たれる

迎え撃たんと溜めた魔力を放つフェイト

しかしてそれは塵へと変わり、衰えを知らず少女に向かう

フェイトは防壁を張りそれをしのぐ

しかし直撃のディバインバスターは優しくはない

だが瞬間、フェイトは堪えてみせると誓った。

あの子も、自分の攻撃に堪えたのだ。

自分が堪えれないなんてことが!!!

「あつて……たまるかアアアアアア!!!」



衝撃に晒されるマントはボロボロとちぎれ、突き出す腕の手袋は次々と避けていく

が、フェイトは堪えきつた。

息は荒く、腕は下がり、顔を落とす。

そんなフェイトの上空、レイジングハート先端に、桜色の魔力が溜まる。

その光に、フェイトが再び顔を上げる。

（そ・・・そんな！！あれだけの砲撃をして、まだあんな魔力・・・まさか！！！！）

「集束・・・魔法！！！！」

その事実にはフェイトは驚愕する。

出会った時は、魔力の大きな素人だったのに、なんでこんなに強くなれたのかと

「考えてみりゃ簡単なことだったんだよな」

離れたところの、公園に立つ蒔風が、誰にでもなく語る

同時に、なのはの言葉が紡がれる

二人の言葉が、申し合わせていたかのように、交互に発せられる

「受けてみて。デイバインバスターのバリエーション！」

「なのはとフェイトの間には、大きな大きな壁があった」

フェイトが逃れようとする、なのはのバインドがフェイトを捕らえる

「私とレイジングハートで考えた、知恵と戦略」

「その壁はあまりに高く、どこまで飛んでも、どこまで眺めても、上の見えない、とてもじゃないけど乗り越えられない壁」

空气中に霧散した微細な魔力をかき集め、自らの魔力とし、ありったけを注ぎ込む!!

「これが私の全力全開!!」

「でも、知ってるやつは知ってるんだ。その壁は……」

「スターライト!!!!!!!!!!!!!!」

「乗り越える必要なんかなかったってな。その壁が、どれだけ薄っぺらいものだったのかを知っているんだ！」

「ブレイカーーーーーーッッッ!!!」

「だからそんな壁、ぶち壊してやれ。思いっきりあたったあとに、分かり合えることだってあるんだからな」

フェイトを砲撃が襲う。

バインドで防御することも出来ず、直撃した。

星の輝きを冠したその砲撃は、フェイトを呑みこみ、下の海に一瞬だけ穴を空け、その着弾点の海水を吹き飛ばした。

砲撃が止み、フェイトが海に落ちるが、なのはがそれを引き上げる。

フェイトを抱えながら飛ぶのはも、もう体力はそんなになく、フェイトが目を覚ますと、自分で飛べるかを聞き、その手を離す。

二人が二言三言、言葉を交わす

そしてフェイトが負けを認め、なのはにジュエルシードを八つすべて差し出すために、バルディッシュからそれを取り出した。

その瞬間

あのととき襲ったの紫電が飛来した

「圧水掌！！」

ドババン！

ババアアア……………

公園から蒔風がそこに圧水掌を叩き込む。

水が紫電ではじけ飛び、一瞬の雨を降らす

「まったく・・・癩癩持ちは嫌われるぜ？プレシアよ」

『舜君！！』

『早く戻れ！なのは！』

蒔風がなのはに戻るように促す

なのはとフェイトが蒔風たちの方に向かう

その間も雷は来たが、蒔風が圧水で傘を作り、それを防いだ

なのはたちが地上に下り、蒔風がなお迫る雷を払い続ける。

「ユーノ！早く転移を！」

「ああ！なのははジュエルシードを確保して！」

ジュエルシードは、フェイトは自分で持っていたが、なのはのものはユーノとアルフの周辺に浮いて置かれていた

今はそれらすべてがここにある

「うん！レイジングハートお願い、きゃあ！！」

「どろした！……！」

なのはが悲鳴を上げ、時風がそちらを向く

すでに雷はおさまっている

「ユ、ユーノ君。あれ……。」

「ツツツ！しまった……ジュエルシードを取られた！！」

ユーノとアルフが転移魔法の準備の為に目を離した瞬間、なにかがジュエルシードを七つ、奪っていったのだ。

「てめえは！」

時風がその存在が何であるかを確認し叫ぶ。

その瞬間、更に一旦攻撃の止んだ雷が飛来し、ジュエルシードを九つ奪っていった。

「ジュエルシードが……！」

「そんなー!!」

なのはとユーノが愕然とする。

すべてのジュエルシールド21個のうち、九つはおそらくプレシア奪われ、得体のしれない奴に七つもとられたのだ。

なのははとりあえず、手元に残る五つのジュエルシールドを回収する

「ユーノ、アルフ。二人を連れてアースラに戻れ」

蒔風がユーノとアルフに促す

「舜は？どうするつもりなんだ!!それにあの黒いのがジュエルシードを取り返さないと!!」

「それはオレがやる」

ユーノの言うことももつともだ。

しかし蒔風が一人でやると言い張った

「舜君は・・・あれを知ってるの?」

なのはの質問に、蒔風の口元がにやりとしたもの変わる

「知らないわけないだろう。あれは・・・「奴」の欠片だ!!!!」



「「奴」って・・・舜君の追ってる!？」

「ああ、本人が来てないところから、解析は済んでないが手出しはしようといったところか」

「だったら私たちも・・・」

「だめだ。お前らは体力も魔力もカラだろ。危険だからここはオレに任せて帰れ」

「でも!?!?!」

舜君が心配だ、とここに残ると言い張るのだが

「~~~~~ッ。ユーノ!!準備できたか!?!」

「あ、ああ。でも・・・」

「だったら行け」

ドカツと蒔風が魔法陣の中に四人を放り込む。

「舜君!?!?!」

「大丈夫さ。ジュエルシードを取り戻して必ず帰る」

なのはにそう声をかけ、蒔風が「欠片」に向かう。

後ろから転移魔法の発動した音が聞こえた

「行つたか……さあて、本体は今どこにいった？」

「\$#68?||9&<」

「言語能力は与えられなかったか。まあいい。オレにとってはやっ  
と、」

「&#%理81g殺!-!」

「欠片」が騒ぐ。

それは言葉にせずとも、明確な殺意と悪意を含んでいた。

「プロローグが見えてきたってところかな!!!」

蒔風が「欠片」に向かう。

二人の戦つたその証を、取り戻すために

一方、アースラ艦内ではジュエルシードを奪つた雷を追ひ、ついに  
プレシアの根城を突き止めていた。

物質転移は跡が残りやすく、容易に見つけることができた。

多くの武装魔導師が乗り込む。

ここから、物語は加速する

しかし、一人の少女の物語はまだ始まってもおらず。

一人の少年の戦いはやっとプロローグの前に辿り着いたばかり。

t o b e c o n t i n u e d

なのは、全力全開!!!そして謎の影なの。(後書き)

アリス「どうするんですか?七つも取られて」

いや、欠片だから大丈夫でしょ、多分

それにしてもやっぱりなのは熱い!!!

ア「燃え上がりますよね!!!」

作者としてはあの作品

アニメとか魔法少女の皮をかぶった特撮ヒーローものだと思っています

ア「おかしいですもん、あの熱さ」

劇場版とかもうサイッコーでしたね

BGMとか今聞いても鳥肌立つもの

ア「ソクゾクするネエ」

するねー!!!

ア「次回、時風の戦い。そしてフェイトの秘密!?!」

回次たまはで

ア「めんどいことすなー!!」

君との出会いで胸に輝く勇氣は  
思いがけないほどに大きく解き放たれた  
運命に負けないように一生懸命動き出そう  
計算違いの展開が未来を切り開いて行く

なのは、闇との戦い。そして残酷な真実なの。

「オオオオ!!」

ガツ、バギイ!!

蒔風が獅子、麒麟を握り「欠片」に迫る。  
それを腕で受け止める「欠片」

「くっそ!!」

蒔風が悪態をつき、「欠片」から離れ、身を翻して獄炎砲を撃つ。

爆発が起きるが、手応えはない。

「欠片」がまだ健在であることがわかる。

「鎌鼬切演舞、単撃!!」

蒔風が「風」と「林」に刀を持ち替え、身体を捻り脚の筋肉に力を込める

「螺旋!!」

捻った身体を一気に戻し、その勢いで回転しながら「欠片」にむかって弾丸のように飛び出す。

「風」「林」の斬撃が「欠片」を刻み、蒔風が「欠片」を飛び越していくと、衝撃波で「欠片」が海にまで吹き飛んだ。

「逃がすか!!」

蒔風が海に飛び込む。

海中で「欠片」を見つけた。

蒔風が圧水を使い一気に接近する

(近づいて、海上に放り投げて、十五天帝てぶった切って終いだ!  
!)

「欠片」は蒔風が迫るにも関わらず、微動だにしない。

そして蒔風が「欠片」を掴み、海上に向けて投げつけようとする。

が

(な・・・こいつ!!)

蒔風がつかみ掛かった瞬間、「欠片」と蒔風の周囲を囲むように渦が発生した。

当然、自然現象ではない。

「欠片」が蒔風を蹴りだし、渦に放り込んだ

(ぐっ・・・あ！？チクシヨウ、一瞬で上下も左右もわかんなくなっ  
たぞ!!)

「欠片」は一人海上に上がり、蒔風を渦ごと海中から引きずり出した。

しかし、蒔風には海中から引き上げられた事すら感知できない。

「欠片」の脚に七つのジュエルシールドがすべて集まり、光りを放つ普通であれば、あまりの強さに目を閉じ、それでも脳がフラッシュしたようになるであろう輝きがその脚に宿る。



しかしその輝きも、今の蒔風には分からない

そして蒔風が回ってきたところに、カウンターの要領で「欠片」が全エネルギーを込めた廻し蹴りを蒔風の背に叩き込む。

蒔風の身体がまるで前と後ろが入れ代わったかのように、背中側でくの字に曲がり、音速を越えるスピードで公園に突き刺さった。

モウモウと土煙が上がって、ガラガラとなにかが崩れた。

地面は抉れ、木は根っこから吹き飛び、蒔風の姿は見えない

「欠片」がその場を去ろうと踵を返す。

そのとき

「開翼！！！！」

ドッバァ！！

土煙を吹き飛ばし、一対の銀白の翼が展開される。

そして時風が立ち上がり、「欠片」に向かって両手を向ける。

「欠片」は再び時風に向かって飛び出した

「混闇陣!」

メギヤ!と音がして、「欠片」が途中で吸い寄せられるように大地に倒れ、目に見えない重力に押し潰されている。

「混闇竜・・・」

更に漆黒の竜を繰り出す時風。

さらに動作は止まらない。

「焼き尽くせ、獄炎。押し潰せ、土惺!混闇の元に混ざり合え!」

混闇竜に獄炎と土せいを投げ込み一つにする。

すると、土惺と獄炎が混ざり合い、マグマのように煮えたぎる竜へと姿を変えた。

「獄惺竜!!焼き押し潰せ!!」

時風が混闇陣を解き、「欠片」を蹴り上げる。



「オイオイどうしたんだ？プレシアは捕まえたの？」

蒔風がジュエルシードをジャラジャラとお手玉しながら管制室に入ってくる。

なのはたちは蒔風が帰還したにもかかわらず、そちらの方を見ず、モニターのある光景に絶句していた

まさに今ちょうどプレシアの研究室が暴かれたところである

モニターにはプレシアに迫る管理局員と、奥の研究室に踏み込んだ先の映像が流れていた。

そこには大きなカプセルが真ん中に置かれており、その中にいたのは……

「あん？なあなあ、あのカプセルの中にいるのってさ……フェイトじゃねえの？」

プレシアが管理局員に殺意と狂気のまなざしを向け、叫んだ

「私のアリシアに……近寄らないでちょうだい！……」

モニターでは、カプセルの傍らにいるプレシアと、それを捕縛するために迫る管理局員が映っているが、プレシアの攻撃に次々と倒れ、全滅した。

リンディの指示で全員が強制的にアースラに戻される

「アリ……シア？」

フェイトが目の前の光景が理解できないとつぶやく。

皆の疑問を解くように、アリシアが語り始める

『もう駄目ね…… たった九個のジュエルシードではアルハザードには到達できない…… 終わりにするわ。娘を失ってからの陰鬱とした日々も、代わりの人形を娘呼ばわりするのよ』

「っ！？」

「！？……人形……だと？」

「どじいっ……」

『聞いていて？あなたのことよ、フェイト。せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ……何の役にも立たない、ちっとも使えない……私のお人形!!』

「~~~~ツ!!!!どじいっことだ!!!!あの少女は誰なんだ!!!!」

蒔風が叫ぶ。

それにエイミーが説明する

「……昔の実験の時に、プレシアは自分の実の娘、アリシア・テスタロッサを亡くしているの」

「な……に？だったらあの少女は!?フェイトは!?!」

「プレシアの研究は、人工的な魂の精製……人造生命の生成と、死者蘇生の秘術……「フェイト」って名前は、その時のプロジェクトの名前なの……」

エイミーが資料から調べ上げたことを話した

プレシアが続きを語る

『よく調べたわね……そうよ、その通り。だけど、ちっともう

まくいかなかった。作りものはしょせん作りもの。アリシアのDNAを元にクローンを作り、アリシアの記憶をそのまま与えたのに全然違う』

プレシアの言葉一つ一つがフェイトの心を砕いていく

自分はその子の代わりだった。

でもそれにもなれなかった、紛い物。

自分自身が保てなくなる……

「やめて……」

なのはがプレシアに向かい、届かない声を発する

『アリシアはもつと優しく笑った。わがままも言うけれど、私にやさしくしてくれた。私の言うことはよく聞いてくれた』

「やめてよ……」

なのはがさっきよりも大きな声を出す、まだ届かない

蒔風の表情が若干険しくなった

『でも……あなたは違う。同じ記憶、同じ体を与えても、所詮あなたは偽物。だからもういらないわ……だから、もうどこにも行くといいわ』

「やめてえ！……！」

なのはの叫びがプレシアに届く

しかしプレシアは止まらない

「実はね……私、あなたと出会ってからずっと……」

・・アナタノコトダイキライダッタノヨ・・

「っ……！」

そこでプレシアは狂ったように笑い、通信を断絶する。

同時、フェイトは自身の存在を見失った。

今までの記憶、今までの自分

それらはすべて「フェイト・テストロッサ」ではなかった。

そんな人間はいなかった。いたのはただの「お人形」

「フェイト・テストロッサ」という人間を見ているものなど……  
いなかったと……



フェイトの手からバルディッシュが落ちる。  
中心の宝石が砕ける。主の心を表すかのように。

そしてフェイト自身も、その場で崩れ落ち、倒れた。

「フェイトちゃん!!!!」

「フェイト……」

なのはとユーノがフェイトに声をかける

「プレシア………テストロッサアアアア!!!!!!」

蒔風がすでに届かない声をあげる。

それに応えるかのように、モニターに巨大な魔力反応が多数現れた

「な……なんだ!!この魔力反応は!?!」

「推定ランクA!!個体数六十、八十……まだ増えています!!!!」

アースラのモニターに再びプレシアの庭園内部の映像が映る

局員の残した別のカメラで内部が映し出されたのだ

庭園内に、鎧の騎士を模したような化け物が、モニターに表示されただけ出現していた

「プレシア・テストロッサ・・・一体、何を!？」

「プレシアはアルハザードに行くと言っていたな」

「舜さん？」

蒔風がリンディに声をかける

「遙か太古に滅んだ理想郷、アルハザード。なるほど、確かにそこなら死者を蘇生させる術があったと思われても不思議じゃないよな」

「では・・・あつたのですか!？そのようなものが!！」

「ないさ。いや、オレはアルハザードのことなんかこれっぽっちも知らないですよ?でも、死者を蘇らせる方法なんか、ない」

「そう・・・ですよね」

「クローンによるアリシアの復活に失敗し、さらにはアルハザードにはいけない・・・ってか、アルハザードって滅んだんですよね?」

「一部の学者の間では、滅んではおらず、どこかの時空に存在して

いるといわれているわ・・・でも・・・」

「一部の学者か・・・そんなものにまで縋るほど・・・か」

「歪んだ愛ね・・・」

「だが、強い・・・今プレシアは自暴自棄状態にある。もうなりふり構わないだろうな。おそらくは・・・」

「おそらく・・・どうなるというの?」

「無理矢理でもアルハザードに行こうとするだろうな。可能性が低いとは言え、ゼロじゃないんだからね。今の彼女ならやりかねない」

その通りであった。

プレシアはアリシアの入ったカプセルを土台から抜き、祭壇の中央に行く。

『私たちは旅立つのよ!!!永遠の都、アルハザードに!!!』

ジュエルシードが九つすべて発動し、次元震が起きる。

アースラが回避行動をとる

「くそっ！！そんな、アルハザードがあったとしたって、失われた過去は取り戻せないんだ！！！！」

クロノが飛び出し、彼女を止めようと庭園に向かう

『あはははははははははは。うふははははは。うひ、ひゃはははははははははは！！！！！！！！！！』

モニターではプレシアが狂ったように笑い続ける

フェイトの眼に光はなく、ボーっと、虚空を見つめていた

それと抱えるのが、キッとプレシアをにらみつける。

ある者にとっては

ここからがクライマックスで、

物語の始まりで、

プロローグの始まりである

t o b e c o n t i n u e d

なのは、闇との戦い。そして残酷な真実なの。(後書き)

アリス「フェイトさん、気を確かに!!! てめえ作者こらなんて展開にしゃがんだ!」

ええ!? いや、ここは弄っちゃいけないだろうよ!!!

ア「でも〜〜〜」

はいはい

確かにひどくはありますがね、仕方ないでしょうよ!!!

ア「そうですね〜〜〜」

大丈夫

なのはや蒔風が何とかしますからね!!!

ア「今ほど主人公に期待したことはありませんよ」

ではお願い

ア「次回、己の存在証明」

ではまた次回

あの日出会った奇跡は  
誰にも想像できない物語のプロローグに繋がっていく

なのは、戦いの終わりと始まりとブローグなの。

アルフがフェイトを抱え、時風が後につき医務室に運ぶ。

なのはとユーノも途中までついて来ていたが、クロノと合流し、プレシアの庭園に乗り込んでいった。

医務室のベッドにフェイトを寝かせ、アルフが心配そうに眺め、時風は壁に寄り掛かって腕を組んでいる。

「……なあ、なんであなたはあっちに行かなかったんだい？」

「こっちの方が心配だからな。にしても衝撃の事実だったねえ」

「うん……」

医務室のモニターに、庭園に乗り込んでいったなのはたち三人が映し出される。

クロノが道を開き、なのはとユーノが先に進む。

クロノは大量の騎士たちを相手どり、なのはたちはプレシアのもとに向かっていく。



「あの騎士たちはなんだ？」

「あれは・・・多分、機械に庭園の動力炉にあるロストロギアのエネルギーを送り込んで作ったものだよ」

「なるほど、人が入ってるわけじゃないのか」

「うん・・・」

「あと、所々にある穴はなんだ？」

「あの穴に黒い空間があるだろ？あれは虚数空間って言ってね、一切の魔法が無効化されてしまうんだよ」

「落ちたら一貫の終わり、か」

「・・・あたし、あの子たちが心配だから、ちょっと手伝ってくるね」

「そうか」

「フェイト・・・これが終わったら、ゆっくりでいい。元の、あたしの知ってるフェイトに戻ってね・・・じゃあ、行ってくるよ」

アルフが部屋を出る

部屋には時風と、虚ろな目をして天井を見つめ続けるフェイトが残された。

「フェイト、わからなくてもいい。聞いてくれ」

蒔風がフェイトに話し始める

「今お前は、自分を見てくれていた母親に裏切られた。お前を見ていた者はいない、と思っっているだろうな」

「でも、アルフはどうだ。あいつは、お前が・・・フェイト・テストロッサがいたからああして生きているんだ。あいつの主は、間違いない、お前なんだ」

「それに、モニターの向こうで戦ってるなのは、お前の名前を何度も叫んだあの少女。お前と友達になりたいっていったんだぜ？他にもない、フェイト・テストロッサとだ」

「オレたちが知っているのは、アリシア・テストロッサの代わりの少女じゃない。ましてやプレシアの人形でもない！フェイト・テストロッサと言う、一人の人間だ！」

「確かに、生まれた理由は、アリシアのクローンだったかもしれない。プレシアの慰み物だったかもしれない。でも、生きる理由は、そこじゃない!!」

「アリシアのクローンだとか、そういったものも当然、お前を形作る要因の一つだ。でも、そうある前に、お前はフェイト・テストロツサだ！アリシアとかプレシアとか、そんなことは後回しだ。まず、お前自身が何者で、なにをしたいのか。よく、考えてくれ」

「そして忘れるな。誰よりも「フェイト・テストロツサ」を見てきた少女が今、他の誰でもないお前の為に戦っていることをな」

蒔風が出口に向かいながら最後に言った。

「お前の物語はここからかもしれないけど、オレの「この世界の」物語はまだ始まってないんだ。プロローグでもたつかせないでくれよ?」

そして蒔風も医務室を出ていく。  
部屋にはフェイトが残された。

あの男の子が出ていった

頭の中を思考がグルグルとまわる

母さん……

あんなこと言われても、私はまだ母さんに笑って欲しいと思ってる。  
まだ母さんに縋り付いてる。

チカチカと映っているモニターに目をやると、アルフと、白い服の  
女の子が戦っていた。

アルフ……何度も私を止めようとしてくれた、アルフ  
アルフは、いつだって私の為に動いてくれた。

それに、あの白い服の女の子……  
なんども戦って、なんども私の名前を呼んでくれて……  
初めて私と対等に向き合ってくれた  
初めて私に本気の本音をぶつけてくれた  
なんどもなんども、私に”初めて”をぶつけてくれた、あの子

胸の中に、熱いなにかを感じた気がした。

身体を起こす

生きる意味なんて、母さんに認めてもらうためだった。  
それ以外にないと思っていた。

でも……あの子は……私に……

逃げればいってわけじゃない。  
捨てればいってわけじゃ、もつとない……

部屋の片隅に置かれた、ポロポロになったバルディッシュ

私の……私たちのすべては、まだ始まってもない。

バルディッシュをデバイスモードに展開する  
ポロポロでヒビだらけで、今にも砕け散ってしまいそうだけど、  
確かにまだここにある

「私……まだ始まってもいなかったのかな、バルディッシュ」

《get set》

「っ……そうだよね、バルディッシュもずっと私のそばにいてくれ  
たんだもんね。このまま終わりになんか、したくないもんね」

《yes sir》

そうだ・・・私はフェイト・テストロッサ！

アリシアが元で生まれて、母さんの人形だったとしても！！

「私は、私であるために！私の、フェイト・テストロッサの物語は、ここから始まるんだ！！バルディッシュュ！！！！」

《yes, sir!!!! recovery!!!!!!》

バリアジャケットに身を包み、バルディッシュュが輝き、ポロポロだった機体が直り、万全なものとなる  
これで準備は整った。

「さあ、これから始めるために、これまでを、終わらせよう！！」

転移魔法陣を展開し、跳ぶ。

向かうはあの子の戦う場所、そして、母さんのもとに

S I D E   o u t

医務室の中からフェイトの気配が消える

「行つたか・・・」

蒔風が中をのぞき、嬉しそうな表情でつぶやいた

「ははは!!!これだから!!!人つてのは素晴らしい!!!」

天井を仰ぎ、大笑いして、この世の最高の幸せと手にしたような顔を  
をする

「どんな逆境にあつても!!!決して失われることなく、輝き続ける  
心!!!ああ、やっぱり生きてるっていいな。人との出会いはなんと  
素晴らしい!!!人の意志の力はなんて逞しいんだ!!!!」

その言葉にはいっさいのからかいはなく、純粹に人に対する想いか  
ら来ていた

「まったく、こんなん見せられたら、もっと人が大好きになつちま  
うだろ!!!」

自分自身が翼人であることは関係なしに、蒔風の想いは大きくなる。  
これが蒔風舜なのだ。

特定の誰かが好きなんじゃない。人間が好きなんだ、と

「さて・・・オレも行きますか。あんなやつがいるんだから、まだ世界は十分輝てるんだからな」

蒔風も飛び出す。

なのはたちのいる決戦の地へ

- - -  
- - -  
- - -

蒔風がアースラを出た頃、なのはとフェイトが並び立ち、大型の騎士と対峙していた。

「大型だ・・・バリアが固い」

「うん・・・」

「でも、二人でなら・・・やれる!!!」

「うん・・・うん! うんっ!!!」

なのはとフェイトが初めて一緒に戦う。



「バルディツシュー!!」

《get set!!》

「こつちもだよ! レイジングハート!!」

《stand by ready!!》

ギイイイイイイ!!!!!!

大型の両肩に乗るキャノンにエネルギーがたまる

だが、知るであろう

そんなものは、この二人の前には無意味であることが!!!!

「サンダー……!!!!スマッシャー……!!!!」

「ディバイ……ン!!!!バスター……!!!!」

ドウツ、ゴアツ!!!!

バリアに二人の砲撃が阻まれる  
それでも!!!!

「セー、のつつつ！！！！！！！」

グオアツ！！！！ドドゴン！！！！

二人の攻撃に、バリアをいとも簡単に破られ、爆散する。

庭園が揺れ、ガラガラと崩れていく。

プレシアの居る場所も、例外ではない

なのはやフェイト達のいる位置よりかも遙か奥

足場が崩れ、虚数空間の領域が広がる

プレシアは最深部の部屋にあり、細く突き出した足場の先に、アリスアの入ったカプセルとともにいた。

「もう来たのね・・・でももう間に合わないわよ・・・あと、も

「もう少し・・・もう少しで・・・」

「ドオン！！！！ドドドオン！！！！ドツ！！！！バガアッ！！！！」

プレシアの言葉をさえぎるように、そこに時風が乗り込んできた

「よう。プレシア、それにそっちがアリシアか」

「・・・何の用かしら。今とても忙しいの。それに、この前にはまだ見張りがいたはずよ」

「あのデグどもか？あんなもんじゃ止められないよ、オレは。止めたきゃ、あと五百倍は持つてこい」

「そう・・・」

「なんだ？拍子抜けだな。アルハザードには行けそうなのかい？」

「・・・無理よ。これっぽっちじゃ届かない」

「あらまあ」

「でも・・・私にはあのままアリシアの死を受け入れられなかった」

「・・・」

「あのまま何もしなきゃ、私はアリシアの死を認めなければならな

くなる。そんなことはできなかった！！私はアリシアをそんな簡単に「殺す」ことはできなかった！！！」

「・・・死は誰にでも訪れるものだ。アルハザードであっても、それは覆らない」

「あなた、アルハザードを知ってるの？知らないでしょう。だからこれから行くのよ！！何としても！！！」

「できないとわかっていても、それに向かって突き進む。その意志は嫌いじゃない。嫌いじゃないが・・・！！！！！」

「なに？文句でもあるの？」

「誰かの意志を踏みにじってまで叶えられる願いなんざ、このオレがゆるさねえ！！！！！」

「そんなの知ったことではないわ！！そもそも、なんでアリシアなの！？なんでこの子がこんな目にあわなければならなかったの！？世界はこんなにも理不尽なのよ！？だから私は取り戻すのよ！このどこまでも理不尽で、救いのない世界から、私たちの失われた過去を！！！！！」

バシユウウウウ・・・ドゴン！！！！

「世界は、いつだって……こんなはずじゃないことばかりだよ！  
！ ずっと昔から、いつだって、誰だってそうなんだ！！！」

そのとき、クロノが額から血を流し一人突入してきた  
そしてなおも、プレシアの問いに叫び続けた

「こんなはずじゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは、  
個人の自由だ！ だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻  
き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！！」

そこでクロノの体が若干揺れる

「クロノ！！！！大丈夫か！？」

蒔風がクロノに向かって叫ぶ

「舜！！もう来ていたのか・・・さすがに、早いね・・・」

現在、プレシアは崖っぷちに

蒔風はそこから三、四メートルほど離れたところに

クロノは蒔風よりも三メートル後ろにいる

さらには天上の穴からフェイトとアルフが飛び降りてきた

「フェイト!!!なのはとユーノは!?!」

「二人とも、動力炉を破壊しに行ったよ!!!」

ドドン……………

さらに庭園が揺れる

足場がビキビキといているのに時風が気付く。

プレシアが苦しそうにせき込む。

「母さん!?!」

「動くな!?!」

フェイトがプレシアに駆けよろうとするのを、時風が止める

「今足場が非常に不安定だ……何の拍子で崩れるかわからない!

「!!」

時風の忠告に、皆動けなくなる

「何をしに来たの・・・言ったでしょう。あなたはもういららないのよ」

プレシアがフェイトに話しかける

「あなたに言いたいことがあつてきました」

それにフェイトが答える

「私は、アリシア・テストロツサじゃありません。あなたが作った、ただの人形なのかもしれません」

フェイトの告白は続く

「だけど、私は・・・フェイト・テストロツサは・・・あなたに育ててもらった、あなたの、娘です!!」

「ふ・・・ふふふ。あははははははは!!言つたでしょう!!私 はもうあなたはいらないの!!なに?今更あなたを娘と呼べと!」

「・・・あなたが、それを望むなら。私は、世界中の誰からも、あ

あなたを守り続けます」

「……………」

「それは、あなたが、私の、母さんだから!!」

「っ!!!!」

フェイトの言葉には芯があった

たとえどんな存在でもいい。自分の意志で決めたことだから。

たとえどんなに愛されなくてもいい。それでも私はあなたの娘だから。

あなたは私の母さんだから!!!!

そこには、かつての人形はいなかった。

この世でたった一人の、フェイト・テストアロツサが、そこにいた

しかし、それでも

「くだらないわ……言ったでしょう?あなたはもついらない。私にはね、ふ……ふふふ」



ドゴンー!!!

プレシアが残った少ない力で、足場に魔力を流す。

たったそれだけの魔力で、プレシアの足場は崩れた

「母さん!!!!」「プレシア!!!!」

フェイトとクロノが叫ぶ。

しかし、その先には踏み込めない。  
容易に動けば、自分も落ちてしまう

「ダメだ!!!!開翼!!!!」

しかしこの少年は動いた

その背に翼を展開させ、プレシアの落ちて行った穴に飛びこむ

「い・・・今、背中に翼が・・・」

「ああ・・・彼は・・・蒔風舜は、あの伝説の翼人なんだ」

「！！！！」

「彼なら虚数空間でも飛ぶ術をもっているのだろつ。急げ！！ここから逃げないと！！」

「ま・・・待って・・・母さんが・・・母さんが！！！！！！」

「フェイトオ！！！！」

アルフがフェイトを引きとめる

そして、その空間から離脱した

一方、虚数空間内

「プレシアアアアアアアアア！！！！！！！！」

時風が落ちていくプレシアを追う

しかし、プレシアは手を伸ばそうとせず、一向に届かない

しかし、その顔には驚きの表情があった

「あなた・・・まさか・・・翼人！？」

「そうだ。普段じゃ飛べないからな。こうしないとならないんだよ」

「では！！やはりアルハザードは！！」

「知らないよ」

「え？」

「オレはアルハザードなんか知らない。あそこの伝説に書かれたものとは別人だよ」

「そんな・・・な」

「今からでも戻れる！！掴め！！」

「・・・だめよ。この子を一人にさせられないわ・・・」

「だったら一緒に引き上げてやるから！！フェイトだって待ってんだぞ！！」

「なおさらダメよ。私にはあの子はいらないもの」

「まだそんなことを！！！！」

「あそこの庭園・・・あそこにアリシアのデータや研究の資料がたくさんあるわ」

「??？」

この間も距離は縮まらず、なおも落ち続ける

「あそこには私とアリシアの、思い出の詰まった場所がたくさんあるの。それを胸に・・・私は逝くわ」

「フェイトはどうするんだよ!!あんたの」

「私にはいらぬのよ!!!!」

「っ!!!!」

プレシアが蒔風の言葉を遮る

「言ったでしょう?私に必要なのは、アリシアか、お人形よ」

「・・・」

「あの子はもう、人だもの。「フェイト・テストロッサ」になっ  
てしまったもの」

「おまえ・・・」

「あの子は一人の人間としてここにきてたわ。紛れもない、フェイ  
ト・テストロッサとして。だから、私は・・・」

そこでプレシアは、

悲しそうに、それでも、穏やかに笑った。



庭園の、プレシアの、その記憶を永遠にするために

『全員退避しろ！！！！ここを跡形もなく吹き飛ばす！！！！』

「舜！？」

「舜君！？」

時風は虚数空間から飛び出すと、庭園内にいる全員に念話を飛ばした

誰にも時風の姿は見えず、その背の翼もみられることはない

『オレは、本気だ！！一切の資料を持ち帰ることはこのオレが許さない！！！！』

（プレシア・・・お前の記憶は・・・誰にもいじらせはしない！！！！それがお前を救いきれなかった、オレの・・・償いだ！！！！）

『くっ、全員退避！！急いで！！！！何も持たないで、全速力！！！！』

リンディからの指示が下る

「おおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

(獄炎、圧水、土惶、雷旺、絶光、混闇、全エネルギーを純エネルギーに変換!!!!!!)

全属性エネルギーを純粹な「力」としてのエネルギーに変換する

『全局員の退避完了!!!!!!』

それを聞き、時風が己の最強の武器を取り出す

「十五天帝!!!!!!!!!!」

ボゴン!!!!!!

十五天帝を組み上げ装備し、天井を突き破り、最上層に上がる時風

(この翼に宿るのはたった一人の願い。  
だが、オレは！！その願いのために、こいつを！！！)

十五天帝と、時風の腕にエネルギーが・・・一人の母の願いが集まる！！！！

「ああああああああ！！！！！！」

時風が涙を流し、「時の庭園」に突っ込んだ

「《すべての者に救いと破滅を》！！！！！！」

ガオオオオオオ！！！！！！ドツ！！！！！！





t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

なのは、戦いの終わりと始まりとプロローグなの。(後書き)

アリス「戦いの終わりですね」

何とかここまでこぎつけたよ・・・

ア「もうそろそろなのはは終わりですかね」

あと二話くらいかな？

ア「にしても、蒔風が人間好きだったとは」

蒔風には確かに確固たる愛情があります

しかしそれは100%の人類愛なんですよね~~~~

ア「そういえば、蒔風とくつつく人って、いないんですか？」

う~~~~ん、いません

ア「悩んで断言ですか」

今のところはね

本当に終盤になったら、出てくるかも

ア「さいですか」

じゃ、よろ

ア「次回、終わってその後。そして・・・」

ではまた次回

ありふれた言葉でもいい 真っ直ぐに伝えたいよ  
君の元へと羽撃いていく  
「行こう・・・」もう迷わない



「フェイトちゃんは？」

「護送室だ。彼女たちはこの事件の重要参考人だからね。残念だけど……」

「ま、仕方ないだろ。クロノが見ることになんだろ？なら安心だよ」

「でも……いつつ」

「なのは！ジツとしてよもつ」

なのはが身を乗り出し、痛みに顔をゆがめる

包帯を巻いていたユーノが注意した

「今回の事件は一步間違えれば次元断層すらも引き起こしかねなかつたんだ」

「関係者の処遇には気をつけないとだからねー」

「そうだ。でも大丈夫だ。彼女には酷い目には合わせないよ絶対にだ」

「クロノ……お前丸くなった？」

「君の影響だよ」

クロノがフツ、と笑いながら蒔風に言った

「オレが？バカ言っちゃなんねえよ。そうだったのはあくまでお前の意志だ」

「・・・そうだね・・・というか、君が庭園を跡形もなく吹き飛ばしたから面倒なことに・・・」

「そうじゃなくても、あそこは崩れていたさ」

「一切の資料も持ち出せなかったし・・・」

「それは許さん」

「・・・プレシアか？」

「ああ・・・」

時風が天井を仰ぐ

とても、悲しく、そして残念そうな顔で

.....

護送室

フェイトとアルフがここに拘留されている

その通路に、なのはたちと別れた時風が入ってきた

「あんだ……」

「よう、フェイト。ちょっとお話ししよう」

「え……うん……」

そうして時風は話し始める

最初に出会って、いきなり戦ったこと

ジュエルシードの暴走を抑え込んだこと

そして……プレシアの最後

「母さんが？」

「ああ。フェイトを……もう、一人の人間だって、言っていたよ。  
そして……」

時風がモニターに一枚の画像を出す

「これは……」



「プレシアの最後の・・・笑顔だ」

「・・・」

「言っていたよ。この笑顔は人形には見せられない笑顔だって。でも、最後にプレシアが想っていたのは・・・きっと・・・」

「母さん・・・」

「オレはプレシアを助けられなかった」

「そんなこと・・・ないよ」

「いいや・・・これはオレが背負わなきゃならない、弱さなんだ」

「・・・」

「だからフェイト。お前は進んでくれ。決して立ち止まらないでくれ。お前の世界は、始まったばかりなんだからな」

「うん・・・うん!!」

「じゃ、オレはもう行くよ。ほんとにここ入っちゃいけないらしいからな」

「え？」

「いやあ、どうしてもこれだけは見せたかったからな。話しておきたかったからな。「奴」もそろそろ来るだろうから、なのはのそば

にいないとだし」

「「奴」？」

「ああ、話してなかったな。そうだな……」

蒔風が五分ほどで説明した。  
自身が翼人であることも含めて

「そんなことが……」

「というか、あんた本当に伝説の翼人だったんだね……」

「気にするなよ。ん？をう！そろそろ本気で見つかりそうだから、オレは逃げるよ。じゃあね」

「うん……じゃあ」

そうして蒔風は壁に向かって、手をかざす  
物質情報の結合を解除、と呟くと、壁に穴があき、出ていくと、再びそこを閉めた

「フエイト……」

「大丈夫だよ。アルフ……ありがとう」



「ま、ただでは済まないよなあ」

「うん・・・数百年以上の幽閉が、普通なんだが・・・」

「そ、そんな!?!」

「ははん、クロノ。「なんだが」、でしょ?」

「ああ。前にも言ったが、絶対にそんなことはさせない。僕の正義が、許さない。何が何でも、上の人に理解させて見せる」

「クロノ君・・・」

「心配しないでくれ。彼女が自らの意志で加担していなかったことははっきりしている。それを、絶対に上の人間に伝えて見せる」

「頼んだぞ。クロノ」

「任せてくれ。そういったことは、得意なんだ」

「信頼してるぜ」

「なにも知らず、ただ母親のために一生懸命だった子に罪を問うほど、時空管理局は冷徹じゃないから」

「でも、見捨てようとしたよな〜あんどき」

「バツ、あのときのことはもう言わないでくれ!?!」

「ははーん。まーだ後悔してんのかーい？あのとぎすぐに助けにいけなかったのがっさ」

「う……うるさい……」

「あははは……」

「笑うな……」

「うっ、ぶはははは……くっくっく……ぶあっはっはっは……」

「舜んんんん……」

「照れるな照れるっぶ……ははははは……」

……  
……  
……

次の日の朝には、なのはたちは高町家に帰っていった。

戻ってきた日常、平凡な日々

なのはの胸にはフェイトのことが、まだ少し気がかりだった

そして蒔風は、だんだんピリピリしてきた

鋭い視線で、いつも周りを気にしている

さらに数日後

なのはの携帯に、時空管理局から連絡が入った  
電波は世界を超えるのである

どうやら、フェイトは、これから身柄を本局に移され、裁判になるらしい。

しかし、ほぼ確実に、無罪になるそうだ

しかし、それには相当時間がかかることもあるために、始まったらしばらく会えなくなる。

その前に、今からフェイトに会えるのだそうだなのはに、会いたいと言っているそうだ

そうして約束の橋の上に来たなのはたち

クロノとアルフも来ていた

「時間も無いから、二人で話すといい。僕たちは、あっちにいるから」

「ありがとう、クロノ君」

「じゃ、行きますか」

「あ……」

「ん？なんだい？」

「あなたとも、話したいことが……」

「……光栄だな」

周りが一瞬静かになる

そうして、蒔風、なのは、フェイトが話し始めた

「話したいこと、いっぱいあるのに……何話したらいいか、わからないや」

「そうだね……私もうまく言葉にできない……」

「いろいろあったからねえ……てか、オレいなくてよくない？」

蒔風が蚊帳の外であることを危惧し始める

「でも、嬉しかった。私と、真っ正面から向き合ってくれて」

「呼び止めたのあなたですよねー？なんでー？」  
フェイトに話しかけるが、無視される

「うん・・・私ね、フェイトちゃんと、お友達になれたらって、想  
ってるの！」

「あれー？なのはさん、あなたもシカトですかー？」  
なのはにもスルーされ、いたたまれなくなってきた

「でも・・・これから、出かけちゃうんだよね」

「うん・・・少し長い旅になる」

「・・・」

蒔風が橋の反対側でいじけ始めた

「また、会えるんだよね！？」



「あ……うん。まだ少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから」

「フェイトちゃん……」

「あなたたちのおかげだよ」

「……え？オレ？やっと話題振られた？」

話題にやっと入れそうになり、蒔風が二人による

「うん……貴女が私と対等に向き合ってくれたから、貴方が私と対等の立場で酷い言葉でも私のために叫んでくれたから、私はここにいられる」

「フェイト自身が見つけた現実だよ、それは。オレたちはきっかけでしかない」

「それでも……私の目を覚まさせてくれたのは、あなたたち二人だった……」

「フェイト……」「フェイトちゃん……」

「今日来てもらったのは、あのときの返事をするため」

「え？」

「君が言ってくれた、「友達になりたい」って」

「うん、うん!?!」

「私にできるなら、私でいいなら……って。だけど……私……」

「どうしたらいいかわからないのかい？」

「うん……だから教えてほしいんだ……どうしたら友達になれるのか……」

「簡単、だよ……」

なのはが言う

それは、誰にでもできることだと

「え？」

「名前を呼んで。初めはそれだけでいいの。君とか、あなたとかじゃなくて、ちゃんと相手の目を見て、ちゃんと相手の名前を呼ぶの」

「あ……」

だから、何度もなのはは名前を呼んでいた。

フェイトと友達になるために

あとは、もう片方が、手を伸ばすだけ

「私、高町なのは。なのはだよ!」

そして

「なのは・・・」

手が、届いた

「うん、そう!」

「なの、は」

「文字ずつを、かみしめるように」

決して間違わないように

「うん!」

「オレは、時風舜な」

「舜・・・」

「いきなし下か」

「あ・・・」

「いや、大丈夫だよ。ありがとう、フェイト」



「おいおい、空気読めよ。普通ここで出くくるかよ。てめえ!!!」

「奴」が、来た

なんだかとてもイライラしているようだ

「よかつたな、そこな少女よ。そいつが最主要人物だよ」

「舜君!!!あいつは!?!」

「「奴」だよ。全く、長い長いプロローグだったぜ……」

「え?」

「そうだなあ!!!こつからが、オレたちの!!!」

「この世界での!!!物語だからなあ!!!」

「舜!!!」

「なんだいあいつ!?!」

アルフとその肩に乗ったユーノ、それとクロノが三人に駆け寄る

「アルフ、ユーノ。結界を頼む」

「え？」

「開翼……」

「バツサ！！！ブオア……」

結界が張られたことを確認すると、蒔風が飛びあがり、「奴」と同じ高さまで上がる

「あー！ーくっそ。計算し続けてあったま痛いわ」

「休んでくりやよかつたじゃないか」

「は！！あんな、最重要人物が相手だったからまともになれたような幸運野郎見てたら、腹立ってきたんだよ」

「なんだそりや。前々から思ってたけどよ、てめえのそれはもうただの僻みひがじゃねえか！！」

「黙れ！！主人公だからという理由だけで成功してきた者にはわからない！！必ず努力が実るような、うまくいくようなやつにはなあ！！！！！！」

「どう言ってもしょうがないみたいだな」

「わかってたたる？」

「まあ・・・な」

「舜君！！私も！！！」

「僕も！！！」

「私も・・・！！！！！」

なのは、クロノ、フェイトが時風の横にまで飛んでくる

「お前ら・・・フェイトはいいのか？クロノ」

「僕が与えた。この状況で、規則とか言ってられないからね」

「ふっ、そうかい！！！」

それぞれの手にはデバイスが握られている

フェイトの手にも、バルディッシュが握られていた

「は！！！！ぶっ殺すぞ！！！！主人公どもが！！！！！」

「させないよ……絶対に!!」

「友達になったのに、終わりになんて、させない!!!!」

「わたしはまだ、始まったばかりなんだ!!!!」

「いきなりやってきて「ぶっ殺す」とは何て言い草だ……時間がないんだ、早く終わらせよう」

「終わるのは……どっちかなあ？」

なのはたちが叫び、時風が意志を固める

そうして、「奴」も構える

川の水がうねりをあげ、空には雷鳴がとどろく

「終わらせねえよ……今！オレのこの世界での話は、始まったんだからな!!!!」



そうして一つの話が終わり、ひとりの少年の「この世界」での物語が始まる

長過ぎたプロローグは、ここから本編に入る

t o b e c o n t i n u e d

なのは、〜終わってからの始まりなの〜（後書き）

アリス「ついに「奴」の登場ですね。いやー空気読めてないですね」

そうですねー

でも「奴」にとってして見ればやっと計算が終わったところなんです  
早く終わらせたいのじゃないかね

ア「さて、ここでプロローグだとかそこらへん聞きたいのですが？」

ああ

なのはにとっては、この話は丸々本編でした

フェイトにとっては、自身の存在を見つけ出したところから、始まりでした

では蒔風にとっては？

蒔風の物語は、各世界での「奴」との戦いです

それまでの物語は、正直すべてがそれまでの時間つぶしなんですよねえ

ア「あの話を時間つぶしだと言ったら、ファンに殺されちゃいますよっ」

時間つぶしとはいえ、時風は本気で取り組んでいますから

てか、「奴」が動き出すまで、あれだけのことほっとくわけにはい  
かないでしょう

ア「まあ、そうですね」

だから、ここからが本編なんです。時風にとっては

ア「なるほどねー」

じゃ、この辺で

ア「次回、「奴」との戦い。なのはの世界ももう終わりですね」

ではまた次回

魔法少女、はじめました

ア「今更キャッチコピー!？」

なのは、戦いと、次なる旅立ちなの

「奴」との戦いが始まり、まだそう時間は経ってない。

しかし、時風の声には焦りが感じられる

「ちいい、青龍!!」

ガアアアア!!

グバツ、ズギャン!!  
ドッパア!!

青龍が川にたたき付けられる。

青龍だけではない

他の神獣たちも大地に伏せ、倒れている。

さらには時風たちもほとんど満身創痍状態である。  
皆、息が上がり、肩が上下している。

(なぜ・・・だ。なぜここまで強い!?)

そこでなのはがレイジングハートを「奴」に向ける

「舜君どいて!! デイバイーーン!!」

《Divine Buster》

「なのは、止せ!!」

「バスターー!!」

蒔風の制止も間に合わず、なのはの砲撃が「奴」に向かって伸びる。

しかし、「奴」はデイバインバスターを掴んでくるりと回転し、なのはに向かって投げ返した。

レイジングハートがとっさに防壁を張るが、弾かれてしまう。  
なのはが川に落ちる。

「っ! きゃあああ!!」

「なのは!! ああああ!!」

「くっ、フェイト！」

フェイトが飛び出し、それをクロノが追う。

「奴」がフェイトに向かい、拳を振るう。  
それに合わせるようにクロノが「奴」にバインドをかける。  
しかし

パシィ、バキッ！！

発動と同時に打ち壊され、その拳が止まることはない

「っ！？バルディッシュ！」

《Protection》

ガイン！！

バババババ！！ドオン！

フェイトの防壁に「奴」の拳が当たり、電撃が爆ぜるが、いとも簡単に打ち壊され、爆発する

爆風に押され煙の中から飛び出してきたフェイトをクロノが押さえるが止まらず、近くに倒れていた獅子がそれをかるうじてキャッチした。

「主!!」

「ああ、わかってる!! 龍虎雀武! 獅子天麟!!」

彼らを刀剣に戻し、龍虎雀武を円盤状に、獅子天麟をバスターソードに組み立てる

ビイイイイーン!!

時風が「奴」に龍虎雀武を投げる  
すると、龍虎雀武が無数に分身し、「奴」に襲い掛かった。  
さらに時風が獅子天麟を握りしめ、「奴」に飛び掛かる。

『「奴」の力の元を探る!! 援護を!!!!』

『『『了解!!』』』

「奴」が無数の龍虎雀武を四肢を使い叩き落としていく  
しかし、一つ以外はあくまでも分身  
叩いては空を切るばかりで、消えていく。





吹き飛ばされた蒔風を「奴」が追撃しようとするのをなのはが防ぐ

蒔風が「奴」から距離をとり、睨みつけた

「お前・・・やりやがったな！！？」

「ははん。さすがにさっきので気付いたか。その通りだ」

そう言って「奴」は風呂敷を広げるように両腕を左右に開いた。

そこには九つの、輝く宝石があった

「あれは！！まさか！」

『ジュエルシード！？』

蒔風を除く皆が同時に声を上げ、驚愕する

「そんな・・・ジュエルシードはすべて時空管理局が回収したはずだ！！！」

「あれはおそらく……プレシアと共に落ちていった九つだ!」  
蒔風が忌々しそうに叫んだ

それにみな再び驚く

「な!？」

「そんな……」

「母さんを……どうしたの!？」

フェイトが「奴」に叫んだ

グリーン、と「奴」の首がフェイトの方を向き、口を開いた

「ああ？母さん？おお、あの女のことか。知らんよ、んなこと。これさえ手に入ればよかったからな」

「てめえ……そのまま見捨ててきやがったのか!!!」

「見捨てるとは人聞きの悪い。あいつは死ぬ事を望んでいたんだから、いいじゃねえか。それがあいつの望みだったんだろ？じゃあその思いを尊重してやらなきゃだろうが。うん？」

「それは……母さん……」

「それは違う!」「」

「死ぬことで報われる罪なんかないんだ!!それはただの逃げだ!」

クロノの言葉に蒔風が続く

「そうだな。死ぬことを望むだ?そんなのはオレは許さない。いいか?死ぬことよりもな、生きてることの方が遥かに辛く、悲しく、苦しいんだ!!だったらよ、罪を購うんなら、生きて購ってんだ!!だからオレは死なせないし殺さない。生かすことが最大の罪滅ぼしだからな!!死なせるなんて、そこまで俺は優しくない!!」

「それを誰もが出来るとか思うな!!そんなもの・・・できるやつ  
の台詞だ!できない弱者に、貴様はそれを強いるのか!？」

「うん」

「なあ!？」

「やってやるさ!生きるとは苦しいが、楽しいんだ!オレは世界最強だからな!それくらいやってのけるさ!!」

「たった一人を救えずなにが世界最強か。プレシアを死なせてしまったのはお前だろ?蒔風!」

「舜はそんなんじゃ・・・」

フェイトはそれを否定しようとする  
が

「そうだ」

蒔風が一発でそれを肯定してしまった

「舜？」

「その通りだ。プレシアを救えなかったのはオレの力不足だ。オレの弱さだ。オレの罪だ！だけどな・・・」

「どうした世界最強。吠えてみせろよ！」

「オレが申し訳なく思うのはお前にじゃない」

「・・・はん！開き直りかよ。そんな開き直りも、おまえが主人公だから、いい感じに聞こえるんだろうけどな・・・まあいい、あの女を庇っても意味ないしな。正直ウジウジしてて嫌いだったしな。落ちながらずーっと娘の死体にしがみついていたんだぜ？非効率的だよな。死者が蘇るわけないのによ。見ててイライラしたよ」

「お、ま、え、はあああああ！！！！！！」

蒔風が更に翼を力強く羽ばたかせ、「奴」に向かって飛び掛かる。

しかし、多少のやり取りですぐにたたき落とされた。

さらにその地点に「奴」の波動砲が四方から撃ち出され、魔導八天が串刺しにしていく

「舜！」 「舜君！」

煙が晴れ、蒔風が姿を現す

貫通はしていないが背中には魔導八天のうちの二本が突き刺さり、右腕は関節のない場所で二、三回曲がっていた。

そんな蒔風がヨロヨロとした足取りで立ち、拳を握りしめ、地面にむかって叫んだ

「ああそうさ！プレシアの行動はバカなことだったさ！死者を蘇らせようだなんて、そんなこと出来るわけねえだろ！！そのためにいくつもの世界を犠牲にしようとするなんざ、大馬鹿者のやることだよー！！」

蒔風が「奴」にまだ無事な左手で指差して叫んだ

「だけど、あの人の想いは本物だった。なによりも強い愛があった

！娘を想う母がいた！！我が子を理不尽な死から引つ張り出そうとした！！その想いは本物だ！！！！！！したことはいくらでもけなすといい。だか、その想いまで否定なんかさせない。絶対だ！！！！！！」

「舜……」

「舜君……」

「あああああ！」

蒔風の翼がさらに強く、雄々しく開かれる

その翼に、みんなと自身の強き願いが！！！！！！

【Mahou Syoujo lyrical Nanhua】  
-  
WORLD LINK - WEAPON -

レイジングハートがなのはの手を離れ、蒔風の元に向かう。

そして、その場の魔力を集め始める。

蒔風の翼の色と同じ、銀白の魔法光が



その願いをのせ、魔力がたまる。

この世界で、この後にも続く物語を、切り開くために!!!!!!

「ああああああ!!!!!!」

【Mahou Syoujo lyrical Nanhua】  
WORLD LINK - {FINAL ATTACK}

「全力全開・・・否!!!限界突破だあ!!!!!!」

時風がレイジングハートを「奴」に向け標準を合わせようとする

が、しかしレイジングハートを握る時風の左腕が振るえる。

支えるために腹筋に力を込めると、アバラがビキビキと音を立てる

(ぐっあ・・・やっぱ左手だけじゃ無理か!?)



蒔風の右腕は使えず、左手も無事ではない

その時、蒔風の両側から、なのはとフェイトの手が伸び、レイジン  
グハートを掴んだ。

「三人一緒に!!!」

「それなら、行ける!!!」

「なのは・・・フェイト・・・」

はぁ、と蒔風がため息を吐く

「反動で吹っ飛ばされても知らねえぞ!?!」

「望む!!!」「ところだよ!!!」

二人が笑顔で蒔風に返す

「よっし・・・行くぞ!!!」

「『セー……のっっ……!!!!』」

ガゴオウ……!!ドオオオオオオ……!!

WORLD LINKが「奴」に向かう

「ちっ……!!ジュエルシードよ……!!我が身を守る盾とならん……!!」

「奴」がジュエルシードを九つすべて目の前に展開し、そのエネルギーでバリアを張る。

たしかに、それだけのエネルギーなら、完全には無理でも、90%近くの威力を殺せただろう。

しかし、ジュエルシードは「奴」の”願い”とは正反対の現象を起こした。



「そうなの？」

「だが、オレはそうは思わない」

「じゃあ・・・なんで？」

「あの人が・・・未来に生きろって、言ってくれたんじゃないかな？」

「あの人、って・・・」

「まさか・・・母さん・・・」

「本当のことはわからない。WORLD LINKの現象だと言っ  
てしまえば、そうすることもできる」

「でも・・・私は、プレシアさんが力を貸してくれたと思うな」

「うん・・・ありがとう・・・母さん」

「じゃあ、オレぶっ倒れるから」

「え？」「は？」

「はい、どーん（ボタン！ー！）」

「舜？舜！！酷い怪我！！」

「ユ、ユーノクーーン！！クロノクーーン！ー！ー！」

「アルフリー！！早くこつちーー！！！！！！」

そうして次の日、時風はアースラの医務室で目を覚ました

右腕にはギプスが巻かれており、全身いたるところに包帯が巻かれている

「舜君！！起きたの！？」

時風が目覚めたことに気付いたなのはが飛びつくように話しかけてくる  
よく見るとユーノとリンディもいた

「なのは、オレには目を開けたまま寝るなんて芸当できないんだが」

「舜君！！よかったーー！！！！本当によかった！！！！」

あきれる時風をよそに大興奮なのは

そこにリンディが話しかけてくる

「とんでもない戦いだっ たみたいね？」

「まあ、あれが普通なんで。ここが多重世界だから、あんだけの前期間があつ たんですよ」

「あんな戦いをいろんな世界で何回もしてるの？」

「そうだよ。でも、仲間もできるし、楽しいからいいのさ」

「でも・・・一人なんだよね？」

「そうだな。これはオレの一人旅だ」

「じゃあ、わた 却下だ」え？」

なのはの言葉を、時風が遮る

「おおかた、「私も付いていくよ！！」とか言つつもりだったんだろ？」

「うん・・・」

「ダメだよ。この世界をどうするつもりだ。それに、フェイトだって今裁判に向かつてんでしょ？」

「そうだね。今はクロノと一緒に、ミッドチルダに向かつてる」

「だろ？ちゃんとお前がいないと、ダメだろうが」

「そんな〜」

「そんな〜、じゃない。諦める」

「む〜」

そんななのは頭をポンポン、となでる蒔風

なのはは恥ずかしくてその手を払いながら、思い出したように言った

「あ、そうだ！！舜君の荷物から、面白そうな食べ物を見つけたんだ！！！」

世界が用意した蒔風キャンプセットには、多くの缶詰や、レトルト食品がある。

中には別世界からの贈り物や、食べ物じゃなくても珍しいものがあったりするのだ

なのはが見つけたのはそのうちのひとつだろう

「なんだ？」

「これこれ！！！」

それは真空パックになっていて、監修者の名前はわからないようにつぶされていた

「なにになに？シヤ 先生監修料理教室特製スープ？レトルトか？」

「そう！！」「ゴルゴンスープ」だってさ！！！！」

「世界も面白そうな料理用意してくれたなあ・・・どれ、獄炎！！」

蒔風が獄炎を使って一瞬でスープを温める。

(こりやすんごく遠い別の世界から送られてきたものだな・・・他世界の珍品ってやつか？)

「ちなみにそれ、見つけた時はかちんこちに凍ってたよ？」

「素材の味をそのままに、って感じだな。いたたま〜す！！」  
ゴクツ」

「ど〜ど〜ど〜」

「なのは・・・」

「な・・・なに？」

蒔風の首がギギギ、となのはの方に曲がった。

なにも言わなかったが、真っ赤な目をしたその眼光はこう物語っていた。



――謀りおつたな。この悪魔め……

ドガシャー!!!

「きゃあ!!!舜君?舜君!!!」

「なのは!!!お皿に……穴があいてる……」

「そんな!!!」

「と、とにかく治癒魔法を!!!救急班、いそいで!!!」

なのは、ユーノ、リンディがワタワタし始め、慌ただしく時間が過ぎて行った

そんなこんなで時風が再び倒れ、何とか回復したのは十二時間後だった。

あんなもの飲んだのに、なぜかリフレッシュしており、傷は完治ほどではなくてもあらかた回復していた。

そうしてそのまま時風は旅立った



『イマジナリー  
幻想殺し』と

t o b e c o n t i n u e d

なのは、戦いと、次なる旅立ちなの。(後書き)

やっと終わりました「なのはの世界」!!!

アリス「今回変なものでできましたね。スープとか」

はい!!あれは現在「魔法少女リリカルなのは」真の紋章と竜の騎士「を執筆されている、剣 流星様からいただきました、ゴルゴンスープです!!

ア「でも、あれ作った人、時系列的に・・・」

だから名前わからないようにしました

ア「たしかに・・・」

### 【魔法少女リリカルなのは】

構成：”ライクル” 35%  
”フォルス” 35%  
”LOND” 30%

最主要人物：高町なのは

- WORLD LINK -  
WEPON：レイジングハートによる翼人エネルギーと魔力の混合

- WORLD LINK -  
FINAL ATTACK：集束

し、最大出力による砲撃

そういえば一つまた言い忘れていた設定が

ア「またですか」

時風は開翼しないと自由に飛べません

ア「なにい!?!」

いや、ある程度の推進力?だとかはありますよ?

FF7ACの時のクラウドたちみたいな

ア「ああ、あれですか。あれ、確実に飛んでるように見えるけど・・・」

飛行能力はないんですよね

そういうもんですはい

じゃ、そろそろ

ア「次回、出会う主人公」

ではまた次回

その幻想をぶち殺す!!!!

とある魔術の禁書目録 くとある病室の珍客騒動く

学園都市 第七学区の病院の病室

上条当麻はこのベッドにいた  
インデックスと呼ばれる少女が椅子に座り、頭をベッドに乗せ、寝  
ている

先程までは先の事件で世話になった少女と、天使の姿をしたとある  
プリエステス  
女教皇もいたのだが、今はいない。

「あー。さっきのはなんだったんだ・・・神裂もどうしちゃったの  
か・・・これ以上なんか起こったらさすがにあのワードをばやくぞ  
・・・」

しかしそんな願いもむなしく、上条当麻は“これ以上”に遭遇して  
しまう

声がして、光のゲートが開くと、そこから一人の男が出てきたのだ

ここは科学的に超能力を開発する街、「学園都市」

故にとんでもない現象は数え切れないほど起こっているが、いきなり現れたら驚くのは当然で・・・

「なんだあ!？」

「ふえ?どうしたの!?!とうま!!魔術師!?!」

上条が大声を出し、インデックスが目覚める。

彼の口癖、「不幸だー!?!」という言葉も出なかった

出てきた男は

「やった!元の大きさ!やっぱりこっちがしっくりくるな!」

とか言っていて、上条たちが目に入ってない。

「とうま、あの人だれ?」

「オレだつてしらねえよ。魔術関係じゃないのか?」

「あんな光の門なんか知らないんだよ。少なくとも、10万3000冊の中にはないよ。科学方面そっちじゃないの?」



「いや、瞬間移動テレポートとも違うしなあ。よくわからないから、はっきりとは断言できないけど。小萌先生にでも聞くか？」

上条とインデックスが小声で話し合っていると、男が二人に気付いたようで、じっと見つめてきていた。

「……見ました？」

「……大体は……」

「不幸だー！ー！」

「それオレの台詞！！」

「待つんだよとうま！それどころじゃないと思うんだけど!？」

ギャーギャー三人で騒いでいると、病室の扉がバン！と開かれた。

「ええい！せつかくキッチンと着替えてお礼を言い直そうとしていたのに、なんですかこの騒ぎは!！」

「にゃー。そのまま逃げるように帰るつもりだったのに、騒ぎを聞き付けるとなんの躊躇もなく突撃できるねーちゃんは流石だにゃー」

扉を開いてやって来たのは一組の男女だ

といつても恰好には一貫性がないが

日本刀を下げた女の方は神裂かんざき火織かおり  
にゃーにゃー言ってる男は土御門つちみかど元春もとはるという人物だ

ちなみに先ほどのセリフのあと、土御門は神裂に殴り飛ばされていた

神裂が中の現状を見るに

- 一、まずいろいろと借りのある恩人たる少年がいて
- 二、『あの子』が少年を庇おうとギャーギャー騒ぎ
- 三、その前には見知らぬ男がワタワタとして立っていた

なにが元凶かは一目瞭然だ

「そこから離れなさい!!」

神裂が男に愛刀「七天七刀」で切り掛かる

「ぬあ!?!」

ギーン!!



都市

ここでは超能力が科学的に解明され、生徒たちは能力開発を受けている超能力者だ。

といつてもすべての生徒が超能力に目覚めているわけではない。

その強さはレベル0、1、2、3、4、5の六段階に別れている

順に無能力者、低能力者、異能力者、強能力者、大能力者、超能力者とされる

なかでも超能力者（レベル5）は学園都市には7人しかいないそうだ

さらにそれに対をなす魔術師

彼らは自らの宗教にのっとった術式を使うものだ

彼らは自ら魔力を練り上げ、それを法則に従い組み上げ魔術を使用する

魔術と科学、オカルトとサイエンスは敵対している

しかし、魔術サイドにもいろいろあるらしく、イギリス清教の必要<sup>ネセ</sup>  
悪の教会は、学園都市側についている<sup>サリウス</sup>

現在は科学サイドのトップ、学園都市と魔術サイドのトップ、ローマ正教が戦争を起こしているらしい。

昨日も第二十二学区で、ローマ正教の「神の右席」に所属する魔術師、「後方のアックア」が攻めてきて、これを退けたばかりだ

「しかし、世界云々はともかく、カミヤんが狙われるって話は信じ  
ておくにゃー」

土御門が蒔風に自分の心境を語る

「世界とか崩壊とかそういうのは大体はわかったけど、いまひとつ納得いかんのよ。でも、とにかく「奴」って野郎がカミヤんの命を狙ってるなら、防ぐだけだにゃー」

「私は上の方に連絡してきます」

神裂が病室を出ていく

携帯を使用するためだろう

「ま、もともとカミヤんは狙われてるから、防衛線張るのは難しくはないんだにゃー」

「もともと狙われてる?」

「そうそう。カミヤん、いろんなことに首つつこみまくっちゃって、ローマ正教の邪魔物になっちゃまってるんですにゃー」

「全く。とうまはとにかくなにかしてないと死んじゃう病気にでもかかっているんじゃないかと思うんだよ?」

「ちげえよ!オレはいつもいつも巻き込まれてんだ!オレからなんて・・・インデックスさん?なんですかその目つき!?わたくし間違ったこと言いましたかね!??」

上条の右手、正確には右手首から先

そこには幻想殺しと呼ばれる能力がある

それは世界の意志だろうが神の奇跡だろうが、それが異能の力ならば、問答無用で消し去る力だ。

上条は今までこの力ひとつで様々な敵に立ち向かってきた。

「まあ、とにかく上条の命が狙われてるんだけど……」

「?どうしたんだよ。何かあんのか?」

「いや、その後方のアックアってのが気になってな。そいつ、昨日戦ったんだよな?」

「そうだけど」

「めちやくちや強いんだよな?何だっけ?神の……ローマ正教四天王だろ?つまり」

「そつだにゃー」

「いいのかよそんな説明で!!!」

「じゃあ……はあ……あ、利用されるよなあ、そりゃあ、よお!!!!!」

蒔風が上条の右手を掴み、病院の窓に向かって突き出させた

するとそこに突如として飛来した黒い巨大な棍棒を触れただけで撃

ち消してしまった

「おお〜。これが幻想殺しか!?!」

蒔風が感心しているが、当の上条としては心臓バクバクである

「なにすんだ!?!ってか、あれはなんだ!?!」

「「奴」だよ。正確には、「奴」の能力で作られたアックア・レプリカだ。とりあえずボコしておこうってわけらしいな」

病院の外

同じくらいの高さのビルの屋上に、黒い影が立っていた。

「あれは・・・アックアの・・・影!?!」

「あんな魔術知らないよ!?!」

「知らなくて当然だよ」

ゴキゴキと蒔風が拳を鳴らしながら病室の窓の縁に足をかける

「おい・・・どこ行くつもりだ」

上条が蒔風に聞いた

「あれを止める。なに大丈夫だよ。お前はここにいる。インデックス、上条を見張っててくれ」

「あ、うん・・・とうま！！なに立ち上がるうとしてるの!？」

インデックスが上条の方を見ると、昨日の傷も癒えてないのに、ベツトから立ち上がるうとしていた

「ほつとけるわけねえだろ！！あれもなんか知らないけど、異能の力でできてんなら、この右手で触れば一発じゃねえか!！」

「じゃあ、オレはお前の右手掴んで飛びまわればいいのかい？」

「え？」

「だって、そうしないといけないじゃないぜ？まあ、任せてくれよ。ほれ」

蒔風がバン、とテレビをたたくと、そこに蒔風が映りこんだ

「これでも見てなさい。オレの活躍をな!！」

バツ!!

蒔風が飛び出す

そうして、「奴」によって再現されたアックア・レプリカに向かう





学園都市

近未来的な表面だけでない、何かが渦巻く都市で、モニター先の時  
風は戦いを始めた

t o b e c o n t i n u e d

とある魔術の禁書目録 くとある病室の珍客騒動（後書き）

アリス「とある魔術の禁書目録の世界に来ましたね」

はい

時期としては、作中でも言っている通り、後方のアックア戦の次の日ですね

ア「そういえばインデックスの前で土御門が普通に魔術師として話してますが・・・」

気にするな!!!

ア「わかりました」

よし、ほら、飴だよ

ア「わーい。久しぶり!!!（コロコロ）」

どうだい？おいしいだろ？

ア「ウマい!!!そういえばどうするんです?」

なにが？

ア「学校の試験ですよ。あなた大学生でしょう?」

・・・ソウデスネ

ア「なんかヤバげな感じですね・・・」

そうなんですよね。試験があるんですよ

いや、これが困ったもので

ア「なにがです?」

作者の執筆の八割は電車の中で携帯によって書かれています。

ア「そんなところで・・・」

電車の中が一番集中できる

高校生時代には40分で英単語をスペルを書けるレベルまでを50  
個覚えたからな

ア「それはなかなか・・・」

だからもっぱらの試験勉強時間は電車の中。しかし・・・

ア「そうになると執筆がなかなかできなくなるから遅れてしまつかも  
?」

そうなんですよ!!

今までは平日の夜に一回と、最低でも土日のどちらかには必ず更新  
してきたのに、これでは遅れてしまっ!!--!

ア「なのはの時もいったん送れませんでした?」

あときはiPodが壊れて参考にできるものがなかったからなあ・  
・

でも今回はマジでヤヴァイから、どうしても執筆時間がとれず、更新が遅れるかもしれない。

ア「まあ、勉強が学生の本分ですからね・・・」

だから、試験のかたまっている再来週あたりから、更新が遅れがちになるかもしれない。

ア「にしても、二週間も先のことをなんで今言つんですか?」

多分言い忘れるから

ア「納得。次回、学園都市でのバトルバトル!!!」

ではまた次回

おなかいっぱいご飯食べさせてくれたら、うれしいな

とある魔術の禁書目録 くとある「欠片」の聖人模倣（前書き）

タイトルの「聖人模倣」は「アックア・レプリカ」と読んでください  
い（笑）

とある魔術の禁書目録 くとある「欠片」の聖人模倣く

「おおおおおりゃあ！！！！！！」

蒔風が病室から飛び出し、アックア・レプリカに飛びかかる

その漆黒の体軀をうならせて、巨大な棍棒メイスを蒔風に振るう

「はえ？おおおおあ！？獅子天麟！！！！」

バツ、ガギョ！！！！

蒔風が自身を仕留めようと振り下ろされたメイスを獅子天麟で受けるが、弾き飛ばされ別のビルの屋上に着地する  
そこに更に叩きつけられるメイス

追撃が止まらない

ビルからビルに飛び移り、体勢を立て直す蒔風  
次第に交互に飛び交いながら打ちあつていく

（何て野郎だよアックアってのは！！一番重量のある獅子天麟がビリビリ言ってるぞ！？）

それもそのはず

「後方のアックア」はこの世界では「聖人」と呼ばれる人間である聖人とは、「神の子」と身体的特徴が似通った人間のことで、ゆえに莫大な力をもった者のことである。

さらにアックアは「神の子」だけではなく「聖母」とも身体的特徴が似ている

つまりは、「神の右席」で「聖人」で「聖母」なのが後方のアックアという人物なのだ。

レプリカとはいえ、その力に落ち度はない

「奴」の力はそんなに荒くはない

ガバァン！！ドギヤァ！！ゴガゴン！！！！

ビルとビルとを跳ねまわりながら打ち合い、飛んでもない音を立てて移動していく二つの影

地上の人間が何事かと上を見上げる頃にはそこにあった二つの影はない



猛スピードで動いていく二人

蒔風がビルに着地と同時にまた跳躍する。

何度目になるかわからないアックア・レプリカとの衝突。

しかし、到底ぶつからないであろう位置から、アックア・レプリカはメイスを振るってきた。

すると、これから打ち合う体制に移行しようとしていた蒔風に、暴風が襲いかかった。

暴風といっても、それだけでは言いきれまい

突風、暴風、轟風、烈風

それらあらゆる風がまじりあい、風であるにもかかわらず、何かが激突したように蒔風を物理的に叩いたのだ

その衝撃を蒔風は顔面で受けてしまった否、顔面でしか受けられなかった

空中でのけ反り、体勢を崩す

そこにアックア・レプリカが二撃目を、今度は直撃コースで振るってきた。

「だあああああ！！！！っそい！！！！」

それを時風は仰け反ったまま一回転して獅子天麟で真っ向から受け止めてしまった。

再三の激突に両手は痺れており、さらには無理な体勢から受けてしまったのは、時風の両手は獅子天麟を握っていることができなくなった

街のどこかに獅子天麟が落ちていく

落としてはしまったが、取りに行くこともできない。  
手元に再び戻すには、いったん落ち着いてからじゃないと無理なのだ。

しかしそのおかげで、直撃は免れ、ふたたび無事に屋上に着地することができた。

時風は飛びあがらず、その場でアックア・レプリカに向け力を放つ

「燃え上がれえ！！！！獄炎砲、獄炎尖、獄炎掌、獄炎砲、獄炎竜、獄炎掌おおおおおおおお！！！！！！！！！！」

ドゥーン！ドシュドバ、ゴゴウ、バガア！！！！ゴオオオオオオオ！！！！！！

蒔風がアックア・レプリカに向かって獄炎コンボをぶっ放す  
しかし相手の元は後方のアックア。それだけでは潰されない。

空中でメイスを振るう反動を使って、上下左右に移動しかわしていき、時にはメイスで碎いた

だが蒔風の本命かここからだ

「獄!!!炎!!!弾!!!」

ゴォ!!!

蒔風の胸前にエネルギーがたまり、それを標的に力のかぎり投げつける!!!

ビュォア・・・ドツ、ズガガガアアアア・・・

獄炎弾が爆発を起こす。

蒔風の能力で最高峰の一つを放ったのだ。無事であるわけがない  
そんなはずはないのだ

「なのになんで・・・まだ生きてんだてめえはよお!?!」

グバツ!!--と獄炎の膨張した巨大火球から、アックア・レプリカが飛び出てくる。

そして気付くと、いつの間にか蒔風の背後にまわっており、襟を掴んで大地に向かって投げつけた

ヒュガッ、ドドン!!--!!

蒔風が頭をフルフルと左右に振って立ち上がる

(くっそ・・・高速移動なんてオレにはできねえぞ!?!ツ!?!)

ドゴン!!--

アックア・レプリカが蒔風の立つ位置に踏み砕こうと飛び降りてきた

どうやらここは開発途中か、それともこれから開発する区域らしい。周りに建物は一応あるが、誰かがいる気配はないしかし、ちよつとでも離れれば市街地だ

「まだまだ気は抜けない・・・か・・・龍虎雀武！！解放形態！！」

蒔風が龍虎雀武を開放して組み立てる

とはいっても、朱雀槍の先端が青龍刀になっていて、柄の部分に白虎と玄武の文字化彫られただけのものだが。

「朱雀青龍刀！！四獣を宿したこの武器相手に、力技じゃあ・・・勝てないぞっ！」

ダッ！！

蒔風が駆ける

アックア・レプリカの足元から上段にかけて朱雀青龍刀を振り上げる。

それを当然のようにかわし、アックア・レプリカはメイスを横なぎに振るう

バアアアアアアン！！！！  
ズシャアアア！！！！

銅鑼を鳴らしたような音が響き、時風が地面を滑る

「よっし！！これでいけるか？！！！！」

時風の握る武器の形が変わっていた

先端が青龍刀であったのが、円盤状でふちが刃になっているものとなっていた。

「朱雀玄武盤。ちと音大きいし、後ろに飛ばされちまうけど、まあ何とか……」

ゴゴウ！！！！  
ブシッ！！

「なるかな？」

蒔風が獲物を振るうと、アックア・レプリカの脇腹辺りが裂けていた。

「変幻自在の武器、攻防。とくどご覧になるがいい!!!」

ゴダウ!!!

メイスを横薙ぎに振るう音と、アックア・レプリカの足の裏から響く踏み込みの音が同時に聞こえた。

蒔風はそれを柄の部分で一瞬だけ受け、その地点を軸にくるりとメイスを乗り越える。

「朱雀白虎棍!!!」

そして今度は槍の両端に白虎釵を取りつけた形として、アックア・レプリカの手首に突きさす

アックア・レプリカはそんなものは関係ないと腕を振るおうとする

が、しかし、その腕は動かない

アックア・レプリカに突きささっている方の白虎釵は蒔風の持つ槍の先端からはずれていた

そしてそれがまるで空中に固定されたかのように動かないのだ

「説明してもわかんないかもしれないけどな。この両端についてる白虎釵は、この状態からなら取り外すことで空中に固定できるんだよ。ま、引き抜かれちゃ終わりだが、その一瞬で十分だ!!」

ドスっ!!

もう一方の先端をアックア・レプリカに突きさす蒔風。

突き刺した白虎釵をそのまま残し、取り外す

朱雀青龍刀に変え、アックア・レプリカの腕を切り落とし、メイスを落とさせる

青龍刀を白虎釵のように突き刺し、離し、今度は朱雀玄武盤にする。

それを脳天からざっくりと切りつけてめり込ませ、蒔風が号令をかける



「よぉ〜し。暴れるてめえら!~!」

ドッ、グバァ!~!~!

その突き刺した所から、体内に向かって四神が飛び出した。

体内から引き裂かれ、アックア・レプリカが無残に散る

「欠片も残さん!~!」

風林火山をブォンブォン回転させ、細かく散った欠片をも消し炭にして消滅させる。

「これで終わりだな。上条〜。見てるん?今戻るよ〜ん」

蒔風がその場を立ち去ろうとする

しかし

蒔風のジーンズの裾が突如として現れた鉄矢によって地面に縫いつけられ、歩みが止まる

さらにそこに二人の少女が突如として現れた

小柄なツインテールの方が右腕の腕章を掴み、こっぴ叫んだ

「ジャツジメント風紀委員ですの！！パイロキネシス放火能力の乱用と、市街地での戦闘容疑で拘束します！！！」

そういった少女、しらこくろ白井黒子は蒔風の前に立つ。

戦いはまだ終わらないようだ

t o b e c o n t i n u e d

とある魔術の禁書目録 くとある「欠片」の聖人模倣（後書き）

アリス「今回また新しい武器出ましたね？」

ええ

解放状態での龍虎雀武の組み合わせですね

まあ、朱雀槍の先端が変わっていただけですけど

各組み合わせはこのように

青龍 先端が青龍刀になる。薙刀？青龍偃月刀？みたいな

玄武 先端が円盤のふちに刃がついた物になる、防御に優れる

白虎 両端に白虎釵がつく。振っている途中でも切り離し、空中に固定することのできるトリッキーなもの

ですね

ア「まためんどくさい」

すみません

ア「最後に白井さんが出てましたね」

そっすねー

まああんだだけ暴ればそりゃ来るでしょう

ア「忘れたことはないですか？」

ないと・・・思う

ア「不安ですがまあいいでしょう。次回、VS常盤台コンビ!」

この世界戦つてばっかかも・・・

ではまた次回

いい加減に始めようぜ、魔術師!!!

とある魔術の禁書目録 ～とある二人の誤答考察～（前書き）

「誤答考察」は「お門違い」とお読みください（笑）

とある魔術の禁書目録 くとある二人の誤答考察

「ジャッツジメント風紀委員第177支部 白井黒子ですの。あなたの身柄を拘束しますわー!」

ジャッツジメント  
風紀委員

志願学生による学園都市の治安機構の一つだ

あれだけ暴れれば確かにそういったものに引っ掛かるだろう

(この鉄矢・・・どっから来た?・・・ま、とにかく)

蒔風が屈伸して、ジャンプする  
ジーンズの裾がビリビリと裂けたが特に気にせずビルの屋上に向かって跳んだ。

「ま、めんどいし、このまま」

蒔風が逃走しようとする

しかしその前に声が聞こえた

「このまま、どうするおつもりですか？」

「な!？」

着地しようとした地点

そこにはすでに黒子と名乗った少女が立っていた。

(こいつも高速移動か!? 気配なかったぞ!?)

時風が思考に身を固めると瞬間、黒子の姿が時風の目の前の宙に突如として現れた。

「なあ!?! ブエ!」

黒子が時風の顔面にドロップキックをかます

ビルのフェンスにぶつかるが、老化していたのか時風は寄り掛かる事もできず、再び下に落ちる。

着地し、鼻の辺りをさすりながら時風が周囲を警戒する

(なるほどね・・・瞬間移動者か!!)

テレポーター

そこで黒子も下にテレポートしてきた

「さあ、観念してもらいますわよ。大人しく御縄につきなさい!」

(テレポーターってことは力のほとんどは視力に頼っているはず・・・  
だったら・・・)

「・・・どうやら、大人しくしているつもりはないようですわね。  
でしたら!」

黒子がスカートで隠れてる、太ももに巻き付けられたベルトにある  
新たな鉄矢に手を伸ばす

しかし、蒔風が一瞬早く動いた。

「乱立! 畳返し!」

ドガガガガガガ! ! !

蒔風が地面を両手で叩き弾く。

すると蒔風と黒子、あとこの光景を見ているだけのもう一人の少女  
がいる広範囲に、バラバラに地面が起き上がる

突如として地面の板が何枚も起き上がり、視界を遮られた黒子は、



別の事に気を取られていた。

（たしか報告であった映像では彼の能力はパイロキネシスでは！？  
どういうことですか！？）

そんなことを考えているうちに、乱立畳返しのうちの一枚が黒子に飛んできた。

時風が蹴り飛ばしたのだが、向こう側の見えない黒子はそんなことには気付けない。

むしろ「物を飛ばす」という能力も持っているのでは、と勘繰ってしまう。

（いいえ……多重能力者デュアルスキルなんてありえませんか！！そんなの、あの方一人いらっしやれば十分ですの！きっとなにかあるはずですよ……なにか……！！！）

そこにさらに時風が畳返しを蹴り飛ばしてきた。

それを飛んできた物の後ろに回り込んで回避する黒子。

そして襟元を捕まれた。

時風は蹴り飛ばした畳返しの裏についていくかたちでジャンプしていたのだ。

完全に意表を突かれた黒子は混乱にとっさのテレポートもできず、地面に叩きつけられそうになる

しかし

そこに電撃の槍が飛来し、蒔風を襲った。

蒔風が吹き飛ばされ、土煙が上がる

黒子は叩きつけられはしなかったが、投げ出されはし、苦しそうに咳込みながら喉を押さえた。

「そろそろあたしも手を出させてもらおうわよ。いいわね?」

「お、お姉様……」

「後輩の尻拭いくらいはしてやるわよ」

「お姉様……」

「だからあなたは大人しく……いっつ!？」

もう一人の少女、御坂美琴が黒子の方を見ると、目を異常にキラキラと輝かせていた。

「ああ！お姉様！！黒子の、この黒子の敵討ちの為に、お姉様が立ち上がって！！！！黒子はもう昇天してしまっそうですわ！！！！」

そんなこといって黒子は身を悶えている  
しかし、体力が尽きたのか本当に昇天してしまったのかはわからないが、黒子はパタリと気絶してしまった

御坂はそんな黒子を放っておき、蒔風が吹き飛んだ方を睨む

煙の向こうから蒔風がひょっこり出てきた。

「なるほど。学園都市超能力者・レベル5の第三位、超電磁砲レールガンの御坂美琴か。どうしてなかなか・・・電撃エレクトロマスター使いの頂点と言っただけあるな」

「私のこと知ってんのね・・・ま、そりゃそうか・・・あんた！私  
の後輩が世話になったわね！今度は私の相手をしてもらっつわよ！！」

「はん・・・超電磁砲だかレベル5だかなんだか知らねえが、それ  
はお前の勝因にはなりえない！」

ババン！

御坂が蒔風に電撃を投げつける。

それを時風は「風」で巻き上げ、地面に向けて奮った。  
方向を変えられた電撃は地面を少しえぐった

「へえ・・・この程度は効かないか・・・でも、あんたの力、少し  
わかったかも」

「ほっほっ！オレさんの能力がわかった？じゃあ、答えてみてくれ。  
正確かどうか採点してやろう」

「あんたの能力はズバリ・・・原子操作！」

「炎は火の原子を空気中の酸素を操って、畳返しも原子を構築し直  
して作り出しただけってか？」

「でも、そんな能力、あたしの電撃で「ぷ、あっはっはっはっはっ  
は！！！！」・・・なにが可笑的いのよ」

「いや、可笑しいてっの。ははは。オレの力は、そんなもんじゃな  
いよ。圧水砲！！！！」

ドッパア！！！！

時風が水の砲撃を美琴に撃ち出す時風

「！？チツ！！！」

バツッ！！ボツシユア！！！！

それを即座に吹き飛ばす美琴。

「どおーだい？これでもまだ、原子だとか言ってるれんのかい！？」

さらに雷旺弾を撃つ。

これは美琴に吸収されてしまう

「ま、そうなるわな。でもこうして見ると、見たくなるよな。電気  
対決！！！！」

蒔風が美琴に向かって右腕を伸ばす。

「力を借りる！！（パンン！）バルディッシュュー！！セットアップ！  
」！

《yes ,sir .set up》

蒔風の服が黒く染まり、腰に赤いベルトがつく

「あー、よかった。色が変わるだけか。ま、さすがに男のオレがあの恰好はいけないもんな」

「な、な、な、な・・・」

「どうした、やらないのかい？」

「なんじゃそりゃーーーー！！！！」

ドバア！！！！

《Photon Lancer》

ドウツ、ババババババババ！！！！

バア！！！！

互いの攻撃がぶつかり合い、弾けて消える

「っと、さすがに電気量じゃあうちのほうか上か・・・」

「なんなのよあんた！！」

「気にすんなよ。ただの・・・そう、ただの世界最強だ」

「世界・・・最強？」



一筋の光線が時風のわきを通り過ぎて行った。

「はい？」

「あなたがどうやって手首足首縛り付けたかは知らないけど・・・  
こちらら指先一本でも動けば十分なのよ！！！！」

煙の中から美琴が腕を突き出してきている。

その指先にはコインが一枚

ドシュー！！！！ゴゴオツ！！！！

今度は外さない、と的確に時風を狙ってくる。

時風がそれをバルディッシュで弾くが

ベキイッ！！！！

「ンなにーーーー！！？」

バルディッシュがあるところかひん曲がって折れてしまった。



「バカですかあんた？あたしのこれ真つ向から受けたらそうなるわよ。あいつ以外だけど……」

「くそ……まだ一分しか使っていないのに退場かよ……使えなくなつたわけじゃないけどさ……」

「さ……あ、観念しなさい。あんたもこれ以上怪我したくないでしょう?」

「……怪我……怪我、ねえ?」

バチバチバチ

「!?!」

「どうやら精密操作と総電気量はそっちの方が上見たいだが……」

ババババババババ!!!

「チツ!!!後悔しても知らないからね!!!」

「オレの方が攻撃力は高い。持久戦に持ち込むべきだったな」

ピン……

美琴がコインを指で弾く

コインが宙を舞い、美琴は腕を時風に向け、標準を合わせる

そしてコインが腕の前まで落ちてきたらレールガンを放つ……

それよりも早く、時風の雷旺砲が襲いかからなければ、だが

ドゴゴゴンゴンゴンゴン……！！！！！！！！

大地を抉り、ただそこには「破壊」の跡があった

「どうだい？オレの雷旺砲。ま、これでもまだ本気ではないんだけど」

チーン、と

コインが静かに落ち、地面に当たった

美琴は立ち尽くしている

雷旺砲は美琴を直撃せず、脇を通過しただけだった

「これで充分だろ？オレは帰る。お友達も、ちよつと揺さぶつただけだから、怪我してないし、あと二、三分で目え覚ますよ。じゃね」

「待ちな・・・さいよ」

「ん？」

「ふざけないでよ！！学園都市第三位の私を相手にして去っていくなら！！！！」

バチバチバチバチ！！！！

「いつ！？ヤベツ！！」

「あたしをしつかり倒してから行きなさい！！！！！！」

ドシュっ！！！！！！

美琴がレールガンを放つ

音速の三倍で放たれたゲームセンターのコインは一筋の光となって  
蒔風に迫る

しかし

それは蒔風には当たらず途中で軌道を変えて空に伸びていった。

「……………な……………んで」

美琴が蒔風をにらみつける

蒔風は「火」を美琴の腕に向け、真っ直ぐに伸ばしていた

レールガンが飛来した瞬間

蒔風は飛んできたコイン……………弾丸に向け「火」を構えた

そしてその切っ先にそっ、と当て、軌道をそらしたのだ

一瞬で飛来する弾丸に即座に反応し、寸分の狂いもなく切っ先にあって軌道をそらす

説明されずとも、美琴はわかっていた。

わかっていたが信じられなかった。  
信じたくなかった

「あいつ」に効かないのはわけわかんない力が作用してるのはわかる  
それは「わけわかんないモノ」だからまだ納得がいく（気がする）

自分より高位の能力者に効かないのはその特性や性能故にだ

しかしこの男は

自らの技量のみでレールガンを攻略した

もし時風が何らかの力で無理やりはじいたり、かき消していたらこ  
うは思わなかっただろう。

だがそうではなく、たった一本の日本刀と、たった一本の腕だけで  
なんの能力も使わずに攻略されたのだ

勝てない、と美琴に思わせるには十分だった。

そして時風は今度こそビルに飛びあがり、姿を消す

美琴は目を覚ました後輩の怪我でも見ようとしたが、かすり傷一つ負ってなかった。

若干電撃で手足がしびれるくらいだ

(あいつ・・・何者なのよ・・・)

それを彼女が知るのはまだ先のことである

.....

「やっべえな。もう帰らないと。っと、映像リンク切ってと」

上条の病室のテレビにつないだリンクを切る

蒔風は上条の病院に帰っている途中だ

だが

学園都市に蒔風の平穩はないのだろうか

一発の銃弾が飛んできた

蒔風はそれを難なく弾くが、このまま帰るわけにもいかない。

蒔風は鉄骨を組まれた建設中の工事現場に降り立った

「ンだア？仕事で渋々来てみりゃあよ、こんな弱っちそうな奴が侵入者だア？」

そこに足を踏み入れる一人の少年

その髪は白く、服は黒を基調としていた

「ッたく。なーンで、オレがいちいちよオ。こんな配役なーンでーすかー？？」

「お前は？」

「はン！！お前オレを知らねエの？いいねエ。面白おかしくなってきたかもなア！？」





t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

とある魔術の禁書目録 くとある二人の誤答考察 (後書き)

アリス「次から次へとなんなんですか!？」

言ったしょ?

この世界じゃ戦ってばかりなのさ!!!

ア「うそでしょ?」

はい

でもこう考えるのが普通なんですよ

アックア・レプリカと戦う

風紀委員 + 超電磁砲登場

上層部からの依頼で一方通行登場

つてね

ア「まあ、ソウデスネ」

なんだその声は

ア「気にしないで」

あ、後それと一つ

アクセラレータ  
一方通行、つていちいち打つとパソコンの人はともかく、携帯で呼んでる人は見にくいと思うのよね

ア「パソコンならルビになりますけど、携帯じゃぜんぶ括弧ですからね」

だからこれからはルビも括弧も抜きで「一方通行」て統一します

ア「まあ、その方がいいでしょうね」

じゃあそろそろ

ア「次回、VS最強のレベル5・時風の戦法は!?!」

ではまた次回

たとえ俺達がどれだけのクズでも、どんな理由を並べても、それでもこのガキが殺されて良い事なんかならねエだろオがよ!!!

とある魔術の禁書目録 くとある最強の戦闘記録く

学園都市最強と世界最強の翼人が睨み合う。

「なんだア、てめエ。やられたツてのになンも言わねエの？あれで  
すか、お前はマゾですかア？よオ！！」

ゴガン！

一方通行が近くの鉄骨を適当に殴る。

すると殴った方向ではないにも関わらず、蒔風に向かって鉄骨が飛んできた。

学園都市最強のレベル5、一方通行の能力は彼の名と同じく「一方通行」

それはありとあらゆる力のベクトルを変更することだ。

故に殴った方向とは違う方に鉄骨が飛んだのだ。

しかし蒔風にはそこまでの情報は流れては来なかった。

(学園都市最強の能力者「アクセラレータ一方通行」、本名が来ないってことは普通にそう呼ばれてたからか。どうせなら能力まで教えるよ！！！)

蒔風が飛来する鉄骨を獄炎で吹き飛ばし、土惺砲を一方通行に撃つ。太い土の柱が一方通行に迫るが、それは一方通行に触れる直前で吹き飛んだ。

（なんだこいつ？複数の能力ちから使ッてるのか？・・・ま、関係ねエか。オレの能力の前じゃ無意味だからな）

蒔風は土惺砲を弾かれた反動でのけ反るが、即座に今度は圧水弾を小さくいくつも投げつけた。

が、それも一方通行の力で反射される。

投げつけられた圧水弾はまっすぐ蒔風の方に帰ってくる。

「反射！？くっ！！」

ババババン！

蒔風がかわし、圧水弾がさっきまで立っていた位置の地面を軽く吹き飛ばした。

「反射かア。少し違うんだよなア」

「??？」

「確かにデフォは「反射」に設定してるけどよオ、そんなものは能力の一部でしかねエンだわ」

「どづいうことだ？」

「知りたきゃもツと面白おかしく愉快に踊れエ!!」

ドバツ!!!

地面が吹き飛び蒔風に向かって飛んでくる

衝撃に身を固めるが、蒔風は回収していた獅子天麟を構え、突進する

(反射してんのは事実なんだから、反射しきれないくらいの力で押し切れば!!!)

ゴギヤ!!!

蒔風が一方通行に突っ込む

しかし、数秒押し合っただけで弾き飛ばされてしまった

「なんだ？押し切るオとしたのか？全然駄目だな。まア、ちツとだ  
けでも持ちこたえたのはよかつたかもなア」

そして一方通行は面白そうに叫んだ

「もしかしてお前、「相手の反射の許容量以上の攻撃で〜」とか  
思っ<sub>て</sub>ンじゃねエだろオなア！！！」

「っち！！！」

「オレの能力はなア、そんな漫画やゲ<sub>ム</sub>とは違<sub>エ</sub>ンだよ！！！」  
そして初めて一方通行が本格的に動き出した

「オレの能力は「ベクトル変換」！！！！てめエがどんな攻撃しよう  
と、オレには届かないんだよ！！！」

ゴウッ！！ゴウッ！！ゴウッ！！ゴウッ！！

一方通行が両手を振り回して時風を追い詰めていく

触れただけであらゆるベクトルの向きを変えるその腕は、今や凶器だ

もし当たれば瞬時に血流や神経内の電気信号を滅茶無茶にされ、殺  
されてしまっだろう

(ベクトル変換？デフォが反射？・・・そりゃいいや、まさに学園都市最強だな。だがいいのかい？そんなに自慢げに語っちゃまってよ)

迫る一方通行の眼前に畳返しをし、視界をふさぐ

一方通行の前にそんなものは無意味だが、その間に蒔風との距離は離れた。

「それだけじゃあ、お前の勝因にはならないぜ？」

スッ、と蒔風が屈み、地面に手を当てる。

「ああ？愉快なこと言ッてくれンじゃねェか！！！！」

一方通行が蒔風に向かって駆けだす

そして

その足元

本当にまっすぐ足の裏の裏の地面から炎が噴き出した



「ンがア!？」

当然

一方通行に炎などは効かない  
一切の熱をカットすればいいのだから

しかし、彼の足の裏は焼けていた

「ナン・・・だとオ!？」

「考えてみりゃ簡単なこつた。デフォが反射ならなんでお前さんは  
歩く度に浮かないんだ？」

そう

もし一方通行が全身に反射を効かせているならば、歩く度にその衝  
撃で浮きあがるはずだ。

足の裏だけ別方向にして浮かないようにしていると言つ仮説もあつ  
たが、時風はこれを却下した  
なぜなら、そんな歩き方をすれば変なところの足の筋肉が発達して  
いるはずだし、目の前の人物がそんなこといちいちするような人間  
にも見えなかったからだ

ならば話は簡単

足の裏の一点のみ、一方通行は能力を切っているだけのこと  
といっても、本当に片足ずつに一点のみだ。  
時風はその一点を一方通行の歩き方一つ一つで見極めていた。

一方通行は足の裏の痛みに動けずにいた

「で、これだ。獄炎弾！！！」

ゴッ！！ズア！！

時風が灼熱の球を投げつける

一方通行に当たる寸前で、獄炎弾が膨れ上がり一方通行を飲み込んだ

(なんだア？この程度じゃアオレは・・・まさか・・・クソツタレ  
！！そういうことか！！！！)

一方通行は獄炎の中でも平気だった。

一切の攻撃は彼を傷つけることはできない

しかし、確実に彼は焦っていた

「どうだい？はたしてその中に・・・呼吸するだけの酸素は残されているかな？」

獄炎弾の持久時間は実を言うと混閻陣に次いで長い  
その中に閉じ込め、酸素を燃焼し、呼吸を奪う

これが蒔風の最後の手段だった

中では一方通行がそこから抜け出そうとしていた

足の裏はやけどで歩けないので、重力を「反射」して宙に浮いて移動する

しかし、「反射」しているということは獄炎弾の中にはぽっかりと穴があいている

それが動けば蒔風にも感知される

蒔風はその空洞が真ん中に来るように獄炎弾を細かく動かしていた

ついには呼吸ができなくなり、脳に酸素がいかなくなる

一方通行は演算を組むことができなくなっていった

(クソ・・・ツタレ・・・なん・・・だ・・・こいつ・・・)



「ただいま〜」

「おう・・・ってお前どうしたんだよ！映像切れてから丸々十分は経ってるぞ!？」

「あー、ジャッジメント風紀委員とかが存外しぶとくてな」

「そういえばビリビリとも戦ってたな・・・」

「ん？彼女知ってるのかい？」

「まあな・・・」

「で、オレがこの世界とは違う力の持ち主ってのはわかったかい？」

「まあな。一人につき能力は一つだからな。それはわかった。インデックスは？」

「うん・・・いかなる魔術にも該当しない・・・しゅんの力はこの世界のものではないと思うよ？」

「ありがとうございます・・・あれ？土御門は？」

「ああ。なんか仕事が入ったとか言っ出ていっちゃった」

「ふ〜ん」

「そういえばお前怪我大丈夫なのか？」

「大丈夫さ。たいしたことない。ただ滅っつっつ茶苦茶に疲れたな・・・おまさんは今日はこのまま病室？」

「当たり前なんだよ！！とうまはポロポロなのに私を置いて飛び出して行ってあるうことかあの後方のアックアにケンカ売りに行ったんだよ！？絶対安静なんだから！！！」

「・・・だそうです」

「じゃあ・・・どうしようか・・・インデックスさんはどうするんで？」

「え？」

「このままここにいても飯は出ないだろうし・・・学生寮に住んでるんだっけ？同居人がインデックスだけじゃ帰ってもやっぱりなにも喰えないぞ？」

「・・・とうま？」

「いやに頭の中であなたがこれから何を言うのかわたくし容易に想像できるのですが、とりあえず言ってみなさい」

「・・・家に「飯は？」」

「・・・ない」

「~~~~~ま~~~~~!!!!!!」

「うひゃあインデックスさん！？オレは絶対安静なのは――！？」

インデックスが大きな口を開け、上条に迫る

それを唾然と眺める時風だが、思いついたように言った

「あ――。じゃあオレが飯用意しようか？」

「!!!!!!!!!!!!!!!!????????!!!!!!」

途端にインデックスがわけのわからない言語・・・いわ、表現をし  
てきた

「上条。彼女は何を伝えたいんだ？」

「あ――。たぶん、

『やった――!!!!!!御飯だ――!!!!!!今更なしと  
かはないんだよ????????』

つてことかと」

上条が彼女の表情を行動から思考を読み取る

「納得。でもオレ飯作るといっつか持つてるもの出すだけなんだが・  
」

「大丈夫なんだよ!!!食べれる物を用意してくれるならとうまより

しゅんだよ！！！！」

「うわｗｗｗｗひでえ。いつもこうなん？」

「いや。お前がいてくれなきゃオレが噛みつかれてた」

「あー。それはなんというか・・・ふこ」言つな「ごめん」

「ほら！！とうまは絶対安静なんだから、私たちはご飯のために帰るんだよ！！！！」

ダダダダダダダ・・・

インデックスが部屋を飛び出す

「いま本音出てたぞ」

「気にしないでやってくれ・・・じゃ、これ寮の鍵」

「ああ・・・というかよくいきなり知り合った人間を部屋に入れられるな」

「うーん。大丈夫なんだろう？」

「まあな」

「ならいいじゃん・・・ッて感じだな」

「そんなもんか。上条さんパネエっすね」



「はは・・・ほら、行かねえと、あの極悪シスターがオレに噛みつく前に行ってくれ」

「ああ。これは置いていく」

そう言っつて時風は獅子天麟の三本を壁に立てかけていく

「ありがとな」

「お互い様だ。じゃな」

そうして時風は外で待つインデックスを追って、上条の寮の部屋まで行った

そしてそこで料理をふるまい、インデックスがベッドで眠りにつくと、時風も適当なところで眠りについた

.....

アレイスター・クロウリーは考える

あの男は我々の手に余る

が、幻想殺しに迫る脅威を追い払ってくれるならこちらとしても僥倖  
ならばこれ以上手は出さず、静観するのが一番か

依然『プラン』に変動なし

侵入者「時風舜」の行動に一切の介入を禁ずる

t o b e c o n t i n u e d

とある魔術の禁書目録 くとある最強の戦闘記録 (後書き)

やーっ と戦いが終わりました

アリス「これはらは日常パートですね!?!」

.....

ア「おい答える」

..... どうしよっか?

ア「まさかまた.....」

次回!?! どのなるのかな!?!?

ア「私の台詞うつうつ!?!?!?!?!」

ではまた次回

祈りは届く。人はそれで救われる。私みたいな修道女は、そうやって教えを広めたんだから!

とある魔術の禁書目録 くとある翼人の世界接続 (前書き)

「世界接続」まんまですね (笑)

とある魔術の禁書目録 くとある翼人の世界接続く

次の日

蒔風とインデックスが上条の病室に向かうと上条はいなかった  
どうやらどこかに散歩にいったようだ。

なので病院内の庭園に足を運び、そこで上条を発見する

「上条――。調子はどうだ？」

「おう。まあ、歩き回るには支障ないってよ」

「とうまはベッドで寝てないとダメなんだよ――！」

蒔風とインデックスが上条に近づいていく。

あと六メートルくらいといった所か。

そこで黒い影が通り過ぎたと思ったら、上条が消えていた。

「はい？」

蒔風が空を見上げると、見覚えのある鳥の姿があった

「迦桜羅!! チクシヨウが・・・よくもまあオレの目の前で!! っ  
か、急展開すぎだ!!」

「しゅん!? あれは何!？」

「あれは「迦桜羅」ってな、「奴」の使役獣だ!!」

「とうまが! 殺されちゃう!!」

「させねえよ!! 追っぞ!!」

ブアッ! ドスン!

ヴァヴァヴァヴァ・・・

蒔風がバイトを出現させ、インデックスにヘルメットを投げる。

「急ぐぞ・・・あの野郎、誘ってやがんな・・・」

.....

どこかの廃工場

迦桜羅は上条をそこにほっぽって消えてしまった

「何なんだ、何なんですか、何が何なんだコンチクショー!!」

「どうも、幻想殺し」

「はい？」

そこに「奴」が現れた。

上条当麻を殺すために

「てめえが蒔風の言っていた……」

「そうだよん。ま、観念して下さい」

「お前、何のためにこんなことしてんだ？」

「ん？世界を取り込んで、それから新しい世界を作るんだ。脇役とか、主人公とか、そんなの全く存在しない世界をね」

「そのために消えていく世界があってもか？」

「どーせ再構築した世界で蘇らせてやるさ。ほら、みんな主役ならみんな楽しい。試練が欲しいなら与えられる。立ち向かう悲劇が欲しいならくれてやる。それらを打ち破る力だって、な」

「その為に「今」を潰すのか？」

「そそ。だから殺される。大丈夫さ。お前も元に戻してやるからさ。不幸つても何とかなるかもよ？そのままでもいいなら、そのままにもできるし」

「だから・・・死ねって言うのか？他の奴のために？ははは、残念ながらこの上条さんは、誰かのためにホイホイ命を投げ出すようなお人好しじゃないんでね。断らせてもらうぜ？」

それ以外にも

上条当麻が断る理由があった

死にたくない、この世界がいいんだ、など多くあったが、一番大きな理由はたった一つ

上条当麻はもう死なない。

あの少女の顔が悲しみに染まるなら、自分は絶対に死んでやれない

上条当麻はもうすでに一度「死んで」いる。

あの少女を助けた時に、彼は一度「死んだ」のだ

もう死んでやることはできない

これ以上、あの子を偽ることなんか・・・できるはずもない



「都合のいいように試練を与え、都合のいいように力を与え、都合のいいように乗り越えさせるだと？ふっざけんじゃねえ！！今まで俺たちが乗り越えてきた苦労を無駄にさせんじゃねえよ！！！！みんながこの理不尽な世界のながで、必死になつて抗つて、それで乗り越えてきた今なんだ！！！！その時の必死をそんなことで無駄にさせてたまるかよ！！俺たちの歩いてきた道を、無意味なものにするんじゃねえ！！！！もしてめえが世界をどうにかして新しく都合のいい感じに作り直すつてんなら・・・そのためにオレの知り合いを泣かせるつてんなら！！！！」

上条当麻は右手を握り、世界最強と対をなす男に向かって、なんら臆することなく宣言した。

「いいぜ・・・お前のその腐った幻想をぶち壊す！！！！」

上条と「奴」が睨み合う。

その眼には確かな敵意

まず「奴」が動いた。

「奴」が波動砲を撃つ。

それを上条が右手で払う。

波動砲は撃ち消され、黒い霧がブワツ、と広がり、すぐに消えた

「異世界のものとはいえ、やはり効くのか幻想殺しイマジンプレイカー！！」

ドウツドウツ

立て続けに何発も撃ってくるのを、撃ち消しきれないと判断し、走り回ってそれをかわす上条。

(あいつの使ってるのだって時風と同じ異能の力なら、この右手で消せるはずだ！！！)

しかし、消せるだけでは倒せない。  
いや、ここで勝とうとは上条は思っていない。

ただ、時風が来るまでに一発でも殴ってやりたかった

「奴」は波動では埒が明かないと判断したのか、その手に魔導八天を出そうとする。

が、そこに上条が突っ込んだ

そして「奴」の手元に向けてその右手を伸ばす

すると、途中まで出現しかかっていた魔導八天が消える

上条は迦桜羅に連れ去られたときに、それに触れていた  
しかし迦桜羅は消えなかった

つまり、迦桜羅を召喚する力は消せるが、迦桜羅自体は消せない  
ということだ

だから、上条は「奴」が何かを出すときにその手に触れると決めて  
いた

「ぬ!?!」

「お、らあ!?!?!」

ブア!?!!

上条の拳がうなる

しかし、「奴」は腕の部分に手刀を当て、弾く。  
そして上条の腹部に蹴りをいれ、その体をやすやすと吹き飛ばした。

「げがああああああああああ！！！！！」

「オレの強さは能力だけじゃない。普通に戦っても強いんだよ。お前じゃオレに勝てないぜ？」

「お、おお、おおおおおおおおお！！！！！！」

「ダメだよ上条さん……そんなことされたら……そんなに必死になっちゃ……」

上条が「奴」に駆ける

そんな姿を見て、「奴」がうれしそうな顔をする

「叩きたくなっちゃうだろお？」

ゴットン！！！！！！

「奴」が大地を踏みつけ、揺らす

あまりの振動に、上条の体が浮き上がった

「うわあああああああ！？」

「上条さん、いらっさい!!」

「奴」が上条に手を伸ばす。

その手に向かつて、上条は空中から蹴りを繰り出すが、簡単に掴まれ、また放り投げられる

そして何度も、何度も、向かつては投げ返される

「ぐっ、ぐああああああああ!!!!!!!!」

もう何回目だろうか

アックア戦でもうすでにボロボロだった上条の体は、ここ二日で回復した分がこの戦闘で吹き飛んでしまった。

それでも上条当麻は立ち上がる

(何か引つかかるんだ・・・「奴」はオレの攻撃を全部真っ向から掴み投げてくる・・・なんだ?なにが・・・引つかかっている?)

「そちらから来ないならこちらから行くぞ!!!攻めてこないならめえは死ね!!!」

「奴」が右腕を振りかぶり、上条に向かって突っ込んでくる

(右腕・・・右?・・・そうか・・・やっぱり効き目はあるってことかよ!!)

「奴」が止めとばかりにダンツ、と大地を踏み締め、上条の顔面を粉碎しようとその拳が唸る。

が、上条当麻は知っている。

止めで繰り出す技を放ったときの人間の間隙は、絶対にあると!!

上条の体がぐらりと倒れ

「どんなことがあったって、どんなに良い結果があったって」

「奴」の右ストレートを懐に入り込みかわす。

ブワァ!と耳の脇を拳が過ぎる。

「そのために誰かが泣いちゃ、意味ねえだろ!!!!」

ゴッキイ!!

上条が「奴」をカウンターで殴り飛ばす

「奴」が後ろに後退し、顔を手で抑える。

「きつさま・・・貴様ア！」

「奴」の顔の、上条が殴った箇所影が消える。

目の下からあご辺りの頬、それと口と鼻の半分があらわになる。

「そついや、お前は自分の世界をエネルギーにして取り込んでんだつたな。世界つてのは消せなくても、お前との接続は消せるみたいだなー！」

だから「奴」は上条の右手には触れようとしなかった。

もしかしたら自分が取り込んだ世界が消えてしまつかもしれないからだ。

実際には殴られた箇所の力が失せるだけで、力が消滅するわけではない。  
イマジンブレイカー  
幻想殺しは能力を打ち消しても、能力を一生涯使えなくさせるものではない。

「ぶっ殺す！ヒーロー面しやがるクソ野郎が！遊びは終わりだ。右手ぶった切ってグチャグチャにしてやる！ー！」

「奴」が怒りに狂い獣のように叫ぶ。

対する上条は満身創痍

もう走るだけの体力もない

だと言うのに、彼の顔は勝ち誇っていた

「ああそつだな。世界の捕食者。お前の願げんぞういは終わりだよ」

ドゴアン！！！！！

上条の後ろの壁が吹き飛び、そこから影が飛び出してくる

アギトに変身し、バイクをサーフボードのように変形させたマシン  
トルネイダースライダーモードに立ち、時風がインデックスと共に  
突っ込んできた。

「とうまー！！！！！！」

「インデックス！！」

インデックスが上条に向かって飛び降りる。



時風はマシントルネイダーから「奴」に向かって飛び、変身をといてから新たにカードデッキを出す。

「変身!!」

パン!!フォン

《Final Vent》

ナイトに変身した時風が「奴」にファイナルベント「飛翔斬」を当てるが、「奴」は魔導八天でそれを弾き飛ばした。

魔導八天に弾かれた時風が空中で体を伸ばして縦に回転しながら、上条の方を向く。

「上条!いくぞ!!」

「おう!!」

【toaru majutu no INDEX】  
LINK - WEAPON - WORLD

ゴゴウ!!

着地と同時に、時風の背にいつもの銀白の翼とは違う、別の翼が何本も生える。

翼といってもそれは白く輝く無数の鞭のようなものだ  
それはまるで刃のように鋭い翼で、ビュンビュンと吹き荒れている。

それらが一斉に「奴」に向かって伸びていく。

一本一本に異常なほどの力を持つそれは「奴」の魔導八天すべてをもつてしても捌き切れるものではない!!

「ぐっが、グギアアアアアアアア!!」

「奴」の叫びがこだまする。

インデックスはその力を目の当たりにして、啞然としていた。

「この力の源の女の子から、願いが届いたぜ」

「え？」

「『頑張つて！私もいるから!!』だつてさ!!」

「ひよ、ひょうか!？」「風斬イ!？」

それは友達の願い

なにがあっても助けたいと願う力!!!

「さあさあ、友達を想う、その願い!!!我が真なる翼にすべてをのせて!!!」

【toaru majutu no INDEX】 - WORLD  
LINK - FINALE ATTACK

無数の翼が消え、時風の銀白の翼が開翼される

インデックスがうつすらと光り出し、全身から無数の文章が浮かび出ては消えていく

「わっわっ!?!な、なに!?!」

「とっつ!?!」

インデックスがうつろたえ、時風が宙に浮く。

五メートルほど浮いたところで、インデックスの背後から無数の本が飛び出した。

それが時風の周囲にページを開いた状態で展開される。

その冊数は実に「10万3000冊」

つまり

「これ・・・全部魔導書の原典!？」

「な!?あれ?でもオレ見ても大丈夫だぞ?」

「当然さあ!!これはお前たちと、友達の願いたる、WORLD LINKなんだからな!!!」

それらの本が一斉に輝く。

その輝きは強く、温かなものだった

「待つて!!そんなもの放ったら学園都市ごと吹き飛ばじゃう!!」

インデックスがその威力を知るが故に、警告する  
時風はそれに自信満々に答えた

「だったら、願え!!!これらをもってお前らが、何を吹き飛ばしたいのかを!!!」



「さつてと・・・オレは行きますよ。の前に・・・よつと」

蒔風が上条を「山」で斬る。

すると斬られた個所から、完治とはいかないまでも、病院からさらわれたときの状態にまでは回復した

「右手に当たらないようにって意識してやると、結構難しいもんだね」

「おお〜。サンキューな。蒔風」

「しゅん、ありがとうね！」

「気にするな。オレのやるべきさ」ああ〜〜〜！！あんた！！」  
「つとあ？」

そこまで話して叫び声をする

そちらの方を見ると、白井黒子と御坂美琴が駆け寄ってきていた

「うは。厄介なのが来た・・・オレは逃げる！！説明よろしく！！」

「ああ！？あんな状態のビリビリをオレに投げるな〜！！ふ、不幸だ〜！！！！」

「とつま、短髪が来たよ？」

「あなた!!今度こそとつちめて・・・」

「あんた!?!なんなのよ!?!説明しなさ・・・」

「Gate Open . . . to aru majutu no I  
NDEX」

「じゃね～～～」

ヴォン

「なんですの?私の能力とは違う・・・一体なんなんですの!?!」

「え?え?なにそれ?一体何がなんなのよ～～～～!?!あんた!?!」

「はい!?!なんでしょうか御坂さん!?!」

「あいつ!?!何者なの?知ってんでしょ!?!だったら早く話し・・・」

「Gate Open . . . to aru kagaku no R  
AILGAN」

「はい?」「え?」「うそ・・・」「なんですの?」

「うあ～～～さつて、次・・・は・・・」

蒔風がやってきた。

ゲートをくぐって、新たな主人公を主軸に、ふたたび学園都市に

「こんなのでありますかあ~~~~~!!??」

t o b e c o n t i n u e d



とある魔術の禁書目録 くとある翼人の世界接続（後書き）

アリス「上条さん、凄いです・・・あの「奴」をほとんど一人で・・・」

まあ、実際に与えたダメージは微々たるものですが、あの一撃は「奴」にとって大きな精神的ダメージになりましたからね

でも、上条さんパネエっす

【とある魔術の禁書目録】

構成：”ライクル” 35%  
”フォルス” 35%  
”LOND” 30%

最主要人物：上条当麻

- WORLD LINK - } WEAPON } : 「天使」の羽を蒔風  
に付加

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : イン  
デックス内の魔導書による一斉掃射

さてさて、次はレールガン!!!

ア「ホントにこんなありなんですか？」

はい

主人公が変われば物語も変わる  
構成もちつとは変わりますしね

一つの世界に最重要人物は一人じゃないんですよ

ア「あれ？じゃあ、なんで「奴」は御坂美琴を狙わなかったんですか？」

それは「奴」があくまで「上条当麻」を主軸としてこの世界に入ってきたからです

あくまであの物語の最重要人物は「上条当麻」だから、彼を狙わなきゃ意味がないんですよね

ア「へえ~~~~~」

ではお願い

ア「次回、蒔風連行!？」

ではまた次回

あの方こそが、学園都市二三〇万人の頂点。七人の超能力者（レベル5）の第三位

とある科学の超電磁砲　とある物語の単発戦闘

「・・・とまあ、そういうことなんですわ」

蒔風が御坂美琴と白井黒子に説明を終える

「それで？　だったらまたこの殿方を狙ってくるということなんですか？」

黒子が上条の方に目をやって言う。

「いや、違うよ。今度はこの御坂美琴嬢を狙ってくる」

「なんでだ？　「奴」が狙うのはその・・・最主要人物ってやつだろ？　オレじゃなかったのか？」

上条の当然の疑問に蒔風が答える

「いや、一つの世界に最主要人物が一人とは限らないんだ。御坂美琴もまた、最主要人物ってことだ。たぶん・・・彼女には彼女なりのエピソードがあったりしたんだろうよ」

「は・・・はあ・・・」

蒔風の説明にあきれたように会釈する一同

よくわかったようなわからないような、そんな顔をしていた

「ま、そんな難しいことはない。重要なのはこのビリビリちゃんが狙われ（バゴンー！）御坂が狙われるってことだ」

途中、時風が御坂にド突かれたが、滞りなく説明が終わった。

「よし・・・じゃあオレも！！！」

「「あんた（とうま）はもう動いちゃダメ！！！」」

やる気のとまった目で立ちあがるつとする上条を、御坂とインデックスの二人が押しとどめる

「つてえなおい！！！」

「バカやる。当たり前だ・・・天馬！！！」

そんな上条を見てあきれ時風。

そして一本の剣を突き立てて叫んだ

ズアッ、ズン！

時風が天馬を召喚し、その背に上条とインデックスを投げ乗せる。

「病院に連れてけ。で、一応お前はそのまま待機な」

「りょーかい。おい、しっかりつかまってるよな！！！」

「え？おい、時風ええええ・・・」

天馬が飛び去り三人が残される

「な、何だったんですの？いまのは」

「あれ？オレの召喚獣ってやつかな」

「召喚獣！？まんまゲームみたいな話じゃない！！」

「だから、別の世界のだって・・・」

「・・・信じるしかなさそうね」

「そうですわね・・・」

「さって、これからどうすっかね」

「ま、まあ、やることは決まっていますわ（ガシャン）」

「あれあれっ？」

黒子が蒔風に手錠をはめている。

その顔はにんまりとしていた

「先の容疑で連行ですわよ？あと、負けた腹いせも受けてもらいますわ」

「なんっ！？」

「まあねー私も負けたから、参加してもいい？黒子」

「大歓迎ですわお姉さま。では、支部に戻りましょうかしら」

「え？え？」

「では行きますわよ？」

黒子が一度に運べる重量は130・7キログラムだ

だから一旦御坂を送り、それから時風を送った。

黒子が戻ってきたとき、時風が手錠を破壊していたのでレポートで直接はめようとし、その度に時風が腕を逸らすのでなかなかできず、一悶着あったようだが、まあ、問題はないだろう。

ちなみに結局手錠をはめなおすことはできなかった

- - - - -  
- - - - -  
- - - - -

「で？白井さんはそんな突拍子もない話を信じたんですか？」

と語るは白井黒子の友達にして風紀委員でコンビを組んでる初春飾ついはるか利きりである。

ここは風紀委員第177支部

そのこのパソコンの前に座っていると、まず御坂が送られ、その後た

つぶり十分後に黒子がボロボロになって見知らぬ男性と一緒に来て、  
とんでもない話を始めたのだからそれは当然だ。

「えー？でも、面白そうじゃん！ねえねえ、本当にいろんな能力  
使えんの？」

と若干興奮気味なのは初春の親友、さてんるいこ佐天涙子だ。

ちなみに、彼女と御坂は風紀委員ではない。  
何となくここに入り浸り、何となく事件にかかわっていくのだ。

「えっと・・・いいのか？やっても」

「「だめ(ですわ)！！！」」

「えー！？」

「で、その「奴」って言うのはいつ頃くるんですの？」

「あと30分くらいしたら来るんじゃない？」

「早!？」

「いや、だって構成は同じだし・・・(ボソツ)魔術ないだけで主  
人公変えるだけだし・・・やっぱそんなくらいだな」

「そんな・・・対策の立てようが・・・」

黒子の顔が青くなるが、蒔風はどこ吹く風だ

「えーっと、じゃあ、大暴れしても問題ない地区って、どこだ？」

「大暴れしても問題ない？」

「ああ、そこでやる。ここにいつまでもいたら、「奴」はここに攻撃を仕掛けてくるからな」

「こんな街中ですか！？」

「こんな街中でも、ですよ！！」

「……………」

「オラア！！！！」

ピリドン！！

「で？初春さん、そういったところって、ある？」

「え？あの、二人は……………」

「いいのよ。バカ騒ぎされるならあの方がましよ」

「えーっとですね……………」



初春が該当地域を検索している間、蒔風と黒子は床でクロ焦げになつて転がり、佐天はそれとつついて遊んでいた。

.....

「で、検索結果が……ここか？」

「そうよ」

蒔風たちが来ていたのは……さつきもいた廃工場だった

「無駄足だったな」

「仕方ないわよ」

「まったく……ここにお姉さまがいるのは危険なのでしょう？」

「だな。だから「奴」がきたらすぐに逃げろ。そこんところは白井に任せる」

「了解ですわ。お姉様も、今回はかりは大人しく下がってもらいますわよ？」

「あー……うん」

(本当にわかってんのか?)

そして、蒔風の言った時間が来る。

「……静かですわね」

「？ああ、ところがそうはいかないようだ（パン！！）」

蒔風の手には、レイジングハートが現れ、それを地面に向ける。

「デイベインバスター！！！」

ドドドゥー！！

地面が吹き飛び、そこからケルベロスの姿があらわになる

「まーた急展開だな。焦んなよなあ、まったく」

蒔風がその両手に風林火山を構える。

「よっしゃあ！！いく……ぜ？」

ドシューン！！！！

ガラアアアアアアアアアア！！！！！！

ズズン……シパンー!!!

時風が勇んでいこうとすると、ケルベロスに美琴のレールガンが撃ち抜いた。

腹部に穴が空き、ケルベロスは消え去って行ってしまった。

「お……い……」

「お姉様？」

「あれ？あれって敵でしょ？いいんでしょう？」

「そういうことじゃない！！早くここ離れろっての！！白井！！」

「わかってますわ。さ、お姉様行きましょう！！」

「やーよ。だってあたしでも何とかかなりそうじゃない」

「バカ野郎！！あいつの眷属倒したくらいで……」

「その余裕……コッチとしては大いにありがたい」

「「！？」」

「ほら来たあ!!」

ドオツゴオオ!!!!

いきなり隣接する無人の廃ビルが飛んできた

「奴」がビル一つを抱えあげ、投げ飛ばしたのだ

蒔風がそれを蹴り飛ばして粉々にする

「白井い!!!!」

「え……は、はいですよ!?!」

ドゴンドゴンドゴン!!!!

蒔風が白井に御坂を連れていくように促すが、次々とビルが投げ込まれて来るために黒子はレポートに集中できない。

飛んでくるビルそのものと、それらの瓦礫。さらには大地を揺るがす衝撃をかわしながら御坂に触れて移動など出来たものではない。

しょうがないので蒔風は御坂と黒子を両脇に抱えて走り出す。

「ちょっと、降ろしなさいよ!!」

「だー、うっせい!! 黙ってる舌噛むぞ!!!!」

ドダン！！！！！

蒔風が跳躍し、まだ無事なビルの壁面に片足をめり込ませて立つ。  
そこにもすぐにビルが飛んでくる

そうやってかわしていく蒔風だが、ビルがそんなにあるわけもなく、  
すぐに追い詰められていく

「御坂！！頼む！！！」

「わかってるわよ！！！」

バツ！！バツツン！！！！

途中、御坂も電撃で攻撃するが、蒔風はともかく黒子がこんなにも  
近くにいると、全力の攻撃の影響が出るかもしれないため、思いつ  
きりやれないでいた

それにここまで動きまわると、レールガンも撃てない

「どしたどしたあ！！！！その程度か第三位！！所詮はただのガキン  
チヨかあ！？」

「なんですってえ！？」

「ばか！乗るな！！」

「あの・・・うぶ、ちよつと・・・おうう・・・」

「白井さん！？やめてください！？クソっ、埒あ明かねえ！！白虎！！青龍！！時間稼ぎだ！！30秒間！！」

「了解！！！！」

ドドーン！！

青龍と白虎が飛び出し、ビルを次々と碎いていく。

その間に蒔風は黒子と御坂を離れた所に置く。

「ここにいる。ほら白井。酔い止めだよ」

「うつぶ・・・」

「黒子、大丈夫？・・・あたしも行くわよ！！あんなけた外れな奴あんな一人でやれるわけ・・・」

「それをやらなきゃいけないんだよ」

蒔風が普段とは違う声を出す  
その声に御坂が縮み上がる。

「ずっと……ずっとそれをやってきたんだ。大丈夫っさ!!」

「そんなの……だからって、見過ごせるはずないじゃない!!」

「お前が狙われてるんだ。お前は来るな」

「じゃああなたは？あんだだって死ぬかもしてないのよ!？」

「構わん」

「かまっ!？」

「オレに今更、「死」を恐怖しろと？この力を得る前より「死」を理解したオレに？おほほほ、なぜ理解できたものを恐怖するひつによーがあるのかしらん？」

「あなた……本当に人間なの？」

「いや？オレは人間どころか生物として破綻しているっさ!!」「死」に抗ってこそその生物!!ま、だからこそこうやって世界を越えていけるんだが」

「……ひとりで……戦うの？」

「そうだよん じゃあね、ここで観戦してな、痛っっ!？」

御坂が蒔風に電撃をぶつける

不意打ちに蒔風が痛がるが、そんなことは御坂は知らない。

「あんたの旅・・・ねえ。わかったわ。確かにあんたの旅は一人か  
もしれないわね」

「ああ」

「でも！今この世界では私を仲間にしなさい！！そうやってきたん  
でしょう！？だったら私にもやらせるコノヤロー！！！！」

「はいい！？」

「あのバカが戦えたのに、私が引つ込むわけにはいかないっての！  
」

「・・・はあ・・・この世界はどうしてこう主人公みたいなのが  
いっぱいいるんだろうねエ・・・いや、確かに主人公だけどさ」

「??？」

「わーっつたよ！！じゃあ・・・行くか！！」

「ええ！！黒子！！」

「わかりましたわよ・・・お姉様、ご武運を・・・」

「大丈夫だ、なんとかするさ・・・お前らの勝因は」

黒子がレポートで二人を「奴」のいる上空に飛ばす



「ここにいらんだからな!!!!」

ゴウッ!!

空中に現れた二人を白虎と青龍が拾う

「主・・・実に80秒は経ってますよ・・・」

「時間過ぎてるじゃん!!何やってたのさ!!」

「えっ!?!こいつらしゃべんの!?!」

「失礼な!!!!」

「あー怒んな怒んなっての。もう終わらせるよ」

【toaru kagaku no RAILGAN - WORLD  
LINK - WEAPON】

蒔風の雷旺と、御坂の電流が一つとなる。

そしてそのすべてが美坂に集まっていく

「なに!?!この電気量!!!!」

「大丈夫だ!!今なら制御できる!!!!」

ズツドン!!!

さらに周囲の鉄がすべて集まり、一枚のコインの形から、鉄球になつていく

直径二メートルにもなるその鉄球が御坂の目の前に浮く

「さあ~~~~て!!!ぶつ放すぜ!!!」

【toaru kagaku no RAILGAN】  
- WORLD  
LINK - FINAL ATTACK

「!!!!これだけのエネルギー・・・(ニツ)行く、く、わ、よ!!!」

「やったれえ!!!!!!」

「おおおおおおおらああああああ!!!!!!」

美坂が鉄球を殴り飛ばす

その瞬間、美坂美琴の代名詞『レールガン超電磁砲』が放たれる!!!!!!

ドッキングユア……!!

「オレ一撃も食らってないのに!？」

ボツ……!!ズジュツガア……!!

そして

なんともあっけなく「奴」は消し飛んでしまった

学園都市第三位は、自信満々に胸を張る

「えっへん」

.....

「もう行くの!?!」

「バカ野郎!!この世界にオレの安息はない!!戦って、戦って、それが終わったら戦って!?!バカじゃねエのかこの世界は!?!」

「バツ!?あんた、人の世界をなんだと」

「あーあー!!聞こえない聞こえないー!!あ、お帰り天馬。じゃあオレは行く!?!」

「Gate Open - - to aru kagaku no R  
A I L G A N」

上条のところから飛んできた天馬を収め、時風が駆ける

「待ちなッさい!?!」

「やなこつた!?!」

御坂が追うが、時風はゲートをくぐって行ってしまった

「はぁ・・・ま、いつか・・・あ!?!そっぴや問い詰めるの忘れち  
やった・・・」

御坂美琴は黒子の元に向かう

その胸にあのバカ(上条)に対する疑念を抱きながら

又、離れた場所の、第七学区の病院では上条が天馬からもつ時風が去ることを聞いて思った。

（「奴」の顔・・・な〜んかどっかで見たことあるよなあ・・・聞こうと思ってたんだけど・・・）

そうしてこの世界での「日常」が過ぎていく

今日もどこかで「魔術」と「科学」が交差する・・・

.....

### 次の世界

ある道端で一人の青年が携帯電話で話をしている  
どつやら宅配業の途中らしい

そして通話を切る前に、彼がつぶやく

「ああ・・・そうか。ふ・・・興味ないね」

そして、次の世界で・・・

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

とある科学の超電磁砲 くとある物語の単発戦闘く（後書き）

アリス「短くない!？」

ごめんなさい

でもこうするしかなかった!!!

ア「まあ、わかりはしますけど・・・」

超電磁砲ファンの皆さま、誠に申し訳ございません!!!  
勘弁してください!!!

【とある科学の超電磁砲】

構成：”ライクル” 35%  
”フォルス” 35%  
”LOND” 30%

最主要人物：御坂美琴

- WORLD LINK - くと WEAPON くと 御坂と時風の電気工  
ネルギーを一つに凝縮

- WORLD LINK - くと FINAL ATTACK くと 用意  
された鉄球にて、最大級のレールガン発射

マジテストつらい・・・

なんで俺こんなに執筆してんだ？

テストやんなきゃいけないのに・・・

ア「言つてたじゃないですか。ちょっとだけ休んでしっかり勉強を  
しましうよ」

でもさ

こつ、更新してない日でも見てる人がいるとさ

「この人たちは更新してないのに覗いてくれてるんだ！がんばっ  
て早く次を！！」

つてなるんですよ・・・

ア「バカじゃねえの？」

なんだと！？

ア「どうせあれですよ。検索して順番に見てみて、ついつい行きす  
ぎて開いちゃった、とかでしょ？」

そんな・・・（ズーーン）

ア「ま、そんなことはないと思いますけど」

（パアアア）



ア「言葉で言いなさい」

次回の方をくくく

ア「次回、次の世界で出会う男は、元ソルジャーで、そして・・・」

ではまだ次回

興味ないね



ピン、ポーン

崩壊したミッドガル周辺にできた新たな街、エッジ

そこにある飲食店兼、宅配業の事務所である「セブンスヘブン」の  
ドアのチャイムが鳴らされる

「はーい」

そのチャイムに、ひとりの女性が出る

この店の運営をしている彼女の名は、ティファ・ロックハート

ティファが扉をあけると、そこには時風が先ほど拾った荷物を持って立っていた

「どなたでしょうか？」

「えっと・・・この荷物拾ったんだけど・・・んあ？」

「?どうしました？」

「ああ、なんでも(なるほどね・・・ここに最主要さんがいるのか)  
」

時風の頭に情報が流れてくるが、まだ詳しいことはわからない。

ティファに荷物を渡すと

「クラウドー！！お届け物だよー！！！！あ、そこに座って  
てくださいね」

と誰かを呼びに階段を上って行ってしまった。

どうやら宅配業の事務所は二階になっているようだ。

手頃な席に蒔風が座ると、ティファが一人の男性とともに降りてきた。

「ほら、この人が」

「ああ・・・すまないな。しかし、これをどこで拾ったんだ？」

男がその手に握る携帯電話を差し出してくる

「どうやら水に浸かってしまったものようで、もう使えない。」

「ん？いや、荒野の丘の上の黄色い花の咲いてるところにあったよ？」

「・・・そうか・・・」

「・・・なあ、ちょっと・・・名前聞かせてもらっていいかい？」

「なんでだ」

「いや、何となくね」

「・・・クラウド・ストライフだ」

「おお〜う。オツケオツケ。わかったぜ」

「なにがだ？」

「オレの名前は・・・（えっと、この世界だと名字逆だから・・・）  
シユン・マイカゼだな」

「興味ないな」

「ところがどっこい、そうはいかないんだ」

「知らないな」

クラウドがフィツと首を逸らして、二階に行ってしまうおつとする  
ティファが、お礼言わないとだめでしょ！、と追いかけていく

その背中に蒔風が言った

「お前の命が狙われている、と言ったら？」

クラウドの足が止まる

「・・・どういうことだ」

「クラウドが？なんで!？」

「さてと、では、ザ・説明タイム、だな」

- - -  
- - -  
- - -

蒔風の説明が終わる

「ま、とにかくクラウドの命を狙ってくる奴がいる、ってことだな」

「信じられないですよ」

「だよなあ。クラウドは？」

「・・・その「違う世界の力」を見せてもらいたい。それからだな」

「んじゃ、とりあえず・・・獄炎!!」

ポ!!

蒔風の手には炎がともる

「確かこの世界で魔法を扱う際はマテリア、ってのが必要なんだけど？でも、見ての通りオレはマテリア持てないぞ」

マテリアとは、この星の体内を巡るエネルギーであるライフストリーム  
の結晶である

ライフストリームとは、あらゆる生物が死によって星の中心に還るときに、持っていた知識やエネルギーが蓄えられ、世界全体が栄え再び新しい命を生み出す源となる力の流れのことだ

その結晶であるマテリアにを使用することで、魔法を使えるのだ

「・・・確かに、マテリアはない。どうやら本当のようだな」

「でも・・・世界を壊して新しい世界を作るって・・・まるで・・・」

「まるで・・・どうしたんだ？」

「・・・セフィロス」

「だれだ？」

「かつての・・・英雄だ」

この星を破滅に導かんとする者、セフィロス

かつてセフィロスは神羅カンパニーという一大企業で、最強であったソルジャーだ

神羅カンパニーとは、ミッドガルにあった、この星全体に影響をもっていた大企業だ

ライフストリームを魔晄エネルギーに変えて発展していったため、生活は豊かになったが、星の力を使っているために反乱分子も多かったのだ。

今はもう神羅カンパニーは潰れ、少数のメンバーによる復興がなさ

れているだけだ

そしてその神羅が治安維持のために所有していた私兵部隊の中でもエリートたちが「ソルジャー」である。

セフィロスはその中でも「英雄」と言われた男だ

しかし、彼は自身の出生を知り、世界を憎むようになる。

彼はある実験によって生み出されたのだ。

ジェノバと呼ばれる古代に宇宙から飛来した生命体の遺伝子を埋め込まれて誕生したセフィロス

ある任務の途中でそれを知った彼は、ジェノバを自らの「母」と呼び、それがかつて葬り去った人類に憎悪を抱き星を滅ぼそうとした  
また、前に現れた時には、この星を自分のものとし、かつてジェノバが宇宙をさまよったように、新たな地を求める、と言っていた  
そうだ

それらはクラウドたちが阻止したのだが……

「たしかに……「奴」の考えと似ているな」

「まさか「奴」って……」

「違う」



蒔風がティファの推測をさえぎる

「「奴」はセフィロスじゃない」

あまりにもバツサリと断言する蒔風にクラウドが疑問の声を投げかける

「お前は・・・「奴」が何者なのか知ってるのか？」

「・・・「奴」は様々な物を利用してくる。何をしてくるかわからないからな」

蒔風が強引に話題を変える。

だからクラウドはそれ以上言及することをやめた  
彼自身にも、あまり突っ込んで聞かれたくないことはある

「「奴」が利用する物は？」

「「記憶」だ。その地に刻まれた記憶から現象としてそいつを引っ張り出してくる。さっきの話だと、多分セフィロスを・・・」

「無理だ。セフィロスの記憶はどこにもない」

クラウドが否定する

「セフィロスは消滅するとき、ライフストリームとなることを拒ん

だ。あらゆる場所を探しても、セフィロスの記憶はないんだ」

『私は・・・思い出にはならないさ』

そう言っつて彼は消えた。

—ライフストリーム（思い出）になることを拒んだのだから、セフィロスという「記憶」はどこにもない

「ライフストリーム・・・確かにそこになきゃ、無理かもな・・・」

ガラガラーン！ドシャアッ！！

クラウドと蒔風が話していると、扉から一人の男が倒れ込んできた。

「なんだ！？どうした？」

「近づくな！」

クラウドが男に近寄るが蒔風がそれを止める。

男の体はユラユラとした影に侵食されていて、首まで漆黒に包まれている

「た・・・助け・・・」

男が呻き、唯一自由の効く首を回し、クラウドの方を見、叫んだ

「助けて！兄さん！！」

「な！？ガタージュ！？おまえどうし・・・」

「う、ぐ、ああ！！！！あああああ・・・」

ガタージュと呼ばれた男が後ろから何かにいきなり引っ張られたように扉から飛び出していった

その腕をつかもうとするクラウドだが、虚しく空を切る

蒔風とクラウドが外に出て、その先を目で追う。

「おい、あいつ誰だ！」

「ガタージュは・・・セフィロスの思念体だ」

「なに！？」

カタージュ

セフィロスの思念体である、少年のような外見と口調の男だ

かつてセフィロスを復活させようとし、クラウドを狙った  
そして戦いのさなか、その体を利用され、セフィロス復活の礎とな  
った

しかし、復活したセフィロスはクラウドに倒され、カダージュはセ  
フィロスの呪縛から解かれ、ライフストリームの中に還って行った  
のだが……

「そのはずなんだ、が……まさか!!」

「あの野郎、セフィロスを呼び出せないから、ライフストリームか  
らガタージュ引っ張り出してセフィロスを復活させよう!!」つて  
か、兄さんって言うってたけど?」

「……行くぞ。方角はわかった」

「おい、ちょっと待ってくれ!!」たく、わーったよ。聞かねえか  
ら待って!!」

クラウドがバイクに跨がり走り出す。

蒔風もバイクを出してそのあとを追う。

向かう先は崩壊したミッドガル

再び彼の地が戦場となる

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

FF7 ～自称・元ソルジャー～（後書き）

アリス「FF7の世界ですね」

は・・・はい・・・

ア「どうしたんですか？」

じ・・・実は・・・

FF7の記憶がうる覚えなんです

ア「ええ！？」

いや、ゲームやったの六年前に友達から借りてだもん！！

しかもストーリーとか頭の中に全然ないし・・・

がんばって当時の記憶を様々な情報で補完してやりました！！

ア「よくやりましたね。この世界」

どうしても入れたかった

いやでも、FF7ACはしっかり見た！！

ア「他は？」

・・・ディシディア

ア「だけですか!?!」

ああ!あと、キング ムハーツも!!

ア「なぜ伏字?」

どこまでがアウトかわかんないし

ですから、もし何か違うんじゃないかね?とか思ったら教えてください!!  
適時修正します

ア「お願いします。で、この世界での時期は?」

ACの後ですね

ア「そういえばマリンは?」

バレットのところにいます

なんか石油あてたらしいですし、彼

ア「ふーん。他のキャラは出さないんですか?」

どうやって出すよ?

ア「聞くなよ!!」

難しいのでカットカット!!

ここは完全に作者の力不足です

これくらいかなあ？

ア「そうですね。では」

お願い

ア「次回、レッツゴー、崩壊のミッドガル！！タダでは行けないぜ  
！？」

ではまた次回

思い出の中で……ジッととじてくれ

……私は、思い出にはならないわ



## FF7 Son The Highway

ハイウェイを二台のバイクが駆ける。

数本の道路が並び、走っていく度に何車線かが別れたり、他から一つになったり、高くなったり低くなったりしている

ミッドガルに向かってフルスピードでクラウドと葎風が走っていく。

走っていくうちに、右の方に下から道路がこちらに合わせた高さに上がってくる。

徐々に上がってきて、駆ける漆黒の巨大な体躯が並走し、飛びだしてきた！！

ダンッ！ドスア！！

駆けてきたのはケルベロス。

それがこちらの車線に飛び乗り、二人に襲い掛かってくる！！

ガッ！ギャリン！ギャギャギャギャ！ブオン！！

バイクを-spinさせてかわし、先に進む二人。

だがケルベロスは二台の後ろに張り付き、追ってきている。

「あいつはなんだ!?!」

「「奴」の召喚獣だ!! 気にするな。このまま突っ切る!!」

その後ろから蒔風を引き裂こうとケルベロスの腕が襲いかかる。

すぐ後ろを爪が襲い、蒔風がバイクごと浮き上がり、そこにさらに襲いくるケルベロスの腕。

蒔風はバイクごとそれにそのまま着地し、ケルベロスの上空にさらにジャンプする。

そしてバイクを飛び降りて消し、「風」「林」をケルベロスの背中に突き刺した!!

……が、そのような攻撃はケルベロスにとってたいしたことのないものだ。

そのままケルベロスがクラウドに襲いかかろうとし、それに揺られて蒔風は必死に二本の刀をハンドルのように握り締める。

「うおおおおおおおッ!?! ゆっ、揺れっ!?!」

「シユン!?!」

クラウドが背に背負っていたファースト剣を抜き、180度方向転

換し、ケルベロスに向き合いながら走行する。

そして襲いくるケルベロスの爪をバイクを残してジャンプでかわし、しがみつくと時風をそのまま回収して、後ろに落ちる。

ピッタリのタイミングでフェンリルがケルベロスの足の間を抜けてやってきて、そこにクラウドは跨り、時風は後部座席に立った。

さらにケルベロスが後ろ足で踏みつけにくる。

「十五天帝!!(ダンッ)」

時風が十五天帝を出し、そのうちの獅子天麟を構えながら飛ぶ。

バツギヤツ!!

時風がケルベロスの足を弾いてから足の脇にバイクを出してそれに着地し、並走する

クラウドが反対側を走り、二人が剣を構えて同時に突っ切った!!!

「フンッ!!ハアッ!!」

「お、りゃあ!!」

二人の剣がケルベロスの後足と前足の腱を切り裂いた

ドキヤッ!!!ドゴン!!!ガリガリガリガリ!!!

ケルベロスは頭から転がり転倒する。  
派手に転がりながら二人を追い抜き、先に行ってしまう、そこで止まった。

それでもケルベロスは終わらない。

その足でどうやっているのか、ふたたび立ち上がり、その三つの口には炎が溢れ始めている。

「っ！クラウド！！」

「わかってる！！」

ゴバア！！

三つの口から火球が放たれ、それが途中で一つにまとまり、巨大な火球が迫りくるッ！！！！

「ッッッ！！！！ハアア！！！！」

蒔風とクラウドがバイクから飛び、空中で野球のバッターのように剣を振りかぶりながら左右対称に一回転し

「オオオオッ！！！！」

そして、ケルベロスの火球を真っ二つに斬り裂き、置き去りにした。二人の後方で裂かれた火球が爆発し、その衝撃を利用して飛距離を得、猛然とケルベロスに斬りかかった！！！！

ズジャッ！！！！ゴガシャ！！！！

そのまま時風が真ん中の頭蓋を貫き、クラウドが縦一直線に背骨を割る。

消えていくケルベロスの元を見、二人がジャンプする。そこに二人のバイクがそのまま走ってきて、それに飛び乗り先に向かった。

行く先のミッドガル上空には怪しげな黒雲が集まっていた。

- - -  
- - -  
- - -

「ケルベロスがやられたか・・・まあ、あの二人相手にこれだけ持てば十分だな」

「終わるのか？私の構築は」

「気にするな！オレさんがやってんですよ？安心しなさいってのよ」

「そうか……」

「まったく。いくらオレさんでも、記憶からモノホン引っ張り出して来るのは大変だったんだよ？まあ、ライフストリームって具現化された形としてあったからできたんだけどね」

「そのために体力を使うとはな」

「うるせい。お前を復活させるためじゃい。オレの体力回復の間、あいつらの相手頼むぞ？」

「ふ……新たな世界……そこを目指すのならば……な」

（こいつ絶対オレ利用する気だよなあ。まあ、オレもそのつもりではいるしな）

（こいつが食らう「世界」をやら……私が貰おう。そして私が新たな世界を……）

「奴」と、八割がた復活したセフィロス

ミッドガルの中心で、二人の思惑が、不気味にうごめいていた……

.....



FF7 Son The Highway (後書き)

アリス「短いですね〜」

いやいやいや

ちよつと待ってくださいよ

ア「なにか？」

思ってたんだ。

「なのは」が長すぎて麻痺してたけど、この小説こんなもんでしたよ!?

ア「あー、たしかに。「なのは」は一話一話が長かったから・・・

」

ですよー!!

だからこれは短くない!!はずだ!!

ア「さて次回は、激突セフィロス!!」

ではまた次回



絶望を贈るつか

FF7 片翼の天使

セフィロスが山になった瓦礫の上から二人を見下ろす

「来たか、クラウド」

「セフィロス!!」

「あいつ……」

クラウドの表情が険しくなり、蒔風はなにかが疼いた

クラウドがフェンリルからすべての剣を取り出しファースト剣に組み付ける

蒔風も、剣にジリジリと手が伸びる

「あの男の体力が戻るまでの相手をしてやろう……死にたくなければ……二人で来い」

タンツ、とセフィロスが跳ね、蒔風とクラウドの間に飛び降りてきた

「ッ！ハアッ！」

ギンツ！バシツ！

ダンツ！ギョオ！

蒔風が風林火山でセフィロスに斬り掛かる

その連続の斬撃を受け、横一線に長刀「正宗」を薙ぐ

後ろ向きに跳躍し、そのまま上空に逃げる蒔風

セフィロスがそれを追い、さらにクラウドが後を追う

蒔風が着地したのはビルの突き出した屋上だ

その背後から即座にセフィロスが飛び出し、振り下ろしながら着地する

蒔風が転がってかわし、斬撃を飛ばす。

それをセフィロスが掻き消し、そのまま回転して後から来たクラウドに斬り付ける。

着地しようとしたクラウドは咄嗟にそれをガードする

セフィロスがクラウドの眼前にまで跳んで、数回打ち合う

セフィロスの猛攻にクラウドは強制的に防御を強いられる。

「クラウド！」

セフィロスの背後から獅子天麟が回転しながら飛んできた。

クラウドは合体剣を正宗に打ち付け、そこを軸にセフィロスの頭上を乗り越え、獅子天麟を握る。そして両側から挟み込む形で斬り掛

かる。

セフィロスはそれをクラウドの腹を蹴り、後退してかわす。

クラウドが着地し、時風が駆け寄る

そこに切り裂かれたビルが落ちてくる。

二人はそれらに向かって高く跳躍し、直撃コースの物は切り裂きながら、ガラガラと落ちてくる巨大なビルだった塊の滝を上を抜け、着地する。

そこより二十メートルほど高い、ビルの壁面にセフィロスが重力を無視したように立っていた。

「クラウド・・・お前はまた、人形なのだな」

「なんだと!?!」

「その男が言うままに戦う・・・やはりお前には導き手が必要なようだな」

「断る!?!ここに来たのは、オレの意志だ!?!」

「そうかな? 私はお前以上にお前を知っているぞ?」

「黙れ!?!あなたは必要ない!?!オレにも、世界にも!?!」

クラウドがセフィロスに向かい、壁を駆け上がる

セフィロスはクラウドに背を向け、自分の立っている位置より上の部分を切り刻む

さっもそうしたのであるう。

巨大な瓦礫が降ってくる

右へ左へと避けながらクラウドがセフィロスに迫る。

斬りかかると同時、上層部のなくなったビルの中から蒔風が飛び出してくる。

上下からの挟み撃ち

クラウドが剣を突き出して滑るように突っ込む

それをかわすと、今度は蒔風が上から斬撃を飛ばしそれに身を隠しセフィロスを斬ろうと獅子天麟を薙いだ

しかし、セフィロスの姿が一瞬消え、蒔風の背後にまわり、蒔風の後頭部を柄で殴り落とす。

落ちていく蒔風の後を、正宗を突き刺すように下に向ける

「シュン！！！！くっ！！」

ドゥッ！！

クラウドがセフィロスの真上から剣を突き出して後を追うように勢

いをつけて追う

ドゴン！！バツガッ！！ドシュ！！

時風が巨大なパイプの上に落ち、後を追ってきたセフィロスの刀が腹部に突き刺さる。

「ぐあああああー！！っあ！づうっ！！」

時風の体が標本のように止められる

深く突き刺さっているのか、時風が抜こうとも抜けなくなっていた

そしてさらに追ってきたクラウドの剣を身体を逸らすだけで避け、その首に手を伸ばし、掴んだ

「がっは……」

クラウドの足がじたばたともがき、浮く

その手から合体剣を落とし、セフィロスの腕を掴むが全く動じない

「クラウド……「奴」から聞いたぞ？お前にも翼があるようだな」

「が……なん……の……ことだ」

セフィロスがクラウドに話し続ける

「他の世界において、お前の背には片翼の翼があるようだな。今のお前にはないということはないだろう？ 私は・・・完全になるのだよクラウド」

グオオオ、バツサー！

セフィロスの背から、右だけの漆黒の翼が現れる  
その姿に蒔風の眼が見開かれ、驚愕の表情に変わる。

「ぐ・・・な・・・翼人！？」

「そういうらしいな。だが不完全だ。だからくれないかクラウド。お前の、翼を」

「!?!?ぐ、お、がああああああああああ!?!?!?!?!」

クラウドが苦痛の声をあげる。  
体内に無理やり力を流し込まれ、それが暴れまわっている

「よ・・・せ!?!?!?!グッ!?!ゲボッ!?!?!」

蒔風がもがき、血を吐く

クラウドの腕からは徐々に力が抜けていき、ついには全身がダランとして意識を失う

と、その背中から左半分の漆黒の翼が現れる

そしてその羽が弾け、翼が消える

散った羽がセフィロスの元に集まり、ついにそれは完成した

「・・・感謝するぞクラウド。そして・・・もういいぞ」

そこに立っていたのは漆黒の翼人

ついに一対の翼を持ち、より強くなったかつての英雄がそこにいた

蒔風の腹から正宗を引き抜き、クラウドの四肢を撥ねようとす  
しかし、その動きが途中で止まる

「ほっ」

振り返ると蒔風が立ちあがっていて、正宗を掴み、その動きを止め  
ていた

「止しておけ。お前にはもう無理だ」

セフィロスが蒔風に言う。

しかし彼は退かない



「わかってんのか・・・」「奴」がクラウドを殺したら、世界ごとお前も消えるんだぞ!!!」

「ふ・・・そんなもの・・・世界などに・・・混ざりはしないさ」

「!?!?ぐあつ!!!」

ギユイイン!!!

セフィロスの攻撃を時風が「風」「火」で弾く。

さらに二、三合撃あい、時風が弾き飛ばされる

元は立体駐車場だったのか、その中に弾丸のようなスピードで突っ込んでいく時風  
壁に激突し、その衝撃に頭を振る。

そして自分が飛んできた穴に視線をやると、そこからセフィロスが飛び込んで時風に斬りかかる

「開翼!!!」

バン!!!

時風も開翼し、それに応じる

しかし、その細い刀身からは想像もできないほどの重さに、片膝をつき、苦しそうに俯く。

「それがお前の翼か・・・しかし、「奴」は持ってはいないのだな」

「は！何のことだか・・・」

蒔風がなんとか上を見上げながら答える

その額には冷や汗と脂汗の混ざった物が張り付いている

「フー、フー、フー・・・おおおおああ！！！！」

ドギャン！！！！ゴゴン！！！！

蒔風が瞬発力をフルに使い、その場から弾けるように離れた

その後を影や天井をジャンプしながらセフィロスが追う

蒔風も同様に移動しながら応戦するが、その速さに苦戦する

「消える」

ズツ、ゴン！！！！

蒔風とセフィロスの剣がぶつかり合い、鏝競り合うが、セフィロスがその状態から衝撃のみを叩き付け、蒔風の体を吹き飛ばした

外にまで飛び出し、倒壊したビルの屋上部分（そこにも他のビルが

倒れこんでいる）に落ちる時風

「こんなものか・・・銀白の翼人」

セフィロスが時風の突き破った穴から時風の落ちたところを見る

「どうだい？調子は」

さらに

そこに「奴」までもが現れる

穴の外の宙に浮いて、セフィロスの方を見る

「クラウドはどこだ？あいつ殺さんと」

「あつちはいいのか？」

セフィロスが時風の方に目をやる

「時風・・・か。やっぱり殺したいよなあ。オレとしてはよ！・・・！」

ドウッ！！

「奴」が波動砲を撃ち、時風のいた所が吹き飛ばす。

「・・・じゃ、クラウドはどこだ」

「死体は確認しないのか」

「やだよそんなの。死んでなくてももう動けんだろ」

セフィロスと「奴」の姿が動いた

クラウドにとどめを刺すために

t o b e c o n t i n u e d

FF7 〈片翼の天使〉（後書き）

アリス「蒔風・・・死んだ？ならば私の!!」

出番ではないですよ

ア「ちえ。そうそう、出てきましたね。蒔風以外の翼人!!」

これは予想してた人もいたのでは？と思います

ア「翼をもつクラウドって言うのは？」

はい

キング ムハーツです。キ グダ ハーツ。

ア「でも、あの作品とセフィロスの翼って、形違くないですか？」

そうなんですよね^^

でもここはセフィロスの方で統一！

クラウドの翼も、普通な感じの翼で

それにしても、戦闘描写を派手にとってどうやるんだろ

ア「ああ。派手ですものね。スクエニのって」

だからみなさん

妄そげフングフン、想像するときには思いっきり派手に!!

お願いします

FF7ACとかの戦闘シーンの素早くて派手なのが好き

ア「あれは凄いですからね」

じゃ、この辺で

ア「次回、新たなる翼人。明かされる秘密」

ではまた次回

大切じゃないものなんか、ない!!!!!!

FF7 勇気の翼・漆黒の翼人

「シユン……おい、シユン！！大丈夫か！！」

「が……う。クラウド……か」

ビルの隙間。

周りからは見えない影の部分で、時風が意識を取り戻す

そのそばにはクラウドがいた

「奴」の波動砲から時風を助け出し、抱えてここまで来たようだ

「ここは……？」

「あの場所からそんなに離れてはいない。まだ動くな」

クラウドがマテリアを使い、時風の体を癒す

「クラウドは……大丈夫なのか？」

「今はな。あのときのあれは一瞬の苦しみのようだ」

あのと看、とは翼を奪われた時のことだろう

「セフィロスつてのは……バケモンかよ……何の手引もなしに、開翼まで持つて行くなんてよ……」

「蒔風、翼人とはなんだ」

その問いに対し、蒔風が翼人の説明をする

「つまりだ、お前も翼人になれる可能性が、まだある」

「セフィロスから翼を・・・奪い返すのか・・・」

「やってやるうぜ・・・オレたちは・・・流されて戦ってるんじゃない。自分の意志で、戦ってるんだ」

「ああ！」

ドシユア！・・・！

「見つけたぞ。行くぜ！！」

「奴」が影を作っていた瓦礫を吹き飛ばし、やってきた

「」のやる・・・ッ！！ぐ・・・」

「シュン！！掴まれ！！」

クラウドが蒔風に肩を貸し、その場から逃げる



しかし、そんな足で逃げられるはずもない

全方位からいたぶるような攻撃が続く

クラウドと蔚風が必死になって弾き続ける攻撃も、はたから見ると  
気まぐれにポツポツと攻撃しているものだ

周りで爆発が起きる中、二人は必死に歩く

が、そこにセフィロスのメテオが落ち、二人を吹き飛ばす

蔚風が瓦礫に背中を預けてぐったりと座り込み、クラウドは地に伏  
せ、起き上がろうとするが力が入らない

一メートルくらいの高さまでセフィロスが降りてくる

「奴」はいない

「無様だな。それでも同一存在なのか？」

「オレは・・・あなたとは、違う・・・オレは・・・あなたじゃな  
い！...」

「お前のことではない、クラウド。知らなかったのか？滑稽だな」

「なんの・・・ことだ」

「やめてくれ・・・セフィロス・・・言うな!!」

蒔風が叫び、ブルブルと震えながら立ちあがるうとするが、すぐにその場に崩れ落ちた

「お前はそれでも「蒔風舜」なのか？」

「黙れえ・・・」

「なんもことだ!!セフィロス!!あんたはなにを知っている!?!」

「なに、簡単なことだ」

「止せ!!!!」

「そこに転がる男と、「奴」は同一人物だということだ」

「な・・・なんだと？」

「セフィロス!!」

蒔風が異常な速度で飛びだし、セフィロスの胸ぐらをつかみ、捻り上げる

「それを・・・言っんじゃねェ!!」

「フン」

ドゴッ

セフィロスが軽く鼻を鳴らし、蒔風の鳩尾に拳を叩き込む  
蒔風の体がズルズルと落ち、倒れる

「弱いな。これで「主人公」?・・・笑わせる。「脇役」であった  
「奴」の方が強いとはな」

セフィロスが言葉を続ける

「さまざまな世界。その中には私や、お前もいるだろう。しかしその役割は違う。もしかしたら、我々はつまらない一市民である世界もあるだろう。「奴」とこの男も同じだ。「脇役の蒔風舜」と「主人公の蒔風舜」。世界は違えど、全くの同一人物。どうだクラウド。同じ存在で戦い続けるのは醜いだろうか?」

「だから・・・どうだと言っただ」

「私と共に来い、クラウド。お前が私にすべてを委ねれば、新たな

る世界へのみ「断る!!!」「」

クラウドがセフィロスの台詞をさえぎる

「この世界には、守るべき友が、仲間が、思いがある!!!この世界を守った人の思いが、この胸にある!!!」

「・・・残念だ」

ゴオオ!!!

セフィロスがクラウドに迫る

そしてクラウドは斬られ、無残に転がるだろう

しかしそうはならなかった

「いーい願いだ。そんだけのもんがあるなら、まだまだ希望は尽きちゃいねエ!!!」

時風が

「正宗」の峰の部分を器用につかみ、食い止めていた

そして「山」でクラウドの傷と疲労を癒した

「クラウド。「奴」の方はまかせる」

「しかし・・・「奴」はおまゝるっせえ！行け！！こいつは・・・！！」  
「・・・わかった。任せた！」

クラウドが「奴」に向かう

「いいのか？自分を殺させて」

「あれはオレじゃない。「奴」だ！！あいつは世界を取り込んだ瞬間から、「時風舜」ではなくなった！！」

「自分潰しの時風舜・・・面白い」

「人の知られたくないことばらばらと言いやがって、覚悟できてるだろうなあ！？」

ドゴウ！！

時風が裏拳を振るい、セフィロスがバックステップで避ける。

「武器も構えず、私に勝つのか？」

セフィロスが勝負は見えていると、時風に言う

それに対して時風が、胸を張って、右手を握りしめ、答えた

「武器なら・・・ここにあり」

その手で胸をドン、と叩き、こう言ったのだ

「オレの武器はたったの一つだ。この胸にある正義、それをなす願  
い！！十五天帝だとか能力何てものはただの手段にすぎない！！」

右手を振り払い、指をチヨイチヨイ、と曲げる。  
時風の目に炎がともる。

「さあ来いよ、英雄。このオレの胸に宿る正義が、願いが！！オレ  
の勝因だ！！」

ゴツゴオア！！！！

.....

「セフィロスメ・・・いらんこと言いやがって」

「お前の相手は俺だ」

「奴」の背後にクラウドが立つ

「おいおい・・・オレは間違いなく「マイカゼシユン」なんだぜ？  
それを殺すのかい？」

「あいつは、お前じゃない。いや、お前は・・・マイカゼシユン  
ではない!」

「は!・・・そういや、セフィロスとお前も同じような存在なんだ  
つたな。そいつを乗り越えた奴の理解は早いねエ。ま、オレもあ  
いと同じだなんて虫唾が走るがな」

「オレとセフィロスは・・・違うさ」

「なに?」

「もう・・・迷わない。オレは・・・」

ダンッ!!ゴオウ!!!

ガギイ!!!!!!

「オレは、ひとりじゃない!!!」

クラウドと「奴」が打ち合う

「奴」もクラウドもその剣の合体を解き、お互いに猛攻を仕掛ける

しかし一本、また一本とクラウドの剣が弾き飛ばされる

そしてついにクラウドは最後のファースト剣になってしまう

「そんなんでいいのか!?元ソルジャーさんよ!!!」

「自称、だ!!」

「奴」が魔導八天を一つにし、飛びかかってきたクラウドを弾く。クラウドの体が飛び、瓦礫に埋もる。

「奴」が静かに構え、クラウドの方へ走って行く

すると、クラウドの居る場所の土煙と瓦礫が吹き飛んだ

「フツ、ハアア!!」

クラウドが頭上でファースト剣を一回転させ、両手で持ち、腰を落とす。

全身から蒼い炎のようなオーラが吹き出、剣までを覆う。

ドゥッ!!

「奴」の走ってくるタイミングに合わせ、クラウドが突進する!!

「奴」がクラウドの剣を弾く。

クラウドが「奴」の頭上を回り、背後に立つ

「奴」の後ろ蹴りがクラウドの腹に命中し、その体が舞う

「いくぞ!!クラウド・ストライフ!!討ち取る!!」

「奴」が宙のクラウドに向かって飛ぶ

クラウドまであと五メートル



そこで、クラウドの眼がカツ！と見開かれる。

「（ブオン！）集え！！」

クラウドの叫びと同時に、散っていていたクラウドの剣、計五本がクラウドに集まっていく

その途中にいる「奴」を切り刻みながら

「ぐおおお！？」

「ハアツ！！！！」

ドゴン！！！！

「奴」に向け、ファイガを放つ。

一瞬、「奴」の視界が曇り、そしてその一瞬で十分だった

上からセフィロスが落ちてくる

.....

少しだけ巻き戻って

セフィロスと時風の戦い。

二人はともに開翼している

二人の翼人が近づくだけで昏倒させてしまつような殺気と闘気を放つ

「フツッ!!」

蒔風がジャンプからのスライディングでセフィロスの足を狙う  
それを高く飛びかわすセフィロス

蒔風はそれがわかっていたかのように即座に後を追う

「自分で自分を潰し続ける気持ちとはどういうものだ？」

蒔風が一回転からの踵落としとするが、セフィロスが腕でガードする

「その気持ちを教えてくれないか？」

「お前にはわからないさ!!」

「フ・・フンツッ!!」

セフィロスが蒔風の足首を掴み、頭上で振り回してから地面に投げ  
つける

地面をクレーターのように窪ませ、蒔風が着地する

そこにセフィロスが蒔風を真つ二つにするように振り下ろしながら  
舞い降りる

蒔風が横からの手刀でそれを逸らす

その後もセフィロスの斬撃がくるが、刃に当たらぬようそれ以外の  
箇所を打ち続けるという、一瞬も気の抜けない攻防をする

蒔風もただ受けているわけではない。

突き、蹴り、足を抜く、後退するを繰り返していく

ガンギン！ヒュパツ！ガガツ！ヒュン！ブオオ！！ゴオ！！ギヤ  
ン、バキヤ！！

時風がセフィロスの攻撃を後ろ回し蹴りで弾き着地し、一回転して  
構える

構えは大きく体を開け、両腕を開き、セフィロスに向かう  
しかしその眼には先ほどと違い、余裕が見える  
が、決してそこに油断はない

「誰かに知ってもらおうと少しだけでもスッキリするって、本当だっ  
たんだな……ッハアツ！！」

時風が飛びかかり、右の拳を強く握り、振りかぶる

それを見て呆けているセフィロスではない

「正宗」を一回だけ振るう  
すると、無数の斬撃が時風を襲った。  
しかし時風は止まらない

その腕から、足から、腹から、顔から、鮮血が吹き出るがそれでも  
止まらない

セフィロスが時風の眉間に向け、「正宗」を突き出す

しかし彼はいくつもの世界で、規格外の者たちと、そして「奴」と  
戦い、勝ってきた男。

これだけでは死ぬことなどできない！！！！

ガッ！！ギヤリギヤリギヤリ！！

蒔風が顔を少しだけそらし、メガネのフレームで受け、それに沿って近づいていく  
フレームが折れ、落ちる

セフィロスの顔面に蒔風の鉄拳が突き刺さり、地面にセフィロスが叩きつけられる  
地面でバウンドしたセフィロスの腹に膝蹴りをかまし、その長い髪を掴む

「長いんだよ。ちつとは散髪しろ！！！」

ブウンブウン！！ゴウウ！！！！

上空にセフィロスを投げ放ち、そこに向かって蒔風も飛ぶ  
そしてセフィロスより少し上まで行き、振り落としの回し蹴りを叩き込んで落とす！！

下の方ではクラウドがちょうど「奴」に向かってファイガを放ち、爆発したところだ

「クラウド！！やれえ！！！！（ブンッ！！！！）」

蒔風がクラウドに十五天帝を投げる

それはセフィロスを追い抜き、クラウドの手に

その二振りを手に、クラウドとセフィロスが交差する！！！！

ヒュッ、ジャカン！！！！

そしてセフィロスの背の翼が切り離され、羽となって散り、クラウドとセフィロスを包むように停滞する

「行くぞー！！」

【FINAL FANTASY VII】 - WORLD LINK  
- WEAPON -

それらの羽が、クラウドの背に集まる

そして一対の翼が現れる

「行くぞクラウド！！使い方は、わかるな？」

「ああ・・・問題ない！！」

飛んできたクラウドが、時風の足の裏に合体剣の側面を当て、地上に向けて射出する

地上の「奴」をセフィロスは衝撃にまだ頭を振っている

そこにとんでもない勢いで落ちてくる時風

そして二人を掴み、落ちてきた勢いをそのままに回転力とし、ふたたび上空に投げ放つ！！

【FINAL FANTASY VII】 - WORLD LINK  
- FINAL ATTACK -

クラウドが合体剣と十五天帝を振り、飛んでくる二人に向けて振る  
そこですべての合体が解かれ、二人の周りにばらまかれる。

そしてクラウドの体が蒼く覆われ、燃え上がるように力を放出する

ヒュ、パシ、斬ッ!!ゴ、オウ!斬!!ヒュゴ、斬!!斬斬斬斬!  
!!!!

「おおおおおおお!!!!!!」

クラウドが次々と周りの剣を掴み、繰り返し繰り返し、何度も二人  
を切り刻む!!

超究武神覇斬 ver・WORLD LINK

その締めくくりに、十五天帝と合体剣を掴み、二人を切り刻まんと  
上空から突っ込んでいく!!

「舐めるなあ!!!!!!」

クラウドが向かってくると、「奴」が身体を起こす

しかしクラウドはさらなる力を解放する!!

「オレは・・・漆黒の翼人!!この翼の司る願いは・・・」

「消えるオ!!翼人!!滅び去れえ!!!」

「奴」がクラウドに赤銅に燃える豪火球を放つ

それは巨大だった。ざつと半径五メートルはあるだろうか

それにクラウドが突入する

そして爆発した

「奴」の口元がニヤリと歪み、次の瞬間、それは丸く開かれた

「な!?!」

爆炎と爆風の中から蒼いオーラに身体を包み、赤い光の粒子に囲まれてクラウドがさつきと変らぬ姿で現れた

「あらゆる運命に立ち向かい、それを打ち破る、勇気だ!!!」

ズッ、パアア!!!!

「奴」に十五天帝が、セフィロスに合体剣が突き刺さり、それを手放しクラウドが先に着地する

そして突き刺さった二本はそこから弾け、綺麗な円形にばらけた。

そしてクラウドと葎風を中心に、ストトトツ、と落ち、突き刺さる

クラウドと葎風がセフィロスと「奴」を見上げる

「ぐ…クラウド…お前は…いずれ…」

「…そうはならないさ」

クラウドがセフィロスにそう言うと、セフィロスは黒い霧を噴出し消え、あとにはカダージュが残される。

- ありがとう、兄さん -

そういつて、カダージュも消える  
ライフストリームの輝きとなって

「こ…の…よかつたな、葎風。せいぜい仲間ごっこを楽しんどけ」

「オレは「脇役」だとかを悪く言うつもりはない。だが、てめえ





「すまないな。だが、助かる」

「気にすんな。翼人の仲間が増えるのはうれしい」

「これも・・・オレの力か」

「戦士タイプの翼人だからな」

「戦士？」

「ああ・・・オレが勝手に分けてるだけだよ。「戦士」は攻撃、「賢者」は防御、「聖人」は治癒を、それぞれとくいとしたりた者のことにしているんだ。分類してすると楽だろ？」

「そ・・・そうか」

「この世界はもう大丈夫だな」

「任せてくれ。もう、大丈夫だから」

「ではな・・・漆黒の翼人。また会えたら」

時風が手を出す

その手を握り返すクラウド

「ああ。お前も、自分に負けるなよ」

「今まで勝ってきたんだ。これからも、な」



FF7 ～勇気の翼・漆黒の翼人～（後書き）

アリス「ついに判明「奴」の正体!!」

「奴」

本名：マイカゼシユン

武器：魔導八天

魔導八天は十五天帝と対となるもの

三本の「獄」「怪」「焰」の召喚の剣と五本の「鬼人」「魔人」「獣人」「廃人」「天人」の剣で構成される

「奴」の呼び掛けに応じ現れるだけなので鞘はない  
すべてが西洋剣の形であり、組み立てると見惚れるような大きな美しい西洋剣になる

1379

彼は出身世界の構成を見抜き、その世界の主人公を殺し、取り込んだその瞬間に「マイカゼシユン」から外れ、「奴」となった

しかし、本質的にはマイカゼシユンのままである（多少のゆがみがあるが）

使役獣はケルベロス、迦桜羅、サラマンダー

剣や能力、召喚獣の数は時風より少ないが、パワーにおいて上回り、幾度も窮地に追いやる

ちなみに元の世界では、蒔風となんら変わらない性格だったが、世界に触れ、壊れた

ア「これが「奴」。蒔風の敵」

だから蒔風は「奴」の敵として選ばれたのです

「奴」が最初に来た世界が「蒔風の世界」だったのも、偶然ではなかったのかもしれませんが

## 【FINAL FANTASY VII】

構成：” フォルス” 60%

” LOND” 40%

最重要人物：クラウド・ストライフ

- WORLD LINK - } WEAPON } : 散った翼人の力をクラウドに

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : 合体  
剣と十五天帝による超究武神覇斬 ver. WORLD LINK

ア「そういえば、ダージユオブケルベロスは出ますか？」

すみません

やったことないので出しようがないのです

ア「本当にそれしかやってなかったんですね・・・」

《漆黒の翼人》

所有者：クラウド・ストライフ

翼色：漆黒

想い：勇気

タイプ：戦士

今回書くこと多いなー

ア「結構明かされましたからね」

この世界でこうやってバラスのはこの小説を考えた時から決まっていた

しかし蒔風の回る世界はまだまだあります

これからも「奴」は立ちはだからでしようね

ア「「奴」の表記はどうするんですか？」

今まで通りに、「奴」で

このことを知っているのはクラウドだけで、これからの世界で説明する時も言いません

ア「先の後書きで言ったことだけですか」

だけになります

これくらいかな？

わからないことは感想でいくらでも聞いてください  
じゃあ

ア「今回は久々に番外編！！！」

正直忘れてました

ア「長かったなのはカットする予定のようです」

本当にすみません

それ以外もカットするかも・・・

ではまた次回

蒔風「ん？後書き？出れなくなっただっていいんだもん！！！」





前回で気づきました  
作者にはああやって書くのは無理だ

《「奴」の考案話》

実際最初にはこの話もただ作者が「いろんな世界回りたいな〜」  
という妄想を考えたところから始まりました。

「奴」

「最初はただ「この世界に作者がいたらこうしてやるのに」って考  
えだっただよな？」

そう。高校生の時にそんなこと考えてましたね〜

でも、作者はクロスオーバーが大ツ好きなのです

仮面ライダーが集結する「ディケイド」が好きだ  
歴代FF主人公で戦う「ディシディア」が好きだ  
様々なディ ニーの世界に行く「キング ムハーツ」が好きだ  
アーネンエルベで「TYPE-MOON」キャラが揃う時には興奮  
が止まらない  
スーパーマンとバットマンが並び立つだけで全身の毛だ逆立つようだ  
そんなキャラクターたちが交差していくのを見ていると心臓が止ま  
りそうになる！！

だから！！いろいろな世界を巡る話にシフトし、その過程で生まれ  
たのが「奴」です

世界をめぐるには理由が必要です  
そのために「奴」を考えました

「奴」の目的として、「世界を食らう」「ことに設定し、そこからは  
トントン拍子に

「奴」

「でもその時はオレの正体なんか決まっていなかったんだろ？」

です

候補はたくさんありました

が、最終的にはこうなりましたね

当初はなんかありきたりすぎてやめようかとも思いました

ですが、「奴」が「時風」だと考えていくと物語が進む進む

「奴」

「それでこの物語の最後まで考えついちゃったんだよな」

ええ

もうこの頭の中に最終回までの大まかなストーリーはあります

最終回の話なんかもう繊細に駆けけますよ

「奴」

「でもまだ途中の話が」

なんですすよね〜

蒔風が巡る世界はあと25個近くあります

「奴」

「そんなにか！？オレの正体バラすの早かったんじゃ？」

もう後悔しても遅い

しかも途中途中の世界では思いつきり長くいる世界もありますし

ってかあれ？お前の考察から離れてない？

お前の誕生の話の予定なのに

「奴」

「そうだったな」

でももうよくな？

「奴」

「おい！！」

《《これからの世界》》

さて、上記のように蒔風をめぐる世界はまだまだありますが・・・

「奴」

「が？」

正直、出そうかどうか迷ってる世界があります

「こんなマイナーな世界わからないんじゃないか？」って

「奴」

「堂々と仮面ライダーのせかい出しててよく言えるな」

あれは私の趣味

それで、です

最初には

空を飛ぶ、三つの方法

真剣で私に恋しなさい

緋弾のアリア

これはゾンビですか？

狂乱家族日記

11eyes

も考えてました

「奴」

「でも、知らない人がいるかもってことぞ？」

はい・・・

後これ以上世界を増やすのも嫌でしたし

「奴」

「なぜ？」

だって最終回が遠のく

「奴」

「まあ、今までもペースでやったら・・・かなり先だからな」

だからもし、これらの世界での時風の活躍が読みたい!!という方がいらっしやいましたら

「奴」

「たら?」

感想でリクエストしてください

一作品に5人以上集まったら書きます

「奴」

「わーお、あわよくば感想人員増やそうとしてるよこいつ」

黙れうるさい

## 《FF7の修正点》

ここで大きな訂正の報告をします

「奴」

「どこだ?」

「FF7の世界」の最初の話

時風が降り立った丘なんですけど

「奴」

「バスターソードの刺さってた？」

はい

しかしわたくし、書きながらコンプリート版の方を見たんですよ

「奴」

「通常の方しか見てなかったのか」

はい

それでコンプリートを見直したら、大変なことに

あのザックスのバスターソード、教会に移されてるじゃないですか  
!!!!!!!!!!

「奴」

「わ〜お。やっちゃまったなあ!!」

だから大急ぎで修正しました

「奴」

「だから最後に教会にバスターソードがあっただんな」

はい

いやあ焦った焦った

だって最後のシーンで丘に剣がなくて、教会にあるんだもの  
あったのは綺麗な花

「奴」

「でも大きく話は変えられないから」

まあ、そこはうまく変えました

気になった方は読み見直してみてもはどうでしょうか  
と言っても、本当に最初の部分だけです

《感謝感激感涙号泣》

さてさて、このストーリー「世界をめぐる、銀白の翼」もここまで  
来てしまいました

「奴」

「途中なのが入って番外編忘れてたりしたけどな」

そこ、うるさい

大丈夫！！次に書くから！！

「奴」

「番外編だとオレ出れないからな〜」

やろうとすればできるよ？

「奴」

「マジでか!？」

うん  
でもそれよりも

皆さまのアクセス一つ一つが十万アクセス  
そしてユニーク一万二千越えとなりました

正直ここまで多くの方に読んでいただけるとは思ってもみませんでした

「奴」

「最初の方なんか読みなおすと酷いもんだ」

いまだに心配です

最初の二、三話読んで「イマイチだな」って切られたらどうしよう  
とか

でも、この作品につきあっていた  
いつもチェックして読んでくれる多くの読者の皆さま  
そしてお気に入り登録してくれたユーザー様

誠にありがとうございます

「奴」

「お、もう自分の作品を駄文って言わないのな」

いや、今でもまだまだだっと思っててるよ？  
こんなものより優れた作品はたくさんある

でも、この作品を読んでくれる人がいるのに



「この作品は駄文です」  
なんていうのは失礼だ。

だから、駄文なんて言いません

「奴」

「心の中ではそうじゃないんだな」

そうです!!

いつかみなさんの作品も読んでみたいです

作者は自分の作品をお気に入り登録してくれている方を検索してお  
ります

必ず見つけ出してやるからな!!!

「奴」

「お前感謝ってどういうものか知ってるか？」

やだ・・

恥ずかしいわ

「奴」

「お前の方が恥ずかしいわ」

ではこの辺で

次は十五万アクセスかなあ・・・

ユニーク一万五千の方が早いかな？

終劇

番外編 くさまざまな夜の過ごし方く

【バカとテストと召喚獣】く戦争前夜く

蒔風が召喚獣を預けた夜のお話

《坂本雄二の場合》

「なあ、玄武とやら」

「なんだ？雄二殿。なにか用でもあるのかね？」

雄二がベッドに寝そべって姿の見えない玄武に話しかけると、宙に小獣状態の玄武が現れた

「いや・・・明日試召戦争だろ？」

「うむ、確かにそうなの」

「戦ってる間に点数削られたら補充のテスト受けただけだよ」

「らしいの」

「答え教えてくんね？」

「ダメ」

「チツ、ケチ臭い」

「ほう……それは我にケンカを売っとるのかツンツンクソガキ」

「そう聞こえたかドンガメ爺」

「ジジイというな！我は人型なら主らと変わらんのだぞ！！」

「でもそんなんじゃないなあ。人型になってみてくれよ」

「今は無理であるの。普通の召喚なら大丈夫だが、この状態では」

「やっぱ爺じゃん？」

「後悔させてやるわ！！！」

玄武が雄二に飛び掛かる

雄二が叩き落とそうと手刀で迎え撃つが、甲羅に当たり、夜の坂本家に雄二の悲鳴が響いた

《木下秀吉の場合》

「のう、白虎……じゃったかの？」

「なんだい？秀吉ー。あははは！この漫画面白い」

秀吉が回転式の椅子に座り、床でゴロゴロしながら肉球で器用に漫画のページをめくる小獣状態の白虎に話しかける

「おぬし……勝手に出てきてよいのか？」

「うん？いやまあ、用は秀吉を護ればいいわけだし、ここで誰かに見られるわけでもないから、いいんじゃない？」

「舜に怒られんのかの？」

「多分ばれたらなんか言われるだろうけど、舜はそんなことで怒らないよ」

「そうなのか？」

「うん。形式的に言うだけさ。舜だって多分漫画があれば読んでるよ」

「秀吉、いる？（ガチャ）」

その時、秀吉の双子の姉、優子がノックも無しに入ってきた

白虎は咄嗟にぬいぐるみのように四肢を伸ばしコロン、と転がった

「姉上……せめてノックはしてもらえんか？」

秀吉は内心ビクウ！としていたが、伊達に演劇バカではない。一切表情にはでてなかった。

「いいじゃないよ……ん？なによこのぬいぐるみ。結構かわいいわね。どうしたのよ」

「それは男子から貰ったのじゃ」

秀吉は間違ったことは言っていない。  
しかし、悲しいかな。

言葉は時に歪んで伝わるものだ。

「あんたあ・・・また男子からこんなプレゼント貰ったのね!？」

「お、落ち着くのじゃ姉上!決してそのようなものでは」

「黙りなさい!女の私より男のあんたが貰ってるなんてえ!!(ギリギリギリギリ)これは没収!」

(秀吉い!た、助けてえ・・・)

白虎の目がそう訴えていたが秀吉は

(軽はずみで姿を現すからじゃ)

といった視線を投げた

白虎の目はウルウルし、身体がプルプルしているが、優子は気づかない。

そのまま連れ出され、深夜になって優子が寝た後に涙目になり精神ボロボロで白虎が帰ってきたのは言うまでもない

《島田美波の場合》

「なんだ?オメー明久のこと好きなのか?」

「な！？なに言ってるのよ！！」(ゴウッ！)「

「え？な、ハンツ(ボキヤッ！)ギヤアアアア！」

天馬に美波の鉄拳が突き刺さる

天馬は身悶えて転がる

「ごおおお・・・これが恋する乙女の強さ、か・・・」

「もう！！ばばば、バカなこと言うからよ！！」

「だが、このままだと瑞樹に取られんじゃねエの？」

「！！たしかに・・・瑞樹は頭もいいし、胸も大きいし・・・」

「お前が勝ってるのは腕力だけだな」

「うっさいわよ！！」

「だが大丈夫さ。世の中にはお前みたいな壁が好きな奴だつてざやあああああ！！！！！！」

これは特に言うことはない

ただの天馬の自滅である

《姫路瑞樹の場合》

「なるほど・・・明久君はそこまで鈍感なのですか」

「そうなんです！！美波ちゃんもわたしもいろいろアプローチしてるのに！！」

瑞樹が朱雀に愚痴っていた  
内容は明久の鈍感ぶりにだ

「しかし、はつきりと「好きだ」と言えば彼だって」

「ダメなんですよ・・・明久君はそれくらいじゃ」

「だったらもうこれは押し倒すしかないですね」

「お、おしっ!?!」

「貴女のその胸は何のためについてるのですか？さあ！！レッツエ  
ンジョイ！！ですよ！」

「朱雀さん・・・もっと大人しめな人（？）かと思ってたのに・・・」

「いえいえ、これはこれで正論ですよ？事実彼が言葉で気づかない  
なら行動で示すしかないじゃないですか」

「そつでしようか・・・」

「そのとおりです。そつですね・・・押し倒すはなくとも、彼にお  
弁当を持っていったら？」

「それは前にやったのですが・・・もういいといわれてしまいました」



た・・・」

「ほう・・・して瑞樹さん。料理の腕は？」

「あ、はい！！この間も新しい調理道具を買いに」

「熱心ですね」

「ドラッグストアとホームセンターに」

「姫路さん、あなたは料理をしない方がいい」

「な、なんでですかあ！？」

朱雀の賢明な判断によって、この世界の主人公は救われた

《ムツツリー二の場合》

「なぜオレだけ本名じゃないんだ」

「なにを言っているんだ？」

「いや・・・なんでもない」

「それよりも話の続きだ。お前なんだこのエロ本、エロ画像の数は」

「それは・・・」

「巨乳巨乳巨乳！！お前は申し訳ないと思ったことはないのか？世

の中の貧乳の冒険だぞ！！買うならどちらもバランスよく買え！！」

「オレは自分の好みに合わせて・・・」

「ふむ、確かにな。これらはそうあるべきかもしれない。だが、貴様は一度でも貧乳のこういったものを見たことがあるのか!？」

「あるが・・・そこまでは・・・」

「それがおかしい。いや、なにもわたしは貧乳が好きだと言ってるんじゃない。ただよく見もせずただ「巨乳巨乳」言ってる貴様に腹が立ったのだ!」

「それは貧乳が好きなんじゃ・・・」

「違う。いいか？たとえばある男がおにぎりの「ねぎとろ」を食べた時、これが最高にうまいコンビニおにぎりだ、と周りに言っつかもしれん」

「いいんじゃない？」

「いや。他のおにぎりも喰わずにそんなこと言えるのか？他の見捨てられたおにぎりはどうするのだ!！」「かわいそうではないか!！」

(ああ。こいつバカだ)

ムツツリーニのひそかな感想なぞ知らずに、麒麟がまくしたてる

「だから貴様も、様々なものを知るべきなのだ。我が主は凄いで。すべてを理解するために狂気と理性を・・・」

そうして夜が更けていく

胸のことが話題になっていのに、全く興奮できなかったムツツリ  
一二であった

《吉井明久の場合》

「……………」

「……………ねえ」

「?……………なんでしょう明久殿？」

「なんで黙ってるの？」

「……………護衛が我が任務……………ああ、決して明久殿と話すのが嫌いだとかそういうのではないので」

「そう」

「はい……………」

青龍と明久の間になんとも言えない空気が漂う

「……………時に明久殿」

「なんだい？」

「この家の冷蔵庫にはまともな食品がなかったように見えましたか？」

「ああ、少し前までは姉さんがいたんだけどね。また海外に行っちゃったから、食生活が前に戻ったのさ」

「……お話に聞いたあの塩と水だけという？」

「うん」

「……ここにお金があるので好きなものでも買ってきてください」

「え？」

「そんな状態では明日の戦争には勝ち残れません。さ、コンビニならまだ空いています。何かしっかりとした食べものを買ってくるのです」

「大丈夫なの？このお金」

「……主はああ見えて必要なお金は持っています。この程度では何ともありませんよ」

「そう……青龍はなんかいる？」

「私……ですか。では、プリンを」

「へあ？」

「ああ、もしなければシュークリームやエクレアでもいいですよ」

「そ、そう・・・(甘いもの好きなんだ)」

・・・少しして・・・

「買ってきたよー」

「おお。ではプリンを」

「え？」

「いただきま・・・なんですかこれは」

「プリンだけど・・・」

「プッチンのできないプリンなど買ってきてあなたは何を考えているのですか」

「え？」

「何か小皿を。あと、爪楊枝もお願いしたいところですね」

「それならキッチン棚に」

「(ヒュン!) あった・・・これでプッチンー!!!!」

(おかしな奴だなあ)

こうして夜が更けていく

明日戦争なのによくのほほんとしてるな〜いつら

【とある魔術の禁書目録】〜これよく食うな〜

上条の部屋から寮の部屋に向かい、そこでインデックスに料理をふるまう時風

「ごっはん!ごっはん〜〜!」

「ご飯と言っても他の世界の得体のしれないものだぞ?いいのか?」

「大丈夫なんだよ!このいいにおい、たまらないよ!」

「では・・・ごっぞ!〜!」

そこにはインデックスの見たことのないフルコースが並んでいた

「おお〜〜〜!〜!〜!」

「や、ご賞味あれ」

「いったただっきま〜〜す!〜!」

蒔風の頬をツツツ、と汗が垂れる

「（バクバクバクバク、ゴクン）うん！ー！とうまはこんなにたくさん作ってくれないんだよ。全部食べてもいいの！？」

どうやらインデックスという少女の判断は「質より量」のようだ

「構わん構わん」

「ようし。もう容赦しないんだよ！ー！」

そしてインデックスが食べる食べる  
あっという間に半分ほどを食べあげて

「こっちはとうまにとっとなかないとね」

そう言って半分を残しておくインデックス

「いいのか？」

「うん。とうまだって今病院で頑張って治してるんだしね」

「にしてはなんかいろいろ噛みつきうとしたりしてたが・・・心配とかして大変だろ？」

「心配？うーん。とうまの怪我は心配だけど、とうま自身に関し

ては心配してないよ」

「??？」

「だってとうまは絶対に帰ってきてくれるもん。あいさの時も、短髪するときも、今回も。怪我をして、ボロボロになっても、とうまは絶対帰ってきてくれるんだよ」

「そっか・・・それはいいことだ」

「うん！！・・・あれ？なんだか・・・！！！！！」

「どうした？」

インデックスの首がギギギと回る

「・・・・・・・・・・（パクパクパク）」

口が金魚みたいにパクパクしてる  
そして倒れた

「・・・やっぱ大丈夫だったわけじゃないんだなこれ」

そう言って今回の料理の入っていた容器を見る時風

<シャ 先生監修料理教室フルコースセット>

そう書いてあった

「嫌な予感はしてたんだ・・・でもすごいな。ここまで大丈夫だった



たとは……」

蒔風が残ったフルコースを見てつぶやいた

残り半分は綺麗にラップして冷蔵庫にしまった

インデックスは昨晚何があったのか忘れていた。

でもなぜか笑顔の神裂と、気恥ずかしそうな顔をしたステイルという魔術師が夢に出てきたらしい

後日

上条がそれを食べようと冷蔵庫の中に右手をのばすと、バキン！と言って料理が消えたそうだ

人外の者でも使ってたのか……  
実に恐ろしい料理であった

t o b e c o n t i n u e d ? ?

番外編 くさまざまな夜の過ごし方（後書き）

いやはや久しぶりに短編書いた

アリス「ほとんど「バカテス」でしたけどね」

なのははもともと長いし、アギトとFF7はすぐに戦いに行ってしまったから短編の隙間ないし・・・

ア「ま、仕方ないですかね」

そう思っていただけるとこれ幸いです

さて、今回インデックスさんに食べてもらったあのフルコース

またまた剣 流星さんから頂いた物です

ア「まだ他の人からもらったものが一つあるでしょうに」

なかなか出せるところが見つからないんだよう!!

ア「がんばって作れ」

はい

ア「次回、本編」

出会いまするは元・カケラの魔女と、その地の守り神

ア「そして陽気な仲間達〜!」

ではまた次回

嘘だツツツ!!

ひぐらしのなく頃に ～事話し編～

蒔風が降り立ったのはどこかの神社の裏の展望台みたいな場所だ。

眼下には村が広がっている

「雑見沢村。人口2000人の小さな村、か」

蒔風が展望台を離れ、神社の方向に向かい、正面の長い階段を下りていく。

階段を下りて行っていると、子供達の集団が走ってきていたとても元気だ

下は小学生低学年、上は中学生ぐらいかの少年少女たち

とはいっても男子は一人

他はみんな女の子だ

この暑い中、長い階段を一気に駆け上がっていく

子供達とすれ違い、蒔風がなにかを感じた

そして振り返る

他のみんなは一番上まで駆け上がっていた

しかし、薄紫色の髪をした女の子がこちらを見下ろしていた。

それより少し上の方で、同い年かの濃い紫色の髪の少女が心配そう





この少女、古手梨花は普通の少女ではない  
これまで『様々な雛見沢』、つまりはパラレルワールドで幾度も幾度も殺されてきた少女で、殺されるたびに時間を巻き戻り、その死に抗ってきた。

昭和58年6月に殺される運命に抗い続けて時間を幾度も巻き戻り百年の時を過ごしたのだ。

それをついに今回打ち破り、運命の6月を越え、今にいたっているそして時間を巻き戻し続けたこの地の神、「オヤシロさま」こと古手羽入。

今は人としての人生を楽しんでいる。

その説明を聞いてから時風が口を開く

「ふむ。多重世界ではないようだな」

「多重世界ってなんなのですか？」

いつもの調子に戻って話した梨花が時風に聞く

「一つの世界がいくつもの世界を内包してるのを「多重世界」ってんだが、ここは違うみたいなんだよ」

「あう？ボク達は確かに多くの世界を・・・」

「それは可能性の世界だろ？そうだなあ・・・多重世界ってのは、一つの世界の中にAとBって別の世界がある場合だ」

「みー」「あうあう」

「君達の場合、AとA'の・・・ようは別の可能性の世界との行き来に近い。だからここは多重世界ではないんだよ」

「なるほどなのです」

「あう。それで、舜がこの世界に来た理由はなんなのですか？」

それに時風が答える

「つとま、こんなところかな」

「梨花の命を・・・なんでまたそんなことに」

「「奴」に聞いてくれ。あと、あれはいいのか？」

「あれ？とはなんなのですか？」

そう言っつてまいかぜがあごをクイツと後ろの方に向けるするとそちらからこそこそと声が聞こえた

（ばれちゃった？）

（もう！！圭ちゃんのバカ！）

（オレじゃねえ！沙都子押すな！！）

（見えないんですよ！！）



(わっわっ、お、押さないで〜)

ドダッ!!!

先ほどの少女+少年が物陰から転がってきた

こういうとき男子が一番下につぶされるのはもはやデフォなのだろうか

「いたた・・・あんた!!!梨花ちゃんが殺されるってどういうこと!?!」

「また「東京」とかいう連中ですよ!?!」

「東京」とはかつて梨花の命を狙った組織の名だ。

この組織は戦後日本政治界重鎮たちの作った組織だ

しかしその重鎮たちが邪魔になった若い世代が、重鎮たちを追いやるうとし、彼らの着手している計画を潰すことを考えた

その計画とはここ雛見沢における「雛見沢症候群」と呼ばれる病気の解明だ

この症候群は雛見沢から離れると果てしない低確率で発症するもので、異常な疑心暗鬼や被害妄想、さらには幻覚を見るなどの症状を起す

近年では全くと言っていいほど収まっているようだが、過度なストレスを受けることで高いレベルでの発症をしてしまうのだ

古手梨花は「女王感染者」と言われる存在で、彼女が死ぬと全村民

が一斉発症し、この世の地獄絵図となるらしい  
そんなことが起きれば重鎮たちは責任を取って消える、という計画  
で梨花を殺そうとしたのだ

「あー！ー！！！まてまてまて！！さっきの話聞いてたんか？」

「は、はい・・・あの、私たちやっぱり梨花ちゃんたちが心配で、  
途中から聞いてしまっって」

「どっから？」

「えっと、あなたが説明を始めたあたりからです」

「さいで。ま、そういうことだ。聞いてたんなら話が早い。オレ、  
蒔風舜な」

「オレは前原圭一と言います。それで・・・」

「敬語禁止。普通に話してくれ。むずかゆくなる」

「えっと・・・じゃあ、私は竜宮レナです！！これくらいならいい  
ですよ？？」

「ま、そんなくらい砕けてくれりゃあ」

「私は園崎魅音。そのさきみおんこの部活の部長だよ」

「わたくしは北条沙都子ですわ。それで、本当に梨花が？」

「マジマジ。ちょっと厄介な奴がねー」

その手をヒラヒラと振りながらなんでもないように言う蒔風

（なんだ？このメンバー、すげえぞ？最主要人物候補が沢山いやがる？あれ？魅音だけ違う？）

そんなことを考えていてもしょうがないと  
蒔風が口を開く

「で？みんなは何をしようとしてたんだい？」

「裏山でサバイバル鬼ごっこですわー！」

「サバイバル鬼ごっこ？」

「沙都子ちゃんの仕掛けたトラップがこの裏山にたくさんあるんです」

「そこで鬼ごっこをするんだ。トラップにかかったり、鬼に捕まったりしたら鬼の仲間になって追いかけるんだ」

「なるほど・・・ようは「全滅鬼」ってやつか」

「え？私たちは「ゾンビ鬼」って言ってますけど」

「そんなことより！舜さん、その「奴」ってのはいつ来るんだい？」

魅音が一切ふざけのない、本気の視線で蒔風を見る

「さすがのリーダーだな・・・その目つきお兄さん怖いわ!!」

蒔風がふざけたように言う

それにちよつとした驚きを感じながら、魅音が先を言おうとする

「いいから・・・」

「ごめんごめん。ま、それに関しては大丈夫だ。まだ「奴」は動かないさ。そんなことより!!!」

蒔風がうきうきしたような眼をして叫んだ

「遊ぶんだろ？オレも入れてくれ!!そういうの大好きなんだ!!」

『・・・はあ?』

その場の全員が一斉に声をあげた

これまでの流れから想像もできないような明るい口調で言い出したのだから

その視線にさらされ、蒔風が焦る

「な、なんだよう。その眼は・・・いいだろお！オレはいつまでも少年ハートなんだ!!遊ぶの大好きでもいいじゃないか!!」

「いや・・・なんか今までのふいんきと違って」

「おっといけねえな圭一。」「ふいんき」「じゃねえ」「ふんいき」「だ」

「そうなの？」

「そうだよ。これ、テストにでるからね!!!(ズビシ!)」

蒔風が意味のわからないテンションになってきた  
夏か。夏のせいなのか

「どうする？魅音」

「う〜ん。我が部に入るには難見沢在住じゃないといけないんだけどなあ〜」

「え〜〜？そんなこと言わないでよ〜〜」

蒔風が子供のように駄々をこねるときの声を出す

「あんたホントに大人か!？」

「童心を忘れないだけさ!!!」

「・・・ほら魅音。勉強しないで遊んでるところという大人になるんだ。受験がんばれよ？」

「説得力あるね・・・」

圭一が蒔風の方を見ながら魅音に言った  
なぜか蒔風は誇らしげだ

結局時風はこの部活に参加させてもらえることになった

そして場所は移り裏山

ここでサバイバル鬼ごっこが始まる

『ジャンケン、ポン！！！！』

最初にジャンケンをして鬼を決める  
負けたのは……

「沙都子が……こりや恐ろしくなったね」

「そんなに凄いのか？トラップ」

「ま、まあね」

「をくくほっほっほっほ！！ま、鬼になっても皆さんを捕まえられれば私の一人勝ち！！ヨッユくですわあ！！！！」

「確かにすごそうだ（汗）……」

「じゃあ百を「待て沙都子」なんですの圭一さん」

「今度もまた問題にしよう。いいか？」

「むっ、もう騙されませんのよ!！」

「よし!!じゃあ!！」山田さんちにリンゴを23個持っていき、山田さんはお返しに22個の梨をお返ししました「ええ!?!舜さん!?!」

圭一が問題を出そうとしたら蒔風が横からいきなり問題を言い出した地面に数字を書きながら沙都子が耳を傾ける

「いいの? 魅いちゃん」

「ここは彼が我が部に対抗しうるかどうかを見てみようじゃないか」

レナと魅音が楽しそうに話す

魅音の口はニッシッシ、と笑っていた

「そこで二人三脚をしていた息子の幸助君が梨を4個食べてしまいました」

「ふむふむ・・・」

「さて、この問題で私は「に」と何回言ったでしょう?」

「なっ!?!」

「そら逃げる!?!!!」

蒔風が走り、大笑いしながら他のメンバーも走り出す

「えっと・・・一回、二回・・・問題が思い出せませんわぁ〜」

「！！！！」

後ろの方で沙都子の叫びが聞こえる

「あっひゃっひゃっひゃ！！！！あんたサイコーだね！！！！」

「同感！！沙都子の悔しそうな顔がたまんね〜！！！！」

「はう〜！！！！泣き顔の沙都子ちゃんかぁいいよ〜。でも部活中だから、罰ゲームでお持ち帰り！！！！」

そんな中梨花と羽入は走りながらもポカんと眺めていた

「凄いわ・・・すぐにみんなの輪に打ち解けた・・・」

「ああああ。それだけいい人、ということなのかもしれないのです。ああ！！！！」

こつして始まった部活

勝者は誰だ！？

t o b e c o n t i n u e d



ひぐらしのなく頃に ～事話し編～ (後書き)

アリス「ひぐらし」の世界です!」

いや〜

そういえばああいう鬼ごっこで地方ごとに違うよね  
作者の方は蒔風と同じですけど

ア「にしてもいきなり部活ですか」

それがひぐらしの醍醐味

ア「ほかの最主要人物候補とは？」

圭一は鬼隠し、綿流し、崇殺しで  
レナは罪滅しで

沙都子は原作じゃないけど厄醒しで

主人公でしたから

正直圭一か梨花か、どちらを主人公にするか悩んだんですけど

ア「結局梨花ちゃんに？」

そう

それしかないと思ったね

ア「さいですか。次回、壮絶、鬼ごっこ」

ではまた次回

なら、その運命とやらを俺がぶち壊してやるっじゃないか

ひぐらしのなく頃に ～鬼倒し編～

蒔風は現在裏山のなかをプラプラ歩いている

さっきまで一緒にいたメンバーとは、沙都子がついに正解を叫びながら追っかけてきたのでバラけた。

「さつてと、どこにいようかな」

蒔風がベストプレイスを探す

こついう場合、若干開けた場所で待つのが蒔風のパターンだ  
そうすれば鬼が来たのも察知でき、開けてるから逃げやすい。

いい感じの切り株が蒔風の目の前に現れる

周りも開けているし、調度いいと蒔風はそこに腰を下ろそうと歩を進める

そこでなにがスイッチだったのか、ぶつとい丸太が縄に吊されてブランコのように蒔風に向かってきた

「フンッ！（ゴッ！）」

蒔風が拳でそれを殴り止める

更に蒔風が調度丸太を止めた瞬間にそれを吊っていた木が倒れてきた。

「は？おうっ！？」

拳を打ち出した直後で体勢が危うかったが、それを廻し蹴りで粉碎する。

そして蹴りきつた足が地に着く前に、下から竹槍が突き出してきた。

それらは幸運にも時風を突くことはなかったが、あと少しズレていたら、時風に尻の穴がもう一つできていただろう

「・・・トラップって、もっと子供じみたもんかと・・・実践レベルだぞ。これ」

「見いつけましたわ！！覚悟してくださいまし！！」

茂みから沙都子が飛び出し、時風を捕まえようとしてくる

それをヒラリとかわし、時風が再び逃げる

「魅音さん！行きましたわよ！！」

「あいよ、沙都子！！」

その行き先に魅音が現れる。

どうやら木の上にはいたらしい。

迫る魅音の手を、うまく手首を払うことで弾き、右に曲がる

「舜さん！」



転がる岩 わずかな隙間を縫ってかわし、最後の一個に玉乗りする  
落とし穴 乗ってた岩を落として回避

飛んでくる竹槍 木の棒で棒術を駆使して弾く  
転んでみーみー泣いてる梨花ちゃん 鬼だったので手に触れないよ  
うに包帯巻き付けて魅音にパス

こんなそんなで何気に余裕の時風

ちなみに魅音は実は鬼ではなかったらしく、梨花をキャッチしてア  
ウトになった

「みんな!!あと二人だ。絶対にぶっ潰すよ!!」

「「「「おーーーーー!!!」(です)(なのです)(ですわよ)」「」  
「」

「ん?二人?おわっ!!」

時風が魅音の言葉に不思議がっていると裾を掴まれて茂みに引っ張り  
込まれた

そこには縮こまって隠れている圭一がいた。

「圭一も生き残ってたのか」

「舜さんやりますね。沙都子のトラップは特殊部隊だって撃退した  
代物なのに」

「そんなんじゃない駄目さ。オレを潰したときや殺る気で来ないと」

いや、結構あのトラップも死亡率高いと思う

「そついえば時間制限は？」

「えっと・・・大体夕暮れになってからです」

「まだあるな・・・よし、鬼の殲滅にかかるか」

「え？」

「手伝ってくれ。さすがにこの地形とかはまだわからないからね」

「は、はい」

蒔風が動き出す

その口はギチギチと笑っていた

.....

「見つからないねえ・・・もう一度あつちの方を探そう!!」

「トラップの起動条件はさっき言ったとおりですわー!引っかから

ないでくださいましー!」

そう言つて沙都子と魅音は振り返つた  
しかしそこには

「あれ？羽入は？」

羽入がいなかった

レナと梨花も、さつきまではいたのに、という顔をする

そしてガサツとした音がして、そちらの方の茂みを見る。  
魅音が茂みをどかしてみると・・・

「こつ、これは!?!」

そこには簀巻きにされた羽入がいた。

顔には紙が貼られており、「うぐう」と書かれていた

なにがなんだかわからない一向。

とりあえず体勢を立て直そうとそこから移動しようとするが

「うきゃう!!な、なんですのー!?!」

沙都子が落とし穴にはまり、首から下がすっぽりと埋まってしまっ  
た。

まるで生首が転がってるみたいだ。

「どつしたの沙都子!?!」

「ト、トラップがいじられてますの!このトラップは一定の場所さ



え踏まなければ作動しないのに・・・やられましたわ・・・」

「沙都子ちゃ・・・」

「レナ、ダメ！！助けようとしたらそこを狙われるよ！！」

「で、でも・・・」

「蒔風舜、か・・・伊達に戦ってきてないってわけね・・・くうくう  
く楽しませてくれるじゃん！！」

「助けてくれませんか！？この穴、梨花用に作ったせいkachよつと  
胸が苦し」

「（ドカビシ！！！！ボン！！）み、みい！！沙都子が！！」

「沙都子！？そんな・・・私たちが目を離れた一瞬の間で！？」

「沙都子ちゃんの特性花火を使ってるのがまたヤラシイやり方だね・  
・・・」

そこには爆破され、アフロになった沙都子がいた。

梨花の表情が「計画通り」な顔になったのは気のせいだろう

「くっ、みんな！背中合わせになって！！全方位を警戒！！」

魅音が号令を出す

しかし背中を合わせるの二人だけ

ガサリ、と上の方から葉が落ちてきた。



圭一である。

そしてその手にはあるものが握られている

「レナ！！見るんだ。これを！！」

圭一がそのあるものを出す

それは、木を星型に掘っただけのものだった

「あはは。圭一君、それだけじゃレナを誘惑できないよ？」

「じゃあ、これでは？」

くるりとその反対側を見せる

そこには「これはヒトデなんだよ」と彫られていた

「かぁいいい~~~~！！？おもちかえり~~~~！！！！！！」

「相変わらずれなのかぁいいポイントがわかんねえ~~~~！！！！」

「！」

そう言っただけで逃げた圭一をレナが追いかける

すぐに茂みで見えなくなったが、おそらくやられただろう

「これは……ん？」

そこに紙飛行機が飛んでくる

そこには何は書いてあった

が、それを確認するよりも早く、魅音の意識はなくなった

.....

「オレたちの勝ち!!!」

蒔風と圭一がガッツポーズをする

その前には縄で縛られた女子メンバーたち

「悔しいのです」

「わたくし、止めは他の誰かに・・・」

「沙都子、考えたら負けなのですよ」

「ヒトデさんかぁいいよ〜」

「一生の不覚!!! 体験入部者に負けるなんて!!!」

と、各々恨み言(?)を言っている

「さてさて、罰ゲームは確か、エンジェルモートでウェイトレスさ  
んだったなあ!!!」

「エンジェルモート? なんだそこ?」

「明日行ってみればわかる!!!」

「だったら楽しみにしよう」

そして日が落ちる  
みんなの縄をほどき、各々帰宅する

蒔風は例によって情報の通りに森を進んだらテントがあった

「ひさしぶりだな・・・」

ちなみにこの山は沙都子のトラップのない山だから安心できる

とりあえずレトルトに手を伸ばし、カレーを用意する蒔風  
途中、トイレに席を立った

そして戻ってきて、さあ食べようか、と思っただらそこにはレトルト  
がなくなっていた

「・・・なぜだ・・・ガックシOTL」

そのカレーを盗んだ女性は後にこう語っている

「ええ。最初は私の知らないカレーの匂いがしたので行って見たのです。そしたらそこに「超激辛マグマカレー」と書いてあるではないですか。次の瞬間、私は気づいたらそれを持って自宅にいました。ええ、今では少し後悔しています。まさか自分の服が燃え上がるとは思いませんでした。しかし、カレーの新たな神秘に気付き、や

はりカレーは素晴らしいと……（この後四時間にわたってカレーの素晴らしさを語った）

時風はもう一つあったので用意し直し、それを食べた

尋常でないほど辛く、服が煤けたが、まあ問題はなかった

t o b e c o n t i n u e d

ひぐらしのなく頃に ～鬼倒し編～（後書き）

今日はもう眠いよ～

アリス「ほらほら、とりあえず言っべきことは言いましょっ

はい

今回の「超激辛マグマカレー」はいつも感想をいただいているリュウガさんからのいただきものです

ア「ありがとうございました」

じゃ・・・私寝ます。

明日試験だコノヤロー

ア「おやすみなさい。次回、罰ゲーム」

ではまだ次回、ZZZ

・・・東京へ帰れ

ひぐらしのなく頃に ～目覚し編～

次の日、蒔風はバイクで圭一の家の前に向かった。

エンジェルモートの場所を知らないの、一緒に行くことにしたのだ。

ちなみに他のメンバーは着替えだとかの準備があるらしいので先に  
行っているらしい

「あなたが蒔風さんですか。うちの愚息をよろしくお願いします」

圭一の父親が挨拶をしてきたので蒔風も挨拶を交わす。

ちょうど圭一が出てきたので、ヘルメットを渡し難見沢よりも発展  
した隣町、興宮に向かう。

長い山道を10分程下って行く。

「その店ですよ」

圭一のナビでエンジェルモートに到着した。

蒔風はバイクを消し、階段を上がって店に入る

エンジェルモートはようはファミレスだ  
ただ……

「なんだ……この店員さんの衣装は」

「すごいでしょう。これが興宮名物、エンジェルモートです……!」



(まるでメイド喫茶・・・あれ？こっつて昭和58年だよな？)

蒔風がもつと考えようとしたが、蒔風の本能がストップをかけた

「ま、悪くないし、いいか」

「舜さん、こっちこっち」

圭一が席をとる

蒔風もその向かいに座る

「で、ここで罰ゲームってことは・・・ってか、お店でそんなことやっていいの？」

「この店、魅音のおじさんがやってるんですよ」

園崎家は難見沢や興宮を含む鹿骨市の全域に影響を持っているいわゆる名士だ。

市会議員と県会議員にも園崎性の人がいるし、街の八百屋から弁護士まで、園崎家の人々がいる  
ここもそんな店の一つだ

魅音は実を言うと園崎家次期当主だ。

だからというわけではないが、まあそれなのに融通がきくのだ

「で、あれを？」

あれ、とはさっきから言っている衣装のことだ。

その衣装はほとんどコスプレだ足はほとんど出ていて、胸の上半分は出ていて・・・描写に苦勞するコスチュームだ  
しかし言えることは一つ

エロい

「いやぁ・・・いいなぁ・・・眼福眼福」

「萌えつて素晴らしいですよね!?!」

「萌え?」

「あれ?知りませんか?萌えつて言うのは」

「いや、知っている。知っているが・・・あれが萌え?」

「え、ええ・・・」

「ふう〜、いいか前原圭一。貴様は萌えとエロをごちゃ混ぜにしているようだな。矯正してやる!そこになおれ!」

「は、はい!」

「確かに、エロと萌えを最近ごちゃ混ぜ逃げるしているものが多い。しかし諸君、忘れてはいないか。萌えとは、かわいい、愛おしいの延長線上のものであると!確かにエロに萌えを掛け合わせれば更に興奮するだろう。それゆえにきさまらの目は曇ったようだな。性的興奮と萌えは違うんだよバカヤロー!!それがわかるか前原圭一!」

「オレは・・・萌えを見失っていたのか？・・・」

「そうだ！あのコスチュームは確かにいい。だが、萌えではない！  
例えればあれだ、「可愛い」と「綺麗」が別物なのと同じだ！！」

「お・・・おお！オレの目は・・・今完全に覚めた！！」

「なにやってんだか・・・エンジェルモートにようこそー！」

そこに彼女たちがやって来た。

それは素晴らしかった。

魅音、梨花がブルマ姿、沙都子、羽入がメイド服、レナが巫女服だった

「あうあう！あれはボクの巫女服なのです！」

「ふむ、素晴らしい。イベントとかでコスプレに出れば優勝できる  
ぜ、これは」

「イベント？」

「有あ・・・いや、今は晴海だな。そのイベントだよ。まあ、  
優勝とかはないけど、大人気にはなる」

「でもそんなとこまで行かなくても良くなくては？そういう場所は  
たくさんありますもの。ここで十分ですわ」





「なに店でバカ騒ぎしてんですかこのスカポンタンが!!!!!!!!!!!!!!」

バギョ!!!!!!!!バチチチチチチ!!!!!!!!!!

蒔風の体がグラリと傾き、座席に倒れる

そこ後ろには魅音と同じ顔をした少女がいた

その手にはふちの凹んだ金属トレート、ごついスタンガンがあった

彼女は園崎詩音。エンジェルモートでバイトをしている魅音の双子の妹だ。

「お姉、なんなんですか?この人」

「あー、その人ね。じつはね・・・」

魅音が詩音に蒔風の事情を話す。

すると詩音があきれた感じのため息を吐いた

「そんなことホントに信じてんですか?」

そこに羽入が真剣に言った

「本当なのです。彼は確かに別の世界の人間なのですよ」

「じゃあ・・・梨花ちゃまが狙われるって・・・やばくないですか？」

「でも、彼がいれば大丈夫なのですよ。あう」

「本当にですか？この人そんなに強くなさそうですよ」

「詩音、わかってないね。なぜ彼がこの罰ゲームで勝者の位置にいるのかが」

「・・・まさか・・・勝ったんですか！？お姉たちに！？」

圭一が昨日の部活の事を詩音に語った

詩音は驚いていたが、みんなが本当のことを言ってるかどうかはわかるらしい

「そうですか・・・」

「む・・・はっ！！おれはしょうきにもどった！！！！！！」

「もう起きたんですか！？」

「詩音！！あんたスタンガンどんだけ強くしてたの！？」

そうしてみんなでくつちゃべって時間が過ぎる  
お昼ごろになって詩音が用事があるからと抜けたが、皆は夕暮れに  
なるまでそこで遊んだ

帰りは蒔風が誰にも見られないように車を出し、それにみんなを乗  
せて帰る

魅音、レナ、圭一を降ろし、梨花、沙都子、羽入を送る

梨花と聡子と羽入は一緒に暮らしてる

両親ともに既に他界してるらしく、がんばって生活してるんだそうだ

そしてみんなを送りきって、車を消して帰る蒔風

テントに戻る途中、止まっているスクーターを見つけた

「どっしたんだ？詩音」

そこで止まってるのは詩音だった

どうやらパンクしたらしく、どうにもならないそうだ

「いやぁ・・・ま、いいですよ。このまま今日はお姉の家に泊まって  
いきますよ」

詩音と魅音は別々に暮らしており、詩音は興宮に住んでいる  
ここから歩いて帰るのは危険だ

「でも、お前の用事って雛見沢にあったんだな。なんのようだった  
の？」



「……あなた、他の世界から来たんですね?」

「そだよ」

「だったら、この世界では無理なことでも、できますか!？」

「……何かによる。言ってみ?」

そうして詩音は話し始めた

難見沢症候群

その病気の末期症状にかかってしまった少年、北条悟史

詩音の想い人で、沙都子の兄だ。

難見沢症候群の原因はウイルスのような寄生虫らしい。

それは感染した人間が死ぬと身体から消え、故に長らく解明されてきていなかったものだ。

現在ではこの村の診療所の地下の研究所で、密かに解明が進められているが、いまだ進展はない

そこで彼は目覚めるのを待っているのだ

そんな彼を、詩音は毎日のようにみまっていた

今日もその帰りだそうだ

「あなたがこの世界の人間じゃないなら、ほかの世界の方法で、何とかできませんか?」

「……一つだけ聞こう。なぜ?」

「もう……沙都子を一人にしたくないんです。悟史君を、起こし

てあげたいんです！！」

それを聞いてニツ、と蒔風が笑う

「残念だな。お前の願いうんぬんより、オレがそいつを助けたくな  
つちまつた」

「え？」

「ダメだな・・・人の願いを奪うなんざ。でもまあ、結果オーライか」

「それじゃ・・・」

「連れてけよ。どこにいるんだい。愛しの悟史君は」

詩音が来た道を戻り、蒔風を案内する

もうあたりはすっかり暗い

街灯もないので本当に真っ暗だ

それでも詩音には離れた道で、すすいと進んでいく

そしてこの村の診療所「入江診療所」についた

詩音がカードを通し、地下までの扉を開く

そしてその突きあたりに、一つの病室があり、そこに一人の少年が  
眠っていた

彼こそが北条悟史

難見沢症候群の末期者だ

「入っても大丈夫か？警報とかは？」

「大丈夫ですよ。私のカードはこのトップの人からもらったものですから、警報は鳴りませんよ」

「では・・・ふむ・・・このベルト、取っても大丈夫なのか？」

詩音曰く、それはだめだそうだ

彼は末期症状者。

彼の眼に映るものはすべて敵に見えるらしく、異常な凶暴性をもって襲いかかるそうだ

それを詩音が悔しそうに言った

「だったら・・・何とかするか手始めに・・・と」

蒔風が力を借りる。

その右手が一瞬だけ光る

「さて、この幻想は殺せるのか？」

蒔風が悟史に触れる

しかし何も起こらない

「やはり・・・病気相手じゃ無理か・・・じゃ、次」

蒔風が次の力を借りる

そして爪を少しだけ悟史に食いこませる

そこからナノデバイスを送り、難見沢症候群を消そうとするが・・・

「ナノより小さい？クソつ。だったら・・・そういえば、難見沢症候群って、死んだ奴からは一切見つからないんだよな？」

「そうですね・・・」

「だったら簡単じゃん」

蒔風が悟史の、ちょうど心臓の真上に手を乗せる  
そして一気に衝撃を送りこんだ

周りの計器がピーーーーと静かに、一斉に鳴った

その光景に詩音は取り乱した  
なぜなら、心拍計が0を示しているのだ  
つまりは悟史の死を意味していた

「な、なにをしてるんですか！！悟史君っ！？」

「静かにしてろ！！大丈夫だ。大丈夫」

そう言って蒔風が力を借りる

全身に電気がほとばしる

「オレの雷旺じゃこんな精密作業はできねえけど」

その手を再び悟史の胸にあてる

「さあ、最強の電撃使用の力の見せ所だ」

エレクトロマスター

そう言っただけで電流を流し、ふたたびその心臓を動かしていく  
悟史の心臓が動き出す

そして一つを除き、すべての計器がさっきと同じ数値を示していた  
その一つとは

難見沢症候群の進行度を表す数字。

それが問題なしの1にまで下がってるのだ

「あ……さ、としく……」

「まあ、まだまだ目は覚めないだろう。でも、一週間以内には」

「あ、ありがとうございます!!! 本当に……本当に……」

蒔風の手を握り、詩音が泣きながら頭を下げてくる。  
それを見て蒔風が頭をかきながら言った

「言ったろ。オレが助けたいと思ったただけだ。それに、早くずらか  
らないと、さっきの計器の音、絶対知られたろ」

「はい!!! 悟史君、また明日ね!!!」

それに答えるものはいない

しかし、彼が目覚めるまで彼女はずっと待っていたのだ

あと一週間



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

ひぐらしのなく頃に ～目覚し編～（後書き）

アリス「なんですかあの途中の大演説」

ひぐらしらしさを・・・あれ？

ア「途中になんか入江のメイドインヘブン入ってますし」

きにするな

アリス「そういえば結局試験あるとか言っておきながら更新してるじゃないですか」

もうどうにも止まらない

ア「バカですか」

アホと言って

あとここで言いたいことが一つ

ア「なんですか？」

先日友人に

「お前の小説で            のネタあったけど、あれの世界も行くの？」  
と聞かれましたよ

ア「それで？」

答えは「そうとは限りません」です



作者はネタでしか知らないのに平気で使うんです  
だから

「あれはあの作品のネタだ！だったらあれでるな」

とか思ったらいけません

ア「この詐欺師」

ごめんなさい

この辺でよろしく

ア「次回、「奴」きまつす！！」

ではまた次回

あなたは今どこで何をしていますか

ひぐらしのなく頃に ～「奴」殺し編～

「今日は前回の雪辱を晴らすよ!」

「今日は大貧民で勝負ですわ!」

ここは雛見沢の学校

雛見沢分校だ

今日の部活はここでの大貧民だそうだ

「いいねえ。オレ大好きだよ!」

「簡単に勝てると思わないことさね」

「新人が勝てるほど甘くはないですよ!」

魅音と沙都子が蒔風にかなりの余裕を見せる

「なあ、あの自信はどこから来るんだ?」

蒔風が誰ともなしに聞くと、後ろから声が出た

「ああ。あれはですね、カードの裏面でなんのカードかわかるからですよ」

「げえっ、詩音!」

魅音がその姿を捉らえて叫んだ  
蒔風の背後に立っていたのは詩音だ。

「マジかよ!? オレ絶対不利じゃねえか!」

「大丈夫です。私が教えましょう」

詩音が蒔風にアドバイザを買って出るが、魅音が反論する

「詩音! これは神聖なる部活なんだよ。ってか、あんた来るな! 診療所はいいのー!?!」

「もう大丈夫なんですー。それでこの方には恩があるので、助力させてもらいます」

「詩い・・・それってどういうことなのですか?」

梨花が詩音に尋ねるがはぐらかすばかりだ

「それに、新人さんにここまで本気になるなんて、大人気ないですよお姉」

「あの、いや、オレの方が年上なんだけど・・・」

そんなことを話していると、ガラガラと教室の扉が開いた

沙都子によるタライ落しのトラップが発動した  
しかし入ってきた人物に当たることはなかった

なぜなら、そいつは開けた瞬間にハイの回転蹴りをしていたからだ。  
タライが飛ぶ

それは凄まじい回転をしながら梨花に向かっていった。  
だか梨花には当たらない

蒔風がそれを手刀で真つ二つに裂き、後ろにそのまま飛んでいった  
からだ。

後ろの壁に二つになったタライが突き刺さる。

「な!？」

「誰だ!」

「梨花、大丈夫ですか？」

「こいつ!!!」

一同が一斉に現れた男、「奴」に向かって敵意を向ける。

「んっん」。面白いメンバーだな。さ、まずはあッ!!!」

ドガッシャ!!

「奴」が突つ込む

それに蒔風が立ちはだかり、「奴」の突進で一緒に窓ガラスを砕き、  
外に飛び出す。

蒔風が仰向けになり、「奴」が馬乗りになって蒔風の首に向け手を  
伸ばし、それを蒔風が食い止めている

「あれが「奴」って奴かい!？」

「魅音さん、わかりにくいですわよ、それ」

「舜さん!?!」

みんなが窓から身を乗り出して校庭の状況を窺う

「このやる・・・男に馬乗りになられても・・・キモチワルイんだよ!?!?!」

ドウ!!

蒔風が「奴」の腹を蹴りだし、身体の上からどける

「(バツ!) 変身ッ!?!」

蒔風がエクシードギルスに変身し、その背から出た触手で「奴」を絡め捕り、校舎裏の林に向かって投げる  
その後を追うように蒔風もジャンプし、校舎を飛び越えていく

「オオオアア!?!」

蒔風が「奴」に踵落としを仕掛ける

しかし、「奴」がそれを魔導八天で受け、柄の部分で蒔風の顔面を殴った

蒔風は変身が解け、地面を転がる

「楽しくゲームなんぞしてからに・・・ちつとは警戒してるよ」

「警戒してたからトライ弾けたんだろオが、バアカ」

ズズズ、と蒔風の足元の地面が盛り上がる  
そしてそこから弾丸を射出した

ボボボボボボボボ！！！！！！

連続射出されるそれをすずしい顔をして弾いていく「奴」  
そうしながら蒔風に近づいていく

「どうしたよお前。その程度おア!?!」

「奴」の体がガクンと下がった

「奴」の足が地面に埋まっているのだ

「これだけ打ち出してる土をどっから出してると思ってるんだ」

「奴」が足を突っ込んだのは射出した分無くなって、空洞になった  
ところだ

「レッツセイ！！！！！！」

蒔風が掛け声とともに空中で横回転していき、縦に回し蹴りを「奴」  
に放つ。

「奴」が首を逸らし、肩に当たる

「ぐっ……おおおあ！！！！！！」

「奴」が足を引っこ抜き、ハイキック、そして反対の足でそのまま

後ろ回し蹴りをする

それが蒔風の側頭部に命中し、蒔風が吹っ飛ぶ

蒔風が頭を押さえ、立ちあがりながら聞いた

「お前記憶とか使ってこないのかよ」

「奴」が右肩を押さえながらそれに答える

「いや、だってここの記憶にある奴らなんてただの自衛隊員だぜ？  
そんなの使うなら真っ向から行くわ」

「さいでか。だったら覚悟できてんのかあ?!」

「上等だあ!?!」

ブオン!!ゴオオ!!

ガツギヤ!?!?!

蒔風の「風」「林」の二刀と、「奴」の「廃人」がっば競り合う。

「フン!?!」「ヌア!?!」

それを二人同時に弾き出そうとしたため、二本とも吹っ飛んでいっ  
てしまう

「オオラア!?!?!」

即座に二人の拳が交差し、お互いの顔面に突き刺さった

「いつてえ!!」「お(う)じ(い)……」

二人がまた同時に後退し、距離をとる

「あー！ー！ー！！またメガネ割れたじゃねえか！！せっかくフレーム直したのに！！！」

まあ、伊達眼鏡だったので問題はないが

蒔風が眼鏡を捨てる

そこに部活メンバーが駆けよってきた

「舜さん!!！」

「舜!!大丈夫なのですか!?!」

「バカ野郎!!なんで来た!!!!」

蒔風が一向に叫んだ

それと同時に「奴」が動くのを察知し、カバーに回る

ギギン!!

今度は蒔風の「天」「地」と、「奴」の「獄」が打ち合った

そしてもう一度大きく振りかぶり、激しく火花を散らしながらぶつかり合う。



「通常ならば人の死は一回のみ。それを自分の都合で何度もやり直したあ、都合のいい主人公様だよなあ!？」

バキン!!

蒔風の「天」「地」が飛び、地面と木に突き刺さる

そして脳天をカチ割ろうと「奴」が剣を振るうが、それをなんとか白刃取りする蒔風。

「こいつらはそれに見合う悲劇を・・・なによりも死を経験してきたんだ!!」

「何度も死んで慣れちまってダメならハイ次なんて簡単に世界を諦めるようなやつあ、ロクな奴じゃねえんだ!!」

「ッ!!」

「奴」の腕にさらに力がこもり、グググと蒔風に刃が迫る

「そいつは死に過ぎて、死ぬことがそこまで重くなっちゃいないんだよ!!」

ズシャッ!!!

「奴」が剣を引き裂く

蒔風は真上からの力に対抗してたため、急に引かれて体勢を崩した。そこを切り裂かれ、胸から血しぶきが飛ぶ

「舜!!!大丈夫!？」

「ゲボツ・・・ウガア!!!」

蒔風が畳返して地面をはね上げ、「奴」を退かせる

圭一とレナが身体を支える

魅音と詩音が前に出て蒔風を庇うように立ち、叫んだ

「あんたがなんのこと言ってたかわからないけどね、ここに死ぬことに慣れた奴なんかいないよ!!!」

「同感です。生きることの素晴らしさを知ってるんです!!! 私たちは!!!」

「そうだ・・・だから俺たちはここにいるんだ!!!」

「梨花ちゃんの命が狙われたときだってそう。生きたいから立ち上がったんだよ!!!」

そんな前向きな、希望に満ちた声に「奴」は感心しながらも唾を吐く

「・・・ふん・・・なんにも知らされていないから言えることなんだけどな。あいつらが数多の別の可能性でお前らを見捨てたか・・・知らないから」

「奴」の言葉は彼らには聞こえない

しかし、梨花や羽入の耳には届いていた

「まったく・・・ウルっせえんだよゴタゴタと」

「舜？」

羽入と梨花が心配そうに蒔風の顔をのぞく

蒔風が魅音、詩音を退け、前に出る

「そんなこと」「この世界」で言っただけでしようがねえだろうよ！！こいつらがなんで百年も死を経験し、乗り越えられてきたか考えろよ！！！百回じゃない、百年だぞ！？祖に慣れたならこんな抗いはしない。いいか？死に恐怖し、生きたいという願望があったからこそ、彼女はここまで踏ん張ってきたんだ！！！」

「舜・・・」

「それを世界を壊して新しく作るだあ？バカ野郎が。この子のただ純粋な、生物として最も強い欲望たる「生」を百年間！！！積み上げ続けてやっと手に入れた幸福なんだぞ！！それを、こんなつまらない「死」でさっさと片付けんじゃねえよ！！！」

「そのたった一人のために、他の者が泣いたのだぞ？それはいいのか！答えろ、翼人！！！」

「翼人？」

「そいつの願いはこの子の命の上に立っていた。そんな願いが叶うくらいなら、打ち砕いてやった方がいいに決まってる！！！」

そして蒔風が一步踏み出し、その体が輝き始める

「誰か死や涙の上に立つ願いなんか認めない。あるとすれば、それ

は歡喜の涙だ！！！開翼！！！！！」

ドン！！！！！！

時風の背に銀白の翼が展開される！！！！

「願いをこの背に！！！！」

ゴオオオオオオ！！！！！！

人から、空気から、大地から噴き出した金の粒子が時風の周りをドーム状に包んでいく

「願い・・・させると思つかあ！」

「奴」が飛び出す。

そこでどこからともなく声が聞こえた

【higurashi nonaku koronni】  
LD LINK - WEAPON - WOR

瞬間、「奴」の体が止まる。否、「奴」だけでない。

木々の葉っぱ、宙を飛ぶ虫、空気の流れさえも止まった  
動いているのは時風と部活メンバーのみだ

「これは・・・」

「時間が止まった!？」

「いくぞ……」

当然「奴」には届いていない。

しかし、蒔風がはつきりと宣告した

……ヒュンヒュンヒュンヒュン!!バシィ!!!

それと同時に一本の剣が蒔風の手へ飛んできた

形は太刀から右上と左下から枝分かれしたようになってる剣だ  
その剣の名は、「鬼狩柳桜」おにがりのりゅうおう

ここ雛見沢に伝わる伝説の宝刀!!!

「又、おおお!!!」

蒔風が「奴」を上空に「奴」を投げ放つ

もちろんそれでも「奴」は止まらなかった

時間が止まってるため、最上部まで上がって、そこで止まる

「見るよ、あいつアホみたいだなー」

「あははは!?!」

レナが笑った

もう心配することがないとわかっているかのよつに  
そしてそれにつられて皆が笑う

蒔風も大笑いして、キツ、と「奴」を睨んだ

「仕留める！……！」

【higurashi nonaku koronni】  
- WORD LINK -  
FINAL ATTACK

ドオウ……！」

蒔風が今までにないほどの「願い」の輝きに包まれる……！！

「ふははははは……！！百年分の「生きたい」衝動……！！これはいい……！！いいぞお……！！」

頭上で二回鬼狩柳桜を回し、両手で持ち、力を込める

「はああああああああ……！！……！！」

そしてすべての力をその剣に……！！

すべての力を突撃に……！！

蒔風の翼が大きく撓<sup>しな</sup>り、砲弾のように飛び出した……！！

そして止まっていた時間が動き出した

「奴」には何が起きたかなぞわからない

急に放り出されたようなものだ  
どっちが上かもわかるまい

ヴォン、ガゴン！！！！！

そして時風が「奴」を切る。

「奴」の切られた部分から金の粒子が噴き出してくる

「いひひひひひひ！！！！願ひ、ネガイ、NEGAI！！！！こんな  
純粋な願ひは初めてだ！！！！消えちまいなこのやろっ！！！！」

「う、うわあああああああああ！！？」

「毎回毎回ボコボコにされてから、必死の逆転ばっかしてんだ！！  
！今回くらいは楽に勝たせろや！！！！！！」

ギョオア！！！！ドゴオオオアアアア！！！！！！！！！！

「奴」が爆散四散し、消え去る。

そして時風が降りると、みんなが出迎えてくれた

.....

「まさか翼人とは思わなかったのですよ」

「羽入、知ってるのですか？」

蒔風が次の世界に行く見送りで、羽入が言った

「翼人とは、ボク達の一族の救い主なのですよ」

「えっ!？」

「梨花には前に話しましたが、ボク達も元はと言えばこの世界の住人ではありませんでした。この世界に辿り着くまで、ある翼人に助けてもらったことがあるのですよ」

「でもそりゃ俺のとは別の翼人だぜ？」

「それはわかってるのです。彼はもっとかっこいい顔でしたのですよ」

「……オレは？」

「メガネかけてフツーですね。無いとパツとしませんです」

「……」

今の蒔風はメガネを掛けていない

二回も連続で壊れたので、もう嫌になったのだ

しかし……



「だ、大丈夫だよ!!」

「そ、そうですね!!今まで掛けてたからそう感じるだけですよ!!」

「否だもつ!!やっぱり掛ける!!」

蒔風がどこからともなく眼鏡を取り出し掛けた

「で、もう行くんですか?」

圭一が聞いてくる

「ああ、次が楽しみでしょうがねえよ」

「がんばってくださいね」

「応援してるよ!!」

詩音と魅音が声をかけてくれる

「じゃね、がんばれよ。お前らも」

『おっ!!!!』

「Gate Open . . . higurashi no naku  
koro ni」

蒔風の足が止まり、一言だけ言った



ひぐらしのなく頃に ～「奴」殺し編～（後書き）

先に言つといちゃいます

次の世界は「仮面ライダー S P R I T S」です

アリス「今回は言うんですか？しかもまたマイナーな・・・」

いや、平成仮面ライダーだすなら昭和も出した  
いでも、昭和の各作品回ってたらキリないでしょ

ア「まあ、それはそうですね」

ただえさえ平成もあるのに・・・

だからひとまとめにしちゃおう！！ということですよ

ア「これわからない人はどうすれば？」

・・・Wiki？

ア「うおおおおおおおい！！！！！！」

気になったら読んでみるとか・・・

すみません

なるべく説明入れますんで

【ひぐらしのなく頃に】

構成：“輝志” 50%

”LOND” 50%

最主要人物：古手梨花

- WORLD LINK -  
- WEAPON - : 時を止め、鬼狩柳桜  
を装備

- WORLD LINK -  
- FINAL ATTACK - : 梨花  
の廻った世界の「生きたい」という願望までも得る

今回のWORLD LINKで集めた「願い」は今めで梨花が百年  
繰り返してきた分の願いですから

ア「ハンパないですね」

ええ

あと、次回は一話でさっさと終わらすつもりです

ア「仮面ライダー好きなのに？」

原作の方がまだ途中なんですよ  
だからついたらいきなり戦闘

ア「そんなに大丈夫なんですか？」

なんとかします、はい

ア「次回、昭和仮面ライダーズ!!!!!!（10号まで）」

ではまた次回

時代が望む時、仮面ライダーは必ず蘇る

仮面ライダーSPIRITS ～昭和って便利だよ～（前書き）

変身するライダーと本名を書いていきます

一号・本郷猛士

二号・一文字隼人

V3・風見志郎

X・神敬介

アマゾン・山本ダイスケ

ストロンガー・城茂

スカイライダー・筑波洋

スーパー1・沖一也

ZX・村雨良

です

アマゾンは本名あるんですが「アマゾン」としか呼ばれません

あとスーパー1の「1」は「ワン」とお読みください

## 仮面ライダー SPIRITS ～昭和って便利だよ～

ただ広がる黒い空間

黒いと言っても暗いわけではなく、視界ははっきりしていた

そこに仮面ライダー<sup>ゼクロス</sup> ZX・村雨良はいる

「この空間はなんだ？バダンの仕業か？」

<sup>バダン</sup>  
BADAN

これまで仮面ライダー一号、二号が相手をしてきた「ショッカー」から始まる組織を裏で操っていた大組織

その組織とは「ショッカー」「ゲルショッカー」「デストロン」「GOD 秘密機関」「ゲドン」「ガランダー帝国」「ブラックサタン」「デルザー軍団」「ネオショッカー」「ドグマ」「ジンドグマ」である

今それらの組織はバダンによって復活させられ、日本各地に展開されている

そして世界征服の名のもとに、世界中の空軍を潰し、日本を占拠せんとしている

一号から始まる、二号、V3、ライダーマン、X、アマゾン、ストロンガー、スカイライダー、スーパー1の仮面ライダーたちもまた、各地に散って戦っている。

ZXは各地に向かい、それぞれのライダーと協力して戦っていたのだ

しかしその途中で、急にこのような空間に取り込まれたのだ。

「バダンには確か魔法陣のようなものを用いた空間移動があったが・  
・これか?」

《良!!聞こえるか!?!》

《本郷さん!!》

ZXに本郷からの通信が入る

《お前もここにいたか》

《お前も……ってことは他のライダーも?》

《合流しよう。一人では危険だ》

良は変身を解き、交信を頼りに他の九人と合流する。

「本郷さん」

「良。大丈夫か」

「ああ。でもこの空間はなんなんだ?」



「さっきホッパを打ち上げたが何もわからない」

村雨の言葉に志郎が答えた

ホッパとは「V3ホッパ」という彼のツールのことだ  
打ち上げることで上空に停滞し、そこからの映像を送るのだ

「それで何もわからないとすると・・・」

「ああ、だから俺たちは待ってるんだ」

「待っている？」

一文字の言葉に良が訊いた  
それに結城が答える

「バダンにしるなんにしる、こういったことをするならば意味があるはずだ」

「だからここで待ってりゃ敵さんのほうからノコノコ来るってわけだ」

結城の言葉を茂が継ぐ

「待ってくれ。「バダンにしるなんにしる」？こんなことするのはバダンしかないんじゃない？」

「そうなんだが・・・」

「ガウ・・・ここ、バダンの空間と違う」

アマゾンが何か釈然としないように言った

「アマゾンのこう、野性じみた・・・というか野性の勘はバカにできない。彼には何か感じるところがあるんだろう」

敬介が説明を入れる

良は合点がいったようだ。

かといって何が進展したわけでもない

「とにかくは待つしかないってこと・・・か」

「いやいやいや。そんなに待たなくてもいいぜ？仮面ライダー諸君」

『！？』

どこから声がした

「みんな、あっちだ！！！」

洋が気づき、皆を促す

その指がさす方向

そこには「奴」がポツンと立っていた

「貴様、バダンか!!!」

志郎が叫ぶ

それに対してどーでもいいように「奴」が答えた

「バダン？ああ、あんな雑兵と一緒にしないでくれよ。こっちが狙ってんのは「世界」なんだから」

「奴」の言うことは彼らには理解できない  
それでも「奴」の言葉は続く

「いや、実はそのZ Xだけでもよかつたんだけどさ、かつての最  
主要人物がここまできると不安だし・・・だから全員殺ることに  
します」

「な!?!」

「まあ、さ。だからこう・・・死んどけ」

ズズズズズズズズズズ・・・

「奴」の体が地面にトブン、と沈み消える

そして地響きとともに大地が揺れ、10人の真ん中が盛り上がり上  
がって  
いく

そこから巨大な「奴」が盛り上がっていく

皆がバラバラになりそこから離れる

「奴」の全身があらわになる

身長は40メートルほど

姿かたちは全く変わらないが、あまりにもでかすぎる

「コイツッ！！・・・!?」

一文字が悪態をつき、その表情がきつくなる

「良！！！！！」

叫んだときにはもう遅かった

良が転がった先で体勢を整えようとしているところに、「奴」の巨大な拳が迫る  
変身も間に合わない

その拳は確実に彼を粉碎してしまっ！！！！！！

皆が良の名を叫ぶ。

しかしその拳は止まらない。ここにいる誰にも、止めることはできない！！！！

「Gate Open . . . KAMEN RIDER SPIRI  
TS」

「バチィ!!!!!!」

そんな状況において、その拳は弾かれた  
世界最強の男の襲来を告げるその門によって!!

「蒔風え!!!!!!」

「おいおい . . . いきなり展開クライマックスかよ」

「お前は? . . . . .」

「オレは蒔風舜。説明している暇はないみたいだな . . . 今回はこれ  
れで」

蒔風が良の額に指をあてる

すると、良の頭に情報が流れ込み、すべてを理解した

「これは . . . あんたは!!!!!!」

「他の人には交信でその情報を伝えてください」

「あ、ああ!!」

「では . . . 行きますか?」

「良!!!!今の話は・・・本当なのか!？」

他の皆が駆けよってくる

蒔風に対しては半信半疑だ

「信じてくれるとありがたいです。でも」

「でも、なんだ」

本郷が蒔風に聞く

蒔風が意地の悪そうな笑いをして、こう言った

「このままじゃ全滅ですよ?それに、もしかしたらあなた達のうちの一人でもやられたらそれで世界は・・・」

「・・・そうだったな」

「本郷さん?」

「信じよう、君を。力を貸してもらえるか?」

「ハナっからそのつもりです。俺としても、あなた達の力を借りなければキツイでしょうしね」

「みんなは?」

本郷がほかのメンバーに聞く

「本郷がいいというんだ。オレはいいぜ」







「あの巨体でッ!！」

「なんてえ速さだ!!!!!!!」

「セイリングジャンプ!!!」

「トオ!!!」

皆が回避する中、空中移動の可能なスカイライダーとゼクロスが飛ぶ

「衝撃集中爆弾!!!!!」

ドゴゴウ!!!!!

「奴」の顔面に向け、ゼクロスの衝撃集中爆弾が炸裂する

煙の中から奴の顔がチラリと見える

「スカアイ!!!キック!!!!!」

その眼に向け、スカイライダーがキックと放つ

「~~~~~ッハア、フウ~~~~~ッ!!!!!」

それに向けて「奴」が思いっきり息を吹きかける

その風に煽られ、スカイライダーがバランスを崩す

「奴」の手が捕らえようと伸びる、が。

「大切断!!!!!!!!!!」

ズバァ!!!!!!!!!!

アマゾンのその手のカッターによる大切断で「奴」の腕が落ちる

「ウぬ!!」

「奴」の腕は落ちると消えた。

そして驚くべきことにビュルルル!!!!と「奴」の腕が超速再生し元に戻ってしまった

「ガウ!?!」

「この・・・野性児が!!!!」

「奴」が魔導八天を取り出す

その剣も主に合わせて巨大になっている

「フン!!!!!!」

ゴゴウ!!!!!!!!!!

その強靭がアマゾンに襲いかかる

「アマゾン!!!!!!!!!!」

スーパーとストロンガーが同時に叫び、「奴」に攻撃する

「エレクトロファイヤー!!!!」

「チエーンジ！！エレキハンド！！！」

ストロンガーはその手から放たれた電撃を地面からスーパー1は直接に「奴」に向けて電撃を放つ

その電撃に「奴」の動きが本当に少し鈍る。

しかし「奴」はその程度で止まることはない。

「「ライダーアーーーー！！！！ダブルキック！！！！！」

ドドドガガア！！！！！！

その剣の横つ面を一号、二号のダブルライダーのキックが命中するそれによって「奴」の剣がずれ、アマゾンが回避に成功する

「大、回、転、スカイキック！！！！！」

そこにスカイライダーの回転キックが「奴」の額に当たる「奴」が少しよろける

さらに

「ゼクロスキック！！！！！」

ゼクロスのキックが立て続けに炸裂し、「奴」の巨体が後ろに仰け反る

「ぐ……この……虫けらが……！！！！！！！」

「ロープアーム!!!!!!」

ライダーマンのロープが「奴」の足が巻き付く  
体勢を整えようとしたところにそれである

「奴」が大地にむかって倒れていく

そこに背中からバツ、とV3が現れる

「V3イーーーー!!!!!!」

ダン、ガン!!!!!!

「反転キック!!!!!!」

ドガツ、ガアア!!!!!!

一度、二度と両の足で立て続けに蹴り、最後に一撃を当てる「V3  
反転キック」によって倒れかけた奴の体が真っ直ぐに起き上がる

その首元が掴まれる

そこにいるのは、Xライダー!!!!!!

「真空・・・地獄車あ!!!!!!」

「グッ、おおおおお!!?!?!?!?」

ズゴオオオオ!!!!!!



「舐めるな貴様ら！！！」

「奴」の体が起き上がり、全身から波動を放つ  
それにより全ライダーが吹き飛ばされ、地面を転がる

「ぐっ……あれだけ食らってもまだこれだけの力が……」

「蒔風！！切札の準備、できてるよな！？」

「ああ！！！」

蒔風がその答えに発動させる！！

【K A M E N   R I D E R   S P I R I T S】 - W O R L D   L I  
N K - ~ W E P O N ~

「全員、パワーをゼクロスに！！！」

「そうか……バラバラなら無理でも！！！」

「一つにすれば！！！」

ギョオオオオオオオオ！！！！！！

9人ライダーのベルトが回る  
そのエネルギーが、ゼクロスに!!!!!!

「おおおおおお!!!」

「奴」がそこを踏みつけようとする

「さ、せ、る、かあ!!!!!!超・絶!!!!!!畳返し!!!!!!」

ダバン!!!!!!ズツ、ドゴゴゴゴオ!!!!!!

その畳返しはいつもの物とは違った  
なによりその大きさが桁違いだ

「奴」と同じぐらいの大きさの畳返しだが、起き上がってくる  
しかしさすがにそれだけの重量は持ちあがらないのか、途中で減速  
する

「ハッ!!!見かけたお・・・」

「まだまだまだあ!!!!!!」

時風が畳返しの背に向かって跳び、中腹辺りで滞空する





【KAMEN RIDER SPIRITS】 - WORLD LI  
NK - FINAL ATTACK

「おおおおおお！！！！！！」

時風が気合を込めて能力を施行する

「奴」に埋め込まれた岩石が土惺の力で「奴」ごと浮き上がっていく

「行けえ！！！！ゼクロス！！！！」

「おお！！！！！！」

時風が「奴」の巨体を高速回転させる

ゼクロスが力を右足に集め、回転キックを「奴」の回転の中心に減り込ませる！！！！

そのキックは・・・「孔<sup>あな</sup>」を「穿つ」！！！！

「ゼクロス！！！！穿孔キック！！！！！！！！」

ドギユアアアアア！！！！！！！！

ズムツ、ボツ、ギアアアアアア！！！！！！





t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

仮面ライダーSPIRITS ～昭和って便利だよ～（後書き）

アリス「本当に一話完結ですか」

いや、このマンガが熱いよ？

マジ熱い

かつこよすぎるよ仮面ライダー！！！！

ア「ではなぜ？」

前回も言ったけど、原作がまだ途中で・・・

どこのタイミングで蒔風を放り込めが言いかわからなかった

だからどの時期に蒔風がやってきたかは明言しません  
とにかく「蒔風が来て「奴」を倒した」ということで

ア「それにマイナーですしね」

そうなんですよね・・・

でも昭和ライダーも出したかったし・・・

【仮面ライダーSPIRITS】

構成：”ライクル” 60%

”LOND” 40%

最主要人物：村雨良（仮面ライダーZX）

- WORLD LINK - } WEAPON } : 全ライダーのパワー  
をゼクロスに

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : 蔦風  
と共同作業による超ゼクロス穿孔キック

と言っても、他のライダーを殺しても世界崩壊にはつながりませ  
どね

ゼクロスなら一発、ということですよ

ア「なるほど。それにしてもみなさん蔦風に対して納得するの速く  
ないですか？」

それが昭和の意気込みさ!!!  
タイトルにも書いてあるだろ？

ア「「めぐ銀」史上最悪のタイトルですね」

・・・いわないで

ア「次回、夏の海、ゴール」

ではまた次回

にははっ

## A i r 　く生きる、ゴール、スタートく

### ある物語の終末

少女と母が向きあい、言葉をかわす

「もう一度だけ、がんばろうって決めた、この夏休み。往人さんと出会ったあの日からはじまった夏休み。

いろんなことがあったけど、つらかったり、苦しかったりしたけど

私、がんばってよかった！

私のゴールは幸せと一緒にだったから、ひとりきりじゃなかったから、だから、だからね、もうゴールするね・・・」

「あかん、観鈴。きたらあかん、ゴールしたらあかん！

はじまったばかりやんか、昨日やっとスタートきれたんやないか！

取り戻していくんや、10年前にはじまってたはずの幸せな暮らし  
これから観鈴と取り戻していくんや！

うちの幸せは始まったばかりやんか！」

海辺で母と子が抱き合う

母の名は神尾晴子

少女の名は神尾観鈴

いま彼女の命は古の呪いに蝕まれて、消えようとしていた。

「Gate Open - - Air」

その海辺のある町のとある一軒家の屋根の上

そこにゲートが開く

と、同時に蒔風が飛び出し、海辺に向かって跳躍した  
隣を見遣ると時空が歪んで「奴」も現れた

「蒔風え！わかってんな！？」

「奴」の叫びを蒔風は瞬時に理解した。

「くそつ、仕方ねえ！」

ガシッ！！

蒔風の腕を「奴」が掴み、海辺の二人に向け投げ放った。



蒔風が二人に急接近する。

蒔風が力を借り受け、右手が淡く光る

「その悲劇げんそつ！いまここでぶち壊す！！」

ダンッ！

蒔風が着地する。

晴子は突如として現れた蒔風から観鈴を守ろうと身体を振る。  
しかし蒔風はそれに構ってる暇はないのだ

「彼女を死なせたくないならどいてくれ！」

蒔風が半ば強引に晴子を退かし、右手を背中に当てる。

バギン！！と砕けた音が鳴り響く

消えようとしていた彼女の命が留まる。

蝕んでいた呪いが身体から消えた。

「っは！……お母さん？」

「み、観鈴？観鈴！！大丈夫なんか？なああんた！！観鈴はもう大丈夫なんか！？」

「大丈夫に決まっています。そうじゃなきゃ、オレが困る」

答えたのは蒔風ではない。

三人がいる海辺の町側の堤防の方に「奴」来た。  
浜辺に降り立ち、こちらに歩いてくる

「最主要人物に消えられて、そいつにまで死なれたら困るし」

「あ・・・あんたも助けてくれたんか？」

それに答えたのは「奴」ではなく蒔風だ

「確かに助けてはくれた・・・だが決して味方じゃない」

「どづいつことや？」

「「奴」はな、自分の手で殺すために神尾観鈴を助ける手伝いをしただけだ！」

「う・・・嘘やる？」

「そこで見ててください」

蒔風が「林山」を突き立てる。

神尾親子を「山」がバリアが包み、「林」が観鈴の体力を回復させていく。

「玄武、頼んだぞ」

「どこまでですかな？」



ギシギシと音が響いてくる。

それは二人の噛み締める歯ぎしりの音が  
それともせめぎ合っている箇所のが

「「ダアツ!!」」

ドツ、フン!!

ブワアアア・・・

「奴」と時風が同時に力を無動で相手にたたき付けた  
その衝撃は周りに散り、浜辺が窪み、周囲に砂を撒き散らした。

バリア内

晴子が時風と「奴」の戦闘を見て驚きの表情をする

「な、なんやこれ。ほんまにあんたの言った通りなん？」

「そつだの。さっき儂が説明したとおりだの」

「あ・・・」

「!!観鈴!身体、大丈夫か？」

「うん・・・あの人は、どうして」

「戦う理由ですか？」

「ううん。実はさっきから聞いてたんだ。でも、それなら私がこの

「まま……」

「確かに観鈴嬢があのまま召されておれば「奴」は手だし出来なくなりませぬ」

「あんた！」

晴子がその言葉に少し憤る  
それを観鈴が止める

「大丈夫だよ。でも、助けてくれたもん。あの人は……蒔風さんはなんで？」

「……主は様々な世界をめぐっておる。その中で世界を救い続けてきたのう。しかし、主にも救いきれないものがなかったわけはないのじゃね」

玄武が一旦言葉をとぎらせ、また話す。

「自らの世界がその一つだった。その瞬間から主は決めたのじゃ」

「なにを？」

玄武は戦う主に視線を向ける。

いくら傷ついても倒れず、決して見捨てぬその意志と、世界を背負うその背を見、誇りを持ってこう言うのだ。

「救えるモノは根こそぎ救う。ただ一つの信念、彼自身の願い」

「信念……」

「主はいろいろな事を考えておる。しかし、その根幹はたった一つのそれなのじゃ」

ガツ、ゴオオオオ!!!

蒔風の背に銀白の翼が現れる

そして叫ぶのだ

「物語？世界？そんなかんげえねえ、関係ないんだ!!!  
ただそこで理不尽に消えていく命があるんだ。」

救う理由はただそれだけでいい  
戦う理由もそれだけでいい  
それ以上もそれ以下も必要ない

誰かが助かって誰かが笑うなら  
なんだって相手にしてやる

世界も、運命も、自分自身でも!!!

なんであろうと相手になるぞ

オレは世界最強、銀白の翼、願いの翼人!!!  
見ておけ……これが俺せかいの正義だ」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

A i r 〱生きる、ゴール、スタート〱（後書き）

アリス「A i rの世界ですね」

key作品から二つ目です

ア「そういうえば今日テスト終わったんですよね？」

そうだね〱

ア「結局休みませんでしたね、更新」

オレ偉い！？

ア「それでテストの結果がいいなら」

.....

ア「卒業できませんよ？大学生さん」

.....単位はまだ足りてるもん！！！！

ア「さいで」

本当だよ！！！！

ア「次回、純白、翼、開翼」

ではまた次回



が、  
が  
あ  
・  
・  
・

A i r 　↳ 没死、必死、決死　↳

「鎌鼬切演武、四季早々・花吹雪」

時風の剣技が「奴」に襲いかかる。

「くっ、お」

「終わらせるぜ」

時風がさらに夏、秋と続けようとする

「フンツ！爆落ばくらく！！！！」

ドッ、ズガ！！！！

「奴」が魔導八天を地面に叩きつけ、爆発したかのように砂塵が舞う

「おお！？ツブ！！砂口入ったあってうお！？」

切演武が掻き消され、さらに地面が陥没してそこに向かって時風がズルズルと引きこまれる。  
まるで蟻地獄だ

足首まで沈んだところで、蒔風が空中に飛びそこから脱する

しかし

「蒔風さんいらっしや〜い」

「な、ん!!!」

ガゴツ!!!

蒔風を待ちうけていたのは「奴」の振るう魔導八天だった。

タイミングばっちり蒔風の頭部をとらえたそれは防がれはしたが、その衝撃は殺されることなく叩きつけられる。

上昇してた蒔風の体そのままの軌道で戻され、蟻地獄のど真ん中にのめり込む

「主!!!」

「地獄に堕ちろや」

「奴」が着地し、観鈴達の居るバリアに向かって歩いてくる

「おのれ貴様あ!!!」

玄武が飛び出し、「奴」に向かう  
その手に玄武盾を出現させ、砂浜とは思えないスピードを出す

ドゴン！！！！

「奴」のケンカキックと玄武盾が真つ向からぶつかり合う  
玄武も「奴」も一步も引かず、凄まじい衝撃をまき散らしその場で止まった。

「僕の防御力は十五天帝随一の物！！！！そう簡単には破れまいて！！！！」

玄武が「奴」に余裕気と言った。

時風がいつもやるように、自信満々に

だが

「そうだな。だがそれは時風の事。お前ひとりじゃ・・・なあ？」

ピ・・・キ・・・

「！？バ、そんなバカなことが・・・！！！！！！！！！！」

ピキキキギギギ！！！！

「引つ込めよ。本来前菜程度の奴が、今更戦場に出てくるな」

バガア！！！！！！

玄武盾が砕け、「奴」の蹴りが玄武の腹部をとらえる

鳩尾に命中したそれは玄武の意識を彼方へ飛ばし、海にまで身体を吹き飛ばした

「単体じゃ思ったほど堅くねえな、あの亀。さあ〜とと、オレに生かされた命、オレのために消えてもらおうか」

「奴」の手が観鈴に伸びる。

晴子が「奴」の手を払おうとするが、簡単に投げ出されてしまう

「いや・・・いやぁ・・・助けて・・・」

「今だけだ。新たな世界で、お前も、お前の愛しい人も、蘇る」

「奴」の言葉には本気の想いがこもっていた

殺意でもなく、悪意でもなく、純粹に世界を造り変えたい

そして皆が笑えるような新しい世界に

その想いだけ

それしかなかった

それしかないから他の犠牲など気にも留めない

新たな世界しか見ない

その過程で流される涙、悲しい想い、怨嗟の叫び

そのすべてなど、どうでもいい

ましてや主要人物のなど

「奴」の手が観鈴の目に触れようとするまで、あと三ミリ

ドッブア！！！！

「スーパーライダーー、月面キック！！！！！」

ドゴオ！！！！

その背後で蟻地獄の中心部が噴水のように噴き上がり、そこから銀色のライダーが飛び出した

仮面ライダースーパー1に変身した蒔風が、そのまま「奴」に向かってキックを仕掛ける

「奴」が振り返り、その腕がキックを受け止め、後ろに流す。

蒔風はそのまま観鈴の元に着地し、彼女を抱えて晴子の元に届ける。

「お母さん！！！」

「う・・・観鈴？」

「大丈夫ですか!？」

蒔風が晴子に呼び掛ける

「あんだ・・・蒔風って言ったっけ？あんだなん？」

外見がスーパー1なので、晴子が恐る恐る聞く

それに蒔風が答えた

「そうです。玄武は？」

蒔風の声がしたので安心し、晴子は言った

「「奴」に吹き飛ばされて・・・海に」

蒔風が海のほうに視線を向ける

「・・・大丈夫でしょう、あいつなら」

そう言いながら変身を解く

「引き続きここにいてください、絶対に」

蒔風が「奴」に向かう

「んん？なんで出てこれた？・・・ああ、そういや、スーパー1は・・・」

「そういうこと、だ！！！」

蒔風が「奴」に向かって駆けだす

蒔風がああ、の蟻地獄を抜け出せたのはひとえにスーパー1の能力のおかげだ

仮面ライダースーパー1は本来宇宙開発用のサイボーグだったのだゆえに、無重力までは無理だとしても、重力操作はお手の物だ。

それによって重力を軽減させ、蟻地獄を一気に抜け出せたのだ

バツキ！！

「一気にあんだだけのライダーと出会っというてよかったぜ！！」

「能力だけかよ。たいした事ねえな」

バゴゴン！！！！

ズツシャア！！！！

時風が地面スレスレに右で回し蹴り、「奴」の左足を払いにかかるそれを「奴」が足をあげてかわし、踏みつけようとする

それをさせる時風ではない。

両手を地面につき、逆立ちするような勢いで左足で蹴りあげる

そのまま逆立ちしたまま足を広げ、カポエイラのように蹴り攻める

ガガッ、ガッガッガッ、ゴガガガガガ！！！！

時風の額に汗がたまっていく。

それに対して「奴」は涼しげな顔だ。



くる攻撃を受け止めるだけで、弾きもしない。

まるで攻撃の来たところにうまく腕や足を当てはめていくゲームをしてるようだ

「どうした蒔風、きつそうだな？そんなに汗かいちまってよ」

「ハッハッハッ・・・できの悪い砂風呂に使っちゃまったからな！！」

「だったら体冷やせやあ！！」

ガシッ！！

蒔風の脛を脇に挟み込み、「奴」がブン回し始める  
そして蒔風を海のほうに投げ放った

ドッパン！！！！

そんなに浅い入射角でもないにも拘らず、蒔風の体が水面ではねた。

「水」とは恐ろしいものだということを知ってるだろうか？

あれほど滑らかで、スラスラと流る水は、実はとても硬くなることがある  
いや、実際に水が硬く固まるわけではない  
しかしその硬度は銃弾をも砕く時がある。

ハンドガンならば銃弾は容易に水の中に入ってくる  
しかしなん十三ミリもの機関銃で水面を撃った場合、銃弾そのもの  
力によって、砕け散るのだ

水が、ではなく、銃弾がだ

突入してくる物の力によって水はそれ相応の牙をむいてくる

石を浅く投げてはねさせる「水切り」も同じだ

あれは「低い」角度で投げ、「回転」させるといふ二つの力があつ  
てこそ水の上を撥ねるものだ

しかし今回時風の体は「高い」角度でほぼ「無回転」で投げつけら  
れてそれで跳ね上がったのだ。

その威力が想像できるだろうか  
それによって時風の体に残されたダメージが想像できるだろうか

「あ主！！！！」

ドッバア！！！！

海中から玄武が獣神体で海上に飛び出す

その口から水流が放たれる

クア！！！！

「玄武！！！！！」

蒔風の眼が見開かれ、くるりと空中で回転して体勢を立て直す  
それだけでもボキゴキとアバラが悲鳴を上げる

そこに玄武の放った水流が届く

蒔風がその先端に足の裏を合わせ、勢いに乗って飛び出していく  
！！

途中で水流はなくなり、玄武も剣の状態に戻ってしまう

それでも蒔風の勢いは止まらず、「奴」に向かって突っ込んでいく。

「おおおおおおお！！！！！！」

蒔風が腕を「奴」に向かって伸ばし、殴りかかろうと鬼神のような  
表情をして迫る

そんな蒔風を「奴」は呆れたように見、たい体を返す

スツ、と「奴」が蒔風をかわし、通り過ぎていく蒔風の後頭部に回  
転蹴りを上から下に真っ直ぐ叩き落とす

「じ……げ……」

「沈みなさい。そしてそのまま死ぬのです」

「お……断りですのことよ……！！」

蒔風が叩きつけられながら身を回転させ、「奴」に蹴りかまそうと  
する



A i r 　↳ 没死、必死、決死　↳ （後書き）

アリス「時風終わり？」

ではないですけど・・・  
やばいっすね

ア「で、なんか途中で字数稼ぎにしか見えない説明入りましたよね？」

・・・

キニスルナ

ア「あの解説本当にあってんですか？」

・・・多分

ア「たぶんで！！！」

だから違うんじゃない？と思ったら指摘をどうぞ！！！！

ア「間違い探しか！！！」

でも強力な機関銃とかで水撃つと弾丸が砕け散って水の中大丈夫なのはホント  
角度にもよるけど

ア「なんかうさんくさ」

うっさい！！なんかテレビでやってたんだよ！！

「世界 見え」みたいなのでさ！！

ア「さいで。あと、次回予告と違いますか？」

・・・

ア「純白も翼も開翼も出てませんよね？」

・・・

ア「むしろ時風ゴールですよね？」

・・・もういいよ

お願い

ア「拗ねないでください。予定通りいかなかったなら行かなかった  
で言いなさい

次回、今度こそ！！純白、翼、開翼」

ではまた次回

観鈴ちゃん、びんち

A i r く覚醒、純白の翼く

蒔風が静かに目を閉じてから十秒がたった。

「奴」にしては時間をかけ過ぎる

蒔風がもう一度、瞼を開けた

「いてっ、この・・・なんなんだよう。もーーーーー!!」

「奴」の頭部に黒い何かがまとわりついているのだ。

否、「何か」ではない。

カラスだ

その光景に蒔風は驚く

一羽のカラスが「奴」の頭を突いていたのだ。

「奴」の行動を邪魔するように

敵うはずもないと知りながらも、戦っていた

「くっ、こいつ・・・邪魔だっつとおしい!!...!!」

バキッ

クアーーーー!!

そのカラスが叩き落とされる  
怪我はないようで、もう一度立ち上がるが、それでもぐったりして  
いた

「ふん・・・観鈴嬢の飼っていたカラスか・・・」

そう。カラスの名は「そら」

そのカラスは観鈴が少し前から飼っていたカラスだ  
飼っていたといっても勝手に拾ってきただけが。

「不幸の象徴のカラスまで来るとは・・・お前も終わったな」

その光景を見て蒔風の体に何かが燈る

その何かが蒔風のもう動かせないだろう顎を、舌を、喉を動かした

「・・・・・・・・い」

蒔風の口から言葉が漏れる

「奴」にそれは聞きとれていない

だからさらに言葉を紡ぐ

「お・・・じゃ・・・い」

「・・・・・・・・あん？」



言葉が「奴」の耳に届いた  
しかしまだわからないようだ

だからまだ言葉を紡ぐ!!

「終わりじゃない・・・まだ、終わってない・・・始まってすらも、  
いないんだ!!!」

【Air】 - WORLD LINK - WEAPON

「彼女たちの物語は・・・始まるはずだった。でも、終わろうとしていた。それが始められるんだ。邪魔はさせない・・・」

蒔風の体はいまだに浜辺に転がっている  
それでも、蒔風にはやるべきことがあった

こんな状況になっても、世界は蒔風に戦うことを求めたのだ

ゴオオオオオ!!!

そらの身体が白く輝く。

そしてその光は人の形をとっていく

光は観鈴の元に飛び、そして徐々に光を失っていった

そこに立つ男は……

「え？……往人<sup>ゆきと</sup>……さん？」

「ああ……観鈴！！！」

そこに立つのは国崎往人。

神尾家に数日間居候していた青年だ。

彼の持つ法術という力。

ただ人形を操るだけの力。

しかし彼はその力を限界以上に使い、観鈴の死を数日間だけ伸ばした。た。た。た。た。た。た。

たった数日

その数日で神尾親子は救われたのだ。

親子の姿を取り戻せたのだ

しかし、彼はあその身にあまり力を行使したために消滅してしまっ  
た。

だが、彼は「そら」に姿を変え、観鈴を見守っていたのだ。

その思いが、今ここに、彼の復活という奇跡であらわされた

「往人さん……往人さん！！！」

「観鈴……よくがんばったな……」

「もういなくならないでえ……」

「泣くな泣くな（ペシッ）」

「が、がお……」

「それやめろって（笑）」

離れたところのその軌跡を目の当たりにし、「奴」の顔がギシリと歪んだ。

「最主要人物の復活……ターゲットが戻ってきたあ!!!」

地面に倒れる蒔風を放って「奴」が国崎に突っ込む

しかし、蒔風の発動のほうが早い

「いけ……純白の」

【Air】 - WORLD LINK - FINALE ATTACK  
K

国崎、美鈴、晴子に迫る「奴」

だが、それが届くことはなかった

「往人さん・・・私ね、翼・・・見つけたよ!!!」

バツサア!!!

観鈴の背中に翼が現れる

その色は純白。汚れなき白。

「綺麗じゃないか。見てたぜ。呪い、なくなったんだっけ？」

「うん。蒔風さんのおかげ」

「そうか。じゃあ、お返ししないとな」

「うん!!!観鈴ちゃん、いっくよー!!!」

ドバア!!!

観鈴の背の翼が荒れ狂う

翼の先端から衝撃波が飛び、辺り一面をなぎ払っていく

「奴」の体も消し飛ぶ

「なぐっ!!!ごおおお!?!ごれはあああ!!!!!!」

それでもなお突き進むとする「奴」

そんな「奴」に、観鈴は優しげに言った

「私の翼はね、純白。共鳴するのは、人を想う・・・愛情だよ！」  
ドバアアアアア！！！！！

あと一歩で国崎まで届くはずだった手が消し飛び、「奴」自信も後方に飛ばされる

そして空の彼方にまで飛び去り、散りになって消えた

「・・・蒔風さんは!？」

「そうだ・・・蒔風!!!!」

観鈴と国崎が蒔風に駆け寄る

「大丈夫か!？」

「大丈夫に、見えるなら・・・眼科、行け・・・」

「酷い怪我・・・そ、そうだ!!」

「どうした、観鈴」

「今ならできると、わかるんだ」

「え？」

「んっ！！！（ポアアア……）」

蒔風を優しい光が包む

「これは……翼人としての力か……まいったな。まさか聖人タイプとは」

「聖人？」

治癒されながら蒔風が答える

どんだん怪我が治っていつている

「ああ。治癒が得意な奴のことさ。聖人タイプはただえさえ少ないし、いたとしても力はそこまで強くない。まして翼人のだなんて今までいたかどうか……」

「えっと……？」

「つまりお前は凄いつてことだ」

「あ、ありがとうございます」

「ありがとう、だけでいいよ。そんなに賢まさんな」

「えっと……うん！」

「よし……」

蒔風がパンパンと服をはたきながら立ちあがる

「オレはもう行くよ」

「だがまだ治癒が終わってないだろ？」

「最強暇なし。次の世界が何だかわからない以上、のんびりできないんだ。ごめんな」

「ううん。次の世界も、がんばってね」

「観鈴とオレの事、ありがとな。本当に、ありがとう」

「それはもういいよ。しっかり生きて、それからしっかり死ぬんだぞ？この世界で、きちんとな」

蒔風がおどけた声で言う

それに苦笑しながら国崎が答えた

「ああ。おまえも、死にに急ぐなよ？」

「・・・そうだな」

「Gate Open... Air」

蒔風がゲートをくぐる

次の世界へと向かった





Air ｝ 覚醒、純白の翼（後書き）

出ました三人目の翼人！！！！

アリス「というかこれありきたりすぎませんか？」

大丈夫です

オリジナル設定付加してどこかの世界の主人公にも覚醒させる予定です

【Air】

構成：“輝志” 75%

”LOND” 25%

最主要人物：国崎往人

- WORLD LINK - ｝ WEAPON ｝：国崎の復活

- WORLD LINK - ｝ FINAL ATTACK ｝：観鈴  
の翼人覚醒

《純白の翼人》

所有者：神尾美鈴

翼色：純白

想い：愛情

タイプ：聖人

ア「そうそう、あの聖人とか戦士と違ってわかりにくいですよ」  
では簡単にまとめましょう

各タイプの力の強い順に並べます

戦士：攻撃＞防御＞治癒

賢者：防御＞攻撃＞治癒

聖人：治癒＞防御＞攻撃

となります

一概にこうとは言いきれませんが

ア「観鈴さんは「奴」を圧倒しましたしね」

ワーリがはたらいてたからね  
ではこの辺で

ア「次回、新たな世界、世界の破壊者」

ではまた次回

通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ!!

## ディケイド く新たな世界く

仮面ライダーディケイド・門矢士は、かどやつかさ薄暗い宇宙のような空間に立っていた。

いくつもの地球が浮かび、漂っている

「1111は……」

「ディケイド、緊急の要件です」

そこに白い服を着た青年が現れた。

士が旅に出る際、世界の危機を促してきた男だ。

「またお前か。オレの旅は9つの世界を回って終わったんじゃないのか？」

「それよりもディケイド。この世界にまた別の破滅がやってきました」

「なに？」

「異世界からの侵入者が世界を喰らい、力にしようとして、この世界に来たのです」

「なんだと？」

「しかし、「奴」を追っている人物もこの世界に来ています。彼と共に、「奴」を打ち破り、世界を救ってください」

「ちょっと待て！なんでオレが！そいつのこともちゃんと教える！」

「頼みましたよ」

そう言い残して青年は消えてしまった

同時に空間も輝きに消え、門矢士は写真館の前に戻ってきた

.....

「で？やってきたのがお前ってことか？」

「そっだそうなんですそのとおりです。オレが来た理由、わかってんだな？」

「ああ、大体わかった」

ここは光写真館

その家の中で蒔風と土が机に座って話し合ってる

「ちょっと土君！！誰ですかこの人」

「そうぞ土。自分だけ納得しないで俺たちにも説明しろ！」

「だから、オレは蒔風舜だ。「奴」を追ってきたんだ。わかんない？」

「わかりません！！！」

蒔風がコーヒーを飲みながらその場にいる全員を見渡して言った。

仮面ライダーディケイドと世界を渡る旅のメンバーだ

ピンクのトイカメラを首から掛けた青年が門矢土

蒔風に問い詰めている女性がこの写真館のオーナーの孫娘、光夏見。

同じく土に問い詰めている青年が小野寺ユウスケ。

奥の流しでコーヒーを作っている老人がこの写真館のオーナー、光栄次郎だ。

「しょーがないな。お前らのために特別に説明してやるよ。このオレが」

士が偉そうに話した。

他の二人は士のそんな態度にはもう慣れていいのか、黙って聞く。

門矢士は世界を救うためにいくつものライダーの世界を回っている。

今までもクウガ／＼キバの世界を回り、救ってきた。

そして前回の世界で九つの世界を回り終わったのだ。

「え！？お前らの旅終わったの!？」

「はい。九つのライダーの世界はすっかり回ってきました」

「そこで世界を救ってきたもんな？士」

「ま、軽いもんだ」

蒔風がその事実を知り、驚くが思いなおし

「でもお前の近くにはいないとなあ」

「「奴」ってのが来るからか？」

「そうそう。それ本当なのかよ。世界はせつかく救われたのにさ」

士とユウスケが蒔風に問う

「その通り。だからまあ・・・お世話になりました!!!!」

「ちよつと！！土君にユウスケまでいるのに、これ以上置いとけませんよ！！」

夏海が反論する

それはそうだ。これだけ人がいれば大変である。

なにより土はこの家に写真の現像代や食事代などの借金を溜めこんでいるのだ。

「どれくらいいるんだ？」

「結構な時間だな。この世界は多重世界だから」

「多重世界？ってなんですか？」

「なるほど。大体わかった」

「土。本当にわかってるのか？」

「当たり前だ」

とりあえず時風が他の二人に多重世界のことを説明する。

「理由はわかりました。でももうこの家は結構きついんですよ？」

そこですすすつ、と時風が夏海によって何か封筒を渡す結構な厚みだ。



「これで足りるかい？」

「なんですか？……！！！！！！ようこそ！時風さん！！！」

いきなり時風と歓迎した夏海に土とユウスケが驚いた

「なんでだナツミカン！！！」

「夏海ちゃん、どうしたの？」

「なんでもありません。さ、町に行きましょう」

そういつて夏海が皆をひきつれて外に出る

ちなみに夏海が封筒の中に見たのは、沢山の福沢諭吉だったとか。

今この世界は最初の「夏海の世界」に帰ってきているそうだ。  
彼女にとっては久しぶりの故郷だ。

旅の最初に、この世界は崩壊しかけてしまったそうなのだが

「わぁー！。すっかり元通りです！！！」

「よかったな、夏海ちゃん！！！」

「はい！！！」

かつて崩壊した街並み

それは綺麗に元通りとなり、前と同じ、平和な世界が広がっていた  
意気揚々と街を回る一向。

途中、土が皆の写真を撮り、終始みんな笑顔だった

そしていったん家に帰ろうとすると、どこからかバイオリンの音色  
が聞こえてきた。

音のほうを向くと、ひとりの男性が道の真ん中でバイオリンを演奏  
していた

演奏し終わり、土達のほうに歩いてきた

「百年に一人の天才、紅音也くれないおとや様の演奏だ。三千万円の価値がある！  
！」

そんなことを言って夏海や土と握手を交わす、紅音也なる人物。

「礼を言おう。お前たちのおかげで世界は救われた」

「お前……何者だ？」

いきなりのその言葉に、土が不審そうなまなざしを向けて聞く。

だがそれに対しあくまでも友好的に答える音也。

「紅音也。えらくいい人だ。近い将来このオレの名前が全国の教科書に載るだろう」

「そんなに偉いんだつたら教えてほしいな。オレは一体何を手に入れたんだ？」

音也の劳いの言葉に土が聞く。

どの世界の住人でもない自分がこの旅で得たものはなんだったのかと九つの世界を巡って、一体自分は何をしてきたのか

音也がそれに答えた

「それは・・・おまえの、生きるべき、世界」

音也の言葉に何か違和感を感じる土

「どうしたんだ？」

「ああいや・・・なんでもない・・・」

蒔風の言葉になあなあに返事をする土

そこに栄次郎が夏海を呼びに来た

どうやら彼女に電話がかかってきたようだ

皆が写真館に戻っていく。

振り返るとそこに音也の姿はなかった

.....

どうやら電話の相手は夏海と同級生らしい。

久々に自分の世界に帰ってこれた夏海は、有頂天になっている。  
これからみんなが集まるのだそうだ。

「T Gクラブ？」

「そうです。「退学」で「T G」です」

「つまり退学クラブ？なんじゃそりゃ」

夏海が出かける準備をしながら教えてくれた。

なんでも高校時代、世の中が詰まなくなり、いつそ退学でもしてやるか！？と作ったものらしい。

とてもくだらなさうに見える集まりだが、それでも彼女にとっては大切な友達だ。

そうやって過ごしてきた青春なのだ。

そんなことを話していると、先ほど士の撮った写真を栄次郎が現像し、持ってきた。

「おおー、綺麗に取れてるじゃん!!」

ユウスケが驚く。そう、その写真はきれいに撮れていたのだ。

と、言うのも、士の写真はいつもピンボケで、まともに映ったためしがないのだ。

それも士がその世界の住人じゃないかららしかったのだが……

「うまいもんだなー。オレは写真だとかのそういつた芸術方面が苦手だからな」

「そうなのか？」

「絵なんかひどいぞ。棒人間がせいぜいだよ」

蒔風たちが話してるうちに夏海の支度が終わったらしい。

とくに用事もない暇な三人なので、途中まで士達も付いていくことにした。

「士君達も会ってみます？みんなに。すごいお宝もあるんですよ」

道中夏海が提案するが、士は呆れた顔をして取り合わない

「青臭い連中は好きじゃない」

「やめろよ。夏海ちゃんの友達なんだから」

土の言葉をユウスケが戒めるが、夏海はもう慣れたと言って受け流す。

「友達・・・か」

「どうしたんだ？舜」

「舜？」

「いいだろ？舜で。で、どうしたんだ？」

ユウスケが蒔風の顔を覗き込み、心配してくる

「なんでもないさ。この世界が修復されて、よかったな」

「はい！！では、行ってきます！！」

夏海が別れる。

三人はそこから夏海を送りだした

「嬉しそうだな、ナツミカン」

土が優しくそうな声で言ったのを、蒔風が聞いた

「へえ、そんな声出せるんだ〜〜」

「バツ、そんなんじゃない!!」

「土?照れてんのか?」

「ちげえ!!!」

「へえ~~~~」

「~~~~~!!!!オレは行く!!!!ついてくんな!!!!」

土がむっすりとしてずんずん歩いていってしまっ

残されたのはユウスケと蒔風だ

「どっする?」

「このまま土っちを追っのも悪くないな~~~~」

蒔風がいたずらっ子の目をして言うが、ユウスケがそれを止める

「やめた方がいいぞ?土は怒ると・・・怖い」

「そんなのだいじょ「怖いんだ」・・・そんなに?」

コクリ、と無言で頷くユウスケ

その簡単な動作がすべてを物語ってた

「そっか・・・じゃあぶらつくか?」





と、そこで公園の中からある庭園の中が覗けた。

聞き覚えのある声がして、その中を凝視すると……

「士!!!」

「え？何やってんだお前!!!」

そこにはゆったりとくつろいでいる士がいた

周りにはメイドが控え、執事みたいな男もいる。

何か見合い写真のようなものをもっているが

「士、どうしたんだこれ？」

「まさか……だまし取ったのか!？」

「人聞きの悪いことを言うな!!!……ま、オレの強運ゆえに、だな」

よくよく話を聞いてみると、入ったレストランで一万目目の客になったそうで、その贈り物で企業の社長やら全財産の譲渡やら大変なことになっているらしい。

「じゃあこの写真は？」

「土坊っちゃんまの結婚相手でございます」



首をクキリと鳴らし、メガネをかけた男が言った。

「こんなところにまだ人間がいたとはな」

ギユウン、カシイン

その姿が変わる。

オルタナティブという疑似ライダーに変身した男が、二人に瞬時に接近して、その首を締めあげていった。

そして崩れ落ちる二人。

この男の名は、田中。

今夏海と合っている「TGクラブ」の顧問をしていた男。

この世界にある秘密。

それは彼女の想いをとは真反対のものだった。

t o b e c o n t i n u e d

ディケイド 〱 新たな世界〱 (後書き)

アリス「世界の破壊者ディケイド!!」

やってきましたよこの世界

ア「この世界は長くなるんですね?」

そうなります

どどん書いて更新してくぞー!!!!

ア「おー!!」

と、言いたいところなんですが

ア「おー?」

最近何だかなかなか書く気が起きなくなってきたかも

ア「スランプってやつですか?」

そうかもしれない

どうしよう!!初投稿から続いてきた更新の勢いがここにきて止まるかも!?

ア「てかよくここまで続けましたね」

ペースの速さなら自信があります

その分内容はトントン拍子さ!!

ア「威張らないください」

すみません

あと、今回戦闘& a m p・変身無くつてごめんなさい

ア「まあ、今回は説明パートでしたからね」

次回からはどんどん行きますよー！！

ア「次回、この世界は本当に夏海の世界なのか？どっちなんだい！！」

ではまた次回

こいつが人の笑顔を守るなら、オレはこいつの笑顔を守る！！

ディケイド 〱この世界の謎〱

「っは！！ここは！？」

気づいたら蒔風とユウスケはどこかの料亭の和室まで連れてこられていた

目の前には三人の着物美人がいる。

「さあ、お坊つちやま。好きな女性を、お選びください」

いつの間にかいた執事のその言葉に、同じくいたのか、土が三人を見る

「女性を選ぶというのは失礼というもの。ゆえに、全員だ」

「土、そんなふしだらな」

「節操無しー！。背中からブスリだぞー！」

ユウスケと蒔風の咎めるような言葉に、興を削ぐ奴だな、と言って立ち上がり。

「だったら、お前らが選べ。あとは好きにしろ」



「おおっわ!?!」

「嘘だろおい!?!?!」

蒔風とユウスケが部屋を飛び出す

怪人という存在には慣れていても、こっもいきなり来られてはビビるわけで。

廊下をどたどたと走り逃げる二人。

その後ろからは羽音が鳴り続け、逃がしてはくれなそう感じた。

「ユウスケ!?!お前右、オレ左!?!」

「オツケイ!?!」

外に飛び脱し、蒔風とユウスケが途中の道で左右に分かれる。

よし、これでうまく分断できたはず……

と、思いきや



「なんで！？なんで全部こっち来んだ！？」

そしてなぜか三体中三体が蒔風のほうに向かってきた。

「なん（ブーン）なんだこ（ブーン）の世界ダアアア！！鬱陶しい！！！！まともに喋らせる！！！！！！」

ゴガッ！！ドオン！！！！！！

蒔風が振り返りざまに追ってくる三体の内の一体を殴り飛ばして爆破させる。  
地面に叩きつけられて爆発した仲間を見て、他の二体が警戒を強める。

「貴様はライダーでも怪人でもないな」

「貴様はこの世界にいることは許されない！！」

「なんだと？」

「それがこの世界のルールだ！！」

バツ、ヴォン

羽音が鋭く鳴り、蒔風に迫る。

二体の怪人、ミラーワールドのレイドラグーンの攻撃を避けながら、蒔風はなおも聞く。

「この世界はなんなんだよ!！」

「貴様に言う必要があると?」

「は!そりゃ正論!！」

バキッ!!

蒔風が後ろ蹴りで二体を押しやり、変身の構えをとる。

「だったら、ライダーならいいんだよな!?!力を借りる!！」

パァン!!

蒔風の腰に変身ベルト・トルネードが現れ、かつての世界の、初めて空を制した仮面ライダーへと変身する。

「(バツ、バ!)スカアイ!変、身!！」

ビュオオオオオ・・・バァン!!

「スカイ、ライダー!!!」

「なんだと!?!」

「変身!? 貴様・・・ライダーか?」

「見ての通りだが? フウツ! スカイドリル!!!」

蒔風が二体に近づき、捻りを利かせたパンチ、「スカイドリル」を放つ。

が、二体は空中に飛んでその攻撃から逃げて行く。  
トンボのような外見の通り、やはり空中を飛べるようだ。

「ム・・・セイリングジャンプ!!!」

蒔風がそれを追って空を飛ぶ。

驚いたのはその二体だ。

「空を・・・飛べるだと!?!」

「可笑しいかい? そんなライダーもいるんだよ!!!」

蒔風が二体に向かって飛ぶ。

一体が逃れたが、もう一体は逃げられず・・・

「スカアイ、キック!!!」

ドカツ、ドオン！！！！

一体が吹き飛び、もう一体がその光景に愕然とする。

「さあて、次はお前だ」

時風がもう一体のほうに飛びかかるとする。  
そこで相手が待ったをかけてきた。

「ま、待て！！貴様がライダーならば戦う理由はない！！」

「なに？どういうことだ！！！！」

「それは・・・」

ピュン、ビシッ

ドオン！！！！

「な、に？」

話そうとした怪人を一筋の光線が撃ち抜いた。

時風が光線の来た方向を見ると、そこには「」をモチーフとした  
仮面ライダー、オーガが変身ツールであるオーガフォンをガンタイ  
プにしてこちらに標準を合わせていた。

「なんだあいつは!？」

オーガはファイズの世界のライダーだ。まだめぐっていない世界のライダーでは、当然蒔風は知るはずもない。

とにかく現状打破だ!!--と蒔風がオーガに向かって飛んでいき、その距離を詰めにかかる。

チュンチュンチュイン!!!

向かっていく蒔風にオーガフォンの銃撃が襲いかかる。

蒔風は腕で顔をガードするが、一発がベルトの腰に被弾し、セイリングジャンプのための「重力軽減装置」破損してその効果が切れる。

蒔風が落ち、その場に土煙が上がる。

が、その中から変身が解け、それでもまだ無事な蒔風が出てきた。

「ったく・・・あのライダーなんなんだよ・・・ん?あれは・・・

戦闘音が聞こえ、そちらの方を見ると、ディケイドに変身した土と、ダークキバが戦っていた。

「ん・・・ダークキバか・・・そしてあれが・・・ディケイド」

時風の頭に情報が来て、とりあえず名前だけでも判明する。  
ダークキバ、キバの世界のライダーだ。

そうやってみるとダークキバとディケイドの戦いが終盤に入る。

ここぞというタイミング。

そこでディケイドがバツクルにカードを差し込み、起動させた！！

「Final Attack Ride - - De De De  
Decade！」

「ハアッ！！！」

ディケイドが跳び、キックの構えをとる。

ダークキバとディケイドの間に黄色いホログラムカードが現れ、それをディケイドが通過していく。

一枚通るごとにエネルギーが足に集まり、敵を粉碎する「ディメンションキック」が、ダークキバにむかって突っ込んでいく！！

はずだった

しかし、そうはならず、ディケイドが通過するはずのカードが黒ずんでポロポロと崩れていく。そのせいかキックの勢いが殺され、勢いを失ったディケイドが体勢を崩してその体が地面に落ちる。

同時にその衝撃で、今まで回ってきた世界のライダーたちのカードが周りに散った。

そこ光景を見てもう用はすんだのか、ダークキバがその場を去る。

「土！！大丈夫か！！」

蒔風が土に駆け寄り、身体を抱える。

土の変身はすでに解けており、地面のカードを見て愕然としていた。

「な……に……」

それはそうだろう。

そのカードに描かれていたはずのライダーの絵が消え、ただの真っ黒なカードになっているのだ。

「これは……カードが……死んだ!?」

「どういうことだ……」

失われたカードはすべて他のライダーに関するものばかりだ。ディケイド自身の能力のカードは失われていない。

ディケイドはカードを使って戦うライダーだ。  
それら他のライダーのカードを使うことで、そのライダーに変身で  
き、能力も使用できる。

最初は使えなかったが、九つの世界を回ってきて、すべて使えるよ  
うになったはずなのだが、それが消えた。  
それはつまり

「ディケイドの・・・旅の否定？」

「なんなんだこれは！！！」

士が乱暴に絵柄のなくなったカードを回収し、立ちあがる。

「どつするんだ？」

蒔風が士に聞く。

振り返らずに士が答えた。

「この世界について調べる」

そして首だけを蒔風に向け、最後に言った。

「この世界は・・・何かおかしい」

.....  
.....



その頃、林の中

夏海は同級生たちと高校時代の秘密基地に来ていた。

そこに特に仲のよかった「千夏」という少女が来たようなので、彼女を探しているのだ。

「千夏……。どこですか……？」

音を頼りに千夏を探す夏海。

しかしここに来ているのは千夏ではなかった。

茂みの中から、その人物が夏海を覗く。

その顔は、友人を探す少女のものと同じものだった。

「光夏海」が、そこにいた。

一体この世界は……どこなのだろうか。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## ディケイド 〜この世界の謎〜（後書き）

ここでディケイドの能力解説コーナー！！

ディケイドはカードを使って戦うライダーです

ア「そのカードは基本的にカメンライド、アタックライド、フォームライドに分かれます」

カメンライドは各主人公ライダーに変身

アタックライドは能力や攻撃、防御を発動させる

フォームライドはまんまフォームチェンジするカードです

ア「さらにこれらの頭に「ファイナル」がつくと効果が一気に上がります」

ファイナルアタックライドは必殺技の発動

ファイナルフォームライドは各主人公ライダーを變形させる効果

が、あります

ア「ファイナルカメンライドはないんですね？」

あるけど、劇中未使用だからな

一応説明すると、各ライダーの最強フォームに変身です

こんなところか？

ア「次回、コンプリートフォームって最初は変だったけど動いたら

かっこよかったよね？」

予告になってない！？

ア「ではまた次回」

信じる者のために戦える、それが王だ！王の資格だ！

ディケイド く新たな旅、コンプリートく

「士、調べるってどうすんだよ」

「手始めに、あいつだ」

士が指差した方に、紅音也が立っていた

「あいつが？」

「ああ、さっきのライダーだ。おい！結局、この世界は救われてなかったのか？」

士の言葉に足を止め、音也が振り返り答えた。

「ははははは！……！この世界は救われる必要などない！！」

「どづいづことだ？おい！！」

「なるほど……そういうことか。わかったぞ士」

蒔風が前に出て言い放った

「つまり、この形でこの世界は正常、ということだな？これがこの世界のあるべき形。そうだな？」

「な……じゃあここはやはり、ナツミカンの世界じゃない！？」

「となると・・・夏海さんが危ない!？」

蒔風と士が駆けだそうとする  
その背中に音也が叫んだ

「お前は!!この世界にふさわしい!お前はいずれこの世界の宝を受け継ぐことになるだろう」

その言葉に士が足を止め、反論する

「気に入らないな。人の人生勝手に決めんな!!行くぞ、蒔風」

「おう」

その場に音也を置いて、二人が駆けだした  
その姿を見て、音也が笑う

歓喜と狂気が程よく混ざった声が響いた

.....

士と蒔風が駆けだしてすぐ、二人の目の前に一人の男が現れた

「お前・・・」

「やあ士。それにしても間違ってるよな、あの男。お宝を受け継ぐなら、この僕しかいないのに」

「海東……」

この青年は海東大樹

仮面ライダーディエンドに変身し、士たちと同じように世界を回っている

彼の各世界での目的はその世界のお宝を手に入れること  
今までの世界でも様々なものをいただいできている

まさに「怪盗」海東大樹だ

「あんたがディエンドか？」

「……君がこの世界にやってきた翼人って奴かい？」

「翼人？なんだそれは」

「あとで説明してやる。知ってんのか？光栄だね」

時風がわざとらしく大きな態度をとって接する

「きみも、たいしたお宝をもってるみたいだけど、それはあとででもいい」

「盗れるかな？」

「それが僕の目的だからね」

時風と海東が互いに挑戦的な目でお互いの目を見る。  
その顔は楽しんでいるようにうつすらと笑っている。

「そんなことは今はいい。海東、この世界はなんだ？」

「なんだ士、知らなかったのかい？ここはネガの世界さ」

「ネガの・・・世界？」

海東が言葉を進める

「そう、写真にポジとネガがあるように、世界にも裏と表の世界があるんだ。ここはその世界さ」

「つまりは一種の平行ワールドってことか？」

「そうだね。さすがに理解が早い」

「そりゃもう」

「ええい、話を逸らすなお前ら！！」

勝手に二人でバチバチ言わしてるのに業を煮やし士が叫んだ

「とにかく、ここはナツミカンの世界じゃないことは確かなんだな？」

「そう。この世界ではライダー・・・といってもダークライダーが怪人たちを統率しているんだ」





彼らこそさつきまで土と戦闘を繰り返したライダーたちだったのだが、彼女はそんなことは露とも知らない。

「千夏さん、もうすぐ来るそうですよ」

「本当ですか！？楽しみだなあ」

「久しぶりだもんな」

「そうだ！あのおときみんなで埋めた宝物、見に行ってみませんか？」

あのおとき、とは「TGクラブ」が解散した時のことだ  
つまりは未来に向けたタイムカプセルだ

「あ……あそこは……」

「え？」

「コンクリ敷き詰められて、マンションの駐車場になってんだ」

「でも大丈夫です。千夏さんがどこかに「宝」を隠していますから」

「じゃあ、早く千夏に合わないですね！」

「ええ……本当に。どこに隠したんでしょうね……」「宝物」

千夏から連絡があるまで、夏海は久々の町を歩いてみることにした。

(町もみ〜んな元通り。これで千夏が揃えば〜)

「夏海さん!!」

「おい、ナツミカン!!」

そこに時風と士が夏海を見つけて駆け寄ってきた。

「どうしたんですか？二人とも。ユウスケは？」

夏海がユウスケのことを案じるが、二人にその気はない。  
全くない。

「夏海、この世界は危険だ。ここはお前の世界じゃない」

「さつき怪人にも襲われた。写真館に戻るんだ」

士と時風がやいのやいのと夏海に言うが、本人は不服そうな顔を  
する。

無理もない。

久々に帰ってきた世界に、久々の友人たち。

それらを否定されて、いい気分ではいられないだろう。

「やめてください！ここは私の世界です。絶対にそうです！..」

「夏海！..」「夏海さん！..」

夏海が駆けだして行ってしまい、土と蒔風はその場に立ち尽くしてしまっ

(酷いです・・・せつかく帰ってこれたのに・・・蒔風さんはあつたばかりなのに馴れ馴れしいですし、土君も)

ドスツ！！

すっかり前を向いてなかったので、夏海が誰かにぶつかってしまっ

「す、すみません！！」

夏海が謝るが、ぶつかった女性は不機嫌な顔をして睨んできた

「なに？あんだ。人間のくせに」

ブーーン

「！！！！！！そんな・・・そんな！！！！」

目の前で女性の顔がトンボのように変わり、怪人になってしまっその光景から逃げ出すように夏海は元の秘密基地まで戻ってきていた。



「・・・ということなの。ここはネガの世界。あなたの世界じゃない」

この世界の夏海（以後、ネガ夏海）が説明を終えた。夏海はそれを聞いて愕然としていた。

「でも、みんなの思い出は同じでした!!」

「思い出はある。でも、それだけ。彼らは知ってるだけなの」

「嘘・・・嘘です!」

「彼らはダークライダーなの。殺したみんなの姿をとってるだけの偽物よ」

「そんな・・・じゃあ千夏は？千夏はどうしたんですか!!」

「千夏は・・・死んだわ。奴らから、宝を盗んで」

「嘘です!!そんなことありえません!!」

「じゃあ私の存在はどうなの？ここは危険なの。早く逃げなさい!!」

「夏海!!そいつから離れろ!!」

そこに同級生三人が走ってきた

ネガ夏海が止めるが、夏海がそちらに駆けて行ってしまっ

「みんな!!」

「夏海……(ニヤリ)フン!!」

グイツ、と佐藤の顔が醜悪なそれに代わり、夏海の腕を捻りあげた。

「佐藤君!?なんで……」

「お前は餌だったんだよ。こいつをおびき寄せるための、な」

青柳がネガ夏海を指さしてバカにしたように言った  
さらに言葉と続ける

「さあ、我々から盗んだ宝を返してもらおうか」

「……」

ネガ夏海が悔しそうに俯く。

人質を取られては、案内するしかなかった

.....

やってきたのは土管が大量に、あちらこちらに積み重ねられている土石場。

この電信柱の下の砂利の中に、「宝」は埋められていた。

ネガ夏海がそれを差し出す

するとどこからともなく現れた音也がそれを奪うように取り上げた。

「んー！。これで我々の宝が戻ってきたぞ・・・そしてこれを受け継ぐのは・・・出て来い！！土！！」

その声に応じて土管の陰から土が出てきた。

その顔は厳しく険しい

「土君・・・」

「これはお前のものだ、土。お前は最高のライダーとしてこの世界に生きるがいい。お前は、影の世界の住人だ」

「なるほど・・・いろいろと楽しかったけどな・・・」

土がその先を言う前に、周囲を紙飛行機が飛んできた。

皆の視線がそちらに奪われる

その隙を突き、海東が音也の手から「宝」をかすめ取っていった！

「へえ〜。これはたいしたお宝だ」

「宝」を見まわし、感心の声をあげる海東。

周囲から向けられる敵意の眼差しなど、気にも留めてない



「貴様……（ガブリ）変身！」

音也がダークキバに変身し、海東に迫る  
それに合わせて海東も変身する

ガシユウ、ガチィ

カードをディエンドライバーに装填し、

「Kamen Ride……」

その銃口を上に向けて

「変身!!」

引き金を引く

「DIEND!!」

幾重にも影が海東を覆い、仮面ライダーディエンドに変身した。

さらに夏海をとらえていた三人も、彼女を放りだし、変身する

「（ウイン）変身」

「（000、standing by）変身」

「（バツ）変身」



「君は・・・蒔風!！」

「相手になるのか? みくくんなまともでもいいぞ?」

「なめるな!！」

蒔風に三人が向かう

その背中にデイエンドが弾丸を放った

「僕を・・・無視するな!！」

ドンドンドンドン!！」

デイエンドがさらに弾丸を放ちながら戦闘に飛びこむ。

「土!！」

蒔風が戦闘の合間に「宝」を投げる

デイエンドがそれを妨害しようと「宝」に向かって撃つ

軌道が逸れ、「宝」は夏海のほうへと転がっていった

それを拾った夏海を庇うように土が近づく

「この世界で生きる土。お前の旅は終わったんだ」

思わず夏海のほうへ向かった土に、こちらの世界にくるよう音せが誘う。

お前は表の世界じゃなく、裏の世界にいるべきだと。

「どうだ？このネガの世界なら何でも好きなものを与えよう！…あらゆる快樂を、幸福を！！」

その素晴らしい誘い

きつと多くの人間ならそちらを選んでしまつかもしれない

だが、ここにいる男は、そんなものに縋るほど弱くはない

「違うな」

断固とした決意で士が言った

「人は誰でも、自分の居るべき世界を探している。

そこは偽りのない、陽のあたる場所

そこに行くために人は旅を続ける。そして旅を恐れない！！

そうだよな・・・ナツミカン」

「士君・・・」

士は言ったのだ

自分の世界は自分で見つける

こんな上っ面な世界じゃない、本当の自分の世界を見つけ出すと

「その旅を穢したり、利用したりする権利は誰にもない！！」

「士・・・」

戦いながら蒔風もその言葉を聞いていた

彼らの旅は世界を探す旅。

しかし、蒔風の世界はすでに崩壊寸前。  
帰ることなどできない

だが……

蒔風が土に近寄り、問いかけた

「見つけられるかな……オレの、帰る場所」

「見つかるさ。そのために世界を回ってるんだ!!」

「ありがとう……少し……救われた」

土と蒔風が互いに見つめ合う  
そこに一つの絆が生まれた

自覚しなくても、彼らは仲間となる

「貴様は……何者だ？」

ダークキバの問いに土が答える

今までも言ってきたその言葉。

自分の世界を見つけるまで、何度でも言い続ける!!!

「やはりオレは・・・通りすがりの仮面ライダーだ!!!」

「と、ただの世界最強さ」

「覚えておけ!!! 変身!!!!!!」

「Kamen Ride・・・DECADE!!!」

「ってか、蒔風!!! オレの台詞に割り込むな!!!」

「いーじゃんいーじゃん。ほら、カードが」

フアアアン・・・

失われていたカードが蘇り、新たなカードが現れた。

「準備はいいな？」

「ああ、いくぞ!!!」

ディエンドの相手呼び寄せた怪人に任せ、三人のダークライダーが二人に迫る。

「おらおら！！こつちだこつち！！カブトムシにドラゴン野郎が！！」

蒔風の挑発にダークカブトが乗るが、リュウガはオーガとともにデイケイドに向かう。

「ちっ。うおっ。力を！！」

蒔風が槌を取り出し、ダークカブトに振るう

「（こいつの残りもあと五分くらいってところか・・・）  
よっし、使い切るか！！来いよ駄ブト！！いや？墮ブトか？」

「貴っ様あ！！！！」

蒔風とダークカブトが交戦する中、デイケイドは二人に押されていた。

右から左から、休むことなく剣が向かってくる

デイケイドもそれを受けはするが、ダークライダーの地力は凄まじく、受けることもできなくなっていく。

そして二人同時に剣を振るって来たのを直撃してしまい、デイケイドが吹っ飛んだ

いくつもの土管を粉々にし、デイケイドが地面に伏せる

「土君！！」

夏海がデイケイドを案じ、叫ぶ。

彼にゆっくりと迫るリュウガとオーガ。

「どうすれは……!!土君!!これ!」

そこで夏海が自分の手にあるものに気付き、それを土に投げた

ディケイドがそれをキャッチする。

そして先ほど現れて新たなカードを挿入し、そこに映ったマークを  
なぞっていく

「K U U G A   A G I T O   R Y U K I   F A I Z   B L A D E  
H I B I K I   K A B U T O   D E N - O   K I V A」

そして最後にディケイドのマークをタッチし、それが……「ケー  
タッチ」が起動した

「Final Kamen Ride……DECADE!!」

その姿がディケイドコンプリートフォームへと変わる

胸には各ライダーのカードが収められており

額部分にはそれらよりも上位であることを示すかのように、ディケ  
イドのカードが嵌まっていた

バオオウ!!!

全身からエネルギーが噴き出し、その力強さをあらわしていた

「……………!!」



二人のライダーがその姿に驚くが、デイケイドはそんなことは気にしない

ライドブツカーソードモードの刃を撫で、二人に迫る

二人は猛然とデイケイドに斬りかかるが、出力が違い過ぎる  
一薙ぎ二薙ぎされただけで、四肢からは力が抜けていく

デイケイドがオーガの腹部に剣を突き刺し、ケータツチを操作する

「RYUKI - Kamen Ride - SURVIVE」

すると、デイケイドの隣に龍騎サバイブが突如として現れた  
デイケイドがオーガから剣を引き抜き、腰に移動させたバツクルに  
カードを装填させる

- Final Vent -

リュウガがデイケイドに最終技を繰り出そうとし、宙に浮いていく

「Final Attack Ride - - RYU RYU R  
YU RYUKI!!」

デイケイドと龍騎サバイブが全く同じ動作をとる

空中で×の字を書くように剣を振るうと、その形に炎の斬撃が作られる

「おおおおああああ!!!」

リュウガがドラグブロッカーの炎を受け、キックで迫ってくる

ディケイドは龍騎サバイブとともに斬撃を飛ばし、迫りくるリュウガを粉碎する!!

「ぐ、ぐああああああ!!!」

リュウガをドラグブロッカーもろとも爆散させると、龍騎サバイブは消えてしまう

さらにオーガがオーガストランザーにエネルギーをチャージし、巨大化したフォトンブラッドの刃を構える。

「FAIZ - Kamen Ride - BLASTER」

それに対し今度はファイズブラスターフォームを召喚し、ファイナルアタックライドを発動させる

「Final Attack Ride - - FA FA FA  
FAIZ!!!」

デイケイドの剣の先と、ファイズの持つファイズブラスターからフ  
オトンブラッドの光線が放たれる

その光線はオーガの刃、オーガストラッシュを粉々に撃ち砕き、さ  
らにオーガをも撃ち抜き、その体を爆発させる。

さらに蒔風と交戦中のダークカブトのほうを向き、ケータッチを押す

「KABUTO - Kamen Ride - HYPER」

カブトハイパーフォームを呼び出し、

「Final Attack Ride - - K A K A K A  
KABUTO!!」

ハイパーキックを二人で放つ

それに気づいたダークカブトが蒔風から離れ、ベルトのボタンを押す

《1、2、3、RIDER KICK》

「うをおおおあああああ!!!!」

空中でキックがぶつかり合うが、敵うはずもなく、ダークカブトが  
キックの渦に飲み込まれ爆発し、消えた。

「うち……」

変身を解いた音也が忌々しそうに土ら一行を睨み、その場を立ち去る

こうして、土達の戦いは終わった

.....

「これから、どうするんだ？」

土がネガ夏海に聞く

「これからもダークライダーによる圧政は続くだろう。それでも……」

「それでも、この世界で生きていく」

ネガ夏海が強い意志を持って時風の言葉にかぶせて答えた

「だから、あなた達も見つけて。自分の世界を」

「……」

「私は信じる。この世界の明日を。そこに世界があると。だから、あなた達も」

そう言ってネガ夏海は何処かへと去っていった。

その未来に、絶望ばかりがあると知りながらも、一筋の希望を信じて、歩きだした。

.....

一行が光写真館に戻ってきた。

そこに栄次郎が土の写真を持ってきて皆驚いた。正常に取れていた土の写真がネガのように色が反転してしまったのだ。

「うゝゝわ。こりゃひでえ」

「やっぱりこうなったか」

「それにしても、世界はまだあつたんだな」

「それは当然だ。オレだってライダー以外の世界を回っているからな」

「ま、オレはライダー限定みただけだな」

「でも、その世界に限界はない」

「ああ・・・世界は九つだけじゃない。オレの回る世界は、まだまだあるってことだ。」

オレたちの旅は・・・まだ終わってはいない」

士の言葉に、皆閉口する。

「・・・ま、オレとしては退屈せずすみそうだ」

「退屈って・・・そうだ、お前ら酷いぞ。オレを置き去りに戦うなんて!!」

「だってユウスケ空気だし」

「諦めるユウスケ。それがお前の宿命だ」

蒔風と士の慰めにならない慰めにユウスケが膝を抱えて拗ねてしまう

「ユウスケ、気を落とさないてくださいよ」

そう言って夏海が立ちあがり、柱の鎖に手を掛ける  
すると背景ロールが降りてきて、新たな世界へと誘った。

その絵に真ん中にはディエンドのマークとWANTEDの文字が

「さあ、新しく蒔風も来たことだし、新たな旅の始まりだ」

次の世界・・・そこは・・・

「海東・・・」

ディهندの世界

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

ディケイド 〱 新たな旅、コンプリート 〱 (後書き)

アリス「長すぎ！！あと時風が空気すぎる！！！」

ごめんなさい

長いのは次回からの課題に

時風の空気もどうにかします

ア「どうやってですか？」

まずは各世界の話にもっと時風を突っ込ませます

今回の話は新たな始まりですから、どうしても時風を入れにくかったんですよ

ア「では次回からは？」

それなりにオリジナル展開だと思います

オリキャラは出ませんが

ア「がんばってください」

がんばる！！！

ア「次回、ディエンドの世界」

ではまた次回



この手で誰かの手を握ることもできる  
その時はオレたちは、弱くても、愚かでも

一人じゃない！！

ディケイド　　～ 親切な世界とその裏～

「海東の世界～海東の世界～どんなのかな～？」

「楽しいのか？」

「いつだって世界に降り立った時は楽しいもんさ」

そうだろ？と聞きながら蒔風がユウスケに振り返る。

いまユウスケ、蒔風、夏海の三人はこの世界の様子を見て回っていた。士はこの世界に着いたときに振られた役割が「サラリーマン」だったため、その会社に出勤していった。

「それにしてもこんな田舎に会社なんかあんのか？」

「さあ？」

そう、ここは田舎だ。

見渡すばかりの田んぼが広がっている

あっち見ても田んぼ、こっち見ても田んぼ。

今通りすがったのだから、きっと田んぼに違いない

「そんなことないだろ」

「やっぱり？でも・・・田んぼしかねえ」

「だなぁ・・・こんな穏やかな世界で海東さんは何やったんだろ」

「それをこれから調べに行くんじゃないですか。ほら、いきますよ！」

そういつて夏海が二人を引き連れていく

その道々には看板が多く掛けられておりそのすべてに

「指名手配犯 海東大樹」「極悪ライダー、ディエンド・海東」

などと言った指名手配書がこれでもかと貼り付けられていた

「まぁ・・・泥棒だからなぁ・・・」

「いきますよ！時風さん！！」

「へーい」

そして三人がたどり着いたのは警察署だ。

海東がなにかやったのなら、それを聞くならここが一番適している  
だろう

「にしても大概におかしな世界だな。ここも」

「そうか？けっこーいい世界だと思うぞ？」

と時風とユウスケが言うのも訳がある

ここまで歩いてくるまでの事だ  
いちいち説明すると長いので簡単に言おう  
皆親切すぎるのだ

ユウスケの腹が鳴ると、通りすがりの少年が自分の弁当をくれたり  
三人が警察署までの道を聞くと、そこまでおぶって行ってくれたり  
今もただ話を聞きに来ただけだというのに、まるで国賓が来たかの  
ようなおもてなしだ

「で、みなさん。一体どのような御用件で？」

警察官が屈託のない笑顔で聞いてきた

ちなみに警察署と言っても申し訳ない程度の交番があるだけだ  
三人はその外にある天幕の下にいる  
周りでは何人かのお年寄りがお茶をすすっていた。

夏海達が海東大樹について聞くと、警察官も、周りにいた住人も一  
斉に驚き、海東大樹の名をささやき始めたのだ。

「海東!?!」「海東大樹だつて!?!」「あいつのことなのか!?!」

「こ、こりゃあ大変だ……ちょっと、お待ちください!!--」

そう言って警官が自転車に乗ってどこかに走り去っていつてしまった  
どうやらお偉いさんに報告に行ったようだ



そして次の日

田園風景の只中にドン！と建っている高層ビル  
そのプールに土たちは案内されていた

「なんで話を聞くのにプールなんだ！！」

「落ち付け土。落ち着くんのだ」

「待て蒔風。お前は本当に冷静なのか？」

「オレか？いたって冷静だ。冷静すぎるほどにな（キラン）」

「だったらなんで海パン一丁なのか説明してくれないか」

「そこにプールがあるからさ！！！（バツ、ドボン！！）」

「あっ！！蒔風さん！！」

蒔風がプールに飛び込み、ザバザバと泳いでいく  
それと同時に、プールから一人の男が上がってきた

「申し訳ございません、このような格好で」

そして男が着替えてから、土達を改めて案内した

屋敷の中のような内装のホールでテーブルを囲んで土達が話をする  
夏海、ユウスケ、土、いまだに水着の蒔風、そして先ほどの男だ

「では、あなた達は海東大樹とともに様々な世界を旅しているという  
ことですか」

「別に・・・仲良くってわけじゃないけどな」

「オレはこないだ参加したよー」

「舜。服は着ないのか？」

「海東はいろんな世界でお宝を手に入れ回ってるらしいけどな」

「所詮ただのコソ泥だ。オレたちの周りをウロチヨロしてる、な」

「舜？なんで服着ないんだ？」

「コソ泥ですか・・・あいつらしい」

「それで、海東さんは一体この世界でなにをしたんですか？」

「あれ？なんでみんなおかしく思わないの？服着てないんだよ？」

「あいつは、この社会を壊そうとしたんです。いわば、反逆です」

「なるほど。大体わかった」

「あいつ？そう言えばさつきからなんか親しげっすね？」

「おかしいな？オレは間違っただこと言っただよないよね？」

「あ、申し遅れました。私はエリア管理委員会次官、海東純一です」

「海東？」

「ということば……」

「はい。大樹は、私の弟です」

「な、なんだってー！ー！？」

「舜。ちょっとこっち来い……（テメエいい加減服着ろって言っただろうが！ー！ー！）」

「（ユウスケさん！？やめてくださいよう！ー！そんな重り縛り付けられたらいくらオレでも……ギヤ……！ー！ー！ー！ー！）」

ドボン！ー！ー！

「ゴボガボボボボボボ……」

.....

士達がビルから出る。



そこからは土も単独行動するようだ。

「お前らは写真館に戻ってる・・・蒔風はどうした？」

「し〜らね」

「私も知りません」

三人が蒔風の所在を考えるが、彼なら一人でも大丈夫だろう、という結論に達し放置した。

その蒔風はと言うと・・・

(こ〜こな〜んかクサインだよなあ・・・)

さっきのビルの中に潜伏していた。

天井のライトの裏や、起伏の所為で死角になってる場所、単純に天井裏などをつたってビル内を見て回っていた

(あの男・・・純一ってったっけ？あの笑顔・・・キモチワルイ笑顔だ)

そして今つけているのはその海東純一本人の背中だ。

彼が「エリア管理委員会長官」と書かれた扉の前に立ち、厳かにノックし、部屋に入る。

蒔風もうまくその部屋の天井裏に入り込み、様子をうかがう

デスクの椅子に座っているのは頭を刈り上げ、眼鏡をかけた白いス  
ーツの男だ

その男の前に純一が立ち、報告する

「そうか・・・海東大樹が戻ったか」

「はい」

「それで？この世界にいる他のライダーはどうした？」

「仮面ライダーランス、ラルク共にいまだ逃亡中です」

「ふむ・・・はやく捕らえ、プログラムに掛けなければな」

「私にお任せください。あのディケイドの一行は大樹や、他のライ  
ダーとも接触しています。彼らの仲間を捕らえれば、まとめて引き  
ずり出せるはずですよ」

そう言って純一が懐からバックルを取り出した

「A」をモチーフにしたライダー、グレイブのものだ

（あいつもライダー？だがあの男はライダーを追っているはず・・・  
「プログラム」ってのも気になるな・・・）

「では任せよう。それにしても、海東大樹に仲間とはな」

「本人は否定していますが、おそらくはそうかと」

「……その一行、注意が必要だな。ところで」

「なんででしょう。」

「招かれていない客を、私は好まない。知っているな？」

「ええ。もうすでに」

ドンッ！！

天井裏が小規模ながら爆発する

しかしそこから落ちてきた瓦礫の中にはなにもいなかった

「捕まえる」

「はい。変身」

《open up》

純一がグレイブに変身する

蒔風が逃げた方向はわかっていた

「まさか、ばれるとは思わなかったぜ……」

蒔風がいるのはこのビルの屋上だ。  
さっきの爆発の直前に逃げたため、所々煤けているが、怪我はなかった

「で、まっさかこんなに早く追いつかれるとも思ってたわ」

蒔風の背後に音もなく現れたのはグレイブだ。  
その剣の切っ先を蒔風に向け、宣告した

「もう逃げられませんよ。ライダーでもないあなたが、ここから逃げる術はありません」

その言葉に蒔風が思考の後に答えた

「……どうかな!?ここからでも、逃げる方法はいくつか考えつくけど?」

「では、見せてもらいましょう」

バツ、ブオン!!

グレイブが専用剣のグレイブラウザーで蒔風の首を狙う

蒔風がそれを身を引いて避けるが、グレイブがそのまま回転し回し蹴りを食らわせてくる

それを腕で受け、掌底をグレイブの腹に減り込ませ後退させる  
しかし後退したのはその威力にではなく、自ら身を引いたためだ。

「おい、なんでライダーを敵視するみたいになってんだ?この世界の仕組みはなんだ」

「教えましょうか？そのためにはまずあなたの身柄は拘束させていただきます！」

グレイブが先ほどと同じ要領でさらにコンボを繋げようとしてくる

蒔風が避け、受け、それを知った上でさらに攻撃を仕掛けてくる  
だが……

ガキツ！！

「なに！？」

蒔風が上腕でグレイブラウザーを受け止めた

服の下からは鞘に収められたままの「天」が覗いていた

「これは！？うぐツ！！」

蒔風がグレイブの首元を掴み、壁に叩きつける

「答えてもらうぞ。この世界の仕組みはなんだ？」

「う、ぐ……この世界では……フォーティーン様がすべてだ」

「フォーティーン？あのおっちゃんの事か？」

「ふ。そうだ。この世界の住人は皆優しい。そうだったでしょう？  
それもすべてフォーティーン様のお力。逆らう者などいません」

「お前らは……一体何をしているんだ！？」

「人間は優しくあるべきです。それができない者は、この世界にふさわしくない」

「そうすることを強要しているのかお前らは！！！彼らの自由を！」

「逆らう者にはプログラムを植え付ける。完璧だ。この世界は完璧であるべきなんだ！」

《MIGHTY》

「！？なに！！」

ドッスン！！

グレイブが蒔風から見えない位置でカードを剣にスラッシュさせる  
そうすることでスラッシュしたカード「マイティグラビティ」が発  
動し、その剣撃を蒔風にぶち当てた

重力の乗ったその一撃に、蒔風が吹き飛ばされ、フェンスを破壊し、  
身体が落ちていく

「~~~~~！！！！力を借りる！！！！」

蒔風の全身に電流が走る

その力で磁力を働かせ、ビル内の鉄骨に作用させる



ドオオン！！！！！！

大爆発を起こり、時風の開けた穴がさらに広がった  
爆発の中から人間一人分の影が吹っ飛んで行ったが、誰もそれを気  
にも留めない

その部屋の扉からグレイブが飛び込んできた

「フォーティーン様！！」

「大丈夫だ。問題ない」

フォーティーンは元の男性の姿に戻っていた

あれだけの爆発にもかかわらず、一切の機材は傷一つ付いていない

「機材を移して、新たに運び込まれたものにプログラムを」

「は」

グレイブが変身を解き、歩き去るフォーティーンに頭を下げた  
そして自身も任務をこなすために、ディケイドの一行のほうへ向か  
った

t o b e c o n t i n u e d



ディケイド 〈親切な世界とその裏〉（後書き）

アリス「おお、確かにちょっと違います」

蒔風視点からの「ディエンドの世界」です  
その代わり士とこの世界のライダーたちの共闘はなくなってしまいました  
ましたが

ア「そこはどうするんです?」

・・・動画サイトに行けばあるさ!!!

ア「うわこいつサイテーですね」

じゃあ書く?

蒔風がないから原作そのまんまだぞ?

はたしてそれを二次創作と言っていいのか?

ア「確かにそうですが・・・」

だからあえて蒔風と士たちは別行動にしました  
多分、他の世界もそうなります

ア「と、なるとあまり士との共闘は?」

各世界の最後の戦いぐらいですかね

ああそうだ

今日ダブルの映画見に行きましたよ!!!  
かっこよかった!!!

ア「エターナルとかジョーカーとか？」

ジョーカーの変身ポーズがメチャかっこよかった。  
あとオーズだよオーズ!!!

ア「先行ライダーですね？」

そうそう。

で、映画の最後にこう言ってた

「ダブル、オーズ。MOVIE大戦再び勃発!!!」

ア「またやるんですか!?!」

やるみたいだよ〜

ア「まったく。最近のライダーはなんというか

次回、ディエンドのエンド」

ではまた次回

オレたちは、共に助けあい、進化する!!!

## ディケイド く兄との決着

蒔風が帰ってきたのはあたりが真っ暗になってからだ。

写真館にいるのはユウスケ、土、栄次郎だけだった  
あと小さな白い蝙蝠のようなキバラーと呼ばれる者もいた。

夏海はいない。  
グレイブに誘拐されたのだ

写真館の中は散々だった  
ユウスケはキバラーに対し異常な優しさをふるまっていたし  
栄次郎は夏海がさらわれたと狼狽していた

そんな栄次郎に土は声をかける

「大丈夫だ。絶対に助ける。絶対にだ」

「やっぱりまともな社会体制じゃなかったか・・・」

「ああ。海東からも話は聞いて大体わかった」

どうやら過去、海東はフォーティーンのもとでライダー狩りをして  
いたそうだ

そして純一はライダーとしてランス、ラルクと共にこの世界の体制  
に抗っていた

そしてある日、ついに純一が捕まった  
兄がライダーだとは知らなかったが、それでも海東はまだ大丈夫だ  
と思っていた

海東は自分の考案した安全な更生プログラムによって納得してくれ  
ると思っていたからだ。

だがそんなものは使用されていなかった  
人間の頭の中にフォーティーンの因子を埋め込むことで言いなりに  
させていたのが現実だった。

結果として海東はフォーティーンから離脱し、  
純一はフォーティーン側に着いた、というわけだ

「海東は自分の兄を元に戻そうと思っている」

「夏海さんはどうするんだ？ユウスケは使い物にならないぞ？」

ソファでユウスケがキバーラのどこかわからない肩を揉んでいた  
「どうだい？痛いところはないかい？あつたら言ってくれよ？」

「・・・キモチワルいな」

「で、蒔風。オレに作戦がある」

「どんな？」

「それは・・・」

- - -  
- - -  
- - -

「オレたちもついに指名手配か・・・」

「おー写真写り悪いなー。オレホントにこんな変な顔してるか？」

「オレだってこんなに意地の悪そうな顔してねえよ」

「・・・そうかあ？」

「で？君たちは一体何の用かな？」

次の日

二人は海東の元にやってきていた

そこにも指名手配の写真が貼られていたが、土と海東は一緒くたで、蒔風はピンで映っていた

「そもそも、なんでお前は一人でなんだよ」

「ほら、オレライダーじゃないし」

「でもライダーの力だってもってんだろ」

「借りてるだけな。だから使わない限りばれないの。につしっし」

「ねえ、用があるなら早くしてくれないか？僕は忙しいんだ」

海東が二人に話をするように促す

「そつだな・・・オレたちはナツミカンを取り返したい」

「お前は兄を助けたい。どちらもうまくいく策があるんだが、乗るかいい？」

「なんだいそれは？まさか僕に同情してるんじゃないだろうね？」

「なに？」

「僕の問題は僕が解決する。君たちは手を出さないでくれたまえ」

「海東。お前は信じる者に裏切られ、そして自分すらも信じられなくなった

だからお宝という確実に信じられるものを集め、自分をごまかそうとしている。

違うか？」

「わかったようなことを言わないでくれないか！！」

「はん・・・土、こいつ飛んだ腑抜けだぜ。オレたちだけで全部解決してやるつぜ」

「なんだと・・・（ガッ！！）僕をバカにしてるのか？」

海東が時風の襟を掴みあげ激昂する  
そんな海東の怒りをさらりと受け流し時風が言う

「じゃあなんでこの世界に来た時、真つ先に兄を助けに行かなかった？あちこちでダークローチを倒すだけで、兄と戦おうとはしなかった」

「そ、それは・・・」

海東の手が緩む

「この世界に来たのだって、土達というきっかけがなければ帰ってこなかったらう？いい機会だから言ってみてやる

お前は逃げてたんだよ。そして「逃げる」ということを「宝探し」という理由でごまかした！」

「違う！！！！僕は・・・僕は兄さんを救う！！！！」

「だったら早く行くぞ。一人でだとかそんな詰まらん意地を言ってるじゃねえよ。何としても兄を助けたいんだろ？」

「・・・・・・」

海東が黙る

そこに一組の男女が現れる

「さつきから黙って聞いてれば・・・私たちも手を貸すわ」

「しゃーねえな。春香に免じて、一度だけお前を信じてやるよ」



そこに立つのは三輪春香と禍木慎まがきしんだ  
彼らはかつての純一の仲間で、仮面ライダーラルクとランスに変身する

純一が捕らえられ、変貌してしまったのは海東のせいだと考えていた  
しかし、彼らも海東が昔の海東とは違うと思ったのだろう

「え？なに？士、知り合い？」

「お前がいない間に会っていたライダーだ」

「あんたもディケイドの連れでしょ？」

「なら俺らと目的は一緒だ」

「よろしくな」

「で、どうする海東。やるか？やらないか？」

「……迷惑だ」

海東がぶっきらぼうに言い放った  
それに憤と春香が怒る

「どうして？五人力を合わせれば、フォーティーンだってきつと倒せる！ー！」

「やめてくれないか。迷惑だっって言ってるだろ」

「いま多くの人間がフォーティーンに操られている。あいつを倒せ

ばみんな解放され」

ドッ！バキッ！！

海東が春香の鳩尾に肘を、慎の顎に拳を命中させて昏倒させる

さらに蒔風にも殴りかかるつもりだが、腕を掴まれ、空中で一回転させられる

しかし地面には叩きつけられず、一回転して再び地面に立たされた。

蒔風の掴んでいる手をさらに土が掴む

「オレはお前を信じている。なぜなら、お前の弱さを見たからだ俺とおまえが手を組めば、お前はオレを信じ、いずれ自分を信じることができる」

「人を信じる想い。それはどこの世界、どんな時代でも、最高のお宝って奴じゃないのかい？」

「.....」

「やるぞ海東。この世界も兄貴も、お前の手で救ってやれ」

.....  
.....  
.....

「で、これがその作戦かい？」

荒地の真ん中に時風、海東、土が立つ

海東の体は縄でグルグル巻きにされていて、まるで捕虜だ

「オレたちがお前をフォーティーンに引き渡す。ナツミカンと交換にな」

「で、入れ替わったところでお前がフォーティーンに攻撃を仕掛ける。縄は簡単にほどけるようにしてあるから大丈夫だ」

「でも奴らが来るのはまだ先だろう？なぜ今から縛ってるんだい？」

先ほど海東と話をしていた時から時間はそう経っていない

あの時にフォーティーンに連絡を入れたなら、来るのはまだ先のはずだ

「いや、だってフォーティーンに連絡したの昨日の夜だし」

「俺様の完璧な作戦をすぐに実行したまでのことだ」

時風と土が言ったことに、海東が疑問を挟む

「君たち、僕がこの作戦に「イエス」と言わなかったらどうするつもりだったんだ？」

その問いにさも当然そうに、二人が同時に言った

「ぶん殴つてでも気絶させて縛りあげてあとはポイ」

「……………」

こいつらに任せて大丈夫なのだろうか？

と、海東が考えているところに土が海東に訊いた。

「お前のことはこの世界でよくわかった。今度は俺の事を教えてもらう番だ」

「お前の事？土、どういうことだ？」

「蒔風には話してなかったな・・・オレには昔の記憶がない。だから、オレが何者かは知らない」

だが、とそこまで話して海東に向き直る

「お前はどうかやら俺の過去を知っているみたいだからな」

「いいだろう。それは……………」

海東の口が開く

しかし、それと同時に別の声が響いた

「来ましたよ！！さあ、大樹をこちらに渡してもらいましょうか！！！！」

海東純一、フォーティーン、そして夏海の三人が現れた

「おい！！夏海さんにはなにもしてないだろうな！！」

蒔風が叫ぶ

昨日の連絡の時点で夏海に一切の手を出さないこと。

それがこの交換の条件の一つだった

「ええ、それはもう！！」

「いいだろう。海東、行け」

「手順はわかっているな？」

「あんな単純な作戦、何度も言わなくてもわかってるさ」

そう言いながら海東が歩いていく

夏海も純一に押し出され、歩いてきた

そして

二人が交差し、入れ違いになった瞬間に

海東が縄をほどいてデイエンドライバーをフォーティーンに向けるが、それを夏海が背後から羽交い締めにして取り押さえた！！

「なに！？」

「ナツミカン！？」

「確かに、手は出していませんよ。あの連絡の後にはね」

純一がにやりと笑う

その柔和な笑顔の瞳だけは、邪悪にきらついていた

「じ、のー!!」

海東が夏海を振りほどいて押しつける  
そして兄の元へと駆けながら

「変身!!」

「Kamen Ride . . . DEEND !!」

デイエンドに変身し、フォーティーンに迫る

それを見過ごす純一ではない

「大樹、決着をつけてあげましょう。

》open up《

純一もグレイブに変身し、海東と激突する

「海東!!」

「待ってる!!」

「Kamen Ride . . . DECADE !!」

時風とディケイドに変身した士も参戦する。

その隙にディエンドがフォーティーンに駆けて行こうとするが、その背中をグレイブが追う  
しかし時風とディケイドがそれを食い止める

「行け、海東！」

「決着をつけて来い！！」

「士、時風・・・兄さん、今元に戻すから！！！」

ディエンドがフォーティーンに向かう  
するとフォーティーンの体から黒いオーラが噴出し、またたく間に  
巨大な怪物へと姿を変えた

その姿は白く、四本の腕に剣、盾、聖杯、棍棒を持ち、下半身は蛇  
のような尾になっていた。

巨大邪神14（フォーティーン）

その名の意味は、「規定をの数を超えるモノ」

「フォーティーン様！！」

グレイブがその姿を確認し、戦線から引いた。  
あのお方さえいれば、自分の出番はないというように

その巨体が地面スレスレを飛んでいく  
ディエンドの体が風圧に飛ばされ、斬り裂こうと跳んだディケイド

も弾かれる

「士あ！！グレイブ頼むぞ！！」

ゴゴウ！！！！

蒔風の獄炎砲が当たり、わずかに身を引かせるフォーティーン  
その際に蒔風が空中に跳び上がり、力を借りる

クルクルと回転した蒔風の体が一瞬で変わり、巨大な姿となる

その姿はウィツアルネミテア。

別の世界における、神とも取れる絶大の力！

『貴様！！』

『邪魔すんじゃねえよこのデカブツが！！』

ドン、ドゴツ、ギヤイン！ゴゴン！！

一撃一撃が大ぶりの攻撃を交互にぶち当てていく蒔風とフォーティーン。

フォーティーンの棍棒を奪って盾を殴り碎き、その肩口に噛みつく  
蒔風

だがフォーティーンも黙ってはいない。

蒔風の背面を剣の柄で殴打し、聖杯を掲げて電撃により引き離す。

蒔風がアッパーカットでフォーティーンを若干引かせるが、フォーティーンが回転からの尾による打撃に蒔風の体が飛ばされる。



ドッゴズン！！！！

その体が大地に落ち、天地を揺るがすようなとんでもない音がした

『愚かなニンゲンども。私はこの世界に幸福をもたらしてやったのに！！』

ドゴガガガガガガガ！！！！！！

聖杯からの電撃を辺り一面にまき散らすフォーティーン

その爆発にデイケイドもデイエンドも吹き飛ばされ、時風は元に戻ってしまふ。

三人が一カ所に集まり、フォーティーンを睨み、叫んだ

「お前が作ったのは、地獄だ！！」

「その通り。人間は自由に生きるべきだ」

「お前はその意志を奪い、殺し、利用した！！」

「……人は誰でも自分の意志で生きるべきだ！それを奪っていいなんてことはあり得ない！！！！」

『そんなもので幸福が作れるとでも？』

ブシューアアアアア・・・

蒔風たちの周囲にダークローチと呼ばれる怪人が何体も現れ、三人を囲んだ

『そう言っただけ人間たちは争ってきた。それでも自由意思が必要か！』

その考えを蒔風が否定する

「必要さ！！ま、確かに人はそう言った間違いを犯す。だけど、それを乗り越えなきゃ強い未来は作れない！！」

『なに！！？』

「お前の作る軟弱な未来なんざ必要ないって言ってんだよ！！！」

「おいお前ら！せっかく信じてやるってのに仲間外れとかにしてんじゃねえよ！！」

「私たちが戦わなくちゃ、強い未来にならないじゃない！！」

蒔風の言葉に反応するように、二人が現れた  
春香と慎だ。

「君たち・・・」

海東が思わず言葉を漏らす

「俺たちだって戦わせる!!」

「行くわよ!」

「変身!!」

《《open up》》

二人がラルク、ランスに変身し、周りのダークローチ達を一手に引き受ける

「雑魚どもはまかせとけ!!」

「あなた達はフォーティーンを!!」

「ああ!!」

「Final Kamen Ride・・・DECADE!!」

その言葉にディケイドが動いた  
ディケイドがコンプリートフォームに姿を変え

「HIBIKI! - Kamen Ride - ARMED」

バシャシャシャシャシャ・・・  
ゴコン！！

デイクイドの隣に装甲響鬼アームドが召喚される  
この世界の、地獄の元凶を断ち切るために！！！！

グバア！！！！

フォーティーンの中から巨大な火球が放たれる

「力を借りる！！！」

ゴッ、パアアアアーン！！！！

蒔風が右手を突き出し、火球に触れると、その火球は始めからなかつたかのように霧散される

「いまだ！！！」

「Final Attack Ride - - HI HI HI  
HI BIKI！」

ボツ、ズオオオオオオ・・・！！！！！！

蒔風に合わせてデイクイドがカードを発動させる

デイクイドと響鬼の刀身が炎に包まれ、どこまでも伸びていく  
その炎は、この世界の自由を奪われた人たちの叫びかのように、唸りを上げて伸びていく！！！！



デイエンドとグレイブを除く皆が思い思いの声をあげていく

「兄さん……」

デイエンドがグレイブに近づく

だがそれよりも早く、ランスとラルクが駆け寄った

「終わったな、純一！」

「これでみんな元通りね！」

そう言っつてグレイブの肩をたたく

それに対してグレイブは

グレイブラウザーで二人を切り裂くことで答えた

「グアッ!!」「うあッ!?!」

「兄さん!?!」

「純一、どうして……」

デイエンドとラルクの言葉にグレイブが本性を現す

「バカめ。オレは最初から自分の意志でフォーティーンに仕えていた。

オレはな、ライダーとしてお前らの中に潜り込んでいた、スパイだったんだよ!!」

「そんな……嘘だ!!」

「純……………」  
「この……………」

三人がグレイブに信じられないという思いと、裏切られたという思いの混じった眼差しを向ける

蒔風とデイケイドは

「やっぱりか」

「操られているにはおかしいと思ったんだ」

と何となくわかっていたかのような声を出した

「で、どうするんだ？オレは今から第二のフォーティーンとなり、この世界を支配する！！止めるのなら……………今のうちだぞ！！」

グレイブがデイエンドに斬りかかる

それをランスとラルクが追うが、デイケイドと蒔風が二人を止める

「手を出すな。これは海東の……………二人の戦いだ！！」

グレイブの剣撃をかわし後退していくデイエンド  
それを追っていくグレイブ

「やめてくれ兄さん！！正気に戻ってくれ！！」

「オレは最初から正気だ。それが嫌なら、オレを倒して見せる！！」

デイエンドの戦法は基本的にはヒットアンドアウェイだ  
避けたところで即座に反撃する

しかし、相手が兄であるということと、ライダーとしての経験値もあり、押されきみただが

「兄さん・・・うあ・・・うああああああああ！・・・！」

ドンドンドン！！バキッ！！！！

ディエンドががむしゃらに攻め立て、グレイブを一気に押し返して地面に倒す

その顔面に向けて銃口を向け、その手が止まる

「どうした？止めを刺さないのか？」

「・・・っ！！」

ザキイツ！！

グレイブがディエンドの腹部の装甲を突き、退かせる

腹を抑えるディエンドの首筋にグレイブラウザーの刃を当て、止まる

そして兄弟がお互いを見据える

静かな時が流れる

二人が武器を下ろし、変身を解く。

他の皆も変身を解いた



「なぜ止めをためらった。大樹」

「兄さんだって」

兄弟が互いの矛盾を問いただす

純一が決別の言葉のように言い放つ

「後悔するぞ。オレを倒しておかなかったことを」

「……………」

その純一の言葉に蒔風が口をはさんだ

「は、じゃあお前も後悔するぞ？ここで海東を倒しておかないことを、な」

さらに士が続く

「お前は海東の自由な意思を認めた。だから止めを刺せなかった。お前はフォーティーンにはなれない」

「……………」

二人の言葉を聞くと、純一は歩き出した

その背中を、皆は見ていた

この世界の行く先は、この世界のライダーが担うのだろう

士たちの出番は、ここまでだ

.....

「ということだったんだよ。わかったか？ナツミカン」

「はぁ・・・でも洗脳されてたって、実感がわきません」

「まあ、それが洗脳だしなあ。海東を捕まえてた時の顔、恐ろしかったぞ？」

「いや時風。あれがナツミカンの本性だ。甘いと思ってる時点でもなく酸っぱいぞ」

「つくさくさく君？笑いのツボ！！！！」

ドスっ！

夏海は士の首元に親指を突き立てる  
すると士が笑い転げ始めた

「これは・・・なんじゃこりゃあ〜！！！！」

「光家秘伝の「笑いのツボ」です。時風さんも気をつけてください  
ね？」

「あっはっはっはっは！！久しぶりはッ！堪える！！！！」

笑い続ける土を見ながら、蒔風は思った

(まだ洗脳されてんじゃないか?)

「さ、次の世界に行きましょう!!」

ガラガラガラ、ビシヤア!!

カーテンロールが降り、新たな絵柄が現れた

そこには獅子、龍、熊、猿、亀が描かれた絵だった

次の世界は、五色の戦士、侍の世界だ

t o b e c o n t i n u e d

ディケイド　く兄との決着く（後書き）

アリス「ディエンドの世界、完！」

ですね

最後の戦いはさすがにオリジナルと変わらない感じで

ア「でも時風もいい感じに出せましたね」

それを判断するのは読者様さ

じゃあお願い

ア「次回、天下御免の侍戦隊見参！！」

ではまた次回

ちっぽけだから、守らなきゃいけないんだろ！！

## ディケイド ～五色の戦士～

「この世界はなんだ？わかるか時風？」

「いや・・・あの絵柄からライダーに関する情報はなかったぜ？」

士が時風に訊く

現在四人で町を歩いていて、今はビルに囲まれた広場にいる  
階段式の噴水があり、ベンチがあり・・・

何の変哲のない世界だ

「ま、この世界からライダーの情報は得られないと思うけど？」

「じゃあこの世界はライダーの世界じゃないのか？」

「そう言うこと。ここは、ライダーの存在しない世界だ」

「ライダーのいない世界か。ディケイドが回る世界だからといって、  
ライダーのとは限らないのね」

「ああそうか。君はライダーのいない世界を回る方が多いのか」

「そうだな。だから取り立てて騒ぐほどでも」

「おい待て、なんで海東が当然そうに会話に参加してんだ!!」

士が叫ぶ

そう、さっきまで会話していたのは蒔風と海東だ。

士たちは突如現れた海東にポカーンとしていただけだった。

「なに言ってるんだい士。僕はお宝を手に入れて忙しいんだ。あとにしてくれないか？」

「来たのはお前のほうからだろ!!」

「というか士よ。なぜそんな恰好してんだ？」

「黒子とは・・・また面白い。似合ってるよ、士」

「うるせえ!!」

この世界で士に振られた役割は「黒子」だ  
一体何をやらされるのか・・・

「士、」で・す・の「って言うってみてくれ!!」

「わけわからんこと言うな!!海東!お前もさっさと行っちまえ!!」

「はいはい・・・っつと」

海東が足元に置いておいたクーラーボックスを担ぎ、その場を去っていった。

「なんだっただあいつは」

「それにしても土。ライダーのいない世界ってことは、ここに怪人はいないんじゃないか？」

ユウスケが土に問う

「いや、そうでもないようだ」

土の返答に合わせたように、噴水のタイルの「スキマ」から異形の怪人が無数に現れた

「ライダーがいなくても、怪人はいるみたいだな」

「別にそれって普通じゃね？」

カードを構える土と、並び立つ蒔風

戦闘開始！！と意気込んだところで和太鼓の音が鳴り、多くの黒子たちがいきなり現れた

さらには何かの家紋入りの陣幕とのぼり旗が立てられ、そこにはかま姿の五人の男女が現れた

「凝り性もなく現れて・・・外道衆！！おとなしく「スキマ」に帰れ  
！！！！」

五人のうちの一人が怪人たちを指さし言い放つ

だが気にも留めずに、うごめき続ける怪人

「もう！そんなんで帰るわけないでしょう！」

「むづ。一回やってみたかったんだが、ダメか？」

「だから、私達が送り返してあげましょう。」三途の川「に」

シユキン！！！

各人が携帯電話を取り出し、それを筆の形に変え空中に文字を描く

「「「「「一筆奏上！」「」「」」

バツバツバツ！！

各々が「火」「水」「木」「土」「天」の文字を書き、それを身に  
まとい「変身」した

彼らこそがこの世界の秩序と平和を守る戦士

その名も

「天下御免の侍戦隊」

「「「「シンケンジャー！参る！！」「」「」」

「シンケンジャー？ああ、そゆこと」



シンケンジャーなる者たちが突如として現れた怪人たちを次々と切り裂き、倒していく

「知ってるんですか？」

「舜、知ってるのか？」

「ああ、今知った。あいつらシンケンジャーはこの世界とは別の、三途の川つてとこにいる妖怪集団、外道衆と戦ってるってわけだ」

「じゃああそこで倒されているのが・・・」

「外道衆だな。ま、あいつらは使い捨ての雑兵らしいが」

「なるほど・・・ってあれ？土は？」

周りを見るとどうやら外道衆の駆除は終わったらしく、シンケンジャーたちが変身を解き帰っていく。

その周りで黒子たちが先ほどの陣幕やのぼり旗の撤収作業に入っていた

そしてどうやら土もそれに駆り出されたようだ

皆黒子なのでどれが土かわからない

「土君？どこですか土君！」

「あれは？いや、あっち？」

「そんなこと言ってもしょうがないだろ。とりあえず行くこうぜ」

「どこにですか？」

「この世界でやるべきことがあるんだろ？それを探しにだよ」

「でも土君は？」

「あいつには護衛付けてるから」

.....

「で？お前が俺の護衛？」

「そうだ。この天馬さんが護衛してやつから、ありがたく思っ  
て  
コノヤロー」

あのまま黒子の波に押されて土がやってきたのはシンケンジャーの  
リーダー、シンケンレッドに変身する志葉丈瑠しはたけあゆの所有する志葉家の  
屋敷だ。

そして頃合いを見て人型になって天馬が現れた

「護衛なんざ必要ない」

土が余裕の態度で天馬に言うが、天馬にとってはそんなこと知った  
ことではない

「だまれやモヤシが」

「モヤッ!？」

「この世界の事よくわかってねえんだからよ。オレさんが教えてやつからまあ聞けよ」

士を座らせ、自身も胡座あぐらをかいて説明を始める天馬

その説明が終わったと同時に、志葉丈瑠の声がある部屋の中から聞こえてきた

「じい！何度言えばわかる。しっかりと病院に行け！」

「いいえ。じいはまだまだ現役です！これくらい、なんてことありませぬ！」

「このわからず屋が！」

「殿はこの私を厄介払いするおつもりですか！？」

「そうじゃないと言ってるだろう。ここは大丈夫だからその腰を治して来いと言ってるんだ！！」

じいというのはシンケンジャーのサポートをしている志葉家に仕える家臣、日下部彦馬くさかへひこまの事だ

どうやら病院に行けという丈瑠と大丈夫だというじいのケンカらしい

「なんだなんだ？ケンカか？」

「殿さまっても案外普通なんだな」

「つかよー。あれかなりキテルぜ？」

「わかっているがもう止まらないんだろ」

「だろうな」。あーもー鬱陶しいな」

士と天馬が話しているところ、ついに丈瑠が部屋を飛び出してくる。

そこでふと立ち止まり、士と天馬に気付く

「なんだお前たち？ただの黒子じゃないな？」

「そんなことないですよ」殿さま」「？」

丈瑠がムツ、とした顔をする

「お前ら、一体なにも・・・」

「ハイこっち来ようか、二人とも」

丈瑠の言葉をさえぎり現れたのは時風だ。

いつの間にか士と天馬の背後にまわり、二人に肩を回す

「時風!？」

「舜・・・いきなり出てくんのは止めるっての」

「わりわり。じゃ、お殿様。オレたちはこれで」

「舜!!!なに勝手に出てってんだ!」

そこにさらに一人の黒子が出てきた

「その声・・・ユウスケ？」

「ちよ、ユウスケ、待て、引きずるなオレをどこに（連れっわああああ・・・）」

途中から外に連れ出されていき、時風の声が遠ざかっていった。丈瑠がそれを眺め呆れて、土達のほうを向くと、そこに土、天馬はいなかった。

t o b e c o n t i n u e d

ディケイド 〱五色の戦士〱（後書き）

アリス「次はシンケンジャーの世界ですか」

はい

しかし、おそらく多くの読者はわからないことも多いかと思えます

ア「まさか・・・」

わからないときは・・・

ア「もしかして」

W i i か Y U T U B E で ご 確 認 を ！ ！

ア「やっぱりかあ！！！！」

ちなみにディケイド24話です

ア「この丸投げ作者め・・・」

すみません

ア「次回、イカ泥棒海東？」

ではまた次回

愚かだから、転んで怪我してみないと判らない。時には道に迷い、間違えたとしても、それでも旅をしている。お前に道案内してもらう必要はない！

ディケイド　く　蒔風、少しキレるく

「引つ張らないで！お願いだから引つ張らないで！とれる！とれちやうからあ！」

「まったく・・・せつかくオレがタイミングよく出ていこうと思つてたのに」

蒔風とユウスケが屋敷の外に出て話していた。

ユウスケが蒔風のどこを引つ張っていたかはご想像にお任せする

「なにしに来たんだお前ら」

士と天馬があとからついてくる。

と、もう用はすんだからと、蒔風が天馬を鞘に収めた。

その光景を目の当たりにして、士と雄介が反応した。

「もう驚かないぞ、オレは」

「なんだ今の！すげー！！」

士は蒔風の力を少しは知っているのでさほど驚かないが、ユウスケは蒔風の力を見るのはこれが初めてだ。十分すぎるほど驚いてくれている。

「ありや、ユウスケは知らなかったっけか？」

と、逝つて蒔風が簡単に天馬たちの事を教え始めた。



そしてそれが終わったと同時に、ドシャツ！とビルの陰から海東が倒れ込んできた。

一体何があったのか、体中ボロボロで、歩くこともままならないようだ。

だがそんな体になってもまだ、先ほど持っていたクーラーボックスは手放していない。

さすがというかなんというか。

「どうした海東？」

「何やってんだお前？」

「海東さん！！大丈夫ですか！？」

時風と士がドライに反応し、ユウスケが海東に駆けよって身体を起こす。

と、それと同時に、海東を追ってきたのか、そこに異形の怪人が現れた。

身体は時間が経って黒くなった血液の色をしていて、その体中にいくつもの目が付いている。

外道衆「チノマナコ」

この世界にやってきたライダーを調べるために、送り込まれた怪人だ。

「なんだあ？あんな眼玉野郎に負けたのかお前は」

「いや待て蒔風。あいつが持つてるのって……」

蒔風が回答をおちよくるように言うが、土が促した先を見ると、確かにチノマナコの手にはディエンドライバーが握られてるではないか。

「あっはっは！なんだお前。泥棒のくせに盗まれたのか」

「なにやってんだか……大方クラーボックスそいつに気を取られてやられたんだろっよ」

土が笑い、蒔風があきれる中、ユウスケが海東に肩を貸して起き上がらせる

「ユウスケ、介抱してやれ。丁重にな。恩は高く売るもんだ」

「厄介だぞ？怪人がライダーの力だからな」

「全く問題ないな」

「そうだけどさ」

ヴォーン！

士がカードを取り出し、眼前に構える。

「変身！！」

そしてそれを反転させてバツクルに挿入、バツクルを回転させて変身する。

「Kamen Ride - - DECADE！」

「お前はそのままでもいいのか？」

「オレはこのままでも強い」

「そうか・・・行くぞ！！！」

「をおおおつつつつああああ・・・」

ドンドンドンドオン！！

チノマナコが言葉にならない唸り声をあげて弾丸を撃ちながら突進してくる。

時風がそれをスライディングでかわし、チノマナコの片足を両足で挟み取りバランスを崩させる。

崩れるチノマナコの体の頭部をナイスなタイミングでバツティングするディケイド。

チノマナコの体から火花が散るが、ディエンドライバーの力が、それともチノマナコ本来の力が、全く効いていないようだ。頭をポリポリと搔いて、なんだこいつら？みたいなジェスチャーをとる。

「この野郎……」

「あの日全部つぶしてやろうか……」

あまりにもこちらを馬鹿にした態度のチノマナコに、蒔風とディケイドがいらついた声を出す。

そもそも、あーうー、うをおおっつ、とさっきからやかましく呻き続けているのだ。

しかも時々不愉快なほど大声で騒いでくる。

そりゃ二人のイライラゲージも溜まるわ。

と、そこを通りかかる謎の男が

「はあはあ……畜生……泥棒野郎も追わなきゃなんねえのに……スシチエン……っぐ……」

何だか寿司屋の大将のような格好をした青年がよろよると歩いてきて、戦いに割り込もうとする。

しかし体力の限界だったのか、その場に崩れ落ちてしまった。

その男に向かってディエンドライバーの銃口がゆらりと向けられる。

「つつ!?おい、まずいぞ!?!?!」

ダッ!!

その状況に血相を変え、蒔風が一気に青年の元に辿り着く。

しかし、辿り着いたはいいがああ体勢では弾くこともできないだろう。

銃口から弾丸が飛び、それがまっすぐに蒔風へと延びていく。

「蒔風!?!」

ディケイドが叫ぶ。

しかし、蒔風の顔には笑みが。

この男は弾く必要を考えなかった。

地面に手が付いていればそれだけでいい。

「畳返し!?!」

バゴン!!バガッ!!

跳ね上がった地面に、弾丸が命中し、少しだけ削る。

その光景に土は少し驚いたが、蒔風の言葉にハッ、としてチノマナコに向きなおした。

「士!!あの野郎はまかせる!!」

「そうさせてもらおう!!変身!!」

「K a m e n R i d e . . . D E N . O !」

時風が青年を連れていく背後でディケイドがさらに変身した音が聞こえた。

だがそんなことを気にしてる場合ではない

とりあえずこの青年を安全なところに連れていくことが先決だ。

とりあえずその場を離れ、ベンチに腰掛けさせる。

「すまねえな・・・」

「気にするない」

「にしても情けねえ・・・泥棒野郎にイカちゃん盗られるし、外道衆とは怪我のせいで戦えねえし。はあゝあゝ」

「なんだ?おまえ、シンケンジャーだったのか?」

「おうとも!オレこそがシンケンジャーが一人、シンケンゴールドよお!つていたた・・・」

彼の名前は梅盛源太つめもりげんた

彼の言う通りシンケンゴールドとして戦う戦士だ。

だが先ほど「泥棒野郎」に大切な相棒であり、武器でもあるイカちやんこと「烏賊折神」を奪われてしまい、それを追っていたのだそ  
うだ。

「なあ、そいつってさ、バカみたいに偉そうにして、指ピストルに  
して撃ってくる男か？」

「そ、そいつだそいつー！知ってんのか！？」

「知ってるけど・・・」

どうやら海東がさつきから持っていたクーラーボックスにはその「  
烏賊折神」が入っていたのだろう。

源太の話によると、海東を一度は追い詰めたのだが、チノマナコが  
襲撃してきた際にディエンドライバーを奪われたのだそうだ。  
そして狙われた海東を守って自身も怪我をしたのだそうだ。

「お前・・・損な性格してんな」

「うっせい」

「だが嫌いじゃない。つまりは烏賊折神も海東も守るといふ意志だ  
もんな。素晴らしすぎるぞこの野郎！！」

「それは褒めてんのか？」

「誉めてます」

「そ、そうか・・・へへっ」







その日の夕暮

いくつもの高層ビルの並び立つ街中

そのうちの一つの屋上に、チノマナコはいた

もはやまともな言葉は発しておらず、唸り声だけを呻き上げている

しかし、その使い方だけはよく知っているようだ

カードを取り出し、装填する

「Kamen Ride」

「へえん……しゅん……」

「DEENDD!!」

ドンドンドンドンドン!!…ヴァアン!!…

ディエンドライダーがいつもとは違う唸り声をあげて、変身音を発する。

チノマナコの頭部と肩にディエンドの装甲が装着される。

この世界に、最初のライダーが誕生してしまった瞬間である。

.....

次の日

士と蒔風は町を歩いてチノマナコを搜索していた。  
夏海とユウスケも他の場所を回ってるはずだ。

「どーもこの世界は落ち着かない」

「そりゃそうだ。お前はライダーの世界しか知らないんだから」

「お前はそれ以外の世界も回ってんだっけか？」

「おう。むしろライダー世界の方が少ないぜ？」

そして搜索場所を海に沿った街道に移し、歩みを進める。  
そこに一人の青年が立ちふさがった。

「お前・・・殿さまじゃないか。家臣はどうしたんだ？」

そこにいたのは丈瑠だった。  
何やら厳しい表情をしており、糾弾するかのように二人に訊いてきた。

「お前らは昨日の・・・まあいい、お前らのうち、どちらがディケイドだ？」

「オレだ。・・・なんか用か？」

士がディケイドだとわかるとそちらを向き、疑問を投げかける。

「お前が世界の破壊者だというのは本当か」

「まったく・・・またそれかよ・・・」

「この世界がおかしくなっているのはお前のせいらしいな」

「だから・・・畜生！！」

士がうんざりした声を出しながら街道から上に伸びる階段の方を向き、言った。

「またお前か、鳴滝！」

その声に応じて灰色のオーロラと共に一人の男性が現れた。鳴滝である。

にしてもあのオヤジ、一体何のつもりなのだろうか？

「そうだディケイド。私だよ。・・・シンケンレッド！ディケイドを倒すんだ。こいつはこの世界を破壊する！！」

その言葉を聞いて丈瑠が黙っていられるわけがない。

変身ツール、「シヨドウフォン」を構え、臨戦態勢に入る。

それに対し士もカードを取り出し、互いに威嚇する。

「おいおいおいおい。ちょっと待てよおっちゃん。あんた・・・誰だ？」

「初めまして。私は預言者。鳴滝と名乗っております、翼人どの」

「・・・その呼び方やめろ」

「では時風殿。あなたにも協力願いたい。ディケイドは世界の破壊者です。今のうちに倒しておかなければ大変なことになる！！あのように！！！！」

鳴滝が指をさした方向にディエンドチノマナコ（以降Dチノマナコ）が現れた。

その装甲の「スキマ」から先日も数多く出現していたアヤカシ、「ナナシ」を出し、こちらに迫ってくる。

「チツ！一筆奏上！！！」

宙に「火」の文字を書き反転、それがエネルギーとなって身体を覆う。

丈瑠がシンケンレッドに変身し、チノマナコに立ち向かっていく。それに加勢しようとする土と時風だが、鳴滝のオーロラによって阻まれてしまった。

「みる、ディケイドのせいでああしてこの世界にライダーが誕生してしまった。この世界にライダーなど必要なかったのにだ！これもディケイドが元凶だ。即刻この世界から去れ！」

「おい待てよ。それはいくらなんでも」

「蒔風殿！！世界を渡り、その秩序を守る翼人のあなたならわかるはずです！各世界は浸食されてはならない。物語はあるべき姿をすべきだ。そうでしょう！？」

「・・・悪いがそんなの知らねえな」

オーロラのせいで遠くなっている戦闘音をBGMに蒔風が言う。

「物語なんざ、こうしてオレがこの世界に来た時点でもう違ってるんだ。だったらなるべくいい方向に持つてくべきだろ？」

「しかし！奴は「破壊者」です。そんな者が」

「すべてを破壊する力なら、すべての悪を退かせる力にもなりうる」

「な・・・ん・・・」

「それに「デイケイドデイケイド」って、土本人を見てやってくれよ」

「・・・あなたは・・・翼人ではないのですか？」

「オレは確かに翼人だよ。でも、世界だとか物語に干渉はする。これはな、オレの物語でもあるんだよ」

「・・・デイケイドの「破壊者」の力は本人の意志とは関係ありません。いずれ後悔しますよ」

「かもな。だけど、オレは土達を出会い、共にいることを後悔はし

ない」

「……翼人……世界の救世主……」

「んでもって「破滅と共にある者」だ」

「……」

シュウウウウウウ……

オーロラと共に鳴滝が消える。

それと同時にシンケンレッドがDチノマナコを退かせたようで、変身を解いて再び士達に向き合う。

「さっきの男といい、「ライダー」と呼ばれる力といい……お前たちは何者なんだ？」

その問いにいつも通り士が答える。

「通りすがりの仮面ライダーだ。覚えとけよ？」

と、自信満々に士が名乗りを上げた瞬間

「てめえも泥棒野郎の仲間かあ！！！！」

一体どこで聞いていたのか、騒がしい声と共に源太が疾走してきて、士に掴みかかろうとする。

「源太！？今までお前何やってたんだ！？」

それを文瑠が止める。

そこで源太が蒔風に気付いた。

「お、兄ちゃんは昨日の！ありがとな、あん時は」

「いや、まあいいんだが。あの後どうしたんだ？」

「あの泥棒野郎を見かけてな、追っかけたんだが、こっちの調子も悪くてな。見失っちゃったのよ」

「それで今日も駆け回っていたのか？」

「そう！！それでその！あの泥棒野郎と仲間なんだろう！？」

源太が土を指さして叫んだ。

それに土が反論する。

「オレとあいつは仲間じゃない。それに蒔風から話は聞いたが・・・イカ盗んでどうするってんだ」

「源太つち。少なくとも土は泥棒じゃない。悪党ではあるが」

「おい！！」

「な？目つき悪いだろ？だから世界の破壊者って言われてみんな信じちまうんだよ」

「たしかに、そう言われてもしょうがないな」



「うんうん。で、そのライダーってのが泥棒野郎の仲間じゃないってんなら、兄ちゃんは知ってんのかい？」

「昨日知ってるって言ったのに・・・」

「おおお！！じゃあ案内してくれ！！まったく、ライダーなんざ口くなもんじゃねえや。変なアヤカシは出るわ、イカちゃん盗まれるわでもう散々だ。

おいそのライダー野郎も、とつとといなくなつとけ。厄介を持ちこまないでくれよな！ライダーなんざ皆同じだ！！」

その言葉にムツ、とする蒔風。

確かに源太の言うことは理解できる。

何せ彼が一番の被害者なのだから、そう思ってしまつのはしょうがないことだ。

それでも蒔風は黙っていられたかった。

いや、理解できるからこそ反論することにした。

「ちょっと！！そんな言い方しなくてもいいじゃないですか！！」

しかし、実際に反論したのは蒔風ではなく、ちょうどその場に土達を呼びに来た夏海だ。

反論しようとしていた蒔風が「ありゃ」と出鼻をくじかれてすこしズツこける。

「土君は違います。今までもたくさんの世界を救ってきたんです！

」！

「あー、それは俺からも言わせてもらおう。「ライダー」だとか「世界」だとか、そんなくだらない固定観念に縛られていてよくこの世界を守るもんだ」

夏海と蒔風が言う。

その言葉に、源太が黙る。

確かにその通りだ。

今までだってあれだからこうだ、なんて思いこみで失敗してきたことは多かった。

それをこんな場所であらためて言われて、源太が少し落ち込む。

「それに、泥棒なら知ってます」

「居場所も知ってるって言ったる。この直情バカが。全く昨日は少しは見所があるかと思っただんだがな」

「ホントにか！？あとバカとはなんだ兄ちゃん！！」

夏海の言葉に嬉しがり、蒔風の言葉に少し怒る源太。  
喜怒哀楽の激しい奴である。

そこにさらに蒔風が追撃を掛ける。

「バカはバカだ。いや、「バカ」という単語を使うこと自体、「バ

カ」という単語そのモノに失礼だな。しかし残念なことに「バカ」としか言い表せないんだから、そう言うしかあるまい？だから「バカ」と言われるたびに「あまりにも愚かで「バカ」としか呼ばれようがない自分を許してください」と馬と鹿とこの言葉を作った古代人に向かつて謝罪しておけ、バカ。とつとと博物館と動物園に行つて謝つてこい。頭ン中もキンピカピーですか？コノヤロー」

その時風の言葉に夏海が若干引いて、青ざめている。士すらも、うわこいつひでえ、といった顔をしている。

「時風さん・・・それはちよつと・・・」

「時風、それは言い過ぎだ」

二人が時風に注意する。

「そうか？こう言った理解力のなくてあれだこれだと決めつけにかるバカがオレは何より嫌いなんだが」

「そ、そうなのか？」

「おう。ま、それはそれとして、ほら、泥棒のとこまで案内してやつから、ついてこいよ」

「・・・はい・・・」

地獄の底まで落ち込んだ源太と、それを支える丈瑠。それと士と夏にと共に時風が写真館に向かつていった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

ディケイド　〜時風、少しキレる〜（後書き）

アリス「今回時風少し怒りましたね」

いや、作者に悪意はないですよ？

シンケンゴールドファンの皆様、すみませんでした

ア「あれ？でも次回でも同じような口論が確か・・・」

・・・むふ

ア「ま、まさか！！」

そこは秘密

ア「次回、時風プツン」

ではまた次回

実体があるとかないとか関係ないんだ。そこに存在することにはな

ディケイド　く　蒔風、かなりキレる

「で、海東、烏賊折紙をどこにやった」

「言わない」

「なんでこいつこんなに強気なんだ？」

写真館で昨日から傷の手当てでソファに寝そべっている海東。

その周りを蒔風、土、ユウスケ、夏海、源太、丈瑠の六人が囲む。

その状況でなお海東は問い詰められても烏賊折紙の場所を吐かない。

根性据わってるとかを一段階超えているなこいつ。

「そう言えばアヤカシの持っていたあの武器、お前のじゃないのか？」

「そつだ！オレがそれを取り返してイカちゃんどつ」

「イ・ヤ・ダ！！」

「うを~~~~~~~~!!!!!!」

丈瑠の提案に源太が賛成するが、海東は頑としてそれを拒否する。

なんだこいつ。

「おまえなあ。だからといってどうするんだ？」

「そんなの君たちは気にしなくてもいいよ。じゃ、僕はこれで」

海東がたちあがって去ろうとするが、それを源太が止める。と、その背後から四人の男女が写真館の中に突撃してきた。

「殿!!ご無事ですか!?!」

「大丈夫ですか、殿!!」

「どうしたんだお前たち」

そこに飛び込んできたのは他のシンケンジャーの面々だ。

その内のシンケンブルー、池波龍之介が声を荒げた。

「黒子たちが、殿が・・・殿が仮面ライダーに誘拐されたと!!」

「なんだそれは!?!」

実際には時風たちが文瑠、源太を案内していただけだったのだが、それを見た黒子たちが勘違いしたようだ。

が、それも無理はないだろう。

彼らの知らない「仮面ライダー」という存在。

さらにそこに鳴滝による「破壊者」の誤認情報。

これだけ材料が揃えばここまで慌てるのも無理はない。

無理はないのだが・・・

シンケングリーン・谷千秋と、シンケンピンク・白石茉莉子まこの言葉がこの場を乱すきっかけとなる。

「まあ、誘拐うんぬんは龍之介の思い込み」

「だけど、ライダーは世界を破壊するって・・・」

その言葉に写真館メンバーが反応する。

だが土は椅子に座ってテーブルに頬杖をついて何やら考えているし。海東はこの場からどのようにしてトンスラするかが最優先のようだ。

「そう、こいつが世界の破壊者さ。で、これが」

「・・・!!おい!!!!」

海東が土の肩に手を置き、さらに土のトイカメラを手に取ってこう言った。

「これが世界を破壊する爆弾。ハイ、プレゼント」





蒔風の怒声に屋根がビリビリと揺れ、埃が落ちてきた。外にいる源太は写真館の周りの生き物が軒並み逃げ出したことを確認したほどだ。

部屋の中がシン・・・と静まりかえる。

「てめえらいい加減にしとけよ・・・異世界から来たのがなんだ？ライダーだから何だっつてんだ！？ライダーがいちゃいけない理由はなんだ？違う世界つてのがそんなにいけないか！？最初は誤認情報もあつたらうから見逃してやったらこのざまだ。てめえらほんとにこの世界守つてんのか答えるやカラフルザムライ共！！！」

「カラフルザムライとはなんだ！！」

ここから蒔風がキレます

結構ひどいと思いますので、見たくない方は飛ばしてください  
なお文章中にシンケンジャーをバカにする言葉がありますが、作者はそんなこと思っておりません  
では覚悟のある方だけどうぞ

「うっさい黙れ。とつと切腹して死ね。さっきも源太にキレたけ

どよお、固定観念で決めつけてんじゃねえよ。人をジャンルで見  
んじゃねえよ!!! バカかてめえらは。それくらいの判断もできな  
くて何がヒーローだ笑わせる。そもそもな、最初の情報くれた男だ  
って信じられるもんなのかよ? え? それらを総合して、さらに自分  
の目で確認して、それで最終確認してんのかお前は? そつれもな  
つしに勝手な先入観で決めつけやがって・・・ああそうか、すまん  
すまん。それがお前らの判断力の限界なんだな。こりゃ失敬だ。で  
もこれなら納得だよ。源太もそうだったんだもんな、バカにはバカ  
が御似合いか。よかつたな、外道衆がみんな悪もんでよ。もしそう  
いう奴らにいい奴がいてもお前から斬つちゃうんだろ? 「外道衆だか  
ら」ってよ。でもそれを失敗だとは思わなくてもいいぞ。それが  
お前たちの限界なんだもんねー!!! あっはっはっは!!!  
バカみてえ!!! 殿さまも大変だな。こんなバカな家臣で戦わなきゃ  
ならないなんてよ。そもそもお前らライダーの何を知ってるんだ?  
知らないだろ? 知らないくせに否定すんだろ? それも愚か者のする  
ことだよ。脳味噌までカラフルなんじゃねえの? 今すぐ三途の川突  
き落としてやるうか。理解できてない者を拒否するのは構わない。  
だがな、理解できないことを理由に、否定することは許さねえぞ。  
この意味わかる? バカでもわかりますか??? 夏海さん、この話通  
じたかな? 俺ここまでの馬鹿と会話することがなかったからわか  
ないや。まあ、夏海さんはバカじゃないからこんなこと聞いても意  
味ないか。おいお前から黙ってないで答えろよ。意味通じましたか?  
「? Do you understand?」

蒔風がそこまでまくしたてて、スッキリツヤツヤの顔をする。

この世の幸せ最高潮みたいな感じだ。

その背後に土と夏海、ユウスケが立つ。

そして思いつきり拳を振りかぶり、三人同時に

ドゴゴガン！！！！

蒔風の後頭部を殴った。

「いったあ！！なにするん！？」

「舜、お前言い過ぎだぞ」

「蒔風さん、今のはあまりにも・・・」

「実はお前外道衆なんじゃないか？」

三者三様の感想を蒔風に告げる。

しかし蒔風は気にも留めない。

「ふう、スッキリ」

蒔風が息を漏らした先には、体育座りをして地面に俯いているシンケンジャーの四人がいた。

皆負のオーラをまき散らしている。

文瑠は落ち込んではいないが、それでも思うところはあったらしい。

落ちていたカメラを手に取り、無言で土に渡す。

そこでシヨドウフォンが鳴った。

源太がDチノマナコを発見し、今交戦中らしい。

「どうした？アヤカシが現れたか？」

「どうすんだ？こいつら」

他のメンバーは打ちのめされて戦える状況じゃない。  
何だか地獄の住人みたいだ。

「オレ、行きます！」

「ま、こうなったのもオレの責任だし、行くか」

「オレは・・・」

ユウスケと蒔風がたちあがるなか、土はどうにも乗り気でない。

「土。まさかお前この世界にオレたちは必要ないんじゃないかって  
思ってるんじゃないのか？」

「・・・それは」

「いいか？お前は戦っていいんだよ。この世界のために。お前の世界が見つからないなら、見つかるまですべての世界をお前の世界として守ればいい」

「すべての・・・世界を？」

「そうだ。それに、今のお前には帰ってこれる場所があるじゃないか。夏海さんがそこを守ってくれている。誰かが出迎えてくれるんだ。それは幸せなことだぞ？士」

「誰かが・・・帰る場所を」

「そうだ。丈瑠もそうだぞ。あの爺さんだってお前らの帰る場所守ってたからな」

「・・・わかってるさ。だが」

「それでも爺さんが心配なんだろう？そこはゆっくりしっかり話せばいいさ」

「・・・そうだな」

士と丈瑠に言葉を贈る時風。

そして士が勢いよく立ちあがった。

「そうだな。たとえライダーが必要とされていなくても、この俺、門矢士は、世界に必要なだからな！」



そこにゆっくりと迫るDチノマナコ。

しかし、突如その体から火花が散り、その歩みを止めた。  
ゴールドが振り返ると、そこには四人の姿が。

「おい。大丈夫か！」

「兄ちゃん、来てくれたのか？」

「まあな」

「ライダーの奴らも・・・」

「ああ」

「・・・さっきはすまなかつた！お前ら確かに泥棒野郎とは違い！」

「気にすんな」

「それくらいにして。来るぞ」

「だったらオレたちは行くまでだ」

ヴォーン！

ブォン！

シュキン！

バツ！

「変身！」



「変身！」

「一筆奏上！」

「十五天帝！」

「Kamen Ride . . . DECADE！」

ヴオンヴオンヴオンヴオンヴオン . . . パアン！！

シャキッ！！ドン！！

シュシュシュ、パアン！！

四人が一斉に戦闘態勢に入る。

その数にさすがに不利を感じたのか、Dチノマナコが一枚のカードを装填し、発動させる。

「Ka i j i n R i d e . . . N ・ D A G B A ・ Z E D A ！」

「お前それズルウツ！？」

蒔風がひきつった顔をする

無理もない

Dチノマナコが呼び出したのは、かつての世界の「究極の闇」最強のグロンギ、ン・ダグバ・ゼダなのだから。

「なんだあいつ！？」

「あいつはオレの回ったクウガの世界の最強の怪人だ」

「だが呼び出した者なら能力は変えないはず。身体能力だけだろ？」

「馬鹿！！それでもきついんだよ！！ユウスケ！源太！手伝え！！」

「「おう！！」」

蒔風、ユウスケ、源太の三人がダグバを引きつけ、Dチノマナコの方はデイケイドとレッドに任せた。

ザキギイン！！！！

ゴールドが得意の居合切りでダグバを攻める。

しかし、ダグバの肉体の硬度にいくら斬ってもきりが無い。

しかも斬れたところですぐに回復していく。

そのあまりの強度に源太が信じられないようあん声を上げる。

「なんだこいつ！？全然斬れねえ！！」

「一人で行くな!!はああ!!」

ガギン!!蒔風が「火」首筋に斬りかかるが、それを腕で防がれる。そしてもう一方の腕で二人まとめて殴り飛ばした。

飛んでいく二人の間を縫ってクウガの蹴りが炸裂する。しかしノーマルのマイティフォームで敵うわけもない。

ハエをはたくかのような動作で弾き飛ばされる。

「こいつ・・・強い!!」

「・・・ユウスケ!!」

「なんだ舜?」

「ちょっとビリビリするぞ!!」

「え?うわあ!!!!」

蒔風がクウガの背に手を当てて、雷旺を流し込む。

そうすることで、蒔風が強引にクウガのライジングフォームを引っ張りだした。

「ったく・・・この世界にはないんだからよ・・・ほい、ライジングフォーム移行可能!!ほれ早く!!」

「お、おう!!超変身!!」

ばっ、バチバチバチ!!!

クウガの全身に電流が流れ、ライジングマイティへと変わる。  
しかし蒔風が納得しない。

「それじゃダメだ!!!もつとだ!!!つてうをお!?!」

ダグバのキックが蒔風の脇腹数?逸れた所を通過していった。  
あたっていれば間違はなくその個所はなくなっていたらう。

「ユウスケごめん!!!雷旺!!!!!!」

「え!?!ぐああああああああ!!!!!!」

クウガにさらに電流を流し込んで力を覚醒させる。

そうすることで赤かった装甲は黒く染まっていき、全身から稲妻が  
ほとばしる!

アメイジングマイティにまで覚醒したクウガがそこに立ち、Dチノ  
マナコを標的に見据える!

「って、いきなりやるな!!!」

「こっつしないとおおう!!!!勝てないのっつとああああ!!!!!!」

蒔風がダグバの攻撃を丁寧、本当に丁寧に逸らしていく。  
そつでもしないと腕が持つて行かれてしまつのだ。

「源太！！お前にはこれ！！」

蒔風がゴールドの剣、サカナマルを握ると、その剣に絶光の力が宿った。

「オレは爆発の余波を食い止める！！お前らがやってくれ！！！」

「「わかった！！」」

その声に応じて、ゴールドが信じられないスピードで動く。絶光の力を受けた「光」のモジカラの戦士はその速度のままダグバを切り刻む！！！！

「ハッ！！ハアッ！！！」

「おおおおおおおおおおりゃあ！！！！！」

そしてゴールドが離脱した瞬間に、クウガの蹴りが炸裂する！！！！

そしてダグバが爆発した。

本来ならば街一つ吹き飛ばす爆発を、上に逃がしていく蒔風。

「うわ～～～今回オレ地味～～～」

そんなことを言いながら、ディケイドの方を見る。

べつちやらあちらも終わるようだ。

「Attack Ride...REKKA DAIZANTOU  
！」

ズグアッ！！ドゴオオオオン・・・

Dチノマナコが爆死し、その場にはディエンドライバーが煙をあげて残されていた。

と、そこにいいとこ盗りをしようと、回答が飄々と表れてディエンドライバーに歩いていく。

「土 僕のためにごくらうさん」

「海東！」

そう言う海東の肩にはしっかりと烏賊折紙の入ったクーラーボックスが掛けられている。

一体どこに隠していたのだろうか。

ディエンドライバーに手を伸ばす海東。

が、先に源太がそれをさっそうと奪い取り、海東に突き出して交換

条件を持ち出した。

「交換だ、泥棒野郎！オレのイカちゃん返せ！！」

海東の顔が鈍る。

世界を渡るために、ディエンドライバーは必要不可欠。

こうなつてはあちらの条件をのむしかないのだが・・・

「海東、お前の負けだ」

「詰まんない意地張るなよ」

そうあつては仕方がないかと判断したのか、海東は渋々だが交換に応じた。

烏賊折紙は無事源太の元に帰り、丈瑠も爺さんと仲直りできたそう  
だ。

シンケンジャーの他の四人はすまなかつたと謝ってきた。

その後に蒔風が本当に外道衆じゃないか調べようとして怒られたが。

そうしてこの世界での事件は終わった。  
士たちは次の世界へと向かおうとする。

「じゃ、行くつか!!」

ガラガラガラ、ビシヤア!!

カーテンロールが降り、新たな絵柄が現れる。

そこには空中に浮いた要塞、そこに伸びる二本の槍。

次はライダーの世界

一体何のライダーなのか……

t o b e c o n t i n u e d



ディケイド 〱 蒔風、かなりキレる〱 (後書き)

ア「それにしてもまたディケイドの戦闘は描かれませんでしたね」

それにはしつかりと理由が

蒔風が巡ったライダー世界はクウガ、アギト、龍騎、響鬼のみです  
だからここで他のライダーのこと知っちゃうのはまずいんじゃない？  
ということがこのようになっております

じゃあこの先ディケイドの戦闘が描写されるのは・・・

なかなかないかもしれません  
ネガの世界でも精一杯でしたし

ア「がんばってくださいよ」

がんばる！！

ア「次回、ア、アー、エ、ツ！！」

ではまた次回

この男は誰にも声の届かない世界で孤独に耐えながら皆を守ってきた誰より強い男だ

ディケイド く士の仲間否定

この世界に着いて、まず士の衣装がいつも通り変わった。

頭にはちまき、指の出たグローブ、Ｔシャツに肩から先のないGジヤン

まさに「昭和！」といった格好だ

「レトロな昭和感溢れる格好だな」

「・・・ふん！・・・こんな恰好でも、着こなしちまう自分が恐ろしいぜ」

「士、無理するなよ」

「だな。どうせ後で着替えられるんだからさ」

「そんなことよりなんで蒔風さんはあえてその服を選んできたんですか？」

夏海が蒔風を指摘している服装はこうだ

短パン、Ｔシャツ、麦わら帽子に虫取り網だ。  
それはまさに「夏休み少年」の恰好だった。

「だって最近暑い。あ！！アブラゼミ！！！！」

「え？おい、待てよ舜！！」

蒔風が駆けだし、ユウスケが追う

その後をやれやれと言った風に土と夏海がついていく。

その背後に白き兵たちが蠢いていた……

「おお！！なんてことだ……見る！！ツクツクホウシだ！！！！」

「すごいな！！ってかいつの間にそんなに捕まえたんだ！？」

ユウスケと蒔風が昆虫を見て興奮している

「なんでそんな虫で楽しめるんだか……」

「ほら！そんなつまらんこと言わずに、お前も見てみるよ！！」

蒔風が土に籠を突き出す

そこにいたのはさまざまなお虫？だ

バッタ、トンボ、カブトムシ、などなど……  
さらには

「おい・・・トカゲがいるぞ？」

「いいんだよ。虫偏だから」

「舜！！スズメバチ居んぞ！！」

「ビクビクすんなよ・・・夏海さんも、ほら！！」

時風が夏海にも見せようとするが

「い、いえ。虫はちょっと・・・」

と行って下がってしまう

「なんだナツミカン。ライダーは大丈夫で、虫はだめなのか？」

「それとこれとは違います！！」

「~~~~~・・・なんだ？」

そんな時風たちの周りに、わらわらと白い兵隊が集まってきた

「どつやら、この世界の雑兵達みたいだな」

「ち・・・逃げるぞ！！」

士達がそこから離れようと走る

が、走り出して三分とたたないうちに目の前に何者かが現れ、行く

手を阻む

「オレはクライシス最強の戦士、怪魔ロボット・シュバリアン!!  
霞のジョーを始末しに来た!!」

そう言つて士を指すシュバリアン

先ほどの白い兵、チャップと呼ばれる雑兵が周りを囲む

「霞のジョー」というのがどうやらこの世界での士の役割らしいが・  
・

(霞のジョー?そいつは別人のはずだ・・・だが、ということはこ  
の世界は・・・!?)

「トオツ!!フン!!!!」

バキッ、ドカア!

そこに一人の男が入り込み、チャップ達を殴り飛ばし、士達とシュ  
バリアンの間に立つ

こちらに背を向けているせいで、顔は見えない

「クライシス!!霞のジョーはこのオレが守る!!!!!!」

バツ、バツ！！ギューン……

「変、身！！」

ブオツ、キュガツ！！！！

キーーーーーン！！！！！！

「オレは太陽の子！！！！！！」

その男が変身を完了し、シュバリアンに対し声高々に名乗りあげた。

「仮面ライダーBlack！！R、X！！」

その姿を確認し、土と時風が同時につぶやいた

「RXの世界か……」

ドドドオ！！！！

「ギイイイイイイ！！！！！！！！」

何名ものチャップが吹き飛ばされて地面に転がり、姿を消していく。

次々とチャップをなぎ倒すRXにシュバリアンが迫る

「RX！！！！今日こそ貴様を地獄に送ってやるわ！！！」

「そうはさせん！オレは必ず貴様らクライシスの野望を砕く！！！」

「戯言を！！！！（ガオンガオンガオン！！！！）」

シュバリアンの爪の上部の砲門から拳ほどもあるエネルギー弾を撃つ  
それをかわしながら接近するRXはベルトから一本の剣を抜き放ち、  
シュバリアンを斬る

ライトセイバーのように光るその剣、リボルケインが切り裂いた部分  
から火花が散る。

しかし、散りはしたもののその装甲は想像以上に硬く、ダメージは  
通っていない

「その程度の攻撃、オレには効かん！！！」

ドンドンドンドン！！

上半身に攻撃を食らい、RXが煙をあげて転がる  
だが、すぐに立ち上がりながらその姿を変容させる

「RX！ロボライダー！！！」

「又ウ！？」

「ボルティックシューター！！！！！！！」



ドンドンドンババン！！！！  
キュンキュン！バババババ！！！！！！

お互いに撃ちあい、光弾が交差する  
その攻撃はお互いに食らうものかと思われたが

「いきなり介入！呼ばれてないけどジャジャジャジャーーン！！！！！！」

ドギンギンギャンギャンギャン！！！！！！

時風がRXに迫る弾丸だけを蹴り飛ばす  
それに驚いたのはRXだ

「君は・・・一体！？」

「気になさんな。ほれつかさん、行きまっせ！！！！！！」

「オレに命令すんな！！！！だが・・・まあいいだろう。変身！！！！！！」

「Kamen Ride・・・DECADE！！」

士が変身し、時風とディケイドが並ぶ

「貴様はディケイド！！！！！！」

「霞のジョーがなぜディケイドに!?!」

シュバリアンとRXがディケイドの姿に驚愕する

「ああ、彼ね？霞のジョーじゃないんですよ」

「なんだと!?!」

RXがさらに驚く

「ま、その説明はあとで……」

そう言うてから振り返り、時風がシュバリアンに言った

「おい、シュバリアンとやら！思いつきり昭和チックな台詞をありがとう

だけどーつ訂正させる。この人いい人だからさ、死んだら行くの天国じゃね?」

「そういえばそうだ。何でいつも「地獄に落ちろ」なんだ?」

「なあ？仮面ライダーは大抵正義の味方なんだから、死んでも行くのは天国じゃね?」

「貴様ら……つまらんことを言うなあ!?!」

そうシュバリアンが叫びこちらに攻撃を仕掛けようとする、その背後に灰色のオーロラが現れ、そこから怪人が二体出現した。

「なんだ貴様ら!？」

シュバリアンも驚いている

ということは彼らは協力関係ではないのか？

一体何者なのか

その答えはユウスケが叫んでくれた

「ファンガイアにイマジン!？なんでこの世界に!？」

そこに現れたのはユウスケの叫び通りファンガイアにイマジンだ  
二体が武器を持って時風とディケイドに襲いかかる

「おいなんだその名前!!オレあ知らんぞ!!!」

「オレたちの回ってきた他のライダーの世界の敵だ!!!」

「オレの知らないライダー世界かよ・・・厄介だ、な!!!」

そういいながらも、時風とディケイドは二体を確実に追い詰めていく

「今日はこいつだ(ヴォン、ガシユウ!!)」

「Kamen Ride・・・AGITO!」

ヴォオン、ヴァアン!!!

ディケイドがアギトにカメンライドし、姿を変える

「おー!!アギトじゃねえか!!じゃあオレは!!」

ガシユガシユガシユ!!

カチツ、ウインカシユ!!

蒔風の背面からひっくり返ってきたかのようにアーマーが装着されていく

「(ピピピピ、カシツ!) 仮面ライダー、G3-Xだあ!!」

蒔風がG3-Xになり、ファンガイアの方を追い詰めていく

「これで終わりでしょう!!」

G3-Xの装備、超高周波振動ソード・デストロイヤーをファンガイアの胸に突き刺し、股にかけて裂く。

しかし、ファンガイアは倒れない

しかも見る見るうちにその裂け目が戻っていくではないか

「なんでだ!？」

「ファンガイアにはよほどのエネルギーを込めないと斬撃じゃ倒せねえぞ!!」

「先に言え!!じゃあこっち!!」

G3-Xがどつから出したのか、ロケット弾頭の装填されたガトリング銃を取り出し標準を合わせる。

「Final Attack Ride - - A A A A G I  
T O !」

それに合わせてDアギトもファイナルアタックライドを発動させる

「フッ!!!」

「ハア!!!」

「グギアアアアアアアアア!!!」

ゴッ!!!ドオン!!!!!!

二体の怪人が爆発し、二人がシュバリアンに向きなおす  
ちなみにすでにDアギトはディケイドに戻っている

「まだやるか？」

「相手には・・・まあ、なっってやってもいい」

「ぐ・・・覚えている・・・」

その場からシュバリアンが姿を消す

「じゃーなー!!」

「ふ、やはりオレは強い」

その二人の背後にRXが立つ

「世界の破壊者ディケイド!!この世界を貴様の好きにはさせん!!」

そう言い放つてRXがリボルケインを構えディケイドに突進してくる  
その言い草に夏海が弁解しようとするが

「G3リアットウ!!!」

G3-Xの二の腕がカウンターでRXの喉に減り込む

RXの体が空中で五、六回転してから地面に落ちる

「くぁwせdrftgyふじこlp;@!!!!?????」

RXが地面でバタバタともがきながら喉を押さえる

そんなRXに装甲を解除した時風が言った(服装は普通の物に変わっている)

「落ち付きなさい!!ほら、夏海さんも言っ(スッパァン!!!)ごめんなさい、大丈夫ですか?」

変身の解けた男性に手を差し伸べる時風

男性がその手を掴んで起き上がると、開口一番訊いてきた



「そ、そうか……」

「とにかく、土君は世界の破壊者じゃありませんから。いくつもの世界を救ってきたんです」

「……そうか……では君のその純粋な目を、信じよう」

「どこまでも昭和！！！！あ！！！！待てユウスケそれ以上は！！！！……」

途中蒔風の声が聞こえたが、皆聞こえないことにした

「オレは南光太郎。RXとして、この世界を征服しようとしているクライシス帝国と戦っているんだ」

「でもなぜイマジンとファンガイアが出てきたんだ？」

ユウスケが蒔風を引きずりながら訊いてきた。

「オレにもわからない。ある日突然、現れたんだ。それと同時期に霞のジョーも……」

「その霞のジョーってえのは、一体誰なんでえ？」

蒔風が荒縄でグルグル巻き状態で訊いた。

「霞のジョーは俺と一緒にクライシスと戦ってきた仲間だ」

「じゃあ今回土君がこの世界ですべきことはその謎を解くことです



ね！」

「はぁ………」

そこで士が盛大にため息をつく  
なんかめんどくさいなあ……、といった感じだ

「どうしたんだ士」

「……別に世界のために戦っても、オレの世界が見つかるわけじゃないしな」

「士あ、拗ねたのか？」

「いくら自分の世界が見つからないからって、それはいけねえよ。  
「ない」訳じゃないんだから」

「それに、士君には帰るべき家があります！」

そんな会話を聞いて、光太郎が士に訊く

「君も、仲間のためにだったら、戦えるんじゃないか？それをも理由にすればいいじゃないか」

その言葉に士はさらにつまらなそうなたため息をつく

「で、お前はその仲間ってのを探してるのか？」

「そつだ」

「そんなことのために、一勝戦い続けるのか？」

「そんなこと？」

「オレはごめんだね。「仲間」なんてチンケな理由でいつ終わるかわからない戦いなんか続けられるか。じゃあな」

そう言つて土が立ち去る

「おい・・・土！！待てよおい！！！」

その後を蒔風がイラついた声を出しながら追う

ユウスケと夏海は光太郎に謝罪してから、二人を追うつもりだったが、その時にはもう二人を見失つてしまっていた

蒔風の追う先を、土がどんどん先に進んでいく

仲間なんかいららない、オレは一人で歩いていける  
オレはいつだつて通りすがりだから

無言でそう語る背中を、蒔風が追う  
そんなことはない、伝えるために

「仲間」というものは、そんな言葉の羅列ではない

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

ディケイド く士の仲間否定（後書き）

アリス「久々の更新ですね。どうしたんです？」

ええ

まず皆様に謝罪を

日曜及び月曜の交信をすっぱかしてすみませんでした

ア「では弁解をどうぞ」

コミケの疲れが抜けなかったからです

ア「そんなこと!？」

そんな事とは何のことだ!

三日間のスタッフ

その後の買い物

初日、二日目は曇ってたけど、三日目は日射しガンガンだったし

そんなこんなの三日間

（前日含め四日）

皆さんお疲れ様でした!!!

ア「でもその間も更新はしてたじゃないですか」

あれはがんばって11日のうちに書き溜めて予約投稿したんですよ、いや、15日に家帰ってから書いて更新しようと思ってたんですが、家に着いたらボタンキューですよ。

実は昨日も一日中ベッドでした  
さらに言うと今でも疲れが取れ切っていない

ア「それは・・・ご愁傷様です」

今回初めてのスタッフ

緊張したけど何とか乗り切った、「一日目！」

少し慣れたけど東の列の応援に行つて気持ちよく疲れた、「二日目！」

前日に映画を見て四時間しか寝れなかった、「三日目！」

沈む夕日が心に染みた、「閉会后！」

ではまた皆さん今度は冬です

ア「とうかなんですかこの卒業式みたいなのは」

着かれてんだもんいいレモン！？お前のトマトはニンジンか！？

ア「何言つてんだか分かりません！！！」

いけ！空飛ぶ飛行船！！東京都からお叱りを受けてしまえ！！！！

ア「下手にリアルっぽいこと言わないでください。ただの噂じゃないですかそれ」

まあね

でも飛んでたのは事実

「ミルキィ・ホームズ」って書いてあったよ  
ブシロードの本気を見たね

ア「さいで」

だから疲れたのでもう寝ます

ア「・・・はあ。」

次回、悪の巨大組織」

ではまた次回

言うておくけど！僕は君よりもずっと前から、通りすがりの仮面ライダーだ！！

・・・覚えておけ

ディケイド 悪の組織、略奪の命

皆から離れ、着替えてから土は街に出て写真を撮っていた  
フィルター越しに見る世界。しかし・・・

「この世界も、オレに撮られたがってないみたいだな」

そうつぶやく

現像しなくてもわかってしまうのだ

木も、人も、建物も、空気ですらも彼の写真を捻じ曲げる

だがそれでもシャッターを切る

様々な景色が映る

異なる世界を直視することなく

否、できないのだ

あらゆるライダーや怪人を凌駕する「破壊者」の力を持つ青年は、  
世界と向き合う強さを持っていなかった

「土あ。見つけたぞ全く・・・」

「蒔風か・・・」

そこに蒔風が声をかけてきた

傍らに立ち、写真を撮る土の姿を眺めてから、訊いた

「なあ、さっきの話だが、仲間なんかくだらないって、本当にそう  
思ってたのか？」

「ああ。そんな仲間（とも）のために戦い続けるなんてのは俺には理解できないね」

「そうか」

「そうだ。お前も、世界を守るために戦ってるんだろ？現にお前は今まで一人で回ってきたんだ」

「なるほどな・・・だったら貴様に南光太郎を否定する行為は許されない」

「なに？」

士がカメラから目を離し、時風を睨む

「否定する、というのはその事柄をよく理解しているものだけに許されるものだ。そのことをよく知っている者ができることだ」

「わかっているなら否定しないんじゃないのか」

「お前大体もわかってねえな。よく知って、よく理解して、どこが悪いかを明確にさせてからが否定だろうが」

「だったらわからなくても嫌な場合はどうすればいいというんだ」

「簡単だ。拒否すればいい。だからお前は仲間のために戦わない、というのは勝手だが、そのまま南光太郎の意志を否定することは許さない」



「なるほどな・・・ならばなおのこと、オレの意志に口出しするな」

士が再びカメラを構えるが、それを蒔風が止める

「そうはいかねえな。オレはお前のその考えを否定する」

「・・・お前・・・オレにケンカ売ってんのか？」

「そんなつもりはないがな。やるならお兄さん、相手になっちゃうぜ」

「ヴォオン!!」

「シュカツ!!」

士がカードを構え、蒔風が「天」を抜こうと手を添える。

「オレの世界はいまだに見つからない。それなのに仲間だとか別の世界だとかのために戦えというのか」

「見つからないだけかもしれませんが。オレの帰るべき世界はもう無いと言っただけなんだからな」

「?それはどういう・・・」

士が蒔風に問いたただそうとするが、そこに大きな声を出しながら夏海が駆けよってきた

「こんなところで何やってるんですか二人とも!! 士君も蒔風さん

も、武器を下ろしてください!!」

「ナツミカン」「夏海さん」

「全く・・・土君も、自分の世界が見つからないとか、そんなことで拗ねないでください」

見つからなくても、帰る場所はあるじゃないですか」

「それが写真館だったか？」

「そうです。たとえどれだけ世界を回っても、あなたの世界が見つからなくても、私はあなたの帰る場所を守ります。だから」

「だから戦えってか？そんな考えを勝手に押し付けんな！」

そう言って土がその場から立ち去る

その土を追って行き、蒔風が土の胸ぐらと掴みあげた

「お前・・・いい加減にしろ。いつまで甘えてんだ」

「オレが・・・いつ甘えた！」

「てめえには帰れる場所があんだろっが。だったらそこを守れよ。強い強いというなら、あれもそれも、世界も仲間も、全部守って見せるよ、あ？」

「そんな勝手なこと決めんじゃねえ!!」

バキツ！！

蒔風が士の顔面を殴り飛ばした。

士の身体がベチャツ、と地面に転がる

「ツ・・・何しやがる！！」

士が蒔風を睨みながら怒鳴るが、蒔風にとってはそんなことどうでもいい

「それでもお前が戦いの後に帰る家はどこだ！傷ついたとき、お前がとつさに駆けこむのはどこだ！！」

いろんな世界でてめえが「破壊者」だと罵られている時に、それを否定してくれていたのが、どこの誰だか答えて見せる！！」

「ち・・・っ・・・」

士の視線がチラリと夏海の方へ向く

そして俯き、なんだかんだ自分についてきてくれた友を思う

「お前には共に旅する仲間がいる。オレにはない、共に世界を旅する仲間がな」

そこでため息をつく

士も言葉を発さない

「蒔風・・・オレはどうす・・・」

士がそこまで言い掛けたところで寸断される  
なぜなら

「キヤアアアアアアアアアアアアアア」

と、甲高い悲鳴と共に、何人もの人間が倒れていき、そこには怪人をひきつれた白スーツの男が現れたからだ

「士！！舜！！」

「ユウスケ！！」

そこにユウスケも合流する

今までのやり取りを見ていたのか、妙に納得した顔をしている

「お前か・・・この世界でイメージンやファンガイアを引き連れている新たな敵ってのは」

そう、この男の引き連れている怪人はまさしくイメージンとファンガイアだ

男が士に気付く

そしてこちらを向いてこういった

「ディケイド・・・ここにいたのか」

「おまさんらは何者だい？」

蒔風の問いに男が答える

「謎の組織などではわかりにくかるう。よく聞いておけ、我々は、世界の秘密結社が大結集した大いなる大組織。それが我らの真の名である、「大シヨツカー」だ!!」

「大シヨツカー？」

四人の疑問に、これ以上こたえる必要はないと判断したのか、男が姿を変える

「アポロチエンジ!!」

グ、ボワッ

男を日輪のような形に炎が覆い、姿が変わった

「アポロガイスト!? 貴様・・・どうやってこの世界に!!」

「ほう。私を知っているのかその眼鏡。だが、その質問に答える必要はないな」

「眼鏡って言うなクソ!!! (オレの知ってる世界のものではないなこりゃ。あくまでも「ディケイドの世界」ってことか)」

「デイケイド、貴様を始末しに来てやったぞ。まさに貴様にとっては、私は迷惑な存在になるのだ」

「そう思うなら来るな!!」

士が変身しようとバツクルを取り出すが、アポロガイストの銃撃でバツクルがその手から弾き飛ばされる

「士!!」

時風にイマジンが、士にファンガイアが迫る  
変身できない士の元にユウスケが変身して助太刀する

そこでアポロガイストが頭部の金属片を取り外し、士に向ける  
それに気付いたのはただ一人であった

「士君!!!!」

夏海が士の元に駆け寄り、突き飛ばす  
標準から士が外れ、代わりに夏海が標的となる

その瞬間、金属片から赤い靄もやのような光が噴出し、夏海から何かを  
吸い上げていった  
そしてその場に崩れ落ちてしまった

「お前!!!!」

それに気付いた蒔風がアポロガイストに掴みかかるうとするが、バツクステップでかわされる

「夏海？夏海！！！」

「夏海ちゃん！！！」

士とユウスケが夏海の身体を抱えあげるが、一向に反応がない

「お前え・・・何したんだ！！！」

「ふん。きさま、ライダーではないようだな。貴様の事も調べておくでしょう」

「あつ、待て！！！」

怪人二体とアポロガイストの背後に灰色のオーロラが現れ、そこに去っていくうとする

そのまま消えてしまううであろう彼らを見逃すほど蒔風は優しくない

蒔風がアポロガイストが消える直前にそのマントを掴み、オーロラの中から引きずり出した

そして地面に投げつけるべく放り投げた

だがアポロガイストは片手を地面につき、そのまま跳ね上がりながら蒔風に銃撃を浴びせて建物の屋上に向かって跳躍する。

「ふははははは！！その命、いつか私の物にしてやるのだ！！！」

「待てや！！二人は夏海さんを！！」

そのまま去るアポロガイストを時風も追う

高層ビルの屋上を十七ほど踏みしめて跳んだところで、アポロガイストが止まる

「貴様・・・変身もせずになぜここまで付いてくれる」

「そんなことあどっだっでいい。答える。夏海さんに何をした！」

「堪える義理はないのだ」

「なら・・・これを見てもおう言えるかな!？」

「なに!？」

バツバツ!!

「セツタツプ!!!!!!」

カシィン、カシィン、ガシユン!!

バァァァァ!!!!!!

「貴様は!!!!」

「仮面ライダー、X!!!!!!」

「Xライダー・・・貴様は何者だ!?!お前はライダーではないはず



「!!」

「なに・・・ただちよいと知り合いなもんでね」

「どっぴいっ・・・」

「GOD秘密警察第一室長だろ？そんなぐらいてめえで調べろ!!」

そっぴいながらベルトのバックルのグリップを握り、抜き放つ

「ライダーホイップ!!!!」

ガキィ!!

Xの武器・ライダーを剣のように扱い攻撃したのを、アポロガイストは巨大な盾で防ぐ

「ライダー！ロングポール!!!!」

そのままライダーをロングポールに変え、長く長く伸ばしていく

「おおおおおおお!!!!」

盾に突きつけられたライダーが伸び、十メートルまで一気に打ち上げられたアポロガイスト

その崩れた体勢の彼に、Xライダーのキックが炸裂する！

「Xキック!!!!」

ドオン!!



病院の屋上

そこに蒔風、士、ユウスケの三人がいる

「体に異常がない？」

「そうなんだ。ただ昏睡状態になってるって、医者が」

「さらに言うと、少しずつだが体力もなくなってきて、いずれは・・・」

「あのアポロガイスト・・・」

ガンッ！

蒔風がフェンスを殴り、つぶやいた

「蒔風、何か治療する方法はないのか！？」

士が蒔風に詰め寄る

「おそらくその方法を知っているのはアポロガイスト野郎だけだな」

「そうか・・・」

「士、とにかく今は、夏海ちゃんのそばに」

「そばにいて、それで夏海が助かるのか？」

ユウスケがム、と顔をしかめる  
確かにその通りなのだが……

そこに、ひとりの男の音がする

「こんなに隙だらけの土は初めてだね」

海東だ

どこから話を聞いていたのか、事情はすべてわかった上でからかう  
ような口調で土に歩み寄る

「おかげで最高のお宝が手に入ったよ」

そう言つてヒラヒラと振る手に持つのはディケイドライダーだ。

だが土は、大切な変身ツールを奪われているにもかかわらず、そんなことはどうでもいいと言つた感じた

「相変わらずお宝集めか……暇な奴め」

「気に入らないなあ、その態度。ちゃんと僕を見ていてくれないか？」

「そんなつまらん児戯に付き合つてる暇はないんだ。

教える海東、大シヨツカーとはなんだ」

児戯、と時風にいわれて少し顔をしかめるが、海東は答えた

「おや？知らないのかい？

大シヨツカーとは様々なライダー世界に存在する悪の組織が集結してできた、まさに大いなる悪の秘密結社さ」

「アポロガイストとは何者だ。ナツミカンはなぜああなった!!」  
士が声を荒げる  
その質問には蒔風が答えた

「アポロガイストは「仮面ライダーXの世界」にあったGOD機関に所属していた殺人マシンだ。  
奴は一度Xライダーに敗れたものの、再改造で蘇った。  
しかし、その命は他者の命を吸い取らなければ生きていけない体だった」

「それで夏海ちゃんは・・・」

「全く、僕の説明をとらないでくれるかな。まあ、そういうわけで、その命を吸い取ってるのが、あのパーフェクターってわけ」

「そこら辺は俺の知ってる「仮面ライダーX」とは違うな。  
・・・とにかく、アポロガイストを探すぞ。  
パーフェクターを奪い、夏海さんの命を返してもらおうとしよう」

「時間がない、急ぐぞ」

「ああ!」

そうやって提案を始める蒔風や士、ユウスケに向かって海東も提案した

「だったらそのパーフェクターは僕がいただくよ」

「なに？」

「お前え・・・夏海ちゃんの命がかかってんだぞ！！」

そういきり立つユウスケの肩を蒔風が掴んで戻す

そして海東の方をチラリとみてから、ユウスケに呟いた。

海東には声こそ聞こえなかったが、唇の動きで何を言ったかわかった

「気にするなだつて？ぼんやりしてたらお宝、いただいちゃうよ？」

そう言つて挑発する海東

その言葉に反応するかの様に三人が海東に向かう

アポロガイストを探す案が出そろつたようなのだが、海東は彼らが挑発に乗つたと思ひこむ

「やる気になつたようだね」

その言葉に蒔風が返す

「言つたろう。兎戯に付き合つている暇はない」

そう言つて三人が立ち去る

「これはどうするんだい？」

「これとは、オレの手にあるこれの事か？」

海東がディケイドドライバーを取り出そうとして、それを蒔風が自身

の懐から取り出した

「な……い、いつの間に!?!」

驚愕する海東。それも当然だ。

蒔風と海東が最も接近したのはユウスケを止めた時だ

あの時はお互いにメートルくらいは離れていた

その距離で、あの短時間で、あれだけの大きさの物を海東に気付か  
れずにかすめ取っていたのだ。

焦る海東に本気でどうでもいい顔をして、呆れたため息を出して蒔  
風が言った

「言っただろう。そんなものは兇戯だ。

誰かの命を救おうとする片手間以下の手順で終ることだ」

「……………」

「いつもみたいなお宝探しなら喜んでつき合おう。だが、人の命が  
かかっててんだ。遊ぶならよそ行け」

「仲間……とやらのためかい?」

「強さの証明のために、だ。オレは世界最強だ」

そう言いながら屋上の扉を開く

「救えるものなら、根こそぎ救うさ」

ボタン、と扉が閉まる  
士とユウスケも後を追った

屋上に取り残された海東

「強さの証明のため・・・か

まるでここでお宝だなんて言ったら、僕が弱いみたいじゃないか」

そう言っつて病院入口の方に視線を落とす

そこからは士と時風のバイクが走り出していった

ユウスケは夏海のそばに着くようだ

「いいよ。その勝負、乗ったよ。

「仲間の素晴らしさ」つてのはまだわかりようもないし必要もない  
と思うけど、それが「強さ」だって言うなら、その強さは僕がもら  
う」

海東の目がキラんと光る

最初はその程度でもいい

仲間の大切さなんて、知ろうとして知れるものじゃない

誰かを守る強さをその手に

すべてのヒーローはそこから始まるのだ



世界を巡る二人の次元戦士のライダーは、ここからヒーローとしての「仲間」を知る

t o b e c o n t i n u e d

ディケイド 〱悪の組織、略奪の命〱（後書き）

アリス「また更新なまけましたね」

う、うるさい！！

ア「なぜです？」

眠かったの

ア「シャラツ！！そんな言い訳はどうでもいい」

すみません

本当はフェイト/エクストラやってました

ア「ゲームか」

ゲームです

こないだPSPを再購入し、やっと始められました

ア「この世界は出すんですか？」

内容的に難しい

でも、いずれは・・・世界を巡る形ではないけど

ア「やるんですか？」

予定は未定

ア「さいですか」

あと最近生活リズムが変わって大変だ！！

ア「どんなふうですか？」

朝8時起床、夜12時には就寝

だから今日はちよつと起きてるな、うん

ア「それ、身体にはいいんじゃない？」

不規則で少し寝不足な方が作者は調子いいんです

ア「まじかよ」

高校の時に一番点数がよかった定期試験  
そんなとき自分40・7の高熱でしたもん

ア「寝てなさい！！」

電車の中の熱気で吐くかと思った

でも高校中学合わせて一番いい点数だったよ

ア「こいつむちゃくちゃや・・・」

ではこの辺で

ア「次回、アポロガイストさんみっけ！！」

ではまた次回

平成ライダー？10年早ええよ！！

ア「今更キャッチコピー！？」

ディケイド く仲間意識・感受く

「士はあっち、オレはこっちな」

「わかった。絶対に見つけるぞ」

蒔風と士は現在アポロガイストを探して街に出ている

「それにしても士、なんでそんなに必死なんだ？」

「？何言ってるんだ、ナツミカンの命がかかってるからな」

その言葉に蒔風の表情が緩む

「こんな状況だけど、お前いい顔してる」

「はあ？」

「いくらお前が仲間じゃないなんて言おうとも……な。

やっぱりお前はいい奴だよ。自覚するのは恥ずかしいかもしれないけどな」

「？……勝手にオレを判断するなよ？」

一瞬だけ士の頭に「？」が浮かぶがすぐに理解し、からかう様に言った

その顔にはまだ焦りがあるにしろ、決意に燃えた目を持っていた

「行ってくる、か」

「ぜってー見つけてやるっぜ」

「おう」

追う行って二人は互いの腕をぶつけあい、離れる  
そして二人はアポロガイストを探し始めた

「さて・・・始めるか」

タンタンターン、ストッ

蒔風が軽快に跳び上がり、ビルの屋上に着く  
そこで自分の周りに正方形になるよう、「龍虎雀武」を突き立てた

「さあーて、どこにいんのかなア？」

そう言って蒔風がポケットから一枚の布切れを取り出す

四本の剣が光の線で結ばれ、陣が出来上がる



アポロガイストがシュバリアンに歩み寄ろうとする

そこでその背後にいる一人の男がアポロガイストに声をかけた

「オレは誰でしょうか、って宿題は解けたかな？アポロガイスト君？」

「!!!」

ガイが振り返ると、そこに時風がいた

「なぜここがわかった」

「方法なんざどうでもいいさ。今ここにオレがいることの方が問題だろ？」

「・・・貴様はこの世界の・・・ディケイド以上に異物のようだな」

「おお!!!よくわかったな。その通り。オレは、異端者だ」

「それで？私のパーフェクターを奪いに来たのか？」

「よくわかってんじゃない・・・だア!!!」

ブゴォ!!!



蒔風の蹴りがガイの顎を捕らえようとする  
それを紙一重でかわしたがいがアポロガイストへと姿を変えた

「あの女の命が消えないのも貴様の仕業か!!」

「その通りです、大正解!! 飴ちゃんやろうか?」

「いらぬ!!」

アポロガイストがフェンシングのような剣・アポロフルーレで蒔風  
に斬りつける  
それをその場から動かさず畳返して防ぐ蒔風

そしてそれを蹴り碎いて、アポロガイストの目をくらます

その隙に足払おうとローキックを放つが、アポロガイストがその軌  
道上に剣を配置する  
キックに急ブレーキをかける蒔風  
するとその止まった足を軸に、身体の方が回転し、アポロガイスト  
の後頭部にカパン!と蹴りが命中する。

「ぬ・・・おっ」

カラァン!

「よっし!!」

その蹴りの衝撃でパーフェクターが頭部から落ちる  
それを蒔風が拾おうとするが、アポロガイストが許さない

巨大な盾、ガイストカッターをfrisビーの用に投げつけ、蒔風の  
右手を切断しようとする

ギィィィオオオン!!!

恐ろしい旋回音を発し、ガイストカッターが迫る  
蒔風に腕を引く時間はなかった

その右手が、ガキユウウウウ……という音と共に吹き飛ばされる

「ぐぐおおおお!!!……っ、なんて重さだよ……」

だが蒔風の右腕はまだついていた  
とつさに「天地陰陽」を出したことで、かろうじて切断には至らな  
かった

だが右腕からは赤い液体が滴り落ちてきている

落ちたパーフェクターを再び装着して、アポロガイストが言う

「ふふふ．．．右腕を潰したぞ．．．さて、答えて貰おうか。なぜあの女の死のスピードがこんなにも遅いのか」

蒔風が右腕を抑えながらアポロガイストに言い返した

「ばあーか、言うかよ」

「な．．．」

「やれ！．．．！」

「Attack Ride．．．SLASH！」

その電子音と共に、ディケイドがアポロガイストに襲いかかる

「ぬ！！ディケイドまで現れおったか！」

「貴様ら！何をしている！！！」

それようやくシュバリアンらクライシス勢もこちらに気づく  
そしてこちらに攻め込もうとするが、ひとりの戦士にそれを阻まれる

「ここは通さんぞ、クライシス!!」

「RX!! 邪魔をするな!!!!」

ここに見事な混戦の形が出来上がる

「ぬづづづ!!!! 邪魔をしおって!!!! 迷惑な奴なのだ!!!!」

「これに懲りたら頭のそれ返せ!!!!」

「それはできない相談なのだ!!!!」

ドカッ!! バン、ドン!!!!

蒔風とディケイドがまとわりつくチャップ共を千切っては投げを繰り返す

「蒔風」

「なんだ!?! 今いそことなく忙しいんだが」

「失ってから気付いたんだ。オレは、誰かのために戦うこともできる、ってな」

「士?」

「仲間なんて明確なものはまだわからない。だが・・・失いたくない奴はそれなりにいるからな!!!」

「それはっ!!どおりや!!よかつたな。また強くなったぞ、お前」  
蒔風とデイケイドが次々と雑兵やアポロガイストが新たに呼びだした怪人を圧倒していく

そんな攻防のさなか、アポロガイストはあくまで任務を遂行するよう  
うで、蒔風らから離れシュバリアンに声をかける

「クライシス皇帝に伝える。手を取り合いライダーどもを殲滅し、  
共に世界を手に入れるのだと!!」

「だまれ!!貴様らの手は借りん!!」

シュバリアンが鋼鉄の爪でアポロガイストを斬り裂こうと振るうが、  
簡単にかわされる

「確かに伝えた。よい返事を待っている。大ショッカーは寛大だからな」

シュウウウウンン.....

そう言ってアポロガイストはその場に戦力を残しオーロラで離脱しようとしていた

「まで!!!」

「この・・邪魔だ貴様ら!!!」

蒔風とデイケイドがアポロガイストを追おうとするが、多くの敵に阻まれてしまう

「ぬ、土君、蒔風君!!! フツ! RX! バイオ、ライダー!!!」

その状況を見たRXがバイオリダーへと姿を変え、その体を液状にして敵を絡めとる

一力所にかき集められた敵を相手にしながら、RXが叫んだ

「事情はユウスケ君から聞いている!!! 行け!!!」

「すまない!!!」

「そうさせてもらう!!!」

蒔風とデイケイドがオーロラに突っ込む

だがアポロガイストのために開かれたその門は侵入者を拒んだ  
オーロラ  
バチバチと少しだが弾かれる

そのオーロラをまず蒔風が通り抜けた

翼人だからであろう、少しだけ静電気のようにはじけたが、なんの問題もなく通る

だがデイケイドはなかなか通れない  
時風が手を貸そうとしたそのとき、デイケイドの背中を何者かが押した

「まったく、仕方ないなあ。だけど助けてあげよう。ほら、行きたまえ。これだけのハンデでも、僕は勝てるくらい強いからね」

その言葉と共にデイケイドはオーロラを破り、世界を越えた。

「土！どうしたんだ？」

「いや・・・なんでもない」

そついいながら二人が周りを見渡す。

夜だ

漆黒に包まれた夜の公園に二人入る

「どこの世界だ？」

「ここまで情報がないとわからん」

そんな二人の元に、ひとりの男がやってきた  
街灯の逆光で顔が見えない

「……！？お前は……世界の破壊者デイクイド……！」

その言葉と共に、男がさらに掛け詰め寄ってくる  
その男は……

「南光太郎！？だったら、ここはまだRXの世界なのか!？」

「いや……違う、ここは……！」

ギユバツ!!

光太郎が両こぶしを握り、右頬に寄せて力を溜める。

バチバチバチバチ……  
バツバツ!!

グオオオオオオ……

「変、身……!!」

ズバツ!!!

一定のポーズをとり、その腕が力強く振るわれ、変身の掛け声をあげる



しかしそのライダーはRXではなく

「仮面ライダー、BLACK!!!!!!」

「RXじゃない!?!」

「やはりかよ」

BLACKが二人に言う

「世界の破壊者ディケイド!!!この世界をお前の好きにはさせない。  
その仲間と共に、オレが倒す!!!!!!」

仮面ライダーBLACKが構える

ああ、この世界でもめんどくさいことになりそうだ

時風はそんなことを考えていた

t o b e c o n t i n u e d

ディケイド 〱 仲間意識・感受〱 (後書き)

アリス「仮面ライダー、ブワッ!!」

それはネタだ

ア「この回では士が仲間を認識し始めますね」

ええ

ですから夏海が倒れるのは必要かと思いましたが  
そうじゃないと士の成長はないですから

ア「でも夏海さんが・・・」

そこは世界最強がどうにかしてくれる

そうそう、カラオケ行きましたよカラオケ

ア「どうでした？」

ダブルク( Double - Actionのこと)を全部歌いましたよ  
あ、でも牙王フォームはなかったな

ア「どれくらい歌ったんですか？」

朝の11時から18時まで

後半三時間は九割オレ一人で歌い続けましたよ

ア「なぜ？」

皆歌わなくっちゃったから  
でもそのおかげで「なのは」全OPと電王系の曲、それと多くのア  
ニソングーソンが歌えました

ANGEL BEATS!とかの曲も歌ったなア

ア「それじゃあのは……」

すげえ元気

ア「枯れてないんですか!？」

枯れないように喉を使ったから  
もはやのど飴いらず。あ、水はあるな

ア「なんて凄くて無駄な技能……」

ヒトカラで四時間十二分間、歌いながら曲送って歌い続けたことも  
あります  
けっこう余裕でした

ア「アホですね」

本望だ!!

ア「次回、ブラックの世界」

ではまた次回



ディケイド ｝BLACKの世界、即離脱！！！！

暗い公園の中、BLACKがディケイドと時風に襲いかかる

BLACKの拳がエネルギーで赤く発光し、その拳で攻撃してくる

「ライダーパンチ！！」

「チツ！！（バチイ！）おおっあ！！」

時風が手刀で応戦するが、両者共に腕が弾かれる

「ぬっうっ！！トオ！！！！」

BLACKが跳躍し、足を突き出その構えは紛れもなくライダーキック！！！！

「ライダーキック、ぐオ！！」

バンバンバン！！！！

だか空中でその体から火花が散り、地面に落ちる

「まったく。こんなところで何やってるんだい？土」

声のした方を見ると、そこにディエンドが銃を構えて立っていた

「貴様もディケイドの仲間か！！！！」

その言葉にディエンドが返す

「さあね。そんなもの理解できないよ!!」

「K a m e n R i d e . . . F E M M E !」

ディエンドがカメンライドを発動させ、ファムを召喚する

「ヤア!!!!」

「くっ!トウア!!」

ファムがBLACKに襲いかかり、その間にディエンドが時風とディケイドをその場から連れ出した

先ほどの公園から少し離れたところで、士、海東、時風が話をしている

「海東、あのライダーはなんだ?ここはなんの世界だ」

「一気に質問しないでくれるかな。とりあえずあのライダーは女ライダーのファム。お堅いBLACK君は苦手だと思ってね」

「後この世界はBLACKの世界だな。確かこの世界の組織は……ゴルゴムだったな」

「だから僕の説明をとらないでくれるかな」

勘弁してよ、と時風に軽く抗議する海東に土が言及する

「おまえ……何のつもりで助けた」

「ふ……誰かを助けるってのは強さなんだろう？」

「は？」「え？」

「だったら僕はやってみせるよ。考えてみればそうだね。「殺す」ことよりも「生かす」ことの方が難しいからね」

その海東の言葉に感心したように時風は言う

「その、とーり。そんな難しいことやれるのは間違いなく「力のあ  
る強い奴」だからな」

「「仲間」なんてもの知らないけど、なるほどね。その「強さ」は  
お宝だ」

なにかすがすがしい顔をした海東だが、土は疑う

「お前……何を考えてる？」

「ん？パーフェクターを手に入れるんだろう？」

その二人の間に蒔風が入る

「まあまあ！ここからは三人力を合わせてアポロガイストの野郎をさー！」

「それは断るよ」

しかし海東が蒔風の提案を断る

「今回の勝負は誰がナツメロンちゃんを助けるか、だよ？そこまでの慣れ合いはできないなあ」

「海東・・・お前！！」

「よせて土・・・いいぜ。そういう勝負なら乗った」

「蒔風！？」

「だってこうすればお互いに急ぐ。結果的に夏海さんが助かるのも早くなる、だろ？」

「それはそうだが・・・」

「じゃ、そういうことで」

そう言って海東がその場から去る





周辺を見回すガイ

そして車のフロントガラスの中に、赤い龍の戦士を見た

「!?!」

「ハア!?!」

そこから飛び出してきたD龍騎の攻撃をかわすガイ

「ミラーワールドから探しまわったかいがあったぜ」

「ディケイド……この世界にまで追ってきたのか……」

「オレだけじゃないぜ」

士がD龍騎からディケイドに戻りながら言う

その言葉を理解するよりも早く、気付いたらガイは地面にあおむけに寝ていた

何が起こったのか全く理解できないが、とりあえず起き上がるようにする

しかし、地面とスーツの裾などを突如として鉄矢が縫いつけ、起き上がれない

「ふっふっふ……。ジャツジメントですの!?!ってな」

仰向けに縫いつけられたガイの顔を覗きこむ形に時風がパツ、と現れる

「テ、瞬間移動だと!?」

「御名答!!! さ、パーフェクターをよこせ」

「断るのだ・・・アポロチェンジ!!!」

ブオツ!!!

ガイがアポロガイストに変身し、撃ちこまれた鉄矢が融解する

「ち!!!」

「Attack Ride...BLAST!」

ディケイドがいくつにも分身した銃身から弾丸を撃ち出す  
だが巨大なガイストカッターにすべて防がれてしまう

しかし状況は依然として二対一  
おそらくこの騒ぎであればディエンドが来るであろうし、最悪BL  
ACKまで相手にしなければならなくなる

「面倒な・・・ぬ・・・貴様、来い!!!」

アポロガイストが近くにいた、逃げ遅れたのであろう少女を人質に  
捕まえる

それを見て時風とディケイドが止まる

「手を出したら・・・どうなるかわかっているな?」

だがその体制もすぐに崩れる

「どうなるんだい？」

その声と同時にアポロガイストの背後にディエンドが現れる

アタックライド・インビジブル

姿を完全に消すこのカードの力によってうまく死角から入りこんでいたのだ

「ナイス海東！！！」

「ディエンド！！貴様あ！！！！」

「パーフェクターはいただくよ」

「そうはさせん！！！！」

「ばか！！まずその子助ける、よっ！！」

ダコン！！

時風が地面を踏みつけると、離れた場所であるにもかかわらず、アポロガイストの足元の地面が跳ね上がった。

柔法・畳返し

その技ではね上げられたアポロガイストは少女をその腕から離してしまう

しかし、少女の方はディケイドが空中でキャッチし、アポロガイストの方は時風とディエンドのパンチがお見舞いされた。

「フン!!! (バガツ!!!)」

だがアポロガイストはいくつもの世界を越え、様々な悪の組織相手に勧誘してきた男だ

その程度のちやちな攻撃ではその巨大な盾に阻まれてしまう

「海東!!! まずこつち助けろよ!!!」

「子どもは次世代の担い手だぞ。未来だって相当大事なもんだろ？」

「・・・ふん・・・それよりもほら、アポロガイストが」

「ああ!!! てめえ待て!!!」

「さらばなのだ・・・ハツ!!!」

アポロガイストがオーロラをくぐり消えて行ってしまふ  
そして入れ替わりにグロンギ、アンノウンが出てくるが

「邪魔、だ!!!」

通り過ぎる一瞬で二体を切り捨てる時風

背後で爆発するのを感じながら、オーロラをくぐる

その後、オーロラは消えてしまった

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

ディケイド 〱 B L A C K の世界、即離脱！〱〱 (後書き)

アリス「チマチマチマチマと鬱陶しい!!」

話ですか？

そうですね・・・

もっと簡単にできればいいんですが・・・

ア「もっと長く書いて一気に終わらせなさい。

下手したら「なのは」より長くなりますよ?」

たしかにそうですが・・・

ア「がんばって書きなさい」

大変だ・・・

実際、二、三日かけて長いを書くのと、短くてもどんどん更新って、どっちが好まれるんだろ

ア「知りません」

校舎でいいなら俺、断然サボ・・・時間とりますよ?

ア「少し聞こえた酷い言葉は聞き流しましょう」

ありがとう

世界に問う!!!!

どっちがいいですか？教えてください

こうやって原作ストーリーに絡めるとどうしても極端に長くなるか短くなるかなんですよね・・・

ア「皆さんの意見、お待ちしています

次回、ふたりは光太郎!!」

ではまた次回

人はさ、皆旅人だよ

ア「誰の台詞ですか？」

栄次郎さん

ア「なるほど」



## ディケイド　↳　蒔風の本質　↳

オーロラの先はどこぞの廃工場だった

コンクリートの柱、錆びた鉄骨、無数に転がるドラム缶

如何にもな場所である

そこに声が響く

「ほう・・・ディケイドを見捨ててきたのか。貴様の仲間意識も、  
たいしたことはなさそうだな」

工場の真ん中に立つアポロガイストが蒔風をのしる  
だが蒔風は全く後悔などしていない

「仲間だからこそ、あいつなら大丈夫と思って置いてきたんだよ」

「戯言を・・・」

「ガキを人質に取るのはいい案だが・・・それを破られた時の代償  
はでかいぞ、アポロガイスト!!!」

ドン!!!

蒔風が大地を思いきり踏みつける

すると地面が針のように真上にせり上がり、途中でグニヤリと曲が  
って

ドドドドドドッ！！！！

と、アポロガイストを串刺しにしようと迫る

だがアポロガイストは全くひるむことなく、地面スレスレを走り猛然と蒔風に迫る

迫りながら放たれるアポロマグナムを蒔風が「風」「林」で弾き応戦する

そして近距離になり、アポロガイストが剣、アポロフルーレに持ちかえ、斬りつけるのを防ぐ蒔風。

ギリギリと剣が呻く

蒔風は首を下に向け、俯いたまま耐えている

それに対しアポロガイストは真っ直ぐ蒔風を見据えていた

「どうした。まだ私には余裕があるのだぞ！！」

アポロガイストが蒔風を叩きのめすと言ってきた

だがしかし、アポロガイストはこの時想像だにしなかった

幼き者を人質にしたことの代償が、あんなにも苦しいものだったとは

この男がこの程度で倒れるものだとは、塵ほども思わなかった

「ブツ!!」

「ぐぬ!?!」

蒔風がアポロガイストの目に唾を吐きかける

それに思わず後退し、目をふき取るアポロガイスト

そんなアポロガイストの右膝を、蒔風が思い切り踏み砕いた

ゴキユン!!という音と骨格の砕ける音がした

「ぐおおおおおおお!!!!!!」

「はーい、まず」「ごめんなさい」「って言うてみようか」

蒔風がニコニコと笑いながら、蹲るアポロガイストを見ながら言った

「何を言つて(グギャ!) ギイイイイイイイ!!!!!!」

その言葉が言い終わらないうちに、蒔風がアポロガイストの右腕をへし折った

「おかしいなあ・・・オレは「ごめんなさい」って言えと言つたんだが? それ以外の言葉はいららないんだよ?」

「ぐ・・・おお

ガゴギユ!!

「ガアアア!!!(ボキッ!!)(ゴオオオ・・・」

「だからそんな叫び声はいいから」「ごめんなさい」「って言え。ん？  
簡単だろ？」

蒔風の顔はとても穏やかだ

その口調はまるで子供に言い聞かせるかのように緩やかだった

「ガキを人質に取るのはダメだよなあ？」

ゴキキキキ！！

「ぬっが！！！」

さらにアポロガイストの右手の指をすべてへし折る

その痛みに呻くアポロガイストに、

「だからそんな叫びはいらなから」「ごめんなさい」「って言えばいいんだよお・・・わかってるのかあい？」

アポロガイストの痛みに堪える声と、蒔風が身体を破壊していく音が淡々と、鈍く、響き渡る

そして三十分ほどたってから、アポロガイストは知った

この男はやバすぎる

悪とか善とか、そんなものじゃない

そんなカテゴリーには当てはまらない

独裁、慈善、復讐、義理、偽善、救済、破滅、善、悪、情、志、歪

み、狂気、理性、本能、衝動

そう言った一切の概念すべてをこの男から感じる  
故にこの男は完璧に偽装するのだ  
誰から見ても「まとも」に見えるのだ

だが違う

この男は何か一つのきっかけがあればどちらにも転ぶ男だ  
今は大きなきっかけがあつたようで大丈夫だが、もしそれ以上の「  
なにか」があれば、あらゆるものにこの男は身を変えるだろう

この男はすべてを理解し、すべてをその身に宿して、それでいてま  
ともなように振舞っている異常者だ……

それを知った故に、アポロガイストはもう抵抗することを止める

「すまなかつた……」

「あん？」

「すまなかつた！！私が悪かつた。だからもう（ベギツ）ギイイ

「イイイイイ!!!」

そのアポロガイストを楽しそうに踏みつぶし、アバラに当たる部位を砕く蒔風

「ちがあうんだよお。オレが求めてんのは「ごめんなさい」、だ！それ以外の言葉は求めてないんだよお……」

「あ……あ、あ……」

そこからさらに拷問が始まった

「ごめんなさい」の一言、たった六文字言うのにアポロガイストはさらに二時間費やした

というのも、「ごめんな」や、「ごめ」の時点で蒔風がいきなりアポロガイストの体を砕き

「最後までちゃんとやってくれないとオレわかくなうい」

と言って先に進ませないからだ

それでもアポロガイストは死ねない

改造人間であるその体は、その程度では死ぬことができない

むしろ一番最初に砕かれた箇所はすでに治ってきているところだ

「いいねえ。便利だねえ。これなら殺すことなく痛めつけられる。オレが「殺さない」って言うのは、こつ言うこともあるんだよなあ。生きてる方がよっぽどつらいってな！」

そう言つて恍惚に笑う蒔風

その間にアポロガイストはついに言つてのけた

「ご……ごめんな、さい……………」

そう言つてアポロガイストは力を抜く

これで解放される

だが、そんな光景を見て蒔風がニヤリと笑つた

「ざあんねん。その程度じゃあ、許せない」

「あ…………え？」

「ガキは俺らよりも先の世界を生きる。つまりは未来の世界だ。お前がああとき壊そうとしたのは世界だった。それを見て許せる俺と思つたか？」

「き…………さま……………」

「でも途中からお前壊すの楽しくなつちやつたんだけどね！！あはははははっ！！」

蒔風が笑う

無邪気にでも、冷酷にでもなく、ただ、笑う

だからと言つて貼り付けたようなものでも、無感情なものでもない

だが蒔風は心から笑つていた

ただ、その根幹の感情は、誰にも理解できない  
たった一人の自分自身を除いて

「ふう……もういいや。飽きた。あとは好きにしろ」

そう言つて蒔風がアポロガイストを「山」で斬る  
すると全快ではなくとも、折れた箇所は治っていた

「!?!?……どういふつもりなのだ……」

「お前に飽きたんだよ。ま、これはいただいてくけどね」

そう言つてパーフェクターを手に持ち、振る蒔風

「か……返せ……私の命を!!」

「その気持ち、覚えておけ。お前に命を奪われた者の叫びだ」

そう宣告し、立ち去ろうとする蒔風

アポロガイストはその後を追えない  
その身に恐怖はしみ込んでいた

「そうそう。でもオレがお前に対してひとつだけ認めてるのはさ」

蒔風が首だけ振り返つて指を立て、言った

「生きる、という執念。それだけは認めてやる。オレにはその執念  
がないからな」



「貴様は・・・人では、否、生物ではないのか？」

その言葉に身体ごと振り返って蒔風が言った

「その通り。オレは異端者にして破綻者。人にあらずして生物にあらず。「死」を恐れないがゆえに、「生」の実感がないものだ」

「な・・・・・・・・」

「そして覚えておけ「ディケイドの迷惑な存在」となる者よ」

その声の凄みにアポロガイストの体がびくりと震える

「世界に下手に手を出してみる。オレが潰すぞ」

そう言っつて蒔風の姿が消える

・・・絶対にな・・・

最後にそう言葉を残して

アポロガイストが人間体に戻る  
その全身から気持ちの悪い汗がにじむ

「アポロガイスト!!」

そこに南光太郎の声が響く  
どうやら自分を探しまわっていたようだ

ガイはいつも通り振舞った  
自分は大シヨツカー大幹部アポロガイスト

そんな自分がライダーに弱みを見せてはならない  
お互いに睨みあっていると、二人の隣にオーロラが出現し、チャッ  
プ達がそこを通っていった

向こうにはシュバリアンがBLACKとディケイドを相手取り戦っ  
ていた

ここからはなんら変わらない物語

ディケイドがオーロラをくぐり、こちらに来る  
ディエンドが現れカードを使ってBLACKを召喚し、四ライダー  
がアポロガイストと呼びだされた他の怪人と戦う



「土、すまなかつたな。お前を置き去りにして」

「いや、こつちも礼を言う。ナツミカンを、ありがとう」

「皆さん、本当にありがとうございました」

「結局君の勝ちかい？つまらないなあ・・・これじゃ僕が強いことにはならないじゃないか」

ユウスケ、蒔風、土、そしてどこから来たのか海東の四人が写真館で騒がしく話している

「いいじゃないか。仲間がどんなもんか、知れたろ？」

「うんうん、海東さんはまた一つ、仲間を知ったんだな、うん！」

蒔風とユウスケの言葉に海東が考え込む

「そうか・・・知らないことを知る・・・知識とは最高のお宝だ・・・  
そういうことだったんだね、蒔風君」

そう言って海東がパン、と指で蒔風を撃つ

「さて、次の世界はどんな世界だ？」

そう言って土がカーテンロールを降ろす

向かう先はアポロガイストの逃げた先の世界・・・になるはずだった

「なんですかこの絵!？」

夏海が驚愕の声をあげる

無理もない、そこにあつた絵は……

真っ黒に塗りつぶされた、ただの黒い布だったのだから

「蒔風……これは!？」

士の問いに、蒔風が面白そうに言った

「あの野郎のお出ましさ。思いのほか計算が早かったな」

ついに敵が来る

蒔風、「ディケイドの世界」最後の戦いだ

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

ディケイド 〱 時風の本質〱 (後書き)

アリス「時風・・・酷い!!」

よくよく見て見なさいよ

「Shun Maikaze」ですよ？

「S・M」なんですよ!!

ア「あれはただのドSでしょう!!」

あれがダメだとわかっていることに対する背徳感でまた楽しいらしいですよ？

そういう意味ではほんの少しMですね

ア「読んでて気持ち悪くなりました・・・」

すみません

ア「次回、演算終了、戦闘開始」

ではまた次回

僕の目の前に広がる

九つの道はいつか重なって

新しい夜明けへと続く道に変わるのだろう

目撃せよ Journey through the Decade



ディケイド　く世界を旅する戦士たち

時風達が外に出ると、ただひたすらに荒野が広がっていた。

「時風、「奴」つのが来たのか？」

「そ、来たみたいだ。あそこ」

時風が指差した先三十メートル程  
上に向いて立っている巨石がある

そしてその上に足を組んで空を見上げる青年がいた

「よう！計算、早かったな！「なのはの世界」じゃ半年はかかって  
たじゃないか！」

時風が話しかけた

その声に反応じ青年の首が軽くこちらに向いた

「ああ・・・今回は「ライダー」っつー共通事項が合ったからな。  
それでも二、三ヶ月は掛かっちゃまったけどな」

二人の会話に海東が口を挟む

「君が「奴」かい？嫌にあっさり出てくるんだね」

彼等の回るライダー世界には様々な組織の陰謀が渦巻いていて、回りくどい事が多かった

故にいきなり出てきた事に驚いているのだ

「準備は出来た。やることは明白。だったらこれ以上時間をかける必要はないよ」

そう言つて青年、「奴」が岩の先端に立ち上がる

「始めまして皆さま」

礼儀正しくお辞儀する「奴」  
そしてその顔が上げられる

「んで、死ね。ディケイド」

ゴゴォー！

ターン、とジャンプし着地した「奴」が後方に巨大な砂埃をあげ、一足飛びで蒔風らの真ん中を通り過ぎていった。

「速……い！」

その速度に時風が驚愕する  
皆も同じように驚く

「夏海！隠れている！行くぞ！」

士が皆に呼びかけ、バックルを取り出そうとする

海東がカードとドライバーを

ユウスケがベルトを出現させ

時風が龍虎雀武を解放合体させようと手を伸ばす

だが士が取り出そうとしたバックルは彼の元にはなかった

「時風がパクれたのをオレがパクれないわけないだろ？」

「奴」がその手に持つディケイドドライバーとライドブッカーを見せ  
付ける。

「通りすがって戴きました。変身！」

「Kamen Rider... DECADE！」

「奴」がディケイドに変身する

だが土のモノと違い、鮮やかなマゼンタは黒く変わり、目は緑でなく黄色になっている

「キメゼリフはないけど、許してね？」

そういつて両手を合わせるディケイド

そしてライドブツカーをガンモードにし、低い姿勢で突っ込みながら蒔風に撃ってくる

「Attack Ride...BLAST！」

銃身がいくつにも分身し、一斉射撃にて攻撃してくる

「チツ！！」

蒔風が前方に「風林火山」と「獅子天麟」を放る

その刀身に銃弾が当たり、回転するのを蒔風が解放した朱雀槍で落ちないように調整していく

そのほかにも撃たれた剣がほかの剣に当たり停滞し、さらに他のに当たって、と永続的に蒔風の前を守る

「全く、君も厄介なものを盗まれたね」

「お前！！それを返せ！！」

「変身！！」

ユウスケと海東が同時変身する

その間にディケイドは蒔風に到達し、ブッカーをソードモードにして斬りかかる

それに蒔風は手にしていた朱雀槍で応対する

外からの衝撃がなくなり、他の剣がすべて地面に落ちるか、突き刺さるかする

朱雀槍とライドブッカーが鏝迫り合いしているところに、海東の銃撃が入り込む

「Attack Ride...BLAST！」

蒔風の真後ろから引き金を引いたディエンドの銃弾は、蒔風を回避し、回りこんでからすべてディケイドに向かう

「フウア！！！」

バゴン！！とディケイドが大地を踏み砕き、地形を崩す  
粉塵が舞い、視界が奪われる

その瞬間にも地盤が崩れ、蒔風身体は崩れて落ちる地面と共に落下していく

「おいおい！どこに落ちてんだよ！！」

落ち続ける足場に周囲

そうやって周りを見渡す蒔風の横を落ちていく岩石にディケイドが降り立ち蒔風に銃撃を浴びせながら歩いてきた  
それに対し朱雀槍を回転させて、防ぐ

だんだんと回転が「舞い」のようになっていき、体の右側左側と交互に回転していく  
その途中で脇に差してある残りの「青龍」「白虎」「玄武」に触れ、  
一体としていく

ブンブンブン、バウッ！！

「龍虎雀武！！朱雀青龍刀！！」

蒔風が回転からそのままディケイドにドン！！と構える

ディケイドが武器をソードに変え、こちらに攻め込もうとしたその  
とき

「ユウスケ！！この声の前方五メートルだ！！」

チュン！ドドドドドドドドド！

ディケイドの全身から火花が散り、この行進が止まる

ディケイドが目をやった先に、ペガサスフォームのクウガと、ディエンドが立っていた

それを確認し、ディケイドがカードを取り出し、装填した

「Attack Ride...INVISIBLE!」

カードは発動しその瞬間、その効果を最も知る男が動いた

「小野寺君、返してくれ」

そう言ってクウガからペガサスボウガンを受け取ると、それはディエンドライバーに戻った

「Attack Ride...INVISIBLE!」

そしてディケイドとディエンドの姿が消えた

と、なにもないところから火花が散る

蒔風とユウスケの周囲で、幾度となく散った

ガッ！バァン！ドドドドツ、バガンバガンバガン！...ドゴウ！...！

「ぐっ、うわああああ………」

「海東!!」

上空からデイエンドが落ちてきて、いくつもの岩石を砕きながらさらに下方へと落ちて行った

「ユウスケ!!あの感覚、覚えてんだろ?行くぞ!!」

「え?あ、ああ!!超変身!!」

クウガが蒔風の叫びに応え、アメイジングマイティに超変身する

「オオオオオオオオリアア!!!!!!」

クウガのアメイジングマイティキックがデイケイドに放たれる  
さらにそこに蒔風が朱雀槍の一方の先端に白虎釵を両方とも装着し、  
デイケイドに向ける

すると白虎釵からエネルギーが伸び、白く輝く牙が現れデイケイド  
を挟み込んだ

身動きの取れないデイケイドに、クウガの必殺技が迫る

しかし



バキヤー!!ゴオツ!!

デイケイドが白虎の牙を右側だけ破壊し、その腕に力を込め、クウガのキツクを正面から殴りつけた

その拳のエネルギーは凄まじく、クウガの足とデイケイドの拳はとんでもない音を立てながらギリギリとせめぎ合っていた

しかし、デイケイドが左腕の拘束をも破壊し、そちらの腕もクウガに向かって突き出した

クウガの足先が爆発し、その体が吹き飛ばされる

クウガは周囲を渦巻く粉塵の向こうに消えていった

「こんなもんか・・・五代雄介の方がまだ手こずったぞ」

「調子に乗るな!!」

バガァン!!

蒔風が朱雀白虎棍の先端を玄武に変え、玄武盤とし、デイケイドの顔面にその側面を叩き付けた

が、それは直撃などしておらず  
デイケイドの腕に阻まれていた

「Attack Ride...SLASH!」

ギヤイイイン!!!!

ディケイドのソードの刃が平行に分身し、時風に重い攻撃を仕掛けてくる

「ああ、そうか!!このライダーシステムは「ライダーを潰すためのもの」だったな」

「どういう・・・ことだ!!」

時風がディケイドの剣撃を受け続ける

(「奴」の体力でこの一斉同時剣撃なんざ、獅子天麟でなきゃこのままじゃマジで・・・!!)

獅子天麟は最初の荒野に落としてきてしまった

そんな時風の焦りを知ってか知らずか、ディケイドは答えた

「実際に門矢士という人間が変身したディケイドは、他のライダーに比べてそこまで強くない。まあ、怪人やある程度の奴なら軽くあしらうがな

だがそれでも他のライダーを圧倒しうることは、このシステムが「他のライダーを潰す」ことが目的に作られているから他ならない  
なるほどなるほど・・・これならライダー大戦でも生き残れるな、  
うん」

ガギイ!!

そう言つて自己完結させ、蒔風に思いつきりソードを叩きつけ、ひざまづかせる

そしてグリーン！とソードを捻り、龍虎雀武を蒔風の手から吹き飛ばした

そして武器のなくなった蒔風にライドブツカーの幾重にも分身した斬撃が襲いかかる

ドシュー！！！！

五つか六つか、それぐらいの斬り傷が蒔風の胸に刻まれる  
そしてさらにディケイドは一回、二回と蒔風を突き刺していく

だが蒔風にとっては一回二回ではない  
一回に突きに五つも六つも同時に貫かれるのだ

その全身から血を噴き出し、蒔風の体も足場になっていた岩板から落ちて行った

それを追つて跳び降りるディケイド

徐々に砂煙が晴れ、周囲が見えてくる

そして落ちて行った先は、最初にいた荒野であった

どういう世界構造になっているのか

ここから地盤が崩れ落ちて、落ちた先はまたここだった

蒔風がのろのろと首を捻ると、変身が解け、ボロボロになった海東

とユウスケが転がっていた

「海東!!おい!!」

「大丈夫ですか?ユウスケ!!」

士と夏海が二人を抱え上げる

そして蒔風にも気付いたようで、二人と共に駆け寄ってくる

「ふう〜。これで十分だな。返すよ」

「奴」が変身を解き、ディケイドドライバーとライドブッカーを手に持つ

「しかし変身されると厄介だ。故に」

「奴」がライドブッカーからすべてのカードを抜き取る  
そして

ボウワ!!!

そのカードすべてを焼き払った

そうしたうえで、空のライドブッカーとドライバーを返却した

「カ、カードが!!」

「そんな……」

士がブッカーの中を見ても、そこには一枚たりともカードはなかった

そこから通じる「クラインの壺」には無尽蔵のエネルギーがあり、それによってカードが生成されるにもかかわらず、一枚もカードは出てこない

「おおおおおお！！！！」

蒔風が落ちていた「獅子」と「天馬」を握り、たちあがって「奴」に迫る

その途中にあつた「麒麟」を蹴りつけて「奴」にダーツのように飛ばす

それを指で挟んで止められ、投げ返される

それを右手でつかみ、三本を合体、「獅子天麟」にし、「奴」に振りかぶった

「奴」も魔導八天を掴み、蒔風に迫る

そして「奴」の剣と蒔風の剣が交差した瞬間、「奴」の剣のうち、一本だけその手に残し、他がはじけ飛ぶ

そして空中でふわりと止まり、その切っ先がギユカツ！と蒔風に向くそしてその剣が蒔風に風を斬って向かって行った

その剣を撃ち落としていくが、受けきれないいくつのもの斬撃に身をさらされる蒔風

そして最後にトンっ、と優しい音が蒔風の腹に鳴る

その音は「奴」が最後の一刀を背中からその手で蒔風に突き刺した音だ

蒔風の体が崩れる

士達は信じられなかった

あれだけ最強だなんだと言い、そして実際には恐ろしいほどの実力を持った男が、「奴」の前には交戦するだけで手一杯なのだから

その蒔風を乗り越え、「奴」が士達に歩み寄る

「ここで旅は終わり。ああ、かわいそうに。門矢士は自分の世界を、その正体を知らずにここで死んで行ってしまっ！！  
だが安心しろ。新たな世界において、しっかりとお前の世界に帰してやる。だから安心して」

「安心して・・・死ねって言うのか？」

士が「奴」を睨む

そして「奴」の後ろに倒れる、蒔風を見る

「世界をまわる旅は、危険が多くあったが、それなりに楽しかった。破壊者だと罵られても、それを庇う奴がいた  
どんなに突っぱねても、ついてきやがる相棒がいた  
ひよこひよこ出てきては邪魔ばっかしゃがるコソ泥もいた」

そして両手を広げ、皆を表して言った

「それがオレの、オレたちの旅だ！！その行き先はオレたちで決めるオレたちが自分の力で、力で、この想いで！進んでいった先に本当の自分の世界がある！！  
それがオレたちの力になる！！

お前の偽りの世界、偽りの力は、必要ない！！」

だが「奴」は土を指さし、蔑む

「その力とやらのカードも消えたじゃあないか。所詮他のライダーと築いた絆も、その程度だったというわけだ！！」

だがその言葉は全く土には痛手にならない

「問題ないな」

「なに！？」

「力とは能力や、腕っ節じゃない。守ろうとする心、絶対に諦めない気持ち。それが力だ！！カードはそれを表す形態の一つにすぎない！！！！」

その土の強き瞳の輝きに、「奴」が下がる  
そして気付いたように蒔風の襟首を掴み持ち上げ、叫んだ

「だからと言って！！この戦力差は覆らない。人質、変身不可、重傷人。これだけのハンデを抱えて、勝てるのか？」

「勝……るさ」

そう答えたのは「奴」に掴みあげられた蒔風だ

「勝て……るに決まってる。ここにいるのは……世界……さい、きよ……だ」

「ムカつくんだよ……そういうお前のでかい態度がよお！！！」

蒔風の体を土達の方に投げつける

土たちが蒔風をキャッチし、肩を貸して立たせる

「泣き虫毛虫、いつも怯えて、自信の持てない奴が、張ったり言うな！！！」

「蒔風は弱くない。ここで一番体を呈してオレたちを守ろうと戦った、世界を一人で回ってきた、最高の男だ！！！」

「違う！！その男がその状態に簡単になれるのは、死を……」

「そんなことはどうでもいい！！！！いま重要なのはたった一つだ……お前を……倒す！！！」

その土の言葉に、蒔風がピクリと動き、自分で立つ



「大丈夫なのか？ 蒔風」

「なんてこたあ・・・ない・・・」

「貴様・・・主人公きどりやがって・・・なんなんだよ！！お前は！！！」

その問いに土がにやりと笑う

ユウスケも夏海も海東も、ボロボロの蒔風ですらも笑い始めた。

「覚えておけ！！オレは・・・」

そこまで言っつて土がライドブツカーを再び開くするとそこから無限ともいえる大量のカードが次々と出てきて、土の周りを囲んだ。そのカードはディケイド自身のもあれば、今まで覚醒した他のライダーのカードもあった

「通りすがりの仮面ライダーだ！！！！変身！！！！」

「Kamen Ride - - DECADE！」

大量のカードから一枚が土のバックルに滑り込み、その姿をディケイドに変身させる

他のカードはすべてブツカーに滑り込んでいって、収まった

「覚えておけだ？・・・めんどくさいなあ！・・・！」

そう言って走り迫る「奴」に、海東が銃撃を浴びせる

その間に蒔風とディケイドが目配せをする

「行くぞ、蒔風！・・・！」

「ああ！・・・！」

【KAMEN RIDER DECADE】 - WORLD LIN  
K - WEAPON -

すると腰に装着されたライドブツカーから一枚のカードが飛んできた  
黄色いカードで、斜めに絵が両断されており、上半分には蒔風が、  
下半分には凄惨な形の剣が描かれていた

「お・・・おいまさかそれはあああああああ！・・・！」

「ちょっとくすぐりたいぞ！・・・！」

「Final Foam Ride - - M A M A M A M A  
I K A Z E !」

「おうぐあー!!」

カードが発動し、時風の体が若干浮き、形を変えていく

転がっている十五天帝すべてが鞘におさめられてから再び抜け、鞘とは反対向きに定着していく  
そして時風の体と顔を装甲が覆っていた

最後に腕がバンザイ状態になり天地陰陽と、背中の「獅子天麟」が三本とも真っ直ぐになり先端に足が折れ曲がりそこが取っ手に  
脇の「龍虎雀武」は円盤状に合体して巨大化、腹部に当たる部位を貫通し、モーターのように高速回転する  
そして「風林火山」は刺又さすまたのように途中で折れ曲がって伸びた

『な、なんじゃこりゃああああああ!!!!!!!!!!』  
「なんじゃそりゃああああああ!!!!!!!!!!」

時風と「奴」が同時に叫んだ  
しかしディケイドはそんなことは気にしない

「はあああああ!!!!!!ウオオオ!!!!!!」

ザッ、ギュギン！！！！！！！

無数の刃が「奴」に振るわれ、斬撃、指突、殴打、さらには中央部の回転刃による削り出し

その一撃に奴が吹き飛ぶ

その一撃にデイケイド自身もよろめき、一旦地面にドン、と置いてしまった

『イッテ！もう少し丁寧に扱え！』

「わぁーたよ。じゃ、終わりにするぞ！……！」

『うっし！……！』

【KAMEN RIDER DECADE】 - WORLD LIN  
K - FINAL ATTACK

再び出てきたカードを掴む

先ほどと同じく黄色く、羽根の形をした紋章が描かれている

「Final Attack Ride - - M A M A M A





こう話している場所は写真館だ  
すでに先ほどの黒い絵はなくなっている

これから蒔風がこの世界から出ていくのだ

「では、これで」

「またいつか」

「おう！ー！」

「Gate Open . . . K A M E N R I D E R D E C A D  
E」

ゲートが出現し、蒔風がそれに向かう

と、不意に土に向き直り、言った

「土、オレがいたのはほんの少しだけだったけど．．．まあ、なん  
だ．．．

仮面ライダーディケイド・門矢土の物語は、結構おもしろかったぜ」

「蒔風．．．」

「お前の物語は確かに存在する。なんでかわからないけど、そう思

えたんだ」

「……………」

「じゃあな！！！」

そう言っつて蒔風が消えた

ここからはまた、彼らとは別の物語

「次の世界はなんなんでしょうかね？」

夏海や土達が次の世界に心躍らせる

これから彼らがめぐるのは、過酷な世界だ  
大シヨツカー、土の正体、ライダー大戦、スーパーシヨツカー

そして、ディケイドの終わり  
そこから始まる物語

しかし、それは別の物語

蒔風が向かう次の世界は……………





t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

ディケイド ～世界を旅する戦士たち～（後書き）

【仮面ライダーディケイド】

|          |          |     |
|----------|----------|-----|
| 構成：      | ” ライクル ” | 35% |
| ” フォルス ” | 35%      |     |
| ” LOND ” | 30%      |     |

最主要人物：門矢士

- WORLD LINK - ～ WEAPON ～：「ファイナルフォームライド：時風」の出現、「マイカゼ十五天帝」の使用

- WORLD LINK - ～ FINAL ATTACK ～：「ファイナルアタックライド：時風」、ディケイドブレイカーの発動

1810

アリス「やっとディケイドが終わりましたか」

やっぱりオリジナル戦闘書いてる方が楽しい

ア「そうですか？」

なんかこう・・・

あらかじめある戦闘に時風を継ぎ足すよりは書きやすい

ア「さいですか」

じゃあこのへんで

ア「次回、四色の怪人、不幸な少年」

ではまた次回

時を越えて、俺、参上！

## 電王 〱時の列車の特異点〱

時風が世界に到着する

「どこですかここ？」

見渡す限りの砂砂砂・・・  
空にはオーロラが光っている

ポケットをまさぐると、一枚のカードが入っていた。

「これは・・・チケット、か」

時風がカードを自分にかざす  
するとなにかが浮き上がってきた

そこには「」と、それをまたがるように「INFINITY」と  
書かれていた

そのカードを確認すると、目の前に線路が走ってきた  
線路だけだ

それだけが走ってきた

フアーアーアーン！！

そこに電車が走ってきた  
白いボディに赤いマスクの電車

その車両部の扉が開く

「客室乗務員のナオミです！デンライナーに、ようこそ！ご乗車、  
しますか？」

蒔風がなんだかわからない顔をしていると、中からナオミと名乗る  
女性ぎ出てきた

「乗るの？」

「乗らないんですか？」

「乗ります」

「ですよー！このままだと時間の砂の中で永遠にさ迷う事になりま  
すしー！」

「え？時間？」

「さあさあ、コーヒーもありますから！」

ナオミが蒔風の背中を押して、デンライナーと呼ばれた電車に押し  
込まれる。

向かった先は食堂車のようだ

そこには赤、青、黄色、紫の怪人がいた  
いや、よく見たら黄色じゃなくて金色か？

「おいおい！こんなヒョロっちいのが他の世界から来た奴ってのかよ！？」

「先輩、いきなりそんなこと言っちゃ失礼でしょ？」

いきなり浴びせられるその言葉に、時風がムツ、とする

「何いきなり言うんだよ！！戦いは力とか能力もあるけど、ノリのいい方が勝つんだよ！！！」

その言葉に赤鬼のような男は時風のほうに歩いて来て、肩をバシバシ叩いた

「お前・・・わかってんな！！！」

「え？は？」

そう言っただけ真ん中の席の方に連れてこられる

そこにはスーツ姿の男性が座ってチャーハンを食べていた  
どうやらチャーハンに立っている旗を倒さないように崩していった  
食べてるようだ

その旗がカタン、と倒れたところで、男性が立ちあがり蒔風の方に向いた

「ようこそ、デンライナーへ！」

「デンライナー？」

「時を越える列車・・・それがこの、デンライナーです」

「で、こっちが電王の、野上良太郎君です！」

そこにナオミが一人の少年を連れてくる  
蒔風よりも結構年下だ

「初めまして、野上良太郎です」

そう言って握手する

「君が・・・主人公か」

「え？」

「しかもまた「仮面ライダー」か。それにしてもちっちゃいな。何歳だい？」





すなわち、その人間が存在した時間を行き来できるのだ

「そうやって時間を飛び越えるイメージを追って撃退しているのが「電王」だ

野上良太郎はいかなる時間の影響を受けない「特異点」である  
それゆえに電王に変身することができる

だが少しばかり前に何らかの時間の歪みの影響で、本来十九歳だったのだが、十二歳の少年姿になってしまったのだ

「なるほどなあ・・・で、あいつらは？」

と時風が先ほどの怪人たちを指さす  
すると一斉にこちらを剥き、バア、とおどけてきた

「おう、俺はモモタロスってんだ。名前の事は気にすんなよ」

「僕はウラタロス。男を釣る趣味はないかな。名前の事は気にしないでね」

「わいはキンタロスや！お前さん、実は強いやろ！あ、名前の事は気にせんといてな」

「僕はリュウタロスだよ！他の世界ってどんなの？でも、名前の事は気にしないでよね！」

そうやって自己紹介してきた

彼らもまた、イマジンだ

だが良太郎の味方に付き、共に闘う仲間である

良太郎は基本的には彼らに憑依させ、身体を貸して戦ってるらしい

「ってことは悪霊みたいなもんか？」

「ちょっと！悪霊はないんじゃない!？」

ウラタロスが反論するが、蒔風はさらりと流す

「あっちの男性は？」

「あの人はこのデンライナーのオーナー。あなたの事も、オーナーから聞いたの」

そこに女の子の声がした

振り返るとそこには良太郎と同年くらいの子がたっていた

「ハナさん」

「私はハナ。こんな姿だけど、良太郎と同じくらいの年よ」

「へえ、やっぱり時間の歪みか。理由は？」

「私の事はわかってるけど、良太郎のは原因不明なの」

「へえ」

ハナは良太郎にベルトを与え、電王に変身させた張本人だ

「ふんふん・・・ん？俺の事？・・・俺の事お！？」

「うん。他の世界から来たって聞いたよ。そこらへんの話、少し訊かせてくれるかな」

自分の事を察知していたオーナーに戦慄を覚えながらも、時風は説明した

それが終わり、モモタロスがウラタロスに質問した

「で、どういうことなんだ？」

「先輩・・・話聞いてなかったの？」

「あはは、モモタロスのばか」

「うるせえ小僧！」

「つまりや、この世界の中心である良太郎を殺すことで、この世界をいただくっていうんやな」

「なにい！？」

「モモの字、ホンマに話聞いてなかったんかい」

「うつさいクマ公！！えーと、なんだ、良太郎を狙ってくる奴がいるから、そいつをブツ倒せばいいだけだろ？簡単じゃねえか」

「て言うか最初からそうとしか言っていないよ先輩」

「カメちゃん、それ以上はモモタロスがうるさくなるからやめようよ」

「なんだと小僧！！」

「わーーーー！！！！」

イメージ達が車内で騒ぎだす

キンタロスやウラタロスが「クマ」とか「カメ」と呼ばれているのは、彼らの元になったイメージが「金太郎」、「浦島太郎」だからだ

イメージがこっちの時間で手に入れる実体は、契約者の持つイメージから形づくられる

この場合、少し事情の違うキンタロスのほか三人は良太郎の持つイメージだ

ちなみにモモタロスは「桃太郎」の赤鬼

ウラタロスは「浦島太郎」のウミガメ

キンタロスは「金太郎」のクマ

リュウタロスは「龍の子太郎」の龍だ

「で、何かおかしいことはないか？」

そう時風が良太郎に訊くが、その前に良太郎が聞いてくる

「そういえば君、チケットは？」

このデンライナーにはチケットがなければ乗ることができない  
持っていないければオーナーに乗車させてもらえず、時間の中に放り  
出されてしまう

そこで時風は最初に持っていたチケットを差し出す  
それを見て良太郎は驚愕した

「これは！……神の路線へのチケット……」

「なんであなたが？」

「いや、わからん。この世界にきたら持ってたんだよ」

「オーナー、これ」

ハナがオーナーにチケットを見せる

「これは……ふむふむ、ひじょーおうちに、興味深いですねえ。た  
だ、「神の路線」に入るといふ役割はもうすでないようです」

「じゃあ、どういふことなんですか？」

「さて、ただのきっかけだったのでは？ほっほっほ〜」

そう言っつて客室から去るオーナー

そこでリュウタロスが蒔風に訊いた

「ねえ、お前本当に強いのか？戦ってみてもいいよね？答えは聞いてない！」

「ちょっとリュウタ！あんた何言っつてんのよ！！」

「おう小僧。お前いいこと言っつじゃねえか。本当に強いのか？お前」

「ま、良太郎守るだけなら俺たちだけでも大丈夫やしな！」

「そつだね・・・ま、ここでのんびりしてれば？」

その言葉に引き下がる蒔風ではない

「上等だ・・・やってやらあ！！表でろオ！！」

「いいぜえ・・・その気迫！！久々に楽しめそうだ〜」

「ま、たまに身体を動かすのも悪くないかもね」

「俺の強さは泣けるレベルやで！！」

「へっへー。ディケイドとどっちが強いのかな？」

リュウタロスの言葉に蒔風が反応する

「ん？知ってんのか？」

「うん。まあ、あの時は引き分けだよ！！」

「そうか（ユウスケから話は効いていたが、あいつら「原典」ともクロスしてたのか）」

「あん？あの野郎知ってんのか？」

「おう、あいつらと引き分けるとは、楽しそうだな」

「へ！！こつちが一方的に楽しんでやるよ！！」

「ノリなら負けねえ！！」

「こつちもだ！！行くぞ良太郎！！」

デンライナーが止まり、皆が出口に向かう

「ちょっとあんた達！！・・・良太郎、いいの？」

「うん・・・こつちになったらモモタロスたちは止まんないよ・・・」



「さあ、始めようか!」

「おう!!--いくぜ!--最初から最後までクライマックスだぜ!--」

t o b e c o n t i n u e d

## 電王 くの列車の特異点(後書き)

アリス「電王の世界!!!」

いや、電王は凄い

なにがすごいってこれだけ続いているんだから

ア「超電王はどこまでやるんでしょうね」

ねー？

自分は超電王のCD BOXまで買ってしまいましたよ

ア「私はDouble-Action Coffee formが好きですね」

作者はRod formが一番好きです  
ポコスカポスカっていうのが

ア「こないだのカラオケで全部歌ってましたもんね」

牙王フォームがなかったからなあ・・・  
Climax Jumpは他のフォームのなかったし・・・

ア「あれはいいですね。そっちでは「ファイナル」が好きです」

超Climax Jumpの冒頭での「まさかこの私までもが」のくだりが好き

ア「次回、コロコロ変わる電王たち!!!」

ではまた次回

千の偽り、万の嘘。嘘の裏には針千本  
それでもいいなら、お前、僕に釣られてみる？

## 電王 ～電王四変化～

デンライナーを降り、砂の荒野に立つ時風たち

「前振りは？」

「は！前振りはいらねえ！！いくぜ、良太郎！！」

「はあ・・・あまりやりすぎないでよ？」

「わーってるって！！よつと！！」

そう言つてモモタロスが良太郎に飛び込み、憑依する

すると良太郎の髪の毛が逆立つて赤いメッシュが入り、瞳が赤く染まる

「よっし！！よく見とけよ？俺のかつこいい変身をよ！！」

ガチツ！！ ～～～

「変身！！」

そう言つてM良太郎がデンオウベルト装着し、定期入れと酷似した形のライダーパス振つてその前を通過させる

《s w o r d f o a m》

ベルトが起動音を鳴らし、囲むようにオーラアーマーが浮きあがり、それが装着される  
そうして赤い装甲に身をまとった、仮面ライダー電王ソードフォームのお目見え……のはずなのだが

「モモの字!!そいつの強さに気付いたのは俺や!!」

そう叫んでキンタロスが変身中の電王に突っ込んでいく  
そうするとモモタロスが弾きとばされ、キンタロスが良太郎に憑依した

《a x f o a m》

~~~~~

ヒイイイイイン、ガシユウ!!

途中で装甲の手順が変わり、黄色を基調とした装甲を身にまとい、アックスフォームへと変身した

「はっはっはっは!!俺の強さに、お前が泣いた!!」

「お？最初はそつちか？」

弾かれた先でモモタロスが「俺の変身があー！！なぐんか前もあつたよなこれえ！！」とか叫んでいるが、ウラタロスになだめられ、大人しくなつた

「行くで、蒔風！！俺の強さは、泣けるでえ！！涙はこれで拭いきー！！」

変身の際に周囲に花びらのように散って現れた紙を見ながら武器、デンガツシャーを斧型のアックスモードに連結、組み立て構えた

「それは痛みで？感動で？」

「それは泣いてからのお楽しみやー！！」

電王と蒔風が睨みあう

ふ、と蒔風が手を前に出し「土惶」と呟く
すると地面の砂が集まって、目の前で棒状にかたまる
さらにそれに「獄炎」と呟き、業火で焼く

するとそれが一本の鉄の杖じゆてになる

熱いのでそれを「圧水」で冷やしてからそれを握る

「準備はできたか？なら、行くでえ！！」

電王が突進してくる

蒔風がそれをひらりとかわす

そこから電王が回転して斧での一撃をかましてくる

蒔風が杖に滑らせる形でそれを逸らす

一撃、二撃とそうやって攻撃をい受け流していく蒔風

「どうした！！そんな単調な攻撃じゃあ見切られんのがオチだぞつと！！」

バガン！！

蒔風の杖の大きな一撃が電王の首元にぶち当たってその動きを止める

それで終わりかと思われたが、相手は電王全フォーム中最高の防御力を誇るアックスフォームだ

そんな簡単には終わらない

「あえて見切らせたんがわからんとは、お前さんもまだまだだな！！」

《Full Charge》

その体勢のままライダーパスをベルトの前に通し、エネルギーを斧

に送り込む

「なに!?!」

「言ったやろ!!俺の強さは、泣けるってな!!フン!!」

電王が突っ張りで蒔風を押し出し、その隙に上空に斧を投げ、腰を落とす

そして蒔風がそれに視線を向けた時には、すでに電王は上空の斧をジャンプでキャッチしており、蒔風に振りおろしてきた!!

蒔風がそれを落とそうと鉄杖を投げつける

しかし、その鉄杖をまるでそうめんを千切るかのように二本に両断してしまった

そしてさらに蒔風に迫る電王

その斧の刃から金色のエネルギーがほとばしる!!

ドゴオン!!!!

砂煙が上がり、二人の姿が消える

その中から声が聞こえてきた

「ダイナミック、チョップ……だったんやがな……」

砂煙が晴れ、二人の姿が露わになる

そこには「獅子天麟」を地面に突き立て、柄の方を上に向けて片膝をついている時風がいた

その柄は電王の鳩尾に減り込んでおり、その手の斧は時風の額十センチ前で止まっていた

時風が立ちあがって電王を突き飛ばす

「さ、あと三人もいるんだ。手っ取り早く終わらせよう!!」

電王が他のみんなのところに倒れ込む

「じゃあ次は僕の番だね、っと!!」

「すまん!!」

そう言っただけでキングタロスが電王から飛び出し、ウラタロスが入り込む

《rod foam》

今後は青を基調とした電王ロッドフォームへと変わった

「次にやられるのはウラタロスかい?」

「僕の強さをキンちゃんと一緒にしない方がいいよ？さて、お前、僕に釣られてみる？」

「そもそもカメは釣るもんじゃねえ。捕獲するって言うんだよ！！
朱雀槍！！！」

蒔風が朱雀槍を構え、電王に突きの暴風を見舞う
それをバックステップで距離をとってかわす電王

「すごいねえ。でも、それだけじゃ倒せないよ！！！」

デンガツシャーをロッドモードにし、大振りに振ってくる電王
蒔風がそれを朱雀槍で受ける

蒔風がそこで一旦離れて距離をとるが

「逃がさないよ！」

ロッドをつりざおのように使用し、先端から糸を飛ばし、その刃を
蒔風の襟に引っ掛ける

蒔風は急にバランスを崩され、その場に倒れ込んでしまった

《Full Charge》

その音声を訊いて即座に立ちあがる蒔風

しかし、電王の方が行動は早く、蒔風に槍のように投げつけられたロッドが蒔風に命中した
それによりダメージはない

だが、蒔風の体に入り込んできたロッドがエネルギーと変わって蒔風の眼前に亀甲状のバリアのようなものが現れ、蒔風の動きを封じたそこにデンライダーキックを放つ電王

だが、蒔風の足は移動はできなくともその場で動くことができた

それが電王のミスだろう

キックの瞬間、蒔風が畳返しで地面を撥ね起こす

電王は想定していたよりも早い場所でのキックで多少バランスを崩したが、それでもその壁を粉々に吹き飛ばした

だが、その先の蒔風にキックが命中していない
キックの勢いでその場にしゃがみこんだ電王

『ウラタロス、横だ！』

電王の体の中で、良太郎の意識が叫んだ
しかしそれも遅く、電王の横っ面に蒔風の拳がぶち当たった

飛んでいく電王

その体に紫の影が飛び込んで行った

《gun foam》

空中の身体から放り出されたウラタロスが地面に落ちる

電王は装甲の前方が上部に展開し、紫を基調としたガンフォームに変わる

「うわあああ！！！！」

「へへっ、次は僕だね！お前、倒すけどいいよね？答えは聞いてないー！」

「人の話はちゃんと聞くように、だ！！」

ドンドンドンドンドンドンドン！！！！

電王が蒔風を狙い撃ち、それを蒔風が蛇のように地面を走りかわしていく

その低い体勢の蒔風に、電王がブレイクダンスの要領での地面すれすれの回転蹴りをかます

蒔風もそれに対して蹴りで応対し、カポエイラのように回り出す

しかし、電王はそれに織り交せてさらにデンガッシャーガンモードによる銃撃をも放ってくる

ガン⇨カタのようなその攻撃に、蒔風がすべてを知ったりとかわし、

受けているのに対して電王がいきり立つ

「もう！ー！倒されてよ！ー！」

ドンドンドンドンドン！ー！ー！

二人が立ちあがってから、一回転して電王が時風に銃撃を放つ

それを「林」で軽くはじいていく時風

「ふつとんじゃえ！ー！」

《Full Charge》

ベルトの前をパスが通り、エネルギーが銃の前方に集まり、エネルギー弾を作っていく

「いつくよ！ー！」

電王がグッ、と引き金を引こうとする

しかし、それよりも早く、時風が動いた

ピン……

コインが一枚弾かれる

そしてそのコインが、電磁の力で音速の三倍でぶっ飛んでいく!!!

ジュゴン!!!

ドゴオ!!!!!!

「うわア!!!」

電王の前にできていたエネルギー弾に超電磁砲レールガンが命中し、大爆発を起こし電王を吹き飛ばす

地面を転がり、変身の解ける電王

「良太郎!!!」

「大丈夫!?!」

「平気か!?!良太郎!!!」

「う~~~~負けんの嫌だあ!!!」

みなが分離したりユウタロスと良太郎のそばに駆け寄る

「うん。怪我はないみたい」

「爆発とかしてたけど・・・」

ハナが心配そうに訊くが、問題ないよと良太郎が返す

当然である

蒔風がこう言う戦いをするときの爆発なんかは演出程度のもので、ダメージは通らないのだから

「でも僕は「やられたー」って思ったよ？」

「どづいづことなんだろうね？」

「それが世界最強さ。で、最後のクライマックスを閉めんのは誰だ！？」

蒔風の声にモモタロスがついに立ちあがる

「ほら小僧、次は俺だ

やっぱりクライマックスは俺だよなあ、良太郎！！」

「うん！！」

そう言って再び憑依したモモタロス

「変身！！」

《s w o r d f o a m》

フィン、ガッシュ！！

変身し、自身を指さし、ビシィ!!!と最高のポーズを決める電王

「俺、ついに参上!!!さあて、オレには特に前振りはねえんだ

《Full Charge》

最初から最後までクライマックスだぜ!!!」

電王がデンガツシャーソードフォームを両手でつかんで前に構える
エネルギーがベルトからソードに送り込まれ、その刃が切り離され、
柄の延長線上に離脱して浮き上がった

「俺の必殺技、始まりのパート1。ウおおりゃあ!!!」

電王がその手の柄を振るう

するとそれに連動して、切り離された刃が蒔風に迫ってきた!!!

その右から来た刃を蒔風が「火」の抜刀で弾く

しかし、さらなる攻撃が左から折り返してやってくる

それを頭を下げてかわす蒔風

そのまま仰向けに回転し、玄武盾を投げつける

電王が最後に真上から振り下ろそうとしたところで玄武盾が装甲に
当たり、火花を散らす

だが振り下ろされた刃も、止まらない

時風がとつさに腕を十字にクロスし、鞘に収まったままの「天」「陰」で受けた

そして電王が倒れるのと、「天」「陰」の鞘が砕ける音が同時に響いた

時風が剣を消し、倒れて変身の解けた良太郎からモモタロスが飛び出す

そして両者が同時に走り出し、お互いにしたことといえば

ゴガアン！！

二人とも相手の後頭部を掴んでからの頭突きだった

「俺の方が勝ってたね！！」

「何言ってるんだ俺の方が強えに決まってるだろ！」

「「んだとこらあ！！」「」

ゴスっ！！

再び今度はお互いに相手の鳩尾を殴った

だが互いにひるまず、今度は交互に肩を突きとばし始めた

ドン！

「って！なんだよ（バシッ！）」

「おまえもなんだよ（バシッ！）」

「なんだ？（ドシッ！）」

「やんのか？（ガスッ！）」

「「上等だコラア！！！！」」

そう言っつてモモタロスと蒔風が取っ組み合いを始めてしまっ

皆止めようとするが、一向に止まらない

と、そこにデンライナー最強の少女が割って入った

「あんたたちはいい加減にしなさい！！」

そう言っつてモモタロスの鳩尾に拳をめり込ませるハナ

さらに取っつ返してすぐさま蒔風にも喰らわせようとするが、蒔風はそれを掌でパシィ！と受け止める

だが受け止めない方がよかった

その後刹那の瞬間もなくハナの蹴りが蒔風の足と足の間に存在する男子特有の急所に命中したからだ

「「「「「おお~~~~~う!!!」」」」」

それを見ていた男性陣（オーナー含む）が悲痛な叫びをあげた

そんなんで電王VS蒔風のバトルの勝者はハナに決定したのであった
.....あれ？

その時、ナオミが電車の中から出てきて、みんなを呼んだ

「みなさ〜ん、オーナーが大変なことになってるかもって、呼んで
ますよう？」

「なにがあつたの？」

良太郎がナオミに訊く

するとナオミの後ろからオーナーが出てきて言った

「ゼロライナーとの連絡が取れません。もおしかしたら！なにか、
大変なことになっているかもしれない」

オーナーがとても含みのある声を出して皆に言った

それを聞いて、全員が乗り込んだ

連絡がつかずとも、居場所はわかるらしい

向かう先はゼロライナー

そこで待つものとは

t o b e c o n t i n u e d

電王 く電王四変化く（後書き）

アリス「さて、昨日休んだ言い訳を言ってみなさい」

疲れた

ア「執行!!!」

なにを！？怖いから何か言っよー!!

ア「拷問執行!!!」

しゃべったのに!?

いえ、今回とある御縁で保育園の園児達のプールの付き添いに行っ
たんですよ

保育園の先生たちと一緒に皆の監督役としてですね

ア「で？」

あいつらの体力パねえ・・・

そんなフラフラ状態状態からバイト行っってから更新なんて無理

昨日はまた今日があったから夜ふかしてできないし

ア「どれくらいですか？」

九時に集合、十時から一時間プール、遊び終わって保育園に11時
到着

ですね

ア「バイトは？」

午後二時から九時

ア「確かにきついかも・・・」

まあいいさ

あ、あとゼロライナーの説明を

ゼロライナーはデンライナーのように時間を越える列車です

良太郎たち共に戦った仲間が所有しています

ア「その人の説明は？」

そりゃ次回だ

ア「次回、仲間の居る場所では！？」

ではまた~~~~

俺の強さにお前が泣いた！！俺の強さは、泣けるでえ〜！！

電王 ～劇場版の悪者ライター～（前書き）

double-actionとかたれ流しにしながら書きました）
笑）

聞きながら読めば興奮度UP!?

電王 ～劇場版の悪者ライダー～

デンライナーがゼロライナーに向かう途中で時風が説明を受けた

ゼロライナーはデンライナーと同じく時間の中を走る列車だ

それと連絡が取れないとなれば、その所有者、桜井侑斗^{ゆうと}の行方が心配だ

桜井侑斗

仮面ライダーゼロノスとして良太郎と共にイマジン達と戦った青年だ

「で、その桜井と連絡が？」

「うん、侑斗ともデネブとも連絡が取れないんだ」

デネブは侑斗の契約イマジンだ

彼からも連絡がないのはおかしい

「とにかく行こう。みんな！身体は大丈夫？」

「大丈夫だよ良太郎。派手だったけど、ダメージはそんなになかったし」

「やっぱ強かったで！うん！」

「じじは・・・」

「わからない。どこかの建設予定地の小屋みたいだ。あいつら、何者なんだ？」

「知らない。だが、どうやら野上をおびき寄せるともりらしいな」

「な、なんだって！？それは一大事やないか！」

「ああ、だからデネブ、なにか持ってないか？ここから脱出する」

「おう！えーつと・・・（ゴソゴソ）あ！」

「なにがあつた！」

「デネブキャンディが溶けてきてるう」

「バカ！それよりもなんかないのか！」

「そうだなあ・・・お！」

「見つけたか！？」

「侑斗の写真が折れてるう！」

「デ〜ネ〜ブ〜！！！」

グワシ！

侑斗がデネブの腹に両足をたたき付けた

「痛い、痛いよ侑斗」

「うつさい！今日こそはー！！」

「おまえらなに騒いでんだ？」

そこに「奴」が扉を開けて入ってきた

身体を縛られながら取っ組み合うという荒業をしていた二人が、「奴」を睨みつける

「お前どついつつもりだ！それに「あいつら」をどつやって出した
」！」

「あん？気にすんなよ。こっちこい」

「奴」が優斗とデネブを引きずり出していく
ちよつど外に出たところで、頭上に線路が走る

時空の穴から伸びてきたそれに、デンライナーが走る

「奴」と優斗達の前に、電車が止まり、蒔風らが降りてきた

「おい！！そいつをどうにか返してもらおうぞ！！」

「野上！！こいつ誰だ！！」

そう叫んだ蒔風の事を知らない侑斗も叫んだ

「あいつは俺の敵です。では、ご協力どうも！！」

「奴」が侑斗とデネブを放り投げる

良太郎達が駆けよって、ロープをほどいて開放する

「大丈夫か？怪我は？」

「お前誰だよ！！」

そこにハナが仲介し、侑斗に事情を説明する

「そんなことがあんのかよ」

「現に目の前に「奴」がいるんだよ？信じてくらはいよ」

「ま、俺としてはそうじゃないほうが楽なんだがな」

「奴」と蒔風が話してるあいだに、モモタロスが割って入った

「おいおいおいおい！！俺たちを無視してんじゃねえよ！主役は俺だ！！いくぜ！良太郎！！」

「うん！変身！！」

《sword foam》

「こつちも行くぞ！！変身！！」

ゼロノスベルトを巻き、切符が他のカード・ゼロノスカードを挿入する

《Altair foam》

そうして、仮面ライダーゼロノスへと変身した

電王、ゼロノス、蒔風

ここに三人の戦士が並び立つ

「俺、今度こそ最初に参上！！」

「最初に言っておく！俺はカーナーリ、キレてる！！」

「あー、えっと・・・がんばるぞー、おーー」

三人が見事な（？）見えを切ったのを見、「奴」がパン！！と両手をたたいた

「いいねえ・・・かつこいいよ仮面ライダー・・・じゃあ・・・こいつらにも参戦してもらおうか！！」

ズウア！！

地面から黒い塊が出て、それが三つに分かれる

「野上！！来るぞ！！」

『え？何が？』

良太郎が電王の中から話した

「「奴」はその地に刻まれた「記憶」を呼び出す。おそらく、そうとう飛びまわったな」

「ああ、勝手にゼロライナー使われた」

「それから俺と侑斗はずっとあそこに閉じ込められていたんだ」

後ろに並ぶデネブが状況を教えてくれた

「そう言ってるあいだにほれ、お目見えだぞ？」

ギユウウウ……

三つの黒塊が人型となっていく

そしてそこに現れたのは……

「お前ら、喰い殺してやろうか」

「絶対の悪つてのは、滅びないもんだ」

「生きてる人間は、皆死ね！！」

「なんだありゃあ！！」

「うそでしょ！？あいつらは前に倒したはずでしょー！？」

「なんちゅうやっちゃ」

モモタロス、ウラタロス、キンタロスがそれぞれ驚く

そう、彼らは

「牙王がおうにネガ電王、それと幽汽ゆうきか」

仮面ライダー、牙王、ネガ電王、幽汽だった

彼らはかつて電王らに倒され、死んだはずのライダーだ

「見たところ、ある程度の個性は残されているみたいだな。気をつける」

「は！！一度勝ったやつに負けるかよ！！」

「……………」

意気込む電王だが、ゼロノスはいまだに緊張が解けない

『どうしたの？侑斗』

良太郎の問いに、侑斗が答える

「あいつらの強さは半端じゃない・・・本当に気をつけるよ。

一度勝ったからって、勝てるとは限らない」

「その通り。では、行けえ！！！」

オオオオオオオオオオオオ！！！！

「奴」の号令に、三人が亡者の叫びをあげて時風たち突っ込んで

きた

「行くぜ行くぜ行くぜ！！！！！！」

それに合わせ、こちらの三人も駆けだす
牙王と蒔風、ネガ電王とゼロノス、幽汽と電王が交戦する

ネガ電王VSゼロノス

「この！！電王と同じ姿だと！？」

ガキイ！！

ゼロノスのゼロガツシャーサーベルモードと、ネガ電王のネガデン
ガツシャーソードモードがぶつかる
だが、電王と同じ姿にもかかわらず、その力はゼロノスをしのいで
いた

「姿は同じでも、強さは、別格だ！！！！」

バガア！！

弾かれるゼロノスの剣

腕ごと吹き飛ばされそうな衝撃を受けながらも、ゼロノスはサーベルを離さなかった

その吹き飛ばされた腕に引っ張られるように離れていくゼロノス

「侑斗!!」

デネブがその指から銃撃を放ち、ゼロノスを援護する

その銃撃をロッドモードに切り替えたネガデンガッシャーを振るって弾くネガ電王

「侑斗! やっぱり身体がまだ回復しきってない!! 無茶だ!!」

「うるさい!! 野上にこいつを向かわせるわけにはいかないだろ!!」

ゼロガッシャーをボウガンモードに変え、ネガ電王を狙い撃つゼロノス

だが、クルクルと回転するネガ電王には当たらない

「クソ!!」

「侑斗!! もう駄目だ!! オレがやる!!」

「よし! 来い、デネブ!!」

少し戻って、幽汽VS電王

「いて！！いてっ！！この野郎！！チマチマした攻撃してんじゃねえ！！！」

ズガガガガガガ！！

「うをおおお！！！」

電王は早くも幽汽に苦戦していた

というのも、幽汽とモモタロスの相性によるものだ

幽汽は鞭を使って独楽こまを弾いて攻撃してくる

宙に投げた二、三個の独楽に鞭をあてる

するとその独楽が二十、三十の独楽になって電王に降り注ぐのだ
モモタロスはチマチマした、とは言いがそんなちやちなものではない
切ない

そういつた豪快な攻撃に、チマチマした対処をとるのには、ソード
フォームは相性が悪いのだ

徐々に追い詰められる電王
無理もない

その幽汽の独楽はそれまで無敗であった電王の「クライマックスフ
ォーム」を強制解除させたほどのものだ

ソードフォームでまともに食らえばひとたまりもない

そこにキンタロスが憑依体で近づいてきた

「モモの字、なら俺に交代やー!!」

「ちっ!!しゃーねえな!!」

《ax foam》

モモタロスは憑依体のまま出て、キンタロスが入る

電王がアックスフォームへとチェンジした

「俺の強さに、（ガガガガガガ!!ギギギン!!）って言うてる場合やないな!!おらあ!!」

電王が無理やり幽汽に突っ込み、斧の一閃を叩きこむ

幽汽の装甲から火花が散り、後退させる

「はっはっは!!行くでえ!!!」

電王が思いつきり突進し、ぶちかまして幽汽に向かって突っ込んだ

だが、待ってたとばかりに幽汽が鞭をその脚に巻きつける

「おおっう!!?」

電王がその勢いのままスツ転びそうになる

それをハンマー投げのようにブン回して、投げつける幽汽

投げつけた先にいるのは、ネガ電王と交戦中のゼロノスベガフォー

ムだ

ゴガッシャ！！！！

「うお！！！」

「なんだ！？」

ゼロノスと電王がぶつかり、その場に倒れ込む

《Full Charge》

《Full Charge》

「あ、やばいやん」

「むおおお！？」

地面に倒れる二人に、ネガ電王、幽汽のフルチャージが放たれようとする

ネガ電王は電王ガンフォームと同じ形態の必殺技、「ネガワイルドシヨット」を

幽汽は剣を地面に叩きつけ、地表を砕きながら突き進む衝撃波を放つ「ターミネイトフラッシュ」を

それぞれが必殺技を放つ構えになる

そうして、引き金が引かれ、剣が振り下ろされ……

その勢いのまま、右の掌底でその顎をしたからアッパーで打ち上げ、回転し、左の肘打ちを鳩尾にめり込ませる

牙王の身体が後退し、後ずさっていく

だが牙王は一瞬の間をあげ、その直後に蒔風に向かって刃を振るって目の前に立っていた

「な!?!」

その速さに驚愕する蒔風

(あれだけの装甲、パワーを持って、さらにこのスピードだと!?!)

巨大な鋸が眼前に迫り、蒔風が「天地陰陽」でそれを防ぐ
だが勢いが殺しきれぬわけがない

天地陰陽はトンファー型で、小手先の力で戦うものだ

とっさに出せるが、これだけの衝撃を受けきれない!!

それでも、蒔風は両腕が吹き飛ぶのを防ぐため、天地陰陽で真っ正面から受け止めた

そのために蒔風の身体が、体勢そのままに牙王に押し切られていく

「ぬっっっっっ!!!!」

「おおおおおお!!!!」

ズガガガガガガ!!!!

地面を少しだけ削り、足の裏から砂煙をあげて地面を滑っていく時風と、それを押しつぶそうと押し切る牙王

時風がチラリと横を見ると、電王とゼロノスに止めを刺そうとネガ電王と幽汽が構えているではないか

「ッ！！！！？？？さ、せ、る、かあ！！！！」

ズドン！！

時風が左足を地面に突き刺し、その脚を軸に回転する

さらに牙王の肩の装甲を鷲掴み、回転の凄まじい勢いのまま、牙王を投げた

時風の手のひらが少し裂け血が少し出るが、あれに比べればたいしたものではない

「ぐお！！！」

「ん？ドウオ！！！！！」

「ウゴオ！！！！！」

弾丸のようにすっ飛んできた牙王が、ネガ電王と幽汽をかつさらっていった

必殺技がキャンセルされ、三人のライダーが離れたところで倒れる

「大丈夫か!!!」

蒔風が二人に駆けよっていく

「あ、ああ。信じられへん。独楽回しされてしもた」

「こつちもだあそこまで強いとは、驚いたぞ!!!」

「まあ、でももうやったし」

ヒイ、ヒュイツ!!!

そう三人が言いあっているところに、突如として砲撃が撃ち込まれる

ドゴオオオオオオオオ!!!

「ぐあ!!!」

「又ア!!!」

「うおお!!!」

三人が吹き飛ばされ、二人の変身が解かれる

離れたところに良太郎のベルトとパスが落ちる
それを取るうとする「奴」

時風の脳裏に、前の世界での戦闘が思い出される

「まずい！……！」

時風がベルトを取ろうと走る

良太郎たちイマジンも走り出した

そこで「奴」が走るのをやめる

そして、指をパチン、とならした

するとゼロライナーが走って来て、良太郎達をかつさらっていったのだ

さらにそのままデンライナーと連結し、そっちをも引っ張って、時間の中に消えて行ってしまった

ベルトとパスを拾う時風

そして「奴」の方へと向いた

「何のつもりだ。向こうにはオーナーさんがいるんだぞ？」

「ああ。すぐに止まんだらうな。でも、その「すぐ」だけの時間で十分だ」

「奴」の隣に、先ほどの三ライダーが並ぶ

その三人が、一斉に時風に襲いかかってきた

.....

ギギッ！！ギギギギギギイイイイイイ.....

プシュウ.....

時間の荒野の中で、デンライナーとゼロライナーが止まる
オーナーによってゼロライナーが止められたのだ

実に暴走を始めてから一分もかからなかった

「早く戻んぞ！！おい！行けるか！？」

「いつでもどおぞ」

「全速で行くから、掴まれ！！」

モモタロスの問いに、オーナーが電車の状況から問題がないことを
確認し、ゼロノスがゼロライナーを運転してデンライナーを引っ張る

なんとこの電車、コックピットにはバイクが一台あるだけだ

そのバイクで電車を操縦するのだから、さすがはライダー、といっ
たところか

そのバイクにライダーパスを入れない限り、デンライナーやゼロラ

リュウタロスが青ざめるような声を出して皆を呼ぶ
窓から外を覗くと、結界の中がよく見えた

リュウタロスが指差す先には何人かの人影が

それは紛れもなく「奴」らと蒔風だ

その蒔風の服はボロボロに裂け、上半身に巻き付けられた包帯から
血が滲みでて真っ赤に染め上げていた
なぜか腰にはベルトが巻きつけられ、その手にはパスを持っていた

その蒔風の身体を「奴」が胸ぐらを掴んで放り投げた

「蒔風さん!!」

「蒔風!!」

「あいつ!!なんだよあの怪我は!!」

「死んじゃうの?あいつ!?!」

皆が驚愕の声を出す

そして蒔風が高く放り投げられた先に時間の穴が開く
おそらく奴が強引に開けたのだろう
そこに蒔風が吸い込まれて消えた

その瞬間に結界が消え、電車が入り込み、良太郎達が降りた

「時風さんをどこに飛ばした……!!」

怒れる良太郎に「奴」がニマニマと笑いながら答えた

「さあな。オレも強引に開けちまったから、どこ行ったかわかんね。
H A H A ! !」

「ふざけないでよ!!」

「ふざけてなどいない」

「奴」の雰囲気が一瞬で変わる
場の空気が冷たくなった気がした

「さて、邪魔ものは消えた」

「奴」が良太郎に歩を進める

「お前を殺して、パワーアップして時風^{あいつ}を殺してやるのかな」

「奴」が迫る

一歩一歩、巨大な脅威が迫ってきた

.....

- - - - -

「む？ついにこの時が来たようだぞ、友よ」

『おう、俺たちの出番だな』

「では参ろうか！華麗に美しく！！」

t o b e c o n t i n u e d

電王 〱劇場版の悪者ライダー〱（後書き）

戦闘描写はいい

だがライダーの外見とか武器の説明が大変だよ!!!

アリス「そうでしょうねえ・・・ああ言った武器はそれなりに複雑ですから」

だからここでまた俺は言いたい!!!

ア「まさかまたですか!?!」

ググレカス（笑）

ア「この野郎ついにカス扱いしやがった!?!?!」

すみません

一回行って見たかった

皆さん巻きこんで申し訳ございません

ア「感想で叩かれてしまえ」

やめて!!!

ア「次回、降臨!!!」

ではまた次回

お前、倒すけどいいよね？答えは聞いてない！！

三メートルはノーバウンドで吹っ飛び、そこからさらに地面を転がった。

前の世界での傷が少し開き、服の中に血がたまっていく。

その時風に追い打ちをかけようと三人が迫る

ここまでで約三十秒

(荷物があるんじゃないでしょうもねえ……)

時風が苦痛に顔を歪ませる

迫る三ライダーに目を向け、そして一つの考えに至った

「あ……着けちまえばいいじゃねえか!!」

時風がベルトを装着する

だがその動作の際にもまず幽汽が迫ってくる

時風の顔面に拳を突き出す幽汽

その拳を時風があいた左手で受け止め絡み付け、脇に挟み拘束する

その間に牙王が正面から突っ込んでくる

それに対し、右手を腕を大きく下から振り上げての左のケンカキックでカウンター気味に蹴り飛ばす

その振り上げた手にはパスが

そしてその過程でベルトの前を通過する

ベルトが輝き、音声を発する

《p l a t i n u m f o a 》

ゴウンゴウンゴウン、ヴァアアア……

ゴッゴンー！

全身が銀と白の装甲に包まれ、周囲に衝撃を発しながら装着される
そして仮面には剣が降りてきて、変形した物が装着される
その形は「」の先が目の部分にあたるような形だ

挟み込んでいた幽汽を蹴り飛ばし、さらに突っ込んできたネガ電王
を拳で殴り飛ばした

その変身に、時風も「奴」も驚く

「装着者のフリーエネルギーを元に変身する「デンオウベルト」・・・
・お前も変身できるのはおかしくないが・・・」

「まさかオレさんも特異点だったとは・・・いや、他の世界の人間だからか？それとも翼人が？」

二人が一瞬思考するが、すぐにその考えを捨てる
いま重要なのは、目の前の男との戦いだけだ

見栄さる蒔風に、「奴」の咆哮が呼応する

「唯一オンリーワンにして世界最強ナンバーワン、ここに参上！！」

「潰せ！！」

《Full Charge》《Full Charge》《Full Charge》《Full Charge》
I Charge

三ライダーが一斉にフルチャージする

蒔風が見て左からネガ電王、幽汽、牙王と並んでこちらに向く

「まあ・・・こう言うのもたまにはありか！？」

《Full Charge》

蒔風もデンガツシャーを拳に握りこむ「メリケンサックモード」に組み立て、右手に握り、フルチャージする。左手を前に突き出し、右手を後ろに引く。

「行く・・・ぞ!!!」

「「「おおおおあああ!!!」」」

三人が必殺技を放つ

ネガ電王と牙王のソードが分離、エネルギーに輝き左右から振り下るされ、幽汽のソードにエネルギーがたまり、地面に叩きつけられた。

蒔風の正面から地面を砕きながら衝撃が、左右から挟み込む形でソードが迫る
その三つの攻撃が蒔風に直撃するコースで、一寸の狂いもなく襲ってくる

そしてそれが射程圏内に入り込んできたとき、蒔風の拳が突き出された!!!

ギュゴアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!
バギャギャン!!!バァン!!!

「「「おおおおおおあああああああ！！」「」

ズゴゴゴゴゴンッ！！！！！！

ドゴォー！！

巨大な拳の形をしたエネルギーがソード二本と衝撃波を吹き飛ばして、三ライダーをぶっ飛ばした

ここまでで一分三十秒

「さすがに三つに分かれちゃ……倒せないか……っ、もういちよー！！」

《Full Charge》

身体を少し俯かせながらも時風がもう一度フルチャージする

だが

バッキャー！ゴシヤアー！！！！！！

「……………あ？」

「いかな…それはいかなよ、蒔風」

蒔風が自分の胸に突き刺さるモノを見る

それは拳だった

一瞬の時間で懐に飛び込んできた「奴」の拳が銀白の装甲を砕き、
中の蒔風の肉体に深刻なダメージを与えていた

「……………ごぼツ……………」

蒔風の変身が解除され、身体が崩れる

その胸ぐらを「奴」が掴んで蒔風を持ち上げる

その服はズタボロに裂け、包帯から血が滲みきってぼたぼたと零れ
落ちていた

そこでデンライナーが走ってくる

しかし「奴」が結界を張り、デンライナーが入り込んでこないよう
にしてしまう

その「奴」の背後に吹き飛ばされ、それでもしぶとく存在している
三ライダーが集まってきた

「今なら開けるか、なツ？」

「奴」が蒔風を上空に放り投げる

そしてそこにある何かをこじ開けるような動きをとる

すると時風の飛んで行った先に時間の穴があき、時風が吸い込まれる

「さて……どこにいったのかなあ……はっはっはっは！」

そうして結界を解き、デンライナーを入れる

時間の中に人を放り出すという行為に激昂する良太郎に、軽く返答する「奴」

「奴」にしてみればどんなに酷いことをしたところで、「自分」なのだからいいじゃねえか、といった感じなのだ

「お前を殺して、パワーアップして時風あいつを殺してやろうかな」

「奴」が歩み寄る

良太郎が後ずさり、その前にゼロノスが立ちふさがる
だが、ゼロノスもその場から下がっていつている

勝てない

この思いが心を支配する

カテナイ

そう思ったことはいくらでもあった
だがそれだけで戦えなくなるなんてことはなかった

この男は違う

この男には、勝てない

もし勝てるのならば

この男自身が自分の味方でなければ、成り立たない……！！

「奴」がゼロノスに歩みながら「魔導八天」を出し、火花をチリチリと出しながら引きずってくる

地面と剣のの甲高い音が響く

そしてその手が振るわれ、ゼロノスが身を固め思わず顔を逸らした

《Full Charge》

「なに！？ぐお！？」

しかしてその刃は振り下ろされることなく、白き力をまとった二つの刃が「奴」を撃ち払った

その場にいる全員が何が起きたかと周囲を見渡す

そんな中八ナと良太郎だけは誰が来たのか想像はついていた

さらに無数の羽根が三ライダーに降り注ぎ、その全身から火花を散らして退ける

そしてついにその人物が現れた

「降臨！！満を持して！！」

「「ジーク！！」」

「鳥さんだ！！」

「この手羽野郎！！なんでてめえが変身してんだ！！」

そこに現れたのは電王ウイングフォームだった

ジークという白いイマジンの変身する電王である

その手には先ほど「奴」に投げつけられた「ハンドアクセスモード」

と「ブーメランモード」に組み立てられたデンガツシャーが握られていた

電王が後ろに手を組んでゆったりと歩いてきた

「おや、お供その一。いやなに、わが友と共にお前たちのピンチに華麗に駆け付けたのだ」

「友って・・・まさかー!!」

良太郎がある男を思い描いた

「では、わが友を紹介しよう!といってもお前たちは知ってるだろうがな」

そう言って電王がベルトをはずし、ジークが離れる
そこにいたのは

「やっぱり・・・蒔風さん!!--!!」

「おっ!長かったぞ〜」ここまで!!--!!」

そう、蒔風だ

だがボロボロだった身体はきれいさっぱり完治していた

「なんで……お前は時間の中に放り込んでやったはずだ！！……まさか……」

「おう、その通りだよ」

「奴」が何かに思い当たり、蒔風が答え合わせをする

「まあ、完全に運だったがな。とばされた先が過去で助かったぜ！！」

「貴様……一体どれだけの時間を……」

「ざっと10か月くらいかな？まあ気にすんな。肉体面は老けないんだしさ」

さらりと言う蒔風だが、良太郎は驚愕した

その時間に自分たちに彼は接触しなかったのは今のこの状況を崩さないためだろう

つまりはそれだけの時間、彼は一人で耐え忍んでいたということ……！！

「まあ、途中でジークにもあえたし、それなりに楽しかったぜ？」

「うむ。私と同じく美しい翼を持つ者だ。一緒にいて楽しかったしな。特別に友にしてやったのだ」

「な？こいつ面白いだろ？」

10か月

それだけの時間が過ぎてても変わらない蒔風
いや、変わらないのではない
変わらなかったのだ

自分の変化を押しとどめ、時間を過ごすと言うことは並大抵のこと
ではない
時間が経てば人は代わる

ではそれを変わらないようにすることもできるこの男は本当に人間
なのか？

「この・・・異端者め！！・・・」

「奴」の叫ぶに蒔風がにやりと笑って大きく胸を張って叫んだ

「はん！！残念ながら「蒔風舜」のブランドは、異端に異常、とち
狂いものの代名詞なんだよ！！」

「ぶつ潰す！！せつかくブン投げたのに、これじゃあ意味ねえじゃ
ねえかよお！！」

「へ！なんでか俺って、最初の一回はとんでもなくいいもん引き当てんだよな。ほれ、良太郎！！」

蒔風が良太郎にベルトを渡す

「いくぜ・・・皆で一緒にだ！！！」

良太郎がその手のベルトを見る

10か月経ったとは思えないほどに綺麗なそのベルト

きつと彼はこのベルトを大切に保管し、綺麗にしてくれていたのだらう

「どっした？」

蒔風が普通に聞いてきた

その声には一片の曇りもない

「・・・うん！！みんな、行くよ！！！」

良太郎に皆が続く

「よっしやあ！！！」

「いくよー！」

「いつでもいいでー！！！」

「てんこ盛り！！！」

「ではわたしも」

《climax foam》

ヴォオン！！ガシュウ、ガシュウ、ガシュウ！！！！
ゴオオオンン、ガッ、バガア！！

胸に両肩に背中に、各イマジンを表すパーツが取りつき、電仮面が一段階ずれ、仮面ライダー電王・超^{スーパー}クライマックスフォームへとなる

その身にあるのは皆の想い

その手に握るは皆の力！！

クライマックスフォームを越えた電王、最強フォーム

これまでの変身回数はただの一度のみにもかかわらず、「無敵無敗」と言っに十分すぎる圧倒感！！！！

「俺たちも行くぞ！！！」

ゼロノスが言ったん変身を解き、新たなカードを挿入する！

《charge and up》

ゼロノスが新たな赤いカードを挿入し、ゼロノスゼロフォームへと変身した

「「「がああああああ！！！！」」」

「奴」をも含め計七人の戦士が同時に駆けだした

ネガ電王とゼロノスが激突し、幽汽と電王がぶつかり合い、牙王と「奴」が時風に襲いかかる

ネガ電王がゼロノスに回り蹴りを放つが、それを肩腕で軽く抑え込むゼロノスそして脇に挟み、捕らえた

その腹部にデネビツクバスターの銃口を押し当てる
片足を引き抜こうと奮闘するネガ電王だが、一ミリたりとも動じない

《Full Charge》

「！？くおおおおおおお！！！！」

ネガ電王の目の前でゼロノスがフルチャージする

ネガ電王はゼロノスを幾度も殴りつけるが、全く微動だにしない！！！！

幽汽も独楽を投げつけ応戦するが、全く効かない
なぜなら

『ちよ、先輩痛いって!』

『コツチ当たつとるがな!』

『イタツ!モモタロスのバカ!』

『背中なので問題ない』

当たった個所で他のイメージが身代わりになってるからだ!!

「ぜえ〜んぜん痛くねえ。はははははは!」

『もう、モモタロス。終わらせるよ』

「おう!!よかつたな。今日は珍しく前座があつたんだ。終わりは
派手に決めるぜえ!」

《charge and up》

「はああ!」

電王が大きく跳躍し、背中の翼を大きく広げる!!

「だああありゃああ!」

その落下と羽ばたきの二重の威力を携えた「超ポイスターキック」
が幽汽の装甲に突き刺さり、粉々に碎き飛ばした

ドッ、ズツゴゴン!!!!

ドバアアアアア!!!!!!

「へへっ、こんなもんかな」

そして蒔風

こちらは「奴」と牙王の二人を相手にしている

「牙王とお前か・・・オレの新技、見ておけよ!!!!」

「なに!?!」

蒔風が十五天帝を電王ばりに放り投げ、「奴」に向かって何かを投げつけた

そしてそれが異常なスピードで、

・・・

成長した

「なんだこれは！！！！」

焦りを隠せない「奴」に、蒔風が言った

「10か月もの時間、俺がただのほほんと暮らしてると思ったか！？」

「思ってた！！」

「否定できないのが悲しいが、今回はそうじゃなかったのさ！！」

投げつけたのはドングリの種

その種が異常成長を始める

その気に幹はまたたく間に「奴」と牙王をその中に飲み込み、押しつぶしていく

「圧水と雷旺を組み合わせ、それによって植物を異常成長させて攻撃する、その名も「植生」！！」

ギョカツ！！！！

蒔風が拳を握りしめ、内部の牙王と「奴」を押しつぶす

幹が一瞬光って、真ん中から爆散した

一瞬だけ牙王の装甲がボロボロと現れ、そして消えていった

「おわらねえ・・・終われねえよ！！そんなセンスねえまんま名前前の技じゃアよ！！！」

「奴」がその中から這い出てきた

右足に左腕、そしてアバラが何本か折れているようだ

そこに電王、ゼロノスが集結する

「終わらせるぜ！！行くぜえ、蒔風！！！」

「おつよ！！てめえら、呼吸合わせるよ！？？」

「わかってらあ！！決めるぜ！！！」

【KAMEN RIDER DEN-O】- WORLD LINK
- WEAPON-！！

十五天帝のすべてがバラけて電王のデンガッシャーとリンクする

電王の周囲に全剣が浮遊する！

「これは俺たちの分」

《Full Charge》

『そしてこれが侑斗の分』

《Full Charge》

『「そしてこれが蒔風の分！」「！』

《Full Charge》

バチっ・・・バチバチバチ！！！！

「三回まとめてフルチャージだ・・・行くぜ・・・俺たちの必殺技
！！！！！！」

【KAMEN RIDER DEN-O】- WORLD LINK
- {FINAL ATTACK}!!

デンガツシャーの先端の刃が離脱し、それが「奴」に振るわれると、同時に十五本の剣がその後を追って襲いかかる!!!

斬撃の暴風に「奴」が幾度もなく巻き込まれる
右から、左からの斬撃、計三十二回

そして最後の振り下ろし!!

十六本の刃がすべて「奴」に降り注ぐ!!!!

「WORLD LINKバージョン!!!!!!」

「ああああああああああ!!!!!!」

ズガッ!!!!ドゴオオオオオオ!!!!!!

凄まじい爆発で、「奴」が粉々に消え去る

十五天帝が時風の鞘に収まり、皆が変身を解く

「みんな、帰ろう!!」

「」「」おおう!!」「」

.....

デンライナー内

モモタロスたちがパーティーを開いている

「お前ら見たかよ。俺のこっぴい必殺技を!!」

「あれ、何かというと時風のおかげでしょ?」

「うるせえ!!俺がやったんだから俺の必殺技だ!!」

「あれだって僕たちを身代わりにしたからじゃんか!!モモタロスのバカ!!」

「あれは痛かったで!!今ここで恨みはらしてやるか!!」

「もう、皆やめなよ!!」

「まったたく・・・あなたたちは・・・」

騒ぐタロウズに良太郎とハナがあきれる

「は〜い。今回は蒔風さんからの差し入れですよ〜」

「また荷物に紛れ込んでいたものだ。なんでも一つだけ外れが入ってるらしい・・・」

蒔風がとりだしたのはすでに中身を移した缶だ

ラベルには「不思議飲料水缶ジューズシリーズ」と書かれている例のシヤ 先生監修料理教室監修のモノだ

モモ、ウラ、キン、リュウ、良太郎がそれを飲んでみようとした

「いいかてめえら、はずれの奴がなんでも言うこと聞くんだからな」

「ちよつと待ちいモモの字。それじゃ良太郎が不利やないか」

「そうだよ先輩。良太郎は歩けば転び、止まれば何か飛んでくるんだから」

「何にも考えてないの？バカなの？」

「あああん！？だったらどうすりゃいいってんだよ！！」

「じゃあ蒔風入れちゃおうよ」

「お？それはいい考えだ小僧。 蒔風！お前これだ！！」

そう言つてモモタロスが蒔風にカップを差し出してくる

「ふ・・・俺の最初の一回の運の良さをなめるなよ？（まあハズレがあるなら大丈夫だな。 当たらなければな）」

「いくぜえ・・・」

「「「「「セーのっ！！（ゴクッ！！）」「「「「」

「ぶはあああああ！！！！！！（エクトプラズム放出）」

「「「「蒔風ええええええええ！！！！！！」「「「「」

蒔風が飲んだ瞬間嘔き出し、地面に倒れた

「はっはっは！やっぱ良太郎の選んだのがハズレやったか（ゴクッ）ん！これはライチみつくすとかやな！！」

「わーいおいしい！えつとお・・・「ラズベリーソーダ」だね！！」

「じゃあこいつが飲んだのはなんだあ？ん、んまい！アロエシエイ

クか？薄味だが、いいな！！」

「あれ？どうしたのカメちゃん」

リュウタロスがウラタロスに訊く

ウラタロスの首が、ギ・ギ・ギ、と動いた

「ねえ・・・ハズレって・・・なに味だっけ？」

「イ、「インド風してる」「やったはずやで？」

「甘辛っ、ぼぶあらぶおッ！！！」

「カメの字いいいいいいいい！！！」

「カメ公うううううううう！！！」

「カメちゃんんんんんん！！！」

「ぼ・・・僕こんな役回りじゃない・・・ゲフッ」

「なんでや！？ハズレは蒔風やなかったんか？」

「うおおおおおうあ・・・甘あああ・・・」

蒔風がジュースを口から垂らしながら立ちあがった

「蒔風さん！どうして？これ・・・」

「おお？貸してみ？（ゴクッ！）甘い！ー！うまい！ー！なんだよ蒔風え、お前あまいの苦手かよ！ー！」

蒔風が飲んだのは「みるくスイカ」だ
聞いてわかるように超撃甘ジュースである

「甘いのもそれなりに大丈夫だがここまでは・・・ごおおおお・・・」
（畜生！！なんだよ！当たりもハズレってこれは呪われてんのか！？）

床ではウラタロスがビクンビクンしながら倒れている
蒔風が涙を流しながら口の中の甘みを消している

「ま、いいか。おい蒔風大丈夫か？」

「大丈夫だ・・・（クイツ）」

「おいおい！！何飲んでんだよこれタバスコじゃねえか！！」

「ふう、一息・・・じゃあ、俺は行きますわな」

「お？じゃあな・・・まあ、カメの事は気にすんな」

「おう・・・（恐ろしい・・・なんなんだこの飲み物は）」

床から煙を出して残りのハズレ飲料は消えてしまった

「じゃあな」

「おう、また会えたらな」

「へん、待ってるぜ」

[Gate Open - - K A M E N R I D E R D E N - O]

「では」

蒔風がゲートをくぐる

そうして蒔風が次の世界に旅立った

「これからも俺たちの物語は続くのか？」

「わかんないよ。でも、そろそろ元に戻りたいなあ・・・」

今日も時間の中をデンライナーが走っていく
時間は世界に密接したもの

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

電王 ～過去からの帰還～（後書き）

アリス「電王の世界、堂々の完結！！」

いやあ、最後にめっちゃくちゃ長くなっちゃった

ア「それにしても、ゼロノスの戦い方って身軽に動いて相手を翻弄
じゃなかったんですか？」

あーでも・・・作者のイメージとノリだあ！！！！

ア「原作無視しやがったこの野郎！？」

ごめんなさあああああ~~~~~い

【仮面ライダー電王】

構成：”ライクル” 80%

”フォルス” 10%

”LOND” 10%

最主要人物：野上良太郎

- WORLD LINK - ～ WEAPON ～：デンガツシャーと十
五天帝のリンク&複数フルチャージの耐久

- WORLD LINK - ～ FINAL ATTACK ～：十五
天帝を含めた刃での「エクストリームスラッシュ」

ア「あああと変身もしてましたね」

ええ!!

もうあれ考えるのが大変で大変で・・・

《仮面ライダー電王プラチナムフォーム》

デングツシャー：メリケンサックモード

メインの色：銀白

あと電仮面なんかは表記の通り

あとは各人の想像に丸投げおまかせさ!!

ア「ひでえ!!」

それが二次の醍醐味

ア「体のいい言い訳ジャナイディスカー!!!!!!」

ほら、次回は？

ア「次回、再びあの世界へ!!!!」

ではまた次回

魔法少女、続けてます。

なのはA・S　　始まりはいつも突然、なの

ビル郡の一角

いまここでフェイト・テストロッサとピンク髪の女騎士と交戦している

高町なのはが襲撃された

この報告に、すぐさまユーノ、アルフ、フェイトが助けに向かったのだが、たどり着いた時にはすでになのはは落とされていた

今では青い服の武人とアルフが、赤い服のハンマーを持った少女とユーノが、そして女騎士とフェイトがぶつかっている
だが相手は未知のデバイスを使っていて、歯が立たない

そしてついにフェイトがビルの屋上に倒れる
バルディッシュも全体にヒビが入り、今にも砕けてしまいそうだ

「終わりだ。殺しはしない」

そう言つて騎士が剣を振り下ろした

だが突如現れたゲートに、その剣が弾かれる

騎士が白いゲートから離れる

「なんだ！？これは……」

騎士は驚く

そしてゲートの中から音声が流れてきた

《gun foam》

ドンドンドンドンドンドンドン！！！！！！

ゲート内から銃撃が襲い掛かり、それを弾いてかわす騎士
数歩分離れ、そのゲートに警戒をする

《sword foam》

再び音声が流れ、ゲートから赤い影が飛び出し、騎士の剣に自らの
ソードを叩き付け、押し離れた

「オレ！参上！！」

仮面ライダー電王ソードフォームがポージングし、騎士を睨みつけた

「おお、声も変わるんだな」

「あ、あなたは……？」

「ん？フェイトお！お久しぶり！つてか、いきなりクライマックス
たあ、面白いじゃねえか！オレも交ぜろよ！！」

フェイトに挨拶し、騎士を睨む電王
その姿を知らない騎士が叫んで聞いた

「貴様！何者だ！！」

「……あんな世界の後にそう聞かれちゃ、こつ返すしかないよ
な」

バシユウ！

電王が変身を解き、そこにいたのは小学三年生ぐらいの外見になっ
た蒔風だった

「舜！？」

「やっぱこのサイズか……いいか！よく聞いておけ！オレは！」

ガシュウ！ブオン！！

ディケイドライダーを装着し、カードを取り出す時風

「通りすがりの仮面ライダーだ！変身！！」

「K a m e n R i d e . . . D E C A D E !」

シュン・シャキシヤキシヤキ、ジャカン！！

「仮面ライダーディケイド！！」

時風がディケイドに変身する

両手をパンパンと合わせて手を払う

「な！？先程とは違う姿・・・」

騎士が驚愕と共に切り掛かってきたのを、ディケイドがソードで受け止めた

「A t t a c k R i d e . . . S L A S H !」

カードによって分身した剣身が騎士に襲い掛かるが、その攻撃をすべて受けたうえで騎士が訊いた

「お前は魔導師でも騎士でもない！何者だ！」

「そうだな。この世界じゃ、「救世主にして破滅の者」らしいが？」

「なに！？」

バキィ！

数回打ち合い、騎士が空に舞う
どうやら空を飛べるようだ

「ヴィータ！ザフィーラ！こっちへ！！三人でこいつを潰す！」

「シグナム！？」

「了解した、行くぞ！」

ヴィータと呼ばれたハンマー少女と、ザフィーラと呼ばれた武人が
こちらに向かう

「シグナムっての？良い名だ。それに強い」

ディケイドがぼそりと呟く

「でもそう簡単にやられるわけには……いかないよなあ？」

ヴォオン！！

ディケイドがカードを取り出す

「行くぞ！！レバンティン！！」《了解！》

「打ち砕く！！グラーフアイゼン！！！！」《了解！》

「おおおおおおああああああ！！！！！！」

上空ではシグナム、ヴィータ、ザフィーラが魔力を込めている
見るとシグナムとヴィータのデバイスから空薬莖が飛んでいる
ザフィーラはデバイスを持ってはいないらしい

（あのデバイス……確か……）

「……はあああああ！！！！！！」

蒔風が考え込んでいると、三人が同時に攻撃してきた

右から順にザフィーラ、シグナム、ヴィータである

ザフィーラはキックで、シグナムは炎をまとった剣で突っ込んで来て、ヴィータは赤い魔力に輝く巨大な鉄球を打ち放ってきた

「おつと!!」Final Attack Ride...DE
DE DE DECADÉ!
もう一丁!!」Attack Ride...ILLUSION
!」

ディケイドがカードをバツクルに装填する
するとまずシグナムに向かって等身大の大きさのホログラムカード
が幾重にも現れていく

そして二枚目のカード、イリユージョンでディケイドの姿が三人に
なり、ザフィーラとヴィータにもカードが伸びる

三人のディケイドが構える

シグナムに向かうのはソードを、ザフィーラには跳躍の姿勢、ヴィ
ータにはガンを向ける

「な!?!」

「なに!?!」

「ぬう!?!」

三者三様に驚く
が

「「「はあああああああ!!!!」」」

それでも三人はディケイドを一齐に倒してしまおうと考えたのか、
さらに勢いをあげ突っ込んでくる!!!

「「「おおおおおあ！！！」「」」

それにディケイドも答える形で攻撃する
三人のディケイドが同時に動いた

キックとソードのディケイドはジャンプし、ガンのはビルの屋上に
立ったままだ
そして前者二名はカードを通過していき、後者一名は銃弾を放ち、そ
の銃弾もカードを通過していく

キックを放ったディケイドの足先にはカードを通ることにエネルギー
ーがたまっていく
ソードのと同様に、剣身にエネルギーがたまり、剣が伸びていく
ガンの銃弾も、カードごとにどんどん肥大し、巨大化していく

「ぬぐお！？」

キックがザフィーラにぶつかり、爆発を起こす
煙の中からザフィーラが落ち、ディケイドの姿が消える

「うわああああ！！！！」

同時に、ヴィータの放った鉄球を飲み込んで、エネルギーの銃弾が
ヴィータに命中し、爆発を起こした

そして屋上に立つディケイドが消える

「うーおおー!!」

そしてまたそれと同時にシグナムにソードを握ったディケイドが到達する

だが彼女は少しだけ耐えた

ディケイドの一撃をはじいたのだ

だが、ディケイドはくるりとシグナムの上を縦回転し、背後から回って切り崩した

斬られた部分から血は出ないが、そこにエネルギーが叩きこまれ、爆発する!!

ドオン、ドオン、ドオオオオン!!!!!!

そしてディケイドが着地し、変身を解く

「こんなもんか？」

「舜!!」

そこにフェイトが声をかける

「よう!!フェイト、なのははどうした？」

蒔風がフェイトになのはの事を訊くと、事の顛末を教えてもらった

「なるへそなるへそ・・・じゃあ治しに行くか」

と、時風が足を延ばした瞬間

ドクン!!!

と何か大きな魔力の動きが感じられた

「この・・・魔力は!!!」

「なのは!!!」

時風がなのはの居る場所に視線を向ける

なのははユーノの張った治癒結界の中にいた
だが、その胸には信じられない物が生えていた

腕だ

と言ってもなのはを貫いてるわけではない
おそらく空間魔法だろう
直接なのはの身体に突っ込んできた物だ
その手の先には何か光が見えた

「なのはのリンカーコアが！！！」

「リンカーコア！？そりゃ確か・・・ん、魔力の元みてえな物じゃなかったか！？」

「あれを取られたら、なのはは当分魔法が！！！」

「使えないってか・・・畜生、まだ仲間がいたか！！！」

蒔風が周囲を見渡す

その光景を、腕の主は見ていた

「うんしょっと・・・凄い魔力。これならページがかなり埋まるわ・・・」

腕の主は金髪の、おっとりとした優しげな女性だ

指輪から伸びた光の糸で作られたゲートから腕を突っ込んでいる
その傍らには一冊の本があり、なのはの魔力が注入されることに白紙のページが文字で埋められていく

彼女の名は、シヤマル

シグナム達の仲間だ

その仲間たちに念話で交信する

『みんな、大丈夫！？この魔力いただいたら、すぐに転送魔法で帰

還するから、待ってて!!』

『ああ・・・すまない、シヤマル』

『なんなんだよあいつ・・・滅茶苦茶だぞ・・・』

『怪我はないが、身体も動かん。あの爆発は虚仮脅しのようだが、
実力は本物だ』

『シヤマル、見つかるなよ』

『大丈夫よ。このクラールヴィントの結界で見つかるわけが・・・』

そう言ってシヤマルが自身の指輪を見、そして時風に視線を戻した
ところで言葉が止まった

『どうした？シヤマル』

『皆、今すぐに転送するわ!!場所はバラバラに!!各自で家に戻
ってきてね!!!!』

『それはいいが、どうした!?!』

『見つかったわ!!!!』

『なに!?!』

そう、言葉が止まった理由

「なのはのリンカーコアの三分の二が？」

「ああ、持って行かれている」

ビルの屋上

気絶しているなのはの周囲にユーノ、アルフ、フェイト、そして蒔風がいる

ユーノはなのはの容体をみているようだ

「それにしても蒔風、またこの世界に来たのかい？」

「それがなく、まあ、たらしいのよ。で、俺がいなくなっからどんぐらいたってん？」

「大体半年だよ」

「ふう〜ん」

「舜の方は？どうだい？」

「え？俺は・・・えつとお・・・」

蒔風が視線を少し上の方にし、考え始めた指がフラフラと動き、そしてパチンと鳴らして答えた

「ざつと一年半かな？」

「そんなに？」

「俺は肉体成長しないの。筋トレとかすればそりゃ筋肉はつくだろうが、背がおっきくとかは全然よ?」

「でもなんか「ヘンシン」した時は・・・」

「ああ、あの時はあの大きさだよ・・・さって、なのはを治しますか」

「治せるの!?!」

フェイトが蒔風に振り向く

「当然。と言ってもわからないんだけどね。オレがあのを引き出しきれるかどうか・・・ま、やってみるよ」

そっいつて蒔風が力を借りる

その背から純白の翼が生えてきた

「これは!?!」

「翼さ・・・」

「あれ?でも舜のは銀白じゃないの?」

「これは・・・俺の仲間に翼人がいてな・・・それを、借りただけだ・・・」

蒔風の息が荒くなっている

それでもなのはに手を当て、癒やしていく

その余波だけで、フェイト達の傷も癒えていった

「す、凄い!!」

「くそ……はあ、はあ……オレじゃ四分の一程度の力しか出せねえ……」

時風からものすごい勢いで汗が流れていく
そして顔色がどんどん悪くなっている

だが、なのはの身体はもう傷一つ見当たらない
レイジングハートやバルディッシュなどの無機物は直らなかったが

そのあいだにも時風はどんどん体力を失っていつている

「舜!!」

「どうしたの?大丈夫!？」

「どうやら……他の翼人の力を借りるのは……つつあ!!
!はあ……はあ……はあ……」

時風が翼を消し、息を整える

「ちょっと……大変みたいだな……つか、れた……」

時風がぐらりと倒れる

「あー、大丈夫だよ。疲れただけだ。ちょっとこうしてりゃすぐに

治る・・・あーつめてー」

蒔風が屋上に寝そべる

冷たいのは当然だろう。今は冬の入り口なのだから

「ち・・・観鈴ちゃんならリンカーコアまで治せるんだがな・・・」

「え？」

「こつちの話よー。気にしないで」

「それにしても・・・あいつら何者？」

「あんなデバイス、知らないよ？」

「いきなり襲撃してきたみたいだし・・・」

「それに魔法陣も・・・」

三人が議論を始めてしまう

そこに蒔風が起き上がって口をはさんだ

「あいつらの事なら教えてやる。どーせクロノあたりも来てるんだろ？続きはあつちで話そうぜ？」

蒔風のその提案に、皆が頷き、一旦アースラへと向かった

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

かっこいいよ！！ブイスリヤー！！！！

ア「あと蒔風、疲れてましたね？」

ええ

「力を借りる」というのは「願いの翼」の力ですから
同じ「翼人の力」を借りるのは途方もない体力と精神力を持って行
かれます
借りられる時間も一分半と短いですし

ア「他に十五分なのにですか！？」

それだけ翼人の力は大変なんですよ

ア「へえー、次回、彼らの秘密、新たな住まい」

ではまた次回

話をッ！

D i v i n e

聞いてっつてはあッ！！

b u s t e r

なのはA・S　↳運命Iを連れIて行く・・・違ったの

アースラに帰還したユーノ達
もちろん時風も一緒だ

彼らを出迎えてくれたのはクロノだった

「舜!!!久しぶりだな!!!」

クロノが時風を見るなり嬉しそうに肩を掴む

「ははは、クロノ久しぶり!!!って、痛い痛い!ど、どうしたん?」

「ふっふっふ・・・待ってたよこの時を・・・」

「クロノさん?」

「舜お前、前回自分のデータ消してったるうが!!!」

「ひいバレた!?!」

「バレれないでか!!!先の事件の報告書をまとめようとしたら君のデータがゴツソリ無くなってたんだぞ!!!!!!」

「翼人の事なんか残せるか!!!それに俺がいなくても大丈夫だった
る!!!!!!」

「それとこれとは話が違う！！管理局のデータベースに入り込んでデータの改竄をしたことが問題なんだ！！！！」

「冷たいこと言つなよクロちゃんあゝん」

「あーもー、君って奴は！！！！！！」

「クロちゃんです」

「やかましい！！！！」

時風とクロノがいきなり口論を始めてしまった
なのは抱えるアルフも、その後ろのユーノとフェイトも啞然と
している

（ねえ、クロノってあんなにはしゃぐタイプだったっけ？）

（ううん。私もそれなりに一緒にいたけど、あんなクロノは初めて）

（なーんか兄弟げんかみたいで面白いねえ）

三人がひそひそと話しているのに気づいたクロノが、咳払いをして
話を戻す

「さ、みんな。これからアースラは時空管理局本局に向かう。話は
それからだ」

半年前に涙の別れをし、ビデオメールで連絡は取り合っていたが、
こうして会うのは本当に久々なのだ
それもあんな戦闘のあつた直後に

それは気まずくもなる

「あ、あはは。なんか変な再会になっちゃったね」

「う、うん」

「・・・フェイトちゃん」

「なに？なのは」

「会いたかったよう・・・」

「・・・うん、私も」

そう言ってお互いの手を取る二人

そして話が盛り上がっていく

「そういえば、フェイトちゃんを途中で助けた人がいたよね？」

「あ！・・・！そうだ！・・・！なのは、帰ってきたんだよ！・・・！」

「え？」

舜が帰ってきたんだよ！とフェイトが言おうとし、
「しゅ」のど

るで扉がガタガタとなりだし、ゴガガガガ、と振動し始めた

『おかしい・・・引いても押しても開かんだと!?!』

扉の向こうから声が聞こえる

ちなみにこの扉はスライド式で、人が近づくと勝手に開くはずなのだが・・・

『おのれこの扉野郎め、そこを開いて人を招き入れるのが貴様の機能のくせに、なんでそれもできないんだよ・・・ひ、ら、け!!!
!(ドゴガン!!!)』

扉の向こうから声が聞こえてきて、散々騒いだ拳句にあらうことが扉を蹴り破ってきた。

本来開かない方向に開かれた扉は、ボタン!!!と部屋の中に倒れ、そこを開けた。

そして壊れた扉の構造を冷静に見直して、扉を蹴破った時風がふつ、と頭を振って言った。

「あ、あんたが開かないから行けないんだからね!!!」

訳のわからないツンデレである

いや、ツンデレですらもない

その時風につかつかとフェイトが歩み寄って、その頭を時風の脳天から拳を振り落として殴った

「オゴウ!？」

「何やってんのかな？舜」

「ま、待てフェイト・・・オレはなんか暗そうな雰囲気だったこの場をどうにかしようとなだな!!」

「どこから聞き耳立ててたの!!!!!」

「え？モチ最初から。その質問は「最初からじゃねえか!!」のベタな・・・待て待て待て!!わかった悪かった俺が悪かった今度は普通に開くからゴオウ!？」

もう一度フェイトが時風の後頭部をはたき、肅正した

「フェ、フェイトちゃん？それに・・・舜君!!!!!!」

「おう、久しぶりですの。時風君だよ。元気？つてもんでもないかな？」

「うん・・・」

「ま、あのままだったらリンカーコア全部取られてたな。あの騎士、やりよるのう」

「舜はあの人たちのこと知ってるの？」

「それは全員集まってからだ・・・噂をすれば、だな」

そのときちょうど扉があった場所に、リンディ、クロノ、ユーノ、

アルフ、エイミイが入ってきた

「蒔風君、元気だった？」

「ま、元気ですな。この姿以外は」

「また「実年齢は」とかですか？」

「なんでそれだけ信じてくれないの？」

「なんとなくです」

「そんな~~~~」

そしてエイミイに挨拶をする

「どうも、久しぶり」

「ほいほいお久しぶり〜。クロノのから聞いたよ〜？翼人なんだって？」

ビシリ、と蒔風が固まる

そしてぐるりと蒔風の首がクロノの方を向く
それと同時にクロノの首が蒔風から逸らされる

「クロノ？」

「えっと……どうしてもって……」

「え〜？クロノ君の愚痴で聞いたんだよ〜？翼人のどうとかって！」

蒔風がズズイッ、とクロノに近づくと

「クロノ？」

「そ……その……すまない……」

「……はあ、ま、いいけど。そこまで必死に隠すものでもないし」

クロノがフウ、と息を漏らす

「でもなるたけ言いふらさないでくれよ？なまじ伝説が残ってる世界だと面倒なことになりかねない」

蒔風との再会で一通りの言葉を交わし合ったところで、本題に入った

「交戦した四人の人物。彼らが今回の相手だ」

モニターが現れて、そこに今回戦った四人が写される

「たしか、シグナム、ヴィータ、ザフィーラって呼び合ってたね」

「最後の一人はわからないけどな、彼らの言葉からある一つの情報を得た」

「それは？」

「……闇の書……」

口を開いたのはクロノだ
なんとも言い難い表情をしており、何かしらの因縁があるように見
てとれる

「闇の……書？」

蒔風が説明を続けた

「なんでも古代から存在する魔導書でな。リンカーコアから魔力を
いただき、その質と量に比例してページを埋めていくんだ」

「埋めていく？」

「そ、最初は全666ページが白紙の状態から始まる。そこから魔
力を蒐集しゅうしゅうしていくことに埋まっていくんだ」

「それと彼らの関係は？」

「彼らは闇の書の防衛プログラムだ」

「プログラム？」

そこからクロノが説明した

「闇の書は持ち主が死んだりすると、次の持ち主のところに転生す
るようにされている。そしてその主と本を守るのが彼ら、「ヴォル
ケンリッター」だ」

「そういえば、あの人たちの魔法、なんか変だった」

「それは彼らだからというわけではないんだがな。魔法の系統が違
うんだ。お前らのミッド式。彼らのベルカ式と呼ばれる物だ」

「遙か昔にミッド式と双壁を誇っていた魔法文化だよ。その最大の
特徴がカードリッジシステムだ。薬莢の様な物の中に魔力を込めて、
戦闘時にそれを開放することで瞬発的に攻撃力を激増させる物だ」

「ま、より対人戦に特化したもんだわな。で、優れたものは「騎士」
と呼ばれる」

そこでなのはが手を上げた

「はい、なのは」

「えっと・・・それであの人たちはリンカーコアから魔力を奪って
それでページを埋めて・・・何をするの？」

蒔風はなのはにビンゴ、という様に指を向ける

「そこなんだ。何が起きるかはわからない。その闇の書の主がどん
な奴かはわからないしな」

「だが使いようによっては危険なロストロギアだ。どちらにしろ、
話は聞かないといけない」

「それにこの事件、多分私たちアースラが受け持つことになりそう
だし」

そこでリンディが当面の問題を言った

「そうなのよねえ・・・でも、アースラは今整備中だし・・・」

「地球は管理外世界で、行くのには時間がかかる。何かあった時に・・・」

そこで蒔風がぼろっと、言った

「みんなでくりゃいいじゃん。現地に住んでさ」

「あ」「え?」「ああ〜」

皆が納得したような声を出した

「そうね、そうしましょうか。でも、まだうちの担当になるかどうか分からないし」

「なるさあ。だって」

「だって?」

「そうはしない・・・ふむ、やはり立つても開かないか・・・よしよ、ッ!？」

蒔風が扉をスライドしようとしても開かない
どうやっても開かない

「バカな!!!ここまでしても俺様を拒むか!!!」

ちなみに蒔風がスライドさせているのは右から左だ。
この扉は左から右に開く。

「舜・・・」

「ぬおおおおお!!!な、なんだクロノ!!!」

「この扉は魔力に反応して開くんだ。それとは違う力を持つ君が開けないのはそのせいだと思っただけど」

「そ、そうなの!?じゃあ・・・こうか?、・・・(キリッ)」

蒔風が魔力を生成し、扉を開く

部屋に入ると、ひとりの老人・・・と言うよりも、紳士と言つべき人物が立っていた
ひげを蓄え、優しげな眼をしていた

「舜、こちらはギル・グレアム提督。かつては艦隊指揮官、執務官長を務めた、歴戦の勇士だ」

そう言つてクロノがグラムを紹介する

「はっは、そうおだてないでくれクロノ。照れてしまう。それにしても面白い子だね」

「へえ・・・この人がクロノの師匠つていう？」

「ああ。執務官研修を担当していただいたんだ」

「どうも、初めまして時風君。ギル・グラムだ。君の事はクロノから聞いているよ」

その言葉に時風がクロノに向く

「・・・クロノ？」

「・・・ナンダイ？」

「どこまで話したのかな？かな？」

クロノの弁解より早く、グラムがバラした

「君が翼人であることまで知ってるよ」

「提督！！」

「クロノお！！！！」

「す、すまない!！」

蒔風がクロノに迫るが

「まあまあ、彼に問い質したのは私なのだから、彼を責めないでください」

その言葉に蒔風も引つ込み、三人が席に着く

「ふう・・・さつき、なのは君とフェイト君とも話していたのだが、二人ともいい目をしていた。君も・・・面白い目をしてるね」

「ん?どういことぞ?」

「いや・・・伝説の翼人がこんな子供だったとは・・・」

「子どもぢゃない・・・って言っても信じてくれないだろうし・・・いいよもう、それで、はあ」

「ん?なんだい?」

「いいえ。それより、管理局の超お偉いさんが何の用でっしゃるか?」

蒔風が聞く

それに頭を下げて答えるグラム

「頼む。この事件を必ず解決してくれ」

「???」

グレアムが話し始めた

クロノの父、クライド・ハラオウンが自分の部下であったこと。彼が殉職した原因の事件が「闇の書」の事件であったこと。そしてグレアム自身も今まで独自に調査してきたこと。

「頼む。闇の書はたとえ所持者を殺しても新たな所持者に転生してしまう。」

そんな代物をどうにかするには、この世界の力ではどうしようもないのだ」

そう言っつて頭を下げ直すグレアム

クロノの顔を見ると、言葉にしたいのに出せない何かがあるようだった

「クロノ、なんかあんのか？言っつてみいよ」

「……グレアム提督、あの事件はあなたの責任ではありません。あのとき父は船員を助けるために、自分と艦を涼めるように言ったのです。あれはだれの責任でもありません。提督が気に病むことなど……」

「そんなことはわかってんよ、この人は」

蒔風がクロノに言う

「こんな人はそれを踏まえたうえでまだ自分が許せないんだ。だからこんな得体のしれない伝説にまで継る」

その言葉に、グラムが返す

「そうだ・・・これが自己満足だとわかっている。だが、もうあんな事件は起こしてはいけないのだ！決して・・・決して！！！」

「・・・・・・・・・・それで？主はどうする？」

「できれば・・・助けたいが・・・」

「ふ、無理なら殺れてか。いや、殺したら意味ないから、捕らえて生き地獄かな？ならお断りだ」

そう言つて時風が部屋から去ろうとする

それにグラムが諦めきれないと引きとめる

「それは・・・だが、必要ならばやるべきなのだ。本当に頼む！！それが最善でないことはわかっている。だが、やってはならないことでも、やらねばならぬときがあるのだ！！それを」

「それを俺にやれつての？それとも俺に許して欲しいってか？悪いが俺は神じゃないんでな。翼はあっても天使ではない」

時風が部屋から出ようとする

そこで背中越しに言った

「やっちゃんいけないことをなんでやっちゃんいけないかわかるか？それがやっちゃんいけないことだからだ。それ以外の御託は必要ない。ただそれだけの理由だよ、断るのは」

その背中にグラムが聞いた

「では……君がやることとはなんなんだ？」

そこで振り返って言った

「当然、いいことだよ。ま、あくまでオレにとってな。いいことをやるのに理由や信念なんてもんはいらない。し続けるなら必要だがな、そんなもんはあとからついてくる。

高尚な理由なんていらない。

それが誰かのためになるなら、迷わずすべきだ。そうだろうか？」

その瞬間、グレアムには時風が小学三年生の少年には見えなかったまさしく、彼は世界を救う青年だと、確信した

「では……私は何をすべきなのだろうか……」

「知らないね。あなたがやるべきことを、あなたの最善を。あなたの願いの通りにやればいいのでは？今までやってきたことをすればいい。誰かにそれが打ち砕かれるまで、な」

そう言って時風が去る

その後をクロノがグレアムに一礼してから追いかけて行った

部屋にはグレアムが残される

「まいったな・・・逃げ道のための会話で、背中を押されるとは・・・」

そう言ってどこかに通信をつなげる

「私だ。ああ、やはりやろう。ん？迷い？もう吹っ切れたよ。打ち碎かれるまでやるとしよう。願わくば相手がこちらに気づくことに賭けるがね。ああ・・・実行するとしよう」

そういつて通信を切る

天井を、いや、おそらくはその先の天を仰いで、グラムは思った

闇の書に終わりが来るように、と

t o b e c o n t i n u e d

なのはA・S　↳運命―を連れ―て行く・・・違ったの〜（後書き）

アリス「説明回ですね」

すみませんですはい

何か間違つてるとこあつたらおせーてください!!!!

ア「それとグレアムさんとの会話」

ですねー

本編知つてる人は何となくわかると思いますが

ア「それにしても蒔風はいちいち魔力作らないといけないんですね」

そうなんですよ

彼は大体どんな力も生成できますが、する必要がいんですよね

ア「なんでです?」

だつて必要なら「力を借り」ればいいし

ア「なるほど」

まあ、念話とかをしてたから、結構なれたらうけどね

ア「じゃあそろそろ」

お願い

ア「次回、今度こそ本当に新たな住まい」

前回の予行は実現できなかった（泣）

だめだ・・・どんなセリフも先取りしてまっ・・・

なのはA・S　　ゝ拠点と接触と共闘なのゝ

この「闇の書事件」が正式にアースラ主導の物になると決定したそれに伴い、現地での活動のため拠点は海鳴市のなのは宅近くのマンションになった

それが発表されたとき、なのはとフェイトは手を取り合って喜んだ
蒔風は自分の荷物があるからと、住所だけ聞いて、地球に降り立つてから別行動をとった

.....

「すっごく〜い!!!」

なのはがフェイトの住むマンションの一部屋に入っの第一声であるそこは海鳴市を見渡せるような高層マンションで、すぐ近くになのはの家もあるので、いつでも会えるという好ポジションだ

「あ、あそこうちだよ」

「え？どこどこ？」

フェイトとなのはがベランダから階下を覗いてはしゃいでいる

さらにこの部屋、現地での本部でもあるため、いたるところにモニ

ターが出たり、何かとハイテクになっている
キッチンなどの技術はこの世界の物だが

「そうだ、屋上からの眺めがすごいんだよ!!」

「みたいみたい!!」

そう言っつて片づけをしているエイミィに一声かけ、二人が屋上に向
かい、扉を開けた

そこには想像してた以上の光景が広がっていた

「スキップ」

「ウノ」

「ウノ」

「あ、じゃあドロ2」

「私もドロ2」

「残念、持ってますよ。ドロ2」

「・・・ドロ4」

「・・・」

「主？」

「お前ら主を敬うつてことしないのか!？」

「」「ゲームではしない」「」「」

「くっそう!何枚だ!!」

「14枚だの」

「ああそうかい。いちにいさん・・・」

「待て主!？騙されているぞ!？」

「もういい構わん!!その程度でお前らの勝因になると思っつなよ!

「？」

「・・・負けたら私にプリン十個」

「をい！！最初三個だったのがおかしいぞ!？」

「じゃあシュークリームでいいです」

「この野郎!!!」

五人の男たちが屋上に丸く座り込んでウノをやっていた

四人は十代後半の青年で、あとの一人は蒔風だ

屋上にテントが張られ、その外で行われている

テントのそばに破壊された看板があり、「久々だと、つい、やっちやうんだ。ランランル」と書かれていた。

「舜君？」

なのはが声をかける

その声に蒔風が反応する

「おー、なのは。身体は大丈夫かい？」

「うん。怪我の方は大丈夫。魔法はまだ駄目だけど」

「なに、身体が大丈夫なら全然平気だよ」

「舜、このお兄さんたちは？」

「んあ？そっかそっか、知らないか」

時風がその場の青龍、白虎、朱雀、玄武を紹介した

「俺の召喚獣たちだよ。おまいら、戻つとけ」

その一声に四人が剣に戻り、時風の脇の鞘に収められ、消える

「す、すい」

「で？何しに来たの？こんな屋上に」

「えっと・・・景色を見に来ただけど・・・」

「舜は？」

「暇だったから遊んでた」

「このテントは？」

「荷物。ここにテントごと置かれていた」

「へ、へえー」

「そういえばレイハとバルはどうした？」

「うん・・・二つとも破損が激しくて・・・」

「まだ治らないみたいなの」

「そうか・・・結構やられたからなあ」

と、そこでフェイトが思い当たる

「舜はこんなところで暮らしてるの?」

「ん? いや、前はなのはの道場に泊めてもらったな」

「じゃあ、今度はうちに泊まる?」

「……はい?」

蒔風がフェイトに聞きなおしたが、フェイトはこれは名案、と考えを変えない

「うちに住めば今後の活動もしやすいし、もしかしたら「奴」の事も見つかるかもよ?」

「まあ、俺としてはありがたいが、リンディさんはいいと言っのか?」

「言っと思っ」

二人が同時に言い、そして下に戻ってリンディに訊くと、

「了承」

「一言っ!？」

あっさり決まってしまった

だが蒔風が硬くな拒んだため、リンディにもうひと部屋借りてもらって、その部屋を蒔風が使うことになった。

「どつした？」

「いやあ、なんでも」

時風がベランダの柵を乗り越え、自分の部屋に帰っていく
そしてパジャマから着替え、出かける準備をした

.....

巨岩が点々と置かれ、広大な荒野の広がる世界
ここにベルカの騎士の気合が響いた

「うをおおおりゃあああ！！！！！！！」

ドゴオン！！！！！！

巨大なワニガメのような生物が岩場のそばで地面に倒れる
他にも二、三体、同じ生物が点々と同じように倒れていた
死んではいけないようだが、その体からはリンカーコアが抜かれている

「こんなもんかな？ちっちええけど、効率はいいんだよな」

そうやって魔力を取っているのはヴィータだ

この無人世界で、こう言った巨大生物から魔力をいただくのが最近
の主流だ

「まったく、管理局に気付けれなきゃこんなめんどいこと・・・」

「だったらぶちのめせばいいじゃん」

「それじゃあ傷つけちゃうかもしれないねえし下手したら殺しちゃうかもしれないねえ。主の名前を穢さないためにも、それだけはやらないと決めたんだ」

「結構なことだな。その主って誰なの？」

「それは、ってうをおおおお！？」

「あ、気付いた」

近くの岩場に、蒔風が座っていた

ニコニコ笑って、手をヒラヒラと振っていた

「てめえは！！！！」

ヴィータが蒔風にいきなり攻撃を仕掛ける

武器であるハンマー、グラーファイゼンからのジェット噴射で回転し、その勢いで殴りつけろうとする

蒔風が岩場からひらりと跳んで、その真上を飛び越して行って、巨大生物の背中の中甲羅に乗った

蒔風がたった今までいた岩場の先端を砕き、ヴィータが蒔風の方を睨む

「おおすげえ！！！！何回転してんだ！？」

「お前、何しに来たんだ!!」

ヴィータがもう一度攻撃しようとして構えるが、時風が手のひらをヴィータに向ける

「三人がかりで、いきなりとはいえ君たちを落とした男にそんな心情で戦っても勝てないよ?」

「うぐっ……」

「それよりも知りたいんだな。なんで蒐集してんだ?完成させれどつするのよそれ」

時風が闇の書を指さして聞いた

「それは……いえねえ!!言っただってお前ら管理局は……主をとつ捕まえんだろ!?!」

「はあ……ん」

「そーゆーのから主を守るの騎士だ!!あたしはそのためになつたら何とでも戦う!?!」

「俺は管理局員じゃないよ」

「信じられつかよ!?!」

「そつだよねえ……お?」

時風が地面を見る

「あ？どうしたんだよ」

「お母さんが御怒りのようだ」

ドゴオオオアアア！！！！！！！

地面にひびが入り、そこから巨大な何かが出てきた

まあなんとということでしょう。

地盤を砕いて現れたそれは、そこらに倒れているカメの二倍はあるうかという大きさがあります。

どうやら彼らの母親なのでしょう。その瞳には怒りの炎が燈っております

「く・・・」

「おい！・・・どうやらやる気らしいぜ！？」

ドゴオ！！！！！

蒔風とヴィータを前足でなぎ払おうとし、それを二人が避けて、地面に降りる

「お前さん、疲れてんだろ？どうだい？こいつとりあえずやらないか？」

「だ、誰がお前なんかと！！！！」

「いいの？なら別に俺はいいんだけど。だけどここのまま戦って勝てる確率は五分五分。もし負けたら闇の書がどーなっちゃうのかなあ？」

「う……」

ヴィータがガリガリと頭をひっ搔き、考え込む

「う……あ……！！！！！！」

「ほらほらどうする？そこまで来てるよ？」

母ガメが猛然と二人に迫ってくる

このままでは押しつぶされてしまうだろう

「だ……！！！！わかったよ……！手伝えお前……！！」

「いいよん（ピイン）」

蒔風がどこからか音叉を取り出し、鳴らす

そして焰に包まれ、変身する

「久々のお……響鬼い……！！」

ドンドン……！！

蒔風が仮面ライダー響鬼に変身し、その姿にヴィータが驚く

「それなんだよ……！前のと違うぞ……？」

その一撃で音撃鼓から全身に音撃を叩き込まれた母ガメは、雄たけびを上げて倒れた

「つと、こんなもんか。やるじゃん」

「うっせー。お前本当に何なんだよ」

時風が変身を解き、ヴィータに声をかける

「そうだな・・・お前黒い影みたいな男、知ってつか？」

「しらねーよ」

「じゃあいいや。ま、俺は世界最強、と覚えておけよ？」

「・・・あたしを捕まえないのか？」

「そうだなあ・・・ダチ襲撃の件はもうその時にぶちのめしたからもういいし・・・うん、けえれけえれ」

「・・・シグナムに言った、あの言葉・・・本当なのか？」

「おお。さすが古代ベルカから存在した騎士だね」

「じゃあ・・・本当に・・・」

「それを信じるかどうかは君だよ。まあ？こんな胡散臭い男は信じないに限ると思うによ？によによよよ」

「……………じゃあな」

ヴィータは蒔風のうやむやな感じに、もうどこでもいいや、といった感じになり、その世界から去って行った

あとには蒔風が残される

「ふう……誰も殺してないし、殺すつもりもない、か。しかもそれは主のためにね。いい奴らだ。まあ話してはくれないだろうしなあ」

そういつて蒔風が空を仰ぎ見る

「ま、華のあるいい戦いしたし、いい気分だ……だからお前らしいよ」

ドゴオン！！！！

地盤を砕き、一斉に巨大ガメたちが襲いかかってくる

五、六体はいるだろうか。サイズは最初にヴィータが倒してた物と同じだ

それらが地盤から勢いよく飛び出し、そのまま蒔風を圧殺しようとする

が、しかし、蒔風の眼が薄く開かれ……

「Gate Open」

世界名が告げられることなくゲートが開く
そこをくぐって時風もいなくなる

とりあえずの接触はした

さて、この物語はどの方向に歪むのか

t o b e c o n t i n u e d

なのはA・S　く拠点と接触と共闘なのく（後書き）

だーめだ眠い

アリス「あなたいつも眠いでしょっ」

そうなんだけどね・・・

ア「仕方ないですね。次回、新たなる力」

ではまた次回・・・ZZZZ

熱血バトル魔法アクションアニメ！

ア「DVDのCM・・・」少女「の字を捨てましたね・・・」

なのはA・S　　日常と、崩壊の故郷

フェイト達がこの町にやって来てから数日、彼女にとって新しいこととの連続だった

「「こんにちわー!!」」

まず、フェイトの家に、すずかとアリサが遊びに来たのだ

お互いの事はなのはを通してビデオメールの事で知り合っていた三人は、すぐさま意気投合。
部屋でワイワイと遊びだした

「初めまして、でいいのかな？月村すずかです」

「アリサ・バニングスよ」

「フェイト・テストロッサです。えっと・・・」

「「なに？」」

「アリサ、すずか。よろしく」

「「うん!!」」

そしてまずは一旦、リンディと共になのは両親のやっている喫茶店「翠屋」へと向かい、なのはの両親に挨拶にむかう

どうやらこっちはこっちですぐに仲良くなったようだ。外のテラスではなのはたちがおしゃべりをしている

「わー。ユーノくん久しぶりー!!」

「あんだ、どっかで見たわね」

動物モードのユーノとアルフを抱えるすずかとアリサ。腕の中でキューキュー言ってるユーノと、ぎくりとするアルフ。

『ユーノくん……がんばって!!』

『アルフもごめん』

二人に念話で話しかける二人に、構わないよと返す動物組

「ショートケーキです」

「え？あ、ありがとう」

と、そこにケーキを持ったウェイターがやってきてそれを置いていく

「モンブランです」

「あ、はい」

「チョコレートケーキです」

「まっ、え?」

「チーズケーキですトルテですシフォンケーキですカステラですマフィンですロールケーキです時風ですミルフィーユですホットケーキですマドレーヌですバームクーヘンです」

「ちょっと待ちなさいーい!ー!」

次々とケーキを置いていくウェイターにアリサがキレた
すずかはポカンとウェイターを見つめていた

「えっと・・・舜君?何やってるの?」

「無論、手伝いだよ。前回泊まらせてもらったのに、全然恩返しできなかつたからね」

なのはと時風は何でもないように話し始め、それに気付いた二人が
驚いた

「ええ!?!舜君!?!?」

「舜!?!あんだこんなところで何やってんの!?!このケーキは何!?!」

そう言いながら掴みかかってくるアリサ

「おいおい、やめてくれ。のおうみいそがあしええいくうさあれえ
るっ」

アリスが蒔風の首をグワングワン揺らしながら問いただしたので、蒔風の言葉がぶれる

「急にいなくなっちゃうし、どこで何やってたのよ!?!」

「いやあ・・・ちょっとね!?!」

「うぎー!?!そのしてやった感じの顔が腹立つ!?!!?!」

そう言ってから席に座りなおす五人

「じゃあ舜も学校に戻ってくるの?」

「いやあ・・・わからないんだよなあ」

そう、実はそこがわからない

前回この世界で蒔風が学校に入ったのはなのはと少しでも知り合っておくことが目的だった。

だが、今回はそれが不必要

故にこの世界に来た時も荷物の中には学校の制服はなかった

「わからないってどういことよ」

「どうなんだろうねえ・・・」

「考えてないで答えなさい!?!」

「およよよよよ~~~~」

蒔風が再びシエイクされ始める。

と、そこに荷物を受け取りに行っていたエイミーが通りかかった

「やあ、みんな、こんにちわ!!」

「エイミーさん!あ、紹介するね。こちらエイミーさん。フェイトちゃんの・・・お姉さんみたいな人」

「どうもこんにちは!エイミー・リミエッタです。話に訊いてるよ。すずかちゃんと、アリサちゃんだよね」

「「こんにちは!!」」

「うんうん、元気元気。と、そうだ。はい、フェイトちゃんの学校の制服」

「え?」

そう言つてエイミーがフェイトに服の入った箱を渡す
その中にはなのはの物と同じ、私立聖祥大学付属小学校の物だ

「フェイトちゃん、やっぱり同じ学校だね!!」

「うん!!」

「ほい、それと舜君のも」

「・・・はい!?!」

エイミーが蒔風にも同じ箱を渡してくる

「ま、まさかこの中身がフェイトと一緒になんてことは……」

「大丈夫だよ」

「そ、そっか……よかった」

「ちゃんと男子の服だから」

「それは当然でしょ！？ああやっと自由に行動できると思ったのに……」

そう言っていると、店の中からリンディとなのはの両親が出てきた

「あら、制服、届いたのね」

「舜君。また君に出会えてうれしいよ。今度私とも手合わせ願いたいんだが……」

「やめてくださいやめてください！！そんな必要ないですってば！」

そしてその後、家に帰った時風が漏らした一言

「学校……めんどくせえ……」

.....
.....

このクラスってこんなクラスだったっけ？と自分のクラスメイトに
関して考え始めたのは

「俺の席は・・・そこだあ~~~~!!!!」(ズビシッ!!)」

蒔風が前回も自分の席だったところを指さし、飛びこんでいった

パカァン!!!

だがその後頭部にチョークが砕け、蒔風が机の間に倒れる。

「そこはフェイトさんの席です。あなたはその隣」

「・・・はい」

「ではホームルームを始めます」

そう言っ学校が始まった

そして休み時間になるや否や、フェイトのところの皆が集まって、
質問攻めにし始める

「まえはどんなとこ住んでたの？」

「他の学校ってどんなとこ？」

「好きな食べ物って何？」

「ツインテールびろ〜ん(バキィ!!)」

「好きなテレビ番組って？」

「今どこに住んでるの？」

そんな質問攻めに、フェイトはおどおどとしてしまい答えられない
それを眺めるなのはたち四人
うち一人は頬に拳の跡がついている

「俺さんの時にはあんなに来なかったやん!! なんなん!?! この差
なんなん!?!」

「フェイトちゃん人気だね」

「でも大変そう」

「変なことされなけりゃいいけどね」

「それしたのはあんだでしょ!!」

そういつてアリサからもはたかれる時風
腕を組んで、首だけがカクツ、と倒れ、そしてまたクイツ、と起き
上がった

「それにしても……凄いなあ……」

「もう……仕方ないわね!!」

「キター……!! アリサ・バニングスさんの仕切り屋発動やで
……!! (ボカア!!) すみません静かにします」

「よろしい。ほらみんな!! 転校生が困ってるじゃない!! 順番順
番……!!」

そういつて質問者をさばっていくアリサ

「すげえ……」

「にゃはは……アリサちゃんは仕切らせたら凄いから」

「うんうん」

そうしてあっという間に放課後になる

五人は途中でリンディと合流し、電気量販店に向かった。
フェイトの携帯電話を買ったためである

「そういえばフェイト持ってなかったんだっけ」

「うん」

「でもこれがあればいつでもお話しできるよ！」

「それはどうかな」

蒔風が顔を暗くして話し始めた

「俺も携帯を持った時はそう思ったさ。だけどそれが恐ろしいことに気付いたんだ……」

「な、何があったの？」

フェイトが恐る恐る聞く

「それは・・・不幸のメール!!」

「不幸のメール!？」

「そう!送られた者に不幸を起こすと言われるメールだ!それを打ち破るには十人の知り合いにそのメールを送らなければならない!」

「そ、そんな!!そんな誰かに押し付けるみたいな・・・」

「だがそうしなければ自分に襲いかかる・・・オレは知っている・・・あの暑い夏の日の事・・・俺の友人はその不幸を一人で背負い、そして・・・」

「そ、そして?(ゴクリ)・・・」

「ギャーーーーー!!!!!!」

「キャーーーーー!!!!!!(ビスツ!!)」

「ぐああああ!...!私の目が、目がああああ!...!」

フェイトが驚きのあまりわざわざ時風の眼鏡を取り払ってから攻撃した

フェイトを驚かせた自業自得というか何というか、時風が目を押さえてのたうち回る

「もう、騒いでないで、携帯選びましょ」

「え？でも不幸のメールが・・・」

「舜君の嘘だよ。多分楽しませようとしてたんだと思うけど・・・」
「フェイトとなのはが振り返ると、すずかがどこから持ってきたのか
細い木の枝で蒔風を突いていた」

「・・・あれ？そういえば舜って携帯持ってたよね？」

蒔風は各世界で知り合った者と写真を撮って携帯に収めている
最後の戦いの後にも写真を撮ったので、フェイトはそれを知っているのだ

そのフェイトの言葉に蒔風が起き上がって答える

「持つてるよ？まあ、こんなんだけど」

蒔風が携帯を取り出し、みんなに見せる
色は蒼。

正面にはソーラーパネルが付いている

「それで、その携帯に不幸のメールは？」

「来たことないな。一度も来てないよ」

「・・・（ビスマッシュ！）」

「目が！！！！」

なにもない状態の蒔風の目に再び襲いかかる衝撃

「で、どうするの？フェイトちゃん」

「えつと……」

蒔風を残し、携帯を見て回るフェイト達
ちよつど買い終わった頃には蒔風も回復していた

「じゃあ帰るね」

「うん、ばいばーい」

そう言って別れるのはたち
すずかとアリサはリズムジんで、他の四人は徒歩で帰ろうとする

と、そこで蒔風の目にある物が止まった

「すずか……その本は？」

「え？図書館で借りた本だよ？」

「ちよつと見せてくれ」

そうやって蒔風がその本を見せてもらっ
その本の内容に蒔風が目を見開き、手が震えだす

「すずか、この本を借りた図書館はどこだ？」

いた

「すみません！D - 45のシリーズって、どこにありますか？」

受付の女性に聞くと、親切に本棚のところまで案内してくれた。

そして先ほど蒔風が立っていた場所まで来て、女性が教えてくれた

「こちらがD - 45番ですよ」

「……………ありがとうございます……………」

「はい」

そう言っつて女性は受付に戻る

そこにあつたのは「the days」ではなかった

そこにあつたのはさつきは「D - 46」だった本があつた

番号が「D - 45」になっていた

つまり、このわずかな時間で「the days」の情報はこの世界から消えてしまった

「俺の世界が崩壊……………仕掛けてるからかな……………まだなくなつてはいないだろうけど、さ」

各世界を描いた物語

それらは確実に存在するものだ

作者と呼ばれる者たちは、その「物語」を感じとつて作品を作る

そして蒔風の世界は崩壊しかけている

つまり、発信する「物語」がないのだ。

いや、あつたとしてもそれだけの力が世界にはない

それを目の当たりにした蒔風は、図書館のベンチに倒れ込んだ

「キッツ……これはきついなあ……」

そう言つて目元を覆う

閉館のアナウンスが聞こえるが、蒔風は動かない

と、そこに声をかける一人の人物がいた

「どうしたん？気分でも悪いんか？」

蒔風が目をあけると、そこには車椅子に座った少女がいた

「……いや、なんでもないよ。ありがとう」

「ホンマに大丈夫？」

「大丈夫だよ。きみは……」

「うちは八神はやて。いつもは一緒に来てる人がおるんやけど、今日は一人や」

「俺は蒔風舜……ふう、いや、こんな辛気臭い顔しても始まらない……」

「どうしたん？落ち込んでたり元気になつたり」

と、そこに図書館員が閉館だから出てくたさいと言いに来たので、

二人ともそそくさと図書館から出た

「……………」

「……………」

「帰るか……………」

「うちも帰るわ……………」

そう言っつて車椅子を押し始めるはやて
キイキイという音だけが鳴る

「……………なあ」

「なんだい？」

はやてが蒔風に声をかけた

「足の事とか、聞かへんの？」

「特にはなあ……………そこを気にするわけでもないし……………あ、疲れ
たら言っつてくれ。押すよ」

「うん……………じゃあ頼むわ」

そう言っつて、蒔風が車椅子を押し

「うちの足な、原因不明の病気で、動かへんのや」

「原因不明？」

「あ、でも病院の先生とか一生懸命やし、いつかは絶対に治るって信じとるし!!」

そういうはやての足を、蒔風が見つめた

(何か足に停滞してそれが麻痺の原因になってる?・・・その何かってのはわからないけど・・・)

「どうしたん?」

「いや、なんでも」

そう言って交差点に差し掛かったはやてと蒔風

「俺ん家こつち」

「うちはこつちや」

そう言って逆方向を指さす二人

それに二人が同時に嘔き出し、苦笑した

「あははは!じゃあ、ここでお別れやな」

「だな。その脚、少しいいか?」

「ん?」

そう言って蒔風が右手に力を借りる

そしてはやての足に触れると、バキンと音がして何かが砕けた

「あれ？」

「あれ？」

二人同時にそう言って、はやてが口を開く

「少し軽くなった気がする・・・ありがとうな!!」

「あ、ああ・・・（溜まっていた「なにか」は消せたけど、大元が消せねえ・・・あれじゃまた溜まるだけだ・・・）」

それから少しだけ話して、お互いに手を振って家路に着く

そこから少しだけ離れ、はやてに声をかける人物が。

「はやて!!」

「あ、みんな!!どうしたん？」

「いえ、今から一緒に家に帰るところです」

「車椅子、押しますね」

「ありがとな、シャマル」

「はやて!。今日の晩御飯はー?」

「ヴィータはくいしん坊やなア。きょうはなあ・・・」

れから、二人には新しい機能を搭載したの」

「新しい・・・力？」

「そう、この子たちには「カードリッジシステム」が新しく搭載されているんだ」

「それって、あのシグナム達と同じ・・・」

「うん。主人の想いとか、信頼にこたえられなかったのが、よっぽど堪えたんだね・・・悔しかったんだよ」

「レイジングハート・・・」

「バルディッシュ・・・」

「ほうほう、それに対して抗するために彼ら自ら搭載してくれと頼んだの？」

《はい。私のマスターの敵わない相手ではなかったです》

《すべて我らの力不足ゆえに。だからこそ我々が主に見合う性能を持たなくては、と》

「やるなあ・・・お前ら、十分に騎士だよ。主人に仕え、忠義を尽くすってな」

《《ありがとうございます》》

「じゃあ次からはなのはたちも戦闘に？確かなのはのリンカーコアは・・・」

「もう大丈夫!!」

「うん。それだったら出てもらう事になるかもしれない。で、それに関する注意点があるの」

「はい」

「まずは二機とも共通の事項ね。それぞれに三つのモードが搭載されてるんだけど・・・」

エイミーが説明する

レイジングハートにはアクセル、バスター、エクセリオンモードが、バルディッシュにはアサルト、ハーケン、ザンバーモードが搭載された

どれも強力なモードだが、カードリッジシステム自体がまだあまり出回っておらず、普通は繊細なインテリジェントデバイスのレイジングハートやバルディッシュに着けるものではないらしい。

だから最初の二つのモードは大丈夫でも、最後の一つ、フルドライブと呼ばれるエクセリオンとザンバーはなるべく使わないこと

特にレイジングハートはフレーム強化がしつかりとするまで、絶対に使用禁止なのだそうだ

「それで、新しく生まれ変わった二人の名前は、「レイジングハート・エクセリオン」と「バルディッシュ・アサルト」だよ!!」

《私たちとしては今まで通りで構いませんが》

「まあ、正式名称はこうだ、って覚えときゃいいだろ?よかったな。

これで勝てる見込みが出てきたな」

「でも、まだこの形のデバイスは普及されてないから何が起ころか・
」

エイミイの心配そうな声に時風が返す

「大丈夫ですよ。彼女たちなら、使いこなすはずですよ」

「うっくん……無茶苦茶やって無理やり慣らすとかしそつで怖い
なあ……」

「……否定できない」

そうして夜が更けていく

戦闘準備は整った

これからが本番だ

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはA・S　〜日常と、崩壊の故郷〜（後書き）

アリス「今回ヴォルケンス全然出ない！！」

しかたありません

でも、次回からはある程度のオリジナル展開で行きます

ア「そしてだんだんと消えゆく蒔風の世界・・・ですか」

そうですね

崩壊してないと言っても、消えかかってはいますからね
すずかさんの持ってた本も、消えてしまったでしょう

ア「せつない・・・」

それが世界ですよ

ア「次回、戦闘と分岐点」

ではまた次回

ドライブ、イグニッション

なのはA・S　↳迫る戦いのときなの

なのはとフェイトが新たなデバイスを入手してから次の日

学校からまっすぐ帰ってきた蒔風はユーノ、クロノと話しこんでいたのはたちは学校帰りに何処かによってきているらしい

「なあクロノ。結局「闇の書」ってのはどういったプログラムなんだ？」

「と、言つと？」

「いや、そんだけすごい力を持つ魔導書ならさ、確かに悪いことにも使えそうだけど、言い事にも使えるかもなんだぜ？」

蒔風の言葉に、ユーノが賛同する

「そうだね。もし持ち主がいい人なら話せばわかってくれるかもしれない」

だが、その言葉にすぐにうなずかないクロノ

「そうは言い切れない・・・今回の「闇の書」の騎士たちは何かおかしい」

「おかしい？」

「ああ。騎士たちは本来外敵から主を守るために動くのであって、自分から動くことはしない」

「主に命令されたんじゃないの？」

「そうかもしれないけど・・・あともう一点。騎士たちが感情的すぎる」

「どづいつことだよ」

「前も言ったけど、彼らはプログラムだ。かつての事件で、彼らが感情的なものを見せたという記録はない」

「でも、なのはとフェイトは彼女たちにはつきりとした個性があるって言ってたよ？」

「そうだな。ヴィータもシグナムもザフィーラも、ハッキリとした感情で俺に向かってきたしね」

「それに最後の一人も時風を見て「悲鳴」を上げてたし」

「あんどきそんなに怖かった？」

「怖かったと思う」

「え〜〜〜？」

「だからこそ今回はハッキリとしたことは何も言えないんだ」

「でも、一体どんな風になるのかな」

「どんなふうによ？」

クロノがユーノの言葉に首をかしげる

「うん。そんな魔道書なら今までだって発動してきたんだろう？その時にどんな風になったのよって……」

「ああ……記録上、ろくなことになったことは一度もない。毎回破壊にしか使われていない。だから今回も……絶対とは言えないが、おそらくは……」

そこで少し顔を暗くするクロノ

そこでユーノだけに蒔風が念話で話しかける

『ユーノ……確かクロノのお父さんは……』

『え？……うん……うん……そうだったんだ……』

『謝ると余計に気を遣わせるから、言わない方がいいよ』

『うん……ごめん、クロノ』

届かぬ言葉で謝るユーノ

仕切りなおすかのように蒔風が会話を進める

「「闇の書」か……情報が少ないな。何かトリガーになる情報があればいくらでも流れ込んでくるんだけど……」

「「世界」が与える情報が……ユーノ、君に頼みたいことがある」

「何かな？」

「君には「無限書庫」で「闇の書」の情報を集めてほしい」

「無限書庫？」

蒔風の質問にクロノが答える

「無限書庫はありとあらゆる情報が、それこそ無限に貯蓄された書庫だよ。そこにならきつと闇の書の情報もあるはずだ」

「でも書庫なら普通に調べればいいんじゃない？わざわざユーノじゃなくても」

「いや、あそこはその貯蔵量の多さから、どこに何があるのかわからない状態だね……」

「おいおいおい……」

「でも、ユーノの持つ検索魔法なら、もしかしたら」

「あ、そっか。確か「スクライア」の部族は探索を生業にする部族だったな」

「そういうことなら任せてよ。絶対に見つける」

「よかった。そのための案内役も用意したかいがあるよ」

「なんだ。もう任せる気満々じゃないかよ」

「実はね。二人とも、入ってきてくれ」

クロノが声をかけると、奥の部屋から二人の女性が入ってきた。どうやらネコを素体とした使い魔のようで、頭からはネコ耳、後ろにはしっぽが見える。外見は同じで、双子のみたいだ。

「はあくいクロスケ。お久しぶりなのにそっけないぞ〜？」

「ロツテ！！いきなり抱きついてこないでくれ！！やめっ、頭をツ！！うわぁ！！」

「はあ・・・ロツテがいきなりすまないな。騒がしい奴だが、気にしないでくれ」

「アリア、そういうなら助けてくれ！！」

そしてクロノがいきなりやってきた二人に揉みくちやにされた

「んん？なんかおいしそうな子がいるね？」

「うー。。。ああっ！！もう！！話を聞いてくれないか！！」

そう言ってクロノがキレる

息を整えてから、クロノが紹介を始めた

「彼女たちはリーゼロッテ、リーゼアリアだ。今回、無限書庫での案内を務めてもらう」

「どうも」「よろしく」

「二人はグラム提督の使い魔なんだ」

「だったら結構やれるんじゃない？」

時風が二人に聞くが、手を振ってできないという二人

「あーだめだめ。こっちはこっちの仕事で忙しいから、案内したらそこまでだよ」

「そういうことです」

「じゃあ、君は早速向かってくれ」

「いまから!？」

「ああ、二人とも、頼む」

「はいはい」

「うわ!?!?ちよ、まっ……」

ガシツ!とユーノの両脇を掴んで連れていく二人
隣の部屋に入り、そこから転送ポートの明かりがポワ、と浮かんで、
三人は行ってしまった

「なんとも・・・勢いのある二人だな」

「あれでも僕の魔法戦闘の師匠だからね」

「まじで!?!」

「ああ」

そう言っつて蒔風とクロノが会話を止めたところで、玄関のチャイムが鳴る

フェイトとなのはが帰ってきたのだ

「「ただいま!」」

「はい、お帰りなさいな」

蒔風が出迎え、中に入れる

リビングに入り、クロノがユーノの事をなのはに説明した

「ユーノくん、調べ物に行ったんだ」

「そう。で、これからどうするかを話し合おう」

「騎士たち・・・ねえ・・・」

どうしようかと悩む二人に、なのはとフェイトがどうしたいかを言
った

「あ、あの・・・わたし、しっかりあの人たちとお話したいです
!！」

「私も。そのために必要なら、戦います」

その言葉の裏にどれだけの思考があったのか
だが、もうこの二人の魔法少女は心に決めたようだ

「ほほ。騎士たちを救うのかいな。いいねえ」

「舜君に教わったんだよ」

「救える者は根こそぎ救う、って」

「素晴らしいね。ありがとう」

そう言っつて計画を立てる蒔風たち

現状、彼らの足取りを捕らえることはそう難しくない
だが、対人に特化したその力には、足止めが聞かず、すぐに逃走さ
れてしまうのだ

さらにあのバックアップの女性の力で、あとを追うこともできない

「だから今回、あいつらを閉じ込めるために結界を張る」

「誰が？ユーノは調べもんでしょう。アルフだけじゃ・・・」

「いや、武装局員をグラム提督の口利きで借りることができた」

「なるほど・・・だったらオレも一つ手を打とう」

そこに蒔風も乗っかる

「・・・というわけなんだが」

「それは・・・イケるかも」

「クロノくん、舜君。あのヴィータって子とは、私が一人で戦う」

「私も、シグナムと一対一で」

「それはいいけど・・・勝てる?」

「「勝つよ」」

「なら問題ないな。結界はこっちに任せろ」

計画は整った

後は実行するまでのこと

.....
.....

海鳴市から少しだけ離れた都市の空中

そこに数十人の武装局員と、それに囲まれたヴィータとザフィーラがいた

「こいつら・・・やっぱり動きはばれていたようだな」

「関係えねえ。こいつらちよろいよ。ぶち抜いちまおう」

と、ヴィータが意気込んでグラーファイゼンを握りしめる
そこで、急に局員が離れて行ってしまった

「なに!？」

「ヴィータ、上だ!!」

ザフィーラの声にヴィータが上方を向く
そこにはデバイスを構えたクロノと、その周囲に浮く数百の魔力刃があつた

「ステインガープレイド・エクスキューションシフト!!」

クロノが号令をあげると、その魔力刃一つ一つに環状魔法陣が取り巻き、発射と同時に二人に標準を合わせ、一斉に降り注いだ!!!

「させん!!!」

ザフィーラが一步前に入る

そして腕を突き出し、目の前にバリアを張ってそれらを防いでいった
バキンバキンバキンドドドドドンッ！！！！！！

魔力刃がバリアに当たり、爆散する
だが、すべては防げなかったのか、三本がその腕に突き刺さっていた

「ザフィーラ！！」

「大丈夫だ。この程度では、効かん！」

バキン、と腕の筋肉を絞り、魔力刃を砕くザフィーラ
それを見つめるクロノ

そしてクロノが腕を上げると同時に、離れて言った武装局員の準備
が整い、すぐさまに結界が展開された。

「これは！？」

「俺たちを閉じ込めるつもりのようなのだ」

そう言って身構える二人

クロノがビルの屋上に降りる
そこには二人の魔法少女と一人の使い魔が

「二人とも、危なくなったら助けるからね?」

「うん、大丈夫」

「今度は・・・負けない!!」

「さあって、あたしもあいつに用があるしね!!」

そう言っただのは、フェイト、アルフが上空の二人を睨みつける

と、そこに結界を突き破ってシグナムが乱入してきた

「ふう・・・何とか誘導成功、だな」

時風がなのはたちの隣に着地する

どうやら結界の上部に立って、シグナムをおびき寄せていたらしい

「あとは、任せる」

「あと一人を探さなくちゃならないしね」

「うん。まかせて!!」

「行くっ、なのは!!」

「レイジングハート・エクセリオン・・・」
「バルディッシュ・アサルト・・・」

「セーリット、アップ！！！！」

そうして新たな相棒^{デバイス}を手に、二人の魔法少女が戦いを挑む

「この結界じゃ逃げらんねえ。それにあいつらのデバイス・・・」

「強化してきているようだな。油断するな」

「だが、我らにはなすべきことがある」

「「我が主のために、いかなるものでも打ち倒す！！！！」」

「僕たちは残りの一人、または主を探そう」

「おっけ。オレはこの作戦の関係上、あまりここから離れたくないから・・・」

「僕が外、君が中だな。ここからはどれくらいまで離れられる？」

「ざっと六十メートルくらい。それ以上離れると弱まっちゃう」

「わかった。じゃあ行こう」

「ああ。この事件を終わらせような」

「誰の悲劇も起こさないままに」

蒔風とクロノが腕を一回組んでその言葉を言い、離れて行った

各々の戦いが始まる

そして……

「ここまで大きく管理局が動くとは厄介だ……少し手を出そうか」

裏で蠢く陰謀、知略。

どうやら素直に解決されてはくれないようだ

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはA・S　↳迫る戦いのときの〜（後書き）

てつきり昨日が土曜だと思ってました、作者です

アリス「で、今日カラオケ行ってそこで気づいたんですね」

はい

フリータイムの時間表で恥かいた・・・

ア「今回はなんかいろいろと時間軸違っていましたね？」

そうです！

ユーノの無限書庫、リーゼたちの登場、市街戦の展開・・・

これはひとえに異物の混入が原因です

ア「「奴」とか蒔風ですね」

よく時間旅行とかで昔言われてた言葉「そこらの枝一本折っただけで歴史が変わるかも」というやつです

特に彼らが何をしたわけでもないけど、何かが少し変わったということですね

ア「でも変わらないものもある、と」

はい

ア「ってかそれって順番とか間違えた作者のミスでは？」

……否定しない

ア「うをおおい!!!」

だって前回書きあげてから

「やべ……ユーノ無限書庫に行かさなきや
って思いだしたしね!!」

ア「胸を張らないでください」

すみません

ア「最近お気に入り登録や読者も増えてきたのですから、もうちょよ
つとしっかりしてください」

そう!!

とてもうれしいのです私それが非常に!!

だからみなさん

ほら、この小説の下の方にある……おお、いいよ……手を伸
ばして……はあはあ

そうそう……いいねえ……その調子さ!!!

ア「それくらいにしないと運営に消されますよ、この小説!……!!」

しまったあ!!!

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……

ア「次回、戦闘、そして歪み」

ではまた次回

遥か^{そら}天空響^こいてる 祈りは奇跡に

なのはA・S　　く戦いの転機、狂気の叫びなのく

なのはとヴィータ、フェイトとシグナム、アルフとザフィーラが戦闘に入る

『まずは計画通りに引き離そう!!頼んだぞ三人とも!!』

『うん!!』

蒔風がどこかにいるかもしれない主、またはシャマルを探し出そうと走りながら念話を飛ばす

「お前らか・・・こないだ落としてやったのにまた来たのか?」

「今度は負けない!それに、今回はお話をしにきたの!!」

そういうなのはにヴィータがハンマーを向けて言った

「ベルカの諺にこう言うのがあんだよ。「和平の使者は槍を持たない」ってな!」

エッヘンどうだと胸を張って言ってやったヴィータに、なのはたちはきよとんとする

そんな三人にヴィータが意味の説明をした

「話し合いに武器持ってくるバカがいるかよ!!バーバーカ!!!!」

「ば、バカって・・・いきなり攻撃してきた子がそんなこと言うかな!?」

『何やってんだ!!早くしろ!!こっちの準備は終わってんだ!!』

蒔風の怒号が飛び、そこで一斉になのはたちが動き出す

「レイジングハート、カードリッジロード!!」

ガシャツコン!!!

なのはの言葉と共に、レイジングハートから葉莢が飛び出し、魔力が充填される

「アクセル・・・シューーーート!!!!!!」

ドバア!!!

レイジングハートの先端から十個ほどの魔力スフィアが打ち出され、その数と勢いに誰よりなのはが驚いた

(やっぱり凄い!!!少しやっただけでこれだけの数!!!)

そのスフィアがヴィータを取り巻き、檻のように閉じ込め動きを止

める

だがそんな状況でも、ヴィータは余裕そうだ。

「こんな数の球、制御できるわけねえだろ!!」

そう言いながらヴィータが小さな鉄球を四つ取り出し、グラーファイゼンで撃ち放つ

それらが赤い魔力を伴ってなのはに飛ぶ

だがその言葉になのはのデバイスが答える

この半年間、欠かすことなく彼女の成長を目の当たりにしてきたその相棒が、一切の迷いなく言い放った

《できます。私のマスターなら》

直後に起こったことが、この一言の証明となった

ひゅんひゅんと跳び回るなのはスフィアのうち四つが、ヴィータの放った鉄球を、的確に打ち砕いたのだ!!

「なにい!?!」

さらに残りのスフィアもギュオツ、と方向を転換し、一斉にヴィータに向かって行く。

ヴィータは瞬時にクリスタル状のバリアを張るが、幾度も幾度も衝突をしてくるスフィアが、そのバリアを削っていく

ビキイ!!!

「な!?!マジかよ!?!」

ついにそのバリアにひびが入る
もうもたないと判断したヴィータは、一瞬の隙間を見てバリアを解
き、スフィアの檻から抜け出した
大きく弧を描いて飛んでいくヴィータの後を、なのはのスフィアが
高速で追尾していく

だがヴィータも逃げてばかりではない
大きく回って、しっかりと背後にスフィアを連れて、なのはに向か
って突っ込んできた
なのはすれすれを通過していくヴィータ。

そこでヴィータがさらに飛びながらなのはの方に振り替える
なのはの元に後続のスフィアが迫る
あれだけの高速で、あの数。まず当たったとヴィータは思った

だがそれがむなしくも外れた
すべてのスフィアがなのはの身体から一センチにも満たない場所を
通過していき、先ほどとなんら変わらずヴィータに向かって来たのだ

「う、うわあああああ!!!!」

ドドドドドドーン!!

首を曲げて後ろを向いていたヴィータは逃げきれず、そのスフィア
が数個命中する
だがさすがに全弾命中とはいかず、いくつかはアイゼンで叩き落と
されたようだ

爆発が起き、その煙の中からヴィータが姿を現す

「…………お前!!名前なんてんだよ!!」

ヴィータがパンパンとスカートほこりを落としながら聞いてきたそれはきつと、相手の実力を認めた騎士の心得なのだろう

「高町、なのは!!」

なのはが元気よく答える

だがヴィータにはいささか言いにくかったようで

「た…高町、なんの…わっかにきい!!おい、なんとか!!」

「なんとかって…ちゃんと覚えてよ!!」

「うっさい!!もう手加減はしねえ。お前を対等の実力者として相手してやる!!!!」

「…………望む…ところだよ!!!!」

「行くぞ!!アイゼン!!!!」

《アイサー!ラケーテンフォーム!!!!》

ヴィータの掛け声とともに薬莢が排出され、ハンマーヘッドの片側に推進噴射口に、もう片方がスパイクに変形する

「うをおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

「主の盾となり守護するもの、「守護獣」だ!!!!!!」

「同じようなもんじゃなかよお!!」

ドッキヤア!!!!

アルフの攻撃が再びザフィーラに炸裂する

その攻撃をクロスした腕で受け、その体が倒れることなく地面を滑る

「俺はヴォルケンリッターが一人、蒼き狼・ザフィーラ!!!!!!この身が粉塵にまで砕かれようとも、主には一歩も近づかせん!!!!!!」

「だったらこういくことになってるのが主にさらに罪と着せるって考えてんのかい!!!!!!」

ドガア!!!!

主に仕え、その身を守ることに使命を燃やす二人が、その身に怒りの炎をともし動いていく

.....

ガキイ!!!!

バルディッシュとシグナムのデバイス・レバンティンはぶつかり合い、お互いに距離をとる

「強いですね、シグナム。それとレバンティン」

「ふ」

《それはどうも》

シグナムが強者を前に狂喜する戦士の笑みを浮かべ、賛辞を返す

「お前もな。それと、そのデバイスも・・・名はなんという?」

「フェイト・テストロツサと、バルディツシュ」

《ありがとう。以後お見知りおきを》

「あなたの目的を教えて!!手伝ってあげられるかもしれない!!話を聞きたいんだ!!」

フェイトのその叫びに、シグナムは諦めたような声を出す

「無理だ。我らはもはや相容れぬ場所に立っている。そんなことは不可能だ」

その言葉にフェイトはムカッ、ときた

そして、ああ、これがこの前に舜が思った怒りなんだ、と知った

「ヤダは墮落者のセリフ、無理は無能のセリフ!!やろうとすれば出来るのに、これを言う人はそういう人!!!!・・・なんだってさ!!!!!!」

「な・・・んだと!?!」

「どんな話でも聞くから!?!あなたの主なら、酷い人ではないと思う!?!だから、お願い!?!」

その言葉にシグナムが黙り、そして聞いてきた

「その言葉、誰の言葉だ」

「私の友達。私を・・・闇から連れ出してくれた人の言葉!?!」

シグナムは、そうか、と呟き、そしてそんな朋のいるフェイトを少し羨んで、それでもこう言った

「こんな状況でなければ、お前とは最高の友になれただろう」

そう言いながら武器を構えるシグナム

その眼には一切の迷いが無い

「だが、この身には為すべきことがある。心躍る戦いだ、それに没頭してもらえん。」

そこを退いてもらおうか・・・殺さずに済ます自信がない」

シグナムから殺気が噴き出す

一切の加減のない、相手の魂を切り裂く剣がレバンテインぎらりと光る
その眼光がフェイトを射抜き、双眸がギチリと引き上がる

だが、フェイト・テストロツサは退かない

結界の周囲を取り巻く武装局員に念話で号令をかける
そして彼女達の周囲に変化が起こった

なのは、ヴィータの周辺が何処かの世界の上空に塗りつぶされていく
どこまでも空が続き、雲が停滞している

フェイト、シグナムの周囲は広大な砂漠に変化した
照りつく太陽が、二人の身体をジリジリと焦がしていく

アルフとザフィーラの周囲にいたっては何処かの森が変わった
すがすがしい空気の漂う、美しい森が二人の周囲に展開された

「なっ!?!これは!?!」

「どういうことだ!?! 転移魔法!?!」

「『ヴィータ!シグナム!?!』 くっ、念話も通じんか!?!」

急に世界が変わり、三人が各世界でうろたえる

だが、それもすぐにやめた

なぜなら、眼前の敵がこれの原因であることは明らかだし、彼らを
倒す以外にこの世界から元の世界に戻ることはできないからだ

各世界での戦闘が始まる
それを眺める蒔風

「さって……こつちも探すかね……」

そう言つて蒔風が立ちあがり、そこでクロノから念話がかきた

『見つけた。結界の外だ』

『距離は？』

『三十メートルくらいだな』

『だったらオレも向かう』

そう言つて結界から抜けだし、クロノの元へと向かう蒔風
その姿はすぐに見つけた

クロノがデバイスをヴォルケンス最後の一人の後頭部に向け、投降
を促している

「これでいい あとは制圧するだけ……！！！！！！」

そこで蒔風がクロノに向かって大声を上げる

「クロノ！！！！左だ！！！！！！」

その声に反応しクロノが左を見る。

すると右側から突如として蹴りが飛んで来て、その体をビルのフェ
ンスまで吹っ飛ばした

だが衝突はせず、蒔風がキャッチして受け止めた

「クロノ!!!す、すまねえ!!!えつと・・・右だ右!!!」

ビルの屋上に着地し、クロノを下ろす蒔風

バツギキャ!!!!!!

「僕側から言わないとわからないだろ!!!なんであの状況で自分中心なんだバカ!!!」

その蒔風の頭をデバイスで殴りつけるクロノ
蒔風が殴られた頭をさすりながら謝っている

「んで、あんた誰よ」

そう言つて蒔風が睨みつけたのは仮面をかぶった男だ
急に現れたその男は、まるで騎士の女性を助けるかのようにクロノを排除しにかかってきた

「お前たちはそこから動くな」

質問には答えず、それだけ言つた男は女性の方に向いていった

「闇の書の魔力を使え。そうすればあの結界を崩せるはずだ」

「え!?!で、でも・・・」

「失ったページはまた蒐集すればいい。今仲間を失つてはその闇の

書も・・・」

そう言っつて発破をかける男に、クロノと蒔風が止めに入る

「そんなことさせると思っつてか？」

「たとえ闇の書が復活しても、主以外は使えない！！君のやっていくことは無意味だ！！おとなしく投稿しろ！！」

その二人の言葉に、やっと耳を貸す気になったのか、仮面の男がこちらを向いた

「やれやれ・・・いずれわかる。我々の行動が正しかったとな」

「何を言っつてるんだ？こいつ」

「・・・さあ・・・」

そう言っつて顔をかしげる蒔風とクロノ
その表情は余裕だ

それもそうだろう

相手は明らかに戦闘タイプではないバックアップ担当の騎士の女性に、戦闘力の高い男が一人
対してこちらはAAA+ランクの執務官魔導師と、世界最強を自負する少年だ

だが、それを相手にしても仮面の男の態度は崩れない

「・・・いいのか？こんなところで私ばかり見ていて」

闘が繰り広げられていたのだろう

両者とも身体から血を滴らせており、体力も限界に近い

(ここにきて……なお速くなるか、テストロッサ。目で追えない攻撃が出てきた……長引くのは……まずいな)

(強い……近接戦闘クロスレンジも中距離戦闘ミドルレンジも圧倒されっぱなし……スピードで引つ掻きまわしている今はいいけど……これ以上時間をかけるのは……舜、クロノ、まだなの?)

互いに互いを牽制し合い、構えたままビシリと動かなくなる
どう動くかを目で追っていく

さらに相手の目の動きを見て、自分の動きを上書きしていく

砂が流れて、一瞬だけ静かになって、そして……

「うああああああ!!!!」

「はああああああ!!!!」

両者共に飛び出し、剣を振るう

その剣が火花を散らしてぶつかり合う!!!!

が、

「ガッ!?ハッ!?!」

それよりも早く、フェイトの身体を貫いた物があつた

それは左腕だ

空間魔法で歪められたフェイトの体内を、先ほどまで蒔風の目の前にいた仮面の男の左腕が貫いていた。

そしてその腕の先にはフェイトの金色に輝くリンカーコアが握られている

「貴様あ!?!?!」

シグナムが激しく激昂する

二人だけの勝負に、異物が乱入し、戦いを穢されたのだ。騎士として、そして武人として、シグナムの全細胞が怒りに震えていた

だが仮面の男はそんなことは気にもしない

「こつやって奪われる・・・世界最強もなんてことはないな」

そう言うってからシグナムに一瞥する男

不意打ちとはいえ、自分と同等か、それ以上の実力であるフェイトを沈めた男に、シグナムが身構える。

だが仮面の男は遠くに何をするわけでもない

空間が固まった

男の悲鳴が響き渡る

そして時風が鮮血に彩られて、瓦礫の中から出てきた。男はその場に置き去りにされている。

時風の顔はもはや狂気に満ちていた。いや、これもまた彼の顔の一つだ。

すべてを理解する彼は、狂気ですらもその身に宿す。最高の理性に、最凶の狂気。

その二つを持つてすべてを理解する彼の、黒い部分がまさにこれだ。もし彼と「奴」の立場が逆なら、おそらくこの姿になっていただろう。

そしてその姿にシグナムは戦慄した。

恐怖が体を駆ける

全身の肌がざわつく

すべての髪の毛が逆立った

コレハホントウニシヨウガクサンネンセイノシヨウネンナノカ？

コレハアノトキケイカイニワライナガラワタシタチトタカッタシ
ヨウネンナノカ？

そのとき、シグナムの脳裏にあるフレーズが響いた

《救世主にして破滅の者》

すなわち

「翼……人……」

今なら信じられる

この少年は間違いなく伝説の通りの人間だ

いかなる概念にもカテゴライズされない、たった一人の存在
すべてを理解するものであり、誰にも理解はされない少年

その少年の後ろで、男が死にかけの声で言った。

「私に……ダメ……を与えても……駄だ……」

そう言つて男の姿が消えた。

「ど、どこへいった!?!」

シグナムがその姿を探し始めるが、もはや影も形もない
そんなシグナムに、少年が声をかける

「なあ……ちつとつき合ってくれねえか?」

「……なに?」

「あノバ鹿のせいでのーミ噂わいちまいソウなんだヨ……」

蒔風がギチギチと話す

その眼には、必死になって狂気を抑え込み、一歩手前で止まっているのがうかがえた

「だカラちヨツと憂サ晴らしニ付き合ッテモラウぞ……！」

「くっ……！！ああああああああああああああああ……！」

「……………」

「あははははははははははははははははははははははは……！」

「……………」

シグナムが蒔風に突っ込んでいく

そこで蒔風が感情を抑え込むのをやめた

バトルマニア
戦闘狂と狂戦士

タイプの違う、戦いに狂うものが衝突した

……………

蒔風とシグナムが衝突したとき、クロノは自分の目の前の事象に目を疑った

砂埃でよく見えなかったが、確実に時風によって戦闘不能にされていた仮面の男が、無事な身体で目の前に現れたからだ。それを証明するかのように、その手にはフェイトのリンカーコアがあった。

「これも使え。それで結界を破壊し、仲間を連れて逃げる」

「ど、どうして・・・」

シヤマルの疑問に、男は答えない

だが、その顔は仮面に隠されていても、確固たる意志が存在した

「させるか！！」

クロノがそれを止めようとするが、身体にバインドを掛けられ、その場に倒れてしまう

「こちらもあれだけやられたのだ。やり返さねば気が済むまい？」

そう言う男を、クロノが睨みつけた

一体この男は何者なのか
時風に潰されても無事な身体、これだけの距離の瞬間移動、そして
クロノをしのぐ戦闘力

ここから物語は加速する

魔法少女の戦いは、ここからが転機

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはA・S　　の戦いの転機、狂気の叫びなの（後書き）

アリス「やってくれましたね仮面の男！　時風があんなにキレちゃって……」

時風にはプレシアを救いきれなかったことがありましたからねそのせいで……プツンと

ア「でも、原作知ってる人は一発でわかりますよね、あのトリック
いわないでね!!

ア「それと戦闘シーン追加ですね」

はい

第七話の戦闘シーンをこっちに混ぜました
こうしないともう出せないの

ア「と、なると?」

ここからがオリジナル展開になるのかなあ……
自信ないなあ……

ア「がんばりましょうよ。次回、結界の破壊!？」

ではまた次回

強装型の捕獲結果・・・。ウィータ達は閉じ込められたか。

W l e n s i e A k t i o n (行動の選択を)

レヴァンティン、お前の主は、ここで引くような騎士だったか？

N e i n (否)

そうだレヴァンティン。私は今までも、ずっとそうして来た！

なのはA・S　くやっとお話しができるの

（クソツ！なんつーバカ魔力・・・それにこの精密制御・・・やっばつええ！！！）

大空の世界でヴィータがなのはと交戦を初めて五分ここにきてのなのはに抱いた感想はそれだった

強い

ただそれだけの事実が、ヴィータをこの世界に捉えて離さない

「さあ！！お話、聞かせてもらっからね！！！」

「まだ負けてねーよ！！！」

そのヴィータだが、すでに疲れが現れてきている
無理もない。

なのははあくまで「ヴィータを疲れさせてから話を聞く」が達成できればそれで勝ち
だがヴィータは勝ったうえに逃走、下手をすると他の仲間も助けに
いかなばならない
しかしこのどこまでも広がる青い空では、どう逃げようともなのは
の視界に映ってしまう

（こいつは明らかに砲撃タイプの魔導師だ。無理ににげようとして
離れたらその瞬間に撃ち抜かれちまう・・・）

故にヴィータは勝つしかないのだ
ここから逃げ出すためにはそれしかない
だが、それは容易ではない

ヴィータは距離をとつての戦闘が不得意だ
大抵の魔導師相手なら砲撃ごとぶっ叩いて粉碎するだけだが、なのは
クラスだとそうもいかない

だからヴィータは考えを改めた
そしてヴィータはなのはに声を飛ばした

「おい!!高町なんとか!!」

「なのはだよ!!」

「なのはは!!」

「な・の・は!!!!」

「うつせえ!!・・・確かにオメーは強い。それだけは認めてやる
!だけど!!お前がどんなに強くても、あたし達にはやらなきゃな
らないことがあるんだよ!!!!」

(あたしたちは闇の書を完成させなきゃならねんだ・・・つ
つても、最近なんか変な感じしてんだけどな・・・)

「だから!!それを話してって言うてるの!!」

ドゥッ!!!!

なのはが再びアクセルシューターを放つ
シューターがそれを横に避けるが、大きくカーブしてシューターに再度
迫ってくる

前にしたように、後ろにスフィアを連れてなのはに飛んでいくシュー
ター

だが、今回とつた行動は違った

なのはすれすれに通過し、素通りしてそのまま逃走を図ったのだ
このまま出はギリ貧になる
ならば、とシューターは多少のダメージは無視してもここから離脱す
ることを選択した

「ッ!？」

なのははその行為に驚きながらも、自分にスフィアが当たたらぬよう
に制御する
だがそうなることはすでに知っているシューターは、振り返らずに飛
び去ってゆく

だがいかんせんスフィアの方が早い
一発、二発と当たっていくと、スピードは落ちたが、確実に距離は
稼いでいった

(制御できるからって、そのまま戦えるわけがねえ・・・だったら
その間に逃げてやる!..!)

最後に三発同時にヴィータに命中し爆発したが、まだ落ちてはいない
片腕を抱えてはいるが、まだ戦闘自体は続行可能だ

(よっしゃ!!勝った!!あとはこのまま……)

逃げよう、というヴィータの思考が固まる
なぜならば、感じとったからだ

(なんだ……これ……いや、知ってる……これは砲撃魔導師
に狙われた感覚!!だけどっ!!)

バツ!!とヴィータが後ろの方に振り替える
そこには自分にデバイスを向け、その鋭い眼光ですでに自分を捉え
たのはがいた
だが距離はかなり離れている

もし撃てるのならば、長距離なんてもんじゃない……それは、超
々度距離砲!!!!

「な……こんな距離であたしを捉えて命中させるなんてそんなこ
と……」

そこでヴィータがハッ!!と気付いた
たしかこの少女は、まさかと思うようなことをやってのける
まさか……まさか、まさか!!!!

「！！！」

その砲撃の衝撃波にさらされながらも、ヴィータは必死になってその砲撃を身体を捻り、回転し、地面を転がるかのように避けることに成功した

ドゴオオオオオオオ！！！！！！

後方で砲撃が爆発し、その爆風でヴィータはなのはの方に近づいていって、戻ってしまっ

なのはとの距離は目測で百メートルくらいか

「チツ！！なんてやるーだ……」

「お話、聞かせてもらっよう！！！」

なのはがデバイスを向け、ヴィータに宣告する

それにしてもこの少女、なんとも恐ろしい「お話」をするものである

(どーする……このままじゃ捕まっちゃう………あれ?)

と、そこでヴィータがふと気づき、後ろの方を振り向いた。

そこはディバインバスターが爆発した地点で、もうすでにそこに爆炎はなかったが、ヴィータはそこを見つめて思った

(確かあの砲撃は直線型……はずれたらエネルギーが切れるまで

どこまでも飛んでいくはずだ・・・だったら・・・

あれはいつたい何にぶつかって爆発したんだ？)

その考えに至ったヴィータは、すぐさまに思いついたことを実行したその手に魔力を込めた、バスケットボールくらいの大きさの球を作り出す

なのはが身構えるが、ヴィータはそれを撃ってくることはしなかったから、なのはは急なその攻撃に対処することはできない

その行動とはまさしく、ヴィータがその球を、ハンマーで打ち砕いたことである！！

球が割れ、中から膨大な光と音が噴出される

衝撃はないが、そのあまりの光と音の暴力に、なのはが若干落ちる

だが術者であるヴィータには何の影響もない

その隙にヴィータがとった行動はまさしくこの世界、否、この空間からの脱出の手がかりを見つけることだ。

そして、見つけた

空間の一部

雲の漂うそこが、ほんのわずかだが歪むのを視認したのだ

「アイゼン!!!」

《アイサー!!!》

ヴィータが特別でかい鉄球をそこに叩きこむ

相手のバリアや砲撃をぶち壊すことに特化したヴィータの攻撃に、

その空間が割れた

青空は消え、元の夜の闇が戻ってきた

後ろのビルの屋上に、なのはのディバインバスターが当たった跡が
しっかりと残っていた

「よっしやああああ!!!」

「ああっ!!!」

ヴィータがガッツポーズをとり、なのはが項垂れる

そう、彼女たちはいたのは幻影の中だった

だが、幻影と言ってもただそんじょそこらにあるものではない

説明すると、実際の幻影は武装局員たちの物だ
だが、それだけでは飛び回られると抜け出られてしまうし、足場が
急になくなったり、あったりするところが出てしまう

そこで蒔風が補助をしていたのだ

結界の中には四角形になるように各「龍虎雀武」が、三角形になる
ように各「獅子天麟」が突き立てられている

蒔風がしたのは陣を敷き、幻影をある特定化に固定すること
言ってしまうえば、幻影の中の人物を中心に幻影の範囲が移動する、
というものだ

だからどこまで飛んでも幻影を突き抜けることはないし、足場もあ
るところにしかない

だが、強度自体は武装局員のみ物だ

蒔風は幻影などのそういった類は得意としない

せいぜいが防壁を張ったり、少しの傷をいやしたりすることだ

そういったことを真に得意とするのは「賢者」や「聖人」のタイプ
の人間だ

ヴィータの幻影が破られたことで、他の幻影も解除されていってしま
う

地上にはアルフと取っ組みあうザフィーラの姿が確認された

だが、すぐに合点がいった

ビルの屋上に倒れているフェイトを見つけたからだ
だが、フェイトが負けたくらいじゃあそこまで怒る時風ではないと
いうのも知っている

おそらく……

「誰かが……戦いに乱入したんだと思う」

「だれかって……だれだよ!!!」

『仮面の男だ』

そこにクロノの念話が入る

『クロノ君!!!』

『いきなり現れたこいつが、フェイトのリンカーコアを非道なやり
口で奪ったんだ!!!畜生!!!』

「そん……な……」

「おい!!!何があつたんだよ!!!」

ヴィータがなのはに説明を求めるが、それよりも早く結界外のシヤ
マルから念話が入った

『みんな!!!今から結界を壊すから、その隙ににげて!!!』

結界の外でシャマルが叫ぶ
傍らには仮面の男、そして少し離れてバインドされているクロノが
いる

「闇の書よ・・・守護者、シャマルが命じます。眼下の敵を打ち砕
く力を・・・今、ここに!!」

闇の書のページが次々と消失していく

それに伴い、その中心にとんでもない量の魔力が蓄積される

そしてそれは稲妻のように天空へ昇り、周囲の雲を巻きこんでいく

「やめろ!!ここら辺一体を吹き飛ばす気が!!!!」

「大丈夫です・・・街は壊しません。中の魔導師も、適切な方法を
とれば回避できます」

シャマルが弁解する

彼女自身だって、これが言い訳にすぎないことはわかっている
だが、今の彼女にはこれしか方法がないのだ

「それでいい」

そう言い残して男は消えた

だが、クロノのバインドは解かれることがない

「結界だけ破壊して・・・撃つて、破壊の雷!!!!!!」

バガア！！！！

結界が破壊され、雷が地面に向かって突き進む
だが、それが地面に到達することはない

蒔風の二つの陣と、二つの剣による防壁に阻まれているからだ
地面からドーム状に展開されたバリアが雷の進行を拒む
四神、三獣の力はもちろんのこと、防御に特化した「林」の力は、
闇の書のページを半分埋めた魔力をもつても破られることはな
い！！！！

「ぎいいいっひっひっひっひっひっひひ！！！！いいねえいいねえ、
サイコオだねえ！！！！やりがいのあるケンカ相手だクソツタレえ！
！！！！」

それに驚愕したのはシャマルはもちろんのこと、ザフィーラとヴィ
ータ、さらにはなのはたちである

あの雷がどれほどの魔力量で生成されているかは一瞬で分かる。
ヴォルケンスなどは闇の書のその威力は知っている。
だからこそ驚愕した

あれを受け止められる人間が、存在していたのだろうか、と
事実、蒔風は人間の域を越えた存在なのだが

「おおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！！」

「そ、そんな……これでも破れないだなんて!!!!!!」

シヤマルの顔が青くなる

仮面の男が差し出したフェイトのリンカーコアは、もうすでに使っ
てしまっている

それでも、蒔風のバリアは破られない

「こ、このままじゃ……ページが!!!!!!」

次々と消失していく闇の書のページ

そしてついに最後のページまで消えてしまった

雷が消える

蒔風のバリアは黒く焦げながらも、依然としてそこに存在し続けて
いる

パキン

そこでクロノがついにバインドを崩した
だがシヤマルはそれには意を示さない
目の前の光景に、衝撃を受けるばかりだ

「な……なんで……」

そんなシャマルにデバイスを向けることなく、クロノが言った

「いいから、大人しく投降するんだ。あれを見ただろう？あれからは逃げられないよ」

「・・・わかり・・・ました」

そう言って闇の書をしまい、投降するシャマル
そこに通信が入る

どうやら、結界内でも各騎士は投降したようだ
無理もない

彼らのリーダー「烈火の将」シグナムが敗れ、さらにあれだけの力
を見せつけられては、抵抗するだけ無駄という結論に至った

- - - - -
- - - - -

「おいつす！！俺、スッキリ！！！」

ツルン、とした顔をして、時風がみんなの前に来た

ちなみにここはフェイトの自宅、現地本部のリビングだ
シグナム達は特に大きな枷はさせられておらず、簡単な手錠をかけ
られただけだ

「ごめんなさい、まだ痛いところないか？あつたら言ってくれ。本当にごめん。あんなにつきあわせちまって……」

そう言つてシグナムに頭を下げる時風

「あれは……仕方のないことだ……」

「そう言つてもらえると助かるけど……」

時風がシグナムにもう一度頭を下げ、着席した

「さて、君たちの話を聞きたい。まず……一応名前を」

クロノに促され、皆自己紹介をしていく

「烈火の将・シグナム」

「紅の鉄騎くれない・ヴィータだ」

「蒼き狼・ザフィーラ」

「風の癒し手・シャマルです」

「よろしく」

「あ、ああ……」

握手を求めるのは達に困惑しながらも、自己紹介を終えた

「やっと名前が知れたよ……え？シャマル？」

シャマルの自己紹介に、蒔風が反応した

シャ 先生監修料理教室

シャ (ポーン)

シャマル？(ピーン)

シャマル!!(ピンポーン)

「あんたかあああああああ!!!!!!!!!!」

「きゃあ!？な、何がですか!？」

「なあ……この人の料理、どんなだ？」

そう残りの三人に蒔風が訊くと、三人はそろって視線を逸らし、何も言わなくなった

「なんで!？なんでみんな何も言わないの!？何か言ってよ!!！」

「やっぱりか……」

「ち、違いますもん！！私、料理下手じゃないもん！！！」

（）（）（）（下手なんだな）（）（）

この瞬間、皆の想いが一つになった

「ま……まあ、それは置いていて」（置いてかないで〜）

「闇の書を完成させようとした理由、教えてもらいたい」

「……わかった。話そう……」

シグナムが口を開いて話し始めた

それは幸せな、そして残酷な話だった

彼らの主は、まだ小さな少女だ

彼女の誕生日に闇の書が反応し、ヴォルケンリッターは彼女の前に姿を現した

この魔法文化のない世界の住人の少女は、シグナムからの説明に戸

惑いながらも、最後にはこう言ってくれた

「じゃあ、今からみんなうちの家族や!!」

これには騎士たちも驚いた

自分たちはプログラムだ。闇の書と主を守るためにだけ存在している、言わば道具。

今までも多くの主に仕えてきた。

そのどれも力におぼれ、強欲で、彼らの事など一切考えもしないような人間たちだった

だが、そんな彼らに彼女は「家族」だと言ってくれた

自分たちのために服を買ってくれた

自分たちのために生活用具をそろえてくれた

そして何より、自分たちのために笑ってくれた

自分たちを意志ある「ヒト」だと認めてくれた

初めての経験だった

そして、それは騎士たちの欠けていた何かを埋めていった

闇の書の蒐集に関しても主は

「それは人様の迷惑になるからダメ。このままのんびりみんなで暮らしていこな?」

と、言っただけを許すことはなかった

シグナムはある日聞いた

貴女に望む物はないのですか？と

それに少女はこう答えたのだ

「望むもんはもう手に入ってもうた。こんな素敵な家族がおるのに、これ以上何を望むんや？」

少女には家族がいなかった

両親は早くして他界

今は父親の知り合いという親切な「おじさん」が、財産管理や資金援助をしていてくれるだけなのだそうだ

故に、彼女が望むものは「家族」だった

そんな当たり前の風景を、少女は何よりも求め、そして手に入れることができた

これ以上望むものなんて、あるのだろうか

もう一人でご飯を食べなくてもいい

もう一人で寝なくてもいい

もう一人で買い物に行かなくてもいい

それは幸せだった

今はみんなでお話ししながらご飯を食べられる

今は一緒に寝てくれる人がいる
今は今晚の料理を話し合いながら買い物ができる

そしてその幸せな生活に、騎士たちも確実に変わっていった

すさんだ想いは穏やかに

乾いた心は潤い

つり上がり、いつもキツイ表情だった顔はいつの間にか笑顔になっていた

帰れば幸せになれる場所がある

笑顔でお帰りと言ってくれる人がいる

いつでも主の笑顔が出迎えてくれる

ああ・・・自分たちはもうあんな戦いの日々には戻らなくてもいい・・・

今のこの幸せを守っていこう

この主こそ、我らの求めた・・・

だが、この世界はかくも残酷なものなのか
少女の身体は蝕まれていた

未完成である闇の書の膨大な力に、少女の身体が耐えられないのだ
少女の健康どころか、まともな生命活動すらをも阻害する、呪いの
プログラム

このままではいずれ少女の全身を浸食し、死に至らしめてしまう

これを防ぐにはたった一つしか方法はなかった

闇の書を完成・安定させ、主に流れ込む負の魔力を浄化する

そのために騎士たちは決意した

今この幸せを守るために、一体何を惜しむことがあるうか

あの主のために、自分たちはいくらでも、どんなことでもして見せよう

そのためには主の命にも逆らおう

だが、その罪は我らだけのもの。決して主に知られてはならぬ。

その名を穢さぬために、決してに命を奪ってはならぬ。

彼らは本物の騎士だった

闇の書に選定されし王に使える、莊嚴たる騎士たちだった

そうして今日に至る

その話を聞き、クロノが次の質問をした

「その子の……名前は？」

「……………」

シグナムをはじめ、四人の口が閉ざされる

「大丈夫だよ。絶対に変なことはしない。なに、闇の書を調べて、その欠陥をどうにかすればいいんだろ？」

「……………そうだが……信じていいのか？」

シグナムが疑いの目をクロノに向ける

それは仕方のないことだ
クロノもそれを理解しているが、それを打ち破る言葉を持っていない

と、そこで時風が口を出した

「あなた達の願い……それはすばらしい物だ。一つ聞こう。どんな罰でも受ける覚悟が？」

「ある」

その返答はシグナム一人からのものだったが、それは四人の意志だった

「では、主が事実を知ったとき、主にすべての事を任せられるか？」

「それは……………」

「自分にも罪があると言ったとき、共に贖罪する覚悟はあるか？」

「……………だが、この事件の主犯は」

「確かにあなた達だ。だけどそれで、はいそうですかと思捨てるよ
うな主じゃないんだろう?」

シグナムたちは考えた

そうだ。

主はそのような人物ではない

むしろ、自分が罰を受けるから見逃してくれというようなお方だ

もしそれを拒んだら、それは主の誇りを穢すことになる

それならば、主と共にその罪を清算していこう

王と共に、歩き続けよう……

「わかった……言おう」

「そうか……ありがとう」

「だが、あとでお前の話も聞かせてもらおう」

「俺の?……ああ……わかった」

「……われらの主、その名は……」八神はやて「」

「なに?」

「え?はやてちゃん!??」

「その名前って……」

なのはとフェイト、時風が驚きの声を出す
それにクロノも驚き、聞いた

「二人とも、知ってるのかい？」

「俺はこないだ図書館で会った」

「私はすずかちゃんのお友達ってことで……写真でしか見たこと
ないけど……」

「うん。私も聞いたよ。すずかのお友達で、八神はやてって子がい
るって……」

「二人とも、すずかちゃんの友達だったんですか……」

「シヤマル、お前知ってるのか？」

「もう、忘れちゃったんですか？はやてちゃんのお友達の、月村す
ずかちゃん！」

「おー、いたなそんなの。はやての友達の友達だったのか」

ヴォルケン組はヴォルケン組で驚いていた

「んじゃ、行くかうか」

「え？どこに？」

「はやての家にさ。善は急げだ。今はいるよな？」

「ええ・・・あ、闇の書どうしよう・・・」

「あなたが持っていててもかまわないよ」

「クロノ？いいのか？」

闇の書を持つシャマルに、クロノが許可し、蒔風が訊いた

「ああいいんだ。彼女たちにもう戦闘の意志はない。だったら、持っていててもかまわないだろう？」

「おまえ・・・ほんっとーに、丸くなったなあ・・・」

「誰の影響だと思ってんのさ。さ、いこう」

そうしてヴォルケنز、なのは、フェイト、クロノに蒔風の八人が八神家へと向かう

そこで何が待ち受けているのか・・・

この物語はレールを外れた
だが、向かう先は同じであることを、
まだ誰も知らない

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはA・S　くやっとお話しができるの〜（後書き）

アリス「オリジナル展開ですね。もう捕まっちゃったんですか!？」

ええ

だってあの結界で時風がいるんですよ？
逃げられるわけじゃないじゃないですか

ア「それはそうですけど・・・どうするんですか？」

大丈夫です

なんとか最後までつなげましたから

ああ、あとヴィータがなのはに砲撃されたとき
あれ別バージョン考えてました

ア「どんなですか？」

えっと・・・

前略

「な・・・こんな距離であたしを捉えて命中させるなんてそんなこ
と・・・」

そこでヴィータがハッ!と気付いた

この考え方・・・まるで漫画のやられキャラ!!!

我ら守護騎士、あなたとの誓いを、一度だけ破ります
我らの不義理、お許しください！

なのはA・S　く奪われたまゝ

はやて宅に到着した一向

なのはたちは家の外に待機し、先にヴォルケンズから中に入って、
事の顛末を説明しに行った

「闇の書・・・呪いのプログラムか・・・・・・・・」

「主にその気がなくても、強制的に集めざるを得ない状況に追い込
む・・・」

「ひどい・・・ね」

「うん・・・」

家の前でなのはたちは闇の書に関して話し合っていた

「とりあえずはやての身柄を確保してから、管理局の病院で検査だ
ね」

「だけど・・・そんな簡単に行くのかな・・・」

「なあに、俺がまだこの世界にいれる時間は結構あるからな。その
点は大丈夫だ」

「どづいづこと？」

「俺は他の世界の仲間の力を借りられてね。ほら、俺がやってる変身とかがそれだよ」

「え？じゃあれは舜の力じゃないの？」

「違う違う。で、だ。その中のうちの一つに「イマジンプレイカー幻想殺し」ってのがある」

「いまじんぶれいかー？」

「簡単に言ってしまうと、魔法とかそういう「異能の力」を打ち消すものなんだ。だから、前にはやてに会った時も、それで触ったら負の魔力が消えたんだよ」

「じゃあ、それで闇の書に触れば？」

「いいや、そう簡単な話じゃないんだ」

「え？」

「この力は問答無用で消してしまうもので、制御ができない。闇の書とはやてのつながりは表面ではなくもつと深遠なところにある。闇の書をうまく分解して、その核を見つけて触れたとしよう。だがその時消えるのはその悪意あるプログラムだけなのか、ということだ」

「もしかして・・・ヴィータちゃん達も？」

「・・・消えるかもしれん。彼女たち自身に触っても問題はないだろうが、その核に触っては闇の書とはやての契約自体が切れてしまふかもしれない。そうなると闇の書は・・・」

「おそらくはやてが死んだと勘違いし、新たな転生先に飛ぶだろう。それでは意味がない」

「その通り。だから慎重に検査して、いらなるところだけ消すんだ」

「大変だね・・・」

「はやての症状の進行は抑えられるから、まあーーー気長に行けば」

ドオオオオン!!!!!!!!!!

「「「「!?!?」「」「」

その瞬間、家の二階の窓ガラスが爆発し、そこからあの仮面の男が飛び出してきた

その腕には二つの物を抱えている

「あいつッ!!!!!!」

「はやてちゃん!?!?」

「闇の書までパクリやがった!!!!!!」

その言葉の通り、男の腕には気絶したはやてと、闇の書が抱えられていた

「貴様！！その子をどうするつもりだ！！！！」

クロノがとつさに結界を張り、周囲から見えないように一体を覆ってから、仮面の男に叫んだ

「お前たちにはもう任せておけない。闇の書とその主は私が預かる。なに、ちゃんと蒐集はしてやるから安心しろ」

ヒュン、ヒュンヒュン！！

そこまで発言した男を、騎士甲冑に身を包んだシグナム、ヴィータ、ザフィーラが取り囲んだ

「貴様ぁ・・・テストロツサを不意打ちしただけでなく、我らが主にこのような仕打ちを！！！！！！」

「ぜってえ許さねえ！！はやてを返せ！！！！」

「さもなけば、後悔することになるぞ！！！！」

三人が激昂する

玄関からヨロリとシャマルが出てきた

なのはたちの方に歩いてきてから、そこでパタリと倒れてしまった

「シャルルさん！……！」

「い、ごめんなさい……闇の書と……はやてちゃんが……！」

「気にすんな……」

そう言っつて肩を叩いてその場に座らせる時風

「フェイト、クロノ、シャルルを頼むよ」

「うん」

「時風、気をつけるよ」

「は！どーってこたアねえ。またボコすだけだ」

「わ、私も行く！！レイジングハート！！」

《セットアップ》

なのはがバリアジャケットを着込み飛び、時風は家の屋根の上にジャンプした

「てめえ……闇の書が完成したところでお前には使えない……！それがわかってんのか？」

「私の目的は闇の書の完成だ。その使用ではない」

男が淡々と言う

その言葉にヴィータがさらに激昂した

「そんなことはどーでもいい！はやてから手を離せ！！」

男に向かってアイゼンを振るうヴィータ
だが

バシィ！！！！

そのグラーファイゼンの動きが止まる

見ると、アイゼンの先端にバインドが巻き付いていた
それが伸びて、ヴィータを簀巻き状態にする

バシバシィ！！！！

さらにザフィーラとシグナムの身体にも巻き付き、束縛する

「お前らはまだだ。来るべき時になればお前らも……」

「くっ！！！！おおおお！！！！」

「はやてええええええ！！！！」

「やぶっ、れん！！！！」

三人が空中で身動きが取れなくなるが、まだこの少年がいる

「その子をお・・・離せや!!!」

蒔風が男に飛びかかっていく

その速度、方向、タイミング、すべてをとって完璧だったこれなら確実にはやてと闇の書を取り返せる、と思われた

ドドッ、ドドッ、ドドッ!!!!!!

ガアルアアアアアアアアアア!!!!!!!!!

バゴオア!!!!!!

そこに、漆黒の体躯を持つ巨大な獣が現れた
三つの首に二振りのしっぽ

「ケルベロス!!!!!!まさか・・・てめえ「奴」と繋がってるのか!!!」

蒔風が男に訊くが、どうやら男も困惑しているようだ
と、いうことは

「なるほどな・・・」「奴」の独断か・・・全員こいつに手を出すな!!!こいつは!!!!!!」

ヒュオオッ！！！！

ドゴア！！！！

蒔風の身体がケルベロスの前足に弾かれ、地面に落ちる
地面を碎き、ゆうに百メートルはその後を残して蒔風が吹っ飛ばされた

「ゴああああ……ゴ、の……開翼！！！！（ドバア！！）」

頭を振って立ち上がりながら開翼する蒔風に、一瞬で接近したケルベロスの爪が襲いかかる

それを前回りでかわし、ケルベロスの後方に向かってジャンプする蒔風

それを反転して追うケルベロスに、桜色の砲撃が命中した

「舜君！！！！」

「手え出すな！！お前はその仮面ヤローを！！ッ、グオア！！！！」

言葉の途中で蒔風にケルベロスの肩がぶち当たり、蒔風が住宅を二、三吹き飛ばしながら飛ばされていく

なのはが苦い顔をしながら、仮面の男に向かう

蒔風も心配だが、はやての事は今どうにかしなければならぬ

「はやてちゃんを、返してもらいます！！！」

「断る。どうやらあの犬はこちらを逃がすためにいるようなのでな。ありがたく逃れさせてもらおう」

「さっせません！！」

なのはが男に向かう

だが、男は幻影や砲撃でなのはを翻弄してその姿を掴ませない

なのはは善戦するが、先ほどの戦いの後だ

どうやっても掴み来ることはできず、ついにはバインドで体を縛られてしまう

そしてついに男は逃走してしまった

その光景を見ていたフェイトが身を乗り出そうとする
だが、その腕をクロノが掴んで止めた

「フェイト！！何をしに行くんだ！！君はリンカーコアを奪われたばかりだ！！魔法どころか、立って歩くのだって本当はいいことじゃないんだぞ！！」

「で、でも……このままじゃ……」

「わかってる。助けに行きたいのは僕も同じだ。だけど、僕まであ

『はあ・・・まだ「闇の書」の真の名も知らないのか』

「なに？それはいつたい・・・」

『今確かユーノ君が無限書庫で調べ物してんだろ？だったら時機にわかるさ』

「お前・・・この世界の「原典」を・・・」

『知ってるさあ！！お前は忘れちゃったみたいだけどな』

「ならば・・・このあとどうなると言うんだ！！！！」

『それは言えないよ。そもそも、俺やお前が介入した時点ですでに歪んでるし』

「まさか貴様・・・もうすでに構築の計算が・・・」

『いや、まだ50%程度だ。だが、最後に「あれ」があるなら、結構役に立つしね』

「いくらお前でも闇の書は扱えないぞ。それに、計算してるんだろ？こんなんしてていいのかよ」

『今は休憩中さ。この会話も、ケルの中に埋め込んだ俺の力で交信してるし』

「どおりで・・・強いわけだ！！！！」

ドバガア！！！！

蒔風の正拳が空中でケルベロスの胴体を横から殴り飛ばす

ケルベロスの身体がぐらりと揺れるが、そのまま回転して後ろ足で蒔風を蹴り飛ばす

だが、蒔風はそれを真っ向から受け止めて、ケルベロスの動くを止める

しかしその爪はズツプリとその体に食い込んでおり、さらに先ほどのダメージも相まって、蒔風の視界がぼやけてきた

そのまま握り潰してしまおうとするが、短い腕ではまわしきれず、それもかなわない

(畜生……この体じゃあ……)

荒い呼吸を一瞬だけ深く貯め込み、ケルベロスを受け放つ蒔風

ケルベロスが空中で止まり、まるでそこに大地があるかのように四本の足で立つ

蒔風とケルベロスの視線が交差し、その瞬間に二人が動いた

ケルベロスの三つの口砲に焰が溜まり、まず左の首が火球を撃ってきた

左が撃ち、また溜めてるあいだに中央の首がうち、さらに右の首が撃つ

そうして間に左の口が装填し終わり、再び火球を撃ってくる

それはまるで鉄砲隊の様に、絶え間なく撃ち続けられる火球の嵐

それを蒔風がすべて弾かんと行動した

獅子天麟を「麒麟」と「獅子天」に分けて、それぞれ左右の手に持つ

そして最初の火球を「獅子天」の上薙ぎで弾く

次に来たのを「麒麟」で横に薙ぎ、回転しての後ろ蹴りで次を

そのまま回し蹴りで弾いた後にその脚を切りかえして踵で弾き、さらに「獅子天」振り下ろして地面に落とす

そういつた行動を何十発と繰り返し、蒔風に一直線に飛んでいく火球は、蒔風に到達した瞬間、花火の様に四方八方に飛んでいく

そして痺れを切らしたのか、ケルベロスは三首同時に火球を溜めこみ、それを飲み込んだ

すると、ケルベロスの身体が焔に包まれる

その姿はまさに「地獄の番犬」

冥界の神よりその任を任された三つ首の黒犬

ならば、その身に焔をともしようともしたら不思議なことはない！！！！

ケルベロスが猛烈な勢いで蒔風に突進してくる

蒔風はそれを見、獅子天麟を鞘に収め、腰に帯刀する「火」に手を伸ばす

荒い呼吸を沈め、目を閉じる

五感を研ぎ澄まし、ケルベロスの迫る音だけを聞いていた

そしてケルベロスが時風に到達する二十メートルほどのところで

シュカン・・・・・・・・

という音が静かに響いた

ケルベロスの身体が途中で凍ったように固まる

時風が口を開く

「・・・・・・・・一閃・・・・・・・・それは「一瞬の「閃」光のごとき斬撃。

ゆえにこの一閃に冠する名は在らず。

なぜなら・・・・・・・・これが「一閃」の極地だからだ

ただ、「一閃」それだけでいい

鎌鼬切演武・単撃・・・・・・・・「一閃」

パカァ・・・・・・・・

と、ケルベロスの身体が横に真つ二つに裂けた
斬った瞬間など見えなかった。
斬られた感触もまた、なかっただろう

それは最初からそういう形であったかのようには、それが当然の形であるかのようには、二つに分かれていった
さらにその後方の雲が綺麗に斬られている
上空では風は吹き荒れているにもかかわらず、斬られた後に雲が混じることはなかった

ケルベロスの身体が消えていく
蒔風が翼をしまい、地面に落ちていった

「舜君!!!!!!」

「舜!!!!!!」

なのはが叫び、クロノがバリアを解いて蒔風に駆け寄った

「大丈夫か!？」

「はやては・・・どうした」

「・・・連れていかれた・・・闇の書と一緒にだ」

「チク・・・シヨオオオオオオ!!!!!!」

蒔風の叫びが響いた

少し離れたところで、ついにバインドが解かれたヴォルケンリッタ
ーやなのはも、悔しさに顔を歪ませ、その眼には涙が溜まっていた

この世界は素晴らしい

主人公はまっすぐで、敵ですらも美しい想いの持ち主だ

友達のため、娘への愛情、主への忠誠、もう悲劇を起こさせないと
いう決意

ただ、この世界はあまりにも美しく
そしてその純粹な想いゆえに、どこまでも残酷だった

t o b e c o n t i n u e d

なのはA・S　く奪われたまゝ（後書き）

アリス「仮面の男エ……」

と、言う風になりました

ア「まだまだ終わりそうにないですね」

ええ。

「奴」も少しかかわってきましたしね

ここからががんばりどころです

もう一度「A・S」見直しておこうかな

ア「もう説明しなくても？」

……あ、忘れてた

鎌鼬切演武はすべて斬撃を飛ばすものです
剣でできることもありますが、鎌鼬との二重の斬撃で切りつけます

ア「だから離れた雲も切れてたんですね」

そゆこと

ア「次回、主なき生活」

ではまた次回

傷つくたびに 優しくなれる
君のその笑顔だけ守り抜きたい
願いは一つ

世界、覚醒、翼人、「奴」

それらの話を聞いて、皆一様に驚いたが、ある意味納得できる内容だった

シグナムが蒔風に問う

「では・・・お前は翼人なのだな？」

「その通り。つつても、あんたがたの知ってる人とは違うけどな」

「お前は他の翼人を知ってんのか？」

「オレのほかに二人、確認しているな。どちらも素晴らしい奴だよ」

そして話題は仮面の男に移る

「いま仮面の男は失われた闇の書のページ集めに奔走しているはずだよ」

「シャマル、あの結界の時にどれだけ使ったんだ」

「・・・全部」

「「「はあ!?!」」」

「ありっただけ使ったのよ!?!」

「でもこれは好機だ。あの野郎の足取りも掴みやすくなる」

「いや、使わせ切らした奴が言うなよな……」

「だが、「奴」が加担してると言うことは、その力も使われていると思う」

蒔風が顎に手を当てて考え始める

「さらに俺の力も使われたと思うから……」

その言葉にクロノが待ったをかける

「待ってくれ。君、蒐集されたのか？」

その問いにその場の全員が蒔風に視線を向ける

「いや、だけど間違いないと思うよ？ケルベロスとやり合ったときあいつの爪が体内に食いこんでな。その時に力を持ってかれたんだ。だから最後には技能一発の技で仕留めるしかなかったんだよ」

「それで、どれほどページは埋まったと思う？」

そうだなあ、と蒔風が視線を泳がせて考える

「なのはの三分の二で確か33ページ……だから……奴がオレと同じ分分け与えたとして……ざっと二人合わせて400ページは埋まったかな」

「「「「「400う!?」「」「」「」」」」」

「魔力にするとな。それに結構水増ししてだからな。オレの力は魔力じゃないが、魔力に変換するとそれぐらいってこと。オレの能力は燃費悪いからなあ」

「と、なると残りは266ページ……」

「あいつら……一体どう動くつもりだ？」

「闇の書完成前にはやてが浸食されて死んだらそれまでだから……あとどれくらい持ちそうだったんだ？はやての身体は」

「あのおとき見たら……あと……ひと月は……もしかしたら、もっと短いかも……」

「ひと月か……なあ……そういえば、はやてには蒐集の事とか伝えられたのか？」

その言葉にシグナムが唇をかみ、ザフィーラが答えた

「いや。お伝えする直前に、あの男が来たのだ。「盾の守護獣」が……聞いてあきれな……」

「落ち込むなって」

そこでクロノが立ち、今後の方針を伝えた

「では、これより我々アースラは八神はやての保護と、仮面の男の

追跡を最重要任務とする！！はやての居場所は、わからないんだよね？」

「ああ・・・闇の書でつながってるから無事なのはわかるけど、それ以外はわかんねー」

「あの・・・クロノ。シグナムさんたちはこれから・・・」

フェイトが心配そうにクロノに訊いた

そんなフェイトを見て、クロノがほほ笑んだ

「大丈夫だ。今彼らがここにいることは、ここにいるみんなと、母さんとエイミイ、ユーノしか知らない」

その言葉に、みんなが目を丸くする

「クロノ、お前なんか変なもん食べたか？」

「クロノ君、どうしちゃったの!？」

「クロノ、熱があるんじゃない？」

時風なのはフェイトの順で次々とクロノの身体をベタベタ触り、異常がないか確認し始めた

「なにもないっ！というか、僕がこういうことをするのがそんなにおかしいか!？」

その言葉に3人が同時にうなづく

「クロノはもつと報告とか真面目にしてるかと・・・」

「クロノ君ってルール順守な人ってイメージがあるから・・・」

「クロノはもつとお固くて、融通の利かない子だと思ってましたっ
！！！！（バシィ！！！！）なんで俺だけ!？」

「失礼だぞ君たち！僕だつて報告すべきか悩んだけど、これが彼ら
的にも一番いいと考えたんだ!！」

「確かに、このまま管理局に行け、と言われたらこの場から脱走し
て主を探し始めてた自身があるッ!！」

「確かにそうだけど・・・シグナム、ちょっとテンション高くねえ
?」

「何を言っている!!この状況で、落ち着いてなどいられるか!!
!主はやてがいまどのような状況に置かれているか・・・できる
ことなら今すぐにも・・・っ」

「ああ。だからこちらと連携がとれるようにした方がいいと思っ
たんだ。それに、今ここから離れる、なんてことは・・・言えない
よ」

「クロノ君・・・」

「クロノ・・・」

「クロちゃん・・・」

その場には帰還したフェイトとシグナム、待機中のなのはとヴィータ、隣の部屋にはシャマルとザフィーラがいた

本来ならば一番取り乱しそうな彼らだが、時風が必要以上に荒立たせているために、逆に冷静になれている

「男の所在がわからねえ・・・あいつらどこにいるんだ!!」

そこでなのはが口を開く

「ねえ、闇の書がこのまま完成してもいいんじゃない？」

「え？」

「だってそれではやてちゃんが治るんでしょ？」

「あ・・・確かに・・・いや待って待って、下手の場所で完成してみる。あの男に何されっかわかったもんじゃねえ」

「そっか・・・」

「「奴」、とかいう輩の事も気になるしな」

はあ・・・とみなが一樣にため息をつく
本当にどうしようか・・・

「……なあ……闇の書って……本当にこんなもんだっ
つけ」

ふと、ヴィータが言葉を漏らす
それにシグナムが返答した

「何を言っているヴィータ。魔力を蒐集し、完成させることで主に
絶対の力を与える。それが闇の書だ」

「確かにそうだけどよぉ……何か忘れてる気がすんだよ……」
「忘れてる？」

「ああ……なんか違うんだ……本当にこれで幸せになれるのか
なって……でも……でもよぉ……はやてが死んじゃうなん
て、あたし嫌だよぉ……」

「ヴィータ……そのようなことは我々がさせん。そうだろう？」

「ああ、ああ！そうだ、あたしたちが守るんだ……はやてを……
また、はやてに笑ってもらって……ご飯食べて……」

ヴィータが涙ぐみ、シグナムが慰める
その姿に、蒔風たちも心が痛む

ヴィーヴィーヴィー

そこにアラームが鳴り、仮面の男の居場所があらわされる
それにシグナムとヴィータが立ちあがった

「今度は逃がさん!!!!」

「ぜってーぶつ潰す!!!!」

「私も行こう」

「私も行きます!!」

隣の部屋から二人も出てきた
ヴォルケンスは皆行く気のようなだ

『だったら僕が付いていこう』

「クロノ!!」

そこにモニターが現れ、クロノを映し出していた

『現地で合流だ。行こう!!』

「「「「おう!!!!」」」」

4人が飛び出していき、部屋が少しだけ広くなった
と、それと入れ違いに他の人物が部屋に入ってきた

「3人とも!!」

「「「「ユーノ(君)!!!!」」」」

入ってきたユーノはソファに座ってからこう切り出した

「闇の書の情報が集まったよ」

「本当!？」

「どんな？」

「ああ……ひどい……話じゃ」

ユーノが話し始めた

闇の書

それは後世に起こったその陰惨な事件からつけられた別の名である

その魔導書の真の名は「夜天の書」

本来の目的は、偉大な魔法、魔導師の知識などを蒐集し、研究するためのものだった

そのための転生、そのための旅する魔導書だった
素晴らしく、そして優れた技術を失わせないために

だが、いつかの世代の主の一人が、夜天の書のプログラムを改変してしまった。

ただ、自らの願いのためだけに使おうとしたためだ

そこに集められた莫大な力、技術、知識。

それらを自由に、自らの欲望のままに行使しようとした結果である。

だが、それはうまくいくはずもなかった

相手は古代に創られし遺産、ロストロギア「夜天の書」

そのために旅をする機能と、自動修復の機能が暴走してしまったのだ
永遠に続く転生と、無限再生はそのためのものだった

さらには持ち主が蒐集しなかった場合、持ち主の身体を侵食し始めるのだ

「今のはやてちゃんがその状態なんだね……」

「でも、完成さえさせれば」

「いや、そもいかないんだ」

ユートの話は続く

魔導書を完成させたとする

だが、そこに待っているのはさらなる悲劇と惨状だけ。

完成したらその書は持ち主の魔力を際限なく使わせるのだ

ただ、無差別破壊の力のみ

これが「夜天の書」が「闇の書」と呼ばれるようになった所以だから、今までの主も皆、その死に抗い、完成と同時に自らの意志を消され、ただ破壊の力となってしまった

「そんな・・・」

「じゃあ、完成させても無駄じゃねえか・・・」

「どつするの？ユーノ！」

完成前での闇の書の封印はまず無理だ
魔導書を完成させた、真の主でなければ、システムに干渉できないからだ

つまり、闇の書を破壊や封印するには、未完成な状態ではだめなのだ
だが、完成させると主の意志は消され、荒れ狂う破壊の嵐となる

無理に外部から介入すると、主を吸収して、転生して逃げてしまう
機能まである

「と、いうことなんだ・・・だから、闇の書の永久封印は、事実上不可能と言われているんだ」

「・・・・・・・・」

「ヴィータちゃんと言ったのはそういうことだったんだ・・・」

「確か幻影に気付いたのもヴィータだったな。なかなか鋭い」

「でも・・・どうするの？」

「たしかに・・・元のプログラムに書き換えられるのははやてだけだ・・・・・・・・」

「でも、完成させないと接触できないし、完成したらはやてちゃんは飲み込まれちゃう・・・」

「・・・・・・・・あの男はこのことを知ってんのか？」

「そういえば・・・・・・・・」

「今の情報だと、封印できんのは完成直後ぐらいだ」

「そう・・・なるかな。暴走状態になった瞬間にどうにかするしか・・・・・・・・」

「確かあいつ、「いずれわかる。我々の行動が正しかったとな」って言ってたけど・・・・・・・・」

その言葉にユーノがまさか……と言葉を漏らした

「仮面の男の目的は……闇の書の封印？」

「だったら説明がつく。シャマルの援護、はやての誘拐、完成の手助け……」

「でも、その状態で封印したら！」

「間違いなくはやてごと封印になる……しかしどうやるつもりだ……よほど大きな組織でない限り、あれを封印する物なんかできないぞ」

「それに、そんなものが作れるような組織なら、闇の書の力を得ようとするはず……」

「でも、ユーノ凄いよ。よくここまで調べたね」

フェイトがユーノに称賛を贈る

「いや、あの無限書庫は凄いよ。調べれば知りたいことはちゃんと出てくるし」

「すげえ……あれだけの蔵書をよく調べたな」

「今度ゆっくり整理しに来ないかって、無限書庫の司書の人に呼ばれちゃったよ」

「おおー」

「でも、大変だったよ。リーゼさんたちは途中任務で出かけちゃうし、ロツテさんなんか、大怪我してきちゃって」

「大丈夫なのか？」

「うん。頭に包帯巻いて、右腕を吊っていたけど、全然大丈夫だつて」

「……よかった」

「バタン！！！！」

そこで玄関が勢いよく開き、シグナムたちがクロノと共に帰ってくる

「また逃げられた！！！！」

「シグナム！ちょうどいい。今ちょうどユーノが」

「それよりも！！！！あの男から贈り物だ……一体何が映ってるのか……くそっ」

そうやってシグナムがクロノの持つ物を指さす
クロノの手には1枚のカードがあった
おそらく映像がその中に収められているだろう

それをモニターに写し、みんなで見る

「ユーノ、資料は集まったのか？」

「うん。あとで話すよ」

「そうか。こっちも気になったことがある」

ぼそぼそとクロノとユーノが小声で話していると、モニターに映像が映った

そこには車椅子で眠り続ける八神はやてと、仮面の男がいた

乱れた物語はここから再び軌道に乗る
そして変わらぬ結末へとなだれ込むのだ

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはA・S ～闇の書の真実～（後書き）

アリス「説明回ですね」

そうなっちゃいますよそりゃあ
だって

ユーノは説明した

アニメ8話をよろしく

なんて書けませんよ

ア「それはそうですね。それにしてもここからどう動くのか」

どうやって原作に戻そうかな・・・

あれらは彼らが後越えるべきものだから、なるべく変えたくないし・
・

ア「がんばれ作者」

はいな

そうそう、なのはA・Sになってから一気に1日のPV、ユニーク
数が上がりましたよ

ア「なのはだからでしょうね」

なのはだからねえ・・・

もうこれだけ書いてようかな・・・

ア「ころころころ。そうですね・・・毎日更新してるから、三日ぐらいほっとかれて一気に読む人がいるんじゃないですか？」

それはあんまりだあ~~~~~!!!!!!

ア「次回、仮面の男の宣告」

ではまた次回

悪魔め・・・!

悪魔で・・・いいよ。

悪魔らしいやり方で話を聞いてもらおうから。

なのはA・S　〜悪魔の正義〜

映像が再生される

そこは何処かの病室のようだ

その部屋に車椅子に座ったはやてと、その傍らに立つ仮面の男がいた

『やあ、管理局諸君。そして守護騎士の四人。そちらにいる「世界最強」と、「異世界の協力者」のおかげで、多くのページが集まり、闇の書はもう完成する』

男が闇の書のページをパラパララ・・・と流して捲っていき、その状態を見せる

『故に君たちから彼女を預かる意味もない。最近症状もひどくなってきたいてね。今この病院に預けているのだよ』

『ああ気にするな。ここは君たちもよく知っている病院だ。八神はやての主治医がいる方がいいと思ってるね』

「海鳴・・・大学病院か!!」

「まで!!まだ行くな!!」

飛びだそうとするシグナムを時風が腕を掴んで止める

「まだ最後まで見るんだ。いまさら居場所を教えたということはあそこからは動かない。違うか？」

そう言われてはシグナムも止まるしかない
モニターに再び目を向ける

『さて・・・さっきも言った通り、八神はやての容体が悪化してね。まあ、私としては完成間近だから問題はないんだが』

『もう諸君は気づいてるかな？我々の目的は闇の書の完全封印だ。未完成状態での封印は転生してしまって無意味なので、一旦完成させる必要があった』

『だが、もうその段階は過ぎた。これから彼女は闇の書と共に永遠ともいえる眠りにつく』

『その前に別れの言葉でも送らせてやってもよいと、我らが主人の言葉だ』

『闇の書の主に言葉を伝えたくば、来い。我らはその場にはおらん。最後の時間を過ごすといい』

そこで最後にカメラがはやてにズームする
彼女は眠っているようだが、表情は苦しそうだ

「みんな・・・どこにおるん・・・ヴィータ・・・シグナム・・・
シヤマル、ザファイラ・・・」

それは寝言だったが、なによりも彼女の精神状態を表していた
そしてカメラが戻されて

『では・・・悲劇の「闇の書」ここに眠らんことを』

ガタガタとカメラが傾き、最後に男とは別の人影が映ってから、映
像が終わる

ザーーーーー・・・・・・・・・・・・・・・・

モニターには砂嵐が映し出され、もうこれ以上はないことを表して
いた

「おい……最後にちよつと映ったの……見たか？」

「ああ……お前にも見えたか、ヴィータ」

「私にも……見えたわ」

「同じく……」

ヴォルケンスが静かに立ち上がる

どうやら、映像の最後に映っていた「誰か」に反応しているようだ

「最後に映ってた「人影」……よく見えなかったけどよ……
あの服、管理局おほえらの制服じゃねえのか？」

ヴィータの言葉がその場の蒔風たちを糾弾するように響いた

「そうか……我らは騙されていたということか……闇の書の封印……確かに、その可能性を考えなかった我らが愚かだった！！
！」

「おまえら、少しはいい奴らだと思ったのに！！あたしたちをだましてたんだな！！！！！！」

「違う！！俺たちは！！！！！」

「黙れ！！！！！！！！！！もはや信用ならん！！！！！！！！このまま主を封印させてなるものか……」

完成さえすれば、主は救われるのだ！！！！主はやてを救いに行くぞ！！！！！！

ヴィータ、シャマル、ザフィーラ！！！！！！！！！！」

「「「おう！！！！！！！！！！」

「待つ……」

ドロン！！！！！！！！！！

マンションの一室から爆発が起き、騎士甲冑を纏った四つの人影が飛び出していった
そしてその後を一つの影が追っていく

それを確認し、シグナムがその人影を食い止める

『シグナムツ!?!』

『先に行け!!!こいつは私が食い止める!!!』

『わ、わかった!!!』

ヴィータ達が病院の方に飛んでいく

それを見た人影、時風がシグナムに訊く

「お前!!!本当に俺たちがそんな奴らに見えんのかよ!?!冷静に考えてくれ!!!あれは・・・」

「もはや・・・なにも信じられん!!!お前たちがそうでないとも思っているが、もしかしたらとも思っている!!!そんな輩と、一緒にはいられない!!!」

ガキイ!!!

シグナムが時風を押し返し、開翼した時風が宙に立つ

「・・・いくら翼人でも・・・今の私を止めることなどできないぞ」

「止めるんじゃない。助けるんだ!!!」

「う……うおおおおおおああああああ!!!」

「ああああああああああああ!!!」

シグナムが涙を流しながら斬りかかってくる

蒔風がそれを「風林火山」で受け止める

すでに組み立てされており、「風林」「火山」が両手に握られている

と、マンションの駐車場から、一台の車とバイクが飛び出していった

車の方にはなのはが乗って、運転しているのは人型の白虎だ

バイクにはフェイトが後ろに乗り、同じく朱雀がハンドルを握る

そのなのとはフェイトに蒔風が念話で交信する

『お前ら!!! すすかとアリサを拾ってけ!!!』

『え!? すすかちゃん達を!?!』

『どっしってっ』

『お前たちが病院に言っても、はやては魔法のこと知ってるし、相手がお前らじゃ戦闘になっちまうのが落ちだ!!!』

ただどすずかの友達って言って病室に先に入っちまえば、あいつらもいきなり戦闘はしない・・・はずだ!!!」

『はずって!?!』

『こつちもいきなりなんだ!!今頃ヴィータ達の方には獅子天麟ズが追いついてるはずだ!!時間は稼ぐから、早くしろ!!!』

『わ、わかった!?!』

『朱雀!!白虎!!お前ら、急げよ!?!』

『おっけー!?!』

『了解!?!』

そこでもう一度シグナムと時風は離れ、お互いを見据える

「病院名を言うべきではなかったな」

「・・・どうやらヴィータ達も足止めされているようだ・・・だが、我らヴォルケンリッター、主の元へといかねばならんだ!?!」

「だから!?!一旦体勢を立て直して!?!それに闇の書は・・・」

「そんなことはどうでもいい!?!!!!!主が・・・今!?!この瞬間にも我らの名を呼んでいるかも知れんだ!?!!!我らを最も必

要としてくれているあのお方が！！涙をこぼして枕を濡らし、そばにいてくれと我らの名前を呼んでいるのだぞ！！！！たとえこの先にどんな障害があろうとも、我らは行かねば・・・行かなければならないんだ！！！！！！」

「ッ・・・シグナム・・・」

「そのためにはたとえ翼人であろうとも！！我らは貴様を・・・殺してでも押し除ける！！もはや我らには、主以外に、本当に心を預けられる物はないんだ！！！！！！主の笑顔のためならば、貴様を切つて捨てる覚悟すらある。騎士の誇りだつて捨ててやる！！！！レバンティン！！！！！！」

《ダンケ！！！！Schlangeform！！！！》

ガシャア！！！！

レバンティンの刃が分裂し、どこまでも伸びていく
鞭状連結刃の形態となったレバンティン・シュランゲフォルムが
時風とシグナムを急退場に覆いつくす

「なに！？ぐおっ！？」

時風の背中が熱くなって、そこに手を伸ばすとヌルリと血がこびりついていた

「蒔風舜！！！そこをどいて……貰おうかアアアあああああ
！！！！！！」

シグナムが柄を引く

すると、蒔風の周囲の連結刃が絞り込まれて、蒔風を簀巻きにする

「ぐおおおお！？これは……」

刃一つ一つが蒔風の身体に抉りこんでいく

その隙間から血が滴り落ちて、地面へと落ちていった

「はあああああ！！！！」

シグナムがさらに柄を引く

ジャリ……ギヤリリリリリリ！！！！

ズバア！！！！！！

「……が……ふっ……」

蒔風に巻き付いた連結刃が一気に引かれ、その肌を切り刻んだ
血しぶきが弾け、シグナムの頬に少しだけ撥ねる

レバンティンを通常の状態に戻し、シグナムが蒔風を見つめた

最初の斬撃が横一列に高く設置され、その下にまた一列、一列と連なり、巨大な「斬撃の壁」となってシグナムに襲いかかる！！

「鎌鼬切演武・四季早々！！夏、津波いあああ！！！！！！」

時風の津波がシグナムに殺到する
それをよけるでもなく受け止めるでもなく、シグナムのつた行動とは

「レバンティン！！！！」

《ダンケ！！カートリッジロード！！！！》

ガシユウガシユウガシユウ！！！！

レバンティンを鞘に収め、カートリッジをロード、魔力を圧縮しだした

「飛龍・・・一閃！！！！！！！！」

そしてそれを抜き放つ

ゴゴウ！！！！！！

シグナムのその剣撃をとつさに「火」を抜いて、半分鞘に入った状態で受け止める蒔風
だが、レバンティンの剣身に焰がともり、それが爆発し、蒔風を地面に吹き飛ばしていく

ドオっ！！ヒュオオオオオオオオ・・・ドゴン！！！！

蒔風が落ちた先は小さな林だ

それを確認したシグナムはヴィータ達を追って飛んで行ってしまった

「ぐお・・・いつてえ・・・」

「大丈夫か、主！！」

蒔風は地面には直撃していなかった

手元に残っていた青龍と玄武が人型に顕現し、受け止めてくれたのだ

「それにしても古代ベルカの騎士、侮れん」

「ああ、主をここまでやるとはな」

「ばっか野郎。今回はあれだ。行かせてやったんだよ。まだ負けてねえよ」

ふ、と蒔風の心情がわかって笑う青龍

そして玄武が訊いた

「では、儂らの負けはなんでしょうかな？」

「おまえら・・・わかってんだろ？」

「」「救える物を、根こそぎ救えなかったとき」「」

「獅子天麟はどうだ？」

「どうやら突破されたようだの。ようやる」

その報告を聞いて蒔風が息を噴き出す

「ふー。行くぞ。まだタイムアップじゃねえ」

「は」「御意に」

蒔風がヨロリと立ちあがって足を進める
病院までは、少し遠かった

・ 「畜生が・・・今日がなんの日だか知ってんのか・・・今日は・・・

クリスマススイブだぞ!!!」

「言つなヴィータ。もはや何も信じられんのだ。我らは孤立している。「もしかしたら」ということに惑わされては……………」

そういつてたしなめるシグナムも悔しそうに唇をかんだ
あの二人の少女は本気で主を心配してくれている
それはここから見てもはつきりとわかった

しかし、シグナムの脳裏にいくつもの可能性が現れていく

もし、あれがすべて演技だったら？

もし、あれが自分たちをおびき寄せるためのものだったら？

もし、彼女たちも闇の書の封印を望んでいて、主もろとも……………

そうではないと信じたい

だが、その考えを「ない」と断言できないのもまた事実

それができない自分が、シグナムたちは何より悔しく、己を恥じた

「すべてはあの男が悪いんだ……………こんな変なことになったのも、
全部……………全部……！」

が、そこに四人とは別の声が響く

「悪いのは闇の書だ。その呪いのプログラムで、一体いくつの命が消えていったと思っっている」

バツ！！！！と四人が振り返る

病院から少し離れたビルの屋上に、あの仮面の男が立っていた

「ツツツッ！！！！！！」

四人が言葉もなく飛び出して屋上に降り、男を包囲する

「貴様ぁ……………」

「ほう……管理局の人間は一緒じゃないのか。まさか、映像の最後に映っていたあの影が理由でか？」

「お前……分かってやってやがったのか！！！！」

「この場に管理局員に來られると厄介だからな」

「き……さまぁぁぁぁぁぁ！！！！」

シグナムが激昂し、レバンティンの刃に魔力を乗せ、それで形成した斬撃を飛ばした。

反対側にいた三人は、とっさにそれをかわし、シグナムの方へと寄る。

斬撃は男の方へと向かい、爆発し、男から後方の屋上部分すべてを火の海に変え、灼熱の世界へと変える。

だが、その炎の中にゆらりと人影が映り、男は一切の傷なく歩み出

てきた。

その姿にシグナムが忌々しそうに言い放つ

「悪魔……め」

「悪魔？違うな。闇の書を葬り去る、正義だ」

男が返す

自分のやっていることは正しいと、まるで自分に言い聞かせるように

だがしかし、この男は勘違いしている

本当の正義などどこにもない

「正義」を「正しさ」として語った時点で、その者は「正義」ではない

「正義」とは、各人の中にある定義に過ぎない

それに気づかないこの男は、ただの自己満足の塊に過ぎなかった

英雄とは、それになろうとした時点で、英雄失格なのだ

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはA・S 〈悪魔の正義〉（後書き）

アリス「なのはさんを悪魔と言わしめた台詞をここで使いますか！」

ええ

これは書きたかった

なのはは自らを悪魔だといい、決して戦うことが正しくないとわかりながらも、分かり合うために戦いました
しかし仮面の男はもうこれしかない、と決め、これが正しいと自分に言い聞かせて無理やり正当化しています

ア「それがちがいで、ですか」

その通りです

ア「次回、はやて、慟哭」

ではまた次回

こんな出会いをしていなければ……

私とお前は、いったいどれほどの友になれただろうか

まだ……間に合います！

止まれん……

我等守護騎士、主の笑顔のためならば、騎士の誇りさえ捨てると決めた。

もう……止まれんだ！！

止めます、私とバルディッシュが！！

Y e s
S i r

なのはA・S　　一方の視点、そして暴走の始まり

時間は少しさかのぼり

蒔風がヴォルケンリッターを追って飛び出した後の部屋
煙にむせながらも、なのはたちは無傷だった

「みんな！！無事！？」

ユーノの張った結界で全員が無事に立ち上がった

「くそっ！！やられた！！あんな映像流されたら、騎士たちがあ
なることをわかってやっているぞ、あいつ！！」

「クロノくん、管理局は」

「もちろんあんな強引な封印なんか考案してないし、僕も知らない
！！蒔風は！？」

「舜なら四人を追って行っちゃったよ！！」

「なら……彼に任せよう」

「え？私たちも応援に……」

なのはが蒔風を助けに行くと言い、フェイトがそれについて行く

とする

だが、そこに待ったの聲がかかった

「いや、ここは舜に任せてください」

「君たちは僕らと一緒ににはやてちゃんのところへレッツゴー！だよ
」！

そこには白虎と朱雀が人型で立っている

初対面のクロノ、ユーノに最初の時に会ったのはとフェイトが紹介する

「で、舜が言うには今すぐに向かって欲しい場所があるそうなんです」

「はやてちゃんのお見舞いだね！！」

朱雀と白虎の提案に、なのはたちが目を丸くする

「え？」

「で、でも・・・」

「大丈夫です。獅子天麟の三人がヴィータさんたちを足止めしてくれます。はやく！！足は確保してあるので、急ぎましよう！！」

朱雀が二人に呼びかけて玄関から外に出ていった

「クロ君とユーノンはどーする？一緒に行くの？」

白虎が二人に訊くが、その返事はノーだった

「僕は……気になることがあるんだ。あの最後の映像……ユーノ、調べてくれないか？そのあとに僕も向かう」

「いいけど……なにを？」

「照合してもらいたいんだ……はずれてくれたらいいと願ってるんだが……」

なので二人を残し、白虎と朱雀はなのは、フェイトと共に出ていった

途中で蒔風からの提案を貰い、その通りにすずかとアリサを拾って、ヴィータ達よりも早く病院にたどり着く

病院のロビー

ここに四人の少女がけたたましく入ってきた

「なのはちゃん!!ほんとうにはやてちゃんが入院してるの!?!」

「ちょっと!!なのはもフェイトも黙ってないで言いなさいよ!!
それに舜はどうしたのよ!!」

「ごめん二人とも!!詳しいことは言えないんだけど、とにかく来て!!」

「私たちを・・・信じて!!」

なのはとフェイトの真剣なまなざしにアリサが「うっ」とたじろぎ、了承してくれた

病院の受付ではやての病室を聞き、その部屋に急いで向かう四人

そして病室に辿り着き、扉をあけると、そこには上体を起こして窓の外を見つめているはやてがいた

「はやてちゃん!!!!」

「すずかちゃん!!!!」

すずかがはやてに飛びつき、再会を喜ぶ

「お見舞いに来てくれたん?ありがとうなあ。そちらさんは、たし

か・・・」

はやてがなのはたち三人を見て、前にすすかからもらったメールの写真を思い出す

「あ、紹介するね。私の友達の、高町なのはちゃん、フェイト・テスタロッサちゃん、アリサ・バニングスちゃんです」

「「「よろしくね!!」「」「」

「うわぁ・・・うち、身体が悪くて学校全然行けんから、こんなに友達できたのは初めてや!!」

はやてがうれしそうに両手を合わせてほほ笑んだ

『フェイトちゃん・・・わかる?』

『うん・・・言われてみないとわからないくらいだけど、確かに闇の書の気配がする』

『グイータちゃん達、どこにいるの?』

そう考えているなのはたちの前に、はやてがお菓子を出してくれたどうやら、見舞い品のようなのだが、誰が置いていったのかわからないものようだ

「みんなでこれ食べよ!!な?な?」

はやてがこれ以上ないように笑う
その笑顔を見て、なのはもフェイトも納得した

この子は確かにヴォルケンリッターを、あんなにも人間に変えた子
だ、と

この優しさを見ればわかる。この笑顔を見ればわかる。
あの四人が敬愛と、信頼と、親愛を込めて「主」と呼び、命や誇り
を投げ捨ててまで尽くそうとする、そんな人物だと。

だからこそなのはとフェイトは悔しかった

こんな子が、いま目の前にいるのに
こんなにも近くにいるのに、もう大丈夫だよって・・・言えないこ
とが、とてもとても悔しかった

思わず抱きしめて泣いてしまいそうになる
しかし、その感情をこらえ、楽しそうな笑顔をして見せる

と、そこで二人は気づいた

窓の外

そこには何のなかったが、確かに誰かの感情が増大するのを感じた

『いる・・・ね』

『うん』

そこではやてが二人に声をかけてきた

「なのはちゃん、フェイトちゃん、どうしたん？」

「え？あ、なんでもないよ？」

「そうそう・・・でも、そろそろ時間じゃないのかな？」

そういつて時計を見る二人

見ると確かにそろそろ面会時間は終わりだ

「あ・・・ホンマやね・・・」

「はやてちゃん、今度、絶対に、絶対に、一緒に遊ぼうね!!」

「え？うん。わかったよ？でもなんでそんな・・・」

「絶対に・・・」

そういつて決意する二人

この少女を永遠の眠りになどつかせてたまるか

四人はここに来たのは急だったこともあって、また今度ゆっくりお話ししようという約束し、病室を出た。

ロビーで白虎と朱雀が迎えた

「では、アリサさんは私が、すずかさんは白虎がお送りいたしましたよ
よう」

だが、そんな提案にアリサはノーと言った

「いいわよ。最悪車呼ぶし、これくらいなら二人で一緒に帰るわ」

「えー？でもー」

「本当に大丈夫ですから・・・」

『どうします？ここ、危険になるかもしれませんよ？』

『僕たちとしてはきちんと送っておきたいんだけど・・・』

『でもアリサは言い出したらなかなか曲げてくれないから・・・』

『大丈夫だと思うよ。戦う時になったら結界を張るから』

白虎たち四人が念話で相談し、これ以上引き下がってもしょうがないので、二人をそのまま帰した。

「ではこれから・・・む？なのはさん、フェイトさん。主が呼んでいるので、私たちはここで」

「はい。じゃあ私たちはヴィータちゃんのところに行こう！行こう！フェイトちゃん！」

そういつて四人はわかれ、それぞれの目的地に走っていった

「レイジングハート！！」「バルディッシュ！！」

「セーラ、アップ！！！！」

二人がバリアジャケットをまとい、デバイスを手に夜空に飛びあがった。

そこで近くのビルの屋上が炎に包まれる

そこにはヴォルケンスの四人と、仮面の男が立っていた

「フェイトちゃん！！」

「うん！！」

すぐさまその場に向かうのは達

が、そこで二人の動きは止まってしまっ

バシィー!!バシィー!!!

二人の体に巻き付く魔力の縄
空中にバインドされ、二人が三角柱の小さな結界に閉じ込められて
しまった

「え!?!これは!?!」

「どづいっ……こと!?!」

なのはとフェイトは目の前の状況に驚く
なぜならそこには

仮面の男がいたからだ

右腕を首から吊っているということを見れば、全く同じ姿だった
しかし、シグナム達の居る屋上にも仮面の男はいる

つまりは二人

これが空間を瞬時に行き来し、時風の攻撃でも無傷を装えたトリック

「ふ、二人!?!」

「くっ!!これを・・・離せ!!!」

その結界と一緒に、第二の仮面の男が屋上に来た

「な・・・テストロッサ!？」

「なのはちゃん!？」

シグナムとシャマルが二人の姿を確認し、名前を呼んだが、結界の効果でその姿は消えてしまった

「さて・・・では・・・」

「仕上げに入ろう・・・」

バシィン!!!!

仮面の男が四人をまとめてバインドし、動きを封じる

「闇の書・・・蒐集!!!!」

そして書に命じた

シグナムとシャマルの胸元からリンカーコアが抽出され、闇の書に収集されてしまう

「うわあああああああ！！！！」
「きゃあああああああ！！！！」

すると、二人の姿がゆっくりと消えていき、消滅してしまった

「そんなー！！」

「シグナムさん！シャマルさん！！」

結界の中でのなのはとフェイトが叫んだが、その声は届かない

「闇の書へ帰れ、騎士たちよ。今までもそうやって完成させてきたようにな」

「おい」

「・・・ああ、そうだったな」

そういつて二人が変身魔法を行使する

二人が変身したのは、紛れもないのはとフェイトだった

「闇の書の覚醒には主の深い絶望が必要だ」

「心は痛むが・・・仕方がない」

そういつて腕を振るうと、魔法陣が屋上に現れ、そこにはやてが転

そこで仮面の男二人はその光景を眺めていた

「あの二人・・・もつかな？」

「闇の書が完全な暴走状態に入るまで持つてもらえば・・・それまで・・・」

ギョオツ！！バシイ！！！！

その瞬間、地面から伸びた青い魔力光の縄が二人を締めあげ、拘束した

「ストラグルバインド・・・強化魔法を無力化するバインドだ・・・あまり使い勝手はよくないけど・・・こう言う場合は役に立つ」

2145

その背後からクロノ・ハラオウン執務官の声がした
二人が振り返り、その姿を確認する

クロノが言葉を続けた

「君たちみたいなの、変身魔法を強制解除するからね」

「くっ！」

男が魔法がインプットされたカードを取り出し、この場を脱しようとする

「動くな」

しかし、それもかなわない

蒔風がカードを取り出すよりかも一瞬早く、地面からビルの屋上のフェンスを飛び越え着地し。十五天帝すべての刃が二人の首筋にあてられていた。

「くそ……くあああああ……!!」

「ぐああああああ!!」

二人の変身魔法が解ける

そしてそこにいたのは

「やっぱりか……リーゼロッテ、リーゼアリア……」

クロノが残念そうな声を出す

「もしかしたらと思っていた。だけど、そうではないと願っていた
!!」

「闇の書の封印……か」

そこにユーノからの連絡が入る

『クロノ、映像の解析、できたよ。あの制服は……ギル・グレアム提督のものと同じだ』

「ありがとう、ユーノ。君もなのは達の助けに入ってくれ」

そういつて通信を切るクロノ

「……説明する……必要はないみたいね」

「まさかクロスケがここまでやるなんてなあ」

「一人でも鍛錬を怠るなと言ったのは君たちだ」

「目的は闇の書の完全封印。おそらく、最初からはやてが闇の書の主だと知っていたな？」

蒔風の糾弾に、彼女たちが口を閉ざす

『いいんだ、話しなさい』

そこに映像が入る

そこに映っていたのはギル・グレアムだ

「でも、父様!!」

『彼らは、もうおおかたの事は知っているだろう。隠しても無駄だ』

『ト』

「……はい……」

「提督、あなたは独自に闇の書の調査をしていました。そして八神はやてが今代の所有者であることを突き止めていた」

『そうだ。あの子の父の知人を名乗って、資金援助もした……。私は、これが運命だと思ったんだ。孤独な子ならば、例え封印されても悲しむ人は比較的少ないとね……。欺瞞だな……。偽善だな……。』

「そうだな。それが偽善で欺瞞だ」

「でも！！あの書のせいで何人も人の命が！！……。あんたの父さんだつて！！」

「それとこれとは関係ありません！！たとえ誰かが犠牲になったからと言って、あの子がいなくなってもいい理由にはなりません！！まだ斧状態ならば、封印されるほどの罪は犯してない……。そんな子を！！あなた達は！！！」

「法だとか！！そんなこと言つてられるものじゃないんだよ闇の書は！！！！今やらなきゃこの世界だって消える。あの子にはかわいそうだけど……。そのためにこの世界が消えてもいいの！？」

そんな口ツテの言葉に、クロノが反論しようとするが、それよりも早く蒔風が言葉を発した

「そんなわけあるか！！！！けどな、誰かが失われて誰かだ助か

るなんて、俺はそんなのはもう見たくない！！ああ、そうさ！！
綺麗事だよこれは！！闇の書を止めて、はやても救うなんて、現
实的じゃないかもしれない。でもな、それを為すために俺は力を持
つてんだ！！クロノはここまで強くなっただ！！なのはとフェイ
トはあそこで踏ん張ってた！！封印するならその後にしる。そこ
で見ていてくれ。俺たちのなすことが、どんな結果になるかをな」

「『』……………」

三人が言葉を失う

そこにクロノが言葉をつづけた

「それに……提督のプランにはまだ欠点があります。封印用の魔
法が、暴走した闇の書に十分に効く可能性は決して高くはないはず
です。たとえ成功して、どんな場所に隠しても、きつといつかは誰
かが発見し、呼び覚ましてしまう。

力を求める人の想いが、その善悪に関わらずそれを見つけ出してし
まう。闇の書のプログラムが、書き換えられてしまったように、人
はいつか……………」

「……………俺はもう行くぞ、クロノ。この二人はまかせたぞ」

「ああ……………二人を送ったら、すぐにそちらに向かう！！」

「ああ……………よっし……………行くか！！」

ブワッ！！と時風が開翼する

その翼は銀白に輝き、夜の闇に美しく映えた

「俺の正義を見せてやるからよく見とけ！！ギル・グレアム、あな

たの手段は決して誉められたものではないが、その想いは本物だ。悲劇を食い止めるその決意は、このオレが認めよう！！安心しろ。闇の書は必ず止める。貴方の「願い」は俺が聞いた！！！！」

ハウッ！！！！時風が飛び出し、なのは達の方へと飛んでいく

「行こうか」

クロノが二人を連れて、グレアムのいる管理局本部の部屋へと向かった

この戦いに関係した者の想いはたった一つだけだった

- 悲劇を止める -

しかし、その想いが数々の事象を捻じ曲げてきた
だが、ここからは揺るがない

闇の書を止め、はやてを救う
その想い、たった一つだ

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはA・s　〜一方の視点、そして暴走の始まり〜（後書き）

気付いたらこんな時間ですた

ア「時間かけ過ぎ!!!」

Fate/Extraのアーチャーがかっこよすぎてつい……

ア「をい!!!」

次回、闇の書の夢

ア「私の台詞ですよ!!!」

ではまた次回

あれ?台詞が出てこないや……

ア「全力全開!!!」

なのはA・S　　く永遠の夢、有限の現く

なのはとフェイトが闇の書と交戦を始めて三分にもかかわらず、二人の息は上がっていた

たった今空間魔法「デアボリック・エミッション」をバリアで防いでここまで回避してきたのだ
今いるのは闇の書からは見えない、死角になっているビルの影だ

「はあ……はあ……はあ……だ、大丈夫？フェイトちゃん」

「なのは……大丈夫……だけど……っ!!」

ズオオツ!!

瞬間、世界が結界に包まれる。

「私たちだけに狙いを絞ってきたね……」

「なんとかしないと……」

「なのは!」

「フェイト!!」

と、そこでユーノとアルフが合流する。

「この結界は……」

「フェイトちゃん!!」

相手の動きが止まると踏んで攻撃に向かったフェイトが急ブレーキをかけ、無防備になってしまうのを、なのはの砲撃で注意を逸らして助ける

戦闘になってない

これでは壁打ちと同じだ

相手にまともな効いた攻撃など一切ありはしない

フェイトとなのはの挟み込みでの砲撃ですらも、彼女は防いでしまう

「断て」

その一言から出現したバリアで、両側から迫りくる砲撃を微動だにせず受け止める

「穿て、ブラッディダガー」

しかも、その砲撃を受け止めた状態のまま、血のように赤い短剣による攻撃に移る

その軌道は直線的で、カクカクと折れ曲がりながら砲撃を回りこんで目で追えぬ速さでなのはとフェイトに直撃した

それは刺突による攻撃ではなく、あくまで魔力での攻撃だったのか、着弾と共に爆発し、爆煙で二人を包んだ

だが、その煙から出てくる二人に大きな怪我はない

ただ、その衝撃に顔を歪ませた

『そこまで大がかりな攻撃はまだないからなんとか行けるかもしれないけど……』

『このままじゃギリ貧に……こっちの魔力が先になくなっちゃうー!!!』

無事な二人を見て、業を煮やしたのか
闇の書は片手を上げ、宣告した

「咎人たちに、破滅の光を」

魔力が集束していく
なのはの最大魔法が使用されようとしていた

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「よっし!!今行くぞ!!なのは、フェイトオ!!!」

蒔風が開翼して闇の書へと一直線に飛んでいく
ついさっきなのは達がブラッディダガーこ攻撃にこらえたばかりだ

「蒔風君参上……ってあれ?なんでみんな離れてんの!？」

なのは達は何かに追われているような緊張の面持ちで闇の書から急激に離れていった

「……………まあいいや！…！めんどくさいことは後回し！…！と
りあえず、おとなしく……………ううおい！？」

時風が闇の書の目前、五十メートルで気付いた
集束された魔力。桜色の魔力光。そして魔法陣。あれは……………

「スターライトブレイカー！？いつペンなのはが蒐集されたからか
！？魔力は使い果たしても情報は残ってたか！…！」

時風が分析し急ブレーキをかけ、その場から離脱しようとする。

だがすでに集まった魔力は直径五メートルほどにまで溜まっており
・

「スターライト……………」

「いい！？やつべやつべ！もう一回言っところか？やつべ！…！ち
よい待ち待って待ちやがれって三段活用！？」

もはや回避不能な状態である

なればこそ、腹をくくって「星」を冠するその砲撃を、撃ち滅ぼす
のみ…！

少年の拳は威力もさながら、そのことに特化した名を持つ拳…！！

「ブレイカー……………」

「ぐ……おおおおおお！！！！！！」

グオツ……ブワアツサ！！！！！！

蒔風の翼がより一層大きく開かれ、全力での力の行使を始める
その過剰な力の余波が翼から放出され、銀白の羽根がキラキラと輝
いてその場に舞う

（チツクシヨウ！！！筋量が絶対的に足りねえ！！！この体さえ何
とかなりやア、こんなもんとくに追いついてんのによ！！！！！！）

バゴオン！！！！！！

蒔風の渾身の一撃で、少しだけ砲撃を押し返す
だが、それはすぐに戻ってくる
なまじ勢いがついた分、さっきよりも強烈に！！！！！！

しかし、この少年はあとには退かない
息を吸い込み、両腕を引く

そして溜めこんだ息を一齐に吐き出し、戻るスターライトブレイカー殲滅の光にその両拳を
叩き込んだ！！！！！！

「打滅星・双拳爆砲！！！！！！！！！！」

バツグオアツ！！！！！！！！！！

「あれ？誰かいたのか？」

「あ、うん……」

「えっとね……アリスちゃんとすずかちゃんが……」

「ヴェ？そりはマジですか！？」

「あ、あはは」

「バレタの？」

「うん」

「俺は？」

「翼くらいは見られたかな？顔はわからないけど」

「あつちや……。説明めんどいぞ……」

「うん……でも今は」

「そうだな」

蒔風たちが振り返る

と、そこに闇の書がふわりと飛んできた

「主は嘆き、悲しんでいる。我が主の望みは、このような絶望しかない世界が、悪い夢であってほしいということ。私はそれを成し遂

しかし彼女はまだ、自己を認識することが出来ていなかった

「我は魔道書、ただの道具だ・・・」

「だけど、言葉を使えるでしょ！心があるでしょ！？そうでなきゃおかしいよ、ホントに心が無いなら・・・泣いたりなんか、しないよー！」

「この涙は主の涙、私は道具だ、悲しみなど・・・無い・・・」

その言葉に、フェイトが感情を爆発させる

それはきつと、かつての自分の姿をそこに見たからだろうか

「悲しみなど無い？そんな言葉を、そんな悲しい顔で言ったって・・・誰が信じるもんか！！」

その言葉を時風がつなく

「お前に心がないのなら、お前のその「主の為」と言う願いはなんだ！！！ここまで俺たちに執着して、それでもお前が俺たちを潰そうとしているのは、それがお前の願いだからだろ！？主のために願うその心が、ただのプログラムなわけないだろ！！！！」

「あなたにも心があるんだよ！？悲しいって言っていいんだよ！？あなたのマスターは、はやてちゃんはきつとそれに答えてくれる、優しい子だよ！？」

「だから、はやてを解放して・・・武装を解いて！お願い！！」

さらになのは、フェイトが続き、説き伏せる
しかし、彼女もはや止まれない

その瞬間、周囲が崩壊を始める
火柱が上がり、天が唸る

その状況は世界の崩壊そのものだった

「ッ！！闇の書による崩壊プログラムか！？」

「そうだ。私もじきに理性を失う。そうなれば主の願いは果たせない。そうなる前に・・・主の願いを、叶えたい」

それは彼女のたった一つの願いだった。

永きにわたり道具と扱われてきた彼女の、最初の願った。
故に彼女は何にも変えてそれを成し遂げるだろう。

その胸に宿る、主の願い。

自分はそれを叶えるしかできないプログラム。
そうすることですか、主に仕えることができない悲しみ。

ああ・・・と彼女は思う。

なぜ、こんな物になってしまったのか。
なぜ、こんな形でしか主に尽くせないのか。

しかしもう止まらない。

自分は今もう、暴走するだろう。

もしこの呪縛から解き放たれ、主を真に救えればどれだけ幸せなこ

とだろう。

それができるならば、私は私の意義を為せる。

しかし、残りの時間はあまりにも短い。

故に、このような粗末な形しかで貴女を救うことのできない私をお許し下さい。

私は………

ついに出会えた真の主と認めるあなたの、真の願いを叶えられなかった

「ハアッ!!」

闇の書が三人に砲撃を放つ

それを時風が畳返して防ぎ、爆発して爆煙が起こる

そしてその中からフェイトが飛び出していった

「言うことをツ、聞けエ!!この!!!!駄々子!!!!」

バルディッシュを戦斧のアサルトにし、斬りかかる

「お前も……安らかな闇の中に眠れ……」

それをバリアで防いだ闇の書が、魔導書をフェイトに向ける
するとフェイトの身体が光の粒子となって、本の中に消えてしまった

《蒐集》

魔導書が宣告し、何が起こったのかを二人は理解した

「フェイトちゃんが……」

「蒐集された！？一度蒐集されてるから、本人もお手の物ってか？」

その二人に闇の書が言う

「我が主もあの子も、覚めること無い眠りの内に終わり無き夢を見る。生と死の狭間の夢、それは永遠だ」

「永遠なんて、ないよ。みんな変わってく、変わっていかなきゃ、
いけないんだ。私も……あなたも！」

「夢は終わりがあるからこそ夢なんだ。覚めない夢は悪夢に過ぎない。限りある命だからこそ、限界があるからこそ、そこに挑んで、
それを乗り越え、そうやって人の人生は輝いていくんだ！！お前のその永遠は停滞だよ。先に進まなくちゃ、その命は輝かないんだ
！！！！」

なのはと時風が闇の書へと言い返し、飛び出していく

「お前も・・・幸せな夢の中で・・・」

「私は、先に進むよ。それにみんなも、今に留まってるだけじゃない・・・未来に向かって、進んでるんだ！！フェイトちゃんも、舜君も、はやてちゃんも！！！！」

吸収された三人の友を救うため、魔法少女は単身で向かった

「永遠」はただ聞こえのいいだけの言葉だ
永遠なんてものは存在しない

そこにあるのは、強固な人の想いだけだ

t o b e c o n t i n u e d

なのはA・S　く永遠の夢、有限の現く（後書き）

アリス「まさかの蒔風吸収」

それは置いていて・・・

さて

これから蒔風がめぐる世界を見直したんですよ

ア「はい」

ほとんどライダーだ・・・

ア「ええ！？」

だからみなさん

もし出して欲しい！！というものがあつたら言ってください

知ってる作品で、なおかつ書けそうなら書きます

ア「結構前に言ってたのもありますよね？」

マジコイとか？

あれも「読みたい！」という声があれば書くと思います

しかし基本知らない物は書けないので、無理な場合は無理、と言つので、そうなってしまうたらごめんなさい

注意事項

ロボットアニメ系は出さないつもりです

某螺旋や某機動戦士好きのみなさん、申し訳ございません
あと”no Name”系は難しいので勘弁してください!!!

ア「次回、夢で逢えたら……」

ではまた次回

じゃあ、いつてらっしやい、フェイト。

現実でも…こんなふうになっていたな……

うわああああああん(泣)(ノ、)

なのはA・S　く夢で逢えたら

一人の青年が立つ

「ここ……は……」

蒔風が人ごみの中にポツンと一人で立って周囲を見渡している

「どこだ……　のちにしては……」

と、そこに声が唐突と掛けられた

「おい！蒔風、どうした？」

その声にハッとすると、周囲はいつの間にか大きな駅のホールになっていた

「あ、ああ……揃ったのか？」

「おう！じゃあ、行くうぜ！」

そう言っつて蒔風は五人くらいのグループの中に入り、駅から出発した

「最初の曲なに歌う？」

「ばっか初原ついはら、最初はモチ「Butter-Fly」だろ！」

「いいか？サビはみんなで一斉歌唱すんだぞ！！わかってんな！？」

「おい蒔風！なんかテンション高いな！！」

「ああ！！なんだろう・・・凄くうれしいんだ！！！！テンションあがってきたYO！！」

そしてカラオケボックスに入り、曲を歌い上げる

「「「むげえんだあいなあああああ！！！！！！」」」

「いええええええええええ！！！！！！！！！！」

「「ほーーーーーッ！！！！ほおおおおおおう！！！！！！」

「にしても俺らバカなことしかしてねえ！！！！！！」

「ツッコミが追いつかねえぞ大谷木！！！！あっはっはっは！！！！」

「バカやろう！！俺たちは突っ込まれるために馬鹿やってんじゃねえんだよお！！なあ佳景山！！！！」

「そつだ。我々はバカなことやるためにバカなことやってんだよ。目的のあるテロじゃない。テロりたいからテロしてんだ！！！！」

「うわあ！！こいつらマジキチ（笑）」

「今更だな本田。俺たちにそれは」

「「「誉め言葉！！！！！」」」

「はじまって十分なのにこのテンションはヤベエ！！！！」

そしてその後に水風船を買い、みんなで投げ合う

「くたばれえ！！！！」

「よっしゃ来い！！！！（グバア！！！！）」

バチーン！！

「バカな！！！！当たっても割れない！！？」

「気合がちがあう！！！！」

「おい！お前携帯大丈夫かよ！！？」

「This is BOUSSUI！！！！」

「「「な、なんだってー！！！！？」」」

「じゃあいいな（ザパア）」

「うひおおおおお！！！！ばっかお前ばっかお前！！もっかい言っとく？
ばっかお前！！？」

「どーするよ」

「.....」

「大谷木、どうした？」

「あー。なんかガラの悪いあんちゃんがおっちゃんにイチャモンつけてんなと」

「なにい!？」

「よおし」

「行くぜえ!!」

「「「おおおう!!!!」」」

みんなでそこに突撃していく

相手は五人、こっちも五人

相手はナイフとか持っていたけど、余裕だった

みんなで戦った

みんなで勝った

ヤンキーたちが逃げ、荷物を置いていく

おっちゃんの荷物を払い、返すとお礼をと言ってきたから断った

「俺たちはやりたいからやっただけですから」

「そーそー。事実おっちゃんは怪我しちったし」

だったらせめて名前ぐらいは、と聞いてきたのでこう答えた

「名乗る必要はないですな」

「そ、俺たちや変人集団さ」

「騒ぎがあればそこにいる」

「だから、あんま俺らと関わらない方がいいかも」

「ま、今日は助かったってだけでいいじゃない」

「」「でわー!」「」

「おい！警官来たぞー!!」

「めんどいから逃げよー!!」

「おあっはっは!!こりゃスリル!!」

「じっくり話せば感謝状くらいは貰えんじゃねえ!？」

「いーよいーよそんなけつたいなもんもらったってしょうがねえ!

「!」

そういつてその場から逃げる五人
そして気付くとまた昼ごろだった

「俺たち彼女いねーよなー」

「ま、変な奴らだしねー……」

「同感wwww」

「おいそこ、悲しいこと言うな……」

「はいこれ」

「おう……ブーーーー……!?!?!?!」

「どした?」

「これ何入れた!?!」

「コーラにメロンソーダと紅茶。あとシロップ三個」

「お前自分じゃ処理なんてしないんだからこつこついつのやめいよ!?!?」

「ほい」

「あぁッ!サキイカ入れやがった!?!?!」

「やめんか!?!(スパアン!?!!)」

「アたっ!?!?」

ファミレスのドリンクバーで騒ぐ

そのまま街に繰り出し、そこでもまた大いに遊んだ

ゲーセン、カラオケ、ボウリング、公園、海、山、テーマパーク！
！！

ああ・・・

なんて最高の世界だ！！！！

漫画とかゲームみたいなことは全然起こらないけど、それに対して
クソつまんねエとか思っても、それも込みでなんて素晴らしい！！！！

最高の仲間、最高の時間

それがなにも起こらずこのまま続く、こんな「なにもない」世界が
大好きだ！！！！

きつとこんな時間はずっとずっと続いていく！！！！

・
・
・
・
・
・
・



・
・
・
・
・
・
・
・

本当に？

「ここは……本当なのか？」

「え？」

「何か忘れてるんだ……」

「蒔風……」

「そつだ……忘れてる……なんで忘れてんだ……」

「ふ……」

「そつだよ……なんで忘れてたんだ？」

「へ、さすがだな」

「忘れるわけもないはずなのに……な」

「やっぱりこうなるか」

「俺の現実は……こつちだ」

ズゴオツ!!!!!!

時風が自覚する

その瞬間に、周りの景色が崩壊した街に塗り潰された

「思い出したのか？」

「ああ……完璧にな……」

「そっか……」

振り返るとみんながいた

頭に包帯を巻き、煤が頬につき、服は所々千切れている

崩壊した街、ひび割れた空

それは「奴」の襲撃の悲惨な爪痕だった

「ゲームとかマンガみたいなこと……起きちゃったんだ……」

「そうだな……」

「なあ、今こっつてどうなってんだ？」

「ここは闇の書に蒐集されたお前の情報から得た世界だ」

「じゃあ……幻想なんだな？」

「そつとも言えないさ」

「え？」

「お前と言う情報をもとに数多の世界に検索をかけて見つけ出した世界の情景がここにある」

「つまり、ここは幻想でありながらもお前のいた、元の世界なんだよ」

「なあ……このまま一緒に遊んでようぜ」

「そうだよ。おまえ、このお話には本来登場してないキャラじゃないか」

「お前がいなくても」「高町なのは」「や」「フェイト・テストロッサ」はどうかしてくれる」

「この世界ではあいつらアニメになってんのも、思い出してんだろ？」

「ああ……どうなるかもな……」

「だったら……このままいようぜ……」

そんな友の誘い

たしかにそうだ

時風はいなくても物語は回る

だったらここで幸せな世界にいてもいいじゃないか

今まで散々つらかったんだ

何度だって死にかけてんだ

ここで幸せなままでいても、いいじゃないか

しかし

「仲間が……待ってるんだ」

蒔風が言った

「俺が戻ると信じて、外で戦ってる子がいるんだよ・・・それを見捨てるなんてできない」

その言葉にみんなが黙った
そして口を開いた

「だぁー！。やっぱダメかぁ！！」

「そりゃそうだ。ここでそうだな、なんて言われてたらぶん殴ってるよ」

「早く行って来い」

「ケリ、つけて来いよ」

「・・・・・・・・・・は？」

「ま、どっちにしる俺たちはお前を蹴りだしてでも行かせるつもりだったよ」

「ちょ、お前ら闇の書の……」

「そうだけどほら、今は「俺」だから」

「それと、一つ言っとく。お前の世界は修繕に向かっている」

「何年かかるかわからない。もしかしたら生きてる間には直らないかもしれない」

「でも、いつかお前の帰る場所はちゃんとあるんだ」

「それは……ほんとうか？」

「マジマジ。だから行って来い」

「救うんだろ？」

「ああ……そうか……俺の世界は……まだ……」

「世界は強い」

「砕かれても、こんなにもボロボロになっても、まだ生きている」

「死を恐れないで戦う男。覚悟とか乗り越えたとかそんなんじゃない、死に恐れない男」

「てめえはそんなバカなこと言ってたけど、そのおかげで俺たちは元の世界で生きている」

「だから、全部の世界救いきって早く戻れよ」

「オリジナルのオレっちだって待ってんだからな」

「ああ……ああ……ああ!!!!」

そして蒔風が決意する

「蒔風、ここから戻ったらここで思い出した「原典」に関する知識は失うぞ？」

「いいよ……今までもそうだったし」

「そうか……」

「十五天帝……」

その剣をくみ上げ、一つの巨剣とする

「さあ……夢の時間は終わりだよ」

ブウン

「ここからは……」

ゴオオ!!!!

「だ、大丈夫？」

フェイトが蒔風を支える

そのままなのは近づいていく

「舜君、翼は？」

「今管理局がこの光景見てるだろうから、あんまだしたくないンよ。足場とか作れる？」

「僕に任せて」

さらにそこよってきたユーノとアルフ

ユーノが魔法陣の足場を作り、そこに蒔風が立つ

「で、なにあれ？」

海上にある巨大な黒いドームを見て蒔風が聞いた

どうやらなのは達の説明によれば、あれこそが闇の書の暴走プログラムそのものなのだそうです

驚くことに八神はやては闇の書覚醒後に、暴走するプログラムから管理者権限を取り戻した

そして暴走プログラムの切り離しに成功し、権限施行のために表に出ているプログラムをのが吹き飛ばしたらしい

「じゃあその黒いのは・・・」

「あれが暴走プログラム。もうはやてちゃんとは切り離されているはず！……！」

「だったらあれぶちのめせば……！」

「終わる……！」

と、そこで白い光が発生する

三角形のベルカ式の魔法陣が回り、そこから現れてきたのはヴォルケンリッター

そして、騎士甲冑に身を包んだ、完全に闇の書、否、「夜天の書」の主となった八神はやてだった

「はやて……！」

「はやてちゃん……！」

「はやて……！」

そこにみんなが寄る

蒔風はユーノの作る足場を跳んでいった

「なのはちゃん……！フェイトちゃん……！それに……！」

「久しぶり。蒔風舜だよ」

「ああ！！舜君！！って、みんな管理局に人やったん？」

「俺ら三人は違うぞー。ま、フェイトは管理局保護下。なのはと俺は協力つてとこ」

「そつか・・・この書の中にいた時に、全部知ったよ。みんな、迷惑かけてごめんな」

「気にしないでよはやてちゃん」

「はやて、髪の色が・・・」

はやての髪を見ると白く、と言うよりクリーム色になっている

「あ、うん。リインフォースがいるんよ」

「りいんふおーす？」

「この・・・夜天の書にずっといた子。あたしが新しい名前をあげたんや」

すると、融合デバイス・リインフォースからの声が、はやての中から聞こえた

『今は主をサポートするために姿を出せません。すみません』

「そつか・・・この書も救われたということか」

「これが夜天の書……」

と、そこにシグナム達が近寄ってきた

「その……なんだ……すまなかった!!」

「あたしたち、勘違いして……それで……」

「わかってるよ」

「でも、なのはちゃん達にひどい」と

「もういいですってば」

「しかし、我らの気が収まら」

「」「もういいって!!!!(困)」「」

なのは、フェイト、時風が同時に言った

「それ以上言われたらこっちが困っちゃうよ」

「あんさんらは主のために最大限動いた。それを誇りに思っとけ」

「あ、ありがとう……」

「みんな、こんな時にすまないが、事態は一刻を争うんだ」

「クロノ!!!!」

そこにクロノがやってきた

「あれをどうにかしなければならぬ」

「制御の失われた暴走プログラム……」

「なに、今だけの人数がいるんだ勝てる勝てる……」

「そうだね……」

「負けないよ！」

「みんな……行くで……」

「……おう……」

こうして

逆転劇は始まった

そして

「やった！！計算オワタ＼（＾o＾）／

あつとは機会を待つだけだあ~~~~

物語は嫌いじゃないけどな~~~~。目的のためだ」

はたしてハッピーエンドになるのだろうか？

t o b e c o n t i n u e d

なのはA・S　く夢で逢えたらく（後書き）

アリス「蒔風の若干の救い」

ですね

ア「フェイトとかはやてのほうか書かないのですか？」

書いたところで原作と同じだから、書いてもしょうがないんですよ

ア「確かに・・・」

ですので、きつとみなさん原作知ってると思いますのでスルーしました！！

決してあのシーンが嫌いなのわけではないです！！！！

感動しすぎます！！

逆に書けませんよあんなシーン！！！！

う、う、うわああああああああん（泣）

ア「ほらほら泣かないで」

う、う、グズッ

そのかわり蒔風を書きました

あれらの物とは比べ物にはなりません、一読していただけると幸いです

ア「ですねー！。さすがにフェイトやはやてのには勝てませんっ

て」

う、うわああああああああん！！！！！！
アリシアあああああ！！！！！！！！
救えなくてごべんんん！！！！！！

ア「次回、VS暴走プログラム」

ではまた次回

我ら、夜天の主のもとに集いし騎士
主ある限り、我らの魂尽きることなし
この身に命ある限り、我らは御身のもとにあり
我らの主、夜天の王、八神はやての名のもとに

なのはA・S（プログラム粉碎？）

「……で、やるゆーてもどうやるんだよ」

「そこなんだよねえ……」

意気込んだはいいが、暴走プログラムはまだドームから姿を現さない
アースラによると反応は依然消えず、おそらく中で肉体を構築して
いるのだそうだ

「つーことは出てきた時点でクライマックス？」

「そうなるね。だから今ここで策を考えないといけない」

そこでクロノが提案してきたのは「アルカンシエル」と言うアース
ラ搭載の魔導砲による消滅だ

「これは砲撃自体にはほとんど威力はないんだけど、着弾後に発生
する空間歪曲と反応消滅で対象を殲滅するものなんだけど」

「世界ごと切り取って消すのか？」

「そついうことになるね」

「でもこれはこのままでは撃てない」

どついうことだ、と時風が聞くより早くクロノが先を言う

「効果範囲が広すぎるんだよ。発動地点から百数十キロ。これでは・
」

「街が消えちゃっつ？」

「おおっと」

「はやての家も？それは絶対にダメ！！」

みんなから反対される
もちろんクロノも同感だ

「だからどうしようかと・・・」

「ここじゃなくて別の場所で撃つちゃえば？」

「「「「え？」「」「」

なのはのふとした一言が、みんなの耳に残った

「だ、だってここで撃てないんなら・・・おかしなこと言ったかな？」

キョトンとするなのはの頭を時風がポンと手を当てて撫でる

「いや、名案だ」

「と言うか、それしかない」

「でもあんな大きな物は僕でも転送できないよ？」

「「だったら吹っ飛ばすだけだ」」

クロノと蒔風が同時に言う

「でもあそこから出てきたら絶対防壁はってんだろっなあ」

『それは間違いないでしょう。貴方などの魔力もあるので、おそらくは五層ほどかと』

リインフォースが伝える事実、蒔風がニヤリとする

「よっし、段階で攻撃しよう。まず俺が三層ほどぶち破る」

「「「「三層!?」」」」

「この身体で無茶して、だからな。本来なら楽に全部いつてる」

「本来？」

「あーっー気にすんな。で、問題はその後だな」

「では私がやるっ」

「じゃ、その次あたしな」

シグナムが名乗り上げ、その後にヴィータが立候補する

『時風の直後に攻撃しても、おそらく一層は回復しますよ?』

「だったらそれはまた俺がぶちのめす」

「え?わたしたちは?」

「なのは達は最後だ。防壁破ってもその後にデカブツが来るんだから」

「あ、そっか……」

「だったらそれまでの舜君の回復は私がやります」

「その間の護衛はまかせろ」

シヤマルとザフィーラが時風の援護に回る

「で、デカブツが出てきたら、なのは達、任せたよ?」

「任せて!?!」

「大丈夫!?!」

「うちもがんばる!?!」

「その意気だ!?!それでちっちゃくなったら」

『オツケイ!!』

蒔風が足場の魔法陣に立ち、構える

「一番!!!世界最強、蒔風舜!!!みんなの願いを乗せて!!!
!開翼!!!」

開翼し、力を溜めこむ

蒔風の周囲に黒い力場が発生し、それが手のひらにまとまる

「混闇の元に・・・獄炎!!!雷旺!!!いつくぜええええ!!!」

二つの力がその手にまとまる

「獄旺砲!!!!!!」

ゴガウ!!!!!!!

極太の砲撃が放たれ、それが第一の防壁に当たり、次の瞬間には二層に到達し、三層目を粉微塵にする!!!

蒔風の砲撃が放たれる直前にシグナムの用意は終わっていた

「二番!!!烈火の将、シグナム!!!レバンティン、刃やいば、連結刃に続く、もう一つの姿!!!」

《ボーゲンフォーム!!!》

レバンティンの剣身と鞘を繋ぎ、弓状へと変形させる
阻止れ自らの魔力から精製した矢を構え、咆哮する!!!

「駆けよ……隼!!!」

《シュツルムファルケン!!!》

シユカツ!!!

ボツ、ギユオオオオオオアアアアアアアア!!!
!!!

音を越え、空気の壁をぶち割って、その矢が第四層目に衝突する!
!!!!!!

ギヤツ、ビキイ!!!

ドゴオオオオオオオオオオ!!!

そして防壁は残る一層

そこにヴィータの超巨大化したグラーフアイゼン最終形態・ギガン
トフォルムでの一撃が送り込まれる!!!

「三番！！鉄鎚の騎士、ヴィータ！！行くぞアイゼン！！」

《ギガントフォーム！！！！》

「轟天爆碎！！！！ギガントシュラー！！！！！！！！！！」

ヴィータの全力の粉碎攻撃が、防壁へと振り下ろされる！！

最後の層とハンマーヘッドがぶち当たり、その層が粉々に砕け散った

「よっシャ！！行く、ぜってうをお！？」

むき出しになった本体に蒔風が向かおうとすると、まずいと思ったのかプログラムが蒔風に向かって触手をおおよそ三十本もの数伸ばしてくる

「させん！！！！縛れ！！鋼の軛くわ！！！！！！」

しかし、その眼前にザフィーラが立ちはだかり、白く輝く槍が地面から突き出し、それら触手をすべて貫き殲滅する

その隙に新たな層を構築しようとするプログラム

だが

損し、吹き飛ばされる
しかし再生は依然としてかのなようで、その速度は落ちてもいまだ
に再生を続けている

「長距離転送魔法!!」

「目標、軌道上!!」

ユーノとアルフの転送魔法によってコアが送られようとする
行く先は宇宙

この星の軌道上で待機しているアースラの前方

そこにアルカンシエルの砲撃が待っている!!!

「行くよ!!」

「任せな!!」

ユーノの掛け声にアルフが応じ、呼吸を合わせて同時に発動させる
!!!

「転送………ッ!?!」

しかし、その声は途中で止まる

「どうした!! ユーノ!!」

「おかしい……目標がロストした!!」

「な……に……?」

時風たちがユーノの元を集まる

皆デバイスを元の状態に戻し、時風も翼を消し魔法陣に立っている

「どうということだ!!」

「反応が急に消えた!!」

「バカな……あれが移動などできるわけがない!!」

と、そこに声が響く

「感謝感激雨霰!!!!!! 皆さんお待たせいたしました!!!!!! 呼ば

「うっせえバカ！！なんてことしてくれんだこの野郎……」

「あいつが……」

「蒔風の言っていた……」

「奴」

そう呼ばれる男が、手のひらにコアを乗せて立っていた
そのコアはなぜか再生を止め、大人しくその手の上にいる

「へへへ……こっちはそれなりに満身創痍……だが、まあ気に
すんな切札はあるしな……」

「あいつには……勝てるのか!？」

シグナムやヴィータ、おそらくは覚醒時にシグナム達のデータから
知ったはやてが蒔風に訊く

それに対し、蒔風はこう答えた

「大丈夫だ……なに、さっきと変わらないよ……あそこにい
んのも、化け物だからな」

そして胸を張ってこう言った

「大丈夫だ！！お前らの勝因は、ここにいる！！！！」

「さて……ラウンド？だ……」

「バーカ……ファイナルラウンドだよ」

終わりかと思えた戦い

しかし、この男が乱入する

「空気読めよ！！！！終わりだったじゃん！！！！」

「そこにあえての乱入してみたYO！！」

終わらない

まだ、終わらない

翼人、時風の戦いは、これが本番なのだから

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはA・s　　プログラム粉碎?　　(後書き)

アリス「うゝゝわ。なんか思いつきり振りがぶってスカした感じ」

書いてて思いました

でもこのタイミングじゃないとねえ……

ア「それにしても「奴」はプログラム使えるんですか?」

それは次回のお楽しみ

ア「次回、「奴」の特権」

ではまた次回

夜天の主の名において、汝に新たな名を送る
強く支える者、幸運の追い風、祝福のイー

ーリーインフォース

いや、それはもはや怪獣と言つていいスケールだ
その出現と共に、海底が隆起し、海だった場所が陸地にまで盛り
上がってしまった

「「「「「ツツ！！！！！！！」」」」」

その巨体に絶句する一同
蒔風ですら啞然とするほかなかった

怪獣の巨体は二段構造になっている

一段目

その巨体を支える脚は六本あり、昆虫の足のような形をしている
さらに正面にはクワガタの様なハサミまであり、そこに禍々しい表
情があった

その一段目だけなら蜘蛛のように平たくなっており、さらにそこか
ら二段目になっている

二段目

一段目の身体の真ん中から上に向かってだんだんと細くなるように
鎧のような肉体がそびえ立ち、そしてその頂上にはまるで王座のよ
うな椅子が取り付けられていた。

そしてそこに「奴」が座る。
足を組み、頬杖をついて、下方の蒔風たちを見下ろしている。
それはまるで王者のようであった

一段目の上の面と、二段目の中腹までは無数のとげでおおわれてお
り、巨大な物は十メートル、小さくても二メートルはある
そして所々から触手が伸びており、その先端はUFOキャッチャー

の爪の様になっていた

「さて……………どうする?……………面白いデータが残ってるな……………」

「奴」が思索し、それを実行に移そうとする

「な、なぜだ!?あれも暴走していたとは言え、我らと同じプログラム!」

「なんで主でもないあいつが使えんだよ!!!」

シグナムとヴィータが蒔風に叫ぶ

その蒔風は冷や汗を一筋流し、そして納得した

「なるほどな……………」
「奴」がなんで記憶操れたり、世界取りこめ
たのか分かったぜ……………」

「どういふこと?」

なのはの問いに、蒔風が答えた

「「奴」には大きな特権がある……………いや、特性と言っていていいかも
な……………その特性は……………」
「君臨特権」!!!!」

君臨特権

あらゆる物を従わせる一種のカリスマ性

「奴」のそれは主や、よりどころの失ったものを従わせると言ったことに特化した「君臨」だ
故に、主なき「記憶」や、主人公の失った「世界」をその身に取り込むことができるのだ

ちなみに主人公を「世界」の事を知り、そういつた意図を持って殺すだけでは世界が崩壊するだけで取り組むことはできない
それを成し遂げたのがこの特性だ

「取り込む」は「手に入れる」とは違う

強いて言うならば、銃を手に入れることと、銃を肉体に埋め込むことの違い

それを為す「奴」は、間違いなく「王」の力を持つものだった
「影役の王」「陽の当らないモノの扇動者」

「奴」は世界にも類を見ない「王の特性を持つ脇役」!!!!!!

だから主を失った「闇の書の暴走プログラム」さえも手中に収める力は八神はやて以上
ならばその力は最大限に引き出される

「見るよ・・・新しくまた作り上げてんぜ・・・」

蒔風が指差した先にみんなの視線が向けられる

そこにはうねうねと立つ三本の触手があった

そのそれぞれの先端には光の球があり、その中で「何か」が構築されているようだ

「くるぞ・・・気を引き締めろ!!!」

「何が来るんだ!？」

「闇の書の中にある、最も強力な魔力を持つ者を元にしたマテリアル・・・俺や「奴」は再現不可だろうからおそらく・・・」

そして三つの光が割れ、中から出てきた姿なのは、フェイト、はやてが驚愕した

「あれ・・・」

「もしかして・・・」

「うちらやないか!？」

そこにいたのはなのは、フェイト、はやてをベースにしたマテリアルの少女たちだった

しかしその眼に光はなく、ただの「奴」の操り人形だった

のスフィアが突っ込み、助太刀を許さない

『主はやて！！！来ます！！！』

「え、うん！！わかって・・・」

「危ない！！！」

ドゴン！！！！

広範囲魔法の攻撃が逃げ場はなく、戦闘の経験もほとんどないはやてに打ちこまれる

その攻撃をクロノとザフィーラが防ぐが、弾きだされ、その衝撃にはやても吹き飛ばされてしまう

その衝撃にリインフォースとの融合も解けてしまい、はやての髪が元に戻る

なのは、フェイト、はやての三人が一カ所に集められ、そこに化け物本体からの攻撃が迫る

触手の先端からレーザー光線や電撃のようなビームが放たれ、それがひとまとまりになって三人に迫る

「あつぶね！！！！！！」

バツツチイイ!!!!!!

時風が両腕に雷旺をまとい、その反発で光線を弾く
しかし、そのあまりの威力に時風の身体は遠くに吹き飛ばされてしまつた

そして間髪いれずに再度放たれる光線
しかもそれに上乗せして

「あの反応・・・まさか撃てるのか!？」

「スターライト、ブラズマザンバー、ラグナロク、ブレイカー、発射」

ドギョゴア!!!!!!

その攻撃が放たれ、三人に一気に迫る
避けることはできない
かといって受け止められるわけもないその威力

シグナムやクロノ達はマテリアル三人娘に邪魔され手が及ばない

「ツ~~~~~~~~!!!!!!開翼!!!!!!」

そこにいたのは、蒔風舜
外見は十九歳

小さくされていたその体が、ついに本来の姿へと戻る!!!

「ふえええ！？しゅ、舜君!？」

「なんでおつきくなってるの!？」

「え？え？どうなってるんや!？」

三人も驚く

その三人はと言うと、なのはは肩に担がれ、フェイトは脇に抱えられ、はやては背中にしがみつかせている状態だ

「お前二人は知らないか？これが俺の本来の年齢だつての。つてかなのは!!!お前最初の時に説明してたの、忘れてたのかよ!!!」

「にゃ、にゃはは……でも……」

「大きい……」

「凄いなあ……この翼とか……」

「蒔風……戻ったか!!!」

なのは達とみんなのところに戻り、集合する時風たちに、「奴」が期待していたと言わんばかりに言った

「こうでなくては・・・ガキの姿の貴様などつまらんからな。お兄さんが思う存分潰してやるからな!!!」

その言葉に時風が、ニヤリと笑ってこう答えた

「へっ!!!な〜〜にいつてんだ!!!これが本当の姿なんだからよお!!!これからが本番だ!!!」

バツ!!!と翼と共に両腕を広げて時風が宣告した

「こっからクライマックスだぜえ!!!みんな!!!行くぞ!!!」

「「「「「おおおおおおおお!!!」」」」」

翼人・時風の真の姿が現れる

ここからが本番

しかして相手も尋常ならざる者達

この決着は、ここで決まる

t o b e c o n t i n u e d

なのはA・s　　↓決戦前に元通り↓（後書き）

アリス「今回のあの怪獣、モデルは？」

メビウスの映画のUキラーザウルスネオ（最終形態）

わからない方はレッツ検索！！

ア「きた！！得意の丸投げ！！！」

気にしないで・・・
表現とか苦手なの・・・

つてか昨日はヤバかった

なのがヤバかったかってすね

ア「はいはい」

なのはA・sの最終一斉攻撃を見てテンション上がって
それを自分好みに書いて終えてテンション上がって
そのテンションのまま更新してテンション上がって

ア「どんだけ上がってんですか!？」

そのままベッドの上ではね回っていたらシートがずれて足滑って頭
打って気絶しました

ア「はあ!？」

気付いたら二時間経ってた

寝るのと気絶ってやっぱ違いますね

寝てると起きた時は身体の筋伸ばせばいいですけど、気絶だと身体がめちゃ重い……

ア「アブなッ!！」

その後普通に寝ましたけど

知り合いには「何やってんだ」と呆れられました

ア「ホントですよ!！」

首の骨とか逝かなくてよかったあ~~~~

あっはっはっは!!!!

ア「もう一度言いますけどホントですよ……次回、最終決戦」

ではまた次回

一つ覚えの砲撃、通ると思っただか

通す!!レイジングハートが力をくれる!

命と心を賭けて、答えてくれる!

泣いてる子を、救ってあげてっ!!!

なのはA・s　　〜最終決戦、全力全開！〜

「待たせたな！」

【Mahou Soujokuryical Nanhaha
s】- WORLD LINK - WEAPON!!

蒔風の翼に皆の想いが集まっていく
その想いはみんな同じだ

- 敵を倒してみんなで帰ろう -

そのためにこの力は発動する
金色の粒子が蒔風の周りを包み、銀白の翼が羽根を舞わせて羽ばた
いている

それに触れると、皆の魔力、体力が戻っていくのを各自が感じた

「俺があのだカブツを一手にひき付ける。あのマテリアル共はまか
せた」

「一手につて・・・舜君！無茶だよ！！」

そう言ういつなのはの口にシー、と人差し指を当てて笑う蒔風

「勝てるよな？あんなにせもん、ぶちのめせるよな？」

蒔風の瞳には疑いなど一切なかった
信じていた

ここにいるのは一人たりとも負けはしないと
それをなのは知った
だったらこう言うしかないではないか

「任せて!!!」

「よし・・・行くぞ!!!!!」

「行け!!!!!」

蒔風と「奴」の声が同時に響き、一斉に動き出す

星光の魔王VSなのは&ヴィータ

星光の魔王が二人に向け、ディバインバスター級の砲撃を放つ
二人は砲撃にまわりこむ形でそれをかわし、ヴィータが鉄球を撃つ

それが長つスピードで飛んで行き、星光の魔王に直撃するが、それはバリアで阻まれる
しかし

「 !? 」

星光の魔王が一瞬だけ驚きの感情をあらわにする
その鉄球はぶつかった瞬間に一つにまとまり、幾度も幾度もバリアに突撃を繰り返していった

「な、なんだよこれ!!こんな制御いつもはできねえぞ!?!」

「それが舜君のWORLD LINKだよ!!」

そしてついに鉄球がバリアを砕き、星光の魔王の上半身の左半分を吹き飛ばした

「-----!!」

言葉にならないような咆哮を上げ、星光の魔王のデバイスの先端に魔力光が集まっていく

「なのは!?!」

「わかった!!行くよ!!レイジングハート!!!!」

《OK、マスター!!!!》

きている

「なのは！！」

「大丈夫！！！勝つよ！！レイジングハート！！！！！」

《YES、マスター》

パアッ！！！！

なのはの砲撃の先端に変化が起きる

ぶつかり合っている本筋の砲撃から、触手のように魔力が枝分かれし、それが星光の魔王の星光の魔王の砲撃に突き刺さり、穴だらけにしていく！！！！

そしてズバズバと糸で縫いとめるように浸食し、ついには星光の魔王自身にも到達する！！！！

ドドドドドッドン！！！！！！

十ほどの枝分かれた砲弾が命中し、その体が揺れる

さらに本番の砲撃が、穴だらけになった砲撃を引きちぎりながら迫ってくる！！！！

「撃ち貫いて！！！！！」

《これで終わりです》

ゴオウ……!

雷神の皇帝がこの刃幕から逃れようと先ほどの超スピードで姿を消す

だが

「どれだけのスピードで動こうと、その動きを予測することはたやすうい……! テスタロッサ……!」

「はい……!」

ガキイ……!

フェイトが雷神の皇帝の肩にバルディッシュガンバーフォームを押し当て、さらにデバイスを掴んで動きを封じる

「バルディッシュ……! …! 斬り裂いて……!」

《イエッサ……! プラズマガンバー……!》

ジュカッ……! …!

雷神の皇帝の動きが止まる

フェイトがバルディッシュを斜めに振り下ろし、振り返る
そしてそのままゆっくりと離れていく

「だったら撃たせないようにするだけだよ!!」

「行くわよ、ザフィーラ!!」

「心得た!!!!」

シャマルのクラーヴイントが十五個ほどの丸い空間ゲートを作り、そこに向かってザフィーラの「鋼の軛」が突き刺さる

次の瞬間、攻撃が終わって次の魔法へと移行する闇の暴君の周囲に、転送先のゲートが開く

するとどうなるかなどは明白である

そのゲートから突き出してきた鋼の槍が闇の暴君に突き刺さり、その動きを縫い止める!!!!

「もう一回、いけるか?デュランダル!!!!」

《オフコース、ボス》

「エターナルコフィン!!!!!!!!」

クロノによるエターナルコフィンでさらに氷の柱に閉じ込められる
闇の暴君

その柱は天に向かってどこまでも伸びていた

「いくで!!リインフォース!!!!」

『はい、我が主!!!!!!』

「『デアボリック・エミッション!!!!!!』」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!

その氷柱ごと空間魔法に取り込み、極小にまで圧縮する
小さなビー玉にまで小さくなったそれを、はやてがそっと手に持つ
と、パキン、と砕けて消えてしまった。

「はやてちゃん!!!!」

「なのはちゃん!!!そっちは?」

「終わったよ!!!フェイトちゃんも!!!」

「舜は!?!」

皆が蒔風の方を見る

蒔風はと言つと………

「おい!!あいつら終わった見てえだぜ?こんなでいいのか!?!」

「ふ・・・甘く・・・見るなあ!!!!」

ドバア!!!!!!

巨大な肉体が全身から光を発する

その光は辺り一帯を白に染め、全員の視界を埋め尽くす

「ッ!?これ・・・は・・・うわあ!!!!」

「グイータツ!?グおっ!!」

「きゃあああ!!!!」

「シグナム!!シヤマル!?!ぐっ、ぬお!!!!」

「フェイトちゃ、きゃあ!!」

「なのは!!はやて、こっちに・・・きゃ!!」

「フェイト!!うわっ!!ぐああああ!!!!!!」

「みんな!!どに・・・きゃあああ!!!!!!」

『くっ！主はやて！！！！』

その閃光の中で、離れた場所にいるのは達が次々と触手に叩きつけたれ隆起した地面へと落ちていく
立ちあがるうとするが、腕や足ががくがくと震え、うまく立ち上がれない

「なにを……ぬぐっ！？」

その中で蒔風も触手に捕まり、振り回される

爪を両足と両手でつつかえさせて挟まれるのを防ぐが、捕まってしまっていることに変わりはない

そのまま触手は真っ直ぐに地面に向かい、蒔風を叩き付けた

ボゴオ！！ボゴッ！！ドゴゴゴゴッ！！！！ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！！

さらにいくつもの触手が蒔風の落ちた場所に叩き付けられ、まるで料理の際、肉を慣らすかの様に蒔風を潰す

「舜……君っ！！」

「蒔風……」

【Mahou Syoujo Iyricai Nannya A
s】- WORLD LINK - FINALE ATTACK
!!

蒔風の翼が開かれ、それが七色に輝きだす!!!!

「だったら、今のオレの力はそれに呼応し、どこまでも強くなるッ
!!!!!!」

天からの光はみんなの願いを力にし、蒔風の周囲に漂う粒子からのだ
それはあまりにも強く、陽の光とも思えるほどの!!!!

さらに蒔風の身体も虹に輝き、全身に力がいきわたる!!

「があああああああああああ!!!!!!」

「奴」が大きく振り返って咆哮する
それと同時に玉座の怪獣にある全部のとげがミサイルのように飛ん
でいき、蒔風を爆散させようと迫る

それを十分に引き付け、蒔風に着弾し、爆発したその瞬間!!!!
蒔風が超高速スピードで真っ直ぐに「奴」に向かって飛び出す!!!!

先に爆発したミサイルの爆風で加速し、後続のミサイル群を旋回してかわし、ついにすべてを振りきって、時風が怪獣に突っ込んでいく！……！！

ドンツ！！！！メキツ！！グチャバキバキバキ！！！！ドゴゴゴゴゴゴ、ドオン！！……！！

その体内に飛び込み、縦横無尽に引つ掻き廻し、その体を崩壊させるそして核を掴み取り、後ろの方から飛び出して、その核を握って潰した

核を失った玉座は砂状になって崩れ去り、そこに叩きこまれたエネルギーの逆流で「奴」の全身から小爆発を起こす

「ぐ……ああああああああああああああああああ！！！！……！！」

「なのは！！！！フェイト！！！！はやて！！……！！」

「……うん！！……！！」「……！！」

三人が時風の方へと何とか飛び、そしてデバイスを構える

三人の魔法陣が重なり、一つの砲撃となってその場に集束されていく！！……！！

「やった!!」

「いえーい!!」

「やったんか!？」

四人がガッツポーズをとり、勝利を喜ぶ
こうして、大きな戦いは終わった

どんよりとした雲は晴れ、朝日が昇ってきた
新たな日、新たな未来

その光を、みんなしてゆつくりと眺めていた

t o b e c o n t i n u e d

なのはA・S　〜最終決戦、全力全開！〜（後書き）

アリス「まんまじゃないですか！！??？」

な、なにが？

ア「最後の蒔風の体当たりのなあれ、メビウスの映画の最後の技まんま！！」

だってあれかつこいいんだもん
使いたかったの！！

ア「まあ、確かにかつこいいですけど」

だがなんか人質にされていた姉ちゃんの弟
あのガキはいらねえ

そこ飛ばして見てるしね、いつも

ア「マジかよ……」

さて、あとはお片づけですな

ア「次回、そして別れるとき」

ではまた次回

セーラ、アップ……！) 最終回より

なのはA・S　　そして笑顔で

戦いから二日後

時風はいまだにこの世界に残っていた

「はあ~~~~~あ………」

リンディ家で大きなため息をつく時風

それもそうだ

先日の戦いは管理局の戦艦がモニターしていた

つまり多くの局員が翼人の存在を目の当たりにしたのだ

「これめんどーなことになるー」

リビングでぐったりとしている時風にエイミィがジュースをついで置いてくれた

「何やってんだか……いいじゃない、これで超有名人じゃん！」

「問題は俺が翼人ってことなのー、つてか、もう慣れたんだな」

「まあねー。大体同じくらいっしょ？歳。だからかなー」

今この部屋にいるのはエイミィと時風だけだ

なのはとフェイトは学校

クロノとリンディとユーノは事件の報告と後始末

アルフは八神家の皆と共にはやての家にいる

なんでもザフィーラに小さな子犬形態の変身の方法を教えるんだとか

「ほら！しっかりして！！クロノ君がなんとかするって言うてくれ
たんだからさ！」

「できるのかなー？俺も行った方がいいんじゃないのかなー
ー？」

「もし君の顔知ってる人とすれ違ったらばれるでしょ？」

「そうなんだよなー……だからクロノに任せるしかないんだ
よなーー」

そういつてグダグダとしながら一日を過ごす時風

大きくなってしまったので学校には行けないし、「奴」も倒したの
でやることがないのだ

ではなぜ次の世界に行かないのか

答えは簡単

ゲートが開かないのだ

まるでまだ時風にはやることあると言っているのよつに

「まったたく……何をやってるんだ？」

と、そこにクロノが帰ってくる

「クロちゃーん。どーだったー？」

「どつて・・・何とかなったよ」

「まじでか!？」

ガバツと時風が起き上がり、クロノに向く

「ああ。記録映像をなんとか問題ないぐらいに修正してね。でもさすがに翼人の事は消せなかった。だから」

スツ、と書類のようなものを時風に手渡すクロノ
そこにはこう書いてあった

・・・のような仔細である
なお、この「闇の書事件」の協力者に

現地の魔導師「高町なのは」

囑託魔導師「フェイト・テスタロッサ」

闇の書改め、夜天の書の保持者「八神はやて」
及びその従者「ヴォルケンリッター」

そして異世界の者「銀白の翼人」の名を記したい
翼人の素性及び名前、外見はここに記さず
彼の者は異次元へと去っていった

「翼人」に関しては別紙のレポート（著／ユーノ・スクライア）を参照されたし

「おお………」

「翼人は現れたけど、それが君である、ということとは消しておいたよ」

「あありがとおおおおおおおおお！！！！！！！」

時風がクロノの腕をブンブン振って感謝する
そして最後にスピンスさせて、ソファに座らせた

「あれ？艦長とユーノ君は？」

「め、目が回る……う？ああ、艦長はまだあっちにいるよ。さすがに翼人の事を問いたただされてね」

「大丈夫なのかなあ」

「艦長なら大丈夫な気がする……」

「母さん……だからね……」

「納得できるのが嫌だな」

「ただいまー……」

「お？帰ってきたな。なのはも一緒……か……」

玄関が開き、なのはとフェイトの聲がして、蒔風がそれを出迎え、そして声が小さくなっていく
なぜならそこにはなのは、フェイトと一緒にアリサとすずかもいたからだ

「連れてきちゃったんかい」

「あ、あはは」

「どうしてもしっかり話しが聞きたいって……」

「ま、まあ中に入れうん、そうだな」

四人をそう言っただけに招き入れる

「さて、説明してもらおうわよ。あの夜のこと、あの不思議な力の事も……」

アリサが催促し、クロノとエイミィが立ちあってすべての事情を説明した

魔法との出会い、ジュエルシード、フェイトとの戦い、次元世界の事、はやての事……

それを聞いて、二人は唾然とした
しかし、クロノの説明やあの夜目の当たりにしたことから、足りないピースが埋まっていき、二人は納得した。

「にしても……とんでもない話があったもんね……」

「うん……びっくりしちゃった」

「あれ？でも蒔風が来たのもそれくらいじゃなかった？」

「呼んだ……？」

そこに蒔風がリビングにやってくる
手にはお菓子を広げた大きなお皿があり、反対の手には人数分のジュースがお盆に乗っていた

「……誰？このお兄さん」

「舜君の……お兄さんかな？名前に反応したし、顔そっくりだし」

「あ、あはは……」

「えっとね、アリサ、さすが、驚かないでほしいんだけど……」

「その人が蒔風舜君だよ？」

「つていつか証拠を見せなさい!! 証拠を!!!」

「問題ない。オレとみんなの間なら、きつと分かり合えるっさ!!」
「!」

「く、くああああ!!!!このノリまさしくあいつだわ~~~~
~~~~!!!!」

「あ、アリサちゃん落ち着いて・・・」

「すずか!! あんたなんでそんなに冷静なの!!!!」

「え? あ、アリサちゃんがそんなに驚くから、驚きそびれちゃったよ・・・」

「グッジョブだよ!! アリサ!!!!」

「フェイトも何言ってるのよ!?!」

「まあまあ・・・」

「なのはもなんでそんなに冷静なの? あれだったのがこうなったん  
のよ!?! こんなに大きなお兄さんだったの!?! うわあ・・・なん  
か今さらになつて恥ずかしい・・・あれ? 一人で騒いでる状態じ  
やない? あたし」

「アホだなあ・・・」

「アホ言うな!!!!」

それから十分してアリサが落ち着き、説明を受けた上で時風に訊いた

「それで？あんなまたいなくなるの？」

「そそ。さすがに次はないだろーしねー。これでこの世界とは最後かな？」

「ふーん」

「なのはちゃんとフェイトちゃんは驚かなかったの？」

「驚いたけどなんか納得というか……」

「無邪気の中に大人な感じがあったというか……」

「それって「子どものままの大人」じゃないの？」

「「それだ!!」」

「あなた達そろってひどくないですか!？」

そうしてギヤイノギヤイノと騒ぎまくってから、アリサとすずかは帰っていった

そして夜、リンディとユーノも帰宅し、それからなのはの家に向か

った

理由は、魔法の事などを高町家の皆に伝えるためだ  
なのは自分の想いを言葉にし、管理局で働きたいと決心した

フェイトも、管理局で働くことを決めたようだ

さらにリンディ家への養子になることも、決定した

この話は当初からフェイトに持ちかけられていたらしく、今までフ  
ェイトは悩んでいたが、新しい自分を始めるきっかけとして決心し  
たのだそうだ

その日の晩御飯は八神家で皆でとった

「皆いらっしやい!!!!こないだはありがとうーな!!!!さ、じゃんじ  
ゃん食べてってな!!!!」

「このたびは我々がご迷惑をかけてしまったうえに主の罪を軽減し  
てくださって、誠にありがとうございました」

「さ!!!!パーティーの始まりや!!!!」

はやての家の庭に出て、満天の星空の下でバーベキューを楽しむ一向

「うまい!!!!すごいな、こんなにもうまいのか!!!!」



「バカヤロー舜！！トーゼンだろ！！！はやての料理はギカウマなんだからな！！！！」

「うまいうまい！！あ、ピーマン嫌い」

「てめえあたしの皿にピーマン乗せんよ！！！！」

「おつきくなれないぞ、ヴィータ！！！！」

「うっせえ！！！！あたしは大人だ！！！！お前より長生きなんだぞ！！！！」

「おいしいねー」

「うん、はやての料理ってこんなにおいしいんだね！」

「料理は任しといてな！！！！これでもあの子たちのご飯はうちが作ってたんやからな！！！！」

「もうそんなに動いても大丈夫なんだ」

「うん！！足もこのままいけば動くようになるって、先生が！！！！」

「よかったね、はやて」

「おおきにや」

「あれ？そういえばシグナムさんとかヴィータちゃんは料理しないの？」

「あの二人もそれなりにできるにはできるんやけど、それだと拗ねるのが一人いてなあ」

「ああ……」

そういつてなのはとフェイトがシャルルの方を向き、当の本人がその視線に気付く

「え？何の話ですか？」

「な、なんでもないんよー」

はやてが明らかに視線を逸らすので、シャルルは大体の事を悟ってしまった

「い、いつか絶対お料理上手になってやるんだからー……！！  
！……」

「シャルル、シャルルさー……ん！？」

「シャルルウー……でもシャルルの準備手伝いは助かってるんやでー……！！……」

はやてがシャルルを追いかけていく  
車椅子でどうしてあのスピードが出るんだろっ……

「テストロツサ、楽しんでくれているか？」

「あ、シグナム」

「今度一回手合わせ願っていたのだが……」

「え？……いいですよ。受けて立ちます……！」

「いい返事だ。それでこそ「たっ、大変だ……！！！」どうした……！！！」

蒔風の叫びにシグナムが瞬時に騎士甲冑に身を包んでそちらに向かった

「ヴィータが……ヴィータが……！」

「何があった!？」

「アイス好きだからって話になって、俺の持ってたかき氷喰わせたところになって……」

そこにはかき氷を幸せいっぱいの表情で口に運び、頬張ったまま固まってしまっているヴィータがいた

ラベルには「極寒！絶対零度かき氷」と書いてある

「ヴィータ!？おい、なんでそんな幸せそうな顔して凍ってるんだ!？」

「シ、シグナム……!？ちようどいい……!お前のレバ剣で温めてやれ!





自身のためだ」

「それでも救われました。「闇の書」は「夜天の書」へと戻り、主はやての力で呪いの機能も断たれました」

「それははやての力でしょうに」

「しかし、意識の眠っていた主を少しでも目覚めさせたのはあなた達の言葉でした。それがなければ、主はここに帰ってくることはできなかつたでしょう」

「だったらなおさら俺じゃなくてなのは達に言ってね。オレはちょいと手を出したただけだよ」

「翼人は各世界に必要な以上に干渉しないのでは？」

「ま、そうなんだけどな。あれ？そっいえば翼人知ってる？」

「ええ……わが身の、「夜天の書」の製造に一番貢献した人物が、翼人でしたから」

「古代ベルカの翼人か……色は？」

「彼は「赤色の翼人」でした」

「どおりで俺をすんなり取り込めたわけだな」

「彼には他にも「青色」や「黄色」と言った友人もいたようですが」

「あのとき色彩が増えたつてのはそういうことか」

「ええ……あの時代は翼人の色は単色だけだったと記憶しています」

「他には知らない？」

「はい。直接知っているのは「赤色の翼人」だけでしたね。彼ももう過去の人物ですが」

そういつてリインにもコーラを差し出す時風  
それを少しだけ飲み、一緒に空を見上げる

「……………」

「……………」

「あ—————!!そんなどこにいたん?こつち来てーな!!みんなで写真撮ろ—————!!」

はやてが二人を見つけ、庭から上を向いて声をかけてきた  
それに応じて二人が降りようと立ち上がったところで、リインフォースが時風に囁きかけた

(今夜……………街の見える丘の上で、お話したいことがあります)

「……………」

(待ってます)





「照れるなあ。俺こんなシチュエーション初めてだから……」

「わかって……いるのでしょうか？」

「……やはり……だめなのか？」

蒔風が陽気な表情をやめ、落ち込んだ声を出す

「ええ……やはり、呪いはそう簡単には消えてはくれないよ  
うですね」

呪い

闇の書の闇

それはいまだにしっかりとリインフォースの中に存在し続けている  
あの時に倒した暴走プログラムは、本体ではない

ようはあれはわき出した腫瘍だ

いくら腫瘍を切りだして破壊しても、それを作り出す大本がなくな  
らなければ、また「あれ」は出てきてしまう

今この瞬間にも、新たな防衛プログラムが彼女の中で構築されてい  
るのだそうだ

そしてそれは再びはやてを蝕むだろう

そしてプログラムは常に成長を繰り返す

蒐集を繰り返す、無限に強くなっていくプログラムは、何度かは大  
丈夫でもいずれ誰にも止められなくなる

それを看過する管理局ではない  
おそらくはやては夜天の書と共に隔離され、研究所か監獄に封印されることになるかもしれない

「それだけは・・・絶対に防がなければなりません」

「お前はどのような」

「・・・騎士たちは主が私と切り離して新たに再構築したので、存在し続けます」

「お前は！どのようなんだ・・・ッ！」

「こうなるしか・・・方法はないのですよ」

「ッ・・・」

「貴方にもわかっていたでしょう？でも、貴方には言えなかった。私が消えねばならない、と」

その言葉に、時風が目を閉じて天を仰ぐ  
そして首を戻して言う

「その「闇」を消そうとしても、お前の核は傷つく。いや、お前の核ごと消すしかない。それほどまでに一体化してしまっている」

「その通り。ですから、貴方をお願いしたいのです」

「お前を・・・消してくれと？」



「う……うん……」

「……シグナム、はやてちゃんは？」

「眠っておられる。ほかは？」

「なのはちゃんもフェイトちゃんも眠ってるわ」

「そうか」

はやて宅

あのパーティーの後、なのはとフェイトはここに泊まっていくことにした

シグナムとシャルは他の皆が起きないように見張りをしている

それは永く共にいた、夜天の書の彼女のために

「でも……ホントに消えちまうのかよ……そんなのあんまりじゃんかよお……」

ヴィータが涙ぐむ

大きなぬいぐるみを抱きかかえ、それに顔をうずませる

「ヴィータ……」

「おそろく、こうなるしかないのだろう……悲しいしいことだが……」

「時風は知っているのだろうな。だが、なにも言わずに出ていった  
ということは、彼にもおそろく……」

「舜君は確かに強いわ。恐ろしいほどに。でも、決して万能じゃな  
い……。なんだか彼が「世界最強」って言うたびに、無理して  
るように見えるの……」

「どういうことだシヤマル。あいつは確かに強いぞ」

「うーん……。そうなんだけど……」

「そんなことよりも！本当にどうしようもないのかよー！」

「ヴィータ、皆が起きてしまう」

「でも……。せっかく皆で幸せになれんのに、なんであいつだけ消  
えなきゃなんねえんだよぉ……」

「言つな。彼女は我らのためにその身を犠牲にしようとしている。  
変わることでできない自分の身が悔しくてたまらない……。それ  
は皆同じだ」

「「「「「「「「「「「「」

そのまま皆黙りこくってしまつ

「う……。い、いや……。リン……。フォース……。  
あれ？リンフォース？」

その時、はやてがうなされてうつすらと目を覚ます。  
そこにシグナムが慌てて行き、寝かしつける

「大丈夫ですよ、主。もう誰も……貴女のそばを離れません。  
……これ以上は、誰一人として」

「う……うん……」

シグナムの言葉には決意が込められていた  
そしてはやては再びまどろみの中へ

「……ふう……」

「……やっぱり……感じん……」

「ッ！あ、主？」

しかし、はやてが違和感に気付いた  
そしていったん気づけば、それは瞬時に確信に変わった

「シグナム……ラインはどこ？」

「あ、主……」

「答えて……！ラインはどこや……まさか……」

「お答えできません」

「答えて！！主の命令や！！！」

「お答えできませんッ！！！！！」

「烈火の将シグナム！！！！答えて！！！！リインは……リインフォ  
ースはどこに言ったんや！？」

「答えるわけには、いかないのです！！！！！！！」

「だったらええ！自分で探す！！！！！」

「主はやて！！！」

「はやて！！！」

「はやてちゃん！！！」

「ううん……どうしたの？」

「なにかあった？」

なのはにフェイトまで目を覚ます  
そして家からはやてが飛び出した

小さな夜天の主は、夜の街を車椅子で駆けて行く  
自分の家族を探して

.....  
.....

蒔風が慟哭する

届く位置にいつにもかかわらず、その命を救えない  
またしても蒔風は、この世界で敗北する

地面に四つん這いになる蒔風にリインフォースが肩に手を当てる

「こう言うてはなんですが……私はプログラムです。厳密にい  
えば人間ではありませんだから」

「だからって……納得できるかよ……」

ガシッ!!!

蒔風がリインフォースの襟を両手で掴み、顔を下に向けて叫んだ

「祝福の風リインフォース。お前は確かに皆の幸せにつながったさ。  
でも……でもよ……」

蒔風が一層強く握りしめ、吐き捨てるように言った

「あなたの幸せは……その風は誰が運んできてくれんだよ!!  
!これじゃ……あまりにもひどいだろうが……なんかな  
いのかよ……お前だからわかる抜け穴とかが!!」

「残念ですが……」

「祝福の風の末路がこれじゃ……一体何が救われるってんだよ  
……」



「大丈夫ですよ」

リインフォースが蒔風に声をかける  
握った拳を解き、蒔風が顔を上げる

そしてリインフォースの顔を見た  
その顔には一切の後悔や未練はなかった

むしろ、それは幸福なものだった  
そして蒔風は知った

「お前の幸せは……」

「ええ……我が主が、しっかりとこの胸に与えてくれました。  
私はもう十分に幸せです。今までの悲痛な記憶がまるでなかったか  
のように、私の記憶と心は幸せに満ちています  
これ以上何を望みましょう。」

主が生き、その周りには愛しの騎士たちとかけがえのない友、そして  
最高の理解者がいるのです  
一体何を思い残すことはありませんよう……  
後はただ……主が私のいない現実を……どうか強く受け止  
めて、先の未来へと進んでくれることを願うばかりです」

「リインフォース……」

「そしてどうかあなたにも祝福を。貴方の先にも、祝福があらんこ  
とを」

リインフォースが両手を組んで祈る。

その願いは確かに蒔風の翼に届いた。

「お願い………します」

「………ッ………ああ………わかった………」

魔法陣が展開される

その中心に蒔風が立ち、手をかざす

リンフォースはしゃがみ、頭を下げた

その姿はまるで、救いを求めて祈る信者と、それを赦す神父のようであった

雪が降り始める

「始めよう」

蒔風の背に翼が開翼され、リンフォースの身体が輝く  
そこに、大きな声が響き渡った

「リンフォース………!!!………!!!」

「主………はやて………」

「………」

蒔風の背後、リインフォースには蒔風越しに正面になる

そこにはやてがやってきた

後からはヴォルケンリッターとなのは、フェイトもいる

「な・・・なにやってん？さ、みんなで家に帰ってあったかいスープでも飲もう？な？」

はやてがおそろおそろ切り出す

たぶん、今この状況が何をしているのかが分かっているのだろうだが、それは信じたくなかった

「な？舜君も、なにやってるんや？そんな翼はやして・・・もう、なんの冗談や？」

「冗談ではない」

蒔風が振り返らずに低い声で言った

その言葉にはやての身体がびくりと震える

「じよ、冗談やないって・・・どういうことや？」

「簡単なこと。リインフォースの中ではいまだに暴走プログラムが構築されている。

このままでは新たなプログラムが発動し、再びお前を飲み込む。だから・・・そうなる前に消す」

「け・・・消すって・・・そ、それはリインが？」

「……は「いや、こいつはあくまで嫌だと言ったよ。お前と  
いたってな。だが、これ以上はやてを苦しめてもいいのかと言っ  
て説き伏せた」!？」

(舜! 一体どういう……)

(黙ってる)

「そ、そんなことダメや!! 絶対にダメや!!! 何しとるん!? そ  
んなことゆるさへん!!! 絶対にだめや!!!!!!」

「それは関係ない。もう決めたんだ」

「決めたって……さ、さてはお前、「奴」やな!? 舜君に化  
けとるんや!!! このにせもん!!! リインを離せ!!! そこからど  
きい!!!!!!」

はやてが車椅子を必死にこぎ、蒔風に向かう

しかし、それが蒔風に届くわけもない

車椅子の目の前に青龍を投げ突き立て、それを止める

車椅子が転倒し、はやての身体が倒れるが、雪に埋まる前に青龍が  
人型に現れて受け止めた

「これが証明だ。十五天帝は俺でしか使えない。

それに「奴」なら、リインよりもこの場でお前やなのは、フェイト  
の首を刎ってるよ」

「そんな……ゆるさへん……絶対にゆるさへん……  
・リインはやつと解放されたんや!!! これ以上不幸にはさせへん

「！！！！リン・・・リンーーーー！！！！！！」

蒔風は気にとめないように再びリンフォースに向き合う

そこで入れ替わるようにリンフォースがはやての元に向かった

「リ、リンフォース！さ、逃げよ？皆で家に「すみません主・・・」  
「・・・え？」

「わが身はいずれ、あなたの未来を壊してしまうのです。それは私にとっても不本意であります」

「いやや・・・そんなこと言わんといて・・・」

「貴女には未来があります。これから先に、無限の可能性が。貴女には幸せになってもらいたい」

「リンがいなきやいやや！！そんな未来は・・・」

「大丈夫」

「あ・・・」

リンフォースがはやてを抱きしめ、優しく言った

「貴女に出会い、呪縛から解放していただき、そして新たな名前、新たな家族、そして最高の祝福をいただきました」

「う・・・ぐ・・・」

「祝福の風、リインフォースは……胸を張ってこう言えます。私は今、世界で、歴史上で、最も幸福な融合機であると」

「リイン……ひっ……うえ……」

「だから泣かないで……私は……貴女にあえて……幸せになれましたよ」

「う……うあ……い、いかないで……リイン……リイン……」

「貴女の付けてくれた誇り高いこの優しい呼び名は、私の後続機に与えてあげてください。

これからあなたと共に存在する、新たな祝福の風に……」

「あ……リイン……あかん……行かないで……もう離れないどいて……」

リインフォースは伝える言葉をすべて伝え、蒔風の目の前に戻ってきた

「お願いします」

「では……」

銀白の翼人により、あなたの願いを聞きとどけた

その想いは永久に

幸せの中に消えて逝け」

そしてリインフォースの身体が光り出す



その光の元に十字架型のデバイスがゆっくりと落ちてきて、  
時風の手に収まる

それこそがリインフォースが残した結晶  
さらに一枚の銀白の羽根

それが十字架に触れると、羽根はとけて行ってしまった  
十字架に一体化するかのよう

その十字架を時風は車椅子に座らされたはやてに渡す  
それをパシッ、と掴み両手で握り込むはやて

そしてその場からなにも言わずに帰って行ってしまった  
その後を騎士たちが追う

途中、時風を一回だけ振り返ったが、その表情は雪でよく見えな  
かった

丘の上には時風、なのは、フェイトの三人が残される

「舜君……………」

「なんだなのは」

「あれって……………嘘でしょ？」

「「あれ」の定義によっては返答が変わるね」

「舜が……………無理やり説き伏せたところ」



「・・・・・・・・何のことだ。あれは」

「嘘だよ、あれは」

なのはが断言する

フェイトもそれに頷く

「・・・・根拠は？」

「舜君は・・・誰かの意志を踏みつづすなんてことしないもん」

「するにしても、最大限救いがあるようにしてくれる。それをわたしは知ってる」

「・・・・・・・・」

「自分から消えるリンさんに罪悪感を、そして残されたはやてちゃんに絶望に染まりきらないように・・・・」

「違うな」

「え？」

「で、でも」

「違いよ。オレはそんなたいした人間じゃない」

「舜君・・・・」

「Gate Open . . . Mahou Syoujo Iyri  
Call NANOHA As」

するとその場にゲートが開く

蒔風の役目は終わったと言わんばかりに

「……………」

無言で蒔風はゲートに向かう

「舜君！！！」「待つて！！！！」

「……………お前ら！さっきの変な話、はやてにするなよ？」

「でも！！！！」

「でもはなしだよ。なのは、お前はもちつと人を頼れ。なまじいろ  
いるできるから頼りにくいかもしれないけどな」

「そんな話を聞きたいんじゃないよ！！！！」

「じゃあな……………」

バシユウ！！

「「舜（君）！！！！！！！！」」

そうして、蒔風は淋しくこの世界を去った





そこは

「輝志”・・・か」

そこは奇跡の世界

夢の世界にて成長し、悲劇の運命を変えた、少年少女のいる世界

「リトルバスターズ・・・か」

t o b e c o n t i n u e d

なのはA・s　　そして笑顔で（後書き）

【魔法少女リリカルなのは　A・s】

構成：”ライクル”　35%  
”フォルス”　35%  
”LOND”　30%

最主要人物：高町なのは

- WORLD LINK -　　WEPON　：全員の体力・魔力回復  
&性能の一時的な超アップ

- WORLD LINK -　　FINAL ATTACK　：皆の  
願いを力を翼に、身体にまとっての突撃攻撃

アリス「今回はさみしい終わり方ですね」

しかし、私にはこれ以上の終わり方はないと思います  
おそらく、無理やり設定すればここで彼女は救えるのでしょう

ですがそれは・・・

ア「できなかつた？」

はい

蒔風の力ではどう仕様もありませんでした

リン最後のシーンはアニメ見直して泣き書きながら泣きでした  
まさか自分の書いている文章で泣くななんて思わなかった

しかし、この悲しみは確実に彼や彼女らの胸に残り、乗り越えてそ  
して……

ア「続くんですね？」

と言つてもかなり終盤です

二百話あたりになるかも？

下手すると二百五十？

この物語はまだまだ先が長い

ア「そんなにですか」

ええ

ですので皆さん応援よろしくお願いします!!!!!!

なんだかんだで二十万アクセスいってましたしね!!!!

じっさいなのはA・sの途中で越えましたがきりのいいところでの  
発表となりました

今回は番外は書きません

申し訳ない

ア「次回、ミッションスタート!!!」

ではまた次回

この青春を駆け抜ける



リトルバスターズ ～遊び人二人の出会い～

朝である

学校である

そして今俺、時風舜は担任である教師と共に自分の教室へと向かっていた

「で、あっちが男子寮、向こうが女子寮だ」

「ふいふい」

「それから、今から行くのが校舎だな」

「オッケイです」

「にしても君、こんな時期に転校とは大変だな。二年ならすぐに受験じゃないのか？」

「あ、いえ」

「ん？なんだ？就職か？それにしたって・・・」

「まあそこは家庭の事情ってやつですよ」

「そうか。ま、深くは聞かんさ」

そんな風に適当な会話をしながら中庭を通って校舎の方へと歩いていくオレたち

と、その途中で教師の足が止まった

「しまった・・・ホームルームで配るプリント忘れた・・・」

「あ、じゃあオレのまま待ってますよ」

「ん、そうか？すまないな。すぐに戻るから」

そついつて教師は足早に職員室へと戻っていく。

そこに立ち尽くして待っていると、さつき食堂がある方だと言われた方角から、けたたましい声が聞こえた。

「だぁー！！！！やばい遅刻すんぞ！！！！」

「元はと言えば真人のせいなんだからね！！！！」

「んだよ理樹、それじゃまるでオレのせいみたいじゃねえかよ！！」

「バカ。理樹はそうとしか言っておらんだろっ」

「お前バカだな」

「ああん！？てめえらオレをバカにすんのが筋肉さんをバカにすることと同義だと知っての言葉か！？」

「そんなこと言っていないで走ってよ真人！」

「そんなこと・・・うをおおお！！！！どうしてくれんだよッ！理樹にまで愛想尽かされちまったじゃねえか！！！！」

「割と前から愛想は尽いたよ」

「もうバカだな。いやバランだな」

「鈴、それは弁当の中の緑の草みたいなものだ。決して馬鹿と言つ意味じゃない」

「なにい!?!」

「へへっ!バーク!」

「うっさいボケえ!!! (ドゲシッ!!!)」

ドッシャア!!!

何やら五人の生徒が遅刻ギリギリで走っているみたいだな  
ブレザー制服なのに学ラン来た筋肉質の男が紅一点の小柄な女子に  
ハイキックぶちかまされてスツ転んだ。

「お前ら何やってんだ!!! もう間に合わないっ!!!」

「どーすんだよ!!!」

「お前のせいだろ、真人」

「なんだとこの謙吾が!!!」

「やるのか？」

「やめろ、そんなことしてる場合じゃない！！こうなったらオレにいい考えがある」

「え？恭介、まさかそれって……」

「言いから耳貸せ」

その五人が円陣組んでなにやら話し込む  
なんだ？何するんだ？

気弱そうな少年が驚くが、結局何かが実行されるようだ

大柄な二人、真人と呼ばれていた学ラン少年と謙吾と呼ばれていた  
剣道着姿の少年が足場になる  
そしてその二人の手に鈴と呼ばれていた少女が立つ

「今度は成功させるぞ！！」

「いつくぜー！！！！！！！！」

「どおりやああああああ！！！！」

なっ、なにに！？

二人が少女を打ち上げて教室の窓から投げいれるだと！？

あ、あれ？あの軌道、入らなくねえ？

ってかあのままじゃ地面に落ちんぞ!?

下にいる男子達からでは手が届かない。だけど俺なら!!!

「あ、ぶなああああああああああ!!!」

とっさに跳躍!!!華麗にジャンプ!!!

まだ二階部分にいる少女をキャッチしようと、オレが跳ぶ!!!  
よし、このままキャッチだ!!!

と、思われた瞬間、少女が信じられない動きを見せた

空中で一回転して体勢を戻し、俺の顔を踏み台にしたのだ!!!

「ノウツ!?!」

そして軌道修正して見事目当ての窓に飛び込む少女  
地面に落ちるオレ

そして俺はこんな感想を漏らしてしまったのだ

「ネコさんか……」

その言葉がオレの午前中の最後の言葉だったな  
なぜならどう聞こえたのか、その教室の窓から先ほどの少女が机を  
投げ出してきたからだ

「は?ンガツ!!!!」

それが顔面に直撃し、ほどなく気絶するオレ。

その周囲に四人の男子が気まずそうによってきたのはぼんやりと見

えた。

教室の方では彼女の友人らしき子がさらにイスを投げつけようとしてきたのを止めていた。

グッジョブだ。

あれ？隣の黒髪さんが殺気放ってきてるよ？

.....パタリ

そしてオレはこの学校でのデビューを、この日最初の保健室利用者として飾ったのだった

.....

「ハッ！！オレは今日覚めたー！！」

ガバリと時風が身体を起こす

ここは保健室だ

あの後担ぎこまれたらしい

ガラガラガラ

「お？目が覚めたかい」

そこに一人の生徒が入ってきた

「あ、朝の」

「よ、オレは棗恭介ってんだ。朝は妹を助けようとしてくれてサンキューな」

「ん？あれ？ああ、そっぴやそっぴだっとな。彼女あなたの妹だったのか」

「そ。で、あなたの名前は？」

「おお、名乗られたからには名乗りがえそぞ。

俺の名前は蒔風舜。趣味は熱いこと。特技は世界最強。座右の銘は「いつまでも少年ハート」だ」

ピクリ、と恭介の眉が動く

「あんた転校生だよな？何年だ？」

「三年……らしい」

「それでも今！青春を駆け抜けたいか！？」

「ふえ！？お、おお！！いつだって青春は好きだ！！！！思いつき





なんでも彼の友達グループは今野球をやっている、そのチームに蒔風は誘われたのだ

「オレとしては今すぐ入れてやりたいッ！！だが他の奴らはお前の事をよく知らない。だからお前の実力、見せてやれよ！！！」

これは恭介の談である

まだここには蒔風を含め男五人しかいないが、まだメンバーはたくさんいるらしい

「まあ恭介ががそういうなら仕方ないけどさ……」

「いいのか？理樹。今リトルバスターズのリーダーはお前なんだから、お前が嫌だと言えばオレは何も言えなくなるんだが」

「うーん……でも恭介が選定したならいい人みたいだし……見てみるだけ見てみるよ」

「よっしやあ！！！！！」

こうして、蒔風の適性試験が始まった

(このメンバーがリトルバスターズか………だったら！！)

蒔風がグローブをつけてベースの外側に立つ

理樹の撃つ球を、それで捕球していくのだ

(何が何でも入ってやる!!!)

蒔風がなぜか冷や汗を流しながら、決心した

t o b e c o n t i n u e d

リトルバスターズ ～遊び人二人の出会い～（後書き）

アリス「今回は作者からお知らせがあります」

はい

実は昨日、「the days」編を修正いたしました

いや、最初の方の分はあまりにもひどい！！

読んで笑ってしまいました

そして悩みました

これは修正したほうがいいのか？

結構悩みましたね

自分の成長がわかるから残そうかとか、いろいろな理由から止そうかとも思いました

しかし、今回百話分突破 and 二十万アクセスも行ったところで、ついに修正を施し少しはマシにしました。

理由としては最終的に「これはentertainmentなんだから、読み手優先じゃ！！」という感じになったからです。

どこが変わったのか、気になる方は読み直してみてもいいかがでしょうか。

話の流れは全く変わってないので見なくてもいいのですが（笑）。

おそらく一つの世界が終わることに初期の方の世界はちよくちよく直すかもしれません。

ア「次回、時風の苦手発覚」

ではまた次回

リトルバスターズ　　〜 蒔風、それなりに落ち込む〜

蒔風がバットを握ってポツクスに立っている

その体制から蒔風が神経を研ぎ澄ましている風を感じられる

「絶対に打ってやる絶対に打ってやる絶対に打ってやる絶対に打ってやるよっしやコイヤーー！！！！」

しかし蒔風の表情は違った

目はグルグルと渦巻いて、半分涙目、しかもやけっぱちだ

一体なにがあつたのか

時間はつい15分ほどに巻き戻る

.....

「よっ！はっ！キャッチ！」

理樹の打つ球を調子よく捕球していく蒔風  
跳んできたボールは十九個

蒔風は真っ直ぐ飛んできたボールすべてを普通にキャッチしてきていた

「なかなかやるな！」

「たりめえよ！・・・お？」

そして最後の球が飛んできた。

最後は凡フライである。

まず捕れたな、と皆が思うその球を蒔風が上を向いて追って行く。

「よし・・・いいぞ・・・このままこのまま・・・うわっ！ア  
タッ！」

「・・・は？」

そして驚いた

後ろ向きに歩き、腕を伸ばしていた蒔風のグローブには球がない。

球は蒔風の両腕の間を抜けて額にボコン、と当たったからだ。

蒔風はそれにのけ反り、足をもつれさせて尻餅について倒れてしまった。

「・・・えっと・・・大丈夫ですかー？」

理樹が恐る恐る聞いてきたので、蒔風が「大丈夫だー」と仰向けになった状態から手をヒラヒラと振って答えた

「じゃあ今度はそっちに溜まったボールをこっちに投げ返して下さい」

「オツ、ケイ！」

蒔風が跳ね起きて足元のボールを集める

「あー、それはそうとオレのことは気軽に「舜」でいいぞー」

「あ、はい！」

「恭介に話し掛ける感じでいいっての」

「だったら・・・バッチコーイ!!！」

「お？いいね！いつくぜえ！ほりゃ！」

そして蒔風がボールを投げる

その軌道はゆったりとしたもので、軽いキャッチボールのようだ

「もっと強くても大丈夫だよ！」

「あ、おう！」

蒔風が少し軌道を変えて投げる

今度は真っ直ぐだ

それを捕球した理樹が「ん？」と顔をしかめ、蒔風はすべて投げ終えてこっちに向かってきた。

「どうしたんだよ理樹。筋肉がプロテイン食らったみてえな顔して

よ

「????えっと、何だか微妙に球筋が逸れてるんだよね。あとまだ力抜いてるみたいだし」

「なんだそりゃ?」

理樹が真人の天然を華麗にスルーして答えた

蒔風はまだ力を抜いて投げている

いや、全力で投げたら大惨事だから、手は抜いているのだが、それでもまだ弱めだ。

「次は?」

「次はバッティングだな」

そういつて謙吾がバットを差し出してくる

それに一瞬蒔風の身体が固まって、それから何事もないようにバットを掴んだ

ピッチャーは本来鈴なのだそうだが、今はいないので真人が受け持っている

「行つくぜえ!!!!おりゃあ!!!!」

真人がボールを投げ、キャッチャー・謙吾のグローブに真っ直ぐに向かう

「ッ、せい!!!!」





も力入れると変な方向飛んでくし」

「えっと……じゃあなんで入ろうとしたの？」

「それは……」

「おい、来たぞ」

そこに数名の女子たちがやってきた  
合わせて六人

どうやらみんなが集まってから来たようだ  
遅れたのはそのためである

「きょーすけ、何やってんだ？ってかそいつ……」

「うん？確か君は朝鈴くんを助けていた三年生じゃないか？」

「鈴りゃんを助けてくれたの？ありがと〜」

「わふ〜。スペシャルマンですねえ……」

「能美さん、その場合はスーパーマンでいいかと」

「ややや？つまりなにかー？この人もうちの仲間になるのかなー  
……？」

なんとも騒がしい

しかし、とても楽しそうだ

「紹介するよ、この人は蒔風舜さん。恭介の推薦でリトルバスターズに入るうとしてっているんだよ」

「どうも、蒔風舜でーす・・・球技のできないダメダメヤローでーす・・・」

「いきなり落ち込んでるけど？」

「そうなんだよね。この人、なんで入ろうとしたのか・・・」

理樹が再びなぜ蒔風が入ろうとしたのか、理由を聞くすると、蒔風が跳び起きて

「よっし!!お話ししようか!!誰かに聞かれない方がいいなあ・・・」

「うーん・・・だったら部室に行こうか？」

「あんの!?!」

「廃部寸前の野球部の勝手に使ってるだけだね」

そうしてリトルバスターと蒔風が部室へと向かう

「それで、なんで入ろうとしたの？」

「そうだけ。確かに俺たちは楽しく遊ぶグループだけどよ、今の活動はほとんど野球なんだぜ?」

「そうだな・・・じゃあ、話そうか。ここに主要、最主要が集まってることだし」

〔時風説明中〕

「と言うわけなんだよ」

その時風に、黒髪の子生徒が言ってきた

「信じられんな。世界だとかそんな話はお話の中の物だ。現実を持つてくる物じゃない」

「そんなあ・・・恭介は?」

「そうだな・・・信じれば面白い話・・・いや、理樹が狙われるのなら面白くはないが・・・そういう話はオレも好きだがさすがに現実を持つてくるほどじゃあないな」

その恭介の言葉に皆がうんうんとうなづく  
みな、時風の話信じられないと言っ

まあそれが普通の態度だろう  
しかし、次の時風の言葉でそれは一変する

「何をおっしゃるか。悲劇の運命を覆すために虚構世界にて成長し、  
そしてみごとそれを打ち破った少年少女と、その世界の作り手たち  
が」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

その場の全員の視線が時風に注がれる

「なぜ……それを知っている？」

「否、今なんか情報が頭にな、流れてきたんだよ。こう言うことが  
あったってな。」

まあ、あったってだけで詳細は知らないけどな」

「……………君は、世界を越えるとか言っていたね」

「んお？そだよ」

理樹の言葉に時風が答える

「だったら……何か一つ力を見せてくる？」

「いいよー。じゃあ……これっ！ー！」

そういつて空中に水を迸らせ、水流のパイプを作る時風  
それを見て理樹は納得した

「うん、信じるよ」

「理樹っ!?!」

「こんな物まで見せられたら反論できないよ鈴」

「うっうっ……」

「ほらあ、鈴ちゃん、今は理樹君がリーダーさんなんだから、理樹君を信じようよ」

「小毬ちゃんがそういうなら……」

そういつて小毬、と呼ばれたほんわかとした少女が手を差し出してくる

「こんにちわ。私、神北小毬ですっ。よろしくね」

それに続いて次々と女子たちが挨拶してくる

「わふっ! 私は能美クドリヤフカですっ! ないすちゅ〜み〜ちゅ〜」

「やつほ! はるちゃんは三枝葉留佳だよ!」

「西園美魚です」

「うむ、私は来ヶ谷唯湖だ」

「棗……鈴です……」

次々とあいさつを交わしていく蒔風

と、そこで恭介が何処かに連絡しているのを確認した

「恭介？どこに連絡してんだ？」

「いやなに・・・ことが大事だけな、それに詳しくそんな奴に電話してんだ」

「・・・誰？」

蒔風が聞くと、恭介がニヤツ、と笑ってこう答えた

「元学園の財宝を狙ったスパイ・・・だな」

t o b e c o n t i n u e d

リトルバスターズ　〜蒔風、それなりに落ち込む〜（後書き）

アリス「そういえばこの世界はどの時期なんですか？」

そうですね

あの事件の後です

虚構世界で成長して、バスの事故現場から戻ってきたところですね  
なおこの世界は正規ルートを回っているので、理樹と鈴は付き合っ  
ています

にゃんにゃん

ア「そう言えば蒔風球技苦手なんですね」

そうですね

刃で銃弾跳ね返せるくせにバットにボール当てられないんです、彼

ア「なんでです？」

彼曰く「なんか無理」だそうです

ア「獄炎弾投げる時とかどうするんですか」

あれはそれなりに軌道修正できるので

ア「そして最後に出たあの台詞はまさか……」

おおっとそれは次回だ

ア「次回、ドジっ娘スナイパー」



ではまた次回

ミッションスタート!!!!!!

リトルバスターズ　〜それがきつと幾千もの力になる〜

恭介が電話相手を呼び出し、ほどなくしてその人物がやって来た

「ど、どうも〜」

おずおずと入ってきたのはこれまた少女だ  
なんだか気まずそうだ

入ってきてすぐに恭介のもとに行き、首根っこ掴んで話し込んだ

「理樹君のピンチって言うから来たのにピンピンしてるじゃない！」

「なるのはこれからだそうだ」

「そうそう、危ないのはこれからなんだ」

「時にお前は「あの世界」でのことは覚えているか？」

「つつすらとね・・・理樹君のことは覚えてるけど」

「恭介、彼女は？」

「ああ、こいつは朱鷺戸沙耶あきと。例の虚構世界に迷い込んでいた奴だ」

「そこではスパイごっこをして大いに楽しんだわ・・・・・・つ  
てあんたいつの間に!？」

と、ここで沙耶が蒔風に気づく

「え？最初からいたけど」

「そんな・・・あたしはスパイなの・・・そりゃ確かに本物じゃないけどさ・・・」

「もしかして・・・さやちゃん？」

そこに小毬が離しかけてきた  
その声に沙耶が振り返る

「やっぱりさやちゃんだ。こんにちは」

「ああ・・・えっと、神北さん？」

「小毬でいいよ。さやちゃんもリトルバスターズに入るの？」

「え？あ、あたしは・・・」

「理樹、どうする？」

恭介がニヤニヤしながら理樹に聞いた  
おそらく理樹がどう答えるのかわかっているようだ

「いいよ。朱鷺戸さん。つていつても今は大変な時だから・・・」  
「

「いいえ！入ります！いれて下さい！絶対入る！！」

そこまで言った理樹の両手をガツシ！と掴んで沙耶がまくし立てる  
その勢いに若干びっくりしながら理樹はよろしく、と返事をした

沙耶が理樹の手を掴みながら「よっしゃー!!」と叫んでいる

「フカーーッ!!理樹の手を離せー!!」

そこに鈴のハイキックが飛んで来るが、沙耶がヒラリとかわし、距離をとる

「り、鈴？」

「理樹はあたしのだ!!」

声高だかにそう宣言する鈴に、皆がやれやれと頭を振る

「はっはっはっ、鈴君も可愛いヤキモチを妬くなあ。ああ・・・  
可愛い・・・」

「来ヶ谷さん、そのワキワキした両手をどうかしてください」

「む？すまないな。だが西園女史もよい題材が一人増えたのではないか？」

「そうですね・・・彼は一見攻め・・・いえ、受けにも回れ  
そうな・・・」

部屋の隅でそんな会話が行われているとはつゆしらず、沙耶に説明していた蒔風の背筋にゾクリと悪寒が走る

「ま、まあ、とりあえずこんな感じだ」

「なるほどね・・・私が呼ばれた理由がわかったわ。ようはその「奴」を探すか、理樹君の護衛つてところ？」

「そうだ。舜、問題は？」

「あるわバカモン」

蒔風が恭介にチョップでツッコんで答えた

「「奴」相手に偵察なんて自殺行為もいいとこだ。学校ごと・・・とはいかなくても、まあ確実に消されるぞ」

「そうか・・・」

「護衛をつけてもいいが、「奴」にもそういった使えるやつがいてな。おそらく意味をなすまい」

「だったらどうするんだ？このまま待てと言っのか」

謙吾が蒔風に言った。

それはそうだろう。

彼にとって最高の親友が狙われているのに、待っているしかできないとは

だが、そんな謙吾に、いや、その場の皆に蒔風は言う

「そうだ、待て。それしかないんだ。この戦いはいつだって後手なんだよ。それでも勝ってきた、俺を信じてくれないか」

時風が頭を下げてそう言った。

「僕はそれでいいよ」

「理樹！！」

理樹の言葉に時風が頭を上げる

「守ってもらえるだけでも十分だよ。舜がいなかったらただ殺されていただろうし」

「そう……だな」

「理樹がそーいうならいい」

真人や鈴の言葉に、恭介が続いた

「確か「奴」が来るのは……」

「明後日だ。この世界はほとんどが”輝志”に該当するからな。”輝志”の世界は少ないけど、構築がややこしいんだ」

「だったら今は大丈夫なんだね」

「今は……な。それに心配するなよ！！オレは世界最強だからな。」

明後日だつて何も心配はいらないさ」

蒔風のその言葉にメンバーの一人が顔をしかめる。

が、それが何だか確信が持てなかったのか、すぐに元の表情に戻った

「だったら今は対策を練ろう！ミッション名「世界の捕食者から理樹を守れ」だ！！！！」

「ちょ、ちょっと恭介！皆を巻きこんだらだめだよ！！」

そう言つて恭介を止める理樹だが、それを真人や謙吾、さらには女性陣までもが止めた

「水臭いぞ理樹。お前の危機に立ち上がらなくて何がリトルバスターズか」

「そうだぜ！！そんなに強い奴なら、俺の筋肉さんの出番だしな！！！！」

「ふむ、このまま少年が死んでは私も悲しいからな」と模造の日本刀を手入れしながら来ヶ谷が言う

「まだ夢の恭×理をこの目で拝んでいないのに死なれては困ります」と両手にグツ、と力を入れる美魚

「リキを死なせはしないのですッ！！」

「死んじゃうのは悲しいことだもん……私も頑張るよ！！」とクドと小毬が意気込んで

「やはは、何だか面白いことになってますな~~~~。これははる

ちんの出番かつ!？」  
と何やらタンバリンを振り始めた葉留佳

「理樹君に手なんか出させない・・・今度は私が助けるんだ」  
とモデルガンをチエックする沙耶

そんな皆に理樹はどう説得しようかとおたおたしていると、肩をポンポン、と叩かれる

理樹がそっちの方に振り向くと、頬に指がツン、と刺さった

「理樹は油断し過ぎだ、だから・・・あたしたちが守る」  
その指を頬に付けながら、鈴が理樹に言った

いつもは言葉足らずな彼女だ。  
だからこそ、たったこれだけで彼女たちが本気であるとわかってしまった

「お前はあたしがいないとだめだからな。つきつきりで守ってやるから安心しろ。死んだら・・・ぶっ殺すぞ」

なんとも物騒な言葉だ

しかし、「守る」と言う言葉の奥にある、その一つの決意に、理樹はこれ以上「やめてくれ」なんて言えなくなってしまったのだ

「鈴・・・その時は僕はもう死んでるよ・・・」

はあ、と肩を落としてしまった理樹に、蒔風が話しかけた



「いい、友達だな。多分、ここにいる誰一人たりとも、その場で言ってるんじゃないな」

「そうだろうね・・・」

「本当にお前が死にそうになったら、命懸けで助けしてくれる連中なんだな」

「そうだったしね・・・」

「だったら・・・そいつらはオレが守るっ」

「僕も・・・何かやるよ」

「それはいい。だが、無茶はするな。決して戦おうとするな。それは俺がやる」

「・・・うん」

「だからさ!!ウジウジすんな!!お前は胸張ってこっ言やいいんだよ!!」

「え?・・・うん・・・ははっ!!」

「愉快だろ?」

「そう・・・だね!!」

そして理樹が皆の前に立って、改めてこう言った

「みんな！！僕のためにいろいろありがとう！！でも、僕は死なない。皆も死なない！！前にも一回死にそうになったところから生き延びた。あの時に比べて今はまだピンピンしてる！！だから大丈夫だ！！こつちには舜もいるし！！」

理樹が蒔風の方を向き、さらに皆を見渡して宣言した

「よし……さあみんな……ミッションスタートだ！！！！」

t o b e c o n t i n u e d

リトルバスターズ　〜それがきつと幾千もの力になる〜（後書き）

アリス「沙耶ちゃん生きてるんですね!!!」

あのまま死んではいません

それが沙耶ちゃん

タイムマシンで過去に戻って、それから普通に成長したんだよ!!!  
沙耶は死んでない!!!

このゲームには男ばかりに泣かされました

一番泣いたのは真人が消えるシーンでした……

ア「原作知らない人この話してもわからないでしょう」

そうですね……ごめんなさい

時にこないだの世界で百話をゆうに超えてしまい、フォルダ内に保存してある「世界をめぐる、銀白の翼」のメモ帳を見たんですよ、我ながらここまでよく連投してきたもんだと

ア「ほとんど毎日でしたっけ？」

そうなるのかな？

これはひそかに自慢話ですよ

まあ何日か休んだ日はありましたけど

さらにクオリティ低くなってるけど

一話一話短いけど

そんな中でそのメモ帳の並び順を「大きさ」順にしたんですよ  
一話分のメモ帳に本編と後書きを一緒に入れて、「奴」の部屋「シリーズ」と最初の設定二編を除いて、どれが一番大きかったのか小さかったのかを見ってみました

ア「どうだったんですか？」

発表！！

大きい順ランキング！！

三位は！！

同着で四話分！！

「バカとテストと召喚獣 ～バカと想いとそのつながり～」

「なのはA's ～やっとお話しができるの～」

「the days 崩壊 ～ほとんど説明だなこりゃ～」

「電王 ～過去からの帰還～」

です！！！！

今回は小さい三位の発表です

ア「次回、時風を見抜いた者？」

ではまた次回

リトルバスターズは・・・永遠だ!!

## リトルバスターズ ～パーティアンドメンタル～

蒔風は結局リトルバスターズには本加入しないことになった。

数日後にはいなくなってしまうからだ。

それでも、一時的には仲間になる、という事で、放課後に食堂でパーティーを開いてくれることになった。

「マジで！？パーティーとか大好きなんですけど！！もうみんないるん？理樹っち！」

蒔風がわくわくしながら理樹に訊く。

そんな蒔風を見ていると、理樹は「この人ホントに十九歳かなあ・・・」と考え込んでしまったが、凄く身近にも子供みたいな年上がいるので、すぐに慣れてしまった。

なぜ理樹が食堂に蒔風を連れて行っているのかと言うと、恭介は何らかの準備をしているらしいのだ。

「くそみたいに楽しみなんですけどっ！やばいやばいっ！」

移動中にも蒔風はなんだか騒がしい。

よっぽどうれしいみたいだ

「そんなにうれしかった？」

「そりゃあもうー！！いつも一人だからね、こっつ言つみんなでワイワ

「イは大好きさ！！！」

「いつも一人？」

理樹は顔をしかめた。

確かいろんな世界を回っていて「奴」と戦っているはずだ。だつたら各世界で友達や仲間ができなかったのか？

「できたよ？皆最高の仲間だし親友さつ。でも……」

「????？」

そこで蒔風の声が少しだけ落ちた

「誰かと一緒に世界は回れてはいないのさ。行く先々で友人はできても、俺の隣にはだれもないのさっ」

軽快にそう言い放つ蒔風に、理樹は少しだけ寂しさを覚えた。そんな旅をしていて、彼は大丈夫なのだろうか、と。

「ん？理樹い、俺の心配してくれてんの？」

「え？うん……ちよつとね」

「ありがとな」

そう言つて頭をくしゃくしゃと撫でる蒔風。そしてすでに吹っ切れた顔をしてこう言った。

「確かにオレは一人かもしれない。でも、俺の戦いがきつと誰かを

救っている、信じている  
だから大丈夫なんだ。だから……戦えるんだよ」

その言葉に理樹は何も言えなくなり、ついには顔がニヤケてしまった。

なんてすごい人なんだろうか。

その考えに達するのに、この人はどれくらいの……

「え？この程度は高一ぐらいで知ったさ。その後「正義と悪の存在」、さらには「死と生」だ」

「そんなこと考えてたの？」

「まね。もつと人生をかけて知るべきことを、俺は二十年もしないで、考え始めてからだと三年もしないで知ってしまったからな」

「それって……」

「ま、普通じゃない。だから俺は「異端者」なのだよ。えっへん」

「威張ることじゃないだろ」

「その通りです（笑）」

そんな話をしていると、二人が食堂に到着した

「「」かっ……」

「そうだね」



「では行くぞッ!！」

「あ!!待っ・・・」

バタン!!

と勢いよく扉が開かれる

ポフン!!

瞬間、蒔風の視界が真っ白になった

なにやら扉の上に仕掛けがあったようだ。

何かの粉で蒔風の全身が真っ白になり、前方では葉留佳がケタケタと腹を抱えて笑っていた。

「やははっ!!引つかかってくれましたなあ~~~~舜さんは!!！」

「はるちゃん、やっぱり悪いよ~~~~」

「え~~~~?こまりんノリ悪いぞ~~~~」

そう言っつて蒔風の方にピヨンと寄ってきた葉留佳。

「にしし、かんそーどーですか!?!」

固まったままの蒔風に、葉留佳が聞いた。

そして蒔風がフツ、と笑ってから、叫んだ。

「小娘が!!!お前も同じようにしてホットケーキに埋めて食ってやるわ!!!」

「きゃあ~~~~~!!!!!!」

蒔風が葉留佳を追いかけ始める。

事情を知ってる彼らだからいいが、なにも知らない人間が見たら真っ白な変質者が女子生徒に迫る光景だ。かなりやばい

「まったく葉留佳さんは……」

「理樹、遅いぞ」

「ごめんごめん。ちょっと話しててね」

食堂中を走り回る蒔風と葉留佳を眺めながら、理樹もテーブルの上にあるものに手を伸ばす。

テーブルの上にはホットプレートが並び、そこで小毬やクドが主体となってホットケーキを焼いていた。

「ぜえー、ぜえー、やっと……捕まえたぞ……」

「はあはあはあ……捕まっちゃうとは思わなかったですな……」

そこに肩で息をした蒔風と葉留佳が戻ってきた。

葉留佳は蒔風のように頭から小麦粉を被っている。

「やられた~~~~~!!悔しいですね~~~~~!!!!」

「何やってんのさまったく」

そう言つて二人にタオルを差し出す理樹。

「こいつメチャすばしっこいのな。まさか軽く本気出すとは思わなかった」

「褒めて褒めて〜〜」

「褒めるかいつ〜!!」

「舜!!!こつち来いよ!!!ゲームやろうぜ!!!」

そこに恭介からの声がかかる

そちらに足を運ぶと、恭介がビンゴのカードを差し出してきた。

「やろうぜ!!!」

「景品は?」

まずそこに食い付く時風。

それに対する恭介の返答は

「無い!!!だが、ビリには罰ゲームがある!!!真人!!!」

「んだよ。こつちはいま食つてんだよ!!!」

「いいから、持ってきたもん出せよ」

「へいへいっと!」(ドスン)「マッスルエクササイザー?セカンドだ

「！！！！！！」

「2が二回ある！？」

と、そんなことを思いつつ、それを掲げる恭介

「ビリにはこいつを飲んでもらう！！！！」

「待てよ恭介。なんでこれが罰ゲームに使われるんだよ！！」

「そりゃそうだろ」

そりゃそうである。

このドリンクは真人が筋肉のさらなる成長のために作り上げたものだ。

その味は何とも形容しがたいものである。

「筋肉の筋肉による筋肉のためのこのドリンクをそんなことに使うなよな！！！！」

「じゃあこっちで用意しよう」

そう言つて蒔風がドリンクを取り出した。

「どこかの世界からの贈り物だ。なにになに……超栄養ドリンク……」

そのラベルには当て字としか思えない名前が書いてあった

それは野菜汁（苦）・ペナル茶（辛）<sup>テイ</sup>・青酢（酸）・イワシ水・粉<sup>コ</sup>  
悪秘胃<sup>オヒイ</sup>とある

「なんだこれ……」

「ま、まずそうだ……」

「何処かのテニスの世界で飲まれているらしいんだが……身体にはいいらしいぞ?」

「飲んだ瞬間にぶっ倒れそうだが?それにこれでは罰ゲームは五人ではないか」

謙吾の言葉に、時風がふっふっふ、と笑って答えた。

「大丈夫だ、秘策がある」

「どんなだ?」

「一つにする」

「なに!？」

「そして一つにしたものがこちらでございます」

「何やってんの!？」

そこにはなんだかよくわからない色と形状をした飲み物が置いてあった。

「命懸けのビンゴゲームだ……」

「ゲームスタートだ!!!」

そして始まったビンゴ  
みんな目が本気だ

と言っても完全にこれは運だ。  
どうしようもないほどの運頼み。

そして結果を言えば、蒔風が負けた。

「な……なぜだ……」

「うわぁ……」

「……ご愁傷さま……」

蒔風の握るカードは穴が開きまくっていた。  
あとどこでもいい、一カ所でも穴があればビンゴなのに、そこが全く開かないのだ。

「なんで……あと一つなのにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii  
イイ!!!!!!」

「さ、飲もうか」

そう言っつて恭介がドリンクを差し出してくる







「すまない。邪魔するわけじゃないんだが」

「いいつての。何かあったのか？」

「いや……気になることがあってな……」

「????？」

蒔風が首をひねる。

何かあっただろうか？

「……オレはうまく言葉にするのが得意ではないから単刀直入に言う……舜、お前、無理してないか？」

「無理？」

蒔風の眉が少しだけ動き、反応する。

「ああ……昨日、「世界最強」って言ったとき、その時はわからなかったが何だかそんな気がした。もしかしてお前……自分の事そんな風に思っていないんじゃないのか？」

その言葉に蒔風がそらを見上げ、頭を搔いてから、謙吾に向き直った。

「まさか……な……」

「オレもそうだったからわかるんだ。無理をしてるんだな？」

「ふう……確かに」

蒔風が言葉を紡ぐ

「オレは世界最強じゃない。それに近い力は持っているが、決してそうじゃないんだ。

オレの本質は結構泣き虫でな。本気で「バカ!!」と十回も言われれば泣きだす男だ。

あまり自分にも自信はない。それでも……オレは世界最強じゃないといけないんだ」

「そこまで……なのか？」

「そうじゃなきゃ世界がペアだからな。

だから、俺は世界最強だと言い張るんだよ。

ようは自己暗示に近いかもな。「本当の蒔風舜」に「蓋」をしているのがオレだ。

これが蒔風舜の理想形態なんだよ。そしてその形をとってるだけの道化だ」

「そんなことが……できるのか？」

「さあな。だけど俺は異端者さ。普通から異常に足を踏み入れ、どの理からも外れた人間……」

いや、人間としてどころか生物として違ってんもんなア……」

「お前はそれで大丈夫なのか？」

返事の代わりに、時風が謙吾に拳を突き出す。  
その拳圧が風となって謙吾を通りぬける。

「大丈夫だよ。今までこうやって生きてきたんだし、例え何かあっても「蓋」をすぐにかぶせればいいんだしね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

宮沢謙吾は考える。

ではそれが溢れてきてしまったらどうなるのか。  
心が恐怖やストレス、または幸福や信頼でうまったら、その蓋はどうなるのか。

よく知られてないが、幸福なイベントでも心のストレスになるのだ。  
悪いことばかりがストレスになるとは限らない。

だが、それならまだいい。  
蓋が取れる頃には、彼は幸福に包まれているから。

だが、もし逆だったら？

その時彼がどうなるのか、想像もつかなかった。  
目の前にいる青年は、自分の考えよりも上の次元にいる。

そんなことを考えていると、一陣の風が吹く。

それにハツとなって謙吾が顔を上げると、時風はもういなかった。  
紙が一枚置いてあって、「明日は戦いになると思うから、早く寝な」と書いてあった。

「舜・・・・・・・・一人の旅で・・・・・・・・お前は本当に大丈夫なのか？」

いつかきつと彼の蓋は剥される。  
しかし、それはずっとずっと先の物語。

もしそうならば、きつと彼は元の「人」に戻るのだろう。  
今はその時ではない。

明日には「奴」が来る。  
戦いは、待つてはくれないのだ。

t o b e c o n t i n u e d

リトルバスターズ ～パーティアンドメンタル～（後書き）

仮面ライダーspirits第三巻買いました!!!!!!  
やっぱメチャかつこええ!!!!!!

アリス「ア~~~~マ~~~~ゾ~~~~ン!!!!!!!!!!!!」

大切断!!!!!!

ア「すうばあだいせつだあん!」

ちよ、それやめて（笑）

ア「あれはあれで好き」

リトバスはキャラ多くて大変だ……  
とても全員書ききれない……  
沙耶なんて完璧に空気だ……

ア「彼女何やってるんですか？」

ホットケーキパクって天井裏から理樹のこと見てました

ア「アホですね」

アホですから

ア「次回、「奴」が来る」

ではまた次回

この世界には秘密がある

## リトルバスターズ ～希望という名の未来を～

夜が明けて次の日

リトルバスターズのメンバーは、グラウンドで野球の練習をしている。

今日は授業がないので朝からだ。

蒔風は真人と理樹にバツティングを教えてもらっていた。

「いいか舜？こう筋肉さんが唸りをあげて、そのパワーがバツトを通してボールに伝わって、「よっしゃあーっ！！」って気合いを入れればいけんぜ」

「最初から気合いしかないじゃないか」

「それで行けるのは真人だけだよ」

「ああん！？じゃあなにか？理樹は思い込みじゃなくて技術で打つてのによー！！」

「それが普通なんだけど」

と、こんな感じにいろいろと教わって行くうちに時間が正午をさす。ちょうどいい時間なので理樹がみんなに声をかけ、ベンチでお昼にすることにした。

「舜さんのばっていんぐはどうですか？」

クドが蒔風、理樹、真人に練習具合を聞いてきた。

「まだだめだなあ。下投げの軽いもんしかまともに当たらない」

「タイミングは合ってるんだけど、高さが合わないんだよね」

「気にすんなよ！諦めたら試合終了だぜ！？」

「じゃあ頑張った舜さんに甘いお菓子をプレゼント〜」

そこに小毬がお菓子を差し出してきた。

「甘い」とは言っていたが、差し出されたのは普通のお菓子だったので、蒔風はありがたくいただく。

「サンキュー、こまりん」

「どういたしまして〜」

そんな風に皆で食事をとっていると、恭介が蒔風に聞いてきた。

「それで舜。「奴」はいつ来るんだ？」

蒔風の読み通りなら「奴」の計算が終わるのは今日。  
つまり襲撃も今日だ。

それに関する恭介の質問に、蒔風が答える。



「多分そろそろ……あ」

蒔風が何かに気づいてサンドイッチを頬張りながらグラウンドの向こうを指差した

そこにみんなの視線が集まる。

そこに蒔風には見慣れた男がいた。

「よう！いい天気だな！」

「だな！準備はできたのかイクソヤロウ！」

「おかげさまでな！」

蒔風と、グラウンドの向こうにいる「奴」が大声で話していると

グオン！

「奴」が結界を発生させ、グラウンドを包囲した。戦いの準備はこれで整う。

そこで蒔風が身を乗り出してみんなに言った。

「お前らは隠れている、あとはオレが」

蒔風が前にでる。

「奴」もこちらに向かって歩いてきた。

二人の距離が近づき、野球場の中央で、手を出せば殴りかけられる位置にまで来た。

「この世界はちよいと面白くてな。つつい計算が弾んじまってよ」

「そうかい。悪いがあいつらはやらせねえぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「十五天帝!!!!」

「魔導八天!!!!」

ガバギイ!!!!!!

蒔風と「奴」が同時に自分の剣をバラでだし、応酬する。

一撃で地面が抉れ、一振りで万物を斬り裂き、一太刀で空気の振動する攻防が超近接で行われる。

「畳返し、己囲い!!!!!!」

蒔風の畳返しで地面が跳ね上がる。

それは二人を閉じ込めるように六角形の筒となり、狭い空間に押し込める。

「ちっ！！！」

そのような非常に狭い空間では蒔風の方が有利になる。

「奴」の持つ「魔導八天」はそのすべてが素晴らしい西洋剣だ。だがこの狭さでは存分に振るうことができない。

それに対し蒔風の「十五天帝」には「天地陰陽」がある。

トンファー型のこれはこのような場所においての戦闘をも可能にする。

「奴」が「魔導八天」を捨て唯一空いている上から飛び出してそこから抜け出す。

蒔風もそれを追って飛び出して行く。

「ぬ………おおあ！！！！」

「どりゃあ！！！！」

飛び出した勢いで空中にいる「奴」が波動砲を打ち出してきたのに対し、蒔風が拳で打ち払い、絶光砲を撃つ。

「奴」がそれを紙一重でかわし、接近する蒔風を迎え撃った。

蒔風の持つ「天地陰陽」をすべて適確に受け、なおかつ細かな蹴りの動作にてそれらをすべて蹴り飛ばす。

そして二人が地面に降り、さらに蒔風が新たな剣を抜刀しようとしたところで、「奴」の蹴りが蒔風の右肘を捉えた。

ゴキッ！！！！と嫌な音がして、蒔風の肘が外れる。

そこを蹴り飛ばされた蒔風が独楽のように回って倒れる。

うつ伏せからすぐに仰向けになり、上を向いた蒔風の視界に、「奴」の拳が跳び込んできた。

バゴン！！！！！！

「奴」の拳が地面を揺るがす。

蒔風はそれを地面を転がって避けるが、そこから立ち上がることを「奴」がさせてはくれない。

逃げた先を狙って「奴」が波動砲を撃ち、ジリジリと追い詰めて行く。

そしてついに蒔風が撥ね起き、走り出す。

「奴」の波動砲の隙間を縫い、接近していく。

と、一瞬だけ「奴」の砲撃が止まり、そして最高出力の波動が打ち出された。

その真正面にいた蒔風の姿がぶれる。

砲撃が後ろに飛んで行き、そこで爆発したところを出蒔風がさっきまでいた場所よりも若干横にずれた位置に立つ。

「十分な速度で、十分によけきつた……………」

そこで蒔風の右腕がダラリと下がる。

「はずだったんだがな」

その右腕は血と砲撃で黒くなっており、ピクピクと痙攣していた。

「その腕はもう使い物になるまい」

「くっそ……」

「舜!!!!!!」

そこに理樹たちが駆けよってくる。

蒔風の表情が驚愕と憤りに染まり、忠告を飛ばす。

「オレに任せろって言ったろうが!!!!!!下がってる!!!!!!」

が、しかしそこで恭介の熱い、それでいて冷静な声が発せられた。

「いや、ここは俺達に任せてもらおう」

「な!?!」

恭介の言葉に蒔風が驚愕する。

その間に理樹が前に出て、それに鈴に真人や謙吾、来ヶ谷らが続いて、横に並ぶ。

「僕たちだって死ぬわけにはいかない。友人をみすみす傷つけさせ  
たちなんかできない!!!!!!」

そのために……僕は……僕たちはあの世界で強くなったんだ

「！！」

理樹たちの脳裏に浮かぶのはかつての悲劇  
崖から落ちた修学旅行のバス。

血まみれの仲間たち。

一度は諦めかけてしまった未来。

だがそこから理樹と鈴はみんなを救って帰ってきた。  
ならば今度もできないはずはない。

「行くよみんな！まずこの結界を！！」

「くくくくおう！！」「」「」「」

ズオアッ！！！！

その瞬間に世界が変わる。見た風景は一切変わらない。  
しかし、確実に違う世界。

この世界には彼らの他には誰ひとりとして存在しない。  
いつまでも続く、彼らの青春の世界！！

「ば……かな……結界!?しかも、固有結界だ!?」

固有結界

空間から隔離する結界とは異なり、これは世界を塗り変えることで存在するもの。

そんな希少能力を、複数人ではいえ発動させつ彼らはとても普通ではない

だがそれよりも特筆すべきは

「なに!?」輝志”は基本的には”no Name”と変わらないはず……こいつら……”輝志”の力の使い方を知っている!?」

そう、想いの強さによって奇跡が起こる”輝志”とはいえ、それを使いこなすなど通常ではありえない。  
だが、彼らはそれをやってのける。

友人を救うという、その想いたった一つに賭けて。

「さ、舜、始めよう!!!」

「………そうだな」

蒔風がにやりと笑いながら、差し出された理樹の手をとる。

「僕たちは正義の味方、リトルバスターズだ!!!」







「舜さん。こつちこつち!!」

「今治療しますから」

美魚と小毬に呼ばれ、右腕を差し出すように言われた時風がそのようにする。

すると見る見るうちにその腕が回復して言ったではないか。

「このメンバー敵なしかよ・・・オレ必要なくね？」

「そんなことはありませんよ。貴方が来なければ、このような力を自覚できなかったと思います。さて、私も行きますか」

そこで真人の固有結界が解かれる。

おそらくはもう限界だったのだろう。

二人が戻ってきて、小毬が癒す。

「このクソツタレ共が!!!!!!寄ってたかってボコボコにしゃがんで!!!!!!ケルベロス!!!!!!」

ゴガア!!!!!!

その声に応じてケルベロスが跳びだし、一行の元へと走り寄ってくる。

それに向けて美魚がどこから取り出したのかバスター力砲を構えた。

「んな!?!」

「やっぱりこの世界内ではNYPは使えるんですね・・・エネルギーチャージ!!!!」

そういうとバズーカに何らかのエネルギーがたまっていく。

「なんなの!? ねえあれ何なの!？」

完全に取り乱している時風。

それに理樹が説明する。

「西園さんはこの世界内ならNYPと言う力を使えるんだ!!!!」

「何それ!？」

「「な」んだか、「よ」くわからない、「パ」ワー」

「本当に何それ!？」

「ふぁいあー」

ドゥゴゴゴゴン!!!!!!

美魚の気の抜けた声とは相反して、とんでもない威力でケルベロスを吹き飛ばす!!!!

「……………おいおい!!!!!!……くそ!!!!!!なんだこの世界は!!!!!!」

こんなこと原典じゃ……………少なくとも現実ではないはずだぞ!

「!!!!!!」

「そんなこと言ってる場合かね？」

「ッ！？らあ！！！」

ガギギン！！！！

その背後に瞬間移動でもしたかのような側語で来ヶ谷が回りこんで、いつもは模造品の日本刀を「奴」に向かって振るう。

「っ！！やはり無理か！」

「その程度ではやられんよ……死ね」

ズギャン！！！！

来ヶ谷の首を跳ね飛ばそうと、「奴」の手刀が唸り上げて打ちつけられる。

その光景を見ていた者は、皆そうなってしまつてあるつことを予見した。  
しかし

「何度でも繰り返す……っ！！」

恭介のその言葉に現実が歪められた。

来ヶ谷の位置がずれ、「奴」の手刀が空振りに終わる。

そしてその「奴」の脇腹を来ヶ谷が斬り裂き、鈴のハイキックが後頭部にめり込んだ。

「な……なにを……」

「この世界は理樹と鈴を強くするために、何度も何度も繰り返されてきた。それを任意で行っただけだ。そうそうできる物じゃないけどな」

そう言う恭介の額には大粒の汗がにじんでいる。確かにあと何度でもできるものではないだろう。

「さて！！！！舜！！！！いける！？」

「おおよ……そろそろオレも何かやんなきゃなア！！！！」

時風の背から翼が現れ、皆の願いを力に変える！！！！

「わかつたんだよ……なぜ”輝志”の世界においてお前らがこんなに力を持てたのかか！！！！」

【Little Busters！！】 - WORLD LINK -  
　　WEAPON！！

そこからともなく聞こえてきたその声と共に、時風の手の平に鍵が出現する。

その鍵を、時風は見覚えがあった。  
なぜならばこの鍵は！！！！

「理樹、覚悟はいいな」

「いつでも!!!」

その光景を見ていた「奴」が、二人に猛然と突っ込む。しかし

タァン!!!

「奴」の側頭部に一発の銃弾が命中する。それにより頭がブレ、倒れ込む「奴」

「私を忘れてもらっちゃ困るわ!!!」

校舎の屋上から、朱鷺戸沙耶が立ち上がり、ライフルでの狙撃で「奴」の足を止める。

その間に時風が理樹の胸にその鍵を放る。

すると鍵は理樹の胸に吸い込まれるように消えて行き、カチリ、と何かの扉を開いた。

バツサア!!!!!!

そして理樹の背中に翼が現れる。

その色は薄い緑。司る想いは、友情!!!!!!









校門から出た先にある河原で、別れの言葉をかわす時風たち。

「……つとまあ、翼人に関してはこんな感じだ」

「ありがとう」

「もう行くのか？」

「そうだね。いくよ」

「舜!!」

時風に理樹が声をかける。

そして無言で握手を求めた。

その手を眺め、そして時風がしっかりとその手を握り返す。

「ありがとう。次の世界でも、がんばっていける」

「応援してるよ。友達のために」

[ Gate Open - - Little Busters ]

ゲートがちょうど落ちる夕日と重なって開かれる。

そこに向かって時風が歩いていく。

そしてまるで日に消えて行くかのように、時風はこの世界から去っ



リトルバスターズ ～希望という名の未来を～（後書き）

【リトルバスターズ!!!】

構成：“輝志” 85%

” LOND” 15%

最主要人物：直枝理樹

- WORLD LINK - ～ WEAPON ～：理樹の翼人覚醒

- WORLD LINK - ～ FINAL ATTACK ～：十五

天帝と理樹のバリア刃のコラボ

リトバスの世界終了!!!

アリス「三人目の新たなる翼人ですね!!!」

ええ!!!

ちなみにあと一人います

お楽しみに

《薄緑の翼人》

所有者：直枝理樹

翼色：薄緑

想い：友情

タイプ：賢者

能力としてはただ薄いバリアを張るだけです。

しかしそのバリアは超硬度であり、並大抵の攻撃では破れない。

ア「どれくらいですか？」

なのはのSLBを至近で食らってもビクともしない。

二発でヒビかな？

ア「すげえ!？」

そしてそれは薄いものだから、刃としても使えます。

ア「「奴」を貫いていたあれですね？」

そうそう

とまあ、翼人に関するものはここまで!!!

前回発表できなかった(し忘れた)ランキング発表!!

ちなみに小さいランキングは数多すぎてやめました

と、言うわけで本文&後書きの容量大きかったランキング第二位は  
!!!!

「涼宮ハルヒの憂鬱　〜蒔風舜の激闘〜」

でした!!!!!!

第一位の物が更新されるまで、これが一位だったんですねえ

ア「次回、蒔風、猫舌に出会う」

ではまた次回

555 standing by complete

## 555 ㄱ 出会は激突から

広い公園で、戦闘が繰り広げられている。

戦っているのは仮面ライダーファイズに変身した乾巧いぬいたくみと、灰色の怪人・オルフェノクだ。

この世界の敵勢力・オルフェノク

彼らが人間を襲う理由は一つ。  
仲間を増やすためだ。

死んだ人間が突如目覚め、復活することでオルフェノクは誕生する。それゆえに多くの者は化け物として復活したのちに、オルフェノクとして生きることを選択する。  
中には「人間」として生きていくことを決心した者もいるが、少数だ。

そんな奴らと、ファイズは戦い続けているのだ。

そして今戦っている相手はチーターオルフェノク。  
そのスピードに翻弄され、うまく攻撃が当たらず苦戦気味だ。

「まったく、調子ノリやがって」

パパッとスナップをきかせて手首を振り、ベルトに挿入されている携帯電話型変身ツール、ファイズフォンからミッションメモリーをぬき、同型のプログラムキー、アクセルメモリーをはめる。

《Complete》

音声と共に全身を駆け巡るフォトンストリームが赤から銀に変わり、胸の装甲が肩にせりあがる。

さらにファイズフォンを開き、「Enter」を押した。

《Exceed Charge》

ベルトからエネルギーが全身を駆け巡る赤いライン、フォトンブラッドに沿って移動し、それが右足首に装着したポインターに溜っていくー！！

「行くぜ」

そしてファイズが左腕に装着しているリストウォッチ型のコントロールデバイスのスイッチを入れた。

《Start up》



音声とともにファイズアクセルフォームの姿が消える。  
超高速移動に入ったファイズの姿は、目にもすることもできない速さ  
に移行するからだ。

異常なスピードを誇るチーターオルフェノクすらもついていけない  
速さで、ファイズの必殺技が放たれる！！

バシュ！バババババシュウ！！

チーターオルフェノクの周囲に赤いホログラムの円錐が現れ、その  
すべての先端が向けられている。

そして超高速移動のファイズが次々とそのいくつもの円錐型のポイ  
ンターを次々とくぐり、何発ものキック「クリムゾンスマッシュ」  
を叩き込む！！！！

ドッ、ドドン！ドドドドドドンッ！！

「ぐガアアアアアア！」

チーターオルフェノクが断末魔の叫びを上げ、

《3、2、1、Time out・Information》

そこでアクセルフォームの高速移動時間の限界、10秒が過ぎ、フ  
アイズの姿が現れ、通常フォームへと戻った。

ボツ！ギーン、ザラザラザラ・・・

チーターオルフェノクから青い炎が吹き出し、の紋章を残し、灰となつて消えていった。

「まったく、人を襲うオルフェノクはあとを絶たないしょ。めんどくせえ」

そう言いながらベルトを外して変身を解く巧。

ファイズフォンのボタンを押し、公園の外に止めたバイク、オートバジンを呼び出すと、すぐに林の中からやって来た。

走ってくるオートバジンを見てみると、どこからきたのか一人の青年も近づいて来た。

「おおーい！あんたファイズだよなー？」

そういいながら走ってくる青年。

その後方からオートバジンが迫る。

「あんた！そこあぶねえぞー！」

巧がファイズの事を知っている青年に驚きながらも、彼に迫る危機を叫ぶ。

その声に反応し、青年・蒔風が振り返ると、そこには太い機械の腕があった。



巧の担いできた男に、真理が呆れたジト目で巧を見る。

「いや、急にやって来てよ、バイクとぶつかってぶっ倒れちまったから。」

「……………んだよその眼は。ほっとくわけにもいかねーだろ！」

「元の所に捨ててきなさい」

「犬猫じゃねえんだぞ!？」

「まま、たつくん。とにかくその人中に入れてあげて」

啓太郎が巧をなだめ、蒔風をソファに寝かす。

それからあーだこーだと巧と真理が口論しているうちに、蒔風が目を覚ます。

「ここ……………どこなんだろうか、と蒔風は思ってみたり」

「あ、目が覚めた」

啓太郎が蒔風の目が覚めたことを確認する。

そして蒔風が周囲を見渡し、巧の姿を捉えて納得した。

「んお?ああそうか!!オレバイクにぶん殴られたのか!!」

「ぶん殴られた?」

真理のその疑問に蒔風が答えた。

「そうそう。彼に近づこうとしたらロボットに変形したバイクにね

「！！！」

「ちょ、巧どういづこと!?!」

「そんなことはどうでもいい。おいお前。お前はオルフェノクか？」

巧の質問は単刀直入だ。

それもそうだろう。巧にしてみれば蒔風は「ファイズですかー？」  
なんて声をかけてきた謎の男である。

そしてファイズを知っている人間は一般人とは思えない。

「あーそつか。じゃあ話そうかね。オレはこの世界の人間じゃないんだよ」

「……………は？」

「とにかく、お前の命が狙われている」

.....  
.....

「マジかよ……………」

「さつきちよいと俺の力見せたる？オルフェノクであるかどうかは、  
お前ならわかるだろうし」

「……………まあな。そこまで知っているのか」

「何となく普通とは違うと思ったただだよ」

蒔風の話が終わり、巧が蒔風がオルフェノクでないこと、言っていることがおそらく本当だということをそれなりに信じたところで、真理が口を開いた。

「確かにそれも大変だけど巧。あんたまた戦ったの？」

「……………あ—————」

「あなたの身体は限界なんだから、もう戦わないでよ!!」

「そう言っただらっかよ。人が襲われてりゃ戦うのは仕方ねーだろ」

「でも……………」

そんな真理と巧のやり取りを見て、蒔風が啓太郎に訊いた。

「巧の身体が限界ってどういうこと？」

「うん……………たっくんは……………もう長くないかもしれないんだ」

啓太郎の話に蒔風が耳を傾ける。

ファイズのベルトをはじめとする「ライダーズギア」は、普通の人間には使えない。

ベルトを使って変身できるのは、オルフェノクの力を持った者だけなのだ。

そして乾巧も例外なくオルフェノクである。

しかし彼はオルフェノクとしてではなく、人間として生きて行くことを決めた。

中にはそのようなオルフェノクも多くいたのだが、それを許さない者がいた。

それこそ覚醒した人間・オルフェノク達を集め、オルフェノクとして生きることを広めようとした「スマートブレイン社」だ。

スマートブレインはオルフェノクに覚醒した人間がわかると使者を送り、人間を襲いさらなるオルフェノクの増幅を狙った組織。

もちろん、そのサーチに引つかからずに生きてきた者もいる（巧はこの場合だ）

しかし、多くの者はそのような生き方に吞まれ、拒絶するものは「裏切り者」として処刑された。

その組織を数か月に壊滅させたのだが、その最後の戦いで彼らが倒したのはオルフェノクの王と言われるアークオルフェノクである。オルフェノク達は人類の進化形態だ。

だがそのあまりにも激しい進化に身体が耐えきれず、いずれは崩壊する。アークオルフェノクの力をわけてもらわない限り。

しかし、自身がいずれ死ぬとわかっていたも、乾巧はアークオルフェノクを倒したのだ。

どうやらまだ生きているらしいのだが、もはや巧が王に延命してもらえないだろう。

故に巧が戦ったことで真理はあんなにも怒っているのだ。

「なるほどね……巧……だっけ？」

「なんだよ」

「それがお前の望みなのか？」

「……ああ。確かにオルフェノクの中にも……いい奴はい  
た。」

でも、俺はオルフェノクのような生き方は絶対に許さない。」

「ならばよしだな」

時風が何か納得し、巧に握手を求めた。

「よろしくな。「奴」を倒すまでのそんなに長くない間だが、頼む」

「任せておけ。この家は好きに使ってもいい」

「ちょ、ちよつとたつくん!？」

そんな巧の言葉に、啓太郎がうろたえる。

この家は啓太郎の実家だ。

そこに勝手に住んでもいいなんて言われればそれは焦るだろう。

「いいじゃねえか啓太郎。小さいこと言うなよ」



「そんなあ〜〜」

「啓太郎。大丈夫だ。まあ、ちょっとものは相談で……」

蒔風が啓太郎の首に腕を回し、何やらこそこそと何か話をする。  
そして五分後、啓太郎が叫んだ。

「皆で歓迎パーティーをしよう!!!!!!」

「心変わり早くねえか(ない)!!?」

そうして今夜も夜が更ける。

そのパーティーの様子はまた別の機会に

t o b e c o n t i n u e d

555 ～出会いは激突から～（後書き）

アリス「仮面ライダー555（ファイズ）！！！」

作者的ナンバーワンのライダーです！！！！！！

変身ポーズのやりごたえならBLACKやRX  
ただ「ライダー」としてはデイクイド

だがしかし、作品、内容、機能どれをとってもファイズがダントツ  
一番です！！！！

ア「カブトや電王は？」

カブトはクロックアップや二段変身最高！！！！  
電王はキャラクターの勝利。

ア「なんか描く作品に思い入れがあるみたいですね」

そうだねー

クウガ：やっぱこれはいいでしょう

アギト：人間の可能性に痺れた。G-3シリーズが好き

龍騎：戦うことの強さと虚しさ、しかしそれでも戦わなければなら  
ないことに深く考えさせられた

555：異常なかつこよさに全身がゴワツ！！となった。アクセル  
フォーム最高

ブレイド：オンドウルラギッタンディスカー！！！！

響鬼：鍛えるってすごい。誰でもヒーローになれるという希望を持

てた。

カプト：おばあちゃんが言っていた……

電王：これはもうキャラクターの勝利だよ……

キバ：時代を越えて、伝わる想いは確かにあることを知りました。

デイケイド：人は誰でも主人公になれる。物語を紡いでいけることを知れた。この作品に大きな影響を残しましたねはい。

W：シリーズ初の「二人で一人」。最初はなんだこれ、と思っていたら一気に化けた。これはいい作品。

オーズ：歌は気にするな！！

と言ったところでしょうか

ア「途中ネタでしかない物が入ってましたよ？」

だってカプトは先に言ったやん

ア「いやあの、ブレ」それ以上言ってみる……オレアクサマヲムッコロス！！」「わかりましたよ……」

でもブレイドはあれでよかったです。

さて、容量の大きかったランキングの一位は！？

発表！！

「なのはA's　　そして笑顔で」でした！！  
やっぱりこれが一番長かったですね……

ア「というより、これが出るまで「ハルヒ」が一位だったんですね」

長いことね。

これを抜くのは一体何なんだろう。

・・・またなのは気がする

ア「次回、この世界のライダーとの出会い」

ではまた次回

おい知ってるか、夢ってのはな

時々スッゲー熱くなって、時々スッゲー切なくなる、らしいぜ。

俺には夢が無い、けど、夢を守る事はできる！

次の日の事だ。

時風は巧と共にある養護施設に来ていた。

その名は「創才児童園」といい、孤児たちの施設だ。

そこで働いている三原修二、という男に会いに来た訳なのである。

「乾さんが狙われている？」

園の外、子どもたちが遊んでいる広場を眺めながら、話を聞いた三原は驚愕した。

三人は幼稚園ほどの大きさの建物の一階部分、開けられた大きな窓のところに座っている。

三原は驚愕したが、よく考えてみればそれもそのはずである。

大元のスマートブレインを壊滅させたとはいえ、その生き方を実践しているオルフェノクは多く存在する。

そういった者達から見れば乾巧は人間側についた裏切り者として、まさに敵だ。

しかも所有するベルト、ファイズギアはかなりの力を持つ。

彼を倒して名を上げようとする者は多くいるだろう。

「わかりました、協力します。で、敵は何者ですか？」

「それはだな」

「いや、それよりも三原、海堂の連絡先知ってるか？」

蒔風が説明しようとする前に、巧が三原に質問した。

「あの人の連絡先ですか？えっと・・・ちょっと待ってください」

そう言って三原が携帯を取り出して海堂と言う男の連絡先を探す。

「なあ、彼はいつたい何者なん？」

蒔風のそんな質問に、巧が答える。

三原修二

三本のライダーズギアのうち、「デルタギア」の所有者だ。

アークオルフェノクとの最終決戦にも参加し、共にオルフェノクと戦った人間だ。

ちなみにデルタギアは人間でも変身可能なものだが、不適合な者が使用すると極めて凶暴かつ好戦的な性格に変貌してしまう。

そういうわけで適合者である三原はオルフェノクではなく人間だ。最初こそ戦いを恐れ、拒んできたが、未来を切り開くために決意し、戦うことを決めたのだ。

だからこそ、彼はデルタギアに呑まれなかったのかもしれない。

「なるほど……………」

そこで三原が携帯をしまい、巧に向き直る

「巧さん、海堂さんとの連絡がとれないんですよ」

「あいつ…………どこで何やってんだ？」

「さあ……………」

「オレがどうしたって？」

「！！！」

その声に反応し、園の入り口のフェンスの方を見ると、そこにはバイクに跨った青年がいた。

「海堂！！！」

「よ。このガキどもに会いに来ただけどよ、なによなによ？こんなところにこんなメンツが集まってよお〜」

巧や三原をチラチラと指差しながら海堂がおどけた態度で言ってきた。

海堂直也なおよち

その正体はスネークオルフェノクである青年だ。彼もまた、人間のために戦ったオルフェノクである。

「ちょうどいい。海堂。お前まだカイザのベルトは持ってるか？」

「あるけど、どうしたん？」

カイザのベルト

これもまた、ライダーに変身するためのベルトである。

このベルトの持ち主はいたのだが、ひとりは戦いの過程でベルトの力に耐えきれなく、最終決戦前に死亡。

二人目はその直後にあった最終決戦にて、ファイズがとどめをさすようにアークオルフェノクの動きをしがみついて止めたためにその反撃を食らって死亡してしまったのだ。

その二人目が海堂の友だったため、今ではこのベルトは海堂が持っている。

と、その間にも蒔風が二人に説明を終えた。

三原は納得し、戦うことを承諾した。

しかし



「オレはパスするよ」

そう言って海堂は出て行くつもりになってしまう。

「ちょ、海堂さん！」

三原が海堂を呼びとめる。

それに振り返って海堂が言った。

「オレはあの時王様のオルフェノクとやり合ったんだ。もうこの体だつて長くはねえ。なのになんでオレがそんな寿命を削るようなことしなきゃならないんだよ」

「う……」

そう言われては三原も何も言えない。

彼もオルフェノクである以上、このままでは消滅して死んでしまうのだ。

そんな彼に戦えとは強制できない。

「残された時間を思いっきり楽しむって俺様は決めたのよ。でわでわ、おたつ、しゃで」

そう言ってペコリとふざけた感じで頭を軽く下げて、海堂は出て行ってしまふ。

「しかたないよ。彼の人生さ。強制はできないしね」

「蒔風さん……」

「で、だ……」「これからどうしようか？」

「決めてなかったのかよ」

「だあ~~~~つて~~~~」。 「奴」が来るまで何するよ

「先にその「奴」を叩く……とか」

「「奴」の居場所は見当もつかん。まあいるとしたら……」

「したら？」

そこで蒔風がにやりと笑いながら、こう答えた。

「アークオルフェノク……だな」

.....  
.....

とある荒廃した建物の中にて  
どうやらこの建物は何処かの研究機関のものだったらしい。  
その機関がつぶれ、打ち捨てられたこの建物に、住み着いた者がいた。

重傷を負い意識不明状態のアークオルフェノクと、最終決戦の場からここまで彼を運び込んで来た女性オルフェノク・ロブスターオルフェノクだ。

「王の目覚めはすぐそこ……待っている、裏切り者のオルフェノクめ！王が眼覚めた暁には、必ず……」

そついいながら培養液に漬けられた王が入っている水槽と愛おしそうに撫でるロブスターオルフェノク。

ドゴオア！！！！

その時、建物が揺れ、計器がぶつかってガシャガシャとやかましい音を立てた。

何事かと思ったその矢先に、その部屋の扉が勢いよく開かれ、一体の彼女の部下のオルフェノクが跳び込んできた。

「た、大変です……何者かがこの施設、にッ!？」

ビクン！！と身体が震え、全身から青い炎を吹き出してそのオルフェノクが灰となって消える。

灰となって消えた先には一人の男が立っていた。

なぜだか顔の部分だけ常に影がかかっている、その素顔がはっきりしない男、「奴」である。

「あなた……何者？」

「……………」

「いいから答えなさい！！この場で死にたい……………」

ロボスターオルフェノクが「奴」に詰め寄り、近づいたところでその言葉が途切れる。  
ガクガクと震える頭を下に向けると、自分の腹を「奴」の抜き手が貫いているのを目撃した。

「……………んな……………」

ボツッ！！ザラザラザラ……………」

そしてロボスターオルフェノクも、先ほどの物と同じように灰になって消滅してしまった。

「奴」がアークオルフェノクのいる水槽に近づく。

「これがかの王か。目覚めると厄介だから、その前に……………」

だが、「奴」がその水槽に手を伸ばした瞬間、アークオルフェノクが目覚め、その首元に両腕を突き出してきた！！！！

「ぬっ、がッ！！！」

ドゴン！！！！！！

そのまま壁を突き抜け、二、三部屋先でアークオルフェノクが「奴」を壁に押し込んでいる。

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

「ぬへえ……こいつ湿ってる……きもっち悪いんだよ！！！！！！」

ドガッ！！！！！！

「奴」がアークオルフェノクの腹部を蹴り飛ばして後退させる。

そして瞬時にその背後に回り込み、首根っこを掴んで壁に向かって投げ放った！！！！

「お返しだこの野郎！！！！」

ガゴゴゴン！！！！！！

その壁を破壊して外まで吹っ飛んだアークオルフェノクを追って、「奴」も外に降りる。



ケルベロスとエラスモテリウムオルフェノクが衝突する。

しかしケルベロスの大きさは約三メートル。

二倍の大きさにそれ以上の重量を持つエラスモテリウムオルフェノクを止めることはできない。

だがそれでも一瞬は押しとどめる。

そしてズルズルと押しやられていくが、その少しの時間で十分だった。

「フツ、セイツ！！！」

「奴」が魔導八天でエラスモテリウムオルフェノクの巨大な角を根本から切り落とす。

そしてその角を掴み、その巨体の背中のだ真ん中に突き刺した。

ゴギユアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！

！！！！！！

エラスモテリウムオルフェノクが壮絶な雄たけびを上げてのたうちまわる。

「奴」がその腹部に入り込んで、地面を踏み抜かんとする勢いで踏みこみ、その巨体を全身の力の限り蹴り上げた！！！！

巨大な化け物が宙に浮き、背中を下に向ける。

そしてその背中に突き刺さった角めがけ、ケルベロスが突っ込み、反対側の腹から突き出し、エラスモテリウムオルフェノクは灰と消える。

その間に「奴」はアークオルフェノクに向かう。  
相手の突き出してきた拳を下に払い落とし、左手に持った剣で肩口から一気に切り込んだ!!!

ズシャアッ!!!!!!

地面を転がるアークオルフェノクの切り口から薄く青い炎が上がっている。

もはや終わりだ。このまま放っておけばこいつは消えるだろう。

「でもそれではいけない。オレの力になってもらうぞ」

「奴」が倒れる王の頭に手を当てる。

「ゴ……ゴオオアアア……」

「あん？人間相手に手を出したお前が悪いんだよ。  
人間をなめるなよ、くそ野郎」

バシイ!!!!!!

そしてアークオルフェノクの姿が「奴」に消える。  
ゴキゴキと首を鳴らし、建物の方へと手を伸ばし、波動砲を撃って  
跡形もなく吹き飛ばした。

「よしよし。これでいいな」



そういつて満足し、「奴」は携帯を取り出す。  
掛ける先はあるクリーニング店だ。

こうして、各々の戦いの準備は整った。  
後は戦うだけとなる。

「もしもし？世界をまっさらにしたいんだけど」

今回の戦いは、まるで決闘のように始まった。

t o b e c o n t i n u e d

555 (三つ)のベルト、ライダーの (選)返 (後書き)

そういえば……最終決戦でオートバジンって壊れてたっけ？

アリス「覚えてないんですか？」

ちよつと古くて思い出せない……

最後に見たのは一年前だから。

劇場版だと壊されてたよな……

ア「どうするんですか。ふつーにバジンさん出てたじゃないですか」

あれだあれ。

壊れてないならそれでよし。

壊れていたなら……何とか直したんだよ！！スマートブレイン襲ったんだな、うん！！

ア「それでいいのですか？」

いい……と思う……！！

ア「次回、戦いますよ……！！」

ではまた次回

戦うことが罪なら、オレが背負ってやる！……！！



「こっつてどういった施設なんですかね？」

ここに到着して周りを見渡した三原がなんとなしに聞いてきたのに、時風が推測から答えた。

「研究所と工場が隣接しているからな・・・おそらく開発した何かをこっちで量産していたか・・・いやするつもりだったのかな」

「どっついうことだよ」

「乾さん、これ！」

三原が何かを見つけたようだ。

二人がそちらに向かい、三原が見つけたものを指差す。

「これは・・・」

「製造途中のライダーギア？」

「こっちにはライオトルーパーのベルトがありますよ」

ライオトルーパーはスマートブレインが作った量産ライダーだ  
しかしこのベルトは

「こっちも未完成品だな」

時風の言葉通り未完成品だ。

手に持つとガシャ、と落ちて壊れてしまった。

「まさか・・・ここで新たなライダーギアを？」

「待てよ。ライダーズギアは二本じゃないのか？」

「最初は二本だったんだけどよ、量産型のライオがでてきたしな」

「さらに言えば僕たちの三本はそれぞれ一回はスマートブレインの手に渡っています」

「つまり解析し、新たなベルトを？」

「可能性はあるな……面倒なことすんなあ……」

新たなライダーギアの存在を懸念しながら三人は進む。

しかし

「キリねえな」

「ですね。さらにあっちの研究所、地下までありますよ？」

「マジですかよ。にゃー、うんざりなのね」

広い工場を探索し、さっきのベルト以降全く手掛かりが見つからず、三人は少しうんざりしていた。

「しかも呼び出したくせになんでアイツいねんだよ!」

そう、しかも「奴」がいない。

これだけ探しても出てこないのだ。

「奴」なら飛び出してきそうなもののだが。

「しょうがねえ、別れるか?」

「まで、それは危険。絶対危険、マジ危険。このまま探索を続ける  
しか……」

………ガシャン………

何かが落ちた音がした。

三人が音のした方を見ると、そこには灯油などが入っていきそうな空  
のアルミ缶が転がっていた。

そしてその上を見上げ、一つの影が落ちてきた。

ダンッ!ズゴン!!!

一切の屈伸をせずに、真っ直ぐ降り立ってきたモノ。

着地と同時に周囲を陥没させ、いくつかの機械が崩れ落ちた。

そこに仁王立ちするは黒い騎士。

のマークをあしらい、漆黒の鎧に身を包み、「帝王のベルト」のうち的一本、「地のベルト・オーガギア」にて変身した「奴」、仮面ライダーオーガだ。

「よう……いいもん拾ってな。これで遊ぼうかと……ね」

「そうかよ」

オーガと蒔風が睨みあう。

それからゆっくりと歩み、近づき始めた。

ザッザッザ

「はっは。お前の理想はオレが潰す！」

ザッ、ガラン、ジャリ

「ひどいねえ。ここは「お前の理想は俺が継ぐ!」じゃないのか？」

ザッザッ、ザシザシ

「知らねえなそんなこたあよ」

ザシ、ザ、ザ、ザ

二人があと一步踏み込めば殴りこめる位置にまで近づき、そこから一気に走り込んでお互いの胸元を殴りつけた!!!



ズッ、ドグアッ！！！

「およよよっ」と

「ぐっがあああー！！！」

オーガが立ったまま滑り後退したのに対し、蒔風は後ろに倒れ、背中を削りながら巧の元まで吹き飛ばされた。

「蒔風！！！」

「こっからだ！！行くぞ！！！」

「おう！≫555、standing by≫変身！」≫complete

「はい！変身！」≫standing by complete

巧がファイズフォンの変身コードを入力し、三原がデルタフォンに音声入力する。

それをそれぞれのベルトに差し込み、ファイズとデルタへと変身を遂げた

「おおおおおおお！！！！！！！」

「「「ああああああああああ！！！！！！！！！！」」」

蒔風とファイズがオーガに走り込み、デルタが後方から銃撃での援

護をする。

しかしいくらデルタの銃撃が当たろうとも、蒔風とファイズの攻撃を食らおうとも、オーガの身体がグラつくことはない。

「ごんの！！！」

蒔風の蹴りがオーガの側頭部に命中する。

さらにファイズが腹部めがけて拳を放った。

が、オーガは蒔風の蹴った方の足を掴み取り、棍棒のように振り回してファイズを殴り飛ばし、

さらにそのまま地面に蒔風を叩き付け、バウンドして跳ね上がったきたところを足刀蹴りで吹き飛ばした。

その間にオーガフォンを銃型に変形させたブラスターでデルタの上半身にまんべんなく銃弾をぶち込む。

蒔風が苦しそうに片膝をついて立ち上がり、血を吐き出して睨みつける

「がっふ……ペッ……おおおおおおおおお！！！！！！」

そしてオーガに再び挑み、凌ぎを削る。

その間にファイズがミッションメモリーを新たに挿入する。

《complete・start up》

ファイズアクセルフォームへとチェンジし、超加速での移動を開始する。  
周りがスローモーションになり、宙をうく蒔風も、オーガに向かうデルタの銃弾もゆっくりと動いている。

ファイズが一気にオーガの背後に回り込みながら拳にナツクルを構え、エクシードチャージしエネルギーを込める。  
だが、それだけ有利な立場にあっても巧は嫌な汗が止まらなかった。

オーガの表情は仮面に覆われてわからない。  
だが、確信できることが一つだけあった。

- ミラレテイル -

まさかそんなことはない、とその考えを振り払うように必殺の威力がこもった拳、グランインパクトが幾重にも放たれる。  
だが、その嫌な考えは最悪の形で現実のものとなってしまった。

ギユガツ！！！！ブオン！！！！ボグゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！！

「ゲ、ブアツ！！！！ゴガガガガガッ！！！！」

オーガが蒔風の腕を掴み、姿が一瞬ぶれるほどのスピードで立ち位置を入れ替えた。

オーガに向けられていた多くの拳はすべて蒔風に叩きこまれ、さらにファイズもオーガの持つ剣、オーガストランザーでファイズを五、六度斬り、ファイズが火花を散らして地面に転がる。

「あああああああああああああ!!!!!!!!!!!!チエック!!!!!!!!!!」  
「《Exceed Charge》」

デルタが立ち上がり、デルタフォンに音声入力する。  
するとエネルギーが銃の先端に集まり、そこから三角錐状のポインターを放ち、オーガにロックオンする。  
その状況にオーガが気付き、そちらの方にまっすぐ向き合った。

「おおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

デルタが跳び上がり、ポインターに向かってキックを放つ。  
オーガの装甲とポインター内のデルタがギリギリと鬨ぎ合<sup>せめぎあ</sup>って押し合っている。

しかしそこでオーガの全身から「奴」による波動が噴き出し、ポインターを砕きデルタを押しやった。

「三原!!!!!!!!!!!!!!」

「このやろおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

「さて、蒔風!!!!!!!!!!」

蒔風が突っ込むのを、ファイズが止める。  
しかし蒔風は止まることなく、「火」を構えて突進する。

狙うはオーガの首元。



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



「乾巧」って奴のせいなんだ……



落ちる天井、炎に爆ぜる金属、ひしゃげた鉄柱、窪んだ地面。それら一つ見るだけでも凄まじい威力の爆発が起こったことを物語っている。

そしてそこから少し離れたところの鉄柱に時風が背中を持たれたせて倒れていた。

頭からは血を流し、衝撃からかばったせいで左腕はボロボロ。

さらには全身にやけどを負い、内蔵の奥深くにまでダメージがいきわたっていた。

「が……は……開……翼……」

時風の背から翼が現れる。

それにより、少しは時風の身体が軽くなった。

（こうしてりゃ少しはマシだが……治療することもままならねえかよ……）

と、その傍らにガシャン、とオーガギアが落ちてきた。

あれだけの爆発にもかかわらず、少し煤が着いた程度の損傷しかない。

「時風ッ……」

巧とデルタが蒔風によってくる。  
どうやら巧はあの一撃に変身が解除されてしまったらしい。

「どうということですか？あれは「奴」ではなかったんですか？」

三原が蒔風に訊く。

あのオーガは爆発し、肉片もなしに残ったのはベルトのみ。  
そこで蒔風が途切れ途切れに応えた。

「オーガは……通常の二倍以上の、フォトンストリームを形成するが……いくら「奴」でも……あの高速移動についてこれるほどの性能は……無い……」

「どづいづことだよ」

「あれは「奴」ではなかった……やられたよ。あれは「奴」の「欠片」だったんだ」

「う」明察だよ」

と、そこに本物の「奴」が降りてきた。

「いやなに、そのベルトを見つけたのは別とこだったんだけどな、どうにも上級オルフェノクの力で無いと使えないらしいんだよ。だからせつかくだし王様を取り込んで、それで「欠片」に使わせて後はボンー！」

そこまで言って「奴」は顎に手を置き、うまくいったと笑う。

「ここまでダメージは期待以上だったな」

「ッー!!させるか!!!」

「奴」の視線が落ちてきているオーガギアに向き、それに気付いた巧がそちらに走り出す。

しかし「奴」の方が早い。

このままでは奪われてしまうことを悟った巧が咆哮を上げる。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

バシユウ!!!!!!

巧の身体がウルフォルフェノクへと変身し、俊敏な動きでオーガギアを蹴り飛ばし、「奴」にもドロップキックをかます。

「奴」の胸を蹴って一回転し着地したウルフォルフェノクだが、「奴」に勝てるはずもなく、足払いをかわしてジャンプしたところに蹴りを叩きこまれて吹っ飛んでいく。

地面に落ち、人間体に戻ってしまい、腹を押さえて悶絶する巧。

ガチリ

ベルトの装着する音が聞こえ、「奴」が蒔風の方を向く。

三原に担ぎあげられた蒔風が、荒い息で意気込んだ。

「翼人の力があればよ……《000 standing b  
y》こう言ったもんにも代用が効くだろ（バチン!!!）……  
変身」

ガキツ、ガチン!!! 《complete》

蒔風の身体を黄金のフォトンストリームが駆け廻り、漆黒の装甲が  
身を包む。

バシィ!!!

「今の身体じゃこんなもんでも使いたい気分なんだよ……  
おおおおおおあああああ!!!」

オーガに変身した蒔風が「奴」に走ってゆく。  
だがしかし、「奴」は冷静に蒔風を見据えるばかりだ。

オーガのパンチが放たれるが、「奴」がそれを真正面から握って止  
める。

そして身体を返し、後ろの方へとオーガの身体を投げる。  
基本的な柔法なのだが、今の蒔風にはこれすらも深刻なものだ。  
受身も取れず、地面に叩きつけられたオーガに、「奴」の蹴り上げ  
が腹に入り込み、その体が天井近くまで浮く。

その衝撃に変身が解け、装甲が碎け散った。

「が……ぶ……し……死ぬ？」

（死ぬ？オレが？あー何となくわかってたけどねーってか、このまま死んだら巧たちやばいもんなー。それ以前に痛いのは嫌だし。感覚もう無いけど）

見た目の悲惨さとは裏腹に、時風の心象はそんな呑気なものだった。そしてはずれたオーガギアと時風の身体が地面に落ちる。

「そうなんだよなあ……この……まま……死ぬわけにはいかないんだよねえ……」

ガクガクと震える腕に全身の力を込めながら立ち上がろうとする時風。

三原が巧を起こそうとするが、巧もまた、今すぐに立ち上がれる状況じゃない。

だからと言って三原一人では相手にならない。

最初に手分けして搜索することに時風が反対した意味がここで本当にわかった。

ダメなのだ。

巧や三原はもちろん、時風ですらもひとりでは危険な相手。

それが 「奴」だ

「さて、せっかく使えるんだからこいつは使わせてもらおうかな」

「奴」がオーガギアを手にとる。

そしてベルトを巻き付けコードを入力した。

《battle mode》

ドンドンドンドン!!!!!!

キイイイ!!!!ドゴオア!!!!!!

そして「奴」に向かってミサイルが飛ぶ。

その予期せぬ爆発にオーガギアは再び吹き飛び、見当もつかなくなつてしまった。

「まったくよお。お前らオレ様がいないとほんつとにだめな」

「奴」をはじめ、蒔風、巧、三原がミサイルの飛んできた方向を見る。

そこには一つの巨大なシルエット。

大型二足歩行型戦闘メカのバトルモードに変形した、サイドカーの着いたバイク・サイドバツシャーが工場の大きな入口の所に立っていた。

そしてその上部にある操縦桿を握っている人物こそ……

「まさか……カイザ!?」

「海堂!!!!!!」

「まったく、何やってんだよ。早く立つちまえよ!!!!」

そこに現れたのは仮面ライダーカイザに変身した海堂だった。  
巧と三原が時風に肩を貸してそちらに近づき、カイザを見上げる。

「来てくれたのか」

「んあ?ばつか言っちゃいけねえよ?オレはオレ、海堂様だ。まあ、このままほつとしても死ぬんならよ、派手に言った方が俺様らしいっつーかよ」

「まったく……お前らしいよ」

「うーーーーーあーーーー!!!!!!鬱陶しい!!!  
!オーガのベルトもどっか行っちゃったじゃねえか!!!!」

「奴」が吠え、全身から波動砲を数十発一気に放ち、周囲を爆破に包み込む。

その衝撃を受け止めようとカイザが前に出るが、あえなく吹き飛ばされてしまう。

「ッ！！」ああ……」

「海堂！！！！」

「ライダー一人増えたくらいじゃオレには勝てない。大人しく死んでおいてくれ」

「なにもわかってねえな……一人増えるのがどんなことか……それだけで俺たちの意志は……願いは大きくなるんだ……」

「蒔風が横転したサイドバツシャーに身体を預けながら立ち上がる。

「なあ……このまま終わらせてもいいのかよ！！巧！！三原！！海堂！！」

「そうだよな……あいつの理想は……オレがどうにかしなきゃなんねえんだよなあ！！」

「オルフェノクとはなんなのか……その答えが出ていませんしね」

「そんなことはどーでもいいけどよ……ここで負けるなんてこともできねえよなあ！！！！」

「行くぞ……三原、海堂！！！！オレたちには夢がある……俺には夢が無かった……でも今なら！胸を張れる夢がある！！！！！！」



その言葉に呼応したかのようにオートバジンが飛んできて、巧にトランクボックス型トランスジェネレーター・ファイズブラスターを落とす。

《555 standing by complete》

巧がファイズに変身し、さらにファイズブラスターのボタンを押し、コードを入力する。

《555 standing by》

そしてベルトのファイズフォンをブラスターに差し込み、それが起動する!!!!!!

《Awakening》

バツ!!!バシュウ!!!!ゴオオオオオオオオオオ!!!!!!

ファイズのスーツ部分が赤く染まり、フォトンブラッドに包まれて行く。

そして仮面ライダーファイズブラスターフォームへと変身を遂げた!!!!!!

《103 Blaster Mode》

ファイズブラスターをフォトンブラスターモードへと切り替え、そ



ボシッ！！！！

「奴」の魔導八天がファイズを捉えようとした瞬間、ファイズが消える。

否、消えたのではなく、飛びあがったのだ。

背中に装着されているマルチユニットで空中飛行に入ったのだが、そのスピードは通常の物とはケタが違う！！！！

《Exceed Charge》《Exceed Charge》

その間にカイザとデルタがエクシードチャージし、銃口にエネルギーを充填する！！！！

ドッゴガガガガガゴン！！！！！！！！

目に止まらぬスピードで「奴」を殴り続け、空中に浮かすファイズ。そしてスピードが最高潮に上がった時、ブラスターのコードを入力する。

《5532 Faiz Pointer Exceed Char  
ge》

【KAMEN RIDER 555】 - WORLD LINK -

FINAL ATTACK!!

「はああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

ババババババン!!!!

十や二十を軽く超える数のポインターが地面に落ちた「奴」の周囲にバラバラの方向を向いて出現した。

だがしかし外したのではない。

そのポインターを次々と通り、赤い閃光となったファイズが「奴」の周囲を駆け巡る!!!!

バシバシバシバシバシバシ!!!!!!

周囲のポインターが次々と無くなっていき、次第に数が絞られてくる。

それでもファイズの姿はとらえられない。捉える事などできはしない!!!!!!

そして一切のポインターが消える。

「奴」が周囲を見渡し探しているところで、カイザとデルタが動いた。

「はっ!!!!!!」「おりゃあ!!!!!!」





「ッ!!は……………ここは？」

「起きたか蒔風」

蒔風が目覚めるとそこは啓太郎の家だった。  
額には濡れタオルが置いてあり、身体は包帯で巻かれている。

「大丈夫か？」

「……………問題はないな」

拳をグツグツ、と握りながら蒔風が笑顔で答えた。

「さて……………オレはもう行くさね」

「その怪我でかよ!!もう少し……………」

そこまでいいかけた巧の目の前にズビシと指をさす蒔風。

「そう言つなよ。行かなきゃならないんだ」

「Gate Open……………KAMEN RIDER 555」

白いゲートが開き、そこに向かう蒔風。  
しかしヨロリと身体がぐらつく。





今はそれも終わり、おだやかな日々を送る毎日。

そこに降り立つ翼人。

この世界には真の聖剣が存在する。

t o b e c o n t i n u e d

555 俺たちのJustice (後書き)

【KAMEN RIDER 555】

構成：”ライクル” 60%  
”フォルス” 30%  
”LOND” 10%

最主要人物：乾巧

- WORLD LINK - } WEAPON } : プラスタフォーム  
での超高速移動

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : ポイ  
ンターの応用化&他ライダーのポインター使用

アリス「これで王の力がまかれ、オルフェノクは滅びなくなったん  
ですね。  
よかったよかった。

作者はもう限界と寝ました。

次回、腹ペコ王、なんでさ  
ではまた次回」

問おう。あなたが私のマスターか

冬木市、衛宮邸

今この家の広い中庭にそうそうたる顔触れが集まっていた。

まずこの家の家主、衛宮士郎にそのサーヴァント、セイバー。士郎の友人、遠坂凜にそのサーヴァント、アーチャー。さらには後輩の間桐桜、ライダーまでいる。

中庭で彼らが集まっている中心には一人の男がぶっ倒れている。もうお分かりだろう。

蒔風である。

白目を向いて倒れている蒔風、一体何があったのか。時は10分程前に遡る。

.....

「で、桜に叩き起こされて来てみたけど・・・何よこれ」

凜が言っているモノ。

この家の土蔵に集まった先程のメンバーがその一つの異常に視線を向けている。

それは蒔風がいつも使っているゲートだ。  
だが開いているだけで変化がない。

「朝食を作ったなら歪みを感じ取ったんだよ。で、桜に呼びに行ってもらってオレはセイバーとこっち見に来たんだ」

「その時には（ゲー）もうこれがありました。凜、（じゅるり）これは一体なんなのですか？（ぐるぐる）」

凜が呆れ眼でセイバーを見、士郎に問い掛けた。

「……………士郎、朝ごはんは？」

「あ？いや、まだだけど」

「はあ……………セイバーは食べてきていいわよ……………」

「！本当ですか凜？いえ決して士郎よりもご飯というわけではないのですが、ほら！腹が減っては戦は出来ぬというように……………」

そこまで一気にまくし立てたセイバーの肩をガツ、と掴みライダーがセイバーの至近距離で短く言った。

「行きなさい」

「はい」

セイバーが即答し、大人しくターン、猛ダッシュで食卓に向かう。そのあとを桜がついていき、この場には四人が残される。

「それで凜。これは一体なんなんですか？」

ライダーがゲートを指差して凜に聞く。

「……………なるほどね。士郎の感覚に引っ掛かるわけだわ……………結論から言っわね。これ、他の世界に繋がっているわよ。」

「……………は？」「」

三人は耳を疑う。

異世界への移動はもはや魔術ではなく魔法の、第二魔法の領域だ。しかも通じているのはパラレルではなく確実に違う世界だ。

そんなものがどうしてこんなところに開いたのか。

「んなもん私にもわからないわよ。でも、気をつけるに越したことはないわ。なにが出てくるかわかったもんじゃないし。」

そこまで凜が説明したところで、壁にもたれて黙っていたアーチャーが口を開いた。

「ふむ、それはさておきマスター。来るようだぞ？」

「え？」

アーチャーが壁から離れ、凜の前に出る。

そしてゲートが輝き、そこからひとりの男が出てきた。

「ふあ……みなさん……おはようございまふい……」

「

眠気に満ちた瞳がトロンとして、半睡半覚状態の時風が出てきた。茶色いカバーの抱き枕を腕に抱え、パジャマ姿でのそのそと出てきた。

その姿にあっけにとられる一同だが、ここで凜が甲高い声で時風に訊いた。

「あんた何者よ……こんなところに現れて何するつもり!？」

「ふい?……ああ……ちょっと待って……ここ冷たくて気持ちいい……」

そう言つて土蔵の地面に横になつてしまふ時風。

凜がその時風にギヤイノギヤイノとまくし立てる。

「ちょっと!!寝てないで答えなさい!!!それから!!!こんなところで寝るな!!!聞こえてんでしょ?」「ふあい」じゃないわよ!!!こっちは朝っぱらから叩き起こされてイライラしてんだからいい加減にしないとブツ飛ばすわよ!？」

「そんなに知りたきゃギャーギャー騒いでんじゃねえよこの豚野郎が」

さつきまでの眠そつな声から一変、時風の声が唸った。その声に全員が身じろぎ、ゾクリと何かを感じた。

「寝起き弱えのはこっちも同じだったのに無理やり叩きだされた俺の気持ちを考えろや……

消し炭にすんぞゴラ。ツたく死ねよもう……世界なんか腐って死んでしまえばいいんだ……

……だからうつせえって言ってるだろうがあ!!!!!!  
「!!!!!!」

バゴウ!!!!!!

時風が跳ね上がって凜に向けて蹴りを放つ。

とっさにアーチャーがそれを弾き、凜を後ろに下げる。

「どうやら君の声が彼の癩に障ったようだぞ……どうしてくれるんだ全く」

「知らないわよ!!!!!!ってかそんなこと私に言うな!!!!!!」

ウガー!!!!とアーチャーにまで当たる凜。

どうやら彼女もまだ眠かったらしく、ライダーが部屋まで連れて行くことになった。

残されたのは士朗とアーチャー。

目の前には寝起きで機嫌を損ねた時風

バーサーカー



「  
．．．．．  
」

「お前にまかす！！！！（ドカア！！）なにすんだお前！！！！」

二人が同時に相手を突き出し、二人同時にスツ転んだ。  
そうやってグチャグチャしている間に二人に影が降りる。

「こちとら低血なんだよ．．．上は97しかねえんだよ．．．そんなオレが寝起きいじられてどんだけイラついてっかわかるかてめえら！？」

「「知るか！！！！」」

「しらねえだ？知つとけよゴラ！！！！知らねえとはてめえら何様のつもりだぶつ殺すぞあ！！！！？？」

ドツ、バフン！！！！！！

土蔵の扉から土煙が噴き出し、そこから志郎とアーチャーが飛び出  
蒔風がそれを追う。

ギン！！ガガガン！！！！ガギンガギン！！！！！！

アーチャーも士朗も投影魔術で木刀を出して応戦する。相手の素性もわからないのにいきなり真剣で斬りかかるわけにもいかない。

だが時風はそんな二人に怒涛の猛攻を仕掛けて行く。

居間にて

「???桜、何処かで乱闘の音がするのですが?」

「(先輩とアーチャーがいれば何とかなるよね?)だ、大丈夫ですよセイバーさん」

「そうですね。桜、おかわりを」

「はいはい」

凜の部屋にて

「凜、落ち着きましたか?」

「うっ……ありがとライダー……我ながら取り乱したわ」

「朝は大変ですからね」





二人は壊滅的にタイミングをはずし、見当違いの方に蒔風の身体が飛んでいく。

そちらには衛宮邸、さらに言うなら障子がある。

そしてもっと言うならそこはセイバーが朝食をとっている居間だ！  
！！

ドガシヤア！！！！

そこに蒔風が突っ込む。

机の上に仰向けになっている蒔風の目がパチクリと開かれ、起き上がって全身の筋を伸ばした。

「ああー！ー！。寝起きは最悪だったけど、まあそれなりにすつきりしたな。さて、ここはど……こ……こ……」

蒔風が振り返った先にはセイバーがいた。

茶碗を持ち、今まさに箸でそれを掴もうとしている姿のまま固まっているセイバー。

しかし左手に茶碗は無く、前髪に双眸を隠して少し俯いてなんかのオーラを出しているセイバー。

頭にひっくり返った茶碗を乗せているセイバーが、蒔風に叫んだ。





『なにでち……ってかほんとに誰に……?』

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



アリス「Fate/stay nightの世界ですね!!!」

そうですねー

この話大好き!!!

ランサーの兄貴が一番好きなキャラ。

次にバーサーカーですね。

ア「時系列とか、どのルートのラストですか？」

それは明確にはしません。

でも、聖杯戦争は終わってます。

ステイナイトとホロウアタラクシアの関係みたいな感じにみてください。さい。

ア「じゃあサーヴァントはみんないるんですか？」

そうなりますね。

アヴェンジャーとハサンの方のアサシンはいませんよ。

ア「その方が面白いし、ですか」

そうですね!!!

難しいこと考えちゃだめ!!!

あ、あと今回説明は入れられませんでしたが、ないようわからなかった方は次回、そこらへん書きますのでそれで許してください。

ア「次回、目覚めて説明ゴ―」

ではまた次回

別にあれを倒してしまってもかまわんのだろうか？



喚して戦う殺し合い。

サーヴァントにはクラスがあり、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、キャスター、アサシン、バーサーカーの七クラスだ。サーヴァントとなる存在はかつての伝説に名を残した英霊たちだ。神話、伝承、古代文、歴史。

そういったものに名を連ねた英雄をクラスにわけろのだ。

そして勝ち残れば聖杯を手にし、その願望機に願いをかければそれが叶う。

故にマスターとサーヴァントは殺し合いと言う戦いを開始した。

しかし、その聖杯はすでに歪んでいた。

まっとうな願望機として機能していなかったのだ。

例えば「戦いをなくしてほしい」という願いならば、人間すべてを抹殺してそれを完遂する、というものだ。

故に士郎たちがその聖杯を破壊し、サーヴァントたちも現代に残ったままである。

ちょうど時風の話が終わり、アーチャーが片目を開けて時風に訊いた。

「なるほどな。よくわかった。つまり君は世界を巡る者なのだな？」

「そゆこと」

「つまりは翼人だと」

「そゆ、うおい!？」

アーチャーの言葉に驚く蒔風。

一方凜や士郎達は何の話かわかっていない。

「翼人とは異世界や時間を越える存在だ。英<sup>あそこ</sup>霊の座にいたとき話には聞いていたがな」

「私は知りませんが」

ライダーの言葉にアーチャーが皮肉気味に答える。

「私は君のように優れた人間ではなかったからな。向こうに行っても貪欲に知識を集めなければ英霊としてやっていけなかったのだよ」

「それ、誰から聞いたん？」

「英霊の座を管理するものだ。ま、君達からすれば神のような者だ。本人はあくまでも管理者だと言っていたがな」

「”フォルス”の管理者か……」

そこまで話したところで凜が立ち上がった。

「そういつことならこつちも戦力を集めなきゃね・・・土郎がそいつに殺されたら世界もおじゃんなんて冗談じゃないわ」

そう言つて携帯を取り出し、土郎に渡す凜。

「どつしると?」

「連絡、とりなさいよ」

「オレが!?つてか遠坂!携帯持つてたのか!?!」

凜が携帯を持つていているということに驚く土郎。

彼女は非常に優秀な魔術師のだが、機械類が苦手で、テレビの録画はおるかプッシュホン式電話の扱いにも困るほどの機械音痴なのだ。

「うっさいわね!!!最近買ったのよ!!!」

「どつやつて登録してもらったんでしよう・・・」

桜の素朴な疑問にアーチャーが苦笑して答えた。

「ふふつ、なに。相手に頼んだまでだ。滑稽だったな。片っ端から知り合いに「登録してくれ」と頼みこんでいるマスターの姿は」

「あああ、あんた何ばらしてんのよ!!!」

「そういえばそれを買った時も店員に勧められるままに使いもしない機能付きのを勧められてそれにしたんだっただったかな?」

「うつさい！……！！」

と、そこでアーチャーにセイバーが言った。

「あなたは着いていかなかったのですか？あなたがいればまともなものを買えたでしょうに」

「いや、その時はくだらないことに口論になってな。「見ている。私一人でも携帯ぐらいどうにでもなるんだから」と意気込んでいたのでね。そつと傍観させてもらっていた」

「そんなときあんさんはなんでケンカしたん？」

「外出時に電話番号のメモや小銭、その他諸々の管理を一手に押しつけられてな。それは文句の一つも出るだろうと言っほどのものだ」

「それはひどいwww」

そんな会話をしているうちに士郎が連絡を取り終えた。

「どこに連絡したんだ？」

「教会のカレンって奴と、魔術師のイリヤって子だよ」

「んじゃその子たち待ちだな」

そう言っ居間でくつろぐとする時風だが、そこでセイバーが口をはさんだ。

「しかしその「奴」と言う者と戦うにしても、あなたの實力はどれくらいですか？」

「かーなーり、強い」

「その力量、はからせてもらってもいいですか？」

「……いいぜえ……いつちよやろうか！……！」

二人が庭に出て準備運動をする。

セイバーに凜と土朗が声をかけた。

「あまりやりすぎないでよね？」

「セイバー、どれくらい自身があるんだ？」

「やりすぎない自信はありませんね。彼もかなりのモノを持っている。それに……」

「それに？」

「エクスカリバーが、疼くんです。何かに反応してるみたいに」

蒔風が声をかけ、互いに構える。

セイバーは手合わせと言いながらも甲冑に身を包んでいる。



「手は私が立ち合おう。危険なことになったら止めるからな」

アーチャーが間に立って、そして始まった。

「両者・・・始めっ!!!」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

アリス「今回短いですね」

説明回だからな！

そこは大目に見てください。

ア「次回、セイバー対蒔風。勝つのはどっち？」

ではまた次回

そうだ、誰かを助けたいという願いが綺麗だったから憧れた！

故に、自身からこぼれおちた気持ちなどない。これを偽善と言わず  
なんという！

この身は誰かの為にならなければならぬと、強迫観念につき動か  
されてきた。

それが苦痛だと思ふ事も、破綻していると気付く間もなく、ただ走  
り続けた！

だが所詮は偽物だ。そんな偽善では何も救えない。  
否、もとより、何を救うべきかも定まらない  
！

アーチャーの掛け声と同時に、二人が走り出す。

セイバーが握るは不可視の剣。

宝具・聖剣エクスカリバーを覆う光すら捻じ曲げるほど圧縮された  
風、インビシブル・エア風王結界の効果である。

「？ああ……不可視の剣か！！ちと厄介だな……」

セイバーの横薙ぎをしゃがみ込んでかわす蒔風。

髪の毛が少し切れ、パラパラと散る。

（見えないだけならともかくなつと！！！！）

蒔風がセイバーの剣をアクロバティックな動きでかわしていく。  
決して剣を弾こうとしないその動きに、セイバーは感心した。

（ふむ……生身で弾こうものならすぐさま風王鉄槌で吹き飛ばそ  
ストライク・エアうとも考えたのですがね）

クルクルと回りながら蒔風が一旦セイバーから距離をとる。  
そしてその手の内が光り、ベルトとパスが握られていた。

「へへっ 変身！」

《gun foam》

「倒すけどいいよね？答えは聞いてないっ！」

仮面ライダー電王ガンフォームに変身した時風がそう言いながらセイバーに銃弾を放っていく。

だがセイバーとて伊達で剣の英霊のクラスにいるのではない。その銃撃をすべて弾き飛ばしながら時風に接近する。

「やっべ！？変身！！《ax foam》」

撃ち続けながら時風がアックスフォームにチェンジする。セイバーは銃撃が止み、そこで一気に飛びあがり剣を縦一文字に振り下ろした。

時風がそれをデンガツシャーアックスモードで受け止め、膝が若干崩れる。

「っ……」

「む……硬いですね」

「そりゃそうだった!!」

ブオ!!!

アックスを振り、セイバーを遠ざける蒔風。  
セイバーが離れ、そこで剣に力を込めていく。

「解き放て!風の王!!!ストライク風王……」

「マズッ!?!」

「鉄槌エア!!!」

ブオオオオオツ!!!!!!

セイバーが不可視の剣を振りおろすと、風の塊が蒔風に向かって飛んでいく。

それが命中し、蒔風の身体を土煙で覆い尽くした。

「おおっ!!!」

「さすがはセイ「何を言っているんだ君たちは」え?」

士朗と凜が感心したところで、アーチャーがそれをさえぎる。

「まだ終わってはいない。これからだと思っただがね」

アーチャーのその言葉を証明するかのように、セイバーはその土煙に向かつて構えたままだ。

そしてそれから数秒後

その土煙の中からさらにドフン！！という音が聞こえ、土煙が広がってセイバーをも呑み込んだ。

「くっ……これは……」

セイバーが腕で顔を覆って、それでも油断なく周囲を見渡すと、その背後にゆらりと一つの影が迫る。

………ギラッ！！

「！！ッ！！??」

セイバーが理由のわからない寒気に身を固め、とっさに頭を下げた。

(なんだ今は……完全に気配がない……)

ユラっ………

「！そこっ！！！！！」

ブオン………シュカッ！！！！

セイバーの掛け声とともに二つの音が鳴る。

最初のはセイバーが剣を振るったもの、二つ目は謎の斬撃だ。

それを紙一重でかわすと、また気配がなくなった。

セイバーの額を大粒の汗が一つ流れる。

打開策は見えない

.....

「よお！面白いことになってんな！！」

「なになに？話の人がセイバーと戦ってんの？」

「この土煙はなんなんですかね？」

セイバーと蒔風が土煙に覆われてから少しして、ランサー、ギルガメッシュ（子）、イリヤがやってきた。



「カレンはどうした？」

「他に連絡するってよ。とりあえず俺らに行けって」

「ふーん」

「で、こりゃなんの祭りだ？」

「さっき話した時風がセイバーと戦ってる」

「マジでか！！オレもやりてえ〜〜！！！！」

その言葉にアーチャーが呆れて言った。

「君はそればかりしかないのか？戦いづくめなど……」

「んだよ！強い奴がいたらとりあえずぶつかってみるのが男気ってやつだろ？そういう意味じゃ、あの騎士王様の方がお前よか男っぽいな」

「私はバトルマニアではないのでね。必要以上にはやらんだけさ」

「へっ、つまんねえ奴だぜ。なあお前はこっちはなんなよ？」

「はいはい」

そんな会話と共に煙の中では静かに激戦が続いている。



そしてついにセイバーが前に出た。  
かわすのではなく、前に出て受け止めたのだ。

すると土煙が一瞬で吹き飛んだ。  
そしてそこで露わになった光景に皆目を見張る。

セイバーと蒔風が互いの剣を握っている。

蒔風の「天地陰陽（組み合わせver）」とセイバーのエクスカリバーがだ。

そう、エクスカリバーだと一目で分かった。

あるべき風王結界が弾け、その剣身をさらしていたからだ。

「こ、これは……!!」

「天剣と聖剣が反応したか……（チャキ）」

そこから蒔風がさらに剣を引き抜こうとする。

それに気付いたセイバーが蒔風に腹部をけり出して距離をとった。

蒔風は脇腹を押えながら蹴られた勢いで後ろに下がっていく。  
そしてそのまま一瞬表情が苦悶に歪み、すぐに元に戻った。

「ふう……やるなあ!!セイバー!!!」

「あなたもです。まさかあのようなた戦い方をしてくるとは!!」

「派手にぶつかんのが一番好きなんだがな。得意なのはこつこつ言つのなんだよね」

「そうですか……では……そろそろ」

「終わりにすっかな？」

「望むところです……！」

ドウツ……！！

両者の闘気が一気に噴き出す。

そして数合相手の動きを予見し、同時に二人が動き出す。

「大鵬……！！」

蒔風が天地陰陽で大鵬を放つ。

セイバーはその切っ先を見抜き、蒔風に走り込みながら少しだけ身体を移動させ、回転してそれを回避した。

だが、身体が正面に向き直った時には蒔風がそこにはおらず、背後から気配がした。

バガア……！！！！

セイバーが振り返りながら剣を振りおろしたところに蒔風はいた。が、空中で身を捻ってそれをかわし、エクスカリバーが地面を抉る。それを踏み台にして蒔風がセイバーの背後に飛び、目にも止まらぬ速さでセイバーの首元に切っ先を突き付けた。

「…………ふう…………勝ったかな？」

「…………負けのようですね」

そう言って二人が剣を下ろす。

「聖剣の持ち主とこうやって出会えることができて光栄です」

「これが聖剣だと？」

「知ってるさ。セイバーのサーヴァント、アーサー王だっけ？」

「……………他にも知ってそうですね」

「必要以上のことは知らないぜ？」

その後、イリヤ達とも知り合い、その晩は衛宮邸に厄介になることになった。

そして夜

「つた~~~~~・・・やっぱり疲れるなあ」

蒔風が布団に転がりながら一人ごちる。  
と、そこに声がかげられた。

「それはその傷のせいかね？」

「・・・アーチャーか？」

「すまないな。だがどうにもこう言ったものは見過ごせない性質な  
ものでね」  
たち

そういうアーチャーの手には救急箱が握られていた。

「別にいいよ。やるべき治療はもうやったから。あとは時間だけだ  
よ」

「言いから見せてみる」

アーチャーが半ば強引に蒔風の診察をした。  
すると

「……………これは……………!!!」

「だから言ったっしょ？やるこたあやっただからって」

アーチャーが見たのは包帯で巻かれた蒔風の身体だ。  
服を着てると全くわからないが、こうして見るとかなりひどい。  
よくもまあこんな状態でセイバーに勝てたものだ。

「だから途中であれもやめたんだけどね」

「ああ……変身したやつか」

「そぞ。あのままじゃ絶対に押し切られていたね」

「そこまで無理をして戦うのか？」

「世界最強が負けるわけにはいかないのさ」

そついうやり取りをしながら、なんだかんだで包帯の取り換えをする蒔風。

世界の挟間にて二週間いたとはいえ、その傷はいまだに癒えない。

「時に……君は本当に世界最強かね？」

「あん？」

「なぜそこまで強くなる。まさか正義の味方になりたいとか言い出さないだろうな？」

「おお？まさにそうさ、正義の味方ね。なるよなるなる。なつてやるわ」

「…………それは止めておけ。ロクなことにならん」

「なに、この場合の「正義」はただのオレの信念だ。なにもみんなみんな助けられるとか思い上がってはいないさ」

「……………」

「誰かを守りたい、何かに立ち向かいたい、友のために何かしたい。これらはすべて「願い」だ。それを為そうとすることになんの躊躇いがあるうか」

「それが自身を追い詰めることになってもか？」

「自分を追い詰める以前にオレは異端者だ。もうその域はとっくに飛び出しているさ、英霊エミヤ」

「……………」

そう、アーチャーの正体は英霊エミヤ。

つまりは未来で英霊となった衛宮士朗その人だ。

かつては「正義の味方」を目指し、そしてその理想のために死んだ



人間。

そして死後も英霊となって皆のために動けるのならば本望だと思っていた。

だがしかしそこに正義は無かった。

英霊とは本来その座に居続け、人類の守護のために動く存在だ。だから世界から命を受けてあらゆることをやった。

大をつけるために小を見捨てたこともある。

危険だからと言ってまだ何もしていない人間を殺したこともある。

故にここまでひねくれてしまったのだ。

そんな彼だからこそ、「正義」の難しさを知っている。

本来の意味での「正義」とは、敵も味方も両方救うもの。

だがそんなことが本当に出来るとは、彼は思えなかったのだ。

「そんなもん強くなればいい」

「強く・・・か？」

「そうだ。どんな状況からでも助けられる、救える。強大な力を持つていれば、それができる」

「一人では無理な時はどうする」

「仲間に頼れ。協「力」もまた、力だ」

「・・・」

「ってかこのことぐらいもつわかってるはずだ。士朗見たる。あの目はもう間違っことのねえ目だよ。それはあんた自身が一番分かるはずだ」

「そうかも・・・しれんな。だが間違えたとあればすぐさま斬るがね」

「お前自分に敵しすぎ」

「かもな」

そんな話が静かに行われている。

そしてその部屋からほんの少しの笑い声が聞こえてきた。

### そのころ

「ち・・・サーヴァントはみんないるし、聖杯も発動できる状態じゃねえな・・・」

ガシガシガシ・・・

「真っ向からかあ……めんどいなあ……」

「ま、めんどいだけなんだけどね」

t o b e c o n t i n u e d

アリス「どんだけ時間かけてんですか!？」

うるっせえ!!!

疲れてんだよ!!!

ア「どんな休日のお父さんだあなたは」

母さんや、飯はまだかいな？

ア「母さん言うな」

他のサーヴァントや宝具の事を知りたい方は Wi i にゴー!!!

ア「キタ丸投げ」

すみません

でも説明ばっかじゃどーしよーもないじゃナイディスクアー!!!

ア「次回、そして戦いするとき

この時になるとこんな予告ばっか

しょうがないさ

ではまた次回

準備はいいか英雄王。武器の貯蔵は十分か。

そして次の日の朝。

時風たちは居間に集合して朝食をとっている。

「んお、この鮭おいしい」

「シロウ、おかわりを」

「はいよセイバー」

「うまいなあ・・・この飯誰が作ってたっけえ？」

「うーん？士朗と桜が毎朝やってんのよ・・・ふあああ」

セイバーがモリモリとご飯を食べ、凜と時風は眠そつにモゴモゴと食べている。

そんな三人に士朗と桜は給仕をする。

「んれ？アーチャーはあ？」

「あいつは見張りよ・・・アーチャーの目は鷹の目以上なのよ」

「ああ、道理で昨日・・・」

「どーかしたのー？」

「いや、何にも。うん、今日も味噌汁がうまい!」

そこでランサーが乱入してくる。

どうもカレンからこちらに来るように言われたそうだ。

「お、うまそうな飯だな。オレにもくれよ」

「オレこれ以上は食えんからもういいぞ」

「おっ、そうか、悪いな」

そう言っつて蒔風が食べきれなかった朝食をランサーがつまそつに、  
実につまそつに食べる。

「何かあつたのか?」

「いや、昨日の夜にこの兄ちゃんの護衛に行けつてカレンが言うも  
んだからよ、ギルとオレとで揉めてな。結局オレが来ることになっ  
たんだが、あのガキ、普通あそこまでして人を売るかよ……」

どうやら家庭の事情があるようだ。

これ以上聞くとなんだかロクなことになりそうにないので、蒔風は  
言及することをやめた。

「んで、その「奴」ってのはいつくんのよ」

「知らんがな」

「待つしかねえのかい」

「そゆことになるわいのう」

「難儀なこつた。ん、味噌汁おかわり」

「結構あつさりとしてるんだな」

「なあに。戦いなんざいつでも唐突さね。気付いてたら死んでた・  
・・なんざザラにある。」

最初に来んのがわかつてるだけでも僥倖つてもんだろ」

「はあーっ。さすがその時代を生きた人間は違うな」

「いや、あそこで白米頼張ってる女もその時代の人間なんだがな」

そう言っつて箸でその女性をさすランサー

セイバーはそんなことには気づかず、後ろに腕を伸ばしつつかえ  
にして、後ろに傾きながら

「よい時代に生まれました・・・」  
とか言っている。

もうこの時代の子になっちゃいなさい。



「シロウ。あなた宛てに小包が来てますよ」

居間のふすまを開けてライダーが小包を持ってきた。

その後ろにはイリヤがついてきている。

おそらく昨日泊まったイリヤを呼びに行つて、その途中の玄関で受け取ったものだろう。

「差出人は……書いてないな」

「うわ何それ思いつき怪しい」

「疑わないバカはいないだろ」

「アホですね」

「言つてやるなよ……こう言ったことが好きな奴なんだよ……」

そう呆れながら言った時風がひよいと小包を持って縁側のふすまを開ける。

そして小包をポーンと放り投げた。

と、同時に両手で地面を叩き、落下地点を覆う様に四枚の地面が起き上がってきた。

その中に小包が落ち、中で爆発する。

「なかなか強力なもの送ってきたなあ」

「ですがこれで？」

「「奴」はそこまで馬鹿じゃない（笑）次は直で来るぞー」

そう言っつて皆が居間で「奴」を待つ。

この家には防犯用の結界が貼っており、侵入者があれば音で知らせてくれるのだ。

なので緊張しすぎず、かといってだらけすぎないように時間が過ぎて行く。

### 数時間後

「全員、外に出た方がいい。何か来るぞ」

アーチャーのその言葉に反応し、皆が武装を整えて外に出る。

太陽が沈みかけ、もうすぐ夜になるだろう時間だ

セイバー、アーチャー、ランサーが戦闘モードに切り替わり、志郎と凜、桜にも緊張が走る。

ライダーはいざという時に士郎を守る役だ。

その後ろには巨大な肉体を誇るイリヤのサーヴァント・バーサーカーが仁王立ちしている。

「来たか」

蒔風が空を見て呟くと、ストーン、と「奴」が降りてきた。

「やーっば待ち構えてんのな。だから嫌なんだよめんどくさいし」

「だったららくなー!!」

「そうはいかない。取り込んだ世界のためにも、な」

あれが「奴」か？などと言った質問は誰一人として言わない。

そんなことは一発ではつきりする。

この一周して逆に純粹とまで言えるようなおどろおどろしい殺気を向けてくるのが敵でないはずがない。

それを確認した桜が家の敷地を包むように結界で覆っていく。

「ふう、前振りはいらないよな？いくぞ！……！」

「ぶち殺すぞ！……！」

「……おおう！……！」

ダオウ！……！

「奴」に向かって時風とランサーが突っ込む。

時風が顔面に伸びる腕をスライディングでかわし、通りざまにローキックをかます。

それに対処している一瞬の間にランサーが「奴」に赤き槍で数十の刺突を繰り返した。

ババババババババババツ！……！！

バガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴン！……！！

「なん！？」

「サーヴァント最速のランサーか？少しがんばればまあ何とか……  
だな……！」

あるうことか「奴」は拳と手刀のみでその攻撃を弾き飛ばした。さらには背後からハイキックを繰り出してくる時風の足を振りむかずに掴み、ランサーに投げつける。ランサーが時風を受け止め、その背後からセイバーが飛び出していた。

「おおおおおおおッ！！！！」

「ふんっ！！」

ガギイ！！！！！！

「奴」が魔導八天の一本、「天人」を抜き応対する。

「聖剣か。この反天剣に、勝てるかなあつと！！！！」

「奴」が左手一本に「天人」を持ちかえ、右腕を振りかぶって外側からセイバーの左こめかみを狙う。

それをセイバーはひじを張り、そこで受け止めた。

だがしかし受け止めた瞬間にセイバーの景色がブレた。

気付けば地面に倒れていたし、左肩が砕けたのではないかと言うほどに痛みを発している。

「バカな……」

「一人一人で来るなよ・・・ん？」

「I am the 骨子は born of 捻れ狂う my sword!!!!  
ガラドボルグ 偽・螺旋剣!!!!」

ギョオウツ!!!!!!

「そつくるかつ!!!!!!」

ガキン!!!!ドゴオン!!!!!!

アーチャーの放ったガラドボルグが「奴」に命中する。  
爆音が響き、火柱が空へと伸びる。

「やったか?」「バカ!!!!」「マ、ジかよ!?!」

その火柱に向かって蒔風が「風林火山」を居合の構えで突っ込む。  
そしてそこに到達すると、それを一瞬で抜き、火柱ごと中にあるモ  
ノを斬った。

「単撃、一閃・・・ダメだ・・・ランサー!!!!頼む!!!!」

「おつよ!!!!!!」

ゆらりと現れた「奴」の身体には少々の煤がついているが、ダメージはほとんどないようだ。

そこにランサーが殺気を込めた一撃の突きを、背後からはセイバーが、そして頭上からはアーチャーの放った赤原獵犬フルンディングが落ちてきている。

フルンディングはアーチャーが投影した剣で、標的に命中するまで追いつけるモノだ。

しかし、「奴」はそれにもおくさない。

ここで「奴」の驚異的な戦闘スキルが発揮された。

まず、頭上から迫るフルンディングを少しだけジャンプして、掴んだ。

本来ならば掴んだとしても暴れてその手から逃げ出すそれを「奴」は振るい、独楽のように回転して着地しながらランサーとセイバーの攻撃を弾き、さらには蹴りのおまけまで付けてきた。

「ぐあつー!!」

「ゲほつ・・・ちよいとあれは強すぎじゃねえのか？」

「そう悲観的になるなよ。こっちにはお前ら最大の勝因があるんだからな」

そう言いながら時風が「天地陰陽」を組み立てる。いつものような両手に構える形ではない。

トンファー型のこの剣の取っ手部分。

そこで背を合わすようにくっつけると、その通りについていく。  
そして四本組み立て、「十」の字型にした。

「天地陰陽・風斬車」  
かみきりくるま

その間に「奴」はフルンディングをへし折っていた。

アーチャーが壊れた幻想で爆破させようとしたのだが、その前に壊されては不可能だ。

壊れているものをこれ以上は壊せない。

蒔風が風斬車を右手に持って振り下ろした。

その勢いで手の中の取っ手を軸に高速回転で刃が回る。

「塵になりたきや触れるがいいさ。なりたくなくてもさせてやらあ  
！！！！」

蒔風が「奴」に走る。

「奴」がとつさに足元にある拳大の石を蒔風に蹴っ飛ばした。

蒔風がそれを風斬車で殴るように振り払うと、回転する刃に削られ、石がキラキラと光るほどの粉末になってしまった。



「おいマジかよそれ鬼畜だろ！！！！」

「お前にはっ、言われたくない！！！！」

ギャリッ！！ギャリリリリリリリリリリリッ！！！！！！

「奴」の「天人」と時風の「風斬車」がぶつかって壮絶な火花を散らす。

バチィ！！と時風が「天人」を弾き、腕を振るって回転を持続させながら「奴」に攻撃を続ける。

「いつまでも寝てらんねえわな」

時風と「奴」の交戦場所にランサーが突進してくる。

そして宝具であるうその槍の先端に、空気が焼けるのではないかと  
言うほどの殺気を込める！！！！

「その心臓、貫い受けるッ！！！！」

「いえっ！？」

時風の相手をしている「奴」に向かって、ランサーが下方に向かって槍を放つ！！！！

「刺し穿つ」

「ッ！！！！」

「死棘の槍！！！！」

「ジョブ・チェンジ転輪する運命！！！！！！」

ギユツ、オウツ！！！！！

「奴」がそう叫ぶと、ランサーの槍、ゲイボルグに変化が起こる。

ゲイボルグは放たれれば最後、必ず心臓に突き刺さる宝具である。実際には槍の持つ因果逆転の呪いにより、「心臓に槍が命中した」という結果をつくってから「槍を放つ」という原因を作るのだ。

ゆえにそれを回避するには槍の魔力を上回る力や、高い幸運などが必要だ。

だが「奴」のとした行動はその両者どちらでもない。

「奴」は本来ならば脇役だった男。それがここまでのし上がったのだ。

運命を越える力は十二分に在りすぎる。

故に因果を操るゲイボルグの切っ先を向けられた人物を、変更する

ことも不可能ではない!!!

「う、ゴアッ!!!!!!」

ゲイボルグが蒔風の左肩を貫いていた。

交戦中だったからか、完全な転輪はできなかったようだ。

蒔風が倒れ込み、セイバーがそれを回収して後退する。

「あの野郎、俺のゲイボルグの因果を変えてきやがった!!!!!!」

「その宝具にとって「奴」は天敵だな……」

「どうしますか!?!」

「慌てるなよ。まだやって無いやつもいる」

「

!-----!!

-----!!

ドバゴアッ!!!!!!

地面に亀裂が入り、それが「奴」に向かって伸びて行く。

その衝撃を飛んでかわした「奴」に、アーチャーの剣、干将・莫邪が飛んできた。

それを弾いた「奴」だが、さらにアーチャーが干将莫邪を投影し、「奴」に飛びかかって斬り、地面にたたき落とす。

落ちたところでバーサーカーがその巨大な足で「奴」を踏みつぶし、巨大な斧剣を振り下ろした。

大地が揺れ、木々が軋み、家のガラスにひびが入った。

土煙が上がり、キャツキヤとイリヤがはしゃいだ。

「ふん！私の土朗を殺そうだなんていい度胸じゃない！！やっちやえ！！バーサーカー！！！！」

ここまでやっても憂さはまだ晴れないらしい。

そうバーサーカーに命じるとその命のままに彼は動いた。

幾度も幾度も斧剣を叩き付け、そのたびに地面に亀裂が入る。

「これは・・・終わったか？」

「その台詞、まだまだ終わらないフラグだぜ？」

「な、なんですって！？」

聞こえてきた台詞にイリヤが驚愕する。

土煙が晴れると、そこには斧剣を素手で受け止めた「奴」がいた。

グググググッ、と膝をあげ、立ち上がってくる状況を皆信じられなかった。

パワー、スピード、そしてこの地における知名度で言ってもトップクラスに入るバーサーカー・ヘラクレスの攻撃をしのいただけでなく受け止めただと!?

「筋肉筋肉~~~~ってなあ!!!!!!筋肉さんにいい思い出はねえ!!!」

「!!!!!!そうか!!!!!!」

「ぶっ飛んどけ!!!!!!」

「奴」が斧剣ごとバーサーカーを持ち上げ、投げつけようとする。だが、蒔風がそれよりも早く動く。

「力を借りるぜ!!!真人お!!!!!!」

ズオアッ!!!!!!

「筋肉革命だあ!!!!!!」

蒔風が力を借り、固有結界を開く。

その瞬間、「奴」とバーサーカーの力関係が逆転した。

ズツシン！！！！

バゴオ！！！！！！

持ちあがっていたバーサーカーの身体が地面に戻り、逆に「奴」をすくい上げて思いつきり拳で叩き付けた！！！！

「が……お……」

「これは……固有結界！？」

「他の世界で仲間になった奴の力を借りただけだ。オレのじゃねえ」

驚愕するセイバーに時風が説明する。

（これで終わってくれればいいがな……オレのコンディションも最高じゃねえし……）

その瞬間、時風の顔面を衝撃が襲った。

ビュオツ！！！！！！

バガン！！！！！！

「奴」が時風の顔面に拳をめり込ませ、時風が地面に後頭部から突っ込んだ。

「な!?!」

「に!?!」

「はああああ……この場において一番の筋肉量はバーサーカーだけだな……」

「二番は俺だつての」

シウウウウウウ……

固有結界が消えうせ、自分の背後に迫るバーサーカーの斧剣を受け止め、さっきやろうとしたことを実行に移す。

地面にバーサーカーを叩き付け、その腹部に斧剣を深々と刺した。

地面に標本のように止められたバーサーカーが脱出しようともがくが、一向に斧剣は抜けない。

「ハアツ!?!」

「オオツ!?!」

「オリヤア!?!」

セイバー、アーチャー、ランサーが同時に攻撃を仕掛けるも、殴られ蹴られ投げ飛ばされて、相手にもならなくなる。

「どけよ、ライダー。お前じゃかなわない」

「わかりませんよ……」

「魔眼は止しとけ。その前にお前の首が飛ぶぞ。またそんな最後は嫌だろう？ライダー・メデューサ」

「ッ！！！<sup>ベルレ</sup>騎英の……」

「遅いよ」

ッ、ドガシヤア！！！！

ライダーの身体が飛び、居間に突っ込んで机を破壊した。  
そこに桜が駆けよっていきこうとするが、「奴」の目の前で背中を見せることはできない。

「お前……オレを殺してどうするつもりだ」

士郎が「奴」を睨みつけて聞く。

「この世界を喰って、新たな世界を。そこでならオレがうまく調節して、悪の無い正義ある世界を作れるが……どうする？」

「………本当か？」

「ちよつと士郎！？」





「させるか！！！」

「それをさせるかあつはあ！！！！！」

そこに蒔風が飛び蹴りで「奴」を弾き飛ばす。

着地の際に血がボタボタと身体からこぼれるが、蒔風は気にしてない。

「できねえよ、お前には。こいつは「正義の味方」だぞ。ヒーローを殺せんのはよ、そのヒーローのそばにいる人間なんだよ！！！！」

「自分よりも人を優先させる異常が、破綻が！！それが正義だと言うのか。それを正義と言えるのか！！！！」

「バツカ野郎が。それくらいならまだ人の域だよ。まだ戻れるし、戻そうとしてくれる友がいれば、こいつは問題ねえよ！！だよな？」

「はい！！」「もちろんよ。こいつをまっとうにさせてやんのが私の使命よ！！！！」

「いいぜ……土朗、準備はいいか！？」

「いけるぜ！！」

「よっし……ゲツ、ブツ……（ボタボタボタ）」

蒔風が派手に吐血する。

肩の傷も酷い。

「大丈夫だ……行くぞ!!!」

【Fate / stay night】 - WORLD LINK -  
「WEAPON」!!

全員の身体に魔力が巡る。

そしてそれはマスターを通じてサーヴァントにも!!!

「これは……」

「気前がいいな……今から使う、魔力は、世界が負担してくれるから……やりたい放題だあ!!!」

そして士朗が固有結界を開く。

その世界はまさに剣の世界。

彼の内包する世界を、今ここに!!!!!!



「行くぞ、影役王。「正義」を殺す覚悟はできたか」

「そんなもんはとっくの昔に」

「だったら……ゆくぞ!!!!!!」

ゴオウ!!!!土朗が「奴」に走り出す。

その途中で土朗の手に投影された剣が飛んできた。

その剣で土朗が「奴」に斬りかかり、「奴」も剣で受けるが、その顔は驚愕に染まっていた。

「な……十五天帝!?!」

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

バキィ!!!!!!

土朗が「奴」を弾き飛ばし、空中に無数の剣を投影して、それを一斉に射出した。

「トレース、トレース、トレース!!!!!!全投影、連続射出!!!!!!」

ザザザザザザザザザザザザザザザザッ!!!!!!!!!!

投影された剣が次々と「奴」へと飛来する。

「奴」は魔導八天をフルで使ってそれを次々と弾いていく。

「シュン!!大丈夫ですか？」

「セイバーか・・・ああ、大丈夫だ・・・シメに行こう!!!!!!!!!!開翼!!!!!!!!!!」

「・・・はい!!」

駆け寄ってきたセイバーと、開翼した蒔風が「奴」に向く。

【Fate/stay night】 - WORLD LINK -  
FINAL ATTACK!!

ゴォ!!ドォ!!

蒔風の十五天帝と、セイバーのエクスカリバーが輝き始める。  
そして蒔風が頭上を通るように左にいるセイバーに十五天帝を投げ

た。

セイバーも蒔風にエクスカリバーを投げる。

するとお互いの剣は吸い込まれるように手に収まり、より一層強い光を放ち始める！！！！

「行くぞ！！！」 「ええ！！！」

二人が剣を振りかぶる。

「約束された……」  
「正義の証たる……」

そして同時に振り下ろす！！！！

「勝利の剣！！！！！！！！！！」  
「十五の刃！！！！！！！！！！」

ドドドドア！！！！！！

恐ろしいほどに輝きを発する二本の光が、「奴」に向かって疾駆した。だが





と、踏ん張る二人の肩を二人の男がポン、と叩いた。

「援護しよう」

「オレを忘れるなよ」

「I am the 骨身を born of 勝利へ捧げん my sword」

後ろに立つのは士朗とアーチャー

その手に握るは投影したばかりのエクスカリバー!!!

「「エクス、カリバー………!!!」」

セイバーの横から志郎が、蒔風の横からアーチャーがエクスカリバーを発動させる。

四本の光は一つとなって、「奴」を沈めんと一気に迫る!!!

「うおおおあああああ!!!」(バチィ!!!)」

だがここで「奴」が動く。

まだ「奴」の方には追加の二本は届いていないため、一瞬だけ今までの二本の光を弾く。

少しだけ押し、「奴」と光との間に余裕ができ、その隙に「奴」が力を込める!!!



と

そこに実に余裕そうな感じの聲がした。

「まったく何をしているのだ。あのような雑種にも劣る脇役、さっさと消し去ってしまえ」

その声の主は歩きながら金の鎧を着け、自身の肩口あたりの空間から一本の剣を抜く。

そしてそのまま歩を進め、四本の破壊の光の中に、なんの躊躇もなく入っていく。

まるでこの程度、どうとでもなると言わんばかりに。

「消えろ、脇役。貴様ごときが我の視界に入ってくるな!!!!!!」

天地乖離す……………」

「もうやめて!!!オレのライフは……………」

「開闢の星!!!!!!!!!!!!」





「(ニツコロ)もう一度言っわよ〜?文句言っな」

「はい……………」

時風は昨日泊まった部屋の布団で横になる。

さつきから士朗をはじめ、セイバー、ランサー、アーチャー、桜とライダー、最後に凜が見舞いに来っていた。

「舜、大丈夫か?」

「また来たのか……………」

そしてまた士朗がやってきた。

「お前は俺たちの恩人だからな」

「よせよ。オレは俺自身の世界のためにやったただけだ」

「お前の世界?」

「気にすんな」

そう言って無理やりに話題を終わらせる時風。  
するし

[ Gate Open . . . Fate / stay night ]



渋谷に落ちた隕石。

そこから出てきた怪物ども。

奴らは人間に擬態して、この社会に溶け込んでいる。  
怪物の名は、ワーム。

この世界の戦士は、天の道を往く男

t o b e c o n t i n u e d



Fate/stay night } Final/world link } (後

【Fate/stay night】

構成：” フォルス” 70%

” LOND” 30%

最主要人物：衛宮士朗

- WORLD LINK - } WEAPON } : 魔力消費量 & 身体への負担ゼロ

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : エクスカリバーと十五天帝による混合攻撃

アリス「いいとこ持ってくギルさま(笑)」

彼ならそうするかと  
しかもかつこいい

ア「そついえば天剣とか聖剣とかのくだりは？」

あれの設定が生きてくるのはもっと先です。  
全然先、すーっつと先。

ア「どんだけ続くんだこの物語」

それは秘密

あ、あとエクスカリバー投影時のセリフのルビは  
「我が骨身を勝利へ捧げん」です

ア「次回、変身するのは完璧男だ!!」

ではまた次回

天の道を往き、総てを司る男だ

カブト くオレがいる！？く

SIDE 蒔風

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！

オレはオレに出会った。

と、思ったらオレが化け物になって襲ってきた！！

な、何を言っているのかわからねーと思うが  
オレも何があったのかわからなかった……

頭がどうにかなりそうではないがな

だが「奴」だとか変装や変身だとか  
そんなチャチなもんじゃあ、断じてねえ

……すみません嘘です。

なんのこともわかってます。ワームですね。

沢辺の散歩道にいたら絡まれました。

ワーム

渋谷に落ちた隕石から出てきた地球外生命体。

彼らは人間の姿に擬態する。

しかも外見だけではない。記憶すらもだ。  
そして人間としてこの世界に潜んでいる。

だが最近になって彼らにも種類が違う者がいたのだ。

ネイティブと呼ばれる彼らは、ワームから逃げてきた者たちである。  
ワームは彼らを追ってきたのだ。

彼らと接触した人間はZECTゼクトという組織を作り、共にワームに対  
抗した。

今ではほとんどのワームはすでに殲滅され、あとはうまく逃れた者  
そしてネイティブだけだ。

「早めにケリをつけんぞ。最近はずECTの蟲どもが……う……  
……が!？」

オレに擬態し、今はサナギ体であるワームが拳動不審にうるたえ始  
める。

ってかそうじゃなくても十分不審だけどな。

「げ、げ……なんだ……この……記憶なかみ……っていうか……  
……つよ……」

そういえば擬態元の人間の記憶、意思が強いとそつちに飲み込まれ  
る場合があるんだっけか？



と、それよりも早くワームの身体から火花が散る。

「あん？」

「その君！！はやく逃げろ！！！加賀美<sup>かがみ</sup>！！ワームだ！！！！」

渋い顔したおっちゃんが銃を構えて走ってくる。

通信機で誰かを呼びだしている。

だが銃では牽制くらいにしかならなかったのか、ワームは今度はその男に向かって走り出した。

「うおい！！相手は・・・こっち！！」

とっさにおっちゃんとワームの間に飛び込む。

すでに十メートルくらい離れていたけど、速攻で追いつき、後ろに投げ飛ばす。

「！？君のその力は？」

「あー、これ？」

この人主要か？

でも話して信じてもらう時間はなさそうだなあ・・・

つてうお！！あいつもう来た！？

ぶっ飛んだ破壊衝動だけしかないのは怖いわ！！！！

そこで身構えるオレだが、迫るワームに拳大の青いクワガタのよう

なものが突進してその体を弾いた。

S I D E o u t

「来い！！ガタツクゼクター！！！」

その虫が走ってきて声を上げた青年に向かって行き、青年がそれを掴む。

「田所さん、大丈夫ですか！！こっちが相手だ！！ワーム！！変身！！！！」

《H e n s h i n . c a s t o f f C h a n g e S t a g  
B e e t l e ! 》

青年がガタツクゼクターと呼んだそれをベルトにはめ、装甲し、さらにその角を反転させて装甲を吹き飛ばし、仮面ライダーガタツクライダーフォームへと変身する。

それと同時にサナギ体のワームも脱皮し、カマキリを元としたマンティスワームとなる。

「脱皮した？」

そうなることでワームはクロックアップという超高速移動に移行することが可能になる。

そしてその通りに動きだした。

「ッ！！クロックアップ！！！！《Clock Up!》」

そしてガタツクも同じように動き出す。

ライダーフォームになったガタツクもまた、クロックアップが可能なのだ。

動き出す二つの影。

単純な攻撃をするワームの腕を掻い潜り、ガタツクが自身の剣「ガタツクダブルカリバー」を銃状に組み合わせて挟み込む。

《1、2、3》「ライダーカッティング！！！！」《Rider Cutting!》という音声と声。

そしてワームを挟み切り、爆散させる。

それらが蒔風の目、耳に残った物だ。

だが視認できただけで身体がついては行けなかった。

蒔風が参加しようとして足を出した時にはすでにワームは爆発したからだ。

「速ええ……………」

そこに変身を解いた青年がやってきた。

「君、大丈夫か？田所さんも」



「ああ、よくやった、加賀美。それと君……」

「あ、助けてもらってども。蒔風舜です。田所……さん？」

「ああ、私は田所修一というものだ。そしてこっちが」

「加賀美新だ」  
あらた

自己紹介してくる彼らと握手し、田所が蒔風に訊く。

「ところで君は何者だ？ワームに追いつく、それを投げ飛ばす。まさか……」

「オレはワームでもネイティブでもないですよ」

「む？そこまで知っているのか？」

田所は眉をあげて驚いた。

確かに最近ワーム殲滅のためにZECTの存在もワームのこともある程度は一般市民にも知らされている。

だが、ネイティブの事などはあまり知らされていない。だが蒔風の言葉からはおそらくかなりの事を知っているように感じられた。

「どこまで知っているんだ？ZECTのメンバーか？」



とは不可能だ」

「・・・おい・・・お前、オレが最後フォームをどうやって倒したか  
言ってみろ」

「たしか・・・剣を鋏状にして切っていたな」

「あ・・・」

加賀美があんぐりと口を開けて驚いている。

「そういうわけだ。確かに世界云々は信じづらいが、誰かが狙われているのは見過ごせないな」

「田所さんがそこまで言うなら・・・オツケ！オレも信じるぜ」

「サンキューー。で、その最主要なんだが・・・「カブト」って誰  
さん？」

「・・・天道か・・・」

「天道？」

「ああ。天道総司。カブトに変身する男だ。確かにあいつならそれ  
っぽいなあ~~~~」

加賀美が頭をガシガシと掻きながら言う。

「だが今彼は・・・」

「そうなんだよなあ……」

「なによなによ〜。話題に置いてかれてるよ？オレ」

「ああ、それは……」

ツーツー

そこに田所の通信機に連絡が入る。

『カブトがペンダントの配布場所に出現！現在、ゼクトルーパーが交戦中。ただちに急行せよ！』

「は！？」

「またか……いくぞ！！加賀美！！君も来るか？」

「まあ行くけど……どういことだよそれ！！」

「途中で説明するから！！速く行こう！！」

加賀美と田所に連れられてワゴン車に乗り込む時風。

どうやら何やらあるようだ。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

カブト くオレがいる！？（後書き）

アリス「カブトの世界！！」

この世界では思いつきりテレビ本編最後のほうですね。  
カブトが襲撃しているところですね。

これ以上は知ってる人も多いでしょうけど言いません。

だからサソードは出せません（泣）

神代ファンの皆様、申し訳ございません！！！！  
多分復活もしなと思う……………

ア「残念です……………」

でもどうにか出したいなあ……………

ア「次回、カブトの真意」

ではまた次回

オレはすべてにおいて頂点に立つ男だ！！！！



配布場所は市役所前の駐車場だ。

時風たちがそこに着く頃にはもう戦闘は終了していた。

クロックアップの可能なライダー同士の戦いは実際には五秒にも満たない。

それがカブトとガタックのようなこの世界で最強に近い二人ならなおさらだ。

だが今回もカブトは逃げおおせ、加賀美は後始末を手伝っていた。

燃え上がるダンボール。

中のネックレスは一つ残らず使い物にならない。

さらには在庫を詰め込んだトラックまで吹き飛ばされている。

「徹底的だな。ここまでやるからにはそれなりの理由があるのか？」

「わからないんだよ。天道の奴、肝心なこといつも言わねえんだか

らよ

「……言わない奴ってのはいくつかパターンがあつてな」

「？」



「仲間を信じてないか、人に言えない理由があるか。そして最後に、誰かを巻き込みたくないかだ」

「どづいうことだ」

話を聞いていた田所が蒔風に質問する。

「言葉の通りだ。巻き込みたくないってのは相手が巨大な組織って場合だな。

ああ、前者二つの理由は省くぞ。そんなことで大局を見誤るような奴じゃなさそうだしな」

「巨大な組織って……」

「この場合十中八九ZECTだな。なにかあるぞ。このネットワークス。ちょっと貸してみてくれ」

「お、おお」

加賀美がワゴン車からネットワークスを持ってくる。

蒔風がそれを首からかけた。

「だああ、なるほどね。

田所さん、これ掛けてみてください」

「ん？ああ……む？」

「どづですか？」

「いや……なにか力が沸いて来るといっか」

「やっぱりか……」

「……ふう〜……んッ！」

パキン！

蒔風がなにかに納得し、力を込める。  
するとネックレスの宝石部分が砕けた。

加賀美がそれにビックリしていると、背後に集まっている野次馬の中からパキンパキンという音が連続で聞こえてくる。

「な、なにをしたんだ？」

「ここじゃZECT隊員が多すぎる。大丈夫な場所は？あと腹減ったにゃー」

「それならいい場所がある」

そうこうして加賀美たちはそこから離れた。  
どっちら行きつけのレストランがあるようだ。



「な!？」

「この宝石部分からネイティブの波長が微弱だが送り込まれている。まあこの程度なら問題はないが・・・  
もしも波長の強弱をコントロール出来るなら、これはまずい」

「ばかな・・・根岸さんは人類との共存を・・・」

「根岸? ああ、ZECT上層部のネイティブか? 多分それ嘘  
おそらく全人類をネイティブにして支配下に置くつもりだ」

「だが・・・だが・・・」

「まあ真意がどこにあるかと、これはいいものじゃないからシステムごとオレが破壊したYO」

「破壊したって・・・どうやってだよ」

「他の世界の宇宙人の力を借りたまでさ」

「うちゅ、え?」

「とにかく、天道とやらの思惑は知れたな。  
そして彼もペンダントが破壊されたことは知っているはず。  
さらに彼が親しげにしているZECTと関係があるのは加賀美だけ。  
となれば・・・」

ボタン!!!!

Bistro la Salleの扉が勢いよく開かれ、ひとりの青年が入ってきた。

「加賀美はいるか？話がある」

ネックレスを手に握り青年が加賀美を連れ出そうとする。だが、そこに蒔風が声をかける。

「ここで話していこうぜ、天の道を往く者よ」

その言葉に青年・天道総司が立ち止まり、蒔風の方を向く。

「お前・・・何者だ？」

「世界最強」

「それは違うな。世界で最も強いのはこのオレ、天の道を往き総てを司る男だ」

「まあ世界最強談義はあとでにして、今はそのネックレスについて、そしてお前さんの境遇について話そうか」

天道が眉をひそめる。

加賀美と一緒にいたようだが、この男は何者なのか。ネックレスが破壊されたのはこの男の仕業なのか。

蒔風の言葉を聞いてしまっただけはいくら天道ですら無視にはできない。

「いいだろう。話してみろ」

「はいはい・・・態度でかいなあ、もう」

そんな感じで蒔風が天道に説明する。

ネックレス、ネイティブ上層部の思惑、そして最後に蒔風自身の事。

それらを聞いて、天道はうなづいた。

「信じられないな。だが、信じるに値する話を聞かされては、信じるほかないだろう」

「よかった」

「ま、オレがいればすべて救われる。オレはすべてを救って見せる男だからな」

「ところがどっこい。「奴」はそう簡単に勝てる相手じゃねえ」

「そういうお前の実力は一体どれほどなんだ？」

「世界最強」

「・・・いいだろう。お前の力を見てやる。ついてこい」

そう言つて天道が蒔風を外に連れ出し、その後を加賀美がついていく。そしてバイクに乗つて三人がいきついた先は

「ここは・・・ZECT本部？」

「そうだ。オレはこれからここを叩く。人間をワームに変え、二つの種族の共存をぶち壊す愚か者を叩き潰すためにな」

「いいねえ・・・わくわくするよ」

そう言つて三人が歩いていこうとする。と、そこに一人のスーツ姿の男がゼクトルーパーをひきつれて現れた。

「天道総司、加賀美新。貴様たちは反逆者だ。そして・・・貴様  
は誰だ？」

「まず自分から名乗ってくださいよ」

「そうだな・・・私は三島。ZECTのお偉いさんだと思つてくれていい」

「じゃあ、どうも初めまして。蒔風舜です。あのネックレスのシステムぶつ壊しました」

「……………貴様が？」

「そうさ。見たところ、あんたも人間やめたみたいだな」

蒔風の追及に天道と加賀美が驚く。

それを言われた三島が眼鏡をはずしながらクツクと笑う。

「なるほどな……………どうやらあの男に言っていたことは本当のようだな」

「!? 貴様……………奴」と？」

「いいアドバイスをもらったぞ……………そしてオレは……………それによつて最強のネイティブとなった!!!!!!」

ゴオオツ!!!!!!

三島からとんでもない殺気とエネルギーが噴き出す。

その顔が冷静そうな落ち着いた顔から、醜悪な、欲望むき出しの男の顔に変貌する。

「お前たち、見ていろ!!! この三人を始末した後に、お前たちもこの力を手にすることになるのだ!!!!!!」

「うおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」



その体の変貌する。

コオロギの特性を持つネイティブワーム・グリラスワームの姿に変わった

そして命令通りに背後のゼクトルーパー達が戦闘に巻き込まれないように下がる。

「どつやらあいつはネイティブに変わったようだな」

「で、さらには部下の人間もネイティブにするつもりらしいな」

「ここで負けたらこの世界の人間は皆あなるわけか……負  
けられないな」

「いくぞ、加賀美。そしてここでお前の力を見せてもらっぞ、蒔風」

「注文多いのなア……まあいいけど」

「天道!!行くぞ!!」

「ああ……おばあちゃんが言っていた。

異なる者がわかりあうこと、それは世界で一番素晴らしい、ってな

「いいこと言うなおばあちゃん。ネイティブだけの世界じゃ、それは為し得ないからな!!」

「「変身!!」」

《Henshin·cast off Change Beetle  
e!》  
《Henshin·cast off Change Stag  
Beetle!》

三人の戦士と一人の異形が相對する。  
普通とは違うエンディング。

世界最強が介入する。

t o b e c o n t i n u e d

カブト く ZECTの裏？（後書き）

アリス「やっとカブト変身しましたね。しかも最後の方で」

いや、すみません

でもガタツク好きなんです！！！！

エコーのかかった高い声！！

一生懸命に走り回る加賀美！！

オレはそんな加賀美カ・ガ・ミが大好きだ！！！！

ア「地獄兄弟は出ないんですか？」

出す予定ではあるのですが……

蒔風がネックレス壊したから影山は無事です。

神代は救えなかったけど、彼は救えたよ……

地獄兄弟ファンの皆様、安心してください。

ア「その代わり神代・サソードファンを……」

い、言うな！！

それ以上言っと……

おや？こんな時間に誰か来たようだ

ア「次回、VSグリラスワーム。ではまた次回」

俺は、俺にしかねない。でも、これが俺なんだ。

カブト く人の無限の可能性く

《Clock up》

カブト、ガタツク、グリラスワームがクロックアップし、超高速移動で戦闘を開始する。

「ちよ、いきなり!? オレついてけねーじゃん」

そしてそれを呆然と眺める時風。  
彼らがなにをしているかは見えている。  
見えてはいるが体が反応しないのだ。

(こいつはどうかしないとな……)

そうしている間にもカブトとガタツクが追い詰められる。  
ただえさえ強力なネイティブになった三島に、「奴」が手を加えたのだ。  
本来なら互角に戦える布陣が崩れている。

「あつ! ……危ねえ! ……そこっ! チクシヨウ! ……こんなりゃヤケだ! 思いつ切り動く!」



そこまで叫んだグリラスワームの言葉が途切れ、身体が壁まで吹っ飛び破壊する。

「なかなか出来るもんだな。あとは慣らしか」

カブトとガタツクの目の前。

そこには右手をニギニギと開いている蒔風がいた。背中には翼、足元のコンクリは窪んでいる。

振り返って蒔風が片手ですまんの形をとる。

「すまない、遅れたわ」

「蒔風、お前のそれはなんだ？」

カブトが蒔風の背中にある銀白の翼を指差して聞いた。

「これ？翼人の証……ってもわからないか。大きな力を使うときにはこれを出すんだが、その時に生まれる反動とか無駄なエネルギーの噴出口なんだよ。  
で、そのエネルギーを無駄なく使ってみました」

「つまり？」

「まあつまりはオレにもクロックアップのまね事ができるといっわけで」





になって生き、その過程で得てきた物が昇華すること。人為的に進化する進化は進化に堪えられない弱い奴がすることだ!!」

お前が勝手にやるのは構わない。

だがお前の弱さを人類に押し付けるな!

ナメるなよ?人類は、弱くはない……!!」

「蒔風……」

「……蒔風」

「こいつはオレがやるよ。オレの力、見たいんだろ?」

「……ふ、そうだったな」

蒔風が一步前に出て、グリラスワームを不敵な目で睨む。

「さあて!ギャラリーもいるし!張り切るか!!」

蒔風の翼が消え、手にはこの世界とは別のライダーのベルトが現れる。

《555 standing by》

「変身!!!」

カチツ、ガキツ！！

《Complete》

蒔風がファイズに変身し、さらにアクセルメモリーをベルトにセツトする。

《Complete》

ガツ、ガシィ！

ファイズアクセルフォームにまで変身した蒔風の姿にグリラスワームが混乱する。

「なんだそのライダーは……俺は知らんぞ！！」

「この世界の誰も知らないさ。」

こっちは時間制限があるんでな！手っ取り早く終わらせるぞ！付き合ってやるよ！10秒間だけな！

あ、これ士の方だわ」

「なにを訳のわからんことを！！」

グリラスワームがクロックアップしファイズアクセルに疾走する。

《start up》

それに合わせて時風もスイッチを入れて超加速する。

周りの動きが止まり、二人だけが動くクロックアップの世界へと突入した。

グリラスワームが腕の鉤爪で時風を引き裂こうと一切の前触れもなく振るう。

鉤爪が空間を裂き、あまりの速さに通過した後の空気がユラリと揺れる。

時風はスライディングしてそれをかわし、その間にエクシードチャージしてポインターにエネルギーを溜める。

そして前回り受身を取りながらグリラスワームの周辺を転がり、六つほどポインターを設置する。

「なっ!?!」

「フッ・・・だらあああああああ!?!?!?!?!」

ドンドンドンドンドンドン!?!?!?!?!  
バァン!?!?!?!?!

時風のキックが全弾命中し、爆発が起きる。

「どうだ・・・これが人として生きた、ある世界の男の力だ。そいつも確か人類の進化系だったかなーそういえば」

「ぐ・・・あ・・・うぐ」

爆発後から三島がヨロヨロと出てきて倒れた。

大の字になって上を向き、完全に気を失っている。

体中にはあざができ、スーツもボロボロ。

整えられた髪型は崩れまくっていた。

「三島さんがやられた」

「どっする」

「やはり人間の方が強いのか？」

周囲のゼクトルーパー達も困惑気味だ。

まさか負けるとは思っていなかったのだろう。

「おいお前ら」

ビクウ！と時風の言葉にゼクトルーパー達がどよめく。

「こいつに起きたら伝えておけ。」

お前は殺さない。その姿で、どのように生きて行くのか。  
そのお前だけの答えを見つけ出せ、とな」

「わ、我々はどうすれば……」

「知るか。いい大人がオレに頼るな……ってもオレの方が実際  
年上になんのかな？」

とにかく、お前らには道がある。

このまま俺らを止めるもよし、家に帰って休むもよしだ」

そう言つてカブトとガタツクの方へと歩みよる。

「どうよ、俺の強さは」

「たいしたものだな」

「だろー？行こうぜ」

天道と加賀美が変身を解き、蒔風の後についていく。  
すると数名の隊員がヘルメットをとってこちらに向かってきた。

「我々は……人のままでも、彼らと共存できるのでしょうか？」

その質問に、天道が指を立て、天に向けながら言った。

「それを為すのが天道。覚えておけ。それを為す偉大な男の名を。  
天道の道を往き、総てを司る男の名をな」

「セリフトルナー」

「蒔風、諦める」

「ふ、行くぞ」

「あ、！！先行くなよ！！！！」

バタバタしながら進んでいく三人。  
それを眺める数名の男達。

彼らになら、この世界の未来を任せてもいいのかもしれないと、そう思える光景だった。

「（スタスタスタスタ）」

「蒔風歩くの速っ!?!」

「・・・・（スタタタタタ）」

「ちょ、天道も待てよ!」

「「オレが先だあ！！！！」」

「よしテメエら一旦そこになおれ。その真っ直ぐにひんまがった性格どうにかしてやるわ！！！！」

「上等だ、やるか？」

「オレに挑むのか？お前ら」

・・・心配になってきた彼らであった

と、そこに現れる一人の男の姿。

「あの翼・・・やはりここに現れたか。相棒を救った男・・・あの男なら俺らに光を・・・」

.....

廊下をほどなく進み（ケンカしながら）  
途中で現れたネイティブを数名昏倒させ（ケンカの邪魔すんなとは  
かりに殴られた）  
ついに最後の部屋に辿り着いた。

「このシステムは……」

その部屋には巨大なスパコンが一台。  
それをコントロールするバーだとかキーボードだとかがついた機械。  
さらに何かがそこにいたのか、大きなベッドがあり、その周辺には  
その「何か」に繋がっていたであろうコードが散っていた。

それら機械一式はすべて壊れている。  
外的なものではなく何かの干渉によるものだ。

おそらくこれが人間をネイティブに変えるシステムだったのだろ  
う。

そして最後に、一体のネイティブの死体があった。  
近くには千切れたジャケットが落ちていた。



「誰だこのネイティブ」

「このジャケットは根岸さんのものだ」

「じゃあここに寝てたのはそいつか？で、脱出しようと暴れ出したと？」

「いいや。確か加賀美の親父さんの話では根岸はこの計画の立案者だ。それはないだろう」

加賀美の父はZECTのトップだ。  
だがその上にネイティブによる評議会があり、そっちの方が事実上のトップになっている。

加賀美の父は天道にこの計画を止めてくれるように言ったそうだ。

「じゃあ一体誰がいたんだ？ネイティブだろ？ここにいたのは」

「それは間違いないが……」

三人が一通り調べるが、一切の痕跡が見つからない。  
これではもうすることはない。

三人はとりあえずこの部屋だけは破壊するかとメタメタのグシャグシャにしてから、アンテナを破壊しようとそのビルの屋上へと上がった。



「斬つて〜）ザシュ（、溶かして〜）ボツ、ドロドロドロ（、  
冷やしてから積み上げて〜）ジユワアアア・・・ガラン（」

そんなことを何回か繰り返し、屋上には巨大な鉄の塊が積み上げられていた。

「これどうするよ」

「確か鉄って高く売れんだよなア」

「おい時風、変なこと考えんなよ？」

「おばあちゃんが言っていた。金は・・・必要だ」

「それ本当におばあちゃんの言葉なのか!？」

そんな光景を見ている男が二人

一人はさっき三島戦の後に現れた男だ。

だがもう一人は違う。

「おおおおおお!!!!速く早く計算終われ~~~~!!!!  
せっかく揃ってんだから~~~~。今が好機なんだから~~~~!!!!

あと、あとはこの作品の劇場版だけなのに!!!!  
しかもよりもよってこの世界には無いし!!!!」

「奴」の世界構築計算終了まで、あと僅か。

t o b e c o n t i n u e d

カブト　く人の無限の可能性（後書き）

アリス「今回は何か言いたいことは？」

うっくん……

あ、そうだ。

蒔風の武器「十五天帝」は組み合わせ式なので単体で使ったり組み合わせさせて使ったりしますよね？

ア「そうですね」

単体の時は「火」とか「青龍」とかで  
組み合わせさせて合体させた時は「風林火山」や「獅子天麟」って書きます。

今さらだな~~~~

ア「ホントに今さらですね」

「十五天帝」って書くときは全部組み合わせた形になりますけど、たま~~~~に鞘に収めた状態で全部を装備したって意味で使うこともあります。

ア「それはあなたがうまく表現すればいいじゃないですか」

すみません……

私の無能を笑ってくださいやっぱ笑わないで泣いちゃうから

ア「否定速いなおい！！！」

いいの〜〜ほらほら、仕事仕事。

ア「次回、計算終了！！！」

ではまた次回

今、誰か俺を笑ったかあ？

カフト く掴む未来、天の道く

蒔風たちはまだ屋上にいる。

天道と加賀美はフェンスに寄り掛かって街を見渡していた。

「なあ、天道」

「なんだ？加賀美」

「本当に人間とネイティブは共存できんのかな」

「なんだ、そんなことを悩んでいたのか？まったく、何度言えばわかるんだ。俺を信じれば、間違いはないさ」

「お前が言つとそうなりそうで怖いよ」

「それに蒔風も言っていただろう。」

「人類は軟弱ではない」とな」

「そうだな・・・」

「おい二人とも！」

「ん？」

「なんだ？」

そこで蒔風が声をかける。

二人が振り返ると蒔風がキラキラした瞳で笑いながらこっちに来た。

「見ろ！超巨大ねりケシだ！！」

「アホか！！！！」

「本望だツ！！」

蒔風が手に持つのは巨大なねりケシだ。

バスケットボールくらいある。

蒔風がさつき座っていた所には消しゴムの空箱とケースが転がっていた。

「ほら見て、うによーん」

「あーはいはい。で？「奴」ってのはいつ来るんだよ」

加賀美が呆れながら蒔風に聞くと、蒔風はねりケシをグニグニしながら答えた。

よくその大きさをグニグニできるな。

「三島に力を与えたのは「奴」だからな。おそろくこれくらいのタイミングで俺達がここに着くぐらいの計算なんだろうから、そろそろ来るんじゃない？」



だから三人はここにまだ残っているのだ。  
下手に街に戻って襲撃されたら面倒だ。  
ここなら別に巻き込んでも構わないだろう物しかない。

「ま、もう来るさ……ん？ほら来た」

時風が少し離れて隣接されているビルの屋上を指差す。  
そこには一人の人影があった。

「あれが！」

「そ、変身しとけ。なにが来るかわから……開翼ッ!!」

時風の言葉が切れ、開翼した時風の姿が消える。

シュッ！バシイ!!

ポテッ、とねりケシが落ちる。

次の瞬間、時風と「奴」が別の場所に現れた。

そこは天道の目の前。

「奴」の抜き手が天道の胸の中心に伸び、その腕を時風が掴みギリギリのところまで止めていた。

「「ッ!?!?」」

「ち、やはり体得していたか」

「三島のおかげでな。開翼の条件付きだがクロックアップについて行けるぞ。」

天道!加賀美!早く変身だ!!!」

「変身!」「変身!!!」

《Henshin·cast off Change Beetle  
e!》

《Henshin·cast off Change Stag  
Beetle!》

二人がカブトとガタツクに変身し、蒔風が「奴」を放り投げて下がる。

「奴」が空中で一回転してフェンスの上にスタン、と降りた。

「.....」

「.....」

「おい、蒔風……」

「動くな、「奴」はどうかやらクロックアップを身につけているらしい。元々速いくせにまた速くなりやがった……」

「わかるか。下の所にいいワームがいたからな。取り込んだよ。いや、途中で脱皮されてビビったが、実験体だったからか弱ってた助かった」

「めんどろな……」

「手っ取り早く終わらせるぞ？（フツ）」

「ブーストオン  
加速開翼！！」

「クロックアップ！」

《《Clock up》》

四人が同時にクロックアップし、超加速の世界へと突入する。

「奴」が魔導八天を振るってカブトに斬りかかる。

それを蒔風が獅子天麟で受け止め、それを土台にジャンプしたカブトがカブトクナイガンで真上から撃ち抜く。

だが「奴」に撃つたしたそれは一発も命中せず、魔導八天から分離させた「獣人」ですべてはじいた。

蒔風が「奴」の剣を蹴りあげ、その隙に足払いから倒れ込む「奴」の顔面に肘鉄をぶちかます。

しかし「奴」はと言うと肩と手のひらを地面に付け、そのまま跳ね上がって蒔風の顔面を蹴り飛ばした。

空中に碎けた地面の欠片と蒔風の鮮血が散ってそのまま浮かび止まる。

後ろに飛んでいく蒔風を飛び越えてガタツクがダブルカリバーで斬りかかっていき、さらにカブトが背後からカブトクナイガンをクナイモードにして斬った。

「奴」はそれを紙一重で、わずかな隙間に潜り回転してそれを回避し、ガタツクに後ろ蹴り、カブトに突きをぶち込んで弾き飛ばす。

ヒヒイロアカネで構築された装甲から火花が散り、二人が転がった。そこに空中で反転しフェンスを蹴って飛んできた蒔風が「奴」に拳を振るうが、「奴」の踵落としが炸裂する。

肩口にそれを食らいながらも両の足で地面を踏みしめてそれに耐える。

「お？耐えるか？」

「ぐっ、ぶっ……」

「無茶すん、なッ！！！！」

ゴグッ！！！！！

「奴」がその状態から無動でさらに衝撃を叩き込む。

その衝撃についに蒔風の肉体が限界を越えた。

全身から血を噴き出し、上半身の服が散り、上半身に刻まれた見るだけで激痛に襲われるような傷をあらわにする。

だがその姿を見ていたカブトもガタツクも、それが傷だとわからなかった。

その体はすでに血まみれ。

赤黒くなっている故に、傷など見えないのだ。

《Clock over》

そこでクロックアップが切れる。

それに合わせて「奴」も超加速をやめる。

この状態の蒔風などはすでに翼がしおれている。

そして雨が降った。

そのすべては蒔風と「奴」に振り、その全身を赤に染め、すぐに黒





そして「奴」を引きとめたところでエネルギーを圧縮し、プラズマ  
火球弾を撃ち爆撃する。

「グおっ!?!」

「奴」がその砲撃に少しひるみ、その隙に再びキャストオフ。  
カブトとガタックが同時にエネルギーを溜める!!!!

《《1、2、3 rider kick!》》

「ライダーキック!!!!」

「ライダー、キック……!!!!!!」

ゴオウ!!!!!!

エネルギー、タオキン粒子が二人のそれぞれのホーンに集まり、そ  
れが全身を走り足先に凝縮される。  
そしてその二人のキック、カブトの高回し蹴りとガタックの飛び回  
し蹴りが炸裂する!!!!!!





S I D E 蒔風

あ・・・・・・・・・・うじ・・・・・・・・・・ど・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・・

ああ・・・・・・・・死・・・・・・・・か・・・・・・・・

楽な・・・・・・・・・・もんだな・・・・・・・・・・  
思ったより・・・・・・・・・・軽いなあ・・・・・・・・・・

世界が・・・・・・・・・・やばい・・・・・・・・・・

死ぬ・・・・・・・・・・の・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・構わないけど・・・・・・・・・・

さす・・・・・・・・・・がに・・・・・・・・・・死・・・・・・・・・・ぬわけに・・・・・・・・・・は・・・・・・・・・・  
行かないよなあ・・・・・・・・・・

ダメだ・・・・・・・・・・動かない・・・・・・・・・・  
視界も・・・・・・・・・・動かねえ・・・・・・・・・・

なにも・・・・・・・・できない・・・・・・・・

ガシィ!!!!!!

「お前には死んでもらっては困るんだよ・・・・・・・・  
俺たちを光に連れて行ってもらうためになア・・・・・・・・」

だ・・・・・・・・れ・・・・・・・・

「オレか？ただの地獄の住人さ・・・・・・・・

お前ほどではないがな《Change Kick Hopper!》

俺たちを地獄から連れ出してくれそうな奴を探してたんだよ・・・・・・・・

お前には死んでもらっては困る

今から病院に行くぞ」

だったら・・・・・・・・そこよりも・・・・・・・・

連れて行ってもらいたい場所があるんだ・・・・・・・・



「よお、天道……あの人が頼んできたんだ。助けてやるからよお！！！！！！」

ドガア！！！！

「奴」をその人物が蹴りだす。

その人物とはさつき時風と話していた男、やぐるま矢車想が変身する仮面ライダーキックホッパーだ。離れたフェンスには時風がぐったりと倒れていて、ガタツクに担ぎあげられている。

「貴様……」

「相棒を助けてもらったんでな……  
それにあの人はオレたち兄弟の希望になるかもしれないんだ」

矢車には義兄弟がいる。  
かげやましゅん影山瞬という青年だ。

彼はなにも知らずにあのネックレスを多く身に付けていた。故に通常よりも多くのネイティブ波長を受けていたのだが、ネイティブになつてしまふ直前で時風が別の波長でそれを破壊したため、ことなきを得たのだ。

そしてそのとき影山の脳裏に浮かんだのが銀白の翼を持つ男だったのだそうだ。

だが時風はこの話を知らない。

意識の飛び飛びだった時風には何の事だかわかってはいないのだ。

「ち……また厄介な……」

「オレに……は……最高だよ……」

「奴」の言葉に時風が反論する。

途切れ途切れに、苦しそうに、それでもなんの悔いも残さない声で言った。

「その人は……オレを……助け……に、来てくれた。」

それは……素晴らしいこと……なんだ……

その人も……天道も……加賀……美も……

皆……先に進んで……いる……」

その言葉に天道、加賀美も激が入る。

そくだ……なぜここでへこたれる。

この男はここまでなっても戦場に立っている。

ならば、自分たちがもう戦えないのはおかしいじゃないか……  
!!!!!!

「どげよ……………」

そこは……………」

オレたちの……………通る未来だ……………」

【KAMEN RIDER KABUTO】- WORLD LIN  
K - WEAPON

「そつだ……………俺たちの道はここから先にある。

その道を切り開くぞ!! 加賀美!!!!」

「おう!!!!!!」

カブトと、そしてガタツクの目の前にハイパーゼクターが現れ、二人がそれを手に取る、

ガタツクは時風に言われてフェンスにもたれさせて下ろし、カブトの隣に行く。

「お、俺にも!？」

「俺たちが掴む未来だ。お前も一緒に未来を掴め!!!!!!」

「オレは…………所詮…………」

「お前は…………まず吹っ切れ直さなきゃ…………」

「そうだな……………」

「ハイパーキャストオフ!!!!!!」

「ハイパーキャストオフ!!!!!!」

《hyper cast off Change!Hyper Beetle!》  
《hyper cast off Change!Hyper tag Beetle!》

カブトとガタツクがハイパーフォームへと強化変身し、その全身から凄まじいエネルギーが噴き出す!!!!!!

「行くぞ…………この世でたったひとつ、確かな事。」



それは天の道を往き、総てを司る男、天道総司だ！！！！」

「完璧野郎が……てめえみたいなやつあー一番癪に障る！！！！」

「奴」が魔導八天を振るいカブトに突進する。  
だがその体が止まる。

「奴」の目の前に蒔風が躍り出たからだ。  
その体が魔導八天に貫かれ、その刃が八つにグバツ！！！！と展開し  
引き裂いた。

「完璧な……奴なん……か……いない  
いるのは……自分のできること……でき……  
無いことを……ゲハツ……知っている者だ……  
だからこいつは……まちがえ……な……  
……」

「蒔風ツ！！！！！！」

「ハイパークロックアップ！！！！」

《《Hyper Clock Up！！！！》》

二人がクロックアップを越えるハイパークロックアップを発動させる。

その速度はもはや計り知れない。

そのあまりの速さゆえに、多少の時間を巻き戻すほどに……！！！！！！

貫かれた時風がスーッと戻っていく。

そしてフェンスに戻ったところで、カブトとガタックがキックを構える……！！

《《Maximum Rider Power》》

腰に装着したハイパーゼクターのホーンを倒し、エネルギーを溜めこみ、そして

《《1, 2, 3》》

「ハイパー、キック……！」

「ハイパーキック……！！」

《《rider kick……！！》》

トトトトトトゴガア……！！！！！！

二人の足先からエネルギーが竜巻の用に渦巻き、それが「奴」に炸裂する！！！！！！

何が起きたかもわからぬままに吹っ飛び空中に飛んだ「奴」

《Rider Jump》

「ライダーキック！！！」

《rider kick！！》

ドゴア！！！！！！

その「奴」にキックポッパーが振り下ろし蹴りを叩き込み、さつき時風が落ちた穴に「奴」をぶち込んだ。

ヨロヨロと時風がその穴に近づき、カブトがその横に並ぶ。

「終わら……せる……」

【KAMEN RIDER KABUTO】 - WORLD LINE  
K - FINAL ATTACK!!

カブトがパーフェクトゼクターを取り出し、他ゼクターをそこに装填していく。

《THE BEE power DRAKE power SASW  
ORD power All Zector Combine!》

ゼクターのパワーが装填されて「奴」に向ける。

その先端に竜巻状にエネルギーが充填され、その振動が周囲を振るわせる!!!!!!!!!!

さらに時風が十五天帝を持ち、それを「奴」に向けた。

するとその先端にも同じようにエネルギーがためって行き、さらに大気を轟かせる!!!!!!!!!!

「おおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!」

「お.....おお.....ああああ.....!」

「!!!!!!!!!!」

ボツ!!!!ドギユゴアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!

!!!!!!!!!!

引き金が引かれ、そのエネルギーが解き放たれる。

二本の竜巻となって打ち出された砲撃は周りを巻きこみ、「奴」に到達する。

二本の奔流に巻き込まれ、身体が引きちぎられ、「奴」が霧散する。だが破壊はそこで終わらず、地下深くの研究所まで届き跡形もなく吹き飛ばした。

本来なら一発で山の半分を消し飛ばす者が二本もあり、WORLD LINKで強化されているのだから、これでもまだ足りないところだ。

しかし時風の意識がそこで途切れ、WORLD LINKが切れる。砲撃が止み、崩れ落ちる時風をガタツクとパンチホッパーが支える。

「このビルはもう駄目だな」

「急げ！！こつちだ！！！！」

「時風！！死ぬな！！！！！！」

「想像以上の地獄……ここから抜け出す術を知っているのか……」

四人がそこから脱出する。

死にかけの翼人を一人抱え、クロツクアップも使えぬまま、必死に。

.....

「ここ……は……」

「目が……覚めたか？」

「天道……」

「もう少しゆっくりしておけ。再生が早いと言ってもお前の怪我はひどい」

「どれくらい寝てた……」

「半日だ。だが」

「行か……なきや……」

「蒔風！……！」

ゴロリ、と蒔風がベッドから落ちる。そこで蒔風は状況を始めて把握した。

ここは天道の家だ。

「奴」との戦闘で倒れた蒔風はここに運び込まれたようだ。

「奴」はこうしてる間にも他の世界に……」

「その体で行っても死ぬだけだ!!!」

「世界に行くたびに二週間ほどの空白があるから……その間に……体力は……」

「怪我はどうなる!!」

「治るが……そこまでは……な」

「だったらここである程度は治せ。せめて血液量は回復させる」

「う……」

天道の言葉に時風が言い返せなくなってしまふ。

そもそもこのまま天道を振り切る体力も無いのだ。

従うほかないだろつ。

そうして二日後

「ありがとな。マシにはなった」

「礼はいらん。早く行け」

「蒔風！！がんばれよ！！！！！！」

「うおおおおおおおおお！！！！！！兄キイイイイイイイイイ！！！！！！」

「あの二人は大丈夫か？」

「大丈夫だろう」

「じゃあ……な」

こうして蒔風が足早にゲートをくぐる。

次の世界では「奴」が活動しているかもしれない。  
この休息が吉と出るか凶と出るか……





カブト ｝ 掴む未来、天の道 ｝ (後書き)

アリス「蒔風死にかけ!？」

結構ヤバかったなあ……

【仮面ライダーカブト】

構成：”ライクル” 80%  
”フォルス” 10%  
”LOND” 10%

最主要人物：天道総司

- WORLD LINK - ｝ WEAPON ｝ : ガタツクにハイパー  
ゼクター&蒔風にハイパークロックアップ付加(今回発動不可)

- WORLD LINK - ｝ FINAL ATTACK ｝ : 蒔風  
の十五天帝に「ハイパーマキシマムタイフーン」を付加、二人で攻撃

ア「結局「奴」がクロックアップについていけたのは何ですか？」

描写しきれなかったのでここで言いましょう。  
擬態天道です。

でもそれらしいシーンを出せなかったのと、蒔風フルボッコだった  
ので精一杯でした……

すみませんでした

ア「そしてやっぱりいいところ貴（笑）」

そういえばなんで時風最後にああ呼ばれてたんですか？」

それは次回さ！！

ア「と、言うことは……………」

次回！！久しぶりの番外編！！！！

多分二つに分けるかも

あいだ空けすぎた……………」

ア「素で忘れてましたもんね」

うっさい！！

ア「次回、ひぐらし〜電王編！！！」

もしかしたらこれ以上かもしれませんし、書かない世界もあるかもです。

ではまた次回

時風「輝ける一ページを……」

番外編 くらBAN GAI くら(前書き)

なんだこのタイトル



「みんな僕の前にひれ伏すことになるのです、にげー」

「あうあうあう~~~~~」

気合十分、士気高揚。

そんな状態を見て魅音がうんうんと頷く。

「良きかな良きかな！ーじゃあ今日のお題を発表するよ！ー！ー！ー」

「へへっ。ま、エンジェルモードでの部活は決まってるからな！ー！

」

「え？そんなん？」

「発表！ー！『食いつくせ！ーデザート大食い競争』だあ！ー！ー！ー！

」

ビシリ！

蒔風の表情、言動すべてが固まった。

この男、ある程度ならいいがそこまで甘い物は得意ではないのだ。

「魅音さん！ー！棄権します！ー！」

「却下します!?!」

「そうかつ!?!」

「そつだツ!?!」

ダメだった……

「敵前逃亡之最善策也ツ!?!?! (ダウツ!?!!)」

「逃がしませんわよ!?!?! (グイツ)」

「ギヤアアアアアア!?!?!?!い、今!?!今なんか!?!?!  
彫刻刀が落ちてきたんですけど!?!?」

「ち!?!仕留め損ないましたわ!」

「おかしい!?!目的が足止めから数歩先に進んでいる!?!?」

「じゃれてる沙都子ちゃんかあい!?!?!」

「も、もうレナさんつたら!?!?!じゃれてなどいませんわよ!?!?!」

「沙都子は悔しいのですよ。かわいいのです。あう!」

「待て!?!それでオレが被り被害は!?!?」



そこで蒔風の肩にポン、と手が置かれる。  
振り返ると圭一が達観したような顔をしてこう言った。

「諦めましょうぜ……！」

「てめえは何キラキラした顔で言ってんだ！？あれか？Mか！？」

「蒔風さんも似たようなもんじゃないですか……」

「は？」

「『S h u n』『M a i k a z e』じゃないですか……！」

「イヤガツタナ……！！！！！」

蒔風がウェイトレスのお盆を掴んではたき倒そうと圭一に振り下ろす。  
が、それよりも早く詩音のお盆が蒔風の顔面に命中した。

縦に。

「これ以上お店で騒がないでください……！！部活をやるならさっさとやる……！」

「はい……」

「あっはっはっは!!じゃあ、大食い大会、始め!!!」

魅音の号令と共にケーキやらなんやらが運び込まれてくる。

(まずい……オレは基本的にはそんなに食べんぞ……!!  
!!!)

「ショートケーキです」

「くっ、いきなりか。フルーツは苦手なんだがなっ」

バクリ、と食べきる時風。

苦手と言ってもこの程度の甘さなら大丈夫らしい。

「次っ!!」

「ジャンボマウンテンパフェでございます」

ゴトリッ!!!

「ねえ!?飛ばし過ぎじゃない!?置くときの音がパフェとは思えないんだけど!?!」

「黙って食つのですよ。こぼ〜」







【仮面ライダーディケイド】VS海東

「君のその剣、天剣・十五天帝は僕が貰う!!」

「だーから!!これは持ち主を選ぶから無理なんだってほら!!」  
（ポイ）」

「（パシ!!……パシュン!!）あっ!!くっ……どうしても無理なのか!？」

写真館での1コマ。

海東と時風が十五天帝をめぐって言いあいをしていた。

確かに時風の十五天帝はとんでもないお宝だ。  
なにせ「世界四剣しげん」のうちの1つだ。

「海東、なんだその「世界四剣」ってのは」

会話を聞いていた土が海東に訊いた。

「そんなことも知らないのかい？」

「世界四剣」とはまさに世界に散らばる四本の至高の剣のことだ。

ま、僕もそれ以上のことは知らないよ

「なんだ。お前も知らねえんじゃねえかよ」

「そんなことはどうでもいいんだよ。とにかく僕はこの剣が欲しい  
！……！」

「無理だったのよ！……！」

「どうしても……！」

「無理だ……！」

「お前ら……でおっぱじめる気か……？」

「でも……でも……！」

「だったら海東、これをやるよ」

蒔風が懐から何かを取り出す。  
それは小さな瓶に入ったパウダーだ。

「これぞ世界中を旅し、2000の技を持つ男の作った伝説のパウダーだ!!!」

「……………いいのか？」

「もっていけ!!!」

「ふ……………（スタスタスタ……………）」

「おい蒔風、あれあげてもいいのか？」

「構わんさ。レシピは持っているしな。それにあれ舐めたら大変だぞ？」

「は？」

「ンゴギョオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!????」

「海東!？」

「舐めたか……………これでこの剣への執着を忘れてくれるといいなあ……………」



士がおそろおそろ廊下を覗くと、床に倒れ伏してビクンビクンしている海東がいた。

時風がケースを回収し、そっとしておいてやろうと言ったので、士も放っておいた。

何が恐ろしかったかと言うと、目覚めた後の海東は時風の言う通り剣への執着を忘れていたことだ。

【仮面ライダー電王】く時風、王子と出会った

時風が過去に飛ばされて浮浪生活をしている時のこと

「さ………寒い………」

これまでの三ヶ月は暖かかったからよかったけど、今は冬だ。雪まで降っている。

「獄炎・・・ほああああ・・・あつたか~~~~」

そんな状況でも何とかやっつけていけるのがこの男。  
以外と遅いのである。

「ううむ。今日はどうしようかな〜」

そう言って街をぶらつく蒔風。

最近になって何だか事件が多い気がするが、あまり関われない。  
告る為のシチュエーション作りにチンピラやとっている男とか、未  
来の自分がやってきてのドッペルゲンガーとか、どっかの泥棒が走  
り回っているとか。

「でも下手に手を出して未来変えたら大変だし・・・めんど〜  
~~~~」

とか言いながらファミマで買った肉まんを頬張る。うまい。

と、その蒔風の背後に黄色い光が接近し、入り込んだ。
瞬間蒔風の目の色が変わり、髪に白いメッシュが入った。

「降臨!!!満を・・・ぬふおっ!?!」

バシユン!!!

だがすぐにその光は飛び出、地面に転がる。

「っあ！！なんだよいきなり……あんた誰？」

「む？我が名はジーク。呼ぶ時は気軽にプリンスでよい。それにしてもお前、面白い中身をしているな？」

「オレ？ああ、少し見たのね？やめとけやめとけ。オレが了承してもいないのに勝手に入ると気がふれるぞ」

これがジークと蒔風の遭遇。

なんでも蒔風の食っていた肉まんを喰いたかったのだそつだ。

「だがしかし私の入り込めないような人間！！私と同等以上か！！」

「人間やめてんだけどなあ……オレ」

「さらには翼も見えたぞ？」

「ああ、翼人だからね」

「素晴らしい……我が友人として認めよう！！光栄に思え
！！！！」

「さいですか」

「では我がお供にも合わせよう。ついてこい」

「どんな奴だよ」

「なに、赤いのと青いのと黄色いのと紫のだ」

「それって野上達じゃねえの!？」

「ふむ……そんな名だったな」

「それには合えねえなあ……残念だが」

「事情があるようだな? 聞こうではないか!!! 我が初の友人よ!!!」

〈時風説明中〉

「事情は分かった!!! 手伝おう!!!」

「その時が来ないと意味ないぞ?」

「なに、私が暇な時遊んでくれ」

「お前もつどっか行けよ!!!」

「私がどこかに行く必要はない。世界の方が動くのだからな」

「はぁ……じゃあその時まで待ってますよ……」

「ふむ、その心構え、ますます我が友人よ!!!」

そんなこんなでさらに七ヶ月。
この二人は時間を過ごした。

【リトルバスターズ！】〜練習中〜

「いくよー！ー！ー！ー！」

「よっし！ー！こい！ー！」

ビュン！ー！ブワッ！ー！ー！バシィ！ー！ー！

「ストライク！ー！なんだよ時風、まだまだだな」

「うーん。タイミングはいいと思うんだけどな」

「いや、高さもタイミングもいい感じにずれてるぞ」

蒔風のバツティング練習。

理樹が投げ、蒔風がバットを振るい、真人がキャッチャーだ。

さっきから何度もやっているが、いまいち命中しない。

「はぁ……」

「諦めんなよ舜！」

「そつだよ！だんだん近づいてきてるよ！！」

「ふう……よっし！やるか！！」

十分後

「やっぱりダメだぁ……」

「気にすんなよ。バットが顔にめり込まないだけオレとしては安心だ」

「じゃあ今度は山なりに投げるよ？」

「それなら打てるかもな……」

「いくよー（ポーン）」

「……そこか！？（コキン！！！！）」

「やったよ舜！！命中だ！！！！」

「まだまだだけどな」

ボールは当たったが理樹の方に真っ直ぐ転がって行っていた。

「それにしても最近まで恭介がリーダーだったんだろ？」

「そうだよ？」

「今はお前がリーダーだっけ」

「うん」

「すげえなあ……オレにリーダー気質はねえからよ。もう恭介とタメ張れんじゃねえ？」

「そ、そんなあ。僕はまだまだだよ（テレテレ）」

「恭介はいつもどんなふう練習してんだ？」

「そうだなあ……えつと……こんな感じだね！！（ポーン）」

「せいっ（コキン！！！！）」

「（パシッ！）なんだか物欲しそうな顔してるねっ。球筋に出てるよー！！」

「ブハッ！！」

「み、みおちゃん！？だいじょーぶ？」

「も、問題ありません・・・」

「次行くよー！！（ポーン）」

「ハイっ！！（コキーン！！）」

「（パシィ！！）カルピスの原液が大好きだって？球筋に思いつきり出てるよッ！！！！！！」

「(ドシャツ!!)グ、ぐフウ……」

「わ、わふー!?!?西園さん!?!?へ、へるぷゆーですか?」

「ま、まだ死ねません……(ヨロヨロ)」

ポーン、カキン!!パシィッ!!!

「バットの調子が最高だね!!見てればわかるよ!!!!」

「……」

「みおっどーし……う、うにゃっ!?!?み、美魚が立ったまま死んでるぞッ!?!?」

「あっち騒がしいなあ……」

「まあ、これがリトルバスターズだからね」

いいのか？これで？

【仮面ライダー555】～激突までの経緯～

「どっこかな～ファイザー～」

蒔風が公園をうろろしながら最主要人物を探す。

手がかりもなくいきなりここに飛ばされたってことはこの近くに
いるはずなのだが……

と、ふいに足元に野球ボールを見つける蒔風。

誰かの忘れものようだ。

「ちょっと練習するか？」

そう言つて蒔風がボールと木の棒を持ち、打とうとする。
ボールを上放つて木の棒を構えて振るう。

バシツ!!!

「当たつた!!! ってやばい飛んでく!？」

木の棒の突起に当たつたのか変な方向にすつ飛んで行つたボール。
それを追つて走り出す蒔風だが、すぐ近くの広場で爆発音がした。

蒔風はどっちに行こうかと悩みながらあつちそつちに首を交互に振り、結局は音のした方向に向かつた。

……ひゅるるるる……ゴーン!!

ボールはと言うと、バイクにぶつかつた。

そのバイクが蒔風にリアアットをぶちかますまであと24秒。

ピピッ……ピピッ……ピピッ……ピピッ……

【Fate / stay night】 Archerの固有結界講座

「 以上が固有結界と言う魔術の構成だ」

蒔風が倒れているうちのこと。

アーチャーが蒔風に固有結界の説明をしていた。

「なるほどねえ……」

「本気でやる気か？確かに君には素質があるのは確かだ。翼人だからな。だがお勧めはしないぞ？」

「大丈夫だよお。生き物の理からも外れてんだからさ」

「そ、そうか？」

「あれだなあ、ちよくちよく士郎や真人の力で感覚を掴んでから俺

自身を作ってみるかなあ……………」

「あまり根を詰め過ぎるなよ?」

「そこら辺は大丈夫だって……………やってみるぞ?」

「ああ」

「はあっ……………」

蒔風がとりあえず詠唱なしで軽くやってみる。
身体が淡く光り、少しだけその空間の毛色が変わる。

「う、うおおお!?!」

「!?!?!?ど、どうした?」

アーチャーの声に驚いて蒔風が術を解いてしまう。

「い、いや……………何か別の空間が見えてな……………どうやら君の固有結界の副産物は幻覚のようだな」

「幻覚?」

「厳密には少し違うみたいだがな。なにかイカレタ世界が見えたぞ?おそらく君の心象世界の断片だろうが……………」

「ということはおレの中身はぐにゃぐにゃってことか？いいねえ。でも本気でやると気が狂いそうだなあ……………」

「狂気ぐらいどうにでもなるだろう、君なら」

「だけどさあ…………コントロールだな、うん」

「まあ、頑張りたまえ（概念を教え、やり方を少し享受するだけでここまでできるとはやはり翼人だな）」

「おう！！どんな世界なのかな…………？」

【仮面ライダーカブト】くまたオチ（笑）く

時風がこの世界を出る前日。
つまりは戦いから翌日の事。

「アニキ！！身体の調子はどうだ？」

「アニキ！！食いたい物はなんだ、作ってやるよ」

「なんで年上にアニキ兄貴と慕われなきゃならんのだ……」

天道家の客室のベッド

天道は買い物に出ている今はいない。

その代わりと言わんばかりに矢車と影山の二人が蒔風の世話をしていた。

蒔風は何が何だかわからない。

話は戦いときに矢車がしていた気がするがあんな状況では聞き取れなかったのだ。

しかし今さら聞くのもなんだから〜と言った感じだし、聞き出そうとしたら「いいからいいから」と流されてしまった。

加賀美はいないし、天道もさあ？と言った感じだ。

「で、あんたはあれだけの地獄を知って今も光の中で生きている」

「俺たちは闇に堕ちた地獄の住人だ。だけどアニキがアニキと慕うあんたなら光に迎える方法を知っているはずだ!!」

「教えてくれ、大兄貴!!」

え？なんなのこの人たち？
とも思ってたが、蒔風は話を始めた。

「地獄・・・ね。確かに知ってるな・・・」

「そうか・・・」

「俺の世界が壊れたんだ。目の前で友人が叩きのされた。何度も死を見た。二度もある世界に負け、絶望しかけた」

「それでもあんたが踏ん張っているのは・・・なぜだ？」

「・・・いるからだよ」

「誰が？」

「自分を信じてくれている人が、な。そしてその皆とまた会いたい、笑い合いたい・・・」

「たったそれだけの想いが、オレを頑張らせてくれるんだよ。一人で回る世界の旅だが、一人で戦うことはないしな」

「誰か・・・か」

「俺たちには・・・」

「となりを見る。その相手はちゃんというだろ？」

「それに地獄のままでもいいじゃねえか。」

「仲間がいるなら、そのために力を振るえ。その行動は素晴らしいこ

とだ。

その際に使われる力なんか関係なく、な」

矢車と影山がお互いを見あつ。

そして何かに気付いたように言った。

「相棒、勝手に死のうとするなよ？」

「兄貴も、俺たちは兄弟だからな！！」

「ふ」

ガシッ！！と二人が熱い握手を交わす。

「一件落着……だな」

「蒔風、これはなんだ？」

と、そこに天道が顔を出す。

その手には何かが乗った皿がある。

「んあ？ああそれ？オレの生活セットに入っていた料理だよ」

「どうした天道？……そ、その料理は……！」

「知っているのか兄貴！？」

「あ、アワビの塩釜蒸しだ……！！！！！」

「え？」

「そうだ、しかも素晴らしい。

見る、この肝は全く傷ついていない。それでいて鮮度は最高とみた……
時間をかけずに素早く肝を取り出した証拠だ。

さらに塩の量、焼く温度、時間、総てをとって完璧だ……

ただ惜しむらくは素材だな。

最高級の物ならばさらに味が出ただろう」

「ってことはそれ、作り手の方は完璧ってことか？」

「ああ……少なくともこれに関しては文句はないな。
基本的に忠実だ。教本に乗せたいぐらいだ」

「そんなに……」

「大兄貴！！オレがもっとうまいもん作ってやる……！！」

「ほう……オレが好きなのは辛い物だ。しかも辛ければ辛いほど
いい」

「兄貴！！だったら・・・」

「おう・・・味あわせてやるよ・・・大兄貴にオレの地獄の麻婆豆腐をな！！！」

「だったらこのパウダーを使いな！！オレ様特性激辛スパイスだ！！！！」

「ああ・・・行くぞ相棒。手伝ってくれ！！！」

「待ってるよ大兄貴！！」

ボタン！！！！

「行ったなあ・・・」

「あれ、どれくらい辛いんだ？」

「ん？もう一つあるから舐めるか？」

「貰おう（ペロッ）・・・ツツツ！！！！？？？？？」

「お？」

「ブオオオオオオオオオオオオオオ！！！！？？？？」

「耐えきれないか・・・」

その後、天道はずっとビクンビクンと倒れ伏していた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
?

番外編 〽BAN GAIR〽(後書き)

アリス「なんですかこれ？結局全部じゃないですか」

いや・・・なに書くこうかと悩みながらキーボード打ってたらこんな風になった・・・

ア「しょーもないですね。と、言うわけで今回は番外編でした」

SPIRITSはすぐに消えましたし

AIRもそんな感じでしたよね。

なのはA・sは長かったからなあ・・・

大体これくらいしか無かったよ・・・

ア「次は本編でしたっけ？」

そうですね

の！！はずでしたが！！！！

ア「オアチャア！！！！」

ノリやテンションが続いたので、番外編を続行します！！！！！！

ア「もーいや！！！！次回番外編！！カオス！！！！！！」

蒔風「もーいーいーもん。
頼まれたって後書きなんか出てやらない!?!」

番外編 〈究極の非武装〉（前書き）

この小説はこの曲を聴きながら読んでいただきたい!!!!

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm1446231>

もしくは

<http://www.youtube.com/watch?v=10EBggz1-Jg>

番外編 究極の非武装

世界と世界のはざまの空間。

現在時風はここで二週間の空白時間を過ごしている。

そこは一面灰色で、地面、天井、壁などの物は一切見えない。端から見れば時風は宙に浮いてるように見える。

だが実際に立つてみるとそこにはしっかりと地面がある。

そこで時風はまるでそこに椅子があるかのように座り込み、頭を抱えて俯いた。

「ああ~~~~~。くつそお~~~~~身体ボロボロだよ……
……
もうヤダよ痛いの~~~~。めんどくさくなってきた……
……
つてもいざやり始めると全然億劫じゃないんだけどね……
……

いい加減……もう……」

だんだん時風がくじけてきた。グダってきた。
だがこれは毎回毎回あることだ。

この男、いろんな世界ではかっこよく見栄切ってるつもりだが実際にはかなりのグータラだ。

「あ——————！！！！！！く——————！！！！！！」

蒔風が大声を出してじたばたと足踏みしだす。
そしてついにしゃがみ込んでしまった。

と、そこに何かが現れた。

???

「やった!!!身体はボロボロだ!!!」

蒔風

(後ろに誰がいる!?)

バツ!!!!!!

アーチャー(はっぱ一枚)

「ここまでくれば、あとはもう休むしかないぞ!!!!!!」

蒔風

「!?!?」

??!?

「やった!?!」

蒔風

「(キョロキョロ)どどどだ!?!」

ザフィーラ(アーチャーの隣・はっぱ一枚)

「その休息が終われば、君はさらに強くなっているぞ!?!?!?!」

蒔風

「!?!?!?!?!?!?!?!?!」

ザフィーラ（皆誇りある笑顔で）

「G!!!」

上条

「R!!!」

士、ハクオロ

「ダブルE!!!」

富竹

「N!!!」

アーチャー

「LEAVES!!!!!!」

フウ-----!!!!!!

アーチャー

「It's so easy」

ザフィーラ

「Happy go lucky」

上条

「We are the world~~~~」

ハクオロ

「We did it」

蒔風を除いた観客含め全員（以下全員）

「ヒューヒューヒューヒュー!!!!!!」

オス オス オス オス!!!!!!」

アーチャー

「……………アイ!!!」

六人

「ヤッタ!ヤッタ!ヤッタ!ヤッタ!」

（ステージに上がって）明久、雄二（以下同）

「大学~~~~合格~~~~」

フェイト

「執務官就任~~~~」

ベナウイ、クロウ

「葉っぱ一枚あればいい~~~~」

富竹

「生きているからラッキーだ~~~~!!!!!!」

全員

「ヤッター！ヤッター！ヤッター！ヤッター！」

圭一、レナ、魅音、梨花、沙都子、羽入、詩音、悟史

「事件解決~~~~っ~~~~」

こなた、かがみ、つかさ、みゆき

「日本代表~~~~」

昭和ライダーズ

「やんなるくらい健康~~~~だ~~~~！！！！」

上条

「everybody say！！」

全員

「ヤッター！！！！」

裕理、ましる

「世つ界キューキュー~~~~」

クロノ、ユーノ

「でも！（クワツ）」

良太郎、モモ、ウラ、キン、リュウ

「明日はワンダホー~~~~」

岡崎、渚

「いじわるされても~~~~」

響鬼、威吹鬼、轟鬼

「ふとん入れば!!!」

全員（最前列にあの六人）

「ゲー!!!ゲー!!!ゲー!!!ゲー!!!」

「パス!!!パス!!!パス!!!パス!!!」

エルルウ、アルルウ、トウカ、カルラ
「君が変われば~~~~~」

ハクオロ

「世界も変わる~~~~~」

上条

「丸腰だから最強だ~~~~~!!!!!!」

士郎、セイバー、凜、ランサー
「まっすぐ立つたら!!!!!!」

ザッ!!ビシィッ!!!!!!

全員

『『『『『キモチィ-----!!!!!!』』』』』

一方通行、打ち止め

「フー!!!フー!!!フー!!!フー!!!」

イリヤ、バーサーカー（雄叫び）

「オス！！オス！！オス！！オス！！オス！！！」

応龍、アメリ、鶴、美冬

「F O I ！！F O I ！！F O I ！！F O I ！！」

ハルヒ、キヨン

「オス！！オス！！オス！！オス！！！」

天道、加賀美、矢車、影山

「お水飲んだらうめえー！」

全員

「やったーーーーー！」

はやて、ヴォルケنز

「日に当たったらあつたかい！」

全員

「やったーーーーー！！！」

鈴、クド、小毬、来ヶ谷、西園、葉留佳、沙耶
「腹から笑ったらおもしれえー！！！！！！！！！」

「ヒュー！！ヒュー！！ヒュー！！ヒュー！！ヒュー！！
オス！！オス！！オス！！オス！！オス！！」

全員

「…………アイ！！」

六人

「ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！ヤッタ！」

巧、海棠、三原

「すれ違いざま……………」

謙吾、真人、恭介

「ほほえみくれた……………」

瑞樹、美波、秀吉

「2度と会えなくなっただっていい……………」

全員（蒔風を指さして）

「君がいたからLUCKYだ……………！！！！」

なのは、フェイト、はやて
「勝ち続けて行け!!!」

アーチャー

「葉っぱ一枚あればいい〜
みんな一緒だ」

全員

「HAPPYだあ!!!!!!」

全員

「ヤッタ!ヤッタ!ヤッタ!ヤッタ!」

みくる

「息を〜吸える〜」

長門

「息を〜吐ける〜」

ハクオロ、富竹、士

「やんなるくらい健康だ~~~~!!!!!!」

女全員

「everybody say!!!!!!」

男全員

「ヤッター!!!!!!」

全員（時風ステージに連れ込まれる）

「G!!!!!!」

R!!

EE!!

N!!

LEAVES!!

G!!

R!!

EE!!

蒔風

「どうした恭介!!!クロノ!!!!!!」

恭介

「ひ、彼女たちが……」

蒔風

「姫？ヒロインか!!!!!!」

クロノ

「ドンキー真人にさらわれてあの城に!!!!!!」

蒔風

「なつ、なにに!?!」

ハッ!!!振り向けばそこにまるでゲームそのまんまのピ
子城が!
!!!!!!」

クロノ

「行って……くれるかい?」

蒔風

「当然だ!!!助けに行ってくる!!!!!!」

恭介(21)

「まで!!!お前に仲間を連れてきている!!!!!!彼らと共に行け!!!
!!!!!!」

蒔風

「どんな奴だい?」

六人

「ヤッタ!!!!!!」

蒔風

「こいつら!?!」

アーチャー

「さあみんな!!ヤッタの布陣で蒔風を守るぞ!!!!」

五人

「アイイ!!!!!!ヒュー————ヒュー————ヒュー————!!!!!!」

蒔風

「まあいい行くぞ!!!!!!」

六人(三人は蒔風をあの歩き方でついていく)

「アイイ!!!!!!」

蒔風

「なんだかんだであつという間だぜ!!!!!!」

士朗（怒）

「セイバーはオレの嫁！……！」

男ども全員（怒）

「やんのかコラア！……！」

どがががごごごきがぼこすかぼこすかどかどかがつしゃんぽこぼこぼこぼりんぐしゃんどどどどどどっかん……！！

蒔風（土煙内）

「ゲほゲほ……！お、おいお前らケンカ……ケンカすなっ……やめるよおい……お……い……！」

ぽこぼこぼこがしがしがし……！（お互いに服を掴む）
びっ、びりっ……！びりびりびりびり……！（服が裂ける）

全員（はっぱ一枚）

「………YATTA……！！……！」

その枕もとには・・・

はっぱが一枚・・・

t o b e c o n t i n u e d ! ?

番外編 〈究極の非武装〉（後書き）

アリス「来ましたカオス」

いや、なんかやりたくなってきた。
都合上これから行く世界の人は出せなかったけど

ア「それでも十分におかしい」

はっば隊は最高だ。

あんなに元気の出る曲はない。

最初の方の台詞と途中を少しだけ変えましたけど

ア「次回こそ更新するんですね？」

はい！！次こそ！！！！

ア「次回、降り立った翼人」

ではまた次回

はわわ！！敵が来ちゃいました！！！！

これ以外に何かあったかなあ・・・

恋姫十無双 外史へ舞い込む

「たつたつた、大変です!!!!緊急の伝令です!!!!」

「な、何があったの!?!」

「ここは蜀の国の会議室。

そこに一人の伝令の青年が駆けてきて、この国の太守、北郷一刀に用件を伝えた。」

「き、奇天烈な格好をした者が市街に出没し、騒動のど真ん中にいるとのこと!!!!」

「本来騒動の方がメインなんじゃない!?!」

「めいん……?」

「と、とにかく大変なことに!!!!」

「そう言われてはこの国の太守として放つてはいけない。」

「一刀は途中であった武將を何人が引き連れて市外へと出た。」

では一刀がその現場に到着するまでにこの世界の概要を説明しよう。

ここは古代中国、三国時代。

つい最近までは「魏」「呉」「蜀」の三国がこの大陸を統一しようと戦いを繰り広げていた。

いまでは一刀が統治する「蜀」が他の二国を併合して一つにまとまりつつあるが。

北郷一刀はこの時代の人間ではない。

学校の帰り道、怪しい男を追って博物館に入ったらその男が持ち出そうとした銅鏡が輝いてこの時代に飛ばされたのだ。

そして飛ばされた先は史実とは少しだけ違う三国時代。いろいろあるがその最も大きな点は

「行きますよご主人様!!!!」

「主が行くのなら、私も行くしかあるまい」

「鈴々も行くのだ!!!!」

名だたる武将達が皆女の子だったということだ。

そしてこの時代の風習も一つ書いておこう。

それは真名だ。

知っている人もいるかもしれないが、真名とは性、名、字なづなの名前のほかにある真の名だ。

この名前を呼びあえるのは互いに認め合った間柄でなければならぬ。

もしそうでもないのにもかかわらず真名で呼べば首を跳ねられてもおかしくはない、と言つほど誇りあるものなのだ。

と、そうこうしているうちに一刀達が騒動が起こっている場所に着いた。

引き連れているのは関羽（真名・愛紗あいしや）と、張飛（真名・鈴々）、趙雲（真名・星せい）だ。

「て、てめえ!!ふざけてんのか!？」

「オレは一切ふざけてなどいない。さあ!!そのガキを離して大人しくしろ!!」

そんな声が人ごみの中から聞こえてきたが、まだ姿が確認できない。

「時に主、一体どんなことが起こっているのです?」

星が一刀に訊く。

この二人は当然のように真名で呼び合う仲だ。

「ああ、なんでも食い逃げした男が逆上して、それを止めに入った人を振り切って逃走、子どもを人質にとって、そして今相手をしている人が対処に当たってるらしい。」

「で、その相手にしている男が」

「変な格好をしているらしいんだけど……」

「食い逃げ? そんなことしてなんになる!?!」

人ごみの向こうから声が聞こえる。

まだ姿は見えないが。

「こっちは腹減ってんだよ!! 悪いか!?!」

どうやら無事解決したのか、人混みが散開して行く。
中には涙を流している人、「これからオレも頑張るぞ!!」と意気
揚々としている者と様々だ。

そしてついにみんなが去り、動乱の中心人物が堂々と立っていた。

「やった!! 今日世界は平和だ!!!!!!」

はっば一枚の蒔風が。

と言っても肌色のパンツに葉っぱがついているだけなのだが。

それでも十分におかしい。

「何やってんだあんたあ!!!!!!!!!!」

一刀が大声を上げた。

後ろの二人なんかは訝しげな顔をしている上に愛紗は武器、青龍円
月刀を握りしめている。

星は腹を抱えてケタケタと笑っているが。

「む？この国の太守、北郷一刀か！！！！！」

「え？そ、そうだけど……」

「お会いできて光栄だ！！！！しいてはお話したいことが……」

と時風が近寄ると武器を構えて愛紗が一刀の前に出る。

「え、ええい近寄るな変態め！！！！！」

「な、何を言う！！！！これぞ究極の非武装！！！！平和の象徴だぞ！！！！！！」

「なるほど、故にあの男も冷静に話を聴けたのだな」

「せ、星も感心してないでこいつをひつとらえろ！！！！！」

「まあ待て愛紗、この男、只者ではないぞ？」

星の言葉に愛紗が少し険しい顔をする。

星は普段はふざけているが人を見る目は確かだ。

その星が只者ではないというからにはその通りなのだろう。

ヴァアアアアン!!!!!!

蒔風がフェイスフォンによって仮面ライダーフェイスに変身し、その姿に愛紗が驚愕し、一刀が信じられない物を見るような目で見た。

「貴様、妖術使いか!!!!!!」

「違うよ。言うならば「願い使い」だな。はぁッ!!!!!!」

二人が駆けだす。

その距離が休息に縮まり、ぶつかり合うというその寸前。

「愛紗、待ってくれ!!!!!!」

ピタァ!!!!!!

ザザザザザザザザ!!!!!!

二人の手が止まり、接近したところで膠着する。

時風が青龍日月刀を左手で掴み、右の肘を愛紗の鼻先に付けていた。

「その人の話を聞くよ。気になることもあるしね」

「そつてもらえると（バシユ）ありがたいね。これいる？」

「」「」「いらんわ！……！」「」「」

時風が差し出すはっぱを一言で払いのけ、四人は時風を城に案内する。

.....

「それで？どういうことなの一刀。みんなを集めるなんて」

「この男の話がそんなに重要なものとは思えないのだけれど……」

「いや、厳密に言えばオレは北郷の世界とは違う世界の住人だよ」

「どづいづことだ？」

「それは……」

ボタン！！！！

「そこからは私が説明するわあゝゝん！！！！」

と、いい声を出して入ってきたのはムキムキマッチョな大男。
それでいて恰好はパンツ一丁という実にキモチワルイ野郎だった。

「貂蝉ちようせん！？」

「お？この世界の観測者か？」

「んふ、さすが翼人ね。そこまでわかるなんてん！！」

「くねくねしないで！！！！」

「あらん、つれないわね」

「貂蟬！！知っているのか？」

「あゝせらないでご主人様ん これからじっくりお話しするわん。
ご主人様自身の、そしてこの世界の行く末に関して、ね」

t o b e c o n t i n u e d

恋姫十無双 外史へ舞い込む (後書き)

アリス「恋姫十無双の世界ですね！無印の方なんですか？」

はい

大丈夫ですよ、ちゃんと真の方も行きますから！！！！

その構成はもう考えてありますし

ア「あらはい。そういえば国名が「蜀」になっていましたね」

ええ。

でもあそこで「北郷軍」と書いたらわからない人はますますわからなくなってしまうかと思いましたが。

と、ここで皆さんに質問です。

11eyesとキノの旅、どっちを入れてほしいですか？

ア「なんとという唐突な質問ですか！？」

いやあ、結構前に残りの世界数言っただけど実際そんなになくってさ。だからこっちから提案してみました。

ア「それでこの二つですか」

はい

この二つは結構好きなんですが、

- ・「キノ」は何だか激しくなりそうにない
- ・「11eyes」は知ってる人少なそう

という理由で省いてましたけど、ここで入れようかと思えます。

この作品の感想はフリーなので皆さんどんどん進言してください！

！！

そしてついでに評ゲフンゲフン

「キノ」か「11eyes」か「両方」かの三つの中からお願います。

ア「次回、説明回乙」

ではまた次回

長き戦乱に苦しむ民草のため、この関雲長、非情の刀と相成りて官
匪匪賊を打ち倒す！

恋姫十無双　く信頼への道く

「じゃあお話を始めるわね？この世界の、外史の話はご主人様達にはしたけど、おさらいということ聞いてちょうだい」

貂蝉が話を始めた。

この世界は外史と呼ばれるものだ。

外史とは、正史という世界において想像されることで誕生する世界。

一刀はその正史からこの世界の主軸として連れ込まれた人間である。

外史は様々な「想像」で生まれる。

「もしもこんなことがあったら」「こうだったら面白そうだ」

そして、「三国志演技の武将がみな女の子だったら」

そう思った思いから、この外史はできた。

そして貂蝉はこの世界の観測者として存在する者、らしい。

「なるほど！じゃあ今度はこっちの話だな。聞いてくれ」

次に時風が話に移る。

いつもする話。

実に手慣れたものだ。

〔時風説明中〕

「というわけですか」

「確かに理論上は可能でしょうけど、本当に世界を食らうなんて・・・」

「それが「奴」なんよ。気をつけんとどないことなるかわからんよ」

「そういうことだったのね。翼人様がいらっしやるからいよいよこの世界の終わりが来たかと思ったわん！」

「・・・翼人？」

一堂が首を傾げて声を揃えた。

「観測者というだけあるな。どんなふう伝わってんだ？」

「……………最悪の悪魔だったわ……………」

「そっちな」

蒔風が顔に手を被せてうんざりした。

「私たちの前に現れたのは「赤銅の翼人」だった。ある外史からやってきたそれはすべてを支配しようとしたらしいわ。その時消滅した世界は11。私たちについても前任者の時代だけどねん。その時128人もいた観測者も、生き残りは一人しかいなかったわ。その一人がどこかに封印したらしい、という話だけどねん」

「……………ま、オレは違うがな」

「それは見てればわかるわ！まったく、あたしったら緊張でビクンビクンしちゃったわ！！」

「ま、待ちなさい！だったら一刀がその「奴」とかいう男に殺されるってどういうの!?!？」

「その「奴」とはいつ来るのだ!？」

すっかり貂蟬と話しこむ蒔風に華琳と愛紗がすごい迫力で迫る。

「おおう……ナイチチとウシチチがまさかのコラボ（ドカバガアツ!）……ここは外史。

つまりはパラレルの一つだ。多重世界でない以上、明日かそこらか?」

「そ、そんなに早くか!？」

「「奴」は早いぞ〜」

と、そこで蓮華が疑問を口にする

「だがそいつは所詮一人だろう?こちらの武将全員で攻めれば勝てるのでは?」

「「無理だな（ね）」」

貂蟬と蒔風がその考えを否定する。

華琳や星はその意味がわかってるようだ。

「まあそうでしょうね。翼人だというこの男と同等かそれ以上の力をもつ「奴」が相手では奇跡が起こらないかぎり無理ね」

「待つのだ！鈴々たちは一人でもさいきよーむてきなだから、みんなで戦えばきつと勝てるのだ！！」

「うん？張飛殿、では聞こう。百人以上の貂蝉に勝てるか？

「奴」はそれよりも強いぞ？この翼人と張り合うんだからな」

「う………」

この貂蝉、見た目は実に変態の極みだが、戦闘力は群を抜いている。おそらくこの城の武将の中でまともに交戦できるのは一人くらいか。

「と、いう訳だから舜ちゃんにはこの城にいてもらった方がいいわ」

「まあオレとしてはそうしてくれた方がありがたいが、多分ハイソウですかとはいかないだろ」

その言葉に愛紗、華琳、蓮華が頷く。

「どこの者とも知れぬ男をいきなり城の客、しかもご主人様のそばに置くのはあまりにも不自然だ」

「それに、あなたの言葉が真実かを知っているのはその筋肉とあなただけ」

「もしお前が「奴」とやらの仲間だった場合、取り返しがつかない」

「ふーん。北郷はどう思う？」

「そうだ・・・ね。オレ個人としてはいいけれど・・・」

「へタレ」

「うるさい！...！」

「皆何悩んでるのだ？そんなもん、戦ってみればわかるのだ」

「は？」「え？」「む？」

鈴々のいきなりの提案に愛紗たち三人がポカンとする。

「り、鈴々？お前今何と言った？」

「だーかーらー、愛紗たちは何をそんなに悩んでいるのだ？
一度思いっきり戦ってみれば、そいつがどんな奴か一発で分かるの
だ！...！」

という鈴々。
なんとまあ熱血な考えだ。

「それは……いい考えね」

「華琳殿!？」

「愛紗、私たちは一度敵だったとはいえ今は友人よ? 「殿」なんて言い方やめてちょうだい。せっかく真名を預け合っただから。それはそうと名案だわ。その男の実力を測ることもできるし、戦わせてみせましょう」

「ふむ……確かに、あなたの実力は私も見てみたいですからな」

「せ、星まで……」

「私も賛成だ。だがここは一刀の城。故に最終決定は一刀が決めてくれ」

蓮華の言葉に皆が一刀の方を向く。
そして一刀が口を開いた。

「時風がいいなら、それで」

「了承!!!!」

「なら善は急げよ。各軍から武将を一人ずつ選び、勝ちなさい。そうすればあなたを認めましょう」

「ではこちらはいまの話を皆に伝えてくる」

「それは各陣営でやりましょう。では数刻したら城内の庭園に集ま
つてから開催よ」

「オレはそれまではどうすれば？」

「じゃあオレの部屋にでも来てよ。面白い話が聞けそうだから。星、
朱里にこの話をしておいてね」

「あいわかりました。行くか、愛紗、鈴々」

「ま、待て星！なんで私でなくお前なのだ！！」

「さっきの話を細かく説明できるか？」

「う、ぐう……で、でもしかし……」

皆が各自部屋に戻る。

残されたのは一刀と時風のみ。

「……にしてもすごいな」

「なにが？」

「こつやってオレと二人にしてもらえるってことが。もう信頼されてるってことだろ？」

「さあてね。オレは隠密なんかが得意だから、自然と溶け込んでるだけかもよ？」

「本当は天の御使ってあんたのことじゃない？」

「天の御使いだあ？」

「オレがそう呼ばれてんの。いきなり現れて愛紗たちと出会って客寄せパンダみたいに祭り上げられて・・・ね。で、オレのいた正史の世界は「天の国」って言われてる」

「なるへそ〜。うん、いや、それは間違いなくお前だよ。この国のトップに立ったのも、この国を、みんなを導いたのも、な」

そう言いながら一刀の部屋に向かう二人。

「にしても大変な時に来たね」

「大変な時？」

「ああ、話してなかったな、実は・・・」

「え？どういうことだ？」

「気にするな。もし明日中に「奴」が来なきゃ当分は大丈夫かもって話だよ」

「????」

「っと、そろそろ時間じゃね？」

「そう・・・かもな。行こうか。案内するよ」

気付けば時間は結構経っていた。
かなり話込んでいたようだ。

~~~~~  
時風、一刀移動中~~~~~

二人が庭園につくと、そこには全武将、  
軍師が集まっている。  
そして中心には四人の将が立っていた。

「来たわね？では始めましょう!!!」

華琳の号令に愛紗が全員に話しかけた。

「この場にいる全員は新たに現れた敵の事を聞いたろう!!  
そしてこの男がそれを食い止めるべくやってきたのだそうだ!!!

だが我々としてはそう簡単に信じることはできないし、彼もその考  
えだ。

故に!!各軍の武将一名と本気の手合わせをし、その形を見て皆に  
決めてもらいたい!!!

武に通ずる者ならば、その構えを見ればわかるはずだ!!!!  
では、まず我が北郷軍からの武将は!!!!」

「この趙子龍が承る!!!!!!」

星が出て、己が槍「龍牙」をダン!!と地面に突き立てる。

「そして我が魏からは」

「魏武の大剣!!!!夏候惇かこうとんげんじょう元讓が相手だ!!!!!!」

その手に幅広い刀身を持つ片刃の大剣を握りしめ、肩に乗せながら  
夏候惇（真名・春蘭しゅんらん）が気合を入れる。

「そして私たち呉からは、甘興かんこう覇はを出すわ」

「蓮華様の命とあらば」

凜としてそこに立つのは甘寧かんねい（真名・思春ししゆん）である。

「あ、あの……わ、私たち董卓とうたく軍からは！！呂布奉先を出しま  
す！！！！！」

「……がんばる」

なぜかメイド服の董卓だと言う少女（真名・月ゆえ）が無口な少女を紹  
介する。

その少女は上がってしまったのか「えいちゃ〜ん」といつて人ご  
みの中に帰って行ってしまった。

紹介された少女はと言うと、その手にかの有名な方天画戟を持ち、  
犬を撫でていた。

「北郷」



「なに？」

「ホントにみんないるのね？」

「ああ。皆大切な仲間さ」

「よくもまあここまで引き込んだもんだ。このハーレム野郎」

「あ、あはは……………」

「そしてあのメイド服はグッジョブ（ガシッ）」

「わかってくれるか（ガシッ）」

そういつてから蒔風がその四人の前に出る。

と、四人のうち三人が引き、ひとりが残される。

その一人とは……………」

「私が一番手だ！！！！そして終わらせてやる！なあに！！！！この様なヒョロい男、一発ですよ華琳様！！！！」

夏候惇、春蘭だ。

蒔風がガシガシと頭を掻いてから春蘭を指さし、こう言った。

「最初に言うておく。オレはかーなり、強い!!!」

魏武の大剣だか何だか知らないが、それはお前の勝因にはならない」

「面白いことを言うなお前!!! いいだろう、特別に二発で倒してやる!!!」

そう言うて庭園の中心で二人が構える。

その光景を見て、星が愛紗に言った。

「おぬしはやらなくてもよいのか？今からでも変わるが？」

「わかって言うているだろう。私はあの時にもう負けていた」

あのととき、とは街で一瞬蒔風とぶつかったときだろう。

寸前で止まったとはいえ、あのまま肘がめり込んでいたらと思うと、恐ろしい。

「ふうむ・・・ま、私も負ける気はしないがね」

自信満々の星に、愛紗が聞こえない声で呟いた。

「あの男・・・強いぞ。本当に」

t o b e c o n t i n u e d

恋姫十無双 〱信頼への道〱（後書き）

いやあ、書けた書けた  
貂蟬って自分なかなか嫌いじゃないんですね。

アリス「そっちの人？」

ちがうわ!!!

普通にいい人やん。

変態だけ。

ア「まあそうですね。そういえば投票はどうなりました？」

まだ言いません。

まあ感想読まれたら一発ですけどね（笑）

メッセージとか飛ばしてくれてもいいですよ

ア「次回、大激突!!!」

ではまた次回

なのだ  
~~~~~  
!!!!!!

恋姫十無双 対戦・魏&北郷軍

開戦。

銅鑼の音が鳴り、同時に春蘭が飛び出していった。

「う、おおおおおおおおお!!!」

頭上高く振りかぶり、大剣を時風の脳天に振り下ろす。
訓練用の刃が潰れた物といってもそれは鉄の塊。
当たればただでは済まないだろう一撃だ。

「フンッ!!!」

バギヤッ!!!

だが時風は一步も動くことなく右の裏拳で真横にそれを弾いた。

「んなっ!?!」

「どうした、夏侯惇元讓。素手で剣に向かうのがそんなにおかしいか?」

「っ！ハアッ！」

弾かれた剣を握り締め、そこから真横に剣を薙ぐ。

それを時風が手をつけないで側転し、風車のようにかわす。

着地し、タンツ、と地面を蹴って時風が下がり構えなおす。

相手に向かって斜めになるように足を広げ、腰を落とし、上半身も半身になって両腕を構える。

ズンツ・・・という音がした気がした。

周囲の空気が重くなり、息が苦しくなってくる。

構える時風はなにかをしているわけではない。

ただ、構えているだけ。

だがその風貌はあまりにも重々しい。

春蘭にはまるで両足が地面に根を張っているように感じられた。

「ツ・・・・・・・・！！！」

春蘭がゴクリと喉を鳴らす。

(なんとという気迫………構え一つでここまでやるか!!!)

だが春蘭の顔は心なしかニヤケている。

彼女もまた「魏武の大剣」と呼ばれた武人。

強者との戦いに少なからず歓喜しているのだ。

と、時風の手が開き、チヨイチヨイと誘ってきた。

かかってこいよ

どの世界においても共通のジエスチャー。
そのメッセージに春蘭が応ずる。

「いづくぞオオオオオオオオオオオオ!!!!」

「………ツハアツ!!!!」

春蘭が時風の脚を狙って大剣を薙ぐ。

だがその攻撃を時風が飛び蹴りのジャンプでそれをかわした。

蹴りを放つ時風。

春蘭は攻撃が外れるとすぐに防御の態勢に入った。

その形は完璧だった。
蒔風のキックが一撃ならば。

「んっ！ダアッ！！V3！！」

蒔風がドカドカツ、と駆け上がるように左右の足で一撃ずつ蹴って
空中でのけ反りで一回転し

「反、転！キック！！」

そこからもう一撃、本命のキックをぶちかます！！

バガア！！

最初の二撃をその剣で見事受け止めた春蘭だが、三撃目のキックに
吹き飛ばされて仰向けに倒れる。

衝撃に顔をしかめ、目を開けたときには蒔風が跨がり喉元に指をま
つすぐに伸ばして突き付けていた。

「私の……………負けだ」

周囲がざわつく。
無理もない。春蘭は魏において最強の武将だ。
その春蘭がなにも出来ずに打ち負かされた。
これは相当なことだ。

「さ、次は誰だ？」

と蒔風が周囲を見渡して言うが、実際はこの戦い、冷や汗ものだった。

(手え痛えー！ー！！カッコつけて素手でやるんじゃないよ
！！見た目以上の力だなおい……こりゃフォルスが少な
らず入ってんな……
力の使い方に気づけば化けるぞこれ
手え痛い！ジンジン言うてるよ！?)

そんな蒔風の前に踊り出たのは北郷軍代表、星だ。

「クジ順では私だな。では、趙雲子龍、いざ参る！！」

「よし、やるか！」

そんな中

「あれには無理よ。諦めなさい。春蘭はよくやったわ」

華琳が声をかけた。

「か、華琳様！！！」

「あの男は確かに強いわ。それは認めざるを得ない事実よ」

「そ、それは……………」

「まあ、見てみましょう。あの男は一体どれほどの人間なのか」

「華琳様、まさか……………」

「いいえ、違うわ。でも……………」

「でも？」

（大きな器…………でもないわね。なにかを感じるわ…………本当に只者ではないみたいね。）

スパァン！！

蒔風の拳が壁に放たれ、無数の突きは掻き消され、星の身体が反動で軽く宙に浮く。

「んな！？」

「技名に「星」とつけなきゃよかったな。朱雀槍！！」

ガァン！！

蒔風が左前脇の柄を掴んで引き抜くと同時にそれが朱雀槍となり、星の龍牙と火花を散らした。

「フツハツ！んっ！セイツサイツ！！」

ガイン、キャンギン！カンカンギン！！

蒔風が槍を振るい、それを星が受けていく。その反動で星はいまだに地面に足を降ろせない。

ガンガンガン！ギイン！！

時風が星を弾き、庭園の木に向かって星が飛んでいく。

その木に足を付け、更に迫る時風を回避するように上方にジャンプし、当然時風もそれを追って跳び上がる。

皆が首を上げるほどに飛び上がった二人は城の屋根の上にもで上がり、更にそこからあちらこちらの場所に跳びはねて戦闘を続けていく。

「ど、どんな戦い方だ！！」

「すごいのだ！！あんなに速く、あっ！もうあっちにいる！！」

「おい！今度はあっちだ！壁走りながらやり合ってる……」

「は、はわわ……こ、壊さないようにお願いしま〜〜〜す！
「！！」

「「善処しようー！！」

「「守る気ないですよねえ！？」

「星！足を地面につけねば！！」

仲間からの声援に星が苦笑する。

「っ！タツ！！簡単に言ってくれる、なっ！！」

そう言いながら星が蒔風を振り切り切るように壁を走りまた別の屋根に跳ぶ。そして後続の蒔風に向かって再び星雲神妙撃を放った。

蒔風は朱雀槍で受ければよかったものを反射的に打滅星で対応してしまった。

必然、跳び移ろうと宙にいた蒔風の身体が反動で勢いを失う。

ガァン！！

そこに星が槍を振りかぶって叩きつけ、蒔風が地面に向かって落ちていく。

ドゥンンー！！

蒔風が地面を窪ませて着地し、追って飛び下りてくる星を見据えた。

「あ、マズ」

「いらっしやいませえ!!」

落ちてくる星に蒔風が槍を突き出す。

それを星が必死に丸くなって空中一回転し避け、そして

「ハアツ! よつ!!」

「おお!? すげえ!!」

朱雀槍の上に飛び乗ったではないか。

これには蒔風も驚いた。

「じ、実戦じみた訓練でやるものではないな……」

周りはすごいすごいと騒いでいるが当の星は心臓バクバク、冷や汗が背中を伝っていた。

顔には一切だしていなかったが。

星が槍から飛び下り、蒔風が槍を放り捨てた。

「夏侯惇がV3だったから、今度はっ!!」

蒔風が右腕を左上にまっすぐ伸ばし、それを右上にスライドさせる。

「ライダー……」

そして入れ代わるように左腕を右上に突き出し、ベルトの風車、タ
イフーンが回りだす!!

「変、身!!トウ!!」

蒔風が高く高くジャンプし、仮面ライダー一号に変身した。
そしてその状態から星に向かって

「ライダーー!!パンチ!!」

ガゴォ!!

星はとっさに槍で防御するがあまりの威力に防御ごとすっ飛んだ。

蒔風のその姿に周りの皆も騒然とする。

だが市街で一度変身を見た星は一切怯まず時風に槍を振るう。

が、その槍を時風は受け止め、捻り上げる。

星の手から龍牙が離れ、時風が槍を星に向ける。

そこで動きが止まり、星が両手をヒラヒラと上げた。

「降参だ。負けを認めよう」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおー！！？？

周囲がざわつく。

春蘭に続き星までもが負けるとは誰ひとり想定していなかったのだ。

星が退場し、時風が変身を解く。
それと同時に銅鑼が鳴り響いた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

恋姫十無双 〱 対戦・魏&北郷軍〱 (後書き)

アリス「まずはこの二人ですか」

はい。

で、次に呉、そして最後に董卓ですね。

アリス「一体どうなるのやら……」

そしてここで重大発表!!!

この「世界をめぐる銀白の翼」の今後!!!!!!

ア「おお!?!」

この話、実は……

まだ……半分も書いてないです。

ア「なにいいいいいい!?!」

この続きはまた次回!!!!!!

熱く滾る魂 雄叫びと共に解き放て
決められたルールを打ち壊して
駆け抜ける 自由へと

恋姫十無双 〱 戦闘・呉&董卓 〱

星が退場し、蒔風がさあ次はと首を鳴らす。

と、そこで三回目の銅鑼が鳴り、変身を解いた蒔風に一閃が迫る。

のんびりとした動作で振り返りざまに腕を出してそれを受ける蒔風。その腕には天地陰陽が現れており、その鞘で呉代表、思春の攻撃を防いでいた。

「暗殺者か……………」

「甘興覇！参る！！」

「思春！頑張つて！！」

「はい！蓮華様！！」

蒔風から離れ、剣を構えてビタリと止まる。
蒔風もついに「天」を抜き、構えた。

そして二人が動かなくなる。

「む？なぜ二人は動かんのだ？秋蘭」

「姉者……なにも姉者みたいにぶつかるだけが戦いではないのだぞ？」

「そうか？私にはさっぱりだ！！あっはっはっは！！！！」

「この脳筋が……」

春蘭、秋蘭、桂花の三人が言葉を漏らす。
他の陣営でも同じような会話がされている。

二人は互いの一瞬のすきを見つけようとしている。
そのために一切動かず、ただ剣をソツ、と構えて相手を見据える。

「おかーさん、おなかへった~~~~」

「そうねえ……まだ時間かかりそうですし、何か持ってきますわね」

黄忠（真名・紫苑^{しおん}）の愛娘、璃々が母に抱き付き、ご飯をねだる。

「そういえばそんな時間かあ」

「おなか減ったのだ!!! 鈴々も何か取ってくるのだ!!!」

「それにしても一体いつまでやっているんだ？」

「さあ……」

いまだにこの二人は動いていない。
さつきから微動だにしていないのだ。

思春は隠密機動のプロだ。スパイ、諜報、お手の物。暗殺者として
は一級品だ。

それを前にして構え、一切の隙を見せない蒔風。

一瞬の油断や隙が命取りになる、そんな場面が目の前に広がって

た。

その光景に皆三分ほどは驚愕していたものだが、ここまで長引くとさすがに飽きが来る。

皆で茶をしたり寝そべったりと思い思いの行動をとってり始めてしまっていた。

だが当の思春はそんなのほんとした心境ではない。
心を無にし、目の前の男だけを見る。

もしその身体に少しでも変化があれば即座に斬るつもりだ。

(・・・・・・・・・・・・・・・・)

故に無心。

だが深層ではこう考えてもいた。

(この男・・・・・・・・一体どれだけの・・・・・・・・つ、いかん、やられる・・・・・・・・長時間、それこそ何日でも粘って好機われらをうかがう暗殺者だが、この男の前に立つだけでかなりの疲労だ・・・・・・・・本当に何者だ?)

そんな思春の推測。

冷や汗が垂れるが拭くことなどできない。

それほどまでに思春を追い詰める当の蒔風はと言つと……………

(……………ハッ!!やべ、少し寝てた)

少し寝てた。

(やべーこの均衡どーにかしないとなあ……………ちよつと脅かすか?)

そして蒔風が少し動く。

だがその動きに思春は隙を見いだせない。

(こ、この男……構えのまま近づいてくる!?)

ジリジリと

本当に少しずつだが

蒔風が距離を詰める。

最初は五メートルほど離れていた。

だが今は四メートル五十センチ……四メートル三十……

四メートル……三メートル七十……

そしてさらに数十分の時間をかけて思春と蒔風が超至近距離にまで近づいた。

もう一メートルも離れていない。

~~~~~!!!!!!!!!!)

(まだ耐えるの~~~~~?フアふ……ねむ……まあ……)

シュカン!!!!!!

「これでおわりだね、悪いな」

トスッ

ここで初めて周りの者が気付いた。  
蒔風が倒れる思春を支え、地面に寝かせる。

この静かな攻防を最初から最後まで見ていたのはこの中でも数名だ。  
ほとんどの物は見てもいなかった。

まさに、暗殺者としての戦いであった。

「オレさんの超得意分野でここまで張りあつとはこの子もやるなあ  
！！！！！」

「思春、よくやったわ」

「う……蓮華様……申し訳ございません……」

「いいのよ。彼の実力は知ったわ。十分にね。あなたの戦い、確かに見届けたわよ」

「あ、ありがとうございます！！」

(い、言えないわ……途中で飽きてて見てなかったなんて言えない……)

呉メンバーも下がり、観戦モードに入る。なぜなら次は……

「さあ……この武芸会もついに最終戦！！！！ことごとく勝利していきこの男を止められるのはもうこいつしかいない！！！！」





そして二人が構える。

三国最強と世界最強。

超規格外がここでぶつかる。

皆が固唾を飲んでその光景にくぎ付けになる。

恋が武器、方天画戟を肩に乗せて立つ。

蒔風も獅子天麟を組み頭上で回し、地面に突き立てて腕を乗せる。

数秒にらみ合う二人。

ここからどう動くのか、とみなが見守る中、恋が方天画戟を下ろす。  
蒔風もまた、獅子天麟をバラして背中の鞘にしまった。

「ど、どうしたのだ恋よ。調子でも悪いのか？」

「蒔風もどうしたよ。なんで戦わないん？」

愛紗と一刀が恋と蒔風にどうしたのかと聞く。  
二人はすぐに答えた。

「ダメ。．．．たたかったら、なくなる」

「なにがだ？」

「この城がだ。この庭園じゃ狭いつてこつた」

「はい？」

「このまま戦ったら．．．この城、壊れる」

「だからここではやれないよ。にしても二回も仕留められそうになつた時は焦つた」

「そつちこそ、三回も仕留めておいてよく言う．．．」

「な、何を言ってるんだ？二人は」

「多分ですがお互いの目の先などを見て動きを予見し、その中で何回か戦つたのではないのでしょうか？」

達人にもなると実際に拳をたがえずとも想像のうちで相手と戦える者がいるそうですから」

「なで、その想像の中で城はどうなったって？」

「ボロボロの」「グシャグシャだ」

「は……ははは……」

「びびりするよ」

「場外の荒野なら、思い切りやれる」

「よし、じゃあ行こう」

「え！？まさかそこまでやるのか！？」

「そりゃあ……強者として戦ってみたいし」

「恋も。こんなに強い奴、初めて」

そう言って話し合う二人に、一刀と愛紗、さらにはその場の全員も

啞然とし、思った。

『こいつら規格外すぎ……』

t o b e c o n t i n u e d

恋姫十無双 〱 戦闘・呉&董卓 〱 (後書き)

アリス「さて、前回言ったことを説明してもらいましょうか？」

この時がついに来てしまいましたか……この「めぐ銀」の物語はまだまだ終わりません。

全然終わりません。

終わる見込みがありません。

ア「最終回はもうできてるんですよね？」

そうですね、頭の中に。

でもだからと言って最終回がすぐとは限らない……!

ア「ええ……!!？」

ですからもし……!

「こつこつ案があるんですけど使ってください」

というモノがあり、そしてそれを提案されても、どれだけ先のことになるかわかりやあしないのです……!

それにあくまでも蒔風の連れのな者は「奴」以外には出す予定はありません。

もし新キャラの提案があるのならば、さらにさらにさらに後、オリジナル世界に行った時くらいですかね？

ア「……………まじで?」

マジマジ。

でもまあ案外すぐかもね。

あるときには「めぐる世界はあと2.5こあります」とか言ったけど、実際にはあと十くらいしかないし。

ア「もうそんなに!?!」

それでもまだまだ先ですし、二百話は超えたいところですからね。

……………まだまだ……………まだ終わらんよ!?!?!  
そんなこのお話をこれからもよろしく!?!?!

ア「次回、時風、認められるのこと」

ではまた次回

北方常山の趙子龍、主の求めに応え、いざ参らん!!!

恋姫十無双　　突然の襲撃、怪我の功名？

ひと通りの鬪いが終わった。

が、時風と恋の二人はこれから広い演習場で決着をつけると言っている。

そこで「じゃあみんなでいこうか」という一刀の発言に早速居残り組と観戦組に別れることになったのだが……

さすがに城から武官文官がそろっていなくなるわけにもいかないだろう。

その組み分けに少々揉めている。

「鈴々は絶対に行くのだ!!」

「待てよ！あたしだって見に行きたいぞ！それに鈴々は紫苑となにか食うもん取りにいったんじゃないのかよ!？」

「こつちの方が面白そうなのだ！璃々の面倒も翠に任せるのだ!!」

鈴々と馬超（真名・翠<sup>すい</sup>）がどっちが残るかケンカをしているし、ほかのところでも同じようなことが起こっていた。

名目上は捕虜扱いの魏、呉のメンバーは全員が出るようだが。



「星、おぬし休んでいたらどうだ？」

「いやいや大丈夫だ愛紗よ。私は見に行くぞ？こんなに面白そうなもの、見逃したくないからな」

「私は恋が大丈夫が心配で心配ででな。怪我はしないか？とかだな・・・」

「はいはいわかりましたよ母さんが」

「誰が母さんか!!」

その光景を蒔風、一刀、恋の三人はのんびりと眺めていた。

「北郷、オレとしては早めに行きたいんだぜ？」

「待つてやろうぜ・・・」

「ご主人様。恋もそろそろお腹が空いてきた・・・」

「みんな~~~~あまり時間かけないでね~~~~」

だがそんな一言で解決するものでもない。

だがまあそれもそうである。  
ここにいるのは一騎当千の武将だ。  
誰も譲らないのは仕方がないのかもしれない。

「よし！じゃあくじ引きにする！！それなら文句はないな！？」

ついに一刀が提案し、主がそう言うならとしぶしぶ従う。

そうとなればくじの材料でも探そうと庭園を出ようと踵を返す一刀。  
だがそれに時風が待ったをかけた。

「北郷、動くな」

「な、なんだ？」

「複数の木偶人形。あと火薬の臭い」

「は？」

「全員伏せる！！爆弾だ！！！！」

バツ！バババババツ！！

「北郷一刀の死で世界の浄化を!!」

「なっ!？」

蒔風が全員に警告を飛ばすと同時に白装束に身を包んだ何者かが複数人、城壁の上などといった高い位置に現れ、細い筒状の物に火のついた紐が繋がっているものを山なりに放り投げてきた。

「ダッ、ダイナマイト!？」

「そんなものまで引つ張り出してきやがるかよ!？」

そこからの蒔風の行動は早かった。

ダイナマイトは庭園すべてを三回は吹き飛ばすくらいの量がある。

それに対し蒔風は高く高くジャンプして蹴り飛ばし、落下しながらも蹴り、又は投げ飛ばした。

総数にして79個ものダイナマイトはすべて打ち上げられ、花火と なって大爆発を起こした。

最後のに至っては地面スレスレでキャッチし、上空にブン投げるほどにギリギリだった。



「ほかの奴らはもう逃げたか。まあ？お前から話を聞こう。誰の差し金だ？」

「ほ、北郷一刀はこの世の歪み……それを正すは我らの正義……！！！！」

蒔風が睨みを効かせて問いかけるも、白装束はぶつぶつとうわ言を繰り返して聞いてもいない。

「どうやら「奴」ではなさそうだな。「奴」はこんな粗末な人形は作らない」

「どうやら佐治ちゃん達が送った刺客でしょうね。よおっぽどご主人さまを殺したいんだわ」

「お前も大変だよなあ？」

「あ、あはは」

「こいつは呪術で形作られた人形。ここで消さないとな何をするかわからないわよん？」

「ま、そこらへんの処理は任せろよ」

そう蒔風、貂蝉、一刀が話し、周りの武将が白装束をたたっ切ろうとする。

だがその瞬間

「北郷一刀……その周りの者の一人でも多く消すべし!!!」

そう叫んでから何かを投げつけ、そして黒い霧となって消滅した。バサリ、と白い布がその場に落ちる。

だが蒔風をはじめ一刀、貂蟬はその男が何を投げたのかしつかりと見ていた。

そしてそれが飛んでいく方向には恋の飼犬、赤兎、そしてそれとじゃれている璃々がいる……!!!!!!

「や!!め!!!!ろおおおおおおおおお!!!!!!」

璃々たちに投げられたダイナマイトの導火線はもうすでに残り一センチもない。

もはや一刻の猶予もない。蒔風は全速で駆けだした。

(加速開翼!!!!!!)

バツ!!!!!!ゴオウ!!!!!!

一筋の銀白の光となった蒔風が璃々の元に到達する。



だが、すぐに声が聞こえてきた。

「うお~~~~~。あぶなかった~~~~~」

「かった~~~~~」

「ワン!~!~!」

「先の世界で身に付けといて正解だったわ~~~~~」

「たわ~~~~~」

「ワンワン!~!~!」

爆心地の煙が晴れ、その場が徐々に見えてくる。

時風がひっくり返っており、その頭の上に赤兎が乗り、腕の中では璃々が傷一つ無くポーズとっていた。

「り、璃々っ!~!~!ああ、ありがとございます!~!~!」

「ガキに死なれちゃ寝覚めが悪いんだ。特に礼はいらんよ」



ビッ！！と時風が立ち上がってから左腕の血を払って答えた。

その手の傷は爆弾から璃々たちを守った時の負傷である。

「呂布！！！邪魔が入ったみたいだから、仕切り直そうぜ！！！」

そう言っている間に戦う気満々の時風に、恋が首を振り、こう言った。

「赤兎、助けてくれた。恋、お前の強さは凄くわかった」

「んあ？こんなんじゃないよ。まだ強くないよ」

そついう時風に華琳が訊いた。

「あなたは璃々の命を救った。それでなぜだめなの？」

「そりゃ駄目さ。「命を救う」ってことは「その命が危険に晒された」ってことだ。そんな状況を作り出した時点で、オレの力量不足さ。」

そもそも、オレがああ男がまだ爆弾持ってたのに気付けりゃこんな

事にやなつてなかつたし、そんな失敗で評価を得ようとは思ってない」

「だがそんなことを言つてはキリがないのではないのか？」

そう反論する星の言葉に、蒔風が少し残念そうな顔をする。

「そう、確かにキリがない。だがいかんせん、これがオレの正義だからね。無理だとわかつていても・・・いや、無理だとわかつているからこそ、オレはそれを成し遂げたい。できないって言われることができたら、すげえじゃん？」

「・・・・・・・・・・蒔風、いや、舜。ありがとう」

「どうした北郷。急に下の名前で呼んで」

「今の一件で、お前の人となりは十分に分かった。お前にも、オレの事は一刀と呼んでもらいたいんだ。これがオレの、この世界での真名みたいなものだから」

「そいつぁ・・・・・・・・受け取らないわけにはいかないなあ。よろしくな、一刀!!」

「ああ!!!!」

そう言つて硬い握手をかわす二人に、他の武将達も集まっっていく。

「ご主人様があそこまで言うからには我々も真名を預けるほかありませんね」

「い、いや、別にそこまでしなくても」

「そうでなくても先ほどの行動には皆感心し、認める者がありました」

「は、はあ……」

「皆も、依存はないだろう!!」

「とーぜんなのだ!!あれだけすごい見せられたら認めるしかないのだ!!」

「私は娘を助けられています。本当にありがとうございます。そんな人に真名を教えないのは失礼ですわ」

「それにしても、どんな速さだ。私の目をもってしても見えなかつたぞ」

「そうか？あたしには見えただぞ？こう、バーツ、と走って行って腕を突き出してあれを止めたの」

「よ、よりよしきゅおねぎやいしましゅ……!!」

「朱里、噛んでおるぞ?」

「は、はわわ！……！」

そう言っつて蒔風に真名を教えた北郷軍。  
と、そこに華琳と蓮華が話しかけた。

「我々としてもあなたを認めざるをえないようね。華琳よ。覚えておきなさい」

「あの武、あの心、どれをとっても劣ることのないものだった。我々の真名も預けようと思う。これは我々全員の意志だ」

「あ、ありがとう……（やべえ……覚えきれるかなあ……心配になってきた……）」

そんな小さな心配をしている蒔風。

それはともかく、無事に皆に受け入れてもらい、蒔風はほっと安心した。

だが

「ぬぐおおお！……！！……？……？……？」

急にそんな大声をだし、皆がびっくりする。  
その背中には短刀が三本ほど刺さっており、城壁にはさっきの白装束が踵を返して逃げ出していた。

「しゅ、舜!!!背中背中!!!!!!」

「刺さってる!!!!!!」

「大変だ!!!!急いで手当を!!!左腕だつて.....」

「.....のやる.....」

「舜殿？」

「ど、どうしたんだ舜？」

星と一刀が蒔風におそろおそろ声をかけると、蒔風が爆発した。

「てめえらしい度胸じゃねえか!!!!地の果てまで追っかけてブツ飛ばす!!!!!!つかこれ一本も急所に刺さつてねえじゃねえか!!!!!!やるならちゃんとやれや!!!!!!」

おもっクソ元気だった。

そのまま走りだして白装束を追いかけるほどに。

その姿は妙にシユールだった。

「・・・・・・・・・・嵐のような者だな・・・・・・・・」

「なあ貂蟬、翼人ってあんな奴ばっかなのかな？」

「わからないわん・・・・・・・・でも変な人ねえ」

「お前に言われちゃおしまいだな」

その日、蒔風が帰ってきた頃には日はとうに沈んでおり、自分の部屋がわからなかった蒔風はとりあえずどこかの蔵で一晩を過ごした。

「あれ？どうしてこうなった？」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

恋姫十無双　　～突然の襲撃、怪我の功名？～（後書き）

・・・・・・・・・・いいのか？こんなんで

アリス「少なくともあなたは自信持つて下さいよ・・・・・・・・・・」

さてさて、ここからどうなるのか

「奴」は明日来るのか！？

ア「次回・・・・・・・・・・なんですかこれ？」

いいから読め

ア「次回、次の日・・・・・・・・・・まんまかッ！！」

そっだッ！！！！ではまた次回ッ！！

この錦馬超！倒せるものなら倒してみな！！



恋姫十無双　く午前の部、「奴」の可能性く

「なにをやつておるのだお主は」

蔵で眠っていた時風を起こしたのはそんな声だった。

目の前には星があり、時風はなにかの壺を抱いて寝ている。

「うおふあよ〜〜そして夢の世界へ〜〜・・・」

「いらいら、こんなところで寝るな」

再び寝ようとしている時風を星が起こす。

なんでもここは星がとっておきのメンマを保存している蔵らしい。

「メンマン?」

「メンマだ。まだ目が醒めていないみたいだな。顔でも洗ってこい」

そう促されて時風が洗面所を探して城内をさ迷い始めた。

.....

「じじは……どじにゃ……？（ボフッ）」

「はっ、はわ……ッ！？って、舜さん？」

蒔風がやって来たのは玉座のある謁見の間だ。  
今は軍師達が書類整理や白装束との戦いの準備をしている。

そこに蒔風が現れ、眠気に負けて倒れ込み、顔が諸葛亮（真名・朱里<sup>ゆり</sup>）の帽子に埋まったのだ。  
そして床に倒れてあぐらをかいて座り込んだ。

「な、なにしてるんですか？」

「洗面所……どじ？」

「それならあっちの方よ。全く、ホントに昨日あれだけのことやった人間なの？」

元董卓軍軍師で今は一刀の世話係も兼任している賈馱<sup>かく</sup>（真名・詠<sup>えい</sup>）  
が呆れた声を上げる。

「ふい。ありがと……」

そう言つてヨロヨロと歩いていく蒔風。  
まだ頭がはつきりしていないようだ。

それと同時に蒔風が出て行つた方とは逆の方から呉の軍師、陸遜  
（のん 真名・穩）と魏の軍師の佳花が資料を持ってやって来た。

「あれえ〜？さっきまでそこに誰かいましたかあ〜？」

非常にのんびりとした口調で穩が首里に聞くと、蒔風がさっきまで居たことを告げた。

「ええ！？それならもつと早く戻ればよかつたあ〜！」

「あんたあいつが気になるの？」

「それはもう！！世界、翼人、不思議な力！！好奇心がピンピンですよお〜！」

穩の知的好奇心はかなり高い。  
確かに蒔風なんかは恰好の対象だろう。

「つたく、華琳様に言われなければなんで私があんな野郎なんかに真名を……」

「あ、あはは・・・じゃあ始めましょうか。ここは・・・」

.....

「ふっ！ハアツ！！っと、準備体操はこんなもんかな？鈴々！始めようぜ！！」

「応なのだ！！・・・お？あそこにいるのは・・・しゅーん！！どーしたのだー！！？」

「鈴々じゃないですか。朝から訓練です？」

次にフラついたのは昨日対戦をした庭園だ。今は翠と鈴々しかない。

「そーなのだ！舜もやるのだ？」

「今はまだ眠いからパスです（ー）（ノ）  
後でまた来るからそんな時にやりましょうや」

「待ってるのだー！！」

「待ってるぞー！！。さ、鈴々！まずは十本勝負だ！」

「受けてたつのだ!」

.....

「ここかー? (ガチャ)」

「ああらん、舜ちゃんあたしになにか用かし (ボタン)」

「洗面所どこだろ.....」

.....

「ねむい.....洗面所どこだよ~~~~」

「舜じゃないの。どうしたの?」

「どつやらまだ眠そうだな」

蒔風が何処かのテラスのような場所に迷い込む。

そこでは蓮華と華琳がお茶をしており、蓮華のとなりには妹の孫尚香（真名・小蓮）もいた。

「洗面所ってどこかね〜〜〜」＝＝（……………」

「なんて顔してんのよ。洗面所はあなたの歩いてきた方向にあるわ  
「よ

「とおりすぎたか〜〜〜ふにふに、ありがと〜〜〜」

「お前本当に時風か？昨日とは別人だぞ……………」

「じゃね〜〜……………」

ぐらぐらと頭を振りながら時風が戻っていく。  
あ、今頭木に打った。

……………

「ん？舜！どうしたんだ？」

「およ、一刀。洗面所ってどこじゃ？」

「洗面所？すぐそこだぞ？でも確かお前いろいろ操る技持ってるって言っただけだ？」

「……………おお！？」

「気付かなかったのかよ！！！！」

「ここは一刀の部屋。」

「今この部屋には一刀のほかにはメイド姿の董卓（真名・月<sup>ゆえ</sup>）がいるだけだ。」

「時風がパシヤンと圧水で顔を洗い、その水を窓から庭に捨てる。」

「そういえば時風昨日どこで寝たんだけ？」

「どっかの蔵だったな、うむ」

「それは……………あとでちゃんと部屋を用意するよ……………」

「サンキューー」

「時風が一刀の後ろに回り込む。」

「今一刀は処務仕事をしている。この国の太守ともなると懸案事項がたくさんあるのだ。」





「来たぞーーーーー」

「お？舜！遅いのだ！！！」

「うちらもう二十三本目だぞ！！！」

「それやりすぎじゃねえ！？」

蒔風が庭園につくと、翠と鈴々が座つて水と飲んでいた。少し離れた所には元董卓軍武将、張遼（ちやうりやう真名・霞しあ）が観戦している。

どうやらまたすぐに始めるようで、蒔風がその隣に座る。

「で？どっちが勝つてたの？」

「鈴々が12勝で翠が11勝やな。さすがに鈴々の方が強いなあ」  
そんなことを離しながら目をやると、鈴々が翠の十文字槍、銀閃を弾き、勝利を収めていた。

「やったーーーー！！鈴々の勝ち越しなのだ！！！！！」

「だあーーーー！！！！負けたあ！！！！！」

「なあなあ。あんたはあの二人どう思うん？」

「ん？そうだなあ。鈴々はまだ荒っぽさがあるがそれを補って余りある豪快な攻撃で相手を叩いているな。

それに対して翠はとてもきれいな演武を舞っている。だがまだ粗削り。極めればもっと強くなるな」

「そうやのうてえ、女の子としてや！！！」

「あん？普通に元気いっばいだな、うん。ああいう子は好きだぞ。どっちもかわいいしな」

「おお？あんさんもかずちんみたいに節操なしかあ？」

「え？ああ、違う違う、恋愛感情はないよ、オレは。誰に対してもそうだと思うよ？」

「はい？」

「お？りんりーん、今度はオレとやろーぜ！！！」

「望むところなのだー！！！！！」

蒔風が鈴々のところに駆け寄り、翠と入れ替わりになる。

「なあ舜、あのときやった早いの見せてくれよ!!」

その時唐突に翠がリクエストしてきた。

あのときの早いのは昨日蒔風が爆弾に走った時の加速開翼だろう。

「見たのか!? あれが!!」

「あ、ああ。確か霞も見えてたって言ってたぞ? なあ!! 霞!!」

「うん? ああ、そうやな。確かに見たで? でもほかの皆はだーれも見えんかったいうねん」

「お前ら……それはすごいことだぞ……あのスピードが見えたってことは、あの速さで動けるってことだ!!」

「すぴーどっ」

「速さってこと。よしよし楽しくなってきた!!! 翠!!! 霞!!! 特訓だ、あの速さで動きたいか!」

「確かにできるよつになれたら面白そうだけども」

「ホンマに出来るんか？そんなん」

「何を言う！！速さに置いて一位二位の二人ならこの領域に来れるはずだ！！なあに安心しろ、結構簡単なはずだ。この世界には”フォルス”が混じってるんだからな！！！」

そう言つて二人を庭園の真ん中に連れ出し、早速やるつとはしゃぎだす蒔風。

「で？どうするんだ？」

「こつするんだ。力を借りるよ！！」

蒔風の手にかブトゼクターが現れ、腰にはベルトが装着される。

「変身！！キャストオフ！！！」

《Henshin・cast off Change Beetle  
e!》

「おお！？」

「そついえばそれなんなん？」

「仮面ライダーカブト。他の世界の仲間の力さ。制限時間があるんだ。早速始めよう！……！」

こうして蒔風の超加速講座が始まった。

「まずは目で追ってみてくれ。行くぞ？」

《Clock up》

蒔風が消える。

だが二人の眼にはしっかりと見えていた。

「さて、なにをしたでしょうか？」

「後方かかえ込み2回宙返り1回ひねり」「」

「エクセレンツ！！正式名称・ツカハラだな。ムーンソルトと言った方がなじみがあると思う」「」

「むーんそると?」「」

「なんでもないよー！。見えているようだから次は動いてみよう」



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

恋姫十無双 午前部、「奴」の可能性（後書き）

アリス「時風エグイ」

彼、何かってーとSっ気あるんで

ア「あの二人が悲鳴上げてる時点でそうとうなことしてますよね！？」

制限時間15分だもん。

余裕を持って10分で終わらせるつもりだよ？彼。

ア「がんばってー！ー！ー！ー！ー！次回、午後部」

ではまた次回

ドキッ！乙女だらけの三国志演義！！



恋姫十無双　く午後の部、特訓の成果、夜の散歩く

昼食後、蒔風は特訓の成果だと言って何人かを庭園に集めた。

「それで、どんな特訓をしたので？」

「（ニツ）超加速」

星の質問に蒔風がしたり顔で答える。  
そして翠と霞に顔を向けた。

「さ、やってみようか！」

「」「おっ！ー！」「」

そう言って二人の姿がフツ、と消える。

「はっ。」

「ど、どどこにー！？」

「わからん……」



その後愛紗と朱里がダッシュでこっちに走ってきた。  
それに対して時風は

「よーいドンー!!」

と号令を出して、翠と霞が再び走り出した。

「んな!?!」

「二人共消えちゃいました!?!」

「落ち着け。実はかくかくしかじかでな」

「なに?それは本当か!?!」

「どつやら本当のようだぞ、愛紗。確かにこの目で見た。といても見えなかったのだが」

こんなこともあって翠と霞が「風足」を身につけたことはすぐに城中に知られた。

「それは他の武将達にも出来るのかしら?」

華琳が時風にそんなことを聞いてきた。  
それもそうだろう。

全員が「風足」を習得すれば怖いものなしだ。

「ああー、残念ながらそりゃあ無理だ。あの二人だから出来た  
んであってそうホイホイ出来るもんじゃないのさ。

しいていうなら「文官に戦場に立て」と言つものさ」

「そう・・・」

華琳が少し残念そうにする。

「なに気にするな。その分鈴々や春蘭のように力の強い者もいるん  
だ。相性だよ、相性。がっはっは！」

そう言つてバンバンと華琳の背中を叩いて時風は一刀の部屋に歩いて  
いってしまった。

「奴」が来るかもしれない時間になり、その周辺を固めるためだ。





「来ない来ない。くそつたねなことだけど、「奴」のことは一番よく知っているからな」

「??？」

~~~~~数時間後~~~~~

日も沈み、空に星が輝くころ。

「う、ご主人様~~~~い、いらいら、いらっしゃいますか？りよ、料理を作ったので、少しどどど、どうでしょうかっ!？」

入ってきたのは料理を持った愛紗だ。

がんばってがんばって、も一つおまけに頑張って作ったチャーハン（四回目）を持ってきている。

だがそんなことよりも重大なことが目の前手起こっており、愛紗は冷静に、それはもう冷静にチャーハンを持って青龍円月刀を構えた。

「仕事まだ終わってないのにどこ逃げるおつもりですかッ！……！」

窓から脱出しようとする蒔風と一刀に向かって叫んだ。

「い、急げ一刀……！鬼が来た……！（窓の外から一刀を引き上げる）」

「ひ、引っ張ってくれ……！早く……！（なんとか窓の向こうに抜け出す）」

「にいがあすかああああああああああ……！（ドカバリーン……！と窓を砕いて飛び出す）」

「き、来たっ……！」

「おい一刀……！誰だよこの時間は見回り来ないから抜け出してもいいって言ったの……！」

「まさかあのまま愛紗が料理やってるとは思わなかったんだよ……！」

蒔風と一刀は走る走る。

だがそれも長く続かない。

いつの間にか走っているのは城壁の上にある通路だ。
後ろにはまだ愛紗がついてきている。

「仕事ほっぽってどこ行くつもりですかっ！……！」

「しゃーねえ、一刀、一言何か言ってやれ」

「ええ！？えーとぉ！？」

蒔風が走りながら一刀の身体を掴む。

そしてそのまま二人の身体が宙に浮いた。

何事かと蒔風の方を見ると、その背には美しい銀白の翼が羽ばたいていた。

「夜間飛行とまいいまーす」

「愛紗ごめん……でもあの量は無理だ……！」

「あつ！！！！・・・・・・飛んで行ってしまった・・・」

「おお、美しい翼だな」

「星！そこにいたならどーして止めてくれなかったのだ！！」

愛紗が見上げる先には見張り台で酒を飲んでいる星がいた。

「まあまあ落ち着け。ほら、これでも呑め」

「いつから飲んでるのだ、おぬしは」

「それこそ気にするな。呑んでもないと、怒りが溜まってしまっぞ？」

「・・・ふう、それもそうだな」

そう言っつて星の隣に座り込み、少しだけすすする愛紗。

見上げる先には満天の星。

そしてキラキラと蒔風の羽根が輝いていた。

「美しい翼だったな」

「そうだな。だがあんなことに使われては困るぞ」

「いやいや、私としてはとても面白くなってきたぞ？今一度、舜とは論議を交えたいものだ」

「そういえば……舜が言うには「奴」とやらは今日来るはずでは？」

「来ないのならばそれでもよいではないか。彼がいれば大丈夫だろう」

「そうであるといいがな、ふう……………」

一方上空、一刀と蒔風

「うおーー、飛んでる……………」

「この世界に翼人の伝承は一般には無いっばいからな。いやー、羽根を伸ばすとはまさにこのこと」

一刀は蒔風の背に乗っている。

風を受け、一刀は上着を脱いでいる。

「にしてもあつついなー」

「そうだねえ。大体秋くらいなのにねえ」

「蒔風はいろんな世界を回ってるんだろ？何か面白い世界なかったのかよ」

「面白い世界つつたらそりゃ全部さ。面白くない世界なんかないよ。っと、一旦降りるか？どこがいい？」

「じゃあ郊外にある川にいこう。いいところなんだ」

一刀の提案に乗り、蒔風たちはスイーっと飛んで行き、森の中の川に着いた。

小さな滝のようにもなっており、そばにある大きな岩がいい感じの形をしている。

「いいなここ。静かだ・・・月が明るい」

「な？お気に入りなんだ、ここ」

そう言って二人で話し始める。

「世界について、ねえ・・・一つだけ言えるのは、消えていい世界なんてないってことだな」

「それが……誰かのエゴで作られた……こんな外史でもか？」

「誰かのエゴ？」

「この世界はある程度オレの思い通りになるって左慈が言ってたんだ。だから時々嫌になる。彼女達の想いも、オレの都合でああなったのかな……って」

「一刀……このバーカ。喰らえデコピン」

「バ！？アタッ！」

「お前はその事実を知ってさ、どう思ったよ」

「そんなんじゃないと思った。だけど、そうだったらと思うと、やり直したくなったよ」

「ふーん。で、結局思いどおりにするってのは嫌だと思ったんだろ？」

「ああ……」

「だったらその通りなんじゃねえの？この世界は最初からお前だけの思い通りではないってことじゃね？お前がそう思ってるってことはね」

「あ……そうか……」

「自分の思い通りの世界作るなんてな、「奴」だけで十分だったーの」

「ありがとうな……」

「なーに真面目腐った顔して考え込んでんだか。オレが今まで巡った世界にもな、同じような力持ったとんでも女子がいたよ」

「どんな？」

「現実がある程度捻じ曲げるってやつだな。しかもそこは外史じゃないんだぞー？」

「そ、そいつはどうしてるんだ？」

「そんなこと知らずに周り引っ掻き廻しているよ。で、その周りが彼女に知られないように事後処理してる。面白かったなーあそこも。死にかけたけど。あっはっはっは！！！」

「笑い事じゃないだろ、死にかけたって……」

「笑い事だよ……。」「死」なんてオレにとっちや恐怖ゼロの取るに足りないもんだもの……」

「へ、へえ……（凄い覚悟で乗り越えたんだろうな、それは……）
……」

（あれ？なんか勘違いしてるかも？まあいつかな……）

「で？他に訊きたいことは？お兄さん、なんでも相談にのっちゃう

ぞ？」

「お兄さん……か」

「ん？」

「いや、なんでもないさ。ありがとな」

「こつちもなかなかスリリングな体験できたからいいさ。帰るか？」

「そうだな……でもオレ部屋に帰ったら……」

「オレっちの部屋来い。そこなら大丈夫だろ」

そう言って蒔風と一刀は城に戻った。

こここそ蒔風の部屋に戻り、蒔風はどこからかやってきた荷物から寝袋を出す。

蒔風は構わないと言ったが、一刀がいいからいいからと言って蒔風がベッド、一刀が寝袋で眠った。

結局、「奴」は今日来なかった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

恋姫十無双 午後部、特訓の成果、夜の散歩（後書き）

アリス「奴」きませんでしたね」

彼にも彼の思惑があるのでしよう。

多重世界でもないのに待つ理由が……

ア「それにしても星さんよく出てきますね？」

作者が一番好きなキャラですから。

恋姫の中では一番好きです。

ア「じゃ、じゃあまさか……」

ふふふ、そうなるかはお楽しみ

ア「次回、きた！！仮面モノ！！！！」

ではまた次回

やべ……なくなっただか？

恋姫十無双　く美しき蝶の仮面く

「で、オレなにしてよ?」

現在時風は暇を持て余していた。

え?だって「奴」来ないんだもん。

一刀達も今は左慈達白装束との最終決戦に向けて準備中だ。

「だから舜は自由にしてもいいぜ?出発まであと三日か四日かか
ると思うし」

と言うのは一刀の談。

「あのやるお……自由にしててが一番不自由なんだぞー
ー?」

そうばやきながらなんだかんだでやること見つけるのが時風である。

仕事を見つげ、翠、鈴々と共に街の警邏に向かう。

「それにしてもなんで舜は着いてきたのだ？」

「あー、暇だ暇だと庭で寝っ転がってたら貂蟬がやってきてな、街で面白いことがあるかもって教えてもらってそれでだね」

「面白いこと？なんじゃそりゃ」

「さあね~~~~~？」

街中をそんなことを離しながら歩く三人。

途中ラーメンや点心を買い食いしてホクホクと先に進む。

「今度警邏に出るときは舜と一緒にがいいのだ!!」

「食べ物的な意味で？」

「うん!!!!」

「ちょ、鈴々……」

「なんだ？翠もそんなこと考えてんのか？」

「気まずそうに否定するってことは、いつもそういつこと思ったな、うん。」

「う……………」

「あつはっは！！気にすんな！！誰かがうれしそうにしてんのはいいもんだ、うん！！可愛い女の子二人も連れて、おにーさん大満足だ」

「あははっ、ありがとなのだ」

「か、かかかわいつ、つてえ！？あたしがあ！？」

「なんだあ？そっち方面に免疫なしか？一刀からも言われてんだろ？」

「あ、あたしみたいに男っぽいのがか？」

「それを含めて「翠」だろうが。それ以上に説明はいらんだろ」

「うぐ……………あ、ありがとう……………」

「正直に話して礼を言われるとは得したねこりゃ！！！！」

そんなこんなで歩いていると、目の前に町民の一人が駆けよってきた。

「しよ、將軍様！！！助けてくだされ！！！！」

「將軍？あ、そっかお前ら將軍か」

「そーなのだ。わすれてたのかー？」

「わり」

「それでおっちゃん、何があつたんだ？」

翠が訊くと男はあわてながらも正確にある方向を指さしてこう言った。

「う、うちの方の通りで子どもを人質に取つた男が暴れてんだ！！
！しかも三人……」

「なに！？」

「よおし！！今すぐ鈴々が成敗するのだ！！！！」

「それはいいけどおまえら相手に怪我させんなよ？」

そう言いながら男の案内で蒔風たちがついていく。

移動中 …

— * . . —

と言いかけたところで時風の言葉が止まる。

『それ以上は語るなよ?』

そういつた意味を持った視線を華蝶仮面改め星が向けてきたからだ。ちなみに二号は貂蝉である。

『なるほどな……分かったぜ。ヒーローの素性は秘密にっつてこ
とだな?』

『ほう、わかるか』

なんだこの二人。

相手はチンピラ三人だ。
チビっこいのとデブとアニキと呼ばれる長身の男である。

長身の男が男の子を人質……なのか?
肩車をしてグルグルと回りながら何かを叫んでいる。酔っているよ
うだ。

「おおらあ！！なんだってんだようがあ！！！！おれあ・・・」

「あ、アニキ、暴れすぎっスヨ！！！！」

「そ、そうなんだな、さすがに鬱憤がたまってるからってこれはひどいんだな」

「うっせえ！！！！うれはよっぺまへえ〜〜ん」

「ベロンベロンなんだな」

「いや、それよりひどいっすね」

「あー、あれか、完全にあの男一人の問題だな」

「しかも人質なんかじゃねえじゃん」

「男の子も楽しそうなのだ」

「何があったか知らないが、暴れているのは事実である！！！！」

「酒は呑んでも呑まれるな、よお？まだまだってことねん！！！！」

「行くぞ！！！！二号！！！！」

「わかったわ、一号!!!」

「あ、始まった」

「ま、今回はたいした事件じゃないからのんびり見てよっぜ」

「………なあ、あの仮面、誰だかわかる？」

「うーん、そういえば正体は知らないんだよなあ………」

(なんだこれ?……ハッ!!!こ、これが有名な「お約束」だ
というのかっ!!!)

なんだこいつ

「むう、なかなかやりおる」

蒔風がそんなこと考えていると、星と貂蟬がちびとデブを倒して
いた。
と言ってもその二人は倒れたフリだ。

戦ったのも長身にいけと言われて渋々みただったし。

そして長身と戦い始めてから少しして、今は押され始めている。

(これも演出か。やりおるな、星！！)

だが周りの町民は心配そうな顔をしている。

よく見ると鈴々や翠も手に汗握っている。

をい、お前らそれでいいのか？

「へえ~~~~いいな、これ……………ん？」

ゴソリと蒔風がポケットに手を突っ込むと、そこに何かあった。取り出してみても蒔風の顔がにやりと笑う。

「あのときか…………やるなあ貂蟬。ありがたく使わせてもらおう」

そうして蒔風の姿が路地裏に消える。

「なんだ？何者だ、てめえ！！！！」

その脚が一人の男の前で止まる。

男はボロボロの布に頭から身を包み、その正体は誰にも知られない。

「誰かの叫びが聞こえたんだ」

「なに？」

「力と技の二人の戦士から受け継いだこいつが、ここにオレを導いた！！！」

男がその手に持つのは仮面。

華蝶仮面の物と同じだが、色だけは違う。

「ま、まさかてめえは！！！！」

「ふっ、助けに来たぞ！！！！一号、二号！！！！」

「お、お前は！！！！（貂蝉、うまくやったな！！！！）」

「ま、まさかあん！？（ふふっ、ちゃんと受け取ったようね）」

ブワサア！！！！！！

男が布をはぎ取って、顔が見られる前に仮面をつけた。

「風の唸りに血が叫び、力の限り、ぶち当たるッ！！オレの名は・・・」

そして左手を右ひじにあて、右手は親指から中指の三本を立てて甲を向ける。

「華蝶仮面、ブウイスリア！！！！！！！！！！」

「ぶ、ブイスリー！！！！！！！！！！」

「か、華蝶仮面の新たな仲間か！！！？？」

「この状況で、お前の味方だと考えるほど、お前はおめでたいのか？」

「ぬ、ぬかせえ！！！！！！！！！！」

「トオ!!!トオオ!!!」

ガン、ガキイ!!!!!!

華蝶仮面V3改め蒔風が男の拳を弾き、星と貂蟬の元に寄る。

「大丈夫か!? 一号、二号!!!!」

「うむ、助かったぞ!!!!」

「にしてもノリノリね」

「む、危ないっ!!!!」

男がどこから取り出したのか角材を振り回してきたのを、蒔風が二人を押しつけてからジャンプしてかわす。
そしてそこからそのままキックを放つ!!!!

「V3スクリューキック!!!!!!」

ドカツバキイ!!!!!!

蒔風が空中で身体を捻り、そのままスクリュー状に回転しながら男に、正確には男の持つ角材に向かってキックした。すると角材は砕け散り、男は後ろに後ずさるだけとなる。

「（我ながらうまく角材だけ破壊できたな）いまだ！！行くぞ！！
！一号、二号！！！！」

「「おおっ！！！！」」

バババツ！！！！！！

三人が高く跳躍し、そこからそろって降下する！！！！！！

「華蝶 トリプルキック！！！！！！」

「ぐぐああああああああああ！！！！！！！！！！」

ドゴオン！！！！！！

長身が吹っ飛び、地面に倒れる。

そしてヨロヨロと立ち上がったから……爆発した。

(ええええええええ！？さ、さすがにそこまでは……)

(大丈夫だ。怪我はしてない)

(そのようね。ほら、あの二人が連れて帰ったわ)

煙でよく見えないが、起き上がったちびとデブが長身を抱えて帰って行っている。

「わー！ー！ー！新しい華蝶仮面だ！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「でもぶいすりーってなんだ！ー？」

「わかんねーけど、かっこいい！ー！ー！」

「ふ、オレが出てくるのはまだ早かったようだ。まだまだ修業の身。また会おう！ー！一号、二号！ー！ー！」

「あっ！ー！ブイスリーー！ー！ー！」

屋根を跳ねてどこかへと去っていくブイスリーー。

それと同時に裏路地から蒔風がひよっこり出てきた。

「あ！ー！舜、どこにいたのだ？」

「今日のはスゴかったぞ!!」

「らしいな。オレはトイレに行つてて見逃してしまったよ」

と、そんなこんなで騒動は終結した。

いつの間にか二人の華蝶仮面もいなくなっていた。
撤収早いな。

t o b e c o n t i n u e d

恋姫十無双　く美しき蝶の仮面く（後書き）

アリス「きた、課蝶仮面」

これ書きたかったんだ。

いや、これが書きたかったんだ

ア「何やってんでしょうね、彼」

さら？楽しそうだからいいんじゃない？

ア「次回、その晩」

ではまた次回

誰かに捧ぐ命なら　自分の境界も越えて
今ならば　ここでなら　強さに変わり　明日へ続くよ

恋姫十無双　く翼人と恋姫とく

華蝶仮面の騒ぎがあつた日の晩。

蒔風は一人城壁の上で座禅を組んである技の練り込みをしていた。

「世界座標を確認。自身の心象を完全理解せよ……それを詠唱に乗せて世界に映し出す……我、異端なる者也　故にそこに法則は無く……」
（ブツブツ）

スウ、と蒔風の周囲が毛色を変える。

見えてきたのは世界の崩壊。

そしてそこに手を伸ばし……

「っあはッ!?!?……っふ……はあ、はあ、はあ……
・キツツ……」

そのまま腕を後ろに伸ばしてのけ反る蒔風。
額には汗が流れている。

「お一人で鍛練ですか?」

「んあ？」

そこで声が駆けられる。

時風がその声のした方を見ると、そっちは酒を飲んでいる星が居た。

どうやらさっきから見ていたようだ。

「星か。よく会うなあ、お前とは」

「なに、私は面白いことが好きですからな。そして貴殿も楽しい事が好き。ならば会おうのはそう珍しいものではありませんまい」

「さいですか。高いところって好きなん？」

「ふむ、好きですな。下に人がいたら……」

「ハーハツハツハツ！と高笑いして登場？」

「よくわかっておられる。一杯どうだ？」

「酒かあ。オレはそんな飲めんぞ？今までだって一回しか飲んだことがないし」

「なに、良い酒だから悪酔いはせん」

「じゃあ……もらおうかな」

そういつて時風もチミチミと飲み始める。

「それにしても良い酒出すって、なんかいいことあったのか？」

「ありましたとも。あらたな正義の仲間ができましたゆえ」

「?・・・ああ昼間の・・・」

「どうだろうか？またやっではもらえないか？」

「また？楽しかったからいいけど」

「お？ようしよし！これでよりいっそう正義の伝道ができますわな
!!--」

「正義の伝道？」

「我々の活躍を見て、子供たちは正しいこと、正義のなんたるかを知る。そうしてゆけば、彼等がこの国を動かすとき、素晴らしい世の中になっているはずだろう？」

「ああ・・・そういつことが・・・」

「だったらオレアやめるよ」

「?なぜだ?」

星は不思議に思う。

璃々を助けだし、皆とも気が合い、さらに聞けばいくつもの世界を救ってきた男。

その男が次世代に正義を伝えるのに積極的ではないとはどういふことか、と。

「オレの正義と世間一般の正義は違うの」

「あなたの・・・正義?またなにをいうか。すべてに通ずる正義などありはしない。私もあなたも、異なる正義があり、似通った部分があるからこうして酒を交わしているのだろう?」

「自己正義までは知ってるのか・・・まあ、オレの正義もそうだよ。言っちまえば「自己満足」だな」

「それでも伝えることはない?」

星の言葉になにかおかしなものを見たかのようにくっくっく、と時風が笑う。

「ああすまん。別に馬鹿にしたわけではないんよ。それでも伝えることはあるさ。それは確かだ。ただオレが言っているのは違うんだ

「よ」

「どついでとどつ」

「うーん……少しだけ長くなるけど、いいか？」

「時間だけはたっぷりありますからな」

「では……」

最初に言うと、オレには死の恐怖がない。

死を理解してしまったからな。

そこらへんは割愛させてもらうが、まあそういうことなんだ。

星、戦いの時、お前は死を恐れるか？」

「ふむ？確かに傷や痛み、死ぬことは恐ろしいな。だが私を信じる仲間や国のために戦うのだ。恐怖は乗り越えている」

「そうだろうな。「死ぬのは怖くない」とか、「死を克服した」って奴はゴマンといる。」

「ただそいつらは根本的に死の恐怖がないわけじゃない。」

揺るぎない信念、絶対の覚悟でそれを乗り越えた強さだ。

だがオレのは違う。

大した信念も覚悟もなく、ある日「死を理解した」というだけでそれを打ち消した男だ。

信念や覚悟、正義を下地に死を乗り越えたんじゃない。

まず最初に死が無く、そこに言い訳するように正義を貼付けただけだ。

自分の自信にはなるさ。

死なない理由くらいには使える。

でもいくらオレが正義を叫んでも、それはその場しのぎの弁舌に過ぎない。

誰かの感情を左右できても、芯を変えるものではないのさ

そんな薄っぺらいものが誰かの模範になっていいわけがない」

「では……あなたは……」

あなたはそのような状態で世界を守り通して来たのか？

そのような少し揺るがされれば簡単にぶれてしまうような心境で？

星は目の前のこの男がとても儂いモノに見えてきた。

今にも消えてしまいそうな今の自分。

世界を幾度も救った世界最強は、誰よりも崩壊しそうな脆い精神を持つ人間だった。

にもかかわらず

彼はいくつものものを背負いすぎている。

負けることの許されない戦い。死。さらにはすべてを理解する狂気と理性。

もしかしたら誰かの死をも背負っているかもしれない。

「・・・・・・・・」

時風が天を仰ぎ、目を閉じる。
その瞬間、星は想った。

この男を消したくない、と

「舜・・・・・・・・」

「あん？」

時風がなんでもない顔をして振り向くと、星が肩を抱いてきた。

「お主は・・・・・・・・消えないでくれ」

「なんだよいきなり。それに・・・・・・・・当たってるぞ」

「ふふ、当てている、と言ったらどうします？」

「え？なんだなんだ？」

おい、なんで顔赤いんだ。まさか・・・・・・・・勘弁してくれ・・・・・・・・」

2793

「わかりましたかな？どうやら私はあなたを大切に想ってしまった
ようですよ？」

事実上の告白だった。

時風舜、世界をめくり始めていろいろあったが、今だに心は年齢1

9歳。

生まれて初めての告白だった。

そこで蒔風が返した言葉は……

「やめておけ」

これだった。

いままで人の想いを尊重してきて、それを守った男が、それをやめると言った。

蒔風が立ち上がり、星に背を向ける。

「なぜですか？」

「言っただろう。」

オレはまともなもんじゃない。そんなオレを好む奴なんなんても、まともじゃない。

変な奴って意味じゃなく、存在が、だ。星は……違っただろ？」

「だが………それでも！」

星が立ちあがって蒔風に向く。

そんな彼女に蒔風はさらに追い打ちをかけた。

「それに俺には恋愛感情がわからない」

「え？」

「いや、それが何なのかとか、素晴らしいものだとかは理解している。

「……オレはみんなが好きだ。もちろん、お前もな、星。だれどこから先がわからないんだ。一体どこからが恋愛感情なのか、どこまでが人間的に好きなのか、わからない……」
「オレの人類愛はデカ過ぎる。オレが、人間じゃないからな。翼人と言う意味ではなく、異端、という意味でだ。」

「そんな男のそばにいて、一体何が幸せだろうか？」

「たとえどれだけ愛してくれても、オレはその人一人に注ぐ愛情を持つていない。」

「人としての好意なら、いくらでもいい。」

「だが男女としての好意を向けられてオレは……自分には自信がない」

「そんな……だったら……」

「そんな奴を好きになる？それじゃ不幸になるだけだ。」

「いくらお前が好きだと言っても、オレが好きなのは世界のすべて。」

その中にお前がいるだけなんだからな」

「それでも……あなたのツ!!!」

そして星が蒔風に駆け寄りつとした瞬間。

「我、この世界より異端とされた『人間』……」

蒔風がそれを呟く。

瞬間、星は何か得体のしれない物を知覚した気がした。

「う、うわっ……」

「……」

それを首だけひねって見た蒔風は、少しだけ悲しそうな、残念そうな顔をして、その場を去ろうとし……

足を止めた。

「どうした？酒でも染みたか？」

ぼたり、ぼたりと

何かが

こぼれる音がした。

「ああ……今夜の酒は……沁みてな……」

「そうか……よい酒だったけどな……」

「ああ……沁みるよ……だが、私はそれでも……」
この酒「は諦めない」

「……好きにしる」

「絶対に……諦めん。私はこれだと思ったらもう止まらないの

でな」

「……………」

蒔風がその場を今度こそ去る。

その時、彼の顔はどんなものだったのだろうか。

誰にも理解されることがなく、ゆえに誰からも信頼されながらも、
誰とも共に旅せぬ男。
彼に理解者はおらず。

彼は……………いつか戻れるのだろうか？
世界から異端とされず、純粹に死を恐れ、そして……………

彼は知らない。
まだまだ知らない。

世界はここまで残酷であることは知っている。
だが、同時に

彼をここまで救ってきたのも、世界自身だといつことを。
いつか訪れる救いが、彼に訪れるよう……………

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

恋姫十無双 〱翼人と恋姫と〱 (後書き)

アリス「なんか寂しいですね」

ハナっからあの男に相手などいません。
でも、もしかしたらいつか……

ア「そうあることを願ってます。次回、決戦日」

ではまた次回

我が主よ。共にこの乱世を治めましょー!!

恋姫十無双　く進軍、そして特攻く

蒔風がやって来てから数日が経ち、準備が整った。

今日、一刀たちは左慈たちに最終決戦を挑む。

「皆のもの！！準備はいいか！！！」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

「その意気や良し！！敵は白装束！！平和の訪れるこの国を脅かす悪鬼共だ！！ならばこそ、我等が奴らを討伐するのだ！！！」

ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

「では、いざ出陣ッ！！！」

城から軍が出る。

全員の士気は高揚し、その軍は熱気を放っていた。

「一刀、華琳や蓮華たちは置いてきてよかったのか？」

「それは」

「彼女らはいくまでも我等が捕虜。軍を率いられては我々はともかく兵達が困惑しますからな」

「そ、そうなんだよ」

「……………」

「で、なんでオレの横にちょこんといるんだ？星」

「おや、いいませんでしたかな？諦めないと」

「舜？」

「ああ一刀、これはな……………」

「がんばれ！応援する！幸せになー！！」

時風の拳が一刀の顔面に減り込んだ。

「ノオ！私の顔が！！顔がああ！！」

「ったく……う？なんでしがみついてくる、頬を寄せるな、胸を当てるな！！」

「おや、つれないですな。こんな美少女が引っ付いているというのに」

「確かに好意はうれしいがオレから返せるものがないからやめてくれ」

「なに、いずれあなたに恋愛感情が生まれた時に私がこういうことをしていたと覚えていれば一発でないですか」

「はいはい、そうなるといいですねー」

「おぬしらはなにをイチャついとるか！！御主人様も騒がないで下さいー」

一刀、蒔風、星が馬を操る愛紗に怒鳴られる。

今四人がいるのは馬車の幌の中だ。

うち愛紗は馬を操っている。

馬車のスピードは周りの行軍と同じスピードで、結構ゆっくりだ。

「向かう先はどこなんだ？」

「山中にある寺殿よ。ようございませう。」

「貂蝉」

そこに貂蝉が馬車に乗り込んできた。
馬車が少しだけ沈む。

「御主人様はその寺殿の奥に安置されている鏡に触れなければなら
ないわ」

「オレが？なんで？」

「なんでもよ。理由は秘密」

「つてか貂蝉！降りろ！馬が疲れる！」

「あらいやだ。舜ちゃんつたら漢乙おとめに重いといふの！？」

「「「「いいからオレイロ！」「」「」」」」

「な、なによ、みんなして……」

貂蝉が渋々降りていく。

なんだか寂しそうに。

「ダアーツ！わかったわかった！オレも一緒に歩いてやるからそんな悲しそうな顔すんなや！！」

「舜ちゃん……もしかしてあたしのこと！？」

「それはない」

「それでもいいわ！舜ちゃん愛してる！」

「友人の域でならいくらでも。本当の愛は一刀になる。」

「ごっ主人さまあ！！」

「ギャー！ごっちくんな！！」

一刀も引きずり出され、一緒に歩く。

三人が馬車の後ろを歩き、星が足を馬車からぶらつかせて組んで座る。

「御主人様~~~~。翠さんが戻って来られました~~~~」

そこに朱里の声がして、翠と一緒にやってきた。

翠は先に戦場を下見してきていたのだ。

朱里が馬から降りて、翠と馬車の中に入る。

「翠さんの「風足」はすごいです。おかげで正確な地形がわかってきましたから」

「馬に乗っていると出来ないのが残念だけだな」

「どんな地形だったんよ？」

「話にあつた寺殿は見れなかったけど、周囲の地形はわかつたぜ。長い長い階段が岩山に伸びていて、その両脇にも岩山が崖みたいにそびえてた。道の両脇に岩山があるってよりは馬鹿でかい岩山を切り出して道にした感じだな」

「細い通路か……」

「翠の話だと両脇は五十メートルくらいしかないみたいだな」

「あそこで戦うのはまずいと思うんだ」

「そうですね……攻めるに不利、守るに有利な地形ですから……」

「一刀を餌に引きずり出したら？」

「可能かもしれませんが、それでも兵は残されず。最悪、挟み込み」

「どうしますかな？」

「うーん……」

「……なあ、白装束って呪術で作られた泥偶人形なんだよな？」

「そうです。でもなんで？」

「相手に命と呼べるものが無ければ容赦する必要はねえ。先陣はオレが行こう」

「舜が？」

「そ、オレが」

「……全員思考中……」

「ありね」「ありですね」「ありですな」「ありだな」

「まあ見てろ。翼人の強さ、見せてやる。地形変えないように気を
つけないとなー」

そういう左慈の瞳には世界を修正するという指命以上のなにかがあった。

彼がここまで一刀に執着している理由はわからない。だが、その行動には憎しみが混ざっていた。

「やれやれ。あなたらしくもない」

「うるさい。オレはいく。ここは任せた、于吉」

「あなたの期待に応えましょう、左慈」

その会話を最後に左慈が消える。

「さて！！お願いしますよ！！わたしの人形たち！！！！」

そういつてバツ！と両腕を開く于吉。

その眼下には幾万の白装束。

準備は万端だ。

と

その瞬間

ゴギユオア!!ドツゴガア!!

、一筋の光が軍を貫き、ど真ん中で爆発して止まった。

「な、何事!?!」

「閉翼つと……さて……名乗ろうか?!観測者!!」

「あなた……何者か!?!」

「オレは……まあ、なんだ……ただの世界最強、すべての勝因だ!!!!!!」

「なに?」

「さあー覚悟しておけ?お前らの目の前にいるオレが敵である時点で、お前らの勝利は……まあないんじゃないかね?絶対とは言わないけど」

「はじまりましたね」

「ああ。舜はうまくやるって言ってたけど、本当に一人で大丈夫なのか？……」

「なに、彼はあの程度の雑兵にやられる男ではないですよ」

蒔風が戦つてるところから離れた場所で、一刀たちが吹き飛ぶ白装束たちを見ていた。

まるでご飯粒が散っているみたいに見えるくらい遠くにいる彼らは、蒔風の合図に合わせて一気に攻めるつもりである。

「今は待とうか。舜の合図が来るまで、な」

t o b e c o n t i n u e d

恋姫十無双　く進軍、そして特攻く（後書き）

アリス「さあ始まりました決戦！！」

ようやく恋姫の世界も終わらせられそうですね。
つてか星との話だけになってしまった感が……

ア「しょうがないですよ」

あんなんでよかったのか？

ア「さあ？次回、まずは戦ってみよう！！」

ではまた次回

どーにも、こーにも世界の主・役、はあ・た・し！！！！

恋姫十無双　く無限の人製？く

「花吹雪！！」

ドゴオア！！

斬撃が吹き荒れ、周囲を飲み込む。
蒔風の「鎌鼬斬演舞」が白装束たちを消し去っていく。

その光景を見て一瞬焦った于吉だが、

「ですが……一人でこの数を消し切れますかな？」

幾ら蒔風が暴れても如何せん相手は幾十万の人形。
消し切るまで何時間とかかるだろうし、その間に人形をまた作り出されたらいたちごっこだ。

（VS大軍勢つてのは初めてだが、これはこれで面倒だな。一気に吹き飛ばすと地形かわって寺殿まで無くなっちまうし。ま、面白い経験が出来たと思えばそれでいいか）

さらに蒔風が花吹雪から津波、秋風、霜柱と続け、大体五万くらい

削っていく。

(あの男、一体何者でしょう。たしかこの外史においてイレギュラーは北郷一刀のみのはず……む?)

そこで蒔風が峡谷から飛び出て荒野に立った。

何人かの白装束が追って行こうとするのを于吉が止める。
彼等の指令はここで北郷一刀を待ち、殺すこと。
わざわざここから出ずとも、来るのを待てばいいのだから。

「流石に追ってはこないか。まあいいや(ドゴン!!)引きずり出すだけだ」

蒔風が両拳で地面を殴りつける。
すると、地面がグワツ!!と起き上がってきた。

畳返し

蒔風の技術の一つだが、今回は大きさが違う。

高さにして数十メートル。

見上げれば首が痛くなる高さだ。

それだけの地面が今、広大な荒野にそびえ立っていた。

それに時風が手を当てて能力を発動させる！！

「混闇陣！！」

ズルツ！グバア！！

巨大畳返しの表面が混闇に包まれる。

混闇は引き付ける重量の力。

それをこうしたらどうなるかは……あまりにも明白だ。

「うわあああああああ！！」

「あああああああああ！！」

「ぐおおおおおおおお！！」

白装束達が次々と宙を舞って混闇陣に引っ張られて峡谷から引きずり出されていく。

「そおら！まだまだまだまだあ！！」

「ほどよくウズウズしてたみたいだな」

「舜！うまくいったな！」

「ああ、一刀。行くぞ！」

「ああ！」

峡谷に残った白装束の数は一万に届くかどうかといった感じだ。

そこに押し寄せる北郷軍は幾数万。

勝敗は明白……のはずだった。

「まったく、ここでこんなにも力を使うことになるとは」

バシユウ！！！！ババババババババババババババババババン！！！！！！！！！！

于吉が腕を振るう。

するとさっきまで無人であった峡谷が一瞬で白装束の塀に埋め尽くされる。

その数は当然ながら北郷軍を圧倒し、迫りくるそれを迎え撃とうとしていた。

「なっ！？一瞬であれだけの兵を！！！！」

お互いに背中を預けながら戦っていた愛紗と星がそんな感想をこぼしている、遠くに見える時風が一刀の後ろで剣十字の杖、シュベルトクロイツをかざし、魔力を込める。

「行くぜ……デアボリック　　エミッション!!!!!!!!!!」

ズゴォ!!!!!!!!!!

灰色の巨大な球体が于吉軍を飲み込み、その内部の物を徹底的に攻撃しつくす。

だがすべては覆えない。周囲では北郷軍が取り囲んでいて、万が一飲み込まれたら大変だからだ。

故に次は任意の敵を刺し貫く呪いの槍を!!!!!!!!!!

「さあて、覚悟しな!!!!!!!!!!」

時風が高く飛び、その手に紅の槍を掴んで振りかぶり、それを軍勢に向けて投射する!!!!!!!!!!

于吉が再び腕を振るう。

「取り囲んだ、と思った側が、実は取り囲まれていたのはよくあることでしょう?」

いま北郷軍は峡谷の中心にいる。

そしてその峡谷の両側から、正確には両側の崖から、白装束たちがボゴボゴと這い出てきたではないか。

一面に現れて行く白、白、白。

びっしりと現れたそれらの腕には、矢、槍、剣が握られており、ドンドン抜け出してきた地面に降り立つ。

「マジかよ……これ反則だぞ!？」

「さて、私は愛しの左慈に、こう報告するとうしましよう」

「全員伏せ……………」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

恋姫十無双　く無限の人製？く（後書き）

アリス「原作やってればこの後の展開丸わかりですね」

言うな！！それを言うてはいけない……………

ア「于吉やべエ……………」

あなたそんな口のきき方してはいけません！！！！

ア「それより心配なのは皆さんが「鎌鼬切演武・四季早々」の形を覚えているかどうかです」

心配はいらない。

わからなければ過去の話を読む。

そしてアクセス数がウハウハじゃあ！！！！

ア「きゃあ、何て汚い作者！！！！」

狡猾と言ってくれ。

そろそろお気に入り100件行きそうですね。

また何か考えますか……………

ア「あと二件ですよ？」

思いつくかどうか勝負！！！！

ア「次回、まあ大丈夫なんじゃね？」

テキトーだ！？ではまた次回

あなたのハートはこの私のもの。

それは天命で定められていることよ！！！！

(恋姫十無双・霸王プロジェクト・魏より)

しない」って。だから私は私の意志でここに来たの。それと……
(ゴガン!!)」

「アダッ!?!」

華琳が蒔風の頭を己の鎌、「絶」の柄で殴る。

「だあくれが「ちっこい」ですってえ?」(怒)」

「お前だ!いやはい、ごめんなさいごめんなさいあっはっは!!!」
ゴン!!」イダッ!!!」

華琳の援軍に態勢が再び傾く。

だが于吉はそうしている間にも次々と人形を生み出している。

「あいつの足元、なにかあるぞ」

「常識的に考えてこれだけの人形を短時間で休まず作り出すなんて不可能よ」

「舜、いくか?」

「よし……行くぞ!翠、霞!!道を開いてくれ!!!」

「応!!!」

「任しとき!!!」

「春蘭！！あなたも行きなさい！！！！」

「御意に！！」

「私も行くぞ！！」

翠と霞が「風足」で動いて白装束を蹴散らしていく。
道はすぐにひらけた。

時風と一刀が乗る馬が、愛紗と春蘭の援護を受けながら、一直線に
于吉の立つ階段に突っ走る！！！！

「む！？流石にきますかっ！！」

「オラア！！」

時風が馬から飛び出し、右腕を振りかぶって于吉に迫る。

「させませんッ！！」

バチィ！！

だがその拳は呪術の防壁に阻まれ、弾かれてしまう。

「ATフィールドかよ!? いや、違うけどさ!」

「ここは通しませんよ!」

蒔風と一刀は階段を二十段か三十段くらい登ったところで于吉と向き合う。

下方では愛紗と春蘭が白装束が来ないように迎撃し、さらに下方には凄まじい戦闘が繰り広げられている。

「舜! !早くしろ! !」

「この数は……やばい! !」

「一点突破する! 朱雀! !」

蒔風が朱雀を呼び、その手に朱雀槍を握り締め、于吉に突進する。

バキン! !ズギヤアツ! !

朱雀が尋常ならざる鋭さにて、于吉の障壁を突き砕く。

ついに于吉がその場から動き、蒔風の突進が于吉の立っていた階段

「さあ！！北郷軍も、魏軍も！！！！押しつぶしてしまいなさい！！！！」

「なんじゃこりゃー！！！！！！？」

三人の巨人が周囲を蹂躞する。

北郷、魏、西軍ともその三体に疾走するが、わずかに斬り出せるのはほんの数体分のみ。

戦いが長引いたせいで、負傷者が出、とてもじゃないが人数が間に合わない！！！！！！

「今すぐこれを！！！！！！！！！！」

「やせませんよ！！！！！！！！！！」

ドッフィン！！！！！！

機械に走る時風の目の前に、三体のうち一体が手のひらを落とす。そしてそのまま階段の時風たちに覆いかぶさるようにして機械を守る。

「こんなんで……止められるとでも思ってたのかぁ!？」

「今それを放てば階段は崩れ、頂上まで無くなりますよ!?!?それでいいのですか!？」

蒔風が力を込め、その手に獄炎を溜めこむが、于吉のその言葉にビタリと止まる。

于吉の言うことももつともである。

さらに言うならば一点を打ち抜く絶光などを放てばその部分だけ修復して立ち上がるだろう。

しかもそれで倒れてしまったら一刀達はぺしゃんこだ。

それを支えられても、その間に回復されては意味がない

「ちい!?!?!面倒なことを!?!?!」

「華琳様!?!」

「っ!?!めんどろね、あれ……でも……」

「華琳どの!?!?!他に援軍は!?!?」

「ええ。そろそろ来るわよ。私たちと時間を逸らして出陣した彼女たちが、ね!?!?!」

ドオーーーーーンドオーーーーーンドオーーーーーン!!!!!!!!!!!!!!

そこで銅鑼の音が鳴り響く。

三体の巨人の足に縄や網が巻き付き、それにもつれて倒れ込む。

「往くぞ!!!!!!!!!!孫呉の誇りを、今見せつけてやれ!!!!!!!!!!」

「蓮華殿!!!!!!!!!!」

「遅かったじゃない!!!!!!」

「予定通りの時間だ!!!!!!!!!!でも・・・確かに、少し遅れたみたいね」

「はあ~~~~いみなさ~~~~ん。おつきな敵はまず、足元をすくつちやいまして~~~~」

「引けえ!!!!!!!!!!力の限り縄を引け!!!!!!!!!!我らの力を、見せつけてやるのだ!!!!!!!!!!」

そしてそれを機械の目の前でキャッチして一回転し、その勢いを殺すどころか何倍にも上げて、鉄の塊に突き立てた！！！！！！

ガギョツ！！！！ギ・・・・ギガガガガガガ！！！！！！！！！！

「朱雀！！！！飛翔！！！！！！！！」

さらに反対の手に握る朱雀槍の先端が翼を広げたように三又槍になり、それに焰をまとわせて回転させ、機械を一気に貫いた！！！！！！

ゴギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！
ツツ！！！！ズゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！
！！！！！！

機械が爆発し、その効果が切れる。
だが白装束たちは消えない。

「もう出てるのは消えないか。ま、とりあえずっ！！！！！！」

ジャキイ！！！！！！

朱雀槍と龍牙を于吉に突きつけ、蒔風が睨みつける。

「今度こそ、チェックメイトだ」

「そのようですね……では最後にささやかなプレゼントを」

ボゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！！！

于吉の言葉と共に、さらに出現する白装束。
だがさっきまでよりかは数が少ない。

だからと言って無視できる数でもない。

「私自身の力でも、これだけの物は出せますよ？」

「やめなさいよ」ら……！！！！」

蒔風が二槍を振るうが、それよりも早く于吉の姿が消え、二つの刃が虚空を斬る。

『私は頂上に行ってますよ。ではこれで。アデューー！！！！！！』

そんな声が響き、一刀が階段を上ろうとするが、下で戦っている華琳や蓮華たちを見て、どうするべきか悩んでいる。

「一刀！！！！何をしているの！！！！行きなさい！！！！」

「私たちはここでこいつらを食い止める！！！！お前はあいつらと決着をつける！！！！！！！！」

だがそんな一刀の背中を押ししたのは、他でも無い華琳と蓮華だった。

「一刀、あの二人はお前を先に行かせてくれるようあそこで踏ん張っている。それを無駄にするな！！！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・ああ！！！！！！」

「早く終わらせて助けに戻るぞ！！！！！！」

「皆、行け！！！！！！！！」

一刀が時風、星、愛紗、鈴々、翠、紫苑を引き連れて階段を疾駆する。

途中崩れているところもあったが、時風が土俵で修復していった。

「行ったわね？」

「そうだな」

「では、できる女と言う物を見せてあげましょう！！！！！！」

「望むところだ！！どちらの軍が多く倒せるか、勝負だ！！！！！！」

そうして彼女達の最終決戦も始まる。

階段をかける一刀たち。

そこで行きついた先に、この外史の終わりが待っている。
エンディング

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

恋姫十無双 ～北郷、援軍に助けられるのこど～（後書き）

アリス「今回はなんともすごいですね」

なんとか原作つぼくできたかなあ？

熱く熱くなつててくれればそれでいいですね。

ア「たしかあなた書いてるとき曲聞きながら書いてますよね？」

大体はそうですね。

熱い、という意味では主題歌「H W I N G S U I」を聞いてましたね。

ア「いい感じに熱いですね」

ハオプロとか突っ込みどころあり、それでいていい歌ですしね。

もう一回ファンディスク出してくれないかなあ……

そしてついに！！！！！！

お気に入り登録百件突破あ！！！！！！！！！！

でもどうしよう！！何も考えてないや！！！！

でも何かやろう！！！！！！

ア「次回、最後の戦い」

ではまた次回

国王が恋をしても・・・よいではないか!!!

(恋姫十無双・霸王プロジェクト・呉より)

恋姫十無双　く時風、世界と繋がるのこと

「左慈っ！！」

「北郷オ！！」

頂上の寺殿に到着し、重々しい扉を時風が蹴り破って突入。
その直後から入って行った一刀と左慈の視線が交差し、互いの名を
敵意を込めて叫んだ。

その左慈の後ろにある壇上にはどうなっているのか淡く、だが力強
く光を放つ銅鏡が置かれていた。

「あれだ！」

「一刀を行かせろ！」

「北郷オ・・・・・・・・一刀オオオオオオオ！！！」

左慈が銅鏡に走る一刀目掛けて殺気の籠った蹴りを放つ。

「させっかい！！」

それを時風が蹴りで受け、一刀を先に行かせる。

左慈がいまいましたそんな顔で時風を睨む。

「貴様どけ!!」

「残念ながらそれはできません。この世界の行く末は、彼等が決めることだ。観測者は下がってろ!!」

「うるさい!!観測者だとかにはうんざりだ!オレは呆けたジジイどもとは違う。できるなら世界を修正にもっていく!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!

時風と左慈が交戦している間に一刀が鏡に到達し、触れる。すると鏡が一気に強烈な光を放ち始めた。

「^{ものがたり}世界にはいつだって始まりと終わりがある」

「我々はマイナス方面から」

「私はプラス方面から、今ここに一つの物語が集結するわ」

「願わくば、^{エンディング}終末を」

「願わくば、続編を」
「コンテナー」

「さあ、世界を指し示せ！」「」

いつの間にか銅鏡の脇に立っていた于吉と貂蝉が一刀に向けてそう
いった言葉を投げかける。

「ち、オレの役目はここまでか。できれば殺してやりたかったが、
まあ、仕方がない」

その言葉と共に世界が光に包まれ、そして……

.....

「う、うう？」

一刀が頭を振って立ち上がる。

「ここは……フランチェスカ学院？」

「ここが一刀の母校か」

「舜！みんなも！？」

一刀が目を覚ましたのは一刀の通っていた学園、聖フランチェスカ学院、その庭園だ。

周囲にはみんながいた。

北郷軍だけでなく、魏、呉、さらには城にいたはずの月と詠まで。

「わ、私たちは白装束と戦っていたはずでは？」

「それに、ここはどこだ？」

「一刀のいた世界……お前らにわかるようにいえば「天の国」ってところか。な？貂蝉？」

「そう考えてもらって構わないわ。ここが御主人様のいた正史なのか、別の外史なのかはわからないわ。でも、物語はまた始まったよ
うね」

「そう……なのか？」

花壇の花はその爆風に耐えられず花弁を散らし、周りに立つ林の木々は何本かから炎が上がって燃え尽きる。

「うわあああああああああああ!?!」

「なんだあ!?!」

「これは!?!」

「きゃあああああああああ!?!」

「ご主人様!?!?!」

「舜!?!?!」

皆が思い思いの悲鳴を上げ、地に伏せる。

「今ここに!!!世界は成った!!!食べごろだと思わないかね?諸君!?!?!」

「そつだよなあ、来るころだと思つたよ!?!」

蒔風が上空を睨む。

そこには「奴」が浮かんでおり、その手からは波動弾を打つた名残か、ゆらゆらと黒いオーラが残っていた。

「あのまま食つてもよかつたんだがな?せつかくこうやって世界が成つてより濃密なものとなつたんだから、そつちの方がいいだろう?つと!?!?!」

ガバギイ！！！！！！

「能書きはいい。今すぐ出てけバカ！！！！！！」

「おーおー、蒔風さんちの舜君は怖いねえ〜〜〜」

「ざっけんな！！！！！！」

蒔風が話し途中の「奴」に「獅子」を握って斬りかかるのを、「奴」もまた「魔人」を抜きそれを防いでいた。

「オレとしてはこのまま全員ぶっ放すのが………簡単なんだがな！！！！！！！！」

ドオン！！！！！！

さらに反対の腕で二、三発と先ほどと同様の波動弾をぶっ放して周囲ごと一刀を殺そうとする「奴」。

それにいち早く感づいた翠と霞が風足で一刀の前に立ち、それを防ごうとする。

ドゴオ！！！！！！

だがそれを防いだのは蒔風だった。
その背には銀白の翼が輝き、大きく羽ばたいていた。

「お前らは一刀のそばを離れるな。「奴」とやり合おうとするんじゃないぞ！！！！（バウツ！！！！）」

蒔風がさらに動く動く。

「奴」が全く惜しみもせず波動弾を放ち続け、蒔風がそれを蹴り、打ち落とし、切り崩しては処理していく。
だがその処理後に起きる爆発に、蒔風の体力も削られ続けて行く。

ドオン！！！！！！

「ウゴツ！？・・・・・・はあ、はあ、はあ・・・・・・だらっシヤア
！！！！！！」

蒔風の頬は煤コケ、どこからか飛んできた破片にぶつかったのか唇も切れている。

当然蒔風も獄炎、雷旺、圧水、土惺と攻撃を放つが・・・・・・

「じ、の、やるオ！！！！！！」

武将たちが口々に「奴」を挑発する。
それを見て「奴」がめんどくさそうにため息をつく。

「あからさまな挑発だな。なんでオレがわざわざ降りねばならんだ。こつからでできるならそれでいいじゃないか。ん?」

「厄介な敵です……目的のためにただ淡々とこつちを狙う……」

「左慈とか言う奴を相手にした方がまだ楽よ。なんなのよあいつ……」

「あの野郎にこつちの常識持ちこむな。それと!!手え出すな、お前ら死ぬぞ」

蒔風がぐらりと立ち上がって考察する朱里と桂花のとなりに立つ。

「舜さん!!怪我は大丈夫ですか!??」

「気にすんな……絶対に一刀に怪我ひとつ負わせんなよ!!!!!!」
「……おら!!!!!!」

蒔風が天地陰陽を風斬車に組み立て、右手一本で「奴」に挑む。

「奴」に風斬車を振るう蒔風だが、「奴」はそれを紙一重でかわす。

「奴」の顎に向かって振るわれたそれをひらりとかわして、「奴」の拳が蒔風の腹にめり込む。

それに対して風斬車は当たらずとも、腕を曲げて肘を「奴」の顔面にめり込ませる蒔風。

「奴」がのけ反り、蒔風が衝撃に耐える。

「奴」が顔を起こした所にもう一発、更にそこから攻撃をやめない蒔風の拳や足が「奴」に襲いかかる。

「がつお！？ぐっ、又、おがつ！？」

胸板を強打し、鳩尾にめり込ませ、脛を割って、腕関節をへし折った。

眉間に中指を少し出した拳で殴り、エルボーを後ろ首にぶちかまし、踵落としを脳天に炸裂させる。

「いつが！？おおおおお！？」

ドゴー！！バキ！！！！ゴゴゴゴン！！！！ゴキヤア！！！！

蒔風の猛攻が「奴」に襲いかかり、最後に中段突きで吹っ飛ばして

その体が木々をなぎ倒して林に突っ込む。

「フウっ！！！！・・・我が武、未だ衰えを知らず！！！！」

蒔風が残心し、静かに構えを変える。

そう、まだ終わってはいない。構えを解くことはできない。

腰を落とし、両腕を前に突き出して反身になる。

そして・・・・・・来た

「超三段回転突き蹴りチヨオップ！！！！！！！！！！」

木々の倒れる林の中から「奴」が飛び出して言った通りの順番に回転しながら一撃ずつ攻撃を仕掛けてきた。

蒔風がその三段を腕で受け止め、反撃する。

ロー、ミドル、ハイの順にキックを右足で放つのを足で受け止められ、「奴」が反対の足で反撃する。

それを脇に抑え込み、投げ飛ばそうとした瞬間、「奴」が反対の足

で蒔風の胸を蹴り飛ばそうとしてくる。
それをとっさに握る形で止め、そのままブン回して地面に叩きつける。

だが「奴」はギャリリリリッ！！と回転してその衝撃を無散させ、そのまま旋風脚で蒔風の足元をすくう。

蒔風も黙ってそれを食らう男ではない。

ジャンプして「奴」の首に絡みつき、「奴」自身の回転とは逆に回る。

「ぐっ、フッおア！！……！」

このままでは首がへし折られる、と直感した「奴」が回転を止めて蒔風の髪を掴む。

そして思いつきり引っぺがすように背中から投げ飛ばす。

「（ダンッ！！ズザザザザッ！！……）いったあ！？ハゲたらどーすんだこら！……！」

「こっちは首取れそうになってんだぞ！……！」

「し、る、か！……！」

ドゥッ！……！

時風が飛び出し、「奴」に腕を突き出す。

身体を返して立ち位置を変えるようにそれをかわした「奴」に、時風が着地してからジャンプして二連蹴りを放つ。

それを両腕で受け、ハイキックを繰り出す「奴」。

時風がそれを屈んでかわすが、「奴」はそのまま回転して踵を起き上がった時風のこめかみに命中させる。

ゴコキイツ!!!!!!!!!!

時風が地面を転がり、その間に「奴」が一刀に迫る。

「ッ!!!!!!させん!!!!!!」

愛紗、鈴々が「奴」に向かう。

当然ながら「奴」は応対するが、全く二人を相手にしない。

愛紗の青龍偃月刀を「天人」で受け流し、鈴々の丈八蛇矛を受け止める。

「だあああああ！！！！！！！」

さらに後方から来た秋蘭の七星牙狼を白刃取りで受け止め、その刃を砕いた。

「な！？」

「バカナ・・・白刃取りで剣を砕くだと！？」

「かんしんしてな？おらっ！！！！」

ドドドッ！！！！！！

「奴」が一瞬で三人の腹部に拳をめり込ませフツ飛ばす。

そして一刀に向いた瞬間、二人の人影の攻撃をしゃがんで避けた。

「コイツツ！？」

「風足を見切りおった！？」

「速いな！！！！だけど、オレも速い」

「舜!!!!」

星が駆けより、蒔風を起こそうとする。
だが蒔風はそんな星の肩を掴んで叫んだ。

「こっちにくるより一刀のそばにいろと言っただろう……!!」
「!!!!!!」

「そんな……あなたの怪我だって!!!!!!」

「言っただろう……そんなの関係ない」

シュラン……と蒔風が「火」を右腕で抜いてそれを支えに立ち
上がって背中と言った。

「オレにそんな感情を向けるな!!!!完全に空回りだ……命の
心配をされようとも、オレがそれを受け止められない!!!!死ぬ
ことに恐怖などないのだから……」

蒔風が「火」を右腰の「林」に付け、組み合わせて抜刀する。

「オレは行く。総てを賭けて、世界を守る。それがオレのすべきこ
とだと信じて戦おう。たとえ上塗りだけの信念でも、貫き通すこと

はできるはずだと信じて！……！！！」

「下積みの無い信念……軟弱だなあ、蒔風え！……！！！」

「うるっせえ！……！！！」

ドゴガア！……！！！」

「奴」と蒔風がぶつかり合う。
その衝撃に皆が目を細め、叫んだ。

「舜！……！！！」

「はたして腕一本で勝てるのか？おい！……！！！」

「確かに左腕は使えねえ……だけど、それはオレの敗因にはならないんだよ！……！！！」

ゴドゴオ！……！！！」

「奴」の顎に衝撃が走り、脳が揺れる。

地面から青龍が飛び出し、アッパーカットを命中させたのだ。

「不意打ちなら召喚獣も行けるだろ？ケルたち出される前にたたみかけるぞ！！！！」

ドゴゴゴッガン！！！！

蒔風を含めた総勢八人の攻撃に「奴」の身体が切り刻まれる。だが「奴」も下がらない。

ゴオウ！！と腕を振るって八人を弾き飛ばし、ケルベロスたち出そうとする。だが……

ドストドスツ！！！！ズシャアツ！！！！ザザザザン！！！！！！

紫苑、秋蘭の矢が額、胸、腹と突き刺さり、翠、星の槍が両肩を貫く。

さらに愛紗、鈴々、恋、思春の刃が「奴」の肢体を斬り出した！！！！

「んなあ！？くっ！！！！！」

「奴」の手足がズルリと元に戻ろうとした。

だが、この好機を蒔風が逃すわけがなかった。

「一刀お！！！！行くぞ！！！！！」

「ああ！！！！舜！！！」

【KOIHIME†MUSOU】 - WORLD LINK - W
EPON〜！！

すべての武器が一刀の元へと集結する。

剣、弓、槍、さらには蒔風の十五天帝までもが一刀の周りを回り出した。

「行くぞ……皆と一緒に……出会えたことが、オレの力になる！！！！！！」

一刀と蒔風が「奴」に突っ込み、そのすべての武器で攻撃する。

斬り、突き、薙ぎ、貫き、刺し、潰し、捻り、抉った。

そして最後に二人が同時に「奴」を斬り、その体中から血を噴き出

して宙に上がる。

「止めと行くぞ……準備はいいか!!!!!!」

「ああ!!!!!!」

【KOIHI ME + MUSOU】 - WORLD LINK - } F
I N A L A T T A C K } !!

二人が一緒に十五天帝を握る。

するとそれにすべての武器がひつついていき、巨大な大剣へと姿を変えた!!!!

「願いを翼に!!!!力を放て!!!!行くぞ……これからの物語のために!!!!!!」

ドバウ!!!!!!

時風の背の翼が雄々しく羽ばたき、二人が「奴」に剣を構えて突進する!!!!!!

ズガッ!!!

そして「奴」の身体を刺し貫いた。

その背かどうかもわからない反対側から十五天帝の切っ先が見える。

次の瞬間ッ!!!

ドバガアッ!!!

傷口だけではなく、「奴」の全身から全員の武器が内部から突き出し、その体をズタズタにする。

もはや肉片とも呼べない形になってしまった「奴」の身体がつつすらと消えゆき、そして消える寸前に大爆発を起こす。

その爆発を背に蒔風と一刀が戻る。

一刀が蒔風に肩を貸し、ヨタヨタと歩いてくる姿に、みんなが安堵し、駆け寄っていった。

- - - - -

「こんなもんでいいよ、ありがとう」

蒔風が学園の保健室で治療を受ける。

だがこの学園、今は誰一人としておらず、戦闘のことも外に漏れていないようだ。

「まあ知られてても何とかごまかすよ」

というのは一刀である。

治療してくれたのは月だが、一刀はここまで付き添ってくれたのだ。

「ほ、本当に大丈夫なのでしょうか……まだまだいっぱい怪我があるのに……」

「悪いな、月ちゃん。これだけでも十分おにーさん癒されました」

「メイド的な意味で？」

「メイド的な意味でだ」

ガラガラガラ

そこに保健室の扉が開き、星が入ってきた。

「皆の様子はどう？」

「皆、新たな世界に興味津々ですな。いや、知識がドンドン頭に流れ込んできたからよかったものの、そうでなかったら相当混乱したでしょうな」

「それ便利だよな。蒔風さんもたくさん助けられています」

この世界にやってきた彼女らにとってすべてが初めての物だった。

テレビや携帯などと言った電子機器はもちろんのこと、学校や寮といった建物から、果ては水道や道路までもが違うのだ。

この世界に関する基本知識が流れ込んでこなければノイローゼで倒れてしまうだろう。

「時に……もう行かれるのですかな？」

「次の世界に？ああ、そうなるな」

「では行きましょうぞ」

「は？」

「私も行きます、と言ったのです。よもや私を置いていくつもりで

はないでしょうな？」

その星の発言に蒔風がため息をついて顔に手を当てた。

「悪いが連れて行く気はない。この世界の物語にはお前がいてこそだろ？」

「それはそうかもしれませんが、知った事ではございませぬなあ。そも、私の物語は私が決めます故」

星はどこまでも星だった。

だが蒔風は認めない。

「それでもお前をここから連れ出すわけにはいかないんだ。お前は
この世界の住人だ。お前の世界はここにあるんだ。そんなところか
らイレギュラー^{オレ}が勝手に連れ出すわけにはいかない」

「それでは・・・置いていかれる私はどうすればいいのですか！
！あなたを思い、たった一人でこの世界で胸を焦がしているという
のですか！？」

星が叫ぶ。

その眼は潤む。

どれだけ恐ろしい敵を前にしても臆することのなかった少女が、未
来の自分の姿を考えて恐れて泣いた。

「だから言っただろ？……オレに惚れてもロクなことがない……ってな」

[Gate Open . . . KOIHIME + MUSOU]

「ま、待ってくれ!!」

「なんだよ一刀」

「星を……連れて行ってやってくれ!!」

「無理。じゃね」

蒔風はどこまでもそっけない。

そんな蒔風の背中を掴み、星が言った。

「いいでしょう……あなたは世界をめぐる……ならば私もその方法を探しましょう。そしてあなたに追いついて見せる!!!!」

「できねえよ。オレがめぐる世界層はかなりの高層になる。外史とかの比じゃねえぞ」

「それでも、追いついて見せます。恋する乙女は恐ろしいのですよ

それを見届け、静かに椅子を下ろしてそれに座る星。

「よかったのか？」

「ふ、次に会った時にもっといい女になって今の事を後悔させてやりますよ……ふふ、ふふふふ……う……あっはっはっはっはっは！！！！！！」

そう言って笑いながら保健室を出て行く星。

「無理しちゃって……」

「でも、あの人はまた来るんですか？」

「それはわからないよ。でもこの世界はどうかやら俺の都合よくなってくれるところはまだあるみたいなんだ。そしてオレの「都合がいい」の中には星の笑顔と蒔風の幸せもある。だから……」

「ふふっ、お優しいですね、ご主人様は」

「ありがとう月。さ、俺たちも行く。みんなにこの世界のいろいろなことを説明しなきゃいけないしな。知識だけじゃわからないだらうし」

そう言っって一刀と月も出て行く。

友を救うために、仮面の戦士は今日も変身し、その身をひとならざる物へと変えて行く。

《turn up》

「始……お前の運命は、オレが変える!!!!!!」

t o b e c o n t i n u e d

恋姫十無双 〱 時風、世界と繋がるの〱 (後書き)

アリス「ついに終わった恋姫の世界……」

長かったねえ

そしてぶつちぎったなあいつ。

ア「女性を泣かせるとは許されん奴だ」

アリスさん？

ア「消えてしまえ……」

ちよ、人が変わってる！？

【恋姫十無双】

構成：” no Name ” 50%

” LOND ” 20%

” フォルス ” 20%

” ライクル ” 10%

最主要人物：北郷一刀

- WORLD LINK - 〱 WEAPON 〱 : 一刀に全武器譲渡 & 使用可能

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } :総て
を十五天帝につき込み、斬った後に拡散させる。

今回はまたまたライダーですね!!!

ア「最近ライダー頻度多くないですか？」

いや、あの・・・世界回る順番とか最初は決めてたんだけどだ
んだんずれてきてそれで・・・

ア「つまりは消化しきれないのをここで一気にやるってことですか？」

オウイエス

ア「この無計画!!!!!!」

すみません!!!!

あああとですね、WORLD LINKの音声、マーク・大喜多さ
んをイメージしてください。

ア「あれ音声入ってたんですか!?!」

友人にも同じこと言われました。

それにキーワードにもあるように、「これは「ディケイドっぽい」で
すから!!!!!!

ア「どっから聞こえてくるんでしょう？」

さあ……どこからだろうね？
全然考えてないや。

ア「次回、破滅へと向かう世界？」

ではまた次回

アンデッドはすべて封印した……
お前が最後だ……ジョーカー……！！！！

……俺とお前は……
戦う事でしか解り合えない……！！！！

53体のアンデットが太古の昔、バトルロワイヤルを繰り広げました。

それは最後に残った一体の種族が地球上に繁栄するルール。

52体は必死に戦いました。

なにせ自分の種族の未来が、繁栄がかかっているのですから。

そしてその時勝利したのが人間の始祖たるヒューマンアンデットでした。

こうして人類は地球上に繁栄し、今に至ります。

そして現代。

アンデットが復活し、バトルファイトが再び始まりました。

不死身である彼等を倒すには封印するしかありません。

人間は「ライダーシステム」を作りだし、アンデットをカードに封印していきました。

その戦いの果てに残ったのは53体のうち、いかなる生物の始祖でもないアンデット「ジョーカー」。

ジョーカーがバトルファイトに勝利したとき、地球上の生物は根絶やしにされます。

人類も滅びます。

それを執行するのが統率者・モノリス。
それは捻れた石版で、次々にダーククローチを生み出しています。

そして今、仮面ライダーは戦っています。
この世界を救うために

「……………ん、なるほどな……………あれは……………」

蒔風が情報を知り、下を見ると、一台のバイクがダーククローチに突っ込み、薙ぎ倒していった。

「変身!!」

《open up》

バイクに乗っていた青年がベルトのバックルを開く。
すると人間大の大きさをしたホログラムのカードが出てきて、青年がそれをくぐってランプのクラブをモチーフにしたライダー、仮

面ライダーレンゲルに変身した。

「行くぞ！！オオオツツツ！！」

レンゲルが尺杖型の武器、醒杖・レンゲルラウザーを振るってダークローチたちを次々と消滅させていく。

戦闘力や耐久力が高くない、不死でもないダークローチを倒すことは簡単だ。
だが数が多すぎる。

黒い絨毯に緑の点がポツンとある。
そんな感じた。
それでもレンゲルはそのビル群にいたダークローチの半数を倒していた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・き、キリがない・・・」

体力に限界が来たレンゲルの膝が落ちる。
餌を見つけたゴキブリのように、そこに一斉に襲いかかるダークローチ。

クローチ達を踏みつぶした。

「こんなものでどうかい？」

「……………あ……………え？」

レンゲルは哑然とするだけだ。

だがこの周囲を一掃したものの、ビルの陰から次々とわき出てくる
ダーククローチ。

「キリがないなホント。一旦逃げんぞ」

「ちょ、待って！！あなた一体何者ですか！？」

レンゲルが蒔風の肩を掴んで話を聞こうとする。

だが蒔風はその肩をはずしてダーククローチを指さして言った。

「ここ一帯の避難は終わったろ？はやくいかねえと、飲み込まれるぞ、あれに」

ウジャウジャとしているダーククローチはまるでそういうシステムであるかのように街を練り歩き、破壊を繰り返していく。

「キモイだろ？あね。早く行こう。話はそれからだ」

.....

公園のベンチに座る二人の男。

蒔風と、レンゲルに変身していた青年、
上城睦月^{かみじょうむつき}だ。

「……って話しなだけでさ」

「信じられません」

「じゃあオレさんの力はどつする？」

「それは……でも……」

「ま、いいさ。とにかくブレイド、確か、剣崎一真けんざきかずま……だっ
け？に会おう」

「……………わかりました。案内します」

「ありがと〜〜！！！！ムツキング！！！！」

「なんですかその呼び名は！？」

そういつて案内してくれた睦月の後をついて行った時風。
着いた先は荒野の一軒家だ。結構ボロい。

「……？」

「ボク達に協力してくれる人の家です。橘さん、いますか？」

扉を開けながら睦月が中に声をかける。

すると一人の男が玄関の廊下の隣の部屋から腕を組んで出てきた。

「睦月、こいつか？変な話を振ってきた男とは」

「はい。でも、僕を助けてもくれました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「橘さん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ナズエミテルンデイス！？」

「！？い、いや、すまない。どうやら君の眼に嘘偽りはないようだな。詳しい話を訊きたい。入ってくれ」

そう言つて男、橘朔也が中に案内した。

「あれ？お客さん！？困つたなあ、いきなり連れてこられちゃ・・・・・・・・」

「橘さん、この人は一体？」

入つて行つたりリビングには二人の男女がいた。

「えっと・・・・・・・・BOARDボードの人かな？この家の持ち主、白井虎太

郎です」

「違うでしょ？この人会ったこと無いもの。元BOARD研究員、広瀬栞です。えっと・・・橘さんの知り合い・・・・・・・・ですか？」

栞と虎太郎が自己紹介する。

ちなみにBOARDとはアンデットを研究し、ライダーシステムを作った組織だ。

組織自体は復活したアンデットに壊滅させられたが、こうして研究員の何名かが集まっているのだ。

「違う。だが、睦月が言うには面白い話が聞けるそうぞぞ？」

「それがこう・・・・突拍子もなくて・・・・それで橘さんにはあらかじめ連絡しておいたんですけど・・・・」

「そりゃそうだろ。いきなり世界だとかブレイドが殺されるなんて言ったら・・・・」

「剣崎くんが!?!?」

「……、殺される!？」

「詳しい話が訊きたいな」

「はいさい。待つてね、今お教えしましょうかな……」

~~~~~  
時風、説明タイム  
~~~~~

「本当に……?」

「おっ!？その疑り深い目!! いいねえ……そうやって何事も鵜呑みにしない警戒心!! 素晴らしい!!」

「でも……真実なんだよね?」

「確かに!! 剣崎一真が「奴」に狙われているのは確かだ。だがそれよりもまず、やらなきゃならないことがある」

「え？」

「この世界はなぜこうなっている？バトルファイトの最初の方でジョーカーを倒せばよかったじゃないか」

その発言に橘や睦月をはじめ、全員が黙りこむ。

「それは……………ですね……………」

「……………オレが話そう。そうだな……………どこから話そうか……………」

頭の中で話すべきことを整理する橘。
そして決まったのか、口を開いて話し始めた。

「ジョーカー……………あいかわはじめ相川始は……………人間なんだ……………」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

剣くクロバーの出会いく(後書き)

アリス「ブレイドのせつかいくく」

オンドウルの世界ですね。

ア「それが」

すべてさ!!!

この世界の時系列も最終回近くですね。

ア「やっぱりですか。劇場版でも本編でも、なんだかさみしい終わりでしたもんね」

確かに皆、救われた。

だがそこには確かな犠牲があった。

それじゃいかんです!!!

ア「頑張れ蒔風。次回、キングフォームの呪い？」

ではまた次回

剣くジョーカーの心く

ジョーカー・相川始はたしかに不死生物たるアンデットだ。

そんな彼を最後まで封印出来なかった理由。

彼はニンゲンだった

「……………なるほどな……………人間の心に目覚めたのか」

「そうだ。あいつは会う度に人間に近づいていった。俺達にはつっけんどんだったけどな」

「そして剣崎君と始は、友達だったんだ」

「最初は敵だった。なんども戦った。だが、次第に剣崎と相川の間には友情が生まれていた」

「最初は僕たちも相川さんを封印しようとしたが、無理でした．．．．」

相川始

ジョーカーである彼は封印したアンデットのカードを使ってその姿に変身することができる。

彼はヒューマンアンデットのカードで人間の姿になっていた。だが、次第にヒューマンアンデットの心までが入ってきた。

彼はゆっくりと、彼らしく変わっていった。

もはや彼はジョーカーでもアンデットでもなく、「相川始」だった。

「彼は今どこに？」

「バトルファイトが終決し、統率者・モノリスが動き出したと同時にアンデットの本能が激しさを増して、俺達の前から姿を消した」

「でも、ダークローチを倒している姿を僕たちは何度も目撃しました」

「彼は戦っている。自らの運命と、本能と」

「だったら……」

「だったら？」

「救ってやらなきゃ、わりに合わないよなあ？」

「待て。なぜ君がそこまでする。君の目的は剣崎が殺されないようにするだけだろ？」

「オレだって面倒だ。けどな、オレは世界最強なんだよ。そういうのを救いたくてなったんだ。意地でも助け出させてもらおう。で？ 剣崎はどこに？」

「剣崎さんは……ずっと戦ってます。毎日毎日身を削るよじつ」

「戻ってくるのか？」

「来ないと……思います」

ガシャンとキングフォーム専用の巨大な黄金の剣、重醒剣キングラウザーを落とし、両膝をついてしまう。

「はあ、はあ、はあ……………眠い……………クソツ!!眠くて眠くてしょうがない……………寝ている隙なんて、ないんだ!!」

ブレイドが剣型のラウザー、ブレイラウザーで体を支えながら立ち上がるうとする。

だが手が滑り、仰向けに倒れる。

それと同時に変身が解け、生身の体があらわになる。

「ぐっ……………始……………待っている……………世界もお前も、助けてやる!はあ……………はあ……………」

「剣崎さん!!」

「剣崎!!」

そこに橋、睦月、時風の三人が到着する。

倒れる剣崎を担ぎ上げて家に連れて帰ろうとするが、剣崎が橋の肩を掴んで叫んだ。

「橘さん！！オレを殴ってください！！」

「なに？」

「眠くて眠くてしょうがないんです……殴って頭をはっきりさせて下さい！！」

「剣崎！！お前は戦いすぎだ！！休め！！」

「ツツ！！睦月！！」

「できませんよ！！」

二人から拒否され、剣崎が時風の方を見る。

「じゃあ……じゃああんたでいい！！あんたオレを殴ってくれ！！！！」

剣崎の目は必死そのものだ。

何かに突き動かされ、なにがなんでも成し遂げなければならないという想いがあつた。

だが

「目がイッてるなこいつ」

「剣崎の疲労はピークをとくに超えている。それでもこいつは戦

っているんだよ」

「オレの事はいい！！！！この眠気をぶっ飛ばしてくれ！！！！！！」

「オーライ、わかった（ドフウツ！！！！！！）」

「オンドウルツ！？（バタリ）」

「剣崎ーーーー！？」

「ったく……一人でろくに立てないやつが……ん？」

「どうした、蒔風」

蒔風が腹部に一発食らって気絶した剣崎を担ごうとして、何か異変に気付く。
そして剣崎が落とした変身のためのバックル、ブレイバックルに目をやった。

「そーゆーことかよ……おい、こいつ連れて帰んぞ。そのバックルは隠しとけ」

「あ、ああ……」

蒔風たちが剣崎を担いでその場を去る。

トに変わりつつあったぞ?」

「な!?!」

「それについては私から説明しよう」

そこにスーツ姿の一人の中年男性が入ってきた。

「所長!?!」

「烏丸さん!?!」

「橘、剣崎は?」

「上の部屋で寝てます」

「そうか・・・早めに回収できてよかった・・・」

「おいあんた、どういづことだ。説明してくれるんだろ?」

「ああ説明する。どうやら君は、我々の助けになってくれるようだからね」

そうして、今は無きのBOARD所長だった男、烏丸啓が話し始め

た。

剣崎・・・仮面ライダーブレイドはラウズアブソーバーという機械にカテゴリークイーンのカードを入れ、さらにそこからカテゴリージャック、またはキングのカードを読み取らせることでジャックフォーム、キングフォームへと強化変身する。フォームチェンジ

キングフォームに変身したのは現段階では剣崎のみ。

だが、彼の変身は異常だった。

ジャックフォームへの強化変身はブレイドにカテゴリージャックの力を融合し、飛行能力や総合戦闘力を底上げする効果がある。キングフォームも同様に、キングの力を付与してとてつもないパワーを得るというものだ。

だが彼のキングフォームは違った。

剣崎はアンデットとの融合係数が異常に高い人間だったため、キングだけでなく、スピードスーツのアンデット全13体との融合をってしまったのだ。

この変身は装着者の体力を異常に消耗させ、さらに変身を続けると最悪装着者の身がジョーカーに変貌してしまう、というものになってしまった。

「おそらく剣崎は、キングフォームで戦い続けることで自らをアンデットとし、この戦いを終わらせるつもりだ」

「そうか……剣崎がジョーカーになれば残ったアンデットは相川と合わせて二体……バトルファイトは再開され、ダークロ―チも消える。そして二人が戦わなければそのまま……だが……！」

「そうです!! そんなの認められません!!! 剣崎さんがアンデットになってしまっただなんて!!!」

「しかも、アンデットは統率者モノリスに戦いを運命付けられている。出会えば戦いの本能がうずく。二人は二度と出会えることはないだろう」

ダンッ! ! ! ! !

突如なつたその音に皆の身体がビクつく。

そちらを見ると時風がテーブルを叩きつけてブルブルと震えていた。

「いけねえよ……そんなんじゃないいけねえ……そんな救いはあっちゃいけねえ!!! いや、あってもいいんだろう。そう言った救いしかない時もあるだろう……だけど……オレがいる以上、そんな救いは認めない……全員が笑えるエンドじゃなけり

や、意味ねえんだ……！！！！！！」

自分以外の人間が、異端の道に走ろうとしている。
人間からアンデットへと

それだけは防がなければならない。
人間でなく、生物の理からも外れた彼は、誰よりも自分と同類が存在することを恐れた。

ガタン！！！！

リビングの外の廊下から音が聞こえた。
橘が扉を開き、皆が廊下を見ると、床に倒れた剣崎が玄関に向かって進んでいた。

「剣崎！！お前……！！！！！！」

「橘さん……オレのバツクル知りませんか……？オレ、いかなくちやならないんですよ……」

だがそんな剣崎を担ぎあげ、蒔風が言った。

「ばーか。あんた無茶しすぎ。そんなことしなくても、相川始を救ってやるっぜ」

「あ、あんたは………??」

剣崎のその質問に、胸を張ってこう答えた。

「オレの名前は蒔風舜。世界をめぐる、最強の男」

そういつて右手を握りしめる。

「さ、そのくそ統率者の元に案内してくれ。なんだっけ？石盤だっけ？んなもんどーにでもしてやるぞ」

ニツ、と笑うその男の言葉を、なぜか剣崎は疑うことはできなかつた。

この男ならできると思った。

「さ、いくぜ。運命の切り札を、きってやるっぜ……」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

剣くジョーカーの心く（後書き）

アリス「お題！ここにニトログリセリンっぽい何かを用意しました！！飲め！！！！」

お題としておかしくないですかそれ！？

ア「飲くくめ！！！！飲くくくめ！！！！」

アッ！！やめっ……ゴブゴブゴブ……

チーーン……

ア「……次回！！VSねじれこんにゃく」

……ゴブっ

ア「ではまた次回くく」

オデノカラダハボドボドダー！！！！！！

剣 く捻れ蒺藜の最後く

岩肌が露出した海岸。

太陽が沈もうとしている水平線。

ジョーカーの姿となった相川始はそこにいた。
そしてそこにいるのは彼だけではない。

「ウオオア！！来るな……オレによってくるな！！オレは……
……オレはこんなこと望んじゃいない！！」

海岸には捻れた石版、モノリスがあり、ダークローチを次々と生み
出していた。

相川は本能でその存在を察知し、ダークローチを駆除しているのだ
が……

「ガアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

数が多すぎる。

相川が倒れる。

「始!!！」

と、そこに剣崎が叫び、蒔風たちが着く。

その姿を見て、ジョーカーの姿のまま、相川が剣崎に叫んだ。

「来るな!!オレに近づけば戦うことになる……戦えばオレ
の中のアンデットの本能がより戦えと叫ぶ!!！」

モノリスを指差し、頭を抱えながら叫ぶ相川。

剣崎が相川の名前を叫ぶ。

「始!!！」

「……いや……違……戦え!剣崎!!そしてオレを
封印しろ!それでこの現象は止まるはずだ!!！」

「オレには……オレにはお前を封印なんか出来ない!!！」

「やれエツツ!!剣崎イイイイイイ!!！」

「仲間を封印なんか出来るわけないだろうが!!!!！」

「だったら……戦わなければならないようにするまでだ!!」

「くっ!! 変身!! 《turn up》」

剣崎がブレイドに変身してジョーカーの爪を受け止める。

「剣崎!!」

「剣崎さん!!」

「二人は手を出さないでくれ!! これは……オレと始の戦いだ!!」

「剣崎!! キングフォームは使うな!! そのまま相川さんを引き付けてくれ!!」

「わかった……けど!! 一体なにをする気だあんた!？」

「見てればわかる。橘さん! ムッキー! 回りの雑魚をお願いします!!」

「わかった!」

「変な呼び方しないで下さい!!」

「「変身!」!」

《turn up》

《open up》

橘と睦月がギャレンとレンゲルに変身し、周囲のダークローチを消滅させていく。

その間に蒔風がモノリスに近づき、手を翳^{かざ}した。

「おい、聞こえてるか?・・・まあい聞け」

そついで蒔風が息を吸って、静かに唸った。

「これを、止める」

そう蒔風が言った瞬間、留め金が外れたかのように一気にダークローチがわき出て、蒔風を飲み込んだ。

「ッ!?蒔風ッ!」!

「蒔風さん!？」

「来るな!!!オレは大丈夫だ!!!!!!」

ギャレンとレンゲルが蒔風の方に叫ぶが、蒔風は大丈夫だという。

「ぐ……ガッ……こんの……いい加減に……」

「

頭を押さえつけられ、のし掛かられ、無数の爪と牙に引っ搔かれながら蒔風がもう一度腕を伸ばした。

「いい加減にしろこの捻れコンニャクが!!!!!!」

バガアッ!!!!!!

蒔風が右手に幻想殺しをまとわせて、蒔風曰く捻れコンニャクを殴

ガコン!!!!

蒔風が再度殴りつけると、ついに大きなひびが入り、バガンツ!!
!と割れてしまった。
それと同時に高音も止み、曇天だった空も雲が引いて日が射してきた。

「これは……………(バシユウ)統率者の意志が……………消えた?」

相川がカテゴリー2、ヒューマンアンドेटのカードにより、人間の姿に戻る。
その表情は非常に穏やかであり、闘争本能など微塵もありはしなかった。

「始!!!!大丈夫か!?!」

「剣崎……………これはいつたい……………」

「あの人がやってくれたんだ!!!!あの人が……………あれ?名前なんて言っただけ?」

そう言いながら剣崎と相川がモノリスのあった場所に目をやる。
戦闘で海岸から少し盛り上がった丘にまで移動していた二人なので、
少し目を凝らせば見えた。

蒔風は片膝を地面に付け、全身や顔にひっかき傷があった。
その蒔風の傍らには橘と睦月がいた。

「蒔風!!」

「だ、大丈夫ですか!？」

「眼鏡また壊れた……ホントにどーしょ、これ」

「視力いくつですか？」

「両目ともに1.7」

「伊達!？」

「もう掛けんのやめようかなあ!？なあ、どうよ、メガネなしのオ
レ」

「いいんじゃない……無いですか？」

「まじで!？パツとしないとかない!？」

「まあ少しインパクトはないですけど・・・なしでも十分いけますよ！……！」

ガッ……！

蒔風が睦月の手を両手で握り、ブンブンと振る。

それに合わせて睦月の首もガクガクと揺れるが、蒔風は感動で見えていない。

「そんなこと言われたのは初めてだ……！みんなみんなパツとしな
いから止せって言うんだ……よし、もう眼鏡は掛けん……
眼鏡っ子の卒業だぜ……！」

「眼鏡っ子って違うと思いますよ？」

「蒔風……さん？」

「おお、剣崎……！ってかオレが呼び捨てにしちゃってるのにそんな
畏まらなくてもいいんじゃないですか？」

「じゃあ……蒔風……！ありがとうな……！」

「オレからも……その……感謝する。だがお前は何者なん

だ？統率者の石板を消し去るなんて……」

「オレ？もう説明すんの三回目だよ〜。むっちゃん、頼んでいい？」

「任せてください！！ってか、変な風に呼ぶにやめてくださいって何回言えばいいんですか！！！」

「何度でも蘇るさ！！！」

なんやかんやでギャイギャイと騒ぎ始める五人。

皆で虎太郎の家に行き、パーティーをしようとバイクにまたがる。その道中、蒔風が一人ごちた。

（オレは……きちんと救えてるよな？後々この行動が裏目に出ることはないよな？もしそれで誰かが傷ついてたら……
考えんのはよそう。そのときゃそんなとき、「オレ」を形作る「蓋」を再構築すればいいだけの事……いつか来んのかなあ？）

彼の精神や心はかなり複雑だ。

それが崩れるとき、彼は立ち直ることができるのだろうか？

それはともかく、この世界ではひとまずの勝利だ。

誰一人欠けることなく、蒔風は救って見せたのだから。

t o b e c o n t i n u e d

剣 く捻れ菫の最後く（後書き）

アリス「ブレイドの悲劇回避!！」

マジおめでとう!!

そして蒔風、脱眼鏡

それと時にだね、アリス君

ア「なんでしよう?」

キノの旅書けないかも

ア「この腐れ作者が!!!!!自分でやるやる言ってたくせに何言っ
てんじゃコリア!!!!!!!」

ひぎい!!!ごめんなさいごめんなさい!!!!!
ですがその代わり……

ア「代わりになんですか?」

「真剣^{マツ}で私に恋しなさい」参戦決定!!!!!

ア「取ってつけたみたいに言っただってお前の怠慢は変わらないだろ
おおオオオ!?」

マジすみません!!!!!!

ア「次回、ドカーン」

わけわかんねえ!?

ア「ほら、「奴」的な意味で」

理解した。

ではまた次回

オレアクサマラムツクロス!!!!!!

剣 くキングの剣(つるぎ)く

モノリスを破壊し、戦いの運命を断ち切った次の日

全員目を覚ます頃には蒔風の眠気もなく、昨日聞いた話を反芻した。

「剣崎を殺す？」

「おう。だから気をつけないとなんだよ」

「世界とかそういう話は信じにくい。だが俺達は蒔風の力を目の当たりにしている」

「え？みんなわかった？オレ全然わかんなかった……」

「馬鹿」

「馬鹿じゃなくてアホだろ」

「わからないのか？」

「剣崎さん……」

「ウエエ！？ナ、ナズエスオンヌアメデミルンディスク！？」

「日本語を話せ」

「相川さん……それマジ？」

「大丈夫だって！！そんな時は俺達で打ち破ってやる！！なあ？みんな！！」

「そうだな」

「だけど剣崎さんのキングフォームは使えないんですね？」

「いや、今は体が徐々に人間に戻っていつている。一気に長時間、休みなく使用すると危険だが、普通に戦闘する分には大丈夫だと思う」

「そっか」

「「奴」との戦いには使わないでね？まだ体が万全じゃないだろ？」

「蒔風の身体もかなり酷い怪我があったみたいだけど？」

「オレさんは大丈夫なの。気にするな、よつと」

「ハッ！！」

「「サボテン！！」」

「お前らなにやってんだ？」

「組体操」

「の、呑気ですね……」

「ホレホレ、睦月も一緒に……」

「扇」

「睦月、お前まで……」

「いや、橘さん。これ結構身体鍛えられますよ？」

「なに？身体が？」

「橘さんも一緒に」

「四段サボテン！！」

「（一番下）うをオオオ……おにーさん膝にキテマスクテマス！！」

「（二段目）た、確かにキツイな！！」

「(三段) 睦月！バランス崩すなよ？」

「(最上部) は、はい！！うわあっ！！時風さん、揺らさないで！
「！」

「なにやってんだお前ら(スパアン)」

「うあっ！？バツ！相川さ、ムギユア！！」

「うぐっ」

「うおー！」

「うわっ！！」

「呑気だなホントに」

「お前ら重い〜〜」

「始もやらないか！？」

「やらん」

「重い……」

「は、早く下りまじゅじゅ」

「んあ？そっだな」

「重かった……」

「お前らホントになにやってんだ？」

「「「「！？」」」」

「来たか……いつから見ていた！」

「サボテンから」

「恥ずかしさで……死んでしまいたいッ……！！！」

「「「恥ずかしかったのかよ！？」」」

「奴」がいた。

いつの間にか現れ、切り株に腰をかけていた。

「面白かった！んじゃま、始めますか？」

「終わらせてやんよ!!行くぞ!!」

時風が叫び、全員が戦闘体勢に入る。

バックルを腰に当て、ベルトが巻き付き、装着する。

「「「変し・・・」」」

バアン!!

「奴」がその瞬間両手を叩いた。

するとその両手から衝撃波が扇状に広がり、バックルを腰から弾き飛ばした。

「あつ、ぐ!!」

「バックルが!!」

「早く回収にいけ!!時間を稼ぐ!!変身!!」

《Kamen Ride DEEND!》

時風が力を借り、仮面ライダーディエンドに変身する。

「奴」がその姿にニヤリと笑い、魔導八天を二刀に振り分けて片方を下ろし、片方を肩に担いだ。

「どんなライダーを出すんだい？楽しみだよ」

「ライダー？なにを言っているんだ？ディエンドが巡ったのはライダー世界。だったらオレが使ったらどうなるかな？」

「な!？」

ガシュウ!ガシュウ!ガシュウ!

《Servan Ride...SABER!!ARTHER!!
RANSER!!》

バァン!!

シュンシュンシュンシュン.....パァン!!

三人の姿がホログラム状に現れ、それが実体を成して現れる。

「聖杯戦争の三騎士の登場だ。楽しんでくれたまえ」

蒔風がディエンドライバーで「奴」を撃つ仕種をしながらそう言う
と同時に三騎士が走り出して「奴」に向かう。

「うち……オラア！」

ガガアン！！バガガガガガッ！！！！！！
ドギャン！ギヤリリリリッ！！

「奴」が三人の攻撃を弾きながら同時に攻撃を加えていく。
だがそこはディエンドの召喚だけあって、攻撃にのけ反ることはあ
っても、一切引くことがない。

「ウザっ……たい！！散れエエ！！！」

「奴」が剣を振るい、三騎士を吹き飛ばす。
アーチャーとランサーの姿が消え去り、セイバーが庇われる形で残
った。

「さて……」

「Attack Ride……CROSS ATTACK！」

ゴォウ！！！！

セイバーの剣に光が凝縮され、それが振り下ろされると同時に放たれる！！！！

「はあああああああ！！！！！！エクス、カリバーーツツ！！！！！！！！」

アタックライド、クロスアタックの効果で放たれたセイバーの必殺技が「奴」に向かって突き抜ける。
だがこの手の攻撃を「奴」は受け止めたことがある。

バギィ！！！！！！

魔導八天の横薙ぎにその光が打ち消され、セイバーの姿が用は済んだと消えていく。

「この程度か！！なんか拍子抜けだな！！！！」

「いったろ（バシユウ）・・・時間稼ぎだつてよ。行くぞ！！！！」

「『『『『変身！！！！』』』』」

《turn up》

《change》

《open up》

蒔風の背後でバツクルを拾った四人のライダーが変身し、ブレイド、ギャレン、カリス、レンゲルが並び立つ。

「ハアッ！！！」

ドドドドドドドドドドドッ！！！！！！

カリスが弓状の武器、醒弓カリスアローから高熱のエネルギー矢・フォースアローを、ギャレンが銃、醒銃ギャレンラウザーで銃弾を撃ち、その弾幕の中をブレイドとレンゲルが突き進む。

「ウウエア！！！！」

「ハアア！！！！」

ドガッ！！！！

ブレイドの剣とレンゲルの杖を剣と腕で受け止めた「奴」に、蒔風が真っ直ぐに「火」を振り下ろしてたたっ切ろうとする。

そこから二人を弾き、蒔風の剣を白刃どって蹴り飛ばす「奴」

蒔風とブレイド、レンゲルが地面に転がり、その直後にギャレンの必殺技が炸裂する。

《DROP・FIRE・GEMINI・・・BURNINGDIV
ID》

ギャレンがギャレンラウザーにカードを読みとらせ、その力を開放する。

ジャンプして宙返りし、空中で分身しながら相手の頭上に炎の力を込めた二段つま先蹴りを打ち込む！！！！

ガゴオッ！！！！ドオン！！！！

命中し、爆発する。

だが、「奴」にまともなダメージは通っていない。

「二体に分身するってんならよ、腕は二本あるんだ。一人ずつ掴めば必ずいける」

「奴」が片手でギャレンの足を掴み、地面に叩きつけようと振り上げて下す。

だが地面とギャレンの間に時風が滑り込み、その衝撃を緩和させ、ギャレンを引きずってその場から離れる。

「おおおおお!!!」

《ブリザード》

レンゲルがカードを読み取り、強烈な冷気を噴出し、「奴」の下半身を凍らせる。

「はあああああ!!!」

「うえああああ!!!」

そこにブレイドの電撃をまとったキック、ライティングソニックと、

カリスの竜巻をまとったキック、スピニングダンスが放たれる。そんな二人のキックを見、「奴」が首をフルフルと振りながらため息をつく。

バキン！！ドゴゴガッ！！！！

「奴」はいとも簡単に下半身の氷結を砕き、踵からの後回し蹴りで二人のキックを粉碎、爆発させて吹き飛ばす。その圧倒的戦闘力に、蒔風に引きずられたギャレンが驚愕する。

「オレたちは……すべてのアンデットと戦い、勝利してきた……だが……あれはいつたいなんだ！！！？まるで歯が立たん……勝ち目は……」

「バカなこと言つな……つぐ、まだ負けねえよ」

蒔風が顔をしかめながらギャレンの方にポン、と手を当てて前に出る。

「お前の身体も限界だろ！！死ぬぞ！！！！」

「……そんな言葉じゃオレは止められないよ」

ニヤリ、と皮肉った笑みを浮かべ、「奴」の方へと走る蒔風。

ギャレンもその後を追って走り出す。

四人があらゆるカード、あらゆる技を繰り出しても、「奴」は次々と打ち破り、蒔風が攻撃に入るも五分と言ったところのダメージ量。このままではジリ貧である。

ゴリ押しされればおしまいだ。

「ガバツ……ゴツ、ハ……プツ、ざっけんじゃねえぞ！
！！！！！」

蒔風が雷旺を「奴」に放ち、その電撃の中を突き進んでいく。

「奴」はそれを弾き、雷旺内の蒔風の首を掴み取った。

「ふん……」

そのまま蒔風の首を擦じり切ろうとする。

だが、蒔風のだらりと下がった手に、圧水の力が集結する！！！！

ドッパツ！！！！バシャアアアアッ！！！！！！

蒔風と「奴」の身体が吹き飛び、倒れる。

蒔風の身体がベシヤリと落ちて、「奴」がのそりと立ち上がった。

「ぐつつ……ゲほつ……おい!! ジョーカー!!!! お前、人間として生きたくはないのか!!!!」

「なに？」

「奴」の言葉に、動きが止まる。

皆、地面に膝をつくか倒れ伏しているかの状態である。

蒔風も右足を引きずりながらなんとか立ち上がっており、ブレイドを立ち上がらせようと肩を貸していた。

「オレが世界を再構築すれば、お前は人間としての生が得られる!!!! もちろん、この場の全員が存在する世界をだ!!!! それを欲しくないか!!!!!!」

「奴」の提案を聞き、カリスが周りの皆を見る。
そして最後にブレイドを見据え、静かに立つ。

「そつだ!!!! お前の本能を、ここで爆発させろ!!!! そうすれば、世界は素晴らしくなる!!!! 皆が笑顔で、欠けることのない未来を得られるんだ!!!!!!」

「奴」が吼える。

その言葉に、カリス・相川始が答えた。

「断わる」

「……お前は人間として生きたいんじゃないかったのか？お前はそんなにいいのかよ！！！！」

「たしかに、オレはアンデットだ。だが、人でなくても、人として生きることにはできる。それを、教えてもらったんだ。それに……」

相川が蒔風、剣崎の方に向き、こう言った。

「もう十分救われた。この世界に救いは無い、なんてことはない。どんな世界にだって、必ず救いは存在する」

「この世界はお前がいくるにはつらい世界だぞ？……お前の居場所には酷く脆い！！そんな世界で、生きていけるのか！！！！」

「」「生きていけるぞ！！！！」「」

「奴」の言葉に相川だけでなく剣崎、蒔風も叫んだ。

「オレの帰りを待っていると言ってくれた子がいるんだ。その子のために、俺は帰る。その子がいる場が、オレの居場所だ!!!」

「始は人として生き、そしてそれを成し遂げようと必死に運命と戦った!!!そんな「奴」に、世界が居場所を与えないなんて嘘だ!!!」

「確かに・・・彼は人ではない。受け入れてくれない人も多いかもしれない。だが・・・それはお前が決めつけていいことじゃない!!!」

「「自分の居場所は自分で決める。自分の運命も、自ら切り開く!!!」」

「行くぞ剣崎、準備はいいか!!!」

「ああ!!!」

【KAMEN RIDER BLADE】 - WORLD LINK
- WEAPON - !!

四人のライダーの全カードが宙を舞い、それがブレイドの全身に張り付いていく。

装甲が黄金に輝き、巨大な剣がその手に握られ、重々しいその姿はまさに王者の風格。

仮面ライダーブレイド、キングフォーム。

さらにそれを越えた存在として、今ここに立つ！！！！！！

ブオアアアアッ！！！！

装甲からオーラが噴き出し、周囲を圧倒する。

そして一歩一歩、静かに「奴」へと歩を勧めた。

「くっそ……アンデットになられるとこっちも迷惑なんだよッ
！！！！！！」

ドッ！！！！ガギイ！！！！

「奴」が魔導八天を振るい、それをブレイドが腕で掴んで止めた。胴体の開けた「奴」に向かって、黄金の剣ではない、ブレイラウザ

―を後ろに引き、「奴」の腹部に突き刺した！！！！

ドブツ！！ブシャアアアアアアッ！！！！！！

「奴」を串刺しにし、掲げてから地面に突き立て、縫いとめるブレイド。

その圧倒的な力に「奴」が苦痛の声を上げる。

「がああああつ！？・・・・は・・・・それでアンデットになっちまったら・・・・ガボツ・・・・お前も・・・・おしまい、だな！！！！」

「アンデットにはならないさ」

蒔風の言葉に「奴」の目が見開かれる。

「これはWORLD LINKだぞ？そんな負担、かかるわけねえだろうが」

「この力はみんなの願いがオレに宿ったものだ。それがオレの身体を蝕むはずか無い！！！！」

【KAMEN RIDER BLADE】 - WORLD LINK

凄まじいエネルギーが蓄積されていく！！！！！！

「ぐっ！！この！！抜ける・・・バカ力め・・・地面に食い込んで
抜けねえ！！！！が、があ！！！！ごあああああああああああ
ああああああ！！！！????????」

ドジュウウウアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！

ブレイドがもはや一つの光線と化し、「奴」を突き抜ける。
その膨大なエネルギーはその体を塵一つとして残さなかった。

.....

ドガン！！！！

「もう行く！！行ってくる！！！！」

「こら待てお前！！！！きちんと治療しろ！！！！」

「そんな暇無いつてのよ!!!」

「抑えろ!!! 剣崎!!! 睦月!!!」

「「おう!!!」」

「うわっ!!! うひょう!?! あつぶねえ!!! お前ら怪我人になんてこ
としやがるんだ!!!」

「怪我人がそんな動きできるか!!!」

「実はあの人アンデットなんじゃないのかな?.....」

「せめて何か飯食ってけ!!!」

「ガリガリ君(ソーダ味)が食いたいです!!!」

「そんなもん食わせられるか!!! (ドンドンドン!!!)」

「うわっ!!! あの野郎!!! 本気で撃ってきやがった!?! せい!!!」

[Gate Open . . . K A M E N R I D E R B L A D E]

「飛び込めオレの情熱!!!」

「タチユバラサン!!!」

「パンツハワタサン!!!」

「言葉おかしくなってるぞ!?!じゃあな!?!元気でやれよ!?!」

「喰らえ!!! (ブンツ!!!)」

「(ゴスっ) あだあ!?!?!?!?!」

バシユン!!!

以上が蒔風がこの世界から旅だった経緯である。
なんとまあ、慌ただしい去り際だろうか。

「あんのバカ・・・行きやがった・・・」

「大丈夫だといいけどな」

「あいつなら平気だろ」

心配しながらも、一方で大丈夫であるとも信じて、
剣崎たちは日常に戻っていった。

剣くキングの剣(つるぎ)(後書き)

アリス「ディエンドの力、面白く使いましたね？」

蒔風があれ使ったらあなりますって、絶対。

ディケイドでも使いたいけど、そんな二度手間するなら一発で本人の力借りちゃえばいいからそっちは使いどころないんだよね。

【仮面ライダーブレイド】

構成：”ライクル” 60%
”LOND” 30%
”フォルス” 10%

最主要人物：剣崎一真

- WORLD LINK - } WEAPON } : 全アンドゥット融合キ
ングフォーム(負担なし)

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : 全力
ードを貫いてのロイヤルストレートフラッシュ

ア「今回はライダーじゃないんですね」

そうだ

今回はあの作品さ!!!

でもアニメ版はあんまりなあ……
原作とはかなり違ったし。

でもこの小説、基本「こんな恰好のやつらが戦っている」程度で十分ですので……！！

ア「あれ？蒔風は？」

作者の脳内じゃ蒔風君は人型に「蒔風」って書いてる人間が暴れるだけだから。

ア「超簡略！？次回、蒔風、どこから現る」

ではまた次回

友と、明日のために……！！

11eyes 　　〜なんてところから来るんだ〜

喫茶店・ツイベリアダ

現在この店に学生服姿の、五人の少女と二人の少年がいた。

「さて、今日集まったのは他でもない。我々の力が戻ったことだ」

そう切り出したのは「美人」と言う言葉が似合う少女、草壁美鈴。
それに対して白髪が肩まで伸びた少年、たじまたかひさ田島賢久が答えた。

「力が戻ったならいいじゃないか。別にあつて困るもんじゃないっしょ?」

「いいや、こういつたことはキチンと原因がわからないといけない。幸いにして菊理君が知っているらしい。菊理君、頼む」

そつ話を振られたのは大人しい外見に長い黒髪の少女、たちばなくくり橘菊理である。

では、と頭をペコリと下げ、指を立てて説明を始めた。

「あれは……昨日の晩……うっうっうっうと眠っていた私の夢の中のことです」

.....

「ここは……夢の中？」

「明晰夢ですか？でもなにか……」

「菊理……」

「？」

「誰ですか？」

「私です、菊理。大切な話があります」

「貴女は……デミウルゴス！？」

「はい、緊急の用件があって、再びやって来ました」

「……………という事でした」

「敵って……なんだよ。また戦いが始まるのか!？」

「駆君……………」

戦い、という言葉に、水奈瀬ゆかが怯え、なつきかけ 臆月おそつきに心配そうな目を向ける。

「菊理先輩、その敵ってどこから来るんですか？」

「わかりません。デミウルゴスは言ってませんでした」

「今はどうなんだ？話は聞けるのか？」

美鈴の質問に首を振って答える菊理。

「彼女はまたアブラクサスとなって私の能力になってしまったので……………」

「そうか……………」

「だが推論は可能」

「栞君？」

無表情な小さな少女、百野栞もものしおりが言葉を発する。

「世界を破壊して特をする人間はこの世界には存在しない。つまり、異世界からの敵」

「異世界って……」

「だが我々はその存在を知っている。一概に否定は出来ない」

皆が黙り込む。

いつもはひょうきんな態度の賢久も、まだ見ぬ敵に緊張を隠せない。

「や、やだなあ、皆さん！！なに黙っちゃってんですか！！皆が揃えば怖いものなしですよ！！ね？賢久先輩！」

なにやら重くなった空気を取り払うように元気を出していった広原雪子が賢久に話を振り、賢久がそれに答えた。

「おお、そうだな！こんだけスゲー力を持った人間が揃ってんだ！怖いもんなんざねえよな！？なあ、駆！」

「あ、ああ。そうだな。まだ敵の姿も見えないのに悲観するのは早いよな！」

「じゃあ私コーヒー注いできますね？」

「オレも行くよ」

「いいですーです。私、広原雪子、全力でおいしいコーヒー注いできますー!!」

この喫茶店でバイトをしている雪子が席を立ってコーヒーを準備しに行く。

「どんなコーヒー注ごうかなー(ガパツ)ってひいいい!?!」

「どうした雪子おー!!」

「あ、あ、ひ、人が……詰まってる……」

「……はあ?」「」

全員が雪子の指差す場所を見る。

そこはカウンターの上にある横長の棚。

そこに我等が時風舜が横倒しになって白目を剥いて詰まっていた。見事に

「ええ~~~~~?」

駆が感情を表しにくい声を出す。

そんな中、栞だけは無表情で土台に足をかけ、蒔風の服を掴んで引きずり下ろした。

ドダン!!と蒔風が落ちてきて、その衝撃に目を覚ましたのか身悶える。

「アダッ!? や、やっと出れた……」

蒔風が腰をさすりながら立ち上がり、ようやく周囲の視線に気づく。

「呼ばれて飛び出「呼んでない」呼ばれなくてもジャジャジャジャ
————!」

「栞のツツコミを流れるようにスルー!？」

「大変なこと、起きてませんか?あなたの世界のお助けマン!! 銀白の翼たあ、オレのことよ!!」

蒔風がバァーン!!!と自己紹介する。

その内容に皆、当然驚いた。

「銀白の翼!？」

「では……………あなたが？」

「話は聞いていたぜ!さ、説明するから席に「それより片付ける」片付けてから説明するから皆待つててね!! (涙目)」

菜の一喝に、蒔風がカウンターに散ったコーヒー豆やコップを片付ける。

そしてそれが一通り終わったところで、蒔風が席についた皆に向かって立ち、説明する。

∥ ∨ (* . ()ノ 説明中 ∥ ∨ (* . ()ノ

「なんてことではな」

「じゃあ……その「奴」って言うのが……」

「オレたちの、敵」

「その通り」

時風が腕を組んでそう答える。

それに納得した駆が、時風に握手を求めた。

「じゃあ、お願いします。時風さん」

「時風とか舜とか、簡単な呼び方でいいよ」

「えっと……じゃあ、舜さん？」

「おう！ああ、それと……」

「なんですか？」

「お前らの素性、教えてくれない？」

「あ」

「てっきり知っているものかと……」

彼らが説明を始める。

この世界であつた戦いの事を。

といつてもかなり複雑だ。

故に、ここで簡単に、非常に簡単に現そう。

? 「赤い夜」と呼んだ幻燈結界という異空間に断続的に引きずり込まれる彼ら。
ファンアズマゴリア

? そこで「黒騎士」と故障した敵と遭遇、幾度も幾度も「赤い夜」を行き来し、彼らを撃破していく。

? 実は黒騎士は暗黒の魔女を封じたメンバーで、「赤い夜」は魔女によるものだった。

? 駆を除く皆の力は魔女が封印されたときに散つた物が移つた物だった。

? 黒騎士を倒し、魔女を撃破した彼らは、日常に戻つた。

である。

ちなみに彼らの力と言うのは

陰陽師・草壁美鈴がその力の増大。

驅の幼馴染、水奈瀬ゆかには「赤い夜」や能力の無効化を持つ、「ハンスオングローリー栄光の手」の発動。

メンバーのムードメーカー、広原雪子は超速再生能力。

清楚なお姉さん、橘菊理はアブラクサスの制御。

ヴァチカンの魔術組織の禁書目録、百野栞は魔術の底上げ。

食いしん坊お兄さん、田島賢久は発火能力^{パイロキネシス}。

駆のみは魔女の力とは関係なく、別の力によるものだ。

それは劫^{アイトンのめ}の眼だ。

未来を見、その未来を引きよせる力を持つ魔石が埋め込まれた眼だ。そのためかつては両目の意をが異なり眼帯で隠していたが、今は別段変には見えない。

デミウルゴスの処理のおかげで、能力の使用時のみ変わるといってもなっている。

「なるほどなるほど……んじゃ、まオレは家帰りますよ」

「え!?!」

「「奴」が来るのは……明日か明後日かな?そこまでのんびりしてますだ。どつとらはい」

そう言って蒔風が店から出て行く。

「あの人……どこ住んでるんだろ?」

「ちあ．．．．」

そんな疑問を置き去りにして、蒔風は街に消えて行ってしまった。

t o b e c o n t i n u e d

11eyes ｝なんてどこから来るんだ｝（後書き）

アリス「なんてどこから来てんですかほんとに」

それが蒔風クオリティ

ア「今回の世界はどんな感じですか？」

菊理さんはいませんが、駆とゆか、賢久と雪子がくつついてます。

それとあと・・・ゆかの能力が何だか曖昧です。

誰か細かい事覚えてたら教えてー！ー

ア「アニメ見ればいいじゃないですか」

アニメは原作と少し設定違うから参考になりきらない

ア「なる。次回、蒔風泊まる。そしてお風呂でヌッフッフ！ー！ー」

ではまた次回

赤き夜に墮ちて 刹那に散りゆく運命
キミは何を望む？

11eyes へ避けられない戦いがある

時風が何処かへと行ってしまったので、皆はいったん解散することになった。

その後、美鈴の家に集まり、事が終わるまで泊まりこむことになった。

「それにしてもさ、やーっぱでけえよな、美鈴先輩の家」

「草壁家の別宅だったよな、たしか」

「でもまた皆でこうやって集まると、なんだかわくわくしますね！！！」

草壁邸へと続く道。

すでに敷地には入って、そこから邸宅までの道を駆、賢久、雪子の三人がしゃべりながら歩き、後ろを菊理とゆかがついて行っている。

「フウウウウ・・・さみいなあ・・・早く着かないかねえ」

「そんなこと言ってもしょうがないだろ・・・ほら、見えてきた・・・ぞぞ?」

「テント？あんだ家無いのか？」

「オレは世界を回る者。家なき子なんですヨ！で、世界に着くたび、テントの場所が情報として送られてきて、そこに着いたらあらびっくり」

「そうだったのか……」

「……<>……だから許してください！」

「まあ……そういう事情なら仕方ないね……」

「ありがとう！じゃあ早速……」

「待て待て待て。なぜテントを組み立て始める？」

「え？だってお世話になるわけにはいかないしですよ」

その発言にはあゝと額を押さえて呆れる一同。

菊理やゆかはあはは……と汗をたらして笑っている。

「わかった、部屋を用意するからそんなところで寝泊まらないでくれ」

「マジで！？ありがとうございますだ！……」

そんなこんなで時風の宿泊も決まり、夜がふける。

「はい、ここではじまりました」男湯、煩惱爆発!!!」の時間がやってきました!!!」

「ワーーーーー!!!ドンドンパフーーーー!!!」(一名棒読み)

そんなこんなで現在入浴中。

皆で晩御飯を食べ、そしてお風呂に入っているのだが……

「おおー。すげー!!!」

「一軒家にこれだけのお風呂があれば十分だよな」

「温泉温泉~~~~」

この家は凄かった。
男湯、女湯に分かれた浴場まであったのだ。隅の方にはサウナもある。

ホテルなどの大浴場までとはいかないが、個人の家が持つには十分な広さだ。

「にしても……」

「ん？」

「蒔風の傷、すげーな」

「それ、全部今までのか？」

「そうだね〜はあ〜ヌクヌク（　）。○○」

身体を洗い終わってから湯船に浸かった二人が蒔風に質問する。

「あいつ強いからね〜……ホント、俺なんて「勝った」って胸張って言えるのなんか三回くらいじゃね〜？」

「今までいくつ回ってきたんだ？」

「ん〜とね、わかんない。ひ〜ふ〜み……………」

時風がのんびりと指を曲げて数えて、指をパチンと鳴らして答えた。

「25個前後かに〜？二回行った世界もあるからメンドイに〜」

「そんだけしか勝てないのかよ。「奴」が強すぎんのか？」

「んん〜？そ〜だねえ〜でもま、安心してに。オイラさん、世界最強にゃから〜」

「大変・・・なんだな」

「別に〜〜こつやって楽しいこともあるし〜〜別に後悔はしてないよ〜〜ただ〜〜」

「ただ？」

「そのきっかけだけは・・・残念だったけどね・・・」

「きっかけ？」

「・・・あーのぼせそうだ！！サウナ行こうぜ！！我慢大会だ！！！！」

そう言って二人の手を取って湯船から上がる時風。
おっと、きちんとタオルは腰に巻いてますよ？

湯船にタオルを入れるな！！と言われそうですが、この男、こついでた面では恥ずかしがり屋なのである。

蒔風が二人と一緒にサウナに入ろうとその扉に手をかける。

その瞬間

彼らを脳髓から揺さぶるボイスが聞こえてきた。

「美鈴先輩おつきいですね！！！」

「や、やめてくれ・・・そんなにじろじろ見ないでくれ・・・」

「うう～ん。でもやっぱり女性として憧れちゃいますね～」

「雪子君だつてないわけじゃないだろう？」

「でも美鈴先輩には叶いませんよ～」

「これも結構肩が凝って大変だし鍛錬には邪魔だし……」

「「襲え!!!」」

「え？なに、うひゃあああああ!!!」

ガシッ!!!!

今この時以上に心が一つになったことがあつただろうか？
おそらくは無いだろう。ああ、なぜ人はこんなにも愚かなのか……

「壁の高さは約三メートル」

「厚さは十五センチと言ったところか？」

「なあ……いいのかこれ？」

訂正、一名冷静な男がいました。

「なあ駆、考えてみる。普通浴場作つてさ、露天でもないのにこんなふうに上の部分が開いてるなんておかしいと思わないか？」

時風の言葉どおり、この浴場は女湯と男湯に分かれており、銭湯のよつにそこを仕切る壁の上部は空いている。

「普通はあそこを塞ぐ。だが、あえて開けられてるのはなんでだ？」

「オレには見える……ここを立てた大工のおっちゃんのが笑顔が！
！そのサムズアップが！！！」

「お？おお？」

「これは行かねばならぬ。かの織田信長も、合戦と女湯、どちらを選ぶか本気で悩んだらしい（嘘です）」

「そつだぞ駆。目の前に牛がいて、それを喰わないライオンはいない。オレたちは……ライオンなんだ！！！」

何かと言うと亀のような気がする。

「さて……いきますか？」

「おう！……！」

「行くぞ!!!」

「まず桶を片っ端から集める。それから逃走経路の確保だ。この場の条件ではじっくり見ることは叶わない。おそらく！見た瞬間に見つかるだろう」

「へっ、そんなリスク、恐れるにあらざだぜ!!!」

「だけど逃走先はどうする？屋敷の中は見つかるぞ？」

「こんなこともあるのかと!!!あのテントちゃんと林の中に立ててきました!!!」

「つまり覗いた瞬間心のフィルムに焼きつけてから脱衣所に逃走」

「衣服を持って屋敷街に逃げ、テントに向かう」

「その通り。準備は怠るな。時間をかけ過ぎると彼女らが出て行ってしまう」

「蒔風!!!準備はできた!!!」

「逃走ルートに障害物は無い。劫の目で確認した」

「圧水でタイル、および全身の徐水終了。これで滑ることは無い」

三人がせつせと桶を積み上げ、覗けるほどの高さになり、その上に乗る。

「せーので行くぞ・・・」

「」「せーのッ」

バツ！！！！！！

「おおッ!?!」

「これは・・・」

「ばんなそかなッ!!」

「ラジカセ・・・だっ!?!」

女湯にあった物。それはラジカセだった。そしてそれはいまもキャッキャウフフな桃源郷の音を流していた。

「この家は私の家だぞ？賢久が来るとわかっていた時点で、壁にモノを積み上げたらわかる術を仕込んでおいたのさ」

背後から声がした。

三人が桶の上から見下ろすと、そこには室内着に着換えた女性陣が。

「……いや、なんとも熱いお風呂ダツタネ！！カケルクン、タカヒサクン！！！」

「そうだな。だがもう大丈夫だ。落ち着いた」

「逆に寒いくらいだけど、もう一度湯船につかろうか！！」

「……あつはつはつは………つは！！！！！！」

三人が同時に駆けだす時風は脱衣所に、駆は窓から、賢久は女湯の方に飛び込み、それぞれ逃走を図った。

だが………

『ぎゃあああああ！！！！ゆ、雪子！！！！なんでお前いつの間に！！？』

『女の子には秘密がタクサア~~~~ン……………』

『ぎゃあああああああああ!?!?!?!?!』

『駆くん?ニガサナイヨ?』

『な!?ハンスオブグロリー栄光の手!?!』

『駆君はこの空間からは逃げられないんだよ~~~~?』

『さてゆか、落ち着け、落ち着くんた』

『弁解、できるの?』

『できませんすみまぎゃあああああああ!?!?!?!?!』

「……………なるほどな。駆が「目」で見たのは「覗いた場合」の未来。つまり、覗けなかった場合は想定外だったわけか」

「で?君はなにか言うことは?」

「こつして悪は滅びた。」

.....

「フンフフ〜ン。ふつろっそうじ〜」

「なんでそんなに上機嫌なんだ？」

「この程度で済んだなら上々じゃね？」

「た、たしかに……」

蒔風たち三人は罰として風呂掃除を任された。
モップを手にゴシゴシと綺麗にしていく。

「蒔風はこついうのめんどくさいんじゃないか？」

「やるまではめんどくさいよ？でもやり始めたら徹底的だから、俺」

それから皆で大広間に行き、そこでカードゲームやらボードゲームやらをやって遊んだ。

「ああ、そういえばさ」

「なんででしょう?」

蒔風が菊理に声をかけ、それに菊理が答える。

「なんでアブラクサスはオレが来ること知ってたんだ?」

「それは……えっと……」

「言えない事ならいいんだよ。ただちよいと気になってね」

「……そんな聞いたそうな眼をしても、説得力無いですよ?」

「バレタか」

「わかりました、お教えしますよ」

この話は誰も知らない事らしいので、なるべく言いふらさないでくれと前置きしてから菊理が話を始める。

赤い夜での最終決戦。

皆が力を出し切り勝利したものの、ボロボロで、死者まで出ていた。

美鈴や駆は力の酷使で身体や魂が崩壊しかけていたし、ゆかと雪子は魔女、リーゼロッテに吸収され、賢久はすでに死亡していたのだ。

だが、戦いに勝利した皆の体内から力の源である「虚無の魔石の欠片」と、駆の「劫の目」を菊理は取り出し、アブラクサスに吸収させた。

それによりアブラクサスはデミウルゴスに覚醒し、真の姿となった。その力は神に等しく、世界を修復するほどのものだった。

その力故に菊理は世界から孤立し、神の領域で一人世界を見守ろうとした。

だが、デミウルゴスには自我が宿っていた。

そのデミウルゴスが自らと菊理の関係を断ち、一つ高層の世界領域から皆を見守ると言って消えた。

こうして菊理は人の世に戻ってこれたのだ。

「なるほどね。それならこの世界に侵入者がいたことに気付いてもおかしくねえや」

そう言いながら菊理の頭をくしゃくしゃと撫でる蒔風。

「よかったな。人間から外れなくてよ。オレとしてもうれしいよ」

「え？」

「オレは既に存在が人外だ。翼人とかそう言うのが無くても、死を理解した時点でオレは爪弾きもんだ。だからうれしい。あんたが、ちゃんと人間やってるとこを見ると、さ」

「……はい。これも、皆さんのおかげです」

「うんうん、人生、楽しんでるかいい？」

「もちろんです」

そう言つて次のボードゲームを用意する蒔風。
その顔は、とても奇麗に笑っていた。

「次はこれだ！！」「レインボードリーム」！！！」

「また人生ゲーム!？」

「じゃあ・・・「ブラックアンドビター」！！！」

「そればっかかよ!？」

「また「エクストラ」やる?」「関西版」もあるけど」

「もうなんでもいい・・・」

「「筋肉番付」と「ハローキティ」、どっちがいい?」

「「」そんなのまであるのか!?」「」

t o b e c o n t i n u e d

11eyes 避けられない戦いがある (後書き)

アリス「何やってんですかまったく」

蒔風は覗きたかったんじゃない。

「覗く」と言うその行動を楽しんだんだ!!! だから別にその先に何があっても構わない!!

でしたからね。

ア「人生ゲーム・・・あれ大人数でやると面白いですよね」

作者が持つてるのは「エクストラ」「ブラックアンドビター」「レインボードリーム」です。

滅茶苦茶面白くていいんですが、なかなか仲間が集まる機会がなく・・・

それとみなさん、今日の「いいとも」見ましたか？

私は見ました。

テレフォンショッキングのゲストが、吉川晃司さんでした!!!

ア「仮面ライダースカルのおやつさん役の？」

そう、鳴海壮吉役の吉川さんです!!!
渋かった.....

ライダー勢からもお花贈られてましたね。

ア「それはテンション上がったでしょうね」

それはもう!!!12月の劇場が楽しみ

ア「次回、送られた刺客」

ではまた次回

千鳥や千鳥、伊勢の赤松を忘れたか

11eyes 〽派手に戦ってみますか！〽

朝である。

いい朝である。

そんな朝、皐月駆は寝起きにとんでもない物を見た。

「うみやあ〜〜〜〜」

「が……………かけ……………たすけ……………」

寝ぼけた時風が賢久にチョークスリーパーをかけていた。しかもホルドで。

「おいおいおいおい！！！！」

駆がどんどん青ざめて行く賢久の首から時風をはずし、代わりに抱き枕を抱かせることで事なきを得た。

「さて！！皆さん、今日と言う日がまたやってきましたが、ご機嫌いかがでしょうか！！！！！！」

「朝からデッドオアアライブ」

「死にかけて友人を救いました」

「それはとってもエキサイティングッ！！！！」

「「あなたのせいだっ！？」」

朝食をとりながらなんだがテンションの高い蒔風が二人からド突かれてあっはっはと笑っていた。

「男の子ってすぐ仲良くなりますね〜」

「うらやましいですね」

「でもああいうのって本人大変なんですよね〜」

女性陣は女性陣で会話に花を咲かせている。

そして朝食後、男三人は何を思ってたか、庭に出て何やら始めていた。

「よっしゃ駆!!どっからでも打ちこんでこい!!」

「おおッ!!」

カンカン!バシッ!

二人が木刀を持って打ち合っている。

その光景を賢久がドーナツをつまみながら眺めてやんややんやと囁きしている。

「ほう、鍛錬か。いいことだな」

「草壁さんじゃないですか」

「私も剣術の心得があるんだが、あとで手合わせしたいな」

「ええよ?でもちよいと待ってね。今日来なきゃ明日・・・いや、明日だな。明日来る」

「なぜ断言できる?」

「いい男には秘密があるの」

蒔風が塞げた口調で振り振り立ってながらいたずらな目をして答える。

その間にも駆が木刀で打ち込んできているが、受けるなり弾くなり流すなりで蒔風には当たらない。

「かけちゃん、ハッキリ言ってお前の剣術では俺には勝てない。だからお前はお前の特技を使え。それはかなぐり、厄介だ」

「・・・わかった。行くぞっ!!」

「来いッ!!!」

蒔風が剣を縦一文字に振り降ろす。

だが蒔風がそれを振るう動作よりも早く、駆が横に動いてそれをかわす。

まるで最初からそう来るとわかっていたかのように。

蒔風がもう一度駆に向き合つと、駆の左目が金色と黄色の中間あたりの色に変わっていた。

「一劫の目（アイオンの目）・・・さすがの性能だな」

「ふう・・・（スウ）でも見れてもオレの身体が動きについていけなかったり、受けても受けきれないような攻撃じゃどうしようもないからなあ」

六体の黒い影が蒔風たちの前に降り立つ。

その形態は武人、巨大な棍棒を持った丸い大男、鞭のような剣を持った悪魔的な女性、何かの像のような形をした者、二本の刀を持った女性。

そして……

「あれがリーダー格か……なにあれ、オーガやん」

そしてその内のリーダー格であろう黒騎士。

確かに、彼らがこの姿を見て「黒騎士」と名付けたにふさわしい外見をした男。

それは蒔風が言う様にオーガ……仮面ライダーオーガに似ていた。

「トレスだろー！ーあれー！ー！ー」

「な、何を言ってるんだ！？とにかく、ここはみんなで「ここはオレに任せてもらおう」んな！？」

蒔風が一步前に出て拳をバキボキと鳴らして行く。

「あいつらは強い！！それがあれだけそろっていれば・・・」

「でも今のあんたらなら勝てるだろ？やらせてくれ。今のオレがどれだけ動けるのか、試させてくれ」

「今の・・・君？」

「気にするなよ。それに、デカブツは終わった」

キーン・・・・・・・・ゴガアアアアアアア！！！！！！

蒔風がそう言うと、棍棒を持った巨体の黒騎士が斜めにずれ、消滅した。

「さあて、はじめようか。この地に染みついた記憶より作られた過去の亡霊よ」

そう蒔風が言うと同時に、武人の黒騎士・イラが中段に拳を構えて突進してくる。蒔風がそれに対して身体を開き、腕を「ハ」の字にして自分の腹にくるよう誘う。

はたしてその拳は周囲の空気を擦じりあげて蒔風の腹部に向かって放たれた。

それを左手で掴みながら蒔風は右足を下げて上体をひねる。

そこから左足を下げ、右手でも掴みながらさらに身体を返し、イラの身体を投げ、地面に落とす。

腕を極め、その根本からへし折ってから頭蓋を踏み砕く。

そして背後に迫る悪魔的な女性の姿をした黒騎士・インヴィディアに振り返りながら裏拳を振るい、顔面にめり込ませる。

「勢いよく飛び過ぎだ。飛翔音で丸わかりだったぞ？」

ゴゴン！！ゴゴン！ゴガツ！！ズ・・・ズン！！！！

邸宅の周囲の林に突っ込み、木々をなぎ倒しながら吹っ飛んだインヴィディアが、最後の巨木でなんだかよくわからない染みになって終わった。

そしてインヴィディアがそうなるより少し前に、すでに蒔風と二刀流の女性像をした黒騎士・スペルビアと激しい剣撃を打ちあっていた

た。

その速度はもはや人の範疇を超えており、実際には五回ほど打ち合った剣の音が、「ギン!!」の二音に聞こえる。

さらにその「ギン!!」がとんでもない回数、一気に鳴っている。

ギギン!!ギギヤギヤギヤギギギンツ!!ガキユイツ!!ガガギギギンツ!!

「ハアアアアああああ!!!!ぬうん!!!!」

ガギギツ・・・ギヤギン!!!!!!

蒔風がスペルピアの剣を弾く。

それと同時に、唯一人型でない、像の形をした黒騎士・アケディアが蒔風に向かって炎と雷を同時に放ってきた。

「圧水砲!!!!!!」

それに対し蒔風が圧水砲で迎え撃ち、爆発を起こして周囲が霧に覆われる。

「なッ……視界が……」

「ゆか!! 離れるな!!」

「か、駆君? どこ!?!」

「オレはここ」声を出すな駆!!」ツツ!?!」

ゴギャン!!!!!!

駆が時風の声にビクつき、ふいに見えた影に頭を抱えて防御をとる。

だが、その影が駆に危害を加えることはなく、時風がその影、スperlビアを背後から貫いていた。

さらに駆と貫かれたスperlビアの間には雪子がナイフを構えており、腕と頬に少し切り傷があったが、その場ですぐに感知してしまった

霧が晴れ、離れたところではすでにアケディアが黒い煙となって消滅していた。

「大丈夫か?」

「あ、ああ」

「びっくりしましたよも〜も〜」

「凄いな、超速再生か？その戦闘能力は別か？」

「あはは、これは自前です。私の力はすっごくよく治るだけですよ？」

「十分だ……ツオツ!?うわアアア!？」

蒔風の身体が漆黒の巨大な腕に掴まれ持ち上げられる。
その腕の主はリーダー格・アワリティア。
巨大な竜へと変貌した彼が、蒔風を潰そうとその腕を握りしめた。

「じんの……」

「蒔風!……!」

「ち……いいだろう……試してみるか……『我ここに異端を証明す』」

ブシャッ!……!……!

蒔風のつぶやきと共に、竜の腕が裂け、その体を離す。

「なんとかうまく行ったな……固有結界、中々難しい」

「蒔風！……まずい！……！」

「ん？なッ！？」

蒔風が賢久の声で竜を見上げる。

その口元には炎のように七色の虹が蓄えられていつている。

「契約の……虹ッ！……！」

「なるほど……次元破断砲撃かよ……勘弁してくれ……！」

ドバオ！……！！……！！

虹色をした砲撃が放たれ、蒔風がそれを迎え撃とうとする。
だが、それよりも早くそれに対処したのは……

その光によつて竜が跡形もなく消し去り、同時に赤い夜も消え、普通の昏下がりの陽氣に戻つた。

「うゝゝん……助けられちまつたな。ありがとさん!!!!」

「う、うゆ……」

そう言いながら蒔風がゆかの頭をくしゃくしゃと撫で、ゆかがそれにワタワタと困る。

「ま、これで証明できた。「奴」は今日、来ない」

「では明日?」

「今晚12時からだな。そこまでは気を抜いておけえ。神経切れちまうからな」

ヒラヒラと手を振りながら椅子に座つて眼をつむる蒔風。

「オレは寝るよ。ごめんな、草壁っち。相手はできそうにないや」

「いや・・・構わない。あの戦いを見ただけで十分だ」

「そ？よかった・・・ふあああ・・・」

そうしてあくびをして眠る時風。

最初は俯いていたが、次第に顎が上がって上を向き、口をポカーッと開けてしまった。

あ、よだれ垂れた。

「じいつ・・・ホントにすじい・・・」

「それでも「奴」に勝つのは難しいらしいんだ」

「それホントですか!？」

「それなら我々も休もう。今日はなんだかもう疲れたよ」

そう言って皆が思い思いの行動に移った。

のんびりする者、いつも通りの者、遊ぶ者、身体を動かす者。

着実に時間は進む。

「奴」の襲撃時間が迫ってくる。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

1 1 e y e s 　↳ 派手に戦ってみますかー！　（後書き）

アリス「今回時風強！！！」

そして「奴」が来るのは次回ですね。

ア「私が言うつもりだったのに！！！」

ではまた次回

そのアイ（眼／愛）が運命を変える

11eyes 　それは友と明日のために

黒騎士の襲撃から数時間後の夜

正確にはもう次の日になってから二時間後。

「づがれだ……」

「待つのもキツイなあ」

皆が起きて「奴」が来るのを待ち構えていた。
といっても外ではなく、家の中でのんびりしながらだが。

と、そこから数分、美鈴がなにかを感じ取り、頭を上げる。

「敷地内に侵入者……なんだ？……酷く歪んでいる……」

美鈴が敵の情報を読み取ったのを聞き、蒔風がノンビリとココアを

飲んで言った。

「それ以上読み取ると魂とか精神とかそんなんが壊れるからやめと
きな——」

「こいつが……」奴「!? まずい、皆、戦闘に……」

「まあ落ち着け、な？」

蒔風がそういうと同時に、邸宅を囲む林の中から轟音と

(のあああああああああ!?!?!?!?)

誰かの悲鳴が聞こえてきた。

「……え？」

「さっき見回った時にトラップ仕掛けた。こいつは凄いな。流石ト
ラップマスターだ」

ドゴンバガンと轟音が響く中、蒔風達はのんびりと邸宅を出る。

「駆、君にはこの剣を渡しておく」

そう言つて美鈴が駆に草壁五宝の一本・雷切を渡す。

「どうやら君が使つた方が相性がいいらしい。これは君に渡そう」

「いいんですか？これつて……」

「確かに草壁五宝は草壁家の物だ。だが、あの最終戦ですべて砕けた。ここにあるのは菊理君の力で戻つた物だから、それを私がだれに与えても問題はあるまい？」

「……ありがたく、お借りします」

そうやって準備ができたところで、「奴」ちよつと林から出てきた。

「はあはあはあ……」

「どうだった？」

「死ぬわ！！いやまあ余裕ちゃんでしたけど!？」

「無茶すんな」

「いやマジだつて。体力だつてまだこんなにあるしなッッ!!」

「奴」が飛び出す。

時風がその拳を受け止め、上空に放る。

「奴」が空中で体勢を整えながら時風に波動砲を撃ち、爆発して煙で包む。

その煙の中から鏃やじりが先端についた鎖が伸び、「奴」の四肢を貫き巻き付いてきた。

「ぬがつ!?!ぬぬ・・・アブラクサスか!!」

煙の中から天使が飛びだし、「奴」の身体を拘束する。

だがパワーにおいて格段に「奴」の方が上だ。

ギリギリと鎖が悲鳴を上げる。

しかし、確かに「奴」の動きは止まり、最初からそれが狙いだった。

「おおおおおおおおおッッ!!」

賢久の指の先端に火の玉が圧縮されていく。

その数は三つ。

ビー玉程度まで凝縮された超圧縮の火炎が、叫び声と共に放たれる!

「ローゲ・・・フィンガー!!!!」

ゴゴオ!!!!

三つの火炎玉が「奴」に命中し巨大な爆発を起こして、蒔風たちの肌をチリチリと熱した。

「すっ・・・っ」

「やったか!？」

煙の中から「奴」が落ち、アブラクサスが再び鎖を伸ばす。

だが「奴」はそれを避けて掴み、ブチブチと引きちぎった。

その衝撃に菊理が小さな悲鳴を上げてアブラクサスを下からせる。

「ったく・・・蒔風の獄炎弾レベルだぞ・・・」

そういう「奴」の身体はユラユラと霧を吹き出している。

かなりのダメージだったようで、その息も荒い。

「はっ・・・ははは!!どうした!?!?!?!まともな攻撃できるのは田島賢久だけか!?!」

「それは・・・どうかな!?!」

ゴゴゴゴゴッ!?!!

美鈴が人型に切られた紙を飛ばす。

それは力の込められた式神であり、彼女の意志に呼応して、炎を生み出し、「奴」を襲う。

「千歳ちとせの儔ともから、火車切広光かしゃぎりひろみつ!?!!

その際に草壁五宝・火車切広光を術で呼び出し、その剣身に力を込めて切りかかる!?!!

「護身破敵とともに、禍災を除かむることを請う　　神隠す十拳とつか
の如く火産靈ほむのたまび、火車来々、焰羅に送られん・・・」

ゴオオッ!?!?!!

健診が赤く灯り、高温の刃となって「奴」に迫る！！！！

「壱の閃！！！！」

ガゴツ！！！！

「弐の閃ツ！！！！」

ギキイ！！！！

「参の被！！！！」

ガアン！！！！！！！！

「・・・・・・・・・・・・・・・・な・・・・・・・・」

「な？何の遊びだ？の「な」？」

ゴォア!!!!!!

「奴」の足元から黒き波動が噴き出し、美鈴を吹き飛ばす。
そして倒れた彼女に向かって剣を抜き、突き出すして突進するッ！
！！

だが

ガァン!!!!

駆が劫の目による情報で先読みし、「奴」の攻撃を弾いていた。

「先読みの力……未来を見る目か。まあ厄介な。でもな……」

ズオツ……!!!!!!

「見える恐怖を知れ」

その瞬間、駆の右目が光り、未来が見えた。
一瞬にして駆を、「奴」の腕が分身したように迫り、突き貫こうとする映像だ。

「あ……ぐっ！……！」

駆はよけようとするが、背後には美鈴がいる。
さらに言えば、駆の動きよりも早く、「奴」の腕が到達する。

そしてその映像通りのモーションを「奴」が起こし……

ガシュツ！！！！

蒔風が間に入ってそれを止めていた。
脇に魔導八天の内の二本を挟んで受け止め、痛みに顔をしかめる。

「はっ！！！！！」

そこに雪子が突っ込み、「奴」に逆手に持った大型ナイフで斬りかかる。

「奴」はそれに対して蒔風が掴む剣をパツ、と離して新たに二本抜

いて対応した。

しっかりと置き土産を残して。

「ケルベロス！！迦桜羅！！！！やっとけ！！！！」

ギイイイイ……ドン！！ドドン！！！！！！

時風の脇から剣がはじけ、ケルベロスと迦桜羅が姿を現す。

「んだよあのバケモン！？」

「ツ……賢久ア！！！！雪子を一人にすんな！！！！全力でフ
オローしろ！！！！テメエの火力はあれば、「奴」に対応できる！！！！
」！」

「わかった！！！！オラオラオラア！！！！オレの雪子に手え出すんじ
やねえ！！！！！！」

「迦桜羅はオレがやる！！！！（バサッ！！！！）駆は他の者と一緒にケ
ルベロスをおとせ！！！！！！」

「あ、あれを!？」

「栞君!!できるか!？」

「行けます!?!」

「いい返事だ。蹴散らせ!?!」

ドウツ!?!?!

時風が銀白の翼をはためかせ、迦桜羅に空中線を仕掛ける。

駆たちは地上でケルベロスの相手 시작했다。

ガルオオツラアアアアアアア!?!?!?!?!
ドンドンドン!?!?!?!?!

ケルベロスが口から三連の火球を打ち出す。
駆は既にそれを先読みし、ゆかに指示を出していた。

「こないでえ！！！！」

ゴアツ・・・パアン！！！！！！

ゆかが手を突き出し、拒絶の言葉を放つと同時に、その火球は一瞬で消滅してしまう。

さらにケルベロスの右の首をアブラクサスが鎖で締め上げ、左の首を美鈴が火車切で斬りおとしていた。

ドチャツ、と首が落ち、それでもその目玉はギョロつき、駆を確認して首だけで突っ込んでいった。

「邪魔」

バアン！！！！！！

その首の特攻もむなしく、棊による魔術攻撃に消し飛んでしまう。だが残った首が一個だろうと二個だろうと、ケルベロスにとっては問題ではない。

蒔風が己の全武器最硬を誇る玄武盾を構え、それを迎え撃つ！……！！

ガゴゴゴゴア……！！……！！

回転を加えた突進を真つ向から玄武盾で受け止める蒔風。
接点から火花が散り、地上に降り注ぐ。

そしてその攻撃を受けきり、背後に流す。
だが迦桜羅は止まらない。

Uターンして、再び蒔風に向かって突っ込んでくる……！！

「行くぞ玄武……！！」

蒔風が玄武盾を迦桜羅に突き出す。

その縦に刻まれた甲羅の模様が、まるで花びらのようにグパア、と
開け、その中に貯蔵された先ほどの迦桜羅の攻撃がエネルギーとし
て放出される……！！

歳引力、攻撃力は共に互角。

「だぁ！ーうつとおしい！ー！！なんなんだお前らは！ー！！チマチマチマチマと！ー！！！」

「オレたちは・・・オレたちはただ、約束をしただけだ！ー！！」

「約束？なんのだよ。蒔風とか？」

「違う。そうじゃない。オレたちがした約束、それは・・・」

「行くぞ、駆！ー！！」

「『『『『『友と、明日のために、だ！ー！！』』』』』」

【11eyes } Tumi to Batu to Tugun
aino Shoujo } - WORLD LINK - } WE
PON } ! !

WORLD LINKが発動し、皆の力の源、「虚無の魔石の欠片」
が駆に集まっていく。

「そんなこんなで、行かせていただきます」

「手の調子は？」

「問題ないよ。ほれ、ニギニギ」

「じゃあ・・・またな」

「会えることはないと思うけどな。また」

「Gate Open... 11eyes」
「Tumito
Auto Tugunaino Shoujo」

蒔風がゲートをくぐって世界から出て行く。
それを見送って彼らは日常に戻る。

平和な日々が続く日々へ。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

11eyes ｝それは友と明日のために｝（後書き）

【11eyes - 罪と罰と償いの少女-】

構成：” フォルス” 50%

” LOND” 50%

最主要人物：皐月駈

- WORLD LINK - ｝WEAPON｝：すべての欠片の力を
駈に集結

- WORLD LINK - ｝FINAL ATTACK｝：蒔風
の力も上乘せし、斬り倒す

アリス「今回はこの辺ですね。作者はどーしようもない友人に愛想
が尽きてイラついているのでここまでです

次回、いきなり果たし状！？ではまた次回「

ここが勝負 勝負の時なのだ
だから真剣^{マツ}で 立ち向かえ乙女

百代の義理の妹の犬っ子、川神一子^{かずこ}。通称ワン子
気の弱そうな少年、師岡卓也。通称モロ。
ガタイのいいタンクトップ男、島津岳人^{がくと}。
大和に大胆な愛情表現をする少女、椎名京^{みやこ}。
メンバー新顔その一、金髪少女のクリスティーナ・フリードリヒ。
通称クリス。
メンバー新顔その二、大和撫子、黛由紀江^{まゆみ}。

そしてチームの軍師で百代の弟分、直江大和だ。

周りの皆は彼らを総称して、「風間ファミリー」と呼んでいる。

「にしても後を絶たないね。モモ先輩の挑戦者」

「しょーがないだろ？姉さんは世界に名を馳せる最強なんだから」

「でも早く行かないと学校遅れるぜ？」

「今日は何気にチンピラさんも頑張ってるなあ……」

「弟……！先に行っていていいぞー。私も後から追いつくからー
ー」

チンピラをまた五人くらい吹っ飛ばしながら軽快に百代が大和にそ
う言ったので、皆が学校に向かう。

「えう！？お、あ！？」

突如として教室に乱入してきたのは川神百代。
入って来るなり蒔風の襟首を掴んで窓に向かって投げ放った。

窓は元々空いていたがどちらにしる大変なことだ。

だが蒔風は窓の棧に捕まってグルリと回って教室から飛び出すのを防いだ。

「ほう！やるな、お前！！」

百代は心底嬉しそうに笑って言うが、この教室の担任、小島梅子は怒鳴り声を上げる。

「こらあ！川神い！！いきなりやって来てなにをしとるかあ！！」

「そうだ先生！言っつてやれ！！」

「今はホームルームだ！それに、キチンと申込みしてから決闘をし
る！！」

「そうだそつ……決闘？」

「転校したての蒔風は知らなかったな。この学園には決闘システム
があつてな。決闘を申し込み、相手が了承したら、立会人の教師の

もと、決闘が行われる、というものだ」

「はあ……」

「その転校生！！私と決闘しろ！！」

「オレと？オレと決闘？」

蒔風が窓枠から降りて、パンパンと服を払いながら訊き返す。
それに対して決闘決闘騒ぎ立てる百代に、ついに小島教諭がキレた。

「一旦席に付けえ！！！！川神も！！！！自分の教室に帰れ！！！！三年生だろうが！！！！！！！！」

「……ち、しょうがない。あとでだ！！！！あとでまた来るからなあ！！！！！！！！」

百代が教室から出て行き、そんなことはどーでもいいと蒔風がかばんを拾ってそそくさと席に着く。

「なあ……あの人なんなんだ？」

「川神百代、最強の人だよ」

「へえ・・・最強・・・」

蒔風が席について隣のモロにそれを聞き、ニヤリと笑う。

「どーでもいーや」

.....

「姉さん、今日はどうしたのさ。急に乱入してきたさ」

「んん？ああ・・・元と言えばジジイがな・・・」

昼

屋上で昼食を取っているメンバー。

そこで朝の事の話題になり、百代が一枚の紙を出した。

「なにこれ？」

「これはな、あの転校生の書類だ」

「いいのかよ!？」

「ジジイが見せてきたんだ。かまやしないさ」

さつきから百代がジジイジジイ言っているのは百代の祖父で川神学園の学長でもある、川神鉄心の事だ。

それなら蒔風の書類を持っていても不思議ではない。

それを見た大和や他のメンバーが、また不思議そうな顔をする。

「ねえこれ……………」

「名前、年齢……………だけ？」

「確かなこと一つもかいてないではないか!!」

「どういふことなんでしょうか……………」

そう、そこには大したことは書いてなかった。

名前と年齢だけ。
だけど確かに学長の印は押されている。

こんな書類、本来なら通らないが……

「まあそれはいい。見てみる、この補足欄」

「補足欄？何があるんだ……って、え？」

「お？」

「ああ……」

百代が指差すそこには、小さく「世界最強」と書かれていた。

「これを見て黙っていられる私ではないだろうか？」

「にしても姉さん、朝から突撃はやり過ぎだ。あと、この書類、貸してもらえるか？」

「お？どうした？」

「調べてみる。何かわかるかもしれない」

「弟はマメだなあ……だが、私はそんな弟のために動いてやったぞ」

「は？」

ギイ……

その言葉に合わせたかのように屋上の扉が開く。

そして、次の瞬間には大和の頭上から声が聞こえた。

「呼び出されてきてみれば……おいおい……書類にこんな書いたの誰だよ」

「!?!?」

そこにいたのは時風だ。

あちゃ〜、みたいな顔をしてその書類をパツ、と取り上げる。

「にしても随分ずばらな書類だ。用意すんのめんどくなつたか？」

「あ、あんたいつの間に来た!?!?」

「それに書類を準備って……」

怪しげな単語をいくつも並べる時風に、皆が訝しげな目をする。

「ん？いやだなあ！！そんな変な目で見るなよ！！ほら、全部教えてやるから！！な？」

「へ？全部？」

「そ、オレがここに来た理由。その書類。そして世界最強。教えてやるから、まあ聞きなさい」

~~~~~説明！！説明！！~~~~~

「てなわけですね」

「お前頭おかしいんじゃないの？」

「おい……傷つくぞ？」

「んな話はいそつですかと聞けるかってんだよバカ！！」

「バ……かなり響いた……もう立ち直れない……」

「よわっ！？」

「そんな話はどうでもいい！！決闘、受けるのか！？」

「……条件がある」

蒔風が指を立てて百代に言う。

「一つ、立ち合つのはここにいるメンバー「風間ファミリー」のみ。  
二つ、誰にも見られないところで。  
三つ、勝負の間にオレの話の証明をするから、それで信じてくれる  
」？

「三つ目のはお願いだぞ？」

「だって信じるかどうかはお前次第だろ？直江大和」

「……」

「それでいいぞ。じゃあ場所はうちの川神院でいいか？」

「あのおつきな道場か……。いいぞ。存分にやろう。放課後を楽しみにしている」

「じゃあな。オレはこれで失礼する。ああ、オレと戦いたいって奴は、誰でもいいぞ？」

「え？じゃあ……。」「

「私たちもか！？」

「全然余裕だから。どろろんとこい（グッ！！）」

「蒔風がじゃー！！と言いながらビシッ、と腕を上げ、その場から立ち去る。」

「ふふふ……。腕が鳴る……。あの男、世界最強を名乗るならまず誰に礼を言わねばならんか、教えてやる！！」

その場の武士娘、五人ともがやる気を見せている。  
普段は好戦的ではない有紀江ですらも「が、がんばりますっ!!」  
とか言っている。

「オレたち・・・どうする?」

「オレはやるぜ!!!!」

「ガクトもやるんだ」

「おうよ!! 普段はモモ先輩に隠れて目立たねえけど、オレだって結構やるんだぜ?」

「そうだよな。かなり凄い筋肉してるもんね」

「やってやらあ!!」

男連中もやる気である(一人だけだが)

「はぁ・・・なんなんだあいつ一体。ただの電波か、それとも・・・」

軍師、直江大和は思考する。  
だが、今この段階では答えなど出なかった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

真剣で私に恋しなさい　くいきなり宣戦布告！??）（後書き）

アリス「真剣で私に恋しなさい、ですか？」

ええ

今回は一応リユウゼツランのルート後ですね。

百代にある程度まだ戦闘狂の毛があり、あの事件を解決した後です。

ア「事件については？」

この小説の中では関与しないので、基本キャラがわかれば問題なしですね。

ア「なるほど」

次回、さあ、戦闘だあ！！

ア「私が言いたかった！！ではまた次回！！」

逃げ場の無い人生<sup>みち</sup>で

己を信じて come on! Hey! Hey! Hey!

真剣で私に恋しなさい　くそして決闘、まずは三人(+1)く

そうして放課後

蒔風は川神院の前に来ている。

「おじゃましてーす……おーい？」

「蒔風、来たか」

蒔風を呼んだのは大和だ。  
どうやら他のメンバーは別の場所に集まっているらしい。

「ん。で？どこでやるの？」

「こっちだ。ついて来いよ」

蒔風と大和がその場所に向かって歩いていく。

「なあ」

途中、大和が口を開く。

蒔風は「ん？」と大和の方を向いた。



「あの話、本気なのか？」

「勝負のこと？世界のこと？」

「どっちもだけど、とりあえず世界の方」

「本気だよ？これからの戦闘で、そいつを証明してやる」

話していると着いたようで、そこは川神院の広い中庭のような場所だった。

「最初は俺様だ！カッコイイとこ見せてやるぜ！..」

「ガクト、がんばれー！」

「おうよ..」

「最初は島津岳人か」

「そう。それともう一ついいか？」

「なん？」

「川神院の総帥.....鉄心のじいちゃんが立会いに立つそうなん

だが、いいか？」

「鉄心？学長か……いいよ、わかった。書類のことも説明しないとだし」

蒔風が中庭の中心に立ち、岳人と向き合う。

「オレだってやるとこ見せてやる!!」

「ふ……」

蒔風が短く笑い、それに応じる。

「立会人の川神鉄心じゃ。両者とも、正々堂々と戦うように。では……始めえい!!」

蒔風と岳人が互いの両手の手の平をつかみ取り、握りしめる。ギリギリ睨み合う二人の力は一見して互角の様に見える。

「ほう……中々の筋肉量。真人にも負けず劣らずだな」

「誰だ？そいつ」

「他の世界の仲間だよ。そらっ!!」

「うっ？をおお！？」

時風が膝を崩し、しゃがみ込む。

そしてそのままブリッジのように反り返り、岳人を後ろに投げた。

「うっ！？」

地面に落ち、岳人が立ち上がるうとした時には時風のチョキが目の前で止まっていた。

「勝者、時風舜！」

「さ、どンドン来い。ノンビリはいかないよ？」

「クリステイーナ・フリードリヒ！！参るッ！」

凜とした声を通る。

レイピアを構えたクリスが時風の前に立ち、礼儀正しく名乗り出ている。

「さながら騎士だな。だったらこっちも騎士ナイトでいこうか」

時風がクリスの方を向きながら道院の窓ガラスにライダーデッキを向け、腰にベルトが装着され

「（バツ）変身！！」

カチツ、キイイイイ、パキーン！！

時風が仮面ライダーナイトに変身し、その姿にクリスが目を見開いた。

「なんだそれは！？」

「他の世界の力だ。これをもって、異世界の証明とさせてもらおう！！」

時風がクリスに切り掛かり、それをクリスがかわし、突きを放って来る。

もちろん時風はそれを避けるが、至近距離だったからか少しギリギリだった。

「うにゃっ！？あつぶな！レイピア怖ー！」

「ちい、まだまだ！」

「めんどいけど、正々堂々と行くか。分身とかしたら卑怯だとかい  
いそうだし。ハッ!!」

蒔風がクリスの突きを丁寧に弾いていく。

クリスの攻撃は決して甘くない。むしろ素晴らしいものだ。

だが、相手が悪すぎる。

蒔風はダークバイザーだけでなく、肘や膝でレイピアの側面、背面  
を押さえて防いでいるのだ。

つまり攻撃がレイピア一本に対し、蒔風は最低でも腕足剣三本の手  
段がある。

これはどうしようもない。

「素晴らしく速くて鋭い突きだ。ま、いかんせん相手が悪かったな」

ギヤァン!!

蒔風がダークバイザーを振り上げる。

するとレイピアの長さが半分になり、無くなった半分が離れた場所  
にトスツ、と軽い音を立てて落ちた。

「……………どうする?」

「負け……………だ」

「勝者、蒔風！」

「さあ、つぎつぎ…！」

蒔風が変身を解き、もとに戻ると、次には一子が立ち上がった。

「あなた、面白いわね！クリの仇、取らせてもらっわ…！」

「オツケー。薙刀ね。元気っ子は好きだぜ！変身…！」

さらに蒔風が変身する。

仮面ライダーアギトストームフォームに直接変身し、ストームハルバードを伸ばして一子とぶつかり合う。

「う、おりゃあ…！」

ドッフィン…！

一子が力の限り薙刀を振り下ろし、それが逸れて地面に大きな穴を穿つ。

蒔風がその薙刀を踏み台に飛びあがり、縦にストームハルバードを振り下ろす。

だが一子は転がってそれをよけ、蒔風の足元を薙ぎ払いにかかった。

ガキイ！！！！

しかし、ハルバードがそれを押し止め、ぐるりと回して一子の薙刀を打ち上げる。

そして無防備になったその体を、ハルバードからの突風で吹き飛ばし、カタをつける。

そして変身を解いて、蒔風が叫んだ。

「はいはい！！！！次だよ早く！！！！」

ドシュ！！！！パシッ！！！！

蒔風が飛んできたそれを掴む。  
それは矢だった。

先端は潰されているものの、当たればかなり痛いだろう。

「おお？・・・椎名か・・・」

離れたところから、椎名京が弓を構えて蒔風を狙っていた。そして次の矢を構え、撃ってきた！！

「よっ！！（ヒィ！）ハツと！！（ヒュン！！！！）」

斬るような音を出して飛んでくる矢を、蒔風はひょいひょいと避けて行く。

「矢つてさー！結構大変だよね？当たるのはたった一点のみ。射れば早いけど、最悪、体一つその場から動けば当たらないし」

そんなことを言っている蒔風は、京の矢をよけながらも、いつこうに近づかない。だがそんな蒔風にイラつくことなく、焦ることもなく、標的に向かってただ淡々と矢を速射していく京。

恐ろしいほどの集中力。

一瞬たりとも目を離さず、正確に射抜いていく京に、蒔風は本気で感心していた。





「ソコオ！！！！もらったあ！！！！」

蒔風が一瞬の焦りを見つけ出し、弓を射る。

その矢は一瞬で二人の距離を進み、京の袖に当たった。

だがここで止まらないのが蒔風仕様だ。

矢はそのまま突き抜けず、京の身体を引っ張りながら壁まで到達し、その部分を縫いつける。

京がそれを抜こうと掴むが、ビクともしない。パラパラと欠片が落ちることすらもないのだ。

完全に詰み・・・かのように思われた。

ビリイ！！

京が裾を引きちぎって蒔風に向かう。

掌底や回し蹴りを放ってくる攻撃は、かなり激しかった。

だが

「徒手空拳もできるとは恐れ入った。でもまだ荒いねえ」

パシパシと受け、弾く蒔風がウンウンと感心しながら京の腹部に手

を優しく当てる。

「……ツア破ッ！……！」

ズンッ！と音が響き、京の身体がガクンと揺れる。

そしてそのまま倒れてしまって、戦闘はどう見てもできないもの  
と見えた。

「勝者、時風！……やるのう、お主」

「ふ、当然。オレは世界最強。この世界じゃどうだか知らないが、  
オレはもつと強い」

そう豪語する時風の前に、由紀江が日本刀を腰に携えて、時風の  
前へ出てくる。

「黛由紀江………よろしくお願ひします」

「む？この闘気・・・鋭く、澄んで、それでいて轟々とした気・・・  
そうか、武道四天王っていたっけな、この世界には」

「まゆっちー！ー！ー！がんばれー！ー！ー！ー！」

「意地を見せてやれー！ー！ー！ー！」

「はいっ！ー！ー！ー！」

「どうやらスイッチ入ってるみたいだな。これは・・・こっちも  
剣で行こうかな？」

蒔風が仲間の力を借りようと、その手に願いを宿す。

風間ファミリーで二番目に強い者、武道四天王・黛由紀江が剣を抜き、構える。



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

真剣で私に恋しなさい　くそして決闘、まずは三人（+1）く（後書き）

アリス「戦闘開始ですか。にしてもライダーばっか」

趣味ですすみません。

あと矢に関しての供述ですが、決して作者は弓道が弱いと言ったわけではないです。

もしそう受け取ってしまった方がいたらすみません

ア「次回、残りの二人、そして？」

ではまた次回

冬花火　寒空打ちあがれ　凜と咲く大きな花ひとつ

この涙　夜空に消えてしまえと願う

私の上に　綺麗すぎた冬花火

真剣で私に恋しなさい　くマジバトル、二回目く

「悪いが気を抜ける相手じゃないみたいだから少し、本気だ」

蒔風が剣を出す。

それは己のものではなく、合体剣。

漆黒の翼人のものだった。

「翼じゃなけりや大丈夫みたいだな……ハアツ!!」

ゴオウ!!

二人が構え、剣がキリキリと鳴っている。

荒々しい空気のまま、静かに時が流れ、そしてッッ

「ダアツ!!」

「ハアツ!!」



ギャアン！！

二人がぶつかり、閃光が走る。

その光に皆が目を瞑り、開けた頃には二人はすでに上空にいた。

ギンギン！！ギャウン・・・ギン！ガツゴツ、バキーン！！

「ハアオア！！」

ブンブン、バゴォ！

二人が半分宙に浮いた形で幾重も幾重も剣を打ち合う。

由紀江は速く、蒔風は重い。

そんな攻撃をお互いに繰り返し出し、どちらも押し切ってはいない。

(ツ・・・この重量でこの速さ・・・！！！！気を抜いたら・・・  
・・・ツッ！)

(速いな。気をつけないと何回斬られるかわかったもんじゃな。

おっと)

ギギン！！キャンキャンキャン！！ゴッバツ！！

「！！せやアツ！！」

由紀江が蒔風の上上がり刀に気をこめ、薄く輝いたその刃を、蒔風目掛けて叩き付ける！！

ゴッ、ガシユア！！

蒔風は無言でそれを大剣で受け、地面向かって弾き飛ばされる。落ちていく蒔風を追って、由紀江が空中を蹴ったかのように飛びだし、気を込めた刀を構えて真下に突進する。

落下している蒔風は、その間も目をつぶり、心を静かに清ませていた。

そして地面まで残り8メートルのところまで、その目が、ガッ！！と開かれる！！！！

ドンッ！！と大地を揺るがし着地して、蒔風が着地した勢いを腕に

送って、合体剣を頭上で回して由紀江に振り向ける。  
無論、由紀江はまだ上空の域。その剣は届かない。

だが合体剣から飛び出していった剣は違う。

ファースト剣を手元に残し、五本の剣が飛び出していく。

一本が由紀江の刀を弾き、四本と共に周囲に散った。

そして蒔風が剣を構えて、由紀江目掛け飛んで行く。

ザシッ！ゴオオ、ザン！ザン、ザンザンザンザン！！！！

由紀江を斬っては周囲の一本を掴みに行つて、それを掴んでまた斬り迫る。

それを繰り返し、蒔風が技の名を叫んだ。

「超 究 武 神 覇 斬！！」

ザギユツツ！！ドンツ！！

蒔風が地上に降り立ち、周囲に残りの剣が刺さって消えた。

そして上方から由紀江が落下し、それをフツ、とキヤツチする蒔風。



「オレのカッコイイ変身、見せてやるからよく見とけ。行くぜ？変身！！」

《Sword Form》

オーラアーマーが周囲に現れ、身体に装着。  
赤い装甲は闘志の証。

全身からオーラを吹き出し、ポーズを決めて、見栄を切る！

「俺、参上！！」

「ほう？」

「今回は前座が何人かいたがな、こっからは……最後の最後まで徹底的にクライマックスだ！！行くぜ行くぜ行くぜエ！！！」

ソードを振り回して百代に切り掛かる時風。

百代は気を込めた腕でそれを受け止め、蹴りを放つがふざけた拳動でそれを時風がかわし、再び切り付ける。

ガキッ！！

「ははは！面白いな！」

「バトルマニアはいいけどよ、戦う為に戦う戦闘中毒は嫌いだよ！」

ガンガン！ガゴツ！！

蒔風の剣撃はすべて防がれる。  
だが、拳撃はそうではない。

確かな急所に蒔風の拳が命中し、百代が少し下がる。  
だが下がっただけで効いてなどいない。

「よーしよし。じゃあこれはどうだ！？」

百代の姿が消える。

そして次の瞬間、蒔風の背後に現れ拳が振るわれ！！

ドゴォー！！

粉塵が上がり、二人の姿が消える。  
すぐに風が吹き、それを取り払って二人が姿を現した。

そこにいたのは

《Ax Form》

すでにアックスフォームに変身した蒔風が、百代の拳を捕まえていた。

「ふ、ふははははは！！これを見抜くか！最高に面白い！」

「そうか。だったらその顔、今すぐ泣き顔にしたる。俺の強さは、泣けるからなあ！！どすこいイ！！！」

張り手で百代を押し出し、悠々と歩いて迫る蒔風。それに、百代が腕に気を込めて

「かーわーかーみー……」

「ムッ？」

「波——————ッ——！！」

気を放出し、かの有名な攻撃に酷似した砲撃を打ち出してきた。

「おおあー!!」

蒔風がそれを前転でかわし、パスをベルトにセタッチする。

《Full Charge》

「フヌアツツ!!」

金に輝くアックスを振り上げる形で振るい、その砲撃を斬り砕く。

「うおッ!?!」

「ダイナミックチョップ、振り上げ」

そこから真っすぐ百代に向き、ベルトのボタンを押して、パスを通す。

《Road For》

「ふう……でもま、相手は女の子。思いつきりやるのは趣味じ



やないけど」

《Full Charge》

「荒い魚は強引に。時に厳しくやるのも、優しさだよね？ハアツ！」

エネルギーをロッド先端に集中させ、それで切り掛かる電王ロッドフォームの蒔風。

百代は薙がれたロッドを上半身を反らして避け、続いてきた廻し蹴りをしゃがんでかわす。

だが更にきた踵廻し蹴りは避け切れず、腕で捕まえ、振り回した。

その状況から百代が蒔風を投げ飛ばし、蒔風は強引に百代目掛けてロッドを投げつけた。

無論、それに反応できない百代ではない。

向かって来るそれを掴んで蒔風に投げ飛ばそうとした。

しかし、百代は知らなかった。

この投げられたロッドは、決して攻撃ではなく、攻撃の為の布石であることを――！

「取っ、なに!？」

ロッドが身体に入って消え、それが百代の眼前で六角形のエネルギーの板となり、百代の動きを束縛する。

地面に落ちた蒔風がフウ、と立ち上がり、百代に向かって駆け出した。

「こんなものっ!」

ピキィ!!

六角形にヒビが入る。

蒔風によって本来のものよりも強度が跳ね上げられているそれに、力技で壊しにかかっている!

その百代に蒔風が一言言った。

「それ、壊すと全身の筋肉が断裂して使い物にならなくなるよ?」

「ッッ!？」

「嘘 ハアア!!」

蒔風の言葉に一瞬動きが緩み、蒔風のデンライダーキックが炸裂し、六角形を砕き、爆発を起こす。爆発はあくまでも蒔風が演出で起こさせたもので大したことはないが、確実にダメージは通っている。

「ま、こんなものかな？」

そう言っつて蒔風が変身を解いて背を向ける。だが、いつこつに鉄心が勝者の名を告げない。

「???どうした？」

「まだ終わっておらんからじゃ」

「は？」

「まあだ………終わってないぞお!!!!」

百代が立ち上がって飛び出してきて、蒔風の首根っこを押さえこんだ。地面で一旦跳ねた蒔風は、跳ねた瞬間一瞬緩んだ腕をつかみ、力づくでそれを押しつけた。

「ゲほツ・・・な・・・ダメージは確実に入ったはず」

「ああ！！確かに効いたなあ！！凄い衝撃だった！！だけど私には川神流瞬間回復がある！！」

「気を巡らせて身体の再生を促したのか・・・なんて速度だよ」

「さあ！！まだまだあ！！！！！！」

蒔風がうんざりした顔をして、百代がそんなことは知らんと拳を握りしめて突っ込む。

そして蒔風まで残り五メートルのところまで、その姿が消える。

だが蒔風はイライラした顔をしながら目を閉じ、次の瞬間、背後にハイキックを叩き込んだ。

「ガアツ!?!」

ドオン！！！！！！

地面にとんでもない勢いで叩きつけられた百代が、今まで受けたこともない衝撃に目を見開く。

(い、今まで多くの強者と戦ってきた・・・その中には確かに痛いと感じたモノもあった・・・だが・・・これは・・・そのどれとも違う・・・ジジイとも、揚羽あけはさんとも違うツ!?)

「・・・ふん」

時風がそこからさらに足を振り上げ、踏みつぶしにかかる。

それを百代が転がって避け、そこから跳び、一気に距離をとった。

「すでに回復したのか・・・この世界において、お前はあまりにも強かった。だから、お前に戦いの身の人生以外の事を教えらる者がいなかった。それは弱者の物だと一蹴してな。だからこそ、君に・・・」

フツ・・・ゴオッ!!!!!!

「敗北を・・・送ろう」

ドゴオンー!!!!!!

蒔風の姿が消え、気付いたときには百代の懐に入り込んでいた。足を払われ、宙に仰向けに浮いたところに裏拳が腹部にめり込んで地面を陥没させて落ちる。

百代は強靱な肉体の持ち主だ。

生まれてこのかた、体を襲う痛みには恐怖したことはなかった。

誰の攻撃も効かなかったし、ヤバそうなのは技を以って避けてきた。

どんな奴でも相手にできると思っていた。

だが、この男は違う。

もはやこれはヒトの域ではない。

自分も存外化け物と言われるが、この男は、次元が違うッ！！！！！

蒔風が百代の肩を片手でつかみ、持ち上げる。

そしてそんな百代の思考を読んだかのように、一言言った。

「言ったる？オレは別世界の人間だって」

「ッ！？瞬間回ふ・・・」

「（バチン！！）瞬間回復解除」

ドンンッ！！！！！

蒔風がその体に雷旺を走らせる。  
気を巡らせて身体の組織を活性化させる瞬間回復はその力を乱され、  
暴走する。

いらないうところに回復が向かい、身体の細胞を異常促進させる。  
それはもはや回復ではない。ただの拷問だ。

「ガッは……」

「はい、終わり」

蒔風が百代をドサリと降ろし、鉄心の方へと歩く。  
その間に百代はすでに瞬間回復を終わらせ、立ち上がるうとしてい  
た。

だが

「やめろ」

ズンツ……！！！！！！

周囲の空気、否、世界の毛色が変わる。  
いまだに未完成ながらも、それが百代の身体を縛る。

どす黒い何かに押しつぶされるかのように、百代の身体が何倍にも重く感じられた。

それでも百代は立ち上がるつもりとした。

ゆっくりと、確実に、その膝が伸びて行く。上半身が上がっていく。

そして立ち上がりきった。

「負けたくない……こんな気持ちは初めてだ!! 戦いたいんじゃない、負けたくない!!!」

「それに気付けば上々だ（パン!!!）」

時風が両手を鳴らして元に戻す。

百代がひざから崩れ落ち、大和達が駆け寄った。

「姉さん!!! 大丈夫か!？」









大和が男に叫ぶ。  
すると男は自慢げに、こう答えて見せた。

「蒔風から聞いてなかったか？おれが、お前を殺しに来た男だよ、直江大和」

「お前が・・・ッ」

「蒔風に勝てなかったお前らがオレに勝てるか思ってたんじゃないぞ？」

剣を消し、その場に立つのは「奴」  
足元には血まみれの蒔風が転がっている。

「主人公、殺しに来ました、覚悟しろ。字余り、ってね」

圧倒的優位な立場に、立った「奴」が大和に指を差し、宣言するよ

うに言った。

「終わってんじやねえぞ？」  
「っから始まるんだ」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

真剣で私に恋しなさい 〳マジバトル、二回目〳 (後書き)

アリス「時風、超重傷」

上半身に重い一太刀。さて、大丈夫かな？

ア「次回、そして最後はどうなるの？」

ではまた次回

いつの間にか友の背中 押し合ってた green days

真剣で私に恋しなさい　く無理矢理に勝利を搔つ攫えく

「まさに、最初から最後までクライマックスだな。いや？この場合、最期か」

「奴」がゴロリと蒔風を俯せに転がし、頭を踏み付けて大和に言った。

「直江大和。来い」

「殺されると解つてて行くと思うか？」

「こいつが……死ぬぞ？」

コツコツと蒔風のこめかみに爪先当て、脅しにかかる。だが、大和はシレッとした顔をして言った。

「は？なんで？別にその人今日会ったばっかだし、そんな人の為に自分の命懸けられるわけないじゃん。もうちょっと考えろよ」

大和の言葉はあまりにも現実的だ。

確かに、大和に蒔風を助ける必要性はない。

しかも、蒔風は大和を助けに来たのだから、ここで出て行つては元

も子もない。

それに、大和には確信があった。

「手間を懸けさせるなよ、めんどくせえ」

「奴」が蒔風を踏み付ける足に力を込める。そして、踏み抜こうと足を少しあげた瞬間、その足に矢が突き刺さった。

「あん？」

「奴」が矢が飛んできた方向を見ると、京が弓を構えていた。その前には大和たちが群がっており、京の姿は隙間からしか見えな

い。  
つまり、京は狙っていたら見つかるため、「奴」が足を振り上げた瞬間に弓を構え、狙いを定め、仲間達の間を縫って矢を速射したのだ。

「奴」はその腕に些か感心し、だとしてもやることは変わらず、矢を足から引き抜き修復させて蒔風に足を踏み下ろした。



ダゴンッ！！

「奴」の足が地面を踏み抜く。  
パチャンと蒔風の血が跳ねた。

だが、そこに蒔風はいない。

「おっ？」

「やっべ……」

蒔風は「奴」の足から少し離れた場所にいた。

そこでは蒔風の脚を風間が掴んで引きずっているところだ。

「脚、速いな」

「あ、ははは……どうも……」

「邪魔（ブオッ！）」

「しゅわっとおっ……」

「奴」が剣を横に薙ぎ、風間の首を狙う。だが蒔風がうつ伏せのまま腕だけを振るって「奴」の足首を払った。軌道が上に逸れ、風間がその場でしゃがみ込み、「奴」の剣をかわす。

「んおあ？」

「……後は任せませ、モモ先輩……！」

「任せろ……！」

ドゴォ！！ズガン！！

百代が「奴」の目の前に現れ、拳を叩き込む。

「奴」がそれに反応し、腕で受けて、地面がクレーターの様に陥没した。

「勝てるのか？最強」

「勝つんです！」

更に由紀江が刀を構えて切り掛かってきたのを剣で受け止めて百代に蹴りを放つ「奴」

二人が「奴」を引き付けている間に風間が蒔風を引きずりそこから離れ、そこにガクトとモロが駆け寄って蒔風を運んだ。

「おい、大丈夫か？」

「まあだ……死なな……い」

「急いで救護室に運べ！！こやつを死なせるな！！」

鉄心が叫びながら「奴」に向かう。

百代と由紀江が二人掛かりで攻めているというのに、「奴」は微塵にも苦戦してないのだ。

鉄心は老体なれども、今だに世界に名を馳せる武人だ。

単純な力では百代が上だが、総合的な戦闘力は今だに鉄心の方が高いほどに。

その間に蒔風を救護室に運び込み、手当てを始める川神院の救護官達。

気を送り込んで出血を止め、輸血パックを運び込む。

蒔風の上半身を左肩から右腰にかけて裂いている斬り口はどす黒く染まっており、もはやなにがなんだかわからない。

そこを消毒し、縫い止めようとした医師の腕を蒔風がガシツ、と掴んだ。

「あ、あなた!？」

「まで……………そのまま気を送り続ける……………」

「死んでしまいます!寝ていてください!」

「よ、翼人は……………この程……………度じゃ……………死な  
ない……………血を……………よこせ」

医師が絶句する。

蒔風のその言げんに、その異様にギラギラした目に、戦慄した。  
そして言われるがままに輸血パックを手渡した。

「はあ……………はあ……………グフツ、ガホツ……………」

蒔風が血を吐きながら輸血パックを破いた。  
零れ出た血は落ちることなく、圧水の力で宙に浮き、蒔風がそれを  
自分の身体に流し入れた。

その瞬間、蒔風の絶叫が響いた。  
無理矢理に血を身体に流し込んだのだ。



「カアアアア！！毘沙門天！！」

鉄心が己の気を巨大な毘沙門天の姿と成させ、その一撃が「奴」を襲う。

「……………ツフツ！！」

だが「奴」が闘気を噴き出し、それを掻き消す。踏み抜こうとした足から消滅した毘沙門天の衝撃が鉄心を襲い、その身体が吹っ飛んだ。

「鉄心さん！！」

「ジジイ！！」

二人の額に更なる汗が滲む。

天下の武道四天王。そのうちの二人に川神院総帥が束になっても勝てない否、勝負にならない相手。

しかも鉄心はやられてしまった。

死んではいないだろうが、戦えないだろう。

現状、もはや勝ち目はない。

由紀江はもはや最初に見せていた速さは出ないし、所々から血も滲みだしている。

百代は身体に怪我はなくとも、体力は確実に削られていつている。

「さあて、お前らは主要人物。しかもメインヒロインだ。とりあえず殺すか。楽しかった。新たな世界で、またやるうか」

「は！大事な弟殺す奴とんな約束したかないわ！！」

「ざあ〜んねん」

両腕を開いて「奴」が突進し、リアアットのように腕が二人の腹部に減り込み、そのまま押しつづけられる。

「ツツ！！まゆ……ず……」

あまりの勢いと速度に呼吸すらままならない。

「奴」の左腕に「く」の字になってへばりついている由紀江に百代が息苦しそうに声をかけるが、気絶してしまったようで、ぐったりとしてしまっている。

そこから脱出しようとするも、あまりの風圧に身動きができない。だが、百代は知っていた。このまま「奴」が進めば、壁にぶつかる事を。

そしてこの速度でぶつかれば、自分たちの身体は腰から二つにブチ切られてしまう。

由紀江だけでもとその手を必死に伸ばすが、どうあっても届かない。

終わりが、と百代が本気で考えた時、男の声が聞こえた。

「人の事置いといてクライマックスやってんじゃねえよ」

メキッ！！！！

その男の足の裏が「奴」の顔面に突き刺さり、二人の身体が勢いで飛び出していく。

そのままいけば壁に激突、ミンチになるところを、青龍、獅子がキヤツチした。

「なんとか戦線復帰だバカ野郎」

時風が上半身を包帯でぐるぐる巻きにされ、その上に上着を羽織った状態で出てきて立っていた。



「青龍、獅子。二人と鉄心さんを運び込め。あと、大和を連れて来い」

「了解」

そんな蒔風を「奴」は顔面を抑えながらその指の間から睨みつけていた。

「てめ、もう回復しやがったのか……だが……」

ゴスツ!!!!!!!!!!

「万全じゃあ、ねえだろ!?!」

「奴」の膝が蒔風の腹部にめり込む。

閉じられた蒔風の口から血が吹き出、包帯をじっとりとした赤が染めていく。

だが蒔風はそれを押し込め、「奴」の両肩に肘を叩き込む。





青龍が連れてきた大和にそれを伝え、一気に血を噴き出し、蒔風がその場に倒れ込む。

それと同時に、音声の流れ、WORLD LINKが発動した。

【Majide Watasini Koisinasai!  
- WORLD LINK - WEAPON - !】

蒔風の背に翼が現れ、それが移動し大和の背に銀白の翼が付与され、それが輝きを帯びていった。

「な、なんだよこれ!!!」

「主の力が一時的にあなたに移っただけです」

「早くやらねば、この世界にどんなものを残していくかわからん。やっつけてしまえ」

「べ、べつすねばいいんだよ!?!」

「「「んめ?」「」」



粉塵をあげ、エネルギーが「奴」の身体を中心につずを巻いて、その体を吸い込んでいく。  
そして圧縮されきったその渦が爆発を起こし、「奴」をこの世界から消滅させた。

「はあ、はあ、はあ……」

大和が肩で息をしている。  
そうしていると背から翼が時風の元へと戻って消えた。

ヨロヨロとした足取りの百代と由紀江を皆が支えながら歩いてくる。  
それを見た大和は終わった、と思い、次の瞬間、時風の元へと駆け寄っていた。

「おい！！あんだ、死ぬんじゃないぞ！！！！今すぐに病院に……ッ！？」

[ Gate Open . . . Maji de Watashi ni  
Koishinasai ]

大和が蒔風の身体を起こそうとしたと瞬間、ゲートが開き、強制的に蒔風の身体を呑みこんでいく。  
大和にはどうすることもできなかった。

「大和！！蒔風はどうした!？」

「消えた……」

「消えたって……どこにだ!？」

「多分、次の世界だ……あんな状態で……何をやらせるっていうんだよッ!!!!!!」

大和が憤慨する。

一体どこの誰だか知らないが、あいつを酷使しやがって、と。

礼の一つも言われぬままに、蒔風は次の世界へと向かった。







真剣で私に恋しなさい 無理矢理に勝利を掻っ攫え (後書き)

【真剣<sup>マジ</sup>で私に恋しなさい】

構成：” no Name ” 50%

” フォルス ” 30%

” ライクル ” 5%

” LOND ” 15%

最主要人物：直江大和

- WORLD LINK - WEAPON : 蒔風の力を大和に一時貸出

- WORLD LINK - FINAL ATTACK : 全力での正拳突き。今回は空間を捻じ曲げ、その中に消滅させるパターン

3105

蒔風結局ボロボロの話です。

アリス「大丈夫なんですかね？」

死にはしません。

ですが、大丈夫ってほどでもない。

ア「二週間の空白期間でなんとかできるモノなんですか？」

難しいね。

時風の身体は強靱だけど、決して再生能力が高いわけじゃない。これが「賢者」や「聖人」タイプの人間だったらまだ何とかかなったけど、彼は「戦士」だから。

ア「大変ですねえ……結構時風死にかけるの多いですよね？」

そうですね？主人公いじめるの楽しいし

ア「鬼畜ですね。では……この小説は最強系に入るのでしょうか？」

……え？

ア「確かに世界最強って言ってますけどその割には「奴」に余裕勝ちなんて数えるくらい。その世界のキャラには勝ってますけど、正直クラウド辺りとぶつかったら負けんじゃないですか？」

……でも彼は勝ちますよ。

そうしなければなりませんから

ア「そういうもんですか。次回、出会いは血塗れに」

ではまた次回

ウエイクアップ  
覚醒！

運命さだめの鎖を解き放て！！

キバ　くコン・ズランチョ？出違い

一台のバイクが都心の道に行く。  
乗っているのは20歳の青年。

「なあ渡。どこに向かっているんだ？」

「どこことなく……かな？　なんだか走りたくなつたというか、外に出たいと思つたというか」

「ふうん。ま、最近ファンガイアとの戦いはもうないだろうしな。のんびりすんのも悪くないよな」

渡と呼ばれた青年が話しているのは手の平に乗りそうなサイズをしたコウモリ型モンスター、キバットバット？　世だ。

渡のバイクに何の苦もなく着いて行っているのは流石というしかない。

彼等の言うファンガイア。

それは人間の命のエネルギー、ライフエナジーを喰らうモンスターだ。

最近まではファンガイアと人間は敵対関係にあつたが、ファンガイアの王との和解により、共存への道を進んでいる。

「それでよ、渡……………渡、そこ、人が倒れてんぞ?？」

「え?」

渡がブレーキをかけて車を止める。

キバットが指摘した場所。

歩道によくあるベンチが一定間隔で置かれており、その一つに一人の青年が倒れて眠っていた。

「キバット……………彼は寝ているだけだよ」

「なんだよ渡。オレを疑うのか? オレにはわかる。こいつ、血の臭いがするぜ。多分、スゲエ怪我してる」

「え?」

確かに、よく見ると顔は血の気が薄く、ほんの少しだが苦しそうな顔をしているようにも見えた。

「じゃあこの人、寝てるんじゃないかな……………」

「気絶してんだよ。ほら」

キバットが翼を使って歩道の先を差した。  
そこには点々と黒い水玉模様が残っていた。  
いや、黒い水玉模様ではない。おそらく出来たばかりの時はまたあ  
れは赤い水玉模様だったはずだ。

渡が青年の上半身の服を破いて見た。  
そこには真っ黒になった包帯があった。  
それしかなかった。

「こ、こいつ一体……」

「それよりも早く病院に……」

そこまで言った渡の腕を青年 時風が掴んだ。

「病院は……よせ……退院とか……すぐ  
にできないだろ……」

「じゃあどこに運びゃいいんだよ!？」

「ダメです。キバット、彼を兄さんの病院に運ぼう!」

「病院は……ゴブア」

「わー!わー!わー!キ、キバット、早く行こう!」





そして医師に一言二言伝えてから、渡の元へとやってきた。

「もう検査終わったの!？」

「ああ・・・渡、こっちへ」

どうやら人には聞かせられないような内容だったらしく、応接室に招かれ、そこで話を受ける。

「なにがあつたの？」

「・・・何処から話そうか・・・」

太牙は話の切り出しに困っているようだ。

二、三分考えて、それから口を開いた。

「彼だが・・・本来人間があれだけの傷を負って生きていられることはないそうだ」

太牙が蒔風のレントゲン写真を渡に見せる。

そこには斜めに切り裂かれた傷、切断された肋骨、そしてそれらを強引に何らかの力で接着した跡があった。

「ツ!!!……じゃあ……彼はファンガイアだったの？」

「それも違うんだ。あの男はファンガイアではなかった。それでいて人間でもあり得ない。これを見てくれ」

太牙がさらにカルテを見せる。

そこに書かれているのはほとんどがドイツ語でわからなかったが、ズラリと書かれた文字がなんのものか、渡は何となくわかった。

「これは……まさか」

「彼の肉体に残っていた傷跡のすべてだ。その内の六割が致命傷、一割が軽傷、三割が重傷だ。致命傷一発でも死んでしまうような怪我をしている。医師もなぜファンガイアでもない彼がここまで生きてこれたのか首をかしげていたよ」

渡はそのカルテに絶句する。

自分も今まで多くの敵と戦ってきた。死にかけたことも多い。

だが、これほどの死を一身に受ける彼はいったい何者なのか。

そう渡と太牙が考え込んでいると、コンコン、と扉がノックされ、  
医師が血相を変えて飛び込んできた。

「た、大変です！！さっき搬送されてきた若者が、逃げました！！」

「な！？」

「なんだと！？」

「本人は「もう大丈夫だから」と言いながら立ちあがっていたのですが、当然我々が認められるわけもなく……止めたのですがすでに病院の外に！！！」

「これだけの怪我で……」

渡がカルテを握り潰して部屋を飛び出す。

太牙がそれを止めようとするが、医師に一枚のメモ用紙を渡されて携帯を取り出した。



二十分後

包帯でぐるぐる巻きにされ、病室に叩きこまれた蒔風がベッドの上で唸っていた。

無論、顔までグルグル巻きだ。ミイラである。巻いかぜである。

「まったく・・・嶋さんに言われてきてみればカフェ・マル・ダムールで人は倒れるわ、それを運ぶわで・・・彼はいつたい何者だ？説明しなさい」

軽い命令口調がデフォであるこの男は名護啓介。

人間に敵対するファンガイアと戦った戦士のバウンティハンターだ。

「それはまだわからないんです」

「だからあなたに連れてきてもらった。これから話を聞くところなんですよ」

「そういう事なら任せなさい。私の交渉術があれば、なにも隠し事はできない」

そう言って蒔風の頭を包帯から解放する名護。

蒔風はいったん暴れるのをやめ、言った。

「もう逃げないから放して？」

「嘘をつくのは止めなさい。丸見えだぞ」

「チツ！！」

本気で舌打ちした。こいつ完全に拗ねている。

舌打ちした時の顔はともじやないが主人公の物とは思えないものだった。

「では……君の名前、職業、その怪我の事、尊敬する人の事、今まで何をやってきたかを答えなさい。そうすれば君に素晴らしい物を上げよう。そして私に着いてきなさい」

「名護さん……」

「今日きょう日ひそんな「素晴らしい物」なんて簡単な手に子どもだって……」

「素晴らしいモノ？（パアアア……）」

「「食い付いた!?!」」



「でもオレのこと、すべて説明するにはこれが一番だよ？」

「………わかりました、信じます」

「お？サンキュー！。で、時にキバって言うのは………」

「僕です。僕は紅渡」

「オレはファンガイアの王たるキング、登大牙」

「私は名護啓介だ。覚えておきなさい」

一応の自己紹介がすみ、渡達の話も始まる。  
今回、蒔風は傷を癒やしきれぬのか………

t o b e c o n t i n u e d



キバ くコン・ズランチョ？出違い（後書き）

キバの世界!!!

アリス「キバっていくぜのところですね？」

名護さんは最高です。

あれほど面白いネタキャラはいない。

ああ、ちなみにコン・ズランチョは「衝動的に、性急に」という意味です。

切羽詰まっています、今回。

ア「そういえば今回は22年前のキャラは出せるんですか？」

そうですね。この際はつきり言っておきましょう。

出ません

ア「それはなぜ？」

それは次回の後書きで話しましょう。

ア「次回、どうするタイムリミット？」

ではまた次回

その命、神に返しなさい！！

## キバ　↳コルテージュ？二十二年　↳

最初に言ってしまうと紅渡は仮面ライダーキバである。  
ファンガイアのキングである太牙とは異父兄弟らしい。

そして名護敬介はファンガイアと戦うために組織された「素晴らしき青空の会」所属の戦士で、独自開発された対ファンガイア用パワードスーツを装着した、仮面ライダーイクサに変身する男だ。

少し前まではキングの立場である太牙と同じくキング継承権を持ちながら人間のために戦った渡は敵対関係にあったが、最終的には和解し、今ではファンガイアと人類は共存に向かっている。

太牙は現在ライフエナジーに変わる新たなエネルギーを開発中で、時風をがこの短時間で脱走まで出来たのもこのエネルギーによる回復の恩恵だ。

「あのエネルギーはすごかったな。力に満ちてきたもん」

「ふむ、ひとまずは成功かな？」

「だけど人間には麻薬にしかない。もう少し改良が必要」

「それは今後の課題だな。それと、その「奴」が……キバ、渡を殺しに来るのはいつ頃か？」

「今回、「奴」は早くここに来たらしい。前の世界で意識と一緒にブツ飛ばさなかったのが仇になった……だから世界もすぐにオレを前の世界から送り出したんだけどな」

蒔風が悔しそうな顔をして、残り時間を言った。

「正直に言おう。へたすりゃ今日だ」

「「「!!!!???」」」

太牙と蒔風が話し込んでいる横では渡と名護が最近の治安について話し合っていたが、その言葉に同じく驚愕する。

「それは……時間がなさすぎる!!」

「しかもそれは「奴」のノリ次第では早まるかもしれない」

「とんでもない話になったな。しかもそれだけ強大な敵ならば、我々は万全を期さなければならぬ」

「今のままじゃ……「奴」には勝っても大苦戦するな……オレの怪我は多分治りきらないし、これ以上擬似ライフエナジーは使えないだろ？」

「確かに……これ以上の投与は危険が伴うな」

「絶対に負けられない以上、そこまでのリスクは懸けられない」

「だったらどうする？もう一日切ってるんだろ？なにができるというんだ……この際、イクササイズの強化特訓を」「それはやめる」「だがしかし」「黙りなさい」「イクササイズは」「静まりなさい！」「……」

「イクササイズってなに……？」

「思い出させないで」

「オレは話に聞いただけだが、やりたくないな」

「とにかく、時間がないことは確かだ」

「時間がなあ……」

そのまま四人が考え込んでしまう。

そしてどうしようかと考えて、名護がポン、と手を叩いてなにかを思い付いていた。

「確か……過去に通じる扉ってなかったか？」

「え？……あ！！」

「なるほど……キヤッスルドランにそういった扉があると話には聞いてきた。それならいけるな」

「キヤッスルドランってなにどらん？」

「キヤッスルドランは……見てもらった方が早いかな？」

渡がそう言っつて皆を引き連れて病院の裏の林に向かった。

「ここならいいな。キバット」

「おっしゃ！来いキヤッスルドラン！」

キバットの呼び声に呼応して、ドラゴンの鳴き声が響いた。

蒔風がその声にびっくりして肩を竦める。

そして四人に影が落ち、見上げるとそこには「城」があった。

そのボックスの様な城には四本の足があり、ドラゴンの翼と尾と頭が伸びていた。

「なるほど……確かに、こいつは巨城竜キヤッスルドラゴンだな」

「このキヤッスルドランの中にはある扉があるんです」

「扉？」

「過去……22年前に通じる扉だ。オレも渡君も一度だけ行ったことがある」

「そこで特訓なり養生なりして、それからってわけだ」

「うーん……でもさ」

「なんだ？」

「それってこっちでの時間はどうなんだ？」

「あ……」

「そうだった……向こうの時代で数日過ごして戻ってきたらこっちでも数日経ってた……」

「……ふう。じゃ、帰りはこっちでなんとかするよ」

「なんとかって……」

「まさかこのチケットがこう役立つとはな」

蒔風が懐から取り出したのはパスに入ったチケットだ。

それには「」のマークに重なるように「INFINITY」と書かれていた。

「こいつはパスだ。時を越えるためのな。帰りはこれ使って帰ろう」

そこで蒔風に太牙が質問する。

「それがあるなら、最初からそれで行かないか？」

「これで時間を越えるとオレの力の軌道が残る。ましてや時間を越えるなんてもんだからな。だから、これ使っと飛んだ先に「奴」が追っかけて着ちまうんだ」

「それでは意味がないな……」

「だからこれ使つのは帰りだ」

「そうと決まれば行きましょう。こっちです」

渡の案内で皆がキャッスルドラムに入り、その扉の前に向かう。



中はいかにも豪華な作りになっており、城と言つ名前は一切劣りはしていないかった。

「この扉です」

「じゃ、いこうか!!」

「どれくらいになるだろうか?」

「さね。行ってみてから考えようや」

そうして四人が扉をくぐる。  
無論、キバットともう一体の蝙蝠モンスター、キバットバット二世も一緒にだ。

「お前、いたの?」

「無駄に喋らんだだけだ」

ガシャン……………

重々しい扉が開かれ。

ギイイイイイ………ボタン!!!!!!!!!!

それがピッタリと閉じられる。

こうして、蒔風達はむかった。そして戻ってくるのはすぐだろう。

.....

「し〜ん………いい日和 ちてちては………」

蒔風がこの世界にくる何日前。

男が街中を歩く。

そしてある公園の中に風呂敷を広げて、座り込んだ。

足を組み、目を閉じて、座禅のような体制になって世界と接続する。

「・・・・・・仮面ライダーキバ・・・」 no Name ”  
” フォルス” ” ライクル” ” 輝志” ” LOND”・・・その区  
分を我に開け放ち、その姿を現せ」

座禅を組む男を中心にその世界の紋章が現れる。

今回はキバの紋章で、そこから上に向かって何らかの文字列がホログラム浮き上がってきた。

そしてそれは次々と出てきて、スキのように男を取り囲んでいく。

ピッ、ピッ・・・・・・シュパァン！！！！

空気を斬るような音がして、男の周囲に紙が落ちてくる。

その紙にはさっきまで浮かび上がった文字列が写されていた。

だがその順番はランダムだし、見ただけでは狂人の落書きにしか見えないような文章だ。

そしてその紙を見て、ニシシと笑う男。

「さ、解くぞー！ー。世界のパズルを解き明かしていこうかな」

取り出したるは「みかん」と書かれた段ボール。

そしてシャープペンシルに消しゴム、定規などの文房具。

準備は整ったさあ始めよう、と男が額にはちまき巻いて解読にとりかかった。

その姿はただの受験失敗した浪人生に見える。

こいつ本当に王の資質の持ち主なのか？

「ふむふむ……だあ~~~~と？ここが？ちがうなあ、こつちか？どこの紙にあるんだよ！ー！」

ガサガサと何十何枚もある紙を何度も何度も見直しては戻ってやり直し、進んでは確認してを繰り返す男 「奴」

毎回これだけの苦勞をして望んでいるのだ。  
その執念は計り知れない物があった。

「絶対に食う・・・そして取り戻すんだ・・・あああ  
っ！！風っ！！待って~~~~その紙持ってかないで~~~~！！キヤ  
アアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

公園内でワタワタし始める「奴」

その十分後、結局は結界内にテントを張ってその中で計算を始めた。

3132

この世界を食らうために。  
彼にも願いはある。それをただ問答無用に慈悲も無く打ち碎けるの  
は、同じ人物である存在だけなのである。

「立場逆だったら絶対に応援して・・・いや、オレも邪魔する  
かもな。オレ、あいつ嫌いだから」

二日間に及ぶ計算の日々が始まった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

キバ　く　コルテージュ？二十二年く（後書き）

アリス「今回過去に行きましたけど……出さないんですか？  
キアラ」

出さない、というか出せない。

あっちの時間で数日経ったらこっちでも同じだけ流れる。

それならその逆もしかり。

となるととくに音也さんはお亡くなりになってしまっているわけ  
です

ア「ああ……、確かに……」

ちなみに、この話の中ではディケイドに出てきた紅渡とは別人とし  
て解釈しています。

公式ではディケイドの渡はキバ本編後の渡と言つことらしいですが、  
その設定はそおい！！させてもらいます。

ア「ややこしいですからね」

あとサガーク出しません出せません。

だってダークキバの方が絶対いいじゃん。

ア「今あなたはサガークファンを敵に回した」

ひぎいッッ!?

今回のコルテージュは……なんだっけ？  
興味あつたら検索ゴ―!!

ア「次回、そして現代、「奴」が来て」

ではまた次回

キバっていくぜ!!



キバ　くカルテット　キバっていくぜー」

「準備はいいか？」

「大丈夫だ」

「点呼とりま〜す。渡」

「はい」

「太牙」

「居るぞ」

「名護さん」

「1111」

「キバット二世」

「おじやっ」

「回〜回」

「ふむ」

「おじやっ」



が覗けた。

その影の名は、仮面ライダーアーク。

その身長は3・2メートルと、基本的な姿のライダーとしては最大の大きさを誇る、レジエンドルガ族最強の王の鎧。

レジエンドルガ族は最強の種として存在していたが、「キバの鎧」を身につけたファンガイアの王により殲滅、封印されていた。それを「奴」が遺跡から発掘し、邪魔なレジエンドルガを排除。鎧のみを奪って中に「欠片」を詰めて使用している。

故にアークの巨体は5メートルほどまで巨大化しており、特殊能力は使えないまでも力は底上げされている。

その「奴」はアークの肩に立っており、家の中を覗き込んで確認する。

「いない？紅渡の仕事はバイオリン作り。工房にいないなら素材探ししか？」

アークが「奴」の意志に反応して踵を返してその場から去ろうとする。

狙いはまず、「素晴らしき青空の会」の集会所になっているカフェ・マル・ダムール。

そして非常に面倒だがビルに擬態しているキャッスルドランだ。

だがその歩は爆撃で阻まれる。

時空を裂いて走ってきたレールに乗ったデンライナーの攻撃にアークが身じろぐ。

そしてその脇を通って行って、デンライナーがアークと「奴」を掻き攫って行った。

そして郊外の森の中にある開けた場所。

そこにアークと「奴」は放り出されデンライナーからは時風たちが降り立つ。

「お前ら……あ、そっか。確かこの世界には時の扉があったなあ……まさか時風がここまで電王の力を借りられるなぞ思っ  
てなかったわ」

「ああ、オレもびっくりだよ」

そついう時風の背後でデンライナーが消え去る。  
それを確認してから、時風が言い放った。

「そつちの準備は万全。だが、俺たちの方は……億全だからな。今回は先手を打たせてもらったあ!!」

「あ~~~~、くつそ!!! 最初からキャツスル潰せばよかった!!」

「もう遅い。いくぞ!!!!」

「ガブツ!!!!」

「ガブリ!!」

渡と太牙の手にキバット三世と二世がそれぞれ噛みつき、魔皇力を流し込む。

《レ・デ・イー》

名護がイクサナツクルを手のひらに押し当てて機動させる。



「兄さん、名護さん!!!!!!」

「あつちは任せよう……それよりも……こっちに集中しないと……死ぬぞ」

「奴」が魔導八天を抜き放ってズルズルと引きずりながら近づいてくる。  
それに対して身構える二人。

そしてその距離がある程度まで近づいて

「せやッ!!!」

「ハア!!!」

「ドウッ!!!」

バゴア!!!!!!

ぶっかり合っ。





大きな木に隠れ、背中越しにアークが通り過ぎるのを確認してやり過す。

イクサの装甲にはすでにひびが入り、ダークキバのマントは穴がいて、所々千切れてもいた。

「最初の衝撃が大きすぎる……………」

「森の中が功を成したな……………ここならあのスピードは使えない……………」

そう話しあう二人。

だが周りの木々もなぎ倒され、その範囲もでき始めている。

このままではまずいのは明白だ。

これまでの数分間、アークとは交戦したが一步步くごとの衝撃ですら攻撃になっているアークはもはやどうしようもなかった。

あの巨体は本来の物よりも大きい。そんなアークを相手取るにはどうあっても二人のサイズでは撤退しながら攻撃し、隙を見つけるしかない。

だがその歩行すらも攻撃になつては、撤退しようもない。

「あの巨体を倒すには……………」

「狙うは……………頭部！！しかも一発でだ」

「名護さんは気を引いてください。あのアークは伝承によればかつてのキングがこの「闇のキバ」の力で封印した・・・今度は破壊してやる・・・」

「よし・・・グッ・・・」

「大丈夫か!？」

「問題はな・・・」

グシャアツツツ!!!!!!

イクサが膝をつき、ダークキバがそれを起こそうとしゃがむ。その瞬間、二人の上半身がさっきまであった高さでアークの手が二人の隠れていた巨木を握りしめていた。

二人が戦慄し、その場から転がり出す。

アークはその二人を見、手にした巨木をまるでコンビニのレシートを丸めるようにクシャクシャと捻り捨て、追いつめる。

「捕まったら終わりだ!!!!」

「くそっ!!!太牙、早く頼んだぞ!!!!」

イクサがイクサカリバーガンモードでアークに銃撃を浴びせる。

だがいつこうに効いた様子はなく、その歩は止まらない。

「なら……これだ!!!」

《イ・ク・サ・ナツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・アツ・プ》

イクサベルトにナツクルフエツスルを読み込ませ、電子音が発せられる。

そしてベルトからはずされたナツクルをアークの足元の地面に向け、焦点されたエネルギーが発射され、地面を穿って吹き飛ばす。

その穴に足を取られ、わずかなりともアークの身体がよろめく。ほんのわずかな隙。必殺技を叩き込む間もなくアークは体勢を整えるだろう。

だが、たったそれだけの隙で十分だった。





二人がお互いの肩を支え、その場から先に行こうとする。  
「奴」と戦っている二人に合流しなければならない。

二人の背後には地面に倒れるアーク。

死んだように倒れているそのアークが

そのアークの目が

バグンツ！！と一気に光り起動した。

巨体が瞬時に起き上がり、よろめく二人の身体を腕が薙ぐ。

二人は吹き飛び、イクサは地面に転がってダークキバは木々をなぎ倒して止まった。

「ぬ・・・うあ・・・ッ！！！！」

ゴドン！！！！

巨大な踵落としをイクサがかわす。

だがその背中に吹き飛んだ地面がぶつかり、装甲から火花が上がる。

ヨロヨロとダークキバが立ち上がってそのイクサを助けに行こうとする。

だがゆうに二十は離れている距離をアークは一瞬で詰め寄って、右腕を振りかぶってダークキバを押しつぶした。

そしてポコツ、と腕が地面から引き抜かれ、その手にはマントを掴まれて吊るされたダークキバがいた。

ダランと力が抜け、まるで死体のようである。

その体を振りかえってその動作で一気に投げ飛ばすアーク。

森の中をノーバウンドで一直線に飛んでいくダークキバの軌道上に、イクサが立つ。

その体を受け止め、しかしその衝撃を受け止めきれぬはずもなく、二人が一緒に吹き飛ばされて森を抜ける。





「奴」の砲撃が蒔風に迫る。  
それを蹴りあげて軌道を逸らして、その間にキバが「奴」に迫る。

「ウエイク、アップ!!!」

キバット三世にウエイクアップフェッスルを吹かせてキバの右足の鎖、カテナが解き放たれ、赤い翼が現れる。  
周囲が夜のように暗くなり、キバの必殺技「ダークネスムーンプレイク」が放たれた。

ドゴオ!!!

それが確かに「奴」の胸に直撃し、そのまま引きずるように押し出していつて巨木にぶつかる。  
その巨木を中心にして、地面に巨大なキバの紋章が打ちこまれてその衝撃が完璧に「奴」に伝わりきる。

だが「奴」がその脚をつかみ、自分の背後にある巨木に叩きつける。  
巨木は倒れ、キバがそのままフルスイングのように回されて投げ放たれて蒔風がそれをキャッチして、それでも止まらず地面に二人がめり込んで倒れ込む。

「ホント・・・なかなか効いたけど、そこまででもねえなあ・・・演出でも血反吐吐けねえぞ？」

「・・・わくわくしたよ・・・見せてやる」

時風がキバを地面に置き、立ち上がった。

「あっちの時間で二週間。完成したオレの能力をな」

「やってみるよ・・・なんて言わないけどな」

「奴」が時風に魔導八天を構えて突っ込む。

その速度は風のように速く、一瞬で時風に到達する。

だが時風が言葉を発する前に、青龍たちが止めに入る。

青龍達が時間を稼ぎ、「奴」がすぐにケルベロスたちを出して応戦、時風に向かうが、詠唱はすでに終わっていた。

異端者、法則から外れ

死を知りて人も生命も外れ

世の理との断絶者

異端なる者は世にただ一人

故に彼の者は孤独にめぐり、そこに付き添う者は

無し

ヒトも世界も外れたならば、世の法則など意味は

なく

結果、顕わすは法則の崩壊

彼の心に法則は在らず

心象的な世界の破壊、顕われん

「イマジナリテイワールドエンド  
心象的世界破壊！！！！！」

ズキヤツ！ゴオ！！

世界が完璧に塗り替えられる。

炎に満ちた空。

地面が隆起しては陥没している。

そんな中でも時風と「奴」の周囲はなににもなかったし何も起こっていない。

だがいつ破壊が身を襲うかわからない状況。

一切の平穏なき世界がそこにあつた。

「バツ……………固有結界！？習得したのか！」

「・・・世界は法則に満ちている」

蒔風が右足を上げて前に踏み出す。  
だがその体は前に進まず、「奴」の身体が衝撃に襲われて地面に減り込む。

「その法則が乱れた世界がここだ」

頭を掻きながら獄炎弾を放つ。

「奴」がそれをクレーターから飛び出して回避した。

一気に獄炎弾が膨れ上がって爆発を起こす。

十メートルまで膨れて爆発した範囲から「奴」は十分に離れて回避していた。

だが

「グバツ・・・・・・・・ガアアアアアアア!?!?」

その爆発範囲には一切の破壊の跡は無く、全く炎が届いていない範囲がえぐれ、焼き尽くされた。

「法則は数学や物理、科学などの学問だけのものではない。右足を出せば前に出る。獄炎弾は当たった場所を焼く。頭を搔けばそこが刺激される。これらも立派な法則だ。で……それが乱れたら」

蒔風が右腕を真横に振るった。

「こうなる」

すると地面が隆起して、左右から「奴」を押し潰す。

それを見た「奴」が岩盤を砕いて脱出し、同じように右腕を真横に振るった。

だがやって来たのは空から落ちる流星群。  
何十発もの隕石が地面に迫り、「奴」も蒔風もすべてを吹き飛ばす  
うとした瞬間

パン！！

固有結界が切れる。

世界が元に戻り、法則が戻ってきた。

「ったく……危ない事するなよな。本来と違っても法則が一定したらそれは乱れたことにならない。つねに乱れ続けてんだから、下手にいじらないで欲しいな」

サラリと言つてのける時風。

イマジナリワールドエンド  
心象的世界破壊

それが固有結界の名だ。

死を理解した異端であり、生まれも育ちも純粹な”no Name””。さらにその世界内で異能に目覚めた彼だからこそ出来る事だ。

「奴」は結界内でのダメージに腕を抱えてヨロついたが、やがて立ち上がったから時風を見、そして倒れているキバを見た。

そのキバもなんとか立ち上がるうと膝を上げていつている。

その時、林の中からイクサとダークキバが吹き飛ばされてきて地面に転がった。

「名護さん、太牙!!」

「ぐあ……」

「すまない……やられた……」

「こつちはなんとか一発入れてやったよ。まだ一勝一敗だ。こつからだ！行けるか？」

その言葉に二人が目を合わせてから鼻で笑った。

「オレは歴代最高のキングだ……レジェンドルガの遺物なんぞに、過去のキングが勝ったものに、負けられるか!!」

「全く、誰に物を言っているのです。オレは名護敬介。この世の正義。名護がやらねば、誰がやる」



意地だった。

二人が立ち上がったのは意地によるもの。

一人はキングの、一人は戦士の。

だがそれは、どんなものよりも二人をしつかりと支えて立ち上がらせた。

イクサがマスクの口部を取り外し、それ　イクサライザーを携帯のように開く。

そして「1」「9」「3」を押して発信ボタンで起動させた。

《ラ・イ・ジ・ン・グ》

ガシュウ！ゴゴオウ・・・・・・・・バァン！！

全身から熱気を吹き出し、イクサがライジングイクサにフォームを強化する。

「タツロット！」

キバがその名を叫ぶと、キバットくらいの大きさをした金色の小型竜が飛んできて、キバの左手首に装着される。

「ビュンビュン〜ン！いつきますよ〜！テンションフォルテッシモオ〜！！」

ガキンガキン！ブワアアア……

キバの身体が黄金に包まれ、最強形態エンペラーフォームに強化変身する。

こうして準備は整った。

ダークキバ、イクサ、キバ、時風が並び、「奴」に向かって言い放つ。

「王の判決を言い渡す。死だ！」

「その命、神に還しなさい！」

「キバっていくぜ？渡！」

「ああ！！！」

「……………アーク!!」

「奴」が名を呼び、森の中から巨大な影が上空に飛び出し、スズン、と「奴」の隣に着地した。

「ハアアアアアアアアア!!」

アークの中からいくつかの「欠片」が抜け出て、「奴」の身体に集まりだす。

アークの身体が本来の大きさの3・2メートルに戻り、「奴」の怪我があらかた修復された。

「さあ、決勝戦だ。いくぞ、みんな!!」

「「「おう!!」」」

アークが先陣切って走り出し、蒔風をわしづかみにしようとかみ掛かってくる。

だがそれは空振りに終わり、回避した蒔風が横っ腹にローリングソバットをブチ当てて巨体を弾き飛ばす。

そのまま時風はキバと共に「奴」に向かい、吹っ飛んだアークにダークキバとイクサが走る。

「行くぞー!!」

《パ・ワ・ー・ド・イ・ク・サ・ー》

イクサがパワードフェッスルをベルトに差し入れ、ドラゴン型巨大重機「パワードイクサー」を呼びだし、それに乗り込んで戦闘を開始した。

その大きさはアークよりも頭一つ抜き出ており、ドラゴンの首を模したアームがアークに噛みついてその装甲を砕かんとする。

だがアークとてそのような重機にただやられるものではない。腕で強引に噛みついている顎をはずして地面に降る。

そして真っ向からぶつかり合って、下に手を入れ、ひっくり返そうとパワードイクサーの巨体が持ちあげられていく。

「ハッ!!!!!」

「ウエイクアップ、ツー！！！」

だがそのパワードイクサーの背後からダークキバが飛び出し、ウエイクアップフェッスルが二回吹かれた。

その脚にエネルギーが凝縮されていき、「キングバーストエンド」が放たれて、頭部に命中、その巨体が揺れてパワードイクサーが地面に降りる。

アークの背後に跳び下りたダークキバがジャコーダーを鞭状に伸ばし、アークを貫き縛り上げた。

さらにアークの頭上にキバの紋章が現れ、それに引っ掛けることでアークをつるし上げ状態にする。

「やれ！！いまだ！！！」

「わかっている！！！」

イクサがパワードイクサーから飛びだしながら最大稼働したエネルギーを銃型に変形させたイクサライザーへと集中させ、通常の数十倍もの威力を誇る強力なエネルギー波を発射する「ファイナルライジングブラスト」を撃った。

それは砲撃となって、とんでもない熱線がアークを焼きつくす。

その反動にイクサの身体が空中で押し返されるが、そのままパワー  
ドイクサーの頭部を蹴るようにして反転。  
さらにその頭部も首を振るってイクサを押し出し、さらなる勢いを  
持ったイクサがアークの胸の中心に飛び蹴りをぶちかます。

その威力は果てしなく、ジャコーダーに貫かれ、熱線で焼かれたア  
ークの装甲をやすやすと貫いて、アークの背後に突き出た。

そこでダークキバがジャコーダーをなぞる。  
すると弦のように鞭部分が激しく震え、その振動でアークの全身が  
砕けて散った。

その際、「欠片」も飛び散り、何処かへと消えて行ってしまった。

「ハアツ!!!!」

「ぬゴツ！」

ガギイン!!!!

キバエンペラーフォームがザンバツソードを、  
時風が獅子天麟を構えて「奴」に斬りかかる。

それを正面から受け止めるが、その衝撃に「奴」の身体が浮き、そこに二人のパンチが放たれてさらに後方へと吹き飛ぶ。

「ふツ……ハアアアツ!!!!!!」

「奴」が上空に飛び出してその手に波動弾を溜めこむ。

時風が「奴」に向かって絶光砲を放つが、いとも簡単に剣で防がれてしまう。

そしてそれが放たれた。

時風とキバを漆黒の爆発が襲い、噴煙が立ち上がって大地を揺るがした。





キバが「奴」を狙って休むことなく炎弾を吐く。  
「奴」が全力で跳び、それを回避して行ってふと気付いた。

蒔風がない

ドギヤツ!!!!!!!!!!

その思考の瞬間、背後から蒔風が十五天帝で「奴」の背後から体を貫き、地面に向けて投げ放った!!!!

そしてその後を追って蒔風が頭からまっすぐに墮ちて行く。

「グツ・・・バツ・・・きい・・・さまあ!!!!!!!!!!」

「渡!!!!行くぞ!!!!!!!!!!」

『はい!!!!!!!!!!』

【KAMEN RIDER KIBA】 - WORLD LINK -  
WEAPON!!

キバの身体に青、緑、紫の光が取りつき、装着される。

それはキバに使役される三体のアームズモンスター、ガルル、バツシャー、ドツガであった。

もしこれが本来の形態であれば、彼は仮面ライダーキバドガバキエンペラーフォームとも呼べる姿になっていただろう。

そしてその翼にさらに銀白の翼が取りつき、二対の翼が生えそろった。

「構えろ!!!」

落下していく時風と「奴」を追いながらキバの口内に銀白に輝く超巨大なエネルギーが溜めこまれて行く。

「ぶっ放せ!!!!!!!!!!」

【KAMEN RIDER KIBA】 - WORLD LINK -  
FINAL ATTACK!!

さらに時風の足に赤い悪魔のような羽が現れた。

それはキバエンペラーフォームでのファイナルウェイクアップでの必殺技で現れる物と同じであった。

ドゴオッ!!!!!!!!!!!!!!

キバがエネルギーを放ち、それが時風に命中する。

そのエネルギーの砲撃に入り込み、その勢いに乗って時風が右足で「奴」に突き刺さる十五天帝にキックを放つ。

空気の壁を二回、三回と次々にぶち破って、地上に向かって落ちて行く。





そして時間が来る。

蒔風がこの世界に現れてから実を言つと時計の上ではまだ十二時間も経っていない。

故に結構早めに出なければならぬのだ。

「行つてらっしゃい」

「そうなるな。もう会うこともないだろ」

「でも・・・今度はゆっくりしたいな」

「それは・・・そうだな。じゃあ、また、だ」

[ Gate Open . . . KAMEN RIDER KIBA ]

蒔風がゲートをくぐる。

そして今日も渡は日常を過します。



「「変身!」!」

今日も街には風が吹く。

悩みも笑顔も一緒に運んで。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



キバ ｝カルテット キバっていくぜー｝（後書き）

【仮面ライダーキバ】

構成：” フォルス” 60%  
” ライクル” 30%  
” LOND” 10%

最主要人物：紅渡

- WORLD LINK - ｝ WEAPON ｝：三体のアームズモン  
スターと時風の力をキバに付加

- WORLD LINK - ｝ FINAL ATTACK ｝：力を  
得たキバ飛翔体からのエネルギーを纏って時風が放つキック

3176

アリス「過去のキャラどころかシーンまでスツ飛ばしましたね」

だって時風は固有結界の練り込み。

渡と太牙は模擬戦、名護さんはイクササイズだぜ？

そんなもん延々と書いて何が楽しいか。

過去のシーンは番外編で

ア「そういえば蒔風の新しい力！！あれ、なんですか？」

では説明しましょう

固有結界「イマジナリテイワールドエンド心象的世界破壊」

あらゆる法則のなくなった世界を構築。

数式などだけの公式ではなく、本編中で言っていたような当たり前の事象ですら捻じ曲げる。

この固有結界、蒔風の意志で事象を捻じ曲げているのではなく、その事象に合わせて蒔風が動いているのだ。

「をやったら 起きる」と蒔風がやっているのではなく、

「をやったら 起きる」ということを蒔風が知り、それに合わせて行動するだけです。

つまりここに置いて蒔風はどんな法則が成り立っていくのかを知っているだけで、コントロールはしてません。

そしてその法則は次々と変わっていつている。

ただえええ世界を侵食する固有結界の上に、こんなに能力なので発動時間は三十秒のみ。

さらに飲み込む相手が多ければ時間は減っていく。

また、一度発生させたら時間が切れるまで蒔風にも解除できない。

ア「だから「奴」が腕振った時も別の現象が起こったんですね」

そうです。

だから「あるとき蒔風があやっつてこうなったからこっちも同じことを」なんてことはできないんです。

ア「それチートやん」

いや？それでもないですよ？

蒔風の考えに、「絶対なんてことは絶対はない」と言うモノがあります。

故に、「一撃で相手を倒す法則」はできません。

まあ、相手が耐えられなくて一撃で倒れることはある間も知れませんが。

ア「つまり耐えきればどうにかなると？」

はい

時間は三十秒。さらに動きまわれば蒔風自身も危険になりますから、

結構な諸刃の剣。

ア「以外と使いづらそう」。次回、アクセル、怖い」

ではまた次回

俺たち／僕たちは、二人で一人の仮面ライダーだ！

## W ～Aの出会い／異世界からいらっしやい～

「お前、なんであれを持っていた。どこで買った。あの力はなんだ  
！……！」

「懐まさぐつたら入ってたんです。信じてくださいよ刑事さん！  
！」

「そんな言い訳信じられるか」

「だって本当にそうなんですもの……！どうすりゃいいんですか！？」

「オレに質問をするな」

皆さん、こん、にち、はー！時風舜でーす！

今ぼくは風都署の中にいます。今日の前にいるこわいかおの刑事さん  
に招待してもらいました！

やったね（＾o＾）v

今は小さい窓のある暗い部屋にいます。両手に金属のリングをはめ  
ています。ファッションだね！

さっきまで目の前の刑事さんとお話してました！



「なんだこれ？」

蒔風がこの世界に着いて、まずやったのは身の回りの物の確認だ。

懐を探って見つけたのがUSBメモリが二回り大きくなったような感じのものだった。

「ガイアメモリ……ここは風都か？」

この町の名は風都。

街の至る所に様々な形状の風車が回る、通称「エコの街」

そしてこの町にはある組織があった。

それが「ミュージアム」

彼らはこの地球に眠る様々な記憶を内包した「ガイアメモリ」を販売し、街の人間を犯罪に走らせた。

ガイアメモリに内包される記憶は「マグマ」や「トレックス」などと言った実在するものから「ウエザー」などの現象、はたまた「テラー」や「ナスカ」と言った感情や文明など多岐にわたる。

そしてそのガイアメモリを人体に取り付けられたコネクターに挿入することで使用者はドーパントに姿を変えるのだ。

そして使用者の感情はどんなものであれ、「地球の記憶」という膨大な情報に圧迫されて歪んでしまう。

ゆえに、こんなものを持っていては犯罪者予備軍、と言われても仕方がない。  
早々に破棄しなければ、と蒔風がそれを手に考えていたところに、その男はやってきた。

「お前、それはガイアメモリか？」

「え？」

背後にバイクのエンジン音が聞こえる。  
振り返るとそこには赤いジャケットを着た青年が立っていた。

「風都署超常犯罪捜査課の照井竜だ。それを大人しくこっちに渡せ」

その言葉に蒔風がちょうどいいや、と呟いてガイアメモリと渡そうとそれを手に持ってスツ、と出した。



《ワールド!!》

その拍子にメモリのボタンが押され、ガイアウィスパーが発せられたのが運のつき。

照井竜が完璧に敵意をむき出しにした。

「貴様……大人しくしろ!!!」

(うええ!? 鳴っちまったよこれ!? もうあの敵意むき出しだよ……)

さらに言うなら取り出したとき「ちょうどいい」とか呟いた瞬間から照井は身構えていた。

そりゃそうだ。蒔風にとつては「回収してくれるから」だろうが、照井にとつてみれば「暴れる相手が出てきた」という意味に捉えられてただろうから。

ヴォーン!!

照井がバイクのスロットルを模したアクセルドライバを腰に装着し、赤い色をした「A」のガイアメモリ、アクセルメモリを取り出

して起動させる。

《アクセル!》

「変……身……!!」

それをアクセルドライバーに装填し、スロットルを捻る。

バイクのエンジン音のような音が響きわたり、一気に装甲が展開される!

ガコツ、ヴオオン……!!

《アクセル!》

照井が赤い装甲に包まれて、仮面ライダーアクセルに変身した。その姿に蒔風は焦り始める。

「うわーうわーうわー!! 待って待って……!! これマジでオレいらな……」

そう言つてガイアメモリをバツ、と突き出すがそれすらも危険な行為だ。

ガイアメモリのコネクターは使用者の任意で隠せる。どこにコネクターがあるかわからない以上、照井はさらに警戒するしかないのだ。

例に挙げれば、ニューヨークでいきなり懐に手を突っ込んだら銃を出されると思われてしまうのと同じである。

「それをよこせ！！《スチーム！》ハアツ！！」

大型剣エンジンブレードにギジメモリである「エンジン」を装填し、スチームを発動させてそれを蒔風に向け放つ。

もちろん生身の人間に対してなので、出力は抑えられている。

だがそれでもかなり熱い。

熱湯をいきなり掛けられたようなものである。

蒔風がスチームから逃げようと路地を通っていくと、目の前に海が広がっていた。

どうやら埠頭に出てしまったようだ。

どうにもこうにも追い詰められた形の蒔風にアクセルがさらにスチ

ームを蒔風に吹き付けてくる。

「あつつあつつ！……！ああもうチキショー……！確かにその対応は正しいけどさ、もうちつと話を聞け……！なんでこうライダー世界の主要人物は喧嘩っ早いのかっかなんだ……？」

蒔風とて照井がここまで警戒し、対応してくるのは当然だと思っ  
ている。

第三者が見てもそれはそうだろう。

だが人と言うのは面白いもので。

「人がやられるのは見ていて面白いが、自分がやられんのは気に入く  
わねえ……！！！」

蒔風がガイアメモリを放り投げ、代わりに手にディエンドライバー  
を出した。

「君のしつこさにはうんざりだ!!変身!!」

「Kamen Ride...DIEND!!」

時風がディエンドに変身し、カードを装填していく。

「Kamen Ride...V3!Garren!!」

「井坂」に因縁のある赤いサブライダーに、ちゅちゅははよ  
く、いもおとよ...ってな

「何を言っているのかわからんが、逮捕する!!」

「やっぱりなるならディケイドよりディエンド。こっちの方が面白  
くイ」

ギャレンが遠方から銃撃し、V3が徒手空拳での接近戦でアクセル

を追い詰める。

「ああっギャレン、そこ狙う！？わあい鬼畜 おおっと！？V3が執拗にアクセルの股間を責めている！！これはきつそうだ！！」

それにしてもこの男、ノリノリである。ってかそれらの行動の指示はお前が出してるだろ。

「んじゃ、そろそろ……んきゃあッ!？」

カードを取り出した時風の手を、エネルギー弾が襲う。アクセルが全身から熱気を噴き出し、仮面のランプが青々とキラめいて、V3の拳を片手で押えながらもう一本の手でエンジンブレードを握っていた。

その切っ先は時風に向いており、おそらくさっきのエネルギー弾はエンジンメモリのジェットによるものだろう。

そして何よりそのオーラが恐ろしい。

全身から噴き出した熱気に炎がチリチリと舞っている。

きつとあの仮面の向こうには阿修羅のごとき形相の照井の顔があるのだろう。

ズガン！！！！！

アクセルがV3の腹部を切ってその体が消滅する。

ギャレンは睨みつかされた瞬間に消えた、ってか逃げた。

「おいおいおいおい！？そこで消えるか！？こつなつたら……………」

ガリガリガリ…………とエンジンブレードをダラリと下げて、地面に引きずりながら一歩一歩近づいてくるアクセル。

正直言っておっかない。もし背景に文字が付けられるなら絶対に「ケタケタケタケタ」or「ゴゴゴゴゴゴゴゴ」である。

断続的に噴き出してくる熱気と炎もだんだんとその量をあげていつている気もする。

「貴様……………覚悟はできているんだろうなあ……………」

「それは勘弁ッ!!」

「Attack Ride...ILLUSION!」

時風がアタックライドを発動させ、四体の分身を作り出す。相手が計五人のディエンドになり、アクセルが身構える。

「さあ!!がんばってくれたまえ!!」

時風の号令に四体が同時にカードを取り出して装填する。来るかっ!?!とアクセルがエンジンブレードを構えた。

だが

「「「Attack Ride...INVISIBLE!」」」





こうして時風は逮捕された。  
その時の心境をこう語っている。

「いや怖かったね。やっぱり人をおちよくるのはよくないね。やめ  
ないけど」

.....

「.....」  
「.....」

「カツ井でないの？」

「おれと」

そして冒頭から今に至る。

なんやかんやでガイアメモリの件はなんとか納得してもらったのだが、他の世界の力など、そちらの方を今は尋問されている。なんやかんや？ちゃんと説明しろ？

……なんやかんやは………なんやかんやだツ！！！！

そこに照井の部下、刃野刑事が三人の人間を連れて入って来た。

「ここだここだ。ほれ翔太郎」

照井がその三人を中に入れる。

どうやら照井の知り合いらしく、軽い挨拶を交わしてから翔太郎と呼ばれた青年が用件を聞いた。

「この男、奇妙な力を使ってな。どうにもならんから、フィリップに検索を依頼したいと思ってな」

「照井竜、君がそこまで言うモノとは一体なんだい？興味が沸いて来たよ……早速検索を始めよう。彼の名前は？」

フィリップと呼ばれた青年が教えられた蒔風の名前を呟いてなにやら模索を始めた。

その姿を見て机にへばり付いている蒔風が翔太郎に聞いた。

「翔太郎だっけか？ やっこさんはなにやってんのだい？」

「あん？ ああ、フィリップはな、「地球の本棚」<sup>ほし</sup>っつーデータベースと接続できてな、あいつにかかれば、わからねえことなんざねえ。ま、まだすべての「本」を読んだわけじゃねえし、決して万能じゃないけどな……ってか、なんでこんなこと話してんだオレは」

「キーワードは、「蒔風舜」。人名だからかなり絞り込めるはず……え？」

検索を始めたフィリップが驚きの声を上げる。  
それに鳴海亜希子がどうしたの？ と首を傾げた。

「彼に関するデータがない……」

「なんだと？」

「いや、「蒔風舜」と言う人間のデータは確かにある。だが間違いなくこの「彼」ではない。「同一人物の別人」としか言いようがない。こんなことは始めてだよ！」

「なぜ別人だと断言できる？」

「簡単だよ。情報の上では「蒔風舜」はここから遙か海の先、ニューヨークで埴輪売りの屋台をやっているはずだからね。しかも御歳68歳。彼ではないだろう？君は本当に何者だい？」

フィリップがニヤニヤと笑いながら聞いてきた。  
フィリップはいわば「情報マニア」だ。

知らない事に関しては猛烈な好奇心を示していく。

「そりゃないさ。オレは別世界から来たからな。この世界に情報は  
ない」

「別世界だと？貴様世迷言を……」

「ああ~~~~」

「なるほど、わかったぜ」

憤慨する照井をよそに、翔太郎とフィリップが納得する。

「おまえら……納得するのか？」

「いやまあ……」

「ボク達は別世界の存在を知っている。その世界の仮面ライダーと共に戦ったこともある」

「なああんた、こんなカード、知ってるか？」

翔太郎がカードを取り出す。

そのカードはディケイドが使っているライダーカードと同じものであり、描かれているのは仮面ライダースカルである。

「士を……ディケイドを知っているのか？」

「やっぱりそっち筋の人か」

「知っているよ。なるほど、君が「ディケイドの物語」の視認者だったんだね」

「どづいづことだよ」

「つまり、ディケイドはキミの言葉で自分を見失わなかった、ということね」

「それはよかった。ってかあいつ話したのか」

「最後に少しだけ話ができな、その時に」

共通の話題が見つかり、話しが弾む三人。

置いてけぼりの照井と亜希子にも教え、信じてもらう。

さらに翔太郎たちの事、そして時風の事の説明も始まった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



W ～Aの出会い／異世界からいらっしやい～（後書き）

アリス「来ました平成ライダー11作品目!!!!ダブル!!!!」

ダブルはかなりいい作品でした。

ア「最初こそ」「なんだこの半分こ、気持ち悪っ!!!」とか思ってたんですよね?」

そうそれはそうです。

ですがなんだろう・・・動くWを見たらね、なんかこうね・・・

あらヤダかつこいい

ってなっただんですよ。

二人で一人という新境地も若干心配でしたが、それに関しても大成功。

文句なしの作品でした。

早く映画のDVD出ないかな

ア「次回、メモリ検索、思わぬ記念と負傷」

ではまた次回

オレに質問をするな

## W へ乗り越えるU / 食った男へ

二人で一人の仮面ライダー、Wである左翔太郎とフィリップは探偵である。

二人はこの街を泣かせる犯罪者から皆を守るために、ドーパント共と戦い続けるのだ！！

「つつー話なんだな？」

「まあ、間違っちゃいないな。というわけだ。ハードボイルド、左翔太郎だ。よろしく」

「おけおけ」

だがそんな翔太郎の自己紹介にチャチャを入れる人物がいた。

「なに言ってるのよ。翔太郎君はハードボイルドじゃなくてハードボイルド半熟君でしょ？」

「全くキまらないからもうよしたらどうだい？翔太郎」

「左、お前はハードボイルドじゃない」

訂正、その場のすべての人間にだ。

「ダアーツ！なんでそういう事言っただよ！こういうのは第一印象が大事なのによ！！」

「なるほど、ようは敵でも救えるなら救いたって口か」

「う………あ~~~~~が~~~~~！そっだよ！チキシヨ  
ー！」

だが翔太郎もハードボイルドに成り切れていない自分がよくわかっているらしく、やけっぱち気味に言った。

「ハードボイルド？」

「うるせー！！」

翔太郎が詩風の頬をつまんでグニグニし始める。

「ひゃめろひゃめろ！！にゃにがかにゃひくて男にこんなことじゃれにゃなりゃんのら！！」

「そつだよな……はあ」

冷静になった翔太郎がパツ、と蒔風の頬を放す。

そこで照井が蒔風に言ってきた。

「とりあえず、あの時のガイアメモリを出してくれ」

「よしきた。持ってもしょうがないからな……あれ？」

「どづした？」

「……ない」

蒔風がポケットをひっくり返しながらか言った言葉に照井が、なんだと？という顔をする。

「照井との戦いで放り投げてそんまんまだ！？」



「ここ立って、スチームに蒸されてこう放り投げたから……  
下手すりゃ海の中？」

「マジかよ……勘弁してくれ」

「海に潜るなんてそんなのあたし聞いてないよー!」

ギヤイギヤイと騒ぐ四人を尻目に、フィリップが顎に手を当てて考  
えていた。

「ふむ……お、どうやら海に潜ることはないようだよ？」

フィリップの言葉に翔太郎と時風が振り返る。

フィリップは四つん這いになって海に身を乗り出して埠頭の下を見  
ていた。

翔太郎と時風も覗き込むと、埠頭に窪みができていてそこにガイア  
メモリがあった。

「海に落ちた後波ですぐそこに入り込んだようだね」

「よくやったぜ！フィリップ！」

「見つかってよかった~~~~」

「そついえばこれはなんのメモリなんだ？」

「これかい？一旦鳴らしてみようか」

蒔風がガイアメモリのスイッチを押してみた。

《ワールド！》

「ワールドメモリ？聞いたことがない……」

「は？そんなことはないだろ。ガイアメモリはお前がミュージアムに捕まっている時に利用されて作ったんだからよ」

「いや翔太郎、本当に知らないんだ。そもそも、こんな記憶は存在しない」

「どういう事だ？」

「このワールドメモリが言っているのは地球、という意味での「ワールド」ではなく、蒔風がというような意味での世界だ」

「ん？ああ、そうか。確かそういうメモリはエクストリームがあったな」



「そう、あれは星や特定の惑星、つまりは「世界」としての記憶だ。だがこのメモリは「この世界」の記憶。そんなものを許容できるガイアメモリなんて存在しないし、使用できる人間も存在しない」

「じゃあさ、このメモリは……」

「残念だが蒔風、中身スカスカのメモリだね。もっとも、記憶を詰め込む機構は完成しているようだからもし、「世界の記憶」なんてものを掴むことが出来たらこいつは起動するよ」

「ま、そりゃ無理だ。構築を知るのが精一杯だからな」

「「奴」ならばどうだい？」

フィリップが恐ろしい推測をするが、蒔風がそれを却下する。

「それをするには世界を破壊してじゃないと無理だ。もしそんなこととするなら、「奴」は食う方を選ぶよ」

ガイアメモリをカチャカチャといじりながら蒔風が照井に聞く。

「これ、記念でもらってもいいかな？」

「……フィリップ、大丈夫か？」

「問題はない。それには世界以外の記憶は入れられないからね」

「ならかまわん。記念にもって行け」

「わーい!!」

蒔風がメモリを懐にしまい、わいわいとし始める。

その蒔風にフィリップがじゃあ、と話題を振ってきた。

「君のめぐってきた世界はどんなものだい!?とても興味がある・・・  
ぜひ教えてくれ!!」

「待てよフィリップ。それよりも先に俺たちを狙ってるその「奴」  
って野郎の事を聞こうぜ」

「それもそうだね!!ああ、聞きたい項目が多すぎて大変だよ!!」

フィリップが興奮のあまりトリップし始めてしまった。  
その間に翔太郎が蒔風に聞いた。

「「奴」はいつ俺たちに手を出してくるんだ？」

「「奴」の世界構築計算はそれなりにかかる。しかも一時的とはいえデイケイドの世界とつながったこの世界の計算なら少しは手間取るはずだ。軽く見て……四日」

「四日か……」

「で、でもその間は翔太郎君達は安全なんだよね!？」

探偵事務所先代所長の娘である鳴海亜樹子が蒔風に訊く。

だが蒔風が首を振ってこたえた。

「確かに「奴」は殺しはしないさ。でも……」

ザシツ……

「戦力を削ぐぐらいの事はする」

蒔風の発言と共に黒い影が倉庫の脇から出てきた。その影が持つのは赤いガイアメモリ。

「あ、あれは？」

「「奴」の「欠片」だ。どうやらちょっとかい出しに来たみたいだな」

その影がガイアメモリを起動させて、首筋に挿入した。

《アルティメット！！！！》

「なっ！？」

「に！？」

ドグオン……………

……………バンツ！！！！！！

「欠片」がガイアメモリを取り込んで、アルティメットドーパントに変貌する。

身体全体が黒く覆われ、かなりがっしりした筋肉質なシルエットに、全身を赤いラインが駆け巡り、背中には「究極」の二文字が書かれていた。

「究極の記憶」

それはあらゆるものを超越するための記憶。

メモリだけでもかなりの威圧感を放つそれが、「奴」の「欠片」で発動されている。

「究極……か。相手にとって不足なしだな」

そう言って蒔風が戦おうと乗り出そうとする。  
だが、その肩を翔太郎が掴んで止めた。

「おっと、待ってもらっせ、蒔風。この町で暴れる奴は、このオレが許さねえ。まずは見ていてくれ。いくぜ、フィリップ」

「ああ」

翔太郎が腰にダブルドライバーを装着し、それと同じものがフィリップの腰にも現れる。

その瞬間、二人の感覚はリンクし、二人は一体となる。

《サイクロン！》

《ジョーカー！！》

「変身！！！！」

翔太郎がジョーカーメモリ、フィリップがサイクロンメモリを構えてダブルドライバーに挿入する。

サイクロンメモリが翔太郎のドライバーに転送されて、さらにジョーカーメモリを入れて、ダブルドライバーを「W」の形になるように展開する。

《サイクロン！ジョーカー！！》

そして風が翔太郎を覆い、半身で色の違う、仮面ライダーWに変身を遂げる。

隣では意識がWの方に飛んでいるため、眠るように倒れたフィリップの身体を亜樹子が支えていた。

「いくぜ！！」

『ああ！！』

Wがアルティメットドーパントに駆け出して行く。

そのWをアルティメットドーパントは全身の赤いラインから光を飛ばしてスキャンする。

その光に一瞬たじろぐWだが、何事もなかったためにそのまま攻撃を始めた。

だがそこで信じられない事が起こる。

Wの攻撃を見たアルティメットドーパントが、全く同じ動作でWを攻撃し、その体を易々（やすやす）とはじき返したのだ。

地面に倒れ、打ち合った右腕を押さえて蹲るW。  
その状況を見て、ソウルサイドである左側の複眼が光り、フィリッ  
プが翔太郎に説明した。

『どうやらこちらの事はお見通しのようだね。こっち以上の力を得  
ている』

「は、だったらこっちはもっと硬くなってやるまでだぜ!!」

《メタル!!》

《サイクロン!メタル!!》

ジョーカーメモリトメタルメモリを入れ替え、ボディサイドの色が  
銀に変わり、打棒型武器メタルシャフトを構えるWサイクロンメタ  
ル。

だが即座にその体もスキャンされ、見透かされてしまう。

疾風を纏ったメタルシャフトを振りまわすWだが、それを真つ正面  
からすべて受け止め、しまいには掴んでWごと投げ飛ばすアルティ



メットドーパント。

どうやらメタルの硬度すらも超えてしまったようで、もはや太刀打ちできない。

「くそっ、こっとなつたら・・・」

『ダメだ翔太郎!!ここでメモリを変えてはまたスキャンされる!しかもあのメモリはどうやらスキャンした性能をどんどん吸収している!!』

「つまりなんだ?あいつはサイクロンの特性にジョーカーの身体能力、さらに今メタルの硬度をもつちまつたってことか!？」

『ああ。ここでヒートヤルナ、トリガー、照井竜のアクセルやトリアルの力をスキャンされては非常にまずい!!』

「どーすんだよ!!!」

『大丈夫だ。今の僕達を越えればいいだけだ』

「なるほどな・・・いくぜ!!」

Wがサイクロンジョーカーに戻って手をかざす。するとWの意志に呼応し、一羽の鳥が飛んできた。

否、本物の鳥ではない。

それはバードモードで自立稼働する鳥型特殊ガイアメモリ、エクストリームメモリ。

フィリップの肉体をデータ化して取り込み、ダブルドライバーに装着、展開する。

そして翔太郎とフィリップの心と体が一体となり、Wをさらなる次元へと昇華させる……！！

《エクストリーム……！！》

荘厳な曲が流れ、サイクロンジョーカーエクストリームへと強化変身を遂げたWが、アルティメットドーパントに向き直る。

『あのドーパントの検索を終了した。この状態なら大丈夫だ』

そう言うWにアルティメットドーパントが迫り、その姿をスキャンし始める。

だが間もなくアルティメットドーパントの身体の赤いラインがどんどん発光し、しまいには火花を散らしてスパークしてしまった。

『やはりエクストリームメモリの取り込みはできないようだね。—  
気に決めよう!—!』

「ああ!—!—!」

ドライバーを一度閉じ、そして再度開くことで、必殺技のマキシマムドライブが発動する!—!—!

《エクストリーム!マキシマムドライブ!—!》

「『ハアツ!—!—!—!』」

Wが跳びあがって両足をそろえてエネルギーを込める。  
そしてアルティメットドーパントに向かってゆき、技を叫んでキックをぶち当てる!—!—!

「『ダブルエクストリーム!—!—!』」



そこで

《イーター!!》

ドブツ!!ガチュガチュガチュ……………

だがそこまで言った時風の腹を蛇のようなモノが貫いて、言葉が止まる。

その蛇の先端の口が、食いちぎった時風のソレを食っていた。

「グ……………バツ……………」

「時風!!!!クソツ!!!!!!」

Wがその蛇の頭を専用武器プリズムビッカーで切り落とす。  
ズルズルと触手のようなモノが抜かれ、その先には一人の男がいた。

「このメモリ、なかなかオレの肌に合うな。巡り合わせ、か」

そつつぶやく男の姿は何ら一般人と変わらない。

顔がこの青天の中、影に覆われて見えなくなっているのみ。

そしてその右腕だけが変貌しており、長い触手になっており、先端が蛇の口になっていた。

「ガブツ……てめ……」

「お前は!?!」

「時風の話にあった「奴」……でいいのかな?」

翔太郎が怒気をはらんだ言葉で低く唸って聞き、フィリップが敵意

ある眼差しを向けて言った。

その言葉に「奴」がきつちりとした声で答えた。

「怖い怖い……そう、その通りだよ。「欠片」がやられて、メモリブレイクされては元も子もないからな。回収しに来たってところなんだが……」

そういう「奴」の手には角のようになってしまった形の「U」が描かれた赤いメモリが握られていた。

「このアルティメットメモリは使えるんでな。ついでにそいつもやつといたし、一石二鳥だな」

腹から血をこぼして倒れている時風を指さしながら「奴」がフツ、と笑う。

その前に照井、Wが時風を庇うように並んだ。

「このまま逃がすと思つのか？」

『こんなことをさせられて、黙っているほど、僕たちはお人好しじ

やないよ?』

「覚悟しやがね。オオオオオツ!!!!」

《アクセル!!》

「変……身!!!!」 《アクセル!!》

ダツ!!とWが駆けだす。

その後をアクセルに変身した照井が追い、二人同時に「奴」に攻撃を仕掛ける。

だが

「ドンドーン……!!」

「グハツ!?!」

「ぬおっ!?!」



「奴」の拳によって左右に吹き飛ばされてしまう。  
Wは剣と盾に分かれる武器プリズムビッカーで、アクセルはエンジンブレードで防御はしたが、それでも通ってきたダメージに驚愕する。

「なんだこの力は!？」

『これが「奴」……蒔風を幾度も追い詰めた男……』

「そんなの関係ねえ。オレたちの依頼人がやられたんだ。尻込みすることはねえ!!!」

意気込む翔太郎だが、それにフィリップが待ったをかける。Wの身体がガクンと止まる。

『待つんだ翔太郎!!もし今ここで僕らがつかまったら「奴」の計算終了と共に殺される!!』

「チツ……ここは撤退するしかないのかよ……」

「どうした?来ないのか?来ないなら……行くぞ!!!!!!」

「奴」が蛇のようになっていた右腕をダブル、アクセルへと鞭のようにならせて振るう。

その先端にはすでに蛇の頭が再生しており、ガードを怠れば以下にライダーの装甲でも容易に食いちぎられてしまうだろう。

三人の脳裏に食いちぎられた時風の腹部がよぎり、背筋がゾツ、と冷たくなる。

そして二人が戦慄した瞬間、「奴」が標的を変える。

「邪アツ!!!!!!」

一直線に伸びた蛇の先には、腹に穴をあけた時風と、それを青い顔をして必死に介抱する亜樹子がいた。

このままでは二人が!!!!!!

そう思つてWとアクセルが動き出すがもう遅い。  
その蛇は蒔風の喉笛を噛み千切り、最悪、亜樹子ですらもその餌食  
になつてしまいかもしれない

迫る蛇に亜樹子が目をつぶつて蒔風に覆いかぶさる。

どんな状況でも依頼人だけは守る。

先代、鳴海荘吉から受け継がれた魂が、彼女をその場から動かさな  
かった。  
蒔風は言わば依頼人だ。

「「奴」を倒すため協力してほしい」という依頼の

だから命をかけて依頼人を守る。

偉大な男の偉大な意思。

それすらをも喰おうとする蛇が亜樹子に迫りそして

それは亜樹子には届かなかった。

さらに言えば覆いかぶさって自分の下にいたはず時風がない。

それもそのはず

時風は亜樹子を庇うように立ち上がって、蛇に向かって拳を突き出していた。

その腕はすっぱりと蛇に丸呑みにされ、牙が上腕に食い込んでいる。

腹からはだらだらと血液がこぼれており、左手で押えてなければ内臓がこぼれてしまいかもしてないほど重傷だった。

「こいつ・・・さすが翼人と言ったところか・・・その怪我ではまだ死ぬに死ねんか！！！！」

「奴」が時風に叫ぶ。

蛇の口はさつきから時風の右腕を引きちぎろうと顎がギリギリと食いこんできている。

当然、時風の腹のように軽く食いちぎれるかと思っていた「奴」だが、ここにきて時風の腕の筋肉が硬く隆起し、噛み千切れないのだ。

時風がグワツ！！と目を見開き、食われた右腕をグリングリン回して捻って蛇を引きちぎった。

「奴」がその反動に少しよろけ、ニヤリと笑う。

「ま、このくらいか・・・これ以上はお互いに不毛だしな。オレは計算に戻る。お前も早く治せよお？」

厭味つたらしい顔をして、「奴」が虚空に消える。

Wとアクセルが変身を解き、時風のところへとダッシュで駆けよる。

「おい！！意識はあるか！？返事をしろ！！！」

「これはひどい・・・早くしないと死んでしまう！！！」

翔太郎とフィリップが時風の怪我の現状を見て、照井に救急車を呼ぶように言う。

「早くしろ、急いで救急車を回せ！！！！なに？質問に答える暇はない！！！！一刻を争う！！！！！」

一瞬にして血みどろとなったその現場に、まもなく救急車が到着し、  
時風を搬送していく。

照井と翔太郎が同伴として乗り込み、フィリップがバイクを運転し  
て後ろに亜樹子が乗ってついていく。

その亜樹子の手はさっきまで時風を介抱しようとしてついた血でべ  
っとりだった。

もうそれは乾いていたし、タオルで拭いてしまったが、まだうっす  
らと残っている。

その手を見て、亜樹子が一人つぶやいた。

「私……こんな聞いてないよ……」

風都に風が吹き、黒い雲が空を覆っていく。

t o b e c o n t i n u e d



W 〱 乗り越えるU / 食った男〱 (後書き)

ア「ここにきての蒔風脱落？」

次回は病室編で誰も変身しませんよ？

ア「そういう発言は私のモノ！！！」

ではここでアルティメットドーパントの説明をしておきましょう。

「究極の記憶」を内包したメモリ。  
究極とはすべてを超越するモノ。

故にこのメモリはスキャンした相手の力を次々に取り込み、その一段上の力を得るのです。

ア「じゃあ今のアルティメットドーパントは？」

基本的なパワーに、サイクロン以上の俊敏性、ジョーカー以上の身体能力、メタル以上の硬度を持っています。

戦うたびに成長し、越えていくメモリ。それが究極。

姿は……まあお好きなように。基本的には本編のまんま。

ア「また厄介なもん考えましたね」

いやあそれほどでも。

書いてたらね、ポンと浮かんできたから出しました。  
逆にワールドメモリは何も浮かばなかった。

ア「なんですかそれ」

自分でもわかんない

ア「まあ、さっきも言っていましたけど、次回、病室での決意」

ではまた次回

さあ、お前の罪を……数えな……

## W 　↳重症のMノ戦いへの覚悟↳

風都総合病院

現在この病院で蒔風が手術を受けている。

「そついえば蒔風の身分証明つて大丈夫なのか？」

「あいつのポケットに入っていた証明書のカードは受理されたからな」

「おそらく、世界が与えたんだろうね。その世界での役割のように」

廊下でそんなことを話し合う翔太郎たち。

廊下の先にある扉の上には「手術中」のランプが赤く灯っている。

「それにしても……あのメモリはなんだ！！」「アルティメット」に「イーター」だと！？」

「アルティメットメモリは相手を超越するメモリだ。さらにイータ

「メモリは捕食者の記憶……喰らう」「という衝動に特化したメモリ……どちらも厄介だよ」

「そんななかで……俺たちは勝てんのか？……時風は大丈夫なのかよ」

暗く落ち込む一同。

と、そこでランプが消えて扉が開かれた。

出てきた医師に照井が様子を聞いた。

「……!?!? どうなんですか」

「なんとか持ちこたえました。ですが、彼は何者ですか？あれだけの傷で、まだ息があるなんて……」

「悪いが……質問はしないでくれ」

「まあ……わかりましたけど……」

そう言って医師はその場を後にする。  
時風は病室に運ばれ、済し崩し的に皆がそこに集まって会議を始めた。

「問題は「奴」がどの程度動くかだ」

「蒔風は確かあと四日、と言っていたな。ではそれくらいは大丈夫ということか？」

「だがそれでも「奴」は来た。いや、それだけじゃねえ。こうしている間にも「欠片」の方がメモリをスキャンしてるかもしれねえ」

翔太郎がガシガシと頭をイラついたようにかきむしる。

「奴」は、この世界を破壊しようと動いている。

この瞬間にもそれは進み、この町が脅威にさらされている事が、彼には我慢できないのだ。

「落ち着くんだ翔太郎。逆を言えば、君さえ守り通せれば、最悪世界は破壊されない」

「とにかく蒔風と左の身辺を守り通さなければならぬ」

「お前ら……. だけどそのためにお前らが殺されちゃったら…….  
」

「死なないさ」

唐突に放たれたフィリップの覚悟に満ちた声が、暗かった病室の空気を塗り替える。

「絶対に死なないさ。僕はもう、死なない。僕に・・・僕達に未来を送ってくれた人たちのためにも、絶対に」

その言葉に皆の心が立ち上がる。

落ち込み、これからどうしようかという思いを払拭し、必ず勝つという覚悟。

それが復活した。

そこで照井の携帯が鳴る。  
出てみると、それは部下からの連絡でドーパントが暴れているとの連絡だった。

「まさか……!!!!」

「いや、アルティメットドーパントではない、他のドーパントだ」

「こんな時にも事件は起こるか……しよーがねーなあ！行くぜ？フィリップ！！」

翔太郎が帽子をキュツ、と直し、意気込んで病室を飛び出そうとする。

だがその首筋をフィリップが掴み、翔太郎の身体に急ブレーキがかかる

「グエエツ！！??」

「待つんだ翔太郎。君が言ってそこで「奴」に捕まったらどうする？もちろん可能性は低いが、ゼロじゃない。ここは僕が行くよ」

そう言って羽織った上着をバサツ、と直して、扉に手をかけながら言うフィリップ。

だがそんなフィリップに亜樹子が言葉を返した。

「フィリップ君、翔太郎君、気絶してる」

「・・・・・・・・・・行こう!!!翔太郎!!!!」

「えっ!?(裏声で)お、おう!?!あいぼー!!!!」

翔太郎の手首をプラプラさせて亜樹子が裏声で答える。

「オレも行こう。もし「奴」が来たら一人では無理だろう」

「頼もう。アキちゃん、何かあったらすぐに連絡をしてくれ」

そしてフィリップは行ってくるよ、と言い残して、飛び出して行ってしまった。

照井もその後を追う様に病室から出て現場に急行する。

「ふう・・・・・・・・・・なんだか慌ただしいなあ~~~~」

「ん・・・・・・・・んが?おい亜樹子、フィリップ達はどーした?」

「ドーパントが暴れてるから、そっちに行ったよ」



翔太郎が目を覚まし、それを亜樹子に訊くと、ダブルドライバーを装着して待機しておく。

「んごあ………ウオが？」

そこで蒔風も目を覚ます。

起き上がろうとして、そのとたん腹部に激痛が走って腹を押さえる。

「蒔風、目が覚めたか！」

「だ、大丈夫！？ゆっくりしてないと！！！」

「あ、ああ……あの野郎……オレの事まで食いやがって……」

蒔風が二へらと笑いながら発言する。

その言葉で翔太郎と亜樹子とその瞬間の事を思い出し、ウゲエ、という顔をした。

「やめてやめて、痛そうな話」

「あ~~~~~、そういう話はパスだぜ？」

「ッたく・・・治るのに三日はかかるか・・・いや、微妙に間に合わないかもな」

腹を押さえながら蒔風が言う。

その発言に、亜樹子がびっくりしていた。

「そんなに早く治るの!？」

「なんとかな。戦闘がきつくなるくらいか。万全ではないけど、贅沢はいつてらんねえしな」

「「奴」って・・・だれなの?全然顔見えなかったけど」

その問いに蒔風がうん・・・と唸ってから、さあ?と首をかしげる。

「だがまあ、今回は記憶を扱わずに済んだな」

「「記憶?」」

「蒔風、記憶を扱って何だ?」

蒔風が翔太郎の問いに答える。

「奴」の「記憶」活用方を話してから、だけどな、と話し始める。

「この世界では「記憶」は形に残せる。それがガイアメモリだ。そしてそういった形になって、過去のメモリは破壊されている。この世界で使うと言ったら・・・ん、エターナルだな。だがそのメモリはブレイクされているし、その変身者は二重に死人だ。そんなもん引つ張り出すには時間がかかるし面倒臭い。そんなことするなら最初からメモリ使った方がいいし、現に超厄介になってるしな」

なるほど〜とつなづく翔太郎に、首をひねる亜樹子。

と、そこで翔太郎がフィリップが敵と遭遇したことを感知する。

「んじゃ、行ってくるぜ」《ジョーカー!!》

「がんばれ」

「負けんよお？」

「おう。変身!!（ガッシュウ!!）」

ジョーカーメモリをドライバーに挿入し、それがフィリップの方に転送される。

それと同時に翔太郎の意識も飛び、身体が倒れて亜樹子が支える。それを椅子にもたれさせ、ふう、とひと段落する。

「大丈夫かな？」

「大丈夫だろ。あいつらは二人で一人の仮面ライダー。この町のヒーローだ。やられることはあるめえよ」

病室から見える街。

その街の空には暗雲が立ち込めている。

だが、街のある場所で一陣の風が吹き、雲がゆっくりと流れを変える。

そしてそれから三日、蒔風は探偵事務所に居候した。

病院は一日後に退院し、残りは事務所で治療に専念した。

「奴」の計算の終わるであろう四日目。

その日までに腹を塞いで治さなければならぬ。

借りれる力は借りていった。

そして時風の腹は、なんとかではあるが塞がった。  
いかんせん血液量が足りず、体力も万全ではないが、戦闘に支障は  
ないだろう。

そしてこの間に何もしていなかったわけではない。

すでに行き先はわかっている。

あとは向かうだけ、そこに敵がいる。

その空は、三日前から晴れ渡っていた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

W へ重症のM / 戦いへの覚悟へ (後書き)

アリス「うわ〜」。中身スカスカ」

言わないで・・・

その代わり次回はゲキアツだから!!!

ア「ついにWと蒔風がやるのか!？」

いや、どっちかつつーと照井の方が熱い。

ア「ええええええええええええ!？」

いや、蒔風は治っても身体万全じゃないし。

ア「そついえばですね、思ったのですが」

はいはい

ア「マジ恋」の百代の力借りれば、瞬間回復でどっぴかになるんじや?」

はいキタこの問答。

蒔風が借りているのはそのシステムや技術（技ではなく、武器や科学としての）です。

だから彼が百代の力を借りてもできるのは「気の扱い」のみなんです。

それを練って体力回復なんてことは蒔風にはできません。

ライダーの力借りても、そのまんまに戦うんじゃないかと、蒔風風に戦ってるでしょ？

ア「それにしてはオリジナルに近いですけど……」

それは彼の趣味。

だから瞬間回復できないんです。

ま、瞬間は無理でもほんの少しずつなら何とかかなりますから、それを含めて四日の内になんとかですね。

ア「そういうことですか。次回、「奴」と戦う……何秒前でしたっけ？」

しらん！！

ではまた次回



さあ、お前の罪を数えろ!!!

W　この街のW／これで決まりだ

風都の街の一角にある「かもめビリヤード場」二階部分。  
そこに鳴海探偵事務所はある。

そのなかで、四人の男が身支度をしている。

一人は帽子をかぶり直し

一人は本を閉じて机に置き

一人はコーヒーの入ったカップを飲み干し

一人は腹部の包帯をチェックして立ち上がった。

「行くぞ」

誰ともなくその言葉が発せられ、開け放たれた扉に向かって歩いていく。

その背を見つめ、送り出すのは一人の女。

彼らの身を誰よりも案じ、戦いの場へと送りだした。

「みんな……帰ってきてね……」

そうつぶやいて、椅子に座ろうとする探偵事務所二代目所長。

そしてそれから十分後、事務書の扉が叩かれる。

ゆっくりと開かれたその扉は、彼女を置いてけぼりにはさせてくれない。なかつた。



スクラップを適当に組み上げました的な感じの機械がそこに一台置かれていた。

機械がスクラップなら建物もスクラップだ。

元はナニカの製造工場だったようで、今は廃棄され、ガラクタしか転がっていない。

意気揚々とその上からメモリを手についた「奴」が、拳を振りおろしてその機械を粉碎し、バチバチと火花を弾けさせて、機械が沈黙する。

そしてその建物から出てきて程なくする。

山から下りようとしている間に、「奴」の足が止まった。

「ほう………ここを嗅ぎつけてきたか。探偵……！」

「この街はオレの庭だ。わからないことなんざ、ねえよ」

その場に翔太郎、フィリップ、照井が立っていた。

山の中腹辺りの開けた場所だ。そしてここは、Wがミュージアム最後の敵と戦った場所でもある。

「奴」は感心したような声を出しながら、探偵モノの犯人がよく言う言葉を言った。

「では聞かせてくれ。なぜここがわかった」

「簡単さ。君の持つそのガイアメモリ、特にアルティメットは例外はあれど相手のどんな能力でも取り込む。だがそんなものが簡単に出来るわけなどないのさ」

「必ず微調整が必要になってくる。そう踏んだ俺たちは、この街に残る「ミュージアム」関連の建物を風潰しに当たった」

「で、ここに行きついたってわけだ。もちろん、生半可なことじゃなかったぜ・・・蒔風のアドバースとフィリップの検索、警察が押収した情報に、オレの土地勘。すべてがなけりゃ、ここにはこれ

なかった」

「じゃ、あいつは？」

「オレを呼んだか？」

蒔風が「奴」の前に現れる。  
その身体はしっかりと二本の足で立っていた。

「全く・・・腹食い破るとはやってくれたな。完治できなかったぞ  
コノヤロー」

「ふん・・・戦闘に差し支えないくせによく言つ」

「まあな」

「とにかく、だ。これ以上この街に手出しはさせない」

「そしてこの街を守る、仮面ライダーにも、だ」

「ハードに行こうぜ？翔太郎！！」

「ああ！！いくぜ？相棒！！」

「準備はいいよ、翔太郎」

「覚悟を決める……」

《サイクロン！》

《ジョーカー！！》

《アクセル！》

「「変身！！！！」」

「変……身！！！！！！！！」



《サイクロン！ジョーカー！！》

《アクセル！》

ドンドンドンドン！……！！

フィリップの身体が崩れ、岩場に隠れる。

そしてその場に、三人が立つ。

W、アクセル、蒔風が「奴」を、「奴」の罪を糾弾するように睨みつける。

「おおめ……！！……振りきるぜ」

「やられた分は返させてもらおう」

『行くよ、翔太郎』

「ああ………」

「『さあ、お前の罪を、数えろ!!!!』」

その言葉に、「奴」がポケットとして、それからハッとして指を折って数え始めた。

3257

「ん〜っとな………両の指程度?」

「それだけあれば十分だッ!!!!」

その言葉にまずアクセルが飛び出す。  
だが「奴」がアクセルに手の平を向ける。



すると上から一本の丸太が落ちてきて地面に突き刺さり、「奴」の手にもアルティメットメモリが同じように落ちてきてその手に収まる。

土煙で「奴」の姿が一瞬消え、それがすぐに風に洗われる。そしてそこにあつた丸太には、ひとりの人間が括りつけられていた。

「なに!？」

『あれは……』

「所長!？」

そう、そこに括りつけられていたのは鳴海亜樹子であった。意識がないようで、その首はぐったりとうな垂れている。

「てめえ……亜樹子に何をした!!!」

「なにもしてないさあ。ただな、置き去りはかわいそうだと（ズツ）………思ってたな!!!」（ブォン!!!）

「奴」がその体から「欠片」を出し、丸太を運び攫わせる。  
それを目で追い、アクセルが心底憎そうな声を出してそれを追う。

「くそ!!!!!!!!!!!!!!逃げさんッ!!!!!!!!!!」

アクセルがバイクフォームに変形し、その後を追う。

さらにWと時風も駆けだそうとするが、その道を「奴」が阻む。

「行かせんよ」

「くそ……照井と俺らを分断させる為か……」

「しょうがない、俺らでやるぞ」

「でもあいつの相手は!!!!!!!!!!」

『翔太郎。信じるんだ。彼も、この街の仮面ライダーだ』

その言葉に無言で答える翔太郎。

そして頭をあげ、蒔風と共に相手を見据える

「話は終わったか？始めようか」

「やらせねえよ。この街は」

『僕達が守る』

「よし・・・気合入れてくぞ！！！！！！」

「『応！！！！！！』」

Wと蒔風が駆けだす。

Wの右パンチに蒔風の右回し蹴り。

だが「奴」はここであえて蒔風のキックを無視した。

脇腹に蒔風の蹴りが命中し、「奴」の息が吐き出される。

それでも「奴」は一向に止まらず、ズゴッ！！と地面に足をめり込ませて、Wの顔面に拳を鋭く突き出した。  
Wのパンチを頬から紙一重でかわし、その拳がWのマスクを破壊せんと迫る。

「！？ つおおアッ！！！！！！」

そこで蒔風が左腕を振り上げてその拳を阻害する。  
拳はそれだが、それはWの右半分の顔をかすりゆく。

そしてWの視界が回転した。  
頬を拳が下から上にかすっただけで、Wの身体が風車のように幾度も回転した。

一瞬で視界を奪われたWの回転の中心に、さらに拳を振るう「奴」それを蒔風が真っ向から両手の手の平で受け、弾くように両腕を開いた。

バチィッ！！！！と信じられないほど鋭い音が鳴って、二人の身体が後方へと吹き飛び、巨大な岩にぶつかる。

Wがフラフラと、蒔風が手をプラプラと振りながら立ち上がって言った。

「野郎……ダメージ無視しやがった……」

『そのまま押しではいけないのかい?』

「「奴」の方が基本値は高い。押し切るのはよほど調子のいい時か、  
「奴」を弱らせた時だけだ」

「奴」が地面に唾を吐きながらこちらに向かってくる。  
それに対してうんざりしたように蒔風が叫んで走った。

「いちいちいちいち……厄介なんだよお前は!!!!!!」

ドゴウ!!!!!!

蒔風の拳が放たれる。  
だが今度は顔面に放たれたそれを「奴」は思いつきりのけ反って避ける。

《サイクロン!トリガー!!》



そしてその空を見上げる「奴」の視界に、緑と青に半身色分けされたライダーの姿が現れる。

サイクロンによって連射が可能となったトリガーマグナムを「奴」に放ち、その銃弾が「奴」の上半身に向かってくる。だが「奴」は蒔風の襟を掴んで自分の身体にかぶせてそれをガードしようとする。

しかし、蒔風もそのまま受けるほど迂闊ではない。即座に身を捻って「奴」と上下を入れ替わり、蒔風が下、「奴」が上となり、向き合って地面に倒れる。

「奴」の背中に風の弾丸が十五発程命中し、そこから黒い影が血のように散るが、「奴」はそんなことはお構いなしに蒔風の頭を掴んで、思いっきり頭を振りかぶって頭突きをかます。

ゴッ！！！！ガゴンっ！！！！

まず「奴」の額が蒔風の頭に当たり、そしてその勢いでさらに地面を衝突する。

その衝撃は果てしないものである。

ガゴバンッ！！！！！！！！！！

蒔風の頭を中心に地面が窪み、ひび割れる。

二段構えの衝撃に、蒔風の頭蓋骨の中が揺れ、意識を一瞬で脳味噌から消失させる。

《ヒート！トリガー！！》

と、そこに蒔風の頭を跨ぐようにWが着地し、「奴」の額に向けて高熱の弾丸をぶっ放した。

「奴」は瞬時に手のひらでそれを受けたが、それでも弾丸に押されてその体が後方に押し出される。

その「奴」にWは追撃をやめない。

炎の銃弾を放ちながらトリガーメモリを抜き、マグナムにセットして、マキシマムドライブを発動させる。

《トリガー！！マキシマムドライブ！！》

「トリガーエクスプロージョン！！」

ドゴオ！！！！！！

炎の柱のような砲撃が放たれ、「奴」に迫る。

「奴」も波動砲を撃ってそれに対抗する。

砲撃と砲撃とがぶつかり合って、中間点でせめぎあつ。

そこに時風が頭を振って立ち上がり、腕を構えて竜を放つ！！！！

「土惶……竜！！！！！！」

竜の形となった地面が空中でくだを巻き、「奴」に向かって突進する。

砲撃を撃っていた「奴」はそれを頭上からくらって、さらにマキシマムドライブで爆発が起こる。

「やったのか？」

「まだだろうな。だが、確実にダメージは……」

《イーター!!!》

「んなつ!?!」

ガイアウイスパーが鳴り、「奴」をやったはずの炎がどんどん中心部分に集まって吸収されていく。

そしてすべてが食われ、そこにはイーターメモリによって右腕が変わった「奴」がいた。

「腹いっぱいだな・・・つと!!!!!!」

そしてその蛇のような右腕を真っ直ぐこちらに向け、そこから先ほどWが放った砲撃と同じモノが放たれた。

「ッ!!!!」

「うおお!!!!!!!!」

Wと時風が転がってそれを避ける。  
だがその砲撃は途切れることなく、まるで☒太いレーザーのように大地を焼き切ってWに迫る。

『翔太郎!! 守りを固めろ!!』

「わかっ・・・てる!!!!!!!!」

《《ヒート!メタル!!》》

Wがヒートメタルに変わる。

だがレーザーの威力を見るに、おそらくこれでも耐えられない!!!

「だアあッ!!!!!!」

そこに時風が割って入る。

その手には超圧縮された獄炎弾があり、横に薙がれたレーザーとWの間に立ち、両手でそれを押しつける。

一瞬でそれが膨れ上がり、レーザーを押し返すが、それと同時に時風の足元も後退する。

そして二、三秒の膠着から、一気に獄炎が爆発し、Wと時風が吹っ飛ぶ。

「ぐっ……おい、時風!!!!!!」

「ぐっ、がああああ………おグッ……っは!!!!!!………」

時風がWに庇われる形で地面に落ち、胸を押さえて悶絶する。  
そこに「奴」がツカツカと迫ってくる。

「イーターメモリはいかなるものをも食らう。そしてそれを使用者のレベルに合わせて吐き出すことも可能なのだ」

そう、それがこのメモリ、「捕食者の記憶」のイーターメモリ。

恐ろしいのはその顎や牙だけではない。  
飲み込むというその特性こそ真骨頂。

「だから……どうした!!!!」

蒔風が痛みを振りきって立ち上がる。  
Wも蒔風に並び、「奴」を睨みつける。

だがその息は荒く、とても善戦できる状態じゃない。

それでも蒔風は言う。

必ず勝つ、と

絶対なんてものがどこの世界にも存在しない事を知りながらも、彼は言う。

必ず成し遂げて見せるといふ、覚悟を込めて。

「てめえには前にも言ったろうが……てめえじゃ勝因にはならない。たとえどんな力を持って、お前は勝因を手に入れられない」

「主人公が勝つつてか？それが一番ムカつくんだよ……主人公だから大丈夫だなんて戯言がよ！！！」

「主人公……だからじゃない。オレだからだ……オレがいる事が勝因だ。主人公なんぞ、知った事か！！！！！」

そこまで言い切った時風がWにそっと耳打ちする。



「なんとかしてこの状況を打破する。時間を稼いでくれるか？」

「オーケ。やってやる」

『やれやれ、今回の依頼人は我がままだ』

「うるせえ」

ドンッ！！！！！

Wがメタルシャフトを構えて走り出す。

そして蒔風が自身の体力回復に専念し始めた。

.....

「ハアア!!!!!!!!!!」

ザシッ!!!!ズズン!!!!

時間は巻き戻って一方アクセル。

結構離れた場所にまで来てしまっており、そこは彼が宿命を果たした場所と酷似していた。

バイクフォームで一気にジャンプし、身体を回転させてエンジンブレードを握る。

亜樹子の括りつけられた丸太を担いだ「欠片」の背をブレードで切り、ついに追いつく。

落ちた丸太をキャッチし、縄を斬って亜樹子を解放する。  
アクセルが名前を呼んで、亜樹子が目を覚ます。

「え?.....聞こえどこ?あたし聞いてない!」

「大丈夫か、所長」

「竜君!？」

「隠れている。説明はあとでしてやる」

アクセルが亜樹子の背を押して、その場から去らせる。

その間に「欠片」がメモリを挿入し、アルティメットドーパントへと変貌した。

「今度こそ逃がさん……………」

「ブシューウウウウウウウウウウ……………」

「さあぁ……………振り斬るぜ……………」

ドンッ!…!とアクセルが一気に踏み出し、アルティメットドーパントへと迫る。

( スキャンされては終わり……………ということとは、スキャンされる前に倒せばいい事!…! )

《アクセル！！マキシマムドライブ！！》

アクセルがマキシマムドライブを発動させ、後ろ飛び回し蹴り「アクセルグランツァー」を放つ。

それが止められたことは一度もない。

アクセルはメモリを一つしか持たない代わりに、そのメモリの力を最大限に活用できる。

その威力は瞬間的にWのそれを越える！！！！

「オオオア！！！！」

ドッ、ガァン！！！！！！

だが

それは止められた。

アルティメットドーパントの腕にギリギリと止められ、その首がキリキリとアクセルの方を向く。

ピーーーーッ! ! ! ! !

そして赤い光がアクセルをスキャンし、その脚を掴んで投げ飛ばした。

「グアッ! ! ! ! !」

「竜君! ! ! ! !」

倒れるアクセルに亜樹子が声をかける。

だがアクセルは来るなど手の平を亜樹子に向けながら立ち上がる。

「そうか……貴様はメタルと同等ではなく、メタル以上の硬度を持っていたんだっただな……」

照井が絶望的な状況を反芻する。

今この場で戦えるのは自分一人。

相手はサイクロン、ジョーカー、メタル、アクセルの力を取り込んだアルティメットドーパント。

しかも相手に対抗するにはエクストリームの手が必要になってくる。だが今Wは「奴」の相手をしているだろう。

結論として、照井の思考に勝利という文字はどうしても浮かんでこなかった。

しかし、それでも

《エンジン！！マキシマムドライブ！！》

「ハアアアアアア！！！！！！」

ドゴン、ドゴン、ドゴオン!!!!!!!!!!!!!!

アルティメットドーパントをエンジンブレードによるマキシマムドライブ「エーススラッシャー」で「A」の字に斬る。  
無論、それでもメモリブレイクはされず、簡単にはじき返されてしまつ。

「チツ!!やはり効かんか」

もうおわりか、と言う様にアルティメットドーパントが拳を握りしめてアクセルに迫り、その拳を振るう。  
アクセルがそれをかわそうとするが、驚異の身体能力でその拳が軌道を変え、腹部のど真ん中、鳩尾に命中してその体が吹き飛ぶ。

「グボツ・・・ガツ」

ゴン!!ゴガン!!!!ズシャツ!!!!!!

地面を削りながらアクセルが吹き飛び、その装甲にひびが入って火花が散る。

アルティメットドーパントはもはや単純な力では「奴」をも凌駕している。

全身から疾風を噴き出し、炎をまき散らして、硬質化した拳をガンガンと鳴らしている。

元が「奴」の「欠片」で、そこにあれだけの性能が降り混ざっては一撃の大きな技ではもはや倒せない。

無論、照井もその考えに至っている。

だがどうしてもそれになれない。

倒すには超高速の連続打撃による一点集中攻撃。

それがわかっていて、彼にはその手段があっても、それができない。

それになるということはこの装甲を脱ぎ捨て、速さにすべてを捧げなければならぬ。

しかしそこまで薄くなった装甲でもしも一撃でも食らえば、今以上の衝撃が身体を襲うだろう。

最悪、身体を貫き、そして……



照井の脳裏に時風の貫かれた腹部が思い出される。

それに恐怖することは恥ではない。  
しかし、照井はそんな自分が許せなかった。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
……………」

ガゴンツツッ……………!!

咆哮をあげながらも、地面に頭を思い切り叩きつけられるアクセル。  
そしてアルティメットドーパントは幾度も幾度も、アクセルの頭を  
潰していく。

そしてそれが何度か目になった時、アルティメットドーパントの頭

にガスツ、と何かが当たった。

それは拳ほどの大きさをした石だった。

アルティメットドーパントが飛んできた方向を見ると、そこにはその場から今にも逃げ出しそうな感じで、それでいて絶対に逃げないという覚悟がある顔をした亜樹子だった。

亜樹子は何も言わない。

きつと言おうとしても言葉など出ないだろう。

だが、それでも

彼女の意思は、言葉に出さずとも伝わるものだった。

否、言葉にしないからこそ伝わる想い。

それは言葉にした瞬間に、陳腐な物に聞こえてしまう、そんな思い。

それを見たアルティメットドーパントがゴトンッ、とアクセルを手放し、亜樹子へと向かう。

亜樹子はその場から一歩たりとも下がらず、アルティメットドーナツを見据えて立つ。

そしてそいつが目の前に来て、亜樹子の姿がその影に包まれる。

ゴオウ！！！と拳が降りあげられて、亜樹子が目を瞑る。  
そしてそれが振り下ろされて

「貴様、何をしている」

その腕をアクセルが後ろから掴んで止めていた。

「ぬ、オオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

アルティメットドーナツの身体を思いっきり振りかぶって投げ飛ばすアクセル。

アルティメットドーパントは全くダメージを受けずに着地する。

「欠片」は痛みなど感じない。  
ただ、怯みはするだけである。

そしてもしアルティメットドーパントが生身の人間が使用者だったら、その右腕に痛みを感じただろう。

「竜・・・君？」

「心配をかけたな、所長。だがもう大丈夫だ」

「だ、大丈夫って・・・」

「頭から少し血が抜けてな、スッキリした。もうゴタゴタ悩まん」

そう言ってアルティメットドーパントに向かうアクセル。  
その背中に亜樹子が叫んだ。

「待ってよ！！あのドーパントって竜君以上の力を持つてるんですよ！？だったらここで引きつけて、時間稼ぎをすればいいじゃん！  
！倒さなくっても、ここに引きつけているだけでも十分だよ！！！！」

亜樹子の言うことはもっともである。

そして時風たちが「奴」を倒せば、おそらくはこの欠片も消えるだろう。

だが、もしそうならなかったら？

そして時風たちが負傷していたら？

ならば自分がやるしかない。

そしてそれ以上に

「所長……オレがいつも変身するとき、なんて言ってるか知っているだろう」

なあ、振りきるぜ



《トライアル！！！！》

アクセルの装甲が一瞬黄色に変わり、そして装甲がはじけ飛んで、その身が一気に青くなる。

仮面ライダーアクセルトライアル

その名の意味は、挑戦。  
常に挑戦するその対象は、いつだって自分自身である！！！！！！

「ガアア……ガアッ！！！！」

アルティメットドーパントが即座にアクセルトライアルの力をスキヤンする。  
それを見た亜樹子が絶望的な声を上げる。

これでアルティメットドーパントはトリアル以上の速度を得た。トリアルの強みはその速度で攻撃をかわし、一気に攻撃を当てて敵を粉碎することにある。

だが相手がそれ以上の速度だったら、それは意味を為さない。

だがそれを知りながら、アクセルトリアルが悠然とアルティメットドーパントに迫っていく。

アクセルトリアルがトリアルメモリを抜き、宙に放り投げる。

それに合わせてアルティメットドーパントも超加速を開始する

そして、始まった。





照井竜はただ、一撃で無理なら多撃で迎え撃つという、トライアルの基本的動作をおこなうだけだ。

「オレは……もう失うわけにはいかない！！！！！！」

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン  
ガンガンガンガン！！

「そのために……過去の自分を、さっきまでのオレを！！！！」

ガンガンガンドドッガンガンドドドッガンガンドドドドッガンガンガ  
ンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン



《トライアル!!マキシマムドライブ!!》

ギーーーーーーン!!!!

「ご、ガ!ゴガアアアアアアアアアア!!!!」

「絶望までの、タイムだ!!!!」

それはアクセルトライアル最速の数字。  
彼はこの戦いの内に乗り越えた。

そもそも

彼は最初、トライアルを使った時の訓練で、十秒の壁を越え切るこ





ところ戻って時風たち。

「はははははっ！！！！」

「グッ………」

Wが時間稼ぎのために戦ってからまだ一分と数秒しか経ってない。

形態はヒートメタル。

その手にメタルシャフトを握っている。

「ハアツ！！！！」

Wがシャフトを振るい、「奴」に攻撃を放つ。

ギャン！！！！！

だがそれはそんな効果音を放って「奴」を素通りしてしまう。

否、素通りではない。Wがシャフトの先端を見る。

そこにはあったはずの先端は無く、その先は「奴」の蛇の口内にあつた。

「な!?!」

「は、マズ……………フンッ!!!!」

「奴」が噛み砕いたそれを弾丸のように吐き出し、それがWを襲つた。

「来た……………行けるぞ翔太郎!!!!!!開翼!!!!」

「やっとかよ!!!!!!」

そこでついに翼人、時風が動き出す。

獅子天麟を盾のように構え、その弾丸からWを守る。

「射撃援護を頼む。いくぞコリア!!!!!!」

「任せろ!!」



《ルナ！トリガー！！》

蒔風が突っ込み、その背後からWルナトリガーが銃弾を放つ。

その銃弾はルナの特徴によってホーミング弾となり、蒔風を避けて飛んで行き、的確に「奴」に命中する。

「ぬっ……逃げやがって……」

その軌道では「奴」もすべての弾丸を追い切れず、放たれた弾丸の9割をくらってしまふ。

それでも蛇の口からは食った1割を放ち、蒔風がそれを弾き消していく。

そして蒔風が「奴」の腹部に獅子天麟を横薙ぎにぶった切ろうと振るう。

だが、それでも「奴」は引かない。

「奴」の上半身からワニの顎のようなモノが出てきて、蒔風を食い散らかそうとその牙を閉じる。

しかし

「グあああああッ!?!」

叫びをあげたのは「奴」だ。

蒔風は四本組み上げた風林火山を「奴」のその大きく開かれたワニの顎に向かって片手で二本、縦に突っ込んでいた。

それを噛もうとすれば当然、上顎と下顎を同時に貫かれ、もはやその口は使い物にならなくなる。

そしてその風林火山の内側に獅子天麟を通し、「奴」の腹部を切り裂いた。

「ゴブツ……バアアアアアアッ!?!?!」

「胃袋斬られたイーター……食っても喰ってもでてくる出てくる」

「ガブツ……デメエ` エアアアアアア!?!?!」

「こっちも腹貫かれてんだ。それくらい大目に見ろ」

その「奴」を時風が風林火山を掴んで蹴り飛ばし、ワニの顎を引き裂く。

そしてWと時風が互いに寄る。

そして肩にポン、と手を置いて時風が言った。

「さ、言うてやれ」

「おう………教えてやるうぜ、フィリップ！」

『ああ、何度でも言うてやるさ』

それは彼らの決め台詞。

この街を穢す犯罪者に、いつだって語られるその言葉。

ガイアメモリに溺れた彼らに、自らが犯した罪を自覚させるため

そしてその罪を忘れないために、何度でも、いくらでもいい放つ。

その意思に反応してか、エクストリームメモリが飛んで来て、ダブルドライブに装着、自動展開される!!!!

「『さあ（ガシューウ！）お前の罪を（エクストリーム！）……  
・数える！……！』」

その発言に、「奴」ではなく時風が答えた。

「あいつの罪の数？……WORLD LINKと同じ数じゃねえのか？」

『それはたくさんありそうだね』

「だったらその分ぶちのめす!!!!」

『ま、それで許されるわけもないけどね』

「たしかにwww」

「オレが罪なら……てめえらみんな罪人だあ!!!!!!」

「うつせたーこ。お前の願いは確かに順当さ。だがな、そこに誰かを殺すなんて項目があったら、それだけでアウトなんだよ！！！！い  
くぜ！！！！！！」

【KAMEN RIDER W】 - WORLD LINK - W  
EPON〜！！

その発動と共に、Wの基本の6メモリが空中に飛び出して、クルクルと回り出す。

ドンドンドンドン回転数を上げ、それが各色の球体にまで見えてきたところで、それが鳴り響いた。

《サイクロン！！》

《ジョーカー！！！！》

《ヒート！！》 《メタル！！！！》

《ルナ！！》

《トリガー！！！！》

そのメモリを中心に、人の形が成っていく。  
それは各メモリの色をしたW。  
しかも単色だ。

六色のライダーに、本家本元のWエクストリーム。

そして六体が一斉に駆け出し、「奴」に攻撃を仕掛けていった。

まず、ルナが腕を鞭のように伸ばして「奴」に巻きつかせて、動きを止める。

その「奴」にメタルがシャフトで殴り上げ、さらにトリガーが追撃の銃弾を放ってさらに上へと押し上げられる「奴」

上空高く上がった「奴」に、サイクロンの手にジョーカーとヒートが乗り、疾風の力を身に受けて、その「奴」にまで到達する。

そして「奴」に二人同時にアッパーをぶちかまし、さらなる上空へと突きあげる！！！！

「さ、追いついてぶちのめせ！！！！！！」



仮面ライダーWサイクロンジョーカーゴールドエクストリームが顕  
現する！……！！

翼によってさらに飛翔し、Wが次々とマキシマムドライブを溜めて  
いく……！！

《サイクロン！マキシマムドライブ！！》

《ジョーカー！マキシマムドライブ！！》

《ヒート！マキシマムドライブ！！》

《メタル！マキシマムドライブ！！》

《ルナ！マキシマムドライブ！！》

《トリガー！！マキシマムドライブ！！》

立て続けに腰のマキシマムスロットにメモリを挿入しては抜き放つ  
ていく。

そして最後に、「奴」のほんの少し上まで到達したダブルが、エク  
ストリームメモリを閉じ、開く……！！

《エクストリーム……！！マキシマムドライブ……！！》







「あんだだけ療養中に聞いといてまだあるのか!？」

「大丈夫か!左、フィリップ、時風!!!」

そこに照井と亜樹子が到着する。

「やったのか？」

「ああ、きっかりとな」

「そうか……よかった」

「そうだ、この街に来たんだ。名物の風都ラーメン、略して風麺、食いに行こうぜ!!!」

「そうだな……今回は時間もある。少しのんびりしていくか」

「時間ってどれくらいだい？」

「そうさね。大体二時間」

「だったら早く行こうぜ!!!!!」

こうして蒔風達が街に繰り出す。

この世界を出る頃には、蒔風は腹いっぱいだった。

「そろそろ時間だ」

「またな」

「会えるかどうかはわからないけどな。じゃあな、ハーフボイルド」

「ハードだ!!!」

「はっはっは。でもな、みんなを救うって想いは、実は結構ハードなんだぜ?」

「ん?・・・そうだな・・・そうだよ!!!オレはハードボイルドでいいじゃねーか!!!」

「お前はハーフだけどな」

「ああ！？」のちうじうじ……！」

「逃げろや逃げろ、と。じゃね〜」

「Gate Open……KAMEN RIDER W」

そうしてこの街から時風が去る。

今日も街にはいい風が吹く。

幸も不幸も、一緒に運んで。

.....

「あらん？また来るのね、翼人」

「ぬ？お主知っておるのか！？」

「知ってるわよ？彼とはお友達だからねん」

「ぬう……」

「あなたにとっては結構キツイかしら？」

「大丈夫だ。あ奴とは違うのだから？」

「そうね」

二人の漢女が話し合う

その国では今まさに出陣を迎えようとしていた。

なされたのは、予言。

銀白の翼が来ると言うもの。

一度来た世界。故にその予言はできたのだろう。

翼人、再び外史に舞い降りる。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

W　この街のWノこれで決まりだ（後書き）

熱く書けてるかな？どうか？

心配なのはエクストリームとトライアルへの強化変身シーン。

ああやって読むと何だかごたごたしてるけど、そのシーンを想像してもらえれば熱いはず！！！！！！

ちなみに今回、メモ帳のサイズで一位を更新しました！！！！

アリス「なのはA・Sの最終話を超えましたか」

はい

そして今回、照井がとにかく熱い。

どうしてこうなった。それはそれでいいんだけど。

ア「そういえばアルティメットドーパントはトライアルの力を取り込んで、どれくらい早くなっただんですか？」

マキシマムドライブ風に言えば、「8・8秒、それが絶望までのゴールだ」



ア「はや!!!!!!」

それを乗り越え振り切りました!!!!!!  
キヤー!!!!!!竜く!!!!!!ん!!!!!!

### 【仮面ライダーW】

構成：”ライクル” 75%  
”フォルス” 5%  
”LOND” 10%

最主要人物：左翔太郎

- WORLD LINK - } WEAPON } : 各メモリライダー召喚(仮面ライダージョーカーみたいな感じの)

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : Wを  
ゴールドエクストリームに。更に基本6メモリ&エクストリームマ  
キシマムドライブ重ね掛け

ア「最主要は左さんだけなんですね？」

どっちかと言えば彼でしょう。最主要是。もちろん、フィリップもそうなんですが、最主に限りなく近い主要という感じで。

なのはとフェイトみたいな？  
いや、これは違うか？

ア「そういえば平成ライダーはこれでやりきったみたいなこと言ってますでした？」

ええ、この場で言ってしまいましたよ。

オーズは出しません。

これは最初から決めていました。  
Wは執筆を始めてその間に終わるだろうと思ってましたけどね。

ア「オーズはなしっど……でも出したいですよね？」

そうですね〜〜

じゃあそろそろ。

ア「次回、蒔風、「真」の外史へ」

ではまた次回

乙女繚乱 三国志演義



場所は上空うん万キロメートル、雲の上。  
もはや落ちるしかない高度である。

「っおりゃー!!」

だがまあ彼にとっては問題ではない。  
地面が近付いてきたところで蒔風の背に銀白の翼が現れ、それが力強く羽ばたき、衝突を避ける。

バオオ!!ととんでもない風が周囲の砂を吹き飛ばす。  
着地したのは荒野のど真ん中。遠くには街……というか城が見えた。

城壁の中に街があるようだ。

だが着目すべきはそこではない。  
蒔風が目を見張ったのは街と自分の中間点。

そこに軍隊があった。  
というかあれは軍隊なのだろうか？

兵などおらず、見たところ武將しかいないようだ。  
軍が掲げる旗には「魏」「呉」「蜀」が立つ。

そして何人ががこつちに弓まで引いている始末。

「ええー？なんでなんで？確かここ一刀の世界だろ？」

呆然する蒔風だがちょうど頭に現状の情報が流れてきた。

「ん？ああ？マジかよ……まあしょうがないよな、再構築された外史だもんな」

蒔風が呟く。

そう、ここは再構築された外史の世界。

この世界の住人に、前の世界の記憶はない。

一刀も愛紗も、そして星も、前の世界の事は知らない。  
記憶を戻す方法はひとつ。

最重要人物と接触せよ。

「マジか……ってことはこの軍勢を抜けて一刀に会わなきゃならないのか？」

蒔風がうんざりしていると、軍の中から旗が上がり、開戦の銅鑼が打ち鳴らされた。

同時、弓が一斉に放たれ、何十もの矢が山なりに飛来してきた。

「つつ!? 喝アツ!!!」

蒔風が闘気を吹き出し、大声を出して大気を震わせる。

その振動に矢が空中で勢いを失って落ちる。

それを見て、軍の中から三人が飛び出してきた。

「ついに来たか……新キャラとかいるだろうな。楽しみだぜ！」

「いくよ！季衣！」

「おう！」

「蜀が魏延きえん！参るっ！！」

その三人は前の世界にもいた季衣、そして蒔風は初対面の、魏軍親衛隊の典韋てんゑい（真名・流琉）と、蜀の武将、魏延えん（真名・焰耶えんや）である。

「おお、重量級！いきなりくるなあ」

そう言いながら蒔風が力を借りる。  
蒔風の髪が伸び、黄色のメッシュが入って



ドゴン！

季衣が投げ放った巨大鉄球を時風が片手で受け止める。

そこに、身の丈ほどもある大金棒「鈍碎骨<sup>どんさいこつ</sup>」を共に、時風の頭上から落下してきた焰耶。

「よっしゃあ！！！！」

「へへ〜んだ！！ボク達の勝ちっ！！」

「わ、私なにもやってない……」

時風がいた場所はクレーターのようになり、周囲の地面がめくわれて針のように起き上がっていた。

そこから季衣が鉄球の先端を回収しようとして鎖を引っ張る。

しかし

「え？」

その鎖の先に鉄球は無く、土煙の中から電子音が聞こえてきた。

《ax foam》

「なに！？う、うわっ！？」

押しつぶした際そのまま鈍砕骨の上に乗っていた焰耶が、急に揺れた足場に驚く。

その下にいたのは、仮面ライダー電王アックスフォーム。  
左手で鈍砕骨ごとそれに乗る焰耶を持ち上げ、右手には季衣の鉄球を掴んでいた。

「なかなかやるやないけ。でもな、力だけの強さじゃあ、俺は泣かせられへんでえ！！！！！」

ドゴン！！！！と鈍砕骨を地面に叩きつけ、その上に乗る焰耶も同じく地面に倒れる。

その衝撃と、地面からの振動で焰耶の内臓が揺れ、その場から立ち上がれなくなってしまう焰耶。

そして両手で鉄球を担いで、それを季衣に投げつける蒔風。

とんでもない勢いで飛んで行ったそれを、季衣が真っ正面から受け止めようとする。が

「えいつ！！！！え？うわあああああああああああああ……」

だがその勢いの強さに、季衣の小さな体ごと揺っ攪われ、軍の後ろまで飛んでいってしまった。



「やはり貴様……ご主人さまを狙っているのだな……!!」

「ならばここを通すわけにはいかないわね。春蘭……!!」

「ハッ……!!」

そして軍から一気に武将が押し寄せてきた。

その人数、十。

愛紗を筆頭に春蘭が続き、さらにその後に見慣れぬ三人娘、忍者の  
ような風貌の少女と思春、最後に鈴々と少女、そして大きな何かを  
担いだ女性だ。

蒔風が変身を解いてそれに応じ、一気に駆けだす。

振るわれる愛紗の青龍偃月刀を右手で掴み、それを逸らして春蘭の  
大剣を防ぐ。

さらに後続から続く三人娘に対し、蒔風が瞬時に反応した。

一人目、于禁（うきん 真名・沙和）の双剣を左手刀で二本とも同時に砕き破壊。

そこから二人目が来る前に春蘭の腹部に蹴りを入れて後退させ、愛紗を偃月刀ごと放り投げる。

そして二人目、楽進（がくしん 真名・凧）の突きをかわしてその下袖と左襟を掴んで背負い投げで地面に叩きつける。

「沙和!!! 凧!!!!」

そして今さらながらに仲間の名を叫んだ三人目、李典（りてん 真名・真桜）が先端がドリルになっている槍「螺旋槍」を蒔風に突き出してくる。蒔風はそのドリルを横から掴むように握りとめ、ギャギャギャギャギャギャ!!!!とドリルの回転と蒔風の手で摩擦が起きる。

そこに愛紗と春蘭が再び蒔風の首めがけて薙いで来た。

だが蒔風はドリルを放り投げ、一瞬放してから後ろ蹴りでその武器がクロスしたところに足を突っ込む。

ガキツ、と互いに引つかかりあってその剣が止まり、蒔風が足を落としてその剣をまとめて踏みつけ、再びドリルの横つばらを先ほどと同じように掴み取った。

その間に鈴々がジャンプして時風の頭上から蛇矛を振りまわして襲いかかってくる。

それを確認し、時風が「フンッ!!」とドリルを掴む手に力を込め、ついにドリルの回転を止めた。

「え?お、うおおおおオオ!?!うひゃああああああああ!!  
!?!?!?!?!」

そうならば取っ手の方が回転を始めるのは必然。

そしてそれを掴んでいる真桜の身体も槍を軸に回転し、それを時風が空中の鈴々に投げつける。

回転している真桜と鈴々がぶつかって、絡み合って地面に落ちる。

「う、腕がからまったのだ!?!」

「ウプ……………」

真桜の意識の混濁もあって、ここで鈴々、真桜がリタイア。

そして足元の二本の武器を踏み砕き、片手ずつに愛紗と春蘭を掴んで投げ飛ばす。

## その瞬間

シュ……ジャジャカツ！！！！！！

空気を切り裂く音と共に、忍者チツクな少女、周泰（しゅうたい真名・みんめい明命）と、思春の暗殺者コンビが襲いかかる。

明命の日本刀風の長刀「魂切」と、思春の曲刀「りんいん鈴音」の斬撃をしゃがんでかわし、いつ放ったかもわからない速度での手刀で二人の後頭部を強打する。

その一撃に明命が倒れ、思春が転がってその衝撃から逃れる。だがなんとか避けたとはいえ、首に残るダメージは甚大で、とてもじゃないが戦闘はできない。

そう思考しているうちにぐらぐらと視界が揺れて思春も倒れた。

そして思春が倒れる事を知っていたのか、それよりも前に残った少



女、翠の従妹の馬岱ばたい（真名・蒲公英たんぽう）に向き合う。

その眼光に、蒔風にそんなつもりは毛頭ないのだがたんぽぽは「ヒイ！」と小さな悲鳴を上げて武器の片鎌槍「影閃えいせん」にしがみついてしまう。

「たんぽぽ！！気をしっかりせんか！！！！」（ドオン！！！！）

「なあッ！？」

そんなたんぽぽに激を飛ばしながら、十人で最後の女性、巖顔げんがん（真名・桔梗）が剣と弩弓が合体した様な形の己の武器「轟天砲」から杭を撃ち出し蒔風を狙う。

それに軽い悲鳴を上げて逃げる蒔風。

「ちょっと待て！！！！あれパイルバンカーだろ！絶対パイルバンカーだ！！！！！！」

「訳のわからん事を言うてない！！！！（ドオン！！！！）」

さらに轟天砲から放たれる杭に、蒔風が力を借りてそれに鎖を巻き

つける。

時風の背後に現れたのは拘束の天使・アブラクサス。

鎖がぐんぐん伸び、そして伸びきったところで思いつきり時風が引き戻し、それが桔梗とたんぽぽのいた場所に突き刺さって衝撃を起こす。

二人がその衝撃に吹き飛ばされて、時風の十人抜きが終わった。

その光景に驚愕するのは陣に残った武将や軍師達だ。  
立った今向かって行ったのは最高戦力ともいえる者たち。

それがあんな一瞬の動作であしらわれ、しかも撃破されてしまうなんて誰も考えてなかったのだ。

「は、はわわ……どうしよう」

「しゅ、朱里ちゃん……」

困惑し、慌てる蜀の軍師、朱里と鳳統ほうとう（真名・雛里ひなり）の二人の肩に、ポン、と手が置かれる。

「安心しな、あたし達で終わらせてやるさ」

「うちの速さについてきたもんはおらん。あっちゅーまや」

そう言って出てきたのは翠と霞。

その姿に時風が小さな汗をたらす。

「おいおいまさか………そういう事はっか覚えてんのか!？」

二人の武将が時風に向かう。

この二人こそ、全武将中最速を誇る二人。

「チッ、めんどくさい事になんなあおい(泣)!!!!」

時風が力を借り、その身に装着する。

最速の戦いが始まる。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

真・恋姫十無双 激戦、闘う者達 (後書き)

アリス「真恋姫ですね」

はい。

今回は萌将伝よろしくな感じですよ。

三国一体平和な時だよ。

ア「でも皆さん時風のこと忘れてるんですね」

まあ再構築された外史だからね。

一刀と時風が直接会えばどうにかなるけど。

観測者は……後に説明します。

無印もそうでしたが、真恋姫は更にキャラが増えて書ききれないキャラも出てくるかもしれませんね。

ア「まああんだけいねば……」

厳密に言えば麗羽さんや白蓮さん、南蛮の人達とかそこらへん。

ア「頑張ってくださいよ」

頑張ったら真恋姫の世界長くなるかも。

しかもそんなにネタが出てくるかが怪しいし。

ア「みなさん、この作者めんどいだけですよ」

ちよ!?!? 本音を言わないで!?!?

ア「シャレで言ったんですけど……」

………てへ

ア「ほつとこ。次回、さらなる激戦、最強VS最強!?!?」

ではまた次回

行くぜ 駆け抜けろ 覚悟を決めろ  
臆病な自分から抜け出して  
そして吹き飛ばせ 限界を魂燃やし走り抜け

真・恋姫†無双 ～超激戦、更に闘う者達～（前書き）

恋との戦闘時に聴いていたBGM

ニコニコ動画で「闘う者達・更に闘う者達を集めてみた」

よかったらどうぞ



真・恋姫†無双 超激戦、更に闘う者達

「力を借りんのも大変だぜ。変身！」

蒔風の手にガタツクゼクターが飛んできて、それをベルトに装着する。

《Henshin》

ウーーン……ガウン！

蒔風がガタツクマスクドフォームに変身し、両肩のバルカン砲を翠と霞にぶっ放す。

キュボボボボボボ！と次々に放たれたそれを、超高速移動法「風足」でかわし蒔風に向かう二人。

「キャストオフ！」

《Cast off Change Stag Beetle!》

迫る二人を視認し、砲撃しながらガタツクゼクターのホーンを反転させ、ライダーフォームへとキヤストオフする。

そしてそのままクロックアップし、時風も超高速の世界に突入する。

ガタツクの双剣、ダブルカリバーを肩から抜き、右で翠を、左で霞を相手取る。

「っ!？お、お前!？」

「これに着いて来るんか!？」

翠と霞が驚愕の声を上げる。

それはそうだ。こんな速度について来たものは、今までに誰一人としていなかったのだから。

そんな二人に時風がムカツ、として声を荒げた。

「誰が教えたと………思ってたんだい!!！」

ザキッ!!

鉄状に組み立てたダブルカリバーで霞の飛龍ひりゅうえんげつとう偃月刀を挟み、カリバーを地面に突き刺しその動きを奪う。

そこから翠の腹を掌底で突き飛ばし、ゼクターのホーンを戻してボタンを三回押す。

《1、2、3!》

そしてホーンを再び元に戻し、その技の名を叫ぶ。

「ライダーキック!」

《R i d e r K i c k ! ! 》

ドゴウ!!

時風の飛び回し蹴りが放たれる。

それを十字槍「銀閃」で受け止める翠だが、如何せん弾かれた直後だったのが悪かった。

体勢を崩した状態では防ぎきれず、体が弾き飛ばされる。

そしてカリバーから武器を引き抜こうと躍起になっている霞にデコピンがましていく蒔風。

当然霞は武器から手を離し、それを手で払って避けるがその隙に足を元を掃われて地面にすっ転んでしまい、変身を解いた蒔風が土惶で地面に拘束してしまう。

周りの人間は目の前の光景が信じられなかった。

数ある武将が尽く敗れ、更には最速を誇るあの二人ですらも、姿を現したと思ったらやられていたのだから。

そして蒔風がついに軍の中に走り込む。  
その場から後退する戦闘の出来ない軍師やトップの人間が下がらされ、戦える人間が蒔風に向かって来た。

宝剣「南海霸王」を呉の小霸王・孫策（真名・雪蓮<sup>しえれん</sup>）が、大鎌「絶」を華琳が振るう。

蒔風が左手で左腰にある「林」を抜いて雪蓮の攻撃を防ぎ、華琳の鎌を内側に踏み込んで避けた。

だが華琳は鎌をそこから引き、蒔風の後ろ首を狙う。

だが蒔風が空いた右肘で華琳の鎌を掴んでいる腕の肘の裏を打ち、カクリと曲げる。

当然鎌の狙いも逸れ、蒔風の後頭部には鎌の柄がコツンと当たっただけだ。

そして蒔風が華琳に追撃をかけようとした瞬間、目標の身体が消えた。

瞬間的に危機を察知した雪蓮が華琳の襟首を掴んで後ろに引っ張ったからだ。

蒔風が上体をお辞儀して後ろの鎌を避け、離れた二人を見ながら両手を地面にバンツ！と当てる。

すると二人の周囲の地面が板状に起き上がり、囲って閉じ込めてしまった。

そして蒔風が一刀がいるであろう方向に向き直り、足を止める。

「ふ……まさかここまで来るとは思わなかったぞ……  
だが悪いが主殿には近づけません」

「……超雲、か」

「その通り！！北方常山の超雲子龍！！いざ尋常にあダツ！？」

名乗りを派手に上げる超雲・・・星に時風が容赦なくデコピンを弾く。

額を押さえて涙目になりながらも威勢の下がらない星が時風に叫び続ける。

「ここは通さんとアテツ！おいウツツ！？ちょイタツ！！待ッアダツ！」

「うん、楽しい。お前に関しちゃあの感情忘れていたらなおよろしい」

ズンズンと歩を進めながら時風が星にデコピンしていく。  
星はそれに一回一回のけ反りながら後退させられ、ついに小石に躓いて転んでしまう。

その脚を時風が掴み、ジャイアントスウィングの要領でブン回して投げっぱなし。

そして障害は無くなった。



方天画戟を地に突き立てて、そこに在るのは天下布武。  
三国において最強となし、立ち並ぶものはすでない。

頂点は、かけ離れているからこそ頂点なのだと言ふ事がよくわかる。

すべての者を抜き去って、最強の座にいる武將。

その名は呂布。字は奉先。真名は恋。

三国無双の最強が、ついにその武を振るいに来た。

「前に来た時はなんやかんやで戦えなかったからなあ……………」  
行くぞ」

「……………」



蒔風が獅子天麟を中段にを構え、恋も下段に方天画戟を構える。

まず、その光景にも皆が驚く。

恋は基本、構えない。肩に乗せて、攻撃に応じて迎え撃つだけだ。

だが、その恋が構えた。

気付けば皆二人から離れていた。

近づけば、巻き添えを食らい、最悪命を落とすかもしれない。





そして一瞬の攻防が展開される。

恋と蒔風が同時に弾き、恋の方が早く薙ぐ。

それを蒔風が受け止め、上方に向かって弾かれる。

横回転にグルングルンと回転して蒔風が、その回転の勢いを反転させて逆回転で地面に落ち、その勢いで地面に獅子天麟を叩きつけた。それを後退ジャンプでかわす恋。恋がさっきまでいたところには一筋の伸びた斬撃の跡があり、そこがチリチリと燃え上がっていた。

それを追ってジャンプする蒔風と、空中で迎え撃つ恋。

まるで浮いているかのように二人が宙で攻防を繰り返す。

ガンガンガンガン！！！！ギイン！！！！ギャギャツ！！！！ガアン！！！！  
……ゴツ、ドオン！！！！

そして数合の打ち合いの後、弾かれて岩場に激突したのは蒔風だ。ガラガラと崩れる岩場の中の蒔風の目の前に、恋が飛びこんできて

さらなる一撃をぶち込む。

それを時風が側転でかわし、割れた岩場の壁を左右交互にジャンプして上がっていく。

激突した岩場は高さがかかなりあり、十五メートルほどあった。

一番上の広さは体育館ほどもある。

その一部が割れた程度ではビクともしない。

そしてその上に乗り上げ。あとから追って飛んできた恋の振り降ろしを転がって避けてしゃがんだ状態で即座に突き出す。

それが恋の腹部をかすり、浅く切りつける。

だがそこから時風が追撃をかけるよりも早く、恋の一撃に岩場が崩れる。

ガラガラと崩れる岩場に二人が吞まれ、だがそれでも二人は落ちながら打ち合っていた。

そして落下位置が中腹に至ったところで、その岩場が爆発した。

二人の振るう武器の威力がついに頂点に達し、それが二人と共に落ちる岩石を吹き飛ばしたのだ。

倒された者、目を覚ました者、その戦いを見守る者がその衝撃波と砂嵐に顔を覆う。

だがその間も剣撃の音は止まない。

その一撃一撃の衝撃に足場になつていゝ岩場だつた瓦礫がどんどん吹き飛ばされ、周囲の地面、否、大地に斬撃が切り刻まれていく。その範囲はだんだんと広がりながら濃くなつていき、二人の中心部などもうすでに斬撃の跡がないのはどこなのだろうかという域にまで至つていゝ。

そして

ドオオオオオウウウウウウウウ!!!!!!!!!

二人が一気に距離を開き、その周囲に溜まつていた斬激も一気に弾き出されて周囲二十メートルの物を次々と切り刻み始めた。陣形成のための布、旗、竹などの柱だけでなく、積み上げられた石、転がる武器、そして鋼の盾までもが切断されて見るも無残な姿とな

っっていく。

蒔風と恋の身体には無数の切り傷ができており、しかしその眼は死んではおらず、息もまだまだ切れていない。

この化け物はいつになったら止まるのか。  
皆がそう思った瞬間、二人は再びぶつかり合う。

蒔風が獅子天麟を恋に槍のように投げ、それを恋が空中で身を捻ってかわし、蒔風に突進する。

蒔風は握るは風林火山。「風林」「火山」にそれぞれの柄のケツの部分を繋ぎ合わされ、一対の剣として存在するその刃は離れた敵ですら切り刻む。

蒔風が両手のそれをステッキのように振り回し、恋に向かって斬撃を飛ばす。

それをすべて紙一重でかわしながら恋が蒔風の腹部に向かって方天画戟を突きこむ。

その攻撃を回転で避け、恋の腹部を蹴って再び距離をとる蒔風。

そして切演武を始める。

春

恋の周囲を斬撃が回り、それが集束する。  
それを一閃で掻き消し、時風に向かう恋。

夏

膨大な量の斬撃が津波の形をして襲いかかるが、それを恋が足に力を込め、軽快に飛び越えてかわしてしまう。

秋

斬撃の砲撃「秋風」を時風が空中の恋にぶつ放す。

そこでついに恋が反撃する。

恋も同様に方天画戟を振りかぶり、時風の物と同様の斬撃砲を放つた。

二つの膨大な斬撃がぶつかって、押し合うこともなく一気に弾け飛んぶ。

二人は自身にまで飛んでくる斬撃を武器で弾くが、そのあまりの量について武器を落としてしまう。



蒔風がさらに武器を出そうとするが、それを出そうとした瞬間、恋の拳が蒔風の顔を捉える。

結局武器を出せず、蒔風がその拳を上受けで受け、掴み捻った。

だが恋はそれに対し身体ごと回転して回避し、その回転で蒔風の顎に蹴りをぶちかました。

それを見た蒔風がとっさに恋の腕を離して蹴りを仰け反って回避、上体を戻した勢いで腹部に拳を叩き込む。

恋は蒔風のその拳を反対の足の裏で受け、そしてそのまま吹っ飛ばされた。

地面が一直線に抉れ、恋の身体が地面に跳ねて空中で一回転、そして着地する。

蒔風、恋共に衝撃で体中軽い怪我をしていたし、頬は煤コケている。

だがそれでも口元はよく見ないとわからないほどに笑っていた。

周囲の大地には抉れた跡、斬られた跡、潰れた跡が残っており、と

てもじゃないがこれがたった二人の人間の戦闘によるものだと、  
到底思えないほどの被害。  
だからと言って大勢の人間が行った戦闘でもこうはならない。

それは化け物。

人を越えた存在と言ってもいいほどの、言いかえれば、武神。

その域に達した者による戦闘の跡だと言って、何とか説得できるよ  
うな物だった。

周囲の地形を丸々変更させた二人が、ジリジリと互いの距離を狭め  
る。

そして蒔風が走り出した。

だがその方向は恋ではなく、離れて避難していた北郷一刀その人  
にである。

恋がとつさに駆け出すが、蒔風の方が早い。

周囲にいた近接戦闘のできない弓の武将三人の矢をかわして一瞬の  
うちに気絶させ、軍師をかき分け、ポワポワした少女と見慣れた褐色  
肌の少女、蓮華を抜き去り、一刀の身体をひつつかんでその場か  
ら走り去ってジャンプし、先ほどの岩場と同じくらいの岩場に着地  
して一刀を下ろす。

「お前一体何者だ……オレの仲間を傷付けてよお……!!……!!……覚悟はできてんのか!?!……この……この……やろ……う……」

最初の方は敵意をこめて、思いつきり叫び散らした一刀の声だが、だんだんと小さくなり、目が開かれる。

そしてああ………と言った感じにしゃがみこんでしまう。

OTLである。

「思い出してきたか?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「思い出してきたか？」

「思い出したよッ！！あー畜生！！！！」

蒔風がニヤリと笑って一刀の手を取って握手を交わす。

「久しぶり。こんなんでも悪かったな」

「ホントだよ。事情はこっちにも来てるから大丈夫だ」

耳をすませると地上の方であーーーーー！！！！！！！！と  
いう声が聞こえてきた。

「どうやらあっちの方も事情を飲み込んだようだな」

「みただいな」

「じゃ、新しい子を紹介してくれ。あと、疲れた」

「おっけ。うちにはいい医者があるんだ。にしてもまた「奴」が？」

「そうだ。すまねえな。あと、なんでいきなり軍で待ち構えていたのか、教えてもらっぞ?」

「城に帰ってからな」

二人の青年が崖の上から下りてくる。  
全武将が彼らを迎える。

こうしてやっと、この世界での第一歩が踏み出された。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

真・恋姫†無双 超激戦、更に闘う者達 (後書き)

アリス「やっと終わりましたか」

やっとです。

自分としては恋との戦闘を激しくできたかな？というところでした。

ア「あれ聞きながらならそりゃあもなります」

戦闘シーンは完璧にFF7ACでしたよ。

燃え過ぎてどうかなりそうだった。

ア「次回、戦い終わって」

ではまた次回



誇りを笑い飛ばされて 頭打たれて血を見つめ  
苦しみ噛み締める前に 上を向いて足を踏み出して行け  
強さが欲しいなら その手で掴み取れ

真・恋姫十無双　くそして休息へく

玉座の間

そこに全員が集まっており、城の名医、華陀による治療を受けていた。

「まったく………舜殿も舜殿だ！最初からそうだと言ってくれれば………」

「愛紗ちゃん、知り合いなんだっけ？前のと違ってどんなのだったの？」

「そういえば桃香おねーちゃんはいなかったのだ」

大広間であるそこには武将たちが座り込み、蒔風のことや前の出来事を話している。

初対面の人も、蒔風や前の出来事に関して簡単には頭に情報が流れることが出来たが、それでも実際に聞かないとわからないのだから。

「舜さん、あなたが来たという事はまた……」

身体の切り傷を手当している時風に、朱里を筆頭に何名かの軍師がやって来た。

「おう、朱里！……でいいよな？」

「はい、真名でいいですよ。それで……」

朱里の聞かんとすることは時風も分かっていた。

「奴」の事である。

「そう、また「奴」がきた。ごめんな」

「い、いえいえいえ！こちらとしてはとても助かりましゅ！」

と、時風が朱里の後ろに隠れる少女を見つける。

手をヒラヒラと振ってやると、オズオズと出て来た。

「あ、あのう……はじめてまして、鳳統です……真名は」

「真名まで預けんのか？いきなりの相手に？」

「愛紗さんや朱里ちゃんが預けていますし、前の時の話しを聞くかぎり、あなたには構わないかな、と……」

「それは光栄なことだ。預かせてもらおう。で？真名は？」

「雛里です」

「ひなちゃんね、サンキュ！ああ、あとさ、他の人も紹介してくない？」

「では、案内しま「あいや待たれい！」しよってえ？」

朱里の申し出を遮ってやって来たのは星さんである。  
額には×の字に白い布が小さく貼られている。

「その案内私が「朱里、行こう」待ってくだされっ!？」

ガシィ、と蒔風のズボンの裾を握りしめ、星がズルズルと蒔風を引き止める。

「やっと会えたのですぞ!？さあ、愛の囁きを!！」

「友人として大好きだ」

「ふふっ、この超子龍には「大好きだ」しか聞こえない!!」

「……………はあ」

蒔風が諦めたようにため息を吐き出す。

そこに一刀も合流して、四人でみんなの間を廻って行った。

その間に新たな仲間との真名交換も終わらせ、ついでに今の状況も聞くことにした蒔風である。

この外史では魏、呉、蜀による三国が天下を取ろうと争い、北郷一  
刀というイレギュラーによってまさかの三国一致。  
今は平和な時を過ごしているのだそうだ。

「つまり大きな戦はないんだな？」

「そうだな。今は平和そのものだけ？にしても驚いたよ」

「なにが？」

「いや、星にね。大体ここの武将は、その……」

「お前に好意を持っているな。このクサレハーレム野郎」

「うるせえ。だけど、星だけは違ったんだ。「主の事は主として好きだが、女としては違います」って言うてな」

「……………」

「なあ蒔風、本当になんとも思っていないのか？」

一刀の言葉に、蒔風がうつむく。

そして、朱里と話す星の方を見ながら、蒔風が言った。

「思っていない事なんかあるか。こうやってオレにそんな感情をもっているだけでも、俺は彼女に仇で返してるんだ。申しわけなくtesyようがねえよ」

「そっちかよ……………」

「そつち以外にあるか」

そんなこんなで全員との紹介が終わり、時風が最後の疑問を聞いた。

「なあ、なんでオレがあそこにいるって知ってたんだ？あと、なんで攻撃してきた？」

その質問に、一刀があはは……と笑いながら答えた。

「オレがこの世界にやってくる事を予言をした占い師、管輅かんろがさ、予言したらしいんだよ」

「なんていうふうに？」

「それは私たちが」

「説明するぞい……！」

ザシッ！！とその場に現れたのは一人の筋肉ムキムキの変態、貂蝉と卑弥呼である。

「おお貂蟬！！と、そちらさんは？」

蒔風が初対面の卑弥呼を見て、名前を聞いた。

「お初にお目にかかります。我が名は卑弥呼。すでに身を引いた元観測者でございます」

「ってことは貂蟬の先輩か」

「そして、前にお話しした「赤銅の翼人」での戦いの唯一の生存者よ」

「マジか」

「あやつはとんでもない翼人だった……だがお主は違うのだろっ？」

「おっけおっけ、大丈夫だよ。オレはそんなことしない」

「ならいいのだ。がっはっはっは」

と、そこで一旦話題が終わり、蒔風が最初の疑問に関して聞いた。

「ふむ、街ゆく男にふと漏らしたそうだ。「銀白の翼、災いと共に



来たる」とな

「それで舜ちゃんが来たもんだから、そりゃみんな慌てるわよねえ？ 全く、管輅ちゃんったらテキストな予言しちやって……」

「知ってんのか？」

「そりゃもう、彼女もあたし達と同じく、観測者だもの。ま、彼女の場合、外史での道標をするのが役割だけどねん」

「その人……結構いい加減だな」

「そうね。そのせいであれだけの戦闘が行われてるんですものね」

「その話を聞いた男ってのは誰だ？」

「調べてみるか？」

「お願い」

蒔風が一刀に頼み、調査してもらうつことにした。

数十分後

「と、言うわけで見つかりました」

「早あ!？」

一刀が蒔風に声をかけ、それに驚く蒔風。  
なんでもその男、街中で言いふらしていたのだそうだ。

「で?どこに?」

「見つけたのは翠なんだ。連れてきてー!ー!ー!」

「おう!ー!舜、このトントン拍子な男が予言を聞いたって奴だ。おい!私に話したみたいだに、トントン拍子に答えろ!」

「街歩いてて声掛けられて予言聞いた」

「トントン拍子だ……」

「ってかはしよりすぎでしょ。情報はそれだけ？管輅はどこに行っ  
たとか」

「ん？さあ？おい、もっとトントン拍子な感じで答える！」

「予言言ったらどっか行っちゃいました」

「まさにトントン拍子だ」

「どんな感じの人だった？」

「おい、どんな感じか、絶好調にトントン拍子に答える！」

「まあ綺麗、女、とりあえず目に止まる。オレも帰りますね」

「さすがにトントン拍子過ぎるだろうがあ!!!!!!」

エキサイティングした翠が男の胸ぐらをつかんでグラグラさせている。

蒔風がその翠を男から引き放し、男を返してあげた。

「まったく……どうしようか」

「もういいさ。見つからないならそれで」

そうして蒔風が一刀と城の中を歩きだす。

途中に会うみんなは蒔風にあれからどうしたのかという話を聞こうと引き留める。  
そのたびに足を止め、話してあげている蒔風もだんだんと疲れてきたようだ。

「一乃あゝゝ。オレの部屋どこ？もう休みたアい……………」

「だよなあ。今日は凄い戦いだったもんな。うん、部屋に案内するよ。「奴」はまだ来ないんだろ？」

「来ないね。明後日の昼くらいかな？」

「なら安心だな。もう遅いし、休んどけ」

「サンキュー……………ふああああ……………」

時風が大あくびをして部屋に向かう。  
そして傷ついた体をしっかりと休めた。

t o b e c o n t i n u e d



真・恋姫†無双　くそして休息へく（後書き）

アリス「やっと休めますね」

それはもう

次回はすっごく日常パート

ア「卑弥呼さんがあの戦いの生き残りだったとは」

あの人はそうである、という設定をつけさせてもらいました。  
パねえな卑弥呼。

ア「次回、休みの日」

ではまた次回

幾千の苦しみ　幾万の絶望に身を焦がしながら  
痛みを振り払い　この願い貫いてきた

真・恋姫十無双 くあいだのきゅじつ

蒔風がこの世界に来て二日目。

朝食の席でその話は持ち上がった。

「遊びに行く？」

「そ。いやあ、現代の物をいろいろ話したらさ、実現しちゃうだけの技術があつてさ！結構建てちゃったんだよね！」

「一刀の話では彼の発言によって、発明好きの真桜が先頭に立って様々なものを再現してしまったのだ。」

「なにを作ったんだ？」

「まずプールだな。アミューズメントパークみたいな遊ぶプール」

それから・・・と指折って一刀が上げたのは競馬場、コーヒーカップ、ジェットコースターなどなど。



ただ、観覧車などの巨大なものもなかった。

「いや、それでも十二分にスゲエよ」

「ウチの発明やで！すごくないモンなんか作るかい！」

と言うは当の本人、真桜だ。

ちなみに現在朝食をとっているのは蒔風、一刀、翠、紫苑と娘の璃々、華琳とその（蒔風にとって）新顔軍師の程ていく？（真名・風ふう）と郭嘉くわ（真名・稟）、真桜、沙和、凧、小蓮、明命、そして恋だ。

「え〜〜〜！？一刀遊びに行くの？じゃあシャオも行く！」

「じゃ、小蓮様！これから午前のお勉強ですよ！？」

「勉強なんてつまないじゃい。それより一刀と遊んだ方が楽しいもん」

自分も行く和大いに乗り気な呉の王家三姉妹の末っ子と、オドオドと止めに入る明命。

しかし明命は説得しきれないようで、小蓮が味方を増やそうとして

「ね？翠も勉強は嫌でしょ！？」

翠に矛先を向けた。

「うえ！？あ、あたし！？」

「そ、翠だって勉強は嫌いでしょ？遊ぶ方がいいわよね？」

その発言にうろろんと腕組んで唸ってから、翠がこう答えた。

「確かに勉強は大変だけどさ、知つといた方がいいことはたくさんあるもんだ。だから勉強したくないっつーのは嘘になるけど、しな  
いってのは賛同できないなあ」

その発言に小蓮が信じられないような声をあげていった。

「翠って脳筋のくせに頭良さそうなこと言ってる……！」

「え？はあああああ！？あ、あたしは脳筋じゃないッ！！！」

「翠さんは脳筋に入ると思うの」

「そつやな、前ゴツツしごかれたしな」

一刀の親衛隊部隊長の三人のうち沙和と真桜がそれに反論し、そんな中、凧だけが反対意見を言った。

「す、翠殿はただ単に他のものと比べ一直線と言っかなんというか・  
・・・」

「凧、それフォローとしては微妙」

「そうだね〜。確かに翠は脳筋の部類に入るけど、そこまでひどい脳筋じゃないね。考える脳筋だ」

「なんだよそれえ！？」

そこで長机を挟んで小蓮の右前に座る華琳が頬を付いて言った。

「あなた……今日の午前のお勉強の先生を前によくもまああんなこと言えたわね？」

「え？」

「あ」

視線が一斉に華琳に向く。

何を隠そう今日のお勉強の講師はこの曹孟徳なのだ。

「いいわ。今日は勉強はやめましょう」

「やった！」でもそのかわり「え？」

「欲しい自由は苦勞モして得るということを教えてあげましょう」

「え？あれ？」

華琳が戦闘服に着替える。

気付くと小蓮も明命によって武器を手に握っていた。

「え？ちよつと明命？」

「小蓮様………頑張ってくださいね！」

「なにそのキツパリとした笑顔ツ！？勉強も武芸も嫌アーーーーー  
|！|！|！」

華琳がものすごくいい笑顔で小蓮を追い回しはじめ、そのまま出て行ってしまった。

「おお、ナイチチ、ナイチチを追い回すの凶」

「舜………それ本人の前で言うなよ？」

「え~~~~~？なにそれつまんな~~~~い） 3（」

蒔風がニヤニヤとしながら食器を片付け、遊びに行くなら、と話を切り出す。

「他にも誰か誘おうぜ。誰がいる？」

「とりあえず」「とりあえずご主人様は執務がありますよね？」「そんな幻聴は聞こえないなあ。さあ行こう蒔風」

「逃がしませんッ！！！！」

ではお教えしよう。

一刀の台詞にかぶせてきたのは愛紗さんです。

はい、もう簡単には逃げられません。

「前回の事を参考に、今回は絶対に逃げられない布陣を組みました・  
・・・もう逃がしませんよ！！！！！」

3381

ダダダダダダと走る抜ける蒔風と一刀。

愛紗は布陣を組んだと言うが、正直蒔風がいれば問題ではなかった。

「よくわからんがここは通さん!!!! 蒔風には先日の決着もだ!!!」

まだ武器は直ってないのか、素手で向かってきた春蘭を、蒔風が刀を庇うように前に出て、先に行かせる。

そして

「ぐにーーーーん」

「え?バ!!それやめッ!?!」

「バチーン」

バツツ!!!!!!

「アツダアあああああああ!!!!!!」

春蘭の左の眼帯を掴んで伸ばし、それを離した。  
ゴムパッチンのような感じになった春蘭が、地面をのた打ち回って居なくなった。

「お前ひでえな」

「正当防衛」(シレッ)

## 第二関門・桃香

「え、えつと・・・ご主人様、お仕事してくださいさ～～い!!!」  
「！」

如何にも天然さんな声を出すのは蜀王、劉備(真名・桃香)である。  
だがその佇まいはどう見ても隙だらけである。

「又ウっ!?次はポワポワ系でなごませる作戦だな!?」

「これなら突破は楽だな!!!」

「ああ!!!楽勝だ!!!」

「確かにそうだけど、ハッキリ言われると傷つくよ!?ご主人様だ  
つて同じようなものじゃないですか!!!」



そう言ってる間に一刀と蒔風が桃香を過ぎ去っていく。

### 第三関門・恋

「……………」

「恋…!遊びに行こうぜ…!」

「(フルフル)愛紗がここ止めるって」

「じゃあ言い換えよう…………遊びに行つて飯食おうぜ!?!好き  
なだけ!」

「行く」

恋が仲間になった!!!!!!

### 第四関門・季衣・流琉

「にいちゃん！……！」

「ここは通しません！……！」

「魏のちびっこズか！……！！！」

「ちびって言うなー……！！！！！！！」

「ごめんなさつグボツ！？」

蒔風が二人のパンチを腹部に食らってる間に一刀と恋が走る抜ける。後から蒔風が腹を押さえながら追いついてきた。

「二人は？」

「………女の子を泣かせてしまった」

「おみやげかってこような」

「うん」

第五関門・愛紗

「ぬぐー……むがむがむがあ……！」

グルグル巻きになつてる。  
簀巻きの愛紗の脇で立っているのは

「正義の華蝶仮面さんじょ」「さあ行くうぜ……！」「ちよっとまっ  
たあ……！」

華蝶仮面さん改め星が仲間になつた……！

「ぶはあ……おい待て……」  
「……！」



「マズ……」

魏の三人娘、沙和、真桜、凧だった。

見事に遊んでいる。

と言つか警邏の仕事サボってる。

「まあ待てお嬢さんたち。実は我々も愛紗から逃げてここまで来たのだ」

「だからここはお互いさまってことで」

蒔風と一刀の言葉にホッと胸をなでおろし、そして遊び続行する三人。

恋はと言つと蒔風からお金をもらってご飯コーナーに向かって行つたばかりだ。

星は蒔風の方へと走ってきて流れるプールにソオイ！！されて何処かへと流されていってしまった。

「にしても再現率高すぎんだろこ」

「三国の技術は世界——イイイイイイイイ——！！！」

「まさにだなおい」

ここには普通の物からさっき言ったような流れるプールを始め、ウォーターライダー、波の出るプール、温水プールまであるのだからたいしたものである。

そこで時風が遊びに遊び、体力をいい感じに消耗してきたところで、昼食となる。

恋を見つけ、そこを中心に集まる一同。

もっしゅもっしゅとご飯を食べる恋になごみながら、昼食をとって次どこに行こうかと話し合う一同。

そうして最近できたばかりの、ところに行くことになった。

「最近できたところ？何作ったんだ？」

「聞いて驚くなよ？それは……遊園地だ……！」

「そんなものまで……あきれるやら感心するやらオレはど  
うすればいいんだよ」

「沙和も一回行ったけど、あそこすごい……！沢山アトラクシ  
ョンがあつて最高の……！」

「そりゃそうや……！うちの技術ぎよーさん使てるからな……！面白  
くないわけないやん！」

「前に行ったときとか大変だったもんな。鈴々とかが壊しそうにな  
ってね」

「あれは主の説明不足が原因だったのでは？その後の説明を受けた  
らちゃんと遊んでましたぞ？」

「遊び方さえ間違わなければとれも楽しいところでしたね。一つを除いて」

凧の顔が暗くなり、それを沙和と真桜がからかう様に言った。

「凧、あん時大変やったもんな〜〜〜」

「そうなの、キヤーキヤー騒いじやって可愛かったの!!!」

「お、お前達!!!そんなこと言うな!!!そんなもの、誰だつて叫ぶ!!!」

「何がそんなにだったの?おせーておせーて〜〜〜」

「い、いえ、時風殿が気にすることでは・・・」

「知りたいですかあ?そうですか、では教えちゃうの!!!」

必死に隠そうとする凧だが、沙和と真桜がフッフッフと笑っている。あ、これバラされるな。



「えっとな？ 凧が言っとんのは、おまけ屋敷ー、やったっけ？」

「違うのー。お化け屋敷なの！ー！」

「う、ううう……」

「う？ オバケヤシキトナ？」

「知らない訳ないよな？」

「知ってるよ。知ってるさ……あんの？ お化け屋敷」

「おう、作ったぜ。オレの過去言ったオバケヤシキとか、思いついた諸々を詰め込んだ最高のお化け屋敷だ」

「へ、へーそうなんだ。でも面白いのほかにあるだろ？」

「あるさ。でもこれは外したくないな」

「そうか……いや、いく、行くさ。楽しみだねえ！ー！ーあっは



一刀プロデュースの遊園地は現代のものとなんら遜色のない、見事なものである。

その見事さに、時風がさすがに言った。

「お前これやり過ぎだ」

「正直オレもここまで本気なものが出るとは思ってたんだよな」

そついいながら全員が歩いて廻って、人影を見てバツ!!と物影に隠れた。

どうした?と言った視線を向ける一刀に、時風が小声で話す。

「全員気をつける。愛紗たちが来てる」

「おお!?!」

そう、確かに遊園地内には愛紗を始め何名かがおり、一刀を捜索していた。

「これはまずい……遊んでるのを見つかったらアトラクションから出た瞬間取り押さえられるぞ」

冷や汗をかく一刀や三人娘だが星と蒔風はいたってのほほんとした顔をしている。

「普通に遊ぼうぜ？まずコーヒーカップにでも行こっか」

「これはダブルデートというものですな？」

「だれに教わった、んな言葉」

「無論、主」

グリグリと一刀の頭を捻りながら一同を引っ張り、蒔風がコーヒーカップに向かい、乗り込んだ。

ここは乗り込んで遊ぶまで何も障害などなく、普通に遊んだ。

だが

「柵の近くに朱里と詠がいるな」

「見つかったら愛紗はんを呼ばれてまう！」

コーヒーカップの柵の辺りに朱里と詠がうろついていた。  
愛紗の差し金だろう。  
まだ見つかってないようだがこのままでは乗っているのを発見されてしまう。

「あ、あの、隊長、もう素直に帰った方が……」

凧が部隊では直接の上司の一刀にそう提案するが、ガタガタと震えながら一刀が答えた。

「無理無理無理無理無理無理無理無理……」

「よっぽど愛紗さんが恐ろしいようなの……」

「いや、そら恐ろしいやろ」

「こうなったら……やるぞ、星」

「お？わかりました。いきましようぞー!」

時風と星がニヤリと笑ってコーヒーカップの真ん中の円盤を掴む。

その笑顔に寒気が走った一刀たちがガシッ!とカップのふちを握りしめた。

「そお!」「いやっ!」

グリンッ!!

そして二人が勢い良く円盤を回す。

それに応じてカップの回転も上がっていく。

休みなく全力で回しつづける二人。

その回転ですでに周囲の景色は見えておらず、全員の身体が遠心力に引っ張られ、おもっくそのけ反っていた。



「朱里と詠は!?!」

「この状況ではわかりませぬなあ!?!」

「あっはっはっ!?!そいつあ一本、取られたな」

「あーはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!?!?!」

「お前らどっか飛んでっちまえ!?!」

それから5分はそれが止まらず、時間が来て機能が止まり、降りる頃には四人は完全にグロッキーだった。

「大丈夫かー!?!」

「は、話しかけんといて……………ウプ」

「気持ち悪いのお……………」

「これは……………」

「ああたまたまがまだグラグラする……………うおえ」



「だらし無いにや〜〜〜次何行く？」

「そうですね。私としては……………」

蒔風と星が次に向かう場所を相談して、一刀がちよつと待って……  
・とヨロヨロしているところに、ついにそれは来た。

「見つけましたよご主人様！！もう逃がしません！！！！」

「…………ゲエツ！？関羽っ！？…………」

そう、そこには怒り心頭の愛紗と、彼女がひきつれる蜀の面々だった。

「なぜバレタ！？」

「「「「ひーかつぷ」であんだけ騒いでいれば嫌でも目につきます……………」

「おい星!! 時風!!」

「メンゴメンゴ」

「こいつらもう駄目だ……逃げろ!!」

「さ、沙和と真桜がまだ……」

「じゅ〜〜〜〜」

「じゅぶお……」

「」「」  
「困だな」「」

地面にまだ倒れている沙和と真桜を見た時風、一刀、星がシレッ、と見捨てた。

それはもう見事に。国語辞典の「見捨てる」の欄に載せたいくらい見捨てた。

「逃げる!!!」

「こっちだ蒔風!!」

「おう!!!」

二人を見捨て、一刀、凧、蒔風、星がその場から逃げ出す。

一刀の案内は的確で、さすがはこの提案者と言ったところである。

そして逃げ込んだ先は

お化け屋敷である。

「ちよ、ここ！？」

「ここなら愛紗も苦手で入ってこない！！！！」

「出口抑えられたら……」

「大丈夫だ。半分も行けば途中に出られる場所があるのだよ」

「星、その半分ってどのくらいだ？」

「そうですね、ざっと……」

そこで星が言った言葉は現代にして百メートルほど。  
かなり長い。

「……………がしませんよ！！！！」

そこで愛紗の怒声が聞こえてくる。  
気まずい顔をした時風の襟首を掴んで、一刀が引きずっていく。

じたばたする時風だが、三人が掴むので抗えず、そのまま引きずりこまれてしまった。



「ちょー!？」

「そうだなあ~~~~そうするか!!(ニヤニヤ)」

「あ、そういうことですか、では二人ずつですね」

ニヤニヤして星と蒔風を見る一刃に何かを察した凧が、さっさと先に進んでしまった。

蒔風が何かを言う前に扉が閉まってしまい、がっくりとうなだれる蒔風。

「さて楽しみましょうぞ!!舜!!!!」

「あのなあ、普通に遊ぶ分にはお前は最高だよ?気も合っし、同じ変人だし」

「ふむ、そこは褒め言葉として取っておきましょう」

「だけどな、オレに恋愛感情は向けないでくれたの!!!!なにも返せんのだから」

「返していただく必要などないですよ?そばにいてくれればそれで十分!!!!」

「オレがだめなの。オレはお前を優先しないぞ？お前一人に感情が向くことなんてないんだ。そんなもん、恋愛なんざ言えるか」

「だったら自覚させて見せます」

「そのためにはオレの中の最大の異端をどうにかするんだな」

そんなことを話していると、扉が開く。  
順番が回ってきたようだ。

「では、とりあえず今は楽しみましょうー！ー！ー！」

「そうだな。遊ぶか………うう………」

時風と星が中に踏み込む。  
くらい暗い空間へと

.....







か

「自由人ですけどね」

「翠や霞に「風足」を教えたのも時風だしな。いや本当に我らが束になってもかなわないとは、さすが世界最強と豪語することはある」

「え？世界最強？」

愛紗の言葉に桃香が首をかしげる。  
その桃香にああ、と前置きして、翠が答えた。

「時風の口癖なんだよ。「オレは世界最強だ！！」ってな」

「あの自信はあれだけの実力の裏付けなのだろうな。敵でなくて本当によかったと思う」

うんうんとうなづく一同。

そこで桃香がボソツ、と呟いた。

「本当にそうなのかな？あの人、結構自信ない感じの人だと思うよ？」

「え？」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！！」

桃香の言葉を聞き返そうと愛紗が言った瞬間、お化け屋敷の中から悲鳴が聞こえてきた。  
それはまごう事なき、今話題になっている男の物だった。



「だ、ダメなんだ………」

そんな星に時風がびくびくと声を上げる。

「は？」

「ダメなんだよお、こういうの。いやさ、ほんまもんの夜の病院とか、墓場とかを歩きまわるだけの肝試しならいいんよ？幽霊とか出てきたらぶん殴ってやるだけだし。でもこういうった「びっくり系」のお化け屋敷とかはダメなんだよ。ついつい身構えて飛びあがっちゃう………は、早く行こうぜ………」

そういう時風が先に進もうとするが、壁際に沿ってズリズリと進んでいく姿は面白いし、その壁から無数の手が飛び出してきて、「うひょウワはあっ!？」とか悲鳴を上げながら飛びあがって腰を抜かす姿に星は

(ゾクゾクしてきた………)

ゾクゾクしていた。

そして星が蒔風の手を取って、引っ張って行く。

「さ、行こうぞー！先は長いー！」

「ま、待ってー！そんなズンズンいかないでー！ー！ちよ、まだ心臓バクバク・・・ヒキヤア!?」

ビビりまくりの蒔風が近くのもの（この場合は星の腕に）捕まってガタガタしている。

死を恐怖しない男は、結構小心者だった、という一面である。







「やめてそれマジリアルだから」

そう話すのは木に簀巻きで逆さ吊りされている時風と一刀だ。

そろそろ日も落ち、暗くなってくるころだ。

「そついえば結局政務はどうなったんだ？」

「青龍たちが片付けたみたい。あいつら優秀だから」

「そつかー」

「そつだー」

「……誰か助けて」

そうして今晚も更けていく。  
「奴」が来るのに、大丈夫か？

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

真・恋姫十無双 くあいだのきゅうじつ (後書き)

アリス「日常パートにしては長いですね」

今回は長くなっちゃいました。

本当ならプールと遊園地で分けるつもりだったんですが、遊園地の方が長くなっちゃって

ア「時風、お化け屋敷ダメなんですか？」

ダメなんですね。

「恐怖系」のならいいんですけどね。

本人が言ってたみたいになだ怖い場所を徘徊するっていうのなら。

でも「びっくり系」はダメなんです。

だからそういう感じのホラー映画もダメ。

「呪怨」とかの静かなホラーならいいんですけどね。

ア「それはまあなんとも……微妙な……」

ま、そんなとこ

次回をどうぞ

ア「次回、そして戦いへ！！！！やっほ~~~~い！！！！」

書くぞ書くぞ~~~~！！！！

もうずっと戦闘パート書いていたい。

でも書く動作がめんどくさい！！！！

頑張ります

ではまた次回

主義や主張の違いから、戦いになって、そしてその戦いを生き抜いて  
そして生まれた確かな絆。

その絆があればこそ、声をたてて笑い、微笑みをかわしながら、こ

のお祭りを楽しめるんだ。

真・恋姫十無双 大結界・集結

さて、三日目である。

この日、朝から時風は街の様子を視察するという朱里と雛里に着いて行っていた。

「一見ゴチャついてるように見えて、店の種類は区間で分けられてんだな」

「その方が競争率が上がって、さらに市場が活性化するんです」

「活性化すれば他のところからも商人を呼び込めますし、それらが結託すれば遠くの村に資材を送ることも出来ますし」

なるほどなあ、と感心して、時風がふと気づいた事を聞いた。

「なあ、その結託した商人が国に無理言ってきたりしたらどうすんだ？」

その質問にそれなら、と雛里が口を開いた。

「商人はこの場所を国から借りて商売する代わりに、税が軽くなっているんです」

「だから不満を持つことはないと思います」

「そっか。店の種類ごとに分けられてんのもそういうことか」

「そうですね。もし毛色の違うお店があれば見つかりますし、同じ区間でお店を開いても新顔はすぐにはれますから、無断でお店を開く事も予防しているんです」

更に街を歩きながら蒔風が朱里、雛里にいろいろと教わっていく。

一箇所に店を集め過ぎても遠くの区間では大変だから、集中させる箇所を二、三箇所に分けたりだとか、蒔風にとって面白い話になった。

そして時間もそれなりに経ち、蒔風が携帯を開いて時間を確認する。

「そろそろ11時か。朱里、雛里、城に戻ろう。時間だ」

「は、はい」

「その機械からくりってすごいですよね」

「朱里は前回一旦二刀の世界に行っただろ？」

「はわわ、それはそうなんですけど、いろいろ目移りしているうちこっちに着てしまったので……」

「朱里ちゃん、いいなあ」

「ま、この世界はもう成っているからな。あっちに行くことはないだろ」

「残念……」

そう話しながら城に向かう時風たち。

「奴」の計算終了時間が今日の12時と推測した時風はその前に全員城に集合するように言っておいたのだ。

途中、屋台でラーメン啜ってる鈴々を拾い、北郷隊の三人娘に声をかけ、猫と戯れている明命と風を捕まえて行く。



「城にちゃんと集まってるなあ？」

「大丈夫なのだ！みんなちゃんといるはずなのだ！」

「だから私は早く行こうと言ったのだ！」

「うう、ごめんなさいなの」

「堪忍してな、風い」

「御猫様………ついつい時間を忘れて………」

「恐ろしい魔力を秘めている………それがにゃんこなのです」

「ま、拾えたからいいさ。このままなら………」

蒔風が城への一本道を歩いて行こうとし、その瞬間それは訪れた。

ドンッ！………！！

異常なほどの重音が鳴り、空間が振動する。

一瞬空がまがましい赤紫になり、そして青空に戻った。

「な、なんや今の!？」

「さっきの音なに?!」

「まさか……」

皆がさっきの現象に驚くが時風が即座に答えを出した。

「そつだ、「奴」だ!!あの野郎……想像以上に早いぞ!？」

「あの、舜殿……」

「舜、おかしいのだ」



通りを青龍が飛び、「欠片」を蹴散らして道を拓く。  
そこを走っていく蒔風達。

だが

「きゃあああああああ！！！」

「うわおおおおお！！？」

「朱里！風ッ！！！」

「欠片」の一体が朱里と風がさらい、屋根の上を走って城の方に逃げていく。

「人質にする気か！！青龍！彼女達を任せた！！！」

「御意！！ダアッ！！！」

蒔風が「欠片」を吹き飛ばす青龍に皆を任せ、「欠片」がうごめく

大通りを走って屋根伝いに走っていく「欠片」を追いはじめた。

キュイツ！ドンドンドンドン！

その時風に「欠片」が気づき、目の位置からビームを撃ってきた。

時風が走る周囲が爆発し、そのせいで一気に接近できない。

時風が砂埃の中から突き抜けると、そこには固まった「欠片」共がいて、時風の進路を塞いでいた。

跳び上がって避けようと足元にビームを撃たれてそれが阻害されてしまう。

「クソッ！ーっ？イイイイ！？」

時風が半分悲鳴、半分悪態のような声を上げる。

目の前の「欠片」共の目が光り、今まさにビームをチャージしているのだ。

「ッ！！南無三！！」

時風が拳を振りかぶり、打滅星で「欠片」を吹き飛ばそうとする。

ドオン！！！！！！

だがその拳が振るわれる前に「欠片」共が真横から吹き飛ばされる。見ると大剣「牙狼七星」を握った春蘭が店の壁を吹き飛ばしてこっちに来ていた。

さらにその後から何十射もの矢が「欠片」を撃ち抜き、一斉掃射していく。

「春蘭!!!!!!」

「蒔風!!!これはまさか!?!」

「「奴」だ!!!急いで城に行け!!!!朱雀!!!!同行しろ!!!!!!」

「了解です!!!!!!」

その場を蒔風が止まることなく駆け抜け、なおも「欠片」を追い続ける。

そして一気に跳躍、「欠片」に飛び付き、朱里と風を奪還せんと腕を伸ばす。

だが「欠片」が蒔風の着地点を狙って足払いをし、やむなく脚を引っ込め、一回転してから蒔風が着地する。

その隙に「欠片」が腕を振りかぶり、風の身体を街の城壁と中心の城との間にある見張り用の塔に真上に向かって投げ放った。

「あぁッ！？テメツ、このお！！！！！！」

蒔風がそれを追って跳躍する。

それには簡単に追いつき、風をキャッチする蒔風。

しかし、蒔風のさらに上空に「欠片」が飛び出し、身体ごと横回転して朱里を蒔風に向かってブン投げた。

地面に向かって直角に落ちていく朱里を受け止め、三人分の体が塔の真上から落ちた。

屋根を突き破り、床を抜け、塔を破壊して地面まで落ちる三人。

塔の窓からは上階から次々と煙を噴き出し、床をぶち向くたびに衝撃が塔から円状に発せられる。

蒔風たちが地面に衝突し、そこに向かって塔が崩れて押しつぶしていく。

「欠片」は屋根の上に着地し、それを眺めたが、次の瞬間に消滅し



た。

「開！！！！！！！翼！！！！！！！！」

ドゴオオオオウ！！！！！！！！！！

瓦礫の中から一対の翼がバサア！！！！と現れ、その瓦礫を吹き飛ばす。

その吹き飛んだ瓦礫によって「欠片」は消滅したのだ。

ガラガラと音を立てているその塔だった場所には蒔風と、その翼の下で守られている朱里と風がいた。

「あ、あわわわわわ………」

「さ、さすがに風もこれは………」

「大丈夫か！？怪我ないか！？このまま一気に城に向かう……！」

蒔風がさつき自分が駆け抜けてきた通りの方を見ると、そちらの方から朱雀が獣神体で飛び出し、更に天に向かって青龍がとぐるを巻いて上昇して同じく城に向かって行った。

それを見上げて目で追い、蒔風も朱里と風を脇に抱えて城に向かう。

「秋蘭……！他に残された者は……！」

「いないはずだ……！後は城に皆いる……！」

「よし……！この結界はまずい……急げ……！」

蒔風が焦り出す。

この結界は本当にやばいものだった。



「お前も帯刀するようになったのか」

「まあね、自分の身はある程度は守らないと。この剣、結構なものなんだぜ？」

「マジ！？後で見せてくれ。それはともかく、この場には全員居るか？」

「ああ、今来たので全員だ。ここはなんなんだ？なにが……」

「出し惜しみしてる暇はないな。ここは行ってしまえば鏡の世界だ。もう一つの「都」を作って、そこに俺たちを転送したんだ。ここは「都」であって「都」ではない。そしてここにいれば、身体が徐々に消滅する……」

「な!?!」

「この城なら大丈夫だ。獅子天麟で結界を張ってるからな。だが……  
・くそつ、まさか街丸ごと飲み込むんだ、想像もしてなかったぞ!?!?!」

蒔風が憎そうな顔をする。

「あのやるつ……ここに来てこんなに大規模な結界張りやが  
つて……!?!」

「舜！！城の中の影はひとまず片付けた！！！！」

「サンキュー……………皆、話がある、ここに集まってくれ」

蒔風の言葉に、全員が耳を傾ける。

そして、蒔風が朱里に街の地図を出してもらって、剣で指しながら説明した。

「この結界はあまりにも大規模すぎる。おそらく、支点となる場所があるはずだ」

「支点？」

「そう、そしてこの結界はおそらく、四点によって構成される結界……………」

「ということは……………その四点を潰せば……………」

「この結界も消えるのですな？」

その言葉に蒔風がうなづく。

「だが一点でも残れば結界は継続される。四点すべてを破壊しなければならぬ」

「ならば……隊を作るのですな？」

「その通り」

蒔風が星を指さし、正解、と言い、組み分けを始める。

「壊れた武器は修復されてるな？まず破壊のための攻める者、その場に応じて案を出せる軍師、その間に守る者、周囲を見る者の四人一組だ。それぞれに龍虎雀武をつける。まず青龍隊！！愛紗、春蘭、朱里、霞、頼む」

「誰が攻める？」

「それは臨機応変に頼む。桂花が指揮をとり、配役を決める。他もそうしてくれ！！次は……」

蒔風が隊を発表していく。  
その配分は以下の通り。

白虎隊：鈴々、明命、華琳、翠

朱雀隊：星、秋蘭、季衣、桂花

「玄武は？」

「玄武は俺一人だ。無駄に時間をかけたくない。恋はここに残って、皆を守ってくれ」

「わかった。みんな、恋が守る」

「サンキユ。オレの結界はこの場合、消滅を防ぐだけで敵を防ぐ事は出来ない。この場に集中させたからある程度は大丈夫だと思うけど、それでも一応迎撃してくれ。部隊の方は神兽がいるから大丈夫だ！離れすぎなきゃ消滅からは守られる！！！」

そう言いながら一刀に布をかぶせ、押し込める時風。

「残った武将は恋を中心に戦えない者の警護を！！！！さあ、てめえら欠々の出番だ！！！！暴れるぜ！！！！」

「「「「応！……！！」「」」」

ドドドドドドッ！……！！

蒔風の背後に四体の神獣、青龍、白虎、玄武、朱雀が現れる。  
その姿に一瞬見とれ、そしてその背に乗って皆が飛び出していく。

「この場は頼んだぞ！……！奔れ！……！玄武！……！！」

ドオウ！……！！

玄武の岩山のような甲羅の上に蒔風が乗り、身体を引っ込めた玄武が飛び去っていく。



「で、では全員この中庭から出ないでくださあゝい！！！」

「そうね。私は前の事は情報でしか知らないけど、かなりヤバいらしいから、死にたくなかったらここにいなさい？」

皆を取りまとめるのは雪蓮に難里だ。

更に結界周辺に恋を筆頭に思春や流琉、焰耶が並び、さらに後方には紫苑や桔梗の弓兵が控えている。

「結界から出てもある程度の距離なら効果はあるらしいな」

「でも四力所……すぐに終わりますよね？」

「いや、そうとも限らん。」

焰耶と流琉の会話に思春が難しい顔をして割り込んでくる。

「前の時、「奴」は火を吐く蜥蜴とかげ……蒔風は「さらまんだー」とか呼んでいたな。そう言った獣を使役している。蒔風のあれみたいな」

思春がすでにいない龍虎雀武を指して言う。

「つまり……守りがいるってわけか」

「……問題ない」

その心配そうな声を、恋の気合の籠もった声が飲み込む。  
その声には蒔風の言う「絶対の覚悟」があった。

「恋が、ここを守る。誰にも奪わせない、恋の居場所だ」

「……そうだな。気を引き締めろ、あの雑兵なぞ恐るるに足りん!!! 所詮は「欠片」、打ち消してくれる!!!!!!」

そういう皆の前にグズグズと「欠片」が現れてくる。

ただ襲うという使命の身に動く「欠片」は、確かに恐ろしいものだろう。

だが彼女らの目に一切の恐れはない。

ただ使命があるからではなく、守りたいものがあるという意志、その願いの強さが、欠片と人間の違いであるという証明が、ここにある。

戦いは、始まった。

だがしかし、そこにまだ「奴」の姿はない。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

真・恋姫†無双 ～大結界・集結～（後書き）

アリス「始まりましたね！！」

始まっちゃった！！！！次は長くなりそう！！！！

ああ、あと生まれて初めてバトンと言う物を受け取りました。

作者の名前をクリックして、活動報告なんかを見れば書いてあるの  
で興味があつたら読んでみてください。

ア「でも結局キャラ書ききれてないですよね？」

多すぎるんですよ！！！！

正直、一刀と蒔風と「奴」がいればいいんじゃないかな？

ア「身も蓋もないことを」

だつて書いてると途中に「あ、あいついるんだつた。会話に挟ませ  
ないと」ってなつて慌てて加筆したりするし。









グワアツと大きく旋回し、一気にその地へと向かって行く朱雀。  
その背には武器を構えた星と、緊張した面持ちの季衣、そして弓を  
構える秋蘭に帽子を押さえる桂花がいた。

地面から伸びた光の柱から大きく翼をはためかせ、迦桜羅が一気に  
朱雀へと接近する。

「・・・・・・・・ハアツ！！！！！」

秋蘭が矢を次々と速射し、迦桜羅を狙うが、そのすべてをグワア  
！！と周囲を大きく回り込んで迦桜羅が回避し、その隙に朱雀が  
地面に向かって降りたっていく。

その後を翼をたたみ、身体を矢のように細めた迦桜羅が接近する。  
朱雀が大通りで地面スレスレを飛行して、星たちが朱雀から飛び降  
りて問題の場所へと駆けだす。

その後方から迦桜羅が迫ってくるが、それに対して一旦上空にまわ  
って上昇した朱雀が迦桜羅の後方から再び降りて襲いかかり、地面  
に足がつくかつかないかの位置で翼を広げてストップをかける。

迦桜羅が即座に身体を反転、朱雀と衝突し、地面を転がってその勢いでふたたび上空へと飛びあがっていった。

その間の星たちは大変である。

後方から襲いくる暴風に耐えながらも、それを利用しつつ前に進んでいかなければならないのだから。

ヘリが高速で接近し、急ブレーキをかけたような暴風が吹き荒れ、それが去るころには朱雀が迦桜羅と共に上空へと飛びあがっていた。

「急げ！！時風は集中すれば大気が淀んだ部分があるからわかるはずだと言っていたが！！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・こつちだ！！！！秋蘭！！！！」

「星さんわかんの！？」

「わからいでか！！！！」

四人が通りを走り、向かうは城壁。

その一部分に張られた「火」と書かれたいかにもな札を、秋蘭が鷹の目で発見する。

「射抜け!!!!!!」

「応!!!!!!なっ!?!」

だがその瞬間、地面から「欠片」が湧き出、通りを封鎖する。

「ダメだ!!!これでは狙えぬ!!!!」

「全員こつちよ!!!!早く!!!!!!」

桂花の声やし、皆がそちらに向かう。

入ったのは細い裏路地で、店と店の間にあるような場所だ。

そこに星たちが走り込んだ瞬間、「欠片」もそこに殺到してその体が通路に詰まる。

「考えなしのバカどもね!!!!さ、こつから一気に.....」

桂花が季衣に指示を飛ばそうとする。

だがその瞬間、四人を巨大な影が覆い、振り返るとそこには細い路地の入口で合体巨大化しつつある「欠片」がいた。

「なななななななな!?!」

「桂花……どうする?」

あまりの事にうろたえる桂花だが、即座にハッ!?!としてさっきまで言おうとしていた事を伝えた。

「季衣!?!潰しなさい!?!」

「あいあいさー!?!」

ドオン!?!!!!

季衣の巨大鉄球がその「欠片」を潰し、道を塞ぐ。

そしてその鉄球を指さして、桂花が「行くわよ!?!」と号令をかける。

その上に乗り、屋根に上がってそこから一気に城壁まで走り抜けようとする四人。

その隣に巨大な影が起き上がっていつていた。

さっきの「欠片」が巨大経過中だったのがよくわかるほどにまで大

きくなつた「欠片」が、その腕を振り降ろし、四人の先の店を叩きつぶす。

飛んでくる破片、その衝撃に跳ね上がった地面の岩盤などが一気に襲いかかり、四人を飲み込む。

星がとつさに桂花を担いでその岩盤の上に飛び乗り、秋蘭、季衣もそれに則って瓦礫の中を進んでいく。そしてそこを抜けた瞬間、目の前に巨大な「欠片」第二号が現れ、目に光を溜めこんでいた。

「まずい！……来るぞ！……！」

時風からあらかじめ聞いていたものだった。どういふことかは理解できないが、あそこから放たれる光は危険であると……！

ドンッ！……！ゴジュアアアッ！……！！

「うわあああああああ……！！……？……？……？」

「季衣！……！桂花を頼む！……！！」

「わあああああッ！！！！つてええええええ！！？」

星が地面に落ちていく季衣に桂花を投げ預け、秋蘭の足に手を添える。

その動作から秋蘭がそれから何を為すかを理解し、星の槍「龍牙」を手に、膝を曲げる。

「飛べっ！！！！！」

「ハアッ！！！！！」

星が秋蘭の足を持ち上げるように上空に投げ、それに合わせて秋蘭も跳躍する。

龍牙を回転させてから弓に添え、弦を引いて目標を睨みつける。だがその目標は「欠片」に隠れて見えない。

しかし

「秋蘭！！！！目標、あなたから左に三十度の方向、距離二区画分！！！！眉間をぶち抜きなさい！！！！」

「応！！！！」

地上からその位置を観測した桂花が目標の位置を伝える。

それを信じ、秋蘭が弓に思いを込め、龍牙を放つ！！！！

ゴッ！！！！ボヒュッ！！！！ガゴオオン！！！！！！！！！！

空を裂き、巨大な「欠片」の眉間をぶち抜いて、秋蘭の放ったそれが城壁に到達する。

寸分たがわず目標の札に命中し、城壁ごとそれを破壊する。

「よし……!!」

「やったあ……!!……ってうわ……!!このお……!!」

秋蘭が空中でガッツポーズをとり、季衣が喜んでいると、そこに「欠片」が出現し、鉄球でなぎ払って行く。

星と秋蘭もすぐに季衣のところが集まって来るが、星の龍牙は瓦礫の中、秋蘭の矢もそろそろ尽きてきたところだ。

と、そこに大通りのすぐ真上、本当にすぐそばの真上を朱雀が飛び去り、その後を迦桜羅が追う。

その衝撃波に地上の「欠片」がすべて吹き飛び、周囲が開ける。

「今だ……!!行くぞ……!!」





だがそうはならない。

炎が渦を巻いて一カ所に集中しだし、消えていく炎の中から朱雀が姿を現した。

その口に集まった炎を思いっきり吐き出す朱雀。

その攻撃を避け、迦桜羅が旋回して距離をとり、朱雀に突進しようと翼をはためかす。

朱雀もその背に星たちを乗せ、同じ上空に上がってそれに対応する。

「皆さん！！大丈夫ですか！？」

「大丈夫じゃないわよ！！死ぬかと思っただわ！！！！」

「大丈夫ですね！？それだけ言えてればまだ余裕なほうです！！！！」  
「！！」

「お主は大丈夫なのか？朱雀」

「お恥ずかしながら、力としてはあっちの方が上です！！！！手間取ってしまい、申し訳ないです！！！！」

「なに、こつちも助かった。あれは・・・落としておかねばならんな」

「他の場所に向かわれたら厄介です。今ここで潰します！！！！」



ケルベロスはそれに向かって三口による連続黒炎弾で青龍を圧倒する。

すでにその背には愛紗たちはおらず、支点の場所に向かっていた。

「どこだ!？」

「わから・・・いや、見つけた!!!!!」

ドオオオオオン!!!!!

ギャオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

「ッ!!!!!青龍さん!!!!!!!」

「朱里ッ!!止まるな、進め!!!!!」

青龍に次々と黒炎が命中、爆発し、その体が大地に堕ちていく。それを見た朱里が思わず振り返ってしまうが愛紗の一喝ですぐに視線を前に戻す。

「支点はあそこだ！……行くぞ春蘭！……霞！……！」

「応！……！」

「合点！……！」

愛紗が指をさすのは一軒の店だ。

どうやらあの店の柱が支点となっているらしい。

だがその店までの道のりを「欠片」が覆い尽くす。

それに対して春蘭がその中の中心に飛びこんで地面を爆発させるように大剣を叩きつけた。

その衝撃に何体かが掻き消えるが、あまりにも数が多すぎる……！！

「キリがない！……朱里、どうする！？」

愛紗の言葉に一瞬だけ考え込み、そして朱里が命を飛ばした。

「霞さん！……」「欠片」の周囲を風足で走り回ってください……！！」

「どねくらいや!？」

「思いつきり!!!最高速度で!!!!時間がありません!!!!!!」

「よっしやあ!?!?!?!?!」

霞が足に力を込め、超加速スピードで周囲を旋回しだす。

最初は霞の姿が消えるが、その回転数を上げると共にだんだんと輪郭が見えてきた。

紫の髪に薄青の羽織が線を描いていく。

風が渦を巻き、「欠片」どもの身体が浮いていった。

そしてついに霞が最高スピードを出そうと下駄を脱ぎ、武器を愛紗に投げ預ける。

その渦は次第に竜巻となり、空中で「欠片」どもが集まって一つの塊となっていく。







同じように霞と春蘭もその場から引き、その瞬間、ケルベロスの黒炎が周囲を焼き払った。

店までの道には炎の壁ができ、とてもじゃないが近づけない。

「これじゃ近づけません!!!」

「どつする・・・どつする!?!」

「愛紗!!!朱里!!!」

「二人とも!!!」

悩む愛紗と朱里の元に二人が合流する。

戦況はかなりまずい。

青龍は落ち、道は断たれた。

しかも「奴」の使役獣最強のケルベロスまでいる。

額を汗が流れ、地面にたれる。  
と、そこに一人の人影が現れた。

「ぐ……は……」

「あなたは！！！」

「青龍さん！？」

そこに現れたのは腕を抱えて壁に身を預けながら歩いてきた人型の青龍だ。

もとよりあまり感情の出ない表情に、少しばかりの苦痛と悔しさがにじみ出ていた。

「……すみません……不覚をとりました……」

「いや……大丈夫か？」

「まだ……いけます……」

「行くにしてもどうする？道は……」

そこで青龍が案を出す。

その案に皆少しばかり驚いたが、今はそれしかない。

そして動いた。

路地から飛び出してきたのは愛紗、秋蘭。

黒い炎の壁に向かって行き、それを確認したケルベロスが炎を越えて突進してくる。

その爪が振るわれ、地面に三本の溝が刻みこまれる。

愛紗と春蘭はその瞬間にUターン、ケルベロスから言っただん距離をとった。

そして次の瞬間、ケルベロスに向かって何かが疾走してきた。

霞である。

霞が黒炎スレスレを疾走してその炎を巻きあげ、引き連れて来たのだ。

霞が走った後を尻尾のように黒炎がついていく。

そして霞がケルベロスの正面に走り込んで鼻面を蹴って後頭部にまわる。

ケルベロスの顔面に黒炎がぶち当たって一瞬だけ視界が隠れた。

その一瞬の際に霞がケルベロスの頭の一つに飛龍偃月刀を突き立てる。

さすがにその一撃にはケルベロスが暴れ出し、犬の仕草そのまんまに頭を振り、身体を独楽のように回転させる。

その遠心力に抵抗しながら、霞が必死に偃月刀にしがみつく。

身体が旗のようにはためき、それでも放さない霞は手元で刀を更に挟り込まれ、頭一つを潰すことに成功した。

その隙に春蘭が剣を投げる。

それは春蘭の物ではなく、剣身状態の青龍。

そしてそれがケルベロスの懐に投げ込まれた瞬間、一気に獣神体として顕現する！！！！！！





そして二頭が一気に駆けだし、ぶつかり合う！！！！

頭と頭がぶつかり合い、その衝撃で背に乗る四人が宙に浮く。

そして春蘭が右の、愛紗が真ん中の頭めがけて刃を落とす！！！！

ケルベロスが身を捻ってそれをかわそうとするが、その身を牙と爪に引き裂かれながらも青龍が意地で巻きつき、その動きを止める。

そして首が落とされた。

ケルベロスの身体が霧となって消滅し、青龍の身体も落ちていく。

ズズゴオン・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！！！！！

地面に落ちた青龍がクッションになり、うまく着地する愛紗たち。

そして青龍が人型になって、地面に倒れ伏した。

「青龍殿！！！！」

「大丈夫か！？」

その身体には全身にわたって切り傷が刻まれ、世界設定で着込んでいた青い中華服はボロボロで血に染まっている。

「なに・・・・・・・・大丈夫です・・・・・・・・我らは・・・・・・・・主が死なぬ限り・・・・・・・・死にません・・・・・・・・あのケルベロスがこの程度で斃せたのですから・・・・・・・・これは僥倖です・・・・・・・・」

そう言いながらぐらりと倒れる青龍。

城までは近い。だが、上空を見ると朱雀と迦桜羅が戦闘を行っている。



「どつするっ」

「こちらは負傷した青龍さんもいますし、あちらに合流はできません。そもそも、青龍さんがこれではあそこに行くことも……」

「すみま……せん。この身が至らぬばかりに」

「い、いえ!! 気にしないでください!!」

「城に着くまでの護衛は承ります。さあ、行きましょう」

青龍が手に青龍刀を握って先に進む。

その後を追いながら、青龍組は何とか勝利を収めたのだった。

.....

そして最後に白虎隊。



「マジかよ……」

「お、恐ろしいですね……」

翠と明命がうええ……と言った顔をするが、そんなことは気にも  
しない鈴々と白虎。

「でも今は楽し。このまま支点壊しに行こう……」

「お………なのだ………」

白虎が大通りを走り抜ける。

が

ゴオウッ………!!





獣の咆哮を上げ、白虎がサラマンダーに飛びかかる。  
獣が戦いを始めた。

そのころ鈴々たちはと言うと。

「翠、先行して「欠片」どもを殲滅しなさい。鈴々はその道を行って支点の破壊。明命は私と共にその後を追う。行くわよ!!!!」

「「「了解!!!!」」」

華琳が的確な指示を出し、確実に支点へと近づいていく。  
支点となっているのはどうやらある一軒家にある白い布だ。

「欠片」などもともせず、一軒家内に入り込む四人。  
そしてその瞬間地面が揺れた。

地面の下から巨大な手が現れ、それが地面ごと一軒家を握り潰す。







「欠片」の身体がゆっくりと崩れ、片膝を突く。  
だがそんな傷跡はすぐに回復する。

左手を使ってその体を持ち上げようとする巨大な「欠片」  
しかし、その体は再び崩れることとなる。

「おりゃああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

鈴々がついた左手首を「蛇矛」にて一刀両断し、その体を支えきれ  
なくなったからだ。

溜まらず両膝をついてなんとか上体だけはおこす「欠片」  
しかし、この霸王がそこで止めるはずもなかった。

ジャキッ！！！！！！！！！！





銀閃の先には白い羽織がバタバタと引つかかっており、それが地面に突き刺さった瞬間、ボロボロと崩れて消えてしまった。

そしてその「欠片」だけが残される。

巨大な「欠片」は守る対象が破壊された事で、優先事項を鈴々たちに変更する。

地面に降りた翠を含めた四人の頭上に「欠片」が迫る。

だが、その「欠片」の身体が白虎によって吹っ飛んだ。

しかし、白虎がやったのではない。  
むしろやったのはサラマンダーだ。

その戦闘で吹き飛んだ白虎が偶然ぶつかっただけのこと。

「白虎!?!」

「いったあ！！！！！！くそっ！！怒らせたったかなあ……」

腹を上に見せ、倒れる白虎が見据える先には巨大な黒煙。

そしてその中から、それは出てきた。

サラマンダーの尾が切れ、それを右手に握り、上体を起こして二足歩行へと姿を変える。  
そして全身を炎の鎧で包み、千切れた尻尾にも炎が纏われ炎剣と化する。

ゴキゴキゴキゴキ！！！！！！という音を鳴らしながら、サラマンダーが第二形態へと姿を変える。  
それはまさに炎の戦士・サラマンドラ。

地獄から来たのではないかというほどの炎を全身にまとったそれが鈴々たちに近づいてくる。

「こうなる前に倒したかったなあ……行くぞ!!!!!!」

「白虎!?!」

「鈴々たちはここにいて!!!!!!」

ドオン!!!!!!

白虎がサラマンドラに飛び付き、拳で地面に落とされる。

だが即座に起き上がって前足で顔面を引き裂き、脚を下ろして頭で突っ込む。

それに若干サラマンドラが後ずさるが、ダメージはないようだ。  
その手の炎剣を下から振り上げ、それが白虎の腹部に命中して身体が吹き飛ぶ。

ギヤオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

白虎の咆哮が轟き、街を押しつぶしながらその体が転がっていく。

「白虎お！！！！！」

「来るなあ！！！！！！来たら焼け死ぬぞ！！！！！！！」

「ツツ！！！！！！！」

鈴々たちが駆け寄ろうとするが、白虎がそれを止める。  
このサラマンドラは危険すぎる。

確かに「奴」の使役獣で最高の力を発揮するのはいつだってケルベロスだ。

だが、そのケルベロスでも倒し切れなかった場合、その相手の最後の処刑人がこのサラマンドラ。

いままで三体同時に倒されてきたからこそ出てこなかっただけで、これが本来の使い方なのだ。

迦桜羅で逃れ、ケルベロスで潰し、それでだめならサラマンダーでやり、そして最後にこいつに変わる。







「ナイスです！！！！白虎！！！！秋蘭さん、頼みます！！！！」

落ちてくるサラマンドラと迦桜羅に、上と下から朱雀、白虎が迫る。

上空の朱雀はその身を朱雀槍へと変え、秋蘭がそれを弓に構える。  
その先端が三又槍に羽ばたき、炎を纏って打ち出される！！！！！！

その矢はサラマンドラの脳天に命中し、ほんの少しだけ食い込んだ。  
だがそれだけでもいい。それだけ食い込めば、あとは済む！！！！！！

ドッ、バァン！！！！！！！！

その状態から一気に朱雀が獣神体へと姿を変え、サラマンドラの頭部を中から爆破させた。

頭を失ったサラマンドラが地面に落ちながら消滅し、朱雀が地面に降り立つ。

一方落ちていく秋蘭たちを回収しようと上空にジャンプした白虎は、その途中で迦桜羅を捕まえ、翼に爪を、喉に牙を喰い込ませて、その首の骨を一気に捻り折った。

そして迦桜羅も消滅していき、落下する秋蘭たちをその背に回収して白虎も地面の降りる。

「なんとか……………勝てましたね……………」

「勘弁してよもー。僕らの性能は七体全員そろってあっちの三体を同じなんだから……………」

「文句は言わないですよ、そこは。さ、おそらくさっきの砲撃は主のもの。おそらくあちらはそろそろ終わるでしょう。急いで城へ……………」

朱雀の先導で皆が城に向かう。  
途中で青龍とも合流し、先を急いだ。



蒔風の方には使役獣が来ていない。  
故に楽に終わったと思っただけだが、そうはならなかったのだ。

こっちの支点は黒い石だった。

それを見つけ、接近すると、「欠片」どもが案の定現れてきたのだが、普通の物とは違っていた。

「ああ！？なんだよあの「欠片」！！！！」

「どうやら「奴」が今まで回った記憶を元に創られているようですのう」

「んなこたわかってら！！！！あーん？セフィロスにリュウガにウイツアルネミアにアックアだと！！？」

「まだ出てくるかもしれん！！！！」

「チツ……………玄武、わかってんな？絶対その姿から元に戻んなよ！？」

「わかっておる！！！！」

そして蒔風が走り出した。  
戦闘そのものは長引きはしたが苦戦はしなかった。

所詮は紛い物。しかも「奴」が再現したモノの、さらに二番煎じなのだから当然だ。

そして最後にセフィロス・レプリカを圧水砲で吹き飛ばして殲滅を完了。

黒い石を破壊して、支点がすべて失われた。

だが

「なぜだ……なぜ結界が破壊されない!?!?」

蒔風が玄武を通して青龍たちに連絡を取る。  
本当に破壊したのか、と

『しましたよ!?!こっちは「火」と書かれた札を!?!』

『僕の方だつて翠がやってくれたよ!!! 白い羽織!!! あれ消えた  
ら支点の気配もなくなつたよ!?!?』

『我らは店の柱でしたな……愛紗殿が確かに……』

「どついつことだ……確かに支点の気配は消えている……  
……なぜだ……まさか!?!?!」

蒔風が城の方を睨みつける。

そつちには恋達があり、皆を守っているはずだ。

「……まずい!?!?! やられた!?!?!」

「どつしたのじゃ!?!?」

「クソツタレ!?!?! これは四点結界じゃない!?!?! 五点……  
五行結界だ!?!?!?!」

「な!?!」

「東に「木」の柱、南に「火」の札!?!」

「五行において残りの西は「金」、北は「水」で……そうか!?!」

「色であらわすと西の「金」は「白」で、北の「水」は「黒」だ!?!」

「ではまさか!?!」

「このままでは城がヤバイ!?!最後の五行、「土」なんざどこにでもある!?!」

蒔風が城の方角を見る。

そこではまさに激戦が繰り広げられていた。





最強が故に戦に時間をかけてこなかった恋ならではの弊害だ。  
ここまで続く持久戦に、恋は慣れていないのだ。

と、そこに最悪がやってきた。

「お熱いねえ……その仲間を思う気持ち、嫌いじゃないわ〜  
〜。だけど惜しむらくは主要人物ってどこか？」

「!!!!!!!!!!お前……………!!!!!!!!!!」

そこに「奴」がいた。

中庭の中を悠々と歩いて来て、恋を見据えて立っている。

「お前と戦ってみるのも面白そうだよなあ」

「………」

「ふふん……やだね」

その言葉と共に「奴」の姿がフツ、と消える。

そして「奴」が現れたのは、フードをかぶった人物の前。

「……しまった……！」

「貰ったぞ……北郷一刀……！」

「奴」が拳をフードの中の身体に突きこむ。

ドゴンッ……というものすごい音を出し、その威力を物語った。



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

真・恋姫十無双 〱 四点結界〱 (後書き)

つてなわけで始めました!!!

アリス「アリスと!!!」

作者の!!!

「何を始めましょーか!?!」

さあ、始めましたこの続けるつもり皆無の新コーナー、「何を始めましょーか!?!」

ア「文字通り、なにを始めようかというコーナーです!!!!!!」

「だから何がしたいんじやアアアアアアアアア!!!!!!」  
「!!!!!!」

ア「バカですか!?!ほんとに何がしたいんですか!?!」

自分でもよつわからん。  
なんでだろつ？

ア「例によつて今回もあの曲聞きながら書いたんですか？」

うん、ニコニコであれ聞きながら。

わからない人は三話戻つてみるといいよ！！！！まえがきにあるから  
！！！！

ア「こうしてアクセス数を稼ごうとするせこい作者なのでした」

うるさい

どうだい？そこのキミ、評価ボタン、クリックしてみないかい？

ア「携帯だとメンドイだけだろ」

はぐつ！！！！！！

ア「次回、「奴」の理想、一刀の叫び、WORLD LINK覚醒」

ではまた次回

いつかまた、どこかで逢おうぜ！みんな！  
萌将伝、エンドにて　　ゝ一刀ゝ



真・恋姫十無双　く繋がる力、その想いく

「奴」の拳がフードに突き刺さる。

その顔がニヤリと歪む。

しかし

「お主が世界を喰らうものか？」

「なに？」

ドゴンー！！

「奴」の胸元にデカイ拳がブチ当たり、その身体を吹っ飛ばした。

あまりの威力に「奴」が片膝をついて、倒れ込む。



卑弥呼が殴り掛かり、貂蝉が蹴りを放つ。

その力はあまりにも暴力的であり、まともに受ければ「奴」でもただでは済まない。

「クソッ、やっぱり北郷一刀は……」

「ご主人様は舜ちゃんと一緒よん」

「貴様の標的が主である以上、ここに置いて行くわけがなからう！」

そう、一刀がいるのは蒔風のところだ。

もっと正確に言うなら玄武の甲羅の中だ。

卑弥呼はフードを被って身を小さくして囷を演じていたのだ。

「ぬあっ!!」

「どうあ!!」

貂蝉と卑弥呼のダブルパンチが「奴」を襲い、腕をクロスして受け、

「奴」が後退する。

「調子に……のるなっ!!」

ゴォウ!!ドォン!!

「ぬがつ!?!」

「きゃあ!!」

「奴」が「獣人」を横に薙ぐ。

そこから発せられた斬撃破が卑弥呼と貂蟬を襲い、地面が吹っ飛び、巨体が舞った。

「っ、強い!」

「流石だの……だが!!」

グラリ、と卑弥呼が立ち上がる。

その目は異様なほどにキラついている。

燃え上がるは、使命

すでに引退した身であるとしても、世界を破壊するその者に、もう二度と負けるわけにはいかない。

「まだ立つか・・・なあ、安心しろよ！オレは破壊するだけじゃない！その後に再び復活させ、理想世界を創るんだ！誰も蔑ろにされない、そんな世界を！」

「奴」が叫ぶ。自らの理想を。

そこに愛紗たちが到着し、それに叫び返す。

「我々は誰ひとりとして蔑ろにはしない！！」

「そう、私たちはこの国のすべての民の為に戦い、そして一つになった！！」

愛紗や華琳が「奴」に反論する。

自分達は戦った。この国の、弱き民のために。

そしてみんなで勝ち取った平和。

それを蔑ろになんかしたことは一切ない。

だがその真っ直ぐな想いに「奴」が言い返す。

「では……貴様らは散つて逝つた名も無き兵の事を思い起こせるか？一人残らず？いや、貴様らは出来るかもしれない。そういつた奴らを、思い出せるかもな。だが他の世界でこの物語が語られるとき、その者たちがどのような扱いを受けているのかわかるか！！？どれだけ必死に戦おうとも、記されるのは「万人」の一人だったり、死んでしまつてもただの数値でしかない！！彼等にも家族がいて、悲しむ人がいるのに、戦いの後に描かれるのは貴様ら主要や主要のハッピーエンドだけ。この物語の脇役がどんなものかわかるか？顔はなく、ただの「蜀軍兵」や「町民」の扱い。しかも彼等が被害を受けても、そんな描写は一行にも満たず、物語を見るものは「そうか」の一言で済ませる！！主要の死には悲しみ、脇役は捨てられる。そんなことがあつていいのか？いいとでも言うのか！！！！オレは赦さねえ……誰だつて蔑ろにしていいわけがねえ！！オレは……オレの大切な友人がそんないい加減な扱いを受けるなんて堪えられない！！だから……だから……だから！！」

それは「奴」の……かつてのマイカゼシユンの想い。

確かにそれは素晴らしいことだ。誰一人として脇役はなく、その皆が中心人物。

そんな世界を成そうとするのは確かに皆にとって良いことなのかもしれない。

しかし・・・・・・・・

「だからと言って、貴様のその為すことが許されるわけじゃない！  
！！！！！！！！」

蒔風が玄武と共に庭園に降り立ち、玄武の中から一刀も出てきた。  
そして「奴」に向かって叫ぶ。

「お前の理想は確かに素晴らしいかもしれない。誰一人として適当に扱われることはないかもしれない！！！」

「だが、お主にわかるのか？消えていくその世界に存在した者たちの叫びが、嘆きが！！その涙が！！貴様が手に掛けるのは最主要人物一人かもしれない。だがその結果破壊するのは貴様の言う脇役も、そのすべてを含めた世界なのだぞ！！！！」

更に続く卑弥呼の叫びに「奴」が頭をガクガクと揺らす。  
そして、狂ったように叫んだ。





「グツ……つつた~~~~」……「一刀？」

だがそんな中、蒔風に庇われた一刀が蒔風を押しつけて立ち上がる。仲間を見、蒔風を見、そして「奴」を見据え、その言葉を紡いだ。

「オレがこの世界に来たのは、なんでかはわからない。必然かもしれないし、偶然かもしれない。奇跡かもしれないし、当たり前だったのかもしれない。でも、これだけは言えるんだ」

そして一刀が言い放った。決定的に「奴」の思想を否定する言葉を

「この物語は俺から始まった物語だ！！！！」「北郷一刀」の世界なんだ！！！！！確かにあなたの理想は素晴らしいよ。オレだって誰かが死ななきゃならないなんて嫌だし、それがなくなるなら何でもする。でもそれだけはだめなんだ。この物語を誰かに任せるなんてできない。そんな無責任な事できるか！！！！誰かの死も、生も、総てを背負えるとは思っていないさ。でもな、それはすべて俺たちが起こしてきたことだ。その罪だけはオレたちの背負うべき物だ！

「……それを投げ捨てて誰かに任せ、無かったことになんかできるか……！！！！出会えたことも、別れることも、すべて俺たちのだ！！！！それを全部なかったことにして、やり直すなんてことが、許されていないはずがない！！！！！！！！！！」

そして一刀が腰の剣を抜き、「奴」に向かってその切っ先を突き出す。

眼前の敵を見、自軍に号令を下す王のように。

その姿はまさに王。

まさしく彼は、多くの物の上に立ち、皆を率いる王しんじたいだった。

「この世界で出会って、紡がれ、ときには切れても、こうして皆と  
いられるこの絆。それが俺の力だ！！！！出会える力が、俺の力だ！！！！  
繋がる絆が、想いが！！！！俺のすべてだ！！！！！！！！この世  
界は消させない。絶対に消させない。その俺たちの軌跡を、消させる  
ことなんかさせてたまるか！！！！！！！！！！」

その言葉と共に一刀の剣がほんのり光り出す。

そしてその傍らに蒔風が立ち、一刀の顔を見る。  
一刀もその顔を見、頷く。

「その世界に存在する、人の想い。それは絶対に消させない。過去の翼人がどうだったかは知らないが、俺はそれを守りたい!!!行くぞ、一刀!!!!」

「ああ……って俺も？」

「あんだけ言っただ。やってやるのが筋ってもんだ!!!!大丈夫。お前にも力はある」

蒔風が右手を前に出し、手のひらを上に向ける。

【KOIHI ME†MUSOU Shin・KOIHI ME†MUSOU!!! ALL SERIES COMPLETE!!!】 -

WORLD LINK - WEAPON!!!

いつもとは違うWORLD LINK

同一の最主要の物語を渡った時に発動するそれは、一刀に新たな力を与える「鍵」を出現させた。

そう、「鍵」

その小さな鍵が、蒔風の手の平に光を発しながら浮いていた。

「一刀、どうする。これを、とるか？」

「取るとどうなるんだ？」

「お前は外史や正史を越えてしまっ存在になる」

「………どういこと？」

「今までと変わらん。今までだって、お前は正史外史を飛び越えたんだからな。ただ単に力が手に入る。それだけだ」

「なんだよそれ………全く………使っさ。あの野郎を倒せるなら」

「よく言った！………！」

蒔風が「鍵」を一刀の胸に叩きつける。

その瞬間に「鍵」は消え、一刀の胸の奥でカチリ、と音がした。

だがその光は消えず、一刀の胸で輝き続ける！………！！

「う、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおお！………！！………！！………！！………！！」

「な……まさか……それは!!!!!!!!!!」

「その通り!!!!!!そもそも、前回でその兆候は表れていた!!!!!!  
!!覚えてるか?その時のWORLD LINKを!!!!!!!!!!」

蒔風の言う通り、前回のWORLD LINK時、一刀は全員の武器を使用した。本物とは別の物を出現させて。

蒔風のように言うならば、まさにそれは「力を借りた」

しかも魔術などの技術ではなく、仲間のその思いによって。

そんなことができるのは、世界においてただ一種の者だけに許された特権!!!!!!!!!!

「一刀もたった今言ってたはずだ。「繋がる絆が、想いが俺のすべてだ!!!!!!」とな!!!!!!!!!!」



一刀の背後に全武將の武器が出現する。

もちろん、愛紗や華琳達の武器は本人の手の中にある。  
つまり一刀は、力を借りることに特化した翼人、絆の最終形態！！  
！！

「俺の力は、皆と繋がる想い、絆だ！！！！！！」

一刀が右に青龍偃月刀、左に蛇矛を握り、構える。

それに合わせて蒔風も十五天帝を組み上げて並び立つ。

「さあ、見せ場だ！！！！行くぞ！！！！」

ドオウ！！！！！！



一刀と時風が同時に「奴」に攻め込む。

「奴」が魔導八天でそれを受けていくが、いかんせん相手が翼人二人では相手として不利すぎる。

しかも一刀は次々と武器を変え、突く裂く斬る潰すと一気に攻め、その攻撃のランダム性に「奴」の剣が徐々に鈍っていく。

「チイツ!!!!!!!!!!」

ドンッ!!!!!!!!!!

「奴」が上空に飛翔し、飛びあがる。

その後を時風と一刀もその背の翼で飛びあがり追って行く。

「奴」の波動砲が真っ直ぐに伸び、それがレーザーのように蒔風と一刀に伸びる。

それを二人はかわすが、「奴」がそれを伸ばしたまま振り、蒔風と一刀の狙い続ける。

蒔風もかわしながら絶光砲を放つが、いかんせん筋の太い「砲」では絶光の貫通力が生かしきれず、波動砲に撃ち消されてしまう。

だが、これだけで終わるつもりなどない。

一刀が次々と矢を放ち、槍を投擲していく。  
そのあまりの数に「奴」がついに砲撃をやめ、魔導八天でそれを打ち払っていく。

「雷!!! 旺!!!」





「ぐ、ぼあ！？ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアああああああああ！！！！！！！！！！」

その瞬間、「奴」の身体内部から無数の刃が飛び出し、その身を引き裂く。

さらに時風が両手をパン！！と鳴らした。

するとその飛び出してきた刃が発光し、高熱を放って「奴」を焼く。

「ギイイイイイイイイイイイいああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

と、そこで固有結界が切れる。

一刀と言う存在を入れたために、25秒しか持たなかったのだ。



時風の声に応じて、一刀が自分の剣を腰から引き抜く。

【KOIHI ME↑MUSOU Shin・KOIHI ME↑MU  
SOU!! ALL SERIES COMPLETE!!】  
WORLD LINK・FINAL ATTACK!!!

ドゴウ!!!!!!!!!!

そして一刀の剣が輝きだす。

その細身の一本の剣が絶大な輝きを発し、それを一刀が天に向かって真っ直ぐにかざし、そしてそれを両手で顔の横に持って来て真っ直ぐ突き出すように構えた。

「天を奔る星の如く、光り輝き流れゆけ!!!!!!!!!!」





剣から発せられた一筋の光が「奴」を貫き、その体を一瞬で消滅させる。  
そしてその光は天に向かってどこまでも伸び、流星のように消えていった。

「はあ、はあ、はあ………」

「よくやった、一刀。最初にしては上出来だ」

「サンキュ………あー………疲れる………おっとと………！」

「アブなッ……！」

慣れない飛行に身体を崩した一刀を時風が支える。  
そうしてゆっくりと地上に戻っていく。

「お？結界、解けてきたな」

「なあ、結界解けたらオレたち元の街に戻るんだろ？」

「そうだな。こっちの破壊された場所は向こうに反映されないから大丈夫だよ?」

「いや、この姿が街の皆に見られたら……」

「それよか早く地上に着くさ」

「よかった……この力の使い方なだけどさ」

「あん?お前の思い通りに使えるよ。大丈夫だ。でも賢者タイプだから、多分炎とかは難しいかな?あ、でもそう言った力をもった人が仲間にいればできるな」

「いや、そうじゃなくてだな。これだと時風はオレの師匠になるのか?」

「師匠?それなんか違うなあ……」

「じゃあ兄貴?兄弟子?でも弟子じゃないだろ」

「なんとも呼べえ」

そんな会話のうちに地上に着く。



「これで終いだな。しっかりと鍛錬しとけよ？」

「わかったよ。うっさいなあもう」

そして別れの時だ。

蒔風は一刀に翼人の事や、力の使い方などをしっかりと教え込み、その説明を他の武将にもしておいた。

一刀の力はまだまだであり、これからの鍛錬が必要なことが分かってから、愛紗や華琳などが意気揚々と訓練メニューを組んでいた。

「怖いなあ……………」

「臆するなよ。今のお前ならあいつらと同等以上に打ちあえるし、力だつて上がってるはずだからな」

「すげえ……………」

「じゃあ、そついで……………」

「待つてくだされ！……！！」

そこに星が駆けこんでくる。

その姿を時風がうへえとした顔をして眺めていた。

「なんだ？ついでには来させないよ？」

時風の言葉に、星が首を振る。

「違いぞ？私はあなたに追いつくと決めた。だから、ここではついていけない。これはあなたの方から来てくれたのです。今度は私の方から向かって見せる……！！」

「その心意気は立派だけどな……はあ……」

「それより……皆……！！……！！」

星の掛け声に、城壁の上から全員が姿を表し、一斉に礼をとった。

その光景は圧巻と言わしめるに値する物。  
そして無言だからこそ、全員の意味が伝わってきた。

「ふ、ありがとうな！……！……！……！……！……！」

蒔風が手を振ってその場を去る。

「Gate Open……Shin・KOHIME†MUSO  
U」

そうして蒔風が世界をでる。

次の世界へと旅立って行った。



翼人、  
三度<sup>みたひ</sup>魔法少女の世界へと入る。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d





最主要人物：北郷一刀

- WORLD LINK - } WEAPON } : 一刀翼人覚醒の「鍵」

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : 一刀  
の剣「流星剣」の覚醒

ア「覚醒ばっかですね」

《蒼青の翼人》

所有者：北郷一刀

翼色：蒼青

想い：絆

タイプ：賢者

「一刀君は絆を結んだ者、つまり仲間になった人の「力」を借りられます。」

ア「でもそれって蒔風もできるんじゃないですか？」

翼人なら基本できます。

でも彼の場合は重ね掛けができるんですよ。

蒔風の場合は愛紗の青龍偃月刀を使ったら使ってる間は他の力は借りられませんし、自分の力も使えません。

一刀は青龍偃月刀を出し、更に蛇矛を出すことも可能です。

ア「じゃあもし一刀が世界をめぐっていたら……」

そうですね……

クロックアップ!! スタートアップ。トライアル!!

みたいなこともできます。

ア「何そのチート」

ですよね（笑）

でもそうはいかない。使いこなすには一刀の技量も必要なんです。そこが彼はまだ未熟ですから、これからが楽しみですね。

ア「他の翼人もできるんですか？」

蒔風が「願い」によって力を借りるように、クラウドも観鈴も理樹もできます。

でも異世界を回ってない時点で、正直力を借りる必要はないんですよ。

もしティファがクラウドを助けたいと思います。

でも、同じ世界にいるのだから普通に駆けつけてしまえばいいじゃないですか。

ア「だからできないのか。納得」

そして次回は！！！！！！



蒔風

「巡る世界も、だんだん………終わりが見えてきたかもな」

番外編　くオンドウル、唐揚げ、政務く

【仮面ライダー剣】く平成ライダー歴代ヒロインで強さにおいて二番目にある者く

「ヴェエエエエエエエ！！！広瀬さん！落ち着いてー！！」

「なによ剣崎君！！ハナセ！！！！ウツトヴァスゾ！！！！！！」

始が戻ってきてからの宴会

そこで悲劇が起こっていた。

事の発端は例によって蒔風である。

蒔風や始、剣崎のお互いを更に深く自己紹介し、広瀬菜のターンになる。

そこでいらん事を言ったのだ。

「広瀬さんっていくつなんですか？」

ビシリ

「確かまだ独身だから……まだ結構若いはずだ」

「あれ？僕もう広瀬さん独身のままかと」

橘や睦月の言葉に身体をブルブルと震わせ、どんどん酒を呑んでいく広瀬。

剣崎があわわわわ……とうろたえているところに、始が止めを刺した。

「ヒューマンアンドットの力を得ているオレにはわかる。広瀬の年齢はもちろん、スリーサイズまで完璧だ。年齢は20。そして体重はズバリドゥブガア……」

だが、最強のアンデット、ジョーカーの言葉はそこで潰された。箆筒たんすによって、その身体とともに。

蒔風や橘たちが箆筒のあった場所を見る。



そこには酒で顔を真っ赤にして、次なる冷蔵庫ひんかくを担ぎ上げている広瀬がいた。

「……………聞いたわね？」

「今あんたが潰したじゃん！何も聞けなかったよ！！」

「はっ、始——！！！！大丈夫か！？」

剣崎が始に駆け寄って筆筒を退かそうとする。

だが何が詰まっているのか、そもそもどうやって持ち上げたのか、その筆筒は最前線で戦ってきた剣崎がいくら持ち上げようともしびくともしない。

「剣崎！気を逸らすな！死ぬぞ！！」

「でも始が！！」

「剣崎くん、そこをどきなさい。今すぐそいつから私のデータ忘れさせるから」

始を救おうとする剣崎の背後に冷蔵庫を引きずってきた広瀬が立つ。流石はかつて積み上げられた筆筒を指一本で支えた女性である。

「逃げるケンジャキ!!」

「ダデヤーナサン!? ルラギルンディスク!?」

「安心しなさい剣崎くん。どんなに殴ってもアンデットだから死なないわ」

「そこ!?!」

「ヒロセサンヲトメロオ!!」

「ウワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!  
!!!!!!!!!!!!!!」

だがまず橋が逃げた。

そして睦月が窓から飛び降りて逃走した。

「剣崎くん……………どうしても聞いてくれないなら……………  
潰すわよ?」

「クソッ! 戦うことですか、オレと広瀬さんは解り合えないのか!  
?」

ちなみに蒔風はすでにソファで寝ている。  
こいつ放棄しやがったな。



【仮面ライダーW】く激辛のKノこんなんありか？く

「風麺ウマ！屋台のレベルじゃないなこれ！！」

「だろ！？これが風都名物、風麺だ！」

蒔風たちが戦いを終え、風都巡りをしている、そんな時間。

なんとも見所満載の街を、蒔風は楽しんだ。

再建された風都タワーの展望台に登り、フウト君ストラップを買い、動物園に行き、翔太郎の案内で今までの事件の話をもその場所に行つて聞いたりしていた。

「にしてもこのラーメン、ナルトデカイ！」

そして最後に風麺屋台に来ていた。

その噂の風麺とは、ラーメンの上にスッポリと覆うほどに巨大なナルトが乗ったラーメンだ。

確かに旨いが、少々食べづらい感も否めない。

「ばっか、そこがいいんじゃないか！」

「そういえば………確かここでは風麴ライスを出していたね？」

「ん？フィリップ君、覚えていてくれたかい！君達に解決してもらったあの事件のあとに来たあの人、いいもん持ってたんだ！」

そう言いながら親父がもう一人の男性を引っ張り出してきた。

「皆さん、お久しぶりです」

「あ！あんた！あのあとどうだい？うまくやってんのか？」

「おかげさまで………そうだ！新商品を考えたんです食べてみてくださいますか？」

何やら話し込む翔太郎ともう一人の男性。  
蒔風がフィリップに男性の事を聞いた。

「ああ、彼はね、風麵の風都名物ね座に嫉妬してね、ガイアメモリで暴れたんだ。ま、今では親父さんのところで腕を研いでいる、というわけさ」

「ふう〜ん。慕われてんだな、翔太郎」

「それはもう、絶大に」

「どうぞぞー！！お待たせしました！！」

そうして出してきたのはから揚げの乗ったラーメンだ。

それを見て、まず一同の反応は

「赤い」

「赤いね」

「赤しかないな」

「おお、赤い」

赤い

ただそれだけだ。

麺やスープ、から揚げに器まで赤一色。

出されただけだとただの赤い塊にしか見えない。

「なあ………これなんだ？」

「風都ラーメン赤！！超激辛ラーメンです！」

「興味深いね。これは麺にも唐辛子を練り込んでるのかい？」

「いいえ、麺もスープも風麺と同じものですよ？」

「「「え？」」」

「ただこのから揚げを入れると………ほらこの通り」

ラーメンにから揚げが投入されると赤い絵の具をぶちまけたかのように一瞬でスープに赤が溶け込み、麺が芯まで赤に染まった。

「どうですか？」

「怖いわ!!!なんだよそのから揚げ!!!?どんだけ辛いんだよ!」

「ああ、から揚げだけの注文はできませんよ?」

「それはなぜ?」

「ほら……その……(ボソリ)死なれたら困りますし」

「今死つて言った!!死ぬって言ったぞ!?!から揚げ単品殺人兵器!?!おい蒔風、絶対食うな「ウマー」はあああああ!?!」

「なかなか辛い。これは良いものだ」

「うちではこのから揚げを、「地獄から揚げ459号」と名付けております」

「単品で売ってくれないか?頼む!!!」



「そうですね…….…….ではこの調理注意書を必ず読んでください」

「あいわかった。ありがとう!」

こうして超激辛から揚げを手に入れた蒔風。

このあと単品で食おうとして、少し舐めたら蒔風がぶっ倒れた。

単品はどこまで辛いのか。

それを確かめられる者はいない。

【真・恋姫十無双】く七獣、政務を行うのことく

「青龍——そっち取ってくれるかの？」

「……………どうぞ、玄武」

時風たちが愛紗から逃げている間、青龍たちが執務室で政務を手伝っていた。

「つたく……………んでこんなめんどいこと……………」

「ぼやくな天馬。さっさとやろっ」

「つてもよ——麒麟さんよ、めんどいものはめんどい……………ん？おいこれ、こっちだよ、こっした方が良くねえか？」

「え？あ、本当だ……………」

天馬が書簡を雛里に見せ、提案する。

そして書簡に書かれた文字を削り消し、書き直していく。

「だが天馬よ。お主が一番めんどくさくしとるぞ？」

「そうですねえ。より良い案を出すのは素晴らしいのですが、あなた結構世話焼きですからねえ」



「はくじょうもの……」

t o b e c o n t i n u e d . . . ?

番外編 くオンドウル、唐揚げ、政務く（後書き）

アリス「短！！！」

すみません……………

あんだけ溜めといてこのくらいしかありません！！！！

ちなみに平成ライダー最強ヒロインは電王のハナさんです。  
でもオーズにもひなちゃん出てきたからなあ……………

Wで言ってる事件とは「ハイパーバトルDVD」でのことです

ア「で、次にあの世界ですか」

はい

それに関して皆さんに報告があります。

つぎからなのはStrikersという大台に乗りあげます。  
もしかしたら今までの更新ペースが崩れる可能性も出てきてしま  
います。

その場合、その日の深夜0時をもって、更新不可として次の日に更  
新いたします。

作者の執筆スピードの遅さゆえに、申し訳ない事をしてしまう場合もあると思いますが、ご容赦ください。

ア「まああれは結構大変な話ですからねえ」

多めに見てくれると嬉しいです。

ア「次回、蒔風、列車にどーん!!」

ではまた次回

魔法少女、育ててます。

なのはStrikers　～出会いは激突から（二回目）～

「っあ~~~~~あ。どっだ？」

時風が降り立った世界を欠伸をしながら見渡す。

周囲は自然。超自然だ。

そんな場所の遠くの空から爆発音が響いて聞こえる。

「なんだよ、いきなり戦闘？ようし、お兄さんがんば………ん？」

張り切り出すお兄さん。

が、そこでふと自分の立ち位置をみた。

立っているのは細く均された地面。  
走る二本のライン。

つまり





「なにやってんのよ」

「アタツ!」

「任務中よ!しっかりしなさい!」

そうだそうだ

今から列車の真ん中車両にあるロストログアを回収しに行くんだ。  
気を引き締めなくっちゃ!!

「よし、行くぞー!.....ってティアアティアアー!.....!」

「ったく!なによスバル!.....!」

怒ってる場合じゃないよティア!

「人が!」

「はあ!?!」

SIDE OUT

リニアモーターカーが暴走している。  
その前部から真ん中に向かおうとしたティアナとスバルが見たのは  
一人の男性。

列車とは反対側のレールの先を見渡し、こっちを向いた。

その瞬間

バゴン！！クルクルクルクル・・・・・・・・グシャツ！！！！

男が列車に撥ねられて、ティアナとスバルの間に落ちてきた。

スバルとティアナはあまりにもいきなりの出来事に軽くパニック状態になる。  
そりゃそつだ。目の前に暴走列車に撥ねられた人間が落ちてきたのだから。

「う、うわーうわーうわー!!?ど、どうしようティア!!」

「お、落ち着くのよスバル!!?つかこの人どこから来たの!?!」

突然の乱入者（すでに重傷）に取り乱す二人。

そうこうしている間にも、俯せの男からジワ~~~~~と血が流れて来ている。

「スバル!あなたは応急処置を!私は.....」

なのはさんに連絡を、と言う前に、ティアナの目に映ったモノがその言葉を変更させた。

「スバルッ!後ろ!!」

「ッッッ!?!」

時風を仰向けにしようと思んだスバルの背後に巨大な球型をした機械兵器、ガジェット三型が機械のアームを伸ばして現れていた。

スバルが振り返り、それを視界に入れた時にはもう遅い。  
時風に気を取られていたスバルにガジェットのアタックが迫る。

ヒュボツ、ドオン！！！！

そしてガジェットが爆発した。

スバルの真後ろから腕が伸び、そちらに振り返ると拳を突き出して、  
顔を真っ赤に染め上げている時風がいた。

「え？え？ええ！？」

「あのガジェットを一撃……しかも素手で！？」

スバルとティアナが驚愕する。本日二度目だ。

「まったく……良い感じでこっち着いたつてのに、殺す気が  
！！！！いきなり激突つてなんだ！！「奴」を前にして死んでし  
まうわ！！！！」

蒔風がウガーッ！！！！と怒りながら立ち上がる。

それに合わせたように周辺に集まってきたガジェット。

蒔風というイレギュラーを察知して来たのだろう。

「か、囲まれた！！」

「スバル！行くわよ！！」

ティアナとスバルが構えをとり、ガジェットを迎え撃とつとする。

「まあ、待てお嬢さんたち」

「お！？」

「お嬢さん！？」

しかし、二人を蒔風が止める。

その顔はにこやかだが、頭から血をダラダラと流し、かなり怖い。

「いきなりの激突、襲撃、そしてなんなんですかお前らは！？壊れたいの？壊されたいの？壊しちゃってもいいのかな！？力借りんぞ！！！」

蒔風の腰にベルトが、手にはゼロノスベルトが現れ、それを構え、変身前に言ってしまった。

「てめえら最初に言うておく！！！！オレはかーなーり、強い！！！！！！！！」

「ど、どれくらい？」

その言葉にスバルが思わず訊いてしまった。  
ティアナがやめなさいよ……とか言っていたが、蒔風は律義に答えた。

「世界最強、さ（ゴぼツ！！）」

「血を吐きながらあんた何言ってるのよ！？」

言いながら勢いで血を吐いてしまった蒔風にティアナが突っ込むが、そんなことは気にしない。

蒔風がカードを持って、変身する。

「まあ見てる！！！デネブとかそういうの取っ払えるから、いきなりこっちだ！！！変身！」

《V e g a   f o a m》

ゴォ・・・ン、ガッシュウ！！！！

蒔風がゼロノスベガフォームに変身し、あーあー、と声を出す。

「やっぱりこっちでも声変わるのか。じゃあ・・・」

そう言って胸を張って、蒔風がこう言いなおした。

「もう一度最初に言うておく！！！！！！！」

）ドキドキ……………）

蒔風の変身を見て何かキラキラした目をし始めたスバルが、何を言うのか、期待していた。  
それを見て、蒔風は

「胸の顔は……………」

）（コクコク）（

ついにティアナまで混ざった。  
お前ら任務どうした。

「ただの……………飾りだぁッ……………」

「飾りかよッ……………」





次々とガジェットをぶっ飛ばしていく蒔風。  
それを啞然として眺める二人。

そんな二人に、通信が入る。

『二人とも、なにしてるんですか？早く進んでくださいです！！！！』

それは先に列車の制御を取り戻そうと運転席に向かったリインフォース？なのだが、その通信にティアナが呆れるやら慌てるやらで答えた。

「い、いえ、でもですね、どう見ても一般人がガジェットを……」

『一般人ですか！？無事なんですか！？』

「いえ……結構大丈夫な……あ、でも重傷でした……えつと……」

「重傷だけど元気に戦ってガジェットをぶっ飛ばしてます！！！！」



「で？どの人です？」

「あ、あの人なんですけど……」

「……」

リンがその人を見る。

「一瞬知ってる気がしたが、そんなことはないなとすぐに否定し、話しかけた。」

「こらー！ー！ー！どこの誰だか知りませんが、早急に戦闘をやめて治療を受けてください！ー！ティアナ、怪我はどれくらいです？」

「激突……」

「は？」

「……リニアと正面衝突しました（ダラダラダラダラ）」

「とんでもない重傷じゃないですかそれ！？は、はやく……」

「あぶねえ！……！……！……！」







「レールを狙うか！……この野郎！……！」

レールにアームを絡ませ、ビームで破壊し始めたのだ。

その歪んだレールにゼロライナーがガタガタと揺れ始める。

「スバル！行くわよ！！」

「うん！！！！」

そしてついにスバルとティアナが動き出そうとした。

が

「お前ら！！！！頭引っ込めてろ！！！！下手したら首取れんぞ！！！！」



「なっ!?!」

「は!?!」

ゼロライナーから(デネブの声で)時風の警告が飛んでくる。

そして次の瞬間、レールに跳ねあげられ、ゼロライナーがジャンプして脱線した。

「あッ!?!?!」

「脱線した!?!?!」

が、それで終わるこの列車ではない。

空中で前後の車両を入れ替え、前になった車両の上部が少しだけ持ち上がり、バラバラバラバラ、とそこが回り始めた。

「と、飛んだ!?!」

「ヘリコプター!?!」

「も、もう列車じゃないです……」

三人がポカーンと呆れるなか、ゼロライナーがリニアの前に降りる。先に後る車両をレールに下ろし、その後ろに前車両が降りて連結することでもう一度前後入れ替わってからだ

「連結……!」

そしてリニアと連結する。  
もちろん互換性などない。だから連結用のアームを強引にリニアの前部に噛みつかせて連結させる。

ゆっくりと列車の勢いが弱まり、そして止まる。  
その間に次々とガジェットがゼロライナーに群がっていくが、出てきたドリルやナギナタのプロペラに巻きあげられ、粉碎されていく。

ガシューウウウウウウウウウウ……





御覧ください、これが「倒れる」と言う事でございます。

「きゃあああああああ……！……！は、はやっ……！早く治療治療  
！……！……！」

「エーとえーと……！包帯……！包帯ですう……！……！」

「キャラ……！早く治療魔法……！……！」

「は、ハイ……！……！」

そうして包帯でぐるぐる巻きにされる時風。

この時、すでに意識はなく、このままその体は彼女たちの部隊、機  
動六課の隊舎へと運ばれていった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

なのはStrikers　〜出会いは激突から（二回目）〜（後書き）

アリス「何という出会い」

なのは達とは未接触到に終わってしまった……

ア「にしても今回蒔風いきなり撥ねられましたけど大丈夫なんですか？」

大丈夫、ギャグ補正だからすぐ治る。

ア「身も蓋もない事を……」

ってか自分としては……

あんなんでよかったのかなあ！？

なのはStS一応見直しましたが、結構不安……

覚えてるのってなのは魔王シーンと最終決戦くらいでヴィヴィオと  
カスカさんの詳細設定忘れた。

ア「ええええ!?!」

まあそこは見直してWikiよんでなんとかしますんで、矛盾があ  
つたら指摘お願いします!!!!!!

ア「次回、そして再会」

ではまた次回

全力全開、手加減なし!



なのはStrikers　↳そして対面、久々の再会

「それで？連れてきたんがこの人やと？」

「は、はい」

「で、なんで全身包帯グルグル巻きなん？」

「それは……………」

機動六課隊舎の部隊長室。

そこにスバルとティアナ、そして部隊長、八神はやてがいた。

リンや二人の報告を聞いて、とりあえずその人物を連れてくるようには言ったのだが……………

「はあ……………確かに連れてきてと言いはしたけど、まさか本当にこんなとはなあ」

はやてが頭を押さえてため息をつく。

目の前に転がっているのは頭からつま先まで包帯で巻かれ、ミイラ状態になっている男。

(……………はっ!!!!ここはどこだ?これは…………消毒液の匂い。包帯か。くっそ、目まで覆いやがって、これじゃまともに見えも話せも聞こえもしねえじゃん)

包帯男がそこで意識を取り戻すが、包帯は固くてちぎれない。どんな力で巻きあげたのだろう。

「にしても全員が記録映像残さなかったとは……………なにやっ  
ん」

「す、すみません……………」

「リンまで忘れてんやから世話ないわ」

「じめんですはやてちゃん……………」

はやてが目の前の男を見、どうしようかと考え、とりあえず包帯を取って顔を見ようとする。

「なあ、こん人、なんか言っとらんかったか？何か身元の分かりそうなこと」

「えつと……」

ティアナが記憶をたどって思い出そうとする。

しかし、その間にミイラさんがビビっていた。  
なぜなら

（何するんだ？顔？顔に手え伸ばしてくる！？これ以上何されんだよッ！？ジョーダンじゃねえ！！！）

そんなこんなだ。

まあ確かに散々な目には合っていた。

世界に着いていきなり撥ねられ、ガジェットにちよっかい出されて、その場の人間に近づいたら悲鳴を上げられ、拳句の果てには包帯で

拘束。

これで勘弁してくれと思わない人間はそうそういないだろう。

バリー！！！！！！

当然、こいつも思った。勘弁してくれと。

故に

「あつ!?」

「に、逃げた!?」

逃げた。

脚を広げて包帯を裂き、とりあえずそこだけが自由になって、その場から走って逃走したのだ。

扉にぶつかり、ひっくり返ってから、再度アタックしてぶち破る。

「ああ!!うちの扉!!!」

「ま、待て————!!!」

廊下へと飛び出して言った包帯男をスバルがダッシュで追いかける。その後をティアナも追おうとするが、それをはやてが止める。

「ティアナ!!あの人、なんて言ってたか思い出せる?」

「え?えつと・・・ですね。そうだ、「この世界に来て」だとか「奴」の前に死ぬ」とか「世界最強!!」とか言っていましたけど・・・それより追わないですよ!!」

ティアナが男の発言をはやてに伝え、追おうと促す。

だがその催促は耳には入っておらず、最初の方の言葉に、はやての目が見開かれる。

「そんな……まさか……」

「や、八神部隊長？」

「はやてちゃん？」

ティアナとラインが心配そうに顔を見る。  
その顔は驚きに満ちていて、そしてすぐにポカンと口を開けて笑った。

「帰って……来たんや」

「え？」

「ついに……やっと……」



そこでまた壁にぶつかる。

だが今度は一気にその壁を崩し、別の部屋に飛び込んだ。

そこは空き部屋のように、特に何もなく、さらに突き進んで反対側の壁も崩した。

その先は食堂。

だが、そこでさらなる衝撃が男を襲う。

バギャア！！！！

ハンマーが横なぎにぶち当たり、男の身体が吹っ飛んだ。

そのハンマーの持ち主はヴェータである。

騒ぎを聞き、アイゼンを取り出して気合を込める意味でブン回したのが偶然に命中したのだ。



「げ、げぼう……」

「え？あれ？おい！！お前、大丈夫か！？」

「ヴィータ副隊長！！その人捕まえてください！！！！」

「え？あ、ああでもよ……」

捕まえるまでもないだろ、とヴィータが言葉が続けようとする。

ところがどっこい、この男は今耳がふさがれてよく聞こえていない。そんな彼にはこう聞こえていた。

3592

『え？あは！！おっしゃ！！！！お前、大自滅な！！！！』

『ぶんどって腸！！その人のを！！得てください！！！！』

正直言って全然意味わからん。  
だが

(俺の腸をぶんどる!?!しかもこいつら俺ぶちのめして喜んでる!?)

彼はこう解釈してしまった。

「おおおおおおおおおおおおお………!!!」

そして再び走り出した。

その最も驚いたのはヴィータである。

あの勢いでぶん殴られて、まだあんなに走り回れるのか!?!と

「なんだよあいつ!?!」

ヴィータが走り出してその後を追う。

男は窓ガラスをぶち破って外に出て下に飛び降りてしまった。

「わかりません！……さっきの出勤の時にいきなり現れて来たんです！……！」

「いきなりだア！？」

スバルが一部始終を追って説明する。  
彼の言っていた事も含め。

それを聞いてヴィータの脚が止まった。

「マジかよ………」

「え？はい、本当ですよ？」

「いや、そうじゃねえ……返ってきたのか……あいつ……！」

「ヴィータ………」

「はやて………」

そこにはやてとティアナ、リインがやってくる。

「グイータ!!!さっきここに……」

「ああ、いた。間違いないよはやて、あいつだ!!!」

「やっぱりそうやった!?!」

「顔は確認してねえが、あんなでたらめな奴、あいつじゃなきゃ説明つかねえ!!!」

意気投合するグイータとはやて。

おいてけぼりの三人は何が何だかわからない。

「そ、それで結局誰なんですか?あの人」

ティアナの発言に、はやてが答えようとする。

ドオン!!!

だがその瞬間爆発音がし、皆に視線がそちらに向く。

「あかん・・・下手したら隊舎破壊されてまう！！！！」

「はやて、急ごう！！！！多分今は・・・シグナムだ！！！！」

二人が走って行ってしまふ。

その後を再び慌てて追い始める三人。

「ま、待ってくださいよ~~~~~！！！！」

.....

「貴様何者だ！？」

「もがもがもがががが！！！！」

男が窓から飛びおりて着地した場所。  
そこにはすでに先客がいた。

シグナムである。

そしてなにも言わず、いきなり切りかかられた。

「この騒ぎの元凶はお前か……大人しくしなければ……」

が、その言葉よりも早く男が逃げる。  
脱兎である。その逃げ足は速い。

「話を最後まで……」

「!？」

「聞けえ!!!!!!」

シグナムがレバンティンに炎を纏わせて斬りかかる。  
それを紙一重でかわし、包帯が焦げて腕が解放される。

「シグナムさん!!!!」

「高町!!!!こいつだ!!!!」

「わかりました!!離れてください!!!!」

そこになのはとフェイトが駆け付ける。

まあこれだけの騒ぎになれば出て来る来る。

レイジングハートを構え、そこに砲撃のため、魔力光が集まっ  
てい  
く。

「!?!?もがもががが!!!!!!」

「ハッ!!!!!!」

男が弁解しようとジエスチャーをとるが、それは伝わらず、足止めのためにシグナムがもう一度レバンティンを振るう。

が、それは驚愕にかわっていく。

「な！？素手でつかんだ！？」

そう、残った包帯越しとはいえ、男は炎に包まれたレバンティンを素手でつかんだのだ。そしてその炎で、今度は顔の包帯が焼け、ついに男の顔左半分があらわになる。

「あ……お前！！」

「んお？あ！！」

シグナムがその男を確認し、目を見開いて驚く。



「ディバイバーン!!!」

だがなのには見えていない。  
だからシグナムが避けることを信じて砲撃した。

「ま、待て、高町!!!」

「バスター!!!!!!!」

「くっ!!!」

「え?」

ドオン!!!!

地面を吹き飛ばして、砲撃が着弾する。

シグナムはとっさにその場から離れ回避し、それにふうっ、とスツ  
キリした顔をするのは。

「お、おい高町……」

「え？シグナムさん、どうしたの？」

「どうしたのではなくだな……あいつだ！帰ってきたんだ」

「え？」

シグナムの言っていることがよくわかっていないのはとフェイト。首をくりん、と傾げている。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、シグナム……！！！」

そこにはやて達が合流する。

「あ、はやてちゃん」

「どうした！？やってしもたか!？」

「その……高町が……砲撃を」

「えええええ!?!?!?!?! なんか、なら大丈夫やね」

「そーだな。あいつなら問題ねーな」

一瞬心配するはやてとヴィータだが本当に一瞬だけで、しれっとした顔をする。

「はやてちゃん、あの人が知ってるの？」

なのはの言葉に、はやてが意地悪そうな顔をして言った。

「なんや？なのはちゃんはもフェイトちゃんもわからんへんの？こん中じゃ一番付き合い長いんやで？」

「え？」

「誰？」

「しゃーないなあ、じゃあヒント！十年前！十年前！」

そのヒントに少し考える二人。

「十年前？はやてと会った時？」

「確かその時……あ、もしかして……本当に！？」

なのはとフェイトがまさか！という顔をした瞬間、土煙から腕が出てきた。

「なるほどな。そういうわけか。まさか三回も来るとは思わなかった」

そしてその腕が横に払われ、土煙が一気に消し飛んだ。

「世界最強、再び、だ！！久しぶりだな。シグナム！！！」

そう言って出て来たのは、きちんとした服を着ている時風だった。

「「舜（君）！？」」

なのはとフェイトが驚き、次の瞬間、蒔風に飛びついていく。

しかし

ヒラリ、ベシヤ

蒔風はその二人を避けた。

二人が地面にベチツ、と落ちて蒔風の方を向く。

「な、なんで！？」

だがそんな二人を見て、蒔風が言った。

「シグナムはいい、ヴィータもいるな。だがおまえら誰だ？」





部隊長室に戻ってきた蒔風。

扉はすでに蒔風が修復し、壊した部分はすべて元通りになっていた。

そして蒔風が黙ってはやての方を見る。

今、はやて、なのは、フェイトが並んで座ソファに座り、テーブルをはさんで反対側のソファに蒔風が座っている。

そして終始無言だ。

それはそうである

前回最後の時。

蒔風ははやての敵として立っていた。

彼女の大切な家族を消滅させた者として。



そしてそれは彼の胸に大きく刻み込まれている。

彼の敗北として、そして……

「……………」

その事を考え、目を閉じる時風。  
そして眼を開けて、こう言った。

「どうした？何か言いたいこともあるんじゃないのか？」

それはきつと、はやては自分の事を恨んでいるだろうという時風の推察からの言葉。

その後にくるのはきつと疑問の言葉だろう。「なぜ」「や」「どうして」と

しかしきた言葉は別物だった。

「ごめんなさい。そして、ありがとうございました」

はやてが立ちあがって時風の手を取って謝る。  
それに時風が目を見開いて驚いた。

「な……………」

「舜君があんときリインを消してしたいきさつ、全部聞いた。あんなときは、本当にすまんかった。十年間、舜君にあつたら絶対に言うと思うとった言葉や」

その言葉に、時風が手を振りきり、立ちあがって言った。

「俺は……リインを消した！！やっと救われたあいつを……中途半端に救って、それで……それなのに……そう簡単に、許されていいはずがない……」

時風がフルフルと首を振りながら座り込む。

そこにお茶が運ばれてきた。

「はい、お茶ですよー」

それは小さな人だった。

ユニゾンデバイス、という単語が頭に流れてくる。

「ありがとおな、リイン」

「ハイですー」

はやてがリインにお礼を言う。  
その言葉に、蒔風が頭を上げた。

「リイン？」

そこで蒔風にはやてが、リインフォース？を紹介した。

「舜君、この子が、二代目のリインフォースや。あのとキリインが残してくれたあの十字架。あれを元に再構築して、私が作った、私の家族。ほらリイン、挨拶せえ」

「はい！！初めまして……ですよね？はやてちゃんのユニゾンデバイス、リインフォース？です！！」

元気よく頭を下げるリイン。

それを見て、蒔風は

「わわっ……ど、どうしたんですか？泣いてるんですか？」

ほろっ、と、一粒の涙を流していた。

「そうか……あいつは……リインフォースは……自分を残せたんだな……よかったあ……」

そう言いながら小さなリインの手をとる蒔風。

その顔にすでに涙はなく、吹っ切れた顔をしていた。

「舜君のおかげやで？こうやってリインがおるんも」

蒔風にはやてがそういうが、蒔風は首を振ってこたえた

「俺は彼女を消しただけ。残したのは、彼女自身だ。だけどまあ……少しスッキリしたかな？」

いい笑顔で蒔風がリインを放す。

ありがとう、と言って蒔風が立ち上がる。

「でも、舜が来たってことは、「奴」が？」

フェイトが蒔風に訊く。

真剣な面持ちになってそれに頷く蒔風。

「ああ、どうやらそのようだな。だけどここは第一世界ミッドチルダ。計算も容易じゃない。今まで以上に長くかかるだろうからな。結構大丈夫だ」

「そうなんだ。じゃあいつしよにまたいられるんだね！！！！！！」

そういうのはだが、蒔風がピシリと言い放つ。

「そうとは限らないだろ？俺の立ち位置もわからないし、ってか、またなんか起こってんのかよ」

蒔風がやれやれと頭を振る。

「そういえば・・・お前ら何やってんだ？時空管理局に入るって前に聞いたけど」

「そうだね。舜君がいなくなってから十年だもんね」

「俺の方じゃそんなに経ってない。大体七ヶ月くらいじゃないか？」

「なんや、それズルうないか？こっちは十九歳になつとるんやで？」

「ずるくない。ってか、お前ら俺と肉体的に同じ年か！？」

「あ、そうなるね！！！！」

「本気で幼馴染かよ・・・ってかお前らはオレにとってあの時から今までズーーーーーと妹みたいな感じだからなあ」

「いまでも？」

「いまでも」

「そつやね〜舜君って「頼れるお兄さん」って感じやもんね」

「うんうん」

「私は・・・わかんないなあ」

「そらなのはちゃんはなア……」

「なのは、そう言うの疎いもんね」

女子三人が勝手に話しだしてしまったので、蒔風が話題を戻す。

「で、お前ら今何やってんだ？」

「うちは捜査官やっとなる」

「私は執務官だよ」

「で、私が武装隊の戦技教導官……」

「なのはちゃんすごいんよ!!管理局不屈のエース「エースオブエース」なんて呼ばれてるんやから……!!」

「はやてちゃんだって、私たちの中じゃ出世頭じゃん。フェイトちゃんだって執務官のエリートだし」



「そ、そんなことないよ……それに、舜だっですごくいいことにな  
ってるんだよ?」

「は?おれ?」

蒔風が自分を指さして驚く。

「十年前の闇の書事件。あん時の情報は確かにクロノが消していた  
はずじゃねえの!?!」

「そうだね。確かにクロノがなんとか洩らさなかったけど……」

「

「「銀白の翼人」は噂と言うか、都市伝説みたいに残ってるんだよ  
?」

「ええ~~~~~~~~?」

「闇の書事件を解決した管理局自慢の三人娘!!!!しかしその戦闘

中、現れた者、「銀白の翼!!!」「

「確かな資料映像とか証拠は何もないけど、やっぱり人の口には戸は立てられないって言うでしょ?」

「それでさらに母さんの事件の時もいたらしい、なんて話になっちゃって……いろいろと伝わって、今や舜はこの世界じゃ英雄扱いなんだよ?」

なんだか自分の知らないところでどんどんよいしょされていく蒔風。

そんな蒔風の感想は

「なにそれ、怖い」

だった。

「え?なに?オレの事そんな風に伝わってんの!??」

「管理局のお偉いさんにも結構問い詰められたんよ?」あの噂は本当か!?!「って」

「本当のこと話してもしょうがないから知らないって言ったけど・・・」

「マジか・・・列車で開翼しないでよかった・・・」

「ホントだね」

そんなこんなで懐かしい話をしていく四人。

そこで、ふと時風がポケットに手を突っ込んで、何かを取り出した。

「なんだこりゃ？」

「何それ？」

「う〜〜ん・・・どうやら何かのカードだな。たぶん、この世界でのオレの役割が出てくると思う。ほら」

時風がカードを机の上に置くと、ジンワリとカードに色や写真、文字が浮かんできて、一つの身分証となった。

「なにになに？時空管理局本局 古代遺物管理部 機動六課……  
機動六課？」

「ここ！？ここに舜君入るの！？はやてちゃん！！！」

「ちょ、なのはちゃん揺らさないでえ……」

そうして、世界が与えてきた時風の役職は機動六課の遊撃戦力。  
まあつまりは

「好きな時出て好きな時戦えってことか？」

「それ違つと思つ……ねえ？はやてちゃん」

「面白いから採用」

「部隊長！！！！それでいいのでありますか！？」

「何言つとるんや！！！！ここでは私がトップ！！！！何者にも反論は  
ゆるさへん！！！！」

「うわぁ！！！！独裁者！！！！！！」

なんだか十年の間に明るくなったはやて達に安心して、時風がいろいろと説明を受ける。  
はやてが机に向かうと、すでにそこには時風の書類があり、一発受理。

いろいろと用意周到なものである、世界。

こうして時風は機動六課に入った。  
さて、この物語はどのように歪んでいくのか。

先はだれにも見えない

t o b e c o n t i n u e d



なのはStrikers　↳そして対面、久々の再会↳（後書き）

やっと出会えたやつとしこりを解消できた!!!

アリス「蒔風にとってリイン？の存在はある程度の救いにはなった  
みたいですね」

まあ、あれは彼が背負った罪ですから。

これからも背負って行くと思いますが、とりあえずはやてに対して  
大きな負い目は無くなったんじゃないかと。

ア「そういえばなかなか説明文ってなかったですよね？」

そうですねえ……

ライダーとかなんかだとわからない人のためにいろいろ説明つけま  
すけど、今回は三回目だし、何より「なのは」

皆さんが知ってる事前提で書いちゃいますからね。

ア「ほう」

それより、ついに昨日買いましたなのは劇場版!!!!!!

熱い！！燃える！！かつこいい！！！！

こいつぁ………ヒーローものだよ！！！！！！

ああ、あの世界に訊きたくなって来て来る。

なぜこの世界には時空跳躍の力がないんだ！！！！！！

ア「no Name」ですからね、作者の世界は「

チクシヨオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

ア「次回、ティアナ達にはどう話す？」

ではまた次回

勇気の意味を、知りたくて。



なのはStrikers　く翼人？うっそだあく

「結局、昨日のあの人はなんだったのかしらね」

リニアでの事件から翌日、機動六課の隊舎内食堂

そこで早朝訓練を終えたティアナたちフォワード陣がシャリオ・フイニーノ、通称シャリーリーと一緒に朝食をとっていた。

「さあ（モグモグ）でも、なのはさんたちの（モグモグ）知り合いましたね」

「スバル、食べながら喋らない。シャリーリーさんは何か知りませんか？」

ティアナがフェイトの執務官補佐を勤めるシャリーリーに聞く。

だが彼女もよくわからないそうだ。

「話に聞くとフェイトさん達が最後に会ったのは十年前らしいんだよね」

「十年前……って、確か……えっと……（モグモグ）」

「闇の書事件の時ですよね？」

「そうだね。でもそんな長い間何やってたのか……私もあんな人がいたなんて聞いてないしね」

シャーリーが頭を捻る。

そこでエリオが口を挟んだ。

「じゃあ、あの人は知ってるんですかね？」

「何を？」

「ほら、あの噂ですよ」

「「翼人」のこと？あんなもん、ただのお伽話でしょ？」

「えー？あたしはいると思うな！」

「スバル……エリオもそう思ってるの？」

「はい。っていうか、フェイトさんから聞いたことがあるんです」

「ほんと！？」

スバルが身を乗り出し、それに合わせて残りの四人も身を乗り出し、

エリオがヒソヒソと話した。

「フェイトさんが昔の話をしてくれたとき、助けてくれた人がいるって。はっきりとは言ってなかったですけど、多分「翼人」のことでした」

「本当に？フェイトさんのお伽話じゃなくて？」

「話してるときのフェイトさん、とても懐かしそうでしたし、多分作り話じゃないと思います」

エリオの話に、はぁ~~~~と感心と溜息の混じった声を出す一同。

「エリオ君、なんかずるいなあ。私そんな聞いたことないよ？」

「あ、えっと、僕が話して話してってその時頼み込んだから・・・」

そんな話をしていると、食堂の角の方から声が聞こえてきた。

「……………プリン!!」

「だあ!青龍!いきなり出てくんな!!なんでてめえ!ごういづのは積極的なんだ!!」

「シヤケもーらい!」

「白米、いただきます」

「ったく、てめえらなにやってんだよ。お、沢庵たくあんもらうぜ?」

「お前らいい加減にオブツ!」

「お主らは!主の朝食を奪うな!!」

「獅子よお、そう言っつなよ。食事くらい俺等が楽しんでもいいだろ?」

「天馬!!麒麟からもなんとか……………」

「ダメだよ。麒麟とじっちゃんおじちゃんは朝は舜より弱いんだから、まだ寝てるよ?」

「ってかお前ら……俺の上からどけ……」

五人が視線を向けるとそこには蒔風と、人型顕現した七獣（二体欠席）がいた。

蒔風の朝食を奪い、その上にのしかかっている。

構図としては

天馬（足組んで沢庵ポリポリ）

青龍（プリン味わい中）

白虎（焼シヤケモグモグ）

朱雀（白米）

蒔風（俯せ）

床

となっていて、それを傍らに立って獅子が注意していた。

「主が潰れる！！早く退け！」

「舜はなんくらいじゃどーってことねえよ」

「そうそう、舜ならいけるいける」

いけしゃあしゃあと saying のける天馬と白虎。  
それについてキレた時風。

「んなわけあるかあ！！」

ドバァ！！と時風が起き上がり、上の奴らをはねのける。

その勢いに全員がテーブルの向こうに飛ばされ、誰にも見えないように剣に戻る。

もちろんその間に食うもんはしっかり食っていたが。

やれやれと獅子も頭を抱え、剣を回収して時風の背に消える。

「OTL うう……あの野郎ども……朝飯全部とりやがった……」

がつくりとうなだれる時風に五人の視線が突き刺さり、ティアナが不意に口を開く。

「何やってんのかしら……」

「さあ？」

ぼそぼそと話すティアナ達に気付いたのか、時風が身体を起こして近づいてきた。

「おつす。どーやら昨日はメーワク掛けたみたいだな」

「え？あ、はい」

「自己紹介をしておこうか。オレの名前は蒔風舜。なのはの友人やつてる。よろしくな」

「は、はい。私はティアナ・ランスターです」

別に管理局の人間じゃないから、階級は省いてティアナが自己紹介する。

それに続いて、スバル、エリオ、キャロ、シャーリーと自己紹介を済ませ、蒔風も同席させてもらう。

「さっきのは一体誰だったんですか？」

そこでエリオが気になる事を聞いた。

そりゃそうだ。あんだけ騒いでたんだから。

「あれ？ああ、あいつらはオレの……なんだろ、使い魔みたいなもん？」

「使い魔をあんなに連れてるんですか！？」



その事実にはティアナが驚愕する。

使い魔一体作るには多くの魔力と資質が必要だし、その数が多ければ多いほど、維持するための魔力も膨大だ。

一体この人何者なんだろう、と推察し始めるティアナ。

そこでスバルがべつの話聞いた。

「なのはさん達とはどれくらいの仲なんですか？」

「なのは？ そうだなあ……十年前に事件を一つ解決して、その半年後にもう一個……それだけだな」

「確かその事件って……」

「おや、さすがにフェイトの補佐。知ってるか。P・T事件に闇の書事件な。あんときにちこつと協力したぐらいだな」

「でもそれから十年間って何してたんです？」

「あ？ おー、えーっつと……」

そこで時風が言葉に詰まる。

(どこまで話したもんかなあ・・・いつもだったらホイと話すけど、  
なのはの教え子たちの前だからなあ・・・)

時風が腕組んで考え込んでいると、そこに珍しい客が現れた。

「舜君、ここにいたんだ」

なのはである。

それだけでなく、フェイトやはやてまでいる。

突然の隊長部隊長三人の登場に、ティアナ達四人のフォワード陣が  
びっくりして立ち上がった。

「な、なのはさん!？」

「あ、スバル、私たちも一緒に言いかないかな？」

「は、はい！！大丈夫です！！」

そうしてなのは達も会話に加わる。

そうそうたるメンバーにスバルはテンションが上がり、ティアナが恐縮してしまった。

そんな中でもスバルはゴーイングマイウェイ。

ちょうどいい、となのはに声をかける。

「あ、そうだ。なのはさん、聞いてもいいですか？」

「なにを？」

「十年前のことですよ！」「翼人」が出たって本当ですか！？」

ブホウ！！

あまりのストレートな質問に、蒔風が噴き出し、なのは達があはは・・・と笑う。

『どこまで話すよ?』

『舜君の気分でいいんじゃない?』

『でもお前さんが狙われるって話だぜ?』

『う~~~~ん…………』

蒔風となのはが念話で話し合う。

確かに、自分たちの教導官せんせいの命が狙われるだなんて言われたらシヨツクだろう。

『うまく隠して離せないかな?』

『おれあ欺くのはできても嘘つけない人間なんだよ』

念話ばかりしていつこうに黙ったままなのはと蒔風に、エリオが聞いた。

「じゃあ、蒔風さんはなんで来たんですか?」

「そうですね。十年も会わないで、どこで何をしてたんですか?」

更にキャラ口まで乗っかって、蒔風に好奇心に満ちた視線が向けられる。

それに蒔風がうるたえ、あー、とかうーとかうなる。

頭をガシガシと掻いて、顔に手を当てて、考えてから、やめた、と言って話し始める。

「やめたやめた。どーにも隠し事はできん。正直に話そうか。びっくりすんなよ？」

そして蒔風が話します。

その内容はいつも世界で話すことだけで、翼人までの事には至っていない。

だがそれでも彼女らを驚愕させるには十分なインパクトがあった。

「な、なのはさんが!？」

「殺される!？」

「って話だよ。させないからな」

「それにしても高次の世界を回ってるだなんて……………」

「それがオレさんの…………まあ、やらなきゃならないことだからね」

そう言つてテーブルの真ん中におかれたスパゲッティをつまんで食べる時風。  
フェイトやはやては知っていたことだが、初めて知らされたフォワード陣はシィン、としてしまう。

そんな状況に、またエリオが口火を切る。

「で、時風さん、結局「翼人」は……………」

「あん?……………言つてもいいのか？」

「是非知りたいです!!管理局で英雄とされ、あの伝説の中でもさらに伝説とされている「翼人」ですよ!？」

「ミッドチルダの子供たちならみんな懂れていますよ!?!?!」

スバルとエリオのどーしようもない感じのよいしょに時風がプルプル震えて涙目になりながらなのは肩を掴んで「どーにかして」と目で訴える。

「なんやむずかゆいなあ。もう言ってもたらどつや?」

「だつて~~~~こつ言つのは長引かせるのが面白んじゃないよ~~~~」

「「「「?」」」」

はやてと時風の話にはてな?となるみんなに、時風がついに言った。

「俺がその翼人ですよ。まったく、あまり言い広めないでくれよ?」

言った。ついに言った。だが

「冗談はいいですから、本当にいたんですか？」

「え？」

「時風さんは確かにわけわからないけどそれは別世界だからでしょう？なんか翼人って言う感じじゃないですよー」

「は？そ、それは……」

時風ががつくりと肩を落とす。

まあ確かに、へらへらしてるし、身体はヒョロい方だし、雰囲気は完璧にお兄さんだ。

対してスバルたちの思い描いている「翼人」は、いかにもな感じの英雄さん。

これで本人が「俺が翼人です」なんて言ってもその場しのぎの逃れ回答にしか聞こえないのも無理はない。

「……う……う……う……」

「で、時風さん、あなた翼人知ってるんですね？どんな人ですか？」



好奇心満々で聞いてくるエリオにスバル。  
頭を押さえるティアナにあはは・・・困ったように笑うキャロ。

そんな彼らに、蒔風が言った。

「なのは、こいつらの午後訓練、模擬戦にしていいか？」

「え？私はいいけど、ヴィータちゃんがなんて言っかな？」

「と、言うわけでここにヴィータを呼んどるよ」

「早あ！？いつの間に!？」

「うちは空間、広域魔法のエキスパートやで!?!?!?!」

はやてさん、それ違います。

ともかく、はやてが通販で紹介するようにヴィータを出した。  
本当にどっから来てたんだろう。

「あたしはいいぜ？手間が省けていいもんだし、舜が相手ならまあ無茶はしないだろ」

「そうだね。だったら任せるよ」

と、教導官二人の許可があり、蒔風がよっし、と張り切る。

「お前ら、吠え面かかせてやっからなあ！！！！覚悟しとけよ！！！！」

そう言いながら部屋から飛び出す蒔風。

ポカン、とフォワード陣がその後を目で追い、どうしようかと話し合った。

「ね、ねえ。ほんとだったんじゃない？ティア」

「大丈夫よ。私たちはいままでだって訓練をしてきた。勝てるとは思わないけど、全力を出せば一撃くらいは……」

ティアナがやる気を出しながらそう言う。  
だが、そこに声かけられる。

「甘いな」

「あ、シグナム副隊長」

その背後に立っていたシグナムが腕を組んで立っていた。

「話は聞いた。おまえら……………」

そう言ってティアナの肩を掴み、マジ真剣な目をして忠告した。

「その……………なんだ……………やってしまったな」

「あー、そっか。シグナムいっぺん舜と戦ってたもんな」

「ああ……………正直に言おう。死を覚悟した」

その一言に皆の背筋が凍る。

エリオとキャラコがガタガタ震えながらフェイトにしがみつくが、フェイトと目があった瞬間、ブワツ、と涙を流して口に手を当てた時、

自分たちは終わっただ、と肌で感じた。

なのははいつこうに目を合わせようとしないう、はやては今から医務室のシャマルに連絡を取っていた。

「確かに強いのは列車で見ましたけど、そんなにですか!？」

「やばいで〜〜〜?正直、リミッターはずしてもうちら全員でかかって勝てるかどうかや」

「うつつそお……………」

シャーリーがずり落ちた眼鏡を治しながらつぶやく。

隊長格の五人は「一つの部隊の戦力基準」のラインを越えないように、その力に制限をかけ、ランクを二個か三個落としている。

そのランクを元に戻しても勝てるかどうか。

いや、あの感じだと結構絶望的みたいだ。

「そんな…………隊長格五人がかりで!？」

「うっん。舜なら多分ザフィーラとシャマルがいてもで勝っちゃいそう」

フェイトの言葉に全員が同時に立ち上がって模擬戦の仕度を始めた。汗ダラダラで、その眼は必死に光っていた。

「フェイトちゃん、さすがにあれは言い過ぎじゃない？」

「そうかな？ 舜なら出来そうな気がするんだけど」

「八神家オールスターズだけならともかく、お前らまでいたらそれは無理だよ」

「!？」

フェイトの言葉にいつの間にか戻ってきていた蒔風が答える。

曰く、三人同時、もしくは八神家オールスターズなら勝てそうだが、全員だと結構きついらしい。

理由としては「数がいるとこっちも疲れる」だからだそうだが、それはめんどくさいだけであって決して勝てない、というわけではない気がするのだが。

「それで、舜君は何しに戻ってきたん？」

「そうそう、はやて、聞きたいことがあるんけど」

「はいはい」

「模擬戦ってどこでやるの？あと、俺の部屋は？」

「」「あ」「」

こうして模擬戦の準備が整って行く。

「スバル！！あんた気い抜くんじゃないわよ！！！」

「だ、大丈夫だよ！！！ぜ、絶対やられないもん……絶対だもん！！！！（涙目）」

「逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ逃げちゃダメだ……」

それまでの間、フォワード陣は必死になってモチベーションを上げていた。

がんばれフォワード。  
負けるなフォワード。

君たちはきっとやれる

t o b e c o n t i n u e d

なのはStrikers　〜翼人？うっそだぁ〜（後書き）

フワードたちの次回の健闘にご期待下さい。

アリス「打ち切りみたいに言わないでください。可愛いそうに・・・  
あんなこと言ったから」

ぶっちゃけエリオスバルあたりは「どうだろう？」、「ティアナは「  
ごまかしてますね」、「キャラは「この人との接し方わかんないや」  
って感じですよ。」

ア「きつと心の底で後悔してますよ」

でしょうね。

あのシグナムさんが「あいつと戦えていいな」ではなくマジものの  
忠告しましたからね。

ア「それは恐ろしい」

まあ彼女前回大変なことになりましたから。

アイアンクローとか

そうそう、作者最近ニコニコ動画で「文字を読む動画」タグのもの  
を見るんですよ。

その中であつたものに、「スカツとするコピペ集」ってのがありま



してね。

ア「笑いましたか？」

泣いた

ア「え？」

もう感泣号泣涙ポロポロ

あんなに泣いたのはアニメ版CLANNAD風子ルートストーリー  
ー見て以来ですよ。

「ブワツ」という効果音が耳に聞こえてきたくらいです。

いくつかは確かにスカツとしましたが、その4とか5あたりで泣き  
ました。

ジーちゃんとか自衛隊の女の子とか唐揚げの話に泣いた。

暇があつたら見てみることをお勧めします。

あれはいい動画だ。

ア「作者のそんな話も終わって、私から報告を。

「世界をめぐる銀白の翼」でめぐる世界はもう決定してしまいまし  
た。

ですのでもし希望してこの世界出して!!という方がいらっしやっ

たらすみません」

そうなんですネ。

もうどんな世界を回っていくかは最後まで流れが決定してしまいました。

ですので懇願されても出せない……  
本当にすみません！！

ア「次回、蒔風VSフォワード四人」

ではまた次回

誰にも負けない夢があるから

なのはStrikers　〈模擬戦ゴーゴー〉

そして時間がきた。

蒔風はなのは達の案内で訓練場だという場所の前まで来ていたが、目の前に広がるのは海海海。  
海岸沿いの公園みたいな感じのフェンスに集まったただけだった。

「まさか海上戦とか言わないよな？」

蒔風がどこで戦うんだよ、となのはに訊く。

そこでシャーリーが自信満々に代わりに答えた。

「ふっふっふ。ではご覧あれ！！機動六課自慢の訓練シュミレーションー！！ポチツとな」

シャーリーが浮かび上がったコンソールのボタンを操作して、起動させる。

すると洋上に浮かんでいた巨大なプレートから、廃墟と化したビル群が出現してきた。

「おーーーーー!!! すごえすごえ!!! 何あれ!?! ホログラムとかじゃないんだよね!?!」

「はい、ちゃんとした実物ですよ。あそこでいつも訓練や模擬戦をやってます。結構暴れても大丈夫ですよ?」

そう訊いた蒔風がにやりと笑う。

その光景を見ていた彼女達は……

「終わったな」

「だ、大丈夫だよ! 舜だつて模擬戦つて言ってるんだし、手加減はする……よ」

「フェイトちゃん……もおちよい自信持つて言おうな?」

「ま、舜だからなあ……お、来たみたいだ」

そんな話をしていると、準備の整ったフォワードたちもやってきた。

「いけそうか?」

「わかりません。でも、全力は尽くします」



『じゃあ、ルールは・・・そうだね、舜君にキチンとした一撃入れられたらフォワードの勝ちってことで。制限時間は十分!』

「あれ？ 蒔風さんの攻撃が当たったらいけないとかクリアしないと終わらないとか・・・」

『そんな無茶ブリ・・・できないよ(プツッ)』

「え？ あ？ なのはさん!？」

「さって、こつからは俺たちの領域だ。オレの事ヒョロいとか言いやがった事後悔させてやつからなツァ!!!」

蒔風がマギマギマギと笑っている。  
どんな擬音だそれ。

「い、怖いです・・・」

「ビビってないで、行くわよ!!--打ち合わせ通りに!!--」



「ああっ！！飛びやがって！！こん畜生！！！！」

時風が銃弾をかわしながらフリードの下にあるビルに向かって走る。そしてそのビルの壁を一気に駆けあがっていった。

「そんな！！生身で壁走り！？」

そう言いながらティアナが双銃クロスミラージュで時風を狙い撃つが、くねくねと曲がりながら走っていてなかなか当たらない。

「キャロ！！！！」

「はい！！フリード！ブラストフレア！！！！」

「ゴオオオオオオオオオ！！！！！！」

ギィィィィィ、ドンッ！！！！！！

フリードの口の前に火球が生成され、それが時風のビルに放たれる。その攻撃にビルが爆発、崩壊していった、時風の身体もぐらりと崩れる。

だが崩壊して飛び散っていくビルの壁を一気に駆け抜け、フリード



に向かってジャンプする。

「スバルっ!!」

「オツケイ!!」

真っ直ぐにフリードへと跳んでいく時風に、右側から回り込んで青い道が現れてきた。

魔法によって作られたその道を、スバルがローラーブーツ型デバイス、マツハキヤリバーで駆ける。

「行くよ!!マツハキヤリバー!!」

《了解》

「なんっ!?!」

ウイングロードが時風に向かって伸び、空中でスバルを迎え撃つ時風。

膝と腕でスバルの拳を受け止めるが、その右手に装着されているリボルバーナックルが回転しだし、カードリッジを二発噴出した。

「リボルバー!!!シュート!!!」

ドゴッ！……と時風が空中で弾き飛ばされ、別のビルの壁面に着地する。

ガゴン

「あら？」

だがビルがそれに耐えられなかったのか、壁が崩れ、その中に時風が突っ込んでいってしまう。

「あー！ー！ー！ー！？」

その時風を見てスバルがウイングロードの上でガッツポーズをとるが、ティアナがまだだとスバルに叫ぶ。

「スバル！！油断しない！！今のはキチンと入ってないわよ！！！」

そう、今のはOKではない。  
時風はガードしていたし、ダメージもないだろう。

ガラガラと崩れる壁の中から時風が現れ、そのビルの屋上まで上がる。

そして腕をブンブン上下に振りながら、フリードを見て叫ぶ。

「お前ら空とか、飛ぶなー！ー！！！！くそう、でもここで開翼すんのもなんか軽いなあ……力を借りる！！！！」

時風がその手に銃を握る。  
そして左手には一枚のカード。

「ッたく……とりあえずこっち来い！！」

時風がカードを装填して指でディエンドドライバーをクルクルと回転させてからクンッ、と振る。

「Kamen Rider...」

「変身！」

「DIEND！」

その勢いにディエンドライバーの前部が前にスライドされ、時風がディエンドに変身する。

「こつちこいやあ...!!」 「Attack Rider...BLAST！」

時風の放ったホーミング弾がフリードの身体を回りこんで背に乗るフォワードたちに降り注ぐ。  
それから逃れるようにフリードが急降下して地面に降り、キャロが防壁を張ってそれを防ぐ。

場所は廃墟の大通り。

そこに時風も降り立って、カードを三枚取り出した。

「やっとこっち着たか。逃げられる前に、行ってらっしゃい!!!」

「Kamen Ride . . . ICHI-GOH! NI-GOH!  
V3!!!」

ディエンドライバーの銃口から三体分のホログラムが現れ、それが  
実体となって現れる。

その三体は、歴史に名を残す三大ライダー!!!

3660

「仮面ライダー、一号!!!」 (バツ!)

「二号!!!」 (グッ!!!)

「V3ア!!!」 (ガッ!!!)

そして三人並んでポーズをし、名乗りを上げるライダー。  
しかも最初からバイクに跨って。

これはかなり豪華である。

「スゴイ……」

「かっこいいー！！！」

そんな姿にスバルとエリオは目をキラキラさせている。

「どうだ！！かっこいいだろう！！このために彼らを出したと言っても過言ではない！！！！！」

この男、なにを言ってるのだろうか。

「さて……行け！！！」

時風の号令に三人が一気にバイクで駆けだす。

一号はスバルに、二号はエリオに、V3はティアナに向かう。

しかし三人のゆく手をフリードの炎が襲った。

だが三人は問題なくその炎を突破、各自の相手に向かって行き、V3は目標を変更し、フリードへと向かって行った。

「くっ、ウイングロード……！」

「待てえ……！トオ……！」

ウイングロードで逃げるスバルを一号がサイクロン号で追う。またエリオは二号のバイクに突っ込まれ、その真正面にしがみついで、二号と共にその場から離れていく。

V3はと言つと

「ハリケーン……！」

自身のバイク、ハリケーンと共に空中に跳び、その後輪を踏み台にして身体をブーメランのように高速回転させて上空にまで飛んだフリードに向かって行った。

「V3!!!!!!マツハ・・・キック!!!!!!」

空中を滑空してきたV3にフリードが炎を吐くが、その炎が回転によつてかき消されてしまう。

寸でのところでV3をかわすフリードだが、なんとV3が空中で旋回、再びフリードに向かってきた。

「え!?そんな!!!!フリード!!!!!!」

「ゴアアアアアアアア!!!!!!」

そのV3にフリードが今度は炎弾をぶつけ、マツハキックと相殺させる。

V3がビルの屋上に着地して、フリードを睨みつける。

「ちやあ……………こりやだめだ。だったら援軍!竜には龍だ!!」

「!」

「Kamen Ride…………RYUKKI!!」



時風が龍騎を召喚し、その龍騎が「しゃあッ!!」と気合を入れて拳を握る。

更にカードを装填し、銃口を龍騎に向けて発砲する時風。

「Final foam Ride - - RYU RYU RYU  
RYUKI!」

そして龍騎がファイナルフォームライドでリュウキドラグレッダーとなり、V3を背に乗せて飛んでいった。

「さて、残ったお前が俺の相手だ。ティアナ」

時風が後の戦闘は各自に任せ、ティアナと向き合う。

ティアナは非常に警戒していた。

増援を出し、自分たちをバラけさせ各個撃破を狙ってくるだなんて思ってもみなかったからだ。

まあ時風の「力を借りる」ことがあまりにも有利過ぎるのもあるが。

「射撃型のセンターポジション。楽しませてくれ、よっ!？」

時風がディエンドライバーを振り降ろしながら引き金を引く。  
飛び出た弾丸は一発。

だがその弾丸は振り下ろされた勢いで本来の者以上の威力をもって、  
ティアナのすぐ脇を通り過ぎていった。

「海東がどう使うかは置いといて、これがオレの銃撃戦だ。ハアッ  
!.....」

同じように次々と銃を振るって発砲する時風。

ティアナはその攻撃に地面を転がってビルの陰に隠れる。

バゴンバゴン!...!と、どんどんビルの壁が削られるなか、ティア  
ナは考えていた。



直撃は避けたものの、その衝撃にスバルがウイングロードから落ちてしまう。

そこにエリオを引き連れた二号もやってきて、二対二の構図になる。

「エリオ!!!」

「スバルさん!!!」

「大丈夫?」

「はい・・・でも結構離されてしまいました」

「うん。早くティアと合流しないと・・・」

だが目の前のダブルライダーに一切の隙はない。  
その風貌にはディエンドのレプリカとはいえ、流石と言わざるを得ない。

「とにかく、ここから逃げよう。私が道を開くから、エリオは行って!!!」

「わかりました!!!」

スバルがウイングロードを走らせる。  
それは一直線にダブルライダーに向かって伸び、その上を疾走して  
いく。

「デイベイーン、バスターーーーーー!!!!!!」

スバルの拳から砲撃が放たれる。  
だがそこで二号が拳を振りかぶって突撃してきた!!

「ライダー パンチ!!!!!!」

ドゴオウ!!!!!!

ライダーパンチで砲撃を打ち、爆発させてその爆炎の中から二号が  
出てきてスバルと取っ組みあう。  
さらにその煙を飛び越えるように一号がエリオに向かって来る。

「くっ、いっけえ!!!!!!」

エリオがその一号ライダーに向かって槍型デバイス「ストラーダ」を向け、そのブーストからの噴出で一気に突っ込んでいく。そのエリオに対して一号が両足をそろえ、命中と共に光を放つキックを炸裂させる!!

「電光オー……!!ライダーキック!!……!!」

カツ!!……ドオオオン!!……!!

エリオと一号がお互いに弾かれ、エリオが地上、一号が残ったままのウイングロードに着地する。そして一号が頭を上げた瞬間、真上からスバルの気合が聞こえてきた。

「ナツクルダスター……!!……!!」

ドゴオン!!……!!

一号が真上からの攻撃に腕で顔を覆い、それをガードする。

そしてスバルと一号の衝突と共に粉塵が上がり、その姿が消えた。

「スバルさん!!!」

エリオがすぐにそっちに向かおうとするが、その眼の前にスバルと戦っていた二号が変わりだと言わんばかりに立ちふさがる。

「くっ、そこを……え？」

エリオが構え、ウイングロードの上に視線を向ける。

そこでは竜巻が起こっていた。

確かにスバルのリボルバーナックルには回転するギアが付いているが、あんなに凄まじい竜巻を起こすものではない。

ならば、その原因は他にある。

土煙が晴れる。







キックで吹き飛ばされ、きりもみ回転しながらもスバルはなんとか体のバランスを取り戻し、よろけながらもウイングロードを出してその上に滑りながらも着地する。

膝をつき、肩で息をしているが、まだまだ戦えると言ったところ。そして周囲を見渡し、そこでディエンドに変身した時風とティアナの戦いが見えた。

ビルの陰からティアナが飛び出す。

時風がそれに向かって即座に銃口を向け、引き金を引く。

だが一発目は外れたのか、後方のビルの壁が崩れ落ちた。

そしてさらに銃を振って二発目を撃とうとしてそれが止まる。

たった一発の弾丸で壁を壊すのもすごいが、時風はティアナの幻術「フェイクシルエツト」を見破ったのだ。

ティアナが得意とするのは幻術魔法。

それをもって自分の姿を表し、敵を錯乱させる。おそらく今のも囹だろつ。

だがばれてしまっただけにも意味はない。

時風が銃口をティアナのいるビル陰に向ける。

その瞬間、そのビル陰から無数のティアナが飛び出してきた。

一瞬つろたえる時風だが、即座に銃のポンプを戻し、カードを装填する。

「Final Attack Ride - - DI DI DI  
DIEND!」

そして再びビルに向かって銃口を向ける。  
まるでその壁などないかのように。

ティアナの幻術が次々を時風に襲いかかるが、すべて無視した。  
なぜならその中に本物などいはいはしない。

「どっせやるなら、影までしっかりやっておけ」



「ハアツ!!!!!!」

そして蒔風の声と共にディメンションシユートが放たれ、ビルの一階部分を見事に吹き飛ばした。

だが蒔風の目はそのビル陰から離れていく。

そのビルの反対側から青い道が伸び、その上をスバルがティアナを担いで走っていた。

「ティア、遅れてごめん!!」

「間に合えば上等よ!!!!!!まだ来るわよ!!!!!!」

ウイングロードで逃げた二人だが、蒔風がディエンドライバーを振ってくる。

いまだに伸び続けるディメンションシユートをスバルがウイングロードやビルの屋上を走り回って回避する。

「ど、どこまでくんの~~~~~!!?」

「泣きごと言わない!!!!!!スバル!!!!!!後ろ向き走行!!!!!!」

ティアナの言葉に後ろ向きで走り出すスバル。  
それに関してはマツハキャリバーの車輪の回転を逆にするだけだからあまりスバルには負荷にはならない。

だが

「後ろ向きってなんか嫌だあ!!!」

「文句はあとで聞くから!!!クロスファイヤー!!!、シュート  
!!!!!!!」

ティアナの周囲にいくつもの魔力スフィアが浮き、それが一斉に時  
風に迫る。  
それらすべてをディメンションシュートで薙ぎ払うが、その間に砲  
撃が終わってしまった。

「やった!!!」

「今はとにかくエリキヤロを助けに行くわよ!!!!!!」

そう言って時風はひとまず後回しにして上空で戦うフリードの元に  
向かうスバルたち。

とにかく四人揃わないと対抗策の立てようもない。

急いで集合しようとするティアナだが

「チイ、させん！！！」

時風がそれをさせるわけがない。

「Attack Ride . . . CROSS ATTACK！」

「もう一丁！！！！」

「Final Attack Ride . . . RYU RYU R  
YU RYUKI！」

二枚のカードを立て続けに装填して発動させる。  
すると上空のV3の複眼が光り、ベルトのダブルタイフーンが回転  
を始めた。

「トオ!!!V3イーーーーー!!!」

V3がリュウキドラグレッダーから跳躍して上がっていく。  
その周囲をグルグルと渦を巻きながらリュウキドラグレッダーも上昇していく。

「!!!!スバル、急いで!!!!」

「うん!!!!・・・うわぁ!!!!!!」

その場に急いで向かおうとした二人だが、その目の前にダブルライダーが降り立つ。

「邪魔をツ!!!!!!」



「ま、間に合わないよ……!!」

そして上空ではV3が身体を回転させながら、キックを放ち、そのV3にリュウキドラグレッダーが炎を吐きかける……!!

「ドラゴンスクリューキック……!!」

そして放たれた。

V3が回転しながら炎の塊となってフリード、しいてはキャラロに向かってゆく。

だがキャラロはフリードの背でブースト魔法をかけていた。その対象はフリードではない。

駆けるべき相手は、V3の後方にいた。

「エリオ君っ……!!」

「行くぞ……!!……!! ストラダー……!!……!!」

《Y H E A ! ! ! 》

リュウキドラグレッダーよりも後方から、ブースターによって一直線に伸びてきたそれが、V3の身体を捉える。

それは槍を構えたエリオ。

どうやってそこまで上昇していたのか、二号によって吹き飛ばされたエリオはキャロの元へと向かって行っていたのだ

そしてそのエリオが、飛行機雲のような煙を残し、V3に突貫する  
!!!!!!

「なに!?!」

V3は完璧にキャロのみを捉えており、そのエリオの一撃をもろに食らってしまった。

エリオがフリードの背に着地し、V3が爆発して消えうせる。

リュウキドラグレッダーもファイナルアタックライドが発動したためか、役目は終わったとその姿を消した。

「やるじゃないあの子たち!?!?!」

「やったあ!?!?!?!」

「トオオ!?!?!?!」

「うわっ!?!?!?!」

だが二人の目の前にはまだこの二人が残っている。  
どうしよう!?!と聞くスバルに、ティアナが「あ」と思い付き、スバルに耳打ちする。

「あ、そうだね」

「やってみなさいよ」

「うっ」

そういうスバルとティアナにダブルライダーが迫る。  
そして

ダブルライダーの足元のウイングロードが消えた。

「え？」

「む？」

「「「はーいーいーい」」」

「「ぐああああああああああああああああああ………!!」」  
「

ダブルライダーが足場を失って落ちていく。  
ってかその叫び声はおかしいだろ。

そして蒔風の前にフォワードたちが集合する。

蒔風の脇にも一号、二号が駆けより、数の上ではティアナの方が有利だ。

「時間は後二分……！強引に決めるわよ……！」

「」「おう……！」

意気込むフォワードたちだが、蒔風がそれに笑いを含めた声で返す。

「まだこいつらのクロスアタックが残っているぜ？こいつらの攻撃に、耐えてみる……！」

「行くぞ一号……！」

「おう……！」

バツ！！！！

蒔風の声に反応してか、一号と二号が息を合わせる。

一号が左腕をまっすぐ右上に、二号が左腕を力こぶを作るようにし、右腕を胸の前で握る。

そして二人のベルト、タイフーンが猛烈に回転しだし、ダブルライダーが走り出した！！！！

「トオオ！！！！」

「来るわよ！！！！キャロ、防御魔法！！！！皆にもブーストを！！！！」

「はい！！！！」

キャロが防壁を張り、残りの三人も各自でプロテクションを張る。







「うん。さっきヴィータちゃんも言ってたけど、直接戦ってないからね」

その発現に皆がコクコクとうなづく。

シャーリーの眼鏡がズルツ、とずれ、それを戻しながら訊く。

「でもあの力何なんでしょう?」

「あれか? あれは・・・確か他の世界の力を借りている、と本人は言っていたな」

「かなり昔の事だからあたしは覚えてねーな」

何となくうる覚えのシグナムとヴィータ。

なのは達もなんだったつけ? と首をかしげる。

「確か・・・舜君の翼が願いを受け取れて・・・だったかなあ?」

「後で本人に訊けばいいやん。それよりほら、あん子たち、立ちあがったようやで!!!」

はやてがモニターを指しながらみんなをちよいちよいと呼びだす。



激！！！！！いやあ、やっぱ人って強いなあ！！！！」

そこに嫌味や皮肉の類は一切なく本当に純粋な感情をもって祝福している蒔風がいた。

「素晴らしい！！！！上出来じゃないか！！！！こんな事ならあんな力を見る戦い方じゃなくて直接ぶつかり合えばよかった！！！！」

蒔風がそう言い、そして倒れそうな四人を担ぎあげた。

「さ、怪我の治療な？しつかり治して、今度またやろう！！！！」

「できれば・・・・勘弁です・・・・」

「もう無理だよ~~~~~」

「くたくたです・・・・」

「同じく・・・・」

あつはつはつはと笑いながら蒔風が四人と一緒に歩いていく。その間にプーーーーー、とブザーが流れて時間終了を伝えた。

『舜君、どうだった？』

時風の前にモニターが出て、なのはが訊いてくる。  
それに笑顔で答える時風。

「スツゲーいいよこいつら！！おにーさん大満足！！！！またやり  
たいな！！！！」

『で、舜よお。信じてもらえたか？』

「なにが？」

『お前が翼人だということだ』

「あ」



『さあ・・・本人に訊いてみないと・・・お、来たぞ』

「あ、シャマル？おう、メツチャ久しぶり！！でさ、頼みたい事が・・・」

そう言ってシャマルと話を終え、通信を切る時風。

そして四人の身体を担いで、こう言った。

「アテンションプリーズ。これより、銀白の翼、テイクオフ」

その言葉に、四人が「え？」となる。  
そんな顔をしていると、羽ばたく音が聞こえて、体が浮き始めたではないか。

「なに!?!」

「え?え?」

「これって……」

「ま、時風さん!?それ……」

四人が時風の方を見る。  
そして言葉を失った。

時風の背には一対の銀白の翼があった。  
それは噂なんかよりずっと綺麗で、ずっと強く、ずっとずっと輝いていた。

「どうだい?これが俺の翼」

「すごい……」

「ほらティア!!!ホントにいたじゃん!!!」

「わかったわよ……それにしても……やっぱり……」

四人が思い思いに感想を口にする。

こんなことではいけないのか？と思われるがそんなことはない。  
訓練のプレートからなのは達がいる場所までの一直線に、シャマルが蒔風が翼を広げるくらい横幅に結界を張っていた。

大きな結界だと管理局から連絡が来てしまうが、訓練場の近くだし、この程度なら大丈夫だろう。

「いいか？あんまり言いふらさないでくれよ？」

「……………はい！！！！」「……………」

なのは達の元に着いて、四人が下ろされてシャマルが擦り傷などの手当てを始める。

それを眺める蒔風の横に、なのは達が寄ってきた。



「いい子たちでしょ？」

「そうだな。磨けば光るもんがあるってのはいいもんだ」

「舜だつて相当凄いでしょ？」

「俺は……磨かずにここまで来てしまったからな」

「??.?」

「ま、気にすんなや。これにてオレさんの翼人証明は終了だ。お疲れ様~~~~」

「ま、待つてくださいい蒔風さん!!!!!!」

と、そこにスバルとエリオが蒔風を呼びとめる。

なんだ!?!と振り返る蒔風に、とってもキラキラした目でこう訊いてきた。

「あの人たちってなんなんですか!!!!??すつごくかっこよかったです!!!!!!」

「うえ？そうかそうか、かっこよかったか！！それは本望、かっこよく戦うのは、俺の信条だからな！！！」

こうしてフォワードたちとも仲良くなっていく蒔風。それを見て、シグナムやヴァイターが感心していた。

「やはりすぐに溶け込むな、あいつは」

「そうでもしねーと世界なんざ回ってらんねーんだろ」

「ふ、それがあいつの、強みなのかもな」

「それと、蒔風さんってのやめてくれ、。そんなに歳離れてないしさ、だから……」

「でもなのはさんと同じ年なんですよね？呼び捨てはちょっと……」

「じゃあ、舜さん、でいいですか？」

「構わん!!!」

わーわーと元気にはしゃぎだす二人。

疲れた感じでへたり込んでいるキャラと、何かを考えているティアナも、その光景を見て何となく笑っていた。

「こうして、舜君は機動六課になじむことに成功した!!!っちゅうわけや!!!」

「その言い方だと打算的で嫌だなあ……………」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

なのはStrikers 〱模擬戦ゴゴ〱 (後書き)

はい、戦闘終了

アリス「こりやまた長い」

長いでしょう？

長引きましたよ全く

このころのフォワード陣はそこまで強くないし、だからと言って弱いわけでもないですから。どの程度に強くするか、難しかったです。

ア「でも途中からしょうじき忘れてたでしょう」

それはもう!!!

エリオがV3やっちゃったあたりなんか「しまったな」って思いましたもん。

ア「胸張って言うことか？」

フォワードの中で一番好きなのはスバル、エリオ。そんな作者でした。

ア「次回、今回のなのは世界の敵は!!」

ではまた次回

あれ?もう思いつかないや.....  
愛が足りん!!足りんぞ私イイイイイイ!!!!!!

なのはStrikers、フヘイト、受難の巻、

「ふあ~~~~あ.....あれ？なんでオレここにいるんだ？」

時風がいるのは森の中。

実際には森を再現した訓練場だ。

そこにあぐらをかいて座っている時風。

どろちからおっきまでうつらうつらだったよつである。

すぐそこではエリオとキャロがフェイトから訓練を受けていた。

「.....っっていう感じにね？」

「す.....」

(むっどろちから回避行動の訓練みたい.....だ.....な.....  
ねむ.....い.....)

そうして時風がまたコックリと首を倒してまどろみの中へとダイブする。

その光景をみて、キャロがあれ？と声を出す。

「あ……舜さんまた寝てる……」

「もう……朝弱いのは変わらないんだから」

フェイトが呆れた感じで笑い、時風を見る。

そしてそうだ、と何かを思い付いたのかエリオとキャロに耳打ちをする。

「今から舜に攻撃を向けてみるから、その動きを見てみてね？」

「え？でも寝てますよ!？」

「大丈夫。舜ならあの状態でも避けるよ」

そう言って時風を指差し、威力の低いスフィアを作って飛ばす。



エリオとキャラロが固唾をのんでそれを見守る。

そして、スフィアが

パコン、と時風の頭に当たった。

「あ

」「あ

三人が同じ声を上げる。

当の時風はというと、首が後ろに反ったがすぐに前に戻ってまだ寝ている。

「……………エリオ君、あの舜さんをどうやって連れて来たの？」

「え？普通に手を引いて来たけど……」

そう、蒔風をここまで連れて来たのはエリオ・モンディアルその人である。

昨日のこと、蒔風の寢床はどこにしようか、という話題になり、ちょうどフォワードで男子一人だったエリオと同室になったのだ。

エリオとしてはありがたい申し出だった。

何しろ同い年だからと同室にされたキャラは自分をなんだと想っているのか、いきなり着替え始めたり、風呂上がりにはバスタオル一枚で歩き回って牛乳を一気飲みしたりとその行動に困っていたのだから。

蒔風に、注意しないのか？と聞かれてエリオの答えは

「しましたけど、「エリオ君、恥ずかしがり屋なんだね」って言われただけでした……」

「oh……」

だった。

無邪気な子供は恐ろしい。

そしてなにより、あの翼人と同室だ。

エリオが断るはずもない。

そして一晩が明け、エリオが訓練に出ようと起き、ついでに蒔風も起こそうとして、そしたら蒔風が「うーうー」とか言いながら腕を伸ばしてきたのだ。

そしてそのまま手をとってここまで来て現在に至る。

そんな朝の状況をキャラロに教えていると、ポコポコポコと音が聞こえる。

エリキャラロが振り返ると、フェイトが一個当ててはもう一個、またもう一個とポコポコ蒔風の頭にスフィアを飛ばしていた。

それに応じて時風の頭もグラグラと揺れていく。

「フェイトさん！？何やってるんですか？」

「え？あ、あはは！なんだか面白くなつて来ちゃって……」

そう言いながらもスフィアを飛ばすフェイト。

「むっ、起きないなあ……」

「フェイトさん……そろそろ……」

「あ、そうだね。じゃあ（ガスッ）」

じゃあ二人とも回避訓練を始めようか、とフェイトが言おうとよそ見をし、効果音が「ポコ」から「ガスッ」になって止まった。

フェイトが恐る恐る振り返ると、時風を見る。

あぐらをかいて、腕を組んで座っているのは変わらない。

しかしその首は後ろにのけ反り、黄色いスフィアが顔面に減り込んでいた。

上を向いていてちらりと見える口元がヒクヒクと動いてもいる。





そしてついにそんなことまで叫んでしまったフェイト。  
しかし

「なるほど……ギリギリまで救援は呼ばないんですね!!」

「できるだけ自分の力でやり遂げる……流石です!!」

もうこの二人には現実など見えていない。  
なんかフィルターかかってしまっているようだ。

と、そこに

「ティアナ、あれを撃つてみて!!」

「は、ハイ!!」

パンパンパン！！！！

なのは&ティアナの訓練場から二人がやってきた。  
大方さっきのフェイトの叫びが聞こえたのだろう。

「いい？ティアナ、さっき教えた通りに、ああやって動く敵を打ち抜くのがセンターガードだからね。じゃあ・・・始め！！！」

そんなことを言ってフェイトと蒔風を訓練に使い出す始末。  
いま、あなたの親友が危機にさらされているのですか。

ティアナが蒔風を狙って発砲するが、全く当たらない。

その間にもフェイトが走りまわり、蒔風が追いまわす。

その動きを見ながら参考にし、エリオとキャラ口が回避訓練を始めて





「ずっとこない？オレさん飛べないのに！！！！」

「あれ？舜君飛べなかつたっけ？」

「飛べませんよ。力を借りればできるけど、オレ個人の力として飛ぶには開翼しにゃあなんのよ」

「舜君も魔力使えば飛べるのに」

「マジ！？魔力なら力変換して使えるって！！教えて教えて！！！！」

目も冴え、落ち着いてから今日の訓練は終了となり、くたくたと歩くフォワード陣となのはたち。

蒔風がなのはに飛行のイロハを教えてもらう約束をしていると、六課の隊舎前に着いて、そこで外回りに出ると言うはやと出会う。

なんでも今回彼女たちの追っているロストロギアは様々なルートで流れており、他の部署から人員を借りて調査するのだそうだ。

「ほんじゃ、行ってくるなー」

「行つてらっしゃいます。はやて、怪我すんなよ？ 気いつけるよ？」

「子どもやあらへんのやから大丈夫やつて。ほななーーーー」

そう言つて走り出すはやての車。

さすがに部隊長となると忙しそうである。

「そついえばさ、今回おまいらの追つちよるモンってなんだっけかな？」

「ああ、話してなかつたっけ？ 「レリック」だよ」

「なにそれ？」

「ここで話すのもなんだしき、一旦シャワー浴びてからにしよう？ 体中汗でベトベトだし」

確かにそうだ。

蒔風とフェイトは砂や土で汚れていたし、フォワード陣は汗ダクダ

ク。

よってそんな感じでシャワーになる。

しかし男のシャワーなんぞはあっちゅうまだ。

そんなわけでエリオと蒔風はシャワールーム外の階段に座っていた。

「それにしても舜さんって本当にすごいんですね!」

「おだてるなよ。ほれ、ジュースだ」

「あ、ありがとうございます。でもフェイトさんと追いかけて回れるなんて相当ですよ?」

その言葉に笑いながら肩をすくめる蒔風。

「耳が痛いな。あいつの・・・と言うかお前ら全員もだけど、その力は自身の成長で得ていったもの。オレのは得てしまったものだから、純粹に素晴らしいかと言ったら、お前らの方が断然いい力だよ」

「?????」

エリオが蒔風の言葉に首をかしげるが、蒔風がま、それは置いといて、と話題を変える。

「確かエリオってフェイトの保護下にあるんだっけ？」

「そうですね。キャロも一緒にです。引き取ってもらえて、優しくしてもらって、家族をくれました。フェイトさんは僕のお母さんみたいなものですよ」

そのエリオの顔を見て、蒔風が柔らかく笑う。

そしてその頭をガシガシと撫でた。

「え？うわ、なにするんです!？」

「にゅっふっふ!!!いいなあ!!!お前、幸せもんだよ!誰かが何かを残す。俺にもできたらねえ.....」

そんな感じで揉みくちやとじゃれ合っているうちに、女性陣が出てきた。

そのシャワー室にはフォワード陣しか入っていないなかったので、ティアナたち三人だけだったが。

蒔風が立ち上がって「んじゃ、ここで」と言ってフェイトの元に行



部屋に入り、蒔風もモニターを見る。

「これってあのガラクタどもじゃねえか」

「ガラクタって……結構厄介な奴らなんだけどなあ……」

蒔風の言葉にガツクシとなるシャーリー。

それを見てフェイトが軽く笑う。

「舜が使うのは魔法じゃないからね。だからAMFも意味がないんだ」

「はーーーーー。じゃあ何使ってるんですか？気合？」

シャーリーが感心したように蒔風に訊く。

それに対して蒔風が顎にを当てて答えた。

「AMFって魔法効かないエリアだろ？そりゃあ俺には効かないね。俺は他の世界で仲間になった奴らの力使ったり、十五天帝使ったりするけど、基本的に俺の力は「願い」だね」

「「願い」ですか？」

「翼人ってのはその翼に各人異なった感情を司っているんだけどな、

俺のはその想いつてのが「願い」なんだよ。で、ありがたくも俺のことを心配してくれる「奴」のオレに無事でいてくれ、とか力になりたい、って思いを翼が受け取って、それを使ってそいつの力を俺が使用できる、というわけ」

「じゃあ他の事も出来るですか？」

「たしか……炎とか雷出してたよね？」

「おう、あれは単純な変換だな。力を炎とかに振り分けて使つてんよ。だから出そうと思えば魔力も出せるよ？」

蒔風が自分の説明をし、そんなことは置いといて、と自分がここに来た目的を聞く。

「レリックって何なん？」

「レリックは……第一級搜索指定ロストログア。性質としては高エネルギーを帯びる「超高エネルギー結晶体」であることが判明してるんだけど、本当のことはよくわからないの」

「ふうーん。とにかく、よくわかんない魔力を持った塊があつて、なんかの拍子に爆発するとやばいから確保して安全な場所に保管しよう、ってことだな？」



「おおむねそんな感じかな？そして……」

「それをこいつらが集めてるってわけね？」

そしてモニターに出ていたガジェットドローンの映像を見る。

「このカプセル型のが？型。飛行機みたいなのが？型。大きな球体型のが？型」

「これどっから来るんだ？」

「それはわからないですよえ……この写真のはシグナム副隊長やヴィータ副隊長が捕獲したもんなんですけど」

「捕獲つてか、破壊、回収だな」

そんなことを話しながら写真が次々に出されていく。そしてその内の一枚にフェイトと時風が注目した。

「シャーリー。二枚後に戻ってくれ」

「え？はいー、二と」

そして望みの画像が出てきた。  
それはガジェットの内側の配電盤のようなものだ。

いくつもの回路が張り巡らされ、その中に二人のよく知る物が取り付けられていた。

「おお、やっぱりジュエルシードじゃねえか」

「ジュエルシード？」

「私となのは、舜が、昔集めてたロストロギア。でも全部回収したはずなのに……」

「大方、どっかのバカに盗まれたんだろ？ほれ、ご丁寧に名前まで書いてあらあ」

そう言つて蒔風が指差したところには確かに名前が書いてある。  
その名前を見て、フェイトが重い声を上げる。

「Dr・ジェイル・スカリエッティ……！！！！！！」

「だれ？」

蒔風の問いに、モニターから目をそらさずにフェイトが答える。

「ドクターの名の通り、生命操作や生体改造、精密機械に通じた科学者で、ロストロギア関連以外にも数多くの事件で広域指名手配されている次元犯罪者。私がここ数年追ってる奴」

「生体操作に生体改造、ね。それはまた因縁がありそうだな」

「あるよ……とつても」

フェイトの目に因縁じみた何かを感じとつた時風がフェイトを見、そしてモニターに映ったジェイル・スカリエツティの顔写真を見た。その顔には大人しそうな表情に、何もかもを欲したがるような目が張り付いていた。

「で、でも、なんでこんな名前出しなんかしたんでしょうか？ リスクしかないんじゃない？」

「いいや、科学者つてのはな、自分がやったつていうことを証明しなきゃならない性分なんだよ。何かを成し遂げても、誰がそれをやったのかわからないんじゃない意味がないだろ？ 「自分の出した結果です」って公表しないとやっていけない人種なんだ。もちろん、すべてそうとは言えない。だけどこう言う俗にマッドサイエンティストなんてやつらは大体そうだね。一言でいえば「自己顕示欲が強い」」

「でも、簡単に決めつけるのは早いよ。もしかしたらはったりブラフかも」

「そこを含めて調査しないとな」

蒔風がにやりと笑いながら改めてモニターの男を見る。

経歴はともかく、その内容は天才的だし、素晴らしい頭脳の持ち主であることがうかがわれた。

( いい顔してる。自分の欲望に忠実な顔だ。問題は………そこで迷惑になるかどうかだけだな )

そうして蒔風は敵を知る。

物語が大きく動き出した。



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

Ἰᾶ  
Ἰᾶ  
Ἰᾶ  
Ἰᾶ  
Ἰᾶ  
Ἰᾶ  
Ἰᾶ  
Ἰᾶ  
Ἰᾶ  
·  
·  
·  
·  
·  
·  
·  
·  
·  
·

なのはStrikers　〜フェイト、受難の巻〜（後書き）

今回は日常andスカさんでしたね。

自分の中ではスカさん嫌いじゃないんですけど、なんかアニメ見直したら悪いやつだった。

二次創作のスカって大体いいキャラかネタキャラだからかなあ

アリス「いろいろぶっ飛んでる人ですしね」

ラボの中に何人も女の子が居るカプセル並べてたもんね。あれじゃただの変態にしか見えないよ。

ア「彼女たちはみんな実験材料………クズですね。そつえばば蒔風、飛行訓練うけてましたね」

長く生身で飛べなかつたですからね。飛ぶには開翼か力借りるかでしたから。

いや、作者としては早く飛ばせたかった。

この話で飛べないって結構大変だし。

ア「でもすぐに習得しますよね？」

しますよ。

身体に慣らすのは早いですから、彼。

ア「次回、海鳴市へゴー！！サウンドステージだ！！」

メタな発現しない。

ではまた次回。

もう大丈夫、安全な場所まで一直線だから！



なのはStrikers　↳出張！機動六課！！↳

蒔風がフェイトと追いかけてこしてから数日後

「出張任務？」

「らしいぜ？なんでもロストロギアが確認されたらしいから」

朝食の場で蒔風が伝言をフォワードたちに伝える。

今日は珍しくまともに早朝訓練に出られたので一緒に訓練を見て、  
自分も飛行の訓練をしていたのだ。

「なのフェイはやてにシグナム、ヴィータ、それからオレ、シヤマルにリインとお前からだな。相手がロストロギアだけあって万全に行きたいらしい」

蒔風が少なめの朝食をとって説明する。

その目の前では超山盛りのご飯をよそっているスバルとエリオがモリモリと食べていた。

「それで、どこなんですか？出張先は」

ティアナが質問し、それに後ろからの声が答えた。

「第97管理外世界、現地名称、地球」

「今回の任務はその島国の町だよ」

「なのはさん」

「フェイトさん」

そこには朝食を持った二人がおり、席に座って朝食をとる。

「ま、言っちまえば俺達のホームグラウンドだ」

「確かなのはさんたちの故郷ですよね？」

「オレやフェイトがなのはとであった場所さ。懐かしいねー」

「最初に会ったのって確か……」

「オレとなのはは小学校で会ってたけどな。意味のある出会いは森  
ん中でだな」

「あの時の舜がさ」

「貧乳？」

「（スパアン！）何を言ってるのかな？舜は」

「いやあ、話したいもん」

「ダメ」

「やめて」

二人が時風を止める。

一体何があったのか、フォワード陳がわからない顔をする。

「と、とにかく、みんな、食べ終わって書類整理が終わったら準備してヘリポートに集合ね？」

「……はい！」「」「」

そうしてなのはフェイトが時風を引きずってその場から去る。

直後、恥ずかしさが込められた悲鳴と、その話を始めた男の痛々しい悲鳴が聞こえた。



並べ！」

「男子はエリオしかいません！しかもトイレです！」

「チクシヨウ・・・・・・男女やりたかった・・・・・・」

蒔風がガツクリとうなだれて気落ちするが、フォワード陳が励ます。

「ほら！まだいけますよ！舜さんの使い魔出せば！」

「スバルお前天才か！？」

「ただの馬鹿ですよ。はあ・・・」

スバルのノリに頭を抱えるティアナ。

まあこういったテンションが自分に降りかからないだけまだマシだが。

「と~~~~かなんとか思ってるんじゃないだろうな！？スバル！膝カックン！」

「アイサー！アダツ！」

「何してんのよー！」

蒔風の指示でティアナに膝カックンを行おうとしたスバル。  
しかしティアナがデコピンでスバルのおでこを撃ち、迎撃した。

「やるな。だが私のテンションは終わらない！やるぞお前ら！せー  
の！男女男男！いつまで遊んでないではよいかんかい！！」「はい」  
はやての一喝に皆の視線がはやてに向き、蒔風の方を見直すとさっ  
きのはっちゃけが嘘みたいに大人しく正座した蒔風&amp;mp;七獣  
がいた。

「あはは……じゃあ、転送ポートに行こうか」

そうしてフェイトが改めて行こうとするのを、蒔風が止める。

「え？こっちで行こうぜ？」

そう言って蒔風が手を振る。

[ Gate Open . . . Midd - Child - ]  
[ a



「うむ、懐かしいな!!どこもかしこも!!!!!!」

そうして到着、海鳴市。

なのはに指定してもらったポイントにゲートを開くと、そこは湖畔のコテージだった。

自然と自然と自然しかない。

空気はうまい!!水も綺麗!!

「……………泳ぐか？」

「バカなことやってないで、ほら、今回の任務忘れてない？」

そうである。

今回の任務は紛失したロストログアの探索。

本来六課はレリック専門のだが、管理局は人手不足。故にこうして六課も駆り出されているというわけだ。

「でもよー。こっちの協力者つてのが来るまで足止めだろ？サーチヤーの設置だって多分お前からで足りるし」

確かにそうなのだ。

本来転送ポートから行く予定が、蒔風によって簡単に来てしまった



ので、現地協力者との待ち合わせ時間までまだ余裕がある。  
そしてこれだけの人数がいればロストログア探索のサーチャーの設置もそんなにかかるものではない。

「だからさ、こっからオレ少しだけ単独行動するわ」

「舜君……今や舜君だって機動六課の一員なんだから、団体行動を……」

なのはが教導官らしく蒔風に言うが、その名のはの言葉を軽く流して蒔風がどこから出したのか、花束を肩に担いで行ってしまった。そんな蒔風を呼びとめ、しっかりするように言おうとしたのはだが、フェイトが蒔風の担ぐ花束を見て、それを止めた。

「連絡入れたら、すぐに戻ってきてね？」

「………わかったよ」

そう言って蒔風がその場から去る。

「フェイトちゃん？」

「なのは、大丈夫だよ。行かせてあげよう。どこに行くかは、大体わかってるから」



のはもフェイトも、はやてだつて元気だ」

そう言いながら蒔風が地面に花束を置く。

そしてそのまましゃがみ込みながら話し続ける。

「まあこんなこと、「この世界」にいたお前なら知ってんだろつな。そもそも、お前の後を継いだデバイスはちゃんというんだし」

「俺は・・・なんていえばいいのかわかんねえや。今更「すまない」でもないし「ありがとう」もおかしいな。オレはお前を結果的に消しちまったんだし。でも、まあ、これは俺なりのけじめだからねえ」

そこで少し強めの風が蒔風の背中を押した。

その若干の力強さに、蒔風がふふ、と笑って目を閉じ、そしてそこから広がる景色を見た。

「俺に祝福あらんことをつてか？優しいな。お前は・・・」

「

「じゃあな。世界最幸のユニゾンデバイス」

そう言って時風が去る。

その場所は彼が前回最後にいた場所。

海鳴の街を見渡せる丘の上の展望台。

そこに「祝福」の花言葉を冠する花束が、風に揺られて残っていた。

.....

『「うちの用事は終わったよん　なのはん、いまどいん」』



久しぶりの両親との会話になのはも楽しそうだ。  
そしてその光景を見てフオワードの二人は

『ティア・・・なのはさんが普通の女の子だ・・・』

『え、ええ・・・そうね・・・』

いつものなのはとは違う一面を見て、そんなことを思う二人。  
と、そこに割り込む声が

「なるほど、お前らそんなこと思ったのね？なのはは思いつきり  
年頃の女の子だよ。ただもうちょっとそれを前面に押し出してくれ  
たらいいんだけどね」

「あ、舜さん！！！！」

スバルの背後に時風が現れ、高町家の面々に挨拶をする。

「」無沙汰してます、士朗さん」

頭を下げて丁寧なあいさつをする時風に、ティアナが正直驚いていた。

「舜さんが頭を下げるって……」

「にやはは。舜君、昔うちに居候してたから、お父さんには頭が上  
がらないんだよ」

「い、居候!？」

「一緒に住んでたんですか!？」

「うんそうだよ。何かおかしいかな？」

「い、いえ」

「別にそうでもないですけど……」

『ティア! ! 完璧だ! ! 完璧な女の子がいる! !』

『お、落ち着きなさいスバル!』

そんなスバルとティアナにあいさつを終えた時風が絡む。  
その顔は半分呆れた感じだ。

「お前らなァ・・・なのはだつて普通の女の子なんだつて。ま、こいつは昔っからこんな感じにポワポワした足りない頭で必死になつて考えて、それでいて周りには遠慮するようなガキだったからな。そう見られてもしょうがないか」

「む、舜くんひどい!! 私つてそんなにポワポワしてる?」

「してるつてかさ、お前はもつと誰かを頼れつてのよ。フェイトもはやても簡単に協力してくれるぜ?」

「だからだよ~~~~。なんでも聞いてくれちゃうから遠慮しちゃうの!!」

「そこで遠慮したらダメだつて!! 昔っから言いたかつたんだがな、大体お前は・・・」

「それを言うなら舜君だつて十年前いきなりいなくなつちやつて、無茶な戦いかたしてばっかりだつたんだから・・・」

だんだん二人の会話がヒートアップして軽い口論になつてしまつ。お互いに意固地な部分があるので、全然収まりそうにもない。

と、そこにフェイトから連絡が入る。

どうやらあつちもサーチャーの取り付けが終わつたらしく、こつちを迎えにくるそうだ。



「しょうがないな……じゃあ今度模擬戦で決着付けっか」

「そうだね。負けないよ!?!」

「ふ、こっちだって」

そんなことを話し合って拳をぶつける二人。

はたから見ればいい感じの二人に見えるのだが、ティアナとスバルからしたら

訓練場がなくなっちゃう!?

と言った感じだ。

リインを見ると今からすでに修繕費を計算していた。

これが経験のなせる技か。

そうしているうちにフェイトが到着し、おみやげのケーキを買って最初に着いたコテージに向かう。

そこで、今晚のご飯が用意されて待っている

t o b e c o n t i n u e d

なのはStrikers 〽出張！機動六課！〽（後書き）

今回はもうちょっと長くします。

アリス「なのはStS SSO1ですか」

そうなんですよ。

いや、本当ならこのままホテルの方に行ってもよかった。  
でもそれじゃあつという間じゃないですか。

だから挟みました、出張編！！！！

ア「次回、後編！！飯、風呂、バトル！！」

メフバコンボ！！！！

ではまた次回。

始めてやったけどモンハンおもしれー……………！！！！

戦法など、届く距離まで近づいて斬れ！ぐらいしか言えん

全くです。

作者も同感です。姐さん

なのはStrikers　く飯食って出勤だ！く

時風たちが街から戻って来て、コテージに到着した。

そこで出迎えたのは旨そうな肉の臭いだった。

「おお！バーベキューじゃないか！！」

「っていつか八神部隊長！？」

「部隊長に料理なんてそんな！！」

そこでははやて主導でバーベキューが用意されていた。

ティアナやスバルなんかは上司に料理してもらうなんて恐れ多いみたいな感じになっていたが、はやてはかまへんかまへんと料理を続けていた。

「今でも皆の料理は作ってるんやから、今でも料理の腕は落ちてないで？」

「はやての料理はギガウマだから」

それをヴィータが称賛し、それならご相伴にあずかろうと（主にスバルが）納得した。

「それにしてもメンバー増えてねえ？二人見ない顔がいるぞ」

蒔風がいつのまにかいた二人の女性を指差してはやてに聞く。  
なんでも現地活動拠点のこのコテージと、別の転送先ポートの場所貸しをしてくれた現地協力者だそうだ。

「あ！来たわね！！蒔風舜！！」

「舜君！！久しぶり～～～～」

蒔風に気付いた二人がそんなことを言いながら近寄ってきた。  
一人は歩いて、一人は走ってきてから飛び蹴りで。

「いきなりいなくなっただにやっつてんのよ！！」

そんなことを叫び跳躍して綺麗なキックを放ってきたその金髪美少女に、蒔風が目を見開いて言った。



その質問に、時風がにやりとする。

「覚えているさ。久しぶりだな、すずか」

「うん！」

顔をパアアと光らせて喜ぶすずかが時風とハイタッチを交わす。そこで時風がもう一人の少女、アリサ・バニングスを見て、おお、と合点がいったように手を叩いて指を指した。

「バーニング・アリサじゃないか!!」

「ちっかう!!」

ボケた時風に鋭いツッコミ。  
完璧や。完璧なツッコミングだ!!

「あれ？バーニングじゃないっけ？シャイニングだっけ？」

「ダアーツ!!違う!私は!!」

「ツインテール・グドン？」

「それなんていう帰マン!？」



「そつだそつだ！アリサ・バニングスだ！！」

「だから~~~~~！！！！」

「アリサちゃん！！合ってる！合ってるよ！」

そんな茶番を繰り広げて、形はどうあれ久々の再会を喜ぶ三人。

その間にまた来客があったらしく、そちらにも顔を出しに行く時風。来たのはエイミィ、なのはの姉、美由希、小さな子供姿のアルフだ。

「舜君！ひつさしぶり！！」

「シュン~~~~~！！！！また会えて嬉しいよ！」

エイミィが手を振って、アルフが時風の腹に向かって突っ込んできた。

ドフウ！！というクリティカルな音をたててアルフが時風に飛びついた。

周りはその音にうわぁ、という顔をするがアルフは無邪気に笑うだけだ。



「今は子供も二人いるんだよね？」

「ふーん（、、）」

「く、クロノくん今じゃ提督だもんね!!」

「はーん（・・・）」

「え？反応薄っ!!何がどうしたの!？」

「だってクロノの力なら提督クラスになるのは驚くくらいにはならないし、むしろなれると思ってたし、エイミィとクロノだったらお似合いだと思ってたからなあ・・・」

まあそんな感じで互いの自己紹介が過ぎ、食事に入る一同。

「うむ、やはりはやてんの料理はうまい!」

「そやる？シャマルも手伝ってくれたんやで!」

「マジで!？（カタリ）「切ってくれるのを手伝ってくれたんや!」

「!」（スツ、モグモグ）やっぱうまいな!!」

「流れるように箸を置いてまた取って食べ始めた!?!」

「あの一ー、シャマル先生つてまさか……」

「そんなことないもん!!!料理下手じゃないもん!?!」

シャマルが必死になって弁解する。

その肩を後ろから蒔風が叩いた。

「シャマル……持ってこいよ!?!」

「え?蒔君!?!もしかして……」

「食ってやんよ!?!お前の料理をよ!?!俺が食ってやんよ!?!」

「舜君……あんだ漢や!?!」

蒔風をはやし立てるはやて。

だが蒔風はどーってことないと胸を張る。

(他世界のシャマルよかマシのはず……それに……)

「それに俺は超辛党。思いっきり辛くしてしまえば、味など関係ない」

自慢げに語る蒔風。

そしてシャマルが意気揚々と料理を準備しに行った。

「蒔風……本当に食せると思ってるのか？」

「なに、味が変わるだけならまだ何とか」

「いや、そーじゃねえ。シャマルのはそんな域は通り過ぎてる」

シグナムとヴィータの言葉に「はてな？」となる蒔風。

そこでわかりやすいように、シグナムがモニターを出し、蒔風に写真を見せた。

その写真を見て、蒔風が思ったことは

「なにこれ？」

だった。

「そこに映っているのは………シャマルの料理だ」

「え？だってこれ………タイヤやん」

そう、そこに映っていたのは車のタイヤだった。

更にページを進めるとボンネットやミラー、フロントガラスにエンジンと、いろいろと凄いものが出てきた。

もはやあれだ、異次元だ。

何だかわけのわからない煙を上げたり、化学反応をおこしたりする  
ならわかる。

食材だつて下手なもん混ぜたらそういったものにもなる。

だがこんなこと、誰が予想できようか。

食材からエンジンなどの無機物ができるだなんて。

「食えるとか食えないとかのレベルじゃねえ………」

「これ組み立ててはやての車になつたんだもんな」

「マジで！？はやてのあの車シャマル製だったの！？」

なんということでしょう。

シヤマルさんの料理は錬金術でも使っているのでしょうか。

「車検おりたのがびっくりだったよな」

「うむ。しかも動作不良など一切ないからな」

「あの・・・それもう料理じゃなくね？ってか、俺これから何喰わされんだろ・・・」

「ま、一つだけ言えることはあれだ。トウガラシとかじゃどうにもならないってことだ」

ズーーーーーン、と気落ちする時風。

彼もまさか食える食えないではなく、絶対的に食いものじゃないのが出てくるかもしれないと思っても無かったのだ。

「お待たせー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！さ、舜君、食べてみて！ー！ー！」

そしてついにシャルマルが料理を持ってきた。

こんだけの短時間で何ができたのか、それだけでも恐ろしいが、時風がくるりと振り返ってテーブルに向かう。

「こ、これは……………」

「まさかの……………」

「大根？（；。）」

そう、大根だった。

ただの大根。しかも生。

一切の手を付け加えられてない大根がそこにあつた。

「シャルマルさん……………これは料理じゃなくて丸だしって言うんじゃない……………」



蒔風がジトーーーーっとシャマルを見つめるが、そこでティアナがふと気付く。

「あれ？でもバーベキューに大根って使いましたっけ？」

「「「「「！！！！！！！！！！」」」」」

確かにそうだ。

バーベキューに大根など使わない。  
使わない物は買ってこない。

だったらこの大根はなんなんだ？

「シャマルさん……これどこから持ってきたの？」

なのはがおそろおそろ聞くと、シャマルは笑顔で答えてくれた。

「え？持ってきたんじゃないですよ？にんじんと玉ねぎ、そして豚肉で作りました！！！！」

「嘘だツツ……！」

「舜さん……！なんでかわからないけど、それ私の台詞だと思います  
……！」

ギヤーギヤー騒ぐ蒔風の口に大根が突っ込まれ、沈黙させられてその場に倒れる。

そのあいだも皆で騒ぎ、たまに蒔風の方を見ると口に刺さった大根がモゴモゴと動いて口の中に入っていくのが確認されていた。

そうして食事も終わり、片付けをし、じゃあお風呂に行こうかという話になる。

「どこの風田？」

「このコテージにはお風田ないんですよね？」

時風やキャロがなのはに訊くと、はやてと目を合わせ、うん、とうなづいた。

「じゃあみんな、今から準備して！！これから市内の、スーパー銭湯に向かいます！！！」

はやてが全員にそう伝える。  
わかつているフェイトやアルフなどはおーー、と腕を上げるが、ティアナやスバルはよくわかってない。

「舜さん、スーパーセントウってなんですか？」

それを聞いた時風がにやりと笑って答えてあげる。

「セントウ、準備。つまりだ、スーパー戦闘を始めるから、各自戦闘準備に入れ！！ってことだ」

「ええ！？お風呂なのにですか！？」

「汗をかいて気持ちよく風呂に入るためだ。古よりこの世界の住人は戦闘を越えた戦闘、スーパー戦闘と呼ばれる行為を行ってから風呂に入ってたな……」

そんなことをスバルとティアナに吹き込んでいると、なのはが蒔風の後頭部を軽く小突いてそれを止めた。

「嘘言わないの。ただのおっきなお風呂だよ」

「実はそうなのだ。だがこの世界、魔法文化はないがその分、他の分野は凄く発達しているな。おそらく、楽しめる事は間違いない、と断言しておこう！！」

その話のスバルの目がキラキラしだし、ティアナは正直話半分に聞いていた。



「にしてもなのはちゃんにフェイトちゃん、スタイルいいよねー」

「ふふん、誰がここまで育てたとおもつとるん？私がこの二人の健全なバストアップに貢献してるんやで？」

流石は女性ばかりの機動六課。

女湯はとても騒がしいことになっている。

客がいなくてホントによかった。

一方、男湯

「ほれエリオ、背中流すから、こっちきんしゃい」

「あ、はい。ありがとうございます」

時風とエリオが背中を洗い合い、裸の付き合いで交流を深めていた。

「にしてもエリオ、あんだけハードな訓練しててよく大きな怪我と  
かしないのな」

「なのはさんやフェイトさんの訓練って、無茶はするけど決して危  
険なものではないんですよ」

「ほおー。あいつら、何気によくやってんのな」

そう言って二人で湯船に浸かる。

「ほふう………はあ……………」

「落ち着きますね……………」

「フェイトとかに誘われてたからな、お前」

「あっち行つてたら正直気持ち休まりませんよ……」

「だよね……昔は残念な貧乳ちゃんだったのに、いつの間にかあんな巨乳ゴールドになっちゃってねえ……」

「じゃあ私にも希望はありますか!？」

「さあ……キャラはキャラだから、将来どうなるかわかんないよ。絶対とは言い切れないから、がんばってみて」

「はい-」

……

「ってキャラ!?!いつの間にかこっち来てたの!？」

「なんだエリオ、気付かなかったのか？」

「気付きませんよ!?!」

「私、普通にいたよ?舜さんの背中とか、エリオ君の背中も流したし……」



「いつの間につ！？」

まあそんな感じで三人一緒に湯船に浸かってのんびりした。  
なぜか時風が「翼をください」を熱唱しだし、三人一緒に大合唱。

しかもしみじみとではない。。

アレンジ効かせてめっちゃめっちゃ熱く歌い上げていた。

そしてそんな大声出せばのぼせるのは当然で、エリオとキャロの体調を見て、時風が風呂からあがるつ、と提案した。

「ふう~~~~いいお湯でしたっ」と

「気持ちよかったですね~~~~」

「エリオくん、舜さん」

「キャロ、来たか」

女性更衣室から出てきたキャロとロビーで合流し、三人一緒に牛乳やコーヒー牛乳をグイグイっつと飲んだ。  
プハア、と三人一緒に瓶から口を放し、飲み終える。

「ふう……にしても、女性陣長いねえ」

「女性の方はお風呂って長いですから」

「俺なんて湯船とか普段はいらないからね。シャワーだけだ」

ロビーのソファに座って皆を待つ三人。  
と、そこでキャロのデバイス、ケリュケイオンが反応した。

「舜さん!!!サーチャーに反応あります!!!」

「オツケ!!!」

キャロの報告から間髪いれず、シャマルから念話が飛んできた。

『皆！！サーチャーが反応したわ！！！！』

『了解シャマル』

『僕達はもう上がってるので、先に行つて見てきます！！！！』

『俺も行くから、なるべく早めに来てくれ。オレはこういった処理はできん』

『わかったよ。スバルとティアナもすぐに向かわせるから、それまで無茶なことは……』

『させないよ。そもそも、無茶なこととしてもオレがいるから大丈夫だ。じゃな』

そう言つて念話を切つて、三人が夜の街に飛び出す。

サーチャーを起点にシャマルの結界が貼られたため、姿はみられていない。

エリオとキャロがフリードの背に乗り、時風が練習とばかりに飛行

していった。

「こりゃ便利だ。魔力だからそんなに力食わないし、いいねえ」

「舜さんもう空飛べるんですか？」

「もともと飛べたからなあ。ただ翼がなくなっただって感じだな。感覚自体は掴んでたから、あとは楽だったよ。んなことより、ほれ、あれじゃねえのか？」

時風がサーチャーの反応があつた河川敷グラウンドを指差す。  
どうやら一体だけでなく、複数体いるようだ。

時風たちが着地して、近くでその姿を確認する。  
そしてその姿は……

「スライムだ……」

スライムだった。

ポヨンポヨンした身体が、空中ではね回っている。

と、そこではやてから連絡が入る。

内容は目の前のロストログアについてだ。

『舜君、持ち主の話によると、攻撃性はなく、動きは逃亡一択らしいんや。ただ、大変高価なもんやから壊さんように気をつけてえな？』

『りょーかい。わかりましたー』

『サーチャーによるとコアとなる一体がいて、他のは分裂したものだから、私たちは範囲が広がらないように足止めしておくね』

『舜君はフォワードの子たちの様子を見ててあげて？』

『はいはい。わかりましたよー』

そう言っているとスバルとティアナもやってきて、時風たちを合流した。

「おい来たか。あいつらの動きは逃亡のみ。ま、俺がやると壊しちゃいそうだから、封印までお前らに任せた。危ないことすんなよ？」

「「「はい！！！」「」「」

そう言っただけ動き出すフォワードたち。

その動きは時風が模擬戦をした時よりも向上されている。

（なのはの訓練の賜物だな。だが・・・どうするんだ？フォワード諸君。そいつなかなか厄介だぞ？）

そう、そのスライムには打撃も斬撃も、魔法もフリードの炎も効かないのだ。

「流石はロストロギア。そう簡単いつてくれないのはどれも同じだな」

蒔風がポケーーツ、と見ていると、ついに終わりそうだった。

どうやらコアを見つけたようで、キャロが錬鉄召喚で出したアルケミックチエーンを使って本体を縛りあげようとする。

それを本体はバリアで防ぐが、エリオとスバルのコンビにバリアを破壊され、最後にキャロによって封印魔法を練り込まれたティアナの魔法弾が射抜き、そのまま封印してしまった。

だがまだ完全な封印ではないため、未だに分身の方は跳ねまわっていた。

「こいつら本当に斬っても叩いても効かないのな〜」

蒔風がブニブニとその分身をあっさりと捕まえていじくりまわしていた。

その間にキャラロが自分が完全封印します、とはやてに伝え、実行していた。

「ふむ……」

そんな間に蒔風が「火」を抜き、スライムを空中に放り投げ、シュカン、と居合い抜いた。するとスライムに半分ほど切れ込みが入り、しかしすぐに戻ってしまった。

「「「おおー」」」

「完全には斬れないかあ。さすがだなロストロギア」

「……遊んでないで、はやく終わらせるわよ。舜さんも手伝ってくださいか？」

ティアナが蒔風に頼む。

だが蒔風は手を振ってそれを断った。

「俺には封印なんてまねはできんさね。そいつが「願い」に反応するなら話は別だけどね。キャラロならできんだろ」

「はい、大丈夫です!!」



「上出来。早く帰ってって、ゆっくりしよつぜ」

そんな話をしているうちに封印も無事終了。

皆でコテージに集合して、もう帰ることをアリサたちに伝える。  
最初は残念そうにする一同だが、まあ今生の別れでもないのだし、  
また会おうと約束をした。

「ロストログアはシグナムが聖王教会に直接持っていきますから」

『ありがとう、はやく』

はやてがそんなことをモニターでの通信で報告していた。

蒔風がフェイトに聞くと、モニターの女性はカリム・グラシア。

「聖王」という歴史上の人物を祀った教会のトップで、管理局での  
地位は少将。

機動六課の立ち上げに尽力してくれた人物の一人だそうだ。

「じゃ、俺がそのゲートを開こうか」

「すまないな、蒔風」

蒔風が教会の場所を教えられ、そこに向かってゲートを開き、シグナムがくぐる。

「ふう」

「にしてもこの街でロストロギア封印かぁ……懐かしいなあ」

「ユーノがいれば完璧だな。あ、クロノいないけど」

「昔を思い出すね」

「あんどきお前無茶して封印しようとしてたもんな」

「一気に発動させようとしてもしてたね」

「ふ、二人とも、それは言わないで……」

そんな雑談をしながら、蒔風がゲートを開く。荷物をまとめ、はやてが号令をかけた。

「さ、うちらも帰るか!」



あれを半分も切り裂くなんて、普通じゃない。

しかも彼はあの翼人。きつとレアスキルよりもロストログリアだ。

そんな人たちがいて、私はなんなんだろう？

私は本当に強くなってるのだろうか。

私は………必要なのか。

t o b e c o n t i n u e d

なのはStrikers へ飯食って出勤だ！〜）（後書き）

出張編終了！！！！

アリス「そしてティアナさんの葛藤」

次はホテルアグスタ編！！！！

ア「ああ！！私の台詞を！！！！」

モンハン、始めました。

いろいろと面白いですね。

冬コミの会場とか大変そうだな…………

ア「20ある集会所が満員とかになりそうですよね」

なるだろ。

コミケなめんな。

ア「あそこは…………夢のような地獄ですよ」

言い得て妙なり。

ではまた次回

守りたい、優しい人を。  
私に笑いかけてくれる人たちを。  
自分の力で、守りたい！

なのはStrikers　くアグスタにて、ガンナーの憂鬱く

「さあーて、今回の起動六課は!？」

「リインですう　今日、ミッドチルダのグランドホテル、ホテル・アグスタで骨董品や古物限定のオークションが開催されます。その中には取引許可の出ているロストログアもあり、それをレリックと間違えてガジェットが出てくるかも知れません。だから今回の任務はそれからの護衛任務です」

輸送ヘリの中でリインが全員に任務内容を伝える。

起動六課メンバーは現在新たな任務についており、その内容はさつきリインが言った通りだ。

さらにはやてが言うにはシグナム、ヴィータは既に現地入りしており、ヘリの中にはシャマルにザフィーラもいる。

「こりゃ総力戦だな」

「まあね。こついつたオークションは密輸取引の隠れ蓑にされることが多いし、用心にこしたことはないよ」





数分後、オークションの受付にメイクアップした四人がいた。  
その四人に注目が集まる。

「はあ~~~~~つ、お前らドレスとか似合うのな」

「舜君のタキシードだって様になってるよ」

なのはたち三人がドレス、時風がタキシードに着替えて中の警備に  
当たることになった。

確かに中の要人の方が護衛対象としては上だ。

しかし時風はタキシードなんて着たことがない。  
だからやんわりと断ろうとしたのだが

「舜君がいない間に「奴」の「欠片」が来たら困るんやないの~~~~  
~~~~?」

と言われてしまった。

こつされたら時風にはもうどうしようもない。
やむなく着替え、中の警護に当たることにした。

「うむ、たまにはこういう服装もいいな」

「なんや、まんざらでもない感じじゃん」

「一回着ちまえばもうどうにでもなる」

「な、な、舜君、誰が一番綺麗？」

唐突にそうはやてが蒔風に聞き、なのは、フェイトも興味津々に蒔風を見てきた。

「あ？そうさなあ・・・誰が綺麗か？正直、三人とも綺麗だな。うん、普通の男性なら惚れちまうな」

「ふふん、せやろ？だけどうちが聞きたいのは誰が一番かや。評価は求めとらん！舜君なら誰に惚れる！？」

はやてがさらに突っ込んだところを聞き、なのはとフェイトがしどろもどろになる。

当の蒔風はキョトンとした顔をして、ああ、と合点がいったような声を出し、頭をポリポリとかいた。

「無理無理。俺が誰かに惚れるなんてことないからさ。あっはっはっはっは！！！！」

そう言って三人の肩に腕を回し、仲良く中に入っていく時風。

「俺たちは友人。仲のいい仲間。頼れる親友。それでいいじゃん。な？」

そう言って自分の立ち位置に向かう時風。

一体どういうことなのかわからないまま、三人が立ちつくす。

「舜君、もう好きな人いんかなあ……」

「でも、誰かに惚れることはないって言ってたから、それは違うんじゃない……」

「舜君……一人でいるつもりなのかな？」

そんなことをはやて、フェイト、なのはと呟き、友人として心配した。
彼はまだ、ひとりなのか、と。

蒔風がはやての言葉を途中で切る。

その眼の前には黒い人型の蟲のような化け物。

漆黒のその姿に、紫のマフラーをしたそれは、脇になんかしらのケ
ースを抱えていた。

「まったく・・・変な反応したから来てみりゃ、仮面ライダーみた
いのがこの世界にいるなんてな。黒いボディに真っ赤な目ってお前
はまりすぎ」

蒔風がその蟲に歩いていき、虫がジリジリと後ずさる。

『ガリユー、どうしたの？何かあったの？』

と、そこでその蟲、ガリユーの脳内のみに、主の声が聞こえてきた。

『え？見つかった？だったら無茶はしないで・・・大丈夫？うん、
じゃあ任せる』

ガリユーの目が一瞬だけ閉じるように光を失い、そして一気に光った。

流星は蟲のような外見をしてるだけあって、その速度はかなりのものだ。

柱や壁、天井を飛びまわり、時風の目をかく乱させようとする。

しかし、この男は見るだけならクロックアップにだってついていく男だ。

身体は反応できなくても、その動きははつきりと見えていた。

「逃げる気か。なるほど、指示を出して居る者がいるようだ。そいつを持ち帰るのが最重要か？お前の主は……誰だっ！？」

ガシッ！！と時風が腕を伸ばす。

ついにガリユーがその場から離脱しようとしたその瞬間、その隙に首に巻かれたマフラーを時風が掴んでその動きを止める。

そしてその間に腹に向かって拳を固め、一撃を放とうと振りかぶる。

「打……滅……ぼ……あら？」

だがガラン、とケースを落とし、ガリユーの身体が黒い光になつて
いずこかへと飛んで行ってしまった。

蒔風は追おうとも考えたが、とりあえず守るべきケースは守ったこ
とだし、今はポジションを離れるわけにはいかないと、とりあえず
回線を開く。

『俺だ。地下駐車場にて敵の使役獣と思われる者と交戦した。警備
員が一人、昏倒されている。狙われたケースは無事だ』

『そうかー、って、いきなり念話切って何しとんのやあ！！！』

『うっせー！！こつちだってすこし集中せにゃならん状態だったんだ
！！ってか、なんかあったのか？』

蒔風がはやてに外の状況を聞いた。

なんでもどっかの召喚魔法師によってガジェットが最終防衛ライン
であるフォワードたちの目の前に転送され、そこで一戦交えている
のだそうだ。

しかもとたんにガジェットの動きがよくなり、AMFもあつて簡単
には倒せない。

『しゃーねえ。やっぱ張つてて良かったってことだ』

『えっ。』

『前線に伝えてくれ。今から結界を張って一気にガジェットを押し出す。そこで殲滅してくれ』

『結界？いつの間に用意したんや？』

『青龍たちを所定ポイントに向かわせて剣に戻ってもらったただけだ。後は簡単に発動できる。カウント十秒前』

『了解、全員に伝えたで。七、六……』

時風とはやてがカウントし、それがゼロになり巨大な結界が出現した。

その起点はホテルの周囲四点にある。

中心のホテルからドーム状に大きくなっていき、時風が任意で敵とみなした無機物をドームの壁で押しやっていく。

そしてその外壁に溜まったガジェットを、シグナムやヴィータが破壊していった。

『これで終わりか？』

『そうやね。私はまだ中の警備におる。なのはちゃんとフェイトちゃん以外の現場検証に行ったから、舜君もそっちの方手伝ったげて』

『了解です』

「いや、また「奴」がこっち来てさ。ビックリしたよ。こっちじゃ十年経ってんだから」

「舜と僕達とじゃ時間の流れが違うみたいだからね」

「ま、十年前の時もおれは中身ずーっと十九歳だったんだけどな」

「そつえばそうだったね」

そんなことを言いながら、フェイトと一緒に話していたのが、ジュエルシードの話になった。

「またこのメンバーで探すか？ジュエルシード！！」

「僕はもうあんな激しい動きはできないよ」

「んな事ねえって！！アルフも呼んでさ、リリカルマジカル！！ってやるっぜー！！」

「わーわーわー！！舜君、それ恥ずかしいからやめてえー！！！！」

「フェイトも、止まれ止まれ止まれ~~~~って無茶してたしな」

「う、うう………反論できません」

「でも舜だつてアースラで叫んでたらしいじゃないか。僕となのはを送り出すために」

「あのかなにか言つてたんだ？」

「流石に十年も前じゃわからんだ……」

『これはオレの正義なんだよ！！ずっとそうだったんだ！！！！ずつとそうしてきたんだ！！！！』

「」「！！！！？？」

『てめえらは解決するために行動してんのか？規則に書かれたことを守るために悲劇を食い止めんのか！？違うだろ！！！！正義があつて、そのために行動するんだろが！！！！！！！！』

「ゆ、ユーノ、それ……まさか……！！！！！！」

「ふ、僕が君のような翼人のデータをそのまま破棄させる男だと思つてるのかい？翼人の伝承の検証、という名目で、クロノから君に関する映像記録などをもらっているのさ」

そう、ユーノが突然出したモニターには、十年前のアースラで、小学三年生姿になっている蒔風が啖呵を切っているシーンが流れていた。

「わー懐かしい！！思ってみればこのころから舜君大人びてたもんね」

「舜、私が無茶やったときこんなこと言ってくれたんだ」

「ユーノ君、そのデータ私にもちょうだい！！」

「私もほしいな」

「分かった。後で送っておくよ」

「や、やめろ！！！！そんなもの流すな！！！！お前らもほしがるな！！！！」

なつかしむなのは、笑顔で喜ぶフェイト。
そして狼狽して耳まで真っ赤になった蒔風。

「こんなもん改めて見るんじゃないやねえ！！！！本人の前で流すな！！！！」

ぎゃあぎゃあど騒ぐ時風だが、ユーノは容赦なく流していく。

『お前らが止めたかった悲劇つてのはよ、あそこにあるものじゃないのか？それを止めるために、みんなここにいるんだろう！？』

『正義を語るんなら、味方も敵も、どっちも救つて見せてみるよ！
！！潰すより生かす方が難しいんだ。だったらそっちをやってみせろよ！！』

『時空管理局は、何が救いたいんだ？人か！！世界か！！両方が！！』

『フェイトのことを想うなら、時には主の命めいにも逆らえよ！！あらゆる手段を使えよ！！それが、命懸けつてやつだろがよ！！』

『世界つてのはさ、確かにクソつたれなことがたくさんあるさ。でも、絶望するほど救いがない世界なんて、ないんだ』

『けどな、誰かが失われて誰かだ助かるなんて、俺はそんなのはもう見たくない！！』

『ああ、そうさ！！綺麗事だよこれは！！闇の書を止めて、はやても救うなんて、現実的じゃないかもしれない。でもな、それを為すために俺は力を持ってんだ！！クロノはここまで強くなつたんだ！！なのはとフェイトはあそこで踏ん張つてんだ！！封印するなら

蒔風が地面で頭を押さえて転がっていた。
もう顔が真っ赤とかそんなレベルを超えている。

身体をビクンビクンさせて悶えるその姿に、なのは達は笑っていた。

「でもその時のこの言葉で、救われてきたんだからさ、そこは自信持とうよ！……！」

「そうだよ？ 舜の言葉があったから、私は立ち上がろうとできたんだ」

「うう……オレさんに自信なんざねえよ……言ってなきや保てないから言ってるだけだよ……！」

そんなこと言いながら和気あいあい？と話しこむ四人。

そんなこんなで今日の任務は終了した。

(やっぱり・・・・・・・・あの人は凄い・・・・・・・・凡人は私だけなのか・・・・・・・・な・・・・・・・・)

ティアナは気落ちしていた。

ついさつき、攻めてきたガジェットを撃ち落とすため、無茶なショットを行って危うくスバルに当たってしまったところだったのだ。

すんでのところでヴィータがやってきてその球は弾かれたが、あのまま当たっていたらと思うと恐ろしい。

ヴィータがその事を怒鳴り、蒔風の結界で押しやられたガジェットを破壊しに行ってしまう、ティアナが呆然と考える。

自分はやっぱり駄目なんだ。

今のままじゃダメなんだ。あの人たちの域には届かない。

私の力を、ランスターの実力を認めてもらえない。

こんな失敗して、拳句の果てにはスバルに八つ当たり。
これじゃ駄目だ。もう絶対に失敗はできない。

そのためにはもっと強くならなくちゃいけない……………

でも、最近本当に自分の普通さを叩きつけられた気がする。

オーバーSやニアSクラスの隊長、副隊長。
将来有望な後衛スタッフ。

そしてどんどん成長している同期達。

さらにあの男だ。

蒔風舜。伝説の、銀白の翼人。

なのはさんたちにも負けないような、そんな噂の人物。

そんな中で私はどうすればいいんだろう……………
どうすれば私は私としてあの中にいられるのだろう……………

.....

そんなことは決まっている。

そうだ、決まってるじゃないか。

もっと強くなつて、自分を認めてもらつて、ランスターの弾丸は、
いかなるものでも撃ち抜けると証明するんだ。

私の・・・兄さんを・・・兄さんから受け継いだ私の魔法を、
認めさせてやるんだ。

現場検証でなのはさんが来たとき、少しだけ注意を受けた。
「ティアナは一人じゃない。皆が一緒」と言われた。

そうだ。なにも一人で突つ走らなくてもいい。
私に仲間がいる。一緒に強くなつていく。

でも、これは私一人の問題。あまりあの子たちに迷惑はかけられない。

それに……

なのはさんの訓練で、私は本当に強くなってるのだろうか？
いや、訓練に不満があるわけではない。

でも凡人である自分は、他の三人と一緒にメニューではだめなのだ。

なのになのはさんはほかの三人と同じ量の訓練しか与えてこない。

ダメなんです。

それじゃ私はだめなんです。

基礎ばかりじゃなくて、更に使える応用を。

もっともっと強くなれる、そんな魔法を
誰も失わなくてもいい、そんな強い魔法を

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

私に・・・ください・・・

なのはStrikers くアグスタにて、ガンナーの憂鬱く（後書き）

アリス「ティアナさん、思いつめてますねえ……………」

大丈夫かな？

ア「あなたが書いてるんじゃないですか」

そうでした

ってかもうこんな話にまでなってるんだな、なのは

流れが速い！！

なんでだ？もっと他の人は長いのに！！！！

ア「毎日更新してりゃそうもなります」

！！！！

そうだったのか……………

まあいいか

ア「次回、師と教え子。思いの違い」

ではまた次回

行くよ！相棒！

なのはStrikers　くすれ違いく

ホテル・アグスタの任務から翌日、蒔風はヴィータからティアナのミスショットの話を初めて耳にした。

「ふーん。珍しい事もあるもんだな」

「んだよ、もうちょい言うことねーのか？なんでー、とかどうしてー、とか」

「失敗して、ティアナはその事をしつかりと受け止めているだろう？　だったらこれ以上何か言う必要はない」

そう言いながらガリガリする氷菓子（ソーダ味）を蒔風がガリガリと食べていた。

「でもよ、たまにあいつ、無茶苦茶やるときあるよな」

「まああの年頃なら強くなるうとするのは普通だろ？　多少の無茶ぐらいはするわ」

蒔風が一本目を食べ終え、二本目（ソーダ味）を食べはじめた。

「まあな。でもよ、あいつがやる無茶って、必要以上なんだよな」

「つまり、そこまでやるに見合わない無茶ってことか」

ヴィータがその言葉にコクリとうなづく。

「ホテルの時もそうだった。冷静になってみりゃ、あの程度ならフオワードでも持ちこたえられた」

「でも無理に全部破壊しようとして誤射、か。ま、確かに、仲間を傷つけてでもやらなきゃならない場面ではねえな」

「ああ………そこでよ、舜は何か知らねーか？ ティアナに何があったのかって」

蒔風は確かに色んな人と話す。

もしかしたらティアナの事も何か気付いているかもしれない。ヴィータとしては大切な教え子の事だ。その目は真剣だった。

「良い先生やってるなあお前。教導官になって正解だよ」

「う、うっせーよ！ それより、知らねーか？」

その問いに蒔風が食べ終わったアイスの棒を捨てて首を振った。さすがに蒔風でもそこまで知らない。

人には話したくないこともあるだろうし。

「なのはにでも聞いてみるか？あいつならわかんだろ」

「なのはか……聞いてみるか……なんか嗅ぎ回っているみたいで気が引けんなあ」

「しょーがないよ。気にすんなよ、せ・ん・せ・い」

時風が立ち上がり、なのはの元に向かっていく。
その後ろからヴィータがドゲシと時風に蹴りを入れてついて行った。

.....

「そう……ティアナの事……」

そうして今はスターズ、ライトニング両隊長、副隊長と時風が通路の途中に備え付けられた休憩スペースに集まっていた。

チームの事はなるべく全員で把握した方がいいという時風の意見だ。

「なのは、なにか知ってるか？ティアナが無茶やるほどの理由」

「……………うん」

「その様子だと、どうやら結構深刻なようだな」

「何があったの？」

「それは……………」

なのは話しはじめた。

それはある一人の、管理局魔導師の話だ。

彼の家族は妹が一人のみ。

両親は既に他界していた。

その彼は優秀な魔導師で管理局の執務官でもあり、執務官であるからには、多くの事件を追い、凶悪な犯罪者と命懸けの戦いもした。

そして数年前のある事件。
その事件を追っていた彼はついに追跡していた犯罪者によって帰らぬ人とされた。

残されたのは尊敬し、多くの事を教えてくれた兄を失い、天涯孤独になってしまった幼い少女。
だがその少女はまだ信じていた。

兄は確かに死んでしまった。
でもそれは悪を撃つためであり、平和を守るために兄は命を懸けたのだ。

そう悲しみの中で兄の事を信じた少女。

しかし

「犯人を追い詰めておきながら反撃されて死ぬとは情けない」

「結果として後日に犯人は別の者が捕まえたが、そうでなかったらどうなったか」

「これではただの無駄死にだ」

管理局高官の発言。

彼は犯罪者を追い詰めておきながらみすみす逃げられ、拳げ句の果てには殺された。

役立たずだ、と

その言葉に少女は絶望した。

しかし、彼女は強かった。

ならば認めさせてやる。

自分の兄の魔法は、兄から教わったこの魔法は、決して役立たずではないというのを。

少女は決心した。

必ず強くなって認めさせてやると。

青年の名は、ティード・ランスター。

ティアナ・ランスターの、たった一人の兄だった男。

その話を聞き終え、皆が難しい顔をした。
こんな理由があつては、どう言えばいいのかわからないのだ。

なのはやフェイトがどんなに優秀でも、十九歳の少女。
そこにかかる言葉なんて簡単に出ては来ない。

だがそこで蒔風が発言をする。
腕と足を組んで、真剣な顔をして。

「ティアナは自らの兄の死を無駄だと断じられ、決してそれが無駄
ではない事を証明しようと思死なんだな」

「でもよ………」

「そうだな。無茶の方向性を間違えてる時がちよこつとあるな。ま
あそこはなのはさんが指導してくれるんだよな？」

「うん。それはもう、絶対に。無茶させて、落ちるなんてことは、
させない」

なのはの決心を聞き、蒔風はなのはによる訓練メニューを見せても
らう。

それを見ての蒔風の感想はと言つと

「基礎ばっかだな」

そう、基礎ばかり。

ただひたすらに、基礎の繰り返し、それだけだった。

「うん。まず大きな基礎を固めてからじゃないと、次の大きな魔法にはいけないよ」

「土台がしっかりしてねーと、強い魔法教えても暴発するだけだからな」

「うーうーん……だけどこれ、ティアナにしては不安だと思っよ?」

「フェイトもそう思うか?」

「うん。執務官試験のとき、すごく難しい魔法とか出るんだろうって思っつて、応用魔法ばかりやってね、基礎はできるからいいやなんてタカをくくってたんだ。でも試験に出てきたのは基礎問題ばかりで、応用なんて一握り。だから一回目は落ちちゃったんだ。二回目のとき、基礎をしっかり埋めてから挑んだらそこで合格。それに今までできなかった高度な魔法のできるようになったんだ」

「それで？」

「でね？その一回目のとき、とても不安だったんだ。応用じゃないと意味がない。凄いのじゃないと合格できないって。だからティアナはきつと焦ってるよ？」

フエイトが体験談を交えて話す。

なのははそれにうん、とうなづいて、答えた。

「ティアナは賢いから、もう気付いてるかもね。一人じゃないって、教えてあげたし。だから大丈夫。ティアナはよくやってるよ。それは確実に、ティアナの力になってる」

「……ま、それならいいけどな。言うべきことはちゃんと言うとけよ。後でこじれると、面倒なことになるから」

「大丈夫だよ」

なのはがそう言ってこの場の話し合いは終わった。

その足元には一体どれだけの時間いたのか、コーヒー缶がいくつも置かれていた。

（この時間まで自己鍛錬？おいおい・・・午後の訓練終わってから四時間、間に休憩入れてても三時間だぞ？あれじゃ明らかにオーバークだ。いくらやっても力になんねえぞ）

蒔風が怪訝そうな顔をして見ていると、ようやく終わったのか、ティアナがヨロヨロとした足取りで隊舎の方へと戻っていった。途中ヴァイスが飲み物を差し出したが、なにも言わずにそのままその場から去ってしまった。

蒔風はティアナがいなくなってから外に出て、ヴァイスに話を聞きに行った。

「よっ」

「おう、舜の兄ちゃん。どうした？」

「兄ちゃんって・・・あんなの方が年上だろ」

「氣くにすんなって。感じだよ、感じ。で？何の用だい？」

ひょうきんな感じで話す二人。
内容は当然ティアナの事だ。

「ありゃ、見てたか」

「実際何時間やってたんだ？あいつ」

「訓練終わって解散、ってなってるからすぐにだ。四時間以上、ぶっ続けた。しかも毎日。ここら辺ずっとだ。最初にフォワードの訓練、それから早朝よりも早くにスバルと訓練、さらに午後訓練の後にまたスバルと少しやってから今度は自己鍛錬だ」

「体壊すぞ。これで明日また早朝訓練だろ？逆効果だ」

「ま、そんなこと今更ガミガミ言ってもしょうがねえって。だからほっといたんだけどな。これで訓練にでも出てりゃ、無茶やってたってことはわかるだろうと思っただが」

「なるほど。だが甘いな。あいつみたいな手合いは、更に無茶してそれをこなしちゃいそくな奴だから」

ティアナにかなり心配する時風に、ヴァイスが「じゃあ行ってくりゃいいじゃねえか」と提案する。
それもそうだな、と時風がティアナを追って六課隊舎の中に入り、シャワー室の前で待つ。

数分後

ティアナがシャワー室から出てきて、時風に気付く。

「よ、ティアナ。ちょっとお前に話が、って待て待て待て!!!」

蒔風が話しかけようとするが、ティアナは軽く会釈だけしてスタスタと歩いて行ってしまふ。

その後を慌てて追って、何とかその足を止めさせることに成功する蒔風。

だがティアナの顔は明らかにイラついており、うんざりしたような顔をしていた。

「なんですか？私明日も早いです。なのはさんとの模擬戦もあるので、もう寝たいのですが」

「まあ、待てって。すこーしおにーさんの話聞いてくれればそれでいいから」

ティアナがあからさまにムツ、とした顔をする。

しかしそこで無理に振りきるのも馬鹿らしいと考え、五分だけですよ？と言って聞くことにした。

「ティアナ、お前最近無茶しすぎ。そんな体力で、今から寝たようなコンディションで、明日しっかり動けるのか？」

蒔風の心配そうな声。

しかし、今のティアナにはそれすらもうつとおしく聞こえていた。

「私なら大丈夫です。明日の事だっと思って考えてます。ちゃんと勝てます。絶対に。だからもう行かせてください。舜さんだって、明日早いんじゃないですか？」

「俺？俺は大丈夫。寝ながら歩くと言う妙技を最近会得してきたからな。眠気に弱いオレでも………」

そんななんでもない話。

いつもなら「さいですか」と流すこともあるだろう。

だがしかし、ティアナには蒔風の言葉はこっぴどく聞いていた。

俺はお前と違って体力もあるから平気だ。それに一番最初に言ったろ？俺は世界最強だ、と

「……るさい」

「ん？」

「うるさいっ！！私は大丈夫です！！やれます！！失敗なんかしない。だから必死になってやってるんだ。それを邪魔しないでください！」

一息で一気に生きるティアナ。

時風がそれを聞いて、さすがに言い咎めようとする。

だがティアナは「五分経ちましたから、これで」と言って時風が言葉を発するより早くさっさと部屋に戻って行ってしまった。

その後を追おうとも、一瞬時風は考えた。

だが、すぐに嫌な感じの顔になって、自分の部屋に戻っていく。

(やーめた。なんでオレがあんな馬鹿どもに付き合わなきゃならんのだ。もう知らん。お前らの正義ならそれでいいさ。だが……)

そう言ってエリオが待つ部屋へと向かう時風。

その口は歪み、目は呆れとイラつきに光っていた。

「だが、それでなんか起こったら……覚悟しとけよ」

そうして

いろいろなことがあって、翌日

早朝訓練が終わって、午前が終わり、午後の訓練。

今日の訓練は模擬戦。

最初はティアナ・スバルVSなのは

その時が、来てしまった

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers　くすれ違いく（後書き）

アリス「わーお。時風いらついていますね」

そりゃイラつきもします、いくら彼でも。

ア「そういえばあんな時間に、とか言っておきながらエリオはまだ起きてるみたいな発言してますね」

そりゃエリオは時間外に無茶した訓練してないですから、普通に起きてますよ？

あくまでティアナにとっては、と言う事です。

ア「さて、Strikersもついに前半の終わりに近づいてまいりましたね」

来ましたなあ・・・

ア「次回！！どうなる！？スターズの模擬戦！！！」

ではまた次回

あたしはもう誰も傷つけないから 失くしたくないから だか
ら強くなりたいんです

なのはStrikers　　↓激昂↓

「じゃあ今日の訓練は模擬戦。最初にスターズの二人、次にライトニングの二人ね」

「『はい！』『』『』」

今日は模擬戦

なのは相手にスターズとライトニングに別れて一対二で、なのはに一撃みまえば合格。

そしてなのはが言った通り、最初はスターズの二人、ティアナとスバルだ。

「やるわよ、スバル」

「うん。でも、大丈夫かなあ……」

「大丈夫よ。成功さえさせれば良いんだから」

「そうだね……うん、失敗すること考えてもしようがないよね！」

「お！スバルがしかけた！！・・・なんかおかしーな」

フェイトが時風に聞こうとするが、ウィータの気になる一言に止まる。

スバルの機動はいつものものとは違っていた。

ウイングロードで走り回るまでは良い。

それではに向かい、当然なのはが魔力スフィアを数弾迎撃で放つ。

しかしその際スバルは、しっかりと足を止めてではなく走りながらバリアを張って、強引に、力任せに押し切ってなのはに攻撃したのだ。

「あれをやるならスバルじゃまだ無理だ。突破出来ても、その後の攻撃に身が入らん。ほれ」

ビルの上で蒔風が解説する通り、スバルの拳となのは魔法陣バリアがぶつかり、程なくしてスバルの身体が大きく弾かれた。

非常に危険なところでなんとか着地したが、下手をしたら大怪我になる動きだ。

「スバル、あんなあぶねーことすると思うか？」

「いや。スバルがあんな無茶自分からするとは思えない。あいつは良くも悪くも一直線だけど、強引にはいかなはずだ。目の前にある障害をキチンと破壊してからやるだろ」

「だよな」

「するなら後ろに流したり、紙一重でかわす、もしくはティアナのフェイクシルエツトで奇襲を狙うべきだが……」

「今のスバルにそのスキルはねえし、そんなこともやってねえ。あれは本人だったからな」

「わかってんのか？あいつ。今どれだけ危険な事を行ったのか」

蒔風たちが話してる間にも攻防は進み、なのはがスバルに注意するが、「必ず避けるから大丈夫です」と言っただけでも続けようとする。その言葉になのはが注意しようとするが、ティアナの照準がなのはを狙い、その行動に気を取られてしまう。

「ティアナが……砲撃!？」

「おい、アホ言うな。ありゃ幻影だ」

「え？」

なのはが幻影のティアナが狙う照準に気を取られている間に、スバルがどこにいるかもわからないティアナと念話で話し、連携をとる。

そしてスバルがなのはに向かって走り出す。
狙う標的はなのは。

しかも、またさっきと同じようになのはの攻撃を強引に押し切りながら。

なのはが厳しい顔をしながらその弾丸のようなスバルの拳をバリアで受け、流石の威力にウイングロードの上に立ってそれを受け止める。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「はあああああああああ！！！！（ティアア！！早く！！！！）」

押し合うのはとスバル。

なのはの魔法陣のバリアからは桜色の魔法光が火花のように散っていた。

と、同時になのはを狙っていたティアナの姿が消える。
蒔風の言う通り、それが幻影であった証拠だ。

「ほ、本当だ……」

「じゃあ、本物のティアナさんはどこに!？」

「(フウ……)……あそこ」

蒔風が呆れてものも言えないと言った感じでなのはの真上を通るウイングロードを指さす。
そこには壁走りのように一気に駆け上がり、なのはの真上に到達したティアナがいた。

その手に握られているのはクロスミラージュ・ワンハンドモード

しかし銃でありながらも、その銃口からはオレンジの魔力刃が飛び出しており、さながら短刀のようになっている。

そして逆さまにジャンプして、頭上からなのはを狙って飛び出した。

「まさか……あれでなのはバリアを引き裂いて!？」

「無茶だな……この距離なら、バリアは張れないな!! つか?」

ドオン!!!!!!!!!!!!!!

ティアナがなのはに到達した瞬間、その衝撃で粉塵が上がる。フェイトやヴィータ、エリオにキャロが心配そうにそれを眺める。

そんな中、時風だけはゴキゴキと首を回し、肩を波のように揺らし

て「はあ〜」……………」とイライラした感情のこもった声を出していた。

そして粉塵が晴れる。

そこにいたのは

レイジングハートを待機モードに戻し、素手でスバルの拳と、ティアナの刃を受け止めているのはがいた。

「ねえ……………なんでこんな……………無茶するのかな？」

その姿に、スバルのティアナも目を見開いて恐れた。
なんという人だ、と。

自分たちの攻撃は非殺傷設定とはいえ、威力だけは通るはずだ。
それを素手で受け止めると言う事。
言うほど簡単なことではない。

全くの素手で掴むから、その衝撃は身体を走るだろうし、現にティアナの刃を掴んでいる右手の手のひらからは血が滴り落ちていた。

「頑張ってるのはわかるけど、模擬戦は、ケンカじゃないんだよ？」

スバルは後悔する。

これが無茶をやった代償なんだ、と。

なのは受け止められたからいいだろう。

しかし、これが自分たちだったらどうなっていたのか。

自分たちでは、無茶をやった代償を受け止められないかもしれない。

目の前にある恐ろしいものは、そういうものなんだと、体で感じ、全身が硬直した。

「練習のときだけ言う事聞いて、本番にこんな無茶するなら、練習の意味、ないじゃない……練習通りやろつよ。私の訓練、そんなに間違ってる？」

そしてティアナもそれは同様だった。

しかし、彼女はまだ終われない。
終わるわけにはいかない。

だって、まだ証明してないから。

だって、まだ得てもないから。

大切だった人が、魔法が、もういなくなるのは、無駄だといわれるのは怖いから。
それを失いたくないから。

だから

クロスミラージュの刃が解除され、ティアナが後ろに大きく飛んでウインググロードの上に着地して叫んだ。

「私は……もう誰も傷つけないから……無くしたくないから……だから……！」

クロスミラージユの銃口前に、ティアナの魔力が充填されていく。それに対し、なのも魔力を溜めこんで周囲にスフィアを展開する。

そしてティアナを指さし、狙いを定める。

「ちょっと・・・頭冷やそうか・・・」

「ティアッツ!!!なのはさん!!!!!!」

スバルの叫びがこだまする。

りと獄炎砲を撃った形跡があった。

そして

「そのガキブツ飛ばすのは……オレだあ!!!!!!!!!!」

バギイ!!!!!!!!!!

スバルが悲痛な声を上げ、なのはが時風を睨みつける。

その目には、明確な敵意が込められていた。

「どういうことかな？ 舜君。これは私の教導なんだよ？ 邪魔……
しないでくれるかな？」

なのはの敵意がこもった視線。

あまりにも恐ろしいその眼光に、時風が虚仮にしたような笑みを浮かべて高い位置から見下していた。

「そういうわけにはいかねえな。あのバカガキは再三の忠告を無視したからな……スバルア！！てめえもだ！！踊らされてんじゃねえぞ！！とつとつそのバカ連れてフェイトんとこいけや！！！」

「え……あ……」

だがスバルは現状についていけない。

無理もないことだ。

なのはに怒られ、ティアナが撃ち落とされそうになったただけでなく、

突如として時風にぶん殴られて叩き落とされ、しかもその時風は異常なまでの敵意を撒き散らしてなのはを見ているのだから、身体はもとより、声もうまく出ない。

「おい……ポケットとしてんじゃねえよ……とつとと行けつってんだろオが!!!!!!顔面剥いで標本にすんぞテメエ!!!!!!とつとと、退けエ!!!!!!」

「は、はいイ!!!!!!」

その言葉にスバルの背筋を凍りつかせる。

恐怖、戦慄、怖気、なんでもいい。そんな感情が一気に噴き出した。

そして「死にたくない」と言う思いから、必死になってティアナを担いでフェイトの元に連れていった。

「さて……邪魔ものはいなくなった……次はテメエの番だ、なのは」

「私？私に？」

「そつだ。ティアナはお前の意志を無視し、あんな無茶しやがった。それはお前の想いを踏みにじる行為。翼人として、許しておけない」

「じゃあ……なんで……」

「てめえも同罪だからだよ、なのは。お前、ティアナとちゃんと話したか？ん？話してねえだろ？だからだよ」

「どういう事？……私、今とつても怒ってるんだけど」

「わからねえのか？こいつはとんだバカ野郎だな。お前……大人数の教導だけやって良かったな。小人数相手にやったらすぐにこれだ。被害者がティアナだけつてのはバカの中に救いだなあ、おい！！！！！！」

「……舜君……そこまで言つて……無事に済むと思つ

てんの？」

「はあ？今からてめえとやり合うつつってんだよ。わからねえのか？バカ！！！」

「バカバカと……人の事を……」

一気に罵詈雑言の言葉を吐きかける蒔風に、なのはが完全にキレる。それに対し、蒔風が落ち着き、そして冷たく、どこまでもつまらない物を見るような冷えた目で、なのはを見ていった。

「お前が怒ってるのを止めるためじゃない。お前の暴走を止めるためじゃない。ましてティアナを助けるとか、庇うとかそんなくはないことでもない。人の想いを無視した、てめえとティアナへの断罪だ」

瞬間、蒔風の姿が消え、なのはが背中になんかを感じる。

振り向くとそこにはなにもなく、蒔風が元の位置に戻っていた。

しかし、変化はすぐに訪れた。
全身に魔力が回ってくるのだ。

どついう事かと、なのはが蒔風を睨む。

「言い訳されちゃ面倒だからな。お前にかかっていた制約、解かせてもらった」

そう言いながら蒔風が手でクルクルと奇妙な形の短刀をいじっていた。

稲妻のように幾重にも折れ曲がったその名は「破戒ルトルフレイカすべき全ての符」

かの世界の魔術師の力を借りて投影したものだ。

「これでお前はランクS+だ。うまくやってそこだけ解いてやったよ」

「これは……余裕のつもりなのかな……?」

「いやあ？これはな……」

時風が髪を掻き上げ、怒りに満ちた顔をして言い放った。

「お前が死なないためにだよ」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers　↳激昂↳（後書き）

アリス「ついに蒔風キレましたね」

蒔風の乱入は普通のとは違います。

大抵はなのはやり過ぎを止めたりする場面になるのですが、そんなことはありません。

なのはに非がなければ、あのままいいぞ、もっとやれ、ってなってます。

ア「つまりなのはさんにも非はあると?」

次回で蒔風はそれを言います。
ですが……

ア「ですが?」

学校のレポートがヤバイ……全然書けてない……

ア「それは……」

と、言うわけで皆さま申し訳ございません

明日、明後日、もしかしたら最悪だと明々後日まで、この小説の更新が止まります。

非常に一身上の都合で申し訳ございませんが、ご容赦ください。

ア「次回、初対戦、なのはVS蒔風」

ではまた次回

少し、頭冷やそうか

なのはStrikers、失ったもの、取り戻すとき、（前書き）

私は帰ってきた！！！！

皆、会えてうれしいぞ！！

これまでの話を読みなおしたか？忘れていたことなどはないか？

よろしいならばはじめよう。

なのはStS、はーじまーるよー！！！！

なのはStrikers　く失ったもの、取り戻すとき

なのはと蒔風

二人が訓練場上空で立つように存在する。

その二人の表情は、フェイト達のいる屋上からでは図りきれない。

「ヴィ、ヴィータ……大変だよ……止めないと!!!」

「ば、バカ言え!!!あんな二人の中に飛び込んで行って止めるってのか!?!」

その周囲の空気は黒々とした感情で渦巻いており、とてもじゃないが入り込むなんてことはできない。

入ったら最後、どうなってしまうのか。

エリオとキャロはお互いを抱き合ってガタガタと震えて居るし、気

絶したティアナの傍らにいるスバルはいまだに腕を抱えて寒そうに震えていた。

「と、とにかくはやてとシグナムに連絡を………シャマルも呼んで、それで………」

「間に合うかよ!!!舜がキレちまったんだ………しかもなのはとかのためじゃないみてえな事言ってたから多分手加減ないぞ………!!!」

蒔風が構え、なのはがレイジングハートを起動させ、両手で握って蒔風に向ける。

「なんで……なんで……！……！私の教導が、間違ってたって言うの！……どうして……！」

ドオウ……！！

なのはの叫びと共に放たれたディバインバスターを蒔風が旋回してかわし、なのはに蹴りを放つ。

その蒔風を身体を回転させて、回り込んで避けるのは。そしてそのまま背後からレイジングハートを殴りつけるように振るう。

しかし

ギィン……！！……！！

蒔風の背に帯刀状態の獅子天麟が現れ、その攻撃を防ぐ。そして後ろ蹴り。なのはの身体が若干浮き、さらになのはの髪を掴んで額に膝をぶちかます。

バリアジャケットは見た目こそ服だが実際には魔力バリアが全身を覆ってるものだ。

だから頭から落ちてても、額を打つてもある程度の衝撃は防がれる。

しかし、この男がこの期に及んでそんな手加減をするはずもなく、なのはの脳は頭蓋骨内で激しく揺れ、額からは血が流れている。

が、そこは空のエース。管理局最強と名高い「エースオブエース」そう簡単には落ちず、最後に蒔風がいた位置に落ちながらも、レイジングハートの補助もあってスフィアを打ち出して攻撃する。

蒔風がそれを腕で顔を覆ってとっさにガードするが、足や胸、肩にそれが被弾し、爆発する。その間に地上になんとか足で着地したなのはが、額から流れる血を拭いながら上空を見上げる。

しかし、爆煙の晴れた先、そこに蒔風の姿はない。

それを知った瞬間、真横のビルを一気に突き抜けて来た蒔風がなのはに突っ込んできた。

ドゴン！！ガゴゴゴゴン！！……！！

ドオン！！……！！

蒔風がなのはの腹部に拳をめり込ませ、腕を振り切る。

その威力なのはの身体がくの字に折れて吹き飛んでいった。

その動作は一瞬だった。ビルが倒壊するよりも速い。

蒔風が突進して貫いてきたビルは今になって一気に根本から崩壊し、吹き飛ばされたなのははその勢いで五つほどのビルをぶち抜いていた。

なのはががれきの中で腰をつき、寄りかかりながら前を見る。

もうもつと上がる砂煙。

ガラガラと崩れ落ちるビルだった瓦礫。

そこになる、断続的なガラスを踏んだり、石の上を歩く音。

崩壊の中、時風が真っ直ぐになのはに向かってコツコツと歩いてき、それを見下す。

「どうしたよ。S+なら、まだそんなにダメージはないだろ？」

「く……」

「どうしたよって聞いてんだ………答えろ！！高町なのは一等空尉………とっとと立って踊れってんだ………楽しい話」お話「タイムだろオが………呑気に寝てんじゃねえよコラア………」

ビュッ……ゴゴッ………

蒔風の脚がうねり、なのはを狙って蹴りあげた。とっさにそれを横に転がって避け、なのはが崩壊するビルから一気に上空へと飛び出していく。

上空に着き、下を見下ろすと蒔風がビルを蹴り上げていた。ビルの屋上部分をけり上げ、それがなのはに向かって飛んできたのだ。

それを砲撃一発で粉碎するなのは。だがその間に、蒔風がなのはと同じ高さにまでやってきていた。

「……………てめえはどうして否定するかっていったな？別に、お前の教導にはケチつけねえよ。だが、てめえの甘えが今回のティアナの暴走を生んだと思え！！！」

「甘え……………？私は……………甘えてなんかない！！！あの子たちが、いつか一人立ちしても、絶対に落ちないように、そんな風にしてあげたかった！！！！それが甘いって言うの！？」

そんななのはの言葉に、蒔風がゆっくりと首を振り、哀れなモノを見る目でいった。

「わかってない……わかってないよ、高町なのは。お前……」

そこまで言って、蒔風がなのはを指さす。
そして、決定的な一言を述べた。

「お前、昔より劣ったな」

その言葉に、なのはの双眸が見開かれる。

自分がここまで強くなったのは、そう、守るためだ。

最初はただ手伝いだった。
困ってる人を、自分の持つてる力で助けられる。
そんな単純な理由だった。

そしてそれはいつかの事件で傷つく人を守りたいという決意にかわり、ますます魔法の力を上げていった。

程なくして後の親友と出会った。

その子とわかり合いたくて、その子を助けてあげたくて

そのためにまた、強くなった。

そしてまた事件があった。

次は自分が狙われた。大きな敗北だった。

もう負けたくない、という意地と、相手の話を聞く、という願い。

そのために、相手を戦い、勝つことも必要だと、また強くなった。

その強さはまた一人の親友を救い、なのはの胸で、まだまだ助けを
求める人がいるはずだ、と言う思いが大きくなってきた。

助けがなく、泣いている人がいる。

その人も助けたい、そして自分にその力があるのなら、自分はその
ために働きたい。

その思いから管理局にも入った。

そして、あの事件。
八年前の、事件。

あのととき誓ったんだ。

私の教え子たちにはあんな思いはさせたくない。

だから、絶対に落ちない、そんな訓練を。

自分は無茶ばかりしてあんなったから、絶対に無茶はさせないんだ。

落とさせちゃいけないんだ。

そう思ってから、教導隊では必死になった。

絶対に基礎から固め、見極めるまでそれより上の魔法には行かせない。

訓練メニューも吟味する。

絶対に自分みたいな無茶を、他人にさせちゃいけない。

そう、これも、誰かのために、誰かを助けたいがためにだ。

そしてそれは、ひとりの男への憧れでもあった。

「世界最強」と豪語して、すべてを救って見せると叫び、救えなければすべてを背負う、その姿に、なのははひたすらに憧れた。

子どもの頃はそうでもなかった。

ただ凄い人、という認識止まりだった。

しかし、管理局に入って思い知った。

世界には救いがなさすぎる。

そんな中でも、彼は世界に救いはあると言っていた。

彼の話聞くに、どうやらどんな状況になっても世界は彼に戦わせ
ることを強要したらしい。

しかし、それでも彼は世界を信じていた。

そんな強さを、ここ数年でやっと理解し、その人を目指してきた。

全部を救うことなどできない。

だったら、自分の遺志を継いでくれそうな、そんな子たちをたくさん育てて、みんなと一緒に守っていこう。

それは、彼女の夢だった。
皆を救いたかった。

そして、いつの日か、あの人と並んで立ち、一緒に助けて、いつかはあの人も助けて見せる。

それなのに

あなたを目指して強くなって、
できる限りのことをしてこのままで来
たのに

なんで

それを

やりたかったら

「どつして……あなたに否定されなきゃいけないのッ!？」

ドオン!……!

なのはの砲撃が激昂と共に放たれ、それを蒔風が回避する。
だが、なのはは止まらない。そして更に言うならば、十年経ったなのはの力は、蒔風の想像を超えていた。

ドンッ!……ギョングョングョン!!!!!!

なのはのダイバインバスターをかわした蒔風だが、その周囲をアクセルシユートが渦を巻きながら迫ってくる。
二つの魔法の同時砲撃。

蒔風が上空に向かって一気に上昇し、旋回を持ってそれをかわす。

だがそうしているうちにもなのはが次々とスフィアや砲撃を放ち、
蒔風を追い詰めていく。

その攻撃をすべてかわしながらも、攻めに転じる事のできない蒔風
が、青筋を立てて叫んで放った。

「……うつトオ………しいやあ……!!!!!!!!」

バオオウ!!!!!!

蒔風が獅子天麟で全力をもって薙ぎ、その風圧にアクセルシユート
のスフィアが真っ直ぐなのはに向かって押し返されていく。
それはまるで桜色の雨であり、砲撃に集中していたなのはに襲いか
かった。

「ッ、きゃあああああああ……!!!!!!!!!!」

「やっぱり……移動しといて正解だったね……」

「なあフェイト、どーすりやいいんだよ!? フェイト!」

「……………」

困り果てるヴィータと考え込むフェイト。

どうすればいいのか、なんて答えなど出ない。

相手はあのエースオブエースと世界最強だ。
対してこっちはリミット付きの魔導師二人。

止める術など、在りはしない。

だからフェイトは先にスバルに言って、フォワードたちを医務室や
自室に帰らせた。

この戦いは、あの子たちに見せるようなものじゃない。

そう、判断したからだ。

「あれを止めるなんて、できないよ。舜がああなった以上は、なのはと話をつけるか、舜が怒りをぶちまけ切るしか……」

「……あ、あたしシグナム呼んでくる!!」

そうやってヴェータがシグナムを呼ぼうと走りだそうとする。しかし、フェイトがそれを止める。

「ここにいて、ヴェータ。もしどちらかが大怪我をしそうになったら、ひとりじゃ止められない」

「う……じゃあこの事だけでも伝えとく。それならなんとかいだらう?」

「うん、お願い」

その内にフェイトが訓練所にフィールドで非殺傷設定をかける。プレートは破壊されても、これなら効くはずだ。

なのは達の魔法には相手を傷つけないために非殺傷設定が用いられている。

しかし、時風の力にはそれが無いし、今のなのはも手加減してるとは思えない。

さらにはいくら非殺傷でも、いきすぎた衝撃などは身体に深刻なダメージを与え、下手をするとショック死させてしまう可能性もあるのだ。

ヴィータが連絡をとり、フェイトがプレートのだ真ん中を突き破って海に沈んだ二人に目をやる。

そして、海が盛り上がっていった。

もはやプレートなど原形をとどめていない。

所々、まだ何とかビルを残している場所もあるが、それでもほとんどあるのはただ浮いてる板にすぎない。

海が渦を巻き。その渦がそのまま上空に抜きだされ、その中からなのはが放り出されてくる。

その上空のなのはの投げ出された方向に蒔風が海中から飛び出し、その脳天に踵落としを振りおろす。

だがそれよりも早くなのはが蒔風の顔面に向けて砲撃を放ち、蒔風の身体がのけ反って吹き飛んだ。

地面に落ちた蒔風。そこに向かってここぞとばかりに何十発のスプリアを叩き込むのは。

そこで蒔風は周囲を見渡し、今だからうじて生き残っているプレートの上にあるビルに向かって白虎釵の片方を投げ、突き立てた。すると蒔風の手にあるもう一方の白虎釵とそれが白い光の糸で結ばれ、手にある白虎釵を引いて蒔風の身体がそれによって一気に旋回、ビルを回ってなのはの背後にまわる。

その勢いのまま、蒔風がひねりを効かせたキックを、なのはがバリアを張り、衝突してぶつかり合う。

そしてそのまま、拮抗するかに思えたそれは、あっさりと覆される。

一瞬だけ火花が散ってぶつかる両者。

だが蒔風がその瞬間に足を曲げ、衝撃を緩和してからバリアの上を飛び越えるように回りこんだ。

そんな機動を見たこともされたこともないのはは何か振り返るので精一杯だった。

しかし、それも叶わない。

蒔風が後ろ襟をひつつかんで、なのはを海に向けて投げ放つ。

海に再びダイブさせられたなのはに、蒔風が突っ込んでいく。

その蒔風に向かって海中からカウンター気味に砲撃が放たれてきた。

その砲撃をらせん状に周囲を回って回避する蒔風。

だが海面に到達した瞬間、海面が爆発して水しぶきに思わず蒔風が目を瞑る。

そしてその蒔風に、なのはの鉄拳が飛んできた。

なのはが殴る。

そんなことは今までもありはしなかった。

もちろん、教導官をやっている以上ある程度の護身術や動きは教わったし、知っている。

だが彼女は砲撃魔導師なのだ。

そんなものは本分ではない。

つまりは、そこまでやらねばならぬ状況なのだという事。

蒔風が上空に後退し、なのはが少し高いところに停滞する。

蒔風は口元を指でさすり、ニヤリと笑ってなのはを見た。

「なかなか強くなったな、なのは。だが、まだ駄目だ。お前は劣った。十年前から、格段にな」

また言われた。劣ったと。

一体何が劣ったというのか。
強くなった、守ってきた、その道を貫いてきた。

目標となったあなたを見て、すべてを救えそうあなたを見て
助け出せない絶望や、帰るところも先もない絶望も、すべてを飲み
込み、背負う姿に

ただひたすらに憧れてきた十年間。

その結果が劣ったただなんて、なのははもう何が何だかわからなかった。

「何が劣ったっていうの!? わたしは……私の十年を、無駄にしたことなんてない!!!!!!」

ガキイ!!!!!!!!!!!!!!

蒔風の身体を、バインドが止める。
両手両足首、そして首に胴体と、桜色のリングが巻きついて、ギリギリと強く締め付けてきた。

「皆を助けるために、強くなった!!!もつと助けるために、そんなことができるような子たちも育ててきた!!!それなのに・・・今までの十年を、劣ってきただなんて、言わないで!!!!!!そんな目で、私を見ないで!!!!!!」

レイジングハートに巻きつくように環状魔法陣が現れ、足元にも円状、更にレイジングハートの先端にも同じく円状の魔法陣が展開される。

「なのはッ!!!それは!!!!!!」

「なのは!!!!やり過ぎだ!!!!!!」

その魔法をよく知るフェイトとヴィータが叫ぶ。

しかし、フェイト達側からは訓練場に声は届かない。

その間にも、レイジングハートの先端に、魔力が集束されていく。

「私はみんなを救いたかった！！そのために、あなたに憧れて、ここまで来た！！あなたに認めてもらいたかった！！皆を救う、なにもなくさない。そのために強くなったのに！！なのに、なんでそれをあなたが否定するのッ！？何が劣っているっていうの！？」

蒔風の目が俯いて見えなくなる。

なにも言わないその姿に、なのはがついに限界を迎えた。

「ああああああああああああああああ！！！！！！スターライ
ト・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！！」

なのはがレイジングハートを振りあげて叫ぶ。
しかし、そこで蒔風がボソツ、と呟いた。

「俺が言ってるのは強さだとかそこじゃねえ。そんなところが劣つて
るなんて、俺が気にすると思うか？違うんだよ、なのは。お前が劣
つたのは・・・・・・・・・・」

そう言いながら蒔風が力を入れる。
するとバキン、となのはのバインドが破壊され、身体が自由になる。

その手首や首からは薄皮でも向けたのか、赤くなってつつすらと血が流れていた。

そして人差し指をなのはに向け、その先端に白い光が集結する。
その大きさはビーズ程度と言う超極小。

その光が高音を発してさらに圧縮され、時風の指先の前に光の球としてチャージされる。

なのははそれにも気付かないのか、慟哭しながら、それを叫び、時風もそれに応じて、一発撃った。

そこには二人の人間が宙に立っていた。

一人は蒔風

その全身の服はボロボロになり、上体からは軽く血も流れている。
唇は切れ、髪も乱れ、肩も上下している。

ゲホゲホと咳をして、上半身がぐらりと揺れるがなんとか上体を起き上がらせる。

そしてもう一方はなのは

なのはのバリアジャケットは砲撃を撃つ前と大して変わりない。

だが、なのはは右肩を庇う様に抱え、その右腕はレイジングハートを握りながらもダラリと下がっている。

時風の「絶光尖」は貫通に特化したものだ。腕の細さ程度に練り上げた光が、そのスピード、その細さで敵を貫く、まさに絶なる光の尖。

更にそれをビーズ程度にまで圧縮し、打ち出したのが今回の「極」だ。

その貫通力は、相手の砲撃すらも貫き通す。

だが貫通力にすべてを注いだ結果、相手の砲撃や攻撃を貫きはするが打ち消すことができず、こうして「痛み分け」のような結果となるのだ。

そしてそれがなのはの右肩に命中していた。

あらかじめこの空間に非殺傷が働いていたため実際に肩に穴が開いたわけではないが、それでもダメージは深刻で、とてもではないが魔法を撃てるコンディションではない。

右肩一点にダメージを集中されそこを痛めたなのは元に、全身を平均的に攻撃された時風がヨロヨロと、ゆっくりと、なのはに近づいていった。

時風が近づいてきて、もうその手が届きそうにもなってくる。

それになのはが震え、左手にレイジングハートを持って

「あ……………ああ……………うああ……………」

その時風を殴りつけた。

時風は受けることもせず、かわすこともせず、それを黙って受ける。

「え……………？あ……………アぐっ……………」

時風がそのままなのはの襟首を両手で掴み、捻り上げる。

そして、言った。

「俺が言ってるのはお前の強さの事じゃねえ……そんなことじゃねえ。オレが劣ってるって言ったのはよ、お前のそのスタンスだ！！！！」

蒔風がなのはに叫ぶ。
それはなおも続いた。

「お前はどんな状況であつても、まず相手と「話をする」とこに對して真摯だつた！！！！そのために相手と戦うことも必要と解れば、そのために強くなつた！！！！思い出してみろ。お前は最初にあつた相手に、なんて言つてきたんだ！！！！お前が一番「話しあう」事が大事だつて言つてきたんじゃないか！！！！それがなんだ、このざまは。ティアナはお前の意志を無視し、お前もティアナが抱えているモノを知りながら、それを無視した。お前もあいつも同罪だよ……強くなれば許してくれるという甘えと、あの子ならわかつてくれるという甘えだ！！！！その双方の甘えが今回の暴走を引き起こしたんだ。それがわかつてんのか！？なんで話さないんだよ……なんで相談しないんだよ！！！！話し合うのはお前の領分だつたじゃねえか！！！！なんで忘れたんだよ！！！！どんな状況に持つて行つてでも、とにかく話し合おうとした奴だつたじゃねえかよ！

「！」

その言葉に、なのはが気付く。

そうだ

私……

あれからティアナとちゃんと話してないや……
どうしてだろう？いつから忘れちゃったんだろう？

沢山の人を相手にしてきて、一人一人とのつながりを忘れてしまっていた少女が、ここで気づいた。

話しあう、という、かつての自分の姿に

時風がなのはを放し、肩を掴む。

そして真っ直ぐに目を見て、しっかりと言った。

「それじゃ伝わらねえよ……確かに、言わないで伝わり合う関係は理想的だ。でもな、言わなきゃ伝わらないことだってあるんだよ……!」

「あ……あ……」

「だから、ちゃんと話せ。いいか？必ずだぞ!!そしてしっかりと仲直りしろ。言つとくがな、拒否権はないぞ。それをするまで、許さねえからな……!」

「うん、うん……………ごめんなさい……………ごめんなさい……………」

なのはが蒔風の胸で泣き始めてしまった。

それに蒔風が「しょーがねーなあ、お前は」と言っただけで頭を撫でてから「山」で切ってその怪我を軽く治す。

そして二人で一緒にフェイトたちの元に戻っていった。

そこにはすでにシャマルがおり、シグナムが息を切らして走っていた。

しかし、何とかことなきを得たので「安心、と言ったところだ。

なのはがフェイトやヴィータに「心配掛けてごめんね?」と涙ながらに謝る。

その場についてきたリインが先日の出張時に行っていた模擬戦による被害を想定していたおかげで、ここの修理は問題ないそうだ。

それを見て満足したのか、蒔風が戻ろうか、と提案する。

こうして、一連の出来事は終わった。

だが彼は知らない。

なのはの過去が、この後明かされ、それが彼にとってどれだけ過酷なことかを

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers　く失ったもの、取り戻すとき（後書き）

やっと更新できたぞおおおおおおお！！！！

アリス「皆様、お待たせいたしました、更新、再開です！！」

でも明日は休みなんですよね……

ア「書けばいいじゃないですか」

ごめん、無理。

流石に休ませて

ア「さて、なのはさんとのやり取り、終わりましたね」

作者として、アニメを見たとき何やってんのこいつら？とマジで思いましたからね。

ティアナはなのはの教導、意志を無視し、なのははティアナの覚悟、想いを無視しました。

そりゃあーなって当然だと。

ア「あれ？でもティアナさんはまだ納得してないですよね？」

まあそこは次回ですね。

ア「なるほど。次回、力を得る、その代償」

ではまた次回

駄々をこねるだけの馬鹿はなまじ付き合っ
てやるからつけあがる

なのはStrikers　く代償く

一人の少女が夢にうなされている。

迫る砲撃、打ち返す自分。

しかしその両方が掻き消され、直後、硬い硬い拳が目の前に迫り、
そして……………

「ッ！！！！・・・・・・・・・はあ、はあ・・・・・・はあ・・・・・・」

その夢を最後に、ティアナが医務室のベッドで目を覚ます。

部屋の中には自分しかいないようで、時計の針が秒を刻む音だけが静かに鳴っている。

3905

「私・・・・・・えっと・・・・・・」

ティアナが身体を起こしてなにがあったのかを思い出そうとした。しかし、身体が起き上がらない。

一体何が？

そう思いよく身体をみると、シーツなどで身体がベッドに括り付けられ、上を見るとちょうど眉間のご真ん中のところで一本の棒が吊されていた。

「な、なにこれ？・・・・・・・・・・そうだ・・・・・・・・・・私、なのはさんとの模擬戦で・・・・・・・・・・舜さんに・・・・・・・・・・？」

なにがあつたのかをティアナが思い出す。

そして、嫌でも目に入るその棒を真つすぐ見た。

これはどういう事なんだろう？と棒を凝視するティアナ。

そうしていると、その効果が表れてきた。

眉間に触れるか触れないかの位置に吊された棒。

それを見ているうちに、なんだか眉間の辺りがムズムズしてきた。

そして顔全体までもがムズ痒くなってくる。

その感覚は表現しがたいものだ。

首を振って目を背けるがもう遅い。

いちゃう五秒前である。

「早くこれどかして！あと両手！顔が！！ムズムズするっ、の！おかしくなるウー！！！」

尋常ではないその様子に、スバルとシャマルが急いでティアナを解放する。

そして洗面台にダッシュして顔を全力で洗っていった。

「シャマル先生……これって……」

「この手の嫌がらせは舜君ね……まったく、いつ侵入したのかしら……」

時風の名を聞いて、ティアナが顔を上げる。

顔をタオルで拭き、シャマルに自分はどれだけ眠っていたのかを聞く。

「もう6時間になるわ。よっぽど疲れが溜まっていたのね」

6時間

つまり、自分はそれだけの時間を無駄にした。
それだけあればまた訓練が……

再び悪循環しようとするティアナの思考。

しかし、その考えを読んだかのように、シャルルがストップをかけた。

「ダメです。ティアナさんは自室待機だそうですよ？それに、もしそうでなくても、医師として訓練なんて認められません」

シャルルが優しく、しかし強く、ティアナを止める。

ティアナがどうして、と口を開くが、理由なんてティアナ自身も十分に承知していた。

毎日度重なる訓練による肉体の酷使、精神の疲弊、模擬戦での無茶、さらに蒔風の一撃。

これだけの負荷を受け、ティアナの身体は限界に近かった。
当然、6時間程度で回復するなんてわけもない。

「にしても……舜君もよくやるわ。モニターで見たけど、あれだけ殴り飛ばして死なせないなんて」

「え？」

「ティアナさん、自分がどれだけ吹き飛んだかわからないでしょう？」

「ティアは……その……」

スバルとシャマルの説明にティアナは背筋が凍った。自分にそれだけの敵意を、殺気を向けていたなんて。

「あの人は……本当になんなんですか？」

「……どういふ事かしら？」

「あの人が強いのは嫌というほどわかります」

「翼人だもんね」

「でも、怒ったくらいであんな簡単にあれほどの殺気や敵意を振り撒けるんですか？」

確かにそうだ。

人は怒れば敵意や殺気を振り撒く。

しかし時風のそれは心底憎しみを携えた敵のそれと大差なかった。

そんなことが簡単に出来るのだろうか？

そんなに簡単に、あの人は敵になるのか？

「なるわ」

それに対し、シャマルが一言、断言した。

その言葉にスバルとティアナがビクリと震える。

そんなに断言出来るものなのか、と

「と、言っても、シグナムが言ったことなんだけどね？シグナムが昔、舜君と戦った時、感じたらしいの」

「な、何を・・・ですか？」

スバルがゴクリと固唾を吞んで聞く。

「すべてを、そして何も」

それに対する答えはそれだった。

全く正反対の答えに困惑する二人に、シャマルが説明する。

「シグナムと舜君が戦った時は・・・ある敵の不意打ちでフェイトちゃんが倒れて、シグナムとの一騎打ちを邪魔したの。それに対して舜君は怒っただけで、その敵は逃げちゃって、代わりにシグナムが舜君の相手をしたんだけど・・・」

「それで・・・どうなったんですか？」

「惨敗よ。私たちヴォルケンリッターの歴史でも、シグナムがあんなにも敗北したのは初めてつくくらいに。でも重要なのはそこじゃなくてね、シグナムが感じたこと。それが」

「全てと、何も？」

スバルにコクリと頷くシヤマル。
なおも話は続く。

「その時、シグナムは舜君の目からあらゆる感情を感じ取れたって言った。きっと、それは本当だし、舜君はそういう人なんですよね」

そう、それは正義だった。
そう、それは悪意だった。
そう、それは義憤だった。
そう、それは悦びだった。

独裁、慈善、復讐、義理、偽善、偽悪、救済、破滅、情、志、歪み、
狂気、理性、本能、衝動、歓喜、慟哭、哀愁、優越、劣等、善悪善
悪……………

それらすべてを内包し、故にどれにも属さない。

願いを受けるといふことは、すべてを理解し、受け止めること。

だから彼には悪もあり善もあり、理性もあり狂気もある。

シグナムは十年前、蒔風に対してそういったものを漠然とを感じていた。

「えつと……それで、舜さんは敵になるかっていうのは……」

「ええ。つまり彼は、簡単な理由一つあれば、私たちの敵にもなる、つてことよ。だって、善悪とかそういうのを超えてるんですもの」

ティアナはその言葉に猛烈に不安になる。

そんな不安定な人物を、自分たちの身近に置いて大丈夫なのか、と。

それに再び、シャマルが断言した。

「大丈夫だし、私たちは舜君を信頼してるわ」

それは最初の断言と同じくらいに確信に満ちた声だった。スバルとティアナがなぜ？という顔をする。

「だって……いつ敵になるかわからないんですよ？」

「今回だって……そうでしたし」

「だったら、今回以外に舜君が敵になった事って、あったかしら？」

「あ……」

それを考えると、それはそうだ。

今までスバルは楽しく接してきたし、ティアナは頭をはたいてツッコミもした。

自分たちでこれなのだから、同室のエリオなんかもそうだった場面は多いのだろう。

しかし、彼は依然として自分たちの味方だ。

「彼は翼人よ。人の想いを司る者。だから、基本的には善悪に関係なく、人を認める人なの」

「善悪に関係なくって……」

「でも、そこで彼の人となりが変わって、彼は彼の正義を貫いている。だから、大丈夫なの。彼の信念が、どれだけのものか、知っているから」

シヤマルが十年前の戦いを思い出す。

彼は闇の書の意味を……リインフォースの想いを認めていた。

そしてその上でそれを否定し、訂正してきたのだ。

彼は人の意思を踏みつぶすことなどしない。

その先に続く意志を消し去ることをよしとはしない。

だからこそ

彼は彼女を消したときすべてを背負い、そして彼女の残したリインリインに涙したのだ。それ

「だから安心しなさい。彼は、私たちの最高の仲間よ」

シャマルが笑顔で締めくくる。
しかし、ティアナは納得してなかった。

否、時風が味方であることはもう疑ってない。

しかし、やはりそれだけのモノを抱え、へらへらとしている彼に、また嫉妬していた。イラついていた。

それだけ強いなら、強そうにしてください。いつもいつもへらへらふざけている。

それは強者の余裕ですか？

弱者にはそこまで見せるつもりはないと？

無論、蒔風にそんなつもりはない。

彼はただ、世界を楽しんでいるだけだ。

しかしティアナにはそう見えてしまった。

盲目的に強さに固執する少女は、まだそこに固執していた。

今まで使ってきた技で普通に倒す、という方針で、切札は出さないことにしている。

まあたしかに、この程度にいちいち切り札は出せないが。

「でもなのは、大丈夫？ 昼間の模擬戦の事もあるし……」

フェイトはなのはの身を心配していた。

確かにそうだ。昼間の模擬戦でのあの戦闘。

もちろん、その話ははやての耳にも入っている。

あの後なのはには再びリミッターがかけられて、ランクは戻されていた。

そこに問題はない。ただ、身体に疲労がたまってるのではないかとフェイトは心配していた。

それに対して、なのはがガッツポーズをとって大丈夫、と言いきる。

「あの後舜君に言われたんだ。」「この事を言い訳にして仕事サボん

じゃねえぞ。すぐに終わらせて、すぐに話せ」って

「そ、そうなんだ………」

だがフェイトは別の話を聞いていた。

模擬戦後、おそらくなのはにそう言った後の時風曰く

「ここで仕事休まれてみる。オレに回されるじゃねエか。なんでオレがそこまで尻拭いせにゃならんのだ」

だそうだ。

はやてはそれに呆れ声を出した。

「舜君……ムチャクチャや………いつたいなにがしたいんや？」

そして出撃のため、ヘリポートになのは達全員が集まっていた。
フォワードの四人も収集され、これからの行動の指示を与えられて
いるところだ。

「じゃあこれから私たちは、洋上に現れたガジェットを撃退してく
るから、フォワードの皆は念のために待機して、有事にはすぐ出ら
れるようにしといてね？」

「はい！！」「はい……………」

三人が大きな声で返事をし、ティアナが元気のない声で答える。
それを見たなのはが、ティアナの事を気遣って優しく言った。

「ティアナは……………待機任務から外れておこうか？」

なのはの言葉に、ティアナが顔を上げる。
その顔は信じられないと言った感じに目が見開かれ、そしてそれはそのままなのはに喰ってかかっていった。

「言う事が聞けない奴は、使えないってことですか……………」
「・」

ぼそりと言つティアナのその言葉に、なのはがカチンとくる。
だがここで怒ってはいけない、と踏みとどまる。

そうだ、今のティアナは不安定なんだ。もっと優しく伝えないと。

そう思ってたのは言い変えて伝えようとした瞬間、ヘリポートに声が響いた。

「バアカ！ひよっこのお前が、勝手に動いて何かできると思ってたのか？ってか、お前が言った事、当然なことだぞ？」

時風である。

今までどこにいたのか、今になってひよっこり出てきた時風。そしてどこかで出撃を聞いたのか、なのは達を見送りに来たのだ。

「なあティアナ、お前、ちょっと調子乗り過ぎだぞ？自分の弱さに甘えてんじゃないだろうな？訓練でも、模擬戦でも無茶をする。そんな奴が本番に出されると思ってたのか？」

蒔風が皆の元に近づく。

エリオヤキャロ、スバルはその姿に若干身体を引いた。

無理もない。昼間のあんな姿を見ては、恐れを抱くのも当然だ。

蒔風がそれを見、悲しそうな、諦めた顔をしてティアナを見据えた。そう、そんな中、ティアナだけはフォワードで一人だけ、蒔風を睨みかえしていた。

「なんなんですかあなたは………なんで上司でもないあなたが私にそんなこと言うんですか………私はちゃんとやってる、訓練もこなしてる、命令も聞いている。それ以外の訓練をやってもいいじゃないですか!!!なのになんで、ダメだっというんですか………?」

「ティアナ、それはティアナ自身が一番わかっているはずだよ。コンデイションの万全じゃない状態じゃ、大怪我するだけだから」

なのはが間に入ってティアナに説明する。

後ろの方でヴィータも賛同し、シグナムが腕を組んでその話を聞いている。

「私は、あなたみたいに自分に自信なんてない。隊長達みたいに優れてないし、スバルやエリオみたいに才能もない、キャロみたいにレアスキルもない。だから、そんな私は死ぬ気で練習しないとイケないんです！！無茶をするのが、そんなに悪いことですか！？わたしはただ……」

と、そこでティアナの言葉が途切れる。

その場にいる全員が目を見張っていた。

シグナムが、ティアナを殴り飛ばしてその発言を止めていたのだ。

スバルが驚き、蒔風がほう、という声を出す。

ティアナがシグナムの一撃に心身ともに喪失し、ぼんやりとその場に倒れて座り込んでしまう。

そのティアナの肩をスバルがそばによって支えるように持った。

「蒔風の言う通り、貴様は甘えているだけだ。弱い弱いと、いつまでもそこに甘んじて……そういえば許されるとでも思っているのか？つけあがるな！！だからお前は弱いんだ！」

シグナムがティアナに怒声を飛ばす。

その後ろではなのはがティアナに帰ったら話そう、と言いながらヴィータにヘリの中に引っ張られていく。

そうして飛び立っていったヘリを見送って、周囲が異様に静かになる。

そこで、スバルが口火を切った。

「……命令違反は絶対だめだし、今のティアアの物言いも、そしてそれを止められなかった私も、悪かったと思います」

それはスバルやティアナの反省点だ。
今更ながらに言う事ではない。

しかし、スバルの本音はこの先にあった。

「だけど、自分なりに強くなろうとする事や、きつい状況でも何とかしようと頑張るのは、そんなにいけないことなんでしょうか!？」

スバルが叫ぶ。確かにティアナは悪かったかもしれない。
でも、その考えは間違っていないはずだ、と。

誰かを守りたいと強くなるのは、決して間違いではないと。

それに、蒔風が一言答えた。

「それは悪くない。むしろいい」

「え？」

スバルがきよとんとした顔をする。

絶対に否定されると思ったのに、こつもあっさり肯定されるなんて、考えても無かつたのだ。

しかし、それはそれでスバルの疑問が飛ぶ。

「じゃあ舜さん、なんでいけないみたいに言うんですか!？」

「やり過ぎだからだ。てめえの力の分量もわからず、無茶な行動で仲間を誤射。訓練漬けで身体を休めないオーバーワーク。強くなるなら、無茶もいい。だが、それはそこまですることなのか？」

蒔風の返答。

そんなに強さなんて求めてどうすんだよ。

そのように聞こえた時風の返答で、ティアナがついに痙攣を起こす。

「あんななんかに………」

「あん？」

「あんななんかに何がわかるのよ！！翼人なんて化け物並に強い力を持って、「世界最強」なんて言いふらして！！！！自分の世界を出て好きなように飛び回って！！！！それでいてそんなヘラヘラしてて！！！！あんたみたいな生れながらの天才に、私の気持ちなんかわからない！！！！そんな力を持てたあんななんかに、なにも言われたくないわよ！！！！！！」

ティアナが叫ぶ。

強大な力を得られたお前に、力が欲しい私の気持ちはわからない、

と。

そのティアナに蒔風が聞く。

「じゃあ、お前は……俺みたいに力が欲しいと？俺が……この力を受けた理由が何かも知らずに？」

蒔風の声は震えている。
それは怒りか、哀しみか。

どちらともとれるような声を出し、ティアナに再度聞く。
それに、ティアナは切実に叫んだ。

「欲しい……あなたはどやってそれだけの力を得たの……？私だって、それだけのモノがあれば！！失うことなんてない……」

・・・！！！！がハツ・・・！？」

ティアナの言葉と息がそこで突然つまる。
足が浮き、苦しそうにそれを両手で掴んだ。

その理由のはっきりしている。

ティアナの首を、蒔風が片手で締め上げ、持ち上げていたからだ。

「自分の世界が壊れて、俺はこの力を得た。俺が世界を飛び出して
だと？飛び出すしかなかったんだよ！！俺だってあそこにいたか
ったさ！！でもな、俺は自分の世界を捨ててきたんだぞ！！！！
守るためにだ！！人として、更には生物からも外れたオレが、唯一
の繋がりだったその世界からすらも外れ、いつも一人で世界を回る
！！！！そんなことがうらやましいって？自分の世界にいて、自分
の世界を守るお前がオレはよっぽどうらやましい！！なんだよ
それ・・・・なんなんだよそれ！！オレが欲しかったのは、あ
んな代償じゃなかったんだよ・・・・！！！！！！！！」

蒔風が涙ながらに叫ぶ。

その手の力がゆっくりと強くなっていく。

「もしおまえがそれを見たいなら、いいだろう・・・・・・・・・・
・・見せてやる」

《我は異端者、法則から外れる》

時風が一言つぶやく。
すると、ティアナの目の前の景色が変わった。

ひび割れた空、うねる大地に砕けた空間。

それだけではない

もう無いはずのかつての彼女の家に家族。
そして今の友、仲間、大切な人たち、大切な場所。

そのすべてが崩壊し、まさに世界の終わりであった。

その中で一人の男が自分に迫ってくる。

その姿は、黒

顔の部分が陰ったように見えない男が、この世界を破壊している。

ティアナの全身が震える。

なんだこれは

こんな世界、私は望んでない
この崩壊の中でどうやって力を得るのか

この程度か？とティアナが思う。
しかし、今のは自分以上の力だという事に、気付いてもない。

「ヤッタね！！ティアア！！」

背後から声がかかる。
それは自分の親友の声。

無事だったのかと振り返って聞「じつとじ」

「クシ……」

その声がひきつる。

なぜなら

その身体はすでに死に体だったからだ。

そのスバルの顔は血みどろで、身体は抉れて腕はなく、血のせいでよく見えないが、きつと片目もつぶれている。

「あはは！私、死んじゃったんだ。でも、ティアがその代わりに強くなれたんだから、いいよね！！キャロもエリオも、大怪我してもう立てないけど、ティアが勝ったからいいもんね！！！」

そんなことを笑顔で言うスバル。

そのスバルから、ティアナが下がっていく。

違う

「どうしたの？ティア。ティアはたくさんがんばって強くなったんだよ？そのための無茶やフオーで私もエリオもキヤロも、いなくなっちゃったけど、ティアはがんばってたもんね？強くなるうとしてたんだもん！！皆うれしよ！！よかった！！ティアが強くなれて、皆うれしよ！！！！」

違う

「つまり、これでティアの夢はかなったんだよ。見て！！管理局の

偉い人が、ティアを認めに来てくれたよ!!」

違う!!!!!!

ティアナが頭を振ってしやがみ込む。

こんな物は違う!!!私はこんなことのために強くなるつもりだんじやない!!!!

私は・・・私は・・・

そのティアナに声がかげられる。
その声は今は亡き兄のもの。

その声が、しゃがみ込んで頭を抱えるティアナの頭上に響いた。

「ティアナ、僕のことを認めるさせるために、仲間やすべてを代償にして、強くなってくれて」

ありがとう

「それがお前の言う「努力」か？お前が払おうとした代償は、あまりにもでかい。それも理解できずに、よくものうのと力が欲しいなどと軽くのたまったな、貴様は」

蒔風の言葉が聞こえ、幻覚が解ける。

気付くとティアナの周囲は元に戻っていた。
依然として首には蒔風の手が。

ティアナは涙を流してすでに気絶している。
そしてその手により一層力がこめられ、そして……

「主!!!!!!!!!!」

ガキイ!!!!!!!!と、蒔風の身体が止められる。
ティアナの首がその手から外れ、意識はなくなるともゲホゲホと咳こみ、
倒れた。

蒔風は、青龍たち七人掛かりで動きを止められていた。
蒔風の腕を、脚を、首を、胴を、その全身で青龍たちが止め、蒔風

を後退させる。

「主！！何をするつもりですか！！あなたは先の意志を潰してしま
うつもりですか！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・クソッ・・・・・・・・」

青龍たちに取り押さえられた時風が、自分の両手を見てから手を下
ろして、空を仰ぎ見る。

そして時風が全員が剣に戻してから、ヨロヨロと時風が自分の脚で
自室に戻っていく。

そんな中、獅子だけが残ってティアナを見、聞こえないだろうとも、
優しく説くように一言だけ言った。

「彼が力を得た時、どんなことが起こったのか。ティアナ嬢、相手
の気持ちも知らずに、軽率な事を言うものではない」

そうして、蒔風の上に獅子も還り、その場を去っていった。

「舜・・・・・・・・」

「蒔風・・・・・・・・」

シグナムとフェイトが蒔風の後を見送る。
その二人に、エリオが聞いてきた。

「あ、あの・・・・・・・・舜さんの過去って、一体何があったんですか？」

その質問に、フェイトがシグナムに相談する。

「それは………どうしようか？」

「………話してやれ」

「いいのかな？」

「あいつはそんなくらいじゃ怒らん。それに私たちが知ってるくらい
の事なら、話しても大丈夫な範疇なんだろうからな」

そうして、ついに話そうと決め、そこに同じタイミングでシャーリ
ーがやってきて、みんなを呼んだ。

彼女もまた、話したい事があると

それは、なのはの過去の話。

彼女の無茶をして、失敗した話だ。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers（代償）（後書き）

蒔風君のトラウマを掘りかえそう!!!

アリス「いやいやいや」

やろっぜ!!!

ア「あんた鬼ですか。それより、蒔風はいつからあんな幻覚なんて能力持ってたんですか？」

あれですか？

あれは固有結界の副産物ですよ。

彼の固有結界は世界の法則を捻じ曲げるもの。
だったら、景色を歪ませるくらい出来るでしょ？

まあ、それくらいしかできないだろうし、あんまり強い物じゃないけどね。

ア「にしてもティアナさん、やっぱり殴られるんですね」

当初、あそこでいきなり蒔風がティアナを殴って壁までとばし、そ

こで首を押さえるはずでした。

でも一回殴られて、さらにまたなんてあまりにもやり過ぎかもな、
と、思っ、てあそこは姐御に任せました。

ア「次回、明かされる想い」

そして、彼の在り方を今一度

ではまた次回

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……………
あ、これ中の人繋がりだわ

なのはStrikers ～揺らぐ～

機動六課隊舎内ロビー

そこでシャーリーがフォワードの四人に話をしていた。
内容は、なのはの過去。

フェイトとシグナムも同席し、その内容を静かに聞いていた。

なのはの歳には合わない異常なまでの正義感。
そして膨大な魔力。

魔法との出会い、二つの事件。

フェイトとの戦いや、ヴォルケンス、闇の書の意志との戦いでなのはの戦いをモニターに出しながら、その歴史を語っていった。

そのあまりのスケールに、フォワードの四人が唾然とする。

画面の中のなのははまだ齡九歳の小学三年生。

そんな少女が、身に余る危険と力と勇気を以って、ひたむきに、必死になって戦う姿。

自分達よりも小さな子が、あんなにまで恐ろしい一撃を放ち、そして一人でも戦ってた事に、四人は驚いていた。

そして、ついに八年前のなのはの過去が明かされた。

「八年前。ある世界で、なのはさんが大怪我をしたの」

それは今まで無茶をやってきた代償だった。

任務は無人世界に現れた謎の敵影との戦闘。
当時なのはは十一歳。

管理局内で早くもエースとして活躍していた彼女なら大丈夫だと、
現場の局員は皆そう思っていた。

だがそんなはずはなかったのだ。

小さな体に、大きな魔力。更にはどんなことでも成し遂げてしまう、強い意志。
それゆえに彼女は二年間、ダメだと言われて空を飛び、無理だと言われて戦った。

闘い続けて、そして墜ちた。

その巨大な魔力を、できるからと言って次々と使用した結果、彼女の身体には反動と疲労が溜まっていたのだ。

「全力全開」

それをいつでも言い続け、どんな時でもためらわずに貫きとおした彼女は、結果的に無茶な機動を行って、戦闘中に身体のコンディションが崩れた。

地上に落ち、そこに敵に攻められ、大怪我と言うのはあまりにも軽いほどの怪我を負った。

ヴィータがその場に駆け付けた時はもう遅く、レイジングハートは折れ、雪は真紅に染まり、白い彼女のバリアジャケットは真っ赤になって、胸の赤いリボンを隠してしまう。

その怪我は尋常ではなく、命を拾えたのが不思議なほどのもの。

だが、彼女の地獄はここから始まりだった。

怪我の治療、一時的な魔力の枯渇、身体の損壊、残る痛み。

そして、もう二度と空を飛べないかもしれないという恐怖。

このときからすでに無意識下であっても、彼女は彼に憧れていたのかもしれない。
だから恐れた。私は、彼のようにもう誰も救えなくなってしまうのか、と。

しかし結果として、なのはは回復した。

過酷なりハビリや、先のことの不安や恐怖と戦いながらも、彼女は血反吐を吐く思いで必死になって身体を取り戻した。

そして決心した。

こんな思いは絶対しないし、させない。

誰にもさせない。あんな地獄は、見させない。

その思いから、なのはは教導を絶対に安全な、そして、絶対に墜ちない子を育てるようになった。

墜ちて命を散らさぬように。
墜ちて地獄を見ないように。

それがなのはの意志。
なのはの思い。

それを知ったフォワードが、言葉に詰まる。
特にティアナは、自分がどんなことをしていたのか、ここにきてようやくと理解したようで、その眼には涙がたまっていた。

そこでシャーリーが選手交代と、フェイトに次の話をしてもらう。

「じゃあ……………」

と言ってフェイトがモニターに映像を出す。

そこには蒔風のワールドリンクによって発動した、なのはの砲撃や、「奴」との戦いの映像があった。

おそらく、先日ユーノからもらったものだろう。

それを映して、話そうとした、そのとき

「なんだよ………これ………」

ロビーに時風の声が響いた。

ティアナに対して、やり過ぎたことを謝りに来たのだろう。
そして、廊下で話を聞いてしまった。

その真偽を確かめるべく、部屋に入ったらその映像。
これではまるで………

その時風はモニターに映るなのはにヨロヨロと近づぐ。

そして、眩いた。

「なのはが……墜ちた？ 身体の負担で？ それで……これは・
………」

時風の目の前には「奴」との戦闘が映っている。

その中にはもちろん、ワールドリンクの効果で強力な砲撃を何発も
放つなのはの姿も映っている。

「これは……オレの……まさか……オレは……
……」

蒔風の考え。

それに気付いたフェイトが、蒔風の肩を掴んで必死に言った。

「違うよ!!! 舜のせいじゃない!!! これは別のものだから!!!
! 舜のあれは、体に負担は残さなかったよ!!!!!!」

「俺は……オレは……オレハ……誰かの
未来を……消しかけた?」

自分の肩を抱き、ガタガタと震えて膝を突く時風。
その眼は焦点があつておらず、今にも気を失つてしまいそうだ。

「なのはの無茶なのはの責任だから！舜のせいじゃないから！！
！私もはやても、みんな大丈夫だったから！！！」

その言葉に理解しているのか、時風が首をフルフルと振って頭を抱え始めた。

「俺は……俺はあ………人の未来を………その願いを………想いを………消してたのかもしれない………」

「舜！！ダメ！！！！！」

フェイトが必死に話しかけるが、蒔風が「ウッ」と息を止め、まるで嘔吐でもしそうな顔になる。

そして腹を押さえ、ヨロリと立ち上がって、その部屋を出ようとする。

「舜!!!」「蒔風!!!」

フェイトとシグナムが蒔風を呼びとめ、せめて付き添おうとするが、蒔風が小さな声を絞り出して、それを断った。

「大丈夫だから……今は……一人にさせてくれ……
俺はもう……あ……うう……」

ヨロヨロ

まるでまともに重力を得ていないような歩き方で

時風が部屋を後にする。

その憔悴しきつた時風の姿に、エリオとキャロが信じられないと言った顔をしている。

「舜さんが……あんなに……?」

「いったい……どういふ事なんですか?」

そこで、フェイトが皆に話し始めた。
時風の事を、知りうるすべてを。

「舜が世界を回っている理由は、前にも話したよね」

「はい、確か……」

「世界の軸となる人物を殺して、その世界を取り込んで力にしよう
としている「奴」って言うのを追ってきてるんですけどっけ？」

「そう。でもね、彼のいた世界は、私たちの知ってる地球とは違うらしいの」

「違う……ですか？」

「他の世界とか、魔法とか、そういう特別な力なんて、何一つとしてない世界」

「蒔風は”no Name”だといっていたな」

「その世界で、舜は「奴」に襲われた」

「襲われたって……大丈夫だったんですか？」

エリオが積極的に聞いてくる。

それに、しっかりと答えていくフェイト。

「大丈夫じゃ……なかつたみたい」

「え……?」

「これは主はやてがリインフォース?を作成する際、夜天の書のデータを調べた時に見つかった記録だな。映像では残ってないが、情

報として、我々はそれを知った」

「舜の世界は、一回破壊されかけた。舜自身も殺されかけて、大切な仲間も、傷付けられた」

「その時の蒔風はただの人間だ。「奴」に敵うはずもなく、瀕死の重傷にまでやられたらしい」

「そして、管理者と言われる女の人から、翼人の力を解放してもらったんだって」

「じゃ、じゃあ……あの力は……」

「そう、自らの世界を破壊され、その悲劇を打ち破るために得たもの。だから舜はいつも必死なんだよ。自分の世界と同じことを絶対に繰り返さない、って」

「その存在の大きさから崩壊しかけた世界には居られない。そもそも、蒔風の世界は”no Name”。居られ続けるわけもないのだろうな」

「だったら舜さんは……」

「その世界はだんだん修復には戻っているらしい。だが、その頃にはもうすでに時風を知る者はいないだろうな」

「そんな……」

「だから、彼はひとりなのだ。常に、ひとりで世界を回り、勝ち続けるという異常をこなし続ける」

「だからあんなに怒ったんだ……あの力が欲しいなんて……私……」

3970

ティアナが後悔する。

なんとこの事を言ってしまったのか、と

彼は決して、大丈夫などではなかったのだ。

ティアナが今すぐ時風に謝りに行くことと席を立つ。
しかし、フェイトがそれを止めた。

「ダメ！！今の舜は、多分誰の話も聞けないから……」

「な、なんでですか？」

「そうですね。舜さんのあの様子は普通じゃなかったです。一体何が……」

そこからシグナムが話を始めた。

「翼人と言うものは、実はよくわかってはいない。だから時風の言ったことしか、現状情報がないのだが、あいつが言うには、翼人は人の想いを司っているらしい」

「人の……」

「想い……」

「舜によると、今までも何人かに合ったらしくて、勇気とか、愛情とかね？」

「そして時風の翼の想いは「願い」だそうだ」

「願い……ですか？」

「そうだ。そしてそれは、人が未来に進もうとする力でもある。つまり、高町のあの事件が自分に原因があると思っただあいつは、今苦しんでいる」

「人の未来が、人の願い。だからこそ、舜は悪とか善とか、関係なくその質で見比べるんだよ」

「だからティアやなのはさんに……」

「うん。人の意志を潰す、っていうのは、舜が一番嫌う事だから」

「だから、それをしてしまったあいつは、思いつめている」

「だったらなおさら……!!」

「でも、今はだめ。舜が落ち着くまで待たないと、きっと話はできないよ」

フェイトがそう言って締めくくる。

そして、時風が消えていった廊下への扉に、全員が目を向けた。

それから数十分後

ガジェットを何の苦もなく粉碎してきたのはとヴィータが帰還する。

そして、シャリーがフォワードたちに自分の過去を話してしまった事を聞く。

それに関しては、まあしょうがない、となのはも特にとがめなかった。

しかし、フェイトの言葉に、なのはが悔しそうな顔をする。

彼に知られた。あの過去を。

エリオと蒔風の部屋

明りはついておらず、カーテンも閉じられて外の光も入ってこない、真っ暗な部屋。

そのベットの中で、蒔風が頭を押さえて蹲っていた。

「だめだ……だめだ……だめだ……もう……俺は……」

蒔風は世界に情報を求めていた。

内容は、なのは落ちたあの事件。

犯人なんかはどうでもいい。

なぜ落ちたか、それを求めた。

すると世界は必要と思ったのか、その原因を時風に流し始める。

その内容を理解し、時風が後悔し、そして思った。

3977

確かに俺の負担じゃないみたいだ・・・
でも・・・俺は口クナモノを残さないみたいだな・・・

なのはは落ちた。

こんなくならない俺への憧れなんかで無茶をして

さらに自分は昼間に何をした？

自分の怒りにまかせて、勢いでなのはのリミット解除して、それでまたあいつの身体に反動や負荷が溜まったらどうするんだ？
それであいつがまた地獄を見るようなことになったらどうする？

そんなこと、「願い」の翼人として許されるわけにはいかない。

もう駄目だ。
関われない。

俺は最初から、「奴」だけ倒してればよかったんだ。

そうだ、俺はイレギュラー
本来ここにはいない者。

だったら……俺は

この物語にはいらなかったんだな

だったらそうあろう。
俺はもう介入できない。

これ以上、あいつらの未来を、世界を、物語を、壊すことなんてでき
るはずもない。

さあ、「蓋」を再構築しよう。

なに、少し修正するだけだ、問題はない。

心を保て、時風舜。

お前は世界を守らなきゃならないんだぞ。

それが俺のやるべきことだ。

翼人として、やるべき事を為せ。

泣き虫に戻ってる場合じゃない。

臆病者になるんじゃない。

それにはすべて「蓋」をしる。

自信を取り戻せ

誰とも関わらないだけの自信を

そうだ、いつもの言葉をつぶやこつ。

そうすれば、自分はできると、思えてくるから。

「大丈夫だ・・・俺は世界最強だから・・・」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers ～揺らぐ～（後書き）

暗いなこいつ

アリス「あなたのせいでしょうに」

そーですね

ア「あら気の抜けた返事」

ここから先書くのめんどいんですよ
ついに原作介入をやめると言う蒔風君。

そんな主人公、書いててつまらん！！！！

ア「だったら早く復帰させなさいよ。そこまでのシナリオは考えて
頭にはあるんでしょう?」

そうですね、なんかそこでさっさと出すとそれもなんか薄くなっ
てしまうじゃないですか。

ア「どうするんですか?」

だったら続くかもしれません。
そうなたらすみません。

ア「次回、決別の告白」

ではまた次回

私の教導地味だから、あんまり成果が出てないように感じて、苦し
かったんだよね？ ゴメンね

なのは strikers とも関われない (前書き)

なのはStrikers くもつ関われないく

翌日

蒔風は早朝訓練に出て来なかった。

同室のエリオが言うには、蒔風はいくら揺すっても生返事をするだけで、起きては来なかったそうだ。

まあ、彼のことだからきつとまだ寝ているのだろう。

いつも通りだ。

そう思い、なのはとフェイトは朝食後に蒔風の部屋に向かうことにした。

そして早朝訓練が終わり、二人が時風がまだいるであろう部屋へと向かう。

しかし、部屋から気配が感じられない。

ドアを開けると、部屋の中には誰もいなかった。

もう起きてるのか。

だったら食堂だ、と二人が向かう。

もとより一緒に食べるつもりだったのだ。

そうとなれば善は急げと二人の足が食堂に向く。

そうして、食堂に到着した二人は、ついに時風を見つけた。

時風はフォワードたちと、普通に朝食をとっていた。

その姿に一安心するなのはとフェイト。

「舜、大丈夫みたいだね」

「うん。でもちゃんと……話しておかないと……」

そうして二人もトレーに朝食を乗せてフワードたちと同席させてもらう。

「あ、な、なのはさん……………」

「おはよ、みんな。舜君も……………おはよう」

「おう、おはようさん」

見た感じはいたって変わりのない時風。

昨日の狼狽が嘘だったかのような、いつもの通りの時風だ。

「舜君……………昨日のことだけど……………」

なのはがさっそく話を切り出す。

朝食の場でするものではないのだろうが、これ以上引き延ばすことは出来なかった。

しかし、時風がなのはの言葉に待ったをかける。
そしてニツ、と笑っていつも通りに言った。

「大丈夫だ。キチンと持ち直したよ。もう大丈夫。関わり方に気をつけるからさ」

「え？」

その言葉に、なのはが疑問を浮かべる。
今何と言った？

「関わり方に気をつける」だって??

一方、フェイトはフォワードに、念話で話を聞いていた。

『舜と何を話していたの?』

『私は・・・昨日のことで謝って』

『それで舜さんも悪かったって、頭を下げてまでしてくれて・・・』

『僕とキャラには、怖がらせてごめんな、って頭を撫でてくれました』

『そ、それから舜さん・・・もう踏み込まないから大丈夫だって・・・』

『え?』

フェイトもまた、疑問を浮かべる。

もう踏み込まない?

「・・・舜君、今日のこれからの訓練、見てもらいたいんだけ

ど、いいかな？」

なのはが疑問を振って時風に聞く。
しかし、時風の返事は否定の断言だった。

「NO、だな」

「そ、そう………だったら………」

なのははなおも時風と話そうとするしかし

「なのは、オレは今後の訓練には出ない。出勤もしない。注意もしない。「奴」が出たら、その時だけ戦う。もう、お前らとは関われない」

その言葉に、全員が絶句する。
もう、なにもしないと、彼は言った。

今まで、なにかあるとすぐに助けてくれた彼が、もう手をださないと、そう言うのだ。

「な、なんで……」

フェイトが聞く。

それに対し、時風が至極当然のようにさらりと言った。

「オレが残したものに、ろくなものはないからな。この物語はオレがいなくてももしっかりと回るんだ。イレギュラーが相手をするのはイレギュラーだけだ」

そういって朝食を取り終わって席を立つ時風。

「もうお前らとは関われない。俺はお前らの物語には関与できない。」

だから……じゃあな」

その場を去る蒔風。

その出口でばったりとはやてと会い、訓練場の件で深々と頭を下げ、もう二度とすることはない、と言って部屋に戻ってしまった。

「なのはちゃん、フェイトちゃん……一体何があったん？もうしないって……あれ、ちよう違う意味に聞こえたんやけど」

はやてはもとより、訓練場での損害について蒔風に愚痴るつもりだった。

だが昨日蒔風は訓練後にはどこかに行つてて、出てきた後には部屋にこもってしまったのだから、彼女だけは何が起きたのかわからずじまい。

そのはやてに、そして後から来たヴォルケンズにも、蒔風の言葉をそのまま伝えた。

蒔風はその後悔から、彼女たちの前から去った。
その最後の言葉は、決別。

自分はこの世界では災厄にしかならないと。
自分がいなくとも、この物語は回って行けると。

自分が残せるものは、なにもないと。

そう思い至って、彼は表舞台から姿を消すと言ったのだ。

もう、蒔風は今までのように助けてはくれない。
なぜなら、彼がいなくても世界は回る。

彼の標的は「奴」ただ一人。

ならば

彼女たちの物語に、首を突っ込む必要など、本来あるはずもなかったのだ、と

時風は完全に機動六課の局員との関係を断った。

「奴」が出現した場合を想定して、回線だけは開いていたが、決して時風がそれに応答することはない。

まず、部屋を変えた。

エリオと同室だったのだが、ある日に時風の荷物が全く別の部屋に移されていた。

そしてみんなと行動が被らないようにもした。

一日中訓練にも出ず、時間をずらして食事を取る。

朝から昼、夜まで、時風と顔を合わせることもない六課のメンバー。

たまに顔を見ることはあっても、時風はすぐにいなくなってしまう。

彼は怯えていた。

一体何が彼女たちの物語に関係してしまうかわからない。

情報から、あの事件が自分のものではないというのはわかったが、あの模擬戦の時、自分はなのはに負荷をかけさせてしまうところだった。

否、もしかしたらもう、その負荷はかかってしまっているのかもしれない。

更には訓練所の破壊、ティアナへの暴行
翼人として、人の先を、意志を潰す、その許されざる行為。

ここまでやってしまっ、時風は気付いた。

俺は何も残せない。

この世界は俺がいなくても回る物語。

だったら

そこにイレギュラーをねじ込んだら、どうあっても歪んでおかしくなるのは当然じゃないか。

だから、俺は関わらない。

銀白の翼人は、「奴」のみを追う者であればよかったのだ。

「ダメだよ……俺はもう……皆と関わる勇気がない……
……俺の願いは……通じなかった……」

願いの翼

その在り方を持つ青年は、誰も傷つけないために、ひとりで戦う道を選んだ。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers くもつ関われないく(後書き)

アリス「短いすねえ……」

はい、今回のこの「時風非干涉」の話は少し続きます。
でも、こんな文章ダラダラ書いててもしょうがない。

だから短くなっております。

ア「戻ってくるんですかね？」

この作品としての答えはYESですね。
流石に戻ってこないとあれですし。

ですが、前来た時の二回で、彼が残せたもの、っていつのは考えて
みればないかもしれないんですよ。

ア「他の世界では？」

あつたかもしれません。

でも、それを時風は知らないです。

彼が戻るまで、どれくらいかな？

ア「次回、蒔風、自信の元と、彼の心」

ではまた次回

胸に宿る 熱き彗星は 始まりの鼓動へ・・・

なのはStrikers　「蓋」

フエイトとはやてが二人で話し合っている。
議題はもちろん、彼のことだ。

「舜君がもう関わらへんって……」

「自分にはまともなものを残せないって言ってたよ」

「そんなことあらへんよ……あたしら舜君にどれだけ助けられたと思とんねん……」

「それについても、こないだ舜に話を聞いてきたんだ……」

フエイトがその時のことを話し出す。

それはまた数日前のこと

フェイトは蒔風の部屋の前に立っていた。
そしてそのまま、閉じられた扉越しに蒔風に語りかける。

「舜……舜が残した物は、ちゃんとあるよ。だから帰ってきて……みんな寂しいよ……一緒にいようよ……」

誰かと関わるということを、誰よりも大きく大事に思う彼女だからこそその言葉。

蒔風はきつと聞いている。
そう信じて、フェイトが語る。

すると、扉に寄り掛かる音が聞こえ、扉のすぐ向こうから、蒔風の
声が聞こえてきた。

「俺が残せたのって……何だよ」

やっと会話が出来た。

その問いに、フェイトはすぐに答えを返した。

「私は舜の言葉に励まされて、あの時立ち上がった。はやても助けてあげられた。だから、舜が残した物に、ろくでもないものなんか、なにもないんだよ？」

優しくフェイトが時風に言う。

もし時風が簡単に喜べるような簡単な男なら、これで終わっていた。

しかし、彼はこの世界で多くを背負っている。
それを無視など出来るはずもない。

「俺はプレシアを助けられなかった」

その言葉にフェイトの肩がビクリて震える。

「それは……」

「さらに、リインフォースも消した」

「だって……でもあの状況で舜は全力を尽くした！それなら……」

「全力どうのこうのじゃない。つまりは俺じゃなきゃ残せないものはない、ってことだ……。そこに首突っ込んで、いらん事なんかできねえよ……。フェイト、お前はあの時立ち上がったと言うが、それは俺がいなくても、なのはの存在がやってくれた。はやても、お前らがいれば解決出来た事件だ」

「そんなことないよ！舜がいなかったら……」

「いなくても解決出来た。それは原典が証明している。そこでプレシアやリインフォースを残せば、俺はそっちにいられたかもしれない。でも……。そんなことはない。オレはこの世界に何も残せてない」

そう言って、扉の向こうから気配が消える。

フェイトはただ、立ちつくした。

「原典」が何だかは知らない。

フェイトは世界について、なにも知らない。

でも、このままでいいわけがないという事だけは、わかってるつもりだ。

しかし

だからといって、今の時風にどんな言葉をかければいいのか、わからない。

確かに、この世界で時風は活躍をしたかもしれない。
だが、最終的に残ったのは原典通りの主要人物。

プレシアも、アリシアも、リインフォースも、誰一人として救い出せてはいない。

では、彼のいる意味は……………

「なんやそれ………そんなん、悲しすぎるやろ………」

はやてがフェイトの話聞いて、今にも泣きそうな顔をする。

彼がこの世界に来たのは「奴」を倒すため。

それ以外の接触は不必要。むしろ、彼女らの邪魔にしなければならない。

そんなことがあるのだろうか。

そんなことがあってよいのだろうか。

しかし、世界は残酷だ。

今までこの世界で、時風が残したものは何も無い。

「はやてちゃん、フェイトちゃん……………」

と、そこになのはも合流する。

今まで時風の部屋の前で話していたのらしいのだが、フェイトとほとんど変わらない会話しかしてきていないことを告げる。

「なんで……………あんなに消極的になってもたんやろ……………」

「そうだよ……いつもの舜なら、何とかするって言ってるはずだよ……」

フェイトとはやてが、時風のあまりの変わりようにわからないと頭を振る。

「舜君……こういう事言ってるっていうの、ユーノ君に貰ったデータにあったよ。アースラで、叫んでみたい。でもその時は、自信たっぷり俺が何とかする、って、言ってたのに……」

なのはも同様にわからないという。
彼はいつでも自信があった。

幾度負けても、立ち上がってきた。

しかし、今回は諦めてしまった。

なぜ今回はだめだったのか。

時風舜は、自信ある人間ではなかったのか、と。

「……それに関して……知りたいですか？」

「!!……あなたは……」

三人の元に聞こえた一人の声。
その声の方向を見ると、そこにいたのは二人の「人」

青龍と獅子が、そこにいた。

「確か……舜君の使役獣とか言われていた……」

「……私は青龍です……こちらは……」

「獅子だ。なのは嬢、フェイト嬢、はやて嬢。我が主のこと、知りたいか？」

まさかの二人の申し出。

一体どういうことなのか。

彼らは基本、時風の意思によってでしか出てこない。

それが歩き回り、あまつさえ主の事を話しに来るなど。

「……我らとしても……今の主は……よく……ありません……」

「うむ。しかし決して勘違いされぬよう、ここでおそらく我等しか

知らぬであろう「蒔風舜」の事を、話しておこうと思ってな」

「我々としても……これ以上主を見てられません……主を理解できる方は、おそらく存在しません」

「それでも、少しは知ってもらいたいのだ。蒔風の事を」

「そして……彼がどんな人間かを……どれだけ自分を偽った者かを」

彼らしか知らない蒔風舜。

いったい、どんなものなのか。

自分たちは、彼を勘違いしていたのか。

「彼がなぜあんなったのか、だな？」

「うん。それと、なんであんなにいつも通りで……それであそこだけハッキリと変えたのか」

「一晩じゃ早すぎる……舜君に何があったんや？」

その質問に、青龍たちが息を吐いてから答えた。

「主には「蓋」があるのだ」

「「蓋」……ですか？」

「……そう……それは本来の自分を隠すための仮面」

「本来の彼は自身もなく、出来ると言っても八割程度の、どこにもいないような普通の青年だった」

「……しかし、そんなのではだめだと、彼は考えました」

「自分が弱くあるのは嫌だ。その思いから、彼は理想の自分を形作り、それを「蓋」とし、その弱さを押し込めた」

そう、その時だ。

彼が「死への理解」を得たのも。

「蓋」を作るには様々なものを理解しなければならない。
その過程で得たのがそれだった。

「だから、今回の失敗からの立ち直りも早いわけです。ただ「蓋」を書き変えて、在り方を少し変えるだけですから」

「主は今までの人生、そうやって過アッパぎして来ました。失敗したら、乗り越える、という形ではなく、改良の形アップデートで回りこんできたのです」

「だからいざ大きな失敗などに直面し、それが連続的になると、彼は大きく変わる」

「……そして今回……ついに「自信」を……書き変えてしまった」

「自信って、なんですか……?」

「彼は自信がない。常に、なんにでも」

「……おかしいと思いませんか?なぜ、主があそこまで……世界最強に……こだわるのか」

確かにそうだ。

彼の気質なら特に勝ち負けにこだわらない、と言っても誰もおかしいとは思わない。

むしろ、楽しめればいいような人間だ。

しかし、彼は「世界最強」に固執した。
その理由は、簡単である。

それを獅子が語りだす

「自信がないからだ。だからいつでも「世界最強」と謳い続ける。そうでもしなければ、彼は自信を失い、自分を保てなくなる」

「……あれは主の自己暗示なのです。だから……」

「ダメだよ」

そこで青龍の言葉を、なのはが遮る。

その眼には、絶対にそんなのはだめだという思いがあった。

「それはただの逃げでしょ？そんなのはダメ……立ち向かって、乗り越えなきゃいけない！！」

「そうや！！失敗して、乗り越えもせずに改良だけしてそれでしまいなんて、そんな無責任なことあらへん！！」

「私も一度、逃げそうになった。でも、逃げるのはよく……」

「別にいいだろ、逃げたってよ」

フェイトの言葉をさえぎって、二人の主の声がした。

「なに勝手に話してんだお前ら」

「……しかし主!!」

「行くぞ」

「主よ、いいのか!？」

「良いも悪いもねえ。俺はもう、そっちに行く自信がねえんだ。俺はお前らほど強くない。弱いんだよ。それを何とか言い繕ってきて、ボロが出た。ただそれだけだ」

獅子と青龍を回収し、その場を去る時風。

「待つて舜君!!話を……」

なのはがその背中を呼びとめる。

しかし、彼は一度たりとも止まることはなく、そのままいなくなっ

てしまった。

その様子に、なのはが涙してフェイトに飛びつく。

「フェイトちゃん・・・舜君・・・こっちの方全然見てくれてなかったよ・・・」

「なのは・・・」

「なんなんや・・・あのヘタレは・・・ただ弱いから逃げるやと・・・？翼人がなんや。そんなもん・・・」

はやてが憤って悪態をつく。

しかし、それにフェイトは違うと反論する。

「はやて。舜はもう、どこにも属さない人間なんだよ・・・人からも、生物からも、世界からもって言ってたから・・・だから・・・「翼人」っていう枠は、舜の最後の居場所なんだよ」

「そんなん……うちらがいくらでも作ったる……それなら……」

「でも……それじゃあ私たちに迷惑をかけるって……」

「……ああもう……!……どないせえっちゅうんや……!……!」

「待とうよ。そして、伝えよう」

はやてが頭をがガシガシと掻くと、なのはが一言、ぽつりと言った。

「待つの。舜君は、いつか気付いてくれるよ。私たちがどれだけ舜君を待っているか。そして、それを伝えなきゃいけない……」

それはなのはの決心だ。
彼を必ず連れ戻す。

そのために、みんなで言葉を贈るのだ、と。
想いは伝えなければならぬと。

それから、蒔風の人に皆のメッセージが届くようになる。
しかし、その内容はどれも蒔風の心を押すものではない。

この世界で、蒔風だからこそ残せた何か。
それが現れる日が来るのだろうか。

誰かと関わり、そのものの願いを受け取れたとき、彼は真の強者になる。

忘れたことは、あまりに大きい。

誰の想いも受け取れぬ、関わりを断った翼人など、並の強者と変わらない、という事を

t o b e c o n t i n u e d

なのはStrikers 〱「蓋」〱（後書き）

時風へタレ編です。

アリス「へタレへタレー」

全くですね。

でもそれが何だか「仕方ないよね」と思ってしまうのが主人公マジック。

ア「主人公補整ってやつですか？」

そうそれ。「奴」が主人公を嫌う理由だよ。

サブキャラなら許されなくても、主人公ならあら不思議。

ア「それはむかつかますね」

それはそうと、五十万アクセス突破ア!!!!!!!!!!

ア「なにこの唐突な展開!？」

そして東京都「あの法案」の可決……

ア「そして墜ち込んだ!？」

あの法案は「エロい物は子どもに見せちゃダメ!」っていうもんなんですよね。

で、その規制を東京都が始めるそうなんですが……

ア「ですが？」

作者としては、規制はした方がいいでしょう。

十八歳未満にエロいの見せるのはまずいですし、と言っておきます。

ですがこれが皮切りになって、様々な規制が漫画、アニメにかけられてしまうのではないか、という懸念があります。

法律や政治の世界は前例があるとメチャクチャ有利になる世界ですからね。

だからここから言われも無い規制が始まると思うとがくがくブルブル。

しかし、正直そんなに気にしてません。

反対の署名は……東京都民じゃなくちゃ出来ないはずだから出来ません。

自分神奈川県民なんで……

あのおっちゃんは口悪すぎんですよ。
正直、言葉は捉える人間によって意味が変わるといふ事を理解して
ない。

更に言うなら

理解してないやつが否定するんじゃない。

と言ってやりたいですね。

これは小説の中でも言ったかな？

どこで言ったっけ？忘れちゃった・・・

ア「話し終わりました？」

終わったよー

ア「次回、休日、そこから始まる」

ではまた次回

まためえてつねしいよ

なのはStrikers　く休日の裏、脈動く

「舜、今日の訓練でみんな、第一段階を突破したみたいだよ」

「……それで今日の午後は……オフシフトになるようで……遊ぶくらいなら主も……」

今日、ティアナたちフォワードは訓練の第一段階をクリアした。

基本、部屋にいる蒔風にそういった情報を持ってくるのが青龍たちの仕事になっていた。

自分からは動かず、ただ、見守らせて、「奴」が来るのを待ち続ける。

あの日からずっとこの調子だ。

だから青龍は提案した。

遊ぶくらいなら構わないのではないかと。

しかし時風の首は縦には振られない。

「しつこいぞ、青龍。何がきつかけになるかわからないでしょうが。それで下手に改変して、取り返しのつかないことになったらどうする」

時風の答えはいつもこうだ。

最初の内は七獣全員が時風を説得していた。

これ以上孤立して、どうするのかと

しかし時風の返答は変わらない。

その時風に、次第に注意する者はいなくなっており、今では忠誠心の高い青龍がたまに言うくらいだ。

「俺はまともな物は残せないんだ。残した物はすべて負の物。俺は関わるべきじゃない」

俺はもうあっちには行かない。
だからこれ以上言うんじゃない。

今までの数日間、誰がやめようとも、青龍だけは蒔風の為に、今からでも戻れると説得してきた。

しかし、いつもあまり感情を表さない青龍も、ついに蒔風に対し、感情が吹き出した。

「だったらなぜ我々に見回らせて、見守らせているのですか・・・」

それに蒔風は胡座をかいて座り、青龍に背を向けたまま答えた。

「「奴」の行動はおそらくあっちに向く。だから些細なことでも・・・」

「その程度の事ならば・・・我々で結界を張れば・・・簡単に察知出来るでしょう!!!!」

「せ、青龍？」

いきなり叫んだ青龍に、白虎がビクリと驚く。
彼がこんなに叫ぶのは、初めてだったのだから。

「一々我々に・・・見守らせる必要は・・・ないはずだ!!・・・
・ようはあなたは・・・断ち切れないのですよ・・・あなたが
誰かを見捨てられるはずなんかないんだ!!・・・中途半端に・・・
・しないてください!!あなたを待つてる人もいるし・・・我
々だって・・・今のあなたは見たくない!!」

青龍が背を向ける蒔風の肩を掴んでこちらに向かせ、その目を睨んで叫んでいた。

「関わらないなら・・・良いのです!!・・・だけどあなたは・・・
・・・・我々を通して関わりを望んでいる!!・・・それが・・・
いいわけではないでしょう!!我等の主であるならば、もっと強くあつ
てください・・・どっちつかずは・・・やめていただきたい!
!」

青龍がついに時風の襟首を掴んで捻り上げる。

その青龍を白虎が抑え、獅子や玄武たちも出てきて下がらせる始末だ。

皆に退げられた青龍に、時風が無感情な眼をしてから、だったらこすりゃいいんだろ、と新たに命を下した。

「だったらお前ら、今から任務を解く。ずっと剣でいて、出て来るな。あいつらと関わるな」

「……………ッ!!ア主!!」

「どうした、青龍」

「……………あなたは……………もう違う……………」

青龍が首をつなだれて降り、その場に座り込む。

そして時風の意味で半強制的に皆が剣に戻され、鞘に収まって消えた。

その中で青龍が、一言だけ呟いた。

て、その通りに店を見ていた。

二人とも管理局魔導師とはいえ、まだ子供だ。街に出れば興味を引かれる物ばかり。

あっちこっちの店を見て、それでもお金は無駄遣いせず、楽しく街を回っていた。

「エリオ君、今度あっちのお店行ってみようよ!！」

「そうだね!!行こう!!！」

その姿は本当に年相応の少年少女と変わりないものだ。そして疲れてしまったのか、計画書に書いてあるのか、公園のベンチで一休みをする二人。

そこでいろいろな話を話す。

二人ともフェイトを保護者としている。

ここに来るまで、いろいろな経緯があった。

いきなりでもなんなので、軽くお互いの話を話し、そこからゆっくりと知って行こうと、交互に身の上話をしていく。

フェイトと出会う前、フェイトと出会ってから、そして機動六課に来てからの日々。

そして、そこまで来て、当然あの男の話になる。

「キャラは……舜さんごとく思っ？」

「うーん……模擬戦の時の事で、少し怖いなって、思ったかな」

「そうだよね……あのときの舜さん、怖かったよね……」

「でも今は大丈夫だよ。あの人は、私たちの味方。それは、ちゃんとわかってる」

「うん……でも……」

しかし、彼は関わりを断った。
もう、話せないかもしれない。

「私、こんな性格だから、あんまり舜さんと話しもできてないんだ

よね……」

「僕はまだまだ聞きたいことあったのに……」

「ふふ、エリオ君、そんなに好きなの？」

キャロのからかうような言葉に、エリオが拳を握って語った。

「何言ってるの！すごいよ！あの人は！！そりゃ、最初は変なお兄さんだな、って思ってたけど……」

「思ってたんだ……」

「最初はただ「あの噂の翼人さん！？うわぁ、本当にいたんだ！！」って感じだったんだ」

「うん」

「でも、一緒の部屋にいるうちに、あの人が、そんなにすごくはない人なんだってわかってきて」

エリオのその言葉に、キャロが首をかしげる。

「あれ？さっきは凄いつて言ってなかった？」

「う〜ん、なんていうんだろ・・・凄くないけど、そこがすごいって言うか・・・」

「エリオ君・・・わからないよ・・・」

「あ、ごめんごめん。そうだなあ・・・まずね、朝に弱いんだ」

「それは知ってるよ。フェイトさんと走りまわってたもんね」

「でも部屋での寝起き姿とか見たことないよね？」

「うん」

「凄いんだよ、本当に。前に起こそうとしたら、そのまま抱きつかれて抱き枕にされちゃったんだけど・・・」

「エリオ君、それってあの時の遅刻？」

「うん」

エリオは一度、訓練に遅刻してきた事がある。
その理由がこれだったのだが。

「どっやって脱出してきたの？」

「えと・・・その・・・(ボソツ)殴った」

「え？」

「脱出しようとしてもがいてたら舜さんの顔に当たっちゃって」

「だ、だからあの後の朝御飯の時、舜さん顔にあざあったんだ……」

キヤロが大きな汗を流してあはは……と笑う。

「それでその時舜さん、即座に土下座の体勢になって介抱してくれただけだね」

「うわぁ……」

キヤロは「ダメだそれ」的な顔をしてその話を聞く。
更にエリオが言うには、その時寝起きで髪はボサボサ、よだれの跡が残り、目は半分眠っていたそうだ。

それを聞いてキヤロが更にあららら……とあぁあ、を合わせたような顔をして呆れる。

「それは……ダメだね」

「うん、あのときは僕も、ええ〜？ってなった。でもね、それでもあの人はすごいんだよ。強いし、かつこいしいし、世界の話なんて面白いものばかりだったよ」

「そうだね・・・あの人は確かにすごいね・・・私もつとお話したかったなあ・・・もう帰って来てくれないのかな・・・」

このとき、キャロとエリオの共通感覚はまとまったようなものだ。

彼は、ダメだが凄い人、と

そして、キャロの最後のぼやき。
それに、エリオは自信を持って返した。

「舜さんは帰ってくるよ。僕はそう信じてる」

その眼には確信に似た信頼があった。
あの人はきつと、僕達のために帰って来てくれる。

理屈とかじゃない。理由なんてない。

ただ、蒔風と私生活を共にした彼だからこそ、そう何となく思えた
だけだ。

「でも、舜さんに送ったメール、一通も帰ってきてないよ？」

「それでもだよ。僕は毎日送ってる。帰ってきてほしいんだあの
人。もつと話をしてほしい。もつといろいろ教えてほしい。もつと
たくさん……その……遊んでほしいんだ」

「エリオ君……」

「フエイトさんの話だと確か、舜さんの翼は「願いの翼」だったよ
ね？ だったら、僕の願いも、届いてくれるはずって、信じてる」

彼は信じる。一人の男の帰還をずっと。

しかし、彼は時風の残したモノを知らない。
十年前の事件も詳細までは知らないし、その時どんなことをしたの
かも知らない。

彼がこの世界に何を残したかなんて、わかりもしない。

今の彼には、願っただけでは届かない。
しかし少年は持っていた。

彼の残したものの、そして、彼が逃げる事の出来ない、その想いを。

それはから数十分もしない時間が経ち、街を再び歩くエリオの耳に、
なにかの音が聞こえてきた。

そしてその方向へ行き、そこで少女を一人見つけた。

新たなる出会い。
新たなる物語。

この物語は、新たな人物キャラとの出会いによって、一つの節目を迎える
こととなる。

なのはStrikers 〱 休日の裏、脈動〱 (後書き)

アリス「おお？エリオ君が何かやってくれそうな予感ですね？」

どうなるかは次回に。

ちなみに、今回他メンバーの動向を知りたい方は、アニメ本編をご覧ください！！！！

ア「出た丸投げ」

書いてどうする、そのまんまのものを。

ア「まあそりゃそうなりますけどね」

ではよろしく

ア「次回、彼は一体何を望むのか」

ではまた次回

最近のお前、センターガードの動きになってるな

なのはStrikers　〜何が為に戦うのか〜

機動六課でアラームが鳴る。

何か事件でも起こったようだ。

蒔風がその警告音にベッドから跳び起きた。

そして急いで上着を羽織って、すぐに指令室に向かった。

その数分後

蒔風はアラームが鳴り終わらないうちに、指令室へと到着していた。

指令室に入ってきた蒔風に、はやてやシャーリーが声をかける。

来てくれたのか、と
助けてくれるのか、と

しかしそんな言葉には見向きもせず、蒔風がモニターの映像を見る。

4048

オフシフト中のフォワードたちが裏路地で少女を保護。
どうやらレリックク入りのケースを引きずっていたらしく、一つは少女と一緒にあったが、もうひとつは下水にあるようだ。

レリッククと入りのケースと繋がっていた事もあり、少女は機動六課で保護となり、現在ヘリでシャマルが回収したようだ。

フォワードたちはそのまま下水へと潜り、紛失されたレリッククケー

スを探しに向かった。

その途中、別ルートからでレリックの出回りを探っていた陸士108部隊所属の魔導師で、スバルの実の姉であるギンガ・ナカジマと合流する。

さらにどつやら洋上から多くの飛行ガジェットが押し寄せてきているそうだ。

おそらくは地下のレリックか、それに繋がっていた少女を狙ってだろう。

最初こそヴィータとリンが防衛ラインとして迎撃していたが、途中からどうにも幻影を織り交ぜた混合部隊となった援軍が来、手に負えなくなる。

そのためにはなのはとフェイトがその上空で防衛ラインとして交戦し、ヴィータが地下のフォワードたちに合流することになったらしい。

その情報を一部始終見て、ふう、とため息をついて、時風が指令室からコツコツと歩いて行ってしまっ。

「舜君！！！！」

その時風をはやてが呼び止める。

その声に時風が一言だけ言って、この部屋を出た。

「奴「じゃない、と

ガンッ！！！！！！！！！！

その言葉に、はやてがコンソールを殴りつける。

もうすでに時風のいない指令室に、殴りつけた音が鳴る。

「本当にいいのかって？……そんなん、もう俺に決めるだけの権利はないよ」

指令室の扉のすぐそこで、はやてのつぶやきを聞いて蒔風が部屋へと向かう。

その途中で何人もの六課スタッフが走りまわり、蒔風がそれを流し目で見、悔しそうにうつむく。

そう、彼だってあの場に行きたいのは当然なのだ。
あんな現場を、放っておけるほど、彼の感情は大人ではないし、押し込めるほど「蓋」は強くはない。

まだ改良が必要だな。

だが彼は行くことなどできないのだ。
誰かの先を潰してしまう可能性がある以上、翼人として、そんなことは許されない。

そんなことを考え、感情を押し込めながら部屋に戻る。

一人で寂しく、「蓋」の練り上げに入る時風。
いまだに彼が安定してないというのは、まさに青龍の言ったとおりだった。

そうしている事、数十分。

時風がフウ、と息を吐き出し、一休みに入ろうとする。

そして、ベッドに座り、自分に送られてきたメールボックスを確認する。

それらは今日の朝にはすでに溜まっており、未だ消化しきれてない。

空中に浮くモニターを叩いて、メールを確認しようとする時風。
だがその寸前で、その手が止まる。

そつだ、関わりを断たないなら意味がない。

こんなこととしてぶつする。

だからさっきも青龍に言われたのではないか。

その考えが、一瞬時風の脳裏に走る。

しかし、結果として彼はメールボックスを開いた。

結局のところ、彼は弱い人間だったのだ。

彼は誰かと関わらない、なんてことはしきれない人間だった。

繋がりを求め、寂しさに簡単に潰れるようなそんな弱い心の持ち主が、青龍の言う「断ち切り」なんて、完全に出来るはずもない。

そして、その「弱さ」が

時風の扉を開けることになった。

その内容はすべてビデオメールだった。

なのはやフェイト、スバルやキャラロにティアナ、シャマルやシグナム、さらにはあの無口なザフィーラまでもが、時風に言葉を伝えようと、一通ずつ送ってきていた。

だがそのどれもが蒔風に言わせれば、自分がいる事の意味にはならない。

そして、最後のメールを開いた。

「舜さん、おはようございます。エリオです」

最後のメールはエリオのものだった。
そしてそれは、いきなりの独白から始まった。

「舜さん、僕は……プロジェクトFATEで生まれたクローン
です」

いきなりの告白。

だが時風にとって、どう生まれたかなどは関係なかった。

少し驚きはしたが、だからどうしたという心境だ。

モニターの中のエリオは、そんなことは知らずに先を進める。

「僕のオリジナルになったエリオ・モンディアルは、すでに病気で
亡くなっています。僕は、その両親が作り出したクローンです」

しかし、それは明らかな違法行為。

その事実を突き止めた研究機関の人間が、なにも知らないエリオを両親と引き離して隔離してしまった。

「その時僕は、両親が助けしてくれると思ってました。だけど、事実が見された僕の両親は、そのまま逮捕され、ついに僕の元に来てくれる事はありませんでした」

そして研究所にて、プロジェクトFATEの成功例として完全に隔離され、ときには非人道的な扱いも受けた事があったそうだ。

だが、そのとき、そんな彼の事を聞き、助けに来てくれた人がいた。

「フェイトさんが、僕を保護してくれて、助けくれました。でも僕はその時、誰も信じられないで、魔法の力を使って、暴れまわりました。それでもフェイトさんは諦めず、僕の事を身体を張って止めてくれて、真剣な目と、その説得のおかげで、僕は立ち直れました。そのとき、フェイトさんが僕に言ってくれた言葉があります」

その言葉を告げるエリオ。
蒔風には、その言葉に聞き覚えがあった。

『私が知っているのは、死んでしまったエリオ・モンディアルの代わりじゃないよ。ましてやプロジェクトFATEの成功例でもない。今ここにいる、あなた自身、「エリオ」っていう、一人の人間』

『確かに、生まれた理由は、誰かの代わりだったかもしれないね。でも、生きる理由は、そこじゃないんだよ？』

『もちろん、プロジェクトで生まれたってことは、あなたを形作る要因の一つかもしれない。でも、そうある前に、あなたはここにしかない「エリオ・モンディアル」なんだよ？成功例とか、誰かの代わりだとか、そんなことは後回し。まず、あなた自身が何者で、なにをしたいのか。それが大事。エリオのしたいことって、何かない？』

「その……言葉は……」

聞き覚えもあるもないも無かった。
それは間違いなく、彼の言葉だった。

『オレたちが知っているのは、アリシア・テストロッサの代わりの少女じゃない。ましてやプレシアの人形でもない！フェイト・テストロッサと言う、一人の人間だ！』

『確かに、生まれた理由は、アリシアのクローンだったかもしれない。プレシアの慰み物だったかもしれない。でも、生きる理由は、そこじゃない！！』

『アリシアのクローンだとか、そういったものも当然、お前を形作る要因の一つだ。でも、そうある前に、お前はフェイト・テストロッサだ！アリシアとかプレシアとか、そんなことは後回しだ。まず、お前自身が何者で、なにをしたいのか。よく、考えてくれ』

それに蒔風の心が揺らぐ。

だがしかし、すぐに頭を振ってそれを否定する。

この言葉じゃなくてもいいはずだ……

フェイトは他の言葉で、きつとエリオを……

だが、そんなことは関係ないなど、彼自身も気づき始めている。

4064

問題なのは、彼が残したモノが、プラスになっているかどうか。

それを必死になって否定しようとする蒔風。

もう本来の目的をも忘れ、自分は関わるべきじゃないと、固執しよ

うとじてしまっている。

だがその揺らいだ彼の心に、止めの言葉が突き刺さる。

「あなたは………一体誰なんですか？あなたは確かに翼人ですし、その翼には願いを司っているかもしれない。そういったものも、舜さんを形作る要因の一つです。でも、そうある前に、あなたは一体誰なんですか！？翼人とか使命とか、そんなことよりもまず、舜さん自身が何者で、なにをしたいのか。よく、考えてください！！！」

「あなたがこの世界にやってきて、僕達を守ろうと決めたのは、なんでですか！？翼人だから、守るんですか？力があるから、守ってるんですか？あなたは翼人としてこの世界に来たのか、それとも、そうじゃないのか………あなたは何故、何のために戦うのか、

教えてください」

エリオは言う。

確かに、あなたがしてしまったことは翼人として許されないのかも
しれない。

あなたにとって、「翼人」というカテゴリーは重要でしょう。

しかし、その在る前に

あなたはいつたい何者なのか、と
あなたは一体、何がしたいのか、と

それこそ、あなたの属するものではないのかと。

「僕は……待ってます。」「舜さん」が帰って来てくれるのを、
ずっと」

その言葉を最後に、エリオのビデオが終わり、未読の数が0になる。

なにも映らなくなったモニターの前で、時風が自分の手のひらを見て、答えるように暗い部屋で呟いた。

「そいつは……どーにも……逃げられない質問
だよな……」

そして立ち上がる。
バサッ、と上着を羽織り、扉へ向かう。

向かう先など、決まっていた。

「現状を教える」

『調べておいたよ!』

『空中のガジェット編隊は手に負えず、はやてさんがリミッター解除で迎え撃つ為に出撃、リミッターの解除申請を出しました』

「却下させる。問題ない」

『それに伴い、なのは嬢、フェイト嬢が保護された少女が搬送されているへりの方へと向かっています』

「エリオたちは？」

『ヴィータ、リインと一緒に、召喚師と融合機を一名捕縛したみてえだ。あっちの戦闘は終わってる』

「だったら大丈夫だな」

キィ・・・・・・・・ザッ

『へりに向けての砲撃反応あり。推定ランクス。現位置からの防御は不可なため、なのはがりミット解除を申請。追いつくつもりです』

「却下。今から向かう。皆ははやての所に。フォワードには……
・青龍、行ってくれるか？」

『……なにをしに？』

「………助けにだ」

『どのような意図で？』

「助けたいからだ。目の前のソレを止めるためだ。関わってやるぞ。
ああ、前言撤回する。あいつらを、助ける」

『………』

「だから………そのために………力を貸せ！！青龍！！！！」

『……………御意に……!……!……!』

「さあて、時間はないみたいだが」

バサア、バシン!……!……!

「は？申請が却下やて！？なんでや！？」

「いやあの・・・ただ我々は「待っている」と・・・」

「待つやて？なにをや？このままじゃ・・・」

迫ってきたガジェット編隊が都市部に入ってしまう。

そうはやてが返そうとした瞬間

突如として空が吹き飛んだ。

「なっ!?!」

はやてが驚愕する。

本体は見た目より少ないとはいえ、あれだけのガジェットを一気に吹き飛ばしたのだから。

しかし、直後に現れた六体の姿にすぐさま納得した。

帰ってきてくれたのか

『はやく殿！大丈夫ですか！？』

『助けにきたよ！！』

『鬱陶しいガラクタ共だぜ！！』

七獣から青龍を除いた六体が、空を飛び交いガジェットを粉碎していく。

「これは……」

『はやくさん、無理をなさらずに。安心してください。我等が主は、

「……わかった。無茶しないでね!？」

「了解!！」

二人が別れ、なのはがへりに向かって一直線に猛スピードで進んでいく。

しかし、距離がありすぎる。

フェイトは射手までまだ遠いし、なのはもへりに着くのがやっとだろう。

だが

「それでもッ!！」

なのはは飛ぶ。

へりの仲間を助けるために。

砲撃が放たれる。

そしてなのはが追いつき、しかし、バリアが張れまいます

ドオオン！！！！

それが着弾した。

爆煙が上がり、へりが隠れる。

それを確認した離れたビルの屋上にいる二人が、次に命中したかを
確認する。

「ダイエチちゃん、どう?」

「クアットロ、静かにしてくれ……? あれは!？」

全身タイツのようなスーツを着た二人の少女が驚愕する。
完璧なタイミングで撃った砲撃であったにも関わらず、へりは無事
だったからだ。

爆煙の中

まず現れたのは一本の腕。

砲撃を打ち砕いたであろうその拳が、真っ直ぐにそこから伸びていった。

そして次に両の脚。

宙に浮いているにもかかわらず、まるでそれは大地に立っているかのような悠々とした構えをしている。

最後に、翼

煙の中から翼が飛び出し、一気にそれを掻き消していく。

その翼は銀白に輝き、太陽の光を浴びて、美しく輝いていた。

「あ………あ………」

なのはの眼前に現れた、ひとりの男のその背中。

憧れて、今までただひたすらに、ずっとずっと目指してきた。

その背中が、目の前にある。

その背からは「願い」の翼がはためいて、その風がそっとなのはの頬を撫でていた。

「遅くなった。大丈夫か？」

男の声が耳に届く。

その瞬間、なのはの視界はぼやけてきた。

ああ、やっぱりこの人は強かった。

なのはの胸が熱くなる。

私が今まで憧れてきたこの人は、いま、私の目の前にいて
私が目指してきた人は、やっぱり助けに来てくれて

その背中とは、とても安心に満ちていた。

もう大丈夫だと、思わせてくれるその背中に、なのはが飛び付き、
名前を漏らした。

「遅いよ………舜君………!!!!!!!!」

ゴオウツ!!!!!!!!

銀白の翼から、迸るオーラを噴き出して、残った煙を完全に晴らし、

高らかに声を上げ、太陽の元に、彼は帰ってきた。

八神はやては歓喜する。

命の恩人の復歸に、まずはパンチやな、とこぼしながら。

フェイト・T・ハラオウンはガッツを取る。

最高の友人のその姿に、自分も犯人を捕まえなくてはと心に決めながら。

フォワード陣は手を取り合った。

へりは無事、そしてあの人も帰ってきた。また面白い事や話をしてもらおう、と

そして

高町なのはは涙した。

憧れの人。今までずっと追いかけてきた人。

一度は見えなくなってしまったけど、その彼がこんなに目の前にいる。

見える場所にいる。それだけで、彼女の心は不思議と安らいだ。

多くの人の待望を受け、ついに

銀白の・・・否

時風舜、ここに帰還する。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers　〜何が為に戦うのか〜（後書き）

アリス「戻ってきましたか!！」

そんなことはどうでもいい

MOVIE大戦、見てきました!!!

ア「こつちそつちのけかい!!!」

でもそれは活動報告の方に書きましたのでそちらをどうぞ。

ア「あ、さいですか。それにしてもエリオ君G」

ですねー

書いてる途中「あのモニターのって何らかの端末だから、時風使ってもおかしくないよね?」って疑問に思いました。

ア「支給品かなんかであるんでしょう?」

だよねー

今回、確かに時風が残せた物、っていうのははっきりとは見つかりませんでした。

しかし、彼が世界を回ってきたのは、翼人として力を得たのは、彼が「時風舜」だったからにはありません。

翼人の使命とか、今更そんなこと気にする必要はなかったんですよ。

ア「それを普通に出来る人にしか翼人の力は宿りませんし」

と、言うわけで次回の「世界をめぐる、銀白の翼」は!!!!

ア「次回、フハハハハハハハハハ!!!!!!最高にハイってやつだ!!!!!!」

ではまた次回

なのは言ってた・・・うちの4人は全員一流のストライカーになれるはずだって

なのはStrikers 〱復活の翼人〱

「な、なんなのよあいつ!？」

「私のイノームスカノンを拳で!？」

ビルの上の射手二人、クアットロとディエチが驚愕の声を上げる。
確かに、彼のことはリニアやホテルでの事件で報告を受けてはいた。

しかし、普通ここまでとは思えない。

ランクS相当の砲撃を、拳の一撃で破壊してしまうなど!!

そうして二人が時風に気を取られていると、ついに背後にフェイト
がやってきて、罪状を言い、逮捕する、と宣告した。

「は、速い……」

「ボーツとしない！逃げるわよデイエチちゃん！」

クアットロとデイエチがその場から離脱、逃走を計る。

クアットロが空を飛び、デイエチは飛行能力がないのかビルの屋上をジャンプで跳んでいく。

「あいつら、逃げるつもりだな」

「み、見えるの！？」

かなり遠くの逃げる二人と追うフェイトを肉眼で視認する時風。
なのはも当然見えているが、あくまでもレイジングハートを介してだ。

「見えます見えます！なのは、回り込め。挟み込む！はやて！聞こえてるか？でかいの一発、用意しとけ！！」

『いきなりやって来てよう言えたもんやなあ！？』

はやてが蒔風に愚痴をいいながら詠唱を始め、杖に魔力が充填されていく。

「さて、追っつくぜ！！ブーストオン加速開翼！！」

蒔風の翼が羽ばたくソレから戦闘機のように鋭利な形に変わり、超加速行動に入る。

なのはには蒔風が消えた様に見える、少し驚いたがすぐに蒔風の指示通りに回り込んでいった。

.....

「待ちなさい！」

「待てと言われて待つ子はいませんよ~~~~~!!」

「しかしクアットロ。このままでは追いつかれるぞ」

逃げる二人と追うフェイト。

その距離は確実に近づいていつている。
捕まるのは時間の問題だ。

しかし、まだ手段があるのか、クアットロがディエチをキャッチし、
二人一緒に飛びはじめ。

「IS発動。シルバーカーテン！」

クアットロが自らの能力を起動させる。

すると二人の身体が虚空に消えゆき、その姿を見失いそうになる。

だが

「遅い！！イマジナリテイ心象的……………」

蒔風が指を突き出し、パチン！と派手に撃ち鳴らした。

蒔風さん、悪役みたいです。

その蒔風が人差し指を下に向ける。
すると突如として出現した岩のリングに二人が束縛される。

「嘘ッ!？」

「な、なんだこの魔法は!？」

「魔法じゃない。魔術だ!!ま、何が違うのかオレもわかんないけど」

わかんないのかよ!!!

そう思った二人だが、状況は依然としてまずい。
今日の任務はレリックの回収と少女マテリアルの奪還。

にもかかわらずなにも成し遂げられないで、更には管理局に捕まるなんてことは絶対に許されない。

リングの中でもがき始める二人。

それを見て蒔風が顔を青くする。

「おいおい！！待って！！その行動はマズイってっておオウあああああああ！！！！」

一体何がトリガーだったのか、蒔風の服の下からなぜが野菜がゴロゴロと出てきて、その中のいくつかがつぶれた。ぐちゃぐちゃになった蒔風の服の下。

首元からムワツ、と野菜の匂いがむせ出してきた、その中のある匂いに蒔風が悶絶した。

「又フォ！？と、トマツ！！トマトはダメっ！？誰だドリアン入れたノオオオオオオ！？」

じたばたと暴れ始める時風を見て、クアットロとディエチが思った。

逃げられるかも知れない。

だがまあ実際にそんなことはないのだが。

時間が経ち、固有結界が切れて元の空間に戻ってくる。

そこで待ち受けるは機動六課の隊長二人。

桜と金の色をした魔力砲撃が、空中で身動きの取れない二人に放たれる……！！

「デイベインバスター……！！！」

「トライデントスマッシャー……！！！」

二人の放つ砲撃。

確実に命中する。

この距離で、このタイミング。
更に二人は捕まっている。

これは行ける……！

つてか普通に捕まえるよ。
オーバーキルだよ。

ドオン……！！！！

砲撃がぶつかり合って、空中で爆発を起こす。

ロングアーチスタッフが歓喜の声を上げるが、撃った本人たちは苦い顔をする。

「ダメ!!」

「ギリギリでかわされた!!!!」

「超加速行動を可能としている仲間がいるな。何体いるんだよまったく……はやて!!!!準備はいいか!!!!」

「いつでもどうぞ!!!!ってか舜君、野菜臭いで?しかもドリアンもあるやないけ!!!!」

いつの間にか翼を閉まった時風が、頭上のはやてに指示を出す。それにはやてはいらん事を突っ込みながら、詠唱完了した空間魔法を、その指示通りの位置に叩きこむ!!!!

「3時の方向、距離650メートル！……ぶち落とせ！……！」

「遠き地にて、闇に沈め……デアボリック・エミッション……！……！」

黒い球体が蒔風の言う通りの位置に向かい、そこで一気に膨れ上がる。
その場にいる二人とその二人を助け出したもう一人の女性が、今日何度目かわからない驚きの声を上げる。

「なんでわかるんだ！？この動きについてくる人間など、報告には

無かったぞ!!!」

「トーレ姉様!!!あのお方に関して、それを考えるのはもう無駄ですう!!!」

「うわあああああああ!!!?????」

それでも結果として、彼女たちはその攻撃から逃げきった。

トーレと呼ばれた女性の能力「ライドインパルス」による超高速移動でその場から離脱、何とか空間攻撃から逃れたのだ。

しかし

「速いねえ。だがまだまだ」

再び逃げた先に蒔風がいなければ、更によかったのだが。

「さあて・・・おにーさんとのお話しタイム！！キミたちこの何者？レリック狙う辺り、スカリエッティとかいう人のお仲間ですか？」

ノリノリで聞いてくる蒔風に、どうにか逃げ道を探そうと目だけを動かして周囲を探る三人だが、目の前の男からどうにも逃がさないというオーラを感じる。

だが、ついにデイエチが突破口を発見する。

三人が念話で打ち合わせ、クアットロが蒔風に話しかけた。

「私どうにもわからないんですけどお、あなたって一体何者なんですか？ここまでやる人だとは思えなかつたんですけど」

「おおメガネちゃん。そうだねえ、俺は蒔風舜だ。そして、ただそ

れだけの男さ。にしても……」

蒔風がクアットロ以下三人の首元を見て、指を指しながら名前を呼んだ。

「3、4、10でトーレ、クアットロ、デイエチ……イタリア語!? ここミッドなのに!？」

蒔風がツツコンではいけない事をツツコンだ。

当の本人たちもよくわかっていないようである。だがまあ、と蒔風が先を言う。

「それなら一体何人までいるんだ? 教えてくれないかなあ……つて逃げんなそこオ!!!」

蒔風の手から圧水砲が放たれる。

狙ったのはトーレだ。

彼女はビルの屋上に跳躍し、その屋上にあつた何かを取ろうとしていた。

砲撃は彼女を捉え、ビルの壁に叩きつけられて地面に落ちる。
しかし、その衝撃でビルの上にあった物が落ち、それをディエチが
キャッチした。

「IS発動!!!」

落ちてきたのは逃亡の際捨ててきた彼女の狙撃砲「イノームスカノ
ン」
それをキャッチし、瞬時にエネルギーを充填、時風にその砲口を向
ける。

4111

だが距離が離れている。
これなら時風は再び拳の一撃で葬るだろう。

本当にこの距離ならば。

時風が拳を振りかぶり、その砲撃に対応しようとした瞬間、デイエチの姿がぶれる。

と、同時、時風の胸元から数？もしない位置に、デイエチと、イノームスカノンの砲口が現れた。

「ッ！？幻術………」

「わたしのIS「シルバーカーテン」。調子乗った人が驚く顔って、本当にいいわね〜」

「同感だがつ……！」

ドオン！……！！……！！……！！

デイイチが砲撃を放ち、大きな爆発が起こる。
爆煙が高々と上がり、もうもうと空に上がっていった。

その隙に三人はシルバーカーテンを使って一時撤退、その後回復したトールレによるライドインパルスで帰還した。

一方時風の方はと言うと

「ブハア！！！！イッタあなあ、もう……」

力を借り、十二ゴッドハンドの試練をその身に宿した時風が爆炎の中から出てくる。

ゲホゲホとせき込みながらも、周囲を見渡すが、すでにそこに三人はいなかった。

「チ、逃げられたか」

「舜君！！！！」

「舜！！」

「舜君！！大丈夫！？」

三人が爆発を見て時風の元へと飛んできた。そして、言葉をそろえて

時風の頭を殴った。

「遅い！！！！」

胸元から臭い野菜の匂いを出しながら、蒔風の頭がガクン、と下を向き、野菜を拭き取って頭をさすりながら上げてきた。

「わりい。迷惑掛けた」

「ホンマやで？」

「申請却下してたの舜だったんだね……」

「舜君……ありがとうね！！」

三人が礼を言う。

だが、蒔風がやめとけえ、と言ってそれを拒否する。

「オレは俺のやりたいようにやったただけだ。そう、最初から、最後まで、それを貫くさ」

蒔風が空を見上げる。

思い出すのはいつか言われた言葉。

『貴様はいずれ・・・仲間を失いかけた時に・・・泣き、叫び、自らの信念が・・・揺らぐだろう・・・』

そう、確かに言われた言葉だ。

蒔風はそれに対し、また見つけて立て直す、と言った。

しかし、立て直す必要など、最初からなかった。

彼のそれは、気付かなかっただけで、はじめからあったのだから。

「今青龍がフォワードの方で交戦している。あっちに期待しましょうか」

そうして時風が向かい、三人も一緒に向かう。

最も頼もしい、彼と共に。

エリオの目の前に足元から突如として現れた人影が、エリオが持っていたケースを奪って再び地面に潜って行ってしまったのだ。

「なっ！？あ、てめー!!」

更にさっきの人影・・・歳はスバルやティアナと同じくらいだろうか、それくらい少女が再び地面から現れ、少女を掴んでその場から潜って消えた。

「そ、そんな!!」

「何あの能力!？」

逃げた二人は高架下に着地し、そこから更に地面に潜って逃走しようとする。

「間に合ってよかったですね！ルーテシアお嬢様！」

「ありがとうございます・・・でも、アギトが・・・」

「アギトさんならあの隙に逃げましたよ。いやあ、やりますねえ・・・」

そんなことをいいながら逃げられるな、と思った二人。

だが、こちらでもそんなことはなかった。

いきなりのそれに驚く二人が、更に地面に潜って逃げようとする。

だが、今この男は使命に燃えている。

もしかしたら一番燃えに燃え上がっているかもしれない。

そんな彼が、地面に潜ったくらいで逃がしてくれるはずなどなかった。

「又・・・ウン！！！！」

高架下の地面に拳を突き立てる青龍。

そしてそこから一気に獣神体となり、巨大な龍の姿へと変わる。

そうならば当然、地面が砕け、瓦解する。

そしてその中に潜っていたセインとルーテシアの姿もあらわになった。

「うええええええ！？なんだそれえ！？」

『……………今の私は……………止められんぞツ！……………！』

そこから再び人神体に戻り、セインとルーテシアを捕まえようと手を伸ばす。

しかし

「ルールーに手え出すなあ……………！！！」

ドオン……………！！！！

巨大な炎の塊が、青龍を襲い、その手はついに届かなかった。

ルーテシアの目の前に現れたのは先ほど捕まっていた小さいなりの融合機、アギトだ。
おそらく離れていたのだろうが、ルーテシアの危機に戻って来たのだ。

「ルールー！！はやく逃げろ！！」

「でも……アギトが……」

「あたしはあとから一人でも転移できる！！だから先に行けつて！！！！」

「お嬢様、ここはアギトさんの言う通りにしましょう！！！！」

「……うん……」

そう言って二人が地面に潜って離脱する。

崩れたハイウェイ上では、フォワードたちとリインが呆気にとられていた。

なにせいきなり上から誰か降りて来たと思ったたら足場を崩してそのまま追っかけて行ってしまふのだから。

「あ、あの人、炎の中に!!!」

「ヴィータ副隊長!!! 助けに行きましょう!!!」

今すぐにもそこから飛び降りようとするスバルやエリオ。しかし、それをヴィータが止めた。

「やめとけ。巻き添え食らうぞ」

その言葉に、キャロがヴィータにあれ？と聞いた。

「ヴィータ副隊長、あの人、知ってるんですか？」

その質問に、にやりと笑って炎の中を見るヴィータ。

なんだかその顔は楽しそうだ。

「知ってるも何もねー。あいつは……舜の使い魔だからな」

「え？」

「あ、そういえば！！一回食堂で見た事ある気が……」

「じゃあ……舜さんが……！！」

その言葉にコクリとうなづいて、ヴィータがアイゼンを担ぐ。

「帰ってきたんだ……あのヤロー、心配させやがって」

ヴィータが安心の籠もった声を出した。

彼がいるなら、きっとへりだって無事だろう、と。

そして高架下、炎の中。

その中から、一切の怪我を負っていない青龍がゆっくりと出てきた。

それにアギトが驚愕する。

自分は融合機だから、確かに単体での戦闘はそこまで強くはない。マスターとユニゾンして、初めてその性能をフルで使えるのだ。

しかしそれでも古代ベルカの融合機としてかなりの戦闘力はあると思っていたし、事実、それなりの実力は持っている。

しかし炎熱を最も得意とする彼女が、その攻撃で、対象に火傷どころか煤一つすらつけられないとはどういうことなのか。

「て、てめえ、なんで焼けねえんだよ!!??」

アギトがわけわからんと青龍に訊く。

それに対する青龍の返答は、全く彼らしくなかった。

「……そんなこと……私が知るか!!!!」

「「「「「知らんのかいッッ！！！！」「」「」「」

アギトだけでなくフォワードたちも思わずッッコムその台詞。
自分でも理屈がわからないってどういふ事なんだろう？

「……………ですが……………一つだけ確かな事がある……………」

「な、なんだよ」

青龍がアギトに向かって言う。

それがちゃんとした理由かどうかは、また別物だが。

位のフルマックス×2・5ぐらいある。

「砲!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

ドゴォウ!!!!!!!!!!

そのすべてがアギト一体に向き、ぶっ放される。
この人もう完全に使命忘れてるよ。

だがアギトの足元に紫の魔法陣が現れ、瞬時にして彼女を転移させる。

雷旺砲が廢墟の都市部を蹂躪し、跡形もなく吹き飛ばした。

「ふう……」

そうため息をついてスッキリした青龍。
そして

「……捕まえる……任務でした……」

そう言って落ち込んだ。

その数分後に蒔風たちも到着する。

青龍が蒔風に謝り、まあ仕方ないよと言われ、剣に戻って蒔風の脇元に収まって消える。

そして、蒔風が真っ直ぐにエリオの方を見て、その手を取ってから言った。

「ありがとう。君のおかげで、戻ってこれた。銀白オレの翼人は蒔風オレ舜を見い出せた。俺がこの世界に来てやることは、目の前の、誰かの

世界を守る事。目を背けてはいけなかったんだ。君の言葉で、戻ってこれた。だから……ありがとう」

その言葉にエリオが顔を赤くしてそんなに言わないでくださいと委縮してしまふ。

そうして、彼は帰ってきた。

銀白の翼人、願いの翼、「奴」を討つ者

確かにそれらは彼のあるべき姿だろう。

だが、彼がそうなれたのは、何より土台に「自分」がいたから。

これは素晴らしい!!!!!!
この姿、この翼!!!!!!

伝説のアルハザードにおいて、さらに伝説と言われた「翼人」そのものではないか!!!!!!

十年前に現れたという噂ばかりだったから、あまり信じてはなかったが.....

これはいい.....なによりも研究対象になる!!!!!!

それから「彼」だ。

世界の仕組みをよく理解している。

彼の考えもまた、素晴らしい!!!!!!

やはり人生はこうでなければ！！！！

ははっ！！とてもやりがいのある人生だよ！！！！

さあ、^{マテリアル}彼女もついに出てきた事だし、ここからが本格的な実験だよ。
.....

なのはStrikers 〱復活の翼人〱（後書き）

わからない方もいると思うので説明をしておきます。

アリス「蒔風が借りた力「十二の試練」は「Fate/stay
night」のバーサーカーのものです」

確か命が十二個あるってものでしたね。

ア「でもこれでやっと戻せましたね」

そうですね。

今まで友人にも「つまらんから早く戻せ」って言われてました。

ア「でもポン、と戻すとなんか軽いんですね」

そう!!!

だから少しだけ長くなってしまいました、申しわけございませんで
した!!!

ア「そういえば年末年始はどうするんですか？」

うーん。

何とか書き溜められればいいんですけどね。

コミケ中は何もできませんから。

自分スタッフなもので。

ア「それは大変ですね」

暇な時だからと言って携帯いじって執筆もできんしね。

ア「あれだけの人数いますからねえ……………」

ああ、ノパソコンが欲しい!!!

ア「次回、少女との邂逅」

ではまた次回

あれ？出てこないや

出そつとするとまだ出番の早い台詞だ・・・

なのはStrikers　く予言の書く

「人造魔導師？あの子供が？」

「ギンガさんが言うには、そうらしいです」

蒔風は翌日から部屋をエリオと同室に戻っていた。
そこで先日保護した少女が人造魔導師である、と聞かされたのだ。

「そっか〜。ま、関係ないよ。子供は子供だ」

だが蒔風は思ったほど驚いていない。
だがエリオはどこかやるせない表情だ。

「きっと……プロジェクトFATEはまだ続いてるんです。今日も、どこかで」

きっと自分の生まれの事もあるのだろう。
少女のこれからを思うと、少し気の毒になってしまふ。

だがそれでも蒔風は大丈夫だ、と断言する。

「生まれた理由とか、どうしているのかなんてのは関係ない。生まれた理由なんかどうだっていい。問題はどうやって生きるかだ。だる？ エリオ」

「……そう、ですね」

「さて、確かなのはが病院にその少女に会いに行くんだっただ。行ってくるか」

蒔風が部屋を出て、なのはと合流して聖王病院に向かうため、隊舎の駐車場へと足を運んだ。

.....

- - - - -

「シグナムが？意外だな」

「ああ。私はシスターシャツハや騎士カリムとの面識がある。ならば私が案内した方がよからう」

「いや、シグナムってレバンティン以外のもの握れたんだなって」

「よし、蒔風。そこにパーキングエリアがある。私は降りて殺りた
い事があるのだが？」

「ごめんなさい。だからアクセルふかさないでください。そのスピード怖いです」

後部座席と運転席で、危うく命のやり取りが行われるところだった。その時助手席にいたなのは、背中に冷や汗をかいていたという。

(舜君……冗談は選んでよ……)

一番の被害者はなのはだったかもしれない。

とまあ、そんな会話もたけなわに、車は聖王医療病院に到着する。

車から降りる三人に、ひとりの女性が走ってきた。
何やら慌てた感じである。

「シグナム、あの人は？」

「シスターシャツハ。聖王教会の修道女にして、優秀な近代ベルカ
式の騎士だ」

「で？本名は？」

「……………シスターシャツハだ」

「……………本名は？」

「……………シスターシャツハ、どうされました？」

「（こいつ本名忘れたな）……………どうも初めまして。機動六課遊撃隊員の蒔風舜です」

「わ、私は聖王教会シスター、シャツハ・ヌエラです。実は……………」

車の方にまでシャツハが近づいてきて、シグナムが挨拶をする。それに倣って蒔風となのはも挨拶をし、なにがあったのかを聞く。

なんでも保護していた少女が逃げ出してしまったそうなのだ。現在手の空いた者が全員で捜索に当たっているらしい。

「そんな大げさな」

「大げさなんて事はありませんよ！あの子は人造魔導師です。先天的にどんな能力を持っているかわかりません。もしそれが暴発でもしたら……」

「だとしたら、すぐに大人数での搜索は止めとくんだな。それこそビビって暴発させるかも知れんぞ」

蒔風の言い分ももつともだ。

あまりの的確な言葉に、シャツハも「う……」とたじろいでしま

だが蒔風は笑顔で

「ま、気楽に探そうや。案外、そこらへんの庭でも散歩してるだけかもよ？」

と行ってポクポクと歩き始めた。

なのはとシグナムは目を合わせ、ハア、とため息をつきながらその後を追っかけていった。

「シグナムさん、一体あの人は？」

「まあ・・・その、気にするな・・・」

.....

そうして時風が早速やってきたのは最初に言ってた中庭だ。

後ろからはなのはもついてきている。

理由としては、なんとなくなついてきたくなったのだそうだ。

「で、なんで真っ先にここなの？」

「そっだねえ、俺だったらここにくるから」

「??？」

「つまりオレもガキだったことさ、ほれいた」

蒔風が指をさす。

その先の茂みがガサガサと揺れ、その中から金髪の少女が出てきた。

病院特有の服を着て、手には小さなウサギのぬいぐるみ。

そして左右で色の違う瞳には、外の世界への怯えがあった。

「おお、オッドアイって奴か？キレーな目えしてんな。どうよ、この子？」

「しゅ、舜君……」

いつの間にかその子の背後にまわり、脇に手を入れて高い高いと持ち上げてからベンチに座らせる蒔風。

「なにしてたんだ？」

「えつと……」

「ん？どうしたの？」

蒔風となのはが二人揃って少女に訊く。

だが少女にとって、これがほとんど初めての他人との接触だ。

緊張か、恐れか、うまく言葉が出てこない。

そんなことをしていると、二階の窓がきらりと光り、何か少女の目の前までやってこようとした。

「逆巻け！ーヴィンデルシャフ」子どもがビビる登場はNGリアアツトオ！ー！」「つとあ！？」

それは武装したシャツハだった。

二階の窓から少女と接近しようとする時風たちを見て、危険だと思っただのかその間に入ろうとしたのだ。

で、シャツハがそうしようとしてたのを、時風がリアアツトで阻む。

いきなりの攻撃にとっさに身を翻してかわしたのはさすがはシグナムの良き剣友と言ったところか。

きっと彼女からしたら、この子は大変危険なのだろう。

うんうん、と時風がそれを理解し、頷きながらもシャツハの肩を掴んで、少女に聞こえないように言った。

「シャツ八さん、確かにあの子は作られた命かもしれない。その身に危険な何かを宿しているのかもしれない。だけど、今のあの子はただ外に怯える小さな少女だ。子どもになにかあつたら、それを止めるのが俺らの仕事。人造だろうが普通のだろうが、そこに違いはない。でしょう?」

「う……む……そ、そうですね……すみませんでした。どうにも私は先に出た手が出してしまうようなので……」

少ししょんぼりと肩を落としながら武装を解除するシャツ八さん
それに蒔風が少し呆れ気味に聞いた。

「武闘派なのはいいけどさあ……もしかしてあんた、バトルマニアか」

「え? いやですねえ、私はただ模擬戦とか闘うのが好きなだけですよ?」

(それがバトルマニアって言うんだよ)

少女を抱えたのはと、がっくりとうなだれる時風が同じことを思った。

ああ、こりゃシグナムとも気が合うや、と。

「さて・・・気を取り直して・・・嬢ちゃん、名前なんてんだ？」

「・・・・・・・・えつと・・・・・・・・」

「ああ、俺は時風舜な？で、こっちのが」

「高町なのは。よろしくね？」

「わ、私は・・・・・・・・ヴィヴィオ・・・・・・・・」

「ヴィヴィオ・・・・・・・・ふむ、良い名じゃのう。よろしくだ、ヴィヴィオ」

「よろしくね？ヴィヴィオ」

「・・・・・・・・」

車から降りる時風たち。

なのはの腕の中ではヴィヴィオが眠っている。

その寝顔は安心しきった子供となんら変わらない。

病院の警備では完全ではないため、六課で預かる事になったヴィヴィオを部屋に連れていくのはと時風。

「で、この子の部屋どこにするよ？」

「一人部屋じゃかわいそうだし、かと言って何かあった時大丈夫なようにしたいからね」

「いくらなんでも男部屋には置けないだろ」

「だったら……」

と、とりあえずなのはとフェイトの部屋に連れていくことになる。

そして部屋に到着し、ベッドに下ろそうとしたそのとき、ヴィヴィオが目を覚ました。

「あ……なの……さん」

「ありゃ、なのさんじゃなくて、なのはさんだよ？」

「なのは……さん？」

「簡単に呼んじゃえよまったく。なのはでいいじゃん」

なのはとヴィヴィオのやり取りを見て苦笑しながら、蒔風がフロワードたちを呼ぶ。

これから今度ははやて、フェイトと共に聖王教会本部へと足を運び、何やら重大な話があるそうなのだ。だからその間、彼らにヴィヴィオを見てもらおうという事になったのだが……

「え？……いつちゃうの？」

「そう、なのはさん、お仕事なの。だから……」

得になのはは女性ということもあり、ヴィヴィオにとって接しやす
いのだろう。

それがわかっているからこそ、蒔風も何言えばいいのかわからなく
なってしまうているのだ。

しかし、その後蒔風の口から出てくる言葉はないだろう。

「まったく……じゃあ選んでください。威嚇して泣きやませる
か、威圧して泣きやませるか」

「もっとまともな方法ないの!？」

と、そこで部屋のドアが開く。

フォワードたちがやってきたのだ。

「なのはさん、来ましたよ〜って、なんですかこれ？」

「才来たか!! 実は君たちに彼女の事を頼みたいのだ!!!!」

「ええ！？こ、子供の相手なんてできませんよ！？」

「は、初めてですし、なにしちゃうかわからないですって！！」

「名前はヴィヴィオ。どーだヴィヴィオ？此処にいるおねーちゃんたちがみんなヴィヴィオの友達になってくれるってさ」

「「「「こいつ聞いてねえ！」「「「」

フォワードフル無視状態の時風。

というか、ついにこいつって言われたぞ。

だがヴィヴィオは新しい人間関係の響きに、心が強く引かれていた。

「……ともだち？」

「そつだ。こんなに頼もしいものはない、最高の宝物だ。みんなと一緒に遊んでくれるってさ」

「……ほんとに?」

「ホントさ!……(ふう……)……大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

そうやってなのは足元に縋るヴィヴィオを抱きかかえ、蒔風が笑う。

「今まで一人でさみしかつたんだよな?暗いとこばつかで怖かったんだよな?でも大丈夫。此処にいるみんなは、お前を一人にしないし、呼べばすぐに駆けつけてやる。だから今は少し我慢して、お仕事に行かせてくれないかい?」

そういう蒔風の言葉に、ヴィヴィオがコクン、と小さく頷いた。

その姿に、なのは何かを感じていた。
それが何かは、わからないが。

「よろしい。じゃ、後はお任せしたよ、諸君」

「え？あ、はい！！」

「あ、でも私たち報告書とかまとめとかなきゃいけないんですけど……」

ティアナが思い出したように言う。

確かに、先日の戦闘はいろいろな事があった。

新たな敵勢力。その武装。

レリックは彼らの機転で奪われなかったが、非常に危ついでところだった。そういつた箇所の今後の対処法。

報告書にまとめる事は多いのだが……

「ンなもんはすでに手を打ってある。現場の天馬さん？」

蒔風がそういうと、モニターが現れてオフィスルームから天馬の中心が繋がってきた。

『おう、こっちの作業はつつがなく進行してるぜ。なにも問題は『
うっわあ！？なんでこんなとこに空き缶がつ！？』 『白虎！！それはさつきワシがまとめた書類じゃぞ！』 『見事にデータ吹っ飛んでますねえ』 『またやり直しですか』 『・・・白虎、あなたは能力以前に体質的に書類仕事に向いてないのでは？』 『・・・問題ねえよ』

「ならいいな（プツン）・・・というわけだ！！安心してヴィヴィオと戯れてやってくれ！！」

「・・・今の不安材料しかなかったんですけど！？」「」「」

確かに不安はあるが、そもそものスペックは高いはずなので問題はない、と言って時風はフォワードたちにヴィヴィオを任せてはやってたちと合流する。

そして向かうは聖王教会。

明かされるのは、六課設立の本当の理由。

この部隊は、何のために存在したのか、明らかになる。

ヴィヴィオから離れられたのかを話し合っていた。

「子どもの駄々っつて大変だったでしょ？どうやったの？」

「それは……ってかフェイトさん、あなた経験おありのようですよ？」

「フェイトちゃんはキャロにエリオもおるし、ちっさい姪っ子たちもおるからなあ」

「その歳でお母さんかよ」

「ま、まだ若いです！！」

「いつかはフェイトおばさんって……いや、姪っ子いるから分類上は叔母か？」

「バルディッシュ」

《ぶった切ってもよろしいかと》

「うん、そっだよね」

「ごめんなさい、あなたまだ全然若いお姉ちゃんです。考えてみればここの四人同年齢でした」

「あはは、でもあのときの舜君、お父さんみたいでぴったりだったよ。」

「じゃあそーいうお前は母さんかっつての」

「え？」

なのはがその言葉にポカンとする。

はやてもフェイトも、ああ、そうなるなあ、とか言っつてニヤニヤと笑っている。

瞬間、ボン、となのはの顔が赤くなり、からかうはやてやフェイトをポカポカと叩き始めた。

「お似合いやで〜〜？」

「せで〜〜？」

「もー、二人ともからかわないでよーーー！……！！」

その間にもポカポカと叩いていくのは。

それを見て蒔風が何かを危惧したが、すぐに「そんなことあるわけもない」と考えをまとめて三人についていく。

と、そこではやてが思いついたように言った。

「あれ？でも舜君、その姿のまま世界めぐってるんよね？」

「そうだが？」

「だったら舜君、肉体年齢は同じでも精神的にはうちらより上とちやうん？」

「「あ」「

その言葉におお、と言って手をポン、と叩く蒔風。

しかし、フツ、と笑いながら髪を掻き上げ、笑いながら言った。

「俺の心はいつだって少年ハート。童心を忘れない、がコンセプト。」

「クロちゃんやないけ……！」

「やあ、他一名」

ズーーン O T L

いきなり時風を落ち込ませるその人物の名はクロノ・ハラオウン。

フェイトの兄であり、今は管理局の提督だ。

「ほ、他一名じゃないもん……！クロちゃんのバーカ……！」

「その呼び方をやめろ！！全く君は・・・いまだにそんななのか！
」？」

ギヤイギヤイと勝手に話し始めるクロノと時風。

その姿に呆気にとられたこの部屋の持ち主である女性が、ためらいがちに聞いてきた。

「えっと・・・クロノ提督、この方は？」

「まったく・・・騎士カリム、紹介します。彼の名前は時風舜。
私の古い友人です」

「初めまして。時風舜と言います。カリムさん？でしたかね」

「舜君、こちらは聖王教会騎士団騎士で、管理局の理事官もしとる
カリム・グラシア中将や。機動六課設立に尽力してもらった内の一
人なんやで？」

はやてがカリムを紹介する。

なんでも彼女が管理局に入ってからいろいろと世話になった人物のようで、頼れるお姉ちゃんといった関係なのだそうだ。

「あー、なるほど。「夜天の書」は古代ベルカ式だもんな。じゃあ納得ですわ」

蒔風が勝手に納得する。

そこでカリムも、ああ！と納得したような声をあげて蒔風を見た。

「はやてが言ってた「なんでもできる凄い人」ってあなたのことだった」

「はえ？」

「はやてが部隊作りたいつて言ったときに、あなたのこと言ってたもの。ね？」

その言葉にはやてがあはは、と照れながら頬を掻く。

「そやな。うちもなんやかんやで舜君に憧れとった。おつきな力持って、それでいて小回りのきく舜君がな」

とまあ、そのあと、簡単になのは達も自己紹介を済ませ、円卓に座って話を始める。

話の内容は、機動六課設立の秘密だ。

「舜君には話してなかったけど、私は昔っからこう言う部隊が欲しかったんや。管理局は大きな力を持つ大きな組織。それでできる事は多いけど、いざという時に小回りがきかへん」

「だからはやてちゃんは即時行動できる部隊を作りたいって言って四年かけて作ったのがこの機動六課」

「って言うのは私たちも聞いてたんだけど……」

「本当の理由があんのか？」

蒔風の問いにウン、と頷くはやて。
そしてその視線がカリムの方へと向く。

「その理由は私のレアスキルにあります」

そういつて何枚かのお札の束を取り出すカリム。
それが彼女の周りにバラけ、短冊のように立って彼女を囲う。

そこには何かしらの文字が書かれており、何枚かが空中を滑るよう
になのはやフェイト、蒔風の前に飛んできた。

「私のレアスキル、プロフェーティン・シュリフテン 預言者の著書。これは最短で半年、最長で数年
先の未来を詩文形式で書きあらわす、という物です。ただ、二つの
突きの魔力がうかむ揃わないと発動できないから、年に一度しか書
きあらわせないんですけどね」

そう言ってなのは達の前に出した札を戻し、説明を続ける。

「預言の中身は古代ベルカ語。しかも解釈によって意味が変わる」ともある難解な文章に加え、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度です」

「それでも管理局の高官は毎年、年に一度はこの予言に目を通して。大きな災害や事件に関しては的中率は高いし、教会騎士で中将の力としての信頼も厚いからな」

「ふーん。未来を見通す能力か」

その時風の言葉に、カリムがいいえ、それは少し違います、と首を振って答える。

「この能力はあくまでも、現時点での世界中のあらゆる情報を統括・検証して、現状で最も起こりうる可能性の高い事象を書きあらわす物です。だから」

「つまり、未来は変えられる、ってことか？」

「そうです」

「ちなみに地上本部のお偉いさんはこの能力がお嫌いだな。あんまり信用しとらんのや」

そこで蒔風がハイ、と手を挙げて質問をする。

「同じ管理局内でなんか分かれてんのか？地上とか、本局とかよくわからんのだが」

その質問に今さらか、と呆れるクロノ、頭を抱えるはやて、ポカンとしてしまうのは達。

その各人の反応に、蒔風が少しうろたえてしまう。

「な、なんだよ？わかんない事あったっていいだろ！？」

「はぁ……じゃあ僕がわかりやすく説明しようか」

クロノが蒔風に説明し始める。

まず、時空管理局と言う大きな組織があり、これを一般的に本局と言
い、すべての部署を統括し、次元世界の管理を行っている。
この本局は直属に航空部隊や次元高校部隊を持っており、多くの魔
導師を有していることが特徴的だ。

で、本局には地上部隊本部という管理局の地上施設がある。

そしてその地上本部と本局との仲が悪いのだ。

と言うのも、地上のトップからしてみれば「地上の平穩を守ってき
たのは自分達」らしく、そこにいらぬ介入をされたくないのだそ
うだ。

まあ確かに陸と空とじゃ勝手も違うし、各々の思想も変わってくる
だろう。

それに加えて大きな事件を扱う本局は多くの優秀な魔導師を抱え込
んでおり、地上はいつだって人材不足。

これで腹も据えかねると言うものだ。

「で、その地上の事実上のトップと言うのが、この人、レジアス・ゲイズ中将」

「いかつい人やねえ。この人が地上のトップか・・・凄い人なん？」

クロノが出したモニターを指さしながら、蒔風がはやてに聞く。

「まあ・・・確かにすごい人はすごい人や？入局40年の大ベテランで、「地上の守護者」なんて呼ばれとる」

「しかし古くからの武闘派だな。そのため、過激な言動や姿勢、武力から、本局から危険視もされている。黒い噂も絶えない人だ」

その説明を聞いて、蒔風が少し考えてから

「ふーん。ようは頑固ジジイってことか。融通利かなそうな顔してんもんなー」

と、気の抜けた声を出す。

それにズコツ、とこけるクロノだが、気を取り直して先に進める。

「それで、このレジアス中将がこの手のレアスキルが気に入らないらしくてな。カリムや、更に言うならばやての事も気に入らないらしい。その・・・なんだ」

「うちの事犯罪者の小娘って言いおったからなあ、あのおっちゃん」

はやてがなんでもないように、それでも少し皮肉った顔をして笑いながら言う。

「はあ~~~~~・・・さいですか」

それに対して時風の返事は実に魔の抜けたものだ。その時風に、フェイトがあれ？と言った顔をする。

「舜なら怒ると思ったのに」

「バーロー。主犯ではないとはいえ、はやてが関わったあの事件は間違いなく犯罪のそれだ。だったら、それを撤回させる言葉を俺は持たんし、する気もない。はやてはちゃんとそれを償い、そして今をしっかりと生きている。だったらそれでいいさ」

しかし、それでもまあ、と前置きしてから蒔風がにやりと笑う。

「俺の目の前でそんなことのためったらどうなるかは見物だよな？」

その蒔風の顔に四人の顔が引きつる。

ああ、あのおじさん終わったな。

とまあとりあえず蒔風に管理局の事を簡単に説明し終え、元の話に戻される。

「それで騎士カリムの預言書に、数年前からある事件について書かれました」

「それが、これです」

カリムが一枚の紙を出してきた。

それは清書されたもので、古代ベルカ語の詩文を、意味はそのままに訳したものだ。

く 古い結晶と無限の欲望が交わる地く

く 死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇るく

く 死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け

落ちく

く それを先駆けに数多の海を守る法の船は碎け落

ちるく

「じねは……」

「詳しい内容はよくわかりません。解釈の違いで、大きく変わってしまいますから。ですが、この予言は……」

「なるほど、管理局地上本部が焼け落ちる、か。確かにこんなもの、信じる気にもならないだろうなあ」

「ええ……案の定レジアス中将は信じはしませんでした。嫌っているレアスキルですし、何より自分の地上本部が焼け落ちるなどと露とも信じてはおらず、なにも対策を取ることとはしませんでした」

「だが、こうして六課ができたってことは、信じた人はいたんだな？」

その言葉にクロノがうなづき、三人の人物をモニターに出す。

「そのためにまず、騎士カリムと僕、クロノ・ハラウン。さらに僕とフェイトの母であるリンディ・ハラウン総務統括官が部隊設立の後押しをしてくれている」

「さらにかの伝説の三提督も、非公式ながらうちらへの協力を申し出てくれる」

更に映し出された三人に、なのはとフェイトが息を飲む。

蒔風だけはその三人がなんなのかわからず、また何も考えずにざらりと聞いた。

「このじいちゃんばあちゃんだれ？」

その質問になのはとフェイトがあわて始める。

なんでもこの三人、時空管理局の黎明期を支えた功労者たちらしく、とてもじゃないが一部隊に三人も協力を申し出ることなどあり得ないことなのだそうだ。

「へえー。すっげえなあ・・・その分、その予言の内容を危険視してるってことか」

「え、ええ。だからこそ、このチームが成り立ったのですよ」

「うちの要望と、管理局の要請が重なって出来たスペシャルチーム。そこに舜君まで来てくれたんやから、もう絶対大丈夫やな！！」

そのはやての言葉に、うんうんと大きくうなづく蒔風だがクロノは

そんなはやてを抑えるようにと止める。

「はやて、舜をあまり調子に乗らせるな。突っ走ってなにをするかわからないからな」

「そこは私が止めるから大丈夫だよ！！クロノ君！！」

「なのはまで……はあ……」

そこからは知り合い同士のお茶会になりそうであった。

が、そこで蒔風がカリムに「つだけ願ひ出た。」

「カリムさん、あなたの預言書の原本、見せていただけますか？」

「え？」

蒔風が言うのは清書されたものではなく、古代ベルカ語で書かれた大元の詩文を読ませろ、というのだ。

「舜君、なんで？」

「前も言った・・・ああ、十年前だから覚えてないか？俺は言葉には強いんだよ。めぐるから」

その言葉になのはとクロノが思い出す。

たしかに、蒔風には世界をめぐるため、各世界で言葉が違うと不便だから自動翻訳能力がある、と

「そっか！舜君に読んでもらえば一発だね！！」

「確かにそうだな・・・騎士カリム、読ませてやってはもらえないか？」

事情を知るクロノとなのはがカリムに頼む。

なにがなんだかわからないが、この二人が頼むなら、とカリムがすくに取り出した。

それを手に取って蒔風が黙読していく。

その間になのはがフェイトやはやてにどういう事か説明していた。

それから数分後、蒔風がダァツ、と椅子の背もたれに寄りかかり、後ろに首を回して頭が痛い時のような顔をして言った。

「だ~~~~めだ。大して意味変わらんわ」

そんな蒔風の答えだが、なのは達は当然内容は聞きたい。そこで蒔風が読んだ感じをそのまま伝えた。

「管理局の古き時代の遺物と果てなき欲を持つ者の思惑が混じり合う。」

そしてかつての王の翼が復活するだろう。

生となる体を死によって変えられた者が蠢き、陸の守護たる塔は崩壊する

その後、数多の海を駆ける船は墜ち、秩序は形を失う

・・・って感じだな」

「ホントにあんまり変わってないね」

「だろ？下手に意味が通じるような言葉になってるから、そこから突っ込んだ情報は入ってこないのよ。だからわかんのはここまでだ。だが、わかる事はいくつもあるな」

そう言って蒔風が立ち上がって指を立てて説明を始める。

「まず、管理局の遺物と果てなき欲望を持つ者。これがなんなのはわからないが、後者はおそらく、スカリエッティで間違いない。科学者の好奇心は凄いからな。まさしく「果てなき欲望」だ」

「「かつての王・・・っていつのは？」

「わからんな。「王の翼」もよくわからん。最初は翼人の事かとも思ったが、どうにもそうじゃないらしいし・・・」

「よ、翼人！？あんな伝説を、信じてるんですか!？」

カリムが驚いて大きな声を出す。

それにびっくりする蒔風だが、クロノの方を見て、何かを目で問いかける。

だがそれに対してクロノは首を横に振ってNOと意思を表した。

それに納得して、蒔風が話を進めた。

「まあそれは置いといて次だ。『生となる体を死によって変えられた者』っつーのはおそらくあの全身タイツ共の事だな。魔法とは違う力を併用していたから、おそらくは……」

「戦闘……機人……」

「ありゃ、そういうの？あいつら。まあそれはあとで聞こう。どうやらあいつらが地上本部を焼くらしいな。あいつら、最低でも十人はいるみたいだし」

「あ、あれが十人……」

「最低限な。何人いるかはわからん。で。そっから始める次元世界

の秩序の崩壊。なるほど、面白いシナリオじゃないか」

「……そうやね。何かのおとぎ話なら最高の出来やね」

「でも、これはほっておくと……」

「現実になる可能性が高い。しかも、当の地上本部は無警戒と来た。こうなったら、俺たちで守ってやるしか無いねえってわけさね」

その言葉にはやてが立ちあがり、拳を握って言った。
まるで自分はそうしなければならないと、自分に言い聞かせるかの
ように。

「そうや!!そのために機動六課は設立された。私たちはみんなを
守る。私も、みんなを守らなあかん。だからなのは隊長、フェイト
隊長、そして舜君。もう一度聞く。うちに付いてきて、くれるか?」

はやてが聞く。

これだけの事を聞いて、まだやってくれるかと。
しかしはやての顔を見るに、どのような返答が返ってくるかわかつ

ているようだった。

「水臭いよ、はやてちゃん。私たち、友達じゃない」

「そつだよはやて。私たちは助け合う仲間だよ？」

「ってか、俺はもう関わるつつただるーが。嫌だと言っても俺はやるから、覚悟しろよ？」

その言葉に、はやてが「ありがとー！！！」と言って三人に飛びついていく。

その仲のよさそうな四人に、クロノが笑った。

と、そこでカリムが質問をしてきた。

「えっと・・・それで舜さんは本当は何者なんですか？」

「「「「え？」「」「」」

「だって、おかしいじゃないですか。管理局員なのにその中身や伝説の三提督を知らない。そのくせ、翼人なんてアルハザードの時代でも伝説と言われていた翼人の事を知っていたり、古代ベルカ語をそのまま読めたり……はやてに最初にもらった六課メンバーの書類にも彼のことは書いてなかったわ。本当はただの局員じゃないんでしょ？」

その問いになのは達一同が「あー」と目線を逸らしていく。

だがカリムは絶対に訊きだすつもりだ。
それ眼光に、蒔風がついに折れた。

「わかりましたよ。お話しします。ですが、この事は他言無用でお願いしますよ？世界にいらん言い伝えとか作りたくないんですよ」

そうして時風が話を始める。

最初こそ信じられない、いや、信じる気にもなれなかったカリム。

しかしなのはやフェイトの持っている昔の映像や、はやて、クロノの証言。さらには時風が目の前で開翼までしたのだから、流石に信じざるを得ず……

「す、凄いです!!! 本物の翼人をこの目で見られるだなんて!!!
!!は、早く自慢しなきゃ・・・シャツハ!!! シスターシャツハ
「!!!!!!」

とかキャラ崩壊一直線しそうになるほどにまで興奮してしまったカリムさんでした。

「はあ・・・ま、いつか」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers　く予言の書く（後書き）

アリス「機動六課設立裏話編ですね」

それとヴィヴィオとのお知り合いの話。

ア「にしても時風でも予言は読み切れなかったんですね」

そうですねえ

なまじ読める字に翻訳だから余計な情報は入ってこないんですよ。完璧に読めないような言葉だったら単語の意味だとかも入ってくるんですけどね。

ア「どんな感じなんでしょう？」

そうだな……

古文の文章って、一応発音的には読めはするけど、意味は全くわからないでしょう？
あんな感じですね。

ア「ま、管理者の私なら余裕ですけどね」

作者は無理だな、古文。

マジで無理。

ア「そして壊滅的に書類仕事のできない白虎」

白虎は苦手なわけではないです。キチンと出来ます。
でもなぜかあうまくいかないんですよね。

ア「書類仕事限定の不幸体質？」

そうそれ!!

ア「次回、蒔風のある一日」

本編タイトルとがぶってる気がするけど、あんな事件は起きません
よ!!

ではまた次回

もう、フヘイトママちよっと甘いよ

お知らせ

もしかしたら明日は更新できないかもしれません。
その場合、前回もお知らせした通り日付が変わった時点で投稿不可
といたします。

申し訳ございません

なのはStrikers　く今こそ六課前線の心を一つにするのだ！く

聖王教会から帰ってきて、機動六課隊舎内

四人はそのロビーまで一緒に歩いてきて、これから自室に帰ろう、
というところだ。

と、そこではやての足が止まる。

それに気づいて三人がはやてに振り返った。

「はやて、どうしたの？」

フェイトの問いに、少し俯くはやて。

しかしすぐに顔を上げてなんでもない、と言う。

「ちょっと疲れてしまったみたいやな。みんな、今日はありがとう
な」

「いいんだよ」

「ゆっくり休んでね？」

なのはとフェイトが手を振って自室に戻る。
部屋でヴィヴィオが待っているはずだ。

少し足速になのはとフェイトがいなくなる。

だが、蒔風だけははやてを見つめてずっとその場にいた。

「ん？舜君、どしたん？」

何か話でもあるのかな？とはやてが蒔風に聞く。

そこで蒔風がため息を吐いてはやてに言った。

「ちよっとな・・・はやて、本当は何が言いたかったんだ？」

「えっ？」

「お前は疲れたぐらいじゃ泣き言は言わんだろが。なぐんか思い詰めてるな？」

蒔風がズバズバと聞いてくる。

それにはやてが、あちゃ、という顔をして舌を出した。

「わかる？」

「わかるわ。で？どうした。あいつら巻き込んだのをまだ引きずってんのか？」

その蒔風の問いにコクリと頷いて答えるはやて。

そして、あんな、と前置きをしてから、はやてが話し出した。

「今回の事件はほんまにやばいことになるかもしれない。事件内での危険はもちろん、管理局内での立場的にもや。だからなのはちゃんとフェイトちゃん、さらにはフォワードのみんな、シグナム達にも迷惑かけるかもしれへん」

「んなこと、あいつらはすでに覚悟してのことだろ」

「……そうやね。でも、だからこそウチは守らなあかん。ウ

手にとってなのはちゃんもフェイトちゃんも命の恩人やし、大事な親友や。ウチはあの二人を守ったるんや。守るためなら……」

「そりゃ……壮大な覚悟だな」

「あはは、そうやなあ。でも、ウチの命はグレアムおじさんに生かされ、なのはちゃんたちに助けられて、ヴォルケンスのみんなに守ってもらった命や。だから、私の命は……」それ以上いうなら俺は貴様の敵になるぞ。八神はやて」……ッ!」

時風の眼光がはやてを射抜いていた。

明らかな敵意を孕んで。

「簡単に命を捨てるような事を言うな。確かに、お前はいろいろと助けられた人間だ。だが、その命を蔑ろに扱ったら、あいつらは何のためにその命を助けた？はやて、お前の命はお前の物だ。だがなだからといって捨て身など許さない。それじゃあ……」
「……俺がなんのためにリインフォースを消したのか、わからないだろ」

「……」

「お前は自分の幸せを追求しろ。命を捨てるな。命を生かせ。誰か

を助けるお前自身が、まず救われなくちゃ意味がないだろ」

「でも……ウチがかけた迷惑は……罪は……
まだ許されない……」

「馬鹿だなあ」

「……は？」

「罪は赦されるものじゃない。購うものだ。それにお前、「償う」
って行為をするっつーことは、お前さん、赦されたいんだろ？」

「……!!!!」

「罪は背負うしかない。そして、それは生きてなくちゃ出来ないことだ。お前は死に恐怖出来るんだろ？つまりは、きちんと「生きて
いる」って事だ。だから、生きてくれ。俺の前でそんな悲しいこと
言わないでくれよ」

蒔風が寂しそうに、呟くように言う。

「死をしっかりと恐怖しろ。それがお前の生きる証だ。
罪のために命をかけるな。命をむやみに消費しないでくれ。」

消えていった、あいつのためにも「

蒔風がお願いだ、と頭を下げる。

もしここではやてが強い願いで「それでもやる」と決心してしまえば、蒔風は彼女に対し、「リインの意思を潰す者」としての意識を持つことになる。

そんなのは嫌なのだ。

蒔風はそんなこと望んでない。

だが相手が「願い」で来るならば、蒔風はぶつかるとしかない。

だから蒔風も、「お願い」をしたのだ。

決して命を、罪のために投げ出さないでくれ、と。

その蒔風にアワアワと慌ててしまふはやて。
だが、蒔風は本気だし真剣だ。

彼女の残したモノを、こんな形で失う事など、彼の思いが許さなかつたのだ。

「はぁ……わかった。だから頭上げてえな」

「マジか!?!」

はやての返答にガバッ、と起き上がって肩を掴む蒔風。

それに困ったような顔をして、はやてがうんうんと頷いた。

「わかったわかったから……なあ舜君」

「なに?」

「うちは……赦されてもいいんかなあ？」

そう聞くはやての目は、救いを求めるような、拒むような、どちらとも見えるような光を宿していた。

だから、蒔風はこう言った。

思いっきり嫌がらせをするように。

「そんなことは知らんが、とにかくお前は幸せになれ。罪を償うだ？ そんなん、お前の気が晴れるくらいじゃねーか。だからとにかく楽しく生きる。お前は他人を差し置いて自分が幸せになるのを嫌う。だったらお前は幸せになれ。それでもなきゃ、罰とは言えんなあ」

その言葉にポカンとするはやて。

そして、蒔風がさらに言う。

「んで、そこで余裕ができたら助けてやれ。お前の幸せ、分けてやれ。お前にしか伝えられない事が、あるはずだ。たとえつらい事があつたとしても、未来は可能性に満ちているってな」

「舜君……」

「未来の可能性は「人の願い」だ。お前は一人の世界で最も幸福な融合機の命をその身に宿しているようなものなんだ。そいつを不幸にさせんなよ？」

「うん……わかったよ」

その返事に、蒔風ははやての目を見て、うん、とうなづいて踵を返す。

「その眼なら」「それでも私は……」なんてことは言わなそうだな。安心して眠れるよ」

「ようゆーわ。行きも帰りも、車ん中でしっかり寝てとったくせに」

「俺はいつも眠いの。眠気にはどーにも勝てん。ふあああ……おやすみ……」

そう言って蒔風が自室に戻る。

そうして、はやては蒔風のその背中に、敬礼を返して送った。

両手の指の数くらい。

だから蒔風本人も、時計を見て一瞬固まった。

そうして「いやいやまさか」と頭を振ってもう一度時計を見る。
しかしさっき見た時間から十秒たってるだけだった。

そうして蒔風の表情も固まった。

「お、おはようございます」

「お、おう……おはよう……」

おかしい

早起きしただけでなんでこんなに緊張してるんだ？こいつら

しかしまあ、このままいても仕方ないので蒔風が立ち上がって朝の
仕度をする。

起きてから歯を磨き（クリ クリーン）、顔を洗い（お湯でヌクヌクと）、着替える（たまに前後間違える）。

そして小さいコップに炭酸ジュースを注いで一気に飲み干した。

そう、この男、朝から炭酸飲む男なのである。
と言っても少量だが。

本人いわく「朝のなまった口ん中が一気に覚醒する」んだそうだ。

そうして訓練場へと赴く二人。

訓練場に着くとスバルやティアナ、キャロは「あ、今日は早起き出来たんですね」と至って自然な感じで接してきたが、蒔風の朝の弱さを知っているのはやフェイト、ヴィータにシグナムは本気でビビっていた。

「きよ、今日は何か起きるの……?」

「みんな、舜の暴走には気をつけよう!!!」

「「おう!!!」」

なんだか不本意な形で一基団結する隊長陣に、時風がなんとも言えない苦笑いをして周囲を見渡す。

すると、そこに見慣れない顔を一人見つけた。

「おや、初対面の人……いや、へり襲撃のときにチラッと見たなあ……たしか……ギンギラギンにさりげなく?」

「ギンガです(汗)!!!!ギンガ・ナカジマー等陸士です!!」

ギンガが時風に自己紹介する。

スバルの姉で、格闘技「シューティングアーツ」の師であるそうだ。

「今回の事件で、陸士108部隊から出向してもらったことになったの」

「ほほ」

とまあそんな感じで訓練開始。

とりあえずギンガの力量と、スバルの成長を見てもらおう、ということと二人で軽い模擬戦をやってもらう。

「おお~~~~！ウイングロードが走り回るとかつけえな！」

「舜……動きも見てやれよ……」

だが全体的に見て、やはりまだスバルよりギンガの方が上手であるか。

しかし、だからといってスバルが負けてるわけではない。

実際、ギンガの一撃をシールドで防いだり、痛烈な一撃を入れたり
と善戦していた。

だが最後の最後、止めの一撃で、スバルの拳よりもギンガの拳が速
さで勝利を収めた。

拳を振りかぶるスバルの目の前に、ギンガの拳がピタリと止まっ
て、勝敗ははっきりと決しのだ。

と、いう模擬戦を見ながら時風となのは、フェイトはまた別の話をしていた。

「なのはがヴィヴィオの保護責任者？」

「で、私が後見人」

どうやらヴィヴィオを守る立場として、なのはとフェイトが登録されたのだそうだ。

時風がそれはいい、とうんづん頷いて賛同する。

「つか、そのまま引き取っちゃえばいいじゃん」

「うん……でも、もっといいい引き取り先がいるかもだし……」

「もうなのは、ヴィヴィオ、泣いちゃうよ？」

「そっだぞ、なのはママ。フェイトママの言う通りだ。泣いちゃうぞっ」

「舜君……その呼び方は……」

「舜からだとちょっと……」

蒔風の反応に少し大きな汗をたらして困る二人。

とかやっているとは模擬戦を終えたスバルとギンガが地面に降り、全体訓練が始まった。

「じゃあ今日はみんな模擬戦。隊長陣四人対フォワード五人！」

「え？」

そのいきなりの無茶振りにギンガが半笑いで呆気にとられてしまう。

「時間内逃げ切るか、デバイスで決まった一撃が入れば終了です」

「最近をよくやるんですね」

「いつもこんな感じだよ？ギン姉」

隊長陳とフォワードメンバー、計九人が肩を担ぎあつて円陣を組んで気合いを入れていた。

ギンガはなんだかわからないまま巻き込まれたが、他の八人の顔は戦場に向かうそれに変わっている。

「あれ！？みんな敵！？どうしてこうなった!？」

狼狽する蒔風だが、九人は所定の位置に向かい、完全に蒔風と戦うつもりだ。

「チクシヨウ！こういうことかよ!?!」

「ヴィータ副隊長！私、い、生きて帰れるんでしょうか!?!」

「スバル！不安になること言わないでよ!?!」

「キャラ！絶対に前には出ないで！！フリード、キャラは任せたよ
！」

「エリオ君、死なないでね!？」

「キユクツ!!！」

「我々が前に出ねばならん！」

「そうだね。行くよ！フェイトちゃん、シグナムさん!!！」

「えっと……皆さん、必死になりすぎじゃ……」

「……………ギンガ(さん/ギン姉)は死にたいのか(ですか
/の)!!!???」「」「」「」「」「」

ギンガがあまりの必死さに疑問を挟んだが、八人の言葉と形相にビビって、ヤバイのか……と気を引き締めた。

「じゃあゴングを……」

「待て！鳴らす前にもう来てる！！」

「な、涙を流して突っ込んできたあ！？」

「総員戦闘開始！！」

「いい度胸だお前らああアア！！！！」

あまりの対処に涙してしまった時風が飛んできて、模擬戦は始まった。

「み、みんないつもこれを……?」

「きよ、今日のは……イレギュラーですから……」

「舜さん……青龍たち出してくるなんて卑怯です……」

「うる……せえ……そっち九人掛かりのくせに……
こつちが……どんだけ苦労したと……」

模擬戦を終えた後、訓練場にいた全員が地面に倒れ伏していた。

誰もが息を荒くして、肩を上下させている。

口なんかはだらしなく開きっ放しだし、立ち上がるうなんて気にもならないほど疲労していた。

「これは……午前の訓練は……出来ないか……?」

「そう……だね……はぁ……」

いつもだったらどんな時に出勤があっても差し支えないようにギリギリまで訓練をするのだが、今は一人残らず疲弊してしまっていて、そんなところではない。

だから今日の午前訓練はお流れ、という事になってしまいそうだ。

4220

「まったく……舜君、急に言い出すんだから……」

「わりいわりい。でもさ、楽しかったな!!またやるか!？」

「勘弁してください」

「もう許して」

「フリードが死んじゃいます」

「いい加減にしろや寝起き魔人」

蒔風の提案に一齐にダメ出しをしていくフォワード四人。
というか一名、遠慮容赦のないツッコミしたぞ。

そんなこんなで皆が立ち上がって朝御飯に行くか、と食堂に向かおうとする。

そうしていった時、ヴィヴィオが寮母のアイナと共になのはのお迎えに来ていた。

「なのはママ~~~~~フェイトママ~~~~~」

「あ、ヴィヴィオー。転んじゃうから気をつけてね~~~~~?」

ヴィヴィオがトテトテとなのは元へと走ってくる。
そのヴィヴィオになのはが気をつけるように大きく声を出した。

それにつられたのか、時風も一緒になって声を出す。

「コケんなよ！？絶対にコケんなよ！？いいか絶対だぞ！？」

「だいじょうぶあっ……………」

そこでヴィヴィオがこけた。
コテンとこけた。

時風の顔がにやりと笑う

「な、何というテンプレ……………しゃーないな……………たく」

「舜君待っ……………ってって言っても聞かないんだからもう……………」

転んでしまい、涙ぐんで泣きそうになってしまつヴィヴィオに近づくと、
く蒔風。

なのはとしてはあのまま待つて、ヴィヴィオが自力で立とうとするのを促そうとしていたのだが。

ちなみにフェイトはすぐに寄つて行つた蒔風を見て、うんうん、と感心していた。

ヴィヴィオの前に来て、しゃがむ蒔風。

そこでどんな言葉をかけるのか、なのはとフェイトが気にしている
と……

「立て!!立つんだヴィヴィオ!!!ほら!!!がんばれよ!!!諦めんなよ!!!もっと熱くなれよ!!!」

なんか熱血やつてた。

しかもそれに合わせてヴィヴィオも立とうとしている。

が、そこは子ども。

すぐに再び地面にペタンと倒れてしまう。

だが、その体を時風が両手でヒョイ、と持ち上げてから高い高いみ
たいにしてよくやったとヴィヴィオを褒めた。

「よく泣かずに立とうとした!!その立ち上がろうとする意思!!
それがなくして何が強さか!!よしよし、今は立てなかったが、次
は立とうな?頑張れるか?」

「……うん」

「オツケーだ!!」

グツ、とサムズアップを決まる時風に、ヴィヴィオも手をグーにし
て頑張る、と意思を表す。

そうしてヴィヴィオを降ろし、服をはらってあげてからなのはの方
へと行かせてあげた。

「舜君・・・なんでそんなうまくやれるの?」

「簡単な事。オレもまた、ガキだから」

そう言っつてシレッと答える時風に、フォワード陣はポカーン、とするばかりだ。

「しゅ、舜さんって・・・」

「案外保育士とかに向いてるのかもしれないわね」

「え?僕はずっとお兄さんの感じなんですけど・・・」

「エリオ君、舜さんと同じ部屋だもんね」

「スバル、あの人誰なの?」

「なのはさんのお友達で・・・えーっつと・・・」

スバルがうまく説明しようとする。

舜さんが言い出してないってことは言わない方がいいのかな?とか考えていると、時風が行こーりーぜーりー、と皆を呼んで食堂へと

行こうとする。

まあ確かに朝っぱらから激しい模擬戦やって、腹もすいているのだろっ。

そう言って先に行こうとする時風に、ヴィヴィオが待ってーと声をかけた。

「ヴィヴィオも行くー！ー！待ってー翼の人ー！ー！」

その言葉に、時風の歩みが止まった。

そして振り返り、ヴィヴィオを見る。

当のヴィヴィオはどーしたの？と時風を真っ直ぐに見て、小首を傾げてきている。

「ヴィヴィオ、どうして俺が「翼の人」なんだ？」

時風が優しくヴィヴィオに聞く。

それにえへへと笑いながらヴィヴィオが元気に答えた。

「えつとねー、なんとなくそんな感じがしたの！しゅーは翼の人ー」

その言葉に時風の口元がヒクヒクと動く。

（な、なんちゆう子供だよ・・・感性だけで翼人を当てる？元になつた人物・・・興味が出てきたな・・・）

その後ろではなのはとフェイトも驚いていた。フォワード陣も同様。シグナムやヴィータなんかも開いた口が塞がらない状態だ。

「え？え？翼の人って、どういう事？スバル？おーい？」

そんな中ギンガだけは話についていけていなかった。

その現状を見て蒔風が、はぁ、とため息をついて、とりあえず飯にするか！と皆と共に改めて食堂へと向かった。

その道中、蒔風がスバルに教えていいよと言ったので、スバルがギンガに蒔風の事を話した。

そこからはギンガの質問攻めだ。

しかし蒔風としては何回目になるかわからない話。

もうめんどくさいとすべてスバルに投げ出し、そのスバルも困ってしまう。

まあ何とかティアアナやエリオが説明し、ギンガも納得してくれたようだったが。

「スバル、お前本当に苦手なんだな、そういうの」

「そ、そんな目で見ないください!!わ、私はもっといい取り柄があるんです!!..!」

「そうだな。とりあえず闘う時どうするか説明してみようか?」

「バーツ!!っ行って敵を見つけてドカンです!!..!!」

「.....」

「な、何か言ってきましたよう!!..!!..!!」

「そーいえばなのはママとフェイトママはヴィヴィオのママだけど、しゅーはヴィヴィオのパパなのー?」

「ヴィヴィオ、しゅーじゃない、舜だ。それからオレはパパじゃない。おにーさんと呼べ」

「パパー?」

「違う。おにーさんだ。皆の兄貴だ」

「パパ!!」

「だから……」

「パーパー」

「OTL」

「舜君、諦めなよ」

「うるせえ母さん」

「かつ!？」

「そうなっちまうから嫌なんだよ。お前母さん、俺父さんとか、どんな状況だよwww」

「しかも二人この状況だと二人も侍らせてますもんね……」

「だから嫌なんだ。そもそも、オレに恋愛対象なんて存在しない」

「好きな人とかいないんですか？」

「いないねえ・・・そもそも、俺は人からも生物からも外れた身だ。だからこそ人間が大好きだし、人を愛している。誰か一人を特別に愛するなんて、俺にはできないんだよ」

「舜君、それって・・・」

「だからヴィヴィオ、俺の事は・・・」

「舜パパ？」

「いやだからな・・・」

「でもそれだと語呂悪いですよね？」

「おいスバルお前」

「舜お父さん？」

「そっちもどうかしらね」

不定期更新になってしまいかもしれません。
いつ更新されるか、ドキドキですね!!!

ア「ああ~~~~~!!!」

皆さま申し訳ございません。

もしかしたら不定期更新は一月ほど続きます。

冬コミ中は更新できないかもしれません。

ですが、これからもこの小説をよろしくお願いいたします!!!!!!

ア「次回、蒔風のそんなある日の続き」

ではまた次回

なのはママは厳しすぎです

なのはStrikers　↳迫りくるそのとき

模擬戦が終わって皆で食堂に到着し、各々が自分の朝食を手にとって座っていく。

「いただきます!!!」

「いただきます!」

テーブルの割り振りとしては

フォワード&ギンガ

なのは・フェイト・ヴィヴィオ

そしてなぜか一人でテーブルに座った時風だ。

「なんで舜君そっちいるの？」

「なんだろうか……嫌な予感しかしないのでねえ……」

そんなことを言いながら蒔風がふと、フォワード陣のテーブルを見る。

そこには山もりの食糧があった。

え？もうご飯とかそんな言い方じゃおかしいので「食糧」ですが？

それにガッツついていくスバル、ギンガ、エリオ。

そう、ギンガもまた、スバルのようにたくさん食べる子だったのだ。

しかし真に恐ろしいのはギンガ一人しか増えてないのに置かれていく食糧はいつもの五倍に増えていたことである。

「グオオオオオオオオオオオッ!? ヒール! ヒールがッ!? ハンマ
ーのようだッ!?!」

バタバタと床を悶える蒔風、見下ろすはやて。

そんな床には蒔風の朝食が散らばって……いなかった。

「……健康ゼリー……いただきます……」

「味噌汁は貰ったあ!!!」

「やったあ!!! アジの開きい!!!」

「白米、シンプル最高!!!」

「納豆は健康にいいんですよね」

いつの間にか出てきた強奪集團せいりゅうぐわんが宙に舞う朝食をキャッチ、そして食ってから消えていった。

それを見届けて、はやてにキャロがおずおずと聞いてきた。

「や、八神部隊長……どうしたんですか？」

その言葉にはっ、と我に返ってはやてがここに来た理由を思い出した。

「そ、そうや!!!!皆聞いて!!!実は六課の食料代が……」

「ゲほっ……それなら今朝来たギンガがメキメキとエンゲル係数を上げてますが」

「いやあああああああ!!!!!(ドスッ!!!)」

「目が!!!私の目がアアアアアアアアア!!!!!!」

落ち着いたはやてが回復した時風に謝ってからやっとのことで本題に入る。

「六課ウチの食費が大変なことになってます」

「いまさらか」

「やっとですね」

「むしろ良く持ち堪えましたね」

「はやてちゃんはよくやったよ」

時風の言葉に、ついに来たかとティアナ、感心するキャロ、ねぎらうなのは。

その言葉にはやてがなのはに縋りついてさめざめと泣いていた。

「うう……あ、ありがとうなあ……(ＴＴ)
いやね？エリオの食べっぷりはフェイトちゃんから聞いた事あったし、スバルの事も初日で知った。だから食費分の予算を先に割り当てて余裕はあったんやけども……」

「なるほど。毎日の訓練で日に日に食べてく量が増えていったと」

「そうなんよ・・・そこでギンガまで来たら大変なことだ!!!」

「「「す、すみません・・・」」」

そんな話に当のスバル、ギンガ、エリオが委縮してしまう。

それを見て蒔風が肩を叩いて気にすんな、と笑って見せた。

「はぁ・・・おにーさんに任せなさい。金の問題ならどーにでもなるから」

「ぎ、銀行強盗!？」

「詐欺はいけませんよ!?!」

「いや?でもここで私が事前に犯罪を食い止めれば執務官試験に有利かも……………」

「ティア!?私ティアが何を言ってるのか分からないんだけど!?!?!」

フォワード四人が次々とおっ立てる推測に肩と頭を下げ、頭をフルフルと振って時風が墜ち込んでいた。

「しゅ、舜君……………」

「ほ、ほら!?!つまりなんでもできるって頼られてるんだよ!?!」

「そんなことより金や。持っとるんだったらはよ出しい」

励ます三人？の声に少し元気の出た時風が説明を入れる。

「言葉の事はお前らも知ってんな？それと同じで、世界ごとにお金も違ってくるだろ？だから俺には各世界に行った際それなりの金が支給されてんの」

「それってどれくらいなん？」

そのはやての質問に時風が首をかしげて「さあ？」と言いながら財布を取り出す。

すると出てくる出てくる。

ひっくり返して財布を振ると、お札がヒラヒラと。

その量は明らかに財布の許容量を超えており、異次元にでも通じているのかというほどだ。

ゴクリ……………

「誰かの唾を呑む声が聞こえた。そして振り返るとそこには凄い目をしたはやてがいた」

「なんでナレーション風!?!」

「ま、とにかくこれだけあれば食費はどつにかなんだろ。ってか、みんなで食いに行くのもいいかもな」

「私焼き肉!?!」

「私は旗の刺さったランチ食べたいです!?!」

「前に部隊長が言った「オスシ」って食べてみたいですね」

「ラーメンとかカレーもいいです!?!」

「お前らもつ食つ気満々かコレ!？」

なんだかフォワード陣も蒔風に容赦なくなってきたる気がする。

と、そこで蒔風がふと思いつてはやてに訊いた。

「なあ、今はこれでいいとしてさ、実際どつするつもりだったの?」

確かにそうだ。

蒔風が持っていたからよかったものの、持ってなかったらどつするのか。

「そこは……六課がちゃんとした実績さえ上げれば予算なんか
ウハウハや!」

「でも確か一年間の実験部隊だったよね？」

「うぐ……」

「ヴィヴィオ、よく見ておけ。これが「取らぬ狸の皮算用」って言
うんだ」

「たぬきー？」

「タヌキだ」

「そこ、いらん」と言わんといて」

「そついえばこないだ査察もあつたんだよね？」

「そうやね。地上本部のレジアスのおっちゃんはどうにもこの部隊を潰したいらしいんや」

そう言いながら自分も朝食をとるはやて。
うーむと蒔風が腕を組んで考え込む。

「あーあ。あるとき来た女の人って、目つき怖かったもんなア」

「オーリス・ゲイズ三佐やね。きつとうちのあら捜しでもしottaんやろ」

「お前らに押し込められて大変だったんだぞ？あんどき」

「だって舜くんいたらなにしだすかわかんないし」

「そもそも舜君の入隊はイレギュラーやから、いらん事さらたら困るからな」

「どんだけ信頼ないんだよ……」

「じゃあ会っていたらどうしたんですか？」

「フツ、幻術を見せて墮とします」

蒔風が手をワキワキ、顔をニヤニヤさせながら言い放った。

「ほづ……べづちってちっ」

「ありとあらゆる辱めを受けさせてから完全なにして、
で を……………」

「ダメ……………!!!!!!」

蒔風のその発言になのはが大声をあげて止めさせる。
後ろの方では困った顔をしてフェイトがエリオとキャロの、はやて
がヴィヴィオの耳を塞いでいた。

「耳キーンだ……。じゃあそうだな。もっと温和にして、適当に引き付けるか？他の世界のやつの方でも使えば簡単に……」

「お？色落とし？舜君も多彩やなあ……」

「それもダメ……！！！！」

更に提案する時風に、再び声をあげてやめさせるのは、フェイトはもう呆れていた。

「しゅ、舜君！！そんな不埒な事はダメだよ！！！！」

「おおぅ……。そうかー。確かにそれはいかんな。責任取れなんて言われても困っちゃうもんなー」

その発言にホッ、とするのは。

胸をなでおろして、蒔風に言う。

「ダメだよ？人の想いを軽んじちゃ・・・」

「おっと、そいつは迂闊すぎた。すまん。にしても、お前やけに必死だったな？どうした？」

「え？あれ、なんでだろ？」

なのはのきよとんとする顔。

それを見て蒔風が笑いながら頭をグシャグシャと撫でた。

「なんだよー、自分でもわからんのかい」

「うあうあうあ、やーめーてー!!」

完全に子ども扱いされるのは。

それを見てニヤつくはやたとフェイト。

「はやて、これは……」

「うぶぶ。面白そうな事になりそうやね……」

そんなことをつぶやく二人。

と、そこで蒔風が思い出したように指を立ててはやてに訊いた。

「そういえばはやて」

「なんや？」

「戦闘機人ってなんだ？結局聞いてなかったんだが」

先日の聖王教会での話に出てきたその単語。
蒔風には馴染みのない言葉だ。

なんやかんやで今まで聞きそびれていたのだが、今回の敵とあって

は知らない、というわけにもいかないだろう。

蒔風は特に何も気にせずはやてに訊いた。

だが、その返答ははやてではなく、思わぬところから来た。

「戦闘機人って言うのは、人工的に生み出された人間に機械とかを埋め込んで、その体を強化した人たちのことです」

4255

スバルだった。

更にはギンガまでその続きを話してくれた。

「普通の人間にいきなりそんなもの埋め込んで身体が耐えられなくなつて、いずれは使えなくなつてしまいます。だから、最初からそういう改造に耐えられる人間を作つて、改造する」

「それが戦闘機人です。魔法とは違うエネルギーを使って、ISと
いう先天的固有技能をみんな持っている。まさに……戦うため、
兵器として作られた……人間」

その説明を聞いて蒔風が少し訝しげな顔をする。

スバルの隣ではティアナが少し心配そうな顔をしていたが、蒔風は
それに気付かない。

「なるほどな……どーりで攻撃に魔力を感じなかったわけだ。
そうになるとAMF内では脅威になるな」

蒔風が腕を組んで納得の行ったように頷く。

「だがまあ、改造人間なんてもんは珍しくもねえ。お前らフオワー
ドと最初にやった模擬戦の時。あんどき出したあの三人だって改造
人間だしな」

「え？」

「そういう意味では俺は別に何とも思っちゃいねーよ。敵か味方が、それだけだ。ってかお前ら、妙に詳しいな？」

「私たちのお母さんの最期の事件が……戦闘機人がらみだったので……」

「あ……そりゃ悪いこと聞いてしまったな……」

時風がバツの悪い顔をして謝るが、スバルもギンガも気にしないでくださいと手を振る。

4257

「しゅ、舜さんが気にする事じゃないですって!!」

「そうですね!!あ、あはは!!つまんない話ししちゃいましたね!!」

まるで取り繕うかのようにその場を濁す二人に、時風の気も少しは晴れたのか、あははとつられて笑う。

「そうか？まあそうならそれでいいけどな．．．にしても作られた命か．．．．．やっぱ違法じゃないのか？それ」

「そつやね．．．．．だからある意味じゃ、あの子たちも被害者なのかもしれない」

「うむ．．．．．ま、関係ないね。オレにとって重要なのは敵か味方かだ。もっと言うなら、「作られた」なんてことに意味はない」

「え？」

「作られたらろうがなんだろうが「命」がそこにあるんだろ？だったらそれでいい。生まれた理由なんか毛ほども価値はねえよ。大事なのは、生きる理由だ」

「生きる．．．．理由．．．．」

「どう生まれてくるかなんてそいつは選べねえ。でも、そこからの道はそいつ自身で決められるものだ。誰かの助言アドバイスがあるかもしれない、誰かが道を指し示すかもしれない。だが、その取捨選択権はそいつ自身に委ねられる。それがいいなんてことはまず許さん」

そう言つてガタンと立ち上がる時風。
食器をかたづけ、部屋へと向かう。

「スカリエッティがもし、あいつらに「生みの親だから」なんて言つて言う事聞かせてるなら、目を覚まさせてやるよ」

時風がにやりと笑いながらその場を後にする。

「そついえば舜君！！」

「はいはい？」

「数日後にな？地上本部で公開意見陳述会があるんよ。だから・・・」

「ああ、わかった。行ってやる。ああ、間違いなく行ってやるともさ。ってか、そいつぁビッグイベントになりそうだな」

どこかの青春白書モノマネの芸人っぽくそう言って、時風が自室に戻っていた。

どうやら今日はのんびりと過ごすつもりだよつだ。

「さあて・・・そんなコマ使ってどうするつもりだ？スカさんよ」

そのどちらをも、私の目的のために頑張ってくれたまえ！！！！！

私は・・・歴史を！！！！

そしてこの先の世界を作る！！！！！！

・・・君にも頼みたい事があるからね
よろしく頼むよ？

t o b e c o n t i n u e d

ア「(ブワッ!!)」

ふ、ふふ……

そうさ、俺は聖夜でもチマチマ書いていた男さ……

ア「お、落ち込まないでください!!!」

………ドンキ行ってくる

ア「え?じ、次回、陳述会編だ!!!ま、待ってください!!!」

爆竹買って祝いの花火を投げつけてやるぜえヒャッハー!!!!!

ア「その日はもう昨日過ぎましたって!!!待ちなさー!!!い!!!」

あたしは知りたいただけだ。

あたしたちの王さまがどんな奴か。

そいつは本当に、あたしたちの上に立つのにふさわしいがどうか。

なのはStrikers　〜襲撃〜

「いきなりですが、やってきました。地上本部」

「舜君、誰に言ってるの？」

「いや、なんかな……」

蒔風たちがいるのは地上本部の中。

地上何階だろうか、窓を覗けば下にミッドの街が広がるほどに高い階で、なのは、フェイトと共に内部警備に当たっていた。

彼らだけではない。

一階のロビー、そしてその周辺、内部、近、管制室から扉の二つ一つに至るまで完璧に警備が敷かれている。

これを見て凄いと云わない人間はそうはいないだろう。

「でもよ、なにもこんな大仰に・・・そうか、予言か」

「うん。やっぱり本局の方は危険視しててね」

「それに管理局の偉い人たちもたくさん来てる」

「狙うには絶好のチャンス、ってことか」

現在はやて、シグナムは会議室で陳述会に参加中。

フォワードの五人とヴィータ、リインは地上で警備をしている。

なお、内部にデバイスの持ち込みは禁止とされているため、彼らになのは達のデバイスは預けられている。

「そう考えると舜君の武器って便利だよな」

「そうだねえ……いつでも俺の意思で出し入れできるから」

「いざとなったら舜君頼みだね」

「おいおい……ま、頑張るぞ」

そんなことを話しながら、時間はゆっくりと過ぎていく。

「舜から見ても、戦闘機人ってどれくらい強いのか？」

「ふふん、オレにしてみりゃあんなどーってことはない」

「やっぱりっ？」

「って、言いたいところなんだけど」

「えっ？」

「実際、あいつらは相当の実力を持っている。俺たちとの交戦記録も、おそらく全員が共有し経験値として溜めてるだろうし、各人のISとか言う特殊能力は厄介だ。しかも肉体レベルが底上げされてるし、武器も天才というだけあって用意してるのはどれも一級品。相手にできて余裕だと言えるのはせいぜい五人までだ。八人になったらキツイ。十人だったらまともにぶつかれん」

「まともによ？」

「真つ向じゃなくて、背後を取って後ろからグサリ、とかな」

「それじゃ暗殺みたいだよ……」

「俺の得意分野がそこなんだから仕方ないだろ」

「そうだったの？」

「そ。あんまり好きじゃないんだけどね……。ありゃ、コーピーなくなっちゃった。お前らもなんかいるか？買ってくるぞ」

蒔風が手に持っていた紙コップをヒラヒラさせて空である事を示すように振る。

その申し出になのは今はいいや、と断るつとするが

「あ、私は別に・・・」じゃあコーヒーでお願いね？」「フェイトちゃん？」

フェイトがそれをさえぎってコーヒーを頼んだ。

だが蒔風は聞こえてなかったのかワザとなのか、恐ろしいものを持つてこようとしていた。

「たしかゴーヤジュースがあったからそれにミルクをたっぷりかけたものを・・・」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「ははっ、りょーかい。ではでは~~~~~」

蒔風が少し離れた自販機コーナーに足を運ぶ。
それを見送って、なのはがフェイトを問い詰め始めた。

「どうしたの？フェイトちゃん」

「うん・・・なのは、。舜の事、どう思ってる？」

「どっつて？」

「ほら、気になるとかさ」

フェイトの目はなんだか生き生きとしている。
その眼に若干押されながら、なのはが答えた。

「うーん。舜君はずっと憧れの人だったからなあ・・・へりを助けてもらった時も、胸が熱くなったくらいだし・・・」

「なのは、それ本当？」

「うん・・・ってフェイトちゃん、なんでそんなに顔近いの？鼻息荒いの？怖いよ!？」

「(はやてが言ってた「面白い」ってこういうことだったんだ・・・胸が熱くなるって、どんなふうに?)」

「背中を見てね、安心したんだ。「この人がいれば大丈夫」って。それで何かこみ上げるように熱くなって・・・フェイトちゃんどうしたの!? プルプル震えてるけど!?!」

「な、なんでもないよ・・・(こ、恋だーーーー!!! なのはが恋してるーーーー!!! しかも本人自覚なし!!! これは・・・面白い!!!)」

なんだか心の中で暴走しているフェイトさん。
ちなみに彼女にとって蒔風は「いつでも頼れるお兄さん」だそうだ。
歳は同じだけど。

「なのは、それは・・・」

「ん?」

フェイトがいつにも自覚をせよとする。

「それはね、こ………」

ドオン！！！！

だが、その言葉の先は突然の轟音にかき消されてしまった。
地上本部の巨大な塔が、大きく揺さぶられるほどの轟音に、その階
にいる全員が思わず膝を突いてしまう。

「な、なに！？」

なのはとフェイトがその事態に通信を繋げて現状報告を聞いていく。

「ぼ、防衛管理室と、動力炉が破壊されました!!!」

「な!?!」

「防壁は!?!」

「バリア自体は別動力なので展開されてはいますが、ガジェットが張り付いていてこちらの身動きが……」

「こちらに増援で向かってきている武装局員の部隊が、戦闘機人とみられる敵二体と交戦!!!壊滅状態です!!!」

「さらに内部のシステムに侵入され現状、緊急で降りたシャッターで各フロアが分断され、救援に向かえません!!!」

そうした報告を聞いて、二人の顔が青ざめた。

このままでは予言の通りに……

今までの報告だって五分とかかったものではない。

だったらこれ以上、一体何が起こってしまうのか、見当もつかない。

ドオン！！！！ドオン！！！！

断続的に聞こえてくる爆発音。
なんとかしたいが、今の自分たちはデバイスもないのだ。

「しゅ、舜君は!?!」

「舜!!!いないの!?!」

なのはとフェイトが時風を思い出してその場を探し始める。
だがその姿は全く見当たらず、周りの局員にも聞いてみた。すると・

・・・

「え？あ、その人だったら俺らにも飲み物いるかって聞いてきたけど・・・」

「は？俺だって聞かれたぞ？」

「わ、私も聞かれたけど・・・」

二人が聞くとそのフロアにいたほとんどの人間の飲み物（全部コーヒー）を買いに行っているようだ。

何やってんだあいつ。

「と、とにかく新人たちと合流しないと!!」

「うん、確か合流場所は、地下!!!!」

そう言つて何人かの人に協力を仰いでエレベーターの扉をこじ開けようとする。

そこから一気に下まで降り、そこで合流してデバイスを受け取るという考えだ。

「んっ！…んぐぐぐぐぐ…」

「かーたーいー…！！！！！！」

だがやはりそこは地上本部。
外敵からの攻撃を受けた今、そのような通路が簡単に開くわけもない。

一旦手を放し、交代でやってここを開けよう、と提案され皆が「おう！…」と勢いよく返事をしたところで、あの男がやってきた。

「戻ったぞ!!!なんだよこのありさまは!?!」

「舜!?!」

「舜……く……ん……?」

そこにいた蒔風は、人数分のコーヒーをしっかり確保してきていた。

紙コップは重ねて一本にし、中身のコーヒーは圧水で水球にしてプカプカと浮かせている。

そうして蒔風がみんなにコップを配り始めた。

「えっと……ヴォルフさんに一個、サクラティスさんに一個、ピンゼンさんに一個……」

律義に頼まれた順に渡していく蒔風。

その時風に、その場の全員が声をそろえて叫んだ。

「「「「何やってんだあんた?!?!?」「「「「「

その声に若干ビビり、紙コップをバラバラと落としてしまい、それを床につくよりも早く何とかキャッチする時風。

そして「なんだよう」と言いながら置いてあったテーブルにコップを一つ一つ置き、均等にコーヒーを入れていく。

4279

「あそこに置いといたから勝手に取ってってくださいね?と・・・
・・・
まったく、どういった現状だ?」

なのはとフェイトがかいつまんで現状を伝える。
というか、お前通信機持ってないのか?

「なるほど……やっぱ用意しといて正解だったってわけだ（パチンー！！）」

時風が指を鳴らす。

なのはが「用意って何！？」と聞く前に、その現象は始まった。

地上本部の地面から上空を結界が覆う。

周囲三点に設置された獅子天麟を起点に展開されたものだ。

それがバリアにへばりついたガジェットを押し出し、引き離す。
ホテル・アグスタの時と同じものだ。

「これで幾分かバリアも持つだろ。地上本部が焼け落ちる、なんてことはないな」

「よ、よかった……」

「それで、獅子から伝言。フォワードたちが合流のために地下へと潜っていったらしい」

「じゃあ私たちも！！」

「行くこうか。どれ、そこ通してくれよ……つとオ！！！！！！！！」

時風がケンカキックでエレベーターの真ん中に蹴りを入れる。
すると真ん中の開く隙間に足が突き刺さり、足の周辺だけ丸く変形
してしまった。

「「嘘お!?!」」

「こんなくらいで驚くなよ今さら……っ」と

さらに足を引っっこ抜き、そこに手を入れて強引にエレベーターを開
く時風。

これで進路は開けた。

「行くぞ!!お前ら!!!!」(ガシッ!!!!)」

「え?行くぞって」

「一体何を……」

ボウワ！！！！ズゴオオオオツ！！！！！！

蒔風が二人を掴んで開翼し、その勢いを完全に殺す。

そして同じようにエレベーターの扉を開け、その階に到着した。

「着いたな」

「なにしてんの！？死ぬかと思っただよ！？」

「悪い、その感覚はオレにわからん」

肩で息をする二人にシレッ、と返す蒔風。

そこで周囲を見渡し、状況を見た。

「ライフラインは完全に閉ざされてるな。空気は緊急時でも動くようになってるみたいだからいいとして……これじゃまるっきりダンジョンと変わらん。とりあえず合流ポイントへ……」

地下という事も相まって、非常灯の明かりしかないこの階はこの状況下ではおどろおどろしい雰囲気しか表していない。

「とりあえずはフォワードたちと合流して……待て、誰か来るぞ」

蒔風が暗がりに向かって目を凝らす。

その先からやってきたのは、息を荒くしたシスターシャツ八だ。

「シャツ八さん!!どーしたんですか!?!」

「す、すごい音と悲鳴が聞こえて・・・何があつたんですか?」

「ああー……」

なのはとフェイトが視線を蒔風に向ける。

なぜかそれだけでなんとなくわかってしまったシャツ八が、話を本題に移した。

会議室の扉自体は有志達によって何とかこじ開けられている。

だがその会議室内にはいまだに高官たちが残っていて、はやてとシグナム、カリムも彼らへの説明のために残っているらしい。

「レジアスっておっちゃんは?」

「少し顔色が悪かったですね・・・」

「ま、そりゃそうか。オレも見たけど、結構なセキュリティだったもんな」

「そこを崩してくるとは……一体どれほどの力を……」

シャツハの言葉に、時風はいいや、と首をふる。

「確かにあいつらは強力な戦闘能力を持っているが、たったあれだけの力押しではこうはならん。多分、先天的固有技能、ISとか言うのがかなり特殊なんでしょうな。地面に潜ったり幻術見せてきたりとそれはもう多彩な」

「地面や幻術……それじゃあ……」

「ガチガチに固めた鉄壁も、小さな策一つで簡単に崩れる。これはいい例だな。うん」

腕を組んで感心する時風をよそに、シャツハがなのはとフェイトにこれからどうするかを聞いた。

「今こつちに新人たちがデバイスをもって向かっています」

「今のところはそこで合流の予定です……え？」

と、そこでフェイトに通信が入る。
なのにも入ったようで、時風が置いてけぼりになる。

「なにがあつた？」

「舜君、端末もらつてないの!？」

「すまん。コーヒーまとめてる時にポチャンした」

「「本当に何やってんの!？」」

とつかあれって落とすようなものなのだろうか？見たことないけど。

「それより現状!?!」

「う、うん……六課隊舎が………襲撃中………!?!」

「なん……だと……?」

「今はシャマルとザフィーラを中心に残ったメンバーが何とか防衛線を築いているみたいだけど……」

「……戦闘機人は何体いる?」

「わからない……今交戦中なのは一人みたいだけど……」

「一人でその威力か……ふむ、考えてみよう」

蒔風が悠長にも人差し指を上げ、まるで講義でもするかのように話した。

「空の武装局員を潰すのに、おそらくあいつらなら二人もいれば十分だ。動力炉に一人、監視室に一人、遠距離砲撃もあつたみたいだからそつちに一人。それからハツキングを行ったものが一人。スカリエッティが身の回りを守るために一人。最後に内部制圧のために二人だとして……予想総勢人数は十人だから……あつちにはそいつしかないか?」

「でも戦闘機人はあのおとき十人だっただけで、今は増えてるかも・

・・・」

「かもしれん。というかそうだろうな。一人が外から攻め、その間に六課に侵入、か。狙いは保管されたレリックにヴィヴィオだ」

「そんな!!!」

「おい、お前ら。俺は先に行く。デバイス受け取り次第すぐに・・・」

蒔風がその場から急いで六課へと向かおうとする。

そこにちょうどいいタイミングでフォワードたちが到着、スバルが血相変えて叫んできた。

「ぎ、ギン姉が!!!今戦闘機人と交戦中だつて!!!」

「なに?」

スバルの話によればギンガは襲撃のあった時、みんなと離れて裏手にまわっていたらしい。

地下で合流するつもりだったのだが、こっちの方も二体の戦闘機人に行く手を阻まれ、やっとの事で撒いてきたのだそうだ。

「なのはさん！！ギン姉を！！！！」

「わかってるよ、スバル。スターズは今からギンガのもとに」

「ライトニングは六課隊舎の増援に向かうよ！」

「」「」「はい！！」「」「」

「シスターシャツハはデバイスをはやてちゃんとシグナムさんに渡してきてください」

「わかりました。お任せください」

「で、舜君は？」

「えーっだーっうーっ……どっするどっする……」

蒔風は悩んでいた。

六課がヤバイ。

かと言って、あいつらをギンガが一人で戦闘機人を相手にできる保証もない。更にスバルたちが交戦したという二体もそっちに向かっていたら非常に危険だ。

しかし獅子天麟の三体はこの場から動かせないし、他の四体はどこから機人が来るかもわからない以上、なるべく自分から放したくなかった。

考えて、考え始めて数秒後、あっさりした顔をして蒔風が考えをまとめた。

「ソッコ―でギンガを助けてタイツ共捕まえて六課に飛ぶ！！！」

「飛ぶって……かなり距離あるよ？」

「うっせ！！今はそんなこと言ってる暇はない！今の間にも結構ヤバいかもしれんな。一気にカタをつける！！！」

「じゃあ……」

「まずは近場のギンガからだ！！スバル、ギンガの場所を教えろ。今から俺が先に行く。後からついてこい！！！」

「はい！！！」

「フェイト！！俺が行くまで六課を任せた！！！」

「うん、任せて！！！」

「あそこは私たちの居場所です・・・だから」

「絶対に守ります！！！！」

「よろしい！！先に行くぞ！！ブーストオン加速開翼！！！！！！」

時風が加速開翼し、翼からのブースターで一気に超高速移動を行ってギンガの元へと向かう。

その後を各自が各々の戦場へと飛んでいった。

先に言っておこう。

物語はここから大きく歪み始める。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers ～襲撃～（後書き）

アリス「現在作者はコミケの仕事でホテルに泊まっています。ですので……」

よっと、面倒なのでここからは「なしで行きますね？アリスです。

にしてもまた時間かかりましたね。

昨日の投稿は無理だったから、こうやって予約投稿したみたいですけど……」

作者曰く「今回の話は考えるのが大変だった。各戦闘にどうやって絡ませるかは考えてたけど、戦場から戦場への移動をどうやって動かすかが考えてなかった。アニメ三回くらい見てマジで悩みました」とのこと。

ちなみに今回はなのはさんたちと一緒にでしたが、案としては「はやと一緒」「ギンガと一緒に」「フォワードと一緒に」もあったそうです。

おそらく次回投稿は年が明けてからですね。
年明け記念なんてものは書かないそうです。

というか、なのはが続いてるのにそれを投下したら連続して読んで邪魔になるんじゃない？という感じでなかなかできないそうです。

お気に入り登録1000の時も、アクセス500、000の時も。

そう考えるとFF7編の跡って言うのは本当に神がかってたんですね。

ここでアリスからの耳よりじょーほー!!!

コミケ会場に作者がいるよ!!!探してみてね!!!

ってわからないでしょー!!!!!!!!!!!!!!?

・・・一人って・・・疲れますね・・・

と、言うわけで次回、「世界をめぐる、銀白の翼」第189話、
なのはStrikers（選択肢の有無）

お楽しみに

さあ、始めようか！！！！
(襲撃開始時、スカさん)

なのはStrikers ｝選択肢の有無｝

「次で止めだ。大人しく来てくれるなら、これ以上は何もしないのだが。タイプゼロ・ファースト」

「それは・・・まだ・・・わかりま・・・せんよ・・・ぐ、
つッ!!」

荒い息づかいが聞こえる。

ここは地上本部の別区画。

スバルたちと合流するためにそのポイントに向かって走っていたギンガは、ここで突如として現れた戦闘機人によって足止めをされていた。

しかも、彼女は自分の事を知っているらしい。

彼女はいきなり現れてギンガを襲撃、そして一緒に来るんだと言ってきたのだ。

当然、ギンガがそれを快諾するはずもない。

故に彼女とギンガが戦闘を開始し、相手を倒して連れて行く、という思考に至ったのは至極自然なことだった。

「諦めては、くれんだな？」

「あいにく……私がいないと……寂しがるかわいい妹も……いるので」

しかし交戦を始めて五分もせず、ギンガの息は上がりきっていた。

目の前の敵、眼帯をつけた少女……たしか名前をチンクと名乗っていた。

彼女はギンガとは逆に遠距離からのナイフ攻撃を主としていて、しかもそのナイフを爆発物に変えているらしい。

自分は近接戦闘専門・・・というわけでもないが、そこが一番の得意分野だ。

こうやって遠距離から投げられ、しかもそれが爆発するとあっては回避だけでも相当ツライ。

更に言うならここは屋内だ。

爆発物を扱う敵と対峙するのはかなり危険。

現に今までだってまともに避けられたのは一回か二回。

後は少なからず飛ばされたり、余波を受けて壁にぶつかるとも多かった。

(スバルが六課の訓練は一辺倒じゃなくしている教えてくれるって言うってたけど、私はまだ日が浅いし・・・他の特訓もしくんだったかな・・・)

ギンガがよろりと立ち上がりながらも、拳を握って身体を構える。

右手を前に、へその高さに置き

左手を顎の前に、上半身を守るように

上体は返す、正面から急所を狙われないように
足は肩幅に、とっさの事態にも動けるように

たとえ身体が疲弊し、傷付いたとしても、その構えに乱れはなかつた。

しかし、いかんせん体力がもう、ついていけない。

おそらくいい一撃でも食らえば終わりだろうし、相手の増援が来たら詰みだ。

逃げられる相手じゃないし、そんな時間も体力もない。

だがそんな状況でも、彼女は諦めなかった。

たとえ左手一本になるとも、彼女は諦めることなどないだろう。

だからこそ、対峙する少女、チンクはそれを感じとって言った。

「あまり気は進まんのだが……命令だからな。ドクターは最悪破損してもよいとおっしゃっていたから……」

「ッ!」

「その通りにする。IS発動、ランブルデトネイダー!」

キーン………ヒュオッ!!!

瞬間、ギンガの耳から集中で音が消える。

ギンガに向かって、チンクが放ったスローイングナイフ「ステインガー」が向かって行った。

それを回避して、回りこもつとするギンガ。

だが、ギンガが予定していたよりも早く、ステインガーが爆発する。

その爆発は今までとは違っており、爆風の方向が定められていた。

今までのステインガーの爆発は拡散だったし、なにより対象に刺さってから爆発していたのだ。

更にこの極限状態。

そんな状況で、ギンガがそういった要素を考え損ねていた事を、誰が批難できよう。

だが、その要素でギンガの勝利は無くなった。

爆風自体のダメージはない。

しかし、身体は吹き飛び、壁に激突。そのままズルズルと床に座り込んでしまう。

肺の空気はすべて吐き出され、衝撃に目もくらむ。

ぼんやりとした視界に、チンクが止めのステインガーを投げようと

振りかぶるのが見えた。

「あ………」

「これで、終わりだ」

ドオン……………!!

爆発した。

そのあまりの爆発に、チンク自身も羽織ってるコートでバリアを張ったほどだ。

それを見て、チンクが他の戦闘機人たち……ナンバーズに連絡を入れる。

「タイプゼロ・ファーストを撃破した。これから回収する。手伝いに来てくれ」

『わかった』

『結局チンク姉一人で終わっちゃったツスねー』

そんな姉妹たちの声を聞きながら、回収しようと思えば爆煙に近づく。

だが、そこでおかしなことに気付く。

奇妙だ。私は対象を破壊するつもりで攻撃した。
彼女ならば修復できるし、ドクターもそうするつもりだったから別
段五体満足でなくても構わなかったからだ。

そういう指示だった。

だから絶対抵抗しないようにこの場が崩れない程度に最大火力で爆
破した。

あの威力なら確実に仕留めたはず。

最悪、もう意識もなく息も止まっているかもしれない。

否、最悪、ではない。
確実にそうなるはずだ。

あれほどのダメージを与え、あれだけの爆発を叩きこんだのだから、腕の一本は余裕で吹き飛んだはず。息は止まって、活動は止まって
いるはず。

だっ
たら
なせ

煙の中から呼吸音なんか聞こえてくるのだ？

その疑問を得た瞬間、煙の中から翼が生える。
それは鋭利に尖った翼で、すぐに柔らかな鳥のような翼のそれにか
わった。

その羽ばたきで煙が掻き消える。

そこにいたのは、ひとりの男。目にも止まらぬその速さで、間に入
って爆破を防いだ者がいた。

「おまえは……」

「ようよう、結構痛めつけてんなあ……おい、ギンガ、大丈夫
か？」

「う……舜……さん？」

時風がギンガの上体を腕で抱え、意識があることを確かめた。そうして大丈夫なことを確認して、ギンガを壁にもたれさせる。

「意識あんなら大丈夫だな。寝てろ」

時風がギンガの肩を叩いて振り返る。

ギンガはそこでブツツリと意識を手放し、その場で気絶してしまっ
た。

「よう、眼帯ちゃん。ギンガに勝つとは、やるじゃないの。いつち
よおにーさんとも相手してくれや」

翼を閉じ、両手両足をプラプラさせて、準備に入る時風。

その時風に、チンクはかなり警戒していた。

トーレ、クアットロ、ディエチ。あの三人が逃走するだけで必死に

なったという男。

そしてドクターの話によれば、あの伝説の翼人だという事。

だからいきなり戦闘に入る、という事はあまりにも愚策、とチンクは判断した。

故に、ここは時間稼ぎに徹することに決める。

待っていれば他の姉妹も来る。そこまで待てば、こちらの勝ちだ、という考えだ。

「私はそのタイプゼロ・ファーストを連れて帰りたいだけだ。知っているか？彼女はそっちよりもこっち側の人間だ」

その言葉に蒔風がきよとんとする。

そうして首をかしげて、ギンガの方をちらりと見てから、頭に指を当てて考え始めた。

「タイプゼロ・ファースト？なんだそれ？うーん……
お前ら戦闘機人の名前は数字から来てたな。そしてゼロ・ファースト……なるほど、プロトタイプ。ってことは、ギンガも戦闘機人か？で、ファースト、なんていうのがあるんだからセカンドもあるんだろうなあ……そっちはスバルだな？」

たったこれだけのキーワードで、時風が正解に行きつく。
そのあまりの頭の回転にチンクが驚きの表情をした。

そう、ギンガ、およびスバルの二人は戦闘機人だ。
そうなった経緯は知らないが、道理で詳しかったわけだと時風が納得する。

その時風に、なおもチンクが話しかけた。

「わかったか？だから、そいつを回収しに来た。連れていかせては貰えないか？」

無論、こんなことが通るわけもないとチンクも重々承知だ。
だが、今は時間を稼いで増援を待つ事が先。どんな話も、無駄には
ならない。

「え？ああ、いーよ？連れてきや連れてけ」

「だろうな、ならば……え？」

しかし、蒔風の答えは信じられないものだった。

連れていきなければいけないじゃない、と

「そ、そこは」「そうはいかない!」「というところじゃないのか!」?

「え? いやだつてさ、お前別にこいつと戦ったとき信念に反するよ
うな手を使ったわけじゃなさそうだし、たとえそうでもこいつは純
粋に負けたんだろ? だったら別に口出しはしないなあ」

なんともあっけらかんと言つてのける蒔風。

その蒔風になぜかチンクが焦り出した。

「そ、それでいいのか!? 本当に連れていくぞ!」?

「だからいいつて。ま、でもその前に一つ聞いてほしい事があるん
だ」

「な、なんだ?」

いままでへらへらと笑顔でとんでもない事を言ってきた蒔風に、チ
ンクが若干うるたえながら訊く。

その蒔風が、一体何を言ってくるのか。

「連れていくなら連れていくで構わない。だけど、俺を無視して通れると思うなよ?」

「……………は?」

「ギンガを連れていきたいならご自由に。だけど俺は、お前を捕まえなきゃならんし、こんだけの事件起こして見逃すわけにもいかない。だから……………オレを突破してみるよ」

時風が本気の目になる。

もはやそこに笑っていた青年はなく、凄まじい気を放つ一人の男がそこにいた。

「そ、それは勝手にとは言わないぞ!？」

「ああ?しらねーよ。だから勝手に捕まえていけつて。オレはそれを止めはしない。オレの狙いはお前だから」

「くっ……………結局は障害になるという事か!」

「結果的にはね〜。ギンガ連れていくなら別にそれで俺は、やらせはせん!〜とかにはならないけど」

クソッ！！と悪態をついて、ついに蒔風に向かってナイフを投げる
チンク。

狙いは胸元、ど真ん中。

爆破で視界をくらませて、一撃目で仕留めるつもりだ。

だが

「ふっ、とぉー！……」

蒔風はそれから逃げも防ぎもしなかった。

ナイフに合わせて上体を反り、右手でスティングガーを掴み取ってか

らそれを見、チンクに向かって投げ返したのだ。

その間、実に一秒にも満たない。

全く動かず、さらには掴んで投げ返すという芸当にチンクが啞然と
していると、その頬をスティングーが通って行き、後ろの壁に突き
刺さった。

恐る恐る振り返ると、そのスティングーは根本までズッポリと突き
刺さっており、出ているのはピンセットでつまむ程度だけだ。

「手投げ系は苦手だなあ……」

そついう時風がポリポリと頬を搔き、ついにチンクに向かって突っ
込んだ。

とっさにそれに反応したチンクが、スティングーを投げ放つ。

その途中や背後で爆発するそれを、時風がかわしながら近づいていた。

そして天井を蹴り、チンクを頭上から攻めにかかる。

しかしチンクは自分をコートで庇いながら、時風の目の前にステインガーを放り、それを起爆させた。

グおっ！？と時風が声を出して爆発に消え、チンクもさすがの至近距離に地面を倒れて床を滑る。

その衝撃に耐えながらもチンクが立ち上がると、目の前の煙から足が伸び、足元をすくう様に右から左へと振るわれた。

それに立ち上がったばかりの体勢を崩され、一瞬無防備になるチンク。

しかしそんな体勢であっても、彼女は今まで訓練を受けてきた戦闘機人だ。

懐に手を伸ばし、ステインガーを手に取りうつとする。

が

「させまつせん！！！」

「ッ！？」

蒔風がガシッ！！とその両手を掴み、チンクの手からスティンガーがこぼれ落ちる。
さらには懐にあった物までポロポロと床に落ちてしまった。

武器を一瞬で失うチンク。取り押さえる蒔風。

勝負は着いた、と思われた、その時

「チンク姉にいいいいいいいい！！！！手を出すなあ！！！！！！！！！！」

ガゴォ!!!!!!!!!!

蒔風の側頭部に踵が命中する。
やってきたのは戦闘機人二人。

短髪でぶっきらぼうそうな少女、ノーヴェと、気さくな感じの少女、ウエンディだ。

蒔風を蹴り飛ばしたのはノーヴェの方だ。
その証拠に、その脚に装着しているジェットエッジのリボルバーが勢いよく回っている。

「よっしゃ！ざまーみる！！」

渾身の一撃を与えた事で勝ったと思いきもノーヴェ。
しかし、ウエンディに肩を借りて立ち上がったチンクが大声で警鐘を鳴らした。

「終わっていないぞ！！油断するな！！！！」

「え？・・・ぐあっ！！！！」

呆けた声と、驚きの声が連続して響く。

ノーヴェがその声に搬送した瞬間、時風がその脚を掴み、大きくブ
ン回してウエンディに向かって投げ放ったのだ。

何とか着地して、構えるノーヴェ。

更にはチンクがステインガーを、ウエンディが大型プレート「ライ
ディングボード」を構えた。

「戦闘機人三人か・・・うーん・・・ナイフ！ボ
ド！リボルバー！！！！ってか？」

「行くぞ！！！」

「おっ！！！！」

蒔風の言は無視し、突撃していく三人。
が、その瞬間思い知られることになる。

あくまでも今まで攻撃が入ったのは、不意を突いたからこそだった
という事実を

順としてはノーヴェ、ウエンディ、チンクの順に蒔風に向かう。

ノーヴェは近接戦闘、ウエンディはボードによる砲撃などの中距離、
チンクは疲労もしているため後方からの爆破を目的とした布陣だ。

まずノーヴェが突っ込む。しかし、即座に流されて後ろに投げ飛ば

された。

身体を右に向け、素通りしていくノーヴェがこっちに向き直す前に首根っこ掴んで投げた。

そして後ろに向かって伸びたその右腕をそこから一気に前に突き出し、ウエンデイに向ける。

とっさにボードでガードするウエンデイだが、二枚重ねて盾にした一枚が碎け、奥のもう一枚が蒔風に掴まれて引っ張られる。

そして寄せられたその体は、振られた左手の裏拳で蒔風の左に飛ばされる。

最後にチンク。

彼女は蒔風の真上の天井にナイフを投げた。掴むほどなのだから、避けられるのは必須。

更に爆発させてもしてはすせば、その衝撃はすべてしまいに向いてしまうだろう。

だからチンクは天井を崩し、蒔風を埋めようと考えた。

だが

バガアッ！！！！

時風が一回転し、右の後ろ回し蹴りでその瓦礫をすべて、一撃のもとに吹き飛ばす。

否、この場合は「掻き消し飛ばされた」と言っただ方がいいだろう。

その驚愕の光景に、三人の身体が硬直する。

そして時風が下を見る。

そこに何かを感じた時風が、次に地面を踏み抜いた。

ゴガアツ！！と足がめり込み、亀裂が入る。

そしてその床をそのまま蹴り上げ、ひっこ抜くとそこからいつかの潜地少女、セインが掘り出されてきた。

そのセインに掌底を当て、雷旺をぶち込んで吹き飛ばす。

バツン！という音がして、意識は刈り取られなかったが、身体が
まともに動かなくなるセイン。

蒔風を中心に、四方に散らされた戦闘機人、ナンバーズ。

彼女たちを一瞥し、蒔風が言った。

「たしかに、動き一つ一つが熟練された者のそれだ。たいしたもん
だよ、それは。だが、それでは届かない領域もある」

そう言いながら蒔風が静かに構える。

前の二人を視界に収め、背後の二人は後ろであるにもかかわらず、
睨み付けられた錯覚を起こした。

「他の誰かの経験値・・・知識、戦闘実績、その他諸々。確かに
お前たちは知っている。その技を、技術を、行い方を知っている。
だがな、それはあまりにも未熟な知り方だ」

その言葉に、ノーヴェエが反論する。

もとより口の悪い彼女だが、今はイライラしてるのか、さらにそれ
が激しくなっている。

「知ってたから、出来んのは当たり前だろ！！それが力だろ！
！！」

確かに、知っていれば行うことも可能だろう。
それを「身に付けた」と言うものもあるだろう。

しかし、それではだめだと蒔風は首を振った。

「違うな。それでは意味がない。いいか・・・力とは、技術と

は、武とは、長年の弛まぬ鍛錬の元に昇華されて、その身に刻まれるもの。知っているだけでは錬度が足りない。識しって初めて、修得する。お前らのそれは、違う。「本物」だったらそんな動きなどしない。識しっている者はああは動かない。本物の動きって言うのはな、型にはまらないもんなんだよ」

時風が構えに力を込める。

その動作だけで周囲の人間が固まった。

「教えてるつか？ 識しるといふ事と、知るといふ事の、圧倒的なその差を、今ここで……！」

その言葉に、ついにノーヴェが動く。

ローラーブレード「ジェットエッジ」を回転させ、地面を滑って時風に向かう。

その拳にあるガンナックルのリボルバーが回転し、渾身の力を溜めこんでいく。

そして蒔風の眼前に迫った瞬間

ダゴンッ！！！！！！！！

地面に叩きつけられた。

目の前に見えるのは天井と覗きこむ蒔風の顔。

蒔風の手はノーヴェの襟と掴んでおり、そこを掴んで地面に叩きつけた……と言っよりは、押し付けたのだ。

一瞬だった。

何をされたのか気付いたのは、叩きつけられた後だった。

そのノーヴェを見、蒔風が見渡してからその場の全員に言った。

「お前ら、知りたくはないか？世界を」

「え？」

「お前らの世界は、今まで任務だの研究室だのしかなかった。お前らは他の世界を知っているのか？知りたくないのか？」

その言葉に、一瞬詰まる一同。

しかしノーヴェも含め、その場の全員が黙ってその言葉を聞いていた。

「命令されるがままに動き、生みの親だからと言ってその言う事を聞く。お前ら、それでいいのか？お前らの正義は、それでいいと言っているのか？こんなこととして、気分がいいのか？ん？」

蒔風の言葉に少しだけ覚えがあるように、四人ともが顔を背ける。

確かに、誰かを傷つけることは好みではないし、実際チンクも指示がなければあそこまでギンガを潰そうとはしなかったろう。

確かに出し抜かれた、と言う点では六課のメンバーには苦渋をのまされた事もあった。

しかし、そこに明らかな殺気などない。

ぶちのめしてやる！！という思いはあっても、さすがにそこまでは思っていない。

だが

「しかし……だからと言って、私たちに選択肢などない！！！戦闘機人となるために創られ、生まれた命。そんな命が、それ以外の生き方など……」

そう、彼女たちには選択肢などなかった。

あそこから逃げ出してどうするのか。彼女たちには戸籍などない。

だから働いて暮らす事も出来ない。物心ついたときにはすでに改造されており、外に居場所などない。

あの二人は運がよかったのだ。

自分たちは知っている。

今まで廃棄されてきた者達のデータを見てきたのだ。

幸いにも、自分たちのラボでそのような者はいなかった。しかし、自分がいつ、そうなってしまいかかわからない。

だから彼女たちは努めて優秀な人材となった。

居場所をあそこしかない。

だから、その人の言う事を聞かなければ、自分たちは生きていけない。

もとよりそのために生み出された命なのだから。

「他に選択肢などない……我々には、あたらな選択肢など現れなどしないのだ！ 私たちは、戦と追う機人として生きていくしかない！ それを……」

「ばっかでねエの？」

だがチンクの言葉を、時風が遮る。
最高に馬鹿にした目をして、完全に呆れた口調で。

「だからさ、お前らはその生き方に満足してんの？お前らの正義は、納得してんの？まずそこだよ。そこが聞きたいんだよ。どうだ？はい、その潜地ッ子！！！！」

「え？あ……そ、そりゃ、これが犯罪だつて言うのはわかってるし、私は誰かと戦うのはごめんかな……って……」

「よしはい、次！！足元の熱血っ子！！」

「あたしはわかんねえよ。ただ、戦うとスカッとするのはあるな」

「罪の意識は？これがいけないことだっけわかってるか？」

「わかってっけけど……他にどーすりゃいいんだよ？今にもあんたを殴り飛ばしたいんだぜ？ここでなきゃできねえよ、そんなの」

「出来る！！ジムにでも通え！！知らないか？」

「じむ？……なんだそれ？あと、あたしはノーヴェだ！！！」

だがその言葉を無視したのが、時風が今度はウエンディを向く。

「そっちのお気楽っぽい子！！！！どうだ??？」

「うえ！？えつと……まああたしは言われた事をしてるだけ
ツスからね……」

「自分の意志で決める！！お前はそのまま犯罪者として一生名を残すつもりか？誰にも聞くな、自分で決める！！！」

その言葉に、ウエンディが考え始め、うえ、という顔をして口を開いた。

「あーでもそう言われてみると……後の時代の人間に」

「こいつサイテー」とか言われんのは嫌ツスねー」

「だったら今からでも引き返せ！！可能性は無限大だ！！！！次！！！！
眼帯っ子！！！！」

「ち、チンクだ！……それは……それは……確かに気が滅入る
事もある。しかし、いわばドクターは私たちの親なんだ！！間違っ
ていても、従うしか……」

そんないまだにモゴモゴと言っているチンクに、蒔風が叫ぶ。

「お前の行いに少しでも疑問があるんなら、それはもはや正義じゃ
ねえ！！！！お前の正義は、なんつってんだ！！！！どうなんだ！！？え
え！！？」

「選択肢がなかっただと？じゃあお前、俺たちだったら選択肢があ
るみたいじゃねえか」

「それは……そうだろう！！私たちのような人間に、最初から・

「・・・」

自分たちはお前たちとは違う。

そう言うチンクに、時風がなおも言った。

「は？お前何言っただ？選択肢なんて、最初からどこにもねー
ーよ。お前はあれですか？ゲームの主人公ですか？ピピツと選
んでそれで終了な人生生きてんですかー？」

「な・・・」

「まあ？確かにそういう事もなかったとは一概に言えん。けどな、
目の前に選択肢の欄なんざ、現れるわけねえだろ？ここは現実だぞ
？浮かんだ気がしているだけで、そんなもんはありはしない」

「よく「選択肢は自分で作る」とか何とか言ってるが、それは違う。
選択肢なんて最初からない。ないんだよ、そんなもの。その場で人
がとる行動パターンなんか、数えきれないほど、それこと無限大に
ある。それから選べって？無理だろ。だから選択肢なんてないんだ

「よ」

「しかし、だからこそ人生はいつだってアドベンチャー!!!それが生きていくってことだろ？選んで生きていくんじゃない。やった結果、選んだ気になっただけ。でもまあ、それでもお前が選択したいと言うならば………」

そこまで言つて、蒔風が両手を広げて大きく叫んだ。

「さあ!!!選ばせてやる!!!ここに俺が寛大にも選択肢を用意してやった!!!」

蒔風が手を出す。

右手を出して「そくはく選択肢なき不確かな未来」を取るかと聞き
左手を出して「選択肢ばかりの先を決められた未来」を取るかと聞く

「さ、選べ。チンク、セイソ、ノーヴェ、ウエンデイ。お前らの人生で、最初で最後の選択肢だ。可能性を取るか、安定を取るか、自分の意志で。それが、生きる強さってやつだ。お前たちは何か一つでも自分で何かを決めてやるってことがなかった。さあ、此处で決めろ。そしてそれから……」

時風の言葉。

その言葉の先は発せられなかったが、十分に意味は理解できた。

数秒の沈黙

そしてその言葉に、まず動いたのは

「あたしは……決められたレールなんか走れない暴走列車だからな。つまんねえ人生なんざ、まっぴらごめんだ」

ノーヴェだった。

足元から腕を伸ばし、時風の手を取って立ち上がる。

その姿をみて、ウエンディ、セインもその手を取る。

「あゝあたしは面白そうなところにつくッス。それにノーヴェほつ
といたら大変そうッスから」

「私は潜ってばかりだったからねえ。確かに、広い世界には興味
があるなあ」

その手ににやりと笑って頷く時風。
そして、チンクの方を見た。

「で？どうする？チンクさんよ。お前はこれだけの強さを持てるか
い？」

だがチンクはいまだに頭を抱えて振っている。

「そっちに行つて、どうするのだ・・・わたしたちは・・・戦と・・・」

「生まれた理由に意味などない。価値があるのは、生きる理由だ」

「ッ!!!」

「生まれた時から人間は犯罪者だとか善人だとかつて決まるのか？違つたら？生まれた後、生きてる間にそう言うのは決まる。お前がどう生きるかは、お前の自由だ。戦闘機人として、兵器として生きるか。それともそれを受け止めた上で、これからの世界を生きていくか・・・どうする？今しか選択できんぞ？」

時風のその言葉に、顔を俯かせ、それからチンクが顔を上げた。

「貴方は・・・卑怯だ・・・選択肢などないと言っておきながら、貴方は今しかないと、一つしかない選択肢を私に迫る」

「ふふん。よく考えてみるんだな。そう、実は選択肢などないっていうのは大ウソだ。実はある。だが、人生の選択肢はあまりにも多すぎてとてもじゃないが選ぶなんてもんじゃない。だから、「ないんだ」

「で・・・その中からあなたが二つを選んでくれたと、そういうわけですか」

「そつだ。さ、どつする？」

そついう時風に、チンクが近づく。

近づいていき、距離が狭まり

そして

蒔風の手をそっと下ろした。

「私は選ばない。私はこれから自分の意志で行く。私の意志で、そちらに行こう」

「舜さん！！！！ギン姉は！！！！？？ツ！！戦闘機人！！！！！」

そこにスバルがやってきた。

ローラーブーツの彼女は、この状況なら飛べないティアナを担いだのはよりも速い。

だから先についたのだろう。

しかしそこにいたのは笑いながら回る時風と、啞然とした戦闘機人四人なのだから、それは警戒もする。

思わず構えるスバルだが、そこに時風が来て軽くチョップする。

「ここら待って待て。それを言ったらお前さんもだろ？彼女たちに戦闘の意志はない。彼女たちは今、明日へと向かって歩き出したの

髪を押さえた。

そして残されて棒立ち状態の五人。

と、スバルがクリン、とナンバーズの方を見、拳を構えた。

「逃げる？」

「『逃げん逃げん』」

そんなこんなであとからなのはとティアナが到着。

状況がよくわかっていなかったが、チンクの説明でなんとか納得し、彼女たちを連行した。

ひとまず、こちらの戦闘は終わった。

あまりにも少なすぎる犠牲のみで

「ところで……あの人はいつもあんな感じなのか？」

「あー！ークルクル回って笑ったりしてたツスね」

「それは……舜さんと通常運転だともうけど……」

「そうなのか……変人なんだな」

「にははは……本人が気いたら「アホって言って!!」って言うだろうね……」

なのはStrikers（選択肢の有無）（後書き）

と、言うわけで結局更新!!!

明日は無理だーーーー!!!

アリス「これでまたストックなくなりましたもんね」

マジで勘弁してくれ。

コミケとかマジ疲れすぎる・・・楽しかったけど。

ア「て言うか今日が大みそかって気付いてないですよね？」

だって深夜から動くんだぜ？

正直、日付とかわかんなくなったもん。

だから大晦日って感じがしない。

ア「日付感覚滅茶苦茶ですな」

ええ

と、言うわけでみなさま、来年もよろしくお願いします!!!!!!

おそらく一月中旬までこの不定期更新は続くと思いますが、しばしご容赦くださいませ。

ア「次回、機動六課崩壊？」

ではまた次回

ギン姉を……返せよオオオオオオオオオオオオ!!!!!!

なのはStrikers　↳奪われる未来↳

炎のように赤く染まる空。

その空に、やっと時風が天井を破って地上まで出てこれた。

現在、地上本部は獅子天麟の結界で守られているとはいえ、かなり危ない状況であることは変わりない。また、構造も非常に脆くなっている。

だから

「やっと出れた！…くっそ、時間食った」

空気の壁をいきなり破って、時風が地上本部上空から一直線に隊舎の方へと向かう。

その瞬間

ドオン!!!!!!!!!!

動き始めて一秒と経たないうちに、時風に砲撃が命中する。

放ったのはビルの屋上にいるディエチ。

直接対峙した自分とトーレ、クアットロの経験値の重ね掛け、更には力による一種の揺らぎから、時風の向かう先を想定し、砲撃を放ったのだ。

対して時風は移動中、しかもこれからという瞬間だった。

爆煙が大きく上がり、その姿が撃ち消える。

「目標には命中。クアットロ、チンク達とは連絡は着かないのか？」

ビルの上でデイエチがクアットロに確認を取る。

彼女もこれだけ大きな戦いだと、少しばかりは姉妹の事が心配になるのだろう。

やられるとは思っていない。

しかし、こつも連絡がつかないと不安にもなるものだ。

だが、通信を取った先から聞こえる声には、そんなこといちいち知らないと言わんばかりにどーでもいいような声が聞こえてきた。

「さあ？ま、やるべきことはもう終わっちゃってるし？ぶっちゃけもういらないうかなんとというか……」

「クアットロ」

「あゝらあらあら。ごめんなさいね。そうよね、心配ねえ？これが終わったあとまだまだやるべき事があるのにい」

クアットロのあまりのいいようにディエチがたしなめる様に名前を呼び、クアットロがわかりましたよ、といった風な口調で弁解する。

「とりあえず私はこのまま翼人の動きを止める。クアットロは・・・」

チンク達の方を頼む、というディエチの言葉は続かなかつた。

彼女の目が、ある二つのものを捉えたからだ。

カカン！！！！

彼女の足元から一メートルほど離れた左右に、一本ずつ剣が飛んで

きて刺さっていた。

なんだ？と疑問に思った瞬間、それが一気に人型に変わり、彼女の巨砲、イノームスカノンと彼女自身を抑えつけて拘束した。

「武器、獲ったどー！ー！ー！！！！」

「女性相手に私ですか……まあ、相手には女性しかないみたいですがね」

武器を抱きかかえているのは白虎、ディエチの手を取って捻っているのは朱雀だ。

ディエチがその二人を見て、まさかと上空の爆煙を見る。しかし、朱雀がそのディエチに遅いですよ、と宣告した。

「舜はもうすでにあそこにはいません。私たちを投げた時にはもうすでに飛んで行ってしまいました」

「ツツ……私を……どうするつもりだ……」

「……どうしたいですか？」

「な……」

「チンクって子たちはなのはちと一緒だよ。こう言つのはなんだけど、だれも大きな怪我は負ってない」

それを聞いてディエチが目を見開く。

彼女の元に向かったのはノーヴェ達三人。

つまりは戦闘機人四人がかりで全員がつかまったというわけなのだから、無理もない。

一体何があったのか。

それを聞こうとして、それよりも早く朱雀が言った。

「ま、詳しい事はチンクさんに訊いてください。彼女は納得して投降してくれましたから」

それを聞いてこれ以上驚きようのないようにディエチが口を開けた。負けて連行なら話はわかる。

「時間食った・・・はやくはやく・・・あん？」

時風が上空を飛んで言って六課に向かう途中、前方で何度か火花が散っているのを確認する。

そして、それは近づくにつれて三つの人影となり、更に近づいてきたところでその内の一つが時風に向かってきた。

「翼人！！！！ここから先は「邪魔じゃあボケえ！！！！！！」ブグアッ！！！！！！？」

だがそれが何かを言って目の前に来た瞬間、時風の拳で弾き飛ばされていった。

突っ込んできたのはトーレ。
ちなみに他の二人は足止めされているフェイトともう一人の戦闘機
人、セツテだ。

蒔風が残っていた二人を見、追いついて行きながらフェイトに通信
を入れた。

「フェイト!!今二人の機人とやってんのか!？」

『舜!!あつちは!?!』

「終わっている!!エリキヤロはどうした!!」

『二人は・・・っ、この!!先に!!』

「足止めされてんのか・・・その二人は任せてもいいか!?俺
は行く!!」

『わかった!!任せて!!!!』

そう言った時にはすでにフェイトは後方にいたのだが、時風は一応連絡を入れた。

本当なら青龍か玄武を置いていきたいところなのだが、戦闘機人があと何体か、そしてどこから出てくるかわからない以上、もう残り二体でもギリギリなのだ。

こんな事ならチンクに割り当て聞いとけばよかったな、と今更後悔する時風。

そう思いながら飛ぶ。

そして、機動六課の隊舎が見えてきた。

隊舎から出てきたのは小さな少女と、いつか見た蟲人間。更には戦闘機人二体だ。

「舜君、来てくれたの!？」

「いや……遅かったみてえだ」

ヴィヴィオを左腕で抱え、燃え上がる隊舎を見る時風。
それを見る表情はとて悔しそうに歪んでいた。

「俺も……守りきれんかった。危うくこの子を……」

「言うな。オレだって同じだよ。だが、まだ負けてない。まだ、いけるか？ザフィーラ」

「たとえこの身が崩れようとも、俺は盾の守護獣だ。こんなところで、倒れてはおれん!!!」

ザフィーラが立ち上がり、なおも戦おうとする。
しかし、その脚が震えているのは確かだし、もう戦う事は実質無理だろう。

「ああ、頼む」

しかしそれでも蒔風は休んでるとは言わなかった。

護る事、それが彼の誇り。

そして今、ここに守るべきものが戻ってきたのだ。

そこで彼に休んでるなんてことは、蒔風には言えるはずもなかった。

「舜さん!!!こっちいつ来たんですか!!!??」

と、そこにエリオとキャロも合流する。

それで蒔風が今だよ、と答えてにやりと笑いながら、上空の敵に向かって叫んだ。

「どうだ!?まだやるか?レリックは取られっぱなしだが、ヴィヴィイオは渡さねえ。かかってくるってのかい?」

そう叫ぶ時風を、無感情な瞳で見つめる三人。
いや、あまりにも無感情すぎる。

「おそらく、あまり人間としての教育を受けてないんだわ・・・」
「兵器として生まれ、兵器として育てられた者たちだ。動きが洗練
されていたぞ。油断するな」

シヤマルとザフィーラの忠告に、時風がコクンとうなづいてキャロ
に抱えたヴィヴィオを預けようとした。

4366

その瞬間

コクン！……！！

その一瞬の隙を突いて、ガリユーが蒔風たちの中心に現れ、蒔風の側頭部に向かって背後からハイキックを叩き込んでいた。

が、それは命中せず、蒔風の残った右腕でガードされたいた。しかし、ここでヴィヴィオを誰かに託せなくなってしまう。

さらにガリユーの主、ルーテシアの転送魔法で目の前に機人の一人、デイドが双剣「ツインブレイズ」を持って地面から現れ、独楽のように回転してその場の全員を散らす。バックステップでそれをかわす蒔風の頬元にうっすらと切れ込みが入った。

4367

蒔風はさっきまで六課隊舎に背を向けて正面上空の機人たちに話していた。

そこに中心からの攻撃をバックステップで避けたのだから、当然、残った上空の機人に背を向けるわけで……

「IS発動、レイストーム」

そしてそこを攻撃された。
ルーテシアの横に残った短髪の戦闘機人、オットーが右掌を時風に向け、そこから幾本にも拡散された光線が打ち出される。

それはシャマルのバリアを打ち破った物だけあってかなり強力だ。
しかも、背後からはガリユーとディードの二人が迫り、左腕はヴィ
ヴィオを抱えて動かせない。

そんな状況。

しかし、時風の目にはまだ余裕があった。

「混暗陣！……！」

その言葉と共に、ズンッ！……と一気にルーテシアとオットーの身
体が地面に落ちる。

ベシヤリと地面にへばりつく彼らを見てから、時風が身体を回転さ
せてガリユーの拳とディードの双剣をほんのわずかな間を縫って避
けて後ろに回る。

そしてその背中を蹴り出し、四人をまとめようとする。

デイドはそれで攻撃の勢いもあって人の中に入ってしまいがしかり、ガリユーは耐え、蒔風の片足を掴み上空へと投げ放った。

蒔風はそのまま青龍と玄武を抜いて機人の方へと投げ、彼らを捕縛しようとしていた。

結果としてうまく投げられはしたのだが、ガリユーのその投げによって視界が乱れ、上空で体勢を整えるころには陣の中からルーシアはいなくなっていた。

「主だけでも助けたか・・・あんな小さな子に何させるつもりだ、スカリエツティ・・・いや、それとも・・・利害関係があるのか？」

そんなことをつぶやきながら蒔風が考える。

「舜さーーーーん!!!大丈夫ですかーーーー!!!???」

と、そこで下の方からエリオが手を振って蒔風に呼び掛ける。

どうやら混闇で動きが封じられていた上に、青龍と玄武の助けもあつてか、オットーとデイドを捕縛することに成功したようだ。

「これでなんとか七た・・・七人はこっち側、か・・・エリオ！！キャロ！！フェイトの加勢に行くぞ！！それからもう一度地上本部だ！！！」

「はい！！！！！！」

そう言つて蒔風がヴィヴィオをシャマルに預けるために、ゆっくりと降りて地面に向かう。

「う・・・ん・・・？」

そこでヴィヴィオが目を覚めたのか、薄く眼を開けて蒔風の顔を見る。

「お、とーさん？」

「誰が父さんじゃ。おにーさんだって言ってるーが」

「あつっ、いたいよーー」

時風がヴィヴィオに軽くデコピンし、まあ良かったとー安心する。

しかし……

そこで時風に通信が入った。

『主！！ち、地上本部は……もう……があああああ
ああああツツ！！！！！』

「獅子！？何が起こった！！おい！！！！」

突如として入った獅子からの通信。
しかし、その後は爆音と叫び声しか聞こえなくなってしまって、何
も聞こえない。

「おい！！何があった！！獅子、麒麟、天馬ア！！！！」

蒔風が空中で降りるのをやめて、大声で彼らに叫びかける。

すると、切れ切れの声で麒麟からの言葉が聞こえてきた。

『主……いかん………結界が………』

「なにがあつた！？結界がどうした！！」

『あやつらが………やってきて………結界どころではなく………
………（キユロオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！）又ガッ、
ぐオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！』

ドオン！！！！！！

通信の向こうから爆音が聞こえる。

そして蒔風の目に残ったのは、聞き覚えのある鳥の鳴き声だった。

「まさか……まさかまさか……介入が早すぎる!! 計算はまだ……」

「舜さん!!!! 後ろ————!!!!!!!!!!」

蒔風が焦り出した瞬間、キャロの叫びが蒔風の身体を動かした。

その場から動いた、その瞬間、今まで蒔風がいたその場を、三つ首を持った地獄の番犬のキバが空を切って噛みついていた。すなわち、そこに居たのはケルベロス。

その存在が現す事はただ一つ。

「「奴」が……来やがった!!!」

「舜!!!!!!」

ケルベロスを過去に見た事のあるザフィーラが時風の名を呼ぶ。
だが、時風は「大丈夫だから地上本部の援護に向かえ」という言葉
を返す。

「おとーさん、こわいよお……」

「おとーさんじゃない、おにーさんだ。大丈夫だ。この腕にしっかり
しがみついている。ぜってー離さないから」

「う、うん……」

そうしているとヴィヴィオが目には涙を溜めて時風に訴えてくる。
そのヴィヴィオの頭をそつと撫で、時風がグツ、と左腕を締める。

奪われてなるものかと

これ以上、もはやこの世界での敗北をしてたまるものかと。

だが

世界はいつだって残酷だった。

時風の背後から、一言だけ聞こえてきた。
その直後、左肩口に時風が熱い痛みを感じた。

そして

ヴィヴィオが時風から離れて行ってしまった。

「子どもを使うのは趣味じゃないんだが……まあ、これしかないなら仕方ない。ガキはいただく」

そう言って地面に倒れる時風を一瞥する「奴」

その言葉に反応してか、時風が左の肩口を押さえながら立ち上がった。

「そいつを……返せ……」

「舜さん!!!う、腕が!!!!!!」

「血も……!!い、急いで手当を……!!」

立ち上がった時風はその場の全員が駆けよってその有様に閉口し、戦慄した。

特にエリオとキャロはそうだ。

いつだって強かった彼が、たった一人の敵に対して、この重傷。

目がうつろいで、足はふらつき、片腕がなく、しかも切り口からは血が吹き出ている。

そんな彼の姿を、一体誰が想像しただろうか？

「ヴィヴィオを……返せ……」

「いかなあ、蒔風。今お前を殺しときたいのは山々なんだが、もう少しでテストタロツサハラオウンが来てしまう。あれの相手もするとなると非常にめんどろだ。だから……」

そう言ってふわりと消えて行く「奴」

空間が歪み、その中に去って行くこうとする。

「ここは引くさ。計算も終わってないからな」

その言葉に、時風の目がガツ！と開かれる。

「返せて・・・行かせねえって・・・」

ブシッ！！！！！

「言ってるんだろ！！！！」

そこで時風が飛び出した。

左の肩口を押さえていた右手を放し、拳を握って「奴」を殴り飛ばそうと踏みこんで跳躍する。

瞬間、左肩口から一気に血が噴き出し、足元を染め上げるが、そんな事で蒔風は止まらない。

自らの死などでは、蒔風の足を止めることなどできない。

だがやはり限界はある。

「奴」は放息をひとつつき、めんどくさそうに蒔風を蹴り飛ばして、その反動で一気に消えて行ってしまった。

だが蒔風はそれも見えていないのか、立ち上がって血を噴き出しながらヨロヨロと周囲を見渡して、どこともなく歩きだそうとした。

「行かせねえぞ！！返せつてんだ・・・ガキを返せ！！！！そいつを巻きこまないでやってくれ！！もう勘弁してやれよ！！！！・・・クソ・・・今行くぞ・・・待っている・・・おにーさんが今、助けに・・・」

そこまで言っついに時風が倒れ込んだ。

ビシャン、という音がして、足元にどれだけの血があるのかという事を証明していた。

「舜君！！！無茶はしないで！！！」

そこでやっとシャマルが寄って行って止血の魔法をかけて結界を張る。

さらに傷口を見て、数回うなづいてザフィーラに指示を出す。

「切り口が綺麗・・・今ならまだ間に合うわ。ザフィーラ！！腕を！！それから、殺菌の結界をお願い！！！！」

「了解した！！！！」

「シャマル先生！！これ、舜さんの・・・」

そこでエリオとキャロが今にも大泣きしてしまいそうな顔をしながら、蒔風の腕を持ってきた。

その腕についている衣類には、ハッキリと解るほどに、ヴィヴィオが握っていた跡がついていたままだった。

それを見て、シャマルが頷いて彼らに隊舎から避難した皆の誘導を頼んだ。

「舜君！！あなた、死ぬ気！？なんでこんな状態で向かって行ったの！？無謀もいい所よ！！！」

エリオたちがいなくなると、シャマルが蒔風に怒鳴り声を上げた。しかし蒔風の顔は痛みに耐えるばかりで、死ぬかもしれない、などという心配は一切していなかった。

否、そもそも、死ぬは最初からどうでもいいと言った顔をしているのだ。

「俺にその説教は成り立たないぞ、シャマル。と言うか、早く繋げる。すぐに追う。止血と接合がすんだら……」

「バカを言わないで！！このままみすみす死なせるなんて、私のプライドが許しません！！！」

「バカを言ってるのはどっちだシャマル！！こちとらはなから「死ぬ」なんてことはどうだっていいんだよ！！非生者よか、これからの未来たるガキを助けに行くのが当然だろうが！！俺は行くぞ……早くしろ！！！」

「蒔風！！貴様が死ねば、主はやてをはじめ、どれだけの人間が悲しむと思っているのだ！！ヴィヴィオは取りかえす。そのためには、貴様の力も必要なのだ！！！」

結界内で倒れる蒔風と、クラールヴィントでなんとか応急的に腕を繋ぐシャマル、更に結界で内部を浄化しているザフィーラが怒声を上げて口論する。

それを見ていたのは、青龍と玄武にとらわれていたオートーとデイドだ。

自らの命を命と見ず、ただひたすらに立ち上がろうとし、その瞬間

だけ「人を救うという一つのシステム」となっていた時風に、二人は驚き、そして戦慄していた。

「あの人は……人間ではないのですか……？」

「私たちも……道具として教育させられました……しかし……あれが私たちの行く末なのですか……？」

誰に向けたものでもないその質問。

彼女たち二人は極力人間味を持たないように教育された戦闘機人だ。つまりは人間兵器として、道具として教育されてきた。

故に最初からそういう状況だったため、そうなっていく事に一切の疑問を抱くことなどなかったし、それを教える者もいなかった。

しかし、自分たちの目の前で命が……否、その肉体が動きを

止めるまで動き続けようとしていた、機械のようにひたすら救おうとしている男。

それを見ていて、急にそうなる事が恐ろしくなってきたのだ。

そこに誰の意志もなく、誰に止められる事もなく、ただ肉体に限界が来て、醜く崩れ落ちて身体が身体と呼べなくなって始めて動きを止めるような、そんな生き方を、今一瞬でも行っている男を見て、自分の行く末に恐れ慄いたのだ。

あんな人生は嫌だ。

何かをやって、それが誰かに認められ、その中で死んで朽ちるならまだいい。

しかし死んで誰にも見ても貰えず、どことも知らない土地で、ただ

むざむざと朽ちて行く、そんな行く末を恐れ始めた。

道具として死ぬ。

確かに、それは貫き通せば立派な死に様かもしれない。

だが、貫いた先にそれがあるかもわからず、「自分」の無のまま終わるという事が、どれだけ恐ろしいかを、彼女らは今、知ったのだ。

「……主は、死と言うものを恐れない」

「乗り越えた結果ではなく、根本的に持っておらんのだ」

「死を……」

「恐れない……?」

「さよう。じゃからこそ、彼は「生きる」と言う事に執着せんだ」

「……いふなれば……嫌いな食べ物のようなモノ……
食べるのは嫌だけど……別に食べることはできる……」

「つまりはいつ死んでもいいのじゃよ、あやつ胸の中ではない。死にたいわけではないが、いざというときは軽く命を投げ捨てる」

「……覚悟も何も……持たないままに……」

「そんな人間は生きてなどおらん。死があるからこそ人間は生きることに必死なのじゃからの。ゴール泣きマラソンなぞ、ただ日常的に歩いてるにすぎん」

「……だからこそ……主はすでに……死人なのです……」

そう、だからこそ

彼は生きると言う事に素晴らしさや美しさ、輝きを見出し、それを
守ろうとしているのだ。

そこまで離れてしまったからこそ、彼は人というのが大好きなのだ。

しかし、なんとその基盤の無残で、残酷なものか。

誰よりも「生」を愛する彼は、誰よりも「生きて」などいないのだ。

「僕達は……」

「お主たちはまだ戻れる。チンク殿をはじめとする数名のナンバー

ズも、こちら側に投降しとる」

「……私たちが……人として……」

「……生きていきます。必ず」

そう言って青龍が強引に締めくくる。

そしてその視線の先には、未だに騒いでいる時風たちがいた。

「仮止めでもいい……俺は……行くぞ……」

「待ちなさい!!--」

「うるせえ!!今さらオレの命に……」

ガゴッ!!--!

叫んで結界から出て行くこうとする時風に、強烈な手刀が撃ち込まれる。
人型となったザフィーラが、後頭部を打たれて崩れ落ちた時風をそのまま抱え、臨時の医務室にまで運んでいく。

「このまま連れていけ。こっちはこっちでさらに客のようだからな」

ザフィーラが上空を見上げ、それにつられて皆がそちらを見る。

その上空の先には無数のガジェット編隊があった。

それを迎撃しに行くというザフィーラに、エリオとキャロもついていくと言い、その迎撃に当たる。

一方青龍達は実際、こうしてここに顕現している事すらやっとの状態で。

主である時風があんな状況で、いまだに存在していられる方がスゴイのだ。

ザフィーラの当身で意識を失っていく時風が最後にみたのは、巨大な足で立つ竜王の姿だった。

そして、崩れ落ちた地上本部では

ナンバーズをとりあえず地下会議室から出てきたはやてとシグナム

が見、ティアナ、スバル、なのはは倒れた獅子天麟の元へと向かって行った。

「大丈夫ですか!？」

「だめ……ですなあ……」

「この体たらく……なさけない……」

「グッ……があ……」

獅子天麟の三体はよく善戦していた。

突如として現れた迦桜羅によって、周囲が焼かれ、結界どころではなくなったのだ。

そこで対処すべく三体が獣神体となってガジェットを瞬時に一掃、迦桜羅に向かった。

しかしその瞬間、二足歩行となったサラマンドラがその炎の太刀で地上本部の塔を斜めに切断、一気に破壊したのだ。

さらには地面にそれを突き立て、地下のある一室を破壊した。その「人」が一人も存在しない、最高評議会室という札のあった部屋は、炎と瓦礫によって完璧に破壊されて一切として動くものは無くなった。

そこからはもはや負け戦だった。

被害は大きく、死者が出なかったのが奇跡なくらいだ。

しかし、その代償は大きかった。

三体の再起不能。
地上本部システムの瓦解。

スターズの三人が駆け付けた時、三体はすでに人型にまでなっており、担ごうとしたら、剣の姿に戻ってしまった。しかたがないのでそれを持って救護のテントまで戻る三人。

更にそこに上空で敵方の騎士と戦闘を行っていたヴィータとリインも運ばれてくる。

何とか地上本部への進攻は阻止したのだが、そのあまりの戦闘力に撃墜されてしまったのだ。

それを見て、なのはが両手の指を組んで、祈るようにつぶやいた。

「助けて……舜君……」

しかし、それに応える青年はいない。

それどころか、その手を取る腕を一本、失ってすらいたのだから。

ヴィヴィオは奪われ、時風が重傷。
結果的に地上本部は瓦解、崩壊し、六課隊舎も使い物にならない。

大きな敗北

大きな歪み

物語は変わっていく。

下にと、大きく振り幅を変えながら。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers 〈奪われる未来〉（後書き）

やっと更新できました！！

みなさま、お待たせしましたよ！！！！

アリス「お疲れ様です。でも不定期更新はまだ期間内なんですよね？」

そうですね。

すぐにレポート提出もありますし、やはりそちらをおろそかにはできないので……

ア「と、言うわけで不定期更新はまだまだ続きそうです。そういえば」

ん？

ア「時風通信機持ってましたね？どうしたんですか？」

シャツハから借りました

ア「後付けですね。」

うるっせえ

ア「しかしこれで敵型に残っているのはウーノ、ドゥーエ、トール、クアットロ、セッテの五人のみ」

見事に構成組、拘留組。

ただどこかでふるいにかけてたかったです。

時風の腕を落としたかったんです

ア「酷いですね」

ニヤリ

ア「次回、宣戦布告」

ではまた次回

私達の居場所を…壊さないでえエッツ！

なのはStrikers　↳エース×翼人　↳

地上本部壊滅、そして六課隊舎崩壊から翌日。

蒔風が、目を覚ますと、見慣れぬ天井が目映った。

ポーンと目をして、周囲を見渡す。
どうやら病院のようだ。

ベッドに横になっており、左腕は肩口ががちりと固められ、首から三角巾で吊るされている。
腕には点滴が繋がり、一滴一滴、少しずつ落ちていつている。

指はびくびくと動かせるので、どうやら腕は一応繋がったようだ。

そして昨日の事を思い出す。

聖王病院

ティアナ、フェイト、なのはの三人は、負傷した六課のメンバーの見舞いで訪れている。
ティアナはスバルの、フェイトはシャーリーたちの、なのはは蒔風の様子を見に来た。

三人は終始無言だった。

無理もない。

機動六課は敗北した。

ここまで決定的な敗北は、初めてだった。

そうして無言のまま、三人が各々の部屋に入っていく。

なのはも蒔風の部屋をノックして、その扉を開けようとする。

なのは本来、来るつもりはなかった。

しかし、蒔風の腕が落ち、彼の目の前からヴィヴィオが奪われたと聞いて、いてもたってもいられなくなったのだ。

だから現場検証をヴィータに無理を言っただわってもらい、やってきた。

しかし

ノックした扉の先から、人の気配がしない。

そして扉を開けた先には、空のベッドと、床に落ちた点滴の針だけだった。

「舜くん？・・・舜君！？どこに・・・」

会いたかった人がいなかった。

なのはが困惑しはじめた。

あの人ならきつと励ましの言葉で奮い立たせてくれるはず。そうして、一緒に戦ってくれるはず。

ヴィヴィオを奪われ、憔悴したなのはは、何か支えを求めていた。
そして、真っ先に浮かび上がったのが彼だったのだ。

しかし、その彼がない。

どこに行ったのかと、フェイトやティアナ、病院関係者を呼ぶこと
も忘れ、部屋から飛び出して探し出す。

どうしようもなく、会いたい。

その想いを抱えて、なのはは走った。

そうして、見つけた。

時間はさほど、かからなかった。

蒔風は、よろよると玄関に向かって中庭を歩いていたのでろう。

なのははその姿に安心したのか、寄って行こうと歩いていく。その瞬間、蒔風が地面にガクリと倒れ伏して倒れてしまった。

「舜君！！」

なのはが驚いて蒔風に走り寄り、仰向けにして身体を起こす。

蒔風は苦しそうに呻き、顔は白い。

しかしそれでも、前に進むうとしていいのか、右腕が虚空を掻いていく。

「なのは……ちようどいい……俺を……連れていけ……あの……う……」

あの時、自分を頼りにして、すがり、必死になって掴んでいた、幼い少女の手の力がたとえ一度千切れたとしても、その感覚はこの腕に宿っている。

その時風に、なのはも心苦しそうな顔をしてそんなことないよ、と首を振る。

だが、時風はそれでは納得できなかった。

「俺は……約束したんだよ……助けを呼んだら、すぐに駆けつけてやるって……」

「それは……」

「俺は!!!……もう負けるわけにはいかないんだよ……この世界にも、理不尽にも!!!守れたんだ、もう少しだったんだ!!!なのに……クソ……クソ……クソ……!!!」

頭を叩きながら慟哭する時風。

涙などは流さなかったが、彼は大きく嘆き叫んでいた。

「舜君……大丈夫、だよ」

「・・・なのは・・・お前は・・・いいのか？俺は・・・お前の大事なヴィヴィオを・・・」

「舜君は・・・世界最強なんでしょう？だったら、また助ければいい。私も、フェイトちゃんも、はやてちゃんもみんないる！！だから・・・だから！！」

「なのは・・・」

その言葉を聞いて、時風が目を閉じる。

そうして何を思ったのか、スウッ、と目を開けて、にこりと笑った。

「そうだよな・・・何を言ってんだかな、俺は・・・助けるぞ、なのは。なにをしてもだ。手伝って・・・くれるかな？」

「もちろんだよ！！！！」

なのはが気持ちを改め、それに応える。

実際、なのはも時風も気はまだ晴れきってなどいない。しかし、少しだけ、本当に少しだけ、立ち上がった。

「絶対に助ける。そのために惜しむモノなんざねえな」

「そうだね。でも、今回みたいに命を捨てるみたいなまねは絶対にダメだよ？」

「ん？何言ってるんだ、俺に死ぬなんてことは止まる理由にならない」

「え？」

「もう何度も説明するのは面倒だから言わんがな、死ぬのがなに？
って感じなのよ、俺」

「そんな……」

「言つとくが俺の優先事項項目のトップ十五にも入ってねえぞ？俺の命なんてもんは。そんなこと、今更怖くもないし、そのような恐怖最初から持ち合わせていないし」

「舜君！！それはあんまりだよ！！舜君が死んだら……」

「はぁ……めんど。青龍」

「は」

と、そこで時風が青龍を出し、部屋を出て行くとする。
それを止めてしっかりと話を聞こうとするのはだが、時風は構わ
んという感じで出て行ってしまった。

そうして部屋に残されるのは。
青龍と二人だけになってしまう。

「青龍さん……舜君って……昔からそんなこと言ってたけ
ど……本当に死ぬのが怖くないんですか？ いったい……ど
ういうことなんですか？」

ポツリと、なのはが青龍に聞く。

その質問に対する青龍の言葉は、YESだった。

そこから、なのはは一部始終を聞いた。

青龍がなのはに確認する。

そうしてなのはが一旦深呼吸した。

なのはは考えた。

私にとって……舜君は憧れの人だった。

ずっとずっと、憧れてきた。

また会えた時は凄くうれしかった。その時は、成長しても立った姿を見てもらいたかった。

ティアナとの模擬戦の時、見捨てられたみたいですごく悲しかった。

ヴィヴィオと一緒に笑っている彼は凄く見ていて気持ちよかった。

そして今、自分は彼を求めてここにやってきたのではないか。

そう思うと、とたんに彼のそばに居たくなってきた。

顔を赤らめながら、なのはがそつと、目を開ける。

「私は……舜君の事が大事になってる。あの人に守られたいし、守ってあげたいの。あの人のおそばで、一緒に」

高町なのはは自覚した。

ああ、自分はこんなにもあの人に……

Bannon!!!

「ギンちゃん元気かい!?」

「うつひゃあ!?」

「きゃあ!?」

「ひいい!?」

蒔風が勢いよく扉を開けて、ギンガの部屋に入って行く。
そこにはティアナもいて、いきなりの来訪者にびっくりしていた。

スバルなんかはガタガタと震えている。

「しゅ、舜さん……」

「ようつす。お前らは大丈夫か?」

蒔風がギンガに身体の調子を聞く。
どうやらチンクとの戦闘でかなり負傷はしたものの、別段重傷ではなかったようだ。

「舜さんは……確か腕が……」

「ん？まあな。ま、気にするなよ。大したことじゃないさ。くっついたら」

そういつて軽快に笑う蒔風。

しかし、なんだか元気がないスバルに、笑い声が一端止んだ。

「どうした、スバル。元気ないな」

「あはは……いや、気になっちゃいまして……ほら……私たちの事とか……」

「戦闘機人、か？」

「はい……」

「そういえばみんなは知ってたん？」

「私は……訓練校からの付き合いだったので……」

「そっかー。はやてとかなのはも知ってたクチだな？俺さん全然わからなかったわ」

ニシシと笑ってスバルの頭を撫でる蒔風。
それでも隠し事をしていたためか、改めて知られたからか、はたま
たその両方か、スバルの顔はまだ晴れない。

そんなスバルに、蒔風がしょーがないなあ、とため息をついてスバ
ルに言った。

「スバル・ナカジマ二等陸士!!」

「は、ひゃい!?!」

いきなりの蒔風からの言葉に変な声で応えてしまっスバル。
それをクツクと笑いながら、蒔風が優しく聞いた。

「お前の、名前は?」

「スバル・ナカジマです!」

「……そうか。なら、それでいいじゃないか」

「え?」

「お前はスバル・ナカジマ。戦闘機人で、ギンガの妹で、スターズ
のNo.04。親友も、師も、仲間も、相棒も、家族もいる。そん
なやつが、ここにいるお前だ。これ以上、何かいるかい?」

「あ…………はい」

その言葉に蒔風が「お？」と目をキョトンと開く。

「私は、ナンバースあのたちも、一緒がいいです！！」

「……………ぷっ、あははははははは！！！！そうかい！お前の願いはでけえな！！欲張りさんめ！嫌いじゃないわ！！」

「え？あれ？ティア、私なんか変な事言った！？」

「ふふ…………うん。あなたはそれでいいのよ。難しいこと考えるのは、あんたらしくないわよ？」

「そうね。スバルは想いのままに動くのが一番よ」

二人の言葉にむー？と手を顎に当てて考えてしまうスバル。

それを見て、蒔風がうんうんと頷いて部屋を出る。

「次はどこブラっつこっかにや〜〜」

「……大丈夫だよ……」

「……」

「うん、わかった。舜君は、私が助ける。絶対に、助けてたい。もう憧れてるだけじゃ、嫌だもん。私は……あの優しくて、強くて、いつだって助けてくれたあの人を、護ってあげたいの」

「……ありがとうございます……」

「もう……そうだなあ……ひとまず、死ぬほど怖い目にあわせれば、その死の恐怖って言うのを思い出さかな？」

「それは……違うと思いますが……」

たいことがあるんだがな」

「「え？」」

「あっち方に小さな女の子がいるのを知ってるか？」

「は、はい……」

「紫の子ですよね……」

「あの子、どうにもおかしい。一体なぜ、スカの野郎に加担してるのか……知りたい」

その言葉にエリオとキャラロがコクリと、力強くうなづく。それをみて、蒔風が二人を肩に抱えあげて元気づけるようにはしゃいだ。

そうやって何回転かしてから二人を降ろし、二人と別れた。

「よしよし……今度はお前らが助けてやれ。この世界の理不尽に、打ち勝って見せてくれよ。それがお前たち未来ある者の力だからな」

一方、去っていく蒔風を見て、エリオがポツリとつぶやいた。

「舜さんの左腕……まだ痛いはずなのに……」

「え？」

「動きが……ぎこちなかったんだ。あの人は……やっぱり凄いよ。キャラ、あの子、絶対に助けよう」

「エリオ君……うん！！絶対に！！」

蒔風は首をかしげ、部屋に入る。

そこにはもう、なのはいなかった。

ただ、一枚の紙が置かれており、そこにはこんな言葉が書かれていた。

『舜君へ

あなたに言いたい言葉があります。伝えたい思いがあります。だけど、それはすべてが終わってから。この思いは、それまで大切にとっておきます。

どうかその命は、あなただけのものだとは思わないでください。あなたの命は、そこにあるのだから。高町なのはより』

それを呼んで、ますます首をかしげる蒔風。

そして一つの仮説に想っていたる。

しかし

「いやいや……まさか……そんなことあるかよ……
ハア……」

マジマジと何度も何度も読み直す時風。

しかし読めば読むほどそうとしか思えない内容に、時風がうんざりした顔をする。

「俺みたいになやつに惚れたって……不幸にしかならないぞ……
・なのは。憧れで、止めておけ……フウ……寝よ」

蒔風がごろりと横になる。

その顔はそれなりに嬉しそうではあったが、決してそれは為す事
出来ない、無駄なことだとわかつている。

自分は……。「人」を愛せても、「その人」自身が大好きでも、
「その人」のためだけの感情などは、持ちえないのだから。

「なのはに……会っのめんどくせー……」

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers（エース×翼人）（後書き）

やっと更新できた……

アリス「前回の予告と違うじゃないですか」

すみません……

ア「それにしても二人目ですか……まあなのはさんとは結構長く一緒にいましたからねえ」

ここまで行きつくのにこんなに大変になるとは思わなかった……

自分は恋愛書くのは不得意ですなあ……

なんか不自然に感じた方がいたら申し訳ございません。

ア「そして次回は？」

おや、自分に振りますか？

次回、決戦までの期間でーす

ア「ではまた次回」

ギン姉を、返せエエエエッ！

いやあ、こうならなくてよかった

なのはStrikers　く思い出の船で

「懐かしいなあ」

「うちらにとっては思い出の船やからねー」

「舜君とかも懐かしいでしょ？」

「俺にとってはお前らほど時経ってないもの」

「そうやったなあ」

そんなことを話しながら内部設備を整えて行く四人。
さすがに廃艦予定だけあって、中の設備はほとんど死んでいる。

まあ、機材はそのままだったから再起動させればいいだけなのだが。

時風の腕は戦闘は無理でも、日常生活には何の支障もない程度にくっついていた。

迅速なシャマルの処置のおかげである。

その蒔風がちらりとなのはの方を見る。

あの手紙があつた日以来、なのはとは何度も話したが特に今までとは違う感じはしない。

蒔風にとっては、まあそれならそれでいいんだけどね、といった感じで、特にあの手紙の事を聞こうとはしない。

(このまま思いなおしてくれれば嬉しいからな)

とまあ、そんなこんなでアースラへの移設が完了し、早速全メンバーを会議室に集合、これからの事を報告した。

「うちらが追うのはスカリエッツィでも、ヴィヴィオでもなく、あくまでもロストロギア、レリックや」

切りだすのははやて。

だがその発現に、顔をしかめる者など誰もいない。

「つてーのは建前で？」

「そう、そしてその途中にスカリエッティがおるから叩きのめすだけや。そんで、ヴィヴィオを救出する。この方針で、みんなええか？」

はやての言葉に、みんなが頷く。

しかし、なのはやフェイトは心配そうな顔だ。

「大丈夫？はやてちゃん」

「無理とかしてない？」

「大丈夫やって！！もううち無茶せえへんもん。それに、三提督も他の上の人も黙認してくれることを確約してくれとる。なんでもこいやー！！」

「現在、アコース査察官がスカリエッティのアジトを搜索していますが、まだ見つかりません」

「はやて、そのアコースつて人は大丈夫なのか？」

はやての副官、グリフィスの言葉に時風が疑問を挟む。

それに対してはやては大丈夫や、と自信ありげに答えた。

なんでもアコース・ヴェロツサはあのカリムの義弟で、レアスキルも持っている、やり手の査察官らしい。

まず心配はないそうだ。

「チンク達ナンバーズから情報が得られれば良かったんやけど・・・」

「さすがといつかなんといつか・・・腐っても天才だったよな、あのスカ野郎」

そう、施設で保護されているナンバーズ投降組から、スカリエツテイのアジトの場所などの情報をもちろん聞こうとはした。しかし、一体どのような仕組みなのか、チンク達はアジトの場所をことごとく思い出せないでいた。

ある程度までは絞り込めるのだが、はつきりとはわからないのだそ
うだ。

そこでシャーリーやデバイス担当の技術官、マリーが建てた仮説は、「敵に敗北、又は捕縛された場合、味方陣営の情報の破棄」というプログラムがある、という事だった。

おそらくこれは兵器として作られた際の当然の施しだったのだろう。もし撃破され、敵に情報が渡っては意味がない。

しかも彼女たちの身体はかなり強化されて作られているため、言うてしまえばかなり痛めつけても死ぬことはない。つまり、かなり過激な拷問が効くのだ。

ならばどうするか

簡単である。情報そのものを消せばいい。と、言ってもまだ量産型ではない彼女らにすべてを忘れさせるなどという事はいきなりしなかったようで、忘れてるのはアジトの場所と、これからの計画の細部のみ。

当のチンク達は「協力はしたいのだが……すまない」と落ち込んでしまったそうだ。

「でもま、絞り込めるだけマシだな」

「そつやね……でも、きつと……」

「きつと、奴はすぐに動く。スカリエッティは、あんなんだけど、天才。準備が整ったら、すぐに動くよ」

フエイトが双眸を厳しくして言う。

長年スカリエッティを追い続けてきたからこそわかる。

あの男は、あつという間に何かを仕掛けてくるはずだと。

「で、だ。さらなる脅威について話しておこう」

そう言つて蒔風が椅子から立って、モニターを出す。

そして久しぶりに伊達眼鏡をかけて、講師のように正面の大型モニターの前に立って話した。

「今までチンクの話で、敵の戦力は残ったナンバーズ、ウーノ・ド
ウーエ・トーレ・クアットロ・セツテ、更に召喚師のルーテシア・
アルピーノ。ヴィータが交戦した融合機アギトと騎士ゼスト。そし
て……」

蒔風がモニターに四つの写真を出す。

それは突如として出現した三体の使役獣と一人の男。

その姿に、会議室の空気が少し重くなる。

「「奴」だ。そして、その使役獣のケルベロス、迦桜羅、サラマン
ダー。言っておくぞ、かなりの勢いで化け物クラスだ。正直な話、
管理局とかでどうにかなる相手じゃない」

「……」

蒔風の言葉に、みんなの顔が暗くなる。

それはそうだ。

あれだけこつち側が優勢だったあの状況を、この男は一発でひっくり返してきたのだから。

「だが……「奴」はまだ世界構築の計算は終わっていないと言っていた。おそらく、今回ヴィヴィオをさらったのはスカとの協力だろうな」

「協力つて……なにをですか？」

「わからん……恐ろしい兵器でも作ってるのかそれとも……
案外、ただ単に寝床借りてるだけかもしれないぜ？」

「それだけで……なんですか？」

ティアナが信じられないという顔をする。

あれだけの力があるにもかかわらず、わざわざスカリエッティに協力する必要があるのか？と

「「奴」を読み切ろうだなんざやめておけ。時間の無駄にしかならない」

「でも……」

それでも気になってしまふのだろう。ティアナが推測をしようとする。

「はぁ……いいか？こう言うのは俺自身気が滅入るし自信無くすからあまり言いたかないんだが……」

そうやって前置きしてから蒔風がギシリと椅子に座って眼鏡をはずしながら先を言う。

「「奴」は俺よりも強い。勝てた、なんて言えるのは勢いで行けた何回かぐらい。五回くらいか？その程度だ」

「え？」

「で、でも勝ち続けてきたんでしょ？」

フエイトのその賭場に首を振って応える蒔風。その顔は妙に皮肉った感じに笑っている。

「俺と「奴」は……戦えばまず、あっちが高確率で勝つ。俺がここまで勝ってこれたのは、最後に世界のひと押しがあったからだ」

「あゝ、世界のひと押しって……なんですか？」

スバルの質問に、蒔風がモニターを叩いて説明する。
モニターに出たのは十年前の最終決戦の映像だ。

「WORLD LINK。世界をこの翼を疑似的につなげ、その力で様々な現象を起こしてヴットはす最後の決め技。それがあったから俺はここまで勝ってきた」

「つまり……「奴」はそれさえ越えられれば舜君に勝つ自信があるんやな？」

「そう。だから「奴」は今までも様々な力を使おうとしてきた。究極の闇、ダクバウィツァルネミアジュエルシード、願いの宝玉、セフィロス過去の英雄……拳げていけばきりねえな」

「ってことは……スカリエツティと何らかの武器の約束を？」

「そのために……ヴィヴィオを……」

「うん。だから今回スカが事を起こすようなら、「奴」自身は無くとも、使役獣ぐらいは出しゃばってくるだろうな」

更に言うなら

蒔風の獅子天麟は戦闘不能状態だ。

普段なら大丈夫なんだろうが、今は蒔風の腕の完全接合のために、獅子天麟の方に力が回せないのだ。

よって使えるのは龍虎雀武の四体のみ。

しかもあつちはガジェットを無数に保有している。

その戦力差に、全員が気落ちするが、そこで蒔風がダン、とテープを叩いて立ち上がった。

「だから全員のパワーアップを図りたいッ……！」

「パワー」「アップ?」

「そう。一体どんな風に来るかわからないし、最悪、バラバラに動かなきゃならない事もあるかもしれないでしょ?だから各個人のステータスや能力のパワーアップをする。時間は・・・三日かな?」

「みつ!?!」

「三日あ!?!」

「そ、三日。時間もねえんだ。かーなーり、きつく行きまっせー」

そう言っただははと笑う時風に、フォワード四人は当然のこと、なのは達までが青い顔をする。

「どどど、どうしよう!?!私まだ舜君に何にも伝えてないのに!?!」

「うち・・・・・・・・ここで死ぬんかなア・・・・・・・・」

「主!?!大丈夫です・・・・・・・・この烈火の将が必ずや!?!」

「アリシア・・・母さん・・・わたし、そっちに行くかもしれない・・・」

「あーーーーさすがにそこまでじゃねえと思うけど・・・ダメだ、やっぱりあたしも「エーーーー!!!」」

「ティア・・・私、メンテナンス終わったばかりなんだけど・・・」

「私だって・・・ギンガさんは怪我してていいなあ・・・不謹慎だけど」

「も、もうなんでもこいですよ!!!(TAT)」

「かかか、かかってこいやーーーー!!!(TAT)」

「お前らって俺のことなんだと思ってんの!?!」

これで準備は整った……
彼の計算とやらはもう少しらしいが……

まあ、こちらの準備が終わったら始めてもいいと言われたからね、
ありがたくそうさせてもらおうか。

・ 「これ」とマテリアルの接続までもう少し。更に洗脳を加え……

くくくくくく……

面白くなりそうだよ

ナンバーズ達数名は残念だが、まああれで捕まってしまうなら今後、
いても仕方ないだろう。

「彼」も何とかすると言っていたし、そちらに期待かな？

さあ・・・すべてを解き明かそう!!!!

私が世界の中心へと赴き、すべてを知ろう!!!!

それが私の存在理由。

私はそうあるように生まれてきた!!!

私を作った者はもういない・・・

存分にやらせてもらおうじゃないか!!!!!!

なのはStrikers　く思い出の船でく（後書き）

はい！！後書きの時間ですよー！！！！！！

アリス「わーい！！」

今回の後書きでは今までの後書きで思いつきり書き忘れていた事を発表するよ！！

ア「久々ですね！書き忘れ！！」

では

Q、時風がへりを砲撃から守ったとき、開翼してたけど管理局の人達は知ってるの？

A、知りません。と、言うのも、モニターされていたのはガジェット迎撃していたはやてさんで、へりの方を見ていたのはロングアーチだけです。もちろん、その後にはやてからの話で時風＝翼人というのは伝えられました。

ア「なぜ描写しなかった」

忘れてましたあ！！！！！！

Q、地上本部から六課隊舎に飛んだとき、開翼してたけど、やっぱりばれてないの？

A、加速開翼してたから大丈夫だよー。こまけエことは気にすんなってことで・・・

ア「なぜその時言わなかった」

忘却の彼方へ・・・

もしかしたらまだ忘れてるかも・・・

ちなみにギンガは負傷していて、戦闘は参加できません。

止めの一步前まで持っていかれてましたから、ソレハソウダロウー

ー

ア「次回、さあ！！特訓だあ！！！」

ではまた次回

大丈夫、ヴィヴィオは絶対大丈夫だから。助けよう、二人で、きっと

フェイトさん、役割、うちの主人公が奪ってしまいました……

なのはStrikers くくんねん！！

「はい！！と、言うわけでえ！！これから個人レッスンを始めます！！！！」

「はい！！！！」

アースラ内、訓練施設。

ここ中央にスバルが立ち、その前に蒔風が立っている。

訓練室の壁の方にはギンガやフォワード陣がシートを広げて座っていた。

と、言うのもたった今、彼女たちはなのはの訓練を受けていたばかりなのだ。

つまりぶっ続けて訓練をするという事。

それを聞いてマジですか・・・という顔をする四人に、苦笑するギンガ。

一番手を指名されたスバルなんかはうへえ、といった顔をしてからティアナに泣つく始末だ。

ギンガに関しては、怪我こそ治ってはいるが、まだ身体の調子は万全ではない。

ゆえに、今回蒔風は戦力から外した。

蒔風曰く「こつ言うのも何なのだが、万全でない者を連れ出すわけにはいかない」だそうだ。

「そ、それで私は何をするんですか!？」

なんだか緊張して直立状態のスバル。
そのスバルを見てクツクと笑いながら蒔風が言う。

「そう緊張すんなよ。今からやるのは激しい動きじゃない。お前の力を引きのばすだけだから」

「私の・・・？」

「ギンガ！左手用のリボルバーナックルは持ってるか？」

「え？は、はい！！」

時風の言葉にギンガが反応し、スバルに自分の左手用のナックルを持って来て装着させる。

それにスバルが啞然とし、自分の腕に付けられたそれをまじまじと見つめる。

「今回、ギンガの参戦は無理だ。だからスバル、お前がそいつを連れて行ってやれ」

「え？」

「左右揃ってこそだろ？それに、お前にはギンガの分も頑張ってもらわなきゃならないしな」

「は、はい！！」

その言葉を受けてますます緊張するスバル。
そして、特訓が始まった。

「スバル、お前を最初に持ってきたのは、ある程度筋肉が暖まっていた方がいいからだね？」

「えっと……なにをするんでしょう……」

「お前の「能力」を「技」にまで昇華させる」

「能力を……技に？」

きよとんとするスバル。

そのスバルの拳を手にとって、蒔風が先を言う。

「スバル、お前のISはなんだ？」

「え？・・・えとお・・・」振動破碎」って言います。振動で相手を内部から攻撃する力なんですけど・・・それを技にですか？」

もう隠す事がなくなってスッキリしたのか、きっぱりと答えるスバル。

そのスバルにコクリと頷いて時風が重々しく、それでいて流動的に構えていく。

「俺はシューティングアーツはわからんが・・・武道なら多少の心得がある。こい、スバル。使うのは振動破碎のみ。まともに教えはできないが、やってる間にわかってくんたる」

「なんだか投げやりだ！？しかも結局激しくなる予感！！！」

懇切丁寧に教えてもらえるかと思っていたスバルは、結局こんなのである時風に「ええー！ー！？」と声を出す。

それを見た同僚たちは、これからのスバルに声援を送っていた。

「頑張れスバル!!」

「あなたはできる子よ!!!!」

「スバルさん!!がんばってください!!」

「ご冥福を祈ります」

「皆ありが、つて!?!だれ!?!今私の冥福祈ったの!?!」

「」「」「」「」

「うわ——————ん!!!!皆まとめて後で砕いてやるう!!
「……」

「よっしゃ!!来いスバル!!お前の力、見せてみる!!」

透き通る、爽快感!!!

ア エリアス!!!

「タイミングはわかった？」

「はい!!! なんとかですけど・・・」

「次からはなのはとの訓練でやっていけ。あんだけできてりゃわざわざ全身で振動噴き出さなくても、必要な一、二カ所だけとか、更に応用次第で防御にも使えるでしょうしね」

「わかりました! いやあ、このISって中々訓練できないんですよ
ね」

「当たればまず、一撃必殺だからな。こっちだって受け流すために腕使ったけど、まだヒリヒリしてんもん」

時風が腕をさすりながら話し、はっはっはっはと二人で笑う。
それを見てのフォワードの感想は……

「あれだけ動いてまだ特訓なのね……」

「スバル……成長したわね……」

「私には無理です……」

「二人とも、かつこいいです!!!!」

.....

「ハイ次、ティアナー……」

「はい……」

蒔風の呼び声に、次はティアナが出る。
そのティアナに蒔風がいきなり言った事は……

「ティアナ、クロスミラージュ起動。オレを狙い撃て」

「はい！！（ジャカ！）」

「躊躇なし！？ちょっと待て、説明させて！！相手はお前がガンナ
ーだって知ってるし、当然それに対策は講じてくる。すなわち、数
で来るか、銃弾なんざものともしない奴が来るか」

「はい」

「もし前者ならば一体残らず打ち抜き、なおかつこっちは無傷でな
ければならない。後者なら来るのは使役獣だ。だが、こいつらは固
い上に速い。だから……」

「動き回る舜さんに銃弾を命中させる？」

ティアナが正解を言う。

腰を捻って動く準備をしながら、蒔風がティアナに条件を言った。

「俺に効いただとかそんなんはいい。とにかく当てる。オレの選択
は回避のみだ」

ガオン！！！

ティアナの銃弾が時風の前髪をかすっていく。

壁を走っていた時風は無理にそれを回避して空中でクルクルと回転し、ベタン！！と床に落ちる。

しかし、だからと言ってティアナは銃撃をやめない。

それは時風がその程度で止まるとは思っていないからだ。

うまく受身を取って身体を張りつけるように床についた時風が、そこからゴロリと転がって銃弾を避けていく。

「（狙いがぶれてきたか？・・・さすがに疲労が・・・）
ツオ！？」

時風がティアナの動きを考察して油断していると、ティアナがいきなりとんでもなく正確な銃撃を放ってきて、思わず畳返しで銃弾を防ぐ時風。

それにティアナも時風も「あ」という顔をして、動きが止まる。

「・・・ふ・・・よくやった！！合格！！」

「よしッ！……！」

「わーい！！ティアー……！！！！！！」

「じゃあ次はこっちからもちよくちよく攻撃入れるから回避するなり撃ち落とすなりして当てにこい」

「《え？》」

やっと終わった……と、思って膝に手をつくティアナに、スバルが駆け寄ろうとして、そこにこの蒔風の一言。

こいつ鬼か。

「デバイスもそろって何言ってるんだよ……避けてるだけの敵なんざいねえぞ？さ、始めつか〜〜」

陽気に言う蒔風。

蒔風自身も結構汗を流しているが、まだ動けるらしい。

対してティアナは結構疲れている。

そして、ハッ、と思います。

それなら一人でも巻き添えにしてやると。

「ッ！！スバル！！あんたも・・・」

「ティア！！私こっから応援してるから！！！！」

「見捨てんの早あ！？いつの間に壁まで！？あんたそれでも私の親友！？」

「命は粗末にしちゃいけないと思うんだ！！それにオーバーワークだし！！！！」

「じゃ、じゃあ・・・」

「「「」うち見ないでください！！！！」」」

「あ、あれ？おかしいわね・・・私このチームのリーダーなのよね？・・・」

「じゃあ合図しまーす。よーーい・・・」

「ギンガさんまさかの鬼進行！？待って待って！！クロスミラージ
ユ！！準備は！？」

《出来ました。いつでもどうぞ！！》

「始め！！！！」

.....

「ちよっ！？ティアナ！！お前合格だつて！！当たつてる当たつて
る！！！！痛い痛い痛い！！！！」

「あっはははははははははは！！！！！！そんな言葉信じるもんか！！！！
その眉間ぶち抜くまで、私は撃つのをやめないッッ！！！！」

スバルが足を投げ出して上を仰ぎ見、更にはキャロとエリオも四つん這いになって荒い息を吐いている。

「ふ、ふふふ……そうさ……こう言う特訓だったのさ……
なかなかだろう?……」

「舜さん……適当に言わないで……ください……」

「うめん……」

計画どおりみたいな事を言う時風だが、エリオに突っ込まれて反論する元気もない。

「エリキャロは……午後にでもしようか……」

「はい……」

さすがに時風も病み上がりとあって、ここで午前の訓練は終わりにしておいた。

エリオとキャロも、ティアナを止めるのに疲れて倒れこんでいて、

「オオオオオオオオオオオオツツ!!」

蒔風が午後になって訓練場で気合を込めて叫ぶ。

ちなみにエリオとキャラロは半ばヤケになって叫んでいた。

だって怖いもん。

「H A H A H A、なにをおっしゃるルシエさん。怖くなんてないよー!？」

「う、うそです!!その目は嘘をついてる人の目です!!!!」

「と、まあ冗談はここまでで」

「どこまでが冗談だったんですか!？」

終始振り回されるエリキャラロに、蒔風が話を進めていく。

ちなみに今はこの三人しかいない。

残りのメンバーはなのはと一緒に模擬戦やらなんやらの訓練中だ。

きつと午前中に得たモノをフルで使って、順調に伸ばしているのだろっ。

「キャロ、お前って確かフリードのほかにもう一体竜いるんだっけ？」

「あ、はい。ヴォルテールって言うんですけど……」

時風がキャロに聞くヴォルテールとは、彼女の出身地、アルザスを守護する巨竜である。
彼女の真の切り札にして、それに見合った、莫大な魔力と攻撃力を誇る。

「それってあれだよな？六課が焼けた時に出したやつ？」

「あ、はい。舜さん、見てたんですか？」

「うんにゃ？すぐに意識なくなってる覚えだったよ？でもまあ……」

「・・・あれの実力を見たい、ってところだな」

その言葉にキャラ口は少しだけ考えて、首を振ってこたえた。

「ダメです・・・今の私だと、契約して呼び出せても、そのコントロールがしきれなくて・・・六課の訓練場の仮想プレートもガジエットの迎撃で勢い余って割っちゃいましたし・・・」

「それに緊急時にはすぐに呼べるそうなのですが、制御するためには長い詠唱が必要みたいで・・・」

それを聞いて時風が頷いて考える。

頭に手を当て、少し考察してから、ポン、と手を叩いて訓練内容を言った。

「よし、キャラ口はそれを呼びだす詠唱をして、エリオはフリードと一緒にそれを守れ」

「ええ！？ヴォルテールをここに呼んじゃうんですか！？」

「いやいやいやいや。呼ばなくていいよ。ただ唱えるだけでいい。で、俺はそれを妨害しようとするから、エリオはそれを守れ。あれ

を呼びだせればまず勝てるだろ」

「はい……あ、でも」

「ん？」

キャラがモニターに映像を出しながら、蒔風に説明する。
出てきたのはチンクから得たルーテシアに関するデータだ。

なんでも彼女は母親をスカリエッティに握られているらしい。
レリックのX-I番があれば復活できる。

そう言われて、彼女は協力しているそうだ。

しかし今注目すべきは彼女の召喚獣だ。

人型の蟲で格闘技戦を得意とする「ガリユー」
大量に存在し、ガジエットなど無機物にとりつく「インゼクト」
数体存在し、振動によって局地的地震を引き起こす「地雷王」

そして……

「究極召喚・白天王……画像はないですが、データだけ見るとこれは……ヴォルテールと同じステータスを持ってるんです」

「つまりあっちにも同じようなやつがいるってことか？」

「はい。しかももしかしたら、あの子の方が召喚師の力は上かもしれません……そうになると……」

キャラが俯いて、自信なさげに言う。

たしかにキャラは、自信満々に、と言うようなキャラではない。

むしろ控えめな性格だ。

しかし今はそれが裏目に出ている。

だが、そんな落ち込むキャラに、エリオが肩を掴んで笑顔で言った。

「キャラ、自信持って！僕はキャラのブーストに何度も助けてもらったし、フリードがいなかったら初任務の時落ちていたんだよ？そんなキャラが、あの子に負けてるなんてことはないよ！！」

「エリオ君……」

「だから、安心して。キャラは凄い力を持つてるんだから。でももしキャラに危険が迫ったら……」

そう言つてエリオがストラダーダを片手に持ち、縦に真っ直ぐ持つて、キャラに言いきつた。

「僕が絶対守る。この槍にかけて。二人で助けよう。あの子を、ルーテシアを」

エリオの決意。

そのエリオを見て、キャラも「うん！」と頷いて決意する。

それを見て蒔風がいひひと笑つて、じゃあ始めようか、と掛け声をかける。

特訓内容はさっき言った通り。
キャラはコントロールのための詠唱、そして、エリオはそのキャラ
の護衛だ。

「始めまつせえ！！！」

「はい！！！！」

.....

ドオン！！！！！！

「舜さん!!逃げてっ!!!!」

「おおおおおおおおおッ!!!!!!」

ガオンッ!!!!ドゴア!!!!

「な!?!ちよつとおおオオオオオオ!!!!!!」

「キャラ!!コントロールは!!!!??」

「やるつとしてるけどッ!!!!」

「キャラ!!気にすんな!!!こうして出て来ちまった以上、コントロールまで持つてく!!!!強く願え!!!信じるんだ!!!!」

「キャラ!!がんばって!!!!」

「舜さん！舜さん大丈夫ですか！？」

「いつつ〜〜・・ふう、何とかモノにしたか？」

「はい・・・ありがとうございます！！！」

キャロの言葉に、ムクリと身体を起こす時風。

イチチ・・・と口元の血を拭ってエリオとキャロに「よくやった！
！」と激励の言葉を贈った。

「エリオ！！おまえ速くなったな！！まさかあそこで飛んでくる
とは思わなかったぜ！！！」

「え、えへへ・・・でも、まだ速くなるんですよ！！！」

「はあ！？おまえ速すぎ・・・いつか俺もお前とやり合つときは
加速開翼しないといけなくなるかもな！！！」

「その時は負けません！！！」

エリオの頭をくしゃくしゃと撫で、その成長を称える時風。
次にキャロの方を見て、やっぱり頭を撫でながらその力を絶賛した。

「お前のヴォルテールってありやただの強い竜じゃなかったんだな」

「え？えつと・・・昔からアルザスを守ってますから!!」

「うんうん。それに、あれは生物というより「自然の体現者」って
言った方がいいな」

時風の言葉に、なんですかそれ（・・・）？と首をかしげる二人。
その顔を見てウンウンと頷いて説明する時風。

「つまり、あれは自然が命として現れた形だ。嵐だとか地震と同じ
なんだよ」

「えつと・・・つまり？」

「止められないってこと。オレでも勝てん。いやそもそも、勝つだ
とか負けるだとかいう次元の存在じゃない。嵐を爆弾で吹き飛ばそ
うとも出来ないし、借りに出来るとしても更に強いのがやってくる」

「そ、そもそも嵐が来たら過ぎるのを待ちますよ・・・」

「だろ？それと同じなんだ。退けることはできても、倒すことなんてできない。あれは確かに制御なんざできねえよ。それをやったお前は凄いいー！」

その後もめっちゃめっちゃに褒める蒔風に、どんどん照れていってしま
うキヤロにエリオ。

しかし、思いのほか時間がかかってしまい、なのは達の方はどうし
ても見きれないだろう。

「舜く〜ん。だいじょ．．．って、ホントに大丈夫!？」

と、そこになのはがやってくる。

後ろには訓練を終えたヴィータとティアナ、スバル、がいた。

訓練室はいくつかあって、それなりに離れている。さらにはその間
には防護壁もあったのだが、さっきの轟音はそこまで聞こえていた

ようだ。

蒔風なら大丈夫だろうと心配せずとも、社交辞令的なあれで「大丈夫？」ときいてきたなのは、その惨状を見て本気で心配そうに聞いてきた。

なんせ床は全部へこんでるし、壁はグニヤリと曲がっている。

更にはいまだ炎がチラチラと上がっているし、当の三人はボロボロなのだから、心配もするだろう。

てゆうかよく大丈夫だったなアースラ。

そんななのは歩いて行って、その肩を叩いて蒔風が眉毛をあげて満足した笑みを浮かべてすれ違う。

「気を抜くなよ？なのは。次からの模擬戦、おまえ苦戦するぜ？」

「え？」

そうやって和気藹々と訓練内容について話している四人の方を見て、蒔風がにやりと笑う。

なのはもそっちの方を見て、まだ負けないよ！！と両手をあげて反論する。

それを見てあははと笑う蒔風。

「じゃ、明日はお前だから」

「え？」

「訓練、ってか調整だな。お前もあるよ？明日やっからなめ〜〜」

そう言って今日はもう寝るといって部屋へ帰ってしまふ蒔風。
今日はこれでおしまい。

あしたはなのはたちだ。

それを想像して、なのはが一言つぶやいた。

なのはStrikers くくんれん!〜) (後書き)

準備期間めんどくせー……………!!!
という作者でございます。

アリス「いきなり何叫んでんですか」

いやね？

こういう準備期間書くのが一番苦手なんですよ私!!

自分が書くとしてもグダグダになってしまっ……

ア「うぬぼれるなッ!!それを決めるのは読者さんだ!!!!」

ヒッ!?

で、ではアリスさんは読んでみてどうでした？

ア「グダグダ」

アッ……………!!!

ア「次回、なのは達編。強化です!!」

ではまた次回

私達は、とめなあかん

早くここまで行きたい・・・

なのはStrikers くきょうか！ー！ー！

「さて、フェイト、なのは」

「うん」

「な、何をするの？」

フォワード陣の訓練の翌日、なのはとフェイトは蒔風に呼び出されていた。

昨日のフォワードたちの様子から、自分たちも何か教えてもらえるのか、と思っていた二人は期待半分怖さ半分といった心境だ。

だが蒔風が二人を呼び出したのは訓練室ではなく、デバイスを解析、修復する技術室だった。

「何をするかって言われてもな……お前らには特にないぞ」

「「へ？」」

蒔風の言葉に、二人は思わず変な声を出してしまった。

「なにもしない？」

「お前らはな。ほれ、レイハとバル出せ」

「え？ってひゃあ!？」

そういつて蒔風がヒラリと二人の手元などを触れるか触れないかの
ストレスの距離で撫でる。

きつと触れてないからセーフ……だろう。
うん、セーフだ。セーフなんだよ!!

しかしまあ、当の二人は触られてはいないものの、当然反射的に悲
鳴が口からこぼれる。
が、蒔風はすぐに後ろを向いてシャーリーやマリーとコンピュータ
ーに向き合ってしまった。

「あの……舜君？私たちは……」

「お？別にもういいぞ？用があるのはこっちだしにや〜」

なのはの質問に時風がデバイスポットの中をクイツ、と親指差して答える。

そこにはいつの間にか掠め取られたレイジングハートとバルディツシュが浮かんでいた。

「ああ！！！？」

「い、いつの間に！？」

当のなのは、フェイトは当然驚く。
なぜならレイハはなのはの首に、バルはフェイトの胸の内ポケットに入っていたのだから。

結局触れてんじゃねーか。

「せ、セクハラ！」

「そんなでかいもん胸につけてる方がセクハラだよ」

「好きでおつきくなっただんじゃないよ!」

「「「フェイト(ちゃん/さん)喧嘩売ってんの?」「」」

フェイトと時風の口論は怒りマークを頭につけた三人の声にて一瞬で終わった。

と、時風が気を取り直して本題に入る。

「お前ら二人の技術だとかはもう俺が口出しするようなことはないよ。ったく・・・十年でホントに成長しちまってよ。おにーさんなんだか寂しいぞ?ま、あとの問題はお前らは自分の身体の後先考えずにバツカンバツカン撃ったり動いたりすることだ」

「「も、申し訳ございません・・・」」

「ふう・・・年下は大人しくおにーさんに任せなさいっての・・・まあ、だから後はその負担を軽減できるようにこつちをいじくるだけだ」

そこまでいって蒔風が説明は終わったとばかりに再びマリーやシャリーと話したりモニター見たり開翼したり閉じたりし始めた。

「あ、あの……私たち、これから訓練が……」

「ん？ああ、行ってきても大丈夫だぜ？」

「いやあの、デバイスがないと……」

「フォワードはヴィーナムが見てるから大丈夫だろ？お前ら二人で組み手でもやっつけ」

いやにそっけない蒔風。

まあ、その分デバイスの方に集中しているということか。

「だからさ、ここでこいつの機構をどうにか組み込んで……」

「でも仕組みがあんまり……」

「じゃあ今こっやって……」

「そっか！で……」

あーだこーだと話し合っけてモニターが出ては横に逸らされ、また前
に持ってきて等を繰り返して話を進める三人。

なのはとフェイトはそれを見て啞然としてしまつが、とりあえず訓
練場に行こうか、ということになり、ため息をついて部屋を出てい
った。

.....

「なのはのこいつはビットまで出んのか」

「はい。だからこそ本人にかかる反動や負担も大きく.....」

「なのはの身体にそんなもん抱えさせちゃいけないよ」

「そうですね.....八年前みたいのは嫌ですもんね.....」

「だからこれを.....」

「なにこれ」

「フェイトさんのリミットブレイクですけど」

「エロいな」

「あ、やっぱり?」

「フェイトさん肉付きもいいですからね」

「なんだ?これで相手を悩殺か?」

「いえいえ、そうではなく、速さを追求した結果ですよ」

「なるほど、無駄を省いたんだな。だが……」

「エロいですよね?」

「エロいっすねー」

「恥ずかしくないのかな、あいつ。ま、速さならこうして……」

「

「それいい!」

「やりましょー！」

.....

「と、言うわけで出来ました」

「「なんだかトントン拍子だ!？」」

なんとなく叫んだ二人だが、出来たもんはできたんだからしょうがない。

午後のお昼の席で蒔風がなのはとフェイトにレイジングハートとバルディッシュを返却する。

組み込んだ機構に関しては内緒だが、まず確実に力になるとのことらしい。

「なのは、フェイト。おまえらは「無茶すんな」って言ったところで絶対するだろ。だからしても大丈夫なもん取りつけといた。ぶっつけ本番で、しかもかなり使えるものだが……やっぱ限度回数ってのはあるからな？よく聞いておけよ？」

「ダメだよ舜、なのははそんなこと言ってもきかないよ」

「ダメだよ舜君。フェイトちゃん平気で無茶するんだもん」

同じ顔で同じようなことを言って、一瞬の間をおいて互いの顔を見るのはとフェイト。

ニッコリ笑った一瞬後、ガシツ！と互いの手を握りしめてギギギギ……と力比べみたいな事を始めてしまった。

「フェイトちゃんっていつもいつもアホみたいに危ないところ行っ

「ちゃうんだから」

「なのはも人のこと言えないよ？全部抱え込んで先の事考えないでバカみたいに砲撃撃つんだから」

「バカって言った!？」

「アホって何!？」

「テメエらどつちもどつちじゃボケエツ!!!」

ガツン!!と頭に拳骨食らわせて怒鳴る時風。
その足元ではしゃがみ込んで頭を押さえる／(T T)＼なのはと
フェイトが涙ぐんでいた。

「そ、それをいうなら舜だって……」

「シャラッ!!」

「自分の命を何とも……」

「黙らっしやい!?!?!」

「ん？なにやっとなん？」

と、そこに昼食を取りに来たのか、はやてが通りかかる。
どっちら今日の昼食はとんかつのようだ。

「げん担ぎか？」

「そや。こんな時だからこそこう言つもん食わんとなー！」

「めったに動かない役職なのにそんなカロリー高いの食ってからに
・・・」

「う、うっさいわ！ー！それより、あつちはなんなんや？」

そう言つてはやてが箸でなのはとフェイトを指さす。
と、言つても蒔風のすぐ後ろだが。

いまだに蒔風にギャーギャーと言つてくる二人を、今の今まで完璧
にスルーしていたのだ。

「なのは、フエイト。そろそろうつさい」

「「舜（君）が聞いてくれないからでしょ!？」」

二人の言葉にさらりとした態度で受け流し、デバイスの説明の補足を入れるため、蒔風が指を立てる。

「おおすまん。でだな？もしおまえらが限界数超えて使用しようとした場合なんだが……」

「う、うん……」

「デバイスの方が損傷する。しかも直るまでずっと」あのとときあなたが無茶しなければ……」といった趣旨の言葉を呟いたりやメールを送り続けてきます」

「「なにそれ怖あ!？」」

想像してたものと違い、あまりにもねちっこいその後始末に背筋が

凍る二人。

それを見て蒔風とはやてが心底面白そうに笑っていた。

「あつははははははは！！！そらいいわ！！二人の無茶にはうちも困ってたんやからな？」

「ほんとほんと。やめろっていつてもやめねえんだから、ったくなあ？」

と、そう話し込んでいる四人の後ろに、今度はシグナムとヴィータがやってくる。

彼女らも昼食のようで、騒いでいる四人に呆れ半分笑顔半分といった感じで隣に座った。

「蒔風。私たちの訓練の方は午後になるのか？」

「あたしらは大丈夫だからな。いつでも相手してやんよ！！」

「あ、そういえばうちもそうやな。それとも、うちらもデバイスいじくるだけか？」

シグナム、ヴィータ、はやてが順番に蒔風に訓練の内容を聞いてこようとする。

それを聞いて時風がうっくと唸りながら、腕を組んでしまう。

「シグナムもヴィータもそこまで強化するところ見当たらないし、はやてはどっかのバカみたいは無茶するようなやつじゃないし……ま、特にはないかもしれないな」

「あ、そ、そうなん……」

「ん？残念そうだね？」

「いや、うちらとしても身体は動かしときたいからなあ」

「あたしたちだと生半可な相手じゃおちおち本気の模擬戦も出来やしねーからよ」

「それに比べて時風が相手なら、私たちでも本気が出せると言うものだ」

と、なんだかんだいってる彼女らだが、ようは言いたいことは一つのようにだ。

「」「」「やらせる」「」

「こんなんでも俺、腕くつついたばかりの病み上がりなんですけど
!?!」

「こっちはスカリエツあのバカティのせいで鬱憤たまつとんのか!!!!」

「それは私もだよ!!あの狂人……一体どれだけ人に迷惑を・
・」

「あ、じゃあ私もやろうかな」

「私ももうこれ以上お前と戦えないのは嫌だからな。十年前の雪辱、
晴らさせてもらおう!!!!」

「あたしはとくにねーけど二人がやんなら、って感じだな」

「シグナム&ヴィータはわかるけどお前ら三人はただの憂さ晴らし
じゃねえか!!」

「うちらが全力で相手しても大丈夫なんって舜君だけなんやから」

「しかたないよ」

「そうなるも今度は俺が手加減しないとイケないんですけど……
」

「ほう、よくいった」

「だったら手加減できないまでやってやる」

「お前ら決戦前って理解してるのか!？」

と、やっぱりギャーギャー言い合う一同。

結局、この後時風ははやくにバインド掛けられて訓練場に連行。

三十分後にはボロ雑巾のように訓練室から出てきた。
それでもなんとか勝ったのは「世界最強」の意地だろうか。

ちなみにその時の戦闘状況、はやくて曰く

「いきなり腕がとれる」なんて言われたら、そら「はっ!」「とす
るわ……卑怯やで、あれ」

「こんにちは、舜さん」

「舜さん、お久しぶりです」

「舜~~~~プール行きたいよ~~~~」

蒔風の状態を聞くデイエチ、おみやげを期待するウエンディ、組み手を希望するノーヴェに一步で遅れたチンク。
更にペコリとあいさつをしてくるオットーとディード、最後にセインが遊びに行きたがっていた。

「おおおおおお、おまえらちょっと待ってくれ。今日は話があつてきたんだよ」

一気に囲まれて困ってしまった蒔風が、どろどろと全員を落ち着かせてから座らせて、今日来た旨を伝えた。

「今日はお前ら全員と………身体の調節に来たんだ」

「身体の調節？」

「おう。聞いての通り、見ての通り、俺の左腕は一回千切れて、なんとかくっついた。で、治ってから動きはしたがどーにも本気で動ける相手がいねえってわけで」

「そこで私たちですか？」

「そう。なのはたちじゃ怪我なんてさせたら戦いに支障がでるからね。ある程度の怪我もさせられん。怪我してもまあ大丈夫だろうな相手がお前らしかないのよ。だからお願い！！お願いお願い！！！！」

蒔風が両手を合わせて懇願する。

その姿を見て、ナンバーズはというと

「いいぜ！！あたしははなっからそのつもりだったしな！！」

「おもしろそーっすね！！」

「あん時負けた分は返す！！」

「舜さんのお願いならば」

「私も、異論はありません」

全員乗り気なようだった。

だが、ノーヴェがそこでハイ、と手を挙げて蒔風に聞く。

自分たちの装備はどうするのかと。

「「「「「あ「「「「「

「私たちの武器は当然だが全部没収されている。能力だけでも戦えない事はないだろうが……そもそもそんなこと自体許されるのか？」

確かに。

自ら投降したとはいえ、彼女らが凶悪犯罪の一端を担っていたのもまた事実。

面会ならともかくとして、模擬戦、更に武装なんて事が許されるはずなどないのだ。

が、そこはこの男。
そんなルールなどお構いなしだ。

「そんなもんはここに用意しておきました!!!(バサア!!)」

「「「す、スゲーーーーー!!!」」」

「「「おお・・・」」」

「「「どつからどーやって出したんだ!?!」」」

時風がいつの間にかそこにあつた、布のかかったなんかの山に近寄つてその布を一气にはぎ取る。
するとそこに現れたのは彼女らの武装のすべてだった。

ライディングボードからステインガーナイフ、ガンナツクル&ジェットエッジにイノーマスカノン、ツインブレイドのすべてがあつた。

「各自自分の武装を持って位置に付けー。ソッコで始めるから」

「い、今からですか?」

「そ。ほらほら！！はじめっぞ〜〜〜」

「い、急げ！！あの男はやると言ったら本気だ！！！」

「あたしは万全だ！！！」

「「ノーヴェ早あ！？」

「デイド、はい」

「ありがとう、オットー」

「ではゴングは僭越ながら私が取らせてもらいます」

ナンバーズが準備を終え、朱雀が現れてスタートを切ろうとする。

前方にはノーヴェ、ウェンディなどの近距離の者。

後方にはチンク、ディエチなどの遠距離の武装を持つ者が立ち、時風に向き合う。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

「では・・・始めっ!!!」

なのは長あ！！！！！

いやまあこういう「多重世界」なんて設定にしちゃったし、最初から長く書くつもりだったからある程度は覚悟してましたけど、まさかここまでになるとは思わなかった！！！！

・ 二百話ぐらいにはなのは終わってるかな？とか思ってたのに……

・ ……
これじゃひと段落するの下手したら二百五十を少し超えるかも……

ア「一段落……ですか？」

おおっと、それはまだ秘密

さて・・・・・・・・今回の後書きはまだ続くぞ!!!!!!

ア「そんなに言う事あるんですか？」

ない!!!!無いが書く!!!!!!

テンションが言っている・・・・・・・・書くのをやめるなど

ア「その分本編書けや」

後書きの方が面白くなってきた。

会話文だけって楽だー！ー

ア「まあ・・・・・・・・そうですね。にしても本当にあと何書くんですか？」

わからん・・・・・・・・だがとにかく目標は

目指せ本分量突破

ア「字数制限的にアウトでしょ」

ぬ、ぬかったぁ・・・・・・・・!!!!!!

だったらこれもう本文として掲載していしまおうか？

ア「アホですかあなたは。そしてあなたは「本望だ!!」と言う」
本望だ!!ハッ!?

ア「もういいでしょう?」

い、いやまだだ!!無意味に続けていたんだ!!!
後書きを終わらせたくない!!!

そ、そうだ!!今度「めぐ銀」検定やろう!!!
問題書くから……

ア「誰得だよ」

すみません、やりません
じゃ、じゃあライダー検定だ!!!

ア「本家がやってたじゃないですか」

によるーん

ア「ふ、所詮その程度ですか」

じゃ、じゃあ何か思いつくのかよ!!!

言ってみるよ！！！言えるのか！？え！？

ア「そうですね。では他の小説の紹介を、作者の了解もなしに勝手にやっつけてしましましょうか！！！！」

やめる！！！

いろんな人に注意されてしまう！！！！

ア「次回！！戦いに火ぶたが、切って落とされる！！！」

なに！！？や、やめる！！終わらせるな！！

後書きは永遠に・・・うわ、なんだおまえやめrくあwせdrft
ggYふじこ1p

愛おしい日々を 刻みこんだamulet
in my precious days

なのはStrikers 〱約束〱

各自の訓練や強化を終えて

機動六課のメンバーは一向に動きを見せないスカリエツティにピリピリしていた。

しかしそれはなにも機動六課に限った話ではない。

その不穏な空気は、地上本部が完全に崩壊し、未だ復興の目処が立たない管理局全体を覆い尽くしていた。だがそんな中でも人々は決して諦めるなんてことはなかった。

スカリエツティのアジトの搜索、武装局員による警備強化、管理局内の暗部

特に地上本部の崩壊から、多くの事がわかってきた。

一つは瓦礫と化した地上本部跡地から発見された「最高評議会議会室」にあったのは人間ではなかったという事。

彼らはその身を失い、生体ポットの中に浮かぶ脳だけの存在になって、管理局を裏から見守り続けていたのだ。

そして二つ目は、その評議会の三人がどうやら秘密裏にスカリエツティと繋がっていたという事。

これに関しては確実な物証はないものの、状況証拠は完全にそうであることを示しており、まず間違いないというのが結論だ。

そしてそれは、彼らと懇意であったレジアス中将もおそらくスカリエツティのバックボーンだったであろうことを示していた。

こちらにもまだ確かな物証がないために身柄の拘束はできないものの、レジアスは実質チエックメイト状態だ。

仮にそうでないとしても、予言を無視し、地上本部をここまで壊滅させてしまった責任は重い。

おそらく、管理局にはもういられないだろう。

そして三つ目

それは……………

「ヴィヴィオが聖王のクローン？」

「そう。かつての古代ベルカの偉大な王さま、聖王オリヴィエの遺伝子から作られた、人造魔導師。それがヴィヴィオや」

定期的にアースラ内で開かれる報告会議。

そこではやてが告げたのはヴィヴィオの正体とでも言うべき内容だった。

「聖王って確か・・・聖王教会の聖王か？」

「古代ベルカの王、オリヴィエ。伝承によれば、永く続いた古代ベルカの戦乱の世を終結に導いた強き王だったそうだ」

蒔風の質問に、聖王教会に顔を出すことの多いシグナムが答える。それを一応の説明とし、はやてが話を先に進めた。

事の発端は十年前。

教会で聖王の遺物「聖遺物」を管理する司祭が、その聖骸布を持ちだした事が始まりだ。

その結果、遺伝子情報は教会外にばらまかれ、それをを用いた研究の

唯一の成功例がヴィヴィオだそうだ。

つまり、結局スカリエッティは天才だったというわけだ。惜しむらくはその才能の矛先を間違えたという事か。

しかし、その天才性はあまりにも異常だ。

「スカリエッティは……なんでそんなにまで出来るんでしょう……」

「今の技術を軽く超えていますよね……」

そう、あまりにも出来すぎる。

それはもはや天才としての域を超えていた。

そしてその答えも、まだ推測の域に過ぎないが、はやては得ていた。

「スカリエッティは……伝説の時代を生きた人間やったからや」

「え？」

「はやてちゃん、それっていったい……」

困惑する一同。

だが、ひとりだけ納得の言った顔をして、蒔風が発言した。

「戦闘機人、人造魔導師。そのどちらもが古代ベルカ、否、下手をしたもつと昔、伝説アルハザードの時代に存在したロストテクノロジーだ……
まさか……」

「そう、ジェイル・スカリエッティは……あのその時代を生きた人間の遺伝子を元に作られた……クローンや」

その言葉に全員が驚愕する。

確かに、その説明ならあれほどの頭脳も納得がいく。

しかし、一体誰が？なんのために？

「つまり、その黒幕が評議会の連中だったという事が」

「そう。管理局はいつだつて力が足りへん。有史以来、魔導師の数は増えたと言つてもまだまだ少ないし、管理できてない世界も多い。だから、さらなる力を求め、世界を平和に導くために……」

「その身を捨てて脳味噌にまでなつて、世界の行く末を見ていこうとしたわけか……その結果が無限の欲望アンミリデット・デザイア」

管理局評議会によつて、技術の発展やさらなる平和のために生み出された科学者、ジェイル・スカリエツィ。

その身をひたすら研究に費やさせるために、探究心や好奇心を増幅させて成長させられてきた。

しかし、そんな偏りで人間がどうにかならないわけがない。

いつしか彼の暴走した探究心は誰にも止められなくなり、ついには希代の犯罪者として今、世界を騒がせている。

「……そんなことがあつたのか」

「うん……でも」

「そうや。だからと言って、許されるわけなんかあらへん。うちらは、どうやつてもあのバカを止めるんや」

「そして、もしあいつがなにも知らないなら……」

フエイトの目が少し、本当に少しだけ憐れみに染まる。
彼もまた、誰かの都合に取って作られた存在だった。

そのつらさは、自分がよく知っている。

しかし、その思いを砕くかのように、会議室に声が響いた。

『自分の出生なんて、私はとっくに知っているよ』

「ッー!？」

「おまえは……」

「ジェイル……スカリエッティ……！！！！」

フェイトが鋭い目つきでモニターに映る男を睨む。

しかしそのような感情には興味がないかのように、スカリエッティが笑い声をあげた。

『あつはははははは！！！！何を感傷に浸ってるんだい！？そんな生まれなんて関係ないねえ……私はただ！！知りたいただけだ！！！そのために行動してるし、評議会の連中ももういらなかったから「彼」に頼んで消してもらった！！！！自分の生まれなんて最初に調べた知った事項だよ？まあ、もしかしたらこの「知りたい」という感情も埋め込まれたものかもしれないのだが……どうでもいいな』

いきなり現れてベラベラと喋るスカリエッティに、フェイトが歯ぎしりをする。

目の前にいる凶悪犯罪者は、やはりどうあっても凶悪犯罪者だったのかと。

『おやあ？なんて顔をしているんだい？何を思っていたのかは知ら

ないが、勝手に思い込んで勝手に裏切られた顔をされても困るよ。
『一方的な感情は迷惑だよ』

「スカリエッツィ！！！」

フェイトの激昂。

そこにもはや意味のある言葉などはなかった。
ただ目の前に標的を絶対に捕まえてやるという殺気じみたフェイト
の声が、会議室に響いた。

そのフェイトの肩に手を当て、落ち着いておけと時風が後ろに下が
らせて前に出る。

「よくもまあ、このアースラに直で通信入れてきたもんだな。ばれ
んぞ?」

『おっと、これはこれは翼人くん。心配をどうも。しかしね、どう
やら君たちの仲間みたいな二人が私のアジトを見つけたようだよ?
そろそろ通信が行くんじゃないかな?』

「は?」

と、スカリエッツィの言葉の直後、はやてに連絡が入る。

アコース査察官とシスター・シャツハがスカリエッツィのアジトを

発見したのだそうだ。

しかし中から無数に湧いてくるガジェットに内部調査を諦めて一時撤退、現在はアジトの入り口である洞窟の前で出てくるガジェットと交戦中らしい。

「なるほど……それでもその余裕……つちゆうことは、そ
ちの準備ができたってことなんやな？」

『理解が速くて助かるよ、部隊長殿。それで、いろいろとなじみのある君たちに招待状だ。私はアジトの奥にいるよ。捕まえたくば来るがいい。まあ、来るだけの暇があればだ』

「どついつつもりだ!!」

『どうもごうもないよ。こっちでの話は終わりだ。後は管理局全体に話がしたいのでね。一旦こちらとの更新は切らせてもらおうよ』

「待て!!……」

『ではまた後ほど』プシン』

そこまで言って、通信が言ったん途切れる。

しかし、またすぐに映像が立ち上がり、スカリエツティの宣戦布告が始まった。

それは管理局すべてに対する宣言だった。

地鳴りが響き、大地を押しつけて、地の底から黄金の戦艦が出現する。

聖王のゆりかご

古代ベルカの戦乱の時代。

聖王が所持していた超巨大空中戦艦。

その武装には魔力兵器だけでなく、質量兵器も装備される「失われし脅威」^{ロキア}

『さあ！挑んでくるもどつするかも！！すべてキミたち次第だよ！！！？君たちが忌避し、封印し続けてきた最悪の力を前に、一体どつすると言つのかね！？』

と、そこでさらに管理局内の通信が全局員に通達される。
内容は至極単純だった。

《戦闘機人、総数七体と謎の巨獣三体によつて、地上防衛用巨大魔力攻撃兵器「アインヘリアル」全三機が大破》とのこと。

「な！？」

「戦闘機人……全七体！？」

「どついう事……なの？」

なのは達が困惑する。

スカリエツティの元に残ったナンバーズは残り五体のはず。

チンクの話だとさらに作り出すだけの上質な個体はいなかったそうだから急増したとは考えにくい。

ではなぜか。

「あの野郎……やりやがったな……」

「舜さん？」

「大体的見当は付いている……やつと来たか。あの野郎……」

「舜君……まさか!？」

時風がその正体を理解する。

その元凶は、彼が今まで、幾度となく戦ってきた相手だった。

暗い空間で二人の声が聞こえる。

一人はこの場から聞こえる声だが、もう一方は通信によるものだ。

通信の方　スカリエツティが宣戦布告の傍ら、「奴」にモニターを繋げて礼を言っていた。

『まさか彼女らの「存在の記憶」まで操れるとはね』

「それが俺の特権だ。あのナンバーズ達は自ら「兵器」である自分を捨て、新たな自分として生きることを決心した。だから俺はその「兵器としての彼女たち」を生み出したにすぎん。実物よりもパワーは勝るが、戦力は低いぞ？」

『構わないさ！！私はあれさえ潰せばいいのだから』

「あんな瓦礫に何があるんだい？」

『見ていてくれたまえ。そっちも早く終わるといいね』

「こっちの戦力はできるだけ貸すから、後は勝手にやってくれ。こっちは仕上げに入りたいんだ」

『おっとすまない。ではこのへんで』

た。

その様子を見て、フェイトがなのはを抱え、時風がおもむろに通信を切った。

「まったく……ガキの泣き声はうるさくてかなわん」

「舜……君？」

「だから……泣き止ませに行かないとな。ガキに泣き顔は似合わない。それに……俺はパパじゃないっての」

「うん……」

アースラのモニターに移るのは三つ。

周囲に大量のガジェットを撒き散らして宙に浮く巨大戦艦「聖王のゆりかご」

地上本部跡に駆ける、「奴」の「欠片」に「記憶」を練り込まれた数体のレプリカナンバーズ。

そして、泣き叫ぶヴィヴィオ。

それを見て涙しなかった者はいない。

蒔風ですら、その目に悔しさが溜まっていた。

だが、そのようなものはもうすでにない。

目に宿るのは、一つの決意。

今まで何度も口にしてきた。
今まで何度も胸に抱いた。

しかし今一度、もう一度言おう。

それは……世界に絶対などなくとも、その想いの存在だけは、何者にも否定されない「絶対」のものだという証明。

「必ず助ける。この身に変えても」

「舜君……」

彼の脳裏に蘇るのは、前にヴィヴィオに告げた言葉。

【此処にいるみんなは、お前を一人にしないし、呼べばすぐに駆けつけてやる】

「約束は果たされなければならない」

「うん……そうだね」

「全員、準備はいいか!?!」

『はい!?!?!』

「行くぞ……待ってるよ、スカリエッティ世界の理不尽………今度は負け
ん。三度目の正直か、二度ある事は三度あるか………勝負だ。
もう、やらせない」

翼人の、蒔風舜の

三度目にして最後の

この世界へのリベンジが始まった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers　〜約束〜（後書き）

キムチ鍋うめー！ー！ー！

と、言うわけで武闘鬼人です。

今晚のご飯はキムチ鍋！！！！

お椀に残った汁にご飯をぶち込み、啜って食うのがたまらない！！！！

アリス「私は辛いものそんなに得意ではないですね」

そっか〜〜

自分のお椀にキムチ鍋の元を入れて喰いましたよ。

かき込み過ぎてむせて嘔き出しましたけど

Oh,shit

ア「そういえばもう一月中旬ですけど、大丈夫なんですか？」

なにが？

ア「更新」

それがですね、今度は大学の期末試験とか始まったんですよ!!!

ア「あー」

だからもしかしたら、一日くらいは更新しないかもです。

ア「とか言っつて毎回更新して単位落としてるバカじゃないですかあな」

言わないで!!!

そして買いました、Fate/Zero文庫版!!!
前からあったのはどうにも大きすぎて手が出しにくかったのですが、
文庫版が出たと聞いて買いました。

やっぱり面白かったです!!!

ア「ほかには？」

ない

ア「次回、各隊出動!!!」

ではまた次回

パンツめく・・・あ、これ違うや

ア「違うでしよ」

なのはStrikers　機動六課、出陣

「全員、集合や」

はやてが一同を集める。

すでに地上ではゆりかごから射出されたガジェットと、地上部隊の魔導師が交戦を始め、市民の避難誘導を進めている。

モニターには廃墟と化した地上本部に向かうレプリカナンバーズ、ゆりかご、スカリエツァイトの様子が映っていた。

「現状、潰さんとならんのはこの三つや」

「おそらく一カ所に一体ずつ、「奴」の使役獣がいる」

「それに対してこっちはこの人数だし、高度なAMF戦が出来る魔導師は多くないから、各部署に協力していく事になるね」

「私はアコース査察官、シスターシャツハと一緒にスカリエッテイのアジト。シグナムは地上本部で待機。他の隊長格はゆりかご。そして」

「地上本部に向かうナンバーズもどきはフォワードに向かって貰うつもりや。みんな、大丈夫か？」

はやての決定に、皆が首肯して了承する。

しかしそれでも、フォワード陣の表情は重く暗い。彼らのとって、最初の大勝負。本気で本当の一本勝負なのだ。

負ければすべて終わる。

そのプレッシャーはいかほどのものか。

さらにエリオとキャロは保護者であるフェイトが部隊からは単身で、スカリエツティのアジトに向かうこともあつて不安も大きい。

それを汲んでか、スターズとライティングでそれぞれ新人たちを激励していつて、へりへと送る。

「舜君からも何かない？」

と、そこでなのはが蒔風に声をかけた。

蒔風はお前らで充分だろ、と言うが、気付いたらフォワードたちの視線が蒔風に向いていた。

もう完全に何か言葉をもらつつもりだ。

それを見て、蒔風が適当にため息をつき、それからフォワードの前に立つ。

「じゃあ……まずティアナ！」

「はい！」

「お前はなのはみたいに膨大な魔力量があるわけでも、派手な大技があるわけでもない」

「はい……」

「強く打たれば崩れ落ちるし、一人になったら敗率は一気に跳ね上がる」

「はい……（泣）」

「だが、だからこそ。お前の魂は強い。師匠譲りの不屈の魂がある。どんな状況でもあきらめず、立ち上がる強さがある。そこから這い上がってきたお前の心は、何よりも打たれ強くなっている」

「あ……」

「強き信念。優れた頭脳。見せてやれ。ランスターの弾丸を」

「はい！！」

「次、スバル」

「はい」

「今までの人生、簡単にでいいから振り返ってみる」

「……はい」

「どうだった？」

「……辛かったし、大変でした。悲しいことも、苦しいこともたくさん。楽な人生じゃなかったと……思います。でも」

「でも？」

「私は、スバル・ナカジマは、今までの人生を嫌だったとは言いません。とても楽しく、幸せなものだと、胸を張って言えます。そし

て、これから先も、ずっとずっと」

「うん、そうだ。あそこを走っているのは「兵器」としてのチンクたちだ。だが「兵器」は「人間」の道具。だったら・・・」

「だったら、私たちが道具に負けるはずない！！ですよね！！！」

「その通り！！お前がなのはからもらったのは、貫く力。敵も障害もぶち抜いて、その先の道を切り開く力だ」

「はい！！！」

「ぶち抜いてこい！！スバル・ナカジマ！！その先に、一直線に進め！！お前の魔法は、それほどに強い！！！」

「はい！！！！！」

「で、キャロ」

「は、はい」

「力は怖いか？」

「はい……」

「でも、必要な力だ」

「……」

「気落ちすんなよ。お前の力は、誰かを守る力。キャロの使う魔法は、ここにいる奴らの中でも、誰よりも優しい」

「舜さん……」

「その優しさは、フェイトからもらった大切なものだろう？ だったら、あの子を救って、証明してくれ。キャロが受け継いで得てきた力は、決して脅威などではなく、頼もしいものであるということ。」

「はい！！」

「んで………終わりか」

「ちよつとお!?!」

「はっはっはっは!!じょーだんですよエリオ君。お前には正直、感謝してもしきれないからな」

「え?」

「俺を立ち直らせてくれたのはお前の言葉だった。お前の言葉は、世界最強ですらも救う力がある。大丈夫だ、エリオ・モンディアル。お前は確かに作られた命だが、お前をここまで形作ってきたものは、お前自身のものなんだから」

「え?う、うあ、舜さん?」

蒔風が膝を折り、エリオと視線を合わせて言った。

「お前の速さは、どんなところに誰がいても、すぐに駆けつけられるものだ。お前を育ててくれた人から、教えてもらったその速さで、キャラを守り、ルーテシアを救ってやれ」

「はい！！わかりました！！！」

「気合い入れてけよお前ら！！あんな瓦礫の本部に何かあるのかは知らないが、向かってる以上何かある。本部には最終防衛ラインでシグナムとリインが張っているが、そんなものはいないと思え！！」

「はい！！」

「お前らの信念で！！！叩き潰してこい！！！」

「「「「了解！！！」」」」」

「では諸君！！準備は整ったな？そろそろ俺たちは降下ポイントだ。ティアナ、エリオ。こいつらを預けておく」

そういつて蒔風がティアナに朱雀を、エリオに白虎を刀剣状態で預ける。

「おそらく、そっちがキツさではかなりものになるはずだ。二体預ける。任せたぞ」

「はい」

そうして、準備が整った。

降下ポイントにつき、蒔風も隊長陣と主にアースラの降下ハッチから飛び降りていく。

空に飛び出し、雲を突き抜けながら落ちていつていると、背後ではフォワードの乗ったヘリが地上本部へと向かうレプリカたちに先回りし、シグナムとリインは単身で本部に直行した。

そして、空中に四つの光が灯る。

なのは、フェイト、はやて、ヴィータの四人がバリアジャケットを展開し、セットアップして蒔風と共に現場に向かっていった。

「俺マジ飛べるようになってよかったわ」

「うちらはこのままゆりかごに、フェイトちゃんはアジトのほうに直行や」

「フェイト、お前には玄武を預けておく。なんか出たらすぐに使え」

「わかった。でも舜の方が……」

そう、このままでは蒔風の手持ちがなくなる。

獅子天麟は剣として問題ないが、召喚はできない状態だ。

だからフェイトは聞いた。
手持ちは青龍のみ。しかも、「奴」まで出てくるかもしれない状況で、大丈夫なのかと。

「大丈夫だ。こっちはなのはにヴィータがいるし、ゆりかこの外ではやてが指揮をとってくれるから無視できる。問題はない。お前のほうも、リミッター外すときはしっかり俺さん特性プログラム使えよ?」

「わかってるよ。なのはも!!無茶はしないでね!!!!」

「フェイトちゃんも!!舜君のシステムがあるからって、やりすぎはだめだよ!!!!」

「それはなのはもだよ!!じゃあ、そろそろ行くね!!!!」

「頑張つてこい!!!!あの野郎は一発ぶん殴つてやるからな!!!!」

「あはは!!!!じゃあ!!!!」

そしてフェイトが森の中へと向かっていく。

向かうは宿敵、ジエイル・スカリエッティのアジト内。

決着を着けるために、金色の魔道士は飛んで行った。

「さて・・・あれか」

そして見えてきた「聖王のゆりかご」

すでに戦闘は始まっており、航空武装隊とゆりかごを取り巻くガジエットの激しい交戦が行われていた。
その下にはすでに交戦し、落とされた戦艦が二、三隻程あった。

「AMFのせいでみんな十分な戦いが出来とらん。しかも、情報だとゆりかごは少しずつ上昇して、数時間後には衛星軌道に乗って二つの月の魔力を受けることになったる」

「調べてくれたユーノ君によると、そうなたらもつ完璧な防御力を誇る無敵の戦艦になるそうだよ」

「無敵の戦艦……か。それはまずいな」

「その前にあたしたちでぶっ潰す……!」

「いくで……!みんな……!……!」

「「「応……!……!」」」

.....
.....

「とは言ったもののッ……!」

「はやて……!数が多すぎるよ……!」

航空隊に合流し、ガジェットを落としていくのは達。

しかし、一体どれだけの貯蓄があると言うのか、ゆりかごの周囲を飛び回るその機影は一向に減らず、こちらの数が減って行くばかりである。

「皆、ここが踏ん張りどころや……!数が減れば、ゆりかごからガジェットが射出される……!そこからののはちゃんたちは内部に突入、ヴィヴィオの救出と、動力炉の破壊や……!」

「ならばそのガジェットの数減らし、俺が承る……!」

はやての言葉に時風が飛び出し、なのはに魔法陣での足場を頼む。そして現れた桜色の魔法陣に、両足を広く取って構える時風。

そして数秒、息を深く取り、力を練り込み、そこから一気に真上にジャンプし、回転しながら敵に向かい、右の拳を突き出した。

「打・滅・星！！音割おとわり！！！！」

ドカッ！！ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！

打ち据えられた巨大な球体型のガジェット？型に、時風の拳が命中する。

その？型自体は、当初全くの無傷だった。しかし、殴られた衝撃が機体を振るわせ、その振動は空気を伝って周りに存在するガジェットへと共振して行った。

その衝撃に内部構造から攻撃され、次々とガジェットが墜ちていく。

「今や……!どっかから噴出口があるはずや……!」

はやての指示に、目を皿にして探す三人。

「見つかって……どこに……!……!はやてちゃん……!あそこ……!」

「どこや!?!……なるほどな。見つけたで……!私はこのままここで指揮を執る……!三人はゆりかご内部に突入……!」

「……了解……!」

「アースラはゆりかごから離れて、衛星軌道上の戦艦隊に合流や!

「!

』了解です』

「ほないくで………ここからクライマックスや!!!!!!」

t o b e c o n t i n u e d

なのはStrikers 〱機動六課、出陣〱(後書き)

やっと始められたよ最終決戦!!!

アリス「でもここからですよね？」

そうだね。

と、言うわけで私の得意技を発動しようと思う

ア「なんですか？」

「内容トントン拍子」のスキル発動じゃあ!!!!!!

ア「ここで!?!?!?!書きなさいよ!!!!!!」

下手するとフォワードの戦いとか次回と更に次回で終わるかも・・・

ア「二話で!?!?!」

下手をするとな。

いい加減なのは長すぎたよ。

しかも戦闘終わってからもなんか少し書かなきゃみたいな感じだし、少しでも早く終わらせる。

ア「手抜き!!」

は、しない!!

だけどトントン拍子だ!!!!

次回予告を!!!!

ア「次回、フォワードの戦い」

ではまた次回

数の子戦隊、ナンバーズ!!!!!!(ドーン!!!!!!)

スピノフでやってくんないかなあ

なのはStrikers、フォワード陣、戦闘開始

「見つけた!!」

へりの中で、ティアナが声を上げる。

その視線の先には黒いシルエットをした七人の姿。

捕虜となった彼女たちの「兵器としての」記憶を埋め込まれた「奴」の「欠片」だ。

その数、七体。

対してこちらは四人にフリード、そして二体の使役獣。

「そういえば「奴」って人の使い魔はいないみたいですね」

「でも六課の時に現れたあの三つ首の犬はいきなり現れたし……」

「油断はできないってことだね……」

『四人とも、準備はいい！？これからあいつらの先に回って、四人を降ろすから今のうちに……』

ドオン！！！！！！

「きゃあ！？」

「うわぁ！！！！！！」

パイロットのアルトが四人を降ろそうとヘリを操ろうとした瞬間、そのヘリを衝撃が襲った。

何が起こったのかもわからぬまま、回転して落ちていくヘリ。

その衝撃と遠心力でハッチが開き、真ん中に立っていて取っ手に手が届かなかったスバルが投げ出される。

「スバルッ！！！」

『大丈夫！！ウイングロードで何とか着地したよ！！』

ティアナがスバルの身を案じ名前を呼んだが、すぐにスバルからの通信が来てほっと胸をなでおろす。

「このまま私たちも行くわよ！！！」

「はい！！！！」

このまま投げ出されたスバルを一人にしておくわけにもいかないの
で、残りの三人も飛び降りてスバルと行流する。

しかし

「うぐあッ、ッッ！！お前は！！！！」

「エリオ君！！！」

降下中のエリオを、へりを襲った衝撃の犯人が襲いかかった。

ガリユーである。

その拳をストラダーで受け止め、そのままガリユーに連れて行かれる形で離されていくエリオ。

それを見てティアナの指示よりも早く、キャロがフリードに乗ってその後を追う。

ティアナはそれを見てスバルの傍らに着地、合流した。

「ティアア！！エリオが！！！」

「わかってる。でも、私たちがここを離れるわけにはいかない。それに相手は召喚士だから、どうしてもキャロの力があっちには必要

「よ」

「じゃあ……」

「やるわよ、私たちで。あの七人を」

「ティア……」

「なんて顔してんのよ。大丈夫よ」

スバルの表情を見てティアナが軽快に言うが内実、ティアナもまずいことは重々把握していた。

もとより四対七、否、蒔風の使役獣やフリードを合わせて互角の数だった戦況が、一気に塗り替わってしまったのだから、それは当然まずい。

しかもあつちは「奴」の「欠片」がベースなだけあって、パワーは段違いだそうだ。

「まさか召喚士がこっちに来てるなんてね……迂闊だったわ」

「うん……でも」

廃棄都市のビル群の中。

槍と一体になつたかのように構えるエリオが、ガリユーと幾度となくぶつかり合う。
しかしガリユーの装甲は想像以上に固く、なかなか好機が訪れてこない。

「キャロー!!」

「うん!!フリード!!ブラストレイ!!」

「ガアアアアアア!!」

ドオン!!!!!!

フリードの火球が大気を振動させる轟音とともに吐き出される。

その先にはガリユー。

確実に命中するコースだ。
しかし

ゴガッ!!

「なっ!?!」

「きゃあ!?!」

信じられないことに、それをサッカーボールのように蹴り飛ばし、まっすぐに打ち返してきたのだ。さらにその火球に身を隠し、フリードの股下に滑り込んでゆき、しっぽをつかんで投げ放った。

あまりにも強い力に、フリードの巨体が揺れてビルの屋上に背中か

らたたきつけられる。

その勢いは、ビルの屋上を二階分ほど下げさせるものだったが、それでも主とその騎士は自らの腹のほうへと回し、直撃を防いだのはさすがというところである。

「フリード!!!大丈夫!?!」

「ガウ」

「ねえキャロ・・・なんだかおかしい」

「うん・・・前に戦ったときは確かに速くて強かったけど」

「こんなに無茶苦茶な力じゃなかった。それに、あの子も見当たらない」

そう

この場で二人と戦っているのはガリユーのみ。
ガジェットがない以上、インゼクトがないのはまだわかるが、
こちらの体勢を崩してくる地雷王も出てきておらず、あまつさえル

ーテシアすらもないのはおかしい。

「どう思うっ？」

「多分、どこからガリユーに補助魔法をかけてるんだと思う。ここからそんなには離れてなくて、こっちの様子が見える場所」

「探せるっ？」

「やってみる。エリオ君はその間……」

「ガリユーを止める！……いくよ！……ストラーダ！……」

J a w o h l .

竜騎士の少年が、一人、蟲武人へと向かっていった。

その間に、キャラが周囲をサーチしていく。

自分と同等の召喚士。
しかもあつちは身動きの取れない状況。

ならば、見つけることはそうそう難しくはないはず!!..

「見つけた!!フリード!!..!!」

「ゴアアアアアアアアアア!!..!!」

キャロの声にフリードが即座に炎弾を吐きかける。
標的は少し離れたビルの中腹。その壁に命中し、壁が崩れてその
中から一人の少女が出てきた。

「ルーテシア.....アルピーノ.....」

しかし、その少女の様子もおかしい。
あまりにも静かすぎる。

いや、前回あったとき、彼女は無表情に無感情という、希薄な印象の少女だったことは確かだ。
しかし、全くなかったわけじゃない。バインドで縛れば悔しそうに顔をゆがめ、レリックケースを奪われた時は残念そうな顔をした。

だが今の彼女は、そんな感情すらも無く。

ただ己の召喚虫へと指示を送る電波塔になっていた。

「あ、あれは……」

「なんて事を……」

ルーテシア・アルピーノの行動は当初からかなり自由度が高かった。眠る母親を目覚めさせるがために、スカリエッティと共に行動していたが、そこはまだ子供。なんの拍子に管理局に身柄を拘束されるかわからない。

故に彼女にはあらかじめ、自我を奪い、外部操作が可能なような「処置」を施されていた。

つまりは洗脳。

しかも先日ナンバースすらも投降してしまったことを受け、いよいよまずいと思ったのか、彼女をすぐさま「兵器」としての操り人形へと変えたのだ。

なるほど、確かに合理的である。

あのナンバースを説き伏せた人物が相手に居るのに、ルーテシアを放っておけば確実に戦力は削がれる。

こうすれば揺れる事も無く、戦闘のコマとして使えると言うもの。

あまりにも合理的で、それでいて、あまりにも人の意志を無視した行為。

「ふざけるな……」

その様子に、エリオが静かに怒っていた。

ガリユーと向き合いながらも、その視線の先にルーテシアを見据え、さらにその眼は、背後にいるであろうスカリエッティを睨みつけているかのごとく形相。

「ふざけるな……！……なんでそんな……人の意志を無視した事をするんだ……！……その子はお母さんを助けたかっただけなのに、」

それを……それを利用して……」

「エリオ君……」

そう、彼だからこそわかる。

様々な理不尽に振り回され、一時はどん底まで荒み^す、ふさぎこんだ彼だからこそ

彼女の不遇と、その運命を、好き勝手に利用する者に対して、激しく激昂した。

4578

「行くよ……キャロ」

「うん。エリオ君。助けようね。絶対に!!!」

エリオが槍を切り捨てるように振り、第二形態「デューゼンフォルム」に変形させ構える。

その背後で、キャロがエリオに、さらな力を与えるよう、セカンド

モードでブーストを掛けた。

そうだ、今度は助けるんだ。

自分たちは助けてもらった。
いまでは一番大切な、お母さんになってくれた人。

その人だけじゃない。

自分たちに、力を教えてくれた人。
自分たちに、道を指し示してくれた人。

自分たちと、仲間になってくれた人。

自分たちを、育て、評価し、絶賛してくれ、ここまで送り出してくれた、総ての人達のように。

今度は自分たちが助ける番だ。

「行くぞ!!!機動六課ライトニング分隊03、ガードウィング、エリオ・モンディアル!!!あの人のようにはいかないかもしれないけれど.....」

「大丈夫!!!私がしっかりサポートするから!!!だから.....絶対に!!!」

「ああ!!!」

「「救える者は、根こそぎ救うんだ！！！！」」

そうして騎士と武人が、そして二人の召喚魔導師が、決意と洗脳の元でぶつかり合った。

.....

「はあ.....はあ.....はあ.....」

「逝きsassy%haoiu想sryj.....」

「ツツ!? キヤああああ!?!?!」

「ティアツ!?!?!」

轟音、爆破、悲鳴、驚愕

今、ティアナ達はレプリカナンバーズと交戦をしていた。

当初として、相手は七人、こっちは三人だったため、どのようにして相手全員を引きとめるかが課題だった。
それに関しては簡単な事、ティアナのフェイクシルエットで解決できた。

しかし、そこからのナンバーズによる進撃がやばすぎた。

「奴」の「欠片」が素体のレプリカナンバーズは、荒い動きである

ものの、信じられない勢いでティアナの幻影を次々と消し去って行ったのだ。

一気に三百出した幻影は、三秒後には二体になっていた。

そしてそれをどう解釈したのか、七体すべてがこの場に留まり、三人を標的として突っ込んできたのだ。

その後、一気にビルの中にまで押し込まれ、外に出ようともしそのあまりの力にあっけなく押し返されてしまい、未だに廃ビル内での戦闘を余議なくされている。

「ティアア!!!大丈夫!!!??」

「バカ!!!こっち気にしないで、後ろ!!!」

「ぬん!!!!!!」

ガゴォ!!!!!!

襲いかかってきたのはデイドのレプリカだろうか。スバルの首に向かつて振るわれたツインブレードを、寸でのところで朱雀が朱雀槍で防ぎはじいた。

しかし、敵は多い。

さらにその朱雀にウエンデイ、オットーの砲撃が襲いかかり、朱雀がスバルを押し出してから転がって避けるとそこにノーヴェの強烈な蹴りが放たれた。

そこにティアナの援護射撃。

その弾丸は連続してノーヴェの足に命中し、その向きを若干変えた。

そう、若干のみだ。

それほどまでに、レプリカの身体は強靱だった。

しかしそれでも朱雀は何とか回避し、スバル、ティアナと背中合わせに集まった。

「お二人とも、大丈夫ですか！」

「ええ、大丈夫」

「朱雀さん、ありがとう」

「いえ……しかしこの数は……私にとっても脅威ですね……」

周りを囲む戦闘機人の数は現在は四体。
全身は黒いが、そのシルエットは間違いなくウェンディ、ノーヴェ、オットー、デードだ。

そして残りの三人、チンク、ノーヴェ、セインの三人はビルの外で逃がさぬよう見張っているのだろう。

「どうやら結界などの力は使えないみたいだけど」

「それでも十分に厄介ね……あのパワー、反則よ」

「しかも相手が多いです。ここは時間を稼ぎ、エリオとキャロが来るのを待つのが得策かと」

「そうね……でもッ……！」

ドゴア……！

警戒しながら話している三人に、ライディングボードが飛んできて三人のいた場所を直接ぶち抜いた。

三人はそれを散開して避けるが、各人に向かってさらに残りの三人が回り込む。

「このままじゃ……時間を稼いでる間にやられる……！」

「あつちもそんな簡単に終わる相手じゃないと思うッ……！」

そう言つてスバルがウィングロードを天井に伸ばして、それが上を突き破る。
そうして屋上へと道を伸ばすが、それはすぐに砲撃と爆破を受けて消滅させられる。

おそらくは外のチンクとディエチだ。

完全な包囲網。

これでは逃げられなどしない。

そこからまた数秒だけ走り回り、フェイクシルエツトで身を隠す三人。

「朱雀さんはおっきくなれませんか？」

「獣神体ですか。いえ、出来ませんが・・・今のままでいい的になるだけです。しかも、相手の数が七体。これは舜でも苦戦するレベルですよ？」

そう、問題はそこだ。

当初この場はフォワード全員で戦う場面だった。

その数ならばおそらく、正面からぶつかり合い、きつかったろうが、勝利をおさめられただろう。しかし、四人は分断された。

蒔風は五体でキツイと言っていたのに、今の敵は更に+2だ。

おそらく、朱雀が獣神体となって飛び出してもすぐに落とされるだろう。

「しかし、逆にチャンスでもあります」

「そうね・・・今なら相手は四人だけ・・・まだチャンスはある」

「下手に外に出なくてよかったね」

「ええ。もしそうすることができていたら、七人同時戦闘になっていました」

「考えたくないわね……朱雀さん、スバル」

「はい」

「なに？」

「あの四人のうち……三人は私に任せてもらえる？」

「ティアア!？」

ティアナの突然の提案に、スバルが大声にならないように叫んだ。それは端から聞けば、あまりにも無謀な提案だ。

しかし、ティアナは黙って聞けと親友にデコピンして話を進めた。

「いい？今はこの状況だからいいけど、あれは命のないただの人形なのよ？つまり、しようと思えば使い捨てができるってこと。今は

多分戦力の温存のためにしないんでしょうけど、長引いていけばおそらく、このビルを爆破してあの影もろとも私たちを潰しに来るわ」

「そんな!?!」

「いいえ、あり得ます。一度引き抜いた記憶は、10%以下まで劣化しますが、もう一度使う事も出来ますし、最悪、駒は捨てにくるでしょう。それが「奴」です。目的のためなら、ある程度の犠牲は払う男ですから」

「わかった?つまり今しかないのよ。私に相手ができるのは三体。でもその内の一人でも倒れれば即座に外の三人が入ってくるでしょうし、最悪その場でドカンよ。三人でやっても一緒。一人潰せば、まとめてやられる。だから二人にはそれをさせないために、残りの四人を押さえてもらいたいんです」

「……………勝算は、あるのですか?」

「……………ふ、何言ってるんですか。私が今からやろうとしている戦術は、あなたの主人から教わった物ですよ?大丈夫です。真っ向勝負はできなくても、私には私の「強み」がありますから」

「でも……………ティア!!」

「いいから!!はやくあんだも……………ッ!!!!??」

ティアナがまだ何か言おうとするスバルを納得させようと口を開くが、そこから言葉は出てこなかった。

三人がしゃがんで隠れている壁。

その壁が一気に光の砲撃でレーザーのように切り倒されたのだ。

真一文字に切られたその高さは、三人が立っていれば頭の位置だった高さだ。

その事実にはゾッ、としながらも、さらなる追撃が襲いかかる。残った壁を突き破き、ノーヴェが突撃してきたのだ。

そしてティアナとスバル、朱雀の間に立ち、三人を二組に分断する。

おそらくはティアナが幻影の使い手であるという事に気付いたのだろう。

ならば簡単、先にそちらを潰すことが先決だ。

それを見た朱雀が、ティアナを助けに向かおうと足を動かすが、それが即座に止まった。

バインドである。

オットーによるバインドに、スバルと朱雀がしぼりつけられ、その身動きを封じられていた。

「ティアが!!」

「くっ、結界は晴れないのにバインドはできるって……どういう基準なんですかまったく!!」

目の前ではティアナがどんどん押し込まれ、視界の外へと追いやられていく。

モードをダガーにして応戦していたが、彼女は基本ガンナーだ。どれだけ持つかわからない。

朱雀がバインドを引きちぎるのは簡単だ。
あくまで強化されたのは肉体的なパワーだけであるし、オットー
人分の魔力のバインドなら容易な事。

しかし、その間にティアナはこちらの目の届かない場所へと移動さ
せられてしまうだろう。

そうなればこっちは二対一。外のメンバーが入ってきてもおかし
くない構図だ。

そうなると無理に合流するのは危険すぎる。結局三対七になる可
能性が高い。

と、なれば

苦渋の決断ではあるが、ティアナの提案通りにする必要があった。

「スバルさん！！このまま外に出て四人を相手取ります！！三人はティアナさんに任せましょう！！！」

「そんな！！つてうわあ！！！」

抗議しようとするスバルだが、朱雀があつという間にバインドを碎いてからオットーの襟首をつかんで外へと投げ放ち、その後スバルを連れて飛び出して行ってしまった。

「大丈夫です！！舜が授けたのであれば、まず負けることは……
・無いと思いますから！！！」

「でも！！！」

「もう遅いです！！きますよ！！！」

「あ~~~~~もう！！！！ティアも朱雀さんも勝手なんだから！！
こうなったら、すぐに倒してティアの援護に！！！」

「そうするのでしょうか！！！」

こうして、布陣は完成した。

しかし、どれも敵は強大。

勝って仲間を助けに行くとスバルは言ったが、果たしてうまくいくのだろうか。

なのはStrikers、フォワード陣、戦闘開始（後書き）

主人公がいない・・・

どうしてこうなった！！！！

アリス「そんなことより明日テストでしょう？大丈夫なんですか？」

一教科だけだからまだ何とか大丈夫かもしれない。

ア「その油断が命取りでしょうに」

う・・・・・・・・

ア「次回、今度は洞窟！！フェイトさん、頑張れ！！超がんばれ！！」

ではまた次回

『もう一度、私にチャンスを下さい』

『今度は必ず、あなたの全力を受け止めます』

『あなたがどこまでも全力で走れるように』

なんだかこの小説、デバイスの影うつすいなあ……

よし決めた。まさかのあいつに活躍の場と与えよう

なのはStrikers　くそれでも守りたいものがあつたんだ

フェイト・T・ハラウンは現在の状況をおかしい、と感じていた。

おそらくは隣のヴェロッサ・アコース査察官とシスターシャツハも同じ心境だろう。

と、言うのも、アジトの入口である洞窟に入ってから、一切の攻撃がないのだ。

確かに、入口での戦闘は激しかった。
しかし、この場のAMFはガジエットの発するものだけで、ゆりかごほど強いものではない。
故にそこでの戦闘はフェイトが到着してから二分とかならず終了した。

そのときは次のガジェットが来る前に内部に侵入することが第一だったため気にはならなかったが、思えばその時から相手からの攻撃がない。

「どづいつことでしょうか・・・」

「順当に考えるなら、誘ってるんだろっね・・・で、その招待客が」

ヴェロツサがそこまで言っつてフェイトを見る。

スカリエツティはフェイトを「プロジェクトF・A・T・Eの残滓」だと言っつていた。

記憶の継承の失敗という不完全な形ながらも、その一応の成功例であるフェイトの身体は、スカリエツティにとって素晴らしい研究材料なのだろうから、招き入れるのはまだわかる。

しかし、捕らえるとなると、こちらの体力を削らなければならない。まさか自分の目の前に来るまで待ち、そこで戦おうなんてことは言

うまい。

「多分………なにかあります」

「なにか？」

「わかりませんが………あの男がそのまま先に進ませることはありえません」

そこまで言っただけしばらく進み、三人の足が止まる。

巨大な扉があった。
おそらく、巨体化したフリードも余裕で羽ばたきながら入れるサイズ。

もはや鉄の塊だ。

しかもその扉には古代の闘技場のような紋様があしらわれていて、おおよそスカリエッティの研究所らしくない。

そこで一人の新たな声がした。

「いかんの。この先にかなりまずいものがある」

人型の玄武が、扉を撫でながら現れてきていた。突然現れた玄武にヴェロツサとシャツハは驚くが、出元がフェイトの懐で、彼女も真摯に耳を傾けていたため、次第に気にしなくなる。

「玄武、どういうこと？」

「なにがあるかわからぬ・・・しかしじゃ、この先はやばいぞ。正直回り道をしていきたい気分させられる」

冷や汗を流して扉を睨みつける玄武。

しかし、ここまでの道は一本だったし、壁を崩して回り道をいくのは危険だ。

洞窟ごと崩れるかもしれない。

しかし、このままここにおいても仕方がない。

思い切って玄武が一步踏み出し、その後に三人も続いて行った。

「暗い……」

「でも、かなり広い空間のようですね」

「気をつける……一体何が出て来るか分かったものじゃないか」
「うん」

なにも見えずとも、周囲を見渡しながら歩を進めていく四人。

そうして何歩進んだらうか。

ボタン！！！という音を立て、開いたときの重々しさはどこへ行ったのか、素早い動きで扉が閉められる。それと同時にこの空間のライトが一斉につき、周囲が明るく照らされた。

「ここは……なんじゃ？」

「フェイトさん！この地面のプラグは……」

「まさか、ここにガジェットを？」

その場所は円形のドームだった。しかし、なんにしる広い。

今フェイト達がいるのは入り口から十メートルぐらい。入口から反対側の出口までざっと二百メートルはあるうか、同じ大きさである巨門がそびえ立っている。

得広い円形の地面に、フェイト達が立っている細い一本の通路が一段だけ高く真っ直ぐに伸びている。そして一段下のその面積の大多数を占める床には、多くのプラグがあった。

おそらくはここにガジェットを保存し、メンテナンスなどをしていたのだろう。
それらは今、すべてゆりかごに詰め込まれ、あの空で使用されている。

そして真ん中には一本の剣がポツンと突き刺さっていた。

『ようこそ諸君！！君たちが来るのを待っていたよ！！！！』

「「「！！！！」「」「」

「スカリエツティ！！！！」

と、突如として空中に大きくモニターが現れ、スカリエツティが映し出された。

その顔は、今からサーカスの出し物を見る子供のように楽しそうである。それでいてそれにはない歪みを持ち合わせたモノになっている。

『四人だけとは少し残念だが……まあ仕方がないね。私も、自分かゆりかごを比べてどっちかと言われれば、あっちの方が魅力的に見えるからね』

「魅力的……？あんな古代の兵器を持ち出し、世界を滅茶苦茶にして、更に何人も人間を自分の好きなようにしてきたおまえは、まだあんなものが魅力的だと言うのか！！」

『魅力的さ！！私はもうあのシステムを知っているからいいがね、もし知らなければ喜んでゆりかごに突貫して内部を調べ上げたくなるだろうよ！！ま、あれもまだ、私の目的を達成するための「手段」に過ぎないのだがね』

「これ以上何をするつもりなんだ……」

『おっと……話がそれそうになったね。それで、どうだい？Fの残滓、否、フェイト・T・ハラオウン』

「……なにがだ」

『私の方へと来てくれないかね？私としてもここで君を失うのは惜しい。こっち側へと「断る！！」……だろうね』

「おまえは犯罪者だ。私は執務官だ。私はお前を捕まえるため、ここに来たんだ！！」

『犯罪者だって？はははははは！！！！そんな肩書き、非常に下ら

ん！！！それを言つなら、君の母上だつて立派な犯罪者じゃないか
！！！！』

「ツツ！！！！！」

モニターのスカリエツティが嗤う。

君を生み出した親も、彼女たちを生み出した私も犯罪者。
ナンバーズ

そこになんの相違がある？
どちらも同じじゃないか。

そんなもの君の勝手なエゴだ。
一個人の感情論で、勝手に人を裁くなよ。と

『それに君たちの所属する時空管理局のトップたちだつて、必ずしも「正義」とは言い難いねえ……身体を捨てて醜い脳味噌にまでなつて生きながらえ、私という犯罪者を生み出し、あまつさえその行為を黙認してきたんだよ？地上の英雄、レジアス・ゲイズだつてそうさ！！私の一番のスポンサー様でね、多大な協力してもらつたよ！！』

「やはりか……」

「そんな……」

その事実にはヴェロツサが苦い顔をし、シャツハが信じられないという顔をする。

そんな彼らを置いて、スカリエツティが話を進めていった。

『小を切り捨て、大を救う。確かに、合理的だねえ。だが、それが果たして正義だと言えるのかい？』

「それは……」

『ゆりかごを止めるために、その発動キーである少女を、殺す事が管理局の正義なのかい！？』

「ッ！！！！！！」

『ばかばかしい！！！！そもそも、全部を救うなんてそんなことができるはずもないじゃないか！！！！私たちは等しく人間さ！！！！救えるモノなんてたかが知れてる。おだからね、思い上がったこの世界に、私が正しい認識を与えてやるうというのだよ！！！！』

「そんなことは！！！」

『じゃあ今の世界で君はいいのかい？こんなどうしようもない世界で、君は果たして君の正義を貫けるのかい！？』

スカリエツティが高らかに言う。

世界に正義なんてない。

救えぬ者は救えない。そんなことなどできないと。

フェイトだって子どもじゃない。そんなことわかっている。

今までだって、救えなかった人がいた。

救った人より、嘆いた人の方が多かったことだってある。

それはヴェロツサヤシャツハとて同じだ。

世界は、どこまでも残酷である。

全員が救われる世界など、どこにも存在しないのだ。

「黙れよお主」

しかし

その言葉に反論する者が一人いた。

「なにも救えないじゃと？それは力の無い、弱い者だからじゃろうが。そのとき、力が足りないから救えなかった。だったら簡単だの。強くなればいい」

玄武である。

そう

彼の主が、いつも心に決めてしている事。

「救えるモノは根こそぎ救う」

主はそれを成すために、どこまでも強くなっていき、その信念を碎かれぬために、「世界最強」などと豪語している。

「結局、重要なのは「力」だ。強い者が生き残る。そしてその者は、誰かを守ってやればいい。倒すことより、守ることの方がはるかに力のある作業じゃからの。だったら、強い道を選ぶ。単純に潰すなど、弱者のやる事。殺しなど、その最たる例じゃ」

静かに言う。

ただただ、湖面のように静かに、玄武がそれだけ言い放った。

しかし、その言葉の奥底には力強さがあつた。

この場の皆を、奮い立たせるほどに。

「そうだ・・・私たちは、弱い。助けられない事もある！！でも・・・だったら、次は助けられるように、もつともつと強くなるだけだ！！！！いつかは世界をすべて救えるほどに・・・そうしてきた人を、私は一人知っている！！！！」

『ほう・・・残念だよ。君があのお愚か者たちと同じ側に行つてしまふなんて』

「嗤うな、スカリエッティ」

管理局のトップだった者たち 最高評議会やレジラス達 を、
「愚か者」と笑うスカリエッティに、フェイトが鋭い言葉でやめさ

せる。

その言葉に思わずスカリエツティの口が止まった。

「おまえには無いだろう……たとえ身体を失っても、その身が罪でまみれようと、己の世界を捨てても、禁じられた研究に手を伸ばしてでも、守りたかった大切な物が……おまえには無いだろう……みんなみんな必死だったんだ！世界の平和を！地上の安息を！自分の世界を！愛する者を……守りたかっただけなんだ……！そのために別のモノを失おうとも、それでも何かを守りたいという、強すぎる想いが、おまえにはあるのか……！そのジレンマに苦しむだけの覚悟があるのか……！辛かったんだ……！涙したんだ……！それでも守りたかったんだ……！その想いが、おまえにわかるか……！！……おまえに彼らを嗤う資格なんてない、スカリエツティ。一人安全圏で、そんなところにいるお前に、すべてを投げうった彼らを嗤うことなんて許されない……！！！」

フェイトの言葉が木霊する。

そうだ、誰だってこんなことは望んでいなかった。

でも、それでも、守りたかったものがあつたんだ。

そこまでに強い思いを持つものは、そのために苦しんだ。

その言葉を聞き、スカリエッツィはというと

『……………そうかい……………では……………お別れだ』

フエイトの言葉を聞いて、スカリエッツィがなんともあっけなく通信を切る。

瞬間、玄武が血相を変え、声を荒げた。

「まずい!!!三人とも、急いで反対の扉へ走ってゆきなされ!!!」

「玄武?」

「あれが動き出すぞ！……！フェイト嬢達は急いであの野郎の元へ向かえ！……！おおおおおおおッ！……！」

ゴドオン！……！

玄武が必死の形相で叫ぶや否や、獣神体へと姿を変えて、その巨体で真ん中に刺さっていた剣を押しつぶした。

それを見て、フェイトが気付く。

「まさか……あれは……！！ッ！！二人とも！！急いでください！……！」

啞然としている二人を押し出し、フェイトが反対側の扉へと飛びだして行く。

その状況にフェイトが唇を噛み、玄武が起き上がって悪態をつく。

『クソツタレ……申し訳ない。進路を断ってしまった』

「う、ううん……気にしないで……でも……あれって……」

『そう……たしかフェイト嬢にとっては十年も昔の話ですからな。覚えてはいないかの？』

「……覚えてるよ……忘れるわけがないよ……」

フェイトの視線のその先に、玄武を投げとばした張本人が、ドームの真ん中に仁王立ちしていた。

全身から黒い煙を噴き出して、逞しい漆黒の体躯に、三つの首、二振りの尻尾。

三対もあるその目は赤く光っており、その眼光はそれだけで射殺すかのような怒気を持っている。

その脚の爪は死霊ですらをも切り裂けるかのように湾曲し
その牙は魂ですらをも噛み砕くかのように鋭い

魔導八天が最凶の一振りにして、最強の使役獣

地獄の番犬、ケルベロス

条件によっては時風と一対一で交戦できるほどの化け物が、目の前に現れていた。

「な、なんですかあれは!？」

『スカリエツティが雇った用心棒というところですね。お気を付けてください。あれは……最悪ですぞ』

驚く二人に玄武が説明している間、フェイトは昔の事を思い出していた。

自分があれを見たのは十年前、はやてを迎えに行った時だ。その時襲撃してきたのがこいつ、ケルベロスだった。

あ のとき、自分は戦っていた時風を助けに行きたかった。

しかし、この十年でいくつもの死線を潜り抜けてきたからこそわかる。

なぜ自分はその時、助けに行こうなんて考えたのだろうか。

それほどまでに、こいつはヤバい。

魔力も何もないはずなのに、この恐ろしさはなんなのか。否、そんなものでは計り知れない禍々しさが、こいつにはある。

十年前に感じる事の出来なかった恐怖を、今、携えて

フェイトの前に、最強最悪の怪物が迫った来た。

.....

- - - - -

一方ゆりかご内部

ガジェット射出口からなんとか侵入した時風たちがたどり着いたのは、高さにしてゆりかごの下方、ちょうど前後の中間部分である。

ここからはヴィータは別行動になると、言うのも止める対象は二つあるからだ。

一つはゆりかごのキーとなっているヴィヴィオ。もう一つはゆりかごの動力炉だ。

どちらかを壊せば止まるかもしれないが、両方壊さなければならなかったとき、それではまずい。

だからここで二手に分かれ、それぞれを撃破する、というのが方針だ。

「ここからは前部のヴィヴィオと、後部の動力炉に別れるわけだが……ヴィータ、大丈夫だな？」

「任せとけて!!こいつもいるしな!!」

「……よろしく願います」

そういうのはヴィータの横に立つ青龍。

ここにくるまでに何とかヴィータの押しつけたのだ。

と、言うのもこっちは大丈夫だからとか言っただけで最初、ヴィータは一人で動力炉に行くと言い張っていた。

そこで蒔風のお説教タイムである。

移動しながらなので、青龍を顕現させてその背中までここにづくまでずっとヴィータに言い聞かせていたようだ。

「まったく……やっと聞き入れやがったんだから……おまえの身体だって、昔ほど丈夫じゃねえ。無茶すんなよ」

「まあ……丈夫じゃなくなんのは人間に近づいてるからだって思ってただけ……」

「だったらなおのこと、用心しとけ。なんかお前って、前に進んで
ばっかで後ろからグサリとやられそうだからな~~~~」

「こえー事言うなよ!~!~ほら!~!おまえらも早く行けよ!~!」

そんな会話をし、ガッ、を拳をぶつけ合ってから四人が飛び出す。

決意を一つに

この船を止める。

ゆりかご衛星軌道上到達まで、あと三時間

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers　くそれでも守りたいものがあつたんだく（後書き）

昨日はすみませんでした。

この小説のデータが紛失し、一から書き直す羽目になってしまつて・
・
・

ア「うわ、酷いですねそれは」

マジ泣いた。

号泣ものだったよ。

ア「で、今回の内容ですが」

フェイトの敵決定ですねえ。

頑張れフェイト。

負けるなフェイト。

ア「次回、いろいろなところでの戦いだよ!!!」

ではまた次回

いいじゃんか。

怪我したらなかなかなおらねえのもやり直しがきかねえのもなんか
普通の人間みてえでさ。

なのはStrikers　く乾坤一擲、必撃粉碎！く

ゆりかごとの交戦空域、右方。

そこで八神はやては全航空隊の指揮をとっていた。

しかし、いくらガジェットを落とせども落とせども、その数が減っていくことがない。

それに対し、こちらの戦力は魔導師だ。

どうあっても、体力や魔力は削られていく。

有利不利にかかわらず、このままではこちらの敗北は決定的である。

「だけど、それを引き延ばすことはできる。そうしていれば、なのはちゃんやフェイトちゃん、舜君がかたを付けてくれる。うちの仕事は、それまでこの戦況を引き延ばすことや！……！」

かといって、守ってばかりでもない。

外部から落とせるならそれに越したことはないのだから、隙さえあれば、前部に並んだ砲門を潰しにかかる。

甲高い鳴き声を上げて、怪鳥「迦桜羅」が飛来してきた。

その身に焰を纏い、武装局員をなぎ倒しながら突っ込んでくる。

それを見て、はやてが迅速に指示を飛ばした。

「総員、あれには手を出さんといて……!!」

『しかし……!!』

「あれの相手は……うちがする……!!」

今代にして、最後の夜天の主が、化け物退治に乗り出した。

本来魔導師同士の戦闘は長くても三十分を少し超えるがどうかである。

その三分の二がすでに経過し、未だに戦い続けている。

敵の人数が多いにもかかわらず、よくこれだけの時間ねばったものだ。

それでも身体にダメージはあり、現にスバルの身体は所々から出血し、唇などは始まって一分もしないで切れていた。

4631

しかし、休んでいる暇などない。

そこにオットーのレーザーのようなレイストームが浴びせられ、それをバリアで防ぎつつ離脱しながら体制を整える。

だが、相手の攻撃は終わらない。

相手の体力はこちらの遥か数倍上をいつているのだ。へばる、なんてことなど決してない。

ウイングロード上で一瞬動きの止まったスバルに、ディエチが隙有りとはかりに砲撃を連続で撃ってきた。

それをきつそうな顔をしながらマツハキヤリバーを走らせて、まるでジェットコースターのように疾走するスバル。

と、そこでその顔がさらにひきつる。

ウイングロードの先、あと数秒で自分が通るであろうそこに、チンクのステインガーが数本突き刺さったのだ。

「うっそ……勘弁してよ、ねっ!!!」

それをとっさにジャンプして、山なりに避けるスバル。

そのスバルを、オットーとディエチが狙いを定めて砲撃を放つ。

その迫りくる光に、空中のスバルはどうする事も出来ない。

が、それは結局スバルには当たらなかった。

朱雀が獣神体で飛来して、スバルをその背にのせて回避したからだ。

「ありがとう！……！」

『いえ！！こちらもなかなか抜け出せずに申し訳ございません！！あのレプリカのディーブダイバーに手を焼かれまして……！！』

そう、今まで朱雀はセインを相手にしていた。

しかし、いくら「奴」素体と言っても、一体だけなら問題ではないはず。

更に言うならセインは本来、偵察や奇襲と言ったいわゆる真っ向勝負の能力持ちではない。

なのになぜ、朱雀がここまで手こずったのか。

それをスバルが聞くよりも早く、休みなく砲撃や投擲が放たれてくる。

光線、砲撃、爆撃

更には直接の肉弾攻撃もある。

もちろん、今までも攻撃は何発か入れているし、その手ごたえもあった。

しかし、その耐久性や、再生速度が半端ではないのだ。

スバルが殴り飛ばしても、上半身をのけ反るだけで、その体勢で蹴りを放ってくる。

朱雀が斬り込んでも、あろうことが刃を腕で押えられ、反対の手で殴り飛ばされる。

「このままだとジリ貧だよ！…！どんなにやってもこっちがやられちゃう！…！…！」

『しかし、こちらにある一撃必殺の技はどれも簡単に出せるものではないです！私のは溜めに、貴女のはその後の残心に、それぞれ時間を取られます！』

「でも！…うわあっ！…！」

バチィ！…！！

朱雀の背にスバルが乗って、旋回するように砲撃をかわしながらどうするか言い合っていると、極太の砲撃が二人を襲う。

それ自体はかるうじてスバルのバリアが抑え込むが、あまりの重さに朱雀がよろめき、そこにセインが重い一撃を叩き込んで来た。

「」のッ…！」

『行けませんスバルさん！！受けずに避けてください！！！！』

「えっ！？っとお！！！！」

その攻撃を受け止めて反撃しようとするスバルだが、朱雀の忠告に慌てて身体を引いてそれを回避する。

セインはそのまま地上に着地し、チンクやオットーが追撃してくる。

「な、なんでダメなんですか!？」

『あれに接近戦はいけません!! ティアナさんと合流してから出ないと、現状では無理です!!』

「え?え!??」

『ですから!! とにかく今は他の三人を潰すとしましょう!! 行けますか!!!!?』

「は、はい!!!!」

攻められっぱなしだった二人が、ここから攻めに転じる。

ここからスバル・ナカジマの、ブチ抜き粉碎が、始まるのだ。

』行きますよ！……！』

「はい……！」

ドオウ！！！！！！

おおよそ飛翔とは言えないほどの大きな羽音を打ち鳴らして、背にスバルを乗せた朱雀が一気に空中に立つ機人たちに突っ込んでいく。

まずその風圧に、チンクのステインガーが落とされた。だが、当然それは物質であるステインガーのみだ。

その反動で身体を反時計回りに回転させるスバル。
そうする事で、うまくセインに触れることなくかわした彼女が次に
相手をするのはチンクのステインガー。

しかし、スバルの反対の拳、右のナックルはすでに準備を終えてい
る。

手首部分のギアが回転し、その力を最大増幅させて、スバルが拳を
ぶち当てる!!!

「ハアッ!!!」

キーン!!!という甲高い金属音が響き、次の瞬間

チンクのステインガーは、粉々に「破碎」された。

そこまで粉になってしまえば、もはや爆破スキルなど使えない。

スバルの拳の振動は、外部ではなく体内に深く浸透し、頭から首へ、胸へ、肩へ腕へ腹へ脚へと響き渡り、その体を内部から破壊する。

IS「振動破砕」

その能力を最大限にまで引き出し、足の運びや体重移動、拳の突き出しを以って一つの技へと昇華した、「振動拳」が炸裂する！！！！！！

4642

ドオオオオオオン！！！！

オットー・レプリカが爆散する。

ようやく一体、倒す事が出来た。

「やった！！！！」

『スバルさん！！！！危険です！！！！』

「え？」

そこに

あろうことか砲撃ではなく、その巨大な大筒をブン回して、ディエチがスバルに迫ってきていた。

しかし、スバルはすぐに動けない。
振動拳はその威力もさることながら反動も大きく、放った後は一

二秒の残心を要するのだ。

この技は最初から混線には向いていなかった。

しかし、それでも朱雀はそこもフォローできるはずだった。

ここでディエチがまさかの直接攻撃に出てこなければ。

「う、うわあ！！！！！！」

『スバルさんっ！！！！！』

ドンドン！！！！ギイン、ガアン！！！！！！

しかし、目を閉じるスバルに、いつまでたっても攻撃は来なかった。

その事態に目を開けて前を見ると、ディエチ・レプリカの頭、喉、胸の三カ所に、正確に穴が開いていた。

「……え？」

「まったく、何やってんのよスバル!!」

「!!!!!!」

その声は聞き覚えのあるもの。

スバルの一番の親友にして、フォワードのリーダーの少女だった。

肩で息はしているし、バリアジャケットはボロボロで髪は乱れて、片方のリボンは千切れたのか、後ろで一つにまとめ上げられている。

頭からは一筋の血が流れた跡まで見えたが、ティアナ・ランスタールは勝利を手にして生還してきた。

「ティアア!!!」

「行くわよスバル!!!残りは二体でしょ!？」

「うん!!!」

ティアナの言葉に、スバルが動き出す。

一体どうやって勝ったのか、怪我とかは大丈夫なのか。

聞きたいことはたくさんあったが、今はとにかく、目の前の敵を倒す事が先。

そう、終わった後に聞くんた。

もはや「階」なんてものは意味をなさず、「部屋」や「フロア」なんて区切りもなく、ダンジョンのようになっていてそこをティアナは必死に走り回った。

自分には一撃であれを吹き飛ばす手段などありはしない。しかし、蒔風との模擬戦で知ったのだ。

私には私の勝ち方があり、それは絶対的にあいつらに有利だという事を。

「はあ……はあ……はあ……クロスミラージユ、どれくらい集まった？」

《蒔風さんのデータから見ても、まだ55%に届くかというところ
です。まだ足りません》

「そう……だったら今度は……こうしてみる、か……！」

ティアナが幻影に身を隠し、ノーヴェに向かって弾丸を数十発撃ち放った。

しかし、相手の身体は強靱だ。そんなものは意に介さない。瞬時にティアナの居場所を見つけ、そこに拳を叩きこむ。

それをダガーの刃で滑らせるように受け止め、再び幻影で身を隠す。

さっきからこんなことばかりをしている。

飛び出してから場所移動、不意打ち、横っ面、正面からの攻撃、フェイクシルエットでのフェイント、ダガーでの攻撃

それらすべて、命中してはいるのだがとてもではないが決定打とはならない。

それでも、どうやら核となっている部分があるらしく、そこは全身くまなく撃ち抜いた結果、ガードをしている三カ所だとわかった。

すなわち、頭部、首、胸部の三力所だ。

だがわかったからと言って、現状が変わるわけではない。
そもそもティアナの攻撃など効きもしないのだ。

異常な再生速度はこちらも同じで、銃弾によって穴が開いたところで、すぐに再生して埋まってしまう。

（私、ホント幻影使えてよかった……じゃなきゃとっくに押されまくって一発ダウンよ……）

そう、それでもティアナがまだ生き残っているのは、ひとえにその幻影の恩恵だ。

やられそうになればそれで姿を隠し、幻影を突撃させてから自分が死角から撃つことも可能なのだから。

だが、それをもつてしても敵三人はすざまじかった。

この廃ビルも、最初はただの廃棄された埃塗れのビルだったのに、
今では三人の攻撃の余波による衝撃で完璧に廃墟になってしまった。

(でもまあ……この調子なら行けるかしら……クロスミラー
ジユ、あとどれくらい?)

《残り、35%と言ったところですね》

「(だったらこのまま同じように……)(ッッ!?!?!?)」

ザキッ、シユカンッ!!

ティアナが首筋に悪寒を感じ、とっさに背をもたれて隠れていた壁
から離れる。

先ほどの音は、ちょうどその位置にツインブレードが貫通してきて、
鉄のように交叉した音だ。

「うっそ……もう見つかった!?まさか……やばっ!?!?!」

そこにドゴンツ！！という轟音をあげながらノーヴェエの拳が飛んできて、それを頬に一筋の切り傷を残しながらも、紙一重で何とか回避するティアナ。

ノーヴェエの腹部にゼロ距離で銃弾を撃つて後退させ、自身も距離を取る。

だがその真上、穴のあいた天井から、ライディングボードに乗ったウエンディが、ティアナを押しつぶそうと飛び降りてきた。

それをダガーで受け止め、横に落とそうとするが、受け止めた瞬間ボードの重みが軽くなった。

降りてきた直後に、ボードから飛び降りたウエンディが、もう一つのボードで殴りかかってきたのだ。

それとティアナは腕の力を抜き、頭上のボードを横に落として、ボードでボードをガードする。

が、そこでツインブレイドが迫ってきて、空いたダガーで防御するが、腕が弾かれてしまう。

そして無防備になったその上体に、ノーヴェエのハイキックが叩き込まれた。

「ぐっ、あああああああああああ……!!!!!!!!!!」

《Sir!!!!》

ティアナの身体がテニスボールのように跳ね、廃ビルの隅から隅に飛んで行った。

「グッ……ああ……」

《大丈夫ですか!?!》

「ええ……でも……地面が揺れてるわ……」

《!!Sir!!!!七時の方向からきます!!!!》

「くそっ……たれええええええええええ!!!!!!!!!!ク口
スファイア……!!!!!!!!!!」

《Shoot!!!!》

「シュー……トッ……!!!!!!!!!!」

しかし、その動作はいかにもイラついているかのようにも見えた。

敵のテイアナは、カモ魔力も、自分たちよりもはるかに下だ。にもかかわらず、仕留められないのはどういう事か。

それはただ単に、フェイクシルエットによるまやかしによるものか。否、それならばとうに解析が済んでいる。

割り出しまで五秒ほどかかりはするが、本人かどうかの識別は可能だ。

現にそれを見破り、先ほど隠れていた対象を吹き飛ばしたばかり。

だがそれでも対象は倒れない。

こちらの一撃は確かに入った。

その一撃は相手を行動不能にまで陥れるほどのものだ。

なぜ、倒れないのか。

だがそんなことはどうでもいい。あと数発でも叩きこめば終わる。そう、これは作業。プチプチと丹念に潰していくだけだ。

と、そこで敵が行動を起こした。

ギリギリまでシルエットで隠した弾丸が、ノーヴェ・レプリカの眼前に現れたのだ。

それに片腕を振ってなんでもないように弾くノーヴェ。

それに反応して、デイドが双剣を構えて発射元に向かって行く。対象は壁に隠れている。穿つ事はあまりにも容易だ。

デイドの後方ではウェンディがボードを、壁から飛びだしてくるティアナを撃つために構えた。

が

ギュガガガッ！！！！

ズ・・・・・・・・ズン・・・・・・・・

重い音を鳴らし、床を振動させて、ウエンディ・レプリカがライディングボードを落とした。

その身体には、頭部、喉、胸部に穴が開いており、直後、その黒いシルエットがグズグズと崩れて崩壊していった。

足元の床には撃ち抜いたであろう弾丸がめり込んだ穴が三つ開いていた。

その事態にノーヴェ・レプリカが振りかえり、デイド・レプリカがなおも変わらずティアナのいるであろう壁に向かって双剣を振り

降ろす。

しかし、それは壁を崩していったのみで、その先のティアナを切り裂くことはない。

壁が崩れて、そこから現れたのは、ダガーモードのクロスミラージュで双剣を受け止めたティアナだった。

「こうやって剣の根本を押えて、足の構えさえしっかりすれば、非力な私でもなんとかだけでも受け止める事が出来るのよ」

《お見事》

その言葉と共に、クロスミラージュの片方をゼロ距離から眉間にピタリと押し当てた。

「BAN^{バン}G、よ」

《Shoot》

ユラリと立ち上がってくるティアナに、ノーヴェ・レプリカが後ずさる。

その何もかもを見透かしたような瞳に、一体この「欠片」がなにを感じたのだろうか。

ティアナがやったのはまず、敵の行動パターンの収集だった。それをクロスミラーージュがまとめ上げ、一つの対策ファイルともいえる物を組み上げたのだ。

だが、それはあるだけではどうしようもない。

敵が動き出したのを見てファイルを開いても、先がわかるころにはもう敵はその行動を終えている。いわば格闘ゲームでいちいちコマンド表を見ながら対戦をするようなものだ。

ならばどうするか。

いや、そんなものはどうするか、などという疑問にするのもばかばかしい事だ。

基本、そのような事をする者は皆、コマンドを覚えて対戦に挑むのだから。

そう、ティアナ・ランスターは

ただ単に敵の行動パターンを、すべてその頭に叩き込んだだけだ。

そのティアナが、今不敵な笑みを浮かべながら、ノーヴェ・レプリカに歩み迫る。

そう宣言してから、あとは二分もかからなかった。

実際、反撃からは五分もかかっていない。

今までの二十五分はすべて情報を集めている時間だった。

「さあ、行くわよクロスミラージュ！！スバルを助けに！！！！」

《YES , Sir!!》

そうして、ティアナはスバルの応援に駆け付けたのだ。

おそらく、こちらはもう大丈夫だろう。

しかし、不気味な事に

いまだに紅蓮の断罪者は、現れていない。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers 〱乾坤一擲、必撃粉碎！〱〱（後書き）

アリス「なんと言うティアナ無双。スバルの頑張りが何だか薄くなりませんか？」

ホントだったらこの二人分けて書くつもりだったのに……
どうしてこうなった!？

ア「無計画め」

褒め言葉だ

ア「次回、……誰になんでしょうか？」

さあ？これから書くからなあ……

ではまた次回

夢見て憧れて、必死に積み重ねてきた時間。どんなにつらくてもやめなかった努力の時間は、絶対に自分を裏切らない

なのはStrikers　↳さらなる脅威

地上本部跡地

起動六課ライトニング隊副隊長、烈火の将シグナムは、リインフォース？を従えて、ある人物の背後に立っていた。

その人物の名は、レジアス・ゲイズ。

二人の秘書を連れて、崩れて落ちてきた自分の部屋のデスクに手を当てながら、何かに思いを馳せていた。

「……………何か用か？」

と、そこでレジアスがシグナムに振り返らずに聞いた。

別段隠れていたわけでもなく、シグナムは普通に後を付けて姿を見ていただけだったので、気づかれるのはおかしなことではない。

「……………いいえ、特には」

「そうか……貴様はゆりかごの方に行かなくていいのか？」

「頼れる仲間が、いますので」

シグナムが答える。

そこで今度はリインがレジアスに質問した。

「公開意見陳述会の時、私とヴィータ副隊長はこの空で一人の騎士と交戦しました。騎士の名は、ゼスト・グランガイツ。書類上、既に故人とされている人でした」

リインの言葉に、二人いる秘書の内の一人が「え？」と驚愕の表情を浮かべる。

それに対し、レジアスは静かに振り返って聞いた。

「……それで？なんだというのだ？」

「そして、彼が死亡した事件に、あなたが少なからずかかわっている情報がありました。もしかして、あなたはあの騎士を、……」

そこまで言ったリインに、レジアスが何かを諦めたかのように天を仰いで言った。

「それは貴様にではなく、あいつに言わねばならんことだ……みつともない、言い訳をな」

「それは一体……」

「言ってもわからん。理想だけを追い続けられる、貴様らのような若い者にはな……だが、それをあいつに話し終えたとき、おそろくわしは……」

「オレがお前に復讐すると？そんな風に思われていたとは、心外だな。レジアス」

「！！！！！！」

いきなり聞こえてきたその声に驚いて、シグナムが振り返る。一方、特に驚きもせず、レジアスもゆっくりとそちらの方に振り返る。

そこには先日、ヴィータを落とした騎士がいた。

「デアボリックエミッション！！！！！！」

ドズオ！！！！！！

はやての空間攻撃魔法が、迦桜羅に向かって放たれる。だが相手は空中を自由に飛び回す怪鳥。その攻撃範囲から悠々と逃げのび、旋回してから再びはやてに向かって突進してきた。

それをはやてはバリアを張って受け流し、息を荒くしてぐらりと揺れた。

もうこのような攻防を幾度となく続けている。はやてはチャンスさえあればすぐさま攻撃魔法を向けるが、機動力ではあちらが完全に上だ。

なのはのように砲撃に優れていたり、フェイトのように高速戦がで

きるならばまだ違ったろうが、はやての主力魔法はあくまで空間魔法での殲滅攻撃。

まさに後方から指揮を飛ばし、止めの一撃を叩き込む司令官の立ち位置なのだ。

だが今はそうも言ってられない。

現状全局員はガジェットと交戦していて手一杯だし、そもそもこの迦桜羅とまともに交戦できる者などいないだろう。

だから自分がやるしかないのだ。

そうはやては思っこの怪物を引き受けたのだが……

「あかん……動きが速すぎる……うちの魔法じゃ狙いきれん」

先ほども言った通り、やはりすべてはそこだった。

速い

ただそれだけのことなのに、あの大きな的に当てることすらできないのだ。

一方、あちらからの突進は、直撃こそしていないものの、魔法陣のバリアで受けて流すという対処しかできないはやては、徐々にその魔力と体力を削られていった。

「どつすればいいんや……………このままじゃ……………」

このままではこちらが墜ちる。

そうなってしまっはこちらの隊は総崩れだ。

指揮官の自分が落ちるわけにはいかないし、この怪物を、他の局員に向けてはならない。

ゴアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!

!!!!!!

「ッ!? キャロツ!!!! 準備は!?!」

「出来てる!!!! 行くよ、エリオ君、危ないから下がって!!!!!!」

天地貫く業火の咆哮、遙けき大地の永遠とわの護り手、我が元こに来よ、
黒き炎の大地の守護者。竜騎招来、天地轟鳴、来よこ、ヴォルテール
!!!!!!」

キャロの召喚に応じ、地面に現れた巨大な魔法陣から、彼女の最強
の召喚、アルザスの守護竜「ヴォルテール」が召喚される。

しかし、なぜいきなりこんな状況になっているのか。

簡単である。相手もまた、究極召喚をしてきたからだ。

究極召喚「白天王」

それこそが彼女、ルーテシア・アルピーノの最強の召喚だ。

出てきた姿は・・・そう、ヴォルテールが「古竜」というならば、
こちらにはさしずめ「蟲竜」とでも言うべきか。

名前の通りに白い体躯、硬質な外骨格、それを支える筋肉、半透明の膜状羽は昆虫を思わせ、人型に近い体であり、ヴォルテールと肩を並べるほど大きい。

そして召喚から数秒が経ち

二竜が一気に激突した。

大地を打ち鳴らし、大気を揺らし、遠いゆりかごまで響いてるのではないかというほどに大きな咆哮をあげて、地上に立つ巨竜二体は拳をぶつけ、衝突した。

その一撃で地割れが起き、胸部からの砲撃や、口部からの火炎で周囲のビル群がなぎ倒されていく。

時風が言ったことは正しかった。

これは災害である。

ただの大きな力ではなく、これは自然の猛威なのだ。

いくら大きな力を持つとも、星の息吹にかなうはずはなく、それに対抗しうるのは、同じく星の力を受けしモノだけだと。

しかし、その白天王の動きがどうにも荒い。
と言うのも、動作がいちいち大きいのだ。

殴る際には無駄に振りかぶり、魔力砲を撃つ際にはわざわざ最大まで溜めてくる。

明らかに常軌を逸した攻撃。
ただ「白天王」という巨大な力を使っているだけの動作。

武器を持った人間が、むやみやたらとそれをぶん回しているようなものだ。

もしこれが、ルーテシア本人による召喚で、本人による意思疎通だったならば、こうはならなかっただろう。

的確な攻撃、適度な威力を以って、ヴォルテールを押し込み、そして勝利していたに違いない。

あまりにもあっけなく、絶望的なほどに。

しかし今の彼女は「ルーテシア」ではないのだ。

洗脳による司令塔。ただそれだけの存在となっている彼女に、白天王を操りきることなど不可能に決まっていた。

絶大な信頼を寄せ、常時自立行動を許可しているガリユーであればまだ大丈夫であっても、白天王などという、切札にしか召喚しない物は、暴走させてしまうのがオチである。

むしろ逆に、白天王からルーテシアに対する警告やエラー、力の逆流で、ルーテシアの脳がパンクし、回路が焼き切れ廃人になってしまいかもしれない可能性まである。

「エリオ君！！このままじゃ！！！」

「くっ……一体どこまで……誰かを利用すれば気が済むんだ、スカリエツティ！！！！！」

ドゴオ！！！！！！

エリオの渾身の斬り払いに、ガリユーがその装甲にひびを受けながらビルの屋上に激突して埋まる。

ガリユー自身も当然、強化されている。
しかも今は白天王から受ける負荷で暴走したルーテシアによって、
過大な強化までされているのだ。

全身からは血を流しながらも棘が生え、全身の武装を強制解除されていた。

それにもかかわらず、エリオはガリユーに肉薄、否、それどころか

善戦していた。

全身から電流を迸らせ、総ての身体能力を底上げするという、模擬選の時に蒔風すらをも一時的に焦らせたエリオオリジナルの強化魔法で、此処まで追いつめてきていたのだ。

「ガリユー、君はそれでいいのか!!!??君の主が、あそこで苦しんでいて、それを助けられなくて悔しくないのか!?!」

そのエリオが、ガリユーの落ちたビルに着地し、全身の力を込めて叫んだ。

主を救ってやらないのかと、苦しんでるあの子を、助けてはあげないのかと。

無論、今ガリユーを動かしているのは強制的なルーテシアからの命令で、それに逆らう事は、簡単に出来るものじゃないという事を、

エリオはよく理解している。

だが、それでも彼は言った。

思いのままに、その胸に想ったその言葉を。

「ルーテシアのことを想うなら、時には主の命めいにも逆らうんだ！
！あらゆる手段を使ってでも助けるんだ！！命を懸けても助けたい
んだろ！？だったら、ここで僕と戦ってる暇はないはずだ。あの子
を助けたいのなら、僕らに力を貸してくれ、ガリユー！！！！！」

自分よりも小さなその少年の言葉。

その言葉に、ガリユーが今までの攻撃すべてよりも、身体の奥に何か一撃を叩き込まれた気がした。

そして、咆哮を上げる。

全身の関節の節々から血が噴き出し、腕を掻き毟ってその武装をはぎ落とす。

そうして眼の色は赤く、一つの意志と、使命に灯った。

「……………行くよ、ガリユー。白天王はキャロが押さえてくれている。その間に僕らでルーテシアを捕まえて、まずは一旦の落ち着かせるんだ!!!」

「ガアア!!!」

ダンッ!!!と地面を抉って二人が跳躍し、ルーテシアへと向かう。

主の指示に従って、その全身全霊を以って押さえつけている。

彼もまた、目の前の少女を救うために。

そうして、ガリユールとエリオがルーテシアもとにたどり着く。
場所はまた別のビルの屋上。そこでルーテシアは叫び声をあげて
いた。

「う、うあ………アアアアアア！！！」

そのルーテシアは今、頭を押さえて暴れまわっている。
全身からは魔力を吹き出し、額には青筋が浮き、頭を抱えて振り続
けているのだ。

おそらく、全身に激痛が走っており、それをやめようとも洗脳によ
ってやめられず、延々と苦しんでいる状況なのだろう。

そのルーテシアを見て、エリオがつらそうな顔をする。
と、その隣にキャロが降りてきた。

「ヴォルテールは？」

「白天王を押さえてくれてる。あんまり時間はないよ」

「うん……」

そう言って、手をつないでルーテシアのほうへと歩いていく。
魔力の渦が襲いかかり、時折魔法弾となって飛んで来ましたが、それはガリユールがすべて弾いてくれた。

しかし、その魔力の渦で二人は横から押されたようによるめき、更には薄い切れ込みが足や腕、頬にも入り、うっすらと出血していく。

それでも二人は止まらなかった。

まるでそんな障害など、何一つとしてないというように。

そうして、二人がルーテシアのもとへとたどりつく。
世界に置き去りにされてしまった少女を助けるために、二人はその
手を取って、強く握りしめた。

「大丈夫・・・大丈夫だから。私が制御を受け持つてあげる。あの子をこれ以上、苦しめないであげて・・・」

「今まで一人で何もかも背負い込んで、大変だったと思う。でも大丈夫。君のお母さんも、友達も、全部一緒に、守ってあげるから！」

「う、あああああ！！！！あああ！！！！あああああああ！！！！
あ・・・ああ・・・」

キャロがルーテシアのデバイス「アスケレピオス」に触れて、白天
王の制御の補助を始める。

こうすることでルーテシアの負荷を下げ、彼女の暴走を止めていく

のだ。

それと同時に、彼女の洗脳も解いていく。早くから封印魔法などの才覚を発揮していた彼女なら、この程度の洗脳を解くことなど、造作もないことだった。

癒しの魔法

キャラの魔法は、最後まで優しい魔法だった。

そしてエリオが、身を以ってここまで来てくれたのだ。自分のために動いてきてくれる人がいる。今までそんなのは虫たちしかいなかった。

徐々に正気を取り戻していくルーテシアは、それを何とかわからなかった。いったいどうして、彼らは自分のために涙して、怒って、ここまで身を賭してくれるのか。

「そんなの、簡単なことだよ」

「友達に、なりたいたからですよ。ルーテシアちゃん」

「とも……だち……」

「相手の目を見て、しっかりと名前を呼べば、その時から友達だつて、教えてくれた人がいるんです」

「僕たちは、逃げない。そんな弱いことはしない。ここまで強くなつたのは、誰かを助けてあげたかったから。だから、助けに来たよ」

「う……うあ……でも……おかあさんが……」

「大丈夫。今、その人を助けに、私たちのとっても頼もしい人が戦っているはずだから」

「まずい！！二人とも、逃げんよ！！！！」

と、そこで今まで黙っていた白虎が人型に現れ、二人を担いでそのビルから跳んで逃げる。

ルーテシアのほうはガリユーが抱えて行った。

そうして、少し離れたビルの上で、声のした方を向く。

そこには紅蓮に燃え上がる断罪者の姿があった。

最初からすでに立ち上がり、その尾を手に持ち炎剣として振るう者。

サラマンドラが、二人を視界に収め、殺気を炎とともに放ってきた。

「あ、あれは！……！」

「確か、地上本部を切り倒した怪物……」

「ヴォルテール！……お願い！……！」

その化け物に一瞬引きながらも、キャラがヴォルテールに指示を飛ばす。

彼ならば、いかなる敵であろうとも負けるわけがない。そう思った考えで、キャラは信頼を以ってヴォルテールを、向かわせた。

サラマンドラの役目は「断罪者」である。

そして、命あるものはどんなに小さくとも「罪」を持って生きていくものだ。

それはヴォルテールとて同じこと。

元が自然だろうとなんだだろうと、命があれば罪があり、罪があるならば、サラマンドラは切り裂くことが可能なのである。

「ッー!!ガリユーー!!今から言う場所に、僕たちをここまで運んできたヘリがあるから、ルーテシアをそこまで運んで!!」

「ヴォルテール!!大丈夫!?いける!?!」

キャロの声に、高々と咆哮を上げるヴォルテール。
いまだ戦意は衰えず、眼前の断罪者をにらみつけている。

ガリユーがエリオの教えたポイントに向かい、ルーテシアを運んでいき、キャロがヘリに連絡して彼女の保護を頼んだ。

それを見届けてから、獣神体と変わった白虎にエリオが、フリードの背中にキャラロが乗って、ヴォルテールと並んでサラマンドラと対峙する。

「二人とも！！準備はいい！？」

「はい！！行くよ！！キャラロ！！！！」

「うん！！！！」

敵は紅蓮の断罪者。

白虎は前回戦って、朱雀とともになんとか勝った。

しかし、その朱雀は今はいない。

代わりにいるのは、頼もしい力を持った、一人の騎士と、竜召喚士。そして彼女のしたがる二竜。

「スバル!!そこッ!!!」

「振動破碎、振動拳ツッ!!!」

ドオン!!!

スバルの一撃に、ついにチンク・レプリカが沈黙する。

ティアナが合流してから五分後には追い詰め、こうして残りはセイ
ン・レプリカ一体のみ。

しかし、朱雀が言うには、ここからが大変だという。

「そういえば……どうしてあれには触れちゃいけなかったんです
か?」

「ええ……それはですね……」

朱雀が説明し始めた。

それはティアナがまだ応援に来ておらず、最初にセインと戦っていたとき。

三体がスバルに向かい、自分のところに一体のみ。
朱雀は当然、まずいと思っていた。

しかし、最初こそそこを突破するのは簡単だと思っていた。
相手は一体だし、最悪、いや、最善ここで倒してしまってもいい。

それに相手はセインだ。攻撃は五体による徒手空拳のみ。

いったいそれであそこまで手こずるなんて思う者がいただろうか？

朱雀は軽くあしらってからセインをまいていこうと考えていた。だが、そんなことは簡単にいかないと、瞬間一発で悟った。

朱雀が人神体状態で、朱雀槍を突き出し、セインに牽制してからそこを通過しようとする。

しかし、セインは全く動かなかった。
そして槍がズプリとその胸に「入っていった」

「刺さった」のではない。「入った」のだ。

IS「ディープダイバー」

それをこのように使用してくるなどと、セインはしてなど来なかった。

こんなことをしてもあっちの攻撃は通らないが、こちらの攻撃も通らないからだ。

つまりはしても無意味だということ。

しかし、こいつは違う。

そのままスッ、と腕を朱雀の胸に突き出して、通過させるセイン。

「?・・・・・・・・ツツツ!?オオオオオオオツツツツ!!!!!!」

そして直後、朱雀が悲鳴にも似た雄たけびをあげて、弾かれたようにセインから後退した。

胸を見ると底の部分の服は千切れており、まるで無理やり何かを突っ込んで破れたようになっていたのだ。

「これは・・・・・・・・かなり厄介ですね・・・・・・・・」

セイン・レプリカがしたこと。

それは自分のいた場所の物質を押しつける、ということだ。

もしオリジナルのセインが壁に潜っているときにISを切って出現したらどうなるか。

そうすればおそらくは壁に押しつぶされて、セインは壁の中で圧殺という面白い死体になっていただろう。

だが、このレプリカは「欠片」が元だ。その強度はオリジナルよりも上。

つまりこいつならば、壁の強度の負けることなく、逆に壁という物質を押しつけて破壊することが可能なのだ。

これが朱雀が手こずった理由。

決して触れてはいけないという理由だった。

「相手は近づいてくるだけです。そして体が重なった瞬間、実体化するだけでその部分を抉り取る。そんな相手に、肉弾戦ができますか？」

「そんなの……反則じゃん……」

「しかもこちらの攻撃はすべて素通りなんですよね？ いったいどうすれば……」

だがそこで朱雀が人差し指をあげて策を言う。

「方法が……ないわけではありません」

「ホントですか!？」

「はい。最初はティアナさんにとどめを刺してもらおうと考えてましたから」

「私にですか？」

「はい。ですが、ティアナさんはまだあれを一発で殲滅するほどの砲撃魔法は持ち合わせていません。ですから最初に考えた案はなし

になりました」

「最初の……ですか？」

「……私が獣神体で突貫し、あいつが体内で実体化した瞬間をお二人に攻撃してお任せする、というものです」

「そんな……！」

「しかし、それは言った通りの理由でできません。いや、こづいづのものなんです、助かりましたよ」

「そんな笑いながら言われても……」

「ですので、第二案です。まあ、これも変わらないのですが……」

「ど、どんな……ですか？」

「あいつが実体化するタイミングは……一回食らっただけですが何とかわかります。だから」

「あえて体を素通りさせて、攻撃の一瞬を回避してその隙に攻撃……」

・・・ですか？」

「そのとおり」

その提案に、ティアナもスバルも血の気が引ける。

一瞬間違えば、間違いなく致命傷。良くても戦闘続行は不可能だろう。

しかし、反論しようにも、今はその手しかないのも事実。

さらにそれを実行する朱雀のプレッシャーはいかほどのものか。

「いきますよ・・・なあに、ティアナさんの先読みと、スバルさんの一撃があれば、すぐに終わります」

そう言って無理やりにも笑いかける朱雀。

正念場は、ここからだ。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

ゆりかご内の前方。

そこをなのはと蒔風は進撃していた。

その過程でガジェット群が飛び出してくるが、正直言って話にならない。

A M Fが働いていても、それはなのはに聞くというだけのもので、
蒔風には何の縛りにもなっていないからだ。

蒔風が剣を投げ、薙ぎ、突き、ガジェットを鉄クズにしながら、そ
の後をなのはが追う。

「うつとーしいな!!こいつらは!!!!」

「舜君!!一人でやってて大丈夫なの!?身体の方は・・・」

「ここでお前が砲撃撃っていく方がややこしくなるっての。ただえ
さえ魔力食う場所なのに、そんなことに力注いでる場合じゃないだ
ろうがい!!!!」

蒔風が後ろから聞こえるなのはの言葉に応えながら、なおもガジエ
ットを撃破して先に進む。

そうしていて、どれだけのガジェットを倒したか。

ついに、到達した。

「ヴィヴィオツ！……！」

「大丈夫か！？」

聖王の間

そう呼ばれる場所の最奥に、玉座が一つこしらえられていた。

そこにしばらくつけられて座っているのは、幼き少女。

なのはと蒔風が助けに来たヴィヴィオは、ぐったりとしてそこにいた。

「……なるほど……あそこに鍵となる人物が座る事で
「ゆりかご」は聖王を認識し、行動を起こしているのか」

「でも……ヴィヴィオは意識がないみたいだし……」

「おそらく狡こすつからい奴が指示だけをどっかから出してんだろ？
車のキーと運転手みたいなもんだ。ほれ、とにかくあそこから引っ
ぺがして、玉座を落とすぞ」

「うん!!今行くよ、ヴィヴィオ!!!」

そう言って走り出す二人。

しかし、玉座まで残り三メートルというところで、謎の衝撃に二人
が打ち払われて弾き飛ばされる。

なのはには何が起きたのかわからないが、時風は肌に残る感覚で分かった。

「奴」の「欠片」だ。

だが何故ここにいる？

あれらはすべて地上本部に向かったはずではなかったのか!?

その疑問を残したまま、黒い影が玉座の裏から飛び出し、時風をひつつかんで玉座の間の後方まで連れて行った。

「舜君!!!!!!」

なのはが連れていかれる時風に手を伸ばすが、その瞬間、二人の目の前に巨大な壁が上下から出てきて、重い音を打ち鳴らして、二人を寸断した。

こうして、玉座の間は二部屋に分けられた。

後部に時風、前部になのは。
間には分厚い壁がそびえ立つ。

「くそっ！！後ろの扉も閉められてやがる……………このまま俺らを各個撃破するつもりか？」

後部の時風が悪態をついて壁を殴る。

その音や力の浸透から、厚さは一メートルほどもある鉄板である事と解り、更に力を込めてそれを破ろうとする。

『あゝらあらあら。そんなことをして、ここの敵をあっちになだれ込ませるきですかあ？』

「!?. . . . おまえは.」

と、そこに声が聞こえてきて、振りかえるとそこにはモニターに映ったナンバーズ04、クアットロがいた。

そこに映る彼女は眼鏡をかけておらず、目もつり上がってなんともキツイ顔に変わっていた。

「おゝ、怖い顔してんなあ。でも付き合ってる暇はないんよ、元メガネちゃん。こっから先に進ませてもらうとするよ」

『それはいけませんわね。聞いてなかったんですか？「敵をあっちに送ってもいいんですか？」って』

「なに？」

クアットロのその言葉に呼応するように、床からズルズルと黒い影が現れてきた。
それは壁の方からも現れ、時風がバックステップで部屋の真ん中にまで下がる。

そうして最終的に、取り囲むように八体も出てきたのだ。

「……敵ってこれか？」

『ええ、そうです。あなたの足止めにこれ以上有効的な物はないでしょう？』

「……随分と安く見られたものだな、クアットロ」

『あは？』

「この程度の「欠片」で、俺を止めるつもりだったとは、浅はかなこった」

蒔風が鼻で笑いながら嘲笑する。

だがそれをもつてしても、クアットロは余裕の表情を崩さない。

それどころか、より硬骨な表情を浮かべ始めたのだ。

『キヤははははは！！！そう思います！？思い上がってますね、翼人！！！これを見てもそう言えますか！！！！！？』

クアットロがモニターの向こうで指を鳴らす。

すると「欠片」が姿を変え、一つ一つがヒトの形を取っていく。

黒いままのそのシルエットは、蒔風にとてもよく見覚えのあるものだった。

- ― 一体は小さな姿で小竜を従え
- ― 一体は槍を振るう少年の姿
- ― 一体は拳を構える少女で
- ― 一体は二丁拳銃のガンナーだ。

更に一体はポニーテールに剣を構え

― 一体はハンマーを肩に担ぎ

― 一体は鎌を手に握り

― 一体は魔導師の杖を時風に向けていた。

機動六課スターズ、ライティング両隊の前線メンバー総勢八人。

その姿を模した「欠片」が、時風を取り囲んでいた。

「あのお方」は愚かな妹たちの昔の記憶とやらを埋め込んで再現してましてね？だったら私が集めた機動六課のデータを埋め込んでもできるんじゃないかな？って思ったんですよ。あは やっぱあり私ってばなんて天才でしょう」

「……………三流が」

「ウフフフフ……なんとでもいいなさい！！今あなたを取り囲んで、追い詰めているのは間違はなく私！！ドクターではなくこの私！！あははははは！！！！このまま捻り潰して、ホルマリン漬けにして研究材料にして上げますよ！！銀白の翼人！！！！！！」

クアットロがうつとりするような顔をして、 蒔風に言い放つ。

そうして、そのすべての影が蒔風に向かって攻撃を仕掛けてきた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers（さらなる脅威）（後書き）

書いてて思った事

白虎を戦闘時に出し忘れてた……

アリス「かわいそうに……」

ち、違うんだ!!!

えっと……その……

そ、そう!!!

あそこは二人が助けてあげなきゃいけない場面だったんだよ!!!
だから白虎はなにも言わないで黙ってたんだ!!!

忘れてたわけじゃないんだから!!!

ア「忘れてたんですね？」

はい

ア「おおかた、書き終わってから」あ!!!こっち白虎いんじゃない、

ど〜〜しよ〜〜」とかなったんでしよ〜?」

・・・面目ないです

にしてもまたヤバそうな展開ですね。

ええ。

迦桜羅に押されぎみ、サラマンドラは出てくるは、なんとセイン最強だったり、クアットロが「欠片」を利用してくるともりだくさん。

そんな中でついに旦那がこの小説に登場した!!!!!!

ア「いままで出てきてませんでしたよね?」

ええ、あくまでヴィータが交戦した相手としか出してませんでした。だからもしかしたらわけわかんない人もいるかもしれませぬ。

ア「どうするんですか?・・・まさか・・・」

アニメや情報をどうぞ!!!

Wikiなんかは結構詳しいよ!!!

ア「来た作者得意の丸投げだ――――――!!!」

本当にごめんなさい!!!

ア「次回、・・・本当に誰書くか決まってるんですか!？」

順番とか決めてないよ!!!どうしよう!？」

展開は決めてるけど!!!

ア「ではまた次回」

ずっと心配してくれてたこと…よく知ってる。だから、今日もちやんと帰ってくる。ヴィヴィオを連れて一緒に元気に帰ってくる！

拘束は解け、玉座から解放されたのはいい。

しかし、そこから立ち上がったのは、いつものヴィヴィオではなかった。

クアットロによる強制覚醒。

レリックを埋め込まれたヴィヴィオは、見た目の姿がなのはとそう変わらないところまで成長させられ、強固な洗脳によって目の前なのはが自分の大切なものを奪ったという認識をとらされているのだ。

「ママを返せ……パパをどこに連れて行った!!!!」

「ヴィヴィオ!!私……なのはママだよ!!!わからないの!」

なのはは懸命に呼びかけるが、ヴィヴィオは頭痛のしているような顔をして頭を振り、違う違うと叫び続けた。

「私のママは、あんたなんかじゃない!!!パパだって、あの人じゃない!!!本当のママとパパはどこだあああああああああ

ああ！！！！！！！！！」

狭くなつた聖王の間で、ヴィヴィオが叫ぶ。

その声はビリビリと壁に反響し、なのはの肩を竦み上げさせた。

そして一歩、また一歩とヴィヴィオが壇上から降りてくる。

その歩みを進めることに、全身からは七色の魔力光が吹き出し、部屋の中に充満していく。

基本、ゆりかごの中にはAMFが発動している。

否、そもそもAMFもガジェットも、もとはといえばゆりかごの機能にすぎないのだ。

スカリエッティはそれを見つけ出し、再現したのであって、何もオリジナルではない。

それが所詮は限界なのだ。
醜悪で、世界の真実を携えているかのように、残酷な声で。

「返せ……返せ返せ返せ……返してくれないなら……」

ゴオッ……!!

「殺す……!!」

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

金色の魔法が放たれる。
水の奔流が押しつぶす。

しかし、それらの大質量の攻撃は、地獄の番犬によって粉微塵にま
で弾き飛ばされた。

スカリエツティアジト内、フェイト陣VSケルベロス

現在無事だといえるのは
総じて戦闘続行可能なのは
フェイ

トと玄武の一人と一体のみとなってしまうた。

ヴェロツサはすでに気絶して壁にぐったりと寄りかかっている。

本来、彼のレアスキルは偵察や諜報に本領を発揮するものだ。

もちろん、ガジェットを相手取ったところから戦闘もできないわけではないが、このような相手と戦闘をする機会はないに等しい。

一方、シスターシャツハはそのヴェロツサを守るためにバリアを張り、その中にいる。

彼女は聖王協会での巡礼の際、過酷な道を信者とともに歩き、時には危険な獣から彼らを守ることもあるため、防御魔法にも心得があった。

もちろん、彼女の本分は戦闘である。

シグナムとサシで戦える実力に、偽りはない。

だが、このケルベロスを相手取る場合、人数が多すぎると、一気に薙ぎ払われる可能性のほうが大きいのだ。

腕の振りかぶり、連続火球、コマのように回転しての突進

それを食らって全員が一撃でやられるわけにはいかない。
そのために、シャツハはヴェロッサのそばについた。

そして何より、フェイトが「これを倒してスカリエッティのところ
に行くとき、捕まえるだけの体力がないかもしれないから」と、そ
の後をシャツハに託した。

そう言われては、シャツハはこの場で倒れるわけにはいかない。

ゆえにこの場合は、フェイト、玄武の二人でケルベロスを撃破しなけ
ればならなかった。

「とは言ったものの……これはきついっのう!!!!」

「でも、やるしかないよ!!ハーケン、セイバアツ!!」

フェイトが魔力刃をケルベロスに向かって数個飛ばして攻撃する。

だがそのすべてを跳躍してかわし、そのままケルベロスは天井や壁をぐるぐる回って疾走し、玄武に体当たりをしてそれでフェイトも押しつぶそうとしてくる。

「舐めるな！！！！十五天帝使役獣玄武、最硬の座は、伊達ではないわ！！！！！！」

ガゴンッ！！！！という思い一撃が玄武を少し後退させたが、何とか踏みとどまってそれを止める。

『が・・・うう・・・フェイト嬢、これからあ奴の動きを止める。そのうちに、きつい一撃をぶち込んでくだされ！！！！』

「げ、玄武！？」

『ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』

『！！！！！！！！！！』

ケルベロスと体を押し合いながら、玄武が息吹を吹き出していく。と、同時、玄武の甲羅の下から、大量の水が流れ出てきた。

それはそのまま下には流れず、グルリと上に向かって伸び、二体を球型に閉じ込めた。

その巨大な水球の中で、ケルベロスの体がコポコポと、浮き、地に足がつかなくなる。

4736

『今じゃ!!!ブチ込めエ!!!』

「くっ・・・避けて、玄武!!!トライデント・・・スマッシュ
-----!!!」

フェイトの砲撃が、水球中のケルベロスに向かって伸び、命中する。

ケルベロスの咆哮と、水球のはじける破裂音が、ドーム内に木霊して、ゆっくりと消えていった。

辺りには雨のように水が滴り、弾けたそれは霧となって、水球のあった場所を覆い尽くした。

「ぐ……ゲハッ……あいつにはしっかりと……当たりましたな……これは」

「玄武!?!?!」

と、水の落ちてくる雨の中、玄武がヨロヨロと霧の中から歩いて出てきた。

腕を抱えて、足を引きずり、いかにもつらそうな表情だ。

「避けなかったの!？」

「あそこでワシが動けば……ケルベロスには逃げられてしまうのでなあ……あれだけの事をして、失敗しましたじゃあ……
・取りかえしつかなんだ」

「じゃあ……あいつは!？」

「……憎たらしい奴じゃて……どうやらまだ先には行けないようじゃぞ」

「え?」

玄武が振りかえって霧の中を見る。

その霧の中に、ギラリと光る目があった。

霧をかき分け、ケルベロスが出てくる。

しかし、攻撃のかいあって、その頭は一つ潰れており、真ん中と右の頭が怒りに狂ってガチガチと牙を鳴らしていた。

「そ、そんな……ここまでやって……」

「ここまでやって、ようやく来たのじゃから、頑張らないといけないのぉ」

「え？あ……」

苦しそうにしながらも、玄武の目には諦めなどはなかった。
単体では遥かに力負けする相手を前にしても、この余裕。

玄武は間違いなく、あの男の使役獣だった。

「ケルベロス一体に何を怯えておるのじゃ？相手は手負い。こちらはまだまだ、戦えますからな！！！」

玄武が意気揚揚をよそおって言う。

だが、そう高々に宣言したところで、玄武の身体はかなり限界に近いのは確かなのだ。

フェイトの一撃だけではない。

今まで玄武はその防御力を以ってケルベロスの周囲を回り、攻撃を弾き、防いできた。

だが相手はケルベロス。たとえ防御をしたとして、いかに玄武でも耐えられるのは二、三撃がせいぜい。そこから先は、鈍く重い攻撃が、玄武の身体に浸透、蓄積されていく。

そこにあれだけの大量の水を出し、フェイトの攻撃をケルベロスもろとも食らったのだ。

これだけ摩耗していて、まだこれだけ声を張れるだけでも十分だった。

一方フェイトも、全く無傷、というわけではない。

ケルベロスの攻撃の大半は玄武が受けてはくれたものの、それとて完全ではないのだ。

どうしてもこちらに攻撃は来るし、それを避けるにも最大動作を要した。

紙一重なんかで捌こうとすれば、その勢いによる風圧に引っ掛けられ、次の攻撃で落ちてしまうからだ。

更に言うなら、ここはAMFの濃度がゆりかご周辺ほどではないが、濃い。

そんな中で回避に全力を注ぎ、その間を縫って攻撃し、最後にあの一撃を叩き込んだのだから、体力、魔力共にかなり削られている。

大体全快時の40%程は残っているが、六割使って頭一個なら、すべて潰すのには、さらにその三倍。

この敵は厄介だと、フェイトは改めて思い知った。

攻撃、疾走、広い視界

そのどれもが面倒この上なくせに、更には二回までは頭を犠牲にできる。

これを厄介と言わずなんというのか。

「やあやあ、どうしたんだい？もうおしまいかな？フェイト・テスタロッサ・ハラオウン？」

「!?!」

と、そこにいきなりドームの扉が開いて、スカリエッツィが戦闘機人、ウーノとトーレをひきつけてやってきたのだ。

それに伴い、ケルベロスが大人しくスカリエッツィの後ろに下がって行った。

おそらく、「奴」からある程度の権限はもらっているのだろう。

いきなり現れたスカリエッツィに、驚きを隠しきれないフェイト。

なぜこのタイミングでやってきたのか。

だが、フェイトは自身の身体を以って、その理由を思い知る。

スカリエツテイの方へと視線を向けていたフェイトは、一瞬のうちにバルディッシュを弾き飛ばされ、地面に倒れ伏し、トーレに押さえつけられていたからだ。

少し離れた場所では、すでに玄武が倒れていて、赤い糸のような魔力糸で縛られている。

おそらくはヴェロツサもシャツハも同じ状態だろう。

トーレのISS「ライドインパルス」

不可視の高速移動による一撃で、疲弊していた彼らは瞬時にして撃破されてしまったのだ。

「ふむ……ここまで弱らせてくれるとは、さすがは「彼」の使い魔だね。いや、厳密には違うらしいが……まあいい。今はこっちの方が重要だ」

そう言いながら、コツコツとスカリエッティがフェイトに近づいてくる。

トーレに抑え込まれて、地面からスカリエッティを睨みつけるフェイト。

その目を見て、スカリエッティがにやりと笑う。

やっぱり駄目なんじゃないかと。

「どうだい？君らの力はこの程度さ。それでよくすべてを救うなんて言えたねえ？それになんだっけ？次にそんなことがないようになつたかな？面白い事を言う。次がある現実なんて、本当にあると思つたのかい？」

「くっ……このっ……」

「だから言つたんだ。無駄なことはするな、とね。まあ、安心したまえよ。次に目覚めたときには、なによりも強い身体にしてあげるからね。もうそんな後悔しないで済む。そうだ……私の力と、あそこの技術さえあれば、すべての人間をそのように出来る」

「あそこ？……いったい……貴様はどこに向かおうというんだ！！！答える、スカリエッティ！！！！……ぐっア！！！」

フェイトが怒声を上げて、それを押さえさせようとトーレが押さえつける手に力を込める。

だがそんなことはお構いなしに、スカリエッティが話を進めた。

「そうさ！！私がすべての人類を改造し、一つ上の段階へと引き上げる存在となる！！！！どうだい！？私は・・・世界を格上げする者となるのだよ！！！！」

「狂ってる・・・」

「そうかい？そうでもないさ！！成長と発展は世界の常じゃないか！！！そしてそれを成し遂げるのは、いつだって偉大な天才たちによつてだ！！今はキミらも私を悪だと思つかもしれない。だがね、そういうた歴史の転換点にいる人物は、いつだって当時は悪役扱いだったのだよ！！！そもそも、世界をより高次なものにしようとする事の何が悪い？それならすべての科学者は、犯罪者なのかい？うん！？私は、世界を改造する！！！彼女らのように、より強く！！！遅しいものへとね！！！」

「それは！！！！」

「反論するならなにが悪いのか、はっきりしてからにしてくれたまえよ？私とそこらの科学者は、なにが違うのか！！！」

「貴様が悪いのは決まっとなるじゃろうが。歪な進化などに、未来はないからじゃ」

と、そこに割り込んできたのは、玄武だった。
スカリエツティはうん？という顔をして玄武の方を向く。

玄武は地面に倒れ、身体を縛られているため、顔もこちらに向けられないが、ハッキリとした言葉は伝わっていた。

「進化……否、進歩とは、書いた字が如く「歩」んで「進む」ことじゃ。一步一步、しっかりと踏みしめていく事。貴様がしているのは、登山と言いながらヘリコプターで山頂を目指そうとしている、ただのバカと同じじゃて」

「……ほう」

「そんな登頂になんの意味がある？そこまで行けたとて、次に行くことはできん。真に高い山を登るには、いつだって自分の足で歩むしかないのじゃからな」

それを聞いて、フェイトは思い出した。

そうだ、自分だって、生まれた時から強かったわけじゃない。

一つ一つ、積み上げてここまで強くなったんだ。

母さんは自分を作ってくれた。

ならば、その時さらに強化した個体を作ろうと思えば作れたのではないか？

否、そもそも、戦闘機人という技術の研究自体は昔からあったのだから、あの人ならば簡単に実現したはず。自分にそれをしてしまえばよかったのでは？

だが、あの人はそうはしなかった。

まっとうな手段で、私を強くしてくれるように、使い魔に指示を出していた。

こいつが育てたといつ、一足飛びの強さと、母さんが私にしてくれ
た、厳しくも丹念おこなに行つた鍛錬。

こいつの言う強さが、母さんがくれたモノよりも、勝まっているわけ
がないじゃないか!!!!!!

「よくもまあ………ここまで言えたものだね………どつと言おうと

ももう変わらないよ。ここは………私たちの勝ちだ」

「それを言った悪役の行く末を、ヌシは知っておるのかな？」

「なに？」

バツンッ！！！

その言葉と共に、いきなり玄武の身体が弾けるように寝たままの状態で浮き上がった。

スカリエッツィによる魔力糸を強引に引きちぎった反動によるものだ。

そしてそのまま地面を転がり、落ちているバルディッシュを手に握ってスカリエッツィの足を打つ。

「ぐああ!？」

それが脛に命中し、もんどりうって倒れるスカリエッティ。

その事態に一瞬気を取られたウーノとトーレの視線が、玄武からスカリエッティへと向く。

と、その隙に玄武が三角形のデバイスモードに戻ったバルディッシュをフェイトの手元に投げつけ、自身はたたずんでいたケルベロスに向かって跳びかかって行った。

しかし、その時にはすでにケルベロスは動いており、人型の玄武を噛み砕こうと、その巨大な顎が開かれていた。

だが玄武はあえて、そこに飛び込んだ。

玄武が飛び込んだのは真ん中の首に

そして飛びこんだ瞬間、その牙が閉じられて玄武の姿が一瞬消える

しかし、直後その顎から、獣神体として顕現した玄武が、その堅固な甲羅で顎と牙を砕いて飛び出してきた。だがその体中からは血を噴き出し、甲羅も所々砕けている。

そんな状態でも玄武は、仰け反ってから俯くケルベロスの最後の頭に向かって押しつぶそうと、巨大な足を振りあげた。

それと同時に、ケルベロスもまた前足を振るって玄武の甲羅を砕き、その内部を抉りだそうと、猛威を振るう。

ゴキヤツ、ズガア!!!!!!!!!!

そうして玄武の足はケルベロスの頭を捉え、ケルベロスの爪は甲羅を砕いて玄武の脊髄を引き裂いた。

二体の獣が同時に倒ながら、姿が消えていく。そうして最後にカラン、という音を立てて、二本の剣が地面に落ちた。

ここまでに必要な時間は、わずか三秒と端数。

だが、何が起きたのかを理解するには、十分だった。

「あああああああああああ！！！！！！バルディッシュ！！！！！！」

《stand by ready・set up・真・ソニック
フォーム 展開します》

それを見たフェイトがバルディッシュを手に、上にのしかかるトーレを力任せに押しつけ、その刃で攻撃する。

トーレはそれをとっさに回避、フェイトから離れるが、その右の二の腕にはしっかりと切り傷が刻み込まれていた。

そして、金色の魔導師が、真の姿を解き放つ。

すべてにおいて最速で、ただそれのみに特化して

誰をも守り、駆け付けると言う、彼女の願いを表した、電光石化の雷神が、大剣を手に、眼前の敵と対峙した。

その背に、最も頼れる男からの、贈り物を宿して。

はやてのある魔法で、空中に射止められているのだ。

はやてによる迦桜羅との戦闘。
それはかなり熾烈を極めていた。

先にも言った通り、何より相性が悪かったのだ。

まあ、だからこそ迦桜羅を送り込んできたのだろうか。

しかし、そこは機動六課部隊長、八神はやて。
普通の人とはまた違う策を出し、実行に移したのだ。

その策とは

「あーもううっとおしい！！！滅茶苦茶にぶっ放して逃げ場無
くしたる！！！覚悟しろやあ！！！！」

迦桜羅のヒット&アウェイ・・・いや、この場合、飛び去るからヒ
ット&ランになるのか。

その攻撃についてキレてしまい、周辺空域には近づかないよう全局
員に通達し、それが済み次第、はやては空間魔法をぶっ放し始めた。

それに何より焦ったのは、迦桜羅ではなく局員たちの方だ。

このAMFフィールド下において、こんだけの魔法ぶっ放しても大丈夫なのかと。

しかし先の戦闘の事を考えなければ、問題など、一切なかった。

はやての魔力量は、管理局でも指折りである。

つまり、どれだけ撃つたところで、全力の砲撃でも撃たなければ魔力切れなんてことはないのだ。

そうして撃っていくうちに、迦桜羅の動きは徐々に制限され、はやてに翻弄され始めてきていた。

そうしてしまえばこっちのものである。場所さえ分かれば、はやての魔法はその空間ごと巻き込むのだから！！

バシィ！！！！と、何かを縛りつけるかのような音が聞こえて迦桜羅の動きが止まった。

それこそ、さっき言った迦桜羅を止めていた「ある魔法」である。

その魔法は、拘束魔法。つまりはバインド。

だが、ただのバインドではない。

はやての魔法は、何度も言っが空間魔法。

で、あるならば

周囲の空間そのものと、対象をバインドしてしまう事もまた、応用次第では可能なのだ。

「舜君との模擬戦でもしかしたらくっついて思ってたら負けてしまったからなあ。ちゃんと使えてよかったあ……」

はやてが汗を流しながらも、不敵に笑みを浮かべながらシユベルトクロイツを空中で周囲ごとバインドされた迦桜羅に向ける。

「これで・・・しまいや・・・ようゴツゴツとやってくれたなあ！？遠き地にて、闇に沈め・・・デアボリッククーーーーーー！
！！！！！！！エミッション！！！！！！！！」

空間魔法が、迦桜羅を完璧に捉え、膨れ上がって爆破する。

その魔法に、迦桜羅はついに沈黙し、一本の剣がどこかへと消えていった。

それをすぐに追おうとするはやてだが、今はこの場を離れるわけにはいかない。

最後の方こそ迦桜羅の相手ははやてのみだったが、最初の方では管理局員もかなり落とされているし、攻撃からの旋回によってゆりか

この反対側の方の局員もかなりの数が落とされていたからだ。

現状、局員とガジェットの対比は4：6と言ったところか。

ゆりかご外部の脅威はひとまず沈めた。

しかし、驚異がなくなったわけではないのだ。

戦いは、終わらない。

t o b e c o n t i n u e d

なのはStrikers　〜魔法少女、戦闘〜（後書き）

はやてが何だかギャグっぽくなってしまった気がする……

アリス「いいんじゃないですか？」

いやでも、大丈夫かなあ……

と、昨日は済みませんでした。

言い訳は活動報告の方にして見えますので、聞き苦しい言葉でも読みたいからはそちらにどうぞ。

ア「そういえば前の活動報告になんか書いてましたね」

そうですね〜

誰か書いてーーーーー！！っていう提案も、一つ前に書いてましたね。

前半はただの歓喜の叫びでしたけど。

ア「でも、自分で書けばいいじゃないですか」

それは活動報告にも書いたけど、そんな時間はとれない。
自分は複数作れるほど器用じゃないです。

この小説だって終わりまで見えてないのに。

ア「あとどれくらいかかると思います?」

まだまだ先ですもん。

正直、来年までかけても終わらないかもしれない。

ア「へえ〜」。次回・・・だから誰なのか決めておけやああああ
!!!!!!」

と、とりあえずスーパーおっさんタイムです!!!!!!
ではまた次回

いつでもそうだ…俺はいつも遅すぎる…

いえいえ、今回はそうはしませんよ（悪笑）

なのはStrikers　〜終わらぬ戦い〜

「少し、歩くか」

そういつてレジアスがゼストを誘って、地上本部跡を歩いていく。そのあとをシグナムと、二人の秘書がついていつている。

最初ゼストが現れた時、シグナムはレヴァンティンを構えてゼストの前に立った。

しかし、直後にレジアスが声を上げて、それをやめさせたのだ。

「剣を下げる。シグナム二等空尉、リインフォース？空曹長」

その言葉に、二人が驚く。

よもやこの人物が、自分たちの階級までしっかりと知っていたとは思わなかったからだ。

「たとえ本局といえども、大まかな局員の名前と階級は知っておる。それがあのタヌキ娘の下ならなおのことだ」

そう言うてにやりと笑い、レジアスがゼストと並んで歩く。

「レジアス、お前は今何をしている？」

「今は、地上本部の中将の席に居る」

「また・・・知らない間に階級が上がったようだな」

「・・・いろいろと・・・あつたからな」

ぽつぽつと語っていく。

最初はつまらない話から、だんだんと、核心の本題へと。

「レジアス。俺が最後に受け持った任務。そのことをお前は知って

いたのか？」

「……………どういう任務かは、な。だが、それを受け持ったのがお前であることなど、微塵も知らなかった」

「しかし、俺でなければよかったということにはなるまい」

「……………」

「あの任務で、クイントをはじめとして、全員が死んだ。メガーヌはスカリエッティに囚われ、娘のルーテシアの人質にされている。俺はこうして人形として存在させられた」

「……………」

「俺に関しては、別にそれでもいい。お前の正義に殉じるならば、俺は本望だった。だが、俺の部下たちはそうではない。彼らの命が失われ、お前の正義はそれを良しとしたのか？」

ゼストの言及。

しかし、その言葉には一切の恨みも憎悪もなく。

ただ事実をだけを述べ、真実を聞き出していた。

「ワシは……今の秩序を作り出すために、必死になってきた。どこまでも理想を追い求めようと、動き続けた」

「そうだったな。若かりし頃、俺とお前とで語り合った理想だ」

思い出されるのはかつての自分。
語っていたのは、夢物語。

いつかは全部を救うんだという、青二才の願い事。

だが

「だがな、ゼスト。世界はそんなに甘くはない。理想だけで秩序は

作れん。願いじゃ平和は訪れない。それを……否、何か成し遂げるためには、何か犠牲が必要になる」

「その犠牲が……俺たちであり、ワイヴァインゆりかこの鍵であり、この地上本部だというのか？」

「ツ……」

「俺たちの追い求めていた正義はどこに行った……俺たちの正義に、こんな犠牲はなかったはずだ。お前が与えてくれた俺の正義に、こんな悲劇などなかったはずだ！……」

「ワシが……与えた？」

レジアスが聞き返す。

ゼストにも自分の正義があり、かつての自分たちはそれが同じだったから、語り合っていたのではないのか？」

「いや、違う。俺に最初、正義などなかった。ただ、強くなるうとしていただけ。俺は武人だ。すべてがそうではないが、少なくとも俺は、たいそうなもんなんか持つてはいなかった。自分の力は何のために振るわれるのか、と疑問にも思った。だがな、そこでお前の理想を聞いたんだ。ああ、なんて甘く、青臭く、無茶難題を言ってるんだと思った。だが……俺にはそれが素晴らしく輝

いて見えた」

「……………」

「そして、俺は決めたんだ。お前の理想を、俺の願いにしよう。お前の正義を、俺の信念にしよう。だが、お前は変わってしまった。正義のためといい、同じく正義のために戦ってきたものを犠牲にしてしまう男になってしまった」

「う……………」

「お前の正義を、お前は見失ってしまった」

「では……………お前はやはり……………」

「だから返しに来たぞ、レジアス・ゲイズ。借り物だった、お前の正義を。あのときのまま、大事に胸に抱いてきた、あの理想を、返しに来た」

「!!!!」

「俺はすでに死人だ。この体も長くは持たん。おそらく、明日の朝日は見れまい……………先無き死人に、抱く理想は不要。ならばこそ、先を生きるお前に返すのが道理というものだ」

「ゼスト……………」

「おまえにもまだそれが残っているのなら、為すべき事を為せ。もしないのなら、俺が共に行ってやる」

おまえに正義を取り戻させるために、さあ、一体何をしようか？

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

「グ……」

「……組み合わせ……脱出は不可能です……それはあなたも……わかってるでしょ？」

ゆりかご内部後方

グイータと青龍が向かった先には、破壊目標の「動力炉」がある。これさえ破壊すれば、ゆりかごは止まらなくても、最悪衛星軌道上への浮上は止まるはずだ。

と、思つてその場へと向かつて行き、最初にその途中でガジェット
の襲撃を受けた二人。

が

「ハアアアアア！……！」

ドオン！……ドドドドドドドドドドッ！……！！

青龍が放った電撃にガジェットが次々と沈黙する。
と、言うかこの程度の敵に苦戦するはずもない。

「あ、あの、あたしは……」

「……貴女はおとなしくしてもらえると……助かります……私の使命の一つは……あなたに無茶をさせて怪我をさせない……事ですから」

「え？あれ？じゃあ、あたしがいる意味……」

「行きましょう」

そんな会話をして、二人は先を進んだ。

そして次には何やら新しいタイプのガジェット。だが、ヴィータには見覚えがあったようだ。

「こいつら……なのはが墜ちた時のアンノウン……!」

「……八年前の……ですか？」

「ああ……あの事件も、こいつらのものだったってわけかよ!?! チクシヨウ……てめえらのせい……」

「せ、青龍？どうしたんだ？」

ヴィータがオズオズと聞く。

こいつらの姿を見てヴィータは頭に血が上り、力任せにブチのめしてやるうという激情に駆られた。

だが、それよりも断然に早く、青龍が暴れてしまったので逆にポカーンとしてしまったのだ。

「……ハッ……さ、行きましようか……」

「おまえのキャラがわからねえ！！！！！！」

そうして先に進む二人。

次に待ち受けていたのは、ナンバーズが一人、セツテ。
一対のブーメランプレイドを両手に握り、動力炉の前で待っていた。

「申し訳ないですが、ここは通しません」

「うっせー!!ここは潰さなきゃならねえんだ!!外のはやても、前のなのはも、地上の皆も、そうしねーとぶっ倒れちまうからな!!!!」

「では、やってみてはどうでしょう。私に敗北はありませんが」

「どーしても退く気はねーみたいだな・・・だったら!!!!」

「・・・目的を先にしてもいいですよね?」

「は?」

ドオン!!!!!!!!!!

セツテの後方で、動力炉が爆煙を上げる。

しかし、直後に煙から現れてきたのは全く無傷の動力炉が出てきた。

グイータが振り返ると、青龍が手を動力炉にむかって伸ばし、電撃砲を放った姿勢になっていた。

「ふむ……さすがに硬いですね……ここはしっかり腰を据えて……やりたいところです」

「ちょ、おま……いきなり何やってんの!？」

「? 私達の使命は……あれを破壊することでしょう? ……こんな幅広く、天井の高い通路で……ああして立って待ちうけるなど……撃ってくれというものでは……ないですか……だからやったのですが……」

「いや、確かにそうだけだよ……」

「やはりその程度ですか。たとえ私にこの場で勝っても、ここは破壊できません」

セツテの言葉は確かだ。

ここの動力炉の硬度はすでにそれだけでもロストロギア級に匹敵する。

この広い通路に彼女一人だけで配置された理由。

それは、絶対に碎かれないという自身があつてこそだった。

「ですので、このまま潰させてもらいます。他のところに加勢されては、面倒との指示なので」

「……ですが……それもいきません」

「あたしらはこいつをぶっ壊さなきゃなんねーんだ……!」

そうして構え、臨戦態勢に入る三人。
その間に、ヴィータに青龍が念話で話しかけた。

『どうしますか？最悪、一人がひきつけて一人が破壊にまわるとい
う手もありますか？』

『いや。ここであいつを一旦ぶっ潰す。その方が早く終わんだろ
ーし、そうすればほかの奴らも助かる』

『了解』

青龍は会話を終え、バツ！と腰を落とし片手に青龍刀を握り、拳
法の構えのように構えて、向かってくるセツテに向かって行った。

セツテのブーメランブレイドが青龍の首を狙って鋏のように閉じら
れるが、青龍は剣を閉じるブレイドに突っ込んで、挟み込めないよ
うに迎え撃つ。

が、そこで終わるセツテではない。

そこから青龍の胸を駆け上がるように蹴り、そのまま一回転して片
方の剣を振り降ろし、もう片方を横から薙いだ。

そこで青龍はセツテの蹴りの勢いに身を預けて床に倒れる。
それによって横からの攻撃は避け、上からの攻撃を左に転がって避けた。

そしてそのまま起き上がりながら足払い、よろけたセツテの足を掴んで掬い上げて転ばせ、俯けにさせてのしかかる。

ヴィータの入り込む余地もなかった。

そもそも戦闘機人一体に、青龍が後れをとるわけがない。

完全に捕まえている。

これでは身動きも出来まい。

そこで最初の言葉に繋がるのだ。

「ッ……」

「ヴィータさん……バインドをよろしく願いします……」

「オウ。次元犯罪加担の罪で、オメーを」

逮捕する。そう言ってバインドを掛けようとしたとしたヴィータの言葉は、その口から出てくることはなかった。

ズズン……という重く、低く、それでいてかなりの衝撃である何かが、ゆりかご全体を揺らしたからだ。

その振動の際に青龍の下から転がり出て、ブーメランブレイドを手に動力炉の方へと飛んでいくセツテ。

地上戦は不利と感じたのか、空中戦に持ち込む気だ。

「上等……相手してやる！」

「抑えきれなかったとは……それにしても今のは……」

ヴィータがセツテにむかう中、青龍が先ほどの振動に……否、

正確には振動ではなく、その瞬間に感じた違和感に顔をしかめる。

おそらく、今のは時風によるものだろう。

と、言うかこのゆりかごを揺らすなど、彼しか思いつかない。

だったら、今の振動とこの違和感に関係がないはずはない。

疑問に思う青龍だが、今はヴィータがセツテと交戦している。
思考を頭の隅に押しつけ、青龍もまた、彼女との戦闘に参加してい
った。

- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -
- -

廃棄都市ビル群、ある一角

そこで二体の巨影が衝突している。

ヴォルテールとサラマンドラ

轟拳がサラマンドラの頭かぶりをもたげさせ、炎剣がヴォルテールの身体を揺らす。

4785

その動作は見た目ではあまりにもゆっくりに見えるが、彼らの身体
の大きさを考えてみれば、それは恐ろしい勢いと威力を持っている
のだ。

その攻撃による踏み込み、受けた事での後ずさりで、地面が跳ね上
がって周囲を揺らす。

まるで怪獣映画の一幕を見ているようだ。

その戦闘に、エリオはもちろん、フリードや白虎すらも入り込めない。
い。

この周囲を襲う衝撃は、一撃で一同を昏倒させるに値するものだ。
だからと言ってそうならないように調整すると、今度はヴォルテールがやられる。

だからこそ、白虎は戦闘には参加せず、彼らがやられないようにコントロールするキャロやエリオたちをバリアで守っているのだ。

だが

「ヴォルテールッ!!!」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!
!!!????」

サラマンドラの動きは俊敏だ。

最初の蜥蜴形態が嘘だったかのように、フットワークが軽い。

炎剣だけではなく、拳や蹴りなどを織り交ぜた剣舞に、ヴォルテールが後退し、ついには白虎たちのいるビルに倒れ込んできた。

「うわあああああああ！……！」

『くっ……！皆……！ここから離れるよ……！僕一人じゃとてもじゃないけど、あそこに割り込めない……！』

白虎が悔しそうに叫ぶ。

実際、白虎があそこに割り込めばサラマンドラには勝てるだろう。ヴォルテールとの共闘になるのだから、それは必ずだ。

しかし、それをやると周囲への衝撃で、二人がやられてしまう。

更に言うなら、ヴォルテールは「自然の体現者」である。
その衝撃に白虎も耐えられる保証はないし、そうなれば当然、二人
を守れない。

フリードならばなおさらだ。

故に、こうして守りに徹するしか、方法がないのだ。

決して自身が倒れることを恐れているのではない。
彼らの身を案じてこそその、苦渋の決断だった。

『せめてあっちが来てくれればどうにかなるんだけど!!!』

「ティアナさんたちは七体の戦闘機人を相手にしてるんですよ!？」

「そうなんだよねっとうおおおおおおおおおオオオオオオオオオオオ
!!!!!!!」

背中に二人を乗せて疾走する白虎が、ビルの隙間を、空中を走って行くと、いきなりビルの中から何かが飛び出してきて、彼の横っ腹に当たった。

「白虎!!」

『朱雀!?!そつちは終わったの!?!』

それは人神体の朱雀だった。

セインを相手取り、その必死の回避でついにビルを突き破ってまですたのだ。

その体には所々血がにじんでおり、あまり無事とは言えない状態になっていた。

「それより、こちらを手伝えませんか!? ディープダイバーがなかなか厄介でして!!」

『それを言つならこつちもだよ!!あの化け物、自然の体現者も倒しちゃう勢いなんだよ!?!』

しかしその瞬間、ついにヴォルテールが膝をついて倒れ、そこにサ
ラマンドラの炎剣が薙かれた。
それを腕でとつさにガードするヴォルテールだが、ダメージがす
でに限界を超え、その体が魔法陣に消えていった。

ヴォルテールが消えていった魔法陣跡に残ったのは、セイン・レプ
リカ。

膝をつかせたのは、こいつだった。

なんのリスクもなしに攻撃を素通りさせながら膝に飛び込み、内部
から破壊したのだ。

「エリオ!!!キャロ!!!」

「大丈夫!?!」

「ティアナさん!!!!!!」

「私たちは何とか……でも、ヴォルテールが……」

『朱雀……厄介だよ。あの二体』

「魔導^{あれ}八天を相手にして、厄介でなかったことなどありませんよ」

最悪の状況。

最後の切り札、ヴォルテールは倒れ、目の前には二体の敵が。

全身を炎に包み、魂すら切断する「紅蓮の断罪者」^{サラマンドラ}
すべての攻撃を無効化し、触れただけで終わらせる「潜行する密偵」^{セイン・レフリカ}

彼らに、勝利はやってくるのか

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers 〱終わらぬ戦い〱（後書き）

セツテ、どうしてあんなった!?

アリス「完璧にギャグじゃないですか。なんですか？あの覇気のない効果音は」

いやその・・・ですね・・・

セツテのキャラってつかみにくかったんです!!!!
でもアニメ見てなんとなく戦い大好きみたいな子かな?って思って、
トーレが教育係だったから脳筋かな?って

ア「で、あんなったんですか?」

うん

アホの子になっちゃった・・・

ア「セツテファンにムッコロされますよ?」

ごめんなさいです。

そして旦那来ました旦那。

この小説、なかなか旦那が書けなくてですね、ここでポンなもんですから。

いやはや全く、困りましたよ。

まあ、なのは見てない人は基本いないと思つますので、わかつてくれるとありがたいです。

ア「もう次回とか言わなくていいでしょう？」

うん。

正直決まってないし

ではまた次回

追記：セツテの性格の違いや、展開に違和感があり、また、自分も読みなおしておかしいと感じたので、そのシーンを修正いたしました。原作の性格を無視した内容を書いてしまい、申し訳ございませんでした。

何故だろうなアギト。お前との融合は不思議と心が温かい

なのはStrikers 一つの想い

蒔風が六課メンバーのレプリカを相手にして立ち回っている。

しかし、それだけの相手と戦っているにもかかわらず、全く危うさが感じられない。

だが、動きには余裕があるものの、顔は険しく、目の前にある「欠片」を殴り飛ばしていく。

「こんなものは違う」

なのはのバスターが唸り、ティアナの射撃が襲い掛かるが、蒔風はそれを避けようともせず、片手でそれを一振りで弾き飛ばす。無論、それで右腕が無傷なわけではない。

手の甲は裂け、握りしめた拳からは血がポタポタと垂れて床に跡を残していく。

「これも違う」

フェイトのバルディッシュザンバーによる斬撃を、右腕に出した「天」の鞘で受け止め
シグナムの連結刃を左腕に巻きつかせて引き付け、武器を奪って粉と砕く。

「何もない、ただの「何か」だ」

左腕からは血を流しながらも、バルディッシュを振り落としの裏拳で砕いてからヴィータのハンマーを額で受け、血を流しながらそれを握りしめて握力で砕く。

さらに背後から迫るスバルの腹部に後ろ蹴りを入れ、吹っ飛んだ身体がキヤロを巻き込んで弾き飛ばす。

その衝撃に、二体が消えた。

「これがあいつら？笑わせる」

スバルとキャロの「欠片」が消滅していくのを見ながら、エリオがブースターで突貫してきたのを紙一重で躲し、脇に挟み込んで顔を殴りつける。エリオ・レプリカも、これで消え去った。

そして、まるで順番だといわんばかりに再びなのはの攻撃が来た。槍のように変形したレイジングハートを構え、時風に突進してくる。

が、それをもはや回避もせず、懐に踏み込んでその顔面を片手でつかんで持ち上げた。

「「奴」がこういう風に「欠片」を使ってきて厄介なのは、それが本物の「記憶」だからだ。ただの記録^{データ}ではないからだ」

攻撃のために群がってくるレプリカ共を一瞥し、まるで相打ちでもするかのように真っ向からその攻撃を受け、そうしてすべてを消し飛ばす。

だが、時風はそれを負傷としてとらえていない。
いや、今までの敵ですらも、^{レプリカ}傷害などとは思っていなかった。

それは「欠片」だからという力量を以ってのことではない。

右腕になのは・レプリカを握りしめて、聖王の間を寸断する壁に向かい

握りしめているほうの手を引き、腰を落とす。

「起動六課を相手にしてもらおう？馬鹿言っなよド三流。これはただの
人形だ」

メキメキという音を上げ、筋肉が隆起する。
そうして、壁をブチ砕く一撃とともに、言い放った。

「各人の・・・こいつならば、高町なのはの、その魂を、信念を宿していなければ、これは決してエースオブエースではありえない！！！！！！！！」

ゴガッ！！！！ガゴオッ！！！！！！

「ただの情報を載せただけの傀儡が、あいつらの名を傲慢にも語るんじゃない！！！！！！！！」

「舜君！！！！！！」

「！？」

時風が壁をブチ向いて、なのはと合流する。

なのは・レプリカは壁をぶち抜いた衝撃で、ザアツ、と消え去っている。

当然だ。あんな真実しんねんのない紛い物に、耐えられる攻撃などない。

「舜君……ヴィヴィオが!!!」

なのはが悲痛な声を上げる。

時風が見た先には、聖王モードのヴィヴィオ。

なのはのバリアジャケットはすでにスカートの端が切れ、レイジングハートにはどれだけの力で握りしめたのだろうか、血が滲んでしまっている。

「強制覚醒……なるほど、聖王としてのヴィヴィオか」

「しかも、洗脳で私達を完全に敵だと……」

「ふむ、なかなか美人。体つきもいい。将来は安泰だなこりゃ」

「そんな呑気な!!!!」

時風が考察しているのを、なのはが諫める。

一方ヴィヴィオは新たな乱入者に頭を抱え、流れ込んでくる偽りの認識に頭痛していた。

「あああああああああ!!!!!!お前もか!!!!!!おまえも私のパパとママを奪った奴か!!!!!!」

「おいおい.....」

「私の本当のパパとママを奪って.....それで自分たちがそうだと嘘をついた!!!!!!そうじゃないくせに!!!!!!」

「ヴィヴィオ.....それは!!!!!!」

「ようやく気付いたか。だから最初から言っただだろ？俺はパパじゃないく、おにーさんだとな」

蒔風の言う事は確かだ。この男は今まで一度も、父と呼ばれる事をよしとはしていない。

『あゝゝゝら？正義の味方も、なかなかひどい事を言いますねえ？』

「黙れよ、三流。おまえには何一つ理解できていない事がある。それがお前の敗因で、俺たちの勝因だ」

『私が知らない事？なんでしようねゝゝ？気になりますう』

それを言おうとした蒔風だが、瞬間、目の前にヴィヴィオが突っ込んできて、蒔風の顎に拳を命中させた。

信じられないスピードだ。

おそろく、フェイトと同じくらい早いのではないか？

時風の視界が揺らぎ、そこに加勢に入るようになのはが砲撃を撃つ。

それに対してヴィヴィオもまた、砲撃を以って迎え撃った。
だが、なのはにヴィヴィオを、牽制とはいえ攻撃することにはためらいがある。

なのはのデバイス「レイジングハート」は祈願型だ。
簡単な防御や攻撃程度なら、主人の思考に合わせてデバイスが自動で発動させる。

それは普段の攻撃にも当てはまる事。

故に、そんな躊躇いの砲撃などは、この場においては無いのも同然。
呆気なく打ち消されて、ヴィヴィオの砲撃がなのはに直撃した。

『あっはははははは！！！ダメですねえ・・・戦闘中に気を逸らすとか馬鹿ですかあ？あ、そっかー あなたの翼は確か「願いの翼」ですもんね？つまりい、私の願いを聞いてくれるってことですか？あはは！！それってなあんで損な力。願いが力になるなんて面白いけど、この場合まるつきり無駄じゃないですかあ？』

片手間でなのはを砲撃で弾いたヴィヴィオが、蒔風の首を掴んで投げようとす。

だが、蒔風とて伊達や酔狂で世界最強を名乗ってはいない。

視界はまだ定まっていけないので、感覚の身で足を地に付け、爪先で踏ん張り、逆にヴィヴィオの身体を投げつける。
地面に倒れるヴィヴィオは即座に立ち上がるが、蒔風がそこに打滅星をぶちかまして、玉座の方へと吹き飛ばした。

そこで恐るべきは聖王のステータスか。
身体は衝撃で吹き飛んで、背中を壁にぶつけこそしたが、打滅星自体は腕でガードしたのだから。
壁から落ちて、今ではその拳をなんでもないように握って構えて戦闘の意を伝えてくる。

なんというハイスペック。

蒔風とて、この場で本気で昏倒させるつもりでぶん殴ったのに、ガード、さらに耐えられてしまったのだから。

しかし、そこでヴィヴィオをバインドがロックする。
なのはだ。彼女がヴィヴィオにもう戦わせまいとして、動きを束縛
している。

だがそのバインドも長くは持つまい。
よくて五分が限界だ。

「チツ、名前に「星」でもついてりや楽だったんだがな」

『えげつねえですね〜。あなた、自分をパパと呼んでいた女の子
を、そう簡単に殴るんですかあ？』

「殴る」

クアットロの問いに、蒔風の答えは即答だった。
その言葉に、なのはも黙ってしまった。

「ああ殴るさ。なにがおかしい？そもそも、この世界だけでなく、どの世界でもそういう事はある。知らないのか？最近では親が子を、逆に子が親を殺す事もあるんだぜ？殴るぐらいなんだってんだ。それに、憎いなら最初からこんな事しない。これはあくまでヴィヴィオのための拳だからな」

『なかなかクソな反論ですねえ』

「なんだ？お前ともあるうド三品が正論たれんのか？「子どもを殴るのはダメだよ！」「って？じょーだんww」

『・・・・・・・・・・』

「この世界はクソツタレだ。他人なんざ完全には信用できねえ。人は人を騙すし、殺しだっしてしまふ。どれだけ頑張ろうと悪は出てくるし、幸せな世界は崩壊する。だが、だからこそいい」

『この男・・・・・・・・』

「だからこそ！！自分の大切な物が、より一層！！美しく輝くんじやないか！！！！なにもない日常に、退屈できたあの日々が！！！！そんなクソツタレな世界だからこそ、そこに生きる人間はなによりも強い！！！！どんな世界でも、それは変わらぬよ」

『聞いてて胸くそ悪いですね。黙ってもらえませんか？』

クアットロの声がイラついてくる。

それは、自分の思い通りに苦悩しないこの男に向けてなのか
それとも簡単に悪を肯定するその思考に嫌気がさしたのか

前者ならいいだろう。まだまっとうな悪役だ。

だが、もし後者なら・・・否、それは彼女ではないだろう。

彼女の不快は、この場の空気を一人の男に持っていかれていることにある。

「ああそうさ・・・どれだけ頑張ったって、悪なんてものはなくならない。悪は必ずそこにある。この世界はクソツタレだし、どうしようもなく醜いさ。でもな、だからこそより一層輝きが増す。だったら・・・おれはこのクソツタレな世界ごとすべて愛して守ってやるぞー!!!」

『ふん・・・だから何だと言っんですかぁ？もしかして、他の援

軍をお待ちですかあ？無駄無駄！！そんな人がいると思います？此処までやってきて助太刀に？」

「……人を助けるのには、確かにその場に行かねばならない。だがな、俺は翼人ぞ？そのような瑣末なこと、我が翼において奇跡を為せばよいことだ」

『ですから……』

「教えてやるよ、クアットロ。世界の理^{みや}不尽に吞まれし哀れな者。おまえが知り得ぬ「人」の強さを教えてやる」

時風が豪語する。
必ず助けはあると。

あれだけ世界はどうしようもないという男が、ここで世界は素晴らしいという。

矛盾

だが、思い返してみてもわかるが

矛盾のなかった世界など、今まで一つもありませんでした。

「見せてやる、クアットロ。おまえには無い、「願い」って奴をな」

時風の翼が開かれる。

その目が向く方向は、玉座に向かって左下側の端。

その先に、撃つべき相手を見ていた。

「なのは、場所はわかるな？」

「え！？あ、ああうん！！今見つけたよ！！でもどうして……」

「おまえがなにしてるのか、わからない俺だと思っていたの？そんなことあるわけないでしょう」

傍目から見ても、二人はなんの話をしているのか、わからないだろう。

その内容を簡潔に言おうとこうだ。

なのははゆりかごに突入してヴィータ達と別れた直後、サーチャーを一つ放っていた。

そう、ただそれだけのことだ。
きっと今頃は発見されたクアットロが、その桜色の球体サーチャーに驚愕しているだろう。

そして蒔風が知りえたのは、それに自らの羽根を一枚、乗せていたから。
なのはがサーチャーを放っていたのはわかっていたから、その状況

を知るために付けていたのだ。

「よ〜くやった。さて、これからが俺の見せ場だ」

「舜君、ここは私が・・・」

「おまえのはここになにをしに来た？ヴィヴィオを救いに来たんだろ？だったら、三流のぶち抜きは俺に任せて、その後のためにその魔力は残せ」

「でも、正確な場所が・・・」

そう、時風はサーチャーが見つけた、という事はわかってても、ここに、という正確な情報は来ていない。大体こつちだろうと推測はつくが、感覚的なものだ。

まあもちろん、撃てば当たりはするだろうが、今、そんな中途半端は嫌だった。

キチンとど真ん中でぶち抜いてやりたい心境なのだ。

「大丈夫だ、こいつを借りるからな」

心配するなのはから、そう言って手に持つ杖をヒョイと取り上げる
蒔風。

すなわち、レイジングハートだ。

それによってヴィヴィオのバインドが解けるが、直後に蒔風が自力
でバインドを掛け直した。

「俺の力を魔力に変換してバインドを張った。その維持くらいなら
レイハがなくてもいいよな？」

「え？え！？で、出来るけど・・・なにをする気なの！？」

「そこで見ている。レイジングハート、力を借りたい。マスターじ
ゃないけど、いいかな？」

《All Right・My Friend》

「嬉しい事言ってくれるじゃないの！！行くぞ！！！」

パン！！と、蒔風の翼がより大きく開かれて、そこに金の粒
子が集まってくる。

それは、願い。

この空で、地上で、そしてどこか別の場所で、戦っている者の、願
いだった。

『は……ははは……な、なにをしてるんですかあ？それが
願いつて奴で？は、かかか！！バカですねえ！！人の願いなんて
同じなわけないじゃないですか！！！！』

「そうだな。違う。だが細部は違えども、今この戦いに身を投じて
いる者は皆、少なくともこの事を願ってくれている」

クアットロが聞く。それはなんだと。

あれだけの、これだけの

それだけの人数が想っている、共通の願いとは一体何だ？

蒔風は言う。

彼らが想っていることはそれぞれ違う。

それは地上の平和だと

それは愛する物を守るためだと

それは自分の正義だからと

それは任務や仕事だからだと

そこには多くの想いがあり、少しずつズレ、同じモノなどない。
だが、重なっている部分があるのもまた確か。

その部分を、蒔風が誇らしげに、まるで息子自慢をする父親のよう

に言って見せた。

「あの子を、助けたい」

『は？』

「モニターの向こうで苦しんでいる、あの子を助けたい。運命に翻弄され、母親を求めて叫ぶ、あの囚われの少女を助けたい。今この空、地上にいるすべてのものが、どんなに小さくともその事を願って
て

それは名誉のためかもしれない
それは偽善や偽りかもしれない
それはただ出来たらいいという夢かもしれない

だが、どんな形であれ、すべてのものが願ってくれている。

ヴィヴィオに、家族を

泣き叫ぶ彼女に、救いの手を、と

「侮ったな？クアットロ。これが俺の援軍だ。これが俺の力だ。皆の願いを一身に受け、俺はこの場でお前を討つ！！！！」

気が付けば聖王の間を、金粉のような粒子が充満していた。
一体どれだけの人が願ってくれたのだろうか。

過去、時風がこの力を使ったのは一回のみだった。
その時皆が想ったのは「生きたい」という生物自身の持つ、半ば本能のようなものだった。

だが、ここに集まる願いは、それをはるかに凌駕する。
数の差ではない。そんなものでは決してない。

にもかかわらず、それを凌駕する理由など、今さら言う必要もない
だろう。

「す、凄い……」

その光景を見て、なのはこれが奇跡だと思った。
ヴィヴィオのために、これだけの人が想ってくれている。

それだけで涙が出る思いだった。

意識を凝らして見ると、声まで聞こえる。

助ける、という強い思いが。

そこには全く効いた事のない人の声もあれば、自分の教え子のものもあったし、親友のものもあった。

間違いなく、目の前に起こっていることは奇跡だ。

本来見えなかった世界の輝きが、そこで威光を放っていたのだから。

《しかし時風。あなたのこれだけの力を、私は受け止めきれません。どうするつもりですか？》

そこでレイジングハートが訊く。

確かにそうだ。これだけの力を魔力に変換して砲撃など撃てば、彼女が粉々に散ってしまうだろう。

だが、大丈夫だ、と時風がレイジングハートを左手に持ち変える。そうしながら自分に集まった力を魔力に変換、それを周囲にばらまいた。ただばらまいただけなので、当然破壊などは起きないし、衝撃も無い。これはただの下準備だ。

「願いの元が、同じ「高町なのは」という同一人物だからこそできる妙技、見せてやる!!!!力を借りる!!!!」

そう言って手をマジシャンのようにひっくり返した時風の指の間には、真紅に輝く二つの宝石があった。そうして、それを、起動させる。

「レイジングハート、レイジングハート・エクセリオン!!!セットアップ!!!!」

《stand by ready・set up》

そうして、ここにまた奇跡が起きる。

本来ならあり得ぬこと。

同じ人物でなければ、蒔風は「願いの複重」で腕の一本、消えてもおかしくはない。

三世代にわたるレイジングハートが、同時にこの場に集結していた。

「さて……三機すべてに、銀白の翼が命じる！！集束開始！！！」

《《OK》》

そして、周囲にばらまかれた魔力がまるで掃除機に吸い込まれるかのように、三機それぞれに集まって行く。

集束されていく魔力は渦を巻き、その質はもはや見た目以上に厚いはずだ。

「更に……レイジングハート、シューティングモード。レイジングハート・エクセリオン、エクセリオンモードA・C・S。やあこしいが、レイジングハート・エクセリオン、ブラスタースリー、ビット稼働！……！^{あれ}プログラムは機動させなくてもいい」

《All Right・master》《All Right・
My Friend》

一機だけ返答が違うのは御愛嬌だろう。

だが、もはやこれを止める者はなにもない。

三本が蒔風の周囲を回り、その切っ先を真っ直ぐに壁に向ける。その先にはきつと、見えはしないがクアットロが恐れ慄いた表情でいることだろう。

更には四つのビットまである。

「さて、クアットロ。おまえは言ったな？自分の願いもかなえてくれと」

『あ……あああ……』

蒔風の方からクアットロに回線を開く。

レイジングハートを手にしている今だから、彼女の位置も正確にわかるのだ。

「無理だな。そもそも、おまえのは願いじゃない。そこがお前の知らないところだ」

『な……なん……』

「なにが」って？今それを教えてやる……いいか？確かに、「したい」と思えばそれは、確かに願いと、かろうじて呼べるだろう。だがな、そんなものは認めん。それは別のものだ。断じて願いなどではない。おまえには信念がない。状況を見て、最終的にはスカリエッティを捨てるようなおまえには、一貫した誇りが無い、信念がない。チンク達だって、一応はあいつの身を案じたというのに、おまえだけにはそれが無い」

なぜ蒔風は、クアットロだけがスカリエツティを見限るとわかるのか。

他の姉妹はどうなのか。そもそも本当にそうなるのか？

そういった疑問も、あるかもしれない。

だがそんなこと、蒔風自身もわからなかった。

そんな気がする、というだけだが、確信はある。こいつは絶対にそうすると。

そこで最後の一言を言おうと、蒔風が息を吸って、その言葉と共に、一気に息を吐き出した。

「教えてやる……信念無き思いなど、ただの醜い欲望に過ぎないという事を……！！！！スターライト……！！！！」

《《Starlight Breaker》》

「ブレイカー」

最後の一言だけ、時風が静かに宣言した。

そして、放たれた。

銀白の魔力光が、三本の杖と四つのビット、合わせて七つから伸びていく。

その砲撃は途中の壁などは障子のように突き破り、太さを以って収納されているガジェットの実に七割を消し飛ばした。

幾層もあるゆりかごを突き抜け、ついにはクアット口の階層にも到達し、そのフロア全体にまるで液体を流し込んだかのように広がっていく。

だが、まだ止まらない。

その砲撃はそこで広がりながらも更に直進を続け、唯にはゆりかごの下腹部を貫き、少し角度を付けて斜めに貫通した。

真下に向けて撃ったわけではないので、角度がつくのは当然だ。

正確にはゆりかごを正面から見て左側下方、前後の位置としては前のところから、それは伸びてきた。

おそらく輪切りにすれば、時風とクアットロの姿が見えただろう。それくらいに、前後感言えば同じ位置にいた。階層が違っただけだ。

そして砲撃が地面にブチ当たり、その反動にゆりかごが後ろ方面にグラついた。

その揺れで動力炉の方では青龍がセツテを逃してしまったのだが、今はいい。

そうして地面に大穴をあけ、どれだけ抉っただろうか？

ようやっとして、その砲撃は細くなっていた。

と、言っても元々の太さが尋常ではなかったのだから、細くなったと言ってもまだ太い。

まるで悪徳セールスマンの言い口だ。五十万と言って、二十万で買わせる。どちらも高いのは変わらないのに。

まあ、細くなっていくのであれば、いずれは消えていくというもの。ほどなくしてから、消えていった。

砲撃を始めて実に二分。そこから細くなって消えるまでが、更に一分。

管理局史上例のない、三分間放たれ続けた超超巨大集束砲撃。

外で指揮をとっていたはやては、その光景を目撃していたが、未だに今の光景が信じられない。

が、その砲撃が「落ちた」後の地面はぽっかりと開いていて、森の仲に怪異な穴ができてしまった。おそらく、落ちればひとたりもないだろう。ここが将来の自殺スポットにならないことを祈ろう。

そこではやてが連絡を受ける。

蒔風からだ。

あの穴の周辺に戦闘機人が一体転がっているはずだから回収してくれ、というものだった。

それだけ言って、はやてが今の事を聞こうとするより早く、蒔風が通信を切ってしまった。

だが、はやてには見えた。通信は音声だけだったが、間違いなく見えた。

舌を出して、半ばふざけるように謝る、あの男の顔が。

実際には舌を出して「俺、知ーらね」という顔をしていたのだが、大差は無いだろう。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers 〜一つの想い〜（後書き）

皆さま、今回は申し訳ございませんでした。

これ以上はしつこくなるので、この辺で。

アリス「時風、ド派手な砲撃編。それにしてもですね」

はい

ア「ここってフェイトさんのスカリエッツィ攻略の跡だったりしません？」

そこら辺はあれです。二次創作の特権です。

それに加えて言うなら、私は最終決戦のシーンを見直していません。

ア「そんなことするから前回間違えたんでしょうに……」

それは私の失敗です。

ですが、この最終決戦から、完璧に原作とは変わってきます。ですから、原作にとらわれてその順番通りは嫌だったんですよ。

ア「なるほど」

でもそこであんな間違いをするとは……ひどかったですね。

ア「もうそれはいいでしょう。あれから苦情も無いという事は、皆さん納得してくださっているかもしれませんといい事でしょうっ。」

推測なんだね……

でも、そうだと思いますよ。

信念無き想いなど、醜い欲望に過ぎない。

これは言いたかった台詞でした。
なんかオーズで後藤さんが言ってたっばいけど。

ア「次回、おっさんズ&フェイトちゃん!!!この今回は決まって

ますよ！！！！！」

もしかしたらフェイトは切ってしまうかもしれません……
ではまた次回

見つけた……

なのはさん、怖いですww

なのはStrikers　く取り戻したモノ、先に進むモノく

SIDE　???

まずいますまずい。

このままでは起動される。

ドクターは起動の瞬間を押さえ、その場所がどこにあるのか突きとめてから終わらせるとおっしゃっていたが、このままではそれもできない。

くそっ・・・最悪の場合、あの騎士が現れてしまったら仕方ないが殺せとも言われていたが、直前に別の騎士が来たからそれもできなかった。

私は戦闘に向いていない。

この変装に特化した能力で相手の背後を取り、静かに命を刈りとるのが私のやりかただ。

こんな騎士二人を、相手にできるものではない。

だが……

このままでは絶対に起動される。

他のナンバーズも向かっては来ていたらしいが、これだけ何もないと、失敗したか足止めを食らっているのだろう。

この場で動ける駒は私だけ。

だが今この場には、目標と共に騎士が一人。そして私の傍らにも一人、それと融合機が二体もいる。

こうなったら……

S I D E
o u t

「ゼスト、こっちだ」

「こんなところになにがある？レジラス」

一通りゼストと話したレジラスは何かを取り戻したのか、それともこれからそれを取り戻しに行くのか、ある場所に向かって行った。

地上本部の跡地からそうは離れていない更地。

表向きには「現在建設中」としか書かれていないが、そこに入るには少なくとも今までに、三つはセキュリティーを通ってきた。

最初のフェンスから、建物の扉、そして地下へと続く隠し扉だ。

「ワシは……後始末をせねばならん。そのすべてを、子ダヌキに持っていかれてたまるか」

「レジアス……」

ゼストはフツ、とその言葉に苦笑する。

文句を言って、ただ名声を求めるかのように聞こえてしまうかもしれないその声は、長く彼の親友をやってきた男にはまるで「おまえらばかりにいい場面は取らせん。ワシも混ぜろよ」と言っているかのように聞こえた。

と、言うか、そういうふうにはしか聞こえない。

もはやこの男に、つまらないしがらみなどない。

「なんだゼスト。何かおかしいか？」

「いや……存外、人は簡単に変わるものなのだな、と」

「なにを言っ取るのかわからんが、ここを守るのはワシの務めだ。他の奴らにばかり、任せてはおけんというだけの事……」

着いたぞ」

地下に入ってから長い通路を通って、レジアスが止まったのは、
ま
たも嚴重な扉だ。

しかし、着いたというからにはこれで最後のだろう。

今まで通過してきたセキュリティは最初を含めて全16カ所。
尋常ではない。しかも、本部かあの状態で稼働しているという事は、
ここは別電力で稼働させて守らなければならないという施設。

一体なにがあるのだろうか？

「この扉をあけるには左右で同時にキーを捻らねばならん。だから・
・・・」

「わ、私がお手伝いいたします!」

「おまえが?」

と、この扉を開くためのもう一方のキーを取り出したレジアスに、秘書の一人が歩いてくる。

だが、この展開はおかしい。

どう見てもここは彼女の出てくる場面ではないし、そもそもここで名乗りでる必要がない。

しかもその目はギラギラと血走っており、まともな物とは思えない。

「いや、いいのだ。これはワシらが……」

そう言って近寄ってくる秘書の申し出を断ろうとするレジアス。そして背中を向け、扉に向き合った瞬間、秘書が動いた。

「ツツツツア……!!」

いつの間に装備したのだろうか？

その手の指には爪のような武器が装着されており、それがレジアス

の背中に吸い込まれるように突き出された。

鮮血が散り、うめく声が聞こえた。

「…………クソツ…………」

だが、それは標的を捉えてのものではなかった。
レジアスと秘書の間にはゼストが立ち、その屈強な二の腕に爪「ピ
アッシングネイル」を突き立てさせて、その到達を防いでいた。

「貴様、スカリエッツィの手の者だな？ 大方、その騎士や俺がい
てレジアスを狙えなくなつて焦つたのだろうが…………この先にあ
る物はよほどお前らの不利益になるようだな？」

「クツ…………」

秘書の顔がぶれる。

まるで、映像か何かが切れたかのようなようだ。

そこで気づいた。

この女、戦闘機人である。

顔が戻ると同時、服装にも変化が現れ、それは戦闘機人の武装する物と全く同じものだった。

ナンバーズ02、ドゥーエ

最後の一人の任務は、レジアスの「後始末」だったが、それはもう叶うまい。

こうして捕まり、身動きが取れない。

この状況で任務をこなせるのであれば、彼女はこんなところではなく、前線で戦っているだろう。

が、彼女の目にいまだあきらめは無い。
虎視眈々と、レジアスをどうにか狙っている。

「やめておけ」

「ッ……」

「今こそこうして捕らえるにとどめてはいるが、これ以上レジアスを狙うそぶりを見せようものなら……」

「殺す……ですか？」

「いいや。殺してくれと泣き叫ぶような地獄を見せる」

その言葉に絶句する。

この男には、それだけをするだけの力が十二分にある。あり過ぎるほどだ。

そしておそらく最終的には殺される。

この男は殺しを良しとしないまでも、そうでなければならぬ時は、躊躇なく実行する。

それを背負う覚悟もまた、この男はしているだろう。

そこまでやられては、ドゥーエは黙るしかなかった。

心底憎らしげな顔をしながら、その身柄をラインに拘束されていく。

「命拾いしたな」

「なにを……!!!!」

と、そのドゥーエにシグナムが話しかける。
その顔は特に感情は感じられないが、彼女の胸の中では、今すぐにこいつを斬り伏せたいという思いがあった。

「もしあそこで中将の命を奪っていれば……私が貴様を斬っていた。おそらくグランガイツも、ああは言っていたがそうしただろう。おまえの命は、結果的に救われた」

「……………」

ドゥーエが今度こそ、本気で敗北した顔をする。
もう彼女が、なにをしようと思う事は無いだろう。

「さてレジアス。ここには何があるんだ？」

右腕の傷を抱えることも無く、なんでもないようにブラブラさせながらゼストが聞く。
アギトが治療だけでもしようと言っていたが、ゼストはそれを拒んだ。

もはやこの身体に、それだけのことをしても意味はない。

「ワシは……この地上を要塞にしようと考えたことがあった」

「地上を？」

「ああ。そうすれば守りはより堅固になる。外からの攻撃にも耐えられる。ここはそのために作った」

レジアスがパネルをいじって起動させると、その部屋が明るく照らし出された。

「だが、そんな案はあまりにもでか過ぎて却下されてな。ここはその名残だ。撤去するにも金がかかるから、それまで放っておかれていたのだが」

「なるほど、あのセキュリティは誰かにその機能を使わせないためか」

「そうだ。まあ、この兵器自体は採用されて、三つのミッドの高地に一つずつ、建造されたんだがな」

「まさか……ここは……！」

話を聞いていたシグナムが、驚きの声を上げる。そしてその推測は当たっていた。

「そう、市街戦を想定されて作られた、アインヘリアル零号機。その建造途中で破棄されたのがここだ」

なるほど、スカリエッティが狙っていたのはこれだった。

三機は潰した。当然だ。あんな巨砲がゆりかごの脅威にならないはずはない。

そして四機目、否、零機目か。その存在も、スカリエッティは当然知っていた。

だが、存在は知りえども場所がわからず、やっとわかって今度もセキュリティだ。

何度もシミュレーションしたが、結果は惨敗。どうやっても突破できるセキュリティは二桁まで到達しなかった

だからこそ、その場所が分かればドゥーエに乗っ取らせ、出来ずとも（この場合はゼストが現れたら）レジアスを処分する、という計画だったのだ。

「さて……これで準備はいいな」

「ああ……問題は……ない」

「ゼスト？」

返答したゼストの声が重い。

それはそうだろう。二の腕から流れる血は、未だに止まっていない。

アギトやリインが不慣れた治癒魔法をそれでもかけるが、まったく止まってはくれないのだ。

「どづいう事だこれは!？」

シグナムが驚愕の声を上げる。

治癒魔法をかけているにもかかわらず、何故止まらないのか。

だが、レジアスにはわかっていて。

友の肉体は、すでに終わりが近いという事に。

「言つたらう。俺の身体はすでに死人だ。しかも、もう限界だ。この身体に治癒など効かんし、おそらく、これのせいでもう五分と意識を保っていられまい」

ゼストが言うのは、自らのカウントダウンだった。

だが、だったらなぜ、彼はさっきの攻撃で右腕一本犠牲にしたのか。

どうという事はない。

彼にはもはやデバイスを扱う余力もなかったという事に他ならない。

もし発動させれば腕が千切れただろう
ユニゾンすれば胸に穴が開いただろう

それほどまでに疲弊していた。

だが、彼はまだ止まらない。
彼の正義を、返すまで。

「……今からこれで、ゆりかごを撃つ。一発も撃てがこごはもう使えん。手伝ってくれるか？」

「そのために……来たのだ……」

息も絶え絶えゼストが答え、ゼストがレバーに、レジアスが発射ボタンに手をかけた。

「行くぞ！！オオオオオオオオ！！！！」

渾身の力を込め、ゼストがレバーを下ろす。
これで安全装置が解除され、発射準備が整った。

地上では地鳴りが響き、更地の地面がぱっくりと割れて、そこから
アインヘリアルがゆっくりと上昇してきていた。
その砲手にはエネルギーが充填され、おそらく上がりきると同時に
チャージは終わるだろう。

制御室に、発射可能までのカウントダウンが流れ始める。
残り二十五秒。

だが、レジアスの隣にゼストは来ない。

そして来ないままに、時間が来た。

「アインヘリアル、発射ア！！！！」

レジアスは振り返らない。

その胸には、確かに過去の正義があった。

だが、それは昔のままのものではない。

そこには、今と過去の自分、そして自分の正義のために殉じた、一人の親友のものだった。

狙うはゆりかご、後部動力炉。

そこにむかつて、破壊の光がまっすぐに伸びていった。

発射されてから、レジアスがモニターの映像を見ずにゼストに駆け寄った。

彼はレバーを下ろしてそのまま、膝から崩れ落ちてしまったのだ。

「旦那……旦那ア!!!」

「そこにいるのは……アギト……か」

彼を慕っていた融合機、アギトがその胸に縋って泣いている。
しかし、ゼストにはすでにその姿は見えていない。見えないのだ。
肉体の限界が訪れていた。

「そこにいる……騎士よ……」

「はい」

ゼストがシグナムに話しかける。
それに対してシグナムは恭しく耳を傾けた。

彼女にはわかっているのだ。

言葉を交わしたのはこれが最初だが、この男は生粋の騎士であるという事が。

「こいつと……アギトと、紫の召喚師の少女は……俺に付いてきただけだ……罪はない……どうか……こいつのこと」

とを・・・引き取ってはくれないか・・・」

「大丈夫です。アギトの事は私が責任を以って、お引き受けいたします。ルーテシア・アルピーノも、すでに保護の対象です・・・
・騎士ゼスト」

「なん・・・だ・・・」

「あなたは騎士だった。守るべき物のために戦い、友のために走り、正義に忠実だった。あなたは真の騎士だ」

その言葉に、ゼストの口元がフツを笑う。

なにも見えない視界だが、浮かび上がってくるイメージがあった。

管理局に向かう自分。

立ちほだかるシグナム。

幾分か剣を交え、自分はレジアスの元に向かい、言葉を交わしたものの、そこでさっきの戦闘機人にレジアスは討たれてしまうというものだ。

それと見て、ゼストはそれが夢であるとは思えなかった。
きっとそれはどこかの現実。

それを見て、ゼストは最後に、つぶやいた。

「俺は……やっど……間に合ったのだな……」

それが

時空管理局でエースと呼ばれ、死してその身を利用されながらも、
己の忠義を貫いた

ラマンドラを投げつける。

当然無傷で、とはいかない。

朱雀は左腕を犠牲にして右腕で投げたし、白虎は炎剣を腹に貫通させ、奪い取ったの反撃だ。

それだけのダメージで、もはや顕現はしてられない。

投げつけた直後に剣になってしまい、エリオとティアナの手元に戻った。

そしてセインとサラマンドラが、砲撃にさらされる。衝突などなかった。

サラマンドラの身体は肉が削げ、骨が碎けて瞬時に消滅し、セイン・レプリカにいたっては砲撃が接近しただけで蒸発してしまったのだ。

「な……なに……いまの……それに、お二人も剣に……」

「私だつてわかんないわよ……でも、これで障害は消えた。二人も、多分死んだわけじゃないと思う。全員、このまま地上本部に……」

『その必要はない』

「シグナム副隊長……！」

地上本部に向かおうとしていたフォワードに、シグナムからの連絡が入る。

どうやら地上本部への脅威はすべてなくなったようで、フォワードにはこれからゆりかごに向かつてもらいたいのだそうだ。

『私もすぐに向かう。先に行け』

「わかりました。皆……ゆりかごに行くわよ……！」

『みんな……！！大丈夫……！？』

と、そこにタイミングぴったりアルトの乗ったヘリが頭上にやってきた。

おそらく、シグナムからの連絡を聞いていたのだろう。

『エリオとキャロから預かった子は、施設に送って保護してもらったよ……!』

「ありがとうございます……!」

『いって……!みんな、乗って……!真っ直ぐに向かうよ……!』

「……はい……!」「……!」

そうして、フォワードが乗り込んで、ゆりかごに向かう。

その中になぜかヴァイスと、彼のバイクまで積んであったのだが、それはまた後の話に。

そして、フォワードの方は終わったが、アインヘリアル砲撃はそのまま伸びていつていた。

目標は遙か遠方のゆりかご。

その後方部分、動力炉。

飛来してきた砲撃は、見事そこに命中した。

「ッ！？危ない、伏せてくださいッ！！！！！！！！」

「え？」

「なに？」

そのエネルギーを感じとったのは青龍だ。

とっさにヴィータを引き戻し、目の前で交戦していたセツテを、抱きつくように庇う。

その間も、何が何だかわからないセツテは青龍に攻撃を加えていくが、もはやそんなことを気にしていられる場合ではない。

そして、やってきた。

ゆりかごの後部を貫いて、あれだけ堅固だった動力炉を、一瞬のうちには破壊、消滅させてしまったのだ。

今までだって、ヴィータ達はなにもしていなかったわけではない。青龍がセツテを引きつけ、ヴィータがその隙に動力炉を攻撃していた。

だが、最初に言ったように、とにかくこれが堅いのだ。

おそらく、玄武の甲羅の四倍近くは堅い。

ヴィータがどれだけ魔力を込めても、アイゼンを振り降ろそうとも、リミッターを解除しようとも、破壊されることなどなかった。そのせいで、まったく攻撃を受けていないヴィータが、攻撃した反動で一番怪我をしていた。

手のひらからは血が滲み、リミッター解除の状態で無茶をしたため筋肉繊維は傷付き、自らの魔力の逆行に所々肌も斬れている。

青龍はそれを見た瞬間、役割が変わろうとした。だが、それはできなかったのだ。

出来るはずもない。ヴィータは最初から全力でやって、その時点ですでに怪我をしていた。ここでセツテに向かわせたら、間違いなく敗北し、最悪命を落とすだろう。

だから戻せなかったのだが……

『二人とも、そこから動かないでください!!!!!!』

いつもの大人しい口調は無く、丁寧ながらも激しく叫ぶ青龍はすでに獣神体へと姿を変えており、とぐろを巻いて、その中の空洞に二人を入れて守っていた。

セツテに関しては庇った際に思い切り腕を締めて圧迫させて気絶させてある。

ガラガラと崩れる天井や、砲撃の衝撃波から青龍が二人を守る。

そしてそれが収まり、程なくして青龍の身体が人神体へと戻った。ヴィータの周辺だけは瓦礫がなく、ぽつかりと綺麗なままだった。

なんだよ、これ……というヴィータの言葉が、その空間に静かに聞こえる。

たしかに、そう思っても仕方ないだろう。

動力炉の方を見ると、すでにその動力炉は存在ごと消えていて、右から左にかけて砲撃が通過した大きな穴が左右それぞれ一つずつ開

いていたのだから。

「ヴィータ……さん……」

「おい青龍！？おまえその怪我!？」

青龍が腹を押さえて倒れ込む。

おそらく、とつさにセツテの身体を抱きしめた際、ブレイドが食い込んだか突き刺さったかしたのだろう。苦しそつにうめいて、言葉を途切れさせながらも、伝えるべき事を伝えた。

「その大穴から……脱出を……彼女の身柄を……連れ……」

「青龍!？」

と、そこで限界が来たのか、青龍が剣の状態に戻って床に落ちる。

それを見たヴィータは、納得したように頷いてから、青龍を腰に付

「……あんたには悪いけど……旦那の身体を、このままにはしておけねえよ……」

そう言って、レジアスの上着がかけられたゼストの遺体を見るアギト。

それを見て、シグナムが「よい」とアギトに頷いた。

「しっかりと弔ってやれ。私に付くのは、その後でいい」

「……ありがとう……」

そう言って、アギトはゼストの元へと向かい、シグナムはリンと共にゆりかごに向かった。

フォワードたちはもう向かっているはずだ。遅れるわけにはいかない。

.....
.....

「じ、これは……」

《それが時風さんが与えてくれた、私たちの翼です》

スカリエツティアジトにて、真・ソニックフォームを展開したフェイトは驚いていた。

しかし、驚いていたのは彼女だけではない。

意識を取り戻したシャツハとヴェロツサ。更にはトーレやウーノ、果てにはスカリエツティまでもが驚愕していた。

翼である。

と、言ってももちろん本物ではない。

フェイトの間良好と同じ黄色と金色の間のような色合いをしており、色は薄く、それがフェイトの背で輝いていた。

その形はバルディッシュサイズフォームの刃と非常に酷似していて、その鋭さは空気を裂くかのようである。

《彼の翼の加速能力。その機構を、何とかねじ込んだらしいです》

「舜の・・・翼・・・」

《ちなみにそれによる加速は、今までのあなたの物の1・8倍ほどあります。行けますか？》

「大丈夫!!!」

その翼は、擬似的な翼。

より負担の無い加速のために、時風がフェイトに送ったプログラム。

故にバリアジャケットが極限まで排除される事も無く、服装はさっ

きとは変わらない。
せいぜいマントがなくなった程度だ。

そうしてザンバーを構えるフェイトに、拳を握り直したトーレが気を張り直して、フェイトに向かう。

「あんなもの、コケ齧しだ！！！！IS発動！！！！」

トーレのISが発動する。
彼女の能力も加速移動だ。十分にやり合うだけの自信があったのだろっ。

しかし

「トアマッシー…？」

ドオン！！！！！

なにが起こったのかわからないままに、トーレの身体が壁にめり込んだ。

その音に気付き、フェイトがいたところに目を向けた時、すでにフェイトはウーノのコンソールを破壊してバインドまでかけていた。

あまりにも速すぎる。

その現状にスカリエッティの額を冷や汗が垂れた。

自分の周囲に赤い魔法系を円錐状に張り、防御をするが、そもそもトーレがやられた時点でスカリエッティは詰んでいた。

その防御を張って一瞬、何を安堵したのかため息をついたスカリエッティだが、背後に気配を感じて振りかえる。

そこにフェイトはいた。

加速を以って、防御が展開し始めてからし終わるまでの間に、その体を滑り込ませたのだ。

「な・・・なな・・・」

「スカリエッティ。おまえがやったことは犯罪だ。だが、そのおかげで出会えた人もいる。そういう意味では、私はあなたに感謝もしている」

「は、はは・・・やっとわかったか・・・だったら・・・」

「だとしても、おまえがやった外道は、間違いなく悪のそれだ。おまえの胸に、誇りある思想などない。あるのはただの、願望だけだ。それを私は許さない！！！！」

「グッ！？クソッ！！！」

スカリエッティが魔法系を消してフェイトに背を向ける。だが、その背中に容赦なくザンバーの面に当たる部分でスカリエッ

ティを殴り飛ばすフェイト。

壁に激突して、スカリエッツィが痛みに呻く。

「ふ……ふふふ……そうやって……自己満足に浸るつもりかい？いつだってそうだ……正義だと言って、君らはただ単に己の満足感を満たしているだけだ……それが……」

「それが私たちの正義だし、それを持つ私たちが正しくあればいいだけだ。私たちには仲間がいる、間違ったらそれを正してくれる、仲間が。だから、私は安心して自分の正義を貫けるんだ。私はもう、揺るがない。私は悩んで、その末にここにいる。それに賛同してくれる、仲間がいる」

「ああ……クソッ。悔しいが……そういう君の瞳は……美しい……出来れば……標本にしてやりたかったよ……」

「だったら私はお前に独房というプライベートゾーンを与えてやる。終わりだ、スカリエッツィ」

「ふ……出来れば……見たかったな……我が故郷……」

「なに？」

「アル……ハザード……」

そこまで言って、スカリエッティは意識を失った。

理想郷、アルハザード

彼が目指したモノ。

衛星軌道に乗り、ゆりかごが得たその魔力を以って、向かおうとした先。

そこがアルハザード。

スカリエッティのオリジナルがいた世界。

なるほど、そこに向かいたいという思いがあっても、おかしくはない。

「アルハザード……か」

「フェイトさん!!!」

「シスターシャツハ!!!アコース査察官!!!」

と、そこに二人が駆け寄ってくる。
どうやら身体はもう大丈夫なようで、トーレにウーノを拘束し、普通に歩いてきた。

「すみません二人とも。スカリエッティを任せてもいいですか？」

「え？はい、それは構いませんが……」

「ゆりかごの方がまだ終わってないみたいなんです。私はあつちの加勢に向かいます」

「わかった。はやてのお友達にそう頼まれては断れないね。はやてを、頼むよ」

「わかりました。では!!!」

そう言ってフェイトがフォームを通常のそれに戻してスカリエッティのアジトから飛び去っていく。

後は、ヴィヴィオを解放するだけである。

一同が集う。
最期のその瞬間に、立ち合つ様に

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers へ取り戻したモノ、先に進むモノへ（後書き）

だぁー！ー！ー！ー！！！！

やっとここまでこぎつけた！！！！

アリス「お疲れ様です」

でもまだまだ続くんだよねえ……
しかもまた一日ぐらい休むかも

ア「戦闘シーンは大変ですね」

楽しいからよし。

で、そこで皆さま、ここで原作との相違点の説明を。

まず一つ目

地上本部にガジェット群が向かわなかったのはなぜか

これは、蒔風がクアットロをフツ飛ばした際にゆりかご内のガジェ
ット七割を吹き飛ばしたじゃないですか。
あれでその分の余裕がなくなっただんです。

ア「二つ目は？」

スカリエツティマジトの爆破です。

まあ、これもフェイトがコンソールを破壊してしまったから、それを使えなかったという事で。

ア「そういえばフェイトさんのプログラムでできましたね」

はい

あれは時風の翼の構造というか、力の流れるな物を解析し、それを組み込んだものです。

と、言ってもバルディッシュやレイジングハートのためのオリジナルカスタムなので、他のデバイスには付けられません。

更に言うなら、発動には魔力がたくさんかかってしまうので、普通の魔導師がやろうとしたら、魔力なくなって干からびちゃいます。

ア「なのはさんの加速ですか？」

ちがいます。

ま、そこは次回のお楽しみに。

ア「次回、ヴィヴィオ解放！！！そ・し・て」

ではまた次回

疑うことなんて、無いんだよね。私は弱いから、迷ったり悩んだり
をきつと・・・ずっと・・・繰り返す。

・・・だけど！いいんだ・・・それも全部、私なんだ！

なのはStrikers ～王権復古～

ヴィヴィオを時風が掛けたバインドで押さえつけるのはと、砲撃を終えた時風に通信が入る。

内容は

- ・フォワード陣によるナンバーズ・レプリカ、サラマンドラ撃破、及び召喚師ルーテシア・アルピーノ保護の完遂
- ・地上本部による戦闘機人一体の無力化、及び融合機の保護。騎士ゼストの死去
- ・ゆりかご外での怪鳥迦桜羅の撃破
- ・スカリエツティと戦闘機人二体の捕縛、及びケルベロスの撃破
- ・ゆりかご後部での動力炉の破壊、戦闘機人一体の撃破

というものだ。

「まあ……こんなもんだろ。よくやったみたいだし」

「うん……あとは……！」

「ああ、あとは」

「皆と一緒に、帰るだけだ」

そうやって、時風がヴィヴィオを見ながらなのはにレイジングハートを返す。

当のヴィヴィオは、そのバインドにもがきながらも、徐々にその目に理性が戻っていつている。

洗脳をかけていた当のクアットロが倒れた事で、その洗脳も切れていつているのだろう。

が、その目はいまだになにかを恐れていた。

「あ……ああ……」

「ヴィヴィオ、わかる？なのはママだよ？」

「あ……マ……マ……パパ……」

「パパじゃないつつつてんだろオが。わかんない子だなーお前も」

「わ、私を……」

「うん？」

「私を……そのまま撃つて……!!」

「はい？」

「ヴィヴィオ!？」

ヴィヴィオが悲痛に叫ぶ。

その身体はすでにその洗脳が解けているにもかかわらず、未だにバインドを振りきってなのは達を倒そうとしているし、その暴走は止まらない。

「も、もう止まらないの……このままじゃ……皆を……
……それに……ヴィヴィオは、一人だから……」

そう、ヴィヴィオはまだ、止まらない。

理由は埋め込まれたレリックだ。

それはヴィヴィオの神経をも乗っ取り、埋め込まれた命令を遂行させ続けている。

しかも、その体力、魔力共に最高レベルで、下手をすれば時風をも圧倒してしまうかもしれないもの。

たしかに、このままでは打つ手がないように見えるかもしれない。

だが、この男がそんな安直な道を往くはずはなかった。

「だから殺せつてか？バアカ」

「でも……」

「ガキがでつかなくなったところで、粋がってんじゃないの。おまえは子供、俺はおにーさん。だったら、おまいさんを助けんのは俺の仕事だ。まさか俺が負けるとか、思ってないよね？」

「おとーさん……」

「だからおとーさんじゃないっての」

否定すべきところはしつかりと否定する時風。
そこで続きをなのはが引き継いでいく。

「それに……ヴィヴィオには家族、ちゃんというよ？確かに、本当のお母さん、お父さんは大切。でもね？舜君も言ってたけど、生まれなんて、だれも選べない。一緒にいてくれる人が、大切な家族。私はヴィヴィオの本当のママじゃないけど、これから、本当のママになっていけるように努力する」

「でも……でも……私が一緒にいたのは、全員的情報を蒐集するため……」

「ああなるほど。だからおまえさっきなのは砲撃っぽい事とかフ

エイトの高速移動できたのか。ま、それこそ今更だ。おまえはそれを意識したのかい？それとも、それがお前の生きる理由かい？」

「あ……………う……………」

「たとえ作られた命でも、生まれた過程がどんなに許されないことだったとしても、命が存在してはいけない理由にはならない。そんな理由はどこにもない。おまえはどう生きたいんだ？この世界で、皆と幸せになりたいのか。それとも、みんなだけで幸せになってもらいたいのか。どっちだ？」

「……………そ、それは……………」

「ヴィヴィオ。今までヴィヴィオと一緒にいて、なのはママはね……………」

「……………うん……………」

「何にも、辛いことなんて、なかったよ？だから、これから……………私を「ママ」って呼んでくれると、嬉しいな」

「ま……………ママ……………」

「さて、それなら、おまえが言うべき一言は決まっているだろ？」

「言ってる？ 私たちは、いつだって、そのために動くから！！！ ホントの気持ち・・・ママ達に教えて・・・？」

「俺はパパじゃないけどな」

「私は・・・私は、なのはママのこと、舜パパの事が・・・大好き・・・！！！！」

「だーかーらー！！！！」

「もういいでしょ・・・諦めなよ。舜君」

「イヤダ！！！！俺はおにーさんだ！！！！」

「まったくもう・・・」

呆れるのはにダダをこねる時風だが、ヴィヴィオの言葉を聞いて、ここで決心が固まった。

「私を……助けてっ……!!!!」

「助けるよ!いつだって、どんな時だって!」

「根こそぎ……な。行くぞなのは!!!!」

「うん!!!!」

そうしてなのはレイジングハートを構え、時風がヴィヴィオに向かって行く。

だが、時風の足はなんだかおぼつかない。すでに何らかのダメージを負っているかのようだ。

しかし、そんなことはどうでもいいとばかりに、気合いでヴィヴィオに向かった時風。

ヴィヴィオには時風のバインドがかかっているが、それももう解けるだろう。

そして時風には、それを張り直すだけの時間は無い。

「舜君!？」

「え？」

だから蒔風はヴィヴィオを抱きしめて止めにかかった。

その身を、バインドで傷つけないよう
その身で、何も傷つけないよう

「なのははそのまま砲撃を撃て。俺がばらまいた魔力はまだ散つて
るから!!!」

「で、でも!!!」

「俺は大丈夫・・・だっ!？」

と、そこでヴィヴィオのバインドが解ける。
その瞬間、七色の魔力光が噴き出し、周囲をまとめて噴き飛ばそう
とし始めた。

その威力は、今まで抑えられていたためか、あまりにも強い。

だが、それがなのはまで届くことなどなかった。

「舜君！！ヴィヴィオ！！！！」

「いい……から……ぐっ……集束しろ！！！！」

「ッ……レイジングハート！！！！」

《All Right》

そうして、蒔風の背後でなのはがヴィヴィオに向かってスターライトブレイカーの発射準備に入る。
その間の時間稼ぎをするのが蒔風の仕事だ。

蒔風はその身を以って、ヴィヴィオの凶悪な魔力を、全身を以ってして受け止めていた。

その衝撃は凄まじい。

上半身前部の肌はすでに破れ、五臓六腑が捻じれ、四肢の骨が軋む。

「グツ・・・がハア・・・グボツ！！！！」

と、その蒔風の口から血が噴き出した。
圧迫された内臓が傷ついたのでろう。

蒔風の尋常でない量の吐血が、玉座の間の床を汚していく。

が、それは一滴たりとも、決してヴィヴィオを汚すことなく足元に落ちていった。

「舜君ツツ！！！！」

「大・・・丈夫・・・だッ！！！！ちよつと内臓を骨が引つ掻いた
だけだ・・・気にすんな・・・」

「パパア！！！！」

「パパじゃ・・・ねえ・・・んな顔すんな・・・大丈夫だよ」

時風が唸り声で、口元を血で濡らしながら答える。
が、その肢体はもう限界に近い。

腹筋に力は入らないし、ついには頭からも出血し始めた。

だが、その顔から笑顔が消えることはなく、抱きしめる腕は一切ゆるまなかった。

むしろより強く、それでいてそつと、ヴィヴィオの体と頭をしつかりと抱きしめていた。

「パパ・・・パパあ・・・」

「安心しろよ、ヴィヴィオ・・・もう、さみしい思いはさせないから」

「でも・・・このままじゃ死んじゃ!!」「死なない」

「俺は死なない。そもそも「生きて」ないからな。だから、大丈夫だ。今はママと・・・おにーさんを信じる」

「うん・・・うん!!!!」

「舜君！！準備できたよ！！！そこから早く！！！」

『構わん、撃て！！！こっちはすぐに離れられるから大丈夫だ！！』

「でも……」

時風にはもう口を開く余裕もないのか、念話でなのはに叫びかけてくる。

だが撃て！！といわれても時風はびったりとヴィヴィオに張り付いているのだ。

しかも、あの位置ではどうやっても砲撃をかわせなどしない。なのはの砲撃は、それほどまでに強大だし、手を抜けばいたずらにヴィヴィオを傷つけるだけで、レリックの破壊はできないのだ。

だがそれでも、時風は撃てと叫ぶ。

そして、容赦なくカウントダウンを始めたのだ。

『撃て！！！なのはア！！！！三秒前エ！！！！3、2！！！！』

「ツツ！？レイジングハート、ブラスタースリー！！！！」

『1!!!!!!』

「スターライトブレイカーズ!!!!!!」

瞬間、時風が手を放す。

直後、ヴィヴィオの魔力によって、時風の身体がまるで鉄砲玉のよ
うに弾きだされ、なのは後方の壁に叩きつけられて、ベシヤリとい
う音が聞こえてきた。

ドオウ!!!!!!

そして放たれたスターライトブレイカー。
だが、レイジングハートの形態が少しだけ変わっていた。

翼が、レイジングハートから生えていたのだ。

否、そもそもレイジングハートをここまで解放されると、翼らしきものが展開されてくるのは最初からだ。だが、この翼は違う。

その翼が出ているところは全く同じだが、翼の形は蒔風の背中のもと同じように、まったく鳥のものと同じだった。

「これは……」

蒔風が与えてくれたプログラムです

「舜君の？」

そう、これがなのはへの贈り物。

なのはの砲撃魔法で一番ネックだったのが、使用者への体の反動だった。

そのせいでなのはは八年前に墜落しているし、リミッターがかかっているのだって、そういう理由もある。

だが、このプログラムはそういったものをまとめてなくしてしまった。

このプログラムもフェイトのものと同様、蒔風の翼を解析して、レイジングハート使用に組み込んだ世界に二つとないオリジナルだ。

フェイトのは加速能力だったが、なのはのを負担軽減が付加されている。

翼人の翼は制空能力や「想い」の収束にも使われるが、そもそもの存在理由は「反動やエネルギーの噴出孔」である。

翼人の力は強大だ。翼もなしにフルで使おうものなら、その反動に体が粉々になってしまう。

それゆえの翼。

その翼の反動噴出機構を、レイジングハートに取り付けたのだ。

なのはは一切後ろを振り返らなかった。

蒔風のことは心配だ。

でも、今はこうすることが、彼の望みでもあると、彼女は分かっていたから。

だからこそ、今は振り返らない。

今は全力で、自分の娘を助けるのだ。

パリン・・・・・・・・

そうして、ヴィヴィオのレリックが砕け散った。

後に残るのは砲撃のクレーター。そこに倒れる、元に戻ったヴィヴィオ。そして、背後で崩れるように壁にもたれて倒れる蒔風。

「ヴィヴィオ……！」

「大……丈夫……一人で……立てるよ……」

クレータ内で倒れるヴィヴィオになのはが駆け寄ろうとするが、まだ意識があつたのか、ヴィヴィオがそれを止めた。
そして、その小さな腕で、必死になって立ち上がるうとしていた。

それはいつの日か、交した約束。

『次は立とうな？ 頑張れるか？』

『……うん……！』

そう、約束は果たさなければならない。

だが、それがなくとも、彼女は一人で立ち上がっただろう。

ヴィヴィオはもう、大丈夫だから。
一人でも立ち上げられるよと。

だって、立ち上がった先には、大好きなママとパパがいるんだから。
……

「ったく……ゲホ……ヴィヴィオが立ってんのに……
俺が寝てるわけにいかない……じゃんか……オゲツ……
ゴポツ……」

「舜君！！！！！」

それを見守るなのはの背後から、蒔風が腹を押さえ、同時に腕を抱え、口からいまだに少量の血を吐きながらよると寄って来た。
その姿はあまりにも痛々しい。

無理もない。ヴィヴィオの暴走を、その体一つで受け止めていたのだから。

そうして見守り、ヴィヴィオが立ち、しかしすぐに崩れ落ちてしま
う。

それをなのはが受け止める。

大事に大事に、名前を呼びながら。

「ヴィヴィオは？」

「気絶・・・ううん。寝ちゃったみたい」

「そ・・・っか。がっ・・・」

時風が苦しそうにつめくが、すべて終わったのだ。もうここには用
はない。

と、そこで壁を突き破って、新たな来客者がやってきた。

「わ、わかりません・・・ヴィータ副隊長たちが動力炉は完全に破壊したって言うていたんですけど、ゆりかごは上昇をやめただけで落ちないし・・・」

「ヴィヴィオを解放したらここは封鎖されて、魔力も使えなくなるから脱出不可能になる。そう聞いて私たちが来たんですけど・・・」

「

たしかに。

ここまで破壊されつくして、ゆりかごはいまだに浮遊している。ガジェットももう出てこない。外にある残り二十基ほどをつぶせばもう終わりだろう。

しかもそつちにはすでにフェイトやシグナムが来ているから、時間はそうかからないはずだ。

確実に終わった。

なのになぜだろうか。

この場に残る、おどろおどろしい空気は、まだ一切消えていない。

「諸君、ご苦労。これでゆりかごは我が配下に入った」

「「「「!!!?」」」」

そこで声がした。

いままで誰も気づかなかった。

否、そもそもいつからいたのだろうか？

聖王の間、その玉座。

そこに「奴」が足を組んで、頬杖をついて実に偉そうに座っていた。

「俺の特権はあくまで所持者のいなくなった物限定だからな。こうしていったん、聖王の器の手放しが必要だったんだが……うまくいったな」

「な……なのはさん……」

「久しぶりだな。高町なのは。お前にとっては十年ぶりか。さて、三度目の正直だ。殺しに来たぞ」

「させないよ……私は、死ねない」

「こ、このひとが？」

「ああ、初対面の新人さん。そう、私が蒔風の言っていた「奴」です」

ティアナとスバルが、立ち上がってきた目の前の人物に恐怖する。確かに、蒔風の相手を今までし続けていたということから、只者ではないだろう、ということとは分かっていた。

だが実際に目の前にしてどうだろうか？

その威圧感と力の重圧に、今すぐにでもつぶれてしまいそうだ。

桁違いではないか。

しかも、一度破壊されたゆりかごを、己の支配下に置いたという。つまり……………

「ゆりかごの恐怖は……………終わってないってか……………」

「舜君!？」

そこで蒔風が会話に入る。
肩を貸してくれていたなのはから離れ、「奴」に向き合う。

「てめえなら自分でぶんどれただろ。わざわざ俺らにやらせるとか・
・・・悪趣味め」

「それでもよかったんだがな。それでお前が消耗してくれるならこ
っちのほうが合理的だろ？」

蒔風と「奴」がにらみ合う。
だが、コンデイションが悪すぎる。

「奴」は今、万全を期してゆりかごを手にした。
対して蒔風は満身創痍だ。今までの戦いで、体に結構なダメージを
負っている。

『なのは。三人を連れて逃げろ』

『えっ？』

時風が「奴」をにらみながら、なのはに念話で話しかける。
その声は、「奴」に向かって余裕そうな顔を向けるのとは裏腹に、
思いのほか焦っているようにも聞こえる。

『この状況はやばい。最悪だ!!このままだと死ぬぞ!!早く行け
!!!』

『でも!!!!』

「ッ!!!!おらぁ!!!!!!」

なのはとの会話に業を煮やした時風が、クアットロを打ち抜いた大
穴に向かってなのはたちと、乗って来たバイクを投げ落とした。
そのあまりの勢いに、なのはが飛行魔法を展開したところには、すで
にゆりかごの外だった。

「なのはさん!舜さんは!？」

ウイングロードを出して着地したスバルとティアナがなのはに聞く。その質問になのはが苦い顔をして上を見上げた。

が、そこから一発、漆黒の波動砲が撃ち出されてきた。

それをなのはが慌ててギリギリ回避して、また撃たれてはかなわな
いとゆりかごの左側にいたはやとと合流する。

さらにその姿を見たフェイトたちやシグナム、ヴィータ、エリオと
キヤロも集まってきた。

「なのは！！ヴィオは！？」

「ヴィオは大丈夫。アルトさん、お願いします」

『了解しました。任せてください！！！！』

アルトの乗ったヘリにティアナとスバルがバイクとヴィオを載
せに行き、彼女らも集まってくる。
だが、一人だけいない。

それに気づいたシグナムが、なのはに何があったのかを聞く。

「時風はどうした。一緒だったのだろうか？」

「そ、それが……」「奴」が……」

「なんだと!？」

「「奴」が……」来た」

「なっ……」

「じゃあ舜はどうしたんだよ!？」

ヴィータが声をつい荒げてなのはに聞く。

その瞬間、ゆりかごが振動した。

その前部から小爆発が起き、そこから後部まで、まるで何かが移動しているかのように、爆発が続いていく。

そして最後部まで達したところで、そこから一気に最前部まで、内部を何かがつんでもない勢いで突き抜けたかのようにゆりかごの外郭が歪み、その勢いのまま、ゆりかごの額とも呼べる位置が爆発、人型の何かが突出してきて、地面に落ちて行く。

それには翼が生えており、その人物はさっきまでなのはとともに聖王の間にいたものだ。

「舜君！……！！！」

その姿を確認し、なのはが飛び出して落下していく時風を抱きしめてキャッチした。

ひどい状態だ。

頭から血を流し、腕は折れているのだろう、あらぬ方向を向いている。
顔を青くし、意識がないのか目をつぶっている。

「舜君？舜君！！！」

「きこ……えてる……」

血まみれの蒔風が、声を絶えさせながらブツブツと答える。
まずいことに、これは重体である。

なのはがすぐに治癒魔法の使えるキャロのもとに連れて行き、その傷を癒す。

だが、完全には無理だ。あまりにも傷が深すぎる。

一応死にはしないだろうが、危険な状態であることは変わらない。

『八神指揮官！！！なぜ……なぜゆりかごは落ちないのですか！
？それにさっきのは……』

局員の声が聞こえる。

だが、はやてはそれに対し、意気揚々とは答えられなかった。

「全員……よう聞いといてや……まだ、戦いは終わっとらん……」

目の前で、ゆりかごが修復されていく。
吹き飛ばされた瓦礫が、戻って行く。

この事件は、ひとりの男にかっさらわれた。

否、ここからはもう、事件ではない。

一つの世界をかけた、戦争だった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers 王権復古(後書き)

「奴」が来た!!!

って言うとなんだか緑色の悪魔を思い出すなあ……

あ、ちなみにタイトルの方は何となくつけたので、意味とか考えて
ません。

本当になんとなくです。

アリス「なにいつてんですか」

「奴」の目的

それはゆりかごを奪う事だったんだよ!!!

ア「な、なんだってー!?!? (棒読み)」

ノリ悪いね

ア「いつもいいと思ってたら大間違いです」

そっか

ア「そうです。次回、ゆりかご、変貌」

ではまた次回

一人で…立てるよ…強くなるって…約束したから

なのはStrikers　↓落ちる翼↓

ゆりかごの抉り飛ばされた外壁が埋められていく。

まず、大穴や爆発の破損が直っていった。

こうしてゆりかごが、最初に出現した時とさほど遜色のない状態になる。

だが、さすがに完全には無理なのか、ところどころはヒビが入っていたり、崩れているところもあった。

次に、ゆりかごは膨張した。

内側から押されるようにして、形はそのままにゆりかごが大きくなっていく。

その膨張で、外壁にさらにヒビが入って、そのヒビは全体を覆って、ヒビの所々から砲台が針のように伸びてきた。

そうして最終的にゆりかごは、当初の1・5倍ほどまでに巨大化してきたのだ。

それを見て、シグナムが誰に言うでもなくつぶやいた。

「で……でかい……」

『ゆりかごはもはや戦艦ではない。要塞だ。そもそも、かの聖王殿下はこの中で一生を果たしたこともある。これぐらいできなくてどうする?』

「奴」の声が響く。

まるでゆりかごが振動して「奴」の言葉を発しているかのようにだ。

そしてその現状に、ほとんどの管理局員は絶望する。

こんなもの、勝てるわけがない。

最初のゆりかごの戦闘だって、善戦していたわけではないのだ。その巨大化、さらにはこっちの戦力だって、かなり減っている。勝てる見込みは、あまりにもない。

『さてとりあえず……うるさい小蠅は……消え去れイ！
！……！』

ゴウン！……と、ゆりかごが雄叫びのようなものを発し、全身に走ったひび割れがポウ……と紅に染まる。

そして、そのゆりかごのすべてから攻撃が放たれた。

それは帯状のレーザーとでもいうのだろうか？
オーロラの用に薄い膜のようなレーザーが、全体を覆うヒビから放出されていく。

しかも、そのヒビは三百六十度すべてに入っているのだ。逃げ場な

どない。

さらにそのヒビのところどころから出現している砲首からの砲撃や、線状のレーザーが放たれてくる。

オーロラは軽いようにも見え、風に吹かれたら揺れてしまいそうなほどだが、そんなことはない。

あのヒビの幅は約一メートル。そこから紅いオーロラのように帯状になって噴き出しているのだ。

幻想的な見た目とは裏腹に、恐ろしい攻撃だ。

もちろん、最初からついていた砲台だって健全である。

蹂躪だった、惨状だった。

ゆりかごがいくつかの次元世界を滅ぼしたといわれたのもわかるというものだ。

これは間違いなく、史上最悪の兵器だ。

『蹂躪せよ、破壊せよ。大丈夫だ。世界を食ったのちに、ここも元通りに返してやる』

局員の悲鳴が聞こえる。

次々と落されていつているのだ。

幸いなのはすでにこちらの戦力が少なかったところだろうか。一塊になっっているところを、狙い撃ちにされなかった。

だからと言って、脅威でないわけがない。その衝撃や空中でいきなり爆ぜた威力でも、十分過ぎる破壊力だ。

脇役は殺さない。

「奴」のそのポリシーで、直撃を食らった者、死んだ者は一人もいなかったが、それだけで十分に戦闘不能だ。

攻撃の嵐、破壊の暴風。

一切の容赦もない、一斉総攻撃だった。

もちろん、衛星軌道上に待機していた戦艦が向かわなかったわけではない。

だが、あまりにもその攻撃範囲が広すぎる。

戦艦が来れば何とかなるかもしれない……などと思っていた局員の心をも、これは砕いた。

ゆりかごの周辺に巨大戦艦が三隻、ゆっくりとした速度で落ちてきたからだ。

その船体からは爆発と火災が起こっており、もはや戦闘どころか航行もできない状態である。

その中にはクロノの戦艦、クラウディアもあった。

「お兄ちゃん！！！！」

『大丈夫だフェイト！！一体何があった！？』

悲鳴を上げるフェイトだが、そこにクロノからの連絡が入る。

どうやら転送ポートで船員は全員脱出し、他の船のクルーも無事らしいが、もはやまともな戦闘は不可能だそうだ。

フェイトがクロノに現状を報告する。

その内容に驚愕するクロノだが、これ以上回線を繋いでいられないフェイトが、再び回避に移る。

いま、機動六課のメンバーは空をかけ、襲いかかる砲撃、攻撃から身を守るので精一杯である。

そんな中、総てを無差別に攻撃しながらも、ゆりかごがある一点に向かってゆっくりと動いていく。

なのはだ。

時風を担いだなのはがにゆりかごの艦首が向けられ、そこに向かってゆりかごは進んでいた。

が、ゆりかごの速度がゆっくりに見えるのはゆりかごそのものがあまりにも大きいからだ。

実際のスピードは現在のなのと同じくらいだし、この大きさにしては異常な旋回力も見せる。

逃げられない。

そう覚^{おぼ}つたなのはが、ゆりかごに向かって杖だけを向けて砲撃を放つ。

だが、前部に設けられている砲撃一発程に軽く打ち消され、他の砲首が向いて一斉に砲撃される。

「ッ!？」

「くっ……なのは……気にすんな、撃ちまくれエ!!!」

バアンツ!!!

そこでなのはに声がかかる。

蒔風だ。意識を取り戻し、キャロの治癒魔法で回復力が促進されていた彼が、何とかその砲撃をバリアで弾いていた。

確かに、蒔風の回復力がブーストされれば、かなりのスピードで大丈夫な状態になるだろう。

しかし、身体に残ったダメージや、染み込んだ鈍痛の様なものからはとてもではないが回復できない。

その抵抗を見て、ゆりかごが全方向砲撃を一旦止め、その砲首をすべて蒔風に向ける。

前部にあつた物から、ヒビの隙間から現れた物まですべてだ。

ヒビから出てきた物は、砲身がメキメキと伸び、棘のようになってから、折れ曲がって蒔風に向いた。

そしてその隙間をオーロラが走り、さらに砲撃が一斉に光線を発し、蒔風を焼こうと襲いかかってきた。

「舜君ツッ！！！」

「離れんな！！大丈夫だ・・・おまえを死なせやしないから！！！！」

「舜君・・・ツ！！ダイバイーーーーン！！バスターーーーー！！！！ツッ！！！！」

ボウツ……………

蒔風に守られながら、なのはが砲撃を撃つが、どうあっても効くはずなどない。

煙のように消え去って、桜色の霧になるだけだ。

『ふん……………さすがに持ちこたえるか。ま、このくらいならお前はやるだろうな。だが……………なぜ俺がわざわざめんどくさいこととしてまでこのゆりかごを手に入れたのか、わかるか?』

「ガツ……………んなもん、ただ単に……………おグアあああ!」

『ふ……………手の皮が裂けてきたか。まあ、ただのでかい質量・魔力兵器だからな。今は……………ん?』

「奴」が何かに気づく。
異常なまでの状況認識能力だ。戦艦を動かして攻撃する際は、オペレーター、操舵主、観測手、全体指揮の艦長など、実に多くのスタッフが必要なはずだ。

だが、この男はゆりかごの玉座に座ったままで、そのすべてを取り行っていた。

全体を見渡し、総ての砲台の管理をして、攻撃する。

「奴」の姿は見えないが、おそらくはこれだけのことをしても特に感動はなく、ただできるだけ、というった顔をしているのだろう。

そして、その「奴」が気付いたのは、はやてである。

4927

「遠き地にて……闇に沈め……」

『八神はやてか。おまえも十年ぶりらしいな』

「デアボリック・エミッション!!!!!!」

ゴォ!!!!!!

再会を懐かしむかのように言う「奴」の言葉を無視し、全砲撃が時風に向かった隙にはやてが攻撃を加える。
その空間魔法の範囲は今までと比べ物にはならないものだ。

一気に膨れ上がったそれは、ゆりかごの三分の一ほどを呑みこんで、一気に爆発した。

「……あかん……無理や……」

「はやて!!!!諦めちゃダメ!!!!ライオットザンバー・カラミティイ!!!!!!」

《R i o t Z a m b e r》

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

苦い顔をしたはやてに変わって、フェイトが大剣をかしたバルディ

ツシユを振りかぶって、ゆりかごに斬りかかって行く。

その刀身は、ゆりかごを輪切りにしようとするれば、おそらく四分の一は斬れるんじゃないかという程に大きい。

さらに速度は真ソニックだ。威力はどんどん跳ね上がり、ゆりかごへと向かっていく。

そして、ゴオン……!!という壮絶な音を鳴らして、刃とゆりかごの外壁がぶつかり合った。

が、そんなにも長く押し付けてはられない。

熱いのだ。

当然と言えば当然だ。

ゆりかごのヒビは全体にまわっており、そこからオーロラ状のレーザーが出ています。

方向こそ時風に向かっているものの、やはり近くに行けば熱い。

「翔シュツルムファルケンけよ、隼シュツルムファルケン！！！！！！」

シグナムの魔法で、最大の破壊力を持つ魔力の矢を以ってして、ゆりかごを射抜こうと試みる。
だが、ゆりかごはフェイトが離れた瞬間から、すでに再生を始めており、その斬り込みは消えようとしていた。

「くっ！？」

「諦めるな！！！！又オオオオオオオオオオッ！！！！！！」

「！？ザファイラッ！？」

そこにいきなり、と言っては失礼だが、現れたザファイラの雄叫びと共に、その切れ込みが「鋼の軛」でつかえ棒のようにされて開かれていく。

そこに見事、シュツルムファルケンの矢が突き刺さった。

「な、なぜここに！？」

「あのような禍々しいモノが出てきて、黙って居られるオレではない」

「だからアースラから転送魔法で真っ直ぐに来たの。「奴」と戦ったことのある戦力、私たちくらいだから」

「シャマル!!!」

ザフィーラだけではない、シャマルまでいた。つまるどころ、これで八神はやてのヴォルケンリッターが集まったというわけである。

が

「うっそだろ!?!まだ耐えてんのか!?!」

ヴィータが叫ぶ。

今のシグナムはリインとユニゾンした状態だ。

それで放ったシュツルムファルケンである。

更にはあらかじめつけられた傷跡。

にもかかわらず、矢は突き刺さったままだ。

貫通せず、矢の半分ほどが付きささり、止まってしまっているの
ある。

「ヴィータちゃん!!」

「おう!!ブースト頼む!!ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツ!!フルドライブ!!轟天爆砕、ギガントシユラーク!!!!」

と、そこでヴィータがさらにそれを押し込めようと、巨大化したアイ
ゼンで矢にギガントシユラークを叩き込む。
かつて、闇の書の闇による魔力と物理の複合結界、その一層を破壊
した魔法が、ゆりかごに叩きこまれた。

しかもその威力は十年前と比較にはならない上に、シャマルのブー
ストまでかかっている。

だが

「なッ！！！！？くっ、全然動かねえ！？」

「そんな……どうして！？」

これだけの威力に叩きつけられても、矢はゆりかごを貫かず、それどころか少し食い込んだくらいだった。
万事休すか。と、思われたが。

「グイータ副隊長！！退いてください！！！！！！」

「あ！？っってお前ら！？」

「スバル・ナカジマ、行きます！！！！！！」

そこで準備を整えていたフォワードたちが攻撃を仕掛けた。
と、言ってもこの攻撃はスバル主体だ。

キャロによってブーストがかけられ、エリオのストラダを左手に握り、ティアナの指示通りのタイミングで、スバルが突貫して行った。

ストラダのブーストと、マツハキャリバーの推進力、さらにはエリオがスバルの身体に電流を流してその身体能力を増強し、一気にトップスピードを乗り越えていくスバル。

空気の壁を打ち破って、目も開けられないようなスピードでゆりかごに向かって突き進む。

そして到達した瞬間、右腕を振りかぶり、リボルバーをフル回転させて振動拳を叩き込む!!!

「やったか!？」

『……その台詞はな? やれてない時の台詞だぞ?』

「……くそッッ! ! ! ! !」

結果として、ゆりかごにダメージは通った。
爆発の中心部には、確かに穴があいている。

だが、その大きさは直径一メートルほどだ。
この大きさのゆりかごに、これでは効いたとは言えない。

『だが……AMFが働いていないとはいえ、穴が開いたのは正
直驚きだな』

そして今、ついに胸へと到達する。

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオああああああああああ
ツツツツツツ！！！！！！！！！！」

「やめてえ！！！！！！！！！！もうやめて！！！！！！舜君をもつこれ以上傷
つけないで！！！！！！」

『ならばおまえが死ぬことだな。オレの手で。そもそも、それが俺
の目的なのよね』

「う……う……う……う……う……う……う……」

『さあ！！どうする？最重要！！？自らを犠牲にして誰かを助けるの
は、お前らの専売特許だろう！？』

その言葉に葛藤するなのは。
自分が死ねば、この世界は食われて消える。だが、このままでは目
の前で傷ついている大好きな人が……

「バカなことすんじゃないねえぞなのは……おまえが死んで!!!
それで「ありがとう」なんて事言う奴が一人でもいると思ってるの
かよ!?!?!?!?!?」

「ツツ!」

蒔風の言葉にハツ、とさせられるなのは。
そつだ、彼女には帰りを待つ娘ヴァイセイオがいる。

だがそうはいつでも、現状はどうすることもできない。

『強情を張るなよ、蒔風。しかし……この状態も飽きたなあ……
・落とすぞ』

4941

ドオンツツツ!?!?!?!?!

「奴」の発言と共に、蒔風を襲っていた砲撃が爆発した。
まるで今までののが侵食系、今のが爆破系とでも言わんばかりの変化
だ。

その爆煙の中から、二人の影が墜ちていく。
だが、なのはに爆発での怪我は一切ない。

時風がその体をボロボロの腕で抱きしめ、背中でガードしていたからだ。

そうして、森に墮ちる。

そこに向かって、ゆりかごが砲撃を加えようと砲首を向けた。

「まずい！！！！！！」

「オレが行く！！！！ブーストを頼むぞ！！！！」

「わかったわ！！」「了解です！！」

「私が連れていく！！！！真ソニック！！！！」

落ちた二人を守るため、全員が動く。

はやてもそこから動こうとするが、そこに通信が入る。

アースラからだ。

こんな時になんだとはやては思いつつも、何かしらの攻略が見えてきたのかと期待して、通信を繋ぐ。

だが、通信の先の声は震えており、どうしようもない絶望の色に染まっていた。

『や、八神部隊長………』

「なんや？どしたん!？」

『ゆ、ゆりかごを解析したのですが……どうやら、あ、あの男の一人の力でここまでやっているようで……』

その報告に、はやては驚きながらも納得する。

確か自分の記憶が正しければ、「奴」の特性「君臨特権」は、主を失ったものを取り込んだり、利用できるというものだ。

つまり、使いこなせるかは本人の力量次第だが、使うこと自体は容易なのだ。

更に言うなら、「奴」には「王」としての資質がある。

ゆりかごを聖王以上に扱っても、おかしくはないだろう。

だが、その後の言葉に、はやては絶句するしかなかった。

『それで……「奴」という男の力も出てきたんですが……ラ
ンクにすると……』

「……すると？」

『魔力ランクSSS++』

「な……………」

『管理局以前の旧暦の時代にもこんな例はありません…………あの男は……………真正正銘の化け物です!!!!!!』

ランクSSS++

その恐ろしさは、下手にEX（測定不可能）と言われるよりも、恐ろしいものだった。

ランクにおいては、なのは、フェイトが空戦S+。
はやてでも総合SSだ。

ちなみに、戯れに蒔風が測った時は、魔力SS++だった。

それを数ランク上に行く「奴」の力。
力押しで十分に蒔風を圧倒できる。

それだけの力の前に、なぜ自分たちは向かって行ったのだろうか、
と疑問すら抱いてしまう強さだ。

もし、相手がEX（測定不能）だったらまだ楽だったかもしれない。
ただ全力で、もはや何も考えずにぶつかればいいのだから。

だが、こうして見えてしまった事で、どれだけの差があるのかわ
かってしまう。

どれほど離されているかが明確になってしまった。

だからこそ、怖い。

その通信は、フェイト達をはじめとする全管理局員に通じていた。

いや、通じさせられていた。「奴」は通信を傍受し、すべてにこの通信を流している。

それは管理局の戦意を削ぐためか。

そして、その思惑はうまくいっていた。

魔力ランクSSS+だつて？

そんなもの、個人が内包する魔力じゃない。兵器で使われるエネルギー値だ。個人が持っているものじゃない。

そして、すべてのものがあった。

それは、都市伝説。

十年前に現れた、奇跡の男。

翼人が現れてはくれないかと。

だが、機動六課メンバーを除き、彼らは知らないのだ。

さつき落とされたあの男こそ、その希望の人物であるという事を。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers 〱落ちる翼〱（後書き）

圧倒的ですネ!!!

にしても自分のイメージ通りにゆりかご改の描写ができたかどうか
が心配です。

アリス「絵でも描けばいいじゃないですか」

無理ですよ。

自分にはそんなツールも無いですし、正直絵心がありません。

棒人間が限界ですもん。

ア「じゃあ誰かに書いてもらえばいいのでは？」

確かに私の友人には絵のうまい人がいますが、わざわざ頼むのもな
んだかねえ……

ア「さいですか。にしても、ゆりかごにはまだまだまだ秘密がありそ
うですね？」

はい!!!

それはもう今回考えましたよ!!!

この設定は作者のオリジナルです!!!

まあ、その内容は次話で書きますので。

ア「ほう。ゆりかご建造の秘密ですか。ふむふむ……」

あ、「こら読むな!!」

ア「でもこのままいったら次話で「奴」倒しちゃいますよ?」

そこが悩みどころ。

引っ張ろうかどうか少し考えてる。

ア「これ以上引っ張んなよ。あ、でもここで簡単に倒してもなんだから味気ないですね……」

そうだ!!!

ア「なんですか?」

ちなみにランクの「空戦」は空中戦において、「総合」は全体的にみて、「魔力」はただ単に魔力量の事です。

ア「そつちですか!?次回、ゆりかごの秘密」

ではまた次回

謝ることなんてなんもあらへん。鉄槌の騎士ヴィータとグラーフア
イゼンがこんなになるまで頑張つて……。それでも壊せへんもんなん
てこの世のどこにもあるわけないやんか

なのはStrikers　く未来、願い、可能性く

「魔力ランクSSS++!?!?」

「そんな……くつ……」

蒔風となのはを後ろで、ザフィーラが驚愕し、フェイトが一瞬くじけそうになる。

今二人を守っているのは、ザフィーラの盾と、フェイトの防壁だ。ゆりかごの複合砲撃をザフィーラが受け止め、それによって周囲に巻き散らかされる衝撃からフェイトがなのはと蒔風を守っていた。

「だが……. だったらこの俺が受け止められているのは、どういうことだ!?!?」

「この攻撃はゆりかごのもので、「奴」の攻撃力とは無関係だから. だと思っ」

そう、この砲撃をザフィーラは、ギリギリとはいえ、何とか受け止めていた。

確かに、フェイトが推測した原因も正しい。

この砲撃はあくまでゆりかごのもので、「奴」の力の大半は、あくまでゆりかごの制御に回っている。

だが、それでもおかしい。

あの時風がゆりかごの総攻撃の三分も耐え切れず押し込まれたものを、ブーストをかけているとはいえ、ザフィーラが耐えられるのか。

『疑問か？呑気だなあ……ま、あくまで時風は防御よりも攻撃のほうが得意な男だ。そこな守護騎士のほうが、守りのほうは上だろう。それにだな……くっ、このゆりかごの製造理由を考えれば当然といえば当然なのだよ』

「ゆりかごの製造理由やって？」

「聖王を守るためのものでは……」

「奴」が語る。

よほど面白いのだろう。その声は若干ながら弾んでいた。

『そいつは表向き。どんな時代にも表向き裏向きってのがあ
るみたいだな。その男はゆりかごは勝てない。このゆりかごは……
・翼人との戦闘を想定して作られたものだったからな』

「なに!？」

「奴」の言葉に、一同が驚愕する。

その言葉に驚く一同をさらに面白がってか、「奴」の言葉は進む。

「奴」は世界構築を計算するうちに、ある程度の事実を知り得る。
今回のこれもその中であつたものだ。

はるか太古。

それは古代ベルカでのおとぎ話。

翼人が無数の世界を破壊し、消滅させたというものだ。

だが、どんな怖いものでも所詮それはおとぎ話である。かみなり様
が来たらおへそをとられるだとか、恐怖の大魔王がやってくるだ
とか、そんなものと同程度と考えられていた。

しかも、アルハザードの壁画に一文だけ書いてあったらしいぐら
いの伝承しかない、翼人そんなものを本気で信じる者などおらず、ほとんど誇大
妄想として扱われていた。

しかし、それは事実だった。

しかも、昔のことではない。

この世界は多重世界だ。何かの拍子でほかの世界の情報が流れてくることも、珍しくはない。
そしてこの話もそうだった。

いくつもの世界、その数十七。

それだけの世界が、確かに破壊、消滅させられていた。

それを事実だと知っていたのは、当時の王たちとその臣下数名だけ。

世界を破壊して回る翼人。その数はすでに十を超えていたのだから、脅威というには十分すぎる。

そうでなくともその時代は戦乱の時代であつたし、力はあれど、世界を滅ぼす伝説の翼人などになうはずもないということは、彼らにはわかっていた。

彼らは決して慢心などしていなかった。いや、もしかしたら、ただ単に怯えていたのかもしれない。自分の世界が破壊されることが。

だからこそ、彼らは絶対的な戦力のため、「聖王のゆりかご」を作り出した。
王を守り、そして、王自らゆりかごとともに戦場へ出て、その翼人と戦うことを目的とされて。

しかし、結果的に言えばゆりかごは一度たりとも翼人と戦闘をしなかった。それどころか、目の前にすら現われず、ほかの世界で打倒され、次元の狭間に封印されたのだそうだ。

だが、せっかく作りだしたものを活用しない手はない。
古代ベルカはその力を以って戦乱の世を正し、平和へと導いた。

逸話としてあった世界を謁見して滅ぼした、というのは、この翼人と同等か、それ以上の力を持って作られたことによって噂されたためについてしまった尾ひれだ。

実際にはそんなことなどはない。

そうして、役目を終えたゆりかごは封印された。
またいつか、翼人の脅威に世界が晒されたとき、誰かがそれを以つて救うという願いを載せて。

ちなみにAMFというのは、翼人の力を弱体化させるために作られたシステムだ。

翼人の使う力が魔力だと思って作られたものだったが、翼人は別に魔力しか扱えないわけではない。

結果的には無駄な機構になったのだが……

『だが、発想としては悪くはない。それでな？ここに俺が持つてる蒔風のデータを組み込めば面白いことに……アンチ・マギリック・フィールドは見事、アンチ・マイカゼ・フィールドとして作用了というわけだ』

そう、この男はゆりかごに組み込まれていたAMFのプログラムを書き換え、その対象を蒔風一人に向けていたのだ。

なるほど、確かにそれならば、時風に耐えられずファイラが耐えられたのも納得がいく。もともと防御にはそこまで秀でていないのに、さらに制限までかけられては、時風も大きく弱体化する。

『こうして！！聖王のゆりかごはついに、翼人兵器として完成した。さて……そろそろこっちの戦力のスキャンも終わったんじゃないのかな？俺のランクは結構上らしいしな？勝ち目は……まあないと思うぞ？』

「ッ……」

「奴」のその言葉に、はやてが唇を噛む。

さっきの「奴」の力の報告で、すべての管理局員はうなだれてしまっている。

その実状が、今の苦境を作り出しているといってもおかしくはないだろう。

『こつちの勝率はすでに99%を数えている!!!どうだ?まだやるか管理局諸君!?!いやいや、俺はお前らが嫌いなわけじゃあない。そこは安心してもいいぞ、うん』

「奴」が納得するように言う。

もちろん、この間にもはやてやシグナム、フォワードたちはゆりかごに総攻撃を仕掛けていた。

掛け値なしの機動六課総戦力。

しかし、それを受けてもなお、ゆりかごは墜ちるところか揺れもせず、延々と砲撃を撃っていた。

「グッ……おおおおお……」

「ザフィーラ!?大丈夫!？」

「大……丈夫……だが……これは……ッア!!」

だが、もはやどうしようもないのだ。

機動六課のメンバーは、今や誰もがエース級だ。

そして、今戦っているのがそのエース級であるという事が、なによりも管理局員たちを落ち込ませる。

あの人たちがあれだけやって、それでも落ちないゆりかごに、一体どうやって戦えばいいんだ？

それは同じ起動六課でも、アースラに残ったロングアーチスタッフにも同じことが言えた。

アースラのモニターには「奴」の数値と、現状でのこちらの戦力が現れている。

絶望、諦め、悲哀

世界は終わる。

そんな異常な日常を、当たり前のように享受できそうな心境。

誰もが挫けた。
もう出来ることなんてないんだと。

誰もが泣いた。
守りたいものが守れない。

誰もが後悔した。

ああ、自分にもっと力があれば。

誰もが恐怖した。

まだ死にたくない。

誰もが諦めた。

想いだけじゃ、どうしようもない。

そしてそこに

「……奮える……！あんな子娘どもに、すべてを丸投げにして、貴様らは恥ずかしくもなるともないのかこの腑抜けがア……！」

戦場の、すべての局員の通信網に、太い男の声がビリビリと飛び出してきた。

「……この声は……」

「ゲイズ中将!？」

誰が言ったのだろうか。

そう、声の主は、レジアス・ゲイズだった。

かの地上の英雄。地上世界を守り通して40年。魔力も無く、力も無く、しかし、それでも理想と信念で走ってきた

男。

その男が、全管理局員に湯を叩き込んでいた。

『なにをのそのそと寝っ転がってる！！とつと起きて、戦わんか！！！艦隊も何をしている！！！！そんなところで怯えてどうする！！！！でかい図体持っているなら、せめて皆の盾になれ！！！！二十も生きていないあの魔導師たちが、あれだけ必死になって諦めんというのに、貴様らは恥ずかしくないのか！！！！相手が強いのか？恐ろしいか？貴様らの守りたかったものは、そんな物に負けるほど、どうでもいいものだったのか！！！！！！』

その言葉で、全員の脳裏に守りたいものが浮かび上がる。

名譽

それでもいい。十分立派だ

家族

それでもいい。十分立派だ

命

それでもいい。十分立派だ

財産

それでもいい。十分立派だ

平和

それでもいい。十分立派だ

正義

それでもいい。十分立派だ

なんでもいい、守りたいものはおまえらにあるか。
それがあつたら、十分立派だ。

そしてあつたら、立ち上がれ。
ここで不貞腐れてる場合じゃない。

あいつはただの強奪者。泥棒、強盗、盗人だ。
だつたら、こつちに正義があつた。

自分たちの守りたい大切なモノを守るなら、間違いなくこちらが正義だ。

そして

正義は、勝つ。

否

正義は、勝たねばならんのだ。

『ワシには、戦う力などはない。こうして、貴様らに言葉を送るだけだ。だが、それでも！！必ずやるべきことはあるのだ！！！！それを教えてくれた、たった一人の友のために、貴様らに叫び続けてやる！！！！』

戦え！！！！！！！！！！

レジアスの言葉は、まさに英雄のそれだった。
もしこれが、はやてやクロノ、仮に管理局トップ、元帥の言葉であっても、皆の心には届かなかっただろう。

だが、この男の言葉は、なによりも強く、芯があった。

それこそ、英雄。

力ある物が英雄になるのではない。

どんなに絶望的な状況でも、皆を立ち上がらせることのできる者。

それが、英雄たる力である。

そしてこの英雄の、過去と現在と、友の正義を芯とする彼の、その言葉に、突き動かされない者など、誰一人としていなかった。

しかし

『ほう……中々にいい演説だ。だがな、力の差は歴然だ。どうする？オレの勝率は99%!!! 貴様らに勝率は1%程しかない！

『……』

「奴」が叫ぶ。

その言葉に、心がくじけそうになる。

それは今やはやてやフェイト、なのは達機動六課のメンバーもそう
だ。

もう限界だ。

すべての者がそう、思ってしまった。

そしついつい

「ゴガアアアアアアアあああああッッッ………」

だが、その状況を見て、六課の戦いを見ていた局員皆が思った。

何故諦めないのか。

この絶望の淵において、どうしてまだ踏みとどまっていられるのか。

その疑問は、誰かが声に出したわけではない。

だが、まるでそれが聞こえたかのように、なのはがポツリと、涙をこらえながら答えた。

「待ってる、から」

『..?』

「ずっとずっと、待ってるから。絶対に助けてくれる人。私が憧れ続けた人。私が……大好きになった人。その人が、いてくれるから」

『……高町イ……』

「どんな絶对的な絶望の中でも、この人の翼が、力強くそれを吹き飛ばしてくれるから!!!!!!だから、私たちを助けて……私も、一緒に戦うから!!!!!!守られるだけは、嫌だから!!!!!!」

『なのはアアアアあああ!!!!!!』

「助けて、目を覚まして………舜君!!!!!!」

ドオウ!!!!!!

そしてついに、防壁が完全に消失する。

全員が襲いかかるであろうその衝撃に身をこわばらせ、目をつぶり、
なのははその腕に時風を抱きしめた。

だが

「大丈夫……負ける気はないさ」

「え？」

パン!!!!!!!!!!

その砲撃は、霧へと消える。
ゴオン……と、ゆりかごの巨大な船体が微妙に揺れた。

そして男が静かに、立ち上がる。

『な……に……?』

「願いつて、やっぱりすげえな……ホントにこれ、たった数人だけの願いかよ……これだけ想われりゃ、十分十分」

『まだ……これだけの力を……』

「これだけの力？そんなもの俺には無かった。まったくな。だが、こいつらがくれた。忘れていたような？オレの力を。弱体化させたところで、意味はないさ」

その背に銀白の翼をはためかせ、男が宙に舞い上がる。

「勝率99%？ああ、そりゃこっちの勝率は1%だな。勝ち目はねえよ。よく「1%でも可能性があれば、不可能じゃない」なんて言うけどよ、んな事ねえよ。百回やって一回だぞ？たった一日乗り越えるために、百年かけたカケラの少女と神様がいたっていうのに、そんな簡単に一回で1%を呼び寄せられるわけねえじゃねえか」

その言葉に、なのはの肩が震え、皆が落胆の渦に落ちそうになる。
しかし、この男は

「だが……可能性の上限が100%だと誰が決めた……
……!……!……!」

蒔風舜は、それでも自信満々に言う。

まだ勝ち目はある、と。

その言葉に皆が顔を上げる。
そして、聞いた。

「百を超え、二百を超え、どこまでも伸びていくのが可能性みらいだろ！
!?!?!? そうやってどこまでも計り知れないのが可能性だし、未
だし願いだ!……!……!……! そこに「百」なんてつまらない数字を当てるん
じゃない……!……!……! そんなに数えられるもんなのかよ!? そんなに
ちっばけなのかよ未来ってのはよ!……!……!?!?!? 違うだろ!? お風呂
で数えられるような、そんな数字じゃないはずだ!……!……! 可能性は
無限大なんだ!……!……! 数えきれぬ99%がなんだよ!……!……! たかが9
9じゃねえか!……!……!……! そんなもんに負けるほど、俺たちの未来は、
小さくない!……!……!……!……!」

ドオウ!!!!!!

背中の翼が肥大して、巨大に羽ばたき、輝きを放つ。

そつだ、可能性に上限などない。
それはみんな知っていること。

今までだって聞いてきたはずだ。

何故それを忘れていたのか。

何故勝手に未来を決めたのか。そんなこと、出来るはずもない。

どこまでも、どこまでも強く輝く翼が、全員の目に止まって行く。

願いの翼、銀白の翼人

願いが叶う。願いは叶う。

だって、未来に、可能性に限界は無いのだから！！！！！

「可能性は未来、その未来を想う心こそ、我が翼が司りし、願い！！俺の名は時風舜。心してかかってこいよ……俺の翼は、願いの翼！！！！未来は、誰にも撃ち消せやしない！！！！」

ゴォウ！！！！！！

「安心しろ……必ず勝てる!!! あっちの勝率が99なら、こっちの勝率は、無限大なんだからな!!!!!!」

全身の産毛がざわつき、翼が猛る。

すでに、絶望に染まった者はいない。

すべてのものに、願いが戻った。

銀白の翼、ここにあり。

その翼こそ、勝利たる、願いの翼なのだから！！！！！！！

「さあ、勝ちに行こう！！。おれ達の勝因は、今ここにあるんだから！！！！！！！！」

なのはStrikers　く未来、願い、可能性く（後書き）

来た来た来たあ！！！！！！！！！！

ここですよここ！！！！この言葉が書きたかったんだ！！！！！！

アリス「そうだったんですか？」

この小説を思い浮かべた時、なのはのこのシーンも当然想像してました。

このシーン書くまでどれだけかかるだろうと思ってたから、とても感無量です！！！！

ア「それにしても・・・もう絶対大丈夫じゃないですか？この翼」

いえいえ、実はそうでもないです。

レジアスさんの演説で、皆の心にわずかながらの希望が生まれたからこそ、時風は立ち上がることができ、そしてそこから彼自身によって希望が膨れていったからあそこまで行けたんです。

ア「あれ？じゃあ今回のMVPって・・・」

そこまでの時間を稼いだザフィーラとレジアスさんです。

ア「おおう・・・何とも渋いお二人が・・・」

まあそんなとこ。

さて、ではどうぞ！！！！

ア「次回、時風、ついに、ついに！！！！」「奴」に、世界に、
大・逆・転！！！！」

ではまた次回

今は前だけ見ればいい・・・信じる事を信じればいい・・・
愛も絶望も羽根になり 不死なる翼へと

甦れ僕の鼓動

挿入歌 「Pray」 水樹奈々
より

なのはStrikers　これが世界への大逆転！

銀白の翼が舞い上がる。

その翼長はいつもの二倍ほどもある。
しかも、今現在も大きくなっていく。

当然だ。

今この瞬間にも、この姿を目の当たりにし、願いは膨れ上がっているのだから。

『蒔風ツ・・・・・・・・！！！！！！』

「よく言葉一つ言っただけとか、新しい味方が来たただけとかで勝ちフラグになる展開あんだろ？そんなんあるわけないじゃん、ってのが現実だが、翼人はそれを現実にするんだ。誰か一人でも諦めない限り、翼人は・・・・決して落ちない」

ゴオオオオオオツツツ！！！！！！！！！！

その言葉に反応してか、ゆりかごが振動し、まるで怒りの咆哮を上げるかのように全身を唸らせる。
そして全砲撃攻撃が、再び蒔風に向かっていった。

「チツ………！！！！！！！！！！」

それに蒔風は舌打ちをして旋回、攻撃をかわしていく。
ああまでは言ったものの、いまだダメージが完全に抜け切っていないのも事実だし、いまだにAMFは効いていて、蒔風の力は十全では使えない。

「みんな……行くで……」

「うん、はやて」

「大丈夫です」

「舜があれだけ言うてくれたのに、立ち上がらないなんて、できないよ!!!」

「さあ、行くよ。みんな!!!!!!」

「「「「おう!!!!!!」」」」

そうして、起動六課メンバーも出撃する。
ゆりかごの周囲を飛び回り、砲撃、打撃、剣撃を加えていく。

魔力の切れた者は蒔風とすれ違った際に魔力を分けてもらう。

それでもなお、まだ戦い続ける。

誰一切として、もはや諦めてなどいなかった。

管理局員もすでに数名飛び上がってきている。
その目にあの翼人を写し、それに希望を見出して、彼らもまた、空を翔ける。

また、はやてがはるか上空に停滞しているであろう戦艦アースラに通信を入れた。

「全戦艦を引き連れて、ゆりかごを射程範囲内に入れて砲撃開始！
！！ゆりかごからの攻撃はうちらが半分引き受ける！！！！」

『部隊長、遅いですよ！！もうとっくこっちは降下してます！！
！！』

が、どうやらいらぬ指揮だったようだ。
すでにアースラをはじめとする次元航行戦艦は降下し、ゆりかごを射程範囲に収めようとしていた。

もちろん、「奴」がそれに気づいていないわけがない。
当然のように砲撃がそちらに伸びる。

が、それはキャロヤシャマルを中心とした局員二十名に張られたバリアで弾かれてしまう。

こうして、ゆりかごと戦艦が同じ高度にそろつ。

『全戦艦、攻撃準備完了！！！』

「総攻撃や！！！！てエ！！！！！！！！」

合わせて八隻の戦艦から、いくつもの砲撃やレーザーがゆりかごに放たれる。

その攻撃を、「奴」はゆりかごの砲撃で撃ち落とし防衛するが、いくつかはそれをすり抜けてゆりかごに到達していた。が、その程度でどうこうなるゆりかごではない。まるで損傷といったものを受けていない。

しかし、その抵抗は確実に「奴」のカンに障っていた。

『効かないとわかっていながらも……やはり粘るか、主人公！
！……！』

「効かないなんてことはない……そんなことは、絶対にない！
」

「舜君がやってきたことを、今まで二回も手伝ってきたんだ！！
今回だって、できる……！！！」

『馬鹿やるおが……三度目の正直ってのを、しらねえのかあ
！……！』

「てめえが三度目の正直ってんなら、こっちは二度あることは二度
ある、だ……！」

「奴」の言葉に、蒔風たちが返していく。
その言葉はより一層「奴」をイラつかせ、そしてついに、その怒り
が頂点に達した。

『ううっとおしいやあ！！！！！！！！！全砲台、制限解除！！！！！！聖
王のゆりかご、全稼働フルドライブ！！！！！！』

「なっ！？」

「うわああああああああああ！！！！！！！！！！」

「なのは！！フェイト！！！！！！！！くっ………みんな………」あ
ああああああああ！！！！！！！！！！」

ゆりかごのヒビが一斉に輝き、全砲台からオーロラと砲撃とか一気
に噴き出してきた。
砲撃、だけではない。電撃や炎、更には衝撃波までもが吹き荒れて、
ゆりかご周辺を一気に薙ぎ払った。

円状にソニックブームが広がって、すべての局員が墜ち、戦艦にも

命中し、また二隻ほど、落とされていく。

そしてその攻撃は、アースラにも届いていた。

「きゃあっ！！！！！！！！」

「うおっ……ッ、損傷は！？」

「アースラ、右舷損傷！！」

「戦闘はできますか！？」

「出来なくはないけど……移動が今までのようにはできない！！！！いい的になるだけです！！！！」

「くっ……こんなところでッ……」

『損傷した戦艦は、その場で地上に降りてそこから砲撃を再開！！！総員、すぐにでも脱出できるようにしとけ！！！！！！』

「了解！！！！」

そのアースラに、蒔風の指示が飛ぶ。

アースラはもともと廃艦予定だったものをメンテナンスしてきたものだ。

ここまで戦況に付いてきただけでも上出来なほど。

だが、そんなゆっくりとしたものを、奴が見逃すはずがない。

『油断はできないな……あの次元砲がある以上、その戦艦どもは落とさせてもらおう！！！！』

アースラが地上に降りていくのを見て、「奴」が砲撃の四割をアースラに向けて撃ち放った。
それを見て、蒔風が翔ける。

ゆりかごの全方向一斉放射に、一度は墜ちた蒔風だが、あのような全体攻撃で薄かったからまだ何とか耐えられたのか、多少苦しそうにはあるものの、まだ立ち上がる。
なのは達も同様に立ち上がり、他の局員もまた数名空に戻ってきている。

地上に降りたアースラを攻撃して破壊しようとするその砲撃の前に、蒔風が巨大な圧水掌を出現させ、叩きつけて霧散させる。
だが、それは少し照準を逸らしただけで、完全に止まるわけではない。

それを突き抜けてきた砲撃が、今度はアースラの左上方を掠めていった。

「うわぁ！……！……？？」

『急げ！……こつちももう持たない！……！』

「は、はい！……！……！」

そこから蒔風が攻撃に移って行き、ゆりかごがそつちに引きつけれ
れている間にアースラが地面に着陸、そこからまた砲撃を撃とうと
する。

周りにはアースラのように被弾した戦艦が降りてきて、地上からの
固定砲台となつて砲撃を開始していた。

「よし・・・これなら!!!」

そう言つて、まだ自分たちはやれると意気込むロングアーチ。
だがこの状況で、「奴」が狙うのをあきらめたわけではない。

蒔風の攻撃の隙を見て、再び砲撃の嵐が戦艦群に向き、そのいくつ
かがアースラにも被弾した。

「グああ!?!」

《警告。船体の損傷が激しく、これ以上船内にいるのは危険です。
ただちに脱出をしてください。繰り返します・・・》

アースラの中にアラームが鳴る。

グリフィスをはじめとしたメンバーが苦い顔をするが、もはやこれまで。

ここは脱出して、足を引っ張らないようにするだけだ。

そうして全員はすぐに脱出した。

あらかじめ蒔風に言われていた通りにしていたのが功を為す。

だが

「よし、全員いるか？我々ロングアーチはこれから……」

ゴオン…………

「え？」

「な…………なんで!？」

「アースラが…………動いてる!？」

アラームが鳴って、もう動けないはずのアースラが再び浮上していった。

その光景に、ロングアーチスタッフは目を見開き、グリフィスがブリッジに通信を繋げた。

「おい!! 誰かいるのか!？勝手な行動は危険だ!!!! 戻れ!! 操縦しているのは、誰だ!!!!！」

だが…………その通信から、返信はない。

そうして、アースラは飛び立って行ってしまった。

唸り声を上げ、獄炎と土惶を混ぜ合った「獄惶竜」が、砲撃にその身を削られながらもゆりかごの額に向かって突っ込んでいった。衝突と共にひねり潰してから爆散し、そこに小さな穴をあける。

その穴になのはが砲撃を叩き込んで、更にそこに休みなく蒔風が絶光尖で貫通させる。

「見えた!!!」

「いまだ!!!雷 旺!!!」

「デイベイイイイイン!!!!」

「砲!!!!」 「バスタアアアア!!!!」

二人の息のあつた砲撃が、その穴の先に見える「奴」を狙い撃った。だが、「奴」にしてみればなのはと、弱体化した蒔風の砲撃など脅威ではない。

片手をめんどくさそうに払って、その砲撃を上弾いた。ゆりかごの天井に穴があいて、その砲撃が逸れていく。

だが、その砲撃は終わらない。

砲撃に宿った雷旺のエネルギーは電気。
なればこそ、彼女であれば、それを動かしての方向転換も可能である。

《いんです!!!》

「せえ……のツツ!!!!!!ハアアアツツ!!!!!!」

フェイトが、その砲撃をバルディッシュザンバーに巻きつけるかの
ようにまとわせ、己の魔力も上乘せしてから、叩き返す。

しかし、開いた穴はすでに四分の三は塞がっており、たとえ届いても「奴」は難なく弾くであろう。

だがからこそ、フェイトが打ち出したのは、そっちの方向ではなかつ

た。

「ヴィータ！！お願いッッ！！！」

「まっかしとけエ！！！！うをおおおおおおおおおおオオオオオオオオオオッッ、りゃあアアア！！！！！」

その行き先は、ヴィータ。

彼女のハンマー、グラーフアイゼンを以ってして、彼女も魔力を上乗せいしてから飛んできたそれをゆりかごに向かって撃ち返した。

5005

ドグオオグアッッ！！！！！

その衝撃に、ゆりかごが少し揺れ、その船体に傷ができる。

そこに向かって、エリオが電撃槍となって突貫し、一気に貫通しようとして試みる。

しかし、電撃のようなレーザーを放つ砲台が振るわれ、まるで鞭のようにしなうてエリオを打つ。
それをスバルがガードして、それでも反動で吹き飛ばされてから、ウイングロードに着地する。

「すみません、スバルさん!!!」

「気にしない!!!今はあれをぶつ潰すよ!!!!ティア!!!!」

「わかってる!!!でも……あれの行動が……読み切れない!!!だから」

「とにかくぶちのめせばいいんだよね!?!」

「その通りよ!!!わかってるじゃない!!!」

全員が一丸となってゆりかごへと向かう。
だが、いくら意気込んでも、勝っているのは心意気だけ、というのも現実だ。

到底、ゆりかごを落とすには至らない。

『どつする？これはやはり、二度目の正直ってことだろう！？ハアアアアア！……！』

空にいる攻撃対象が減ってきて、「奴」の砲撃がついに全体からピンポイントへと移って行く。

フォワードを打ち、シグナムを打ち、シャマルを打とうとしてそれを庇ったザフィーラごと撃ち落とし。
ヴィータがバリアと旋回でかわすがオーロラに挟み込まれて撃墜され。

更にそのオーロラがまるでスキャンでもするかのように下から上へとかけて走り、局員たちを落としていく。

その攻撃になのは、フェイト、はやては耐えるが、立ち上がったと

言ってもすでに限界な時風の身体がグラついて動きが止まる。

そこに奴が砲撃を当て、何とか弾くが、時風の身体はその反動で地面に向かって落ちていく。

「舜君！！！」

「あかん……もう限界や！！！」

なのは達の身を案じる声が聞こえる。

だがそれでも、時風は地面にまでは落ちなかった。
決して落ちることはない。否、決して落ちてはいけないのだ。

「負けるわけには、いかないんだ」

血を吐きながら、足をぶらつかせながら、時風が呟く。

「もう俺は。二回も負けている。ああそつな・・・おまえの言う通りだよ。二度あることは三度ある、じゃあ困るんだ」

時風は呟いていく。

それは、決意。

もはや決して負けないと。
世界の理不尽には屈しないと。

二度も負けたんだ、今度は勝つ、と。

『無茶するなよ。おまえ、俺が出ていった時からもう体ボロだったろ？』

「いや……勝つ、なんてのじゃダメなんだ……オレが求めているのはそんなんじゃない……」

『おい……』

「奴」の言葉を無視して、時風が語る。

一体何に？

決まっている。この世界にだ。

時風が今勝つべきなのは、「奴」にであり、世界にであり、今までの自分にであった。

「ふんぞり返ってよく見てろ！！！！これが俺の三度目の正直だ・・・これが・・・ここからが大逆転って奴だからな！！！！」

ゴォウ！！！！

時風の翼が唸る。

しかし、今までのキレはもう無い。

身体がクラ突き、意識が一瞬途切れにそうになる。

【Mahoザツ・・・Sザザツ・・・olyriザン
oザザha ザアー・・・ツツkers】-WOザザザアツ・・・
・・・NK-ザシツ・・・N〜

いつもは発動するとすぐに聞こえてくるあの音声も、ノイズだらけ
でしっかりと出来ていない。
世界に不都合はない。

ただ、蒔風のコンディションの問題だ。

しかし、「奴」はそれで安心することなど、出来ない。

蒔風が実行しようとしているのは、ワールドリンク世界の奇跡。
しかし、彼にはそれを一瞬で発動させるだけの体力がもう無いのだ。

と、いつてもしっかりと立ち止まって呼吸を整えて行えば、それは

おそらく発動できるだろう。

そしてそれだけの隙を、「奴」が見逃すはずがない。

『ジ・エンドだ!!!!! 蒔風エ!!!!!!』

ゆりかごの砲撃に、「奴」の漆黒の波動砲までもが混ざり合って、蒔風に迫る。

「舜君!!!!!!」

「舜ッッ!!!!!!」

「あかん!!!!!!……え? なんやて?」

「はやてちゃん!?!」

「そんなことって……………」

その瞬間、はやてが通信に驚愕する。

そしてその内容が、なのは達の目に飛び込んできた。

ゴオツ!!!!!!カッ……………ゴゴオオオオオオオオオツツツ……………!!!!!!

アースラだ。

長らく彼女たちと共にあり、その成長を見てきた船が、ここでその先を開くため、時風とゆりかごとの間に飛び込み、砲撃をその身に受けて轟沈した。

「ア、アースラが!？」

「な、中の人はい!？」

なのはとフェイトがはやてに聞く。

聞かれたはやてのその首は、横に振られてしまう。

しかし、それは決して被害者が出たというわけではない。

「だれも・・・おらんて」

「え？」

「アースラのロングアーチスタッフは、一人残らず脱出してる。あのアースラには、誰も乗っ取らんのや」

そう、このアースラは無人大った。
誰も乗っていない船。いやむしろ、この船は飛べないと言ってアラームを鳴らしたのではなかったのか？

それにもかかわらず、アースラはアラームを鳴らし、誰もいないその体で、このピンチをチャンスに変えたのだ。

戦艦には基本、そこまで高性能でなくとも、AIが組み込まれている。
だからもしかしたら、アースラはわかっていたのかもしれない。

この戦闘が、自分の最後のものになることが。
そして、その戦闘で、自分の中で暮らし、過ごし、笑っていた彼らが、危機にさらされているのを察知し、彼らのために戦える最後のチャンスだという事が。

無論、普通に考えれば、そんなことはあり得ない。
戦艦が自律行動など、とりはしないのだ。取るはずがないのだ。

おそらく、しっかりと説明するならば、戦闘の際のバグとして処理されるだろう。

しかし、だれひとりとして、そんなことは思えなかった。

アースラは、その最後の瞬間まで、自分達と共に戦ってくれた、仲間だったのだと。

機械のそれに、感じる心はなかった。

しかし、そのAIは、それがそうであるという事だと「考えた」

爆炎を上げて落ちるアースラ。

外壁が崩れ、外からブリッジが見え、それが時風の目に止まる。

崩れた壁の隙間から見えたブリッジのモニターには、ただ一文だけ、こう表れていた。

《GOOD LUCK · MY FAMILY》

『ッ……この………廃艦寸前の鉄くずがア!!!!!!』

「……ははっ………残念ながら、to be conti
nued . だつたみたいだなア!!!!!!世界も粹なもん^{ワールドリンク}を用意して
くれるよな………行くぜ………大逆転劇つてのを、見せてや
る!!!!!!」

【Mahou Syoujo lyrical Nanhah -
- Nanhah As StrikerS!! ALL SERI
ES COMPLETE!!】 - WORLD LINK -
EPON~!!!!

その発動と共に、空に大きく二つ、光が輝く。

その光の元は、フェイトとはやて。

今、時風が敗北してきたすべてのものに、逆転勝利を突きつける！

!!!!!!!!!!

フェイトの身体からホログラムのように文字がいくつも浮き出してくる。それがだんだん人の形を取って行く。

同時に、はやての魔導書「夜天の書」のページがものすごい勢いでめくられていき、やはりそこからホログラム状に文字が浮き出て人の姿を取って行く。

そうして現れたのは、二人の人物。

もはや、会う事などないと思っていた人物だった。

一人は、フェイトと二つ瓜の少女だった。

ただ、フェイトが大人しそうなのに対し、とても元気のありそうな活発な目をして、リボンの色は緑色だ。

もう一人は、長い銀髪と深紅の瞳が印象的な若い女性の姿をしている。

静かな紅い瞳に、溢れんばかりの優しさを以って、はやての事を見つめていた。

「え？」

「そんな……ホンマに……？」

「夢じゃ……ないよ」

「帰ってきました。我が主」

「え？え？も、もしかして……」

「どうもです！！フェイトのお姉ちゃん、アリシア・テストロッサと……！！」

「祝福の風、リインフォース。お一人ともも、お久しぶりです」

その二人が名乗りを上げる。

それはこの世界の理不尽によって奪われた者たちだった。
それは時風が助けようとして助けられなかった者たちだった。

しかし、ここに、それは逆転する。

最後に世界は、彼に救いを。

決して取り戻せないはずだったものが、ここに奇跡を以って帰ってきた！！！！

「アリシア……………!?!?」

「リイン……………リイン!!!!!!!!!!?!?!?」

その突然の出現に、一番面喰っているのはフェイトだ。
なにしろ、彼女の話は知っていても、しっかりと会うのは初めてなのだから。

「大丈夫？フェイト。ほら！！お姉ちゃんだよ？」

「え？え？えつと……うえ……あれ？な、涙が……」

「……ありがとう。私のせいであなただが酷い目にあつたのに、あなたは私のために泣いてくれる。私はね？ずっと見てたよ？フェイトが今まで頑張っていたのを、あなたの中から、ずーっ」と

「うん……うん……うえええええええ……」

そしてフェイトはついに本泣きしてしまう。

しかし、はやてはすでに本泣きだ。
失われた家族が帰って来たのだから。

「リン……リン……！！！！」

「ご心配をおかけしました。ですがもう、私はあなたの元を離れま

せん」

「うちだってもう放さへん……もうずっと、一緒の家族や!!」

「はい」

その光景に、蒔風の目頭は熱くなっていた。

ああ、やっと形になった。

俺がこの世界に残せた物が、やっとあったんだ。

こんなオレでも、何かを残せる。

そう思うだけで、心が満たされた。
そんな思いで、蒔風の心は一気に羽ばたいた。

大丈夫だったんだ。自分が世界をめぐる意味は、確かにこうして存在したのだから！！！！！！

『なにを………しているんだ………』

「………ツ………あん？」

それを見ていた「奴」が、震える声で言う。
それに対して、蒔風が涙に声を少し詰まらせて、反応した。

『そいつらは……過去に失われたものだぞ……!!それを復活させることが、どういう事かわかっているのか……!!時風……!!』

「十分に、な……!!わかっているさ……だがよ、世界の奇跡が認めちまったんだ。許容するしか、ねえだろうが……!!」

『まともでないぞ……まともじゃあない……!!そんなことは認めない……大切な人がいなくなつて、悲しいのはそいつらだけじゃない……!!だと言うのに……!!なぜそいつらのだけが戻つてこられる……?不公平だろうが……!!いいのかよ……そんな差別が、許されるとでも思っているのか世界がよオオオオオオオオオオオオオ……!!』

「奴」の叫び。

主要人物だけ、こんな優遇許されていいのか。

なんでお前らだけが許される。

何故世界は等しくないんだ、と。

「ああ……確かに、世界は理不尽だ。こんなこと、許されるべきじゃないだろう。けどな……もうここにあるのは一つの命だ！……それを奪うというのなら、それは許されることじゃない」

『いつも通りの言い訳か……開き直りか！！！！脇役がそれをいえば叱咤され、主人公なら称賛される！！……そんなのが……クソツタレって言うんだよ！！！！』

そんな奴の言葉に、蒔風が、本当に誰にも聞こえない声でボソリと一言だけ言った。

「ま……こいつら、厳密には本人じゃあないけどな……」

しかし、その声はだれにも、「奴」にすら届かない。

そうして蒔風がなのは達の元へと向かって行く。

その周辺に、他の六課メンバーも集まっただけ。

「リイン・・・フォース・・・か？」

「ええ、シグナム。帰ってきましたよ」

「よがっだあああああああ・・・」

「ほらほら、ヴィータちゃん・・・」

「えっと・・・フェイトさん・・・じゃないんですよね？」

「そー！私は、アリシア・テストロッサー！！あ、でもフェイトと同じようになるから、どうなるのかな？」

「わ、私はもう・・・こうしてるだけで・・・」

初対面同士だったり、感動の再会だったりでワイワイしているが、そこに時風が手を叩いてやってきた。

そのデバイス、本人たちに全員に、その力が付与される……！！

『砕け散っちまえよオア……！！……！！……！！』

「動け……！！……！！……！！」

ドオウ……！！……！！……！！

ゆりかごが、「奴」の怒りに呼応したように暴走を始める。

が、その攻撃の一切は誰ひとりにも当たらない。

「ヴォルケンリッター、烈火の将シグナム、押してまいるッ!!!
!レバンティン!!!!!!」

《J a w o h l ! S c h l a n g e f o r m ! ! ! 》

その攻撃を、シグナムがレバンティンの連結刃のドームですべて打ち消していったからだ。

いくらまとめれば驚異の砲撃でも、まとまる前の短髪ならば、恐れることはない。

しかもその連結刃のドームは、ゆりかごをすっぽりと覆うまでに巨大なモノ。

撃ち落としそこなうなどという事は、あり得ない!!!!!!

『なあッ!?!?』

「行くよッ!!!フェイト!!!!!!」

「うん、アリシア……！」

『小娘が……粹がるなあ……！！！！！！』

そうしてすべての攻撃を防がれたゆりかごに、アリシアと、目元が赤くなっているフェイトがバルディッシュと一緒に握り、ライオットザンバーの大剣でゆりかごに向かって上方から突撃して打ちおろした。

その刃は強化され、さらに二人の魔力を吸って、ゆりかごを前後半分に切り分ける……！！！！

『バカな……このゆりかごが……！！！！』

「行くわよ!!!スバル!!!!さつきと同じ要領で!!!!」

「オツケー、ティア、いつでもいけるよ!!!!」

「ストラーダ!!!スバルさんを、ちゃんと運んでいくんだぞ!!!!」

「ブーストかけます!!!!フルドライブ!!!!!!」

そこで、フォワードたちの準備が完了する。
やっていることは、最初にゆりかごにぶちかましたものと同じだ。

エリオの電気変換された魔力でスバルの身体能力を底上げし、キャロのブーストで強化されたストラーダのブースターで突っ込んでいく。

ただ違うのが、今度はストラーダを以って突っ込んで、振動拳ならぬ振動槍になるという事。
スタートダッシュに、クロスミラージュの第三段階「ブレイズモード」で、スバルを打ち出していくこと。

そして何より、WORLD LINKが働いている!!!!!!

メキメキという音を上げ、ゆりかごが軋んで落ちていく。

しかし

「バラけさせへんよ……！行くで……！リインフォース……！……！」

『はい……！主はやて……！……！……！』

「『エアロック・バインド……！……！……！』」

ゴォン……！！……！！

空中でバラけ、崩壊し始めるゆりかごを、はやての空間バインドでその場にとどめる。

その空間はまるでモノクロのように色が褪せ、名前の通りに空間ごとその動きを止めていた。

まるで、まとめて吹き飛ばしてやると言わんばかりに。

「これでこちらの攻撃ができるな。我らヴォルケンリッターに、二代目祝福の風が五人！！！！すべてをかけて、貴様を穿つ！！！！」

シグナムがリンとユニゾンし、レバンティンを弓状に変形させる。

「フルドライブ！！ボーゲン、行くぞ！！！！」

「『了解！！！！』」

真横から後部を狙い、反対側まで容易に貫いたそれは、ブースターによってUターンして、今度は別の場所を貫いた。そしてまたターンして貫き、またターンする、その繰り返し。

まるで紅い糸で裁縫をしているかのように、爆炎を跡に残しながらゆりかごを縫って行くその矢は、ついに真上から奴がいるであろう聖王の間に手、一気に炸裂、爆破した。

その船体の後ろ三分の二はすでに瓦礫となって、ゆりかごの前部上半分が吹き飛んで、その爆煙の中からグラーファイゼンが回転しながら飛んでくる。

そしてそれをヴィータがキャッチする頃には

管理局最強 砲撃のエキスパート エースオブエース、高町なのはの集束が、すべて完了しきっていた!!!!!!

「覚悟して・・・これはただの集束じゃないよ・・・この場に
残った皆の魔力。今倒れてる人たちの、残った魔力。そして、みん
なのあなたを倒すという願いが、すべて集まったこの砲撃！！！受
けてみて！！！」

『ガッ・・・くお・・・空間バインドッ・・・この・・・
』

はやての空間バインドに、身動きが制限された奴が舌打ちをする。

なのはのこの砲撃は、すべての者の、その想い。
ただの魔力だけじゃない。すべての願いと、可能性が乗っている。

魔力を持たない者の願いちからをも乗せたその砲撃は、まさにこう呼ぶの
がふさわしいだろう！！！！

まさしく、オールスター。

誰一人として、この砲撃に、欠けた者などいないのだから!!!

『クソッ……これはもうダメか……ッッ!!!!!!』

桜色の砲撃が、ゆりかごを吹き飛ばす。

その太さは空間バインドでロックされたゆりかごをすべて包み込み、そのすべてを瓦礫に変えて、原型というものをなくしていった。

そうして、世界すべてを振るわせるような轟音と共に、ゆりかごだ

った残骸が、地表にバラバラと落ちていく。

戦いは終わる。

その残骸跡に、聖王の玉座だけが、まるで墓標のように立って残っていた。

なのはStrikers　〜これが世界への大逆転！〜（後書き）

最終決戦

ここに

完

結！！！！！！

アリス「やっと来ましたか！！にしてもまさかあの二人が帰ってくるとは！！！！！！」

こういう展開は最初から考えてました。

ここにて時風はついに世界に勝利する。

それどころか、今までの敗北をチャラにするくらいのものです！！！！

ア「しかし、「奴」のいう通りこれは死者復活。あまり許されることではないのでは？」

そこは次回に説明しますよ

ア「そういえば時風も何か言っていましたね。どういふことなんでしょっつか？」

それを含めて、また次回です。

ア「そしてまさかのアースラ活躍」

この戦いの跡、ただ廃艦されるなら、こういう散り様がいいかな、と

ア「いつか言ってた活躍させるあいつ、っていうのはこれだったんですか」

その通り!!!

まさかアースラだと思った人は……いないと思う!!!

幸運なことに、感想でそこに触れてきた人はいなかったから、助かりました!!!
自分は嘘をつけないので……

ア「次回、蒔風、世界を去る」

ではまた次回

———
やっと長かったこの世界が………終わるぞ———

なのはStrikers ｝事件のその後

ジェイル・スカリエツィによる大規模な次元世界間でのテロ。後にJ・S事件と呼ばれた事件の、その後はというと

まず、崩壊した地上本部は機能している。と、いつても、建物自体はまだ工事にも始まっておらず、とりあえずその機能をまだ生きている他の地上施設に移し、何とか臨時で動かしている状態だ。

それとは対照に、機動六課隊舎はもうすでに元通りになっていた。あの事件の後、何故だかどこよりも早く工事が着工され二日もしないで元通りになった。

まあ、まだ一応の原形はとどめていたからそれだけできたのはわかるが、なぜこんなにも早く工事が始められたのか。

はやて達はその理由は知らないが、なんだかあのおじさんの顔が浮かんでくる。

そしてそのおじさん、レジアス中将だが、管理局から去るのだそうだ。

今までやってきたことの落とし前をつける、といって管理局にすべてを告白したのだが、どう調べてもその証拠が出てこない。いくら告白しても、そうである証拠がなければただの被害妄想だ。

しかし、そうはいつでも納得がいかないのはレジアス自身である。そうして、レジアスは辞職した。しかし、いまだに管理局から助言が求められたりと、彼の人生はまだ忙しくなりそうだ。

そんなことを思いながら、管理局員はかき集め、そして調べ上げたあるデータを消去した。

首謀者曰く、「グレアムおじさんと同じよーなもんや。それに、あの人恨んだってしゃーないやろ？」だそうだ。

逮捕されたスカリエツティと、ウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアツト口の五名は、その後管理局に協力することを拒み、各人異なる次元世界にある監獄に投獄された。

セツテは保護組に入った。

あのアインヘリアルルの砲撃の際、なぜ青龍が自分を助けたのかを疑問に思い、それを聞いたものの今一つ納得できなかつたらしい。そこで、「その答えを知りたい」と言つて一人で様々な世界を回ると言いだしたのだ。

それに対し、管理局は「構成プログラムを終了し、誰かが保護責任者になつたら」という条件をつけて承諾した。今頃は先に投降したナンバーズと共に、施設でプログラムを受けているだろう。

なお、その施設にはルーテシアとアギトも一緒におり、彼女の母、メガーヌが目覚め次第引き合わせ、共に暮らしていくことが可能だそうだ。

と、いつても彼女が自分が出たことをそう簡単に許せる人間かと言えばそうではないので、それなりの制限がつくのだろう。

ちなみにナンバーズたちの保護者候補としては、スバルの父、ゲン

ヤ・ナカジマと、聖王教会のカリム・グラシアが立候補している。まだ未確定ではあるものの、チンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンデイ、の四人はナカジマ家に、セイン、オットー、ディード、セツテが聖王教会に身を置くことになりそうだ。

セツテの保護者に関しては、本人の希望で青龍の主、時風が指名されていたのだが、本人がこれを頑として拒否。

説得の末、各世界に施設を持つ聖王教会の方が旅をするのに効率がいい、と言われて最終的に聖王教会保護下になった。

なにはともあれ、彼女たちの未来は大きく開けた。

そこから自由という名の不自由を、苦しみ、楽しみを自分で選択し、生きていく。

この施設から出ていくのも、そう遠くはない。

次にヴィヴィオだが、あの後にもなにひとつ後遺症はなく、翌日に

病室のベッドで目を覚ました時には、目の前に機動六課メンバー全員が見舞いに来てくれた。

その後、ヴィヴィオは正式になのはが引き取り、高町ヴィヴィオとして家族になった。

ヴィヴィオが蒔風もパパになってと叫んだが、やっぱり本人が拒否し、結局フェイトが後見人になった。

ちなみにその時ヴィヴィオを泣きやませたのは

「大丈夫！！絶対に舜君をパパにしてあげるから！！！」

というなんだか鼻息の荒いなのはの言葉だったらしい。

フォワードたちは事件が終わった翌日からすぐに訓練を始めていた。

あれだけ凄かったの事件の翌日に！？と思ったが、WORLD L INKで体調は最高になり、それに加えて特に大怪我もしていなかったので仕方ないと言えば仕方ないのかもしれない。

今日も彼らの悲鳴に似た掛け声が訓練場から聞こえる。
覚えることは多く、機動六課運用期間終了まで、訓練スケジュール
はびっしりだそうだ。

そして、はやて、というか、八神家は大変な大盛り上がりを見せて
いた。

なにせリインフォースが戻ってきたのだから。

困ったのは初代、二代目の二人だ。

なにせ呼び名が同じでいちいち反応してしまう。

だから今のところは初代を「リインフォース」、二代目を「リイン
」と呼んで分けているらしい。

しかし、それでもリインフォースの悩みは尽きない。

今度ははやてがリインフォースから離れなくなってしまい、家でも
職場でもべったりなのだ。

ヴィータやシグナム、ヴォルケンズたちは「すぐに戻んだろ」、と
あきれ顔だったが、本人は少し困り顔だ。

と、いつても抱きついてからの上目使いで「リインフォース〜」

「と言われた瞬間グネグネと身をよじらせて悶えていたから、まんざらでもないのだろう。」

一方リインははやての隣を奪われて悔しいのか、ヴィータに泣きついてしまった。

そう、シグナムにアギトがつくことになって、もはや逃げ場がそこしかないのだ。

「リインは……もうヴィータちゃんしか……ううっ~~~~」

「おーおーよしよし。まあ気にすんな。ああなってんのも今だけだから」

「余裕ぶっこいてて……フッ」

「リインお前どうしたよ!?!」

今日も今日とて、八神家は平和である。

そしてはやて同様、大切なモノを取り戻せたフェイト。

現在、なのはと相部屋だった彼女の部屋は、フェイトとアリシアの部屋になっている。

なのはは新しい部屋でヴィヴィオと一緒にだ。

「アリシア……あの……」

「……」

「えっと……」

「ダーーーーッッ……!!」

「ひえ!?!」

「もう、いつまでももじもじしてないで……!!言ったでしょ?私はあなたを知っているって」

「え?でも……なんで?」

「うーん、なんだろ。あそこで目覚めるとき、いろいろ知ったのよ。いやあ、大変ね、フェイトも」

「なんとも軽い。いや、気さくなだけだろうか？」

「アリシアの言葉には、本当に会えてうれしいよ！くらいの意味しかなかった。」

「ねね、私もフェイトと一緒に働きたい！！」

「え！？」

「いーじゃんいーじゃん。おねーちゃんも一緒がいいぞう！！そして今までの分の時間をごっそりと取りかえすんだから！！！！」

「うん……そうだよね！！あ、でもそのためにはまず戸籍がいるかな……」

「どうするの？」

「大丈夫！！執務官やってると戸籍のない人を相手にしたり保護したりしてるから、そういうのを作ったりしてごまかすのは得意だよ！！！！」

「いやフェイト、それはいけないことだっていうのは私わかるよ？任せるけど」

なお、近々シャリーとマリーがアリシアのためにデバイスをプレゼントするらしい。
もしかしたら、「雷光の魔導師」の異名は、フェイト一人のものでなくなるかもしれない。

そして、なのは。

今はヴィヴィオと楽しく暮らし、良好な親子関係であるようだ。

決戦の後、なのはは時風に想いを打ち明けたが、やっぱりというかなんとというか、時風はこれを拒否した。

しかし、なのははすでに青龍からそのことは聞いていたので、それでも絶対に振り向かせて見せると息巻いていた。

なお、その際他の世界でもそういった女性がいると聞かされて、まだ見ぬライバルに激しい闘争心を燃やしていたりする。

彼女の身体には何一つとして一切の反動や負担は残らなかった。

「舜君のプログラムの賜物ね」とは彼女の主治医、シャマルの言。フォワードたちの訓練にも手を抜くことなく、彼女は全力全開で鍛え上げるのだらう。

機動六課は、ゆりかごを落とし、更には「奴」という巨悪を撃ち払った部隊として「奇跡の部隊」として話題になった。

そこでは「銀白の翼人」蒔風舜の事も一緒に知られ、翌日、彼のベツドには多くの見舞い品が送られてきて、廊下まで並べられたほどだ。

更には週刊誌などのマスコミが殺到してきて聖王病院は混乱したが、そこは恐ろしい魔王まのまによって全員返り討ちにされた。

彼は管理局のトップ三人から元帥になってくれ、とまで頼まれたが、これを拒否。
だったらせめて表彰をとまわれるが、それは言いかけたところで却下した。

自分のことは口伝ぐらいの言い伝えで残すぐらいがちょうどいい。

そう言っつて、記録に残すことを許さなかったのだ。
しかし、おそらくそれは無理だろう。

全管理局員が知ったとなつては、百年くらいじゃこの名声は衰えることなどないだろうからだ。

不幸中の幸いとしては、彼の名前を知られても、顔まで知ってる人はいない、という事だ。

知ってる人は知っている。
その程度で済んだのは本当によかったと、蒔風は胸をなでおろしていた。

現在時刻、 18:00

蒔風が眠りから覚めてみると、彼のベッドは病院の大会議室みたいな部屋に運ばれていて、頭にはパーティー用の三角帽子がかぶせられていた。

なんでもこれから「事件解決&アリシア、リインフォースお帰りなさいパーティー」を開くのだそうだ。

なお、パーティー名が書かれた看板は、「アリシア」と「リインフォース」の名前どっちを先に書こうと揉めたのか、何度も書き直された跡が見える。

「あの……俺この通り動けないんですが」

皆パーティーやる気マンマンだが、蒔風は本人のいう通りベッドから動けない状態だ。

と、いうのも腕、右足はギプスに覆われ、点滴も二本くらい通っているのだから、そりゃ動けないのだろう。

そしてそうでなくとも、ヴィヴィオが目覚めた時に無理矢理病室抜け出して会いに行つて、すぐにやってきた病院長からカルテ（縦）

で頭を殴られて昏睡、そこからベッドに縛り付けられていたのだ。

「でも、院長先生からはこれならいいよ、って言われましたし」

「それに、これ以上舜さんを視界からはずしたら、どんな無茶するかわかりませんし。こうしてるほうが安心です」

おそらくここまでベッドを運んできた二人だろう。

スバルとエリオが拳を握って語っていた。

「舜さんの怪我って、まるで私たちがしなかった分全部引き受けたみたいなんですよね」

「そんなことないぞ。ってか今さらだけど、俺の身体ってワールドリンクやった時から攻撃食らってないよね？あの時ある程度回復したから、このギプスいらなはずだけど？」

その時風の言葉に、そんなことないです、ときつめの口調でシャマルが言う。

「確かに元には戻ったけど、疲労自体はその体に残ってたのよ？腕なんて簡単に疲労骨折したわ」

「いっ」

「ゆりかご落とした後舜君が気絶して、運ぼうとしてスバルさんが持ちあげようとした時にポキッと」

「そこで落ちそうになったのを私が支えようとした時に、反対の腕が」

「で、最後に落下した舜君を私が掴んだ時に右足が………ね？」

え？（；　　）となる時風がスバル、シグナム、なのはの方を見る。

その視線にスバルはあ、あはは〜と笑い、シグナムは申し訳なかったというかのように咳ばらいをし、なのはは両手を合わせてごめんね？としていた。

「勘弁してくれ………」

「あはは。でも、これはこれでいいと思うんだ」

「なんで?..」

「だってこれなら舜君にアーンって出来るでしょ!!!?」

「なにを拳握りしめていつとるんだお前は!?そこ!!!フェイト、はやて、GJしない!!!」

「舜、あつちはアリシアだよ」

そんなこんなでパーティーが始まった。テーブルには実に多くの食材が並んでいる。

「一瞬食べられるのか?と思った人も何人かいたが、スバルやエリオ、そしてギンガを見て「ああ、大丈夫だな」とか納得した。

「体重……………」

「(ビクッ!!)」

「デブ……………」

「(ビビクッ……………!?!?!?)」

「ギン姉。なんか舜さんの言葉に皆反応してるけどなんなんだろうね？」

「さあ？それよりスバル、食べましょ。向こう一週間分は溜めないとおなか減っちゃってもう駄目だわ」

「うん！…いくら溜めても全部どっか行っちゃうもんね、私達！…さあ、食べるぞー！…！」

「ぎゃあ！…！こっち動けないのになんでお前らそんな一方的に殴れんの！？おかしい！…おまえらおか、ブホッ！…！」

「」のツ」のツ！…！」

「もっと考えてから言ってくださいッ！…！」

「やめて！…！フェイトちゃん、うちを止めんといて！…！」

「ダメだよはやて！…！さすがに魔法はまずいって！…！アリシアも手伝って！？」

「スバルおねーちゃん、このお肉いい？」

「ん？いいよ？たくさん食べるんだよー？」

「うん！ー！！」

むしゃむしゃと食べているスバルたちのお皿に山のように積まれた肉を、ヴィヴィオが貰ってなのはと時風のベットに向かう。

「あの中に向かって、しかもご飯を持って行ってあげるとは……」

「ヴィヴィオ、強くなったね」

山積みになっている一本の骨付き肉、いわゆる「マンガ肉」を食べながらスバルとギンガは感心していた。

ちなみに食べ方としては

・まず、縦に口に入れる

・そして、骨を掴んで引き抜く

・骨だけ出てくる

というものだ。

「こんがりしててうまい！！！」

「こんがり肉！！！スタミナ回復！！！」

「これでいくら走っても大丈夫だね！！！」

おまえらはどこのまわしもんだ？

「時にフェイトちゃんはその言葉大丈夫なん？」

「え？わたし、いくら食べても……」

「ぶっ殺すよ……」

「え？だってお前ら、いいコンビじゃん。お似合いだとおにーさんは思っけどなア」

「じゃ、じゃあ舜さんはなのはさんのことどうなんですか！」

「え？ああ、あいつは俺にとって妹みたいなものだからにやー。それに、俺は誰かに恋することはないんだって」

「う……………」

「ほれ、諦めてお前らの赤裸々なお話を聞かせんしゃい」

「フェ、フェイトさ……ん……舜さんがいじめる……………！！！！」

「ほーれ、お姉さんが慰めてあげよう」

「エリオ君……！そっちアリシアさん……ってなに胸に顔つずめとんじゃボケえ……………！！！！」

「まっ、これは不可抗力よブゲツ！？」

「エ、エリオ……………！！！！！！！！！！」

走り去るエリオ。

立ちふさがって、それを回避しようとしたエリオを捕まえて抱きしめるアリシア。
それにとんでもない声を出してドロップキックを放つキャロ。
叫ぶ時風。

ちなみにアリシアは「やっぱり面白〜い」とか言って指さして笑ってる。

「ひ・・・ひど・・・い・・・」(ガクッ)

「い、いいのか？エリオ、完全に伸びてるぞ？」

「ここは病院ですから」

「いや、理由になってねえよ!？」

「それにしてもなんでいきなりこんなことしたんだ？」

「え？」

パーティーも終わりつつあり、眠ってしまったヴィヴィオを膝の上で撫でながら、時風が隣に座るなのはに聞いた。

「だって・・・舜君、「奴」を倒したからすぐにいなくなっちゃうんでしょ？」

「ああ・・・そういう事が・・・」

「だから、思い出を残すなら今のうちかなあ、って」

「ふーん」

「でも！絶対に会いに行くからね！！」

「くんなくんな。来られても困る。なんでそんなにするわけ？」

「す、好きだから！！！！」

一瞬どもりながら、なのはが力説するように言う。
それを聞いて時風はため息をつく。

「いいかなのは。もっといい男がいるって。みんな、ではなく、おまえを大事にしてくれる人が、な」

「そんなことないよ。舜君は、私を守ってくれた」

「「みんな」の一部としてな」

「その意識、変えてあげるから！！！」

「そう言って息巻いて、会えるかわかんねえんだぞ？」

「会っよ」

「え？」

「絶対に、また会うもん」

「………わいど」

そうして、パーティーはお開きした。

それから二、三日、時風は病室で過ごし、後に六課隊舎へと生活の場を移した。

もう日常生活には何ら支障も無く、軽い物なら模擬戦もできるそうだ。

そして待つこと、十分。

待ち人が、そこに現れた。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

なのはStrikers ｝事件のその後｝（後書き）

ごめんなさい続きます。

アリシア達の事も言わせるとか言ってますみませんでした次回です。

今回、とりあえず各自のこれから、みたいのを書きましたが、「あの人は？」的なモノがあったら言ってください。

書き加えるなり、返・・・信！！なりでお返しいたします。

アリス「で、次回こそ終わるんですね？このなのは！！！」

ええ終わります。

やっとここまで来たって感じですよ全く

ア「次回、待ち人、来たる」

ではまた次回

全力全開手加減なし…機動六課で最後の模擬戦！

なのはStrikers　く翼人は静かに世界を去りゆく

深夜の訓練場

そこに、二人の男が立っている。

一人は蒔風、もう一人は、蒔風が待っていた人物だ。

「およ」

「……おう」

「やっぱりきたか。まあ、大体このタイミングだと思ったよ」

「……わかるか」

「クソみたいなことだが、わかっちゃもうんだよ」

「……おい、なんでオレは来ると、いや、なんでオレがまだこの世界にいるとわかった、蒔風」

「その問いはいたって簡単だよ。マイカゼ」

時風が、誰もいないことをいいことに相手の名を呼ぶ。

訓練場にやってきたのは「奴」だった。

時風が言った名前に嫌そうな顔をして、「奴」がなおも聞いた。

「その名でオレを呼ぶな……で、なんでわかった？」

「簡単なこと。ゆりかごの玉座が残ってた」

「なに？」

「おまえが知ってるかは知らんが、WORLD LINKはな？おまえを倒すと同時に、おまえが取り込んだ物を完全に破壊するんだよ。ま、今回は取り込んだわけじゃないが、おまえの力でゆりかごは膨張してたし、かわらんたる」

「そういう事か……それで玉座が残ってれば」

「そう、つまりおまえはあの砲撃でゆりかごが完全崩壊する前に、あれを放棄して脱出した。まあ？力技で、更にあの砲撃じゃあ怪我もしてるだろうからな。それで大体これくらいかな？って」

「そうか」

そう言って「奴」がポリポリと頭をかく。
蒔風もあくびをしながら、それでいて、「奴」から視線を逸らさない。

「どけ」

「断る。世界は壊させない」

「死者を復活させた男に言われたくない」

「アリシアとリインフォースか？は。ありや本人じゃねえよ。言っちゃまえば超高性能な同じ魂を持ったクローンだ」

「・・・・・・・・・・なに？」

「フェイトの身体にはアリシア・テスタロッサのデータがすべて詰め込まれている。だが、それをそのままクローンにしても、生まれ落ちた瞬間にそれは別ものの魂だ。アリシアにはならない。で、今回やったのがその誤差をなくし、フェイトに埋め込まれていたアリシアのデータがそのまま成長したらどうなるかをシュミレートして誕生させたのが彼女だ。もち、本人じゃない。だが、そうなら同じ魂を持つのは自然だろ？本人だが、本人じゃない。クローンでありながら、クローンじゃなくて本人。それが、彼女だ」

そう、蒔風の言う通り、彼女が本人かと言われれば、YESとは言えず、そうはいつでもNOとも言えない。

世界がシュミレートを行ったと蒔風は言ったが、そのシュミレートには寸分の誤差も無いのだ。それこそ、世界の奇跡。

揚げ足取りのようだが、世界にはこれが精一杯だった。

この世界を三度も救ってくれた、彼に対する、精一杯の恩返しだったのだ。

「なるほどな。そうするとリインフォースはもつと簡単だな。夜天の書に残ったデータ。それを元に、穴があいた所を世界が完璧に埋めて再構築したってところか」

「ご明察。だから、あれは同じ魂を持ったクローンだ。まあ、気にすんなよ。本人だと思えばいいさ」

「ふん。確かに完全な死者蘇生、というわけではないようだ」

そう言つてクツクと笑う「奴」

それにつられて、蒔風も軽く笑う。

だが、「奴」はそんな話をしに来たわけではない。

「さて、話を戻すぞ」

「なに言われるかわかってるから言っとく。断る」

「……まあ、そう来ることはわかってたけどな」

「それでもなきや、こんなもん用意しないよ」

そう言つて、剣を抜く「奴」に合わせて、時風も獅子天麟を組み上げて突き立てる。

「やる、か。覚悟は言いか？脇役王。おまえの体力、万全じゃないだろ？」

「ははっ、いいぜ、合わせてやる……抜かせ雑種。この我^{オレ}にとってはいいいハンデだ。貴様とて万全でないだろっ？」

「こんだけあればじゅーぶんだ。さて……WORLD LIN
Kなしでお前とガチでやんのは初めてだからな……」

「なあに、オレにとっては問題はない。倒してしまっても問題はな
いだろう?」

「おまえ、それ死亡フラグだぞ? キャラ違っし」

「些細なことだ。そんな運命^{フラグ}なんてへし折ってやる。運命は、金魚
すくいの網よりも薄く、破りやすいんだからな」

「おいおいwww。その幻想をぶち殺すってか?」

ヒュオ……………

静かに風が流れる。

ほんのりとした潮の香りが、二人の間を駆け抜けた。

「脇役を統べる者として、行くぞ」

「銀白の翼、時風舜。推して参る」

言って、一瞬の間が開いてから

ドンツッ！という地面を踏みつける音がして、両雄が剣を構えて激突した。

「ラアッ！！！！」

蒔風の十五天帝と「奴」の魔導八天がぶつかり合う。

十五天帝は本数こそ魔導八天を超えるが、重さにおいて負けている。獅子天麟の三本で二本分。残りの十二本で六本分だ。つまるところ、威力は互角。

現に最初は、蒔風の剣と「奴」の剣が、お互いの攻撃に同時に弾かれ、そのまま手から飛んで行って上空で回転しながら飛んで行っている。

5090

しかし、それを取りに行くことなどしない。

二人は次の剣を抜き、蒔風は二本、「奴」は一本で打ち合い、またそれが宙を舞う。

そんなことをしていればあっという間に手持ちがなくなる。どうやっても八合で剣がすべてなくなってしまうのだから。

だが、その八合目が終わるころは、一本目が落ちてきて、それを掴んでまた打ち合う。

まるで大道芸。ジャグリングだ。

しかも、この状況で律義に自分の剣を選んで取っている暇などない。

蒔風が魔導八天を、「奴」が十五天帝を、ときにはそれらがごつちやになって、二人が二人の剣を使って切り合っていた。

が、ここでついに均衡が破られる事態が起きた。剣が上でなく、横に飛び始めたのだ。

飛んで行った剣は、ビルに直撃し、そのビルを根本から破壊して、いとも簡単に瓦礫に変えた。これが先にあつた倒壊音だ。

なんという威力だろうか。

そうしてすべての剣がなくなり、ついに肉弾戦に入る。

「奴」の蹴りに、蒔風が身を返して回避し、相手の胸に拳をぶち当てて「奴」を後退させる。

が、「奴」はそのままのけ反り、返した身体で時風に頭突きを放ち、それを両の掌で受け止めた時風がビルにまで飛んで突っ込んでいった。

それを追う「奴」

しかし、時風が突っ込んだ穴から絶光砲が放たれ、「奴」はそれを緊急回避するが、右腕をかすり、地面に転がる。

ビルから出てくる時風、立ち上がる「奴」

ビルは時風が抜け出してから崩れ始め、その音がこの戦いのBGMになっていた。

両者とも、一撃ずつ。

まだ、戦いは終わらない。

今度は押しつけて、などというものではない。
すでに「奴」の頭はビルの中に入っており、通過した後には横一文
字の溝が出来上がっていた。

そしてそうやってビルを二、三ほど通り抜け、最後に四つ目のビル
に叩きつけようと振りかぶる。
が、そこで「奴」が身体をグルンと返し、逆にその反動で時風をビ
ルの根本に投げ叩きつけて、そのビルを反対側から倒壊させて押し
つぶす。

時風の声が聞こえた気がするが、倒壊音で掻き消されてしまってよ
く聞こえない。

砂煙が起こり、それを吹き飛ばすかのように瓦礫の下から翼が生え
る。

ガラガラという音を立て、時風が瓦礫の下から這い出てきた。

それに応じて「奴」の全身から黒い煙がオーラのように噴き出して
きた。

もはやまだ立っているビルは最初の三分の一程度しかない。

そのプレートの上で、「奴」と蒔風が攻防を繰り返していた。辺りには剣が突き刺さっているが、それを取りに行く余裕もない。

しかし、「奴」の一撃に蒔風が弾き飛ばされ、その際に剣を一本、引き抜いた。

それを見た「奴」がその剣を振りかぶる蒔風を見て、とっさに横に走り出す。

5096

蒔風が斬撃を次々に飛ばし、「奴」がそれを横に走破して避けていく。

そして前回りに飛び込んで、剣を拾い握ってその斬撃を跳ね返し始めた。

その余波でまたビルは崩れ、飛ばしたり飛んできたりの斬撃に、両者の身体に切り傷が刻まれていく。

「星!!!轟!!!噴!!!!破ッ!!!」

ガゴゴゴゴン!!!!!!

「奴」の拳が、蒔風の急所を的確にとらえていく。その攻撃一撃ごとに血を噴き出しながらも耐える蒔風だが、その足が段々と折れ曲がっていつていた。

「激!!!!!!」

「ッ!!!!!!サアリヤア!!!!!!」

連撃最後の一発に、「奴」の力が込められて来たのを見て、蒔風がその腕を、首と肩の間を滑らせてかわす。そしてそのまま身体を返してからの一本背負い。

しかし、ただの一本背負いではない。

「奴」がおちる地面には困難が発動し、その重力に引かれて一気に叩きつけられる。

鈍い音だけが、鳴り響く。

すでに周囲に立っているビルは一つも無く、ただ、瓦礫の山が広がっている。

ここに至るまで、二人は一切の広範囲攻撃を行ってはいない。すべてが肉弾戦や、剣劇でくずれたものだ。

そしてその瓦礫の上で、二人の男が、無様に殴り合っていた。

一発殴って相手の身体がのけ反って、その相手は仰け反りから身体を戻して相手を殴って。

その繰り返しだ。しかも、一撃一撃の攻撃で、一回一回息切れのように動きが止まっている。

「ハアッ　ツ　．．．　ハアッ　ツ　．．．　お　わりか？　．．．　」

「まだ　．．．　に　決　ま　っ　て　ん　だ　ろ　オ　が　．．．　」

ド　ロ　ッ

「ぞんな　．．．　もんか　．．．　じゃあ　．．．　今度はこっちだ　．．．
　　．　　ツ　！　！　！　！　！　」

ゴ　キ　ッ

「ガッ　．．．　は　！　なん　だ　よ　そ　れ　よ　．．．　．．．　ぞ　れ　じ　ゃ　俺　は　死　な　ね
　　え　．．．　ぞ　！　！　！　！　！　」

ガゴッ

「あまゝい……………!!!!」

バキッ

「奴」が最後に蒔風を殴り、そこで蒔風からの反撃がなくなった。
「奴」が心底きつそうので、それでいてまだ余裕な態度を崩さずに、蒔風に問いかける。

「ハア………ハア………どうした………」

息が荒い。
それは時風もだ。

おそらく二人は、もはや目の前すらはつきり見えていないだろう。
ただ、そこにあるものを殴る。それだけだったのだ。

「いや…………こいつで終わらせよう……………思ってたな」

「じゃあこっちも……………そうしようか……………」

そう言って、二人が拳を握りしめる。

全身の力をすべてここに詰め込み、これで相手を終わらせるのだ。

「グウウウウウ……………ッ!!!」

「アアアアア……………ッア!!!!」

そして、その拳が放たれる。

しかしそれは

一人分のだけであつた。

「ああ!？」

「バアカ・・・ケンカに・・・正直もくそもあるか」

「蒔風エ！……！」

蒔風は拳を打ち出すことなどせず、背を向けて近くの剣を掴みに行つたのだ。

一方「奴」は、拳を打ち出してそのまま勢いで体勢を崩す。それはそうだろう、相手がその場にいないのだから。

そうして、蒔風が剣を握つてジャンプし「奴」に向かい、突き立てるように剣の切っ先を下に向けた。

それに対して「奴」は、蒔風が剣を取りに行く事でできた一瞬にて、近くにあった魔導八天の一本を呼び寄せて、飛んできた剣をその手に掴む。

ザクッ！……！！

という音が、二回分、重なって一回分に聞こえた。
そして、二人の剣の切っ先は……

「奴」の剣は蒔風の腹を貫き、蒔風の剣は「奴」の左肩に突き刺さっている、というものだった。

「これで……」

「ご……フツ……ああ、これで終わり……だ……
集え……十五ツ……天帝!!!」

「なッ!？」

蒔風が、腹を貫かれながらも、叫んだ。

蒔風が手にしていたのは「天馬」

十五天帝を組み上げるとき、その中心に位置する剣だ。

つまり、この天馬には、他の剣を呼び寄せ、ということも可能になっっている!!

そうして集った時風の他の十四本の剣が、「奴」をめった刺しにしていく。

頭、胸、腕、足、すべてをだ。

それを受けて「奴」は怒声すら上げなかった。
貫かれ、その体が消えていく。

「ち……こんな事なら、ゆりかごから吹き飛ばさないであのまま中で殺すんだった」

「そうだな。あの時オレは中無かったからな」

「なにがなくなってた」

「肝臓の三分の一、血液の十分の三」

「全部戻ってくる器官じゃねエか……くっそ、ずりい」

「ざまーみるだ」

そう言って、「奴」が消える。

二人が最後に話していたこと。

それはあの、時風がクアットロを打ち抜いたときのことだ。

あのとき、時風はなのはの力を借りた。

まあ、あれ自体はなのは一人分だったから複合できたから、という事で問題はない。

問題なのは、その時青龍たち、しいては十五天帝、蒔風の力を使っていたという事だ。

蒔風は力を借りた時、自分の力を使えない。
使えば、身体が崩壊するからだ。

願いに同じものはない。それはその通りだ。
つまり、蒔風に力を貸してくれる願いにも、それぞれの差異はある。
だから違う人物からの願いは一緒に使えないし、自分のも当然無理だ。

が、あの時蒔風は力を借りた。

その代償が、さっき蒔風が言っていたものだ。

つまり本当に、「奴」が蒔風を倒すのは、あの瞬間しかなかったのだ。

「まあ……終わったことだ……諦め……ろ……」

そう憎らしげに呟きながら、時風が倒れる。

しかしそうしながらも、目の前にモニターを出して、訓練場を元のプレートに戻し、使用記録を抹消した。

「ははは……終わった……あ……つかれ……
……た……な……」

そう一言、一人空を眺めながら。
その空の星を目に写して。

時風の意識は途絶えた。



- - - - -

翌日

六課メンバーは隊舎内やその周辺を走り回っていた。

蒔風がいなかったからである。

朝起きたらベッドにいない。
通信をしてもつながらない。

それを受けて、なのはの提案で全員で蒔風を探し始めていた。

が、どうしても見つからない。

そうしていると、シャーリーが何かおかしなものを発見した。
蒔風の何か痕跡が見つからないかということデータを片っ端から
漁って、そして何かを見つけよう、と思って見ていなければ、おそ
らく見逃していただろう、その痕跡。

フェイトが復元できる？ときいて、それでNOという彼女ではない。
さすがといつかなんといつか、そのデータを復旧させた。

出てきたのは、訓練場の使用記録。

映像は残っていなかったが、時間と、そのプレートの状態は出せた。

それをシャーリーが再生する。

プレートの上に、廃棄都市のビルが現れた。

そしてそれから十分と少しして、いきなりビルが崩れた。
そこからはまるでないかが戦っていたかのように、次々とビルが崩れていく。

それを見て、一同は何が起きたのか、わからないままだった。

しかし、ひとりだけはわかった。

再生をやめましょうか？と聞くシャーリーに、なのは最後まで見せてと頼み、ひとりで最後まで、そのプレートを見ていた。

延々と崩れ続けるビル群。

それを見て、なのはの目はせわしく右へ左へと動いていた。そこには人などいない。ただ、ビルが崩れていく現象しかない。

だが、彼女には見えていた。あの人が、どのように戦っていたのが。

そうして、その倒壊が終わる。しかし、まだ再生は終わらない。

なのはの目が、一点に止まる。

そして、終わった。

再生時間、四時間と十三分二十秒。

それが終わってから、なのははプレートへと降りていき、最後に見ていた一点に向かった。

そしてそこで膝を曲げ、静かに泣いた。

あの人は、ここで戦ってたんだ。

誰にも知られることなく、どういつことなのかわからないが、生きていた「奴」と戦って、最後にここで私たちを守ってくれた。

そして、「奴」を倒した彼はいなくなってしまった。

おそらく、帰っては来ないのだろう。

なのはは泣きはらした後に、その胸をみんなに伝えた。
彼はもう、次の世界に行ってしまった、と。

また、いきなりいなくなってしまった。
お別れの言葉も言えなかった。

だが、なのはは想い立つ。

そうだ、別れの言葉なんていらぬい。

絶対に、必ず

また会えると信じているから。

否

「絶対に、会いに行つてあげるから」

学園

そう、学園だ。それも夜の。

そのグラウンドで、時風は目を覚ました。

来ているのは黒い学園。

仰向けに寝っ転がって、空を仰いでいる。

「ここ……は……どこだ？」

「目、覚ましたか？」

蒔風が目を覚ましたのを見て、一人の青年が話しかけてくる。その青年は缶コーヒーを投げ渡し、蒔風の隣に座った。

「ここは……次の世界か……」

「ん？覚えてるか？自分に何があったか」

「えっと……ああ、まあな」

「それだったら話は早い。自己紹介、してくれるか？」

「蒔風舜だ」

「そうか、よろしく蒔風。オレは、音無結弦。おとなしゆづる生徒会長だ」

「生徒会長？」

「ようこそ、死後の世界へ」

時風、ついに終着の世界へと降り立つ。

t o b e c o n t i n u e d

なのはStrikers ｝翼人は静かに世界を去りゆく（後書き）

なのはStS、終了です!!!!!!

【魔法少女リリカルなのは Strikers】

構成：”ライクル” 35%
”フォルス” 35%
”LOND” 30%

最主要人物：高町なのは

- WORLD LINK - ｝WEAPON｝：アリシア・リインフ
オースの再構築。全員のデバイス出力の激増。

- WORLD LINK - ｝FINAL ATTACK｝：あらゆる全エネルギーを集束しての「オールスターライトブレイカー」

アリス「まあた何ともさびしい終わらせ方しましたねえ」

はて、なんの事かな？

そして来ました前半の説明部分。

中でも言いましたが、あれはほとんどいいわけです。抜け穴です。

もし、気に食わない方がいらっしやったら、申し訳ございません。

ア「で、次回はあの世界ですか？」

そう、死後の世界。を、舞台にした物語。

先に言っておきます。

次の世界は、本編終了後です。

ですので、原作を見ていないともしかしたらわからない部分があるかも？です。

でも大丈夫！！

アニメは13話！！あつという間さ！！！！

ア「CMとか抜いて一本25分くらいだとして、その13だから・・・325分？」

五時間半かかりますね・・・

ア「・・・」

・・・

気にしないッ!!!

ア「丸投げた!?!」

ほらほら、任せましたよ!!!

ア「次回、久々に・・・説明回だッ!!!」

ではまた次回

神への復讐。その最前線

Angel Beats! ~He will not die~

「死後の……世界？」

「ああ。実感ないか？まあ、最初はそうだよなあ」

暗くなったグラウンドでそう言った、音無という青年は話を進める。
一方、時風は困惑していた。

自分は死んでしまったのか？

それとも、ここはそういう設定の世界であるだけなのか。

5128

確証がない。

そもそも、確か最後に自分は「奴」との一騎打ちで、腹を貫かれたのだ。

あのまま死んだといわれてもおかしくはないし、あの直後にこの世界に運ばれ、傷が治ったといっても、これもまた、おかしくはない。

「なあ、俺は死んだのか？」

「この世界にいるってことはそうなんじゃないのか？そこだけ記憶がないとか？」

「いや・・・その前に、この世界のことを教えてくれないか？じやないと推測も立てられん」

「??ま、いいか。この世界はな・・・」

音無の話通り、この世界は死後の世界だ。

生前、理不尽なことがあって、それに自分の生きたかった時間、青春を失ったもの。

そういった人物がこの世界に送り込まれてくるのだそうだ。

未練ある、迷える魂。

そういった彼らはここで失った青春を取り戻すのだ。
自分の人生に、納得する。

そうして、満足して心置きなくこの世界から成仏まじつてごくするのだそうだ。

「で？お前はその導き手か？」

「俺は・・・そうだなオレの事も話しておこうかな」

そういって、音無が今度は身の上話を始める。

かつて、この世界には戦線があった。

名を、「死んだ世界戦線」という。

そのメンバーは、理不尽な人生に対し、それを与えた物に復讐を誓っていた。

そう、彼らの人生は理不尽だった。

まあ、この世界に死後、やってきた時点でそういう人物たちなのだが。

ある者は、夢を断たれ
ある者は、妹、弟を殺され
ある者は、幸せをつかめず

それが実行できなかったのは、自分たちのせいではない。

暴力で夢を追えなくなった
強盗に押し入られて殺された
交通事故で半身不随になってしまった

そういった、なにを憎めばいいのかわからないようなそんな悲劇を、
身に受けてきた者たちだ。

そんな彼ら、彼女らが、この世界にやってきて、そしてそこが死後
の世界なら、そこには自分たちにあんな人生を叩きつけた張本人が
いるはずだ。

すなわち、神。

自分たちは復讐するのだ。
あんな理不尽な人生を叩きつけた、神に向かって。

「それで……そいつらはどうしたんだ？」

「成仏したよ。紆余曲折あったけど、自分の人生に納得して、みんな、旅立った」

「ふーん……あれ？じゃあこの学園の奴らみんなそんな奴らなの？」

「いや、そうじゃない。大半はNPCっていう人間みたいなやつらだ」

「人間みただけと、そうであるふつに用意されたものってことか？村人Aとかそんなんか」

「そうだ」

納得する時風。

そこで、あれ？と思い付く。

「じゃあ音無。おまえは人間なのか？」

「生前がある人、って意味なら、そうだな。オレは人間だ」

そう言いながら、音無が立ち上がる。

しかし、蒔風の疑問は尽きない。

「じゃあ、おまえはなんでまだこの世界に居るんだ？なんか納得いってないのか？」

「……違う……オレはただ……この世界で……」

「・」

「?？」

そうして話が終わったのか、音無が蒔風を連れて寮へと案内する。どうやら同室になるらしく、それで音無は蒔風という人物が新たにこの世界にやってきたことを知ったのだそうだ。

「それで、おまえの疑問は解消できたか？」

「それなりにな。そして、オレはおそらく死んでこの世界に来たんじゃない」

「……………は？」

「今度はこっちが話す番だ。驚くなよ？実はな……………」

そうして、蒔風の説明が始まる。

ベッドに座って、不思議がる音無に、今この世界に起っていることを話した。

……………

「………つて、ことなんだよ」

「まじか？」

「にわかには信じられないかもしれないけどな」

「そうか……でもまあ、大丈夫だと思うぞ……」

「は？」

説明を聞き終えて、音無はなんだか納得したように頷いてから、特に何かを意識することも無くベッドに入ってしまった。

「お、おい………お前な……」

「明日には授業あんだから、さっさと寝よーぜ？」

「いやだから、そんな間に………」

「オレ、生徒会長なんだし、寝坊とかダメだろ？じゃ、おやすみー」

「いやだから………寝ちまったよ………こいつわかってんのか？状況」

ベッドに入っただけで、音無は眠ってしまった。

なんだか納得はしてはいたみたいではあった物の、本当に信じてるのか、それとも「あっそう」と流しているだけなのか、蒔風には判別がつかなかった。

もう何時間か話していれば人となりがわかってどういう感じなのかわかるものなのだが……ここまで短いとどうしようもない。

まあなんにしろ、本人が眠ってしまったのだ。

無理矢理起こしてもしょうがないし、そもそも「奴」はそんなすぐには来ないだろう。

とりあえず、本腰入れるのは明日からだということにして、蒔風も眠る。

ちなみにベッドは二段ベッドで、音無が下、蒔風が上だった。

蒔風がレンゲを音無に向けながら聞く。
ここを信じてもらわないと、蒔風にとってもどうしようもないから
だ。

「さあなー。信じるも信じないも、変わらないし」

「変わらない？おいおいそりゃないぜ？おまえが死んだらこの世界
は……」

蒔風が音無にもう一度しっかりと話そうとして、その言葉が詰まる。
人ごみの中に、気になる人物を見たからだ。

「あい……っ……」

「どうした？」

「隠れる、音無。「奴」だ……どうにも来んのがだんだん早
くなってきたんな……」

そう、こっちに気付いていないのか、「奴」が食券売り場に並んで

いた。

しかも、「丁寧」に学ランまで着ている状態。

「多分、計算中の息抜きってところか……ここは狭い世界だから……こうしてかちあうのもおかしくはない……か」

「ふーん。あいつが？」

「そっだ、あいつが「奴」だ……っておまえ普通に食ってんのな！？」

蒔風がテーブルに身をかがめていると、隠れていると言っておいた音無が横に来て同じ人物を見ていた。

「ちょっと聞いてくるわ」

「バツ！おまえ、説明聞いてなかったのかよ！！！」

「だってよ、あいつ、生徒じゃん。で、オレが生徒会長。わけへだてできないよ」

「は？っておい、ちょっと待って待って！！！！！」

そう言っつて、時風の制止も虚しく音無が歩いて行っつてしまつ。
それはもう一直線にだ。

そして

「新しく来た人か？」

至つて普通に話しかけた。

その言葉に、「奴」は振り返つて、こちらも普通に返事をしてきた。

「ん？」

「オレは音無結弦。生徒会長だ」

「…………ツ…………今は用、ないんだがな…………」

「？ああ、計算、だっけ？オレを殺すとかつていう人？」

「……………（バツ！！！！）」

音無の言葉に、「奴」が周囲を見渡して、時風を発見する。

そして、その目がキラリと光った。

「今こいつを殺す必要はねえけどよ……」

「イイツ!？」

「てめえは殺しても構わねえよなあ!?!」

「バツカ……こんなところで!?!」

「奴」が剣を構え、テーブルの上を走って時風に突っ込んでくる。それにとっさに拳を構えて迎え撃とうとする時風。

そして両者がぶつかりあおうとしたところで

パン!!!!

と、そこで銃声が鳴る。

音無だ。

どこに持っていたのだろうか、その手には拳銃が握られており、真っ直ぐ天井に向けられていた。

「やめるんだ。ここは喧嘩するところじゃない」

「お？む……………」

そう言って、「奴」がその言葉自体には忌々しそうな顔をするが、周囲の学生達わがまが騒然わがまとしているのを見て、唾を吐いてテーブルから降りた。

「グラウンド出るや時風。前回での一騎打ち。借りを返してやる」

「……………クソツ……………」

そう言って、時風が「奴」に応じて食器を片づける。

と、そこに音無が寄ってきて、話しかけてきた。

「本当みたいだな」

「てめ・・・そんなこと確認するためにあんな危険なことしたのはのか
!?!」

「大丈夫だって。だってよ、この世界は・・・」

そう言つて、音無がまた、拳銃を取り出す。

そして銃口を自分の胸、心臓の真上に押し当てた。

それを見て蒔風はもちろん、自分の手で殺さなければならぬ「奴」も動揺する。

「な、おい!?!」

「バカ!! 貴様が自分で死んだら!!!」

だが、その二人を見て音無は笑い

タァン!!と、引き金を引いた。

「音無ッ!!!!」

「クソ・・・やってくれるな、主人公ッ・・・」

そう言って、時風が顔を青くし、「奴」が怒り心頭になる。

が

音無の身体が倒れない。

銃弾の勢いで後ろにふらついたが、倒れないのだ。

そうして、胸にハンカチを押し当てて止血しながら、にっこりと笑ってここう言った。

「言つたる？ここは死後の世界。つまり、ここではもう、誰も死な
ない」

その現状と言葉に、蒔風も「奴」もポカーンとする。

確かに音無が撃つたのは自分の心臓だ。その位置に間違いはない。

ならば、彼の言っていることは正しいのだろう。

「なるほどな……オレにも「奴」にも、「破壊者」が持つ「破
壊機構」はない。つまり……」

「そ、いくら「奴」が襲つてきても、俺は死なないの」

「バカ……な……」

「……とんだ貧乏くじだったなあ……おまえ、実はこの
世界よくわかつて選んでなかっただろ？」

「チツ……クソツ……」

笑う時風に、憤る「奴」

「奴」は踵を返して食堂を出ていった。

おそらくは計算して、この理をどうにかするための模索をするのだろっが、無理だろう。

そもそもこの世界の前提である「死後」というものが壁なのだ。

打ち破れるものではない。

「ふー、なるほど。大丈夫ってのはそういうことか」

「そういう事だ」

そっとう音無の胸の血はもう止まってきている。

あと十分もすれば穴もふさがってしまっらしいし、最悪バラバラになってもくっついて戻るらしい。

「で、あと二つなんだけだよ」

「なんだ？」

ゴガンツ！！！

「無茶し過ぎだバカ。心配させんな」

「イツツツツあ~~~~~~~~.....!!!!!!」

頭をそれなりの強さで殴る時風。
そこを押さえて涙ぐむ音無。

どうあっても主人公が死なない世界。

一体この世界はどうなっていくのだろうか

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

来ましたね、Angel Beats!!

アリス「今回はどの時間軸なんですか？」

本編後です。

あれからどれだけ立っているのかは明言いたしません。

が、出てくる原作キャラは音無のみです。

ア「天使ちゃんとか立華さんとか奏さんは？」

それみんな同じ人。

出ません。でも、過去バナ的なモノでぼろぼろと出てくるかも？

ア「で、主人公が死なない、と」

そうですね。死にません。

この世界の根底に関わる設定なので、時風はもちろん、「奴」にも
どうすることはできません。

ア「そうですか・・・ん？じゃあ時風とか奴は死なないんですか？
でも彼らは死んで来たわけじゃないから・・・どうなるんでしょう？
う？」

そこら辺は追々わかって行きますよ。

ア「そんなもんですか」

そんなもんです

ア「次回、やることなくなった蒔風、どうしよつか？」

ではまた次回

お前の人生だって、本物だったはずだろおっ！

Angel Beats! ~Going my Way~

「生徒会に？俺が？」

「ああ、あなたは普通とは違った来かたをしている。つまり、未練だとかそういったのはないんだろ？」

「そうだな・・・そもそも、死なんてもんはどーだっていいもんだから・・・たしかにそうだ」

「で、この世界でやることって言ったら「奴」から俺を守ることなんだろうけど・・・」

「それも意味ないしなあ。お前死なないし」

「だったらさ、一緒にやってみないか？生徒会」

音無から誘われたのは、「奴」といざこざがあっただけから翌日の放課後だ。

音無の言つとおり、蒔風は暇だった。

まあ確かに、この世界は初めて訪れることもあったためそれなりに見て回ることもできたのだが、いかなせん範囲が狭い。

なんせ学園、寮、設備などぐらいいしがなく、あとは延々と広がる森だけだ。もつと離れれば山もあるそうだが、そこまで行くのも億劫なだけ。

つまりは簡単に見回り切ってしまったのだ。

そうして、特に思い残しだとか未練なんかはとくに飲み込んでいるこの男は、特にやることもなくなってしまうていた。

と、そこで音無からの誘い。たしかに、いい話だ。

しかし蒔風にはそんな経験はないし、そもそも、途中から入っても先のメンバーがいるのではのか。

そう思って聞いてもみたのだが

「大丈夫だ。生徒会は俺しかいないから」

「は？」

「教師だってNPCなんだぜ？ここで人間・・・前世がある奴らってことな？は・・・今はお前、「奴」、俺くらいだ」

「いないの？なんで」

「少し前までいたんだが、成仏して行ったよ。なんでもできるやつだったけど、そこに至る苦勞つてのを知らないから、それを知りたかったんだってよ」

「でも・・・そんな中で残ったお前は どうするつもりだったんだ？」

「どうもしないさ・・・それに、あとからそんなに来ないってのは、それはいいことだろ？ようは自分の人生に納得している人が多いってことなんだから」

「なんか「医者暇なほうがいい」ってみたいだな」

「それに近い」

そんなことを話しながら食券を手にカウンターで受け取ろうと並ぶ二人。

そこで、最初の質問に戻った。

「生徒会、入ってくれるか？」

「・・・・・・はあ。わかった。入ろう。特にやることもないし、

そうやって誰かと接するのも面白そうだ」

「ははっ、大変だぞ？」

「誘ったのは誰だよ。ともかく、よろしくだ、会長」

「よろしく、副会長」

そうして、なんやかんやあって蒔風の生徒会参入が決定した。なんやかんやはなんやかんやだ！！

「できれば「奴」も誘いたいなあ。ほら、どうせ俺死なないし」

「それはやめとけ！！」

.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....
.....

「で？なにすればいいんだ？」

「そうだなア……って言ったところでやることないんだよな」

「はあ！？」

時風が素っ頓狂な声を上げる。

それに音無がははと笑いながら先を話す。

「だっていつもやってんのはここに来たやつらを成仏させることな
んだけど、今はみんないないし……」

「じゃあお前も成仏すりゃあいいじゃねえか。ってか、だつたらな
んでオレを誘つたんだよ！！」

「ん〜〜。面白そうだったからかな？だって、死なないでこの世
界に来たやつなんて、初めてだし」

「……はあ……もうお前それでいいよ」

そんなことを話しながら蒔風と音無が歩いていくと、チャイムが鳴って、授業の始まりを告げる。

「お、しまったな・・・急いで教室に・・・」

「だめだ。遊ぶぞ」

「・・・は？」

授業に出ようとする音無に、蒔風が待ったをかけて腕をつかむ。その蒔風になにすんだとあきれ顔をする音無だが、蒔風は問答無用だ。

「おまえオレのこと誘つといてなにも無いのなら、オレのやりたいようにやる!!まずは球技だ!!」

「は？は!？」

「俺は球技がでкин!!だからそれを克服させてくれ!!やんぞコラー!!!」

「ちよ、待てって!!授業は!？」

「そんなんどうだっていいだろうが!!!!どーせん死なばもろとも

だし!!!」

「まあ、確かに死んでんけど……」

強引にグラウンドにまで出ていく二人。

そして、蒔風がバットを握り、音無がグローブを持った。

「よっしゃ!!!打てるまでやんぞー!!!」

「はあ……」

「なんだよ、ため息つくなよ!!!暇になっちまったんだから、やることないんだよ!!!」

「まあ……誘っついて何もなかったオレが言つのもなんだけど……」
「奴」を倒しに行かなくてもいいのか?

「いーの!!!どーせあっちもなにもしないし、俺はあいつが動かないと何もしようがないんだからさ」

「そういうもんか?」

そんなことを話しながら、普通に練習を始める二人。

蒔風がバットを振り、五回に四回は空ぶって、それを音無が注意、指導していた。

そうして再度始めると、手からすっぱ抜けたバットが音無の顔面に直撃かけたり。

当たれば間違いなくボールは見えなくなるが、まったく見当違いの方向へと飛んで行ってしまふ。

そんなことを続けて、早くも放課後になってしまった。すでに夕日がまぶしく、すぐに暗くなりそうだ。

「なんとか様にはなってきたな!!蒔風!!」

「なあに、もうすでにコツは掴んだ。今に見てるよ?世界の果てまで飛んでくホームランを見せてやっからな!!」

結局乗り気になって楽しそうになっている音無と、汗をかいていい笑顔になっている蒔風が、これで最後にしようかと叫びあった。

最初、蒔風はとにかくタイミングがあつたら「ここだあ!!」とか言っと思っていきり振っていたのだが、音無の注意でなんとかそう言った「思い切り打法」をやめ、慎重に、とりあえずバットに当てることから始めたのだ。

その成果もあり、弱くではあるが、だんだんバットに当たるようになってはきている。

音無の足元にテンテン、と転がってきているいくつものボールがその証拠だ。

「よっしゃ!!いくぞー!!!!」

「バッチこーい!!!!」

そう言っつて音無が投球の姿勢になり、アンダースローでボールを投げる。

それを冷静に視界とらえる蒔風。

「（落ち着いてだ・・・無理することはない。しっかり見れば見えるんだ・・・全力じゃなくていい、必要な分の力でッ!!!!）」

カキーン！！！！

「お……おおッ！！！」

「やつ……たぁアアアアアアアアアア！！！！！！！」

そうして、気持ちのいい音を立ててボールが空に消えていく。方向は真っ直ぐに音無の後ろの方だ。

つまり

「ホームラン行ったる、これ!？」

「おおお！！やつとやつたな！！！」

ホームランである。

それにはしゃぎまくる二人。

そうしてある程度ワイワイやった後に、用具を抱えて帰ろうとする。

その途中

「音無、なんだ？その赤いの」

「え？赤いの？」

「えっと……ッ！……！音無ッ！……！」

蒔風が用具を投げだして音無の前に出る。
蒔風が見たのは音無の額に写る赤いポインターだ。

つまり、狙撃。

それを見た蒔風が、とっさに音無の前に出て、それから守る。
そしてその直後、蒔風の後頭部に銃弾が命中した。

頭が割れるような痛みと共に、蒔風が地面に倒れ伏す。

それと同時に、後者の方の茂みから、「奴」が出てきてライフルを投げ捨てた。

「ああ、クソツ！！不意打ちなら死ぬんじゃないかと思ったのによ
オ！！！！邪魔すんじゃないかねえ！！！！」

「あ・・・おまえか」

「おまえかって・・・まあいい・・・蒔風はこれで・・・」

そういつて舌なめずりする「奴」

どうやら今回は「不意打ちなら殺せるのかも」という実験だったようだ、蒔風を打ち抜くと言う思いもよらない結果に嬉しかった。

しかし、それを見て音無が頭を抱える。

「あんな、前にもトラップ・・・つまり不意打ちで死んだ奴も、普通に生き帰ってんぞ？」

「あ？・・・なんだよ・・・だがまあ・・・」

「それにこいつも「ダアツ！！」ってえなクソ野郎！！」生き
てるし」

「なあッ!？」

音無の言葉通り、いきなり立ち上がって頭を押さえる蒔風。
驚愕する「奴」

頭から血が流れているが、それも治まりつつある。

「あーっつ・・・ん？あれ？これって・・・」

「つまり蒔風も例に漏らさず、この世界じゃ死なないってことなん
だろっよ」

「マジかよ……じゃあ……」

「ああ、もちろんお前の方も死なないぞー？」

「ななな……」

「なんだよこの世界……それにおまえ、まだきっちり計算終わってないだろ？」

「うぐ……」

「焦ってないで、とっととやることやってこい。ってか、何やっても無駄だろ？そんなことわかってるくせに……」

「く……っそ……！ぜってえ諦めねえ……！必ずぶっ殺してやるからなア……！！」

そんなことを言いながら、「奴」が何処かへと去っていく。それを見て苦笑する音無に、何か言いたげな顔をした蒔風。

「おまえなあ……死ぬの怖くないのかよ？」

「この世界でその質問は無意味だって。それに、蒔風はどうなんだ

「よ」

「おれか？」

「俺が狙われると知って、おまえは何の躊躇も無く俺の前に立った。おまえは死んでこの世界に来た人間じゃないのに、なんでそんなことができたんだ？死なないかどうかもわからなかったのに」

そう言われて、時風の顔がすーっ、と大人しくなっていく。そして、普通さと、寂しさと、孤高さという、三つの感情の降り混ざったよくわからないような顔をして、複雑そうに言った。

「おれは・・・ここにきてこんな事しなくても、死、っていうのがよくわかつちまった人間だからな」

「・・・・・・・・」

「わかるか？意味が。俺はな・・・死ななくても、死んじまった人間なんだ。だから・・・怖くない」

「そうか・・・・・・・・」

そうして、用具を片づけて寮へと戻る二人。
食堂はもうしまっていたので、買い置きのカップラーメンを喰った。

「ペヤ グってこっちあるの!？」

「あるぞ?それだけじゃなく、マル やんだとかど赤いき ねに緑
ためき、定番のカ プヌードルまでよりどりみどりだ」

そんなことをしながら、二人の夜は更けていく。

ちなみに別の寮の部屋で、カリカリと計算し続ける男はというと・・・

「ガーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!殺せないってなんだよこ
れよ!!!!!!!!くっそ・・・・なんでこの世界セレクトしちまったんだ・・・

・そもそもなんでこんな世界あるんだ――――
「――！！！！！！」

と、頭を抱えて叫んでいたそうだ。

t o b e c o n t i n u e d

Angel Beats! ~Going my Way~ (後書き)

なんか普通の学園生活になりそうだ・・・

アリス「だって「奴」がなにしようと思わないじゃないですか、この世界」

そうなんだよねえ・・・

引っ張っては来たけど、どうしようか？

ア「そういえばAngel Prayerとか言っのありませんでした？」

あれって世界そのものを書きかえるのは無理だろ

ア「そつかあ・・・」

ま、なんとか持っていけますよ。

泣けるかどうかは・・・別だけど!!!

ア「泣けないんですか!？」

なんだ？泣かせる文章が書けるとでも思ってたのか!？私が？無理デス!!!

ア「次回、続く日常」

ではまた次回

そんな人生・・・あんまりじゃない・・・

Angel Beats!! ~ Today to Day ~

「よっしゃ!!今日はサッカーすんぞ!!」

「おい!!今日は卓球だ!!」

「なあ、今日はボウリングしようぜ!!」

あれから数日間、時風と音無はずっとこんな感じだ。
音無もそれに連れられていろいろと大変そうではあったが、楽しそ
うでもあった。

無論、授業にもしっかり出ている。
最初こそ丸々一日さぼってはいたのだが、途中からやはり授業には
出ようという音無の提案である。

「授業も授業でいいもんだろ?それに疲れんだろ。さすがに」

とは音無の言葉だ。

まあ確かに、こんなNPCしかない世界でも、彼は一応生徒会長なわけであって。

そうなるも授業をずっとボイコットはまずいだろう。

「ふっ、いいだろう。授業ですら楽しく受けてやるぜ」

一方そう言うのは時風の言葉だ。

それから数日後、小テストがあったので点数を比べようとしていたのだが、その時の手ごたえは

「まあできたかな」(音無)

「これはキタ」(時風)

というもので、結果が来た後に

「まあこんなもんかな」(音無)

「なん……だと……?」(蒔風)

だったそうだ。

「音無、お前頭いいいな」

「蒔風だって真ん中くらいじゃないか」

「真ん中よりも下だ。中の下ですよ?はあ……」

そんなことをしながら、日々をゆっくりと、それでいて楽しく過ごしていった。

もちろん、「奴」が何もしてこなかったわけではない。

計算を終え、もう無駄であることが分かっているのだろうに、いまだに音無や蒔風殺しを諦めていないのはさすがといふかなんといふかといったところである。

が、そこはやはり無駄だった。駄目なものはダメだったのだ。

途中にも、「Angel Prayer」という世界改変ソフトを使ったプログラムで襲い掛かってきたが、結局二人を殺すことはできず、それによる世界の設定も変更不可だった。

そのプログラム内に魂を食って「人」をNPC化するという物もあったのだが、それは能力の割に耐久が低く、まるで蒔風の相手にならなかつたし、無差別なものだったためさらに「奴」にまでも襲い掛かって来たのでNGとなった。

なにより、「個性を殺す」や「人格破壊」ではダメなのだ。

「音無という主人公の命を断つ」という事が必要なため、そもそもこのNPC化は意味がない。

しかも、仮にそうしたとしても意志さえあれば簡単に戻ってきてしまうから、なおのこと意味がない。

そんなこんなでいろいろと試した「奴」だったが、もう手がなくなつたのか最近はついに授業にまで出ているらしい。

無論、教室は違つが。

それでも「奴」は諦めない。

何かあるとすぐに突っかかってくる、すぐに殺そうとしてくるのだ。まあ、時風は別に死ぬことに恐怖はないし、何度かは本気で相手をしているが、大抵は軽く相手をして殺されといている。

正直言つてめんどうくさいのだ。

生き帰るから窮地にもならない。WORLD LINKはするだけ
疲れる。

そんな適当な時風の態度にイラついているのか、「奴」は今日も時
風にケンカをフツかけてきていた。

「お前……いい加減この世界諦めたらどうだよ」

「それができりゃあこんな下手こかねえよ!!!」

今日は昼食中に「奴」が教室の扉を蹴り飛ばして時風のところまでドカドカと進んで行ってから、中庭にまで殴り飛ばしてきたことから始まった。

教室は二階。その教室から廊下を突き抜けて中庭に落ちた時風。まあ、この程度の高さはなんでもない彼なのだが、昼食はチヨココ口ネだったために、口の周りはベトベトだ。

「あーあ。まったく……（フキフキ）そーいえばお前、チヨココ口ネってどっちから食べる？」

「あ？そりゃお前、尻尾の方を干切って、頭の方からチヨココすくって付けてだろーがよ。って、そんなことはどーでもいい!!!」

「なんだよ〜。おまえオレと一緒にかよお。まあ、当然っちゃ当然

なんだけだよ」

そんな他愛もない話をしながら、蒔風が「奴」と戦おうと襟を締め、拳を構える。

その間に音無が離れて観戦し、しかも音無の周りにはNPCたちも群がって観戦する始末だ。

もはや一種の見世物、エンターテイメントとなってしまっている。

「下手こかない・・・ねえ。もしかしておまえ、来ることはできても出ることできないのか？」

「・・・・・・・・」

蒔風の推測。「奴」の沈黙。

そう、「奴」は世界に入ることとはできても出ることとはできない。

こんな世界があることなんて知らなかったため今はこうなってしまう

つたが、そもそも、「奴」の目的は主人公を殺して世界を取り込むことだ。
つまり、主人公を殺せば世界を食べるから、出る手段なんて必要ない。

しかし、この世界は主人公を殺せない世界だった。
と、いうことは、「奴」がこの世界を出るためには、蒔風に殺してもらって、この世界から締め出してもらえないのだ。

だがそれを知ってか知らずか、蒔風は「奴」を殺していない。
そもそも、殺したところでこの世界では復活してしまうので、「奴」を消すにはWORLD LINKしかない。
そして、先にも言ったように、いままで蒔風はそこまでする必要を見出していないのだ。

当然と言ったら当然だ。
何度でもリベンジできて、負けようが勝とうがどちらでもいいのだから、わざわざWORLD LINKをする必要はない。

しかし、ここにきて蒔風はやっぱりやんなくてよかったー、と安堵した。

ここでもし「奴」にWORLD LINKを放って消したら最後、次の世界に行ってまたイタチごっこだ。

しかも、ほかの世界が危険にさらされる。

ほかの世界も見てみたいな、という思いも無きにしても非ずである時風だが、世界の危険には代えられない。

ここでこのままいるのが安全策だ、という結論に達した。

「なあるほど。じゃあ俺はお前を殺さないよ。そもそも、人殺して嫌いなんだ」

「チツ…………このままじゃあよ…………俺がこの世界から…………いや…………そうか…………」

そういつて何か納得したような「奴」だが、とりあえずはこの場の戦いはしておこうと思ったのか、魔導八天を構えて来た。それに対して時風も風林火山を構えて「奴」と打ち合う。

「いつもいつも適当に流しやがって!!!!」

「だったら今日は…………本気で行こうか!!!!」

攻撃を回避する。

蒔風は獅子天麟を振ってそのまま一回転し、地面に垂直に叩きつけてから朱雀白虎釵で「奴」に向かって突きつけた。

が、その先端はまるで三又のようになっていて、その隙間に「奴」の手刀が入って簡単にひねりあげられてしまう。

そこで蒔風は朱雀白虎釵を放し、上空から落ちてきた風林火山を掴んで、真上からそのまま降り降ろていった。

それを「奴」が受けたらまた放し、今度は横から青龍刀と天地を掴んで左右から脇腹を切ろうとする。

その攻撃を「奴」は頭上に受けた風林火山を落として地面に突き刺し、ガードする。

瞬間、正面から蒔風のケンカキックが腹に向かって突き出されるが、ゴスッ！！という音がして、「奴」の腹筋に止められてしまった。

「あり？」

「バカ」

ガシャア！！というおとがして、時風の周囲を覆うようにあった十五天帝の劍群が一瞬で薙ぎ払われて、視界から消える。

「奴」はこの一瞬で魔導八天を三つと五つに分け、二振りの劍にしていた。

劍群を消し飛ばしたのは三つの方だ。

そして「奴」はそれとほとんど同時に、五つの方で時風の肩にかけて劍を振り下ろした。

丸腰の時風がそれを白刃取りで受け止めるが、勢いに押されてすでに肩まで刃か食い込んでいる。

「おおッ．．．は！！止めてやったぜ．．．．．」

「だから言ったる．．．．バカ」

そう言って「奴」はまとめられている五つを、更に三つを二つに分けた。

するとどうなるか。

蒔風が押さえているのはちょうど剣の真ん中だ。つまり、三本目。そこでこのように分離したら、当然のように……

ズシャツ！！！

「ガツ！？」

蒔風は剣を放していない。

だが、それは切り離された三本まとめの方だ。

「奴」の残りの二本まとめの剣で、蒔風の左肩から右腰にかけて切り捌いた。

蒔風の血が吹き出て、そのまで倒れる。

返り血などは一切浴びず、「奴」が取り出したハンカチで魔導八天

を拭いてからそれを消した。

こうして、今回の勝負は、「奴」の勝ちで締めくくられる。

この勝負で「奴」の7勝2敗。ちなみに、蒔風が適当に流したのを除いて、だ。

「ふん……さて、と……もしかしたらだからなあ……
もう少し計算してみっか」

そんなことを言って、ふう、と一息ついてから「奴」がその場を去る。

音無が回りを見ると、すでに他の生徒たちも自分の教室に帰って行ってしまっている。

そうしているのを見てから、音無が蒔風のいる中庭まで下りてきて、横にしゃがんで話しかけた。

「まーた負けたな。3連敗だぞ？」

「うつせえ。所詮これがオレと「奴」との実力差だよ……った
~~~~~」

口に残った血を吐き出しながら、蒔風が腹を押さえてムクリと起き  
上がる。

全身の骨をゴキゴキさせながら、調子を整えて立ち上がった。

「授業、次なんだっけ？」

「たしか、化学だったな」

「げえ~~~~…こんな目にあつてからの化学かよ……俺苦手  
なんだよなア……」

「ほら行くぞ。それとも、もう一度死んで保健室行つとくか？」

「ごめんごつむる」

そう言つて二人も教室に帰る。

授業はまだ、先生が来ていなかった。

「なあ、そういえば今は何学期だ？」

「そう言うのではないからなァ……」

「じゃあ卒業式はないのか」

「いや……あつたよ。一回だけ、な」

「??？」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

Angel Beats!! ~Today to Day~ (後書き)

そんな日常パート2です

アリス「にしても展開の無い話ですね」

そりゃそうですよ。

ちなみに、この時点で時風が来てから一週間くらい経ってます。

ア「いい加減どうにかしましょうよ……」

いや、話は見えてるんだけどね？

ここでそっち持つてくといきなりすぎて肩すかしまいたいになっちゃうのよ

ア「あ〜それは……」

あ、そういえば説明してたっけ？「魔導八天」のこと

ア「確かしてましたよ？あれは……FF7辺りではなかったですか？」

そうだっけ？忘れたなあ……

魔導八天はすべてが西洋剣です。

組み立て合体ではなく、融合合体ですね。ここは十五天帝と同じです。

で、その融合は二本以上ならどれとでもオーケー。まあ、全部名前が違っただけで形は同じですからね。

って感じですよ。うまく読者様のイメージに映し出せると言いのですが

ア「そこはあなたの表現力次第ですね」

精進いたす!!!

ア「次回、夢の話」

ではまた次回

私は天使なんかじゃないわ。生徒会長よ。

Angel Beats! ~Phenomenon in Dream~

ある話をしよう。

すでに忘れ去られ、失ってしまった世界<sup>ものがたり</sup>

それはその世界の、終末へと向かうちょっとした話だ。



夜

自室のベッドの掛け布団にくるまって、俺は頭を悩ませていた。

いや、悩ませていたのではない。苦しんでいたのだ。

一体何にだろうか？

その時はただ漠然としてわからなかった。

今までの事だろうか？今の事だろうか？今からの事だろうか？

将来への不安なのか、勉強に関しての不安なのか、友人関係の不安なのか。

まったくわからない。

なにがなんだかわからない。

今になってやっとわかることだが、この時オレが苦しんでいたのは自分の存在の在り方についてだったんだと、なんとなく思う。

「わかる」と言っておきながら「なんとなく」ってのもおかしいんだが、本当にそれくらい漠然としかしていないんだ。

その時はわからず、ただ苦しんでいた。なぜ？どうして？そもそもなんで苦しんでいたのか。思考の渦に取りつかれ、どんなにかもがいても立ち位置の変わらない海中に居るようなものだった。

もしくは、箱にがっちり詰まって身動きのできない、あの苦しきさだ。息苦しくはないが、身体が微塵も動かないあの苦しきさだ。

頭を抱えて、足をばたつかせ、布団の中でもがき苦しんだ。

もし、その時外に飛び出して、大声をあげて走りまわれたら、きつとスツキリもしたのだろうか、その時の自分にはそれを押さえるだけの理性があつたのが幸い、否、不幸だったのだろうかと、夢の中ながら俺は笑う。

そうだ、そして俺のその悶々とした苦しみは、次の日には無くなっているのだからたちが悪い。

消化などできていない。回答など得られていない。ただ、解けないから後回しにしたただけだ。

その日の夜にはまた俺は苦しみの渦に飲み込まれていく。

そうやって、俺の日常は回って行っていた。

日中に通っている学校。オレの大学は・・・まあ、ランクは中の下ぐらいだ。

この大学に来た理由は、受験の日に限って元気いっぱいになったインフルなウイルスがどうにもオレの中で暴れたらしく、ここくらいしか残ったのがなかった。

どうせなら「インフル」よか「インテル」の方が良かった。

・・・訳わかんね。

まあとにかく、そんなこともあった。

今？まあ夢の中で「今」ってのもおかしい話だが、後悔はしてないよ。

この学校は普通に楽しいし、いろんな人間がいるから見てて飽きない。

俺の友人たちのほとんどは高校時代の仲間だったし、こっちの学校でも同じように仲良くできるやつはたくさんいる。

ヤンキー、バカ、頭いい奴、イケメン、オタク（俺もその一人だったりする）、普通、ひ弱

本当にいろんな人がいた。

だがまあ、この学校で何が一番おもしろかったって、こういう人たち見んのもそうだが、こういった人たちがまったく争わないのが面白かった。

と、いうか、微妙に重なり合ってたのが面白くてしょうがなかった。

ヤンキー、と言ってもオタクな俺たちと一緒に混じってそんな話する人もいたし

バカ、って言っても何かと一緒にいるのは普通なやつだったりオタク、って言っても武道系の人達と一緒にマジになって修練してたし（俺だ）

イケメン、って言っても頭いい奴と合コン行ってたり

頭いい奴、って言ってもバカと一緒にになってバカなことしてたし

普通の奴、って言ってもヤンキーと一緒にバイクでドライブ行ってたり

ひ弱、って言ってもイケメンと一緒に酒飲みに行ったりして、愚痴を聞いてた

つまり、巡り巡って皆友達みたいな感じの学校だったんだ。  
面白かったな。たぶん、上の学校言ってもこの面白さはなかったと  
思う。上の学校にはまた別の面白さがあったんだろうけど、俺はこ  
っちで満足していた。

よく遊びにも行っただし、バカなこともやった。  
勉強も教えたり教えられたり、そんなこんなで成績も悪くない。

そう、俺の人生に、後にも今にも先にすらも、悩みや考え事なんて  
あるはずがない。

だからこそ、何に悩んでいるのかもわからず、オレの苦しみは毎晩  
続いた。

そんな日が何日続いただろうか。

俺の人生はついに転機を迎える。

それはある十月の事。

この街に来た観光客の一人を見たことだった。

オレの住んでいる街は地方都市だ。

そして、すぐ近くに観光名所の五、六箇所は存在する。

つまり、観光に来た人がホテルなどを構えるのには、もってこいの町なのだ。

彼もそうだったのだろうか。

地図を持って街を歩き、目印になるような建物を指して方向確認するその一団は、間違いなく観光客のそれだった。

その日、俺は友人と一緒に服を買いに来てて、その一団が目に入っただのは、ほとんど背景としてただけだったのだが……

だが、意識するしないではなく、視界に入った瞬間に、何か俺の中で弾けた。

何か、わかった気がした。

その瞬間の事はよく覚えている。

揺らいでいた自分の存在が、わかったような気がした。

「この世界」の自分。「他の世界」の自分。あいつ、こいつ。あれらそれら。きみ、お前、貴様、彼、私、一人称二人三人彼女オレわたしそっち主役ヒロインこれあれそいつだれ？わたしだ神？ここ、









脇役

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
その晩から  
・  
・  
・  
・  
・  
・

俺はずっと取りつかれたかのように考え続けていた。

世界の構築、物語、主要脇役主人公………

あいつのことは知らない。

だが、こうして俺が反応したなら、あいつは主人公？って奴なんだろう。

だが……これは本当のことなのか？

俺はただ単におかしくなってしまったのか？

多分、そうだろう。

自分の中に浮かびつつある推論。

だが、推論であろうとも、俺には确实だと言えるだけの自信があった。

そして、それが何より怖い。

精神異常者やトンチンカンな予言者は、自分がイカレテいるという事に気付いていない。

彼らは自信満々なのだ。持論に、何の疑いも無い。

きっと今の自分はそれと同じなのだろう。

だから早くこんなこと早く忘れてしまっるのが一番いい。

馬鹿げてる。

アホくさい。

実に現実的でない。

作品は確かに存在し、それが他世界に電波のように伝わって、それを受信した者が作者となつて作品にしているなど。

この世界を舞台にした、あの時見たあいつを主人公とした物語。他の世界でその物語を見てみると、彼がすべての中心で、自分たちは目にも止まらぬ脇役なのだ、などと言ったことは

すべて、バカげた妄想なのだ。

そもそも、そんな事知ったところで俺たちの人生がどうなる？

俺はすっかりとここにいて、実に楽しく人生を謳歌してるじゃないか。

そこに不満はないし、いまさらどうしようもない。

それにあの時見たあいつだって、もう自分の町に帰っているだろう。顔ももうぼんやりとしか覚えていない。

名前もなにも知らないのに、これ以上どうすると言っただバカバカしい。

それに本当に今の立ち位置に不満があるなら、自分から彼に会いに行つて知り合えばいいじゃないか。  
出てきたホテルはわかるから、彼の事を知るのは別に不可能ではないだろう。

だがそうしたところで、もしかしたらあいつは俺にとってはそのり合わない人間かもしれない。  
そんな人間と一緒にいてどうする？

オレは今、十分に満足している。

それに何度も言うが、そんなことしても俺は今の人生には……



・  
・

『不満はないか？そうかそうか。お前は今、自分の人生に満足しているのだな？』

そうだ、その時、そんな声が聞こえてきたんだ。  
いつものように布団の中で、苦しみと悩みが払拭され、この議題を自己完結させようとした俺の脳裏に。

『お前の友人達、あれはいい友人だな』

.....

『？おいおい、無視か？お前に語りかけてるのは幻聴じゃないですよー？』

.....だから何だ。

ああわかったよ答えてやるよ、最高の友人だ。

『お？答えてくれる？そうなのだね。君の友人はいい者ばかりだ。だが、彼らに何かあったとき、皆は彼らをないがしろにするぞ？』

.....そんなことはない。皆一丸となって.....

『この世界じゃない。そうだなア.....もし、全員で旅行に行つた時、飛行機が墜落したとする。そして全員の命が失われた』

・・・考えたくないな。

『だが、その時その事件を知る者はいるのか？いないだろうか？あの主人公だって、テレビや新聞で読みながらも、適当に流すだろうか？』

・・・そんなこと言ってどうする。

俺だってそうしてしまうだろうし、そこで「ないがしろにしやがって」とキれるのはお門違いだ。

『それだけじゃない。他の世界では、誰かの死なんざ適当に流されてしまう。考えてみる。今までお前が見てきた作品で人死にがあつたらう？そのなかで、すべての人の死が掘り下げられてきたか？』

そんなことをしては・・・

『そうだ。そんなことはない。そんなことあつたね、だ。最悪、描写すらされないかもしれないな。そんなんでいいのか？お前の仲間の死なんて、だあれも見向きもしないぞ？無視だ無視。あつたつてなかつたつて、同じようなもんなんだよ』

貴様・・・

『お？お？キレる？この声は幻聴かもしれないのに？そう言ったのはキミなのに？それに向かって切れるんですか？この声の存在を受け入れるんですか？』

・・・黙れ、お前はいつた・・・

『はい、残念。認めましたね。ではさようなら。フエ〜ドアウ〜』

.....

そこからの事は屋気楼がかかったようになって、頭の中がはっきり

してない。

普通は「もやがかかったように」だって？  
いや、そうじゃなかった。だって頭の中では沸々とした怒りがわき  
上がっていたから。

あいつらはなくてもいい存在なんかじゃない。

あいつらは決して無視されてもいいような、そんなどうでもいい奴  
らじゃない。

そんな思いに駆られて、俺は行動していた。

ホテルに聞き込み、住所を割り出し、入念に準備までしてきた。

なんでだ？どうしてこうなる？あいつらがないがしろにされていい  
はずなんかない。

なぜだ？なぜそうなる？なんでこんな扱いなんだ？

『決まってる。それは主人公がいるからさ。彼がいるから、こっちに誰も目を向けないんだ』

そうか……

なんだ、だったら簡単じゃないか。

ただ

そいつを

ケシテヤレバイイнда

そう思って名前も知らないあいつの玄関前に立った。

あれから二カ月。今晚の天気は雪だ。すでに少し降りつもって、足跡がつきそうだな……。息が白く、フードをかぶっても耳が少し痛い。

待っている間にもいろいろと考えた。自分は何をしているのか。これは犯罪だ。しかも、最悪の部類に入る。

そんなことをしていいわけがない。今すぐ辞めて、家に帰ろう。

そんな理性の聲がしていたが、脳内でわきあがっていた怒りの感情によって、すぐに、消えた。

あの時、俺が外を走り回って大声を出すのを止めていた理性など、もはやなかったのだ。

そうして待つこと一時間。

夜遅くになって、コンビニにでも出かけようとしたのか、二か月前に見たあいつが家から出てきた。

少し後をつけ、五分くらいして公園を通り抜けようとする。

その街灯の明かりであいつの顔がはつきりと見え



その瞬間、俺の頭にすべてが流れ込んできた。

この世界の情報<sup>さくひん</sup>。

他の世界でどう描かれているのか。

主人公、主要、その周辺人物。あらすじ、いきさつ。そのすべてがだ。

そしてその中に、自分と、そして何より一番重要な、自分の仲間の事など、一切なかった。

その直後、胸の中にくすぶっていた怒りに火がつき

俺はナイフを握って突進していた。

その時の俺は、やっぱりどうかしていたんだろう。  
まるで、自分のこの感情が自分のものじゃないような感じがしていたのだから。

そう、元は確かに自分だが、なんだか、養殖されたかのような気分で………

事を為し終えるまで、三秒もかからなかった。

人体の急所は十分に知り尽くしていたし、短刀を使った際の重心の乗せ方も知っていたから、一発だった。

彼はなしゅんぱんにうしろが起きたかもわからない顔をしてから地面に倒れて、その

目からすぐに光が失われた。

あっという間だった。

そして、自分の手が震えだす。手元に少しだけついた血が、妙に艶やかに光っている。

怖い怖いコワイ……。何が俺に迫ってきている気がして、ついに全身が震えてきた。

そしてその瞬間、世界が揺れたんだ。

周囲の景色、否、空間が歪んで自分に雪崩れ込んでくる。

苦しい苦しい。なんだこれは。まるですべてが自分に入ってきているみたいだ。

すべて？・・・・・・・・世界だ。

これは世界が入ってきているのだ。

ああ、ならばこの異常なほどの苦しみは納得だ。

すべての幸福と不幸を、未練と達成を、死と生を、すべてその身に受け止めようとしているのだから。

その辛さに大声を出す。

こんなに大声を出して苦しむのなんて、きっと生まれた時以来初め

てだ。

『そのとおり。君は今から生まれ変わる。さあ、あとは存分にやりたまえ』

あの声が聞こえる。

でも、答えてなどいられない。だってそうだろう？世界が入り込んでいるのに、思考がまともなわけがないじゃないか。

今のこれ？ああ、これはいいんだよ。これは夢なんだから。客観的に見た、俺の過去なんだからさ。こうして冷静なもの、わかるだろ？

5220

でもまあ、そうはいつでも自分は自分、やっぱり苦しい。

汗が次々と流れ出て、口からは涎が垂れている。目の前がチカチカと光って、耳がガンガンと鳴り響く。全身の筋肉が鈍い痛みを訴えて、中から押しつぶされているかのようだ。その苦しさに、大声は止まらない。

ああ、やばいな。この現場、見られたらいけないのに。

おいおいなに言ってるんだよ。世界丸ごとなんだぜ？そんなの気にする奴らがいるもんかよ。

それもそうか。

あれ？今のはオレの思考か？

違うよ俺だよ。

違う私だ。僕だよ。ウチだってワシじゃ自分ですオイラだ e t c .  
e t c . . . . .

自分の思考がわからない。

自分というものがなくなっていく。

俺はなんだっけ？俺は . . . だれだ？

一体何をすべきなのか . . . . .

そう思った瞬間、周囲が黒に呑みこまれた。  
この世界のすべてを取り込んだのか。

数泊してから、目の前に、大切だった仲間たちが映る。

ああ・・・これだけは守れたのかな？

そう思いながらそれを見て、俺は足掻くようにそこに手を伸ばそうとして

瞬間、その姿が碎けて消えた。

そしてそれらはオレの中の世界と共に、ただのそういう力と化した。

」  
うああああああああああああああああああああああああああああああ







「楽しくなってきた……………」

自分にはない高揚感。

そりゃそうだ、俺は「自分」じゃないんだから。

「さて……………世界を食らおうね。翼人？そんなもんはぶちのめす。そうだな。せつかくだから、取り込んだその世界もその時戻して行こうか。そうすれば……………世界はもつと良くなる」

そうだ。俺たちだけがいい目を見るんじゃない。他の奴も等しく主人公にだ。

「……………そのために、すべてを捨てる。俺はもう、一つの世界を取り込んだ。俺はオレではない……………さしあさっては、名前

を捨てよう……………」

そっだ、俺の名を……………」

俺の名は……………」



どつやら授業中に寝てしまったようだ。

にしても、なんでまだこんな授業出たんだろうね、俺は。

．．．．．おおう．．．ブルっときた．．．．．

．．．あんな夢見りや当たり前か．．．まさかあのときの夢を見ることになるうとは．．．この世界か？未練をなくせって？

バカ言うな。こんなもんは未練じゃねえよ。

確かにあんとき幻聴を聞きはしたが、あの感情は間違いなく俺のもんだ。俺の罪だ。

簡単には戻らないだろうが、世界をいくつも取り込めばいつかはできることだろう？

そうだ、取り戻さなきゃならないものだよ。

「……こんなこと考えるんざ、俺も落ち着いてきたのか？  
俺の中の世界が……オレになじみ始めている？」

「まずい……それじゃあ構築できなくなる。  
あの世界を、取り戻せなくなる。」

「早くこの世界から出ないと……いや、あれさえうまくいけば  
そんなことしなくても……」

「……次こそ必ずぶっ殺す……そうだ、これさえうまくい  
けば……」

「ん？どーしたお前。具合でも悪いか？」

「いえ、そうでは……いや、そうですね。体調がすぐれな  
いので、少し保健室に行つてきます」

「そうか。大事にな」

まあ・・・その前にこの夢で沸いてきた嫌な思いを、あのくそ野郎を一回ぶち殺して発散してくんのもありかな・・・  
死なないのは癪に障るけど。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

さて、今回は主人公も音無も出ないお話となりました。  
ちなみに、私はこの世界の事など一切考えてません。

今後、書くことは無いでしょう（多分）

彼が訊いたあの声が、彼の内なる本能からのささやきだったのか、  
ただの幻聴なのか、はたまた第三者のものだったのかはわかりませ  
ん、という事で。

誰だって、自分に理不尽を感じた。だが、それでもこの世界で生き  
ていくしかない。この話はただそれだけのものです。  
そして、その一線を踏み越えてしまった、哀れな男の話、ただそれ  
だけ。

さて、次回には主人公も音無も、ちゃんと出てきますよ。

そしてもしかしたら、次でAB!!は最後かもしれませぬ。

短いな……でも、これ以上は続けてもしょうがないしなあ……



・  
・  
・

ではまた次回

なら・・・あなた認めてくれるの？このボクを・・・

A n g e l   B e a t s ! !   〈 N e x t   D o o r 〉 ( 前 書 き )

今回でこの世界でいきなり終わりになります。  
なるべく流れは汲むようにしましたが、いきなりすぎたらすみません

Angel Beats! ~Next Door~

「にしても……」

「どうした？ 蒔風」

「いや、ちょっとした興味なただけだな？」

ある晩、寮の自室で、蒔風が音無に話題を振る。

すでに寝る準備はできていて、あとは布団をかぶればそれでいい、といった状態だ。

「お前がこの世界に残ってんのってさ、どんな未練があるからなんだ？」

「え？」

「いやだつてさ、この世界にいるのは生前に何かやり遂げられなかった人なんだろう？ でも、お前を見ててもなあ……なんだろう、そついったものが見えてこないんだよな」

そう、この世界にいる、ということは、何かしらの未練を持っているということだ。

そしてこれまでの長い時間、この世界に居続けているということは、音無にはまだ吹っ切れていない「なにか」があるということだ。

しかし、ここまで一緒にいても、蒔風は音無にそういった未練を見出すことはできなかった。

時折、何かを懐かしむような顔をしているが、それは懐かしさであつて未練ではない。

だから、聞いた。

蒔風は相手に遠慮して聞かない、なんてことはしない男だ。

聞くだけ聞いて、相手が本気で嫌がるようならやめる、それでいいじゃん、というのが蒔風のやり方。

「俺の……未練か」

「そ。お前もこんな閉塞された世界から出て、次の人生を歩んだらどうだ？ いやまあ、ここは楽しいけどさ、次つてのは絶対にない世界じゃん？」

「そう……かもな」

この世界から成仏すれば次の人生、つまりは来世がある、と言われている。

言われている、というのは実際にそうなるのかはわからないからだ。

まあ、当然か。行って戻ってきた人はいないのだから。

「でも……俺は次に来る奴らを、ちゃんと導かなきゃならないからな……」

「お前はどうなる？つてか、お前の仲間だった奴らは、お前がここに残ってることを、本当に良しとしてんのか？」

「……」

そういつて、音無が机のわきに立て掛けられている黒い筒に目を向けた。

何かの賞でももらったのだろうか？この世界にそんなものあったのだろうか？

それは何かにおいて行かれた感じを醸し出していた。

「これは……俺の卒業証書だ」

「？ ああ……確か言ってたな。一回だけ卒業式があったって。そんなときのか？」

そういつて、時風が卒業証書を手に取って開いてみる。

そこに書いてある文章は、決して大仰なものではなかった。

ただ、一生懸命頑張った、そのひたむきな姿が大切だったということが、書かれてあった。

「その時な、俺は残ってこの世界でやることを見つけたんだ。そして……」

「おい、音無……」

「俺はこの世界に残って、みんなを救い続ける。それが……俺の「何言ってたんだ音無」」

音無の言葉を時風が遮る。

まるで、それは許さない、と言わんばかりに。

「おいおいおいおい。待てよ音無。それじゃ何か？お前はいったん納得しておきながら、それでもこの世界に執着してんのか？」

「……そうだ」

「……音無。お前の仲間だつて、この世界には未練を抱えてやつてきた。多分、それは生半可なものじゃないんだろう。とんでもなく大きなものだったんだろう。多分、生きることが嫌になるくらい、生きることが苦しくなるくらい、大きなものだったはずだ。そんな彼らにとつて、また「生きる」という選択肢は、きつと辛いものだったと思う。確かにそうだ、生きるとは辛い。でも、彼らはそれを乗り越えて、それでも生きようとして、来世に向かっていったんじゃないのか？お前はその場において、一緒に行こうと言ったんじゃないのか？」

「それは……」

「その時の思いは嘘だったのか？生きることは素晴らしいという」とは、戯言だったのか？音無」

「……」

時風の言葉に、音無はあの時の光景を思い浮かべていた。

皆が順番に旅立っていき、その顔はすべて、次への希望に満ちていた。そんな、あの時のことを。

「音無……おまえの生前に、未練はないな？あるのは、この世界への執着だ……」

「……そうだ」

「やり遂げなきゃならないことがあるのか？」

「……そうだ」

「これから来るやつらが心配か？」

「……そうだ」

「誰かがまた来るのを……待っているのか？」

「……そうだ」

その答えだけで、十分だった。

時風はよいしょと音無の肩に腕を回し、そこからその体を担いでベ  
ットに投げ飛ばした。

ソオイ!!である。

「……」



「ぶわっ！？な、なにすんだ！！」

「お前さんよ、それはいけねえよ。みんな一緒に旅立って、次の世界で逢おうぜ、って言ったんだろ？お前にありがとって、言ってくれた人がいたんだろ？だったら、お前はその人のために生きなきゃならん。次に進まなきゃならん。お前の世界は、ここから始まるんだ」

「……でも……次の世界で会えるかなんて……」

「お前の親友は、そう思ってたのか？60億分の1の出会い。それを信じて、旅立たんじゃないのか？」

「お前……なんでそれ……」

蒔風の脳裏に、知らないはずの事が流れてきていた。

きつと、これはこの世界での彼らの記録、記憶、出来事だ。

その「彼ら」がどんな人間だったかなんてことに、蒔風は興味はない。かれらはもう、ここにはいない。

ただ、その最後はどんな奴らでも、満足し、そして次なる希望へと胸を躍らせていた。

それだけは分かったし、それだけで十分だった。

「いいか、音無。お前は、その待ってる人を置き去りにしているん

だぞ？次で逢おうと、その人が思わなかったわけないじゃないか。お前は行かなきゃならない。だろ？」

「お、俺は……でも……」

「だー！ーもー！ー……卒業生がいつまでも学校にいるんじゃないの！お前は、今までに不満があったか？」

「……ないさ。オレの人生は、満ち足りていたんだ」

「じゃあ、この世界に来てからはどうだった」

「それもないさ。ここでのオレの人生は……まあ、騒がしかったけど、楽しかったし、大切な人に出会えたから」

「じゃあ、次の世界には、不安はあるか？」

「……それは……」

そこで、音無の言葉が詰まる。

次の世界。そこに向かえば、自分は彼女に対するこの想いを忘れてしまっただろう。

それが、何より怖かった。

せつかくここで出会えたのに、なんで別たれなければならないのか。

ああ……生前に不満などなかった。

だが、この世界での人生で、俺は神を呪った。  
この理不尽さを呪ったんだ。

「だったら、願え、音無」

不安に駆られる音無に、蒔風が言葉をかける。  
安心しろ、大丈夫だ、と。その言葉に根拠はないが、なぜだが確かなものがある気がした。

「大丈夫だ、音無。そりゃたしかに、この世界に絶対なんてことはないさ。でもな？願いがあるなら、それは現実にできる」

「願い……」

「……もし、お前に、この世界の先に行く勇気ができたら、体育館にこい」

「……ってあ、おい、蒔風……」

「では、おやすみ」

最後に一言言って、蒔風はベットに潜ってしまった。

音無が二段ベットの梯子を登ってみると、時風はすでに眠っていた。

それを見て、音無は考える。

自分は今、この世界に居るべきなのか、先に行き、大切なあの人に会えるかどうか分からない世界を生きるのか。

青年は考える。そして、願った。あらん限りに。

「奏……オレに、お前の勇気をくれないか……」



そうして、体育館の扉を開いた。

だが、いくら探しても蒔風はいない。  
そこで音無はハッ！と気が付いた。

ずっと悩み、考え、俯いてきたから気付かなかったが、蒔風が体育館で待つと言ってから今まで、あいつが授業に出ているのを、俺は見ている。  
そして今思うと、ベッドの上の段は膨らんではいたが人の気配がなかった気がする。

つまり、まさか蒔風は……

そう思って、音無は体育館の用具倉庫の重い扉を開いた。

そこにいたのは……………

「……………何時だと思ってんだ……………このバカ……………  
まだ寝てるよ……………」

マットの上で、抱き枕にしがみついて眠っている蒔風だった。

隅の方にはごみ箱があり、そこには今まで食べた分であろうビニールゴミがあり、蒔風が寝ているすぐ横にはまだここにいるつもりだったのか、パンやらなんやらが積まれていた。

「お前……本当にいつまでもここで待つつもりだったんだな……」

蒔風を見て、苦笑する音無。  
と、そこで蒔風が眠気眼をこすって起き上がった。

そして、眼をしょぼしょぼさせて、目の前の人物を見る。

「ん………お？……音無……来たか」

「ああ………」

「こんなとこまで俺を探すとは、しっかりと決心はついたんだな？」

「ああ」

「胸を張って、自信を持って、次の世界に、希望は持ったか？」

「ああ………!!!!」





「って言っても、やるのはほとんど音無、お前だけだな」

「え？・・・ああ。まあ、そうなるな」

「えー、では・・・・・・音無結弦」

「はい」

「今までの人生に、悔いはないな？」

「ないな」

「この瞬間に、思い残すことないな？」

「ないよ」

「これからこの先に、不安や恐怖はあるか？」

「それはある」

「だが、君の胸にはそれに打ち勝つ溜めの、大切なものがある！！」

「ああ！！」

「希望は持ったか!?」

「あるさ!! 沢山ある!!!!!!」

「会いたい人は!?」

「まずは奏に!!そして日向とユイもからかってやりたいし、ゆりに振り回されんのもいいし、直井は俺がいてやんないとダメなやつだからな!!みんなに会いたい!!また、次の世界で!!!」

そこまで一気に、最後には大声で叫ぶように言った音無に、時風が祝福を込め、そして願って、音無に言葉を贈る。

「願いを胸に!!勇気を一步に!!!!さあ、向かうがいいさ!!!!この先へ!!君の願いは聞きとどけられた!!大丈夫。この翼が保証する!!!!!!」

【Angel Beats!!】 - W O

R L D   L I N K   -

「願いの先には、幸福を。これまでの人生に悔いはなく、ここにきてK楽いたという稀有な迷える魂よ!!!希望の光に見つびかれ、存分に!!!生きる苦しみをその身に受けて、生きる幸せを噛みしめてゆく!!!人よ!!!」

バサア!!!

「そう、人よ!!!ただ、幸福に生きよ!!!それだけが、君たちに与えられた、たったひとつの義務なのだから!!!」

音無が、目の前に翼を持った時風を見る。  
その姿はさながらに天使だ。

だが、彼は知っている。

天使なんていない。神もない。

たとえいたところで、自分たちに差しのべてくる手なんてないだろう。  
そうだ、いつだって人生を歩んでいくのは、他でもない自分自身なのだから………

音無の視界が、翼から噴き出してくる羽に覆われる。  
なにも見えなくなつて、周りが銀白に包まれた。

その中を、必死になつてかき分けて、音無が先へと進んでいき



.....  
蒔風がその翼で音無を優しく包み込み、そしてその中からその存在が消えたことを感じとってから、静かに涙を流した。

決別の涙ではない。

彼が勇気を以って旅立ったこと、そしてその先の幸せを想ってこそ、涙だった。

蒔風がその余韻に浸る。

が、そこにその雰囲気をぶち壊してくる男が一人、乱入してきた。

「ここにいたのか……やあっと……何とかいけそうだ……」

「奴」だ。

体育館の扉を開け、羽根の舞い散るその中を蒔風に向かって歩いてくる。

「音無はどうした」

「残念だったな。次の世界へ行ったよ……」

「……成仏か。まあいいさ。この世界さえ出れば、どうにかなるからな。この世界は諦めよう」

そういつて、「奴」が蒔風に向かって走り出す。

その手には魔導八天が握られており、思いっきり蒔風に向かって振り降ろされた。



が、振り下ろしたのは、蒔風までまだ十五メートルも離れた位置で  
だ。  
それもそのはずである。「奴」は蒔風を切ろうとしたのではなく、  
魔導八天を投げつけただけなのだから。

「!?そんなことしてもツ!!!」

そう言つて蒔風が魔導八天を避けようとする。  
そしてそれと同時に、十五天帝を出して「奴」に応戦しようと思  
つた。

今の奴は剣がない。

この気持ちのいい場面に突入してきた「奴」に対して、イラついて  
いたのだらう。

ポコポコにしてやる、という思いの蒔風が、飛んでくる魔導八天の  
延長線上から身体をずらして、「風」と「林」に手をかける。

その瞬間

「汝が主、マイカゼシユンが命じる!!!主の元へ、その手に剣を！」

走り止まって、「奴」が叫んだ。

直後、二人の剣に、変化が起きる。

蒔風の元へと飛んで行っていた魔導八天は止まり、十五天帝は蒔風の元を離れていった。

そしてその二剣は、まるで蒔風と「奴」という二人の磁場に押されあっているかのようになり、ちょうど真ん中で停滞してしまっただ。

その二つの剣が時風や「奴」の方にグラグラと揺れ、ぶつかり合うたびに巨大なエネルギーを生み出していく。  
そのエネルギーは球体状となって、まるで竜巻のように周囲の空気を巻きこんでいつていた。

「な……お前!？」

「このために、Angel Prayerをずーっといじくつてたんだ!!!」

これまで、「奴」がやっていたこと。  
それこそ、今回この現象が起こったことの原因だ。

蒔風と、「奴」

二人の持つ剣は、「天剣」と「反天剣」  
反する存在の二振りの剣。

そしてその担い手は、世界は違えど、同じ人間。  
異世界での同一人物。

だからこそできたことなのだが

「奴」はこの世界での蒔風と自分の境界線を薄めた。  
二人をある程度まで同一人物ということにしたのだ。

故に、「奴」のあの言葉に剣が今、暴発しようとしている。

蒔風に向かえばいいのか、「奴」に向かえばいいのか。

一体どちらが担い手なのか。

どちらも同じ人物だ。しかし、どちらも違う人物だ。

二人の剣には意思が宿った物もあるが、このようなバグを起こしては意味のない事だろう。

しかも、この剣はただの剣ではない。「世界四剣」と、その反剣だ。更に言うならば、そのうちの一本と、ちょうど反対に位置するモノがぶつかっているのだ。

そのエネルギーは計り知れない。

そして、その暴発が今、巨大な球体となって二人を飲み込んだ。

「な・・・ぶおッ!？」

「はははは!!うまく行った!!これで爆発すれば、世界の外まで弾き出される!!」

「きさま・・・これが・・・」

「そつだ!!安心しな、この世界は諦めた。だがな、次の世界で、俺はお前を殺す!!暴発することがわかってりゃあ、その方向性もどうにかできるからなあ!!」

「奴」が叫ぶ。次こそ終わりだと。何度も聞いたその言葉が、何故だかイヤに耳に残る。

「どづいっ・・・ウアあッ!？」

「お前」を殺すんだよ蒔風!!!消してやる・・・次の世界で、絶対に殺してやる!!!この世界で死んだ方がましだったって思わせ  
てやるからなあ!!!」

「奴」の笑い声が聞こえる。

目の前が光に包まれ、その光が光として見えなくなったところ

それが爆発して、世界から二人を弾きだした。





リリは・・・どっだ・・・

・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・  
・ ・ ・

時風が目を覚ます。

いや、正確には意識が覚醒しただけで、目はまだ開かれていない。

ただわかるのは、自分は今、ベッドの上で眠っているという事だ。

目を覚ます。

まあ当然だが天井がある。

周囲を見渡す。

この世界は……情報が流れ込んでくる。

記憶をたどる。

……だめだ、薄ぼんやりだ。世界のはざままで何かあったことは覚えているが、その内容が思い出せない。

だが、少しずつ思い出してきた。

だからまあ、すぐに記憶は戻るだろう。

とりあえず、現状を確認しよう。

今わかっていることは

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

この世界は、"noname"であるところなのだ。

Angel Beats!! ～Next Door～ (後書き)

終わりましたあ！！AB！！

アリス「にしても呆気ないですね」

もしそのように感じてしまったらすみません。  
私の力量不足です。

【Angel Beats!!】

構成：“No name” 70%

“フォルス” 20%

“輝志” 5%

“LOND” 5%

最主要人物：音無結弦

WORLD LINK：次なる世界での幸福を……

ア「今回のWORLD LINKは攻撃ではないんですね？」

いえ、あの場面で出したからああなっただけで、「奴」と戦ってい

るときに使ったら別の効果を出したと思います。

ア「その時はどうなるんですか？」

さあ・・・考えてなかったですね・・・

ア「おい!!!」

にしても今日は良かった・・・  
雪じゃなかったら土砂降りの中帰ってくるころだったよ・・・

ア「降ってましたねえ」

まあ、神奈川じゃ積もらないでグズグズの氷になりますけど。

ア「今回は番外編!!!」

と、行っても狭間でのことですけど

ア「お題としては「もし廻った世界が微妙にこんな風に違ったらいやだ!!!」です」

最初からやるので、一、二、三回に分けるかもです。

ではまた次回

時風「狭間の時間を見に行こう……!!」

番外編 ～CLANNADから龍騎まで～（前書き）

蒔風「最初に言っておこう。これは夢オチだ!!」



番外編 〽CLANNADから龍騎まで〽

こんな世界は嫌だ!!!

【くらなど】 〽演劇「鉦少女」〽

渚

「じゃあ時風さんのために今から演劇をしましょう!」

時風

「お?ありがとうございます!!なにやんの?」

渚

「待ってくださいね?今小道具を……」(ゴソゴソ……)

渚

「これをどうぞ!」

時風

「へ?金属バット?」

渚

「今からこれで、戦いを演じます!!!」

蒔風

「ちよ、どんな流れでそうなった？お前のそれ鈍じゃねえか、刃あつぶれてないんじゃないか、なんか今ギリリってなんなかつたか！？」

渚

「嘘だツツ!!!」

蒔風

「それお前達……ってか、俺の立ち位置は岡崎だろう!？」

岡崎

「マジやめて」

杏、椋、ことみ

「「「こっちみんな」「」」

春原

「僕にそんなひどい役はできないよ」

蒔風

「岡崎だけでなく女子に春原まで!?!自分以外皆敵!?!」





「奴」

「ちょ、おま、しかも目エ黒いぞ!？」

何か真つ黒なモノを背負った一条さん

「グフアアアアア・・・グットバス!!!」

蒔風

「ぎゃ-----!!!仕事のストレスか-----」

「-----!!!?????」

「奴」

「おい蒔風!!てめえ主人公なんだからどうか・・・って俺もぎゃ-----!!!」

【ハルヒちゃん】 くまさかのスピノフだったらす

ハルヒちゃん

「さあ！今日の不思議を探すわよ！！」

蒔風

「どうも、異世界人です」

キヨン

「うおーうー！！いきなり言っちゃったよこの人ーーーーー！！？」

長門

「……………この世界に行った？」

蒔風

「ん？ああ、クラナドなら……………」

長門（目がキラキラ）

「今度、詳しく」

蒔風

「長門がゲーマーだ！？つてかこつちハルヒちゃんだ！！俺の正体明かしても大丈夫なあたりギャグ漫画だな？これ！！！」

【ハルヒちゃん2】

↳浅倉違い



【羅鬼巢墮】　もし根本から違ったら〜

蒔風

「いや……この世界、名前が……」

あんちゃん

「ゴルア！……ここに来るとはいい度胸じゃけんのお！……？？」

蒔風

「いや、何かおかしいよ！？確かに、こんな「らきすた」嫌だけどさ、これは根本から間違ってるだろ！？」

モヒカン&リーゼント

「覚悟しんときいや！……！！」

蒔風（殴られてキリキリ舞い）

「スキンヘッドにモヒカン！？なんて世紀末ッ！？ブハアっ！？」



【ひびき】　　もし完璧な音楽サークルだったら

「（プオー）」

「（ドンドン）」

「（パフー）」

蒔風

「なに？どうしてこうなった？なんで変身して女子高生の制服着てんの！？」

響鬼

「君はキーボードだ！！！」

蒔風

「いや、俺できないから！！芸術関係全く駄目だから！！」

斬鬼、轟鬼、響鬼

「「おんげき!!」」

「それだけはやっちゃいけないだろ!？」

威吹鬼

「僕は……無力だ」

蒔風

「確かに管楽器はないけど……」

響鬼

「大丈夫だ威吹鬼。これを付ける」(スツ)

威吹鬼

「これは……ネコ耳!!!」



バツ、ザザツ！！！トウツ！！！！！

謎の仮面男

「はー！ー！はっはっはっは！ー！およびとあらば、即参上！ー！眠れる名探偵から、24時間で任務遂行の刑事、そのとき不思議なことが起こった男の相棒まで、なんでもござれのスーパーヒーロー！ー！！苦しみを破り、炉が如く熱いハートを持つ男！ー！ー！仮面破苦<sup>ハク</sup>御炉<sup>オロ</sup>、ここに誕生！ー！ー！」

蒔風

「参上と言って誕生した！？斬新だな！ー！ー！ってか、あんたは時系列的に封印されてんじゃないの！？」

破苦御炉

「NO。ソレ、はくおろ。ワタシ、チガウ。めたハツゲン、ダメ、ゼツタイ」

蒔風

「なんでそこだけ片言なんだよ！ー！絶対そうだ！ー！ハクオロさんだ！ー！ー！」

アルルー

「ハチミツ食べた！ー！ー！い！ー！ー！」

破苦御炉

「許さんぞ……！蜂蜜は私のものだ……！！！！！！」

蒔風

「この人蜂蜜欲しさに来ただけかクソツタレえ……！！！！」

【ターユーターマ……！！】

（まさかの最初の猿最強伝説）

蒔風（猿を迎撃中）

「さて、ハクオロさん、力を借りますよっと……！！」

パン……！！

猿

「キ？」

蒔風

「は？」（顔をペタペタ）

.....

蒔風

「仮面ついてる——————!!?」

猿

「キ——————!!!」

蒔風

「アツ!!?こら、やめツ、イタタタタタタ!!と、とれツ。取れないから!!その仮面取れないから!!顔の皮はげちゃう!!!—!や、ツ、ア——————!!!」

猿

「キキヤ————!!!」

蒔風

「おおおおおお!!?う、うひツ!!く、くすぐんなっ!!わ、脇は・・・脇腹はダメえ!!!ツてかこれ八チミツくせえ!!?破苦御炉だこれ!!?!!?」

【りゅっき】　　〜日本じゃなかったら〜

蒔風

「龍騎の世界か？」

???

「Hey, You there!」

蒔風

「ん？」

???

「Who are you? What is your name」

蒔風

「ん？あれ？英語!？」







番外編 〽CLANNADから龍騎まで〽（後書き）

大丈夫かなこんなんでも……  
苦情とか来ないかな……

アリス「大丈夫です！！だってこれは夢だから！！ほら、夢ってめぐるましく場面変わるじゃないですか」

確かにそうだけど……

私とあなた、言う立場逆じゃありません？

ア「そうですか？次回はバカテスからAir！！」

全部のネタが思いつくかが心配だ……

番外編 　　＼バカテスからAirまで＼

【バカテス】　　＼恐るべき男の嫉妬＼

蒔風

「明久！！逃げておけ！！！」

明久

「うん！！わかったよ！！！」

「奴」

「こいつ、自分の世界に恋人残してきてるんだぜ？」

Fクラス

「コロセ！！！」

蒔風

「ちよ、お前ら待てエ！！！！この野郎、嘘つくんじや……………」

明久

「裏切り者には死を！！！！！」

蒔風

「隠れてろって言ったろお！？？」

【アギト】　　くこれだからディケイドはネタにしやすい

翔一

「お……お……」

蒔風

「どうしたんですか？」

シヨウイチ

「俺を呼ぶなアアアアアあああ……!!……!!」

蒔風

「どっから来たんだあんたアアアアあああ……!!……!!」



蒔風

「さて、君に来てもたったのはほかでもない」

ユ一ノ

「な、なんだい？」

蒔風

「お前、このままじゃ出番なくなるんだぞ？」

ユ一ノ

「えー？何言ってるんだよ舜。そんなわけないじゃないかー」

蒔風

「知らぬというのはかくも幸せなことなのか……………」

ユ一ノ

「僕の地位は揺るがないんだ。だって、なのはが魔法に出会った原因は僕。つまり、ぼくがいなければのはは始まらなかつたんだよ？そんな僕の出番がなくなるなんてことはない！！！！！！」

蒔風

「ユーノ、わかった。もうわかったから！！だから泣きながら太陽に叫ばないでくれ！！！！！！」

【とある魔術の禁書目録】　　もし上条が日々の鬱憤を、いやな方法で発散させていたら

上条

「あー、今日も不幸だった……おい、インデックス。これあげるよ」

インデックス

「あ、お帰りとうま。なに？食べ物？」

上条

「この錠剤、すぐにおなかがいっぱいになるみたいだぞ？」

インデックス

「ほんと!?!もーらい!?!」(ゴクン)

上条

「H A H A H A、そしてこれを飲んでくれ」

インデックス

「あ!!これ「こーら」ってやつだね?いただきマース!」(グビ  
リ)「ゴボア!?!?!」

上条

「(にやり)ストレス発散できないわー!ー今度御坂に砂鉄バラま  
いてやるか」

蒔風

「お前絶対チゲえよ!?!?!上条じゃねえよ!?!?!」



【とある科学の超電磁砲】　　もし上条が日々の鬱憤を、以下略

御坂

「黒子……」

黒子

「なんででしょう。おね……ぎざ……!」

御坂

「どづしたのよ」

黒子

「な、な、な、なんで全身砂鉄まみれなんですの!？」

御坂（ポツと顔を赤らめながら）

「だ、だって!!こづしたほづがいつて言われたから……」

黒子

「だからってムック（黒バージョン）になんなくてもよろしいですよー!？」





クラウド（剣を振りまわして）

「ハアッ！……！」

バラッ！……ヒュンヒュンヒュン！……！！

蒔風

「ぬおおおおおおお！？ちよっ！？剣の組み合わせの接合が  
緩い！……！辺り一面串刺しにする気が、ってオウウア！？」（ジョ  
リッ！……！）

【FF7】 ～一瞬忘れた～

カダージュ

「ありがとう、兄さん」

クラウド

「ああ、……………カタール……………ジャ」

カタールジュ

「ジュ！……！」

【FF7】 ……書けなくてごめんなさい…

レノ

「俺達きつと忘れられてっぞ、っ」と

ルード

「言つな……………」

【ひぐらし】 くもし携帯電話があつたら《鬼隠し編》く

圭一（メールで連絡）

『なあ、あれってどういう事なんだ？』

魅音

『え？おはぎに入ってたのタバスコだよ？（・3・）』

圭一

『なあんだ』

解決！！！！

【ひぐらし】 くもし携帯電話ry 《綿流し編》く

圭一（メールで連r）

『なあ、今日オレと一緒にいたのって』

魅音

『詩音』

圭一

『OKわかった。大丈夫だ問題ない』

【ひぐらし】　　くもし携帯ry) 《崇殺し編》く

レナ

『圭一君、沙都子ちゃんのおじさん　しちゃったんでしょ?』

圭一

『え?』

レナ

『大丈夫、みんなで口裏合わせしとくから』

圭一

『ありがてえ!!』

【ひぐらし】　くもしりや　《暇潰し編》　く

赤坂

『雪江、元気か？』

雪江

『ええ』

赤坂

『よかった』

梨花

「つまらないのです……………」

【ひぐらし】　く彼女に防犯ブザー持たせとけばいいと思うんだく





梨花

「これさえあればこれさえあればこれさえあれば……」

蒔風

「ダメじゃねえ！？いや、でもハッピーエンドだからいいのか？うむ……」

【仮面ライダーSPIRITS】 あれってどういうエネルギーなんだ？



【Air】　　くゴール？させねえよ！？く

観鈴（晴子に抱きつこうとしている）

「もう・・・ゴールしても・・・」

晴子（そこから後退する）

「（スッ）」

観鈴

「・・・も、もう・・・ゴールしても・・・」

晴子

「（スッ）」

観鈴

「・・・く、くゴールしても・・・」

晴子

「(ズザザザザザザザザツツ!!!)」

観鈴

「ゴールさせるオオオオオオオオオオ!!!」

晴子

「あかん!!!ゴールしたらあかん!!!」

蒔風

「これは……悪夢なのか何だかわからないな……」

まだ夢は続く

番外編 くバカテスからAirまでく（後書き）

なにこれひどい

アリス「FFF、多かったですねえ」

なんか書いてたら出てきた。

なんだかクラウドはネタにしやすいぞ!?

ア「次回、ディケイドから恋姫まで」

ではまた次回

もしかしたら明日は更新できないかもしれません。  
そうだったら、活動報告に載せますので、ご了承ください。



番外編 〱ディケイドからまで恋姫〱

【ディケイド】 〱海東ソツチ疑惑〱

海東

「僕だけを見ていてくれ……」

海東

「君は大切な宝だ」

海東

「士、死ぬな……!」

蒔風

「海東ってソツチの気があるんじゃないのか?」

士

「否定できねえな」



士  
「あ、あれ！？バグった！？」

カメンラカメンラカメンライライライライライライ

士  
「のっ、のっ……！！」

カメンライド

士  
「？」

「Yokujin Ride . . . MAIKAZE！」

士  
「お、ちよ、ま！？」

パン！！！

蒔風×2

「私は一人ではない」(エージェントスミス的な感じで)

ディエンド

「僕も行くー！！」

「Kamen Ride . . . MAIKZE！」

蒔風×3

「まだまだ増えるぞお？」

「奴」

「やめてー!？」

【電王】 くきつとそれは不幸のせいだ〜

蒔風

「それ!!」

モモタロス

「おをお!!?」

良太郎

「憑依だけが解けるみたい」

蒔風

「の、ようだな」

ナオミ

「コーヒー持ってきましたよお・・・あっ!!」

蒔風・良太郎

「おおおおお！……？？」

モモタロス

「あぶねえ良太郎！！蒔風バリアー……！！」

バシヤツ……！！

蒔風

「アツウウウウウウウウウウウウウウウウウウ……！！……？？」

良太郎

「しゅ、舜……！！……！！……！！……！！」

【電王】

「もしマジでハナが良太郎のヒロインやってたら」

侑斗

「……………」

良太郎

「……………お義父さん？」

侑斗

「義父さん言っな」

【電王】　　くつまりこう言うことだよね

ハナ

「良太郎おじさー……ん」

良太郎

「見た目は完璧に幼馴染だけどね」(ル……)

デネブ

「ダメだ野上！！その関係は不埒だ！！！」

侑斗・良太郎





ユーノ

「フッフッフッフ」

ザフィーラ

「どうした？スクライア」

ユーノ

「君もこっちに……」

ザフィーラ

「いや、最終決戦で活躍したから俺は勝ちだ」

ユーノ（涙）

「（ダバァ！！）」

【なのはA・S】　　〽八神名作劇場〽

はやて

「ん~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ハッ!!」

ヴィータ

「立った!!はやてが立った————!!!!」

シグナム

「なにしてるんだ、ヴィータ」

はやて・ヴィータ

「「予行練習」」

シグナム

「頭痛い……………」

【リトルバスターズ】　　「理樹がもし理鬼だったら」

真人

「筋肉筋n」バカやってないで行くよ、真人」はい……………」

謙吾

「メー…ン!!…メー…ン!!…ドォー…ウ」うっさい」はい……………」

真人

「理樹が……………理樹が……………」

謙吾

「理樹は……あんな目しないッ!!」

蒔風

「おーおーよしよし……」

【リトルバスターズ】　　く彼なら何とかしてくれる……はずだく

恭介

「なんだお前ら、ふがないぞ?」

蒔風、真人、蒔風

「恭介!!!」

恭介

「今から俺が、元の理樹を取り戻してきてやる!!!」

バツ!!!

理樹

「仕事探せよ」

恭介

「チツクシヨオオオオオオオオオオ!!!」

蒔風

「恭介えエエエエエエエエエエ!!!」



巧

「バツ!？」

蒔風

「そら!！」

カシャン!!!バシユン!!!

ドオン!!!!!

蒔風

「………爆発しちゃった」

巧

「どーすんだよ!!!!!!!」

蒔風

「いっせ、ムジメ……」

巧

「爆発才チなんざ今更やったって・・・」

蒔風

「そつち!?!」

【Fate】　　く彼らなら何でもできるんだく

アーチャー

「アーチャーレッド!?!」

ランサー

「ランサーブルー!?!」

バーサーカー（しゃべれることは気にしちやいけない）

「バーサーカーblack!?!」

ライダー

「ライダーバイオレット!?!」



セイバー

「セイバーホワイト!!!」(リリイ的な意味で)

アーチャー

「理想におぼれぬ、我らが魂!!!」

五人

「英霊戦隊!!!」

ダンッ!!

ボースがっけえ  
五人

「サーヴァンジャー!!!!!!」

蒔風

「心なしかアーチャーがノリノリだ……」

凜

「甘いわね……」

士朗

「え？」

【Fate】　　最後の一言は作者の言葉

凜

「リンレッド……」

桜

「サクラblack!RX!!!!」

士朗

「ブルーナンデサー」（棒読み）

イリヤ

「イリヤホワイト」

慎二

「ワカメ!!!」

凜

「戦わなければ生き残れない!!!」

五人

「魔術師戦隊!!!」

バーン!

なんかヘコイ  
五人

「マスターファイブ!!!」

アーチャー

「……ちょっと待て」

凜

「なによ」

アーチャー

「いや、君はいい。桜も・・・なんだか黒であるのをいいことに何かパクっている気がするんだが、まあいいだろう。で、お前はなんだ？」

士朗

「ブルーナンデサー」

アーチャー

「それでお前はいいのか？」

士朗

「いいよ・・・もう・・・」

アーチャー

「そうか・・・で・・・まあイリヤのブルマは許可しよう。お前はホントになんだ？」

慎二

「・・・ワカメッ！！！」（ビシッ！！！！）

アーチャー

「もはや色も何もないじゃないか。ただのワカメで・・・何ができるんだ？」

慎二

「ただよってます」

アーチャー

「それで何ができる」

慎二

「だってほら・・・敵を倒せばいいってもんじゃない。破壊された町の修復。心の傷・・・そういったものを、なんとか・・・」

アーチャー

「いや、確かにそうなんだが・・・それはただよっていればできるのか？」

慎二

「いや・・・出来ないですけど・・・でもせめてこれくらいはやっておきたいかなあって」

アーチャー

「やらない方が身のためだ」

時風

「ちなみに作者が一番好きなのは・・・」  
「五星戦隊ダイレンジャー」  
「ダアアッ!!!」

【Fate】　　「いつかやりたい」「めぐ銀」「メンバー聖杯戦争」

蒔風

「そついえばオレが英霊になったらどうなるんだ？」

士朗

「さあ？ストレンジヤー変人とかじゃないのか？」

蒔風

「お前言つね」

【カフト】　　「ワームってことは「虫」のことだよな？」

天道

「ひより、買い物に行ってくれるか」

ひより（シシーラフォーム）

「わかった。（グアン）行ってくるよ」

シュバン！！！

時風

「フォームだった事ってトラウマじゃないの！？ねえ！？」

【カブト】　　くこれはディケイド版にも言えることだった　　！！く

ソウジ

「クロックアップの世界に一人か……」





一刀  
「だなあ……」

蒔風  
「このハーレム野郎」

一刀  
「いや、オレに言われても……」

星  
「ちょっとお待ちください」

蒔風  
「どうした？星」

星  
「そう言った趣旨の、ゲームではありませんかッ！……ッ！……」

蒔風

「メタ発言は——、お控えくださいッ！」

まだあるよ——（泣）

番外編 　くディケイドからまで恋姫く（後書き）

やっと次で番外終わりそうだ・・・

アリス「にしてもなんでこんなに長くやるんですか？」

知りたい？

ア「まあ、読者様的には知りたいことではないかと」

次回でなんとなくわかると思いますよ？

ア「次回？次回はブレイドからAB！！までですよくく」

ではまた次回

やばい・・・脳味噌干からびてきてるかも・・・

番外……そして、序章 始まりの世界

【ブレイド】

ケンジャキ

「イッタイ又ニガオコッテイルンダ!？」

ダディ

「ゼンインノコトヴァガボドボドニサレテア!？」

蒔風

「ボボザ ブレイドボゲバギ ジャバギボバ!？」

訳

剣崎

「一体何が起こっているんだ!？」

橘

「全員の言葉がボロボロにされてる!？」

蒔風

「ボボザ ブレイドボゲバギ ジャバギボバ!？」

睦月  
「蒔風さん、それグロンギ……！」

始

「蒔風、ここはちゃんとブレイドの世界だ」

睦月

「わかるんですか!？」

【11eyes】

蒔風

「そついえば駆の目が見えると、「11」じゃなくて「12eye  
s」になっちゃうのか？」

ゆか

「あ、そうだね。確かそういうタイトルだったもんね」

栞

「だったら、潰せばいい」

駆

「怖あ！？え？ちよつとなんでみんな尖ったもの持ってきてんの？  
ねえちよつとお！？」

美鈴

「許せ、駆。これも作品のためだ！！！」

駆

「二次創作なんだからそういうの関係な、ギャーーーーー  
ーーーー(3 T)!!!!」

【マジ恋】

蒔風

「ここは……特にないつ……!!!!」

大和

「ハアツ!?!」

蒔風

「だって……だって!!!!作者がこの世界入れたのって「蒔風ボロにしたいなあ……よし、なんか入れてボコそう」って思ったからだもん!!!!」

大和

「作者に愛はないのかああああああああああああああ!!?!」



【キバ】

蒔風

「オレに音楽の知識はないッ!!」

渡

「教えてくださいか?」

蒔風

「やってみよう」

ドオン！！！！！

蒔風

「だろ？」

渡

「なんでバイオリンが爆発したんだ！？」

【W】

男

「このメモリで暴れてやる！！」

翔太郎

「やめろ！！」



【真・恋姫】

星

「舜—————」

蒔風

「またかッ!？」

ボンッ

星(男)

「ん————?どうしたのか……………まあよい。舜!—行くぞ!—!」

蒔風

「男になった!?!なんだよこれ!?!」

.....

蒔風

「すみません!!三国志って元から男ばかりでしたッ!!!!」

【なのはStS】

ティアナ  
「ファントムブレイ.....」

蒔風

「(ピラッ)」

ティアナ

「……………」

なのは・ティアナ

「死ねえッ！！！！」

蒔風

「一件落着ッ！？」「ドォンッ！！！！」

【エンジェルビーツ】

音無

「俺の未練？」

蒔風

「そ。あ、言いにくかったらいいよ？」

音無

「うーん……」

蒔風

「ああ、彼女できなかったとかだったら俺には無理だぞ？」

音無

「え？」

蒔風

「オレにそっちの気はないから」

音無





「ハッ！！！！・・・夢か・・・」

時風が目を覚ます。

ここは世界のはざま。  
世界を超えるたびに、時風が停滞しているどこも言えぬ空間。

なんだか妙に長く変な夢から覚めたせいで、頭がまだはつきりしない。

『目が覚めましたか・・・』

「！？この声・・・まさか」

『久しぶりですね。 蒔風』

「……管理者……か」

蒔風が目を覚まし、聞こえてきた声の方向を向くと、そこには懐かしい顔があった。

5353

世界の管理者、”no Name”の神ともいえる存在  
蒔風を世界に送り出した張本人が、このはざまにやってきていた。

「なにしに来たんだ？いままで……一度も来なかったくせに」

そう、だが、それはおかしな話だった。  
今まで一度だって、彼女はここに来ていない。  
それどころか、蒔風が最初の世界に行きついてから、一度だって顔を見せていないのだから、それはそうだ。

それを聞くと、彼女は重い顔をして、蒔風に事実を率直に伝えた。

『事情が、変わったのです。「奴」が向かった世界。そこはあなたでは行きつけません』

蒔風では行きつけない。  
その事実が、どれだけ非常事態なのか、蒔風は理解出来ない男ではない。

つまり、「奴」は追えない。  
世界は食われる。

世界は護り手を失ってしまうのか。

「な………じゃあ………どうすればいいんだよ!!!!」

時風が焦る。それはそうだ。

「奴」によってどこかの世界が食われるのも嫌だが、その後に被害にあうのは、今まで彼がめぐってきた世界すべて。そっちの事の方が、より恐怖を感じる。

『大丈夫です。これから……あなたをその世界に送り出しますか』  
『う』

「よ……よかったあ………さすが管理者、だな」

胸をなでおろす時風。

そして、管理者の女性に次の世界の事を聞くこととする。

『ここでは言えません………しかし、着けばすぐに知ることです』

「はっ」

『さあ！扉は開きました！行きなさい、銀白の翼人！！！』

「お、おい……うわっ!？」

光が白く輝いて、その光に蒔風が引き込まれていく。  
視界が光に包まれて、なにも見えなくなったとき、管理者の声が耳に届いた。

『”no Name”管理者、アリスの名において……どうか、  
あなたの世界に祝福あらんことを……』

「なにを……うわああアアアアアア!？」



そう、そうして時風は世界に送り出され、あのベッドの上で寝ていたのだ。

そんな回想を振り返って、時風が目を開ける。

そうだ、そうだった。

そう言われて、俺はこの世界に来た。

そりゃ、俺一人の力じゃ無理だ。

こんなところ、来れるわけがないんだから。

記憶がこんがらがるともわかる。

だって、時間を巻き戻ってんだからなあ。

そういえば古手梨花も、こんな感じだったらしいしな。  
彼女も神の力を借りてでだし。

なるほど、だったら・・・俺は・・・



俺がやる事は・・・否

俺は・・・やれるんだ。  
やり直せる

救いなおせるんだ。

蒔風がいるのは電車の中。

今から先週した約束通り、カラオケに行って歌い尽くすつもりである。

そしてその後、街を歩き回って遊ぶのだ。  
仲間と一緒に、この世界で

「今度こそ救ってみせる」

そつづぶやいた時風を乗せ、電車は目的の駅へと進み  
時計の針は、一刻一刻とその時間へと向かって行く。

「さて……」

そう、向かう先、この世界は……

「行きますかね」

始まりの世界

「明日のオレに、顔向けできるように、お」

銀白の翼、  
蒔風舜

時を巻き戻り、  
帰還する。

世界の名は、  
「the days」

翼人は、世界を救うために、やってきた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

番外……そして、序章 始まりの世界（後書き）

彼の旅も、ついにここまで来ました。

さて……次回からまた本腰入れますか……！！

ちなみに最初のグロンギ語は

「ここはブレイドの世界じゃなかったのか!？」

です。

ここで逃げたら、顔向けできなくなっちまっただろっがよ

- 明日の、自分の面にだよ！ -

t h e d a y s 　く必ず救う／必ず食う

街を歩く一団。

どつちやらさつきまで騒いでいたテンションが尾を引いて、いまだに騒がしい。

だが、その騒がしさも街の喧騒の前には小さく、周囲には全く迷惑になっていない。

そんな彼らの一幕。

そろそろ時間は一時を回ると言ったところか。

どこかの店に入って昼食を取ろうと誰かが提案し、だったら店を覗きながら決めようと、また別の誰かの提案が採用された。



そうして、一団は進んでいく。

同じ方向に歩く人

追い抜く人、

追い抜かれる人

すれ違う人

そして

実に多くの人間が、この場にいた。

街を往く一人の男が、すれ違ってから数歩歩いて

それこそまるで当然のように懐から銃を抜き放って

当たり前のように一人の男の後頭部に銃口を向けた。

男の唇の片方がグイ、と引きあがり

引き金に指が掛けられてそれが何の躊躇も無く引かれた。

パア、ギイン！！！！！

だが、それは決して男の思い通りの音を立てなかった。発砲音とほとんど同時に、金属がぶつかった音がした。

その理由は、見る者が見れば一目瞭然だ。  
狙われた男、時風舜が、背に「獅子天麟」を出現させて、その弾丸をつかの部分で弾いていたから。

「な………?」

「このタイミングだと、思っていた」

いきなりの音に、周囲の人間は立ち止まり、食い入るようにその二人を見ている。

片や、銃を真つ直ぐに腕を伸ばしている男  
片や、背中の剣でそれを受け止めた男



「よし」

「お前まさか……時風……なのか……？」

「奴」が訊く。

この世界には、この男一人では来れないはずだ。  
自分が来れたのだって、あの時起こった魔導八天と十五天帝の暴発  
エネルギーを利用してやっとだったのだから。

本当だったらもっと前に行きたいところだったが、この時点がギリ  
ギリだった。

それなのに、この男はこうも簡単に自分の前に立ちふさがってしま  
う。

奴が聞きながらも、己の頭で推察し、その答えを導き出した。

「なるほど……管理者か」

「聞いとして自己完結すんなよ……ま、なんか最後に「アリス」とか言ってたけどな」

「ま……蒔風？なんだよこれ……なんだそれ!？」

と、蒔風と「奴」が話していると、蒔風の後ろから友人が恐る恐る聞いてきた。

彼らのその反応は当然だろう。

彼らには、今までの蒔風の旅どころか、世界の崩壊ですらも知らないのだから。

それでいきなりこの場面である。取り乱さない方がおかしい。

その四人を見て、蒔風がフウ、と息を吐き、言った。

「ここにいるのは危険だ。早く避難しろ」

「な……」

「じゃあ……お前はどうすんだよ……!」

ここは危険だからと、蒔風は仲間の避難を促すが、彼らはそこで「うん」とは頷かない。それはそうだ。この男の仲間だという人間が、彼を置いてここから逃げるなんてことはしない。

だが、蒔風はその彼らの肩を掴んで、より強い口調で言った。

「逃げるんだ。大丈夫だって。俺はこの世界を一度壊されたんだ。二度も失敗するへマは……しないさ」

「だ……だがよ……」



「うつせえ！！早く行け！！死にたくはないだろうが！！！！」

蒔風の言う事は半分以上わからなかったが、それでもこの場から逃げようとはしなかった彼らに、蒔風が怒声を浴びせる。

その言葉に、仲間の一人が反論しようとするが、別の仲間には肩を掴まれて押しとどめられる。

「……本当に大丈夫なんだな？」

「任せておけ……俺は……もう何度もこんなことしてっからよ」

その言葉を聞いて、仲間が走り出した。

蒔風が一体何を経験してきたのかわからないが、昨日のあいつとはまるで別人であるという事が、彼らにはわかった。

だから、信じた。  
いや、そうでなくても、彼らは信じただろう。

それが、この仲間というものだった。

「さて……邪魔はねえ……やるか？」

「くっそ……だが……やるからには……俺はもう負け  
られん……！」

「それはこっちも同じだったのよ……！」

ゴッ、バァン！！！！

「奴」の放った波動砲を、時風がその場から動かずに裏拳で薙ぎ払う。

その裏拳から一回転して、時風が獅子天麟を手に組み立てて「奴」に迫った。

それに対して「奴」は無手。

獅子天麟の広い側面を殴ってその軌道を変え、うまくいなして、時風に攻撃を加えていく。

時風もそれをうまく膝や脛、肘を上げるなどをして滑らせるように逸らしていき、どちらも渾身の一撃を与えるには至らない。

と、そこで時風がひときわ大きく獅子天麟を振りかぶり、「奴」の

脳天に叩きつけようとする。

だが、そのような大きなモーションでは当然のように「奴」に読まれ、両手で挟まれ、白刃取りされてしまう。

が、その攻撃はあまりにも軽すぎる。

当たり前である。

「奴」が白刃取りする頃には、時風は剣から手を放してその手に絶光を溜めこんでいたのだから。

「絶光尖！！！」

「おグッ！？」

射出さえされれば最高速度を誇るそれを、とっさに転がってかわしたのやはり流石というところだろう。

しかし、やはり完璧にはいかず、それは「奴」の脇腹を少しえぐり取っていた。

「チツ。外した!!」

「ハッ!!そんな溜めが長い攻撃、当たるわけねえだろうが!!」

そう言つて「奴」が魔導八天を構えて突っ込んでくる。

時風がそれを「風林火山」で受け止める頃には、脇腹の傷はすでに塞がり、なんでもないうようになっていた。

二人の剣が、ぶつかり合つて火花を散らす。

そうして幾合か打ち合つて、ガンツ!!と衝突させて鏝迫り合つ。

それを見、苦にがそうな顔をしてから時風は、剣を弾くように押し、互いにバックステップで距離を取った。

同時に、上空に飛びあがり、風林火山を振りまわして「奴」を斬撃の渦で包み込んだ。

「鎌鼬切演武!!春夏秋冬・花吹雪!!!!」

次々と送り出され、地上の「奴」の周りを回り出す斬撃。  
その斬撃の渦が、回転しながら狭まって行つて徐々に「奴」押しつ  
ぶそつとする。

しかし

「な!？」

「力技でえ……勝てると思つな!!!」

「奴」はまったくこの状況を問題としていなかったのだ。

地面に立つ「奴」は魔導八天をバラし、それを頭上でプロペラのよ  
うに回していた。

それによって発生した竜巻に、蒔風の花吹雪が巻き込まれ、むしろ  
「奴」のその竜巻と一体になってしまった。

「そらあ！……！」

「ッ！？質量で押しつぶす！！津波！！！」

それに対して時風は大量の斬撃によってその名の通りに押しつぶす「津波」を以って対抗する。

空中で大質量の斬撃が衝突し、周囲の建物やアスファルトに切り傷を残して爆発したかのように週に風を撒き散らす。

その突風と斬撃の余波に目を細める時風。

だが、そうしている間に、耳に何か聞こえてきた。





く。

落ちる時風。

だが、地面に落ちる前に、その双眸が一気に開かれる！！！！

「奴」が剣を突き出してきたその瞬間、時風は空中で一回転し、その剣の上に足をつける。

そしてそこを土台にしてまた一回移転、そこから「奴」の脳天に踵下ろしをクリティカルヒットさせた。

その一撃に「奴」は脳味噌を揺らされ、その体がぐらりと揺れる。だが、この一撃では「奴」はすぐに回復するだろう。

だから

「だから……このまま休ませねえ！！！！」

ゴオツ！！！

灼熱の音を立て、蒔風の手の平で獄炎弾が出来上がり、それを掌底で「奴」の腹に叩きこむ。

「ハツ！！！！」

そこから蒔風が気合を込めると、その手の平から獄炎弾が射出され、それに押されるようにして「奴」も空中に飛び出していく。

そしてズゴツ！！というおとをたててそれが膨張、「奴」を飲み込み、そして数拍置いてから大爆発を起こした。

爆炎の中に消える「奴」

どうだ？とそこに目を凝らす蒔風。

だが、この程度で終わるなら、「奴」は「奴」として時風を苦しめてなどこれない。

ボゴオツ！！！！

爆煙を見上げていた時風に、衝撃が襲いかかる。

場所は、顎。

そこに向かつて、いつの間にか潜っていた「奴」が地面からアップ  
ーカットで正確に捉えていたのだ。

更にそこから襟を掴んで頭突き。

最後に右の拳で顔面をぶん殴って、その体を弾き飛ばす。

その威力は尋常ではなかった。

殴られた時風は、まるでキャノン砲で飛んできた鉄球を受けたような衝撃を身に覚えている。

だが、実際に時風がそれに撃たれたところでダメージはないだろう。

つまり、ただえさえ頑丈な時風が、それだけのダメージを受けたという事。

それは一般人に換算したら、一体どれだけの威力となるのだろうか？

そして、それで飛ばされた時風は、大通りを端から端までノーバウンドで横断し、ビルに直撃。崩れてくるビルのすべてをその身に受け止めながら、潰されていった。

「カツ……バカみてえにデカイ火球投げてきやがって……」

そう言いながら、「奴」が時風を下敷きにしたビルに歩み寄って行

く。

そして、残り三メートルというところで、ビルの瓦礫の中から、時風が突っ込んできた。

その手に構えるのは「天」  
それを「奴」に向かって、全体重を乗せて突き刺した。

「ぐうっ！？いいタイミングでの奇襲だが・・・」

そっぴいながら、「奴」は左腕の上腕の甲に当たる部分でそれを受けて止めていた。  
当然、手甲なんてものはないので、その腕に突き刺させての、苦肉のガードだ。

だが、そのまま黙っていつ「奴」でもない。  
反対の右手の指を立て、それを時風の左肩に突き立てる。

そこは先ほど波動砲が掠めていった場所だ。

その痛みに、時風の顔も歪む。

そしてまるでその身体に突き刺さる痛みを振り払うかのように、二人が同時に足を上げ、相手の顔面に膝をブチかました。

そのお互いの攻撃に、「奴」がのけ反りながらも踏みとどまって立ち、時風がドカツ、と地面に転がってから膝立ちで構えた。

「はあ……はあ……」

「……フツ……ハツ、ハツ、ハツ、ハ……」

戦いを始めて、どれだけ立ったか。

実際にはそれほど経っていないだろうに、本人たちはかなり長く感じていた。

これだけの戦闘ですでに大きな怪我を負い、呼吸も荒くなっている。最初の怪我は再生していた「奴」も、その余裕がないのかその怪我の部分は影はゆらゆらと揺れるだけで再生していない。

「は……なんだよ……だらし……ねえぞ？えエ！？」

「こっちはなあ……あの暴発の威力をどうにかこっにかしてこっち来てんだよ……おめえと一緒にすんな」

「言い訳かよ……まあいいさ。それもまた……事実だ。ごホッ……」

時風がせき込む。

余裕そうに言っではいるものの、時風の身体もすでに疲弊しきっている。

右足は腿を突き刺されているためにうまく力をこめられず、実質左足で立っているようなもの。

さらに左肩のダメージでうまく肩が上がらなくなってきている。

全身にも、浅くではあるが広くダメージが残されていた。

戦いがこのまま長続きすれば、おそらくこっちが終わる。

いや、長続きなんてしなくても、おそらく五分かそこらで力押しさ

れてしまう。

蒔風はそう考えた。

だから、次の技で終わらせることに、即座に決めたのだ。

「終わらせる！！！！自分が主人公の世界だと・・・楽でいい！！」

「待て！！いいのか？またこの世界を飛び出していくことになるのだぞ！！！！」

「奴」の浅い脅し。

そう、この脅しはあまりにも浅い。

この男は、この世界が救えればそれでいいのだ。

そしてこの先、世界をまたいくつも回る事になっても、それを後悔などしない！！



「やんなきゃこの世界が食われんだ……そんな危険を冒してまで、この世界にいたいとは思わねえよ……!」

バサアツ!!!!!!

時風の翼が大きく開かれる。  
銀白の翼が、周囲を照らす。

「俺は……救えなかった心残りを救えるんだ!!!これで明日に顔向けできる。この世界は、救わせてもらっぞ!!!!!!」

「くっそつたれえ!!!!!!」

「奴」が波動砲を放つ。

が、それよりも早く、時風による、この世界のWORLD LIN

Kが発動した！！！！

【the days - WORLD LINK - FINAL  
ATTACK】！！

ポフッ！！！！

その発動と共に、「奴」の波動砲がそんな音を立てて消滅した。

そして、消えていくのはそれだけではない。

「な……に!?!」

「……この世界に、「マイカゼシユン」は二人もいない。一人は不純。お前は消える」

そう、これがこの世界でのWORLD LINK

複重する存在である彼らの内、この世界で正規なのは蒔風の方だ。ならば、消えるのは、当然のことながら「奴」。

この技はそう言ったものだ。

この世界は、”no Name”

純なる世界。

何者にも染められぬ世界。

ゆえに、不純の排除などは、当然なのだ。

「い……きなり……かよッ!？」

「?……はーあん。なるほど。WEAPONの方が出てくるのを待ち構えていたんだな。だが残念。それはもうすでに発動していたんだよ」

そういつて、時風が親指で自分の背中の翼を指す。

そう、今までの世界でも、WEAPONで翼人は覚醒していた。この世界では、既にそれは行われていたのだ。

そうしている間にも、「奴」の身体は粒子となって消えていつていく。

その事実にも、「奴」の言葉が焦っているようにこぼれ出てきた。

「き……きえ……るッ!？」

「ああ、消える。この世界にいるな。じゃあな」

そういつて、時風が肩を上下させて、汗をたらす。

そう、これで終わりのはずだ。

見栄は張っているが、こっちの体力はもう限界。  
身体の傷も結構重い。

だが、こうなってしまうえば勝ちのはずだ。

だが……だったらなぜ……

「この悪寒はおさまってくれないんだ？」

蒔風が消えゆく「奴」をずっと見据える。

しっかりと消えるまで安心できないという思いがあったのだろう。

が、その目に、信じられない物が映る。

「消える……へ……これで終わり……とか思ってたんじゃないだろうなア？」

笑った。

笑ったのだ。

いつもWORLD LINKをくらい、憎悪を叫ぶ「奴」が、この状況で笑ったのだ。

その事實は、あまりにも不気味。

この男は、ハツタリなどしない男だ。

何かある、と言った以上、そこには必ず何かがある。

「終わらねえよオ……まだ終わらねエ……この世界で終わらせるって決めてきたんだ……」

もはや下半身と両腕の消えた「奴」が、まるで勝利を確信したかの  
ようにニヤリと嗤う。

「このまま終わっちゃ、そろそろつまらないって思わないか？」  
マンネリ

「な!？」

「奴」が、それを始めた。

周囲が歪み、世界が揺れる。



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

捕食者、  
いまだに諦めず。



the days く必ず救う／必ず食う（後書き）

さて！！今週は最終回週間ですよ！！！

アリス「わー！ーい！！！」

今週中に終わらせましようかね・・・  
そして！！！

その先に！！！

ア「さきに！？」

そこはまだ秘密！！

ア「わあい！！でもそう言っちゃうと頃を見ると、終わらないみたいですね！？」

シヤラッ！！

そこは終わってからだー！

ア「WORLD LINK やつても終わらなそうですよ。」

そうですねエ。

まあ、一応明記しておきましょうか？

【the days】

構成：“no Name” 100%

最主要人物：時風舜

- WORLD LINK - } WEAPON } : 銀白の翼人の覚醒

- WORLD LINK - } FINAL ATTACK } : 「奴」  
の消滅

だったんですけど……

さて、どうなるー！？

どうする!？

ではまた次回

あなたがこの鍵を手にするならば、あなたは世界の理からの外れる、  
真の異端者になります

く世界がどれだけ苦痛に満ちていてもく

「奴」が笑う。

世界がゆがむ。

崩壊、接点を分解、再構築、繋ぎ合せて一つとせよ。

すでに消えかかっていた「奴」の体が徐々に戻っていき、最盛期のものへと回復していく。

「お前……いったい何を!？」

「なあに……ただ、一つに戻したただけだ」

「!？」

「奴」が笑う。  
黒い「欠片」が次々と「奴」に集まっていき、その体を元に戻して  
いていた。

まるで襟の立った黒いコートを羽織っているかのような外見へと変  
わり、顔は陰で隠れているものの、その眼光は冷静に燃え上がって  
いる。

WORLD LINKがかき消された。

「世界をめぐるって回って……俺が何もしていなかったとも思  
っていたのか？お前、とんだおめでただな」

「どづいう……ことだ！！！」

「奴」が笑う。

その「奴」に、時風が息も絶え絶えに聞き返した。  
戦闘の負傷、WORLD LINKの発動による体力消耗。

蒔風はもはや戦闘を続行できるような、万全のコンディションではない。

「世界においてきていた俺の「欠片」。それを一つにまとめ上げただけだ」

「……………なん……………」

「ま……………余計なもんも引っ張って来たみたいだけどな」

「奴」の「欠片」

それは「奴」から切り離された力の断片。

「奴」の力は元が「世界」だったと言っただけあって、その適応性は無類だ。

無機、有機にとどまらず、「記憶」などといった無実体のものまでと結合しての使用も可能である。



その「欠片」を、「奴」は今までめぐってきた世界すべてに一つずつばらまいてきた。

もちろん、そんなに強いものではない。

ただそこにあるだけのものであり、最小限の自己防衛はするものの、下手をすれば銃を持った人間だけでも消されてしまうような弱いものだ。

「まあ、一つの世界では見つかって消されちゃったし、単発でしかいなかった世界にはおいてこれなかったけどな」

そうであっても、ほぼすべての世界には、「欠片」が残っていたこととなる。

そして、「奴」はその「欠片」をすべて、自分の体に戻したのだ。  
するとどうなるか。

当然、「欠片」は本体である「奴」に戻っていく。  
だが、それだけにはとどまらない。

いかに「奴」の「欠片」も、「欠片」だけでは世界を超えることは  
できない。  
それにもかかわらず、「奴」の元には今、「欠片」が集結しつつあ  
る。

つまり

「世界ごと・・・引っ張って来たってのか・・・!?!?」

「そのとおり!!--もはやこの世界は「the days」ではない  
!!--名もなき世界よ・・・そんな世界で、どうする? 時風!!  
!!--」

そういつて、「奴」の体が完全に再生した。  
体力は万全、傷は完全修復、さらに言うなら、「欠片」を戻したこ  
とでパワーも上がっている。

その状態で、「奴」は笑う。  
これで勝ったと。

その姿に、蒔風は肩で息をし、冷や汗を垂らした。  
だが、それでもまだ勝機はある。

世界が新しくなったのなら、その世界でのWORLD LINKが  
あるはずだ。  
さらに、世界を一つにしたと言うならば、仲間たちが来てくれるか  
もしれない。

その希望を胸に、まだ立ち上がろうとする蒔風に対し、「奴」がそ  
れを見越して言った。

「WORLD LINKを発動させるか？その体力で？そもそも、  
この世界の最主要って、誰なんだ？そんなもんいるのかねエ？」

「!! くっそ……そういうことか……」

「そう!! この世界は、正規に誕生したものではない。俺が強引に無理やりにつなぎ合わせてできた世界だ。ゆえに、まだ不安定なんだよ。そんなところで、WORLD LINKが発動するわけがない!!」

「ッ……だが、まだ!!」

「仲間か? ああ、あいつらもこの世界にいるだろうなあ。一つにしたらだし。だけど、思い出してみる。要は世界で、お前が最初にこの世界で見たあの光景が起こっているようなもんなだけ? しかも今回は接合だ。モンスターのない世界にモンスターが出たかもな。特定の力でないと倒せない敵が、別の場所に現れたかもな。いや、そうじゃなかったって、この衝撃での災害にてんてこ舞いだろうさ。こっちにくる余力などないさ!!」

「奴」が、笑う。

すべて、「奴」の言うとおりだ。

この世界は、たった今できたばかりと言ってもおかしくないのだ。この状況では、WORLD LINKが発動できるわけがなかった。

さらに、仲間も来れない。

そもそも、この状況を理解している人がいるのだろうか？

蒔風はこの場にいる当事者だからわかっているものの、ほかの世界だったところではこの現状を理解することなどできないだろう。だが、大変なことが起こっているという認識のみで、まさか他世界と結合してしまったなどは露とも思わない。

多重世界である世界ならばどうにかできるのかもしれないが、その解析には時間がかかるだろうし、そのころには蒔風は倒されている。

5412

それに、わかったところでここにはこれない。

各場所で、世界の無茶な接合による余波が起こっているのだから。

「奴」の言うとおり、敵が出てきたのかもしれないし、地面が割れたり、火焰が噴き出したりもしているかもしれない。

そんな状況をどうにか解決して、そしてここまで来て助けに入るな

どといったことができる人間は、時風を含めて存在しない。出来な  
いのだ。

それがわかって、「奴」はここまでやってのけた。  
切り札中の切り札。

世界を巻き込む、禁断のジョーカー。

それを「奴」が切ったのだ。

ぬかりなど、ありはしなかった。

「この……」

「おおっと……怖い怖い……今のお前は、疲弊していて、俺は万全。万が一つにも負けはない。だが……」

ボゴツ！！！！！

「げっ、ハッツ！？」

「それでも俺は、油断しねえ。万全のお前を相手にしているつもりで、ブチのめす……！！」

「奴」が宙に浮く時風の腹に下からの拳をめり込ませ、身体がくの

字になった蒔風の後頭部を振り降ろしのチョップで殴り、大地に落とす。

その一撃で、蒔風が地面に直撃、めり込んで、それでも軸になっている左足をガクガクと揺らしながらも立ち上がった。

その目ははまだ諦めてはいないものの、この現状をどう打破すればいいのか、本人ですらわからない。

だが、そんな状態でも立ち上がった蒔風を見て、「奴」は確信した。

「やはりお前は、ここで潰す。万が一にも負けはないが、その確率を跳ね上げてくるのがお前から翼人だからな。それに・・・お前はどんな状況でも立ち上がってくる男だ。油断など、出来るはずもなかるう?」

「ツ・・・龍虎雀武ッ!!!」

上空の「奴」に向かって、蒔風が解放されていない龍虎雀武を円盤状に組み上げ、それを「奴」に向かって投げつける。

そしてその円盤は、「奴」に向かって行く途中で次々に分身し、何十枚もの円盤刃となって「奴」に向かって行った。



そのすべてが回りこんだり、潜り抜けたりして、「奴」へと向かって行っている。

だが、今の「奴」にその攻撃が効くわけもない。

バラした魔導八天のうち、四本を胸、四本を腰の位置に、自分を中心として浮かせる。

そしてそれがプロペラのように「奴」の身体を回り出し、その円盤刃をすべてはじいていった。

「奴」はそつと剣に手を添えるだけで、掴んでもいない。舞うように動き、その分身を一つ残らず掻き消していく。

その動作、実に二十秒もかからず。

そして最後の一つを弾き落としてところで、時風が追撃を仕掛ける。

時風は地面から翼で羽ばたいて上空の「奴」へと向かった。

そして地面に向かって落とされた円盤刃をすれ違いざまに左手で掴

み、「奴」に斬りかかった後にそのまま一回転して右手の武器で攻撃した。

それをスウエーでかわした「奴」だったが、ボツ！という音と共に、その襟が削ぎ消されていた。

「ほう……やはりまだ動けるか、蒔風」

蒔風から距離を取って、「奴」がそれを見て笑う。

蒔風の右手には天地陰陽を組み合わせた「風斬車」が握られていた。

左手には、円盤刃。右手には風斬車。

その両方を腕を振っての遠心力で、高速回転させて蒔風は構えている。

それに触れれば、おそらく「奴」でもその部分が刃に削られて消えることだろう。

しかし、それを見ても「奴」は油断もしなかったし、焦りもしなかった。

「行くぞ」

ただ、そう一言言った後に魔導八天を構えて時風へと飛んで行く。

魔導八天すべての重量の乗った重撃に、時風は右手の風斬車で応戦。その刃を少し角度を加えて魔導八天にぶつける事で、ガチツとかみ合わせてその動きを奪い、左の円盤刃で首をかつ切ろうとする。

だが、風斬車はうまく噛み合ったものの、その重量に右腕語と引っ張られて右肩がガクンと落ち、それでも円盤刃で斬りかかるうとしたが、こちらは上から時風の手首を掴まれて防がれてしまった。

「アがつ……」

「ふんツ!!!!」

「奴」がその掴んだ蒔風を地面に投げつけ、叩きつける。

蒔風の身体はアスファルトの地面に直撃し、その地面を波立たせてヒビを入れた。

さらに、そこからバウンドして「奴」の目の前まで戻ってきてしまい、蹴りの一撃で横へとすつとばされた。

このままではビルに衝突する。

その衝撃を青龍が獣神体で顕現して受け止めようとするが、その青龍をケルベロスが噛み砕かんと言わんばかりに組みかかってきて、連れ去って行ってしまった。

その青龍を助太刀に入ろうとして、他の者も獣神体で飛び出して行ったが、そこに「奴」のサラマンダー、迦桜羅までもが参戦し、同じように離れていってしまった。

よって、蒔風はそのまま障害物であるビルの壁に衝突し、コンクリートにしっかりとその体をめり込ませていた。

「がほっ……は……あ……」

ガコッ……という音と共に時風の身体がはがれるようにビルの壁から倒れて離れ、落ちていこうとする。

が、ぐらりとよろけたその体を、「奴」の手が時風の首を掴んで再度叩きつけ、さらなる衝撃をその体を与えた。

瓦礫が地面に落ち、パラパラと小石を落とすビルの壁に叩きつけられた時風。

その身体はすでにボロボロであるにもかかわらず、いまだに息をしている。

だが、「奴」はそれを見ても焦らない、驕らない。

そのまま時風を見続ける。

「……あ……」

「……む」

蒔風の口から、弱々しい声が漏れ出てきた。

いや、それはもはや声などではなく、何かの音としか聞こえない。

だが、おそらくその音には何らかの意味があったのだろう。

蒔風の腕が、ガクガクと、ヨロヨロと、ユルユルと振るえながら、「奴」の首元へと伸びていつていた。

それを見た「奴」が再び蒔風をビルに押しつけて叩きつける。  
ガゴン！！という音を立てて、ビルの壁が完全に崩れて室内の様子がはつきりと見えた。

もうもうと煙が上がってくる中、「奴」は握っている蒔風の首から、徐々に力が抜けていって行くのを感じた。

だが、それでも

その煙の中からさっきと同じように、蒔風の腕が「奴」の方へと伸びていった。

それを見て、「奴」は再び蒔風を叩きつける。

その首を掴んで地面へと垂直落下していき、地面に蒔風を叩きつけたのだ。

塗装されたアスファルトの地面にクレーターができて、その中心に蒔風と、その首をいまだに掴んで叩きつけ、押しつけている「奴」がいた。

蒔風の身体はすでに地面にめり込んで、もはやその姿は砂煙もあって見えなくなっている。

だが、それでも

時風の腕は、「奴」に向かって伸びていき

その額にピンっ、とデコピンをかましていた。

その攻撃に、「奴」は今までと変わらず、更に息の根を止めようと一撃をブチかました。  
クレーターがさらに窪む。

しかし、今度はさっきと違う。

時風の腕が、上にのびたまま倒れない。



それを見て、「奴」が哀れむような声を出して、蒔風に語りかけた。

「お前と俺の実力は歴然。ただ、いままで世界の援助があつたから勝ってきただけだ。見ろ、援助の無いお前は、今こうして力なく腕を伸ばすだけだ。それでどうする？ 力のないデコピンを何百発も当てて、オレに額でも割ってみるか？ できないだろう。お前に助けは来ない。翼人は、人の想いを糧に戦うもの。つまり、こうして一人のお前は……」

ブンツ……

「無力だ」

バガアツ！！！！

「奴」が蒔風の身体を放り投げ、それに向かって波動砲を撃つ。

その砲撃に蒔風の身体が宙を舞い、放物線を描いて落ちていく。

「奴」は思った。  
これで終わりだと。

蒔風がいなければ、あとはどうにでもんある連中ばかりだ。  
翼人もいたが、蒔風ほどではない。

世界がすっかり成り立つまで待ち、主人公を殺すでしょう。

そう思いながら、落ちていく蒔風を見ていた。

だが、こちらの男は違った。

まだ終わらない。

終わらないさ。

世界は、祈っても力はくれないし  
助けてといくら叫んでも手などは差し延べてくれない

いくらボロボロでも戦えと言ってくるし、死にそうになっても知ら  
ん顔だった。

でも……

俺は・・・

それでもこの世界には、救いがあると思っただ。

だって・・・

ほら、助けに来てくれたじゃないか。

そう思った時風の視界に、数人の人影が映り込む。

翼人の救い手がやってきた。



く世界がどれだけ苦痛に満ちていてもく（後書き）

「奴」による世界の結合。

しかし、仲間は来れない！？どうする時風！？

これに関してはずっとこう行こうと考えていました。

「奴」が「欠片」を引っ張り込む事で、世界ごとびったりと寄せて、一つにまとめてしまおうと。

ちなみに「奴」の言った結合できなかった世界というのは「クウガ」と「仮面ライダーSPIRITS」です。

その後の世界の構図なんかは・・・最後になりますね。

さてさて、これからどうなってしまうのか・・・

次回か、次々回で終わってしまいそうです。

さすがはトントントン拍子だな・・・

次回、救い、来たる

ではまた次回

救えるものは根こそぎ救う！



世界をめぐる、銀白の翼 〉 PLATINUM WING 〈 LINK THE

今回聞いてもらいたいBGM

「climax jump the final」

世界名が次々に述べられていったところから聞いてください。  
注文多くてすみません……。出来たらでいいので……!

しかし……。これ以上のBGMはない!と、思っています……!

今回で最終回……!

後にはエンドロールだけ……!

では、どうぞ……!

世界をめぐる、銀白の翼　↳ PLATINUM WING / LINK THE

時風が砲撃で吹き飛んでいく。

その体が地面に向かって放物線を描いていく。

このままでは地面に落ち、そのダメージは時風を終わらせるだろう。

だが、

「時風!!!」

ガシッ!!!

その落下地点に四人の男が走ってきて、その体をちょうどよくキャッチしたのだ。

時風の体は地面に落下することなく、彼の仲間によって抱え込まれていた。

「お……まえら……」

「ったく……何が大丈夫だよ。ボロボロじゃねえか」

「にげ……」

「「「「られるか!!!」」」」

「こんなけつたいな翼生やして、どんだけ強くなったかと思えばこのくらいか?」

「おまえ、もっと強かったじゃねえか」

「結局、俺がいないとダメっこなんだからなあ、こいつ」

「さて、ダメっこはなんだかおかしい。ダメ野郎だな」

「「「意義なし」」」

「時風に肩を貸し、支えてくれる仲間を見て、時風はぽかんとしていた。」

そんな体でポカンとしては意識が飛んでそのままお陀仏になってしまいうなのだが、それでも時風はそうせざるを得なかった。

しかし、すぐに考えて分かった。

そつだよ……こいつらがあの程度の言葉で「はいそうですか」と納得するような奴らじゃないってことは、わかってたじゃないか。

5435

「ずっと……見てたのか？」

「お前を見捨てて逃げる？ できんよ。そんなこと」

「それに、あんなすごい戦い、見逃したらつまんねえしな」

そういつてくれる仲間たちに、蒔風は心底感謝していた。

ありがとう

お前らがいてくれるだけで

「俺はまだ……戦える……!!……!!」

右足を引きずって、蒔風が立ち上がる。  
その体を支えるように付き添う親友。

彼は、まだ戦えるだけの気力を取り戻した。

しかし

「だが、だからと言って、貴様に俺を打倒する術はないはずだ」

ズンッ!!!

「奴」が一步、時風に向かって足を踏み出して来る。  
あまりにも重い一步。その拳動だけでも、おそらくは恐怖が噴き出して逃げてしまってもおかしくはない。

だが、逃げなかった。

一人として、彼から離れるものなど、いなかったのだ。

「終わらねえよ……こうして仲間が来てくれたんだぞ？……  
おわれねえ……まだ……」

そういつて、時風も弱々しく踏み出す。

しかし、その足はすぐに膝がぐんと屑で、その場に跪いてしまっ  
た。

「仲間？ああ、そいつらは来るかもな。お前の世界の住人だったわ  
けだし。だが……それ以上はない！！世界は、いつだってお前  
を無視してきたんだからな！！！」

「そん……なことは……ない！！そんなことはない！世界は  
いつだってクソツタレだが……救いなんてものはどこにだっ  
て……あるんだ！！！」

蒔風が叫ぶ。

その瞬間

ゴオッ！！という音とともに、蒔風の翼が光り輝く。

その翼が、力なく、それでいて悠々と

大きく開かれ、その瞬間！！



翼の内から各世界での、仲間と過ごしたあの時間。

そのワンシーンが写真をホログラムで空中に張り出されたかのように溢れ出ていって行った。

それは笑い合っている一場面。

ともに敵に立ち向かっていった一場面。

平穏な一幕、騒乱の一幕。

その画像が、映し出されていた。

5440

「な!?!」

「終わらない……終わらない……こんなところで、終わるわけがない!?!?!」

【 ・ WザツD Lザツシ ・ Wザツザー  
IIE・・・」

時風が何かを発動させる。

だが、こんな世界ではやはり無理なのか、世界名などは告げられず、当然それも効果を發揮しない。

だが

「無理か・・・いや、でも・・・来てくれる・・・世界は・・・  
・・・願いに応えてくれる！！！！WORLD LINKなんか  
なくなっただって、俺は世界と繋がってんだ！！！！」

a I N a n n o h a S t r i k k e r  
【S r r e e】  
H I M E t M U S S o u h a M 【C O O S U S h a M】  
S y o u j o l y r i c  
I K I B I B 【A K A M E N R I D E R】  
【W S h i n】  
K A M E N R I D E R  
a s i n i K o i s i n a s  
【i a K A M E N R I D E R】  
K A M E N R I D E R  
u u g g n a i n o n o S h o u  
【o o j j i M a M】  
W a t  
A D D E 【1 1 e y e s】  
T u M i t o B a t u t o T  
K O I H I M E t M U S S o u h a M 【C O O S U S h a M】  
R I D E R  
B L  
【O A B U T】  
t a y n i n i g g h t  
【t h g g h t】  
K A M E N R I D E R  
K A M E N R I D E R  
t e r s 【! K A M E N R I D E R】  
【5 5 F a t e / s】  
B u s  
【K A M E N R I D E R】  
【O - N D E R R I D E R】  
L i t t l e  
B u s  
【D E C A D E】  
o r o n n i 【A i r】  
【K A M E N R I D E R】  
D E C A D E  
N T A S Y V I I  
【h i g u r a s h i n o n a k u k】  
o a r u m a j u t u n o  
I N D E R  
【F I N A L F A】  
【O A G I T A R I D E R】  
A G I T A R I D E R  
E R R Y U K I  
【B a k a t o T e s u t o t o S h】  
A - K i s s o n m y D e i t y  
【K A M E N R I D E R】  
H I B I K I  
【I U T A W A R E R U M O N T A Y U T A M】  
【O N Z O M O N T A Y U T A M】  
u u t t  
【u u t t a k k i s u t t a K A M E N R I D E R】  
R I D E R  
【C L A N N A D D S u z u m i y a H a r u h i n o Y】  
C L A N N A D D S u z u m i y a H a r u h i n o Y

この世界に結合された世界名が次々と述べられ、蒔風の背後にその記念写真が立体映像のように立ち上がっていく。そう、まるでいつかの世界に見た、世界を超えるオーロラのように。

「ま……さか……来れるはずがない!! そんなはずが!!!!」

『甘いですね』

『その程度、われらが何とか調整した』

『まだ粗削りだけど、天変地異は抑え込んだぞ』

『われら管理者。その程度ならば軽いものよ』

『お前にはかなわずとも、自然現象くらいならば……な』

驚愕する「奴」の目の前に、五人の管理者が現れた。

” N o n a m e ”、” ライクル ”、” フォルス ”、” 輝志 ”、  
L O N D ”

五つの世界の管理者が、時風の背後、さらには宙にまで浮いてきた  
写真の牛を側に、巨大な姿で現れたのだ。

『 あなたの言う、災害などは我々が封じ込めました。そして、彼の  
仲間に、すべてを』

「 な!?!? 」

『 もう、見ているのは止めです。あなたを、ここで討ちます!!立  
ち上がりなさい!!銀白の翼人よ!!あなたはまだ、勝っていない  
でしょう!!!!!!』

五人の管理者、その代表で、アリスが蒔風に檄を送る。

それに呼応し、蒔風の翼が輝き

背後に光るそのホログラムから、人影が現れてきた!!!

「な……そんな……なんでだよ!!!」

そしてその影は映像からついにそれを超え、この場にその姿を現した。

彼らは皆、蒔風の友、仲間、盟友。

この状況で、彼を助け出そうと、離れた場所の仲間たちが集結したのだ!!!

「青年！！いや、蒔風！！助けに来た！！鍛えに鍛えた鬼の力、また強くなったよ！！！」

「蒔風！！久しぶりだな・・・封印されていた私を助けてくれたように、今度は私が、お前を助ける番だ！！！」

「大丈夫か蒔風！？僕の時もボロボロになってたけど、今度はまたひどいね・・・防御なら任せてよ。退魔の霊能、みせつけてやる！！！」

「っしやあ！！助けに来たぜ！！蒔風！！人を守る願い、叶えに来た！！！」

「蒔風さん、大丈夫ですか！？オレ、助けに来ましたよ！洗練された、アギトの力。ここで見ててください！！！」

「蒔風！！この野郎・・・てめえ、あれだけじゃ物足りねえ見てえだな・・・その幻想、ぶち殺しつくす！！！」

「舜さん！！助けに来たぜ！！負けなんてない。そんな運命、軽く打ち破ってやりましょう！！！」

「蒔風！！ここがお前の世界か？だったら、壊させるわけにはいかねえな！！！」

「俺、参上！！ったく、うるせえなあ。おう！！蒔風！！！！助け

に来てやったぜ!!!」

『行くよ!!!モモタロス!!!!』

「蒔風!!!すっかりしろ!!!おまえにはオレの夢の行く末を見てもらわなきゃならないんだからな!!!」

「助けに来たぞ!!!さあ・・・友達を傷つけた、その落とし前をつける準備は良いか?脇役王!!!!」

「天の道を往く者・・・すなわち世界も救う。お前を助ける事が、世界を救う事になる!!!」

「お前には始を助けてもらった・・・みんな助けてもらったんだ!!!ここで死んでもらったら、恩返しできない!!!」

「蒔風!!!この地獄から、助けに来たぞ!!!オレに眼には、勝利の未来しか写っていない!!!」

「おい!!!その後大丈夫・・・じゃなかったみたいだな。いきなりいなくなつて、それなりに心配したんだぜ?助けてやる!!!」

「蒔風さん!!!ひどい・・・行くぞ!!!キバット!!!!」 「オツケイ!!!」

「大丈夫かよ!!!この野郎・・・街だけじゃなく、世界まで泣かせやがるとはなあ!!!!」

「舜君!!!大丈夫!?もう安心して・・・皆来たから!!!!」



皆が、蒔風を助けようとして来てくれた。  
全員が蒔風の前に立ち、「奴」に向かって武器や拳を構える。

『立ち上がってくれ蒔風!!お前の勝利を、ここから応援している  
からな!!!!』

『ちよつと!!仮にもうちの団員になったんだから、そのまま死ぬ  
なんて、許さないわよ!!!!』

『蒔風君!!頑張つて!!私たちは何もできないけど、蒔風君の勝  
利を祈ってるよ!!!!』

『舜!!!!僕達は戦いにいけない・・・でも、君のことを忘れたこ  
とはなかった!!!!』

そして、戦う力を持たない彼らも、映像越しにはあるものの、喉  
が張り裂けんばかりに蒔風に声援を送っていた。  
その願いが彼の力になることを信じて。

「管理者からの声が聞こえた。お前が危機だと。お前にやっと、恩  
が返せる!!!!」

「舜！！助けに来たぞ！！！！おまえにはまだ翼人としての戦い方を教えてもらいたんだからな！！！！」

「大丈夫？舜！！僕らは、仲間を見捨てない。正義の味方、リトルバスターズだ！！！！」

「舜さん！！生きて！！あなた命を救ってもらった。やっと、その恩返しができるんだよ！？」

そして、最後に時風の脇には、四人の翼人が、まるで彼を守らんとするかのようについでに寄っていた。

「お前ら・・・来てくれたのか・・・」

「当たり前だろ！！」

「俺たちは世界も、そして俺たち自身も助けてもらったんだ」

「そのままいなくなっちゃって、本当に心配したんだからね！？」

「だから、やっと今一つ返す番。私たちの、恩返し！！！！」



アリスの号令に、全員が雄たけびを上げ、地を揺るがす。

それを見て「奴」がブチ切れた。  
もはや、有利は働かない。

ならばこそ、本気を出して応戦することに、なんら異常もありはしない！！！！

「現れよ！！！我が「欠片」よ……各世界に取りつき、その身に記憶を練り込ませた最高のモノよ！！！！あの者どもを……打ち倒せええええええええええ！！！！！！！！」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！







だが、そんなものは翼人の相手にはならない。  
その虫どもを蹴散らしながら、クラウドが真っ直ぐに「奴」へと向  
かって行く。

しかし

「ッ！？セフィロス！？」

山になって襲いかかってきた虫どもの後ろから、セフィロス・レプ  
リカ（以下、すべてレプリカ省略）がそれを切り崩して突っ込んで  
きた。

そのいきなりの登場にクラウドの足が一瞬止まりかける。

「止まるな！！先に行け！！」

「こいつは私たちが相手をする！！！！」



ガガン！という剣撃音とともに、そのセフィロスにシグナムとセイバーの二剣士が立ちふさがった。

それを見て、クラウドがうなづいて「奴」へと向かう。

無論、戦いはそこだけではない。

ほとんどの戦士たちは、虫どもを時風の元へと向かわせないように押しとどめている。

さらには、「奴」に向かって行く者も多く、クラウドのように固定人物の「欠片」が向かって行く場合もあった。

「フィリップ！！マキシマムだ！！」

『それならこっちのメモリだ。その方が効果的だ』

《ヒート！メタル！！》

「『メタルブランディング！！！』」

「ギイイイイイイイイイイイイ！！！！」

「よっしゃあ！！！！ドンドン行くぜ！！」

「ああ！？色替えならこっちも負けねえ！！カメ！！！行けッ！！」

「オツケイ先輩！！！！」

「ここの防衛ラインは僕らが守る！！行くよ！！みんな！！」

「おう！！この筋肉さんの力あ、見せつけるチャンスだぜ！！！！」

「む！？固有結界？ふ・・・ならばこちらも負けてられんな・・・  
凜！！派手に行くぞ！！！！」

「私は最初っから出し惜しみなんかしてないわよ！！！！」

「三十秒後に二時の方向から大群が来る！！誰か対処を！！」

「わ、わかりました！！では、愛紗さんたちでそちらにくるとい  
大群をよろしくおねがいしましゅ！！！」

「<sup>アイオン</sup>劫の目・・・すごい・・・でも、そこからどうするかは、私たち  
軍師の仕事！！！」

「だれか！！こちらの防衛線に来てくれ！！あと十五秒で来る！！」

「おっしや！！オレが！！！」

「炎だったら俺だって負けねえ！！ローゲフィンガー！！！」

「《-Strike Vent-》うおりゃああ！！！！！」

「あつちが炎・・・だったらこっちは！！！」

「おおお！！そっちも仮面ライダー！？だったら俺だって剣で！！」

「！《royal straight flash》

「「おおおおおりゃああああああ！！！！！！」

「あつちの長刀の剣士が強い!!押されているぞ!!!!」

「みんな!!加勢に……」

「まて!!危険だ!!!!」

ドゴオ!!!!

「ウィツアルネミテア!!我が半身をいまだに利用するかッ!!!!  
オオオオオオオオ!!!!」

「聖上!!!!」

「でかいもんなら、あたしも行くわ!!!!」

「そつちも電気?だったら、私も行く!!バルディツシュ!!!!」

「お姉様、お待ちになって!!!!」

「あれは!?!」

「ゆりかご!?!?そんな物まで……」

「あれの弱点はわかつとる!!みんなウチが教えたるから、行くで  
!?!!!」

「空中戦艦相手なら、やったことがあるぜ!!ユウスケ!!」

「おう!!」  
「Final Attack Ride……KU  
KU KU KUGA!!」

「こんなに強い奴らがいるのか!!楽しいなア、大和!!」

「姉さん!!いいから動いて!!!!」

「危ない!!……強さに過信したらダメだよ?少年!!」

「ほう、あなたは強そうですね!」

「鍛えてますから!次来たよお!」

「すべて・・・振りきるぜ!」

「行くぞ!」《start up》

「クロツクアップ!」

「風足ッ!」

シュカツ!!

ドオン!!!

「次だ!!!」

「ぶつちぎるぜえ!!!」

「あの戦艦を落とすに行こう!!」

「だったら・・・俺がその心臓部、貫き受けるッ!!!<sup>ゲイ!</sup>突き穿つ死翔<sup>ボルク</sup>の槍ッ!!!」

「すごい!? だったら、そのまま頭部を落とすに!!! フォワード、行くわよ!!!」

「了解!!!」

「ほーらほーら、こっちですわよ!!!」

「ギャゴオオオオオオオ!!! グゲッ!!!??」

「やーりい!!! まんまとはるちんトラップにはまったね!!!」

「次に行きますわよ!!! 大勢が相手の戦い、腕が鳴りますわ!!!」

「くっ!!! 牙王にネガ電王に幽汽!!!」

「侑斗!!! 大丈夫か!?!」

「心配すんな!!!」

「そっだ!!! あんな奴ら、あたしがぶっ潰してやっからな!!! アイ

「ゼン……!!」

「相手が三人ならもう一人行きましょう!! タツロット……!!」

「ご主人様……!!」

「安心していいよ……俺は……この程度じゃ死なない……!!」

「よし……あの蒼青の翼に続け……!! 武器の陰に入り、一気に「奴」へと突っ込む……!!」

「いや……まで……!! あれは……!!?」

「アーク……やはり出てくるか……!!」

「大丈夫だ……あの程度の巨体なら、いくらでも相手にできる……!!」



「いくぞッ!!!」

クラウドが「奴」のもとへと到達し、その剣をふるって攻撃を仕掛ける。

が、それは魔道八天の一撃で猛烈に弾かれ、体ごと後退させられる。

と、そこにアークを始末し終えた一刀が仲間数人とともに横から突っ込んできた。

無数の剣の乱舞に、「奴」がバックステップで大きく下がり、すべての攻撃をいなしていく。

一刀が出している武器はすでに恋姫たちだけのものではない。  
この場にいるすべてのものの武器が、彼の武器となって力となっていた。

「すでに絆ができて始めているというのか!？」

「なめんな!!!俺は、絆の翼だぞ!!!」

その剣の後ろから、ギルス、ベナウイ、応龍とが飛び出し、四人で

同時に攻撃を仕掛けるが、波動砲を打ち出され、さらにそれをまるでレーザーのように薙がれて弾き飛ばされる。  
一刀はそれに踏みとどまるが、ほかの三人は後退を余儀なくされ、ほかの戦闘に参加していった。

「「奴」の相手は翼人だけでだ!!ほかは・・・」

「デイベインツ!!!!バスター!!!!!!」

クラウドが翼人以外が「奴」に向かわないように言うが、それよりも早くなのはが砲撃を「奴」に放つ。

だが、その砲撃はいまだに振るわれ続けている波動砲にかき消されてしまった。

「ッ!!ダメ!?!」

「諦めなさるな!!まだまだ行くぞ!!!」

そこで星が槍「龍牙」を手に、「奴」へと向かって突っ込んで行っ

た。

なのはあはそれに一瞬驚くが、すぐに頭を切り替えて、アクセルシ  
ューターで星に当たらないように「奴」を撃っていく。

「なんてこつた……」

「蒼青の!!俺たちも行くぞ!!」

「一刀!!北郷一刀だ!!」

「俺は、クラウド・ストライフ。漆黒の翼!!」

「オツケイ、クラウドさん!!行こう!!!!」

「蒔風さん、大丈夫ですか!？」

「ああ……サンキューな、観鈴」

「あんたには観鈴を助けてもらったからな。まずは一つ目ってと  
るだ」



「レバンティン!!!」

《Schlangenform》

シグナムがレバンティンを連結刃へと形態を変えさせ、セフィロスの動くを封じにかかる。

無論、それでこいつがやられることなどない。

だが、そうして動きが止まれば、大技で狙い撃つことも可能!!

「エクスツ!!!カリバー!!!!ツツ!!!!!!」

連結刃に包囲され、その攻撃を弾き飛ばしていくセフィロスに、セイバーの宝具が放たれた。

しかし、相手は翼人の翼を片翼持っていた男。

なんとということが、エクスカリバーの攻撃を、その長刀の一薙ぎで吹き飛ばしてしまったのだ。

武器が弾かれ、シグナムとセイバーがよろける。

そこからもう一度振りかぶって今度こそ一人に引導を渡そうとする  
セフィロス。

だが、そこに

「そちらも長刀か。ならば、我が剣筋、受けてみよ！！秘剣！！！」

「!?!」

「燕返しッ！！！」

アサシンによる三筋の同時斬撃「燕返し」をその身に放たれ、セフィロスの身体が三つに斬られる。  
それを見て、満足そうにつぶやくアサシンに、消えゆきながらも長刀を振るいに来るセフィロスだが、程なくしてその体が消滅した。

「……一つは防ぐか……だが、我が太刀筋、一つにあらず。  
出来れば本人と相見えたかあいまみったものよ」

だが、彼が消えてもまだ敵はいる。  
しかし、その戦闘は終わりそうにあった。

ドオン！！！！

美琴のレールガンがウィツアルネミテアの大きな胸板を貫き、更にその四肢をフェイトが切断。

最後にハクオロ・ウィツアルネミテアがその頭部をひしゃげてひねりつぶす。

「……………ウィツアルネミテア、やられたか……………」

「後はガラクタや！！跡形もなく吹き飛ばすだけや！！！」

「俺が行く！！全員、力を貸せ！！行くぞ海東！！！」

「任せたまえ！！」「Kamen Ride・・・J！！」

「Final Foam Ride・・・DE DE DE  
CADE！！」

ディエンドが「ジャンボフォーメーションを召喚し、ディケイドが一人で自身のファイナルフォームライドを発動させ、ジャンボディケイドライダーへと変形する。

そして、それに取りついて、「がディケイドジャンボフォーメーションへと姿を変えた。

「Final Kamen Attack Form Ride  
・・・DE DE DE DECADE！！」

「ハアッ！！」「」「」「」「」「」





「ゆりかご、沈黙……」

「行くぞ！！アイゼン、フルドライブ！！！！」

《1、2、3》「ライダーキック！！」《R i d e r K i c k》

「千歳の儂、小烏丸天国！八咫やたの黒鳥こくつの風切り羽根  
生ようす万象を斬れ！」  
森羅けしに化

ダークライダーを相手にしているヴィータ、ガタツク、草壁美鈴が、その「欠片」を潰し、蹴り、切り捨てて消し去っていく。

最終的にはリュウガ、オーガ、牙王、ネガ電王、幽汽、更にはアルティメットドーパントまでもが参戦してきたが、こっちも彼ら三人だけ、というわけではない。

牙王をヴィータが、オーガを美鈴が、幽汽をガタツク、リュウガを春蘭が、ネガ電王を百代が撃破し、アルティメットドーパントはラッサーが宝具にて突き貫いて消滅させた。

「ライダー勢……終わったか……」

「なにをぶつぶつと……!」

「言っている!……!」

各場所で「欠片」が撃破されていくのを感じとりながら、「奴」がクラウドと一刀を相手にしていく。

更にはその隙を埋めるように星となのはが攻撃を入れているのだが、

まったく攻撃が当たらない。  
いや、当たっていても、効いている気がしないのだ。

「奴」の戦力たる「欠片」はすでに潰しきっている。  
アントロードや魔化魍はもはや数も少ない。まだ湧いては来るもの  
の、あんなものが使えるとも思えない。

なのに

この男はまだ破れない!!!

「全員!!!下がって!!!スターライトオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」  
「オオオ!!!!!!ブレイカアアアアアアアアアア!!!!!!」

ゴオウ!!!となのはの集束砲撃が「奴」へと迫る。  
しかし、「奴」は再びその手から波動砲を撃ち放ち、なのはの砲撃  
を一回二回と薙いで方向を逸らし、周囲を爆散させてそれが自身に  
当たらないように処置する。



両手という脅威。  
片手でなのはの集束砲撃スターライトブレイカーを弾いた砲撃が、  
二本分。

その極太の波動砲が、アントロードや魔化魍、そして主人公たちを  
巻き込んで蒔風の元へと真っ直ぐに飛んで行った！！！！

「奴」に向かったクラウド、一刀は、「奴」が発射した反動によつ  
て起こった爆音で弾き飛ばされ、その波動砲の道筋にいた物は命中  
するよりも早く、砲撃の波動による先行してきた余波で残らず吹き  
飛んだ。

「うおおおおおおお！？」

「ウアッ！？」

「ぐあっ……」

「ッッ!! 時風ッ!!!!」

波動砲が伸びていく。

だが

「打ち消してやるっ!!!! ハアッ!!!!」

「その幻想、ブチ壊してやる!!!!」

ゴゴガンッ!!!!!!!!

打ち響く、衝突音。

泉戸裕理と、上条当麻による能力打ち消しコンビが、その波動砲にその身と右手をさらけ出し

蒔風への到達を拒んでいた!!!

「僕が先に!!!その後を頼む!!!」

「任しとけ!!!」

ダンッ!!!

その波動砲に、裕理がさらに一步踏み込み、全身を使って受け止めていく。

だが、退魔の霊能と言っても限界はある。





そして、上条がその残った砲撃を後ろに流し、それを純白の翼が受け止める！！！

「ハアッ！！！」

観鈴がその翼を以って砲撃の先にソツと触れ、その方向をいなして変える。

凶悪な砲撃は空へと伸びていき、そして消えていった。

「バカ・・・な・・・」

「バカなじゃねえ！！！しっかり見てろ！！！これで・・・・・・終  
わらせるからよ！！！！！！！」





WORLD LINKは答えない。

それに、「奴」はまだ笑えた。  
まだ勝てる。

だが、その想いは間違いだ。

「WORLD LINKは答えない!!!この世界に、まだ主人公  
はいない!!!」

「バカ野郎・・・そんなわけねえだろう」

「奴」の言葉に、時風が答える。  
この世界はすでにできていると。

「まったく・・・俺もお前も何を勘違いしていたのか・・・」  
の世界は、とつくに始まってたんだよ」

ゴオッ！！！！！

【ザ界をザシッ、ザツぐる・・・】 - WザシッLD LINザッ  
- 〓WEザザン〓

「俺が帰って来てからじゃない。お前が世界をくつつけてからじゃない。もっともっと、最初から始まっていたんだ！！！！」

バサア！！！！！！

【ザ界をザツぐる、銀ザシユツの翼】 - WORザザザンK -  
WEPザン〓！！！！

「俺の物語は、もうとっくに始まっていた!! さあ!! これが!!  
!! オレの世界だ!!」

N!!

CONGRATULATION

【世界をめぐる、銀白の翼・PLATINUM WING、LINK THE WORLD】

all WEAPON!!  
- WORLD LINK - Fin

ゴォッ!!!!

その発動と共に、クラウド、観鈴、理樹、一刀の翼が輝き、時風の背へと粒子となって移動して行った。

「これが俺の世界だ。最初からそうだった。そして、これからも！  
！！十五天帝！！！！」

時風の手に、十五天帝がすべて集結し、組み上げられて握られる。

そしてその剣も輝きだし、エネルギーのチャージが始まった！！！！！！

【RELOAD、JET-BLACK！RELOAD、PURE  
WHITE！RELOAD、LIGHT GREEN！RELOA  
D、SKY BLUE！ALL WINGS Full Char  
ge！！！！】

WORLD LINKの声に呼応して、十五天帝に皆の翼が移動し











この世界は、大丈夫だ。

なにはともあれ

長い長い

銀白の翼人の

世界をめぐるゆく戦いは

ひとまずここで終結した！！！！！

もう少しだけ to be continued！！！！！！



ア・時「おおおおお！……！」

ですが、すべては後日談の後に

とりあえず自分が訊きたいのは……

このまま続けてもいいのかどうかです。

新しくページを作るか

それとも、このまま章管理で第二章に行ってしまうか！……！

なあ、どうするー！？

皆さまの意見がすべてです！……！

どうって言うしてくれろ！……！



でも・・・見たくないですか？

500部とか!!!

蒔「お前がやりたいだけじゃん!!!」

ではまた次回!!!

今回は・・・結構すぐに上げたいです!!!

もしかしたら・・・明日のこの時間まで待たなくていいかも!?

更新できそうになったら、活動報告で!!

武闘鬼人でした!!!

エピローグ ～Last Prologue～ (前書き)

エンドロールBGMは、ひぐらしのなく頃に解 罪滅し編ED 「Z・E・R・O」です。  
わからない方はニコニコで

ひぐらしのなく頃にの罪滅し編(原作)のEDに使われていたBGM  
と検索すれば出てきます。

## エピローグ ～Last Prologue～

一つになった世界の、曖昧だったり、あつたらまずい部分はすべて管理者が整えてくれた。

たとえば、各世界にあった「作品」の原典はまとめて無くなった。つまり、「あ！」の誰々だ！」という事にはならない。

まるで、最初からそういう世界だったかのように調節されていた。むしろ、もともとが違う世界であることは承知している。

また、世界観が著しく異なる世界では、その土地ごとでの基本的な知識はすべて頭に流れ込まされている。

例：うたわれるもの、ひぐらしのなく頃に、恋姫無双のキャラ達には、最新技術に関するものだったりの一般教養が流れた。

また、この機に世界を守る機関として、アリスを後見人に「EAR TH」が設立され、時風はその大きなビルに、現在くぎ付け状態

らしい。

【CLANNAD】

岡崎朋也

学校を卒業後、一年遅れて卒業した渚と結婚。娘もでき、幸せな家庭で生きている。

岡崎渚

学校をさらに二年留年してしまうも、無事卒業。岡崎と結婚し、娘「岡崎汐」をもつける。

現在、彼らは友人とも仲良く、幸せな生活を送っている。

【仮面ライダークウガ】

この世界では「奴」の「欠片」が破壊され、この世界とは結合できなかったが、ディケイドの世界が繋がったことによって「ライダーの世界」として、世界の壁が緩くなり、わずかだが繋がりはできた。道を通ずるのも、そうは遠くないだろう。

五代雄介：今も世界を旅する放浪人。いつか、この世界にも来るのだろうか？

一条薫：原作通り、長野県警でいまも凶悪犯罪を追っている。五代とはこまめに連絡を取り合っているそうだ。

### 【涼宮ハルヒの憂鬱】

世界が一つになっても、ハルヒはSOS団の隠しステータスには気づいておらず、今日も不思議を探しまわっている。彼女の力は弱まったが、いまだに存在はし、なんの拍子でなにが出てくるかわからない。

だが、そんなんでも楽しいと、主人公は語っていた。

涼宮ハルヒ：「EARTH」登録（強引に）。自分の力にも、SO

S団メンバーの素性も知らない。最近、不思議を求めて時風の元にちよくちよく来るようだ。

朝比奈みくる：「EARTH」登録。今でもハルヒに振り回される日々。未来人であることは隠し、着せ替え人形とされる彼女の悲鳴が今日も聞こえる。

長門有希：「EARTH」登録。宇宙人であることはハルヒに知られていない。知られると何が起こるかわからない、というのは彼女の談。時折、時空管理局のメンテナンスに呼ばれるらしい。

古泉一樹：「EARTH」登録。自身が超能力者であることを【以下略】。何かあると頼る選択肢に、時風たちも含まれ始めたらしい。

キョン：「EARTH」登録（ハルヒが無理やり）。結局、世界がどうなってもハルヒは変わらない。彼の愉快と苦勞は、まだまだ終わらないだろう。

【らきすた】

この世界は変わらない。  
何にも変わらない。

今まで通り、なにも変わらない。

ただ、時風の元に遊びに行った時、ハルヒとこなたが嫌に意気投合したようだ。

泉こなた、柊つかさ、柊かがみ、高良みゆき：そろそろ高校を卒業するらしい。ただ、卒業後に与えられた職業選択に、時風の立ちあげた新組織の名前があったようだ。

### 【仮面ライダー響鬼】

魔化魍討伐組織「猛士」は「EARTH」と協力体制をとり、そのネットワークを広げた。

魔化魍を作り出す童子たちを、今日も鬼たちが追って行く。

なお、彼ら鬼は「EARTH」にも登録され、招集があれば駆けつ

けてくれるという事になった。

響鬼：長く連絡を取っていなかった少年と和解し、今は一人の弟子を育てている。しかし、その肉体にまだ衰えは見えぬ、今後も現役を貫いていくのだろう。

威吹鬼、轟鬼：響鬼と共に、関東支部を代表する鬼になった彼らは、今日も魔化魍退治に汗を流している。

【うたわれるもの】

トウスクールは辺境ながらも自然に富み、裕福な国として存在している。

最近ではいろいろな機材が入ってきて民衆たちは頭に流れてきた知識をフルに活用し、それを使おうとしているが……

おそろく、この国は今までどおりに、自然のままにあるのだろう。  
オウルオ  
白き皇、ハクオロの元で



ハクオロ：今でもトウスクルの皇<sup>オウルオ</sup>として、日々政務をこなしているが、たまに逃げ出しているらしい。理想の国王として、様々な指導者から相談を受けることもあるそうだ。

エルルウ：宮殿の薬師。ハクオロの周辺の世話を、あくせくと続けている。キレると怖いのはいまだ変わらず。

アルルウ：お姉ちゃんを困らせて楽しむ日々。ただ最近は蒔風のところ遊びに行つて、いろんな人と友達になつてゐるらしい。

## 【タユタマ】

太転依たちは世界がこうなつても、うまく生きていけてるらしい。ただ、妖怪、ということで、「猛士」からの注意は多いらしいが。

しかし、彼らならしっかりと共存できるだろう。

泉戸裕理：その能力を人のために使いたいと「EARTH」に加盟。いつもは自宅の神社で太転依騒ぎの後始末に追われて奔走している。

泉戸ましる：今日も夫の裕理を支えて、彼女もあつちこつちへと走りまわっている。良妻賢母。「EARTH」登録。

【仮面ライダー龍騎】

ミラーワールドはまだ閉じていないが、モンスターは出てこない。ただ、このだれが悪用するかわからない状況なので、油断はできないらしい。

城戸真司：龍騎として「EARTH」登録。いまだに「OREジャーナル」での下働き。いい意味でバカはいまだに健在。「EARTH」の宿舎に、住居を移している。

秋山連：ナイトとして「EARTH」登録。友人である城戸に誘われて、しょっちゅう引きずりまわされている。だが、そんな彼の表情はなんだかすっきりしていた。そんな彼も「EARTH」移住。

北岡秀一：ゾルダとして「EARTH」登録。現在も最終兵器弁護士を襲進中。現在、浅倉の裁判を受け持つ（無罪にする気なし。無期懲役狙い）

【バカとテストと召喚獣】

今でも試験召喚戦争システムは継続中。

このシステムは、蒔風が学校を作った時に参考してみたいと、たまに見に行くそうだ。

吉井明久：今日も友人とバカやって捕まってるまた馬鹿をやっている。将来は「EARTH」に入りたいと言っているらしい。

坂本雄二：同上（笑）。最近はガールフレンドからの逃走先に蒔風の元があるらしいが、それも読まれているのはお約束

姫路瑞樹、島田美波：明久にアタックを仕掛けているものの、まったく気付いてもらえない。頑張れ。

## 【仮面ライダーアギト】

「闇の力」はまったく音沙汰もない。  
アンノウンは出てこないため、この世界からの脅威はなさそうである。

津上翔一：「EARTH」登録、移住。現在は「EARTH」内の食堂を経営しているらしい。レストランAGIT は平常運転。城戸とは仲がいいらしい。

芦原涼：「EARTH」登録、移住。もともと一人暮らしだったため、楽なことちに引越したらしい。高校時代にやっていた水泳のインストラクターや、バイクのメンテナンスも最近では受け持っているらしい。

氷川誠：警視庁捜査一課に戻っている。だが、何かあった時はすぐに駆けつけて来てくれるそうだ。G3-Xの装着員として「EARTH」登録。

## 【とある魔術の禁書目録】

学園都市は普通にある。

今日もどこかで、魔術と科学は交差している。

上条当麻：「EARTH」登録。学園都市に在住。基本的には事なかれだが、何かあったとき、彼はすぐに駆けつけて来てくれるだろう。

インデックス：ネセサリウス必要悪の教会が「EARTH」と協力体制に入ったので、自動的に登録。彼女はいつも食い気ばかり。

### 【とある科学の超電磁砲】

今までと変わらない。

【禁書目録】と同じ世界なので、現状は同じ。

御坂美琴：学園都市が「EARTH」と繋がりをもってはいるが、それを抜いても個人的に「EARTH」登録。電撃姫は、伊達じゃない。

白井黒子：憧れのお姉様についていって「EARTH」登録。しかし、美琴が動かないと協力する気はないようだ（笑）

【FINAL FANTASY VII】

この世界は大きく変わり、平和な世界とまじりあった。  
と、いうことでもしかしたら前よりもカオス（笑）としているかもしれない。

なお、神羅カンパニーは「EARTH」傘下に入り、世界に貢献していくそうだ。

クラウド・ストライフ：「EARTH」登録。漆黒の翼人として、「EARTH」のNO.2の座につく。が、時風とは対等の立場。二人目のリーダー格と言った感じ。宅配業はいまだに続けているよ  
うだ。

ティファ・ロックハート：クラウドについて「EARTH」登録。なお、ほかのメンバーは登録していない。だが、クラウドから呼びかけがあればすぐにでも駆けつけて来てくれるそうだ。

【ひぐらしのなく頃に】

時代が丸々二十年近く進み、携帯やパソコンに慣れていく日々。だが、基礎知識は与えられたので驚くことはなかったそうだ。

なお、変化が見られたのは雛見沢村のみで、他のどこの町がこの世界だったかどうかはわからない。

雛見沢症候群は、悟史の回復で特效薬への開発が飛躍的に進み、ほぼ完全に根絶された。

前原圭一：「EARTH」登録。魅音が卒業し、二代目部長に。将来は魅音と同じ学校に行き、またそこで部活を始めたいのだそうだ。

竜宮レナ：「EARTH」登録。圭一と共に、今度は受験組。同じく魅音の学校を狙っているらしい。

北条沙都子、古手梨花、古手羽入：「EARTH」登録。年少組三人は、いまだに気楽に山を走り回っている。蒔風のところに遊びに来て、リトルバスターズたちと仲良くなったそうだ。

園崎魅音：「EARTH」登録。蒔風が開いた高校に入学（半分コネで）。そこで新たな友人と共に楽しく後輩が来るのを待っている。

園崎詩音、北条悟史：悟史は永い眠りから覚めてあっという間に回復。一年遅れてしまったため、二人で一緒に、魅音の行った学校への受験勉強をしているらしい。

### 【仮面ライダーSPIRITS】

この世界は単発だったために「欠片」はなく、世界ともつながらなかった。

だが、彼らの物語は、いまだに続いているのだろう。

### 【仮面ライダーディケイド】



この世界は少々特殊で、この世界にやってきたのは光写真館の面々のみ。

他の、俗に言う「リイマジの世界」は、次元世界の一つとして存在している。

門矢士：「EARTH」登録。いまだにいろいろとぶらついているらしい。写真の腕は変わらず。今はいろいろな世界だった場所を回っているらしい。

光夏海：「EARTH」登録。最近手に入れた「仮面ライダーキバーラ」の力でいつも暴走する土のストッパーとして、更に力を発揮している。笑いのつばは最終兵器。

小野寺ユウスケ：「EARTH」登録。土の旅に同行。彼もまた、世界を見て回ることに興味津々なようだ。

海東大樹：「EARTH」登録、移住。と、いつでもほとんど写真館にいる。土達の旅についていって、その先々でお宝をいただいている。そして、「EARTH」の部屋に送って時風に没収されている。

【仮面ライダー電王】

時間の守護組織として、ターミナル自体が「EARTH」の管理下に入った。

しかし、現状は今までと変わらず。自由気ままに、彼らも旅を続けている。

野上良太郎：「EARTH」登録。いまだに身体は元に戻らない。時間関係の事件があれば、イマジンを連れて今日も走りまわっていく。

桜井侑斗：「EARTH」登録、移住。なにかとあるとゼロライナーで気ままににかけてしまうので、彼の部屋は基本的に空。でも綺麗なのはデネブのおかげ。

イマジンズ：「EARTH」登録。彼らは今までと変わらず、契約者と共に自由に騒ぎまくっている。最近ではいろいろな人に取りついて遊んでいるらしい。

【リトルバスターズ】

メンバー全員が「EARTH」登録。

恭介は就職先に「EARTH」を選択したらしい。  
他のメンバーはどうするかはわからないが。

難見沢部活メンバーと息が合うらしい。

直枝理樹：「EARTH」登録。薄緑の翼人として、「EARTH」  
随一の防御力を誇る。彼の将来は、おそらくここに就職すること  
なるだろう。

### 【仮面ライダーファイズ】

オルフェノクの死はなくなったものの、その活動はゼロにはならな  
い。  
しかし、スマートブレインはないので、悪に走る人はそうそういな  
い。

乾巧：「EARTH」登録。啓太郎のクリーニング店でいまだに居

候。真理とケンカすると「EARTH」隊舎に止まりに来る事もあ  
るようだ。

海堂直也：「EARTH」登録、移住。住みやすい家を見つけて、  
今は快適に過ごしているようだ。基本自分勝手だが、面倒見がいい  
のでたまに訓練に参加したりなんかしてるらしい。

三原修二：「EARTH」登録。変わらず孤児院で保父さんをやつ  
ている。

【Fate / stay night】

魔術がある世界もいくつか混ぜてよくわからなくなりそうだが、  
あつちはあつち、こつちはこつちの魔術でやっぱり違うらしい。  
英霊の座には、この世界の全員が行くことになるのだろうか？

衛宮士朗：「EARTH」登録。衛宮家の者とサーヴァントは全員  
登録している。憧れの「正義」に入れて少し浮き浮きしているそ  
うだ。

セイバー：「EARTH」登録。今日も衛宮家のエンゲル係数増長  
に貢献中。たまに「EARTH」の訓練に顔を出す。

凜：「EARTH」登録。「EARTH」に集まった人たちから、いろいろな話を聞いて、さらに博識になっている。だが、機械はダメ。アーチャー：「EARTH」登録。また始めた正義の味方に、彼はもう揺らがないだろう。真人と固有結界について話したところ、頭が痛くなったそうだ。

### 【仮面ライダーカブト】

ZECTが「EARTH」傘下に参加。  
いまだに暴れるはぐれワームの討伐を担当。

また、局員にはネイティブもちらほら。全員仲はいい。

天道総司：「EARTH」登録。今日も変わらず、天の道。それ以上の説明はいらない。

加賀美新：「EARTH」登録。このままなら警官になるつもりだったが、世界が一つになって新たな脅威があると知ってZECT経

由で「EARTH」に入る。

矢車想：「EARTH」登録、移住。蒔風を兄貴と慕って加入。義弟の影山も同様。光を守るといふ決意で、これからも戦い続けるのだそうだ。

### 【仮面ライダーブレイド】

BOARDのシステムは丸々「EARTH」へと運ばれた。  
アンデットはもう出ないが、まだ脅威はあるので彼らはまだライダーを続けている。

剣崎一真：「EARTH」登録、移住。「EARTH」内のアンデット研究機関で、その不死を使つての不治の病や癌の治療のための研究につく。

橘朔也：「EARTH」登録、移住。剣崎と共に研究機関に入る。  
こっちは生命の根源にいたる研究で、剣崎の方と両立しているそうだ。

上城睦月：「EARTH」登録。まだ高校生の彼は、登録のみ。だが、自分にできることはしたい、という事で、将来は「EARTH」に本格的にはいるそうだ。

相川始：「EARTH」登録。レストラン「ハラカランダ」で、手に入れた人間の生活を満喫中。彼の「人」生はまだ始まったばかりだ。

## 【11eyes】

駆をはじめとして七人全員は「EARTH」登録。

なお、「禁書目録聖省」はあまりにも影に徹していたためか、世界結合で更に陰に潜り、存在が確認できない状況だ。

皐月駆：「EARTH」登録。周期的にやってくる劫の目アイオンによる予知で、事件を予見する。が、その力が弱いらしく、ハッキリしないらしい。

水奈瀬ゆか：「EARTH」登録。固有結界の扱いに不慣れなため、アーチャーに指導してもらっているそうだ。

【真剣で私に恋しなさい】

この世界もあまり変わらない。

「EARTH」に登録してくれた者はおらず、彼ら自身もすでに進路は決まっているらしい。

直江大和：このまま大学へと進学するらしい。登録はしてないが、連絡があればすぐに助けてくれることを確約してくれた。

川神百代：川神院次期党首として、今は心身練磨中（主に精神面）。たまに「EARTH」の訓練場に顔を出してくる。

【仮面ライダーキバ】



「EARTH」と太牙の会社による提携で、ライフエナジーの配給が実現。

ファンガイアによる騒ぎは少なくなったが、それでもまだあるため、「素晴らしき青空の会」は「EARTH」傘下に入り、治安維持に貢献している。

紅渡：「EARTH」登録。バイオリン作りに精を出す日々。定期的に「EARTH」のホールで疲労しているらしい。

名護敬介：「EARTH」登録、移住。「青空の会」は傘下に入っ  
ての登録。だが、彼も現状には満足している。強化スーツつながり  
で、氷川誠とたまに飲むらしい。

登大牙：「EARTH」登録。投資企業「G&amp;p.p」の敏腕  
社長として顕在。ライフエナジーの配給で表彰された。

【仮面ライダーW】

風都は「EARTH」本部からそうはなれていない位置にあり、すぐに遊びに行ける距離。

最近いろんな事件があるようだが、彼らなら何とかしていくだろう。

左翔太郎：「EARTH」登録。風都の街で、今日もハードボイルドに探偵をしている。フィリップの検索癖が爆発して頭を悩ませているようだ。

フィリップ：「EARTH」登録。世界が一つになって、検索事項でいっぱいのような。三日間にも喰わずに検索して、ぶっ倒れて「EARTH」に運ばれた。

照井竜：「EARTH」登録。亜樹子との新婚生活を満喫。ノンストップ刑事は伊達じゃない。

### 【真・恋姫十無双】

彼らは【恋姫十無双】の時にあったような移動でここに来たらしく、

全員が「EARTH」隊舎に身を寄せている。  
また、彼女らはこの世界では学生のはずなので、蒔風が学校を立て、そこに押し込まれた。

ちなみに、今まで言っていた学校とはこの事。「EARTH」の敷地内にある。

なお、みなこの世界では真名が普通の名前となっており、初対面の人もそちらの名前でみんな呼び合っている。（これに関する違和感はない。管理者が調節してくれたから）

北郷一刀：「EARTH」登録、移住。蒼青の翼として、そして蒔風の弟子？として今日も鍛錬をしている。いろんな人と仲良くなつて、彼の次々とモノマネしていく武器の種類は無限大だ。そんな彼もまだ学生。恋姫たちと、甘い学園生活を送っている。

愛紗：「EARTH」登録、移住。一刀と共に、学校に通う。勉強は少し苦手のような。同じクラスの魅音と仲がいい。

星：「EARTH」登録、移住。蒔風と一緒にいられるという事で真っ先に彼の部屋の隣を希望したが却下される。放課後には蒔風を追いまわしているらしい。

【魔法少女リリカルなのは Strikers】

崩壊した地上本部ははまだ治っておらず、その機能を「EARTH」に移している。

これもあつて時空管理局は「EARTH」と連携をくみ、世界の保安を受け持つていくことになる。

なお、機動六課はちょうどあの時が解散の日で、最後の模擬戦をやるところだったのだそうだ。

隊長陣らはそのまま「EARTH」に出向、隊舎に身を寄せている。フォワードたちは各希望の部署へと異動して、夢へとひた走っている。

高町なのは：「EARTH」登録、移住。娘のヴィヴィオと共に「EARTH」の蒔風の隣部屋を狙うが、却下される。なお、その際に星と出会ってからは良きライバルとして、お互いを認めているとか何とか。

フェイト・T・ハラオウン：「EARTH」登録、移住。姉のアリシア・テストロッサと一緒に住んでいる。なお、彼女にはバルディッシュと同じ機能を持った兄弟機「バルディッシュ・ウイング」が与えられているそうだ。

八神はやて：彼女の家族と共に、「EARTH」登録、移住。こちらでも指揮官となって活躍する予定。

【Angel Beats!!】

この世界はどこにもつかない。

ただ、もしかしたら彼らの来世がこの世界にいるかもしれないが・・・

彼らが関わることはないだろう。

彼らは、もう新たな世界を生きているのだから。

【世界をめぐる、銀白の翼】

都会の真ん中に大きなビルを建て、世界防衛機構「EARTH」を設立。

世界の危機に立ち向かっていく機関として、いま、世界中から信頼を寄せられている。

「EARTH」本部の敷地は広く、イメージとしては国連本部を想い浮かべてもらえればいいと思う（川沿いではないが）その敷地内に蒔風が建てた学校もある。

なお、大きな建物は学校と本部のみで、あとは屋外訓練場と、残りほとんどが庭のようなモノ。

ビルの区分けとしては

全39階

一〜二階が受付窓口。

二階から十九階までが事務室になっていて、そこから上の十九階から最上階までは隊舎となっている。

現在ガラ空き（笑）

なお、一階から四階は吹き抜けになっていて、解放感バツチリ。隊舎のエリアは多いと思われるかもしれないが、一階丸々トレーニングルーム、丸々浴場（いろんな種類が点々としている）となっている。

地下には大訓練場もある。

蒔風舜：「EARTH」のトップに立つ。本人は相当嫌がったが、「形だけでいい」という言葉でやっと頷いた。なお、自宅は別にありますが、「EARTH」にも部屋を持つ。毎日のようになのはや星に

追いかけれ、更には仕事にも追われて泣きだしている。

アリス：発端の管理者として「EARTH」後見人に。さらに、今後「EARTH」に協力していくことを約束した。

他の管理者たちはあの後消えていってしまったが、アリス曰く「いろいろと忙しい」らしい。

こうして、世界は今日も回って行く。

「いままで、いろいろあったけど、全部全部楽しかった！……ありがとうな……！」



では

今回はじじいひひとあそ

世界をめぐる、銀白の翼

第一章 WORLD LINK } Grand Prologue }

完! ! ! ! !

エピソード ～ Last Prologue ～ (後書き)

2011.2.24.03:00 現在

PVアクセス 769,526

ユニーク 80,561

読んでくださって、本当にありがとうございます!!

以下の方々に感謝を

感想をくださった方&お気に入りユーザーに登録してくださった方  
(英字、五十音順)

ATD-X 様

h . o 様  
M E R A N 様  
r e i m u 様  
W h i t e S e a l 様  
アストラル 様  
液体の蛇 様  
神無月 様  
キヨン 様  
久遠 様  
クリア 様  
グレイ 様  
コンバース 様  
準也 様  
深蒼の覇者 様  
だいさむ 様  
剣 流星 様  
とある旅人 様  
ニャンコ隊長 様  
灰狼 様  
東雲葉月 様  
バラランシヤ 様  
ポリンキー羽田 様  
御剣悠一 様  
夜一 様  
保名 様  
夕 様  
リュウガ 様  
ルシファー 様  
ルシフェル 様  
レイフォン 様

レン様  
わや様

そして、今モニターの前に居る、あなたに!!!!!!

THANK YOU!!!!

〜あ〜がき〜

とー！ー！言っわけで昏々！ー！ー！

ーんっつ

「世界をめぐる、銀白の翼」第一章は、無事に完結いたしました！  
！！！！

アリス「ワーーーーワーーーーワーーーーワーーーー！！！！」

蒔風「ヒューーヒューー！！！！！！」

いやぁ・・・長かったなア・・・  
ここまで来るの！！！！

時「そういえば二章があるらしいけど、一体いつから考えてたんだ？」

え？そんなもん

最初っからに決まってるんだろ!？

ア・時「はあ!？」

この話、書き始める前からすでに妄想で完成している、って言うのは話したよな？

ア「まあ、聞きましたね」

あの時点ですでにかなり出来上がってて、あとは書くだけなんだよ。

蒔「おま……だったら今何章まで出来てんだ？」

三章までは内容確定。

四章は練り込み中。

ア「どこまでやるつもりなんですか!？」

どこまでも

それで、ですね。

四章で結構いいキャラ作って出すつもりだったんですよ

蒔「ほっほっ

でもね、そのキャラ、設定だけで名前とか全然思い浮かばなくてどうしようって……結構前に悩んだ。

ア「結構前に？」



そうなんです。  
その名前は、すでに読者様からある日来たある案でビツタリ決めて  
しまいました。

蒔「どういうことだよ？」

蒔風が持つのが天剣「十五天帝」だろ？  
じゃあその新キャラになにもたせようか、ってことになって

・名前は「神剣」

・属性としては「癒やし」（あくまで剣の）

ってのは決めてたんだけど、剣の名前、キャラの名前が出てこなか  
ったところに「こんなキャラどうですか」という案が来て・・・

ア「ああ！！それでなんとその設定がドンピシャだったと！！」

ザツツライ！！

運命すら感じましたよ。

ですがね、そうしたキャラをもらってもですね……

蒔「なるほど。第二章まではすでにできているから出てくるのは四章からだ」と

そうなるんです。

しかも、三章まではもう本当に完成していて登場させる余地がない。

だから、その登場は四章まで待ってもらわないといけないんですよ……

ア「それは……案をくださったリユウガさんに……なんかつ……」

蒔「もうしわけないな……」

ですが、こればかりはどつにもならない……  
泣くしかないです。

蒔「それで？結局二章はどうするんだ？」

え？ああ……

このまま投稿します。

ア「沢山の人から感想きましたからね」

それ以上に新しく作るのがめんどくさい……

蒔「ヲイ!？」

と、まあこんな感じでしたよ!!

時「そういえばクラウドの仲間とか出てなかったっぽいんだけど・・・って、お前友人に言われてなかったか？」

ああ、そこに関してですか？

正直ですね・・・

FFFに関してはクラウドだけが欲しかった部分がありますッ！！！！

時「こいつぶっちゃけやがった!？」

ア「じゃ・・・じゃあ・・・他のキャラは？」

いや、出しますよ?でもどつちかって絡ませよ?か・・・超悩む

ア・蒔「こいつクソだ……」

でもね？それを言われてちゃんと話に入れようとしてるよ？

だけど……

ア「だけど？」

私のFF7知識って、本編とアドベントチルドレンしかないんですよね……！

蒔「よくそんなんで書く気になったな！？」

書きたかったから書いたッ……！

ア「ファンに殺されてしまえ」

時「ん？そういえばこれって第一章なんだよな？」

そうだけど？

時「でもこれ、「第一章 WORLD LINK \ Grand Prologue」って書いてあんぞ？」

ああ、それね。

だって書きたいのはいっぴになってからだからっ！！！！

ア「どっぴいっことですか？」

いやね、最初に考えたのはよくあるコラボ物。

この話の世界ではこの作品とこの作品の世界が混じっています、ってやつね？

蒔「まあ、よくみるな」

でも、いきなりそんな話からじゃ、この物語はダメだと考えたわけですよ。  
だから

ア「だから世界が一つになる過程を書いた、と」

蒔「そしてここからがホントに書きたい話になって……」

つまりは、グランドプロローグ。  
でも、ここまで長いとあれだからって理由で第一章。

ってわけ。

ア「だったら二章はどれだけ長くなるんですか!？」

ああ、大丈夫……同じくらいか、それ以下だから。

蒔「本当か？」

いやだなア、信じてよ。

詳しい事は言えないけど、扱う事件は二個だけだし。

ア「二個？少ないですね」

ええ、まあ、それは次にアップする次章予告で



ア「にしてもあなたって戦闘後を書きませんよね？」

君はなぜ時風が「奴」を倒した後にすぐ世界を出るかわかるか？

時「「奴」を追うためだな」

そう、そういう設定だ。

だけども、それには裏があつてだな……

私がおの後のを書くのが苦手という事もあるのだよ……！！！！

ア「なるほど、うまく逃げていた、と」

その通り……だから戦闘後の肩すかし感はん端ない。

時「「EARTH」のビルだつてどうやって建てたか明記してないしな」

あそこはほら……

管理者だし？ポンと出したんだよ。

蒔「……まじで?」

そこをどうにかするのが管理者。

正直、建てたと言ってるけど、そこにドン、と出した感じで。

蒔「マジかー」

あ、それと前の話での

登録

って言うのは戦闘員として協力してくれるかどうか(任意)。登録は  
しなくてもいい)

移住

って言うのは「EARTH」ビルに部屋を持つかどうか(別に本住  
まいじゃなくてもいい)

です。

と、言うわけでここまで来た「世界をめぐる、銀白の翼」

第一章は完結。

次は第二章へとコマを進めます。

ですが……いきなり事件に入っているのか、それとも少し日常を出すべきか、悩んでいます。

正直、日常パートの話が浮かばない!!!

誰か案をくれれば嬉しんですがねえ……

蒔「なにげに催促するんじゃないよ」

すみません。

では、この辺で……!!

次章予告をどうぞ……!!

第二章 予告

武闘鬼人  
P r e s e n t s

銀白  
P R O J E C T  
第二段

始  
動

— つとになって、 — 見平穩に見えた世界

「時風さん」

「どっしした？」

いた。

だが、その世界に、暗い影は確実にやってきて



「仮面ライダーゼロノス、桜井侑斗との連絡が取れません！！！」  
「なに！？」

消えゆくのは

「棗恭介、反応がロスト！！！」

「呉軍、全滅！？」

主人公達

「泉こなたさんたち四人が、学校に休学届を出して旅行に出たそうですが……位置がつかめません!!!」

「岡崎夫妻との連絡が途絶……?……娘の汐は、彼らの友人の保母に預けられているようです……」

今回起こる、事件は二つ

「どついつ事だ……!」

「主要、最主要たちが狙われている……!?!」

敵は、どちらも同じといえる  
あえて言うなら、それは

「おいおい・・・本気でオレに・・・勝てんのかア？」

「くっ・・・ひるむな！！！！行けえ！！！」

世界 そのもの

「「奴」ではない……こんな短期間では復活できん!!!」

新たなる「敵」

失われる主人公

「一刃は……やられた……」

「「EARTH」本部、崩壊……」

そして、いなくなる翼人達

「蒔風ッ！……！」

「クッ……クラウド！！理樹ッ！……！」

世界は、どこへ向かおうとしているのか

「そんな……おまえは!？」

「そうだ、初対面か？自己紹介だ。俺は……」

「貴様!!!!!!」

世界をめぐる、銀白の翼

第二章

LOST  
HEROS

「俺が最後の「EARTH」メンバーになってしまった……」

「……………」

「だから……お前は俺が倒す……!!」



5560

ZOOS GZMOC



## ある一日

うっそうとした森の中。

二人の男が剣を握って向かいあう。

「オレが最後の「EARTH」メンバーになってしまった……」

「……」

「だから……オレがお前を倒す!!!」

「御託はいい!!!お前、オレを倒したいんだろ?えエ!?!」

そういつて、男二人が睨みあい。

その剣がぶつかり合って最期の闘いが始まった。

その数ヶ月前

.....

「EARTH」 宿舎の一室で、甲高い電子音を鳴らしながら、目覚まし時計が鳴っている。  
結構うるさい。

しばらくしてから、そのデジタル時計の頭を、ベッドで眠る男の掌が叩く。

この男こそ、この部屋の主、時風舜である。

だが、人間これだけで起きれるなら、国語辞書に「遅刻」などという項目はない。

叩いたては力なくそこから離れ、布団の中に戻っていく。  
もぞもぞとしながら頭を掛け布団に潜らせ、抱き枕を手足で探つてたぐりよせ、ベストポジションで抱き直す。  
ちなみに彼のために言っておくが、これはいたって普通の抱き枕であって、変なプリントはされていない。

そうして彼は再びまどろみの中に戻っていくが、五分もしないうち

にもう一度、目覚まし時計が持ち主を起こそうと鳴り始めた。  
繰り返しアラームが鳴るタイプのようだ。

だが、それをさっきと同じ動作で消す時風。  
そして、同じように鳴る目覚まし。

そうこうしているうちに、ついに時風が時計を掴み、アラーム機能  
そのものを切ってしまった。

これで彼の安眠を妨げる者はいない。

だが

ベッドで眠る時風に、一人分の小さな影が歩み寄る。  
時風はまったく気が付いていないようだ。

それをみて、その人物の口元がニヤリと上がり……

「どーーーーん……！」

飛びこんだ。

そりゃもう飛びこんだ。

人体の中心ともいえる「水月（鳩尾のこと）」に頭から突っ込んだ。

「グホウツツ!？」

「起きたー?」

今、一瞬目覚めて、一瞬でオチました。

蒔風の腹の上で、ヴィヴィオが馬乗りになってポンポン跳ねている。見た目は可愛い光景だが、下にいる人間が気絶していることを考えると結構怖い。

ガタガタガタツ、バタンツ！！！！

「ああ！？や、やられた！？」

「ふふふ、よくやったよ！！ヴィヴィオ！！」

「いえーい！！」

と、そこでけたたましい音を鳴らしながら、時風の寝室に倒れ込んできたのは、組み合って地面に転がるのはと星だ。

どうやらなのは星を押さえている間にヴィヴィオが時風の元に向かうという作戦だったらしく、この様子ではかなりうまく行ったようである。

「舜君は！？」

「まだ寝てるよ？」

「ならばっ！！まだ私にも勝機があるッ！！！！」



部屋の主を差し置いて、その部屋でギャーギャー騒ぎまくる少女二人。

そんな争いしてんだったら朝飯でも作ってやればいいのに、という事は考えちゃいけない。

なお、それを聞いたなのは親友Fさんは叩はたかれた後に「朝起きて、最初に見たのが私だった方がいいでしょう!？」と言われたそうだし、ちなみにそのとき、Fさんのお姉さんはそれを見てケタケタ笑っていた。助けてやれよ。

「くっ……だがさすがだな、なのは殿……よもや私と同じことを考えるとは!!!」

「それはこっちの台詞ですよ。でも、これから先は通さないから!」

認めながらも、戦う定め。

ああ、なんと悲しい世界なのか。

「これが・・・戦いなんだね・・・」

それを見て、ベッドから降りていた高町ヴィヴィオは何かを悟っていた。

君が知るには、あの世界は少しディープすぎるよ？

「ん・・・んあ？」

と、そこで蒔風が目を覚ます。

なんだか普通の目覚めよりも身体が重く感じたのは、きっと気のせいではないだろう。

「「舜（君）！おはよう！」」

「・・・え？」

「おはよ、なんでいるんだあああああああああ！！！」

「?????」朝の挨拶!!!」

蒔風の叫びに、元気よく答える二人。

それを聞いてからの蒔風の行動は早かった。

バサッ!ドスドスドス・・・ガチャッ、ポーーーーイ

朝起きて 目の前にいた 侵入者 布団にくるんで 廊下に捨てた  
字余り

『(モゴモゴ)だ、出してーーーー!!』

『むう・・・ハッ!?こ、これは舜の匂いが!!』

『ホントだ!!』

「ホントだじゃね」

『うう……なんでこんなことするのー？』

『そうか……わかりましたぞ、なのは殿』

『どっどっどっとなの！？』

『舜も男子。きっと朝の処理を……』

「よし、お前らそのまま浴場に放り込んできてやる」

『『そ、それは先にシャワー浴びてこいよ的な！？？？』』

「そうじゃね」

そうして、蒔風が部屋に戻る。

ちなみにヴィヴィオは布団にくるまった二人を引きずって部屋に戻っていつていた。  
遅しい子である。

「ったく……なんであいつら朝からミッドナイトなんだよ……」

そう言いながら、蒔風が身体を伸ばす。

ここからの蒔風の行動はいつも通りだ。  
洗面台に向かって歯を磨き、顔を洗い、炭酸を少しだけ飲み、朝ごはんを食べて、着替えて部屋を出る。

そして、蒔風はこれから学校の方に行くのであろう一刀や愛紗たち

とすれ違いながら（星は愛紗に簞巻きにされていた）会釈し、自分の事務室に入った。

「あ、来ましたか」

「お前が「来なかったら毎晩見る夢を悪夢にしますよ?」とか言うからじゃねエか……」

「どうでしたか?」

「二度とすんな……」

蒔風がその日の事を思い出して疲れた声を出す。

そう、蒔風がサボって仕事から逃げたある日の晩、アリスは宣告通りに蒔風の夢を悪夢にしまったのだ。

それはもう……うなされまくって次の日に蒔風がアリスにすぎるほどだった、と言えば、どれだけのものだったかの想像はできるだろう。

「ってか!!形だけでいい、って言われたからここにいんの!!  
なんでもおもつくそポジションつけられてんの!?!」

「ですから!!すべての世界を回ったのはあなただけなんですから、  
あなたじゃないとわからないことが多いからですよ!!」

「あんたでもいいじゃないの!!もういや!!私こんなの耐えられ  
ない!!!!」

「なんでカマ臭くなってんですか。気持ち悪いです」

「キモイゆーな!!傷つくのは俺なんだぞ!!」

そんなことをギャーギャー言いながらも、蒔風は椅子に座り、その  
右手は書類を次々と回していつていた。  
器用な男である。

「終わった!!」

「じゃあ次」

「オレ逃げるよ!?!」





「どうしたんですか？ 蒔風さん。元気ないですよ？」

「いやあ……朝っぱらから疲れて……」

「何かあつたんですか？」

「いや……説明したくない……」

ぐったりしている蒔風に話しかけてきたのはこの「AGIT 食堂」を取り仕切るシェフ、津上翔一だ。どうやら一番忙しい時は抜けだしたようで、彼も昼食を取りに来たようだ。

「津上さくん。今日は何がいいですかあ？」

「ありゃ、疲れて眠そうですね？ 水泳なんかいいんじゃないですか？ スイミング！ 芦原さんがインストラクターやってるみたいだし、行ってみたら！ スイミング」

「……」

「あ、今のは「睡眠、グ」と「スイミング」を……」

「いや、それはわかってるから」

説明の入ったポケほど悲しい物はない。

「お待たせしましたー。はい、蒔風君」

「おう、サンキューだ。って、泉か」

「うん。ここでバイトしてんだよね〜」

津上と蒔風が注文してから数分後、頼んだものを持ってきたのはこなただった。

彼女いわく、こちらの方がバイトしやすいらしいのだ。

「時給も蒔風君に泣きつけば上げてもらえそうだしね〜」

「をい」

そう言いながら皿を置いて仕事に戻るこなた。  
頼んだものは、蒔風がマーボー豆腐。津上がオムライスだ。

「（もぐもぐ）うまいなア、やっぱー！」

「それ、蒔風さんのために作っておいたものですから」

「まじで！？ありがとうー」

腹が満たされ、元気が出たのか蒔風の声が弾む。  
津上もそれによかったよかったと頷きながら、厨房に戻った。

蒔風も食べるのはちゃっちやと済ます人なので、食い終わってから  
はぶらつくだけだ。  
アリスから新しい仕事が来なければだが。

「お、舜ー！」

「一刀」

蒔風が廊下を歩いていると、一刀が声をかけてきた。どうやらこれから鍛錬のようで、後ろには武器を持った愛紗と翠がいた。

「ガッコは？・・・ああ、午前だけか」

「そ、土曜だからな。で、俺はこれから愛紗たちと模擬戦すんだけど・・・蒔風も来るか？」

一刀からの提案。

その提案に、蒔風が顎に手を当てながら首をコキコキ鳴らして考えだした。

「ふうむ・・・最近体動かしてないしなあ・・・」

「じゃあ行くつぜ！！舜とも模擬戦したいから！！」

「そうだ・・・な。よし、やるか！！ためさないといけないことも

あるしな」

そう言って向かうは地下の大訓練場。

そこにはすでに使用者がいた。

いたどころか、思いつきり模擬戦をしていた。

「ハアアアアッ！！！！」

「良太郎！！そこでヒュッ、とかわしてバーンと反撃だ！！！」

「先輩、その説明は無茶でしょ！？」

「リョウタロウ!!」

「クツ・・・剣技でここまで押されるとは・・・」

「負けちまったあたしらが何言ってもしよーがねーけどな」

「ふう・・・さすがは翼人、だな」

戦ってるのは、クラウド・ストライフ。

訓練場の脇にはすでに挑んで負けたセイバー、草壁美鈴、ヴィータ、ハクオロが座り込んでいる。

「にしても今んとこ五人目だろ？」

「それでまだあんだだけ勝てんだからすげーよなア・・・」

そういつてそのわきに立つのは土にユウスケだ。

その奥のベンチにはエルルウとアルルウが見学をしていた。

「おー、クラウドやってんなあ・・・」

「舜じゃないか」

「よ。今は・・・開いてないねえ・・・」

と、一同が時風に気付く。

更にその後からひよこりと一刀たちまで出てきて、会話に入る。

「なに？クラウドに勝ち抜き戦？」

「らしいな。オレが来た時にはもう始まってたぞ？」

どうやら、最初にクラウドを見つけたヴィータが戦いを挑んで、そこからギャラリーがどんどん挑んでいって今に至っているそうだ。

「クラウドはなにしに来たんだ？」

「さあ？なんか小包持ってたけど？」

「宅配ついだか・・・不運な・・・」

「電車斬り!!!」

「凶斬りッ!!」

ガゴオツ!!!!!

と、そんなことを話していると、どうやら決着がついたようだ。  
電王ライナーフォームと、クラウドの技がぶつかり合い、飛ばされたのは良太郎だった。

「五人抜きか」

「やっぱりやるなあ……」



蒔風が感心して呟く。

そうしていると、クラウドも疲れたのか良太郎と一緒にこちらに向かってきた。

「やるなあ、クラウド」

「シユンか……見てたのか」

「五人抜き、おめでとう！」

「たいしたことじゃない」

そんなことを話し合っている彼らを見て、アルルウがふと思ったことを言葉にした。

「おねーちゃん、マイカゼーとクラウドーは、どっちが強いのか？」

「えっ？」

「「「「え？」「」「」

「「「「え？」「」「」

その言葉に、皆が振り返る。

そして、面白そうだという顔をして士が言った。

「確かに。時風がどれだけ強いかは知ってるが、そっちが時風に並ぶくらい強いのか、俺らは知らないしなあ」

「失礼だぞ！！士！！」

「ユウスケだって正直思ってたろ？」

「う……」

それを聞いて、時風とクラウドはどろじようかという状態だ。

「どろじようか？」

「どろじようか？」

「戦ってみりゃーいーじゃねえか」

「そうだな。私も、興味がある」

そこにヴィータとハクオロの賛成票。

ここまで来てしまえば、やらないのもなんだという事だが……

「でもクラウド疲れてんだろ？」

「だったら後日だな」

「よし！……こっちで日程合わせるから、みんな呼ぶか！……」

「え？」

「と、なると全員分の飲み物と食べ物……」

「完全に見世物じゃねーか」

こうして、決まってしまった蒔風対クラウド。

勝つのはどっちなんだろう？

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

ある一日（後書き）

第一話がこんなんでいいのか、と不安な不安な作者です。  
始まりました、第二章！！！！

ここから数話は日常編です。  
なんとか書いていきませう！！

事件が起こるのはそれから……

ふふふふふふふふ！！

デイシディア デュオデシムおもしれー！！！！！！

翼人对翼人 かーらーの？

蒔風とクラウドの模擬選が決定されてから数日後。  
ついにその日がやってきた。

「で・・・何この大観衆」

「EARTH」地下大訓練場。  
その観戦エリアに、なんとほとんどのメンバーが集まっていた。

皆、今か今かと蒔風とクラウドの戦いを待っている。

「ギョッしてこっぴなった・・・」

困惑しているのはクラウドも同じだった。

この大訓練場は天井までかなりの高さがあり、二、三階ぐらいまでの高い。  
だから見上げれば、上階部分にはガラス越しに何人もの観客がみえるのだ。

『さあ！！始まってまいりました翼人対決「時風VSクラウド」！！  
！！実況はオレ、棗恭介が！！』

『解説はこのオレ、門矢士がやってやる』

『門矢さん、一体どっちが勝つんでしょうかね？』

『時風がどれだけ強いかは皆知っているだろうが、クラウドがどれだけ強いかわかんないからな。強くても、時風と比べてどれくらいなのかわからない以上、まだなにも推測は立てらんねえな』

『なるほど・・・この場にいる者は、「奴」との最後の戦いでクラウドさんを見ただけでしたからね。その強さに注目です！！』

『どちらも攻撃特化の翼人。おそらく、どちらが勝ってもおかしくはない』

更にはこのように実況、解説まで付けられる始末。完全にエンターテイメントだ。

出店を出していたり、お弁当持って来ていたりと、準備も万端だった。

プアーーーーー！

『さあ！！時間がやってまいりました！！！！ご覧ください！！今回の選手の入場です！！！！』

アラームが鳴り、そんな声が聞こえて、蒔風がやれやれとベンチから腰を上げて真ん中へと向かう。

それに伴い、クラウドも気を引き締めて歩いてきた。



『実況席向かって右側！！銀白の翼、「EARTH」局長。時風ええええええええええ、しゅーーーーーん！！！！！！』

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！

『そして対する左側ア！！漆黒の翼、「EARTH」局長に並ぶとされる唯一の男！！クラウドオオオオオオオオオオオオ・ストライフウウウウウウ！！！！！！』

ヒューーーーーー！！！！ワーーーーーワーーーーー  
！！！！！！！！

5592

「なんかおかしなことになったなあ」

「仕方ない……だが……オレもお前とは戦ってみたかった」

「おや、クラウドらしからぬ好戦的な台詞」

「ふ……オレも最近、世界を楽しめるようになってきた」

『では両者剣を構えて!!!!』

お互いに話しながら、時風とクラウドが剣を握る。

「ま・・・やるからには・・・なあ？」

「全力・・・だッ!!!!!!」

『ゴ—!!—』

二人の剣が、轟音を鳴らしてぶつかり合った。



それに合わせて時風が獄炎弾を放ったが、クラウドもマテリアによる魔法でそれに応戦していった。

「雷旺！！」

「サンダガ！！」

「土惶！！」

「ブリザガ！！！！」

その攻防は圧巻の一言だった。  
おそらく、あの場に飛び込んで誰も巻き込まれ、立ってはいられない。

怒声の攻撃を冷気が凍り砕き  
獄炎の炎を雷で弾き

火炎弾を圧水で打ち消し、降り注ぐ隕石を拳で砕いていた。

『魔法と魔法！！剣技と剣技！！どちらの剣も合体剣ということもあつて、白熱した戦いが行われています！！』

『時風のは融合式合体剣。クラウドのは組み立て式合体剣という違い話はあるがな』

『この場合どう違ってくるのでしょうか？』

『時風の剣は様々な形があり、多様性に富む分、クラウドのようなすべてに重量が乗るような剣撃を受けるには二本以上で受けなければならぬ。対してクラウドは組み立て式という手間のかかるものを持っていながら、その機能をうまく使った攻撃や防御をするからな』

『さっきの、合体剣から一本はじき出して使ったようにですね？なるほど、両者とも不利、有利があるというわけですか』

『だな。これは本当に・・・わからないぞ・・・』

恭介と士の実況解説が流れてくるが、当の本人たちは実際そんなものの気にしてなどいられない。

正直、一撃でもいいのをもらったら終わるような状況なのだ。

クラウドは一撃が重いし、時風は一撃は言った後の連撃で。

しかしその状況でも、二人は楽しそうに剣を交えていた。命の削りあいではなく、技と力を見せ合うようなこついった戦いはクラウドにはほとんど経験がなかったし、蒔風もそうだったことをしていなかったわけではないが、ここまで釣合の取れる相手がいなかったのも事実。

故に、楽しいのだ。

こつした純粹なぶつかり合いが!!

「青龍!!白虎!!」

「迎え撃て!!リヴァイアサン、イフリート!!」

さらには召喚獣まで出し始めてきた。

だが、そちらの戦闘に気を取られている場合ではない。

彼らは彼らでやってもらわないと、こつちが気が気でないからだ。

宙に浮いた蒔風の放つ無数の斬撃をかわしながら、クラウドが地面を駆けて蒔風の真下へと向かう。そしてそこから真上に向かって剣を突き出し、ロケットのように飛び出していった。

それを紙一重で躲して反撃しようとする蒔風だが、躲そうとした瞬間、クラウドの剣がグリツ、と捻られてその切っ先が、蒔風が避けようとした方向へと向けられた。さらにはクラウドの剣がバラけ、花びらのように開いたので、紙一重などとはいってられない。

「うおガッ!?!」

「チツ!?!」

その攻撃に、蒔風がとっさに開翼。その波動でクラウドを押し返す。さすがに至近で開翼されては、クラウドも下がらずをえない。

地面に降り立ったクラウドに、蒔風が使役獣を引っ込めてから十五天帝を構え、対戦相手の方向に向かって垂直に降りてきた。

それに対してクラウドも同じく召喚獣を引っ込め、開翼して受け答えた。

火花散り、魔法が入り乱れ、気合いと咆哮が響き渡る大訓練場。

両者とも力は全く互角。

否、おそらく、時風がクラウドの使う剣を少しでも知っていなかったら、負けていたかもしれない。

クラウドも時風の剣は知っていたものの、そのすべてを知っているわけではない。

だが、その有利性を以って時風はクラウドと互角なのだ。逆だった場合、負けていた可能性は高い。

「そんなこともできるんだな、シユン」

「知らなかったか？じゃあこれは知ってつか！？心象的世界破壊！  
イマジナリテイ・ワールドエンド

！」

「うお！？」



ここで蒔風が畳み掛けるかのように固有結界を発動、その破壊現象にクラウドを巻き込んだ。

と、言っても相手はクラウド。

このようなことでは倒れないし、また、彼が動かない、という選択肢を取るはずがない。

蒔風はその中で法則性は知っているものの、その法則を自由にすることはできないため、相手の動きから発生する事象を防ぐのは実際には難しいのだ。

だから、この技はギャンブルなのだが……

「うわぁッ!? バッ、バナナの皮ぁッ!?!」

ツルンツ、ステーーーン

「か、かなだらしい金盞が……ごわっ!?!」

ガラガラガラガラ、ゴガンツ!!

お互いの行動によって起きた現象で現れたのは、バナナの皮と空から落ちてくる金盥の雨。

それによって時風は滑って転んで後頭部を強打。  
クラウドは金盥を脳天に食らってグラついていた。

二人は今までの戦闘で、決定的な一撃は喰らわなかったものの、その疲労と軽傷は確実にその体に蓄積されていっていた。

今さら言う話だが、この大訓練場の空間には時空管理局から提供された「非殺傷設定フィールド」が適用されている。  
つまり、どんな攻撃を食らっても、怪我にはならないのだ。

この空間では、ダメージはすべて疲労として蓄積されていく。  
だから胴体を切られた場合、腹筋に力が入らなくなったり、右肩を貫かれた場合にはそこが疲れてしまい、上がらなくなるのだ。

そして死に至るようなダメージを食らうと、自動的に気絶にされてしまう。

その際、死亡で終わったか気絶で終わったかはモニターで判断される。

だから、この空間では怪我も疲労となつて溜まっていく。

そんな空間で翼人二人が暴れたのだから、その本人たちは相当疲れていることだろうし、実際そうだった。

もしかしたらこんなアホなことで二人の決着になつてしまうのでは？と、その場の全員が思つてしまったほどだ。

『さて……固有結界も切れ、二人はいまだに頭をさすつていますが……』

『さすがと言わざるをえないな。さすがは翼人。蒔風と並ぶとされるだけある』

「クラウドーーーーー!!! 負けんじゃねえぞ!!! マリン、言っ



『両者とも応援席からの声援が耐えられません。中には「時風たまには負けちまえ」などという声も聞こえてきます!!』

『あとで説教だろうな、そいつら。ばれないことを祈る。にしても・  
』

『どうしました?』

『これは・・・チャンスじゃないか?』

『え?』

士の言葉に、恭介が訊き返す。  
今こいつ何を言った?

『みんな、思い出せ。知っているはずだ。時風は強い。中には、ポコポコにされて物もいれば、一緒に戦った者がいただろう。そして、こっちは思わなかったか?』

あいつに勝つてみたいなあ・・・と

「「「「「「!!!??」」」」」」

『確かに、俺たち全員が向かっても勝てないかもしれない。だが、今ならどうだ？むしろ、今しかない。蒔風に勝つてみたい奴は立ち上がれ……しかも、漆黒の翼人のおまけつき』

え……でも……

あそこに突っ込むのかよ……

つてか、そんなの夢物語じゃん

そんなざわつきが訓練場の全域を覆う。

ちなみに、翼人二人は戦闘中で全く耳に入っていない。

『じゃあ……蒔風を泣かせてみたいか？』

『『『『『それはある』』』』』』











「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「か……勝った……」

「綺麗にいったのは……最初だけだがな……」

「勝てたんだから……いいじゃねえか……」

大訓練場のど真ん中。

そこで、蒔風とクラウドが己の大剣を床に突き立て、その側面に寄りかかってへたり込んでいた。

その周りには二人に挑んできた「EARTH」メンバーが死屍累々。訓練場の大モニターには、軒並み「気絶」と書かれていて、「死亡」の文字は一つもない。

「シユンは・・・何人倒した・・・」

「さあな・・・途中から数えてない・・・お前は？」

「興味ないね・・・」

「じゃあ聞くなよ・・・」

「戦果は・・・半分ずつ・・・だな」

「じゃあオレの勝ちだ。フリードやってるし」

「だったらこっちはあれだ。ドラグレッダー落とした」

「さて、一刀の武器〃人数分だからオレの勝ちじゃね？」

「それならオレだってアーチャー切り捨てたぞ」

「翼人だからこっちが上だ」

「なら理樹を落としてるから互角だな」

「いやいやだから・・・」

「さて、だったら・・・」

そんな口論をしながら、蒔風とクラウドが剣を握ってまた立とうと

する。

こいつらまだやる気なのか？

と、そこで

「いい加減にしなさいッ！……！」

「ガッ！？」

「アグッ！？」

ゴゴンッ！……！といういい音がして、クラウドと時風の頭が地面に  
めり込んだ。

その跡に立っているのは、アリス。

翼人がいかに管理者より強くとも、相手がこの状態ならば勝つこと  
も可能なのだ。

そう、その拳骨が二人のドタマにぶち込まされて、仲良く沈黙させられたのだ。

「まったく……こういうイベントがあるのは知ってましたけどね、やり過ぎはいけませんでしょう……ほら、仕事あるんですから、来てください。クラウドさんにも手伝ってもらいますよ?」

そう言いながらアリスがズルズルと二人を引きずっていく。  
ちなみに絶賛気絶中だ。

「せっかく管理者の立場からあなた方と同じ世界で生きていくことと  
思っていたというのに、いきなりなんですかこの人たちは……  
ブツブツブツ……」

『今回の「EARTH」最強決定戦バトルロワイヤルの勝者は、アリスなのですよー』

『飛んだダークホースだったわね……さすがは管理者、ってとこね』

『梨花ちゃん、話し方がーう』

『気にははいけないのです。にぱー』

「何故だ……なぜオレもこんな書類を……」

「愚痴るなクラウド。オレは毎日だ」

「……すまん」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



翼人对翼人 かーらーの？（後書き）

どうでしたか？

まさかのアリスの勝利。

蒔風「あれは完全にいいとこ取りだった」

クラウド「何故オレがなぜオレがなぜオレが……」

あ、ちなみにこっちのクラウドは「めぐ銀」使用なので、キャラ崩壊が激しいかもです！！

ク「おい、他の奴らは出さないのか。ティファとか」

黙れリア充

蒔「文面上だけどな。こういつときって、二次元……じゃないよな？」

ク「線だけだから一次元だろ」

蒔「おい作者。今度友人にイラスト描いてもらえ」

うっさい黙れ。

ク「次回、今度はあの人にスポットライトだ」

ではまた次回



それから数十分後

蒔風の事務室で、アリスは一人時計を見ながら、カウントダウンを取っていた。

「あと・・・五、四、三、二、一・・・」

ボタン！！

「ま、間に合った！？」

と、おそらく決められた時間まで本当にギリギリだったのだろう。蒔風が息を切らして事務室に飛び込んできた。

その顔はドヤ顔だが、アリスのは呆れた顔になっている。

「ギリギリですね。どうしてこう毎日毎日ギリギリなんですか。もう十分は早く来てもらえると・・・」

「知らないのか？朝起きた後の十分はな、この世界でかなり重要なんだぞ？」

「管理者やってかなりになりますけどそんな決まりを決めた覚えはありません」

ま、そういうのを決定するのは私でもないんですけどね。

最後にそう言って、アリスが時風に書類を渡す。

毎日なんでこんなに書類があるのか。もはや時風は考えるのをやめたが、本当にどこから来たんだろうか？

「こっちは魔化魍討伐組織「猛士」の活動報告です。どうやら、結構な勢いで魔化魍が勢力を広げているようですね」

「魔化魍って、音撃じゃないと倒せないだろ。どうすんだよ。「鬼」ってそんなにいないんだろ？」

「そこはあの最後の戦いときに我々が調節しましたから、普通に倒せます」

「だったら各魔化魍の特性を適当に配布しところかな。あいつら、そこが厄介だから」

「で、星さんや雪蓮さんが酒を飲みたいと・・・」

「未成年はいけません」

「それから、神羅カンパニーからの報告で、モンスターたちは比較

的温厚。よほどのことがなければ襲い掛かってくることはないそうですね

「でも警戒はしないとでしょう。モンスターリストを上げてこっちによこしてくれ」

「それと……あの件はやっぱり?」

「ああ……どつやら、やらねばならんことはあるな」

「そうですね……で、次の話ですが」

「まだあのか……ってか、書類もまだあんですけど!？」

「頑張ってくださいね」

「鬼!！」

「管理者です」

そうして、蒔風が逃げ出さないように見張りながら、アリスも書類をまとめていく。

なにせ、蒔風は仕上げた書類はどんどん机の端にほっぽってしまっ

し、最悪床に散乱していることもあるのだから、それを分類別にまとめていく必要があるのだ。

そんな作業を、午前中びつしりやる時風は、すぐにグロッキーになつてしまい、十二時になるころには机にべったりを伏せていた。

「お・・・終わった・・・」

「ご苦労様です」

「でもよ、また24時間経つと書類溜まるんだよな・・・」

「そりゃそうです。いくら我々が調節したといつてもやはりできたばかりの世界ですから、問題は山積みなんですよ。まあ、それを午前中に終わらせてしまふあなたもすごいと思いますよ？」

「でも多分安定したらしたで問題の量はかわらないんだろうしなあ・・・あの野郎、とことん面倒なことしてくれたよな・・・みんなと会えるのは楽しいけど」

会話を済ませ、アリスが昼食でも取りに行こうとし、机から動かない時風に何かいるかと聞いた。

それに時風はなんでもいいから飯をくれ、と答え、昼食をアリスに任せることにした。

「さて・・・津上さんならおいしい料理を作ってくれるでしょうから、楽しみですね」

そういながら食堂に入るアリス。  
が、そこはいつもの食堂とは風景が変わっていた。

「あ、アリスさんじゃないですか」

「なになに？何しに来たの？」



「いえ、少し昼食と・・・何をしてるんですか？」

その場にいたのはこなたたち四人組、ハルヒを始めとしたSOS団、なのは、フェイト、はやてとその同居者たち、リトルバスターズ、雛見沢分校部活メンバー、恋姫たちに、裕理とましろだった。さらにこの場の提供として津上と、何かを設置しているのか、その手伝いの城戸とそれに引つ張られてきた蓮がいた。

「それ・・・ひな祭りの雛壇ですか？」

「そそ！！いやあ、ご飯食べに来た璃々ちゃんとかヴィヴィオちゃんにひなあられ出してあげたら、知らないっていつからねー」

「そこで！すべてのイベントごとをすべからず実行する我がSOS団が、この雛祭りを開催することにしたのよ！！」

こなたとハルヒがアリスに説明して、ちらし寿司やひな人形を用意しに帰り、アリスは何とも大きな雛壇を眺めて呆気にとられていた。

「こんなに大きなものよく用意しましたね・・・あれ？でもひな祭りってたしか・・・」

「そうなんですよね。三月三日はもう過ぎちゃったんですけど、これだけ用意するのに時間がかっちゃって」

と、そこにまだ積むのだろうか。雛壇を担いできた津上と城戸が、それを設置しながら話しかけてきた。

「ヴィヴィオちゃんも璃々ちゃんも、こっちのこういった伝統的な風習を知らないみたいですね」

「で、やるなら徹底的がいい!!ってことになったんですよ!いやあ、やっぱりお祭りって楽しいですね!」

「でも……なんでこんなに大きな雛壇を？」

アリスはそういいながらもう一度雛壇を見上げた。そう、雛壇と言っても、その大きさは普通ではない。

まるでこの大きさは……

「源寸大くらいありませんか？」

「あ、わかりました？」

「津上」。やっぱりこれじゃ天井突っかかっちゃまって」

「そうなるかー。棗さん、どうでしょう?」

「だったら、外の広場で派手にパーティーにしましょう。あそこなら気にしなくてもいいですし。おい理樹!手伝ってくれ!」

そう、それは人形の大きさが人間大くらいあるような大きさの雛壇だった。

その設置を指揮しているのはどうやら恭介のようだ。

どうしてこうなったのか。  
それを恭介に聞くと曰く

「初めてのひな祭り。それは何としても最高の思い出してもらいたい。それだけさ」

そういつてニヒルに笑う恭介だが、そのあとでの謙吾の話では

「むかし、鈴のひな人形がお内裏様とお雛様しかいなかったからさ  
みしがっていったってここまで派手にするらしい」

とのことだった。

それを聞いて鈴のほうを見ると、大勢に囲まれてどきまぎしながらも、この状況を楽しんでいる鈴を見て、アリスもふふっ、と笑ってしまった。

「では！私も手伝ってあげましょう！」

「か、管理者のアリスさんが？」

「はい。って、なにを驚いてるんですか？もう私はこの世界に關与すると決めてきているのです。今更除け者なんて、止めてくださいね？」

理樹が少し驚くが、その言葉になるほど、とうなづいてしまう。

「ささ！―皆で運ぼうかね！―このままじゃおじさん、寮に戻らないとだよ」

そう言って魅音が手を叩いてさあ行こうと号令を出す。

まあ、一刀、理樹や真人、裕理にライダーが三人、そしてアリスま



「恭介！！段差設置完了だ！！」

「はいはい！！料理も運んだわよ！！こなた！！」

「ま、待ってよかがみん。料理できなかったからってなんでそんな運ぶの張り切って・・・」

「キョン、古泉君！シートしきなさい！！でつかいの！！」

「さ、そこな幼女と少女たちはこっちに。おねーさんが着付けをしてあげよう（ハアハア）」

「姐御ー。目付き、目付きやばいっすよー」

「来ヶ谷さんだと心配なので、私が見ましょう。能美さん、手伝ってください」

「らじゃーなのですっ」

こうして外に出てきた一同。

もはや雛祭りというよりただの宴になってきているのは、気のせいではないはずだ。

そして、男連中は完成した雛段の飾りつけと同時に、並び順を考えていた。

「雛段完成！！したことだし、さあ、みんな乗るぞ！！」

「おうー！！」

「……」

「……」

「……なあ」

「ん？」

「べじいじい配置だったっけ？」

「あ」





「で、次の段に右大臣と左大臣の二人です」

「あれ？二人だけ？」

「間に柏餅と雛あられを置くんですよ」

「じゃあ……謙吾と真人で」

「筋肉大臣じゃねーのか……」

「オレはロマンティック大統領だ」

「そこ、文句言ってるともう遊ばないよ？」

「「全力で承った！」」

「理樹、鬼だな」

「鈴のためなら何にでも」

「それから、次に五人囃子、そしてもう一つ次に三人官女です」

「五人囃子つて、楽器だよな？」

「太鼓、大鼓おおつづみ、小鼓こつづみ、笛、謡うたいですね」

「どうせならできる奴を呼びたいね」

「でもないだろ。響鬼さんの太鼓くらいしか思い浮かばないし」

「じゃあ、この場にいる五人でいいか」

「と、なると……僕、恭介、裕理にザフィーラと古泉さんだね」

「三人官女は？」

「あそこの三人でいいだろ。おーい!!!高町さん!!!」

「え?なにー?」

「さて・・・メインだ」

「お雛様は誰にする？」

そう、そしてこの段階がやってきた。

雛段のトップ。雛祭りの主役。十二単に身を包んだ、頂点に座する者を決める時が来たのだ。

5634

「まあこの風習を知らない子が座るのが当然だよな」

「だが、それには問題がある・・・お雛様は一人しかいないという事だ・・・ッ！！！」

「僕は鈴を推薦するよ」

「までって。それじゃヴィヴィオちゃんや璃々ちゃんが可哀そうじゃないか」

「どうです？涼宮さんとあなたが座れば、僕的には非常に面白いのですが」

各々が推薦していく人物は、鈴、ヴィヴィオ、璃々、ハルヒと一気に増えていく。

更にすべての準備が整った女子までも会話に入り、彼女らも座りたいと言いだしたのだからきりが無い。

「私もあそこ座りたい！！」

「かがみん、お内裏様は任せたよ！」

「なんであたしがそつちななのよ！！」

「シグナムとが行ったら綺麗そーやなあ」

「待ってください。その場合、お内裏様は誰が……」

「では僭越ながら私が」

「リインフォース！？」



誰もがその座をめくり、かと言って争いもせず。

どーぞどーぞと差し出しながらも、その目は絶対に渡さないとありありと主張していた。

「アリスさんは？どうします？」

「私はいいですよ。というか、もっと難段増やせばいいじゃないですか」

「え？」

「ほら、こつやって……ソオイ……！」

「その掛け声はダメだと思っの……」

そうして、問題は解決した。  
アリスが同じような難段をもういくつか出して、そこに各自座って  
行こうというのだ。

だが、いかんせん人数が足りない。  
これでは頂点に一人だけというさみしい難段になってしまう。

と、言う事で再びアリスの管理者能力が発揮された。

「EARTH」にあるいくつかの扉を、離れたところの扉と空間結  
合し、一種のワープ空間にしてしまったのだ。  
つまりどこでもドアである。

そこを通じて次々とメンバーを呼び、結局全員でパーティーになっ  
てしまった。

桜は咲いていなかったが、そこは管理者。咲かせることなど造作もない。

盛大にパーティーが始まり、最後にはキャンプファイヤーで締めくくるといふ、なんとも派手なモノになってしまった。

「EARTH」敷地内の広大な庭にはいくつもの雛段。

そして、いつの間にか設置されたステージ。

野外訓練場ではスポーツが行われていたり模擬選していたり

とりあえず、パーティー開会の乾杯の音頭は、理樹がとっていた。

「みんなー！！三月三日ってね、両津勘吉の誕生日なんだよ！！」

「マンガのキャラ引っ張ってきてそんなこと言っなッ！！」

そして、一刀が突っ込んでいた。

もうこれ雛祭りじゃないよね？



「あー！楽しかった」

「なのはママ！ありがとう！」

「今日はいい日だった。呼んでもらって感謝する」

「いえいえ。だってまた書類仕事であなた呼ぶかもしれませんし・・・」

「やめてくれ・・・」

そう言って片付けに入るメンバー達。  
だが、これだけの人数だ。あつという間に終わり、更にはごみの処分まで、各人の能力で終わらせた。

便利な奴らである。

そうして皆が帰路に付き（扉をくぐるだけだが）、それを見送るアリス。

と、最後に理樹がアリスに聞いた。

「そついえば舜は？今日はずっと書類仕事？」

「え？・・・あ！！！！！」

その質問に、ハッ！とするアリス。

その日、銀白の翼人は、自分の事務室で涙を流しながら腹をすかせ、外から聞こえてくる笑い声を聞いていたそうなの。

「う．．．うえっ．．．うああうう．．．．．腹減ったよう．  
．．．動けないよう．．．．．なんか．．．皆楽しそうだよ．．．  
．ズツ、グズツ．．．ふえ、うううう．．．．．」

t o b e c o n t i n u e d



羽入

「秘儀、オヤシロバリアー!!!」

梨花

「あつ!!!羽入ずるいわよ!!!」

魅音

「おお!!!羽入がんばるね!!!将来的にも絶望な胸と、希望ある胸のテニス対決!!!燃えるね!」

『 OK、貴様は今、死を選択した』  
『  
『  
『  
『  
『  
『  
』

魅音

「え?あ?うつそおおおおおお!!!???」

と、言うわけでどうでしたでしょうか？

日常アリス編

雛まつりを思いついたのはGoogleのタグ?です。

次週から事件に入ろうか、と考えています。

そんなに長引かせても……ですし。

ではまた次回!!



そこで一刀が次々と武器を出し、いろんなメンバーの武器の扱いを練習していた。

隣では蒔風とアーチャーがそれを見ながら時々指導に入っている。

一刀の力は強力だが、一刀の技量がそこに追いつかないと扱いきれないものもまだある。

まあ、翼人なのですぐに習得するだろうが、何分数が多いのでこうして多武器を扱うアーチャーと、各世界での能力を見、そして翼人の先輩として蒔風が見ていたのだ。

「じゃあ、次だな。今度は何やるんだ？」

「レールガン」

そうやって一刀の手のひらにコインが現れ、それを指ではじいて宙に浮かす。

そしてそれがまっすぐ伸ばした手の先に来た瞬間

ドオン！！！！



轟音を轟かせ、熱線と化したコインが飛んで行った。  
それは三十メートルほど進んでからコイン自体が蒸発することで、  
自然に消えて行った。

「うーん・・・美琴が五十だったから、お前も行けなきゃおかしい  
んだけどなあ」

「おそらく、無駄に力が入っているのだろう。もっとスマートに打ち出さなければ、受けるのは小さなコインなのだからすぐに消えてしまうのは道理だ」

「そっかー・・・じゃあ今度は抑えてやってみるよ」

そう言っつて何発も撃っていく一刀。  
だがその調節がなかなか難しい。やはり学園都市最強のレベル5その  
第三位は伊達ではないということだ。

「はあ・・・はあ・・・これ反動もキツ」

「そろそろ休憩しようか」

「そうだな。それに、そのあと気晴らしにほかの力を試してみるもよし。私が剣を見てやってもいいぞ。二流なれども、まだ教えてえやれることもあるさ」

「バタン！！！！！」

と、そこで大きな音を立てて大訓練場の扉が開かれる。

その扉は更衣室につながっているはずだが、扉の向こうにある風景はそのものではない。

「蒔風！！ゆ・・・侑斗が・・・」

「・・・デネブ？」

「侑斗が襲われた！！助けてやってくれ！！！」

「なに！？？」

蒔風らがデネブが駆け込んできた扉の向こうを見る。

そこにあったのは、ところどころから蒸気を吹き出し、ボロボロに



時間に降り立ち、見回って、キャンディー（侑斗をよろしく！）を配ってたデネブにプロレス技を仕掛ける。いつものことを終わらせてから、また時間を走っていた。

「なあ侑斗。もうこんなに飛び回らなくてもいいんじゃないか？」

「あん？どういうことだよ」

ゼロライナー食堂車。

そこでご飯を食べながら、侑斗がデネブに聞き返す。

デネブが言うには、「EARTH」というちゃんとした部屋があるんだから、そこで暮らせばいいのに、だそうだ。

だが、侑斗はそれに対して横に首を振った。

「いや、それじゃだめだ。イメージがやってくるのは突然だ。ターミナルも見ているんだろが、こうやって常に見回っていないといつ来るかわからないからな」

「おお、そういうことか！さすが侑斗！」

「それにずっとあそこにいたらそのままブーになっちまうかもしれない……」

「おお……そういうことか……」

「って何納得してんだー!!」

「アタツ！痛いな〜侑斗〜。侑斗が言ったんじゃないか〜」

車内にて、誰も見てない漫才を延々と披露していく二人。相も変わらず仲のいいものである。

そうして床の上でゴロゴロと暴れあっていると、突然

ゴガンッ！……！

という音と共に、衝撃がゼロライナーを襲った。  
その衝撃は重く巨大なゼロライナーを一発で脱線させ、緊急停止をさせるほどのものだった。

「な、なんだ!？」

「襲撃されてんだ!!行くぞ!!デネブ!!変身!!」

ゼロノスに変身し、デネブと共に外へと飛び出して行くこととする侑斗。

だが

カン、カランカラン……ボシュツ!!

「なっ!?!」

「ぶわっ!?!」

少し開けられた扉の隙間から缶のようなモノが投げ込まれ、それから一気に白い煙が噴き出してきた。  
ゼロライナーの狭い室内は一気に真っ白な煙に覆われ、視界を奪われる。

「これは……」

「ブンッ、クッ、クッ……」

「!?!?! デネブ!?!」

「侑斗!?! うわっ!?!」

何か重いものが床に落ちた音がして、侑斗が血相を変えてデネブの後ろ襟をつかんだ。

いや、実際にはその顔は仮面に隠れて見えなかったが、その時の侑斗の顔は、デネブには容易に分かったのだ。

『ゼロライナーを切り離して「EARTH」に戻れ！！そしてこのことを……………』

「侑斗!?!」

ドオン!!!!

侑斗の声がドアの向こうから聞こえる。そして、その後に爆発音が聞こえてきた。

侑斗はデネブを掴んで、彼をゼロライナーの前部、つまりは操縦室に放り込んでいたのだ。

デネブが扉に縋りつくが、ゼロノスである侑斗がゼロライナーを切





「それでそのままここに……頼む!!侑斗を……侑斗を助けてくれ!!」

一部始終を話したデネブが、時風に縋りつく。  
隣で聞いていたアーチャーと一刀は信じられないと言った顔をしていた。

無理もない。

ある程度の上下はあれども、あの仮面ライダー、しかもゼロノスを、デネブの援護がないとはいえそう簡単に倒す者がいるのだろうか？

「場所が悪かったんだ……あんな狭い食堂車じゃ、ゼロノスの武器は大きすぎて十分に戦えない……」

「いや、いい……話しは後だ!!急いでその場所に案内してくれ……行けるか？」

「ああ!!こつちだ!!」

「オレも行く!!」

「私もついて行く!!」



「野上!!!……………」

「舜……………見てよ……………こんなの……………」

ゼロライナーが到着する頃には、デンライナーに乗った良太郎もその場に到着し、現状の酷さに言葉も無い状態だった。

ゼロライナー後部車両「ナギナタ」の真ん中上部は完全に吹き飛んで天井がなくなってしまっている。

そしてその状態で横転し、こちら側に中を見せているかのようだ。

その内部だが、ところどころからは火花が散って、そのど真ん中には何かが爆発したかのような跡がくつきりと残っていた。

「俺らが来た時にはもうこんなだったぜ」

「多分、よっぽどいきなりだったんだね。なににも残っちゃいないよ」

「ゆ、侑斗は!？」

先に来ていたため、一応この周辺を見ていたモモタロスとウラタロスに、デネブが必死になって聞いた。  
だが、二人はそれに答えることはできなかった。

「いないよ・・・見つからなかったんだ。あいつ、かなり強かったのに」

「あの侑斗に簡単に勝てる奴なんて、想像もつかへん」

と、さらに気落ちした様子のリュウタロスと、本当に今でもこの現状が信じられないというキンタロスが、侑斗どころか、手がかりも無かったと報告する。  
それを聞き、デネブは泣き崩れてしまった。

その様子を見て、アーチャーがオーナーに話しかけた。

「だが、おかしいじゃないか。遺体も無いというのはどういふ事だ?ほかに戦闘場所はあったのか?」

「いいえ。この場だけです。おそらく、ここで襲撃され、ここで・・・」

「やられたんでしょ？」

そのオーナーの言葉に、一刀が「ん？」と頭を捻る。

だったら、遺体がないのはやっぱりおかしいと。

「ここだけが戦闘範囲なら、なんで遺体がないんだ？もしそれごと消すぐらいの攻撃なら、ゼロライナーも無いはずだろ？でもあるってことは……」

「おそらく、連れ去られたか何かだろうね。だけど、あの坊っちゃんを連れ去るなんてこと、短時間でできると思う？」

「殺した後に遺体を処分したってことはないか？」

「それはないやろ。そんなん、この砂漠でどうやるんや？」

現状を見て、推測を立てていく一同。

結論としてわかったのは、侑斗は襲撃され、なぜかはわからないが連れ去られたという事。

そして、襲撃者はゼロノスを圧倒し、尚且つ連れされると言うほどの実力者だという事だけだった。

「だが・・・なぜ侑斗が狙われた？デネブ、わかるか？」

「わからない・・・だが、いつもこうやって時間の中を監視していたから、邪魔だと思われたのかもしれない・・・」

少しは立ち直ってきたのか、デネブが顔をグシグシとこすりながら立ち上がった。

なるほど、確かにここ最近、侑斗は一（時間の中）ここを見回っていた。

もし、襲撃者がこれからことを起こすつもりなら、未来過去に自由に行き来できるゼロノスが邪魔だと思っるのは当然かもしれない。

「つまり・・・」

「ああ、これから何か起こるぞ。アリス、全「EARTH」メンバーに通達。警戒態勢を敷き、いかなる襲撃にも備えろとな」

「時風！？一体それは・・・」

「帰ってから説明する。あと、地下施設のどっかにドックがあったる。あけといてくれ。これからでかいの運ぶから」

蒔風がアリスに通信で警告を出す。

「EARTH」所属の戦士に、これから何かが起こるといふ事を伝えてもらうために。

「これから……とんでもないことが起こりそうですね」

「オーナー……あなたは知っているのか？」

「いいえ？ですが……無事に終息することを……祈るだけです……」

オーナーの言葉。

そう、きっとこれは始まりに過ぎない。

だが、皆まだ気付いていなかったのだ。

もうすでに、事件はもう少し前から始まっていたという事に。



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 始まりの襲撃（後書き）

始まりました事件。

これぞ第二章の本筋です。

侑斗「二回目の事件はどうしたんだよ！」

ありますよ？

でも、その話よりもこっちの方が長いです。

先に言つとくと、第二章は先の事件が長く、後のが短いです。

ここから始まる、事件……

一人、また一人と……

さあ！！襲撃者の思惑とは一体！？

侑「オレも結局、戦闘描写すらも無く終わったからなー」

そんなことよりゴーカイジャーだ。

あーいうクロスオーバーというか大集合もの大好きだ。

最初はなんてディケイド？って思ったけど。

あとデュオデシム購入したから執筆できない……

侑「我慢しろよ」

13回目の戦いはクリアしたんですけど……クリア後の「もう一つの物語」？でしたっけ。あれが終わらない。というか性能が変わり過ぎて前作やりこんだ自分マジ涙目。

タイミングとか射程、技の性能が変わり過ぎて慣れてしまった手が憎い……

ってか！！セーブデータ引き継げるのにアイテム引き継げないってどういう事だ……！！

せっかく最強装備そろえたのに、せっかく800時間もプレイした

のに！！！

全部無駄。ゼーンぶむだ。

アヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ！！！！！！

もうどーにでもなーれ！！！！

侑「作者が壊れた・・・まあ、そんな感じだから、たまに更新が遅れることもあるかもしれない」

そうなたらスクエニのせいだ。

侑「十割お前のせいだよ」

ではまた次回



## 襲撃者、止まらず

桜井侑斗が襲撃されてから数日。  
まるでその事が嘘だったかのようになり、それ以来襲撃はぱったりと止んでいた。

「なぜ・・・なにもアクションがないんだ？」

「おそらく警戒してるんだろう。前回の襲撃は多分、二人まとめて仕留めるはずだったんだろうからな」

一刀と時風が、「EARTH」にある指令室で現状を話し合っていた。

侑斗を襲った襲撃者は、おそらくデネブも一緒に倒してしまってもりだったのだろう。

そうすれば、あの広大な時の砂漠の中だ。見つけることは難しい。

だが結果としてデネブは逃げ、事は「EARTH」全体に知れ渡ることになった。

こうなるとは、敵も手を出しにくいのだろう。

しかし、ここまでだ。

ここまで推察して、二人の考えは行き詰ってしまった。

一方、「EARTH」地下ドックでは、いまだに大破したゼロライナーナギナタの調査が行われており、何か小さな証拠一つでもないか探されている。

「あかん・・・なにも見つからへん」

「この「時の列車システム」自体も、どこの時間でどんなふうになされたかわからないんだもんねえ」

「オーナーさんの協力があっても・・・私たちではこれ以上は何もわからないわね・・・」

そう理樹に報告しているのは魏国で工兵をしていた武将、真桜と、デバイスマスターのシャーリーという、機械に強い二人だ。

さらに機械のデータを見るという意味合いで、御坂美琴も来ている。

が、その調査結果は芳しくはないようだ。

なにぶん、損傷がひどすぎるのだ。

残ったデータは軒並み破損。

回収したのはゼロライナーだったモノだけという惨状。

修理にはまだ数日間かかりそうで、走り出すかどうかは五分五分だ  
そうだ。

「そう・・・何の手がかりもないんだね？」

「そうなりますわな。こっから何かを見つけ出すのは、ちょっと無理があると思わん？」

「私も見たけど、もうなにも残ってないわよ。証拠つばいのはあったけど、多分どれもハズレね」

「こっとう時じゃなきゃ、楽しんで解析するんですけど・・・事件  
ですもんね・・・」



襲撃者の証拠はない。  
正体は依然として不明。

そう感じ取った理樹は、彼女らに礼を言ってから、ゼロライナーの修復に取り掛かってくださいと頭を下げて、蒔風に報告を入れる。

その報告を受け、蒔風が指令室のモニターを見る。

あれから、世界はなにも起きていない。  
なにも無さ過ぎるのだ。

その事が、余計に恐怖を感じさせる。

「なにが・・・起きているんだ？」

「桜井侑斗との連絡、依然として付きません」

「こうなると・・・本格的に監禁されているか、消されたか・・・」

オペレーター要員として席に座る朱里や雛里からの報告を聞き、更に頭を悩ませる時風。

と、そこに、プープープー、という電話音が鳴って、時風がその電話にでる。  
どうやら外部からの電話で、時風に聞きたいことがあるそうなのが・・・

「ああ、繋いでくれ」

「はい。三番の通信です」

その電話をここにつないでもらい、受話器のボタンを押して話し始める時風。

「もしもし。時風ですが」

『あ、蒔風？覚えてる？私よ、藤林杏』

「おお、どうした？」

『いやあね？朋也と渚が旅行に行くつているから、汐<sup>うしお</sup>ちゃんを預か  
つてるんだけど、実は……』

「うん……？……な……わかった。じゃあ汐  
ちゃんは渚の両親に預けといてくれ。ごめんな」

『はいはい。まあ、久しぶりに二人で水入らずの旅行に行つて  
るんだから、しょうがないと思っけどねー』

「まあ……そんなもんだろ」

『うんうん。よかったー。じゃあ、そつちに連絡入れとくわ。じゃ  
ーねー』

プツン

そうして会話が終わり、蒔風が受話器を置く。それと同時に、携帯を開いてあるところに電話をかけた。だが、繋がらなかったのか、もう一回、今度は別のところにかけてみるが、やはり繋がらない。

「どうした、蒔風」

「おい。今そこらへん見回って来たが、「EARTH」の周りに変な奴はいなかったぞ」

「オレたちの方も・・・どうした？血相変えて。なにかあったのか？」

と、そこに「EARTH」ビル周辺に怪しいものがないかを見てきた天道達や士達が指令室に入ってくる。その言葉に、蒔風がイラついたように身体を揺らし、たんだ携帯をダン！！と机の上に叩きつけて指令室全体に指示を飛ばした。

「全員！！各世界の主要、最主要人物だった者の安否を確認しろ！！いいか！」「EARTH」登録、非登録に関わらずだ！！！」

「い、いったいどうした」

「リストはここにある。全員の所在を明らかにしろ!!! 急げ!!!」

その言葉に、訳もかからない状態だがとりあえず蒔風がだした携帯のアドレス帳に入っている各主要、最主要人物へと、連絡がとらされて行く。

そうして、最初の報告を待つ。

それまでに、三分とかかりはしなかった。

「岡崎夫妻が旅行と言って家を出たきり連絡が途絶……娘の汐は、彼らの友人の保母に預けられているようです……」

「それは聞いた。今の電話だな……他は!？」

「文月学園の坂本雄二が、数日間学校に出てません。彼を募っている霧島翔子という同級生も同様です」

「吉井明久によればきつと彼女のキツイアプローチから逃げている

のだろうという事です……」

「バカ野郎……それで学校数日休むかよ……」

「泉こなたさんたち四人が、学校に休学届を出して旅行に出たそうですが……位置がつかめません。なお、どこの鉄道、飛行機にも、彼女らが乗ったという記録はないです」

「あいつらはまだ高校生だ……免許持ってる奴もないし、旅行なら鉄道か飛行機しかないはずなのに……!!」

「川神市の直江大和が、友人に会ってくると言って昨日寮を出てから帰っていないそうです」

「誰に会うかは？」

「誰も聞いてないようです……彼の交友関係は広いため、特定は難しいかと……」

「お、おい……蒔風……」

「まさか……これは……」

「ああ……最悪だ……完全にやられた!!!」

一連の報告を聞き、蒔風が机に両手を叩きつけて俯く。そして起き上がりながら、今明らかになったその事を、憎々しげに言い放った。

5678

「狙われてんのは「EARTH」だとかそんなんじゃない……各世界で、主要、最主要だった者たちだ!!!」

「な……」

「主要、最主要たちが……狙われている!?!」

蒔風の言葉に、驚愕する一同。

いままで、狙われているのは世界だとか「EARTH」だとかと思  
い、危機の通達を戦闘力のある「EARTH」登録の戦士のみに行  
ってきた。

だが、そうではなかったのだ。  
敵の目標は、主人公たちだった。

しかも、彼らがいなくなった時間を考えれば、それはゼロライナー  
襲撃よりも前だ。

つまり

「とつくに事件は始まってたんだ……唐突にどころじゃねえ・  
・とんだ『後出し』だ!!!!クソツタレ!!!!」

このいままで、襲撃に会っていたのは力なき者たちだった。  
なにも起こっていないなかったわけではない。何か起こっていたにもか  
かわらず、それに気付けなかったのだ。



「チクシヨウ！！！他に！！連絡の取れないものはいるか！？」

「舜君。見回り終わったよー。皆もじきに戻ってくると思うんや。だからここで……って、どうしたん？なにかあったん？」

そこに、士達と同じように、別エリアを見回っていたはやてが戻ってきた。

どうやら、ヴォルケنزとは別々に行動しているらしく、ここで合流するつもりだったのだそうだが……

「……反応が……ロスト……」

「ツツ！！どこで！！誰がだ！！！」

オペレーターの言葉に、蒔風が振り返ってその席へと近づく。

「場所は……そんな……ポイント00より、西に三キロの地点……」

「ポイント00……からだど？」

「そこ……って……」

「……」

「「EARTH」……本部ビルから三キロです……！」  
「……！」

「バカな!!!!!!」

報告に、時風が部屋を飛び出してその位置に走っていく。  
その後を士達も追うが、入っていたばかりのはやては、その場へ  
たりと座りこんでしまった。

そのはやてを、天道がとつさに支えて立ち上がらせる。

「そ……その位置……たしか……」

「……ロストしたのは……誰だ」

はやてが恐怖に目を見開き、天道が覚悟を決めてオペレーターに聞



「・・・・・・・・・・なにがあつた・・・・・・・・」

現場に到着し、時風が眩く。  
だが、それに応える者などいない。

「なにがあつた・・・・・・・・」

現場は、大通りから外れた裏道。  
ビルとビルの、広い隙間だった。

「一体ここで・・・・・・・・なにがあつた!!!」

時風が叫ぶ、だが、やはり何も答える者はいない。

残っていたのは、両側のビル壁に残った、何らかの攻撃でつけられた抉り跡<sup>えぐ</sup>。

そして、はやて達とヴォルケンス分、計八人分の飲み物の入ったコンビニのビニール袋が転がっていた。

これが示すことはたった一つ。

ついに、襲撃者が本格的に動き出したという事だった。

**襲撃者、止まらず（後書き）**

ついにあの、ヴォルケンリッターの一角までもが墜ちてしまいました！！！！

「ザフィーラ「我々がどのように負けたのかの描写もなしか……」

「シャマル「確かに私たちは戦闘向きじゃないですけど……」

大丈夫。機会を見てなんとか書くから。

「ザ「そうか……だが、襲撃してきた瞬間、俺は見たぞ」

「シャ「私も見ました！！襲撃者！！でも……」

はい、そこまで。

それ以上はダーメダーメよ？

「ザ「む、そうか……ならばその情報、この盾の守護獣が守って見せよう！！ゼエリヤアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！」

おお・・・これは鉄壁・・・

シャ「次回から、どんどんやられていってしまうみたいですよ？」  
あ、どうなるのか!!」

なんだか楽しそうだね

ではまた次回

な、なんとか間に合った・・・  
なかなかじかんとれなくて、書き始めてから二時間で何とかこ  
までいったぞ・・・

だから見直してません オイ

誤字脱字あったら申し訳ございません!!!!

## わずかな光明

襲撃者の狙いがわかった今、もはや全員を自宅などの各自離れた場所にいさせるのは危険すぎる。

その考えから、全主要メンバーが次々と「EARTH」へと集められ、戦う力のある者のみを選定し、更にチーム分けして調査に動き、移動の際には必ず「EARTH」敷地内はおろか、建物内でも複数人で固まることを義務付けられた。

しかし、ザフィーラとシャマルがいなくなった路地や、今までいなくなつた者たちの前日などを、これだけの人数で調査したにもかかわらず、襲撃者の手がかりはまったく出てこなかった。

現場には指紋や足跡どころか、毛髪の本や唾液の一滴も残っていなかったし、残った傷跡から武器の判定をしても、おそらくは意味がないものと判断された。

ゼロライナー襲撃時に使われたのは催涙ガスの缶に、手榴弾と言つた通常火器だつたし、通りに残された抉り跡は、剣によるものだけだ。ということしかわからなかつたからだ。



つまり、相手は特徴ある武器を使わない。  
どこにでもあるような武器を使って、彼らを追い詰め、連れ去ったのだ。

「……と、これが今のところわかったことだ……」

「……何一つとしてわかったとは言えないな」

「学園都市にサイコメトラとかいるでしょ？その人に頼んで、あの場を見てもらえば……」

「ダメだ。あの裏路地、意外と大通り間の抜け道になっててかなり  
の人が歩いているから、思念が入り混じってて読みとれないらしい」

「なにか一つでも証拠があれば……」

「EARTH」ビルの一角。その会議室。

円卓のテーブルに脅威に対抗出来る最高の力を持った者が集まり、  
そこで話しあっていた。

蒔風をはじめとした翼人五人。

彼ら五人が、この場に集まって今後のことを話し合っていた。

もちろん、この会議の様子は他のメンバーもモニターで見聞きしており、自由に意見できるようになっている。

「ここに集まってもらったメンバーで、チームを組んで動いてもらいたい。もちろん、ここにいない人間を含めても構わないが、「EARTH」関係者にとどめておくようにしてくれ」

『味方は多い方がいいだろ？なんでだよ』

「今、時空管理局の地上本部の機能は半分ほどしか戻っていない。ほとんどは「EARTH」で見回ってるようなもんだ。そこでこっちの主要メンバーが倒れていってるといいう情報が流れたら、どう転んだっていいことにはならないからな」

「こうしている間にも、襲撃者はこっちを狙ってきている。絶対に複数人で動くことを心がけてくれ」

これからの行動方針を、今一度改めて伝える蒔風。  
そこで一旦彼の話が終わり、次に一刀が次の話を始めた。

「じゃあ……この中にも、すでに友人や知り合いがやられた者も多いと思う、今回の襲撃事件。その犯人だけど、いまだに一切の手がかりはない」

『犯人は複数人かもしれないねえ』

「それに関しては、まだわからない。僕の方でも全部の現場と物件を見たけど、見つかったのはどこにでもあるような武器で付けられて傷と、どこにでもあるようなものしかなかった」

『じゃあ、複数人と見て警戒しましょう。今時の状況じゃ、警戒しすぎていけないという事はないわ』

一刀の言葉に、翔太郎が犯人の人数を聞き、理樹の言葉に、華琳が現状は複数犯と見て行動するように提案した。

そうして又いろいろと話していくのだが、なにぶん情報は穴だらけで、ほとんどの事項がわからない事ばかりで、進めようにも進めないのだ。

とりあえず、この場での情報交換を済ませ、最後に観鈴が各人の前にモニターを出し、今までの証拠品を一つ一つ出していった。

「一度私たちでも見てみたけど、みんなにも見てもらいたい。なんでもいいから、何か見つけたら教えてくれるかな？」

その言葉に、全員がモニターを見て写真や映像を回していくが、今までだつてかなりの人数が鑑定してきた物品だ。

いくら力があつたつて、ここにいるのはほとんどが元々はただの一般人だつた人や、まだ学生だつたりする者がほとんど。

今さら新発見などあるはずも無く、皆が首を振つてモニターを消す。

「月並みな言葉だが、皆気をつけてくれ。一体敵がどこから来るのか、今回は本当にわからないから」

最後にもう一度、蒔風が注意を促してから、今回の会議は解散となった。

と、言つても帰る場所は皆同じだ。

現在、すべての者が「EARTH」に身を寄せているのだから。

だが、そこで何もしないわけではない。

数グループが見回りに立ち、警備を強化したり、出入り口を封鎖したりしている。

だがそれと同じくらい、重要なことがたくさんあった。

衣食住の確保である。

「衣」に関しては、問題はさほどない。  
アリスがつかないだ扉で、各人の部屋に空間を繋いで持ってくればいいのだから。

5692

「住」むところは言わずもがな、ここである。

最大の問題は、「食」だ。

なにしろこんな人数。「EARTH」の食堂は全員が入るように設計はされているものの、いかにせん厨房の食材を扱う料理人の数が足りなくなってくるのだ。

更に、食料も調達しなければならぬ。

厨房には本来のシェフである津上を筆頭に、天道やアーチャー、士朗を始め、料理ができる者は全員駆り出された。

食材にも、細心の注意を払った。

「EARTH」圏内ともいえるような三キロ地点で、襲撃者は見事ザフィーラとシャマルを狩ったのだ。

ここの施設に忍び込んでいない、と考えるのはあまりにも甘過ぎる。

食材を大冷凍庫から厨房に運ぶ際には必ずチェックが入り、毒物がないかどうかを確認してから運び込まれていた。

「これは・・・大丈夫だな」

「舜さん・・・」

「ん？ハクオロさん？どうしました？」

そうして、食材のチェックをしていると、蒔風にハクオロが話しかけてきた。

どうやら、避難してきてから数日が経って、自国であるトウスクルのことが心配になってきたのだそうだ。

「確かに……それはまずいな……」

「トウスクルは安定した国だからそんなに心配事は多くないのだが、やはりな……」

「うーん……代役とか……立てられるか？」

「何人か部下は残してきている。だが……」

「今あっちにいるのは？」

「オボロとカミュが残ってくれている。アルルウも一緒だ」

「出来れば彼らもこっちに呼びたいんだがな……」

そう話しながらも、食品の手分けをしていく。

レトルトやカップ麺などの即席物から、肉、野菜、小麦などの穀物、更には調味料まで見ていく。

結果、一切の問題はなく、食事は用意された。

大テーブルに並べられる料理。

それを前にして、皆席について食事に取り掛かった。

それはもうこの人数の上に、ひとりで何人前も食べるような者もいるのだから、すごい量だ。

最初は重い空気だった者の、この食事中だけは少し軽くなっていた。

5695

「なあ、そういえば襲撃者はどうしてあいつらを狙ったんだ？」

「ん？さあ・・・」奴「のように世界をどうにかしたいのかもよ？」

「いや、そうじゃない。オレが言いたいのはだな・・・」



食事中の蒔風に、巧が話しかける。

猫舌の彼は確保した物が食べられるほど冷えるまで時間を置く必要があり、その間に蒔風に話しかけてきたのだ。

「なんだ？なにに気付いた？」

「いや・・・なんで今回の襲撃者はあいつらが主要だったり最要人物つてのに気付いたんだらうなってことだよ」

「・・・なんと？」

「だってよ、俺たちはお前に会って言われるまでそんなことわかりもしなかったし、今だって気にしてる事なんかはねえが・・・」

「あいつらがそういう人物であることを知ってるのは限られている・・・デカした巧！！！！」

「え？おい！！！！」

そう言って、蒔風が食堂を飛び出してモニタールームへと向かう。

その様子を見て、どうしたどうしたと皆が巧に寄っていつて話を聞

「じつとする。」

「ま、待て!!」

「なあ!!今なに話してたんだ!？」

「何かわかったんか!？」

「蒔風どこ行つたんだよ!!」

「ちょっと待て!!話すから・・・」

「ん?おいこれ冷えちゃってんじゃない。あつたかいの持って来てやつから」

「おい!!それは・・・」

「ほい!アツアツだぜ!!」

OTL

一気に大人数に囲まれ、更にはせつかく食べられそうになった食糧まで持っていかれ、巧は一気に落ち込んだ。



くっそ、やっぱ「こつ」なるよなあ・・・  
しょうがない。グループ分けされてるから、ひと塊ごとやるか・・・

ん？待てよ？・・・

あの手があるなあ・・・

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

わずかな光明（後書き）

こなた「今回少しだけわかったね！」

かがみ「にしても、今回は誰もやらなくなってよかったわ……」

なに言ってるんの君達。

次回ではまた何人かいくから。

こ「おお、そうでなくっちゃー！」

か「不謹慎でしょ……」

こ「なに言ってるんのさかがみん！こは後書き。あっちの私達とは関係ないですよ」

その通り

この後書き空間は無限に満ちているのさー！……！

か「はいはい。次回、襲撃者、その手口」

こ「どうやって連れ去ったのかわかるかもよ!!!」

ではまた次回

## 犠牲を払って得た情報

蒔風の事務室前。

そこに、理樹と一刀がやってきていた。

コンコンとノックして、返事があったので部屋に入る。

「舜……大丈夫か？」

「ああ……」

そう言って、眠そうな声を出して蒔風が答える。

ここ数日間、蒔風は報告があるたびに飛びまわり、戻っては調査し、また飛んで行つての繰り返しだ。

疲れも、かなり溜まっているのだろう。

しかも、そこまでやっても、いまだ手がかりなどなにも無いのだ。



あの日

巧の一言で光明の見えた蒔風だが、次の日には意気消沈して会議にあらわれ、なにもわからないと言だけいつてすぐに部屋を出ていつてしまったのだ。  
それからの現状はひどかった。

まず、威吹鬼と轟鬼が消えた。  
こんな状況でも魔化魍は倒さねばならず、その帰りに消息が途絶えた。

次に、北岡秀一が居なくなった。  
弁護士である彼は自宅に秘密度の高い書類が多くある。

その整理に何人かと一緒に家に戻って、ものの五秒。  
その間に消えていた。

鏡は割られ、書類が散乱していたそうだ。

更に、神北小毬、能美クドリヤフカ、西園美魚、朱鷺戸沙耶が、三  
原修二と海堂直也と共にまとめて消えた。

主に調査に当たっていた彼女らと、それを護衛していた間の出来事  
だった。

だが



を向ける。

「これは先日、「EARTH」の衛星写真が捉えた映像だ。時間は、海堂たちが消えた時刻。見ていてきつい者がいたら、退出してもらって構わない・・・再生するぞ」

そう前置きして、クラウドがモニターを再生させた。そこには悲劇しか映っていないとしても。

ビル群を真上から捕らえた映像。

時間は夜遅く。暗い映像だが、人の動きくらいはつかめそうだ。

その中に、白いブロックがいくつも並んでいる。この場合、白いブロックは上空から見たビルの屋上だ。

その間、この場合では裏通りを、三人の少女と一人の男が走っている。

どうやら、三人を一人が守りながら、何かから逃げているようだ。

そして、その一瞬後、その四人が出てきたビル一階から煙が噴き出し、白い光が立ち上って、そこからバトルモードのサイドバツシャーが吹き飛んできた。

これは衛星映像なので、音は録音されていないが、きつとそれはすごい音だったのだろう。

三人の足が止まり、一人が止まらないようにと彼女らを促す。

だが、その一瞬のうちに何か白く細い光が美魚とクドを打ち抜き、小毬に迫ったそれをデルタが何とか弾く。

撃たれた二人は倒れ込んでいくが、瞬間、光が柱のように立ち上ってから消え、そのまま消滅してしまふ。

それを見たデルタはジェットスライガーを呼びだしてその場から退避しようとするが、デルタの足元が爆発し、彼もまた光になって消えた。

そして、小毬はそこから一步も動くことも出来ず、程なくして光となって消えた。

「これが……先日、ここで会ったことの一部始終だ……」

「真上からの映像でわかりにくいところもあったただろうけど、大体何があったのかはわかったと思う。で……だ」

辛そうに呟くクラウドの後を、一刀が引き継いで話していく。

「この映像は、今回の事件で唯一残った証拠。どれだけ解析しても敵の姿は出てこなかった。だけど」

一刀がコンソールをいじってある一場で映像を止める。

それは、彼らは光となって消滅した瞬間だ。

彼らを包むように光が立ち上り、そして細くなって消えていった瞬間だ。

その瞬間の映像を停止させ、五人分を映し出す。

「見てもらってわかるように、彼らは倒された後にその場から消滅している。これが、今まで遺体もなにも無かった理由だ」

そして、その映像を拡大していく。

「で、これが拡大映像。荒くなっててわかりにくいと思うけど、ここを見てくれ」

そうやって一刀が射すのは、光の中心。

そこに、なんだかよくわからない黒い点があった。

そしてそれは、それぞれの光に一個ずつ、しっかりと存在していた。

「で、だ……これが最大拡大映像」

そう言って、めいっばいまで拡大した画像を移す。

だが、これでは粗過ぎてもはやただの抽象画みたいになってしまっている。



「そして……これを解析すると……」

その粗い画像が、徐々に鮮明さを取り戻していく。  
その黒い点の正体が明らかになっていく。

それは、四角くて、薄い何かだった。

片面には顔らしきもの、裏面には何かのマークがついていた。

「これは……」

「これは……ディケイドやディエンドの使うライダーカード  
に酷似しているものだ」

会議場にざわめきが走る。

ならば犯人はディケイドたちなのか。

確か彼は「破壊者」という呼び名だったはず。ならば本当に？

一気にざわつき、士たちに視線が向く。

ユウスケは待つてくれと周囲を落ち着かせ、そんなわけないと叫んでいる。

そんな中、士は冷静に立ち上がって、意見を述べた。

「俺や海東じゃない。俺たちはあいつらが襲われたとき、グループで一緒になった連中と一緒にいたからな」

そう、士たちにはれっきとしたアリバイがある。

それに、蒔風自身も、彼がやったとは思っていなかった。

「士は過去、すべてのライダーを敵に回して戦ったことがあるが、今回はそれをする意味が全くない。別に・・・世界は平穏なのだからな」

「?・・・蒔風？」

一刀が蒔風が一瞬間を空けたことに疑問を感じたが、頭を押さえてぐらつく彼を見て、疲れているのかと思い、大丈夫かと声をかけた。

「大丈夫だ・・・ちょっと無理しすぎただけだから・・・で、今回の敵は、おそらくディケイドやディエンド・・・いや、この場合はディケイドだけだな。そのライダーシステムを利用しているか、所持しているかだろう」

ディケイドがライダーをカードに封印していくことができたのは、そのライダーを倒し、三次元での存在を破壊して二次元に押しやってカードにしていたからだ。

おそらく今回の敵は、大シヨッカーが開発したその「破壊機構」を利用したものか、ライダーかである、というのか最終的な考えだ。

「もしディエンドタイプなら・・・封印した奴らを解放して戦わせてくるかもしれない。ディケイドタイプなら、封印した奴らの力を使って攻撃してくるかもしれない」

「たしかに、これは厄介極まりない・・・だが、これならまだ希望はある」



会議の後。

一刀が退出した時風を呼びとめて声をかける。

その隣には、理樹も一緒だ。

一刀が訊いたのは、先日、巧からのヒントで調査をした時風がなにもわからなかったのは本当なのかと。

「本当に何もわからなかった。情報がつかめない……なんだ？  
疑ってんのか？」

「そうじゃない。だけど、みんな不安なんだ。こんなに連続でいなくなっていくて……」

「まだ短いけど決して知らない間柄じゃないし……ねえ、本当に……」

一刀が悔しそうに拳を握り、顔を俯かせる。

理樹は時風なら何かきつと掴んでいるだろうという期待を込めて、それでも顔を見れないでいた。

わかっているのだ。  
こんなものが淡い期待だと。

敵の情報はまだ少ない。

「大丈夫だよ。すぐに終わらせてやるから」

「……そんな気休め……」

「終わらせる」

蒔風の言葉に、ついそんなことを言ってしまった理樹だが、それを蒔風が断じた。

必ず自分が終わらせると。

「なあに。形はわかってきてる。あいつらも死んだわけじゃない。だったら……救いだしてやるさ……!!!!」

蒔風の目が静かに燃える。  
決して、揺るがぬ、その想いを燃やして。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

**犠牲を払って得た情報（後書き）**

小毬「ふえ〜、や、やられちゃってるよお」

クド「小毬さんッ、小毬さんはまだ最後まで入れたからいいのです！」

美魚「そうです、私と能美さんなど、何があったのかもわからず消えたのですから」

と、言うわけで被害続出。

蒔風は何も分からず、しかし、情報は得ていく。その情報の代価はあまりにも大きいが……

と、言うわけでようやく投稿です。

理由はいわずもがな、あの地震です。

地震発生時刻、自分はバイト先でした。

最初はすぐに収まるかな？と思いましたが、どうも収まる気配はあらず、更に大きくなっていくばかり。

ついにお店の外に避難してしまっ。



ですが、大変でしたよ。  
バイト先には高いビルもあるのですが、そのビルらまるでこんなにや  
く揺らしてるみたいにゆらゆら揺れるんです。  
あれはぞっとしましたね。

そのまま電車が止まって帰れなくなりました。  
バイト先で止まって、朝一の始発で帰宅。

心身ともに疲れ果てました……

テレビは見れなかったなので、家に帰ってから惨状を目の当たりにし  
ましたね。

自分は神奈川ですが、東北地方、および被害の甚大な地域にお住ま  
いの方、気をつけて、そしてがんばってください。

事態が落ち着くことを、心よりお祈りしております。

小毬「次回、迫れぬ時風」

美魚「そして、犯人に迫っていくのは……」

クド「あ、あなたを犯人ですッ！」

美魚「能美さん、それは違いますよ？」

ではまた次回

裏と表　そして……

相手の力の片鱗が見れてから三日。  
蒔風は今、外を一人で回っている。

指令室では、理樹がディケイドやディエンドの「破壊機構」が始動された時の波長をモニターで監視している。

ただ単に物を破壊するならともかく、「三次元」などという実体のないものを破壊して二次元に押し込めるには、それなりのエネルギーが発生するはずだ。

その発生に即時対応できるよう、こうして動いているのだが……

「舜君……大丈夫？」

「……なのはか……ちょっと眠いな」

そうしている時風に、別の個所を回っていたなのは達がコーヒーを持ってやってきた。

彼女も精神的に疲労しているのか、あまり優れた顔はしていない。

「ヴィヴィオは？」

「この事は知らないよ……その方がいいでしょう？」

「ああ……知らない方が……いいな。はやては？」

「部屋で休んでる。ザフィーラたちがいなくなったのが、堪えたみたいで……」

「それも……そうだな」

そう言って、会話を終わらせる時風。

もう彼の意識は別の方へと向いている。

動いているのはここだけではない。

翼人は常に四人動き、一人は休息を取っている状態だ。  
そのうち、三人は外を回り、一人は「EARTH」本部内に必ずいるようにしている。

今はクラウド、一刀、時風が外に出ている、観鈴が休息、理樹が本部待機状態で、そろそろ外の見回りを観鈴と変わる時間だ。

『舜さん、交代だよ』

「ああ……じゃ、オレは本部に戻ろうかね。理樹を休憩させてやんなきゃ」

「舜君！」

「なんだ？」



翼人の前で、嘘はばれる

感情を感じとれるからね

だったら、どついう事だ？あいつは嘘をついている？

わからない……

調べてみよつよ

よし、オレがやるつ

.....

時風が、モニター端から端まで見渡していく。  
どこもすでに見たが、それでも見ていく。

















「たどり着く直前に天に昇る光が五つ見えて……最悪の場合が浮かんだが、その通りになってしまった」

「恭介……が……?」

「華琳もかよ……!!」

集まった翼人達が、現場を見ていく。

観鈴は「EARTH」で待機してもらっているので、ここにいるのは四人だ。

他のメンバーは本部に戻らせた。  
もはや、調査などとは言ってられないかもしれないからだ。

「何一つとして証拠がないな」

「それどころか……戦闘の跡も無い」

「そんなことありうるのか?」

そう、この現場は、一切の破壊の跡がなかったのだ。  
メンバーには重量級の季衣と瑠璃がいたにもかかわらず、壁や地面は綺麗なものだった。

「しかも、証拠がなにも無い？あの恭介と華琳がか？」

「あの二人なら、どうにかしてなにかでも残そうとするはずなのに……」

クラウドと一刀が驚愕する。

知能において、かなりの高さを要するあの二人だったら、何らかの方法で証拠を残せたはずだ。  
だが、それがない。

そうしようとした跡も無い。

「相手が一瞬で片付けちまったんだろ……なにも残す間もなく……」

「本当にそう思つか？」

「西園とクドがやられたとき、誰も気づかぬまま一瞬で撃ち抜かれ、



三原がガードできたのもその後だったからだ。そんなのを一気に撃たれたら……」

蒔風がとつとつと語っていく。

おそらく、相手は絶対の機会を見逃す気はもう無いのだろうと。

「本部に戻ろう。全員に伝えなきゃならん」

そう言って、この場での調査を終える蒔風。

四人が去った後には、本当に何も残っていなかった。



そして、普通に正面の扉から普通に出ていった。

エレベーターに乗り、三階に降りた。

そこから、吹き抜けロビーの、湾曲した壁側の通路を歩いて、下に降りる階段に向かい

「待て」

呼びとめられた。

男の声だ。

気配からして、翼人。

だが、待つことなどない。

男はそのまま出ていこうとする。

だから、名前をつけて、翼人は呼びとめる。

「名指しで呼んでやるのか？待て」

名前が呼ばれる。  
男が振り返る。

後ろ向きだった男が、こちらを向いた。

t o b e c o n t i n u e d

裏と表　そして……（後書き）

あれ？おかしいな。なんだか次回で分かっけてしまいそうですよ！？  
犯人！！

華琳「どうやら私たちのメッセージに気付いたようね」

恭介「にしても、あれはやばかったなあ……」

五人一気にだもんね。

ちなみに、最後の「男」のイメージとしては、コナンの犯人みたいな感じで。

全身真っ黒！

にしても、頭がいたい……

喉がひりひりする。

体が重い……

一体どういうことだろうか？

風邪みたいな症状だが、おそらく違っただろう。  
だっバカだから。

それっばいだけであって、きつと風ではない。

このことを友人にメールしたら「そうだな。お前はバカだ」と言われたから間違いない。  
これは風邪ではない。

一体どういう事なのだろうか……

恭「寝てる」

華「次回、ついに犯人発覚よ。まったく……よくここまでやってくれたわね！」

恭「ああ、だが事件は終わらなそうだけ？」

ではまた次回

襲撃者VS漆黒& amp・蒼青

通り過ぎようとしたその男に、翼人、クラウドが名指しで呼んだ。

「待て……………シユン」

呼ばれた男は、時風だった。



そうして、呼ばれた男、時風が立ち止まり、こちらに振り返った。

「・・・なんだよクラウド。今からオレあ家帰って寝たいんだ・・・わかるだろ？疲れてんだよ。冗談は・・・」

「冗談ではない」

迷惑そうに答える時風に、クラウドが厳しく言及する。

その一言で、時風の目付きが鋭くなる。

「なんだよ・・・俺をそう言っつてことは・・・言っなら、証拠はあんのか？」

時風の言葉。

それに応えるように、クラウドが懐から一枚の紙を取り出した。

何かのリストをプリントした物のようで、そこには多くの者の名前がずらりと書かれていた。

そして、クラウドがそのリストのタイトルを読み上げた。

「「襲撃リスト」……このデータが、お前のパソコンの中にあつた」

「……どーやってだ」

「ミサカが手伝ってくれた。膨大な量の情報データから、頑張つて引き抜いてもらったものだ」

その言葉に、時風が参ったな、と言った感じで頭を搔く。

「それはなあ……狙われていくだろう人間をリストアップしたもので、決してこれから襲おうというものではないよ。メンバーを掌握するには必要だろう？」

「では……この消された欄はなんだ？これは……」

「いなくなってしまった奴らをリストからなくしていった……それだけだ。見やすいだろう？」

そう言って、蒔風がクラウドからリストをひったくる。  
そして、くしゃくしゃに丸めた後に、そばのダストシュートに捨てた。

「じゃあ……もういいか？オレは本当に疲れて……」

「まだ話は終わっていない!!」

ジャキッ!!!!

ザザザザザザザッ!!

クラウドが後ろを向いてその場を去ろうとする蒔風の背に剣を向け、更に蒔風の周囲には数人の「EARTH」メンバーが逃がさないように取り囲んでいた。

「お前を相手取るとして、オレ一人で来ると思つか？」

「……………で？」

蒔風がクラウドに振り向いて、話を進めていった。

「たえそうだとして…………オレはあいつらが襲われたとき、本部だったり、誰かと一緒だったりとアリバイがある。なんでそんなオレが疑われなきゃならないんだ？」

「……………」

その言葉に、その場の全員が閉口する。

そうだ。確かに、クラウドからの話を聞いてこうしてきたものの、確固たる証拠はまだわからない。

だが、クラウドは蒔風を肩を並べる翼人なのだ。きっと何かを掴んでいる。

そう信じて、彼らはこうして蒔風を取り囲んでいる。

「おいおい……お前ら、オレが本当に……やったと思っ  
たのか？」

「……信じたくはない。だが、そうである可能性がある以上、  
看過はできない」

時風が周囲に聞き、愛紗がそれに応える。

その意見に、時風は言っておきながら見事だと思った。  
たしかに、その通りだ。疑うべきは疑い、そしてそれを晴らせばい  
い。

「なるほどね……でも、オレのアリバイは？どついう事になる  
んだ？」

だが、そう。

その問題が残っている。

皆が黙る。時風が待つ。

そして、クラウドは口を開いた。

「……わかった。行け」

「クラウド殿!？」

しかし、クラウドはそう言って剣を下ろしてしまった。  
その行動に、時風が肩をなでおろして安心する。

「疑いが晴れてよかった。じゃあ、オレは……」

「最後に、一つ言いか？」

その場から時風が一步步歩いて、クラウドが最後だと言って質問する。  
まあ最後ならと、時風も振り返ってその質問を聞くこととする。

「なんだ？・・・これでもう三回も振り返ったんだ。四回目は無しにしてくれよ？」

「四回目はない。そもそも、蒔風は振り向いていない」

「は？」

「蒔風はどこだ、青龍。今すべに呼んでもらおうか」

クラウドの言葉。

その言葉に時風の周囲を囲むメンバーからどよめきが起き、時風（？）は目を見開いた。

「お、おいおい……そんなことは……」

「気付いてないなら教えてやる。さっきから口調が出ているぞ。いきなりの事で動揺したか？」

「!?!?……いや、これは……」

明らかに狼狽する時風（？）



だが、そこにクラウドは追い打ちをかける。

決定的な証拠として。

「もしお前が時風なら……十五天帝を出してみる。すべてだ」

「ッッ……」

その言葉に、息詰まる時風(?)

ほとんどチエックメイト。

もう、彼に逃げ場はない。

それでも何とか言い繕おうとするが、最初の一言を言っただけで、もう無駄だと察したのか、黙ってしまふ。

そこに

「もういいよ、青龍。全部わかってるみたいだ」

頭上から声がした。

このロビーは吹き抜けで天井まで四階の高さがある。

そこの高い天井から、声がした。

皆が一斉に見上げる。

その天井を走るの丸い鉄柱に、時風が腰かけていた。

そして、囲まれている時風改め青龍の横に飛び降り、彼の肩をポンと叩いた。

「……すみません」

「しゃーない。よくやったよ。戻っとけ」

時風の言葉に、青龍が剣に戻って時風の脇に消える。

それを見て、全員が絶句した。

まさか本当にこの男が、この人が、この翼人が敵なのかと。

「……さ、てと……いや、クラウド、これはな？オレが狙われた場合の保険で……」

「そんな戯言はいい！！なぜやった！！！！」

この期に及んで、いまだにシラを切ろうとする時風。だが、それを断じるクラウド。

その言葉に、諦めた感じの目をして、時風が訊いた。

「どこから気付いた？」

「発端は・・・お前がいろいろときっかけを掴んでいながらも、なにも発見できていないという事だ。今まで色々な情報が集まったのは、総てお前からではなく、他のメンバーからだった」

「で？」

「そして、決定的だったのは・・・華琳と恭介がやられたあの現場だ」

「？証拠はなにも無かったが？」

「それが、彼らのメツセージだった」

「どういうことだ？」

「あの現場には何もなかった。だがあの時言ったように、あの二人がなにも残さないのはおかしい。つまり、彼らは“残せなかった”んじゃない。“残さなかった”んだ。自分たちがいくらか策を講じ、どんな証拠を残しても、それは襲撃者に消されてしまう。だから何も残さなかった。戦闘もしなかった」

「……………」

「自分たちを襲った相手は、抵抗することも無駄で、勝つ見込みも無く、どんなものを残したところで消されてしまうような、圧倒的な力の持ち主だという事だ！！そしてそれをいきなりできたのは、襲撃者が知り合いだっただという事だ！！！」

「それが……結論か」

「そつだ……否定は？」

クラウドが、ここまで言っただけで最後の望みをかける。  
もしかしたら、彼には何か理由があるのか、それともこのように陥  
れられたのか、と。

だが

「よくできました。大正解だ！さて・・・どうしましょうか？やっ  
とたどり着いた、強大な敵が目の前にいるぞ？」

時風は笑った。

そう、それはまるで、ついにたどり着いた最後の敵。ダンジョンの  
奥で待ち構えているような、魔王のように。

その顔は、悪に染まったように嗤い上げていた。

「それがわかってたんなら即捕まえることだ。こんなに標的集めてくれて、感謝するぜえ……！！！！」

「ッ！？全員離れ……」

ガオンッッ！！！！

クラウドが全員に引くように指示を出す、それよりも早く時風が突っ込んできた。

それを剣で受け止めたクラウドだが、三階ロビー外枠の通路などいう狭いところでは受け止めきれはるはずもなく、ガラスのフェンスを突き破って一階にまで落ちて行った。

「グオツ!？」

「俺だからって油断してんじゃねえぞ?」ここにいんのはてめえの敵  
なんだからよオ!!!」

蒔風が剣を構え、両腕を広げるようにうち広げる。

それによって、クラウドが握っていた剣が両手とも弾き上げられ、  
胴体が無防備になる。

そしてその腹部に、蒔風の打滅星が一撃、ド真ん中に打ち込まれた。

その衝撃にクラウドの体は壁にまで突っ込み、たたきつけられる。

「ガ……ア……」

「おいおい、真面目にやってくれ。このままじゃあ……終わっち  
まうだろっ!？」



そのクラウドに、蒔風が「獅子」を握って歩み寄り、その首に向かって振り下ろした。

だが

ゴッ、バガアッ！！！！

クラウドがもたれかかっているその壁の向こうから、幾本ものの剣や武器が突き出してきて蒔風に対してカウンターのように攻撃してきた。

その無数の剣に蒔風は「獅子」を盾にし、その「獅子」を足場に反転、後ろに下がった。

「ツツ……！！？」

「舜ツツ！！！！」

そうして何とか体制を整える時風だが、壁の空いた穴の向こうから一刀が突っ込んできて、時風の背後に一瞬で回り込み剣で切りかかってきていた。

無論、それ自体は難なく受け止められてしまったが、時風の動きを止めることには成功していた。

「本当に・・・本当にお前がやったのか！！！」

「めんどくせーなア・・・言っただろ？それとも、まだ夢見てんですかア？」

そう言って、剣を握る手とは逆の手で懐をまさぐり、時風が何かを取り出す。

それは、カードの束だった。一番上には、華琳の姿が書かれていて、さらに数枚、同じようなものが今まで襲撃された人数分あった。

それを見せて、一刀の目が見開かれ

時風の口元がギチリと醜悪に歪んだ。



「ご主人様!!」

「愛紗!! 危険だ、今すぐここから……」

「離してくださいクラウド殿!! 私は……私は!!」

今「EARTH」本部には彼らしかいない。

もしやと思ってクラウドが全員をここから帰していたのだが、それはどうやら正解だったようだ。

最後まで残ろうとした愛紗を無理やり引っ張って、クラウドも最後に本部を飛び出す。

5763

「なぜ……何故だ、シユン!!」

そう叫びながら、愛紗を抱えて空から「EARTH」本部を見るクラウド。

周囲には同じように、何人かが残って見届けようとしている。

その、数秒後

一階から四階、吹き抜けになっているエリアが銀白の光で満たされ、それが消えた瞬間、「EARTH」本部が揺れた。

すべての窓ガラスが一斉に割れ、衝撃が一気に最上階にまで登ってから、すぐに最下層まで下がり、更に地下にまで突っ込んでいった。大地が揺れ、ヒビが入る。いたるところが隆起し、陥没し、深い振動音と共にビルを損壊していく。

そして



その言葉に、釈然としないまでも従って離れていくメンバー。

「ご主人様……一刀ッ!!」

「暴れるな……ここではもうどうしようもない!」

クラウドが一刀の名を呼ぶ愛紗を連れて、その場を離れる。

その後ろでは剣山の隙間から銀白の光が漏れだしてきて、その一瞬後に薄氷のように剣山が砕けた。

その中心に立つのは、服が千切れながらも一枚のカードを手に持つ  
時風。

表には一刀の姿が、裏面には十文字のマークが描かれていた。

「さて……まだ急げば追いつくな。何人かここで……」

そう言って、逃げていくものを追いかけとする蒔風だが、その足が止まる。

理由は簡単だ。目の前にそれを止めようとする者が立ちふさがったからである。

「なんで……なんでおにーちゃんをやったのだ!!!」

「舜……もはやあなたは、私が止めます。他の誰にも、止めさせません」

蒔風の前に、鈴々と星が立っていた。

その顔にはそれぞれ怒りと悲しみが込められていたものの、明らかに敵意が存在していた。



「……はあ……」「ねじゃあいつら逃がしちゃまっじゃん……  
・退け」

「断る……！」

瞬間

クラウドは後方で、もう一度光が空に昇るのを見た。

それも、二本。

「全員……聞いてくれ。今回の敵は……『時風舜』だ」

通信を以って、クラウドが通達する。

その反応は様々だが、こうして、戦いはついに切って落とされた。

「敵は、世界最強。世界と戦うつもりで行け……!……!」

銀白、破滅の光とならん

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

襲撃者VS漆黒& amp・蒼青（後書き）

さて・・・犯人発表です！！

一刀「まさかの蒔風！？」

ふっふっふ。

この戦いを思い描いたのは言わずもがな。デイケイドです。

一「じゃあ・・・蒔風にも何か思惑が？」

さあ？

そこはまだ明かしませんが。

一「にしてもオレが最初の翼人脱落者かあ・・・」

これは予定通りです。

さて・・・次はだれを蒔風とぶつけようかな！！！！

「次回、本当に時風か？」

ではまた次回

## 銀白VS剣&夜天

ミッドチルダ郊外にある、八神家宅  
その家に、数人のメンバーが集まっていた。

現在、「EARTH」メンバーは様々なところにバラけており、  
時風によって一気に殲滅されるのを防いでいる。  
そして、今は通信を使って全員と連絡を取り、時風の戦力を検討し  
ていたところだ。

各世界でいろいろな力を見せてきた時風だが、一つの世界で見せた  
力はそう多くはない。  
そのために、こうした情報のやり取りが今はとても重要なのだ。

『シユンの力は分かった』

『戦力としては・・・彼の武器、「十五天帝」に、その使役獣「七  
獣」』

『そして固有結界「イマジナリレイ・ワールドエンド心象的世界破壊」』

『あとは炎とか雷とかの力に・・・願いだね』

「願いの力は使えないんじゃないか？こうして敵になった以上、俺  
たちの「願い」は使えないだろうし」

現在、蒔風は願いが使えない。  
なぜならば、彼のために願ってくれる味方がいないからだ。

だが、それでも翼人。まだ強い。

この世界で皆が一つに集まったことで、もともと借りていた力は失せていたが、これではつきりとそれは消えた。

「だったら総攻撃でつぶしてしまえばいいんじゃないか？」

『無理だな。固有結界は周辺の世界を丸ごと飲み込む。聞いただけの性能では全員を飲み込んだところで一秒と持つまい。だが……』

『あの性能なら「全員を一気に攻撃」や、下手をしたら「全員を撃破」などということも可能になりかねない』

そう、だから彼らは総攻撃を実施できなかった。

そうしたこと、全員が一気に全滅してしまうことだけは避けたかったからだ。

まあ、彼の固有結界で「全攻撃」はできても「全殲滅」はできない

ので、考えすぎということもあるのだが、それでも危険度は変わらない。

ちなみに、現在八神家に集まっているのは現存する八神家一同、それと、剣崎たち四人のライダーたちだ。

戦力をバラけさせたほうがいいという、理樹の考えで、こつやつて一点に集中しないようにしているのだが・・・これは襲われたときにやられてしまうというデメリットがある。逆に言えば被害が少なくて済むということにもなるのだが・・・

『あれが蒔風でない、という可能性はないか？』

『・・・・・・・・・・「奴」か？』

『そうだ！！「奴」ならば蒔風に化けることもできるはず・・・  
だったらー！！』

『それはない。一刀の最後の攻撃。あの剣山の中に、蒔風の十五天帝はなかった。つまり・・・』

「蒔風との絆はもうないということか・・・？」

『そう。残念だが、あれはオレたちの知る蒔風だ。化けただとか、乗っ取ったとかでは、青龍を使役することはできないからな』



そうして話が一通り終わり、最後にクラウドが入手した時風の襲撃リストを皆に送って、話し合いは終わった。

「これから……どうする？」

「リストの中には天音ちゃんたちはいなかった。彼女が無事なら、あとは気兼ねなく俺はあいつを倒すだけだ」

「待てよ。あいつのリスト、なんか変だったじゃねーか。主要だとか最主要が襲われるってのに、ヴィヴィオやユーノは入ってなかったじゃんか」

「そう、それが気がかりだ。高町やテストロッサ、我らは入っていないながら、同じように主要であったものが入っていない」

「私やアリシアも入っていたのに……不気味ですね」

「関係あらへん」

「八神？大丈夫か？」

と、話を進める剣崎やヴィータたちの中に、はやてが入っていく。家族を失ったシヨックと、信頼できた人物のまさかの裏切りに寝込んでしまっていた彼女だが、少しは氣力が戻ったのかふらふらと近づいてきた。

「大丈夫や・・・とにかく、舜君は・・・あいつはもう敵になったんや。それをうちらは・・・倒すだけや」

「・・・復讐か」

はやての状態から、冷静にその心境をくみ取った始が、立ち上がったその原動力の名を言った。

その言葉に、はやてが皮肉気味に笑ってから、そうやなあ、と頷く。

「復讐・・・と言ったらそうなるのかもしれない。うちの家族を二人も奪つといて、それでもほかの家族を・・・仲間を奪つとるなんて許さへんし」

「・・・辛いぞ？」

「それでもかまわん。うちは・・・家族を返してもらおう。そのためなら・・・しゃあない。舜君を・・・倒す。それしかあらへん」

はやての決意。

敵として立つのなら、もう容赦はしないという、その覚悟。

その少女の思いに、今さら異を唱える者などいなかった。

「まあ、確かに・・・蒔風が敵になったのはショックだったけど、みんなをやるなら容赦はできないな」

「私は最初からそのつもりだった。蒔風は味方だったが、同時に敵になる危険も帯びていたのだからな」

「そういや・・・シグナムそんなこと言ってたっけな」

「あいつの中は「混沌とした虚無」と呼ぶのが相應しいくらいだ・・・何が起きてても、おかしくはない」

そう、彼はいつだって敵にもなるし味方にもなる。

今までの味方だったというだけ。

そして今、敵になったというだけだった。

と、そこに

前触れも前兆も無く

ピンポーン

というインターホンの音が鳴った。

その音に各人が肩を振るわせた。  
一体誰だ？

昼間だから誰が訪ねてきてもおかしくはないが、この状況では・・・

そう思って、睦月と橘が、玄関の覗き穴から外を見る。

だが、そこには誰もいない。

瞬間

ガオンッ、ドオン！！！！

リビングの窓ガラスが吹き飛び、そこから時風が突っ込んできていた。だが、その獅子天麟を構えての進行は、シグナムとヴィータ二人掛かりで食い止められ、その切っ先が他のものに届くことはない。

「ツツ!!!!!!」

「時……風ッ!!!!」

「あちゃあ……無理か。まあ？行けるとも思ってたがなッ！」

そう言って、獅子天麟から手を放し、腰の「風」「林」を回転しながら抜き、周囲を一気に斬り伏せる。それをスウエーで必死にかわす二人だが、胸の位置に一文字の切り傷がぱっくりと開く。

皮膚には至ってないようだが、外装の鎧やフリルは切り落とされてしまった。

それを見て、一気にたたみかけようとする時風だが、同時に、このまま室内戦をしてはやられると察したシグナムが、己の剣に魔力を込める。

「レバンティンー!!」

《Schlangenform》

レバンティンを連結刃にし、一気に展開。

球体状に膨れ上がったそれは、家屋の一部を吹き飛ばしながらも、味方を守りかつ、敵を押しつけさせることに成功した。

「ここじゃ周囲の住宅に被害が出るかもしれん……ここから少し言ったところに森がある。そこまで誘導してや!!」

「おし!!行くぞ!!変身!!」





だが、それでもいい。  
こちらにはまだ、戦力がいるのだから。

《BULLET - FIRE - RAPID - - - BARRINGSH  
OT》

ドンドンドンドンッ！！！

上空から、時風に向かって炎の弾丸が降り注いできた。  
それを剣で難なく弾く時風。

見上げると、ジャックフォームへと変身したギャレンが武器を構えて滞空していた。

「いきなりジャックか!!」

「お前相手に、手加減はできないからな!!!!睦月!!」

《BLIZZARD》

ギャレンの掛け声と共に、レンゲルがカードをスラッシュし、「ポーラーブリザード」で時風の足元を凍らせる。

この程度の氷は時風にとっては足かせにはならない。だが、コンマ数秒の足止めくらいにはなるのだ。

5785

「今です!!!!」

ギャギン!!!!

そうして、足元の止まった時風を、シグナムとブレイドキングフォームの剣が首元を狙って雑がれ、交差する。

それをしゃがみ込んで回避する時風だが、リインとユニゾンしたヴィータによる下からのアッパー気味に振るわれてきたアイゼンの一撃をくらい、上空にまで弾き飛ばされる。

そこで

「遠き地にて……闇に沈め……」

「ツガツハ！……！？」

「デアボリックエミッション……！！！！」

「グアあ！？」

ドオオン……！！！！

リインフォースとユニゾンしたはやてが、時風に渾身の一撃を叩き込む。

しかし、一同は一切終わった、などという感情は抱けなかった。

その黒煙の中からは、いまだに恐ろしいまでの殺気が噴き出している。

「休ませたらあかん!!! 攻撃を続けるんや!!!」

「翔けよ、隼!!!」

《WILD》「オオオオオオオオ!!!」

シグナムとカリスが、その弓状の武器に力を込め、それを一気に射出して時風を貫こうと弦を引く。

その間に時風は黒炎の中から降りてきて着地、その二人に迫るが、

もう遅い。  
ギャレンとはやてが蒔風の足元を射撃と魔法で吹き飛ばし、彼の視界を奪ってから、二人の矢が放たれた。

ド、ドンツ！！！！！という空気の壁をぶち抜く音して、土煙の中の蒔風に向かって矢が飛んで行く。

だが、それと同時に、否、その一瞬前に、蒔風もまた、動いていた。正確には、はやてとギャレンが蒔風の足元を吹き飛ばした、直前。

蒔風が、白虎を釵にして投げ放っていた。  
釵という武器は、見てみればわかるが原則的には違うものの、三又のような形をしている。

その三本の突起。  
今投げた白虎釵の片方は、その三本のうち、外側の二本が180度反転していた。

つまり、「返し」である。



「なッ!?!」

「睦月ッ!?!?!」

周囲の人間も、小さな釵に気付かず、レンゲルが引っ張られていつから始めて気付いた。

その体が、一気に時風の元へと吹っ飛ぶように引き寄せられて、そして

ゴゴオッ!?!?!?!

そして、二人の矢が発射された。  
だが、それが命中していないことははっきりしていた。











そんな状況で、もはやはやては限界を超えてしまった。

全身が黒く染まり、身体に紋様を走らせ、かつて暴走した時のように、身体がリインフォースのように変わっていく。

『いけません！！主はやて！！それ以上は・・・アぐっ！？』

それをユニゾンしているリインフォースが止めようとするが、彼女の意志に吞まれてその意識が途絶えてしまう。

その魔力は周囲の木々をなぎ倒し、倒れている味方も、立っている味方も吹き飛ばしていった。

だから、シグナムをカリスが、ヴィータをギャレンが、吹き飛ばしながらも抱えて庇っていた。

だが、蒔風はそちらをいちいち気にしている暇はない。

ヴィータを撃った後、蒔風は即座にブレイドと剣撃を打ち合わせていたからだ。



彼女の魔力が集結し、白い魔力光がギチギチと音を鳴らしながら圧縮されていく。

それは、砲撃の準備。

しかも、デアボリックエミッションどころではない。

それはおそらく砲撃魔法「ラグナロク」なのだろうが、その魔力の違いで全くの別物に見えてしまう。

と、その充填を、時風がブレイドと剣を組み合いながら見、そしてそれが十分になったところで、ブレイドの剣を受け止めている腕の力を抜き、自分の後ろに落とさせる。

そして後ろにまわり、ブレイドの背中を蹴り出す時風。

すると、どうなるのか。

「すべて消える……！！！！終焉の笛EEEEEEEE……」

「ツツ！？時風ツツ！！！！」

「早くしねえとオ……吹っ飛ばんじまうぜ！？」

蒔風とはやての直線上。そこに立たされてしまうブレイド。ここで、彼に与えられた選択肢は二つ。

はやての攻撃の方を避け蒔風にそれを直撃させるか、はやての攻撃に向かって大技を発し打ち消すか。

前者ならば、まず確実に蒔風に大ダメージを望める。

だが、あの砲撃はおそらくここ一体を飲み込む。蒔風が耐え、そして体力が残っていた場合、巻き込まれた自分たちは無抵抗で消される。

後者ならば、蒔風は逃すかもしれないが、みんなが助かる。その後に反撃にも出れる。

だが、あの砲撃を受け止めきれぬのかという懸念と、受け止めている間に蒔風が自分を潰しに来たら終わりだ。

ここで彼が取るべきだと考えたのは前者だ。

この場で蒔風を倒せずとも、ダメージを与えておけば後々戦う者にとっての有利になる。

自分たちがここで倒れても、あとに残せる。

戦士としては、そちらを優先すべきだろう。

今のこの場を捨て、蒔風にダメージを与える。

キングフォームの今なら、直撃さえしなければこの砲撃にも耐えて蒔風にとどめをさせるかもしれない。

だが

「許せ、八神ッ！！！」

彼は、そうすることができなかった。

スペードスートのカード10からキング、Aの五枚がキングラウザーに飲み込まれていく。

彼は、見捨てることができなかったのだ。

たとえこの先になげようとも、今この場の皆を見捨てるようなことなど、彼にはできなかった。

すべての人、人間が

大好きだから、守りたい。







離れたところでは暴走したはやてがいまだに叫びまわっている。  
あれだけの砲撃の後にもかかわらず、なんという魔力量か。

いや、そうではない。

暴走だから気付いていないだけで、彼女はもはや限界に近かった。

それでも、彼女は敵を探した。

自分の家族を奪った敵を。

そんなはやてなど眼中にないとわんばかりに、ブレイドの前に  
風が立つ。

その時風を睨みつけるブレイドだが、もう彼に剣を振るう力はない。

「よく受け止めたなあ……だが、思い通りに事が進んで何より  
だ」

「クソ……テメエ……」

「いいねえ……だがお前のその願いは受け取れねえな」

そう言つて、蒔風が剣を振りあげる。

「最後に聞きたい・・・なぜこんなことを・・・」

「ん？理由？そんなん簡単だよ。だって・・・こんだけ強い奴ら  
がいるんだぜ？」

「まさか・・・」

「戦つてみたいダロ？暴れたくナツテキチャツタンダ」

「蒔風エツ！！！！」

「バァイ」

ヒュ、ガキイ！！！！

時風が剣を振り下ろす。  
だが、その剣はカリスが武器、カリスアローを剣のように構えて受け止めていた。

それを怪訝そうに見ている時風に、更にギャレンの銃撃が襲いかかる。

だが、あの砲撃にあって威力が落ちているのか、時風はバックスアップで下がりながら素手でそれを払っていた。

あの砲撃で、二人は既に通常フォームに戻ってしまっている。

「剣崎！！！！あっちの茂みにシグナムとヴィータがいる。連れて逃げろ！！！！」

「橘さん！！始！？」

「ここはもう駄目だ……生き残ることだけを考えろ！！！！オレたちが時間を稼ぐ！！！！」

「そんな事できるか！！オレも一緒に……」

「聞き分ける！！剣崎！！！！今何が重要か、お前ならわかるはずだ！！！！！！」

「ツツ!!!!!!」

「行くぞ!!橘!!」

「オオオオオオオオオツツ!!!!!!」

剣崎の返事を待たず、二人は駆け出して行ってしまふ。

その跡をなんとか追おうとするブレイドだが、そのわきをはやてが通る。

やっと敵を見つけたのか、口論の音を元に走ってきただけなのか。

それはわからないが、剣崎は確かに、すれ違ったその瞬間。

仮面越しに彼女の声を聞いた気がした。

剣崎さん あの子達の事 お願いします

「.....ツツツ!!!!!!」



「オオオオオオオオオオオオ！！！！」

ドンッ！！！！

そうして、ギャレンもやられた。

時間は全くいいほどかかっていない。

はやてがここまで駆けてくるまでの時間も無かったのだから。

そして、はやての拳が蒔風に向かって伸びる。

だが、いくらなんでもそれは無茶だった。

この身体は見た目こそリインフォースに近いが、それでもやっぱり元ははやてなのだ。

近接戦闘どころか、普通の殴り合いだってできないような彼女がすることではない。

だから、蒔風は冷静にカウンターを顎に決め、その体をフツ飛ばす。





「イマジナリテイ・ワールドエンド  
心象的世界破壊」

時風のつぶやき。

その一言で、世界が歪んだ。

迫るラグナロクに、拳を当てる。

すると、それが180度方向を変え、撃った本人に向かって直進、  
そして直撃した。

倒れるはやて。

三十秒経って、結界が切れる。

そして、はやての身体が光に消え、時風の上に新たに二枚、カード



そのバイクには、ボロボロのシグナムとヴィータと一緒に乗っている。

意識がもうろうとしながらも、自分たちを主の元に連れていくように頼む二人。

だが、剣崎にそうする事などできなかった。

いまだに戻ってくれと涙するシグナムの言葉に、ダメだと言い続けるブレイドの顔は仮面に隠されている。

だが、それを見上げたヴィータには、その仮面が泣き顔に見えてしようがなかった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



橘「ああ・・・あれはオレたちの知ってる蒔風じゃないようだ・・・」

彼の本領発揮、というところですね。

ちなみに、今回のリストはここに乘せておきますので、確認を〜あと、カリスの「ワイルド」は少しアレンジ聞かせたのでご了承ください。

弓の技じゃなかったけど、そう言う事にしました。

橘「次回・・・はまだ決まってるようだが・・・」

は「どうやら魔術関係みたいやで？」

始「いろいろあるな・・・」

ではまた次回

襲撃リスト（完全版）

岡崎智也  
岡崎渚  
キヨン  
朝比奈みくる  
長門有希  
古泉一樹  
泉こなた  
柊かがみ  
柊つかさ  
高良みゆき  
響鬼  
威吹鬼  
轟鬼  
ハクオロ  
エルルウ  
オボロ  
ベナウイ  
クロウ  
カルラ  
トウカ  
泉戸裕理  
泉戸ましる  
応龍  
鵜  
城戸真司  
秋山連  
北岡秀一



吉井明久  
坂本雄二  
姫路瑞樹  
島田美波  
木下秀吉  
土屋康太  
津上翔一  
芦原涼  
氷川誠  
上条当麻  
インデックス  
御坂美琴  
クラウド・ストライフ  
前原圭一  
竜宮レナ  
園崎魅音  
園崎詩音  
北条沙都子  
古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
神尾美鈴  
門矢士  
小野寺ユウスケ  
光夏海  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
キンタロス

リュウタロス  
ジーク  
桜井侑斗  
デネブ  
直枝理樹  
棗鈴  
棗恭介  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
神北小毬  
能美クドリヤフカ  
来ヶ谷唯湖  
三枝葉留佳  
西園美魚  
朱鷺戸沙耶  
乾巧  
海堂直也  
三原修二  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
アーチャー  
間桐桜  
ライダー  
イリヤスフィール・アインツベルン  
バーサーカー  
ランサー  
ギルガメッシュ  
天道総司  
加賀美新

矢車想  
北郷一刀  
剣崎一真  
橋朔也  
相川始  
上城睦月  
皐月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
直江大和  
紅渡  
ガルル  
バツシャー  
ドツガ  
左翔太郎  
フィリップ  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
八神はやて  
リンフォース  
シグナム  
ヴィータ  
シヤマル  
ザフィーラ  
リンフォース？

スバル・ナカジマ  
ティアナ・ランスタ  
キヤロ・エ・ルシエ  
エリオ・モンディアル

## 銀白VS英霊

「あの八神はやてがやられただと!？」

『うん……剣崎さんから連絡があった。今はまた別のところに身を寄せているみたいだけど……』

あの戦いの後、八神はやて陥落の報はすぐに「EARTH」メンバーの間を駆け巡り、激震を起こした。

それはそうだ。

ブレイド達ライダーと、残ったヴォルケンス達総出を以って蒔風を迎え撃つたというのに、その代償が敗北、しかも八神はやてがやられてしまった。

これはあまりにも大きなダメージだった。

ここは、地方都市「冬木市」

そのまた郊外にある、衛宮邸だ。

そこに、サーヴァントやマスター、総てが集まっていた。

あくまでリストに載っていた者だけだが、それでもかなりの戦力だ。

凜は他のアサシンやキャスターなども呼ぼつと提案したのだが、士郎がそれを許さなかった。

「関係のないあいつらを巻き込むことはできない」らしい。

アーチャーはその考えを甘いと言いつつだが、戦いの範囲が広がれば結果的に被害者が増えるという考えで納得していた。

「だが……まさかこんなにも早く主力の一人がやられてしまふなど……」

「そういえば、ギルガメッシュはどうした？あいつも狙われてんだぞ？」

「知らねえよ。あの金ピカ野郎なら簡単にはやられないだろうよ」

と、応えるのはランサーだ。

現在居間に居るのは、士郎、凜、アーチャー、ランサーだ。イリヤと桜は寝室で寝ていて、その部屋の前にセイバーがいる。

門の前では霊体化したバーサーカーが張っているし、屋根の上ではライダーが周囲を警戒している。

本来ならばライダーの仕事はアーチャーのものなのだが、さすがに休みなしは英霊にもキツイ。

と、言う事で魔眼を持つライダーとの交代になったのだ。魔眼の効果は石化だが、魔眼はそれだけで普通の目を超える性能を持つ。遠くを監視することは別に難しくくない。

「それで・・・時風の目的が戦いだって・・・どういうことだ!？」

『おそらく、舜は・・・世界を今まで守ってきた、という責務から離れ、自由に生きてきた。そして、失ってしまったんだ。力の向け先を』

「つまり・・・「奴」の消失が？」

『そうなるかもね・・・これは土さんが言ってたんだけど、あいつはいつだって「自分」の正義を貫いてきた。それがオレたちに牙を向いただけ・・・だって』

「ふざけやがって・・・」

『クラウドさんは「堕ちた」って言ってたけど・・・』

士郎が話している通信相手は理樹だ。  
こうやっていろんなところに情報を流しているらしい。

「そういえば・・・アリスとの連絡は取れないのか？」

『アリスさんがこの世界にいたのは舜との約束が元だったから・・・  
・・・こつちから彼女に連絡を取ることはできないと思う』

「そうじゃなくても！この現状を見れば・・・」

そこまで言つて、士郎が気付く。

そうだ・・・そういえばこの襲撃事件が始まってから、一度もアリスを見ていないんじゃないか？

『それは僕らも思つてた。だけど、管理者だったらこんな回りくどいことはしない。そもそも、管理者は力があつても人の意志までには変えられないそうなんだ。相手が翼人なら、なおさら』

「じゃあ・・・これは本当に？」

『舜の仕業。しかも、的確にこつちの居場所を突き止めてきている。僕らもそろそろここを離れるところなんだ。一カ所に、しかも、由縁のある場所は絶対にまずいから』

「わかった。オレたちも移動する」



『気をつけて。舜の戦い方は・・・僕らの知ってる舜のものとは違うから』

そうして、連絡を切る。

一同はその話を聞いて、気落ちはしたものの、上がることはなかった。

「今の話、本当？」

「らしい・・・信じられるか？こんなの・・・」

凜の言葉に、士朗が辛そうに答える。

だがそんな彼らに、ランサーだけがいつもと変わらない様子であっけらかんと言った。

「何気落ちしてんだ。「昨日の敵は今日の友」ってのがあんだろ？  
だったら、「今日の友が明日の敵」ってことがあんのも道理だろうが。敵は敵。やるだけだ」

戦士然としたランサーの言葉に、アーチャーも頷く。

今そのようなためらいがあっては、すぐにやられてしまっぞ、と。

と、そこに

カランカランカラン……………

衛宮邸に仕掛けられている、侵入者を知らせる音が、静かに、だが確かに鳴った。  
その音を察知して、庭にバーサーカーが顕現し、ライダーが降りてくる。

「今の音……………!!」

「ああ……………誰かが……………きた」

否、誰かが、などではない。

彼らは知っている。一体誰がここに来たのか。  
しかし、その可能性を消したいというのもまた事実。

出来れば戦いたくないのだ。

心境的にはない。

自らの安全のためにだ。

居間で構えて、待ちつける一同。

何が起るかわからないため、下手に動くことができないのだ。

だが、こうしていても仕方がない。敵はすでにこの敷地に入っている。

アーチャーが凜と土朗を促して、桜とイリヤを起こしてくるよう  
言った。

確かに、セイバーがいるといっても、今は離れている彼女らの方が  
心配だ。

こちらに合流させた方がいい。

そうして、二人が居間から出ていこうとして、一歩その敷居を踏み越えたところで

ゴバツ!!!!!!!!!!

という字練りのような音が、地面の底から轟いてきた。  
と、言うかそれはそうだろう。

なぜならば、時風のものであろう土怪竜が地面から顎を開いて現れ、居間をばつくりと呑みこんでしまったのだから。

だが、その程度反応できない英霊ではない。  
ランサーとアーチャーは怪我也無くその今から脱出していたし、凜  
と士郎はそのままダッシュして桜とイリヤを起こしに行った。

「怪我はないか？」

「へ、誰に言っただ？」

アーチャーの言葉に減らず口をたたくランサーだが、今はそうも言  
つてられない状況だ。

地面から生えてくるように出てきた土惺竜が、とぐるを巻いてこち  
らに狙いをすまし、一気に突っ込んできたからだ。

その狙いは、ランサー。

猛烈な勢いで、土惺竜がランサーに向かっていく。

当然、それを避け、回避するランサーだが土惺竜は止まらない。

バーサーカーなどがその体を削っても無駄だ。地面から土を補充し  
てすぐに再生してしまう。

「ク……ッソ！！術者本人が見えねエからゲイ・ボルグも撃て  
やしねえ！！！」

ランサーの宝具「ゲイ・ボルグ」は相手の心臓を一撃で破壊する脅威の武器だが、相手が見えなくては狙いようもない。

この土惺竜を止めるには、大質量の大技で吹き飛ばさないと無理だ。しかし、それをやっている間にランサーに直撃してしまう。

そうして、ランサーがどうしようもなく避け続けて、バックステップで下がった瞬間。

ザキュッ！という音とともに、地面から十五本の刃が突き出てきて、ランサーの体を傷つけていく。

「グア！？・・・ツチイ！！！」

その剣に足止めと怪我を食らったランサーに、土惺竜が迫る。だが、その前にバーサーカーが立ちふさがり、巨大な戦斧を以ってそれを真正面から塵芥までに吹き飛ばして防いだ。

「すまねえな・・・」

「・・・」

その場を離れ、礼を言うランサーに寡黙で答えるバーサーカー。

そのランサーがさっきまで立っていた場所。  
十五の刃が突き出している地面の中から、蒔風がボコリ、と地面を  
押しのけて出ていた。

「ふう……さて……ランサー、傷つけたのは、利き腕か？反  
対の腕か？まあどっちにしろ、宝具は打てないだろうな」

「貴様……最初からそれが狙いか」

「いや？それだけじゃないけどね」

そう言つて、二枚のカードを取り出す蒔風。  
そこにあつたのは、イリヤと桜のカードだった。

それを見て、ライダーとバーサーカーが目を見開く。  
この男は、土惺竜にランサーを追い回させている間にこの二人を打  
ち取っていたのだ。

「……………」

「シユン……あなたはッツ！……！！！」

「ああ、部屋の前にセイバーがいた気がしたがな？シカトしていったよ。ランサーのほうが脅威だったし」

そう、いつものように言い放つ時風。  
と、そこに現状をようやく把握したのか、時風に向かって突風の塊が飛んできた。

風王結界による「ストライク・エア」

それを畳返してその場を動かずに防御する時風に、セイバーが突っ込んで行って剣をぶつかり合わせた。

「貴様・・・それでも戦士かッツ!!!!!!」

「俺はただの戦人だよ」  
いくぢらん

ガァン!!



セイバーの剣を弾き、全員を目の前に見据えながら、時風が剣を構える。

「……ライダー、バーサーカー……申し訳ございません。イリヤスフィールとサクラを……私は……」

「そう思うなら、あの男を殺すために全力で協力してもらいます」

「……………」

セイバーの謝罪に、ライダーが応え、バーサーカーも何かを叫んだ。その言葉に、セイバーがより一層覚悟を決めた。

こいつはここで倒すと。

「ランサー、君は戦えるか？」

「へ、なめんな。宝具は打てなくても槍をふるつことはできらあ」

「その元気があるなら、少し頼まれごとをしてくれないか？」

「あん？」

と、各々が小声で話していると、時風が待ちきれないとばかりに声を荒げた。

「おいおいおいおい……早くしろよ……!……!……じゃねえとこっちは  
ら」

ゴオッ、ドオン……!

「んおッ!……?」

「ハアアアアアアアアアア……!……!……!」

ガゴンッ！！！

蒔風がそうしてしびれを切らして走り出そうとした瞬間。

まさにそのタイミングでセイバーとバーサーカーが同時に突っ込んできた。

(う……うまいッ！？……くっそ！！！！)

そのタイミングは完璧だった。

蒔風はこれから駆けだすという体制で、そこに向かって突っ込んでいったのだから、蒔風の行動はどうやったって咄嗟になる。

その攻撃を前周りに受け身を取ってすり抜け立ち上がり、右にセイバー、バーサーカーを、左にアーチャーたちを取るといって、挟み込まれた形にされた蒔風。

「よし……！……！」

「周囲を囲め……凜は絶対にこちらに来るなよ！！……！」

「わ、わかつてるわよー!!」

「・・・・・・・・」

周囲を囲んだサーヴァントたちを見て、蒔風が息を深く整える。  
アーチャーが凜と士朗にこちらには来ないように注意し、二人がそれに従う。

これからの戦いに、生身の人間が入り込んでいいものではない。

そして、動く。

バーサーカーが戦斧を地面に叩きつけ、その衝撃が地面を跳ねあげながら蒔風に向かう。  
だが、それを蒔風は先ほどと同じように畳返しで防ぎ、その姿を一瞬二人から消す。

その間に時風は屋敷側、つまりはアーチャー達に向かい、武器を振るう。

走りながら十五天帝を次々と投げ、アーチャーを串刺しにしようとする。

だが、ここで時風が疑問に思う。

ランサーがない。

一体彼がどこに行ったのか。

それは疑問になったものの、今の彼は宝具を使えないので無視することにした。

むしろ今の相手がアーチャーとライダーになった事のほうが僥倖だ。

が、ただ飛んでくるだけの剣ならアーチャーに当たることはない。そのすべてがかわされ、屋敷や地面に剣が突き刺さる。



いきなり体が硬直する時風。  
その背後から降りあげられ、猛烈な勢いで振り下ろされる巨大な戦斧。

（キュベレイ……石化の魔眼！……）

ドゴオツ！！！！！

直後、時風の身体が戦斧の下に消えたかどうかも見えず、一瞬で猛烈な土煙を上げていった。  
その衝撃は凄まじく、周囲にいたセイバー達は空気に叩かれたような衝撃を受けていたほどだ。

さすがにこの一撃。

やったか！？と、凜と士朗は思った。

他の者も、樂觀視するつもりはなくとも少なからずそう思っただろう。

この場にいる者は皆、あの一撃の重さを知っている。  
しかも、イリヤを奪った者に対してだ。容赦など欠片も無いに決ま  
っている。

しかし

ザキツ！！ザギギギギギギギギギギギギギギギギ！！！！

なにかが土煙の中に湯っ込んでいき、金属の刃が肉を貫いていく音  
が中からしてきた。  
直後に、土煙が晴れる。

現れたのは、バーサーカーと時風だ。



そして、バーサーカーには十五天帝すべてが急所に突き刺さっており、蒔風が何かをバーサーカーに向かってかざしていた。バーサーカーの戦斧は、その「何か」の前でピタリと止まっており、その踏み込んだ足は地面にめり込むほど踏みとどめられている。

蒔風が持っていた剣は、天馬。中心となる剣だ。

だから、ここにこうしてすべてが集まってきたのは不思議ではない。

しかしどうやって、蒔風はあの状態から石化を解き、バーサーカーの攻撃を止めたのか。

繰り返すが、蒔風の持っていた剣は天馬だ。

そして、ライダーの真名は「メデューサ」。彼女は自らの仔である

「ペガサス天馬」を駆る。

彼女ら英霊は「概念」というものに縛られる存在だ。

いくら蛇より強くても、過去蛇に負ければ圧倒的に弱くなるし、信じられないような化け物に勝っていれば、そう言ったモノに対して優位になれる。

つまり直接の関係などなくとも、「天馬」という存在はライダーにとって使役対象であり、その効力を緩和できる。

敵を石化させた際、自らの天馬まで石化させては元も子もないから

だ。

無論、こちらの天馬にとってそんな事実は知ったことではない。

バーサーカーが止まった瞬間、蒔風の手から人神体になって飛び出し、剣に戻って突き刺さり、他の剣を集めればいいだけなのだから。

そして、どうやってバーサーカーを止めたのか。

目の前の現実に、効力が弱まったのか蒔風の身体に自由が戻る。

そして、その盾のように掲げていたものを皆に見せながら、蒔風がライダーやアーチャー、そちら側にまわったセイバーに向かって歩いてきた。

「バーサーカー狂戦士なんて言いながら、かわいい事にこいつには人質が効く」

そして、カードを振りながらいやらしく笑って見せた。

「イリヤのカード見せたらさ、簡単に止まったよ!!!」

そう言い放って見せる蒔風。

あの時の土煙は、振り下ろすのを止めるためにバーサーカーが地面に踏みとどまった際に起こったものだったのだ。そしてその理由が、イリヤのカード。

それを前にして、バーサーカーは止まったのだ。

それを見せつけた蒔風の後ろで、バーサーカーが光りになって消え、カードになって蒔風の手に収まる。

「しっかり十五回、だ。三回はオーバーキルかな？」

「蒔風・・・貴様・・・誇りはどうした!!!!!!!!!! 戦士の誇りを・・・失ったのか!!!!!!!!!!」

その蒔風に、セイバーが叫ぶ。

騎士王とまで言われる彼女だからこそ、この男のやり方は許せなかった。

ここまで戦士を侮辱した戦いなど、許されていいはずかない。

だが、蒔風は

「戦士の誇り？間違っているな、セイバーよ。オレは決して戦士じゃない。お前と最初にやり合ったときを忘れたか？オレの本領は・・・」

ドフン！！！！！！！

そこで時風が地面を踏み抜き、自分の身体を土煙に隠す。

「これは……」

「舐めているのか……時風ッ!!!!」

そう、それはかつてここで行った模擬試合。その時時風は取った戦法と全く同じだった。

その中にセイバーが突っ込んで行くこととする。

しかし

「行くな!!セイバー!!!!!!」

アーチャーがそれを止める。

その瞬間

土煙の中から時風が飛び出してきた。

まったく予期することのできないその突進に、セイバーがとっさに反応してそれをいなし、後ろに流す。

だが、彼の狙いは最初からセイバーなどではなかった。

「アーチャー……撃ち取ったり!!!」

青龍刀を構え、アーチャーに振るって来る時風。しかし、その動きが止まる。

ライダーだ。

ライダーがその目を以って再び時風を止め、同時に横っ腹に鉄杭を突き刺していた。

しかし、そこでライダーが異変に気付く。

一気に動いたためここまでやってしまったが、魔眼を発動させた瞬間に気付いたのだ。

「アーチャー！！こいつは……」

「ネタばれは禁止だよ」

シュカツ！！

「！？……カツ！？……カ……ヒツ……ア……」

ライダーの言葉と共に、蒔風の言葉がしてその首がかっ切られていた。

ライダーの姿が光と消える。

何が何だかわからないアーチャー。

だが、比較的にはあるが一人離れていたセイバーは気付いていた。

残っている土煙の中から、蒔風が「もう一人」飛び出してきたというように。

と、その瞬間に魔眼が切れ、アーチャーに斬りかかっていた蒔風の身体が一瞬で青龍の巨大な獣神体へと変わり、その体を締めあげていった。

そう、こちらの蒔風は、青龍の変化体だった。

今までの戦い、凜と士朗は離れて見ていたが、何が起きているのか全く分からない。

いや、眼には見えているのだ。魔力を目に回し、それを強化して様子を見ていたのだから。

しかし、そこで隙があれば宝石魔術や投影した剣を投げつけようと思っていた二人の思惑は外れた。

まったくその隙がないのだ。

あっても、そこにはすかさずサーヴァントたちが攻撃に入っている。自分たち魔術師はあくまでも人間だという事を、否でも思い知らされる。

今も、アーチャーが締めあげられていくのを見ていることしかできない。

が、その巨大な身体をセイバーが逃すはずがない。剣を振るって、その体に斬りかかっていく。

しかし、当然その前には蒔風が立ちふさがる。



「ツ……貴様!」

「オレの青龍をいじめないでくれよなあ?」

ギーン!!!

そういつて交戦する二人。

だが、時風はどう見ても全力を出していない。

楽しんでいるのだ。

セイバーとの打ち合いを。そして、アーチャーを見て悔しそうに顔をゆがめるセイバーを見て。

「又ああああッ……ツツ!!!」  
『身体は剣でできている』  
……!!!」

だが、そうしている後ろで爆発音が起き、青龍の腹部が爆ぜた。

何事かとセイバーがそちらに目を向けるが、わかりきっている時風はそのセイバーの腹を蹴りだして押しのける。

そして、まったく振り返ることなく、後ろの状況を正確に口にした。

「………」アンミッドレットフレードワークス無限の剣製ブローケンファンタズムでの「壊れた幻想」か。無茶するよな  
あ？青龍、戻れ」

と、青龍を脇の鞘に戻し、そこで振り返る。

アーチャーの腹部からは煙が上がり、口からは血がこぼれる。

「アーチャー！！！！」

「っと、テメエはこの期に及んでオレを無視すんな！！！！」

「ッ！！」

パンパンパン！と銃声が鳴り、セイバーに銃弾が飛んで行く。  
それを弾くセイバーだが、それと同時に投げつけられてきた手榴弾の爆発に、少しばかり後退する。

そこで少し落ち着いたのか、蒔風がアーチャーに言葉を向けた。

「ランサーがどこに行ったかは……わからん？」

「貴様に……教える義理はないな……」

「おお、息絶え絶え。だがまあ、大方言峰教会だろう。あそこにいる自分のマスターに助けを求めに行ったか？」

「……」

そこまで読まれて、アーチャーに揺らぎはない。

なぜなら、そろそろランサーが戻ってくるころだったからだ。

「彼女」の「アレ」ならば、蒔風に絶対的に有効だろうと。

そう考えていたアーチャーには、また勝算があった。

しかし

「あー、すまん。もうわかってんだわ」

ズンツ、と地面に手を突っ込み、そこからズルズルと何か巨大な筒を抜く。

知ってるものは知っている。

その筒の名は「イノームスカノン」

時空管理局で押収されていたその巨大な大砲を、時風はここまで持ってきて、地面に潜んでいる間に持ってきたのだ。

後は簡単。

自分の立っている場所に土俵の力で移動させて引き抜くだけだ。

「そっち」

ドオン！！！！！

そう一言だけいって、蒔風がイノーマスカノンを最高出力で発射させる。

と、ちょうどその延長線上に、自身のマスター「カレン・オルテンシア」を抱えて屋根を跳躍してきたランサーが現れた。

「ツツツオオオオオオ!?」

ドッゴオ!?!?!?!?!

そして、直撃。否、直撃というよりは直前で爆発し、二人を飲み込んだと言ったところか。

しかし、結果は変わらない。空中の彼に、避けるすべなどなかった。光が一つだけ走り、煙からランサーが落ち、何とか着地する。

そして光からはカードが飛び出して、蒔風の手には。

カードにはカレンの姿が描かれていた。

「来るならそっちの方向だと思っていた」

「な………」

「彼女の持つ礼装「マグダラの聖骸布」は男性に対して強力な拘束力を持つ。それを持ってこられると厄介だからな。いい手だが、それなら最初から用意しておくべきだった」

「なん……だと!？」

アーチャーが腹を押さえこみながら驚愕する。

なぜならば、時風とカレンに面識はないはずだからだ。

確かに、会話の中に出てきたことはあつたし、「EARTH」設立の際にその存在を知ってもいただろう。だが、彼女の持つ礼装や、その能力まで把握していることなどあり得ない。

一体どこで知ったのか。

彼はいつたい何者なのか、本気で困惑し始めるアーチャー。

と、話しているところで、時風の首元に槍が振るわれる。それをパシツ、と片手で受け止める時風。

ランサーは耐えたと言っても、あの砲撃はあの世界でランクSとまで言われる威力を持っていた。

その直撃でカレンをなんとか庇おうとまですたのだ。一番最初の攻撃、これまでの移動。

全身のダメージは、すでにかなり溜まりこんでいる。

そのランサーにイノーマスカノンを真上から降り降りして叩きつける。

ランサーはそれを槍を横にして頭上で受け止めるが、ベキョー！と巨大な砲首がへし曲がり、イノーマスカノンが爆発した。

その爆破に吹き飛んで地面に倒れるランサー。

現状を見て、五体満足なのはセイバーのみ。  
魔術師とはいえ人間の凜や士朗にこの男は手に負えない。

自分は脱出のためとはいえ爆破をゼロ距離で受け、ランサーはダメージを負い過ぎた。

それを見て、アーチャーが覚悟を決める。

「セイバー！！ランサーと凜たちを連れて、この場から逃げろ！！」

「アーチャー！？」

と、それと同時にアーチャーが一瞬の間に詠唱し、固有結界を発動させる。

そのために魔力を取られたマスターの凜が具合を崩したように倒れ、士朗が支える。  
それを見て、セイバーも決心した。



倒れるランサーを抱え、二人の元に向かって更に担いで逃走を図る。

それ止めようとする蒔風だが、すでに固有結界は発動している。  
アーチャーの無数の剣が、蒔風に向かって降り注いで行く。

「クソツ・・・イマジナリテイ・ワールドエンド心象的世界破壊」

それに対し、蒔風も固有結界を展開させ、打ち消してきた。  
この場合、打ち消したのは固有結界そのものをだ。

固有結界という魔法に限りなく近い魔術は、世界を侵食するものである。  
故に、それを発動させると同時に世界空の修正力が働き、維持するためにはかなりの魔力量と意志が必要になるのだが、こうして固有結界を重複して発動させてしまった場合、それぞれの結界が反発しあい、消滅してしまう。

しかし、その反動は凄まじい。  
アーチャーはそのまま地面に倒れ、蒔風は胸を押さえて脂汗をたらしている。

が、それでもやることはやりアーチャーの胸に「天」を投げ放つて刺し、その体をカードに変える。

そして、三人を抱えて衛宮家の塀の上から跳躍しようとするセイバーに向かって手を伸ばし、簡易型獄炎弾を三発、正確に放った。

しかし、それは彼女らには届かなかった。

灰色のオーロラが彼女らを覆い、どこかへと連れ去ってしまったからだ。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・あれは・・・・・・・・」

そして、そのオーロラが蒔風の前にも表れ、そこから四人の影が現れた。

その四人は

「間に合わなかったか……」

「だが、彼女らは逃がしたよ」

「舜……お前はオレたちが倒す!!」

「もう……私も容赦しません」

世界を旅する仮面ライダー。

破壊者・ディケイド

その仲間だった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

銀白VS英霊（後書き）

遅れて申し訳ないです!!!

ライダー「私がやられた後にライダーがやってくるんですか」

桜「あ、そうなるね」

バーサーカー「……………」

イリヤ「文句言わないのバーサーカー。私と桜なんて寝ている間に一瞬よ？」

マークの柄は、全員それぞれの令呪のマーク、でした。

にしても、ここまで書いてると何書いて言いかわからない……………

とりあえず、アリスは連絡が取れません。

蒔風にやられているのか、それとも……………

カレン「なんで私の事を知っていたのかもわかりませんしね」

桜「そうそう!!!なんででしょうっか？」

それはこの事件の秘密に結構関わってきます。

イ「え？え？どついつこと！？」

バ「（正解）」

イ「なるほど！！！」

ラ「わかるんですか！？」

桜「次回、このまま連戦。世界の破壊者です！！」

ではまた次回

リスト残り

キヨン

朝比奈みくる

長門有希

古泉一樹

響鬼  
ハクオロ  
エルルウ  
オボロ  
ベナウイ  
クロウ  
カルラ  
トウカ  
泉戸裕理  
泉戸ましる  
応龍  
鶴  
城戸真司  
秋山連  
吉井明久  
姫路瑞樹  
島田美波  
木下秀吉  
土屋康太  
津上翔一  
芦原涼  
氷川誠  
上条当麻  
インデックス  
御坂美琴  
クラウド・ストライフ  
前原圭一  
竜宮レナ  
園崎魅音  
園崎詩音

北条沙都子  
古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
神尾美鈴  
門矢士  
小野寺ユウスケ  
光夏海  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
キンタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
棗鈴  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
来ヶ谷唯湖  
三枝葉留佳  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
天道総司  
加賀美新



矢車想  
剣崎一真  
皐月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
紅渡  
ガルル  
バツシャ  
ドツガ  
左翔太郎  
フィリップ  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
シグナム  
ヴィータ  
リンフォース？  
スバル・ナカジマ  
ティアナ・ランスター  
キャロ・エ・ルシエ  
エリオ・モンディアル

## 銀白VS破壊者

「「「「变身」「」」」」

蒔風の目の前で四人が同時に変身し、明らかな敵意を向けてくる。

「固有結界を反発で無理に破壊してこつちも気分は最悪なのに、ここで来るかよ……」

「あれだけの戦闘をやって、気付かれないと思っていたというのが無理な話さ」

蒔風の愚痴に、海東が答える。

だが彼らが来れたのも、あくまで距離が比較的近かったからだ。

他の増援は望めそうにない。

一応連絡は入れたが、自分たちがそこまで耐えられるかどうかもわからない。

「蒔風・・・お前、どうやってカードに変えている？」

だから、まず話しかけた。  
時間稼いだ。

一斉には無理でも、連戦を重ねていけば蒔風も倒れるはず。  
そのためには皆が来るまでの時間を稼がなければならない。

士の問いに、蒔風が懐から何か小さな機械を取り出した。  
それは、ディケイドライバーの外層が取り外され、カードを挿入するスロットなど諸々がまだ取り付けられていない、基盤むき出しの機械。

大きさは大きめの携帯ストラップくらいか。  
それを見せ、蒔風が話した。

「大ショッカーの巨大基地。その跡地にあったライダーシステム開発室。ディケイド、ディエンドに続く第三のライダーのために作られたのがこれだ」

「大シヨツカーのだと・・・・・・・・!？」

「そう、この「破壊機構」を基本としているのはお前らのと同じ。まあ？これ作ったところでぶっ潰されちまったみたいだからこれしか残ってなかったけど」

そういつてそれをしまつ時風。

そして、次にカードを取り出す。

「で、こうしたわけ。お前はわかってるよなあ、土！！！経験者だもんな！！！」

「ツ……………」

そしてカードもしまい、土に言う時風。

だが、その言葉にユウスケが疑問を抱く。

「待てよ……………なんでお前がそれを知ってたんだよ！！おまえはいなかっただろ!？」

そう、時風はあのライダー大戦の詳細を知らないはず。

それどころかそれ以前に、大シヨツカーの基地は彼らが跡形も無く

吹き飛ばしてしまったために、跡地もわからないはずなのだ。

「あん？知ってんぞ？仮面ライダー全員でシャドームーンごと基地吹っ飛ばしたのも、ユウスケがアルティメットゴウラムで特攻かけたのも、ドラスに苦戦しながらも勝利を収めたことも！！」

なのに、彼は知っていた。  
まるで、どこかからその光景を見ていたかのようにだ。

「な・・・なんで・・・」

「ユウスケ、それ以上は言っても無駄だ」

「そう、今の彼はただの敵。そう・・・ただの敵さ」

そうして、時風が呼吸を整えて剣を構える。

それに反応して、彼らも剣や銃、拳を構えて迎え撃とうとする。

だが

「……やーめた。気分じゃない」

「な!？」

「言つたる？気分最悪なんだ。今戦つて増援呼ばれたら確実に倒れる。ここは逃げるよ」

そう言つて、踵を返す時風。

しかし、士達としては困るところ。

今、時風は疲弊している。

倒すなら今なのだ。そのために増援も呼んでいる。

ここで逃がせば、更に被害が出る!!!

そう思った時風を、真っ先にクウガが追った。

その背中に向かってマイティキックを放ち、何が何でも足止めするつもりだ。

「待てえ!!!」

「.....」

そう来られては、時風は避けるか受けるかするしかない。  
結果、時風はそれを避けた。

ただし、その場から十メートルは横っ跳びして。

「な!?!ウオあ!?!」

ドッ、ガゴッ!!--!

クウガのキックが不発に終わり、地面にその衝撃が伝えられる。と、同時に、その地面がまるで落とし穴のように崩れ、大穴の中にクウガが呑みこまれていった。

「なっ・・・ユウスケ!!」

「お前ら見てなかったもんな。土惺竜の土、どっから持ってきたと思ってたんだ？」

そう、この穴は時風が最初の最初に放っていた土惺竜の分の穴だ。そこの上に、土を固めて乗せていただけ。

歩く走るに影響はないが、ライダーのキックには耐えられず崩壊したのだ。

「おまえっ!!」

「ダーディーな戦いならお前も得意だろ？セイバーにも言ったがな、オレの最も得意とする戦闘は正々堂々、真っ向からの派手なぶつかり合いじゃない。オレが得意なのは!!」



そういいながら、蒔風が「青龍刀」と「獅子」を手に持って突っ込んでくる。

そしてそれをデイケイドに振り上げ、そうしながらも蹴りを放って突きとばし、左のキバーラに切りつけ、右のデイエンドには柄の後ろで殴り飛ばしていた。

「卑怯、外道の暗殺だ！！勘違いしてんじゃねえぞ！！！」

A T T A C K      R I D E      B L A S T !

デイエンドとデイケイドの銃撃が、蒔風に向かって数十発叩き込まれる。

それを畳返して防ぐ蒔風だが、その壁の一面が吹き飛び、キバーラが剣を構えて突撃してきた。

その攻撃にスウェーで躲し、そのまま地面に仰向けに転がってキバーラの腹に両足で蹴りをぶち込む蒔風。衝撃に、キバーラの体が浮く。

即座に蒔風が立ち上がり、浮いている体に拳をブチ当て、その手か

ら剣が宙に飛び出していった。

「知ってるぞ。仮面ライダーキバーラ。だがお前では相手にならない」と、吹き飛んでいくキバーラを視界の隅に回し、ディケイドに向かう時風。  
ライドブツカーをソードモードに変え、ディケイドが時風の剣を受け止めて鏢競り合う。

そこに、時風の背後からディエンドが回し蹴りを放ってきた。それを横に転がって避け、銃を取り出してディエンドに向ける時風が、そこで気づく。

（キバーラの剣が落ちてこない！？）

ドンッ！！！！！

その疑問とともに首筋に悪寒が走った時風が、横に転がるとそこにタイタンフォームになったクウガがタイタンソードを地面に突き立てて着地してきた。

おそらく、あの穴からドラゴンフォームの跳躍で脱出し、空中のキ  
バーラの剣をつかんで超変身、機会を狙って強襲をかけたのだろう。

「くそつ、外した!!」

「ユウスケ、大丈夫か？」

「ああ・・・夏美ちゃんは!？」

「吹っ飛ばされてノビてるだけだ。まだ平気だろう」

宮邸の扉を見ると、そこにキバーラがぐったりとはしているものの、  
変身も解けずまだそこにいた。  
それを見てクウガがホッと安心する。

「さて・・・ああいう戦いができんのがお前だけじゃないっての  
を見せてやる。海東!!!!」

「ああ!!!!」

《ATTACK RIDE      CLOCK UP!》

と、そこでデイケイドがクロックアップに入る。  
ライダー大戦で習得した他ライダーの能力使用だが、それに蒔風は驚くこともせず、姿の消えたデイケイドを無視してデイエンドのほうへと向かっていった。

(クロックアップしているあいつの姿は見えているし捕捉している。無理に追うより、今は厄介なデイエンドをつぶす!!!!!!)

その考えで、まずはほかのライダーを呼び出してこれるデイエンドのほうに標的を決めて突っ込んでゆく。  
対して、デイエンドは近接はできても、やはりもっとも得意なのは銃撃による遠距離だ。  
直接格闘の戦闘は相手を翻弄するものでしかない。

だから、デイケイドはその蒔風を見てその眼前に割り込んだ。

しかし

「墳ッ!!--!!」

「なっ、くそっ！」

《ATTACK RIDE INVISIBLE!》

時風が攻撃の一瞬のみ加速開翼し、ディケイドを裏拳の一撃で弾き飛ばす。

無論、クロックアップ上ならまだ普通の行動速度なので、それをインビジブルで緊急回避するディケイド。

が、これでディエンドまでの間に障害物はなくなった。

クウガが後ろから走ってくるが、間に合っまい。

「もらったぁ！ー！ー！」

「ふっ」

拳を握り、一撃粉碎の剛拳をディエンドに突き出していく時風。

と、それに対してディエンドはカードを装填。引き金を引いて発動させる。

《ATTACK RIDE》

「インビジブルか!!」

「残念、違つよ」

《SLASH!!》

ザシッ!!!

時風とディエンドが交差し、時風の胸に袈裟切りに血が噴き出す。胸を押さえ、うずくまりながら振り向くと、ディエンドライバーの銃口からは青いエネルギーが刃のように出ていて、銃剣として存在していた。

その刃はすぐに消えたが、時風はそのカードの存在に驚愕していた。

「ディエンドが……「スラッシュ」のアタックライドだと!？」

「カードは常に進化していく。僕もこの間大きなお宝を手に入れてね。そのおかげでいろいろと用途が増えたのさ」

「チツ……!？」

《FINAL ATTACK RIDE DE DE DE  
DECADE!》

と、その時風に向かってホログラム上にカードが伸びてきて、それを赤い光弾が通過して襲い掛かって来た。

それを地面を転がって避ける時風だが、爆風に身をあおられて吹き飛ばされてしまう。

「がっ……あ……」

「大丈夫か？海東」

「ああ、ヒヤツとしたけどね。もう彼とは真正面に戦いたくないよ」

全身を襲う衝撃に苦しげな声を出す時風。

デイエンドとデイケイドがその時風を見て警戒しながらも最後にしようとし、クウガがキバーラを担いで集まって来た。

「ハア、ハア、ハア、ハア……」

「終わりだ。時風。時期の増援も来る」

「まだまだ……まだ終わらんッ！！！！」



そう叫んで、蒔風が四人に突っ込む。

その蒔風にデイケイドが銃撃を、デイエンドがライダーを召喚して防ぐが、全く止まらない。

銃弾をすべて弾き、サソード、タイガ、ラルク、そしてライオトルパー五体を斬り消し、蒔風がついに到達する。

キバーラを担ぐクウガに向かって圧水を放出、彼らを吹き飛ばしたうえで、デイケイドに向かって手刀を振り下ろす。

その背後からデイエンドが引き離そうとパンチを繰り出してきたが、蒔風は一回転してデイエンドの顎を蹴りで捉えて吹き飛ばし、そのままデイケイドにもう一度、今度は左の手刀で首を相手の左から狙う。

5880

それをガンモードのままのライドブッカード受け止めるデイケイドだが、その威力にライドブッカードにヒビが入った。

「な……………」

「ガアアアアアアアああああああああああ……………!!」

そして咆哮を上げ、右の拳でディケイドの側頭部を殴り地面にたたき落とす。

バチバチと音を立て、そのマスクが砕けて土の顔が半分ほど見える。

「土!!!」

「オオオオオオオオオオオ!!!」

「な口オ!!!」

《ATTACK RIDE METAL!》

膝立ちになり、何とか立ち上がるうとしたディケイドに、時風が剣を振り下ろす。

それをアタックライド・メタルで体を高質化して受け止めるディケイドだが、マスク部分の破損が響いているのかその硬度は十分に発揮されていない。

「土ア!!!クソッ!!!」

「まっずい!!!」

自分の肩にぶつかつたままになっている蒔風の剣を両手で握りしめ、動きを止めようとするデイケイド。  
だが、徐々にその剣はずり落ちてきて、デイケイドを切り裂こうとしている。

「フーツ、フーツ、フーツ……」

「つつ……ガツ……」

その状態で、士は考えていた。

蒔風のその目が、あまりにも必死だったということに疑問を抱いたからだ。

士はその目を知っている。

皆の記憶から消え、消滅してしまう世界を救うためにライダーと戦っていたあの頃の自分と同じだと。

そして、この戦いの意図に

「蒔風……まさかお前……!!」

「ツツツ！！！！！？？？ゼリヤアツ！！！！！」

斬ツ！！！！！！ドンツ！！！！！！

その言葉に蒔風が目を見開き、デイケイドの身体を切り裂いて消滅させる。

その姿がカードになって蒔風の手飛び込んでくるが、それよりも蒔風の様子がおかしい。

まるで何かを探しているかのように上空を見上げ、焦っているようにも見えた。

が、その蒔風にクウガタイタンフォームとデイエンドが迫ってきている。

クウガの突き、カラミティタイタンを脇に挟んで受け止め、デイエンドの銃撃をタイタンの背中を向ける事でそこに着弾させてガードする。

「小野寺君!!」

「大丈夫です!!それよりも・・・こいつを!!!!」

「・・・クソツ!!」

と、土をやられた事で激昂する彼らを見て、時風がついに逃走する。クウガを投げ転がし、ディエンドの銃撃をよけながら、衛宮邸の扉に向かって走った。

5884

しかし、その勢いがガクンと落ちた。

見てみると、足をキバーラが掴んで止め、その場から逃がさないとばかりに踏ん張っているのだ。

「チツ・・・邪魔だ!!!!!!」



変身を解いた海東とユウスケ、衛宮邸で待機していると、そこにデ  
ンライナーが走り込んできて中から理樹と電王メンバー、泉戸裕理  
とましろ、更には応龍と鶴が出てきた。

「大丈夫!？」

「オレらは・・・でも、士と夏海ちゃんが!!!」

「舜は？」

「逃げたよ。でも、怪我は負わせた」

質問する理樹に、簡単にだが説明する二人。

と、そこで理樹が翼を広げ、何かの機器を取り出してそのモニター  
を見る。

「それは？」

「あれは翼人の力の波長を測る装置。それをああやれば、探知する

「こともできる」

ユウスケの質問に、裕理が代わりに応える。

理樹は何かに集中しているようで、そのモニターを見続けている。

「……………どうやら、ここ以外で翼人の力は使っていないみたいだね」

「怪我は負わせたんだろ？じゃあまだ近くにいるかもしれない！」

「そうだな。見つけ出して、一発シメたる！！！」

「うん。ここに来るまでに、冬木市を取り囲むように鶴が結界を張ってくれたから、この街からは出れないはず。追おう」

そう言って、理樹が機器のモニターの映像をみんなに送り、リンクさせる。

全員の手元辺りに、モニターが浮いて街の地図とが映し出された。



「今日で、終わらせる。もうこれ以上は、やらせない……」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 銀白VS破壊者（後書き）

皆さま申し訳ございませんでしたあ！！！！

昨日はなんにも言わずに更新せずに……………

いえ、実はですね？こういった経緯があるのですよ。  
まあ言い訳ですが、聞いてください。

いつもはこの小説をメモ帳で書いてフォルダに保存するのですが、  
昨日はノパソコンから移したからそのままUSBメモリで書いてたんです。

そして、保存。

USBメモリ内には、もうデスクトップに移してしまっただけで  
書きかけデータがゴロゴロ。

よし、スッキリさせよう。

ドラック、右クリックからキーボード「D」「Y」

ハッ！？

そこで気付きました。

残ってるのがいらぬいの。

おや？さっき書き上げたのはどこだろう？

USBメモリだからごみ箱にも無い。

絶望しました。

鬱になりました。そのままもう一度書きあげる、活動報告するといった気力を失い、そのまま半泣き状態でベッドにダイブ。

本当に申し訳ございませんでした。



に強くないし。

彼がライダー達の中でタメ張れんのはディケイドの作られた理由がライダーの破壊だからだし。

ナ「まあ・・・劇場版でもRXに剣技でぼっこボコでしたけどね・・・ん？なんで私「ナ」なんですか？カタカナ？」

全表記してみる？ほい

ナツミカン「・・・・・・・・ぼう・・・・・・・・」(ゴキッ)

夏「作者は滅んだ・・・・・・・・次回、捜査網脱出!!!!ではまた次回!!!!」

## 逃走の銀白

冬木市、都市部の裏路地。

そこで蹲る、一人の男。後ろを振り返るとそこには点々と赤い血が残っている。

「結界……この気配は太転依……鵜のものか……」

上空を見上げ、一見して何も無いように見える空に何かを見て蒔風が呟く。

更には空からも探しているのか、理樹の翼や応龍の姿もちらちら見える。

蒔風がビルに身体を預けながらズルズルと歩んでいき、ある一角で座り込んで胸の傷を見る。

袈裟斬りにされたその跡は、使用者がディエンドというのが幸いでそんなに深くはない。

だが、その大きさには目を見張るものがあって、放っておけばじきに血が足りなくなる。

それはここまで残ってしまった血の跡を見ても明らかだ。

(ここまで逃げてこれたけど・・・結界内で力を使えば嫌でも探知される・・・だが・・・)

蒔風はここまで逃げるのにたいした力を使っていない。  
というか、使えないのだ。

そんなことをしてはやがて来るであろう増援に見つけてくれという  
ようなものだし、そもそも体のコンディションだって一気に崩れる。

とにかく、なんとかしてこの血を止めなければならない。

蒔風は覚悟を決めて、剣を取り出す。





夜の冬木を、住宅街の高い丘から見下ろす理樹。

この街は住宅街と都市部に、川でわけられている。  
今は二手に分かれて、都市部と住宅街を搜索しているのだが、中々  
足取りがつかめない。

「舜の場所はわかりそう？」

『いや……流石と言ったところか、中々わからないね』

『だが、鶴のチビが言うには結界を抜けた人間に大きな力を持った  
奴アいなかったそうだぜ？』

「うん。舜はまだここにいる。全員、気をつけて探して……」

『理樹！見つけた、血の跡だ！！』

「どー！？」

『いや……見つけたが、途切れてしまっている。場所からして、ビルの屋上に飛びあがって追跡しにくいようにしてるんだろ。上空から見えてみてくれ!!』

「わかった!」

ユウスケからの連絡に、理樹が街に飛び出す。

上空で獣の姿になった応龍とも合流し、その背に乗った鶴からも話を聞く。

即興で作ったこの結界は今なお作り上げ中で、時期に時風の位置もはっきりと割り出せるようになるらしい。

「小野寺さんが見たのは……」

「あそこだ。で、あっちのビルにも見つけた」

『理樹、こっちの地面にも跡を見つけたが、すぐに消えてる』

「大丈夫、こっちで見つけた」

そうして、徐々に時風へと近づいていく理樹たち。

と、そこでモニターが表示され、機器に反応があったことを示した。

「舜だ！反応あり！！」

「微弱だけどな……」

『僕が近い！！行くよ、ましろ！！』

『はい！！』

裕理からの連絡があり、一緒にいたましろと共にその地点へと向かう。だが、そこにあったのは小さな血だまりと、剣の刺さった後だけだった。

「理樹！だめだ、こっちにはもう……」

『裕理！！そこを今すぐ離れるんだ！！！！！！』

「え？・・・ツツ！！??」

チユン、ギイ！！

現場に到着し、報告した裕理に、理樹の警告が飛ぶ。  
直後、真上からの銃撃に、裕理が強化した手で反応して弾く。

手がしびれたものの、その攻撃を防いだ彼は、むしろに危険が及ばないようにその場から撤退する。

「ま、さか！！！！」

『上から見てた！！舜だ！！ビルの屋上にいる！！』

そう、上空の理樹は、屋上からライフルで裕理を狙う時風を見ていた。  
最初こそ陰で見えなかったが、狙った瞬間殺気を感じ、咄嗟に警告したのだ。

「クソッ！！！！」

「待て!!!」

奇襲を外した時風は、組み立て式のライフルをその場に投げ捨て、ビルの上を跳ねて逃げる。その跡を追う理樹と応龍だが、時風が逃げながら銃弾を放ってくるのでうまく接近して行けない。

が、その行く先にデンライナーが通過するように停車し、行く手をさえぎる。

いきなり現れたそれに両手をデンライナーに当て、一回転して飛び越える時風。

しかし

「おりゃア!!!」

「ぐっ!?!おあッ!?!」

その屋根の上に飛び出した時風をクウガの拳が捉え、叩きつける。直撃こそ避けたものの、ガードの上から押し付けられるような攻撃に、時風のひざが曲がる。

さらに、そのしゃがみ込んだ時風に背後からキンタロスが腕で締め

上げるように掴みかかり、時風を拘束する。

「はっは！！大金星や！！」

「も〜お逃がさねエからな！！」

「うまく釣れたみたいだね」

怪我はあらかた治っても体力までは戻っていない時風は、キンタロスの拘束を解くことができずもがくばかりだ。

と、そこに理樹と応龍が追いつき、階段から裕理とましろも合流したディエンドと一緒に上がってきた。

「もう逃げられないよ、舜。カードを出して、今までの事を全部話してもらおうから！！」

これだけの状況で、理樹が宣告する。  
大人しく掴まれ、と。

だが、時風の目はいまだ鋭く、諦めた様子がない。

「理樹……」

「……舜、一体何があったんだ……戦いたっていうなら、模擬戦をすればいいじゃないか!!! どうしてこんな……」

「ものの見方が甘いな、理樹。強者は時に、その程度では満足しないものだ」

「な……」

「あと……やはり悲しいな。いくら翼人でも、まだ学生、か」

「え？」

「フンッ!?!?!?!」

「がつ!?!?!」

ゴキッ!!と

蒔風が踵を思い切り、キンタロスの足の甲に叩きつけて踏み抜く。

人体の急所はイマジンにも有効なのか、あまりの痛みにキンタロスの腕が緩み、蒔風が跳躍、更にその頭を踏みつけて宙返りする。

蒔風の視界が逆さになるが、その瞬間に蒔風が両手に銃を持ち、全員を狙って発砲する。

咄嗟ながらもその攻撃は全員防ぐ事が出来たが、蒔風を完全に逃がしてしまう事になる。

「くっ……舜は!?!」

「逃げ……」

ボコッ、ゴキッ!?!?!?!





だが、その獄炎弾が消える頃には、すでに時風の姿は冬木の夜空には居なかった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 逃走の銀白（後書き）

なんだか締まらない逃走劇になってしまいました……でもやることはやってる時風。

応龍「オレなんてロクに戦ってないぜ？」

鶴「ワシもじゃー！どーしてこんなにあっさりなのじゃー！」

あ、ちなみにアメリカも美冬も時風が敵というのは知りませんが、襲撃の際に「EARTH」に呼ばれこそしましたが、あの後どうにか解決したと聞かされて学校生活を送ってます。

応「あいつらはリストになかったからな」

鶴「さすがに巻き込めないからのう……寂しいのじゃ」

応「で、次回は山中での戦いだ」

鶴「どの山かは……お楽しみじゃー！」

ではまた次回

これ前回忘れてた・・・

残りリスト

キヨン

朝比奈みくる

長門有希

古泉一樹

響鬼

ハクオロ

エルルウ

オボロ

ベナウイ

クロウ

カルラ

トウカ

泉戸裕理

泉戸ましる

城戸真司

秋山連

吉井明久

姫路瑞樹

島田美波

木下秀吉

土屋康太

津上翔一

芦原涼  
氷川誠  
上条当麻  
インデックス  
御坂美琴  
クラウド・ストライフ  
前原圭一  
竜宮レナ  
園崎魅音  
園崎詩音  
北条沙都子  
古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
神尾美鈴  
門矢士  
小野寺ユウスケ  
光夏海  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
キンタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
棗鈴  
井ノ原真人  
宮沢謙吾

来ヶ谷唯湖  
三枝葉留佳  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
天道総司  
加賀美新  
矢車想  
劍崎一真  
皐月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
紅渡  
ガルル  
バッシュャー  
ドツガ  
左翔太郎  
フィリップ  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
シグナム  
ヴィータ

リンフォース？  
スバル・ナカジマ  
ティアナ・ランスタ  
キャラ・ル・ルシエ  
エリオ・モンディアル





「じゃあ・・・うん・・・わかった。こっちも気をつける。それじゃ」

そう言って、圭一が通信を切る。

まだ完全には慣れていないのか、その手はぎこちない。

「圭一、どうでしたのですか？戦況は・・・」

「応龍さんと鶴ちゃんがやられたみたいだ。ほかにも門矢さんと光さんが」

「ここもそろそろまずいだろうな」

「そうですねエ・・・三枝さんとわたくしでいくつかのトラップは仕掛けましたが、どう見ても心許ないですわ・・・」

ここは雛見沢村山中

そこにある一つの広い洞窟だ。

その中には理樹を除いたリトルバスターズ、雖見沢分校部活メンバーと、逃げてきたセイバーたちがいた。

「理樹は大丈夫だったか!？」

「鈴、落ち着けよ。あいつがそうやられるはずはねエさ」

「うん、理樹さんは大丈夫みたいだったけど……」

今の報告の内容を皆に伝える圭一。  
その内容を聞いて、皆がまた話し出した。

「そっといえば、悟史はどうしてんだい? 詩音」

「悟史君は診療所にいらってます。リストに名前がなかったの  
で、あそこにいれば安心のほすですから」

「にーにーにはこのことに巻き込まれてほしくないですわ」

「我々もいつまでもここに籠城しているわけにもいくまい。理樹君が帰って来しだい、ここを離れなければ」

「そうだね……いくらなんでも村の皆を巻き込めないし、沙都子ちゃんと葉留佳さんのトラップがあるって言うても、舜さんにはあまり意味がないよね……」

「あうあう……梨花、大丈夫なのですか？」

「大丈夫よ羽入。もう私は、絶対に死なないから……」

「真人、わかってるな？」

「ああ、いざとなったら、俺らがこいつらを逃がさなきゃなんねえからな」



羽入の言葉に、全員が洞窟から出てどんな状況にも対処できるように体制を整える。

しかし、その瞬間からすでに攻撃は始まっていた。

「……………」

「……………はあ……………はあ……………」

「なんか……………息苦しいくないか?……………」

「これは……………まさか!?!?!」

そう言つて、レナが手元をハンカチで押さえる。それにならつて皆も押さえるが、すでに吸い込んでしまった量で身体がかなりだるくなっている。

「こ、これは!?!?!」

「毒ガス!?!」

その場の空気には凶悪なモノが振り撒かれていた。  
無色無臭の毒ガス。手っ取り早く、それでいて確実性の高い代物だ。

「身体が……重い……」

「即死性のものじゃないのがまだ……」

ドンッ！！

この状況でまだ何とか立ち上がるうとするが、その中で二枝葉留佳  
が消えた。

さらに続いて何か沙都子に向かって飛来するが、それを来ヶ谷が  
何とか弾く。

飛んできたクナイは沙都子には当たらず森の中に弾かれて消えて行  
ったが、弾いた来ヶ谷の模造刀は砕け、弾き飛んでいく。

「くっ……」

「来ヶ谷さん！大丈夫ですよ！？」

「なに・・・幼気な幼女を守れてわたしも満足さ・・・」

そうなんでもないように言う来ヶ谷だが、手は衝撃にしびれて動かないし、受け止めるために動いたせいで毒が全身に回り、両手を使っってしまったために、さらに吸い込んでしまったもいた。額には大粒の汗が垂れ、膝について蹲ってしまう。

「来ヶ谷さん!!」

「圭ちゃん、行っちゃだめだ!!」

「来るな、圭一少年!!!!来ればやられるぞ!!!!」

「な・・・」

圭一が来ヶ谷のもとに走り出そうとするが、魅音と来ヶ谷の言葉にその足が止まる。

魅音に引き寄せられて、圭一がどういことだと聞く。

「狙撃兵のやり口だよ・・・負傷した仲間をそのままにして、助けに来た人間を狙い撃ちしていくんだ・・・」

「なに・・・!!?」

見ると、来ヶ谷が沙都子をどの方向から攻撃が来ても守れるようにしゃがませる。

だが、その顔はどんどん悪くなっていくだけだ。

「来ヶ谷さん！！私のことはもう……」

「バカなことを……いう物ではない……」

沙都子は来ヶ谷を見てそう叫ぶが、それを認める来ヶ谷ではない。傍から離れないように抱き寄せるが、このままの状況がいい方へと働くわけもない。

そうして、状況が動いた。

だが、それを動かしたのは彼らではないが。

ゴトリ、と重い音がして、来ヶ谷の足元に手榴弾が転がってくる。それを視界にとらえる者の、今の彼女にそれを弾くだけの力はない。



爆発まで、あと二秒か。

そう考え、沙都子に覆いかぶさって守ろうとする来ヶ谷。

そして直後に、それが爆発した。

「くるがやッ！！！」

「待て、鈴！行くなッ！！」

それを見て駆け出そうとする鈴を、謙吾が止める。  
隣では梨花と詩音が走りだそうとしていたが、羽入に止められていた。

「なんで止めるんだ！！くるがやとさところが！！！！！！」

「大丈夫だ！！あの二人はまだ大丈夫だ！！！！」

「え？」

「あぶねエことしやがって……筋肉さんがなかったら、どうなると思ってたんだ……！」

爆心地、その噴煙の中から、男の声が聞こえてきた。

真人だ。彼がその巨体と強靱さを以って、二人を爆破から守っていた。

が、そこで来ヶ谷が地面に倒れてしまう。  
おそらく、体力上の限界だろう。

「真人……！急げ……！」

「おう……！」

謙吾の声に、真人が二人を抱えてその場から逃げ出そうとするが、もはやこのままではメリットがないと考えたのか、一人分の人影が、木々の中から飛び出してきた。

ギギイ!!!

飛び出し、真人を背後から切り捨てようとした蒔風の剣を、謙吾が折れた模造刀を拾って受け止める。

だが、いくら彼がかつて”輝志”の力を使った者とはいえ、この戦力差ではどうすることもできないのだ。

「謙吾さん!!」

「逃げろ!!!今こいつに太刀打ちすることはできない!!!」

「.....」

謙吾の言葉に、皆がそれでも!と踏みとどまるが、真人はその意思を汲み取り、全員を押し出して逃がそうとする。

「おいバカ!!!謙吾を見殺しにする気か!!!」





そんな真人に切りかかる七獣は、あれだけの事をやったのだから因果応報だが、哀れだと言うほかない。

白虎の腹に拳がめり込み、振るわれた腕が麒麟の首を折り、後ろから飛びかかる獅子を後ろ蹴りで吹き飛ばしてから、その獅子に続いて飛びかかり背中に抱きついてきた玄武を頭を掴んで背負い投げのように地面に叩きつける。

更に朱雀の足を払って仰向けになったところを踏みつぶし、その朱雀から奪った槍で天馬を串刺しにする。

そして最後、青龍に、顔面を数センチ陥没させるほどの拳がブチ込まれて七人が一気に沈黙した。

真人の足元では羽人と梨花が蹲って震えている。

いくら彼女たちでも、目の前の現状にどうすることもできないのだ。

「な……に？」

「真人！！」

「謙吾……俺は……オレは理樹に顔向けできねえ！！！」

「今はいい！！逃げるぞ！！！！」

「逃がさん!!」

二人は梨花と羽入を抱えてその場から逃げることに全力を注ぐ。  
しかし、七獣がやられた事で一瞬気を取られた蒔風が、逃げていく彼らに向かって絶光砲を放とうとする。

だが

「こつちだ! 掴まれ!!!」

「な?」

「うお!?!」

そこに、小さな恐竜のような馬ウオプタルが走ってきて、それに乗ったハクオロとベナウイが四人を拾ってその場を去る。  
それでも絶光砲を放とうとする蒔風だが、背後から二刀の刃が迫り、身体を回転させてそれをかわしてその姿を見る。

オボロだ。

彼の両手に握られた刀が蒔風に迫るが、それを回転しながらの回し蹴りで下げ、絶光尖を逃げた真人たちに放つ。

が、それが彼らに当たることはなかった。

白く白い、純白の翼が、その先端に当てられて、軌道を大きく逸らしていったからだ。

「……神尾……観鈴……」

「私……こういうのは苦手なんだけど……でも、絶対にいけないって言うのも、わかってるから……だから……!」

そう言って、観鈴が傍らに立つ往人の手を握る。

まるで、それがとても怖いことであると知っていて、その恐怖を押し殺そうとするように。

「わたし、戦う……もう誰も……悲しいことなんて、さなないために……」



その言葉と同時に、時風が周囲を警戒する。  
おそらくはすでに囲まれている。

相手は神尾観鈴、国崎往人と、ハクオ口率いるトウスクルの戦士。  
森の中での戦いが、本格的に始まった。

t o b e c o n t i n u e d

山中襲撃（後書き）

圭「オレらの戦闘シーンは!？」

レナ「はう……私なんて鉈も振ってないよう……」

葉留佳「はるちゃんなんて一言もしゃべってないのに!？」

沙都子「わたくしは足手まといに……」

来ヶ谷「私は活躍できたから満足だ。やられたのは心外だがな」

鈴「一発蹴ってやりたかった!！」

詩音「あゝあ、こんな簡単にやられちゃうなんて」

魅音「仕方ないよ……あんな状況じゃ……」

はい、皆さんお疲れ様でしたー

全員「でしたー」

いやぁね？あの調子じゃどうにもキリがないので一気にやっしま

いました。  
ごめんねー！

沙「そ、そんなことで……」

レ「でも梨花ちゃんは生き残ったからー！」

そうして彼女もやられてしまうのだった

圭「変なこと言うなー！ー！」

今回も続きますね。

こうしたほづがやりやすいと思った。

来「ふむ、今回はこういう山の中での戦いを本領とした方々の出番  
だな」

鈴「さらに「よくじん」が来るのか。ようわからん」

あなたの先輩です。key的に。

ではまた次回

リスト残り

キヨン

朝比奈みくる

長門有希

古泉一樹

響鬼

ハクオロ

エルルウ

オボロ

ベナウイ

クロウ

カルラ

トウカ

泉戸裕理

泉戸ましる

城戸真司

秋山連

吉井明久

姫路瑞樹

島田美波

木下秀吉

土屋康太

津上翔一  
芦原涼  
氷川誠  
上条当麻  
インデックス  
御坂美琴  
クラウド・ストライフ  
古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
神尾美鈴  
小野寺ユウスケ  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
キンタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
天道総司

加賀美新  
矢車想  
劍崎一真  
皇月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
紅渡  
ガルル  
バツシャ  
ドツガ  
左翔太郎  
フィリップ  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
シグナム  
ヴィータ  
リインフォース？  
スバル・ナカジマ  
ティアナ・ランスタ  
キャロル・ルシエ  
エリオ・モンディアル

親白V's告白&謳者(前書き)

「謳者」は「うたわれるもの」です。

## 銀白VS純白&謳者

ギギイ！……ドンッ！……！

森の中で、剣を撃ちあう音、そして砲撃が放たれたかのような轟音が響く。

蒔風が木々の間を走り、脇の茂みからオボロヤカルラ、クロウが攻撃を仕掛け、どこから放っているのか矢も飛んで来ている。今までの音は、蒔風が攻撃を防ぎ、砲撃で反撃したものだ。

しかし、彼らは攻撃してきたと思っただけで、すぐに茂みに隠れ、ヒット&アウェイの戦法を崩してこない。

もちろん、蒔風とて最強を名乗っているだけあって、絶対に命中するというタイミングで砲撃を放っているのだが、そこを観鈴が逸らしてしまい、まったくこちらの攻撃が入らない。

その観鈴を狙おうにも、往人が常にそばにいるために攻撃の手を向けられない。



確かに、往人自身の力はそんなに高くない。

人形を操る「法术」を扱えると言っても、その程度では蒔風を防ぐことはできない。

だが、間に一人入るだけでそれは大きく異なる。

そのために手間が、一つ増えるのだから。

もちろん、蒔風がこの山ごと吹き飛ばすような攻撃をすれば意味はないのだが、なぜか彼はそれをしない。

とにかく、彼はその手間の間に観鈴に一撃入れられることを恐れていた。

彼女は翼人の中では非力な方だ。しかしそれでも、一撃をまともに食らえば蒔風もただでは済まない。

ゆえに、今のようなチマチマした攻撃に対してチマチマと返していくしかないのだ。

だが

「クツ・・・ソ!!!当たんねえ上にあつちからはやりたい放題かよ!!!」

「お前相手に、真つ向からは無理だからな」

「少し納得いかんが・・・搦め手で行かせてもらおう!!!」

攻撃を繰り出し、そして去っていくオボロとトウカが蒔風に言い放ち、だんだんとその攻撃を入れられるようになっていく。それに対して蒔風が顔をゆがめ、ついにその脚を止める。

「いつつ!!!」

「もらいましたわ!!!」

その蒔風に、カルラの鉄塊のような大剣が降り降ろされる。それを蒔風が前転でかわし、衝撃に地面が吹き飛び、その岩石に顔を覆つ。

更に追撃でオボロとクロウが剣を振るい、逆立ちのように避けてから、そのまま足を広げて反撃する。

と、そこに

「オオオオオオオオオオオオ！！！」

「！？　グアああああ！！？」

巨大なウィツアルネミアの姿が頭上に現れ、時風を巨腕で押しつぶす。

空にその腕を上げ、地面を抉りながらけち飛ばし、時風の身体が軽く吹き飛んで行って岩に激突。ガラガラと砕きながら、その中に埋もれていった。

「ハクオロさん！！！」

「四人は安全な所に連れて行った！！ベナウイが一緒だ。安心していい」

「よかった……」

「それと、仲間も来てくれたぞ」



そこまで言つて、蒔風の背後から、足音と何かが展開されるような音が聞こえた。

首だけひねり、その方向を睨みつけるかのように見る蒔風。

その額に、汗がにじむ。

「青年、覚悟！！」

「なっ！？」

「音撃打！！爆裂強打ッ！！！！」

ドドオン！！！！

背後に現れた響鬼に対し身体を返そうとした蒔風だが、その途中で音撃が叩きこまれる。

結果として身体の左から強烈な二連撃をくらい、ソレが統合されて音撃鼓が炸裂、爆発して破壊的な一撃を以って蒔風を元いたところにまで吹き飛ばす。

「ご……バはッ……（な……内臓をやられた……長くは戦えん!!!）」

蒔風が地面に倒れ伏せ、顔を上げるとそこには見えていたハクオロや観鈴たちがおり、蒔風を見下ろしていた。

「……………」

「もう……話すことはないんだな？」

「理樹からの報告を……聞いてない見てえだな？え？」

その言葉に、ハクオロの目が見開かれ、巨大な足が蒔風を踏みつぶそうと下ろされた。

だが、蒔風はそれを転がって避け、そのまま立ち上がってハクオロの足を螺旋状に駆けあがる。

その走った後に切れ込みができ、中から血が噴き出して、ハクオロがひるむ。

腰のあたりまで走り、そこからひるんだクロウ、カルラ、トウカ、オボロらへと真上から突っ込む蒔風。  
おそらく、このままならば彼ら四人のうち、どう見積もっても二人はやられるだろう。

しかし

「これで……っ!? アぐっ!?」

真上から彼らを狙う蒔風に、矢が飛んできてその脇腹を掠めていった。  
その攻撃に、蒔風が宙できりもみ回転し、地面に向かって無様に堕ちた。

「ッ……ドレイ、グラアか……たいした腕だ……」

「カミュとウルトリイが強化してんだ。当然だろ」

「ゼーりで……」

地面に倒れる時風に、オボロ達が取り囲んで元の姿に戻ったハクオ口、走ってきた響鬼もそこに加わる。その一同が、時風に向かって剣や武器を向ける。

「切断まではせずとも、臆は切らせてもらう。悪く思つな」

「因果応報……か？はは！！だが……」

「動くな！！！」

オオっ！！！！

時風の背から、銀白の翼が現れてそれが一気に光り出す。その光に一瞬目を奪われるが、それでもオボロが時風の元いた位置を感覚の身で切りつけた。

が、光が収まり、目を開けた頃には時風はおらず、その場に血だまりが残っていた。

「どこだ！？」



「剣は当たった……感触からして……真上だ!!!」

オボロがその手に残った剣で切った感覚から、時風の逃走経路を推察、そちらを見る。

はたして、時風は確かにそこにいた。

だが、上空だからどうという事はない。

観鈴が真っ先に飛び出していつて、そこから逃がさないように衝撃波を撒き散らして突っ込む。

今の時風は満身創痍だ。

それに対し、観鈴は万全の状態。

彼女の攻撃は衝撃波たった一つだが、その威力は猛烈だ。

かつて彼女の先祖であった者が、取り囲んだ僧兵数百人をその地形ごとまとめて吹き飛ばしたのだから。

だが、頭から血を流し、脇からは出血し、喉の奥から血がいまだにこみあげてくる時風は、苦しそうな顔をしながらもそれに向かって幾分も臆することはなかった。

後ろの腰辺りから何かを取り出し、それを起動させて握りしめると、それが体内の中に入って行った。

「!?!」

「これを使うのはもっと後だと思ってたけどな……」

瞬間、無数の剣が上空に現れ、彼女たちを一斉に襲った。

.....



にはあるが眩く。

「これは……なるほど……その人格」の人物には……翼人の素質があつたようだな……だが……」

Bannon!!!

「翼人が転生したところで、翼人になれるわけではない!!!」

ムツミの拳と、時風の両手の間で生じていた衝撃が破裂するように吹き飛び、両者を吹き飛ばす。

大きな木に背中を打ちつけるムツミ。だが、その脇腹にドッ、と短剣が突き刺さって、身体がぐらりと揺れ、カードへと変わってしまった。

その反対側では時風が息を切らしながら膝立ちになり、短剣を投げたままの姿になっていた。

観鈴はすでに吹き飛ばされていってしまったている。

あの無数の剣の雨から皆を守ろうとしたのだが、その物量の多さに押し負け、弾き飛ばされていってしまったのだ。

往人はその彼女を守ろうとして飛び付き抱きしめたが、その勢いの強さに一緒になって飛んで行ってしまった。

「ハア……ハア……ハア……やっ……た……」

そこまで言って、ドサリと倒れ込む蒔風。

意識が遠のく。そうして、最後に見たのは一人の少女の姿だった。



「お前……オレが何だかわかってんのか？」

「はい」

「敵だぞ！！！」

「ですが、怪我人です」

「な……！！？」

エルルウは言う。

確かに、あなたは敵だ。自分の大切な人を消したし、今までだって何人も。

でも、それでも自分は薬師なのだ。怪我人を治すのが自分の役目だ。

それは敵であろうと、変わらない。

「ダメだ……ダメなんだよ！！！！オレは……」

そのエルルウに、蒔風が首を振り、剣が揺れる。

「私は、あなたを許しません」

「え？」

「確かに、私はあなたを少しだけ診ました。しかし、それは薬師としてだけです。私個人は、あなたの敵です」

その瞳には、確かな思いがあった。

私は私の誇りにかけて、目の前で傷ついた人を治す。いくらそれが敵であっても。

それでいて、この少女は蒔風に対する敵意を持ったままだった。

一体、どれだけ強い思いなのだろう。

相反する思いを抱きながら、その使命と誇りを全うしきる、その心は。

その想いに、蒔風が驚いたように目を見開く。



そして俯き、短く言った。

「オレは、敵だ」

「はい」

「オレを許せるか」

「現在では、何を言われてもあなたを許すことはできません」

「そうか」

エルルウは思っていた。

いくら弱っているとは言っても、時風を自分が倒すことは不可能だ。それに、誰かを倒すなんてことが、自分にできるはずがない。

相手は時風舜。

世界最強。そして、一級品の暗殺者なのだから。

「それでも、憎むことはできます。私はあなたを許さない」

「そうか・・・ならば安心だ」

俯いたまま、時風が剣を収める。

そして

「すまない」

そう一言言って、彼女の後頭部に手刀を当てて倒す。

エルルウは、痛みすらも感じなかった。

だが、その瞬間の彼は、いつもの彼が悲劇に泣いているかのように、エルルウには見えた。

「は……は……なんだよ……こんなで崩れんなよ……」

エルルウのカードを手に、時風が慟哭するように呟く。  
その顔は今にもグシャグシャに崩れてしまいそうで、それでいて悪役の一片を残していた。

「せつかくここまで悪役やってんだぞ……もう賽は振っちゃまったんだ！最後までやるしかないんだよ……！！！」

そうして、カードを閉まって、心を練る。  
呼吸を取り戻して、飛び立っていく。

揺るがない。  
揺るぐわけにはいかないんだ。

一人たりとも逃さない。

これが、オレの正義だから……

オレは、こうしないと貰けないから……

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

銀白VS純白&謳者(後書き)

エルルウ「蒔風さん、なんだか悲しそうでした……」

ハクオロ「どういう事だ？やはり何が思惑があるという事か？」

オボロ「それはまあエルルウにしかわからないな」

トウカ「それよりもあの力はなんだったのか、だ」

響鬼「一体何したんだろうねえ？」

カルラ「ああもう！！一撃入ればどうにでもなると言うのに！！！」

クロウ「あゝあ、やられてしまいましたか。大將は逃げられたみたいですけどね」

皆さん御疲れでしたー

全員「でしたー」

マーク

ハクオロ達……ハクオロの仮面を正面から見たシルエツト(オリジナルで考えました。トウスクルのマークってありますか？)

響鬼……従来のものと同じ

あと忘れていたので

レナ・・・鉦

圭一・・・バット

沙都子・・・紐とタライ

詩音・・・スタンガン

魅音・・・モデルガン

鈴、来ヶ谷、葉留佳・・・リトルバスターズのロゴ

今回、何かをちらつかせてみました。

早かったかな？とも思いますけど、これからはまたどんどんやられていってしまうと思います。

少人数ずつだと鬱になってしまつ方も多いと思つので、こっついつぶうにしたのですが、どうでしょう？

最近執筆が進まない・・・

ゴジラのFINAL DVD BOXを買ってしまったってそれを見てばかりです。

こっちにゴジラ出そうかな・・・とか思ってみたり。

活動報告にも書きましたが、自分はゴジラから始まった人間だ、と言っても過言ではないほどに大好きなんですよね。

多分いつか出します!!!

そして、この場を借りて謝罪を。

前話での感想で、自分の単純な操作ミスでリュウガ様の、感想を削除してしまいました。

返信を以って謝罪いたしましたがこの場を借りて今一度謝罪いたします。

申しわけございませんでした。



この文章がしつこい、と思われたら、言ってください。  
後書きから削除いたします。

八「次回、蒔風を知る者」

ではまた次回

リスト残り

キヨン

朝比奈みくる

長門有希

古泉一樹

ベナウイ

泉戸裕理

泉戸ましる

城戸真司

秋山連

吉井明久

姫路瑞樹  
島田美波  
木下秀吉  
土屋康太  
津上翔一  
芦原涼  
氷川誠  
上条当麻  
インデックス  
御坂美琴  
クラウド・ストライフ  
古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
神尾美鈴  
小野寺ユウスケ  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
キンタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー

遠坂凜  
ランサー  
ギルガメツシュ  
天道総司  
加賀美新  
矢車想  
剣崎一真  
皐月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
紅渡  
ガルル  
バツシャ  
ドツガ  
左翔太郎  
フィリップ  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
シグナム  
ヴィータ  
リインフォース？  
スバル・ナカジマ  
ティアナ・ランスタ  
キャロル・ルシエ  
エリオ・モンディアル



## 彼に関して

ある街の一室。

「EARTH」支部だった場所だが、本部の壊滅で今は機能のすべ  
てが死んでいる。

そこに、クラウドと理樹、なのは、フェイト、海東、ユウスケ、愛  
紗、上条と、残った主力メンバーが集まっていた。  
彼らが集まったのは、他でもない。「彼」を知るためだ。

何故あんなにも変貌したのか。

そのために、この場には二人の男が呼ばれていた。

「蒔風の知り合いさんたちか。なんの用です？」

「あなたに、訊きたいことがあります」

その二人は、蒔風の友人の中で最も親しそうであった、佳景山と初  
原だ。

二人が途中で買った缶ジュースを手に、そこらへんのテーブルに腰

掛ける。

「蒔風の事で聞きたい？あいつがどーかしたのか？」

「ばっかお前聞いてなかったのか？あいつが敵になったからあいつの情報が欲しいって話だったじゃんかよ」

「おっけ、把握した」

そう言って、佳景山がどっかりと座り直して話を聞く。  
まず、何を知りたいのかを。

「シユンは……いきなり変わったりするような男か？」

「うーん……わからん」

「もし仲間を襲う事があったら、どついう事わかる？」

「わかんねえなあ……」

「……なんでもいい。あいつの行動や、心境で分かるようなものがあつたら……」

「「わかんないよ」「

しかし、いざ聞いてみると、返答は「わからない」の一边倒だった。その返答に、理樹が眉をひそめる。

本当に何もわからないのかと。

「わかんないなあ……あいつのことは数年間一緒にいるけど、わからんな」

「だなww。時風ってどんな人物？って聞かれても、「わからないが一番合ってるww」

「そ、そんなんで？」

「そんなんでも、あいつが楽しいことはわかってるし、オレたちは別にいいんだ」

「そしてあいつが何かするときは、必ずそれなりの理由がある。オレたちはそれを信じて敵になるだけだな」

「信じて……敵に？」

「そうだ。あいつのことなんてわかんねえよ。ホントはすぐに泣く、精神的に弱い、臆病者だつてのに、それを隠して強いと豪語してんだぜ？そんな奴の心境なんてわかんねえな」

「それでも、オレらはそんなあいつを信じてる。だが、敵として立つならあいつは敵だ。あんたらに、そこまでしてあいつをしつかりと信じて敵になることはできるか？」

「それは……」

「出来ないなら、あいつを理解することは止めておけ。やるだけ虚しいぞ」

「中途半端に知ろうとするくらいなら、しつかり憎んで、嫌い、敵になれ。じゃないと、そっちもあっちも辛いだけだからな」

そう言い残して、二人はその場を去って行った。  
その背中に、なのはが叫んだ。

「あなた達の目の前に！！大切な仲間が他の仲間を傷つけていたと



いう事実を突きつけられて！！それでもあなた達は……」

「許さんね。だが、信じもする」

「生ぬるい敵意ではない。本気での敵意だ。しかし、同時に信じる」

「それが……仲間だ」

「なんとも……まだまだぬるいね。「EARTH」のみなさん

」

そう言つて、今度こそその場を立ち去る二人。

残った者は、愕然とした。

「信じても敵？そんなこと……」

「いや。彼らならやる。間違いなく」

「これが経験の差か……考えてみれば、オレたちは蒔風と全然一緒に居なかつたもんな」

「でも、その友人を以つても「わからない」なんて……規格外すぎるよ」

「あいつが規格外なのは承知の上だ。だったら……」

そこまで言って、クラウドが拳を握って言った。

「オレは徹底的に、あいつの敵になるだけだ」

そう言って、個人のモニターを目の前に開く。  
回線を通して、他のメンバーに連絡を取るためだ。

『理樹……俺は……俺は!!!!!!』

「ま、真人……もう落ち着いて。気にしないで……」

『理樹、悪いがオレも同じだ。オレたちはもうお前に顔向けできない……!!!!!!』

理樹の元にかかれたモニターには、真人と謙吾が映っていた。後ろ

にはベナウイも見え、梨花と羽入を介抱している。

『俺たちはみんなを守れなかった……もう、あいつを倒すまで俺たちは戻らない!』

「真人!!」

『守ってばっかじゃ、やられちまうんだよ!!』

『理樹、守るのも大事だ。しかし、攻めなければ守れる者も守れん!!』

「でも……そんな危険な!!」

「だが、一理ある」

「クラウドさん!?!」

蒔風を追う側にまわるといふ二人の意見に、理樹は危険だと引き留めるがクラウドはそれに賛成した。

その確かに一理ある意見に、理樹がそれでも危険だという。

「攻めていくのには危険が伴う。だが、そうしなければおそらくシユンは倒せない」

「 蒔風は追い、それでいて追われる、か。たしかに有効だな・・・」

「 でも・・・それは!..!」

「 確かに危険だ。いや、だからこそ、やらねばならないかもしれな  
い」

「 .....」

「 攻めるぞ、あいつを。もう逃げてばかりではいられない」

.....  
.....

「ダァッ!!」

「クッ!!!!?」

「ハァッ!!!!」

荒野にて。

蒔風に対して猛攻を仕掛ける一団があった。

「蓮華様、お下がりにください!!」

「ここまで近ければ意味はない!!!!私に構わず、行け!!」

それは、呉国の一団だった。

彼らは数が少ないが、その全員が武術の心得を持つものだ。

しかし、その彼らを以ってしても、蒔風の前には敗れていくのみ。だが、今までと違うのは、倒してもとどめは刺さず、そのまま転がしているところだ。

「お前らを相手にする必要はない!!!!引け!!」

「そうはいかない……北郷を消したお前を、我々が見逃すと思  
うか!!!」

すでに地面には先頭切って飛び出していった雪蓮を始め、穩、亞莎、  
明命が倒れていて、残った者が総攻撃を仕掛けているところだ。  
だが、周りには何も無い荒野。時風はその能力で周囲一帯を吹き飛  
ばすような攻撃で、まったく彼らを寄せ付けない。

「くっ……我々では……ダメなのか!!!」

「引け引け!!おまえらじゃあ、役不足だ!!」

そう言って、再び絶光での衝撃を噴き出して一掃する時風。  
その衝撃に全員が吹き飛んで地面を転がる。

そうして、時風がもう誰も起き上がらないことを確認してから、そ  
の場を去ろうとする。

しかし

《アクセル!マキシマムドライブ!!!》

「!?!」

「ハアッ!?!」

ドンッ!?!

仮面ライダーアクセル、照井竜のアクセルグランツァーが蒔風を後ろから襲い、それを腕で受け止めて、転がりながらもどうにか防ぐ蒔風。

そうして起き上がると、そこにはWの二人が立っていた。

「まさか、お前が皆を泣かせてやがったとはな」

「許さないよ。絶対に」

その二人に、蒔風が髪を掻きあげながら目を細める。

彼らはリストのターゲットだ。ここで狙わないということはない。

「その二人だけでいい。お前は帰れ、照井」

「そうはできん。お前のやっていることを見逃せるほど、オレはお人好しではないのでな」

「邪魔だっつってんだよ……帰れ!?!」

「断る!?!?!」

「翔太郎、行くよ」

「ああ、フィリップ」

《サイクロン!》

《ジョーカー!?!》

「「変身!」」

《サイクロン ジョーカー!?!》

そうして、風都の仮面ライダーが立ちふさがる。



それに対し、時風が腰から何かを取り出す。

前回、観鈴やハクオ口達を一掃した原因だ。

ここから、時風からの、そして時風への攻撃が始まる。

t o b e c o n t i n u e d

彼に関して（後書き）

今回は誰もやらなかったから一人だね！！

そしてきました、これからの行動が。  
いままでは守りに出て、来たら撃退、そして出来れば追い詰めると言った形でしたが、ここから攻撃に転じます。

もしかしたら何か思惑があるかもしれない。でも、敵意は持つ。

彼らにそんなことはできません。  
出来るのは一部の人間だけでしょう。前回のエルルウのような。

だから、今一度決意を。  
彼を敵だと、認識し直す回ですね。

そして次回はライダー祭り！！  
ドンドン増援でやってきます（予定です）

さらに、蒔風が取り出したモノはなんなのか。

乞うご期待です!!

今回はリストなしです。

ではまた次回!!!

ゴジラおもしれー  
今は「VSメカゴジラ」見えます。

## 銀白VS仮面

荒野にて、Wとアクセルが時風と睨みあっている。

その時風の手には、握れば隠れてしまいそうな大きさのノック式USBメモリがあつた。

『なんだい？それは』

「なんだいとは面白い。お前らが一番知っているものだぞ？」

そう言われ、翔太郎が一つの考えに行きつく。

照井も同様に行きついたのか、しかし、それに信じられないでいる。

「ばかな・・・そんなに小型の物など、聞いたことがない！！！」

「何言つてんだよ。見つきりやすい犯罪道具・・・爆弾や銃なんてのは見つからないようどんどん小型になってんだぜ？こいつだって同じだ」

そう言つて、時風が手の中でそれをくるりと回し、USBをノックして接続部分を押し出した。

《ワールド!!!》

「ワールドだと!？」

「そのガイアメモリは……!!!」

「世界接合の際、どつからあぶれてきたのか……うまくこいつにコピペされたみたいだな。ちよいと融通効かないところもあるが、これはこれでいい」

「まずいぞ……」

アクセルの言葉に、Wがエクストリームへと強化変身して、ガイアメモリに対抗しようとする。

一方、蒔風が右手に握ったそれをそのまま右掌に握りしめ、体内に埋め込む。

蒔風の身体に淡くオレンジの光が走り、グキグキと首を鳴らして身体の様子を見る。

しかし、その体は一切変化せず、元の蒔風のままだった。

「ドーパントにならねえ？」

「あんないかにもな怪人、街中じゃ目立つただけだ。すぐれた道具は、無意味な変容はしないもんだぜ？」

それに、蒔風の場合は適合率もある。

彼らが関与したガイアメモリ事件で適合率が異様に高い事例があったのだが、その時の適合者はその能力のみを手に入れ、姿は一切変わらなかった。

このガイアメモリは、蒔風にとっての「運命の一本」なのだ。

「フィリップ！！あのメモリは！？」

『わからない……検索しても出てこない！！！！』

狼狽するWに、蒔風が早速攻撃に乗り出す。

その両手に握られたのは、干将・莫邪だ。

いきなり現れたその武器に、Wとアクセルが驚愕するが今はそんな事で足を止めている場合ではない。

それを手にして、蒔風が突撃してくる。

「くっ、迎え撃つぞ、左!!!!」

「わかってらあ!!!!」

そう言って二人掛かりで切りかかるが、蒔風のその剣はその攻撃を受け止めただけですぐに砕けてしまった。

しかし、即座に新たな剣が出現、再び二人に振るわれる。

「あれは……いったいどういうことだ？」

『おそらくはアーチャーの投影魔術という物だろう。前に見せてもらった。だが……それをなぜ彼が?』

「間違いなくガイアメモリのせいだろうがな」

ギーン!!!ギャリリリリリリリリ!!!!!!

三人の剣が鎬を削って打ち合わされ続けている。

蒔風の剣は相も変わらず砕けては戻りの繰り返しだ。

しかし、そんな中でもアクセルとWは圧倒されている。

最初から剣など捨てている様な、重い一撃。その一撃を受けるたびに、彼らの剣が大きくはじかれるのだ。無論、時風の剣は打ち付けた瞬間に砕け散るのだが、それでも衝撃は伝わってくる。

しかも、相手の剣は無尽蔵なのだ。

その怒涛の攻撃で、アクセルが弾かれた隙に蹴りを食らって転がる。

「照井!!」

「だからお前はハーフボイルドなんだ」

それを見て叫ぶ翔太郎だが、時風がその彼に向かって無数の剣を降らせてきた。

一瞬の隙。彼の取り柄であり、弱点でもあるその甘えが、この一瞬を生んでしまった。

「左!!!」

Wに向かって降りかかる数多くの剣が、次々と地面に突き刺さっていく。

その雨が止んだ後に残っていたのは、ぐらりと崩れながら変身が解除された翔太郎とフィリップだった。



「う……く……」

「ッは……そ、そのメモリは……まさか……」

地面を這うように蹲り、蒔風を見上げるフィリップがワールドメモリに大体の見当をつける。

彼の推測が正しければこのメモリはおそらく……

「あれは各世界の人物の記憶を持ったメモリだ……!!!」

「なに!?!」

「「世界」とはつまり物語だ。物語を記憶するという事はその登場人物の記録に近い……」

「つまりオレたちや「EARTH」のメンバー全員の方が使えるのかよ!?!」

「残念ながら、そこまで便利なもんじゃねえ」

フィリップの推理を聞いて、クツクと笑いながら蒔風が答えた。

曰く、彼が使えるのは倒して封印した者の力だけらしい。

そして、一度発動させたら使えるのはその時に決めた一人分だけ。つまり、ほかの者の力を使うには一度取り出して、もう一度起動させるしかないのだ。

「まあそれでも、アーチャーのこれが使えるだけで十分だけどな」

そう言って、蒔風の背後にまるで壁のように剣が出現し、背景を覆い尽くしていった。

「ッー?」

「無限アマンリミテッドの……」

「まずい……」

「ブレイトダンス  
剣舞」

蒔風の言葉と共に射出されてきた剣が、変身の解けた二人に向かって突っ込んできた。  
それをとっさに入り防ぐアクセル。

しかし、いくらアクセルと言っても無数に迫ってくる剣の多さに防ぎきれず、だんだんとその足が下がってきてしまっている。

「照井竜……」

「なんだ!!!」

「僕の相棒の身体を任せてもいいかい？」

「……承知した!!!」

「おいフィリップ!？」

と、その瞬間に翔太郎の腰にまだつけられていたベルトからジョーカーメモリが消え、フィリップのベルトに移動する。  
そして、彼の手にはボロボロの恐竜型ガイアメモリ「ファンゲ」があった。ファンゲは彼の呼び掛けに応じてやってくるるので、常に携帯しているものではない。この剣の雨の中を潜り抜けてきて、ここまで機能と外観を残しているだけでも奇跡的だ。

「翔太郎、大丈夫だ。僕らの絆は……そう簡単には消えないだろう?」

「フィリップ……わかったよ。つきあうぜ、相棒」

《ファンゲ!》

「「変身」」

《ファンゲ ジョーカー!!》

そうして、フィリップの体に装甲が纏われ、仮面ライダーWファンゲジョーカーへと姿を変える。

その際、翔太郎の身体は意識をなくし、フィリップの肩に手を当てながら崩れて倒れた。

「いまだー!!」

その変身の衝撃とオーラで降り注ぐ剣が吹き飛び、その際にアクセルがバイクフォームになって翔太郎の身体を背中に乗せてその場を去って行った。

それを逃がすまいと蒔風は翔太郎の身体に向かって剣を飛ばすが、Wがショルダーファンクを発動、肩に出現したショルダーセイバーをブーメランのように飛ばしてそれを迎撃して行った。

『オレの身体に手は出させないぜ?』

「さあ、いくよ、翔太郎」

『ああ、フィリップ』

そうして二人が蒔風に指をさし、いつものように、あの台詞を叩きつけた。

「『さあ、お前の罪を数えろー!!』」

それを聞き、見、蒔風が一瞬止まり、そしてハア、とため息をついてから弓を構えて矢の代わりになる剣を出現させた。

その剣は螺旋状に捻れており、まるで蒔風自身の捻れを表しているかのように禍々しかった。

「偽・螺旋剣（ガラドボルグ？）」

ドッ……！！

そうして放たれた矢は、一直線にWに向かって突っ込んでいった。炎の軌道を一本残し、大気を焦がしながら迫るその剣を、Wは真っ向から受けようとはしなかった。

まず、回避だ。

Wがその攻撃をその直線上から避ける事で回避しようとする。そこから一気に走りだし、蒔風へと最短距離で走り寄ってきた。

しかし、蒔風がそれニヤリと笑う。  
それで避けたつもりなのか、と

「ブローケンファンタズム  
壊れた幻想」

ドオン！！！！

Wが外れたように見えたその剣の間横を通った瞬間、その剣に込められた魔力が爆発してその姿を炎と衝撃で覆い尽くした。

それを時風が、ただ冷静に、冷えた目つきで見ている。

これで終わったとは思っていない。、曲がりなりにもWの強化体。この一撃で終わるとはさすがに思っていないが……

その瞬間、爆炎の中から、炎の塊と何百という銃弾、そして赤と青の残像が目映った。

「ほっ」

だが、そのいきなりの攻撃にも時風は慌てず、畳返しでその炎と銃弾を防ぎ、その壁と突き破ってきた残像に対して一瞬だけ剣を交えて後ろに流した。

そうして、背後に立ったのはカブトとガタツクだった。

みると、周囲を囲まれている。

煙の中から現れたWの脇には龍騎とG3-Xが、左にはギルスとキバ、右にはナイトとアギトがいた。

「蒔風！！おまえを」

「やっとここまでこれた……覚悟しろ」

「お前にはこれ以上やらせない」

各人が蒔風を囲んで何かを言うが、当の蒔風にはそれが聞こえていない。

蒔風としては、この状況はこう言った思いしか生まなかつた。

獲物がゾロゾロとやってきた……

そう片目を閉じ、フツ、と笑った蒔風。そこで、周りの声がやっと



耳に届いた。

しかしそれに今さら反応することもなく、いきなり動いた。

「遅いぞ」

ただ一言そう言って、三方向　正面と左右に向けて畳返しをし、背後のカブトとガタツクの超高速ライダーに向かって走り出した。

それに対して二人はクロックアップを発動し、蒔風も加速開翼でそれについていく。

別にしなくてもついていけるのだが、その時間は二秒とあまりにも短い。

さっきのように一瞬の攻防ならどうにかなるもの、先頭となるとやはりこうしなければついてはいけないのだ。

ツッコんてくる敵に、カブトが足刀蹴りで蒔風の顎を狙って来、バツクステップでそれを躲すとそこにガタツクがダブルカリバーで切りかかってくる。

それを畳返して起こした地面を蹴り飛ばして防ぐ蒔風。

飛んできたそれをガタツクが難なく粉碎するものの、その陰に隠れてすぐ横にまで接近してきた蒔風がその腰に触れた。

「CLOCK OVER」

その瞬間、ガタツクのクロックアップが強制解除されてこの世界からはじき出される。

その動きの止まったガタツクに対し、時風が踵落しでその脳天を踏み砕こうとするが、そこにカブトがクナイガンクナイモードで切りかかってきた。

それに対して、踵落しの落としどころを変更し、カブトに対して振り下ろす時風。

カブトは腕を十字にクロスさせてそれを受け止め、片手を降ろしてゼクターのボタンを押す。

1、2、3、とカウント音が発せられてエネルギーがチャージされ、その足にタオキン粒子をまとわせて、至近距離のままカブトのライダークックが放たれた。

ゴッ、ドオン！！！！

凄まじい衝撃と破壊音を鳴らして、時風の身体が吹き飛んだ。が、頭から血を流し、その視界が真っ赤に染まりながらも、時風は標的を定めていた。

吹き飛んだ先、静止したライダーたち。そこにいたのは、ギルスとキバだった。

「なに!？」

「・・・もらった」

ザシュ!!という斬撃音とともに、時風が吹き飛んだ勢いを利用してギルスに一闪、剣をふるった。

そしてその体がスローモーションで崩れていく。

カブトとて、その延長線上に彼らがいたことは知っていた。

しかし、誰が想定するだろうか？カブトの渾身のライダーキックをあえて食らい、それを利用するなどという捨て身の攻撃など!!!

「CLOCK OVER」

そうして、カブトのクロックアップも解け、時風も必要がなくなつたためか翼を閉じた。

世界が戻る。

突如として現れる蒔風とカブト。  
驚愕するガタツク、崩れ落ち消えるギルス、目の前の光景に硬直するキバ。

そのキバの腰にあるフェッスルを軒並み奪い取る蒔風。  
そのまま彼の背後へと回って彼を羽交い絞めにし、ベルトにいるキバットの口に無理やりそれを噛ませて次々とガール、ドツカ、バツシャーを呼び出させる。

「なにを!?!」

「こっちらわなきゃこっちは困るんでな」

そうして、呼び出されたら来ないわけにはいかない彼らはキバのもとへと集まって来た。

その瞬間、蒔風がキバを蹴り飛ばし、光になって飛んできた三体を次々と切り碎いて封印した。

呼び出された際、彼らはキバ各フォームの専用武器へと姿を変えてやってくる。

そこを攻撃されたのだ。抵抗などできるはずもない。

「みんなあ!!!」

「彼らがやれるかどうかが厄介だった。キャッスルドランごと吹き飛ばしてもよかったが……さすがに骨が折れるからな」

「くそ！！タツロツト！！！！」

と、そこでキバがタツロツトを呼び出してエンペラーフォームへと強化変身する。

蒔風は飛んでくるタツロツトを狙い攻撃するものの、ナイトとアギトの攻撃で邪魔をされてしまった。

「うざいぞ！！！！」

「本望だな」

「蒔風さん、あなたを倒します！！！！」

そう言つて、ナイトがサバイブ、アギトがシャイニングへと変わり、今度はその隙をキバが補った。

しかし、蒔風の攻撃を受け切るにはいくらエンペラーフォームといえども心許ない。

それはそうだろう。彼の本領はエンペラーフォームになることで使用可能になる「ザンバットソード」や、アームズモンスターによるファイバー技だ。

ザンバットソードはそれ自体の力が強すぎてアームズモンスターたちの補助なしには使えないし、ファイバー技は彼ら自身がないのでどうしようもない。

もちろん、彼単体でも攻撃はできる。できるのだが、ファイナルウエイクアップには時間がかかりすぎるのだ。それを待つほど、蒔風は優しい人間ではない。

だがまあ、いくら隙とはいっても彼らが強化変身を終えるまでに所要する時間は二秒と掛からない。

キバが蒔風の相手をし始めてすぐ、彼ら二人が攻撃に加わった。

ナイトサバイブとシャイニングアギトの剣、そして、キバの拳。

だが、それだけを相手取っても、蒔風は一切の余裕を崩さない。

(なんだ・・・この手ごたえのなさは!?)

(まるで攻撃が効かない・・・届かない!?)

「(これは・・・まさか!!) みなさん!! いったん攻撃を・・・」

「行くぞ!! 皆下がれ!!」

「うおりゃアアアアア!!」

アギトが何かに気づき、皆をいったん下げようとするがそこにG3-Xと強化変身した龍騎サバイブによる遠距離からの爆撃が放たれた。

その攻撃に、三人がその場を一瞬で下がリド真ん中にいた時風に直撃した。

「っしやあー!!!」

「これで……!?!」

ガッツポーズをとる龍騎の隣で、G3-Xが終わったのかと爆煙を見ると、マスク内のモニターが何かを察知した。

それを解析し始めると、なぜか目の前の光景が歪み、足元が揺れた。

「これは……!?!」

「みなさん!!!これは幻覚です!!!!オオオオオオオオオオ!!!」

頭を押さえ、立ち眩みのようにG3-Xがグラつくと、アギトが皆に叫んでシャイニングカリバーを輝かせて何も無い空間に振るった。

しかし、そのカリバーは空を切ることなく、ガキィ！！という音とともに火花を散らして受け止められた。

「!?!」

「さすがは超能力のアギト。思ったより早く気付いたな」

「やはりそうですか・・・これは固有結界から派生した幻覚!?!」

「!?!明察」

そう言っつて、周囲が歪んで風景が正常のものへと変わる。  
そして見えてきたのは、すでに発された後なのか消えていく光と、  
蒔風の手にあるカードだった。

「あれは・・・!?!」

「蓮・・・!?!」





「『フアングストライザー！！！』」

「ハアアアああ！！！！」

しかし

「混暗を基に混ざりし二属。雷旺、絶光」

蒔風がその拳に混暗を纏わせ、そこに雷旺と絶光を乗せる事で混ぜ合わせ、一つの力として握りしめる。

「拳閃、雷光拳」

ヒュオ

バア！！！！！！

腰を落とし、深く構えた蒔風が、その拳を構えて中段突きの高さで突いた。

しかし、恐ろしいのはそのスピードだ。

蒔風にとっては一步踏み込んで拳を出したただだが、その「一步」は突っ込んでくる三人を一気に通り過ぎ、同時に何十発もの乱打を浴びせていたのだから。

「音を超え、雷、光を携えた拳は、当たらずともその余波だけで何発もの衝撃を与える」

「が……ぐ……」

「お……」

「あ……ああ……」

「吹き飛ばへ」

ゴシャー！！

ゴンツッ！！

ガッ、ベキョッ！！！！

三人が吹き飛び、ある者は岩に、ある者は垂直に地面に叩きつけられ、ある者はきりもみ回転して地面に落下、大地を抉って動きを止めた。

そうして、Wとキバが光と消えた。

彼らは宙でキックを放っていた。そこをあんな反則じみた途方もない威力で吹き飛ばされたのだから、踏ん張るもなにもなく直撃してしまったのだ。

龍騎だけはまだ無事だった。

しかし、サバイブは解け、ドラグレッダーも力なく地面に倒れ込んでいる。

その龍騎に、時風が慈悲もなく剣を振り下ろす。

ドンッ！！という音がして、G3-X　　氷室誠が光となって消えた。

G3-Xはライダーとはいえ、決して強力なものではない。ただの機械仕掛けの強化スーツなのだ。



構えを取り、その脚にエネルギーを溜めていく二人。  
しかし、二人は顔をあげようとしない。

いつもならば、真っ直ぐに敵を見据えて構えるはずが、今の彼らは下に俯きながら腰を落としている。

もう、彼らには見てられないのだ。仲間が倒れるところも、彼がその仲間を倒しているところも、自分が彼を倒すところも。

もう、憎んでいるのかも信じているのかもわからない、ある種の狂気に彼らは心を襲われていた。

「ハアッ!!」「ダアッ!!」

しかしそんな状況でも、彼らはキックを蒔風に放った。  
蒔風の前後から、同じ角度、同じ高さから二人のキックが放たれて、真っ直ぐに向かってきて、蒔風がそれを見て、小さくつぶやいた。

「イメージ的世界破壊」  
イマジナリティワールドエンド

瞬間、世界が変わった。

蒔風が法則を読みとり、そのタイミングで指をバチン、と鳴らした。すると、彼らのキックの角度が変わって、あらぬ方向へとすっ飛んで行った。

彼らは自分の想定していた角度とは違う角度で着地させられ、龍騎は地面にこすりつけられ、アギトは背中から思いつきり打ちつけて地面に落ちた。

そうして、誰も動かなくなる。

この空間内ではこれが切れるまでは動かない方が得策だ。

何が起こるか、全くわからないのだから。

しかし、ここで蒔風が吐血して倒れる。

一体何の法則が働いたのかわからないが、それと同時に時間が過ぎて結界が切れる。

それと同時に、カブトとガタックが動いた。

その手にハイパーゼクターを握り、それぞれハイパーフォームへと

変身したのだ。

「あー……げふ……くそ」

それを見て、蒔風が頭をガシガシと書いて口元の血を拭った。

彼らのハイパークロックアップの速度は彼も知っている。

しかし、いまだ彼にもあのスピードは出せないのだ。

加速開翼しても、最大で二秒。

しかも、今はコンディションが最悪だ。おそらくついてはいけな  
いだろう。

だから、彼は諦めた。

そして右の掌からメモリを出した。

《ワールド……!》

そうしてもう一度メモリをロックして起動、再び挿入し、その手に  
武器を構える。

武器は、機召銃マグナバイザー。仮面ライダーゾルダの基本装備だ。



と、同時に蒔風が思いっきり足を地面に踏みつけ起き上がった。壁で、カブトとガタツク、そして龍騎とアギトをまとめて一つの部屋に入れた。かなり巨大だ。しかも、その中には蒔風までも入っている。天井もどうやったのか塞がれており、彼らは完全に閉じ込められた形になった。

と、そこでカブトが身構える。

どうしたのかと聞くガタツクだが、カブトはそのまま言った。

「忘れたのか……蒔風は暗殺のプロだ。この暗闇でやってこないとは限らない……」

「!?!」

その言葉に、全員が背を合わせて全方位に意識を飛ばす。だが、聞こえてきたのは蒔風のやる気のない声だけだった。

「もつさ、お前らの相手めんどくさいんだわ」





そして今向かっているのは、彼らがやってきた方向だった。

（この先にはあいつらが一緒にいたメンバーがいるはず……  
守り手は登大牙に名護敬介、矢車と言ったところかな？……）

そうして一歩ずつ、その標的へと近づいて行く時風。  
すでにその洞窟のような岩場は視界にとらえている。

それから三十分後には時風の手元にカードがさらに集まっていた。  
矢車想と、吉井明久、姫路瑞樹、島田美波、木下秀吉、土屋康太の  
五人のカードが。

名護と太牙は戦闘不能にして転がしてきた。  
彼らをカードにする必要はない。

時風の脳裏に、彼らの最後の言葉が思い出される。

やめて！！

死にたくない

なんでこんな……

その記憶に、時風が頭を抱えてぐらついた。  
まるで呼吸の仕方を忘れたかのような声を出して苦しそうに歯を食いしばり、錯乱したように頭をかきむしった。

しかし、それでも時風の目に揺るぎはなかった。

その感情を押し殺し、時風はヨロヨロとその場を去る。

次の標的を、探して。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 銀白VS仮面（後書き）

今日も遅くなつてすみませんでした!!

戦闘シーンを書くのは楽しいんですけど、そのせいで昨日は展開に影響の出る内容を書いていしまつて……

マークですが、ライダーはガンバライドと同じです。

明久達は文月学園の校章で。

翔一「蒔風さん、あれは反則ですよ……」

天道「まさかあやつてハイパーを封じてくるとは……!!」

カ・ガーマン「捨て身の攻撃じゃねえか!!あと名前ちげエ!!」

真司「オレ結構頑張った!!がんばったのに!!」

芦原「オレなんて相手がクロックアップだったから何が何だかわからなかったぞ……」

氷川「僕はまア……なんですか津上さんその目は!!私は決して不器用では……!!!!」





さて、こんかいでかーなり、削りましたよ？

これで残ったのはかなりいい戦いをしてくれる人たちでしょうか？

追い詰められてるから、きつと必死だな。

この調子で消すとあつという間に終わりそうなので、多分いつかは  
一対一の話もあると思いますね。

ちなみに蒔風が吐血して倒れた時の法則は

敵の攻撃を避ける 直撃分の三分の二ダメージを食らう。です

まあ確かにどちらかと言われればそっちでしょうが、いい法則は発  
生してくれなかったみたいですね。

では！！このへんで！！

名護「やめなさい！！・・・私を押しつけて自分が次回予告しよ  
うとするのをやめなさい！！ボタンとるぞ！！！」

渡「名護さんはやられただけで封印されてないじゃないですか！！

！」

明久「次回、学園都市」

ではまた次回

名護「予告がア！？その命、神に返しなさい！！！！！」

大きな修正箇所を見つけ、いったん削除して投稿し直しました。  
誠に申し訳ございません

リスト残り

キヨン

朝比奈みくる

長門有希

古泉一樹

ベナウイ

泉戸裕理

泉戸ましる  
上条当麻  
インデックス  
御坂美琴  
クラウド・ストライフ  
古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
神尾美鈴  
小野寺ユウスケ  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
キンタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
剣崎一真  
皐月駆  
水奈瀬ゆか

草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
左翔太郎  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
シグナム  
ヴィータ  
リインフォース？  
スバル・ナカジマ  
ティアナ・ランスタール  
キャロル・ルシエ  
エリオ・モンディアル

## 銀白VS前線&超電磁砲

「駄目だよ！！私は絶対に行かせないから！！」

「桃香様は悔しくないの！？ご主人様が消され、蓮華たちがあんなにも叩きのめされてしまったんだよ！！」

「蒲公英の言うとおりだぜ。しかもこっちは星、そして何よりも鈴々が……」

「桃香様……我々には仇討の権利があります。私も仲間や主、そして友人が手にかけられて、黙っていられるほど冷静な人物ではありません。春蘭たち魏はすでに時風を追っています。我々も！！」

「ダメ！！もうみんな離れないで……誰もいなくならないで……ご主人様に鈴々ちゃんと星ちゃんがやられて、それで愛紗ちゃんまで失っちゃったらどうすればいいの！？」

「桃香様……」

「いつもなら、私も一緒に戦うよ。でも……これじゃまるで……」

「……わかりました。我々は彼を追うのをやめましょう」

「!!! 愛紗ちゃん!!!!」

そうして、ボロボロになって工事中の「EARTH」本部横の学園の一室で、一人の少女が義妹を抱きしめた。  
しかし、その瞳は申し訳なさと



「とにかく、ここにいれば大丈夫……のはずだ」

「上条さん、本当にそれ大丈夫なんですか……」

人口320万人の学園都市。

その廃棄都市の一角で、キョンや上条当麻をはじめとしたメンバーが集まっていた。

いるのは、ハルヒを除いたSOS団の四人、上条当麻、インデックス、そして彼女の所属する必要悪の教会<sup>ネヒサリウス</sup>魔術師、ステイル・マヌグスに神裂火織だ。

6023

しかし、ついさっきまではここにはもう少しメンバーがいた。  
ティアナたち四人のフォワードと、御坂美琴、白井黒子だ。

つい二十分前の事。

学園都市の治安を司る<sup>アンチスキル</sup>警備員や<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員に、学園都市に侵入者があつたとの連絡が入つたのだ。

それを聞いて、その場にいた者は理解した。



ここに時風がやってきたのだと。

無論、それを聞いて黙っている彼女らではなかった。

ここを守りを彼らに任せ、時風に攻撃を仕掛けに行ってしまった。

ちなみにステイルと神裂はその後に出てきた。

この場にはいたのだが、どうも科学サイドの二人がいるとどうにもやりにくいそうだ。

「あいつら大丈夫かな・・・」

「学園都市第三位の超能力者に、瞬間移動の大能力者だぜ？大丈夫・・・だと思っ」

「そうですね。それにランスターさん達は選りすぐられたの精鋭です。かといつても相手は時風さんですし・・・長門さん、彼らの勝率、大まかでいいのでわかりませんか？」

大きな木箱に腰かけていた長門に、古泉が話を振った。

その質問に長門が一度キヨンの方を向き、教えてくれ、と頷くと淡々と言葉を発した。

「彼女らの力と蒔風舜の力だけを見ると、彼女らの方が勝っている」

「マジでか!？」

「まあ、あんだけ数いりゃあなア……」

「しかし、戦闘で勝てるかは話が別。もし彼女らが蒔風舜と交戦した場合、38手以内に敗北するだろう」

「うそ……」

「ホントかよ……」

長門の話に、みくるは怯え、上条が啞然とする。

無理もない。御坂や黒子の力はよく知ってるし、最後の戦いときや模擬戦の時に見たティアナ達の实力はそれにも負けず劣らずと言ったところか。

そんな彼らが、四十も満たない攻防でやられると言われたのだから、啞然は当然の反応だ。

「しかし、計算通りに行く現実などない。私は、それを知っている」

「長門？」



「わかったわよ。あいつが侵入したのは第11学区。物資搬入のゲートから侵入したみたいね」

「さっすがお姉様。では、行きましようか？」

「そうね。でもなんであんたがいるのかしら？黒子」

公衆電話からハッキングをかけ、蒔風が侵入した学区を割り出した美琴が、一緒に来ている黒子の頬を引つ張って問い詰めていた。黒子はそれに対して「ひたいひたい」と言いながらその手を叩いた。

「あんたはリストに載ってないでしょ！？ここらでもう手を引きなさい・・・あんたまでやられたら・・・」

「では聞きましょう。逆の立場だったらお姉様はそうですかと引き下がりましたか？」

「そういう問題じゃないの！！相手はあの蒔風なのよ！？この人数で行っても勝てるかどうかなの・・・」

「だったら私も行きますわ。それに、私の能力ならば先に逃げて皆さんを逃がすこともできますよ」

「う……」

黒子の言葉に押され気味の機事が、助け船を求めるようにティアナの方を見た。

視線を向けられ、あ、あたし？と困惑するティアナだが、こほんと咳ばらいをし、黒子に言った。

「あなた、本気で来るつもりなのね？」

「もちろんですわ」

「……わかったわ」

「ティアナさん!？」

「だってしょうがないじゃない。それに、彼女の言い分も一理あるわ。戦力としては申し分ないし」

その言葉に、ぐぬぬぬと頭を抱える美琴に、決まりですわねと笑う黒子。

そうして、彼女らは向かう。



い。このペースならまだ順調だが……)

「できれば、早めに済ませたい……」

そうつぶやいて、ビルの角をまがった瞬間だった。

「リボルバーナックルツ!!!」

ゴッ!!という音が蒔風の顔面から鳴り、その体が吹き飛んで行った。  
ぶつかったビルの壁を崩してに突っ込み、蒔風の姿が消えた。

しかしその瞬間、蒔風を吹き飛ばしたスバルの後方から、ティアナのクロスファイアと御坂の電撃が放たれ、一気にその一点へと叩きこまれていった。

そうして十秒ほど叩きこまれた後に

「・・・ストップ。様子を見るわ」

と、ティアナがその攻撃を中断する。

攻撃されたビルの一階部分はすでに崩れており、どうしてまだ立っているのか不思議な感じだ。

煙が晴れ、案の定そこに蒔風はいない。

しかし、命中はしていたようで、血の跡が点々と残っていた。

「どこに・・・」

それを見たティアナが血の跡を探る。

もちろん、ビルに近づいてなどという愚行は犯さない。その場から見える範囲でその跡を追った。

そして、それが途中で途切れているのを見て、ティアナが皆に言った。

「ここにはもういないか・・・いや、それで諦める人じゃない・・・」

「ティア、どっする??」



「……………キャラ、反応は？」

「近くに舜さんの反応は見当たりません」

「私も、不意打ちなら大丈夫よ。微弱な電磁波出してるから察知できるし」

キャラと美琴の言葉に三秒ほど考えるティアナだが、結論としてだったら善は急げと、彼女らが駆けだした。  
ここにいないのなら、きっと狙われるのはあっちだ。

しかし

バゴオツ!!!!

走り出してから十歩。

その地点で、美琴の足元の地面から蒔風が飛び出し、アッパーカットを叩き込もうと腕を伸ばしてきた。

が、それは叶わず、黒子によって美琴が緊急回避されて少し離れたところに着地した。

「あつぶな……」

「お姉様、お怪我は？」

「ないわ。ありがとう……でも……」

「行くよエリオ!!」

「はい!!」

その場から二メートルほど離れた美琴の脇を、二人が駆けて蒔風へと迫る。

もちろん、二人ともキャロのブーストをかけてもらっていたし、スバルはすでにいつでも振動拳を放てる状態に、エリオも全身に電気を回して身体能力を底上げしていた。

にもかかわらず、蒔風の攻撃はスバルの身体に衝撃を深く叩きこんだ。

ゴガッ!!!

蒔風はまるでその場にスバルが来ることを把握していたかのように、踵を振りあげて待ち受けていた。

そしてスバルは、その真下にまんまと踏み込んでしまったのだ。

足が振り降ろされスバルがそれをガードするが、あまりの威力に地面が窪み、いきなりの攻撃に膝が崩れた。

しかしそうなつても、蒔風の踵落としをしつかりと防いでいたスバルはさすがというところだ。

だが、同時にまずい。スバルはまだ振動拳を「完全に」扱いきれていないのだ。

もちろん、以前の蒔風の特訓で拳に集中させて放つことはできたし、あれからの特訓で蹴りでも放つ事が出来た。そこは全く問題なく自由に行ける。

だが、まだそれ以外の任意の場所から放つことはできず、上腕をクロスさせて受けている状態では放ちようがないのだ。

無論、全身から噴き出すことも可能だが、それではエリオも巻き添えだ。

そんなことはできなかった。

と、踵落としとそれを受け止めた形のまま固まった二人に、残ったエリオが方向を変えて槍を突き出した。

場所は、蒔風の真背面から。狙うは、背中のご真ん中。

雷が迸り、蒔風に直撃。直後にエリオの槍もそこに突っ込んだ。

しかし、それは蒔風が背に出した「獅子天麟」の鞘で受け止められてしまう。

それでも押されていることには変わりない。蒔風の身体が押し出され、スバルがそれに合わせて身体を返し、蒔風の後ろに回りこんだ。

蒔風にしては支えを失ったようなもの。その身体が前にヨロつく。それ自体はたいしたことではない。蒔風はすぐに体制を整える。

しかし、まずいのはここからだ。

「喰らいなさいませ！！！」

頭上に黒子テレポートで、どこから持ってきたのかコンクリートの塊を次々と降り落としていく。

それを拳で砕いてすべて粉碎する蒔風だが、そこに再びエリオとスバルが突っ込み、スバルが前に立って近接、エリオがその隙間を縫うような突きで攻撃してきた。

その攻撃に蒔風すらも舌打ちをしてついに剣を抜く。

「天地」と「陰陽」に組み上げて両手でいなし、防いでいく。

が、敵は彼らだけではないのだ。  
そうして受けていくと、キャロのアルケミックチェーンが蒔風の腕と足、腰に巻きつき、その動きを止めた。

「行くわよ！！クロスミラージュ！！」

「黒子！！皆と一緒に下がってなさい！！！！」

縛りつけられた蒔風の元へと、ファントムブレイザーとレールガンが放たれ、その顔が一瞬焦りに染まった。

しかし、そうしながらも蒔風が迅速に行動した。  
アルケミックチェーンが引きちぎれないとわかるとその場にしゃがみ込んで、まず先に来た胸を狙うレールガンを避けた。  
次に、誘導性能のあるファントムブレイザーに対してはタイミングを見て再び立ち上がり、真正面からそれを腹部に受ける。

その瞬間、蒔風が全身の力を腹部に回し、胆力を以って腰の軸を捻って、それを受け流した。

「オアツ！！！！」

するとファントムブレイザーは何発もあるにもかかわらずそのすべてが、時風の腰に着弾した瞬間、その腰を一周ぐるりと回って真っ直ぐにティアナへと跳ね返されていった。

嫌、実際には跳ね返されたのではない。しいて言うのならば、「腰で掴んで投げ飛ばした」のだ……!!!!!!

その攻撃を、美琴が電撃で弾き飛ばす。

しかし、弾いたはいいもののそれは二人の周囲に着弾し、二人を土煙に隠した。

「ティアナさん！御坂さん!!!」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

バキンッ!!

時風の咆哮と共に、身体を縛っていたチェーンが砕け、その拳が離れたキャロに向かって放たれた。

拳からは衝撃波のようなモノが飛び出し、それはまるで空気の塊のようにキャロへと激突。

咄嗟に間に入ったフリード（巨大体）もろとも吹き飛ばし、その巨体を光に変えた。

キヤロはというと、吹き飛んでフリードとビルに挟まれる前に黒子が救出したので無事だったが、気絶してしまっていて戦闘続行は不可能だ。

と、そこで土煙の中からティアナが飛び出してきてダガーで蒔風に切りつけてきた。その刃を蒔風が裏拳で弾き、魔力で構成された刃が碎ける。

直後、ピタリと背中に触れる何かを感じた蒔風。

冷や汗を感じ、それに対応しようと身体をそちらに向けようとするが、エリオが槍で蒔風の臍の部分にストラダーの石突をめり込ませてその場に縫いとめてしまった。

その速さに、蒔風が一切気付かなかった。

目の前にティアナがいたためというのもあったが、その速さに蒔風は驚愕していた。

「ガッ！？はや・・・」

「あなたに貰った、強さです！！！！！！」

「振動拳！！不動破碎！！！！！！」

グウン・・・・・・・・・・ビギギギギギギギツツ！！！！！！

「お・・・・・・・・ご・・・・・・・・ぐつ・・・・・・・・バハツァ！！！！！！」

そうして、蒔風の背中からスバルの振動拳が叩きこまれる。

打ちこむ衝撃はなく、しかしそれでも全身に廻るその振動は蒔風の身体を内部から隅々にわたるまで攻撃し、甚大なダメージを与えた。

その体がぐらりと揺れ、しかしそれでも蒔風はただではやられない。地面に倒れ伏す直前、両手を地面に付けて後ろのスバルに足払いを振り、横に倒れ、半ば宙に浮いた彼女の側頭部に向かって、地に付けた両手で逆立ちしてからその頭を真上から踏み抜いた。

地面に亀裂が入り、先ほど蒔風が吹き飛ばされたビルが崩れ落ち、スバルの身体が消えていった。

「げバツ・・・・・・・・ごホツ・・・・・・・・ハア・・・・・・・・ハア・・・・・・・・」



蒔風がスバルのカードを手取るが、その体の状態は瀕死に近い。

彼女のこれは戦闘機人としての能力を利用したもので、非殺傷にはしているもののあまり意味がないのだ。

爆破や砲撃といった手段ならともかく、内部破壊に殺傷も非殺傷もない。

内部からダメージを与えるとはいさういう事。どうあがいても相手を潰す攻撃。

そして、スバルはそれを承知で叩きこんだ。

蒔風は全身に細かい傷を負い、頭部からは血を流し、アバラが何本か折れて背骨にはひびが入っているかもしれない。

さらに喉からは血が今も登ってきて吐き出しそうだし、血涙も流していた。鼻血など当然だ。

その光景にすこしだけ哀れそうな顔をしながらも、ティアナは銃口を蒔風に向けて逸らさない。

当然である。部隊長に引き続いて親友までやられた。

この男にかける遠慮、同情はもはやない。

その時風はジャケットの下に着ている服を引きちぎって、血を吸って重くなった布を捨てた。  
素肌の上に直接羽織っている状態だ。

そして、その下に途方もない傷跡を黒子とエリオは見た。  
周囲を時風が注意するように振り向いたので、必然的にティアナや美琴にも見える。

その状態はあまりにも陰惨だった。

上体に傷がないところはない。

肩から腰にかけては斜めに切り傷があり、脇腹にも切り傷が。そしてその上体は血が固まっているのかドス黒く染まっていた。

「どうしたあ……怖気づいてんじゃねえぞお……かかってこいよ!!!剥ぐぞてめえらア!!!」

シュキン……………

時風がそんな状態で腰から「風林火山」を抜く。  
組み立て、片手にそれぞれ「風林」「火山」と握ってその腕をだらしと下げている。

一歩一歩、ダラリとした身体でそのまま歩いてきて、一気に美琴の方へと走り出した蒔風。

地面に付いた刃が火花を散らしてその軌道を照らした。

美琴は確かに学園都市で第三位を誇る超能力者だ。

しかしだからと言って、こんな相手と近接戦闘ができるほどじゃない……!!!!

美琴が蒔風の腕を狙って電撃を発し、その狙いを逸らしていく。

もちろん手加減などしていない。しかし雷旺を操る彼には逸らす程度にしか効かないのだ。

それでも帯電した腕は痺れ、思ったように振れていないのかその顔に苛立ちが見えてきた。

「今よ!!! エリオ」

「貫いて!!!」

その一瞬の間。

底について、ティアナと美琴が同時に叫び、エリオが雷槍ストライダーを構えて蒔風の身体を貫こうと突貫した。

それを蒔風が後ろ向きに見て察知し、足で踏みこみ、畳返しで防ごうとする。

しかも三枚。これだけの数を前にして、今のエリオのスピードで突っ込めば間違いなくぶつかって潰れるだろう。

しかし、それはなにもせず突っ込んだら、という話だ。

「ストラーダ、フルドライブ!!!!!!」

《Jawohl!》

「だアアアアアアアアア!!!!!!必敵貫砕!!!!!!紫電一閃!!!!!!」

ドンドンドンッ!!!!!!ドンドンドンッ!!!!!!

その突進が三枚の地盤を砕き、粉碎された破片をも爆砕させて疾走する。

元よりの速度、ブースター、そして爆風を背に、雷の竜騎士がトツプスピードで時風へと迫った。

その空気抵抗で槍がぶれる。バリアジャケットが裂けていく。

バリアジャケットを羽織っているにも関わらずこの風圧。

エリオは必死になって両手でストラーダを握りしめた。



この間にも蒔風は美琴と交戦していたのだが、それを考えれば相当なものだ。

しかし、ここまでか。

そう思った美琴の意識が一瞬緩み、その瞬間蒔風が腕を伸ばしてその首を掴んだ。

そして真後ろに向け、彼女を盾のように差し向けたのだ。

エリオはそれを見て必死に軌道を変えてビルに突っ込み、美琴と蒔風はその衝撃波で吹き飛ばされて地面を転がった。

そうして、蒔風の手元にエリオのカードが滑りこんでくるも、倒れた蒔風は動かない。

一方、美琴は足を引きずりながらも立ち上がり、ティアナはその光景を愕然と見ていた。

払った犠牲はあまりにも大きい。

しかし、まだ蒔風の手元にカードがあるなら戻せるかもしれない。



と、そこで倒れている蒔風の腕だけが上がり、「天」がティアナの脇腹を貫いていた。

その攻撃に、黒子が即座に近寄り、テレポートで剣を能力で飛ばしてから彼女を下がらせる。

脇腹を押え、苦しそうにするティアナが顔を青くさせながら黒子に礼を言う。

その後ろには気がついたのかキャラもやってきていた。

「はぁ・・・はぁ・・・これは・・・ダメね・・・」

「な・・・」

「何言ってるんですかティアナさん！！！」

脇腹を押えながら、ティアナが察する。

その言葉を否定しながら、キャラが簡単ながらも治癒魔法をかける。

しかし、それでも血は止まらない。

どうしたことかと目を見張るキャラだが、美琴が蒔風を睨みつけて呟いた。



「毒……ッ!!!!!!」

そう、ティアナの血が止まらないのも、その顔がだんだんと青くなっ  
つていくのもそれが理由だ。

飛ばされてしまった「天」は見えないが、数百メートル先のその剣  
にはティアナの血の他に、透明な液体が滴っていた。

「皆聞いて……分かったわよ……あのリストの……選考  
理由……」

「え?」

「ティアナさん!!喋らないでください……今から病院に……」

「ダメよ!!聞きなさい。もう頭回んなくて私にはわかんないから、  
あんたたちに伝える。聞いて。自分のことは一番わかってるわ」

そう言つて、自分の気付いた情報を伝えようとするティアナ。  
そうしている間にも時風がヨロリを立ち上がるつとしているが、それにも構わず彼女は言った。

「あのリストは乗ってるのは……皆に聞かないとわからないけど、たぶん……WORLD LINK発動時に近くにいた人間よ……!!……!!」

「!!」

「そ、そうですね……私あの時はお姉様と離れていましたわ!!」

「他の皆に聞いてみないとわからないけど……たぶん間違いないわ……それがどういう事かも……わからないけど……う……」

「ティアナさん!!」

「三人とも、逃げなさい。皆と合流しないと……あいつとなんか戦えないわよ!!……!!」

「で、でも……」

そうは言われても、ティアナを置いてなどいけないキャロは何とかして彼女を助けようとする。  
しかし、その肩を黒子が掴む。

「黒子さん・・・」

「これ以上困らせてはいけませんの」

「でも!」

「逃げますわよ!お姉様!」

「・・・わかったわ」

そう言って、黒子が二人の手を取ってテレポートしようとする。

が、その瞬間

「お姉様!」

「美琴さん!!」

美琴が黒子の手を放してしまっ。

だが勢いというものが、黒子はキャロだけを連れて消えてしまった。

「残る……か……」

「あなたはここで倒す。先には行かせない」

「ティアナも……気付きやがって……」

その直後、ティアナの身体が光りになってカードへと変わった。  
そしてそのカードと、ティアナが回収していたカードをポケットに  
しまつて咳き込む。

「発動したら……どうすんだよ……」

「? あんた……何を言つてんの?」

「……」

その美琴の言葉に、時風はなにも応えずに構えた。

左掌を突き出し、身体を横に向けて右手は腰の位置に握って置く。

「この先に行かねばならん……消えろ、否、消される」

「消えんのはあんたの方よ!!!」

そう言って、美琴もポケットに手を突っ込む。

それから数秒後

彼女は「弾丸」を握りしめ、数秒の間を以ってそれが電撃に乗って放たれた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 銀白VS前線&超電磁砲（後書き）

おかしい・・・なぜかフォワードの話になってしまった。

エリオ「自滅・・・酷いや」

スバル「いやいやいや、あの威力を出して逸らしただけでもすごいじゃん！ー！！」

ティアナ「今回一番ダメージ与えたのあんたじゃない。まあ、あんなの直撃食らったら誰でもあなるでしょうけど」

フリード「キュクツ！！」

お三方プラス1、御疲れですたー

全員「ですたー（キュクル）」

今回フリードがやられたのはついでみたいでしたね。

さて、今回の話の流れは！！

エ「まず最初に・・・あれは蜀のみなさんですか？」

そうだね。魏はもう動いているみたいだけど、蜀は桃香の命令で動いてなかったみたい。

テイ「本当は？」

なんだか思ったより少ない・・・あ、やつべ・・・彼女ら出してないじゃん、という事でした。

テイ「やつぱり・・・」

ス「でも絡んできそうだね？」

ええ、あれで黙っていられる彼らじゃないですから。  
ちなみに、最初の二人までだけですよ？ 蒔風がリスト以外の人物を封印したのは。

他の人物たち・・・華琳や季衣、霧島さんは事実が露見されるとま  
ずいから消したただけでしたし。

エ「あれ？名護さんや太牙さんは・・・」

ああ、君は前回更新した先の方を呼んでしまったんだね？



あの後読み直したら、リストになの無いあの二人を消してしまったことに気付いて、慌てて削除、修正して投稿し直したんですよ。

だから彼らは倒されただけで封印されてないようになっているはず。

ティ「死んでは・・・」

ないない。ちなみにその話の前にやられてた呉のみなさんもそうです。

ス「そして気付いた！！リストの内容！！でもこれってどーいこうとなの？」

ティ「わかんないわよ。作者だってまだ明かす気ないんでしょうし」

ええないです。

ちなみにこのリスト、ああは言いましたけど基準は作者の気分なので「あれ？」と思っただら感想でどうぞ。

なのはや恋姫で愛紗やユーノが載ってないのは次回で説明しますの。と言ってもわかると思います。

ティ「そして次回は御坂さんとの戦いになるのね」

ス「あたしの振動拳でボロボロの舜さん！！勝てるのか!？」

エ「ではまた次回！！」

ああ！！私の台詞！！・・・一回言っとう  
ではまた次回

ス「ティア〜！！あたしの！！振動拳で  
」

ティ「わかったわよ！！うっさい！！！！」

リスト残り

キヨン

朝比奈みくる

長門有希

古泉一樹

ベナウイ

泉戸裕理

泉戸ましる

上条当麻

インデックス  
御坂美琴  
クラウド・ストライフ  
古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
神尾美鈴  
小野寺ユウスケ  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
キンタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
剣崎一真  
皐月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理

広原雪子

田島賢久

百野栞

左翔太郎

高町なのは

フェイト・T・ハラオウン

アリシア・テストロツサ

シグナム

ヴィータ

リンフォース?

キャロ・ル・ルシエ

## 銀白VSレベル5

「黒子さん！美琴さんが！！」

「わかってましてよ……でも……」

そう言つて、キャロを抱えながらビルの屋上をテレポートで飛び越えていく黒子。

今の彼女らがあそこに行くことは自殺行為に近い。

それに、あそこに美琴が残ったのは明らかに時間稼ぎだ。

もちろん負ける気などないのだから、もし三人で逃げた場合時風は即座に十九学区のほうへと到達してしまうだろう。

そうなつては意味がない。

だからこそ、黒子は戻らずに皆を逃がすことに決めた。

(お姉様、どうか御無事で……！！！！)

自らの慕つ「お姉様」の無事を祈つて。



それ自体は大した威力はない。  
しかしこうも立て続けに打たれるとダメージは蓄積し、今の体には堪えるのだ。

だから、短期決戦。

一瞬のうちにこの間合いを詰め、反撃を許さぬ最速の一撃で美琴を叩くしかない。

そう思い、蒔風はまず最初に距離を取った。

その距離、五十メートル。レールガンの射程距離だ。

しかし、美琴はレベル5の第三位。

その地位にいる理由は威力もさながら、その能力の多様性にある。

「そんなんで……」

「チツ、やはりかよ……」

「逃げ切れると思ってんの!?!」

ズシャア、と碎けたコンクリートの下の地面から黒い砂　砂鉄が  
かき集められ、それが剣か鞭のように美琴の手に振動音を鳴らして  
現れた。

そしてそれを振るい、蒔風に襲い掛かってくる!?!

それに対し、時風はやはり回避ばかりを取るしかない。  
周囲のコンクリートが抉り削られ、それが粉になってさらに砂鉄を  
生み出していく。

(まずい・・・これはすぐに・・・思い出せ・・・思い出せ時  
風舜！！決して御坂も万能無敵ではない。絶対に追いつめられたこ  
とがある・・・記憶をたどれ。思い出せ思い出せ思い出せ・・・  
・・・)

「あつたぜ・・・お前の弱点ッ！！！」

そう言つて、必死になって頭を回していた時風が一つの考えにたど  
り着き、それを実行し始めた。

美琴の砂鉄ブレードの隙間を縫って走り出す時風。  
もちろん、その走りは疾走感あふれるものではなく地面を転がった  
無様なものだが、そんなことを気になどしてられない。

そうして美琴との距離を詰めた時風が、勢いあまってコケて地面に



倒れる。

が、もう距離は十分だ。

彼女がブレードを振るってくるが、それよりも早く時風が地面に触れて力を発動させる。

「土惺粉塵！！！」

ドオン！！！！

その瞬間、粉のように細かくされた土が周囲を覆った。

それを見て美琴は目くらましかと思い、そのまま攻撃をしようとするが、さらなる異変に気付く。

周囲を壁で囲まれているのだ。

それは畳返しのレベルではない。おそらくはさっきの粉塵のタイミングで土惺の力で作った壁だろう。

そうして、美琴は気づいた。今この状況の不味さを。

「粉塵に満ちたこのフィールド。ここでおまえの力を使えば……」

クク、どうなるかわかるな？」

「……粉塵爆発……！！！！！！」

そう、蒔風はこれをして美琴の能力を封じにかかった。

美琴の能力はエレクトロマスターと呼ばれるように、言わずもがな電気だ。

そしてそれは火花とは切っても切れない力でもある。

電撃を放つても、下手をすれば磁力を使っても、何をしてもこの空間では爆発につながるかもしれない。

(周囲に落ちた鉄骨や廃材をかき集めてドームを作るか？いや……それよりも早く爆発が襲いかかるし、そんな全方位を守るようなものはとつきには作れない……そもそも、それがきつかけで爆発したら元も子もないし……これ、私の能力全部……ッ！！！！)

ゴッ！！！！！！

その中で、蒔風が拳を振るって美琴に殴りかかった。そしてその首をつかんで締め落そうとしてきた。



体力、体調的に見て使える能力はあと一つといったところか。

そんな状態ではとてもではないが上条たちのいる場所には行けない。

今はとりあえず体を休めなければなるまい。

そう思つて時風が踵を返してその場から去ろうとする。

しかし、直後にその足が止まる。

なぜか

それは

「今ここで何をしていたのですか、とミサカはあなたに問いかけます」

「……………妹達……………!!!」

そこにいたのは、御坂美琴そっくり……いや、そのものと言っていい存在「妹達」<sup>シスターズ</sup>だった。路地からこちらに出てきて、その手にはゴム弾を装填したマシンガンが握られている。

詳しい説明は省くが、彼女らはある計画によって作られた御坂美琴のクローンだ。「達」というからにはそれなりの数があり、学園都市には全部で六人いる。

持つ力こそ彼女に及ばずレベル2〜3程度だが、その力は当然一般人のそれを凌駕している。

無感情な瞳が、蒔風を見つめる。

自分たちの存在を少なからず知っているということに彼女は驚いたようだが、特別それを表に出すこともなく蒔風になおも銃口を向け続けた。

「お前らにかかわると面倒な奴が出てくるから早めに済ませたかったのに……………!!!」

「さっきまでここで感じていたお姉様特有の電磁波が二秒前に途絶しました。と、ミサカは自分の感じたことを素直に言いながらあな

たに更に質問をします」

(不味いまずいマズイ!!今のオレじゃあこいつ「ら」どころかこいつ一体にも負ける勢いだったのに……)

「今ここであったことの説明を求めると共にその手に持っているカードを見せてもらえませんか?と、ミサカはあなたに近づきます」

(しかもなによりまずいのは……ここでこいつに手を出したらもっと厄介な奴が来るってことだ……それだけは絶対に防がな……)

「返答がないので実力を行使します、とミサカは目標に向かって攻撃を開始します」

パパン!!!!

エアガンのような音が連射され、ガスの噴出で時風にゴム弾が飛んできた。

それを避けながらも、背中を向けて逃げようとする時風だが、膝、続いて肩に命中し、うつ伏せに倒れてしまった。

ゴム弾とはいえ、かなり痛い。

その時風に彼女が近づいてきて、落ちてしまった美琴のカードに手を伸ばして取るうとする。

「ッ！ー！らぁッ！ー！！」

その瞬間、時風が撥ねるよう動いた。

うつ伏せから転がって仰向けになり、その回転で足を振りあげて妹<sup>シス</sup>達の銃器<sup>タイズ</sup>を破壊する。

そしてその場のカードを手にとって、走り出した。

(一旦引くしかねえ……この街で一晩あたりか過ぎさないと、戦うにしても街から抜けるにしても不可能だ！ー！くっそ……もっと速く動け横の足………ッッ！?)

が、その思うように動かない足はすぐに止まった。

シスターズ  
妹達の攻撃か？ いや、違う

体力に限界が来たか？ それも違う

ならば諦めたのか？ 断じてない

時風が足を止めたのは、目の前に現れた妙に白い人間が原因だ。

服は何かというとグレーに近い。

何やらメカニカルな杖について、こっちに歩いてきたとの男は……  
……！！！！

「よおお。なアにヤッてンだ？ テメエ」

「ア……一方通行……」  
アクセラレータ

「ツたく、あのチビが大変な事かもツて言うから来てみりヤアよ、こいつは楽しいお客さんが愉快なこととしてンじゃねエか」



カラン、と

学園都市最強の第一位アクセラレータ一方通行が、細い路地からこちらに出てきた。

彼が見ているのは、たった今、少女に蹴りを入れた青年と、それを追おうとして手に怪我を負った少女。

しかも、その手に握ったカードには御坂美琴が映っているわけで……

「なんだア？超電磁砲レールガンのファンにでもなツたのかよ？」

そう言つて蒔風を茶化す彼だが、その目は一切笑っていない。その一方で蒔風も焦っていた。

（この状況……ダメだダメだ……戦えない……今の状態じゃ戦えない！！だから早めに済ませたかったんだ！！こんな来たら……）

アクセラレータ一方通行は紆余曲折あつて妹達を守る事を心に決めている。シスターズ

そして、時風はそれを傷つけた男だ。

そこで、ミサカが一言、彼に告げた。

「その男が持っているカードに、オリジナルお姉様がとらわれています」

その一言。

それだけで十分だった。

この男は御坂美琴を消した。

それが一体どういことなのはか全くわからないが、あのカードに変えたらしい。

そして、彼女を狙う奴がシスターズ妹達を見逃すはずがないし、下手をすると・  
・  
・

「テメエ……ほかにもそオヤツて消してんのか？」

「……らしくねエぞ、アクセラレータ一方通行……今さら慈善事業かよ？」

「……」

彼はかつて学園都市の深い部分にいた。  
その闇の世界で、様々なことをやってきた。

だが彼はその半面、「光」や「表舞台」に属する人間がそう言った  
「闇」に利用されるのを良しとしない。

だからこそ、この男に彼は挑まなければならないのだ。  
いや……逆だ。

蒔風はこの男に挑まれてしまった。

もちろん、この男は蒔風が「EARTH」のメンバーを消して回っ  
ている事など知らない。  
ただ、ほかにもこうして狙われているとしたらシスターズ妹達の他にないし、ほ  
かにも狙われているかもしれない。

ただ、それだけだ。

彼はそれだけで十分だった。

「おいそのオ。ここはあぶねエから消えろ」

「……………わかりました。とミサカは踵を返してこの場を立ち去ります」

アクセラレータ  
一方通行の言葉に、ミサカが元来た道に戻って行った。  
そうして、二人が向き合う。

「テメエには一度借りがあったよなア？」

「……………忘れたね。俺は休みたいんだ」

「つうれないねエ！まアいい……………はなからテメエの都合なンぞ知ッたこッちゃんないンだわ」

そう言って、首のチョーカーにあるスイッチを入れ、彼は学園都市最強の超能力者へと変貌する。

「テメエが消したツつウ奴ら、全部出してもらおオカ」

「……ハツ……前にダツサイかつこさらして負けた奴が何言っ  
てんだ。神様や天使にでもなったか？」

「……いいからよオ……黙ってそれを……寄越せッつッ  
てんだよこの三下がア……!!!!」

ドオっ!!!!

蒔風に向かって、一方通行が突っ込んできた。  
アクセラレータ  
ぐらりと揺れながら、蒔風が辛そうな顔をする。

(使える力は一つだけ……こいつに勝つ必要なんざない……  
必要なのは……!!!!!!!!)

そうして、蒔風が力を発動させた。

彼がすべきなのは、なによりもこの場からの撤退である。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

銀白VSレベル5（後書き）

美琴「だぁー！ー！！やられた！！爆弾ルームとか自殺する気！？」

おつかれですたー

美「はいはいですたー。で、第一位出しちゃったけど・・・」

ええそうですね

しかしそれよりも一方通行の言葉変換がめんどくさい！！！！  
「あいうえお」と「ん」をカタカナ・・・間違えてないかなあ・・・

美「大丈夫なんじゃない？」

彼の登場は少し強引だったかな？と思います。  
そしてここからがなやみどころ。

本編のいつぐらいの彼にしようか……

美琴「一章は確か原作十六巻直後だったわよね？」

はい。

しかしその後上条さんはイギリスに行き、ロシアに行き、海に沈んでから「新約」で帰ってきました。

そう考えると時系列的には原作よりももっと先の時点になってる……！？

美「もうそういうの考えないで普通に「彼ら、彼女がいます」でいいんじゃない？」

それでいいか（おい

美「次回！！第一位との戦い……」

は一瞬で終了！！だって逃げるから！！ランナウェイ！！！！

ではまた次回！！！！！！



リスト残り

キヨン

朝比奈みくる

長門有希

古泉一樹

ベナウイ

泉戸裕理

泉戸ましる

上条当麻

インデックス

クラウド・ストライフ

古手梨花

古手羽入

国崎往人

神尾美鈴

小野寺ユウスケ

海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
キンタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
劍崎一真  
皐月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
左翔太郎  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
シグナム

ヴィータ  
リンフォース？  
キャロ・ル・ルシエ

回避、そして再戦

「クソツタレがア……！」

裏路地で、アクセラレータ一方通行が地面を蹴り飛ばしてその怒りをブチまける。

しかし、すでにこの場にはその対象はいない。

今この場には彼一人しかいないのだ。

つい十分前の事だ。

一方通行は蒔風に向かって突っ込んでいった。だが蒔風はその瞬間に、歯を食いしばって力を捻り出し、それを発動させる。

直後、一方通行の身体の勢いが止まり、蒔風の腕が折れた。

その痛みに蒔風が呻くが、一方通行は何が起こったのかまったくわからない。

ただ、自分の力がはっきりと断ち切られているのは感じとった。更に周囲を見渡せば、何やら風景が変わっている。

否、見た目が変わったわけではない。風景はまるで変わらないのだ。しかし、確実に何かが違う。まるで向こうの風景が、写真に張りつけられたモノのようにしか見えないのだ。

「どオいうことだ……電波が切れたわけじゃねエのに力が失われたのだと？」

「ハ……アッ……ツ……ツツ!!!」

そうして、時風が指を鳴らして、瞬時にその場から消えた。それを彼も追おうとするのだが、一步前に足を出すとなぜか横に進み、さらに一步踏み出すと能力が発動して真上にジャンプしてしまった。

そうしているうちに、三十秒が経ってその空間が消えた。

そして今、逃走した男を追って周囲を搜索、見つからずに十分経ってしまった、というところだったのだ。

(だがあのヤロオもかなり重症だった・・・ツツーことはだ。この街からは出られるわけがねエ)

そうして、彼が再び搜索を始める。

獣のように猛りながらも、頭は冷静に研ぎ澄まして。

.....

- - - - -

「ハア・・・ハア　　す、すまない。一室貸してもらえるかな？」

「はいつて・・・だい、大丈夫ですか!？」

「大丈夫だ・・・問題ない・・・ただ救急箱はくれ」

そう言つて蒔風がやってきたのは第三学区の個室サロンというところだ。

カラオケボックスを豪奢にしたような施設で、『監視の目が完全に無い場所』として重宝されてるのだとか。

純粹に楽しむだけでなく、もちろん不良集団が溜まっていることもあるのだが、もちろんこんな重傷人が来るところではないのは明らかだ。

だがそれでも蒔風はにこやかに笑顔を作つてなんでもないように部屋の鍵を受け取っていく。

フロントの男性はおそらくアルバイトなのだろう。最初こそ驚いた

が、何かの事情を察してそれ以上は聞いてこなかった。

(まあ金も多く渡しておいたから・・・彼が通報することもあるまい・・・)

そして、蒔風がドサリと倒れた。  
息は荒く、腕も片方折れていて、血も少し足りない状態だ。

(とにかく一回身体を休めて・・・そうすればなんとかだがまだ戦える。丸一日経って明日になれば腕も使いものくらいにはなるだろうし・・・)

そして、蒔風はそのまま寝た。  
数時間後には動かなければならない。

(この身体・・・うまく使えるようにまで回復しないと・・・)





「君の「お姉様」がその蒔風を相手にしてそしてまだ戻ってこないという事は、きっとやられてしまったのだろう。だが蒔風もまた来ない、という事は彼も酷い怪我を負って倒れているという事だろ？ 確かそんな話だったね。もし僕ならそのまま逃げるね。僕らが彼に一気に攻めいったら彼は死んでしまうだろうし」

そうして、更にステイルが言うにはそんな怪我だったらこの街からも出れない。もし回復したら即座にこの街を出るかこっちに攻撃を仕掛けてくるだろう。そして、その行動はどちらにしてもすぐに動かなければどんどん困難になっていくという事だ。

脱出するにも警備がきつくなっていくし、こっちに攻め入るにも逃げられたり増援があつたら苦戦する。

だから彼が逃げるのならばそれでよし、こっちに来るとしたら、おそらくその体がある程度回復した程度で万全ではないはず、という考えらしい。

「手負い相手に、僕の「インケンティウス魔女狩りの王」と神裂が負けるはずがない。だからここにいた方が安全なんだ」

「それは……」

その言葉には確かな自信があつた。そしてそれが、決して驕りでないこともわかる。

だが、それでも不安なものは不安だ。

しかし、彼らは結局ここに残った。

決め手は、彼の能力を見せつけたからだ。そして、その強さの源にも、納得させるだけの原因があった。

そうして翌日。

ちょうど時風と交戦してから一日が経った時。

「来るなら今かな？」

「だけど本当に大丈夫なのかよ」

「ん？ああ、君のことなんて心配はしてないよ。僕は彼女が守られ

ばそれでいい。まあ、そいつがどれだけ強いかわからないけど、僕の魔女狩りの王さえいれば……」

「来た」

上条とステイルが話していると、その後ろで長門がポツリとつぶやく。瞬間、ビルの壁が吹き飛び崩れ、その向こうから一人の男のシルエットが現れた。

来たか！！と身構えるステイルや神裂、上条らだが、そのシルエツトは全く彼らなど気にしていなかったらしい。

翼が生え、それが鋭利に開かれて輝いたかと思うとその姿は消え、直後に朝比奈みくると古泉一樹、そしてキャロが消えた。その影は更にキヨンへといたろうとしてしかし、その腕が長門に掴まれて投げとばされて壁に突っ込む。

そこまで来て、彼らは気付いた。  
彼は最初から自分たちと戦う気などないのだ。

ただ標的の人間を消すだけ。  
この瞬間、時風舜は標的を消すことだけを考えていた。

「全員こっちに集まれ!!!」

「くおッ……が……まさか長門がこの速さに付いて来れると  
は……」

だが、その時風は壁に激突させられた。  
彼の翼が折れたたまれ、その速度はもう出せなくなった。

それを見てステイルは全員を一点に集め、ガラガラと崩れた壁から

這い出てくる時風に向かって腕を振るった。

「その名は炎、その役は剣

顕現せよ、わが身を喰らいて力と為せ

魔女狩りの王、イノ

ケンティウス！！！！」

そうしてステイルの目の前に炎が生まれ、それが彼の力であること  
を表していた。

「我が魔法名をここに。 Fortiss931（我が名が最強である  
理由をここに証明する）！！！！」

そうしてその炎の塊が、立ち上がるうとする時風に向かって跳んで  
行く。

だが、それを見て立ち上がりつつある時風がにやりと笑い、パチン、  
指を鳴らした。

瞬間

ボシュツ！！という音を立てて炎が消える。

そしてそれと全く同じ炎が、時風の掌の上に現れたのだ。

「はっはっは！！すこーしそれっぽいことしてやったら有利になったとチョーシづく！！こいつはオレの獄炎だよ。未成年のガキが大  
人ぶってんじゃねエぞスタイル君！！！」

「な……………」

そう叫びながらスタイルが再びイノケンティウスを出そうとするが、  
炎どころかこの場の気温すら変わらない。

それを見て、時風がグラリヨロリと立ち上がり、顔に手を当てて大  
笑いしながら狂ったように叫んだ。

「魔法名！？いいねえ・・・面白いよ！！あんなに元気に名乗っち  
やってさア！！それでボシュツ、じゃ話になんねえ！！ヒヤツヒヤ  
ツヒヤツヒヤ！！！！演出御苦労！！！！スタイルくウウウウウウウ  
ウウん！！！！つてかア！？」

「イ…………イノケンティウスが……………」

「消された!？」

神裂と上条が、その事実<sup>に</sup>驚愕する。

その二人に、時風がさっきの様子とはひらりと表情を変え、静かな顔になってそれでもやりと笑った口元だけは変えずに言った。

「必要悪<sup>ネセサリウス</sup>の教会魔術師、ステイル・マヌグス。歳は十四。しかし、現存するルーン24文字の完全解読に成功し、さらに自ら6つの文字を編み出したルーンを極めし者。中でも、炎の魔術に特化し、それを用いた攻撃が最大の強み。しかし悲しいかな、ルーンは文字を設置したその内部でないとたいした効力は発揮されない」

バラバラバラ、と、時風の手元から何枚ものカードがばらまかれる。それは彼が設置していたルーンの刻まれたカードだ。

そして足元に落とされたそれは、即座に燃やされ塵へと変わった。

「キチンと見回りして確認すべきだったな。そうすればこんなことにはならなかっただろうに」

「ッ!？」



「ステイル!!!あなたはその子たちを連れて逃げなさい!!!」

ギイ

!!!!!!

と、驚愕するステイルの脇を、神裂が走りぬけて二メートルもある長刀「七天七刀」で蒔風に斬りかかった。それを蒔風が右手で右腰、左手で左腰の「風」「林」を抜いて正面から受け止める。

「神裂火織。元天草式十字凄教の女教皇プリエステスにして聖人。貴女やステイルを倒す必要などないのだ。どういてもらえるか？騒ぎ過ぎると厄介な奴に見つかってしまう」

「そう言われて・・・下がれますか!!!!!!」

ギイイ!!!!!!

時風と神裂の剣が打ち鳴らされ、時風はそのまま刀を逆手に握り、神裂がこれぞ構えと言ったような構えで、剣を握る。

「下がれないか・・・まあそうだろうな。インデックスを守るために敵にまで扮していたあなた達だ。その程度で下がるわけもないか」

「・・・一体どこまで知っているのですか・・・」

「さてね？魔法名でも当ててみようか？」

「・・・」

そう言われ、神裂が目を閉じて、そして開く。

「その名は我が口から唱えて初めて意味を為すものです。私の魔法名は」

ゴオッ！！！

神裂が剣を振るって鋼系クワイヤを伸ばし、それを以って敵を切り裂く「七閃」を繰り出してそれを唱えた。

「Salvere000!!!」

ゴゴッ、ゴゴゴガンッ!!!!!!

周囲のものを斬り込みながら、何本もの鋼系が蒔風に襲いかかった。それによって土煙が起き、蒔風の姿が消える。

「神裂!!!」

そうして、その間に外に逃げた上条が、中の神裂を呼びだした。その声に応えて彼女も外に出て、中の様子をうかがった。

が

ボゴオッ！！！！

その位置から上階部分。二階の位置から、時風が飛び出してきて神裂を飛び越えていく。飛び越えると言う事は神裂は対象でないという事。目標は、その先の人間だ。

「救われぬ者に救いの手を……か」

「！？」

神裂の真上を通過したとき、蒔風がそうつぶやいた。  
それに驚愕する神裂だが、蒔風はすでに標的の方へと向いている。

その手から、何かが親指にはじき出されて黒子の顎に命中する。  
はじき出されたのは、黒いゴム弾。先日蒔風に打ち出されたモノを  
拝借したものだ。

その衝撃は彼女の脳を揺らして、その場に昏倒させた。  
これでこの場からの逃走を防ぐ。

そして、蒔風の手から雷が迸って、それを両手に溜めて一気に打ち  
出された。

「雷……旺……砲!!!!」

「ごゴオ!!!!」という猛烈な音と光を発して、蒔風の持つ力のうち最  
高の破壊能力を持つモノが発せられた。

雷旺の力は扱いにくいとはいえほかのモノを圧倒するだけの力があ  
る。それを最も効果の発揮する「砲」で放ったのだ。  
間違いなくこの場の全員はお陀仏だ。

もし、彼がいなければ、だが。

パイン！！！！！！

そう甲高い音がして、雷旺砲が止められる。

上条だ。その右手に宿る「幻想殺し（イマジンプレイカー）」を以つて、その砲撃を止めていた。

しかし、止めている事だけだ。いずれは消えるのだろうが、そのあまり質量に雷旺砲はまだ残っている。

上条がそちらから手を離せない隙に、蒔風はキョンを狙い、それを長門に防がれる。

しかし、その長門の攻撃を地面をまるでブレイクダンスやカポエラのように回転して避け、一人の少女へと剣を伸ばした。

「インデックス!!!」

「え・・・あ・・・」

ドスッ!!!

そして、蒔風の刃が彼女に届いた。

ステイル・マヌグスという一人の男の身体を貫いて、彼の「朱雀槍」はインデックスの身体を貫通していた。

ドドンツッ！という音を立て、二人がカードになって蒔風の手に残る。

それを見て、上条が絶叫した。

受け止めている雷旺砲を蒔風の方へと投げ飛ばし、長門はキョンを抱えてその場から離脱した。

だが、投げ返されたとはいえ元はと言えば雷旺砲は蒔風の力。受け流して消滅させることは難しくくない。

そしてその通りにして雷旺砲を打ち消す蒔風。

残ったのは、上条と神裂のみだ。

隣の小ビルの屋上 高さは二階分というこじんまりとしたものだ。の上にも長門とキョンがいるが、その二人に向かって上条が叫んだ。



「逃げてくれ！！こいつはオレがブチのめす！！！」

「おい・・・待ってくれ！！オレだってその野郎を・・・お、おい長門！？」

キョンが上条に反論するが、長門は彼を肩に抱えてそのまま屋上を跳躍していなくなった。

そうして今度こそ、目の前に残ったのは上条と神裂のみとなった。

「上条だけでいい・・・そっちは消える」

「そっはいきません。彼には恩があるので」

「そっかよ・・・やるしかないってか・・・クソッ」

そうして、手に持ったステイルとインデックスのカードを握りしめてからしまい込み、拳を片手それぞれで握るようにゴキゴキと言わせる時風。

と、そこにドンッ、という着地音を鳴らして一人の人影が降ってきた。

「でけエ光が見えたと思ッたら、やっぱデメエか」

「アクセラレータ一方通行……………」

昨日からいったん家に帰り、そして再び蒔風の後を追っていた彼が、この場にやってきた。彼はさつきまで蒔風のいた個室サロンにいたのだ。そこまで彼は追いついていた。そしてあの雷旺の光。これを見てわからない人間はいないだろう。

「デメエら三人かよ……………二人はいらん！！上条だけでいいんだよ！！」

「あア？しらねーよそんなもん。オレはデメエをブツ殺しに来ただけだからよオ」

「アクセラレータ一方通行……………」

「デメエもかよ……………言っとくが、オレア仲良く戦うなンぎ……………」

「そうじゃない。一人じゃ無理だ。協力する」

アクセラレータ  
一方通行は上条の言葉に知った事かというが、上条は共闘しないと勝てないと言った。

確かにそうだ。彼は万全でないと言っても、昨日からはかなり回復しているようで危険度は数倍だ。

そんな状況で彼が来てくれたのはありがたかったが、それでも彼はまだ危険だと肌で感じていた。

「……………」

それを聞いて、アクセラレータ一方通行も考える。

確かに自分は最強と言われる力を以って入るが、昨日蒔風が見せた妙な力で自分の能力が消されたのも事実。

その正体もわからないのに一人で戦うほど、彼は愚かではない。

「…………テメエは罔だ。あいつのわけわかんねエ力を引き出してこい  
いや」

「十分だ。ありがとうな」

「ケツ」

そうして、この三人の共同戦線が始まった。

対するは、世界最強最上級の暗殺者。

相手にとって不足なし。

「行くぜ……テメエのクソみてえなその願望<sup>げんそう</sup>……この手でぶち壊してやるからよ……!……!」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

回避、そして再戦（後書き）

時間かかったー！ー！！！！

誠に申し訳ございませんでした！！

誤字脱字多かったですでしょう！？

チェックしてませんから！！（おい

キャラ「そう言えば黒子さんは大丈夫なんでしょうか？」

インデックス「そう言えばあそこに転がったままなのかな？」

あ……………

……………上条さんはできる子。

きつと雷旺砲を投げた時、黒子の身体を引っ張って安全なところにソオイ！！したんだよ！！

古泉「しかしそんなことをしたら……………」

いいんだよ!!

みくる「大怪我……」

こまけエことはいいいんだよ!!!!  
皆さん御疲れ様ですたー!!

ステイル「僕の事を忘れないでほしいんだが」

ですたー!!

全員「ですたー」

まあ取り合えずマークを  
この間忘れていた彼女らも一緒に

スバル、ティアナ、エリオ、キャロ・・・各デバイス（デバイスモ  
ード）のシルエット。フリードはキャロと同じ

美琴・・・常盤台中学の校章

古泉一樹、朝比奈みくる・・・SOS団のマーク

インデックス・・・十字架

ステイル・マヌグス・・・カードにあった五芒星

古「それにしてもよくあの人から逃げましたね」

それはまあ、あの固有結界がありましたから。  
法則をいじってしまえば彼は無力化できます。それは原作での第二  
位との戦闘でも明らかですし。

ですが、問題はこの状況です。

み「あ、上条さんですね？」

そう、彼がいては固有結界は発動しません。  
だから彼の排除が一番でしょうね。

キャ「でもなんでステイルさんの弱点を知ってたんでしょうか？」

ス「さあね。問い合わせでもしたんじゃないのか？」

イ「それはないと思う。魔術師の弱点を教えるほど教会も馬鹿じゃ



ないし」

そこはまだ秘密です。

でも、それに関してはよーっく考えればわかるハズ。

イ「次回、頑張れとーま!!!」

ス「で、更に神裂もいるし・・・」

キャ「一方通行アクセラレータさんも・・・」

古「彼死んだんじゃないですかこれ？」

そつかな？作者としては結構漬け込みやそすそつだけど。  
卑怯に行けば!!!

全員「え!？」

ではまた次回！！！！

リスト残り

キヨン

長門有希

ベナウイ

泉戸裕理

泉戸ましる

上条当麻

クラウド・ストライフ

古手梨花

古手羽入

国崎往人

神尾美鈴

小野寺ユウスケ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

キンタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ

直枝理樹

井ノ原真人

宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
劍崎一真  
皐月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
左翔太郎  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
シグナム  
ヴィータ  
リインフォース？

## 銀白VS最強&最弱&聖人

ギギイ！！！！ドンツ！！！！パアン！！！！！！

剣が打ち鳴らされ、炎や雷が撃ち出されては消し飛ばされていく。まだ戦い始めて五分だが、彼らは各自の役割を理解し、それを実行していた。

蒔風に斬りかかっているのは強靱な肉体を持つ神裂。  
蒔風が放ってくる「砲」や「弾」を上条が消し飛ばす。  
そして蒔風の足場を崩して攻撃のチャンスを作り出しているのがア  
クセラレータ  
方通行だ。

（全員で突っ込んでくる戦いだったらやりようはいくらでもあったんだが、こころもすっかり分擔されると……！！！！！！）

ゴォ！！！！！！

その名の通り、七本の鋼糸がコンクリートを刻みながら神裂の「七閃」が時風に襲いかかる。それを時風が隙間を避け、後退しながら神裂からの直接の剣を受け止める。

神裂を潰すだけならまだ簡単な方だ。ムチャクチャすれば、力押しでまだ潰せる。

だけどそんな事やったら一方通行アクセラレータが来る。彼を飛ばすには固有結界だが、それには上条を排除しなければならない。上条なんかは単純だ。能力を使わずに普通に殴り飛ばせば終いである。だが、神裂の間を縫ってそんなことは難しいだろう。

「厄介に手え組みやがって!!!!」

「あなたは、倒します!!」

勇んで斬り込む神裂だが、時風が力押しで押し返すと弾かれてしまい、そこに時風が獄炎弾を放つ。  
しかし、それが上条に手で弾き消され、一方通行アクセラレータが足場を吹き飛ばしてきた。

そこに神裂が再びの攻撃。

時風は正直攻めあぐねていた。

それに、彼の体力もその場しのぎで回復した状態に近い。

(このままじゃどうしようもない……一方通行のバッテリー起  
動時間は十五分だが、ああやって必要な時だけスイッチ入れてんじ  
ゃ一時間はもつ……)

そう考え、時風が十五天帝すべての剣十五本を宙に抜き、それを次々と手にとって神裂の攻撃に対処し始めた。

次々と掴んでは剣を握り変えてうごかし、一本たりとも下に剣は落ちない。  
まるで大道芸のジャグリングだが、それを技にまで昇華させているのが時風だ。

剣によってまあいや攻撃の特質が変わって少し焦り出す神裂だが、こちらとて世界に二十人といない聖人だ。その程度の攻撃などは二秒で順応した。

しかし、この中で一番力を出し切れていないのが彼女でもある。

彼女のような聖人の力はとてつもなく強大だ。  
それはもう、街一つを一人で壊滅させることができるほどに。

もちろん、神裂はすでに蒔風の力を知った。  
この相手は本来ならば手加減して戦える相手などではない。おそらくは昨日のダメージをまだ引きずっているのだらう。

しかし、彼女はそれでも全力を出せない。  
その強大さゆえに、周りを巻きこむことを恐れたのだ。

一方通行は大丈夫だらう。  
アクセラレータ  
あらゆる力の向きを捜査する彼ならば、どんなに力が大きくとも無傷でけろりとしているに違いない。

しかし、もう一人の上条はそうではない。  
もし彼女が魔術による攻撃（こちらも並の魔術師を一般的な魔術<sup>もの</sup>でも一瞬で消し炭にするほどの膨大なモノ）を使うならまだ大丈夫だったかもしれない。

だが、今行っているのは接近戦、純粹な力だ。  
本気でぶつかれば周囲に広がる衝撃や瓦解したビルの岩石ともいえる塊で彼は死ぬかもしれない。彼の力は「異能」にしか効かないのだから。

だからと言って魔術戦にしてもダメだ。  
それには今使っている鋼糸を術式に沿って二次元魔法陣に組み上げなければならぬ。  
だが、そんな隙はない。今この場でそんなことができるほど余裕もないのだ。

そしてその状況が蒔風をも助けていた。  
先にも言った通り、神裂は周りを気にして全力を出せない。

つまり周りがいなければ彼女の力は今の蒔風を超えているのだ。簡単に倒せるだろう。

(この三人がそろっているから俺は苦戦し、それによる微妙なバランスで俺はまだここに立てている・・・なんつージレンマだよ全  
く!!!!)

そうして、蒔風が地面を踏みつけたタイミングで、地面を土俵で砕いて周囲に粉塵を巻き上げる。  
美琴に取った戦法と同じものだ。



だが、それは一瞬で掻き消された。

アクセラレータ  
一方通行である。風のベクトルを変えれば、こんなもの一瞬で消し飛ばせるのか。だから問題である。以前の話だ。

しかし、それだけでは終わらないのが第一位。

風を操れるという事は、その粉塵の位置も操れる、ということだ。  
つまり……

「!!! 離れる神裂!!!!」

「!!!」

「しまっ……」

「消し飛べ」

ドオオ！！！！

爆発音がして、蒔風一人を包み込んだ粉塵が爆発した。

おそらくは適当にその辺の廃材を投げて、更にもう一つ投げて火花を散らしたのだろう。

だが、その炎が渦を巻いて一点に集中、蒔風の手の上で炎の塊となつてかき集められてしまっていた。

彼の服の所々に焼けた跡が付いているが、それだけだ。たいしたダメージにはなっていない。

「……ダメだな……この期に及んで先の事を考えてやがる」

「「「？」」」」

蒔風が手の中の炎を握り潰して消しながら、忌々しそくに呟く。

彼らにはその意図が全く分からないが、蒔風は何かをするつもりだ。

「先が大事じゃないとは言わん。だが……今を越えなきゃ、先は来ないみたいでなあ！！！！」

バツ！《ワールド！！！！》

ゴウン、という音を立て、それが時風の体に埋め込まれていく。そのガイアメモリの存在はすでに何人かからの報告で聞いていたから驚きはしないが、脅威であることは変わらない。

一体彼は何をしてくるのか、今誰の力を発動させたのか。

それを知るすべは、ただ一つ。

彼がその力を使わなければならない。

しかし、彼は一向に動かない。

ただ、頭の前髪辺りから何やらパリパリと電気が放電されているようだ。

「なんだ？あのヤロオイカレちまったのか？そもそもありやなんな  
ンだよ」

「・・・あれは他者の力を使えるものらしい。だけど、あれは・・・  
」

(なんだ？あの電気信号・・・どツかで・・・！！！！)

「まさか・・・あのヤロオ!!!!!!!!!!」

アクセラレータ  
一方通行がそれに気付き、駆けだした瞬間に蒔風の掌からガイアメ  
モリが飛び出し、それをキャッチしてもう一度起動させた。

《ワールド!!!》

そして、挿入。

瞬間、蒔風の目の前に魔法陣が展開され、そこから青白い砲撃のよ  
うなモノが噴き出して一方通行に襲いかかった。アクセラレータ

「ツツ!? いけないあれは!!!!!!!!!!」

その光に見覚えのある神裂が、一方通行に注意を促す。アクセラレータ

一方、彼もそれには気づいていた。圧倒的なエネルギー。しかも魔法陣だ。

彼は過去に一度魔術攻撃を「反射」させたことがあったが、それは科学とは異なる法則で成り立っているものだったためにうまく返せなかった。

そして今も彼は魔術に関する法則を知っているわけではない。

だから、それを避けた。  
変な方向にぶちまけるわけにはいかない。

そして上条もそれを避けようとしたのだが、神裂がそれに待ったをかけた。

「待ってください!!!この砲撃がこのままいけば、この先の街は間違いなく壊滅します!!!」

「な!?!クソツ!!!!!!」

そう言われては、上条は受け止めざるを得ない。  
その神秘なる右手で砲撃を受け止めた。

しかし、この砲撃の質量か何かはわからないが、消えないのだ。  
否、消してはいるのだが幻想殺しの処理が追い付いていない……  
・!?!?!?!

かつてまだ「上条当麻」が生きていたころ、彼が守ろうとした少女が意識を失ってはなつた最悪の一撃。

曰く、「伝説にある聖ジョージのドラゴンの一撃と同意」であり、この攻撃の光は粒子一つ一つの質が異なるため、幻想殺しの処理が追いつかないのだ。

もちろん、彼は今までそういう敵とも戦ってきた。

そして、敵の攻撃を掴んで投げると言う事も出来る。

しかし、この質量の前では、投げようとした瞬間に彼の身体の方が投げ飛ばされてしまうだろう。

と、そこでついに一方通行が<sup>アクセラレータ</sup>蒔風に到達して迫る。

（これだけの砲撃だ。それに使う力が何なのかは知らねエが、片手間でできるもんじゃねエだろ！！！！）

そうして、信じられないことに近くのビルを投げ飛ばし、その影に隠れて一方通行が<sup>アクセラレータ</sup>蒔風を潰しにかかった。

が、そこで彼の耳に声が聞こえた。一体何をしているのかはわからないが、聞こえたのだ。その声が。



御坂美琴の力をメモリで使い、ネットワークに接続、その中で彼女に一方通行の居場所を教えたのだ……！！！！

ミサカネットワークとは妹達シスターズが電撃使いであり、そして同一人物ともいえるクローンだからこそできる芸当だ。

同様の脳波を持った者同士なら、その脳波をリンクさせてネットワークを構築できる、というものだ。

しかしそれで知ったからと言ってもちろん、こんな早く来るなんてことはない。

だが、昨日一方通行が来た原因の大元は彼女からの情報だ。アクセラレータ

ならば、彼を心配する彼女だったらその跡を突いてきていてもおかしくはない。

そしてここまで来て見失い、その後もうろついていたとしたら……

彼女がこのタイミングで来ることは難しくないのだ。

「このやるオが……！！！！」

「そして……発動だ」



ドンッ！と蒔風の固有結界が発動する。

一方通行はこの瞬間にこの男を見誤ったことを怒った。  
この男の底力は一体どこまであると言うのか……

瞬間、竜王の殺息はまるで鞭のようにしなった。が、結界外に居る上条にとっては変わりない。結界から出た瞬間、また真っ直ぐに上条に向かって放たれるだけだからだ。

ゆえに、彼は結界に触れない。触れなければ無効化もできない。

と、蒔風が一方通行の方を向く。  
彼の身体は空中に制止し、その格好は蒔風に拳を振り上げて殴りかかるうとしている瞬間だった。

「なに……!?!?」

「この結界では法則を乱す。ようこそ、知らない未知の世界へ」

「は……ご親切にドーモ」

「なに……もうなにもわからなくなるんだからな。それくらいは教えてやる」

そう言つて、蒔風が一方通行のチョーカーに指をかけ、ビツと引きちぎるように没収する。

その瞬間、彼の脳味噌は世界から放り出された。

アクセラレータ  
一方通行は脳に大きな怪我を負っている。

故に、彼は日常生活に支障をきたすような障害を持っているのだ。

それでも彼がこうしていられるのは、彼がチョーカーで受信したミサカネットワークの演算機能で補助してもらっているからにすぎない。

つまりこうされてしまった彼は能力はおろか、立つことも歩くことも、しゃべることも言語を理解することも叶わない……！！！！

アクセラレータ  
そうして、一方通行が地面に倒れて、結界が切れると蒔風が砲撃をやめて神裂へと向かう。

《ワールド！！！！》

もう一度、メモリをさし入れ、能力を入れ替えてから。

蒔風に神裂が剣を振るい、それを蒔風が受け止める。  
しかし、その膝はガクリと崩れ、上から押し付けられるかの如くそれに耐えている。

「もらい・・・ました!!!」

「・・・ッ・・・いいや・・・それはこっちだ!!!」

ガッ!!と

蒔風がそこで神裂の七刀七閃を握りしめ、メモリによる力を発動させた。

「IS発動、振動破碎!!!」

瞬間、神裂の刀にヒビが入って、直後に砕けた。  
それと同時に周囲を待っていた鋼糸もそれに連なっていたのかハタハタと地面に落ちていった。

「七刀七閃は霊装だ。おそらく、その鋼糸を操ってる大元もそれだろっ?」

「な……わたしの……」

「下がれ神裂。お前をやる必要はない！！！！」

愕然としてしまっている神裂に一撃、重い当て身をくらわし、蒔風が投げ飛ばして上条にパスする。  
その瞬間、それと一緒に駆け出した蒔風が上条に突っ込み、剣を振るってその右手を狙った。

そして

斬ッ！！という鋭い音を残して、彼の右の手首から先が落ちる。  
その瞬間、彼が青龍を呼びだし、青龍が何かのビンにその右手を入れて密封、保存した。  
そしてそれと同時に上条の喉元に剣をさし込み、彼を消滅させた。

「……フウ　　青龍、それはあるべき場所においてきてくれ」

「……御意」

時風が青龍の持つ、何かの液体と一緒にの右手を指してそう命じた。青龍はそれに首肯してから、即座にその場から消えた。

時風がため息をつく。

倒れている一方通行は打ち止めが病院にでも運ぶだろう。アクセラレータ ラストオーダー

あのチョーカーは確かオーダーメイド物だから作るには時間がかかるはず。

神裂もそうだ。

剣を砕かれた一瞬で痛恨の当て身を入れたのだ。いくら聖人として五分、十分では目覚めまい。

それに剣も特殊な霊装だから新注するには時間がかかる。これでは無力化できたも同然だ。

彼女ならば肉弾戦でも戦えるだろうが、剣術を基本とした彼女にその戦いで時風に勝つのは無理だろう、という考えもある。

そうして、時風がその場から立ち去ろうとする。

だが

プアーーーーーーン!!!!!!!!!!

その場にレールが走り込み、その上を時の列車が乗ってきて時風の  
ゆく手を阻んだのだ。

「デンライナー……」

そして、その車両から数名のものが降りてきた。

降りてきたのは電王のメンバーに、途中で合流したのか、駆達赤い夜を乗り越えたメンバーだった。

「……………は、理樹はどうした？裕理にましろは？途中下車でもしたのかな？」

「直枝さんは泉戸さん達とほかを回ってる」

「なるほど」

そうして、彼らが蒔風の前に立つ。

どうして分かったのか、という事は聞かなかった。

デンライナーの車両部。そこに黒子が見えたからだ。

「変身」

《GUN F O A M》

「お前らだけでオレとやる気か？いい度胸だな……………」

そうして、時風が若干荒い息を吐きながら両手をブラブラとさせる。

「行くよ……あいつを倒すのは僕なんだ……お前じゃない」

「侑斗の事か？まアだ張りあってんのかよ……」

無論、リュウタロスは妥当侑斗というかつて持っていた感情はもう無い。

しかしだからこそ、リュウタロスは彼を認めていたのだ。

だから……

「お前、倒すけどいいよね？」

「答えは　　必要ないよな？」



剣を構え、銃を構え、炎と携え、式神を出し

蒔風のこの地での戦いは終わらない。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 銀白VS最強&最弱&聖人（後書き）

上条「今回俺だけかぁ……………」

上条さんが投げられた神裂を受け止めないわけにいかないじゃないですか。

卑怯ですねー。チョーカーと言い、武器破壊といい。

あと上条さんのマークどうしよう……

上「もっと言うならあのメモリは卑怯すぎる」

スルーですか。

まあいいや、と言うわけで御疲れですたー

上「ですたー」

これで封印はせずとも二人をほぼ無力化、上条封印という目的を見事達成しました。

一方通行は打ち止めに連れていかれるでしょうし、神裂は……………あれ？

上「描写してな……」

いや、隅に置かれているだろう。

おお、これはこれでまた卑怯なことができそう。

上「外道!!!」

いやいやそれほど

上「そういや竜王の殺息<sup>ドラゴンブレス</sup>ってインデックスのдар？インデックスって魔術使えないんじゃない？」

そこが時風が使う「願い」との違いです。

あくまでもあれの力はガイアメモリによるものです。つまり、あれをやりながらも時風の力を使うことも可能。

だから知識と力を得て、時風自身の力で魔術を発動させたんです。

上「まじかよ……」

さあて、次回は!!

上「電王&11eyes!!」

ある意味科学と魔術ですね!!

ではまた次回!!

リスト残り

キヨン

長門有希

ベナウイ

泉戸裕理

泉戸ましる

クラウド・ストライフ

古手梨花

古手羽入

国崎往人

神尾美鈴

小野寺ユウスケ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

キンタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ  
直枝理樹  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
剣崎一真  
皐月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
左翔太郎  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
シグナム  
ヴィータ  
リインフォース？

明日は執筆時間が取れず、もしかしたら更新できないかもしれませ

ん。

もしそうなら活動報告でお知らせいたしますので

よろしくお願いいたします

## 銀白VS電王&かつての欠片

時風の前にデンライナーが現れてから二分。  
その時点ですでに一人、彼の手で消されていた。

広原雪子である。

その能力に「超速再生」を持つ彼女は、前々からあまり回避に対してそれほど大きな意義を持っていなかった。

むしろその能力を使つての特攻で敵陣に入り込む突撃隊長的なポジションだ。

ゆえに、攻撃を受けても再生するからと思つていたのが、一撃を食らつて消えた。

周囲の人間は驚愕するしかない。

昨日のダメージを引きずり、さっきまでもあの三人と戦つていながら、あの雪子を一撃で葬るだけの余力を残していたのだから。

「雪子君の耐久力はその再生力を除いても群を抜いていたはず・・・」

「それを・・・一撃で!？」

「アアマイ甘い・・・てめえらごとくで俺に勝てるっても・・・  
・・・思ってたのかア！！！！??？」

そうして、蒔風が駆け出して美鈴に切りかかっていく。  
無論、それを見て何もしない彼らではない。

電王はデンガツシャーガンモードで狙い撃ち、タカヒサは発火能力  
による炎弾、菊理もアブラクサスによる鎖でその行く手を阻もうと  
する。

しかし、銃弾、炎弾は蛇行する蒔風に悉く避けられ、鎖は腕に絡ん  
だものの、そのまま捻りあげられ、引き切れた。

鎖を引きちぎられて菊理が痛そうな顔をしたが、そんなことは気に  
もせず、蒔風が十五天帝のすべてをくみ上げ、一つの刃として美鈴  
に到達して振り下ろした。

その剣がうつすらと光り、それにどれだけの力が込められているの  
かが分かった。

おそらくは全力でないのだろうが、あの大剣を受け止めることなど  
できない！！

しかし、それでも彼女は剣を構えてそれを受けようとした。

あまりに無謀。しかし、蒔風がここまで迫ってくる速度があまりに



も速く、それ以上の行動、対処がとれないのだ。

ゴッ、ギャリッ、ドドンッ！！！！

しかし、それを受けた　正確には受け止め、剣を斜めにして地面に流したのは皐月駆だった。

彼女より受け継いでいた「雷切」でそれを受け、受けた瞬間に剣を斜めに傾けることで十五天帝を滑らせて地面に逸らし落したのだ。

「ほう……先読みか」

「お前の動きは分かっているぞ……時風！！」

皐月駆の魔眼「劫の目」アイオン

その能力は、少し先の未来を見ることだ。

正確にはこの世界での可能性を見通すのだが、まあ結果としては変わりない。

しかも以前はこの力を使うたびに頭痛にさいなまやされ、この目を所持していた歴代の所有者の魂の集合体に同化していくというリスクがあつたが、それも無いのだ。

その分予知の力は落ち、歴代の所有者の知識を用いることは出来な

くなったものの、それでも戦闘においては十分すぎる。

それを見て、時風が心底めんどくさそうな顔をして十五天帝を振るう。

「剣に炎を。宿し力は地獄の業火……獄炎烈火……」

「みんな避ける！！！！」

ゴオウ！！と炎を纏った大剣を時風が振るい、炎の斬撃が一振りです十五、唸りを上げて数名に襲い掛かった。

まず一振り目は駆、美鈴、ゆかへと飛来し、二人はその反応速度で避け、ゆかはハンスネオブグロリー栄光の手の力でその能力を無効化していた。

もう一振りです電王、賢久、菊理へと斬撃を飛ばした。

が、電王は避け、菊理はアブラクサスの鎖で弾き、賢久は斬撃の炎を巻き上げて取り込み、逆に時風に投げ飛ばしてきていた。

「……剣に雷を。いかずち宿し力は旺なる雷撃……雷旺招雷……」

すると、その攻撃を時風は十五天帝の面で受け、獄炎では意味がないと思っただのか今度は刀身に雷旺を纏わせて振るった。

そうすると今度は十五の雷となって降り注ぎ、各人を次々と襲った。

雷を避けれる人間はいない。

その落ちる先を予知できる駆以外の人間は、皆少なからず衝撃を食らってしまふ。

その一瞬に、時風がゆりに向かって剣を振り上げて地を割るほどの斬撃を飛ばしてきた。

が、それを駆が一瞬で、というよりも、そこに来ているのが分かっているかのような動きでガードに入った。

しかし、ガードできてもその衝撃は凄まじく、雷切が弾かれて遠くに落ちる。

さらには両腕はしびれてしまい、これ以上はこの場に剣があっても握れないほどだ。

「駆ウ、お前は「分かっている」からこそそこに飛び込むしかない・・・見捨てられないもんなあ？」

ドーンッ！！！！！

そうして、次に菊理に向かって土の塊を作って土惺弾として放った。無論、そんな重量を彼女が受け切れるわけもなく、おそらくは潰される。

しかし、それでもその砲弾は当たらなかった。

駆がその場に飛び出し、菊理を担いでそのままジャンプして避けたからだ、

勢いそのまま飛び込んだため地面に二人してズシヤリと倒れるが、あれに潰させるよりかは遥かにマシだ。

「グっ……はぁ……ハア……!!!!」

「か、駆さん!!!!」

「大丈夫……大丈夫だから……!!!!」

大丈夫と駆は言うがその肩は土惺弾が掠ったのか血が滲んできている。しかも、かなりの量だ。

おそらくはもう腕を上げることはできないだろう。

そうして、次に蒔風が腕を上げる。

そこにはいつの間にか集められた圧水が浮遊し、ユラユラと揺れな

がら今も徐々に大きくなっていった。

「駆……俺のすること……わかってるよなあ!？」

「お前……!!!!!!」

「圧水掌!!!!!!」

蒔風が掌を下に向け、叩きつけるかのように腕を真下に落として、それと連動して浮遊した水の塊がその場に落下してきた。

その流れに皆が呑み込まれる。

電王はとっさにロッドフォームへとチェンジし、彼のウミガメ型専用戦闘車両「デンライナースルギ」に飛び乗って賢久と美鈴を拾った。

しかし、当然この大規模な攻撃に間に合わなかった者もいた。

まず、水の中でその重量に耐えきれず菊理が消えた。

次に、ハンスオングローリ栄光の手で圧水を消して何とか生き残っていたゆかが処理が間に合わず押しつぶされた。

そして駆は、その圧水に掻き混ぜられて上下左右を見失ったもの、どう動けば大丈夫かを半分直感交じりに感じ取り、水の引いた跡に

四つん這いになって助かっていた。

「ゲホゲホツ……ゲ……は……ゴホツ!!!……はあ・  
・ハア……」

だが、そのダメージはかなりのものだ。

正直、体を揺さぶられて今にも吐き出しそうだし、水中という圧迫された空間によって全身の体力は根こそぎ持って行かれている。

「さて……厄介なのはお前くらいだ、駆。電王は前にも一回やったが……まあ許容範囲内だしな」

「げほつ……ハツ……うぐっ!？」

「死ね」

時風が駆を背中から踏みつけ、四つん這いから俯せに変えてその首元に切っ先を当てて切り裂こうとする。

しかし、その瞬間に駆の口元がニヤリと笑った。

「百野、いまだ!!!」

「発射」

ドンッ！！！！！！

駆の叫び声と共に、蒔風へと魔術砲撃が襲いかかる。

その威力、まるでレールガンを三十発ほど込めたものと変わらないものだ。

その砲撃を必死にかわし、腹ばいになって不様に倒れる蒔風だが、更にイスルギからのレーザーが迫る。

それを刀身で弾く蒔風だが、その目はそっちの方を向いていない。

向いている先は、百野栞。

その周囲には無数の魔術書が浮いており、胸の部分は観音開きになっており、そこから魔導書が出てきているようだ。

その魔導書の数、五千。

その魔導書は一冊それだけでも術式の役割をはたし、そしてその魔導書の配置によってさらなる魔法陣を描いていた。

彼女がかつて所属していた、今は無き「禁書目録聖省」

そこでの彼女の呼び名は「書架のウルスラ」

書架

つまり彼女はその体に、魔術的な処置を受け、物理的に五千冊もの魔導書を保存、管理しているのだ……！！！！

「なるほど……。テメエもまた、ある意味一つのインデックス！！！！」

「再装填、開始……終了。弾丸を込めよ。裏切り者は代価に三十枚の銀貨を受け取った」

「チ……ならばこちらも《ワールド！！！！》《こいつで受ける！！！！》」

蒔風がワールドメモリを起動させて宙に放り、混暗の力でイスルギを落としてからメモリをキャッチ、魔法陣を展開させて竜王の殺息ドラゴンフレックス



を放った。

同時に、栞の砲撃も再び蒔風へと伸びていった。

そして、衝突。

その衝撃にイスルギは完全に吹き飛び、電王はロッドモードとなったデンガツシャーを地面に突き立ててやっと立てると言った状況に追いやられる。

その電王に賢久と美鈴がしがみついて吹き飛ばされまいとしているが、それ以上に動くことができなくなってしまっている。

また、駆はその場から衝撃で吹き飛ばされ、廃ビルの壁に叩きつけられてそのままズルズルと倒れ込んでしまった。

栞が放っているのは「裏切り者の銀貨」である。

かつて「人の子」を裏切ったとされる使徒が三十枚の銀貨を受け取ったという事から、その対象者に銀の属性を持つ者を三十連射する魔術だ。

実際には砲撃魔術ではないのだが、その威力と速度、そして連続性はほかの魔導書の陣による術式で驚異的に底上げされていて、それ

が砲撃に見えてしまうだけのこと。

対する蒔風は先ほどと同じく竜王ドラゴンブレスの殺息。

しかも二回目だ。その威力は先ほどよりも落ちている。

しかしながら、蒔風に表情には一切の焦りはなく、栞の砲撃を受け続けていた。

この砲撃には普段無表情の栞もその顔に驚愕の感情をあらわにさせるほどのものだった。

無論、彼女はこの砲撃がどんなものかは知っている。

しかし、こんなものを知識を得ただけで、なんの補助もなく撃ちだすなんて思いもしなかったのだ。

だが、今のところその力は拮抗している。

蒔風だって限界に近いはずなのだ。

現にだんだんとその額を流れる汗の数が多くなってきている。

しかし、それでも蒔風は笑った。

これでなんとかできるな、と。

「さあて……」主が、お前の名は何かとお尋ねになると彼らは

応えた　我が名は“レギオン”我々は大勢であるが故に』・・・  
「！！！！」

瞬間

ボコリと地面から土の塊が立ち上がってきて、人型になって無数に現れた。

その手には身体と同じく土でできた鈍器を握っており、今にも殴りかかってきそうな様子だ。

だが、そんなことよりも驚異的なのはその数である。  
その傀儡の数、実に二千体。

それだけの数の傀儡が、衝撃で動けない彼らに向かって一斉に攻めていった。

電王、賢久、美鈴の三人は、衝撃に体が慣れてきたのか手を放し、その傀儡に応戦しようとする。

しかし、その圧倒的な数の前にまず、美鈴が倒れた。剣の一薙ぎで五十は削った彼女だが、彼女の剣は一振り、二振りしたところで傀儡の崩れて出来た土砂に剣を吞まれ、更にその体にかかってくる傀儡によって消滅した。

次に、賢久が倒れる。

彼はその合かを以ってして傀儡を焼き砕き、実に九百もの数を吹き飛ばしたが、その能力とは別に、身体に限界が来ていた。

いくつもの炎を発してきたその彼の手はすでに焼けただれており、炎を放てば皮がめくれ、圧縮すれば肉が焼けた。

その半ば自滅に近いようなダメージに明久の炎が弱まっていき、ついにその体が傀儡にうずもれて消滅した。

そんな中、電王は奮闘していた。

圧倒的に不利を感じたウラタロスはキンタロスと咄嗟にバトンタッチ、電王に無数の傀儡がのしかかろうと飛びついてきたが、電王アックスフォームの気合と共に振りあげられた腕にまとめて吹き飛ばされていた。

そして、彼が向かうのは駆の方だ。

フォームチェンジしてから美鈴、賢久の元へと向かおうとした彼女だったが、その時にはすでに美鈴がやられ、賢久はまだやられて

いなくとも自暴自棄のように炎を撒き散らさして暴れ回っていた。

あのままでは自滅する。

そんなこと彼だってわかっていたし、電王もそれを見て一発で確信した。

だが、彼は止まれなかったのだ。

自分の恋人をいきなり消され、その怒りの炎をブチまけなければ彼の心は壊れてしまう。

それがわかって、電王は彼を止める事などできなかった。

良太郎は中で「助けよう」と叫んでいたが、キンタロスはそれを許さなかった。

「あかん、良太郎……あれを止めようと近づいたら、こっちまで焼かれてお陀仏や!!!」

『でも……それでも助けに!!!』

「あかんのや!!おまえさんには死んでもらいとうない……俺らの存在が消えるからやないで。お前がいなきや、全員おらんかったんや。だから……お前さんを死に行かせるわけにはいかんのだや!!!」

『キンタロス……』

それは彼にも苦渋の決断だった。  
助けたいという思いが、ないわけなどないのだ。

だが今の彼を止め、なだめ、落ち着かせるには時間がなさすぎる。

だから、キンタロスは向かえなかった。

それよりも、まだ無事な駆の方へと向かうために走ることを選んだのだ……

「堪忍や……堪忍してや……」

そう呟きながら、彼が駆の元に辿り着き、彼の身体を抱え上げた。

「兄ちゃん、しっかりしい!!!その嬢ちゃんもはよう!!!」

そう言って、電王が柔にも促しながらデンライナーへと走っていく。  
だが、彼女はその場から動かない。否、動けないのだ。

もしこの砲撃を撃ち続けることをやめれば、時風はあの場から動くことができる。

そうすればこの傀儡以上の脅威だ、逃げられない。

しかも、その瞬間に賢久がやられて光になっていた。  
これで傀儡もこちらに向かってくる。

逃げることは実質不可能になる。

だから

「逃げて……ください」

「なんやて!?!」

「彼を押さえつけられるのはあと一分もありません……だから、  
今のうちに!!!!」

「アホ!!そんな事できるか!!」

「全員やられるよりかは、数倍マシです……早く……彼を  
電車に乗せて逃げてください……」

「……くぞッ!!!!」

電王が、そうして琴に背を向けて走る。

その声はすでに涙ぐんでおり、どうしようもない現状を嘆いていた。

そして、彼はすぐにデンライナーに乗り込んで、駆を寝かせて変身を解いた。

外の方では直後、栞がついに撃ち抜かれて消えるのが確認されていた。

「そんな……」

「チクシヨウ……おい良太郎!!なんでオレを出しに行かなかったんだよ!!全員でいけば……」

「全員で行ってみんなやられちゃったら嫌だからだよ!!!」

モモタロスの怒りの言葉に、良太郎が拳を強く握りしめて叫び返した。

「嫌なんだよ……あのときみたいにみんないなくなっちゃうのが……!!!」

「良太郎……」



そう、彼ら良太郎と契約している今人は一度消滅の危機に立たされた。

結果として、良太郎との絆の強さが記憶となり、その記憶が彼らを存在させることに成功して問題はなかったのだが、それでも一度は彼らは消滅してしまっていた。

その別れが嫌だったのだ。

だから、彼は強化フォームで行けばよかったのを、一人のフォームでしか行かなかったのだ。

もし皆が許せば彼は一人で変身した「ライナーフォーム」で出陣して行っただろう。

しかし、そうすれば彼らも一緒に並んで出てきてしまうだろう。

だからこそその一人ずつ。

しかし、今回は彼のその心が、裏目に出て決まっていた。

けっかとして、駆以外のメンバーは全員消滅。

大きく戦力を失った。

そうして落ち込んでいると、リュウタロスがふと気付いた。



キンタロスが、その場に残って蒔風と対峙していた。

その手にはデンオウベルトとライダーパスがあり、それを巻きつけて単独変身、電王アックスフォームへと姿を変えていた。

「駆を逃がしたその手腕は立派だったな」

「お前さんにやらせるわけにはいかんかったからのう」

「だが……くくっ……」

「？ なんや、なにがおかしい!!!」

「クカカカカカ!!! あっはっはっはっは!!!」

シュカツ、ドンッ!!!

蒔風が笑いながら、天地陰陽の四本を一点に投げ、それが廃ビルに横たわるかのように立てかけられた岩に当たって、光となって消滅した。

「な……」

そして、キンタロスははつきりと見、気付いた。  
その岩が光となって消える瞬間………駆の姿をしていたこ  
とに。

「そんな……あほな………」

「お前がめでたく持ちかえたのはそれ相応の重さをした岩の塊だ  
よ。ククツ……幻術かけて見た目そろえたら騙されちまって……  
…」

「貴様………」

「重かったかい？あね。そろそろ幻術が解けると思うけど……  
岩抱えて走るお前は滑稽だったよ！！！！」

「貴様アああああああああああああああああああ！！  
！！！！！！」

ドオ！！！！！！！！

アックスフォームの全身から衝撃波のようなモノが吹き出、その装  
甲を残像でブラし、仮面をまるで鬼の形相のように歪めながら



・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・

・  
・  
・

そうして、その衝撃から三十秒と経たずに決着はついた。

蒔風の手にはキンタロスのカード。

その体はビル三つ突き抜けてガラガラと崩れるその中にいた。

「ゲツ・・・は・・・い・・・ギアあああああああ  
つ！！！！！！」

そして、絶叫。

胸を押さえて悶え苦しみ、地面を時風が転がった。

だが、その五分後にはすでにその場に彼はいなく、学園都市の侵入者警告も解けていた。





## 銀白VS電王&かつての欠片（後書き）

今日は作者の体力が限界なので後書きはなしで。  
申しわけございません。

ちなみに今回出てきた魔獣はやオリジナルです。  
勝手に考えましたごめんなさい。

カード

キンタロス・・・電王のマーク  
11eyesメンバー・・・タイトルロゴと同じ

リスト残り

キヨン

長門有希

ベナウイ

泉戸裕理

泉戸ましろ

クラウド・ストライフ

古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
神尾美鈴  
小野寺ユウスケ  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
劍崎一真  
左翔太郎  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
シグナム  
ヴィータ  
リインフォース?



## 銀白VS六課&恋姫

今まで

蒔風に攻撃を仕掛けて行くこうという動きが出始めていたころ。

クラウド・ストライフは考えていた。

蒔風に対して攻めるといってもがむしゃらになって全員でかかれば固有結界の餌食だし、そのような乱闘にでもなれば蒔風に付け込まれる。

だから、攻めるためには段取りを取っていかねばならない。

そう考え、彼は各地に散っているメンバーを集めるなり配置するなりで蒔風に効果的な攻撃を仕掛けようとしてきていた。

今までどうも連戦続きだったのはそういうことだ。

しかし、最終的には間に合わない。  
時風が先に駆け付けたメンバーを倒してしまったり逃走してしまっていたり、または時風の攻撃がまるでこちらの段取りをつぶすかのような形で来たりと、クラウドがその場に着くころには時風の姿はいつだってなかったのだ。

だが………

( 今までどうしても集まらない……こうなったらがむしやらにでも攻めねばならないのか……?)

そう、ここまで多くの仲間がやられた。

この襲撃事件を隠せる者にはなるべく隠してきたが、もうそろそろ怪しんできてもおかしくはない。

そうなればリストにない、やられる必要のない者まで巻き込むことになる。

それだけは避けねばならない。

幸い、蒔風はなぜかリスト以外の人物は最初のうちのみ封印していたが、あとは戦力を削るだけで封印は極力避けている。しかし、だからと言ってこれ以上巻き込めるはずなどないのだ。

だから

(もう今しかない……十分にそろってるとかは関係ない。いま攻めなければこのまま全員……)

彼は、いつまでも冷静だった。本人が聞いたなら「臆病なだけだ」と否定しそうなものだが、それでも彼は冷静に考えていた。

彼は決して臆病ではない。彼の翼は勇気なのだから。

そんな彼が、空になっていた隠れ家の一つでメモを見つけた。

『捕捉出来たようです。私たちは行きます。場所はここです。勝手に動いてごめんなさい』

それを読み、クラウドが外に出てバイク「フェンリル」に跨って走り出した。

場所はかなり遠い。

おそらく彼女らは転移魔法で向かったのだろう。

「早まるな、高町なのは……あいつはもう……俺たちの知っているシユンじゃない……!……!……!」

バイクが駆ける。

一人の男のもとに。





ここ三十分は走っているが全く変化が見られない退屈な時間だ。  
変化と言えばたまに大きな石をタイヤが踏んで振動するくらいか。

ここまで来るとまるでベルトコンベアを逆走しているかのような気分させられる。

この地面、後ろに向かって流れてんじゃないのか？と思ったのは何度目か。

だが、そんな風景に変化が訪れる。

前方から、鮮やかな桜色の砲撃魔法。さらには数十本の矢が正確に  
蒔風へと飛来してきた。

ヴォーン！！ヒュン・・・ヒュンヒュン、ゴォオ！！！！

それを蒔風がハンドルを強く握りしめ、重心を羅してバイクを横に

そらす。

が、その攻撃の主はどつやら蒔風がはつきり見えているらしく、とめどなく放たれてきていた。

それをなだらかな蛇行を描いて避けていく蒔風。

そして、その攻撃の隙間から、確かに見た。

高町なのは達生き残った機動六課メンバーと、蜀と魏の混成メンバーを。

「グッ……しよっぱなから距離を取られた……!!!!」

その遠距離からの砲撃と射られた矢に、蒔風が回避に専念するしかないようにさせられている。  
しかし、それでも前には進んでおり、彼女らの姿が徐々に大きくなって見えるようになってきた。

と、その瞬間

ゾクウツ！と首元に寒気を感じた蒔風が咄嗟にバイクを右に倒し、体を右に倒した。まるでバイクと扇の組体操をしているようだ。そしてそうして躲した蒔風とバイクの上を、二つの刃が薙がれて行った。

直後、バイクに二人分の体重が加算された。

翠と霞である。その高速移動「風足」によって蒔風の背後に回り、彼の首を狙ったのちにバイクの後ろに飛び乗って来たのだ。

「くおっ!？」

「ハアああああ!！」

「セリヤアアア!！」

だが、これで終わらせるつもりなら最初から飛び乗りはしない。その狭い足場ながらも、翠が蒔風に切りかかり、それに対して蒔風がハンドルから片手を放して頭の上にあげ「天」で受け止めた。

が、彼女はそのままその接触点を軸に蒔風の上を飛び越えてハンドルを踏みつける。

蒔風がそれを見て驚愕しながらもハンドルを固定して跳躍、バイクの上立つ。

気がつくのと砲撃や矢は止まっていた。

おそらくは彼女らへの配慮だろう。

だがそれがなくなったからなんだと言うのだ。

脅威がなくなっただけではないのだから。

そこで時風が加速開翼し、二人の動きに合わせた。

一瞬のうちに数百発打ち合い、その激しい応酬の後、霞が時風の蹴りに弾き飛ばされて地面を転がった。

だが、いくら体感時間が長くなっているといっても時が止まっているわけではないのだ。バイクがついになのはや愛紗たちの立っている場まで到達していた。

が、彼女達から見ればバイクと、その上で何かがせわしく動いているようにしか見えないため攻撃のしようがない。

と、そこで二人が動いた。

一方バイクの上、高速の世界で戦っている二人

その翠の表情から血の気が引き切り、だんだんと意識が朦朧としてきた。

当然だ。本来のものではないスピードで体感とはいえこんなにも長い間動いているのだ。もうその剣筋はブレ始め、蒔風からの攻撃も入り始めている。

それでも、彼女はここから足を放さなかった。

絶対にこの男から引かない。

その意地がこの場に彼女を留まらせていた。

しかし、どんなに頑張ってももう限界だ。これ以上このまま戦えば彼女の身体がそのスピードに振り回され、空中にきりもみで弾き飛ばされて自滅するだけだ。

だが、それは蒔風も同じことだ。

むしろ、すでにファイズアクセルやトライアルは当然、クロックアップの制限をとくに超えた時間加速している。

ここまで翠が耐えられたのは彼女の体力故。その彼女にも限界が近いというのに、蒔風のこの余裕はなんなのだろうか。

と、そのバイクの両脇に、金の閃光が光って時風の首を狙って薙がれた。

「翠さん、降りて!!」

「今度の相手は・・・私達だ!!!」

ゴッ、ジャカッ!!!

二刀のバルディッシュ、アサルトとウイングの名を持つ大剣が、アリシアとフェイトによって挟み込まれるように迫り、それを時風がバイクの上でバク宙して飛び降り避けた。

と、同時に高速の世界から翠が出てきて地面を転がり、時風とフェイト、アリシアの二人が向き合い、その横になのはと愛紗が立つ。

「ふっ……どう見ても同じだな、お前らはよ」

そう言っつて蒔風が二人に視線を向ける。二人はバリアジャケットの姿まで同じだった。

ただ、ベルトの色がフェイトが赤、アリシアが青で、構えがそれぞれ聞き手が違うためか左右逆に。あとはバルディッシュ・ウイングのコアが銀になっている事か。

「ふむ……あとフェイトの方がバストが大きいな。それ以外は全く同じだ」

「なっ……」

「ふざけるな!!」

蒔風の言葉にフェイトが羞恥に顔を赤らめて睨み、愛紗が激昂した。そんな愛紗やなのは達に対し、蒔風がふざけた顔をし、舌をベエとだしてにたりと笑った。

「お前ら武将には興味ねえんだよ。お前ら総力戦でオレに一回負けてんじゃねえか」

「黙れ！……だからと言って……貴様を許すことはできん！！！」

そう聞いて、時風が呆れたようにため息をつく。

後ろを向き、スタスタと歩いてからバイクを立て直し、腰に手を当てて心底めんどくさそうに言った。

「武将なんざどーだっていいんだよ。そもそも、いつも俺は言うてただろうが。「結局何をするにも強くなきゃならん」ってな」

「その強さは……誰かのために振るうものじゃなかったの!？」

「バアカ。ちげエよ。すべてはオレの気分だ。あの時はそれが気分良かったからやってただけ。で、今はいまだ」

「……もういい……しゃべるな……」

「今のオレはとても楽しいぜ?」

「……しゃべるな……」





かつて、敵から聞いたことのあるような言葉を聞き、フェイトが怒りをあらわにして砲撃を放ちそのまま蒔風に突撃してきた。

それを見て、蒔風が加速開翼をし、フェイトも真ソニックへといきなりフォームを変えていった。

両者とも、トップスピード。

しかし、なぜだろうか。すでにあれだけ動いていながら、蒔風の加速には一切の減速もキツさもない。

しかし、更にそこにアリシアも入ってくる。

バルディッシュにかつて組み込んだ加速プログラム。それは当然アリシアのバルディッシュ・ウイングにも入っている。

そしてフェイトと身体を基本的に同じとする彼女は、そのプログラムを使う事が出来る。

だから彼女もこの戦闘に入れるのだが……

『おかしいよこんなの！！なんでこの人こんなに長くいられるの！？』

『舜相手に疑問は無意味！！いつだってこの男は……考えの外から襲いかかってくるんだ！！！！』

『だけど……キヤア！！！！』

「アリシアッ！！！！！」

蒔風との交戦でアリシアが弾かれる。

無理もなかるう。いくらアリシアがフェイトと同じ知識を持っていると言っても、その体に刻み込んだ経験はまだ皆無に近しい。もちろんアリシアは今まで多く模擬戦や訓練で驚異的な速さでその強さを修得している。だが、いくらなんでもそれだけでは蒔風に及ぶわけもない。

「大丈夫！？」

「くっ……ごめんフェイト、足引っ張って……」

「やっぱりアリシアはさが……」

「言ってる場合じゃないでしょ。さ、行くよ！！！！」

「……クソッ！！！！」

アリシアまでもこの場に駆り出さなければならぬことと、その場に巻きこむような事シチュエーションにした蒔風に、彼女らしくもない激しい悪態を吐いて再び向かって行った。

しかし

「ガッ!？」

「ま・・・まだ!？・・・アグッ!!!！」

時風のまったく衰えを見せないその速度に、徐々に追い込まれていくフェイトとアリシア。  
それに対し全く速度を緩める事の時風が、ついにその首元に剣を持つて来て、振り下ろした。

ギーン!!

と、しかしそれを翠が受け止めて時風を弾き飛ばした。  
時風が加速をやめ、剣を収めて両手をパンパンと叩く。

「す、翠さん」

「ごめん・・・ありがとう・・・」



それをうつろな目をして蒔風が眺め、向かってくる武將を次々と潰していった。

まず、偃月刀が振るわれるよりも早く先頭の愛紗を殴りとばし、次に続いてきた春蘭の腹部を後ろ蹴り、壁キツクのようにそこを踏み台にして逆の足で背後から復帰してきた霞を蹴り弾いた。

焰耶が武器を振るってくるが、巨大なハンマー鈍砕骨を拳で砕きその石飛礫ついでならぬ鉄飛礫で目をくらませた後にアッパーで沈め、蒲公英の片鎌槍「影閃えいせん」の柄を腕で受け、腕をからませて回し奪いその石突で身体のだ真ん中に突きこんで意識を奪う。

そしてそれを武器にして尻、真桜、沙和の三人を流れるように避け、後頭部に手刀を当てて気絶させた。

と、そこに飛来する矢。

紫苑、桔梗、秋蘭の三人による弓の攻撃が蒔風へと放たれる。

しかし蒔風は自身の剣を抜く事もなく、その矢を次々と払い落とし、そしていったが、その手の武器を三つにへし折り、それをそれぞれ三人に投げつけた。

無論、それは軽々とかわして次の矢を射ろうとする三人だが、その瞬間投げられたそれがボボンと爆発して煙を出す。

すぐにそれを手で払う三人だが、どうしてか意識が遠のき、その場に倒れ込んでしまった。



それを下がってかわす恋だが、そこで獅子天麟が落ちてきて地面に刺さった。

「ッ!？」

それはまるで壁のように恋のバックステップを止め、それにドン、と寄りかかってしまう恋。

しかも予期せぬ壁に体制も崩れた。その恋に時風の拳が迫る。

「星、巡りて天日てんじつを廻る。その日数ひかず三百と六十五」

ゴキッ!.....!

「打滅星、年巡り!.....!」

ゴゴッ、ゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッゴゴッ  
ッッ!.....!



時風の拳が、次々と恋の身体に突き刺さる。拳といっても掌底だが、部位によっては指突であったりとその拳は多彩だ。

そして十五秒後、その拳の嵐が止まり、恋の身体がぐらりと崩れる。しかし、そこは天下の三国無双と謳われし者。それでも片足を踏ん張って恋はまだ倒れなかった。

が、今すぐに戦闘は無理だろう。

時風が恋の後ろの獅子天麟を抜き、背中に収めてフェイトに向かう。

翠はもう動けない。

アリシアだって今の攻撃を喰らってはもう立てないだろう。

そう思い、フェイトが時風へと向かった。

「年巡り」

「真……ソニック!!!!!!」

ゴッ、ガガガガガガガガ!!!!!!

フェイトのバルディッシュに、蒔風の拳が当たっていく。  
フェイトはあの猛攻を受けきっていた。

さすがにもはや加速プログラムは無理でも、ここまでの加速ならば可能だ。

そうして、十五秒。

フェイトがすべての攻撃を受けきり、蒔風へと攻撃に移ろうとした瞬間、蒔風が背を向けてシグナムに向かって行った。

逃がすもんかと、その背に向かってバルディッシュを振るうフェイトだが、蒔風に魔力刃が当たった瞬間、その黄色の刃が粉々に砕け散った。

「な……まさか……あの攻撃で……!?!」

驚愕するフェイトだが、蒔風はまったく振り返りもせずシグナムへと向かった。

が、到達するまで二三秒。その間にシグナムの隣にはリインとユニゾンしたヴィータも立っていた。

「行くぞ、ヴィータ!」

「おう……ぜってエにブツ殺してやる……!!!!」

『行きます……!!!!』

ゴゴッ……!!

そうして、三度目の衝突。

しかし、もう二度も見つた攻撃、しかもこちらは二人。その攻撃を受けるのは容易だ。

そして、二人も受けきる。しかし、その攻撃にカートリッジはすべて使い果たし、彼らの攻撃手段はなくなったと等しくさせられる。

それを見て、時風が今度はアリシアへと向かっていく。

フェイトが即座にそちらに向かおうとするが、バルディッシュの刃はまだ戻らないし、その状態では真ソニックはおるかソニックも無理だ。

だが

「アリシアさん、行くよ!!」

「なのは!!」

アリシアの横に、なのはが着く。

それに時風が眉をピクリと動かしたが、それでも構わずまったく同じ攻撃を仕掛けた。

「……年巡り」

「行くよ、なのは!!」

「レイジングハート、エクシード!!!」

ゴッ、ゴガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガッ!  
!!!

と、その攻撃を受け続ける二人。

彼女らのような相手に、初見ならともかく二度も見せてはもはや意味がない。

受けて、捌き、弾き、その攻撃を弾き切ったところで。

「デイベイン！！！」

なのはがレイジングハートを構えて叫ぶ。

しかし

「グハアッ！？」

隣のアリシアが肺からすべての空気を吐きだした。

その声に、レイジングハートの先端から魔力が引き、彼女の腹部を見る。

そこには時風の拳が

しかも抜き手であり、アリシアの腹部に文字通り「突き刺さっていた」

なのは困惑していた。

今までの攻撃は365回すべて防いだ。それなのにこの一撃は……

そこまで考え、ハッとするなのは。

蒔風が口を開く。

「しらねエのか？四年に一度は閏年だ。この技はこの一撃のためにあるよーなもんだ」

ゴポリと

血を流し落としながらその手がアリシアから引き抜かれ、その激痛が脳に達する前に光となってカードに変わった。

「ア……アリシアアアアあああああああああああああああああああああああああ……」

フェイトの絶叫。

なのはが蒔風に蹴り飛ばされたが、その蒔風にフェイトがバルディッシュをサイズフォームにして突っ込んでいく。

その顔は、まるで鬼神だ。

そうしてフェイトが降りかぶり、弾かれたなのはが砲撃を放とうと構えた、その瞬間。

「あ……アがつ!？」

ガクン!と、カードを持つ蒔風の身体が揺れ、頭を押さえて呻きだした。

その痛みは相当なモノのようで、頭を押さえながらついに膝を付き、カードがバラバラと落ちていってしまったほどだ。





叫ぶなのは。

その名のはの透き通るような目を見て、時風の口がパクパクと動く。

が、それを言葉に出さないのも時風の意志だ。

最初の一言が聞こえ、その先を言わないようになのはには見える。

そして、目を堅くつぶり、歯を食いしばってから一気に息を吐き出して

ビッ

「え？」

「俺は悪役、オレはあくやく、オレハアクヤク……………」

バン!!!!!!!!!!

「オレは悪だ……テメエら、勘違いするなよ……」

なのはの胸に、「天」が突き刺さり光りに消える。  
仰向けに寝そべりながら、蒔風が呟いて拳を上げる。

そして立ち上がってから、カード集めて非常に冷めた、感情の乏し  
そうな顔をしてフェイト達に向き合った。

「舜……なのはは……」

「?」

「なのはが!!今どんな思いでお前の元に走ったかわかるか!?こ  
の……」の……」

フェイトがもはや言葉にできないと歯ぎしりし、ヴィータとシグナ  
ムが武器を構えて向き合う。

が

「え？うわ！？」

「くっ、なにを！？」

「はなせ！！あの野郎を……！！！！！」

『恋さん、翠さん！？』

三人（と中の一人）を攫って逃げる姿があった。

馬に乗った恋と翠だ。

彼女らが三人を抱えて、その場から走り去っていた。

「恋！どうして！？どうしてあの場から……」

「あそこ、危ない。今の恋じゃ……皆守れない」



いまだに額に残る脂汗を拭きとり、周囲に転がっている愛紗たちの武器をへし折ってからバイクに跨る時風。

が、そのエンジンをかけることはない。

目の前に、漆黒のバイクに跨った、もう一人の翼人を見たからだ。

「クラウド……………か」

「シユン……………これはお前が？」

「……………ああ、やった。カードにする価値もないんでな」

「・・・わかった」

そう言って、バイクに収納されている剣を抜き、バイクのエンジンをふかせるクラウド。

それを先ほどから変わらず覚めた目をして見つめる時風。

空が淀み、どうやら一雨きそつな空気だ。

だが、ここ一帯だけは違う。

雨がいくら降るつとも、この熱気は下がる事を知らない。

t o b e c o n t i n u e d

銀白VS六課&恋姫（後書き）

なんとかクラウドが今まで来なかった理由を考えてみたよ！！

なのは「舜君・・・一体あなたはなんなの？」

アリシア「うゝゝゝ、さすがに無茶だったかなあ・・・」

よく考えてみると今回やられたのはこの二人だけですな。

さて、ついに恋姫全滅！？

まあ恋は動けるけど武器がない、翠は体調が戻らないだけで結構すくにまだいけそうですけどね。

ア「なんであんなに長く動けたのかも不思議だし・・・」

ああ、まあそれは簡単に推測つくでしょう。  
と、言うか「あれ」しかない。

な「あの時の絶叫と苦しみは……」

ああ、あれはここで断言しておきましょう。

演技ではございません。

あれはマジもんの絶叫でした。

胸の苦しみも、苦悶の表情も何もかも。

な「じゃあやっぱり……」

そうですね、何かがあるのでしょうか。

しいかし、その顔を見たのはなのはだけ。

ほかの面々は「あれはなのはをだますための演技」だと思っています。

で……ついに来てしまいました!!!



な「今回はVS漆黒の翼、クラウドさん！」

ア「さあ、みんなも映画館に！」

何言ってるんですかまったく。

ではまた次回。

リスト残り

キヨン

長門有希

ベナウイ

泉戸裕理

泉戸ましろ

クラウド・ストライフ

古手梨花

古手羽入

国崎往人

神尾美鈴

小野寺ユウスケ

海東大樹

野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
劍崎一真  
左翔太郎  
フェイト・T・ハラオウン  
シグナム  
ヴィータ  
リンフォース？

銀白VS漆黒& a m p・薄緑& a m p・純白

二台のバイクが交差し、火花を散らしてターン、そうしてまたぶつかり合う。

そして何度か目の交差で、ついに時風がジャンプしてクラウドのバイクに飛び乗った。

クラウドがそれを剣で受け、その上に乗るようにして剣を押し付ける時風。

そこからクラウドの顎を狙って蹴り上げ、それをクラウドが躲して時風を振り落とす。

地面に着地した時風。向かってくるクラウド。

そのクラウドのバイクに向かって、時風が銃を構えて数発放った。

しかし、銃弾はバイクの装甲に当たって弾かれてしまうだけで、全くダメージを与えられない。

「防弾装甲……銃弾の量と大きさが足りないな」

《ワールド!!!》

そうして時風がメモリを取りだし、起動させて握りしめる。  
するとその手にはG3-Xの装備であるガトリング銃が現れ、時風の背に翼が現れる。

「ブーストオン加速開翼……………」

「ツツ！…！」

瞬間、クラウドがバイクから飛び降りて地面を転がる。  
それは攻撃によるものではない。むしろ回避のための行動だ。

直後、火花の嵐 実際には果てしないスピードの時風から放たれた銃弾が、バイクに襲い掛かった。  
しかし恐ろしいのはバイクの装甲度である。それだけの銃弾を食らっても、多少窪んで倒れただけで、バイクそのものはまだ生きていた。

が、だからと言って乗っていたらクラウドは蜂の巣だ。

そのクラウドも同様に翼を開き、時風の姿を見る。  
ガトリングを構え、その驚異的なスピードで迫ってくる時風を見てから、目をつむる。

クラウドの視界が消え、音と感覚だけの世界へと変わった。

……ザ……

そうして、合体剣のうち、小振りな一本を握りしめ、両手で構える。

……ザシ……

音が近い。

しかし、彼は全く呼吸を乱さず構えを微塵も動かさない。

そして

……ザキ……ゴゴ……

自分の目の前で音が聞こえた瞬間、その剣を振り降ろして蒔風の顔を殴りつけた。  
地面にバウンドしながらも、何とかしてクラウドから距離を取る蒔風だが、頭からは血を流している。

「なかなか……」

(軌道を逸らされたか……)

両者とも、相手の力量に改めて驚嘆していた。  
蒔風はあのクラウドの一瞬の動きを察知し、とっさに体を捻ってその面が当たるように回避し、クラウドは蒔風の動きを翼で上がっていたとはいえ五感のみで捉えたのだ。

蒔風が頭から流れる血を拭い、メモリをしまつて剣を構える。

「そいつはもういいのか？」

「お前相手に他者の力を使っていたら負けるから」

しかし、それでも時風はどこか冷めていた。  
無感情な目をし、冷めた口調で言葉を返す。

そうして剣を構える二人。

直後、その周囲にもう二人、降り立ってきた。

「クラウドさん！！加勢に来た！！」

「もう……逃げさないよ……」

その場に現れたのは、薄緑と純白の翼人だった。

理樹と観鈴。その二人の登場に、少しばかり表情に変化が現れた時風だが、すぐにそんなものはなくなり時風が剣を握って走り出した。

狙うは、観鈴。

しかし、あまりにも順当すぎるその攻撃は間に入った理樹に防がれてしまう。

直後、観鈴の翼から衝撃波が放たれて蒔風を吹き飛ばした。

その衝撃に蒔風は吹き飛ばされながらも地面に着地。正面から受け切って、それでもなお前進を始めた。

「な………」

「そんな!!」

この衝撃波を放っている観鈴は確かに攻撃が得意なわけではない。しかし、それでもこの衝撃波は周りが森なら木々をなぎ倒し、周りが街ならビルを倒壊させているはずなのだ。

が、それでも蒔風は前に進んできた。

もしここが森ならば蒔風の背後の木々は無事で、街ならばビルの壁は人型に残っていただろう。



とはいっても全くダメージになっていないわけではないようで、ところどころの皮膚が薄くだが裂けてきている。感覚としては少しずつ薄皮がはがれている感覚だ。

非常にヒリヒリするといったことが。

そして、この攻撃のダメージをそんなもので済ましているこの男は、間違いなく

「化け物……か……!!!!!!」

「違う。ただの悪だ」

ドゴッ……!

時風の踵落しが地面にめり込み、理樹と観鈴がそれを避ける。そこにクラウドが剣を時風に叩きつけようと振りかぶってくるが、時風がそこから地面を蹴り上げて土をクラウドの目に放った。

その攻撃にクラウドが腕で土を弾き、再び目を開けた時には時風はいなかった。

直後、クラウドが身を捻って身体ごと上を向くと、そこから時風が落下してきてそれを剣で受け止める。

と、そこに観鈴からの衝撃波が飛んできた。

しかも、今度は先ほどのような拡散ではなく一点集中型だ。

ライフル弾のようなその衝撃波が時風の左ももに命中しその機動を削いだ。

と、クラウドがその場から飛びのいて地面から薄いガラスのようなプレートが刃の形をして突出してきた。

理樹だ。

彼の本来防御に使われるその透明のプレートが、時風の足元から一気に突き出してきた。

それを時風が顔を腕でガードしながら吹き飛ばされ、後方に下がる。

「くっ、速い・・・」

「だが、確実にダメージは通っている」

「勝てるよー!!」

理樹、クラウド、観鈴が並び、その背に翼を表しながら一切の油断なく時風を見る。

対して、時風は肩に付いた埃を落とし、左足を上げ下げして怪我の具合を見た。

「・・・・・・・・」

そして、ごく自然な動きで腰から銃を抜いて、三人に向かって発砲した。

それを弾くクラウド、バリアで防ぐ理樹、飛びあがって回避する観鈴。

そのクラウドに向けてなおも発砲しながら時風が走り迫り、クラウドがそれを弾きながら時風に迫る。

そしてちょうどクラウドと時風がぶつかり合う瞬間、時風が銃を放

り捨てて背中から獅子天麟を抜いて組み上げ、クラウドの大剣とぶつけ合った。

と、クラウドが後腰に挿してあるほかの合体剣を蒔風に振るい、その手首の部分を蒔風が膝を上げて止めた。

「くっ……」

「……行け」

ドバツ！！！！！

その状態で組み合っていた蒔風とクラウドだが、蒔風の言葉と共に脇に挿してある青龍と白虎が飛び出してクラウドの胸を狙って吹き飛ばした。

それをかるうじて防ぐクラウドだが、すでに蒔風の剣がクラウドに振り下ろされている。クラウドのガードは間に合わないだろう。

しかし、それを理樹が防いだ。

クラウドの目の前にバリアを張り、蒔風の獅子天麟を全く微動だにせず受け止めていた。

「む……」

「ガードは任せて・・・クラウドさんは攻撃に専念を!!」

「任せた!!!」

ドゴツ!!ギンギン!!!!!!

そのバリアが解け、その瞬間にクラウドが時風に剣を振るってマテリアによるファイガを放ってきた。

それを剣の二薙ぎで切り裂き、火球を四分割して後方へと流す時風。そして身体を返しながら宙に反転、両手を合わせてその挟間に雷が迸る。

ザッ、ガッ!!!ガッ!!!!!!

そして、両手を突き出して、その間にできたエネルギーを、一つの指向性を以って爆ぜ打ち出す!!!!!!

「雷旺砲!!!!!!」



るはず。

そう、はずだった。

しかし、土煙の中から現れたのは、バリアをドーム状に張ってその攻撃を防いでいる理樹と、クラウドがいただけだった。

そのバリアには多少の焦げ目があるだけで一切押し返された跡も何もない。

つまり、理樹は真つ向から受けて耐えきったのだ。この男の最高ともいえるこの砲撃を。

「むう………」

「クラウドさん……！」

「ああ……！」

そうして、再びクラウドが蒔風に向かってくる。

それを受け、銃弾を放つがそれはすべてクラウドに弾かれ、途中から理樹も刃状にしたバリアで蒔風に切りかかってきていた。また、上空遠距離からは観鈴の集中型衝撃波による狙撃。

このままいけば、蒔風は間違いなく負ける。

翼人三人を相手にしてここまで粘っているのは大したものだが、いくらなんでも無茶である。

(仕方ない・・・搦め手を使いましょうか・・・)

そうして時風が剣を収めて、その動きが変わる。腹を引つ込めてクラウドの剣を避けたと思ったら、逆に腕はクラウドの方へと伸びており、その拳が顔面を掠った。そのまま腕を振りながら回転し、理樹に向かって腕を振り下ろしにかかって、それでいて腕を止めて足払い、そして止めていた腕を振り下ろし、理樹の顔面を地面にたたきつけた。

「な・・・」

「この動き・・・」

「・・・見よう見まねだけど・・・何とかいけるものだ」

全く一貫性のない攻撃法。

それは、一般的に酔拳と呼ばれるようなものだ。

腕や体をグネグネと動かし、その攻撃のタイミングや軌道が読めなくなつた。



しかし、彼らとて翼人だ。  
最初に二、三撃は翻弄されようとも、即座に対応して対処した。

と、そこで蒔風の踏み込みが地面を鳴らし、理樹に向かって正拳突きを放ってきた。  
その構えは全くの不動であり、まるで銅像を着色したかのようなのである。

その拳にバリアを張って防ぐ理樹だが、バリアが少し押されて跡を残した。

「なに・・・!?」

「さっきと動きが・・・」

そして直後、観鈴の衝撃波が蒔風に飛来するが、それをまるで逆立ちでもするかのようにして足を振り回し、クラウドに向かってはじき出した。

それを防ぐクラウドだが、蒔風によるやはり先ほどとは違う動きに翻弄されてしまう。

「いつ・・・ッ!?!」

「動きをどんどん変えてきてる!?!」



その戦いを遠くから見ているものがある。

真人、謙吾、往人だ。

彼らは理樹、観鈴とともに行動していたが、ここに蒔風との戦いとなつていったん引かされている。

最初こそ彼らは自分たちも戦うと言い張った。

真人や謙吾は戦力になるし、往人の能力は戦闘向きとは言えずともアシストくらいならできるはずだ。

だが、ここにきて彼らはそれが間違いであったことを知る。

翼人同士の戦いには、おいそれと入り込めるものではないと。

無論、純粹なパワーならば真人のほうが強いし、謙吾や往人が入れればより確実に蒔風の体にダメージを与えうるだろう。

しかし、何かが違うのだ。

翼人同士の戦いは何かが違う。

そう、まるで……何か得体のしれない感情の渦があの中を巻き起している気がしてならないのだ。



本来、このように蒔風が使役獣を出した場合はそれに応じてクラウドも召喚獣を出すつもりではいた。しかし、こうしていきなり仕掛けられて、しかも三人も相手にしてはそれを行う暇もないのだ。

無論、理樹も同様だ。

彼は守る事には非常に特化しており、そのバリアによる刃は相当なものだ。

しかし、三人に攻められてはやはり守り一択になってしまおうし、攻めるにしても彼のそんなに得意でない攻撃に、三人が直撃などするはずもない。

そうしているうちに、最も打たれ弱い観鈴に蒔風と玄武が向かった。もちろん観鈴もただ見ている事などなく、衝撃波を発して止めにかかるが、蒔風は玄武を剣に変え、更に玄武盾にしてその衝撃波を防ぎながら観鈴に接近する。

「こ……ないで……!」

「そもいくまい」

ガッ!と、蒔風が観鈴の首を掴み、そのまま地面に引きずり降ろす。

そして、彼女の頸動脈を親指の付け根で締め、即座に意識を飛ばそうとする。

しかし、彼女も純白の翼人だ。  
体の耐久力は常人のそれをはるかに超えている。

故に、普通ならば十秒かとかからずに意識を失うところを、たっぷり三十秒も駆けて意識を失っていった。

そうして、蒔風が彼女の身体をぶらりとぶら下げて、青龍たちを引かせた。  
彼の元に集まり、後ろに下がる青龍たち。

そして、蒔風に掴みあげられている観鈴を見て、理樹とクラウドの動きが止まった。

「さて・・・と」

「観鈴さん!!」

「貴様・・・」

その蒔風に、激昂する二人。  
その二人を見て、蒔風が鼻で軽く笑った。

「お前ら三人相手して、まともに勝てるか」

「なにが・・・望みなんだ・・・」

「ん？」

「観鈴さんを放せ・・・望みなら・・・」

「ねえよそんなの・・・捕まえたらこつだ」

瞬間、ゴグツ！という音を立て、観鈴の首が折れて光へと変わる。

「な・・・」

「なんだよ・・・なんて顔してるんだ。注目したのはお前らの勝手だ。人質とかにでも使おうと思ったか？」

「お前・・・」

「翼人相手に人質は効かない。そんなことはオレが一番知っているからな」

「お・・・まえ・・・」





「時風……貴様に立ち向かう皆の勇氣、受けてみる覚悟を決める……！」

「舜。仲間を想うその気持ち。それを踏みにじった事を後悔させる……！」

そうして、二人が力を込め、時風へと向かってこようとする。

しかし

「翼に集え、我が力よ……！」

青龍たちを引つ込め、そう時風が叫んだ瞬間、その翼に尋常ならざる量の金の粒子が集まって行った。それは、願い。彼の翼が司る想い。

だが、おかしい。  
今彼の事を願う仲間などいない。

彼の勝利を願っている者などいないというのに、この願いはなんなのか……！！！！

「すべての感情が何から来てるか知ってるかい？」

「なに？」

蒔風が話す。

「敵に立ち向かいたいと「願う」事で、勇気が生まれる」

「……」

「仲間を救いたいと「願う」事で、友情ができる」

「まさか……」

「誰かと一緒に居たいと「願い」、両者に絆が生まれ……誰かを大事にしたいという「願い」が、愛情を生む」

その言葉は、あまりにも雄弁で。

それでいて、遥かな上位からの語りかけであった。

「すべての感情は、「願い」から発生する。ならばこそ……「蒔風を倒したい」の「倒す」という部分のみを取り出し……「仲間を救いたい」という「救う」のみを取り出し自分に当てる……するとどうなるか!!!!」

ドオオオ……!!!!

蒔風の翼が大きく開き、その力が全身にまわって回復する。

「大まかな感情になるゆえに力は下がるが、二人分なら全快してな

お余りある……ありがとうよ。お前らが集めなきゃ、こんな  
ことできなかった」

そうして、蒔風が降り立つ。

理樹とクラウドが目の中の存在に脅威と、それとほんの少しの絶望  
を感じとった。

勝てないのではないか……と

感情をエネルギーにし、取り込むのは翼人にとって最後の手段だ。  
それをしては自分の体力も大幅に削られ、その力は攻撃か回復下に  
回される。

二人はすでにその力を「攻撃」に加えることに決定し、そうしてい  
る。今さら変えることはできない。

だが、この男はその二人の力をかすめ取って全回復。

正直に言って、全開状態のこの男に勝てる気などしていなかった。

もちろん、二人で粘り続ければ勝てるだろう。

と、言うか蒔風を手段を選ばずに本気で潰しにかかれば勝てるのだ。

だが、二人は隣に仲間がいる事も忘れ、目の前の男を凝視していた。

そして、その顔がだんだんと脅威を目の当たりにした者から、怒りへと変わっていく。

あの感情は、離れた場所にいるみんなが自分たちのために出してくれた勇気と友情だった。

それをこの男は利用し、かすめ取って行った。

確かに、総ての感情は「願い」から来るのかも知れない。

だが、だからと言って

自分たちのためのその感情を、他者が利用することなど、許されるはずもないのだ……！！！！！！！！

「理樹・・・潰すぞ・・・」

「うん・・・絶対に・・・倒す!!」

「故に、我、原初の翼人。すべてに根ざす者。お前たちはその力を  
使うべきではなかったな」

蒔風が剣を地面に突き立てる。

いま、過去に一度しか見せなかった蒔風の大技が発動しようとする。

それに対するは「漆黒の翼人」クラウド・ストライフと、「薄緑の  
翼人」直枝理樹。

最高峰ともいえる攻撃力を持つ者と、最高峰の防御を持つ者。

両者は、再び激突する。

この戦いは終わらない。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

銀白VS漆黒&amp;薄緑&amp;純白(後書き)

観鈴「うう・・・やられちゃったよ・・・がお」

御疲れー

観「私確かに翼人じゃ弱いけどあんなやられ方なんて・・・ひどいよー！」

ブー垂れないで

マーク

観鈴・・・「Air」のロゴ

さて、今回は重要なお知らせがあります。

実はこの小説、次回からは隔日更新にしたいと思います。

理由は簡単。私が書くのが遅いからです。

度重なる戦闘シーン。

その描写はどうあっても長くなってしまい、更にはその戦闘を決める技なども考えるに当たり、どうしても時間を長く取らねばなりません。



しかし、私が執筆にとれる時間は学校が始まり、バイトもあるためにそんなに長くはありません。

第一章は大丈夫でした。日常パートがあったから。でも第二章は戦ってばっか。さすがに大変です。

現にここ数日は一日飛ばしになってやっとというところ。ですので、次回からは隔日更新という事にしました。

その分、日曜でも更新するようにしますので、次回からもお楽しみにして下さい!!!

観「次回、引き続きクラウドさんと理樹さんの戦いだよー！」

ではまた次回

リスト残り

キヨン

長門有希

ベナウイ  
泉戸裕理  
泉戸ましる  
クラウド・ストライフ  
古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
小野寺ユウスケ  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
剣崎一真  
左翔太郎  
フェイト・T・ハラオウン  
シグナム  
ヴィータ  
リンフォース?

## 二神VS漆黒&amp;mp;薄緑

蒔風が獅子天麟を突き立て、その上にまるで天使の輪のように龍虎雀武を浮遊させた。

「剣の一薙ぎ、拳一発すらも放たずに、完全なる全快状態のみに発動できる技……二伸召喚。顕現せよ二柱！！！！」

ゴォッ！！と風が渦巻いて、剣が輝き、とてつもない光を放って二つの剣が姿を変えた。

真ん中に蒔風が指を合わせて遊んでいた。

背には翼が輝き、顔はニタニタと歪んでいる。

その左に青い髪をした応竜が立つ。

手には解放組立状態の龍虎雀武が。今は朱雀槍の先端に青龍刀がついた薙刀のような形になっている。

そして、右には赤い髪をした鳳凰が。

手には獅子天麟。大地に突き立て、腕を組んで敵を睨む。

「ふむ……この状態は本当に久々ですな」

「だが、この相手ならば納得だ。してま。どのようだった。」

「生死は問わん。倒せ」

「「御意」」

蒔風が土俵で地面を椅子に作り上げてそこに座る。

そして応竜、朱雀はそれぞれ理樹、クラウドのもとへと剣を構えて突っ込んでいった。

「これ以上手間とらせんなよ？二人とも」

蒔風が笑う。

その笑みは、悪の者のそれだった。



「ツツツ！！！！」

そして、地面にそれを叩きつけると、叩きつけた場所から三つに切れ目が走り、そこが赤く光って爆発した。

それを上空に飛び上がって回避したクラウド。そこから着地とともに朱雀に剣を振り落としてそこから回転して後ろ蹴りを顔面にたたきつける。

朱雀はクラウドの剣をバックステップで躲したが、顔面へのキックは躲せなかったのかまともにも命中してしまっ。

だが、そんなものは全く効いていないかのようにその顔面に当たった足を左手でつかみ、地面にクラウドを叩きつけた。

ゴカツ！！！という音を立てて、彼の体が地面を撥ねた。  
しかし、それでも宙で体制を整えて、剣と突き立てストッパーにして両足で着地したのは流石だ。

「あまりこの体を傷つけないでもらえるかね」

「それは・・・断る！！！」

ブンブン、ゴカッ！！

クラウドが剣を振り上げて突っ込み、朱雀に向けて横薙ぎ、しゃがんで躲した朱雀が一回転したクラウドの背に向かって剣を振り下ろす。

が、クラウドは振り回した剣を握ったまま投げるかのように朱雀の上に向かって伸ばし、その勢いに乗って跳躍、地面に振り下ろされた獅子天麟を踏みつけて地面にめり込ませる。

そうして一瞬動きを止められた朱雀めがけて、そのうえでもう一度跳躍。

宙で体ごと剣を振り回し、その剣に青い魔光のオーラを纏わせて叩きつけた。

それを朱雀は獅子天麟を地面にめり込んでしまった麒麟を残し、「獅子天」のみを引き抜いて回避した。

だが、地面にぶち当たったクラウドによる衝撃凄まじく、朱雀の体かはしけ飛ぶ。

一方、理樹のほうだが応竜の変幻自在な攻撃に防戦一方だった。朱雀槍の先端を次々と変えたり、両手に青龍刀と玄武盾などといった武器を以つての二刀攻撃などで全く先が読めないのだ。

だが、それでも理樹はそのすべてを防いでいた。ひっかくような刃、引き裂く斬撃、重く鋭い打撃。それらすべての攻撃を、最小限の防御で防ぎ切っていたのだ。

防御とは、ある意味で攻撃よりも高等なスキルだ。

いくら防壁が頑丈だからと言って、ずっとバリアを張っていればいいというわけではないからだ  
そんなことをすればいくら頑丈なバリアでも、いずれは疲弊して打ち破られるし、大きなバリアほど隙が大きい。

その分、理樹が現在行っている防御は素晴らしいものだった。

最小限にして最硬のバリアで防ぎ、決して無茶な大振りはしない。

ゆえに、一見一方的に見える応竜の攻撃なのだが、実際には彼は攻めあぐねていた。

いくら攻めても、この防御壁が破られる気配がないのだ。



通常、こういった手合いが相手の場合は一点を集中して攻撃して破壊するのがセオリーだが、このバリアはただ張っているように見え、実は表面上は流動的になっている。

バリアが理樹の意志によって変則的に動いているため、一点集中などできるはずもないのだ。

つまり、彼のバリアはそこに壁を作るのではなく、それがベルトコンベアのように動き続けているということ。

それはまるで川の一部を切り取ったかのようで、どこから来てどこへ流れるといったものではない。

そんなバリアではもはや打ち破るとかの話ではない。

もともと何もなくてもあの雷旺砲を受け耐えうるものだというのに、それがこんな力まで働いては破壊するだけでも相当の労力である。

そうであっても応竜には攻撃するほかない。

大振りや小振りな攻撃で攻めていくが、その一瞬を見切った理樹によって武器がバリアの回転に吞まれ弾かれる。

と、同時にクラウドの衝撃で朱雀も弾き飛ばされてきた。

吹き飛ばされながらも、その二人が視線を交差して一瞬で意思を疎通させる。

そして二人がすれ違う時、そのまま互いの足の裏を踏みつけ、朱雀は理樹に、応竜はクラウドに向かって飛び出していった。

こうして、相手が入れ替わる。

しかも、獣神体となつてだ。

標的が大きくなったものの、その脅威は数倍に上がったと思つてもいいだろう。

応竜の姿は東洋の龍に翼が生えた姿で、鳳凰は通常の鳥型に、二股に分かれた尾がさらに一對の翼に見えるという形だ。

巨大な姿をうねらせて、クラウドと理樹をその通過した風圧だけで吹き飛ばしてひとまとめにした。

二体は上空でぐるぐる回って滞空している。まるで二人を見定めているかのようだ。

その彼らが何をするのか。どんな攻撃をしてくるのか。

理樹とクラウドは各々身構え、攻撃に備えた。

しかし、彼らの攻撃は単純明快にして強力だった。

そう、ただその巨体に有り余る膨大なエネルギーを全身から吹き出すだけだ。

身体のいたるところからレーザーのように噴出したエネルギーが周囲を駆け廻っていく。

その隙間を走り抜け回避していく二人だが、相手は上空なのだ。このままではいずれ潰される。

故に、理樹がバリアを張って上空に突っ込み、その後ろにクラウドがぴったりとついた。

理樹のバリアに何本ものレーザーがぶち当たっていくが、その程度ではバリアは何ともない。勢いに押し返されそうにもなるが、後ろ

からはクラウドも後押ししているのでその勢いが衰えることはない。

そして、理樹がついに到達した。

バリアという弾丸になった理樹がその勢いそのまま鳳凰の腹部にめり込んでそのまま押し上げ、クラウドが応竜の尾を掴んで振り回し、同じく上空に投げ放ってその後を追っていった。

「……………グふっ……………ペツ……………あと……………二分かな……………」

それを見上げ、蒔風が口から吹き上げてきた血を地面に吐き、口元をぬぐって腹を押さえる。

見ると鼻からは鼻血でも出ていたのか真っ赤になっていた。

……………

- - - - -

雲の上

そこで空中戦が繰り広げられていた。

薄緑と漆黒の翼が舞い、それに襲い掛かる二体の巨大な怪物。応竜がとぐるを巻いてクラウドに襲い掛かるが、クラウドも弾丸のように回転してその鱗を削り、すれ違いざまに髭を切り落とす。

が、後ろに抜けた瞬間、応竜の尾がクラウドの横っ腹に衝突し、ゴキゴキと嫌な音を立てていく。クラウドは下方に吹き飛ばされ、雲に突っ込みそうになるがその寸前で体制を立て直してその上を滑空して距離を取る。

一方、理樹は自らをバリアに包んで弾丸のように鳳凰へと突っ込んで行っていた。

しかし、鳳凰もその巨体からは想像もつかないような旋回や急降下を見せ、理樹の体当たりを避けていく。

だからと言って、鳳凰のターンかと言えばそうでもない。

鳳凰はその口から炎を吐き、理樹を包み込んでいくが表面の回転しているそのバリアには当たったところがかき消されていつてしまうのが関の山で、いまだ焦げ目の一つも付けられていない状況だ。

薄緑の翼。最高防御を誇る翼人は、いまだ攻撃と言えるような攻撃を一切食らっていないのだから。

「理樹!! 離れろ!!!!」

そうして理樹が鳳凰と超高速の空中戦を演じていると、クラウドの叫びが耳に届いた。

見るとクラウドが頭上で剣を振り、そこにエネルギーが溜まっていた。

「メテオ・・・レイン!!!!!!」

ゴッ・・・ジュッジュッジュッ!!!!!!



無論、この二体とて弱いわけではない。  
この二体はかつて、五体満足、全開状態だった「奴」をその体当たりと衝撃波で粉碎し、打ち負かし、死に体だった時風を勝利へと導いた二体だ。

今回の相手は翼人二人。それが悪かった。  
ただ、相手が強すぎたというだけの事。

しかし、その二体の身体には傷らしきものは一切なく、このまま戦闘は続行できそうな様子だ。

だが

「……………！……………聞こえたか？」

「うむ……………目的は達された。我らはもう戻るか」

鳳凰が何かを感じとり、応竜が応えて頷く。





『こちら、白虎だよ。まずい事になった』

『どしたよ？』

『とちったんじゃねーだろうな？』

『理樹つちが僕のこと追っかけてきてる。このままじゃ舜のところ  
戻れないよ』

『……クラウド殿は？』

『誰の方にも向かってないのう』

『追われてるのは白虎だけですか。あなたは追いかけてここにないと  
ホント不運ですね』

『七分の一だからな』

『そんなのいらないよ』

『我らで引きつけるしかなかるう』

『……タイミングを見て、主の元へ。我々では封印はできない』



あの応竜、鳳凰を召喚する代償。

それは「二体が受けたダメージをすべてフィードバックする」

故に、あの二体が受けたダメージはすべて時風が背負ったのだ。

だから彼は戦闘に参加しなかった。

しかし、あれだけの大技をして狙いはクラウドたちではない。  
むしろすべてはあの三人を何の苦もなく潰すために二人を引き離し  
たにすぎないのだ。

「やっってくれるな……」

そうして、理樹が飛んで行った方向を見るクラウド。

その方向に、自分のバイクに跨って走り出した。

銀白、まんまと逃げおおせる。



二神VS漆黒&amp;mp;薄緑(後書き)

と!!言うわけで超久々に出ました「二神召喚」!!!

三人「描写は!?!」

キック!!パンチ!!チヨップ!!

固有結界には固有結界で討ち破ったよ!!

マーク

三人とも各作品のロゴ

三人「説明がヒデエ.....」

さて、かなり佳境に入ってきましたね。

これからは敗者復活戦になりそうです。  
つまり、一度負け、敗走した者たち+ で行きますよーーー!!!

にしても二日かけたくせにこの時間……  
申しわけございませんでした。

ここからは自慢話だよ……!

ですが、恐ろしいことが発覚してしまいました……

皆さまは「Google」をご存じだろうか？  
そう、かの有名な検索サイトです。

そのメインページで文字を打つと検索候補が出てくるのですが……

「世界」と打ち込むと「世界一受けたい授業」や「世界地図」  
「世界を」と打ち込むと「世界をかえておくれよ」「世界を変える  
100人の日本人」



と、出てくるのですが……

そこで、さらに「め」と打ち込んでみると……

なんと候補の中に「世界をめぐる、銀白の翼」の文字が……！！

ちなみに一緒に「世界をめぐるスープの旅」がありました。  
蒔風「スープですか……」

これを見た瞬間、嬉しくてさらに恐ろしくなりました……！！  
！！

と、言うだけの話。

真人「次回、オレの筋肉が……！！」

謙吾「違っただろ……！！俺たちのリトルバスターズが……」

往人「はあ・・・次回、神に近い者との戦い」

ではまた次回

リスト残り

キヨン

長門有希

ベナウイ

泉戸裕理

泉戸ましる

クラウド・ストライフ

古手梨花

古手羽入

小野寺ユウスケ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ  
直枝理樹  
乾巧  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
ランサー  
ギルガメッシュ  
劍崎一真  
左翔太郎  
フェイト・T・ハラオウン  
シグナム  
ヴィータ  
リインフォース？

## 銀白VS御社&太転依

「今は誰だっけ？」

「朱雀じゃ。あやつなら涼しい顔して帰ってくるであろうよ」

「ったく……振り切つちまえよ。テメエも逃げ切つちまえばよかつたのによ」

「無茶言わないでよ。翼人相手に僕らじゃ勝てないに決まってるじゃないか」

「……次は誰か……」

「また白虎かもしれんな」

「やめてよもお!!」

「来たぞ!!!」

六人のうち一人が叫び、その体が光になって六つの光体となる。そして、飛んできた朱雀も同じように姿を変え、七つの光がまるでシャッフルのようにぐちゃぐちゃと交差してからバラバラに散った。

そのうちの一つを、あとからやってきた理樹が追う。  
考えてなどいない。とにかく追うしかないのだ。しかし、このやり取りはもう三回目。

改めて翼人の化け物じみた力を思い知る。

「次は俺か・・・へっ、じゃあこれで振り切つてやるぜ!!!」

そうして、次の標的になった天馬が理樹からの逃走役として飛び去っていく。

残りの六人はまた集合場所を決めてそこで天馬を待つ。

「主のもとには・・・まだ帰れぬな」

『・・・残りの八剣で・・・何とかしてもらおうしかない・・・』

』



ベナウイと共に古手梨花、羽入を守りながらほかのメンバーとの合流場所に向かつて、この場所を通過していた所を蒔風に狙われたのだ。

当初、能力を打ち消し、さらには神通力をも使う裕理が蒔風を攻めていた。

その補助でベナウイが蒔風の足元を狙って槍を薙ぐ、ましろの槌が頭上から振り下ろされるなどの妨害もした。

だが、その陣形が出来て蒔風を追いたてようとした瞬間、蒔風が狙いを古手梨花のほうへと変えた。

傍らには羽入がおり、その神力で蒔風の撃った銃弾を止めて落すが、そこからは完璧にそちらに標的を変えたのだ。

それを受け、ならばと裕理がそちらに走って二人を守ろうとする。

だが、そちらに走り出した瞬間、蒔風が銃口をましろに向けた。

その蒔風に行動に裕理が目をギョッと開き、梨花たちの方へと向いていた足を強引にましろのほうへと回し方向転換、彼女のもとに向かった。

その瞬間、蒔風が簡単な獄炎弾を放って裕理を吹き飛ばしたのだ。

あまりにいきなり、そして崩れた体制ということもあって、直撃こそはしなくとも裕理の体が焦げる。

最初の叫びと静止はここでのことだ。

裕理が吹き飛んだのを見て、まだ倒れていないと思いつつも、時風が向かってきたベナウイの槍を銃身で受け止める。

数秒してから、ベナウイの槍と時風の銃が互いに押し返し離れ、そこからもう一度振り戻し、ベナウイが槍を時風に突き放った。

それを脇腹数センチで躲した時風がベナウイの眉間に銃口を突き立てて発砲。ベナウイは体を回転させてそれを回避し、その回転のまま時風の右につき、銃を持つ腕をわきに挟み掴んだ。額が裂け、血が流れてきていたが、あの至近距離で銃弾をかわしたのはとてつもないことである。

時風の動きと銃が抑えられ、羽入がついに動いた。



その能力を解放し、時間操作能力をいかなく振り始める。

蒔風がベナウイを振るい放そうとすると、その瞬間にベナウイは消え、ほかの場所に移っていた。

また、銃弾を羽入に放つと見えない壁に押しとめられて反転、蒔風の肩口に着弾した。

その反撃に蒔風が銃を落とす。

しかし、地面に落ちる前に蒔風がそれを足で軽く蹴り上げ、宙に浮いたそれを後ろ回し蹴りでベナウイに蹴り飛ばした。

それをベナウイは槍を使うこともなく避ける。

否、避けようとした。しかし、その飛距離はどう見ても彼の足元で落ちてしまうであろうものだ。

それを見て、ベナウイがその場から走って離れ、銃との距離を取った。

横にずれてから蒔風に突進するベナウイ。

背後では銃が地面に落ち、猛烈な爆発を起こしていた。

その爆風を背に、より加速したベナウイが蒔風に槍を突き出してくる。

その槍を時風が焦った表情で白羽取りし、刃を折ろうと力を込めた。と、その瞬間に再び彼が消える。

見渡すと羽入がベナウイと共に時風から離れた場所にいるではないか。

「時間操作……」

「誰もやらせませんです……ボクがみんなを守るんだ!!」

それは、かつて、そして今も。

土地神としてみんなを守ってきたオヤシロ様の信念。

守ってきたなどと言われても、自分はずっと傍観者だった。

そして、教えられたのだ。生きる意志の強さを。その強さを、もう失わせないために!!

「あなたを……倒します!! 柳桜!!」

そう叫んだ羽入の手に、七支刀と呼ばれる形をした剣「鬼狩柳桜」が光を放って顕現する。

「・・・過去を断ち切ったか・・・!!!!!!」

「いいえ・・・乗り越えたのです!!!!!!」

そう言つて、羽入が神力を込めてその剣を振るい襲いかかてきた。それを蒔風が組み上げた「天地」で受け止め、飛びのいて襲い掛かつてきたましろの槌を回避する。

と、そのタイミングを狙つてベナウイが槍を蒔風の背中に向かって放った。

が、それには蒔風が消していた獅子天麟らの鞘をだし、背後の攻撃を防いだ。

そこから転がったまましゃがんでの足払い、「天」を上向きに地面において、羽入とましろに向き直った。

蒔風の背後で光が立ち上つてベナウイが消える。

「ベナウイさん!!!!!!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

その光景を見て、全身の痛みなど吹き飛んだ裕理がらしくもない咆哮を上げて法力を練って尋常ではない神通力を発する。

彼の体の構築はすでに人間のものを超えている。

ましろと一緒に生きていくために、その身体の半分を太転依と同じものにした彼は、半神半人のようなものになっているのだ。

その彼が、その膨大な力を放出するがために頭に血管を浮かせ、白目を剥き、鼻血を流して全身から発せられる力を一点に収縮、その一点から一気に撃ち放った。

その攻撃を、蒔風が避けようとする。

しかし、それを蒔風の脇腹を紙一重で通過して行った瞬間。

その膨大なエネルギーを撒き散らし、大爆発を起こした。

「つつつ！？ガアアアああ！！！！！」

「や……つた……あく……」

「裕理さん！！！」

「大丈夫なのですか！？？」

「大……丈夫……それよりも蒔風は!？」

ましろに抱え上げられ、裕理が蒔風の方を見た。

ちょうどそのタイミングで、爆発で吹き飛んだ蒔風が頭を抱えながら草むらから出てくる。

血を流し、くらくらと揺れながらも、その揺れから戻ろうとしているようだ。

「今です!！」

「神域展開!！」

「グツ!?!……………」

……………

羽入が力を再度発揮し、数秒という短い間だが、時の流れが停止した。

この世界で動けるのは羽入だけ。

しかし、今の羽入には宝刀「鬼狩柳桜」がある。

その世界で、蒔風の首元狙ってその剣を振るう。

ザクツッ！！という音がして、蒔風の首に剣がめり込む。

しかし、その首にどれだけの力が込められているのだろうか。

刃がめり込んで、すぐに止まってしまった。

それを見て驚愕する羽入だが、それでも力を込めて振りきろうとする。

「くっ……このお……！！！！！！」

しかし、その刃は更に一ミリ進んで完全に止まった。これ以上の力を羽入が出せるわけもないし、そもそもこの神域結界が限界だ。

羽入が剣を引き、蒔風から離れてその結界が切れる。

瞬間、ブシュッ！という音を立てて蒔風の首から血が流れ出し、その痛みに首を押さえて歯軋りする。

「テメエ……」

「ハアツ!!」

ドッ・・・スン!!!!

と、時風の真横からましろの槌が襲いかかる。  
血をばたばたと流しながら、それを回避する時風。

現状、裕理はあの一撃での反動疲労で梨花のそばにいるようだが、  
この二人だけでもキツそうな表情をする。

と、更にそこに

ブンッ・・・ドゴッ!!!!!!

「ガッはあっ!?!」

「……目標の耐久力、53%に低下」

長門の拳による重い一撃が、脇腹にめり込んだ。

彼女のその動きはまるで達人のそれだ。

おそらくはその体に情報をインストールしての動きだろう。

そう言う場合、身体の経験が追いつかないものだが、彼女の場合はそれを容易に越えてきていた。

蒔風の身体が吹き飛び、大木に衝突してその木がメキメキと横に倒れた。

「退くぞ!!」

「キョンさん!!!!」

と、そこでキョンが裕理を肩に抱え、梨花をその後ろに隠すようにして出てきた。

「こつちにも負傷者が多いんだ。オレらがこれ以上がんばる必要はない!!!!」



キヨンの言う事は確かだ。  
だが、ここまで弱らせたのに追い打ちをかけなくともよいのかとい  
う思いもある。

「ダメだ・・・キヨン、ここで斃さないと・・・!!!!」

「なんでオレらがそこまでやらなきゃならんのだ。この状況でまた  
何人がやられてみる・・・プラマイゼロだろうが!!」

そうしていると、時風を見張るかのように立っていた長門がバック  
ステップでましろの横まで下がってきた。

その右手は何か液体がかかっており、シュウシュウと音を立てて融  
けていた。

「これは!?!」

「強酸性の液体」

そう痛みに顔を変えることもなく長門が淡々と言って手を修復する。

立ち上がった時風が手にしているのは、一本の小瓶だ。

おそらくは長門の手を溶かした液体はそこの中に入っていたのだろう。

そして、時風がさらに懐に手を突っ込みその小瓶を十本ほど取り出して、蓋を開けて宙に放った。

ガラス瓶がカランだったりカシャンだったり音を立てて地面に落ちるが、液体が落ちた音はしない。

見ると、時風の手の上にはその液体が圧水で集められてフヨフヨと浮いていた。

「マジ……かよ……」

「ッ……ハ!!!!」

そうして、時風がまるで指揮者かのように指を振るい、その液体が細い鞭のようになって襲いかかって行った。

「うオオっ!!!!」

「キヤあッ!!」

「.....」

各々がその鞭を回避して行く。

しかし、そんな物を回避しきるほどの体力などないし、そもそもキヨンは裕理を抱えてその背後には梨花がいるために動くことができない。

その足を鞭が通過して行つて、ジュワッ!!という音を立ててその皮を爛ただれさせる。

その鞭は液体ゆえに触れたところで通過して行くだけだ。  
だがそれは蒔風の動き次第。

当たった時に腕を引けば肉が爆ぜ、振りきれば通過して融かされるだけ。

キヨンの足がガクガクと揺れ、次第に肩、頬、脇腹と鞭が掠めていつてその傷が増えていく。

無論、ましろや羽入はもちろん、長門もそちらに向かおうとする。しかしその瞬間、どういふふうに踏みつけているのか、蒔風が地面を踏むとその行く先に畳返し壁が立ちふさがって邪魔をする。

その妨害に、ましろが蒔風に向かってその攻撃をやめさせようと走って行った。

その間にも蒔風はキヨンに攻撃をやめない。ましろが迫ってきているのがわかっていながらもそちらに一瞥することもなく圧水をコントロールしているのだ。

「もう・・・やめてください!!!」

そうして、ましろの槌が振るわれる。どうせ避けられる。だから、最初から顔面ではなく腹部を狙った。

にもかかわらず

「ぐッ・・・」

「え!?!」

その槌は命中した。  
蒔風の腹にメキメキとめり込んだ。

そして

「バはッ!!」

「!?!?キヤアッ!!!!」

蒔風が吐血する。ましろに向かって。

その血流がましろの顔面にバシヤッ!とかかって視界を封じ直後、ましろの心臓部を絶光尖が貫いて彼女をカードに変えた。

「ましろさん!!」

「ましろオ!!!!」

「オオ………」

そして、ガボンと

キヨンの頭部を圧水　肉を溶かすほどの強酸性の液体が包み込み、彼の身体が消えていった。

同時に、裕理の身体が地面に崩れ、キヨンを包んだ液体がそのまま口から滑りこんで弾けた。

その攻撃に、当然裕理も消える。

それらの事態に、羽入が梨花を連れて逃げようと彼女の方へと走り出していた。

長門もそれに続いて彼女を守るかのように蒔風に立ちふさがった。

長門が腕を硬質化させて蒔風に突き出すが、それを蒔風が右掌を出してそこに突きたてさせ、そのまま握り止める。

そうして長門の動きが止まり、蒔風の左熊手が顎を捉えてその身体を草むらの向こうに吹き飛ばした。

「梨花！！逃げるのです！！」

「は・・・」

「早く!!」

「羽入ッ!!!」

ガッ

「実に掴みやすい角だ。これなら苦もなく・・・」

「ツツツツ!!!!!!鬼狩おにがりの・・・!!!!」

ゴキーン!

背後の蒔風に羽入が剣を振るおうとするが、それよりも早く蒔風が両手で掴んでいた角を捻って首を折る。

目の前で羽入が消え、カタカタと震えながら梨花が座り込んでしま  
う。

ブツブツと何かをつぶやいているが、その梨花を蒔風が抱きかかえ、  
一気に腕を絞ってコキリ、という音がたつてその体が消滅した。

その後、時風が長門を吹き飛ばした草むらを見るが、すでに逃げたのかそこに彼女はおらず、遠くから何人かがやってくる気配がした。

それがここに来るまでに、時風はこの場から消えた。

五分後、セイバー達が到着したころには、多くの血の跡しか残って  
いなかった。



銀白VS御社&太転依（後書き）

いきなり始まり、いきなり終わるよ!!

ましる「うえ・・・血でべったりですよ・・・」

キヨン「顔面に酸とかあいつは鬼か・・・」

裕理「僕はながしこまれたけど?!」

羽入「この角がこの角がこの角が・・・」

梨花「また死んだまた死んだまた死んだ・・・」

はいはい皆さん御疲れですたー。

全員「ですたー」

マーク

羽入、梨花・・・クリスタルみたいなカケラのシルエット

キヨン・・・SOS団マーク

裕理・・・八衢の紋

ましろ・・・槌にあるマーク

さて、今回は本文に出た「熊手突き」について説明いたしましょう。

まあ言ってしまうえば「掌底」ですね。  
手の作り方は

- 1、手を指の隙間を開かずに開く。
- 2、指だけを曲げる。指だけグーにする感じ
- 3、手のひらの下の部分で殴る。

です。

今回は剣があまり使いきれないので能力と卑怯を使って勝ちました。  
このままだと次回は・・・

キョン「次回、そのまま追いかけて・・・？」

ましろ「セイバーさん達ですか？」

ではまた次回！！

リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

小野寺ユウスケ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ

直枝理樹

乾巧

衛宮士朗

セイバー

遠坂凜

ランサー

ギルガメツシュ

剣崎一真

左翔太郎

フェイト・T・ハラオウン

シグナム

ヴィータ

リンフォース？

## 銀白VS英霊？

溪流。

両側を崖に挟まれ、その最下層に川が流れている。

崖に挟まれているとは言っても沢があり、その広さは十分にひろい。

空は晴天。

きれいな光に、美しい川。沢から崖にかけては小規模ながらも木々が生い茂っている。

そのきれいな川の水に、赤い液体が流れてきた。

見ると、川の中に誰かが入っており、どうやらこの赤はその人物のものであるという言っことが分かった。

川から上がり、傷を拭く男は時風だ。

濡れた体を圧水で水分を飛ばし、一瞬で乾かす。

そして掛けてあつた服を取り、着替える。

「傷が多くなつたな・・・それに・・・」

そう言つて、懐から懐中時計を取り出す。

しかしそれは現在時刻を示すものではないのだろうか、動いている針は一本のみ。針の動きは目を凝らして初めてわかるくらいのもので、普通の時計にして45分のところを指し、何かの経過を示していた。

「もうそんなに経つたか・・・」

蒔風が時計をしまふ。

その顔は心なしか焦っているようにも見えた。

と

「見つけたぞ・・・蒔風!」

「……………おお」

蒔風がびっくりしたようなジェスチャーをして、セイバーたちに対しておどけて見せた。

「あそこから追いかけてきたのか？よく来たな。歓迎しようか？」

「そのようなものは結構だ」

そう言って、セイバーが剣を構える。

いつも通り目に見えないが、確かに存在している聖剣だ。

（七刀は理樹との追いかけてこつちに来れない……気配からして……土郎と凜もいるな。大方、セイバーに止められながらもランサーと来たってことろか……）

蒔風がおもむろに銃を取り出し、特に見もしないで右斜め後ろの木の上に向かって発砲した。

直後、銃弾が弾かれる甲高い音がして三発の銃弾が六つになって地面に落ちた。

「気付かれてるみてえだな……」

「ランサー！……やはり来てしまいましたか……」

蒔風の後ろで、ランサーが凜と士朗と共に茂みから出てきた。

そのランサー曰く「戦いたいならやらせりゃいい。抑え込んでも仕方ない」だそうだ。

だが、蒔風の表情は良くも悪くも変わらない。

「やんのか？やらないのか？どっちだ？」

「こちらが下がっても追ってくるくせに……」

「今は怪我してんだ。少し休みたいんだよな」



「だったら・・・なおのこと引けないな!！」

そうして、セイバーが剣を振るう。

が、蒔風はそれに対してまともに対応しようとしない。

スウエーで、しゃがんで、ボックスステップで

そんな簡単な動きでセイバーの剣を避けていく。

「この剣を見切るか・・・!!!！」

「典型的な西洋剣じゃねえか。ンなもん見切るもくそもねえよ・・・  
つと」

6296

ゲシッ、と

蒔風が剣を振るセイバーにケンカキックをかまして後退させる。

その攻撃はあまりにもあつさりに入れられ、セイバーの自信とプライドが揺れた。

彼女は最優のサーヴァントとしてカテゴリーズされている。

そんな彼女が、超一級とはいえ暗殺者<sup>アサシン</sup>である彼にこんなにも遅れを取る。

あり得ない。が、それがまた蒔風のありかた。

「オレは真っ向からより背中からブスリが一番得意なんだよ。お前と最初にあった時の模擬戦でもそうだったろ？」

「だったらよお・・・俺なんかの相手はどうだい！！！！」

ポポツ！！と、空気を貫く音がしてランサーの槍が蒔風に放たれる。その槍はランサーを飛び越えて回避した蒔風の上着を引っ掛け、それを穴だらけにしてしまう。

ランサーの背後にまわり、「天」で突き刺そうとする蒔風だが、それはいとも簡単に止められる。

「チツ」

「どうした？もっとまじめにやれよッ！！！！」

死の呪いを持つ槍を、ランサーが振るって蒔風が避ける。

と、そこに叩きこまれる凜の宝石魔術。

その目的は時風の気を逸らすことだが、狙いはすべて急所を的確にとらえている。

「今よランサーー!!」

「オレアもうちっと楽しみたかったんだがな……」

「そんなこと言っていないでさっさとする!!」

「わあったよ……っと!!」

背後から迫る宝石魔術に対し、背中に生やした翼で振り返ることもなく防御するが、目の前のランサーの動作に双眸がきつくなる。

槍の先端に魔力が回り、赤くうつすらと光って宝具が発動される。

「ゲイ・ホルケ刺し穿つ死翔の槍!」

ドスツ!!という音がして、鮮血が散る。

この宝具は決して派手なものではない。

ほかの英霊が持つ超絶的な武器に比べて、いってしまえば地味な方

だ。

だがしかし、その威力はどの宝具よりも遙かに高い。放たれさえしてしまえば、必ず相手の心臓を打ち砕くのだから……!!

そして

「放たれさえ……すればな」

その槍は時風の心臓を貫いていなかった。

貫いているのは、時風の手の平。しかもそれは槍の突出によるものではなく、時風が自ら手を出し、貫かせて握ったものだ。

つまり……

「放たれなければただの槍」

「デメエ……」

「放たぬ宝具は、ただの棒だ」

《ワールド!!!》

時風が貫かれた左手をそのままに、右手でメモリを起動、握りしめて腕に赤い布が現れる。

「ノリ・メ・タンゲレ  
我に触れぬ」

直後、その布がランサーの体に巻きついて行き、更には離れた場所にいる士郎にまでそれが伸びていく。  
そちらの方は咄嗟に掛けたセイバーによって切り裂かれたが、至近距離に居るランサーは逃げようもなく束縛される。

しかしそれでも宝具を放そうとしないのはさすがだ。

が、それ以上は何もできない。

この布は「マグダラの聖骸布」  
男性に対して絶対的な束縛力を持つ、カレン・オルテンシアの所有する魔術礼装だ。

「お前は最初の時にこれで仕留めるつもりだったんだよ。お前の宝具は厄介すぎる」

「うっ……うっ……」

ランサーがミイラのように聖骸布にくるまれながらも、蒔風に悪態をつく。

しかし、それが蒔風に聞こえるわけもなく。

「わかんねえよ。バーカ」

ドンッ！！！

地面に倒れ、無抵抗と化したランサーに、蒔風が頭、喉、胸、の三点に剣を突き立てた上に引き裂いた。

「心臓貫いた程度じゃあ英霊は死なない。だからしっかりやらせてもらったぞ？」

「ランサー！！！！」

ランサーが消え、セイバーが叫ぶ。  
だが、この男がそれを手に入れた今、そんなことを気にすることなどなく……

《ワールド!!!》

もう一度メモリを使用、その手には先ほど消えた英霊の、赤き槍の  
宝具が握られ……

「ゲ〜イボ〜ルグ」

ドスッ!!!

なんともおどけた、リズムにでも乗るかのような動きで、滅茶苦茶な方向に一突き突いた。  
するとセイバーが目に見えぬほどの動きで緊急回避し、その肩口に穴が開く。

「貴様……」

「さすがによけるかー。でもまだまだ……」

そうやって、蒔風が再び放とうと槍を構える。

構えると言っても、適当な方向に突き出すだけでも心臓に向かって突き刺さるのだ。彼はいちいちそんな大仰な構えはしない。

「凜！！土朗！！私に魔力を回してください！！！」

「セイバー……何を!？」

「ハアアアアあああああああああ！！！！！」

セイバーに向かって、凜と土朗の魔力が流れ込んでいく。

蒔風がそれを面白そうに眺めながら、槍を首の後ろに回して両肩に担いだ。

直後、白い羽根が散って、セイバーの姿があらわになった。



その姿は先ほどの甲冑が青だとしたら、今は白と呼ぶべき姿だ。

まるで花。ドレスのような外見に、その装甲は幾分か少なくなった。

姫騎士・セイバーリリィ

速度にすべてを置いた、彼女の別形態が二人の魔力を吸い取って今ここに現れた。

「ほう………」

それに、時風が感心したように言葉を漏らす。

その姿は、ただ美しいものだ。とても戦闘のできるような、否、戦闘など出せば崩れてしまいそうなほど美しいものだった。

しかし

「行きます………」

セイバーのその掛け声と

「覚悟ッ！！！」

速度によってその考えは改めさせられる。

まるで視認できない。

蒔風は一瞬自分に迫ってくるセイバーを見たが、次の瞬間には脇腹が切られていた。  
そこを押さえ、血を止めようとする蒔風だが、セイバーの攻撃は止まらない。

肩を、足を、少しずつ切られていく。  
蒔風はそれに対し、何とか身をよじって避けている。だからこここの程度。本来なら既に足の一本でも切り落とされて当然だ。

（クロックアップに慣れてっからいいけど・・・これはいささかき

ついぞ……！)

蒔風の感想はこんなものだ。

そう、彼女の速さに、蒔風は追い詰められつつある。

それを見る士朗と凜にしてみれば、ただ白い亡霊が蒔風を通過して切り刻んでいるようにしか見えない。

が、その現象は蒔風にも発生した。

加速開翼。

超高速移動についていくため、蒔風が獲得した活性化法だ。  
その速度はクロックアップや風足に匹敵し、彼らの動きについて行くことができる。

だが、それでもセイバーはなお速い。下手をすれば全力を出したフ  
ェイトよりも早いのではないだろうか？

しかし、勝負は一瞬で終わる。

「ゲイボルグ」ストライク・エア風王鉄槌！！！！」

ドバツ！！と

風の奔流に殴られ、同時に吹き飛ばされた蒔風が沢の砂利の上をジャラジャラと転がり、すられ、身体の半分が水に沈む。

その蒔風に向かって、セイバーが超高速をやめて蒔風の元に走る。もう彼は動けまい。このままでも十分に勝てる。早くしないと二人の魔力も危ないのだ。

しかし、瞬間その槍が光って蒔風の手から飛び出した。

「ッッ！！！！まず……」

そうしてその場から動いて回避しようとするセイバー。

彼女はこの攻撃を、本家本元のランサーからくらったときにそのスピードと幸運ランクでなんとか避けた（肩には当たったが）経験がある。

故に、今のこのスピードならば避けられると思ったのだ。

しかし、彼女には読めなかった。否、読ことなどできないと言っべきだろう。

6308

なぜならば彼女は「王」だ。しかも、その中でもことさら誇り高き「騎士王」である。

そんな彼女が、卑怯な手、外道な行いをする時風の思考など読めるはずもなく……

ドゥンッ！！

その槍は手首のスナップ程度に「放たれ」、凜の心臓に突き刺さって彼女を消した。

「凜!!」

「リン!!!!!!……クツ……魔力が……!!?」

カランと、赤い呪槍が地面に落ちる頃には、魔力の供給のなくなったセイバーはいつもの姿に戻っていた。

「圧水」

そして直後、蒔風のつぶやきと共に川の水がセイバーを包み込んで水球に閉じ込める。

彼女は水の上を歩ける。これは湖の精霊の加護によるものだが、それゆえに彼女は泳ぐという事を知らない。

最近はず朗とプールに行つて練習していたらしいが、今の甲冑姿で泳ぐほど出来るわけではない。

その水の中で、セイバーがジタバタと暴れるが、圧水からは逃げられない。

そしてその中から見える光景に絶句した。

士郎が、投影した「干将莫邪」を振るって蒔風に向かって行ったのだ。

士郎は半人前だ。

しかし、彼の持つ固有結界「無限の剣製」は絶大な威力を誇るものだし、それを全開させれば蒔風を止めることはできる。

しかし、先ほども言ったように彼は半人前だ。

何らかのバックアップもなしに固有結界は展開できないし、そもそもリイへの形態変化のために、魔力をかなり使っている。

果敢に蒔風に攻め込み、攻撃をかわしていく士郎だがあえなく蒔風の刃に倒れる。

それを見て、セイバーの脳内で血管が切れた気がした。

蒔風は士郎の始末を終え、セイバーを包む圧水を絞って彼女を潰す

か、と振り向いて腕を出す。  
直後、その水が弾けて爆散した。

周囲を雨のように水が覆い、一瞬で地面に落ちる。

そこに立っていたのは漆黒の甲冑に身を包んだ暴君がいた。

「貴様・・・死んだぞ」

「それはおかしいねえ。まだ生きてるわけだが？オルタさん？」

セイバーオルタ。

彼女が反転し、その属性が「秩序・善」から「秩序・悪」へと変わり果てた暴君だ。

その力は　　力だけは通常はもちろんリイも凌ぐ。







しかし、その体を流れるエネルギーを変換し、体の健康を保っていた。

「本気で化け物じゃの……」

現在逃走中の玄武が呟きながら、この男からあと二十分は逃げなければならぬと考えるとうんざりしていた。

無論、これは両者ともにメリットがある。

理樹からすれば時風に近づけるし、彼の戦力を削れる。

青龍たちからすれば理樹を時風の向わせずに済む。

いったいが逃げ続けることは不可能だが、こうして交代ならば青龍らにも逃げるだけなら可能だ。

しかし、ここで獅子が何かを感じ取って叫んだ。

「まずいぞ……クラウドが接近している……」

「翼人二人かよ……」

「……玄武、聞こえましたか？」

『ああ、ああ！わかっておる！！厄介極まりないのう！！』

「今から合流しましょう。そして、再びシャッフルを」

「とはいってもクラウド殿は理樹殿と違って召喚獣を使いなさる・・・これはまずいのでは？」

「……我々とはかく逃げるのみ。召喚獣が来たら撃墜しよう」

そうして、玄武が見えてきて同時、漆黒の翼を視界にとらえた。

「逃げるぞ！！」

七つの光が交差し、バラバラに逃げる。

案の定クラウドが召喚獣を放ってきたが、それでも逃げるばかりだ。

それでいい。

否、むしろそうするしかないだろう。



そのきれいな川の水に、赤い液体が流れてきた。

蒔風が身体の血を流したのだ。  
そうして再びさっぱりしてから、その場を去った。

そこに残ったのは、戦闘の跡のみ。  
川を流れる赤い液体は、もう薄まって見えなくなってしまっていた。

t o b e c o n t i n u e d

銀白VS英霊？（後書き）

そろそろ終わっちゃいそうぞ「あれ？」な武闘鬼人です。  
第二章、五十話も行かないで終わっちゃいそうぞぞ？

凜「人間に宝具なんて・・・敵うわけないじゃない!!」

ランサー「あの野郎オレの宝具好き勝手に・・・」

セイバー「さすがにもう無理・・・」

士郎「料理あるからみんなで食おうか」

御疲れですたー

第一章が長かったせいで終わりが速いと感じる。

なお、セイバーリリーの設定は作中にあるようにしました。  
リリー可愛いんだもん。出したかった!!

なぜかマスター陣が全く活躍しない。  
とくに士朗。どうしてこうなった……

そして追いかけてこ翼人。  
化物か!?

セ「次回、私が倒れ、そしてあの男が……」

ラ「あの野郎今まで何にもしてこなかったくせによ……」

ではまた次回

リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

小野寺ユウスケ

海東大樹



野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
乾巧  
ギルガメッシュ  
剣崎一真  
左翔太郎  
フェイト・T・ハラオウン  
シグナム  
ヴィータ  
リインフォース？



「逃げ切れんのかねえ？」

「天馬、おぬし他人事のように……」

「いやだってよ、俺らはいいつ相手にして倒せたからよかったけどほかのやつらはどーだかなんだぜ？」

「まあ確かに……今は理樹殿が朱雀を、クラウド殿が獅子を追いかけているんじゃないか？」

「おう」

そう言っつて、天馬と玄武の目の前からタイタンとイフリートが消える。

現在七獣たちは、クラウドと理樹、さらにはクラウドの召喚獣から逃げていた。

当初それぞれ一人ずつ担当して逃げていたが、召喚獣が相手ならば勝機がある。

そこで近くにいた玄武と天馬が合流してこの二体を倒したのだ。

その身体が光となって、ヒビの入ったマテリアの球体へと変わり、どこか　おそらくはクラウドの元　へと飛んで行った。

「ほかの加勢に行こうか?」

「だなー。オレア青龍さんどこ行きますわ」

「では僕は麒麟のところへ行こうか」

「白虎のガキはいいのか?」

「追いかけることに慣れとるアイツなら大丈夫じゃろう」

「同感。じゃ、あとでな」

「うむ。健闘を」

そうして、二体が別々に飛んでいく。

主に害を及ぼさないように、その敵を砕くために。

.....

.....

「見つけた……」

崖の上で、時風がバイクにまたがって眩く。

崖の上から荒野を、時風が見下ろしていた。

そこを走る時の列車。

間違いなくデンライナーだ。

このまま電車ごと吹き飛ばしてもいいが、それではいけない犠牲が出る。

オーナーやナオミ、ハナをやる必要はないのだ。

それは最後の手段だな。

そう考えながら、時風が崖をバイクで駆け下りていく。砂埃がうっとうしいが、それはまあ気にするほどでもない。

そうして、デンライナーの後方につける蒔風。そこから前へと追いついて線路を攻撃、脱線させてあぶりだす作戦だ。

まだデンライナーの後ろである蒔風が、バイクを加速させようとアクセルを捻る。

が、その瞬間。

無数の剣がデンライナーの上から蒔風に降り注ぎ、蒔風がバイクのアクセルを弱めて後退させた。

デンライナーとの距離が空き、その開いた地面に向かっていきなり宙に現れた剣がつぎつぎと射出されては刺さっていく。

その数に蒔風が思わずバイクを止め、デンライナーを見送る。が、その列車はUターンし、蒔風の前に停車してきた。

「王自ら潰しに来てやったぞ。雑種」

「……ギルガメツシュ……か」

眩く蒔風に、別段驚いた様子はない。

彼は最古の英雄王。その所持する宝具の中に、蒔風の所在を掴むものがあってもおかしくはない。

それに、蒔風はなぜここにきて彼が来たのかも理解していた。おそらくは彼は無視していたのだ。

これまでのことなど、自分には関係ない。下々が勝手にやっつけていればよい、と。

だが、そんな彼が出てきた。その理由……

「……セイバーか？」

「わかっているではないか。あの女は我<sup>オレ</sup>の物だ。愚かな雑種どもが勝手に争い消えるのは構わん。だが……」

「自分の所有物に手を出すなっか。まあそもそも、おまえはこの世界そのものが自分のものだと思ってる誇大妄想野郎だからなあ」

「その口のきき方、王に対するものではないな」

「すまんね。俺が長く相手した「王」はろくな奴じゃなかったもんで」

と、そこで良太郎がデンライナーから降りてきた。  
例によって、イマジンに憑依されてだ。

車両の中では残されたイマジンが見守っている。

一人欠けている今、クライマックスフォームはできない。  
いったい誰がついているのか。

見ると良太郎の髪は白いメッシュが入り、目は白くなっている。

ジークだ。

「何をしに来た雑種。ここは我<sup>オレ</sup>の戦場。貴様<sup>キさま</sup>ごときが出てくるのは  
おこがましいぞ」

「まあ何、気にするな。私は何もせぬ。世界の方から動くのだから  
な」

その二人に、時風がやれやれと頭を振る。



この高慢ちき二人を、いったいどうしてくれようかと。

(ま・・・とりあえず保険を掛けとくかね)

《ワールド!!!》

時風がメモリを握りしめて挿入する。

特に何を構えるわけではないが、何らかの力が付随されたのだろう。

「でさ・・・やんならやるでこいよ。時間かけたくないんだ。お前から対する勝算はすでについている」

「なに？雑種が息がってしまったようだな。我オレに対する勝算だと？  
ふん、大方我オレが油断でもすると思っオレているのだから・・・」

ゴオツ・・・

「そんなことはないと思えよ?」

ギルガメッシュが黄金の鎧を構え、背後に剣をいくつも浮遊させる。

ゲイトオブバビロン  
王の財宝

彼の所有物であるあらゆる武器を貯蔵する異次元の扉だ。  
それを撃ち放つことで彼はかつて「アーチャー」のサーヴァントとして存在していた。

《WING form》

そして隣に立つは電王ウイングフォーム。

自らを「王」だという相手に、時風が鼻で大きく笑って見せた。

「かかってこいよ王様ども。王への反旗は慣れている」

そうして、始まる。

バビロンからの法具射出。

それに対して蒔風が足による畳返しで地面を撥ね上げながら走って回避する。

しかし、その武器の中いくつか追尾機能のようなものでもついているのか、二、三本が蒔風の後を追って突っ込んできた。

それに対して風林火山で受け流し、地面に刺さったところでへし折った。

だが、そうして足を止めている間にも打ち出された剣はまたバに論へと戻り、再び射出されていく。

永久機関だ。

この射出は終わることを知らない。

だが、蒔風は避けてばかりで一向に反撃にはうつらなかつた。

ギルガメッシュは射出こそすれど、その射撃の精度は低い。相手のいる一面を、適当に剣を掃射して力任せに薙ぎ払うのが彼の戦法だ。

圧倒的な暴力。  
一方的な蹂躪。

それが彼の王たる証であり、あり方だつた。

「ふむ・・・私の出番がないではないか」

「だから言つたであらう。あのような男、我一人<sup>オレ</sup>で充分だとな」

蒔風を視界にとらえながら、隣でぼやくジークにギルガメッシュが言う。

確かに、このままならばいずれはこの男は倒れる。

だが・・・

（我が友であったこの男がこれで終わる・・・そんなわけ、あるわけないだろうな？）

ジークにはそうは思えなかった。

いやむしろ、そう思わせることがこの男の狙いであるとしか思えないのだ。

「はっはっはっは！！どうした？その程度か！！！」

しかしギルガメッシュは一方的に相手を攻撃している事で興奮し、その事に気付いている様子はない。

慢心、傲慢、油断

それこそが彼の自信と力の源であり、同時に大きな弱点でもある。

「ッウ……グアっ!？」

と、そこでついに時風が地面を転がった。  
回避しきれなかった剣を、畳返して壁にしたもののその勢いに吹き飛ばされたのだ。

そこに降り注ぐいくつももの剣。  
地面を独楽のように回りながらもそれを弾き回避して行く時風だが、  
いかんせん数が多すぎる。

五体が刻まれ、血が噴き出す。  
そうして右の腿と肩に剣が突き刺さり、更には左手の甲を剣が貫いて地面に縫いつけた。

「ぐうウウウウウウウウウウウウ……!!!!!!!!??？」

「ふん。最初からそうして、雑種らしく地べたを這っていればよかったのだ」

そう言つて、ギルガメッシュが後方から彼の「担う」一本の剣を引き抜いた。

乖離剣「エア」

その名はただ単に彼がそう付けて呼んでいるだけの、無銘の剣。しかし、この剣の回転は時空を裂き、その威力はかのエクスカリバーを相殺してなお相手を粉碎しうるというもの。

この局面で彼がそれを出してきたという事は……

「終わらせようか。この期に及んで出し惜しみはせぬ。我が全力で殺してやるぞ、雑種」

ギイイイイイイ……と、乖離剣が回転を始めてその腕が振り

あげられる。  
すでに魔力は充填され、あとは振り下ろすだけで蒔風はこの場から消え去るだろう。

「……………は、ははは!!…あはははははは!!…!!」

「む?」

「ちゃんちゃら可笑しいぜギルガメツシュ……雑種?ははは……傑作だこりゃ!」

しかし、左手を地面に刺し止められ、右の肩と腿に剣を突き刺しっぱなしにしながらも、蒔風はおかしそうに笑っていた。

その目に死の恐怖はない。ただ「痛いなあ」という感情しかないのだ。

蒔風のその姿を見て、ギルガメツシュは今まで感じたことのないモノを感じた。



それは恐怖か？

自らの「知り得ぬ存在」のこの人物が怖いのか？

そんなことはない。

理解の及ばない相手とは今までだって遭遇してきたし、彼はすべてのを粉碎してきた。

それは畏怖か？

死を超えてしまったこの男に、そんな感情を覚えたのか？

そんなことはない。

自分は王だ。自分が一番だと言うのに、そんな感情は芽生えない。

それは拒絶か？

すべてを理解し、そして何者にも属さないこの男を拒んだのか？

そんなことはない。

拒むようなものは殲滅してきた。許すべきは自らが望んだ者だけだ。

だったらこの感覚はなんなのか。

まるで何も無いようなのにどうしてもそこに何かが見えてしまう錯覚。

「いる」のに「いない」この男。生きていながら、死んでいる。

ここまで人間味にあふれ、それでいて人でない彼に、なんとも言えない薄気味悪さを感じていた。

それは形容しがたいもの。

まるで雨上がりに水たまりを見て、そこにどこからか流れてきた油が混ざってオーロラのように見えるかのように。

まるで何色ものスライムを混ぜ、その色が完全に混ざらず、各色が見えているかのように。

そしてそれを見ながら乗り物に酔い、今にも胃液が喉をこみ上げて来そうになりながらも脳味噌をガンガン振られ続けている感じた。

気色悪い

王として、総てを許容するだけの器を自負するギルガメツシュが、自分は生涯、この男を理解することはないだろうと確信した瞬間だった。

「雑種雑種つてよオ・・・つまりは何かと何かの掛け合わせだろ？それ」

「だからどうした・・・」

「嫌なに、お前の事を思い出してな・・・そんなに自分が嫌かい？完全でない自分が？」

「なにを・・・言っているのだ・・・」

「そんなに嫌なら死んどけ王様。そういうお前も半神半人おしひただろう？」

「貴様・・・我を愚弄オレするかア！！！！天地乖離あす（エヌマ）ア・・・」

ギルガメッシュが激昂し、その剣の名を叫んで振り下ろす。  
その瞬間、蒔風が左手から剣を抜き、地面から解き放たれるがもう  
遅い。

「開闢エリシユの星!!!」

ギルガメッシュの右手に握られたそれが、怒りと力のままに蒔風の  
頭上へと振り下ろされた。

瞬間

「アヴァロン全て遠き理想郷……」

バチイ！！！！！！

ギルガメツシュのエヌマ・エリシュが蒔風と、その後方だけ避け  
るかのように割れ、その威力を完全に無効化された。  
残ったのは、蒔風が四つん這いになって居る場所の両脇を走る深い  
溝だけ。

その四つん這いになっている頭の前には、神々しい光りを放つ、エ  
クスカリバーの鞘が浮いていた。

「貴様……それは……！！！！！！」

「所有者を別次元におく事であらゆる攻撃の干渉を防ぐ宝具「ヴァロソ全ア  
遠き理想郷」……一度発生した貴様のそれを防ぐにはこれしか  
ないからな……」

「おのれ……………!!!!!!」

ギルガメッシュが更に激昂する。

そうして、再び剣を振るう。

無論、魔力などまだ切れないし、この男はもはやこの一撃で吹き飛ばすと決めたのだ。

しかし

ゴン、という音と共に、力なく握られた時風の左拳が振りあげられたそれに触れていた。

それと共に充填された魔力が消えうせ、エヌマ・エリッシュが強制解除される。

目の前の現象に信じられないのか、再び下がってそれを振るうギルだが、時風が左足だけの跳躍で接近、再び同じように拳をつける。



叩きつけられたギルガメッシュは地面に練り込み、その口から血を吐きだして動きが止まる。

「受肉している、って言うのがお前の弱点でもある。いくら英霊とは言え、受肉している以上瞬時に回復とはいくまい!!--!」

「……………」

《ワールド!!--!》

時風がメモリを抜き、もう一度起動、挿入する。  
すると身体から黒いカーテンのようなモノが帯状に出てきて、彼を食らおうとそれを触手のように伸ばす。

「間桐桜謹製の「影」……融けて吸われて消滅しろ」

「……………お……………のれ……………」



蒔風の足元から、まるで沼のように広がる黒い影。ありとあらゆる生物を溶解し、吸収する魔術。

間桐桜が「反転」した時に発生させた闇。

それを以って、蒔風が激しかったこの男を、静まりの中に消して見せた。

無論、この間に電王が何もしていなかったわけではない。しかし、デンライナーからの砲撃ではギルガメッシュが吹き飛んでしまうかもしれないし、接近しようにもエヌマ・エリッシュにアヴァロン、更にはこの「影」だ。まったく手が出せない。

「ギルガメッシュ・・・確かにお前は強い。オレの身体も結構やられた。だがな、最初からそこそこ前回のオレとやり合おうと考える時点でお前は傲慢だったんだよ」

彼のカードを手に、時風が呟く。  
そうして電王を見、彼の方へと影を伸ばした。

それに対し、咄嗟に下がって回避する電王。  
が、あまりの範囲にもはや攻撃は意味を為さない。

見るとデンライナーの車輪が影に巻き込まれ動けない。

このまま逃げられる、もしくはやられてしまうのか。

そう思い、せめて一撃と武器を構えてジークがフルチャージしよう  
としたその瞬間。

灰色のオーロラがデンライナーを覆ってどこかへと消えていった。

「……………なに？」

「舜……見つけたぞ。お前は俺たち二人で斃す！！」

「なかなか厄介だね。でも、なんとか連れてこれたよ」

そうして、電王の横にも同じオーロラが現れて、そこからユウスケと海東が出てきた。

「お前ら二人で？オレを？啞わせんなよ」

蒔風がイラついた声を出す。

あの列車には標的の対象がまだ何人も乗っているのだ。

それをこのチャンスで逃され、かなりイラついてきているようだ。

が、そんな蒔風を無視し、海東が電王の方を掴んでオーロラに消える。

その光景に、蒔風が首をかしげた。

なぜ逃げる？

いや、それが正しいのだろうか、それならなぜユウスケを……

そこまで言つて、蒔風の顔からすこしだけ 血が引いた。

海東が消えたオーロラは、まだなくなつてない。

「まさか……」

「いっただろ……俺たちで斃すと」

そうして、オーロラから人物が出てくる。

この世界に統合されることの無かった世界の主人公が。

「行きますよ、五代さん」

「はい、小野寺さん……どうやら、本当みたいだしね」

ユウスケの横に立つのは、五代雄介。

今、目の前の邪悪を撃ち払わんと、古代の戦士が二人立つ。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

銀白VS英雄王（後書き）

電王は正直道案内で終わったよ!!!

ギル「あの男が来たところにわざわざ張っておったというのに・・・  
・! ! ! !」

はいはいお疲れでした。

ギ「おい!!一章みたいなかッコイイ見せ場は・・・」

ないッ!!

マーク

前回忘れた皆含めて、全員令呪のマーク

時風が保だといってメモリで起動させたのはセイバーでした!!あれ?でも確かあれって士朗の投影だったから・・・士朗か?どっちでもいける気がするけど!!

電王は・・・なかなかやられてくれないなあ・・・

ギル（小）「次回、究極の間を撃ち払わんと、究極の二人が立ち上がる、です」

え？ギル？

ギル（小）「大人の僕は拗ねちゃいましたよ」

そうかい。

ではまた次回！！

リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

小野寺ユウスケ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ

直枝理樹

乾巧

剣崎一真

左翔太郎

フェイト・T・ハラオウン

シグナム

ヴィータ

リンフォース？



## 銀白VS空我

なぜだなぜだなぜだ。

何故 貴方が 此処に いる。

あなたは免れた。

この世界に巻き込まれなかった。

こんな悲劇に付き合う必要なんてなかった。

自分の世界で、やっと手に入れた平和な世界で、好きなところを巡る旅ができたというのに。

あなたには自分のできないことができ、そして世界を回ってもらいたかったのに。

なぜだ、なぜ……なぜだ!!

「なぜ……来てしまったんだ……五代さん……!!」

蒔風が悔しさと悲壮感を織り交ぜた、何とも言えない表情を作って五代を睨みつかせる。

蒔風には解っている。

なぜ彼がここまでやってきて、目の前に立っているのか。

それを知っているからこそ、それを否定したかった。だから問いた。なぜ来たんだと。

出来ればここにいるということすら否定したかった。

彼はこの世界に関して全くの無関係だというのに。  
解っているのに否定したい。それを蒔風はこれほど思ったことはなかった。

「なんで・・・来たんですか・・・五代さん!!!!!!」

「蒔風さんが罪もない人を襲い、次々と消していると聞いたからです」

「それでも・・・無関係のあなたは来る必要はなかった!!」

「それは、できない」

そうして、五代が腰に手を当て、アークルを出現させる。  
その隣で、それにならって両腕を開いてアークルを出すユウスケ。

「俺は嫌なんです。誰かの笑顔が、一方的な暴力で失われるのが！」

「みんなの笑顔を守る……そのために俺たちは来た！」

「あなたに見せる、最後の变身」

「見せてやる……守る者の強さを！！！」

カチツ、と

ポーズをとってアークル横のスイッチを入れて蒔風へと走ってくる二人。

蒔風は左から来たユウスケのフックを腕でガードし、五代の前蹴りを右腕で止めた。

「うぐっ……」

蒔風が右肩の痛みにうめくが、二人はさらに攻撃を繰り出していく。するとどうだろうか。

攻撃したその四肢から次々と黒い装甲が纏われて変貌していき、最後に顔をマスクが覆ってその目が赤く光る。

「ハアっ！！！！」

ドムッ！！！！

そうして、変身を終えた二人はそれぞれ右と左のストレートを放つて時風を後退させる。  
そこに立つのは、仮面ライダークウガ。その究極の姿だった。

「アルティメット……クウガ……！！！！！！」

全ライダーをして。

その最高スペックを誇る仮面ライダー。

空我

その泉枯れ果てようとも、胸に残ったその思い。

伝説を乗り越え塗り替えて、漆黒の正義を携えて

すべてをゼロにほどの還す力を持つ者。

一人で充分だった英雄が、今ここに二人立つ。

(こっちは右肩、右腿、左掌を負傷して、さらに剣だって全部ある状態じゃない・・・こんな状況でどうしろって・・・!!!!!!?)

ドオツ!!!!!!

と、時風が思考を走らせているとその体が突如として炎に包まれる。その熱に時風が転がるが、そうしていると時風の手のひらに炎が集まってそれがボシユ、と掻き消えて行った。

「やっぱり効きませんね」





どこかの廃工場。

そこでバハムート零式、リヴァイアサン、フェニックスが消え去って、五人が集まっていた。

彼らは合流し、なんとかしてクラウドの召喚獣を撃破していた。

だが、驚異の大元が消えたわけではない。

いまだ理樹とクラウドは彼らを追っているし、そうある以上は彼らは蒔風の元に戻れない。

「そろそろ獅子と朱雀と入れ替わらぬとな」

「次の合流ポイントは……」

「みんないるか？どうにもおかしなことになった……！」

「……どうしました？」

と、そこで獅子が合流してきた。

今彼はクラウドに追われていたはずなのだが……

「クラウド殿が消えた！！追って来ていない！！」

「なに？」

クラウドがいなくなった。

それは彼らにしてみれば負担の少なくなったと喜ぶべきことなのか  
もしれない。

だが、追われることに何かと慣れてしまった白虎が、嫌な考えに達した。

「ねえ・・・もしかして」

『誰か・・・誰か救援に来て下さい!!!これは・・・このままで  
は・・・!!!ああああああああああああああああああ  
!..!』

ドオン!!!!!!

そこで全員の頭に響く助けを求める朱雀の声、爆発音。

そして空を見上げると、炎が膨れて爆発が起こっていた。

「なにが・・・!!」

麒麟が目を凝らし、その爆発の中心を見る。

すると、その中から炎に包まれた人からの朱雀が力なく落ちていき、工場を走るパイプを何本もへし折って地面に落下した。

「朱雀！！！！」

「まさか……！！！！」

彼らが朱雀の落ちた地点に走る。

6363

そこは一つのクレーターのなっていて、そこから人間の手が力なく伸びていた。

そしてその体が光り、一本の剣になって沈黙した。

「な……」

「お前たちがいると厄介だから……確実に潰していくことにする」

「そして・・・舜の力を削ぐ」

朱雀の落ちた際に焼かれたのか、チリチリと熱を発する地面から剣となつてしまつた彼を引き抜いた彼らの後ろに、クラウドと理樹が降り立つ。

彼らは、全てを追う事をやめたのだ。

どれを追つても蒔風の元に戻ることはない。だったら全てを倒してしまつた方がいい。

蒔風の十五天帝の数がそれだけで半分近く減るのだから。

「これは・・・かなりまずいと・・・考えてよいのでしょうか・・・」

「つたりまえですよ・・・」

「覚悟しろ。ここでお前たちは終わらせる」

「怯むな!!!天剣の意地、見せてやれ!!!」



た。

蒔風が転がりながらも立ち上がり、もう一方にハイキックを入れる。しかし、その首が少し勢いに押されて曲がるだけで、全く効かない。足を掴まれ、投げ飛ばされる。

「ガッ……は……勘弁してくれよ……ここまで規格外だとおにーさん泣いちゃうって……」

地面にうつぶせになりながら、上体を起こして二体のクウガを睨みつける蒔風。

そこから一気に撥ね起きて、両拳でのラッシュを浴びせかける。それに対応して腕でガードする二人に、そこからの反撃を受け流していく蒔風。

と、蒔風のケンカキックにさすがに押しのけられたクウガが少し後退した。

が、攻撃したのなら無論隙ができる。

そこに攻撃してきたもう一体のクウガの拳を頭を倒して、首すれすれで回避し、その腕をつかみんで背中を向ける。

そこから背負い投げでもしようとしたのか、蒔風が腰を入れて腕を引く。

しかし、その体がガクツ、と止まり、逆にその腕を掴まれて蒔風の身体がブン回されて地面に向かって投げとばされた。

ブチッ・・・という音が聞こえた。

そして地面を抉りながら蒔風が地面に命中する。

背中を打ち、その衝撃に目をこれ以上ないほどに見開きながら二、三回撥ねて地面を滑り転がる。



一方、蒔風が蹴り押しした方　五代だ　のクウガが、ユウスケで  
あるクウガを見た。

その手に握られているのは、蒔風の左腕。

ぶらりとそこにある腕の持ち主は、今この少し先で転がっている。

「小野寺君」

「このまま、叩き潰しましょう。絶対に許しておけませんから」

五代がユウスケに声をかけるが、ユウスケにはそってなく反応して  
からなおも蒔風に歩み進む。

その赤い目の輪郭は、徐々に黒い闇に侵食され始めていた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

銀白VS空我（後書き）

クウガ強すぎる・・・  
どうやって倒すのか。

朱雀「そしてまさかの私の敗退」

一度真人にのされて、そこから何とかして復活したら今度は翼人に  
これはもう復活できないよね？

朱「ですねー。まあ、剣の状態なら大丈夫ですけど。槍の状態には  
なれませんが」

あっちもこっちも死闘状態。

蒔風の左腕もまゝた飛びましたし。

朱「とりあえず「アレ」を使えば腕は大丈夫でしょうけどね」

でも勝てるかどうか・・・

まあ勝たせないといけないんですが……

卑怯に行くぜツ!!

朱「次回、VSクウガ×2パート?。そして……」

ではまた次回

リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

小野寺ユウスケ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ

直枝理樹

乾巧

剣崎一真

左翔太郎

フェイト・T・ハラオウン

シグナム

ヴィータ

リンフォース？

## 銀白VS空我？

「う……ぐうううううう……！！！！！！」

蒔風が腕が千切れた跡を抑え、痛みにつめいて蹲る。

その耳にはズシャリズシャリと自分に向かって歩いてくる二つの足音。

《ワールド！！！！》

蒔風がメモリを取りだし、幸運なことにまだ残っていた右掌にそれを突き刺した。

すると、千切れた左腕がズシュリと再生して蛇のように生えてきたではないか。

しかし腕が戻ったとはいってもその息は荒いし、その腕はまだ力なく震えてる。

（芦原さん倒しといてよかった……なんて思えるとはな。腕一本瞬時に再生させたギルスなら何とかなると思ったが……）

「どつやら……現実はその甘くはなかったらしい……」

そう、腕は再生したが状況は何一つ好転していない。

クウガが二体。大変な脅威だ。

もしも普通のフォームであるならば、ここまで苦戦はしなかった。  
搦め手、卑怯。何が何でも押しつけるだけの力は自負している。

だが、アルティメットフォームはそうも言っていられない。  
一体でもなかなか厄介なのが、二体なのだ。

正直、手も足も出ないというのが素直な感想。

(一気に吹き飛ばそうにも獄炎は意味がない。圧水じゃ押し切れな  
い。土俵じゃぶち抜かれるだろうし、絶光は外した時のリスクがで  
かすぎる。雷旺なんてもつてのほか……)

「これは詰んだか・・・ッッ!!!」

と、そこに片方のクウガが駆けてきて、蒔風のいる場所に向かって飛びかかってきた。

それを転がって避ける蒔風。今までいた場所がクウガのパンチでクレーターに変わった。

と、転がった先にはもう一方のクウガ。そのクウガに腕を掴み引かれ、頭突きを食らって蒔風の意識が薄れる。

「お？ぐ・・・あ？」

脳を揺らされ、朦朧としている蒔風の足をまた別のクウガがつかみ逆さまに片手で掴んだままもう一方の手で腹を殴り、地面にたたきつけた。

足が千切れ、蒔風の体がブツ飛んでボトリと落ちた。



その足はすぐにまた再生するのだが、それによる体力の消費はあまりにも激しい。

だからと言って再生しなければ回避の取りようがなくなって……

「はは。これは死ぬのかな？」

「気楽……ですね」

「ん？ああ……死ぬことは別段どうとも思ってたねえよ」

声からして五代だろう。

蒔風の足を千切った方とは別のクウガが、蒔風を視界から外しながら聞いた。

だが、そう言っている間にもユウスケであるほうのクウガは悠然と蒔風に歩み寄り、近づくにつれて雄叫びをあげながら突進していった。

そのタツクルに、蒔風の体が掻っ攫われる。

その衝撃だけにはなんとか耐え、身体の上と下がおさらばするような状態にはならず済んだ蒔風だが、首だけを回して後ろを見てギョツとした。

そこには巨大な岩がある。

このまま突っ込めばあの岩は砕け、自分もどうなってしまふのかわからない。

しかもこうしている間にも自分を捕まえている腕はメキメキと締め上げる力を上げつつあるのだ。

「チヨ……タンマ……!!」

「………オアッ!!!!」

ドゴオア!!!!

そうして、まるで牡牛のように岩に突っ込みそれを粉碎させたクウガが、蒔風を手放して勢いを止めた。  
すると当然、蒔風の体は慣性の法則に従ってしばらく地面と水平に飛び、ほどなくして地面を削りながら滑って転がる。

「い……ガあ……」

痛みに呻く時風。

その腹部はグルリと真つ赤に染まっており、再生したばかりだった左腕は折れているのだろうか、おかしな方向に曲がっている。さらに全身はクウガの肩の棘から発生した斬撃波でズタズタにされて血でベトベトだ。

その骨もすぐに再生しまつすぐになったが、その痛みはいまだ消えない。

ダメージは体に染みつく。

(こ……このままでは……いや……死ぬのは別段いいんだが……それでは意味がない!!！)

「俺には……やらねばならないことがある……!!!!」

そう言って何とかして傷を再生で治し、メモリを抜き出す時風。

その行為にどうしたのかとクウガが動きを止めたが、いまさら恐れることなどない。

このまま叩き潰してさえやればいい。

そうだ……

必ず

目の前の男を

物言わぬ肉の塊に変えてやるのだ………!!!

「小野寺君……!!!」

その攻撃をやめようとしないうウスケに、五代が叫んで声をかけた。

「あまり攻撃的になると・・・君自身が危険だ!!」

「・・・んです・・・」

「え？」

「いいんです。気にしないでください。俺は決めてるんです」

そうして、クウガが時風を改めて見、その言葉の先を言った。

「みんなの笑顔を守るためなら・・・究極の闇にもなる・・・  
!!!」

「小野寺君!!!!」

《ワールド!!!!》

「おおおおおおおおお！！！」

時風が飛びかかり、その体を締めあげようとする。  
無論、その程度で身体も足も揺るがぬクウガは、そのまま時風の頭を掴んで強引に引き放そうと腕に力を込めた。

頭蓋骨がメキメキと音を上げ、その握力に目が充血して更には血涙まで出てきたが、それでも時風はメモリで借り受けた力を以ってその邪気を払い続けた。

「う……が……あぁあぁあぁ!？」

と、そうしているとクウガの装甲から黒い意思が払われるかのように煙が上がり、その姿がアメイジングマイティにまで退行されていくではないか。

「くっ……っのお……」

「どんなパワーだよ……こんだけひつついてもこの程度か……  
!!!」

蒔風が全身から発しているのは泉戸裕理の持つ「八衢・退魔の波長」その力を以って、ユウスケを蝕み始めた黒い意識を抜っていったのだ。

その効果か、ユウスケはアルティメットからアメイジングマイティにまで下げられてしまった。

「お前……!!!」

「がむしゃらに攻め、相手を倒すことしか眼中にないお前に、アルティメットは御しきれんよ」

が、このフォームをしてもまだ強い。

それを表すかのように、蒔風を自らの身体から引き剥がし投げ飛ばす。

その力に蒔風が軽々と投げ飛ばされ、地面を転がっていくが、今度はいしつかりと足を付けてその勢いに踏ん張って見せた。

「か……は……ど、どうしたユウスケ……出力が落ちてい





その蒔風の肩を掴んで彼を止めようとする五代だが、蒔風の脚の筋肉が隆起してクウガの体が浮きだした。

そしてそのまま駆けだす。

その身体は斬撃波と発した炎で焼け裂けて行くが、彼は止まることなく走り続ける。

が、その脚は次第におぼつかなくなって戦いの衝撃で転がっていた拳大ほどの石に爪づいて倒れた。

だがその勢いは途切れることなく、ベシヤリと蒔風は倒れたものの、クウガの身体はすっ飛んで行き……

《ワールド!!!》

そして、蒔風が即座にメモリを発動させ、飛んで行くクウガの後ろにオーロラを出現させて元の世界へと強制送還させた。

が、そのオーロラに下半身が突っ込んだところで、クウガが何にかまっているのか上半身のみをこちら側に無理やり突き出してきた。

「蒔風さん!!!」

「あなたは……こちらに来る必要はない!!」

時風がそのオーロラに向かって腕を伸ばして強引に閉じようとする。そうして力を込め、鼻血まで出たところでようやくオーロラが閉じる。

「へへ……やった……オガアツ!？」

時風が五代を元の世界に返し、やりきったと言ったところで今だアメイジングであるクウガが時風の伸ばされたままになっていた左腕を踏みつぶした。

痛みに時風が涙目になりながら、右手でその足を払って立ち上がる。

「五代さんをどうした!!」

「元の世界に返したただけだ……。にしても……。よくも関係のない人間巻き込んだなコラ」

「おかしいと思っていた……。俺の知っているワタルじゃない、渡さんのキバとかがいたのに、なんでクウガは俺だけなんだって……」

┌

「それで海東と探し回って連れてきたってかよ……面倒なことを……」

「お前を……倒すためだ!!!」

そうして、クウガがもう一度時風にとびかかっていく。力を使う前に、この力で叩きのめす!!!

「ハアアアああああああ!!!」

クウガの拳に炎と雷が宿り、それが時風へと振り下ろされていく。

それを時風が右手で実に危うそうに回避していった。

受け流すだけで汗が一気に噴き出す。

下手をすれば受け流すために出した腕がそのまま引かれて行ってしまいそうだ。

だが

「ATTACK RIDE ILLUSION!」

そんな音がして、時風の体が六体の分身へと変わっていった。腰にあるのは、ディケイドライバー。時風は変身することなく、その力を使ったのだ。

と、そこにさらに追い打ちをかけに行く。

「ATTACK RIDE Clear Vent!」

「インビジブルだところからも攻撃できないが・・・」

「他ライダーの力も使えるディケイドだからこそこの戦法」

「複数人からの見えない攻撃」

「お前に受けきれるかどうか」

「試してやるっ」

「Final」Final Attack「Final Att

a c k R i d e . . . D E D E D E D E C A D E ! ] R  
i d e . . . D E D E D E D E C A D E ! ] A t t ] F i n  
a l A t t a c k R i d e . . . D E D E D ] F i n a l  
A t t a c k R i d e . . . D E D E D E C A D E  
! ] E D E C A D E ! ] a c k R i d e . . . D E D E D  
E D E C A D E ! ]

デイケイドのファイナルアタックライドが放たれる。  
いくつもの音声が重複し、何が何だかわからないがそれはクウガに  
向かって確実に突っ込んできていた。

ドドドドドッッッ!!!!!!!!!!

二つの斬撃、二つの巨大な弾丸、一つのキックをランダムなタイミ  
ングに打ち出されてそのすべてをクウガがまともに食らった。

カードが切れ、姿を表した時風の口すべてがニヤリと歪む。  
しかし



背中に鋭い痛みを感じ、それが自分の前腰にまで伸びているを感じた。

降り降ろそうとした拳をそのままに、クウガが自分の腹を見る。

そこには背中を貫き、腹から飛び出した「火」が、アークルを貫通しているという光景だった。

「う……あああああああ……！！！！！！」

「分身は六体。攻撃したのは五体……気付かなかったか？だから御しきれてないと言っただ」

斬ッ！！

そこから蒔風上に向かって刀を振りあげ、クウガを両断、カードへ

と変える。

「お前はあの瞬間pegasusフォームになるべきだった。あのフォームならば攻撃を見切り、オレの居場所もわかっただろうによ……」

蒔風がクウガのカードを手に、話しかけるかのように呟いた。

そして、力なくブラブラしている左腕を見て、メモリを起動、挿入して再生しようとする。  
しかし

「お……くうウウウウ……ツツハ!!はあ……はあ……無理か……」

蒔風が再生しようとする、ただただ激痛が走るのみでまったく再生しない。

身体に限界が来ているのだ。この腕を治すまでどれだけの時間が必要か。





しかし、その数はもう半数近くにまで減っている。

たった今、麒麟と白虎がやられ、剣に戻った。

これまで彼らは倒そうとする戦いではなく、相手を消耗させるつまりは逃げ回る戦法を取っていた。

そのまま本格的に逃げてもよかつたのだが、そうしては朱雀の二の舞だ。あくまで相手の見える範囲を逃げ回る。

残る七獣は青龍、獅子、玄武、天馬のみ。

と、そこに蒔風の言葉が聞こえてきた。

『お前ら、今理樹に追われてるな?』

『そもも言ってもらえませぬぞ。クラウド殿にも攻められ……』

『今絶賛戦闘中だコノヤロー』

『……いかなさい……ましたか?』

それに対し、四人は声に出さず返答する。

時風は理樹だけでなくクラウドまでそっちに行っていたことに少し驚き、さらにそれに対してまだ何とか持ち堪えていた彼らを称賛しながら、さらなる無茶を言ってきた。

『理樹だけを引っ張ってこい。できるか?』

『難しい注文しやがんなあ・・・』

『できるか?』

『・・・やりましょう』

『任せた』

そこで通信が切れる。

そして、青龍が二秒ほど考えて、叫んだ。

「……………我々では……………敵いません!!…逃げます!!…!!」

「よし来た!!」「了解じゃ!!」「うむ!!…!!」

青龍の言葉と、彼らの応答から、その場にいたすべてのものの行動は速かった。

まず、倒れた三体分の剣を青龍が抱えて飛びたち、それを理樹が追う。

次にその後が続いて行こうとしたクラウド目掛け、天馬が突っ込んで一瞬で返り討ちにされた。

しかし、「逃げる」と言っつて逆に突っ込んできたのでクラウドが踏<sup>た</sup>鞆<sup>たら</sup>を踏み、止まる。

そしてその前に獅子と玄武が立ちふさがり、剣になった天馬を青龍に投げ放つて回収させて先に行かせた。

「天馬は困か・・・!!」

「この先には通せませんのう」

「招待客は理樹殿のみでな。貴殿はまだ招かれておらんだ」

「まさか・・・罨か・・・！！！」

「ま、主ならどんな手を使ってもおかしくはないの」

「正攻法で行くのか・・・はたまた得意な卑怯で行くのか・・・それはわからぬ」

そう、今の蒔風はわからない。

騙してくるのか、それともそれすらも騙して逆に正攻法で来るのか。

なにはともあれ、急がねばなるまい。

「そこをどいてもらうぞ・・・」

「・・・龍虎雀武が一の堅牢・玄武。二つは通せぬ」

「獅子天麟が一の剛力・獅子。推して参る」

そうして、たった二人の時間稼ぎが始まった。

彼らの戦闘時間は実に五分と三十四秒。

しかし、終わるころにはもう理樹の居場所などわからなかった。

t o b e c o n t i n u e d

銀白VS空我？（後書き）

ユウスケ「負けた・・・チクショウ、オレクウガなのに!!」

あなたはクウキです。

ユ「うるっせえ!!」

マークは・・・まあユウスケですし、クウガのマークで。

五代さんは送りかえし、ユウスケは弱体化させて何とか勝利。

しかし、何を考えたのか今度は理樹をおびき寄せて・・・？

ユ「次回、VS薄緑。満身創痕の舜は勝てるのか・・・やられち  
まえ!!」

ではまた次回

リスト残り

長門有希  
クラウド・ストライフ  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
リュウタロス  
ジーク  
デネブ  
直枝理樹  
乾巧  
剣崎一真  
左翔太郎  
フェイト・T・ハラオウン  
シグナム  
ヴィータ  
リンフォース？



## 銀白VS薄緑

「まだ逃げるのか……!」

理樹が追う。

眼前十メートルほどの位置には青龍が計四本の剣を抱えて飛んでいる。

クラウドは来ない。どうやら足止めを食らったようだ。

「どこに……まさか……」

飛んでいくうちに、理樹はある推測を立てる。

このままいくのはまずいのではないか？

もしかしたらおびき寄せられているのかもしれない……  
この先に罠があったら……

最硬の翼人として、いかなる攻撃も防ぎきる自信はあるし、実際に彼はそれだけの力を有している。

だが、なんといつても相手はあの時風だ。  
隙を突く、背後から一撃、搦め手、非道、卑怯、なんでも使ってくるだろう。

そんな相手と、理樹はなかなか戦ったことがない。  
否、そもそもがただの高校生だった彼に、そんな機会などなかったのだが……

それでも、一癖も二癖もある仲間たちを遊んでいるうちに彼にも騙しなどの耐性はついていたし、この戦いの中で時風の手法もだんだんとわかってきた。

その仲間たちはいない、時風は敵だ。

「友情」の名を冠する翼人は、すべてを失ってしまうのか……

そうしていると、青龍が一気に急降下して地表に向かって下りて行った。

それを追って行く理樹。

雲に突っ込み、そこから飛び出したその瞬間！！

「獄炎弾！！」

「わ!?!?!?」

ドオウ!!!

地表から離れているにもかかわらず、蒔風の声が聞こえ、理樹めがけてバスケットボールほどの大きさをした球体が飛んできた。それをスレスレで回避、一気に加速して急降下する理樹の後ろで、獄炎弾が一気に膨れて爆発した。

それは巨大な火球となって雲を飲み込み、その肥大によって理樹を飲み込もうとするが、それよりも早く理樹はその範囲から脱し、地面に降り立つ。

「チ……流石に避けるか」

「舜!!!」

そうして降りてきた理樹の前に、蒔風がいた。すでに四本の剣は鞘に納められ、その右手に青龍刀が握られている。

が、その体はどう見ても満身創痍だ。

もつとも目につくのは、左腕。

力なくだらりと下がり、持ち上げたらそれだけで千切れてしまうのではないかというほどに力ない。

そして良く目を凝らすと、外見こそ傷は目立たないが、体内部に蓄積されたダメージはかなりのものようだ。

ゴホゴホと咳込んでもいるようだから、内臓へのダメージは確実にある。

いったい、ここまで誰が戦っていたのか。  
そして、やられてしまったのか……

「覚悟しろ、理樹……お前を倒すぞ」

「……そんな状態でよくも言えるね……僕を舐めすぎているか？」

だが、そんな満身創痍でも、彼は一切臆することがない。

死を恐れない彼にとって、「死にそうである」などというのは一切戦闘に躊躇いを持たせない。

せいぜいが「痛くて動きにくい」くらいの認識だ。

そんな男を直視し、次第に気分が悪くなって理樹が視線を逸らす。

ゴガッ！！！

その瞬間、理樹の側頭部を時風の蹴りが襲った。

しかし、そこにはバリアが張られ、理樹には一切届いていない。

6404

「よそ見たと思った？そんな簡単にやれると思った？」

「……少しは思ってたな」

「バカにするな！！！」

ドオウ！！！！

理樹の翼が大きく開かれ、そこから発せられるオーラで時風の体が吹き飛んだ。

地面に背中を打ち、肺から空気が吐き出される。

「かつハ……………て……………めえは……………」

「？」

「てめえは……………あっさり倒すって決めてんだよ……………」

ドンッ……………!!

青龍刀では無理だと悟ったのか鞘に納め、時風の右手に光が集まり、それが腕の細さにまで圧縮、光速を以って打ち出された。

絶光尖

貫通力と瞬間的な速度を誇り持つこの絶光の力を、さらに細めて貫くことに特化した「尖」にして打ち出す、絶光系最高の攻撃。

それを蒔風が理樹に向かって撃ち放った。

しかし

バチイン！！と、「弾く」という事をまさに音で表したかのような音とともに、理樹のバリアでそれは難なく防がれてしまった。

その事実には、蒔風が流石に冷や汗を流す。

最高攻撃力を誇る雷旺砲も防がれ、最突力を持つ絶光尖も効かない。

いま、改めてこの翼人の強さを感じた。

こいつに効く攻撃なんてものがあるのだろうか？

「それだけ？だったら……」

「ツツ！！こいやア！！」

「じつちから行くよ!!!」

ザゴン！と理樹がバリアを柱状にして自分の背中から地面に突き出し、その反動で一気に飛び出してくる。

そして、蒔風の懐に一瞬で踏み込んできた彼は、バリアを拳にまとわせ、それだけでなくそれで巨大な拳を作って蒔風を殴りつけた。

その拳の大きさは通常の拳の五倍ほどもあるか。

バリアを自由に組み上げれば、このようなナツクルを作り出すこともでき、それがこれだけの硬さを持っているのならば十分に脅威となりうる最たる例だ。

が、それを蒔風は右掌で受け、受けて触れた瞬間に掌を下げながら舞うようにすると回して後ろに流す。

そして、カウンターでそのまま右拳を理樹の顔面に正面から突き出した。

しかし、それも阻まれて理樹が今度は蹴りを放ってきて腹にめり込む。



「ぐぼっ……っはー!!」

時風が腹を抱えながら、地面を転がって呻いた。

全く効かない。

こちらの攻撃は防がれる。

これが、彼が「賢者」と分類した防御系の翼人。

その頂点に立つ者だ。

しかし、だからと言って

時風が諦める理由にはならない。

「オオオオオオオオ!! 風斬車!!!!」

天地陰陽を組み上げて、蒔風が風斬車で削りかかる。

手を振り、その遠心力で回転する風斬車が理樹のバリアと接触した瞬間、まるでフラッシュを焚いたかのようなスパークが起き、二人の目の前を白で覆い尽くした。

「う・・・わ・・・」

「オオオオオオ！！！！リヤアアアアアア！！！！」

その光に目を細めてしまった理樹に、蒔風が咆哮を上げて蹴りを放つ。

全く見えていなかった理樹の腹部に蒔風つま先が鋭く突き刺さり、理樹の内臓が圧迫された。

その体が転がって、膝立ちに立ちあがった。

「ゴホゴホっ！！蹴り一発で・・・これ？」

「さあて・・・はあ・・・はあ・・・視界を奪えば・・・どうにかなることは証明されたし・・・こんな感じで行くから・・・フーツ・・・ハ・・・宜しくウア！！！！」

そう叫んで蒔風が再び風斬車を振って理樹へと走る。

それに対し、バリアを張らず理樹は回避で対処した。  
あれに対してバリアでは逆効果だ。

無論、全身をバリアで覆えばいいのだろうが、それでは身動きが取れない。

そうなれば滅多打ちにされるのみ。こうして一撃ずつだったりなら受け切る自信はあるが、滅多打ち状態が継続されてバリアが破壊されないとは言い切れない。

が、受けるだけがこの翼人の強さではない。

ゴン！！！！

「ウゴッ………?」

バカッ！！！！

「ア・・・ガッ!!」

重い鈍撃の音と、蒔風の口からそれに応じた音が漏れる。

バリアを展開する勢いで、理樹が蒔風に向かって柱状のバリアを突出させたのだ。

咄嗟の攻撃に対処するバリア。その展開速度は蒔風の拳と同程度だ。つまり、蒔風が突っ込んでくるのに合わせてその速度で出現させれば、こちらのその速度と蒔風が突っ込んでくる速度とでのカウンタ―攻撃が可能となる。

が、いくら片腕しか使えない状態とはいえ蒔風だって翼人なのだ。翼を開き、その動きに変則性を持たせてくる。

カウンターは先読みしたうえでの攻撃だ。

相手が動きを変えれば、アホみたいに棒を突き出すだけ。

しかし、だからと言って理樹が自分にバリアを張れないというわけではない。

その柱が外れた直後、理樹はすでに時風の攻撃を受け止めていた。

強い

決して理樹からは激しい攻めをしてこない。

彼ならばこのバリアを刃状にしての攻撃もできるはずなのだが、彼はそれをしない。

攻撃に転じるのはもっともつと優位になってから。

あくまでも自分は防御に秀でた翼人だ。無茶はしない。そんなことをしてはつけ込まれて返り討ちにされるだけだ。

だから、相手が来たときにその数倍はあるカウンターを入れよう。

こちらは決して攻撃を受けてはならない。さつき蹴りの一発を受けて分かったが、理樹自身の耐久力は決して高くはないからだ。

それゆえに高い防御力なのかもしれないが、だからこそこのバリアは破られるわけにはいかない。

そして、彼はこの戦いでも学び、経験し、成長していた。

彼はかつての悲劇を、幾度も繰り返してきた虚構世界での経験で乗り越えた。

その繰り返しの記憶はない。  
しかし、体にしみこんだ経験は生き残っているのだ。

彼は、何一つとして無駄にせず、取り込んでいく。

それこそ、努力の最終形態。  
彼の成長率は果てしないものだった。

「チ・・・テメエ・・・いつまでも受け切れるとか思ってたんじゃない・・・！！！！！！」

「な・・・！！？」

「ねエエエエエエえええぞ！！！！！！」

「ゲふっ！？おグっ・・・は・・・！！！！」

が、それでも彼との経験の差は大きい。  
彼は《the days》時代にすでにそれなりの強さを持ち、さらに世界をめぐって戦いを経てきたもの。

彼の拳がまるで蛇のようにうねり、攪乱、そして渾身の一撃を打ち放ってきたのだ。

それが理樹の腹部に命中、腹を押さえて理樹が転がる。呼吸が一瞬止まった。

「オオラア！！！」

「ぐ……ああああ！！！」

と、そこにさらに蒔風の右拳が理息の顔面に放たれた。

無論、それ自体はバリアで防げる。

威力も速度も、不可能なものではないはずだ。

しかし、一瞬呼吸が止まったのが悪かったのか、ついにそのバリア

に亀裂が入った。

しかも、それだけではなく、拳は半分ほどこちら側に突っ込んでま  
で来たのだ。

そのバリアの欠片と衝撃にとって、理樹は後ろに転がった。  
さっきの声はその時のだ。

受け切れるはず、それが受け切れなかった。

それは仕方のないことだろう。攻撃に続く攻撃、しかも呼吸が途切  
れていた。

しかし、そうわかっていても、その事実は理樹を確実に焦らせた。

どうするどうする……

もう生半可な（それでも時風の攻撃のほとんどを受け切ってしまう  
のだが）バリアではだめだ。

しかし、それほど強固なバリアでは瞬時には出せないし、だからと  
言って展開しっぱなしでは動けない。



.....

「そう・・・か!!!」

「何を思いついた？さあ・・・やってみろ!!!」

そうして、時風が理樹に駆ける。

理樹はバリアを張ったようには見えない。

だから時風は、狂気じみた邪悪な笑みを浮かべて、理樹に向かって右手で手刀を、その首をへし折ろうと振り下ろした。

が

それはゴスツ、という音とともに押しとめられた。

蒔風の手刀は間違いなく理樹に振り下ろされた。

理樹はバリアを張っていない。

かのように見えた。

しかし、理樹はしっかりとバリアを張っていた。

しかも、その強度は今までのモノと比にならないほどに硬い。

「これが・・・僕の力の最高ノ硬だ」

「鎧・・・だと!？」

理樹が微動だにせずとその体を動かす。

その全身を、見えないほどに薄く、それでいて最高強度のバリアで覆っていた。

「は……でもそれじゃあ動けるはずが……」

ドゴッ……

「が……」

「動けるよ？そついうふうにしたんだ！」

理樹の身体が異常な速度で動いて蒔風を攻め立てる。  
それに対して右腕一本ながら受けきる蒔風。

理樹自身の格闘能力はそこまで高くはない。

しかし、その腕や足を覆うバリアの硬さに、受けるたびに防御しているはずのこちらの腕が傷ついていく。

更に言うならば理樹は自分から動いていない。  
理樹は自分を覆うバリアの方を動かす事で、自分の身体を動かしていた。

故に、無理な動きもできる。

そのために少し身体が痛むが、それは許容範囲内だ。

今や理樹に手出しできる者などいない。

この鎧こそが理樹の今の最高力。

「さあ・・・終わらせるよ。今までの事、これからの事、全部!!」

「デメエ・・・」

蒔風が理樹を睨む。

その姿にはバリアを纏っているなど思いもよらない。

なにも見えないのだ。

普通に立っているようにしか見えない。

これが、翼人。

今、立場が逆転した。

理樹が見下ろし、蒔風が見上げる。

戦いの終わりは近い。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 銀白VS薄緑（後書き）

理樹、超善戦。

賢者の翼人はさすがだぜ！！！！

何ひとつとして効かないバリアを纏い、一体どうすればいいのか・・・

そう言えば今日、ゲーセンでJubeatやりました！！中々面白い。  
と、言うかあれで「ユビート」って読むんですね。全然わからなかった。

もしユーザーに「BTOKJIN」っていたら私ですwwww

あと「BOSS」面白いね！！！！

ではまた次回！！！！

リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ

直枝理樹

乾巧

剣崎一真

左翔太郎

フェイト・T・ハラオウン

シグナム

ヴィータ

リインフォース？



## V S 薄緑決着（前書き）

これまでの、世界をめぐる、銀白の翼 第二章は

「主要、最主要たちが消えた!？」

「大正解!!!俺が犯人だ.....!!!」

「時風.....貴様!!!」

オオオオオオオオオオオオ.....

「お前を倒す.....」

「絶対に許さん!!!」



## V S 薄緑決着

「ゼアアアアアアあああああ！！！！」

ゴン！！バツガアツ！！！！

「メリツ・・・ツて・・・ゲ・・・フ・・・ア」

「もう無駄だよ。こうなったら・・・僕は倒せない」

理樹が猛然と攻めてくる。

それはそうだろう。彼は彼のできる内で最硬の防具であり、最強の武器を手に入れた。

しかも相手は満身創痍。

いまこそ攻め時だ。この男を倒し、すべてを終わらせる。



## 獄炎弾

それが理樹の元へと一気に向かい、触れるか触れないかの位置で膨れ上がって飲み込んだ。

その火焰自体にはダメージを食らわずとも、周囲の酸素はなくなるはずだ。

前に第一位とやりあったときもそれで倒した。

しかし、この場合はまた別だ。

理樹はすでにいったんバリアを張って定着させている。

動き回るならその都度バリアを動かさなければならぬが、立ち止まってならほかのバリアを張るだけの余裕はある。

ゆえに、理樹は立ち止まってそれを受け、炎にのまれてからドーム状のバリアを一気に自分から膨れるように展開していった。

そのバリアに獄炎が内側から押しのけられてかき消された。

これは効かない。

では、固有結界はどうか？

しかし、これは蒔風が考えているうちにやめた。

この固有結界は「法則」を弄る。  
だから「バリアを張る」という行動をとってもその通りになるとは  
限らない。

その動きが蒔風のためになるか、理樹のためになるか、それとも両  
者にとって有利不利になるかはわからないが、兎に角あのバリアは  
張れないだろう。

しかし、この固有結界にはある欠点があった。

「行動」にしか反応しないのだ。

つまり、発動した瞬間に動きを止めて突っ立っていれば何も「法則」は働かない。

あのバリアはもう張られてしまったものだし、そのままいるなら余計な行動はいらない。

あれほどの硬度ならば三十秒間バリアを張り直さなくとも耐えきるだろうし、消し去ることもできない。そう言った「一瞬で終わらせろ」ということはできないのだ。

つまり、理樹としては発動した瞬間に動かなければいいのだ。

この固有結界のことは彼も知っている。

ここまでの詳細は知らなくとも、自分の思い通りにならない、というのは知っているはず。

ならば下手に動くのは危険とみて、動かないだろう。

それでは意味がない。

体力を消耗するだけだ。

これは効かない。

あれを破壊しうる方法としては、十五天帝による一撃粉碎だが全部そろっていない今ではそれも出来ない。

そもそも中心になるべき獅子天麟がないのだ。

天馬があるから呼び寄せることも可能なのでそれをしてもいいが、それでは飛んでくる剣を追ってクラウドが来るかもしれない。

これはできない。

雷旺砲、絶光尖と防がれた今、こういった能力系は一切効かないだろつ。



これは意味がない。

そもそも、雷旺砲は両手でないと放てない。  
片手では拡散してしまい、本来の三分の一程度の威力しか出ないの  
だ。

そう考え、いきついた先はただ一つだった。

「うん……やっぱり捨てるしかないみたいだな」

「？ いったいどうしよう……」

何やら気楽な声で、時風が首をゴキゴキと鳴らす。

いったい何をするというのか。

流石に理樹も身構えた。

この男はどんなことをしてくるかわからない。

「見せてやるよ、理樹」

時風が翼を開く。

「死の恐怖無き男の」

そして翼それが鋭利になつて。

「未来みらいを見据えぬ戦い方を」

時風が加速開翼してその場から消えた。

「!?!? 高速移動……!?!?!」

視認できないほどの高速移動。

そこから放たれる攻撃はなるほど、確かに強力だ。

だが今のコンディションではとてもではないが理樹のバリアを破ることなどできない。

そう考え、理樹は蒔風が攻撃してくるのを待った。

あの体ではそう長くは移動し続けられないはずだ。

すぐに限界は来る。

その瞬間に叩き潰してやるのだ。

蒔風の移動で踏み込められた土が少しだけ、そしてところどころ宙

に弾ける。

バツ・・・ザッ・・・

しかし、音を確認できても、それは時風にとってはもう五秒も前のことだ。

ゆえに聞くだけで理樹は視線を逸らすことをしない。

ただ真っ直ぐ顔を向け、視界はどこともなく焦点を合わさずに空間を見ていた。

(どっぴくるのか、受けてからの反撃か・・・よく見ていやがる。よくぞここまで強くなったものだ)

グ・・・ギチギチギチ・・・

(だが・・・そのバリアには決定的な欠点がある。そこさえ改善されれば本当に手出しできなかつたが)

メキメキメキメキ、ブシュ・・・バキン！

(その高度ではそんなことは簡単にできまい・・・!!!!!!)

直後、時風が理樹の目の前に現れ、左腕を思い切り振るって真っ直ぐに、正拳突きを放ってきた。

それに対して理樹が瞬時に身構え、反撃に転じようとする。

しかし、その一瞬後に理樹の視界は真っ赤に染まって潰された。



その答えが、理樹の視界をつぶしたものにあり。

加速開翼でのスピードはかなりのものだ。

そして、時風はそこから身体を止め、姿を現して左拳を放った。

しかし、よく見てみるとその拳は理樹に命中していない。  
見えもしない理樹のバリア。その十センチほど前で、その拳は止まっていた。

だが、その腕はしっかりと伸びきっており、ただ単に寸止めたようでもない。

そう、それでいい。

彼の目的は最初からそれだ。



超加速から一気に脱して放った腕。  
そんなことをすればどんなことになってしまうのか。

簡単だ。答え合わせをしよう。

その左腕の皮はすべて反動でめくれあがって剥げ、筋肉繊維は裂かれて弾きだす。

それと同時にその腕に詰まっていた血液がすべて前へと、ペンキの缶を放り投げたかのようにぶちまけられた。

理樹には一切かからない。  
しかし、そのバリアはすべて真っ赤に染まって中からは見えなくなっってしまった。

これでは反撃も何もない。  
しかも、こんないきなりすることに理樹はパニックになった。



「突!!」

「うぐッ……」

「天馬に集え!!」

「う……おおわああ!!!!!!」

更には天馬を理樹に向かって突き出し、バリアに阻まれた瞬間に現在所有する分だけの剣をバラバラに出して、全方向から理樹を突き刺すように突っ込ませた。

それをなんとかバリアで防ぐ理樹だが、そちらに意識が言って蒔風の右拳が腹にめり込む。

更に喉の奥から血がこみ上げ、バリアが緩んで剣が突き刺さり全身に激痛が走った。

だが、それでもまだ倒れない。

理樹が地面を思い切り踏み込んでバックステップで距離を取る。

その理樹に向かって蒔風が獄炎砲を放って追撃。

「ハツ・・・ハツ・・・クツ、こんなもの・・・ああああああ  
あああああ！！！」

が、身体に剣が突き刺さり、しかも今の状況からの心の状態見では  
まともにバリアなど張れるはずもなく、その砲撃は理樹を撃ち落と  
した。

地面を転がる理樹。

その耳に自分のすぐ目の前に足が置かれる音が聞こえ、立ち上がっ  
て攻撃する。

しかし、その攻撃を足で蒔風は防いで、その体を独楽のように回転  
させた。

ピチャリと、理樹の顔面に血がブチ撒けられ、その視界が奪われた。

それをこすって落とす理樹だが、次の瞬間には拳が見え、その時点  
で理樹の意識は消失した。



「だが・・・それだけの硬度のモノでそれを実行するにはまだ経験不足だったなあ？・・・」

蒔風が空間からバイクを出し、そこに収納されているものの中から包帯を取り出して左腕を吊る。

処置はしたが、この左腕は当分先まで使えないだろう。

しかし、彼はなにも後悔はしない。

また一人、仲間を屠って蒔風舜は、次の獲物を探しに行く。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

VS薄緑決着（後書き）

最初にあらすじ入れてみました!!!

理樹「あんな・・・腕を捨てるなんて・・・!!!」

千切れてないまでも、再起不能でしょうね!!

理樹の敗因はズバリ経験不足でしたね。  
まあ本編でも言いましたが仕方ないですけど。

理樹の切り札と、その破り方に関してはこう考えていました!!

満足しました!!

理樹「次回、ライダー、最後の抵抗」

ではまた次回!



リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ

乾巧

剣崎一真

左翔太郎

フェイト・T・ハラオウン

シグナム

ヴィータ

リインフォース？

## 訪問者／襲撃者

《ワールド……!》

「ふう……ハアツ!……たたた!? イデデデデ! ……  
つたあ……ダメかあ……。がつくり」

廃棄都市の一角、柱と床と天井しかないようなそのビルに、時風が  
手の平からワールドメモリを抜き、ため息をつく。

左腕はいまだ治っていない。  
包帯に巻かれ肩から吊っているものの、それをはがせばそこには人  
体模型のようにむき出しになった腕がある。

ワールドメモリで回復能力を持つ者の力を引き出して治そうとして  
いたのだが、痛みが走るだけで治らないのだ。  
ほかの傷は治ったし、体力もそこそこ戻った。戦闘に支障はないだ  
ろう。

だが、この左腕だけは無理だった。

呪いか怨嗟か

腕のおぞましい外観とその痛みはまるで時風を許さないと叫んでいるかのように感じた。

「残りリストは……実力者ばかりか……とりあえず……」

6450

そうして、時計を見、リストを確認して時風が瓦礫から立ち上がって街を見る。

廃棄されたビルの一角を越え、その先に見えるのは風車が町中に並ぶエコの街。

時風は風都に足を運び入れた。



かもめビルヤード一階の「鳴海探偵事務所」には生き残ったライダーたちが集まっていた。

つまりはファイズである乾巧。

ブレイドである剣崎一真。

電王である野上良太郎。

ディエンドである海東大樹。

Wの半身である左翔太郎。

そして狙われてはいないが事情は知っている照井竜だ。

「そっぴやお前の嫁さんは知ってんのか？このことよ」

「襲撃事件は終わったと言っている。巻き込むわけにはいかないからな」

「ふーん」

バイクに乗りながら、信号で停車するたびに二人が会話を交わしていく。

「だがそろそろごまかしも効かないだろう。所長はあれでなかなか勘が鋭い」

「わりいな。そろそろ出ていくからよ」

「いや、それは構わないが……」

「ったく……真理のやるお、「危ないから逃げていようよ」とか  
言いやがって……そのせいで俺は一度もあいつと戦ってねえんだ  
ぞ」

「確か知っているんだっ たな？園田は」

「ああ、蒔風を問い詰めた時、俺はあの場において……その提案  
を受けた時にアイツもいたからな。北郷がやられて怖くなっちまっ  
たんだろ」

「それは仕方ないことだろう」

「まあ気持ちは分からなくねえけどよ……正直鬱陶しい」

「今はどうしてるんだ？」

「啓太郎ん家にいる。「ここにいる」とまではわからねえぞ」

そうして大通りから路地に入り、回る風車を横目にバイク二台はか  
もめビリヤード前にバイクを止める。

ライダーたちのバイクは地下、リボルギャリー格納庫に収納されて  
いる。

目の前においておいてはここにいますというようなものだし、バイ  
クをそんなに並べては（といっても全部で四台だが）邪魔になつて  
しまうからだ。

だから彼らも前にいったんバイクを止め、買ってきたものを運び入  
れようとした。

と、その瞬間

ドオン！！！ギイイイイイ・・・・ガオオオオオオン・・・・

地下から重々しい爆発音と、いくつものエンジン音。  
そして離れた位置にある格納庫出口から飛び出してきたリボルギヤ  
リーの走行音が轟いてきた。

「ハア！？んだよ・・・来てやがんのかよ！？」

「追うぞ乾！！格納庫出口は遠い・・・間に合わなくなるぞ！！！」

バイクから降りかけていた二人が、買い物袋をその場に放置してエ  
ンジンを再度吹かせ、後輪を流して方向転換、リボルギヤリーの出  
口へと向かった。





そして夜に出るのは危険、外食もダメということで、今の内に照井と巧が買い出しに行っているのだ。

「それにしても僕らが来ていなかったらどうしてたんでしょう？」

「その時は刑事さんが作ってたんじゃないかい？ま、探偵君もできないわけじゃないみたいだけど」

ちなみにこの二人はつい一時間前にここに来た。

海東は前に共闘したことのあった電王のメンバーと合流し、その良太郎はちょうどほかのライダーたちのいるここに顔を出しに来るつもりだったので、ついでについてきた、という経緯だ。

「誰かと組むのは性に合わないんだけど・・・どうにもそう言うてられなくてね」

「五代さん・・・でしたっけ。押し戻されてしまった方は」

「ああ。しかも翼人の力でゲートが強めに閉じられてしまっただね。また会いに行くのは難しそうなんだ」

「ってことはやっぱり俺らでやるしかないってことだろ？」

「今度こそ、救って見せる。何もできなかった俺は嫌だからな」

「翔太郎、剣崎さん」

「まあ、その話もいいけどよ……」

「とにかく今は飯食おう!!」

ガゴオン……

と、そこでリボルギャリーの前にある大きな扉が開く。

その扉は巨大な体軀を誇るリボルギャリーが出ていくための物なのだが、それがゆっくりと開かれていった。

「あ、照井さんたち帰って来たみたいだ」

そういつて、良太郎がその大きな扉に近づいていく

たしかに、今ここにブルースペイダーにハードボイルダーと二台のバイクはあるし、実際に照井や巧のバイクもここに置く。

だから良太郎の取った行動は正しいと言えば正しいだろう。正面からでなく、この通路から帰ってきたと考えるのは妥当だ。

だが、翔太郎はそこから来るのが照井達ではないことに気づいていた。

なぜならばあちら側、リボルギヤリー用のこの通路からは、入ってきたことなどは一度もないし、向こうから入り込むことはできないはずだからだ……

「離れる野上イ！！！！！！《ジョーカー！！》」

「え？」

「バアンツ！！！！」

直後、ジョーカーへと変身した翔太郎が良太郎の肩を掴んで引き下げ、開いて来た扉の隙間から出てきた拳を両手で受けて弾いた。

「ウガッ！？」

「翔太郎！？」

「下がれ翔太郎！！！！おおおおお！！！！」

《タツクル》

ヴオオオオオオオオオン！！！！！！！！！！

ゴガッ！！！！

ジョーカーが転がって扉から出てくるであろう相手に向き合っていると、背後からすでに変身を終えた剣崎の叫びと共に、スピード4「タツクルボア」のカードを専用バイク「ブルースペイダー」にラウズ、更にはスピード9「マツハジャガー」までをも読み取らせ、その相手、蒔風の身体を搔っ攫って地上までの通路を一気に駆け抜けて行った。

そしてさらに、ジョーカーがリボルギャリ 内部に入りその後を追って走り出した。

後に残ったのは床に倒れた良太郎と、それを受け止めた海東だけだ。

「まさか・・・こんな風にいきなり来るなんてね・・・」

「あの人が来るのはいつだって突然だよ・・・それよりも・・・」

「

ガチャ

「僕らも追おう。二人だけじゃ無理だ」

そう言って、良太郎が扉を開ける。

その向こうは時の砂漠。デンライナーが、発車音を鳴らしてやってきていた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



訪問者／襲撃者（後書き）

なんだか短くなってしまった気が・・・

この襲撃シーンを考えるので手いっぱいになってしまった・・・  
今回考えるだけでも一日中妄想してました。

残すライダーは最初から決まってるのでどうやってやられる or  
やられないの場面に持っていくか・・・とか

次回まで続き、次々回まで続くかもです。

細かくする分もしかしたら！！！！短く感じてしまう方もいらっしゃるかもしれませんが、戦闘描写は手を抜かずに頑張りますので許して下さい！！！！

あっ！！痛い！！モヤッとボールを投げないで！！！！！！

ブルースペイダーにはカードの効果を付属させる装置ありましたけど、考えてみると「タツクルボア」は使っていないんですね。使ったのは「マツハジャガー」と「サンダーディーアー」のみ。

でも本編で一回も成功しなかった「タツクルボア」が活躍できたからいいよね!!!

ではまた次回!!!

リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ

乾巧

剣崎一真

左翔太郎

フェイト・T・ハラオウン

シグナム

ヴィータ

リンフォース？

コンディション

左腕使用不可。

体力はバイクに押しのかされながらもいまだ健在。

体力値：98%

ただし度重なる戦闘で耐久力は低下している

## 銀白VS切札&剣

地下格納庫からの広く大きな通路を、一台のバイクが走っていく。

そのハンドルを握るのは仮面ライダーブレイド・剣崎一真。

そしてそのバイクに押され続け、前部にしがみつき後ろ向きに進まされていくのは時風だ。

本来ならばここで足を地面につけ、その勢いを殺してバイクを持ち上げてから投げ飛ばしてやるところなのだが、突っ込んできたバイクを受けるために右腕で押さえている状態だし、このままの維持なら勢いで張り付いていられるが勢いそのものは殺すことができない。

ゆえにこのバイクが止まるか、外に出て自ら脱するかしないかこの状況は変わらない。

それに後ろ向きだからわかったことだが、このバイクの五十メートル

ルほど後方にはリボルギャリがあり、だんだんと迫ってきているのが見えた。

グオン！！！！

と、そうして状況を考えているとバイクがついに地上へと飛び出した。

場所は工場地帯側面を走る道路だ。

おそらくは工場の敷地内だから、走っている車はほかに一台もなく、トラックなどの大型車両が走るためにその幅は以上に広い。見た限り延々と道路は伸びていた。

「ッ……うまく着地……できるといいなっど！！！！」

そして蒔風は即座に右腕をまげてバネのように跳ねてバイクから離

脱した。

慣性の法則か時風はバイクと並行して宙を流れていくが、いずれは地面に落ちるだろう。

《ワールド!!!》

が、そうはいかないのがこの男だ。

メモリを取り込み、その足にローラーブーツ型デバイス「マツハキヤリバー」を履き、右腕にはリボルバーナックルを装備してウイングロードを展開、その上を滑走していった。

「もしこれがギンガだったらナックルは使えなかったな・・・あぶねえあぶねえ」

そんなことを呟きながら、時風が跳躍。ブルースペイダーに向かって飛びかかっていった。

真上から迫る時風。

その時風にブレイドはハンドルを固定し、ブレイラウザーを真っ直ぐに突き出した。

それをリボルバーの手首に当たる部分で受け、バイクの前部に立ち乗ってブレイドと組み合う時風。

その着地の衝撃でバイクはコマのように回転するが、乗っている両者はそんなことは気にしていられない。

ブレイドが空いた片腕で時風の足を攻撃するが、攻撃された片足を上げてそれを受け止める時風。

ブレイラウザーを押しつけて拳を放ち、さらに足で受けている拳も押しつけて蹴りまではなってきた。

が、それを受け切れないと悟ったブレイドはバイクから真上にジャンプし、真下の時風に向かって剣を突き立てるようにして落ちて行った。

ジャンプから落ちてくるまでは一瞬だ。

その一瞬でできることは限られており、さらには片腕しか使えないのならば受けることも不可。

蒔風はとっさにバイクから前に向かってジャンプ（蒔風にとってはバックステップだが）、それを回避した。

そのジャンプで、蒔風が前に向かって飛んだのだから、バイクは当然後方に流されてブレイドの剣が地面に突き刺さる。

蒔風はウイングロードに着地するものの、後方から追いついてきたリボルギャリーからの体当たりに着地した瞬間に真横に吹き飛ばされ、その先でロードを展開して着地して戻っていく。

ブレイドは地面に着地した。そこに後ろへと流されていたバイクがやってきて、それに飛び乗って先に行く蒔風を追い始めた。



リボルギャリーの攻撃から何とか戻ってこれたのはいいが、そのダメージは無視できない。まあそうはいつでもこの大型車両は確かに強烈なものではあるが、いかんせん体当たりしか攻撃法はない。

ゆえに離れていれば無事と言えば無事なのだ。

(ただどあれん中には翔太郎がいる・・・やらないわけにはいかないな)

時風が行動を開始する。

あれの装甲は固い。しかし、今時風が借りている力は、その装甲を内から破壊する拳。

ならばためらう必要などありはしない。

「オオオッ!」

リボルバーが唸りを上げ、拳を握って蒔風がウイングロードを疾走してリボルギャリに徐々に接近する。

この道路は確かに広いものの、リボルギャリが回避するには十分な広さではない。それに、やっと行き止まりも見えてきた。その中には、絶対に回避できない一点があるハズだ。

そこに打ち込みさえすれば、どこに当たろうとこの攻撃は耐久力など無視して破壊する……!!!!

「IS発動！振動破碎ツ！！！」

蒔風の身体がウイングロードから飛び出して、リボルギャリの横っ腹に拳を稚気出し、地面と水平に、真っ直ぐに突っ込んでいった。

もらった!!

蒔風はそう思った。

これさえ入れればリボルギャリは爆破、それができずとも横転にまでは持つていけるはず。

爆破されればそれで終わり、横転ならば中身がシェイクされてグチヤグチヤだ。

これで一人……

そう、蒔風がそう思うのは無理もないのだ。

油断？

否

焦っているが故に

バガンツ！！！

「あゴッ！？ギアああ！！！」

しかし、そう蒔風の思い通りにはならなかった。

リボルギャリ が中身をさらけ出すようにそのハッチを勢いよく開き、真横から突っ込んできた蒔風を地面に叩ききつけたのだ。

地面を転がって勢いが殺される蒔風。

一方リボルギャリ は勢いよくだらいたためかハッチが地面に当たって火花を上げたものの、それを開いたまま行き止まりまで行って反転、蒔風の方へと向き直った。

「ぐ……おおお……イッテえ……!?」

ヴォン、ギャイン!!!

「オグアっ!?!」

地面を転がり、立ち上がった時風の後方からバイクのエンジン音が聞こえ、振り向いた瞬間にブレイドが剣を振りながら時風を轢いて行った。

直撃こそはしなかったものの、身体を引っ掛けられ時風はその場で回転し背中を打って再び倒れる。

「おおっ……強……烈……ッ……」

地面を倒れる時風だが、こうしているわけにもいかない。

今度はその倒れている時風が今いる場所を、電車のレールが走ってきた。

それ自体には特に何も無い。そのしく間に時風が膝をついているだけだ。

しかし、時風は血相を変えてその場から即座に転がり出た。

その理由は明らか。

直後にデンライナーが時風を引き飛ばそうと突っ込んできたからだ。

その勢いでの突風にあおられながらも、時風が受け身で転がった勢いのまま立ち上がって睨みつける。

リボルギャリにはハードボイルダーに跨ったジョーカー。

その横にバイクに跨ったブレイドがあり、その二人を通過し、大回

りして再び蒔風に向かってこようとするデンライナーがあった。

「くるか……いいぜ……プランはたった。実行しようか……」

そうして、蒔風に向かってデンライナーと共にブレイドと、リボルギヤリーからブースターを取りつけたハードボイルダースタートダツシユモードが突っ込んできた。

その三台のうち、最初に蒔風へと到達したのはジョーカーだ。

が、到達したと言っても途中でバイクから跳躍して蒔風へと殴りかかって行ったのだが。

それに応じて蒔風もジャンプし、空中でジョーカーと蒔風がぶつかる。

蒔風の半ば逆立ちになったつかのような体勢からの回し蹴りを、ジョーカーが腕で受け止めた。

それを見て時風が逆の足で腹を蹴るが、ジョーカーも逆の手でそれを受け止め、時風に蹴りを放った。

その蹴りを右腕で受ける時風。

しかしさらに放たれた蹴りに左手を使えない時風がもろに食らい、吹き飛ばされる。

その時風に向かってジャックフォームへと強化変身したブレイドがバイクから跳躍して宙を飛ぶ時風に切りかかり、突進していく。

それを何とか剣で受け流した時風だが、ブレイドはそのまま時風の後ろにまで行き追い付いてきたブルースペイダーに着地して再び走ってくる。

止まることを知らない連続攻撃に、時風が肩を上下させながらやっとならんと地面に降り立つも、そこにデンライナーからの砲撃が放たれて地面に大穴を開けた。

土煙で時風が消えるが、直後に時風がそこから転がり出、デンライナーに圧水砲を打ち放ってその車体を大きく揺らした。



そうして一時的にデンライナーを押しつけたものの、最後にリボルギヤリーが残っている。

その突進を見、蒔風が歯ぎしりするもの、それを何とかして投げ飛ばした。

そう、投げ飛ばしたのだ。

突っ込んできたリボルギヤリーが到達した瞬間に右足のつま先を地面との隙間に滑り込ませて持ち上げて仰向けに寝そべり、さらに左足で蹴り飛ばしてひっくり返したのだ……!!

6480

「うおおおおお!?!」

「なんて奴だ……うぐあ!!」

落下してきたリボルギヤリーを回避し、ジョーカーとブレイドが再び突っ込んで来ようとしてきた。

蒔風の後ろからはデンライナーが迫ってきている。

挟み込んだ

これはかなり有利な状況だ。  
これならばもしかしたら……

そう考え、ジョーカーとブレイドはハンドルを握ってエンジンを吹かした。

そしてバイクを疾走させようとしたその瞬間！！

「粉……砕ッ！！！」

ゴガッ！！と時風が震脚でも用いるかのように地面を踏み込むようにして思い切り踏みつけた。

その音は「地面を」というよりも「大地を」と言った方が的確なものではないのかというほどのもの。

その足が踏みつけた地面から小さな亀裂のようなものが二人の元へと走り、到達した瞬間にメキッ、という音を立ててアスファルトが砕け、バガッ！！と爆発したかのように爆ぜた。

「地面がッ!？」

「クソッ!!!」

地面が吹き飛び、瓦礫とともに宙を舞う二人とバイクとリボルギヤリー。

が、ブレイドはすでにジャックフォームで空中移動可能だし、ジョーカーもリボルギヤリーの後部を換装すればハードタービュラーとして空を行ける。

空中という無茶な大勢だが、ジョーカーは何とかして換装を完了させて体勢を立て直し、ブレイドも容易に立て直した。

もはやブルースペイダーとリボルギヤリーはあきらめるしかないだろう。

そう思い、蒔風へと視線を戻す二人だが、その場に蒔風がない。

「どっくに……」

そう呟いて周囲を見るブレイド。  
しかし、蒔風はすぐに姿を現した。

二人共々、宙を散っている地面だった瓦礫は大小さまざまであり、その大きさは人ひとり隠しきれるものも当然あった。

そのうちの一つを破壊、粉碎し、蒔風がブレイドに向かって突っ込んできた。

「なあっ!?!」

「ぼさつとすんな。お前終わったぞ」

正面から来た蒔風はブレイドの片翼を掴んで背中に回り、その背を蹴って地面へと落す。

翼はもがれ、地面に落ちていくブレイド。その地面にはデンライナ  
ーの砲撃で開いた大穴が口を開いて待っていた。

「くっ……オグツ!!」

その穴にブレイドが落ち、蒔風が手の平を向けグツ、と握ると、土の力で周りの地面が寄っていきその穴に蓋をした。

「閉じ込めツ!?……………あいつ…舐めやがって……………!!!!」

光の絶たれた穴の中で、ブレイドがカードを取り出してラウズした。穴の中に、黄金の輝きが煌めいた。

「ふう……………あとは……………っど?」

一方いまだ上空の蒔風は翼を広げて滞空していた。

瓦礫が雨のように落ちていますが、それももう三秒もすれば終わるだろう。

その瓦礫を避けながらジョーカーが時風へと向かってくるが、タービュラーに当たらないようにここまで来るのには三秒以上かかるだろう。

そう考えていると、穴から何かが伸びてきた。

いや、伸びてきた、というのは少しおかしいかもしれない。

現れたのは、黄金のカード。  
人間大にまで大きなそのホログラムのようなカードが、地面から三枚あらわれていた。

ロイヤルストレートフラッシュ

仮面ライダーブレイドキングフォームをして最強の一撃。

それは不死生物たるアンデットを解析して作られた人造怪人「トリアル」を一撃で消し飛ばすほどの威力を持つまさに「最強の一手」

それをブレイドが穴の中から発動させているのだ。

この時出現するカードは五枚。

おそらくは穴の中に二枚あるのだろう。入りきらずに三枚は地上に突出してしまったというわけだ。

「ほう……そこまでやるか？」

《ロイヤルストレートフラッシュ》

「ううええエエエエええいアアアアアアあああああああ  
あああああ！……！！！」

蒔風の弦きののち、キングラウザーの音声と剣崎の咆哮が、穴の中

からとは思えないほどはつきりと聞こえ穴のふたが爆発した。

この技は自分自身がカードを通過して相手を切り裂くのと、太い砲撃上のエネルギーを打ち出す二パターンある。

今回のこれは前者だ。

おそらくあんなところで砲撃を打てば自分が吹き飛んでしまうからだろう。

その勢いは容易に蓋を砕き飛ばし、そのまま時風へと突っ込んでいくようだった。

しかし

「剣崎！…いくなああアアアアアアあああああああ！…！」



「おおおおおおお！！！な！？があっ！？！？！」

翔太郎の静止の叫びもむなしく、キングフォームであるはずの彼がカードを四枚ほど通過したところで元の穴にたたき落とされた。

「突っ込んでくることは解ってたよ。だから言っただろ？プランはあるってよ」

上空の蒔風が穴を見下ろして呟く。

その穴にはさっきまでの蓋はない。  
しかしその代わりにいまだ装甲の健在なりボルギャリーが叩き込まれていた。

時風は解っていたのだ。  
ああして閉じ込めれば剣崎一真という男はそれをぶち破って自分に  
向かってくる男だと。

だからあの瓦礫の中時風はリボルギャリーを掴んで持ち、剣崎が蓋  
を破壊して飛び出してきた瞬間にそれを投げ落したのだ。

剣崎にしてみれば飛び出したばかりで予測のできない攻撃だし、な  
により一つぶち抜いてきて、その先にもう一個あるとまで考えても  
いなかった。

更にはエネルギーが最高潮まで溜まりきっていない、体勢が整え切  
れていないなどの要因もあった。

そう、だからこそ時風はこのタイミングでリボルギャリーを叩きつ  
けたのだ……！！！！

「剣崎！！」

そうしているうちに瓦礫がすべて落ち切り、ジョーカーが時風へと  
向かう。

しかしそうしているうちに、いつの間にメモリを指し入れ直したの

か、時風の手に新たな武器が握られていた。

レイジングハート・エクセリオン

その先端に桜色の球体が生成、肥大されていき、その技名と共に時風は撃ち放った。

「エクセリオンバスター、シュート」

バゴンッ！と穴の蓋になって逆さに埋まっていたリボルギャリ  
の後部にそれが命中し、更にその穴に押し込まれる。

しかし、あの装甲は<sup>キングフォーム</sup>一体どれだけ硬いというのか。

瓦礫と化したリボルギャリの残骸の中から、青い腕　おそろくは通常フォームに戻されてしまったブレイドの腕がガラリと出てきた。

それを見て蒔風がため息を漏らし、突っ込んできたハードタービュラーの鼻面を後ろ回し蹴りで吹き飛ばしてから右腕に力を込めて、絶光尖を撃った。

手を出す暇などなかった。

ジョーカーはタービュラーの体勢を立て直していたし、デンライナーは墜ちてくる瓦礫に巻き込まれないとう距離をとっていたのだから。

ズガンツッ！という金属を貫いた音と共に、絶光尖はその腕の根本に着弾し、その先にあるものを貫通して行った。

ブレイドの腕がビクン！と跳ねて、その腕が光となってカードへと変わった。

「これで後は・・・お前らのみ」

そうして、デンライナーとジョーカーを睨みつける時風。

その顔は手っ取り早く終わらせたいと、ありありと書いてあるようであった。

そうして再びメモリを握り、新たに力を借りようとする時風だが、その行動のすべてが止まった。

円錐形の、クリムゾンレッドに輝くポインターが、宙に浮く時風を包囲するように取り囲んだからである。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

銀白VS切札&剣（後書き）

今日はまだ27日だ。

・・・27日なんですっ！！（泣）

27日の24時とか25時なんだっ！！！！

だからまだ大丈夫。

え？何の話かって？

記念日ですよ。

正直自分は誕生日とかって最近ウキウキしてこない人で、あまり感動がない・・・

しかし、始まりは重要です。  
もちろん結果もですが。

と、言うわけで何か記念をしたいのですが……

この小説ページからの短編は出さないと思います。

やるなら……そう、時系列、展開無視のギャグ番組。

そんな感じで行きたいです。

もしかしたら投稿は早くて明日、遅くてし明々後日ですかね？

投稿したらこちらの後書きか活動報告に載せますのでよろしくです  
！！！！

さて、今回は風都でのカーチェイスっばいですね。

どうにも戦闘描写が細かくなりすぎてわずらわしいかもしれません



が、そこは申し訳ございません。

戦闘場所イメージとしては、W劇場版「運命のガイアメモリ」で「そろそろあたしも、行こうかしら？」とルナドーパント・泉京水、通称「嫌いじゃないわ！」がマスカレイドドーパントを出したところです。

ヒートドーパントとおっかけっこした場所ですね。

あの後すぐに地下トンネル出口とか海岸沿いの工場跡地に行ってきたけどwww

剣崎「ついにやられてしまったウェイ。悔しいウェイ」

何かおかしいぞ君。

剣「ウエ？」

やばいなんか面白い。

剣「次回、蒔風による策略」

ではまた次回

リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

海東大樹

野上良太郎

モモタロス

ウラタロス

リュウタロス

ジーク

デネブ

乾巧

左翔太郎

フェイト・T・ハラオウン

シグナム

ヴィータ

ラインフォース？

コンディション

左腕使用不可。  
頭部から流血。

体力値：51%

全員相手は実質不可能

## 銀白VS電王&amp;mp;切札

遠くで行われている戦闘の音が聞こえる。

大地が振動し、轟音、後に爆音。

最後に金属を貫く音がしたときにはその瞬間を目撃までした。

## 《Complete》

メモリーを入れ替え、胸の装甲が肩の上にスライドし、フォームが変わる。

## 《start up》

そして、身体が動いていた。

《Exceed Charge》

直後、周囲の世界が緩やかになり、右足首のポインターにエネルギーが集まって、それを一瞬で敵の周囲にばらまいた。

そして

「巧か・・・ッ！ゼアアア！！！」

そうしてそれを打ち出された蒔風が、即座にそれに対応した。

周囲を浮くポインターは計八つ。

そのうちの三つを蒔風が瞬時に四（三）肢で破壊した。

しかし、その直後に破壊された三つがあつた場所に新たにポインターが現れ、ファイズの体がそれを通して蒔風に次々に突き刺さって

いった。

エネルギーと化したファイズが八回続けて時風の体を通過し地面に着地、それと同時に時風の体を赤い「」の紋章がホログラム上に現れ、血を吐き錐もみに落ちて行った。

立て続けに叩き込まれた八つの衝撃。

それによって時風の体が全く一貫性のない回転をして落ちて行ったのだ。

「」・・・うが・・・」

《ジョーカー！！マキシマムドライブ！！》

「ツツ！？」

「ライダーパンチ！！」

ガゴツ！！

と、そこにジョーカーのライダーパンチが放たれて、それを時風が必死になって転がり避ける。転がったあとに血が点々と残るが、それでも時風はがんばって避けた。

それはもう頑張った。必死になった。

まあ必死にもなるだろう。

今の状況で重い一撃でももらえば終わってしまう。

終わりだけにはできない。

いったいどんなことがあったとしても、終わりにだけはできないのだ。

「左！！大丈夫か！？」

「ああ・・・だけど剣崎が・・・」

さらにそこにアクセルも追いつき、デンライナーからは電王とディ  
エンドが降りてきた。

(ついに総攻撃か……この全員相手は無理だ……な……  
だったら……!!!!)

「ブーストオン  
加速開翼!!!」

(この速度についてこれるやつはいない……ファイズはやっ  
たばっかで、トライアルには時間がかかるからな!!)

「ツツ!?!」

「来るぞツ!」

「ふ……」



「させると思うか？このインビジ野郎」

「な！？」

「それとお前だ！！オオカミ君！！！」

直後、オートバジンをバトルモードに変形させようと寄って行ったファイズと、インビジブルのカードでこの一瞬をやり過ごそうとしたデイエンドを蒔風がつかみ、同じ方向に投げ、蹴り飛ばした。それにオートバジンも巻き込まれ、二人と一台が吹き飛んでいく。

「開け！！！」

そうして吹き飛んで行った先に、蒔風がゲートを開いて二人を狭間ともいえる空間に閉じ込めた。

こうして、戦力は分断され、一気に低下させられる。

「行くぞ野上！左イ！！！！！」

「くっそ!!!」

「かかってこい!!!」

『行くよ、モモタロス!!!』

「おう!!!」

そうして、今一度覚悟を決めたジョーカーと電王、アクセルが蒔風へと駆けていく。

それに対し、ハァー……と息をもらし、腹筋をに力を込めて蒔風が脚の筋肉を一気に解放し電王に突進して行った。

電王ソードフォームは勢いで、ジョーカーはその技や身体能力を尽くして戦うライダーだ。  
とどのつまりは力技には向いていないという事。

だとすれば蒔風のやるべき戦法は一つだ。

「ブッチのめす!?!?!」

「この……やろっ!?!?!」

「クマの野郎がいれば……」

『まさか……ここまで想定して!?!?』

否

そんなことはない

そんなことまで想定できるわけなどない。

しかし、こうなるように戦力を分散したのは時風である。

電王の振るう剣技のすべてを時風がスウェーなどの最小の動きで回避し、その腹部に重い一撃を叩き込む。

その一撃に電王が呻き声をあげてうずくまった。

彼の攻撃は強いが大振りなのだ。

良太郎に憑依しているモモタロスは決して「技」の強いイメージではない。

しかし、戦闘での一瞬のすきについて大きな一撃を叩き込むのが抜群にうまいのだ。

だからこそ今までの戦闘も勝ってきたし、その経験でその勘は研ぎ澄まされていっていた。

しかし彼は今までこのような男の相手はしてきたことがない。免疫がないのだ。

しかし不利な相手にフォームを変えられるのが電王の強みだ。

故に不利となつたら即座に変わった。

《 r o o d f o r m 》

「さて……釣り上げてやるうか!?!」

そうしてロッドフォームとチェンジした良太郎が時風へと斬りかか  
つていく。

騙しと卑怯を主流とする彼ウラタロスならば、確かに對抗しうるだろう。

「オレたちを忘れんなよ!?!」

「はアああ!?!?!」

そこに更にジョーカーとアクセルが乱入する。



直後、そのエンジンブレードを折り曲げてエンジンメモリを取り出し、足払いでアクセルを倒す。

更に蒔風は、再び立ち上がるうとするアクセルの首根っこを踏みつけて逃げないようにしてアクセルのベルトからメモリを引き抜いてエンジンメモリを指し入れてスロットルを捻った。

《エンジン！マキシマムドライブ！！》

「なに！？」

「用はねえんだ。レッツドライブ！！」

そうしてそのアクセルドライブを取り外してアクセルに握らせる。すると彼の身体がバイクフォームへと変形し、マキシマムドライブのエネルギーでアクセルは疾走して行ってしまった。

これでは何かにぶつかってエネルギーを発散するほかない。

しかしこの工場地帯ではぶつかって爆発でも起こしたら大惨事だ。故にアクセルは工場を避けてそのまま道路を走るしかなく、フェンスを破壊し、それでも曲がりきれずに工場へと突っ込んだ。

幸いにしてその工場は稼働を停止していたようなので暴発はしなかったが、本体この技を向けられる対象のドーパントはこういった壁よりも強い。こんなものにぶつかっただけではエネルギーなど発散できるはずもないのだ。

そしてそのままその工場を突き抜け、反対側に飛び出したアクセルは、そのまま海に突っ込んでいった。

海中に突っ込まされ、海面との衝突で変身が解除されるアクセル。

口から海水が入り込み、その塩辛さにむせながら照井が海から這い上がってきた。

たとえ同じ動作でも、無駄なエネルギー消費というものは身体に堪えるものだ。

たとえるならば「疲れてもいないのに寝たり休むと、余計に疲れる」といった感じか。



「ゲほっ・・・ハッッ・・・は・・・くそガアッ！！・・・急がねば・・・！！！」

照井が脇腹を押えて進んで行った。  
今はその手にアクセルメモリは無い。

しかし今のうちに言っておこう。

彼がもとの場所に戻った時、そこには誰もいなかったのだ・・・

.....

「照井イー！！」

「よそ見してていいのかよ。エエ！？？」

《ワールド！！！！》

「!?!? あれは……まずいよ。良太郎!!」

『え?』

「ゲイボルグ」

ドスッ!!

蒔風が呪いの死棘「ゲイボルグ」をチョン、と適当に突いて電王の胸を突き刺す。

「う……ぐう……」

「ウラタロス!!」

「無事……だね……良太……郎……」

ドスッ!!!!

が、それが電王自身に突き刺さる前に、ウラタロスがそのダメージをすべて受け継いで分離、カードへと姿を変えた。

「ウラ・・・ウラタロスーーーー！！！！」

プラットフォームへと弱体化した電王が、その名を叫んでうなだれる。

その上体を見て、ますいと思ったのはイマジン達だ。

野上良太郎個人はそんなに強くはない。

もちろん、数々の激戦を乗り越え、彼自身もかなりの強さを持っているし、一人での変身で敵を倒してきたこともあった。

だが、だからと言って蒔風に勝てるほど強くはない。

彼の強さはイマジン達が憑依して活動したことで蓄積された「身体  
の経験値」による者が大きい。

彼はまだ発展途上中なのだ。

「……………ゲイ……………」

「マジいぞおい!!」

「良太郎!!」

「野上!!」

「ボ〜ルグ……………まだかよ……………ゲイボルグ」

ドンッ!!……………ドンッ!!!!

そうして、蒔風が再びそれを放つ。  
それに対して、二つの光。

リュウタロスとデネブがとっさに良太郎に憑依、くらった瞬間に離  
脱して彼を守ったのだ。



「ぬ・・・ハアツ!!」

ゴオツ!!

「な・・・回避したと!?!」

「世界は私を中心にまわっておるのだ。そんなもの、当たるわけがなかるう!!」

が、その槍は外れた。

今の電王はウイングフォームだ。

その元となるジークは自称するだけあってその幸運値は高い。

彼は驚くべきことに、その幸運のみを以って、ゲイボルグを回避したのだ・・・!!!

「く・・・」

「まだ終わってねエぞ時風!!!!」

ドゴオッ！！！

と、驚愕する蒔風に外れたためにまだそのエネルギーが拳に宿っていたジョーカーが、蒔風の腹部と真ん中にそれを叩き込んだ。

蒔風が胃液を吐きだし、その身体からスパークを起こした。

見た目が全く変わってないが、今の彼はドーパントなのだ。そして更に言うならば、この状態で戦士の技がここまでまともにはいったことは今まで一度たりともない……！！

「げ……ハッ！！！」

《Full Charge》

「覚悟せよ……！フンッ……！」

そうして、そこに更にウイングフォームのフルチャージ「ロイヤルスマッシュ」を投げ放ち、それが蒔風の左の二の腕と右腿を切り裂いて行った。

まともに食らわなかったのは流石という他ないが、それでも起動は大きく奪われた。

蒔風が肩を抱えて膝をつく。

「う……がぁ……」

《ジョーカー……！マキシマムドライブ……！》

「ライダー……！！！」

「クッ……オオオオオオオオ！！！！！」



「キイイイイイツク！！！！！！」

ドッ・・・ガアアアアアアアアア！！！！！！

ドオン！！！！

「ハアツ・・・ハアツ・・・ハアツ！！！！」

時風にマキシマムドライブを叩き込み、ジョーカーが地面に着地した。

その時風は爆発に巻き込まれ、それを背にしてジョーカーは膝をついた。

煙の中からはバキン・・・という音と共にガイアメモリの残骸が弾け飛んできた。

そこに書かれている文字は「W」

形はノック式USB。

それは間違いなく、ワールドメモリの残骸だった。

「これで・・・やっと・・・終わったぞ、フィリップ!!」

ジョーカーが声をあげて拳を握る。

それは勝利をかみしめた者の動作だった。

しかし、彼は甘かった。

甘さは彼の長所だが、ここではマイナスにしか働かない。

頭を掴まれた。

「ツな・・・!?!」

「メモリブレイクされたからと言って・・・その被体者が倒れると  
思っのおー間違いだ」

ゴシヤあッ!!--!!

時風が煙の中からジョーカーの頭を掴み、顔面を地面に叩きつけた。そして腰から無理矢理にベルトを引き剥がし、生身に戻してから更に押し付けて首をへし折る。

『翔太郎!!!』

《Full Charge》

それを見て、電王がもう一度フルチャージして、時風へと攻撃した。

ウイングフォームはデンガツシャーをハンドアックスとブーメランモードに変形させるフォームだ。

そしてフルチャージの際にそれを投げ放つのだが、今投げたのはブーメランのみ。

それを時風が回避し、電王へと向かって行った瞬間に電王も走り、ハンドアックスで切り裂かんと真っ直ぐに突きだした。

と、その一瞬前にブーメランが戻ってきて、時風を後ろから斬り裂こうとする。

ウイングフォームのフルチャージは、この二段構えの攻撃なのだ。

しかし、時風がブーメランの方を見ることもなく、背後の戻ってきたそれを掴み取って電王の腹部に突き刺した。

「ガッ……なに……見切……って……？」

「わかってんだよ。お前の必殺技くらいはな」

そしてさらにハンドアックスを奪い取り、駒のように身体を回転しながら背後にまわってその首を落とした。

一瞬で電王の身体が輝き、二枚のカードへと変わる。

しかし、時風はそれで止まることなどしなかった。



蒔風が入って行った瞬間、モモタロスは自身の武器モモタロスオー  
ドで斬りかかるも彼が叶うはずもなく、「天」と「地」の二刀に首  
を挟まれ切り裂かれて消え去った。

その様子を見て、ハナが蒔風へと攻撃を仕掛けようとするものの、  
オーナーがそれをさえぎって蒔風の前に立つ。

咄嗟に蒔風がオーナーへと剣を向けるが、オーナーは全く意に介さ  
ない。

ステッキでその剣を下ろさせ、蒔風の目の前にまで接近した。

その距離は近い。

鼻と鼻が当たるのではないかという距離までに近い。

「この車内での戦闘は控えていただきたいのですが……!」

「あなたらが手を出さなきゃこっちももう出ていく。気にしないで  
くれ」

「……………」

蒔風の言葉に、オーナーは無言だ。

その無言を肯定と受け取ったのか、蒔風が下ろされた剣を鞘に収めて踵を返した。

「オーナー!!行かせていいんですか!?!」

「……蒔風舜君」

デンライナーから去ろうとする蒔風に、オーナーが声をかけた。その足が止まる。

「この事態は……」時の重複」と類似したものであると考えてもよろしいのですかねえ?」

「……!!!!」

ジャカッ!!



オーナーのその一言に、蒔風が血相を変えて刀の切っ先を向けた。しかし、オーナーはなおも涼しい顔だ。

「私は誰にも言いませんので安心してください。それに私ならば・  
・幾分かは安全でしょうしねえ」

「・・・そうか・・・あなたは特定の時に所属しない人物でしたね・  
・・・・だからか・・・」

「えええ・・・」

「・・・誰にも・・・言わないでください」

「言つつもりはありません。安心してください」

その言葉に、蒔風が今度こそ本当に剣をしまい、さらには頭を深くと下げてデンライナーから出て行った。

「オーナー・・・今の言葉って・・・」



蒔風がデイエンドとファイズを閉じ込めた空間へと足を運びいれると、そこには大穴が空いており、誰も残ってはいなかった。

しかし逃げられたものの、蒔風は安堵の息を漏らした。

今の彼では、さらなる連戦は不可能だった

t o b e c o n t i n u e d

銀白VS電王&amp;切札(後書き)

遅れたけれども祝!!世界をめぐる、銀白の翼連載開始一周年――  
――!!!!

翔太郎「わーーーー!!」

良太郎「どどんぱフー!!」

タロウズ「いーじゃん!いーじゃんすげー」

ハイそこまで!!

うかれんのそこまで!!

全員「ええー?」

と、言うわけで今回を記念して、特別番組(?)を始めました!!

タイトルは「レッツゴーめぐ銀レイディオ!!」

詳細はそっちの方をクリックだ!!

翔「メモリはぶっ壊してやったぜおい!!!」

今回のMVPは何よりも翔太郎ですね。

ついにあのワールドメモリを破壊しましたから。

良「あんな必殺の技をポンポン出すとか・・・卑怯だよ・・・」

リュウタ「そのせいでボクら全然戦えなかったしね」

デネブ「侑斗をよろしく!」

ジーク「しかしあれを完全に回避するとは、やはり世界は私を中心にまわっていたな」

ウラ「僕もそれなりに卑怯だとは思ってたけど・・・あれは外道だよ。なんであっちが主人公になったんだろうね?」

モモ「オレに聞くな!!!」

さて・・・リストも減ってきて、言えることはただ一つ。

次回から最終戦に入ります。

もしかしたら隔日でも無理になるかもしれませんが、よろしくお願  
いいたします!!

翔「次回、襲撃されるのは烈火と鉄槌から」

ではまた次回

リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

海東大樹

乾巧

フェイト・T・ハラオウン

シグナム

ヴィータ

リインフォース?

コンディション

左腕使用不可。

頭部から流血。

左肩、右腿に切り傷。

全身に鈍いダメージあり

メモリブレイクの衝撃はあるものの、常人でも耐える者がいる程度なのでそこまで重要視しませんでした。

体力値：28%

現在回復中

## 最終戦、開幕

荒野である。

広大な大地にいくつもものせり上がった大地（メサと呼ばれるテーブル上の台地）がいくつも点在し、岩石による天然のコンクリートジャングルのようになっている。

そのメサとメサの隙間（隙間といっても体育館ほどの幅はある）を、四人の人影が歩み進んでいた。

「この先……か」

「ああ。でも生き残ったメンバーはもう少ないから……」

「あ、熱いですー……」



「ほら、大丈夫か？リイン」

シグナムとヴィータ、リインフォース？が、翠の案内でこの荒野を進んでいた。

もはやメンバーは少ない。

故に、クラウドがまだ倒れておらず、事情を知っているメンバー集めてもらおうように頼んだのだ。

と、言ってもそんな人間は少ない。

恋姫のメンバーは軒並み武器を破壊され、事情を知っていたライダー達も全員変身に必要なモノを奪われていて戦えない。

実質、万全でいるのは翠のほかにはいない。

事情を知らない者にを話せばいいのだろうか、巻き込むことなどできるはずもないのだ。

しかし、今クラウドのいる場所に全員向かっているところだそうだ。

「にしてもまだ遠いのか？」

と、岩場に座って休憩しているとおもむろにヴィータが訊いてきた。歩を進めて、すでに何時間経ったか。

飛行魔法で進んでもいいが、この荒野では時風に発見されてしまうかもしれない。

この地に来ているかはわからないが、そもそも相手は時風だ。気にしすぎていけないという事はない。

「まあなー。一番遠かったのがシグナムとヴィータとこだったかな」

「リン、大丈夫か？」

「あ、はい大丈夫です。ありがとうございます、シグナム」

「うむ」

「そろそろ行くか」

「そうだな。休憩しすぎて見つかりましたじゃ笑えねえ」

そうして、水分補給をし、周囲のメサの影に入って少し休んだ彼らが立ち上がってその陰から出て、また歩き出そうとする。

しかし、その影から出て、地面におかしなものを見つけた。

影である。

いや、影がそこにあっただのは最初からだ。自分たちが休んでいた巨大なメサの影だ。

しかし何がおかしいかといえば、そのメサの影の上部。メサの上は平らだ。故にその影も真っ平らになっているはず。

しかし、その影の上には確かに今、一人一人分のシルエットが映っていた。

「!!!!!!」

その影に、翠が振り返ってメサの上を見る。  
そこには逆光で真っ黒に染まった一人の男。

その男のシルエットには吊っているためか左腕が見えないが、間違  
いなくあの男だった。

「逃げる!!!見つかったぞ!!!!!!」

翠の見上げた先を見て、シグナムが飛びかかって行こうとするがその肩を翠が掴んで止める。  
そしてそのまま二人を担いで走りだそうと、足に力を込めた。

だが

バツンッ！！

「アグッ！？アアアアアア！！！」

ドオン！！

男 時風の右腕から放たれた絶光尖が命中し、翠がメサに突っ込んで土煙に消える。

それを見て、ヴィータが時風に向かおうとするがすでにユニゾンしていたラインから警告が飛んできた。

『今のリイン達じゃ勝てません！！逃げて合流しないとですよお！』

「……クソッ……チクシヨオ！！！！」

その言葉に、ヴィータがシグナムと共に飛行して逃走を図った。翠を置いていくことには大いに抵抗がある。

しかし、ここで自分たちがやられてはなんのために彼女がここまで来て、さらには弾き飛ばされてしまったかわからない……！！

「絶光尖……」

しかし、時風が小さくつぶやいた瞬間、再びは放たれたそれがヴィータを背中から狙い、魔法陣でのガードを容易く打ち砕いてその体を貫通させた。

「ヴィータちゃん！！！！」

魔法陣が突破される直前にユニゾン解除されて無事だったリインが叫ぶ。

だが、その声で気付かれてしまったのか絶光尖がそのまま振るわれてリインに直撃、小さな彼女の身体がメサに激突し、二人がほとんど同時にカードへと変わった。

絶光尖は一瞬の突貫力に秀でた攻撃だ。

にもかかわらず、蒔風は打ち出してからのわずかな一瞬でリインの位置を把握し、振るって命中させてきたのだ。

「ッッ!!!」

その事態にシグナムが歯噛みし、しかしそれでも速度を落とすことなく蒔風から離れようと上昇を続けた。

逃げ出すなんて彼女らしく、ひいてはベルカの騎士らしくないと言われるかもしれない。

しかし、彼女は嫌というほどに理解していた。

今の彼女ならば蒔風を……確かに圧倒できるかもしれない。

だが、そこまでだ。勝てる見込みはあまりにも低い。

自分がやられることに恐れはない。とうにそれに対しての覚悟などできている。

しかし、無駄死にするつもりもさらさらなのだ。

せめて後から増援が来なければ、今この場では倒せない……！！

そのために、まずは退いた。

決して臆したわけではない。勝利のための、策である。

そうして飛んで行き、雲の上にまで到達したシグナムだが、凄まじいエネルギーを足の方から感じていた。

間違いない、時風だ。



今ここでそれを感じると言う事は、相手は自分の位置を捕捉している。

(まさか・・・ここまで撃ってくると言うのか!?)

今シグナムがいるのは雲の上。

といつても最上層ではなく、その少し上にも雲はあり、その中間層辺りだ。

だが、その高度で捉えてくるなど・・・!!!!

しかし、メサの上に立つ地上の時風は確かにその方向を見て右腕に力を込めていた。

混闇を礎に練り込む力は「雷旺」「絶光」  
それを砲撃として、その腕から解き放つッ!!!

「・・・雷光砲」

ギヤオオツ！！！！

凄まじい音がした。

まるで空間そのものを削ぎ落すような摩擦の音を立てながら、その砲撃が真っ直ぐにシグナムの元へと向かって行った。

「ツツツ！？！？ そんな・・・くそツ！！！！レバンティン！！！」

《J a w o h l ! ! B o g e n f o r m . S t u r m f a l k e n  
！！》

その波動を肌で感じ取り、シグナムが身体を返して見えぬ時風へと向け、その弦を引いた。

「翔シュツルムファルケンけよ隼ツツッ！！！！」

ドシュツッ！！！！！！

そしてまた、シグナムも撃ち放った。

炎と衝撃波を撒き散らしながら、放たれた矢が時風へと一直線に突き貫して行った。

そして、時風の放った雷光砲とシュツルムファルケンがすれ違い、先に放たれた雷光砲がシグナムの身体を包んで消し飛ばした。

が、放たれたシュツルムファルケンは消えない。

まるで彼女の意志が宿っているかのようにその勢いは衰えるどころか更に増し、斜め上空から時風を突き貫かんと奔った。

蒔風がそれを見つけたのは、着弾するまで後五秒という時点だ。雲を突き抜けた瞬間、それが炎と共に現れ周囲の雲を焼き消してきた。

円状に雲が開かれ、その中心を走る一本の矢。

が、それほどの猶予があつて対処できない蒔風ではない。

「風林火山」で最も硬度の高い「林」を真つ直ぐに矢へと向け、それが着弾した瞬間に手首を捻つてその軌道を逸らす。

斜めの鋭角度から突っ込んできた矢が、その動作によってくの字に折れて蒔風の真後ろへと逸れて行った。

が、その反動が全くないわけではない。右腕が引つ張られるかのように後ろに巻き上げられ、そのまま体がグワンと回転して蒔風がその場に膝をつく。



「な!？」

「疾駆せよ、隼の刃よ!!!」

ゴオツ!!!

その先端にシュツルムファルケンを携えた銀閃が蒔風へと再び一直線に伸びていき、着弾して爆発した。

投げた際に前に伸ばした腕に引っ張られるように翠の身体が宙で動き、爆発を縦回転をしながら乗り越えてそのままメサの下に降り立つ。

と、爆炎の中からヒュンヒュンと銀閃が回転しながら飛び出してきた、それを翠が見もせず後ろ向きでキャッチする。

ピツ、とそれを振るってから肩に掲げ、肩越しにメサの上の炎を見上げる翠。

しかし、その目が見開かれ、次の瞬間彼女は風足で走り出していた。

ヴオオン！！！！！

直後、その炎の中からエンジン音が響き、バイクに跨った蒔風が煙の中から飛び出しそのままミサの下に飛び降りてきて走りだした。

視線の先には翠が走っている。

それに追いつこうと、蒔風がバイクのアクセルを更に捻った。

その速度は風足のそれに到達し、時風がその後を追う。

「案内してもらつぜ・・・翠！！！」

「この速度に・・・！？マズイ・・・くっ・・・」

ドオっ！！！！

翠がどこかへと連絡を取りながらさらに疾走するが、時風はまったく振りきられることもなくそれについて行く。

その先には巨大な岩山。

どうやら洞窟になっているようで、その中へと翠が奔って入る。

（ついてくるか・・・？来るなら来い・・・あたしたちが相手し



てやる！！）

天然の岩石の洞窟。

所々天井に穴が開いているらしく、中は結構見えるようだ。

そこを時風が翠を追って疾走し、どんどん先へと進んでいく。

無論、天然というだけあってその洞窟には脇道が多く存在する。

居間と追っている洞窟が真ん中のモノのようだが、この穴よりも大きな脇穴もある。

そして時風が洞窟を走っていると、右の壁（所々にちいなさ穴が  
いている）からつつすらと光が見えてきた。

外か？

時風は、最初こそそう思った。  
が、直後にそれは違うと知った。

外からの日光があんな放射状に、しかも一方向に向いているはずがない！！！！

ドオウ！！

瞬間、その薄い壁を突き破ってフェンリルに跨ったクラウドが時風へと突っ込み、それを時風が回避してなおも翠を追った。

時風に回避され、少し遅れて追ってくるクラウドだが、その距離は縮まりつつある。

と、そこで時風が翠の真横にバイクを追いつかせ、その横っ面を殴

り飛ばした。

その直撃をガードはした翠だが、風足中だったこともありそのまま弾けるように壁にきりもみで突っ込んで行った。

厳密に言つと風足とクロックアップは違う。

クロックアップは時間軸によるものだが、風足は単純な高速移動だ。故に弾かれればこのように穴の開けられた風船のように吹き飛んで行ってしまふ。

その翠をバイクから飛び出したクラウドがキャッチし、壁に激突する前に押しとどめた。

ぐったりと頭をたらし、気絶してしまった翠を見て、クラウドが歯ぎしりする。

彼女をその場に寝かせ、漆黒の翼をはためかせて自動停車したフェンリルに飛び乗ってその後を追う。



そこに蒔風は入り込んだのだ。

いくつも入り組んだ道路。

その道路を真っ直ぐに進んでいく蒔風だが、Yの字に分かれているのを見て右にハンドルを切った。

直後

《Exceed Charge》

「ライオットザンバー!!!」

ゴッ、ジュカッ!!!

蒔風の腹部と首を狙って、オートバジンに乗ったファイズのナックルと、背から金色の翼を生やしたフェイトのバルディッシュザンバ

ーが、放たれ振るわれてきた。

それをとっさに跳躍して回避した時風は、宙で回転してバイクの上に立ち二人に蹴りを放った。

左右にいる二人はそれを受け止め、弾かれながらもなおも時風の横に付いてその後を追う。

荒野での襲撃からまだ十分。

荒野からの戦闘は、近代的なトンネル内へと場所を移して続く。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d





ヴィ「そりゃそうだけだよー」

リ「だからと言ってやられたいわけじゃないですー」

作者の勝手な考えで、翠の風足にバイクで着いて行ってみました。  
こう・・ファイズアクセルフォームとほぼ同じ速度でサイガが飛行  
ユニットで飛んでたみたいなの？

後調べてわかったのですが、テーブル上の台地って「メサ」って言  
うんですね。

おかげで書きやすくなりました。

そして・・・

後藤さんバーン来たああああああああああああああああああああ

!!!!!!

5103は315です!!!!

待ちに待った後藤バーン!!!!

彼はきつと説明書熟読するんだろうなあ・・・

ここからの戦闘は完璧にFF7ACのバイク戦ですWWW  
執筆BGMも以前紹介したニコ動にある「闘う者達・更に闘う者達  
を集めてみた」ですしねWWW

ヴィータ「次回はそのままフェイトとファイズだ」

ではまた次回

リスト残り

長門有希

クラウド・ストライフ

海東大樹

乾巧

フェイト・T・ハラオウン

コンディション

左腕使用不可。

体力値：89%

## 最終戦、決死

バイクに立つ蒔風を、フェイトとファイズが追って行く。

後方からは別のバイク音も聞こえてきた。

《Exceed Charge》

ファイズフォンが鳴る。

蒔風へと、真紅のポインターが放たれてファイズがクリムゾンスマッシュの標準を合わせた。

蒔風は走行中なのだが、そのポインターは蒔風にぴったりと張りつき着いて来る。

「チツ……」

「ウオリヤア！！！」

蒔風が舌打ちをし、ファイズが雄叫びとともにキックを放つ。

が、それはポインターにファイズが突っ込んだ瞬間に蒔風の右裏拳で弾かれ、後方へと吹っ飛ばされた。

その反動で蒔風のバイクが独楽のように回転して、それでもなお先に進んでいく。

そこからバイクに跨り直してそれを立て直そうとする蒔風。

しかし、跨る直前にフェイトが現れてザンバーを振るって蒔風の胸を狙ってきた。

それを咄嗟の跳躍で回避する蒔風。

その蒔風を追って、フェイトがバルディッシュをツインソードに分けてその片方を投げ放ってきた。

それを弾く時風だが、バルディツシユの二刀は魔力糸でつながっている。  
フェイトが引き戻してそれを握り、時風を一切宙からに降ろさぬように上に向かって攻撃を仕掛けていく。

その後方では吹き飛ばされたファイズが、ミッションメモリーを取り換えてアクセルフォームへと強化変身をしていた。

《Start Up》

そしてバトルモードになったオートバジンに拾われてその肩に乗り、そこを土台にすぐさま飛び出していく。

その後方からバジンもすぐに追い、機銃での援護射撃をはじめて行った。

「!!!!」

それを視認した時風は、フェイトのザンバーを左肩で受けて肉に食い込ませ、筋肉を絞めて抜けないように奪い取った。

「な!？」

「一本いただき・・・っ」と

フェイトもここまでしてこっちの動きを封じてくるとは思わなかったのか、その行為に驚く。

確かにどうせ使えないものとはいえ、こつも簡単に自らの肉体を囿に使うなんて……!!!!

そこから蒔風が上体を返して左肩を引き、フェイトの体を引っ張り込んだ。

そうしてこちら側に来たフェイトの体を躲して後ろに回り込み、両足でキックを放って天井にたたきつける。

左肩から剣が抜け、その一撃にまるで地面を転がるかのようにフェイトが天井を転がり、地面に落ちて膝をつく。

だがまだ意識はあるようで、ファイズに抜かれてから、頭から血を流しながらもその先を追った。

フェイトをけり上げた直後、ファイズが蒔風に到達してチャージしたナツクルを放ってくる。

それを翼を使つてのバックステップで回避し、地面に足を付けよう

とした。

が、そこにバジンの機銃が襲い掛かかってきたのだ。

翼で体を包んでそれをガードする時風だが、その隙にファイズが時風のバイクに飛び乗ってそこからファイズフォンでのブラスターを浴びせてきた。

すでに時間は過ぎ、通常フォームに戻ってはいるが問題はない。

現在、時風にとっての前方（進行方向から見れば後方）からバジンの銃撃が放たれており、時風のバイクはその少し先を行っている。ゆえに、翼を前に回して防御しているために今の時風は後ろが無防備なのだ。

そこにそれを放たれ、三発ほど命中して時風が揺れる。

その瞬間、フェイトが再び追いついて二刀流を駆使して時風へと切りかかってきた。

それを「風林」を使って片手ながらも二刀扱うという手法で防いでいく時風。



が、その合間に入れられた蹴りが腹にめり込み、  
時風が後ろ向きに転がっていきバンツ、と地面を大きく撥ねた。

そこを狙ってブラスターや射撃魔法を放つファイズにフェイトだが、  
こんな状況でも見えているのかがむしやらに振るっているだけなの  
か、くるくると回転する時風はそのまま「風林」や翼でそのすべて  
を弾いていった。

そうして着地地点はファイズの立っている時風のバイク上。

しかしあの動きでは、いかに時風でも空中での制御などできるはず  
もない。

時風がバイクに落ちてくる一瞬前に、バジンがその間に入って時風  
を殴り飛ばそうとその鋼鉄の拳を放ってきた。

ドムンツ！！！！

重々しい音がして、時風にその拳が確かに命中した。が、時風の体  
は飛ばない。

腹部に力を込め、それをあえて食らって、そして弾き飛ばされない  
ようにこらえたのだ。

直後、蒔風が剣を振るってバジンを上下に切り分けた。

火花を散らして落ちていくバジン。

その蒔風の後方からファイズが掴みかかってくるが、まるでそれを知っていたかのように、そのを伸ばされてきた腕を掴んで後方に回り、蹴り押した。

その結果ファイズは切り裂かれたバジンの上と下の間に挟まれ、そのまま爆発に巻き込まれる。

「巧！……舜！！」

「いちいちキレんな。カルシウム足りてないんじゃないのか？」

ファイズがやられ、フェイトが叫ぶが蒔風は全く意にも介していない。

しかし、蒔風はまだそのバジンの煙を宙で見ていた。

いまだカード化の光は発されていない。

そして蒔風がバイクに着地、跨った瞬間バジンの残骸から真紅のシルエットが飛び出してきて、一気に追いついてきた。

背中のブースターで飛び出してきたそれは仮面ライダーファイズブラスターフォーム。

その手にはファイズブラスターソードモードが握られていた

それを肩越しに確認し、蒔風がバイクを反転、向かってくるファイズに向けて逆走を始めた。

そのいきなりの行動にフェイトが多少行き過ぎ、急いで進行方向を変えてその後を追い直す。

ファイズとしては向かってくる蒔風をカウンター、最悪相打ちの形

でも打ち取ってやるといった覚悟だ。

しかし、それに対する蒔風はファイズの動きからタイミングを掴もうと睨みつけるだけだ。

こちらに覚悟けっしなんてものはなかった。

しかし

ファイズが蒔風へと一直線に飛び、腕に力を込めていく。

そうして交差まであと二十メートルのところ、蒔風が行動を起こした。

一瞬の勢いでトンネルの壁を走り、そのまま天井まで到達してバイクを再び反転、方向を戻して真下の（蒔風にとっては頭上の）ファイズに向かって剣を突き立てた。

完璧に交差するつもりだったファイズはその視界外からの攻撃をもろに食らい、背中には「風」が突き刺さる。

そのまま時風はファイズの背中に乗りボードのように踏みつけた。

ファイズの体が地面に削られ、火花を散らし、そこに天井、壁をグルリと回って地面に降りてきた時風のバイクがやってきて、時風がファイズの頭を踏みつけて跳躍、バイクに跨った。

踏みつけられたためにファイズの顔面は地面で削られ、コンクリートで舗装されたトンネルの車道をガリゴリと抉る。

当然、そこまで強烈な衝撃に耐えられるほどマスクは強くなく、砕け、勢いに首があり得ない方向を向いて曲がり彼の体が光と消えた。

「な・・・!？」

「最終フォームになったからって、調子乗ってんじゃねえぞ」

「風」を収め、バイクに跨ったままの時風がフェイトの攻撃を回避しながら先に進む。

もはや走っている地面は舗装されたコンクリートだけではなく、壁や天井をも利用しての壮絶なカーチェイスとなっていた。

そこに

「ファイガッツ!!!」

ドオン!!!!!!

クラウドの放ったファイガが蒔風のバイクに命中、爆発した。  
その直前にジャンプしてバイクから離れていた蒔風は無傷だが、そのジャンプ直後にフェイトがバルディッシュを大剣型にして腰を返し、バッテリーが振りかぶるかのようにそれを胴体に向かって振るってきた。

それに対し、蒔風が一瞬で左腰の「風」を握って交差した瞬間に居合い抜く。

ジュカッ・・・!!

という刃物の鋭い音がして、刃がまるで音叉のようになりん．．．と鳴っていた。

バキン！！

「ッ！？」

「魔力刃ごとき、その程度か」

そして、バルディッシュザンバーの金色の魔力で形作られた刃が切り裂かれていた。

上半分丸々切り裂かれ、パキリ、と儂い音を出してそれが落ちていく。

しかし

「再変換！！プラズマランサー！！」

「なっ！？」

その裂かれた刃が空中で形を変え、金色の弾丸と化して蒔風へと真っ直ぐに疾駆して来た。

それをいなし、後ろに流す蒔風だが、その弾丸は蒔風の後方で停止、ぐるりと転換して再び突貫してきた。

更にはクラウドがバイクから飛び出して蒔風へと斬りかかって来る。

「な……ク、ソッ！！！」

その弾丸を蒔風が獅子天麟の面で受け全てを耐えきり、クラウドからの剣を相手の手首を蹴りあげることによって逸らし回避していた。





「画竜点睛！」

ドゴツ、ゴガアツ！！

そしてその回転をそのまま攻撃に利用し、二人の翼人が一気に上昇、天井を突き破っていつてしまった。

その先にあるのは先ほどと変わらぬトンネル内。  
が、今度は天井と道路だけで、左右にあるのは壁ではなくいくつかの鉄骨だ。

おそらくは階層別にされたハイウェイが集まってくる地点にまで来てしまっていたのだろう。

穴を突き抜け、バチィ！！と二人が弾けて地面に着地する。

が、その直後時風の足元がうつすらと金色に光り、そこから大剣の刃が斬り出てきて、時風を一刀両断しようと横断した。

それを横に回避した時風。  
そこにクラウドが剣を構えて突っ込み、道路に出来た切れ目からフェイトがフェンリルに跨って飛び出してきた。

先ほどの金色の刃はおそらく、フェイトが下の階からザンバーを振るってきたものだ。

そのフェンリルにクラウドが飛び乗り、フェイトが後部に立つ。  
フェンリルが突っ込んできた衝撃を流そうと後ろに跳躍した時風は再び進行方向へと翼をはためかせて飛び出して行った。

その後を追うバイク。

射撃魔法や剣撃が飛び交い、時風が翼を小さく畳んで更に速く飛んで行く。  
抵抗を減らしたのだ。身体を真っ直ぐにし、ロケットのように先に向かって飛んでいた。

その時風へとフェイトがフェンリルから飛び出して行って今度はツインソードで切りかかって行った。

その双剣に対し、蒔風が獅子天麟を「獅子天」「麒麟」に分けて指で挟んで片手に二刀持つ。

そして片方を宙に放り投げ、まず麒麟で攻撃を受けた。直後、麒麟から手を放して放った獅子天をキャッチ、フェイトへと斬りかかる。

それをもう一刀で受けて麒麟に押し当てていた方を蒔風へと振るう。

現在麒麟はフェイトが蒔風に斬りかかっていたから押さえつけるかのようにそこにあっただけで、そう離されては落ちるだけだ。

しかし、蒔風はこの程度で剣を落とさない。

麒麟の柄の先を足の甲で拾い、脛に麒麟を当ててフェイトの剣を受けたのだ。

左手の使えない状況ながらも、この男は二刀流を操る男……！！

「……強い……！！！！」

「ただの小手先だ」

そうつぶやき、空中でありながらもフェイトの身体を巴投げのよう  
に後ろ（実際には進行方向）に向かって蹴り出し、蒔風のその動作  
の際に斬りかかってきたクラウドをバイクに弾き返し、そのバイク  
を狙って獄炎砲を放った。

その直撃をクラウドはハンドルを切って避けるが、道路の方はそう  
もいかない。

コンクリートが砕け、道が消える。

その瓦礫の中をバイクに跨ってクラウドは回避、着地するも別路線  
の道路に乗ってしまっただけで直後に姿がトンネル（山の中ではなくチユ  
ーブ状の道路）に消えてしまった。

と、直後に蒔風とフェイトもトンネルの中へと入った。

相手は一人。

ならば、確実に潰しうる方法が一つある！！

「イマジナリテイ心象的……」

「干涉成功。空間断絶を実行する」

「ワールドエン世界破……な！？ツ、ゲボツ！！」

しかし、その方法たる固有結界は発動しなかった。

蒔風がその名を叫ぼうとした瞬間、それに割り込んできた声の主に  
よって固有結界が阻害された。

そうなれば当然反動は術者に帰って来るし、このような強力な物な  
らば反動は強い。

血を吐き、それでも天井を蹴って飛翔、更に加速する蒔風。

すると、地面を高速で走る一人の少女を発見した。  
フェイトではない。フェイトは今自分の少し後方だ。

その姿は、はかなげで、それでいて今ははっきりとした意志を持った「宇宙人」だった。

「長門……!!!!」

「目標の排除、開始」

ダンッ!!

長門が飛びあがり、一瞬で蒔風の真後ろにまわり後頭部を手刀で強打した。

その衝撃に蒔風が地面スレスレにまで落ち、ギリギリで体勢を直した。

そこに放たれるさらなる射撃魔法。

その弾幕を長門がまるですり抜けるかのように時風へと切迫し、その体を羽交い締めにしてきた。

「!?!?」のッ・・・離せ!?!?!」

「今」

長門が呟く。

と、そうしていると時風の視界に外の光が見えた。どうやらチューブの出口らしい。

が、そこに一人の姿が見えた。

遠く、そして外からの光の逆光でよく見えないが、そのシルエットを見るに手には銃を握り、腰から何かを取り出して装填していた。



「まさ・・・か・・・！！！」

《ATTACK RIDE GEKIJOUBAN!!》

その耳に、確かにはつきりとその音声が聞こえてきた。

直後、その姿を中心に、更に九人の姿が現れてきたのだ。

ガチャ・・・

《Final Vent》

《Exceed Charge》

《MIGHTY》

ドンドン！！

《Maximum Rider Power》

《ウエイクアップ!!》

《エターナル！マキシマムドライブ!!》

《Final Attack Ride D I D I D I



「Jジャン……」

ドオオオオオ！！！！！！

そうして大爆発が起き、トンネルの出口は粉碎された。

地面までは吹き飛んでいないが、出口付近の天井と壁は完璧に落ちた。

これで終わるといって……

ディエンドがそう思いながらも、瓦礫を見続けた。

嫌な感じは、おさまってくれない。

t o b e c o n t i n u e d

## 最終戦、決死（後書き）

iPodが死んだ……

今朝方にパソコンにつないだらなんか勝手に同期を始めて、「中止」をクリックしたらデータが全部「その他」になってた……

だからこれからまたバックアップしておいたデータをブチ込んで、編集しないといけないじゃないですかヤダー……！！！！

巧「荒れんなよ。つたく、たかが音楽データだろ？それに元は取っ  
といてあんなら……」

曲データ約1400曲（ドラマCD含む。内、約700曲が曲。約  
400がBGM）を全部プレイリストに分け、曲順を並び替えな  
ければならないんですよ？

巧「おおう……」

曲だけでも9G……！！

ビデオも入ってたから全部合わせて56Gですよ!?

めんどくさいったらありやしねえ

巧「まあ・・・がんばれや」

おう

とまあまたbattleでしたが・・・

巧「発音にいいなおい」

あのバトル、イメージしていたのは完璧にFF7ACのバイク戦です。

なんで彼らはあんなに宮中で流れるんでしょうね?って言うのは前にも書いた気がする。

そんな感じでイメージしていただけると幸いです。

今回のトンネルも何かをくりぬいて、というよりはチューブ状のハイウェイのようなものだと思ってくれれば・・・

巧「誰か絵を書いてくれればいいんじゃないの?」

書けん。

棒人間が精一杯じゃ。

ちなみに、ディエンドコンプリートフォームは今回初めて出しましたが。出てきたライダーはお分かりでしょうか？

あの効果音順に……

G4、リュウガ、オーガ、グレイブ、歌舞鬼、コーカサス、アーク、エターナルです。

エターナルに関しては勝手な想像なのですが、ディケイドの方も電王が更新（ライナーから超クライマックスに）されていたので、こうしました。

一瞬「この場合はコアじゃないのか？」とも思いましたがエターナルで行きました……！

かっこいいもん……！嫌いじゃないわよ……！

巧「おっしゃるとーりだわー（棒読み）」

さて・・・iPodの編集が終わったらラジオでも書こうか次話を  
書こうか・・・

巧「次回、ディエンドの最高の攻撃に一体時風は・・・？」  
ではまた次回

リスト残り

長門有希  
クラウド・ストライフ  
海東大樹  
フェイト・T・ハラオウン

コンディション

左腕使用不可。

体力値：53%



## 最終戦、最後の一人

ディエンドの周囲から八人のライダーが消え、彼一人だけが崩れたトンネルを見ていた。

ここもまた入る前と同じように、左右が壁ではなく鉄骨の鉄橋。

終わったはず。

だが、このジットリとした嫌な感じは何か。

6592

目の前の瓦礫。

ただの残骸にすぎないその中から、いまだに途切れぬ敵意があふれ出てきていた。

それに

ガラッ……

攻撃をぎりぎり回避したはずのフェイトと長門がない。

「!?!」

ディエンドがディエンドライバーを握り、驚愕する。

瓦礫の中から時風が立ち上がってきたのだ。

その右手にはブスブスと煙を上げて焼けている「何か」を握っていた。

おそらくはその「何か」を盾にして攻撃をしのいだのだろう。しかし、それでもダメージは通っており、頭からは血を流し、全身からは擦過傷が見え、口は切ったのか吐血なのかはわからないが血

の跡が残っていた。

「まさかあれを耐えきるとはね……！！！」

「小賢しいぞ、海東。インビジって逃げておけばいいんだよ、お前は」

「……確かにそれは考えたさ」

時風の言葉に、海東が応えた。

そう、彼はやるうと思えばいつものように引っ掻き回してはインビジブルのカードで逃げることもできた。

だが

「だけどね、君は前に言ったんじゃなかったかい？」

「あん？」

「倒すことより、守ることの方がはるかに難しい。それこそ強さ、ってね。弱いのはシャクだから僕もやってみただけど……いまでは皆を守りたいと思っている。もちろん、自分が一番なのは変わらないな

いけど」

「……上等」

「だから危なくなるまでは、君を倒すためにいろいろやらせてもらおう」

《ATTACK RIDE      BLAST!!》

ディエンドがカードを装填し、数十発もの弾丸が時風へと襲いかかる。

その弾丸をすべて右手で握っているそれで弾き飛ばし、接近して行く時風。

そして、ディエンドが時風の握っているものを見てギョツとした。

最初、握っているのは瓦礫か何かなのかと思った。それを盾にして  
凌いでいたものだとばかり思っていた。

だが、接近して初めて分かった。

これは人だ。

しかも、こんな消し炭のような状態でもまだ再生しようとしている  
ようで、再生したてでもろい肉体がブラストの弾丸ではじけ飛んで  
行っていた。

「ツツ！？」

それを見ては銃弾など撃てない。  
ディエンドが時風の攻撃を避けながら、ディエンドライバーで殴っ  
ていく。

と、蒔風の後方頭上にフェイトが現れ、その首を狙ってバルディッシュサイズフォームを振るった。

その左足は怪我をしており、血でポロポロになっていた。

おそらくは回避しようとした瞬間、蒔風が掴んで引きとめたのだろう。

蒔風が何をつかんで彼女を止めたのかは、わかりきっている。

その右腕に握られているモノがそれだ……

蒔風は右手に握ったそれをフェイトに突き出し、その鎌を寸前で止めさせた。

「お前……ッッ……!!」

「やらんのか？ならおれがやるっ」

蒔風がそう言ってグシャリ、と非常に耳障りで嫌な、炭を握り潰し

たよつな音がし、その「人」の首が握りしめられもろく崩れた。

直後、その体が光と変わって消え去り、それが長門の姿の写ったカードへと変化する。

「有希さん!!!」

「厄介な長門やれてよかった。礼を言っとくぞ」

「お前……!!!」

その言葉に、フェイトがバルディッシュからハーケンセイバーを放ち、それとともに飛び出してきて蒔風へと自身も切り掛かる。

計六発のハーケンセイバーと、フェイト自身とで計七つの斬撃が蒔風へと迫る。

(掛け値なしの七発同時斬撃!!!片腕じゃ防ぎも弾けもしない。躲

しても大樹さんが狙い撃つてくれる。さあ・・・)

「終わり・・・だ・・・!!!」

その考えのもとに、フェイトが蒔風へと突っ込んだ。フェイトの後方ではディエンドがファイナルアタックライドのカードをディエンドライバーに装填して準備をしていた。

彼女の考えは正しい。

今の蒔風にはこれを防ごうにも、フェイト自身の攻撃は受け切れな  
い。  
うまく弾き、流したとしても、同様にフェイトの攻撃には弾き返さ  
れてしまうし、そうして体がはみ出た瞬間にディエンドに撃ち抜か  
れるだろう。

だからと言って最初から回避などしたら当然ディエンドに撃たれる  
し、そもそもそんな大きな動作では下手をしたらフェイトにだって  
切り捨てられるかもしれない。



そう、彼女の考えは正しいし、十人に聞いたら十人は「倒せる」と答えただろう。

だがそれは、そこに「相手が時風だったら？」という項目がなければ、だが。

この男に、「決死」はない。

それに、あくまで死に対してだけだが「覚悟」もない。

だから、「やる」と思った瞬間にはその行動がとれるのだ。

たとえそれが、未来を無視した行動であっても、だ。

ドドドドドドドド、ザシユッ……………

想像よりもはるかに静かな音と主に、フェイトが蒔風に突っ込んだ。

しかし、おかしい。

剣を打ちすえた音もしない。

回避し、受け流したのか？  
違う、それならば地面に突き刺さったコンクリートが破壊された音がするはずだ。

回避はしていない。

ならば、導き出される答えは一つ。

「え……？」

「ちょっと……驚くな……覚悟の強さを、見せてくれよ」

「そんな……なっ!？」

ゴゴッ!!

直後、時風の右拳にブウン、と絶光の光が宿り、光速で拳が振るわれてフェイトを撃ちすえた。

「ガはっ!!」

「……」

フェイトの左腕上腕に蒔風の拳が叩きこまれ、そのまま地面に叩きつけられる。

地面との板挟みに、彼女の内臓が圧迫されて地面に亀裂が入った。

「やめる!!!」

と、そこに銃弾を放つデイエンドだが、蒔風が身体に突き刺さった刃でそれを器用にはじいた。

フェイトが地面に倒されて始めて見えた、蒔風の姿。

背中に三つ

左腕に二つ

左肩に一つ

それぞれにハーケンセイバーの刃が

そして、バルディッシュが右肩に突き刺さった状態で、蒔風は立っていた。

そう、彼は最初からなにも考えていなかった。

避ける？

受ける？

耐える？

笑わせる。そんな物に意味はない。

そこに必要だったのは、ただ目の前の相手を叩き伏せるこの腕があればいい。

そこに飛び込んでくるのなら、喜んで受け入れようじゃないか

蒔風の身体から、フェイトへダメージを与えたことでハーケンセイバーが消える。

身体から血が流れ出すが、この程度の出血ならまだ翼人は動ける。

《ワールド!!!》

「な!?!」

「に……!？」

と、そこであの音声が流れる。

蒔風の右腕は、フエイトを地面に押し当てているので見えないが、何やらもぞもぞと動いていた。

「ばかな……あのメモリは探偵君が確かに……!？」

その事実には驚愕するディエンド。  
それを無視し、蒔風は上空を見上げ視線だけをディエンドへと向けた。

「落ちよ……」

「!？」



「刃っ！！！」

「クッっ……！！！！……え？なににも……（ドスッ）……  
か……は……？」

蒔風のその言動から、おそらく真上から刃が落ちてくる　つまり  
はアーチャーの力か何かだろうと思ったディエンドが、咄嗟に上空  
を見上げた。

しかし、その先にはなにもなかった。

直後、胸に重い衝撃と、鋭利な痛みが走る。

間抜けな声を出し、自分の胸を見るとそこには「獅子」が突き刺さ  
っていて、蒔風はフェイトの背中に座り、腕を拘束して封じ込めて  
いたのだ。

その瞬間、ディエンドは後悔した。

たとえ一瞬だったとしても、この男から目を逸らした自分の行動を。



その時風の言葉にフェイトが嘆き、悲痛な声を上げ、更にそこに怒気を込めてなおも方向し、背中に乗る時風を睨みつけた。

「お前ツ……は……!!!!」

「最低、か？」

「それ以下だ……この犯罪者が……!!!!」

「皆言っただらろ？俺は一級品の暗殺者アサシンだ……ってな」

「ゴキッ!!!!!」

そうして、時風がフェイトをカードへと消す。

そして

ヴォオン………

「来たか」

「お前……!!!!」

そして、ようやく合流することに成功したクラウドは、その光景を  
目の当たりにして絶句した。

もはや、残っているのは自分だけ。

全員だ。

自分を残して、全ての者がやられてしまった。

「来いよ。終わらせるんだろっ？」

「……………!!オ……オ……………」

「おめ……………」



そのクラウドと共に時風が押し出され、そのままハイウェイから落下して行った。

落下先は、森。

上を通るハイウェイのせいで、所々に影が射し、それがこの森の鬱<sup>うつ</sup>蒼感<sup>そうかん</sup>を醸し出していた。

クラウドが無言で大剣のすべてを組み上げ、一つにして握る。

それに応じ、時風は風斬車に組み上げた「天地陰陽」を握って静か

に見る。

「オレが最後の「EARTH」メンバーになってしまった……」

「……………」

「だから……だからオレがお前を倒す!!!」

「……………御託はいい……………お前、オレを倒したいんだろ? えエ!  
! ?……………来いよ……………」

そういつて、男二人が睨みあい。



その剣がぶつかり合って最期の闘いが始まった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 最終戦、最後の一人（後書き）

ついにここまで来ました・・・！！！！

次回で、全ての戦いが終わります。

そこであらかじめ言っておきましょう。

次話の戦闘は非常に短いです。

力ある者同士の戦闘は、本当に一瞬で終わるといってもいい。

やっと冒頭が続いた・・・！！！！

次回はもしかしたら、明日に更新できるかも・・・？

次回、戦闘終了。そして・・・

リスト残り

クラウド・ストライフ

コンディション

左腕使用不可。

体力値：36%

背中に三つ

左腕に二つ

左肩に一つ

右肩に一つ、刃の刺突痕

## 終結 破滅

ドゴオッ！！！！

「げフツ……が……」

「どうした……その程度か！！！」

クラウドが剣を構え、地面に倒れる時風を睨みつける。

それに対し時風は、「山」を突き立ててそれを杖のようにして立ち上がるうと膝を起こした。

周囲には時風の十五天帝の剣が散っており、すでに打ち払われてしまったものであることが分かる。

此処で戦いを始めた時すでに、蒔風にはクラウドと打ち合うだけの力など残ってはいなかった。

ぼたぼたと血を流し、それでもクラウドの攻撃を必死に回避していく蒔風。

もう膝も満足に立たない。

気を緩めれば剣を落としてしまいそうだ。

背中が痛い。

腕が痛い。

腹が痛い。

首が痛い。

頭が痛い。

足が痛い。

筋肉が呻く。

骨が軋む。

拳が震える。

膝が唾う。

地面がグラつく。  
空が歪む。  
視界が捻れる。  
意識が途切れる。

そして何より、胸が締め付けられたようになり、そこに何かを突き刺したくなる。

「ッ……は……ハア……ウあ……」

クラウドの攻撃は大振りだ。  
しかし、大振りだからといって簡単に回避できるわけではない。

例えば

クラウドが剣を振って時風に斬りかかるとしよう。

無論、それは振りかぶってからの攻撃である。

彼の持つ剣が大剣なのだから、それは仕方のないことだ。

そして、大振りという攻撃は強力だが、あまりにも簡単に見切られるものだという事は、説明するまでもなく理解できよう。

だが、この男の攻撃はそんな簡単な、一定枠に収まるような代物ではない。

そう、例えば

その大振りから降り降ろされるまでの動作が、全快状態の時風の拳と同じ速度だったらどうだろうか。

ドゴッ！！！！

「おグッ・・・ガッ・・・ううオ・・・ア・・・」

そうして、時風がその攻撃を紙一重に回避するが、勢いに引っ掛けられてまた剣が弾け飛んだ。

すでにこれで十一本目。

速くてあと二回、長く持つても、あと十回も攻撃されれば彼は終わるだろう。

二本はクラウドが所持しているので、十五天帝は揃っていないのだ。

と、そこにクラウドが剣を突き出しての突進をかける。

地面を滑るように一直線に突っ込んだ彼を、時風が剣の背で受け流し回避するが、その衝撃に背中 of 皮膚が裂けて血液が噴き出した。



そして、また剣が飛んで行った。

後一回。

それだけで蒔風は終わる。

「ゼツ・・・ゼツ・・・ゼツ・・・うプツ・・・ゲホゲホツ！！！！・・・」

「舜・・・」

「・・・」

もう終わりというところで、クラウドが剣をゆっくりと振って構えながら、蒔風へと声をかけた。

今の蒔風は本当にボロボロで、この声が聞こえているかもわからない。

しかし、それでも訊かないわけにはいかなかった。

これできっと、最後だから。

「なぜ……こんなことをしたんだ……」

「……」

「お前は……！！全てを救うんじゃないのか……！！」

「……み……」

「？」

「もう・・・疲れたよ・・・」

「なに・・・？」

「速く・・・終わらせようよ・・・なあ・・・」

「・・・」

「クラウドオ！！！！」

そうして、時風がクラウドへと疾走した。

いまだこんな力が残っていたのかと驚愕するクラウドだが、時風の勢いはどう見ても弱々しい。

こんな状況から動いた、という事に驚いただけで、その勢い自体はたいしたものではないのだ。

「……ハアあつ！……！」

ズツ、ドンツ！！！！

その時風へと向かって、クラウドが剣に気を込め、地面に叩きつけて剣気を放つ「破暁撃」を放った。

それが一瞬の速度を以って時風と衝突し爆発、時風を空中に跳ねあげさせる。

「オ……あ……」

「フツ！！……！」

その時風へと飛び上がり、クラウドが合体剣を解除し周囲の宙にはさまく。

しかし、いつもと違う事がある。

クラウドの身体に、魔晄の青白い光が灯った。  
それはいつものことだ。それはいい。

だが、クラウドがはじき出した剣は時風を360度囲むように展開され、更にはその剣には、まるで分身したかのように魔晄で形作られたクラウドが着いて行っていた。

そして

「ハアアツツツツツ!!!」

各クラウドが己の剣を握って時風へと突っ込み、同時にそれぞれ十

五撃斬り込んだ。

本来の超究武神覇斬と、そのVer.5を合わせたようなその技が、対象を一瞬で切り刻んでいく。

ゴォッ！と、一連の攻撃を終えてクラウドがその剣撃の中心から抜け出し、空中で振り向くことなく、その中心（おそらくは切られた蒔風がいるのだろう）を背にし、止まる。

彼の手にファースト剣が残され、分身が消え、地面に残りの剣が突き刺さって行く。

確実に斬った

彼の手には確かな手応えがあった。

確かに彼の剣には血液が付着しており、その手には斬ったという確かな感触が残っている。

そうして一瞬目を閉じた後に、自分が切った後を振り返ってみた。

その瞬間

ポフッ！！！！ブワアアアア……………

「！？ブツ……………これは……………！？」

突如、クラウドの視界を一気に深紅が覆い尽くし、彼自身を覆い尽くした。

それは真っ赤な霧だった。

全身をジツトリと濡らし、気持ち悪く張り付いて、即座に乾いてくる。

そして、それは存分に鉄の匂いを含んでおり、彼の鼻を衝いた。

「まさ……ガッ!?!」

「おわりぶおあり……だ……あ……」



クラウドの喉を潰したような声と、時風のくぐもった声が聞こえてきた。

否、「ような」ではない。

その赤い霧の中、時風がクラウドの喉笛に喰らい付き、ブチブチと引きちぎっていた。

更にはその頭部に右腕を押し当て、噛みつきながら首の骨をも砕く。

確かに、時風に対して刃は通っていた。

しかしそれは、彼の「一部分」のみだったが。

そして、肉食獣が獲物をしとめるかのように時風はクラウドを仕留めていた。

が、そこで倒れるようなクラウドでもなかった。

翼人はこれでは倒れない。

しかし、時風はクラウドに抱きつき身体を捻った。

即座にクラウドの腰からゴキボキと重い音が鳴り、背骨が砕けた。

その捻りで肋骨が内臓を傷つけ、吐血するクラウド。

二人が地面に落ちる。

が、更に時風は有らん限りの力で、まるで全身の血を絞り取るかのようにクラウドを締め上げた。

クラウドは抵抗するものの、血が一気に失われ、意識が薄れ、そして

ドンッ！！！！！

消えた。

時風が残った唯一の腕で、そのカードを拾い上げる。

「一級の暗殺者……ね……」

フウ………

「そんな奴、この世に存在するはずねえだろ」

彼に、左腕は無かった。

上空の霧はすでに落ち、地面をドス黒く染め上げている。

それは全て、つい一分前までは彼の左腕だったものだ。

「はア……は……はは……まあ……終わった……終わらせた……」

左腕の斬り口を布で縛って止血する。

そして時風がケタケタと笑いながら、右腕を広げて上空を仰ぎ見、狂ったように声を上げた。

「やった!!やったぞ!!!これでいい……これでいいぞ……  
!……!」

そうして、懐中時計を取り出して、その針を見る。

もうほとんど頂点だ。  
あと一度もない角度に迫っている。

「間に合った……ハア……ハア……間に合ったぞ……あ  
が……」

その時計を投げ捨て、狂気に取りつかれたように笑う蒔風が、どこともなく足をふらつかせて進む。

しかし、すぐに倒れ込んで木に寄りかかってしまった。

だが、それでも蒔風は嗤っていた。

「さあ……はじまるぜ……ここからだ!!!来いよ……  
…この瞬間のために、存分に練って来てやったんだからな……」

蒔風が気から手を放し、自分の足で立つ。

ガクガクと震えながら、メトロノームのように揺れながら、蒔風が上空を仰ぎ見た。

「かかってこいよ 世界」

直後、地面に捨てられた時計の針が頂点を指した。

そして、時風の身体がビクンと揺れ、ガクリと崩れ、そのままの表情で倒れた。

「

!!!!!!」

言葉にならない悲鳴が上がり、一人の男が誰もいない森をのたうちまわる。

彼の心に、「総て」が押し掛かっていた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



## 終結 破滅（後書き）

戦闘が終了しました。

一体ここからどうなるのか。

彼にのしかかってきたモノはなんだったのか。

そのすべてはまた次話に

次回は解説編！！！！

これまでの事件の真実。  
いったい何があったのか……

ではまた次回

リスト残り

L  
o  
s  
t  
  
H  
e  
r  
o  
s  
.  
.  
.  
.

## その時世界で起こっていたこと（前書き）

今回の説明BGMは「生まれ変わった新しい生命」です。  
クラナドですね。このタイトルでyoutube検索すればでて  
くると思います。



メンバーが転がっていたのだ。

「え？あれ？」

「重い重い！！」

「ふええ〜！だ、誰かおしり触ってるよお〜！！」

「ふむ、いい感触だ」

「ぐええ」

.....

「なのはママ、フェイトママ・・・ほかのみんなもなにしてるの？」

「え？」

「ヴィヴィ・・・オ？」





「え？なんでなんで！？」

「いったい何があったってんだよ！？」

困惑する一同。

モモタロスがハナに聞き寄るが拳に沈められ、床に倒れた。

彼女の話では、突如として扉の隙間からカードが滑り込んできて、光ったと思ったらいきなりみんなが現れたそうだ。

「それってどういう……」

「と、いうか……僕らがこうやって戻ってきた、ってことは……」

「……誰かがあのバカたれをブチノメシたんか！？」

「いいえ。あのリストにあった者は全員やられましたねえ。凄まじい人です」



その言葉に、ハナが口を開こうとしたが、その前にチャーハンを食べているオーナーが答えてしまう。

そこでハナがオーナーに詰め寄って、聞いた。

「オーナー。蒔風さんと何か話していましたよね？」

「ええ」

「なにか・・・知っているんですか？」

今まで、こうして何度も聞いてきた。

だが、そのたびに彼は答えてはくれなかったのだ。

しかし、こうして終わった今なら教えてくれるかもしれない。



先に言うと、「時間」と「世界」はかなり密接な関係にある。

完全なる別世界でなくとも、パラレルという形で時間は世界を無数に作る。

例えばの話

一人の男が、ある行動 仮にAとしよう を行ったとする。

その結果、それに見合った現象が起こる。

だが、その行動Aがもし、世界を分岐するファクターだったら？

その際、もし別の行動をとっていたら？

ここでAではなく、Bの行動をとればそれに即した世界に変わる。これだけならば、今までの戦いで電王も経験してきたことだ。

だったらもし、AとB、両方の行動をとったら？

結果だけをいえば単純な話、Aの結果とBの結果が同時に起こるだけだ。

事象のダブルブッキングだと思えばいい。

そして、今回のそれはこの事象に非常に近い。

世界が一つになった。

それによって、物語も重なった。

ものがたり ダブルブッキング  
事象の重なり

結果が先に来てしまったが、結果は同じだ。

だったら、そのために経過がなければならぬ。

その経過が、一斉にのしかかるのだ。

「経過が・・・のしかかる？」

「この世界は確か28の世界が融合したもの・・・一体その何がのしかかるのかは・・・わかりませんがねえ・・・」

何が来るのかはわからない。

しかし、それが世界の何かならば「28」という数字は脅威だ。

「一体・・・何がですか？」

「わかりません・・・わかりませんが・・・あ」

と、そこでチャーハンに刺さっていた旗が倒れ、頼に手の甲を当てておどけた後、ステッキを持ってオーナーが立ち上がった。

「わかるであろう人物は・・・管理者のアリスさんだけでしょうねえ・・・わかるっかなあ・・・」

と、最後に少しだけスキップしながら、食堂車から出ていくオーナー！。

その話を聞いて、良太郎は頭を振った。

わからない・・・

自分たちは・・・守られたとも言つのか？



子に座って外を見ながら、振り返らずに聞き、そして黙った。

「教えてください．．．一体何があったんですか!？」

「一乃、舜の部屋には誰も．．．あ．．．」

と、そこに理樹も入ってくる。

部屋の中には三人のみだ。ほかのメンバーは部屋の外で話を聞いている。

「．．．．．」

「黙ってないでください．．．教えてください」

「．．．．．あなた達がいると言う事は．．．舜はやり遂げたようですね．．．」

「そのまま．．．なんにも言わない気なの?そんな事で舜が．．．」



「話せるのならば話します。しかし、彼はすべてを背負うと言った。私は管理者ですが、もはやこの世界の一員なんです。彼の意志を・・・」

「だったら！！舜の意志をしっかりと僕らに伝えるべきだ！！」

「そうだな・・・もしそれであいつがあなたに突っかかるなら、オレらがかばってやる。だから・・・」

「しかし・・・」

「・・・こうして・・・敵になって戦ったけど・・・」

「えっ？」

「僕らはまだ、舜の事を「舜」って・・・呼びかけるように言えるんだ・・・でも、面と向かっては言えない」

「それは・・・」

「敵だったから、しょうがないよね・・・でも、いいの？もし話してくれれば、僕らは知ることができる。機会を与えてくれれば、僕はまた、舜を呼べるんだ」

「・・・お願いします・・・教えてください・・・舜に・・・いえ、世界に一体何があったんですか？」

「・・・」

「時風舜と言う魂を！！これ以上一人にさせたくないのはあなたも同じでしょー！！！！」

「ッ！・・・わかりました・・・では。お話ししましょう」

世界に何があり、彼が何をしたのか・・・を



それで困った者はいない。

しかし、困ったモノはあった。

「世界」というのは、自分の中で起こった物語を他世界に発している。

それを受け取って、その他世界で「世界」は様々な媒体で「物語」となって知られていくのだ。

そして、世界には少なくとも一名、もしくは複数名の最主要人物、すなわち主人公がいる。

その人物は、各世界が定めた人物。  
しかし、今回それが一気に集まった。

全員をそこに当てはめるのは無理だ。

クラス内でグループ分けされ、そこでせっかくリーダーを決めたの

に、クラスで一纏めにされ、誰をリーダーにすればいいのかわからなくなってしまう様に、世界もそうだったからだ。

世界は困惑した。

一体誰が、この世界の最主要人物なのか、と

「世界の意志」と「管理者」は別物だ。  
それぞれに意志があり、前者は合理的で、自身が存在すればいいという考えだ。

世界は、選定を行うことにした。

主人公

即ち、運命に立ち向かう者

即ち、自分に納得のいく者

即ち、多くの思いを抱えた者

即ち、多くの変動を目の当たりにしてきた者

全てがそうであるわけではない。

しかし、ほとんどの者がそうだろう。

そして、彼らはそれに耐え、打ち勝ち、世界を生き抜いてきた。

だったら、それに耐えられるのがこの世界の主人公だ。

全ての者に、それをぶつけよう。  
全ての世界の、全ての物語の、主人公たちが経験してきた喜怒哀楽を。

彼らは一度耐えた者。

ならば、今回も耐えられたであろう者がこの世界の主人公だ。

ただし、世界に加減などない。

どんなにボロボロになっても、彼を世界のために戦いに駆り出して行ったように、「世界」を「自身」の存在を守り、確立させるためならばそこに感情を挟まない。そんな物はそもそもない。

28の世界 実際には何度も行った世界があるので、30を超える物語。

その中での喜び、怒り、哀しみ、楽しみ 全てをぶつけようとしたのだ。

では、誰に試そうか？

ちよつどよく過去に、世界に繋がり、力を発揮したことが何度かあった。

WORLD LINK

だったらそこに名を連ねる人物は間違いなく「そういったもの」に耐えられる人物だ。

だからこそ、この世界に来た人物のみがあのだリストにあった。



順番にやっでは身構えられるかもしれない。

物語は突然なように、これもいきなり始めねば。

全員一斉にそれをのしかけなければ。

そうして、それを整えるのにかかった時間が時風の持っていた時計が示したカウントダウン。

彼はその話を、彼女から聞いたのだ。

もともとこの世界は「the days」だった。  
その基盤になった世界の最主要だったからか、彼がその話を聞いても選別は行われなかった。

しかし、ほかの者が知れば、身構えられるだろうと思つ世界は途中で何でも選別を始める。

だから、誰にも言えなかった。

そうして、彼は仕事に取り掛かったのだ。

大シヨツカーの跡から「破壊機構」を取り出し、該当人物をカードに封印して行った。

そこに封印しておけば、世界との関わりを断てる。  
選別を免れる。

しかも、戻った時は五体満足だ。

皆戻る。

そうして起こったのが、今回の事件だった。

「じゃあ……なんであんなひどいことをしたんだ……」

「あの破壊機構は敵意のない相手には封印を発動できないんです。かつてディケイドがライダートーナメントで戦った時は封印できませんでしたが、その後のライダー大戦では出来ましたから」

「敵意」がトリガーだった……だからあんな……憎まれるような戦法を……」

「それは違います」

「え？」

「彼は……決して最強などではありません。あのような卑怯な戦法を最も得意とし、そしてそうでなければ勝てない男です」

「でも！！そうじゃなくても……」

「十分に強い？それは彼が、なにも恐れていないから。死を恐れず、先を見据えない戦いをするからです。一流の暗殺者？そんなものはありません。彼曰く、そんな人物は存在しません。なぜなら、「殺し」という手段は、それだけで三流だからです」

「……」

「戦いの前に、彼は話してくれました……」

『やっぱ……クラウドと模擬戦やったけど……これはちゃんと敵にならないとダメみたいだな』

『でも……本当にやるんですか……？あなたの心は……』

『心には「蓋」をする。理想的な「悪役」を作り出す。それにそもそも、オレにはそういった戦いの方が似合ってるしな。それに、「選別」も蓋を何層も重ねれば……即興品でもなんとか行けるかもな』

『それで・・・あなたの「本心」は耐えられるんですか？』

『・・・たぶん何回か悪役用の「蓋」は壊れる。ま、そのたびに  
練るさ。ずっと続くような蓋なんか、この人格の一つしかないから』

『あなたは・・・強いですね』

『・・・強い・・・ねえ・・・そんなんじゃないさ・・・  
俺はただ・・・』

「あの瞬間まで、彼がどんな人物か私は・・・私は忘れていまし

た

「え？」

「彼はね……”no Name”の住人なんですよ」

「その話は……前から聞いていたけど……」

「完全な”no Name”に、争いが起こるとしても？戦いの経験があつたとしても？確かに、ちょっととしたイザコザはあつたでしょう。しかし、それだけです」

「いわば、こなたさんたちと同じなんですよ。理樹さんや、一刀さんのように何かに立ち向かって勝ってきた人物なんかじゃないんです。本当に、そこら辺を歩いているような一般人よりも、ほんの少し強いような普通の青年なんですよ……？私はその人を……素質があると言うだけで力を与え、戦い人間に仕立て上げたのです。それなのに……彼は私に、ありがとうって……言ってくれました……」  
「オレの憧れたちを、守りきる事ができる。あいつら

みたいになりたかった」……って」

「？」

「死を恐れない」……そんな人間がいて、歪まないでも  
思いますか？そんなことはありません。そんなことがあつては、生  
きる氣力をなくし、先もなく墮落し、最後には何もかもがどうでも  
よくなつて……もしかしたら周囲を巻き込む破滅へと迷いこむ  
かもしれません。ですが、彼はそれでも歪まなかった」

「なんで……」

「それは「あなた達」がいたからですよ。世界を旅する前、彼はあ  
なた達の作品をすべて知っていました。そして、憧れたのです。夢  
見たのです。「自分もあんな風に、皆を救いたい」と。だから彼は  
あそこまでまっとうな人間に、これまで歪むことなく生きてこれた。  
彼は言っていました。「死を恐れない、なんてのが強さだなんて、  
オレは嫌だ。みんなみんな死を恐れ、それでも必死に抗い頑張つて  
ハッピーエンドに持って行ったんだ。それが強さだつて、オレはそ  
うありたかった」……でも、今回彼は……」



「そうだったからこそ・・・僕らに勝った・・・勝ててしまった・・・」

「そうなるかもしれないことは、彼もよく知っていました。でも、その結果がわかっていながら、実行しました。彼は嫌だったんです。世界の理不尽で、自分の憧れがいなくなってしまうのが。あなた達は彼を英雄だ、最強だと思っているかもしれませんが、とんでもないです。」

彼の正義を作り、そして、ここまで歩ませてきた根源は、間違いなくあなた方なんですから。あなた方が、彼にとっての英雄ヒーローだったんですよ・・・」

「そして、全てが終わって・・・僕らは戻された・・・」

「平穏な・・・もう何も起こらない・・・」

「そう、世界の選別は終わりました。これで本当に、この世界は安

定したんです」

その一連の話で、彼ら全員は理解した。

自分たちは守られていた。

しかし、彼は英雄ではなかった。

彼は、憧れだった自分のヒーローを守った、ただのファンだった。

そんな一介の男が、なまじすべてを救えるような力を手に入れて、  
そして必死になって守ったのだ。

だから、彼はあんなにも「主人公」をやっつけてこれていた。

当然だ。

彼はその憧れ達を元に、憧れ達と共に戦ったのだから。

そして、彼は………

「それで……舜は？」

「そうだ……その選別が終わって、舜はどうしたんだ？」

「……」

「まさか……か……」

「彼はWORLD LINKの発動者です。当然、リストにはその名が連ねられています……」

「まさか……そんな……!!」

理樹と一刀が、外へと飛び出す。

部屋にはアリスが一人、残されていた。

「この世界に戻ってきたとき、あなたは思い出したんでしょうね。旅に出る前に消された、忘れていた全ての物語を……だから、その辛さを知っている。そのすべてを、仕掛けるわけにはいかなかった……だから……」

「"no Name"、いや、アリスよ」

「え？」

「

数時間後

「EARTH」本部の前に、数人の手によって、一人の男が運び込まれてきた。

その男には左腕がなく、身体もスタボロだった。

しかし、それ以上にひどかったのが、彼の倒れていた森だ。

周囲にはおおよそ人間から吐き出されるモノ全てがまき散らされており、そこから少し離れた岩に、彼は座り込んで寄りかかっていた。

目は虚ろで、口は半開き。

その上体はまさに、心が死んだ、というのが相応しい。

彼は死体のように動かず、それでいて信じられないほどに軽かった。

顔には涙や嘔吐の跡があり、全身の服は自分で引きちぎったのかボロボロで、さらはそのまま引っ掻いたのか、身体中にもひっかき傷があった。

誰もが駆け寄った。

しかし、彼は答えない。

まるで人形のように止まってしまった彼は、そのまま動くことは無かった。

今回の敵は、世界だった。

世界のために飛んだ翼人は

仲間のために飛び

世界に沈んでプツンと……



きれてしまった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## その時世界で起こっていたこと（後書き）

全ての物語、その重みを全てぶつける。

これからすべてを逃がそうとして、彼はあんなことをしてきたんですね。

ここで「蓋」についての説明を少ししておきましょう。

簡単な説明は「なのはStS」の話で触れましたけど……

本当の彼は、人見知りで、怖がりで、自信などない人物です。

しかし、それではいけないとして無理矢理強い自分像を作り出し、それを「本心」にかぶせてこれまでであったような人物としてふるまってきました。

「死の理解」といったものも、この「蓋」を構築してくみ込まれた思考の一つです。

これは意図してではなく、ある日ふと考えたら至ってしまったものですね。

この「蓋」は彼の・・・どうしよう、中学生くらいにしよう（オイ）、その時に作り出し、それ以来練り込みを繰り返して作り出してきた強固なモノです。

そして今回は、新たに即興の「蓋」を作り出して悪役となりました。更に世界からの衝撃にも、蓋を何層かにして耐えようとしていましたね。すべて砕けましたが。

本来の「蓋」は砕けてません。

これは時風自身が、おそらくは蓋を何層重ねても耐えられるとは思っていなかったからです。

だからこの「蓋」は耐えるのには使わなかったんですね。

即興で作ったものは簡単に碎けるか、消えてしまいます。だから途中で揺らいたことが何度ありましたね。

その「蓋」に、理想のヒーローを描いてきたんです。



おっとネタばれWWW

でもここまで読んだ人はわかっているから問題ないよね!!!

次回、時風の容体、管理者の行方。

そして、今章での第二の事件とは……………？

ではまた次回!!!

## 不日常

「EARTH」本部医務室の奥

そこにある隔離された部屋。壁に大きなガラスがはめ込まれ、そこから中がうかがえる。

そのベッドの上で、時風があれから一週間たった今でも眠り続けていた。

「舜……」

それを見て、廊下からガラスに手を当てているのは星だ。

その廊下にある長椅子では、なのはがすすすつと寝息を立てて眠っていた。

おそろく、ずっと起きていたのだろう。その目の下には隈ができている。

その長椅子の先には、彼女から離れて理樹が座っている。

アリスから事の顛末は聞いたが、実際に彼の口からは何も聞いていないのだ。

それに、今の蒔風ではもしかしたら暴れ出すかもしれない。

翼人が常に一人はここにいる状態を維持している。

「なぜ……目覚めないのか……」

「……僕が経験してきたことは……素晴らしいことだったけど、その分大変なこと、酷いこともあった。それを乗り越えるだけでも必死だったのを、まとめて一発で、しかもそれを30以上も叩き込まれたんだ……当然と言えば当然だ」

そう、そんな衝撃では心が潰れ、容易に死に至るだろう。

こうして生きているだけでもおかしいのだ。





そしてなにも起きず、不気味なほど静かな日常が続いていた。

まるで二人が、この世界を荒らしていた要因だと言わんばかりに。

「アリスさんとの連絡は取れずじまい、か……」

「舜さんがあんなことになってしまって……もしかしたら責任感じてるのかも……」

指令室モニターの前で、一刀と観鈴がのんびりと飲み物を飲みながら話す。

なにもないとはいえ、一応何かが起こってはいないかこうして見ているのだが……やはり何も無いものはない。

無論、事件自体は起こっているのだが、「EARTH」が取り扱うほどの大きなものはない。

その全ては警察や様々な組織で受け持っているようなもので、「EARTH」からも数名が派遣されている。

「静か・・・だね」

「ああ・・・寂しいな」

虚無感は消えない。

.....

「よ……っどー!」

「アぐっ!?!こ、この野郎!!ってアダダダダダ!!」

「わかったわかった!!俺らが悪かった!!降参するからやめろっ  
て!!!」

どこかの次元世界で、理樹と真人と謙吾が、フェイト、ティアナと  
共に逃げていた犯罪者を捕まえていた。

いくつもの次元世界で悪事を働いていたらしいのだが……正  
直言つてこのメンバーで負ける気など皆無だった。

「ありがとね。おかげでこっちは楽できたわ」

「フッ、いって事よ。またこの筋肉が必要になったら呼びな」





そんなある日

「次元震？」

「いや、実際には次元空間でのものではないから……時「空」震って言ったほうがいいのかもしれない」

次元空間でもなく、世界そのものでもない、全くの別空間からの振動が計測されたそうだ。

とはいっても非常に微弱なもので、どこからなのかもわからないものだ。

たとえるのなら（たとえること自体難しいのだが）海の浸透を図っ

ている振動計が、水族館のプールの波を観測したようなものだ。

ようはなんでこんなもの計測したのか、わからないのだ。

そんな計測データを見ながら、はやてと理樹が頭を捻っていた。

「だけど、どこかで何かが起こっているのは確かみたいだね」

「舜君なら何か分かっ取るかもしれないけど……あんなんやか  
らなあ……」

結局、なにもわからずに時間が過ぎていき……

その時は突如としてやってきた







『それでも管理者か！！！』

と、そのとき、「EARTH」ビルを爆破による衝撃が襲い、更に空間を響くような声が聞こえてきた。

その声に応じて、理樹と一刀が外に飛び出す。

ほかのビルにいたメンバーは、すでに外にいた。

その全員が空を見上げている。

そこに、強大なる敵がいた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 不日常（後書き）

短い・・・

タイトルの「不日常」とは、なにも起こることなく、そして何かが欠けている、という事です。

今回また起こった事件・・・

これはかなり短いです。

下手をすると、後三話が二話で終わってしまうかも・・・

ち・・・違っんや！！第一章が長すぎたんや！！

決して二章が短いという事ではあらへん！！！！

でもこれだと四章で1000はさすがに無理かなあ・・・

次回、今回の敵「世界」

ではまた次回！！！！

予測感想が・・・今から怖いっ！！

終末への戦い〜管理者の戦い

「EARTH」本部ビル

そこから外に飛び出した理樹や一刀、メンバーたちが見たのは、上空に立つ巨大な人物たちだった。

「あの人たちは……」

「最終決戦の時に見た人たち……だよな？ たしか……」

『我が名は…… “ライクル”』

『“輝志”』

『“フォルス”』

『…… “LOND”』

『此度の事件で、我らは知った。やはり最重要がこれほどの数、一つの世界にいることは不可能だった』

『混ぜた世界は危険すぎる』

『管理者を一人に統一しなければならない』

『そこで、その女は逃げだしたのだ。出せ』

と、上空にいる各世界区分の管理者たちは一方的にアリスを出せと言ってきた。

が、そんなことを言われても「はいそうですか」と言って出すわけにもいかない。

統一するとはどういうことなのか。  
何故アリスはこんなにも傷ついているのか。

それを知らないうちには、どうすることもできないのだ。



『……返答はどうした』

『黙ってないで、早く出してこい』

しかし、それを聞く前にもこうして彼らは催促してきている。

いったい何のつもりなのか彼らには、こちらの話を最初から聞くなどないようにも見えた。

「待ってください！！彼女は怪我をしています！！そんな彼女を・・・」

『知るか。出せ』

「そんなことはできない！！！！」

『ほう……貴様、まさかこの私に逆らうか？』

「なに？」

『直枝理樹。お前の世界の構成はほとんどが“輝志”で成り立って  
いたな』

「……らしいね」

『私はその管理者だぞ』

「だから僕よりも……上だって言うのか？」

『貴様が生き残ったあの奇蹟は、私によるものでもあるのだぞ？』

「お前……!!!!」

『ふむ……勘違いしているようだから言うっておきましよう。私  
たちは別に、お願いをしているのではないです。私たちは、命じてい

るんですよ。わかっていますか？』

『我々は各構成を管理するもの……お前らのその力、奇蹟、技術、混沌、日常は……全て我らが与えたようなものだ』

「調子に乗るのもいい加減にしなさい！！！！！！！！」

「アリスさん！？」

「だめだ！！あいつらあなたを……」

そういつて中に戻そうとする理樹たちを手で制して、ヨロヨロと出てきながらも姿勢だけは真っ直ぐにして、アリスが四人を見上げて言った。

「我々は「管理」するだけです！！その管理されたものをどう使うかは、彼らの力です！！！！」

『またそれか……』

『何度でもいうが、それは違う。我々が管理しているのだ。我々が与えたと言っても、間違いではあるまい？』

「それは傲慢です……我々はあくまでも「管理者」ですよ!!!? 神にでもなったつもりですか!!!!!」

『そうだな』

「なっ……」

『我らはいわば、神だ。貴様が異端なのだよ、“No name”』

『我らと同じ立場にいらながらも、そちら側を好み、そちら側に属する者よ』

『来い！我々は決めねばなるまい!!!世界を統一する管理……否、

神を決めるのだ！！皆で決めたことだろうが！！！！』

「そのようなことは多数決で決めることではないでしょう！！！！あなたたちは……ただ世界を自分の手中に収めていい気になりただけだ！！！！」

『そうして世界に関わっている貴様も同じではないのか？“No name”』

「ツツ……」

『下手に関わろうとするから、世界は揺れる。内心、お前も思っていただろう』

「ち……ちが……私は……」

『「the days」の最主要を駆り出し、戦いに行かせたのはお前だろうが。いまさらそんな善人ぶったことを言ってるんじゃない』

『自分は何もせず、ただ上に立つだけ。いる場所が変わっただけで・  
・・貴様は我々と所詮は変わらぬよ』

『我ら五人で、最も先に生まれ・・・そして最も罪深き“N O  
name”・・・・最初に消えるのは貴様だ!!!』

「!!!!マズイ!!!!」

「理樹!!!!」

「わかってるよ!!!!」

ゴオン!!!!バライ!!!!!!

叫んだ瞬間、理樹が巨大なバリアを張って“フォルス”の巨大な拳を受け止めた。

しかし、やはりなんと力強いのか。  
その振動から、「EARTH」ビルの窓ガラスは割れたものの、バ  
リアは少し振動しただけで一切退くことはなかった。

『む？逆らうか？』

「アリスさんは……確かに罪を背負っているかもしれない！  
でも……！！！」

「罪を背負おうともせず、ただ君臨することだけを考えているあん  
たたちよりもマシだ！！！」

「そつだ！！！」

「この人は一緒に生きるって言ったんだ！！！」

「お前らみたいな勝手にやってるな奴なんかごめんだ！！！」

理樹と一刀の言葉に、皆が続く。

その声を実に鬱陶しそうに聞く四人の管理者たちだが、その顔からは嘲笑が消えない。

『ふう……まさかあなたたち……私たちに勝とうとでも？』

「アリスさんの敵なら……僕らの敵だ!!」

『まさか戦いになるとでも思っていたのか……愚かな』

瞬間

「え？そんな!!!!」

「うっそだろ……」



理樹のバリアが消えた。

“フォルス”の拳が障害物がなくなって、突っ込んできた。

「うおおー!!!」

「わあああああ!!!」

その攻撃を、アリスを抱えて回避する理樹と一刀だが、その顔は驚愕に満ちていた。

何もしていないのに、「薄緑」たる理樹のバリアが消えた……？

消されたという感覚はない。  
壊されたという感覚もない。

そうまるでその感覚は

こちらから消してしまったかのような……そんな感じがした。

『貴様の世界の大半は“輝志”で構成されていた。貴様自身も、“輝志”なのだ。それを管理すれば……その力、どうにでもできるわ』

「テメエ……!!!!」

『北郷一刀!! 貴様があの世界に行けたのは“輝志”だったか“フオルス”だったか?』

『どちらでもやれるだろ?』

そう言った瞬間、一刀が展開していた何本もの剣が消えた。

そうして、見えない力に押しつぶされる。

見ると、理樹も同じようにへばりついている。

まさか・・・こんな・・・!!!!

まるで存在を抑え込まれたかのようなことをされるだなんて・・・

!!!!

「バルディッシュ!!!!」

『そのデバイスは完璧な“ライクル”だなあ?』

ブシューウウウ・・・

「え？きやあつ！！！！！」

《申し訳ありません、サー。展開不可です》

「そんな・・・あぐつ！！」

そうして、フェイトも抑え込まれる。

が、彼らはそれでも四人にとびかかっていった。  
だが、彼らに通る攻撃など、一つたりともない。

当然だ。

“ライクル” “輝志” “フォルス” “LOND”

このどれにも属さないとすれば、それは世界構築“  
No name” 100%の世界だ。

そんな世界に、彼らと戦うだけの力があるとしてもいつのだろうか？

「み・・みな・・さん！・！・！」

「ひるむな！・！」

「こいつらに・・・世界は渡せない！・！・！」

『鬱陶しいな・・・わざわざ封じずとも、貴様らなんぞ・・・・  
！・？』

と、そこで“フォルス”が背後に迫る巨大な力に振り替える。

“フォルス”は腕を振るい、飛びかかってくるメンバーをまるで蠅を払うかのように落そうとしていた。

その背後から首を狙って、漆黒の翼をはためかせたクラウドが飛び切り掛かっていたのだ。

『チツ・・・この・・・』

『面倒だ。まとめて終われ』

ズシツツ！！！！！

「オゴツ！？」

「う・・・あ・・・！！！」

「い・・・そんな・・・これは・・・」

『お前らが立ち向かってきた「何か」・・・それはすなわち、全て我が“LOND”に通ずる。そうして「立ち向かう力」を持つ以上、貴様らの世界には必ず“LOND”がある。オレに逆らえると思うなよっ。』

そうして、「LOND」によって彼らがまとめて押しつぶされる。

なにも出来ずにだ。

彼らは何もできず、管理者に手も触れずに倒れされた。

『管理者の話に、お前らが口を出すんじゃない』

『ふん……まあこれで邪魔も入らん。さあ、管理者で決めようか』

『その点に関しては感謝するぞ、”LONDD”』

『・・・・・・・・』

そうして、四人がアリスに迫る。

それを見て、数名の人影が「EARTH」の中に走って行った。

向かう先は、ただ一つ。

この状況を打破しうる、最も適任で、最も傷ついた人間の元へと。

t o b e c o n t i n u e d





終末への戦い〜管理者の戦い（後書き）

さて、今回の敵は四人の管理者ですね。

四人に攻撃そのものは普通に通ります。  
しかし、彼らがそう念ずるだけで、そこに属した者はすべてからず無力化される、という者でして……

こらそこ、深く考えないで……！

考えたら負けや……

こまけエコタアいいんだよ……！！

すみません、取り乱しました……

しかし、今回で全員が無力化。  
戦えるのは、あの男のみ。

それ呼びに行ったのは無論、同じく”no Name” 100%  
のあの子たち……流石に全員じゃないですけどww

次回、銀白、最期の戦い

・  
・  
善と為り、悪と為り、どちらに属すること無き主人公の行く末は……

ではまた次回



終末への戦い／立ち上がる者（前書き）

後に

「管理者大戦」と呼ばれた戦い。

実質、その決着をつけたのは一人の翼人。

その者の、最期の戦いを

ここに記す。

薄緑の翼・直枝理樹  
蒼青の翼・北郷一刀 連名

終末への戦い／立ち上がる者

『さて・・・まず一人、確実に消さねばならない奴を消しておこうか』

『”no Name”・・・貴様がいては、多大な障害だから・・・』

だから、最初に彼女が狙われた。  
理由は簡単だ。

『あっちもやっておこうか？』

『それが一番だな。我らでやるのか』

ドドドドッ！！！！！！

” フォルス” の拳と” ライクル” の砲撃がアリスに放たれ  
” LOND” の波動と” 輝志” の掌底波が「EARTH」ビルにブ  
チ込まれた。

「クッ・・・アあっ！！！」

それをバリアで防ぐアリスだが、すでに疲弊しているために弾かれ、  
地面に倒れ込んでしまう。

うつ伏せに倒れ、「EARTH」ビルを見るアリス。

攻撃を叩き込まれた箇所

そこは・・・

ガラリと崩れ、穴の空いたビル。  
せっかく直したのに、また壊された。

その穴を見て、痛快そうに笑う”フォルス”に”ライクル”

しかし



カアッ・・・ボウツツッ!!!

「!!!!!!」

『む?』

『なに?』

その土煙が内側から光り、そこから砲撃が撃ち出されてきた。それを回避する”フォルス”と”ライクル”

その砲撃を見て、アリスに迫った”LOND”と”輝志”も目を向けた。

そこで煙がだんだんと晴れ、その中心に、一人の男が立っていた。

その男は、こなたとかがみに肩を支えられ、息を荒く吐きながら、腕を伸ばして睨みつけていた。

左腕は無い。

そこにプラスチックのカバーのようなものが掛けられていた。

見るからに元気がなく、覇気もなく、しかし、ある感情のみが彼を目覚めさせ、立ち上がらせた。

「最初に……自分の世界を奪われて……」

そこから一歩、男が踏みだす。

「世界を取り戻しても……次に仲間を危険にさらされ……  
奪われかけ……」

ピルの穴から二人と一緒に飛び降りて、地面にふわりと着地した。

「そして・・・また、奪うのか」

こなたとかがみを脇に避難させ、時風が「風」を抜きながら上空の四人を睨みつけた。

「もう・・・させん・・・」

その立ち姿は力強く

「何一つとして奪わせない。失うのはもう……嫌なんだ……  
! ! ! ! ! !」

そして、その自らの力で砕けてしまうのではないかというほどに、  
夢げだった。

『……は……誰かと思えば!! 瀕死の英雄君じゃないか!』

『貴様は先の戦いで片腕を失っている。安定させてくれたことは感謝するが……今は邪魔だ』

蒔風を見て、一瞬はたじろいだものの、管理者たちが蒔風を指さして笑った。

だが、そんな言葉など無視して蒔風が剣を振りかぶる。

「風」を右腕に握り、左側にまで振りかぶって  
に当たるまで振りかぶった。 剣の峰が後首

そんなところで何をやっているのだ。

管理者たちが嗤う。  
指を指す。

そして、”フォルス”の指の先がなくなった。

『は?』

『な!?』

そして直後、”フォルス”の視界が上下でわかれ、左右にずれた。

『な・・・ガアアアああああ!!??』

「腕がなくなった・・・ね」

目から上を失った”フォルス”の肩に、蒔風が立っていた。

ボシユウ……!!!!!!

そしてその”フォルス”の体が、粒子に散って消えた。  
粒子が宙に少し留まり、それが残った四人の管理者へと流れていく。

『バカな……バカな!!!その力は……そもそもお前!  
!なぜ抑制しな……』

ザシッ!!!





と、そうして”ライクル”も粒子と消えて、残った管理者へと流れていく。

「腕がなくなった分・・・速くなったと・・・」

ブオツ!!

「思わない・・・かい!？」

ガァン!!!!!!

『……………思惑通り』

「なに？」

が、そこでこの快進撃は止まる。  
蒔風が次の標的にと、”LOND”に斬りかかったが、腕でそれを防がれ、刃は全く通らなかつた。

『バカな奴らだ……デカけりゃ勝てると言ったらほんとにずっとでかく居やがる』

ブシューウウウウウウウウウウ……………

「こいつ相手にデカイだけじゃいいのだ。全員そろってバカばつか・  
・罪を知らなきゃダメシも知らない、愚か者どもめ」

「?・・・!!!!」

そうして、”LOND”の身体が縮み、蒔風と同じ大きさまでになる。

「だが考えたな。倒された管理者の力がほかの管理者に流れる前に倒せば・・確かに、翼人にとってはたいしたことはない。まあだが、遅かったねエ」

「・・・こそ」

「すでに力は流れた。三人の力のうちの半分は我が手中。半分は”no Name”に流れたが・・あの身体では戦えまい。ま、そうなるようにあらかじめ潰したんだがな」

「お前・・なんのつもりなんだ・・・一体何なんだ・・・」

「管理者”LOND”、それ以上ではない・・・今は、な」

「なに!?!」

ドゴオ!!!!!!!!!!

”LOND”の拳が蒔風の腹部にめり込み、身体がくの字になって蒔風が吹き飛んだ。  
バランスの取れない蒔風はうまく着地することもできず、両足を地面につけてもまた倒れて勢いが殺せずには吹き飛ばす。

「お……ぐ……」

「さて……吸収終了。後は”no Name”を倒しその力をすべて取り込めば、俺は五つの構成要素を持つ絶対なる管理者になれる。そうすれば……」

ほしいモノを手に入れた、と言わんばかりに自分の目の前で両拳を

握りしめる” LOND”

抉れた地面に倒れ込み、ぐったりとした時風にアリスがヨロヨロと駆け寄る。

「大丈夫ですか!!どうしてまたあなたは……」

「出てくるつもりなんてなかった……んだがな……聞こえたんだ。あいつらの声が」

「え?」

「涙ながらに、こなたたちが……な。立ち上がって……言いたくもないような言葉を、涙ながらに叫んで言ったんだ」

そう、時風が目覚めたのは、なにより彼を求めるその声だった。

100%”no Name”であった世界。

そこにいた彼女らは、どの管理者からの干渉も受けずに動くことができた。

しかし、彼女らには何もできない。

戦う事など、できないのだ。

だから、彼に頼るしかなかった。

自分たちと同じように”no Name”出身で、それでいて戦える彼に。

彼女たちも、そうはしたくなかった。

こんなにも疲弊し、いまだに眠り続けていた彼を、また戦いに駆り出すことなどできない。

最初こそ彼の元まで走った彼女らは、彼を目の前にしてなにも声が出なくなつた。

この方法を思いつきはした。  
しかし、実際に彼を目の前にして、そんなこと言えるはずもなかったのだ。

だが、それでも蒔風は「言った」という。

言葉にできなかつたそれを、聞いたといのだ。

しかしそれも当然だ。

彼は「銀白の翼人」  
たとえ眠っていても感じとり、口に出さなくても分かつたからだ。

それほどに大きな「願い」だったからだ。



た・す・け・て

たったその四文字に込められた、シンプルな大きな願い。

それを見逃せるはずはあろうか。

言葉にできなかつたその「願い」は、出さなかつたからこそ押し込まれ、そして強大な力として彼を呼び醒ましたのだった。

だが

「しょうもねーな……こんな体じゃあ……勝てもしない……」

「私が……私が……!!!」

「やめとけアリス……四人の攻撃に逃げ惑って、あんたは戦える状態じゃない。ここは……」

ぐっ……ググッ……

「この世界の……主人公に……任せてくれや……」

彼が立ち上がる。

そう、それは騎士のようであった。

後ろせなかに居るのは、アリスだけではない。

彼の背中に背負われているのは、この世界だった。

事実、一度は背負ったのだ。

彼は、それを守らねばならない。

心が摩耗した

身体がボロボロ

片腕がない

敵が強大

仲間はやられて動けない

関係などあるものか

守りたいものがある

敵がいる

そして、立ち上がるだけの力がある

それ以外に理由などない。

彼の理念は、ここまでも、今までも、これから

何一つとして変わらない。

「救える者は、根こそぎ救う……」

それは、味方も、敵も、世界ですらも

それは、絶望、地獄、虚構から

たとえ応じてくれようとも、たとえ応じてくれなくとも

どんな状況であろうとも、彼はいつだって立ち上がってきた。

いくらでも立ち上がろう。

そこに、希望を持つ者がいる限り。

「まあ……行くぜ……明日の自分に……しっかりと顔向けでき  
るようにな……!」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



終末への戦い／立ち上がる者（後書き）

はいきました！復活です！！

ですが、状況は厳しいです。

いくら彼でも、戦いの場に持ち込む程度でおそらく勝つことは難しいでしょう。

だが・・・それでも・・・

彼はどんなことをしてでも、勝つでしょうね

あと最初の文章でなぜあの二人なのかは、また後々に

次回、時風は戦う。しかし相手は強大だった。

しかしそれでも、それでもまだ・・・

ではまた次回

終末への戦い、総てを賭して、立ち上がる者、(前書き)

後半の復活BGMは「only my railgun」です。

終末への戦い、総てを賭して、立ち上がる者。

メゴツツ！！！！

「ゲ・・・ハアっ！！！！！」

ドオン！！！！

“LOND”の蹴りに、時風の体が吹き飛ぶ。

だが、それでもヨロリと立ち上がって再び斬り掛かっていく時風。

「風林」による斬撃を、硬質化でもしているのかその腕で受け止めて、即座に反撃してくる“LOND”

無論、時風の攻撃だつて入ってはいるし効いてもいる。

だが、あまりにも時風へのダメージが多く、そして相手の回復が早い。

決して再生ではない分確実にダメージは蓄積されているのだろうが、  
いったいどれほどしか効いていないのだろうか。

そうして、首をゴキゴキと鳴らして時風を弾き飛ばした“LOND  
”が、アリスへと歩み寄る。

が、その足が三步も進まないうちに再び時風が掴みかかってその身  
体を投げ飛ばした。

それ自体は難なく着地する“LOND”だが、体制を整えて前を向  
いた瞬間に時風の拳が顔面に突き刺さった。  
さらには腹部に膝蹴り、一回転しながらの後頭部にエルボー、足払  
いをして、宙に浮いたその体を蹴り飛ばす。

「オオオオオオオツッ！！！」

その吹き飛んだ“LOND”目掛けて、時風が「天地」を握りしめ

て突進した。  
腰に構え、体重がすべて乗るようにして、確実にその身体を貫こうと。

ゴッ、ガアッ！！！！

そして“LOND”の着地地点で、爆発とも思えるような土煙を上げて時風が到達した。

おそらくは最初にメンバーが総攻撃した時にひっくり返ってきたのだろう。そこには一台の車がひっくり返っており、時風の突進は“LOND”をそこに張り付けるかのように突っ込んで行っていた。

しかし

「……」

「また距離が空いた・・・やめてくれないか。そういうの」

その切っ先を、“LOND”が指先で抓むようにして止めていた。

それでも押し込もうと力が込められて剣が振るえるが、せいぜいそれで“LOND”の指が一緒に振るえるだけだ。

ドオン！！！

直後、“LOND”が背にしている車が爆発して二人が炎に包まれた。

轟音と共にあたりが炎に包まれ、二人の姿が消える。だが、すぐにその姿は現れてきた。

炎の中から、二人の影。

一人が一人の頭を掴み、ぶらぶらと持ち上げながら炎の中から出たのだ。

そうして出てきた“LOND”が、力なくそこにある時風の体を放り投げて一瞥した。

「よくもそこまで食い下がった。さすがだな。「奴」とあれだけ戦ったことだけはある……フンツッ！！！！」

「ゲツブツツ……オゴツ……ツハ……ゴ、ふ……」



“LOND”の拳が地面に倒れる時風の鳩尾にめり込み、彼を中心としたクレーターを作り出した。

時風の肺から空気が押し出され、口からは空気と一緒に音が漏れてきた。

それはただ単に喉を通って来た際の呼吸音なのか、それとも痛みからくる呻きなのかはわからない。

一撃で沈めた。

攻撃 否、全ての力はすでに、時風を越えている。

時風は確かに疲弊してはいるが、体力自体は万全なのだ。なにせ、さっきまでようは寝ていたのだから。

それを潰し、一撃で止めた。

今、管理者“LOND”以上の力を持つ者はいない。

唯一そうであるうアリスも、体がぼろぼろで戦うことなどできない。

そして、瓦礫に寄りかかり崩れる時風の足元に、“LOND”が立って言葉をつづけた。

「だがまあそれまでだろうよ。そこで見ている。やっと成就する・・・俺がこの世界を管理する。そのためにここまでやってきた・・・長かったぜ・・・俺が唯一の神の者になる！！絶対なる存在に・・・楽しみだぜ・・・どんな世界が出来るかなあ！！！」

「あなたは・・・そのつもりで・・・！？」

その言葉を聞いて、アリスが驚愕する。

この管理者は　　この男は、最初からこのつもりだった。

世界を自分のものにする。

思い通りの箱庭を得ようとしたのだ。

だから、世界が安定してすぐに、ほかの三人を<sup>そそのか</sup>唆して一番の障害になるであろうアリスを襲った。

一番の懸念である蒔風は目覚めないから大丈夫だし、いざとなれば自分が抑え込めるから、と言い包めて。

ほかの三人はそれを信じた。

彼らは悪くはない。ただ、愚かだったのだ。

管理ばかりし、その重みを知らなかった。背負うことを知らなかった。

そのことがどれだけ大事か、わかっていなかったのだ。

そうしたこと知らない彼らは当然「罪」を知ることがなく、そして、免疫がないために騙されて利用され、簡単に彼に染まった。

結局、わかっていたのは二人の管理者だけだった。

日常の“Noname”  
非日常の“LOND”

両極端にありながら、二人は同じことをしっかりと理解していた。

「それ」は背負うべきものである、と

だが、そこから進んだ道は今こうして、はっきりと違えている。

「そのためにここまでやった！！あの男はもう立てん・・・いいぞ・・・世界をオレのモノにイイイイイイイイ！！！！！！」

拳を握り、空を見上げ、“LOND”が高らかに叫んだ。

それを聞いたアリスは、立ち上がろうとしたが膝が崩れた。

無理もない。ここに来るまで四人の管理者に追い立てられ、ボロボロになったところを駆けこんできたのだ。

それでも“LOND”の前の立つものアリスだが、二、三撃で弾き飛ばされて地面に崩れこむアリス。

その服の端がすでに粒子となって消えている。

まだ“LOND”には流れていないが、このままでは・・・

「死期が近いぞ？“No name”・・・お前のヒーロー様はもう来ない」

「・・・く・・・！！・・・そう・・・ですか・・・」

「諦めたか？」

「・・・私は・・・今まで何を見て来たのでしょうね・・・  
・・・そして、あなたも」

6765

「なに？」

アリスの言葉。

最初は諦めかと思ったが、そうではなかった。

彼女の言葉が続く。

その視線は“LOND”の真後ろに

「あの人は、私が何も言わなくても立ち上がっていましたよ。力を与える前から、「奴」に面と向かって啖呵を切って。彼を支えるのは、力でも、死の理解からくる無恐怖でもありません」

「がんばって……！」

「……！」

と、そこでこなたとかがみの声がした。

そしてそれに呼応するように、黄金の粒子に覆われた銀白の翼が、まるで地面から生えたかのように、倒れている蒔風の背中から大きく開かれ、あたりを照らして眩いた。

そろそろ夕方に近づく。

しかし、いまだに二つの輝きが地上を照らして、その中心にいる主人公が立ち上がった。



黄金の輝きは粒子となって周囲を覆うように浮き上がり、空を照らす太陽のように輝いて

銀白の羽根は雪のようにハラハラと舞い、闇夜を照らす月のように輝いていた

「な……んだと……」

「我々は解ってなどいませんよ、“LOND”。私がいまだわかりきってもいないのに、あなたがわかりきったような口を利かないでください」

男が起つ。

翼は銀白、想いは希望

敵は、今までだって何度も打倒してきたもの。

「彼は、そこに救えるものがある限り、何度だって立ち上がってくるのです……我々が止められるようなものではありません……」

「お前の管理するそれは……なるほど、確かに強大だ……だがな……主人公はそれに立ち向かって打ち勝ってきた……」

「バツ!!!」

「一度敗れた相手には、決して二度と負けない……それが……」

それが、主人公だ

今の場のすべて者。

その者の願いを一身に受け。

銀白、最期の、そして、宿命の戦いへと足を踏み入れた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

終末への戦い、総てを賭して、立ち上がる者、（後書き）

一度は倒れた彼ですが、ここにもう一度立ち上がることができました。

”LOND”は強大です。

しかし、彼にはそれを超えるだけの力を得ることができます。

次回、想いと共に……

ではまた次回

## 果てなき希望（前書き）

今回の戦闘BGMは、平原綾香の「Jupiter」です。  
歌詞が彼にぴったりかなあ・・・と思いました。歌詞は女性になっ  
てるけど。

## 果てなき希望

“LOND”がアリスに向かって歩む。

蒔風は、軋む体を起こそうと地面にめり込んだ体を起こそうとするが、地面から外しただけで立ち上がれなかった。

仰向けになって、首を倒して見ていることしかできない。

拳を握る。足を踏ん張ろうと足の裏を地面につける。

しかし、もはや立てない。

体力はあるというのに、身体が立ち上がってくれないのだ。

“LOND”の攻撃は無造作で、それでいて確実に蒔風の体を確実に破壊していた。



ようはエンジンが破壊された車だ。

体力はあっても、エンジン身体が潰されているようなもの。

だが、それでもまだ、彼は立つ術を持っていた。

「舜君！！！！」

「舜！！あんた・・・大丈夫！？」

こなたとかがみか駆け寄ってきてその手を取った。

だが、蒔風の身体はあの儂さとは裏腹にかなり重く感じられた。

「おい……聞こえ……てるか？」

と、そこで蒔風が口から声を漏らした。

それを聞き、耳を傾ける二人。

「聞こえてるよ！」

「そ……つか……なあ……オレ今スゲー疲れててさ……  
・立てないみたいなんだ……」

「う……うん……」

「だから……」「がんばれ」って……言ってくんねえかな

「？」

「それは……」

「頼むよ……」

一瞬、口ごもることなた。

その一言で彼は確かに頑張れるだろう。

立ち上がってゆくだろう。

立ち上がって行ってしまっだろう。

もうこれ以上はダメだった。

どう見ても、彼は戦える人間の体をしていない。

でも

「また……取りこぼすのは嫌なんだ……みんなの力が必要なんだ……あんなこととして虫がいいかもしれないけど……もう……失うのは絶対に嫌なんだ……!!!」

それを聞いて、こなたとかがみは悟った。

この男は、絶対に行く。

ここで自分たちが何も言わなくても、這ってでもあの男のもとに行き、噛みついてでも立ち向かうだろう。

そんなことがわかりきるくらいに、この男の言葉には力があつた。

現に今も、動こうとして少しずつそちらの方に移動している。

だったら……自分たちができることなど、もう一つしかなかった。

「ずるいわよ……何を言っても止まらないなら……」  
うしかないじゃない……」

「……………頼む」

「がんばって……」

ゴオツ!!!!!!

瞬間、時風の足が動いた。  
身体が持ち上がって、クレーターのようになった地面から、時風が  
ぐらぐらと揺れながら出てきた。

そうして歩みを進めていくと、地面に押しつけられた仲間から、言葉はなくなるとも思いが届く。

がんばれ

負けるな!!

任せる……

絶対に勝ってくれ!!

アイツを倒せ!!

守るために……

お前だけが頼りだ

一人すれ違ふことにその輝きが増し、黄金の粒子が噴き出して、銀白の翼が大きく開かれた。

その光景を、アリスは見ていた。

背に翼を生やし、立ち上がる者。

翼人

その姿は、神話の中の天使にも見える。

しかし、彼らは一度として「天使」と呼ばれたことがない。



思われることはあった。  
あれは天使なんじゃないか、と

だが、呼ばれたことはない。

なぜか

その答えが、ここにある。

「人の想いが、俺の力だ」

彼が在るのは、神の力ではないからだ。

「願いが、心を奮い立たせる・・・!!!!」

彼が立つのは、神の言葉だからではないからだ。

「世界の意志よ!!」

粒子が舞い

「星の声よ!!」

翼が輝き

「街の願いを!!」

全てが彼に凝縮され

「皆の想いを！！！！」

そしてそれが、すべてを終わらす力となる。

「まだ立つのか・・・銀白ッ！！！！！」

「当然だ」

「だが・・・だがな！！！！いくら貴様でも、その力ではコンディショ

ンを100%にするだけで、今までを超えることはできない……  
忘れたか!!すでにオレの力はお前を越えて……」

「ああ、そつだ。お前は俺よりも強い……だったらなあ!!!!」

粒子がすべて、彼に流れ込み、そしてオーラのように放ち始めた。

「皆の力を!!今こそ……」

「貴様……正気か!?!」

「!!!!あなた……まさかそれは……!!!!」

「借りるッッ!!--!!」

世界をめぐる、銀白の翼

第二章

果てなき希望<sup>ねがい</sup>

彼の後方に、金の粒子が形作って、多くのものが浮かび上がった。



その手にあるのは、バルディッシュ・アサルト。

その鎌の刃を“LOND”の首元に叩きつける時風。

鎌の刃を“LOND”は上腕で受け止めるが直後、腹部に桜色の衝撃を受けて吹き飛んで行った。

時風に、左腕があった。

粒子が押し固まってできたそれはうっすらと光りながらも、確かに彼の左腕として機能していた。

そしてその左腕に、もう一本の武器が握られている。

レイジングハート・エクセリオン





《CLOCK UP》

時風の腰にベルトが現れ、その右腰を叩くとそんな機会音声が聞こえて彼の姿が消えた。

「その程度の高速で・・・逃れられると思うなよオツツ!!!」

しかし、“LOND”はその動きを捉えていた。  
その後ろに一瞬で回り込み、確実に借りとれる一撃。

「獲った・・・!!」

「と思うだろ？」

《start up》

そして直後、再び時風が消えた。

クロックアップであるその世界でありながらも、さらなる加速を始めていたのだ。

「ツツ!? おオオオオオツツツ!!!??」

そして、見えない猛攻に”LOND”が襲われた。

その間、十秒。

蒔風の手には、エクスカリバーと青龍偃月刀が

次の瞬間にはザンバットソードとデンガツシャーソード

そして、ましろの槌に、グラーフアイゼン

計六つの武器に斬られ潰され、”LOND”の身体が地面に落ちた。

叩きつけられた”LOND”は頭を振りながら立ち上がるが、その目の前に真紅のポインターが現れて、その体に狙いをすました。

”LOND”はそれを掴み、逆に砕こうとするがそのポインターの奥にさらなるものを見た。

デイケイドのファイナルアタックライドの際に現れるカードがそこにあり、その奥にはリボルバーナックルを構える蒔風がいた。

直後、カードとポインターを突き抜けて、振動破砕が”LOND”  
に叩きこまれて彼の身体が地面に更にめり込んだ。

そこに襲い来る、指先に圧縮された火球「ローゲフィンガー」  
それを放ちながら、「無限の剣製」アンミリデットブレイドワークスで斬りつけていく。

身体を焼かれながらも、それを腕で弾いて行く”LOND”だが、  
下がっていくといきなり背中が何かにぶつかった。

振り返ると、電流から来る磁力でまとめ上げられた鉄塊が山になっ  
ており、彼に向かって叩き込まれた。

舐めるなど言わんばかりにそれを腕で受け止めて投げ飛ばし、蒔風  
へと殴りかかる”LOND”

しかし、彼にはすべてが見えていた。

「<sup>アイオン</sup>劫の目」で全ての行動を先読みした蒔風が、ス……、と鬼狩柳桜を差し出すように向け、そこに”LOND”が突き刺さった。

痛みにつめきながら、その剣を引き抜いて蒔風を蹴り飛ばし、波動砲を放つ”LOND”

が、それは彼の<sup>イマジンブレイカー</sup>右手に消し去られた。

驚愕する”LOND”に対し、即座に蒔風がその肩口に向かって装<sup>ア</sup>甲<sup>ムトセイバー</sup>声刃の刀身を炎で伸ばし、斬りつけた。

喰い込むだけでそれは致命傷にはならないが、そのまま蒔風がダッシュして接近、剣をタイタンソードに変化させて腹を貫く。

直後、その位置が爆発して、”LOND”が吹き飛んだ。

「効くと思っっているのか・・・その程度では俺はまだまだ死なんぞおツ!!!!」

が、彼の言う通りその体がみるみる再生し、元通りになる。

「らしいな・・・だが・・・」

「もう・・・やめてください!!!!!!それ以上は・・・!!!!」

「まだ、ある」

アリスが途中で口を挟むが、時風がさらに翼から光りを放ち、それを発動させた。

雪のような白い光が”LOND”の体に巻きついて動きを封じ、手に現れた剣で斬った。

蒔風の目から光りが放たれ、爆破、斬撃された後、青白い巨人に”LOND”が踏みつぶされた。

蒔風が何発も”LOND”を殴りつけ、直後、それが多大な威力でぶり返してきた。

太鼓の鼓に”LOND”が拘束され、手に現れた炎の剣で切り裂かれた。

周囲に巨大な武器が現れ、それで斬り裂いた後に白いリングが爆発した。

巨大な槌が手に握られ、それで叩き潰して爆破した。

全契約モンスターが現れて、そのエネルギーを叩きこんまれた蒔風がキックを放つ。

小さな召喚獣が現れ、十五天帝を握ったそれが”LOND”を切り捨てた。

四つの紋章が現れ、それを通過して蒔風が蹴りは命中させた。



桜色の集束砲撃を二分、叩き込んだ。

十万三千冊もの魔導書の魔術が発動して、”LOND”を押しつぶした。

電流が流れ、巨大な鉄塊が熱線となって身体を貫いた。

手に握られ、周囲に散ったいくつもの剣で、宙に放りだした”LOND”めがけて何撃も斬りつけた。

まるで時が止まったかのようになった”LOND”に、光りを放つ鬼狩柳桜で地面にたたき落とした。

十五天帝を鎧のように身に纏い、”LOND”に突貫して切り裂いた。

そしてその十五の刃と手に持つデンガツシャーを連動させ、細切れにまで斬りつける。

再生しつつある”LOND”に、七色の魔力を身にまとった蒔風が体当たりして拳で沈めた。

此処まで行けば、誰でもわかった。

彼は、かつての世界の奇跡ワールドリンクすらをも再現している。

「ダメです……やめてください!!!そんなことをしては……  
あなた自身が!!!」

「アリスさん？」

それを見て、アリスが涙を流しながら叫んだ。  
こなたとかがみがそれをみて、どうしたのかと声をかける。

「願いを一度にあんなにも……他人の者を使役すれば、願いがぶ  
つかり合って彼自身が消えてしまいます!!!」

「で……でも、みんなの願いは同じなんだから……」

「完璧にですか？何一つたがえることなくですか？意味は同じでも、  
一体どういう感情から来るのかまでも同じですか？そんなことはあ  
り得ません……人の願いはどれだけ近かろうとも、決してぴつた  
りとまでに同じにはならないのです……」

「じゃ・・・じゃあ・・・」

「あのままでは・・・彼が!!!」

そうして、時風がすべての奇跡を放ち終えた。

しかし、一体どれだけの力があるのだろうか。

いまだにその体はメゴメゴと再生し、元通りに戻っていった。

「そこまでやって・・・貴様は消えるぞ・・・確実に消える!!! 貴様は・・・」

「心配すんな。気色悪い。んなことわかってるよ」

「この……この……化物がアアアアアア！！！！！！！」

その言葉を聞いて、慄然と立つ時風に向かって”LOND”が突っ込んできた。

手に持った岩を、鋭利な剣に変えて突き立てて来る。

それに対し、時風がまるでピンポン球を避けるかのような軽い動作でバックステップをとる。

直後、”LOND”をいくつもの刃が襲いかかった。

”LOND”の手にした剣は容易く碎け、何十という剣、刃、様々な武器にその肉体を切り裂かれ、叩き潰され、消し飛ばされた。



だが、その攻撃の中から、”LOND”が蒔風の足をつかんだ。

攻撃がやみ、爆炎の中から”LOND”が姿を現した。

その姿は、破壊された人体模型というのが正しいだろう。

皮などすべてなく、全身の筋肉繊維が見えており、所々からは骨が見えている。それどころか、骨しかない個所もあった。

その”LOND”が、蒔風を地面に寝下つけて叩きつける。

それでも蒔風は一切の危なげなく着地し、更に追撃して来ようと突っ込んでくる”LOND”に視線を向けた。

”LOND”再生ははまだ続いており、蒔風に到達する頃には元通りにまでなって、その拳を蒔風に放った。

だが

「このバリアは、オレにも破れなかった……」

「!?!?おグツ……!?!?」

その拳は、時風が纏っていたバリアの鎧に阻まれた。その背には薄緑の翼が。

そのバリアの前に、逆に攻撃した”LOND”の拳が碎け、反動で腕が裂けていつてしまっていたほどだ。

そこからなおも”LOND”が殴り、蹴り、斬り、攻撃してくるがこれだけは破れなかった。

そして

ゴォウ!!!!

時風の背中に、更に純白の翼が生え、衝撃波で”LOND”を吹き飛ばした。

その威力になにもできず、弾けたように吹き飛んで地面に落ちる”LOND”。

そして、時風が手をかざすと蒼青の翼と無限の剣製による武器が現れ、それが一斉に降り注いだ。

実に三分はそれが続いたか。

終わるころには”LOND”の身体はいくつもの剣に突き刺さって、まるで磔にされているかのようにぶらりとぶら下がっていた。

「よつやく・・・神に見えてきたじゃないか」





ズルと再生しながら独白した。

「全てオレの計画だ！！脇役をそのかせば、最終的にこうなることはわかっていた……世界を一つにすることぐらい、誰だつて考えるからなア！！！」

「まさか……貴様……」

「長かつたんだぞ！！本当に長かつた……素質のある脇役なんざ、どこにでもいるようなもんじゃねえからな。その人間を探して、そつ、とささやいてやれば簡単だった……あの男を見つけて、お前が戦つて、世界が一つになって……全て完璧だった！！！それを……お前が……全部台無しにしゃがった……俺があんなにも時間を費やしたものを、貴様がアアア！！！」

「お前が……「奴」を……」

「そうよ！！オレだ！！はははは！！あいつが本当に勝手に気付い



瞬間、時風の右手に十五天帝が握られた。

そして、もう片方の手 希望の粒子で作られた左手には、かつての彼の敵であり、そして彼自身であった者の剣が。

魔導八天

その二刀の天剣・反天剣が、”LOND”の胴と腕を挟み取り、時風が勢いのまま上空へと飛び出して行った。

ギリギリと挟み込まれる”LOND”だが、腕に力を込めてその進行を止めている。

しかし、それは確実に食い込んできており、引き裂くのも時間の問題だ。

「は・・・ははは!!それで!?オレを倒してどうする時風!!お前は消える・・・その力でな!!甲斐の無い話だねエ・・・皆のためには立ち、それでいて自分は消えんのか!!理解者もなく、悪にも善にも染まりきらず!!実に虚しい男だ!!貴様は・・・空っぽだ!!」

「・・・・・・・・貴様はそう思うかも・・・しれん」

「あん?」

「だがな・・・そいつあちよつと違うんじゃないか?」LOND”」

「なにが・・・」



「グウウウウウウウウウウー！！！！」

「そんな物を今さら相手にだなんて・・・笑えるぜ。貴様はただの的になっただけだ！！！！」

ブツンッ

「オゲウウツツ！！！！う、腕がアアアアアアアア！！！！」

「お前は・・・俺を・・・「マイカゼシユン」を敵に回した・・・  
・・・」





一瞬再生するかと思われたそれはしかし、傷口が輝きだしてすぐに崩れて消滅した。

断末魔の一つもあげず、”LOND”はその場で消え去った。

「へ……消え際はあっさりしてやんの……な……」

そうして、蒔風が地面に落ちていく。

翼を出す気力も体力も使い果たした。

魔導八天は手から離れ、消えた。

十五天帝は鞘に戻ってから消えた。

両腕を広げ、時風の身体が地面に落ちていく。

その風は、どうにも心地よい。

そうして……

彼は、地面に着いた。

”LOND”が消え、自由になった仲間によって、抱えあげられて。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

果てなき希望（後書き）

タイトル、完璧に龍騎ですね。  
戦っても生き残れない……

さて……第二章もここまで来ました。

そこ、短いとか言わない。

第一章が長かったからそう感じるだけなんや……！  
第二章が短かったわけやあらへん……！！

と、言うか……

考えなしに更新して行くからこうなるんや……

今回、彼が仲間だけでなくWORLD LINKや魔導八天まで再現できたことに関して解説しましょう。

WORLD LINKに関しては簡単です。

彼が途中で叫んでいた通り、彼は「世界の意志」からも願いをかき集めていたからです。

世界も、あんな男はごめんだっただんでしょねエ……

そして、魔導八天。

もしかしたら、「奴」は聞いていたのかもしれませんが、身体もなく、たまゆらの様に漂いながら再生していた「奴」が、今回の”LOND”の言葉を。

そして……

しかし、これははっきりとは言わないでおきます。とりあえず「これは奇跡だった」と思っておいて下さい。

全ての元凶、”LOND”  
彼は倒され、消えました。

「奴」にささやいていた言葉は、こいつのものだったんです。

しかしだからこそ、この物語は始まった。

”LOND”とは、ある意味で全てにおいての作者なんですね。

その物語がどうなるかは敵の在り方ですし、主人公が立ちまわるために必要なモノですから（といっても、ほのぼの系には必要ないですけどね）

支配、といえばその通りです。  
もしかしたら”LOND”は、元はどこからの世界の「作者」だった人間なのかもしれません。

そして、時風。

これからどうなっていくてしまうのか。

そして、彼の運命は……

全ては次回で

ではまた

愛を―学ぶた―めに、孤独―がある―な―ら―

願いをありがとう(前書き)

BGMはAngel Beats!!の「Brave Song」  
「Glide over」です

こっちも歌詞と雰囲気がいいので。



願いをありがとう

地面に落ち、キャッチされて地面に倒れる時風。

それを、仲間たちが囲んでいる。

その身体は外側から淡く光っており、さらさらと流れていっていた。

「舜君・・・大丈夫？」

「・・・大丈夫だが・・・アリス、あなたは何やってんだ？」

地面に仰向けに寝そべりながら、時風が顔を横に向けた。

その先には、時風に両手をかざして何かを送り込んでいるアリスがいた。

彼女が送り込んでいくもの。

それは”LOND”が消滅し、その力が流れ込んできているものだ。

「……………なにやってん？」

「このままではあなたが消えます……………この力さえ送り込めば……………!」

そう、蒔風の身体は今、消滅へと向かっていた。

無理もない。

あれだけの願いを同時に使い、なおかつ自分の力も使用していたのだ。

その体が今にも、粒子となって消えて行くこうとしている。

しかし

「やめとけ」

蒔風がアリスの手を取って止めさせる。

「流しこんでるったって、その力全部流れてんじゃん。その力は、あんたがもらっときなさい」

そう、流しこんでいるはずなのだ。

アリスに流れ込んでくる力を、たしかに蒔風に流している。

しかし、まるでざるに水をためようとしているかのように彼からすべてこぼれ出し、またアリスに流れていつてしまっていた。

「まあ……こんなのもあり……かな？」

「そんなこと・・・言わないでください!!!わたしは・・・あな  
たになにもできなかつた・・・!!!」

「・・・・・・・・」

その言葉を聞きながら、蒔風がゆっくりと体を起こして、立ち上がった。

身体の上に乗っていた粒子が、ザラリと地面に落ちる。

「もう・・・十分だったよ」

そう言ってどこかへ歩き出そうとする蒔風。

と、すぐにその体が引きとめられる。

その腕を、なのはが掴んで引き留めていた。

「舜君は！！ずっとずっと私たちのために戦って！！ずっとずっと一人ぼっちで……それで……それで一人で全部……」

「なのは……」

そのなのはの頭を、時風が撫でてから、優しくそんな目をして言った。

「だから言つたる。こつこついう事だ。お前は俺じゃ幸せになれん。こつこついう男だからさー」

そうして、なのはの腕からするりと抜けて、時風が先に進む。

「蒔風さん」

「舜……」

「……クラウド」

「せつかく……同じ世界になって……これからたくさん恩返ししようと思っていたのに……私たちは何もできない……助けられない……」

「オレたちは……そうだ、ずっと助けられてきた……世界をお前に救われ、俺たち自身を救われ！！恩返しもさせないで……勝手にいなくなる気が……！！」

「そうだ、オレは勝手に消えるのを」

観鈴とクラウドの言葉に、時風が皮肉気に笑いながら、二人を過ぎて、背中越しに最後の言葉を交わした。

「……とんだ英雄だ……」

「どっちつかずだったからなあ……」

ははっ、と笑いながらそうして、二人を過ぎて、その先に進む時風。

「時風」「舜」「舜君」「時風」「マイカゼ」

そうして歩いていると、次々と声をかけられる時風だが、それでも彼は止まらない。

歩き続け、そして、身体から粒子がこぼれ続けて行った。

「舜!!!」

と、そこに理樹と一刀が駆け寄ってきた。

「そんな……待つてよ!!!」



「お前らなら大丈夫だろうからな。厄介者は早々に退散するよ」

「バカ!!!」「野郎!!!」

蒔風がそんなことを言うと、二人が蒔風の腹を殴った。

おフツ、と少し身体が折れる蒔風だが、それを笑って受けていた。

「はは・・・良い攻撃」

「殴ったからな・・・ちゃんと殴りかえしに来いよ!!!」

「厄介なんて思ったことは・・・まあ前にはあつたけど・・・でもそれでも!!!いなくなって欲しいなんて思ったことはない!!!」

「また・・・帰ってこいよ」

「絶対はない、と言っておこうかね」

そうして、蒔風がさらに先へと歩を進める。

そして、みんなの輪を抜けたところで、アリスがその中から走ってきてその背中を引きとめようとした。

が、その手は伸ばそうとして伸ばせず、言葉も出そうとしても出なかった。

「・・・なに？」

「あ・・・わ・・・私は・・・私は・・・なんにも・・・あなたに・・・本当に・・・できなかった・・・」

アリスが言葉をたどたどしく紡ぐ。

今さら、自分が何を言えるのだろうか。

彼をこの道に連れてきたのは自分だ。

彼のこんな力を覚醒させてしまったのは私だ。

彼がここで消えてしまったのは、私の責任だ。

そんな私が、ここでどんな言葉をかけられるというのか。

そんな物は、私が許されたいだけだ。  
今消えゆく彼に、更に自分を許してくれと・・・言われたいだけなのだ・・・

「私は・・・私は・・・」

「ありがとう」

が、それでも時風の口から出てきたのはこの言葉だった。

「そんな貴女だから、俺は戦ったんだ。俺はあなたの世界で、心からよかったと思う。皆を守れて今、とても感謝している」

「でも……でも……」

「なにも出来なかった……ね」

「……はい……」

「近頃そう言う奴がどうにも多いよなあ……じゃあま、一言だけ言っというてやる」

そうして、時風が人差し指を立てながらこちらに振り向き、励ますようにアリスに言った。

「人の価値は、何ができないか、じゃない。何ができるか、だ。成績表にできないこと書いて行く者はない。テストは正解点を数える。出来ないことを嘆かないでくれ。出来ると言う事を誇りに持つてくれ」

「あ……う……」

「貴女は俺を救ってくれた。皆を救う、力をくれた。こんな歪んだ俺でも、皆を守って、胸を張って生きてくれた。だから……十分だ」



時風が振り返らず、歩きながら右手を軽く上げてから振って、別れを告げる。



最初に左腕が、光の中に溶けるように消えた。

次に、右足が粒子に流れながらなくなる。  
しかし時風の身体は崩れることなく、そのまま歩みを進めていた。

そして、左足が透けていき、粒子を噴いてペア・・・と消えた。

身体が順番に、ゆっくりと、じつじつと消えていく。

下半身が消えた。

ゆらゆらと揺れながら、蒔風がそのまま先に進む。

そして、残った上体の左下から、スウ……  
となくなつて行つた。

だんだんと向こう側が透けていって、綺麗な夕日の光がこちら側に  
まで来る。  
すでに影など、残っていない。

そうして、光の中に溶けるかのようにして、蒔風の全身がとけるかのように消えた。

蒔風から出た粒子が空を舞い、地面や建物、全員に降り注いで、その怪我が治っていく。

全て元通りになった。



何一つとして、「異常なモノ」はここにはいなくなった。

リム  
リム

世界を一人でめぐった銀白の翼人、  
時風舜は



「あ……………」

「消え…………ちやった……………」

「舜君……………」

「アリス…………あいつは…………死ん……………」

「死んだわけではありません」

「え……………」

「彼は、「願い」として消えたのです。その体が分解され、世界に溶けた……彼の思念は、どこかに生きているかもしれないね」

「……！！ライフストリーム……」

「そこかもしれないし、そこではないかもしれない」

「戻って……来るの？」

「わかりません。でももし……世界中の人々が彼を必要としたとしたら……ただ会いたいなどではなく、本当に必要としたとき……もしかしたら、本当にもしかしたら、彼の翼が反応してくれるかもしれない……それに……」

「それに？」

「この世界には・・・なんとという皮肉でしょうか・・・まだ彼は  
いるのですよ。どちらも・・・身体を失っています」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

**願いをありがとう（後書き）**

これでストーリーは終わりです。

三十分後ぐらいには、エンドロール（短い）と後書きと次章予告を入れます。

もしかしたらもっとかかるかもしれませんが・・・

では、最速で三十分、最遅で一時間後に、また

## エピソード ～Lost Heroes～ (前書き)

ED曲は、ニコニコ動画で人気があった「パンダヒーロー」です。

「みーちゃん」という歌い手さんのが一番好きです。

ヒーローグ〜Lost Heroes〜

世界は安定した。

一人の男が戦いぬいて。

「EARTH」はそのまま存続



局長室に座るうとする者はおらず、欠番のようになっている。

局長にはクラウド・ストライフが推されるものの、「自分のガラじゃない」と本人の希望で辞退。

結果、直枝理樹と北郷一刀の二人が連名で「EARTH」トップに立つことになった。

十五天帝は蒔風の消滅と共に石化したものが瓦礫の下から発見された。

何故次の資格者の元に行かないのかは、アリス曰く「彼は死んだわけではないから」だそうだ。

その剣は「EARTH」の周囲に十五本付きたてられ、それぞれが石碑のようになってる。

彼は死んだわけではないものの、概念のような存在となったため、単に魂や思念体とはまた違ったものになっているらしい。

世界をめぐる、銀白の翼 第二章 L O S T H E R O S

キャスト

想像、執筆  
武闘鬼人

登場人物

蒔風舜

岡崎智也

岡崎渚

五代雄介

キヨン

朝比奈みくる

長門有希

古泉一樹

泉こなた

柊かがみ  
柊つかさ  
高良みゆき  
響鬼  
威吹鬼  
轟鬼  
ハクオロ  
エルルウ  
オボロ  
ベナウイ  
クロウ  
カルラ  
トウカ  
泉戸裕理  
泉戸ましる  
応龍  
鵜  
城戸真司  
秋山連  
北岡秀一  
吉井明久  
坂本雄二  
姫路瑞樹  
島田美波  
木下秀吉  
土屋康太  
津上翔一  
芦原涼  
氷川誠  
上条当麻

インデックス  
ステイル・マヌグス  
神裂火織  
一方通行  
打ち止め  
妹達  
御坂美琴  
白井黒子  
クラウド・ストライフ  
前原圭一  
竜宮レナ  
園崎魅音  
園崎詩音  
北条沙都子  
古手梨花  
古手羽入  
国崎往人  
神尾美鈴  
門矢士  
小野寺ユウスケ  
光夏海  
海東大樹  
野上良太郎  
モモタロス  
ウラタロス  
キンタロス  
リュウタロス  
ジーク  
桜井侑斗  
デネブ

ハナ  
オーナー  
ナオミ  
直枝理樹  
棗鈴  
棗恭介  
井ノ原真人  
宮沢謙吾  
神北小毬  
能美クドリヤフカ  
来ヶ谷唯湖  
三枝葉留佳  
西園美魚  
朱鷺戸沙耶  
乾巧  
海堂直也  
三原修二  
衛宮士朗  
セイバー  
遠坂凜  
アーチャー  
間桐桜  
ライダー  
イリヤスフィール・アインツベルン  
バーサーカー  
ランサー  
ギルガメッシュ  
カレン・オルテンシア  
天道総司  
加賀美新

矢車想  
北郷一刀  
蜀・魏・呉の各武将  
劍崎一真  
橘朔也  
相川始  
上城睦月  
皐月駆  
水奈瀬ゆか  
草壁美鈴  
橘菊理  
広原雪子  
田島賢久  
百野栞  
直江大和  
紅渡  
登大牙  
名護敬介  
ガルル  
バツシヤ  
ドツガ  
左翔太郎  
フィリップ  
照井竜  
高町なのは  
フェイト・T・ハラオウン  
アリシア・テストアロツサ  
八神はやて  
リンフォース  
シグナム

ヴィータ

シヤマル

ザフィーラ

リインフォース？

スバル・ナカジマ

ティアナ・ランスタール

キャロ・エ・ルシエ

エリオ・モンディアル

初原

佳景山

”ライクル”

”フォルス”

”輝志”

”LOND”



アリス

以下の方々に感謝を

これまでも引き続き感想をくださった方&お気に入りユーザーに  
登録して下さった方

(英字、五十音順)

3 様

a n o k i 様

A T D - X 様

h . o 様

M E R A N 様

r e i m u 様

t y t a 様

W h i t e S e a l 様

ア ス ト ラ ル 様

ウ エ イ 様

液体の蛇 様  
桜龍 様  
彼方からの翼 様  
カレールパン 様  
神無月 様  
キヨン 様  
久遠 様  
クリア 様  
グレイ 様  
コンバース 様  
シャドー・ナイトメア 様  
準也 様  
深蒼の覇者 様  
だいさむ 様  
蛸壺の主 様  
剣 流星 様  
ティエト・コーティオン 様  
とある旅人 様  
ニャンコ隊長 様  
ハイパーカイザー 様  
灰狼 様  
東雲葉月 様  
バラランシヤ 様  
H@LYA 様  
ブレ 様  
ポリンキー羽田 様  
夜一 様  
保名 様  
夕 様  
リュウガ 様

ルシフェル様  
レイフォン様  
レン様  
わや様

今、モニターの前にいるあなた様に

t h a n k  
y o u ! !

あとがき？

第二章、完結です！！！！

蒔風「俺、消えたんだが……？」

最初からその予定でした。  
此处で蒔風が消えることは、本当に最初から決まっていたことなので。

6867

蒔風「じゃあ新しいキャラで主人公にすんのか？」

いえ、そうはしません。

次章……つまりは第三章ですが、これは外伝みたいなものだと思っ  
て下さってよかです。

蒔風がない世界で、彼らが立ち向かう敵とは一体!?

蒔風「俺が戻る予定は？」

当然ある。

だけどもあ・・・まだ先だね。

第三章も、二つの事件で出来ています。

流れとしては二章とほとんど同じですね。

最初のがメインで長く、二つ目のが締めくくるものになって短いです。

蒔風「今回の二章についてのコメントはないのか？」

違っんや！！短いんやない！！一章が・・・

蒔風「その話はもう聞いたよ」

そっか・・・

いつか言ったかもしれませんが、この話を思いついたのは、ディケイド完結編です。

「しっかりと主人公たちVS蒔風をやりたい」という思いから作りました。

で、うまく蒔風消滅と絡ませて、此処までかこつけました。

彼は消えました。

しかし、必ず復活することをここに明言しておきます

それと、次章でもしかしたら「奴」が主人公になる、と考えている方がいらつしゃると思うますが、そんなことはありません。

「奴」は「奴」です。彼はもし仮に！！味方になったとしても、主人公にはなりません。

と、まあ正直言ってあまり言う事ないような・・・

あ、そうだ・・・

第三章ですが、しっかりと形の出来ていた今までとは違い、まだ細かいところやどのようにしてストーリーを持っていくかは煮詰め切っております。

ですから、おそらくこれまでのようにドンドン更新・・・は難しいかと思います。

三章第一話更新にも一週間はかかるかも・・・

多分、飛び飛びな更新になってしまおうでしょうが、お許しください。

この物語が始まるのは、時風が消えてそろそろ一年が経つ頃です。そこ、上条の学校とかどうしたって言わないでください。

また、もしかしたら今まででも出したキャラが一気に登場しなくなる可能性がありますが、そこはご了承ください。

十人もいればいいのに、こんなにたくさんいたら大変なことになる  
ううう・・・うー・・・うー

基本的に翼人たち中心に進んでいきますので、よろしくお願いいたします。



それから、一番忘れてはいけないことを忘れていました。

この三章を書くに当たって、見直さなければならぬ部分があるの  
で最初の投稿まで時間がかかると思いますが（再び一週間ほど）、  
ご了承ください。

では、次の話をクリックして、レッツ次章予告へ！！

### 第三章 予告

一人の男によって、安定した世界

しかし

敵はいつでもそこにいる

同時に起こった、複数の事件

妹達襲撃

不死生物復活

希少能力保有の少女誘拐未遂

次元世界間放火殺人事件

そして、その事件は一つの思惑の元に

邪神復活

彼が守った世界のために、彼らは負けられない戦いに挑む。

「守りきって見せる……あいつが残した、この世界を……」

そして

「こぼれた力を拾ってきました!!!主人公諸君!!!久しぶりだ……  
戻って……来てやったぞ……」

6876

復活するのは、それだけではなかった。

世界をめぐる、銀白の翼

第三章

X クロス

物語は交差する。

G  
O  
  
t  
o  
  
N  
E  
X  
T  
  
S  
T  
A  
G  
E

予兆

夜

学園都市

繁華街から少し外れた、ビル影の道

「はあ・・・はあ・・・」

そこを、一人の少女が走っている。



その少女はこの都市の超能力者第三位を瓜二つの顔をしているが、額に当てているゴーグルが別人であることを表している。

彼女は妹達のシスターズの一員で、「あの実験」で、最後に一方通行と戦った个体だ。

仲間からは「一〇〇三二号、上条からは『御坂妹』と呼ばれる彼女が、今裏路地を走って何かから逃げていた。

『今ミサカは……謎の生物に追われています……誰か救援に来てください、とミサカー一〇〇三二号は懇願します』

『懇願するということとは、かなりやばい相手なのですか？とミサカー一〇〇九〇号は質問します』

『攻撃してもひるむだけで倒れません。対処に困ります、とミサカー一〇〇三二号は半笑いをしながら空元気を出します』

彼女がミサカネットワークを通じて仲間に連絡を取る。

そこで空元気だと自分で言っはしようもないのだが、そこを突っ込む者はいない。



「EARTH」本部

その食堂

「橘さんが？」

「ああ、連絡が取れないんだ。何かの調査に向かった、っていうのは聞いていたんだけどさ」

二人の男が、円形のテーブルで少し遅めの晩御飯をとっている。

その人物とは、剣崎と一刀だ。

調査のこと自体は知っていたが、彼が何の踏査をしているのか、そして音信不通であることは知らなかった。

「何かトラブルに？」

「でもバックルは持って行っているから大抵の事だったら大丈夫だ  
と思うけどなあ・・・」

そう話しているテーブルから離れたところでは、理樹が何人かのメンバーと一緒に何かを話し合っていた。

「そろそろ一年だね……」

「なにも起こらなねえなあ」

「で？なんて報告するつもりなんですか？」

そのメンバーは、理樹と上条とエリオだ。

「彼」がいなくなって、それからそろそろ一年だ。

あの事件から一年が経って、彼らは「彼」に報告をするという計画を立てていた。  
彼ら、というのは勿論この三人だけではなく「EARTH」メンバーでだ。

どこで声をかけるか、というのはあの十五天帝・青龍の突き刺さっている場所で。

しかし、誰が声をかけるかが決まっていない。

「いや、ここは理樹か一刀じゃねえの？」

「僕としてはクラウドさんがいいんだけど……」

「でも断られてしまったんですよね？」

「内容はどうするんだ？」

「『何もなかったです』……じゃない？」

「まあ確かにそうだけど……ねえ？」

そんなことを話しながら、彼らの手が進んでいく。

今日の飯もつまい。



「では……あなたは

です」

「ひ……ひいいいいいい！！た、助けてくれ！！助けてくれ！！！！」

炎の中で、女性の声はよく聞こえなかったが、この男性にははっきり聞こえたようだ。

質問し、その手に握った剣を振り上げる長身の女性に怯え、質問された男が四つん這いになって逃げだす。

しかし炎は周囲を覆っていて、逃げ道はない。

逃げられるとしても、死を覚悟してこの炎を突破しなければならぬ。

と、そこに何か動く影を見た。

そのシルエットは、自分を襲おうと背後に迫っているそれとは違う。



「た・・・助かった・・・お、おい！！聞こえてたら助けてくれ  
！！！！こ、こいつを・・・え？」

炎が踊り、そのシルエットが明らかにされ、瞬間

その姿を見て、一瞬ほころんだ顔が最初よりも恐怖に染まった。

それは、瞳に映ったその姿が、異形のモノであるからであろう。

「な・・・なんだよ！！なんなんだよ！！てめえなんだあアアア  
アアアア！？」

ドンドンドン！！！！

銃声が鳴り、その異形から火花が爆ぜる。

しかし、その銃弾に少しよろめくだけで全く意に介していない。

そして、その鋭い爪が男に食い込み……………

「グ…………ぎゃああアアアアアああああああああああああああああああああ………  
ああ……………!」

6889

男の体が裂かれ、その体がただの物言わぬ肉と骨へと変わった。  
そしてそれは、今この炎によって焦げていつていた。

「あなたは……………」

「……………」





ドンドンドンッッ！！！！ドオン！！！！

そして、機会音声とともに炎の弾丸が飛んできてその化け物を吹き飛ばした。

その弾丸の飛んできた方向を彼女が見ると、夜の闇でできたビルの陰がそこにあるだけだ。

直後そこから、一枚のカードが飛んできてその化け物に刺さり、身体が吸収されていく。

「これは……………」

「大丈夫……………か……………？」

その闇に向かってカードが戻り、それを手にした赤き銃士が息も絶え絶えに聞いてきた。

その手にあるカードには先ほどの化け物が描かれていたが、溶けるようにその絵が消える。

「あなたは確か……」

「仮面ライダーギャレン、橘朔也……だ……頼む……  
急ぎ……」EARTH」に連絡を……ぐっ……（ドサ  
ッ）」

「……大丈夫ですか……!」とミサカは体を抱えながらも、あなたに問いかけます……!」

倒れたギャレンの変身が解け、橘が御坂妹に抱えあげられる。

（この近くで、問答無用で助けてくれそうな方は……とミサカは目的地を決定してそこに向かいます）

そうして二人の影が、第七学区の学生寮に向かう。

しかし、その背後には、先ほどと姿が違っながらも、同じような異形がいた。

t o b e c o n t i n u e

## 予兆（後書き）

はい！！始まりました第三章！！

蒔風「みんながんばれー」

時期としてはもうすぐ蒔風が消えて一年になるうとするところです。で、そのタイミングでこう・・・なんかしようとしているわけですが、彼らは。

蒔風「記念とも違うし、一周忌とも違うしなあ」

そして、うごめく影達。

蒔風「なあ、これって章のタイトルとかからしてメインになるの・・・」

そこは黙って！！

いやさ、わかると思うけどさ。

しかしそれだけでは終わらないのがこのめぐ銀。

多くの世界のファクターが織り交ざって、どうにかこうにかしていきせー！！



時風「次回、動き出す「EARTH」」

ではまた次回

## 出勤

翌日の朝

「え？協力要請？いいけど」

理樹が自分の部屋で男メンバーたちと一緒にツイスターをやっていると、通信モニターが開いてそんな連絡が入ってきた。

通信相手はティアナ。

執務官である彼女が今担当している事件に、協力してほしいのとだった。

「いいけど……ティアナさんが要請してくるってことは……」

「並みの事件じゃねえってことだな。筋肉の出番か」

「どんな事件なんだ？あ、理樹、左手を青」

『ツイスターしながら聞かないでください……連続放火殺人です。現在で十一件、死傷者多数。二つの次元世界で起こっているんですけど……』

「そんなかしこまらないですよ……同い年じゃないか……と、右足を黄色？」

『だから……まあいいわ。それで……』

「うん、協力するよ。死人が出ているならなおさらだ。僕らは……」

『救えるものは、根こそぎ救う、よね？』

「その通り。じゃあこれからリトルバスターズがそちらの事件に協力するよ」

『ありがとう』

そうして通信が切れ、入れ替わりに事件の報告書が出てきた。

ツイスターを取りやめ、彼らが部屋から出る準備をしていく。

「さ、行くところか。相手は放火魔らしいよ」



上条が言うには、昨晚遅く　　日付が変わって三時間が経とうとした頃に扉が開かれたのだ。最初こそ空き巣かと思ってフライパンを振り上げた上条だったが、電撃で反撃された彼はその姿をみて即座に部屋に入れ、介抱した。

橘は意識不明・・・というか眠っている。

御坂妹はこの部屋のソファの上で眠っていたが、今はすでに起きていてインデックスと共にテレビを見ているらしい。

『御坂には連絡したから、すぐこっちに来ると思う。それから妹の言うには、化け物はカードに吸われて消えたらしいぜ』

「アンデット？　だけどそれはたしか・・・」

そう、倒され、カードを突き立てられて消えたとなればそれはアンデットと同じ反応だ。

不死生物たるアンデットは、一部の例外を除いてカードに封印とい

う手段でなければ倒せない。  
ダメージを与えても、いずれすぐに復活してしまうのだ。

しかし

「アンデットは52体、きちんと封印されてるはずだよな？」

「そうですね……確かそうだったはずですよ」

一刀の横で、彼の秘書替わりをしている朱里が答え、資料を雛里がもってきた。

それをみて、やっぱりそうだと頷く一刀。

「アンデットはジョーカーである相川始を除いて全員封印済み……」

『でも、御坂妹が言うにはアンデットとしか考えられないってよ』

「うー……ん……よし、今からそっちに行こう。朱里、剣崎さんと呼んでくれないかな？」

「はい、ご主人様」

そうして通信を切り、部屋から出ていく一刃。

と、そこでこれからどこかに行こうとしている理樹たちとぶつかりそうになった。

「おっと」

「あ、一刃。これから僕たち、ティアナさんの事件の協力に出てるから」

「こっちもだ。橘さんがアンデットみたいのを追っていたらしいぜ」

「そっか・・・お互いに頑張ろうか！」

「おう！ー！」

そうして、二人の翼人が、その場を後にする。

理樹はリトルバスターズの残りのメンバーと合流して、ティアナの  
もとに。

一刀は剣崎と数名の武将と共に、学園都市の上条の部屋へと。

.....

「これが雛見沢……！……！……！……！……！……！」

「大自然……！……！……！」

「お前ら……ガキじゃないんだからみっともなくはしゃいでんじ  
やねえ」

「きれいな土地だねえ」



ところ、大きく変わって雛見沢村は古手神社の展望台

そこに門矢士をはじめとしたディケイドのメンバーが観光に来ていた。

ユウスケと夏海はこの大自然の前に感動しまくっており、それを見て士は頭を抱え、海東はさらにそれを見て面白そうに笑っていた。近くにはパタパタとキバラーも飛んでいたが、何を気に入っただのか森の中に入って行ってしまった。呼べばすぐに来るらしいが。

「喜んでもらって何よりなのです」

「あああう、僕もうれしいですよ」

と、そこで後ろから声が掛けられた。

この神社の主、古手梨花と古手羽入だ。

時間はちょうど一時。

彼女らは早めに学校が終わったこともあり、彼らの案内を買って出たのだ。

ちなみに年長組はまだ授業中、沙都子は悟史を待って学校にいる。

「こんな平日からぶらぶらできるなんて、大人はうらやましいのです」

「またまた、梨花だって十分もう（ゴスツ）あうツ!？」

「なにか……いいましたですか?にぱー」

そんなことを言いながら、麦茶の入った大きな水筒とビニールシートを抱えてきた二人を見て、土が「?」となるが、体よく暇人と言われたことに気付いた海東は少し落ち込んでいた。ユウスケと夏海は持ってきてくれた二人に感謝しながら、急いでそれをかわってシートを広げるのを手伝いに向かう。

「冷たい麦茶をお持ちしましたですよー」

「ごめんね、ありがとう」

「汗だくじゃないですか。本当にすみません」

「幼女にへりくだっているな、夏みかん」

「土君も手伝いなさい!!」

「（バツ!）は!こうして首さえ押さえちまえば笑いのツボも・・・  
（ゴシャッ!!）パンチは反則だろう・・・（ドサッ）」

「これが後に雛見沢六回目の惨劇と呼ばれ・・・」

「大樹さんも物騒なこと言わないでください!!!!」

その様子を笑いながら眺めている梨花と羽入もシートの端に置く石を持ってきて、六人でゆっくりと休憩を取っていた。

「どうですか？雛見沢は」

「いいところだな。景色もきれいだし、空気もつまい」

「じゃあ都会の空気はまずいのですか？」

「ここよりは澄んでないなあ」

と、そんなことを話していると、どこからか「カランカラン・・・」という軽い音が聞こえてきた。

それを聞いて「なんだ？」と考える土たちだが、梨花が立ち上がりながら説明していた。

「沙都子のトラップなのです。と言っても、誰か来たというのをお知らせする程度なので、多分沙都子やレナたちが来たのです。迎えに行ってくださいですよ」

「あ、じゃあ私も行きますよ」

「いつてらっしゃーい」

そういって、梨花と夏海が境内のほうへと向かい、ユウスケが送り出す。

そして話をしようとする三人だが、羽入だけは何かを考えていた。

「どうしたの？羽入ちゃん」

「・・・おかしいのです」

「なにが？」

「沙都子をはじめとした部活メンバーはみんな、この神社内に沙都子のトラップがあるということは知ってます。そう簡単に引っこかるはずがないのです」

「……どういうことだ？」

「もしかしたら、本当に侵入者なのかもしれないですよ……」

「……マジ？」

「行ってみた方が」

ジャギイー！ーギャン！ーゴオン……！！！！

「……！！」

「あの音は……まさか……！！」

「梨花!!」

「夏みかん!!行くぞユウスケ!!」

遠くから金属のぶつかる音と、爆発音が聞こえてきて、四人がその場に向かって走る。

その場にたどり着くと、足首をひねってしまったのか座り込んだ梨花と、仮面ライダーキバラーに変身して彼女を守っていた夏海がいた。

「あいつらは・・・」

「いいから!!行くぞ士!!」

士が彼女らを取り囲んでいる三体の化け物を見て頭を捻るが、今はユウスケの言うとおりだ。  
ユウスケがキックで首の長い一体を押し出し、階段のほうへと連れ込んでいく。

それにならって士も思考をやめ、キバラーの剣と、棘のついたレイピアのような武器を使って鏢競り合っているバラの花びらを散らし

ている化け物を横から蹴り飛ばして、カードを構えた。

「せっかくの観光に出てきて・・・覚悟できてんだろっな！！変身  
！！」

《KAMEN RIDE DECADE!》

そうして、ディケイドへと変身した士がライドブッカーでその化け物に切りかかっていき、相手をした。

しかし、それでもまだ一体残っている。

その一体 なにやら豚のように見える化け物が、キバーラ、というよりも梨花に向かって突進していった。

が、その腕はディエンドに変身していた海東につかまれ、そのままインビジブルのカードと一緒に消えて行った。

- - - - -









一方、ユウスケ

場所は、階段を二十段ほど降りたところ。

化け物を階段まで蹴り飛ばし組み付いたのはいいものの、そのまま階段を転がり落ちそうにまでなってしまう、化け物のキリンのような長い首にしがみついて落ちないようにしていたのだ。

この神社の階段は長い。しかも、途中途中に平たく広い段差もないのだ。

生身で転がり落ちたらただではすむまい。というか死ぬ。

だから彼は必死になってしがみついたのだが、化け物はそれを振り落とそうと首をぶん回して暴れていた。

「うわっ！！ちょ・・・落ち・・・落ちるッ！！！」

「ゴおオオオオオ！！！」

「え？うわあっ！……！」

と、そこで化け物の首がビタツ！と止まり、一瞬後にまた振られた。

その動きについてユウスケの体が宙を飛び、階段から放り出される。

「iiiiiiiiiiiiiiii！……へ、変身！……！」

しかし、彼とて仮面ライダーだ。

空中でベルトのスイッチを入れ、ドラゴンフォームに直接変身して、木の枝の上に着地した。

「ふう……じゃあこれで……！」

そこでさらに木の枝を折り、それをドラゴンロッドに変化させて構える。



て階段から突き落とした。

その衝撃に、化け物が手足をじたばたさせながら落ちていく。

「転がり落ちて」ではなく、「宙に放り出されて真っ逆さま」に。

ドオン！！という凄まじい音を立てて化け物が地面に落ちる。

うつぶせに落ちたそれが、仰向けに体を返したその瞬間、視界に太陽が入りその中心に、青き戦士が金色の雷を携え、ロッドを突き立てて落ちてきた。

ドガツツッ！！！！ギイイイイイイ、ドオン！！！！

ライジングドラゴンフォームとなったクウガが、キリンのような化け物の腹部にロッドの先端を突き刺してエネルギーを送り込む。

そのエネルギーによって化け物は爆発、炎は火柱を上げ、クウガはマイティフォームに戻った。

しかし

「?・・・!!こいつ・・・」

ユウスケは見た。

爆発したその炎の中に、その化け物が原形を留めたままで焼けているのだ。

そのベルトのエンブレムが、パキン、と行って縦に割れた。

「ユウスケさーん!!」

「どうし・・・ええ!?な、なんですかこれ!？」

と、そこに圭一とレナが走ってきた。

詩音と沙都子は悟史の定期検診に付き合っているらしい。

二人が神社の階段の前で焼けているそれを見て驚愕するが、ユウスケは信じられないものを見るような顔をして、呟いた。

「わからない・・・アンデットは全部、封印されているはずだ・・・でもこいつは・・・」

.....

敵は、アンデット

それはとっくにわかっていた。  
門矢士は、最初からそれは解っていた。

ベルトを見て、一発だ。

しかし、おかしい。  
アンデットはすでに（あくまでもこの世界のは）全種封印されていたはずだ。

しかもこいつ、否、こいつらは・・・



「キリンに豚にバラのアンデット……？そんな奴らはいなかった！！」

ガキイ！！

「52種の生物に、お前らはいなかったはずだ！！」

「フシユルルルル……」

そう、その52種のアンデットの中に、そんな生物はいなかった。

だったら、こいつらは一体何なのか。

「お前ら一体なんなんだよ！！」

そう叫びながら、土がバラのアンデット「ローズアンデット」を蹴り飛ばした。

しかし、鞭のように伸ばした棘付きの茎をディケイドの腕に絡ませ、一気に引っ張って入れ替わるようにして彼の後ろにいる梨花たちに突っ込んでいった。

「させつか!!」

《ATTACK RIDE            CLOCK UP!》

だが、超高速で動き出したデイケイドがその間に割って入り、さらにカードを装填する。

《FINAL ATTACK RIDE            DE DE DE  
DECADE!!》

黄色のホログラムカードがローズアンデットに伸び、そこに向かってデイケイドがライドブツカーを槍投げのように構えてから投げ放った。

ライドブツカーがホログラムを通過するたびにその刀身にはマゼンタ色のエネルギーが蓄積されていき、巨大な刃となってローズアンデットを突き貫く。

貫かれたローズアンデットは爆発、消滅し、ライドブツカーはそのまま飛んで行って階段の下で倒されていたアンデット、ジラファンデットに突き刺さってそれをも吹き飛ばし消した。

「いったい……何が起きている？」

森の中から海東が、周囲にはもうアンデットはいないようだと言ってきた。

階段の下からはライドブッカーを持ってユウスケ達が駆けあがってくる。

観光はどつやら、ここまでのようだ。

.....

「なんだこれは……」

「橘さん!!!」

一刀が連絡を受けて一時間後  
学園都市の学生寮、その上条の部屋

そこ部屋の前に立った一刀たちが目の当たりにしたのは、吹き飛んだドアと、荒らされた部屋、倒れている上条と橘だった。

剣崎と一刀が即座に中に飛び込み彼らを抱えあげると、彼らの呼吸音が聞こえた。

どうやら、死んではいないらしい。

「よかった・・・上条!!!大丈夫か!!!」

「う・・・お・・・」

「・・・・・・・・主人さま」

「ん?」

と、そこで共にやってきていた愛紗が部屋の隅を見、一刀に声をかけた。

「その隅・・・結界のようなものが張ってあります」

「え？」

そう言った瞬間、部屋の隅が柔らかく歪み、その中から血まみれの土御門とインデックス、そして御坂妹が現れてきた。

6924

「とーまあ！！大丈夫なの！？」

「大丈夫、死んではないよ。怪我はひどいけど・・・」

「大丈夫ですか！？橘さん！！・・・くそ・・・いつたい誰が・・・！？」

インデックスが上条に駆け寄り、入れ替わるようにして土御門に駆け寄る一刀。

剣崎は橋をしつかりと寝かせ、憤っていた。

「なにが・・・起きたんだ？」

「・・・オリジナルお姉様が連れ去られました、とミサカは結果を簡潔に述べます」

「な・・・!？」

一刀に、御坂妹が報告する。

「この部屋で起きたことの一部始終を、ご報告します、とミサカは言葉をつづります」

敵はアンデッド。

しかし、その出自は明らかにならず。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

出勤（後書き）

蒔風

「さあて、事件が本格的に始まりましたな」

まずは不死生物復活と、希少能力持ち少女の襲撃です。

蒔風

「「原典」を知ってる俺でもあんなアンデットは知らんぞ？何だあいつら」

それはまあ・・・今度で

蒔風

「でも原典は何となくわかったな。あの二つだねえ」

ええ、あの二つです。

それを大元にしています。

そこを「めぐ銀」風のアレンジー！



蒔風

「さて……みんなは救えるんでしょうかね？」

そこを含めて、お楽しみに！！

蒔風

「次回、数時間前にあったこと、回想」

ではまた次回

## 奪取

昨晩、と言っても時間的にはもう今日になっていたその時刻に、橘が御坂妹に抱え込まれてきたそのあと。

朝になつてから「EARTH」に電話した上条は、魔術師である隣室の友人、土御門に事の次第を相談していた。

彼の所属する必要悪の教会も今は「EARTH」と協力体制を取っている。  
ネセサリウス

なのでここで彼に相談することは何らおかしくはない。

むしろ、上条は戦力として彼に協力してほしかった。

相手がアンデットのようなものであることは上条も理解したし、それがどんな奴らかうる覚えだったが、御坂妹の説明でしつかりと思いだした。

彼の右手に宿る幻想殺しは異能の力を問答無用で打ち消す。  
イマジンブレイカー

それはアンデットの放つ炎や電撃、さらにはその特性である「不死」をも無効化することが可能だ。

しかし、いくら相手の力を無効化できても、それはあくまで右手首から先に当てなければならぬし、そうしたとしても相手の肉体はそうあるだけでも人間のそれを容易に超えている。

拳ひとつで立ち向かって、無謀であるのは火を見るよりも明らかだ。

ゆえに、取り急ぎすぐに呼べた土御門を連れてきたのだ。

「アンデット？カミヤん、オレを呼ぶ気持ちは分かるが、そいつあ役者不足すぎやしないかじゃー？」

「お前が魔術を簡単に使えない身体だつてのはわかってる。でも一刃に連絡はしたから、一時間もしないうちに来るとおもうんだ。だからその間……」

「……カミヤん、カズちゃんにはなんて呼んだんだ？」

それを聞いて、土御門が魔術師の　プロの目をして聞いた。  
その質問に、上条は一刀を呼んだ時の会話を簡単に教える。

「橘さんが連れこまれて、アンデットがいるかも……」

「・・・カミちゃんもカズちゃんもまだ学生ってことか・・・」

「は？」

「一時間もあれば襲撃作戦なんて30は仕掛けられる。待ち時間としては長すぎるぞ・・・」

「お、おいまさか・・・」

ベランダに続く窓をカーテンで遮り、その隙間から簡単に外を見まわした土御門に、上条が心配そうな声をかける。  
そして、部屋の周囲に彼がいつも魔術に使う色つき折り紙を設置していった。

「土御門、お前魔術を使ったら・・・」

「へーきへーき。今はまだ準備しているだけだから、スイッチを入れない限り身体に支障はないんだにゃー。ほれ」

そう言いながら、シャツの前を開いて身体に異常がないことを表す土御門。

能力者に魔術は扱えない。

それはこの世界まじゅうしにおいて、常識だ。

しかし、土御門はこの学園都市に潜入した時、能力開発カリキュラムを受けている。

そのために、彼は「能力者」にカテゴライズされてしまい、魔術を扱えば身体が崩壊するという事になっている。

かつては陰陽術のエキスパートだった彼は、一つ魔術を使うだけで血を吐き死ぬような思いをすることになってしまったのだ。

しかも開発された能力は、傷の上に薄皮を張る程度の力しかないレベル0という非常に微弱な「自動再生オートリパース」  
これのおかげで魔術を使ってもある程度は大丈夫なのだが、それでも死ぬような思いをするのだ。

「崩壊するということになっている」とはこういうことだ。

しかし、それでも彼は魔術施行の準備をしていた。

「で？襲われたのはその・・・」

「シスターズ、一〇〇三二号のミサカです、とミサカは簡潔に自己紹介をしてテレビのほうに向きなおします」

「はー、うわさにゃきいてたけど初めて見たにゃー」

そういつて、彼は話には聞いていた第三位のクローンをまじまじと見て感心したような声を上げる。

「私たちの考えでは狙われたのはお姉様オリジナルのほうかと思われます、とミサカは自分の考えを述べておきハキキュアの視聴に戻ります」

『うぬの覇気が、我が五体を刺激しておるわ！！』

『ゆくぞ、フザケンナー！！この世界は私たちが守る！！オアタア  
！！！！』

「なるほど、古代中国に伝わる魔力「気」を、覇気と称して体を魔

術で強化してるんだね。となるとあの服装は……」

「何やら隣からよくわからない解説が出てますが、ミサカは純粹にこの作品を楽しみましょう、と言いながらミサカどうせ勝つであろうハキキュア応援します」

テレビの液晶の向こうで、何やらフリフリの衣装を着た少女（？）が劇画タッチに描かれて激しく戦っているのを、二人の少女が目をキラキラさせて見ていた。  
二人のそのキラキラの方向性は少し違う気がするが、とにかく楽しんでるならいいのだろう。

その二人を置いて、土御門がポイポイと折り紙を放りながら設置していく。

適当に投げているようで意味があるらしく、片手で瞬時に折っていかつか放ると、よし、と頷いて上条の隣に座り込んだ。

「もしも誰かがこの部屋に無理やり押し入ろうとした瞬間に発動するようにしたから、とりあえずは時間は稼げると思うにゃー」

土御門いわく、効果としては気配や姿を完全に遮断する決壊を張る程度のものらしい。

しかし、その中に上条は入れない。  
理由は右手だ。

「だからもしもの事があつたら、カミヤんはすぐにこのベランダから逃げる。こつちから来たら玄関からだ」

「お前らを置いて・・・」

「お前がいて、アンデットに吹き飛ばされでもしてみる。結界にぶち当たつたら俺らは丸見え、全員ミンチだ」

その言葉に「う・・・」と言葉を詰まらせる上条。

と、そこにピンポン、というインターホンが鳴らされ、呼び出されてきた御坂美琴がやってきた。

「で？後で話すって言ってたけど、いったいどうして呼ばれたのかしら？」

「ああそれは・・・」

と、上条が中に招き入れて事情を話す。



それを聞き、美琴が驚き、理不尽だという顔をしていた。

「なんでまたあの子たちが狙われなきゃならないのよ！」

「それはわかんねって！でも狙われてんだから無視できねえだろ  
う！？」

思わず叫んでしまった美琴だが、上条の言葉にそれもそつだと落ち  
着く。

「で？この人はなんなの？」

「ああ・・・妹が連れてきたんだ。助けてもらったみたいで・・・  
」

と、そこまで聞いて、美琴が上条の言葉を「シ・・・」と遮った。

「な、なんだよ」

「近くで電磁波が発せられてる……」

「発電機とかのじゃねえの？」

「違うわ。機器からの電気じゃない……これは……生体電気？  
しかもこの大きさ……！！！」

その感知したものの大きさに、美琴が驚いてベランダのカーテンをバサツツと開いて、その先のビルの屋上に、敵を見つけた。

直後

バツウイツツッ！！！！という凄まじい電撃の爆ぜる音がして、上条の部屋のリビングが光に包まれた。

が、直後にそれも消える。

飛んできたのは、電撃の光線。

それを美琴が受け止め、上条が消したのだ。

ビルの向かいには、黒く、ほそ長い体をした、どうやら魚のようなアンデットがいた。

「あつぶなあ!?!」

「へえ・・・あたしに向かって電撃放ってくるなんて・・・いい度胸してるじゃないの!?!」

ガゴオ!!

そう言いながら、美琴が磁力を使って上条の部屋の壁の中にある鉄骨を、コンクリートごと抉り取った。

「ギャー!?!?!御坂さん!?!あなたオレの部屋になんてことを!

!?!?!」

「いちいちつっさい!?!」

そして、上条の不幸の叫びを背に受けながら、美琴がそれを投げ飛

ばし、それに対しビルの上のアンデットはそこから一足飛びに上条の部屋へと突っ込んできていた。

躲す術などない。

誰が見てもそうだった。

だが、美琴の投げたそのブロックはアンデットの体に当たった瞬間、ぬるりと滑ってあらぬ方向へと落ちて行ってしまったのだ。

「え!?!」

「ちよいちよいちよいちよい!?!こっちくんぞおおおおオオオオオオオオ!?!」

ドゴオ!?!...!

そのままアンデットは上条の部屋へと突っ込み、美琴へと突進してくる。

が、美琴は部屋中の家電や金属をかき集め、磁力で壁にしてそれを受け止めていた。

上条が振り返ると、そこには土御門やインデックス、御坂妹はおらず、おそらくは発動したという結界内に隠れているのだろう。魔術が発動したことで土御門の体には反動が跳ね返っているはず。それはそれで心配だが、今自分がやるべきことはとにかく……

「こっちだこの野郎！！おらこいよ！！」

そう叫び、アンデットを部屋の外に誘い出そうとすることだ。しかし、アンデットは全く上条に反応せず、美琴と向き合って動かない。

「無理よ……こいつ、あたしに用があるみたいだから」

「クソツ……」

「あんたは早く逃げなさい！！」

「お前置いて、逃げられっかよ！！」

捜査権で、美琴の隣に立つ上条だが、ぼそりと小さな声でつぶやいた。

「でも、できればこの部屋とは別のところであってほしいと上条さんは提案するのですが……」

「相手に言いなさい!！」

バツ、バチイツ!!!

と、直後に両者が同時に電撃を放ち、ちょうど真ん中でそれがぶつかって光を放つ。

「グ・・・む・・・」

「あたしに電撃で張り合おうなんて、調子のってんじゃないわよッ  
ッ!!!！」

ドオオ!!!と、美琴から放たれた電撃が、中間地点を相手の方へと押しのけていく。

上条は美琴の隣で、もしもこちらに弾かれてきたときのガードとして、右手を構えていた。

そんな心配をしている上条に、美琴が自信満々に言う。

「私が負けるなんてことはないから、あんたは早く避難しなさい! あいつと一緒に昇天したいの!？」

「ば、馬鹿野郎！オレは自分の部屋の心配してんだよー！」

そんな口げんかをしながらも、美琴の電撃はアンデットのそれを押しつけていき、もうすぐで達するといったところまで行っていた。

それはそうだ。

彼女は学園都市の頂点のレベル5、その第三位なのだ。

彼女に電撃戦を挑んでは、勝てるものはそうそういない。

しかし

「何やら余裕そうだが・・・後天的に身に着けた発電能力で、俺と張り合って勝てると思ってるのか？」

「え？」

「うそ・・・」

「ふぬあつ!!!!」

いきなり声を発してきたアンデットは、同じようにいきなり電撃をやめ、その体で美琴のそれを受け止めた。  
すると、その全身から電撃が吸い込まれ、バチバチと爆ぜながらアンデットに蓄電されていつていないか。

「俺はあらゆる生物の中でも希少な、自家発電することが可能な生物の始祖だぞ。後付けされたその程度の力で、張り合おうなどおこがましいぞ、人間!!!!」

「そんな……きゃあああああああああ!!!!」

「御坂!!!!!!」

吸収された電撃と、アンデットの「そこそこ本気の」電撃が合わせでぶつけられ、美琴が悲鳴を上げてその場につづくまる。

上条はとっさにその電撃に右手をぶつけ消滅させるが、その電撃による光が晴れた先には、アンデットが腕を振るって立っていた。



「もらっていくぞ。電撃使用の頂点に立つ少女」

エレクトロマスター

「この野郎！！」

そんなことを言って、美琴に手を伸ばすアンデットに、右拳を振るう上条だが、それはあっさりと受け止められて逆に上条が殴り飛ばされた。

アンデットはその上条に対し、興味などないといった風に視線を外し、美琴の体を肩に抱えてベランダから出て行こうとする。

「魔導書をその身に宿した少女もここだったはずだが……逃げたらしいな。ではさしあたってはこいつだけでも……」

どうやら上条は結界にはぶつからなかったようで、この部屋にいる別の人間はばれていなかった。

が、その背中に一枚のカードが突き刺る。

振り返ろうとすると、背後から《turn up》という音声が聞こえ、背後に仮面ライダーギャレンが立っていた。



「そうして、あなたたちが来るまで待っていました、とミサカは話を終えます」

これまでの時間、御坂妹は土御門の体の具合をできる範囲で診て、飛び出そうとするインデックスを押さえていたのだ。

アンデットの発言から、インデックスも狙いだということは簡単に分かった。  
だからこそ、まだ敵がいるかもしれないのに彼女を出すわけにはいかなかった。

「御坂よりも上の・・・電撃を放つアンデット・・・!？」

「生まれつき、と言っていたので、あの体からしてもおそらくは電気ウナギかと思われます」

そう、敵はエレクトロエエルアンデット  
電気ウナギの始祖たるアンデットだ。

しかも

「言葉を発するだけの知能がある？」

「完全に上位アンデット級……しかも俺たちの封印してきたアンデットを「あの程度」扱い……」

「ご主人様……」

「ん？」

「囲まれています。数は五体と言ったところでしょうか。おそらくは異形のモノ……アンデットでしょう」

と、そこで愛紗が息をひそめるように一刀に報告する。

それを聞き、改めて一刀が耳を澄ませると、確実に人間のモノではない足音と息遣いが聞こえてきた。

「……インデックスは俺が連れて行く。愛紗は俺が戦っている間に全員を逃がして「EARTH」に連れて行ってくれ」

「御意です」

「俺もアンデットのほうに行く。そっちは俺の領分だ」

「助かる」

「え……えっと……とーまと……」

「大丈夫だ、インデックス。必ず守ってやるから。また上条と会えるぞ」

そういつて、翼を開く一刀と変身する剣崎。

一刀の背中にインデックスを乗せ、二人が飛び出して行ってアンデットに向かう。



目の前には、バイザーで顔面上部を覆った長身の女性。

男の利き腕である手には、すでにすべての弾丸を打ち切った銃が、まるでお守りでもあるかのように強く握りしめられていた。

『 は どこですか ？ 』

そこでは先の現場と同じように、スピーカーのような声を出してなおも女性が質問する。

それに対し、男は知らないと呼び、命乞いをしていた。

その男性に対し、女性が採取確認というかのように、また同じ質問をした。

『 教えてください。イクス・・・イクスヴェリアはどこですか 』

「し、しらねえって言うてんだろ!!何なんだよ、そのイクスってのは!?!」

『知らない…….そうですか』

そう言つて、女性が本当に知らないということを確認し、その場を去る。

「た…….すかった…….?…….し…….死ぬかと思つたぜ…….  
」

助かったのかと男がその場で安堵し、息をもらす。

しかし

「なんで俺がこんな目に会わなきゃ…….あん?…….お、お、お…….うそだろおい!?!?」



その男性の手にナイフが握られ、その手が徐々に自分の喉仏に向かって持ち上げられていく。

「おいおいおいおい……じよ、冗談だろ……とまれ……止まれよ俺の腕だろうかよ!! やめろ……俺あ死にたくないゴブツ」

男のそれを拒否する声もむなしく、ナイフの刃が喉につきたてられ、そこから血が噴き出してくる。

なおも動く心臓の動きに合わせ、そこから噴水のように血が噴き出してくるが、それも十秒もすれば収まってきて、男が自らの血液でできた池の中に倒れこむ。

コヒュー、コヒュー、という枯れるような呼吸音が弱まり、完全に沈黙する。

その火災現場は、のちにミッドチルダ連続放火殺人事件の11件目に数えられる事件で、この放火殺人事件がついにミッドチルダに入

ってきた、はじめての事件である。

物語は交差する。

今はまだ交わらなくとも

それはいずれ、新たな物語を作り出すために。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 奪取（後書き）

と、いうわけでいったい何があったのか、でした！！

蒔風

「これで今回、まずは美琴が連れて行かれたわけか……橘さんは何か知ってるみたいだったけどな」

ええ、彼はあのアンデットがどんなものか知っています。次回か次々回にでも、それを明らかにしたいと思います。

さて、今回で何と何が交差するかわもうお分かりでしょう。

ドラマCD「Strikers X」と、「劇場版仮面ライダーブレイド Missing Ace」です。

蒔風

「だけど時期が少しずれてるんじゃないか？「X」のほうは「Strikers」から3年後だし、ブレイドのほうは4年だろ？」

そう、第一部の終わりからと第二部の終わりまでが半年だとしても、まだ約一年半しか経っていません。

だからティアナは執務官になりたてです。  
と、言ってもあんまり変わりませんけどね。

でも、なぜ早く始まったのかもまた謎にしておきましょう。

蒔風

「にしても今回のアンデットにも強弱があるみたいだな」

あるね。

今回のエレクトリックエエルアンデットは、完璧に上級以上です。

何故そこでわざわざ「エエル（ウナギ）」ではなく「エレクトリックエエル」と細かく分類したのは、また橘さんの解説待ちです。

ちなみにこんな感じのアンデットはまだ出てきます。  
雑兵のアンデットと、上級のです。

蒔風

「次回、ティアナ、ミッドチルダへ。そして薄緑参戦」

ではまた次回

## 捜査

「これで十一件目……」

「ですね。ではミッドに？」

「ええ、そこで協力者とも合流するわ」

時空管理局本局転送ポート

そこで執務官のティアナ・ランスターと、その補佐ルネッサ・マグナスが打ち合わせをしていた。

彼女が追っている事件は、次元世界における連続放火殺人事件。一つ目の世界ではフォルスで六件、二つ目はヴァイゼンで四件、そして、今回三件目はついに第一世界ミッドチルダの地上にやってきた。

その被害者　　主だった犯人による死者は、すべて遺跡発掘などの

学者たち。

しかも、盗掘疑惑の掛けられていた者たちばかり。

犯人の姿はすでに掴んでおり、その名を「マリアージュ」と呼ばれていた。

が、被害者の死因は焼死ではなく、のどを引き裂いたことによる失血死だ。

しかも、ナイフの刺さる方向からして、明らかに自らの手によって。

だが……

「一件前の事件は確か鋭利な何かに引き裂かれていましたよね？」

「そう、だからわからないの……確かにマリアージュは剣を持っているわ。でもあの剣でできる切り傷ではないし、今までのやり方とは違うのも気になる……」

そう言いながら、どうやらポートの準備ができたらしく、二人が乗って転送される。





付き合いの長い二人だ。

こうして会えば、否応にもテンションは上がる。

しかし、ルネッサがジトーーー、と見てきているのに気づき、「ホ  
ンと咳払いして紹介した。」

「ルネ、こちらはギンガ・ナカジマ捜査官。私の親友のお姉さんよ。  
で、ギンガさん、こっちが私の補佐をしてきている、ルネッサ・  
マグナス執務官補佐です」

「よろしくね」

「はい。二人はお知り合いだったんですか」

「そうねー、かれこれ付き合いとしては五年以上かしら？」

と、まあそんな自己紹介はともかくとして、今は事件である。

そちらの打ち合わせを始めて行った。

「事件の犯人は？」

「現場に駆け付けた隊員からの報告から、マリアージュで間違いないそうよ」

「その隊員の話を知りたいのですが……」

「駄目よ。駆けつけたのは五人だったんだけど、そのうち三人が重体、二人が意識不明のまま」

「そう……ですか……」

そうしてその後も打ち合わせをしながら、ふとルネが思い出したように質問した。

「あの……そういえばほかに協力者がいるようなことをおっしゃっていたような気がするのですが……」

「あ……そういえば理樹さんたちはどこにいるんですか？こっち来ることは連絡していたので、多分来てるはずなんですが……」

「え？あ、ああ・・・あの人たちは・・・」

「さあ——みんな！——これからみんなを守る正義の味方の登場だ  
——！——」

『『わ————！！——』』

と、そこに司会のお兄さんのような声と、それを聞いてパチパチと拍手する小学生くらいの子供たちの歓声が聞こえてきた。

「ギンガさん、あれは・・・」

「どうやら、低学年生の見学のようですね。こういったデモンストラーションもするんですか？」

「そうね。やっぱり、この仕事のこと、もっと知ってもらいたいからね」

「どうやらそれは防災課による見学会で、そこで実際の隊員と話をしようと言っ催しのようだった。」

それはいい。しかし、ティアナの視線はそのイベントではなく・・・

「あれ、恭介さんじゃないですか？」

そのステージに立ち、マイクを（小指を立てて）握っている青年に向いていた。



というか、もはや何でもありである、この集団。

「ヒーローの登場には爆発……これが正義だ」

「おうよ。謙吾っち、今日は熱くいこうぜ」

「そんなことよりもクチャクチャハズいぞッ!!」

「恭介……行き当たりばったり過ぎるよ……」

「わ、私もびつくりで……って真人さん!? 背中燃えていますよ!」  
「?」

「おう!! 燃えるように熱い背中の筋肉だぜ!!」

「違います!! 爆発の火が燃え移ってますっ!!」

「ん? ……おうああ!? あっつい————!!」  
「!!」

と、ステージの上で体を張った漫才をする真人。  
恐ろしい男である。

と、言うか防災課のステージで火事を起こしているのだろうか？

「ふうー、危なかったぜ。まさか俺の筋肉がついに炎を上げる時が来るとは思わなかった・・・」

「真人、それは違うよ・・・」

「私たちは日々！みなさんの平和と安全を守って訓練を繰り返し、危険な場所にいる人を安全な場所にまで・・・」

「だ、大丈夫なのかしら・・・？」





残りのメンバーは特に召集されていない。

「全員じゃないんですね」

「うん。でもバックアップは取ってくれるから大丈夫だよ」

『まかせてよー』

『がんばるのですっ！』

『ティアナ君、今度おねーさんとクロスシフトしないかい？』

『姉御、エロいっす』

『………ぽっ』

「来ヶ谷さんのが気になるけど……ありがとね」

「で、敵はマリアージュだっけ？」

「そう、目的も放火方法も不明。ただわかっているのは、発掘学者、それも犯罪者スレスレの人たちを狙っているということよ」

そんなこんなで、とりあえず事件の現状を説明しているティアナと、それを聞く理樹。

と、そこに突撃してくる一人の少女がいた。

「ティーーーーーアーーーーー!!!!!!」

「え？スバ・・・オフウ!？」

ドスッ!

そんな音がして、ティアナに突っ込んで来たのは、さっきまでステージではしゃいでいたスバル・ナカジマその人だ。  
床に倒れるティアナ、のしかかるスバル。

「ひっさしぶり!!事件か何か？」

「突っ込んでくるのやめなさいよ!!!」

「えー！？だつてえー！？」

「だつても何も無い！！！」

であつてさつそくそんなド突き漫才を繰り広げる二人だが、そこにギンガが割つて入つてやめさせた。

「ほらほら、事件なんでしょ？せつかく理樹さんたちも来たつて言うのに、恥ずかしいところ見せるんじゃないやありません」

「「は、はい・・・」」

そうして話していると、「こつちでの拠点はどこにしようか、とルネが聞いてきた。

ティアナはホテルでもいいというのだが、そこでスバルは自分の部屋でもいいよと提案してきてくれたのでティアナはそつちに。別拠点を構えるといったルネツサはそのままホテルに向かい、リトルバスターズの面々は・・・

「僕らは乗つてきた船にいるよ」

「どの船ですか？港は？」

その質問に、理樹はうーん、と声を出して、ニコリと笑って口  
に人差し指を当てた。

「「船」というかなんというか・・・秘密だね」

「え？でもそれじゃ・・・」

「大丈夫。いざとなったら船ごと行くから」

「え？」

と、そこで理樹はこの話を打ち切り、これからどうするのかを聞いた。

どうやらティアナはこれからこっちでの現場検証に向かうそうだ。  
荷物はスバルが「まっかせて！」と張り切っているので、彼女が  
帰宅する時に一緒に持って行ってもらうことにした。  
どうせ帰りは遅くなる。

そうして、ティアナ、ギンガと共に、理樹と鈴が手伝いに行っ  
て、ルネッサは建物に入って資料をまとめに行った。

残されたのは、スバル、恭介、真人、謙吾。

と、そこで不意に真人がスバルに話しかけた。

「なあスバルっち」

「なんですか？真人さん」

「おまえらって同じ部隊にいたんだよな？」

「そうですよー。ティアがいて、私がいて……で、うちの部隊にヘリパイのアルト、さらにギン姉」

「なんだ、ほとんどそろってんじゃねエか」

「そうなんですよ！！エリオとキャロも呼んで来れば……」

そんな世間話のような話をしていく二人だが、恭介と謙吾が驚愕に包まれていた。



た。仮面ライダー」

「え？」

「へえ・・・」

「私を、連れて行ってください。五体満足な状態で、化け物の蠢くその最深部まで」

t o b e c o n t i n u e



## 捜査（後書き）

まずは謝罪をば。

ミッドでの放火事件は三つ目の世界であって、三件目じゃなかったんだーーーー！！

蒔風

「な、なんだってーーーー!?」

そこは修正いたしました。  
気付いてよかったあ……

蒔風

「今回はティアナと理樹たちの合流シーンだな」

ほとんど原作と変わらないからかなり難産だった。

蒔風

「まあなー。ここはあのシーンで、そこからです……とか言ったら読者に張ったおされるもんな」

それに内容知らない人もいらっしやる。  
と、なると簡単には書かないとまずい。

難しいね。

蒔風

「そして最後のは？あれは翔太郎かね？」

そうです。

風都の探偵、左翔太郎です。フィリップも一言だけ言葉を発してましたね。

蒔風

「依頼人は・・・女か？」

ええそうですね。

ちなみにオリキャラです。と、いうことは当然キーマン・・・この場合はキーウーマンですね。

蒔風

「なるほど・・・さらにキャラを絡めていくんだな」

そのとおり!!

ちなみにこのキャラ、名前に困ったので友人（相手はどう思ってるか知りませんが）の名前を少しもじりました。

蒔風

「許可は取ったのか？」

大丈夫だ。問題ない

蒔風

「次回、復活の不死生物とは一体？」

ではまた次回

## 根幹

風都、かもめビルヤード一階

そこにあるこの街の切札、鳴海探偵事務所

その中で、テーブルを挟んだソファに座っているのは、左翔太郎と、依頼者の女性だ。

「化け物の中を安全に？つまりは・・・護衛ってことか？」

「ええ。お願いします。私はそこに行かなければなりません」

「それはまたどうして？そんなところに行く理由を知りたいね」

依頼人の女性に興味を持ったのか、フィリップがいつもの仕草をしながら女性に聞いた。

それに対し、女性は特に答えない。

「依頼人のプライベートよ。それとも、ここの探偵事務所はそこま

で知らないと言われたいに依頼に依らねない？」

その言葉に翔太郎は少しムツ、とするものの、それでも確かにその通りだ。

いちいち内容の細かいところまで気にしない。依頼を完遂することがこの仕事だ。

別に知るのはそれまでの過程の内でもいい。

「わかったぜ。あんたを絶対に送り届ける。俺は左翔太郎。こっちは相棒のフィリップだ」

「よろしく」

「で……あなたの名前は？」

「私？私は、長岡ユキよ。なんでも呼んでちょうだい」



そう、あの周囲をかこっていたアンデットに、エレクトリックエールアンデットはいなかった。

だからこそ、もしかしたら一刀はインデックスを守り切れたのかも  
しれない。

「カードに封印したら消えた。やっぱり橘さんが相手にしたのと同じだ」

「どういうことなんだ……愛紗、橘さんは？」

「それがまだ……」

と、玄関口でそんなことを話していると、医務室から連絡が入った。

『みなさん、橘さんが目を覚ましました。話があるようです』

それから数分後には、医務室のベッドに横たわっている橘のもとに  
一刀や愛紗、剣崎が集まっていた。

「橘さん！」

「おお剣崎。心配かけたな」

頭に包帯などを巻いてはいるものの、いたってげんきなたちばなを  
みて、一同がほっとする。  
だが、こうしているのも惜しいほどに、彼等には知りたいことがあ  
った。

「橘さん、聞きたいことがあります」

「ああ、アンデットのことだろ？その話をするためにみんなに来て  
もらった」



そうして、橘が口を開く。

ことはつい一か月前にまでさかのぼる。

「EARTH」でアンデットに関する研究をしていた橘のもとに、一本の電話が匿名でかかってきたのだ。

その内容は、海岸近くの山奥、その洞窟に、意味不明な、そして大きな石板がある、というものだった。

その電話自体は橘がもっと詳しく聞こうとする前に、石版の場所を伝えただけで切れてしまったが、確かめてみるには十分な内容だった。

今考えてみれば、なぜ「EARTH」のほうではなく、この橘の部屋に直接かかって来たのかを考えると違和感があるのだが、この時

は特に気づかず橋はその場所に向かった。  
なにぶん、匿名からの電話だし、内容もあいまいな情報なので、特に重くも受け止めず一人で。

しかし洞窟に入りその石板にたどり着いて、橋は思い直した。

「デカイ……」

その石板は、もはや「板」というよりも、「壁」と言った方が的確であるほどに巨大なものだった。

そしてそこには、確かにアンデットの紋章があった。

その石板をカシャカシャと写真に収めていく橋だが、

「ふむ……これは確かに……む？」

と、ここで彼は電話の違和感に気づいた。

一切アンデットのことを言っていないのに、なぜ自分のところに電話が来たのか。

自分のところにそう言った案件の電話が来たために、錯覚してしまっていた。

周りを見らたそうとし、石版に背を当てる。

そして直後、彼は後悔した。もっと大人数で来るべきだった、と。

『ニンゲン・・・』

『ニンゲンノタマシイ・・・』

『人間？』

『魂だ！！何万年ぶりの！！』

『外・・・そうだ・・・ここには外がある！！』

『食べ！喰え！！』

『魂を食らえ！！』

「な!？」

ゴポツ・・・ゴボゴボゴボツツ!!!

そして突如、石版の中から黒い水があふれ出してきて一面を覆った。その水は洞窟内の地面を全て覆うと、さらに壁を這いあがって全方位を水で覆いつくしていき・・・

「こ・・・これは・・・まさか・・・!？」

それを見、橘は急いで洞窟の外に出た。

後ろをちらりと振り返ると、水から湧き上がるかのように次々と化け物 アンデットが出現し、そしてそれは一体たりとも見たことのない者だった。

「く・・・こいつらを野放しにするわけには・・・!!!？」



そして撮った写真を解析して、その文字盤を読み取りその内容を知って、襲われるであろう少女のうち、一番近い場所に向かったのだ。

すなわち、学園都市。

そこで、彼は御坂妹を助けたのだ。

「そ……そんなことが……」

橘の話聞いて、剣崎が驚く。  
そして、話はアンデットのほうへと移った。

「だけどアンデットは全部封印していたんじゃない？」

「俺もそう思っていた。だが、そうなるとおかしくないか？」

「え？」

「生物の始祖たるアンデットを戦わせてこの星の生態系の頂点を決める戦い「バトルファイト」。だが、それに選ばれた生物は52種……少ないとは思わないか？この地球上にはまだ途方もないほどの生物がいるのにな？」

それを聞き、剣崎ははっとした。  
確かにそうだ。しかも、個体によっては細かく分類されていたものもいた……

「人間、ゾウ、カマキリなどと簡単に分けられているものもあれば、スパイダーとタランチュラ、さらにはギラファノコギリクワガタなどまで細かく分類されていたものまでいたのに、52種は少なすぎる」

「じゃあつまり・・・あのアンデットたちは、バトルファイトに選ばれなかったアンデット？」

「そうだ。しかも、その理由は「弱いから」ではない。無論、そう言った理由のものもいたが、そうでない者もいる」

そう、バトルファイトは地球上での生態系の頂点に立つ者を決めるべく行われるバトルロワイヤルだ。

ゆえに、異常に強い者がいてはならない。バランスが重要なのだ。一人勝ちだけは許されない。

そこからあぶられたものには、当然その力が強すぎたがゆえに封印され、バトルファイトに参加できなかった種族もいたのだ。

いわば、オフィシャル選手ではなくストリートで名を馳せるようなもの。

ただただ強すぎたがゆえに、枠に入れなかったということ。

「そ、そんな奴らが・・・」



「ああ・・・襲ってくる雑魚共の大半は俺たちが勝って封印したア  
ンデットと同等くらい力の。弱いアンデットはなから戦わずに自  
然に帰った。しかし、強力なアンデットは、あのジョーカーすらを  
も凌ぐ」

「な・・・」

そう、今回の敵は、そんな奴らだ。  
だからカードに封印すると、彼らの姿は消えてしまったのだ。

「ま・・・何枚もラウズカードを使わずには済むが、な」

そこまで話した橋に、一刀が最後の疑問を挟んだ。  
まだ、橋の話には聞くべきことがある

「橋さんは、「狙われるであろう少女のうち」って言ってたよな？」

「ああ」

「標的は・・・複数人いる？」

「そうだ……」

「なんで彼女らだと……」

「石版を解析、解読した。見てくれ」

と、橘が宙にモニターを表し、そこに写真を提示していく。

そこにはよくわからない文字で言葉がつづられていたのだが、すでに解読は終わっているということもあって、即座に訳文が出てきた。

「これは……!!」

《我ら、「大いなる者」》

《この地にて、一つの種を選びて繁栄を約束せん》

そこにあったのは、バトルファイトを開始するといった旨が書かれていた。

つまりこれは、その観測者が残したものだっただ。

そして、そこに書かれているのはそれだけではなかった。

《我ら、この地に邪神を見つけたり》

《そのもの、世を破壊と混沌に導かん》

《この地の繁栄を約束せんがため、我ら邪神を封印せり》

「邪・・・神・・・？」

「ああ、おそらくはこいつが元凶だ。見ろ」

と、モニターの一部を拡大し、さらに細かく見ていく橘。  
そこには、先ほどまでの筆記とは明らかに違う文字で掘り込まれた文があった。

【十の幼き少女の魂を捧げよ。我が身の力と成らんが為に】  
【さすれば我、彼の者に無限の力を与えたもう】

「これは？」

「こいつを封印した「大いなる者」ってのは、多分あのモノリスを作った奴ら・・・バトルファイトの統率者だ」

「モノリス？」

「ああ・・・バトルファイトを促していた、捻じれた石版だよ。結構前に破壊したんだけど・・・まさか！！」

「そうだ。おそらくはその影響で封印が弱まり、あの文字を外の石板に掘り込むことができたんだろう。そして、俺がアンデットを解き放ってしまった」

「待ってくれ。ってことはアンデットで蓋をして封印してたんだろ？それならもう邪神の封印も解けてるんじゃないのか？」

「いや、それは違う。ここにもあるように、「邪神」はアンデットとはまた別の存在らしい。封印に使われたアンデットは不死だから衰えることはないが、この邪神は一万・・・いや、場合によってはさらに太古から封印され続行けていた」

「邪神は魂に飢えている……ってことか？」

「ああ。そしておそらくは強い能力や魂を持つ者である者の中で、一番近かったのが彼女だった……連れ去られてしまったがな」

「なるほど……」

「だったら警戒態勢を引かなければなりませんね」

「うん。力を持った少女は、幸いなことに多く「EARTH」にいる。みんなをここに……」

そうして一刀が各方面へと連絡を取ろうとするが、そこで医務室の扉が開いて、一人の青年の声が聞こえてきた。

「なるほどな。大体わかった。二人ならもう連れてきたぜ」

「!!」  
「士!!」

「それにユウスケも・・・あ、梨花ちゃんに羽入ちゃん！」

「見たこともないようなアンデットってのそついうことか」

「俺たち、雛見沢に行っている時に・・・」

標的であろう梨花と羽入をここまで連れてきた土とユウスケが、一連の話を聞いて納得していた。

海東と夏海はすでに雛見沢で別れ、各地に走っていた。

そして話の内容から、土は大まかなながらも邪神の目星をつけていた。

「そいつ・・・知ってるかもしれないねえ」

「本当か!？」

「ああ・・・だが俺が知ってるのは別世界のだ。こっちのとはかなり違う。それにそれなら・・・」

「それなら？」



ゴオンっ！！

と、そこで宮殿の屋根を突き破られた。ハクオロがウィツアルネミテアの姿となつて、巨大な姿に変貌したのだ。

が、その睨みつける敵は人間大のモノ。

現在、カルラとトウカが交戦しているものの、一向に攻撃が入らない。

この二人の攻撃をして、そのすべてを回避、防御しているそのアンデットは、全身が黒光りしており、マントのような羽を持っていた。

『二人ともどけエ！！』

ドオン……！！！！



そのハクオロの咆哮と共に、巨腕が振り下ろされてアンデットに叩きつけられる。

だが

『いない!?!』

「おつそいねえ・・・あんたら人間は、デカけりゃ勝てると思ってんのかい!?!」

そんな声がし、直後シュカツ、という音がしてハクオロのアキレス腱が切り裂かれた。

ガクリと崩れる巨体。  
しかし、即座にそれは再生し、再びその足で立ってアンデットを睨みつけた。

『カアああアアアアアアアアアア!!!!』

そして、その口の前に黒い球体が出来上がっていく。  
それは見て分かるように、途方もない力を込めたエネルギー弾だ。

「へっ……まあじかよ……あんたクレイジーだぜ!!」

『オオオオオオオオオオオ!!』

ドオン!!!

そして、それが放たれて着弾、爆発。  
炎を上げて、宮殿の広い謁見室が炎に包まれた。

しかし、その炎の中にアンデットはいなかった。

それを見て、ハクオロが空に向かって咆哮を上げる。

奪われたものは、あまりに大きい。

その奪われたものとは

そいつは

アンデットが逃げてきたのは森の中。  
その肩には一人の少女が担がれていた。

「『ヤナマツナ森の母』の少女、ね。これでまた一人、と」

意識を失い、担がれている少女の名はアルルウ。  
森と心を通わせ、動物の言葉を聞く少女だ。

「さつきも虎が追っかけて来たみたいだし、力は本物。申し分ない」

「申し分ないところ失礼だが、返してもらおうよ」

「なに!？」

《ATTACK RIDE      BARRIER!!》

と、アンデットが森を走っていると、目の前に青いホログラムのよ  
うな壁が現れ、行く手を阻んだ。

その壁の前に急ブレーキで止まるアンデットが声のした方向を見る  
と、そこからシアンのカラーに身を包んだ仮面ライダー、ディエン  
ド  
海東大樹が現れてきた。

「なんだデメエ？」

「今連絡が入った。お前達が復活させようとしているもの・・・ま  
あ、復活させるわけにはいかないんだよね。しかも、そんな子供の  
命を使つてなんて」

「ああ？・・・ああそうかそうか。お前「仮面ライダー」ってや  
つだな？バトルファイトのボンボンどもがやられたつて言う」

「おや、ならば君も同じ未来をたどることだね！！害虫君！！」

そう言つて、ディエンドが銃弾を放つてそれがしなり、肩のアルル  
ウに当たらないよう的確に命中させていく。

しかし、その弾丸の九割は回避され、残りはすべて打ち弾かれた。  
アンデットの、実に素早い動きによって。

その動きは本能に訴えかけるような気味悪さを持っており、それがゆえに一発で何の始祖かはつきりした。

「テメエ・・・害虫呼ばわりしといて・・・ただで済むと思っ  
てんのか!!!」

アンデットが激昂し、しかしそれでも肩のアルルウは降ろさず  
そのままディエンドへと突っ込んできた。

その速度はかなりものだが、ディエンドもある程度ならば加速  
することができる問題はない。

突っ込んでくるアンデットを見て、銃口を向けながらディエンドが  
相手の正体を叫び走りこんでいった。

「問題ないね。さ、その子を放したまえ、ゴキブリ君!!!」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 根幹（後書き）

と、いうわけでアンデットの出自を明かさせていただきました！  
え？アルビノジョーカー？そんないなかったんやwwww

と、いうのは冗談で。

当初、アルビノジョーカーも出すことを考えていました。

しかし、彼を入れるとまた話がややこしくなりますし、どうしようかと悩んでいました。

7007

と、ここで思いつきました。

あのアンデット達は、邪心を封印するために使われていました。  
そして、アルビノジョーカーはその封印とはまた別に封印されていた、と考えたのです。

これはいける。

こぎつけ？いいえ、設定です（笑）



友人もこう言っていました。

「原作から変えていくのが、二次創作の醍醐味だ」と

よろしい、ならば改変だ。

アルビノジョーカーにはさよなライオンしてもらいました。  
ごめんねアルビノくん。

そして、十人の少女。

これは魂の質や持っている力の強さで選びました。

まあ、礎には十人の少女が必要。  
その強さで邪心の力も上下しますからね。

さて、その十人とは一体！？  
すでに判明しているのは五人。

これからまた誰が狙われるのか！！

ではまた次回で！！

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花

古手羽入

御坂美琴

インデックス

アルルウ

残り五名

## 害虫

森の中での戦闘

コックローチアンデットとディエンドの戦いは、高速移動によって展開されていた。

しかし高速移動いっても、まだ目視できるレベルだ。

だといっても、コックローチアンデットは依然としてその肩にアルルウを抱えている状態で、ディエンドの動きについてきていた。

(なんて速度だ・・・こっちの弾丸がもう掠りもしない!!)

そう、しかもその状態でディエンドの攻撃は一切当たっていなかった。

それどころか相手の攻撃に装甲から火花を散らしてしまうほどだ。

ついてきていたどころではない。すでに凌駕し始めていたのだ。

「その程度か？その程度だろうなあ？所詮人間じゃあこの星の統治者になっても、一番の強者にはなれない、ってこった!!」

ガギイ!!

と、ディエンドの装甲にコックローチアンデットの鉤爪が命中して火花を散らす。

(ぐっ……勝て……ない……だが彼女だけは!!)

しかし、それでもディエンドは諦めてはいなかった。

現に、コックローチアンデットが彼女を連れてこの場から逃げているのがその証拠だ。

相手にしてみれば逃げればそれで勝ちなのに、ディエンドはいまだに敵をこの場に引き留めている。

7011

それに、彼は怪盗だ。

盗んで逃げるは専門分野。

くらまし、惑わし、かすめ取る。

今までだって、そうして戦ってきたのだから!!

《ATTACK RIDE ILLUSION!》

ディエンドがカードを装填、引き金を引くと、コックローチアンデットを囲むかのように五体のディエンドが現れ、銃口を一斉に向けた。

「早さじゃ勝てねエから今度は数がよ!」

「そう。君らだってうじゃうじゃいるじゃないか。ハッ!」

と、計六人のディエンドが次々に襲い掛かり、その肩に担いだアルルウを奪い取ろうと腕を伸ばしていった。

まず一気に二人が掴みかかり、それをバックステップで避けるコックローチアンデットだが、さらにそこに背後から一人が飛びかかってくる。

それを後ろ蹴りで押しのけるが、その隙に左右からディエンドが一人ずつ掴んで拘束した。

「1」のっ!」

「いただいたよ!」

と、そこでコックローチアンデットの頭上を宙返りして飛び越えて言ったディエンドは、そのままアルルウの体を掴んで奪い取った。

成功である。

しかし

「テメエこの野郎!」

激昂したコックローチアンデットが、さっきと比べ物にならない速度で突進してくる。

それに対し、ディエンドはアルルウを抱えながらカードを装填しようとしていた。

間に合わないか!?

ディエンドがそう思いとっさに彼女を守ろうと背を向けた瞬間

「ガオルルルルルル！！！！！」

バザアツツ！！と茂みを押しつけて、アルルウになついている白虎「ムツクル」が飛び出してコックローチアンデットに剛腕を振るい爪で引き裂こうと襲い掛かった。

それをギリギリで回避したコックローチアンデットだが、ディエンドとアルルウを守ろうとムツクルがさらに咆哮を上げた。コックローチアンデットはその声の振動に若干ながらも後退させられ、その隙にディエンドがカードを発動させる。

《ATTACK RIDE INVISIBLE!》

そしてムツクルの姿ごと二人がその場から消え、コックローチアンデットが咄嗟に飛びかかってその腕が空を切った。

「チッ！……逃げられたか……」

「ありがとう、白虎君<sup>しろこ</sup>」

「ヴオフ」

と、その戦闘の場から逃げ出した海東は変身を解き、疾走するムツクルの背の上で腕を押さえていた。

（強かった……想像以上に。とりあえずこの子を保護者のもとに連れてって、それから「EARTH」に保護だ……）

「まったく、厄介なことになって来たね」





「私の番犬。一緒にいて、損にはならないわ」

そうして彼女が車に乗って目的地に向かい、その後を翔太郎がバイクでついていった。

二人の乗った車とバイクが、町を抜け、海岸線沿いの道路を走る。

と、そこで

『なあ、行くところは聞いた。でもよ、なんでそこに行くんだ？化け物ってなんだよ？』

『あら、気になるの？』

『まあそりゃあな』

車の中の長岡と、バイクで追う翔太郎が通信機で会話をする。

その内容は、至極まともなものだ。  
いったい何から守ればいいのかわからなければ、護衛のしようがない。

『そうね……だけど、そんなこと話している場合かしら?』

『あん?』

『お客さんよ、ハードボイルドさん!』

そんな会話をしていると、長岡がハンドルを切って曲がり、海岸の駐車場に突っ込んだ。

この海岸は岩場ばかりで、とてもではないが海水浴場として機能している場所ではない。  
ゆえに車も他の人も一切おらず、とりあえずほかの被害は出なさそうだ。

そして、長岡と犬と一緒に車から飛び降りてきた。  
直後にその車に向かって何かかが飛んできてボンネットに突き刺さり、車を爆散させる。

「キヤあつー!!」

その爆風で地面を転がる長岡だが、それでも何とか受け身を取って膝立ちになる。

その目の前には、一对の羽根を持ち、口がまるで針のようにとがった怪人が舞い降りてきた。

柴犬が長岡の前に立って怪人アンデットに向かって唸り声をあげ、長尾もポーチから銃を取り出して銃口を向けた。

「守り、ってこと？石版に行かせないつもりね」

「フィリップ！！出たぞ！！」

《ジョーカー！！》

そこにダブルドライバーを装着した翔太郎が割って入り、ガイアメモリを起動させた。

『ああ、翔太郎。いっつ』

《サイクロン！》

すると翔太郎の脳裏にドライバーでつながったフィリップの声が聞こえてきて、相棒のガイアウィスパーも聞こえてきた。そして直後、ドライバーにサイクロンメモリが出現。それを押し込み、さらに自分のジョーカーメモリを押し込み、ドライバーを展開させた。

《サイクロン！ジョーカー！！》

そして、その身体を風が覆い、姿を仮面ライダーWのそれへと変身させ、戦闘を開始した。

「行くぜ！！オオリヤア！！」

気合一発。

声を上げ、再び上空から襲いかかろうとするそのアンデットの足をつかみ、引きずり降ろそうとしがみついた。

しかし、アンデットはそのWを足蹴にし、地面に落して上空から襲

いかる。

「アダッ!？」

『翔太郎!こいつはアンデットだ!!!』

「なんだって!?!」

『こいつは倒してもすぐに復活する。勝負を長引かせるのは不利だ  
!!!』

チュン、チュンチュンチュンチュンチュン!!!

フィリップからの警告が飛ぶものの、上空のアンデットの針のような口から、同じように針のような赤い弾丸が打ち出されてそれが地面に突き刺さり穿った。

この駐車場には一切の車もなにもなく、しかも開けているので、上空から狙われると格好の的になる。

「うおっ、つた、つた、つた!?!」

『翔太郎!岩場に隠れるんだ!!!ここでは的になってしまっ!!!』

「くっ！」

と、フィリップの提案に乗って海岸に向かい、荒々しい岩場に隠れるW。

するとそこには同様に長岡もいて、その隣にはちょこんと柴犬も座っていた。

「ちよつと!!こつち来ないでよ!!」

「え!？」

『そつだぞ翔太郎。依頼人を守らなきゃならないのに、依頼人のところに逃げ込むとは何事だい?』

「はあ!？え？俺悪いの？確かにその通りだけど、俺が悪いのかこの場合!？」

そんな言い合いをする彼らだが、そこにあるものを発見する。

服だ。

作業員の着るようなものから、男性用の服、女性用の服、子ども服、さらにはサーファーが着るようなライフジャケットやダイバーズスーツ、釣り人のジャンパーや、釣り竿やらの道具もそこに捨てられてあった。

「これは……??？」

『……翔太郎。あのアンデットはおそらく蚊のアンデットだ』

「フィリップ?」

『モスキートアンデット、といったところかな?そして、あいつが撃ち出してきているのは、赤い弾丸だ……!!』

「……まさか……あの野郎!？」

『そつだ、あいつは……ここにやってきた人間の血を吸って、それを押し固めて高圧で噴き出してきているんだ!!!』



「これだけの人間を・・・」

『許せないね、翔太郎』

「ああ・・・あの野郎は、絶対にブチノメス!!!」

ザッ!!

《ルナ!》 《トリガー!!》

「行くよ!!!翔太郎!!!」

「ああ・・・フィリップ!!!」

《ルナ!トリガー!!》

「『オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』」

そして、岩場から飛び出した幻想の狙撃手の銃口から飛び出した金色の弾丸が、吸血の化け物へと襲いかかった。

「『さあ、お前の罪を数えろ!!!』」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 害虫（後書き）

さて、今回はディエンドとWの戦闘でしたがいかがでしたでしょうか？

敵は、タイトルの通り害虫ですねえ！

蒔風

「キモチワルイ……しかもコックローチに至っては上級じゃねえか！」

そうです。

そりゃあそうでしょう。

だって恐竜の時代からいるようなやつですよ？

生存能力も高いし、一説だと人間が滅んだ後に繁栄するのは奴らだつてもいわれてんですから。

それにほら、M宇宙ハンター星雲人だって正体はゴキブリだったじゃないか。

蒔風

「何のネタだ」

「ゴジラ対ガイガン」での敵宇宙人。

蒔風

「濃いわー!」

で、それ考えてたらまた面白い考えが浮かんでしまった。

蒔風

「ほっ?」

一万年前のバトルファイトは人間の始祖、ヒューマンアンデットが勝った。

だったらその前の恐竜時代ではダイナソーアンデットが勝ったのか?

7027

蒔風

「む?確かにそうだな……」

では彼らと戦ったのは?

伝説に残っているドラゴンや人魚なんてもののアンデットがいたら!?

蒔風

「それはまた壮大だな」

でもありえなくはないでしょう?

蒔風

「確かに」

ま、話には出しませんがね。  
誰かこの案使いませんか？

蒔風

「にしても強かったな、コックローチ」

彼の速度はクロックアップほどではないですが、ディエンドの移動よりは早いです。

ちなみに作者の考えとしては

ハイパークロックアップ>クロックアップ=アクセルフォーム>ア  
クセルトリアル>ディエンド高速移動

くらいに思ってます。

ちなみに「風足」や「加速開翼」はクロックアップくらいです。

蒔風

「で？コックローチは？」

アクセルトリアル程度です。

でもトリアルの速度もだんだんと上がっていくので、いつかはク  
ロックアップに追いつくと思いますよ？

蒔風

「そして、長岡とかいう女史。いったいなぜ、石板の事を知っているのか、そこに向かおうとしているのか。気になるな」

地味にオリキャラですしね。

今回の事件、いろいろとめんどくさいです。

しかも下手するところのまま続いて行って、「次の日」とか「数日後」とか忘れそうだ。

読み返してみても「あれ！？この第三章一日でかたついてる！？」なんてことになるかもしれない！？

蒔風

「気をつけるよ！？」

気をつけます！！

蒔風

「次回、Wの害虫退治！！」

ヒヤッハ！汚物は消毒だ！！！！！！！！

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花

古手羽入

御坂美琴

インデックス

アルルウ

残り五名

## 輪郭

W VS モスキートアンデット

Wルナトリガーのもつトリガーマグナム銃口から金色の弾丸が放たれ、めちゃくちゃな軌道を描きながらもひとつ残らずモスキートアンデットに向かって飛んで行った。

それを左右上下にとちよこちよこ飛び回って回避するモスキートアンデットだが、回避したはずの弾丸がUターンして戻ってくる。

「ギッ!?!」

「ほらドンドン行くぞオ!!」

ガキヨンガキヨンガキヨン!!!

さらにWは追い打ちをかけるかのように弾丸を放ち、モスキートアンデットを弾丸で包围していく。そうして一発が命中し、そこからはなし崩しのように二発三発と命中していった。





翔太郎の気合いと共に、炎を纏ったヒートジョーカーの拳がモスキートアンデットの顔面に突き刺さり、その体を岩肌叩きつけてやる。

ガリゴリと岩場を削りながら吹き飛ばされたモスキートアンデットを睨み付け、Wが腰のスロットにジョーカーメモ리를落とす、腰を叩いてマキシマムドライブを発動させた！

《ジョーカー！！マキシマムドライブ！！！！》

その発動を以って、その両拳に先ほどとは比べ物にならない程の炎が灯った。まるで、怒りの炎であるかのように。

「うおおおおお！！」

そうして、その拳を握りしめて走り出したW。その拳で渾身の力を持って殴りつけ、相手を爆散させるつもりなのだ。

しかし

「危ない！！もう一体いる！！」

「なに！？ぐあッ！？」

長岡の言葉と同時に、ガゴツガゴツガゴツ！！という重い音を立ててWに向かつて拳ほどの大きさをした鉄球が飛んできて、その動きを阻害した。

その鉄球をその両拳で粉砕、地面に落として鉄球が飛んできた方向を見ると、そこにはもういったいアンデットがこちらに向いて立っていた。

「なんだよ・・・まだいやがったのかよ！！！」

『鉄球！？そういえば・・・そうか翔太郎。あいつは鉄バクテリアだ！！』

「はあ！？」

マキシマムドライブを中断されたばかりでなく、それを無駄撃ちさせられた翔太郎がイラつきながら、その鉄球を打ち払って落としていく。

そうしながらも、フィリップが相手の生物を推測していつていた。

新たなアンデットは鉄細菌、というよりもただ単の細菌の始祖たるアンデット、バクテリアアンデットだ。

その種の中には鉄を食べるバクテリアが存在するのだが、おそらくはその力を持って鉄を食らい、押し固めて吐き出しているのだろう。

『被害者たちがここに来た時に乗っていた車などを処分していたのはあいつだったんだ!』

「チツ・・・とことん食らいつく野郎どもだ!!!」

と、そこでモスキートアンデットがムクリと起き上がり、バクテリアアンデットの隣に立つ。

そして、バクテリアアンデットがWに向かって吐き出した鉄球に赤い弾丸をぶつけて破碎、散弾のようにして浴びせかけてきた。

「うお!? オアあああ!!!」

『うわああ!?! くっ・・・翔太郎、まとめて焼き払うしかない!?!』

「だったらこいつで間違いないな!?!」

《トリガー!?!》

《ヒート!トリガー!?!》

全身から散弾による火花をちらし、後ろに押し込まれるWだが即座にメモリをチェンジして、ヒートトリガーへと変わった。

だが、相手からの散弾がやむことはない。  
変わった瞬間にはエネルギーによる膜があるので大丈夫だったが、  
その後の散弾はなおもこちらに当たり続けている。

「グアツ……こ……の……!!」

『グアア!……クソツ、怯んでいる暇はない!! 一気にやろう  
』!』

《トリガー!! マキシマムドライブ!!》

「『トリガーエクスプロージョン!!』!」

トリガーマグナムの先端から噴き出してきた熱線が、炸裂してきた  
散弾を蒸発させる。

そしてさらにはモスキートとバクテリアアンデットのもとにたどり  
着き、その体を焼き焦がしていった。

「ギギギギギギイイ!!」



とはない。

そして彼が持つて来たラウズカード（興味があったので検索用に橘からもらっていたもの）で二体を封印しようとする。

一枚しかないのもスキートだけでもと封印したものの、やはりカードに封印した瞬間に絵柄は消え、消滅したため続いてバクテリアのほうも封印した。

「どういうことだい？君を狙っているのはアンデットだった。しかも、普通ではない」

「訳を・・・聞かせてもらえねえかな？」

そしてその場に残っていた遺品をすべて回収したうえで、フィリップと翔太郎が長岡に聞いた。

彼らは今起こっている別の事件は知らない。

しかし、それでもアンデットが狙ってくるなんてことはよほどのことだ。

だが、長岡は今それどころではないようだった。  
ぶつぶつと独り言を言い、思考を廻らせているようだ。

「……………規模が大きすぎる？……………なんで二体しかないの？  
……………」

そんなことを言いながら、こめかみのところを抑えて考え込む長岡。  
隣には柴犬がちょこんと座りながらクウーン、と小さな声を上げて  
いた。

「あ、なあ？話だけでも……………」

「……………！？翔太郎！！あれは！？」

そこでさらに話を聞こうとする翔太郎だが、フィリップの言葉に振  
り返り、空を見た。

「な、なんじゃありゃあ！？」

「あれは……………まさか全部アンデットなのか……………？」



その空を飛んでいたのは、無数のアンデットどもだった。飛べないものは飛べるものにしがみつき、さまざまな方向に飛んでいく。

それはまるで、世界の終りでも見ているかのような光景だった。

「どうということだよ……」

「ここではまずい。いったん風都に……いや、「EARTH」に向かおう。僕ら二人じゃ事が大きすぎる」

そうしてリボルギャリーに乗り込み、三人と一匹は「EARTH」へと向かった。

各地へと向かったアンデット達。  
いったい何を始めようというのか。



「この文字の解読は……」

「まだです。なにぶんこちらもつい昨日に消化したばかりだったから……」

「この文字って、何語？」

「わけわからんな」

その血文字を見て、ティアナとギンガが話し、そこに理樹が聞いてきた。

「どうやら、古代ベルカ文字見たいで……専門家の知識が必要ですね」

「なんて内容だろう……え……と……」詩篇の六　かくして  
王の帰還はなされること無く、大いなる王と……『長いね』

壁の血文字を見て、すらすらと読んでいく理樹。  
その理樹に、ティアナとギンガは驚いていた。

「わ、わかるんですか!？」

「まあね、翼人っていうのは基本的に世界をめぐるものらしいから、僕ら言葉には強いんだ」

「あ、そういえばそんな話聞いたことが……」

「う〜ん……」詩篇「ってことは何かからの引用かな？」

「でしょうね。でもいったい何の……」

「それに、古代ベルカがらみだったら聖王教会にも連絡しないとすね」

鈴が飽きたといわんばかりに周囲をぶらぶらとみている間に、  
とティアナとギンガは情報の収集と今後の動きを話し合う。 理樹

「連絡は僕がやっておくよ。えっと、写真写真……」

「あ、それなら私が撮ってます。クロスミラージュ、お願い」

《了解。そちらの端末に送っておきました》

「あ、どうもありがとう」

「理樹——」

と、そこで鈴が何かを見つけたようで、理樹を大声で呼んできた。なんだなんだとそっちの方へ向かう三人。

「どうしたの？鈴」

「ん、これ」

理樹が聞くと、す、と鈴がコンクリートの床を指さした。そこには消火した時の水が溜まっており、水たまりになっている。

おそらくは気にも留めるようなものではない窪みでもあるのだろう。

「これが？」

「水たまり」

「え、あ……そ、そうだけど……」

「ハア……」

「え！？なんで！？なんで溜息！？」

「理樹はわかってない。床がポコポコたとコケるだろーが」

「ま、まあそうだけど・・・」

「この前小毬ちゃんもコケてた」

「小毬さんはなあ・・・」

と、そんな話をしている理樹と鈴の横で、反対にティアナとギンガは真剣な顔をしていた。

「ギンガさん、このビルって・・・」

「建つてすぐってわけじゃないけど、床がくぼむほど古いものじゃないわ」

「そうですね・・・クロスミラージュ」

《OK》

「ど、どうしたの？」

「鈴さんの言う通りよ。ビルの床がくぼんでるのはおかしい」

「え……と？」

「つまり、ここには何かいたのよ。マリアージュじゃない……いいえ、下手をすると人間じゃないものかもしれないわ」

「じゃあこれは何かの足跡で、重みで少しくぼんだと？」

「ええ……こんなの、普通気付かないわ……ありがとね、鈴さん」

「ん、たいしたことない」

腕を組んでなぜか偉そうに返事をする鈴。

そうして、そのデータを別行動中のルネッサに送り、解析を頼むテ  
イアナ。

ここには、なにかいた。

ティアナとギンガ、そして理樹が顔を見合わせる。

この事件には、自分たちの知らないところで動いている何かがある、  
実際に存在するのだ。

「でも連絡は明日になってしまいそうだね」

「そうねー。こんな時間だし、今から連絡じゃあたぶん無理よね」

時間はもう午後の10時を回ろうとしていた。

確かに、こんな時間に連絡するのはよろしくないだろう。

それに急がなくても、古代ベルカ語を知っているものは知り合いに  
何人かいる。

「じゃー今日はここまでなのか？」

「そうだね・・・こっちの血文字は僕のほうでも調べておくよ。  
これだけのメッセージだ。文字以外にも手掛かりはあるかもしれない  
いし」

「何かあったらここに連絡。私かルネは起きていると思うから」



そうして、あらかたの手掛かりを持って、四人は解散する。

日が沈んで、深夜となって、そしてまた日が昇る。

同じように事件もまた起こるものだ。

t o b e c o n t i n u e d

## 輪郭（後書き）

はい、害虫退治その二と、マリアージュ事件の方の進展ですね。

蒔風

「これで一日の終わりか？長いな」

えつと……

前日深夜

御坂妹、アンデットに襲われ橘が助ける  
ミッドチルダで放火事件発生

午前

10:00 一刀、上条の部屋に向かう

10:30 雛見沢にてアンデットの襲来

11:00 ティアナ、事件の報告を受けてミッドチルダへ向かう  
準備

一刀、剣崎が到着

11:30 インデックスを連れて脱出。アンデットと交戦

午後

13:00 風都鳴海探偵事務所に長岡が依頼を持ってくる。

ティアナ、ルネッサ、理樹、ミッド入り。

14:00 一刀、剣崎、アンデットを倒して「EARTH」到着、橋から話を聞く

防災課のイベント

15:00 士、ユウスケが梨花と羽入を連れて「EARTH」到着

海東、トウスクルの森でコックローチと交戦

15:30 ティアナ、理樹が合流。現地での様々な手続き

翔太郎、長岡、目的地へと出発

17:00 ティアナ、防災課内での情報収集。そして現場へ

18:00 W、海岸にてアンデットと交戦

19:00 現場入り。その後調査

といったところですかね？

蒔風

「うわああ、なんという同時進行。ってかティアナは結構かかってるな」

まあ、まだ慣れていないのでしょう・・・

細かいことは気にしないで！！

それについて昨日放火があったばかりということなので、現場はまだ

荒れ荒れです。

それらの整理もしていたら、自然と時間もかかりますね。

蒔風

「にしてもちよこちよこ柴犬いるな。何だあれ？」

さあ・・・何となく出したんだ。  
後悔はない。ただ空気になる。

蒔風

「うおい」

さて、次回は夜！！

明日に向かってガンバロー！！

蒔風

「おー」

リストは増えた時に出します。

なんか毎回あってもしょうがない気がした

ではまた次回で

## 初夜

「ふう……今日は疲れたぜ……」

「翔太郎、何やら騒がしいようだよ？」

「ん？みてーだな……理樹が一刀はいんのか？」

「えっと……ああ、一刀がいるね」

リボルギャリーに乗って、Wの二人と長岡が「EARTH」に到着すると、何やら何名かの人間が集まってきた。

そこで翔太郎はフィリップにリボルギャリーを「EARTH」地下にある格納庫においてくるよう頼み、長岡とともにその中へと入って行った。

「おい、一刀！」

「ん？あ、翔太郎さん！！」

そこで手を振って声を投げかけると、一刀も手を振って返してきた。彼の周りには女子ばかりが集まっており、それをまとめようとしているようだった。

「一刀・・・お前ついに節操なくなって来たか？」

「ば、馬鹿言うな！！そんなんじゃない！！」

「ご主人様！いったいどういうことですかッ!？」

「ええ！？愛紗は状況知ってんじやんか!!」

「気を付けよ愛紗！主は保護と言ってついでにペロリするつもりだぞ!!」

「星もバカなこと言ってないで手伝ってくれ!!」

「みなさん、こちらです。説明しますですよー」

「おい、おめーら危ないから走んなよ」

「ヴィータも対象なのかな？」

「あたしは大人だ!!」

そこには一刀だけではなく、愛紗やフェイト、ヴィータ、リインに星もいて、その少女たちをまとめていた。

「おいおい、これはどういうことなんだ？」

「説明するからとりあえずみんなを会議室に入れてくれないか？急に連れてきたから説明してないんだ」

「おっけ。そのあとにはこっちの話もさせてもらっせ？」

と翔太郎も一緒になって全員の誘導を手伝った。

しかしここに集まっているのは皆少女だ。  
女三人寄れば姦しいというが、さすがにこの人数では女子でなくともうるさいだろう。

だがそれでも何とか会議室に全員を入れ、席にも就かせることに成功、そこから一刀が事の説明を始めた。

「今日、御坂美琴がさらわれた」

最初の言葉はその一言から始まった。  
そしてその言葉には、全員が閉口した。

御坂美琴と言えばあの電撃使いのトップではないか。

一体彼女に何があったというのだろうか。

と、さらに一刀が詳細を説明していく。

その内容はあまりにも唐突で、すでに被害にあっているものも改めて聞いて自分たちが危なかったことに少しだけ背筋が凍った。

「じゃあここで、敵に関しての説明をするから、変わるよ。じゃ、お願い」

「わかったよ」



そういつて次は敵の話に移り、壇上には一刀に替わって海東が上  
ってきた。

「知ってる人もいると思うが、今回の敵はアンデットだ」

「え？」

「なんで……」

海東の言葉に翔太郎はまさかの偶然にびっくりし、長岡は耳を疑っ  
ていた。

しかしその言葉は小さかったのか海東には聞こえず、彼は先を進め  
た。

「仮面ライダーギャレン、橘朔也が言うには、十人の少女の魂を求  
めているらしい」

「そんな……どうして!?!」

「おそらく、邪神、って言うのを復活させてその力を自分のモノに  
するためだ。だからここに集めたのは邪神の力になりそうな、そん  
な魂を持った少女たちばかりだろう?」

そう言われてみると、と少女たちが周囲を見渡す。  
ここにいるのは、皆力を持った少女たちだ。

「それで・・・その邪神ってのはなんなんだ？」

と、そこでヴィータが質問した。

完全にみんなに埋もれ、これでは被害者候補の一人・・・というか完全にそうとしか見えなかった。  
だが、それを皆は言わない。

それが大人という物だ。

そして、その質問に海東が応えようとする。

「邪神の名は・・・」

しかし

「邪神の名は、フォーティーンよ」

その答えが飛んできたのは海東からではなかった。

「え？」

「だ、だれ・・・？」

その声に、全員が振り返る。

そこには椅子に座ってその話を聞いていた長岡ユキがいた。

「確かにそうだけど・・・君は一体誰だい？」

「長岡ユキ。あの化け物どもを、いえ、邪神を封じ込める者よ」

.....

「私の家に代々伝わっている話でね。邪神が目覚める時、封じ込めるのは私なんですってさ」

「どづいつことだ？」

長岡の独白が始まって、早々に翔太郎が聞き返した。

それに対し、特に向かいなおすこともなくそのまま話を続ける長岡。

「祖母から聞かされていたのよ。半分おとぎ話でね。邪神が目覚めるとき、使者が現れ私たちの一族の一人が、その魂を以って邪神を封じ込めるってお話」

「それが、今回のことだと？」

「ええ。私だって最初は信じちゃいなかったわ。だけど、数日前にこの子が来た」

「ワン！」

そういつて、長岡が傍らにお座りしている柴犬に視線を落とす。

長岡の言う数日前。

その日、仕事から帰ってきた長岡のもとに、その犬はいたそうだと。玄関口で座って、まるで数年一緒にいた忠犬であるかのように。

最初こそただの犬だろうと思った彼女だが、どうにも気になってしまい、餌を与えた。そして、撫で上げた時に見たのだ。その首輪にあるものを。

「これは……アンデットの紋章……石版にあったものと同じじゃないか!！」

「ええ、その紋章だけは知ってたわ。なにぶん祖母が聞かせてくれた話の本に載ってたから」

柴犬を抱えあげ、一刀が驚愕する。

そのあとから剣崎や海東もそれを見て驚く。

「だったらこの犬はアンデットなのか？」

「わからないわ。でもそのあと私のもとに化け物・・・アンデットだったかしら？が一体だけやってきたときにこの子は立ち向かっていって、そのあとひよっこり帰ってきた。だから多分・・・」

「・・・それで？あなたはなぜそれをどこかに連絡しなかった？」

と、そこでフィリップからの質問。

当然だろう。それだけのことならば、「EARTH」の管轄になる。

ほかの機関ではとても出ないが扱いきれないだろう。

「これは私たちの一族の問題だと思ったからよ。まさかほかの子たちがこんな狙われているなんて思わなかったわ」

長岡は言う。

あくまで自分一人でこれは処分する問題だったと。

しかし、彼女の知らないところでどうやらその内容は変わっていたそう。

「私が祖母から聞いた話とは違ったわ。化け物どもは邪神を封印しようとする私を狙ってくるかと思っただけど、私を狙ってきたのは最初の一体だけ。それからは音沙汰なし。だから探偵さんと封印に行こうとしたのよ」

「一体なにが……」

「それはわからないわ。私は、祖母から話を聞いて、すぐに動き出した。それだけ」

「待ってくれ」

と、そこで長岡の言葉を、剣崎が止めた。

「あんた言ったよな？自分が封印するって。それって、どうやってだ？」

「……私の魂をフォーティーンに捧げ、そして内から抑え込ん で封じ込めるのよ。伝承ではそうだったと言い伝えられているし」

「そんな方法で!？」

「私はこれしか知らないもの。それにね、私はこの世界が……それなりに好きなの。まとめて滅ぼされるくらいなら、助けたいくら

いいは、ね」

否にあっさりという長岡。

彼女の考えはなるほど、確かに合理的だ。  
巻き添えを出したくないからとどこにも連絡をしなかった。それも正しい。

しかし一人では無理だから最小限ですみ、なおかつ死にそうにない護衛を頼んだ。

おそらく、彼女は決断したのだろう。

抑え込めるのは自分だけ。  
だったら被害はそれだけでいい。

だが、それでも長岡の腕は小刻みに震えていた。

「そうか・・・」

「だがいったいなぜ彼女なんだ？」

「さあ？知らないわ。とりあえず私の家に伝わっているというだけ



だし」

そういつて話を終える長岡。

内容は分かった。

彼女は成し遂げようとしていた。

しかし、その言い伝えは変貌し、狙われるのは彼女ではない。

.....



「な、なんで!?!」

「ってかエリオにキャロ!!あなたたちまで来たの!?!」

「僕らのほうちょうど休暇が取れまして」

「それに、ティアナさんとはなかなか会えませんか」

確かに、執務官になってティアナは各所を飛び回っているためになかなか友人と会っていない。

一か所にとどまるような仕事ではないので、「EARTH」にも管理局にも顔を出す機会がないのだ。  
会えてもそれは事件の合間とか、向かいの通路からだったりで、会えたという気がしていなかった。

「だからって・・・まさかスバル・・・」

「うん?私は呼んだら面白そうだな、って恭介さんに提案しただけだよー?」

「俺は今こっちでこんなことがあるって連絡しただけだよー?」

と、そこでティアナがスバルに視線を向けると、スバルがてへつ、と舌を出して頭をコツン、おどけた感じで白状した。そしてそれと同じ動作で恭介も暴露する。染色体が違っただけで、同じ動作なのにこうも差が出るものなのか。

腹立つ。おのれ染色体め。

「そして俺と真人が筋肉宅急便で掻っ攫ってきたんだ」

「ティアナさん」

「ええ、誘拐の現行犯ね」

「二人とも、弁護には立ってあげ・・・やっぱやめた」

「「辛辣ツツ!?!」」

そしてさらなる暴露をする真人と謙吾。  
本当に何しているのか。

「びっくりしましたよ。連絡があっただろうか考えてたら、  
そういうこともあるのかと!」とか恭介さんが言った途端に真人さ

んが飛び出して身体掴んで来ちゃったんですもん」

「わ、私も同じ感じで……」

「あれ？でもそれだと二人は着替えとか……」

「それはすでに用意してあります」

「ここにはエリオさんの下着が」

「そしてここにはキャラ君の下着が」

「「なんで!？」」

「「趣味と実益」」

そこでとんでもないものを取り出してきた来ヶ谷と美魚。

こいつら妙に満足した顔をしてると思ったたらそういつことが、そうかそうか。

「と、まあそれはともかくとしてツイスターだ」

「あたし明日も捜査があるんですけど」

「僕らだってそのはずなんだけど？」

「そうさ、俺たちは明日も捜査がある」

「しかし、だからと言って遊んでいけないわけがない」

「むしろ遊ぼうよ、ティア!!」

「あんたは何でそっちに取り込まれてるの!？」

完全にリトバスメンバーに取り込まれた親友に突っ込みをするティアナ。

ちなみに理樹はもうあきらめており、鈴に至っては素早く小毬の隣に行っていた。

余談だが、スバルも今日は今日で遅くまで仕事の予定だったらしい。しかし、それらはまさにこの瞬間の時間を作るためにリトルバスタ

―ズが総出で手伝ったそうだ。

この暇人どもめ。

「だって恭介や来ヶ谷ならともかくよ、俺や謙吾っちは戦いにならないと大して意味ねーじゃねーか」

「神北や能美のように情報処理ができるわけでもないしな」

「だから遊ぶしかないんだよ」

「それにたのしーしねー」

そして話をほんわかと終わらせた小毬がお菓子を取り出してキヤロとクド、鈴とでお話を始めてしまった。

もうこの流れはどうにも変更できないらしい。

しかし、理樹とティアナはまだ食事をとっていないのだ。

だからこれから食べるのだが……

「人が食べてる前でツイスターはやめてくれない!？」

「ああ、スバル君のふ・と・も・も (はあと)」

「うつひゃあ!？た、助けて!！」

「そうなたら来ヶ谷はもう俺らにはもう止められないな」

「うつひゃー、姉御さすが!！エロい!！」

「ほらほら!次は青に左足だぞ!？こっちに!！こっちにその足も延ばすんだ!！」

「なんで来ヶ谷さんはそんな体制で私の足をつてうきゃあ!？」

ティアナと理樹（鈴は小毬たちと食べている）の目の前でスバルと来ヶ谷がツイスターをやっていた。

しかも来ヶ谷はスバルの体にすり寄ってハアハアしている。

「そこにパンツがあれば見、太ももがあれば撫でまわす。至極当然じゃないか。どうして君らは減りもしないモノにこだわるんだい？わけがわからないよ(?????)」



「来ヶ谷さんが言ってることがわからないですよ！というか、この場合私の精神がすり減ります!!」

「そのあとおね・さんがしっぽりと癒してやるから!!」

「ぎゃーーーーーーーーーーーーーーーー!!」

「いつもこんななの?」

その来ヶ谷とスバルを、もう慣れたのか、ティアナがモフモフとごはんを食べていた。

理樹は最初は叫んだが即座に慣れていたようだ。これが経験の差。

「あはは・・・これがいつもだったらご飯食べ終わった後に僕が女装させられて・・・」

ガラッ！！

「や、やめてください！！なんでそんな女の子の格好（ガッツ！）  
グえー！！ちよ、西園さんなんでそんな力つよ、うわやめくぁwせd  
rftggyふじじーp..」

ピシヤッ！！

『これで直枝さんに勝つる！！..!』

『うわーいたずら好きのはるちんでもここまではやらないなあ・・・  
エリオ君、だってこの中とか・・・』

『見ないでくださいよッッ！！..!（怒）』

「ってなるんだ」

「エリオ・・・強くなるのよ」



『ゆいちゃんっていうなゲボボクボエ!!!』

ドサッ!..

事件とは裏腹に、こちらの夜は楽しく更けていった。

しかし、それでも状況は着実に進行していつている。

t o b e c o n t i n u e d

## 初夜（後書き）

前後との差が大きすぎる。

どうしてこうなったWWW

蒔風

「「EARTH」の方とミッドのほつがテンション違いすぎるとう  
う」

勢いで書いてたらこうなった。

本当にどうしてか私は分からない。

蒔風

「しかも事件のさなかだつて言うのに何とも楽しそうな……」

私もそう思いました。

事件のさなか、こんなに愉快に騒いでいかなものかと。

ですが、これは二次創作

こんなんでもいいじゃない!!

という考えに達しました。

蒔風

「なにそれ・・・あと、長岡女史の目的がわかったな、とりあえずは」

はい。

邪神を内から抑え込もうというわけですね。

しかし、長い時間とともにその伝承は薄れ、しかもその伝承とはまた変わってしまっているのですから、そりゃあうまくいきません。

蒔風

「でもまだ謎はあるわけだな」

なぜ、とくに力もない彼女の家にそれが伝わっているのか。言い伝えの内容が変わり、十人の少女が狙われるのか。

そしてあの柴犬はいつたい？

蒔風

「そういえばそろそろあの柴犬に名前つけてやれよ」

どうでしょうか？正直名前思いついてない。

蒔風

「応募するか？」

ではしましょう。

柴犬の名前、募集！！

そのまま使われないかもしれません。

二つの案を組み合わせるかもしれません。

それでもいいという方は、是非どうぞ！！

蒔風

「今回は各地での奮闘」

少女たちを守ろうと、各地で戦う姿を書きたいなあ……とか思っ  
てみたり。

マリアージュの方もチマチマ進めます。

ではまた次回！

## 攻防

深夜

とある駅前広場で

「変身！」

「カア〜プ？」

光夏海が、キバーラと共に変身し、仮面ライダーキバーラへと姿を変え剣を構えた。

その眼前には三体のアンデット。  
右から見ておそらくそれぞれ、パイン松、バンフープラム竹、梅の始祖たるアンデットだろう。

確かに、蔦や蘭の始祖たるアンデットがいたから植物系のモノがいておかしくはないのだが、こう並んでは竹ぐらいしか見た目ではわ



からない。

「あれ、なんのアンデットなんでしょっ？」

「さあ？みんな植物、って言うのははっきりしてるけどね」

「とにかく・・・ここから先にはいかせません！！」

夏海がキバーラに聞くが、まあわかるわけもない。

しかし、ここですべきことは決まっている。

ここは涼宮ハルヒの家の近くの駅前だ。

もう数キロ先に行けば彼女の自宅がある。

少女たちの収集の際、当然こんな時間なので集めきれない少女もいたのだが、ハルヒに関しては話が別だ。

彼女に自身の力　世界を無意識に改変させるほどの力を自覚させてはならない。

そのために、とりあえず彼女がここに来ていたのだ。

「EARTH」からの話だと、すぐに増援が来るそうなのだが……

「まだみたいですわね……」

「なぬに言ってるのよ夏海ちゃん。わたしたちなら余裕よ?」

そんなことを言っていると、三体のアンデットがそれぞれの葉を飛ばし、キバーラに向かって攻撃してきた。

それを剣振りながら弾いていくキバーラだが、いかんせん数が多すぎる。

「ど、どうしましょう!?!」

「うーん。わたし、人間を変身させられはするけど、その分形態変化とかはできないのよねえ」

「それじゃだめ押しじゃないですか!?!」

「だあいじょうぶ。その分、お兄ちゃんよりも優れたところがあるんだから。行くわよ!」

そういつて、キバーラの背から白い翼のようなエネルギーが噴出し、それによって一気に攻撃ごとアンデット三体を飛び越え背後に回った。

「ハアッ!!!」

そして直後、ジャギイ!!!という音とともに振り返ってきたバンプーアンデットを縦に切り裂き、そのままベルトをも叩き割った。

「かぐや姫が入っていたら真っ二つだったわね」

「そんなことより、次ですよ!」

そのアンデットにカードを投げつけ封印消滅させるキバーラだが、ほかの二体は逃れ、パインアンデットが針のような棘を飛ばし、追ってくるキバーラを押しとどめた。

その際にプラムアンデットが一直線に目的地へとジャンプしていく。

「この・・・邪魔を・・・しないでください!」

キバーラを向かわせないよう邪魔をしてくるパイアンデットにそう叫んだキバーラが、背のエネルギーを剣にまとわせ、頭上に掲げて構えた。

その間も棘の弾幕が彼女に飛んできているのだが、それはエネルギーの膜によってすべて弾かれてしまっている。

「ハアアアあああ！タアツ！！！」

そして、一振り。

その一振りによって剣から斬撃が飛び出し、パイアンデットへと向かっていった。

無論、それを腕でガードしようとするパイアンデットだが、目の前でその斬撃が散り消え、直後全身を切り裂かれて爆発した。

この斬撃は、一つに見えて一つではない。

無数の細かい斬撃波が固まることで、一つに見えているだけだったのだ。

「ふう……急がないと！！ハルヒさんが！」



そして、ハルヒの体に手を伸ばし、その体を抱えあげ、窓の棧さんに足をかけて外へと出ていく。

ハルヒは熟睡しており、全く起きるそぶりなどない。

このまま彼女は連れ去られてしまうのか。

そう思われた。

しかし

ドドドドドッ！

「…………ギウ？」

「困りますね。我らが団長を連れて行ってしまったのは

パイアンデットの体に三発の赤い光弾が命中し、その足をその場にとどめた。

そして、住宅街の道にアンデットが着地数ると、そこには一人の青年が立っていた。

立っていたのは、SOS団副団長で、自称超能力者の青年である。

.....

「ここか……?」

キバーラと松竹梅のアンデットが戦闘を行っていた場所からから、  
また少しばかり離れたマンシヨンの前。

そこに、また別のアンデットが三体立っていた。

その真ん中にいる個体は、堅そうな皮膚に、振ればしなるような剣  
を持っていて、しかも言語を発していた。上位である。

「行け」

そう一言、脇にいるアンデットに発すると、うち一体がマンシヨンの  
壁に張り付いてひよいひよいと登っていく。

全身は緑。四つん這いになって這っていくその姿は間違いなくカエ  
ルのそれだ。<sup>ツグ</sup><sub>フロ</sub>

そうして、ある一室の前にぴたっと止まって、中をぎよるぎよると  
確認しはじめた。

深夜とあって、部屋の中は真っ暗だ。

しかしそうでなくても、この部屋には生活感という物が稀薄な気が  
する。



そして、フロッグアンデットがその中に侵入しようと、口の中をモゴモゴさせてから何やら紫色の液体をべっ、と吐き出し、べちゃりと張りつけた。  
すると静かにガラスは溶け、大穴があいてその穴から侵入しようと手をかけた。

《final vent》

そんな時だ。  
そんな無機質な音声が聞こえ、小さく、本当に小さなタンツ、という音を立てて、屋上から何かが飛び降りてきた。

頭上を見上げるアンデットには何も見えない。  
視界に広がるのは漆黒の夜空と、マンションの小さな光のみ。

しかし直後、そこには敵がいたということ、フロッグアンデットは身体を顔面から貫かれながら思い知った。

見えたのは、漆黒の中でもさらに黒さを映え<sup>は</sup>さえた一点。

そしてそれは一筋の斬撃となって、フロッグアンデットを貫き、地面に叩きつけたのだ。

ドシャツ、という音を立てて、フロッグアンデットが落ちてくるとそこにカードが突き刺さり、その体を消滅させた。

カードが飛んできたのは、マンションの陰から。

そこに立っていたのは、アギトと龍騎の二大ライダーだ。

「貴様らは……」

「城戸さん、あいつしゃべってますよ?」

「上位アンデット、って言うらしいな。強いみたいだぞ?」

と、そこにさらにふわりとマントをなびかせて、仮面ライダーナイトもその場に降りてきた。

「馬鹿とアホで会話してないで、早くこいつらを倒すぞ」

「はい」

「蓮、俺のことバカって言うなよ！津上も、はいじゃないだろ！？」

そんな漫才をする三人だが、目の前のアンデットはそれを見ても特に反応することなく、三人を見ていた。

「仮面ライダー・・・というのか」

「ん？そうですけど、あなたは？」

「自己紹介して仲良くなるつという間柄でもあるまい？」

「まあ、そうですけどね」

「はぁ・・・やるぞ。お前はそっちだ」

アギトとそんな簡単な会話をしてからそう命じると、残った一体のアンデットが走り出し、ナイトに襲い掛かって行った。

「うわぁ……」「いつらなんのアンデットなんでしょうね？」

「知るか」

「っしやぁー！行くぜー！」

ナイトに襲い掛かっていくのは、ヤシバルムの始祖たるアンデット。

そしてアギトと龍騎には、上級アンデットである桜の始祖たるブロッサムアンデットが襲い掛かった。

.....

ブロッサムアンデット……

ハルヒを担いでその場から逃げようとするプラムアンデットを、古泉一樹が赤い光球を投げ放って押しとどめていた。

現在この場で彼が力を使えるのは、ほかでもないハルヒの力だ。

古泉の推測では無意識化で自分に降りかかる脅威を察知し、そして無意識化で自分を守るだけの力を古泉に与えたのだ。

ゆえに今、こうやってアンデットを押しとどめておいているのだが・  
・  
・

(この力で充分・・・とても思われているのでしょうか？少々きついのですが)

そう、実際には倒すには至らない。しかし、古泉はさほど焦っては  
いなかった。

なぜならば、彼女がこの程度の力で充分だという認識で力を使える  
ようにしてきたのなら、それで大丈夫なのだということなのだか  
ら。

そして

ギャリリリッ！！

アンデットの体に、鞭のようなものが巻き付いて、その場にハルヒと落させた。

そしてそれをキャッチしたのは、バイクフォームで突っ込んできた仮面ライダーアクセルだ。

「これは・・・」

「よくやった。後は任せろ」

そういつて古泉の肩を叩いたのは、レヴァンティンを連結刃にして握っているシグナム。

そしてその腕を大きく上に振り上げて、アンデットをコマ回しのよ  
うに上空へと投げ放った。

「ギ……ギヒイ…….?」

「紫電、一閃!!」

《アクセル!マキシマムドライブ!!》

「絶望が、お前のゴールだ!」

ド、ド、ド、ンッ!!

シグナムの紫電一閃、アクセルのアクセルグランツァー。  
その二撃が確実にプラムアンデットに叩き込まれ、その体が燃え盛  
りながら地面に落ちていった。

「ありがとうございます。僕だけではどうにも倒せそうもなかった

ので」

「仕方ない。あれは不死生物だ。こうしなければ倒せんからな」

そういつて、アクセルがカードを投げつけ、アンデットを消滅させた。

その間にシグナムがハルヒを起こさないように部屋に戻し、二人の元に帰ってきた。

「何が起きているんです？」

「彼女の存在上、まだ連絡していなかったな」

「実は……」

そうして、事の次第を古泉に伝える二人。ほどなくしてキバラーも追いついてきた。

しかし、ほかの場所でも、戦闘は行われている。

-----



.....

《FINAL VENT》

「オオっ！」

ドゴオ！！

サバイブと強化変身したナイトが、パルムアンデットにファイナルベントを発動させて吹き飛ばした。そしてそれをカードに封印消滅させると、いまだブロッサムアンデットと戦っている、アギトと龍騎の元へと走っていった。

すでにアギトはバーニング、龍騎はサバイブへと強化変身しているのだが、堅い樹皮とその技量によって、攻撃らしい攻撃が全く入らないのだ。

「こっちは二人とも炎だつてのに……」

「これはキツイ……ですね……」

「ハアツー！」

と、そこで息を切らして構え直す二人を飛び越え、ナイトがダークブレイドで切りかかってくる。しかし、それすらもいなされ、逆に回転からの後ろ蹴りで飛ばされてしまった。

「ガハツ……」

「「桜切るバカ、梅切らぬバカ」、という言葉を知らないのか」

「お前は、枯れてもいい桜だからな」

「なるほど」

そんな何とも思っていないような声を出しながら、ブロッサムアンデットが腕をかざして三人に向ける。

そしてその腕の前に、桜の花びらが押し固められて行き、エネルギーを纏って高速回転し始めた。

「な!?!」

「まずい!?!」

《guard vent》

キュボツ、ドツゴオ!?!?!

そして、それは撃ち出されて三人へと向かい、大爆発を起こす。

「……………ガードするか」

しかし、プロツサムアンデットはやれたとは思っていなかった。  
現に、土煙が晴れたそこには三人の姿はしっかりとそこにあった。

だがしかし、無事でないことも確かである。

ナイトと龍騎が二人掛かりでガードベントを発動させたものの、それでもあの衝撃には耐え切れずにサバイブが解除され、アギトのフォーム内でも耐久力なら随一のバーニングフォームすら、ノーマルのグラントフォームに戻っていた。

さらに言うならば、攻撃のエネルギーをアギトは真っ向から殴りかかっていたために現在は仰向けに倒れており、龍騎とナイトは膝立ちになってすぐには立ち上がれない状態だ。

「なんて火力……だ……」

「く……おお……」

「……上々だな」

ガシャアツッ!!!!!!

ブロッサムアンデットがそう呟き、マンシヨンの一室を見上げると、その窓ガラスが派手に割れて、ガラスの雨と共に何かがどしゃりと落ちてきた。

それは透明であり、地面をバタバタとたた打ち回ったのちに姿を現し、バキン！とベルトが割れて沈黙した。

おそらくはヒトデの始祖たるアンデットだ。

こいつは三人が交戦している間に壁に登り、しかも身体を擬態で隠していた。

だが、どうやら撃退されてしまったようで、今こつして落ちてきたのだ。

「む………?」

そして、ブロッサムアンデットが見上げた先のマンションの一室に、一人の少女が立っていた。

その部屋の主である、長門有希。

その少女を見てからブロッサムアンデットは顎に手を当て、少し考えたのちに踵を返してその場を去ろうとする。

「まて………どこに行く!?!」



「兄貴い、来ないよ・・・」

「は・・・どうせ俺なんか・・・」

一方朝比奈みくる宅前。

そこに仮面ライダーキックホッパー、パンチホッパーである矢車想と影山瞬とが体育座りで待機していた。

こちらにはアンデットの「ア」の字もない。

二人は変身することもなく、黙々とカップめんを食べていた。

「なあ・・・こっち来ないんじゃない・・・」

「かもしれんが、来た時が大変だからな。それに・・・こんなのが俺らにはお似合いだ・・・」

「兄貴い・・・」

「・・・泣くな」





それから一、二時間後

もうあと一時間もすれば夜も明けようかという時に、照井、シグナム、夏美が長門のマンションにやってきて津上たち三人と合流した。古泉は明日……というかもう時間的には今日、学校があるために家に帰らされた。

警察官がサボリを見逃すわけがない。

「では、アンデットが「これでは見込めない」……そう言ったんだな？」

「ああ。わっけわかんねえよ。あそこまでしといて間違いでした、かよ……」

「だけどそのおかげで助かったんですから。文句は言えません。気持ちはわかりますけど」

「確かにそうだけとさあ……」

そして、そこでは、その六人が情報のやり取りをしていた。

長門はすでに寝ている。  
というか寝かされている。

彼女のスペック上、不眠不休でも大丈夫なのだろうが、津上がそれはいけないと寝室に押し込んだのだ。

「涼宮ハルヒ、長門有希。この二人は力を持つ少女としてはかなりトップクラスに入るはずだ」

「だがそれを「見込めない」……？訳が分からないな」

照井とシグナムが聞いた話を頭で整理し考えるが、どうしてもわからない。

なぜ彼女たちは見逃されたのか。

さらに朝比奈みくるの家で張っていた矢車と影山からの話だと、アンデットは現われずしなかったそうだ。

「ただ単に力のある少女ではない、ということが……？」

「いったい何が……」

「どっになってるんでしょねえ・・・」

そうして、六人はほどなくしてその場から「EARTH」へと帰還した。

考えても始まらない。

わかったことは、とりあえず彼女たちは狙われない、ということだ。

t o b e c o n t i n u e d

## 攻防（後書き）

ようやく更新です。

レポートがきつくてきつくて・・・  
新聞の中から題材を見つけて授業で学んだことを参考に書けとか・  
・

新聞の中に授業と関連させた内容が見つからなくてワロタ。

と、言うわけで今回は深夜の攻防

蒔風

「さて、ただ力がある、というだけではなさそうだな」

ええ、力があるというだけではないです。  
それを考えれば、十人は何とか絞れるかと。

ちなみにそう考えると、美琴はかなりギリギリだったんだなあ、と  
いまさら思いましたWWW

蒔風

「そついえば地獄兄弟の二人はどうしたんだ？」

あのまま直帰しましたよ。

蒔風

「哀れな……かわいそつに……」

しかし、それがネタ

蒔風

「次回、今度はマリアージュ事件を進めたいらしいな？」

そうですねえ……

ではまた次回！！

## 火災

「大丈夫ですか！？今助けに来ましたから！！！」

劫火が周囲を取り囲み、360度どころか上下すらをもすべて焼き焦がしている。

そんな中、スバル・ナカジマは休日にもかかわらず、救助活動として火災の中に呼び込んでいた。

数十分前



「なんで・・・男女に分かれなかったし・・・」

「恭介、大丈夫だ。いざとなれば俺らからも・・・」

「ああ、この筋肉を売ってでも払ってやるぜ」

「いや・・・こうなることは予測していたからな。理樹からカードを借りてきている」

「「ちょ、おま!?!」」

ドンドン積み重なる皿、皿、皿・・・

しかもスバルとエリオは言わずもがな、真人まで慰めながらもバクバク食っているのだからたちが悪い。

だがそんな中でも、恭介はスツ、と一枚のカードを取り出してこれで払うからと言い出したのだ。



「お前、理樹が知ったら大変なことになるぞ!？」

「問題はない。理樹は将来の義弟、いや、もうすでに義弟だ、と言つてもいい」

「ま、まあな……」

「それに！俺たちリトルバスターズは家族じゃないか!！」

「ああ」

「だからこの程度は……いいと思いたい」

「いや、それはおかしい」

恭介の話が飛躍するのはいつものことだが、今回はまじめに金銭が絡んでいるので真人もボケない。  
と、そこで恭介が「けどなあ」と前置きしてから持っている理由を話した。

「理樹にな、みんなで食事行くから何かあったら連絡頼む、って言うたらこれ貸してくれたんだ」

「みんな……俺たちぐらいだと思っただんな……」

「と、言つか男子組、女子組に分かれると思っていたんだろ……」

「「哀れだ……」」

そう思うなら真人、お前は食べるのを押さえなさい。

そうして腹に詰めるものを詰め、それでも腹八分目に抑え満足した頃（桁も結構行った頃）に、昔話をするようになった。

「私、昔なのはさんに災害現場で助けてもらったんです」

「へえー」

「なのは……ってえと高町さんか」

「あの究極魔法兵器さんか」

「はい。それで懂れて救助隊に入って……」

そこからのスバルはしゃべるしゃべる。

皆同じ「EARTH」登録員と言ってもやはりそこは現役救助隊員と学生なわけだから、面白い話は当然両者ともにある。

「じゃあ、今度は俺が話そうか。あれは忘れることのない、理樹が初めてじよ……ん？」

「どうしたんですか？」

「じよ！？な、なんですか！？何があったんですか理樹さんの過去に！？」

恭介が過去の何かを話そうとし、その内容にエリオが予想、戦慄した時。

恭介が窓の外を見て、何かに気付いた。

彼らのいるのはさっきも言ったようにビルの上層階だ。  
そして当然、そこからは他のビルも見える。

その見えるビルのうちの一つから、黒煙がモクモクと伸び、その一瞬後にビルの一部が爆発、大穴があいてそこから炎が噴き出してきたのだ。

「え……」

「おいおいおい!?」

「爆発……火災!？」

「恭介さん!」

「ああ、こいつぁ俺たちの出番みたいだな!!理樹に連絡をしとけ。俺たちはあっちの火事をどうにかするぞ!!」

「よし！！」

「筋肉の出番だぜ！！」

「じゃあ今日は特別、スバルたちも合わせて……リトルバスターズ、ミッションスタートだ！！！」

「「「「おう！！！」」

.....

「じゃあ僕は聖王教会のほうに連絡しとくから」

『お願い。私は知り合いの古代ベルカ文字を読める……』

「ルーテシアさんだよね？」

『ええ。そっちに連絡するわ。じゃあ』

ピッ

理樹が通信機のモニターを切って、目の前の建物を見上げる。

ミッドチルダ郊外にある、聖王教会

近くには付属学校もあるここに、直枝理樹は直接来ていた。

内容は、今回の連続放火殺人事件に古代ベルカ文字があつたことの報告と、その文字の詳しい解読だ。

「あの、「EARTH」の直枝理樹なんですけど、騎士カリムにあわせてもらえませんか？連絡は昨日したはずで……」

そういつて、受付の人に通してもらおうように頼む理樹だが、その必要はほとんどなかった。

なぜならその返事が来る前に理樹のもとにシスターシャツハがやってきて、直立不動で出迎えに来たからだ。

だが……

「ようこそいらっしゃいました！！薄緑のモガツ！？」

「ちょオーーーーーーい！？何大声で言おうとしてんですか！？（ボソボソ）」

シャツハの口を塞ぎ、その発言を大急ぎでやめさせた理樹。まあ当然と言えば当然だろ。それにそもそも、恭介とは違って理樹自身も騒がれるのがあまり得意ではない人間だ。

「い、いはいはいえいえ！翼人さんが来るというのにこっちに粗相があつてはならないので……（ボソボソ）」

「そういうのいいから！！あくまでも普通にしてください！！」（ソソソソ）」

「そ、そうですか……？しかし……」

そういつて理樹はシャツハを説得しようとするが、シャツハとしてはいきなり普通にしてくれと言ったところで実際そうするのは難しいだろう。

なんせ彼女がかつて一度だけよく人と会ったときは、リアットをブチかまされそうになったうえに、説得までされたのだから。

どうしようか……

理樹はシャツハの態度をどうにか普通にしようと考え、そして妙案を思いついた。

これなら緊張も解けるだろう。

「（ボソツ）あ、ガツカリおっぱい」

「誰がなんだとこの鳥人間がアツ！……！」

ヴォン！！

「え？」





「それはそうと・・・大丈夫ですか？顔・・・」

「最硬の翼人なんで」

「いや、それは体が頑丈という意味じゃないはず・・・」

「硬いんで」

「はあ・・・」

「ボドウドウドオードウー」

「はあ！？」

カリムの素っ頓狂な声が出て、とりあえず伝えるべきことは伝えた理樹。

カリムの背後では胸をペタペタと押さえながら「まだいけるもん・・・成長期に終わりはないもん・・・」とか呟いているシャツ八がいた。

と、そこでがらりと医務室の扉が開いて、部屋に客がやってきた。

「あ、ほんとだ、理樹さんだー！」

「こんにちは、理樹君」

「あれ？ヴィヴィオちゃん？なのはさんも」

そこにやってきたのは、高町なのは、ヴィヴィオ親子でだった。

なんでも今日は授業参観日で、無理言っただけで管理局を休みしてもらい、来ていたのだそう。

ここに来たのは教会の騒ぎを聞いて、管理局員である以上見ないわけにもいかないために話を聞き、そして理樹が来ているのを聞いてあいさつに来たといったところか。

「理樹君が来てるってことは・・・「EARTH」のお仕事？」

「「EARTH」というよりは管理局の協力ですね。今ティアナさんが追っかけてる事件の」

「ああ・・・あの放火事件・・・」

もちろん、なのはも管理局員で「EARTH」登録員だ。事件があることは当然知っている。

だが、それはそれ、これはこれだ。  
事件があるからといってすべてに首を突っ込んでいられるわけではないし、教テイアナえ子の事件だからといって自分が手を出しては彼女の成長にならない。

だから、まあ知っていても特に干渉することはないのだ。

「……ということで、聖王教会に報告と協力を頼みに来たんだ」

「現場に血で古代ベルカ文字？」

「うん。それで……」

「だったらわたし調べるー！」

「え？」

それでののはたちにここに来た事情を簡単に説明した理樹なのだが、そこでヴィヴィオが解読すると買って出たのだ。

確かに、ヴィヴィオは暇さえあれば無限書庫に行って読書をしている関係で、勢い余って司書の資格まで取っているのだ。

調べ物を頼むのにはもってこいの人材と言えばそうだ。

「いいん・・・ですかね？」

「ん？私はいいよ？ヴィヴィオがやりたいようにやれば」

「わーい！！じゃあいこー！どれ？ベルカ文字って？」

そうしてなのはからの許可も出たので、ヴィヴィオに血文字を写した文章を見せる。

さすがに現場写真を祖もまま見せるわけにもいかない。

「うーん、とね、これならすぐに出ると思うよ？」

「ほんと！？」

「あはは、これだけ長いんだもん。検索すれば一発だよ！高町ヴィヴィオ！！根こそぎみんなを助けるために、がんばりまーす！」

そうやって、ヴィヴィオがさっそく無限書庫へ、といった感じに医務室から外に出ようとして、なのはと理樹がその後についていこうとする。

ピーピーピー……

「ん？なんたる」

「どうしたの？」

「恭介からの通信……え？」

と、そこに力の通信に恭介からの連絡が。

ミッドチルダのビルで大規模火災が発生。

それに対し、「船」の解除を願うといった内容だった。

「……ご、ごめん！僕こっちに行くから！」

「じゃあ解読が終わったらすぐに送りますね……！」

「こーら！ヴィヴィオはまだ授業があるで……！」

ドオンッッ！！！！！

ヴィヴィオが急いで解読しようとするのを、学校があるだろうと諒めるのは。

しかしその言葉を、とてつもない爆音が遮り掻き消してしまった。

それに、爆音だけではない。

教会そのものも揺れたし、よく見ると学校の方からももくもくと小さな火が上がっている。  
どうやらさっきの衝撃でボヤでも起きたようだ。

「た、大変！！」

「いったい何があったのです！？」

「・・・駄目です、連絡が取れません！！」

「急いで怪我人の救護と治療、そして鎮火を！！」

「なんだ・・・いったい何が・・・！？」

あまりにもいきなりすぎた振動と衝撃に、理樹がよろめいていから立ち上がり、医務室の扉をがらりと開けて廊下を見た。

すると

「かつての王の魂を正確にコピーした希少な魂・・・まさにちよびごいさ」

廊下に、化け物がいた。

そいつは突出した巨大な顎をもち、まるで・・・というか、まさに鰐ワニといった感じの風貌をした怪人だった。



しかもそいつは言語を操り、さらには明確にヴィヴィオをターゲットと指差しまでしてきた。

「……カリムさん、シャツハさん、早く救助と、この事態の鎮静に向かってください」

「え？あ、あれは……」

「あれは僕が何とかします。ここに詳しいあなたたちなら、大事故になる前に全員を助けられるはずです。急いで！！！！」

「は、はい！！」

「行きましょう、シスターシャツハ！！シスターセインやシスターオットーたちにも連絡を！！」

そうして、理樹たちの背中の方から怪人とは反対側にカリムとシャツハが走ってその場を離脱した。  
怪人は周囲の悲鳴や逃げる人々には見向きもしないで、ただまっすぐにごつちを見ている。

そうして、周りに誰もいなくなったころ。

「レイジングハート、セットアップ」

《stand by ready・set up》

なのはがバリアジャケットとレイジングハートを展開させ、この怪人に向き合った。

当然だ。自分の娘を狙っているといわれて、引くような人ではない。

「なのはさん。あいつのベルト見てください」

「?・・・あれは・・・」

《データと照合しました。アンデットと呼ばれる不死生物のものと同型です》

「アンデット・・・倒せないの?」

「死ななくても、ベルトさえ割れば無力化はできます。その後で僕が「壁」で封じ込めるので・・・」

「じゃあ」

「ええ、全力で」

「わかりやすいね。行こう!」

「はい！！！」

「抵抗する……か。翼人にエースオブエースとは、少し荷が重いのではないかね？」

その二人を見て、腰を落とすは鱈の始祖たるクロコダイルアンデット。

太古の昔より

かつては地上を支配した者の血統に最も近い牙獣が

二人の強者にんげんに挑みかかった。

t o b e c o n t i n u e d

## 火災（後書き）

ふう・・・少し時間がかかってしまいました。

ラジオも更新したので、そっちもよろしくです！

最初の方は勢いやばいです。

最初の方は・・・

と、いうわけでリトバス、スバルたちが火災現場に遭遇。

そして、聖王教会へと赴いた力のもとにはとヴィヴィオがいて、そこにアンデットが襲来、です。

7132

そこで心配なのがヴィヴィオの通う魔法学校の位置です。

S t Sのエンド的に見て、教会の隣とか近くにある、ってことではないんですよね！？

いやあ、少し心配になってしまいましたよ。

ここでのなのも出したかったので、授業参観ということ。

え？フェイトママ？

.....

フェイトさんごめんなさいm( | )m

次回としては、確定なのはティアナの方。

そして火災現場or教会のどっちかに行きます。

ではまた次回！！！！

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花

古手羽入

御坂美琴

インデックス

アルルウ

高町ヴィヴィオ

残り四名

## 勃発

「スバルさん！どうしますか！？」

「まずは人命救助！！生体反応をサーチしてから、安全なところを  
まで保護して！！」

火災に見舞われているビルの真下。

そこで到着したスバルとエリオ、真人、謙吾がこれから内部に突入しようとする際の注意事項を頭に叩き込んでいた。

スバルたちはバリアジャケットを、真人と謙吾は防火服を着て準備を整え終わっている。

「いい？何があっても、まずは自分の命優先！！自分が死んだら、  
誰も助けられないから！！！！」

「了解！！！！」

そういつて、彼らはレスキュー隊が到着するよりも早く、内部に突入していった。



「絶対に、根こそぎ全員、助け出すよ!!」

「おっ……」「おっ……」

.....

辺境世界マウ克蘭、宅地開発地区

『……ってことなのよ。だから、これの解読をお願いしたいの』

「わかった。ふふつ、ティアナさんの頼みじゃ、断れないね」

「あたしも手伝うから、大船に乗ったつもりでいてくれよな!」

火災発生から少し前のこと、理樹と連絡を取った後にティアナは、ルーテシア・アルピーノに古代ベルカ文字の解読を頼んでいる。ここにはちょうど遊びに来ていたアギトもいる。

彼女はキャロやヴィヴィオの繋がりでいろんな書物から知識を漁ることが日課となっている。それでこうして拘留された世界にいながらもさまざまな知識を持っているのだ。

と、なればまあ、こうして依頼が来るのも当然であって……

『ありがとう。データは今そっちに送ったから、お願いね』

「うん。えっと……」詩篇の六　かくして王の帰還はなされること無く……」ね。アギト、下から二段目の棚にある赤い本を取ってくる?」

「あいよー。これだな?」

「うん……えつと……あった。」

そういつて、文章を読んだだけで何の詩編かを割り出し、簡単にその参考書を取り出してきたルーテシア。

まさか今このやり取りで終わってしまうとは思っていなかったデ  
イアナは、その手際の良さと彼女の記憶力に驚嘆していた。

『すごいわね。全部覚えてるの?』

「何回も読んだからね。頭には大体」

「ルール は勉強家だもんな!」

そういつて、内容を伝えるルーテシア。

どうやらこれは何かの歴史を記したもののようで、長い詩編の中  
でも何かの兵器にまつわる部分であるらしい。

そして、その兵器の名称を見て、ルーテシアが頭を捻った。

『兵器……穏やかじゃないわね』

「うん……？ねえアギト、この兵器って……」

「うん？……あー、どっかで聞いたなあ……どこだったか？」

「私がおぼえてる、ってことは、ドクターの所にいたころだったと思うけど……」

『ドクター？……って、まさか……』

ヴー！ヴー！！ヴー！！！ヴー！！！！

と、そこでティアナ側で警報が高らかに鳴り響き、ただ事ではないということを伝えてきた。

『！？なに……ミッドでビル火災……爆発あり！？』

「事件？」

『ええ、こっちで追ってるのがまた起きたみたい』

「じゃあ、レポートにまとめて後で送るね」

『お願い!!ごめんね!!』

防災課にいたティアナは事件発生のほうを受けてすぐに現場に走り、通信を切ってしまった。

まあ、仕方のないことだ。

とりあえず、自分のすべきことは……

「これ、解読しないと……」

「よっしゃ!!ありったけの資料を集めよーぜ!!!!」

友人のティアナの頼みとあっては、張りきらない方がおかしい。そうして、ルーテシアとアギトが資料を探そうと部屋を出た。

その瞬間。

ドドドドドドドドドドドツ、チュンチュン、チュインー！！

その部屋に、おそらくは外からの無数の銃弾が叩き込まれ、部屋の中を八子の巣にして家具の八割を粗大ごみに変化させられてしまった。

「え？」

「なあ！？」

部屋から出た瞬間にその背後から銃撃・・・というよりも銃弾の音を聞いて振り返る二人は、直後に背筋が寒くなった。

なぜこうなったのかはわからない。

しかし、もし自分たちがこの部屋にいたらと思うと、ぞつとする話  
しだ。

「な・・・なんだよこれ！！いったい誰が・・・」

その惨状を見て、アギトが絶句する。

ルーテシアに至っては声が出ていない。

と、そこに

「ふうー・・・はずれか。まあ、下手に当たって死なれても困る、な。これは失策。失敗してよかった」

「「!?!」」

そんな声がどこからか聞こえてきて、二人が周囲を見渡した。

そして、部屋の中の穴だらけになった壁がガラガラと崩れ落ち、外から一体の異形が現れて入ってくる。

そいつの両手には一丁ずつ、合わせて二丁の銃が握られていて、耳がピンと立ち、精悍そうな顔立ちをしていた。

ただ、そいつはまるで犬のような顔をして、鋭い眼光をしていたが。

「なんだてめえは!?!」

「おやおや、これは失敬。自己紹介が遅れた。俺はドーベルマンの

始祖たるアンデットで、名前はそのままドールマンアンデットという者。訳あってあなたの魂が必要なのでね。なあに、この場で殺そうというわけではないよ。じゃあ……」

ジャカ

「いただいでいきましょう」

ドンドンドンドンッ……!!

そう言うなり銃口をルーテシアに向け、何のためらいもなく発砲してきたドールマンアンデット。  
が、その銃弾はアギトが発生させた炎熱の壁によって瞬時に解け消え、防がれてしまう。

「ほう、四肢の動きを封じて連れ去ろうと思ったが……なるほど、優秀な護衛がいるようだ」

「あつたりまえだ!!それにテメエ、それがルールーに当たったらどうすんだ!!」

「連れ去るだけだな」

「そうなたら私、出血多量で死んじゃうけど……」



銃口を向け、向けられながら、そんな話をする彼ら。  
何かずれているように感じて、それは気のせいだ。

『ルルー……こいつやべえ……』

『うん。アンデット……だもんね』

そんな会話をしながらも、二人は念話でも会話をしていた。

相手はアンデット。

ルーテシアも、その存在のことは知っていた。

彼女が好きなのは古代ベルカ……というよりも古代史や考古学に近い。

それならば一万年前に起こったバトルファイトなどの事柄に興味を持たないわけもなく、当然アンデットのことも知っている。

『それもただとき、さっきの銃弾。あたし融かしたの実はかなりギリギリだったんだ……』

『え？』

それを聞いて、ルーテシアは表情に出さないように、それでもかなり驚いていた。

彼女の知る限り、アギトはかなり高性能なユニゾンデバイスだ。さらにはデバイスというカテゴリーで見なくても、彼女以上の炎熱使いはそうそういない。

その彼女が防ぐのがキツイ（彼女自体が攻撃型ということもあるが）というのはなかなかないことだ。

これだけでも、相手の強さが伺える。

『だからルールはすぐに転移魔法で逃げろ！！ここは・・・』

『アギトは！？』

『あたしは標的じゃないみたいだからな。うまく逃げ切ってやるさ  
！！』

そんな算段を付けていると、念話の内容など知らないドーベルマンアンデットが、口頭の会話の返答をしてきた。

「……おお、確かに。この場で死なれては困る。ふむふむ失策失策。これまた失敗してよかったな。では……」

「ッ！！！！ルールー！！！！行け！！！！」

「的確に意識を刈り取らせていたどころ」

そういつて双銃を腰のホルスターに収め、ドーベルマンアンデットがルーテシアに向かって疾駆し、その間にアギトが飛び込んだ。

「ダメだ！！！！」

「アギトッ！！！！」

ゴオオオッ！！！！





「え……？」

「……む？」

通路の曲がりかこの向こう側から、ひょっこりと一体の怪人が現れたのだ。

「犬……あれはテリア……？」

「知ってるんですか？」

「まあな……だが……あれは!？」

「牙<sup>ガ</sup>アアアアアアアアア!!!」

「グ!？」







にアンデットが高速回転、そのちに地面に叩きつけられ、バキリとベルトが砕け散った。

哀れなり。

「あんだあ？こいつ」

『井ノ原さんッ！』

「ん？どーしたクド公」

と、肩をぐいぐいと回して倒れたそいつを見る真人に、クドリヤフカからの通信が入った。  
何やら慌てているようだ。

『謙吾さんとエリオさんが、アンデットみたいな敵と交戦してますッ』

「おう、そんなの今俺も倒したぜ？」



「……配達に来てみれば……」

「貴様、誰だ」

「お前がなんだ」

場所は戻って、辺境世界マウ克蘭  
アルピーノ邸の一室

二人に向かって走ったドールマンアンドットのその手が、アギトとルーテシアに到達する前で止まっていた。

その腕は別の腕につかまれており、その腕は一人の青年のものだった。

黒い服に、ツンツンと立った金髪。そして、元ソルジャーの証たる  
魔晄に染まった蒼い眼。

背中には巨大な大剣を背負っている。

「あ、あなたは……」

「フンッ!!!」

ルーテシアがその青年に声をかけると、ドーベルマンアンデットが中で一回転しながら後退し、その男を睨みつける。

一方、金髪の青年はルーテシアに、届けものだといって小包を渡した。

「宅配を頼まれて世界を越え、こうしてやってくれば……危なかったようだな」

「貴様……まさか!!」

「下がってる」

ドオウ!!

青年が剣を構え、ドーベルマンアンデットに向かい立つ。

「翼人が……しかも貴様は……!!」

「……クラウド・ストライフ……漆黒の翼、だ」

まさに偶然。

ここに、今や最強の翼人がやってきていた。

名を、クラウド・ストライフ

勇気を司る漆黒の翼をもち

そして、唯一「世界最強」と互角に戦うことができるとつたわれた人物だ。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 勃発（後書き）

更新ですよー！ー！！！！

と、いうわけで一気に攻めてきた・・・というか混ぜってきましたね。

今回出てきたのは、ドーベルマンアンデットです。  
もう完全に上位ですね。

こいつの武器は双銃です。  
ゴツイ感じのイーグルとかをイメージしてください。  
銃を持った怪人ってなかなか見ませんのでね。

で、問題はこの「ドーベルマン」なんですよ。

感じよくて強そうなイメージで出したんですが、調べてみて後悔しました。

ドーベルマンって、人工的な勾配で生み出された種だったんです！  
！！  
そんな種に「始祖たる」もくそもあるわけないじゃないか！！！（  
劇中じゃ言っちゃったけど！！）

でもその分その大本となった犬種は出しましたけどね。（テリアと  
ロットワイラーです）

真人はあれでいいんです。

きつと彼には何より筋肉が最高の防護服なんですwwww

後「龍牙斬」出せてよかったwwww

哀れなりロットワイラーアンドット……

今回は、それぞれの戦いの続きですね。

ではまた次回！！



希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花

古手羽入

御坂美琴

インデックス

アルルウ

高町ヴィヴィオ

ルーテシア・アルピーノ（？）

残り四名

## 破壁

聖王教会

瓦礫と煙がところどころに散る廊下にて

「アクセルシュート!」

「ちよぞい!」

バパン!!!

なのはと理樹が、クロコダイルアンデットと交戦をはじめ、すでに五分。

ヴィヴィオは医務室で理樹のバリアに入って隠れていて安全だ。すでに火事も収まっており、この場でこいつを倒せばそれで終わりだ。

しかし、まだ倒せずにいる。

正直に言おう。この状況は異常だ。

あの「エースオブエース」高町なのはに、「薄緑の翼」直枝理樹が二人掛かりで挑んで倒せていないというのは。

「攻撃が効かない……!？」

「室内だからデイベインバスターはできないし……」

そう、この室内においての戦闘が、一番のネックだった。

攻撃のなのは、防御の理樹と、戦闘が始まった瞬間に二人は瞬時に自分の持ち分を理解し、実行していた。

だが、なのはの攻撃は基本的に砲撃魔法だ。距離が近くては近接戦闘になり、そしてそれはなのにとってあまり得意である分野ではない。

だからと言って距離を取ろうにも大きな攻撃では建物ごと吹き飛ばしてしまうので却下。

いつも使っているカウンターバインドで相手をとどめ、距離を取る戦法、バインドがあっさりと碎かれて不可。

強いバインドを練ればいいのだが、そうさせてくれる相手ではない。

ゆえに、こうして押しとどめる程度しかできていないのだが……

「会話をする……ということとは上級……ってやつだね」

「なんでここにアンデットが……そもそもアンデットは全部封印したんじゃない!?!?」

「そんな会話はいいから、そこを退け。全く……この二人がいるとは思ってなかったが、やっぱりめんどくさいことになったな」

この二人をして「面倒くさい」で片付けるこのアンデットは、確かに強かった。

この状況というのを差し引いても、このアンデットはおそらく、自

分たちとまともに戦えうるだろう。

『なのはさん。僕があいつを引き留めるから、ヴィヴィオちゃんをここから避難させてください』

『……大丈夫？』

『僕は最硬の翼人だよ？「世界最強」だってまともに傷つけられなかったこの壁なら大丈夫！！』

『……じゃあ、お願い！！』

ダッ！！

念話でそう言った会話を取りかわし、なのはがヴィヴィオのもとにUターンして走りクロコダイルアンデットの前に理樹が立ちふさがった。

「む……逃がしたくないな！！」

「僕を突破できると思ってるの？」

フォン、フォン・・・フォンフォンフォン!!!!

走り出そうとするクロコダイルアンデットの前に立ち、うっすらと青い粒子をためた掌を流すように構える理樹。

クリスタルのような外見の小さな盾が連続で現れ、理樹が完全に臨戦態勢に入った。

ここから先は通さないという、確かな意思がそこにある。

「さあ、かかってこい!!」

「舐めやがっておお!!!!」

そうして、クロコダイルアンデットが理樹にとびかかっていき、その巨大なアギトで喰らいついていった。

体を捻り、理樹の体を左右から挟むようにして上顎と下顎を閉じるクロコダイルアンデット。

理樹は自分の体をバリアで作った箱に入れ、それを難無く防いでいた。







バリアからビリビリと振動が伝い、それが空気を伝って理樹を直接叩きつけているのだ。

「うううううあ!?!?.....これは.....ちよつと.....!?!?」

叩きつけ、ブン回し、顎の筋肉を収縮させる。

その動作が、ついにこの生物の持つ能力を、最大最恐にまで引き出す技にまで到達した。

グルンツツツ!?!?ゴガガガガガガガガ!?!?

時に

デスロール、という技を知っているだろうか。

ワニが標的にかみつき、その体を引き千切るうとする際に用いる技である。

その動作は豪快にして破壊的だ。

標的に噛みつき、身体を回転させることでただえさえ強靱なあの力をさらに増大させ、相手の身体を引き千切って息の根を止めるといふものなのだから。

そして、その動作をこいつができないわけもなく……

ゴゴン、ゴゴンゴゴン、ゴゴンゴゴンゴゴン！……！！

ゴガガガガガガガガガガガガガガガッッッ！……！！

「い！？」

「ガアアアアアアアアアアアオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

回転する視界。

すつとんでいく景色。

もはや方向などわからない。

最初に自分が立っていた向きもわからなくなるような回転に、理樹が頭を押さえながら箱の中で小さな悲鳴を上げていた。

そして、ついに

「ギッッ！……！」

「ば……そんな……！」



理樹が突っ込んだ穴をちらりと見、そしてクロコダイルアンデットがクイ、と少し上の方を見て、何かを察知するかのようにしてから、肩を落として踵を返した。

「離脱された……か。ち、結局のところこいつに邪魔されたということがあるか……む？」

忌々しそうにつぶやき、理樹に止めでも刺そうとしたのかそちらに足を進めようとしたクロコダイルアンデットだが、何かを感じ取ってからさすがに今の消耗した状態では分が悪いと思ったのか、その場から即座に消えた。

「ぐ……あ………せん………戦艦………承………認………」

《(ピピッ)(コード認証。直枝理樹、承認いたしました)》

「これで……あつちは………なんとか………な………(ガク  
リ)」



『こちらスバル！要救助者と接触！今から脱出します！！』

『こちらティアナ』

「ティアナさん！！来てたんですか！」

『爆発火災って聞いたからね。急いで来たのよ。それで、地下一階でマリアージュと遭遇。多分これから交戦に入るわ』

「わかりました。ではスバルさんはウイングロードで脱出を。ティアナさんも放水のタイミングでそこを離れてください」

『わかった！！』

『了解！』

「メイン駆動炉、オールクリア」

「全消火冷凍弾、装填完了」

「エネルギー、78%使用可能」

「反重力エンジン、問題なし」

「パイプライン、問題なし!!」

「了解。起動システム、機動エンジン、オールグリーン」

「行くぜ……空中移動戦艦「瞬風」……起動、発進!!!!」

ゴォン……!!!!



エリオたち三人がビルから飛び出し脱出した瞬間、海の底からそんな重い駆動音が聞こえ、徐々に海面が盛り上がって行った。

そしてその山になった海面がはじけ飛び、そこから巨大な戦艦が姿を現しそのまま空中にまで飛び出していった。

「あ、あれは!!」

「空中移動戦艦「瞬風」。「EARTH」の地下で作られていたのが、やっと完成したんだ」

「で、今回それを持ってきたってわけだ」

「あの名前は……」

「……ああ、そういことだ」



「どづした!？」

「担がれている・・・きゅ、救助者の男性が、喉にナイフを突き立てて・・・!？」

「じ・・・おじ・・・?」

.....

「あんだ、早くここから離れないと溺れ死ぬわよ?」

『関係ありません。私は一つではありませんので』

「? どづいづいと?」

炎上していたビルの地下一階

そこで、ティアナはこの一連の事件の犯人であろう人物、マリアー  
ジュと向き合い立っていた。

相変わらずのスピーカーから出ているかのような音声。  
人間と話している気がしない。

『私という個体が消滅しても、また別の個体が、彼女を探し出すで  
しょう』

「彼女？・・・別の個体？・・・あなたは一体・・・」

『トレヴィア・グラゼの居場所は知れました。いまこそ我らにイ  
クスを取り戻すとき。邪魔をしないでください』

「ッ！？」

そこまで言って、マリアージュがティアナに向かって走り出してきた。  
た。

手に持った剣を突き出し、その喉を引き裂こうと突進してくる。

が、ティアナはとつさに地面に倒れ、仰向けになって頭上を越えていくマリアーージュに向かってクロスミラーージュからの弾丸を放った。

バチュン！！

「え？」

「オ……………」

そして、その弾丸はマリアーージュの股を抜け、脳天から飛び出して天井に当たった。

一番驚いているのはティアナだ。

この弾丸は非殺傷設定の弾丸なのに、一発撃っただけでここまで人体を貫くなんてことはありえない。

ティアナを越え、少し行ったところでマリアーージュが止まる。

立ち上がり、その姿を見るティアナだが、その瞬間彼女の困惑の表情が、驚愕の表情へと変わった。

「え……液体!？」

『新たなマリアージュたちよ……我らが主を……みつ……  
け……』

ドロツ!!!

ティアナが驚くのも無理はない。

マリアージュは彼女の目の前でたちゴマって振り向いたと思ったら、突如としてどろりとした液体になって溶けてしまったのだから。

『ティアナさん、一階と二階部分に放水を始めます。そこは危険なので、脱出してください』

そこで、ティアナに西園からの連絡が入り、その液体を少しだけ瓶に入れてその場を離脱した。

キーワードは、そろった。  
解くための鍵は、あの天才科学者だ。  
マッドサイエンティスト

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 破壁（後書き）

さて、今回は理樹の戦いを終わらせ、火事のほうも終結させました。

蒔風

「で、スバルの目の前で救助者が自殺……か。この点は原作と変わらないな」

自殺される現場が違いますけどね。

蒔風

「俺でも傷一つ入れられなかった理樹のバリアをかみ砕きに来るとは……恐ろしいアンデットだな。クロコダイル」

そうなんです。

上級アンデットは恐ろしい。

半端ない強さですから。



蒔風

「そして戦艦。「船」って言うのは「ういづ」ことか」

名前は言わずもがなです。

イメージとしては「ランブリング」です。

蒔風

「ゴジラファイナルウォーズに出てたやつか」

ああいう特撮怪獣映画はこういう時に便利ですね。

蒔風

「次回、ところ変わってクラウドの戦い」

ではまた次回

未熟

辺境世界マウ克蘭、住居開拓地域

ドンドンドン！

「下がれ！！」

チュンチュン、ギイイ！！

ドールマンアンドレットVSクラウド・ストライフ

「邪魔、だな！！」

ガンガン！ゴツガ！！

ドーベルマンアンデットの放つ銃弾を弾きながらクラウドが疾走してファースト剣と呼ばれる大剣で斬りかかって行く。

が、銃身をクロスさせ、そこで受け止めたアンデットはそれを流すように降ろしながら一回転、そして銃口を向けて数十発撃ち放った。

それを大剣の面で受けるクラウド。

ドーベルマンアンデットは銃弾を放ちながらハイキックや回し蹴りをも放ち、回転しながらの攻撃を連続してきて止まるうとしない。

銃弾と脚撃の連続攻撃。

しかもそれは勢いに乗ってドンドン速くなっていつている。

「クツ……!？」

「はははははははは!?!どうしたのか?人間!オレに勝てないか!」

「舐め……るなよ!?!」

ドオウ!?!

クラウドの気が充満し、バイク「フェンリル」から残りの合体剣がすべて飛んできて手や腰に収まる。

「ここからだ」

「フツ……笑わせないよう……がんばってくれ!!!」

ドンドンドンドン!!!

ドーベルマンアンデットが銃を放ちながらクラウドに走り、クラウドもまたそれを弾き飛ばしながら迫って行った。

そして、交錯する瞬間。

クラウドが横一文字に剣を薙ぎ、それをドーベルマンアンデットが縦一回転しながらクラウドを飛び越し回避する。

しかも、回避しながらクラウドの真上で銃弾を放ってきすらした。

クラウドはそれを腰に収めている剣で何とか防ぎ、相手の動きを止めるためにブリザドを放つ。

が、当然ながら何も強化していない魔法では相手の動きを止められ

るわけもなく、氷の塊はいともたやすく銃弾に打ち砕かれていった。

「ははは！私も甘く見られたものだ。その程度の力？翼人とはこんなものか？」

「……………」

「これで終わりなら……………」

「封じろ」

ビギッッ！！！

大口を叩き、こんなものかと嘲るドーベルマンアンデットに対しクラウドが短くそう言った瞬間、そいつの手足を巨大な氷塊が覆い、動きを封じ込めに来た。

いきなりの現象に戸惑いを隠せないドーベルマンアンデット。銃を持った両腕は肘まで凍りつき、脚は同じように膝まで氷に閉ざされていた。

「目の前で氷が出て・・・おかしいと思わないのがおかしいだろう」「なに!？」

クラウドは確かに、ブリザドを放った。

しかしよく考えてみよう。

ブリザドとはいったいどんな魔法なのか。

「氷で相手を攻撃する」のか、「冷気を以ってして相手を攻撃する」のか。

そう考えると、前者ならば別に氷でなくてもいい。  
むしろ鉄球を投げつけた方が威力は高い。

そう、ブリザドの攻撃とは、冷気を以って相手を凍らせ、それによってダメージを与えるということ。

ブリザドを放ったときに発生する氷とは、軌道上の水分が凍った際にできる副産物に過ぎない。

この魔法はそれで攻撃するものではない。

そして、クラウドほどの人物ならば、空気中の水分を凍らせずとも相手に冷気を飛ばすことなど造作もないこと。最初の氷などは、ただの罠にすぎないのだ。

「未熟・・・だな」

「なんだと?」

「力や強さだけならばオレと同等程にもかかわらず、その未熟ゆえに弱い」

「・・・」

「お前、アンデットだな?なぜいる」

「・・・なあ」

「?」

動きを封じられたドーベルマンアンデットに、クラウドが問い詰めようとすると、ドーベルマンアンデットはにやりと笑って勝手に、そして聞いたこととは関係のない話を始めた。

「自分は、実をいうとバトルファイトを知らないのだよ」

「?・・・どういう・・・」

「ドールベルマンという犬種はあなたたち人間によって誕生させられた新たな種。だけど、そんな種でも次回あるであろうバトルファイトには参加できるかもしれない。そんな感じで、多分私は生まれた。だけど、その統率者モノリスがいらないんじゃ、バトルファイト再開の見込みはない」

「だからどうした」

「だから・・・今このチャンスを逃せないですよねえ。比較的生まれただけで、まだこうやって自分のキャラも定まっていってのにさあ!!!!もう先がないなんてあんまりじゃねえ!?!」

ビキッ!!

「!!!無駄だ!!!」

ガキイ!!!



「いくら逃げようとしても、それは氷だ。すぐに作り直せる」

「チ．．．ま、それはいいんだが．．．いいのかな？そんな「俺一人」に気をまわしちゃって」

．．．．ガシヤア．．．．

「!!!!!!」

「ハハハハハハハハ!! そうさ! 俺はまだまだ未熟者!! だからこそ何体もつれてきたんだよ!!!! 気づかなかったか!!!! 間抜け!!!!」

「クツツ!!!!!!」

聞こえてきた破壊音と、ドーベルマンアンデットの言葉に齒ぎしりしながらクラウドがルーテシアのもとに走り出した。

場所は、リビング。

そこでは彼女を守ろうと、アギトとガリユーが奮闘していた。

もちろん、ルーテシア自身も交戦しているが、彼女は魔道士といっ

ても召喚魔導師だ。  
弱くはないが、アンデットを相手にするにまだは不利としか言いようがない。

「ルーテシアッ！！！」

「クラウドさん！！」

と、ルーテシアの声を呼び、彼女もクラウドに気付く。

そこからは念話で会話をしたのだが、彼女の話ではメガーヌとガリユーは一緒に遠出をしていたそうだと、そこでガリユーがこちらの異変を察知、まずは一人で急いできたらしい。

もちろんメガーヌも一緒に連れて来ようとしたらしいのだが、彼女がガリユーだけでも先に行くように指示したそうだと、確かに、担いていくよりは一人のほうがはるかに速い。

転移魔法も使えないことはないが、彼女たちがここに住んでいる理由を考えればそれは実際不可能だろう。

現在彼女らを取り囲んでいるアンデットは三体。

アギトがセミロウクスト、ガリユーバタフライレディバグが蝶とテントウムシだろうかと、それらのアンデットを相手にしていた。

そこに向かって、クラウドも参戦しバタフライアンデットを一閃のもとに切り伏せ、上に飛ばうとしたそいつを叩き落とした。

そしてその際に、天井を張りつく リーチ ヒルだろうか アンデットを見つければ、それに向かって垂直に天井へと剣を構えて突っ込んだ。

残った二体をアギトとガリユーに任せ、天井を突き破り二階へと突っ込んだ彼はリーチアンデットをバラバラにし、そこに見つけたほかの三対のアンデットを切り捨てて部屋から蹴り飛ばした。

そして、穴から一階を見下ろし、そこにあいつを見た。

氷を砕き脱出できたのか、ダブルマンアンデットがルーテシアに向かって疾走しているのを。

「ツツ!!リフレク!!」

だが、クラウドはルーテシアに向かってリフレクを展開し、彼女をドーム状のバリアで守った。

そのドームにダブルマンアンデットの銃弾が当たるものの全く揺らがない、蹴りを放たれるが少し揺れただけで問題はない。

「終わりだ!!」

そしてそれと同時に、クラウドが剣を構えて一階に飛び降り、ドーベルマンアンデットを狙って突っ込む。

しかし

バゴオツツ!!!!!!

「なに!?!」

「ルールー!!」

リフレクの張った内部の地面から、ミミズの始祖たるアースワームアンデットが出現して彼女の体を掻っ攫っていったのだ。

クラウドは咄嗟にドーベルマンアンデットを蹴り飛ばして押しつけ、リフレクを解いて中を見た。

そこには大穴がぽっかりと残っており、ルーテシアはどこにもいなかった。

「もらったぞ！！召喚の才能を持った少女！！」

「させるか！！！！」

クラウドが背後で叫ぶドーベルマンアンデットを無視して剣を床に突き刺し、マテリアを輝かせた。

彼が発動させたのは、「クエイク」と「召喚獣・タイタン」

その効果は絶大だ。

クエイクで地面を隆起させ、タイタンがその地面に両腕を突っ込んでそのままひっくり返すのだから。

それによって、ルーテシアを掴んだアースモールアンデットが宙に放り出され、クラウドがそれに向かって跳躍した。

しかし、それよりも早く鳥系のアンデットがルーテシアの体をキャッチ、飛び去って行くこうとする。

しかも、少し行ったところでもう五体ほど現れて、一点に集まったのちに六体がバラバラの方向へと飛び去って行ったのだ。

「クソツツ!!!!」

バオオ!!!!

それを見てクラウドが悪態をつきながら開翼し、五体すべての召喚獣を出してそれぞれを追っていかせた。  
相手は六体、こっちも五体と一人。

「させてたまるか……!!!!」

「ガウウ……」

「だ、大丈夫かよガリユー。くっそ……頼んだぜ……」

飛んでいく彼らを見ながら、ガリユーが意識を失うように倒れ、アギトがそれを介抱する。

ドーベルマンアンデットはもう、その場にいなかった。







その避難所としてのテントで、理樹は目を覚ました。脇には恭介や鈴をはじめ、治療班としてきた観鈴もいる。

「聞いたぜ、理樹。アンデットだって？」

「うん……恭介たちのほうは!？」

「大丈夫だ。ちゃんと鎮火してきた。お前の方もこんな大変だったのに承認とか、すまなかったな」

「……そういえば、ヴィヴィオちゃんが!！」

「ヴィヴィオはなののが一緒にいて大丈夫だったぞ。だからお前は寝てる」

「そ、そう……よかったあ~~~~」

鈴の言葉に、理樹がはあく、と息を漏らして安堵する。しかし、そのあとに表情は苦々しいものに変わっていき、寝たまま拳をベッドにボスリと叩きつけた。

「でも……僕は負けた。あのままだったら、ヴィヴィオちゃんは確実に奪われていた……」

「それは・・・」

「なんでアンデットが来たんだ？ いったい何が・・・」

「俺らの方にも来てたぜ」

「ああ、火事現場にいた」

「そつちにも!？」

「理樹!!!」

謙吾や真人の話に驚く理樹のもとに、今度入ってきたのは一刀と愛紗、朱里だった。

おそらくはアンデットの話聞いて、ここまでやってきたのだろう。

「一刀・・・そうだ・・・たしか!!!」

「ああ、今こっちはアンデットを追ってる」

「どういふことなんだ・・・? 五十二体以外のアンデットが・・・」



「そう……」

その話を聞いて、理樹はとりあえず襲撃された訳は分かった。彼らがヴィヴィオを狙う理由も。

「でも……こっちに来たのは解る。でも、どうして火災現場に？」

「わからない。もしかしたらリトルバスターズのメンバーや、スバルさんたちを狙ったのかも……」

ちなみに、スバルやティアナは事件現場に残っている。消火後の片づけや、証拠などを見てデータを取っているのだ。

「火事のほうは……？」

「ほとんどの人命は救助できた。だが、一人だけ救助されたとたんに自殺しちゃった」

「え……？」

そして、理樹が今度はそつちの方の話を聞き始めた。  
すると、一刀のほうに連絡が入り、それに出るためにテントから外に出る。

「救助された人が自殺・・・どうして？」

「おそらくは催眠や操作系の魔法で自害させられるようになってたんだろう、って言うのがティアナの考えだ」

「今までの被害者の傷はそういう・・・」

「なんだって!!??」

その瞬間、テントの外から一刀の大声が聞こえてきた。  
なんだなんだと外を見ようとすると理樹だったが、直後にバサァッ!

！と一刀が中に駆け込んできた。

「な、どうしたの？」

「クラウドさんからの連絡で……ルーテシア・アルピーノがア  
ンデットに連れ去られた……！！！！」

事件は、よつやくこころで重なるようにする。

しかし、完全にX<sup>クロス</sup>するのはまだこころではない。

t o b e c o n t i n u e d



あうう！！  
な、何すんのさ。

蒔風

「何でお前は人の話無視してガオレンジャー吼えてんだ」

ん？ああ、そうかそうか、そういうことか。だったら・・・

シュシュッと参・・・

蒔風

「戦隊の種類いつてんじゃねえよ。何で歌ってんだってんだよ！！」

そつちい？

・・・・・・・・ノったから。

蒔風

「まず先にあとがきしろよ」

はいはい

と、いうわけでクラウドVSダブルマンアンドットでしたね。  
ルーテシア連れて行かれましたね。あんだけごちゃごちゃやられち



やさすがに無理でしょ。

では

急げ救急戦隊、ゴーツゴーツファイブウー……！！！！！！

蒔風

「それやめろ（マイク没収）」

ああ！！

な、何すんのさ！！今回の内容かえりみたじゃないか！！

蒔風

「解説をしろよ解説を！！ただえさえお前解説し忘れ多いんだから！！！！」

わーっ たよ……

バーローめ

蒔風

「あゝあゝ……！！？」

うひいー！

と、まあ、今回はそんなもんでしたね。

ブリザドの考えに関しては自分の勝手な解釈です。  
きっとゲームのあれは演出上のものであって、実際に氷飛ばしてるわけじゃないはず・・・と、思っています。

だって氷ぶつけるってそれ思いツきり物理じゃないですかwwwwww

あとメガー又さんでできませんでしたね・・・  
忘れていたわけではありません。

きっと山菜を採りに行ってたんですよ。ガリユート。

ドーベルマンアンデットに関してはああいう風に考察しなおしました。

その代りキャラが安定しなくなっちゃった。てへ

未熟だということを知っている分、あいつは強いと思います。  
無知の知、って奴でしょうか？

それと、クラウドの召喚獣ですが、確か明言してなかった気がする  
のでここで言ってしまうです。

してたかなあ・・・どうだったかなあ・・・？

バハムート零式

フェニックス

リヴァイアサン

イフリート

タイタン

の五体です。

FFFにはまだ召喚獣いたんですが、これくらいにしないとぎりがない・・・

ナイツオブラウンドくらいは出したいと思いますけどね。

理樹と一刀はお互いの事件の事を少し知りますが、ここで合流操作にはなりません。

今回はたまたまかぶった、というだけで終わりそうです。

・そして、手掛かりをもとにマリアージュ事件は終わりに向かう・・・

蒔風

「次回はそこらへんか？」

いいや？まだまだ。

っていつかルネッサさん忘れてる自分に今気付いた。どうしようか

蒔風

「急いで出せ」

はいな

蒔風

「次回、今回の事件後」

あと一刀たちの方へとまた返したいと思います。

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花

古手羽入

御坂美琴

インデックス

アルルク

高町ヴィヴィオ  
ルーテシア・アルピーノ

残り三名

## 会話

「どうしても後手後手になる・・・ッたっ！」

「対象が多すぎるんだ。こればかりは・・・エあ!!！」

「ったく、そろそろ一年なんだろう？こんなんじゃないよなあ・・・

」

「EARTH」本部ビル、道場内。

そこに、北郷一刀、剣崎一真、左翔太郎の三人が今回の事件の内容を話し合っていた。

ちなみに一真と一刀が木刀を手に打ち合っており、翔太郎がそれを眺めている形だ。

「対象になる少女が多すぎるし・・・フッ！そもそもなんでハルヒさんたちが対象外なのか分からない」

「力としては絶大なんだっけ？彼女。なんでだろうな」

「さあ・・・なつと!!!!」

「うわっ！！」

と、そこで一刀の木刀が受け流されて、体制を崩し倒れてしまったところに、一真の木刀が向けられた。

「勝負あり、だな」

「はー……なかなか勝てないなあ……」

「実戦では俺より強いんだから、拗ねない拗ねない」

「それで、実際どうなんだ？」

実際どうなのか、というのは保護した少女たちの事だ。

こちらに保護したのは古手梨花、羽入、インデックス、アルルウ、ヴィヴィオだけだ。

他の者たちには警護をつけておいただけだし、そもそも本人たちが大丈夫だと言ってしまったので、これ以上引き留めようもなかったのだ。

「標的になる少女とならない少女の基準がまだ分からないからなあ．．．．」

「ここまで来ると力ある、とは限らなくなってくるかも．．．あくまでも石板にあったのは「十の少女」だからなあ．．．．」

「ってか、そもそもその「封印」ってのは何で崩れたんだ？」

「それは．．．たぶん「あいつ」が俺たちの世界で．．．」

「ああ．．．．そっか」

これからどうしようかという話を、困りながらもした彼らだが、ここでその根本の理由に行きついた。

そう、この根本の理由。

邪神の封印がわずかながらにも溶けてしまったが故に、アンデットは復活した。

その原因は、間違いなく「彼」が統率者からの意思を伝えるモノリスを破壊したからだ。





「イヌー！」

「待てー！」

「ワンワンー！」

「ちよ、なんでおじさんのところにつぶわあ！！？」

その「EARTH」の敷地内の芝生で、アルルウとヴィヴィオが柴犬を追いかけ、そして柴犬は放課後で遊びに来た魅音を追いかけていた。

そこから少し離れた所にはシートがひかれており、その上で古手梨花、羽入が寝ており、見守るようにアリスとなのはが座っていた。

ちなみにハクオロやエルルウ達は破壊して（されて）しまった宮殿の修理で来れないのだ。

事のついでに海東も手伝っているが、ひと段落つくまではアルルウはこっちに預けることにしたらしい。

インデックスは食堂で「EARTH」のエンゲル係数を順調に伸ば

している。

ちなみに、それが直接響くのは上条のポケットマネーになのだが。

「いい天気ですね」

「うん。みんな元気で何より。でも……」

「御坂さんやルーテシアさんが心配ですか？」

「……はい」

シートの上で、なのはとアリスが話している。

なんだかんだと言って、すでに二人も連れ去られているのだ。

しかも、うち一人は翼人の手をかいくぐって。

もしここにそんな奴が何体もせめて着たらと思うと、守りきれないかもしれない。

「ほかの事件で動いている方たちにも、一応はラウズカードを渡しておいたのでアンデットの対策はできるはずです。それに、ここには今一刀さんだけでなく観鈴さんにクラウドさんもいますので」

「そう・・・だよな。フェイトちゃんもヴィータちゃんもシグナムさんもいるし・・・」

「はやてさんは確かまた別の仕事でしたっけ？大変ですねえ」

そう、今ここ「EARTH」本部には四人中三人の翼人が集まっている。

正直言つて、アンデットが何体かかってきても勝てるという自信はある。

しかし、理樹が対一で苦戦した相手クラスのアンデットは現在確認されているだけでも五体いる。

上級アンデット。

エレクトリックエエル

コックローチ

ブロッサム

クロコダイル

ドーベルマン

計五体

ただのアンデットならまだしも、上級となると話が別だ。しかも、まだいるかもしれないのだ。これ以上の脅威はない。

「……アリスさん」

「？　なんででしょう」

「原典……って知ってます？」

「え？」

なのはが、唐突にアリスに聞いた。

原典

それ即ち、「彼」が関わることのない、オリジナルのストーリー。

その存在を、知っているのかと、彼女は聞いてきた。

「……知っています」

「!?!」

「しかし、世界が一つになった影響で、様々な要因が混じり、重なり、原典と同じとは限らないのですよ。現にアンデットのほづはすでに私の知っている原典とは全く異なったストーリーになっています」

「つまり……やっぱり元の話からはずれている……ということなの？」

「ええ……でもそもそもあなたたちにそのような話があるのでしょうか？」

「それは……」

「あなたたちはそれを知ることはありません。いうなれば、物語の未来ですよ？それは。運命、と言ってもいいかもしれせん」

「……」

「そんなものを知ってどうするといつのですか？確かに、私の中に仮設は生まれています。火災現場にアンデットが現れた理由も、わかっています」

「な、なんで黙ってるんですか!？」

「問題ないからですよ」

「そ、そんな……」

アリスは言う。

自分はアンデットがなぜあの火災現場に現れたのかを知っている、と。

なのはは問う。

だったらなぜその理由を教えてあげないのかと

再びアリスは言う。

だからそれを知ってどうするのか、と  
問題はない、と

「現れる、ということとは知りませんでした。しかし、現れたということを知ると、理由は確かなものが一つあります」

「だからなんでそれを……」

「信じてますから、あなたたちを」

アリスの言葉には、自信と確信があった。

そう、彼ら、彼女らならば、必ずどんな状況でも立ち上がり、救ってくれるのだろう、と。

「「彼」だって何も知りませんでした。それでもあなたたちの世界でうまくやっていました。だから、あなたたちにもできる」

「……………」

「私のこの世界は、世界のみなさんは……未来を知ろうが知らなかるうが、どこよりも素晴らしい人々だと思っってますから」

そういつて、ニコリと笑うアリス。

世界に関わり、見守ると決めた管理者。

その姿は間違いなく「女神」と呼ばれるに相応しいものだった。

「それに、原典通りならもうそろそろ情報を掴んでいるはずですね」





「ど……どれくらい……」

「僕のバリアを、破壊するくらいには」

その言葉に、ティアナたちが驚愕した。

誰一人　あの「世界最強」ですら破壊しえなかったあのバリアを、破壊できるというほどの力を持つ敵。

しかし、だからと言って負けていいことにはならない。

「本当に……僕の方も危なかった……あと少しでヴィヴィオちやんもだったし……」

「でも、それはあっちが捜査するんですよね？」

「うん、一刀のほうだね。さらにクラウドさんと観鈴さんも協力するみたいだから、まず問題ないと……思う」

そういつて、理樹が全員に一刀から渡されたラウズカードを一枚と、予備にもう一枚渡しておく。

あのアンデットたちが現れたのが、もしもこっちで調査している彼女たちを狙ったことならばこれは必ず必要だからだ。

「それで、手がかりをつかんだって？」

「え、ええ。それなんだけど・・・」

と、そこで理樹がこの話を打ち切り、事件の内容に話題を移した。

理樹の方では報告はしたものの、ヴィヴィオの襲撃で調査は依頼できない。

一方ティアナの方はというと・・・

「ルーテシアが言った・・・」「ドクターのところでも聞いたことがある」「話だ・・・って」「

「そうか・・・」

「あと、トレヴィア・グラッセって名前も気になるな」

「マリアージュが最後に言っていたという言葉か・・・」

大きなモニターが現れ、そこにマリアージュの映像が映し出される。

長身で、片手に剣を握り、顔の上半分を覆うバイザー。間違いない。

そして、ティアナの考えとしては、彼女らは人間ではない、というものだった。

「地下で交戦して撃破したんだけど・・・そしたらドロドロの可燃液になって崩れたのよ。直後に放水の水が来たから燃えはしなかったけど、あのままいたら間違いなく焼けてたわ」

「それが放火の原因か・・・」

「倒してもその場で爆発、炎上・・・なんて奴だ」

「それでいて、対象となった人物を自害させるような操作魔法の類・・・」

「そんな奴が何体もいる？冗談きついで」

そう、マリアージュは言った。「自分たち」だと。

つまり、あれは人型の何か　　否、もうわかってる。兵器、だということだ。

「これから行くべきところは決まった、ね」

「ええ、話を聞く必要があるわ」

「ジェイル・・・スカリエツィ・・・」

稀代の天才科学者にして、最悪のテロリスト、ジェイル・スカリエツィ。

次なるキーワードを持っているのは、ある世界に隔離拘留されているその男だった。

.....

「ここにいたんですか」

「あ、長岡さん」

ところ戻って、「EARTH」敷地内芝生上

今はアリスと、今ここに来た長岡だけがシートに座り、ほかの人は柴犬と戯れていた。

「あの犬の名前、なんていうんですか？」

「まだ決めてないんで・・・」

「ああ、だったらつけましょうよ。名前！」

「え？」

これはいい考えた、と言わんばかりにポン、と両手を合わせるアリス。

そうしてうん・・・考えたのち、これはどうでしょう？と人差し指を伸ばして言った。

「シヴァー!」

「まんまじゃないですか。却下です」

「シバ!」

「変わってません」

「じゃあ何がいいんですか」

ぶーぶー言いながら長岡にも案を求めるアリスに、しょうがないです  
ね、と考える長岡。

と、そこに静かな、夕暮れの風が流れてきて彼女の髪を軽く流した。

「風……ですか」

「そうですねえ……そろそろ、夏ですから、ちょっといい感じ  
です」

「……風……」

「えっ」

「「困」なんてどうですか?」

「おお、いいですね!—いかに柴犬っぽいですし!—」





もしかしたら、自分の知らない情報も持っているかもしれない。

「じゃあ明日の十時にそっちに行くと言えどももらえる？」

「了解しました」

「それで・・・こっちに来るのは私と理樹、ギンガさんなだけで、あなたも来るかしら？」

そう言つて、ティアナがルネッサと一緒に来るかどうかと誘う。

会う人物は多い方がいい。  
適度な数の意見は、様々なものの見方を得ることでもいくつもの情報を得られるからだ。

まあ多すぎると、逆にみんなが一つの意見に流れてしまつて悪影響なのだが。

『いえ・・・私は遠慮しておきます』

「そつ？」

『私は・・・私のしなければならぬことがあるので』

「・・・そつ。じゃあ、今晚だけでもこっちに来ない？」

『えっ？』

ティアナが、今度は今現在でルネッサを誘った。

彼女がいるのはスバルの家だ。

今日もメンバーが集まって馬鹿騒ぎをしている。

と、言うのは建前で、実は目の前で救助者が死なされたスバルを落ち込ませないようにしているだけなのだが。

「いまね？スバルがお気に入り番組見てんのよ。昔やってたやつなんだけど、みんなで・・・」

『いえ、私は・・・』

「・・・ふう・・・ルネ、あまり重く受け止めないで」

『？』

「あなたは何か重いものを背負っている。確か、出身は内戦地区だったわよね？」

『・・・はい・・・』

「それで、保護されてそのまま検視官」

『生きている人間は……怖いので』

「……そうね。怖いわ」

ティアナが言う。

生きている人間は怖い。

死んでいる人間は、何もしてこないのだから。

だからこそ、過酷な状況で生き、幼いころから武器を手にしてきた彼女がそんな気持ちになるのもわかる。

でも

「だからこそ、その怖さを克服してやらなきゃ」

『克服……ですか……』

「そう。だから、来ない？それに友人は多いに越したことはないわよ」

『しかし……私が行っても……』

「ふう……じゃあ、あなたの上司として命じます。今すぐ来なさい」

『え……あ……その……』

「この事件が終わった後にも、あなたには私の補佐をしてもらいたい。だから、ね？」

『自分のことを、もっと知りたいという……ことですか』

「ええ。だから来なさい！これ以上グダつくと、人さらいを寄越すわよ？」

『それってどういう……（ボタン！！）』『リトルバスターズ  
参上！！』『え？ちよっとうわあ！？なんなんですかあああああ  
あ……』

「遅かったか……」

モニターの向こうで今まさに誘拐のシーンを見たティアナが、あはは……と笑いながら、スバルたちのいる部屋に戻った。



ちなみに、スバルは今回の火災で正式にティアナの事件に協力することになった。

t o b e c o n t i n u e d

## 会話（後書き）

と、言うわけで前回の予告とはなんかずれた気がするけど、「会話」でした！！

柴犬の名前決定！！

リュウガ様の案をいただきまして、「いがら閑」と命名させていただきました！！

蒔風

「この「閑」って漢字、確か夏目漱石が考えた国字だったっけか？」  
そうそう。造語ってやつね。

蒔風

「アリスは原典知ってたな」  
知ってます。  
しかし、教えても教えなくても、彼等ならば大丈夫だと信じてのことです。

蒔風

「ま、内容も変わってるし、意味無いっちゃ無いしな」

それに、それを知ったうえで物語に参入ってずるいじゃないですか。

蒔風

「それは・・・まあ・・・なあ・・・？（こいつたった今多くの二次創作作者にケンカ売らなかつたか？）」

今回は・・・どうしようか？

蒔風

「おお！？」

正直なところ

スバル宅でのバカ騒ぎを書くか  
事件を進展させるか

のどちらかで悩んでいる。

どうしましょっ？



蒔風

「先が決まってない執筆なんていつものことだろうが」

まあね。

でも予告に困る。

蒔風

「じゃあ・・・次回は気分で!!」

それはないだろー・・・  
しかしそうなる。

ではまた次回 W W W W

## 宴会

「では！第二回、スバル宅で何か騒ごう大会ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

『オオー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

「「よおおおおおおおおおつし！ー！ー！ー！」

なぜかマイクを持った恭介の言葉に、全員が乗り気になって片手をあげて応える。  
理樹とスバルに至っては、両腕を振り上げて異様なテンションを見せていた。

「恭介！ー今日はゲストがいるんだよね！？」

「ああそうさ！ー入ってこい！ー真人！ー謙吾！ー！」

「筋肉が通りまーす！」

「筋肉宅急便が通りまーす！ー！ー！」



「あなたは……」

「はじめまして。エリオ・モンディアルです」

「キャロ・エ・ルシエです。私たち二人ともティアナさんと同じ部隊にいた……」

「ああ、元機動六課の……それで……ここは？」

ポン

「災難でしたね」

「受け入れるといいですよ」

「さらわれた状況を納得されたうえで受け入れる助言!？」

「それしかないのでから!(グッ)」

「考えるだけ無駄ですから!(グッ)」

「何この子たち、怖い」

そんなこんなで連れてさらわこられて来たルネッサは一通り自己紹介され、同じく自分もしたのちにティアナの隣に避難した。

「ラ、ランスター執務官、これは一体……」

「考えちゃダメ」

「え？」

「考えたら負けよ」

「誘ったの執務官ですよね!？」

もうだめだ、おしまいだ。逃れられるはずがない。

そう覚悟したルネッサ・マグネス執務官補佐。御年17歳である。愛銃、シルバードガーを握りしめていま、人生とは何かを見つめ直していた。

「私はどうすればいいのかな？シルバードガー……世界つてもっと暗かったはずだよね……なんか明るいや……あははは……」

ま、速い話が現実逃避だ。

「あまりの衝撃にルネさんがおかしくなった!？」

「あー、彼女小さいころ大変なところで生活してたから、こんな能天気な空間初めてなのよ」

「なるほど」

そんなこんなでルネツサを落ち着かせてから、今から何をするのかを発表し始めた。

「知らない人もいるかもしれないが、俺たちリトルバスターズは野球チームだ」

「「そうだったの!?!」」

驚愕の声を上げるティアナとエリオ。

キヤロも声が出てないだけで驚いているようだ。

スバルは理樹とビデオを見に戻ってしまっている。

どうにもはまってしまい抜け出せないようだ。

「ビックリされたことにビックリだが、まあ話を戻すぞ」

「はい……」

「しかし、ここは室内だし時間も遅い。そんな中、野球ができると思っつか?」

「できませんね」

「と、思っところが素人なのだよルネッサ君!」

「えっ?」

「ミッド育ちの君らは知らんだろっが、我々の国にはいついつときにもできる野球があるのだよ」

「それは・・・いったいなんですか？」

ルネッサの目が光る。

おそらくは彼女の好奇心をくすぐったのだろう。

その質問に、恭介と来ヶ谷が腕を組んで並び、高らかに宣言した。

「その競技とは・・・野球拳だッッ!!!!」

「「野球じゃないよー!!!!/ですっ!!!!」」

と、そこで小毬とクドも驚いた声を出した。  
何をやるかまでは聞いていなかったようだ。

「ぬ、脱ぐんですか!?!」

「そついうのはやだよー(泣)」

涙目になっていやいやと騒ぎ出す二人。

むろん、ティアナとキャロも内容を聞いて素直にウンとは言えなか



った。

しかし、そんな彼女らを乗り気にさせる言葉が、ここにはあった。

「脱がせるのはただの野球拳。しかし、俺たちがやらせるのは違う」

「そう・・・負けた人間にッ！！好きな衣装を着させるのだッ！！」

「「「「な、なんだってー！ー！？」」「」「」

「つまり！！理樹君にあんな服を着せることもできる！！」

「ゆいちゃんにフリフリの服も！？」

「ハッ！？しまったか！？・・・しかし・・・それでもまだ追い求めるだけの価値がッ・・・ぬうう！！」

「エリオ君をもっとかわいくしても!？」

「キャラが何を言ってるのか訳が分からないよ!!」

「大丈夫!!みんなが振り向くように絶対可愛くするから!!」

「こんなのってないよ！！ひどすぎるよ！！こんなの絶対おかしいですよ！！」

「じゃあティアにあんなカッコやこんなカッコも！？」

「許可するッ！」

「勝手にしないでくださいッ！！」

「つまり全員に筋肉の肉襦袢じゅばんを着せて筋肉隊を作ることまできるってわけだな！！」

『『『筋肉ルート一直線ッ！？』』』

そんなこんなで始まる野球拳。否、内容からして逆野球拳というベ  
きか。

いつせいにやってもしょうがないので、チームに分かれることにし  
た。

着せ替え人形チーム

理樹、エリオ、小毬、クド、鈴

お着換え推奨チーム

来ヶ谷、西園、葉留佳、キャロ、スバル

勝敗調整チーム

真人、謙吾、ティアナ、ルネツサ

「一部の女子からの明らかかな悪意を感じるんですが!?!」

「というか何じゃこのチーム名は——!?!」

「どうした鈴」

「どうしたじゃないわボケエ!!」

「(ズゴシッ)なんで俺ツ!?!」

恭介が鈴をなだめようとするのだが、なぜかそこでハイキックを食

らうのは真人だった。  
お約束とは恐ろしい。

「むっふっふ、鈴君や理樹君、そして今夜はエリオ君と、より取り見取りのラインナップ!!」

「それを俺たち調整チームがどうにかしてお前らを負かせる、ということさ!!」

「面倒なチームに振り分けないでくださいッ!!」

「と、言うわけで頼んだぞ、リーダー」

「私が!?! 恭介さんは!?!」

「俺はほら、審判だから」

卑怯である。

「と、言うわけでもくっちゃべってないでいくぞ第一回戦!!」

クドVS来ヶ谷VS真人

「」「」「ちきゅーっっするなっあっっ」「っっっ具合にっせっちゃん  
せっっっ」「」「」

「アウト!」

「セーフ!」

「よっよいの、よい!」

グー、チヨキ、パー!!

「あ、あいこですねえ」

「危なかった・・・ナイスパーだ、真人少年」

「へ、いってことよ。パーを出すならオレしかいねエからな」

「ああ、君以上にパーな人間はいないさ」

「へへっ、照れること言ってくるじゃねえか来ヶ谷の姉御よ」

「真人ー、暗に貶されてるぞー」

「言つのもかつたるくなつたので簡単に行くぞー!」

「「「じゃんけんポン!」」」

「チヨキ!チヨキ!グー!!」

「わふっ!負けましたあ」

「なん・・・だと・・・!?何をしている真人少年!」

「す、すまねえ。力を籠めたら握力を最大限に発揮しちまったぜ・・・  
・恐ろしい筋肉だ」

「では！！勝者の真人は何か着せたい衣装を！！！」

「や、やはり筋肉肉襦袢を！？」

「いや・・・全身を鍛えるサスペンダーかもしれんぞ！？」

「おいおいお前ら、俺だからってすぐにそういう決めつけは良くないんじゃないかい？」

「え？じゃあ違うんですか？」

「おうよ。確かに筋肉はたくましく強い。しかし、同時にしなやかでなくちゃいけないんだ。だから・・・」

「バツ！！」

「フィットネス用の全身タイツだあッ！！」

「まさかまさかだったああああああ！！！！！！」

ぽぽぽぽぽん

「わふ〜…………ペ、ペったんこなのですう…………」

「がふるあ!?!」

「きよ、恭介(21)——————!!!!!!」

「理樹…………そのカッコはひどいんじゃないか…………ガク  
ッ」

「ふふ、フリフリドレスを着るよりも何倍もましだな。ほーれほれ  
少年たち、どうだ?」

「女性の凹凸に感動した」

「エリオ君、あとでヴォルテールと模擬戦しようね」

「えっ?」

「ん?」





「「「じゃんけんポン！！！」「」

グー、グー、グー！！

「あつぶなあー！！」

「あいこですか」

「………ときにモンディアルさん」

「（ビクリ）な、なんですか西園さん」

「あなた、さつきルシエさんに怒られましたよね？このままでは巨竜と戦う羽目になるとか」

「（ガタガタガタ）そり、そんなこと……冗談に」

「しかしさつきからあつちで魔力練ってますが？」

「夢も希望もありゃしない！！」





スバルと謙吾は見事な執事服を着せられていた。

「く・・・せつかくのチーム分けなのにまだ目的を果たせたのはエリオ君だけではないか!!」

全身タイトの来ヶ谷が、コブシを震わせて悔しがる。

確かに、いまだ目標を果たしているのはエリオのみ。  
小毬もクドもなんとなしに逃れている。

このままでは・・・

「もうジャンケンとかよくな？」

「おお、恭介氏、もどったか・・・して？」

と、そこに復活した恭介が来ヶ谷の肩にポン、と手を置いて立ちあがってきた。

その顔は明らかに何かを企んでいるそれだ。

そして、その考えを恭介が来ヶ谷に耳打ちしていく。  
その話を聞いていくうちに、来ヶ谷の顔が「ニヤリ」どころか「ニ  
タア」……をこえ、「ニマタア、ゲへへへへ」と歪んでいっ  
た。

「俺らでこつして……それで……すれば……」

「なるほど。では……」

「ああ!! 真人、謙吾!! お前らもやるぞ!!!!」

「「応よオ!!!!」」

「「「固有結界展開ツツ!!!!」」」

「はあっ!?!?」

「え!?!?」

「なんで四人で出来んのツツツ!?!?!?」

「私もいますよ?」

「完成！虚構世界ッッ！！！」

そう、それはかつて彼らが運命を覆そうと発動した虚構世界。  
”輝志”という世界だからこそできた、集団で行うという、奇跡の  
固有結界だ。

それを五人という人数で発動させるとは……

「これが欲望の力ア！！！」

「素晴らしいッッ！！！」

「ハッピーバースデイ！！！！！」

「この欲望、解放しよう」

「ふふふ、フフフフ、腐腐腐腐腐腐……」

「こいつら人間やめやがった！？」

「ティアナさん、口調荒くなってますよ!」

この虚構世界、または固有結界。

その名を「運命を乗り越えし虚構の学園（ハッピーエンディング）」という。

かつて彼らの世界が襲撃されたときにもこれを発動させて、大いに活躍したのだが……

これを発動する際に必要なのは構築のために軸、そして多くの、または強い想いだ。

この「軸」とは恭介、真人、謙吾の三人を指す。恭介が世界を概念から引つ張り、真人がそれを「そうあるもの」だと存在させ続け、謙吾がそんな中で変革させていくのだ。

無論、展開するために協力した人の思いは無視できないため、彼らが好き勝手出来るわけではない。  
しかしこの場合……



「理樹の女装が見たいか!!」

「「みたいみたい!!」」

「理樹と遊びたいか!!」

「「筋肉筋肉——!!」」

「よかるう、ではお着換えタイムだッッ!!」

「「「レッツパーリィ——!!」」」

言うまでもない。一致団結だ。

というか理性が完全にすつとんでますね。

こりゃ一致もするわ。下手なこと考えてないんだから。

「覚悟するがいい!!そしておねーさんを抱き締めるオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」



消え、皆で片づけに入った。

ちなみに最終的な服装としては……

理樹・・・猫耳 and 女制服

鈴・・・素晴らしき男装

恭介・・・猫の着ぐるみ

真人・・・バカ殿

謙吾・・・ふんどし

小毬・・・スバルのバリアジャケット

クド・・・巫女服

来ヶ谷・・・全身タイツ

西園・・・メガネをかけてブルマ体操服

葉留佳・・・チャイナドレス

ティアナ・・・スクミズ（旧に非ず）

スバル・・・こっちはこだわりの旧スクミズ

エリオ・・・メイド服  
はだけてます

キヤロ・・・剣道着（新品なので大丈夫）

ルネツサ・・・理樹の制服

となった。

「あの・・・」

「ん？あールネ、それ理樹のだから返してあげてね？」

「いえ・・・まあ、それもそうなのですが・・・」

「？ どうしたの？」

片づけをしながらルネツサがティアナに声を掛けてきた。  
何やら聞きたいことがあるようなのだが・・・

「いま私たちは事件を担当しています」

「そうね」

「それは彼らも同じはずです」

「うん」

「なのになぜ・・・こうもお気楽なのですか？」

「・・・不謹慎じゃないか、ってことね？」

「・・・はい」

そう、彼女はここに来た時から・・・いや、実際には最初から思っていたかもしれない。

なんでこんな時にこんなに能天気にはしゃいでいられるのか。

事件ということを経く受け止めているのではないかと。

しかし、ティアナはふう、とため息をついて「確かにそうね」と前置きをしてから、でもね、と先を続けた。

「だからってね、いつまでも辛気臭くちゃいけないのよ。こうしてなんでもないような仲間や親友とはしゃいで、遊んで・・・それでね、こう思うのよね。やっぱりこの世界は素晴らしい・・・って」

「世界が・・・ですか？」

「いまとなつては「世界」って言葉はとても広くなつてしまつただと・・・それでも私は、この日常や仲間たちを大切にしたい。そして、それは他の誰にでもあるもの。もしもそれを守るなら、それはとても素晴らしいことじゃない？」

「・・・はい」

「誰にだつて素晴らしい世界がある。それを守ることは、とてもとても強いこと。だから・・・かな？こうやって、自分たちの護っているものの素晴らしさを、楽しさを、しっかりとかみしめて・・・そしてそれを壊させないために、私たちは戦うのよ」

「・・・私が生まれたのは、内戦地区のひどい土地でした・・・」

と、そこでルネッサが自分の生れた土地のことを話す。  
そのことはティアナもすでに知っている。

「生きるために殺したことも、盗んだこともありました。すぐ隣で人が死んでいきました・・・そんなところでも、あなたは同じことが言えますか？」

彼女の生まれ故郷はひどい土地だった。  
笑い声ではなく銃弾が飛び交い、煙で灰色になつた空と真紅が染み込んで所々黒くなつた土地。

そんな場所を知ってもなお、この世界は素晴らしいと思えるのか。世界は決して、きれいなところばかりで構成されているわけではない。

醜く、穢く、汚らわしく

救いようのない現実というものでできた、そんな場所も存在するのだ。

それでもなお、この世界は素晴らしいと思えるのか。

「言えるわ」

それに対するティアナの回答は即答だった。

その言葉に、ルネッサの相貌が鋭くなる。

まるで、何も知らないくせに、と言わんばかりに。

「そう……ですか……」

「と、言っても、私は何も知らないからこういえるだけかもしれないわね」

「……………」

「だからこそ、あなたには知ってもらいたい」

「え？」

「この世界の、素晴らしさを。たとえそんな土地でも命は生まれるし、こうしてわたしはあなたに出会えた。それに……………」

「それに？」

「そこから生まれてくれたあなたは、とても強いはずよ。そんなあなたがいるなら、その世界はいくらでも変わる余地はある。一人だけなら、私たちを頼りなさい」

「しかし……………」

「水臭いゼルネっち!!!」

「そうだ。俺たちはもう友達じゃないか」

「困ったことがあったら何でも言って来い。あたしたちも頑張るか」



と、そこに話を聞いていたのか、真人に謙吾、鈴が後ろから元気よく声をかけてきた。

そして、その真ん中に立った理樹が手を差出し、言葉を紡ぐ。

「ルネッサさんの生れた土地はひどくて、そのころの生活はひどいものだったかもしれない」

その通り。

あそこでの生活は、ただ一つを除いてひどいことばかりだった。

人としての自分を忘れそうになりもする。

しかし

「だけど・・・いや、だからこそ、さ。これからの人生を、もっともっと楽しく、凄いものにしようよ！そして、助けに行くんだ。その世界を。最後には、こんなこともあったって、高らかに笑い飛ばせるくらいに！」

「人生つてのは辛いことの方が圧倒的に多い。苦しい時間の方が幸せな時間より多いことがほとんどだ。だったらよ、人生の醍醐味っ

てのはそれをどれだけ楽しいことで埋め尽くせるかってことじゃないか？」

「私たちがルネちゃんを幸せにして〜そしてルネちゃんも私たちと楽しく遊んで〜、そしてみんなでほかの人を幸せにします。それが幸せスパイラル」

「美少女のためとなれば、おねーさんはいくらでも協力するぞ」

「そこに救える命があるなら、私だってどこにでも！！」

「不条理な環境がどれだけひどいか知ってるから・・・僕も、助けに行きたいです」

さらに恭介が続き、小毬、来ヶ谷、スバル、エリオとルネッサに声をかけていく。

大丈夫、一人じゃないと。

必ず一人は、世界のどこかに仲間がいる。  
しかも今は、一人どころではない人数がいるのだ。

「だからさ、こんな事件は早く終わらせようよ。そして、この世界を楽しもう？」

「でしょ？大丈夫よ。みんな事件を忘れてバカやってるわけじゃないんだから」

「ティアナさん、そんな風に思ってたの？」

「あ、いや……あははははは」

そんな彼らを見て、ポカーン、としてみまうルネッサ。

そして、スックと立ち上がり、片づけをしようごみ袋にごみを詰めていく。

「さ、早く片付けましょう？次のことが、できないじゃないですか」

「おっ！」

「そうだな」

「次はなにしようか？」

「それは明日の夜な？明日は事件を追わないとだから」

そのあと片付けは続いていく。

新しいごみ袋をバサリを広げるルネッサの口元にはうっすらと、確かに笑みが浮かんでいた。



「そうかそうか！！けどな？楽しいことはまだまだあるからな？」

ありがとうございますと言わんばかりにそう言うルネッサに、まだまだこれからだという恭介。

と、そこでルネッサが足を止め、空を何となしに見上げた。

「？ どうした？」

「あ・・・先に部屋に戻ってください。ちょっと興奮した身体を冷ましていきますので」

「ん、そうか。風邪ひかない程度にな」

ルネッサの言葉に、恭介が手を振って先に部屋に戻る。それを確認し、ルネッサがポケットから何かを取り出した。

それは何かの端末で、ピッ、と起動させるとモニターが現れてきた。そのモニターを見ながら、同時に現れたコンソールに指を当てて何かを解除していく。

「やはり・・・止めるべきでしょうね・・・私は見ているだけでした・・・止めないと・・・」

「何をしている？」

「!？」

独り言をつぶやきながらコンソールを叩いていたルネッサの背後から、そんな声がして咄嗟に彼女がシルバーダガーを構え向ける。

そこにいたのは、一体の化け物。

硬そうな、まるで樹皮のような茶色い皮に、美しいピンクの花を肩に携えた化け物だった。

「それは君の目的を果たそうとするためのものではなかったのか？」

「私はこれを使っていません。ある日送られてきて「君のしたいことを為せ」と書いてあっただけです」

「……なるほど。どうりでなかなかたどり着けないわけだ……」

「あなたは……なにものですか？」

銃口を向けられているにもかかわらず、化け物はルネッサと普通に会話している。



「ふう……そのようなことをしても、冥王は止まらぬというのに」  
「え？」

「渡さないというならば、死体となった貴様からはぎとらせてもらおう……！」

ドオン！……！！

直後、ブロッサムアンデットが手を向け、そこに桜の花びらが押し固まった拳ほどの弾丸が四つ生まれ、ルネッサに向かって突っ込んでいった。

そのうち一つは撃ち落とされたものの、残りの三つはどうしてもはじけず、脇に転がり避けようとしたルネッサ。  
しかし、それはククッ、とそちらの方へと微妙に曲がり、彼女を爆炎に包みこんだ。



「人を壊し、端末を壊さずに……この程度の威力なら大丈夫かね？」

そういつて炎の方へと歩いていくブロッサムアンデット。  
だが、そううまくいくわけがない。

バフオア！！！！

炎を腕でかき消し、その場を晴らして見たブロッサムアンデット。  
しかし、そこには端末どころかルネッサの死体すらなかった。

「はあ……はあ……」

「あつぶなかつたな……。大丈夫か？ルネッサ」

「きよ、恭介さん……」

「恭介！！ルネッサさんをお願い！！」

「じいっ……こつちまで来たの！？」

ルネッサを腕の中に抱えてその場にしゃがみ込む恭介。  
そして、その二人をかばうようにしてティアナと理樹が駆けつけて  
きていた。

「ぬウ……………」

「話せる……………ってことは、上級アンデット……………」

「気を付けて……………こいつら、油断できないから」

「……………ち、分が悪いな。ここは引こつ」

ザアッ

「ま、待て!!」

「それはなくとも構わん!!…どうせマリアージュは止まらないのだ  
からな!!」

そうして、桜の花びらと共にブロッサムアンデットが消え、その場には彼ら四人だけが残された。

「いったい……どういうことなんだ？」

「あ……あの……もう大丈夫なので……放してくださいませんか？」

「ん？おう、わりいな」

「いえ……」

そういつて、恭介がルネッサを放し、地面に立たせる。

「何があったの？それは何？」

「……すべて、話します。しかし、今知ったこともありますので……」

「構わないわ。教えてちょうだい」



へ？誰だつて？

下級は物覚えが悪いなあ……

あの屋敷にいる一人の少女は、綺麗な綺麗な聖杯ホムンクルスの器だよ。

t o b e c o n t i n u e d

## 宴会（後書き）

と、言うわけでどんちゃん騒ぎからのシリアスヘドーン!!

前後のテンションがおかしい第二弾でした。

今回のネタ考えるのに結構かかってしまった・・・  
最終的にはアンソロのネタをパク、ゲフンゲフン・・・参考にして  
しまったし。

ブロッサムアンデットが言っていた「分が悪い」とは決して勝てない  
わけではなく、端末を破壊せずに奪い取るのが難しい、ということ  
でした。

7285

ここからマリアージュ事件は終わりへと一直線!!

あ、最期のは全部一人のセリフです。

口調が一定しないあたり、あのアンデットですね。

今回見直してないから間違い多いかも!?

蒔風

「物書きとしてそれでいいのか」

次回、ルネの独白と、新たな候補

ではまた次回

## 告白

スバル宅内のリビング。

そこで恭介が、先ほど起こったことを簡単に説明していた。

ブロッサムアンデットの襲撃。

相手が狙っていたもの。

そして、そこから助けたこと。

それが終わると次に、ルネッサが前に出てきて、テーブルの上にある一つの小さな端末を置いて話を始めた。

「数か月前、私の部屋にこれが送られてきました」

「・・・これは？」

「マリアージュの制御装置・・・のようです」

「!?!?!?」



ルネッサの言葉。

しかし、それにはなんだか確証がないようだ。

順を追って話そう。

数か月前、彼女の部屋にある小包が届いた。

入っていたのは、「これは貴女の父が残したものだ。貴女の為すべきことを為せ」という小さなメモと、一緒に送られてきた端末。

彼女は最初、それがなんなのか知らなかった。

起動させようにもしないのだ。

そして、それと時を同じくして発生した今回のマリアージュ事件。

それを追っていくうちに、彼女は気づいたのだ。

これはマリアージュが発生し、事件が起こるたびに反応している、と。

しかし、最初は全く気付かなかった。

そもそも、マリアージュは普通に人間だと思っていたのだ。

無理もない。あの外見で「人間ではなく兵器」だと思っ方が難しい。

だが、ティアナの「彼女らは兵器である」という結論。

それによって、事件を追ううちに抱いてきていた疑惑が、確証に変わった。

そこからマリアーヂュを「兵器」として今晚調べようと思っていたのだが・・・まあその前にこちらの運ばれてきたという次第だ。

彼女の確証。

それによって、彼女は「彼女の親」の言葉を思い出していた。

「世界に痛みを。今この平和がどれだけ脆く儂いものなのかを思い知らせなければならぬ」

そういつていた彼の名前は、トレヴィア・グラージェ。

陰惨な内戦地域でルネッサが出会った老人であり、その地での唯一の救いだった人間だ。

いま彼女が此処にいるのは、トレヴィアのおかげと言っても過言で

もないほどに。

彼は彼女の父となりえていた。

しかし、そんな彼も数年前に死んでしまう。

ならば・・・彼の思想を受け継ぐのは自分だけしかない。  
小包にあったメモ、そして、「父」の残したこの端末。

そういった経緯で自分のもとに来たかは知らない。

受け取った時はなんだかまったくわからなかった。

しかし、今はわかる。これの使い道が。

それが彼女を、誘惑に誘った。

自分の為すべきこと。それは、これを使って・・・

・  
マリアージュを自分が手引きして、世界により効果的な痛みを・・・

そう、思っていた。

今日の事件が終わり、ホテルでティアナからの連絡を受けるまで。

しかし、そう思っていた思いも、今はない。

それははっきりと、ブロッサムアンデットに言ってやった。

あの化け物曰く、これらの真相を知った自分にマリアージュを操らせ、あるものを探させるつもりだったらしい。

しかし、最終的に彼女はこれを使うことをやめた。

その原因となったのは……

「ありがとうございます。みなさん」

そういつて、ルネッサが頭を下げる。

その相手は、この部屋にいる全員だ。

世界は決して、平和であることに墮落などしていない。

そう、思わせてくれた人たちだ。

もし……

もう何年か後だったら、彼女は踏みとどまれなかったかもしれない。

もし、もう何年か検死官をし、途絶えることのない、事件に巻き込まれたいくつもの死体を見ていたら……彼女はこの世界の愚かさを嘆いてしまったかもしれない。

世界に牙をむいてしまっていたかもしれない。

「それでも、私は世界はまだ素晴らしくあれると思えました。本当にありがとうございます」

そういつて、また頭を下げるルネッサ。

そして同時に、ティアナに向かって両手を差し出していた。

「なに？ルネ」

「私は……これを持っていました。何かわからなかったとはいえ、事件を止められたかもしれないモノを。しかも、これから使おうとも思ってしまった。だから……」

「馬鹿ね」

「え？」

ティアナがルネッサのその手をおろし、しっかりと目の前に立つてこう言った。

「貴女は最初、これがなんなのか知らなかった。ここに来てやっと、マリアージュ制御のプログラムだとわかった。それを使おうとも一瞬思ったが、踏みとどまってマリアージュの活動を全停止させようとした。そういうことでしょ？」

「はい……」

「だったら、あなたは罪に問われない。故意がない以上、私にはそこに手錠をかける権利を持ってないわよ？」

「しかし、何かしらの……!!」

「うーん……じゃあこの場合、「EARTH」的にはどうなるんでしょうね？理樹」

素直に「わかりました」といわない……というか、言えないルネッサ。

それに対し、ティアナはじゃあどうしようか、と理樹に聞いてみる。

「そうだなあ……上司であるティアナに報告しなかったことへの始末書かな？」

「そ……そんなことで？」

「それとも筋肉に関して原稿用紙300枚のレポートでも書くか？」

「いえ……遠慮します」

と、そこに口を挟んできた真人。

こういう空気の時、彼のバカは素晴らしい効果を発揮する。

愛すべきバカとはこういうことを言うのだろう。

それを以って、ティアナがパンパンと手を叩いて話にピリオドを打とうとした。

「だったら！これでこの問題はおしまい！さ、明日は忙しくなるわよ。そういえば、その端末は使えるの？」

「あ、それは……さっき見たら、あいつの砲撃で発生した衝撃で細部が故障したみたいで……うまく起動しません」

「そう……」

テーブルの上にある端末。





深夜

地方都市、冬木市

その郊外の森に、大きな大きな屋敷・・というよりも、すでに城と呼べるような建物がある。

と、というかその建物の名称は「アインツベルン城」だ。

呼べるような、どころか立派な城だった。

その城の高い場所にある一室。

その部屋の中で、一人の少女がベッドの中でじたばたと暴れていてメイドを困らせていた。

「やーだー！！土郎の家に泊ーまーるー！！」

「アインツベルンの淑女レディがはしたないことするんじゃありません！  
！リゼも見えないで手伝ってください！！」

「えー？私もあつちのほーがいい」

「クラあ！！！！」

部屋から出て行くこととする、イリヤ。

その服をつかみながらもずるずると引きずられる、セラ。

それを眺めながらお泊りの荷物を抱える、リゼことリーゼリット。

どうやらイリヤは土郎のいる衛宮邸に泊まりたがり、淑女たれとい  
うセラはそれをよしとしなかったのだらう。

「私だつて狙われてるかもしれないのに、ここに一人にしてい  
の？さ、お兄ちゃんのところ……」

「バーサーカーがいますよ！それともバーサーカーよりも衛宮土郎

の方が強いと!？」

「う…………でも…………」

確かに、バーサーカーは限りなく強い。

その体をもってすれば、勝てない相手はそうそういないだろう。

その宝具「十二の試練」コトハシはその命の上限を十二に上げるものだ。

一時期は七つしかなかったのだが、ある事件でやられ、復活した際にすべて戻っている。

万全といえば万全だ。

7298

「いついかなる時もアインツベルンの淑女はしとやかにですね…………」

だからこそ、こうして大人しく城の中にいるようにセラは言っているのだ。

今から衛宮邸に行くのは逆に危険なことである。

しかし……………

「くどくどくどくど……ってああ！？そこ！窓から逃げない……！」

「やばっ！見つけた！？バーサーカー！受け止めて……！」

スピヨーン

まるでそんな音が聞こえるかのように窓から飛び降りたイリヤ。それを止めようと窓へとダッシュしたセラだが、時すでに遅し。

逆に窓から落ちそうになったのをリゼリットに助けてもらってすらいた。

「……お嬢様……！」

「あはは……じゃあ行っちゃえバーサーカー……！」

「……！」

ダゴン……！」

そんな音がして、イリヤを抱えあげていたバーサーカーが一気に跳躍、森の中に消えていった。

「オオオオオオ嬢様アツ!？」

「イリヤ、すごい」

「リゼ!!!こんな一大事に何をのんきな!!!」

「? バーサーカーと一緒になら大丈夫。それに、今は森の方が安全かも」

「え?」

・・・ズツ・・・ズン・・・

「!?!?」

「誰か入ってきてる。敵」

「そ、そんな・・・ここは魔術的な処置が施されたアインツベルンの隠れ城ですよ!?!?」

「それでも来てる。それが現実。セラはここに隠れてて」

そう言って、リーゼリットがどこから取り出したのか身の丈以上のハルバードを抱えあげ、ムン、と仁王立ちしていた。

確かに、セラには戦闘能力どころか、運動能力すら皆無だ。今戦えるのはリーゼリットだけだと言うことになる。

しかし・・・

「ひ、一人ではあなたが!!」

「大丈夫だよ。私は、みんなを守るためにここにいる。私も、みんなといたいから」

そう言って、リーゼリットは部屋を出て行ってしまおうセラ。こうなっては、自分はここに隠れるしかない。

一緒に行って邪魔になることはわかりきっているのだ。自分はそういった目的に作られたホムンクルスではない。

しかし、彼女は自分の姉妹のようなものなのだ。みすみす見殺しになどできるはずもない。



屋敷のメインホール。

そこには多くのアンデットがひしめいていた。

その数、ざっと二十はいようか。

気配から察するに、この周囲も囲っているようだ。それを含めると五十体以上いるかもしれない。

「さて・・・お掃除お掃除・・・」

そう言っつて、そのアンデットを前に大階段の上に立つせう。  
その表情にはまるで焦りは見えないものの、ほほを一筋の汗が  
つって行っている。

「よし・・・」

「《R E A ・ D ・ Y》魑魅魍魎の跋扈するこの世界・・・」

「行くよ！キバット！！」



が、そうしていざ挑みに行こうとする彼女を両脇に、二人の青年が立った。

彼らこそ、護衛としてこの城にやってきていた、二人のライダー。

紅渡と名護啓介だ。

まさに今返信しようと、キバットとイクサナツクルを手にしている。

それに対し、セラは・・・

「あ、そういえばいた」

と、まるで・・・というか、本気で忘れていたらしい声を出していた。

それにくりとコケる渡に、突っ込むキバット。

名護だけは何か前口上を延々とやっている。

だが名護おのそれもなんやかんやで終わったらしく、意気揚々と宣言した。

「では行くぞ渡君、セラ君！！」

「はい！！」

「はい」

「死なぬというあなたたちのその命、それでも神に返しなさい・・・  
！！変身！！」《F・I・S・T　O・N》

「ガブツ！」変身！！」

「張り切って行きまーす（ズンツ！！）」

そうして構える三人。

向かうは目測五十のアンデット。

相手にとって不足はない。

「そういえばイリヤが森の中に・・・」

「大丈夫です。まだ護衛はいますから」



彼の本文は圧倒的破壊力による蹂躪だ。  
こうして逃げ回るのは得意ではない。

「逃げてんじゃねえよ！！疲れるだけですのねえ……」

「だったらそれ撃つのやめてよ！！あとキャラを安定させてよね！  
！気持ち悪くなる！！」

「それはできない相談。そして、定まってくればいいんだけどね、  
つとー！！」

そう言って、ドーベルマンアンデットが一気に跳躍、木々を足場にして三角飛びし、バーサーカーの目の前に躍り出てきた。

正確に言うと、バーサーカーの走っている右脇の木をけり、地面と平行に移動するようにして前に躍り出たのだ。

「もらったアツー！！」

「ツツ！！???」

その位置から一気に反転し、ドーベルマンアンデットがイリヤへと飛び。

それを剛腕で叩き落とそうとするバーサーカーだが、空中にもかか

わらずひらりと身の返して回避され、イリヤへの障害物がなくなっ  
てしまう。

「ふむ………いただいたってばよ……！」

ガアンツッ！！！ザザッ！！！

が、しかし

そんな音がして、ドールマンアンドットの腕がイリヤへと届くこ  
とはなかった。

バーサーカーは疾走をやめ、イリヤを降ろして近くに隠れさせる。

一方ドールマンアンドットは腕を抑え、離れて着地している。  
地面にぼたぼたと、アンドット特有の緑色の血を流しながら、自分  
の邪魔をしてきた一人の少女をにらみつけた。

「……誰なんだい？」

「……恋」

そう問われた少女は、自分の名前をぱつりと言った。

三國無双、呂布奉先。

武器たる巨大な方天画戟を肩に担いで、敵を淡々と見据えていた。

「は……上等……」

一人は無口な者

一人は咆哮を上げる者

そして一人は安定しない口調でベラベラとしゃべる者。

三者は三様に、これだけの言葉で済ませ、無言のうちじぶづかりあった。

直後、この森のすべての木々が、衝撃に振動した。

t o b e c o n t i n u e d

## 告白（後書き）

はいはい！！

「告白」でしたよー！！！！

っと、では、ここで分かりにくかったかもしれない事項をおさらいしておきますね。

数ヶ月前、ルネのもとに端末がメモと送られてくる。

この時点でルネは何の事だかわからない。

### 事件発生

いくつか事件が発生するうちに、同じところに端末が反応するのでもしかしてと疑問に思う。

そして、ティアナによる発言で、兵器だったというマリアーヂュ。疑問が確信に変わる。

ならば自分はこれを使ってなすべきなのかもしれないと思う。

マリアーヂュを知るために、「兵器として」の情報を集めようとする。



筋肉隊にさらわれる

前話へ

という流れですね。

「いったい誰が彼女にそれを送ったのか、というのはまだ謎という  
ことで。」

「何故彼女は、この事件の真相を知らなかったのか。  
マリアージュの事を知らなかったのか。」

「それは、この事件発生の時間に関係します。」

「本来の「サウンドステージ」よりも、この物語は一、二年早く発  
生してるんです。  
彼女がオリジナルで知っていたトレヴィアやマリアージュ、そして  
冥王に関する情報は、この一、二年の間に調べたことだったんです  
よ。」

「だから知らなかった。」

と、言うことでしょうか？

蒔風

「そして紐解く次の手掛かりは、ルーテシアの残した言葉、ドクタ  
ー……」

はい、スカリエツティですね。

そこに聞きに行くのが、彼らの次のミッションです。

蒔風

「でもそれより前に……」

イリヤの方の戦いですね。

いやあ、一刀の方に戻すとかいつときながら、一刀出てきてないじ  
ゃん!!! W W W W

さて、彼女はアンデットの眼鏡にかなうのか!?

蒔風

「かなわねても困るなあ……」

マジでリーゼロッテとセラが分からなくなる。

どっちが強くてどっちが弱いのか!!

いや、強い方が無口、礼節だの口うるさいのが弱い、というのはわかるんです。

蒔風

「後者に対する印象ひどいな、おい」

しかし・・・名前がどうしても結び付けられない・・・  
ごっちゃになる。

もしかしたら間違えている個所があるかも・・・

蒔風

「もっと見るよ・・・」

見たよ！！  
でももしかしたら・・・ってあるじゃん。

蒔風

「まあな・・・さて、リゼの助っ人は渡キハに名護イクサさん」

そしてバーサーカーには呂布奉先こと恋！！

一瞬リゼとのハルバード（っぽい）コンビでも面白いかと思いましたが、こっちのバーサーカーコンビ（EXTRA的な意味）で行きました！！

蒔風

「次回、風雲イリヤ城！そして、残りの選ばれた魂は誰だ！？」

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花

古手羽入

御坂美琴

インデックス

アルルウ

高町ヴィヴィオ

ルーテシア・アルピノ

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

残り二名



「  
――――！！！」

「だらだらだらだらあアアアツツツ！！！！！」

ドーベルマンアンデットが疾駆し、それを恋が阻むようにして方天画戟を奮い襲いかかる。

が、その奮われてくる方天画戟のたった一点に向かってドーベルマンアンデットが腰から抜いた双銃から銃弾を放ち、一瞬のうちに撃ち弾いてしまっていた。

「!?!」

だが、恋の感じた衝撃は一撃。

無数の銃弾にもかかわらず、一撃だと感じてしまうほどに早い連射術。

しかしそれでも、彼女にはそれに対し驚く時間はない。

恋は方天画戟を弾かれながらもその手を放すことなく、逆に弾かれ

たことよってできた勢いをそのまま一回転して受け流す。  
そして、もう一度襲いかかる斬撃。

が、ドーベルマンアンデットは即座に自分の足元に向かって銃弾を放った。

一体どれだけの威力が・・・否、一体どれだけの早さで、何発の銃弾を放ったのか。

その反動でドーベルマンアンデットの体が浮き、恋を飛び越えるようにしてそれを回避し、バーサーカーへと突っ込んでいった。

と、そこでバーサーカーが、まるで待つてましたとばかりに振り上げて待機していた岩の塊のような斧剣を、その重量と剛腕をもって力の限り叩きおろした。

大地が裂け、直線上に会った木々が軒並み吹き飛び掻き消えた。

その衝撃に、ドーベルマンアンデットの体も当然吹き飛ばされるが  
いかなせん戦闘不能に追い込まれるまではなかった。

「紙一重で躲した……」

「いつけ——————！！バーサーカー——————！！！！！」

それをみて、恋が驚愕しイリヤが応援する。

あの斧剣による攻撃は、とてもじゃないがそれ自体を交わしたところではどうにかなるような攻撃ではない。

生半可に見切ろうとするならば、衝撃に身体をさらわれてあの破壊の潮流にのまれて粉みじんになるだけなのだから。

しかし、こいつはそれすらをも見切り、回避した。衝撃で体は後退させられながらも、それでも回避と呼べる行為を確かにしたのだ……！！！！！！

「……………」



それを見、まだ仕留めていないことを確認したバーサーカーが標的に向かってその破壊を実行しに突進していく。

ドーベルマンアンデットが吹き飛びから着地し、前を見るとそこには岩石のような巨体があった。

「チッ!!」

それを軽いバックステップをしながら飛び上がり避け、そのままバーサーカーの肩に乗り、踏み台にして後ろに回ろうとするドーベルマンアンデット。が、後ろに回った瞬間にバーサーカーも斧剣を振り回しながら反転、その遠心力を使って方向転換と攻撃を同時に行ってきた。

標的は、飛び越えたばかりでまだ着地できていないドーベルマンアンデットだ。

それに対し相手は宙で銃を連射、その斧剣の根元を狙って軌道を逸らそうとしてきた。

無論、その程度で変わるバーサーカーの攻撃ではない。

しかし、それでも意味はあった。

銃の反動でドーベルマンアンデットの身体が動き、その斧剣は結果として命中することはなかったのだから。

が、そこに恋の方天画戟がすっ飛んできた。

着地したドーベルマンアンデットはそれを両腕で受けるものの、衝撃にまるで万歳でもするかのように弾き上げられてしまった。

方天画戟がフォンフォン、という音を立てて回転しながら地面に落ち、突き刺さる。

と、方天画戟と一緒にすっ飛んで気でもしたかのようなスピードで恋が走り込んできた。

そして、地面に突き刺さった方天画戟を掴み、そこを軸にして一回転、ドーベルマンアンデットのどてっ腹に強烈な後ろ回し蹴りを叩きこんだのだ。

「げっふ!?!」

それにはドーベルマンアンデットもさすがに吹き飛んだ。

その先にはバーサーカーがいて、咆哮を上げながら斧剣を両腕で振りかぶって待っている。

それを見たドーベルマンアンデットはとっさに身体を地面に落した。スライディングする形になり、ドーベルマンアンデットがバーサー

カーをくぐりぬけていったのだ。

横に薙がれた斧剣の下をすれすれに潜り抜け、バーサーカーの股下から数十発の銃弾を叩きこんで、さらにはそのまま背後に抜けて背骨の位置を下から上に、正確に撃ちぬいていった。

その攻撃にぐしゃりと身体がねじれて地面に倒れるバーサーカー。彼の皮膚には、通常の銃弾など通らない。

しかし、同じ個所にこいつは少なくとも八発ずつ打ち込んでいるのだ。

しかも、打ち出しているのは上級アンデットの武器になっている銃である。

それだけの数を打ち込まれては、さすがの彼の背骨も碎けるだろう。背骨せほねを失えば、体が崩れるのは当然だった。

が、本当に恐ろしいのはこいつの連射速度だ。

背後に回った一瞬でバーサーカーの背骨を八チの巢にし、しかもその放った銃弾の数は見た弾痕の×8だけの数があるのだから……  
・！！！！

そこで崩れてしまったバーサーカーの巨体を飛び越え、恋が方天画戟を手に飛びかかってきた。

それを体を回転させて回避し、顔面に銃弾を放つドーベルマンアンデット。

しかし、恋はそこであえてさらに踏み込む。頬の真横に銃身が来るほどにまで。

そうなってしまうては銃弾など当たらない。

ドーベルマンアンデットは距離を取ろうと回し蹴りを右でミドル、そのまま左の踵でハイ、右足で足払いという順に回転して放ち、それを受けて後退した恋に向かって最後に銃口を向けた。

が、それに臆することなく恋は攻撃が終わると即座に接近し、その首を取ろうと方天画戟をつきだしてきた。

良い的になるだけだ。

そう思い、ドーベルマンアンデットが引き金を引いて恋の頭を吹き飛ばそうとする。

しかし

「

！！！！！！」

そこに復活したバーサーカーが割って入り、銃弾をすべて皮膚で受け止めてしまったのだ。

彼に、一度放った技は通用しない。

彼を倒すには異なった攻撃をいくつもする必要があるのだ。

そして、バーサーカーは壁になりながらもドーベルマンアンデットに突進し、拳をふるって襲いかかった。

それに対しドーベルマンアンデットは、ピョン、と軽く飛んで、あろうことがバーサーカーの肩の上に着地したのだ。

「チエックメイトお~~~~」

そしてそんなふざけた声を出し、バーサーカーの顔面に向かって引き金を引いた。

しかし、効かないものは効かないのだ。  
自分にたかる八工を追い払うかのようにバーサーカーが腕をふるうが、それに合わせてドーベルマンアンデットは背中、頭、反対の肩へと飛び移ってなおも銃弾を浴びせにかかる。

と、そこに恋が割って入り、ついにドーベルマンアンデットの後ろ襟のような個所を掴んで地面に引きずり下ろした。

地面に倒されるドーベルマンアンデットだが、即座に恋に向かって足払い、そのまま立ち上がり、回転しながら銃弾を放ち同時にけりなどの攻撃もしてきた。

ガン!!カタと呼ばれる戦闘方法だ。

銃を使った格闘技、とでもいったらわかりやすいだろうか。

しかし、その攻防虚しくドーベルマンアンデットの首元に恋の手刀が命中し、さらにはバーサーカーのけりが横っ腹に、体制を崩したところに恋の蹴りとバーサーカーの拳が叩きこまれてその体が森を突き抜けて吹き飛んだ。

「や、やったの!?!」

「.....」

「・・・まだ。腕で防がれた」

暴風雨のような戦闘だったために、到底顔の出せないイリヤが、終わったのかと二人のもとへと駆けてきた。

しかし、恋曰く終わってはいないらしい。

最後の二人の蹴りと突きは、何とかガードされたらしいのだ。しかし、あれだけの威力。おそらく腕はただでは済んでいないだろう。

と、そこでバガアツ、という破砕音が聞こえてきた。見ると、吹き飛んだ先の大木に背中からめり込んでいたドーベルマンアンデットが、両腕両足を大の字に開いて、その木を弾き壊して脱出したようだった。

が、口や胴体からはポタポタと緑色の血液を流し、ベルトに至っては「ピキ・・・ピキ・・・」と今にも割れそうな音を出しているのだ。

終わりは近いように見えた。

「が・・・はあ・・・やはりわたくしめはまだ未熟者でしたなあ・・・  
こつちにも何体か連れてくりゃあよかったぜ・・・」

そんな言葉を吐くドーベルマンアンデット。

それを見て聞いて、恋とバーサーカーが身構えた。

なぜならば、このアンデット。  
この状況になってもいまだ

「このままベルト割られちゃあ退場になっちまいますでな。逃がさせてもらいましょか!!」

笑っていたからだ。



ジャカツツ!!!

そう言って、双銃を構えるドーベルマンアンデット。

しかし、これだけでは終わらなかった。

ジャカジャカジャカジャカジャカジャカジャカカカカカカカカカカカカカカカカカカツツ!!!

「!!!??」

「な、何よあの数!!!??」

「……俺の銃が二丁しかないと思っていたのか……甘いですよ。」

そういうドーベルマンアンデットの握っている銃の数は、確かに二丁だ。

しかし、それはあくまで「握っている」数。

他の銃は、それぞれの腕を筒状に囲むようにして、くるくるとゆっくり、回っていた。

それはまるで、ガトリング銃。

しかもそれは腕だけでなく、胸の前、そして両方の肩の上にもあり、計五砲のガトリングがあるように見えた。

ガトリング一つ一つはまず、最前列に銃がこちらに銃口を向けた形で魔法陣でもあるかのように回転し、その隙間から狙うようにしてその後ろにも同じように銃が置かれていた。

合計でいくつあるのだろうか。

そして、こいつの連射速度から考えて、一秒に打ち出せる段数は容易に億を越え、兆を越え、京にまで達する勢いすらあるだろう。

「未熟ゆえに、逃げに入ります」





無論、無事ではない。

あの一瞬で、バーサーカーは地面を斧剣でえぐり飛ばし、隠れるための穴を掘った。

そしてそこに恋とイリヤが飛び込み、恋はそれでも伝わってくる衝撃から守り、そして土に押しつぶされないようにイリヤを下に抱きかかえていたのだ。

バーサーカーは地面に潜れはしたものの、最後だったので当然受ける衝撃も大きい。

しかし、それでも彼は初撃で三つ命を落としたものの、その後は耐えきっていた。

「ゴ……オオ……」

「ハア……ハア……つか……れた……」

「大変大変……と、とりあえず城に!!」

そう言って狼狽するイリヤだが、彼女とて聖杯戦争のために送り込まれた魔術師なのだ。

すぐに冷静を取り戻し、バーサーカーを霊体化させてひっこめ、恋の体を背中に抱えてずるずると歩き出した。

それから五分。

比較的早めに彼女は屋敷から助けに来た渡やセラたちに会うことができ、無事に城に戻った。

屋敷を取り囲んでいたアンデットはもういない。

ドーベルマンアンデットがひいた瞬間に、彼らもいなくなっていた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

轟天（後書き）

はい、天も轟く戦闘でした！！

ドールマンアンドットが特化したのは連射術と素早さです。

速さではなく、素早さです。

近接戦闘においてかなり優位になりますね。

そして連射、速射。

さらには実は持っていたものすごい数の銃。  
二丁じゃなかったんだねwww

イリヤは守れても、損害は大きいです。

バーサーカーなんて背骨で一回、黒空流星群で三回、命を失ってま  
すからね。



え？城の方ですか？

あっちのアンデットは有象無象ですので、無双してきましたよ！！

一階部分は完全に瓦解してますけどね。

さて、では次回はついに出てきた天才科学者！！

ではまた次回



「それが・・・私たち本人に直接言いたいとのことでしたので、いまだ言っていないそうです」

その拘置所内の廊下。

そこで、数人の人物が手続きを済ませて目的地に向かって歩いていった。

ティアナ・ランスター

直枝理樹

ギンガ・ナカジマ

ルネッサ・マグナス

そして、彼の生み出した戦闘機人の中で、更生したメンバーで一番年上のチンク・ナカジマだ。

「ふーん・・・スカリエツティが、ねえ」

「どう思っつ？チンク」

「私にもわかりかねる。ドクターはこう・・・いろいろとすっ飛ん

でいる方だったので」

「あはは、まあね」

と、そんなこんなで話している内に、スカリエッティとの面会部屋につく。

ガチャリ、と扉を開くと、ガラスの壁の向こうには、二人の看守に挟まれて座る天才科学者、ジェイル・スカリエッティが足を組んで座っていた。

「やあやあ久しぶりだね！！タイプゼロ・ファーストにチンク！！それに面識はないがそちらも元機動六課のメンバーだった・・・」

「ティアナ・ランスター執務官よ」

「おお、合格したんだね。祝福を述べておこつ。ただまあ、わたしたち犯罪者にとつては喜ばしいことではないかもしれないがね」

「そのとおりね」

看守二人が部屋から出ると、そんなことを言って旧来の友人に会っ

たかのような顔をして話しかけてくるスカリエッティ。

と、そこで視線が初体面に二人に向かった。

「ん？君らは？そつちの方は階級章からして執務官補佐のようだが」

「ルネッサ・マグナス執務官補です」

「僕は直枝理樹。」「EARTH」で・・・」

「「EARTH」！！！」

ガタンッ！！

理樹がそこまで言って、スカリエッティが興奮したように立ち上がり、その勢いに椅子が倒れた。

そして、理樹のことをまじまじと見つめて、笑顔でガラスに両手を張りつけた。

「世界が一つになったときはすでに私はここにいたからね。あれから世界がどうなったのかが知りたくて知りたくてたまらなかつたんだ！！」「EARTH」所属の君ならば知っているだろう？ああ・・・  
久々の知的好奇心がうずくよ・・・！！！」

「え……と……そ、それで、「EARTH」所属「薄緑の翼人」直枝理樹です」

「翼人！！いやはやさらには翼人だなんて君らはなんて気前がいいんだい！！私はモニター越しばかりで、ついぞ「彼」には直接会えなかったからね。今すぐにも君を調べ上げたいよ！！……つと、今日はそんな話ではなかったかな？」

理樹が翼人であることを知り、さらに興奮するスカリエツティだが、一呼吸してから何とか落ち着きを取り戻す。  
椅子を戻し、そこに座って、最初と同じように足を組む。

「取り乱してすまない。それで？君らの話とはなんだい？」

「ええ。でもその前に、あなたが私たちに出す「条件」を教えてくださいるかしら？」

今すぐにも話は聞きたいのだが、それでも油断できないのがこの男だ。

一体何が望みなのかを聞いてからでないといこの男、話が違うと言っ  
て何をするかわからないのだ。

「ん？なあに、大したことではないよ。とりあえず翼人の諸君を調べ上げたいだけさ」

この男としてはまあ普通の欲求だ。

翼人のことを知りたいという知的好奇心はわかる。

しかし

「それはできないね。なんか改造されてしまっただろうし」

理樹がそれを却下した。

自分だけならまだ決定権もあるが、翼人みんなのことを彼一人で決めるだけのことはできない。

まあ無論、自分だけだと言っても断るのだが。

「だろうね。そう返答すると思って、私もこの考えは断念したよ。その代わり……」

「代わり？」

「私を外に出してくれ。いや、自由にしてくれというわけではない

よ。ただ、一変した世界という物を見てみたいのさ」

「出来るわけないでしょう!!」

「そうかい？私をほんの少し事件に同行させるだけでいいのだよ？もちろん、私の自由を奪ってくれても構わない手錠にバインド、なんでもするがいい。私はただ見たいだけだからね」

「あなたは自分がどれだけの犯罪者だと・・・ギンガさん、待って」  
「え？」

が、その言葉を理樹が制した。

そして、スカリエッティに近づいて、目と目を合わせた。

「目的はそれだけ？」

「ああ」

「ほかに何かしてやろうと思うことは？」

「ないね。いまのところは」

「本当に外に出てどんなものか見たいだけ？」



「そうさ。翼人である君なら、私の言葉が嘘かどうかはこれで証明されたかな？」

「……そうだね」

そういつて、理樹がティアナの方を向いた。

「よし、彼を出そう」

「理樹!？」

「彼は嘘をついていないよ。それだけは確かだ。僕らに嘘は通じないから」

そう、翼人によこしまな嘘は通じない。

感情を基にする彼らは、それを感じ取ることができる。

まあ、欺く方法もないわけではないが、この状況でそれはないだろう。

「だから彼は本当に外出したいただけだと思うよ？」

「でも・・・彼は犯罪者。罪を償うためにここに入っているのに、出してしまつては意味がないじゃないですか！！！」

「うん、ギンガさんの言うとおり、確かにそう。でも、今起こつてる事件を解決するために必要で、そして彼もそれに協力してくれるなら、それは立派な償いじゃない？」

「そう・・・ですけど・・・」

「それに、ぼくらがいるからね。さすがに彼も翼人とこれだけの人数相手に何かやらかそうとするわけもないし。どうする？ティアナさん」

「ん？」

「僕としては、彼を出してもいいと思う。後はティアナさんの承諾さえあれば、僕らの権限で一時的に動向してもらつことはできる」

「・・・」

それを聞いて、ティアナが顎に手を当てて考える。

しかし、まあ答えなど最初からこつするしかないのだが……

「わかったわ、条件をのみましよう。スカリエツティ」

「感謝するよ。その代り、約束通りにすべてを話そう」

そうして、条件は満たされ、取引は成立した。

そして、ティアナたちが今回の事件に関して話を始めた。

.....

「イリヤが襲われた……？」

「うん。それで、しっかり狙ってた」

「じゃあ、彼女も標的になるのか……」

「EARTH」本部。

出迎えた一刀にそう言った報告をしながら、連れてきたイリヤを部屋に案内する恋。

これで狙われたのは計八人。

御坂美琴

インデックス

古手梨花

古手羽入

アルルウ

高町ヴィヴィオ

ルーテシア・アルピーノ

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

もはや、気づくなという方が難しい。

「全員、高校生に満たない者ばかりだな」

「ああ……年の低い少女ばかり狙っている……」

そういつて、狙われたメンバーの書類を見てそう推測をする一刀にクラウド。

もっと力のあるものはいくらでもいる。

陰陽師の血を引く、草壁美鈴

驚異的な再生の能力を持つ、広原雪子

翼人である、神尾観鈴

エースオブエース、高町なのは

最後の夜天の主、八神はやて

神にも等しい力を持つ、涼宮ハルヒ

魂の特異性というならば

ネイティブワームと人間の中間的少女、日下部ひより  
英霊であるセイバーは力も望める

偽・聖杯の器たる、間桐桜

「うたわれるもの」との契約をした少女、エルルウ

太古の魂を宿した巫女、カミュ

太転依の中でも上位に立つ、泉戸ましるに鶴

というラインナップもある。

しかし、それらのモノではなく、彼らが選んだのはいまだ年端もいかなない少女たちのみ。

一体どういうことなのか。

「……でも、理由はともかくとして狙われる条件は分かった」

「ああ。この年で力を持つ者はそうそういない。自然と限られてくる」

「あと誰だ……？誰が……」

そう話しながら、リストを見ていくクラウドと一刀。

保護している少女たちは観鈴が近くにいるので大丈夫だ。

彼女とて翼人。相手が上級アンデットでも、足止めすることは可能だ。

そうしてバサバサと書類をめくっていき、誰かを探す二人。

と、そこでふとクラウドの手が止まった。

「まで……確か古手梨花は幾度もの輪廻ですでに百年の時を過ごしていたんだっただよな？」

「そうだけど……それなら羽入ちゃんは千年だぜ？それにそうはいつでもまだそこらへんの子と変わらないよ」

「そうだよな……だったらこの彼女は……!!!!」





そして、この警報は……

「この襲撃警報!？」

「一体誰が……いや、というよりこれはまさか(ザザッ)!!？」

「観鈴さん!!」

と、そこで観鈴がらの連絡が入る。

現在、ビル内部の保護した少女たちの部屋をアンデットが襲撃し、撃退。

しかし、なおもやってくるアンデットに身動きが取れないようだ。

「誰かやられたか!？」

『うっん!!大丈夫!!みんな無事だよ!!剣崎さんと左さんはアンデットに向かって行っちゃったけど』

「……そうか、なら任した……あの二人なら大丈夫だ!!津上さんとか城戸さんもそっちに行ったらしいから!!」

観鈴と話をしていたクラウドに、朱里から現状を聞いていた一刀が

彼らのほうは大丈夫だろうと教える。  
しかし、まだ脅威がなくなったわけではない。

『ご主人様！！二つの巨大な反応が観鈴さんのもとに！！』

『照合します……出ました！！反応、上級。生体反応、ワニに桜です！！』

「！！！」

「アイツらの力は危険だぜ？」

「俺たちであっちの足止めをするしかない……か」

メキッ……ドゴツォー！！

「邪魔だ！！」

「どけえ！！」

クラウドと一刀が話しているとその瞬間、二体のアンデットが壁を

突き破ってこの部屋に突っ込んできた。

ちょうど、向き合っているクラウドと一刀のそれぞれの背後から。

が、クラウドが一刀の、一刀がクラウドの背後から迫ったそいつらを一刀に切り伏せ、消滅させながらその場を出た。

「オレがクロコダイルをやる」

「だったら俺はブロッサム・・・か。行こう!!」

そして、加速。

その場に一筋の蒼青と漆黒の光の跡を残し、二人の翼人は戦場へと向かった。

.....

「みすずちゃん.....」

「ん？大丈夫だよ。大丈夫。私だって、翼人だもん！」

そういつているのは、部屋の一角に衝撃波のドームでバリアを張る観鈴。

その中にはアルルウ、インデックス、梨花、羽入が入っており、この状況に少なからず怯えていた。

イリヤは恋と共にこちらに向かう途中だったし、ヴィヴィオはなのはが一緒だ。

おいそれとやられることはないと思うが……

ドオンー！

「！……！」

「フウ ……見つけたぞ。こつも固まってくれていると

やりやすく助かるな」

「……ワニー!!」

「そうストレートに呼ばれると少しへこむのだがな。やるべきことはやらせてもらおう」

観鈴たちのいる部屋の壁を突き破り、クロコダイルアンデットが入室してきたのだ。  
それを見て、観鈴がバリアから出て彼女たちを守ろうと立ち上がった。

「観鈴さん!？」

「大丈夫……倒せなくても、邪魔することはできるから!！」

そういつて、開翼する観鈴。

一点の濁りのない純白が開かれ、神々しさすら感じられるほどに美しい翼人がそこに現れた。

「知っているぞ。貴様は戦闘に向かない翼人であるという事はな」

「そうですね」

「ならばこの結果がどうなるかわかっているだろう！……！」

ドゥッ！！

そう叫び、クロコダイルアンデットが疾走し、顎をガチガチと鳴らして観鈴に突っ込んでいった。

が、それでも観鈴はその場から動くことなく、翼を大きく開いてそこから衝撃波を噴出、クロコダイルアンデットに命中させた。

「む？ゴッ！？」

その衝撃波は果てしなく、上がっている煙や瓦礫、部屋の壁ごとクロコダイルアンデットを吹き飛ばして「掃除」してしまった。

が、無論倒せるほどの威力はない。

ガラリ、と吹き飛んだ先の瓦礫の中からクロコダイルアンデットが

立ち上がり、頭をブンブンと振って観鈴を睨み付けた。

「なるほど・・・戦闘向きでないと言ってもやはり翼人。侮ることはできないということか。やはり聖王教会では逃げて正解だったな！！」

そういつて、再度突っ込んでくるクロコダイルアンデット。

それに対し、観鈴は翼の内に行くつも衝撃波の球をため込んでいき、それをライフルのように打ち放って行った。

その威力、先ほどの衝撃波ほど派手ではないものの侮るなかれ。

一発目ではクロコダイルアンデットの膝は砕け、二発目のは腹を貫通して風穴を開ける威力。

が、それでもまたベルトは砕けることがない。

そこで直接ベルトを狙おうとする観鈴だが、そうはさせまいと、クロコダイルアンデットは走りながらうつつぶせに倒れこんでしまったのだ。

そして、その腹が床につく一瞬前に床を踏みしめ、滑空するロケッ

トのように速度を上げてきた。

しかも、顎を開け、無数の牙をむけながら回転までしてくる。

観鈴はとっさにバリアを張ろうとするが、間に合わない。  
たとえ張れても、それでは簡単に破られる……!!

「もらっ……!!!!」

ガキツツ!!

「させん!!!!」

しかし、その牙は観鈴に届かない。

観鈴とその無数の牙の間には、巨大な大剣。  
クラウドがそれを挟ませることで噛みつかせ、そのままぶん回して  
クロコダイルアンデットを投げ飛ばしたのだ。

「お……っと。ふむ……二人目の翼人、か」



「貴様が……」

そういつて、向き合う二人。

「クラウドさん、気を付けてください」

「ああ、報告は聞いている。理樹のバリアを破るそうだな……」

そう、こいつの力は理樹のバリアを破るほどのもの。

無論、容易くというわけではないが、脅威であることは変わらない。

実際、先ほど大剣でこいつの攻撃を防いだクラウドの腕も、ビリビリとしびれて軽くさすっているほどなのだから。

「観鈴はそこで彼女らを守ってくれ……下手に動かない方がいい」

「うん、そのつもりだよ……」

そうして、クラウドがクロコダイルアンデットに剣を握りしめて切っ先を向けた。



に向かっているようだぞ!!」

「ああ……絶対にやらせない!!」

「そうはいかんぞき!!!!」

「!?!」

「ツオ!?!ぐあ!!!!」

「ご主人様!!」

が、その途中で黒光りする残像に行く手を阻まれ、一刀が地面を転がった。

それを見て、瞬時に彼を守るように挟み立つ星と愛紗。

そこに現れたのは、人類が生理的に受け付けられない最悪の昆虫の始祖だ。

「こんの・・・ゴキブリ野郎・・・」

「んんん？恐竜時代から生きている大先輩に何言ってるんだこの猿のなれの果てがよお」

コックローチアンデット。

その速さにおいて最高のものを誇るそいつが、今この場で三人を阻んでいた。

「そんな、朱里の報告には・・・」

「こいつはコソコソ隠れんのは得意だからな・・・」

「レーダーをかいくぐって来たのか・・・！！」

「こっから先は桜の大将の持ち場・・・オレはオレでやりたいことがあるんだが、いかんせん早い者勝ちでな。足止めさせてもらっぞ」

どうやら彼らはまず下級アンデットで襲撃をかけてから、上級が侵入して対象である少女に出会ったものがどんどんそのまま狙っていくという計画だったようだ。

つまり彼ははずれだったのだ。

「……愛紗、星。こいつは俺が止める。二人はなのはさんのところへ！」

「しかし……」

「大丈夫。こいつの速さは脅威だけど、俺にだって対抗策はいくらでもある。なのはさんのところに向かっているのも上級なんだ……もしかしたらということもある」

「……わかりました。行くぞ、星！」

「応……！」

そうして、愛紗と星が走り出してコックローチアンデットを抜き行こうと走って向かう。

もちろん、そうはさせないと姿がブレほどの高速で二人に襲い掛かるコックローチアンデット。

ガキィ！！



「冥王イクスヴェリア？」

「そう。それこそこの事件の中核を担う存在さ」

そういつて、一通りの情報を聞かされたスカリエッティは言葉を紡いだ。

「マリアージュは兵器である。  
言われた命令を遂行していくモノ。」

その材料は、死体。  
戦場において、これほど素晴らしい兵器はない。

死体などそこにはいくらでも転がっており、その数だけ兵隊が出来る上がるのだから。

しかも、敗れて破壊されれば燃焼液に身体を変え周囲一帯を炎の海

に変える。

あまりに効率的で、人道に悖<sup>もと</sup>った兵器。

そして、それを作り出し、制御するのが彼の言う、冥王と呼ばれる太古の王だったそうだ。

「古代ベルカの歴代には実に多くの王がいてね。君らも知っている  
「聖王」や、ほかの有名どころだと「霸王」なんてものいたらしい  
が」

「じゃあ・・・そのイクスヴェリアが犯人？」

「いや。それは違うだろう。君らの話通りならば、そのための機能はその端末に移されてしまっているようだからね。彼女は生み出しているだけに過ぎない」

「でも・・・なんのためにそいつは・・・」

「そこで出てくるのが、トレヴィア・グラーゼ」

「えっ？」



「彼は私の「祭り」・・・ああ、今では光栄なことにJ・S事件と呼ばれているんだったね。それに参加する予定だったのだよ」

そう、彼はスカリエッティのテロに参加するつもりだった一人だ。マリアージュの制御装置を持っていたのだから、それは大きな戦力になったに違いない。

古代の遺跡からイクスヴェリアを見つけ出し、そこからマリアージュを知り、制御に成功したのだ。

しかし、その前に彼は死んだ。  
殺されてしまったのだ。マリアージュによって。

だがその死に際にマリアージュを全凍結し、冥王も封印していたらしいのだが・・・

「いやはや、私もマリアージュを使えば、と思っているいろと探したのだがね。ついぞ見つからなかったんだよ。この様子だと誰かが見つけたようだが」

とのことらしい。

しかし、マリアージュは戦闘能力底あるくせに命令遂行能力は昆虫並みの使えるのか使えないのかわからないような兵器なのだ。だから古代ベルカでも封印されたのだろうが……

ともかく、何かの原因であろうとも、とにかく冥王が復活して、今回の事件を巻き起こしているらしい。  
しかし……

「でも、マリアージュはそのイクスヴェリアって奴のことを知らなかったわ。探している、って言っていたし……」

「ほう。つまりはそれを作り出すのは彼女の意志ではない、という可能性も出てきたね」

「そうね……って、彼女？」

と、そこでティアナが首をかしげてスカリエッティに聞き直した。

ちなみに今ギンガとルネッサ、チンクはスカリエッティを出すための手続きをしに行っていない。

「おや、知らなかったのい？冥王イクスヴェリアはね、まだ年端も  
いかない少女の姿をしていると私はトレヴィアから聞いていたがね  
？まあ、兵器を生み出す彼女が大人だと困るものもいたのだろう」

そう考察するスカリエツィだったが、そんなことよりも理樹とテ  
ィアナは別の可能性を考えていた。

それはこの事件とは別件だが、決して無視はできないことだ。

「じゃあ……まさかアンデットは……！！」

「イクスヴェリアを狙って!？」

「？ 何の話だい？私にも詳しく……」

ピーピー……！！

と、そこにクロスミラージユに連絡が入る、  
どうやらスバルからのようだ……

『マリンガーデンで大規模火災発生!!! ティア、私行ってくるね  
!!!』

「スバル!? わかったわ・・・それと・・・」

『ごめんティア! もう行くから!! マツハキャリバー!!』

「ちよつとスバル!! 話をちゃんと・・・ああもうっ!!!」

どうやら大規模火災が発生し、スバルたちはそちらの方へと向かったようだ。

そこでティアナが大事なことを伝えようとしたのだが、あちらはどうも切迫した状況のようで通信はすぐに切れてしまった。

「火災?」

「ええ・・・でもスカリエツティが・・・」

「私のことはいい。あとからあの三人と一緒に行くさ」

そう言ってくれるのならば、別に遠慮する相手ではない。

ティアナがバリアジャケットを纏い、理樹が彼女を抱えて拘留所から飛び出していく。

向かうは現場。

マリアージュ事件は、これで終わるのだろうか・・・？

t o b e c o n t i n u e d

## 条件（後書き）

さまざまな条件が明らかになりました！！

蒔風

「オリジナルだとドゥーエが死んでるけど、こっちだと生きてるかな。まあいつだったらこういうのを望むだろう」

そう思つてスカリエツティの条件はこうしました。

無論、まったく自由にする気はないですけどねwww

蒔風

「んでもつて「EARTH」の襲撃か。あそこよくやられるなwww」

つてか過去一回しかないだろ。  
しかもそれやったのお前だし。

蒔風

「………記憶にないな」

クラア

一刀がベルトを出したのは翼人の力！！  
こういうこともできるんですよ！！

蒔風

「あれ？それって第二章の最後で俺がやったようなこともできるってこと？」

できるね。

でもあの時、一刀をはじめとしたメンバーはみんな抑え込まれてしまったからどっちにしろお前しかいなかったよ。

蒔風

「そして最後に……アンデットはロリコンだったという件」

ハッ！そういえば相川始・ジョーカーも確か……！！！！

蒔風

「そついつことか……！！」

いやまあ、本当の理由はちゃんとあるけどねWWW

蒔風

「次回、スバルの熱い救命活動」

人の命は地球の未来！！燃えるレスキュー魂！！  
ではまた次回……！！

蒔風

「スバルたちが見てた懐かしいビデオって……」



救急（前書き）

BGM「救急戦隊ゴーゴーファイブ」

スバルが「着装！」って叫んだところからですね。

救急

「EARTH」襲撃や、ティアナ達の留置場訪問より、時間は少しだけ巻き戻って

.....

「さて・・・ティア達は事件の調査に行っちゃったし、こっちは見事に暇だね」

「そうですね」

「ようしゃー！...」  
「ううう時は筋トレしよせー！...」

「うっさい筋肉」

「はは、おいおい。それゝ褒め言葉か？照れるぜ」

スバルの部屋で、彼らが目を覚ました時にはすでにティアナと理樹、ルネッサはいなかった。

おそらく、スカリエツティのもとに向かい、話を聞きに行ったのだろう。

それなりに離れた世界にあるから、仕方がない。

「どうします?」

「う〜ん・・・じゃあさ、ミッドのこと知らない鈴ちゃんや恭介さんたちに、ミッドっ子の私が観光スポットを紹介しちゃいましょう!」

「おおー!」

そう言われて、よしそうとなれば、と即座に身支度を済ませる。

やはりなんだかんだで、外出は楽しいのだ。

それから数分後には全員が準備を済ませて玄関に立っていた。

無論、もしも緊急出動が掛けられた時に対応できるだけの準備も済ませてある。

「えっと・・・このボタンを押せばいいんだな？」

「そうだ。それを押せばもしもの時には即座に「瞬風」に転送されるから、そこから援護を頼むぞ」

「りょうかい！」

そういつて、リトルバスターズ女子メンバーはポケットに端末を入れてこれでよし、と靴を履きかえた。

「じゃあいくよー」

「どこに行くんですか？」

「むっふぶづ。ミッドに来たなら、まず見なきゃいけない場所！マリンガーデンだよー！」



くなるわけもなく、毎日のように多くの人がやってきて賑わっている。

まあそんな場所だから、もちろん朝一番から入らなければ見れない場所もある。

そのためにメンバーは開店時間よりも少し早めにつくように家を出てきたのだが……

「あちゃー、これじゃ全部回れないかもねー」

「そもそも一日で見れないんだから、焦ったってしょうがないだろ？また明日もあるさ」

「明日はルネッサさんもいっしょがいいなー」

「あつちは捜査があるから無理だろ」

そういつて電車（と言ってもイメージとしてはモノレールと言った方がいいかもしれない）に乗ってマリンガーデンに向かう一向。

車はないし、だからと言って「瞬風」で行くのもどうかというから、まあ必然的に電車しかない。

「まず何見る？」

「お洋服とかー、お菓子とかー」

「あはは、だったらすっごくおいしいお菓子屋さんありますよー！」

「ほんとー！？スバちゃんありがとうー」

ピピピピ

《相棒。防災課から連絡です》

と、そこにスバルのマツハキャリバーに防災課からの連絡が入る。彼女は今、連続放火事件担当のティアナに協力として貸し出されている状態だ。

その彼女に、防災課から連絡が入るとなると……

「ん、繋いで」

《OK》

『スバル！！お前今どこにいる！？』

マツハキヤリバーが通信をつなぐと、その相手はスバルの上司、ヴォルツだった。  
相手の剣幕に少しびびくりしたスバルだったが、聞かれたことに対して正確に答える。

「えっと・・・電車の中です。せっかくだからみんなでマリンガーデンに向かってるんですよ」

『ホントか！！そいつあついでる・・・おい！そつからマリンガーデンは見えるか！？』

「え？」

『マリンガーデンで大規模火災発生！！しかも火元は地下だ。いずれ全部焼け落ちるぞ！！』

「！？」

「みなさん、ちょっとすみません！！」



「「EARTH」です！！ちょっと窓の外を見せてください！！」

スバルの通信を着ていたエリオや謙吾が、とつさに窓際に駆け寄って外を見る。

はじめてくる彼らはマリナーガーデンがどこにあるか知らなかったが、黒い煙というはつきりとした目印が目に見え込んだ。

「スバル！！」

「確認しました！！中に人は！？」

『開園前だったからな。客はいないし、従業員もすぐに脱出したらしい。だが万が一ってこともある』

「わかりました！！じゃあ先行して現場（現場）に向かいます！」

『すまん！！こっちも向ってるんだが、お前の方が早い！！「EARTH」の兄ちゃんたちも、頼んだぜ！！』

「ああ。任せておけ！！」

そうして、通信が切れてちょうど電車が止まる。

そして、その駅で全員が降りて、即座に恭介が声を張り上げた。



「！！ビル内にマリアージュの反応あり・・・！？さ、さらに生体反応をキャッチ！！生存者です！！！！！」

「なに！？？」

『じゃあ私の出番だね』

《OK》

そういつて、ビルの入り口だった場所に、スバル・ナカジマがセツトアップをして立っていた。目の前には、燃え上がるビル。

背後・・・地上では脱出してきた人たちの救助が行われており、けがの治療が行われていた。

「行くのか？」

「はい」

「だったら俺たちも行くぜ」

「スバルさん一人は危険すぎますし、マリアージュだっていますから」

「わかった。お願いね!!」

「おう!!」「はい!!」

そういつて、真人とエリオを後ろに、スバルが挑みかかるかのよう  
に一步、ビルに向かって近づいた。

「今度こそ助けて見せる・・・もうだれも、死なせない!!」

《その通りです、相棒!!》

「バリアジャケット、アンチハザードモード、着装!!」

《OK!!》

そうして、マツハキヤリバーがスバルの体にあらゆる災害のための  
バリアジャケットを着せる。

より高温に耐え、より水圧に耐え、災害から人の命を救うために、彼女は持てるすべてを出し切る！！

「人の命は地球の未来。燃えるレスキュー魂……そう、言っただもんね！！！」

《子ども時代のヒーローですか？》

「うん……私だって、ヒーローにあこがれるもん！！行くよ！！二人とも！！！」

待っていて。

生きていて。

絶対そこに、たどり着くから！！



壁を崩し、内部に突入。

直後、マリアージュが一気に五体ほど飛び掛かってくるが、それを流れるような連撃で次々に殴り、蹴り飛ばしていく。

右拳、左拳、そこから腰を返して右の回し蹴りにそのまま回転して左の後ろ回し蹴り、そして最後に再び右拳で、それぞれを一撃で吹き飛ばしていった。

彼女らが壁に叩きつけられ、どろりと溶けて発火していくが、あとから到着したエリオと真人が消火剤を使ってそれを消していく。

「スバルっちは早く行け!!!」

「ここは僕たちが引き受けます!!!」

「わかった!!!絶対に・・・」

「無茶しない。それはスバルさんも!!!」

「あはは!!!それじゃ!!!」

そういつて、スバルがマツハキャリバーをフル稼働させて深部へと突っ込んでいく。

途中の瓦礫などにマリアージュがはばまれていて邪魔だったが、彼女らを消し飛ばしてなおも奥へ。

通路にぎっしりと、マリアージュがひしめいているエリアもあった。

しかし、そこでブレーキをかけることなどない。

スバルがそこを通過する前に「瞬風」からの冷凍砲撃によって軒並み瞬間冷却させられ、氷の塊となったそれを粉碎していくからだ。

「行つて来い!!」

瞬風の上に立つ恭介が、彼女を後押しする。

恐れるものなどもうない。

助けるべき命まで、隔てる壁はもうあと一枚!!!

そして.....



「見つけた!!」

スバルがその視界に、彼女を捉えた。

少女はおどおどするわけでもなく、この状況に対し比較的落ち着いた状態で佇んでいた。

「あなたは……」

「スバル・ナカジマ防災師長です!!あなたを助けに来ました!!」

「助……けに?」

「あなたの名前は?……」

スバルが少女の肩を掴んで、怪我がないかどうかを確かめる。

「どうやら、怪我の類どころか、火傷ひとつもないようだ。」

「とにかく良かった・・・これから、外に出ます！私につかまって  
！！」

「・・・だめです。私から離れてください！私は、災厄を呼ぶもの  
・・・私と一緒にいては、あなたが！！」

しかし、それを拒絶してしまう少女。

この瞳を、スバルは知っている。

自分は兵器だと、いてはならないと悟った少女。

だからこそ、スバルはどうしても救いたかった。

しかしそうはさせないと、その場に新たな参入者が。

《見つけました。イクス、我々とともに来ていただきます》

「マリアージュー！！！！」

そこにマリアーヂュが襲来、彼女を寄越せと言ってきた。もちろん、それに対して「はい」と言えるわけもない。

「断る!」

「逆らつてはダメです!! あいつは師団長クラス……あなたの知っているマリアーヂュとは違います!!」

「え?」

なぜこの少女　イクスというらしい　がそんなことを知っているのかは解らない。  
しかし、それでもこの言葉は本当であることがスバルにはしっかりとわかっていた。

こいつは、今までのとは違う!!

「大丈夫……こう見えても私、強いから!!」

グ……ダンツッ!!!

「世界最強の人から教えをもらっているんだもん……負けるはずなんて、あるわけない!!」

《挑みますか……》

腰を落とし、右拳を腰に、左腕を立てて前にだして型を構えるスバル。

それに対しマリアージュは無造作に剣を取りだして突きのように構えた。

構えるという動作そのものが、このマリアージュにはなかったことだ。

この動きだけで、今までのとは違うということが分かった。

しかし、スバルの心に、「負け」という単語はどうしても浮かんでこなかった。

地面を踏みしめ、拳を構える。

それは到底「兵器」ではなしえない構え。

「人間」にのみ到達できる境地。

鋼の体に、金属の骨格。

しかしてそれを動かす原動力は、どんなものを使って燃えることのできない膨大な熱を持ったもの。

その原動力、物体に非ず。

確かに胸むねにありながら、決して燃え尽きぬ不屈こひじの炎！！！！

「来い！！」

ダウッ！！

そうして、マリアージュが剣を突き出して突進してきた。

しかも、無数の瓦礫を飛ばしながら、猛然としてきたのだ。

その速度は最初からトッブスピード最高速。  
ただの人間ならこの一突きで終わる。

が、スバルはただの人間ではない。

《!?!》

飛んできた瓦礫のすべてを殴り、蹴り飛ばし排除した。

そして剣の切っ先がスバルへともう到達するといったところで、いまだ飛んでくる残りの瓦礫のすべては粉微塵となって消滅した。

驚愕するマリアージュ。

しかし、その剣はもう止められない。

その剣筋を見切り、スバルは上体だけを右に少しずらして避ける。  
と、同時に左腕を剣に絡ませ、脇に挟んで締め付けた。

するとその一瞬で剣が砕け折れ、反対に右拳のリボルバーナックルが蒸気と魔力粒子を噴き出して、空気を振動させて猛烈に回転し始めた！！！！

「オオオオオオオオオオ！！！！」

「この力・・・戦闘機人？」

イクスが呟くが、その声は誰にも届かない。

そのようなこと、些細な問題であると言わんばかりに！！

「振動拳ツツ！！」

《な・・・そんな・・・！？》

「ふんばくれっば粉爆裂破あツツ！！！！」

ビシリ！！ブワアアアアアアアア・・・ツツ！！！！

その一撃、まさに必殺。

師団長クラスと言われたそのマリアージュは、粉々に砕けるどころか霧になって文字通り消滅してしまった。

しかも、あまりにも粉碎が細かく行われたために発火作用すらも失われている。

「ハアツ・・・ハツ・・・ハア　　・・・・・・・・」

そうして、スバルが両拳を目の前でクロスし、息を吐きながらゆっくりと開いて降ろしていく。

残心



勝者たる彼女は、なおも悠然だった。

確かに、あのマリアージュは強かった。  
師団長クラスといわれるだけのこともある。

だが、だからなんだというのだ。

ここには救うべき命がある。

兵器だとか、火事だとか、そんなもののため  
とがあるうとも、失われていい命なんか、一つたりとも存在しない。  
否、どんなこ

だから、彼女は勝利する。

理由なんて必要か？  
大層な理想が必要か？

いいや、そんなことはない。

その場に助けたい人がいて、そこに手を伸ばす限り、人はどんな障害も乗り越えるのだから。

「あ……わたしは……」

「もう、助けなくていいなんて言わないでくださいね？」

「え？」

「助かりたくても、助からない人もいる。それなのに、まだ生きていられる貴女がそんなこと言っちゃだめです！！」

「あ……う……」

そう言って、イクスの手を取ってその場を去ろうとするスバル。

その時、ティアナから連絡が入り



「おうよ!!俺はもう一人さらってるからよ。こつして一人で派遣されてきたんだよ?」

「!!!.....じゃあ、お前が.....」

それを聞き、エリオがストラダを構えて相手を睨みつける。

「お?やる?まあイクスヴェリアをいただくには、テメエ様方をぶっ倒してやらなきゃならないんでしょうけどなあ!!!」

バツッ!!!

エリオの全身から、電流が迸る。

相手はドールベルマンアンデット。まだ回復しきっていない状態だ。しかし手負いと言えども、上級アンデット。

決して油断の出来る相手ではない。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 救急（後書き）

イクスヴェリア救出！！

はい、今回は完璧にゴーゴーファイブでしたね！！

とにかく熱くいきました！！

そして、エリオとドーベルマンアンデットの戦い。

相手は手負いですが、それでもあいつですからねえ……

次回は「EARTH」での戦闘も交え、どんどん行きたいと思いま  
す！！

ではまた次回！！

では、また次回で！！

大事なことなので二回言いましたWWW

## 強奪

「イクスヴェリア・・・イクスって言うんですね！」

「はい・・・それにしても師団長クラスをああも簡単に・・・」

「私だって、「EARTH」の一員でもあるんですから！！ってあれ？私なんで敬語なんだろ？」

「私、王様ですから・・・」

火災現場のビル内で、スバルとイクスが互いに自己紹介をしてんやかんやと話し合っていた。

ぶっちゃけると、戦闘の衝撃でビルが崩れて脱出できないのだ。

これ以上壁を崩すと、崩落に巻き込まれる可能性があるということだ。

「やりすぎちゃった……」

そうスバルが呟いて舌を出したのはつい三十秒前。

しかし、その直後にティアナから通信が入って、彼女のことを聞いた。

冥王・イクスヴェリア

マリアージュを作り出す能力を持ち、そしてその力は今の時代に必要ないとし、自分を探すマリアージュから逃げ続けていた少女だ。

無論、スバルも自分の素性やらなんやらを話している。

相手は古代ベルカの時代を生きた正真正銘の本人なのだ。

戦闘機人のことも知っていたし、理解もある。

何より、自分は兵器だ、なんてことは、誰かを拒絶する理由にはならないということを知ってもらいたかったのだ。



そして、理樹とともにこちらに到着したティアナの通信から、彼女がアンデットの標的になっていているらしい、ということを知り、ここから脱出しようと待っているのが今。

「理樹、まだー？」

『もうちょっと。どう撃てばスバルさんたちを凍らせなくてビルを凍結させられるか計算してるから』

スバルがもう安心しきった声で理樹に残り時間を聞く。

つまり、外からの冷凍砲撃でビルを凍らせて、崩壊と火災を同時におさめようというのだ。

「エリオたちもいるからしっかりね？」

『わかってるよ。えっと・・・エリオたちはここ・・・？なんだこの反応・・・！？こいつは！？』

「どつたの？」

同じようにエリオたちの場所も割り出していた理樹だが、その声が張りつめたものに替わる。  
それに対し、スバルが気軽に聞くが、その返答はとてでもないが気軽なものではない。

『アンデット・・・しかもこの反応は上級!』

「!?!」

『現在エリオと交戦中・・・真人は!?!』

「理樹!!私、そっち見に行つて・・・」

ドオンッッッ!!!!



この部屋に吹き飛ばされたドーベルマンアンデットがイクスを見つけそちらに駆けていくが、電光石火でその眼前にエリオが立つ。

「このガキ!!」

「霸ツツ!!」

ドバアツ!!

そして、エリオがストラダを構えると同時に地面を踏みしめ、電流を周囲にまき散らして電磁波の壁のようなものでドーベルマンアンデットを弾き返して防ぐ。

「ルーテシアをさらったのはお前か!!」

「ガツツハア……ち……万全じゃなきゃこんなにきついのかい!!」

エリオに向かい、抜き手のようにして二、三度突くドーベルマンアンデット。

命中すれば鋭い爪がエリオの体を突き貫いただろう。

しかし、今のエリオは身体能力が底上げされている状態だ。  
その場のコンディションにもよるが、おそらくはライダーの最強フ  
ォームにも匹敵しうる。

その突きを身体を逸らし、返して躲し、最期の一撃をストラダーで  
叩き落として石突でドーベルマンアンドットの顎を下から突き上げ  
た。

が、そこで頭を上に向けながらドーベルマンアンドットが双銃を抜  
き放ち、エリオに向かって発砲してきた。

それを弾き落とすエリオだが、立て続けにやってくる銃弾が肩や頬、  
腿を掠り、ところどころ出血させていつていた。

「エリオー!!」

「スバルさんはその子のそばにいてください!!! キャロッツ!!!」

『フリード、ブラストレイ!!!』

ゴオウ!!!

と、そこでビルの壁が崩れてその向こうから巨大化したフリードの炎が襲い掛かり、ドーベルマンアンデットを包み込んだ。

それにより、その場から彼の姿が消える。

しかし、それと同時にビルに限界が来たのかギギギギギ、というコンクリートと鉄骨の軋む音がして崩壊が始まった。

「マズイ、崩れるよ!!！」

「スバルさん、こっちに!!！」

そういつてエリオがスバルとイクスを自分のもとに呼び、一か所に集まるように叫んだ。

それに従って集まる二人だが、逃げ道はもちろん、足場すらも見えなくなるほどに周囲は崩壊し、砂埃を上げている状態。

足場だけはウイングロードを短く展開しているから大丈夫だが、これではすぐに崩壊に巻き込まれてお陀仏だ。

「ど、どうするの!?!」

「大丈夫です。理樹さん!!今です!!!!」

ドシュツ、ゴオン！！！！！！

スバルが心配そうに叫ぶ。

が、大丈夫だと言ってエリオが理樹に合図を出した瞬間、彼らを巨大なパイプが覆っていた。

そのパイプはビルを横一直線に貫いており、薄く緑色の色がついたバリアだった、

「大丈夫！？」

「大丈夫です！！救助者も無事です！！」

そのパイプの元には理樹が翼をはためかせて飛んでおり、おそらくはあそこからこれを発生させてビルを貫き、中にエリオたちを入れたのだろう。

「び、びっくりしたあ……」

「あれは……翼人！？」

スバルが豪快な助け方に腰を抜き、イクスが翼人である理樹に驚いて座り込んでしまう。

「真人さんは？」

「真人なら大丈夫。傷は深くないし」

ドーベルマンアンデットと遭遇した瞬間、エリオは激昂して突っ込んでいこうとしたのだが、それを待ってたとばかりにドーベルマンアンデットはカウンターで弾幕を張ってきたのだ。

無論、そんな攻撃を知らなかったエリオはそれをまともに喰らってしまう状態だった。

しかし、それを真人がとっさにかばったらしい。

そのあと、真人は大丈夫だと言って自力で瞬風に戻り、エリオはドーベルマンアンデットを追った、ということだった。

「そうですね・・・よかった」

「じゃあ今から降ろすから、ちょっと待って」てね



そう言おうとした理樹だが、その言葉が最後まで続く前に、そのパイプを何者かが攻撃してきた。

攻撃してきたのは、真下から。

崩壊して瓦礫の山になったビルの中から、ドーベルマンアンデットが二本のガトリングで黒空流星群を放ってきたのだ。

それはエリオオたちのいる場所を挟んで左右の場所に命中し、パイプバリアを粉々に砕く。

無論、その間にいて支えを失ったエリオオたち三人は落ちていく。

ウイングロードを再び展開しようとするスバルに、ストラダーを構えようとすするエリオ、何かにつかまろうとするイクス。

しかし、その三人のド真ん中にドーベルマンアンデットがジャンプして飛び込んできた。

そして彼が三人の高度に到達した瞬間、独楽のように回転しながら左右に腕を伸ばし、エリオとスバルに向かって引き金を引いた。

二人は空中という不利な体勢にありながらもそれを防ぐが、その連

射と威力にストラダは弾かれて落ち、ナツクルで防いだスバルもウイングロードを展開する間もなく、その威力に押されて落ちていく。

そしてドオン！とガシャア！という音をそれぞれ立てて、エリオとスバルが地上に落下した時には、すでにドーベルマンアンデットはイクスをその腕に抱えて気絶させ、その場から逃走を始めていた。

「！！！！」

「足いった〜シビレル・・・だがもらったぞ、冥王の名を冠する兵器を生産しうる少女！！！！」

そう叫んだかと思うと、シュバツ！！という音とともに、ドーベルマンアンデットの姿がその場から消えた。

「ぐ・・・理・・・樹さん！！追えませんか！？」

『クラウドと違って、僕に加速開翼の力はないんだ！！でも大丈夫。居場所はわかってるから！！』

そう叫ぶのは、瞬風の中に戻っていた理樹。

モニターには海の上を走るといふ芸当をこなしながら逃走するドーベルマンアンデットと、その腕に抱えられたイクスが映っていた。

「ここからなら射程内だけど……」

「ダメだ……イクスも巻き添えになってしまっ！！」「瞬風」搭載の武器は使えない！！」

モニタールームではそう言った言葉が交わされていた。

瞬風で海上を走るドーベルマンアンデットを追ってはいるものの、いかんせん手を出せる状況ではないのだ。

しかも、このまま市街地に逃げ込まれるとまずい。

否、地上を逃げられるだけでもまずいのだ。

今のドーベルマンアンデットはさほど早くない。

しかし、それはクロックアップや風足と比べた場合であり、理樹の飛翔と同じぐらいの早さだ。

そのスピードで、瞬風は追いかけている。

この速度でこの巨艦が地上の上を飛べば、その突風で地上が危険にさらされる。

どれくらい危険かと言えば、車が木の葉のように舞うくらい危険である。

かなり上空に上がればいいのだが、消火活動から追いつめたので高度が足りない。

そして今から上昇しては、その間に逃げられてしまうのだ。

もしここで仮に、理樹が飛び出して追っていけば、確かに追いつく事は可能かもしれない。

しかし、それまでだ。

こうして戦艦には乗って来てはいるものの、まだ先日のクロコダイランデットとの戦闘のダメージも全快しているわけではない。

この状況で上級アンデットドールマンと戦い、負けずにイクスを無事に奪い取れることは、あまりにも現実的ではないのだ。

さらにはもし万全でも、彼はあくまでも賢者タイプ  
翼人だ。

防御の

一刀も賢者タイプに入るのだが、あれはまた特別な部類。

基本として、賢者タイプの翼人は、防御や能力に重きを置いたタイプ。

本来ならば攻め込むのはクラウドや「彼」のような戦士タイプであるべきなのだ。

この場にエリオヤスバルがいれば、必ず取り戻せた。

二人と理樹がそろえば、必ずあいつを止め、イクスを奪い返せる。

しかし、この現状のメンバーでトップクラスの機動力、移動速度をもつ二人は善戦したもののあいつに落されてしまってこちらには来れない。

体力的に見て、もう追いつけはしないだろう。

だから今は

「こうやって・・・追いかけるしかないのか・・・！！！！」

「！！理樹！二時の方向から、大量のアンデットの反応が！！！！」

「そんな・・・！！！！」

と、そこに飛び込んでくるデータ、そして映像。

まだ遠くて細かく見えないが、ザッと見て三十体近くのアンデットだ。

それが群れのように固まり、こちらに向かって突っ込んでくるではないか！

「砲撃用意！！一体残らず撃ち落とすよ！！！！」

「！！！！了解！！！！」

一同がドーベルマンアンデットを追いながらも、向かってくるアンデット共との応戦体勢に入る。

そして、衝突。

実にその衝突で十体ほどのアンデットが爆発して海に落ちていくが、今はそれを気にしている場合ではない。残りの二十体ほどが瞬風の速度に合わせてきて、その機体にしがみついて攻撃してきたのだ。

無論、それを撃ち落としていくが、こつも張り付かれては戦艦では分が悪い。

戦艦が揺れ、速度が落ちる。

しかし、それでもまだ彼らはドールベルマンアンデットを追っていた。

だが

「！！！！ 敵からの砲撃が来る！！全員衝撃に備えて！！僕のタイミングで舵を切るんだ！！」

理樹が揺れる機体の中で、モニターにあるものを見た。

それはこっちに銃口を向け、にやりと邪悪な笑みを浮かべるドールマンアンデット。

そして、その腕には、腕を覆うように並んだ銃で構成された一門のガトリング。

無数に並ばされたその銃の中心。

彼自身の握る銃の引き金が、鋭い眼光とともにカチリ、という小さな音とともに引かれ、凄まじい音を放って弾丸が固まって砲撃のように打ち出されてきた。

7423

「今だ!!」

「右方全力旋回!!」

ゴオオオオオオオオオオオオ!!

そして、理樹の合図とともに瞬風が大きく右に逸れ、その砲撃を回



避けようとする。

船内を凄まじいGが襲い、ティアナは壁に倒れ込み、イスに座っていたメンバーはベルトに身体を絞められた。

そんな中理樹だけはしっかりと立っていたあたり、さすがは翼人。回避のタイミングも完璧だった。最善である。

そう、最善だった。

今この状況において、出来る限りの最大の回避だった。

しかし、それでも

ドオン……ヴィーヴィーヴィー……！！！！

「左方推進エンジンに被弾！！」

「予備エンジンに切り替えます！！」

しかしそれでも、黒空流星群は命中してしまった。  
船体がぐらりと揺れ、海に向かって落ちていく。

途中で予備エンジンが働くが、それでも落下は止められずに、瞬風は海に落ちた。

まともに落ちれば戦艦は衝撃でバラバラだったであろうことを考えると、本当に予備エンジンに助けられた、ということだ。

海上に浮きあがってきた潜水艦のように浮く「瞬風」

しかし、すでにその視界にはドーベルマンアンデットはおらず、代わりに数十体のアンデットがその船体の上に降り立ってきた。

それから数十分後

ハッチから飛び出した理樹とティアナ、そして艦内にいた者の中で戦える来ヶ谷や、負傷したといっても通常アンデット相手ならば問題はなない真人によってそれらアンデット達が倒されていった。

さらに数分後には、スバルたちの救助も来て、戦艦瞬風は港にまで運ばれていった。

本格的な修理、そして、この出来事を伝えるために、「EARTH」へと連絡を取ろうとする理樹。

しかし、何度呼び出しても応答かない。

彼らは知る由もなかった。  
知れるはずがないのだ。

その同時刻、「EARTH」本部も襲われていたということなど。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

強奪（後書き）

救えども、やはり奪われる、イクスさん（字余り）

邪神

「ドーベル君はもう二人も連れてきたのかい！！エエル君も一人連れてきている。それに引き換えなんだね君たちは！！」

コック、クロコ、プロ

「『『申し訳ございません部長』『『

ドーベル

「まったくもー、がんばってくださいよ。せ・ん・ぱ・い」

エエル

「私も一人だけだがな、一人も取って来れないとはどういうことだ？」

コック

「ンダとお？」

邪神

「君らに何か言えた口かね!!こんなところでしょぼくれている暇があつたら、さっさと一人でも多く連れてきなさい!!」

三人

「わ、わかりましたあ!!」

みたいなwww

蒔風

「なにその今にもな「今日契約取って来れなきゃクビだ!!」みたいなドラマ。そんな邪神いやだわ」

ええ、こんな邪神ではないです。

そもそも、邪神に喋らせるつもりもないですしwww

蒔風

「なるほど・・・上の会話はこう・・・マンガの裏表紙にあるシヨートコントみたいなのやつだな?」

そんな感じ

蒔風

「そしてドーベル。また数で勝負か」

さて・・・これがどう影響してくるのか。

そして、「EARTH」で何があったのか！！！！

蒔風

「次回、「EARTH」での戦い。そして、十人目の魂は？」

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト（現状）

古手梨花

古手羽入

御坂美琴

インデックス

アルルウ

高町ヴィヴィオ

ルーテシア・アルピーノ

イクスヴェリア

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

残り一名



## 戦場

「EARTH」本部ビル

まるで廃墟のようになった廊下

向き合つのは、クロコダイルアンデットとクラウド・ストライフ。

「なぜ彼女らを狙う」

「その方が力になるからさ」

「なに？」

「ま、それは置いといて。こうして一か所に集まってくれるとは、サービスご苦労！……！」

皮肉を口に、クラウドに向かうクロコダイルアンデット。

クラウドはそれを受け、後ろに投げ飛ばすかのように流す。

そして、後ろに流したそいつに向き合い、改めてこいつの脅威を思い知る。

（流したというのにこの衝撃……しかも流した先の壁がごっそりなくなっている。まともに受けたら……）

「打アツツ！！！」

「二度と立ち上がれない、な！！！！！」

ゴォン！！！

直線で突っ込んでくるクロコダイルアンデットに対し、真上から大剣を叩き落としてそれを止めるクラウド。

ワニの顎は閉じる、即ち噛みつく力は途方もないが、開ける力はそれほど強くない。

こうして強引に閉じようとするれば、閉じられないことはないのだ。

現にこいつの大きく開かれた顎も、閉じられた。

だが、断じて防げるわけではない。  
脅威の種類が変わっただけだ。

「閉じればいいとでも……」

ドッゴー！！！！

「グ……オオオツツ!？」

「思ってたのかアツツ!!!!!!」

ゴゴン!!!ゴガガガガガガガツツ!!!!!!

顎は閉じ、無数の牙の攻撃はなくなったが、その代わりに固い硬い鼻面が突っ込んできて、大剣でガードしたクラウドごとそのまま壁を何層も貫いていった。

いまさらだが、ワニの皮は堅い。場合によっては銃弾すら弾くほど

に。

ただえさえそれなのに、アンデットという肉体であるこいつのそれはすでに鋼鉄の域にも達している。

さらに言うならば突進速度もかなりのものだ。

それだけの速度で、それだけの硬度の物をぶつけられては、如何に翼人と言えども吹き飛ぶのは道理。

「がっ……っ、のっっ!!」

が、クラウドもそれだけで終わるような男ではない。

大剣から剣を一本分離させ、二刀でクロコダイルアンデットに切りかかっていく。

それを顎と爪で弾くクロコダイルアンデット。

「無駄よ!!俺の硬皮はそう簡単には斬れん!!」

こいつの言うとおり、この皮膚を切り裂くにはこれではだめだ。

一拍の空白を置いて研ぎ澄ませ、一閃を以って斬るしかない。だが、その溜めすらをも許さないのがこいつの実力。

距離を取ろうにもさっきの一直線高速移動では溜める暇もない。

しかし

「ハアあツツ!!」

「グツ、オ？」

クロコダイルアンデットの体がぐらりと揺れる。

あまりの硬度にクラウドの剣は刃こぼれをしてしまっているが、そもそも斬れないのだから大した問題ではない。

「この……やろう……頭ばつか殴りやがって……」

「いくら皮膚が固くとも、衝撃は確実に脳に届いたようだな」

「揺れ……チツ……おグあツツ!!??」

クラウドの攻撃がクロコダイルアンデットの皮膚には通らずとも、その脳みそを確実に揺らし、脳震盪を起こさせる。

視界が歪み、平衡感覚がなくなったクロコダイルアンデットに、クラウドの蹴りが命中し、その体がゴム球のように廊下を撥ねてすっ飛んで行った。

「翼人を舐めるな!!!」

「クツ・・・ザアツっ!!!」

頭を押さえて振りながら立ち上がるクロコダイルアンデットに、クラウドが大剣を一つにし、滑空するように向かっていく。

それを上体を逸らして躲すクロコダイルアンデット。  
そこからの噛みつき。

が、クラウドもそれを見切って回避、再び攻撃に移る。

互いの体が揺れ、激しい攻防が行われている。  
このやり取りではまだ致命的な一撃は入っていないが、クロコダイルアンデットの牙や爪が徐々にクラウドを掠り始めている。

それに対し、クラウドが狙うのはこいつの目玉やのど元だ。もはや斬れるであろう場所は、そこしか思いつかない。

しかし、相手もそれは解っている。

だからこそ、そこだけを重点的に守っているのだ。

「クラウドさんー!!」

「!!!(バツツ!!!)」

と、そこに観鈴がクラウドに向かって叫び、それに気づいたクラウドがその場からバックステップで離脱する。

そしてその直後、クロコダイルアンデットに向かって観鈴からの衝撃砲が放たれた。

それは竜巻のようなもので、一本のその衝撃砲の中には乱回転をするいくつもの竜巻が内蔵されている。

そんなものを食らえば、どうなるかは明白だ。

上半身が右に、下半身が左に、頭が下に、腕が前に、足が上に

そんなめちゃくちゃな方向に捻じ曲げられていき、クロコダイヤルア  
ンデットの全身から緑の鮮血が噴き出してきたのだ。

「げ……ふ……」

「今だ!!」

そのタイミング。

その瞬間に、クラウドが大剣に魔晄を込めて大きく振り上げて構え  
た。

そしてその剣に観鈴がさらに衝撃を纏わせ、電動ノコギリのように  
超振動させる。

準備は整った。

「行くぞッッ!!」

「ぬ……ぐううづづ!!」

ドオウ!!



そんな風の音を置き去りにして、クラウドが疾駆。  
黒き翼を背に、青の閃光を剣に宿らせ、純白の後押しを以って、眼  
前の敵へと斬りかかる！！

ドゴツッ！！

「ゲバツッ！？」

クラウドの大剣がよろめくクロコダイルアンデットの腹部ド真ん中  
に見事命中し、その体を貫いた。  
そして大剣に組み込まれた全ての剣が振動を纏いながら解放され、  
内部からも引き裂かれてゆく。

ギイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！

だが、振動波はまだ残っている。  
それがその振動音をけたたましく鳴らし、甲高い音をまき散らす！

「吹き飛び、爆ぜろ!!」

ドオンッ!!

そして、その抑えられていた振動が衝撃となつて一気に爆発、クロコダイルアンデットの背中から衝撃波が吹き出し、その体がノーバウンドで吹き飛んで、壁にぶつかりめり込んだ。

「……フン」

それを見、クラウドが剣をビツ、と振り下ろして背を向けて、剣を頭上で回し、肩に引っ掛けるようにして背中に付ける。

直後、それに反応したかのようにクロコダイルアンデットが爆発し、その炎の中でバキン、という音が彼らの耳に聞こえてきた。

「やったあ!!」

「ベルトも砕けたな。これでひとまず終わった……か」

そういつて、クラウドがラウズカードを取り出し、手首のスナップで炎の中のクロコダイルアンデットに投げる。

カードは燃えることなくその体に向かって飛んでいき……

.....

「ヘッヘッへっへ……その程度か？蒼青さんよ……」

「まだまだア……」

コックローチアンデットとの戦闘を始めてから、三分。しかし、その相手をしている北郷一刀の体感時間は、そんなものではなかった。

コックローチアンデットの移動速度はすでにクロックアップレベルだ。

その攻撃方法は、徒手空拳。

二本の脚、二本の腕、そして、虫のような二本の鉤爪。

それに対して一刀は「ものまね」ともいえるような力を使い、仲間の力を次々と使って応戦している。

まず最初にカブトのベルト、終わればガタツク、次にはファイズのアクセルメモリー、風足、アクセルトリアル……

思い浮かぶ限りの高速戦闘を可能にする能力を借り受けて戦うのが一刀のスタイルだ。翼人の翼は無理だが。

ちなみに変身などはいちいちしていない。

生身でも十分移動には耐えられるからだ。しかし……

「フツ、はっ、邪アツ!!!」

「お、ダア!!!うおッ!!!?」

コックローチアンデットの拳が一刀に伸び、それを左上腕で受けて右手で払い落としてからそのまま右拳を叩きこむ。

が、それをコックローチアンデットは屈伸で回避し、一刀の腹部を鉤爪で引っ掻くかのように裂いていく。

それには一刀もたまらず下がり、腹を押さえて驚愕する。

上級アンデットと交戦するのは初めてだが、まさかここまで強いとは……!!

「さあ（バツバツ）、もっと俺を（スウ〜）、楽しませてくれい！  
！（ダンッッ!!!）」

一連の構えの動作を行いながら、コックローチアンデットが一刀を挑発する。

その構えに一切の無駄はなく、武人というのがふさわしいほどのも

のだ。

「ぜってーコスイ手使って来ると思ったのにな……」

「あん？モチそういうのも使わないことはないがな。どっちかってーとそりゃドーベルの犬っこだ」

ダッ！！

そう話しながらも、コックローチアンデットが一刀に向かって中段突きを放って突っ込んできた。まるで砲弾だ。漆黒の体がさらにそれを連想させる。

それをバックして下がる一刀。その後の追撃も次々と回避する。

が、ついに後ろがなくなり、背中にドっ、と壁が当たった。

「まず……」

「もらったぁー！！」

「ツツ！？しゃがみ避け緊急回避！！！！」

それを見逃すことなく、コックローチアンデットが顔面に向けて正拳突きを放ってきたのを、一刀が下半身を脱力させて一気にしゃがみこみ回避する。

一刀の頭上を拳が通過し、壁にボツ、という音と共にきれいな穴をあけていく。

「う……っそお」

「ラあ!!」

「おうああ!!」

と、そこから腕を引き抜き、回し蹴りを放つコックローチアンデット。

しゃがんでしまっている一刀は受けるしかなく、とつさに巨大な金棒「鈍砕骨」を取り出してそれを盾にしながら吹き飛んだ。

直撃は避けたために吹き飛んだだけで大したダメージは通っていない。しかし、背中をジツトリと嫌な汗が伝っていくのがわかる。

一刀は翼人としては一番の後輩だ。

覚醒が遅かったただけではない。

観鈴、理樹、クラウドの三人は、もともとそう言った力を元の世界で使った経験がある。

それは前世の記憶から

それは虚構世界で

それは宿敵との戦いの旅で

しかし、一刀はそう言った力に飲み込まれて時空移動をしたことはあつたが、自分自身が力を発揮したことはない。

ゆえに、翼人の中で最も多くの力を使え、最も扱えきれていないのだ。

「オオっ!!」

「う、ぬウツ!!」

が、しかしそうはいつでもやはり翼人。強いかどうかと言えば、もちろん強い。

彼の上に（あくまで戦闘面で）立つのは翼人の理樹とクラウド、後は数名の実力者のみ。



一刀の両手にはそれぞれ青龍偃月刀とレイジングハートが握られており、近ければ斬りかかり、遠ければ砲撃で応戦している。

それに対し、近づいて殴るしかないコックローチアンデットは当然高速移動でまず都に接近してくるが、一刀も高速移動の力にはストックがある。

彼自身は加速開翼できないが、こうすることで彼もそいつた戦闘が可能なのだ。

「ち……ポンポンと武器変えやがって……めんどくせえ野郎だなおい!!」

ブンツッ!と、空気を震わす音と共に、コックローチアンデットの姿が消えて高速移動に入った。それについていこうと一刀も腰に出して置いていたキックホッパーのベルトによるクロックアップでついていく。

(これが最後の高速能力……これで、決める!!)

そうして一刀がコックローチアンデットの背後に周り、レイジングハートを構えて突貫する。

超至近距離からの零距离砲撃&斬撃

それをもって終わらせようとしているのだ。

このままならば、コックローチアンデットに確実に命中する。クロックアップに入らなくても、視認することぐらいはできる。それによってクロックアップした直後、背後に一瞬で回り込むことに成功していた。

しかし

「遅いぞ、人間」

「なッ!?!」

高速移動のその世界で、コックローチアンデットの姿が消えた。

「消えた！？・・・違う、まさか！」

「さらなる加速。貴様らには決してたどり着けない速度の極地！！  
まだまだノロいわ！人間がアツ！！！」

消えた、のではない。さらなる加速。

クロックアップと同等の高速の中で、さらに姿を消すほどの高速！！

ザシュツ！！

「アゲツ！」

ガリッ！！

「じゅっ！！！！」



その武器の種類は実に多彩で、剣はもちろんのこと、槍、弓、銃、砲撃などのすべてが嵐のようにコックローチアンデットに襲い掛かる。

それだけの攻撃をコックローチアンデットは、最初の十くらいは何とか受け、流していたが、そのあとの者は暗い、一気に吹き飛ばされていった。

そして、一刀がガクリと膝をついて四つん這いに倒れた。

流れた血も少なくなき、連続した高速移動に体力もそろそろマズイ。

しかし、まだ相手はそこにいるのだ。

そう思い、一刀が起き上がって吹き飛んだ先を見る。

しかし

「い……ない……?」

しかし、そこにコックローチアンデットの姿はなかった。

一体どこに向かったのか。

一刀がヨロヨロと立ち上がってほかの場所に向かおうとする。

戦いが起こっているのは、ここだけではない。

t o b e c o n t i n u e d

戦場（後書き）

遅くなってすみません！！

上級に初勝利か！？な戦場でした！！

蒔風

「流石にクラウドは強いな」

観鈴ちゃんの活躍も忘れないでね！！

蒔風

「それにしても一刀とは惜しかったといつかなんとつか・・・」

相手が悪かった、というしかないですね。

クロックアップ上においてのさらなる加速。

ハイパーゼクターでも出せばよかったです・・・

蒔風

「一刀の力は多くの力を使うからな。体力の消費も激しいのに、さ

らにクロツクアップを連続じゃあな」

ってかあそこからさらに加速とかコックさんマジ害虫WWW

ちなみに一刀が出した棍棒「鈍砕骨」がなんなのかわからない方にご説明!!

これは「真・恋姫無双」の魏延（真名・焰耶）の武器です。  
青龍偃月刀とレイジングハートは大丈夫ですよね!!

「EARTH」戦闘編はまだまだ続きます!!

蒔風

「次回、砲撃勝負、最期の一人？」

ではまた次回



## 漫食

「ファイオア！！！」

「デイベインバスター！！！」

ゴオッ、ドオン！！！！

「EARTH」地下大訓練場。

そこで、高町なのはとブロッサムアンデットの戦闘が行われていた。

奥の部屋には鍵とプロテクションをかけて、ヴィヴィオが避難している。

下手に今、この「EARTH」の中を逃がすのは危険だ。

ブロッサムアンデットの周囲に桜色の球弾が作られていき、それなののが的確に撃ち落して行っている。

が、その一発一発がデイベインバスター級なのだ。  
このままではギリ貧。結果は目に見えている。





レイジングハートがとっさにプロテクションを張ってくれたおかげで直撃はしなかったものの、衝撃にバリアごと押し戻され、後退させられてしまう。

上級アンデットは翼人並み。

ならば、自分たちに勝てるのか？

「そっちもなかなかの手練れだということは解る。しかしだな、私に勝つにはちよいと実力不足かな？」

「この……！..！」

「だったら俺も相手してやるぜ」

ゴォン……

高笑いするブロッサムアンデット。

そこに、そんな声が聞こえてきて、地下訓練場が振動を始めた。

見ると頭上からパラパラと土が落ちてきて、天井が左右に開いてい

っているではないか。

その先には、空。この訓練場は天井が開く構造になっている。

そして、その地上に立っていたのは……

《FINAL ATTACK RIDE DE DE DE  
DECADE!!》

「ぬ!!ダア!!!!」

バキィ!!

訓練場の上、要は地上にいたのは、すでにディケイドに変身した門矢士だ。

そこから放ってきたディメンションシュートの巨大な弾丸を、ブロッサムアンデットは回転してからの右腕での打ち払いで弾き飛ばしていた。

「あなたの相手はまだまだいるということよ（ジャカ）」

「グルルルルル……ガウガウ!!」

とそこにさらには長岡までもが現れ、銃を構え、凾を従えて訓練場にやって来きていた。

それを見て、ブロッサムアンデットが驚いたようなリアクションを取り、長岡に話しかけてきた。

「おお？誰かと思えば……役目を負った一族の末裔ではないか！！しかしだな、我々にはあなたの魂を必要ない。即刻退去してもらおうか？」

「らしいわね。なんで私じゃなくてほかの子たちをさらうのか、しっかり教えてもらいたいものね」

銃口を一切ブラさずにそういう長岡だが、ブロッサムアンデットもそれに大した脅威を感じていないのかおどけ墮胎度しかとらない。

「……その様子では、役目によってどうなるかはわかっているも、それがどういいう役目かはわかっていないということかな？」

「？役目の……意味？」

「邪神に取り込まれ、内部から君がいつたい何を為すべきなのか、だよ。そこまでは伝えられなかったか？」

「それは……一体？」

「邪神を押さえる？そんなんで終わると思っ  
ているのかね？ま、それも別段間違  
いではない。だからあなたは邪魔  
なのだよ。我々はあれの力がほ  
しいのだ。下手に制御されては、  
困るのだ！」

ドオウ！！！！

と、そう叫んで長岡に向かって砲撃を放つ  
ブロッサムアンデット。それを転が  
って回避し、銃弾を放つ長岡。

ビスビスビス、と銃弾が樹皮にめり込み、  
ブロッサムアンデットの体が少しばか  
し揺れるが、効いていない。が、こ  
ちらにはまだ四人もいるのだ。これ  
だけでは終わらない。

《Attack Ride B L A S T ! ! 》

ライドブッカーガンモードから無数の  
弾丸が飛び出し、それをブロッサム  
アンデットが剣のようにとりだした  
一本の木で弾きと増していく。

それは鞭のように、とまではいかな  
くとも十分に撓しなるもので、そのまま  
走りだして愛紗と星に向かって斬り  
かかっていた。

バチッ、バチィッ!!という弾けた音を打ち鳴らし、青龍偃月刀と龍牙を打ち払ってなおも突進するブロッサムアンデット。

そこになおも向かってくるライドブッカーをソードモードに変えたデイケイドが立ちふさがり、スラッシュのカードを装填する。

「邪魔だ、どけ!!」

「そもさせられねえんだよ!!」

ガァン、バチィ!!!

カードで強化されたライドブッカーとブロッサムアンデットの剣が幾度かぶつかり合い、激しい火花を散らしてゆく。

「こい・・・っつ!!」

「鞭ともまた違う、このしなる剣・・・というのは初めてかな？デイケイド。なかなかにして打ち合いくいだらう!!」

そこの剣、ただの剣より数倍打ち合いくい。



剣と剣をぶつかり合わせて鏢競り合おうにも、ぎりぎりと凌ぎ合うことがないのだ。  
そんなことをしては、グググ、とシなつてバチンとこちらに向かつてくる。

だからと言って回避しようにもしなるために、見切るには困難を極める。

それに対してデイケイドがこうして打ち合えるのは、いくつもの世界で様々な敵を相見えたからこそ、こういったものにも柔軟に対応できるのだらう。

しかし、対応できるからと言ってもその威力はどうしようもない。カードでの強化が切れてしまえば、一撃で剣は弾き飛ばされてしまふだらう。

「ハアッ！」

「フンッ！...」

と、そこで愛紗と星が武器に気を込め、再びブロッサムアンデットに斬りかかっていった。

さらには長岡も発砲してブロッサムアンデットに命中させていく。

なのはは攻撃に参加できないこともないが、今はヴィヴィオの方が心配だ。

そちらのそばに今は寄っていて、防衛に専念していた。

「ぐ、こいつ、ら・・・」

「先程は弾かれはしたが」

「今度は気を込めさせてもらった！！もうさっきのようにはいかん  
！！！」

「じゃあダメ押ししてやるぜ！」

《Blade! Kamen Ride King》

「なに！？」

いつの間にかコンプリートフォームに強化変身していたデイケイドが、ブロッサムアンデットに愛紗と星が斬りかかっていた隙に仮面ライダーブレイドキングフォームを召喚し、狙いをブロッサムアンデットに定めていた。

さすがに仮面ライダーの最強フォーム二人がこうして並んで、大丈夫だ、とは上級アンデットも言えないらしい。

「士殿！！追いこみます！！！」

「頼んだぜ！（ガチャ、ヴォオン！）」

デイケイドがカードを取り出し、タイミングを計る間に、愛紗と星が気力を放ち、大技と共にブロッサムアーンデットの動きを止めにかかると！！

「青龍、逆鱗陣ッ！！！」

「星雲妙神撃ッ！！！」

「ガッ……ッ、だが……」

しかし、そのダメージを負ってもまだ立ちあがるブロッサムアーンデット。

むしろまだまだこれからだと言わんばかりに力強い。

「邪魔をするなど……（ガクンッ）なあっ！？」

立ちあがり、なおも全身を続けようとするブロッサムアーンデット。しかし、その足ががくりと地面に落ち、躓くように動くがとまった。

「こ……れは……」

「あなたたちアンデットは死なない。でも、その体を動かしているのが筋肉っていうのは変わらないでしょう？植物だったから不安だったけど、効いてよかったわ」

「貴様……まさか……」

「対アンデット用の筋肉弛緩剤。それにしても驚いたわよ。十発近く打ち込んでも、動きが鈍るだけなんだから」

長岡の銃弾に込められていたものを知り、「葉」ぎしりをするブロッサムアンデット。

だが長岡の言うとおり、完全に動きが止まったわけではない。

「だけど十分！行くぜ！！」

《Final Attack Ride  
BU BU BU  
Blade!!》

「ぬ……!?!?」

そのブロッサムアンデットに向かって、黄金のカードが五枚、二つ並んだ。

そして二人がシンクロした動きで剣を奮い、その先端から同じく黄

金の、ディケイドからはマゼンタのエネルギー砲撃が放たれ、ブロッサムアンデットに襲いかかった！！

「終わりだ！！」

「ぬ、あ・・・ぬああアアアアアアアアああ！！！！」

ガゴンツツ！！！！

その熱戦が直撃することを察知したブロッサムアンデットは唸り声をあげ、直撃する寸前、ひび割れた床に拳をめり込ませた。

すると直後、訓練上の床や壁から巨木が突き出してきた、地下訓練場をまるで森林のようにしてしまった。

「なに！？」

突き出してきたその巨木に二つの砲撃は防がれ、ブロッサムアンデットの姿はもちろん、仲間たちの姿すらも見失ってしまう。

完全に孤立。

巨木が突出したといってもまるで籠のようにうねって生えており、森になったというよりは迷路になった感じだ。まったく先が見えない。

「こ、これは……」

「なのはママ……みんなは？」

「大丈夫。みんな強いし、ママも強いから」

「大丈夫？」

「大丈夫。絶対に連れて行かせないから!!」

それはなのはも同じだった。

ヴィヴィオから引き離されることはなかったが、完全に孤立した状況。

しかも、先が見えない。

あちらからは砲撃を放ってもかまわないが、なのはが砲撃を撃てば

最悪仲間にも当たる。

「やっぱりまずい……ね。どうしよっか？」

「とりあえず逃げるー！」

「だね……土さんが天井うへを開けてくれたのは好都合……」

ドオウ!!!

が、そこからののはが空へと飛ばうとし身体が浮いたその瞬間、今までいた場所に桜色の砲撃が襲いかかった。

そしてその砲撃は、なのはの片足を掠っていき、彼女の体制を大きく崩した。

「ブツッ!?……ツアがッ!!!……ハ……」

「ママ!……」

これから上昇しよう加速しかけていたところにそれだ。ヴィヴィオをかばったために、なのはが背中から巨木に落ちていき、地面に倒れて呼吸が止まる。





痼癘を起したかのような否定の声を上げ、向かってくる球体に、防ぐかのように両手を突き出ると、ヴィヴィオの手の先から七色の魔力が噴き出してその球体を、まるで最初からなかったかのように霧散させてしまった。

「……………おお」

「なのはママに……………これ以上ひどいことしないで……………」

「では貴女に御同行願おう……………素晴らしき聖王の力を持ちし少女よ……………」

「ヤダ……………」

ヴィヴィオが迫ってくるブロッサムアンデットに向かって、一切臆することなくそう叫ぶ。

そこに宿るは強固な意志。

自分は絶対にあきらめない。

守られてばかりはいやだから。

しかし、その意志もむなしく

「げホツ・・・」

「小さな体でよく頑張って抵抗した。さすがだ」

「ヴィヴィオ！！！！」

ブロッサムアンデットの肩にヴィヴィオが担がれ、それを止めようとなのはが立ちあがってレイジングハートを向けた。しかし、被弾した片足はまともに機能しておらず、酸素を一気に吐き出したからかまだ腕も震えている。

「その砲撃もいいが・・・当たるのか？外れれば仲間当たるぞ？」

「ツツ・・・」

満身創痍で構えるのはだが、それにブロッサムアンデットは特に警戒もしない。

撃ってくるはずはないと高をくくっているのだ。

そして、それは正しい。

いま、この空間での非殺傷設定はつけられない。訓練場がこのような状態では、作動させるのは無理だ。  
万が一仲間やヴィヴィオに当たっては確実に怪我をさせる。

無論、砲撃に設定をつけることも可能だが、そんな設定では不死生物であるこの敵に勝てるわけもないのだ。

「では、な」

「行か……せない!!!」

ヴィヴィオを抱えて去ろうとするブロッサムアンドットを飛び越すようにして、なのはが跳躍。その真上から砲撃を放ってピンポイントでその脳天を狙った。

放たれる細い砲撃。

着地もなままならず、地面に落ちるなのは。

しかし、ブロッサムアンドットはその真上からの砲撃を特に弾くでもなく、直撃したうえで耐えきっていた。



なのはが集束している間に集まった花びらはすでに押し固められ、直径はすでにブロッサムアンデットよりも大きく、その姿を隠してしまうほど。

そして、この大きさでありながら、これはすでに圧縮されたものなのだというのだから恐ろしい。

だがしかし、それを前にしてもなのはは一切引かずに叫んだ。

「もう奪わせない！！私の目の前から、大切な人が奪われるなんて、絶対にさせない！！！」

あのかきは救えなかった。

私たちの目の前で、あのかきは消えてしまった。

私たちには何もできなかった。

もうあんなのはいやなんだ。

絶対に救ってみせるんだ。

救えるものを、根こそぎ全部！！！！

あなたにもらった、この力で！！！！



ドンドンドンドンドンッッッ！！！

砲撃と弾丸がぶつかり合い、次々と砲撃の方が消されていく。

そして……

「が……は……」

「強力だな。まさかこちらの弾丸が二発しか届かなかったとは」

地面になのはが倒れ、ブロッサムアンデットがその姿を見てもう一度腕を向けた。

そして、その先端にエネルギーが集まり、砲撃が放たれ……

「危ない！！！」

それはなのはに命中しなかった。

倒れてしまったなのはを、長岡が走りこんできて抱え込みながら転がって回避したのだ。

しかし、それを見てあきらめるわけもない。

長岡も処分しとかないと面倒になる人間だ。ここでやれるのならばやっておいてしまいたい。

そして再びブロッサムアンデットが砲撃を構え、その右手から撃ち放つ。

ドンッ!!という爆炎と爆音が響き、長岡となのはの姿が消えた。

しかし

「ガウワウ!!!!」

「む?」

その煙の向こうから、凧が飛び出してきてブロッサムアンデットに向かって嘯みついてきたのだ。

みると、全身の毛が妙に焦げ、血も滴り落ちている。



煙の向こうに二人の気配があるところをみると、どつやらいつが  
かばって、そのまま攻撃してきたのだろう。

「邪魔」

「ギャウー！」

しかし、その凧を適当な感じで腕をふるって叩き落とし、空いた天  
井から空を見上げるブロッサムアンデット。

「そろそろ退却か……これ以上固執してはほかの戦士に狙われ  
かねんな」

そう言つて、ブロッサムアンデットが巨大な幹の上に飛び移ってい  
き、地上へと出る。

また一人、奪われてしまったのだ。



「アダッ!？」

「ど、どうしたのモモタロス!？」

「わかんねえ……扉に触ったらバチッて言いやがった!！」

飛び降りてでも早く到着し、下の皆を助けようと出ようとして、扉に手をかけたモモタロスがいきなり走った電流にたじろいでしまう。

その状況に、良太郎がどうしたのかと声をかけた。

「一体何が……(ババツツツ!!)うわっ!？」

しかし、そう疑問に思った瞬間、外からのである電撃によって、デンライナーが揺れ所々から火が上がる。

デンライナーには乗車車両と戦闘車両がある。

戦闘車両はかなり頑丈なのだが、乗車車両はそうでもない。相手の強さにもよるが、簡単に破壊されてしまいそんな代物だ。

そこに襲いかかってきたのは……

「やっと出てきたかデンライナー」

地上に、一体の黒い影が立っている。

その影は片腕を上空のデンライナーに向かってかざし、なおも電撃を放ち続けている。

がたがたと揺れながら走って何とか着地しようとするデンライナー。右から左へと上空を走っていくが、こいつの電撃はそれも追いついていく。

「美琴嬢が目覚めたとき対処できるのは私だけなのでな。チャッチャと終わらせて私は帰らせてもらいたい」

エレクトリックエールアンデット

そいつが、着地して炎と火花を上げるデンライナーに向かって悠々と歩いていく。

狙うは十人の少女、最後の一人。

未来の特異点だ。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 漫食（後書き）

今回は侵食された場での戦いでした！！

遅くなってすみませんでした。

どという終わりにしようかとかは考えが付いていたのに、そこに至る過程が全然思いつかずにズルズルと……

にしても土は助太刀に来れたのはいいけど結果的に逃げ道を与えてしまったようなものだと思ひなおして思いました。  
ディケイドとは一体何だったのか……

愛紗と星、さらには長岡さん、最後には冨まで活躍したのに……

蒔風

「さすが破壊者だ」

鞭ほどではないがしなる剣、って、実際結構厄介だと思っんですよね。

イメージとしてはただのロッドに近い感じですかね。先端は細いで

すけど。

そして、奪われるヴィヴィオ。

蒔風

「ウナギはやっと再登場か」

ええ。

美琴だつてきつと何度か意識は取り戻すはず。

その時抑え込めるのはそれ以上の力を持ったこいつだけですから、離れられなかったんでしょう。

蒔風

「で、気絶させてから来て、目が覚める前に帰るつもりか」

らしいね。

どうする電王!?

蒔風

「次回、敗北」

ではまた次回

希少能力持ち少女リスト

古手梨花

古手羽入

アルルウ

高町ヴィヴィオ

ルーテシア・アルピーノ

イクスヴェリア

インデックス

御坂美琴

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン  
ハナ

全十人



敗北

燃え上がるクロコダイルアンデット。

そこに向かって、クラウドのカードが投げられた。

そして……

「そらっ！」

「ツツ！！」

そのカードが真っ直ぐにクラウドへと投げ返され、顔面目掛けて飛んできた。  
それを指で挟んで止めるクラウド。

「ゴキブリ……か」

「うっせー。ほらよ、ワニのとつつあん。大丈夫かよ」

そこに現れたのは、ほかでもないコックローチアンデット。

一刀との戦闘から離脱し、ここまでやってきたのだ。

「お互い翼人の相手は大変だねえ」

「……貴様は一人だったろうが」

「体動く？」

「見て分かるだろう。ベルトが割られた。体は動かん」

倒れるクロコダイルアンデットと話すコックローチアンデットは、その状態を聞いてふーん、と軽く頷いてからクラウド……というよりも、その後ろにいる観鈴と彼女の護っている少女たちをみる。

それを察知し、クラウドと観鈴が身構えるが、おいおい待てよ、といったジェスチャーをして、コックローチアンデットがズルリ、と曲がり角の向こうから何かを引っ張り出してきた。

「……恋!!!」

「恋ちゃん!!」

そこから引きずり出されてきたのは、恋だった。

ここに来るまでの間に、こいつに見つかってやられたのだろう。

「この子スゲーのな。十五体くらいのアンデットを相手取ってたんだぜ? ドーベルの犬っ子と戦った後で満身創痍だったらしいのにさ」

「……イリヤをどうした……!!」

「んあ? ああ、大丈夫大丈夫。ちゃんとはかのアンデットに任せであるさね。この子も生きとる。ってわけだし、取引しようや」

「なに?」

恋の体をぶらぶらと持ち上げて、コックローチアンデットがクラウドに取引を持ち出してきた。

その内容は、ここから自分たちを逃がすこと。

そうすれば、恋の命は助けてやる、といったものだった。

「そんな条件……」

「飲めなきゃこの子はここで死ぬ。こっちはそれでも別にかまわな  
いんだぜ？」

「……くそが……」

「ところがどうこい。そんな奴だからこうして今でも生き残ってん  
の。しらねーの？人間の後に繁殖するのはゴキブリオレたちなんだぜ？」

こんな条件は飲む以外の選択肢などない。

人質がある以上、あちらに完全に利があるのだから。

こうして、返答は決まった。

いまだ言えないのは悔しさからか。

「……」

「沈黙はイエスととるぜ。ほら……よ……！」

「！ チツ……！」

そして、コックローチアンデットが恋の体をクラウドに向けてポーン、と高く投げ放った。

放物線を描いて落ちていく恋の体。  
それをキャッチしようとし、クラウドが走り出す。

最初に行っておこう。  
今投げられたこれは、恋ではない。

無論、コックローチアンデットが言っていたことも途中までは本当だ。

恋は満身創痕の体でアンデット十五体を相手にしてイリヤを守っていた。  
そしてこいつと遭遇して、負け、奪われたのも正しい。

しかし、恋はそのままそこに放置され、イリヤだけは他のアンデットに渡して離脱させている。  
ではこの場にあるこの恋は何か。

正解は　　とても気持ち悪いものだが、すべてゴキブリだ。  
それが固まって恋の姿になっているに過ぎない。

こいつの考えとしては、こうして放ればクラウドは必ずこのように  
駆け込んでくる。

しかし、これはゴキブリの塊。キャッチした瞬間にザーーーッ、  
と一気にぶちまけられるだけだ。

それによって全員の体がコンマ一秒でも止まれば、観鈴から少女た  
ちを奪える。

クロコダイルアンデットに至っては最悪見捨てても構わない。

そしてその思惑通り、今クラウドは恋に向かって駆け出した。  
後はキャッチさえしてくれれば、それで終わりだ。

そう思っていた。

だが

「翼人に人質は効かない」

スツ、と

その言葉を発しながら、クラウドがその恋を素通りし、まっすぐにコックローチアンデットへと突っ込んで向かってきた。

恋の体はというと、観鈴の衝撃波でうまくふわりと浮かされたのち、そのすべてがグシャリと潰されて一匹残らず駆除されてしまっている。

「なあ!？」

「それが恋でないことは

」

「最初からわかってたよ!」

翼人に、人質は効かない。

あくまでも基本的に、だが。

二人は、コックローチアンデットがこの恋を出した瞬間こそびっくりしたが、瞬時にそれが何かの擬態であることを見破っていた。

そして、あの取引。

明らかにこちらの意表を突くつもりだ。

だからこそ乗り、こつして裏をかいた。

翼人に、このようなコスイ手は通じない。

「終わり……だ!!」

「ちょ、勘弁」

ドゴォア!!!!!!

「なに!?!」

「おおっ!?!」



が、そこに巨木が床から飛び出してきて、二人の間を遮った。  
おそらくはブロッサムアンデットによるものがここまで侵食してき  
たのだろう。

だが、そのいきなりの登場に対し、クラウドらとコックローチアン  
デットの頭の中は違った。

どちらも同時に考えた。

これはなんだと。

そこまではいい。掛かる時間は同じだ。

しかし次に、クラウドはこれは一体どういう攻撃なのかを考えてし  
まったのだ。

それに対しコックローチアンデットは瞬時にブロッサムアンデット  
によるものだということがわかっていた。

その差。

その差が、ここからの一連の動きでの、勝敗を分けた。

(いただきっ!!)

コックローチアンデットがその巨木の脇をすり抜け、クラウドを追い越して観鈴を乗り越え、少女たちの元へと辿りついた。

クロコダイルアンデットはそのついでで最初に外に向かって蹴り飛ばされていた。運が良ければ、他のアンデットが拾っていくだろう。

そして彼女らの意識を瞬時に刈り取り、二本の腕と二本の鉤爪で四人をかつぎあげ、その場を瞬時に離脱した。

「待てエっ!!」

「おおおうオレを攻撃すると、この子たちだってただじゃすまないぜ!」

「当てなければどうという事はない!!」

クラウドと観鈴を越えて、その背後で少女を奪っていたコックローチアンデットが、そのまま壁を破壊して外へと飛び降りた。

それを追って、クラウドも飛び降りながら剣を投げ、その背中に命中させていく。

「ドドドッ）オグッ！？が、ハッ！！」

「お前たちはその子たちの魂を狙っている。この場では死なせないだろう？」

「ち・・・コスいのはどっちだよ！！」

背中に三本ほどの剣が突き刺さっても、いまだ腕から彼女らを放さないコックローチアンデット。

クラウドが最後の一撃だと言わん掛かりにファースト剣を振りかざして突き構え、開翼して真っ直ぐに落ちていく。

「雑魚は雑魚なりに役に立ちやがれ！！」

「なに！？」

が、そこでコックローチアンデットが梨花たち四人をバラバラに投げ放ち、ほかの箇所では戦っていたアンデットにキャッチさせて離脱させた。

しかも、今度も擬態による偽物を織り交せている。

すぐに判別できるとはいえ、その一瞬は大きい。

「はっは！一匹見たら、あと二百万匹はいると思いなア！！」

「そんなにはいない！！」

そういつて、クラウドがアンデットを追っていく。  
だがしかし相手が多い。

こっちは一人、逃げるあっちは四体。三体が鳥系で、一体が獣系だ。

他にも偽物が多くいるが、どれが本物かはわかっている。  
しかし、どれを追おうか、というのが問題。

だが

「ブリザガッ！！！！」

「ギッ！？」「ガッ！？」「ギエッ！！」

そこでクラウドは鳥系三体の翼を瞬時に凍らせ、自分は獣形のアン

デットを一撃で排除、そいつの抱えていたアルルウを奪い返して、  
即座にほかの三体のもとに向かっていく。

今はいたるところでアンデットとの戦いが行われている。  
上級でない相手ならばそう苦戦もさせられないが、いかんせん数が多いのだ。下手なところに落ちて巻き込まれては大変だ。

上空から落ちてくる三体の鳥系アンデットに向かって、クラウドが  
飛び上がる。

しかし、十分に間に合うであろうそれを、邪魔するものが一体・・・

ドオウー！！

「ッ！？砲撃！？」

「ゼアッ！ー！！」

両肩にイリヤとヴィヴィオを抱えたプロツサムアンデット　おそ  
らくは地下訓練場から地上に出たところでイリヤを拾ってこっちに  
来たのだろう　が、クラウドに向かって砲撃を放ち、一発蹴りを  
放って一瞬だけ足止めをする。

クラウドがそれに対して蹴りを剣の面で受け、逆に二人を取り返そうとするが

「サンキューだ、桜の大将！！もういいぜえ！！」

「な・・・」

「背中に三本突き刺さったくらいじゃあ、オレアやられん！」

「しっかり潰してもピクピク動くくらいだもんな」

「桜の大将、ちょっと黙っててくんねえ！？つてか早く行け！！」

そこにとびかかってきたコックローチアンデットがブロッサムアンデットの皮肉に突っ込みながら、クラウドに向かって打ち下ろしの拳を命中させて地面にたたき落とした。

その隙にブロッサムアンデットは完全に離脱。

さらには落ちた鳥系の抱えていた梨花、羽入、インデックスも植物系アンデットが抱えてその場からいなくなってしまった。

落ちたクラウドはしゃがみ、片手をつきながらもしつかりと着地していたが、頭を上げた瞬間にコックローチアンデットが目の前に着地、蹴りを放ってきた。

それをガードするクラウドだが、勢いに体が後退させられる。

そして、その先で三体のアンデットに右足、左足、身体を掴まれ、はりつけ礫のように動きを止められ、コックローチアンデットの追撃の拳をまともに喰らってしまった。

「がっ……！」

「へえ、これで壊れないとは凄い。でも……」

ガシッ

「こいつはもらったあー!!」

「まで……ッッ!!」

クラウドからアルルウを奪ってその場から離脱するコックローチアンデット。

クラウドは自分を押さえる三体のアンデットを即座に殴り飛ばし、コックローチアンデットを追おうと開翼した。

「レーダーでコックローチアンデットを追えるか!？」

『だ、ダメです!! 今日強力な磁場が働いていて、レーダーが使い





その場には良太郎や侑斗、モモタロス達イマジン、が倒れており、デンライナー、ゼロライナーは脱線、横転して転がっていた。

「さて・・・急いで戻るか。思いのほか時間がかかった。美琴嬢が痙攣を起してなければいいが・・・」

そういつて、その場からエレクトリックエエルアンデットが走って行き、近くの川に飛び込んだ。

こうして、すべての少女は奪われた。  
ことあるごとに、この「EARTH」本部で。

真の意味で、「EARTH」初めての敗北であった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

敗北（後書き）

奪われる少女たち。

すべて、回収されてしまった敗北の話です。

蒔風

「さて、そろそろ彼女らがどんな力を狙われたのか、って言う内約を教えてください」

そうですね。ではお教えしましょう

御坂美琴

純粹に電撃の力を求められて

インデックス

その身におさめた膨大な魔術所、そしてその知識

古手梨花

時読みの力、カケラの魔女としての魂

古手羽入

時間干渉の力、神の魂の取り込み

高町ヴィヴィオ

古代の王たる者の魂。特異なる七色の魔力

イクスヴェリア

兵器となる兵の製造。炎熱系の力を求めて

ルーテシア・アルピーノ

召喚の力を求められて。あらゆる兵や自分を送り込むための力

アルルウ

全ての生物を統べる力。

ハナ

未来の特異点としての特性。全ての時間軸においての自分の存在の確立

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

以上の力を取り込むために、聖杯の器（すべてを内包しうる器）として許容量を増やすため

ですな。

蒔風

「じゃあ過去に戻って阻止しようとしても」

ハナの特異点で聞かない。

蒔風

「相手の行動は」

梨花ちゃまのカケラで読まれる。

まあ、そうホイホイできるものじゃないけど。

蒔風

「しかも最悪」

羽入の力で止められたり巻き戻される。

これもホイホイできるもんじゃないね

三回くらいかな？

蒔風

「ルーテシアの力で何か呼び出して・・・」

アルルウで操れる。

蒔風

「確かフォーティーンって雷つかえたよな？」

美琴でパワーアップ。

未知の攻撃はインデックスの知識で対応。

ヴィヴィオの力もあるし・・・

イクスの力で兵隊も作りたい放題。

蒔風

「やべえ、勝てないWWW」

いやまあ、こんなもんは「設定だけ」になりそうですけどね!!

蒔風

「オオオオイ!!??」

だって特撮とかの設定見てくださいよ。

それを踏まえて実際の映像見てくださいよ。

矛盾、結構ありますよね？

そんなんでいいんです!!

それに最終的には勝ってもらわないとだし。

蒔風

「ま、まあな・・・で？結局あの年くらいの子供だった理由  
ってなんなんだ？最終的に見た目で年の判断してたら、絶対」

それはおいおい・・・どこかで言わせませぬ!!

蒔風

「次回、みんな集まってから、どーしよー、って話」

ではまた次回

## 翌日

「EARTH」襲撃、および少女誘拐から、翌日

「つまりそっちの放火事件の……」

「イクスヴェリア……イクスのあんな不完全な復活も、アンデットが絡んでいたみたいね」

「というか、あいつの言ってる風だとそのためにわざわざ解き放つたらしい」

廊下を歩きながら、一刀、ティアナ、理樹が二つの事件の関連性に関して話あっていた。

今回の襲撃で、「EARTH」本部のビルはかなりの損害を受け、現在修復中だ。

今三人が話している廊下は、巨大空中戦艦「瞬風」のである。



「彼女らがさらわれて・・・でもまだ動きがないんだ。どういうことだろう?」

「向こうにも事情があるということ?」

「わからない・・・そういう意味では、彼を連れてきたのは・・・

」

プシュ

「良かったかもしれないね」

「おおお!!これが今の世界の形!!それにこの戦艦も素晴らしい・・・む!?これはマテリアというのかね!?ほうほう、これもまた別の世界の魔法の形。我々のは魔法科学と言ったところだから、こっちの方が本当の意味で魔法と言えるかもしれない・・・こっちは伝染病のデータかい!?ふむふむ、難見沢症候群・・・その土地特有の・・・おお、時を超える電車だつて!?こちらは古代の戦士のベルトに、鏡の世界!?待て待てこの聖杯戦争とはなんだ?サーヴァント・・・ぜひともお目にかかりたい!!ま、まさかこっちは・・・」

そう言いながら三人が入った部屋では、連れてきたジェイル・スカリエッティがこの端末を使って様々なデータを見漁っていた。無論、変なアクセスや下手な情報を見られないようにはしているが。

それでも十分らしく、ウヒョー、と興奮気味にドンドンデータを漁っている。

お目付け役の朱里と愛紗が椅子に座ってげっそりしている。

愛紗なんかは気力や気合いという物を見せてくれとせがまれ、朱里に至ってはものすごい量の質問攻めにあっていたのだ。しかもこのテンションである。疲れるのは当然だ。

「ジェイルさん」

「!?!?おおおおおお!!翼人のお二人!!ぜひともこれを……」

「そんなことよりも今回の事件でちよつと……」

「見てくれ!!がんばったよ……ティアナ・ランスターのスリサイズをブフォア!?!」

「なんでそんなもん手に入れてんのよあんたはツツ!?そこツツ!!理樹も一刀もデータを見るなああああああ!!!!!!」

ここからどうやってハッキングしたのだろうか。  
とりあえずスカリエツティの顔面にクロスミラーージュでぶっ放して  
めり込ませ、それをさりげなく手元を持ってきてまじまじと見てい  
る二人の首元にダガーを押し当てるティアナ。

「はっはっは、スカさんG」

「G」!!」

「ご主人様!? 理樹殿も鈴殿に言いつけますよ!？」

「やばっ」

「と、思つてすでに事情を知つた鈴さんをこちらにご用意していま  
す」

「理樹のバカ! 死ねえー!」

「ガンキンツ!? (ドキヤッ!」

.....

.....

「・・・と、漫才はそれくらいにして」

「顔をそんなにポコポコにされて漫才と言えるのかい？」

そんなこんなで本題に入る三人。

少女らの力など、事件に関する内容を聞いたうえで、スカリエツェイが邪神に関しての推論を話し出した。

「あくまでも推論だがね？彼女らの力は邪神を強化するためのものだ」

「ああ・・・それはもうわかっている」

「時間や存在に関するもの。単純に力と知識、さらにはそれだけのものを受け入れるだけの器・・・」

「そう、そのために彼女たちはさらわれたと考えるね。全く、十分に世界を破壊しうるじゃないか」

「なんであの年なのか、とかは分かったの？」

「わからない・・・とまでは言わないが、まだ予測の域を出ないよ。推論にもならない」

「そうか・・・」

「それに、いまさらそれを知ってもしょうがない。それよりも・・・」

「なんで全員揃ったのにいまだ動きがないのか、ということね？」

「そう、そこが不安なのだ。」

「なぜせっかく全員がそろったというのに、その邪神というのが出てこないのか。」

「もし既に活動しており、人知れず動いているのならば厄介だ。」

「ふむ・・・これも推論だがね」

「それでも十分です」

「なにぶん十人という人数だ。対象も少女・・・つまりは比較的不安定な年齢。取り込むということは一つにすること。そのために、」



そこで剣崎と橘が、アンデットたちの行方に関して話しあっていた。  
邪神の復活にはあの石板が必要だ。

だが、橘が見つけた洞窟の中に向かって、そこにはすでに石板は  
なかったらしい。

「復活するにはあの場所でもいいらしいな」

「石板はゲート……ってことですか」

「ああ。だからどこで復活してもおかしくない」

「ほかの時限世界等に逃げ込まれたらお手上げだな」

「あ、シグナムさん、ヴィータちゃん」

「おいこら。なんであたしだけ「ちゃん」なんだ」

「一緒にいいか？」

「どっどっどっど」

「おい、なんであたしにだけわざわざ椅子に台を乗っけるんだ」

「それで……」





シグナムの言葉に、剣崎が唸る。  
確かに、石版があくまでゲートであるならば、どこであっても邪神は出てくる。

どの次元世界でも別にかまわないのだ。

だが、橘がそれを否定した。

「いや、それはないな。アンデットの中にも時を止めるような奴はいたが、次元を操るようなものはいなかった」

「つまり、あくまでもこの世界の中？」

「ああ」

「でもよ、もし今回復活した奴らの中にそういう力を持った奴がいたらどうするんだよ」

「そんなことを言っただけはこの話し合い自体無駄だな」

「うぐ……」

ヴィータの言葉に、にべもなく返す橘。  
ストレートな返しにヴィータが詰まってしまうと、剣崎が慰めるように何かを差し出してきた。





「あら、お礼言ってるのかしら？」

「……俺に犬の言葉は解らん」

ザフィーラの言葉に反応したのか、凧が元気よく、とはいかずとも返事をするように吠えた。

ザフィーラはオオカミなのでわからないことはないと思うのだが……  
本人がわからないのならわからないのだろう。

「それにしても、結局長岡さんの役目って何なのかしら」

と、そこでシャマルが気になっていたことを話題にした。

本当に、長岡の役目とは何だったのだろうか？

「……わかりません。伝承も口伝のみでしたし、書物があったと言っても祖母の作った絵本くらいですし」

「邪神を抑え込む……つまりは復活した際の生贄としての役割だったのだろうか？」

「ええ・・・しかしそれはあくまでもできるというだけで、本来の役割とは違つと、あのアンデットは言つてたわ」

「本来の役割ねえ・・・」

「それに、どうして復活に関して私じゃなくてもよくなったのかも気になります」

「じゃあ・・・」

「私もついていきますよ、最後まで。それが私の依頼だったもの」

.....

「おーい、どうだい調子は」

「あと三日、といったところかな。いやはや全員が年頃とあつては調節も大変だ」

「ウナギのおっさんも大変だな。ここにつきつきりだろ？」

「俺が離れては美琴嬢に対抗できんだろうが」

どこかの洞窟

近くに海があり、陸と海との境界線は海岸ではなく、断崖絶壁の崖で分けられていた。

崖の上は森が広がっているが、この洞窟があるのは崖の方だ。

そこに開いた穴の中に石版が立たされており、その前に少女たちはクリスタルのようなものの中で眠らされている。

少女たちは円形に並べられており、その一つ内側にホログラムのよ  
うな光の輪が浮かび上がっていた。

それはそれぞれの前で窪んでいたり突き出していたりで、きれいな

丸にはなっていない。

「イクスヴェリアは比較的落ち着いているな」

「美琴嬢がなかなか落ち着いてくれなくてな。みる、輪が尖ってる」

「森アルルウの母ッ子は落ち込んでんなあ・・・」

と、この会話からわかるようにこの輪は彼女らの精神状態を表している。

それがきれいな円形になったその時、彼女らの魂を邪神に捧げる準備が完了するのだ。

「しかし落ち着いてきているな」

「ああ、少しずつだが」

「いいかー？ 抜け駆けすんじゃないですよ？」

「ふん。邪神の復活、そしてその力を自分のモノに、か」

「復活したのちに五人で戦い、勝ったものが文句なしで邪神に飛びつく。それでいいな？」

「異議なし」

「そいつが逆に邪神に取り込まれたらどうする？」

「その時はその時だ。次の奴が飛び込めばいい。少なくとも、必ず俺らの内、一人が手に入れる」

その力を以って地上を制し、己が種族の繁栄と栄光を

計画は、着々と進んでいる。





## 翌日（後書き）

と、いうわけで襲撃から翌日の話ですよー!!

蒔風

「なあ、途中で次元世界って言葉が出てきたが」

ああ、あれですか。

この世界に統合されてしまったのは……

なのはの世界からは地球とミッドです。

一期、二期そして三期の舞台すね。

だからこの世界では地球とミッドは同じ世界にあるんですよ

蒔風

「他の世界は普通に次元世界か」

そそ。

ディケイドの回った世界もそんな感じで漂ってます。

蒔風

「アンデット曰く、後三日……か。長岡さんのあれこれもわからないし、困もあれだしな」

まだ少しだけ謎が残る第三章!!

次回、焦り始める「EARTH」

蒔風

「ではまた次回で!!」

焦燥

さらにその翌日。

「EARTH」襲撃から、二日目。

巨木を撤去し、とりあえず形だけは見繕った地下訓練場。

そこで、数名の人間が訓練を行っていた。

その人物は、ハクオロや上条といった、さらわれた少女の仲間たちだ。

昨日

少女たちがさらわれたと聞いて、彼らは呼び出された。そこで、どれだけの戦いがあったかを知ったのだ。

「俺たちもつれて行ってくれ」

今まで何があったのか、その説明を聞いて最初にそう言い出したのは上条だった。

しかし、その思いはこの場にいる皆、同じだっただろう。

アンデットたちの居場所がわかり、そしてそこへの攻撃に向かう時には、自分たちも加えてくれと。

だが、全員を連れていくことはできない。それに、彼ら自身のこともある。

「上条。お前はアンデットの肉体に対抗する術はない。お前を連れていくわけには……」

と、上条には言い

「ハクオロさんも、自国のことがあるじゃないですか。それを放ってはいかないでしょう」

と、ハクオロに伝え

「圭一やレナは……“輝志”出身とはいえ力は一般人に限りなく近んだ。危険すぎる」

と、圭一たちに話した。

だが

「だったら俺が強くなる。俺にだってサポートはできる。あいつら一発ぶん殴ってやる」

「これはもう国の話ではない。私の家族が連れ去られたのだ。私個人として参戦させてもらうぞ」

「梨花ちゃんと羽入ちゃんは俺たちの家族で仲間だ。力がないからって、引っ込んでられないぜ」

と、三者三様に返答し、絶対についていくと言って聞かないのだ。

確かに、戦力は多い方がいい。

あっちには上級アンデット五体に加え、さらには中級・・・つまりは普通にアンデットも多数いるのだ。

ゆえに、仮面ライダーたちにはすべて声をかけ、さらには武将や数名のサーヴァントにも、都合がつく限り協力を頼んだ。

相手は決して弱い相手ではない。

今回出てきた上級は、かつてブレイドたちが戦った上級よりも上の存在だ。

それらには翼人が当たるしかない。

そして、中級のアンデットもピンからキリまでいる。

その中に突入する可能性が高いというのに、ハクオロ等とはもかくとして、圭一などは危険が多すぎる。

よって、ここでしっかりと訓練し、その結果を見て大丈夫かどうかを見ているのだ。

「瞬風のクルーとしては乗せられないのか？」

「乗せていくだけではできるけどな……それでもやっぱり危ない」

その訓練の様子を見ながら、さっきまで参加し、今は休憩しているアーチャーと一刀がそうぼやく。

彼等だって、連れて行ってやりたいのはやまやまだ。

しかし、それができるほど簡単な相手ではないし、簡単な現実ではない。

「最終的に全員をふるいにかける。そこで連れていけないと判断したら……しょうがないけど」

「置いていくしかないな」

「……ああ」

そういつて、時計を見る一刀。  
そろそろ訓練の交代時間だ。





無理もないだろう。

わかっている正確なアンデットは五体。

さらには以下のアンデット達まで含めると、その数はいまだに把握しきれていない。」

そんななか、どのようなワードで検索すれば引っかかるというのだろうか。

「アンデットと戦ってきたBOARDのデータからいろいろと調べているのですが……。」

「くそ……一体どこにいるんだ……。」

部屋にいるのは数名のオペレーターだ。

この体制で昨日からずっとやっているにもかかわらず、結果は散々なことから、クラウドのイラつきもわかるというものだ。

こうしている間にも、あっちの準備は進んでいるのかもしれない。しかも、この考えも推測にすぎないのだから余計に焦燥感を煽ってくる。

「……どうしてそんなふうで、必ず見つけ出してやる。」

そう、かならず、叩き潰して見せる。

.....

「おいおい、全然安定しないぞ。」

「とてもじゃないがあと二日で安定するようには見えないんだが？」

「うーるっせえ。じゃあオメーやってみろオ。」

.....

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

「出来たか？」

「十分理解した。こーりや駄目だ。あっちができたら今度はこっち、今度はあっち。キリがねえやな」

石板の立つ洞窟の中で、ドールマンアンデットが他の四体のところに歩み寄って愚痴を吐いた。

どれだけ安定させようとあの輪を見てたり、少女にちよっかい出したりしたとしても、まったくもってきれいな円にならない。

これではいつまでたっても安定の見込みがない。

場合によっては

あと少し、あと少しで安定する・・・よし、こい!!  
やった! ってなんでそっちがそうなるの――――!!?

みたいなことも多かった。

こんなものにも物欲センサーってあるのだろうか？

「本当に勘弁してほしいっての・・・あの方たちを維持してくのもよ、そう長くできるものじゃないんですね」

「ドーベル、お前はいい加減・・・いや、もういい」

「それよりもどうする。このままでは力を手に入れる以前の問題だぞ」

「・・・・・・・・まったく。どうしてそうお前らは自分から無理に変えようとするのか」

が、その言い合いを眺めていたブロッサムアンデットが、呆れたように溜息をついてそう一言いつてきた。

「もし本人を弄って変わらないなら、周囲のものを換えればいい」

「周囲？」

「なんだ？景色でも変えるってか？」

その言葉にはてな、と首をかしげるドーベルマンアンデットにコミックローチアンデット。

が、それに対してクロコダイルアンデットとエレクトリックエエルアンデットは気付いたようで、顎に手を当て一考していた。

「だがな・・・それは同時に危険だぞ？あつちが総力を挙げているだろうからな」

「安定から復活まではそうかからん。その間くらいの時間稼ぎに問

題はないだろう?」

「そうだな・・・最悪、復活したらその場で取り込んで殲滅させてしまってもいい」

くっくくくく、と実にいい考えが浮かんだと笑う三体。  
二体はわけがわからんと首をかしげるが、話を聞いてなるほど面白い、と同時に笑いながら拳を握った。

「EARTH」に、アンデット

両社とも進まぬ状況に焦り、そしてそこからの脱却を見つけあのはアンデットだった。

計画は実行される。

その夕方から夜にかけて

彼らのいる海辺の断崖絶壁の洞窟

その上に生い茂る森の木が、たった一晚ですべて桜に変わってしまった。  
っていた。



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 焦燥（後書き）

みじかつ！？

短いくせに実に時間がかかって申し訳ございませんでした！！

この数日間、私が何をしていたかと申しますとズバリ、レポートで  
ございます。  
といつても一つだけですが。

今回言われた課題は

- ・「新自由主義と「公共」「」というタイトルで書け。
- ・5000文字をワードで  
でした。

そのレポートの存在を忘れて前日まで遊び呆けていた私。  
アルバトリオン一人で全破壊とか楽しかったなあ……

そして、決戦の夜。

100円自販機で缶コーヒー「BOSS」を一種類ずつ買う私の姿がそこにありました。

種類は「洗練の極み」「アイスコーヒー地中海ブレンド」「HALF & amp; HALF」「アイスラテ」「カフェオレ」「贅沢微糖」「レインボーマウンテン」でした。珈琲戦隊BOSSセブン  
www

それを0時、1時、2時と順番に一巻ずつ飲んで、レポートを一気に書き上げましたよ。

ですが・・・6本目、5時まではよかった。贅沢微糖までは。しかし6時。レインボーマウンテンに手が伸びたものの、私はプルタブを開けられませんでした。

え？なんでかって？

そりゃあ両手が震えて・・・というか痙攣してましたからwww

よくよく考えてみれば1時間ごとに250mlを6本飲んだということ合計1.5？

それだけのコーヒーを飲んで徹夜とか、私は馬鹿ですか。

カフェインは薬物ですからね。  
みなさん、過剰な摂取はやめましょう。中毒になります。

自販機にはあと「ブラック無糖」があったのですが、本当に買わなくて良かったと思ってます。

そして寝たら辛く思い起き続けて、目の前にあったカップラーメンを朝食に食す。

直後、胃袋が飛んでもなく重くなって、ぐるぐると回りだしました。唸りをあげて回ったんですwww

その気持ち悪さにダウン、6:30から8:30まで仮眠し、それでも死にそうなほどキモチワルイ。

たぶんケミカルXを飲んだらこんな感じ。  
というか吐き出せばそれがケミカルX。

あとは「お砂糖」「スパイス」「素敵なものがいっぱい」あれば、パワーパフガールズができるところだったと本気で思います。

と、いうわけで吐けば楽になるかと思っただが、喉に指をつっこんで

も出てくるのは涎ばかり。

胃袋が気持ち悪がってるのに身体は拒絶しないってどういことw

wwww

結局その気持ち悪さを携えて大学まで二時間の電車の旅。

揺れないでありがとございました、京急さん、東海道さん

大学で友人に話したら「1.5リットルのことを言われてから」「お前  
良く死ななかつたな」と言われました。

レポートは無事提出。死にかけたかいはありましたよ、ええ。

震えたてのせいで表示の字はブレブレでしたけどね。

それが、木曜から金曜にかけての出来事でした。

本当にもう二度とやらない。

そのまま帰宅後はぶっ倒れて何もできませんでしたもん。

反省も後悔も、あるんだよ

ちなみに今も私の目の前にはレインボーマウンテンが残っています。  
おのれ、どうしてくれようか。

と、いうわけッで本編には一切触れずにあとがき終了!!

次回、突撃しまーす

ではまた次回

## 覚悟

「なに、これ……」

モニターに映ったそれを見て、観鈴がそう呟いた。

モニターにあるのは、ある衛星写真。

森がサクラに浸食され、見るも美しい桜の森が出来上がっているのだ。

その隣には、何倍速かは知らないがそうになっていく映像も流れている。

こんな出鱈目な力は、一つしかない。

と、どうか数名はこの力を目の当たりにしているのだから、わからないはずがない。

「ブロッサムアンデット……」

「間違いねえな。あんどき見たのと同じだ」

観鈴の推測に、隣に立った土が肯定する。

あからさまなものだった。

これはもはや見つけてくれというふうなもの……というか言っているのだろつ。

これは誘いだ。

「だが……」

「行くしかない……ですよね？」

そう、行くしかない。

彼らに選択肢など、ありはしなかった。





「こっちの準備が整っていないうちは無理。出発は、明日」

「明日……」

「と、言うわけでききなりだけど、連れていける人間をここで振るわせてもらおうよ」

「！」

一刀の宣告。

だが、当然だろう。ことは一刻を争うかもしれないのだ。悠長になどしてられない。

「まず……仮面ライダーの方たちは……」

「俺ア絶対に行くぜ。文句は言わせねえ」

「文句はないよ。全員に来てもらいたい」

モモタロスの言葉に、一刀が首肯してそう言った。

彼らは戦力としては申し分ない。

一刀としては、彼らには中級アンデットの対処を頼みたいのだ。

無論、上級アンデットとの戦闘に参加してもらえれば心強いのだが、相手の中級がどれだけいるかわからないのでは、安易に上級の相手をしてくれとは言えない。

翼人は上級にあたる。それはもう決定事項なので、彼らにはまずこちらの相手をしてもらいたいのだ。

同じ理由でサーヴァントたちにも声がかかった。

セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、バーサーカー

そしてマスターである士郎、凜、桜もである。

キャスターは家庭がどうのこうのと結局来なかったし、そのキャスターの許可なしにはアサシンはあの場から動けない。

ギルガメッシュに至っては居場所すら知れなかった。

そして……

「ハクオロさん、あなたには来てもらいたい」

「わかった」

「じゃあ俺たちもついて「だけど、オボロさんたちはだめだ」なに？」

ハクオロが呼ばれ、それに対してオボロも意気込んでいたが、一刀が連れてはいけない、と来ることを許可しなかった。

曰く、<sup>トウスケル</sup> 国の方があまりにも危険だからというのだ。

一国の主が飛び出すということは、それだけでも大変なこと。今こうしてここに居揃っているのも、実は大変なことなのだ。

それなのに全員が戦闘に参加しては、どうしようもない。国を回すということは、そんなに甘くない。

「ハクオロさん一人抜いた以上、そっちから抜く余裕はないはずで。宮殿の修繕もまだ終わっていないでしょう？」

「う．．．ぐ．．．だがな．．．」

オボロも頭では分かっている。しかしそうはいつでもすんなりとは呑み込めないのだ。

みすみすと仲間が奪われ、そしてそれに奪還にも向かえないのはあまりにも悔しすぎる。

だが

「オボロ」

「……兄者」

反論しようとするオボロを、ハクオロが制した。  
その言葉には、絶対の信頼がある。

「私の留守を、お前に任せたい。アルルウと共に、帰ってくるからな」

「……兄者が言うなら仕方ねえ……今回は引いてやるからな」

「ツンデレエ。じゃあつぎは……」

「おい!!今なんか聞き捨てならねエ言葉が……!!」

そういうオボロを華麗にスルーし、一刀がエルルウにも声をかける。  
今回の戦いはおそらく大きなものになる。どうしても医療班が必要

なのだ。

その言葉に、手を握ってきてまで感謝するエルルウ。

次には……

「上条。お前にも来てraitたい」

「俺でいいのかよ？」

「そ。相手のアンデットにもし、永続する能力を持った奴・毒とかな？そういう「奴」の攻撃を食らった人のを助ける側に向かってもらいたい。要は医療班だ。戦闘員じゃない。」

「わかった」

「絶対に外とか出んなよ？お前はあくまでサポートなんだからな！？」

「わかった。殴ればいいんだろ？」

「こいつだめだ。わかってねえ」

そんな上条を何とか言いなだめ、納得させる一刀。

かなり疲れた顔をしている。

そして、残ったのは……

「圭一たちは……」

「解ってるさ」

「……ごめんな」

悟った、というよりも、最初からこうなることがわかったような顔をして、圭一が一刀に言った。

実をいうと、この一日にも満たない訓練などには意味はないのだ。

彼らが納得するための時間。ただそれだけ。

連れて行くメンバーは最初からすでに決まっており、そこに彼らは載っていなかった。

「わかってたさ。俺らじゃどうにもならない。俺たちの力は、そんなに強くない」

「うん・・・アンデットに勝てるなんて、そこまで強い力、私たちにないもん」

「ですので、皆さんに任せますわ。ぜーったいに梨花と羽入さんを助けてくるんですよ!」

圭一、レナ、沙都子と順番に一刀に声をかけ、頼んだと言って肩を叩いていく。

重い

誰かを救う、救わねばならないということは、ここまで重かったのかと、本格的な戦場慣れをしていない一刀は初めてその重さを知った。

無論、彼も元の世界では一国の主だった。



人の命の重さは嫌というほど知っているし、実際に戦では他国、自国共に民を失っていた。

戦場にも立ち、そこから目を逸らさなかった。

しかし、それは失う、ということを実感し、肝に銘じ、覚悟すること。

こちらの場合は、失わず、必ず全員で戻る。誰も失わない。もちろん最初からずっとその思いは変わっていない。

だが、今はその気持ちを心に秘めながらも、さらにほかの者のその願いも背負う。

自分の覚悟だけではないのだ。

他の誰かの覚悟をも背負うということ。

それは一体どれだけの重量があるのだろうか。

そして、自分の知る限り最も多くの願いを背負い、戦い続けてきた

「彼」はこれだけの重圧を背負っていたのか、と。

「……つたいに」

「え？」

「絶対に……助けて見せるさ」

今ならわかる。

「彼」がなぜああも「世界最強」と言っていたのか。

つまりは、そういつていなければ自信が保てないからだ。

焚き付けろ。

魂を燃え上がらせろ。

身体を動かせ。

信じ続ける。



夜が明ける。

瞬風のドックへと向かう、廊下の途中にある準備室。

そこで四人の翼人が、いつもとは違う服装でそこに集まっていた。

「準備は？」

理樹が扉の脇に寄りかかり

「オーケーだ」

一刀が長椅子にどっしりと座って膝に肘を付け

「大丈夫」

観鈴がパタンとロッカーを締め

「行くぞ」

クラウドが黒いコートをバサリと羽織ってドアを開けて外に出る。

もう、準備はできた。

黒いスーツに身を包み、ビシリと決めて、グラスンまでかけている。

7564

さあ、殴り込みだ。

あのクソ野郎共をぶっちめてやるぜ。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 覚悟（後書き）

翼人、一刀の覚悟でした。  
そして出陣。

蒔風が世界最強

だったらこっちが世界最優だ、と。

たぶんこの先で他の翼人も言っていくと思います。

7566

最後、なんでスーツかって？  
なんだかかっこいいからさー！！

この小説のキーワードは「熱けりゃいいじゃん」「だぜー！！

イラストとかでなんかキャラが黒スーツでキメて並んでるのを見ると  
燃えませんか？

ワンピースとか見るとそう思いますwww  
pixivでなのはそんなイラストも見たことあるし。

あと戦闘服で上る朝日に向かって行く姿を、斜め後ろ下から眺める  
イラストもかっこいい。

「行くぞ」みたいな!!

上条さんはあくまで医療班にしました。  
瞬風から出しませんwww

だから戦闘シーンもありません。

いつもお前の戦闘シーンがあると思うなよ!!  
ぜってー抜けださせないからなあ!!!

ちなみに私は上条さん大好きです。  
アンチではないですwww

でもなんか・・・彼まで入るとめんどくさくなりそうなので。

ただえさえ仮面ライダーとかサーヴァントたちが「周りで戦っている人たち」になりそうなのに!!  
最悪なのはたちもそうなりそう・・・



あ、でも電王とフォワード陣は少し絡ませるかも。

そろそろ最終決戦へと行きますよ……！

次回、突入……！！  
ではまた次回……！！

## 開戦

「来るかねえ？」

「来てもらわないと困る。そのためにあんなもん生やしたんだからな」

洞窟内

そこで五体のアンデットが立って話し合っていた。

最奥には石版があり、その少し前に少女たちが円形に並ぶ。彼らが立っているのはさらにその少し前。

姿は見えないが、横穴には無数のアンデットがひしめいている。

「桜あれをやったのが昨日の晩。だったら来るのはそろそろだ」

そういつてブロッサムアンデットがクイ、と顎を上に向ける。そのさきには岩の天井があるだけだが、そのさらに先の地上には確かに桜の森がある。

「これで来ないならもう直接連れてくるしかないな」

「これでどーにかなんのか？」

「そもそもあのままじゃどうにもならなかったんだ。やるだけやってみようぜ」

「そうだねえ・・・それに、来たみたいだぜ」

ゴ、ゴン・・・

洞窟の入り口に当たる場所。

岩で蓋をされたそこからそんな重い音を立てて、少しずつ崩れていき、外の光が差し込んできた。

それに反応してか、周囲の穴にいるアンデット達が近くまで出てきて、暗い穴の中でキラキラと眼光を灯してぎゃあぎゃああと騒ぎ出している。

そして、岩が崩れて全開された。

海から上る朝日が、まっすぐに洞窟の中を照らし出して入ってきた四人をシルエットにして黒く染め上げる。

「ようこそみなさん！ーですが、まねかねざる客というのは好みませんゆえに、とっとと名乗りを上げてくださいますいー！」

ドールマンアンデットがパンパンと手を叩きながら、おどけた態度で前に出、丁寧な言葉づかいから乱暴なそれに変化してそう言う。それに対して呆れたような溜息をだし、その四人が名乗りを上げた。

7571

「直枝理樹」

「クラウド・ストライフ」

「神尾観鈴」

「北郷一乃。俺たちの大切な仲間を返してもらいに来た」

ギイン……!!!!

彼らが名乗りを上げた瞬間、アンデット達の背後でそんな音がして、石版が淡く光りだす。

しかし、そんなことは気にしないとわんばかりに今度はクロコダイルアンデットが前に出て四人に言った。

「さて……来てもらって悪いが、早々におかえりただこつ。それともここでやるきか？洞窟が崩れれば、彼女らも死ぬだろうが？」

「……さいですか」

「……は？」

ジャコン

「言ったことを忘れてるようだな」

ガシヤ、ガキンツ

「翼人に人質は効かない」

ブオン、ガシヤコッ

「ここをぶっ放して、崩壊より前に助ければいい」

チャキ

「ちよつと、大胆かな？」

四人が次々と大型火器をや大型銃器を一刀の翼から取出し、それを構えて引き金に指を翔ける。

その光景に、アンデットどもがギョツとした。

自分たちはあんなものでやられないが、少女たちに当たったらいつらどうするつもりだ!？

「問題はない。俺たちの救助の方が早い」



「うおおおおオオオオオオオオオオ!?」

ガゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッッッ!!

いきなりぶっ放されたその無数の銃器の勢いにビビりながらも、ブ  
ロツサムアンデットがとっさに腕を地面に突っ込んだ。

直後、アンデット達と翼人たちの間に巨木が現れ、それがその銃弾  
や巨砲を受け止め、さらに洞窟の全域に張り巡らせられて崩壊を止  
めた。

その膨大な破壊のための物量は防御に出した巨木を跡形もなく吹き  
飛ばし、アンデット達を露呈させた。

「なんて無茶苦茶な奴らだ……!!!!」

「第二射!!」

「させるかアッ!!」



そこからさらにぶっ放そうとする翼人共に対し、ブロッサムアンデットがもうさせないといって砲撃を撃ち放った。

それを受けて四人を爆煙が包むが直後、その煙の中から現れたのは、誰も来ていない空のスーツだった。

「なに！？うおっ！？」

それを見て驚くブロッサムアンデットだが、目の前に翼人が現れてさらなる驚愕の声を出した。

見ると、ほかのアンデットの元にも翼人が掛け迫っており、今にも戦闘を始めそうな勢いだった。

「来い！！」

「っつ、おっつー！？」

まず、クラウドがドーベルマンアンデットの後ろ首をひつつかんで天井に投げ放ち、さらにそれを追って自身も突っ込んでいった。

その勢いは天井を突き崩し、そのまま地上にまで突き出していった。

次に、一刀だ。

一刀が無数の武器でエレクトリックエールアンデットを横穴に押し込むようにして突っ込み、そのまま暗闇の中へと消えていく。

さらに理樹。

クロコダイルアンデットの四肢にリング状にしたバリアをはめて動きを止め、ドてっ腹にハンマーにしたバリアをブチ当てて洞窟の入り口外へとすっ飛ばす。

そのままクロコダイルアンデットは海へと弾き飛ばされて落ち、理樹も後を追って飛び込んで行った。

観鈴はブロッサムアンデットを相手にし、クラウドが開けた穴から地上に出、桜の森の中へと突っ込んで向かう。

「各個撃破する気が・・・だが俺の相手は誰になのかな？」

そこで取りこぼされてしまったコックローチアンデットが、さて誰の加勢に行こうかとそれぞれ四人の向った方向をキョロキョロと見渡し始めた。

さらには横穴からは中級アンデットもわらわらと出てきている。

こいつらが加勢に向かったら、翼人と言えども勝てるかどうか。

しかし、そうはならない。

「てめえの相手は俺たちだ害虫野郎！」

クラウドの開けた穴がガラガラと大きな穴へと広がったところで、連れてこられた「EARTH」メンバーが穴を囲むようにして見下ろしていた。

そして一気に飛び降りてきて、その他大勢のアンデットもとの戦闘が始まった。

「おおおお、派手だねえ。じゃあ俺は今の内……」

「テメエの相手は俺だといつたる？」

『またコックローチの相手かい。だがその力は検索済みだ』

そこから穴をはいあがりどこかへと行こうとしたコックローチアン

デットを待っていたのは、仮面ライダーW、ディエンド、そしてハクオロの三人だ。

まるで最初からこいつがこうして上がってくることを把握していたかのように、この三人は待ち構えていた。

『こちらからも援護します』

「ありがとう。でも僕らでやってみるよ。翼人たちの援護にも何人かもう向かってるみたいだし」

こうして、戦いの幕は開かれた。

終末に笑うのは、いつたいだれなのか。

《くっくくく……せいぜい戦え。その力  
に完成させるがいい》

私のため

まだ、終わりは見えない。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 開戦（後書き）

ド派手に殴り込みしての開戦でした！！  
でも短いなあ……

と、いうかなんというストロングワールドWWW  
なんのためにスーツ着たのが、こまけえことはいいんだよ！

カッコ良ければそれが正義だ！！（えー

と、言うわけで

クラウドVSドールマンアンデット

理樹VSクロコダイルアンデット

一刀VSエレクトリックエルアンデット

観鈴VSブロッサムアンデット

を基本といたしました。

もちろん、各人に援護というか助けはいますけどね。

そしてコックローチアンデットの相手は何人かでもらうことに  
しました。

でもこうなると誰から書こうか悩むなあ・・・

自分がこういう戦闘書くといろいろなところを転々と書いていくから順番が自分でもわからなくなりますWWW

もう書いてる勢いで決まっていますからね。

あらかじめ順番なんか決めてませんよWWW

だから次回も誰からかわかりませんWWW

とりあえず次回、戦闘ですとしか言えない!!

ではまた次回

## 戦闘

ドオウドオウドオウ！！

「当たれッ！！」

ゴ………スウ、ドオン！！！！

森林内

桜の花びら舞う中で、ブロッサムアンデットが観鈴に向かって砲撃をいくつも撃ち放っていた。

その砲撃一発は、聖人タイプ　つまりは治癒に特化した観鈴であるならば一撃直撃したらそれだけでダウンをとれるという威力だ。観鈴だって翼人である以上、ある程度の防御力を持っているにも関わらず、である。

実際観鈴はなのはのディバインバスターやWのトリガーエクスプロージョンを防ぐことはわけないぐらいの実力は持っている。



それを優に凌ぐ砲撃を放つブロッサムアンデット。  
しかし、いまだにブロッサムアンデットは観鈴を仕留められてはいなかった。

「すごい砲撃・・・せっかくの桜がみんな散っちゃうね」

「む・・・・・・・・」

荒れ狂う爆発による暴風でかき上げられる髪を手で押さえながら、見当違いの方向へと飛んで行った砲撃を見やって観鈴が呟いた。

当然なことながら、ブロッサムアンデットの放った砲撃はどれもが正確に観鈴を捉えていた。

何もなければ必ず相手に直撃していたし、直撃すれば先にも言ったように観鈴はそれだけでダウンだ。

しかし、ようは「当たったら」の話。

「衝撃波・・・・・・・・それをうまく扱って砲撃の軌道を滑らかに逸らしたか・・・・・・・・!!」

「すごいでしょ？観鈴ちゃんイエイ！」

ぶいつ、とピースする観鈴に、ハッ、とあきれたように息を漏らす  
ブロッサムアンデット。

衝撃波、と聞いてもあまり大きな力には聞こえないかもしれない。  
昨今のキャラクターたちの能力としては、もう新鮮味がないからか  
もしれない。

もはやそれは表現や描写においてのみ使われるような衝撃波<sup>それ</sup>だが、  
思えばこれほど厄介なものもないだろう。

よく聞く、ということとはつまり、どんな攻撃においてもそれは存在  
し、すべてに共通する万能の道具なのだから。

この場合もそうである。

彼女は衝撃波の膜を作り、そつ、とブロッサムアンデットのはなる  
砲撃の先端に当たって砲撃の行く先をリード、変更させていたのだ。

「あなたの砲撃はすごいよ。でも、当たらないんだったら、怖くない」

そう言って衝撃波を小さな弾丸にし、さらに針のようにとがらせて回転、加速させて打ち出していく観鈴。

それはブロッサムアンデットの硬い樹皮に命中して抉り、その表皮の下からアンデット特有の緑色の血液を流しださせた。

が、五、六発受けたところでブロッサムアンデットが腕を振ってその弾丸を撃ち払い始めると、再び観鈴に向かって砲撃を放ち続ける。

それを誘導して回避する観鈴。

「見事な誘導だ！！しかしだな、そのような精密なコントロール、いつまでも続くものか！！」

「・・・・・・・・」

砲撃を撃ち、観鈴からも打ち出されてきた衝撃波の砲撃を回避、薙ぎ払っていくブロッサムアンデットが指摘する。

このような精密作業をしなからの攻撃。

それは確かに観鈴の体力と神経を確実に削っている。

それに気づかれ、観鈴の頬を小さな汗が垂れた。

「体力では流石に私の方が上とみた。このまま体力切れを待ち、勝負を決めさせてもらっぞ！！」

「ッ……やってみるといいよ……その前に終わらせるから！！」

激しい砲撃による猛攻と、それに見合った高度な防衛、反撃。

純白と桜色の嵐が吹き荒れる。



その漆黒の闇が詰め込まれた洞窟の中で、一瞬だけスパークが上がって二人の姿が見えた。

どうやらエレクトリックエールアンデットが電撃を放って一刀から離れようとしたらしい。

いま二人はかなりの速度で飛んでおり、エレクトリックエールアンデットにとってはきつい状態であった。

正直呼吸もそれなりに苦しく、十分な電量は生み出せない。

しかし、それでも何とか脱出するだけの電力は出したし、それを見舞ってやった。

これでこの状況からは脱せられる。エレクトリックエールアンデットはそう思っていた。

だが、その一刀の右手は一切の力を緩めることなく、エレクトリックエールアンデットの首元を掴んでいた。

(……………!?!?こいつ……手を離さない!?!?否、そもそも電気が通って……………)

「残念な。今この右手に電気は通らないぜ」

「な……………ッ!?!?」

ガゴオツツツ!?!?!!

エレクトリックエエルアンデットの気持ちを察したかのように一刀がそう呟いた直後、壁に激突してエレクトリックエエルアンデットの体が岩盤に叩きつけられた。

叩きつけられた衝撃と、衝突音が洞窟内で反響した振動とで脳ミソがグワグワと揺れる。

「……………のヤロ……………」

「視界の効かないこの暗闇。お前に俺を捉えることはできるか?」

「!?!?!?!」

エレクトリックエエルアンデットが立ち上がって周囲を見渡した瞬間、どこからかその声が聞こえてきて瞬時に身構える。

暗黒漆黒、なんでもいい。

とにかく真っ暗だ。

一切の光が差し込まぬ洞窟内で、一刀は確実にエレクトリックエエルアンデットを追いこんでいた。

「俺には見えるぞ、エレクトリックエエルアンデット。ここで一気に終わらせてもらおう」

この暗闇の中、エレクトリックエエルアンデットにだって相手を察知するすべがないわけではない。

まず一つに、電気を発すればいい。

そうすれば先ほどのスパークのように周囲が明るくなって、見えやすくなる。

しかし、それをしてしまえばこの暗闇の中自分の居場所を教えてし



まうようなもの。  
そんなことはできない。

それに対し、一刀には相手の姿がしっかりと見えていた。

翼人の力という物は、かなり互換性が高い。

基本的な肉体強化や各人の持つ能力に使うのもありだが、様々な世界の様々な力にも変換可能だ。

有名どころでは「魔力」や「気力」はもちろんのこと、言ってしまえば「瘴気」だって（その力のことをしっかりと知っていれば）変換可能だ。

そして今回一刀が用いたのはその有名どころである「魔力」

その魔力を目に回すことで、この暗闇でも相手の姿がはっきりと見えていたのだ。

「時間をかけている場合じゃないんだ」

「……クソ！」

「さっさと終わらせてもらおうー!」

一刀がそう叫んで翼から無数の剣を出し、それを携えてエレクトリックエエルアンデットに向かって突っ込んでいった。

突進して、まず一撃。

エレクトリックエエルアンデットの寸前でUターンするように体を返して、翼でその体を切り裂く。

鮮血が散り、エレクトリックエエルアンデットの呻く声が聞こえてきた。

そしてそのまま回転し、腰に携えた「流星剣」を構え、居合の形にかまえて一気に切り裂こうと呼吸を止めて

「そこにいるのか」

「!?!」

「カアッ！！！」

バンツツツ！！！！

身体の痛み、そして足音。

今までは反響していたために、音から居場所を掴むことはできなかった。

しかし、この直接攻撃。そして間近での足音。目の前に一刀がいるのは解っていた。

だからエレクトリックエエルアンデットはこのタイミングでありつたけの力を使ってスパークし、一刀の目の前で強烈なフラッシュと焚いたのだ。

「グああああああアアアアアア！！！！！！」

「今まで暗闇にいて、しかもその状況でよく見えるようにまで視力を上げていたんだ。もう今は何も見えまい？」

「ッ、オオッ！！！！」

両目を押さええて呻く一刀だが、即座に流星剣を手にエレクトリック  
エエルアンデットに向かって切り掛かって行った。

が、相手はそれをヒョイヒョイと避けてしまい、一刀は逆に重い拳  
の一撃を腹部に食らってしまつ形になる。

「ゲホツ……」

「この状況でもまだ俺の位置を捉え、正確に斬りつけてくるのはさ  
すがだが……む」

ブシュッ

そういつて相手を称賛するエレクトリックエエルアンデットだが、  
直後一刀を殴った拳が裂け、そこから血がしたり落ちてきた。  
あの中で、一刀はさらに拳のガードまでしていたのだ。

そしてそれを剣で行ったために、こうしてこいつの拳が切れた、と  
いうことだ。

「この程度は……ハンデだ」

目をしょぼしょぼさせながら、一刀がガラリと立ち上がった。

その手には多くの仲間たちの武器。

「こっちはまだお前の居場所がわかるぞ。翼人を舐めるんじゃない  
い」

「ほう……視力を奪われ、まだやる気か？行くぞ!!」

エレクトリックエエルアンデットが走り出す。  
猛然と走り、向かい、そして

「とか言いながらどこ行こうとしてんだお前はア!!!!」

ドゴゴゴゴン!!!!!!

その行く先に、行かせはしないと剣が突き刺さった。

「・・・・・・・・・・」

「解ってただよ。そーゆーことするってことぐらいは」

「いまだ目は開いていない。」

「視力は奪われたままだ。」

「だが、一刀はそれでも確実にこの場にいる相手を認識していた。」

「お前・・・・・・・・そこまで邪魔して・・・・・・・・」

「悪いね。だけど・・・・・・・・オレを相手にするんなら、「EARTH」  
全員相手にする気で来てもらわないと」

「地獄行きにすんぞ!!」

「俺の翼は絆の翼。みんなと繋がっている以上、俺に負けはない！」

洞窟内の戦い。



だが、いまだこいつに当たった攻撃は一発もない。

「鈍い遅いトロい!!!その程度のスピードかい君たちハア!!!」

「オオツ!!!」

素早い相手に対し、ハクオロの体が縮み（それでも二メートルとまだ巨体だが）、コックローチアンデットのスピードにかろうじてついていっていた。

流星は神として謳われていたものである。

おそらくはこのスピードに対抗するために行った急激な形態変化なのだろう。

しかし、コックローチアンデットはWのトリガーフルバースト、デイエンドのブラストの弾丸すべてをこともあるるか、ハクオロとの肉弾戦をしながら回避していた。

「馬鹿・・・な!!!」



コックローチアンデットの撃ち出す拳を両腕で受け止めて後退させられたハクオロ。  
そこにWが弾丸を放ってゆくのだが、それはすべて弾かれてしまい、全く効果があげられない。

《ATTACK RIDE SLASH!》

と、その直後ディエンドがコックローチアンデットの懐に現れた。

おそらくはインビジブルのカードで姿を消していたのだろう。

そして、ここでカードをさらに装填、銃口から伸びた青いエネルギーで形成された刃で、コックローチアンデットの胸を思いっきり薙いだ。

「ゴオッ!?!」

「よし!?!」

コックローチアンデットの腹からはつつすらと血が滴り、そこを押しさえてコックローチアンデットが片膝をつく。

そこに畳み掛けるかのように、その体を焼き尽くそうとハクオロが火炎を口から放射した。

さすがにこれだけの炎には弱いのか、コックローチアンデットがバツ、とその場を飛び退くが、背後に迫っていた新たな脅威に気付いていなかった。

《メタル！！マキシマムドライブ！！！！》

「！？」

『「メタルブランディング！！！！」』

超々加速のできるという油断、余裕、驕り。それがこうして、今まで回避できていた攻撃を食らってしまうという結果に結びついた。

こいつの弱点は、そこだったのかもしれない。  
そして

ドゴオウツッ！！！！！

「（スタツ）やったか！？」

『手ごたえは確かにあったね』

「……………」

地面に叩きつけられ、土煙に紛れて姿の見えないコックローチアン  
デット。

そこに視線をやって、ディエンドがとりあえずラウズガードを投げ  
た。

が

ビッ！！という音とともにカードはコマ切れにされ、直後彼ら三人  
は地面に叩きつけられる結果となった。

「がっ」

「グワァ！」

「ウオツ!？」

「さっきのはやばかったぞ。炎に重圧とか……オレを本気で叩き潰す気がよ」

倒れる三人の前に、いきなり現れるコックローチアンデット。

速い。

まったく攻撃の動作が見えない。

「もう出し惜しみなどせんぞ。最初からこのスピードでいかせても」

「遠慮……したいね」

「あ、すぐキレルあたり……っと、単細胞の害虫野郎ってわかるよな」

『出来れば僕もこいつのことは検索したくない』

そういつて立ち上がる三人。しかし、この状況では戦闘に持つていくことすら困難かもしれない。

「ハクオロさんはほかの何人かを連れてきてください」

「なに？」

「この中で集団あっち戦闘に入つて戦力になるのは君さ。だからその代わり、あっちから誰かを呼んできてもらいたいんだ」

「………わかった」

メンバーの入れ替え。

これ自体は最初から想定していたことだ。

集団戦闘をしているのは中級アンデットばかり。

そちらの戦闘は相手がそれほど強くないため、それなりに楽な現場

だ。

ただ数があまりにも多いので、どれだけ戦えばいいのかわからないというのが不安なところだが。

コックローチアンデットの相手をずっとできるような人間などそうはいない。

翼人相手でも手こずるのだ。

メンバー三人そろったところで勝つのは至難の業。

だったらローテ ションしてこいつと戦い、翼人が来るまでの時間を稼げばいい。

幸いにして、瞬風の中には結構な医療班がいる。

もしダメージを負いすぎたら、そっちで回復すればいい。

だからこうしてメンバーが入れ替わるのは別にかまわない。最初からそのつもりだったから。

想定外だったのは

(「こちらの消耗が早すぎる……強い……!!」)

コックローチアンデットの異常な強さだった。

この状況で、こいつはまだまだ速く、そして攻撃は重くなる。

この状況で、翼人が来るまでの時間稼ぎをするなどということは  
・・・

「悪夢にしてはきつすぎるぞ・・・！！！！」

皆が戦う現場に向かって、ハクオロが呟く。

この戦い、戦力差はこちらの方が最悪低い。  
せめて上級アンデットと翼人の数さえ合えば・・・

ふと、一人の姿が頭に浮かぶが、すぐに頭を振ってそれを掻き消す。

ないものねだりをしている場合じゃない。  
今のこの状況を、確実に乗りきらねばならないのだ。





「一薙ぎで中級アンデット五体を一掃。さすがですねえ（ドンドン！）」

そう言いながらも、クラウドへと発砲を続けるドーベルマンアンデット。

それをも弾くクラウドだが、服はすすけており、頬にもつつすらと切り傷が出来ていた。

さっきからこいつはそうだった。

下手な戦闘は行わず、どこから出てきたのか分からないが中級アンデットを呼び出してそれをクラウドにぶつけていたのだ。

「オレアまだまだ未熟者よ。ですからこうして入念にいかっせてもらいまっせエ！！」

「こいつ……」

「イケイケイケえ！！！！」

ガアアアアアアアアアアアアアアアアアああ！！！！！！

一歩引き、無茶はせず

自分の力量を見て、前面衝突は避けるこのアンデット。  
絶対に周囲からアンデットが離れない。

「かかって……こい!!」

「俺は翼人ほど強くないんだ。賢く狡猾に、行かせてもらおうまじょうな!!」

「……ふん」

クラウドが剣を握り、ダブルマンアンデットへと斬りかかる。  
それを遮る有象無象のアンデット。

相手は強敵。

どれも一筋縄ではいきはしまい。

t o b e c o n t i n u e d



## 戦闘（後書き）

各場所での戦闘でした！！

理樹はどこ行ったかって？

彼は……ほら、海中に行っちゃったからカメラが大変なんだよ！！だからさ！！

蒔風

「何言ってるんだあんた」

状況としては

観鈴はギリギリと削られ。

一刀は暗闇の洞窟で目が見えず。

クラウドは取り巻くアンデットに邪魔されていますね

蒔風

「コックローチアンデットにはどんどんローテで戦うみたいだな」

メンバーが持つかどうかだよなあ……

と、いうわけで次はとりあえず理樹の戦いでいきますかね！！

ではまた次回

海中

ゴポリ

「海中で私を相手にしようとは、思い上がったか？」

ゴポゴポゴポゴポ

「本来川にすむワニである私ならば、海の中なら対等に戦えると思  
ったか？」

ガボツ！！

「残念だがな、淡水だろうと海水だろうと、アンデットわたしには関係な  
いのだよ！！」

ゴゴツ！！



理樹は今、全身をバリアで包んで海中で戦っている。

クロコダイルアンデットの突進は海中でさらなる加速を見せていた。直進のみの動きだが、その速度は弾丸のそれに近い。

それをかろうじて回避する理樹だが、掠った時の振動は確かに、理樹へとダメージを重く、鈍く、伝えていた。

「突っ込んで来い……返り討ちだ!!」

「ぬお!？」

Uターンして再び突進してくるクロコダイルアンデットに、理樹がバリアでの刃を向けてカウンターを狙った。

あの速度で突っ込んで来れば、確実にまっふたつだ。

しかしガキイ!!という甲高い音が海中に響き、それがかなわなかったことを教えてくれていた。

「突進だけかと思ったか? 甘いぞ翼人」

「くそ……」



「貴様のバリアを破ったのは、この牙であるということをお忘れか  
！！！」

バクアアッ！！！！

噛みついてきた理樹の刃を、頭ごと振り上げて碎き折るクロコダイ  
ルアンデット。

その反動に理樹の両腕があげられてしまうが、そこで理樹の双眸が  
ギリリとクロコダイルアンデットを睨み付けた。

「そつちこそ舐めてるんじゃない？」

「なに？」

「僕の刃が、これだけでも思ったの！？」

そう叫び、理樹が拳をグツ、と握りしめた。  
すると海中の、今まで何もなかったところに、無数の刃が現れてそ  
のすべてがクロコダイルアンデットに向けられているではないか。

「!?!?」

「これくらいのモノを作り出すなんてのは、僕にとっては朝飯前さ」

その数は十や二十を軽く凌駕しており、まるで満天の星でも見ているかのように刃が周囲を覆っていた。

• これだけの刃を受けてはさしものクロコダイルアンデットも……

「ぐおお……!?!?」

「逃がさないよ。何のためにここまで接近したと思ってるのさ」

その場から逃げ、回避しようとするクロコダイルアンデットだったが、またもや四肢                    だけではなく、尻尾の先端、胴までもをバリアで封じられ、さらには上顎と下顎もリングで閉じられてしまった。

回避不能

理樹のバリアの硬度はあまりにも強い。

自分も破壊できるとはいえ、それは牙を顎を使ってこそその偉業。

とてもじゃないが動きをこう封じられた状態で、この刃を耐える硬度は自分にはない……！！！！

「つ……よい……」

その状態で、クロコダイルアンデットが口の隙間からそんな言葉を漏らした。

しかし、理樹は頭を横に振ってそれは違うと言う。

「そっちの方が強かったよ。最初から全部。だからこそ、あんたは僕に対して速攻でデスロールを決めるべきだったんだ。敗因はあんたさ。下手な自信をつけて、僕相手なら勝てると油断していた、あんたが敗因だ」

「おのれ……きさ……」



この海中内、理樹は決して十分に酸素があつた状態ではなかった。翼人の力を用いてこのバリア内での空気をかるうじて生産、戦闘を行っていたに過ぎなかったのだ。まあ、それでもここで戦わなければほかの上級と合流されて面倒になるのだから仕方がないのだが。

そして、その酸素がそろそろ尽きてきた。

流石に翼人と言っても慣れていない「酸素を生産」というのは疲れ  
るらしい。

無論まだまだ出し続けることはできたが、なるべく無駄な力は抑え  
たい。

それに目の前であれだけの刃が突き刺さつたのだ。全身へのダメー  
ジに、クロコダイルアンデットは動けまい。

ザパア、と理樹が海面から顔を出し、そこで呼吸をする。

やはりそれなりに苦しかったらしく大きく深呼吸する理樹。

だが

(終わったと・・・思うなよ・・・オ!!!)

海中では、クロコダイルアンデットまだ動いていた。

最初の数撃は喰らったものの、それによって体を縛っていたリングも砕け、自由に動くようになっていたのだ。

そうなれば後は防ぐのみ。牙を、爪を、尾を使って刃を弾き、砕き、何とかしてそのすべてから身を護ったのだ。

とはいってもやはり体に残ったダメージは相当なモノで、驚異的な肺活量を誇るクロコダイルアンデットの口から気泡があふれ出てきていた。

(ちょうどいい・・・息継ぎついでに、貴様のその魂)

ゴオツ！！

( 噛み砕いてやる！！！！ )

ますでスクリューでもついているかのような加速で、一気に飛び出していくクロコダイルアンデット。

目指すは海上で息継ぎをする理樹。

キラリと牙が光り、猛然と理樹の背中へと襲い掛かり





そこでは仮面ライダーたち、サーヴァント数名、そして魔道士も数名戦っている。

「うわっ!!」

「スバル!!」

「危ないっ!!っど……こらこら、女の子には優しくしな、よっ  
ッ!!!!」

倒れたスバルのもとにウラタロスが加勢に入り一体アンデットを吹き飛ばしたが、いかんせん相手の数が多すぎる。

まだまだ出てくるみたいだし、こちらの戦力はじわじわと削られて  
いっていた。

「ありがとうございます!!」

「いやなに。かわいい女の子を傷つけるような奴にお仕置きしただけ  
けな」





「ハクオ口さん!!」

「誰があつちに向かつてくれ!!強すぎる………こつちにはわたしが加勢する!!速く!!」

「わかりました!!じゃあ私たちが!!」

「おい、俺らも行くぞ!!」

「ちよ、そんなに抜けていいの!?!」

「答えなんか聞いてられつか!!」

「あー!!それぼくのセリフ!!!!」

ハクオ口の参入から、フォワード陣の四人とイマジンたちが走り出していつてしまった。

急に走り出したものだからキンタロスや良太郎から抜け出さず、哀れ良太郎はプラットフォームで置き去りにされてしまった。

「ちよ、ま……およお!?!」

「がるああアアアアアア！！！」

そこからモタロス達を追いかけようとする良太郎だが、その行く先をアンデットが立ちふさがってしまったので、そこから逃げるので見失ってしまった。

「あつちはたぶん大丈夫だよね……はあ、いつもなんでこうなるんだろ。変身」

そっぽやきながら、良太郎がケータロスを取りだし、ライナーフォームへと変身しようとする。  
だが……

グヴォーン！ 《Wing Form》

「降臨！満を持って……」

『ジーク！？』

「喜べ。哀れにもお供たちにおいていかれたお前を、私が拾ってやったぞう？」

『いや、僕は大丈夫だったんだけど……』

「遠慮するな。行くぞ、不幸なるお供よ!」

『不幸なる、って言わないで————!!——!!』

「ん?」

「どうしました?上条さん」

「いや、なんか呼ばれた気が……」

その上空、瞬風の中

そこでは怪我を負ったメンバーが治癒などを受けていた。たった今も何やら毒を喰らったメンバーに右手を当て、治癒していたばかりだ。

「これで大丈夫だろ」

「ああ……げほ、楽になった」

「でもまだ体力が戻ってません。これを飲んでください……」  
こっちの方も優秀なメンバーがそろっているためにすぐに回復、出撃していくのだが、時間が経つごとに人数が多くなっていく。

押されているのだ。

これだけの混戦だと、せつかく倒した相手もカードを投げられずにまた復活してしまうということもあるのだから、しょうがないと言えはしょうがないのだが……

「それを抜きにしても多すぎる……」

「やはり直接石板を叩くしかないんじゃないか？」

「ダメ。アンデットが蔓延って守ってるし、その前には彼女たちも並んでる……砲撃も撃てないわ」

「全部駆逐してからか……」

「……ねえ、だったら、考えがあるんだけど」

「長岡さん？」

.....

「俺ら、参上!!」

「助けに来ました!!」



『急いでくれ。今は海東大樹ひとりで耐えているようなものだ！！』

《ORGAN! KAMEN RIDE PARADISE LO  
ST》

「おおおおおおお！！！！！！！！」

《FINAL ATTACK RIDE O O O ORG  
A！！》

地面に倒れて動けないWエクストリームを見て、その場に到着したメンバーは驚愕していた。

ディエンドはすでにコンプリートフォームに強化変身しており、ケータッチで仮面ライダーオーガを呼び出していた。

オーガの剣から金色のエネルギーで作られた巨剣が伸び、ディエンドライダーからはシアン色のエネルギーで同じように刃が作られている。

そしてシンクロした動きでコックローチアンデットに向けてその刃

を振り下ろしたのだが……

「イイイイイイイイイイ、ヤアツツツ!!!」

まるで奇声のような気合いを放ち、その刃をけり砕くコックローチアンデット。

そこから猛スピードで突進し、ディエンドへと迫ってその装甲を粉砕しようと拳を握る。

「オラオラあ!!!もっと見せてよ!楽しいぜエ!!!」

「その動きで近づかないでくれるかなッ!!!」

《KAMEN RIDE RIOTROOPER!!!》

自身に迫るコックローチアンデットに向け、ディエンドがライオトルーパーを五体召喚して向かわせるがまるでドラックに小石をぶつけたようなものだ。簡単に弾き飛ばされて爆発、消滅する。

しかしその爆発の向こうからさらに召喚された仮面ライダーサイガが現れて飛んできた。

バックパックで宙を飛び、コックローチアンデットに向けて銃撃を放ってきている。

だがそれを軽々と飛び越え、真上から顔面に拳をめり込ませてマスクを破壊、そのまま着地と同時に地面に叩きつけるコックローチアンデット。

その衝撃にサイガも消滅するが、その間にディエンドは次の攻撃を始めていた。

《G4! KAMEN RIDE PROJECT G4》

《FINAL ATTACK RIDE G G G G4!  
!》

「喰らえ!!」

そう叫んで隣に召喚されたG4と共にミサイルを四発、二人で計八発をぶっぱなしてコックローチアンデットを吹き飛ばさんとするディエンド。

コックローチアンデットはまず、三発を蛇行して回避し、四、五、六、と階段を上るかのよう踏み台にして躲す。

そして七発目は羽根を広げて羽ばたき、何とかして回避した。

しかし

「一気に放たなくてよかったよ」

「オウツ!？」

「ドーン、だ」

ドオンツッ!!!

そうして回避したものの、八発目のミサイルが命中してとんでもない爆発と共にコッククローチアンデットの上半身が宙で仰け反り、後頭部から地面に落ちて行った。

やっと一発、攻撃らしい攻撃が命中した。

しかもケータツチで召喚したライダーでの攻撃だ。それはカメンライドで呼び出したそれをはるかにしのぐ。

「や……つた……ッハ……はあ、はあ……」

それを見てディエンドが膝をついて変身が解除される。

海東の体は汗びっしょりで、まるで今まで土砂降りの中で突っ立っていたかのような様子だ。

四つん這いで息切れも激しく、だらりと顎を垂らしている。  
汗が地面に跡を作った。

「海東さん!!」

「やあ……遅かったね……柄にもなく頑張っちゃったよ」

そういつてスバルに担ぎあげられる海東。

そこに変身を解いた翔太郎も、まだ体力のあったフィリップに肩を借りてよろよろと寄って来た。

「でも、これでアイツはやったんですよね!!」

「ンだよ、オレら来た意味ねーじゃねエか」

疲弊した三人を見て心配する者の、スバルは一体倒したと喜び、モタロスは無駄足（というより活躍できなくて）ぶーぶー言っていた。

だが、翔太郎や海東の目にはとてもではないが勝利した、という確信は宿っていなかった。

「君らは・・・翼人たちがミサイル一発で死ぬと思うかい？」

「・・・・・・・・え？」

「そういうとき。まだ終わってないよ」

そうフィリップが呟いた瞬間、ミサイルによる炎の中にゆらりと影が揺れて、コックローチアンデットが歩み出てきたではないか。

「これで終わりかい？どんなライダー出してくれるのかと期待して

いたんだが・・・じゃあもういいな」

そういつて楽しみはもうないのかと残念そうな声を出してコックロ  
ーチアンデットがゆっくりと歩き、だんだんと加速して走りだした。

それに向かってスバルやエリオ、キンタロスらも駆け出し、迎え撃  
とうと応戦していく。

そこでモモタロスが振り返り、よっしゃ行くぜと声をかけた。

「おお~~~~し、やっとオレの出番かあ~~~~。良太郎!!行くぞ!  
」!

クルッ!

「.....あれ?」





## 海上

理樹に迫っていたクロコダイルアンデットは、海面から飛び出すことなく何かにつつかっていた。

理樹はその何かの上に立っており、足元から来たその振動に特に何の感情もなく純粹に「何してるの？」と首をかしげていた。

「貴様……これは……」

「ああ、バリアだよ？海の上に飛んでるのも疲れるからね。これは出しておけばそれだけでいいし」

理樹が乗っているのは海面に出したバリアだ。  
クロコダイルアンデットはそれに衝突して鼻をつぶしたのだ。

このままでは息も切れそうだ。

クロコダイルアンデットはとりあえずそのバリアの範囲から逃れて海面から頭を出そうとするのだが……

(ど、どこまで続いておるのだ……こいつ……海前面にバリアを張りおったんじゃないだろうな!?)

そう、そこからいくら見渡し、移動しようともそのバリアの終わりが見えない。

それに対し、本当に何でもないかのように理樹が言う。

「足場って広い方がいいよねー？だからおつきくしてみました」

星が黒い。

黒いよ理樹君。

クロコダイルアンデットはそれでもあきらめず、牙を立てて回転、バリアを粉碎しようとするが……

ギャリイッ！！

「ッッ！？」

バリアが猛烈な勢いで回転し、牙と接触した瞬間にクロコダイルア  
ンデットを体ごと弾き飛ばした。

理樹のバリアはそこに壁となつて現れるだけではない。  
自由に動かすことが可能なのだ。

思えばこれほど応用力のある能力もあるまい。

そしてこれは、さらにエグい物へと変貌する。

「いやあ、僕ってなかなか怒らないキャラなんだけどさ」

ググッ……

「今回はかりはキレてるんだ」

海面に張られたその円形のバリアの端が海中に回り込んできて、円柱のように形を変えてクロコダイルアンデットをその中に閉じ込める。

「だから……結構きついよ？覚悟してね？」

そして、その底の部分にプロペラのような刃が出来上がって……

「おい……貴様まさか……!!」

「スイッチオン」

ギャオオオ!!!!

回りだした。

その回転はすぐさま円柱の中に渦を作りだし、クロコダイルアンデットを引き込んでいく。

何とかして逃げようとするクロコダイルアンデットだが、周囲を覆う円柱の壁までもが回転を始めてしまったために、攻撃しても弾かれてしまう。

「君の攻撃は一点にぶち込まれると大変なことになるけど、こうしちゃえば大丈夫だよな」

「またもや黒い。」

しかも、その円柱はだんだんと縮小してさらに逃げ場をなくしていく。

もうこれがおかかわかるだろう。

そう、ミキサーである。

何とも恐ろしいものを作ったものだ。

ミキサーの天井部分をドンドンと叩くクロコダイルアンデットを、しゃがみこんでみる理樹。

「無駄だよ。僕は世界最硬。そんなんじゃ弾かれるだけだよ？」

「お、まで……流石にこれは……いくら不死でもひど……  
・!！」

「フル パ ワ ア」

「オオオオオオオオおお!!!!おっ……ガっ……あ、ああ  
ゝ……アゝ あああ!!!!……」

そして、彼の体が巻き込まれる。

瞬時にして海水がメロンソーダのような色合いになり、アンデット  
がその場にいた唯一の証になってしまった。

それを見て、理樹がすつきりしたと言わんばかりの溜息をつき、バ  
リアに小さな穴をあけてカードをちよん、と浸した。

するとその緑色の液体がずるとカードに吸い込まれ、一滴残ら  
ず吸収され、カードにはクロコダイルアンデットの絵が映り、直後  
に消滅する。

「ふう……すっかりはしたけど……」

そういつて理樹が海岸線の先を見る。

「遠くまで来ちゃったなあ……一発ですごく遠くまで行くんだもんな、こいつ」

クロコダイルアンデットの突進の距離と、逃亡しようとした際の移動によって陸からかなり離れてしまった。

理樹がその背に薄緑の翼を開翼し、飛び立つ。

ほかの仲間は無事だろうか。

そう思いながら、理樹は陸地へと戻って行った。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



## 海中（後書き）

どうだったでしょうか海中での戦い！！

今回の理樹君は鬼理樹、略して理鬼君になってもらいました。  
彼は起こると怖い（ガタガタブルブル

デイエンドのコンプリートは勝手に考えました！！  
デイケイドが「ライダー名・カメンライド・フォーム名」だったの  
で、こっちは「ライダー名・カメンライド・映画タイトル」にしま  
した！！

どうですか？

こっちでの召喚はカメンライドより高性能だということにしました。  
そうでもないとする意味無くなっちゃうしwwww

そしてかわいそうな良太郎。大丈夫、ジークがいるからね！！

多分次の話あたりでモモたちは彼女らに憑依するかもwwwwww  
やばいそれ面白いwwww

そして長岡さんはどうするつもりなんでしょうかね？

今回もまたレポートで更新が遅れましたよまったく。

流石にコピーは使ってないですけどね!!!  
もうあんなことはしない

と、言うわけで次回……やっぱ決まってる!!!  
誰書こうかなー？

ではまた次回

流星（前書き）

BGM「獣拳戦隊ゲキレンジャー」

二回目の一刀のシーンからどうぞー！！

## 流星

「フッ！」

「当た、るか!!！」

## 洞窟内

一刀が剣を握ってエレクトリックエエルアンデットに向かって切り掛かっていくも、それは簡単に回避されて逆に殴られてしまうという状況。

一刀の目はまだ回復しておらず、その反面エレクトリックエエルアンデットは発光による光でしっかりと状況を見ることができていた。

「ふむ、しかし翼人。こんな状況でもオレを逃がさないようにするとはさすがだな」

「は、見てろよ……そろそろお前の攻撃がわかりそうなんだ。次は躲してやる」

「やってみろ。ま、わかったところで……」

ダッ！

「いつ来るかわからなきゃ 躲しようがないけどなッッ！……！」

エレクトリックエエルアンデットの拳に電光が走り、捻りのきいた拳が放たれる。

それに対して一刀は棒立ち状態だ。

真正面から走り出したエレクトリックエエルアンデットが、その拳を途中で右フックに変えて一刀のこめかみを狙った。

そこで、一刀が目を閉じた。

今まで見えずとも開けていたのだが、ここで両腕をおろし、目を閉じ、完全に起立状態になる。

だからと言って直立ではなく、力の抜けたリラックス状態で。

そして、一刀がその体制をとった瞬間に、エレクトリックエエルアンデットは拳を止め、さらに二、三步瞬時に後退した。

まるで、何かを感じ取ったかのように。

「……………貴様……………」

「どうした？打ってこないのか」

「刀ははまだ目を閉じたままだ。  
こっちなど向いてはいない。」

しかし、エレクトリックエールアンデットは確実に何かを感じて  
いた。

そう、なにか

真っ直ぐ直視されているかのような、そんな錯覚

ゾクッツ……………!!!!!!

薄暗い洞窟の中、エレクトリックエエルアンデットの顔はそれだけが原因ではない寒気を感じ取った。

この男は……ここで自分を仕留める気だ。

「……………(フウ)」

それを見て、エレクトリックエエルアンデットの顔から油断が消えた。

今までは圧倒的優位だったその状況から、完全ではなくとも油断していたものだが、それを一切なくして構えを取った。

腰を落とし、全身の発光も止め、洞窟内が再び漆黒へと戻る。

「……………!!!!!!」

そして、エレクトリックエエルアンデットが一刀に向かって駆け出した。

すでに電磁波で相手の居場所は解っている。

そしてその両腕がガシリと確かに一刀の体を掴みとった。

「捕まえタアツ！！」

バアツツイ！！ババババババババババツツ！！

その叫びと共にエレクトリックエエルアンデットが全劇を一刀の全身に流し込みその体をガクガクと揺さぶる。

電光で、一刀の姿があらわになった。

だがそれは、エレクトリックエエルアンデットをさらに驚愕させるものにしかならなかった。

「こいつ……まだ!？」

全身を掴み締め上げられ、さらに電撃を食らわされているにもかかわらず、一刀の顔は先ほどの表情から一切崩れてはいなかった。

まるでこんな攻撃など、喰らっていないかのような様子。



「また無効化か！？ならばっ！！！」

先ほどあったような無効化かもしれないと思ったエレクトリックエルアンデットは今度は両手をチョップのように一刀の首の左右に当てた。

だが、それでも一刀の様子は回らない。

むしろ自由になった両腕で、今度は一刀がエレクトリックエルアンデットの体を締め上げ始めたではないか。

しかし、その力は相手を苦しめるほどの強さはなく、エレクトリックエルアンデットの体を少し持ち上げる程度。

「ははは、この程度か？見苦しいぞ」

「……んなもんじゃ……」

「なに？」

「こんなもんじゃない……」

ギユアッ！！

「がっ……こいつ!?力が……」

「俺が一年前に食らった「アイツ」の攻撃は、こんなもんじゃなかったぞ!!!!!!」

ガゴオツツ!!!!!!

「ガアハツツ!!!!!!」

叫んだ一刀が片腕でエレクトリックエールアンデットの身体をぶん回し始め、壁に、天井に、地面に向かって叩きつけて行った。

左に振り、反動のまま右に振り、跳ね上がったからのを地面に叩きつけ、そのまま持ち上げる過程で天井に。

まるでゴムボールが先端についているかのようだ。

凄まじい振動と衝撃音が洞窟内を響き渡り、エレクトリックエールアンデットの身体が叩きつけられていく。

「JG……!!」

と、そこでエレクトリックエエルアンデットがヌルリ、とウナギ特有の粘液を出し、掴んでいる一刀の手から逃れた。

しかし、その勢いは殺せずに壁へと猛烈な勢いで激突してしまったが。

「お・・・グお・・・こんのガキア!!!!!!!!!!」

バアツツ!!!!!!

足元から電撃を発しながらエレクトリックエエルアンデットが立ち上がる。

その顔は憤怒に包まれており、放つ電撃は触れるものをすべてを消し炭にするほどに激しい。

「優しくしてやりや調子に乗りやがってエ・・・てめえの脳みそ脊髄ごと引っこ抜いてやるうかアゝあ!?!」

完全にブチギレたエレクトリックエエルアンデット。

しかし反面、一刀の表情はおとなしいものだった。

「来い」

「ウゴああああアアアアアアあああああああ！！！！！」

そう一言だけ言った一刀に、エレクトリックエルアンデットが地面を踏み抜かんとする勢いで一気に接近していった。

二人の距離が一瞬で消滅し、寸前まで寄りあい……

ブンッッ、ゴオッ！！

そして　　ゴシヤリ、と……何かがつぶれた音がした。

.....

.....

スッ、ドンツッ！！！

「当たれっつのに！！！！」

「ハア、ハア……当たらないよ……」

桜の森の中で、砲撃と衝撃波が入り乱れた戦いがなおも続いている。

すでに桜の八割は散ってしまっており、そして砲撃は一撃たりとも観鈴に命中してはいなかった。

しかし彼女の体力は確実に削られており、それこそまさにブロッサムアンデットのもくろみどおりに事は進んでいる。

だがまあ、だからと言ってブロッサムアンデットの気がすっきりしているかと言えばそうでもなく、やはり当たらないというのは適度にイラつくようだった。

その証拠に、砲撃の精度がだんだんと荒くなってきているし、観鈴も衝撃波を使わずとも動きだけで回避できることもあつたくらいだ。

「つたく・・・よくもまあ逸らすな！！！」

「そっちの思い通りに・・・ね。思い通りになっているのに怒るっておかしいよ？」

「それはそれ、これはこれだよ。確かに思い通りに消耗させちゃいるが、当たらないんじゃないわ。勝ってるけど思い通りにフィニッシュできない格ゲーみたいなもの？」

「にはは、納得」

そんなことを言いながら笑う観鈴だが、彼女の体力も結構底を尽きかけている。

そもそも彼女は戦闘向きではないのだ。

汗は全身を濡らしているし、呼吸も数回に一回は深呼吸になっていた。

「ま、いいか。ここらでそっちをつぶす準備は十分にできたからな  
! ! ! ! !」

「？」

走りながらまるで踊っているかのように回転、手から砲撃を撃ちまくってくるブロッサムアンデットだが、それがピタリとやんだ。

観鈴も舞を舞うかのように華麗な動きで衝撃をは放って逸らし、弾いていたのだが相手の動きに合わせてそれを止める。

「私の砲撃、一体どのようにして撃っているかご理解いただけているかな？」

そう言つて、ブロッサムアンデットが手のひらに桜の花びらを集めてエネルギーとし、球体へと変えて浮かせている。  
彼はそれを投げるかのようにして放ち、砲撃にしているのだが・・・

「! ! ! ! !」

「気付いたか？お前は弾幕の真上にいるのだよ！」

それを見て、観鈴がハッ、と地面を見たときにはすでにそれは薄い光を放っていた。

ここは桜の森。足元には今までの戦闘で散りまくった花びら。もしこれがすべて弾丸となったら……!!!!

「貴女の純白に、桜の輝きを添えましょう」

「ッッ!!」

「そこに鮮血のスパイスを加えて、ね」

ズゴォ!!!!!!

直後、観鈴の足元がピンクに輝き

「きゃああああああああああああ!!!!」







「俺の魂が、そこにあるお前を殴り飛ばせてな、叫んでんだよッ  
！……！」

ドゴオ！……！！

「ゲツバツ！？」

「捉えたぞ、お前の動き。ここからは俺のターンだ！……！」

ドゴツ、ガツ、バンツ！……！！

「オ、グ、ガアッ！……！！？」

一刀の拳が、蹴りが、次々にエレクトリックエエルアンデットへと  
突き刺さっていく。  
それに対してエレクトリックエエルアンデットはすべてをまともに  
喰らい、片膝について洞窟を照らして状況を確認した。

一刀はまだ目を瞑っている。

そう、彼はいまだに何も見えてなどはないのだ

だが!!

「そこだ!!」

「ぬおっ!?!」

一刀の剣がエレクトリックエエルアンデットを正確にとらえ、さらには攻防までもを演じてみせる。

エレクトリックエエルアンデットの思考は完全に混乱した。

なんだこいつは……

なぜわかる、なぜできる、なぜ見える!?

居場所ぐらいならわかるかもしれない。

簡単な回避ならできるだろう。

だがしかし、これはそんなレベルの動きではない!!!

「ダアツ!！」

「効くか!!(バチイ!!)」

エレクトリックエエルアンデットがさらに電撃を放つが、それは一  
刀の翼に弾かれて消滅してしまった。

その後も次々と放つていくが、彼はその隙間を縫ってエレクトリッ  
クエエルアンデットへと肉薄、打撃や斬撃を加えていく。

それが続き、もう耐え切れなくなったのか、エレクトリックエエル  
アンデットがついに本気を出した。

今までは洞窟の崩壊の危険性から使わなかったが、もうそんなこと  
は言ってもらえない……!!!!

ドバアツ!と、エレクトリックエエルアンデットが全身から電撃  
を放つて一刀を弾き飛ばし、そのうちに両腕を前に突き出してそこ  
に電磁をため込んでいく。

「エネルギーフルチャージ。爆ぜ荒れる雷の前に、消し炭になれ北  
郷一刀おオオオオオオオオオオ!!!!」

「へっ……」

「地獄に落ちろオツ！！翼人！！！」

ガオウ！！

嵐をまるまる効果音にしたような、そんな音が洞窟内に響き、そしてそれが一刀の耳に届くよりも早くその雷砲は洞窟内すべてを満たして一刀へと向かって来た。

それに対し……

「ソードウォール 剣製防壁、最大展開ツツ！！！」

一刀が翼の中から次々と剣を召喚し、それを積み上げて巨大な盾とする。

ただ盾というにはおかしいと言える点が一つ。それは、その盾は剣の面を雷に向けてではなく、剣の切っ先を向けて作られているということだけだ。

「オオオオオオオオオオオオオオ！！！」

ドオン！！！！

まるで巨大な太鼓が爆発したかのような音が轟き、盾と矛はぶつかり合った。

否、これは……

「回転!!」

ギユああああああアアアアアア!!

一刀の剣製防壁が唸り声をあげて猛回転し始めた。それによって一つの塊であった雷は四方八方に散らされていく。

その砲撃は洞窟すべてを満たす大きさ。散らされた雷は行き場を失い……なんてことはなく、洞窟の天井、壁、地面を破壊しながら突き進んでいった。

その衝撃に洞窟どころか大地が振動し、ガラガラと遠くから崩落の音もしてきた。

だが、砲撃は止まらない。

エレクトリックエールアンデットにとってはまだまだこれから。そのすべてを吐き出すまで、こいつは止まることがない!!

「どこまで受け切れるかな!? 貴様の剣だって、いつまでも受け切れるわけがない。いつかはぶっ壊れんだろ!？」

エレクトリックエエルアンデットが届くかどうか分からない言葉を叫びながら、さらに力を込めて雷を放つ。

その声は確かに届いてはいない。しかし、それに応えることは出来る……!!

ズンツツ……!!

「!? これは……」

ズンツツ!!

「グオツ!? お、押され……まさか!？」



ズンッ！！！

雷が押されている。

エレクトリックエェルアンデットはそれを感じ取った。

この腕にかかる圧迫は間違いない。

そして、それが起こるとすれば可能性はただ一つ……！！！！！！

「こちらに……向かってきているというのか……！！！！？」

一刀の足が、一歩ずつ確実にエレクトリックエェルアンデットと向かっていく。  
回転する剣製防壁を押し込んで。

「グ……この……オオ！？」

エレクトリックエールアンデットがさらに押し戻してやろうと雷を放つが、なぜだか今度は引っ張られていく錯覚にとらわれた。

下がったのか？

否、違う。こいつはそんなことをするタマじゃない！！！！

ブオン、と何かを振り上げる音が聞こえた。

その音に、エレクトリックエールアンデットが前を見るとそこには驚愕の状況が出来上がっていた。

先ほどの「ブオン」は、回転する剣製防壁の柄をどうにかして一本にまとめた一刀が肩にそれを担いだ音。

剣製防壁はさきほどのように洞窟を塞ぐような大きさはなく、普通に扱える大きさになっていた。

形はそのままなので、先端に剣が前を向いて揃っているから、それは一見してハンマーにも見える。

そして、その先端はいまだに回転し続けておりさらに

その回転によって、エレクトリックエエルアンデットの雷すべてを巻き取るかのようにして取り込み、吸収していつていた。

「馬鹿な……」

「回転によって電力を電磁や磁力に変え、お前の力すべてをこちらにもらったぞ」

「そんな馬鹿な……生まれ以って電気を操るオレが……貴様らなんぞに……!!!!!!」

「翼人を……人間を……」

ガシャッ!!

「舐めるんじゃないッッ!!!!」

ドオウ!!!

一刀がそれを構え、一気にエレクトリックエエルアンデットへと疾駆していく。

エレクトリックエエルアンデットはそれを咄嗟に回避しようとする



その大きさは洞窟を崩し、大地を貫き、地上にまで飛び出していったほど。

我々はこれを知っている。  
一度だけ見たことがある。

一年前のあのとき、一刀が「彼」に向かっていった際に放った技である。

「じ……お……」

「飛翔抜剣!!」

「ガアッ!?!」

その山頂にいるエレクトリックエエルアンデットに、一刀が剣山の中を突き進んで上昇、抜剣と共に斬り裂いた。

エレクトリックエエルアンデットの目が見開かれ、そこに映る翼人のシルエット。

それは空に出ていた新月と重なって、舞い降りる天使のように見えた。

「貴様がいくら効かないといっても……ダメージは確実にあるはずだ……」

「……………」

「一体どこにそんな力が！！何が貴様の体を動かす！？」

エレクトリックエエルアンデットが叫ぶ。

確かに一刀はこれまでも攻撃を食らいすぎている。

いくら大丈夫だといってもそれは心の持ちようだ。

ダメージは確実に体を侵食しているし、実際に真上にいる一刀からはポタポタと血が垂れてきている。

しかし、こいつはそもそも勘違いをしていた。

翼人とは、心の持ちようで戦える存在だということ。

「打ち得ぬ瞬間ときに繰り出す……それが極意だ」

「ぐ……ぬう……この重圧……!!!!ガアツ!?!」

「空を駆けるは流星が如く」

そして、剣山すべてがギユアツ、とエレクトリックエエルアンデットを締め上げ、その全身を剣で貫く。

上空の一刀が、剣を肩にまで振り上げてエレクトリックエエルアンデットに向かって直下してくる!!!!!!

「流星剣!!」

「オオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

シュツ……ピン………





「悪いな」

ドオオオオオオンツ！！！！

「俺はヒーローだからよ。死んでも行くのは天国なんだ」

そう言って、一刀がカードをエレクトリックエールアンデットの肉片の一つに投げつけ、吸収消滅させる。

「さて……他のところにもいかなくちや……とと」

と、天井に穴のあいた洞窟内で一刀がカードを手にして上を向き、直後にトサリと座り込んでしまった。

どうやらダメージが一気にきたようで、今すぐ動くのは無理そうだ。

「……しよーがない……少し休んでいきますか、ね」

そうやって一刀が空を見上げて座り込む。

しかし

《大したものではないな、アンデット。だが……私の目的は果たしてくれそうだな》

それらの戦場をどこからか見ているのか、彼らの戦いをそつそつと怪しい存在がいた。

この事件には、もうひとつだけ裏がある。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 流星（後書き）

では今回は何故！！BGMがあれだったのかをお話しましょう。

簡単なことです。声ですwww

恋姫無双のドラマCDには、一刀の声が入っています。  
と、というか一刀の声が聞ける唯一の媒体です。

それ聞いた後にですね、「獣拳戦隊ゲキレンジャー」を聞いたんですよ。

……あれ？声同じじゃね？

いやいや、そんなわけないですよ。まあ実施クレジットの一刀の  
声は「????」でしたけど。

でもま、そっくりだったんですよ。

だからもうこれしかないと思いました。

今回獣拳全然関係ないけどね!!! (笑)

次回は美鈴さん終わらせて・・・あとは長岡さんたちとコックさんたちをちまちま行きたいなー、と思ってます  
思ってるだけでそういくかどうかはわかりませんがWWW

ではまた次回

## 裏目

森の中から桜の雨が立ち上っている。

それを眺めて、ブロッサムアンドットが呟いた。

「……………この中でいまだ息をしているといったあたり、やはり翼人が……………」

下から撃ち放たれていく桜の雨で、すでに観鈴の姿は見えなくなっている。

だがしかし、ブロッサムアンドットはその中で観鈴がまだ生きていることを知っていた。

なぜならば、感じるからだ。

自分の力で打ち出された雨のすべてが、ひとつ残らずいなされているということを。

「これだけの中にさらされながらも、逸らしきるとは流石だ……………流石すぎる。だがその流石もここで終わらせてもらおう」

ブロッサムアンデットの腕に、エネルギーが溜まっていく。  
今までと同じ砲撃だ。ただ今は、それを受ける相手の状況が違う。

「ここでこいつをぶっ放されて、貴女に防ぐすべはない!!」

キュボ、ドウツ!!

ブロッサムアンデットが放つ。  
砲撃が迫る。

細い桜の雨を押しつけながら、それが観鈴へと到達し

バチィ!!と弾かれた。

ブロッサムアンデットの首が傾く。

「なに……?」

「アアアアアアアア、はぁっ!!!!」

ヴオオオン!!!!!!

その瞬間、観鈴が最大開翼したその勢いとオーラによって、桜の雨のすべてが吹き飛ばされた。

口元を切ってしまったのか少し血が流れており、服もすすけてはいるがいまだに観鈴は立っている。  
ただ、体力の方は

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「あ、あの状況で弾くとは・・・ふふ、面白い。しかし逆に言わねばそこまで大きく開翼しなければもう私の砲撃は弾けないということ!!もう底が見えたぞ、翼人!!」

「はぁ・・・フウ」

「

うるたえながらもそう言い放つブロッサムアソビの前で、観鈴が目を閉じて深呼吸するように体と翼を開いた。



それはブロッサムアンデットからすれば観念したのだろう、と解釈できる。

だが、その解釈は当然のことながら違う。全く持って、それは間違っている。

「……人を想うことに、限界ってあると思う？」

「なに……？」

「そんなものはないよ。誰かを思う気持ちに、限界なんてない」

真っ白な光の粒子が観鈴に集まり、まるで雪でも振っているかのようになに彼女を覆った。

それに応じて彼女の怪我はもちろん、体力までもが全快されていき、翼がさらに大きく開かれていく。

「だから……私の翼も……愛情の翼にも、限界なんて、ないんだよ」

この少女は、純白

「体力を削った？うん、そうだね。でもね？今だったら  
」

この少女は、世界最愛

「私の方が、あなたより強い。だってこれは、ここには・・・ここに集まった人たちのあの子たちを想う愛情で満ちているんだから  
！！」

世界にはそういうモノが満ちている。





それが、感情を集束した翼人でなければ

!!!

ゴォツ、ギイイイイイイイイイイイイイイイイッ！！！！

高音速の音がする。

それは観鈴の腕からしていた。

衝撃波の渦。

力を受けるのではなく、流し、巻き上げるようなそんな形。

それを以って、彼女は砲撃のすべてを腕に吸収していった。

「な……ん……」

「あなたの振るってきた暴力……」  
ちから

そして、その吸収されたエネルギーがキラキラと光りながら純白へと色を変えていく。

まるで邪なる意志から解放され、浄化されていくかのよう。

「そのまま……じゃないけど、きれいにして、返すよ……！」

ブンッ、ドオッ……！！

観鈴がそのエネルギーの塊を投げ放ち、猛烈な勢いでブロッサムア  
ンデットへと突っ込んでいった。

その威力は彼自身が一番知っている。

森と呼べるほどの大量に生やした桜の木。

その花びらすべてをエネルギーとし、砲撃にした。

邪神が復活した時の切札にとっておいたそれを、そのままそっくり、  
更には彼女のエネルギーまで上乘せさせて、放たれたのだ。

放つのに右腕一本代償にしたというのに、受け止めるすべなどあ  
るはずがない……！！！！！！

「オオオオオオオオオオオオ！！」

だから、躲す。

ブロッサムアンデットは全力で動き、その砲撃から回避しようとして全身の筋肉をフル稼働させた。

しかし

パンパンパンパンパンパン！！！！

砲撃の横脇から衝撃波の薄い膜による先導で、その向きが修正される。

回避したブロッサムアンデットに向かってそれは確実に突き刺さり・  
・  
・  
・

「ひ……いアアアアアアああああああアアアアアア

ア！！！！」

彼の視界を白く染め上げ、さらにその全身を包み込んで吹き飛ばした。

バキリとベルトが碎け、砲撃が撃ちきられた跡にはなんだかよくわからない塊が転がっているだけだった。

それに観鈴が近寄って、カードをえい、という声を出しながらトスリと刺すとその塊はカードに吸収され、さらに絵柄も消滅した。

「ふう……やった、観鈴ちゃんいえい！！」

周囲はプスプスと煙を上げているが、その中で観鈴がだれにするわけでもなくピースをして勝利を謳った。

残りは、あと二体。





その為に石版を解析する役目を受けてスカリエツティも同行するぞうだ。

そして後は誰かが回復し次第、同行を頼むつもりだった、という話である。

それを聞いてフィリップは自分が行くと手を挙げた。

確かにコックローチアンデットとの戦闘で疲労はしているものの、エクストリームになったのは途中からだだったので比較的ダメージは低く済んだのだ。

だから自分が変身して、ファンゲジョーカーならついていける、ということだ。

それを断る理由など何もない。

そういうわけで今、シャマルの「旅の鏡」で石版のもとに直行するつもりなのだ。

「でも石版の目の前は危険すぎるわ。少し離れたところに開くから、そこから先は……」

「解ってます。それだけでも十分ですよ」

「出来れば私も行きたいのだけれど・・・」

シャマルも当然行こうとしたのだが、ここには次々と負傷者がやってくるので彼女がいなくなればかなりの負担になる。

向かうのは長岡、スカリエッティ、フィリップ（Wファンゲジョーカー）、そして長岡に凧がついていく。  
これ以上いると気付かれるし、石版の破壊だけならばフィリップだけで十分すぎるからだ。

「気を付けて」

「はい」

そういつてシャマルに手を振り、彼ら三人と一匹がシャマルの開けたゲートをくぐって外に出る。

.....

そうして、たどり着いたのは穴の近くの木の根元。

この穴はクラウドが開けたもので、この下には空の洞窟と十人の少女、石版があるだけだ。

木の裏側にたどり着いた彼らは、少し顔を出して穴の周囲を見る。

どうやらほとんどのアンデットは他のメンバーとの戦闘に向かってしまっているらしく、周囲には三体ほどのアンデットしかいなかった。

それを見てWが獣じみた動きで三体をすべて、死角からの一撃で撃破、カードに封印してゆく。

そして三人と一匹が穴から内部に侵入し、石版の前にたどり着いた。

「……………これは……………」

「興味深いねえ、好奇心がわくねえ、ゾクゾクするねえ!!」

「ドクター、それは僕のセリフだよ?」

「おっと、そうだったかい？」

石版を前にしてスカリエッティが興奮し、できることなら邪神も見  
てみたいが、とつぶやきながら手元にコンソールを出現させてカタ  
カタと叩き出した。

どうやら解析にはもう少しかかるそうだ。

周囲を警戒しながら、Wと長岡がスカリエッティを囲む。

Wは拳を握り石版側を、長岡は銃を構えて少女たちがいる方を。

しかし、二人はそれぞれ何かがおかしいことに気付いた。

Wは気づく。

自分の前にある石版がつつすらと光を放っていることに。

長岡も気づく。

少女たちの前にある光のリングが、きれいな円形を描いているというように。

「長岡さん」

「フィリップ君……」

「「これは」」

「発動してる！」「安定してるわ！！」

「べっぴんちゃんそのようだね」

コンソールのモニターを見ながら、スカリエッティが結論を言う。

この石板はすでに起動している。

少女たちの魂は安定し、石板に流れ込んでいた。

「そんな・・・なぜだ！」

『俺たちが来たときには安定していたなんて反応はなかったぜ!？』

「待ちたまえ・・・ふむ・・・なるほどこれは・・・」

フィリップの驚きと翔太郎の質問を、スカリエッティが流して考え込む。

そして、その考えが一つの答えを出した瞬間。

ドゴオッッ!!--!!

そこに漆黒の拳が叩き込まれ、三人の姿が粉塵に消えた。

-----





ティアナとキャロ、リュウタロスの弾幕を避け、スバルを投げ飛ばし、キンタロスを殴り飛ばし、ウラタロスを足蹴、踏み台にして空中二段蹴りでスバルとモモタロスを蹴り飛ばした。

そして振り下ろされた拳をティアナが腕を頭上でクロス、ダガーにしたクロスミラージュで受け止め、リュウタロスがその腹に向かつてリュウボルバーを向け、キャロのブーストで強化された弾丸がぶつ放された。

その衝撃にコックローチアンデットの体がくの字に曲がり、ズザザザザッ！と地面を滑るように後退していった。

しかし少し行っただころでガッ、と踏みとどまり、まるで腹筋に力を入れるかのような姿勢から腹をさすりながら頭を上げる。

そのさする腹からはプスプスという音と薄い煙が上がるが、それだけだ。

大したダメージではあるまい。

「フウ~~~~・・・なかなかいい連続攻撃だ。だがまだ浅いな」

「ちつくしょう、良太郎と一緒にならこんなヤロオ」

「しゃーないやろ。いないもんは!!!」

「置いてきたのはテメエだろうが!!!」

相手の攻撃を称賛しながらもまだ余裕を見せるコックローチアンデットに、なかなか思い通りの力が出せないタロウズ。

そもそもイマジンは他人の記憶に依存する存在だ。

この四人はすでに確固たる存在としてここにはするものの、彼らの戦いの記憶の大半は「電王」となったモノ　つまりは誰かに憑依してのことが圧倒的に多い。

もちろん彼ら四人が弱いわけではない。

しかし誰かに憑依し心を通わせた方が、より力を発揮できるというのも確か。

例外として単独で「変身」した時も同じ効果が得られるのだが、あくまでもあれはライダーパスを持っているときのみ。

よって今の状況が、彼らが思い通りにならないのも無理はないのだ。

「あんのヤロウ……どっかに使える身体がありやあ……」

「先輩、それは……までよ……？」

「なんだよカメ公、言ってみ……あぁくん……」

そう愚痴をつくモモタロスをウラタロスがなだめていると、何かを思いついたのか顎を手でさすりだした。

その様子に何かあったのかとモモタロスも同じ方を向き、彼も納得した。

そこにはエリオが槍を構えて突進し、電光の力で辛うじてコックロ―チアンデットについて行って、それでも片膝をついてしまっているところだった。

「そういふことかア！！トウアッ！」

そして、モモタロスが駆ける。

身体が薄くなって光り、その体に飛び込み……

「俺、参上！！！」

そう叫んだのは、かわいらしいキャラの口からだった。

「んなにいいー！いいー！？」

「ごめんねえ、先輩。でも武器的にもボクがこっちでしょう？」

そついうのはエリオ　　否、エリオに憑依したウラタロスだ。  
どうやらモモタロスを押しのけてこちらに入り、肝心のモモタロス  
はキヤロの方に押し退かされてそのまま入ってしまったのだろう。

「なあんでテメエがそつちなんだよ！！？テメエは色的にあつちじ  
やねエのか！！？」

「いやあほら、僕女の子につく趣味はないからさあ。それに……  
」

「こつちはオレが入ってしまったからなア！！フンッ」

そついつて顎に手を当ててゴキリと首を鳴らすスバル。キントロス

目の色が何の前兆もなしに変わったので戦闘機人モードかどうかと  
かティアナが驚いたが、直後に紫の光が入り込んで彼女も少し変わ  
った。

と、言うかいちばん変わったのは彼女だ。

執務官のバリアジャケットには何やらストラップがいくつもあり、ヘッドホンを首からかけているのだから。そしていい笑顔。

「銃使いの子もーらいつ。銃が二つあるって面白いよね？」

『え？え？ええ！？』

「すまんなあ。だがオレはおまえさんのガッツが気に入ったんや！」

『わ、私はいいですけど……とりあえず笑顔のティアを一枚』

「僕が一番しつくりくるね。ま、少し視線は低くなっただけど」

『ひよ、憑依ですか……なんだかおかしな気分ですね』

「なんで俺がこのちびっこなんだよ！！いだっ！？このチビドラゴン噛みやがった！！」

『ふ、フリード、私も痛いよ。あ、あの、ちびですみません……クスン』

「な、泣くなよおい……。だあー、わかった、俺が悪かった！だから泣かないでくれって！！お願い！お願いお願い！！」

何やら漫才を繰り広げる八人。

それを眺めるコックローチアンデットはポカーンとしてしまっている。

外から見ている分には四人がそれぞれ一人漫才をしているようなものなのだから。

「ったく……。ンなことしてる場合じゃねえ。なんのためにこうなつたか、おめえら、忘れんなよ!？」

「おう!!！」

「もちろん!!！」

「オツケー!!！」

タロウズが横に並び、各自の武器を手取る。と言ってもキャロのみはモモタロスWORDだが。

『わ、私剣なんか使ったことないですよ!?!』

「大丈夫だ。お前は俺を信じてる。あとはツツこみやあどうにかなるー!!」

『どづにかつてエ!?!』

「行くぜ行くぜ行くぜエ!!!」

そう叫び、ソードを振り回してキャロが走り出し、コックローチア  
ンデットに切りかかて行った。

気合いと共に振り下ろしたそれをコックローチアンデットは受け止  
めもせずに、高速移動で背後に回ってその小さな体をつぶそうと拳  
を振り下ろす。

が、その拳は当たらない。

振り下ろし、標的を外した剣を、そのまま後ろに向きながら今度は  
斜めに振り上げてコックローチアンデットの胸を切りつけたからだ。

その拳を抑えてコックローチアンデットがうろたえるが、キャロは

というかモモタロスは 剣を眺めるように持ってすげえ

と感嘆の声をあげていた。

それはそうだろう。

モモタロスの戦闘における経験、勘、そして嗅覚。

そこにキヤロの探知魔法まで入ってくるのだから、見えなくたって直感で動く彼には相手がどこに逃げたかは手に取るように分かる。

「おう……びつくり」

「こっちもいるよ!!」

『ストラーダ!!』

そして、さらにはストラーダの突きも迫りくる。

もともとウラタロスもロッド使い。そこにエリオの力も来ればそれはもう猛烈な……

「なめんなや!!」

ガキイ!!!





それを見て、スバルがキングロス大きく四股を踏んで気合を一発。

リボルバーを回して、その拳をコックローチアンデットの脳天に向けて振り下ろした。  
が、それをコックローチアンデットはすんでのところで回避し、拳は地面に叩きつけられる。

すると円形にピン……と力が浸透していき、そこを中心に地面がざらざらと崩れていくではないか。

「わー、クマちゃんスゴイ！」

『ちよ、これ流砂!?!?』

『こんなこともできるんだ……』

そのあまりの威力に、全員が絶賛。  
これがイマジンの……

「殴つたら地面も壊れおつたで!？」

なんでもありませんでした。

「おいおい、足場あんなにされたらさすがに……」

「いえーい、バンバン!！」

「ぬお!？」

と、回避したそこにティアナがクロスミラー<sup>リュウタロス</sup>ジュでコックローチア  
ンデットを狙い撃ちしてきた。

むちゃくちゃなフォームで撃ってるくせに狙いは的確。

中のティアナはクロスミラージュの制御をしながら泣きました。

「ち……数が多くてもあのレベルならよかったが、質が上がっての四人じゃチト手こずる……」

その弾丸を腕で顔を覆うようにガードするコックローチアンデット。その両足がメキメキと音を立てて最高速度で瞬時に片づけに入るか、とした瞬間。

「……………？……………はぁん……………そついつごと!!」

何かを感じとったのか、コックローチアンデットが弾丸を背中に浴びながら、その場から逃走。

それを見た四人が追いかけ始めた。

「みなさん!!フリードに乗ってください!!」

その後を追おうと、キャラコが憑依を解いてもらってフリードを巨大化させる。

イマジンの憑依は慣れないと非常に体力を食う。実際四人の体は汗だくだ。



そこに漆黒の拳が叩き込まれ、三人の姿が粉塵に消えた。  
その拳の持ち主はコックローチアンデット。

石板で何かが起こっていると感じ取り、即座に戻ってきたのだ。

「……………避けるか。だが犬一匹死んでないのはショックだぜ？」

そのコックローチアンデットが上をクイ、と見上げると、そこには背中に長岡たちを乗せ、壁にしがみつくファンングジョーカーがいた。そのままWは天井の穴から地上に出て、コックローチアンデットもその前に躍り出す。

「陽動作戦……………ま、来るとは思ってたけど」

「そもそも、もともとから考えていた作戦じゃなかったしね」

コックローチアンデットの言葉に、フィリップが返す。

こいつの力は知っている。知ってはいるが、とても相手にできるかどうか……………

と、そこにスバルたちも到着した。

結構な数のメンバーに囲まれ、コックローチアンデットが面白い、とでもいうような仕草を取った。

ちなみに、モモタロスたちは途中で良太郎を見つけて飛び降りて行ってしまった。

今頃は楽しく(?)ジークと言い合いをしているだろう。

が、彼らにとってそれは今どうでもいい。  
今聞くべきことはただ一つ……

「何故あの石板が発動している!?!」

そう、そこだ。

彼らが突入する前に見たサーチ映像では、あの中ではどのようなエネルギーも(アンデットのもの以外は)観測されなかったし、石板もあんなになっていなかった。

それが今は発動している。  
一体どういふことなのか。

「は……なんで桜の大将があんたら呼ばうって言ったと思う？」

『なに？』

「……なるほどねえ」

その言葉に翔太郎が聞き返すが、ただ一人スカリエッティだけが理解していた。

「何かわかったの？」

「ああ、わかるさ。というかなぜわからないんだい？ゼロセカ」

「

「スバルです」

「おや、それは失礼した。そういえば君にはチンク達の面倒を見てもらっていたね」

「それはそうと、どういふことなんだ？」



勝手に話すスカリエッティに、エリオは少しイラついたように聞く。それに対しスカリエッティは軽快に答えた。

「君らは捕まった人間が何を求めると思っかね？」

「……助け……まさか!!」

「そして、まさに君らがきた。おそらくその瞬間だろう。少女たちは安心した。それでさ」

『俺たちが来て安定して……邪神復活に導いてしまった？』

「そうなるね」

「その通り!! あんたなかなか頭の回転速いねドクター？」

邪神に魂と捧げるための、十人の少女の心の安定。

しかし、それはいくら待っても無理だった。アンデットも三日でやれると見込んでいたのだが、どうしてもそれで出来る気がしていなかった。

だから安定させるために、彼女たちが何を望んでいるのは何かを考えた。

自由？

それはできない。ここから出すわけにはいかない

家族？

連れてくるには骨が折れる

助け？

まさにそうだ。助けが来れば、こいつらは必ず安堵する。

石板はその瞬間を見逃さない。

そして、ブロッサムアンデットが桜の森を出現させ、彼らがこの地に呼んだのだ。

果たしてそのもくろみは果たされた。

いま、石板は少女たちの魂を吸っている。

「させるか!!」

「おっと行かせねえ!!!」

Wが穴へと駆けながらベルトのホーンを押す。

透かしそれが二回鳴らされたところでWは見えない程に速く動くコックローチアンデットに殴り飛ばされて地面に倒れた。

「な・・・!？」

「は、速い・・・」

「見えなかった・・・」

この場の誰一人。

エリオですらもとらえることのできない速さ。

それを以って、コックローチアンデットはたった一人で石板の防衛網を築いていた。

「さて・・・どうしてくれるかなあ？とりあえずなんか起こされる  
とまずいんで・・・」

ゴッ、オオ！！！！

「あんたから消えてもらおうかな！？巫女よ！！！！」

コックローチアンデットが遊び口調で、しかし気配は本気で、そう  
言って姿を消す。

そして直後、その黒い姿は長岡の目の前に現れて・・・

一つの身体を大きく殴り飛ばし、その体に鮮血を浴びた。

t o b e c o n t i n u e d



## 裏目（後書き）

どうも、最近更新遅れ気味の武闘鬼人です。

武闘鬼人 of the 武闘鬼人  
武闘鬼人の中の武闘鬼人。

実を言うと「2010年度武闘鬼人オプザイヤー」に輝いた武闘鬼人はこの武闘鬼人なんですよ!!!

蒔風

「何を言ってるかさっぱりわからん。とりあえず内容いけ」

ブロッサムアムデット撃破!!!  
そしてやりたかったフォワードでのイメージン憑依ができて僕満足!!!

もう思い残すことはない……

蒔風

「~~~~~!!!!!!」

イメージたちと絡ませたのは本当にそのためだけです！  
良太郎は犠牲になったのだwwww

蒔風

「まさか観鈴ちゃんが一人でやりきるとはなあ……」

ものはやりよう、ということですよ。

これがクロコダイルアンデット相手だったら勝ち目なんてありませんよ。

砲撃で、しかもあんな方法使ったからです。

蒔風

「翼人による、感情の集束か。俺も何回かしかやってないなあ……」

あとはお前相手にしたクラウドと理樹だな。

実はすでに始まっていた邪神復活。

すべて後出しの「EARTH」に、勝ち目はあるのか！？

蒔風

「次回、今こそ真の姿を!!」

ではまた次回



忠犬（前書き）

BGM「ガオレンジャー 吼えろ！！」

あるキャラが名乗りを上げた瞬間からどどぞどどぞ！！



迫りくるアンデット。

それを指揮するドーベルマンアンデットは、無限とも思えるようなアンデットと互角以上に渡り合っているクラウドを眺めてヒュ〜、と口笛を吹いた。

飛び掛かって来たものは横一線に切り裂き

真正面からの大群は凶切りで消し飛ばし

遠くから攻撃してくる敵はファイガ等でまとめて吹き飛ばすその姿は、まさに現「EARTH」最強と言われるほどの物。

「全滅もこりや夢じゃないなあ……ま、そのころにはアイツも体力尽きるだろうし……」

そう言いながらドーベルマンアンデットがクラウドの放ったサンダラを回避し、アンデットの中に隠れて再び様子を見る。

そして銃を取りだしその銃身をズルウ、と大きな舌でなめた。

「こいつでお前の命を討ち取ったるってのよ……」

自分は未熟。



「凧ッ!」

ドッ、ドサツ、という地面を撥ね、凧の体が投げ出され、あたりに血液を振りまいていく。

長岡は凧に押しやられて地面に倒れていたため大丈夫だが、今は木枯らしのほうが心配なようだ。

一方コックローチアンデットはというと、自分に降りかかった緑の返り血を見て「?」という仕草をしていた。しかし、それを考える間もなくスバルとWのパンチが背後から迫って来たためにそれを中断せざるを得なくなる。

「!」

「『ウウオリヤああああアアアアアアア!』」

ドゴッ、ガガシィッ!」

コックローチアンデットは二人の拳に対し、超速度で振り返り掌で受け止めてまるで合気のように二人の腕を回した。

二人が地面に倒れ、そこに踏みつける動作でコックローチアンデットが足を振り下ろしてくる。

二人が転がってそれを回避しているうちに、長岡は立ち上がったその場から離れ、凧の体を抱えあげた。

「凧？凧ッ！！」

呼びかける長岡に、凧は小さく声を漏らすだけで、ぐったりとしまっている。

口からはアンデットの緑の血液が流れており、死なないとはわかっていてもあまりにもひどい状態だった。

キャロが近くに駆け寄って治癒魔法をかけようとするが、なぜか効かない。

スカリエツティもその体を診るが、あまりにも衝撃が強かったからか再生が始まらない。

やられ、倒れた凧の姿にWとスバルがキレ、エリオまでもが咆哮を上げて切りかかって行っている。

が、それを相手にしてもコックローチアンデットの動きは彼らを超えていた。

Wとスバルはあしらわれ、エリオは投げ飛ばされ、ティアナの弾丸は当たらない。

「竜召喚士の御嬢さん。もう治癒はやめたまえ」

「な、何を言ってるんですか！！あなたやつぱり……！！！」

いきなりそう言ったスカリエッティに、キャラが睨みつけて反論した。

その目には涙が溜まっており、「睨み」には思っていたほどの効果はない。

「その犬はアンデットだ。ここで戦力になるならまだしも、あくまでもこうして盾になることしかない。ならばその治癒を、ほかの仲間のために回す必要があるのではないかい？」

「そ……それはそうですね……でも……」

ぼそぼそと反論の言葉を探すキャラだが、いかんせんここはスカリエッティの言葉が正しい。

凾をここで復活させても、幾分かの戦力にもならない。  
それに彼はアンデット。ほっといても死にはしない。

ならば、その力は他の仲間が負傷した時に使うべきではないのか。

彼らは「死ぬ」のだから。

それを聞いてうろたえるキャロの手に、長岡がそっ、と手を当てた。

「ありがとう。でももう大丈夫よ。あなたのサポートなしで勝てる  
相手じゃない。行ってあげて」

「で、でも!」

「自分の身は自分でも守れる。だから……」

「……わかりました……でもこれくらいは(ヴォン)させて  
ください」

長岡の言葉を承諾し、キャロがバリアを張ってその場から戦線のサ  
ポートに向かった。



中に残ったのは、スカリエッティと長岡、瀕死の罨。

しかし

「オラア！！！」

コックローチアンデットがスバルたちに何かを投げつける。

それはなにか黒い塊で、それを咄嗟にスバルが魔法陣のバリアで防いだ。

その瞬間

ドオン！！！！

「きゃあああああああああ！！」

「スバル！！！」

その塊が爆発し、砕けたバリアがスバルを襲う。

塊はコックローチアンデットの力を凝縮させた爆弾だ。

それを周囲にばらまき、一気に爆破させるコックローチアンデット。

その爆発にWやエリオは下がり、コックローチアンデットの姿は爆煙に消えて見えなくなってしまふ。

そしてヒュボツ、という音を立てて、その煙の中から何かが長岡達のバリアに向かって突撃していった。

「狙いはそつちよお！！！」

「しまった！！！」

ゴオオオオオオン

!!!!

コックローチアンデットの拳とバリアがぶつかり、とんでもない衝撃を振りまいてバリアが砕けた。

衝撃は中にいる長岡達には一切当たらず、逆にコックローチアンデットの身体を後方に吹き飛ばした。

そのバリアの威力もすごいが、それを耐えて着地、間髪入れることなく再び長岡へと走り出すあたりこいつも只者ではない。

そう、コックローチアンデットは全く怯むことなく、再度長岡へと突撃していった。

「ガアウー!!!」

「凧!?!」

そしてその迫りくる脅威に、野生が雄叫びを上げて突貫していった。

迫るコックローチアンデットの腕。その腕には先ほどの黒い塊が握られている。  
その腕に向かって、凧が最後の力を振り絞るかのようにして長岡の腕から飛び出し、果敢にも向かっていったのだ。

しかし、凧はアンデットと言っても完璧にただの柴犬とそう変わらない。  
結果は当然……………

ガッ

「ギャオオオオオウ!!!!」

ドオン!!!!

コックローチアンデットの腕のすぐ前で、その塊が爆発して凧が炎に包まれる。

その煙に凧の姿が消え、その場の全員が啞然としてしまう。

最後まで主人のために立ち向かい、そして果てて言ったその忠犬に  
……………

「ハアン……ま、アンデットだから死んでないだろ？まったく、無駄な悲しみだな」

そう「ハン」と笑いながらコックローチアンデットが再び走り出す。

長岡に防ぐすべはない。

コックローチアンデットに先を走られては、スバルたちにも止めるすべはない。

「終わりッ！！」

コックローチアンデットの腕が突き出され

「それはそちらのことだろっ」

背後からの声と、その持ち主によって、その拳が掴まれて止まっていた。

コックローチアンデットの背中に立つそいつが、振りかぶった右腕内肘を掴んで止めていた。

「ゼアッ!!!」

そして、その腕を一本背負いで投げ飛ばし、長岡からコックローチアンデットを離れた。

彼女の前に立つその姿は、侍と騎士を合わせたような体裁で、うっすらと小麦色の乗った色をしている。

腰には刀を携え、真っ白なマントを羽織り、頭からはまっすぐに立った耳が一对あった。

目元にはマスク　　というよりも真っ白なバイザーをしており、視界確保のための穴が鋭い視線を放つかのように空いている。

そう、まるで正体を知られては行けないヒーローのように。

そして腰にあるベルトの紋章で、彼がアンデットであることが窺い知れる。

だが、どうやらコックローチアンデットの味方ではないらしい。  
それはコックローチアンデットの表情からしてわかる。コックローチアンデットの顔にある感情は「驚き」そしてほんの少しの

「貴様……シバイヌアンデ……!!!!」

「すまんが、それは適切な名ではない」

コックローチアンデットの口から出るその言葉を、違つと言って遮るシバイヌアンデット。

腰の刀に手を乗せて、長岡の前に立ち主を守らんとする忠犬は、自らを種族ではなく、確固たる個体としてこつ名乗った。

「我が名は凧！それが……我が主より承りし誇りある名だ!!」

ドオウ！！

全身から噴き出る闘気が、マントをなびかせてバタバタと騒がせる。まるでそれが、この者の怒りを表しているかのごとく。

それを見てコックローチアンデットがうるたえながらもハッ、と笑い、凧を指さし叫んだ。

「己が種の繁栄ではなく、統率者についた物好きな野郎がいたってのは聞いてたがな……なるほどね……お前が！！」

「いかにも。我らのような不死生物そんざいには、そのような柱はしらが必要なのだ」

「なにをわけのわからんことを！！！！」

ドゥー！！

凧の言葉を一蹴し、コックローチアンデットが高速で動きその場から姿を消す。



しかし凧は、自分と長岡の周囲をバシシシ！と地面が少し撥ね、明らかに狙われている状況でも、それに一切ひるむことはない。

ビッ！！

と、そうしてから十秒ほどで凧の真正面にいきなり黒い塊が出現した。

コックローチアンデットが投げ放ってきたのだろう。

しかし

シュチン                   ！！！！ドドンッ！！

構えもなく立つ凧が、気づかないほどの一瞬で動いた。

長岡の少し後ろの左右で爆発が起こり、凧の腕はまっすぐ伸び、その手には刀が鞘に納められまっすぐ縦に握られていた。

「な・・・に!?!」

「居合、縦一文字」

コックローチアンデットの目にすらも捉えきれない縦一閃。聞こえたのは音のみ。

構えの動作も、抜き放った刀身すらも見ることなく、凧はそれを真っ二つに切り裂いていた。

「解っていないようだな。我らは不死だ」

「だからどうした」

「だからこそ。我らには確固たるものが必要なのだ」

「だからそれがなんだってんだ!?!」

パンッッ!?!

音速を超えたその音を上げ、コックローチアンデットが再び消えた。もはやクロックアップや風足、加速開翼ですらとらえきれないほどのスピードで動き出したコックローチアンデット。

地面を蹴ることにその場が抉れ、跳ねればクレーターのように入んでいく。風すらをも置き去りにする速度で、コックローチアンデットが風の周囲をかく乱し始めた

！！！！

「凧!？」

「離れないで、そばにいてください。主」

その中心にいる長岡をそばに寄せ、凧が周囲を見渡すように首を回す。

『見えねエだろ!？声を聴いて居場所を特定することすらままなるまい……!』

「……そうだな」

『はっは!!!これが我が力!!!太古より生き延びてきた、我が一族の集大成!!!』

どこからか            というより、この空間自体から響くようにコックローチアンデットの声が聞こえてくる。

もはや音からのサーチは無理だ。

しかし、凧に一切の緊張はなく、淡々とコックローチアンデットに話しかけていく。

「我らは不死だ。「死」という物が無い。ゆえに、そこに覚悟はない」

『だからどおした。だからこいつらよか強いんだろが!!!』

「……それが無い以上、「誇り」と「信念」しか残らぬ我らはそれを強く持たねばならん。生き抜く「覚悟」が無い以上、貫く「信念」と抱く「誇り」をより強くしなければならぬ。ゆえに、私は仕えることにしたのだ。本来三本で支えるものを二本で支えあわねばならぬのだから、それを強くしなければならぬのは当然」

『は、何言ってるんだ。だったら一本だけメチャクチャ強くすればいいだろ?』

「フ、もはや・・・妄執ともいえるな。生き残ることしか頭になり、傲慢なプライドしか持ち合わせていない貴様には解らないさ」

足音とはもう到底思えない音が周囲を唸っていく。

そして

ドスッ!!

『がアッ!?!』

「一刀閃、心刺し」

見えもしないコックローチアンデットの胸を、凧の刀が正確に捉え刺し貫いた。

切っ先についた血をビツ、と払い、鞘に納めるが、コックローチア

ンデットはまだ姿を見せない。

『……の……その結果、邪神のための封印に取り込まれて  
！！己の種の繁栄よりも、こいつらの方が大事か！！』

胸を貫かれた程度ではまだ倒れないコックローチアンデットが、  
呷に叫び返した。

自分たちは己が種の繁栄のためにいるはずなのに、邪神とやらの封  
印の捨て駒にされた。

それでいいのか。許せるのか。  
繁栄のチャンスもなく弾かれた自分たちに、そしてお前に、怒りは  
ないのか、と。

それに、呷は誇りを持って答える。

「我が一族は古くから彼らとともにいた。共に生きてきた。共に歩  
んできた。これまでも、今も、そして、これからもそれは変わらん  
！！」

『繁栄こそが生物おれたちの生きる理由ワケ!!それを放棄した貴様の方が、俺たちよりもよっぽど歪よこしまんでいる!!』

「……そうかも、しれん。しかし私の魂は」

『あん?』

「貴様のようなドブ臭さは放っていない」

『……………』

「ま、不死わねわねにそんなものがあるのなら、な」

『魂?誇り?信念ンンン!?臭え臭え……そんな臭えセリフ、吐いてんじゃねえ!!』

ツツツ……!!

もはや音すらもない。

凧と長岡の周囲を、とてつもない速さに到達したコックローチアン  
デットによる黒い帯が覆い、今まさに襲いかかろうと拳を握る。

凧が、凧の肌を薄く裂いていく。  
しかしそれは命に届くことはない。

「……………」

凧が、その場に座り込む。  
片膝をつき、もう片方をおろし、きれいに正座へと。

そして



「死イッ！！！！」

ゴオツツツ！！！！

そして、その残像のベルトの中からコックローチアンデットが飛び出して

チンツツ・・・・・・

そんな音だけが、静かに響いていた。

その状況を見ていた、スバル・ナカジマは後にこう語る。

真っ直ぐ見ていた。

だが瞬きをした瞬間に、それはすでに終わっていた

と

正座していた冨が、瞬きの一瞬で片膝を立てて腰に手を当てていた。

そして、その少し後方にはコックローチアンデットが。

その二体が互いに背を向けて、その場に立つ。

これからあの居合が！？

構えた！

どうするんだ？

そう思ったのはその場の全員だ。

だが

「じ……………ああ……………」

「どじやら……」

スクッ

床が立ち上がる。

動きの止まったコックローチアンデットの額から液体が流れ出した。

「私のセリフよりも、貴様の方が臭かったようだな」

「な、なん……で……」

バキン！！

そして、首を回して背中越しに語りかけた。



そのときすでに、すべて終わっていた。

動作も、構えも、何一つとして見せることなく、凧の剣閃はコックローチアンデットを切り裂き、この戦いを終わらせていたのだ。

「心配おかけいたしました、皆さん」

驚く一同に凧が頭を下げ一礼し、自分が倒れた時にあんなにも怒ってくれてどうの、ということを感じていた。

コックローチアンデット、消滅

軍配は、白き忠犬に上がる事となる。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

忠犬（後書き）

忠犬、ここにあり。

野生の牙を、誇りの刃と変える。

凧の大活躍回です！！

蒔風

「こいつ速いな」

凧のイメージとしては「学園キノ」のサモエド仮面です。  
もちろん頭にリングは無しでwwwwww

あつちはサモエドだけど、まあ変わらないよね！！

「オオカミ剣士」という物を想像すればいいかと思えます。柴犬だ  
けど

くっそかつこよく考えましたよ全く

しかもBGMがガオレンジャーwwwwww  
熱くなっていただけでしょうか？

蒔風

「クラウドはダブル指揮のアンデットどもに邪魔されてるみたいだな」

そう、彼は賢いからね。  
無理はしないのさ。

でもな、その判断がまず間違っているのだよ、彼。

蒔風

「ほっ?」

ま、そこは次回。

先に言っと、ダブルの戦闘はあっけなく終わりそうですよwwww

ww



邪神はどうなるのか、そして時々聞こえてきた謎の声は邪神のものなのか！？

蒔風

「クライマックスになだれ込め！！」

ではまた次回

## 復活

四体目のアンデットを倒し、そのあと

コックローチアンデットを撃破した一同は、再び洞窟内に入って石版を調べ始めた。

見るとやはりコックローチアンデットの言うとおりで、魂は今も石版に流れ続けており、邪神復活までもう時間があまり残されていない、ということが分かったただけだったが。

「今これを破壊してはだめなのかい？」

「駄目だね。いま魂が流れている状態で壊してはパイプを破壊してしまう。そうなれば魂は途切れて戻ることにはなくなってしまう」

『んだよ……ってことはそのまま見てるしかねえってのか？』

「いえ……多分、石版に全部流れきった瞬間に……ですよね？」

スカリエッティとWの二人が話しているところに、ティアナが入り

込んできた。

今石板を壊してはそちらに魂が残されてしまう。

やるならば、すべて流れきった後に破壊するのだ。

それも、流れきってから邪神が出てくるまでの一瞬のうちに。

「タイミングはわかりそうかい？」

「私が計算するよりも彼の方が正確なのではないかい？」

フィリップの問いに、スカリエッティが凧の方を向いて質問をそのまま投げた。

その問いに凧が応える。

「後・・・二分と13秒・・・12、11、10・・・」

そういつてカウントダウンを始める凧。

あまりにも時間がなかったため、いきなりのそれに驚く一同。

だが冷静に考えればそれだけ時間がある。

最大火力にまで力をためるには、十分すぎる時間だ。

『最大まで溜めるぞ、フィリップ!』

「もちろんさ、翔太郎」

ガシュツガシュツガシュツ!

《ファング!マキシマムドライブ!》

「クロスミラージュ!」

「マツハキャリバー!」

「ストラダー!」

「ケリユケイオン!」

「『『『『エクシードソード!』』』』」

フワードも魔力をためていき、キャロの補助でさらに威力を上げていく。

「では、私も」

更には凧も構え、万全を期してその瞬間を待つ。

「……残り、50秒」

「行くぞ……」

「はい」

「任せてください!!」

洞窟内を、甲高い音が響いていく。  
魔力など諸々の力がうねりを上げて、装填される。

そして

「残り……!!?」

ガッ、ズン!!!

「うわっ!?!」

「きゃあ!!!」

残り三十秒ほどとなったその瞬間、洞窟が揺れ、直後に瓦解、崩れて行ってしまふ。

そのど真ん中にいた彼らは降りかかる土砂から逃げようとして、完全に構えを解いてしまった。

「ま……ずい……主!!!」

「凧!!!」

凧が長岡を引き寄せ、語りかける。

いま、その時間が来た、と。

しかし誰一人として石版に打ち込める状況ではない。

それどころか、今にも崩壊に飲まれまいと逃げ惑うので精いっぱいだ。

「ぬ・・・破アッ!!」

その状況を脱しようと、凧が真上に向けて剣閃を打ち出す。

それによって降りかかる瓦礫の雨に穴が開き、そこから全員が脱出に成功した。

そして

「なんだ・・・これは・・・」

地上に出た彼らは、真っ白な巨大な塊を頭上に見た。

その塊の正体は、離れた場所で戦闘を行っているクラウドが見ることではっきり確認できるほどの大きさだった。

「フンッ!!……!?なんだ……?」

「あ?あ……!!あの野郎独り占めする気かよ!!ずっこいぞ!!」

そこから見えたのは、巨大な巨大なクジラだった。おそらくはシロナガスクジラの始祖たるアンデットなのだろうが、いくら始祖と言ってもあれはデカ過ぎる。

戦艦ではないかと思うほどの巨大。

同じ空域に浮いている瞬風がの五倍ほどもあるうその巨体の口から



は、ガラガラと岩石を落としていて、おそらく洞窟ごと石版と少女たちを飲み込んだのだろうというのが推測できた。

「いきなり飲み込みまじまじとか・・・今まで動かなかったのは体が重かったからじゃなかったのかアー!!」

なんてこつたと頭を押さえるドーベルマンアンデットだが、そこにクラウドの剣撃が迫ってきたのでおっと、といった感じに回避してアンデットを差し向ける。

「もうあんたと遊んでる場合じゃねえんだ。あっちに行かせてもらっよー!!」

「行かせるかー!!」

「行ーくーの!!お前ら、相手してやれー!!」

そういつてさらにアンデットをクラウドに向けるドーベルマンアンデット。

背後からはクラウドに向かうそれらの叫び声が聞こえてくる。



ーベルマンアンドレットは訳が分からなかった。

自分は未熟だ。

それが十分わかっているからこそ、周りをかこって堅実に戦ってきたのに、なんでここで崩れるんだ……

しかし、その考えを読んだかのように、クラウドがさらに後を続けた。

「お前、気づいていないのか？オレ、バーサーカーと恋、そしてエリオたち……それらとの戦闘はかなり濃い経験だったろう。それによってお前の力は、すでにオレと同等か……もしかしたらそれ以上にまでなっているんだぞ？」

「な……」

「そんなお前が隠れる戦い方を？それはもはや慎重や堅実ではなく、臆病以外の何物でもない」

そう、ドーベルマンアンドレットの力はすでにクラウドを凌駕していた。

否、力だけならばすでに超えていたと言ってもおかしくはない。ただ、新参者がゆえに経験値が足りなかっただけだ。

しかし、これまでであった数々の戦闘により、ドーベルマンアンデットは成長していった。

速射、身のこなし、必殺技に至るまで、その精度は上がってきている。

しかし、彼はいつまでも「未熟者」として戦い、その力を使うよりも早くほかのアンデットに任せてしまった。

それはクラウドの言うとおり、もはや策略でもなんでもなく、臆病であるというだけのこと。

「俺の翼は勇気の翼……世界最勇のオレに、臆病者が勝てるわけがない」

「は……はは……やはり……まだ未熟だったか……」

「ま、そういうことだな」

「自分が未熟でないことに気付けなかった……オレはもうお前らより強かったんだな……」

「そうだな」

「試す機会がないのは……」

「それでも、勝つさ」

「……残念。これは失策」

クラウドの剣は背中を貫き、そのまま正面のベルトをも砕いていた。

ドーベルマンアンドレットが目を閉じ、クラウドがカードを突き立てる。



その巨体のすべてをようやく視界に収めたころ、理樹が合流し、さらに巨体こわを見て一刀と観鈴も急いで駆け付けてきた。

更にはアンデットはすべて倒し終わったのか、ほかのメンバーも集まりだす。

最初こそ風の姿にびっくりしたが、事情を説明して事なきを得る。

と、言うよりもこちらの方がやばいだろう。

「石版をみんなごと飲みこんだあ!？」

「最初から体内に問いこんでの復活・・・うまい手だね」

驚く一刀にスカリエッティが冷静に答える。

しかも実は邪神復活のための準備は済んでおり、今にも出てくると聞いて理樹たちは焦った。

だが、それに対して一人だけ、今だ余裕にかまえるライダーが一人。

「何焦ってんだ。あんなのラクショーだったの」

《HIBIKI! KAMEN RIDE ARM D》

《FINAL ATTACK RIDE H I H I H I

HIBIKI!!》

そっけいのはコンプリートフォームのディケイドだ。

隣にアームド響鬼を召喚し、ファイナルアタックライドを発動させる。

すると二人の剣が炎に包まれ、ぐんぐんと伸びていき、その長さは怪獣でもぶった切るのではないかというほどにまで長さに達した。

「オレは前にもフォーティーンを倒している。ちょうどこの技でな」

「ま、士ならやってくれるだろうね」

そっけいって、力を込めるディケイド。



するとちょうどその瞬間、シロナガスゲジラアンデットが悲痛の叫びをあげ、身体がボコボコとうねりだしたではないか。

そして、腹が裂け、背中が割れ、口や頭から暗黒の煙が噴き出してきた。

「来るぞ!!」

デイケイドが叫ぶ。

それに応じて、ほかのメンバーも攻撃を構える。

煙が立ち上り、それが晴れていくとそこには邪神、フォーティーン  
の姿が……

「行くぞ!!」

「オオオオオ!!」

「ハアアア!!」

そして、気合いを込めて叫ぶディケイド。

だが

「アアアア!! って・・・え? おいおいおいおい・・・」

相手を見る視線が、ぐんぐんと角度を上げていき、それと共に気合いが掻き消えて行った。

「で・・・でかい・・・」

「おいおい・・・う・・・そだる・・・」

ディケイドの腕がだらりと放心したように下がっていき、攻撃はいつまでたっても放たれない。

デカすぎる。

さっきのクジラも相当なものだが、こちらも負けてはいないデカさ

だ。

かつて土が相手にしたフォーティーンは子供  
否、ペット  
だったのかと思えるくらいの違いがある。

その場の全員に影と落とし、フォーティーンが彼らを見つけた。

そして、咆哮。

7778

その咆哮で召喚されたアームド響鬼は消滅し、全員が踏ん張って地面から飛ばされないようにしなければならなかったほどのもの。

「うわぁー!」

「なんつー奴だよ!」



ずだ。あれと共にこの星に脅威が迫った時、その精神になり変って敵を粉碎するのは貴女の役目だった。だが膨大な時の流れが貴女の血を薄めた・・・まさに「少女」と呼べる存在の魂の揺らぎが最も大きなエネルギーになると言っていたのはどこの次元世界の定説だったかな？もはや混じり合って力を成すのは、この時代の少女たちである方がふさわしい・・・!!」

早口で一気に言い放つスカリエッティには、多少なりの狂気が含まれている。

おそらくはこれを目の前にして好奇心がうずいてしょうがないのだろう。

まあ、それで暴走しなくても昔よりまともになったということなのか。

フォーティーン

四本の腕に、蛇のような下半身。そして、真っ白な鎧を身にまとったかのような体躯。

腕にはそれぞれ剣、杯、棍棒、盾が握られており、それぞれが風、雷、氷、炎の力を持つ。

十人の少女たちは体の各部に、配置封印され、その力を利用されている。

聖杯からは雷が溢れ、盾の中心からは爆熱系の液体がどろりと垂れ出ていた。

海面を吹き飛ばし、炎上させ、フォーティーンが海上から陸地へと乗り込み、そのまま都市部へと向かおうと飛んでいく。

「させるか!!」

「えいッッ!!!!」

そこに一刀が飛び出し、無数の剣を頭部に向けた。

しかしそれは一本も突き刺さることはなく、カンカン、と甲高い音を鳴らして落ちていく。

だが気をそらすことはできたようで、その恐ろしい相貌が彼らに向けられる。

剣が振るわれ、盾の中心から球体状の液体がドポツ、と飛び出してくる。

その剣を理樹の巨大バリアが防ぐがその重さに力が地面に叩きつけられ、液体は観鈴が衝撃波で遠くへ飛ばそうとするが触れた瞬間に爆発炎上、円状に広がった熱で、木々は焼け焦げあたりを焦土と変貌させてしまった。

「ぐお・・・」

「なんて・・・やろうだ・・・」

「これが・・・邪神フォーティーン・・・!!」

地面に倒れ、立ち上がる一同が武器を構えて睨みつける。

こいつをここで止めなければ、この星は終わりだ。

「クラウドさんもそろそろつく。全員で、こいつを倒す……！」

「……………よオッしやあ……！」

一度は驚きはしたものの、彼らの士気は再び上がる。

思い出す。

思い出せ。

「勝てない」といわれる勝負に挑み、一度も負けることなく勝利し続けた男のことを。

異常なる偉業を成し遂げ、そしてついに負けることなく世界を救った男を。

気付けば「その日」は明日に迫っている。  
胸を張って言えるようにしよう。



何よりも、自分たちのために。

ここで世界を終わらせては、明日の自分に向ける顔がないから。

t o b e c o n t i n u e d

## 復活（後書き）

ついにフォーティーン復活！！

ちなみに少女たちの配置は

右腕（上）の剣・・・ルーテシア・アルピーノ  
右腕（下）の盾・・・イクスヴェリア

左腕（上）の聖杯・・・御坂美琴  
左腕（下）の棍棒・・・アルルウ

額・・・インデックス  
胸・・・イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

背中（左）・・・古手梨花  
背中（右）・・・古手羽入

尾（手前）・・・高町ヴィヴィオ  
尾（奥）・・・ハナ

となっております。

その個所には彼女たちを形度ったプレートがあります。  
ブレイドのキングフォームみたいに。

スカさんのまくし立て解説が何気に一番書いてて楽しかったですW  
W W

イメージは「カメラ3 邪神覚醒」<sup>イリス</sup>でのワンシーンです。

そして何故あの年齢でなければならぬのか。  
それもスカさんの言うとおりです。

え？何がモチーフ？

巷で噂の例の「血溜まりスケ・・・」ゲフンゲフン

あの魔法少女です。

僕と契約して魔法少女になってよ！！

ドーベルマンアンデットも本当に何気に終わってますしW W W W  
彼は自らがすでに「未熟でないこと」に気付けなかった。

はたしてそれは未熟なのか？W W W W

次回、VSフォーティーン。

だがこれだけではないのだよ、諸君。

マリアージュ制御端末を送ったのは？橋に連絡したのは？アンデ  
ット達に力となる少女たちの情報を流したのは？

事件の根幹にかかわる謎は、実はまだあつたりします。

では、また次回で！！

## 邪神

「オオオオオオオオ!!」

一刀が流星剣で切り掛かる。

しかし、その動きは最初からわかっていたかのように回避される。

「えい!!」

観鈴の衝撃波が襲い掛かる。

しかし、額部分から魔法陣が出現してそれを防いでしまう。

「行かせるか!!」

理樹がバリアを張る。

しかし、尾が振るわれて七色の魔力がほとばしり破壊されてしまう。

フォーティーンにあらゆる攻撃を加えていくものの、そのすべてが  
躲され、弾かれ、破壊される。

カケラによる先読みの力は絶大で

魔術書の知識から来る防衛策は完璧で

七色の魔力による攻撃は強力すぎる

これだけやって、まだ力を蓄えているのだから、まさに邪神だ。

フォーティーンが棍棒を振るうと、地面や宙に魔法陣が出現し、そ  
の中心から化け物が現れてきた。  
さらに剣をタクトのように振るうことで、その化け物たちが「E A  
R T H」のメンバーに襲い掛かって行った。

召喚、使役

「電王!!!過去に戻ってあれを消せないのか!!!」

『無理です。ハナさんを取り込んでから、過去や未来からの介入はできないです！！』

### 特異点

「これだけの力を使ってるんだ・・・暴走しないわけが・・・」

「イリヤを取り込んでる以上、力が器を超えることはないと思います、よー！！」

### 聖杯の器

ドドドドドン！！バツチー！！

「ホントに雷かよ・・・自然現象の域を超えてるぞ！？」

「液体に触れるな！！爆発するぞ！！くっそ・・・」「あいつ」の獄炎の方がかわいく思える！！」

電撃、爆炎

「クロツクアップ以上・・・!？」

「違います・・・瞬間移動・・・それ以上の力だ!!」

「時を・・・止めるだと!？」

時間操作

それぞれの力は威力の上下こそあれど、そのどれもが強力だった。

いかなる対軍兵器も、巨大砲撃も、技も、能力も、この邪神を前にしては遊びに近い。

飛び掛かって切り掛かることも可能だが、近づいて一回斬りかかるだけで内部から衝撃波が吹き出し、叩き落とされてしまうのだ。



《ABSORB QUEEN FUSION JACK》

《ABSORB QUEEN EVOLUTION KING》

「行くぞ剣崎!!」

「はい!!」

空を飛べるメンバーは残らず飛び立ち、四方八方から攻撃を仕掛けていく。

しかしだからと言って効いているわけではない。

だが意識をこちらに向けることは出来る。

彼らは待っていた。

現在を以って「世界最強」と言える、彼を。

《SPADE 10 JACK QUEEN KING ACE  
ROYAL STRAIGHT FRAISH》

「アアアアアアああああアアアアアア！！！！」

ドゴツ、ギヤギギギギギギギギギギギギギギギギイイ！！！！

ブレイドキングフォーム渾身のロイヤルストレートフラッシュも、フォーティーンの鎧の隙間を狙うが回避され、その鉄板のような場所にぶち当たって縦に真っ直ぐ火花を散らしながら少しだけ窪ませていくだけだ。

落ちていくブレイド。

それを剣で切り裂こうとするフォーティーン。

ブレイドは巨大なそれを、自身の剣を二刀握って受け止めた。しかし、受け切れるはずもない衝撃に、地面に激しく叩きつけられて変身を解除されてしまった。

刻一刻とメンバーが減らされていく。

と、そこに

「フツ、ハアツ!!」

ドツゴオウ!!!

メンバーに向かって振り降ろされたフォーティーンの剣を、クラウドが全てを組ませた合体剣で真っ向から斬りかかって互いに弾かれていった。

フォーティーンの上体はよろめき、クラウドが地面に真っ直ぐ落下して着地する。

「クラウドさん!!!」

「アンデットはすべて倒した……それにしてもデカいな」

そうさうさうと言って空を見上げるクラウド。

それに対しフォーティーンは、自分の剣を弾いた相手を見つけ最大限の威嚇を以って咆哮してくる。

「開翼！！！！」

ドバツ！！とクラウドの背から漆黒の翼が広がり、咆哮の衝撃を掻き消していく。

「アイツのもとにたどり着ければ勝機があるかもしれない。三人とも、援護を頼めるか？」

「よっし！！！」

「オツケイ！！！」

「任せて！！！」

「よし……行くぞ！！！」

ドゥンッッ！！！！！！

そう叫んで一気に地上を飛び立っていく四人の翼人。

それに対しフォーティーンが剣と棍棒を振るって襲い掛かってきた。

クラウドが魔法と剣技でそれを弾き、さらに前へと進んでいく。

その途中を召喚された無数のアンデットが阻んでくるが、クラウドの前に現れた観鈴が衝撃波ですべて薙ぎ払って地面に落とした。

更にクラウドを落とそうと、七色の魔力光と共にエネルギーが尾とともに振るわれる。

今度は理樹の番だ。

クラウドを追い抜いて飛び出し、その尾を防ごうと最高のバリアを繰り出した。

「さっきは壊されたけどね、今度はそうはいかないよ!!」

ヴオンヴオンヴオンヴオン!!

「五重に張って、さらに流動!!壊せるものなら、壊してみなよ!!」

理樹がバリアを張って、それを防ぐ。



カケラによる先読み、そして時止め。

おそらくここまで来るのはフォーティーンにとっても予想外だったのだろうが、最終的にはこの力がある。

それを以って回避、さらにもう来れないように反撃して叩き潰すつもりだ。

「一刀!!」

「ああ、右後方から来るぞ!!」

ゴォ!!

「また動いたな。次は真左だ!!正面に誘導する!!」

一刀の片目が光り、それによる能力で先読みを行っていた。

その借りた力の目の名は「劫アイオンの目」  
皐月駆の持つ、数ある未来の可能性を幻視する目だ。







その行先は、フォーティーンの体に突き刺さった一本。

その柄の尾に二本目が突撃、ぶつかって一本目を体内に押し込んだ。二本目が一本目と同じくらい突き刺さり、さらにそこに三本目、四本目と突き刺さり……

「GYIAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA  
AAAA!!!」

「「あいつ」なら、お前程度の邪神……」

「G  
OOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOOO  
OOOOOOOOOOOOOO!?!」

「「こつ簡単に、斬り伏せてくれる。だから俺も……やらせてもらっぞ」

フォーティーンの体内で縦連結したクラウドの剣の先端が、ついにフォーティーンの体を貫いた。

そこからクラウドが最後に突っ込んだ剣、つまり飛び出した柄の方を握り、渾身の力を持って振り上げた。

となれば当然、右わきから左肩に斬り裂かれるのはわかりきったこと。

ザギユツツ!!

「まだア!!」

ギヤオツツ!!

さらに右肩から左脇に、Xの字を描くようにしてフォーティーンを斬り裂くクラウド。

その斬り口から炎が上がり、フォーティーンの体を包んでいく。その体から明らかに生氣（と呼べるものがあるのならば、だが）が抜けて行っている。

しかし、いまだフォーティーンに倒れる気配はない。

「いつ・・・まだかよ!!」

「インデックスの知識と羽入の神通力をフルに使って再生しようとしてやがる・・・」

「それだけじゃない。「少女」の魂が力になる、というのが本当なら、そもそもの治癒能力、基本スペックもでかいはずだから・・・」

そう、なんということか今やフォーティーンの体は、すでに斬り口吹き出る炎のエネルギーすらも取り込んで、再生へと向かっていた。

しかし、体を傷つけられたというのがよほど頭に來たのだろうか。再生を待つことなくフォーティーンはクラウドへと襲いかかった。

「ZIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIIGAAAA  
AAAAAAA!!!」

「グッ、おー！」

バガン、ゴオン、バゴオツツツ！！！！

その剣と棍棒を剣で受け、流すクラウドだが、真横から振り下ろされた盾をもろに食らい、吹き飛んでいく。

身体が横に「く」の字に曲がり、肺から空気が吐き出される声にならない呼吸音と、右半身の骨がミシメキと軋む嫌な音が聞こえてきた。

グググツツ、と振られた盾に張り付くように押しのかれていくクラウドは、それが降り抜かれると同時に目にもとまらないスピードで地面に向かって一直線に激突した。

が、その体はとっさに動いたカブトや翠といったメンバーによって、直撃は避けた。

しかし地面はくぼみ、クッションとなってくれたにもかかわらずクラウドはすぐに起き上がれないし、カブトと翠は完全に気絶してしまった。

そのクラウドにフォーティーンが襲いかかる。

それを止めようと一刀が地面を走り、フォーティーンの真下へと向かっていった。

それに気付いたのか、フォーティーンが一刀を見ることもなく盾から流した爆液で吹き飛ばそうとこちらに向けてきた。

走りながら一刀はそれを回避し、爆発によって跳ね上がった地面を駆け、真下に到達すると一気にしゃがみこんで跳躍、開翼して突っ込んで行った。

垂直に飛び上がった一刀の目の前には、フォーティーンの尾があり、そこからヴィヴィオを模したようなプレートが見えた。

直後、そこから七色の魔力が吹き出、幕でも張るかのようにして一刀に落ちてきた。

「ッ！？ フンッっ！！！！」

それを見て、一刀が空中で足を踏ん張った。

「オオオオア！！つらぬけエ！！！」

一回転し、反動をつけて足を踏み込み、左掌の甲に右拳を当て、全身の力を込めて、それを打ち込んだ。

拳から放たれ、掌底から打ち出された衝撃が、フォーティーンの体を下から一気に脳天まで走り、貫く。

ゴブン、とフォーティーンの目や鎧の隙間から何やらよくわからない液体がこぼれ、その体がビクンと揺れた。

「っしやあ！！！」

一刀がガッツポーズを取り、フォーティーンの体が止まった事に手ごたえを感じていた。

しかし、直後フォーティーンのみだけがギョロリと周り、一刀を捉えた。

その尾が鞭のように奮われ、それを一刀は紙一重で回避。

しかしそれと同時に放たれた七色の光線が一刀を追い始め、七つの追尾から一刀が開翼して回避を始めた。

一つ、二つと弾き、回避し、消滅させていく一刀だが、一発が掠り、二発三発目と命中してしまい、動きが止まったところに電撃をくらって地面に落ちていく。

それを愛紗とセイバーが抱えあげるがあまりの電量に身体が痺れてしまい、まともにしゃべることすらもままならない。

そうしている間にクラウドが何とか立ち上がり、フォーティーンに向かって再び斬りかかっていった。

クラウドの力はすさまじく、フォーティーンとまともに数回斬り合っただけで地面に落ちていくことの繰り返しをしている。

無論、他のメンバーも見ているだけではない。

当然地上や空中からの攻撃は行っているのだが、まったくフォーテ



イーンは気にもせず、ただ翼人組との戦闘しか行わないのだ。

まるで、相手にするのも馬鹿らしいといわんばかりに。

「グオアツっ！！？」

そして、何回目だろうか。

クラウドがまた地面に叩きつけられ、それを頭から血を流した理樹が抱えあげ、観鈴が一刀を起こそうと腕を引っ張っていた。

しかし支えている方も支えられている方も、すでに限界に近い。

足はガクガクで、視界もぼんやりしてきた。

そうまでなつて必死に闘う姿を見て、メンバーは徐々に思い始めてしまっていた。

勝てないのでは、ないか

しかし、そうなるてはならない。

そうはなるてはいけないのだ。

「世界は、幾度も消滅の危機にさらされてきた」

理樹が言う。

「いつだって、大丈夫だと思っていた「世界」ってというのは、簡単に砕け散ってしまうものだったんだ」

くじけそつな魂に、言葉を向ける。

「でも、でもだよ、あきらめず、立ち上がる。たったそれだけを繰り返してきて、僕はこうして生きて、この世界にいる」

終わりなんてない。

「そして、それは誰だって知ってるはずだ。だって……」

だって今ここにいるみんなは、そういう男の背中を見、憧れ、集まったみんなじゃないか

「友の為に……!!」

「繋がる・・・絆を守るために!!」

「愛する想いを」

「立ち向かう勇気を、ここに」

ゴオツツ!!!

四人の翼人それぞれに、皆の思いが流れてくる。

翼が輝き、粒子が舞う。

その光にフォーティーンが目がくらみ、そして晴れた頃に四人はそこにいなかった。

驚愕するフォーティーン



「ゴ……ガ……」

ズツ……グラァ……

フォーティーンの体が揺らぎ、そして……

ズウン……

落ちた。

その光景に、すべてのものが歓喜した。  
諸手を挙げ、喜んだ。

しかし



それによって体が爆発し、フォーティーンの体が消える。

「素晴らしい出来だ」

その人物が淡々と言った。

それを見て、ほとんどのメンバーは新たな味方かと思った。

そう、始めてみる人物だ。

しかし、何人かは「どこかで見たような気がする」と感じていた。

「私の為にここまで力をそろえ、さらにお前たちを弱体化させた」

そのメンバーの中、たった一人だけが剣を握りしめ、その男を睨み



つけた。

「膨大な力の奔流の中、ようやくまた戻ってきた。多くの絶望に惹かれてな……」

クラウド・ストライフが、男の名を叫んだ。

見間違えるはずもない。  
決して見間違えるものか。

長い銀髪

漆黒のコート

魔晄に浸った蒼い眼

男の伸長を優に超えて長い、異様な長刀

すべてを見下したような、冷たい視線。

「セフィロス……！！！」

「……クラウド……お前の大切なものを……奪いに来てやったぞ」

事件は、邪神に終わらなかった。  
それらすべてを利用する、最悪の英雄が現れた。

t o b e c o n t i n u e d

邪神（後書き）

邪神さん退場！！

でも翼人四人がかりなのをここまで痛めつけるって相当だと思うんだ。

だから弱いわけじゃないよ。ほんとだよ！！

と、いうわけでクラウド愛好会の会長、セフィロスさんに来てもらいましたwww

もう静かな口調で語尾に「クラウド」ってつければ何でもセフィロスになる気がしてきたwww

さあ、みんなもやってみよう！！

と、冗談はさておき。

昨日、バイトの先輩からマイクをもらいました。

理由は簡単。

ニコ動の「歌ってみた」って面白！って思ったからです。

そして昨日、さっそく「星獣戦隊ギンガマン」歌ってみたんですけど……

難しい！！カラオケとは違って難しい！！

いやさ、まだ投稿なんてしてませんよ？とりあえずやってみただけです。

もしかしたらいつかは投稿するかも W W W W W

この小説の挿入歌にしてきた曲かなあ……とかおもってます W W W

そろそろコミケですね！！

作者は死んできます W W W W W

でもコミケ中にも頑張って投稿したいなあ……とか

では、また次回をお楽しみに！！

## 銀白

空が曇っていく。

日がこれから上りきるという時間に、空を分厚い雲が覆っていく。

この場にいるメンバーの大半は彼を知らない。

知ってる者も、あの最終決戦で「奴」の出したレプリカを見ただけだ。

これが、そうこれが

「良い絶望だ」

本物の、災厄の戦士

「何故あんたが……」

「忘れたのか？クラウド。私も、翼人と言われる存在だったことを」

セフィロス復活。

しかし、彼は体を失ったはずだ。

今までも何度か復活しているが、今回はなぜ……

「この場にはよい絶望が蔓延している……」

セフィロス

漆黒の翼をもった、かつての翼人。

その翼がつかさどる想いは「絶望」

その力が、この場に彼をこつして復活させたのだ。

「そして、これだ」

そういつて、セフィロスが「開翼」した。

「なんだと……!?!」

クラウドが驚愕する。

彼はもともと片翼だ。

それを一度クラウドから奪って完全なる翼人になり、そしてクラウドはその両翼ともを奪って漆黒の翼人として覚醒した。

色が同じでも、ひとによって司る感情は異なるので彼が「絶望」でクラウドが「勇気」なのはなんらおかしいことではない。

クラウドが驚愕したのは、彼の開いた翼の色。



それは

「美しいとは思わないか？これが・・・」

キラキラと光を放つ、白と銀の折り合った

「私の翼だ」

彼らがよく知る、銀白の翼だった。

「バカな！！！」

「そんな……」とつて!？」

理樹が拳を握り、なのはが崩れ落ちる。

まさか、この翼が再び敵に回ることになるなんて……誰が予想していたらどうか？

「人々が希望を胸に抱く時は、いつだ？」

セフィロスが語る。

これこそ自分にふさわしいと、翼を見せびらかすように開きながら。

「それは、絶望に立たされた瞬間。わかるか？この翼は、私にも共鳴することができる……」

とはいえ、扱う感情はやはり絶望でしかない。  
セフィロスは消滅し、形骸化した「彼」の翼を、こつこつた形で奪ったのだ。

「絶望したか？」

「・・・貴様・・・！！！！」

「あの時果たせなかった約束を果たそう・・・」

フツ・・・ザツツ！！

「!?!?」

「ツツ！！！！」

セフィロスの小さくそついうと、瞬間その姿が消え、クラウドの背のメンバーのど真ん中に出現した。



セフィロスの振るう剣をキバエンペラーフォームとヴィータが受けていく。

しかし、二合打ち合っただけでその武器が弾き落とされて身体を切り裂かれていった。

崩れ落ちる二人。

致命傷ではないものの、放っておけば命が危ない。

と、そこにシグナムが切り掛かって行き、そのあとに続いてセイバ―も向っていった。

が、攻めていたのは最初の二打ちのみ。  
そのあとはすべて防戦一方だ。

「こちらは二人掛かりだぞ!？」

「こいつ……剣わたしの英霊よりもツ……!?!」

「フツ……ン!?!」

セフィロスが思い切り剣を振ると、斬撃が飛び放たれて二人を直撃した。

二人はそれを受けようとするが、触れた瞬間に体ごと吹き飛ばされて地面をえぐる。

「やめるー!」

と、そこにクラウドが駆け込んでセフィロスの前に立ちふさがる。

しかし、クラウドの剣を撃ちあうこともなく、その大きな面を蹴りあげてセフィロスは彼を相手にすることもなく次々にメンバーへと切り掛かって行った。

刀が振るわれ、そこから炎と電撃が噴き出て五、六人が吹き飛んだ。

何も、特殊なものではない。  
ただ単純に、強力な攻撃であるということ。

今や少女たちはその長刀にはめこまれた、マテリアの中に封じ込められていた。

その力を猛然と振るい、今や両翼の旧英雄は、その場にいたメンバーの七割を削り取っていた。

「デイバインー!!」

「トライデントー!!」

「バスターー!!」「スマツシャアーー!!」

桜色と金色の、二色の砲撃がセフィロスへと放たれ、大気との摩擦熱で炎を上げながら彼女らの杖から放出される。

それを見ることもなくセフィロスは背後から迫るバスターを真っ二つに切り裂き、スマツシャーの外側二本を相殺させ、最期の金色は召喚したモンスターを盾にして防いだ。

そのモンスターの鎧は爆発によって四方に散り、ほかのメンバーを叩いていく。

しかし、それでも臆すること無く夜天の主がその頭上に膨大なる質量の魔力を叩き落としてきた。

十年來の友人同士だからこそその連携攻撃。

だが、直後その場からセフィロスは消え、はやてを真下の地上から吹き上がった火柱が襲った。

気づくとセフィロスは一刀の前に立ち、激しい剣撃を繰り返していた。

セフィロスの一撃に一刀の剣は次々と弾き飛ばされ、しかし一刀の手の中には次々と剣が現れそれを以って応戦していく。

しかし

「こっちが出してんのは剣だけじゃないってのに……!!」



「ほう・・・武器だけでなく能力までも写し取る、か」

そのすべてが、セフィロスにとっては所見であるであろうにもかかわらず見切られ、回避、弾かれていってしまう。

そう言った攻防で固まってしまったのか、一刀はそこで剣を手放すべきだったのを、握りしめて受けてしまったために剣を弾き飛ばされてしまうだけでなく腕まで跳ね上がってしまった。胴体が無防備にさらされる。

そこにセフィロスの手のひらが「そっ」と当てられ、そこから電撃の槍が噴き出そうと爆ぜはじめた。

「させるか!!」

と、直後セフィロスの手と一刀の腹の間に、理樹のバリアが入り込んで、その電撃を見事に防いだ。

だがその衝撃はどうしても通してしまい、一刀の体が後方に吹き飛び、腹の部分の服が吹き飛び身体が地面を抉り飛ばした。

「……………ほう」

だがセフィロスは防がれたというのに、全く悔しがることもなくむしろ面白いものを見たといった顔をして理樹へと向かう。

が、理樹のバリアにはさしものセフィロスの刃も通らない……というわけでもなく、しかし少し食い込んだところで止まっていく。

しかも理樹のバリアは即座に元に戻すことができるし、流動させればさらにその性能は上がっていくのだ。

それを知りつつ、セフィロスはどんどん切り込んでいく。さして効いていないというにもかかわらず、まるで敵を髑るかのよううに。

そこに、クラウドが追いついてくる。  
セフィロスの腕を切り落とそうと、理樹のバリアに伸びる腕に大剣を振り下ろすクラウド。

だが、セフィロスは長刀から片手を放し、あるうことかその大剣の刃側を掴んでそれを止めた。

「な……に……!？」

そして、その剣を投げ飛ばすセフィロス。  
クラウドは体を持って行かれて、これ以上離されてはまずいと思っ  
たのか、とっさに剣を放してその場から飛ばされるのを防ぐ。

そして、セフィロスの腹に蹴りを入れて理樹から離し、その手に理  
樹がバリアでの剣を作り出して握らせた。

理樹のバリアに魔晄の力が充満していき、さらに開翼までしてクラ  
ウドがセフィロスに切りかかって行った。

大きく振り上げて叩きつけ、セフィロスがそれを軽く体を逸らして  
回避、踏み台にして今度はこちらがクラウドの上から斬りかかって  
行った。

それをクラウドは手を放し、後ろから飛んできた理樹のさらなる剣

を見ずにつかんでそのセフィロスの剣を受け止めた。

「クラウドさん!!」

と、そこにエリオがクラウドの剣を投げ、もう片方の手に合体剣が戻ってきた。

理樹の剣を放し、即座に両手でそれを構えるクラウド。

しかしそうしている間に、またセフィロスはクラウドよりもエリオに狙いを定めていた。

「クッ!!!」

それを見、エリオが迫るセフィロスの剣をストラーダで受けようとするが、ゾン!!という音と共に受け止めたはずのストラーダが真つ二つに切り裂かれてその胸から血が吹きでる。

その状況にアギト、ファイズが最強フォームに姿を変えて助太刀し、その間に龍騎がドラクランザーでエリオを回収し瞬風に運んで行った。

「やめろ!!!」

その背にクラウドが叫び、セフィロスに向かって突っ込んでいった。

それにセフィロス派が応戦して答える。

「「大切じゃないものなんてない」・・・か。ならばお前は、すべてを守りきることができるのか?クラウド」

「なに?」

「これも」

斬ッ

「グオツ!?!」

「これも」

ザシッ

「オウあっ!!」

「すべてお前にとっては大切な「仲間」なのだろう？守ってやれもしないくせに、よくも大きなことを言ったものだ」

「ッッ!!」

傷つく仲間  
護れない自分

大切じゃないものなんてない

そうだ。確かにそうだ。

その思いにいまだ変わりはない。

しかし……

今の自分に、それを守ることは出来ていない。

また失うのか。

また、何もできずに？

「そんなことはない……!!」

ギーン!!

クラウドが漆黒の翼を大きく広げる。

そこにチロチロと赤い光の粒子が集まっていく。

しかし、クラウドはすでに一回感情の集束を行っている。

今からそれを行っても、集まるものはなく、ただ力を消費するだけだ。

いくなれば、何も落ちていないのに掃除機を回しているようなもの。エネルギーを消費するだけだ。

だが、それでも彼は止まらない。

「見る……あなたはやっぱり何もわかっていない」

翼を開き、クラウドが腕をかざしてみんなを表す。セフィロスの視線が、周囲に向いた。



倒れているもの  
膝をついているもの  
誰かを抱えるもの

その場にいるものはすべて、もう疲労困憊もいいところだ。

しかし、それでもその目は真っ直ぐに敵を睨み付けていた。  
セフィロス

クラウドは何も優秀な戦士ではなかった。

意気込んで村を出て、しかし大した戦士にもなれないでいた、ただ  
の一介の兵士だった。

ただ、ある悲劇に巻き込まれてその身体を力漬けにされてここまで  
跳ね上げられただけだ。

そして記憶を失い、戦い、旅の過程で取戻し、それでも戦い続けて  
いただけの男。

本来の彼は打たれ弱い、ただの青年でしかない。

そんな彼が、どうして星を救い、さらにはここまで戦い抜くことが  
できたのか。

「大切じゃないものなんてない……そして、俺の大切なものは  
……」

目の前にいる最強の英雄は、守ることを放棄し、攻め滅ぼすことを  
考えている。

守ることに苦悩したことがない。

自分の存在には悩み苦しんだ彼だが、それしかない。

彼の人生にはそれしかない。

しかし、こちらの戦士は違う。

自身の存在に悩み

護れなかったことを悔やみ

立ち上がることに苦悩し

そして剣を握ることに躊躇いを持って

そして覚悟してそれらを乗り越えてきたのだ。

英雄の乗り越えた階段は一段。  
戦士の乗り越えた段数はそれ以上。

どちらが高みにいるかは、一目瞭然。

目の前の敵を倒し、撃ち破るだけなら英雄だ。

しかし、目の前の苦悩を乗り越え、そして苦しみの中を戦い帰還してきた戦士を

人は、それに敬意をこめて“英雄”<sup>ヒーロー</sup>と呼ぶ。

「オレの大切なものは、そう簡単に壊れはしない……!!!!!!」

胸に手を当て、握りしめ、彼に赤き粒子が流れ込む。

チロチロと  
ザラザラと

そして、一斉に流れ始めてきた。

「この量は……!!」

「……あなたに見せてやる。立ち向かうといつこと、真の意  
味を……!!!!!!」

漆黒、立つ

乗り越え、さらなるものを求めるために

t o b e c o n t i n u e d

銀白（後書き）

こうして復活したセフィロス  
そして背に映えるはあの銀白でした！

時風

「取られた!？」

あの翼は時風の物である以上「希望の翼」です。

それに彼は劇中で言ったように絶望を以って干渉し、その翼をみごと奪ったわけです。

しかしまあ・・・次回でセフィロスさんやれそうですけどね!!  
WWW  
W

第三章の一つ目の事件は、そろそろ終息を迎えます。

ちなみにコミケは一日目は暑くて大変でしたWWW  
W

この後（朝の）四時に集合してまた仕事にかかります。

自分は基本企業ばかりだから助かりますけど、ほかの人の同人を並んでるとねwwwwww

明日も頑張りまっせー！！！！

ではまた次回



## 決着

クラウドが剣をかざす。

空の頂点に太陽が差し掛かり、まるでその決起を祝福するかのよう  
に光が彼を照らす。

赤い粒子を見にまとい

黒でありながら美しく輝く翼をはためかせ

クラウド・ストライフが長年の敵に、牙を剥く。



「絶望は確かに大きな力かもしれない。しかし、人はそれを乗り越える」

オオツ・・・

「誰かを護りたいから、誰かと繋がっていたいから。その思いが、立ち上がる力になる」

ギチツツ

「想いは、決して個別の物じゃない。あなたが絶望を糧にするなら、オレはそれも越えてすべてを力にする！！」

ズ、ガオツツ！！！！

クラウドが上から振り下ろした剣を、グルリと下に回して打ち上げ、セフィロスの剣を弾きあげる。

連動する想い

理解した翼人に、負けはない。

クラウドが剣を一層握りしめ、合体剣の中心であるファースト剣を除くすべてが真上に向かって飛び出していった。

そして、そのうちの二本がセフィロスの膝を貫き砕く。崩れ落ちるセフィロスの、上を向いていく上体の肩に向かってさらに二本が落ちてきて突き刺さり、地面と身体を縫い付けた。

「ツアー!!」

「ツツ!!」

そのセフィロスに向かってクラウドが剣を突き立てようと両手で握り振り上げ降ろす。

が、セフィロスは肩がブチブチという音を立てるもかまうことなく、剣が肩と膝に突き刺さったまま無理やり起き上がってその剣を回避、真上に跳躍した。

そのセフィロスを見やって、クラウドも跳び剣を下段に構えて上空のセフィロスへと突撃してゆく。

それに対し

「落ちろ」

と一言いい、セフィロスの翼に、恐ろしいほどの輝きを放つ銀色の粒子が集まっていき、その間を稼ぐかのようにセフィロスの体に刺さった四本の剣を抜き、自らの長刀でクラウドに向かって弾き飛ばした。

猛烈な勢いで主に迫るクラウドの剣。

が、開翼したクラウドはそれを回避しながら自らの剣に打ちつけ、次々と結合、合体させていく。

その対処に、セフィロスは驚くこともなく淡々とクラウドを見る。

まるでありきたりの展開に、飽き飽きしたという顔をして

しかし、ありきたりというものは

正しいからこそ、幾度も幾度も取り扱われる事項なのだ。

「セフィロス。あなたにその翼は使えない」

目の前に巨大なエネルギーの塊が出来上がっていく。  
この世界には、絶望などどこにでも転がっている。

いくらでもその力は集まる。

「判断」はお前に必要ない……与えられた使命をただ全うし  
る」

7854

ゴオオオオオオオ

「だが……たまには果てなき絶望に潰れ、這いつくばって眺める世界というのもいいものだろうか？」

セライロス  
この男はわかっていない。

確かに、この世に絶望はいくらでもある。  
それは正しい。この世界は、悲しいことばかりだし、絶望するには  
十分すぎる要素で詰まっている。

しかし

この世界にあるのがそれだけしかないと言っならば、この世界はと  
うの昔に破滅している。

それを乗り越えてきたからこそ



数多くの絶望<sup>それ</sup>を踏み越えてきたからこそ

この世界は今もこうして、誰の手にも落ちることなく存在している。

この男はこの世界を手に入れることはできず

そして、この世界の護り手にもまた、勝つことはできない

その証拠に

「あんたにその輝きは似合わない……!……!」

翼の輝きすら、彼に順応していなかった。

セフィロスがため込んだ絶望ぎんいろの粒子をクラウドに向かって放つ。  
が、クラウドが剣を振ってゆくとそれは綿毛に息を吹きかけたかの  
ように軽く消えていってしまった。

「その程度か、絶望」

斬ッッッ!!!

そして、剣がセフィロスの体をすり抜けた。  
セフィロスが驚愕するよりも、早く。

だがセフィロスも当然それをガードした。  
しかし、セフィロスの長刀は魔晄と勇気で発光した剣の前にはもろ  
くも砕け、そこから十の光が飛び出してしまったのだ。

背中<sup>の</sup>翼<sup>まで</sup>が切<sup>断</sup>され、それが無<sup>数</sup>の羽<sup>とな</sup>って消<sup>え</sup>ていく。

セフィロスの体は斬<sup>ら</sup>れたにもか<sup>かわ</sup>らず、血<sup>は</sup>流<sup>れ</sup>てい<sup>な</sup>かつた。  
しかし、そのコ<sup>ー</sup>ト<sup>の</sup>下<sup>の</sup>服<sup>は</sup>避<sup>け</sup>、通<sup>過</sup>した部<sup>分</sup>は真<sup>っ</sup>赤<sup>に</sup>焼<sup>け</sup>  
ただれ、今<sup>ま</sup>さにさ<sup>ら</sup>に発<sup>光</sup>してい<sup>っ</sup>てい<sup>る</sup>。

「……ここまでか」

ボロボロと塵<sup>芥</sup>のよ<sup>う</sup>に崩<sup>れ</sup>てい<sup>く</sup>自<sup>分</sup>の手<sup>を</sup>見、セフィロスが  
つ<sup>ぶ</sup>や<sup>く</sup>。

そして、地<sup>上</sup>に降<sup>り</sup>立<sup>っ</sup>たク<sup>ラ</sup>ウ<sup>ド</sup>を一<sup>瞥</sup>し

「お前<sup>が</sup>い<sup>る</sup>限<sup>り</sup>……終<sup>わ</sup>ら<sup>な</sup>いさ」



「EARTH」の医務室はまだ、負傷したメンバーを収容出来るほど復興していなかったために、メンバーは聖王教会付属病院を訪れていた。

その一室。

そこで、クラウドは別途に横になり、体中に包帯を巻いていた。

・ 窓の外を眺めると、そこには広々とした中庭があり、そして……

「あうあう〜待つのですよー」

「まったく・・・あんたら病み上がりなんだから大人しくしてなさいよー？」

「にぱー。わかりましたですよ、胸の小さなおねーさん」

「今なんつったコリアー!!」

「ん、ハチミツ」

「わ、ありがとうー!おいしいんだよー、あまいんだよー」

「こっちだよー!イクスー!」

「せ、聖王殿下・・・」

「もー、その呼び方は禁止ー!」

はしゃいで駆けまわる、少女たちがいた。

中には座って休んでる者もいれば、芝生で眠っている者もいる。

しかし、そこには平和な、いつもの光景が広がっていた。

「こいつがうまく効いてよかったよ」

と、クラウドの部屋にやってきたのは上条だ。

セフィロスを倒し、彼女らが解放された瞬間に魂はその身体へと向かって復活した。

彼女らはすぐに目を覚ますことはなかったが、ただ一人だけ、イクスヴェリアだけはすぐに目を覚ました。

そして、言ったのだ。

自分の中のマリアージュを作り出す機能は止まってはおらず、またいつ暴走して吐き出し始めるかわからない、と。

だが、そこに現れたのがこのツンツン頭の幻想殺<sup>イメージブレイカー</sup>だ。

その胸にポンと手を当てて、イクスとスバルに張り倒されただけでその機能は簡単に消滅した。

その現象に驚いたイクスだが、スバルからの言葉を思い出し「生きていこう」と思ったらしい。  
彼女の人生は、ここから始まる。

「……いい光景だ……な」

「まさかあんた……小さな子が……好きなのか？」

ドンッ、パキユイン！！

クラウドが魔法を放ち、上条がそれを消した。  
高度なツッコミとボケである。



ちなみに両者とも見ていない。シールドだ。

「でも・・・戦い、手に入れたかいはある・・・そう思える光景だよな」

「ああ・・・この小さな窓から見える光景の為に、俺たちはいつでも命がけで戦ってきたんだ」

太陽は頂点に差し掛かってから少し傾いたところにある。

その日光は明るくともやわらかなもので、彼女らをやさしく照らしていた。

・・・彼らは気づいていない

今見えるこの光景がどれだけ得難いものだったかということ、彼らは知らない。



この世界の、物質に存在を頼らない空間。  
そこは広い広い空間で、上下前後左右すべてが真っ白だが、足元数メートル下には蒼緑の光が流れている。

立っているのか、浮いているのかもわからないその場所で、セフィロスは静かな怒りを覚えていた。

『お前が強くなれたのは私がいたからだ……それをさも自分の力であるかのように言っている貴様は滑稽だ……』

まるで負け惜しみ。  
しかし、彼自身にしてみれば、それは重大なことなのだろう。

足元の光      ライフストリームを見て、セフィロスの体が少し引かれる。

『……私は吞まれん』

しかし、その引力を引き千切るかのようにコートを翻し、その真逆へとセフィロスが歩いていく。

『個を失い、世界の循環器の一部になど私はならない。私には、母の願いを全うする必要がある』

星を我が手に

そして、新たなる土地へ

この星がどうなるうとも、必ずこの世界は私のものに

それは思考だったのだろうが、この空間においては声と変わらない。

次はどうした手で言ってやるうか。

そういえば、前に復活した時に利用した「あいつ」は記憶を……

そこまでセフィロスが思考した瞬間

ザッ、ギィー!!

その目の前に、二本の何か落ちてきてその行く先を遮った。

それは、大きなバスターソードと、金属製のロッド。

X字になって前を遮るそれに、セフィロスは見覚えがあった。

しかし、持ち主の気配はしない。

当然だ。彼らはすでに足元の流れの中にいる。

この空間に足場はあってないようなもの。

このように足止めされても、下や上、左右に回り込んで進めそうなものだ。

だが、セフィロスはどうしてもその前に進むことができなかった。

『これ……は……!?!?』

『ようやくあなたを、星に害を及ぼさないように受け入れることができるようになったよ』

『クラウドにはメーワクかけちゃったなあ』

『だいじょうぶ。クラウドなら、何度も立ち上がるよ』

どこからか、声が聞こえる。  
聞き覚えのある、その声。

一人は自分を最初に殺した男  
もう一人は、自分が殺した女

姿はない。

ただ、声だけが聞こえてきた。

そして、邪魔をする二つのそれに目を見張るセフィロスの背後に、  
誰かが現れた。

ったくよー

せつかく静かにしてたのに、おまさんがこんなことするから起きちゃったじゃんよ

声ではなく、そんな思考が空間に響いた。

先ほどの二人とは全く違う声。

しかし、聞き覚えはある。

しかも声だけではなく、その男はセフィロスの背後にしっかりと立って（？）いた。

響いたそれに反応し、セフィロスが振り返ろうとするがそれよりも早く後ろから頭を掴まれ、その顔を見ることができない。

《人の翼引っぺがしといてあっさり負けるとかやめてくんない？俺まであっちに連れ出されそうになっちまったじゃないのよ》

『貴様……!!』

『イレギュラーな死、っつーか消滅だったからねえ。早かった分の時間、ここで待ってんのよ。お前の方はもう終わりだけど』

『私は……消えんぞ!!』

『ああ……命は消えないさ』

セフィロスの体に、足元から伸びてきたライフストリームの光が絡みつき、グン、グン!!と引きずりおろしていく。

みるみる下がっていくそれを見下ろして、あとから現れた男が立っ  
たまま一言最後に言った。



《めぐるだけさ》

『・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！』

その言葉が聞こえたのかどうかは分からない。  
しかし、セフィロスは何かを叫びながらドンドン引き込まれていき  
そして・・・・・・・・

ライフストリームに飲まれ、浄化、循環する命の一つへと還元され  
ていった。

《終わらせるのは・・・やっぱ世界だったか》



「EARTH」の周辺に突き刺さった十五天帝のうち的一本、青龍の前に「EARTH」メンバーの大半が集まっていた。

青龍の一番前には一刀が立ち、理樹と観鈴も一緒にいる。クラウドは少し離れたところでバイクに寄りかかってその様子を見ていた。

「なあ……あんたがいなくなって一年たったけどさ」

それは報告だ。  
ただの活動報告。

一周年でも、一周年でもない

彼は、いなくなっても何もないのでから

「世界は……今日も平和さ。なんにも、なかったさ」

ニカッと笑ってそっぴう一刀。

何一つ変わらない世界。

何もなかった。

結局報告はこつなつた。

しかし、その中には多くの想いが詰め込まれている。

太陽が眩しい。

その中に、光る羽根が見えた気がした。

t o b e c o n t i n u e d

## 決着（後書き）

いやあ、あつけない「ラスト」と、「その後」っぽいのです!!  
セフィロスを強そうに描写しきれなかったなあ・・・くそう

そしてやっぱり戦闘後ってメチャクチャ苦手ですwww  
なんかおかしかったら言ってください。

蒔風

「そして祝、俺出演」

そうだね。

ちなみに最初の武器は言わずもがな、エアリスとザックスのです。  
まあ二人はもう完全にライフストリームになっているので、あくまでも残った残留思念とでも思ってくださいね。

武器は蒔風がやりました。

流石やでえ・・・

蒔風

「これでセフィロスも終わりか。もう出てこないよな？」

あくまでもこの小説で出す予定はないです。  
ま、必要に迫られればどうにかして出しますがね!!

蒔風

「イクスも無事この時代で生きていくことができてよかった」

そこは上条さんです。

マジパネエっす。

中でも言いましたが、彼らには蒔風を超えていつてもらいたいという思いを込めていました。

蒔風

「俺は「なのはシリーズ」の話には二回も負けているからね」

そして、三度目でやっと打ち勝った。

それをたった一回でやり遂げた彼らは、間違いなくすごいのです。

蒔風

「とはいつても、帰ってくるしね」

まね

と、いうわけで次回、ついに帰って来た!?

蒔風

「ではまた次回」



## 日常

「ヤアアアア！！！！」

「ハアあああ！！！！」

すでに修復された「EARTH」の地下訓練場。

そこで二人の人間が、激しい戦いを繰り返していた。  
限りなく本気で、自分の愛機の名を叫んで技を繰り返す。

「シルバードガー！！！」

「マツハキヤリバー！！！」

そう、その二人とはまさにスバル・ナカジマ、ルネッサ・マグナスである。

銃弾と拳がぶつかり合い、弾け、見るも綺麗で激しく鮮烈な火花を散らし、一体何があったのかと思えるような戦闘を繰り広げていたのだ。

この二人がここまでして戦う理由。それは

「イクスはウチんだああアアアアアアアあああああ!!!」

運命から解き放たれた冥王・イクスヴェリアの争奪戦だった。

時間を少しだけ遡って

先日保護された少女、イクスヴェリア。  
体内に秘められた兵器としての機能ももう暴走することがなくなり、  
一人の人間として生きていくことになった彼女には、まず必要なも  
のがあった。

即ち、戸籍である。

無論、そんなものは「EARTH」の方で簡単に用意できる。  
しかし、イクスはどう見たってまだ子供だ。どうしても保護者が必  
要になってくる。

そこで真っ先に立候補したのがスバル、そしてルネッサだった。

今のところ交流の多いスバル  
父と慕った人物が残した彼女に親近感のあるルネッサ

その思いは大きい。

どれくらいかというところ「聖王教会に預けたら？」と提案したティアナに二人して腹パンして撃沈させるほどだ。

「あんたら・・・覚えときなさいよ・・・ぐふう」

「ティ、ティアナさーん！！！！」

腹を押さえ、顔にタオルをかけ、グテツ、と横になったティアナが  
呟き、腕がパタリと落ちる。南無

そのわきにキャロがオロオロとスバル、ルネッサ、ティアナを見まわしていき、最後にエリオを見てみる。

その視線には「ど、どうしよう・・・」という意図が込められているのが容易に分かったが、エリオもどうすればいいのかわからないままだ。

「ぼくには・・・何もできない・・・ッ！！」

そんな茶番の横で、もう一つの茶番が行われた。

「ティア！くっ、ティアの犠牲を無駄にしないためにも、イクスはウチで引き取ります！！！」

「ランスター執務官！！おのれ・・・上司の遺志は、私が継ぎます！！私が引き取るのです！！！」

「まだ死んでないですよ！？」「遺志」じゃなくて「意志」でしょう！？」

突っ込むエリオ。

どうやらこの騒動の立ち位置を掴んだ模様。

そういつていると

ガシッ、ガシイ！！

と二人が互いの肩をギリギリと掴み

「スバルさんの家はもう大所帯でしょう？食費とか大変なんですから、うちでイクスを・・・」

「いやいや私はもう一人暮らしだから実家は大丈夫だし、一人暮らしのルネッサさんこそイクスの面倒見るの大変でしょう？」

そんな話し合いを始めた。

笑顔で。でもこの笑顔カタイヨー

「でもやっぱり金銭的にうちの方が」

「ウチはお父さんがもっと働けばいいんですよ!!」

「ゲンヤさんオワタ」

その言い合いを見てエリオが呟く。

ゲンヤさんご愁傷様。

スバルの思考に「自分が」という選択肢はなかった。

「だってそれだとイクスと過ごす時間が無くなるじゃん!!」

さいですか。

と、そこに

「まてーいーいー!」

ガラガラ、ばん!と勢いよく扉を開いてそこに現れたのは、夜天の主・八神はやて。  
ヴィータと初代リインフォースを引き連れて、駆けこんできた彼女は開口一番こう叫んだ。

「幼女がいると聞いて!!--幼女をもらえると聞いてきました!!--」

バリーン!!--

「かわいい幼女をモノにできると聞いて！！おねーさん大歓迎だ！！」

そして、窓ガラスを割って来ヶ谷が登場。  
何かのアクションシーンか何かのようだ。

ちなみに

「来ヶ谷さん！？こゝ、こゝ36階！！」

「幼女がいるのなら」

「不可能を可能に！？」

真人と言い、こいつと言い、“輝志”って怖い

「幼女幼女！！ハアハア」

「うちには幼女分がたらん！！古代ベル力的な意味でも、うちが引



き取つたる!!」

「いろいろ危なそうなので!!」「ダメです!!!!」

ドコッッ!!

ひとしきり叫んだ来ヶ谷とはやて。

その二人の腹部に、スバルとルネッサの重い一撃が叩き込まれた。

その一撃で沈む二人。

崩れ落ちる二人を、それぞれリンフォースとヴィータが抱えあげた。

「だ、大丈夫ですか!?!」

「はやて、はやてー!!!!早く誰か来てくれよ!!!!このままじゃはやてが死んじゃうよ!!!!」

とは言つ物の、来ヶ谷はリンフォースの胸に埋まって幸せそうだし、はやてははやてでヴィータを抱き枕にして至福そうだった。

「あつちの心配は・・・」

「いらないみたいだね」

そんな二人を見てキャロとエリオが脱力していると、今度は開いたままの扉に相川始が現れた。

「おいどうした！すごい音が・・・」

「ロリコンカリスはだめです！！」

「なんとって言われッ!？」

パリンポーン

そんな軽い音がして、始の体が宙を舞う。  
身体は真っ直ぐ。まるで人形を投げたかのようにすっ飛んで行った。  
ちなみに気絶してます。なんという早業。

『は、始ーーーーー!?!?』

『どっしたんだい?』

『は、始がいま上から落ちてきたんだよ!?!』

『落下出会い系ジョーカー?』

『こ、これがテンプレという物かい!?!?』

『バカなこと言ってないで医務室に連れてくの手伝ってくれ!?!』

下の方からそんな剣崎と翔太郎、フィリップの声が聞こえてきたが、今は気にしてられない。



「泉さん。私、なんていった？」

「EARTH」の一室。

そこで正座させられたこなたが、目の前のハルヒに凄まじっていた。

そのハルヒの手には一枚の原稿用紙（漫画用）。

握られている一枚には大きなインクをこぼした跡があり、失敗してしまったことを表していた。

この部屋にはいくつも机があり、今はこの二人しかいない。

ついさっきまでは長門やみくる、かがみ（ガタツクに非ず）につかさ（デイケイドに非ず）、さらには朱里と雛里、西園などもいたが、今はいない。

外の扉にはデカデカと「男子禁制！！」と書かれており、ここで一体何が描かれていたのかはまあイメージにお任せしよう。

こなたは汗を垂らし、ハルヒは「やっちゃってこれてるなもう！！！」といった感じにそのこなたを見ていた。

「あらゆる祭りに参加するSOS団は、当然年に二回の「あの祭り」にも参加しようとしていたわ。そして今回無事に受かって、サークル参加できました」

説明台詞乙

こなたはそう思ったが、火に油を注ぎそうなので言わなかった。

「そして、有志を募って漫画を描いていました。さすがに内容が内容だから男子はなしで」

そう、そうして作業してて、こなたがこうしてミスってしまったのだ。

それはまあいい。

あらかた文句言って、ハルヒは原稿用紙を買ってきてくれとこなたに頼んだ。

ここからの一連のやり取りが、今まさにハルヒの中で爆発していた。

「そして買ってきてって言ったら、泉さん、なんていった？」

「えっと……」

「なんて言った!？」

『じゃあ……どっちが行くかは)ピン、パシッ) 10じゅう円えんに、任  
せようか!』

「じゃらくせーよおー!!!!なんでそんなドヤ顔なのよ!!!泉さん  
がミスったんだから、あんたが買いに行きなさいよ!!!」

「あの……」

「まあいいわ。それで結局泉さんが行くって言ったとき、あんたな  
んて言った!？」

「ちよっと……あの……」

「なんて言った!？」

『ねえ、私いくつに見えるー?』

「知!ら!ね!え!よ!あ!!!!そんなの関係ないよ!!!早くいかないと文房具店しまっちゃうよ。なんで今聞くのよ 年相応よ  
り若く見えるわよ!!!!」

「ア  
」

「まあいいわ。それで?結局買いに行くってなってお金渡して部屋  
から出ようとした時にあんたが言った言葉が  
」

『今日寒いねー。あ、そういうえは私……(ブイッ)風邪気味だ  
った』



「（グワツ）泣いて馬謖を斬つてよ！！どこまで粘るのよ！（ガツ！）どんだけ行きたくないのよ！！しかも今日寒くないし！！！」

フウー

「それで、あんたがいざ出かけて買ってきたのが

」

一甘

つ酒

「どづいづことよ！？頼んだのはゲンコーヨーシなのよ！！悪い冗談やめてよ！！そう言つて、あんたが出してきたのが

」

ハイ！>（＝　＝　・　（つ）ドロリ農耕ピーチ味」

「ノーサンキューよお！！ニツチもサツチもいかないわよ！！私に  
どうしてもらいたいのよ！！しかもこれ「農耕」だし！！」「濃厚」  
じゃないし！畑で何が採れたっていつの！？腐ったようにゲル状よ  
！！渡した時妙に目え逸らすなよ！！！」

「あの、口調が・・・」

「待つて！！何も言わないで！！それでさ、ちゃんと物はあるのか  
って聞いたらあんたは」

『許してヒヤシンス』

「ヒヤシンスッ！！くだらないって騒ぎじゃないよ！！  
ヒヤシンスどっつっから出てきたんだよッ！！」

それでも信じたよ。ちゃんと原稿用紙買ってきてるって！！それが  
ハードなギャグだって！！でも、はやく原稿用紙出せって言った  
ら

『ハルにゃん頭をヒヤシンス』

「（息を吐くように）ヒヤシンススツウ……！頭を冷やすのはどつちだよ……！どっちがヒヤシンスだよ……！」

「いやいやだから……」

「それでもつかい聞いたよ。原稿用紙どこだ……！そしたら……」

『ゆるしてくんさい（ペロ）』

「（自分の腿スパーン！）ヒヤシンスどこい……！たんだよ……！つかど……でもいいわよヒヤシンスは……！それよりも……！原稿用紙だよ……！」

で！！結局出したのが！！！！」

つ「原稿用紙（四百字詰め作文用）」

『そそそ、これこれ。さてと・・・薔薇な文でも（カタン）書きますか（カリカリカリ）・・・・・・』

「ッて（ガバアッ！）アンポンターーーーン！！（ドタンドタンドタン！！）どんだけトンチンカンかませばいいのよ！！－一体何がしたいのよ！！－そう聞いたらあんた」

『真実がいつも正しいとは・・・限らないんだよ！（キラッ）』

「（ゴワツツ！）限るわーーーー！！もう泉さんじゃ埒が  
明かないからそこを通りかかったキャラちゃんに頼もうとしたわよ  
！！そしたら」

『どんなのですか？あ、これですか・・・』

『あ』

『（ボヒューーーーー！！！！）アわわわわわわ』

「夢中だよ！！目が釘付けだよ！！嬉しい悲鳴だよ！！！！そ  
れで、じゃあ有希に行ってもらおうとしたら」

『（真っ赤になりながらキャラが（ここはここしたらっ。』

『・・・それはいい案』

「あつちに乗っちゃったよ！！結局その後ほかの人たちも呼ばれちゃったよ！！SOS団率下がってくよ！」「EARTH」腐女子人口の高さに・・・びっくりだよ！！ 集まった人のうちSOS団は三人だけよ！！私除くと二人だよ！！他の二人も私たちの時より思いのほか楽しそうだったし！！サークル名「SOS団」なのに正規メンバーが半分以下って何よ！！ジユウレンジャーかよ！！！」

「ハルにゃんいくつ！？」

「それであんた引っ張ってって急いで買ってきて！！そして帰ってきたときには」

『他のみんなと別の部屋で作業してます（置き手紙）』

「あ、みんないなくなっ ちゃっ たよ！！しかもどこの部屋

か書いてないし！！合流できないし！！そんなに私の考えた話が面白くなかったかコンチクヨオーウ！！　で、その置き手紙見てあんたこう言っただよね！？」

『神の悪戯か・・・悪魔の罠か（キリッ）』

「悪魔の罠よオ~~~~~！！もう何をしたらって悪魔が待ち構えていたわ！！私にだって手の施しようがないわよ！！どうすりゃいいのよ！！神の力がほしいと思っただわ！！そう聞いたらあんな・・・」

『。。。』（ポカーン）』

「何よその顔は！？あんたが元凶じゃない！？ミスった時にすぐ言  
つてくれればまだ原稿用紙はあったのにイーーーーー」

ガクンガクンとこなたの肩を揺らし、（ギャグ的に）目に涙をため  
ながらハルヒが叫び終える。

そうして、その場が静かになって……

「この空気……どうする？」

「どうするじゃないわよ！！さっさとみんな探して作業始めるわよ  
ーーーーーオ！！！！」

こなたの後ろ襟を掴んで、まるで子猫でも引きずるようにハルヒが  
廊下を飛び出す。

その勢いにこなたの体はブランブランしているが、別に大丈夫そう  
だ。





負けたルネッサは似つかわしくない叫びをあげていた。  
キャラ崩壊か？

「さあイクス……こつちだよ!!」

そういつて、スバルがティアナとエリオ（キャラは他の人たちとど  
っか行ってしまった）と一緒にいる、イクスに向かってそう呼びか  
けた。

だが、振り向いた先にイクスはいない。

その光景に呆然とするスバルに、ティアナが声をかけた。

「ああ、イクスならなのはさんとヴィヴィオが遊びに行こうって誘  
いに来て、そのまま行かせたわよ？」

ティアナは知っていた。  
イクスが目の前の戦いに対し、一体これは何なのだ、と  
思っていたことを。

正直言つてこの騒動はめんどくさい。

だからいったんこの場から逃がすという意味も含めて、  
なのはにイクスを任せてしまったのだが……

「友よ！！なぜ君は、魔王に魂を売ったのか！！！」

「なにが!?!」

その話を聞いて、スバルが超獣戦隊よろしくそんなことを叫んだ。  
しかしここまではつきりと魔王と言つてもいいのか？

「チャンス!!」

「あつ、まで!!」

それを聞いてルネッサが訓練場から飛び出して行くように、その足にしがみついてスバルが止めた。

「まだそんな力があつたなんてね!!」

「命あるところ、正義の雄叫びありイイイイイイイイイイイイ  
い!!!!」

ここに、ルネッサのキャラ崩壊が証明された。  
というかこの状況で自分を正義と言い張るのか。

どちらも悪の道に寄り始めている気がする。

そう言いながらもドタンバタンと泥試合を進める二人。

そこに、一人の人間の影がかかった。

「スバル？ルネツサさん？」

「この・・・え？」

「あ、エースオブエース・・・」

そこに現れたのは高町なのはだ。  
イクスを連れにきたときに、何をやっているんだろうと気になって、  
結局こうして戻って来てしまった感じだが・・・

「なのはさーん」

「あ、ティアナ。さっきはどうしたの？お腹押さえてたけど」

「ええ・・・それですね・・・」

そこに駆け寄ってきたティアナ。  
さっきはまだ腹が痛くてなにもできなかったが、ここにきてなのは  
の耳元にクロスミラージユを当てた。

その時、ティアナの顔を、スバルは見た。

『言ったわよね？覚えておきなさいって』

「ティアー——————！！！！！」

クロスミラーージュには先ほどのスバルの叫びが入っており、それに気づいたスバルが叫んだ。

奇蹟的にも、その叫びはクロスミラーージュから再生された音声と見事にハモっており、なのはの耳にステレオで、脳味噌にはしっかりと認識されてしまった。

『「友よ！！なぜ君は魔王なのはさんに魂を売ったのか！？」』

直後、スバルの体を桜色の砲撃が包み込む。  
当然近くにいたルネッサも一緒であり、二人仲良く消し飛んで行っ  
た。

ちなみに、イクスはとりあえず「EARTH」預かりにして、誰が  
保護責任者になるかは保留になってしまったようだ。

エリオによる、今日の教訓

「女性はたくましい。が、恐ろしい」

.....

「騒がしいですねえ」

「一体何があったんでしよう?」

「EARTH」の一室

完璧和風のその部屋に、アリスと長岡、そして凧がいた。

三人とも正座しゆったりと茶を飲んでいて、さっきから何やら騒がしい様子にはてな、と首をかしげていた。

「そうですねえ……管理者的勘がいうには何となくですが……」

「何となくですか?」

「イクスさんをめぐってスバルさんとルネッサさんが戦って、思わず言っちゃった言葉で二人がなのはさんに吹き飛ばされた感じですかね?あとはハルヒさんとこなたさんが友だちを探して走りまわってるくらいでしょうか?」

「何となく以上の詳細情報!」

大人しく茶をすすする凧の横で、長岡が驚きの声を上げる。

ちなみに凧は人型で、目をつぶって茶をのんびり楽しんでいた。







「……………つていうのが今日の報告です。今日中にまとめてくださいね」

「……………なあ」

「あ、理樹さんは今日休みですので、あなた一人で頑張ってください」

「……………あの」

「逃げたら……………ぶち抜きますよ」

「何を!？」

そして、北郷の部屋で、今日あったことを軒並み報告書にしてアリスが机の上にドサリと置いていつていた。

中にはどーでもいい内容も……………と、いつかどーでもいい内容しかない。

だがここで厄介なのは

「どーでもいい内容のくせに被害だけはマジもんだ!？」

「さあ、キリキリまとめていきましょー」

「待てよ待てよ!! 訓練場の損壊はまだわかる。だけど窓ガラス数枚の補修、崩れた壁、廊下での戦闘、貫いた砲撃の被害!!! これ全部各個人がやっちゃまったやつだよな!？」

「やっちゃったZE?」

「やっちゃったZEじゃない!!! しかもあんた何気に茶葉のお金を請求してんじゃねえか!？」

机にたまった紙束を見て、げんなりしてゆく一刀。

ちなみに、この状態はすでに手伝ってもらった後でこれなのだ。

今更またやってくれとは言えない。

手伝ってくれた武将はみんなタレ武将になって休んでしまっている。



それを追っていくヴィヴィオ。  
それは敷地の門の方へと転がっていき……

「おっと」

一人の男の足元に当たって止まった。

男がそれを拾い上げ、ヴィヴィオの方を向く。  
その男の姿に、ヴィヴィオの足が止まった。

「……………え？」

その様子を見て、なのはがヴィヴィオのもとに駆け寄っていき、彼女もその姿を見た。

その男は……

「よお。久しぶりだな」

ポン、とヴィヴィオにボールを投げ返し、一人の男が声をかける。

その姿は、忘れたことなどなかった男だ。

ちょうど一年前に消えた、あの男のものだった。

「戻ったぜ。なのは」

「舜……くん……?」

マイカゼ シュン

いま、この男が帰ってきた。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



## 日常（後書き）

日常のアニメが面白いWWW  
ついつい入れちゃったZE!!

イクスはどうしようかと本気で悩んでいます。  
スバルでいいかな？もうWWW

ところどころに戦隊ネタを入れるのも楽しかったです。

今日は日中お神輿がついでで本気で疲れました・・・  
現在最後の力を振り絞っております。

剣崎のオンドウル語は「もう誰も死なせたくない」・・・だったと思います。

そして、戻ってきた男。

まあ、あっさりと帰ってくるわけないですけどね!!!!

本気で疲れてますいのでこの辺でアデュー……!  
ちなみに、ここから予告で言っていた「二つ目の短い方の事件」が  
始まります。

そして、この中で……!?

次回、野望再び

ではまた次回

## 襲来

「本当に……舜君なの……?」

「この姿を見忘れたのかい?なのは」

「ほ、本当に……」

そういつて、なのはがまだ信じられないといった風に蒔風へと近づいていく。

一方蒔風の手も、そのなのはの方へと伸び、そっと頭を撫でよつと  
して、言った。

「お前が大好きな蒔風さんだぜ?ほれ、おにーさんに飛びついてきなさい」

その言葉になのはが涙をこぼし、目を見開き、そして

「いけません!」

「EARTH」ビルの廊下から眺めていたアリスが、窓ガラスをすり抜けて飛び出し、なのはとヴィヴィオの体を抱え込んでその場から後退させた。

その早業たるや、二人を抱えた一瞬で蒔風の手を後ろ蹴りし、衝撃波のような気迫を飛ばして一歩後退させるほどだ。

「おお〜う。手荒い歓迎だねえ、アリスさん」

そう言いながら、蒔風が手をプラプラと振って笑いかける。

が、当のアリスとなのははそんなこと聞いていない。  
ヴィヴィオをビルの方へと帰し、避難しているように言ってからア  
リスがなのはを諭すとように言う。

「なのはさん、あれは・・・あの男は・・・」

「・・・わかってるよ」

アリスの言葉に、なのははすでに気づいていた。

この男は蒔風ではない。断じて違う。

蒔風舜という男は一度たりとも、なのはが彼に対して思いを抱いて  
いるのを良しとしたことなどなかったのだから。

なのはの目にたまった涙は、そこから来る悔しさだった。

待ち焦がれていた言葉だったはずなのに、いまはそれがこんな否定  
の証明に使われるなんて、悔しくてしょうがなかった。

「戻って……来たんですか」

「おいおい、ひどい言われようだねえ。あんたは俺の正体知ってる？なら、ここは総じてオレの帰る場所じゃないのかい？」

アリスの双眸がグツ、と引き締まる。

かつて、蒔風と幾度となく死闘を繰り返し、そして一時は消えていた男。

「奴」と呼ばれていたその男が、蒔風の皮をかぶって今、ここに復活していた。

「……」

アリスの疑問。

確かに、「奴」にはかなり優れた再生力がある。

しかし、流石に一年と少しでは全消滅した身体は戻らないはず。彼が今までやられてもやられても再生していたのはあくまでも世界を超えた際にのみだ。

この世界の中では、そんなに早く戻るとも思えないのだが・・・

その疑問に、「奴」が蒔風への変装を解いて答えた。

黒い影の男曰く

「あなたは蒔風が消える時、“LOND”の力をあいつに流し込んでたろ？が、あいつの体をすり抜けて行ってしまった・・・そうだろ？」

「ええ・・・」

「だけどな、俺の方はどうだ？こっちにその力が流れてしまっていたら？」

「・・・まさか・・・」

「そのまさか・・・さあっ!!」

ポウッ!!と「奴」の身体からオーラが吹き出し、凄まじい風が巻き起こる。

そして、その気の中には知った気配もあった。

「これは・・・“LOND”の力!？」

「そ、助かったぜ?おかげで予定より早く戻ってこれた」

「奴」が復活の種明かしをしているが、理解しているのはアリスだけだろう。

「奴」と時風のつながりなど、知っている人間は少ないのだから。



「アリス!!」

「一体これは……!？」

と、そこに一刀や数名のメンバーが駆け寄ってきた。そして、目の前の男に気付き驚愕する。

「「奴」……だと!？」

「お前……あいつに消されたんじゃ!？」

各々リアクションを取るメンバーだが、いまさらめんどくさいというようにひらひらと手を振る「奴」は、さてさっそくと言わんばかりに魔導八天を抜き放って首をゴキリと鳴らした。

「いまさら説明はいらぬよなあ？お前らは知ってんだろ？」

「ツツツ！！！」

「オレの目的、知ってんだろ？前置きは……」

「ダウツツ！！」

「いらねえだろオツツ！？」

.....

漆黒の波動砲が薙かれ、地面を軒並み吹き飛ばしていく。

その土煙を掻き払いながら、北郷一刀が開翼して「奴」へと切り掛かって行った。

「俺たちを殺って……世界を食らう気か!!!（ガァン!!!）」

「（ギチツ……）それ以外に何がある？オレは最初から最後まで……そのスタンスを崩したことはねえよ!!!（ドゴツ）」

一刀と剣を鏝競り合う「奴」が、一刀の腹にケンカキックを入れて後退させた。

そしてその顎を狙って回転、剣を横に薙いでさらに斬りかかっていく。

「くっ……だがこつちにはみんなの力がある!!!」

そこで一刀が一気にバックステップして距離を取り、その背後に大量の剣を出現させて一つに結合、無理やり巨大剣を作り上げて「奴」へと振り下ろした。

それに対し「奴」は、魔導八天をばらして背中に回し、まるで羽のように装着した。  
そしてその巨大剣に向かって飛び出し、くるくるとその旋回をしながら一刀へと向かっていく。

「ッ！？この数の剣を・・・輪切りに!？」

「おいおいおい。そんな粗末な技で・・・」

ザクッ!!!

「俺に勝てると思ってんの？」

一刀が流星剣で迫ってきた「奴」を受け止めるも、「奴」の背中から魔導八天が手裏剣のように回転して飛び出してきた、一刀の肩に突き刺さった。

それを食らい、滴る血と共に一刀が落ちていく。

その一刀を愛紗が飛び出して抱え込み、その愛紗の肩を踏み台にし

て鈴々が「奴」へと身の丈以上の己の武器「蛇矛」を振り下ろしぶちかました。

その一撃を「奴」が受け、鈴々と共にそのまま地面に押しつけられるかのように落下していった。

ゴッゴン……!という重々しい音と共に地面が揺れ、二人が地面に落ちて砂煙が起る。

そして、その中からユラリと姿を現したのは

「重いな。だがオレの魂を潰すにはちと軽い……!」

蛇矛の刃と持ち手の境目に二の腕を当てて受け止め、振り下ろした体制のままの鈴々を見て、「奴」が呟く。

直後、「奴」は蛇矛を掴んでブン回し、それを「EARTH」ビルに向かって投げ飛ばした。

バゴオ！！という音がし、鈴々の小さな体が「EARTH」ビルに小さなクレーターを作り出す。

それを見てまだ死んではない鈴々を見て、「奴」は感心したような声を出す。それはすぐにほかの攻撃に遮られてしまった。

斬りかかってきたのはライダーとセイバー。

更にはクウガやアギトたちといった仮面ライダーたちだ。

後方からはアーチャーからの援護射撃も助け、一気に「奴」へと攻め込んでいく。

しかし

「魔導八天……フルブラスト！！！！」

魔導八天の切っ先が彼らに向き、その先端から一気に砲撃が放たれていった。

計八本の無慈悲な砲撃はジュゴウツ！！という音を立てて次々とライダーをなぎ倒し、アーチャーの投影の八割を消し飛ばした。

が、それでも生き残った者はいる。

飛んできた剣を回避していると、そこにセイバーがエクスカリバーを振り下ろして「奴」の首を狙ってきた。

「奴」はそれを横にそれて回避し、セイバーの腹を貫いてやるうと彼女の右側から拳を突き込む。

が、それよりも早くセイバーの左掌が「奴」の胸に当てられ、そこから一気にストライク・エアがぶち込まされた。

その風圧に「奴」の体が真上にすっ飛び、そこに向かってライダーのベルレフォーンが放たれる！！

「ベルレフオーン!!!」

ギヤゴツツ!!という空気との摩擦音を上げながら天馬ヘガサスに跨った彼女が砲撃となって突っ込んでいく。

しかし、「奴」は手に握った魔導八天を花びらのように展開し、それを回転させてバリアとして機能させた。

エネルギーが掻き散らされていき、ぶつかり合ったライダーが地面へと落ちていった。

が、その手からはジャラジャラと鎖が伸びており、彼女は落ちながらもそれを思い切り真上へと引つ張った。

その先端を握るのは、地面のセイバー。

まるで滑車のように入れ違うライダーとセイバー！。

ダメージにライダーは地面に着地できず落ちるが、セイバーがそのまま「奴」に向かって切り掛かって行った。



片手でエクスカリバーを振り下ろし、背中に飛んできた投影によるエクスカリバーを握り、更に振り下ろす。

「聖剣の二刀流かい！！面白いことしてくれるね！！」

そういつてその二刀を魔導八天の二本で受け止め、「奴」が手に握った剣を放した。

「奴」の二刀が落ちていき、それと同時にセイバーの腹に膝をぶちかまして回転してからのエルボーで大地に叩きつける。

《FINAL ATTACK RIDE DE DE DE  
DECADE!!》

と、そこにデイケイドのディメンションシュートが地上から放たれ、「奴」に見事命中した。  
が、「奴」はそれをクロスして腕でガードしており、そのまま引力に従って地上に降りていく。

「オオオオオオ！！俺の必殺技ア！！」

「紫電一閃!!」

と、その着地点から「奴」に合わせてシグナムと電王が垂直に飛び上がって切り掛かった行った。

そのあとをほかにも剣を武器とするものが次々と切り掛かっていくが

「ラァッ!」

「うおっ!」

「ぶウっ!」

「ゴァッ!」

「正<sup>せ</sup>ァッ!」

「「「「「「「「「」」」」」」」」

その飛び掛かってくる相手を、来た順番通りに蹴り投げ殴り飛ばしていく「奴」。

電王がエネルギーをためながら斬りかかったのを捻り躲して背中を踏むように蹴り、身体を捻ったそのままにシグナムの小手を回し蹴りで弾く。

星、翠、愛紗の三人の突き込みを、縦回転することで回避し、交差した三本の武器の上に乗るような形になる。

その上で回転し、三人の顔を蹴り飛ばしてから、真上から襲い掛かったヴィータのギガントシュラクを見上げる「奴」。

「轟 天 爆 碎！！！」

「オウツツア！！！」

それを両腕で受け、地面に叩きつけられる「奴」。

それにヴィータはガッツポーズをとった。

ハンマーの面は確実に地面にめり込んでいる。逃げる隙間はないはずだ。

しかし

「（ポコツ！！）モグラたたきはこうやんだ！！！」

「なッ！？ガアッ！？」

背後の地面から飛び出してきた「奴」がヴィータに向かって魔導八天を思い切り振りおろし、グラーファイゼンで受け止めたヴィータがアイゼンごと切り裂かれて倒れる。

「オオオオオオ！！」

ズンツツ！！

その瞬間、空間が重くなって毛色を変える。

リトルバスターズによる固有結界「ハッピートエンディング虚構学園」だ。

その中で、理樹が「奴」に挑みかかって行った。  
バリアを全身に纏い、さらに流動までさせている。

かつて時風を追い詰めた物のバージョンアップ版だ。

「まさか、お前が帰ってきてるなんてね!!」

「おいおい。俺はもともといたぞ？あいつにふつとばされてただけさ」

「じゃあもう一度吹っ飛ばす!!」

ギャギイ!!ギャウツ……ギャリリリリリリッ……!!

理樹はバリアを張つての徒手空拳。

「奴」はそれに向かって魔導八天で切りかかっていく。

一瞬触れるだけでも凄まじい火花を起こすそれに対し、「奴」は臆

することなく魔導八天を振るっていく。

そして、数撃打ち合ってから「奴」が一步下がって魔導八天を構え直し、手の中で独楽のように軸回転させて一気に理樹に向かって突きこんできた!!

ギャツツ………バァン………!!!!

「んな……?」

「そつちが回転してんなら話は簡単だ。そつち以上の回転を以って、一気に突き込むだけだ」

「奴」の眩き。  
割れるバリア。

熱した鉄棒を突っ込まれたかのような感触。

激痛の信号が、理樹の腹から脳へと届く。

「お……グオ……があああアアあああああ……!!?」

「お前の為の固有結界だ。すぐに回復するだろう?」

「グエ……あ……」

そう言って、理樹の腹に突き刺した剣をそのまま地面に突き刺し、標本のように縫いとめる。

あまりの激痛に、理樹が呻いて地面をひっかく。

これでは再生しようにも、剣が邪魔で立ち上がれない。

「何すんだテメエ!!」

「理樹を離せ!!」

と、そこに真人と謙吾が突っ込み、「奴」を理樹のもとから離そうとする。

その二人から大きなバックステップで距離を取る「奴」。

理樹を剣から解放し、肩を担ぐリトルバスターズのメンバー！。それ向かって、「奴」が頭上に巨大な黒球を生みだしていた。

「吹っ飛びなあー!!」

「まずい!!」

「下がれ!!」

ゴギユツツツ、ギヤツゴオオオオオオオ!!



その黒球がメンバーを呑みこみ、空間を削り取るような音を起こして全員を地面に伏せさせた。

それと同時に固有結界が切れ、世界の毛色が戻る。

そこで生き残ったライダー数名によるライダーキックがいつせいに放たれてくる。

だが、それすらも「奴」は一人ひとりの足を掴み、後続のライダーに投げつけて衝突させたり、なぎ倒したりして一人残らずたたき落とした。

最後に、掴んでいたクウガを向かってくるランサー、アーチャーに向かつてブン投げて飛ばす。

クウガはランサーに向かつて地面と水平にすっ飛び、よけるわけにもいかないランサーはそれを受け止め、壁に叩きつけられてしまう。

アーチャーはそれを見ながらも止まることなく干将・莫邪を取り出し、円の動きで振るって「奴」へと攻撃を試みる。

が、その隙間を縫うように放たれた「奴」の拳がアーチャーの顔面を捉え、さらに背後に現れたディエンドを後ろ回し蹴りでなぎ倒し、波動砲でアーチャーを吹き飛ばした。

次々とメンバーを戦闘不能へと陥らせていく、「奴」

かつて、銀白の翼人もこのメンバーを相手取り、勝利を収めた経験がある。

しかしそれはあくまでも相手の裏をかき、非道を極め、勝つためなら何でもするという、おおよそまとは言えない手段を用いたものだった。

それに対し、この男はどうか。

真っ向から立ち向かい、そして次々と連続で仕留めていくこの男。

やってることは悪役のそれにもかかわらず、勝ち方はかの男よりもはるかに正統派じみていた。

「俺は実を言うところ言った真っ向からのガチが得意なんだよなあ・  
・・・好きなのは静かに隠密なんだけどね!!」

まるであの男と逆。

暗殺を得意として、派手にやり合っのが好きな男  
派手にやり合っのを得意として、隠密を好む男

実は「奴」というのは正統派だった。

しかし、「正統派」だからと言って、許されるかどうかは、また別の話。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

襲来（後書き）

と、いうわけでやってきたのは「奴」でした！！  
久しぶり！！良く帰ってきた！！

「奴」

「いやまあそれほどでも／＼」

だが数話以内にやられていただきます。

「奴」

「うをいつ！？」

だーっってお前がいるってことは当然あつちだつて……ねえ？

「奴」

「ねえ？つて……」

蒔風ですらあれだけかかった「EARTH」メンバーつぶしを、こ  
うしてとんとんと進めていくあたりやはり奴と蒔風の力の違いが分  
かるというものです。

「奴」

「それにあいつコスい手段使ってたしな」

そう、そこも違い。

同じだが、真逆。

戦闘方法とかももうこいつの方が主人公っぽいｗｗｗｗ

ではなぜ今までそうではなかったのか。

こんなまともに戦っちゃって、「奴」にしてはちよいと大人しい方ですよ？

7949

「奴」

「ま、途中に出した黒球で一気になぎ払ったりもできるしな」

でもそれをしない。  
至って理性的。

あの狂気はどうしたんだ!?

というところで次回なんですよ!!

「奴」

「次回はメンバーつぶし後編!!! 11eyesメンバーとかもう空  
気だったな」

.....

「奴」

「忘れてただろ」

.....もう出てこないかもwwwwww

「奴」

「ファンに殺されてしまえ」

だつてだつて!! あのとときはこう・・・間隔が短くなっちゃうと思  
つたんだよ!!

だから場つなぎとして入れただけの世界が結構あつたりしたり・・・

「奴」

「わかった。俺の敵は主人公じゃなくて作者、お前だ」

今更気付いたかウストラトンカチめが!!

じゃ、今から「奴」とバトってくるんでこの辺で!!

ではまた次回



## 激戦

剣撃、拳撃、黒球、波動砲

あらゆる攻撃で、「奴」がメンバーをなぎ倒していく。

「バルディッシュー!!」

「ストラーダ!!」

フェイトとエリオの二人が、キャロからの最大ブーストを身に受けて「奴」へと切り掛かっていく。

半ば無茶とも見えるブーストだが、相手が相手だ。そんなこと言ってもいられない。

金色と真紅の閃光と化し、二人が「奴」へと一気に突っ込んでいっ

た。

それを「奴」は魔導八天で受けながら、徐々に後退させられている。相手の速度が速度なだけに、「奴」の身体にも少々の切り傷が増えていく。

「おいおい・・・その背中・・・」

「舜からもらったものだ・・・!!!!」

「ぼくも・・・この力はある人にもらった!!」

バチチ!!と爆ぜる音がして二人がさらに速度を上げていく。もはや「奴」の目ですらも追いきれない。

だから

「オラこいや!!!!」

「奴」はガードをやめ、腕を広げて二人を受け止めた。刃が二つ、身体にめり込む。

その光景に一番驚いたのは当の二人だ。

だが、「奴」はそこでニヤリと笑い……

《イーター!!!》

そんな起動音を鳴らし、バキリ!とデバイスの先端をかじりとって破壊してきた。

コアは無事だったものの、戦闘など到底不可能だ。

「な……」

「に!?!」

「ガイアメモリの記憶は破壊されたらなくなるわけじゃない。現に一回破壊されたメモリもまた出てきたりしてるしな」

ゴスツ!!という重い音が二回して、二人が腹部を押さえてその場に崩れ落ちた。

「奴」の腹からはワニの顎のようなものが飛び出しており、それがバリバリとストラダーダとバルディッシュの先端を咀嚼していたのだ。

と、そこに

「音撃打・怒涛爆碎!!」

ドゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ!!!!

「奴」の真上数メートルのところに太鼓の鼓のようなものが現れ、そこに向かって響鬼が思い切り音撃棒を連続で叩きつけてきた。

まるでバズーカの連続発射のように衝撃と炎が「奴」へと襲い掛かっていくが、「奴」はそれを左手の「口」でそれを飲みこみ、一気に固めて吐き出し放つ。

それを食らい響鬼が吹っ飛び、「奴」が両手をパン!!と合わせると、ハイパーフォームとなって過去から攻撃を加えようとしたカブトがバチッ!!と現れて地面を転がる。

「な……ただの手合せで……時空に干渉だと……!?!」

「オレ、天の道どころか天そのもの行ってるから」

そういつてゴバツ!と地面ごとカブトを蹴り飛ばし、その先にいるメンバーを数人巻き添えにさせる「奴」。

土ではなく、地面。それを蹴り飛ばしたのだから、飛んでくるのは土砂なんてレベルではなかったのだ。

だが、その中をすり抜けて駆けてくる影が一つ。

「ウオおおおお!」

「チツ、劫アイオンの目か!」

光りを放つその左目で未来を予知し、土砂の隙間を予見して駆けだしてきた皐月駆が、刀・雷切を爆ぜさせながら「奴」に切りかかって行った。

それを受け、反撃する「奴」だがそれが放たれるよりも早く駆は回

避行動を取り、完全に四角きあら「奴」の背中を切り裂いた。

初めて入った一撃。

しかし、ここまでやってやっと一撃なのだ。

それに反応して振り返りながら「奴」が剣を振るが、それも回避されて斬られる。

「わかるぞ……お前の未来を、敗北に追い込む!!」

「未来……か。思えばそいつを敵にするのは初めてだな!!」

そういつて、「奴」がバックステップを取るが、それすらも予見されているのかぴったりとついて突き込んでくる駆。

しかし

「じゃあお前は……俺がこつする未来をどうする!!」

「?……ツツ!!うをぁっ!?!」

そこで「奴」が一気に攻撃を仕掛ける気で魔導八天を握った。

逃げ場はない。受け止めきれぬのか！？

そんな未来のヴィジョンが飛び込んできて、駆は焦って後方へと飛びのく。

それに合わせて「奴」が駆に接近し、こめかみに向かって拳を振り下ろして昏倒させた。

「未来に踊らされてるようじゃ、今の自分は越えられないぜ？」

「お前に、「今のお前」を超えられるのか？」

「！！！！」

ギャオオツツ！！！！

「奴」がニヒルに吐いた言葉に、背後から応える声があった。それに反応して「奴」が魔導八天でガードしながら振り返った。

そこにいたのは、漆黒の翼。

「クラウドさんじゃありませんか!!」

「奴」がクラウドに向かって呼びかけるも、当の本人はそんなことに取り合ってはられないと言わんばかりに、「奴」へと斬り掛かっていく。

それを魔導八天で受ける「奴」

そうしていると背後から草壁美鈴が刀を携えて突っ込んできて、「奴」へと切り掛かってきた。

「奴」はそれにとっさに体を開き、クラウドを右で、背後からの美鈴を左でと、一人片手で受けながら剣撃を繰り返していった。

「陰陽剣士に漆黒の翼人……ちと左右のバランス悪くない……  
かいっ!?!」



美鈴の剣を「奴」が弾き飛ばし、彼女を蹴り飛ばしてからクラウドへと向き直って大きく剣を振るう「奴」  
が、クラウドはそれを合体剣で受け止めたのち、「奴」の顔面を殴り付けた。

「奴」の剣がクラウドの合体剣に打ち付けられてから離されるまでの数秒に、「奴」はクラウドに数回殴りつけられていた。

「ブツ……くそ……」  
「離す」という意識がいくまでに何べんも殴りやがってからに！」

「数秒でも、貴重な攻撃機会だからな！」

顔を押しえて後退する「奴」に、クラウドが合体剣を二刀に分けて左右から挟みこむようにして振った。

うまくいけば、上半身と下半身を分けることができる。

だが、「奴」も魔導八天を二刀に分け、右手と左手に握って地面に思い切り、杭のように突き刺した。

クラウドの二刀はその杭にガッアン！と阻害され、「奴」はそれを握ったまま体重をかけ、両足でクラウドの胸に向かってキックを

ぶち込んだ。

「奴」の両足キックにクラウドの体が地面を数回バウンドして、大木に大の字で叩きつけられる。

更に「奴」はそのクラウドに魔導八天を分割し、投げ放った。

まず四本がクラウドの両肩と両腿を貫き、残り四本が脇の下などに突き刺さって身動きが取れないようにする。

「ガッ……っ……う……!!このッッ!!」

「王巖拳!!」おういけん

ドッ、パァン!!!!

そのクラウドの胸に、「奴」の拳が叩きこまれ、衝撃がクラウドの背後の大木を木端微塵に吹き飛ばした。

クラウドは口から血を吹き出し、ズルリとその場に崩れこんでしまった。

その拳の威力たるや、クラウドに突き刺さった四本の剣が抜け落ちてしまうほどだった。

ゴッ、パァン！！

と、そうしている「奴」に観鈴からの衝撃波が襲い掛かり、「奴」が地面を滑るように押しやられ、後退する。

その隙に観鈴の衝撃波を背に受け、さらに加速したスバルと凧が「奴」へと突っ込んでいった。

「リボルb

」

「おっそい！！」

しかし、早速スバルが投げ飛ばされる。

高速回転するリボルバーナックルのギアをイーターメモリで変化し

た右手で噛みつかれ、逆にスバル自身の方がきりもみ回転していつて投げ飛ばされる。

が、その一瞬を狙って凧が「奴」に向かって「チン！」と刀を抜き収めた。

直後、「奴」が腕をクロスして受けるがその体に次々と切り傷が出来ていき、肩口がバツサリと斬り裂かれた。

「おうっ!?!」

「ぬ・・・反応するか。なんという御人!!」

それに対して「奴」はやられたこと、凧は狙いを逸らされたことに驚愕するも、間髪入れずに向きあって武器を構え、再び衝突した。

刀に手を添えたまま凧が走り出し、一瞬の間を以って「奴」を通過する。

その瞬間、再び「チンッ」という音が聞こえ、同時に「奴」も魔導八天を左下から右上に大きく振りぬく。

直後、背中を剥かせあう二人の間で、無数の斬撃場ぶつかり合い、甲高い音を鳴り響かせていった。

「ぬ……!!」

「つたあ〜!! やつべえなおい!! でも……」

ギヤギリリリリリリリ!!……

「いったな」

ギヤツ、斬ツ!!!!

「アゲツ!!」

その剣撃の中から、凧に向かって斬撃が一つ飛び、彼の背中を両断



「奴」に向けて、集束砲撃の頂点に立つ魔法が二つ、とんでもない大きさになって飛んできた。

無論、「奴」はそれに対して迎撃を試みる。

だが、なのはとティアナの狙いはこれよりも少し先にあった。

「レイジングハート！」

「クロスミラーージュ！」

《《OK!!》》

そう二人がデバイスに働きかけた瞬間、二つの集束砲撃魔法はグバツ！！と枝分かれしていった。

それは本当に満天の星のようで、それが一斉に「奴」へと伸びる。

だが、それを見ても「奴」は不敵な笑みを隠さない。

「大したもんだ。でもな？そんな大質量、バラバラにして制御できるわけねえだろうが！！」

そう、目測だがこれは一つの砲撃が五十ほどの数に分裂している。

そんな数を制御できたとしても、この質量ではどうしても不可能だ。

しかし、思い過ぎだろうか。

砲撃はすべて「奴」に向かって突っ込んできた。

「んなあ！？」



砲撃を寸でのところで回避した「奴」だが、ぶつかり合った砲撃は一つになってまた「奴」へと向かってくる。向かってくる間にも一つになった二つはちゃんと分裂している。

これほどのコントロール。

それを担っているのは、ほかの人物だった。

「私の力を使えば、砲撃の誘導は楽だよ!!」

「ありがとうございます！ティアナ、私たちは砲撃の大まかな照準を!!無理そうなのは観鈴さんがやってくれるから!!」

「はい!!」

誘導しているのは、ほかでもない純白の翼だった。

それを以って、「奴」へと一気に到達する砲撃達。

「チい・・・これは・・・」

がバツ!!!

「覚悟を決めるぜ!?!?」

ドゴオツツ!?!?!

そういつて「奴」が自らの波動砲エネルギーで腕を覆って、その砲撃と受け止めて行った。

十発目喰らいはまだよかった。

しかし、そこから先は地面に足をつけ、右上腕を左手でつかんで支えながら強引に受け止めていく。

そして……

「うっけととめエ!!! きたあ!!!」

「な!?!?」

「そんな・・・」

「黒球！！！！」

そして、その砲撃のエネルギーを取り込みながら黒球を作り出し、生き残ったメンバーをまとめて覆い、ひねりつぶした。

全員が地面に倒れる。

そして、一番目の前の人間に、視線が向く。

「さて・・・終わらせに行きますか？」

そういって、なのはの頭に手が伸びていき

「それ以上はさせません！！」

その腕が掴まれ、奴の体が投げ飛ばされた。

クルクルと回転し、体制を整えて着地する「奴」は、自分を投げ飛ばした相手を見た。

「アーリスさん。最初からいたくせにおっそい登場で!!」

「もうこれ以上はさせません」

パアツ!!!

アリスの服装が、ゆったりしたものから変わる。

下はロングスカートだが、上がノースリーブになり、肘まであるよ  
うな長い手袋を付け、二の腕をさらす格好になる。

「管理者として以上に、この世界の二員として……あなたを、倒します……!」

「やってみろオア……!」

「奴」が吼え、アリスが構える。

最後の砦、立つ。

t o b e c o n t i n u e d

## 激戦（後書き）

さて、メンバーが軒並みやられてついにアリス参戦！！！！

翼人はやられてしまいました。どんだけだよこいつwwww

感情の集束というのでもできませんでしたねエ。

まあ、フォーティーンとの戦いときに結構無茶して集めていたからできませんでした、という。

え？上条さんなら黒球をどうにかしたかもって？

あれは幻想殺しのキャパをオーバーしてて、しかも彼の腕力で捻じ曲げることもかなわない代物ですから。

次回はアリスVS「奴」！！  
ではまた次回

PS

そういえば感想件数が1000件超えてました！！！！

その1000件目の感想は・・・リユウガ様の感想でした！！  
この小説に感想を送ってくださる古株で、いまだに送り続けてくだ  
さるありがたい読者様です！！

これからもみなさん！宜しくお願いいたします！！！！

## 帰還

アリスは、世界の管理者である。

もともと力は持っていたが、それはあくまで管理に使うべき力であり、“No name”をつかさどる彼女はそれに対して疑問はなかったし、満足していた。

だが、知ったのだ。  
力がなくては、何も守れない。

だから彼女は今、その力を転換して敵へと挑む。

彼女が最初に敵と感じ、そして、彼を送り出す原因となった、その男へと。



「では……ブツちめて行くか!!!」

ダンツッ!つと、「奴」が魔導八天の内二本を地面につき差、それが輝き姿を変える。

「グルルルルルルルル……」

「キィー……!!!」

「フシユルルルルル」

ケルベロス、迦楼羅、サラマンダー

「奴」の誇る三大魔獣が、いま迫る。

「行って来い!!」

その言葉と共に、三体が駆け出してアリスへと突っ込んだ。

その先頭を駆けるのはケルベロス。

それを見、アリスが構えて迎撃に応じる。

そして、三体が二体になった。

「!?!」

驚愕するアリスだが、なんとということではない。  
ただ単にケルベロスが高速でその視界から消えただけだ。

その行き先は、

「ギャアオウ!!!」

アリスの背後。

まるで「もらったア!!!」とでも言わんばかりに叫ぶケルベロスが、  
アリスに向かって爪を振り下ろして地面を抉る。

しかしその爪が抉ったのは

「それだけですか」

地面だけだった。

ドオン！！！！

大気が轟く音を響かせ、アリスの拳がケルベロスの左頭を真横から殴り飛ばした。

その衝撃は左頭を貫き、真ん中、右と、次々と頭を粉碎してケルベロスの体を真横にふっとばし、一撃で戦闘不能に叩き込む。

「……………へ？」

「甘く見ないでください。もう、あなたのことを彼に頼むことしかできなかつた頃の私ではありません」

ダンッッ!!!!

「あなたとの戦い……」

ゴッッ!!!!!

「ここで終わらせて見せます!!!」

そう叫び、上空から突貫してくる迦楼羅に向かってアリスが飛び上がる。

羽根をたたみ、針のようになって突っ込んでくる迦楼羅。

その嘴を、アリスが脇に挟み込むようにして受け止め、巴投げのように薙げながら思い切り腹を蹴り上げた。

ガキユウ!!!と気味の悪い声をだし、迦楼羅の体が上に真っ直ぐ戻って行き、アリスは着地と同時に二足歩行となったサラマンドラの炎剣を、片手で受け止めた。

「!?!」

「断罪者……ですか。しかし、すでに背負う覚悟があるのなら、それは脅威ではありません!」

炎剣というからには燃えているものだというのに、アリスはそれを全く感じさせずに掌で押さえていた。

それを押し込もうと腕に力を含めるサラマンドラだが、アリスの足が地面をズズズ、と少し土を退かすだけで全く切り込めない。

そして、それをアリスが一気に押しつけ跳躍、サラマンドラの顎に見事なアッパーカットを叩き込み、更に振り下ろしの回し蹴りを脳天に叩き込んで地面に顎から叩きつけて行った。

それを食らって、サラマンドラがフリフリと身体を揺らしながらも立ち上がるごとするが……

ドオンー！

「ギイツッ！！」

「ゴギヤアー！！」

先ほどの一撃を食らった迦楼羅がそこに落ちてきて、サラマンドラを叩き潰して完全に再起不能にする。落ちてきた迦楼羅などは言わずもがなだ。

三体の使役獣を一気に殲滅し、そのすべてが剣に戻って「奴」の手に収まる。

その光景に、「奴」は少なからず驚いていた。

確かに相手は管理者だし、力も相当あったという予測は立てていた。

だが、まさかあの三体がここまで何もできずに負けるとは思ってもいなかったのだ。

眉をクイツ、と上げ、ひょうきんに驚く「奴」

その「奴」に、アリスが一気に走り込んで拳を放ち、それをパシツ、と「奴」が片手で受け止めた。

「やるね!..!」

「どう、も!..!」

そこからアリスが「奴」の頭を狙ってハイキック、「奴」はそれをしゃがんで回避し、アリスの軸足を狙って踵からの足払いをした。

アリスもまた、それを小さくジャンプして避けてから裏拳を「奴」の頭に叩きつけようとして、それを上腕で受け止められる。

「くっ・・・」



「フッ」

と、そこから「奴」がアリスのその腕を取り、曲げ、柔法の要領で地面に俯せに寝かせる。

さらには腕をがっちりつかみ、技までかけて抑え込む。

「強いな。だが、あんたが手に入れた力は俺だって手に入れてんだ。と、なれば後は大本のスペックの違いだろうか？」

「ツツ！！！！」

「せつ（グイッ）、エアツツ！！！」

「ガツは！！！！！」

「奴」が技をかけた腕を持ち上げ、アリスの全面をさらけ出してサッカーボールを蹴るかのように脚を動かした。

その蹴り一撃にアリスの体が地面スレスレを飛び、一、二、三回地面にこすり付けながら止まった。

「ふう、これで大方終わったかな？」

周囲を見渡す「奴」

そこに立ち上がろうとする者はいても、「奴」に向かってこれる者はいなかった。

一人残らず、倒されている。

無論、「EARTH」のビルにはまだ人はいる。

しかしそっちにいるのは戦う力のないメンバーだし、長門などといったメンバーはもしもの時にそちらを守っていてこちらにはこれない。

それも「奴」にはわかっていいるのだが……

「……ま、当面は目の前の目標だな」

そういつて、再び歩み、手を伸ばす。

そこにいるのは、やはりなのはだ。

襟を掴まれ、グイツと持ち上げられて、なのはが見たのは「奴」の拳。

大きく振り上げられて、おそらくこのまま振り下ろされる。

そうすればなのはの頭は、果物のようにつぶれて二度と元には戻らないだろう。

「……………てよ……………」

「?」

そのなのはが、目に涙を溜め、胸に願いを抱え、ポツリと漏らす。

「助けてよ……………そう言ったら……………いつだって来てくれるんでし

「よっっっっっ」

「.....」

その言葉に、「奴」の腕が振り上げの頂点で止まる。

見ると、周囲から光は上がっていた。

黄金の光  
願いの光

希望の光

誰だって、いつだって望んだ。

でもそれは、彼をまた戦いに巻き込むことになる。

それはわかっている。

ああ、しかし人間じぶんたちはなんと残酷なんだろう。

このろくでもない世界に、自分たちはまた彼を求めてしまった。

7988

生まれた瞬間、人間は泣く。

周囲は誕生したそれを祝っているがしかし……

もしかしたら赤ん坊は、生まれたことを嘆いて生まれているのかも  
しれない。

こんなろくでもない世界にやってきてしまった、と

だけど、それでも

「それでも、いや、だからこそ、この世界は美しい」

「……」

パン！と、「奴」の手が弾かれる。

そこを通過していったのは、一つの光の玉

皆の願いが集まってできた、バスケットボールほどの玉だ。

それが「奴」となのはの間を抜け、一気に上空へと上がっていき、見下ろすように滞空した。

「……来たか」

そして、そこから金の粒子が波紋のように広がり、崩れたビルや、倒れたメンバーの傷を癒す。

が、傷が治っても体力の問題が解決されていない。

現に、なのはに向かって波動砲を放とうとする「奴」を誰一人とし

て止められない。

誰も立てない。

しかし、誰一人として焦燥など抱いていなかった。

抱いていたのは、呼んでしまった罪悪感と

「来て………くれた………」

そして、これからも共に生きていける希望の喜びだった。



「……………!!」

そこで、「奴」が無言でなのはに波動砲を叩き込もうとする。

しかし、再び光の玉が飛び、今度はなのはの体を掻っ攫っていった。

その光の玉は今や形を変え、確かな両腕で彼女の体を支え、確実に両足で地面に足を付けていた。

どこかへと散っていた銀白の羽根が「主を見つけた」と言わんばかりにその者の背中へと集まっていく。

「おいおい……確かに条件はそろってたさ。翼持ってかれて、お前がいて、みんなが願う」

「あ……………」

「だけども、この状況はないだろう？俺を呼びたかったら、テメエが一言、こう言やよかったんだ」

「帰って……？本物？」

「オレは世界最強だぜ？誰かが名前を呼んでくれれば、そこに駆け付けんのが」

「舜君！！！！」

「主人公って……もんだろう！！！！？」

ド、バサァッ！！！！！！

蒔風舜、帰還す

幾多の希望と、数多の願いを背に受けて

「オレの仲間に凝り性もなく……いや、これはまだ過程か？」

その男、敵を睨みて拳を握る。  
相対するは、対にして同なる者。

「その通り。ようやく軌道に乗ったぞ主人公」

「奴」が言う。ここからなんだと。  
蒔風も言う。ここで終わりだと。

世界を食らう男と、世界を護る男

感動的な帰還はともあれ、二人の因縁はここにて決着する。

t o b e c o n t i n u e d

帰還（後書き）

はい！！帰ってきました第二弾！！

大復活の蒔風でっす！！！！

わー！！ドンドンパー！！！！

蒔風

「よっしゃあ！！帰って来たぜ！！思えばここまで」

ハイカット！！ここまで！！復活の感動はここまで！！

蒔風

「ええエエエエええええええ！？」

そんなことよりも武闘鬼人 in 博多ー！！！！  
現在家族で九州来てます。

一泊二日の短い観光ですが、短くたって楽しいものは楽しいです  
！！

明日(というか今日)は、福岡タワー見に行きます。

福岡タワーと言えはあれですよ、VSスペースゴジラで破壊された場所ですよ!!

あ、あと福岡ドームは平成ガメラ第一作でギャオス捕獲作戦がとられた場所でしたね!!

ガメラもそつから上陸でしたし!!

・・・実は九州危ない・・・?

VSスペースゴジラの時も何気にゴジラさん九州縦断してましたし。鹿児島から福岡に。

みんな!!住むなら四国だ!!あそこはまだ一度も怪獣が来てない!!!(少なくともゴジラ作品は)

瀬戸内海にガメラが寝てるかもしれないけどね!! W W W W

ちなみに作者の地元も一度、ゴジラは上陸してます。

逃げ場はなかった、というよりもゴジラさんに死角がなかった W W

W W W

あとそういえばオーズ最終回でしたね！！

蒔風

「お前あとがきにどれだけ詰め込んだよ」

かなり

で、アंकボイスの「タカ！クジャク！コンドル！」は卑怯だろお  
おおおお！！！！

マジ泣きました。

これから飛行機乗っていくって時に泣き腫らしました。

空港のロビーで携帯（ワンセグで見てた）握って号泣してる兄ちゃ  
んとか・・・何それ怖い

ロビーにあるテレビは三人くらいのおツちゃんかニュース見てたし、  
それ以外にも二人の兄ちゃんがそれ見て話し合ってたし・・・

いや、まあそつちだったら嗚咽してたかもしれないから結果オーラ  
イですけどwwwwww

と、言うわけで「めぐ銀」初の九州投稿!!

そこにどんな意味もないけどなんだかテンションあがってくるぜ!!

そういえばブラックロックシューターのゲーム買ってですね・・・

蒔風

「本編の話してやれよ。アリス超強かつたじゃん」

あ、それはまあね。

だって考えてみるとあの時に“ライクル”“輝志”“フォルス”“LOND”の力を取り込んで、半分を蒔風に流してたんだもん。

その分は「マイカゼ」つながりで「奴」に流れたけど、それでも十分に強いお!!

蒔風

「お、っていうな。となるとホントに元のスペックか」

その点お前なら大丈夫。

復活した時点でお前にも力行ってイーブン!!



蒔風

「え？何それ怖い。てか結局大元のスペックで負けるじゃん」

は？この状況に持ってきた主人公が負けるわけないじゃん W W W W

蒔風

「元も子もないこと言いやがったこいつ！？」

問題はどんな内容で勝つかだよ、明智君

蒔風

「明智じゃねーよ」

明風君

蒔風

「明智ファンに謝れ」

じっちゃんの？

蒔風

「名に懸けて!!」

眞実は？

蒔風

「いつもひとつ!!……ハッ!？」

うむ、見事ノリに乗ったな。  
流石は我が主人公。

蒔風

「眞実はいつもひとつとは……限らないじゃん?」キラッ(」

限るわ————!!!

次回、「奴」の行く先

時風

「ではまた次回」

時風（前書き）

挿入歌「Time judged all」  
頭からいきなりどつぞどつぞ！！

## 蒔風

他者によって現界していた、主を失いし羽根

その羽根に皆の願いが共鳴し、「彼」という存在をこちらに引く。

だが、彼の現界の主軸になったのは、間違いなく「奴」だった。

「奴」は主人公を殺すことで世界のバランスを崩して破壊、食らうことで吸収し、そのエネルギーで己の世界を復活させようとしている。

しかしその対象は決して主人公でなくともよい。

それに準ずる人物でも、別にかまわないのだ（得るエネルギーは多少減るが）

かつて観鈴を狙った時がこの場合だ。

だが、「奴」はここから軌道に乗ったという。

わざわざ時風を呼び戻したのだ。

彼が、そこまでしてエネルギーを求めた理由

それは

「オラァ!!!」

「だあっ!」

ゴッ・・・パァン!!!

「奴」と蒔風の拳が正面からぶつかり、周囲に波状衝撃を飛ばして止まった。

地面には円形に模様が浮かび、さらなる一撃でそれもまた変わっていく。

そこからの攻防はまるで手足が鞭のように見えた。

実際には様々な打ち手が飛び交っているのだが、あまりの速さに残像が起こって両者の四肢は鞭のようにしか見えなかったのだ。

スパアン！！と両者の拳がぶつかって弾け、お互いに地面を滑るように後退、距離を取る。

が、その直後「奴」が蒔風の周囲を動きだし、無数の残像となって一気に蒔風へと襲い掛かって行った。

「ぬ……アあつっ！！！！」

その残像に向かって、時風が構える。

腰を落とし、両拳を左右の腰に沿えて呼吸を深く取り、一気に吐き出して拳を放つ。

「雷光拳・無限突破!!!」

一回突き、それを戻す。

ただそれだけの動作が、雷旺と絶光の力を持った拳で行うことで、凄まじい衝撃波となつて一気に「奴」の残像を叩いていった……!!!

8007

だが、その中に「奴」はいない。

それに気づいた時にはすでに「奴」の攻撃は行われていた。

ポッゴオッ!!

「奴」が地面から飛び出しながらのアップーを時風に放ち、それを回避した時風の頬がうっすらと斬れる。



蒔風は回避のために仰け反った身体で、そのまま足を地面から離し「奴」の体を挟み込んだ。

その瞬間、身体に回転を効かせて「奴」を頭から地面にたたき込もうと落として掛かる。

が、「奴」としてそれに対処できないということはない。

頭から落ちる「奴」が、手を頭の上にあげて逆立ちのように地面を掴んだ。

ギユウウウウウー！！と「奴」の腕が衝撃を受け止めようと曲げられていき、ついに

「オオおつぁー！！！」

「うあつー！！？」

「奴」が逆立ち状態で回転し、逆に蒔風を地面に叩きつけようと仕掛けた。

その勢いに蒔風はとっさに足を話すが、地面に叩きつけられるのは免れない。

ズダンッ、ザッ、ガガガガガッ！！！！

体が叩きつけられ、そこから受け身を取って体制を整え、地面を膝立ちで滑る蒔風。

頭からうつすらと血を流すが、蒔風もただ投げられたわけではない。この回転合戦の中で、「奴」の頭に爪先を叩き込んでいる。

「奴」も頭から流れてくる血を拭い、地面にビシヤ、と払って蒔風へと向く。

「おい……お前、変わったな」

「……そんな世間話してる暇はない」

「いやいや、かなり重要な話だ。お前、どうしてこんなに」お前「なんだ？」

「ツツ！！！！」

時風の言葉に、「奴」が息を止めて一気に上空へと飛びあがって行く。

時風も開翼してしてそれを追っていくが、「奴」の放つ波動砲で阻まれる。

そして、地面から時風が十メートルほど、「奴」はさらにそこから十メートルは上にいるところで止まった。

「言つたる・・・暇はないんだ。終わらせんぞ！！！」

「奴」の身体から漆黒のエネルギーが噴き出、それが頭上に集まって球体へと形を変えていく。

それに対し時風が開翼、金の粒子が一気に展開された。時風を包むよう、球状に回っていくその粒子は、さながら地球の大气の流れでもあらわしているかのよう。

「奴」の黒球の大きさは今までの比ではない。  
さっきまでののはサッカーボールほどだったのが、今は直径三メートルはあるつかという大きさ。

「!?あの大きさ・・・まずいぞ!？」

「それを食らったら終わりだ!蒔風!!」

地上にメンバーが叫ぶ。

あれは自分たちのほとんどを沈めた技だ。

しかも、あの大きさではいかに蒔風でも・・・!!

「大丈夫だ」

だが、彼に一切の不安はない。

そうしているうちに「奴」が時風の斜め上から黒球を振りおろし、叩きつけるかのように投げ放って来た。

大気を焦がし、空間を削るような回転をしながら、黒球が時風に迫って着弾する。

時風も粒子でそれを受けるが、さすがに重すぎる。

「は……どうやらテメエが実体したとき、俺の中の管理者の力が配分されちまったようだが……それなら大本のスペックの違いだ。やっぱり勝つぜー!!」

「奴」が叫ぶ。

その通り、「奴」の中に流れていた管理者の力は、今は平等に二人の物となっている。

そうなれば後は大本のスペックの差。

時風は「奴」に劣る。

しかし

「俺には、この力がある」

バサ………

「皆が願い、思ってくれたこの希望は………」  
ちから

ギャオツ!!!!

「その差を補って、なお余りある!!お前一人では、勝ちえない!!」

ドオオオオ!!!!!!

蒔風の粒子と、「奴」の黒球がせめぎ合う。

黒い衝動と、黄金の粒子が散って行って火花を散らす。

そこに向かって腕を伸ばし、叩き潰そうとする「奴」が、切迫するその状況を見て、悲痛な声を上げて叫んだ。

「俺だつてなア・・・背負ってんだよ・・・」

ググツつ・・・

「消えちまったオレの世界を！！！！何人も人間の存在を！！！！失っちゃいけなかった仲間たちを！！！！俺はそれを取り戻さなきゃならないんだ！！！！！！」

「・・・」

「アイツらがまだオレの中にあるうちに、俺は世界を食らわなきゃいけないんだよオオオオオオオオオ！！！！！！」

「アツツ！！！！」

互角だったエネルギーが、時風に向かって押し返される。

それを聞き、時風が悲しそうにポツリとつぶやいた。

「そうか・・・お前の世界は、もう・・・」

ドオツ!!

「お前となってしまうているんだな？」

「アツツツ!!!!」

それを指摘され、「奴」が一瞬ひるむ。

そして、一瞬のうちに時風の粒子が「奴」の黒球を引きずり込んで、粒子の流動が高速のモーター音のようなものを鳴らしながら回転し始めた。

「だったら・・・テメエがそれを背負わないで、どうするんだよ



「！！！」

ドンッッ！！！！！！

時風の翼が、一回だけ大きく羽撃たき、それに合わせて粒子の球体が「奴」に向かって放たれた。

そのエネルギーは「奴」に向かって真つすぐに突っ込んでいき、「奴」はそれを両手で受け止めようとしますが、ズルリと飲まれて

「おおおおおお！！？」

ガオオオウウウウウづづづづづづ……！！！！！！

- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -  
- -

「が……は……」

ザシッ

「へ……来たかよ」

倒れる「奴」が「EARTH」内のちょっとした木々の中で上体を上げようとするとところに、時風が降り立ってきた。

周囲には誰もいない。

「やれよ……だがな、また戻ってきてやる。そしたら今度こそ……」

「今度はない。そうだろ？」

「……………」

「お前の中の「世界」は、すでにほとんどがお前の力と成ってしまっているはずだ」

「……………クソ……………」

「奴」の中には、彼が元いた世界が渦巻いていた。

だからこそその狂気、安定しない心情、容易に自分らしからぬ行動をとる。

その代償として、己を見失い、目的のためだけに爆走する。

しかし、ここまで「奴」という中であって、その世界はただの力として還元されてしまっていた。

もう今更エネルギーを得ても、世界はかつてあった姿そのままには戻らないだろう。

だからこそ、彼はここまでエネルギーを欲し、自らを主軸としてでも時風を呼び戻したのだ。

「そつだ・・・次はない・・・!!」

ガッ!!!

「だから!!俺は今に懸けるしかねえんだよ!!!」

「奴」が立ち上がり、時風の胸ぐらをつかんで叫ぶ。

その顔は地面の方を向き、どんな顔をしているのかわからない。

そして、時風の顔を見上げてなおも叫ぶ。

「見る!!最初はメチャクチャだった俺も、今じゃこんなに「俺」だ!!世界の構築なんて、もう5%もない!!少しでもあるうちに俺は取り返さなきゃならねえんだ!!それがたとえ、誰かを殺してしまうという道であってもだ!!!」

そう、かつての「奴」は、すでにほとんど「マイカゼシユン」にまで戻っていた。

世界の構築に気付きながらも、現状が最高として特に動こうともしなかった青年。

さらなる高みのために、主人公を殺そうだなんて露とも思っていなかった男だ。

“LOND”の言葉に翻弄され、操られるかのようにその世界を手懸けた男。

「LOND」の野郎の言葉に我を見失ったのは俺の責任だ。そこを言い逃れする気はない。だから！！だから俺がやらなきゃならない！！俺はどんなものを背負ってでも、世界を取り戻さなきゃならないんだよ！！！！」

「……できない」

「ツ……お前らの世界だつてきちんと戻してやる……このままにして返す。俺ならそれができる！！なあ……お前、主人公なんだろう？だったら、だったら俺の世界も救ってやってくれ……！！！！」

「俺は……世界を救ったことはある。だが、その原点は世界のためじゃない」

蒔風が言う。

自分は世界のために戦った。しかし、それはあくまで結果でしかない。

「自分の世界の仲間のため。ほかの世界の仲間のため。自分の味方をしてくれる管理者のためだ。そのために世界を救わなきゃならないから、救っただけだ。だから、今度も」

「……そうかい……」

「今、お前の世界はお前の記憶の中にしかない。精一杯思い出せ。そして忘れるな。一つたりとも忘れるな。それがお前が背負うべきものだ。人殺しなんてそんなもんより、もっとずっと、お前は重いものを背負っていくべきなんだよ」

「……忘れるなど？記憶の中で反芻し、決して届かぬ夢を見ると？」

「お前も……マイカゼシユンであるなら……!!!!!!」

蒔風が拳を握る。

「それを乗り越えて」

ギチリと蒔風の手が握り締める自らの握力で拳を固め

「強く……この世界で生きやがれ!!!!」

そして、その拳が「奴」の顔面をとらえ、ど真ん中に命中する。

「うん……」

その一撃で、「奴」の体がすっ飛び、ゆらりと消えていく。  
それに対し、時風が指差して言った。

「残った世界も使い果たし、きちんと「お前」として帰ってこい。  
お前が背負うのは、それからだ」

「・・・残酷だな・・・主人公」

「奴」がいう。  
それはなんと、残酷なことなのだ、と。

だが、時風は首を横に振ってそれを否定する。

「いや、残酷なのは、俺じゃないよ」

そういつて、踵を返す時風。  
そして斜め下を見ながら、吐き捨てるようにいついった。



「残酷なのは、世界だった。最初から、最期まで」

「……そうか」

背後から、「奴」の気配が消える。

そして、その場所に一滴のしずくが、ぽたりと垂れて行った。

.....

「終わった」

「そ、そう……」

「ん？どうした？」

林から出てきた蒔風に、皆が集まってジロジロとみてる。

当の本人は最初からいたようにあっけらかんとしているし、どこにも現実感がわからないのだ。

「えつと………本物？」

「当たり前だ。お前らの願いが呼んだんだろうが」

「消えない？」

「消えない消えない」

手をひらひらと振って、蒔風がにやりと笑ってそう言う。

そして、全員が声をそろえて蒔風に叫んだ。

「「「「「おかえり!!!!」」」」」

「おう、ただいま」

時風舜が帰ってきた。

長く長く続いた、一つの因縁に終止符を打って。

直後、メンバーが次々に時風へと飛び込んでくる。

笑う者、泣く者、なぜか怒っている者

それらに押しつぶされ、時風が呻いた。

「俺の背負つ者か……重いなあ  
WWW  
WWW  
WWW  
」

t o b e c o n t i n u e d

時風（後書き）

後書きは別に投稿しますので  
では

## あとがき3rd

帰ってきた翼人！！

そして、第三章完結ですね！！！！

蒔風

「まさか「奴」とあんな決着になるなんてな」

「奴」はもともと非常に理性的な男です。

人殺しだって良しとしないし、決して世界に不満を持った人間ではなかった。

そこら辺は第一章のA B！編を読めばわかると思います。

彼の中には「世界」があり、それをそのまま存続させていたからあそこまで狂気じみていたわけですが……

長く彼の中にあっただがゆえに、世界は彼の力となってなじんでいつてしまった、もう世界としての情報はかけらほどしかなかった。だからエネルギーを最大限欲したわけですね。

なんだか嬉しい

何気に一番自分の中で育ってくれたキャラは「奴」でしたし

さて、次章の話でもしましょうか。

次章は完全オリジナル！！

とりあえず自分が考えていたのはここまでですね。

だから五章とかは全然イメージついてませんwwww

伝説の中にしかない敵が、動き出します。

世界四剣に関しても触れますからね

あ、あとこの最終話ほっというライダー小説とか書いてましたww  
ww

世界観はゴークライダーに近いです。

昭和から平成までのライダーが連続して存在していた世界にしてますので。

もし読みたい、という方が何人かいらっしやいましたら投稿してみようかと思えます。

一話くらいしか書いてませんけどwww

では、今から次章予告を書いていきます!!

それをお楽しみに!!

第三章、元ストーリー

劇場版仮面ライダーブレイド「Missing Ace」  
Strikers サウンドステージ X

以下の方々に感謝を

これまでも引き続き感想をくださった方&お気に入りユーザーに登録してくださった方



(英字、五十音順)

3 様

a n o k i 様

A T D - X 様

h . o 様

H @ L Y A 様

M E R A N 様

r e i m u 様

t y t a 様

W h i t e S e a l 様

ア ス ト ラ ル 様

ウ エ イ 様

液 体 の 蛇 様

桜 籠 様

カ イ ( 海 ) ・ R ・ 銃 王 様

彼 方 からの 翼 様

カ レ ー パ ン 様

神 無 月 様

キ ヨ ン 様

久 遠 様

ク リ ア 様

グ レ イ 様

コ ン バ ー ス 様

桜 の 木 様

シ ャ ド ー ・ ナ イ ト メ ア 様

準也 様  
深蒼の覇者 様  
ソーヤ 様  
だいさむ 様  
蛸壺の主 様  
剣 流星 様  
ティエト・コーティオン 様  
とある旅人 様  
ニヤンコ隊長 様  
ハイパーカイザー 様  
灰狼 様  
東雲葉月 様  
バラランシヤ 様  
ヒダリキキ 様  
ブレ 様  
ポリンキー羽田 様  
ミケねこ サマ  
夜一 様  
保名 様  
夕 様  
ライト 様  
リュウガ 様  
流寸 様  
ルシフェル 様  
レイガン 様  
レイフォン 様  
レン 様  
わや 様

今、モニターの前にいるあなた様に

t h a n k   y o u ! !

第四章 予告

鬼人

produced by 武闘

銀白 PROJECT 第四段

8035

翼人伝説

世界を越えて行く者  
理解する者

輝く翼

帰ってきた銀白ー！

訪れる日常は楽しいことばかりだー！

だけど、そもいかなのが世界の理

迫るは赤い、封印されし破壊の男

「なんだこの街は……」

「なにがあった！？」

「何一つまともじゃない……」

## 世界四剣

「共鳴してる……」

「それは……その剣は失われし四本目の……!?」

「なぜあなたがそれを持っているのですか……!!」

伝説が交差する。

否、蘇る。



「怖い・・・死にたくない・・・!!」

乗り越える魂

「世界を破壊だあ？ザケンじゃないよお前」

戻る戦士



「この世界は俺が守る最後のモノだ」

.....

「翼人.....對抗兵器？」

今、彼らに最悪の敵が襲いかかる。

「諸君!!!兵器には、それに対するものがなくては商売にならないのだよ!!!毒物に薬が必要なようにな!!!」

英雄に、最大の試練が訪れる。

世界をめぐる、銀白の翼

4 t h  
S T A G E

R E : : B I R T H

今、主人公は再起する。

自らの、魂を乗り越えて

「「世界最強を相手に、勝てるよ思っオレなよ……!?!」」

来週あたりから執筆開始！！

逃・げ・ろ！！

「はい、次はこっちですよー？」

「うぐう……」

今、「EARTH」局長室は凄まじい量の書類で埋まっている。

当然だ。

急に帰ってきて、今まで起こっていた事件の内容は知っているとしても、それでも確認してもらわないといけないことがあるのだから。

どうやら彼は消えていたあいだに起きていた事件は関知していたようで、内容は大体わかっていた。

しかしそれでも「見る」というのがこの管理者である。

「なあアリス……」

「なんですか？」

「後この部屋にある分で終わりなんだよな？」

「……イメージしてください」

「？」

「テレフォンショッキングって、ステージに入りきれない花は廊下に並べられるそうですね」

「もうヤダア！！！（ガバツ！！）」

「逃がさんツツ！！！」

机から飛び出そうとする蒔風。  
それに飛びついて取り押さえるアリス。

二人の「打ち合わせでもしていたんじゃない？」というほどの完璧な夕イミングに、全米が泣いた。







「よろしい」

パッ

「ふう〜……………」

「……………」

「ゴキブリ……!」

「ぎゃあ……………!」

アリスが蒔風を解放した一瞬で、彼は何か黒いものを放り投げてその場から遁走した。

彼の投げたそれはおもちゃだが、そこはこれ、「EARTH」の技術を結集して作った超高性能なゴムゴキブリだ。  
多分、精密すぎて本物よりグロい。

「ひいつ、ひい……………!」(落ち着く)……………玩具



風。

そしてその直後、壊れて開けっ放しの扉の向こうからカアッ！！  
！と光があふれ出て、直後に爆発。その煙の中からシヨットガンを  
肩に担いで、タスキのように弾を肩にかけるアリスが駆け出してきた。

「待てエ！！！」

「いや待つわけが……」

「ハチの巣にしてやるから止まって！！！」

「止まるかア！！！！！」

蒔風は駆けだす。

この長い長い逃走路を

.....

.....  
「もう頭だけでいいんで寄りしてください!!判断できるモノがあればそれでいいんで!!」

「そのわりにはヘッドショット狙ってるよな!?!一発でつぶれた果物になってみせるぞ!!」

「自慢にすることじゃないでしょう!?!」

「だったらそれぶつ放すのやめい!!!!」

廊下を闘争する時風。  
追うアリス。

管理者の力かなんなのだろうか、その弾が尽きることはどうやらな  
いようで、今までに何十発も時風は発砲されていた。

それを走りながら回避し、必死に逃げる時風。

おっかないっいたらありゃしない

と、その途中で時風が理樹を見つける。

「理樹バリアー!!」

「うわあ!?(ガキキキキン!!)」

そして、とっさにバリアにして再び逃走。

この男、鬼畜である。

そのまま理樹を背中に担いで走り続ける時風  
すると、背中の理樹が話しかけてきた。

「こ、これってどういう状況!？」

「書類から逃げた」

「ああ……………」

いやにあっさりとに納得する理樹。

どうやら心当たりがあるようで……

『もうこんな書類嫌だあ！！！！』

『翼人二人なら逃げられる！！行くぞ、理樹！！』

『（テッテレッテ テレレレ〜ン！）地球破壊爆弾』

「……」

「音はキテレツなのに道具はドラかよ……」

走りながら意気投合する理樹と時風。

だからといってまあ理樹がこの状況に納得するわけもなく……

「降りる!?!」

「わあまっつてくれ!?!これじゃ俺が八チの巢に!?!!」

ゲシツ、と理樹が蒔風の背中を蹴り飛ばし、一気に離脱しようとする。

だが蒔風だつて逃がす気はない。

その理樹の足を掴んで引き留めようとし、しかし勢い余って二人ですっ転んでしまった。

「やばいやばい!?!追い理樹早くどけこのままじゃ撃ち抜かれるぞ!?!」

「キユ〜・・・」

「気絶しとるーーーーー!?!?バリアは最硬のくせに本人が何という脆弱!?!」

そんな風にごろごろしてしまっている二人のもとに、アリスの足(?)音が聞こえてくる。







「「残念そんなな君を待っていた!!」」

ゲシツ×2

「ぬお!?(バガガガギン!!!)ウおおおおお!?!」

「「大逃走!!」」

「おのれ翼人ンンンンンンンン!!」

二人の前に現れてくれて、アリスをいったん押しつけてくれたザフイーラに対してなんとというもの言い。

しかもそのあと蹴り出して盾にするとか超鬼畜である。

抗議をしようとするザフィーラだが、アリスが再びショットガンをぶっ放してきたためにいやおうなしに防衛に回らねばならなくなつた。

「ザフィーラさん!!あなたまでそちらにつくんですか!!!!」

「この状況を見てよくそんなことが言えるな!!」

「「ザッフィーは巻き込まれただけだ!!」」

「お前らのせいだアアアアアアアああ!!!!」

ドッパン!!!!

二人の言葉にザフィーラが叫び返すと、そのザフィーラが吹っ飛ばされて二人の後方に消えた。

え？という顔をしてアリスの方を見直す二人。

そこには背中にポンプを背負い、消防車などについている消火用のホースを握るアリスがいた。

俗に言う圧水銃というものだ。  
しかし、威力はその比ではなく……

「逃げる!!!」

「逃がしません!!!」

ダダッ!!と走り出す二人。追う一人。

そもそも威力がおかしい。

時風だつて圧水の能力でイニシアチブを取ろうとしているのに、それがうまくできないほどの水圧。  
理樹もバリアで防ごうとするものの、バリアはよくても理樹自身が押されてしまつてアウト。

「EARTH」の廊下をゴリゴリ削りながらなので、その破片を飲み込んだ圧水銃はさっきの散弾以上の威力を発揮していた。

「やめろやめろ!!ビルが壊れる!!修繕費かかるぞコラア!!」

「では威力を落として……」

「やめはしないのか……」

「五十人は吹っ飛ばす方向で」

「うおい!?今までのは何なんだよ!!」

「もはや切断系?」

「ウォーターカッターかよ!!!」

恐ろしい。

拳大の大きさの水流が、ウォーターカッター。

無事なのは翼人だからであろうか。

が、威力を落としたと言ってもまだ凶悪だ。

まともに当たれば昏倒は免れない。

「ってかハプニングあるたびに走ってねえか俺!？」

「まずいよ……誰か来る!!」

走りながら、理樹が曲がり角の向こうから誰か来ると指摘してくる。  
言われてみれば確かに、小さく足音が聞こえてきた。

その前を通過し、水流を弾く時風。

すると曲がろうとしていた乾巧と園田真理にバシヤア！！と水がかかった。

「ヒヤッハー！！理樹！！」

「写真に収めたよ！！」

「濡れた少女の写真ゲッツ！！後でムッツリーニ売ろう」

こいつら、何をしているのか。

ちなみに蒔風は楽しんでるだけで、理樹は最近猫の餌モンスチを山買いさせられて金欠なのだ。

だが

「？・・・おオオ？！なんかめっちゃスゴイの来てる！なんか壁と

か天井走りながらめっちゃ追ってきてる!？」

「ファイズアクセルだアアアアアアアアああ!!--走れ理樹!!--キレた巧は病んだ小毬より怖い!!--」

「なんと!？」

「テメエらちよつと待てやゴラア!!--!!--」

びしょびしょにされ、さらには写真まで撮られた乾巧がめっちゃキレてた。

劇場版よろしく壁や天井を走り、迫るファイズ。

が

「気張れ理樹!!--アクセルの加速は十秒が限界だ!!--!!--」

「一秒が永久とわに感じるね!!--」

「いや、実際には1000倍だから.....」

「マジレスしてる暇があったら引っ張ってよ!!--!!--」怒



そりゃそうだ、と時風が理樹の腕を掴んで加速開翼。  
ファイズを振り切ったところで解除して息を整えた。

「なかなかにまずい状況だったな」

「そうだね・・・じゃ、僕はここで。写真これをムツツリーニ売って  
くるよ」

「気をつけるよ？」

「そっちもね」

そういつて、別れる二人。

しかし、理樹がどこから部屋の扉の前を通ったところで・・・

ガシッ！！

「（頭掴まれて）…………え？」

《Exceed Charge》

グイッ！（引きずり込まれる音）

「あー！うわアア……………！！！」

ギーーーーーン……………！！！！

蒔風の背後の教室の窓から、紅い閃光が漏れ出てきた。

それだけで何が起こったのか、蒔風にはすべて理解でき……………

ただ、彼には涙をこぼすことしかできなかった。

「逝ったか……（男泣き）」

「あなたもです」

ガシッ

「いやだぁー！！遊ぶー！！！」

「今こうしている間にも何人かに手伝ってもらってんですよ！？早く終わらせなさい！遊ぶのはその後ですッ！！！」

どうやら、彼の休みはまだ先のようなだ。

しかし仕事をしているとどうにも別のことを考えてしまっつよっつで



逃・げ・ろ！！（後書き）

みなっさーん！！

第四章の始まりですよー！！！！！！

私が日常を描くと大体みんな走ってる気がする。

逃走劇しか頭に浮かばないんや……

と、言うわけで次回もこういった感じで日常編を書きたいのですが・  
・  
・

どこのを書くのが悩んでいます。

候補は

・海

・山

- ・遊園地
- ・ビッグサイトのお祭り
- ・神社のお祭り

くらいですね。

……では緊急読者アンケート!!

どれがいいですか!?

まずは次回でどの場面が見たいか!?!です。

で、その結果は活動報告で言います。

だいたい明日の夜(11時くらい?)ですかね。

そしたら今度は「どのキャラでいきましょうか?」という投票にします。

変に多くなければ、一人最高で二人まで。

多い場合は何人が削るかもしれませんがよろしくお願いします。

とにかく登場キャラが決まらなくて困るWWW

何人かは決まってるけど、その他が決まらぬWWW

上記の五つの場所（他にアイデアがあったら受付ますよー）を、  
まず選んでください！！

そして、その後のキャラ投票で誰連れて行くかは決めていきます！！

次回がどうなるかは皆さんにかかっているのでーす！！（他力本願）

ちなみに今作中では夏です。

夏って言ったら夏ですwwwwww

ではまた次回で

海だー！！

「はい！今日これから海行くけど行ける人、挙手」

「「「「はあ？」「」「」」

「EARTH」内食堂「AGIT」

そこでは数名の人間が昼食を取っていたのだが、そこでいきなり時風がこう言い出したのだ。

その場でその言葉を聞いたのは五人。

理樹が書類仕事で、それを手伝いに来た棗恭介

何となく暇だから遊びに来た涼宮ハルヒ

この食堂でバイト中の泉こなた

何やら書類関係でこっちに来ていたはやての付添、ヴィータとザフ  
イーラ



この五人が、スプーンを掲げる蒔風に向かってそんな気の抜けた声を発していた。

「いやあね？これで俺っち書類仕事終わったのよ　だからさ〜これから遊ばないか？」

その反応に、蒔風がそう答えた。

今まで書類仕事ですし詰め状態だったから、こうして外に遊びに行きたい気持ちはわからないでもない。

だが、あらかじめこういうことは通知しておくべきではないのか？

そうヴィータが言うと、蒔風曰く「こういうのはサプライズだからいい」だそうだ。

「サプライズはいいけどよー、今からじゃ何の準備もしてないぜ？」

「うむ……海を楽しむには少し時間がないのでは？」

確かに、今はちょうど昼・・・よりも少し早い時間だ。  
今から準備、出発、到着では、遊ぶ時間はあまりないだろう。

だが、この男はそれを可能にする。

「大丈夫！全員分の水着などはこちらに用意しております！！」

「「「「「なんで！？」」「」「」」

「・・・なんでだろ？」

疑問に感じる五人、そして時風本人。

お前が分からないというのはおかしいだろう。

「・・・なんであるんだろ？」

疑問で疑問を返すなど習わなかったらしいこの主人公は、胸に「泉」と書かれたスクール水着をひらひらさせていたがために貧乳ステータスの少女に見事な合気をくらって投げ飛ばされた。

「ななな、なに持ってんのー！ー！？」

「見事だぜ・・・お前が貧乳じゃなかったらきつとおれは胸に邪魔されて投げられてはいなかった」うっさい！」「ぐえぶ！」

自分の水着を抱えるこなたと、投げ飛ばされてさかさまに転がる時風。

直後に踏まれながらも、この男はなかなかタフネスだった。

「と、言うわけでこれから海行くぞ！！一緒にいきたい子ら連れて、十分後に集合！！」

そう勝手に決めて、食器をカウンターに返す時風。

「事件は唐突に」というが、こういう唐突は本当に厄介である。

.....

.....

では、ダイジエストでお送りしよう!!

「集合したな!!」

「おおー!!」

「出発!!」

「おおおおお!!」

「到着!!」

「ウオオオオオオオ!!海だアアアアアア!!」

『『だからなんで?!?!?』』』

いま、彼らは海岸にいる。  
来たメンバーはあの場にいたのと+だ。

まずは理樹、恭介、真人、鈴、小毬、来ヶ谷  
SOS団の五人は全員で、こなたはかがみとつかさ、あとは従妹の  
ゆたか、その友達のみなみと来ている。

それに八神家の全員に、騒ぎを聞いて「行こう行こう」と騒ぎ出し  
た城戸真司と剣崎一真、名護慶介に引きずられて渡も来ている。7  
53は315です。

「ダイジェスト……書物などの内容を、わかりやすく要約す  
r  
」

「そういつこと言ってんじゃない。なんでこうもとん拍子!?!?」

「何を言ってるんだ?普通にバスのって普通に来たじゃんか」



「あ、あのう、わたしは……?」

「みくるちゃんは一番下で埋まってもらうわ!」

「ふええ〜!」

「あ、あのはじめまして!おねーちゃ、じゃなくで泉こなたさんの従妹の小早川ゆたかです!」

「ゆたかの友達の岩崎みなみです」

「ん!どうもはじめまして蒔風舜だよ!話に聞いてるよ。ちっちゃくてかわいいね、大丈夫?」

「えつと……?」

「ほら、ちっちゃい女の子がいると……」

「合法ロリだから大丈夫ですもん!」

「ちょ、どこでそんな言葉!?みなみさんめっちゃ睨むのやめてくれませんか!?周りの視線もいたいからやめて!!弁明のチャンスを!」

じ〜〜〜〜

「っしやあー！蓮のやつ「お前だけで行け」とか強情言っちゃってこないんだもんなー」

「気にすんなよ。始だってそんなもんだったさ。ビーチバレーやるーぜー！！あっちでもうやってるしー！！」

「ほらー！！そこでレシーブー！！アタックー！！今だー！変身しなさいー！ラ・イ・ジ・ン・グー！！」

「ライジングはできませんよー！？」

「なあ・・・」

「なーに？」

「あれすげーよなあ・・・」

シグナム（ボイーン）  
来ヶ谷<sup>ボイーン</sup>

リインフォース（ボイーン）  
みくる（ボイーン）



「あつちもすごいですう・・・」

はやて（ポイン）

シヤマル（ポイン）

ハルヒ（ポイン）

「なんてことはないよ、ヴィータちゃん！リインちゃん！！」

「え？」

「貧乳はステータスだ！希少価値だ！！つてね！！」

「・・・おお！！」

「それにほら、好きな人ができても、その人が巨乳好きだったら私たちはどうにかできるけど、あつちはもうどうにもできないし」

「す、好きな人ですか！？」

「でもなんかその見返し方はしたくねえ・・・」

「つてか姐御たちは何胸見て涙ぐんでんだ？」

「アギトは貧乳それでいいのですか！？」

「いや、だってあたし融合機だからあんまそんな・・・」

「女じゃねえ・・・」

「その言い方傷つく!」

「小毬ちゃん! あっちいこつ!」

「おっけ〜・・・ふわあ!」

「(コンコン) 鈴の成長日記! (パシヤ!)」

「何してんのね」

「(びくっ)・・・理樹、この写真は違うんだ。兄が妹をめでの  
のは当然で」

「こけた小毬さんのお尻撮っという何言ってるんだあんた!？」

「二人ともなに言っとなんじゃボケエ!!!」

「げふう!!!」



「ドラゴンライダースマッシュ!!」

「ウエーイ!!」

ドツ!!バサアッ!!

「渡・真司コンビ、一点!!」

「すみません!!」

「なに、ここからだ・・・名護慶介の本気をここに表さん!!」

753は315です!

「オイそつちの大人組!!バレーの俺に砂全部かかってんぞ!!」

「キョウっさい!!」

「バツ!?やめるハルヒ!!落ち着くんだそれを置け。ナマコやワ  
カメはともかくとして、フナムシだけはダ、ギャアアアアアアア  
アア!!!!」

「うへへへへへ、美少女達！」

「こっちもうまく撮れたで・これは永久保存版や!!」

「主はやて……!!!!」

「落ちてシグナム!!あのはやてを見たくないのはわかるが、男泣きしながら斬りかかろうとするな!!」

「とりあえずレバンティンは置いて!!余計に暑いから!!」

.....

そうして遊ぶこと、数十分

唐突に時風が全員を呼んでいきなり発表してきた。

「はい注もーく!!これから「チキチキ!水泳勝負」を行いたい  
と思います!!」

「「「イエー!」」」

海に来たことで全員のテンションも上がっているようでノリがいい。  
それに満足しながら、蒔風が沖の方にある岩を指さしてルールを言  
う。

「二チームに分かれてレースをします!!一人一往復!!負けた方  
には海の家で飯おごりな!」

昼食を食ってから来たというのにまだ食うのか。  
と、言っても結構遊んだから腹は減っているのだが。

片道五十メートルはありそうな場所に、岩がポツンとある。  
そこまで泳いでいって戻り、それをこなしていって早く終わった

方が勝ち、ということらしい。

ちなみに無理だった場合は並走している小舟から変わりが出ることになるが、「必ず全員は泳ぐこと」「変わった人の泳ぐ距離は変わった分プラスになる」ということになるそうだ。

つまり片道だけ行ったところで交代になったら、変わった人間はそのまま150一気に泳ぐことになるということである。

チームは以下のとおり

#### 第一チーム

- ・理樹
- ・キヨン
- ・ザフィーラ
- ・一真
- ・名護
- ・鈴
- ・長門
- ・こなた
- ・かがみ
- ・つかさ
- ・ゆたか
- ・みなみ
- ・ヴィータ

## 第二チーム

- ・ 恭介
- ・ 真人
- ・ 古泉
- ・ 真司
- ・ 渡
- ・ 小毬
- ・ 来ヶ谷
- ・ ハルヒ
- ・ みくる
- ・ はやて
- ・ シグナム
- ・ シヤマル
- ・ リインフォース

である。

「ちなみに順番は出来るだけ男女交互なー？じゃ、オレ審判」

「小舟係はリインと」「アギトでやってくぜー！」



と、言うわけで各チーム順番を決めて第一走者がピーチに立つ。

第一走者はヴィータと一真

ちなみに第二が真司、シグナム

第三・こなた、はやて

第四・ザフィーラ、ハルヒ

第五・長門、みくる

第六・キヨン、名護

第七・みなみ、真人

第八・ゆたか、小毬

第九・かがみ、シャマル

第十・渡、リンフォース

第十一・つかさ、古泉

第十二・鈴、恭介

第十三・理樹、来ヶ谷

である。

「位置について……よ……い……!」

ッドン!……!

蒔風の掛け声の後に、アギトが撃ち上げた火球がこれでもかと爆音を響かせてスタートを合図した。

それに応じて海に飛び込むヴィータと一真。

どちらも最初こそは拮抗するものの、やはりタツパの違いで徐々にヴィータが引き離されていく。

ヴィータが折り返すころにはすでに剣崎は十メートルほど先の地点を泳いでいた。

だから

「アイゼン!!」

《!!》

ヴィータが愛機・グラーフアイゼンを構え水中で一気にロケット噴射、剣崎にすっ飛んで行ったのは間違っていない判断だ。ルールとしてはおかしい気がするが。





「ナイスプレーやで!!」

「あんたら身内じゃねエの!?!」

何はともあれ、ヴィータが回収されている間に剣崎はその差を縮め、追い付くころに真司が代走し始めていた。

並ぶ剣崎と真司。

と、浜辺について剣崎はシグナムと交代、真司はそのままターンして泳ぎ始めていた。

真司とシグナムは実力こそ近いが、もともと真司はただのジャーナリストだった男だ。基本的な身体能力ではシグナムに及ばないところがある。

それでも何とか食いさがり、距離を三メートル以内に抑えつつゴールしてバトンタッチする。

そして次にこなたとはやてだ。

ここで一気にこなたが追い上げを見せ、はやてに追いつき、追い抜いて行った。

「やっぱりあなたの方が運動神経いいからなあ」

「はやてちゃん、体力とかはからきしですからねエ」

「それにほら、あっちのチームは邪魔になるものがない」

「邪魔になるもの？」

「胸」

直後、時風がブツ飛ばされた。

そんなこんなでレースは続く。

追い越し追い抜き、結果は同着。

考えるのも面倒なので、すっ飛ばした時風の財布から飯代は出て行

った。

.....

「いってて……人のことすっ飛ばしといてさらに金まで巻き上げていくなんて……あの子たちひどい」

この男には一度自業自得という言葉を送ってやりたい。

まあそれはひとまずとして、時風が首元をさすりながら浜辺を歩いていると

ズボツツ!!!





「……明久」

「……えつと……舜？」

そこにいたのは吉井明久その人である。

少し離れたところには坂本雄二が転がっている。

背中の跡からして、明久にドロップキックを食らったのだろう。

「……何してんだ？」

「えつと……吊り橋効果？」

「落・ち・ろー!!」

「う、うわああアアアアアア!!」

その後、二人を捜しに秀吉がやってきて、蒔風とあいさつをして事情を聞いた。

どうやら彼らもいつものメンバーでこの海に遊びに来ていたようで、明久と雄二は姫路たちに「ナンパする度胸はない」と言われてしまったらしい。

「なるほど。それで男の意地にかけてナンパしようとして……」

「どうやら女子を危機的状況に追い込んで、助け出してそのまま……  
・とでも思ったらしいのう」

ちなみにその二人は今、首だけを出した状態で砂浜に埋まっている。  
縦に。

まだ気絶しているが、今しがた姫路たちに連絡したので引き取ってもらえるだろう。

と、その前に

「（ボソリ）おっばい」

「「どこにおっばいが!?!」」

蒔風のその一言で、気絶していた二人が目覚めます。  
バカしかここにはいなかった。

「嘘だよ。じゃ、せいぜい楽しめ」

「え？あ！舜！！騙すなんてひどいよ！！」

「あの野郎・・・男の深層心理に働かせてきやがったな！！」

蒔風のやり方に無駄な憤りを感じる二人だが、その背後に脅威が迫っていることなど考えてもいなかった。

「アゝキゝ？（怒）」

「明久くん？（怒）」

「雄二。いま誰のこと考えてた？」

「そ、それはだな（ガシツ！？）返答も聞かずにアイアンクローはないんじゃないか！？」

後ろに振り向くこともできず、二人はしっかりとゆっくり処刑おしまされて  
いった。

.....

「あー！真司飛ばし過ぎだったのー！」

「ワリワリ！！取ってきてくれー！！」

「もつお前もいー！！」

「真&真司、ボール探し中……」

海岸沿いの岩場

「あ！！見つけたぜ！！」

「マジか！！」

「ああ！この人が持っててくれたよ！！」

「お前か・・・このボールを飛ばして来やがったのは・・・」

「！？」

「俺をイライラさせるとはな・・・」

「浅倉！？」

「ん？知り合い？」

そう言っで一真が真司に聞くが、とうの真司は口をパクパクさせてしまっている。

と、そこで浅倉が真司に指を向け、こういった。

「…………馬鹿か？」

「みんな馬鹿バカって俺のことオー……!!!(ブワッ!!)」

「え？真司？真司……!!?」

「オイお前……悪いと思うなら……俺に喰いもんでも買ってこい」

「え？えつと……?」

「あそこの……焼きそばなんかでも何でもいい。早くしろ……腹が減ってイライラしてるんだ……」

「わ、わかった！(な、なんだこいつ……言いようもない雰囲気を出してるぜ……)」

五分後

「はいよ」

「……………なんだこれは」

「何って………焼きサバ」

「鯖じゃねえ!!」

「ええ!?!」

「俺が頼んだのは焼きそばだ……焼いた!そばだ!!鯖じゃあねえ!!!お前……俺をよっぽどイライラさせたいらしいな……」

「ちよ、だつてお前が焼きサバつて」

「焼きそばだよオ!!!」

グワシッ

そう言つて浅倉が一真の頭部を掴み、ブンッ!!という追ひよく、それはもうとてもとても勢いよく投げ放ちました。

きれいな放物線を描いて飛んで行った一真は、頭から砂浜に落下、ビーン、という感じに突き刺さってからグタツ、と倒れた。





ここに、因縁の戦いが幕を上げるのである。

.....

そうこうしていると日も落ちてきて、あたりがだんだんと暗くなつて一番星が見えた頃。

「キャンプファイヤーやろうぜ!!」

蒔風が腕を高々に掲げてそう提案した。

だがしかし、周辺に薪となるモノはなく、一体何を燃やせばいいのか、とザフィーラが聴いてきた。

ちなみに今はもうみんな着替えており、途中であつた明久たちも集まっていた。

「木？まあそこは・・・ロウソクで？」

「何それしょぼい」

「千本ぐらい集めてきたから・・・」

ゴオオオオオオオオオオ！！！！

「ロウソクとは思えない火力！！」

千本集めたというロウソクにはすでに火が灯されており、一メートル以上の高さにも火は高く立ち上っている。

集まると火は大きくなるが、ここまで大きくなるとさすがに怖い。

「ちょっと！？洒落じゃない火力になってるわよ！？」

「木がないんだからしょうがないね。ああそうさ、それならしょうがない」

「蒔風、お前木とか出せるんじゃないの！？」

「あ、そうだ」

真司に指摘され、そうだったと思い蒔風がそこら辺の土に手を当てて、圧水と雷旺の力を使って木々を急速成長、一気に切り倒して・  
・  
・

「そおい!!」

全部一気にくべた。

しかも燃えが悪いとか言ってポリタンクに入った油（10リットル）を一気にぶちまけるといふ所業。

ほかのメンバーは蒔風がそれを手にした瞬間にその場からダッシュ  
逃走。

だって目からハイライト消えてるんだもん。そりゃ逃げるわ。

そして



「やめなさい！！歌うのをやめなさい！！」

そういつてギヤーギヤーと楽しんで（？）いると、炎の中から人影がゆらりと出てきた。

おそらくは時風である。

そこで一回ぶん殴ってからこの炎をどうにかしてもらおうと近づき・

「ぎゃああアアアアアア！」

そのシルエットを見て悲鳴が上がる。

なぜならそのシルエットには、首から上が存在していなかったからだ。

「」「」「ま、マミったあああああああ！……」「」「」

実際には顔が焼けるのを防ぐために頭を服の中に入れてただけなのだ

が、まあこの炎の中じゃわかるはずもなからう。

数分後にアフロ頭で現れた時風に一通りのライダーキックをぶちかまし、みんなで消火して程よい火量でキャンプファイヤーをした。

一同は誓う。

この男に、二度と火遊びはさせまい、と

「EARTH」に変えることには完全に夜となっており、各々「EARTH」の扉（各家につながってます。さすがはアリスさんです）をくぐって帰っていく。

それから時風は髪形が直るまでの間「爆熱アフロさん」と呼ばれ続けていたそう。



「検体Y、目標「鉄槌」「インターフェイス」を撃破。所要時間5  
3秒」

「ふむ……上々だな。調節を済ませ次第に次の相手をぶつける。次は？」

「……検体「漆黒」です」

モニターの向こうで、一人の青年が地面に倒れるクリスタルのようなもので出来た何かを、漠然とした目で見ている。

そのクリスタルからは赤い液体がどろりと流れ、それが青年に撥ねた返り血(?)から砕けた身体、すべてがスウツ、と消えていった。

《第2004番実験、開始します。目標レベル、Ⅱ（イコール）》

その実験場の扉が開き、そこから先ほどと同じようなクリスタルの人影が出てきた。

違うのはその人影が、我々の知る「漆黒の翼」のものと同じという



こと。

ただ、全身がクリスタルでできているだけだ。

そして、その二分後にはそのクリスタルは粉々に砕かれた。

また次の実験が始まる

t o b e c o n t i n u e d

海だー！！（後書き）

どうも！！

時間がかかって上になんかこんな四コマみたいなノリになってすみません！！！！

しかも何人が出せてないし……………

グダグダになってしょうがないです。

もし面白いと思っていただけたらありがたいです。

面白くなかったら……………

とりあえず悪い点に」「って付けといてくださいwwwwww

さて……………次回は「神社の祭り」にしときましよう！！

絡ませたいキャラ、見てみたいシチュエーションなどあったら感想にどうぞ！！

ちなみに最後の話の「クリスタル」って言うのは、イメージとして「ディシディアファイナルファンタジー」のイミテーションみたいな感じですね。

あの実験とはなんなのか……

わー、一体誰なんだー（棒）

多分わかってしまう人は解ります。  
ある読者様とかなり前（第一章の時だったか？）に決めたキャラです  
のでwwww

……誰なんだ？

ちょっと感想読み直してきます  
wwwwww

ではまた次回

みなさん！！次回はがんばって速く書きます！！！！  
今回はホント時間かかってすみませんでした！！！！

レッツフィステイボー！！

雛見沢村、古手神社、境内

そこには今夜、実に多くの夜店が並び出ており、その場にいる全員が浮足立っている。

そう、今夜は縁日。ようはお祭りの日だ。

「全員浴衣着たー？」

『はい！』

「お金持ったー？」

『はい！』

「じゃ、行きましょー!」

ここは雛見沢一の名家、園崎家の広間。

そこで数名の女性が、浴衣の着付けを行っていた。

クド、美魚、魅音、詩音とが着付けを見て回り、ほかのメンバーがやってもらってるという形だ。

この場に来ているのはまず年長者の光夏海

クド、美魚、葉留佳、そして葉留佳が誘った佳奈多

大和が行くということのでついてきた川神百代、一子

それに祭り好きの星に、一刀についてきた愛紗、華琳、蓮華

後はティアナ、スバル、キャロとルーテシア

最後に当然ながら、雛見沢部活メンバー女子陣だ。

ちなみに梨花、羽入、沙都子はすでに境内でお神酒を配っている。

巫女服で。

そう、巫女服で。

大事なことなので二回言いました。

羽入もいつものではなく普通の巫女服で。

三回目いただきました。

「ふう〜、こんなもんかねえ」

「おお」

「すごいね〜。私たちより年下なのにね!」

皆のを見て回り、最終的な手直しをしていた魅音が汗を拭う仕草をして一息つき、見事な着付けに百代と一子が感心していた。





と、言うわけで男性陣側の前原邸である。

いるのはまず時風、理樹、真人だ。

恭介は海での盗撮が原因で理樹の書類を押し付けられていて、謙吾は剣道の大会が重なってしまった。

謙吾は「大会などどうなっても構わん！」とかいって屋上からバンジージャンプなど無謀な遊びを幾度も敢行していたらしい

高く飛べ〜高く空へ〜

だがしかし、なんということか

神は言っている。ここで死ぬべきではないと。

謙吾はなぜか擦り傷程度で済み、普通に大会に出れてしまったのだ。理樹の必死の説得で何とか大会には出てもらえたそうだが……

余談だが、謙吾は天下無双を起こして圧倒的優勝を飾った。

……憂さ晴らしてないことを祈る。

あと、直枝大和、北郷一刀というハーレム野郎。  
話を出した時には今こっちに来ている人間しかいなく、それ以上連れて行くこともしたのだが

「お祭りでの食費」

という一言でそこから話を広げることにはなかった。

おそらく全員連れて来たら雞見沢の食材は消え去るだろう。

無論、彼らの懐の中身もだ。

一人につき「さらば諭吉」×15くらいは行けるかもしれない。

それと圭一、悟史、エリオ、以前来たときは祭りどころではなくな  
ってしまっていた土、海東、ユウスケだ。

しかし……

「これどう着ればいいんだ……?」

非常に残念なことこつち側に浴衣の着方を熟知した人間はいなかった。

だから「俺に苦手なものはない」という土と海東のかじった程度の知識をもとに、全員で頑張って着てみたのだ。

真人はめんどくさいだとかで甚平じんぺいにしているが。

「野郎の着付けして何が楽しいのか……」

「俺だって野郎にしてもらってもうれしかねえよ……!」

「うひょー……! まっつりり……! まっつりり……!」

「……」

「いや、あのバカは別だろ……」

「アホって言って……!」



まあ、男性陣の手間取りを知らないのが、こつも気楽に言えるのだが。

そうして待っているとほどなくして男性陣が到着。

「悟史君！！なんで私柄の浴衣着てくれないんですか！？」

「詩音の顔がプリントされた浴衣なんて着れないって！！」

そんな言い合いも流し、さて行こうということとで階段を上り始めた。

「俺たちはのぼり始める。この長い長い階段を………」

「人生はじまりそうだな、それ」

.....

階段序盤

「いやあ、見上げると結構長いなこの階段」

「俺なんかこの一番上から一気にジャンプしたことあるぜ」

「ま、張り切っついていこー！」

中盤

「ちょっときついな？」

「いやいや、大丈夫！」

「わははははは！三往復目！まだまだ行くぞ一子！」

「はい！あと四往復！」

「危ないから走んな！」

少し上

「はあ・・・はあ・・・」

「ご主人様？大丈夫ですか？」

「・・・いやいや大丈夫。はは、ちょっと甘く見てたねこりゃ。すこし・・・本気出すとしますかね・・・」

「姉さん・・・助けて・・・」

「大和お、お前体力無いなあ」

「もう八往復してる姉さんと一緒にしないで・・・」

もう少し上

「ご、ご主人様？」

「い、いや！大丈夫！ほら！！最近あれじゃん！あれだったからさ！！そうだよそうそう、だからだよ！！」

「わふ〜、楽ちんです〜」

「筋肉さんが役に立ったぜ」

「でも私にクドさんに美魚さん、華琳さんを乗っけて大丈夫なんですか？」

「キャロ、こついつ時は利用できるものは利用するものよ」

「華琳さんは早々にめんどくさいって言うてましたもんね・・・」

また少し上

「ほ、ほら！！蚊に刺されたから！！蚊のせいだから！！だから疲れてんだよ！！きつと貧血だな、うん！！」

「二十三往復目ーーーー！！！！」

「運んでくれるのはいいけど姉さんそのまま何往復もしないで振動が……………！！うぷっ」



「な、なんでこんなに段数があるんでしょうか……？」

「も、もうだめだ……（バタリ）」

「ユウスケ!？」

「い、一体何が……起きて……」

そしてついにユウスケが倒れる。

ここまでくればもう分る。

この階段おかしい。

と、そこで隣を歩く時風がペロリと舌を出して謝ってきた。

「あ、やべえ幻術やりすぎだった（ペペロペロ）」

「「「時風テメエ!」「」」

「笑いのツボッ!!!」



今回来たのは後者の方で、やはりいくつもの出店でにぎわっていた。

「じゃあこっから自由行動な？二時間後くらいに花火やるから、もっかい集まっつてなー」

「うーい」

頭や腕を星に包帯で巻いてもらいながら、時風がキリツ、と言う。そして、彼らがそれぞれ見たい方へと向かって歩いていった。

「じゃあ舜、我々も行きましょうか？」

「そう言いながら祭具殿の方へ行くなアホウ」

雛見沢には禁忌がいっぱいだ。

.....  
.....

「ティアー!!リンゴ飴!!」

「はいはい」

「ティアー!!綿菓子!!」

「そうね、おいしいわね」

「ティアー!!チョコバナナ!!」

「面白くておいしいのがたくさんあるわね。でもね?スバル」

「んにー?」

「次のモノ買う時はとりあえず両手の物を消費してからにきなさい  
ね」

「わかってるよティアーwwww私もさすがにそこまで馬鹿じゃないよwwww」

「そつよむね」

「あ!!おじさん焼きそば」

「わかってな——い!!」





「いやあ、最近翔太郎への依頼もめつきり減ってしまっただね」

「お金がないんですか・・・」

「そ、だから僕ら二人でこうしてたこ焼き屋をしているのだ」

と、言うことらしい。

ちなみに亜希子は照井と旅行に行ってしまったっているようだ。

「ちつくしよー！ー！！こうなったらハードボイルドに焼いてやる  
！！」

「ハードなのはいいが焦がさないでくれたまえよ？翔太郎」

そう言いながら二人にたこ焼きを渡すフィリップ。

値段は一舟500円と少し高い気がするが、確かにうまい。

「当然さ。僕が検索してアキちゃんが手ほどきをしたんだ。まったく、翔太郎はこういうのは何気に得意なんだよね」

「・・・・・・・・探偵さん・・・・・・・・なんですよね？」

「キャロ・ル・ルシエ。時に純粋な疑問は人を傷つけてしまう物だよ？」

「俺は探偵なんだー！ー！ー！ー！！！！（ブワッ！ー！！）くうう、おやつさんごめんさい。あなたの弟子はこんなところでこんなこととして食い扶持稼いでます……」

「（こぼー）こんなところでは言ってくれますね翔太郎」

「！？」

「頼み込んでくるから私のついでで夜店を出させてやったのをお忘れかしら？クスクスクス……」

「申し訳ございません梨花さん！！！！（土下座）」

「そうね……ボクはたこ焼きが食べたいのです」

「え、ごひゃ」（ズイッ）食べたいのです」どうぞお持ち帰りください！！！！（涙）」

「……翔太郎さん、もう三舟ください」

（パアアアアアアア！！！！）



「翔太郎さんが光ってる・・・」

「よっぽど優しさが身に染みたんだね・・・」

.....

「さあ！！うまく命中して台の後ろに落ちたら商品ゲットだ！！五発で五百円！！九発八百円だ！！」

「九発だ！筋肉狙撃法を見せてやるぜ！！」

「井ノ原さん、がんばってくださいっ！」

「ヤハハ！真人君、大当たり狙ってこー！！」

「まったく・・・こんなので大当たりなんてもらえるわけが・・・」

キュ、キュ（コルク詰める）

ググッ（振りかぶる）

「!?!」

「筋・肉!?!」

ブンツツ!?!?! (振り下ろす)

スツパアン!?!!

「よっしやあ!?!」

「はあああああああ!?!」

そのコルク一発で標的が吹っ飛んだ。

腕をふるう遠心力のみでここまでやるとは恐ろしい筋肉だ。

標的だったのは「大当たり」と書かれた空き缶で、中には釣り具に使うような重しがゴロゴロと入っていた。





「お宝なら僕の出番だNE　！！！！！！」

と超大声で騒いで雄介と士にド突かれ、笑いのツボで絶賛抱腹絶倒中の海東である。

ちなみにその海東を士はバシバシカメラに収めており「将来国語辞書に載せる」とか言っていた。  
こいつならやりかねん。

抱腹絶倒之図

写真

みたいな

一回百円というので、それぞれ三回ずつ挑戦してみるということでオツチャンに金額を払う。

まず一人目、一子が三つ選んで一気に引いた。  
せつかちといつかなんといつか・・・あまりの即断におっちゃんも唾然だ。

が、とりあえず何かは引いたらしくその景品を受け取る。

「辞書だったよう・・・」

「あっはっは！ー！ベンキョーしろってことなんじゃねえの？見せてみ？何語辞書？」

「グロンギ語辞書」「オンドウル語辞書」「グデイン・ツウー！」

ポン、と一子の肩を皆の手が同情の意味を持って叩かれた。

といつか最後のは違っただろ。

超電子！？超電子なのか！？このエゲ声め！！WWW

「じゃ、じゃあ次は私ね・・・」

一子の引いた景品を見ながらも、いまさら後には引けない蓮華が両手をグツ、と握って気合を込める。

そして、一本を選んでまず引いた。出てきたのは……

「んにゃあ？」

猫だった。しかもただの猫じゃない。

こう……型月シリーズを引つ掻き回す感じの、どっかの真祖に似た感じの猫だ。

「ニヤニヤ！！次元の穴をくぐってネコアルク」

「帰りなさい（ポイツ）」

なんだか自己紹介でも始めようとしたそいつを、一刀がひつつかで次元の穴に落とした。

世界が一つになっているなら多分ポイツはこの世界の住人なんだろうが、もうこの方法でいいと思う。

「か、一刀……せつかく引いたのに……」

「蓮華、あれはだめだ。なんだかそんな気がするんだ……」  
「めんな？」

「え？あ、うん、いいわ。まだあと二回あるものね!」

蓮華、いい子である。実にいい子である。

そしてもう一度引く蓮華。  
出てきた景品は……

「プハア〜! やつと出れたよ〜」

鳥だった。しかもただの鳥ではない。

見た目からして思いつきりメカニックだし、何より言葉をしゃべる。

まるでどこぞかの宇宙海賊の舟で大いなる力の手掛かりを言ってる  
ような鳥である。

きつと中身は梨花ちゃんと同じ人だ。



「レッツ！お宝ナビゲート」

「ゴーカイ返却！！」

すると、また一刀がそれをひつつかんで次元の穴に放り込む。  
多分これで帰れるだろう。

「一刀……」

「ごめん蓮華！！あれは……まだ完結してないから作者もいじりにくいんだ！！」

「一刀が何を言ってるかわからないけど、メタいということは解ったわ」

蓮華さん、あなたよくわかってるでしょう。

と、言うわけで蓮華はこうしてせっかくの景品を二回連続で失ってしまった。  
もう次しかない。

深呼吸し、目を閉じ選び、掴み取った一本のひもを勢いよく引き上

げる!!

「私は呉の国王だ……自らの運命は!!自ら切り開く!!」

グイッ!!!

そして、現れたのは!!!

ゴトン!! (岩の棺桶が地面に落ちる音)

「何事だ!!!?」

ギギギ…… (棺桶、開く)

「もつと僕を笑顔にしてよ……」

「ウををオオオオオオオオオオオオオオ!!?!?!?」

ドカッ!!!バタン!!!

その言葉聞くやいなや、土が棺桶の扉を蹴り締めて中から出てこようとした少年（？）を閉じ込めた。

よく見るとその棺桶には模様のように文字が刻まれており、何やら嚴重に封印されているものようだった。

「ダグバだった!!!いまの絶対ダグバだった!!!」

『アハハハハハハ!!!（ガタガタガタ）』

棺桶の扉を背中で押さえながら叫ぶ土、棺桶の中から聞こえてくる笑い声。

「土!!!それを絶対に開くな!!!」

「わかってる!だからそのディエンドライダーをこっちに向けんな海東!!!」

「え?俺ごとやれって?流石は土!!!ライダーの鏡だね!!!」

「海東てめえええええええええええ!!!」

そんな漫才をしている間にも棺桶は大きく揺れ、ついに扉が開いて士が前に突き出される。

士は海東に突っ込んでいって二人は転び、棺桶の中から飛び出していったものは真っ直ぐユウスケの元へと走り……！！！！

「もっとボクを笑顔にしてよ」

なんだかそんなことを言ってきた。

いや、こいつが言つとこの言葉は恐怖にしかならないのだが、何かが違う。

「えつと……?」

「もっとボクを笑顔にしてよ」

いふなれば「僕」が「ボク」になった。  
なんだろう、それだけでかなりかわいい。

あと、姿も変わっていた。



「ンーーーー!?」

「はうう!..!かぁいいよ!..!この子かぁいいよーーーー!..!」

「ゼダ!..!ゼダーーーー!..!」

なんかダグバのほうも「ン!」と「ゼダ!」としかしゃべらなくなってる。

ホントにただのちびキャラじゃん。

結局、何とかしてダグバをレナから解放し、そのダグバはユウスケのもとへと走って行った。

そしてしがみつく。

どうやらなついてしまったらしい。

「「なに.....これ.....」」

ちなみに海東がゲットしたのは「紙飛行機」「銀玉鉄砲」「ハリセ



いろあつたらしいがここでは割愛する。

「じゃあ全員に花火いったー？」

「はい！」

「あの」

「じゃあ火の方向だけは気をつけてねー？」

「りょうかーい！」

「ちよつと」

「ん？どうした？舜」

星や愛紗がみんなに花火を配り終わり、さあ楽しもうといつところで蒔風が星に向かって声をかけた。



「オレ、これしかもらってないんだけど」

「ああ、それはですね・・・先日海で舜が結構やらかしたと聞きましてな」

「あ、はいそうです」

「だからへこれビ花火です」

「だからってこいつはひどくないですか!？」

線香花火さえも渡してもらえない時風。

まあこいつに持たせたらねずみ花火は投げるだろうし、ポンポン飛び出すものはひとまとめにして一気に発射とか馬鹿なことしかしないだろうから正解といえば正解なのだが。

みんながワイワイやってるのを見ながら、一人さみしく（頭の上にダグバのつけて）ニヨロニヨロ伸びる蛇花火を眺め続けた時風であったとき。



壁には取っ手があり、それを引くと薄い板がスライドしてきてそこにいくつもの銃が掛けられていた。

部屋をぼんやりと移すモニターには人体の構造を映し出した映像が流れ、より効果的に人体を破壊する方法が計算され続けている。また別のモニターにはそれをもとに何十人という人間が殺し合っている映像も流れていた。

さらには様々な用途に使えそうな小道具から、薬、注射器、拷問用の椅子、洗脳用のヘルメット、エトセトラエトセトラ……

そんな部屋に、また新たなモニターが映し出される。

そこに映ったのは、一人の青年。  
プロテクターとも思えるようなメットをかぶり、それと一体になっているバイザーが目元を覆い隠している。

その男は、炎の中に立っている。燃えているのは様々なモノだ。

家、車、道路、木、空

そして、人

それらのモノにはすべて「だった」という過去形を用いるのが適切であろう。

家だった、車だった、道路だった、木だった、空だった

人だった

今や何が燃えているかもわからないし、その炎でもはや臭いも何も感じない。

だが、その青年はその熱すらも感じていないかのように、燃えた街並みを機械的に進み、その先に何があるうとも越えられるなら踏み越

え、邪魔なら破壊して進んでいった。

「上質ですね。やっとここまで来ました」

「はい。ここまでの成果は初めてになりますね」

その町から少し離れた安全圏で、一人の丁寧な物腰な男と、その後ろにつく研究員のような女性がそう言った言葉を交わしている。

男の方は1.5リットルのペットボトルに入った水を持ち、それをたまに口に運んでいる。  
ペットボトルは専用のホルダーに入っており、肩から掛けて持ち歩いているようだ。

「いままで、多くの先人達が夢破れてきたことが、ついに実現するんですね！教授！」

「そうです。これこそが私がお先祖から受け継いできた夢なのです」

「じゃあ、今日はここら辺でやめておきましょう。下手に暴走して

も困りますし……ウぐっ!？」

そう言って手元のコンソールを操作し、街を歩く青年を止めようとする女性だが、その声が詰まった。

原因はペットボトル男である。

女性の何に反応したのか、男の右腕が女性の頬を左右からつかみ、口を変な形に歪ませていたからだ。

「私と、私のご先祖がここまで培ってきたものが今更暴走するともあなたは言うんですか？」

「ひ、ひえ!!!そういうわけは!!!」

ゴキン

そんな重そうで、それでいて小さな音だけがその場に聞こえた。

「変な方向に曲がった首」という新しい特徴を得た女性の身体が、生命の反応を失いその場に崩れ落ちた。

「回収し、他の実験の素体にでもしなさい」

「はっ」

そういうと別の人間が現れ、その死体を回収していく。

それと同時に新たな女性が現れて地面に落ちたコンソールをひろいあげ

ゴキリ

先ほどと同じことがまたその場で起こっていた。

「長髪の人間は嫌悪すると言っていますか？ああ……  
しかもポニーテールだ。そうしてれば邪魔にならないとも思っているのかこの小娘は」

そう言って、その女性の後頭部をつま先で小突き、またさっきと同じように回収するように命じた。

ただし今度は死体の髪を切ってから、と付け加えたが。

「……ん、ああ。今はこっちに来なくていいよ。来てしまつとそこに何人控えていてもキリがないだろうからね」

誰ともなくそう男が言う。

その右手はゴキゴキと骨を鳴らしており、今すぐにも何かを握りつぶしたい、と訴えているかのように見えた。

それは目の前の「実験」がうまくいっているからか、気に食わないことがあったからなのか

おそらく、どっちでもいいだろう。

否、この男はどっちでも同じことをしていただろう。

結局、最終的にこの街の原型がなくなつたところまでいってからやつと男は青年を止めた。



この後の、男の会話から、この街は青年の、故郷であることが、わかった。

「あっはっはっはっはっは。あっっっはー！ー！ー！っはっはっはっはー！ー！ー！」

t o b e c o n t i n u e d

レッツフェイスティボー！！（後書き）

何このマッドサイエンティスト。書いてて楽しい!？

はっ!？自分もなんかやばくなってる気がする・・・

と、言うわけでお待たせしました祭り編です!!

最初は読者様からの案もあって「らきすた」のモデルになった「  
驚宮神社」を使おうと思ったのですが、今回は古手神社に。  
だってこっちなら何があっても「まあ難見沢だもんな」で片づけら  
れそうだしwwww

そして今回最大の謎

何故現れた「ちびダクバ」wwww

あのキャラの名前は「だぐば」です。  
平仮名表記なんです。

ユウスケが保護者みたいになってるみたいです。  
まあ何かあった時に対処できそうなのあいつくらいだし（スペック的にも）

本当になんで出たのかようわからん。

そして主人公はオチ担当。

星とのからみもやりたかったけど……

あ、だめだ。

あの人相手だとしてもR - 18まっしぐらだ！！WWW

きつと祭具殿にでもつれだして、ビビる時風でも見ようとしてたんじゃないですか？

でも時風は「おばけやしき」はダメだけど「心霊スポット」とかのマジモンは大丈夫だから全然平気だったという

きつとそんなくらいでしょうｗｗｗｗ

なんかギャグだと途端に残念になるな、主人公。  
まあそんなもんかｗｗｗｗ

最後の男はマッドですねえ

最後の一文が妙に句読点多いのはあえてです。  
なんかキモチワルイ気しません？

長髪の人間に殺意を覚えるのは「あんな長いもんつけて邪魔でしかない」だからだそうです。  
せつかくここまで人類は洗練されてきたのだから、あえてそんな邪魔なものをつける意味がわからない、だからだとか。

胸とかはいいらしいです。

あれは自分の意思じゃどうにもできないから。

ひどい奴ですね。

まあいつかぶつとばしてもらいましょうー!!

と、言うわけでまだまだ続く日常編！！

次回くらいで終わらせようかな？とか考えてます。

次回は遊園地にしたいとか何とか考えてます。

それならBBQとかもできるだろうから「山」ッぱいシチュエーションもできそうだしwwww

ではまた見てみたいキャラの絡みや、イベントがあったらどうぞ。

基本的に前の二つに出てないキャラで。ま、あくまで基本的にです

wwww

ではまた次回！！

遊・園・地ッ！

朝、「EARTH」にある時風の部屋

そこに迫る人影。

部屋の鍵を合鍵（非公認）で開き

少しだけ部屋の中を見渡して

そして時風の寝ている寝室に忍び込み……

「舜君！！！！なんで海にもお祭りにも私を誘ってくれなかったのー  
—————！！！！？？」

なのはがそう叫んで飛び掛かってきた。

これまで蒔風はその二か所に遊びには行っていたが、どちらもなのはは用事があつたようなので声はかけていなかったのだ。

それに彼女ならば仕事をヴィータやフェイトあたりに丸投げしてでもついてきそうだったし。

まあ、はやてやスバルあたりからでも聴いたのだろう。

蒔風がそんな楽しいところに行っていたと知って、こうしてなのははやってきたのだ。

彼女も夜遅くに尋ねるのは失礼と思ったのかそれはやめ、こうして朝一で来たのだが……

ドオツツ！！！

そんな轟音と共に、蒔風の部屋の扉が外の廊下に吹き飛んで、その後になのはが転がり出てきた。





「うん！」

ズズ、と味噌汁をすすりながら蒔風が目の前のなのはに聞く。  
今二人は食堂のテーブルに向かい合わせで座っており、朝食をとっていた。

ちなみに逃避行の方は最終的に、青龍たちがわりとマジになって止めたので、何とか大事にならなくて済んだらしい。

・・・崩壊した壁は今、彼らが修復している。

閑話休題

話題は戻る

「まあそりゃ、俺だって遊びに行くのはやぶさかではないけど・・・」

「じゃあー！」

「でもそう何度も行くと大変だし、何より書類がなあ……」

「私と書類、どっちが大事なの!？」

「書類」

即答だった。

普段は嫌がるものの、やはりやらねばならないということとは解っているのでそこは書類を選ぶ時風。

というか何より鬼アリスの管理者が怖い。

まあいざという時はもちろん「仲間」である彼女を選ぶのだろうが

「ひどい!! 私今までずっとあなたに……あんなこともこんなことも!!」

「そんな劇的なドラマを繰り広げるようなことはしてないだろ」

「あつ、イタイイタイ! 頭掴まないで!!」

「それともお前の言う「あんなことこんなこと」ってのは朝っぱらから低血圧者たたき起こして存分にイラつかせることを言うんです

かねエ？」

「舜君怖いよ！？はっ、これがこなたちゃんの言ってた「好きな子ほどイジめたい」っていう！？」

「こなたくカモーン」

「私にも標的が向いた！？」

梅干しの種を口の中で転がしながらなのはに説教し、こなたのドタマに軽くげんこつを落として時風が部屋から出ていく。

「まったく……俺だってできれば遊んでいたいけど、そう簡単じゃなかったり……」

「え？いいですよ？最近何もありませんし」

「いいんかいつつ！！！！！」

「EARTH」局長室でそんな話をすると、アリスの返答はまさかまさかの「OK」だった。

蒔風がふと後ろを振り返ると、少し開いた扉の隙間からなのはとこなたとヴィヴィオが「グッ！」と拳を握っていた。

「見てんな！！」

「（バフォ）にゃー！！！！！！！！！！」

その三人に蒔風がクッションを投げつけ、逃げろー！と三人が走っていく。

そんな三人に蒔風がハア・・・とため息をつき

「じゃあ……」にでも行きますかねえ」

机の引き出しから、何枚かのチケットを取り出した。

.....

「ゆ……」

「え……ん……」

「ち……」

「うおー！とそつ叫ぶのはヴィヴィオ、イリヤ、インデックスの三人。

今回ここにきているのは当然ながらもまず時風。それになのは、ヴィオ

イリヤの付き添いで士郎、セイバー、凜、アーチャー、桜

インデックスの付き添いで上条当麻である。

その少し後ろにはクラウドとティファがバイクで来ていた。

「な、なんでこんな大人数に……」

「チケットたくさんあんだもんよ。誘える人数は多い方が楽しいっしょ?」

「そうだけど〜(うう〜)」

てつきりヴィオと自分と時風の三人で行けるものと思っていたのはががつくりしていた。

まさかこんなに人数呼ばれるとは……

「急に決まったことにはやっぱり人数集まってんな」

「どつするの?みんなで回るには大変だよ?」

ふむ、と考える蒔風にフェイトがヒョコ、と顔を出して聞く。

そのフェイトにうん、とうなずき、じゃあ各自自由行動で大丈夫かー？ときき、九分九厘の賛成をもらったのでそのようにした。  
ちなみに反対意見は……

「（上条、 太郎）一緒に回ってください！！」（食費的な問題で）  
」

が、ダメ！

ここは民主主義

とはいってもあまりに哀れだったので蒔風からお小遣いが出た。  
多分足りないだろうけど。

.....  
.....

この遊園地は敷地が広い。

テーマパークの場所もあれば、少し進むとキャンプ場のような場所もあるのだ。

これだけ詰め込んで経営とか大丈夫なのかと言われそうだが、結構儲かっているらしい。

「先輩先輩！！これ！これやってみましようよー！！」

士郎と回っていた桜が、ゲームセンターのような場所で一台の機械を指さしてぴよんぴよん跳ねていた。

その機械のタイトルは「占いマツスイ〜ン」という怪しさ爆発のネーミングだった。

が、女子というのは往々にしてこういうのに惹かれがちであり、桜もその例外ではなかった。



「相性判別占い？」

「そうですね！ーやりましょうやりましょう！ー！」

「え？でもあつちのメリーゴーラウンドとか・・・」

「やれ」

「はい」

一瞬桜の足元から黒いカーテンのようなものが見えたので即座に従う。

ヤダ・・・女って怖い

その二人を見てセイバーが面白そうですねと眺めていると、イリヤが話しかけて行った。

「セイバーはいいの？シロウとの相性判断」

「私とシロウの間には信頼という絆が出来上がっていますし、私の鞄アヴァロンを宿しているんですから、相性もばっちりです。いまさらそんな箱にこもって測る必要もないですよ」

「ふん」

「貴女はいいんですか？」

「私だって士郎の姉で妹よ？そんなもん今更……」

「「ねえく？」」

フフン、と鼻を自慢げに鳴らして、無い胸を張るセイバーとイリヤ。  
あ、無いとか言ってますみません。

そのふたりの話を聞いて、桜がグツ、と止まるが、それでも機械に  
コインを入れてデータを打ち込む。

8177

「名前は……」

「「衛宮士郎」と「衛宮桜」」

「なんで!？」「間桐桜」だろ!？」

「生年月日は」

「知ってますよ(ピッピッピッピッ)」



「お

「あ

《二人は良き先輩後輩でいられるでしょう!》

「まあ無難な・・・」

《逆に言えば先輩後輩以上にはなれないでしょう!でも、人生きつといいことあるよ!》

「ダメ出ししてきやがった!?!なんだこれ!?!」

「う、うえーん!」

「そして桜はガチ泣き!?!」

そうして二人が垂れ幕から出てくる。

グズンと涙をふく桜をみて、セイバーは「あんな機械に桜の良さなどわからないんですよ」と慰めていた。

しかし、凜は

「・・・・・・・・プー、クスクス」

吹いた。

それを聞いた瞬間に桜も「うがぁ！」と涙を吹っ切り、機械を指さして凜に叫んだ。

「じゃ、じゃあ姉さんもやってみてくださいよ!」

「えー？私は士郎の師だし？いまさら測る必要もないってゆーか・・・」

「・・・・・・・・あはっ、そーですよね！。姉さんじゃ触った瞬間に爆発させるだけですもんねーwwwwww」

「士郎!..やるわよ!..」

「なんでさー!..!..!..?」

・・・・・・・・ボンッ!



その列の中に、クラウドとティファが並んでいた。

ティファとしてはこうしているのは本当に欠方ぶりなので、クラウドと遊べて楽しいようだが、そのクラウドはというと……

「ん……あそこで直滑降……グワツ、と回って……」

コースターの写真を眺めて予習していた。

何を隠そうこのクラウド、こういうのが苦手だったりするのだ。

戦闘や移動の際ならもつと激しい動きをしたこともある。

だがそれは自分の意志だし、自分でハンドルを握っているから大丈夫なのだ。

ジェットコースターとかでのあの「内臓が浮き上がる感じ」がダメらしい。

だからこうしてコースターがどの順でどうなるのかを頭に入れ、楽しむための予習をしていたのだが……

「室内コースター……だと!？」

そう、二人が並んでいるのは巨大なドームの中を走るジェットコースター、つまりは室内コースターだ。

だからクラウドはそこら辺のパンフレットを見て必死になって予測していた。

これでは最後までどんな行き方をするかわからない。

前にシューティングコースターというゲームはやったことがあるが、おそらくあれ以上だろう……

と、そこで後ろからクイクイ、と服を引っ張られた。

振り返ると、そこにはインデックスがいて、一緒に上条も列に並んでいるではないか。

今まで気づかなかったが、彼らも並んでいたのだ。



「緊張してるの？」

「あ、ああ……ちよつとな……」

「だったらいいこと教えられるかも」

「何!？」

インデックスの言葉に、クラウドがわりとマジな目になって肩を掴む。

はたから見れば危ない人である。

「教えてくれ。コースターの形か？今からこの列を抜け出す方法か？」

「「人」って掌に書いて飲むと落ち着くらしいんだよ」

プラーシーボ効果狙いだっただ。

が、その言葉にクラウドがそれだ!!!という顔をして、猛烈な勢いで掌に「人」と書いては飲みこみ書いては飲みこみを始めたではないか。

しかし時は遅かった。

そうし始めて五分くらいで

「次のお客様はこちらへどうぞ〜」

案内のお姉さんにコースターへと連れられて行った。

しかも一番前。

「……………!?!?」

「やったあ! わくわくするねクラウド!?!」

「そ、そうだなティファ……………」

「このコースター、落下個所が25か所もあるんだって!?!」

「そ、そそそ、そうなのかティファ」

「しかもその内側の角度、90度よりも全部小さいんだって!?!」

「そうなの!?!」

「しかも時速は50を下回らないって……どこに行くのクラウ  
ドッ!!!(ガシッ!)」

「ト、トイレだ!!そうだ!!こんなものに乗ったら大変なことに  
」

「長い列だからって最初に行ったでしょ?」

「う……」

ガコン、ゴンゴンゴンゴン……

「ウオアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
」

「キャー……」

「あああああああッ!!……」

と、ここでクラウドの声が途切れて静かになる。

「クラウド？クラウド……！！！」

白目、泡吹き、ぐったり

彼ほどこの三拍子の合わない男はいまい。

そしてその三拍子が見事にそろっていた。

パシャパシャ

降りた後、ティファに介抱されるその珍しい彼を、上条がケータイで激写していた。

インデックスなんかは木の枝でつついていた。



そこは特に人の並びが激しいところではない。  
しかし、彼にとっては鬼門もいいところだ。

「舜君、幽霊もお化けも大丈夫でしょ!？」

「ああ!墓場でも夜の病院でも行ってやるし、そんなもん出てきたら殴って追い返してやる!!!けどお化け屋敷とかはダメなんだ!!作り物って駄目なんだ!!ビツクリ系はマジで心臓に悪いから!!」

そう、お化け屋敷である。タイトルは「走馬灯への誘い」  
ガチである。

なのはとしては「きゃー!」とか行って蒔風に抱き着こうとでも考えていたのだろうが、当の蒔風の方がガチで怖がっている。  
というか嫌がっている。

が、チャキンと背中からレイジングハートを構えられては蒔風ももう何も言えない。

と、というかこの先の恐怖より、目先の恐怖の方が大きかったらしい。



「うぎゃアアアアアああアアアアア！！？？」

その余裕の儂いことと言ったら。

余裕ぶって近づいた時風の足元からゾンビが飛び出してきて、時風の心臓が跳ね上がった。

そしてズザザザザザ！と後ずさり、なのはもとへと帰っていく。

「いいい、行こう！！こんなのとつとと終わらせるんだ！！」

「「はい」「」

自分の身体をなのはで隠すようにして先に進む時風。

ビクビクする時風になのははとつもなく満足だったが、ここはお化け屋敷、そうおとなしく終わるわけもない。

突如としてバーーン！という大きな音がして扉が閉まり、時風がビククリしてなのはの腕をつかむ。



が、そのあとは幽霊らしいのがユラユラ出てきただけだったので、何とかそれ以上はパニくらない蒔風。

(本当にビククリさせられるのが苦手なんだね……)

その蒔風を見てなのはは少しかわいそうに見えたが、そんな理性は二秒で消し飛ぶこのシチュエーション。

蒔風がしがみついてて、なのはがハアハアしてます。

と、そこでヴィヴィオがコテツ、とこけてしまった。

足元も暗いし、まあそれは珍しくはない。

そのヴィヴィオに蒔風が「大丈夫か？」と手をさし延ばす。

その手を普通にヴィヴィオがとって、よろけながら立ち上がった。

「おいおい、よろけてんぞ大丈夫か？」

「うん……えっと……暗くて見えないの」

「ん？ああ、おばけ屋敷だからな」

「そうじゃないの」



逃げられない

振り返るとそこには「アゝゝゝゝゝ！！」と叫びながら走ってくる  
ヴィヴィオ。

「開けて開けて開けて開けてかけたテサセダシツカラステッ……  
……（カクッ）」

そこで蒔風が静かになって地面に座り込んだ。  
真っ白に燃え尽きていた。

「ヴィヴィオ、そのおもちゃどこにあったの？」

「お化け屋敷の前の売店ー」

と、目から黒い丸のシールを取って、目玉の模型をポケットに押し  
込みながらヴィヴィオがキャツキャと答えた。

なのははというと、その話をしながら蒔風に抱き着き、座り込み、  
撫でまわして堪能してから肩を抱えて一緒には出口へと向かった。



「わーい、舜君って料理出来たんだ！」

「まあカレーだけですけどね！」

バラバラバラ！！

そう言いながらもスパイスをどんどん入れていく時風

カレー、というか辛味に関しては壮絶なこだわりを見せる時風

というか入れる量多くないか？時風

最終的に食べれる人いるのか？時風！！

ポチャン

今何か真っ赤なから揚げが投入された気もするが、大丈夫なのだろうか？



蒔風はというと、その場から逃げだしていた。

だってそりゃそうだろう。

作り終わって「ふう〜」となって、みんなが「いただきま〜す！」  
となって口に頬張った瞬間に

「ガアアアアアアアアアアアあああ！！」とか言いながらのたうち  
まわったのだから。

ちなみに上記の叫びはヴィヴィオのものである。

彼女でこれなのだから、他の者の叫びは断丸魔のものどころではな  
かっただろう。

蒔風は直後にダッシュして逃げた。

「何故か」とかの意識はなく、何となくここにはまずいと思っ  
たのだ。





「ああ………」

「このまま帰らない？………」

「いや、それはさすがに駄目だろう………」

「………」

「………」

………

「………なあ」

「なんだ」

「何か言ったびにや」

「ああ」

「オレの「ってつけると何かエロくねえ?」

.....

「たとえばバスターソード」

「.....俺のバスターソードで.....」

「.....プッ」

「プフッ!」

「オレの十五天帝がお前を貫く!!」

「フハッ!」

「オレのフェンリルが突っ走るぜえ.....」

「タハッ!!」

「ギンガを貫く伝説の刃！」

「ちょ、やめろそれギンガマンWWW」

「しかも具体性ありすぎWWW」

「その妄言をブチ殺す！！」

ゴン、ゴン！！

そんなくだらない会話をしている二人に、上条のゲンコツがお見舞いされた。

どうやらあの激辛から何とかして回復し、二人を探してきてこんな会話を聞いたのだろう。  
まあそりゃ殴りたくなる。

頭から「シュー・・・」と煙を上げ、二人の翼人がぐったりとする。



特になのはは満足したようである。

まあクラウドと時風の疲労感と言つまでもないが。

「やあみなさん！僕の遊園地はどうでしたか？」

そこに一人の少年が現れて、時風に挨拶してきた。  
時風はその少年を知っていた。

「お前……」

「ギルガメツシュ！？」

そこには少年姿のギルガメツシュがいた。

話に聞くと彼はこの遊園地のオーナーで、大抵のアトラクションは彼の考案らしい。

なるほど

彼には「黄金律」という生まれながらの特性があり、絶対に金には困らないということが約束されている。

これだけ無茶な遊園地を経営しても破綻しないというのは、そんな奇跡ともいえる力のうちだからである。

と、そんなギルガメツシュが蒔風やクラウドに意気揚々と自慢してきた。

「いやあ、あのジェットコースターすごいでしょ！あれだけのものを室内のものにしたのは大変でしたよ〜」

「おばけ屋敷もすごかったでしょ！！一緒に行く人にアイテム渡して「驚かせちゃおう！」っていうのは最高だったでしょ？」

「お前が犯人かー！！」

ドリユツ！

その言葉を聞いて、蒔風とクラウドのコークスクリューが小ギルを吹っ飛ばした。



「はい、とある街からなんですけど……」

「どなんだ？」

「それが……受信はしたんですけど、三秒後には切れてしまったんですよ。その後連絡してみても何事もなかったように返事されませんでしたし……」

「じゃあ何もなかったんだろ？間違え警報だろーよ」

「でも気になるっていうか……」

「だったら、あそこに回せばいいーだろ」

「あそこですか？」

「「EARTH」にな。街から音声から、データ全部送っわけ。あそこなら俺たちにわからん何かを掴むかもしれないな」



こうして、また「EARTH」に一つの事件が持ち込まれる。

物語は、始まる。

t o b e c o n t i n u e d

遊・園・地ッ！（後書き）

お待たせしましたみなさん！！

こういうストーリー書いて一話が限界ですね！！ｗｗｗｗ

四話も続くと書くのもきつくなってきて・・・

どうしてこうしてしまったし。

蒔風

「どつやら次回から事件が始まるよつですな」

そうなります。

今回はそのの説明と、調査に向かおうというところになりますね。

蒔風

「次回、俺にとってはひっそりさびさの事件になるー」

ではまた次回

## 小さな始まり

某月某日

蒔風の部屋

「うひえ〜、書類めんどい」

「とか言いながらも午前中に終わらせられる勢いじゃないですか」

いつも通りの風景。

あと三十分で午前も終わろうとするそのころに、自分のデスクに向かって、蒔風が書類仕事をしていた。

なんだか遊びほうけてばかりに見られる「EARTH」だが、これでも様々な世界に顔が効くこともあって、連日さまざまな質問や書

類が送られてきている。

彼がいなくなっている間にかなり数が減ってはいたものの、それでもまだ「多い」というカテゴリーに含まれる量である。

蒔風は特に書類仕事が苦手なわけではない。

そもそもここにあるのは「報告書にまとめる」という物ではなく、「内容を読んで、それに対する返答やサインする」だけなのだから、本人としては読書してるのと同じ感じなのだ。

報告書をまとめるようなのもたまにあるが、三日に一回あればいい方だし、この仕事も嘆くほどの物ではなくなってきた、とは本人の談。

そうしていると書類の山もだんだんと小さくなっていき、ついに最後の一枚にサインをして終了した。

「あ〜、終わった」

「ご苦労様です」

んん！と腕を上には伸ばし、身体を伸ばす時風にアリスがお茶を出す。

と、そこでデスクの上にお茶を置くと、そこにはまだ一枚の書類が置いてあった。

それを怪訝そうに見るアリスだが、その視線に気づいたのか時風がその内容に関して説明する。

「あー、それな？小っちゃい通報があったらしいんだよ」

「小っちゃい通報？」

時風が言うには、というか書類にあるには

時空管理局に、一本の通報があったらしいのだ。

それは三秒しかないような、短いものだったらしい。

なにせオペレーターがそれに出て、どうしましたかと問いかけても何も返答はなく、そのままプツリと切れてしまったらしい。

そんな通報だ、おかしいと思わないわけがない。

連絡先を特定してみると、そこはある街の市役所の電話だった。ゆえにすぐ、折り返しの電話をしたらしい。

が、今度はあっさりと電話に職員だろう男が出て受け答えしたそう  
だ。

そこに二言、三言交わし、結局は間違え電話だったということだ、  
小さな笑い話になるような話なのだが・・・

「その三秒の無言電話な？こんなものが聞こえてきたんだ」

そういつて、時風がコンソールを叩いてその音声を再生する。

《(ピッ)(はい、こちら時空管理局緊急通報センターです》

《・・・・・・・・・・・・・・・・》

《どうしま……(プシン)切れちゃったよ……》

「……えーと？」

「たったこれだけ。だけど、この空白の部分、音声解析してみると……」

《……》

「まだわかりません」

「じゃあ……」

《……》

「？ 今何か……」

「最高にまで上げたものが、これ」



《……わああ……》

「あ」

「ひっじょーに小さいけどね。しかもただ騒いでるだけかもしれないってくらいの声さ」

「まああれだけじゃ……大声出してるところにしか聞こえませんか」

「そ、近くの公園で子供が大声で騒いでるのが運動会でもしてるのか、って声だろ？」

「時空管理局は？どんな見解なんですか？」

「普通に日常生活内の音だと判断したらしいよ？まあ俺もそう思うし」

本当に何でもない音なんだろう、くらいに考える時風がさらに言うには

「あっこさんとしてはもう話を一回つけちゃったのに、また顔は出しにくいんだとさ」とのこと

時空管理局は巨大な組織である。  
巨大であるがゆえに、人々の注目も多い。

こうして一つの小さな事柄でも、言葉を返せばどう叩かれるかわからないほどに。

そうでなくともただでさえ時空管理局は、数年前に上層部の隠蔽なごどが騒がれていたのだから、どんな小さないざござも起こしたくないらしい。

「ま、その点オレら「EARTH」はそんなこともないしね」

「「EARTH」の方が強いという意味では強大なんですけどね・・・」

「言っちゃえば「EARTH」って俺の友達集団だし」

「あー、確かに」

「时空管理局って組織のこともわかってるさ。決してあっちも利用しよつって算段じゃない。こうして助けあつてくのも友達ってもんさ」

三提督のじつちゃんばっちゃんに心労掛けさせたくないしね〜

と、そんなことを言いながら、その街の名前、地図を出す時風。

「と、言つわけでこればかりは現地入りして見に行くしかないのよ」

「じゃあ誰かに頼みますか？」

「いいよ。俺も暇だし、何人が連れていくことにするさ」

「なにかあつたら・・・」

「ないない（笑） 下手すると小旅行で終わっちゃうかもしれないし」

そう言いながら「EARTH」内に残っている人間を探しに行く時風。

本当に適当に済ます気らしい。

ああ心配しながらも、実はアリスもほとんど同意見である。

あの程度の声なら、「EARTH」の中でだって何度も聞いてるし、街ならあってもおかしくない。

むしろあれだけの音声でいちいち動き出す人間の方が奇異だろう。

8219

しかし「EARTH」のみとしては任された懸案だし、そのままほったらかし、適当に済ますのは時風の心情的にすっきりしないから一応見に行く、ということらしい。

「EARTH」という組織は、一般にその存在は認知されているものの、実際のところよく知られていない組織だ。  
一応治安機関、という認識はされているようだが。

我々からしてみれば、政府の組織とかでよく聞く名前やどんなことをしているかはほんやりと分かっているが、その内容を本当に知っているかと言えばそうではない、という感覚だ。  
時空管理局のように「時空世界の警察」みたいなわかりやすい実例がないのだ。

だから結構自由に動けるし、当の本人も言ってるように実際には「時風舜の友達集団」といってもおかしくない。

世界の管理者支援の組織とは、危ういようなバランスの上に成り立っているのだ。

.....

「んじゃ、行ってくるな」

「はい、気を付けてくださいね」

翌日、「EARTH」の門の前で、時風が数人を連れてその街に向かう車に乗り込んでいた。

メンバーはまず時風

後はその時「EARTH」ビル内にいて、都合のついた数名だ。

矢車想、影山瞬、エリオ・モンディアル、キャロル・ルシエと小  
竜フリード

その五人と一匹で街に向かうらしい。

8221

「兄貴から誘いがあったときはうれしかったぜ……」

「大兄貴、俺たちに任せてくれ……」

「えっと……宜しくお願いしますね、舜さん!!」

「おねがいしまーす」

「キュツクル〜」

いつも通りの服装の矢車と影山

蒔風と一緒にに行けるのがうれしいらしいエリオと、エリオに付き添いのキャラ。

その肩ら辺にはフリードがパタパタと飛んで、白い羽が二枚ほど落ちた。

なんだか蒔風寄りの人間っぽいのは気のせいである。

まあ食堂に入った瞬間に地獄兄弟の二人は蒔風が何かあると気づき話しかけてきたし、それに気づいてエリオもキャラと一緒に飛びついてきた。

なんだかねで蒔風はおにーさんだった。

約二名は明らかに蒔風より年上だが

「気にするな……あくまで魂の問題さ……」

らじこです

街まではかなりある。

車を三人で交代して運転し、目的地に向かう一同。

今は、そこがどんな場所かという楽しみしか、胸になかった。

疑惑など、一欠片もありはしない。



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 小さな始まり（後書き）

少し短い気もしますが、大丈夫でしょうか？

こういう説明文っぽいのかいてるのたのしいWWW  
なぜだろう、ギャグ回よりも筆（？）が進む進む

と、言うわけで小さなきっかけからの始まりでした。

まああんな音で動く奴なんていませんよ、ホント

「EARTH」、よっぽど暇なのかWWW

やべえすごく「EARTH」で働きたい！！

その分、一回でメチャクチャ疲れそうだけど・・・

エリオ君とキャラは蒔風のこと結構慕ってますからね  
こういう機会が全然なかったからうれしいでしょう。

蒔風

「まあこれから行くわけだが……なぜ羽根がある？」

え？フリードのこと？

蒔風

「そう」

そんなことは知ってる  
いまさら何を言ってるのだお前は

蒔風

「コイツ……」

と、言うわけであれば敢えてでくす！  
どういうわけかは、まあ多分あっさりわかるかと。

蒔風

「次回、街に到着」

ではまた次回



## 街日和

「いっまゝひとりひとりのむっねっのっなっか」

そんな歌を小声で歌いながら、時風が車を走らせる。  
車はワゴンタイプ、中は結構広い。

助手席には矢車が座っており、後部座席に右からキャロ、エリオ、影山の三人が座り、一番後ろの座席でフリードが羽を休めて寝ている、と言う感じだ。

これから向かう町は、一つの道に店が集まり、そのまま大きくなっただよな町である。

一つの荒野を走る街道に、一つの店が立ち、その後、その後と立ち並んでいき、やがて膨れて行って街になったらしい。

今ではもうそんなことも気にならないくらいの街になっており、立派なものになっている。

ここ数十年でさらに発展したようで、ここら周辺では真っ先に拳がる街だそうだ。

「そんな街で何かあればすぐに……なあ？」

「ああ、そんなところで大きな事件があれば俺たちじゃなくても警察が気付く」

「こりゃ完璧に小旅行になったかまあ……」

軽く苦笑しながら、時風が矢車と話しながら車を走らせる。

「エリオ、お前背え伸びたな？」

「最近じゃ買った服がすぐに着れなくなって大変で……」

「エリオ君は私の成長養分を全部吸い取ってるんですよ」

「納得」

「そんなことないですってば！」



- - - - -

キイツ

車のタイヤが地面を少しだけ擦り、街の入り口で停車する。

聞いていた通り大きな街だ。

と言っても大きなビルなどがあるわけではなく、どれか一つの屋上にでも立てば街の端がぼんやり見えるくらいの高さしかない。

本当に店が集まり、そこに住む人の家が集まり、といった街なのだ。

一つの大きな、それでいてやはり同じような高さの建物。

それはある機関の研究施設らしく、そこが入ってきてからこの街はさらにここまで大きくなっただけらしい。

そしてその街の周囲には等間隔　　大体十メートルずつ　　に、  
標識のポールくらいの鉄棒が立てられ、ぐるりとまわりと囲って  
いて、その上がリング状の同じような鉄棒で繋がっていた。



「なんだろうな、これ」

「さあ……」

柵にしては間隔があきすぎだし、造形物としては訳が分からない。  
まあ、芸術アートだというならわからなくはないが……

「あれ？外の人ですか？」

と、そこに一人の少女……というには少し年を取った感じだが、女性というほど年も取っていない、そんなくらいの女性が話しかけてきた。

まあ、気にはなるだろう。

街に入らず車を止め、街を囲むそのポールをしげしげと眺めている  
一団なんてものは。

こんな街だから外から来る人はそうそう珍しくないのだろうか、結構あっさりと話しかけてきたその少女に、蒔風がフランクに話しかけて行った。

「ああ・・・そそ、外の人。こんなところに町があるって聞いてさ、友達と一緒に遊びに来たんだ・・・っと、こんなところってのは失礼だったね」

「いえいえ、まあ確かにそうですね」

蒔風の言葉にもカラカラと笑って受け答える少女。

少だけ親しくなってから、蒔風がポールに手を当てて彼女に聞く。

「これ、なんなの？」

「これですか？昔この街ができた時、この辺には大きな鳥・・・まあ怪鳥ですね、がいたらしいんです。で、それ対策に上から頑丈なネットを垂らして、街全体を覆っちゃったらしいですよ」

「は~~~~、つまり大きな蚊帳<sup>かや</sup>、ってことか」

「そうなりますね。まあ使ってたのは昔らしいですし、私が生まれる前にもう来なくなったらしいですね。そのおかげでここまで街も大きくなりましたし」

そんな話をした後、蒔風がこの街にホテルやらなんやらはないか



「じゃあ俺はこっちの方を見てくる」

「俺もだ・・・少し気になるところがあつてな・・・」

そう言葉を交わし、二人が別々の方向へと走り出す。

それを見届けてから、蒔風は自分のバイクにサイドカーを取り付けてそこにキヤロが座れるように準備しておく。

「ふんふん」

「あっちの方でパレードやってるみたいですよ？」

「おっ、そりゃあ運がいいな。見ていこっか？」

「はい！」

.....

「これは・・・すごい人だなあ・・・」

「キャラ、俺かエリオにすっかりつかまっとけよ?」

「ふ、ふええ……」

そこは確かにすごい人ばかりだった。

大きな広場の真ん中で、大道芸人が五人くらい、互いに背を向けながらそれぞれの技を披露していた。

更にその広場の周囲では出店もあって、珍しい外の人だからと言って三人は実にいろいろなものをごちそうしてもらっている。

「いやいやダメだって。お金払いますって!」

「そうですよ!こんなたくさんもらっちゃっても……」

「がはは!!大丈夫だ!みんな一個ずつしか出してねえんだ。それぞれの出費はそんなデカかねえわな!!」

それでもお金を払おうとする時風やエリオだが、お好み焼き屋台の

おっちゃんはそう豪快に笑って受け取ってくれない。

キャラなんかは差し出されるお菓子を断れず、ドンドンもらってしまっている。

さっきついに一つ目に口を付けたばかりだ。

はぁ・・・と溜め息をつき、エリオと蒔風がキャラのお菓子をいくつか持ち、フリードにはリングォ飴をあげた。

「皆も呼べばよかったですね。こんな楽しい街」

「いやぁ、それはそれで迷惑になりそうだが・・・」

ドンチャンとさらにやかましく音を鳴らす太鼓、上がるテンション。

結局蒔風たちは全く出費することなく、その日は満腹になってしまった。

.....  
.....  
.....

「そっちはどうだ？」

『兄貴、やっぱり街をすっぱり囲んでるね』

「ああ、話してもらった通りだな」

そのころ、矢車はバイクで街の周りをぐるりと、ポール沿いにバイクで回っていた。

かなり大きい。

決してゆっくり走ってるわけではないが、かれこれ三時間走っても反対から来た影山の姿も見えないのだから。

と、そこで矢車が一人の少女を見かけた。  
この街に来て最初に会った、あの少女だ。

バイクの音にあっちも気づいたようで、矢車もバイクを止める。

「あ、また会いましたね」

「大きな街だな・・・中心街が騒がしいようだ・・・」

「あ、お祭りですね。今日はみんなでワイワイと騒ぐ日なんですよ」

「そうか・・・俺も笑ってもらおうとするかな・・・」

「え？」

「・・・いや、なんでもない。いったい何の祭りなんだ？」

「いやあ、そういう伝統とか興味ないまま育っちゃったんで、はっきりと覚えてないんですよ、たはは・・・」

少し申し訳なさそうに頭の後ろに片手を当てて笑う少女。

そうか、と矢車の方も返答し、街の中心に向かうことにした。

多分時風はそこにいるんだろうし。

.....



.....  
矢車も矢車から町の中心に行くと言いついて、一足先にその会場についていた。

が、三人の乗っていたサイドカーのバイクは見つけたものの本人たちが見当たらない。

おそらくこの人ごみの中にいるのだろうが、変身でもしない限り見つかからないだろう。

そして、そんなことのためにいちいちするつもりもない。

「待つ……か……ま、俺にはこんなのがお似合いさ……」

「兄ちゃん！どうだい!!」

と、そういつてサイドカーの隣にバイクを止め、寄りかかって三人が来るのを待つ影山に、屋台のおっちゃんが話しかけてきた。

その手には屋台で売ってるモノだろう、お好み焼きを持ち、影山に差し出してきた。

影山としてもバイクを走らせてきたため（バイクの運転は実は結構体力を消耗するのだ）、腹も減っていたからちようどいいと財布を取り出す影山。

しかし、屋台のおっちゃんはいいいって受け取るうとしない。

蒔風たちと同じように、外から来た人だかららしい。

そのおっちゃんのやり取りをみて、ほかの屋台の人たちも渡してくる。

当然、影山はそれに困ってしまい、どうあっても払おうとするのだが・・・

「がはは！！大丈夫だ！みんな一個ずつしか出してねえんだ。それぞれの出費はそんなデカかねえわな！！」

そう言って笑うおっちゃん。

そこまで言われてしまっては受け取るほかない

受け取ったものが多いので、少し離れた場所にあるベンチに座って食べ始める影山。

食いきれるかと、少し心配になってきた。



途中で影山も拾ったようで、お腹いっぱい動けない彼を担いでいた。

「お前ももらったのか」

「ああ……この住人は眩しいぜ……」

「でも……」

「こんなに食べねえ……」

とりあえず晩飯代は浮いた。

そう考え、五人と一匹はホテルへと戻って行く。

その後、矢車、影山、蒔風の三人は、この街に対する印象について話し合っていた。

特に何も無い。

皆平和に、楽しそうに暮らしている。

一応町役場にも行ったらしいのだがなんてこともないし、あの電話の声はこういった祭りの準備をしていた時の掛け声なんかだったのだろう。

そういう結論に終わった。

「じゃあ明日チェックアウトして、帰るか」

「だな」

「ああ」

そう言い合って、就寝する三人。

こうして、夜の闇が訪れる。

この街は、何かがおかしい

t o b e c o n t i n u e d

街日和（後書き）

街の様子はいたって普通だあ——！！！！  
街日和でございまっす！！

読者視点から見ると、何やらおかしな点がいくつかあるかも？

ぬふふ

矢車

「今オレを笑ったなあ？」

げえっ！？矢車さん！？

・・・ライダーキック中・・・

今回、イメージして書いたのは「キノの旅」です。

「キノ」って変換しようとしたら「鬼の」って出てきた・・・  
なにこれ怖い。

楽しそうな街ですが、一体何があるのかは次回から!!

一気にこの理想の街が崩れていく・・・

では、また次回をお楽しみに!



## 街・捕縛

夜

蒔風たちも寝静まっている頃

そんな時間に、その部屋で動く影があった。

当然矢車たちではない。

その影は淡々と、そして音もなく蒔風の荷物などを運び出していた。

と、その気配に気づいたのか蒔風が薄目を開けてその影をぼんやりとみるが、寝ている途中だということ、再び眠りについてしまった。



『へえ』

『死ぬのが怖いと思えば思うほど心臓は高鳴り、そのままショック死だ。殺人とはだれも思わないってことさ』

そんな会話と一緒に、一人の男が時風の腕を取って注射をする。

そして注射針を抜き、檻を出ようとする男。

しかし

「おオイ・・・・・・・・テメエ人が寝てるどこに何してくれてんじゃコラア」

この男は知らなかった。

寝起きの時風は、特に無理やり起こされたようなときは、とても気分が最悪だということを。

「え？おグっ!？」

その男の後頭部にハンマーのように拳を叩きつけ、地面に倒れたところを蹴り飛ばす。

カシャン、という音と共に檻が閉まるが、特に気にすることもなく男を行動不能にして檻の中の、申し訳なさそうに置かれていたシーツで縛り上げた。

そこまでやって、蒔風の意識も眠気から抜け出していく。

地下牢、石の壁、怪しい研究職の男

「おいおい・・・マジかよ・・・」

檻の外を見てみると、そこには一つだけモニターがあつて、そこがチカチカと光っていた。

もう一人くらい人の声が聞こえたのは、どうやらそれによる通信の



おもいつきり蹴ってみるが、ビーン！というだけで折れもしない。

はてな？と思う時風だが「何か特殊な金属でできているのか」とでも考え、今度は壁に向かった。

横の壁の材質は普通に岩だ。

まあその中に鉄板でも仕込まれていたら少し大変そうだが……

「ラアツっ！！」

ゴンッッ！

そこを思い切り殴り、そんな重い音がした。

無論、壁は崩れていない。

かわりに、時風の方が痛みに拳を押さえていた。

「ノオオオオオオオオオオ………いつてえ………なんだこれ、ただの岩じゃないのか？」

手をプラプラさせて、時風が壁に手をやるが、特に何かを混ぜてあ

るようには見えない。  
ただの岩だ。

「ただの岩・・・？なんでこんな程度崩せないん・・・？」

と、そこで時風が、なんで気づかなかったのだろうか、自分の手首につけられている白いブレスレットのようなものに気付いた。

そして、それは・・・

「力が抑え込まれている？」

彼の翼人の力を抑え込んでいた。

ために開翼でもしてみようとするもの、一気に力が変な方向に流れて発散されてしまいできない。

「開翼できない！？なんだよこれ・・・これじゃあ・・・」

翼人の力がなければ、彼はただの“N o n a m e”の人間と変わらない。

こうして岩も崩せなければ、一撃で研究員をのすこともできないのだ。

そういやコイツ気絶させんのにも手間取ったしなあ……とそんなことを考えながら、蒔風がどうしたもんかと腰に手を当てる。

そうして三十秒、蒔風が思い出したようにパツ、と手を振った。するとその腰、背中、脇、腕に、彼の専用剣たる十五天帝が現れてきた。

翼人の力と剣の力は別物、ということをごくにきて思い出したのだ。

しかし

「重ッ！」



獅子天麟を振り上げようとして、蒔風が「よっこいしょ」という感じになる。

とても戦闘に使用できるとは思えない。

そう。

剣は所有、使用できても、扱いきれるかは別だった。

しかし、それだけでも十分だろう。

「せいりゅ〜」

「は」

蒔風には使役獣がいる。

そのうちの一体、青龍を呼び出し、青龍刀で手首のブレスレットを斬ってもらう。

カラン、という軽い音を立てて、それが落ちた。

「……翼人の力を……抑え込むとは……こいつら……  
・何者なのでしょう……?」

青龍の言葉を聞きながら、手首をグニグニと揉み、準備体操のようなものをしてから檻をこじ開ける時風。  
が、その返答はしない。というかできない。

「わからないな。翼人の存在自体はもうかなりの人間に知られているが、その実態を知っているのは限られている」

そう、知っているだけではだめだ。  
識っている必要があるのだ。

翼人の力を理解していなければ、こんな封じ込めるようなモノなど作れるはずがない。

「とにかく、今はほかの奴らと合流しないとな」

そういつて、時風が机の上のレポートを見る。

そういえば注射されていたな、と思い出すが、その効力を見て鼻で笑う。

なんとなくいやな感じはしていたが、なるほど、そうか。

「死の恐怖、ね。そんなもんじゃ、俺は死なんよ」

バサアツ！とそのレポートを投げ捨て、その場を後にする時風。

「ま、そこで死ねた方がまともだったんだろうがな」

.....

ゴン！ゴン！！ゴンッ！！バアン！！！！

幾度か扉を殴り、ようやっと地上に出る時風。

どうやら街の端の方にある家の地下にいたようだ。

その屋根の上に立ち、周囲を見渡す蒔風。

普通に夜の街だ。

しかし、明かりが一つもついていないのはどういつことだろうか？

ウン！！！

「！？」

と、その瞬間に蒔風の背後の方で何かが起動した音がした。

振り返ると、街の周囲を囲うポールの間を、何やらエネルギーのよ  
うな幕が覆っていつている。

それは一番上をつなぐリングから出てきていて、上にまで張られて  
おり、街全体をすっぽりと覆ってしまったのだ。

その直後、蒔風の身体から少しばかり力が抜ける。

少し不愉快な顔をする蒔風だが、今はなんとなくわかった。



「うぐっ!?!」

「ゴエツ!?!」

「ハアぁ…………どうせ俺なんか…………」

同じ頃

蒔風が捕まっていた場所と対して違いはない地下牢。

そこで矢車が、普通に研究員をのしていた。

ただえさえ強靱な矢車の肉体に、ライダーベルトを付けているのだ。  
それはもう簡単だろう。

そのまま地上に出て、張られたバリアを見る矢車。

「さて…………行くか…………」

そういつて、どきともなく走り出す。



「引き払った……?」

なんのことを言ってるのかはよくわからないが、とにかくにもピ  
ンチであることは変わらない。

デバイスは離れた机の上におかれている。

呼び出して起動させるには離れすぎている。

「さて……じゃあまず竜じゅうりゅうの方から調べるかな」

そういつて注射器を持ち、フリードに向かって歩いていく研究員。

その姿にフリードは鳴き、キャラロが悲鳴に似た叫び声をあげた。

「や、やめて!?!?!フリードに何もしないで!?!」

「いやいやそうもいかないよ。仮に君から始めるとして、失敗した  
らどうするんだい? 竜召喚士きみという験体は一体しかいないんだ。そ  
れに比べ、数は少ないものの竜だったら何匹かうちにもいるしね」

キャラロの言葉にも、なんてこと無いようにサラリと答える研究員。

ケリュケイオンがなければフリードを巨大化させられないし、仮に



させてもデバイスもない状態では傷つけてしまう。  
それにフリードよりも、取り付けられているロックの方が強かったら、  
千切れるのはフリードの翼だ。

研究員が、フリードに近づく。

その注射の先端から怪しげな液体が滴り、それが肉体に侵入しよう  
とした。

瞬間

『愛おしい女兒がやめると言っているのだ。止めぬとはとんだ無礼  
者だな』

「え？ワブツ!？」

フリードの目が真っ白に染まり、そんな声が聞こえてきた。

直後、フリードのむき出しになっている腹部あたりから真っ白な羽  
根が噴き出してきて、研究員を壁まで吹き飛ばしていった。

「え？フリード！？」

驚くキャラだが、そのフリードの身体から光が飛び出して実体化する。

その光が羽をまき散らし、実体化。スタンと足音を立てて着地した。

「降臨！・・・満を持して」

出てきたのはイマジン・ジーク

どうやら時風にこっさりついてきたらしいのだが、人ではばれると  
いうことでフリードに憑りついてきたらしい。

「大丈夫か？安心するがいい。私が来たからには、そなたの安全は  
確定した」

高慢、かつ自信にあふれ、そして少し上から目線でそういつてくる  
ジークが、壁際のボタンをいじって錠をはがす。

キャラとフリードが解放され、ジークとともにその場から脱出して  
いった。

「みんなどこに・・・」

「探す必要はない」

ケリユケイオンでサーチしようとするキャラだが、ジークがそういつて制する。

何か考えがあるのか。そう思ったキャラが、ジークの案を聞こうと耳を傾けた。

「私が動くのではない。世界の方が、私を中心に回っているのだ。だから大丈夫だぞ！」

「ケリユケイオン、サーチ」

《OK》

そのジークをサラリとスルーし、再び検索を頼むキャラ。

ガン！と少しショックに打たれたジークだが、はっはっは！やんちゃだな、とか言って気を持ち直している。

まあ本人がそれでいいならいいのだろうが。

彼らが動き出す。

脱出もままならぬ、この街で

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

街・捕縛（後書き）

とりあえず捕まって、逃げ出したよ！！

蒔風は弱体化、ほかはそうでもないです。

エリオと影山？

あっちはまた捕まりっぱなしです！！

蒔風も十五天帝がなきゃ脱出できませんでしたし、キャラはジークがいなきゃ実験されてましたしね。

矢車さんは説明いらず。

あの人だったら簡単に脱出できそうwwww

そしてジーク登場

フリードから散ってた羽根はそういうことでした！

本当に意味で蒔風フルメンバーですねwwww  
見事に野郎しかいねえなwwww

あ、キャラがいるか。

さて、次回は街、奔走！！  
二人も助けないといけないし、こりゃ大変だ！！

ではまた次回

脱出！合流！！爆発！！！！

駆ける、跳ねる、奔る

蒔風舜が、街の屋根を飛ぶように移動する。

向かうは中心部。

(用紙にあつた地下牢のある場所は街の五か所……)

すなわち、線で繋げば円形の街の中に、きれいな四角形ができる場所、そしてその中心。

(どこにだれがいるかは分からないが……騒ぎも起こせば脱出できるだろう)

と、そこで自分のいた牢からかつぱらった拳骨ほどの大きさをした、黒い塊を取り出してピンを引き抜く蒔風。  
中身は爆薬と鉄片。いわゆる「手榴弾」と呼ばれる代物だ。





絶対に何か目立つことをするはずだ。

ドドンッ！！ドババババババンッッ！！！

そう考えていると案の定、爆音と煙、炎が遠くから聞こえ、はつきりわかる目印を出してきた。

「あそこか」

そう小さくつぶやき、矢車が駆ける。

.....

さて、ここで現在の各人の位置を表して見よう。

左下の隅にある地下牢から脱した時風は中心部に向かう途中で、その道中には手榴弾による爆発がある。

矢車は左上にある地下牢にいて、そこから爆発地に向かってまっすぐ進む。

キャロとジークは右上から脱出し、時風と同じように中心部へと走っていた。

「爆音!?!」

「ふむ……おそらくは我が友によるものだな。派手にやっっているようだ」

そのキャロの耳にも、小さくはあるが爆音が聞こえてきた。

と、そこで町中の明かりが灯る。

今までは街の外壁が<sup>バリ</sup>がうっすらと光っていただけだったのが、一気に明るくなった。

「おお?」

「これは……!!ジークさん!!敵が来ます!!」

「うむ」

その光景にジークは興味ありげに感心するだけだが、キャロのケリユケイオンが敵影を感知、臨戦態勢に入ろうとする。

その直後、走り抜けた後方の家という家から人が飛び出してきて、手に握った銃を構えて一斉に放ってきた。

銃の形は両手で構え、脇で挟むように固定するほどの大きさのものだ。

地方のお土産屋さんで売られている簡単な玩具にも見えなくない、チャチな外見はしていたものの、この状況で玩具だと思うバカはいないだろう。

《Protection!》

ギャゴオオオオオオツツ!!

とっさの判断でケリユケイオンがドーム状のバリアを張り、その攻撃を弾く。

そのレーザーがバリアに当たって削るように後方へと飛んでいく音からして、その威力を推し量るキャロ。

飛び出してきたのは弾丸ではなく、単発のレーザーだ。

その大半はドームの形によって後方へと逸らされていくが、一、三発はどうしても直撃する。

そして、その銃の威力は……

「そんな……たったこれだけで!!」

ただ二、三発当たっただけで、すでにキャロのバリアに穴を開け、破壊し、すでにドームは前方の壁になってしまっていた。

「むう……おいその小竜」

「きゅ!?!」

「女兒を連れ、飛ぶがよい」

「……きゅくつ!!!!」

銃の威力に少し考えたジークが、フリードに話しかけて指示を出す。それに一瞬だけ考え込むフリードだが、今は主が危険にさらされている場。そんな暇はなく、即決した。

「行け!! 召喚士!!」

「え？きやあ！！！！」

「きゅむー！！」

そして、ジークがキャロを放り上げた。

そのキャロを巨大化したフリードが啜えながら上昇していく。

「我が友の場へと行くがよい！！私は後を追う！！」

そうジークが叫ぶのを聞き、フリードがその両眼で街の反対側を見る。

そこには肉眼では小さな点で、巨竜となったフリードの目でははっきりと、屋根の上を走る蒔風の姿が見えた。

ドゥツ！！という風の音をまき散らし、フリードが一気にその方向へと飛んで行った。

ジークはそれを、無数のレーザーを自身から放つ無数の羽根で逸らしながら見た。

そっちか、とでもいいそうに顔を見上げて、走り出す。



曲がり角の先にザザッ！！と勢いよく飛び込む矢車。

そこにいたのは

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ああクソ、どうせ俺なんか・・・・・・・・」

無言でこちらを見る、ひとりの男とその護衛か何かの十人くらいの人間だった。

当然だろう。

あれだけの爆発で敵が何事かと思わないはずがない。

情報の確実性を求めるためにこうして直接見に来たのだろう。

そして、矢車はそこに飛び込んで行ってしまったのだ。

護衛らしき十人の腰には日本刀がぶら下げられており、呆れたような眼をした男が顎を向けるとその住人が一斉に刀を抜き放って突っ込んできた。

「ハアあ……」

と、その十人の内三人ほどに、小さな手のひらに乗るほどの緑の塊がぶつかった。

それは地面を撥ねて矢車の手に収まり、馳せ参じる。

「変身」

《Change! KICK HOPPER!!》

そしてベルトの台座にスライドインし、起動音と共にその体に装甲がまとわりつく。

ここでついに仮面ライダーキックホッパーへと変身した矢車が、七人&遅れてくる三人と交戦する。

最初の七人の内二人が同時に、刀を振りかぶり

「ッ!?!」







時風に向かって飛ぶフリードは、すでに合流できる勢いである。

見た感じは残り二百メートル。  
その距離で、時風がキャロに向かって叫んだ。

「どっから!？」

「こっちからです!!」

時風の質問に、キャロが真後ろを指さして自分が出てきた場所を示す。  
キャロの声は風の音で聞こえないが、どこを指さしているのかわかった。

それでは、脱出できていない場所は二か所、ということだ。

中心は誰もいないし、さっきの太刀音は戦闘によるものだろう。  
自分は遭遇しなかったから、おそらく左上から来た誰か。

と、なると後はこの中心と右下の施設。

中心はともかくとして、右下は面倒だ。

だから

「フリード！！ブラストレイ！！」

「ガオオオオオオオオオオオオ！！！！」

その方向を指でさして、フリードに号令をかける。

フリードは方向を変え、ドリフトのようにブレーキを掛けながらその方向を見た。

そして、口を開いてその手前に火球をためていき発射準備が整う。

そのフリードの鼻面の上に飛び乗り、時風が獄炎を混ぜて「発射あ！！」と叫びそれを打ち出した。

自分ではうまくできなくても、こつして力を付加する程度ならできる。

その火球は遠くへと飛んでいき、施設のあるであろう場所を炎に包んで吹き飛ばした。

「よしっ!」

「よし!じゃないですよ!?!」

荒っぽいやり方に驚くキャロだが、まああつちはあれでどうにかなるだろう。

と、そこで蒔風がジークを見つけた。

後ろから銃を持った人間に追われ、そのままこっちにくるようだ。

なんているんだろ、と思った彼だが、見方がいるなら心強い。

「ジーク!」

「おお!友よ!」

「使え!」

そういつて、蒔風が中心部の地下牢があるう建物の上に飛びおっりながら、ちょうど真下を通るジークに向かって何かを投げた。

それは「」のマークの入った、蒔風の持つライダーパスだ。

それを見てジークはフリーエナジーを以ってデンオウベルトを出し、腰に巻きつけそれをキャッチした。

《W i n g f o a m》《f u l l c h a r g e》

「ハアッ!」

変身とフルチャージを同時にこなし、タンツ、と跳ねて逆さまになりながら後方の人間に向かってハンドアックスとブーメランにしたデンガツシャーを投げ放った。

無論、狙うのは銃器のみ。

追ってくる全員のそれを見事破壊し、ジークがそのまま走り去る。

《ジーク!なんているのかは後で聞く。そっから向こうにある倒壊地域見えるか!?》

ジークの頭に、蒔風からの念話が飛んできたのだ。  
蒔風の言う場所は、彼が手榴弾を置き、そして矢車がいるであろう場所だ。

《見えるぞ》

《そっち行ってくれ！誰かいるはずだから！！》

《友の頼みならしょうがないな。では》

いくらなんでもそこまで空気の読めないジークではないらしい。  
蒔風の言葉に軽く首肯して、そのままその地へと向かっていく。

一方蒔風はというと、フリードから飛び降りながらジークにライダーパスを投げ、屋根に着地すると同時に獅子天麟を叩きつけて突っ込んでいた。  
屋根だけでなく、床までぶち抜き、影山のある地下牢にまで突っ込む。

そついう強引な突っ込み方だったため、地下の床に着地するころにはそこを見張っていた人間は見事に気絶して地面に倒れていた。

「影山！！いるか！！」

「舜さん！！」

影山の名を呼び時風に、同じく降りてきたキャロが声をかけた。

見つけたのか、と時風がよると、そこには驚くべき光景が……

「ね……」

「寝てる」

「zzzz……」

「……はぁ……」

この騒ぎの中、見事に寝ている影山だった。

その姿にキャロと時風が同時にため息をつき、時風なんかはつきながら膝を落とした。



「げ、元気出してくださいよ！無事だったんですし！ね？」

そういつて元気づけてくれるキャラ。

うん、なんか元気です。というか癒される。

と、そこに

「もう食えないよ兄貴……」

そんな寝言が聞こえ

「（イラッ）起きろやゴラァー！！（ゲシッ！！）」

蒔風の蹴りがぶち込まれた。

.....

そのころ、右下の地下牢。

訂正。地下牢「だった」場所。

その瓦礫から「ボコリ」と人の腕が突き出してきた。

それは白いバリアジャケットを纏った少年のもので、ついに全身があらわになった。

「はあ．．．はあ．．．ス、スバルさんからこういう時の対処法を聞いてなかったらヤバかった．．．」

その手にはストラダが握られており、今にもブースターから炎が吹き出しそうである。

わかってる。

あの炎はフリードのブラストレイに蒔風の獄炎が練り込まれたものだろうということは解ってる。

わかってるさ。

そしてこれは僕を救い出すための方法だったね。

ああ、大丈夫。僕は冷静さ。だから

「一発殴ってもいいよね（にじり）」

その笑み、シヨタ好きのおねーさんなら一発で墜ちたであろう。

しかし、実際に見ると怖いこと怖いこと……

エリオがストラダにつかまって飛ぶ。

フリードの姿は見えている。

その後を、家から飛び出してきた人たちが追う。

皆、あの銃を持っており、機械のように走っていく。

全員の脱出が終了した。

しかし、街から出られるという事にはならない。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

脱出！合流！！爆発！！！！（後書き）

全員脱出完了！

エリオ？リア充は爆発するものでしょ？ｗｗｗｗｗｗ

ちなみにエリオには悪意はありません。

心境としては「あっはっは、あの人はしょうがないなあ」（黒）  
といった感じです。

銃の威力としては一発で《FINAL ATTACK RIDE

DE DE DE DE END！！》くらいですね。

途方もないなあ。

そして、ここの住人達もついに参戦してきましたね。

一体どういうことなのでしょうねー？

さて、そんなことよりみなさん。

来週のゴーカイジャーにあの五星戦隊ダイレンジャーが出てきます  
よー！！！！！！

しかもゴーマさんチャンズの中の人まででるっばいし!!

これは燃えるしかないんだアツ!!!!

フォーゼは早くも新フォーム!!

オーズはいろいろ出し惜しみすぎて後半がトントントンといった感があるので、これはいいことです。

40もスイッチあることですね。

次回、敵兵の危険武器

ではまた次回

## 最悪武器の威力

おそらくは、この街の住人だ。  
何人かの顔に見覚えがある。

いま仮面ライダーキックホッパーが相手をしているのは、刀を持ったそんな人たちだ。

攻撃を避けるのはたやすい。

一人一人の動きはどうあがいたって素人の域を出はしないのだから。本当にそこら辺の街の人に「はい」と言って刀を持たせて戦わせているものなのだ。

しかしその割には攻撃に迷いはなく、さらには殺気もありはしないのだ。

だが、それでもキックホッパーは攻めあぐねていた。  
彼は徒手空拳で戦うライダーだが、だからといって武器を持った相手に後れを取るはずもないし、この装甲なら腕で受けてもさしたる問題はない。

しかし、彼は見てしまった。  
この武器の恐ろしい威力を。

《full charge》

そこに電王が到着する。

フルチャージをため込み、手に持つ武器を投げ放って相手を後退させてキックホッパーの隣に立った。

「大丈夫か？」

「ち……お前は眩しいよなあ……」

「？」

そんないいタイミングで応援に来た彼にそんなことを言うキックホッパーだが、内心感謝していた。

正直彼らを相手にするには自分一人じゃ分が悪い。

なんでジークがいるんだと気にはなるが、ほかのみんな同様に気にしている暇はない。



「いいか、武器には触れるな。回避しろ」

「？ どういう…」

「わかったか！！来るぞ！！」

そう叫んで、キックホッパーが電王を突き飛ばして地面を転がる。その位置を一人の刀が振り下ろされ、さらに二人、三人と斬りかかってくる。

電王の方にも攻撃は仕掛けられ、忠告通りに回避しているものすぐに家の壁に追い込まれてしまった。

それに対し、しかたなしと電王がハンドアックスとブーメランを十字に構え、真っ向から受け止めようとした。

しかし

「受けるな！！」

《rider jump!》

それを見て、キックホッパーがライダージャンプを発動させ、地面と水平に飛んで電王を突き飛ばした。

パンチホッパーにつかまれ、一緒に地面を転がる電王。そして、その光景を見た。

刀が、普通に振られた。

いや、普通というのはおかしいか。普通ではなかったのだ。

あの位置から振るえば、まず確実に家の壁に当たる。

そのまま振りぬこうとも何をしようとも、必ず一瞬くらいは減速するだろうし、そもそもあの素人集団に家の壁を斬りぬくだけの技量も何もあるわけがない。

しかし、彼はそれを振りぬいた。

ヌルリ、と壁に刀が入り、そのままスラッ！と振りぬいたのだ。

豆腐を切るよう、なんて比喻どころではない。

素振り、空振りしたみたい、何一つ抵抗なく切られたのだ。

そこで電王は気づいた。

デンガツシャーが切られている。

ブーメランのくの字の先がバツサリと。

感じなかった。

斬られれば必ずそこに重みを感じるはず。そうでなくてはおかしい。

だというのに、目で見るまで気づかなかったのだ。

ゾツとする切れ味。

斬るといふ感覚もなしに

斬られたという実感もなしに

持ち主の技量など丸つきり無視して、最強の斬撃を放つ刀。

「わかったか？あれを受けられるのは兄貴の十五天帝だけだ！」

「おのれ・・・この私に刃を向けるなど・・・!!！」

「兄貴の場所を教えろ！！俺たちじゃ相手にできないんだよ！！」

そう言いながらもすでに数人くらいは昏倒に成功しているあたり、さすがは仮面ライダーだということだが、相手も学習しているのかこれ以上は無理そうだ。どうしても攻撃を受けなければ、こちらが攻撃に移れなくなっている。

ギヤーギヤー言いながらそれでも向かっていくとする電王の後ろ襟掴んで、彼の来た方向へと真っ直ぐ走り出すキックホッパー。

後ろから集団が追ってくる。

.....

一方蒔風達は銃撃部隊を相手にしていた。

さつきキャラが相手にしたのと同じものだが、数が明らかに増えている。

「おいおい冗談みたいな威力してんぞ!？」

「オオあつと!!大兄貴!!!どうする!？」

「街の人たち、普通じゃないですよ!？」

それに立ち向かうのは、蒔風、パンチホッパー影山、そして合流してきたエリオである。

キャラはフルバックに立ち、三人の攻撃や防御をサポートする。

襲ってきているのは街の住人だ。それは解っているのだ。しかし、彼らの目からはハイライトが消えており、明らかに様子が変わる。

その原因は一目見て分かった。彼らに取り付けられた首輪だ。蒔風に取り付けられていたブレスレットと同じような外見で、無機

質な白いリングなのだが、そのランプが青緑に光っているのだ。

十中八九それが原因である。

しかし、だからと言ってそれを取ればいいのか、という単純な話でもない。

戦闘開始からそれに気づいた三人はすぐにそれを掴んで引きはがした。  
するとバタリと倒れて動かなくなるのだが、次に行こうとするとガードされてしまう。

学習している。

結局そこからさらに奪えることはなく、今こうして殴りつけての昏倒や、縛り上げての拘束で倒している状況。

「くそ……やろつがアッ……！」

「影山！…キレてもしょうがねエぞ！…」

「でもよ大兄貴！…」

「相手の動きはどうしたって素人だ！…」

「こっちが負けることはないですよ！…」

「そうだけど・・・よ！…」

しかし、イラつく気持ちは分からなくもない。

影山が叫んでなかったら、エリオか蒔風も叫んでしまっただろう。

このレーザー、貫通力はないものの喰らえば確実に戦闘不能寸前に追い込まれる代物だ。

もはや力だとかそういう物ではなく、いつまでもうまく耐えきれるかどうかの戦いとなっていた。

そして

「づぐ！…？」

「舜さん!!」

「危ない!!!」

蒔風の膝が崩れた。

そこに向かって銃口が向けられるが、影山が蒔風を掴んで回避し、エリオが放電でレーザーを逸らしていく。

「ハア・・・ハア・・・」

「大丈夫か!? 大兄貴」

「くそ・・・体力面がやべえ・・・シャレにならんぞ・・・っ」

蒔風の額を汗が流れ、いくつかの汗と交って大きな水滴となって顎から落ちる。

今一番疲労しているのは他でもない蒔風だ。

キャロからの（微弱ではあるが）治癒魔法も越える疲労。

原因は、街を包むバリアである。



「畜生……あのポールさえ倒せれば……」

「無理だ……ありゃとんでもない硬さだし、バリアだって、今の俺じゃ崩せもしない……伏せる影山!!」

パンチホッパーの肩を借りて一気に立ち上がった蒔風が、彼の背後に放たれたレーザーを十五天帝で弾いていった。

が、一発弾き、二発目を弾いたところで汗で手が滑り剣が落ちる。

放たれるレーザーの本数はかなりものもだが、狙いは悪く、当たるのはせいぜい二、三発だ。

とはいえ、ただの一撃ですらも喰らったらそのまま戦闘不能に押し込まれるので、その弾幕は恐ろしいとしか言いようがない。

ついに拳を握り、蹴りや突きでエネルギーを弾き飛ばしていく蒔風だが、拳からは血が流れ、地面に黒い斑点を残していく。

「舜さん!!くっ、ストライダー!!」

「おおおお!!ライダーパンチ!!」

ドオウツッ!!



飛び込んだ。

いま、その冷蔵庫を漁つてのどを潤し、包帯で手を巻いている。

「街の人たちは操られているだけだ……」

「あの首輪ですよね」

「どこかに指令を出してる場所があるはずなんだが……」

そういつて、この街の地図（地下牢から盗ったもの）を広げ、自分たちの位置を大体で指差す。

8306

「俺たちがここ……だな。なあ、こういう場合、やっぱりどこからやるよ?」

「そうだな……やはり電波となると中央部からの発信が一番効率がいい」

「キャラ口は?サーチできるか?」

「サーチしたんですけど……その電波、街を囲むバリアから出てるんです」

「と、なると……あれを壊さないとダメ？」

「いや、あのバリアはオレが出て行った瞬間に展開されたが、その時はまだ彼らはいなかった」

自分が脱出した時を思い出し、蒔風が言う。

あの時に彼らが来てない、ということは自然に考えてあくまでもバリアを利用して発信している、というだけで電波基地は別にあると考えるのが一番だ。

もちろん、そうではない可能性もあるにはあるのだが……

「それを考えたら何もできないもんな」

「ああ、できることを順番にやってくしかないみたいだな」

その話を終え、当面としてはその電波基地を見つけることを第一にした。

話しているうちにエリオが外の様子を見てきたらしく、話してくる。

どうやら探し回る、というふうにはせず、マネキンのようにその場

で突っ立っているらしい。  
等間隔に、それこそチェスの駒のように並んで立つ彼らは気味の悪いものだ。

探し回ってくれれば隙もできるから抜けやすいのだが、こっさされる  
と抜け出すのも無理だ。

「あゝも〜……………」

「俺、裏口の方見てくる」

「頼む」

どしどしというのだ、と頭を振る時風に、パンチホッパーが裏口側  
を見てくると言って部屋を出る。

直後

「ウオおおおおおおお!?」

《rider punch!》

ゴツ!!ドオオウツ!!!

驚愕の感情が込められた声と、ライダーパンチの起動音がして、仮面ライダーパンチホッパーが部屋まですっ飛ばされて戻ってきた。

何があった!?!と聞く前に、その部屋の扉がキィ、と開いていき、そこから一人の少女が出てきた。

服装はひどく簡単なもので、つなぎのような、それでいてスポーティーな雰囲気も感じられるもの。  
街の住人と同じように目からはハイライトが消えており、無機質に蒔風たちを見ていた。

そしてその顔は、彼らの記憶にある顔だった。

「君は……?」

「街に来たとき……最初に会った子か?」

無言で立つ少女。

それはまごうことなく彼らがこの街で最初に会った少女だ。

そして見るからに、今までの住人とは違う。

「……………!!!」

「ッ!?!おあ!?!」

と、その少女が時風に向かって突っ込み、そのまま拳を突き出してくる。

それを両掌で受け止める時風。

ドツツツ！！ズ、ゴオンツツ！！！

凄まじい衝突音と共に、蒔風がそのまま押し退かされて、少女と共に家の壁を突き破る。

が、押し出されてもその拳を受けたままの体制で耐える蒔風。周囲の住人はこっちに反応するも、少女がいるからか銃を撃っていない。

「舜さん！！」

「兄貴！！」

家の中からエリオの、通りからは矢車の声があったが、それを気にしていられる状況ではない。

少女の踏み込まれた右足が一瞬スウツ、と弛緩し、直後、凄まじい



胆力を以って地面を踏み抜いた。

ゴ、ドオンツツツ！！！！

まるで大砲を十発ほど一気に発射したかのような轟音が轟き、蒔風の体が民家を二、三崩壊させながらブツ飛んだ。

少女の立ち位置は変わらず、まっすぐに蒔風の吹き飛んだ方向に拳を向けて構えたままだ。

と、そこで住人たちの瞳にエリオやキックホッパーたちが映り、銃や刀の入り混じった混成部隊となって襲い掛かった。

「刀は受けるな！！豆腐みたいに切れるぞ！！」

矢車の言葉に、エリオが受けようとしたストラダーを引っ込める。

掠ってしまったのか、ブースターの一つが斬り落とされてエリオがその言葉を理解すると、蒔風が突っ込んだ民家の瓦礫が吹き飛び、

そこから剣が飛んできた。

剣は、十五天帝。

風林火山が一本ずつ、エリオ、キックホッパー、電王、パンチホッパーの足元に刺さり、各人がそれを手にして攻撃を開始した。

ガラリ、という音がして、瓦礫の中から立ち上がった時風が少女を見る。

「この街で何があった……?」

「……………(ダンツツ!!)」

「あんたらを操ってんのは誰だ!!!!」

飛び掛かる少女  
迎え撃つ時風。

大きなハンデを負って、闇に彼らは立ち向かう。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 最悪武器の威力（後書き）

はいさい！！

相手の武器の解説回&強敵少女出現です！！

銃は前回説明しましたが、刀は初めてですね。

この刀、もし地面に落とせばヌルリと入って行って鏢で止まるまで行っちゃいます。

柄も何もない刃だけで投げれば、減速して落ちるまで止まることはないです。

問答無用の切れ味の刀です。

逆に素人技量相手だから怖い。

時風の十五天帝なら受けられる、というのは彼の剣が世界四剣の一つだからです。

絶対に破壊されない剣なので、こついったものも受けられるんですね。

そして少女登場。

でも自己紹介は全然先になりそうだなあ・・・

そういえば買いましたよ、バガミールWWW  
フォーゼドライバーは売り切れていた・・・

まあ予約していない自分が悪いんですけどね!!

マジックハンドとカメラのスイッチは手に入れました。  
これだけじゃカチカチするだけじゃないかWWW

楽しいけど!!!

次回、VS少女  
もしかしたらこの街の黒幕出現？

ではまた次回

## 少女、脅威

少女の拳が、壁を破壊する。

少女の踏み込みが、地面に亀裂を入れる。

動き一つ一つが、空を切る。

明らかに素人ではない。

おそらくはこのバリアがなくとも手こずるだろう。  
そして、それがある以上は手こずる以上に、きつかった。

「！！・・・！！」

「ぶっ、ほ、セツ・・・！」

無言で恐ろしい突きを繰り出してくる少女を、時風が最小限の動きで回避していく。

最小限、と言っても紙一重すぎると勢いに巻き込まれてしまうから見た目は必要以上に回避しているように見える。

無論、その少女の首にも住人と同じような首輪がついているが、この状況で取れるはずがない。

(くっ……あっちの相手は素人。武器があれば、すぐに誰か一人でもこっちに来てくれる!!)

.....

時風の考えは正しい。





一回受けるだけで、身体が大きく仰け反っていく。

そこにさらなるラッシュを叩き込む少女の攻撃を、それでも姿勢を無理やり戻しながら受け続ける時風。

「っ！！おあっ！？ウグオツ！！！！！」

少女の攻撃に、とうとう蹴りが加えられてきた。

右回り蹴りに、時風の左わき腹がミシリ、と軋みを上げ、一気にその体が吹き飛んだ。

地面を一回はね、そこで体制を整え両手両足で着地、下に顔を向けながら踏ん張り、地面を滑る。

その勢いを殺しきった時風が顔を上げると、その顎に少女のアップアが思い切り振られてきた。

顎の下に両掌を添え、それを受ける時風が、身体ごと縦回転して威力を殺す。

そこで少し宙に浮く時風に、少女の攻撃が止めど無く打ちこまれていく。

その威力は手足で弾いているにもかかわらず、時風の体がなかなか地面につかないほどだ。

鞭でも振っているような音が続き、ふとそこで、時風の腹に少女の脚がスツ、と当てられた。

「ッ！まず」

ドンッッ！……！

最初に受けたノーインチパンチ、その蹴りが、時風の腹部にクリーンヒットした。

その蹴りの衝撃はその体を突き抜け、宙を奔り、その方向15メートル先にあった民家を打ち砕く。

しかし、少女の脚に引っ掛かる時風の体が、まるで霧でのあるかのようにユラリと消えた。

少女は無感情に加え無表情だ。

だが、困惑はしているようで蹴りのその体勢のまままで左右を見る。

一体どこにいるのか、と

その疑問に、蒔風の声が応えた。

「下だよ」

その声に気付いた時には、少女は下から蒔風に抱えあげられていた。そして、そのままの勢いで、蒔風はタックルでもブチかましたかのように、その通りを一直線に飛んで行った。

蒔風がいたのは、蹴り上げられっぱなしの少女の脚の下だ。

そこからその片足ごと抱えあげられた彼女は、ドカドカと蒔風の背中を叩くがしかし、この体勢では威力はない。

このままでは、どこかの壁に叩きつけられる。

そう思ったのか、少女は蒔風の右脇腹に拳を当てた。

「は、踏み込みのできないこの体勢で、そんな拳が撃てつかよー!!」  
ボゴオツツ!!!!

そう叫んだ時風だが、直後にその認識を改めた。  
なぜならその少女は、踏み込まずとも腕の力のみでそれを放ってきたのだから。

とはいえ、その威力は大したことはない。  
だが近距離とはいえ真横からの衝撃だ。直進する時風の体勢を崩すには十分だった。

少女を放し、地面を転がる時風は受け身を取って（あくまでこの攻撃での）傷は一つもない。

一方少女はそのままの勢いで投げ出され、全く方向を変えることなく吹っ飛び、民家に突っ込みそれを倒壊させる。

「~~~~!!」

頭をさすりながら立ち上がる時風。

しかし、少しの間もおかずに民家の中からは少女が立ち上がって  
時風へと突進してきていた。

「舜さん!!」

それを見て、エリオが少女へ向かっていく。

少女も迎え撃つつもりだ。

否、おそらくはエリオを轢き倒してそのまま時風へと向かうつもり  
なのだろう。

「エリオお!!」

そのエリオを援護しようと、時風が身体を横に向け、両掌を迎え合  
わせて上下に構えた。

その腕を突きだし、身体を横に向けてその間に雷旺を走らせる。

瞬時、エリオは理解してストラダを振った。

時風のその両掌の間をストラダが通過し、その電撃を纏ってブー  
スターに火をつけた。

そのまま真正面に突き出されたストラダが、少女に向かって突進する！！

「一点雷貫！！雷 旺 一 閃！！！」

ガゴオツツ！！！！

凄まじく硬そうなそんな音がして、エリオと少女が土煙に消える。

直後に風が吹いて、それが消えたその場所には、ストラダの先端、面の部分を上下から挟みこんで止めている少女がいた。

下から膝で、上からは肘で。

ガツツリ挟み込まれたそれは、少女の脚を地面にめり込ませ、後退させて止まっていた。

が、この槍は雷槍。

蒔風が与えたエネルギーは、突進力ではない。

バンツツツ!!!

弾くような音と光がストライダーから発せられた。

爆ぜる、弾ける。

それが雷旺の真骨頂。

少女の体はその衝撃に弾かれ後退、地面をズザツ、と滑って着地する。

そこに

《r i d e r   j u m p》

仮面ライダーキックホッパーが、凄まじい跳躍量で少女の真上に飛来した。

「!?!」

反応する少女だが、すでに攻撃態勢は整っている。

キックホッパーが宙で一回転し、右足を突き出して少女に向かってキックを放つ！！

「！！！！ッッ」

「フンッ！！」

それに対し、少女は後ろ回し蹴りで迎え撃ち、キックホッパーの蹴りと激突させる。

綺麗にぶつかり合った、両者の右足。

そして、キックホッパーがベルトのホッパーゼクターのレバーを戻す。

《r i d e r k i c k》

直後、タオキン粒子が右足に集結し、圧倒的な爆発力で、少女の体を地面に向けて押しつぶしていった。

ゴゴウ！！という凄まじい音で地面を揺らし、少女がその威力から逃げようと地面を転がって受け身を取った。



が、転がった先にはもう一人のホッパーがいた。

「ライダーパンチ！」

《rider punch》

彼女の顔面に向かって、一直線につき放たれる拳。

少女がとっさに両腕でそれを受けるが、さすがに無茶だろう。

一回、二回転撥ね、少女の体が地面を転がり、立ち上がるうとして膝がガクリと落ちた。

「流石に限界が来たようだな」

獄、圧、惺、旺、混、絶

蒔風が円を描くように両腕を降ろしていき、エネルギーをためていく。



蒔風が矢車の肩に寄りかかりながら、みんなでその場に行くと、破壊された噴水はプシュー、と水を噴き出して傾いていた。

辺りは当然水浸し。

確かここは昼間に来たまつりの会場だったはずだが、到底同じ場所には見えない。

その噴水の瓦礫の中から、少女の体が出てきていた。

おそらくはここにぶち込まれたのちに這い出ようとして力尽きたのだろう。

あれだけの物を食らってまだ立とうとすることができるといふのは恐ろしい。

「終わった……か？」

「でもこの街から出られませんよ？」

「それは後だ……もうヤダ疲れた……」

矢車、キャロ、蒔風と声を発していく。

しかし

「やーっぱダメかア」

そんな声がして、一人の男が現れた。

一同が一斉にその声に振り向き、その顔に反応したのは矢車だった。

「お前……爆発場所にいた……」

「おお、仮面ライダーか？あの刀集団とのやり取りはすごかったねえ」

その男は、蒔風の爆発場所を調べに来ていた男だった。

コイツが目の前に来ている、ということとは他の人間も来ているのか。彼の周辺には刀を持った者、銃を持った者が二人ずつ付いているが、ほかの人間の気配はしない。

「ん？ああほかの奴らは処分したよ。てんで使いもんにならないんで」

処分

男はそういった。

おそらく、深読みするべくもなくその通りなのだろう。

8332

「お前……」

「翼人に、仮面ライダーに、魔導師か。面白い組み合わせだな……  
・「EARTH」か？」

「……」

無言

蒔風たちは答えない。

しかし男はそれを肯定ととったのか、左腕の上腕半分を覆うコンソールをタタンツ、といじった。

「引き払った後にこんな上質な奴らが来て、しかもそれが初めてのお客様なんだってんだから笑える」

ゴゴン！！

そんな音がして、地面が揺れる。

しかし、男は特に驚くこともなく、さらに言葉を続けて行った。

「ここでお前ら捕まえればさ、俺の手柄になるんだよな？そいつあさらに面白い話だ！！！！」

ズゴォ！！

「あのショートヘアフェチの野郎に、一泡吹かせられるってわけだ  
！！」

男が興奮気味に叫んだ。

直後、巨大な何かがさっきまで戦っていた通りあたりから出現し、  
その大きな影が時風たちを覆う。

8334

小さく舌打ちをする時風

行くぞ、と声をかける矢車に、応える影山

後ろに手を回し、ムウ、と唸って不快感を表すジーク  
キャラをかばうようにストラーダを横に構えるエリオ

終わらない

終わらない

この街を覆う、狂気の技術は

まだ底など見せてはいなかった。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



少女、脅威（後書き）

と、言うわけで少女決着！！

それと同時に、この街のボス出現。

発言からわかるように、こいつはあのショートヘアフェチのマッド野郎ではありません。

あと、実をいうと各牢に配備されていたのは一人ずつ。

影山さんだけ二人でしたね。

こいつは地下牢のポジションではなく、普通に街の中にいました。ボスは働かない、ということ。

そしてその職員たちも「処分」されてしまい、すでにこの男一人なのですが……

ここから先は次回で。

今回は、この街での決着、ですかね？

じゃあここからは雑記!!

先日、バガミールとマジックハンドのアストロスイッチを買った私。

そして、それを友達に見せて、学校の帰りにゲーセンへ。

そこで見つけた「ガンバライド」!!!

今まで見向きもしなかったんですが、折角持つてるスイッチ。  
ベルトもないし、遊んでみるかとやってしまったのが始まりです。

その日のうちに、千円。

翌日にはなんと一万ぐらい吹っ飛びましたwwww

どうしてこうなった。

しかもレジェンドレアが出ないという罠wwww

だからカードゲームはだめだと自分にあれだけ言い聞かせていたのに!!!

買い始めると全部揃えないと気が済まなくなるから駄目だと知っていたのに!!!

そして無くなる一万円。  
さらば諭吉と叫ぶ暇もなかった!!!!!!

一万あれば何ができたかと考えると三日前の自分を殴りに行きたくなる。

でもあれ意外と出来がいい。

スーパー1で敵を倒した時とかの「ミヨンミヨンミヨン」という音が忠実に再現されていたし、Z×キックとかメチャクチャカッコよかったし!!!!!!

どうすればいいのだ……

しかし、ここで思い出します。

偉い人（政治家）の息子は言いました。

「少しのお金（小銭）と、明日のパンツさえあれば生きていけます  
って!!!」

バカ野郎。

その小銭すら吹っ飛ばすのがガンバライドなんだよ!!!

三ケタ以上のお金は軒並み吸い込まれていったわ!!!

マジふざけんなマジふざけんな W W W W W

悪いのはガンバライドじゃない。

全てオレが悪い。

アーチャーが過去の自分を嫌う気持ちがありました。

と、いうかこの勢い、どう締めていいかわからなくなった。  
では、わけのわからない効果音で締めていきましようか。

ではみなさん、せーの

辛味噌!!!

また次回で！！

## 外道技術

### 街の外

そこから見える街は、薄紫のバリアに覆われた不思議空間になっていて、ポールの間をバリアが覆い、上も幕でふさがれていた。

その光景を、外から一人の女性が見ている。

偶然この場を通ったようで、ローブにもマントにも見えるような感じで羽織った布から地図をだし、確認を取っている。

そしてどうあってもあれは異常だと思ったのか、武器を構えて街へと走り出した。

その両手に、一対のブーメランブレードを握って。



それはよく見ると、一人一人の姿がよくわかる。まるでいったん粘土で人間をつくり、それを張り合わせて大きな人を作った感じ。

気持ち悪い。

なんとという醜悪な姿。

そして、それを構成しているモノが、あまりにも人道に悖る<sup>もと</sup>。

「お前……人間を何だと思っているんだ!!!!」

その大きな敵に、エリオが叫んだ。

しかし返答よりも先に、巨人の攻撃が始まり、それどころではなくなった。

巨大な拳が時風たちを狙い、叩き潰そうと振り下ろされてきたのだ。それをバラバラに回避し、巨人を囲むように立つ四人と、フリードに乗って空から全貌を見るキャロ。



男の方を見ると、彼と共に来ていた四人の住人も巨人の脚に取り込まれていつてあれを構成する一部分になってしまった。

「人？そんなもの、最初からいないさ！！そいつらはただの人形だ！！！！」

男が嗤う。

そうしていると、巨人の目であろう位置がガアツ！と光り、周囲の蒔風たちに電撃のようなビームを発してきた。

それを転がって回避し、男の元へと走り出す蒔風。

巨人はそれを防ごうと拳や脚で踏みつけようとするが、蒔風はそれを回避する。

空からはフリードの火炎、地上からだつてエリオやキックホッパーたちが飛び掛かっているにもかかわらず、軽くはねのけられる始末。

大本を絶つ。それしかない。

と、そこでビームが蒔風を包み、周囲を爆発させて吹き飛ばす。

その攻撃自体は回避する蒔風。  
しかし、そのうちの一本が崩壊した瓦礫へと伸びて行ったのを、彼は見た。

「ツツ！！！！」

ドオン！！！！

蒔風がとっさに飛びつき、その瓦礫から少女を引っ張り出して腕に抱えた。

あと数秒遅ければ、瓦礫の代わりに少女が吹き飛んでいただろう。

「おい・・・あの人たちを元に戻せ！！！」

「無駄だな。もうああなればただの兵器だ。単体ずつに取り分けるのは無理だ」

「テメエ・・・・・・・・！！！！！」

ドンッッ!!

男に怒りを向ける蒔風だが、巨人の攻撃は蒔風たち五人を的確に狙っている。

大きな体ゆえの死角がないのだ。

どういうわけか、この巨人は背後を飛ぶキャロにも、脇の下に攻撃を仕掛けようとするキックホッパーにも気づいていた。

そのことを影山が疑問に思っていると、目の前の肉が動いた。

巨人に取り込まれた人の、それぞれの顔。

その顔にある目が、一斉にギョロリと開いたのだ。

そのおぞましい姿に、皆が目を見開く。

キャロは叫び声も上がらず、強く歯をかみしめた。

「必死だねエ。翼人はこんな物かい？」

「黙れ!!」

少女をそこらへんに置くわけにもいかず、蒔風が左手で抱えながら、男を右腕で殴ろうと突っかった。

しかし、男はそれをひらりと回避して少女を指さして笑う。

「その女を抱えたままじゃ、俺に勝てんだろ！？はは、厄介だねエ。まさかあれも人だから殺せないとか思ってたんじゃないか！？何度も言うが、あれは人じゃねエよ！！」

「・・・どういうことだ」

「そのまんまの意味だ。なにもオレの感性が、人を人と見ないからってわけじゃねエ。あれはホントにモノなんだっつもの！！」

男が言う。

あれは本当に人ではない、と。

だったらロボットか？

いや、それはない。

街中で見たあの姿は、動きは、明らかに人間の物だ。

とてもではないが、命のないモノの動きとは思えない。

しかし、男はそれを聞いて馬鹿にした笑いをした。

「脳味噌の中身つてのは電気信号の塊よ。じゃあもし「死体の脳みそいじってそれをもとに動く」ように改造したら、どうだ!？」

その言葉に、目を見開いた。

この住人達は、すでに死人。  
街中で動いていたのも、祭りではしゃいでいたのも、すべて。

問われれば答える。  
動けば反応する。

しかしそれは脳と体に残った、生前の電気信号データをもとに構築されたプログラムで動くだけのものだ。  
だから同じ問い掛けや反応には、同じようにしか動けない、反応しない。

死後すぐの死体をもとにし、さらにその記憶をもとに行動を設定しているなら、気配があっても当然だ。

しかもデータは、死んだ直後にいじらなければ失われる。

つまりこいつらは、この街の住人が死にいたるその瞬間まで待機していたのだ。

否、むしろそれよりも、この街を壊滅させたのがこいつらだったとしたら？

あの通報の電話は、決して日常の一風景ではなかったのだ。  
非日常からの、助けを求める声だったのだ。

「お前らは……この街を……」

「おおっと、俺は見てただけだからな？指揮とつたのは別の奴、実行犯はそいつの持つ実験体さあ」

こいつらはこの街を壊滅させ、住人を皆殺しにして、使えそうな死体に処置を施して偽りの街を作り出したのだ。  
使えないほどに破損した死体は地中に埋めた。

損壊した町は処置を施した死体を総動員で修復させた。

その後、訪問者が来た時の対策マニュアルを作り上げ、やってきたものを捕えるシステムを作り上げたのだ。

そこで初めてやってきたのが、蒔風たちだった。

よく考えると、この街を囲うポールの話も、最初からおかしかったのだ。

少女は言った。

昔、この街を怪鳥から護るためにネットを張っていたものだ。

しかし、ポールは街の外壁をしつかりと囲っていた。

この街がここまで大きくなったのは十数年前だ。そんな昔には、まだこの街はこんなにも大きくない。

この街は、来たその時から偽りであり、すでに死んだ街だったのだ。

「じゃああの人たちは」

「だから、もう死んでる。昼に見せたのは、生前の記憶をもとにしたもの。今は、忠実に動く兵士で、混ぜればあのとおりよ」

そういつて巨人を指さす男。

直後、真面目な顔をして蒔風にこう言ってきた。

「で？買ってみるかい？」

「なんだと？」

「死んだとしても、その者の力をそのままに再生！しかも反抗しないし、いざとなればスイッチを切れば元の死体。そんな兵士、いかがでしょうか？」

男は、なんとここにきてセールストークを始めてきた。  
これだけの兵器、買うのは手だぞ、と。

「お前の組織は……」

「兵器開発を主軸としたもんでね。死の商人、っていったらわかるかい？」



そういつて、値段やらなんやらをべらべらと話し出す男。  
これだけしゃべっても組織のことは大して言っていないのだから、大  
したものだが……

と、そこで蒔風が腕に抱えた少女にハッと気づき、首元にそつ、と  
手を当てる。

そして、感じた。

静かな脈  
上下する胸

生きている

「ああ？あーそうそう、そいつね。そいつだけは生きてるよ」

その男の言葉に、蒔風の顔が少し緩んだ。

よかった、と

しかし、直後その表情は、男の言葉で変化していった。

「あの実験体」の知り合いらしくてよ、うちの施設まで乗り込んできたんだわ。こっちも「最終実験」の前日で面倒だったからな。  
「これに耐えられたら解放してやるよ」って言って地獄のような鍛錬をさせたのよ。耐えられたらいつもの日常を返して、とか言ってたな。どうせ死ぬかと思ってた実験だが、ところがどっこいそいつは死ななかったのよ。うちの組織は約束は守るもんでな。お望み通り「日常」ってやつを返してやったよ！」

そして、腕を広げて笑った。

「あつはっは！！とうに死体の人間に話しかけて、元気に応えるそいつを見んのは楽しかったぜ！！ま、どうせ気づいてもその首輪でコントロールできるしな！！！」

それをきいて、時風が無言で少女の首輪を掴み、破壊した。

「ん？あゝあとつちまいやがってんの。そいつにとって現実を知る方がずつとずつと残酷なんだぜ？それをわかってやれよあゝ」

「だまれ」

「それによ！！コンソールコンソールをちよちよいといじればその女もこの街も、一発で粉々に吹っ飛んで」

8354

ザン！ボト・・・

「・・・へ？」

「黙れと言ってる」



拳を振り上げ、即座に蒔風をつぶそうとするが、振り向きもしないで蒔風は叫んだ。

「こんなにタダで貰えませんよ！！お金払いますって！！！！！」

そしてその叫びに、巨人はビタツ！と、揺れて止まった。

「あらいいのよ」「そんなん気にすんなって」「じゃあもらおうかな、あはは！」「お客さんなんだからもらってもらって！」「そっちがそう言うならしょうがないね」「いらんいらん！！」「持ってちやいなよ」「おにーさんあげるー！」「いらねえって。もってつとけ！」

直後、巨人を構成する人々が一斉にしゃべりだした。どうしたことかと目を見張る男だが、蒔風は当然だと言って鼻で笑った。

「これだけの人数を一つにまとめて動かしているんだから、各人の意志が統一されてなきゃまともに動けんだろう？バカかお前」

そういつて電王に少女を預け、バサア！と翼を広げて男にコツコツと歩み寄っていく蒔風。

コンソールが離れたせいか、翼人の力を押さえている磁場は消えていた。

ただし、まだ街を包むバリアは消えていない。

「さて・・・何だったかな？」

「ヒイツー!!」

男が小さな悲鳴を上げる。

肘から先のない左腕を必死に握りしめ、それでも喚かないのは目の前の恐怖が大きいからか。

バリアからのうっすらとした光の逆光で、男には真正面にいる男が真っ黒に見えた。

開かれた翼が斜め上に向かって広がり、内側にギシギシと湾曲して

いる。

男の正面はすべて逆光の陰で黒く染まってよく見えない。

ただそんな中で、見開かれた眼光と、怒りに晒う口元だが、はっきりと見える。

「どうした……もっとしゃべれよ……」

コッ

「う、うあ……」

コッコッ

「あれだけ得意げだったじゃないか。あの子をどうするかとか、街を何かするとか。面白いからもっと聞かせてくれよ」

蒔風が一步步むごとに、男の表情が恐怖に歪んでいく。

男は今、「死」という物を目の当たりにしていた。

「わかるか？それが「死」だ。なに、わからなくても気にするな。これは軽い予習だから」

「な、なん……」

「今から、お前が体験することだよ。じゃあな」

そして、蒔風が腕を振り上げ刀を振りおろし……

「そこまでだ、兄貴」

その腕をキックホッパー矢車が止めていた。

「矢車さん」

「それ以上はいいだろう。この男に地獄なんぞもつたいない」

「……ああ」

そういつて、蒔風が腕を静かにおろし、キックホッパーが腕を放す。

「悪い……」

「気にすんな」



そう短くやり取りし、翼をしまつて男を視界から外す蒔風。

それをみて男が気でも抜けたのか、一気にべらべらしゃべりだそうとしてきた。

「はは・・・結局やらないの。あんだけ怒ってたのに、あっさり下がるの！つまりあんたにとってその程度だったとツツ！！！」

が、その言葉が途中で詰まって止まる。

理由は、殺気。

蒔風のも物ではなく、矢車によるものだ。

背中を向けるキックホッパーが、首だけ回して男に問いかけた。

「今・・・兄貴を笑ったか？」

「い・・・」

「だったら俺のことも」

ワラッテモラオウカ

「あ……あ……」

キックホッパーのマスクが凄まじい殺気を発し、男がついに放心する。

その場に膝をつき、ぺたりとしゃがみこんでしまった。

「見苦しいとこ見せた。すまん」

「い、いえ……」

エリオヤキャロにその声をかけ、時風が疲れたように顔に手を当てた。

ジーク、矢車、影山も変身を解き、大丈夫かと時風を案じた。

あれだけの殺意<sup>もの</sup>を飲みこんで、そして何もしないというのはかなり

堪えるはずだ。

心に重くのしかからなければいいが……

と、そこで地面に落ちた男のコンソールがカタカタと動き出した。

「！」

それに反応した時には、すでにコンソールは機能を發揮していた。

男の腕を離れ、ポーンと飛び上がるコンソール。

高さは人の胸くらいか。

と、そこでクルクルと回転し、全方位に人差し指くらいの針が全方位に発射された。

「畳返しッッ！！」

パンツ、ズカカカカカカカカカカカカカカカッッ！！！！！！

その無数の針の猛威を、時風が畳返して地面を起き上がらせて壁にして防ぐ。

その向こう側から、ズシヤリという何かが地面に倒れる音がした。

「な、なにが・・・」

「見に行かない方がいい」

エリオが一体何なのだろうと壁の向こうを見ようとすると、矢車がそれを制して向こう側へ行き、男の死体にそこら辺の布をかぶせた。

すると地面に落ちたコンソールが再び光り、一人の男をホログラムで映し出した。

『やあ、「EARTH」の諸君かね？』

その男が、話しかけてきた。

畏か？

矢車はすでに民家の影に隠れ、蒔風は畳返しの際から様子をつかっている。

『突然の攻撃は失礼した。しかしこちら側としてもそいつの口は封じなければならなくてね』

しかし、男はそれにもかかわらずそのまま話を進める。

『こうしてはれてしまった以上、その街はもう不要だ。好きにしてい。君らにしても、「EARTH」のデータはもういらぬのだよ。まあ、銀白の君のデータは不十分なのだがね』

「どづういうことだ」

そこで蒔風が応えるが、男の姿は消え、代わりに助手らしきシヨトヘアの女性が現れてきた。

『データはすべて破棄したので何も残ってないと思います。ご了承ください。あと、バリアはこちらからもそちらからも解除は無理です。外からの救助が来るまで我慢してください』

「おいふざげんな！！テメエら一体……」

『では』

プツン

一方的にそれだけ述べて、ホログラムは消えてしまった。  
蒔風がコンソールを拾い上げてみるが、プシューという音がして中の回路が焼けてしまった。

「手がかりは消されたか・・・？」

「どうする？」

「バリアの起動装置は街の外だし・・・」

これからどうするか、と話し合う一同。  
キャラは疲れてしまったのか、フリードの背中で少女と一緒に眠っている。

このバリアの起動装置が外にある以上、やはり救援が来るのを待つしかない。

ポールを破壊しようにも、一本破壊するとそこをすっ飛ばしてバリアが張られるので意味がない。

しかもバリアはパツ、と変わるのではなく、ズズズ、とずれて収まるのでどうやっても最終的に潰されてしまうのだ。

だから、待つしかない。

あと数日間はこちらにいなければならないと霹靂する彼ら。

が、そこでウウウウウウウウン・・・という何かがダウンする音がして、街を覆うバリアが消え去っていた。

「お？」

「バリアが消えたーよ？」

「停電でもしたか？」

そんなことを言う彼らだが、そこに一人の少女が走ってやってきた。

「蒔風さん！エリオさん！キャロさん！」

「セツテさん！」

「セツテえ！！！どうしたこんなとこで？」

そこに現れた少女、かつてのナンバーズ7のセツテが、このバリアを破壊してきてくれたのだ。

彼女の持つ武器「ブーメランブレード」には、バリア破壊機能がついている。

各地を旅する彼女は偶然にもこの地を通りかかり、そこであのバリアを見たのだ。  
何かあったと思いつけこんで来れば、この有様である、というわけだ。

そんなこんなで蒔風が車をだして、皆を乗せて荒野を走らせる。

見張りに獅子天麟の三人を置いたので、おそらく荒らされることはないだろう。



この街での一件は終わった。

彼らはいったん、帰っていく。

次の戦いに備えるために。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 外道技術（後書き）

• なんだかナアナアになってしまった気がするが大丈夫だろうか・・・

相手の外道技術、そして唯一の少女救出

男に関しては名前も何も決めてません。

とりあえずクソ野郎ということは解っておいてくださいwwww

あれだけ武器、技術を持った敵とは一体何なのか。

彼らの目的は兵器開発です。

だからこうして「EARTH」にも勧めてきたんですね。

まあ無論無駄でしたが

少女の身に何があったのか、組織は一体何をしようとしているのか。

それは追々、説明していきたいと思います。

ちなみに「あの実験体」というのは日常編の最後に街を焼いていたあれです。

ホログラムの男は例のシヨールヘアフェチですね。

今回は・・・どう進めるか決めてないや（エー？

ではまた次回で

## 街の終わり・情報集め

事件の翌日。

といっても正確には事件のあった晩に帰り、日が昇ってから再びやってきたのだが。

街に入った「EARTH」は、即座に調査を進めた。

蒔風たちのつかまっていた地下牢

街を囲うポールと、街の外で発見されたバリアの起動装置

男の死体、そして住人達

回路は焼けてしまったが、男の使用していたコンソールも調べている。



「あるんだよ」

「へえ、これはすごい銃だね。一発が決め技クラスの威力を持つてるよ」

「当たったら一巻の終わりってことか・・・クソ」

手に入るのは、武器の情報のみ。  
決して機関に関するものはなかった。

そして、一番目立つ「兵器」の処理に、時風が向かった。

「・・・」

「・・・」

「・・・キツイな」

その巨人を見上げるのは、蒔風、エリオ、矢車の三人。

巨人はあの時からショートでも起こしたのか、ピクリとも動くことなく停止していた。

男曰く、これはすでに死体だ。

これからはどうあっても救えない。

悲しい哉「救えるものは根こそぎ救う」ということは、救えない者は救えないのだ。

だから、彼らはこれを処理するしかない。

このままでは腐ってしまうし、そうなっただけはこの地域に伝染病やらが流行ってしまう。

蒔風が「火」を居合で構えて巨人の視点になっている部分を見る。

腰のあたりの一点。  
そこを崩せば、この巨人は倒れるだろう。

タンツ、と軽く跳躍して、右手でその部分に抜刀する。

「すまん」

そう一言短くいって、時風が切り抜く。

その部分に在った人は、見覚えのある顔。

時風が抜き、刀が当たろうとする、瞬間

（がはは！大丈夫だ！）

「ツ……………」

そんな声が聞こえ、時風が辛そうな顔をする。





「アリス、どうだ？」

「ええ……これは間違いなく翼人を抑えるための装置です」

「EARTH」の一室で、アリスが時風を抑え込んでいたブレスレットを調べていた。

この世界に、彼女ほど翼人に精通した者はいないだろう。

と、言っても彼女とて決して専門家ではない。  
管理者ゆえに多少の知識を持ち合わせているだけだ。

「だからこれ以上のことは解らないですね……」

「そうか……だったら他をあたってみるか」

「他、ですか？あの少女はまだ無理だと思いますが……」

街で救助されたあの少女は、今「EARTH」の保護に入っている。

あのあと時空管理局から「身柄を寄越せ」と明らかに高慢ちきな、ストーリーに出せば必ずアンチが出てきそうなお偉いさんが言ってきたが

「知るか」

の一言で時風がぶった切った。

あっちとしては最初の通報を聞いたのは自分たちだから、というらしいがいまさらである。

時風はさらに「協力する気がないのでしたらお引き取りください。なお、通報を受けたオペレーターが何らかの処分を下されたら、そちらの方にそれなりの損害が出るであろうことをここに明言しておきますね?」と言って重圧もかけておいた。  
これである人たちが憂さ晴らして何かされることもあるまい。

時空管理局とて一枚岩ではない。

善意ある者に預けても、どこで悪意ある者に搔っ攫われるかわからないのだ。

「信頼してないわけじゃないんだけどね」とは、時風の談。



そこでまず時風が話を聞いたのは、夜天の書の管理人格・リインフオースだ。

確かに結構前、時風は彼女から翼人の話を聞いた。

「ええ、確かに夜天の書の製造者には赤色の翼人せきしやくがいましたね。ですが、私が知っているのはそこまでです」

「わからない？」

「すみません……夜天の書もその後何者かによって改悪されてしまったので、そこより過去の記憶が……」

「あ、すまんすまん。そっか」

そういつて、時風がリインフオースと別の話題を二言三言話し、次の心当たりに向かった。

-----

「翼人のことじゃと？」

蒔風が次に向かったのは、観測者「卑弥呼」のもとだ。  
筋肉ムキムキのそっち系おじさんだが、決して悪い人ではない。

「そうじゃの。確かに知っておるぞい」

「どんな話かな？」

「前に話したのとそう変わらんよ。凶悪な翼人がおって、儂らがそれを封印した。それ以上のことはないのう」

「ううゝむ……その時翼人の力を抑え込んだりとかは、しなかった？」

「したくてもできなんだ。じゃから儂らは死力を尽くしてあ奴を抑え込み、封印したんじゃからな。その生き残りも、儂一人じゃ」

よほど昔のことなのだろう。

遠い目をして語る卑弥呼には、いつもにはない哀愁が漂っていた。

.....

翌日

蒔風は第三の心当たりの話を聞きに、雛見沢を訪れていた。

その相手は、古手羽入

千年の昔に、この地に流れてくる途中翼人に出会ったという少女だ。

「あう？翼人ですか？」

何かの罰ゲームか。

メイド服でこれからキムチの丸呑みを敢行しようとしていた羽入に、蒔風が話を聞きに行った。

「これですか？いやはや、部活で負けてしまったので・・・」

「ってか、今日は圭一たちはいないのな」

「あう。受験勉強で大変らしいのですよ」

ちなみに、今蒔風と羽入がいるのは学校の校庭だ（メイド服はそのまま）

教室では梨花と沙都子が羽入を待っている。

次のゲームのために、大いに仕込みをしているのだろう。

「そうですね……僕たちはある世界を追われ、追放された一族なのです」

「ああ、その角でか」

「う、ズバツと言いますですね……」

「いやいや（照）」

「ま、その途中で僕らは力尽きようとしていました。なにぶん、放り出されるなど初めてでしたので右も左もわからなかったのですよ」

「ほうほう」

「そこで、一筋の光が僕たちを導いたのです」

「へ？光？」

羽人が言うには、翼人を直接見たわけではないらしい。

ただ、そこには羽根が舞っていたので「ああ、翼人が助けてくれたんだ」と思っていたらしい。

「まあ、そんなことできんのは翼人くらいだけだね」

「だから僕も大したことを知っているわけではないのですよ」





と、そこにはやてがやってきて」となりいい?」と聞いてきたので  
ジェスチャーで「どーぞ」と勧める。

「なあ、やっぱり時空管理局とやった方がいいんとちゃう?」

「やだ。あのおやじさんが出てくるだろ」

「あー、まああのおっちゃんはなあ……」

二人が少女を引き渡せと言ってきた男を思い出し、嫌な顔をする。  
あんな人もまだいるのか、と思ってしまう。

「まあその分「EARTH」だったら自由にできるからうちらも気分いいわ」

「建前とか気にしなくていいからな。あと、無茶だけはさせないし」

「うちはいいんよ?」

「お前のそういうところがだめだったの」

たらこスパゲッティをクルクルとまわしながら、蒔風がのそのそと  
答える。

それにたいしてはやても「まあそうやねー」と呑気に応える。

「……」「兵器」つちゅー面から、今シグナムとアギトが調べを  
回してくれとる。昨日もスカリエッティのところに行きに行っただ

かりや」

「交換条件出されなかったか？」

「いや、何も知らないからそんな話にもならなかったって」

「スカリエッティが知らない、か」

「他にもフェイトちゃんとかティアナが過去に捕まえた犯罪者とか調べたんやけど、全然や」

「そっかー……ん？」

「どしたん？」

「そうひえはさ、もはて」

「食べながらしゃべらんの」

「あい（ゴクン）……彼女に話は聞いたか？」

「彼女？」

.....  
.....

「やあ初めましてかな？マグネスさん」

「初めまして、蒔風さん。私のことはルネッサでいいですよ」

「りょーかい」

翌日、蒔風が訪れたのはルネッサ・マグネスの執務官補佐室。

直通した隣の部屋では、ティアナが他の事件の書類を読んでいる。

「いきなりの訪問すんません。そっちも事件があるというのに・・・」

「そちらもそうなのですから、お互い様ですよ」

そんな簡単な自己紹介と会話をし、早速本題に入っていく。

「え、トレヴィアのことですか？」

「うん。考古学者だったんでしょ？しかもイクスを発見するだけの

優秀な」

「そうですね……でもわたしはトレヴィアの仕事のことは、何も知らなんですよ」

まあ、それはそうだろう。

戦争孤児だった彼女がトレヴィアに拾われたのが子どもの頃。

十代後半にはすでにトレヴィアと別れ、管理局で働いていたらしいから、彼の仕事に関する内容は知らなくても無理はない。

だが

「むかし、彼と一緒に住んでいた場所なら、多分……」

「どー!?!」

「内戦の絶えない次元世界、オルセアです。出来れば私も行ければいいのですが……」

「いやいや、地図さえくれればそれでいいさ」

そういつて、小さな端末で地図のデータや、諸々の必要な情報を受け取る蒔風。

よしよし、と笑顔の蒔風だが、その蒔風にルネッサが警告をしてお

く。

「オルセアは時空管理局の干渉を拒む地域です。いわば非加盟世界。十分気を付けてください」

「わかった」

自分も間に合えばあとから行く、と最後に言ってくれたルネッサと別れ、蒔風が部屋を出て行った。  
一瞬だけ静かになって、少しだけ心配するルネッサ。

「ふう……何事もなければいいのですが……」

P i P i

「ん？どうしました？イクス」

『えっと……来週学校で、授業参観という物が……』

バンツッー！

「ランスター執務官！……とつとと捕まえに行きますよこのゴミニ野

郎を!!」

「え？ちよ、ルネ!？」

「今日中に捕まえてさっさと仕事終わらせましょう!!」

「ま、まって？まだ情報がまとまってな」「ここです!!」「ナンデワカルノ!？」

「カン!!」

さあ、授業参観まであと三日。  
ルネッサ・マグナスの戦いが始まった。

.....

情報は得た。

と、言うかこれにすぎない。

時風が準備し、翌日には出かけていく。

目的地は次元世界オルセア。

内戦が今でも続く、無法地帯のど真ん中である。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



街の終わり・情報集め（後書き）

手がかりさがし、聞き込みじゃア！！  
足で探すのが一番でっせ！！

翼人関連からの情報は得られなかったが、兵器という面から簡単に  
来ましたね。

と、言うかこれが情報になるかまだ確定していませんが、いち  
るの望みをかけてですね。

さて・・・オルセアの設定、サウンドステージ聞き直して思い出  
さなきゃ！！

無かった気がするけど、一応聞かなきゃ始まらぬWWW

あと、何気にイクスはルネッサの元で暮らしてます。

あの後どう收拾つけたのか不思議だ・・・

次回、オルセアにゴー！

ではまた雑記！！

現在作者、仮面ライダーBLACKを順調に視聴中です。

これを見終われば作者は結構な仮面ライダーシリーズを見ていますね。

今のところ

仮面ライダーストロンガー（TVのみ）

仮面ライダースーパー1（TVのみ）

仮面ライダーZX

仮面ライダーBLACK（視聴中）

仮面ライダー真

仮面ライダーZO

仮面ライダーJ（仮面ライダーワールドも）

平成仮面ライダーすべて（劇場版・スーパーバトルビデオ込み、ネットムービーはキバだけ見てない）

ですな。

もうコンプリートできるんじゃないかという W W W W

このまま全部見てやろうか W W W W

と、いうわけでだからなんだという雑記でした W W W W

ではまた次回

## 悪い子登場

次元世界オルセア

数十年前から南部諸国での内戦が絶えない世界だ。

時空管理局もこういつた世界に公的支援を送ることで内戦を止めようとすることはしていたのだが、この世界はそれを拒否し続けているらしい。

時風たちが降り立ったのは、そんなオルセアの中でもまだマシに機能している場所の次元空港だ。  
ただ……

「Gate Open      Olserre」

正規の手段は踏んでいない。

「よつと……到着だな」

空港の隅、周囲から比較的にくい場所に、ゲートから時風が出て

きて、銃痕がいくつかある空港内の待合ベンチに座った。

その五分後、違う場所から今度はフェイトが、またその五分後にランサーがやってきた。

おそらく、空港にも内戦に組している人間はいるだろう。

そしてその人間は、この世界にやってきた人がどんな人間か、データをどこかに送っている可能性を考えると、律儀に航空券など買っていない。

そのデータから時空管理局やら「EARTH」やらの人間が来たと知られては、後々面倒なことになりかねない。

「まあこうやってきてるのも問題なんだけどね……」

あはは、と笑いながら、フェイトがこの方法を褒めるやらなんやらしている。

今回のメンバーはこの三人だ。  
当然私服で来ているし、適当なものを取って来たので上等なものはない。

こういった調査には執務官の仕事でなれているフェイトに同行を頼み、あと一人くらいはほしいと言ったところでランサーが逃げてき

たように駆け込んできたのだ。

おそらくは鬼<sup>カレン</sup>シスターから逃げてきたのだろう。

内戦が激しいのはこの世界の南部諸国だ。  
空港があるのは北部よりの地域。

ここから南部に入る。

「直接行ってもよかった気がするけどなあ」

「多分街には見張りがあるから急に出てきた人はばれちゃうし、出てくるところを見られるのはまずいよ」

幻術を張って周囲の意識を攪乱させたうえで、時風が車を出して三人がそれに乗り込み、荒野を南に進む。

そっちの方向に向かう車は一台もない。  
代わりに、その道の両脇には爆破でもされたような跡を残した、錆びた廃車が打ち捨てられている。

「で？これからどーすんだ？」

よく内容を聞かされていないランサーが、運転する時風に向かってそんなことを聞いてきた。

彼も一応、あの町での事件の話は聞いているのでそこは省き、ルネッサからの情報の話だけした。

「なるほどなあ」

「で、それがこじ」

そういうと運転席と助手席の間の、普通ならカーナビが取り付けられる場所から宙にモニターが現れてオルセアの地図を表した。

そこには目的地の青い点と、自分たちの車の位置を表す移動する赤い点が映っており、もうそろそろ南の地域に入り込むことを表していた。

「オルセアでバトってんのはこの三国。名前は……うげ、長くてめんどい。適当に右上を「バカ」左上を「ボケ」下を「クソ」と命名しよう」

「酷えな！」

「ちゃんと読もうよ……」「バルガソウスベラ・カラッソス」と  
「ボルボダロングス・ケルツツアーリン」と「クックレリオウデリ  
ユス・ソーベクラウン」でしょ？」

「じゃあ前後の頭文字で略して「バカ」「ボケ」「クソ」だな」

「か、変わらない……」

「ま、その方がわかりやすいわな」

自分たちが勝者だと信じて止まない指導者たちが、自国に偉大な名前を考えたならそれも対抗しあつてこんなに長くなつたらしい三国の名前を、便宜上適当に決め、話を進める。

地図を見るとこの三国は逆三角形の形をしており、それぞれを蒔風が言った通り右上、左上、下の三つに分けて所有している。  
今蒔風たちはとりあえず分かれ道がないので真っ直ぐに走っている  
ので、このままだと「バカ」と「ボケ」の間に入ることになる。

そしてトレヴィアの隠れ家というのが「クソ」の奥地にある遺跡らしい。

そこで彼は生活と発掘を同時に進めていたようだ。



「だから俺たちは「バカ」か「ボケ」かのどっちかを通過していか  
なきゃいけないわけなんだが」

「そつだな」

「まあ向こうがここを通る車を素通りさせてくれるわけもな、くッ  
ッ！！」

ギヤオツ！！

そこで蒔風が急にハンドルを切り、直進していたところを右に逸れ  
た。

するとあのまま直進していたら車がちょうどいたであろう場所に、  
ヒュルルルルルル・・・とミサイルのような魔力弾が飛んで来  
て爆発、地面をかなり吹き飛ばした。

「そおらきた！！」

「お？爆撃か？」

「このままだと・・・」

「「ボケ」だ！！」

その後、絶え間なく振ってくる爆撃の嵐を、時風が車を飛ばして一直線にばく進していく。

「こ、この車大丈夫!？」

「防弾使用だ!！」

「けどあれに当たったらひっくり返されちまうぞ!？」

爆撃のほかにも小さな魔力弾の一斉掃射も受けている車は、少しずつその形を変形させられながら「ボケ」の方へと突っ込んでいく。

もう少し、もう少し!！」

街の中にまで爆撃が来ないとは限らないが、とりあえず飛び込めば何とかなるかもしれない。

そう（実に行き当たりばったりな感じに）思った時風が、車のアク

セルを踏み込んでいく。

時速がどんどん上がり、国の中に入れる!!!

そのゲートが見え、ラストスパートだと時風がこれでマックスだ！  
！と思い切りアクセルを踏んだ。

すると

バキン！

そんな音と共に、時風の体がガクンと揺れ、同時にドンドン音のため  
て行った。

「ど、どうしたの舜!？」

「ふ、踏み込んだじゃった」

「え?」







蒔風たちが入ったのはバルガソウスベラ・カラッソス、略称「バカ」  
(命名・蒔風)だ。

門というかフェンスの扉というか、そこをとおって普通に入国する  
三人。

すると

「おい兄ちゃん」

「ん？」

そこに、四人くらいのヤンキーが突っかかってきた。

うち二人は肩からアサルトライフルを掛け、残り二人は豚でも解体  
するのかというほど大きなコンパットナイフをちらつかせていた。

そして、その真ん中にいた蒔風に向かってこんなことを言ってきた。

「俺たちやここの門番だよ。通りたきゃ賃金置いてきな」

明らかならみである。  
当然、彼らも門番などではない。

しかし

「あ、そうですね。いくらですか？」

蒔風は律儀にそんなことを聞いた。

その言葉に「え!？」となるフェイトとランサーだが、蒔風は至極普通だ。

まあ当然と言えば当然だ。

多くの世界をめぐり、戦ってきた彼だが、こんな地域に足を踏み入れるのは初めてである。

“No name”であった彼の世界では、こんな争い事はテレビの中か、小説、漫画の中だけだったし。

だから「ま、現実ならこんな門番もいるのかな」と変に理解してしまっただけのこと。

一方、蒔風の質問にぎゃははと笑いながら、男が応えた。



「そうだな。まず持つてる金目の物は全部出してもらおうか」

「普通に現金しかないが？」

「じゃあそれ全部だしな」

「あとそっちの女もよこしな」

金を要求し、さらにフェイトにまで目を付けてくるあたりは予想通りというかなんというか。欲望に忠実な奴らである。

「見ろよ。でけえ乳だぜ」

「顔も最高だ。いじめたくなってくるぜエ」

銃に肘を寄せ、それを持った二人がそんなことをコソコソと話している。

それをきいてフェイトが胸を押さえて真っ赤になるが、時風が肩にポン、と手を置いて気にすんなど言う。

「まあ君たち待ちたまえ。とりあえずフェイトをいじめたくなる気持ちもわかるが待つんだ」

「わかるんだ!？」

そんなことを言う蒔風にフェイトがええ〜!?!という顔をするが、まあ冗談だよな?と思いき直してランサーの方を向く。

ランサーは見事なフェイトの胸に向かってサムズアップしていた。フェイトは強く生きようと心に誓った。

「だがまあ、金はともかくこの人は上げられないな」

「あん?何お前逆らうの?」

「やられちゃう?やられたいの?」

「まあ渡してもぶっ殺しでしたけど!?!」

やっぱり……という顔をして、フェイトとランサーがどうしようもない顔をしてヤンキーを眺める。

だが、蒔風は少し顎に手を当てて考え、直後キラキラした目をして二人に聞いた。

「ねえねえ、俺からまれてんの?」

「なに期待感たっぷりでそんなこと聞いてんだよ」

「いやだつてさ、俺にこんな対応してくれる人は希少だよ？それにこんな状況は初めてだし！！」

今まで経験したことのない状況に、蒔風は好奇心バクバクだった。そして楽しそうな、実に楽しそうな顔をしてヤンキーに振り返った。

「うんうん、で？いくら払えばいいのかな？」

「あ！？だから全部出せつつってんだろおが！！」

蒔風の全くビビらない態度にイラついたのか、ヤンキーが大声を上げて喚きだした。

しかしそれすらも「うわー！テンプレ通りだー！！小説のまんま！！」とか言って楽しむ蒔風。

そして「よしよしわかったよ」といった感じで懐をまさぐって、そこからこの世界の紙幣を取り出して彼らの目の前に見せつけた。

「お、けっこー持ってんじゃん」

「ところで、君らはホントに門番なの？」

「……ぎゃっはっはっは！！そんなわけねえだろ。ツバ  
カ！！」

そういつて蒔風の手から紙幣を搔っ攫おうとするリーダー格  
が、その手は空を切る。

「んふふっだったら君らはただのカツアゲってわけだ」

「おい、それ寄こせよ」

蒔風がひょい、とリーダー格の手を回避し、紙幣を握らせない。  
それに対し、蒔風が笑顔のままてこう言った。

「おいおい……お金がほしいんだろ？恵んでほしいんだろ？だ  
ったら物乞いみたいにくださいって言えよ」

超DSだった。

にやにやと笑いながら、蒔風が言葉を続ける。

「俺はお金を上げる側。お前らはもらう側。お金貰うんだからあ、  
くださいって頭下げろよ。どうしたの？欲しいんだろ？哀れにも  
働くだけの能力がないからこうやってもらうことしかできないんだ  
ろ？ほらほらほらあ、人に頼むときには態度つてものがあるだろお  
？」

「でた。DSモード」

完全になら目線で、口だけがにんまりと笑う時風は悪役にしか見えないほどに悪い顔をしていた。  
悪い奴である。

それに対しヤンキーたちは、少しずつボルテージが上がっているよ  
うでナイフのグリップを握る手に力が入り、銃口を時風に向け始め  
た。

と、そのタイミングで時風がポイ、と紙幣を投げた。

パラパラと時風とヤンキーの間に紙幣が落ち、それをヤンキーたち  
は拾い始めた。

が、膝をついてそれに手を伸ばすと、ワイヤーでもついているのか、  
時風の手紙幣が戻っていく。

そして

「プ、プフー！そこまで這いつくばってお金が欲しいんですかー？  
プフー！……！」

噴き出した。

口に手を当て、目に涙をためながら。

「て、テメエ……アゴツ……？」

リーダー格が青筋を立てて、立ち上がって蒔風に掴みかかろうとする。

しかし、その行動は立ち上がったところで止まってしまった。

「おいガキ。調子のンなよ？」

それは、蒔風が銃をリーダー格の口内に、ゴツイ銃身を咥えこませたからだ。

銃口は44口径というハンドガンとしては大きい方。

「お、これが口に入るなんて、君は大きな口してるねー」

「あ、あが……」

「俺はともかく、俺の仲間にかよっかい出すなよ。ゲスなこと考えてんじゃねエバカ」

「は、はひ」

「うし、行ってよし」

その一言で蒔風が銃を降ろした。

それを見た銃を持った二人や、残りの一人が突っかかるうとするがリーダー格がそれを止めて手を出すと叫ぶ。



翌日、特にからまれることもなく、また国内を進む時風一行。

また車を出して襲撃されてはもったいないので（破壊すること前提）、今回は自転車を出して進む。

翼人は便利である。

「さて……今日は「バカ」の半分くらいまで来たんだが……」

「問題はどつやってあっちに入るかだね」

街をそろそろ抜けるところで、時風が地図を出して現在位置と目的地を確認する。

今はバルガソウスベラ・カラッソスの一番南の街の一番南にいる。わかりにくい表現だ。

「この先の荒野を抜けつと「クソ」に足を踏み入れるわけだな……」

「なんか土気下がるな。「クソ」に足を踏み入れる」とか」

「命名したのは舜じゃん」



そこら辺の木箱に座って、フェイトが突っ込む。

この先の荒野は基本的には「バカ」と「クソ」の戦闘地域だ。

今は戦闘は行われていないようだが、すぐ見える場所には銃器を持った男が数人いる。

無論、軍人ではないが。

「にしてもこいつらはなんでまたこんな戦ってんだ？」

「昔はいろいろあつたらしいけど、今は純粹に食糧が足りないみたいから、って聞いたぜ」

壁に寄りかかるランサーの何気ない質問に、地図を見ながら時風が応える。

内戦は長く続いているが、その指導者がいつまでも同じというわけではない。

ほかの国はともかく、今こっちの方の指導者は人口問題に頭を抱えていた。

一見して寂れた町で人数が少ないように見えるが、実は食料の需要と供給が釣り合っていないらしい。

つまり、食料を作る人間が少ないのだ。

しかもあのヤンキーを見て分かるように、内戦しかしていないこの国は戦うことしか知らない人間ばかりだ。

昔はそうだった知識人もいたらしく、このままでは国が飢え死ぬと提言していたらしいのだが……

「ま、昔の指導者つてのは本当に戦うことしか知らなかったらしくてな。しかも飢えなど気合いでどうにかしろツツーわけのわからん根性論で反論したらしい」

「飢えを知らなかったんだろっな」

そのままその提言者は国家反逆罪で死刑。

数年後にその指導者も飢餓で進んだために怒り狂った国民に殺されて死亡。

そして今、食料を奪おうとこの国は隣国に攻め込んでいるらしい。

しかも変なプライドもあり、施しは受けないとして管理局の支援は受けたくないらしい。

いらなるところだけ受け継いでしまったものである。

「だから昨晚も今朝も今も、こうして隠れて缶詰食ってるってわけ」

そう言う時風の背後にはいくつかの缶詰が転がっていた。  
これは後で地面に埋めるつもりだ。

「何はともあれ、この荒野を通らないことにはあっちに行けない」

「でも間違いなく見つかるよ？」

「見晴しいもんな」

そう、ここを通ろうにも、目立つ。  
目立つたら、間違いなく撃たれる。

次元世界ではあるので質量兵器（銃など）はないはず。  
しかし、一応こうして世界の壁はあれど一つの世界に内包された場  
所だ、あってもおかしくない。

そもそも魔法だからと言って非殺傷にしているわけがないから、当  
然当たれば死ぬ。

「どっしりよっか？」

「抜けること自体は可能だが、それやると向こうでの動きがなあ・・・

・・・  
「

トレヴィアの隠れ家を調べるうえでの障害は少なくしたい。  
その為には騒がれずに侵入しないといけないのだが……………

「……………よし」

蒔風が思いつき、そしてどっかりと座りこんだ。

「待とう」

「何を？」

「抜けるチャンス」

そんなのあるものかねエ、とランサーが頭を掻くが、大丈夫さと蒔風が応える。

「街中の店を見ると、食料品が少なくなってる。街にいる人たちはくたびれているが、目だけはキラキラしている」

「……………つまり……………」



時風が立ち上がり、民衆の中に入るぞ、と走っていく。

さあ、侵入だ。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 悪い子登場（後書き）

ヤンキーの絡みが楽しくてしょうがなかったWWW

さて、オルセアでの一幕です。

今回はかなり少なめにいきました。

よく見れば真ソニックのフェイトさん、最速の英霊ランサー、加速開翼の蒔風と、なんだかスピードメンバーに。狙ってなかったんだけどなー

直接行かなかったのは、そこがわからなかったからです。

空港なら写真からわかったから行けたんですが、トレヴィアの隠れ家は写真もないので。

第一章で行けたのは世界の導きがあったからということ。

そういえば出ましたよー！！

ガンバライドレジエンドレアのシャイニングアギトー！！

マジかっーいい

あと岩石大首領が出過ぎて吹いたWWW

まず最初に当たる

「やった」

二枚目が当たる

「まあまあ……」

カードショップでのガチャで当てる。

「ここに潜んでいたか」

友人とガンバライド！

「また来たか！」

後日友人とガンバライド

「また おまえか！」

計五枚も来ましたよ。

どういうことなの岩石大首領WWW

五人も来たら大変なことになるじゃない！！WWW

と、言うわけでこれから友人と遊んできますWWW  
今日は二千円かな？WWW



次回、突破

ではまた次回

レッドカモフラージュ！（前書き）

タイトルがギャグだWWW

## レッドカモフラージュ！

目の前で行われる戦闘。

相手の物を奪い、手に入れるための略奪。

生きるための、殺害。

目の前で行われているこの行為はそういう物だ。

数人が（おそらくは無人格デバイスストレージを構え、その他大勢は銃器を構えて突っ込んでいている。

銃から飛び出すのは魔力弾だ。

カードリッジシステムに近いものを使ったもので、使用者に魔力適性がなくとも、薬莢に込められた魔力が発射される武器。

相手も同じようなものを持っているようで、飛び出してくる魔法弾や砲撃魔法の色は少ない。

「バカ」の方は大半が黒ずんだ赤  
「クソ」の方の大半は鈍色だにびいろ

おそらくは魔力を持った者がそれしかいないのだろう。  
他の色の魔力も見えるが、ごく少数である。

「だから俺たちはこの戦いには参加しない。魔力光でバレる」

「助けないの？」

「指導者ども引つ張り出して説教してやりたいが、今回は別の目的があるし、人数も少ない」

「それにこいつはあいつらがバカやった結果の戦いだ。テメエらでケリつけなきゃなんねえんだろ」

「ま、それもある」

集団に飛び込み、真っ先に（「バカ」から見て）右の林に飛び込んで姿を消した三人がそんなことを話していた。

「林」というよりは「木々が集まった場所」と言った方がいいくら

いの大きさだが。  
野球場くらいの大きさか。

そしてこんなところにこんなのがあれば、当然両者とも畏は仕掛けるというもの。

実際、ここに来るまで一、三のトラップを抜けてきている。

今隠れているのは、時風が幻術を張っているからだ。

その中で、どうやって「クソ」の方へと入り込むかを話している。

「でもよ、この分だとアイツら全員顔見知りだぜ？」

「見慣れない顔があつたらバレそうだもんなあ」

「私は変身魔法は使えないし、舜の幻術で姿消していくの？」

「まあそれが一番だが・・・問題はあつちから見えないから魔法弾が飛んできたときが怖い」

「非殺傷じゃなさそうだもんな」

「だから」

「え？」



ここは「クソ」、つまりは時風達の目的地である国の医療班のいるテントだ。

医療、と言っても痛み止めに数の少なくなっている鎮痛剤をぶち込んだり、怪我を消毒して包帯を巻く程度しかできない、保健室程度の効果しか持たないものだが。

しかしそんな施設でも次々と担ぎ込まれてくる。

ここに連れてきても無駄な、どうあっても死んでしまう人間もいる。というかそちらの方が多い。

正直な話、そんな人間を連れてくる方が労力も人員も裂くのでほっといた方が効率がいいのだが、ここに何時連中はそんなことにも頭が回らない、もしくは考えられる状況じゃない。

と、そこに三つの人影が飛び込んできた。

「だ、誰か助けてくれ!!」

それは、全身真っ赤になった時風たちだ。

ランサーは腹部を真っ赤に染め、口からもボタボタと血をこぼしている。

フェイトは涙を目に溜め、肩から腕を力なくブラブラさせながら頭から血を流していた。

ちなみに髪は束ねて、男性に見えなくない顔をしている。

そして時風は二人に肩を担がれ、ズルズルと運び込まれてきた。

顔面に血をぶちまけ、もう死体同然のように見える。

右足はズルズルと引きずり、グラリと揺れる首が前後左右に揺れる。

「な、なにがあつた!？」

「森に引きずり込まれてズタズタにやられた!！」

「あいつらエゲツねエ・・・人間の仕掛ける罠じゃねエ!! あいつら俺たちを人間と思っちゃいねエ!!！」

地獄から帰ってきました、とでも言わんばかりのその姿にその場の全員が驚愕する。

だがそれも数秒だ。

すぐに助からないと知ると、そいつをあっちに置いてこいと二人にいい、助かる人間の治療(という行為)に専念する。

それを聞き、二人が「畜生あの野郎ども・・・こいつ寝かしたらすぐにアイツらぶっ殺しに行つて来らあ!!！」とか叫び、周囲の間も「やってやれ!!！」とか「仇を取つてやれ!!！」とかいつて送り





顔もそれである程度隠せたので、あの騒動と合わせてうまく通過できた。成功である。

「でもこれはこれで目立つっちゃっけ」

「しかもくせえ」

じーーーーーーーーー

そんな文句を言いながら、蒔風の方をじとー、と見る二人。

顔をゴシゴシと拭き、蒔風が二人のそれに気づき、たじっ、と下が  
る。

「え、えっと……わり」

「……はあ、まあいいけど……」

「いまさらおめえに文句言ってもなあ……」

「アンガトサンキュー」

「もうちょっと悪びれよ」

フェイトの髪についた、乾いてネトネトしたケチャップを摘み取り、ランサーの肩を拭いてやりながら、蒔風がシレッ、という。

と、そこでちょうどよく井戸を見つけ、圧水力でバスケットボールほどの球体で掬い上げ、身体をきれいにしていく。

「な？な？これで水に流してくれよ。あ、今うまいこと言った」

さして上手いことは言えてない

.....

「どうして、なんやかんやうまく？」（入国できた蒔風たち。

あとは目的地まで一直線だ。  
ルネッサにもらった地図では、トレヴィアの隠れ家は国の南にある  
砂漠地帯。その遺跡にあるらしい。

「だけど夜に砂漠越えは危険だよ？」

「ま、何が起こるかわかねえわな」

「そじゃね。じゃー今日はもうどっかで寝るか」

.....

「次の街までは行つとく？」

「賛成」

銃声が聞こえ、爆撃が飛んで来るかもしれない街に、宿などあるわけがなかった。

.....

- - - - -

「おい！なんだあれ・・・あんなアイツら持ってたのかよ!？」

「みる！！あいつらバルガの野郎どもじゃねエ・・・ボルボダロンの奴らだ!!！」

「俺たちが疲弊したとこ狙って来やがったのか!？」

「卑怯者のゲス野郎どもが!!!!！」

戦場で争う「バカ」と「クソ」の二国に、「ボケ」が攻め込んだ。た。

しかし、その兵器はいつも使用しているモノとは違うようだ。

数時間後、この戦いは、

- - - - -

翌日

国境の近くのあの町から移動し、少し内部に入ったところで宿をとった蒔風たちが、朝にチェックアウトして目的地に向かう。

車を出したのは蒔風だが、今はまた後部座席で眠ってる。

「運転すうよー？」とか眠気で舌もまわらない男に、ハンドルを握らせることだけは阻止した。

そして、三人は砂漠に一番近い街についた。

街の砂漠側はすでに砂に地面が侵食されている。

「舜ー？着いたよー？」

「ううん……おにぎりはネギトロで宜しく。あとファミチキ」

「ファミチキじゃないよっ。」

ここにあなたとコンビになるお店はない。

車を降りると、人の雑踏が聞こえてきた。

やはりここは戦闘地域から離れているからか、それなりに人も集まり、賑わっているようだ。

とはいっても一面に人、人、人……といったほどではないのが、ここが内戦地域であることがわかる。

この先に、手がかりがあるのか。

それはまだわからない。

もしかしたら何もなければかもしれない。

しかし、今は先に進むしかない。

装備を整え、蒔風たちは砂漠に踏み出す。

手がかりは、あるのか

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



## レッドカモフラージュ！（後書き）

入国成功！！

この内戦も何やら不穏な空気が？な話ですね。

なんだか大して進んでない気がするwwww

正直他にも侵入の手はありそうなものですが、これでいいだろ、と  
蒔風の独断で決定wwww

結果的にうまくいくのだから厄介ですねwwww

なにげにランサーもノリノリですし。

ケチャップぶちまけはマジでひどいです。お勧めしません。  
ベトベトしてかなわん。

最近UFOキャッチャーで遊んでいます。

店員さんにコツを教えてくださいましたら面白いようにとれるとれるww  
ww

この間も8つも手に入れましたよ。

まあ8000円は抱えいましたが、一つ10000円だと思えば妥当。

リラックマかわいいよりリラックマクッション。

次回で砂漠入り、うまくいけばトレヴィアの隠れ家に到着、  
ね？

ではまた次回で

遺跡爆発！！

砂、砂、砂、砂しか見えない。  
それしかない。

砂漠に踏み込んだ時風たちの目の前に広がる光景はただ砂ばかりである。

日光が上から時風たちを照らし、砂で跳ね返って下からも焼き付ける。

光に視界は眩むし、目印が見えないのでこまめに方角を確認して進み直す。

と、普通は三人共にキツイ状況なのだろうが……

「よ、翼人の翼はこういふのじゃない……」

「涼しくて快適」

「だな。よっ、さすが……！」

辛そうにしているのは蒔風一人だ。  
汗はただらだら、帽子をかぶり、ストールを顔に巻きつけている。

一方、フェイトとランサーは蒔風が開翼した翼を屋根にして、その影で平然としていた。  
翼がバサバサしていて、適度に涼しい風も来る。

こうなったのも数分前のこと、蒔風が砂漠に入って大変そうになっている二人を見て、提案したのだ。

もちろん、蒔風も大変なことは大変だったが、まあこの距離なら、と甘く見たのが運の尽き。

方向の確認、砂によるスピードの遅れで、思ったよりも時間がかかってしょうがないのだ。

最初の五分くらいは良かったが、そこから一気にツラくなってきた。しかし「到着するまで俺が何とかしてやんよ」と調子に乗ったことを言ってしまった手前、いまさら「やめていいか?」などとは言えない。



「フェイト・・・お前それ違・・・もういや（グテツ）」

そして、ついに遺跡にたどり着いた三人。

時風は岩を枕にして、顔にタオル掛けて倒れている。

この遺跡は、巨大な岩をくりぬいてできたような場所だ。

高さ三十メートルはあろうという巨大な岩に亀裂が入っており、そこから入ってすぐのところまで三人は休んでいる。

ちなみにここから遺跡は始まっており、この先に神殿のような入口が設けられてるようだ。

組み上げて作った、というよりは、もともとあった巨大な岩に穴があり、そこを削ったりなんだりで作った感じだ。

「こんな感じの遺跡、インディ・ジョーンズで見たぞ」

「あ、思った。そんな感じだよね」

「ジョーンズってのはなんだ？」

テレビとかでたびたびやる映画を思い出し、頭にタオルを置いた時

風が一人ごちた。

それにフェイトも共感し、映画に興味のないランサーが「なんだそれ？」と言う顔をする。

「映画だよ、映画。確か聖杯を巡った物語だったな」

「聖杯？」

「お前の知ってるのじゃなく、宗教的にマジもんのな」

「なんだよ」

こっちの方がすごい気がするのだが、それをなんだの一言で切り捨てる男、ランサー。  
流石である。

8446

「ま、あくまで映画さね」

「そうそう、この先にあるのはただの隠れ家だし……」

と、そこで踏み込もうとしたフェイトの足がピタリと止まった。

どったん？とフェイトに聞く蒔風だが、直後に理由がわかった。





数分後、蒔風は壁の中にあつた部屋に連れて来られていた。

おそらくはこの遺跡を作る際に使用された奴隷たちの住処だった場所だろう。

そしてそのまま残つたそれを、彼らが使っているというわけだ。

その中でも一番大きな部屋であることは、目の前のリーダーの部屋らしい。

リーダーの部屋と言っても、彼の個室自体はここ隣の隣にあり、広さも他の物と同じらしいが。

ただこの部屋は今行われていることや、作戦会議などで使われ、ほとんどの時間リーダーがいるため「リーダーの部屋」と呼ばれているというわけだ。

その部屋で、蒔風がリーダーに言う。

先に進ませてくれないか？と

特に縛られたり拘束されていないのは相手の余裕か、それとも自信か。

しかしここで争う意味はない。

通してくれるならそれに越したことはないのだ。

「…………お前ら、なんでオレらがここに住んでんのか知ってっか？」

「？」

「なんで遺跡の中じゃなく、わざわざここで生きてるかってことだよ」

「……………罨か」

リーダーが忌々しそうに言う。

この遺跡にはトラップがあるらしい。

今まで何人ももっと住みやすい中を求めて行き、そして帰ってこないか、帰ってきてても一部だけだったという結果しかないらしい。

「だから俺たちは奥にはいかない。ここでも十分住めるしな」

彼らは内戦で親を失った。

リーダーはこの集団の中でも古株だ。

そして放浪の末、この遺跡を見つけたらしい。

彼の同期はみんな死んだ。

親の仇を取る

こんな所より街に行く

街じゃだめだ、国を出よう

他の世界に行こう

そういつて飛び出したものもいたが、噂にもならないところを見ると、おそらく結果は変わらないだろう。

そして、彼はここに残って孤児たちを連れてきては一緒に暮らしていた。

遺跡を作るために連れてこられた奴隷が暮らしていたこともあって、湧水はあるし、食料も採れる。たまにオオトカゲが出てくるので、それを狩れば肉も食える。ここでは一通りの自給自足が可能なのだ。昔の人さまさまである。

そうしてそのまま残った者が、生活し、もはや一つの街になっているのだ。

「こんなところに来るやつはいない。武器は死んだ兵士・・・つつつてもいいのかわからないけど、そいつらからとった。ここはこの国じゃ一番安全だと言えるかもな」

そう言うのはリーダーで、現にここが襲われたことは一度もないよ  
うだ。

「はーん、じゃあ別に盗賊じゃなかったんか。すまぬ」

「いや、まああんな対応したら普通はそう思うだろう」

そんなことを言ってぺこりと頭を下げる時風。  
が

「だと言っても、俺はまだあんたらを信頼してない」

「え？」

いい感じに話がまとまりそうだったが、リーダーはまだ心は許して  
いないようだ。

その言葉にフェイトが気の抜けた声をだし、ランサーが説明した。

「この話が本当である証拠は何もねえ。こんな嘘言って適当に帰って、そしてここを奪えばかなりの要塞になるからな。それにもしかしたらオレらは「バカ」か「ボケ」の人間かもしれない。そう考えると、ホイホイ信じるわけにはいかねえってわけだ」

「じゃあ身分を明かせば？」

「それがいい方に転ぶかどうか、五分五分だろ？」

この世界は管理局の介入を拒む世界だ。

「EARTH」だから大丈夫、という保証はない。むしろない方が可能性は高い。

今ある状況から、下手にマイナス方面にはもっていきたくないのだ。

「じゃ、どうすれば俺たちはいいのかな？」

「……まあ、遺跡に行くのはいいい」

「ありゃ、いいの？」

「どうせ行っても死ぬだけだ。お前らが仮に帰ってこれたら、その時考えてやるよ」

「ま、確かに。でも中に抜け道があって逃げたらどうする？」





それはゲイボルグの先端の炎で、時風の獄炎で、バルディッシュのコアの光だ。

少し中に入り、この光が外に漏れないくらいの内部。思っていたとおりの内装である。

足元は砂まみれ  
両脇を石像が固めている

これが映画なら石像が動き出して襲い掛かり、足元の砂が落ちていくところだ。

「大丈夫だよな？」

「さあ？ま、落ちたら飛べばいいし、襲ってきたらぶち壊せばいい」

そういつて、奥に進んでいく三人。  
途中途中で人骨が見え、それは何百年以上も前の物だったり、ここ数年の物だったりとまちまちだ。

おそらくはトラップの犠牲者だろう。



「あちゃ〜、理樹連れてくればよかったかな？」

「ねエちゃんから貰った地図あんだろ？大丈夫かよ」

「だってこれ見てよ」

ランサーが地図もあるんだから畏ぐらい平気だろうと言っが、それに答える形で時風が地図を見せた。

フェイトも一緒になってそれを見るが、二人の顔が固まった。

「ここにトラップ。それを回避するとそこ以外の足場にもトラップ。飛び越えて行ってもその先にトラップ。どこもかしこもトラップ」

「ってことは……」

「とりあえず踏んでけ、ってこと？」

「鬼畜だ……」

どう選んでもトラップだった。

と、そこで時風がもうめんどくさいと「林」を取り出して三人を包むようにボールの形にバリアを張った。

まるでハムスターボール、というかまんまそれだった。

「理樹なら壁全部にバリア張れただけだな」

「これでも十分だよ」

「これだと落とし穴あったら落ちるけどね」

そういつてごろごろ転がしながら先を進む三人。

槍やら魔法弾やらが飛んでくるが、たいていはバリアに弾かれて消える。

8457

そうして歩くこと十分後

ここか、とランサーが呟く。

それは遺跡には似つかわしくない嚴重な扉だった。

金庫に使われるかのような扉だ。

ルネッサの話とも合う。





その間に蒔風は見つけたコンソールに手を当て、起動させていく。ランサーは奥の部屋に入り、何かないと物色していった。

「君たちだけ？お父さんお母さんは？」

「……」

質問されるも、言葉は発さない子供たち。奥にいる子は暗がりで見えない。

「そつちの子もおいで？外に出ようよ。危ないよ？」

そういつて、フェイトがむこうにいる子呼んだ。

同時、蒔風がコンソールであるモニターを開く。

検索事項は「兵器」「製造」

そこに、検索結果といくつかの画像が出てきた。

ランサーが奥の部屋を見ていると、壁を叩いた時の音が一部違う。

ためしに槍で突くと、ガラリと崩れて向こうが見えた。

そこには生体カプセルが七つほどあり……

「……え？」

それぞれの場所の三人が、全く同じ声を上げた。

フェイトが見たのは、暗がりの向こうから近寄ってきた子。  
今まで話し掛けていた子と同じ顔をした子ども。

蒔風が見たのは、モニターに映った、さっきの子ども。  
「マリアージュの能力、複製成功」と書かれている。

ランサーが見たのは、カプセルに浮いた三人の子ども。  
七つのうち四つはわねており、今フェイトの目の前にいるのはその  
四人だろう。

直後

「「「ツツ！！！」「」」

ドオオン！！！！

フェイトがバリアジャケットを展開させ、後退した瞬間に子供が爆  
発した。

どろりと溶け、液体のように変質し、一気に着火、爆発したのだ。

蒔風の背中に、子供が一人飛びついてきた。

目がグワツ！と開かれ、口元が真っ赤に光って、炎を巻き上げ爆発  
する。

ランサーの目の前では三つのカプセルの中の子どもの目がギョロロ  
と開かれ、ガラスをぶち割って襲い掛かってきた。

「うあっ・・・！！舜！！ランサー！！」

「ツツ　　ガアッ！！大丈夫だ！！そっちは！？」

「ガキどもが出てきやがった。こいつら人間じゃねエぞ！！！！」

部屋から飛び出し、各人が確認しあう。

蒔風はとっさに開翼し、翼で爆発から身を守ったらしい。  
フェイトも頬にすがついているが問題ない。  
ランサーは爆発されていないので無事だ。

「マリアージュの子ども版！？」

「トレヴィアはスカリエッティのテロに参加する予定だった。こいつらを使うつもりで、研究中に死んだんだ！！」

しかし、七体はすでに製造中で、うち四体がここの維持に動き、三体は眠っていたのだろう。

七体全員がいたということは、ここまで侵入していた人間は一人もいなかったということらしい。



「子どもを模した爆弾・・・管理局員が近づいて保護したところで施設ごとドカンか・・・なんてことを」

「えっげつねえな!？」

「効果的だ。現にさつきもフェイトは危なかった」

そんなことを言っていると、ガシャア!と言う甲高い音を立てて残ったことも五人が蒔風たちに突進してくる。

うち三人は裸だが、手に持つ凶器がそんなことは気にさせなくなる。

まともな武器は持っていないのか、そこら辺にある岩や鉄パイプを握って突っ込んでくる子どもはかなり怖い。

「ランサー!!!頼む!!!フェイト行くぞ!!!」

「うん!!!バルディッシュ!!!真ソニック!オープン!!!」

《Limit Break・Open Wing》

それを見て、蒔風とフェイトが背を向け、ランサーが槍を投げるように構えて魔力をためた。

フェイトは背中から魔力を翼のように展開し、バルディッシュをラ

イオットにして片手に持つ。  
蒔風も加速開翼を準備してランサーの左に立った。

「行くぞ!!」

「いつでも!」

「どーぞ!!」

「突ゲイき穿ボルグつツツ!!死翔の槍!!」

ギャツ……オオツツ!!!!!!

ランサーがゲイボルグを放つ。  
それを同時に、蒔風とフェイトがランサーの脇を抱えて全力疾走して出口に向かう。

そして、後方で大爆発が起きた。

あの子供たちにゲイボルグが命中し、一気に爆発させたのだろう。  
そしてそれだけ爆発させれば、当然この遺跡は崩れる。

だから、加速開翼と真ソニックで、一気にこの場を突破しているのだ。

「ランサー！！大丈夫か！？」

「密室やべえ！？！？！すげえ勢いで炎が来てんぞ！！！」

「やっぱり無茶だったんだよお（泣）！！！」

ひーん、と半分笑い半分泣くフェイトだが、当然諦めているわけではない。

そうして走っていると、出口の光が見えた。

.....

「だめだリーダー！あいつらここまですぐでくんどー！！！」

「ち.....おいお前ら」

遺跡の近くまで後退したリーダーたち。  
彼らは今襲撃を受けていた。

内戦は、急に終わりを告げた。

勝者はボルボダロングス・ケルツツアーリン。

陰惨な戦争の次に訪れたのは蹂躪だった。

ボルボダロングス・ケルツツアーリンは、ほかの二国の領土に押し入り、奪えるものは奪っていった。

それは何もおかしくはない。それが戦争だ。

しかし、彼らが奪っているのは財産や食料ではなく、「人間」だった。そして今、ついにこのことも嗅ぎ付け、襲い掛かってきているのだ。

逃げるものは逃げた。

しかし、大半の人間はここに残った。

理由は、リーダーが声をかけた「彼ら」にある。

「おいお前ら」

リーダーがもう一度声をかける。

かけられたのは、一番上でも十代前半ほどの子どもたちだ。

「この先に隠し洞窟がある。危ないからいつも入るな、って言うてる場所だ」

「う、うん」

「今日は特別に入っている。中にはたくさん飯もあるはずだ。そこで静かにしてなさい」

「お、おじちゃんは!？」

「オレは……あのうるさい人たちを少し懲らしめてくるから」

ダメだよ!!

死んじゃうよ!!

一緒にいて!!

いやだいやだ!!!!

リーダーの言葉に、年が上の方の子どもたちが泣く。

まだ小さい子はいつもはだめと言われた場所に入れると聞いて、ウキウキしている。

現状を理解していないのか、それともこんなことは理解したくないのか。

しかし、リーダーは子どもたちを抱えて、遺跡の入り口わきにある隠し洞窟に押し込んだ。

実際には抜けられない穴なのだが、大きいために「洞窟」と呼んでいる。

あそこなら地下に入っているから大丈夫だろう。

もともとこういうことに使うつもりだったから、強化もしてある。

よほどの攻撃じゃなきゃ崩れない。

一緒にいてと言う子供たちを押し込み、リーダーと四人の男、二人の女が、銃を担いで迫る敵をにらむ。

リーダーの武器はストレージデバイスだ。

若草色の魔力が、そこにたまっていく。

「弾は何発ある？」

「今日までにあんたが込めてくれた分、500発」



リーダーの雄叫びと共に六人の仲間が吼え、敵に向かって突っ込もうとし

「あつぶなあい！！！脇に伏せる！！！」

背後の遺跡の中から、蒔風たちが飛び出してきて、彼らをひつつかんで入口の脇に引きずり込んだ。

直後、遺跡の入り口である穴から、一気に炎が噴き出して目の前のクリスタルどもをまとめて焼き払い、消滅させた。

「！？！？！？！？！？」

「うおお！？すげえ！？」

その炎が止むころには遺跡の入り口は二倍くらいに広がっており、目の前の敵は少しの欠片と、どろどろに溶けた何かになって残らず消えていた。

「……………えつと……………」



「大丈夫か！？いやあすまん。遺跡焼いちゃった」

「いや、それはいいんだが……助かった」

「？」

そこで、時風が事情を聞く。

内戦が終わったこと。

地獄が始まったこと。

見たこともない兵器を使っているということ。  
守るため、彼らは応戦していること。

敵はまだ来るということ。

「……わかった」

全てを聞き、時風が外に向かう。

「戦って……くれるのか？」

その蒔風に、リーダーが問う。  
蒔風が笑いながら答えた。

「そんな上等に考えんなよ。オレらだってこのままじゃ帰れないからな」

そういつて外に向かう三人。

見たことのないような兵器。

大いに心当たりがある。

t o b e c o n t i n u e d



遺跡爆発！！（後書き）

遺跡では何もわからなかったけど、これからわかりそうですよ！！

蒔風

「オルセアに手掛かりはあったが、遺跡にはない、か」

フェイト

「じゃあこの敵、っていつのが？」

ランサー

「あのクソ機関らしいな」

その通り！！

さあ皆さん、がんばっていきましょう！！

やべ、これから授業だwwwwww

では今回のあとがきは短めに

次回、翼人対抗兵器

ではまた次回

青年、来る

「トライデント・スマッシュャー！！！！」

「オラオラオラア！！」

「ゼアアアあああ！！獄炎弾！！！！」

砂漠

その遺跡、巨大な岩の前

蒔風たちが飛び出していくと、そこには軍団がいた。  
全身がクリスタルできており、明らかに人間じゃない軍団だ。

しかし、その姿には見覚えがある。

「おい、あれシグナムじゃないか？」

「あつちはキバもいるよ……後ろの方にははやても」

「アーチャーもセイバーもいやがる……どういうことだ？」

そう、それは「EARTH」メンバーの模造品とでもいうべきものだ  
だった。

それなりの攻撃で砕け、中から赤い液体を流して止まりはするのだが、技量が本人のそれに近い。  
しかも、蒔風たちに対応し始めているのだ。

「こいつら……」

「ちょっとやばいかも!？」

ランサー、フェイト、蒔風と、もう一体一体に攻撃はしていない。  
広範囲に対する攻撃で、一気に薙ぎ払っていく。

だがそれでも減って行かない軍勢。  
ジリ貧だ。

「フツ……こうなりゃ一気に……!？」

蒔風が雷旺砲でこちら一面を吹き飛ばそうとする。が、その瞬間五、六体のクラウドらしき模造品が飛び掛かり、蒔風に襲い掛かってきたのだ。

「うっそだろ!？」

その模造品に、蒔風が解放して組み上げた龍虎雀武（現在は先端が偃月刀）を片手に握り、迎撃していく。

まず一体目を朱雀青龍刀で突き刺し、二体目をハイキックで蹴り碎く。

そのまま回転して先端の青龍刀を落として白虎釵に取り換え、ブンとまわして釵を飛ばして二体落とす。

そして最後の二体を、朱雀槍で貫き、串刺しにして投げ飛ばした。

「けっ、大したことねえ。所詮は模造品!」

そう意気込む蒔風だが、内心ではそうもいってられない。

まず、この数だ。

一人の模造品が一つではなく、さっきのクラウドのように何体もいる。







「雷旺砲！！！！」

弩<sub>下</sub>ッ！！ゴガガガガガガガガガガガッッ！！！！

蒔風の放つ雷旺砲が、左右に薙がれて模造品を軒並み消し飛ばしていく。

ここが砂漠でなかったら、おそらく地図を書き換えなければならなかっただろう。

飛び掛かってくるのも、走ってくるのも、地面に潜っていたのもまとめて消し、それが済むころには激しい砂埃と鉄の臭いしかなかった。

「……………！！ツツ、ハア、ハア……………フいゝゝ」

「大丈夫？」

「問題ない」

そうして撃ち終えた蒔風が手をプラプラさせながら答えた。

もう目に見える敵はいないはずだ。砂埃が、風に払われていく。

そして、その「はずだ」は見事に外れた。

「あれは……!?!」

「……冗談勘弁」

そこに残っていたのは、セイバーの模造品と、銀の強化服を着た人間。

そしてみたことのない人間が六人。首にあるリングを見ると「あの街」にいた住人と同じように死人兵士だろう。

「あの武器は受けるな……絶対にだ!!」

その模造品セイバーがもっているのは、いつもの剣ではなく刀だ。そう、恐ろしい切れ味を持つ、あの刀。

それと同じ物を、後ろの六人も持っている。

強化服は銃だ。これもあの町の物と同じだろう。

「へ、俺のゲイボルグを斬れんなら切ってみろっての」

「大丈夫。対策はあるから」

「特にヤバいのがセイバーと強化服だ・・・あれ、G4だぞ」

蒔風の忠告に、二人が頷く。

そして、覚悟を決めて走り出した。

当然、蒔風もそれと共に行こうとする。

しかし

ザシッ

「・・・」





考えながら相手の攻撃を受け、時風が後回し蹴りで踵を青年の腹にめり込ませ、その体を吹き飛ばした。

今はフェイトたちだ。

「あとで相手してやる!!」

そう叫び、フェイトの元へと走る時風。

ランサーのゲイボルグは宝具だ。

そして、宝具を破壊する術など、人の身を越えた大魔術でしかない。

そう考えると、フェイトを助けに行くほうが優先される。

そのフェイトは、何とかして刃を回避して相手の首輪を狙っている。しかし、この刀は受け流すことも逸らすこともできないのだ。



触れたらそのままルリと斬られる。  
スパツ、という表現すら許されない切れ味。

そして、セイバーに対しては完全に回避のみで対応している。

(この剣技・・・受けられなきゃどうしようもないよー!!！)

相手の実力は、フェイトに切迫している。  
ツインソードの魔力刃も、何度切断されたか。

魔力で包み込んでも物質化した瞬間に寸断される。  
雷で攻撃しても、相手の動きで回避される。

だったら

「真ソニックフォーム!!行くよバルディッシュ!!」

《Yes,sir》

ドツツツ!!!

砂漠の砂を蹴り、フェイトの姿が金色の閃光となって消え失せる。

その刃が、一人目の首輪を切り落とす。

その光景にほかの二人が首を振って探すが、そうしているうちに二人目の破壊する。

あと一人とセイバー！。

周囲の動きが鈍い。

どうやら相手はこの動きについてはこれないらしい。

三人目。

背後から刃が首輪を捕え、切断して地面に落ちる。

その瞬間、フェイトは信じられないものを見た。



死人兵士はフェイトを捉えきれていない。  
が、一人だけ静かに佇んでいた。

一人、二人とフェイトが敵を倒し、三人目に差し掛かった瞬間、セイバーの顔が動いた。

視線が向く。

視界に捉える。

「フェイトオ!!!」

しかし、フェイトは止まらない。止まらない。  
振り下ろされるライオットブレード。

ガァン!という音と共に、セイバーの左小手がその刃を受け止めた。  
同時、右手に握られた刃が振り上げられた。

フェイトが反射的にライオットブレードのもう一本でそれを受けて  
しまおうとする。

だがフェイトもこの行動を取りながら気づいていた。

これでは防げない。



それに対し、時風もこたえようとする。

なんつー重い一撃だ

しかし、声は出なかった。

スパッ！！ブシュウツツ！！

「オ……ガッ……」

「!?!」

時風の左肩から、右腰に掛けて、一太刀の刀傷が出来ていた。

刀は受け止め、防いだにもかかわらず、その先に続く斬撃は止まらない。

「か……そういえば……腕のある奴が持つと、斬撃がホイホイ飛ぶんだっけ、な!!!」

そう苦しそうに言いながら、時風がセイバーの腹に一撃蹴り入れ、空高く打ち上げて一気にカタを付ける。

「十五天帝!!」

ビッ!!..!..!..!..!

そして、放り投げた十五の刀の先端から銀白の光が伸びセイバーに直撃する。

一本、二本、三本と命中していき、そしてそれが今度は十四、十三と収束して数を減らしていく。

最後には極太の一本となり、ついにセイバーを吹き飛ばした。

「ツツ.....」

「舜!?!」

「俺のことはいい!.....早くランサーのところだ.....!..!..!」

「わ、わかつ.....!?!」

息の切れる蒔風に寄るフェイトが、ランサーの援護に行こうとしたが、その言葉が詰まる。

さっきまで蒔風が相手にしていた青年。

その青年が、一本の剣を握って突っ込んできたのだ。

蒔風がとっさにフェイトを突き飛ばして、獅子天麟の面でそれを受け止め、そして吹き飛ばされていく。

斜め45度の角度にすっ飛ばす蒔風が、遺跡の上部に命中して内部へと姿を消した。

青年が、それを追って飛び出した。

「あつ！！ツ~~~~！！こっち！！」

それを見たフェイトだが、蒔風なら大丈夫だろうという判断を下したのだらう。

それに、今追って行ってもしょうがない。彼女はランサーの援護に向かった。





にランサーへと向かってきた。  
銃の威力は、あの町で見たものと変わらないようだ。

だからランサーも弾くということはない。

撃ってきたレーザーを機動力で回避し、その首を落とそうと槍を振るう。

G4がその槍を地面に倒れるようにして回避し、ランサーの腹部に銃口を向けた。

槍を振ったまま回転し、その場を移動するランサーがそのレーザーを回避し、足元のG4に向かって、串刺しにするように槍をおろす。が、G4は後転してそれを回避、回転しながらトリガーを引き、レーザーをまき散らして少し下がった。

そのタイミングで、ランサーがゲイボルグの先端に魔力を込める。

一撃必殺の「突き穿つ死棘の槍」

しかし、それを溜め切る前にG4からの銃撃がそれを阻んだ。

いくら少ない魔力でいいと言っても、やはり溜めの時間は必要だ。

それを削られてしまったては、宝具は打てない。

「クソ……」

舌打ちするランサー。

G4には魔力感知の装置でもついているのか、こちらが溜めはじめると無茶苦茶に妨害してくるのだ。

しかも装甲を感じさせないくらいに身軽だ。

速いわけではないのだが、回避だけはしっかり取っているのも憎らしい。

「ランサー……」

「お、ねエちゃん……あつちは？」

「舜が受け持つてる。問題ないと思うよ」

「そうかい」

そこにフェイトが合流してきた。

ライオットを構え、特に前置きもなくG4に向かっていった。

一瞬で背後に回り、その首を落とそうと振りかぶるフェイト。

しかし、G4は銃口のみを脇の下から後ろに向け、フェイトに向かって発砲した。

一撃で必殺技クラスの威力を持つ銃だ。

フェイトは瞬間的にバルディッシュを大剣にしてそれを受けたが、魔力刃にひびが入って、身体が後ろに下がっていく。

その隙にランサーが再び法具を放とうとするが、砂の中に腕を突っ込んだG4が、隠してあったのか四連ミサイルランチャーをガボツと取出し、ランサーに向かってぶっ放した。

「イイ!？」

それに冷や汗を流して動き始めるランサー。

G4を中心にして円を描くように、回り込んで走っていく。

と、放たれたミサイルの先端がパカリと開き、そこからさらにロケット花火のようなものが噴き出して、逃げるランサーの位置を追尾していく。

ロケット花火と言っても威力はバカにならない。

ランサーの走った跡に次々と火柱が上がって行き、砂漠の砂を吹き飛ばしていく。

そしてランサーがフェイトと合流し、ハーケンセイバーで弾をすべて撃ち落とすまでそれは続いた。

「無茶苦茶やりやがるぜアイツ!?!」

「G3-Xに似ているみたいだけど……」

「面白ええじゃん。楽しくなってきやがったぜ!!!」

「……まあね」

バトルマニアの二人に、なんだか火がついてきたらしい。

多彩な武器と言ってもいつかは尽きるはずだ。

そこまで持っていき、一気にカタを付ける。

そうして、改めて二人が武器を構えると、G4が何かを取り出した。

それは手のひらサイズの小さな長方形の箱。  
大きな、いや、あれにしては少し巨大だ。USBメモリは通常あんな大きさはじゃない。

ベージュ色の外装に「W」と書かれたメモリ。

そして、それが起動される。

《ウエポン!!》

「あん？」

「あれは・・・ガイアメモリ!？」

メモリがG4の首筋から中に入って行き、その形を変えていく。

さて、諸君はこんな感想を持った事はないか？

「変形してるけど、これ一体どこから出てきたんだよ」というロボットの、一昔前のテレビで見たことはないか？

この変形、というかなんというか、それはそんな感じだった。  
ガシャガシャとG4の身体のいたるところから兵器が飛び出し、ド  
ンドンその体が大きくなっていく。

山のように積み上がり、下からも押し上げ、G4の身体が上がって  
いく。

G4自身はその兵器に下半身を吞まれ、山のてっぺんから少し下の  
あたりにいた。

「おいおい……マジかよ」

「これは……」

それはもはや要塞のようだった。

銃口、砲口が一斉に彼らに向けられる。

唸りを上げる鉄の音が、こいつの笑い声に聞こえた。





ぶつかり合う剣と剣。

十五天帝と相手の剣が、全く同じように光り、呼び合っている。

「これは……呼び合っている!?!」

「……」

青年は答えない。

しかし、はっきりしたことがただ一つ。

相手の剣は、世界四剣だ。

t o b e c o n t i n u e d

## 青年、来る（後書き）

はい！！また新しい兵器出てきましたね！！、な翼人兵器の回でした！！

剣と銃は今まで出たものです。

セイバーのクリスタル兵士はコピー品ですね。

これは日常編での最後にちよいちよいあった奴のと同じです。

イメージはディシディアファイナルファンタジーのイミテーション。

G4は敵が手に入れたデータを基に作られた装甲です。

さてさて中身は死人か生者か

敵は一体どれだけのデータを有しているのでしょうかね。

さらに組み合わせる「兵器」の記憶を宿したメモリ。

最悪の組み合わせをどうぞ！！みたいな。

今回出てきた青年は、ちょっとだけ出ていた検体Yの青年です。

当然意思などないです。

途中に出てきたのは当然ショートヘア大好き外道野郎ですwwwwww

このキャラはリュウガさんからもらったキャラです!!

ありがとうリュウガさん。

配役だけで何も決まっていなかったから楽ですよ!!! (オイコラ

次回、G4と青年、それぞれの戦いをどうにか書いていきます!!

ではまた次回

## 砂漠の死闘

### 世界四剣

それは世界を股にかけて存在する剣。

剣は所有者を認め、その所有者の生涯とともにある。

ある剣は勝利をもたらし

ある剣は世界を統べ護り

ある剣は人々の傷を癒し

ある剣は人々の心を開いた

うち二つは我々も知っている。

天剣・十五天帝

聖剣・エクスカリバー

そして、今三つ目の四剣が現れた。  
その名は

「神剣……ヴァルクヴェイン？」

時風がふと言葉を漏らす。

目の前の剣の、その名前を。

癒しの剣、浄化の剣。

しかし、だからと言ってなんだというのだ。

癒せる、という事とは脅威でないことにはならない。



落ちてきた手榴弾（バスケットボールの大きさ）が、遠慮容赦なく爆発し、周囲に破壊を振りまいた。

「ちよっ!?!」

「城壁相手にしたことはあったがよ、これはさすがに初めてだあな  
!?!」

相手の猛攻（猛撃、といってもいい）を受けて、ランサーとフェイトは砂漠を走り、飛び回っていた。

猛烈な爆撃の間をぬけ、ランサーは走りフェイトは飛ぶ。

バルディッシュを振るい、ハーケンセイバーを弾幕のようにつも飛ばし、さらにトライデントスマッシャーで背後の三点を一気に攻める。

しかし、要塞の背後にも目があるのか相手は反応、迎撃してきた。  
ガキョン！と砲口が三つ、内側から伸びてきて、そこから冷凍砲  
が発射されてきたのだ。  
更にはそれを取り囲むようにガトリングが四門、こちらも一斉掃射  
されてきた。

その弾丸にハーケンはすべて掻き消え、スマツシャーは二本とも凍  
結して砕け散った。

無論、フェイトの魔法には雷が付加されている。  
しかし、電気はすべて地面に流されているために効果がない。

「クツツ！！！！」

冷凍砲撃を回避し、避けようのない弾丸はすべて電磁を織り交ぜた  
魔力バリアで逸らしていく。

正面ではランサーが砲撃の隙間を縫って要塞へと飛びついて行って  
いた。

その山を一気に駆け上がり、G4の目の前へと到達し



「ウグオツっ！？火炎放射器！！？」

G4の周囲の隙間から吹き出してきた火炎に押し返されて地面に着地する。

直後、熱を纏ったG4が即座に自分へと冷凍砲を撃って冷却する。熱疲労でバキバキと兵器にヒビが入るが、即座に新たなものが飛び出してきて意味がない。

むしろ砕けた鉄片などを爆破で飛ばしてきて、散弾のようにして来ている。

「くそツたれ・・・近づけねエ、攻撃が効かねえってんじゃ、どうしろってんだよ」

「本体を狙えば・・・」

「相手もそれがわかってるみてえだけだな」

「だよね・・・」

そう悪態をつく二人だが、相手は待つてなどはくれない。

要塞の下段から、回転ノコギリのアームが飛び出してきて二人へと襲い掛かってきた。

それをランサーが受け止め、フェイトが切り落とす。  
しかし「ピピッツ！」という音がして、その切り落とされたアームが爆発した。

フェイトがバリアを張って防御、その威力に二人が後退する。

要塞の腹の部分がグパリと開き、太陽光線を集めて一気に打ち出した。  
てきた。

瞬間的にランサーがフェイトを突き飛ばして飛びのくと、その直線状の砂漠がドロドロに溶けて鉛細工のようになる。

そうしているところにロケット砲が撃ち込まれ、避けたところでトリモチ爆弾が彼らを捕えようと襲い掛かってきた。  
フェイトがトリモチを焼き焦がして無効化しても、またも現れた巨大なアームが彼女を掴み、ブンブンと振り回してしまう。

「ツツ・・・あ・・・!?」

その勢いに呼吸が出来なるフェイト。  
するとその腕が止まって、要塞からガキヨンと二股の槍のようなもの  
が突き出てきた。

その先端にどんどん電気が溜まって行き、二つの磁極によって鉄塊が打ち出される。

「なっ！？レールガン……」

「させるかア……！」

ギャギイ！と、そのレールガンの根元にゲイボルグが突き刺さり、根元が傾いてその方向を少しだけ変えた。根元では少しでも、先端では大きな傾きだ。

フェイトが必死になって首を逸らし、そしてレールガンが彼女の顔から二メートルのところを通って行く。

そしてランサーがアームを切り落とし、着地と同時にフェイトが要塞の中腹を斬り裂く。

ギイイイイイイイ……ギョゴオン

そんな金属がきしみ、砕けるような音がして要塞が一瞬揺らぐが、そこもすぐに治っていつてしまった。

無限に兵器を生み出していくG4。

もはや、個人の持つ戦力では勝てない。

「ツツアオア！！突ゲイき穿ツつ！！！！」

ギイイイ！！ドドドツツ！！

痺れを切らすランサーがゲイボルグを放とうとするが、そこに耳を砕こうとでもするかのような高音と共に魔法砲撃が放たれた来て地面を吹き飛ばした。

そして触手のようなアームが二本出てきて、そのハサミのような先端がガバリと開く。

その二本のアームに、魔力が凝縮されていき、巨大な球体となって集束されていく。

「集束魔法！？」

「俺たちの使った力丸々ぶち込んでくる気かよ！？」

叫ぶランサーだが、それだけではない。

「こいつって内戦地区だったよね？」

「おっ」

「で、みんなデバイスとかカートリッジの銃とか使ってたから・・・  
・・・！！！！」

集まる魔力は、彼等だけのものではない。

この地で行われてきた戦争。

そのすべての重みが、押し掛かってくる。

.....

「オオオオオオオオおお！！！！」

ガッ、ギイ！！

時風の十五天帝と、青年のヴァルクヴェインが交差して遺跡内で火花を生む。

ぶつかり合って、鏖競合う。

そうして拮抗する両者だが、時風が青年に蹴りを入れてその隙に剣を弾きあげる。

青年の腕が上がり、そこに時風が拳を叩き込んできた。

が、青年はあっさりと剣を手放し、その拳を手刀で落とし、肘鉄を顔面に叩き込む。

「ガッ!? つてえゝ・・・な!!」

それを掌で受けたが自分の手の甲が当たった時風が、青年の足元を払う。

それを小さく飛んで回避した青年は、時風の胸にそのまま蹴りをぶつけて後退させる。

後退した時風に、地面に刺さった神剣を抜いて斬りかかる青年。

が、時風がそこで目をガッ!と開き、その剣筋を見切って上体を逸らした。

そして素通りしていく青年の腕を横から掴み取り、壁にガンガンとぶつけてから外に向かって投げ飛ばそうと腕に力を込める。

しかし青年は投げられてしまふ、といつとこゝろで地面に足を付け、めり込むほどに踏ん張る。

そうして、振り回す側と回される側が反転し、時風の体が壁に向かつて投げ飛ばされていった。

「ツツ!? オオ!!! アツツ!!!」

バフオア!!!

壁に激突し、その先に飛ばされそうになる時風は、開翼して思い切り大きく羽ばたくことでその勢いを止めた。

その風で遺跡内の小石康永巻きあがり、青年の全身を叩いていき、目が細められた。

その一瞬、時風が一気に青年へと突っ込んでいき剣を振るう。

しかし

ドゴオッシ!!!

遺跡に大きな穴が開いて、そこからいくつもの刃が飛び出して行き、  
蒔風を外に押し飛ばしていった。

飛んできた刃は、エネルギーではなくキッチンとした物質だ。

形は、鐔も柄もない剣。

上下のどちらもが切っ先となっている。

発生源は、神剣ヴァルクヴェイン。

その一振りがいくつもの刃を生み、ザアッ!!と蒔風に放たれていったのだ。

「ツツ・・・世界四剣はどれもが「多剣」ってのは聴いていたが、  
こういうことか」

そういつて、蒔風が右腿と左肩に突き刺さった刃を掴み抜く。

どろりと血が出てくるが、身体強化の力を回して止血する。

痛みや怪我はなくならないが、とりあえず失血はしない。

蒔風は十五天帝を分解し、「風林」「火山」だけを握って青年へと



突っ込む。

青年が剣を振るい、そこから刃が掃射のように飛び出してきた。

一振るい30本と言ったところか。

それを二回、三回と続け、蒔風を落そうとする青年。

「風林火山」は演舞のように動き、手数で相手を責める十五天帝の剣だ。

バトンのように手の中で回し、旋回、上昇下降を繰り返して青年への攻撃範囲に入る。

そして思い切り振り上げ、まっすぐに二刀を一気に振り下ろした。

青年は剣を横にしてそれを受けるが、蒔風がそのまま前転するよう  
に回転し、反対側の刃を叩きつける。  
その衝撃で青年の膝がぐらりと崩れ、さらに回転して蒔風が最初の  
二刀をもう一度叩きつけた。

蒔風にとってはそれが本命だったようで、遺跡上部にいた二人は、  
そのまま最下層にまで床を砕いて突っ込んで行った。

-----

.....

土煙がはれる。

そこにいたのは、青年と蒔風の二人。

ギリギリという音がして、両者の剣がせめぎ合っているが、何もその音はそこからだけのものではない。

「.....のッ.....!!」

「.....」

蒔風の言葉が齒の隙間から洩れ、その剣を青年が受け止める。

「強いじゃないかい.....けどな、俺だってまだまだ!!」

ドオッ!!

蒔風の背中から風が吹き出し、開かれた翼がさらに大きく開いて力

を発散させていく。

翼人の最大ブースト。

その押し込む力と背中からの排出の勢いで、一気に青年を攻めようとする時風。

しかし

「（ガクンッ）え？・・・な!？」

突如、その翼の開き具合が小さくなった。

みると、青年が何らかの力を発揮しているかのように、その手がうつすらと光っていた。

「翼人・・・封じ!?!いや、これは・・・!!!!!!」

ヴウン、ドオアッ!!

驚愕する時風だが、そんなことを気にしている間にヴァルクヴェインがさらなる刃を生みだして、時風を一気に押し飛ばす。

「世界干渉による翼人の抑圧!?!こいつ「渡航者」か!?!」

渡航者

世界を渡る者

科学技術などに全く頼らず、自らの力を以って世界の壁を越える者のこと。

翼人でなくとも、

そういった力を持ったものはまれに存在する。

おそらくこの青年もそういった人間なのだろう。

岩の壁を突き破り、砂の大地に時風が飛び出して驚愕するのもつかの間、青年がさらに剣を奮って刃を飛ばしてくる。

十五天帝を使って弾く時風だが、先の戦闘と今の抑圧で力が落ち、剣が次々と弾き飛ばされて手から離れていく。

そして、ついに

「うわアアアアアアアアアアアアアアアアああ……!!」

蒔風が刃に埋まる。

砂漠に突き刺さっていく刃は止まることなく襲いかかり、文字どおりの剣山となって蒔風を埋めてしまった。

数秒の静寂。

そののち、剣山から腕が出てきた。

蒔風のだ。

刃が擦れ、金属と金属がぶつかる音を鳴らしながら、蒔風がその山から出てきた。

全身に切り傷があり、出血も止められない。  
さらに砂漠の日射と、金属に囲まれているせいでの照り返しやこもった熱で意識が遠のいていく。

「あ……く……おお……」

その時風に、青年が剣を構えて突出してきた。

「ツツアあ！！十五天帝エエええエエアあアア！！！！」

ガシャア！！とその刃を押しつけ、さらに傷を増やし、切り込みを深くしながら、時風も飛び出していった。

まるで墨をふんだんにつけた筆で描くかのように、時風が走った跡には血が残って行っており、そしてすぐに真っ黒な跡となって砂漠にアクセントをつけている。

集え！十五天帝！！

言葉にならない叫びを時風があげ、その手にすべてが集結して異形の大剣となる。

開け！！翼！！

もうこれ以上開きようのない翼に発破をかけ、さらに開こうとする  
蒔風。  
しかし、翼は力を発揮しきれていない。

そして

ガキイツッ！！

剣がぶつかり合う。

その一撃で、蒔風の手から十五天帝がはじけ飛んで遠くへと消える。

ズツ

神剣が蒔風の右肩に切れ込みを入れ

バアッ！

そのまま左腰にまで振り抜かれた。

ザラアツッ！！

そしてその後を追うようにしていくつも刃が全く同じ部分を切りつけていった。

後続の刃が斬り、そしてまたその後続が、後続が、後続が、後続が

「ゴフツ……」

蒔風の体が、ズシヤリと地面に落ちた。

力なく開かれた腕

握られた拳がほどけ

膝がもう体重を支えていられない

血が思ったより出ないのは、もうすでに出しようがないからだ。

《連れて来なさい》

青年の首輪から、そんな声が聞こえてきた。

蒔風に、青年の腕が伸びる。



.....

「受けきれんのか!?!」

「無理だね」

「逃げられるか!?!」

「無理」

ランサーの言葉に、フェイトが立ちつくして答える。

圧倒的な魔力。

この内戦での魔力がすべてこの化け物に集まっている。

いくら優れているからといって、個人が太刀打ちできる魔力量をすでに超えている。

阻止しようにも、猛撃で止められる。

逃げようにも、回避しようにもその範囲が広すぎる。

もしも、これを相手にできるとしたらそれは

「じゃあ、あの魔力奪ってやるっか？」

人の範疇を越えた翼人<sup>モウ</sup>だろう。

「!？」

「か、一刀!？」

二人の背後に現れ、声を発した男。

蒼青の翼人、北郷一刀

その彼が、手にレイジングハートを握ってその矛先をG4に向けた。

「絆で借りたこの力で」

ゴォ・・・

「どっちの集束が強いか、勝負だ!!!」

そして彼もまた、集束を始める。

頼りになる戦力が、やってきてくれた。

.....

「!?!」

ドンドンドンン...!  
ザァッ!!

青年が時風に腕を伸ばし、直後に魔法弾が飛んできてそこから下がった。

「大丈夫ですか!？」

「舜さんを……ここまで……!？」

飛んできた弾丸は、ルネツサによるシルバーダガーからのもの。

驚愕の声は、倒れる彼の頭を抱えあげたティアナのものだ。

「用事が済んだので来てみたら……」

「一刀に一緒に来てもらって正解だったみたいね」

薄れる意識の中、時風が口を動かす。

『や……める……』

しかし、彼女らには届かない。

彼をここまで追い詰めた敵に、立ち向かうことがどういふことかは十分わかっている。

だが、だからと言って引けるものか。  
目の前の犯罪は、そしてもしかしたら保護すべきであろう対象を、見逃すようならば執務官にはならない。

「私の教官せんせいにここまでして、許せないわね」

クロスミラーシユを構えるティアナ。  
時風に防護バリアを張るルネッサ。

頼りになる戦力が、やってきてくれた。

しかし、勝ち目はあるのだろうか。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 砂漠の死闘（後書き）

久しぶりに時風ボロボロシーンを描いて楽しかったです！！

さて、今回出てきましたるは「神剣・ヴァルクヴェイン」

設定をば書きますと

特性としては「癒し・浄化」の力を持つ剣。

しかしやはりそこは世界四剣ですから、強力であることは変わりありません。

認識としては「治癒も、浄化も、あるんだよ」ということです。

出来る、というだけでそれだけでないんです。

そしてその力は「多刃」です。

振るえば矢のようにいくつも飛んでいき、斬りつければその後からも連続して切る。

どちらも戦闘で使っていましたね。

世界四剣はどれも「多剣」である、というのは

十五天帝・・・見たまんま、十五剣一对の剣  
エクスカリバー・・・強力な一本の光線 一つにまとめ上げた一撃  
ヴァルクヴェイン・・・振れば多くの刃を生む

ということですよ。

ちなみにまだ出てきていない一本は

????・・・その名を冠し、特性も同じ剣(同一のものではなく派  
生剣)がある。

ということですよ。

仮面ライダーみたいな感じですね。

いくつも有りますが、その大元が四剣になっているのですな。

さて、助けに来たのは一刀にティアナ、ルネッサ。

彼らは勝てるのだろうか!?

次回、戦闘終了・・・まで持っていけるといいなあ



ではまた次回

## 見誤る戦力

砂漠の真ん中で、膨大な魔力が渦巻いている。

その魔力を奪い合うように、二者が集束魔法を展開していた。

一人はG4、一人は一刀

「集束は周囲の魔力をかき集める魔法だ。つまり相手と同時にこれを行えば、単純な魔力の奪い合いになる」

8537

そう呟いて、一刀の翼が大きく開いた。

周囲を渦巻く様々な色の魔力が、一刀の魔力光をベースに次々と集まって来ている。

G4にいったん集まっていた魔力も、一刀に吸い上げられるかのよ  
うに消えていく。

ギシイイイイイイイイイイイイ！！！！

その光景にG4が怒り咆哮のような音を上げ、一刀たちに向かって銃口、砲口、切っ先を向け、一斉に撃ち放ってきた。しかし、その攻撃はすべて一筋の剣閃に斬り裂かれてしまう。

「これでよろしいか？」

「サンキュ、凜」

その剣閃は、凜によるもの。  
声が掛けられた時一緒にいたので、ついてきてもらっていたのだ。

そして

「集束完了」

ギギヤオオオオオオオオオ！！！！

「フレイカーキャノン集束魔法砲撃、発射」

ドオツツ！！

一刀の言葉と共に、蒼青の光がG4を要塞ごと包み込んで弾き飛ばしていく。

その光の中でガイアメモリが飛び出し、砕け、欠片も残さず消滅した。

そして、G4の体がバチバチと火花を上げて、ガシャア！と砂漠に投げ捨てられる。

腕だけがまだ戦おうとバタバタしているが、ほかが全く動いていない。

しかし



銃弾が飛び出し、青年に向かう。

が、青年はそれを剣で弾き飛ばして一気に接近してきた。

「!?!? 速い!?!」

ガキイ!!!!

その速さに驚愕するも、振り下ろされた剣をクロスミラーージュのダガーモードで受け止め、銃口を青年の腹部に向け発砲するティアナ。パパパパンツツ!!と青年の体が若干くの字に折れるが、その顔にダメージを受けたという感じはしていない。

しかし、その崩れた体勢をティアナが足払いで押し倒し、銃口から紐のような魔力を発射して青年の体に巻きつけた。そうして地面に転がる青年だが、足を回し、胴体を軸にして回転、ティアナを蹴り飛ばしてから勢いで立ち上がる。

だが青年の脚に手ごたえはない。

蹴り飛ばされたティアナの姿がゆらりと消え、青年の背後からオレンジの弾丸が迫りくる。

それを後ろ蹴り上げですべてかき消す青年だが、それもまた幻影と消える。

「?.....(ドオツ!!)!?」

そして、疑問を頭に浮かべた彼の足元からクロスファイアが飛び出してきて、真下から彼に向かって襲い掛かった。  
その隙にルネッサがバインド魔法を重ね掛けし、さらに拘束を強化する。

「行けた？」

「と、思います」

ティアナがフェイクシルエットを解くと、さっきまでそこにいた彼女らが消え、五メートルほど横にずれた位置に現れてきた。

砂煙が晴れる。

当選そこには、バインドにつかまった青年が倒れて.....

「……え？」

「そんな!？」

いなかった。

その体にバインドや拘束魔法の束縛は一切なく、クロスファイアの弾丸をすべて手で受け止めて握っていた。

ギョルギョルギョル、と回転するオレンジの魔力弾を握りしめた青年が、それを潰して消滅させる。

「うそ……」

魔力弾や魔法砲撃を、素手で弾く人はいる。  
掴んで投げる人だっている。

今この世界には魔力以外の力もあるのだから、そういった人が多くいるのは別に驚くことではない。

しかし、至近距離から、しかも真下からの魔力弾を、素手で受け止めて握れるかと言われるればそれができる人間はそうはいない。



現に彼女だって、至近距離の魔法を受け止める人を見るのは初めてだ。

青年がヴァルクヴェインを握り、ティアナたちに振るう。無数の刃が飛来して、彼女たちに襲い掛かった。

「ツツ!? 走って!!! ルネ!!!」

「はいッ!!!」

迫りくるその刃を、走り回って回避するティアナ。

撃ち落とすなんて考えは即座に捨てた。  
あれはその範疇を超えている。

しかし、この砂漠でそんな回避がしきれぬわけがなく

「っ!!! 追い付かれっ!!!?」

ティアナとルネッサに、刃が追い付いていく。

砂に足もとられて、うまく走れない。

ドバウツツ!!!

が、その瞬間、青年の足元から爆発したかのように、一気に砂が吹き上がった。

見るとそこから少し離れた場所で、蒔風が息も絶え絶えに地面に手を当てていた。

畳返しを、相手の足元で跳ね上げさせたのだ。

大地は砂なので、本来立ち上がる地面ではなく、地雷のように砂が巻き上がったというわけだ。

しかし、その一回で蒔風の頭がぐらりと揺れ、倒れそうになるのを踏ん張って耐える。

それを見て青年が砂の中から飛び出し、蒔風へと向かっていった。  
剣が振るわれ、飛来した刃にルネッサのバリアが破壊される。

「……………へ……………」

それを見て、蒔風が笑う。

その先にある死など気にしていないという顔で。

「逃げる、ティアナ」

そう短くつぶやき、蒔風が叩きつけるように地面に手を降ろす。  
青年の足元の砂が次々を吹き上がって行くが、全く止まることがない。

軋む足に鞭打って蒔風が下がるが、振るわれた刃が襲い掛かる。

肩に刺さり

腹に刺さり

そこを押さえようとして腕に刺さり

顔に飛んできたのを蹴り飛ばして足に刺さり

ドドドドッ！という重い音がして、時風が地面に落ちる。

そして、止めと言わんばかりに青年が力の限り剣を振り下ろした。

時風の両脇からティアナとルネッサが走って寄ってくるが、間に合わない。

それどころか横薙ぎに振るわれた剣からの刃で、三人まとめて串刺しだ。

「舜さん！！」

「くっ……そお……！！！」

声を張り上げる二人だが、時風はすでに言葉を発さなくなっていた。

振るわれる剣。

その軌道上に現れ、射出されていく刃

そして





その弾丸の向こうには、ガトリングを握る。  
地面から引つ張り上げたものらしく、抱えるたぐいのものではない。

ガシャン、とスクラップのような音を立ててG4が一步前に出る。

「まだ……立てるのか……!?」

「そんな馬鹿な……!!」

「G4システム」は装着車が死体あつても動き続ける装甲だ。

その概念は「人体が装甲を纏う」ではなく「装甲を動かすために人体というパーツを用いる」という物だ。

だから中が死体でもここまで動くのはおかしくない。

一刀も前にそんな話を蒔風や津上から聞いたことがあるし、フェイトも警察関係で氷川から聞いたことがある。

しかし今の衝撃は、そして外見は、完璧に破壊するものだったし、されたものだった。

と、そこでG4がベルトに手を当てて上部のボタンをガツ！と押し込む。

直後に

《cast off》

という機会音声响起、その答えを提示してくれた。

「な……」

「キャストオフだと!？」

G4のゴツイ装甲が肩、腹、胸、腿、脛と解除され、最期にマスクの頬が盛り上がり、そのすべてが弾け飛んだ。

飛んできた装甲を避け、一刀たちがその姿を見る。

《Change PROJECT G4》

その体つきが非常にストレートなものとなり、腕や足周りがすっきりしている。



顔も丸いものから縦長になって、スマートだ。

それは「装甲」から「強化スーツ」へと表現を改めるほどの物だった。

「マジかよ……!？」

ドオツツ!!

驚愕する一刀だが、その腹部にG4の拳がめり込み、そのままフェイトやランサーの間を抜けて砂漠にめり込む。

その後で《CLOCK UP》《RIDER PUNCH》という音声が聞こえてきた。

速い。

それは自らの発した音を超えるほどに。

一刀に駆け寄るフェイト。

直後に斬りかかるランサーと凜。

「みんな来て!! うん……うん!! 翠さんと霞さん、あと加賀美さんたちも!! 早く!!」

フェイトが通信機に向かって叫ぶ。  
もはやこまねいている場合ではない。

自分たちがここにいれば、それを察知して翼人ならゲートを開ける。  
すぐに来れるだろう。

だがもう一つの戦いでは、すでに間に合っではない。

.....

「しっかり……しっかりしてください!!」

「あ、ああ……そんな……そんな!!!!」

ティアナとルネッサが蒔風の体を抱えて声をかける。  
揺るだけで、命が尽きてしまいそうな風体だ。

むしろ生きていられるのは翼人の力が微弱でも効いているからか。

ティアナとルネッサも、大なり小なり怪我をしている。

いくら砂が跳ね上がったと言っても刃を完全に止められるものではない。

いくつかはガードしたが、やはり何箇所には刺さり、数十か所を斬られている。

『ふむ、彼女らのデータを少し向上させておこうか……さあ、連れてきなさい』

それを眺める青年の首輪からそんな声が聞こえ、蒔風たちへと足を進める。

ティアナやルネッサがそれを阻もうとするが弾丸は弾かれ、首を掴まれて投げ飛ばされる。

そして身体が赤く染まることも気にせず、蒔風の体を肩に担ぐ青年。

「連れて……いかせないわ」

その背後に銃口を向け、ティアナがヨロリと立ち上がる。

そのティアナに青年は答えない。

しかし、代わりに首輪が応えてきた。

『困りましたね。我々は「EARTH」と事を起こす気はないんですよ。ただ開発するだけですから』

「そうやってその人を連れていくなら、見逃さないって言ってんのよ……!!」

淡々という男の声に、ティアナが凄みを聞かせて唸る。  
だが、相手の態度は変わらない。

『我々は「ある兵器」に対抗するモノを作ろうとしているだけです』

「ある兵器……?」

『ええ、兵器とは対になって初めて価値があります。毒と薬のように、対応するモノがあればこそ、両国に売れるのですから。それを作る過程での戦いという実験。そして検体を集めているんです。彼はちよつどいい』

「させないって……言ってるのよ……!!」

左肩が上がらず、右手だけでクロスミラージユを一丁握り、青年に狙いを合わせるティアナ。

しかし、手が震えてうまく狙えない。  
もうそんな体力もないのか。

『どうやら手足の腱が切れかかっているようで。運が悪かったですね。まあ、すぐに治療すればきれいに治りそうですよ』

「このッッ……!!」

それを聞き、ティアナが周囲に魔力弾を展開する。  
それに対して青年が剣を握り、ティアナに振り下ろそうとするが

ガシッッ!!

その腕を、青年の肩の蒔風が掴んだ。

一瞬だけ青年の腕が止まったが、すぐにその腕から力が抜けてダラリと下がる。





そのうちにカブトがパーフェクトゼクターで腹部を斬りつけて押し付ける。

するとガタツクエクステンダーが背後から現れ、ボード状になってG4を押さえつけた。

と、そこでハイパークロックアップが切れる。

動きを封じられたG4はすでにいくつか喰らったダメージのせいか、複数個所がすすけており、装甲にもひびが入っている。

《FINAL ATTACK RIDE DE DE DE  
DECADE!!》

そのG4に、止めとばかりにディケイドのファイナルアタックライドが発動する。

が、G4のどこにそんな力が残っているのか、ガタツクエクステンダーを跳ね上げ飛ばしてそのキックを回避した。

そこに振るわれるフェイトの大剣。



両腕でそれをガードするが、ついにその装甲が弾け飛んでG4の体が地面を転がる。

「『ゼアツッ！！』」

と、その火花を上げる右腕に霞と翠の斬撃が命中し、一撃目で切れ込みを入れ、二撃目で腕を切り落とした。  
さらにセイバーのエクスカリバーが胸を貫き、引き抜かれて五体が揺れる。

ピガガガガガガガガ！！！と異常な電子音を火花を散らし、G4が魔力をため込むランサーに向かってクロックアップでの妨害をしようとするが

「させつかよ！！！」

それを背後から一刀が掴みかかって止めた。  
暴れるG4だが、無理がたたったのかベルトは煙を噴き出し続け、ランプが異常に光っている。

「その速度で回避されたら大変だからな！・・・ランサー！！」

「おう・・・その心臓、ようやくと貫き受ける！！突き穿つ！！」<sup>ゲイ</sup>

「（ドコッ！）ウオッ！？ランサー！！！！」

「<sup>ホルグ</sup>死棘の槍ウア！！！！」

バキイイイイ・・・！！！！！！！！

G4が一刀の拘束から逃れ、走り出そうとしたがもう遅かった。  
ゲイホルグはその装甲の心臓部である頭部とベルトを破壊し、その<sup>メモリーチップ</sup>機動を停止させた。

勢いで一步、二歩と足を進めるG4が、まるでオブジェのように動きを止め、やがて完全に停止した。

戦いは、終わった。

しかし、失う物は大きい。

彼らの追跡が始まる。

t o b e c o n t i n u e d

## 見誤る戦力（後書き）

G4が無双しすぎてヤバイwww

もう少し戦わせたかったです、もう一話は長くなってしまったので断念しました。

兵器だからまた出てくると思いますし、その時をご期待！？

ティアナさんたちじゃどうにもならなかったという。

誰も悪くない。

しいて言うなら「蒔風なら」という考えが甘かった。

そして何気にいた凧さん。

本当にスピード野郎ばっかだ（セイバー除く）www

連れて行かれた蒔風。

なんかギンガみたいな感じですね。

改造されてしまうのだろうか！？蒔風君！！！！

次回、内戦後のこの世界、そして追跡

ではまた次回

## 国のその後と

次元世界オルセアの内戦

それはボルボダロングス・ケルツツアーリンの突如とした猛進で終わりを告げた。

彼らの持ち出した兵器は他の二国とは比べ物にならないもので、二国の兵士を撃破して進行していったのだ。

当然二国の戦力もこれに立ち向かったが、勝てるはずもなくあっさりと占領されてしまう。

そして、人間狩りが始まったそうだ。

様々な年齢、男女、人種に関わらず連れ去られた。

今はそれも終わっているが、すでに連れて行かれた人数は、百人が両手の指で数えても足りない。

「そんなことになってんのに、オレらはこうしてる場合なのかよ？」

「おばあちゃんが言っていた。国と言う字は、「口かこい」があり、「王」

がいて、そして小さな一点がある。そしてその小さな点をきちんとした場所におかなければ、国として成り立たない、ってな。」

「一人は小さな力だけど、それがなくして国には成らない、ってことか」

「そう思うなら、メシだ！！食べることは人を良くすることだからな！！！」

そうして併合された一つの国で、天道たちが炊き出しをしていた。

人間狩りが終わったあと、残った戦力が「ポケ」に踏み込んだらしい。

しかしそこにはまともな街も、国も、ありはしなかった。

街に人はおらず、家の中に入ると何人もの人間がぶっ倒れていたそうだった。

原因は、主に飢えと病気だ。

それを見ていい気味だと笑う者は少なくなかった。しかし、あの遺跡のリーダーがこう叫んだ。

「こういう国にしたのは、誰だ？こうなったのは、本当に彼らなのか？何かが違うば、こうなっているのは俺たちだぞ？お前も誰かに助けられたことがあるなら、今すぐやるべきことがあるんじゃないのか！？」

その一言で、全員ではなくとも数名が動き始め、そしてそれが波紋となって広がりつつある。

戦闘で逃げようとした指導者や隊長などと言った人間も死んでしまったので、こういった人々を引っ張れる人間を、皆求めていたのだろう。

これをカリスマというのだろうか。

結局、三国とも人民が少なくなって一国ではやっていけなくなったので、三国併合して新たにスタートするらしい。  
乗りかかった舟と言うことで当面は「EARTH」が支援し、時空管理局も手を出してくれるそうだ。

「ごめんなさい。私たちは何も・・・」

「いや・・・あんたらが来たから、俺たちは生き残った。こうし



て国を立ち上がらせられる」

フェイトがリーダーの男に頭を下げ、リーダーもフェイトに頭を下げる。

「あの男はどうした？連れていかれたんだろっ？」

「いま、仲間が搜索してます」

「そうか・・・見つかるといいな」

「そうですね」

そういつて、会話を終わらせる二人。

一人は搜索に、一人は指導に、それぞれ向かっていった。

.....

「ルネ、少しは見えてきていいのよ？」

「いえ、それはまた今度にします。この国はこれから、何度も来れるような国になるので」

「そう・・・ね」

蒔風が青年に連れて行かれた場所。

そこでティアナ、ルネツサが肩から腕を釣って話をしていた。

他にいるのは、士、一刀、セイバーの三人だ。

「わかりそう？」

「難しいですね・・・」

「はぁ・・・アツチィ」

そこで、三人が蒔風を連れ去った青年の跡を追うべく痕跡を探していた。

ちなみに一刀は試したが駄目だった。

士は一目見て「無理」と断言。

そして最後の頼み、セイバーが今試しているのだ。

何を？

四剣のつながりをだ。

「さすがに無理かなあ？」

「エクスカリバーも十五天帝も世界四剣つてのだ。他の世界でも、共鳴できるかもしれない……って海東が言ってたぜ」

「相手がわかってるならできなくはないと思うんですが……ん？こつちでしょうか」

エクスカリバーを握り、右に左にクイクイと揺らすセイバー。それを土が指を絵の額のようにして片目で眺める。

「題名「宝探しの王」」

「馬鹿なこと言ってないで土さんも何かしましょうよ……」

「つつたつてよ。今はその王様しか取っ掛かりがないんだからどーしよーもないだろ」

「だけど・・・」

「それに、相手がなんだろうと、一度捕まるつと、時風がそうやられると思うのか？」

「そうですね・・・」

.....

時風の体が、部屋の中に持ち込まれる。

部屋は正方形。

壁には衝撃を逃すための凹凸がある。

中心に椅子があり、時風がそこに座らされて脚を椅子の足に、手を後ろに回して固定される。

部屋の明かりは壁の下から二十センチくらいのところにある非常灯のような物だけだ。

数名の男と青年によって固定された蒔風。  
男たちと青年が部屋を出る。

するとヴィーン！という起動音とともに部屋がほんの少しだけ振動した。

それと同時に、蒔風の体の傷が少しずつ、本当に少しずつだが、回復に向かっていった。

それを見て、別の部屋の男が部下に指示を出す。

「その調子で戻してあげなさい。ただし抑圧をゼロにはしないで」

「はい」

部下の数名がレバーなどを弄り、蒔風の力に対する抑圧を徐々に緩

めていく。

.....

翌日

「EARTH」ビル

そこに、数名のメンバーが帰ってきた。  
向こうに残っているのは、セイバーと二刀、士の三人だけだ。

そして、そのホールで甲高い声が上がっていた。

「舜君をそのまま一人にして、連れて行かれちゃったってどういうこと……？」

「な、なのは……」

「なのはさん……」

「ティアナもフェイトちゃんも執務官でしょ！？なんで……なんでもいつもあの人だけ……！！！！」

「おい高町のねえちゃん！！それくらいにしろ！！」

フェイトとティアナに、なのはが掴みかかって叫んでいた。

いつもの彼女とは違うその風体に、ティアナは恐縮しフェイトは泣きそうになっている。

そのなのはをランサーが引き離し、壁に押し付けて怒鳴った。

「俺だってあいつらだって、全員が全力で戦っていた！！その結果敗北し、連れて行かれた！！これ以上何か言うんだってんなら、それは俺たちと、あいつの！！戦士の矜持を馬鹿にしたと見るぞ！！」

「でもそれで連れて行かれたんだったら戦士も何も無いじゃない！！！！」

「だから今でもセイバーたちが夜通し手掛かり探してんだろぅが！！あの状況で俺たちは全力を尽くした！！まだ何か言うなら、いくらお前でも敵とみなす！！」

その言葉になのはが息を荒くして言い返そうとするが、その顔が次第に歪んでいき、くしゃくしゃになって涙を流し始めた。

「そんなこと……わかってるよ……」

そして、ランサーの腕が緩められて地面にへたり込む。

「わかってる……わかってる……みんなが頑張つて、今も必死になってくれるのは……わかってる……だけど……やっぱり……」

それを見て、フェイトが肩を抱えてともに泣き、ティアナがその光景を見て拳を握りしめた。

「必ず、見つけ出します。絶対に」

拳からは、血が垂れている。



「みなさん」

と、そこに冨とともに長岡が何枚かのファイルを手にして、やってきた。

「少女が、目を覚ましました。限られますが、話もきけますよ」

ここで、一つ解き明かされ始める。

最初に戻って、あの街で何があったのかが。

t o b e c o n t i n u e d

## 国その後と（後書き）

特に先には進みませんですね。  
なのはさんを取りみださせてみました。

国その後、その頃の蒔風、これからの「EARTH」、そして目覚め。

あの街で何があったのかを次回で書いていきましょう!!

ときに・・・オーズって出しているのでしょうか？  
自分としては、映画を見るまで出しにくいんですよ。コアメダルと  
かアंकのこととかありますし。

でも出したい!!  
出すつもりだったけど、映画まで待てない!!

もしかしたら矛盾が出てしまつかも・・・それが怖くて出せない  
です。  
チキンです。

だして・・・いいかなあ？WWW

ではまあそこら辺はまだ先になりそうですし、展開ももしかしたら  
映画後になるかもしれないですし！！

では、今から法事で名古屋にドットラハイ

ではまた次回

## 綺堂唯子

「EARTH」の中にあてがわれた彼女の部屋。

外一面がガラスになっており、街が一望できる開放的な部屋だ。

その扉が開かれ、入ってきたのは三人。

取り調べ担当としてティアナ、あの街を直に見た矢車、そして、彼女を診ていた長岡である。

三人が入ると、景色でも眺めていたのか少女が窓辺で振り返ってきた。

少女はこれから女性という域に踏み込むくらいの年で、ティアナと同じくらいだろうか。

服は真っ白で、ワンピースのような、診察服のような形をしている。なびいたスカートが日光の中を泳ぎ、とてもきれいな、まるで絵画を切り取ったかのような感覚になる。

「あ……長岡さん……」

「大丈夫ですか？」

「はい……」

そう言つて、少女がベッドに座る。

それを向い合せになるようにして、ティアナが椅子に座り、長岡が少女の横に座る。矢車は壁に寄り掛かった。

「話を聞かせ……いえ、話せますか？」

「……最初に、これだけは教えてください」

「……なんでしょう」

「私の街は……どうなりました？」

「……」

「俺たちの見たうちじゃ、生存者はあんなだけ。何名かが行方知らずだ」

「そう……ですか」

矢車の言葉に、そう言って少女が顔をうつ向させる。

「大丈夫ですか？」

「はい……ごめんなさい。大丈夫です」

そう言って、目に少し溜まった涙をぬぐい、少女が顔を上げた。

「綺堂唯子、きどう ゆいこ 19歳です。あの街の事……お話します」

.....

あるところに、街がありました。

その街は、長い長い一本の道の途中にありました。

ここを通る人の休憩所として、一つのお店が立ったところから大きくなったそうです。

そして、数十年前までは「大きな町」としてあたりにも知られる場所となっていました。

そんな町が、今知られているような「大きな街」になって行っただけが、十八年前にやって来ました。

ある会社の研究機関が、ここに研究所を設けることにしたのです。

その研究所の人たちも住むそうなので、街は一気に大きくなると聞き、そして実際にそうになりました。

街の人たちはより豊かになって大喜びです。研究所からの公害や騒音といった被害もなく、すぐに町の一部になり、溶け込みました。

その様子を見ながら、少女・綺堂唯子は育っていきました。

街が大きくなると犯罪も増えましたが、研究所の人たちが作ってくれた道具ですぐにつかまりました。捕まった彼らは研究所での手伝いをさせられ、しだいに街の警察のようになってきました。

そうして十年と少しが経ち、彼女が小学校の高学年になった頃。

彼女の学校に研究所の人がやってきて、同じクラスの男の子を一人、研究所に呼びました。

このころすでに「研究所の人たち」と言えば街の平和を守るヒーローだったので、男の子たちはその子を羨ましがりました。

8583

「オレ、かっこいいヒーローになるんだぜ!!」

彼とは隣の家だったので、彼女は男の子からよくそんな話を聞きました。

それからも彼は研究所に通い続け、そうして八年もの時間が過ぎま



した。

彼女と彼はその間も、男女間が離れていくという年になってもたまには一緒に遊んでいました。

本人たちは腐れ縁と言ってますが、傍から見ていると完全に付き合っているように見えます。

そしてそのお話の中で、彼がたまに研究所の中での話をしてくれるのです。

「本当は極秘だっって言われてんだけどな」

そう言って話してくれる彼は本当に楽しそうです。

誰にも言っではいけない秘密を知っている楽しさと、それを話してしまうというタブーを踏むのが楽しい年頃なのでしょう。

そして彼女もまた、その話を聞くのが楽しいと感じていました。

「ね、あそこで何やってるの？昔ヒーローになるとか言ってたけど」

「ん？今でも変わらねーよ。俺はあそこでヒーローになるんだ」

「じゃあピンチになったら助けにきてよね」

「うちの道場で稽古してんだから自分でどーにかしろ」

「ちょっと、レディーのピンチに駆けつけるのがヒーローでしょ？」

「レディーがいればな」

「ムカツ・・・まあ？あんたに助けられるほど弱くないしね、私」

「小学三年生に一本取られる高校三年生が何を言う」

「うるさい（ぽか）」

「アテ」

しかし、一年前のある日。

研究所から帰ってきた彼はいつもと様子が違っていました。

顔は強張り、口は固く閉じられ、拳は握りしめられていました。

「もう来るな」

そう一言だけ言って、彼との話は終わりました。

しかし

.....

「だからと言って、言つとおりになんかできませんよ」

「だから・・・調べた？」

「街の小娘の・・・無駄な抵抗でしたけど」



「踏み込んだ!？」

「といつても、入口から5メートルのところで捕まりましたけどね」

そうして、彼女が知ったのはこの研究所の実態でした。

研究され、開発されていく兵器

身体をいじくられる人体

吐き気を催すような形をした「何か」

その先で、唯子は彼を見つけました。

今までの彼とは思えないような、虚ろな目。

だらりと下がった両腕、立っているのに、浮いているような感じな見た目。

到底普通ではない状況でした。

そして、連れて行かれる彼女は、そのまま青年の目の前に連れて行かれました。

声をかけました。

体をゆすりました。

腕を引っ張りました。

全身で抱き締めました。

しかし、青年は一切反応することはなかったのです。

『幼馴染というその女に反応するかの実験ですが、何事もなかったようですね』

『安定しています。大丈夫でしょう』

『ではあの女を処分しなさい』

「!？」

唯子に聞こえていることを十分知っているだろうに、平気でそんな事を話す男たち。

逃げだそうとする唯子だが、押し入ってきた男たちに取り押さえられる。

目隠しをされ、手を縛られ、どこかに連れて行かれる途中で、彼女の耳にこんな声が聞こえてきた。

この街にはもう必要なものはないな

明日にでも焼き払っておくんだろ？問題ねえよ

ああ、あの男の性能を試す実験でもあるみたいだけどな

それを聞いて、彼女は死の淵にありながらも力の限り叫びました。

「街には何もしないで！！何でもするから！！みんなを殺さないで！！」

もちろん、そんな叫びなど聞き入れてもらえるはずがありません。

しかし

「確か、一つやり残した実験があるでしょう」

「え？ああ、だけどあれは被験者が耐えられるもんじゃないぜ？」

「どうせ死ぬ女。有効活用しようじゃないか」

「・・・オイ女」

その言葉とともに、唯子の目隠しが取り払われて、目の前の男が言いました。

今からお前を実験する。

切ったり埋め込んだりするもんじゃない。



ただ、お前は確実に死ぬだろうな。

もし生きられたらみんな解放してやるよ。

それを聞き、唯子は敵意と殺気を込めて、睨みつける。

今まで感じたこともないようなその感情に、自分の目が焼けているんじゃないかと思うほどの怒りが脳を焦がしました。

そして、彼女は別の部屋に放り込まれました。

男の話では、体感時間はとてつもなく長いが実際の時間はそう経たない空間であるらしいのですが、彼女はそれどころではありませんでした。

次々に襲いかかる試練、訓練

拷問ともいえるような特訓、実践

あのクリスタル状の戦士も、死人兵士も、何人も何人も相手にしました。

何度も何度も死にかけ、耐え、勝ち、どんな手を使ってでも生き残

ろうとしました。

体感時間だけが長いだけで肉体へのダメージは実際の時間と一緒に負っていくのですから、それはとんでもない地獄だったのでしょう。

決して彼女は、肉体的に秀でた少女ではありません。  
潜在的に何かを秘めているわけでもありません。

そんな少女が、一日を数何カ月ともいえる時間で過ごし、そしてそのダメージを一気に背負って、生きていけるはずなどないのです。

しかし、彼女は耐えきりました。

腕を片方失い、目は潰れ、もう五分も放っておけば死ぬような身体でしたが、その「実験」が済んだ時、彼女は確かに生きていました。

そして、次に気付いた時には、彼女は自分のベッドの上で寝ていた  
そうです。

腕も、目も、身体の傷は一つ残らず消えていました。  
まぎれもない、自分自身の身体でした。

街はいつもの通り。

研究所など、最初からなかったかのよう。

彼女は、満足して日常に帰りました。

そして、時風たちが遭遇した事件が起こったのです。

「私は・・・利用されたんですよ。結局彼も、街も、何も救えなかった・・・!!!」

「綺堂さん・・・」

その話に、ティアナも長岡もどう声をかけていいか分からなくなる。  
結局、彼女が耐えきった実験は何だったのだろうか。すべてが無駄

になっちゃったのか。

そこで、落ち着くようにと紅茶を注いだきた矢車が、唯子に差し出していく。

「飲め。落ち着くぞ」

「ありがとう……」

紅茶に唯子が口をつけ、ほっと一息つく。

考えてみれば、彼女は目覚めてから今までしゃべり通した。

.....

「おいおい……注射はやめてくれよな。苦手なんだ」

「なに、上手にやりますが、痛みは感じませんよ」

「そーかい（プスッ）……ウぐっ!？」

「バイタルは？」

「正常です。暴れているのは、おそらく薬に抵抗しているからかと」

「だ……から言ってるんだろ……そんな薬何本打ちこまれ……  
たつて、今の俺なら……いくらでも耐えられるぜ……  
うぷっ」

「ふむ、まだ行けそうですね」

「ハッ……おうツ!？がア……ッは……」

「翼人に薬物が効かないわけではないのですが、彼は強いですねえ」

「こちら側に引き込むのは無理では？」

「まだ時間はたっぷりある。それに、改造できれば問題はないでしょ」  
「うっ」

「……ですね」



「これ・・・どこですか!？」

「え? ちょ!？」

「この写真!! どこで撮ったんですか?!?!」

ドタン!!

ティアナの体を揺さぶり、しまいには床に倒して唯子が激しく聞く。もはやその風体は「聞く」というよりは「問いただす」といった方が正しいかもしれないが。

「ちょっとちょっと!! 落ち着いてって!!」

「その写真をどこで撮った!! 教える!!」

「(ムカツ) だあゝかあゝらあゝ・・・どけての!!」

押し倒されたティアナも、人の話を聞かない唯子に落ち着くように

言うがやはりそこは人の子である。  
この状態で叫ばれば、ムカツとする。

ティアナは言いながら唯子の手首を掴み、寝ながらだというのにそれを捻って投げ、ベッドに倒した。

「落ち着きなさいっての！この写真は、先日私たちが戦った時に撮ったもの」

「その様子だと、ただの知り合いつてわけじゃないようだが……まさか？」

あの体勢から投げられてびっくりしたのか、唯子は五秒ほどそこで大の字になり、そしてその口がすぐに動いた。

「鉄……翼刀……」

「この人の名前ね？……そして……」

「私の言っていた……男の子です……!!!!」

目に涙をためながら彼女がそう言って、ついに嗚咽を漏らして泣き始めてしまった。



それは、彼がまだ生きていたことに対する喜びか、それとも救いだせなかった悔しさか。

「ティアナさん」

「呼び捨てでいいわよ」

「ティアナ、私を・・・強くして」

「・・・・・・・・・・え？」

そう言って、唯子がティアナに土下座する。

ベッドの上だが、その誠意は確かなものだった。

そしてそこから顔を上げ、イエスと言わなければ殺すともいいそうな目つきで、心の底から懇願してきた。





ず突破していた。

今はその塀の陰に隠れる形で張り付いている。

少しして、塀の扉が開き、そこから数台のジープと兵が飛び出してきた。

その兵の一人（やはり死人兵士だった）を捕まえ、服を奪って隊に混じる。

（この施設はやばい・・・こいつらは、「あれ」の対となる、對抗しうる兵器を作ろうとしている。このまま「あれ」を開放させられたら・・・!!!!）

8603

蒔風、脱出。

しかし、本番はこれからである。

t o b e c o n t i n u e d



## 綺堂唯子（後書き）

時間がかかってすみませんでした！！

名古屋では結局一回も書けずじまいでして……

今回は二人の登場人物が出てきましたね！！

青年の名は「鉄翼刀」

少女の名は「綺堂唯子」

です！！

翼刀はリュウガ様、唯子はソーヤ様から、それぞれいただいたキャラクターです！！

ではお二人から頂いたプロフィールの一部をば

名前 鉄翼刀くろがねよくて

年齢 19

身長 172cm

体重 54kg

性別 男

名前 綺堂唯子きでん ゆいこ

年齢 19

髪 金髪のセミロングをまとめている

瞳 紫

だそうです。

書かれているデータが二人で違う？

H A H A H A

それは武闘鬼人に創作力がないからさ！！

実はお二人からもらったデータだどこまでしか明かせません。

しかし、どのデータを採用し、不採用にしたかは読んでいけば分かると思います。

気に入らなかつたら申し訳ございません。

自分は頭にキャラを置くとき文字が浮かぶのでだめなんですよね。人型のキャラではなく、こう・・・顔にキャラ名を書いたマスクをした感じの人が精一杯です。

それが動いているんです。頭の中で。

だから容姿ってあまり気にしないんですよね。

オリジナルキャラはみんな髪黒いイメージだし。

唯子とか金髪なのに・・・ごめんなさい。

ちなみに、いただいたキャラですが一応カテゴリーとしては「オリジナルキャラ」とさせていただきます。

私としてもいただいたキャラを盗むような名称になってしまうのは申し訳ないのですが、この言い方がしっくりくるので。

それにキャラ設定も結構変わってますしね。

というわけで本編の話。

過去話で何かわからなくなったら聞いてください。お答えします。もちろんネタバレにならない程度で。



あれだけ書いてるとちゃんと全部説明したか心配だ……

ちなみに唯子がきちんと街に返された理由は、もう書いた気がする  
ので省きました。

さあ、読みなおそう！！（アクセス数ウマウマWWW

そして脱出の蒔風。

どうやって抜け出したか？

……蒔風さんならしょうがないよねWWW

しかし、逃げ切れるかは別問題。

どうする蒔風！？

次回は蒔風メインでいきたいと思ったりんだり。

ちなみに映画が間に合っていたらオーズをここで出したかった！！

！WWW

ではまた次回で

## 四面楚歌

兵士の装備は銃が一つのみ。

服は分厚いもので、深緑色をしている。

ヘルメットのようなものをかぶっており、時風はそれで目元を隠している。

(しかし熱い・・・夜に逃げればよかった)

地面からの照り返しと、直射日光が身を焦がす。

あの施設の中で時間も何も分かったものではないので、飛び出せるときに飛び出したらこのざまだ。

夜だったら闇夜に紛れることができたというのに。

(もぐりこんだはいいがそのままじゃ帰っちゃうし・・・いや  
?こいつらは死人。だったら夜通し探すだろうからその隙に乗じて  
・・・)

様々なことを考えながらついていく時風だが、実をいうとついて行くだけでも結構な神経を使う。

先頭のジープは決して速く走っているわけではない。

しかし、この兵士たちの足並みが気持ち悪い程にそろっているのだ。その足並みが少しでもずれればバレるかもしれない。

そう考えると、一步一步に神経を使うのは当然で、そんなことをしながら妙案も何も思いつくはずがない。

(こりゃあ行き当たりばったりになりそうだぞ……)

そう思いながらも「いつものことか」と気を取り直す時風。

(じっかし……どこまで行くんだ？これ)

おそらくこれは自分を探索する隊だ。

それにしても結構歩くし、散開した方が見つけられるんじゃないかと考える時風だが、そんなことを考えているうちにジープが止まった。

ジープの上の男（研究所で見た顔だ）が、コンソールをいじって指示を出す。

蒔風の首にも首輪は付けているが、当然壊したものをばれないようにつけているだけだ。受信機能なんてあるわけない。

だがそれでも周囲の兵士が散開していくのを見て「そう言う指示か」と判断し、蒔風も走り出した。

パンツ！

「ッ！？」

そして、発砲音。

蒔風が身体を回転させて、弾丸を回避する。

ジープを見ると、その上に立つ男が銃（普通の拳銃）を手に蒔風を見下ろしていた。

「周囲の動きを見ての瞬時の判断。しかも、その一瞬で誰も向っていない方向を見極めて走り出しているのだから、流石と言わざるを得ないな。まあ、その一瞬が命取りだったわけだが」

「くそ……」

「ああ、あと今の発砲はお前だと気づいていたわけじゃなく、すぐに動かない欠陥品を処分しようとしただけだ。お前は完璧だったよ」

男が蒔風を称賛しながら手を上げる。

すると周囲に兵士がやってきて、無言で蒔風に銃（こっちは兵器の）を向けてきた。

数にして十三人。

十三の銃口が蒔風を狙う。

「あんたなら耐えるだろ。じゃ、逆戻りだ」

スイッ

「ドオアツッ！……」

カチッ、ドゴゴゴゴオンッッッ！……！

男の腕が下がり、蒔風がしゃがんで大声と気合を発し、引き金が引かれて十三の銃口からとんでもない威力のレーザーが発せられた。その爆発に蒔風の姿が砂煙に消える。

「砂煙……砂煙だと!？」

レーザーが当たっただけなら、砂煙は上がらない。つまりは間に遮る何かが入ったということ。

男が驚愕した直後、その煙の中から黒い石のようなものが十四個、空に向かつて投げだされた。

そしてそれが十三人それぞれの足元とジープの上に落ち、各人が逃げ出そうとする。

しかし

「なすへき牢壁・置返し!!!」

ガゴゴゴン!という音と共に各人とジープを置返し、壁が囲い、逃げられないように逃げ道を遮断する。

ドオムツッ！！！！

そしてくぐもったような爆発音が響き、牢壁の空いた上部から火柱が上がった。

倒れていく牢壁の中から、ズシヤリと何かの炭が倒れ込んでくる。

「貴様……」

ジープの牢壁から、男が出てくる。

手にしている者を見てみると、運転手を盾にして生き延びたようだ。

土煙が晴れる。

「無駄な力は使いたくないんでな低コストで行かせてもらう」

地面に手を当て、蒔風が男に言う。

男はコンソールをいじり、さらに戦力を投じてくるだろう。





「アタアっ!?!」

「士郎おにーちゃん……よわっ」

「うっせー!?!?!」

「EARTH」地下訓練場

そこでイリヤに言葉に士郎が叫び返していた。

相手は唯子だ。

士郎だって弱いわけではないのだが、それは投影した剣を握ったときぐらいなもの。

普通に木刀を握った彼は、一般人に毛が生えた程度の力量しかない。

その士郎の攻撃をヒョイヒョイ回避し、突っ込んできたところで後頭部に突っ込みのような平手打ちを入れたのだ。結構いい音がしていた。

一方唯子はイエーイ！とVサインし、ぴょんぴょん跳ねながらティアナのもとに走って行って行った。

落ち込む土郎を尻目に、その様子を黙って見ていたアーチャーが立ち上がり、唯子に向かって声をかけた。

「次はオレがやるぞ」

「アーチャー？」

「私なら、少しは通ずる部分があると思うがね」

アーチャーが進んでこういうことをするのは珍しい。頼めばしてくれないこともないのだが。

「いくぞ？準備はいいか」

「あ、はい。宜しく願います！...」

.....



追っては破ったか？  
もう来ないか？

そう考えながらも、彼は走ることしかできなかった。

ちょうどいい岩場を見つけて、そこに腰を下ろす。

(兵士や残骸でオレの居場所はすぐにバレる。くそ……ここがどこだかわかればな……)

どことも知らないこの世界から、なるほど、確かに飛び出すことは出来る。

だがそれでは次元の狭間を漂っているうちにつかまってしまうのがオチ。

意味のない事に力は使えないのだ。

(せめてここがどこだかわかってから逃げるべきだったかなあ……  
・・行き当たりばったりなのは悪いところだ)

そんな自己評価をしている場合ではないのだが、それでもしないと  
やってられないのだろう。  
自分に苦笑する蒔風。

ガオン！！

「！！ 来たか」

蒔風がそうしていると、また新しいジープ三台ほどが走ってきた。  
うち一台の荷台に搭載されているガトリングが唸りを上げて回転し、  
先端から火花と共に鉛玉を弾きだしてきた。  
さらに一台はボンボン！と気の抜ける音でロケット砲を打ち出し、  
さっきまでいた場所を爆撃してくる。

蒔風が岩場から飛び出し、荒野を駆ける。  
いくつか迫る銃弾、爆撃は蛇行して回避し、さらに剣で弾き飛ばし  
ていく。

最後の一台の荷台には静電気発生装置みたいなのが乗っていて、そ  
こから翼人の抑圧波が出ていた。

しかしそれを破壊しようにも他のジープが守っているし、そもそも今の体力でそこまで力が出るかどうか。

ドオンー！！

「オウツ！？」

銃撃を回避し、弾き飛ばした時風の背後からロケット砲が飛来し、即座に転がるものの爆風に体が投げ出される。

地面を転がる時風が体制を整えて膝立ちになった瞬間、その場に巨大なトレーラーが突っ込んできて時風をひき潰そうと爆進してきた。

「ターミネーターかよ！？」

そんな愚痴を叫びながら、時風がいつもの二倍はありそうな畳返しでトレーラーの足元を撥ね上げ、軸回転させながらトレーラーを吹っ飛ばす。

時風の頭上を飛んでいくトレーラーだが、その荷台部分がガチャガチャと展開され、オフロードのバイクが四台飛び出してきた。

そのうち二台が時風の両肩をかすめて行き、衝撃に時風が吹き飛ばされる。

さらにトレーラーの爆発で地面を転がり、引きずられるように滑る。

「じつおー！野郎ー！！」

飛ばされる時風が憤るが、向かって行ってもしょうがない。  
今は逃げるだけだ。

とはいってもあつちと時風の機動力は違いすぎる。

今の時風は抑圧で開翼もできないのだ。  
それに対し相手は高性能のジープやバイク。

逃げるには、撃墜するしかない。

そうしていると時風に向かってバイクが走ってきて、すれ違い様に時風に蹴りを放ってきた。  
その足を時風が掴み投げようとするが相手の勢いが強いのか、そのまま押されてゆく。

その時風にさらに背後からもう一台が同じようにして蹴りを放ってきた。

両者の脚もただでは済まないだろうが、おそらくそんなのはどうで

もいいのだろう。

それを見て蒔風が紙一重のタイミングで一人目の脚の上で逆立ちしてそれを回避する。

そしてバイクの後部に立って男に殴りかかる。

しかし背後からの行為劇に対し男もそれを受け止め、裏拳で反撃して、蒔風の腕を掴んで前に投げた。

ブウン、と蒔風の体がバイクの上を越え、それでもバイクにしがみつき、脚が地面に付いて滑って行く。

数十メートル進み、バイクの後輪が上がった。

蒔風がその両足に力を込め、バイクごと投げ放って爆発させる。

一台撃破した蒔風だが、即座に攻撃の手が伸びた。

バイクの男がペンのようなものを投げ放ち、そのお尻（ペンならノックする部分）から火が噴き出して蒔風に向かって飛んで来た。

文字通りロケットペンシルとでも呼べそうなそれを蹴り飛ばし、蒔風の周囲で爆発が起こる。



そこにジープからの爆発が襲い掛かり、さらなる爆風に押されて時風が加速する。

周囲は砂埃がひどい。

しかし、その先に時風が何かの影を見た。

それは

「あれは……勘弁してくれっつてのによぉ……」

それを見て、時風の顔が歪む。

まるで質の悪いコメディを見たかのような、そんな顔だ。

目の前に見えたのは、まぎれもなく彼が脱出してきたあの施設だった。

目標物の見えないこの荒野。

本来なら幾度も地図と方角を確認して進まなければならない場所だ。そこを時風は一心不乱に走り抜け、さらには送り込まれる戦力も相手にしていた。そんな状態で、しっかりと離れていくことなどできるはずがない。

彼は気づかないうちに、元の場所に向かって走っていたのだ。

「くそつたれ……」

悪態をつく彼の前方数百メートルの位置から、ガキン！！！！という音がして地面から数百以上の砲門がせり出してきた。それは足元にちよこんとあるような小さなものだったが、先端から飛び出している棘を見ればそれがどんなものかわかる。

そして、その形は時風にも見えていた。

「あれは……！！ 止めてくれよ!？」

その棘の先端は、刺さりやすく抜けにくいという形をしたものだった。  
進行方向とは逆に向いた棘のついた針。そして外見からは見えないが、その針にはワイヤーが取り付けられていた。

ドンツッ!!!

それを見て、施設に向かって時風が一気に走り出す。背中を見せたら貫かれる。

と、同時にババババンツッ!!!と一気に拘束弾が射出されてきた。

ワイヤーの尾を引きながら、いくつもが時風に向かって伸びてきて、大地に突き刺さった。

そんなワイヤーと針の隙間を時風が駆けていると、そんな中でも関わらずバイクやジープが飛び込んできた。

それを転がりながら回避し、横や下を蹴りあげて転がす時風。しかし、針の一つが肩をかすめて皮膚を裂く。

すぐにそこを押さえて血を抜くが、視界が一瞬で揺れて来てしまう。血抜きは間に合わなかったらしい。何かの毒が、身体を回る。

するとその隙に一瞬だけ針が止み、そしてすぐに百発ほどが一斉に放たれてきた。

蒔風が獅子天麟を背中に構え、背負った状態から力の限り一回転してから投げ放ち、ワイヤーを五、六本逸らす。  
その逸れたワイヤーにぶつかって他のが逸れ、連鎖的に多くのワイヤーを食い止める蒔風。

膝が崩れる。

手がつく。

その手で身体を跳ね上げてそれでも前へ。

ドオドオドオドオドオツツ！！！！！！

物凄い音を立てて針が地面に突き刺さる。

山なりに、放物線を描いていたそれが、だんだんと地面と水平に飛

んでくるようになってきた。

蒔風がそれを紙一重で回避し、どんどん前へ。

足場がワイヤーに埋め尽くされていく。

そのワイヤーに足を取られるが、青龍刀で斬り裂いて前へ。  
ワイヤーの中から数本の触手のような機械が伸びてきて襲い掛かってくるが、白虎釵を投げつけて沈黙させる。  
更に襲い掛かる触手やワイヤーは玄武盾で弾き飛ばす。

そして、その砲門群が見えてきて、その先にあの青年の姿を捕えた。

「やっぱり出てくるかよ!!!」

青年が剣を振るい、無数の刃が具現して、ワイヤーをブチ切りながら蒔風へと飛んで来た。

それを蒔風が身体を少し低くするだけで回避する。

「剣を振るって飛ばしてくるってことは、その軌道上しか飛んでこないってことだろ!!!?」

横薙ぎなら、身体を下げる。

縦なら脇に避ける。

それだけで、この攻撃は回避できる。

すると青年はグリンツ!!と螺旋状に剣を振るい、そしてその通りに刃が飛んで来た。

蒔風はその中心に飛び込んで、青年に向かって玄武盾と青龍刀をフリスビーのように投げつけた。

その剣を弾く青年だが、くるくると旋回して玄武盾と青龍刀が蒔風のもとに帰り、再び投げつけられる。

そうしているうちに蒔風が青年との接近戦の域に踏み込み、剣を玄武盾で抑え込んで青龍刀で切りかかった。

しかし、青年はあっさりと剣から手を放して蒔風の青龍刀を持つ手首を掴んでそれを止めた。

そしてそこを蹴り飛ばして青龍刀を飛ばし、玄武盾でのナツクルを

回避して時風から下がる。

そのうちに剣を拾い直して再び時風に刃を飛ばそうとするが

「させるかアッ！！！」

ドゥツ！！と空気を破る音がして、朱雀槍が青年に向かって飛翔していった。

炎の一閃となって青年に向かう朱雀槍だが、青年はそれを紙一重で回避してしまった。

しかしそれでも彼の頬からは血が流れ、刃の射出は止められた。

そして、時風が振り下げられようとする剣の持ち手を足刀で留め、玄武盾を右手に握って思い切り青年の腹部にそれを叩き込んだ。

「甲蓋打滅星！！！」





「いいえ。それは翼人が「理解者」だからです」

「理解者？」

「ええ。他者の感情をエネルギーに出来る、ということは、それを理解しなければならぬ。その理解力の高さを以って、一度相手にした者ならばそれなりに優位に戦えるんですよ」

「そう簡単なもんか？」

「……あなた、小さいころアニメなんかは見ていました？」

「そりゃまあ」

「では、あなたはそのキャラの弱点も、攻撃法も、全部知っているわけですね？」

「今はうる覚えだけど」

「彼らの理解はそういうことですよ。一度相手にした敵を理解し、そして幾度も立ち上がる心の強さ。それが、翼人を何度も勝利に導かせる理由です」

「なるほど……じゃあ最初で勝てなければもう勝てないということか？」

「いえ……そうでなくとも」

「？」





剣の隙間に、唯子が立っていた。

彼女の立つ場所、わずかな立ち位置だけ、剣が突き刺さってない。

「やはりな……彼女は特に秀でた能力などない」

「え？」

「私と同じ……いや、弓こゝろや投影がある私よりも、はるかに……  
・こういつてはなんだが、劣っている」

「でもあんだけ動いてんのよ!？」

「だからこそ、彼女が一体どれだけの「実験」を行ったのか……  
想像もつかん」

そうした会話を脳内で済ませる凜とアーチャー。

その間に唯子がアーチャーに向かって駆け出し、拳を握ってそれを突き出してきた。

それを躲し、いなし、投げようとしたアーチャーだが

「ゴツ!!!」

「ッお!!!」

その拳が眼前に迫って、咄嗟にそれを回避した。

するとその外れた拳から、本来アーチャーに叩き込むはずだった衝撃が飛び出し、レーザーのように一直線に壁に向かって行った。

目に見えない衝撃の光線がアーチャーの顔の横を通過し、凜のツインテールの片方をすり抜けて壁にボゴツ!と穴をあけた。

「ほえ?」

「ん?」

「おお」

それを見て唯子が気の抜けた声をだし、凜が何が起こったのか一瞬理解できず、アーチャーが感心の声を上げた。

「おお、じゃないわよ!!!下手したら顔に穴が開くところだったわよ!!!?」

「非殺傷だから大丈夫だろうが(ス・・・)」

「誰が正座やめていいって言った!!!正座ッ!!!」

「ま、まで!!!なぜそこで令呪を光らせる!?!」

「なんで俺まで・・・」

「(膝の上のイリヤ)凜を守れなかったからでしょー?」

「なんでさ・・・」

説教されてるWシロウを尻目に、唯子が自分の力にびっくりしていた。

「凄い・・・」

「あなた、自分の力に気付いてなかったの?」

「力は強くなったなあ、って思っていましたけど・・・」

「それはそうでしょうね」

と、そこに長岡が彼女のファイルを持ってやってきた。

「あなたの話では、実験は死にもの狂い、そしてそのあとすぐに戻され、洗脳の中で戦っていました。だから実感がないのは当たり前ですね」

「そうなんですか……」

その話を聞いてまた驚く唯子の脇で、ティアナが長岡に聞く。

「長岡さん。唯子って……」

「ええ。私と同じ、“No name”の人間です。世界が一つになつて、“No name”でも力を手に入れた者はいません。でも、彼女はそれでも力のない“No name”の人間です」

「それであれだけの力……」

「異常ですよ。決して力を植え付けることなく、“No name”のままあの域に達するなど」





ダンッッ!!!

思い切り地面を蹴り、一気に蒔風へと突っ込んで来る青年。

それを蒔風がバックステップして間合いを整え、その顔面に剣を振るう。

しかし、青年は片手で「風林」の刃を掴み止め、剣を振るう。

蒔風はその剣を玄武盾で受け、「風林」を分離させて「風」を捨て、「林」で再び切りつける。

だがその刃が到達するよりも早く青年の蹴りが、後退させようと蒔風の腹に入る。

「フンッ!!!」

「!?!」

しかし、その攻撃で時風が下がることはなく、仕方なしに青年が地面に伏せて刃を回避する。

そして青年が時風に足払いし、一回転。

その勢いで、居合でもするかのように剣を構えた。

(ここから刃か!! えげつないが・・・)

グッ!!

(耐えられない!!!)

その攻撃を予測して時風が玄武盾に力を込める。

だが、迫った攻撃は全く違う物だった。

ヴウン・・・

「!?!?」



「が……は……世界を擦じつて……歪みを飛ばす……  
だと?……う」

蒔風が地面に倒れ、そう呟きながら意識を失う。

その攻撃は読み通り「津波」そのもので、懐という至近距離から喰らった蒔風は、いとも簡単に吹き飛んで地面に大きな跡を作った。

その体を抱え、青年が施設の中に戻る。

「まさかこの技まで引き出させるとは……翼人とは本当に恐ろしい」

「だからそれに対応できる兵器を作ってたんだろ?」

「ええ。兵器とは片方あるだけではだめですから。その抑止力があつて、初めて利用価値が生まれます」

そう言いながら、蒔風を再び中に連れ込む。



荒野の中で、セイバーが剣を持って座禅を組み、土が毛布にくるまって寝ていた。

こちらの搜索メンバーは少し変わっており、一刀の代わりに星が来て、さらになのはも合流していた。

ちなみに、なのははあれから一睡もしていない。

ヴィヴィオに「絶対に舜君を取り返してくるから」と自分に言い聞かせるように出てきたのだ。

しかし、このままでは体調を崩す。

「なのは。私が見ているので、お休みになつては」

「いいの。セイバーさんが寝ないでいるのに、私が寝るわけにはいかないから。それに、星さんも起きてるし、負けられないよ」

「なのは殿……」

声をかけるセイバーだが、なのはは自分の意地だからと言って眠ろうとはせず、それを見て星が小さくつぶやいた。

「私は……最近分らないのです」

「え？」

「舜が連れ去られたとき、私は確かに悲しみました。しかし、それは本当に「愛」から来たものなのかと、疑問を持ったのですよ」

「星さん？」

客観的に言うのはいかにも星らしいが、彼女にとってはかなり真剣なことだ。

「私は舜のあり方を聞き、何と脆く、そして素晴らしいものだと感じたのです。そして、失いたくないと思った。それを今まで恋愛感情だと思ってきました」

「普通じゃないの？」

「しかし、今になってはこう思います。「それは世界遺産などがかけがえのない物と感じ、失ってはならないと感じているだけじゃないのか？」と……」

「そんなことないよ！！星さんの想いは確かに……」

「確かに愛だと？しかし、私は貴女のように取り乱すことはなかつ

た。絶対に取り戻すと、心に誓っただけだ」

「それは私が勝手に取り乱しただけで……」

「……まあ、それも彼の顔を見ればわかることでしょう」

そんな話をしている二人を見て、セイバーがふふつ、と笑う。

「乙女ですね」

「あんたもそうだろう」

「（びくうっ！！）士、起きていたのですか？」

「女三人寄れば姦しいというからな。起きちまった」

「私は話に参加してないですが」

そんな会話をする二人が二組だが、こうしてエクスカリバーで四剣をたどろうとしてすでに三日。

英霊である彼女だから大丈夫だが、ほかはつらいはずだ。

まあ士は旅人ではあるから大丈夫そうだが、なのはや星はこれ以上ここにいるのは難しいだろう。





「……………なのはさん……………」

「何かに引かれると思ったら、エクスカリバーだったか」

蒔風の使役獣・七獣。

その人間体が、次元の穴から落ちてきたのだ。

彼らが言うには、蒔風は脱走した時にうまく自分たちだけを投げて逃がしたのだそうだ。

最初から出していくと相手に利用される可能性があるし、下手をすれば彼らも改造されるかもしれないことを考えると、迂闊に出せなかったそうだ。

「それに、相手の剣も世界四剣……………我らもばれていれば何をされていたか……………」

「相手も……………世界四剣!？」

「……………世界四剣って……………なんなの?」

なのはが、セイバーに聞く。  
しかし彼女も知らないという。

その呼び名はもっと高次での物らしいのだ。

「アリスに聞こう。それが一番だ」

士の言葉に、一同は「EARTH」に戻る。

四剣の実体が、明かされようとしている。

.....

「お前、剣をどこにやった？」

「さあね」

「お前が投げた剣七つ。そのすべてが回収されていない」

「答える義理があるか？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「モニターしました。驚きましたね。これ、十五天帝ですよ」

「では、彼は四剣の所有者だったと！！！」

「オルセアではわかりませんでしたねえ。いやはや迂闊迂闊」

「待て。伝承では天剣には仕えし獣がいるということだろう？」

「このままではこの場所が「EARTH」にばれるぞ」

「なに。そうはいつでもこの世界に来るのは・・・・・・・・明日でし  
よう」

「すぐじゃねえか！！」

「だったら、それまでにことを済ませます」

「こと？こいつに洗脳も何も効かないぜ？」

男が、時風の部屋の扉に向かう。

そしてニツ、と、気持ちよく笑ってみせた。

「目標は、高い方が燃えるんですよ」

男が部屋に入る。

処置が、始まった。

「始めますよ。死ぬかもしれないので、覚悟はいいですか？」

「そんなもん覚悟ははなからないね。やれるもんならやってみる」

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 四面楚歌（後書き）

と、言うわけで周りはみんな敵だらけ（蒔風のみ）！！！！  
四面楚歌でした。

唯子の強さに関しては、本編の通りです。  
彼女、まだ実感してないんですよ。恐ろしいwwww

そして、青年対蒔風・第二ラウンド  
蒔風、再びの敗北。

男の処置に、蒔風が耐える耐える！！

がんばれー！！

……応援はこれくらいでいいかなwwww  
主人公だから大丈夫だよ！！きつとwwww

ではまた次回

## V S 銀白 再び

青龍たちと共にセイバーたちが戻り、時風の居場所がわかるかもしれないという情報を持ってきた。

それを聞いて、「EARTH」は攻め込む準備を始めている。

「クラウドさんに声を掛けないと……」

「全員行くの？」

「そうしたいけど、前にそれでこっち狙われたことがあるから……」

「でもあの男は「EARTH」が目標ではないと言ってた。大丈夫じゃない？」

「それなら全員で行くか」

「……主が対峙した青年は……翼人の力を封じることが……できます……全員で彼に向かうのは……得策ではないかと」



「そつちには手練れを回すしかないな……」

会議室では理樹や青龍がほか数名のメンバーと共に準備を進めていた。

また、他の部屋では残りの七獣が時風の持つ十五天帝を捉えてゲートを開こうとしていた。

そのゲートを観鈴が安定させ、みんなを送り出す、という物だ。

準備ができ次第、出発する。

そして、その準備までの間に、なのはや一刀、セイバーが、アリスから話を聞いていた。

「世界四剣……ですか。まさかまた集まることになるっつとは」

「知ってるんですか？」

「……………私の話もあくまで聞いた話です。私よりも数代前の管理者の時の話らしいですし」

それでもいいなら、とアリスが前置きして、早速話し始める。

#### 世界四剣

世界を股にかけて存在する剣。

その最初の持ち主は、もう数えることすらも億劫なほど、はるか昔の人間である。

ある男がいました。  
その男がその剣を振るうと敵は倒され、自軍に勝利をもたらしました。

ある男がいました。  
その男はそうして広げた土地を統治し、世界を統べて安寧を約束しました。

ある男がいました。

その男は戦いで傷ついた人間を癒し、敵味方関係なく救いました。

ある男がいました。

その男は人々の心を開き、自国の民の心も、敵国だった者の心も繋げ、一体とした国を築きあげました。

ある男の剣は、聖剣・エクスカリバー

ある男の剣は、天剣・十五天帝

ある男の剣は、神剣・ヴァルクヴェイン

ある男の剣は、開剣・キーブレード

男たちははるか太古に連携し、素晴らしい大国を築き、四人の王として統治しました。

しかし、彼らが死んでいくとその国はバランスを崩し始めます。

四剣は新たな所有者を求めて、別の世界へ。

統治しきれなくなった国は、その後崩壊し、新たな国となったそう

です。

それから四剣は長い時の中をさまよいました。

ある剣は名をいたる世界に馳せ、その名を持つ剣がいくつも作られました。

王の伝説と共にあったその剣は、今では新たな所有者もいないために彼<sup>か</sup>の王と共にあります。

ある剣は長らく所有者がおらず、一番最近の所有者も“Noname”の人間だったためにその手に握られることがないと思われていました。

今ではその所有者と共に世界をめぐり、そして世界を救ってきました。

ある剣は使用者が固定され、今は敵の手にあります。

ある剣はまた別の次元を渡る多くの勇者の手にあります。

彼らが手にしているのは派生剣であり、本物ではありませんが、本物でないのです。

四剣のキーブレードはその大元であり、またの名を「<sup>キ</sup>ブレード」と呼ばれています。

「その共通点は、多刃です。聖剣は一つに束ね、天剣は十五対、神剣は刃を生み、開剣は派生剣として多く名を馳せています」

「そのうちの一本が、敵の手に……」

「でもヴァルクヴェインって癒しの剣なんですよ？なんでこんなこと？」

「世界四剣はどれも強大な力を秘めています。「治癒」や「統治」はその能力でしかないんです」

「つまり、使用者によって変わる？」

「舜を見てください。あの人、統治者って感じですか？」

「……違うな」

「もちろん、その青年が治癒の力を使えないわけではないのでしようが」

ヴァルクヴェインの多刃は、凶悪そうに見えて実は一番相手を無力化しやすい能力だ。

うまく振るって相手を封じ込めれば、相手は大きな怪我を負うことなく無力化される。

そしてその小さな切り傷等を癒す、というのが本来の使い方らしいのだが……

「まあ、要は使いようです。セイバーさんのエクスカリバーだって、風王結界とかがあるでしょう?」

「そういう物ですか」

「そういう物です」

「世界四剣のことは分かった。で、どう対処すればいい?」

「……まあ?」

「さあ……って……」

「世界四剣だのなんだのと言っても所詮は剣です。ただの強力な剣。



翌日

「EARTH」の一室に、ゲートが開かれた。

向かうメンバーが、門の前に立つ。

「俺たちの目的は時風の奪還だ。相手組織を潰せばそれでいいけど、無理ならすぐに引き返すよー!」

「わかった」

「OK」

「では、いきましょー!」



いつも通りの服装で、アリスがそういつて先陣を切って踏み出した。

戦力は十分。

さあ、取り返しに行こう。

.....

「私も行く!!」

「ま〜ち〜な〜さ〜い〜!!」

唯子が出陣の話聞き、その部屋に向かって走り出そうとする。

その唯子に待てと声をかけるのはイリヤである。

ちなみに唯子の腕を掴んで止めているのはバーサーカーである。

「だって翼刀があるかもしれないのに!!速くいかないよ……!!」

「いまみんなが向かっているのは舜を取り戻すためでしょ!!そつちの方もどうにかしようとするでしょうけど、もしものは置いてこられちゃうって!!」

「何で翼刀が後回しなのよ!!私、行くから!!」

ズッ!!

「え?うきゃあ!!」

「ゴオオ!?!」

叫び、勇んで、足を進める唯子。

バーサーカーがずるずると引きずられ、乗っかっているイリヤが頭にしがみつく。

「フニニニニニニニニ!!ウニャー!!!!」

「かわいい声出してなんてことしてんのよ……」

腕を引つ張ってバーサーカーごと進む彼女が、かわいい気合いを出して進む。

イリヤはそれを見て呆れていた。





城壁の囲む施設の中で、モニターを見る男たちが、一斉に外を写すモニターに視線を向ける。

見ると、グオン！と一気にゲートが開き、そこからドチャドチャと「EARTH」のメンバーが落ちてきた。

「……………」

「……………」

「……………撃つていいと思っ？」

「まあ待ちましょう。とりあえず……………」

「とりあえず？」

「来訪者には挨拶です。それが礼儀です」

……………

.....

「重い！！上乗ってんの誰だ!？」

「ガアア……」

「バーサーカーッ!？」

「より重く感じてきたぞ……」

「セイバーさん、甲冑が痛い痛い!！」

「誰か髪の毛挟んでるって!！」

折角みんなで一斉にあらわれ、突っ込んでいこうとしたにもかかわらずこの体たらく。

突っ走った約一名のせいですね。

「ここが……」

そんな彼らの上を転がって、地面に最初に降りたのは唯子だ。その目の前の門を、力強く睨み付けている。

他のみんなも立ち上がり、その門を見上げた。

「この中か？」

「……はい……私たちは中では出されなかったので……  
中は解りませんが……」

クラウドの言葉に、青龍が応える。

と、大きな門の脇にある小さなドアから、一人の男が出てきた。

「やあみなさん」

「お前ツ……!!!!!!」

そこから出てきた男を見て、唯子が怒りの形相で走り出そうとする。

しかし、アリスがその肩を掴み、唯子を止めた。

「なるほど、彼が責任者ですか」

「アイツが街を壊したんだ……あいつがみんなを、翼刀を!!!」

唯子の叫びで、男に皆の注目が集まっていく。

それを聞き、男は人差し指を上げて訂正を始めた。

「ええ。ですが実際に行ったのは私ではなく「翼刀」ですよ」

「変わらないだろ!!!」

「そうですね。然したる差などないでしょう。ですが、それがなんですか?」

「な……」

「あれは私の実験にとって重要なことでした。結果、十分なデータが集まったのですよ。彼らは無駄ではなかった」

「なにを……!!!」

「それに、あの街が壊滅しなかったらあなたたちは我々の影すら知らなかった。結果的に見れば」



「そんなこと聞いてんじゃないのよ!!!」

男の言葉に唯子が激昂し、アリスの抑制を振りほどいて飛びかかって行った。

しかし男がパチンと指を鳴らすと、足元からワイヤーが伸びて唯子の足に絡まって

「え？」

グリーン、と高くまで持ち上げて

「ちょっとちょっと!?!?うわああああああ!!!?!?」

ポーンと城壁の中に放り込んでしまった。

「彼女はあの実験に耐えきった検体でしたからね。約束を果たした今、じっくり調べさせていただきますしょう」

男は淡々と言うが、アリスをはじめとした「EARTH」のメンバーが顔に手を当ててハア・・・とため息をついていた。

「誰だあれ連れてきたの・・・」

「バーサー・・・いや、イリヤだ」

「勝手に引っ張ってったのよ!!」

「何人が助けに・・・」

「いや、それは大丈夫だろう」

アーチャーの言葉に、走りだそうとする何人が足を止めた。

「綺堂は自覚してないだけで緊急回避や戦闘力はかなりものもだよほどじゃなければ大丈夫だろう」

しかし、その言葉に理樹が「そうは言っても」と不安そうな顔をした。

だが、アーチャーが言葉を続ける。

「それに、すでに増援は行っている」

「そちらで話を進めるのはいいですけどね。そろそろお引き取りいただけませんか」

勝手に話を進める彼らに、男が淡々と言い述べる。  
だが、そう言われて帰る彼らではない。

むしろ今から突入するという勢いだ。

その、まるで目に見えるという錯覚を感じるほどの意志を見て、やれやれと男が頭を振る。

「まったく……こっちは一晩中実験していて疲れているというのに」

「実……験……?」

男の言葉に、理樹が聞き返す。

「ええ。実験です。自称・世界最強というほどの翼人が手に入ったのですから、それはするでしょう」

「自称じゃない。事実だ」

「そこはまあどうでもいいのですが。ですがねえ……彼、洗脳とか幻術全然効かないんですよ」

それを聞き、そりゃそうだと一同が思う。

あの男がそう簡単に染まるはずがない。

「つまり、うまくいかなかったってことだろ？」

「ええ、まったくうまくいかなかったですよ」

そう言って、再び男が指を鳴らす。

大きな門が、メインの門が、開かれていく。  
ゆっくり、ゆっくりと、門が動く。

「うまくはいきませんでしたけどね」

門の厚みの分の鉄が見え、そしてその隙間が開いて光が差し込む。向こう側の光景が開けてきた。

「諦めないとは素晴らしいことです。不屈が人に成功を届ける」

そしてそこに、蒔風舜が立っていた。

その姿を見た一同の想いは何だったのだろうか。

そして、男の言葉からして、それは最悪の現状を示唆していた。

「致死量ギリギリで難しい調整でしたが、どうにかしました。さすが私」

そう言って、男が閉じられていく扉の向こうに下がって行く。



「りょーかい」

「世界中で戦う「EARTH」の戦闘データ。ハッキングしても「EARTH」のパソコンにはない。となれば戦場でとるしかないですしね」

「まとめて手に入るなら、僥倖だな」

「やっていますか？」

「おう」

「では、高みの見物といきましょうか」

モニターの中では、風林火山を奮う時風が集団に突っ込んでいっている。

彼が、再び敵になる。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d



VS 銀白 再び（後書き）

唯子がなんだかアホの子になつとる——！？

唯子

「これでいいのか武闘鬼人さん！？」

これでいいんじゃないでしょうか！！

唯子

「断言しおつた……」

彼女は突っ走っちゃってるだけで、別にアホじゃない……です？

唯子

「なぜ疑問なのか話を聞こうか？」

スルーします。

今後の流れで自然にしていくともしかしたらなるかもしれないww

ww

でもそれもいいと思うんだ。キャラが勝手に育つておもしろい。

世界四剣に關してもまた少し明かしました。  
というかこれ以上のことはあまりないですが。

キーブレードは出してもいいかどうか悩みました。  
さすがの私でもネズミーマウス（仮）の一団は怖いので。

でもあくまでもあっちが持っているのはキャラだけです。設定  
は大丈夫！！という話を聞いたので出しました。

そして、時風が敵になったという  
士とかは問答無用でぶっとばそうとしそうだけどwww

さて、戦場分けが出来上がりました。

ここからまた進行させていきますよ！！！！

次回、唯子でいこうか時風でいこうか、どっちだろーなー！？  
ではまた次回

## 偽翼

「いったあ・・・何すんのよもう」

ワイヤーで放り投げられ、彼女が落ちたのは穴の中。

その穴の中を滑り台のように落ちて行き、一つの部屋にやがて到着した。

見渡してみても、大したものはない。

「中に入れたのはいいけど・・・どうしようかなあ・・・」

彼女は特にこういった侵入作戦ができる人間ではない。

ただ中に入って暴れ、走っていればいいだろうという考えだったし。

と、そこでガシャンという音がして、部屋にクリスタルの人形が入ってきた。

「え？ちよお！？」

ゴツ、バキィ！！

突っ込んできたそれを、半ばあわてた感じで蹴って、それでも十分に粉碎する唯子。  
すると間髪入れずに次の人形が入ってきて、今度は三回の蹴りで倒す。

どうやら相手は彼女の力を測っているようだが、唯子としては邪魔なのが来たから吹っ飛ばしてるだけだ。

そうして二十体くらいまで倒したところで、床が砕けたクリスタルで覆われてしまう。  
するとクリスタルが溶けて消え、その液体がさらさらと流れて行ってしまった。

「？　そこ？」

そしてその流れた先を見て、バキッ！と拳を一発叩き込んだ。  
衝撃を吸収する構造の壁だが、そのほんの少しの穴ではさすがに耐えられず、簡単に崩れた。

こうなれば簡単だ。

十五秒後には、この部屋には誰もいなくなった。



この男をブチのめす為である。  
主に士が主導となつて。

蒔風は開翼もせず、獄炎なども使わず、ただ剣技のみで彼らに攻め込んでいつていた。

当然と言えば当然だろう。

翼人は意志で戦う者だ。それが悪意であろうと善意であろうと、自身であろうと他人であろうと意志を得て立ち上がる彼らは強い。

それを上塗りされ、ただの人形のようにされては出せる力も出せないだろう。

8685

「よっし！！ブチのめして目エ覚まさせるぞ！！」

「ねえ・・・土さんって・・・」

「ただ倒したいだけですよね・・・」

無論、ノリノリなのは土くらいのものだが、結果的には皆の行動は

変わらない。

この場に来ている他の人間は、普通に倒そうと、本気で掛かって行っている。

デイケイドに土が変身し、頭部のプレートで突っ込んでくる蒔風を弾き飛ばしてゆく。

ライドブツカーで切りかかっていたが、その剣筋を蒔風はするりといなしてデイケイドの背中を転がって先に行く。

そしてデイケイドの後ろにいたアーチャーに切りかかり、返す刃でセイバーを切り上げた。

そのタイミングでティアナが魔力弾を撃ち、蒔風がそれを回避するが魔力弾は蒔風を追って直角に曲がって行く。

その魔力弾を半ば無理やりな体勢で斬り落とす蒔風だが、そこにバ―サーカーの雄叫びと共に斧剣が叩き落とされた。

「！！！！」

「ゴッおオオオオオオオオオオオオオオオオおお！！！！」

ドゴンッッッ！！！！！！

思い切り振り降り降ろされた斧剣が蒔風の脳天に落ちて行き、それを蒔風が風林火山を頭上でクロスさせて受け止める。

しかしその威力は真正面から受け止めきれるものなどではない。膝がガクリと少し崩れ、蒔風の体が押し込まれていく。

そこに

《FINAL ATTACK RIDE》

蒔風のこめかみに銃口が当てられ、デイケイドがカードを装填した。デイメンションシュートのホログラムカードの一枚目と二枚目に蒔風が挟まれ、その後にも六枚くらいそれが続いていく。

「!!!!」

「喰らえ」



ドンッッ!!

そして容赦なく引き金を引くデイケイド。

一枚目をくぐった弾丸が巨大化して蒔風を押しつけ、さらに通過しながら肥大し、蒔風の体を押ししていく。

しかし一番最後のカードをくぐったところで弾丸（すでに砲弾と言った大きさだが）が、四つに割れて後方に飛んで行った。

「クソが!!」

「土さん、悪ですね」

まるで悪役のセリフを吐くデイケイドが見た蒔風の手には、風林火山ではなく天地陰陽・風斬車が握られていた。どうやら風林火山は弾丸を止めるために手放したらしく、バーサーカーの斧剣の下に落ちている。

その蒔風に、クラウドが二刀握って斬りかかっていく。

風斬車を「天地」「陰陽」に分けて組み直し、下がりながらそれを

受ける時風。

クラウドが大剣を叩きつけ、それを時風が体捌きで回避したところにもう一刀を斬りつける。

それを時風が側宙して回避し、そのままクラウドの胸に蹴りを放った。

が、その蹴りは理樹のバリアに阻まれ、一刀の掌底が時風の腹部にめり込んで身体を吹き飛ばす。

吹き飛びながらも時風は天地陰陽を投げ、クラウドたちの顔面を狙うもののそれは簡単に弾かれてしまう。

「タフだな」

ドスッ

アーチャーの短い一言と共に投影剣が射られ、それが時風の足元に刺さる。

そして

「ブローケンファンタズム  
壊れた幻想」

それが爆発し、時風の立ち位置を爆心地に変えた。その攻撃を受けてごろごろと地面を転がる時風は、体のあちこちが煤けており、場所によっては甚大な火傷を負っている。

「死なれても困るが、あの程度で済まされるのも心外なのだがな・・・」

その驚異の耐久力に冷や汗を垂らすアーチャー。

「でもそれくらいのつもりじゃないと勝てませんよ!!」

その後ろからスバルが飛び出し、突っ込んでくる時風にカウンターを入れようと拳を握る。

リボルバーが唸り、その顔面に向かって拳を握って突き出した。

そして、時風がそのまま頭突きでそれを迎え撃つ。

バキリという嫌な音がして、そしてそれから時風の蹴りがスバルの腹に叩き込まれる。

「うグ・・・ゲホツ・・・そんな・・・」

スバルが腹を押さえながら信じられないものを見たように時風を見る。

バキリ、といったのは、彼女の拳ではない。時風の頭蓋骨だ。

感触からして砕けてはいないが、ヒビは入っていると聞いたところか。

そしてそれで拳を止めたうえで、スバルに反撃してきたのだ。

非殺傷と言っても、やはりそれは物質同士のぶつかり合いではあるのだから損傷はある。

だからこうした怪我は当然あるものだが、だからと言ってこの「行為」がまともであるわけではない。

「下手をすれば死ぬ判断だろ・・・これ・・・」

自分の命を無視した戦い。

それが簡単にできるのが、この男なのである。

覚悟も何も、ありはしない。

からっぽだとしても、彼はあっさり命を捨てられる。

頭部からドロリを血を流しながら、時風がまた突っ込んでいく。

クラウドたちがそれに対抗しようと剣を握り

「あなたたちは下がってなさい」

迎え撃つ前に、アリスが時風の腹に足刀を入れて真逆に吹き飛ばした。

「こんなところで全力を出してどうするんですか。たかだかこの程度一人に」

バサアッ！とアリスが服を脱ぎ払い、ノースリーブの服に替わる。そして、立ち上がってくる時風に対して、拳を真っ直ぐに向けて宣





蒔風の胸に、アリスの拳がめり込んで吹き飛ばす。蒔風も受け身を取ってその衝撃を逃がすものの、見るからにボロボロになっていつていた。

アリスに選手交代してから、蒔風への攻撃は怒涛そのものだった。攻撃はすべて受け流すか防がれ、確実な一撃が確実にダメージを与えて行っていた。

蒔風の蹴りをアリスが掌で流し、拳を避け、後ろ廻し蹴りを掴み取る。

そして地面にビタンビタンと叩きつけまくり、最期に円を描くように地面を引きずって投げ飛ばした。

攻撃されることに対して、蒔風は最善の対策をとっていた。叩きつけられれば頭を抱え、投げ飛ばされたら衝撃を流して受け身を取る。

だとは言っても、やはり攻撃のダメージは耐えられるものではなく、明らかに致命傷の傷をすでに四つほど抱えていた。

「頭蓋骨陥没、気管破損、内臓損傷、動脈失血……まったく、どれだけのことをすればそれだけ動けるのでしょうかね」



半ば呆れたようにアリスが眩き、向かってくる蒔風を見つめた。

腕を肘から振り、力を溜めて蒔風が拳を全力で握りしめる。

そうして蒔風が放った打滅星を、アリスが拳とすれ違うようにして躲し、上腕を首の下に引つ搔けて地面に叩きつけた。

バンツ！！という音がして蒔風の身体が跳ね、地面から浮いたところにアリスのラッシュユが叩き込まれる。

右ストレート、左ブロー、右蹴り上げ、右後ろ蹴り

後ろ蹴りでまた少し浮かせた身体に左アッパー、左蹴り上げ、頭を掴んで右ひざ蹴り、一回転して左エルボー

そして止めに両手の連続突きを十発叩き込んでから、一回転して十分な腰の捻りを練り込んだ後ろ高回し蹴りが側頭部に命中して吹き飛ばした。

「ア、アリスさん、舜さんは大丈夫なんですか!？」

一通り終わらせたアリスに、ティアナが駆け寄って聞く。  
あれで蒔風は大丈夫なのか、と。

それに対し、アリスがニツコリと笑って答えた。

「ええ、大丈夫ですよ」

そう言っていると、蒔風の体がグラリとしながらも立ち上がり、蒔風に向か  
かって腕を伸ばして突っ込んできた。

「しっこい」

そしてそれにアリスは手に剣を一本出し、振り向くと同時に肩から  
股間にかけてバツサリと蒔風を切り捨てた。  
ブシャアッ！と血が噴き出して、蒔風の体が荒野に沈む。

「舜！！！」

「……………は？」

セイバーが倒れた時風に駆け寄り、ほかのみんなもそうする中、アリスが一人気の抜けた声を出した。

「ど、どうしたんですか？」

「どうしたって……舜が!!」

「ええ、だから助けに行くのでしょうか？」

「え？」

「え？」

「あれ？何かかみ合っていない？」

何やらおかしい。

アリスとセイバーたちの会話が成り立たない。

ティアナがおずおずとアリスに聞く。

「あの……舜さんを助けに来たんですね？」

「ええ」

「着きましたよね？」

「ええ」

「（時風を指さして）出てきましたよね？」

「ええ」

「あれ、舜さんですよね？」

「いいえ？」

「あれ？」

「ここがかみ合わなくなる。

あれは時風ではないというのが。

「動きも、見た目も、確かに時風です。さらに言っなら「死の恐怖」も取り払われています」

でも、あれは時風舜ではない、らしい。

「死亡直後の死体に生前の電気信号などのデータを送ることで気配から何までそのままに人形とする技術を彼らは持っていたでしょう。それを蒔風でやっただけです」

アリス曰く、彼らは結局うまくは行かなかったものの、蒔風から得た膨大なデータを送りつけ、「この蒔風」を作ったようだ。致死量ギリギリ、というのはこの男に対するモノだ。

「つまり士さんはそれに気づいていたからあれだけ本気だったんですね!!」

「あ……あぁ！あぁそうだ。俺には、全部わかってたさ」

「つまり、俺たちは謀られたのか」

「おそらく、あの中にまだ蒔風はいます。こうしている間にも、多くのデータや力を吸われて……」

ダン!!ザザザザザッ!!

と、そこでアリスの言葉を遮るようにして城壁の上から何か飛び出してきて彼等を取り囲んだ。

その数は十三。どうやら彼らはこの数が好きらしい。

そしてその顔は、全てさっきまで戦っていた相手と同じものだ。

「こいつらは……」

「なんてことを」

周囲に現れた、十三体の時風。

十五天帝はさすがに全部ではなく、そのうちのいくつかを各人がもっていた。

風林火山を持つのが四体、天地陰陽が二体、獅子天麟が三体、龍虎雀武の未解放状態が二体、解放状態が二体だ。

「もう隠す必要はない、ってことか」

「だが、本気でやっていいなら）ガシャ（」

「やれない数じゃ……」

ドンッッ!!!

武器を握り、じゃあ行くかというところで十三体全員にエネルギーが送り込まれた。

それは施設から送られているモノらしく、日光で薄れて見えにくい  
が、キラキラと光る銀白色をしていた。

「!?!」

「まさ・・・か・・・!?!」

バンツツ!?!

そしてエネルギーが溜まったのか、十三人が全身に力を込めて何か  
を解放した。

その構えはまちまちだが、どれもがさっきの一体とは全く違う気配  
を漂わせている。

「ねえ、これって・・・」

「ああ、翼は出てないが・・・」「開翼」だ」

「まさか、ここまで翼人のことを知っているとは・・・!?!」

限りなく時風に近づいた十三体が、武器をそれぞれ構えて周囲を回





「・・・つとお・・・俺、こついつの得意じゃないんだけどね・・・  
ほら、大丈夫か？」

「あ、はい大丈夫です」

「問題ないぞ」

スタン、とそれに続いてなのはと星も降りてくる。

当初はこの男だけで来るはずだったのだが、二人がどうしてもついてきたのだ。

「さて・・・どつちかなあ？こつちかな？ん？この機械どう使  
んだ？」

「・・・」

それにしても機械が苦手なこの男一人で本当に大丈夫だったのだろ  
うか？

ついてきてよかった気がする。

そう思いながら、なのはが機械を受け取ってこつちだと案内する。

「お、ありがとな。じゃ、いっちょ行きますか！」

シュツ、と敬礼のように指を向ける男が張り切る。

日高仁志、普段は皆からヒビキと呼ばれる男性が、先に進む。

別働隊が動き出す。

.....

「.....」

気絶した研究員の胸ぐらをつかんでパツと放して落とす唯子。

あれえ？と首をかしげ、彼女は先に進んでいく。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 偽翼（後書き）

実は蒔風ではなかったという件  
そしてやはり敵は外道だった。

ちなみに青龍たちは気づいてましたけど、アリスと同じように「皆  
わかってるよね？」みたいな感じだったそうです。

そして侵入組。

ヒビキさんとか出したら面白い気がしたから出しましたwwwwww

次回はまた戦闘

時に・・・偽蒔風との戦い、一人一人書こうか悩んでいます。  
軽くしますか？ガッツリしますか？

蒔風

「自分で決めるよ」

では、また次回で

## 十三人、侵入班、囚われの身

「お……グう……」

蒔風が部屋で唸る。

四肢の先端を壁にはめこまれ、そこからエネルギーが取り出されて  
いつている。

その下の床にはすでに水たまりのような汗が垂れており、疲労の程  
がうかがえた。

「くっそ……好き勝手に薬やったと思ったら今度はこれかよ……  
」

苦しそうな顔をして、悪態をつく蒔風。

しかし、聞く人間は一人もない。代わりに、壁に埋め込まれた機  
械が止まることなく動き続けている。

「ふう~~~~~……ダあツツ!~!!」

ゴツッ！！！

息を深く吸い、一気に吐き出して、時風がその手にエネルギーを放出し、壁ごと破壊して脱出しようとする。

しかし壁はガキョガキョという音を立てて少し揺れただけで、すぐにそのエネルギーと衝撃を吸い取って送り出してしまふ。

「~~~~~ツ……ハアツ、ハアツ……クソ」

そしてまた憎たらしそうに呟く。

（俺のエネルギーが使われているってことは、ここに誰か来たってことか……多分アイツらだろうなあ）

脱出できればよかったのだが、これ以上抗うと逆にエネルギーを与えることになりかねない。

「EARTH」が来ているのなら、これ以上は首を絞めるだけだ。

「果報は寝て待て、ってことか」



飛ばす。

後退するクラウドだが、大剣をクイツと持ち上げ、剣を一本射出、蒔風に向かって飛ばしていった。

しかし蒔風はそれを真っ向から弾き飛ばし、クラウドになおも向かって行く。

「クラウドさ、ウワオッツ!?!」

「自分の相手に集中しろ!?!」

「相手の数の方が多いんだからってもうこの!?!?!」

現在、各人がそれぞれ一人ずつ蒔風を相手にしている。

混戦、というよりは一対一がいくつもある、といった感じだろう。

「相手の方が数が多いんだ!?!自分の相手以外を気にしていたら死ぬぞ!?!」

「でも気にしないわけには……」



ドゴオウツッ!!!

周りを気にする一刀の言葉を遮って、アリスと時風の爆発が轟いた。現状、超えた分の余人数はアリスが一人で相手にしているのだ。

「風林火山、獅子天麟、龍虎雀武、天地陰陽。十五天帝オールスタ  
ーズですか」

そう言いながら、手に握った青龍を振るうアリス。七獣を戻して戦わせてもいいのだが、正直言って彼等では粉碎されてしまう相手だ。

それなら武器となってくれていた方が戦力になる。

と、言うわけで龍虎雀武、獅子天麟は今、アリスが使っている。

アリスが上空にジャンプし、四人がそれを追うようにして一気に向

かつて突っ込んでゆく。

それに対してアリスが独楽のように回転し、「獅子」「天馬」でその顔を狙って斬り裂こうとする。

しかし四人はそれを受けず、少しだけ身体を逸らしてアリスに向かって剣を振ってきた。

四人の内アリスの攻撃範囲にまで突っ込んできたのは二人。その二人は「切られても戦える程度の傷」になるように回避し、顔と胸元を斬り裂かれながら獅子天麟と龍虎雀武を振るって打ち合う。

そして残った二人がそれぞれ突きと斬撃を飛ばしてきて、組み合ってきた二人もろともアリスを切り刻もうとしてきた。

「本気ですかッッ!？」

ギャゴゴゴゴゴ!という金属が振動するような音がして、三人にそれが命中し、回避したアリスが地面に降り立つ。

回避したと言ったものの、二の腕や頬にはうっすらとした切り傷

が出来ており、血がたらたらと流れ出てきていた。

「蒔風四人相当の相手……これはさすがに………クラウドさん……！」

「なんだ……！」

上空から降りて　　というより落ちてくる四人を見上げ、アリスがクラウドに叫びかける。

獅子天麟の攻撃をかわし続けてから蹴りを放つクラウドがそれに応えると、アリスが蒔風の一人を蹴り飛ばし

「一人あげます……！」

「いるかア……！」

クラウドの方に飛ばしてきた。

クラウドは当然拒否するが、すでにこっちに飛ばされてきているのだ。対応しないわけにはいかない。

こうして、クラウドの方に二人目の獅子天麟時風がやってきた。

アリスの蹴りで顎が砕けているようだが、どうせなら腕の一本でもへし折ってくれていればよかったのに、と思う。

同じようにして理樹にも時風を一人飛ばし、いい仕事したと汗をぬぐうアリスが再び時風を相手にしていった。

「「ぜってーあとで呪う!!!」」

しかし、アリスの耳には届かない。

.....

《ザっ、ザザッ.....》

「.....外との連絡がつかない」

「妨害電波が出てるみたいだね……」

施設内を進むヒビキ、なのは、星の三人は、いまだ時風を見つけていない。

外での様子もわからない以上、とりあえず先に進むしかないのだ。

研究員が慌ただしく騒ぎだし、対処に追われていたためここまでは楽に入ることができた。

「誰か入ってるのかな？」

「さあ？でもま、俺らは俺らでやることしましょ。デバイスさん、準備はいいかい？」

《いつでも》

「お二人さんも、多分やったら敵が来るから、準備いいかい？（キイン……）」

「大丈夫！！」

「むしろ来てみる、という感じですか」

「そりゃ頼もしい。では……ハアッ！！！」

ドドンッッ！！

そうしてヒビキが変身し、音撃棒を手にしてクルクルと回す。

ベルトから外した鼓を外して壁にセットし、大きくなったそれを思い切り叩いた。

ドオン！！！！という音が鳴り響き、施設内に浸透していく。

それをレイジングハートが感知し、ソナーのように内部の構造を測って行った。

「どう？レイジングハート」

《いま私たちがいるのはここです》

そういつて、レイジングハートが地図を出して一点を点滅させる。

この地図は円形をしていた。

それを円グラフのように四分の一ずつ分け、それぞれを少しずつ離して隙間ができていて、その真ん中にもう一つ小さな円（塔になっている部分）がある。

そしてその四つに分かれたものから、それぞれ隣の区画と塔に通路が通っている。

響鬼たちがいるのは、右上の区画から右下の区画に伸びる通路だ。音が響き切っていないからか、左側の方に行くほど、地図はぼやけていた。

「広い……」

《今では時風を見つけたことが出来ませんでした。とりあえず地下はないようなので……》

「じゃ、左側かな？」

「それか塔の上、ですな。でもその前に」

ガシャン、という音がして、目の前にクリスタルでの模造戦士が現れた。

見た目からして、相手は

「俺かよ」







カンカン

「うーむ。硬いなあ」

鉄の扉をノックするように叩く唯子。

ここまで順調に進んできたものの、ここでいきなり壁が下りてきて行く手を阻んでしまったのだ。

戻ろうにもそっちにも壁が下りてきて閉じ込められている。

「じゃあ……」

ドゴン！！

そして、唯子が下腹部に力を込めて、一歩踏み込んで拳を叩き付けた。

しかし数秒ビリビリと振動してから、その衝撃は唯子の体を叩いて弾き飛ばしてしまっ。

「きゃあ!?!」

そして反対の壁に当たり、その衝撃がまた弾け返って唯子の体を飛ばす。

まるで全面トランポリンだ。しかも壁の硬さはかなりのもの。

「クツ・・・キャあああああああ！！！！」

そんな中でも、唯子は必死になってガードや受け身を取っていた。

そして、床に体がついた際に腕を全力で押し付けて方向転換する。

腕の筋肉がメキメキと嫌な音を立てるが、それでも唯子は前進方向の壁に向かって体を飛ばした。

「アアアアアアあああああああああ！！！！」

ドゴオウ！！！！！！

その勢いのまま、唯子が肩からタックルをしてその壁をブチ破った。

「つつう・・・・・・」

しかし、右腕は肩から外れてしまったのかブラリと下がってしまった。  
ている。

「グツ・・・あアッ！」



「ダメか」

ダメだろ

お前が

t  
o  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

十三人、侵入班、囚われの身（後書き）

蒔風はいつたい何をしているのだろうかwwwwwwww  
ちなみに区切りが違うだけで言ってることは前と同じです。  
あってるか自信がないwwww

唯子さんが少し負傷

戦いはかなりヤバい領域に  
ヒビキさんはなかなか順調

といったところでしょうか。

なんだか進展ないなあ  
ごめんなさい

次回、やっと合流！！発見！！

ではまた次回

「死」という恐怖

《KUUGA AGITO RYUKI FAIZ BLADE

HIBIKI KABUTO DEN-OKIBA FINAL

KAMEN RIDE DECADE!》

《ATTACK RIDE BLAST!》

ドドドドドドッ!!

コンプリートフォームへと強化変身したディケイドが、強化されたブラストを時風に向けて撃ち放った。

それを畳返して防ぎ、その壁を蹴り飛ばしてくる時風。

ディケイドがそれを斬り裂いて防ぐと、その向こうから時風がディケイドの胸を飛び蹴りで蹴り飛ばした。

「ガアッ!・・・くそ、やっぱり強えぞ!」

「当たり前のことをいまさら言っな!」

半ば苦笑気味に言うディケイドに、アーチャーが皮肉で返す。

彼も多くの武器を投影して攻撃を受けているが、行けて互角程である。

これ以上の攻撃手段は固有結界しかない。

「まあこいつがそれを許してくれるわけもないのだがな!!」

「ハアツツ!!!!」

ゴソツツ!!!!という硬い音がして、スバルの蹴りが蒔風の腹部に突き刺さって身体を一直線に吹き飛ばす。

しかしカウンターで蒔風のパンチが顎をかすめたらしい。スバルの膝がガクリと崩れそうになり、その一方で蒔風がゴボリと血を吐き出しながら立ち上がった。きた。

「ツツ!!!!こんのお!!!!」

ザシツ、ザシツ、と不安定な足取りで蒔風がスバルの方へと迫り、未解放状態（円盤状）の龍虎雀武を投げ飛ばしてきた。

ビーン!!!!という振動音が聞こえ、それがスバルの体を上下に分けようと飛んでくる。

それをスバルは蹴り上げて防ぐが、代償にマツハキヤリバーのローラーが二つ転がった。



致命傷は防いだが、機動力を削られる。

蹴り上げ直後のそのスバルに、蒔風が拳を握って振りかぶり、腹部に向かって重い一撃を突き出してきた。

まるで槍か杭かを思わせる一撃。  
喰らえば確実に腹に穴が開く。

そう直感したスバルが蒔風の腕を飛び越え、彼の頭に手を置いて逆立ちになってから背後に回る。

「IS発動!!!」

頭を飛び越えるスバルがその瞬間、両手から振動破碎を放って蒔風を破壊しようとした。

頭部の血管が切れて頭皮から血が吹き出し、血涙まで流しだす蒔風。スバルはその恐ろしさを必死になって噛み締め、耐えた。

もしもここで即座に蒔風が頭を引いて体勢を整えれば、また仕切り直しと行けるだろう。

だが、この蒔風はそんなことはしない。  
死の恐怖がない彼等は、ただ相手をつぶすことのみ考える。

もはや「個」ではない彼らは、自分の消失に何の疑問も持たない。

振動波を流し込まれ、頭部が破壊されながらも、蒔風がグリンツ！と頭はそのままに胴体をこちらに向けてスバルに向かって振り突きを腹に放ってきた。

蒔風の首からゴキボキと骨の碎ける音がした。

「ひッ!?」

《Protection!!》

その姿に戦慄し、スバルの動きが一瞬止まる。

それを察知したマツハキャリバーが魔力バリアを展開させ、その拳を受け止めさせた。

しかし、拳の威力は絶大であった。

横薙ぎに振られた振り突きが、そのバリアを砕いて突き進んできたのだから。

だがそれにも意味はあり、蒔風の振り突きがスバルの腹をかすめ、少し肉を抉る程度に済む。

もう少し下がるの遅ければ、スバルは腹を削り取られ、腹から内臓をこぼして死んでいただろう。

だが恐ろしいのはそれではない。  
今それよりも恐ろしいのは、首があらぬ方向を向いてブラブラして  
いるにもかかわらず立ち、スバルに向かって拳を向けているままの  
時風である。

首が回らないと判断したのか、身体を後ろに向け、両眼をこちらに  
向ける時風。

しかし破壊された頭部ではそれが限界だったのか、身体が前に向か  
って倒れた。

「う……あ……」

彼女はレスキュー隊員だ。  
望む望まずにかかわらず、人の「死」というのは見てきたつもりだ  
った。

目の前で絶たれる命だって、いくつだってあった。

しかし、ここままでまざまざと、あからさまに、「死」という物を見

せつけられたことはなかった。

彼女はレスキュー隊員だ。  
レスキュー  
命を救う人間なのだ。

その為の障害は取り払うものの、決してそれは目的ではない。

彼女はもしかしたら、今回来た中で一番「敵を倒す」事に向いていないのかもしれない。

「スバル！！大丈夫！？」

「ティア……………」

「ポケットとしないで！！立てる！？来るわよ！！」

「だ、大丈夫……………大丈夫！！！！」

しかし、それでも立ち上がるだけの強さを彼女は持っていた。

身体は傷つき、出血も多いが、それでも立った。

身体を染める赤は、彼女の物よりも相手によるものが多い。

あれは偽物。あれは嘘。

そう思うことで、次の敵に向かって行く。

だが、これから倒す相手も、また同じ顔なのだ。

それも、さっきのと同じような死に方をするだろう。「死」を無視した、「命」を捨てた攻撃。

だから、アリスは最初こそ四人を相手にしていたのだ。

一人が一人、倒すのならば然したる問題ではない。

しかし、一人が同じ人間を何人も殺すのは、決してまともな状況ではない。

たとえ相手が偽物だとわかっていても、その死に顔は蒔風の物なのだ。

たとえ相手が偽物でも、その「死」は決して偽りではない。

それに立ち向かうことは、一朝一夕でできる覚悟ではない。

そして、戦場は、その時間すら、許さない。



《先ほどの音撃から、彼の居場所が特定されました》

「ホント!?!」

《左下のエリア中央です。そこに捕らわれています》

「今俺たちが右下だから……こっちか」

「行こう」

クリスタルの残骸を踏みしめ、三人が進んでいく。

順調であるのは、誰もが疑ってなかった。

しかし、その左下のエリアに入ったところで、敵は現れた。

「あれは……」

神剣・ヴァルクヴェインを握った青年・鉄翼刀が、三人の行く手を阻むように待ち構えていた。





るで、一つの扉の向こうから変な声が聞こえてきた。

（ゾボドビ、ズギギバボドガゴボダダ！ドサバセダ、ボドビジヨデ  
デバサザグジジュ、グビグゴババギセガ、ダダバマイカゼ、ゴボグ  
ム、ムンバサンギバシグ、バセンジレサセダガギ、ゲギボグリヨブ  
ゾ、ギビギビドザツド、グガゲダボデガセ！！）

それを聞いて唯子は

「なにこれ怖い」

何とも言えない恐怖に捕らわれた。

ここはスルーしてもいいよね。

そう思い、通り過ぎようとした唯子だが

（ダメか）

そんな声が聞こえてきて、足を止める。

どうやら中にいるのは人間らしい。さっきの言葉がなんなのかよく  
わからないが、ダメか、と言っているということは会話はできるは  
ず。

うまくいけば翼刀のことを聞けるかもしれない。

そう思い直し、彼女がコンソールを見つけて破壊、扉を開いて中に入った。

「お邪魔しまーす」

「ん？・・・ガゲツバ！！」

「ひえ！？」

「ああすまん・・・お前は！！」

「はあ、私ですが」

そこにいたのは、蒔風だった。  
無論、彼が蒔風であることや、蒔風と自分が戦ったことなど彼女の記憶にはないのだが。

「そうか・・・目を覚ましたのか」

「？ あなた私を知ってるんですか？」

「記憶がなかった系か？あの町でお前さんと戦った人間だよ」

「……………おお、ではあなたが時風舜さん？」

「テキストに呼んでくれ。とりあえずこれを外してくれると助かるんだが」

そんなこんなでとりあえず唯子も自己紹介し、ペコリと頭を下げる。そして時風の手足を壁から引っこ抜こうとするのだが……………

「この壁ってさ、殴ったら」

「衝撃が反射して君を叩くだけだ」

「ええ。それはさっき試したし」

「やったのか」

時風と唯子が話し合うが、特に案が見つからない。

唯子に壁の機械を扱うのは無理だし、時風から指示を出そうにも機械が多すぎてよくわからない。

「もう翼刀探しに行っちゃっていいかな？」

「お〜い？翼刀って誰？」

「聞いた話だとあなたがそうなってる原因の人」

「あいつか」

「機械壊してみます？あ、でも壁に埋め込まれてるから駄目か」

「だなあ。うまく腕と機械の隙間を攻撃してくれるとありがたい」

そこで時風が提案する。

この際、四肢が傷ついても構わない。とりあえず脱出しないと話は始まらないのだ。

.....

「これで三発目だ!!」

《FINAL ATTACK  
RIDE DE DE DE  
DECADE!!》

「ウオラアあああああ!!!!!!」

ゴッ!!ドオオンッ!!!!!!

荒野にて、時風の一体が爆発、四散して撃破される。

これで三体目だ。

しかし、この状況に持つてくるまでにかなりの負傷をした。

デイケイドはすでにファイナルアタックライドを三枚使っている。アーチャーも投影に使用する魔力が尽きてきているし、セイバーの甲冑もすでに見る影がない。スバルもティアナも、肩が大きく上下して魔力ももう少ない。カートリッジもあと二発くらい。

クラウドや理樹たちと言った翼人四人はまだ無事だが、疲労の方は隠しようがない状態だ。

唯一無事だと言えるアリスも、これから十体の時風を相手にすると  
なると

「結構……キツイかもしれないね」

「だが相手も少なからず消耗しているはずだ。このままならどうにか……」

ズっ……

「!？」

このままなら、どうにか勝てるかもしれない。  
そう思っていた彼らの目に、それを打ち砕くモノがやってきた。

銀白のエネルギー

施設から再び放たれてきたその光が、残った十人に降り注いでいき、  
失っていたエネルギーを充填していく。

8741

「勘弁してほしいものだな……」

「これだけのエネルギーを取られ、時風は無事なのか……?」

エネルギーを浴びながら、十人が歩を進める。

歯を食いしばり、アリスたちが一斉に向かって行った。













勢いがあまりにもありすぎて、彼女にはよく見えてなかったようだ。と、そこに穴を通ってなのはと星がやってくる。

その目に飛び込んでくるのは、蒔風と、その肩を持ち上げている唯子。

「その役目は私のなのに――！――！――！」

なのはがウソダンドコドーン！！の勢いでそう叫ぶ。  
一方星は「よかった無事か」と軽くため息をつく。

蒔風、救出。

しかし窮地はいまだ脱していない。

.....  
.....

ウン……

「エネルギーが止まった!!!」

「いまだ!!!行くぞ!!!」

《ALL RIDERS KAMEN RIDE FINAL  
FORM》

エネルギーの供給が止まり、時風達の動きが一気に鈍ってきた。

その瞬間、デイケイドが相手にしている時風を蹴り飛ばしてケータツチを操作、起動させ、クウガからWまでの最終フォームが出そるえさせた。

《FINAL ATTACK RIDE ALL RRR  
RIDERS!!!》

「ウオああアアアアアアアア!!!」

ゴッ、ドッ、ドッ、バガアッ!!!

ドゴオオウッッ!!!

その11ライダーの必殺技で時風たちを一点に吹き飛ばし、その一点に向けてセイバーの宝具が振り上げられた。

「エクス約束された、カリバー勝利の剣!!!!!!」

「!!!!!!??」

「ゴォッ、ジュゴワツッ!!!!!!」

光の束が満身創痍の十人に襲い掛かり、その体を跡形もなく消し飛ばした。

「や・・・つたぞおおお!!!!!!」

「皆大丈夫か!? 立てるか!?!」

皆が一斉に歓声を上げる。

しかし、これから踏み込もうにも皆疲労しきっている。

そんな中アリスだけでも突入しようと足を一步踏み出し

バンッ！！！！

城壁の巨大な門が弾けて開き、その向こうから装甲響鬼と翼刀が弾丸のように飛び出してきた。

響鬼が押し付ける音撃棒を一気に押し出し、翼刀の体を荒野に転がす。

「ふう〜。や、みんな。大丈夫か？」

「ヒビキさん！！！！」

「ふん」

中に入っていた響鬼が現れたということは、蒔風は助けられたということだ。

その結果は、彼らの心を明るくする。

しかし、そこに水を差す雄叫びが、一つ荒野に轟いた。

「ゴオ唾ああアアアアアあああああ!!!」

翼刀である。

頭を押さえ、剣を振り、何やら苦しそうな様子である。

だがやるべきことは見えているようだ。

剣を握り、今までのおとなしそうな顔とは真逆の顔をして、響鬼と、たった今戦いを終えた十人に突撃していった。





「いや、急いでいこう、星」

星なりの考えで唯子を止めていたのだが、蒔風はとにかく急いで外に向かおうとする。

その蒔風に、星が聞く。なぜそこまでして向かうのかと。

「舜の身体も無事とは到底言えない状態。そんな状態で、何かできるとお思いか!?!」

「必要ならこの命捨てよう。だが、今やるべきは俺じゃない。彼女だ」

「わたし?」

蒔風の視線に、唯子がきょとんとする。

何もできないというのは自分でもわかっていた。

ただ何かをしなければならぬと思っただけだ。

しかし、蒔風は彼女にやるべきことがあるという。

「ヒビキさんを連れてきてくれたのは良かった……これなら何とかなりそうだ」

その小さな言葉で、時風が先に進んでいく。

「安心してくれ、唯子。鉄翼刀は、必ず救う。そして、それにはお前の力が不可欠だ」

満身創痍ながらも、時風の頭には勝利が見えていた。

はたして、それは現実にできるのか。

t o b e c o n t i n u e d

「死」という恐怖（後書き）

デイクイドによるオールライダー最強フォームフルボッコでエクスカリバーとかオーバーキルすぎるwwww  
11人ライダーの攻撃ですでに時風十人とかもう戦える状態じゃなかったですからねwwww

彼等だけでも苦労して時風三体は倒せました。  
彼らも強くなってますからね。

しかし全員出し切った状態からのVS翼刀。

さあ、みんなはだいじょうぶなのか!?

そう言えばTPPによる二次創作の影響はだいじょうぶなんですかね？

アメリカの著作権法が日本に適用されたら自分たち一斉検挙ですよ。

日本の著作権法は「訴える人」がいて初めて違法になる制度。

アメリカのは誰も言わなくても「やってるならアウト」になりますから。

でもまあそれで違法になっても武闘鬼人は書きますけど  
どね！

サイトを上げるかもしれない。

ブログにあげるかもしれない。

欲しいと言う人にデータを送るかもしれない。

野田さんがTPPでどこまで参加していくのかによりますが。

全部はいはいと飲みこんでいったら私はこの国をもう信じられませ  
ん。

ともかく次回、剥げはじめる洗脳？

ではまた次回

## 断罪

翼刀の振るうヴァルクヴェインからの刃が、一同に向かって飛来してくる。

だが、大気を振るわす轟音がその刃を叩き、ひとつ残らず大地に落とした。

「危ないもん飛ばしてくるなあ」

響鬼の叩く音撃が、その刃を空中で迎撃していつているのだ。

その援護を受け、バーサーカーが翼刀に向かって突進、一撃で吹き飛ばそうと剛腕を振るった。

だがその攻撃はまるで予測されていたかのように回避され、翼刀がバーサーカーの背後に回る。

そして膝裏を踏みつけて脚を崩し、ガクンと降りてきたバーサーカーの首筋に剣を斬りつけてダウンさせていく。

「ぐ……う……」

「力が出ない……」

理樹や一刀、観鈴といった翼人たちは力が抑圧されて戦えない。

バリアが出せない、武器が出てこない、衝撃波が発生させられないとあっては彼らは一般人となんら変わらないのだ。

しかし、そんな中でも剣を振るい、翼刀に向かって行く人間が一人。

「凶、斬りツツ！！！」

ゴツ、ゴツ、ゴツ、ゴンツツ！！！！

クラウドである。

その大剣を振るい、翼刀に凶斬りでの四連撃を叩きつけ、豪快に攻め立てていた。

もともと戦う力を持つクラウドなら、抑圧されてもこうして戦うことができる。

力はもちろん下がるし、能力もいくつかが削がれてしまいが、今は問題ない。

飛んでくる刃を剣撃で弾き飛ばしながら翼刀に向かって走り進み、一回転して横薙ぎに剣を振るうクラウド。

その剣をジャンプして回避し、翼刀がクラウドの頭上から剣を一突きしてきた。

それを紙一重に回避するクラウドの脇を、ボウガンのように一直線となって射出された刃が通過していつて地面に突き刺さる。

回避に成功したクラウドは、着地した瞬間の翼刀を狙い、その腹部に向けて見事な蹴りを突き放った。

が、その足を翼刀は掴み取り、一気に捻り上げてクラウドを地面に叩きつける。

グおッ！！と言う声と共に肺の空気をすべて吐き出したクラウドに、翼刀の拳が振り上げられた。

「マズイ！！」

その拳を止めようとアーチャーが弓を射、ディケイドやセイバーが切り掛かっていくが、すべて撃ち落とされにべもなく薙ぎ払われる。

「……………」

「クソッ！！」

翼刀が無言で拳をクラウドに振り下ろす。

腕をクロスしてクラウドがそれを受け止めようとした。

そのとき



「ハアツツ!!!」

バキィ!と翼刀のその腕をアリスの飛び蹴りが弾き飛ばし、その拳がクラウドを叩き潰すを防いだ。間一髪である。

そのクラウドをアリスが起き上がらせ、声をかける。

「大丈夫ですか!」

「ああ。行くぞ!」

ギョオオツ!!

アリスと立ち上がったクラウドが構えて意気込むが、そこに無数の刃が飛来してくる。

だがその刃をアーチャーが投影で迎撃し、さらにバーサーカーが壁になってクラウドとアリスを先に進ませた。

そしてバーサーカーが翼刀にのしかかるように飛びつき、それを転がって回避する翼刀へ、クラウドが大剣を振り下ろす。

襲いくるその剣を翼刀が受け、するとクラウドの大剣が展開、翼刀の周囲に散って行った。

「超、究……ガアツ!」

しかし、そこから技に繋げようとしたクラウドの言葉が痛みの唸り声で止まり、同時に技の発動も停止する。

彼の腿には一本の刃が突き刺さっており、翼刀がクラウドに拳をピタリと当て、右脚、腰、肩と内功を練り上げて、その衝撃をクラウドの胸部に不動で叩きつけた。

ズゴンッ！という凄まじい音がして、クラウドの足が地面を離れて一瞬間を浮く。

そして、全身に衝撃が走り渡り、身体の中で鈍痛が蠢いてその場から身体がはるか後方にぶっ飛んで行った。

・・・イン！！という空を切る音がして、それから後にクラウドが地面を抉って突っ込み、そこからはじけるようにして二、三回回転して動きが止まる。

「ゴボあッ！！・・・が・・・ハア・・・」

そしてクラウドの動きが止まり、バタリと地面に倒れ伏す。クラウドが、一撃で沈む。

「クラウド！！」

クラウドに駆け寄っていく観鈴を視界の端に捉えながら、自らに向かってきた剣を白羽取りの要領で挟み止めるアリス。

投げるようにしてそれを逸らし落とし、突き蹴りを織り交ぜて翼刀に攻撃を仕掛けるアリスだが、それを翼刀は体捌きと腕、脚の動きで受けていく。

そこにバーサーカーが飛び掛かって行つて、大地を大きく抉り吹き飛ばした。

その攻撃をヴァルクヴェインで受け、そのまま後転してバーサーカーの腹を蹴りあげて方足を掴み、勢いを利用して振り回してから投げ飛ばす翼刀。

そして再びアリスに向かって行く翼刀だが、そこで響鬼が叫んだ。

「音撃刃、鬼神覚声！！ハアアツツ！！！」

装甲声刃に向かつて声を張り上げ、それを音撃として打ち出して翼刀の足を止める響鬼。

その音撃に翼刀が頭を抱え、苦しそうにもがいてその場で止まる。

「これは……まさか！！！」

アリスが響鬼の方を見上げ、憶測を立てる。

「士！！ファイナルフォームライドです！！！！最終フォームでもで  
きますよね！！？」

「当たり前だろ！！！！ちよつとくすぐつたいぞ！！！」

《FINAL FOAM RIDE           HI HI HI HI  
BIIKII！！》

アリスの言葉にデイケイドが応え、ファイナルフォームライドが発  
動されて響鬼の体が変わっていく。

巨大なディスクアニマル・アームドヒビキアカネタカへと変形した  
響鬼が、甲高い鳴き声と共に翼刀に向かって飛び立っていき、音撃  
鼓の形になって張りつこうと接近した。

だが翼刀も剣を振るって刃を飛ばし、その接近を許さない。

が

ゴスッ

「ツガ!？」

翼刀の頭に拳大の石が飛んできて、その動きを止めた。

その方向を見ると、時風が同じように石をポンポンと持ち、にやりと笑ってからドサリと尻をつく。

「あゝ、限界」

そう時風が呟くのと同時に、翼刀の背後にアームドヒビキアカネタカの音撃鼓が張りついた。

《FINAL ATTACK RIDE HI HI HI  
HIBIKI!!》

《ATTACK RIDE ONGEKI-BOU REKK  
A》

そしてデイケイドの手に音撃棒現れそれを握り、翼刀に向かって思い切りたたき始めた。

「ハアッ!ハッ!!ハアああ!!!!」

連続して叩かれていく音撃鼓が、翼刀の体に音撃をたたき込んでい



洗脳というのにも、様々なものがある。

対象の思想を染め上げ、取り込んでしまうもの  
認識を誤らせて、常識から外れたことをやらせるもの

そして、対象の自我を奪い、人形のように動かすものだ。

翼刀の洗脳は、彼の精神を閉じたものだ。

その「閉じたもの」が、邪悪でないわけがない。

音撃は「悪しき者を清める波動」だ。

ならばそれを打ち込むことで、洗脳を解くことも可能だろう。

「ただし、相手はあれだけの模造戦士を作るほどに「EARTH」  
の戦力を知っている。おそらくはヒビキさんたちの猛士のデータも  
かなり手に入れているはずだ」

「つまり、もうひと押し？」

星の言葉に、蒔風が頷く。

「君次第だ」





彼はこうなる人物ではない。  
きっと自分たちを守るために、身を挺してこうなったのだ。

「じめん」

嗚呼、皆を救いたくて、貴方はこうなってしまった。  
悪しき生物兵器へと変えられてしまった。

「私が、弱かったから……！！！」

だから、貴方を救うのは私だ。  
私も助けられなかった。無駄だった。

あの街はなくなってしまった。

でも、もしその「無駄」に何か意味があるとしたら……!

「それは、今この時のために……!」

ギユアアツツ……!!

束縛された翼刀の身体に向け、拳を思い切り振りまぶって

「貴方が辛かったことも、背負ってしまった罪も、全部全部、私も一緒に……!」

つまりは、断罪

それは、貴方の。そして、何よりも私自身の



翼刀の体はぐったりと地面に倒れており、出血もひどい。何よりあの一撃のダメージが大きいのだろう。

「何をどうやったらあんな威力が出るんだ？……」

ブンブンと手を振って無事を表す唯子を見て、半ば呆れ気味につぶやく蒔風。  
しかし、その顔が直後硬直した。

「唯子オ！！後ろだア！！！」

「え？」

蒔風の叫びと同時に唯子が振り返り、それとまた同時に唯子と翼刀の間に一人の男が飛び降りてきた。

即座に唯子が振り向きざまに裏拳を放ち、それを男がしゃがんで回避、翼刀の後ろ襟をつかんで足払いしながら飛びのいた。

唯子は足払いをジャンプで避けていたが、そのせいで翼刀を奪われてしまった。

「音撃の効能はわかってたがな。まあさすがにここまでされたら解けもするか」

翼刀の首筋にスタンガンのようなものを当てて、男がそう言う。ウグ、という小さな声をだし、翼刀の身体から完全に力が抜けて行った。

「翼刀を返せ！！」

「それはできない。せつかくここまで完成したのを、みすみす手放せるか」

「返しなさい！！」

拒否する男に唯子がハイキックから後ろ回し蹴りで踵を叩きつけていく。

そのハイキックを頭を下げた回避し、踵を肘で受け止めて男が唯子の顔に蹴りを放った。

翼刀を抱えているにもかかわらず、唯子と対等に渡り合う男。

回転して攻撃の衝撃を流しながら、男が開いた手で懐からガイアメモリを取り出した。

《ウエポン！！！》

「マズイ！！」

そしてそれを首筋に突き立て、回転しながら男の体が兵器に埋め尽くされていく。

突如として飛び出してきた、砲身に唯子が横薙ぎに殴られ、ガードするものの弾き飛ばされてしまう。

「ダハハハハハハハアツ！！ぶっ放しなあ！！！」

そしてそのまま回転しながら全身の砲口、銃口から様々な砲弾、銃弾、魔法、砲撃、光線を撃ち出し、周囲を一気に薙ぎ払う。その爆発に全員が飲まれ、体中を衝撃が叩きつけていく。

そしてその爆発が終わったところ、周囲には地面に倒れたメンバーが転がっているだけだった。



その際、恐らくここを爆破して行こうとしたのだろう。  
施設のいくつかはそれによってきれいに吹き飛んでいたようだ。

だが中に残った星がいくつかの爆破装置を解除していたので、施設  
の大半はそのまま残すことができた。

「手がかりが一気に増えたな」

「だが、まだ翼刀は相手の手中にある」

蒔風とクラウドが、治療を受けながら話していた。

蒔風は点滴をいくつも受けていたし、クラウドは全身に包帯状態だ。  
クラウドに関してはさっきティファが駆け込んできたとき、致命傷  
が増えた。

「ところで、何もただ捕まっていたわけじゃないだろう？」

「……まあな」

「何を見た？」

「最悪だ」







「…………聞いた覚えがないな」

「そりゃな。俺だって話に聞いただけで知ってるわけじゃない」

「だが……その話が本当なら相当まずいぞ」

「絶対に、止める」

そう言っつて点滴を抜く時風。

少し足が揺れるが、問題はない。

クラウドも包帯の上に服を着て、ベッドから立つ。

胸が少し軋むが、問題はない。

施設の中から、様々なものは運び出されていく。

あいての、思惑とは

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 断罪（後書き）

はい！！VS翼刀は勝利したけど勝ててはいない、ですね。

乱入してきた男はウエポンメモリの適合者です。

そのデータを埋め込まれたのが、あのG4だったのですよ。  
まあ死体にデータを打ち込んで偽時風を作るんですから、それくらいはやりますよね。きっと

ガイアメモリも一種類一本と言う訳じゃないですし、大丈夫なはず。

ともかくここで唯子さんの本気発動、パート1。  
まだまだ威力をあげられるそうだが・・・？

さて、彼らは一体何を復活させる気なのでしょうか！！

とりあえず次回はなぜ翼刀だったのかということですね。  
あの街であったことの回想を、翼刀方面でつづりたいと思います。

ではまた次回

## Y O ・ K U ・ T O

検体名：Y O K U T O

一体いつからこのような名称になったのかは、もはや記述に残っていない。

ただ、われわれの求める人材の名前が、毎回この発音の物だったというのは確かだ。

我々が先祖は、その優れた技術を用いて最高の「兵器」を生み出した。

しかし、兵器は対抗するモノがあつて初めて売れるし、使用できる。毒ガス兵器を作るならば、同時に抗体も作らなければならないのと同じように。

我々は何も世界を滅ぼしたいわけではない。

我々の先祖は作り出した「兵器」はまさに最強だった。

しかし同時に、それだけのものをまた作り出すことはほとんど不可能だとわかった。

少なくとも、一人一人の人生の内では。

だから、こうして記録に残して後世に伝わっている。  
近代では子供の頭の中に記憶を埋め込んで受け継がせることもやっている。

我々の先祖が目につけた最初の「兵器」の元は、あの翼人だった。  
しかし翼人の存在は先祖から見てもまた、伝説の存在だった。

数年、数十年の探索が行われ、先祖が諦めかけたその時、ついに一枚のサンプルが手に入った。

真っ赤な羽根

数多くの伝説に名を遺す、あの「赤色の翼人」の物だった。  
死後、翼人がその羽根にある程度の力を残して消えるという伝説があったが、まさか本当に見つかるとは。先祖の執念に驚かされる。

だが、驚くのは早かった。

翼人のクローンを作ったとしても、その者が翼人になるという事はない。

クローンだとしても、その能力は決して受け継がれないのだ。  
その羽根からのデータをもとに他者に力を植え付けようとしたが、



とても翼人とは言えない劣化品しか生まれない。

そんな中、数世代ほどの実験を経て、ようやくとして成功と呼ばれる検体を開発した。

そして、先祖はそれを即座に殺した。

成功と「呼ばれる」程度ではだめだ。完全に「成功した」と言えなければならぬ。

先祖は妥協しなかったし、我々もその意思に賛同し、尊敬する。何事も中途半端は良くない。

そうして、さらに数世代を経てついに「成功した」と書かれている。

感情を司る翼もすっかりとあつたらしい。

しかも「赤色の翼人」が所持していた世界四剣の所有者として復活させられた。

これはものすごいことだ。

どれだけ気の遠くなるような実験を繰り返したのだろうか。

色は少しくすんでいたそうだが、それでも「翼人のクローン」を作り出せたのだから。

しかし起動実験でいきなり暴走（意識はあつたようなので厳密には好き勝手暴れたただけだろう）してしまった。

結果として11の世界が消えてしまったらしい。

我々の先祖は反省した。  
兵器には対応するモノが必要だと。

そして、その実験は我々に引き継がれ、完成しようとしている。

先祖は再びクローンを作り出すことは不可能だと判断した。  
そして、あの翼人に対抗するには、まっとうな力ではダメだと。

優れた「渡航者」が必要だ。

しかも、翼人の力を封じることができるとの、強力な渡航者が。

我々の先祖は再び探した。

そして、ついに一人の青年を見つけた。

その人物も、名をヨクトと言ったらしい（どう書くかはわからないが）

先祖は即座にその青年を連れてきて、実験した。

翼人のデータはある。それに対抗できるように肉体を改造するだけだ。

我々の「改造」は、身体に機械を埋め込んだりなどというそんな前

時代的な技術ではない。

もっともつと根本から変えていくものだ。時にそれは魔術や魔法と呼ばれたらしいが、分類などは然したる問題ではない。

さて、そして最初の被験者だが、一秒と持たずに死んだ。

投薬した瞬間、身体が崩壊したのだ。

先祖は落胆した。

また渡航者を探さなければ。

渡航者の能力は転生する。

魂とは別に別れてしまい、能力のみ（魂と実際あまり変わらない）での転生なので、探すのにはまた数年を要した。

そして、そうして検体を探しては実験していくことに、先祖は手こたえを感じ、着実に進歩していった。

最初は一秒と持たなかった検体も、二千を数える頃には十秒持つようになった。

そして一万を超えてようやく十分。十万で二十四時間の活動も成功。

先祖の実験で伸びる時間は回を重ねることに大きくなる率が上がっていた。

しかし、ここで今度は精神が耐えられなくなった。

肉体の方はほぼクリアしていたのに、ここでまた障害だ。

だが先祖はあきらめなかった。  
渡航者の魂に魔術的な施しをし、精神面も回を重ねるごと強くしていった。

その実験の途中、まさかの事態が起こった。

なんとその中に、あの神剣・ヴァルクヴェインの保有者が現れたのだ。

我々の実態を知って暴れだしたが、種類は違えど四剣のデータは持っていた。抑える事はそう難しくなかった。

そしてそれからは能力が転生する度にその保有者になるよう術式を施した。

あの翼人も四剣の保有者なのだから、こちらもそうであっていけないわけがない。

能力の転生先を察知する技術もでき、我々の実験はどんどん<sup>はかど</sup>捗って行っていた。最初は転生するたびに十年は月日を費やしていたのが、今ではその日のうちにわかったのだから。  
とはいっても、その検体の身体がある程度出来上がるまでは何もいじれない。

しかし、事前に準備をすることができる。

その人物のデータを集めておけば、実験がスムーズになる。

そして、それを繰り返して私の代になる。

理想的だった。

あのヨクトこそ、我々の終着点となる者だ。

苗字は鉄。

「鉄」と書いて「くろがね」とは面白い。

そして、名前は「翼刀」と書いた。

翼刀

「翼」人に「刃」を向けし者

そして、そこから「一（人）」を取り除くことで、それは完成する。

.....

.....

○×年 月 日

きょうはぼくの10さいのたんじょうびです。

おとうさんとおかさんがおめでとつとつって、きょうはおじいちゃんとおばあちゃんに会いました。

よるにはみんなあつまってばーていをやりました。

でも、いちばんうれしかったのはがっこうでした。

がっこうに、けんきゅうじょのひとがやってきました、ぼくのたんじょうびをお祝いしてくれました。

「きみはひーろーになれるんだよ」って言ってくれたけど、よくわからない。

でも、けんきゅうじょのひとたちはわるものをやっつけてくれるひとたちです。

ぼくもそうになれるなら、それはさいごのぶねげんとでした。







さらに、今日は武器ももらった。  
世界四剣だとかいう強力なモノらしいが、まあすごい剣だとい  
うことだ。

名前は神剣・ヴァルクヴェイン

こいつが俺の武器。

剣の扱いもできないわけじゃない。

こいつも使いこなしてやらなきゃな。

ある日、唯子に何をやっているのかと聞かれて、俺は子どもの頃言  
われた言葉を思い出してこう答えた。

「ヒーローになるのさ」

.....

今日は君の仮想敵との戦闘実験だと言われた。

彼らは実験というが、まあそれが研究者の言い方なのだろう。俺と  
しては修行と変わらない。



今日は事件が起こった。

空も大地もみんな揺れて、収まったときには世界地図が変わっていた。

頭の中に何やら基礎知識が流れてきたし、ニュースを見ると「世界が一つになった」とんでもないことを言い出していた。みんなドッキリか放送事故かと思っていたが、俺だけはわかっていった。

これは全部事実だ。

それから三日して、「EARTH」という組織が設立されたとニュースで報じられた。

なんでも時空管理局やらなんやらと同じような組織らしい。

基礎知識が流れてきてなかったら、みんなパニックになっていただろう。

実際、法学を勉強していた町内のアンちゃんはそのつち方面の法律も勉強していたし。

影響はいろいろあったが、大騒動にはならなかった。

この組織は「世界の管理者」だった女性が後押しし、トップには翼人がついているらしい。



だが「EARTH」は世界を崩壊から守った精鋭の集まる組織らしい。

まさかそんなことをするとは思えない。

まあ一介のガキでしかない俺の考えでは及ばないこともあるのかもしれないが。

研究所の人たちに聞いたら「君の敵は翼人だが、「EARTH」ではないよ」といわれた。

なるほど、翼人と言っても色々あるそうだ。

人間にも善い人悪い人がいるんだし、当然と言えば当然か。

だけど、気になる。

きつと反抗期だったのだろう。

ほら、言われただけじゃ納得できない時期ってあるだろ？

テレビとかに影響されて何か裏があるんじゃないかー、とか馬鹿なこと考える時期とか。

多分俺はそうだったんだと思う。











- - - - -

そして、翼刀が目を覚ました。  
ここはどこだろうか。

久しぶりに意識がはっきりしている。

今までであったことを思い出そうとすると、記憶にもやがかったようになつて思い出せなくなる。

だが、そんな中で見覚えのある女性のビジョンを見、それが何かわかると連鎖的にほかの記憶も思い出されてきた。

「唯子……？グッ……これは……この……記憶は……  
俺は……！！！」

「お目覚めかい？」

「！！……お前エ……！！！」

と、そこで扉が開いてレジエスと呼ばれる男が入室してきた。そのレジエスを翼刀が見、思い切り睨みつけて男に走り出す。

ガゴンツッ!!!

しかし後ろ手に手錠をされ、鎖が壁につながれている状態では先に進めず、むなしく壁が少し揺れるだけで止まってしまった。

「暴れてもしようがないですよ。あなたの力は知っていますからね。ああ、ヴァルクヴェインも呼べませんよ」

「お前は……この野郎……!!!」

しかしそれでも動こうとする翼刀だが、男はそんなことは気にしていないように翼刀へと話しかけた。

「さて、思い出しましたか？」

「何をだ!!!」

「貴方が焼いた、あの街ですよ」

「ツツ……!!!それは……」

「ええ、指示したのは私ですよ？あなたはどうにもできなかった、不可抗力だった。そうでしょう？」

「テメエ……」

翼刀だってわかってる。

そんなことはわかってる。

だが、だからなんだというのだ。

あの街を焼いたのは自分だ。

皆を殺したのは俺だ。

今でも、否、今は思い出せる。

あの時誰かを斬った感触を

あの時誰かを踏み潰した足踏みを

あの時殴り飛ばした硬さを

あの時間こえてきた悲鳴の振動も

全部全部思い出せる。

「ええええその通りです！あなたは一切悪くないですよ。あなたは仕方なかった！！不可抗力だった！！がんばりましたもんね。街が焼かれ、破壊され、皆殺しにされると聞いて、貴方は立ち上がった！！抗った！！でもダメだった！！大丈夫ですよ。あの街のみなさんはきつとあなたをよくやっただと言ってくれませんか！！！」

「や、やめる……」

翼刀が頭を振ってうつむく。  
男は止めない。

「さあ！！存分に恨みなさい！！それが正しいのですから！！鉄翼  
刀、君は悪くない。君がいくら」

「止めてくれ！！！」

翼刀が叫ぶ。

だが、男は止まらない。

「君がいくら友を握り潰そうとも！！助けを求め受話器に叫ぶ隣人  
を斬り捨てようとも！！止めようと向かってきた父親の胸を拳で貫  
こうとも！！縋り付く母親を焼き尽くそうとも！！」

「ああ……アアアアアアアアアア！！！！」

「まだ君の半分も生きていない子供の未来を奪おうとも！！その子  
を守るうとする必死な御老人を蹴り飛ばそうとも！！胎児を宿した  
女性を踏みつぶそうとも！！」

「俺は……オレはツツ！！！」

「人々の逃げ込んだ建物を見て一撃で吹き飛ばそうとも、今まで生  
きてきた思い出の詰まった街を壊滅させようとも！！！！」





クロノと、蒔風が会話を進めていく。

『船は見つかったが、遅かった。このままだと次元世界に入るぞ』

「そこまでわかれば大丈夫だ。で？どこの世界だ？」

『……ここだな』

そう言って、クロノが地図を出してその一点を移す。

それは、この世界の世界地図そのまんまだった。

「ここか!？」

「そう。最大世界“N o n a m e”。そこが、奴らの目的地だ」

世界が混ざった際にミッドチルダも地球も混ざってしまったため、その広大さも含めてこの世界は「第一」ではなく「最大」世界と呼ばれている。

我々の知る世界地図とは比べ物にならない広大さで、トウスクルやミッドチルダは当然のこと、ミッドガルや魏、呉、蜀の風体を持つ地域まであるくらいだ。



そして、彼らが向かう先は

「封印地域……！！！」

『「EARTH」からの要請で即座に封印指定した土地だ』

「……まあ……」あれ」を復活させるならそうなるだろうな。この世界に来てても不思議じゃない」

『奴らの到着予想時刻は6時間後だ。間に合うか？』

「ちょうど同じくらいだろうな……」

あの施設の戦いから、すでに六日ほどたっている。

相手もこちらにも準備が整っている分、先に向かっていたあちらの方がやや早いだろう。

「だが行かなきゃならない。世界は……破壊させない」

そうして、銀白の翼がその部屋を出る。

目的地は、見えた。

敵は、最悪の「あれ」を復活させる気だ。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## Y O ・ K U ・ T O (後書き)

よくわからない構成になった回想編でした。

わかりにくいと思いますが、あの施設からの戦いからすでに六日たつてます。

ちなみに翼刀がレジエスに追い詰められているのはあそこを出てすぐのことです。

つまり

施設の戦闘終了

翼刀目覚める

レジエスが言葉攻め

六日経過

時空管理局が敵船発見

「EARTH」に連絡

という感じですよ。

さて、翼刀に対抗させる兵器は何と翼人のクローンでした！！

多分誰だかわかったと思いますけどね！！

ネタバレになるからいいませんがwwww

「EARTH」が配収したデータは頭から始まっているレポートっぽいのと、あとは翼刀の生い立ち（データはなかった）です。

ですのでレポートは読んでますが、翼刀の回想部分については完璧に把握してません。

まあほとんど問題ないですけどね。

次回は最終決戦になるのかな？  
どうなるのだろうか？

作者自身もよくわかりません。

流れで書いて行ってしまっているのでwwww

そう言えばツイッター登録してみました。

登録自体はずっと前にやってたんですけどねwwww

何かするたびに呟くのがめんどくさいからやらないだろ、とほったらかしにしました。

多分これからもほとんど眩かない気がします。が、よろしくです。  
ユーザー名は「BTOKIJIIN」です。

ではまた次回

航行中の超砲撃（前書き）

横のスクロールバーを見てください

・  
・  
・

見ましたか？

信じられるか？

スクロールの三分の一以上、後書きなんだぜ・・・WWW

## 航行中の超砲撃

空を進んでいく、戦艦・瞬風  
その一室

そこで時風が腰を下ろして休んでいた。  
ボヤ、と座って、一人ごちる。

「戦艦……ねえ……瞬風か。やだ、なんか恥ずかしい」  
そして何をしてるかと思えば、名前の由来が自分だと聞き、少し恥ずかしがっていた。

そして

「暇だな……くんね……いや、とつく……遊ぶか」トヤ  
「

オイ







この四人は相手が相手だからの戦力だ。

相手の能力を無効化する泉戸裕理  
抑圧を無視しても戦える川神百代  
時を止めるという能力を持つ羽入  
巨大な敵に対して有効的なハクオロ

四人とも本来ならやるべきことがある立場だが、この状況に駆けつけてきてくれたのだ。  
中には本気で頼み込み、交換条件まで出してきてもらった相手もある。

そして、最後に一人、こいつがいる。

「儂が！漢女道亜細亜方面前継承者、卑弥呼である！！」

「出た筋肉ダルマ」

その声に開口一番はやてが突っ込んで、コラとクラウドが小突く。  
こんななりでも彼は「観測者」、管理者に準ずる存在である。

そして今回、奴らが復活させようとしている「兵器」は、彼（彼女？）に深く関係している。

「じゃあ話そうかのう。ともあれ、今回わかった事実の方が大きいのじゃが」

そう、卑弥呼はその兵器と最後に戦った人間だ。

兵器の名が、その口から発せられた。

それは、世界を破壊した災厄の翼。

翼人伝説の中でも、とびつきりのダークサイド。

「当時はまだ世界は少なかった。いまではどれが外史でどれが正史かわからぬほどに多くの世界が存在するかわからぬほどあるがの。その数は全部で300程度しかなかったのじゃ」

「そしてそのうちの十一を破壊した？」

「さよう。わしらは早々にその行動に気づき、早急に対処した」

だが、一つの世界が消滅して即座に動いた観測者たちだが、それを止めることは出来ず、その翼人は止まることなくさらに十の世界を

破壊していったのだ。

まるで彼らを障害物競走のそれだと言わんばかりに、楽しみながら  
驀進していったそうさ。

当時いた観測者は、卑弥呼を含め128人。

そのうち生き残ったのは彼だけだ。

卑弥呼の戦闘力はずば抜けている。

どれくらいかというと、恋とタメを張れるほどの強さを持つ彼の後  
継者・貂蟬よりも強いのだ。

蒔風も「戦いたくない人間」だと公言している。

当然観測者の強さもピンキリだったのだろうが、だとしても弱い者  
がいるわけがない。

そんな集団が、たった一人に全滅まで追い詰められたのだ。

脅威と感じないものはいなかった。

「じゃが儂らは散って逝った仲間たち残してくれたデータからそや  
つを追い詰め、捕え、どうにか封じ込んだのだ」

「そしてそのポイントがここだ」

そう言っつて、時風が地図の一点を指さす。  
ぽつんと立つ岩山が、急に禍々しく見えてきた。

「絶対に復活させちゃいけないね」

「ああ、危ないことこの上ないからな」

船が進む。

到着まで、あと4時間

.....

「EARTH」本部ビル

通信指令室内

『それで、翼刀はどうにかなりそうなのか？』

「ダメ……やっぱり無理やり目覚めさせるのが一番みたいです」

そこでティアナが時風と連絡を取っていた。

今回、時風が全員を連れて行かなかったのは万が一にも封印が解かれてしまった場合を想定してのことだ。

今連れて行っているメンバーでも、十分に翼刀を止めることは出来るはずだ。

現に、あの施設での戦いではかなりのところまで行っていた。

今回は対策も立てられている。

恐らくは大丈夫だろう。

『どうやら翼刀は俺たちの模造戦士との戦いを幾度となく繰り返していたらしいな』

「私たちの攻撃も、なんだか最初からわかっていた動きもありましたもんね」

『だがさすがにこれらのメンバーを相手にして、翼刀を止められないことはないだろ。そしたら一気に相手を捕縛して終いだな』

ちなみに、ティアナはさっきまで翼刀のデータをスカリエツティに見せに行っていた。

結局収穫はなかったわけなのだが、彼が言うにはこの技術はなんだ

か覚えがあるような気がするらしい。

『それどういうことだ？』

「スカリエッティの技術は人体改造と生成。まあ通じるところがあるってことなんじゃないですか？」

『・・・だが相手はその改造法を「前時代的」だつて斬り捨ててたからな・・・』

一体どれだけの技術力を持っていたのだろうか。

十数、いや、下手をすれば三ケタに届くかもしれないほどの世代を超えて続けられた狂気の研究。

それによって積み上げられた技術は生半可なものではない。

『うちの技術陣は？』

「技術陣と言っても、人体改造に精通した人間はいませんよ」

『学園都市は？』

「送りましたが、返答はまだです」

『間に合いは……』

「しないでしょうね」

そりゃそうか、と蒔風がため息をついてから、ティアナに礼を言っ  
てどうするかと伸びをする。

ティアナの方も同じように、ギィっ、と椅子の背もたれに体重をか  
けた。

こちらでの準備も大変である。

蒔風は万が一、と言っていたが、相手の技術が今までのすべてだ  
という確証はないのだ。

今向かってるメンバーが負けるのならば、恐らくそれ以上戦力を投  
じても無理だろう。

だったら、こちらに残ってもらってその「もしもの時」に備えてお  
いてほしいというのが蒔風の考えだった。

『全員で行っても負ける時は負けるからな』

「そんなこと……と言いたいですけどね」

『可能性は捨てられないさ』





「おーう、レジエス。今んとこ問題ないな。このままなら予定通りにつける」

「だけど……っとこれこれ、どーします？まだかなり離れてますが」

「……おや、「EARTH」ですか……」

「これでもぶっばなしとくか？」

「そうですねえ……ついでにこっちでも行きましょうか」

「おお、えげつない」

「我々の最終段階です。幾数世代に及ぶ祈願の成就です。邪魔などさせません」

今度ばかりは、牙を剥かせていただきますよ。

カチッ、ピッツ……!!

.....

「おー、精が出てるねエ」

「あ、蒔風」

瞬風内の訓練室。

そんなに広くないその場所で、唯子が川神百代と組み手をしていた。そこにひょっこりと顔を出しに来た蒔風を、唯子が見つつけて声をかけた。

「どうしたのよ」

「いや、まだ時間もあるし暇だから歩いて回ってた。この艦初めてだし」

「ふーん」

「蒔風！！」

「うおう！？な、なんだよ川神」

香気に話している蒔風に、百代がいきなり話しかけてきた。それにびっくりする蒔風だが、百代の顔はキラキラ輝いていた。

「こいつすごく強いな！！いやあ、もう楽しくてしょうがない！！」

「自分は汗一つかかないでよく言うわよ……」

タオルで汗を拭き、水分を補給する唯子が口を出す。

確かに、百代はまだまだいけるといった感じだが、唯子はマラソン後のように汗をびっしょりかいていた。

「あー、まあ川神には“フォルス”が入ってるからな。骨の髄まで

“Name”のお前じゃどうしたって差は出るさ」

「じゃあ勝てないの？」

「そうとは限らないな。あくまで総合的な力の差だから、一撃でも入ればそこから多分叩き潰せるだろ」

ようはスタミナと耐久力の違いで、唯子の攻撃も十分に強いのだがら命中させられれば勝てるとのこと。

現に百代も、さっきの組手ではギリギリだったらしい。

「あのパニツシャ パンチだったか？あれはまずいと思ったな」

「あああれな。「なんであんな威力が出るのかよくわからないパンチ」略して「意味不明パンチ」な」

「意味不明ゆーな。まあ自分で「パニッシャー」言っても恥ずかしいけど」

そう言っつて椅子に座る唯子。

どうやらここまでにして、到着までの時間は休憩にするらしい。

「今度は全力で、外でやろうな!!」

「やめて・・・百代さっき気力弾が撃てるとか言っつてたじゃない・・・」

「撃てないのか？」

「撃てないわよ!」

それでもいい線行きそうだけどなあ、と時風は思ったが口には出さない。

考えてみれば気力弾は打てなくても拳の衝撃は飛ばせるのだ、こいつ。

そんな話をして、十分。

その時

『高エネルギー反応！！十時の方向からSSランク級砲撃！！！！』

「なに！？」

艦内放送が響き渡り、アラームが一斉に鳴り響いた。

それを受け、走り出す時風。

そしてデッキに到着すやいなや、即座に状況の報告をさせた。

「どこからの攻撃だ！？」

「わかりません！！レーダーに反応なし！！」

「肉眼でも目視できんだと・・・！！？」

「被弾します！！」

ガオオウツツ！！！！

報告と共に、飛来した砲撃が瞬風に命中、その機体を大きく揺らした。

戦艦瞬風は「EARTH」唯一の戦艦ともあつて、かなりの硬度を誇る。

しかし、それはあくまでも「通常の戦艦と比べて」であり、砲撃をいくつも受けて大丈夫ということにはならない。

「超々遠距離高度精密砲撃!？」

「先頭部外壁67%を損傷!!」

「第二波きます!!!!同じく十時の方向!!!」

『瞬風!!!』

次砲飛来の報告。それと同時にモニターが開いて、そこにすでに変身した天道総司が、ハイパーフォームになって映し出されてきた。

『俺が止める。反動に気を付けてくれ』

「ちよ、お前まさか!!!」

《ALL Zector Combine!!》

「ッ!!!総員衝撃に備ええ!!!とんでもないのが来るで!!!」

デッキの時風が言葉が出ないうちに、はやてが艦内に叫びかける。もしも本気で天道が撃つつもりなら、かなりの衝撃が来るはずだ。

一方瞬風の額と呼べるだろう場所に立つカブトハイパーフォームが、その手にパーフェクトゼクターを手にして砲撃に向けてまっすぐ構えた。

そしてそのエネルギーがタオキン粒子となって先端部に渦巻いていき、荒れ狂う竜巻となって撃ち出されていく。

『(ガシャコッ!!!)マキシマムハイパーサイクロン.....!!』

ドッグオア!!!!!!

凄まじい轟音と衝撃を伴い、大気を巻き込みながらそれと砲撃が真っ向から命中した。



ガゴオン！！

「ウオオオオオオオオオ！！！！！！」

カブトの背面からは反動を殺すために甲虫の羽根状のエネルギーが噴き出しているが、それでも瞬風がかなり大きく揺れる威力だ。すでに第一波でヒビの入った外壁がバキン！！といってさらに砕け、カブトの脚がくるぶしあたりまで埋まっっていく。

しかし拮抗しぶつかり合う砲撃は、どうやらカブトの方が強いようだ。もうすぐにでも打ち消されるだろう。

だが、その先にカブトはさらなる砲撃を発見した。

「マズイ！！！！蒔風、第三波だ！！！！」

『ああ見えてる！！無理か！？』

「やってみるさ！！！！」

ぐおおオオオオオオ！！！！と腹の下から出てくるような気合いを上げ、砲撃を巻き取るかのようにカブトがパーフェクトゼクターで円を描いた。

剣道の巻き技と呼ばれるものだが、それをまさか砲撃でやろうとい



更に四回目の砲撃が視界に飛び込んできて、カブトが本気で覚悟を決める。

「これは・・・まずい!!」

「いやいや、お前さんだけいいカッコさせねーって」

「ありがとうございます。今度は私たちが!!!」

ギャオオツ!!

と、そこに二人の人間が現れて、カブトを挟むようにして同じ方向を見る。

そしてその武器の先端に、己の魔力を練り込み始めた。

一つは、レイジングハート。

その杖の先端に、桜色の魔力が充填されていく。

一つは、ゲイ・ボルグ。

その槍の先端に、殺気とともに真紅の魔力が練り込まれていく。

「エクセリオン、バスターアーツ!!」

「ゲイ・ボルグッ！！！」

そして、その二本から放たれた攻撃によって迫りくる二本の砲撃が追撃されていた。

連射はさすがに威力が落ちるのだろう。

その砲撃と投擲によって穿ち消された砲撃の衝撃が、カブトが巻き上げていた砲撃を揺らし、一気に崩壊していく。

「ツア……ハア……ハア……すまないな」

「大丈夫だよ！」

「さあて、ちと早すぎる気もするが……」

『戦闘開始だ！！相手にはこっちの姿が見えているぞ！！』

時風の言葉とともに、全員が改めて気を引き締める。

目的地には、たどり着けるのか。



ガギャンガギョングヤギョんッッ!!

その三角錐が、すべて砲首で構成されていたからである。

モノによっては、砲台である。

モノによっては、機関砲である。

モノによっては、銃口である。

モノによっては、魔力砲台である。

モノによっては、大砲である。

モノによっては、電磁砲である。

モノによっては、レーザー砲である。

あらゆる「砲」と呼ばれる物で構成されたその三角錐は、ある一点に向かつてその先端を向けている。  
肉眼はおろかレーザーでも捉えられないような遙か彼方に存在する瞬間に、その先端の照準をピタリと、寸分の狂いもなく合わせていた。

そしてその脇から、一隻の時空航行船が現れてきた。

「これで邪魔は入りませんね」

「にしてもウエポンメモリの暴走体をこつも上手く使うとは・・・  
お前は天才か」

「知ってます。というか今までの失敗作を使えばこれくらいはできます」

暴走も、探知も、ね

そう小さくつぶやいて、船が目的地に向かう。

行く者  
追う者

解き放つ者  
止める者

絶望する者  
それを救いたいと望む者

様々な様相を持ち合わせ、船は先に進んでいく。

決して織り合わない彼らだが、向かう先は同じ場所だった。

そしてそれは、一人の封じられし男のもとへと

止めることは

出来るのだろうか

解き放つことは



t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 航行中の超砲撃（後書き）

みなさん申し訳ございませんでした！！  
遅れて投稿する武闘鬼人ですよ。

まあ言い訳はあとにするとしてとりあえず本編の話。

結局遊んでない時風。

まあ遊ばせたらどうしようもなかったし、本人もノリで言っただけでしょうwww

困った時のスカさん頼り。

でもあの人くらいしか相談できそうな人いないじゃないか……！！！！

そして砲撃からいきなり始まる戦闘。

カブトがいい仕事すぎるwww！！

敵の出してきた三角錐の砲台のイメージは「スマブラX」の……

こっ……あれですwww

あるじゃないですか、ストーリー終盤近くでクツパとガノンさんがめっちゃくちゃにブツ放すやつ。

あれですwww名前なんて言っただっけかなあ……

封印されている「兵器」はも皆さん絶対わかってますよねwww

しかしあえて出しません。

いや、今後に素晴らしい展開が思いついているわけでもないんですけどwww

そう……強いて言うなら……

何となくです。

ちなみに瞬風は世界内を航行  
相手の航行船は次元空間を航行中でした。

さて、では言い訳を始めよう（キリッ）  
ここまで遅れた、言い訳を！！

わたくし、武闘鬼人はメモ帳に小説を書いていた。

書き終わり、あとはあとがきを書いて上げるだけだった。  
と、そこでメモ帳からのまさかの申告

「応答してません」

！？

・・・だがまあ落ち着け。

そんなことはいくらでもある。待てば元に戻るさ。

が、突如として消えるメモ帳ッ！！

告知もなし！！

「保存しますか？」なし！！

希望なし！

今まで書いてきた文章もなくなる！！！！

そしてそこには絶望だけが残った……..  
バイトくそ忙しい中がんばって書いたのに……..

そしてグダグダと書いてこうなりました。  
本当に申し訳ございません（平謝り）

もうここまで書いてるんだから今週のフォーゼとかゴーカイジャー  
ネタ振ってもいいよね？  
え？だめ？

聞く耳持たん

まずゴーカイジャー

メガレンジャーいいよメガレンジャー！！  
電磁戦隊！！MEGARANGER！！（OPより）

というか留年していた彼が教師になれたとは……  
さすがはレッド。メガレッドは戦えば戦うほど強くなる戦士。

何度繰り返したというのだろうか……WWW

あと鎧が気に入られ過ぎワロタ

あの人レジエンドに好かれすぎだろ

羨ましすぎる

電磁戦隊メガレンジャーは初のシルバーの戦士。

そう、メガシルバー・早川裕作が出てきた戦隊ですよ!!

変身時間2分30秒ながらも圧倒的な戦闘力を誇ったメガシルバー

!!

時間ぴったりで敵を倒し、背後で爆発する怪人と共に変身が解けて  
ビシリ……!!

そこにシビレル憧れるウ!!!

そして第二の高校生戦隊。

前作のカーレンジャーが「車」、次が「高校生」と、ターボレンジャーの二大要素が二年連続で掘り下げられているという。

OP前の戦隊名コールが本人たち（メガレンジャーたち）じゃなかったのも印象的ですね。

信じられるか？

あの一号メカ・ギャラクシーメガって、百人以上の研究員乗せたまま戦ってたぜ……？

しかも生身ですよ彼らは  
マジ研究員すげえ

俺たちメガ！メガ！！メガア！！  
……これ以上は歌詞に触れるからやめておこう……

代わりにこっちで我慢してください。

蒔風

「私の目が！目が！！目がアアアアアあ！！！！」

電磁戦隊〜メ〜ガ〜レンジャー！！

ふう、削除から逃れることに成功したWWW

さて、今まさに高校生といえばフォーゼ

今回のフォーゼはフォーゼだからこそそのエピソードですね。

今までのライダーで味方の基地に閉じ込められるなんてあったらどうか？

戦隊ならあつた記憶が無きにしも非ずだが。

でもあの開通スイッチ（仮）があれば、フォーゼが取りに行つて「わが魂はZECTと共にありー！！」でもどつて、またロッカー繋げれば行けるんじゃないか？と思つたのは私だけではないはず。

こまけえことはいいんだよ？ごもつともですWWW

そんなこと言つてて特撮楽しめると思つなよ！！WWW

そついうのはマジレスしちゃいけない。

武闘鬼人とのお約束だ。

そろそろあとがきも終わりだろつて？



.....

正直書きたいことはまだある。

と、言うか別に特撮の話はしなくてもいいじゃないか。  
活動報告に上げてろよ。

ええ、その通りです。

私の耳にも皆さんの声が聞こえてきます。

だが・・・だが・・・!!

この指が、止まらんですよ・・・!!!!

正直こんなこと書いてないで見直して投稿すれば21日の2時に  
は上げられているはずなんです。

私はいったい何をしているのだろうか。

というか今この短時間でこんなに書けているのに、本編がもっと時間かかっているのはなぜだ。

だ、だれか・・・一年前の俺を知らないか・・・  
一日一話ペースで投稿していた、あの頃の俺が見つからないんだ・

それともあの頃の自分がおかしいのだろうか？  
今となってはもう分らないのさ（るるるる）

このままでは本編の長さを超えるかもしれない。  
それはまずいかもれない。

そろそろやめてくれという声が聞こえてくる。

え？感想書く欄にたどり着きたい？

ならば語るつか・・・

夜明けまで書き続けたる！！

蒔風

「いい加減にしるよ・・・学校で死ぬぞ」

いつも寝てるから変わらん

蒔風

「おい」

さあ！！光に向かってゆくぞ！！

蒔風

「夜明けとかけたな？それでうまいこと言ったつもりか？」

ドヤ

蒔風

「そこまでうまいこと言っていない」

シヨボーン

あ、そういえば来週のゴーカイジャーはタイムレンジャー回ですね  
!!

ゴセイVSシンケンに何故彼らがいたのかの謎が明らかになるのか  
!!  
というかやはりタイムレンジャーの大いなる力というのはあながち  
間違ってたなかつたか

あと歌星君は来週までがんばってたえるんだ。  
人間一週間は水と塩で生きられるらしいし。

いざとなったらポテチチョコキンと新しい仲間(名前忘れた)がいるよ  
!!

さ、がんばって食うんだWWWWWW

.....そろそろ話題がなくなってきた。

蒔風

「無理して続けなくてもいいだろ!？」

あとガチで眠い。

それネタにして後三十分は……

蒔風

「大人しく寝ろよ」

ちなみに現在4時ジャスト。

これから見直しして投稿ですよ！

蒔風

「とつとつやれよ！！余計に遅れるだろ！？眠いんだろ！？」

ふ、もう眠くてまともに頭が回らないなどと……

バタリ

口が裂けても言えぬツ…………ZZZ

蒔風

「言ってるも同然だろ。という過去のネタどこかのアニメで見たぞ」



だが作者、テメーはダメだ。キック」

痛いです。

やめてください

蒔風

「とりあえず次回予告して締めなさい」

次回……も更新しますよ」

蒔風

「それは当然だろ！！内容を言えよ！！！！」

蒔風うるさい

蒔風

「ムカツ。しかし私は大人。こうなったら私が次回予告をしよう。  
では……逆転！！」

作者

「い、一体何が……ああ！！私がかぎカツコに！！？」

そして俺が地の文だ。

次回、VS巨大砲撃

何人脱落してしまうのか!?

ではまた次回だ



## 砲撃戦艦

「再び十時の方向から来ます!!」

「かなり揺れるぞ!!こらえてくれ!!」

瞬風管制室では、さらなる砲撃をすでに捉えていた。さっきまでは急な攻撃に何もできなかったが、来るとわかれば対処もできる。

「回避だ!!操縦はお前に任せる!!」

「わかりました!!行きますよ!!!!」

操縦桿を握ったのは、剣のサーヴァント・セイバー  
彼女の騎乗スキルはB  
伝説級の物でなければ、彼女は何でも乗りこなせる。

それは、戦艦ですら例外ではない。

ゴオオオオオツツツ!!!

瞬風の後方にあるブースターが炎を吹き上げ、さっきまでの砲撃の高さから少し下方に下がり、そこから一気に前へと前進していく。

そのあまりの勢いに艦内には物凄いGがかかったが、いまさらそれを気にする者はいない。

はるか遠方の砲撃戦艦が、その動きを察知して見た目ではわからないほどに小さく揺れ、その方向を修正していた。

そして、その砲台すべてから一斉にエネルギーや砲弾が飛び出していき、彼方の標的へと伸びて行く。

「狙われています!!少し荒くいきますよ!!」

グーおオオオオオオ!!!

瞬風が下方から一気に上昇し、左右に揺れながら砲撃の嵐を回避して爆進していった。

だが砲撃の隙間と言っても、それは絶対に瞬風よりも大きいものではない。

必ず当たる攻撃はある。

当たっても大丈夫な攻撃。絶対に回避しなければならない砲撃。

その判断を、セイバーは百戦錬磨の経験値で判断していく。

「目的地はどっちですか!!」

「右に三十度ずれてる!! 砲台は直線上にはない!! 敢えてずらしておかれてるぞ!!」

「面倒なツ!!」

瞬風が後方のみではなく、全方向に取り付けられた緊急用のブースター（衝突や墜落の危険があるときに使用するストッパー目的のもの）までフルに使用して、上下左右に動き回ることによって追撃を避け続ける。

その動きはすでに戦闘機の物と言ってもいいくらいだ。  
正直、セイバーでなければ戦艦がこんな動きをすることは出来ない。

だがここで外壁に無理がたたってきた。

この無茶な機動の上に、避けきれない小さな（とはいってもAA級はある）砲撃も当たっているのだ。

命中とまでは言えないそれだが、確実にダメージはある。

艦内からでも、鉄の軋む嫌な音が、耳にまわりつき始めた。

「シユン！！このままではこの船がもちません！！」

「もつように回避は！？」

「できません！！」

「じゃあウチが空間魔法で固定したる！！」

これ以上は船が持たない。

それを聞き、はやてが杖と夜天の書を持ち立ち上がった。

リインフォースとユニゾンし、すでに甲冑や髪の色は変わっている。

直後、瞬風の表面をはやての魔力が包み込み、その外壁の状態を固

定した。

「これは……!!」

「こ、これならまだ動けるはずやで!!」

「感謝します、騎士はやて!!」

ゴオウ!!!

その対応にセイバーが感謝しながら、思いつ切り操縦桿を引き上げ、左に振った。

そうすることで砲撃の本流から逃れ、方向を改めて目的地に進む。

「砲撃の方向は!？」

「依然十時の方向から!!変わってない!!」

「これだけ動いてまだ変わらないのかよ!？」

あれだけの動きをして、さらに先に進んでいるというのに相手から

の砲撃の方向が変わらない。

それはつまり、相手との距離を如実に物語っていた。

「目的地の確認を――！」

「右にずれてる――！砲撃の反対側だ――！」

「勘弁願いますよまったく――！」

ぐるぐると回転しながら、砲撃の周囲を回って反対側に向かう瞬風。  
うまく回避し、先に進む　　が

「ジュウジに來ます――！！！」

「十時？今はそつちからじゃ……」

「違います――！十字です――！！！」

「そつち！？」

瞬風が前方だけでなく、左右後方のモニターも展開させ、それを確認した。

砲撃がまさに十字、四方向から一斉に迫り、艦体を貫こうと襲い掛



ボボボボボンツッ!!

そして瞬風の背中から真上に向かって数十発のミサイルが飛び出していき、それが蛇のように軌道を変えて、砲撃に向かって突っ込んでいった。

着弾し、凄まじい爆発の衝撃が瞬風を叩き、前進する機体を押し込んでいく。

「よし、加速だ!!!」

「動力最大出力!!!」

カチカチと手元や頭上のボタンを操作し、その域を一気に抜け出す瞬風。

しかし、だからと言って砲撃の嵐から逃れられるものではない。

「右エンジン被弾!!!予備に切り替えます!!!」

「あかん・・・ウチももうやばいかも・・・」



「くっそー!!」

「どこに行く気だ!？」

いずれくる限界。  
それはもう目の前だ。

蒔風が部屋から飛びだろつとするのを、クラウドが叫び止める。

「お前まさか外に出てあれを凌ぐつもりじゃないだろつな!？」

「それしかないならやるだけだ!！」

「いくらおまえでもこの船を守ることとは無理だ!！」

『俺が行く』

叫びあう二人だが、そこに冷静な声が割って入った。

『俺が、この船を護る』

「一刀!？」

モニターに映ったのは、先ほどのカブトと同じように艦首に立つ刀だった。

セイバーが操縦桿を握った今では、一刀一人しかそこにいない。

そもそも、かかるGからしてあそこに立てる人間はいまい。それを一刀は様々な力を使ってそこに立っていた。

「セイバー、真つすぐに進んでくれ!!俺がこじ開ける!!」

『しかし!!!!』

「ここから先に進まなきゃ戦う前に撃沈だ!!!俺を信じる!!!突っ込めセイバー!!!」

『クツ……任せますよツ!!!!』

グ、オオツツ!!!

一刀の言葉にセイバーが了承し、防御も回避も何もなく、目的地に向かって操縦桿を押し込んでいく。

数万キロ先ではそれを察知し、砲撃艦が移動していた。  
ゆっくりりゅっくりだが、回転しながら確かに動いていた。

それは徐々に目的地と瞬風の直線状へと向かってスライドしていき、  
そしてやがてライン上に乗った。

その五分後

『つこの!!...!!...!!一刀!!砲台が俺たちの目の前に来やがった  
みたいだぞ!!』

「距離はどれくらいだ!？」

『正確な距離はわかりません!!ですが、目的地までの途中にある  
かと!!...!!』



「む……暴走体が移動してますね。そろそろ来るでしょうか？」

そのころ、遥か上空を奔っていく砲撃の光を見上げたレジエスがそんなことを言っていた。

周囲には機関の人間が多くいて、彼らの意識は完全に一点に向いていた。

岩山

とはいっても、実際には「山」と呼べるほどの大きさではない。地面から生えたような岩、高さは八メートルくらいか。

そしてそこに、封印された最悪の翼人がいる。

「設置完了」

「では爆破」

カチッ

ドンッッ！！！

岩山が吹き飛ばされる。

そこに大きな穴が開き、機材で瓦礫がどかされていく。

「なるほど、予想通りですね」

そしてそこに、時空の歪みがあった。

「翼人すら封じ込めるほど強烈な時空の歪み。なるほど、有効な手ですね」

そう言いながらも、また別の機材を用意させてそれをこじ開けようとする。

その別の機材にはフラスコのようなガラスのケースがあり、そこに銀白のエネルギーがたっぷりと詰まっていた。

「このエネルギーならば相当歪みを正せるでしょう。そこに翼刀の一撃を入れれば、確実にゲートは開きます……さあ、大願成就の時は近いですよ」







エネルギーを照射し始めた機材を眺めるレジエス。  
しかしふと何かが気になり、上空を見る。

(なんででしょう・・・これは・・・おや?)

上空の砲撃を眺めるレジエス  
その光景から、一本の砲撃が消えた。

それは小さな光線ともいうものだったが、確かに消えた。

そしてそれはそれだけに止まらず、一本、二本と次々に消えていく。

「なにが・・・!!?」

そして、自分たちよりも先に進んでいた砲撃艦を見、驚愕する。

艦体が、崩れて行っている。

まるで結合が解けてしまったかのように、ガラガラと、ザラザラと、その砲台の塊が崩壊していった。



砕けた剣は、即座にまた召喚して埋める。

だがいくらなんでも限界である。

翼人と言えど、ただ砲撃を受け続けて大丈夫ということはない。

連続して、休むことなく武器を生成し続ける。

それは彼の体力を異常なほど削り取り、滝のような汗を流させていた。

通常ならばその汗ですでに視界はにじんで見えないうが、暴風がそれを取り払っていく。

「ゼエッ、ゼエッ、ゼエッ……ア？」

しかし、そこで剣に襲い掛かっていた重圧が消える。周囲が一気に静かになる。

「な、なにが……」

『カスト！！砲撃が止みました！！』

「え？」

セイバーからの言葉に、啞然として剣をどかす一刃。  
そこにはすでに、一本の光線、レーザーもありはしなかった。

「何がどうなって……」

『とにかく好機だ！！今の内に先に進もう！！行くぞ！！』

疑問の消えない一同だが、今は悩んでいてもしょうがない。

とりあえず相手の攻撃がやんだ。

畏とも思えなくはないが、行かねばならないことにかわりはない。

「中に入ってくれ、一刃」

『あ、ああ……』

「ですが、艦体ももう限界です」

「動力炉の出力ももう40%まで落ちたか……どうする？はや  
て」

「うーん・・・いつそのこと派手に墜落させたるかな？」

「え？」

.....

「まずいですね・・・」「EARTH」が来ます！！対応の準備をして・・・」

「レジエス！！真後ろからでっかいのが突っ込んでくるぞ！！」

「！！！！」

一方封印地。

そこでレジエスが来るであろう「EARTH」への迎撃体勢を促していた。

準備はあるが、あの砲撃艦をクリアするのがここまで速いとは思わなかったのだ。

しかもこのままだと、相手には脱落者がいないという可能性もある。

計算では数人が艦体に向かい、戦力を半減させるはずだったのだが。

「速度は!?!」

「速度だ?.....おいおいウソだろ.....こいつぁ!?!」

.....ゴオオ.....

と、そこに重々しい起動音が聞こえてきた。

すでに肉眼で見える距離。と言ってもまだ点ではあるが、その点は目に見えて大きくなっていつている。

「あの速度は.....!?!」

再び驚愕するレジエス。

そこからは見えないが、その艦首にはクラウド・ストライフが立っていた。

「方向はそのままだ」

『了解。では固定して脱出します』

バンツッ!!

クラウドの少し右側が跳ね上がり、そこからセイバーが飛び出して、それをなのはがキャッチして離脱する。

その各所から煙を噴き上げていく瞬風。  
その艦首に立つクラウドが全員の脱出を確認し、タンツ、と軽くジャンプした。

すると当然クラウドは置いてけぼりにされ、瞬風が前に向かって流れていく。

そして、その最後尾に差し掛かる直前に

「行くぞ川神、綺堂！！！！」

「ああ！！」「任せて！！！」

大剣を大きく振り上げて、二人に声をかけるクラウド。

目の前にその二人が落ちてきて、それに向かって大剣の面を振り下ろす。

そこに足を当て、唯子と百代が飛び出していき反転、ライダーキックのよろしく、船の後ろを蹴り飛ばした。

「ウオリヤアああああ！！！！！！」

ドッゴツツオオウ！！！！

衝撃が船全体に伝わって行き、あまりの威力にその表面が波打っていく。

そして外壁を弾き飛ばしながら、瞬風が機関の船に向かって突っ込



んでいき命中、木端微塵に大破させた。

ゴオオオオ・・・と爆発と炎上音を響かせる二機の戦艦。  
それを眺めるレジエス。

戦艦大破の衝撃で、銀白のエネルギーを入れた容器が砕けて、その光が流れて行っていた。

そして、その流れていく方向には

「よお」

燃え盛る残骸の山の上に、禍々しき天剣を持つ男が立つ。

その男を、初めて感情をこめてレジエスが睨みつけた。

「あなた・・・」

「待たせたな。招待状はないが、来ても構わないだろ？」

ダンッッ!!

その山から、時風が飛び出していく。

その目の前に、鉄翼刀が立ちふさがった。

t o b e c o n t i n u e d

## 砲撃戦艦（後書き）

さて、脱落者は出ませんでしたね！！  
でも表記してないだけで、戦えないという意味では数人が出てこれません。

回避時、瞬風は戦闘機並みの動きをしていました。  
それだけの動きをすれば当然ボロボロになるわけです。

その砲撃艦は完全に破壊されましたね。

原因はちよいと不明ですねwww

さて、再び立ちふさがる翼刀。

一体彼はどういう状況なのか！！

次回、VS機関

ではまた次回



## 揺らぐ封印地

スタン……

岩山を囲うような森の中に、戦艦から脱してきた一刀やはやてが着地する。

クラウドや川神百代たちはすでに戦地に向かった。

今ここにいるのは先の砲撃時に体力を大幅に損耗したメンバーだ。

「うちらはここから指揮を出す」

「わかりました、マスター」

「わ、私は？」

「唯子さんはもうちょいここにいてえな。一刀君に天道さんは回復次第向かってもらえるか？」

「はやては？一人だろ？」

「私が残りますから大丈夫です」



ギツ、ガガガッ

そのブーメランをすべて回避、撃ち落として翼刀が回転しながら剣を振って時風に刃を飛ばしてくる。

それを畳返して一瞬防ぎ、戻ってきた龍虎雀武をキヤッチ、即座に解放、結合して片手に構える。

「行くぞ」

ジャカッ

気迫を込めた時風の言葉に、剣を構えて答える翼刀。

翼刀の構えは柄を顔よりも後ろにし、頬に刃を添わせる形だ。

明らかにこれから突き出してくる構え。

それに対して時風は、大きく腕を広げて十五天帝と龍虎雀武を構える。

にらみ合う両者。

どちらも動かず、その時を待つ。





しかし、先ほどから大木が飛んで来たり岩が落ちてきたりしているので、敵がいるのは明らかだ。

(どこだ・・・どこにいるー！)

クラウドが周囲を見渡しながら敵を探す。  
しかし、相手はよほど隠れることに長けているらしい。全く見えな  
い。

「よし・・・」

そこでマテリアを使うかとクラウドがそれに魔力を流し始める。

その瞬間

「ゴッ！！」

「！！ ハアッ！！」

「バガンッ！！！！」

大木がクラウドの背後から飛んできて、それをクラウドが大剣で斬り飛ばす。

ガロン、と重い音を立てて地面を転がる大木だが、二つに分かれたそれは地面に落ちることなく再びクラウドに向かって迫る。

その二本を相手に剣を振るうクラウドだが、一本当たりが軽くなっただためか動きが早い。

振り回される大木とのバトルは、まるで透明人間・・・というか、透明巨人と戦っている気分だ。

頭部に向かって薙がれる大木をしゃがんで回避し、しゃがみながら回転して背後からの大木を剣の面で弾き飛ばす。  
そして後ろ蹴りで頭を薙いでいった方を蹴りあげ、大剣から一本剣を射出して串刺し、ほかの木に打ち付けて磔にする。

しかし

「なに!？」

こともあろうか、射出した剣は宙で止まり、方向を変えてクラウド

に切りかかっていく。  
そのいきなりの動きにクラウドが面喰って防ぐも、体勢が崩れて剣に押されて倒れる。

そこに大木が振り下ろされ、バゴンバゴンと転がって回避するクラウドを追って何度も地面を殴打していった。

「フッ！！オアッ！！」

そこでクラウドが息を一気に掃出し、そこから足を振り上げ、大木を蹴り飛ばしながらそのままの勢いで立ち上がる。

その瞬間を狙った剣の攻撃を防ぎながら立つが、背後から迫る巨大な存在を察知してそれに向かって剣を薙ぐ。  
そして

ドッグあアッ！！！！

斬り裂かれた燃料タンクから液体が吹き出し、斬り裂かれた火花に反応して、一気に爆発してクラウドを包み消した。

(やった！)

そして、聞こえないほどの小さな声でその成功を喜ぶものが一人。だが、その喜びもつかの間。

ギュゴオ・・・

クラウドを包んだ火炎が渦を巻き一つの塊となり

ドンツッ！！

その声がした場所に向かってぶち込まれた。

「！！！！」

その塊は巨木にぶつかり、さっきのタンクからばらまかれた燃料に引火、周囲を炎で囲んで檻を作り出す。そして、その熱によって一部の空間がユラリと揺れる。地面に大木と剣が解放されて落ちる。

「光の反射によって自らの姿を不可視化。強力なサイコキネシスだ

な？」

「クツ……」

その方向に腕を伸ばしたクラウドが、姿の見えない相手に宣告する。するとそこからフツ、と一人の男が現れ、クラウドに向かってニツと笑う。

「へえ、あれで死なないんだ……誰？」

「名乗る義理は、ない」

「つれないね。僕の名前は」

ドゴウ……！

会話をつづけようとするその男に、クラウドが容赦なく破暁撃と撃ち放ち、その姿を土煙に消す。

「興味ないね」

そう一言つぶやき、地面に落ちた剣を拾い、その剣を相手に向けて大剣を肩に担ぐ。

すると土気鞭が中から押しのけられて払われる。  
ヴォーン！と張られた光の膜のような力場によって守られた男が、ポ  
ケットに手を入れた姿勢でコツコツと歩み寄る。

「そう、それなら仕方ない」

そうして、男も片手を突き出して掌を向ける。

互いの視線がぶつかり合い、そして

.....

《ウェポン！！！》

「ザラアッッ！！」

.....

大地に立つのは、仮面ライダーG4である。  
最初からウエポンメモリを使用して、しかもそれを制御できている  
状態だ。

「あんどき出てきた奴の親玉か!？」

「それに近いようだな。行くぞ!!」

使用者は、レジエスと頻繁に話していた男だ。  
荒野で翼刀を回収した、あの男である。  
ウエポンメモリの正当適合者。

その彼が、最悪の装甲を身に纏って襲い掛かる。

空を飛ぶシグナム、なのは  
大地を駆けるランサー、響鬼

その四人を相手にして、優勢に立つこの男の攻撃は個人の放てるレ  
ベルをはるかに超えている。

G4の力で統率され、メモリの力で強化された兵装、そして男の攻

撃性が相まって、恐ろしき兵器となっていた。

「ワイヤー射出!!」

G4が腕を振るい、地面から小さな砲首が現れ、その中から「かえし」のついたワイヤーが射出されていく。

砲首は八つ、そして一つ当たりから十は飛び出してきている。

物理的におかしい個数だが、これもメモリの力なのだろう。

一斉に迫りくるそれを、なのはが砲撃を薙いで打ち払っていくが、そのたびに次のワイヤーが射出されていく。

「高町!!」

「グツ!!」

そのうちの一本がなのはの脇腹をかすめて行き、浅い切り傷を作る。大した傷ではないが、砲撃主として右に出るものがないなのは、それを越えてくるということはかなり脅威である。

「ゲイ……」



「フンツッ!!」

「鬼神覚声!!」

「ハアアアアアツツ!!!!」

そのG4に向かって宝具や音撃を叩き込もうとするランサーに響鬼。だがランサーは足元に突如現れた地雷が爆発して吹き飛び、響鬼の音撃は増長された男の気合いでかき消されてしまう。

「くっそ!!こんな対抗ありかよ!!!!」

「どんなものでも使いようでは兵器になる、ってことが。多分あいつに出せないものはないだろうねッ」

「あんた呑気に言ってる場合かよっとお!?!」

そんな会話をしているのも相当呑気だと思っただが、それはともかくとしてランサーが走り出してミサイルを回避していく。見るとG4の背後には壁のようにバズーカが設置されていた。

その一斉砲撃から飛び出してくるものは多種多様。動きを止めるもの、毒弾、弾丸、爆弾、追尾ミサイル

そのすべてをランサーは一瞬の判断で次々に回避していく。

「オオおおお．．．」

同時に、ランサーは深く息を取っていた。走りながら槍の先端に魔力を込めていく。

高ぶる殺気、ほとばしる魔力。

そして爆発をジャンプで回避し、そのままG4に向かって力の限り宝具を投げ放った。

「刺し穿つ死翔の槍！！！」  
ゲイボルグ

ドンツツ！！と大気を激しく貫き、赤き一閃光の軌跡を残してゲイボルグが放たれる。

ゲイボルグは標的の心臓を必ず射止める呪いの槍だ。  
それは「死棘」でも「死翔」でも変わらない。

だが、その成功率はなかなかよくない。

一つに、相手の幸運度だ。

過去一度、セイバーは己の幸運度とスピードでその槍を回避（肩には刺さったが）して見せたことがある。

二つ目に、武器に優位な防具を使うことだ。

アーチャーは投擲武器に優位性を持つ「アイアスの盾」を用いてこれを防いだ（片腕はズタズタになったが）

そして三つ目は、因果を捻じ曲げられてしまうこと。

この槍は「放つ」という動作が「心臓に突き刺さる」という結果に直結する槍だ。

つまり極論を言ってしまうえば、相手が視界に入って尚且つ、ランサーが相手の心臓という物を認識した瞬間に槍を放てばそれで終わる。放つランサーが「放った」と認識すれば（つまり基本的に槍が届く位置なら）それで勝負はつく。

下だろつが上だろつが、後ろに向かって突きだしても、その槍は相手の心臓に届く。

だから因果を捻じ曲げられると、思わぬ方向へと槍は向かって行ってしまうのだ。

このように、ゲイボルグはその優位性から多くの弱点を持つ。

そして今回相手はその三つのうちの一つを持っている。

《cast off》《CLOCK UP》

「クソっ!!!」

凄まじいを越えて果てしないほどの超高速によって、G4がゲイボルグを回避する。

それは因果すら振り切る速さ。運命を置き去りにする速度。

ギギイ!!

「グおおおお!!!?」

G4が新たに手にした武器ナイフで、ランサーに向かって切り掛かるのを、ランサーが冷や汗を垂らしながらガードする。

武器自体は普通の物らしいが、速度が速すぎる。

響鬼が装甲声刃の刃に炎をともし、横薙ぎしてG4を斬り裂こうとするが、G4は瞬時に背後に回って回避する。

そしてナイフが響鬼の首筋に向かい、そこに桜色の砲撃が叩き込まれた。

「当たった!？」

《いいえ!回避されました!》

レイジングハートの解析でどうにか相手の位置を割り出して放った砲撃も、反応が早すぎて当たらない。  
そして、なのはの真後ろにG4が現れた。

「高町ッッ!!!」

ドシュッ!!!!

そのG4の姿をなのはと同じようにとらえ、シグナムが連結刃を伸ばしてその動きを止めようとする。  
連結刃によってその行動を止められたG4だが、即座にその連結刃を掴み取り、思いきり引き込んだ。

その勢いにシグナムの身体がG4に向かってすっ飛び、顔面に拳が叩きこまれて地面に落ちる。

同時になのはを蹴り飛ばそうとするG4だが、掴んだ連結刃が引つ

張られ、逆に地面に落ちていく。

シグナムは、地面に落ちながらも意識を保っていた。その手にはヒビが入ってすでにボロボロと崩れているレヴァンティンの鞘。

叩き込まれたG4の拳を鞘で受け止め、何とかして着地したのだ。

そして、今度は逆にG4を引きずり込んでいる。

シグナムは連結刃を轆きながら元の剣に戻し、G4の身体を貫こうとしているようだ。

それに対してG4は連結刃を手放し、両手に持ったナイフをクロスさせてレヴァンティンの刃を受け止める。

刃がぶつかり合い、レヴァンティンの刃をナイフの刃が滑るように落ちて行き、シグナムの傍らにG4が着地した。

着地したG4に後ろ回し蹴りを放つシグナムだが、G4はそれをバク転で回避し、距離を取る。

《put on》

そして装甲を戻してナイフではなく刀を構えるG4。

それに対し、シグナムも呼気を吐き出し、真正面に剣を構えた。

G4が装甲を戻したのは相手に対して余裕を持っているからではない。  
あくまでも彼にとって、クロックアップはゲイボルグを回避するた  
めだけのものだ。

G4は切っ先をシグナムに向け、真正面に  
シグナムは剣を振り上げた状態で真正面に

それぞれ両者が構える。

下手な横槍は入れられない状況。

しかし構えてから二秒  
本人たちにとっては五分くらいの間を置き、シグナムが剣を振り下  
ろしながら突っ込んでいった。

それを真正面から打ち合い、防ぎきるG4。  
一合、二合と続けて打ち合い、鏑競り合ってから相手を押しのける  
シグナム。

そして押しのけから剣を横に薙ぎ、連結刃を鞭のようにふるってバ  
ックステップで回避したG4を追っていく。

その連結刃を刀で弾き、バックステップから着地するG4。  
そして着地と同時にランサーに向かって牽制の爆破を投げ、上空の  
なののはに向かって爆弾を放り投げた。

そこに

「音撃刃」

ズオツ・・・ツツ！！！！

「音爆振撃！！！！」

「オオツっ！？」

ドオンツツ！！

地面に音撃刃を突き刺した響鬼の、地面に流し込まれた音撃が一面  
を吹き上げさせてG4を宙に飛ばす。

そして、そのG4に向かって、強力な一撃が叩き込まれた。

「ダイバインバスタアアッ！！！！」



「オオアッ!？」

ドンッッ!!!!

宙で動きの取れないG4に、なのはの砲撃が命中し、そのまま地面に叩きつけて大きなクレーターにさせた。

「・・・やった?」

「そのセリフは終わってない時に言うセリフだぜ?」

「元も子もないことを・・・」

小さくつぶやきながら着地するなのは  
そこに突っ込みを入れるランサー  
呆れるシグナム

しかしやはり、その通りである。  
煙の中から、ゆらりと人影が現れてきた。



それを時風が回避できないと判断し、十五天帝の面で受け止めて後方へと押し退かされていく。連続して叩きつけられる刃が地面へ次々に落ち、そして即座に消えていく。

ギヤラギヤラと言う音が足元からしながらも、時風は耳を澄まして翼刀の動きを探った。

タンツ・・・

刃は止まない。  
ガードのため、目の前から剣をどかせない。

ザッ

音が近い

ダンッー！

ドンッッッッッー！！！！

そして地面が陥没するほどの踏み込みと共に、十五天帝に向かってヴァルクヴェインが突きつけられた。

その刃は十五天帝の融合結合部分に食い込み、無理矢理それを解除、向こう側の蒔風に向かって剣ごと貫いてきたのだ。

「ッ……てえ!!」

その刃を紙一重、脇腹の薄皮一枚切らせただけで回避する蒔風が、剣を振り上げてヴァルクヴェインを手放させる。

しかし十五天帝も解除されてバラバラと地面に落ち、両者とも無手の状態に。

直後、翼刀の拳が蒔風の腹に当てられ、それを蒔風が始めたように腕を跳ね上げて外す。

パンン!!という音がして翼刀の拳から衝撃が何も無い空間に放たれ、蒔風が足払い、ハイキック、ミドルキックを回転しながら連続で放ち、最期にステップで踏み込んで後ろ蹴りで腹に一撃を叩き込んだ。

「(ザザザッ……)……っぐ……フウッ」

その一撃を食らい、腹を押さえて後退する翼刀だが、何でも無いように立ち上がって息を吐きだし何かを発動させる。すると拳から力が少し抜け、蒔風は自分が弱体化されていくことを実感する。

「そいつか・・・だが、今回は対抗要員を連れてきた」

自分の手をにグバグバと握って力を確かめながら、蒔風が反対の手で指を鳴らす。

直後、蒔風の姿はその場から消え、蒔風がいた位置には四人の人間が立っていた。

川神百代

泉戸裕理

羽入

ハクオロ

『わざわざお前のために来てもらったメンバーだ。相手してくださいな』

その四人を眺める翼刀に、どこからか蒔風の声がしてきて気配が消える。

「さて、お前なかなか強そうだなー！」

「川神さん（汗）・・・」

「あうあう、では行きますですよー！」

「ああ、止めなければなるまい」

「・・・」

.....

「さて・・・相手も他に戦力を出してきてんな・・・そっちをつぶすにゃならんというところか・・・」







揺らぐ封印地（後書き）

はい！！

みんな、あとがきの時間ですよー！！

そして今更ながら謝罪を。

二話前のあとがきは本当に申し訳ございませんでした。

深夜の意味わからないテンションでああなってしまってます……  
これが意味不明病か（意味わからない方は活動報告をどうぞ）

さて、今回はそれぞれ戦闘に散ってもらいました。

クラウドは超能力戦士

G4にはシグナム、なのは、ランサー、響鬼

翼刀には来てもらった四人が当たります。

え？エリオたち？

彼らはまた別のお仕事が……

最後に蒔風が消えて四人が現れたのは羽入さんの時間止めですね。きっと羽入さんと一緒に時止めに入ったからよ四人が現れたんです。

もしも羽入の時止めが自分限定だったら・・・

よいしょよいしょと蒔風たちを運んで移動させるけなげな姿か・・・

何それかわいいWWW

まあ、そんなことはをまかくとして、始まった戦闘。蒔風は他の助けに入るようです。

次回、蒔風という男の戦い方

ではまた次回



刃が舞い、刃が散る

鉄翼刀を相手にする四人は、その中を潜り抜けていく。

一方四人を相手にする翼刀は、さっきまで蒔風と行っていた近接は避け、刃の射出による攻撃しか行っていない。

それもそのはず。

四人にはわからないことだが、実をいうと翼刀は「この四人」との戦闘記録がない。

「EARTH」の様々なメンバーの模造戦士を作り上げた機関だが、この四人は「EARTH」とは深くかかわっていないメンバーだ。

川神百代は友人関係であって、メンバー登録していない。

泉戸裕理は登録してても太転依問題専門としてしか動いていなかった。

羽入は立場こそ「元神様」だが、普段はただの学生。

ハクオ口もフォーティーンの戦いに参戦したがそれだけだ。

本部に来るのも稀だし、主に（一名を除いては）戦うメンバーではないのだ。

だから、こうして様子を見ている。

相手の動き、攻撃方法、回避方法などを。

しかし、その思惑は簡単に覆される。

ドンツッ!!

「ハハッ！面白い剣もの使っなあ、お前!!」

「!!!??」

その刃の弾幕、いくなれば刃幕の中を直進し、川神百代が翼刀の胸ぐらをつかみかかってきた。  
無論、回避などはしていない。

「川神流瞬間回復!!ではここから……」

キイイイイ!!

「お楽しみ時間だな!!」

ドゴオツッ!!

翼刀の目の前で百代が発光し、そのままエネルギーをばらまいて爆発した。

## 川神流大爆発

自分の体内に気力をめぐらし、それを一気に爆発させるものだ。  
無論、使用者自身もダメージを負うが彼女の場合は瞬間回復で治っ  
てしまう。

「そらあー!!」

「!!」

ブワオッ!!とその爆発の煙の中から翼刀が転がり出て、そこに百  
代の蹴りが放たれる。

それを腕でガードする翼刀。

バキリという音がして、骨が砕けた。

ドオン!!

そして、吹っ飛ぶ身体。

川神百代の蹴りは、そうそう受け止められるものではない。

「これ……」

「もうあの人一人でいいんじゃないかな？」

それを眺める残りの三人。

羽入と裕理がどうしたもんかとおつばやいた。

だがハクオロだけは、吹き飛んだ翼刀を眺めていた。

「まだまだ!!!百代!!!!」

「なに？」

ドウアツツ、バガアツツ!!!!

直後、ハクオロの言葉と共に翼刀が飛び出し、百代に向かって突っ込んでいった。

翼刀の拳を百代が受け止めるが、その初撃の一発で百代の方までの骨が砕ける。

「う……おおお!？」

ブンツッ!という音がして、百代の体が先ほどの翼刀のように勢いよく飛んでいく。

それを一瞬目で追うハクオ口と裕理。  
羽入は百代のもとに駆け寄って行っていた。

「大丈夫なのですか!？」

「むう・・・まさか瞬間回復を一発で真似られるとは思わなかった」

百代の視線の先の翼刀は、すでに腕をブンブン振るってハクオ口と裕理に襲い掛かっている。

さっきの百代の一撃は確実に翼刀の腕を砕いていたはずにもかかわらず、だ。

「だがまあ私のももう治った」

少し困ったような顔をした百代だが、彼女の傷もすぐに治る。  
羽入の頭を撫で、立ち上がって気力を溜める。

「これは一人じゃ勝てないかもなあ・・・」

「え!？」

「負けないが、勝てないだろうな。だからサポートを頼むさ」

「は、はい!!--」





- - - - -

「あっははははは！！！」

「クッ、オオッ！！！」

炎に囲まれた森の中、クラウドと超能力を駆使する男が戦っている。しかし男はクラウドとまともにぶつかろうとはせず、フヨフヨ浮いてクラウドから一定の距離を取って波動を放ってくるだけだ。

その波動を剣で受け、力任せに投げ飛ばすようにしていなしていくクラウド。

ギチィッッ！！

「オグッ！！！」

しかし、そこでクラウドの動きがビタリと止められてしまう。そこに周囲の炎が渦を巻いて襲い掛かって行った。

クラウドは身体を縛るそれを強引に振り切り、剣を振るってその炎を吹き飛ばす。

そしてそのままその炎を飛ばしていくが、男の前で炎は弾けて消え

行った。

「無理無理！！お前じゃ僕に勝てないよ！！なんとって僕は

」

ガァン！！

意気揚々とクラウドに話しかける男。

しかし、その言葉はクラウドの刃によって打ちとめられていく。

その刃は男の前で見えない壁に防がれてしまっているが。

「本当に人の話聞かない人だね」

「言ったるっ」

ドゴッッ！！

「うぐっ！？」

「興味ないね」

フツ、と笑いながら、クラウドが剣を押し付けた状態から男の腹に向かって足を振り上げた。

それを男は何とか受け止めたようだが、若干遅かったらしく、鈍い痛みが浸透していく。

「やはりお前自身の耐久力は低いみたいだな」

「は、はは！！そりゃそうさ。僕が本気を出せば、誰も一步も動けないんだから！！」

「じゃあ、やれよ」

「………え？」

今まで手加減してやってたんだという男の言葉。

それにクラウドが、じゃあ全力で来い、と言い放った。

臆することなく、油断もなく。

その目には、確実に打ち破れる、という気概に満ちていた。

「何その目……お前僕を舐めてるだろ」

「舐めるも何もない」

チャキ

「興味がない。さつきからそう言ってるだろ」

クラウドが剣を構える。

その態度に、男が額に青筋を立てる。

うつすらと浮き上がったそれは、徐々にはつきりと浮き上がり、周囲の地面を陥没させ、その感情を爆発させた。

「コロス！」

「来い……と……うまくいくといいんだが」

クラウドがニヤリと笑いながらも、その念動力の力に少し冷や汗を垂らす。

目の前には、見て明らかに分かるほど空間を歪める力場。それが男の二本の腕からそれぞれ噴き出してきた。

それは鞭のように男の両腕から伸びており、ヒュンヒュンとクラウドの周囲を覆っていく。

「これは……」

「擦じれ行く空間の波に、吞まれて碎けてバラバラになっちゃいな

ア！！！！」

そして男の言葉通りに、カ場鞭の旋回によってその場が電撃のよう  
なものを放ち始め、歪みが一気にクラウドの体を叩いた。

「喰らえエ！！念動術」

ズゴウツツ！！

ネジレジア  
掀次亜！！！！

ギユイツ、ズゴンツツ！！！！

空間が締め上げられる音  
空間が陥没する音

そんなありえない音がして、一体が粉塵に消える。

そのあとには、男の笑い声。

それが空間に響いていた。



酷い男である。

「蒔風……」

「ん？どうしたよ。そんながつくりして」

「いや……考えたら負けだな……」

「？」

ランサーが眩き、シグナムがこめかみに指を当ててやれやれと頭を振るのを見て、蒔風がきょとんとする。

その瞬間

ガッ、ゴンツッ！！！

という鋼を打ち据える音が二重にして、G4が蒔風に向かって突っ込んでいった。

パイルバンカーを脚から生やし、その射出によって一気に向かってきたそのG4を、蒔風が両足を踏ん張って、両腕で受け止める。



が、突っ込んできたG4の腕にガキヨン、と再び現れるパイルバンカー。

その機構の隙間からブシュッ！！と蒸気が噴き出て

「やバツッ！！!?」

バギャツッ！！！！と時風の顔面に向かって鋼の杭をブチ込んだ。

「時風！！」

「舜君ツッ！！！！」

その光景を見て、一同が叫ぶ。

時風の上半身が大きく仰け反り、辺りに鮮血が噴き出す。

「~~~~ツッ！！ドラアツッ！！！！」

だが、その杭は時風の頭を貫いてはいなかった。

時風が仰け反った体勢から、無理矢理に蹴りを放ってG4の顎を狙った。

それを容易にG4が回避し、そこに響鬼とシグナムが切り掛かって相手を引き受けていく。

「舜君！大丈夫！？」

「心配すんな。これくらい大したことはない」

そう言う時風だがしかし、額からはダラダラと血が流れ、視界を朱く染め上げている。  
そこをグシグシと拭って、時風が大声を出して呼びかけた。

「響鬼さん！！！！」

「なに！！！！？」

「翼刀の方に行ってもらえますか！！！！」

「オツケイ……じゃあこいつは任せたよッ！！！！」

ドドンッ！！！！

時風の呼びかけに響鬼が応え、音撃を以ってG4の押しつけて時風の指示した方向に走る。

それを追って行こうとするG4だが、それを時風とランサーが阻んだ。

「行かせねえぜ？」

「ああ、なんせこの「妖怪・心臓貰い」が心臓欲しいって言うてるからな！！」

「俺のセリフを変なキャラ付けに変えんじゃねエ！！！」

茶番をする二人だが、G4の背後にはなのはとシグナムもまわりこんでいる。

それを見て、マスクの下で、男が笑う。

「へえ……いいねえ……」

「あん？」

「いやいや、やっと楽しい戦いが出来そうだよ。翼人がいるなら、最高に楽しそうだ！！」

「……」

オオオオオオ！！と気迫を吐きあげ、男が戦いに対する覚悟をよう



クラウドは確かに、この男の力場による空間のねじでに巻き込まれたはずだ。

しかし、こうして男に大剣を振り尾をして襲い掛かっている。実際には無傷ではなく、服が所々千切れ、身体の各所から血を流しているが。

「知らないのか？」

「なにを？」

その男に対し、クラウドが答えを教えてやる。静かに応えるクラウドの言葉。

「翼人の力は、あらゆる力に変換可能だ。気力、魔力はもちろんのこと、その多様性は無類だ」

「ま・・・さか・・・!!!」

「そうだ。あれだけ大きなものを見れば、その力を使うことも可能だろう？」

そう、クラウドはあの瞬間、相手の力を解釈し、翼人の力を以ってそれに変換、剣を二刀にしてそれぞれに纏わせ振ることあの歪みを脱出していたのだ。

だが、それでも完全には無理だった。  
男の念動力はあまりに協力で、打ち消すことはかなわず、こうして大きなダメージを追ってしまっている。

「そう・・・かい・・・！！でも、それを繰り返したらどうなるかな？この力に関しては、僕の方がずっと上だよ！！！」

ギョオツ！！

男のその言葉通りである。  
相手の力の方が上だ。

いくら理解して中和できるからと言っても、相手はクラウドの動きを封じ込められるほどの念動力の持ち主。  
中和してそれを開示しても、相手の挨拶が飛んでくる方が早い。

しかし、クラウドはその言葉に対してフツ、と力を抜いて宙に浮く男から離れて地面に着地した。

「ああ、そうだな。だから」

「流　　星　　！！！！」

「ん？ウあッ！？」

「バトンタッチだ」

「 剣ン！！！！！！」

ゴギイツ、ギヤアツツ！！！！！！

とんでもない摩擦音。  
まるで黒板を引っ掻いた音の二十倍はあるような音を掻き鳴らし、  
男の力場と一刀の流星剣が衝突した。

ガチガチとぶつかって止まる流星剣を、一刀がより押し込もうと力  
を入れ、それに対して念動力で男がそれを受け流そうと少しずつ脇  
に逸らしていく。

「う・・・アあああ！！！！」

ブンツッ！！ザツシャアツ！！！！

そしてそれを逸らし切り、一刀がスライディングするようにしてクラウドの横に到着した。

「ごめん！遅くなった！！にしてもなんて奴だよ・・・流星剣を流したぜ！？」

「いや、いいタイミングだ。あいつの力はかなり強い。俺も動きを止められるくらいだ」

こうして、二人の翼人がそろろう。

一人は戦士、一人は賢者の翼人。  
しかも後者は、多種多様の力を使うことに特化した者。

「じゃあ」

「ああ」

「行くぞ！！」



二人が意気込み、剣を向ける。  
切っ先の直線状には、へえ、という顔をしてにやつく男。

戦いは、終わらない。

t o b e c o n t i n u e d

## 研究機関の兵器たち（後書き）

どうも、いつもより遅くなりましての更新です。

とりあえずは内容から。

クラウドが相手をするのは超能力戦士です。  
そこ、「エターナルのか」とか言わないで。

こいつがいじれるのは「空間」であって「時空」ではないので、世界のゲートは開けません。

その力で空間を捻じ曲げ、それが戻ろうとする反動で相手を粉碎するのが得意な奴です。

その為に感性を研ぎ澄ませる目的で、少し少年風になってます。

まあ見た目は二十代後半なんですけどwwwwww

ちなみにこいつの技名

適当に叫ばせようと思ったけどウヲオオ!!とかじゃなんか違うと思っ  
ってテキストに付けましたwww

元ネタは電磁戦隊です。

一方おなじみG4さん

こいつの攻撃方法考えるのがもう大変ですよwwwwww  
下手したら単調になりますからね。

今回遅くなったのもそれが一つの原因です。

こっちは四人で相手してもらってます。  
こいつのクロックアップはハイパーのチヨイ手前くらいまで速いです。

時間は越えられないけど、かなりやばい速さということだ。

そして時風鬼畜登場。

お前ホントに主人公かよ。

入れ替わりで翼刀の方には響鬼さんが向かってますね。

そして翼刀の方ですが……

正直言つて、まだまだ全然構想がまとまってない……!!!

いえ、こういうシーンを入れようとか、そう言うのはもう出揃ってるんです。

しかし、それらをどう繋げて行くのかがまだ決まってないんです。

ですので、また恐らく更新は遅れます。

出来ても多分翼刀のシーンはあまりないですね。

本当にすみません。

翼刀自身の強さは、百代と渡り合ってるあたりかなり上位に食い込む強さです。

翼人と戦えるというのも、決して渡航者というアドバンテージがあるからというわけじゃないんですね。

エリオと卑弥呼は別働隊です。  
彼らは彼らの仕事がある。

さて

今回はマジでバイトが忙しすぎて無理でした。  
大学も単位がそろそろヤバいですし。

そして何より3年生。  
将来を見据えて行かないとガチでヤバいことを実感しました。

ですので、更新はおそらく最近のように遅くなります。  
基本は週に二回、最低でも、一回は上げますが、できないときは活動報告で申告します。

かき上げたら投稿、の武闘鬼人ですので、定期更新は明言しません。  
間隔が短くなることもあるし、長くなるかもです。

他の作者さんはどんな間隔で更新してるのかあまり気にしたことないからなあ……

今にして思えば、一日一回更新していたあの時期は何かおかしかったんでしょwww

あ、でもその分感想や活動報告はこれからしっかりとしていきます。  
基本ものぐさな私、感想とか気まぐれにしか書いてませんでした。

本当にすみません。

これからはコミュニティ（コミュニティだっけ？）を大事に行きたい  
と思います！！  
ではこの辺で

今回は・・・やっぱり決まっています。

ではまた次回

覚悟無き刃 弾ける閃光

笑うG4。

雄叫びと共に、気合を込め、覚悟を決め、腹を括る。

男にして、ここからが本番。

翼人を相手にするところから、彼の戦いは本当に始まる。

斬ッッ……

そして、男の胸を、時風が横一文字に斬り裂いた。

「カッ……ハ……!？」

「覚悟決めんのに時間かけすぎ」

「お……ま……」

「覚悟とかに時間かけるから、こっつしてその時間を詰められるんだ」

「ユッ、ビッ！ チン

蒔風が「火」を軽く振って血を払い、鞘に納める。

「最初から決めてくるべきだったな。俺にとって、その時間は無駄に過ぎない」

そしてむなしそうな顔をして、男に背を向けて蒔風がその場を去ろうとする。

その蒔風に、シグナムが声をかけた。

「蒔風」

「ん？」

「お前、今考えてなかっただろう」

「なにを」

「覚悟をだ」

「……………」

そう、蒔風は覚悟を決めてきていない。

今、G4が本気で行くと呼んだ時、ほかの三人も新たに覚悟を決めていたのだ。

今までが本気じゃなかったのなら、それは当然のことだ。

時風だつて、それは知っているはずだ。

しかし、彼はその覚悟を無視して刃を振るつた。

死を無視した男に、そもそも覚悟それをする必要はないのだから。

当然、それは危ういものだ。彼の「人間」として、あまりにも危険な要素。

一歩間違えれば、良くて狂人、悪くて廃人だ。

それをシグナムは言い止めようとしたのだが……

「……………」

「……………」

それ以上の言葉が出てこない。

当たり前である。

その領域の人間に対し、通じる言葉が見つからないのは。



そして、それは決して恥じるのではなく、むしろ自らの人間性を誇るべきことなのである。

だが、この何とも言えない感は否めない。

「……話は終わりか？」

「……ああ」

「じゃあ、あとは任せた」

「なに？」

そうして、蒔風が指をさす。

方向は、G4の死体。

そしてそれが、ガチャリと動き出した。

「使用者が死んでなお動かし続けるG4システム。やはりまだ生きていたか」

その言葉通り、身体の調子を見ているかのようにG4が各部を動かしていき、立ち上がって一同に顔を向けた。

そして、腕を向けてそこから砲撃が放たれてきた。

「そら来たぞ！！避けるツツ！！」

ドンツツツツ！！！！

放たれた砲撃が、回避した蒔風とシグナムの間を抜けて行き、木々を薙ぎ倒して爆発させる。

今までの物よりも、比べ物にならない威力。

例によって、兵器要塞の形をとっていくG4の陰に、蒔風たちどころか森がおおわれていく。

それをみて、蒔風が呟いた。

「要塞形態で使用する兵器の数はあまりにも多すぎると思ったんだ。人間に管理できる量じゃない。あれはオペレーターが死んで初めて起動するシステムだったってことか」

やっぱりかよ、とうんざりして十五天帝を振り上げる蒔風。

そして、剣に光が集まって行き



「ん、十五天帝の光だな」

ヒラリ

「ああ、じゃああつちの戦いは終わったかな？」

ヒヨイ

「あれが出たからにはそうだろう」

「お前ら無視して話してんなよオ！！」

遠方から伸びる光を見て、あちらの戦闘はどうやら終わったと話す  
一刀とクラウド。

そこに、奇立ちを募らせた男の念動力が襲い掛かるが、それを軽い  
動作でヒヨイヒヨイ避けて行っている。

なんだか男の方がかわいそうになってきた。

とはいえ、さっきからいきなりこうして躲せるようになったわけ  
はない。

一刀がクラウドと合流してから少なくとも十五分、この男は優位に戦闘を進めてきていた。

二人を拘束して投げ飛ばし

空間のうねりに投げ込んで吹き飛ばしたり

相手の放ってきた攻撃を反転させてぶつけたり

それらの攻撃に、クラウドも一刀も全身に傷を負っている。

唇は切っているし、額からも血を流している。

しかし、ついさっきのこと。

ついに一刀が相手の攻撃を見切ったのだ。

曰く「全身拘束とか全域攻撃とか調子のもって何回もやるからだ」だ  
そうだ。

確かに、そんな大きなものを幾度も放てば、他者の武器を用いる一  
刀にとってはいいサンプルになってしまうのだ。

そして、今に至る。

今まで攻撃を食らっていた時間の方が長かったものの、こうなっ  
ては詰んだも同然だ。

「お前、早めに捕まえて捻り潰すべきだったんだ。それをわざわざ

長引かせるからこうなるんだよ?。」

「だがそういった感性や感情があるからこそ、こうして念動力が大きくなったのだからな」

「ジレンマだねえ。ま、落ち込むなよ。相手が悪かったってことで」

「そんなに納得できるかアツツ!!!」

激昂する男が、全域に向かって力場を広げる。

しかし、それはあっさりと一刀に切り裂かれて霧散していつてしまった。

「これ以上は何をしても無駄だ」

「なあ、もうやめようぜ。あんただって死にたいわけじゃないだろ?。」

「この……この野郎が……!!」

自分の方が力で上回っているというのに、わけのわからない力で打ち消されては、男の怒りももつともた。沸々と頭の中が沸騰していくのがわかる。

そしてその男の頭に

『何一人で突っ走ってんだ。地面だ地面』

そんな声が聞こえてきた。

「！！！！ ラあ！！！！」

「！！？」

「ウオツ！！！！」

何かに気づいたように地面を吹き飛ばす男。  
ドンツツ！！！！という音と共に、地面が爆せて姿が消えた。

『おーまえは考えんの苦手だろうが。俺が指示出すから、そのとりにやれってのまったく』

「うっさいな！力だけなら僕の方が上だ！！！！」

『そりゃな。だけどそれだけじゃどうにもならんときはオレがやるって決まりだろう』

「む……じゃああいつらぶっ潰す案をちよっうだい！！！！」

『あーいよ』





カチャカチャ……………

レジエスが、何かをくみ上げているとき、小さなモニターがそこに現れた。

そしてそこには、「Death」という文字が表示され

「……………!! そう……………ですか」

ほんの少しだけ落胆した声をだし、しかしそれでも作業の手は止まらなかった。

「貴方が見れなかったものを、私が見ましょう。必ず成功させてみせますよ」

ほんの少しでも友と呼べたと思う人間。

自分と同じく、先祖から連なる血を受け継いだ男の死に少しだけ目を閉じて、彼は作業を進めていく。

「そのために……………邪魔をする者は排除です」

ピピピ、タンッ



翼刀も黙っているものの、肩は大きく上下しているし、声に出ないだけで呼吸も大きいものになっている。

「ツ……ハアあああああ!!!!」

と、そこで翼刀が大きく呼吸を溜め、丹田に力を込めて吐き出す。

そしてそこに気力が練り込まれ、胸の前に超圧縮された空気の塊が圧縮されていく。

「!?!」

「あれは……!!!!」

「超高密度の空気の塊……?あんなものやられたら!!!!」

「上等!!!!(ズツツウ)」

胸の前に手をかざし、そこにある空気弾をこねるようにして回転させていく翼刀。

それに対して百代は右拳を引いて、そこにあらん限りの気力を練り

込んでいった。

周囲の気が翼刀に向かって集まって行き、その膨大な量が野球ボール程度の大きさに凝縮されて荒ぶれている。  
百代の右拳が激しく唸り、直視できないほどの鋭い光で周囲を突き刺していく。

そして

「……んっ！ムウン！！！」

「川神流！！置去後光拳！！！」

二人の攻撃が放たれていき、それが正面からぶつかった。

翼刀の球と、百代の拳から放たれた気力砲。

直後、激しい爆破に周囲が巻き込まれた。



「封印とは、必ず解かれるもの。数百、数千年後だろうとも、それは必ずだわ」

「そうなんですか？」

「完全に封じるなど、土台無理なことなのだ。だから、儂はこうして「裏口」を作った」

「裏口……ですか」

「左様。表向きのお知らせから開かれる封印を、こちらから封じる」

「それで防げるんですか？」

「いや……裏門はやはり裏門。正門が開けば、こちらからの封印はあまり意味を成すまい」

「じゃあ……」

「だが、それでもやれることはすべてやらねばならん」

卑弥呼は、自らの拳を握って強く答える。

もし意味がなくとも自分はやらねばならないのだと。

それが、あの大戦で唯一生き残った、自分の勤めであると。

「ここにアクセスする間、儂の体は無防備になる。その守りを任せ



「神域!!」

それが命中する瞬間の一步手前、羽入が能力を解放、世界が灰色になつて時が止まる。

彼女の認識したもの以外は。

認識したのは、有利、ハクオロの二人。  
彼らの時は動いている。

裕理が止まった時の中進んでいき、翼刀の圧縮球の前に八衢の波長を張り巡らせていく。  
相手の能力を打ち消していくその能力は、彼の身体から出た瞬間に動きを止める。

そして、ハクオロが羽入とタイミングを合わせて巨大化、ウィツアルネミテアとなつて翼刀を押しつぶしたところで時が戻つた。

「ツアあつ!!!!」

長らく息継ぎをしていなかったかのように羽入が息を吐きだし、周囲の世界が元に戻る。

圧縮球の前に張られた波長で、弾の圧縮が緩められてその威力の半分を殺される。





どこの戦いも終わりに近いな。  
手こずってるのは意外とクラウド・一刀組か……

あの二人は大丈夫、封印は卑弥呼が押さえている。  
となれば向かうは鉄翼刀……

「川神百代に加えてあの四人だ……さらにヒビキさんも向かって  
るし……だが」

心残りがある。

なんだ？何が引つかかってる？

鉄翼刀

あいつには何かある。  
明確な、見逃しが、何か。

「……まさか……!!!!」

蒔風が駆ける。

向かう先では、とんでもない光がその場を覆っていた。

t o b e c o n t i n u e d

## 覚悟無き刃 弾ける閃光（後書き）

更新できた・・・

空き時間にちよくちよく書いてきました！！

クラウドさんたちにはもう少し苦戦してもらうことにします。  
ただぶっ放してきたあの男に頭脳が出現。

これが本当の彼らの戦い方なんですネ。  
中でも言ってますが、あれだけの力を使うということは直感を頼りにします。

まああくまで彼の力は心的なものですからね。

だから攻撃も単純なんです。

そこに考えるという第三者が現れば、当然強くはなりません。

彼らにはてこずってもらおうましよう！！

そして裏門からの制御を試みる卑弥呼。

この裏門、万が一のことを考えて封印後に卑弥呼が作った彼自身しか扱えない門です。

だから他の人が知ってたとしても、扱える可能性はゼロだったでしょう。

そして、そこへの介入は精神によって行われます。

だからエリオ君は守ってるんですね。

何故エリオだったのか。

それは彼の個人的な趣味ですwww

そして冒頭での蒔風いきなりバツサリ事件。

彼は死ぬことが怖くない以上、覚悟の時間なんていらないうちです。だからその時間を詰められてしまった。

いつかその「どこかに投げやった恐怖」があだとなって帰ってくるのでしょうか。

因果応報です。いつか大変なことになります。

そして、翼刀。

彼はいつたいていどう変わっているのでしょうか!?

再洗脳?

いいえ、そんなものではありません。

それがいつたいていどういうものか、次回で(たぶん)明らかに!!

ではまた次回で



その名より「一つ」欠けたモノを表す（前書き）

「翼」人に「刃」を向けし者

そこから「一つ」を抜いて「翼刀」

その「一つ」が表すものは、「心」か、「人」か  
それとも

その名より「一つ」欠けたモノを表す

「紫電一閃!!」

ゴツ、バガアツ!!!

エリオの電撃と共に爆ぜ出た斬撃が、寄って集ってくる模造戦士を砕いて消し去る。

今や彼の足元には多くの残骸が山積みになっており、ちょっとしたバリケードのようになっていいる。

「フウツ、フ……ハア ……!!!」

ストラダーのブースターが煙を噴き上げ、飛び掛かってきた三体をテンポよく三連撃で薙ぎ払い、突進攻撃で群像を消し飛ばす。そしてそこから逆噴射し、今度は駒のように回転しながら岩のもとへと戻っていく。

「セツ、ハアツ!!」

気合を込め、脇に槍を挟んで後ろに回し、掌を向けて構えを整えるエリオ。

汗は流れるが、いまだ劣勢という雰囲気ではない。



( だけど終わる気配がない・・・相手もだんだん耐久力が上がって  
るし・・・ )

エリオの思う通り、相手はだんだん倒しづらくなっている。  
そして、その分こちらの魔力消費も激しい。

このままではそうかからない内に、数の暴力で圧殺されてしまうだ  
ろう。

( 卑弥呼さん・・・早くッ!! )

「 ストラダ!! 行くぞ!! 」

《 Explosi on!! 》

バオウツッ!!!

ストラダが爆発的なブーストをかけ、一気に飛び出して向こう外  
側の模造戦士を駆逐する。  
それと同時にエリオはこちら側の敵を、電気魔法で身体強化した蹴  
りでなぎ払う。

観測者は、動かない。





焦げたような臭い  
地面からシューシューと上がる煙

その真ん中に、息を荒くした鉄翼刀は立っていた。

あの瞬間

百代の放った気力弾は、翼刀の圧縮球を消し飛ばして、確実に命中コースの軌道に乗っていた。

しかし、ハクオロに上半身を掴まれた翼刀は両足を上げてその気力弾を脚で挟んだのだ。

そしてそのまま後方のハクオロに流すようにしてブチ当てた。

ハクオロの顔面が爆発で吹き飛び、その巨体が地面を揺らして倒れるころには、すでに翼刀は百代の目の前に到達していた。

「ッ！！！！」

「フウツツ！！！！」

シュゴツツ！！

息をのむ百代、抜き手で頸動脈を狙う翼刀。

百代の優れた反射神経でその命中は防げたものの、いかんせん体力がそろそろつきそうだ。

百代の瞬間回復は体の損傷などは瞬時に直すものの、体力までは戻らない。

そもそも彼女の体力自体が異常なほど高いので、そんなこと気にしたこともなかったのだ。

そして、さっきの気力弾。

あれには彼女の気力のほとんどをつぎ込んでいた。

よもやあの一撃を回避されるとは思ってもみなかったのだ。

まさか自分の全力近いパワーを出して、倒れない相手がいるとは。

「ハハツ！！世界は広いなあ！！！」

しかし、それでも百代は楽しそうである。

最後に倒れない程度の体力しか残していないので、身体はふらつ

ているが。

だが、それは翼刀も変わらない。

あんな威力の気力弾を挟んで流したのだ。

一歩踏み出すごとに肉離れを起こしそうだし、走り出そうものなら膝が笑って倒れてしまうだろう。

だから、頸動脈を狙った抜き手でも、そのまま地面につんのめてしまっていた。

しかし、それは脚に限った話であり

ダンッッ、ブオウッ!!

「(ゴッ!!(うオッ!!!)」

腕に関しては、そうでもない。

「カポエイラか!!また渋いもん持つてくるじゃないか!!」

逆立ち状態になって、翼刀が百代に蹴りを打ち放っていく。

翼刀は脚に力を入れていない。回転による遠心力を用いているだけ



「今や！！唯子ちゃん、いったれ！！」

「はい！！！！」

「響鬼さんの音撃と、そして唯子ちゃんなら、翼刀君は元に戻せるんや！！うちらも出るで！！」

「はい！！！！」

.....

凄まじいほどの音撃を紙一重で回避する翼刀だが、肩を掠めていたのか押さえている。

その翼刀に向かって、装甲声刃に自らの声を吸収、音撃に変換して、響鬼が刃を振るっていく。

その刃を片膝立ててヴァルクヴェインで受け止める翼刀。

さらに最後の力を振り絞って突っ込んできた百代を後ろ回し蹴りで蹴り飛ばし、同じような状態で、同じように攻撃してきた羽入を掌撃で吹き飛ばした。



「ゲホツ……」

「くふつ……ケホツ!!!!!!!!」

羽入の握っていた「鬼狩柳桜」が回転して飛んでいくが、それを裕理が握って神通力を流す。

そして翼刀の周囲に幻影を張り巡らし一斉に襲い掛かるが、ヴァルクヴェインからの刃の雨で、まとめて吹き飛ばされて裕理も倒れる。

「ぐあッ!」

そして、最後に立つ一人

二十メートルは離れた装甲響鬼に向かって、翼刀がヴァルクヴェインを振り下ろす。

その振るった軌道に刃が現れ、串刺しにせんと射出されていく。

「タアッ!」

ドンッ!!

しかし、その刃が音撃の波状攻撃で刃は空中で叩き落とされる。そしてそのまま音撃は翼刀の体を叩き、衝撃に身じろがさせた。

「いまや!!」

「翼刀オオオオオ!!」

音撃にひるんだ翼刀目掛けて、唯子が飛び出して行って拳を握りしめる。

「パニツシャア————!!」

ゴウツ!!

「パン……え!？」

パシツツツ!!

技を叫び、拳を千切れるのではないかと思うくらいに突き出した唯子。

しかし、その言葉は拳と共に止まった。

「う、受け止めたやて!？」

『いえ、それよりも、まさか!!』



『おそらくあれで体力を回復したものと』

「ホンマかい！？じゃあ……いや、でも……」

だからと言って、音撃が弾かれたのはなんでだ！？

はやてもリインフォースも、まだその答えを導き出せてはいなかった。

「フンッ！！」

「ガアッ！！？」

そうしている間にも、響鬼が吹き飛ばされて草むらに消える。腕だけは出てきているが、その腕の変身が解けているところを見ると、完全に撃破されてしまっているらしい。

周囲には音撃や、その前にあつた気力弾での煙が、地面からシュウシュウと上がっている。

その真ん中に翼刀は立ち、肩を短く上下させて呼吸を整えていた。

「ヒビキさんまで……」

「翼刀!!!このバカ、目エ覚ましなさいよ!!!」

「あ、唯子ちゃん!？」

その一面の光景を見て、唯子がはやての腕を振りほどいて飛び降りて行った。

その声に反応して、翼刀が唯子の飛び降りからのキックを腕で逸らすように受けて流す。

地面に着地した唯子は受け身を取り、そのままの勢いで翼刀に向かって拳を振るって攻撃をしていった。

その拳に合わせ、翼刀も拳を振るって正面からぶち当たる。

ゴッ、バアウツツ!!!

「キヤアツ!？」

『くっ!!!これほどの衝撃を・・・!？』

ピリピリと大気を振動させたその衝撃は、ユニゾンしていた上空のはやての姿勢を崩すほどの物だった。

そんな衝撃の元になった二人は、それを発しながら拳をぶつけて押し込み続けていた。

一步も引けば、周囲にばらまかれているこの衝撃分、自分に襲い掛かることを知っているのだ。

しかしそんな拮抗状態は長く続かず、バチィ！とはじけて両者が後退しあう。

翼刀がバックステップで下がり、唯子が地面を滑るように後退した。

弾けた衝撃に翼刀が腕で顔を覆い、それを外す。

その瞬間、唯子が蹴り飛ばしてきた土くれが顔を叩き、視界を遮った。

「くっ……」

「貰ったあ！！」

ズンツッ！！

目を少し細めてしまった翼刀の腹部に、踏み込み足刀をぶちかます唯子。

そしてそのまま全身の軸を捻り、不動衝撃を叩き込む。

が、翼刀はその場でバク宙することでその衝撃を逃がし、二、三回転じたのち地面に着地、瞬時に足払いをしてきた。それを小ジャンプで回避し、右踵落しからの左後ろ踵回し蹴りで翼刀の側頭部を強打する。

しかし、唯子のその左足を翼刀は掴み取り、合気を以って逆に投げ飛ばし、唯子を大木に叩きつけた。

「が……けっほ……!!」

肺の空気がすべて押し出され、胸を押さえて唯子が地面に倒れる。

「最後の夜天の王……確認」

上空にいるはやてを睨み上げ、ヴァルクヴェインを振るう。もちろん、はやても空間魔法でそれを迎え撃った。

しかし、射出されてきた刃一本一本が揺らぎを携えており、それぞれの間には擦れを生じさせている。

二つの力の間を生じる擦じれだけでも、本来とんでもない威力。しかし、今のこれはその数を優に超えており……！！！！

ギョオツ、パンツツ！！！！

大気のはじける音がして、はやてが内部からの衝撃に血を流しながら落ち、倒れた。

擦じれで歪んだ空間。

それが一気に解放されたことによる大気の押し出し。

一瞬生まれた「真空」という状況に、人間は耐えられるほどの強度を持っていない。

「ケふツ……ツハ！！！」

「ぐ……ツ……」

地面に倒れ伏し、ユニゾンも解けてしまうはやてとリインフォース。



そこに向かって、翼刀が剣を振り上げ

ガガガガガガガガッギンッツ！！！！

放たれた刃が、蒔風の剣によってすべて弾かれて消えていった。

「!？」

どこからか飛来してきたその剣が地面に突き刺さると同時に、もう一本が飛んできて剣と剣がくつついた。

二本合わさり「林山」となったその剣は、エネルギードームを作り出してその中のメンバーのダメージを少しずつだが、癒し始めている。

その剣に気を取られる翼刀だが、直後にその身体を衝撃が襲った。

なんてことはない。

ただ単に、一人の男がぶつかってきただけのことである。

「テメエ・・・好き勝手やってくれてんじゃねえか！！！！」

「ッ！！！」

ゴオンッッ！！

時風の衝突でそのまま押し出され、共にドームの中から出ていく翼刀と時風。  
数十メートル吹っ飛んだところで、翼刀が大地に足をつけてそれを受け止める。

両者の剣が鏝競合って、小さな火花を散らす。

「……………」

「……………おい、いつまでダンマリしてんだお前」

「……………」

「音撃は効かない、的確な判断能力……………つまりはお前……………」

「……………」

「洗脳、解けてんだろ」

「.....ああ」

時風が聞き、返答が返って来た。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

その名より「一つ」欠けたモノを表す（後書き）

一週間近くかかった。

その割にはあまり進んでない気がする。

クラウドさんたちは少しお預けです。

MOVIE大戦メガマックス見てきました。

初回の朝一番の上映で。

感想は・・・みんな、感想ページを見よう。  
リュウガさんのところですよ。

今は眠すぎてもう駄目だzzzz

次回、良心の呵責と安堵と悪

オーズっぽくしてみた

ではまた次回

「人」の「良さ」「故の」「弱さ」

「洗脳、解けてんだろ」

「ああ」

短い会話。

しかしそれには、大きな意味が込められている。

剣を打ち合わせ、弾けるように後退しあう二人。  
チャキという小さな音がして、それぞれが剣を握り直す。

「……………抗うことを……………諦めたのか!!」

「……………そうだ」

「お前の故郷を破壊したアイツらにつくのかよ!!!!」

「そう……………しかないんだよ!!!!」

ガン!!!!

苦しそうな叫びと共に、翼刀が蒔風の目の前に躍り出でて剣を振り下ろす。

それを蒔風が「獅子」「天馬」の二刀でクロスして受け止める。

「確かにそうさ！！元凶はあいつらさ！！けどな、あの街を消しちゃったのは俺なんだよ！！」

「ぐツ……」

ギヤイン！

「そんな中、苛まれながら生きて行けと？俺のせいで唯子だって死にかけた。親父も母さんも、俺がこの手で殺したんだ！！そんな中で、まともに正義感振りかざしているって言うのかよ！！！」

もしも

鉄翼刀という人間が、もつと割り切れる人間だったら

悪いのはレジエスたちだと割り切り、機関に刃を向けただろう。ここで時風と肩を並べて、立ち向かっていっただろう。

しかし、彼はそんな風に割り切れるわけがなかったのだ。

あれは自分の犯したこと。

何がどうであれ、あの街を、人を、日常を破壊して、しかも幼馴染までもを地獄に叩き落としたのは自分なのだ。

その苦痛をあつさりを割り切れる人間は、俗に「人でなし」と言われる人種だ。

そして彼は、人でなしなどではなかった。

彼は人らしさを持つがゆえに、背負い込み、耐えられない。

善人がゆえに背負い込む責任感を持ち、しかし、背負い込むにはその業はあまりにも重すぎた。

「俺はあの感覚を忘れられない!!それなら……それなら……!!」

「お前……」

「知ってるか……何もかも無視して、身を委ねるってのは……」

悲しい顔をして、今にも泣きそうな顔をして

「とつても……楽なんだ……!!!!」

翼刀が言った。

そして

「苦しんで行けよバカ野郎」



それに対し、時風は短く言い放つ。

「ッ!？」

その威圧に息をのむ翼刀が、瞬時に後退して剣を握る。

目の前にいる人間　　否、ニンゲンなどとは言えない、何かもつと、恐ろしい何か　　から、何かが発せられてくる。

「辛くても生きる。立ち向かえ。そんな簡単に飲まれて、そんなに弱いのか？お前は」

「そつだよ!！」

「.....」

「ああそうさ、俺はそんなに強くなんかない!!なににも守れなかった!!みんなみんな死んだ!!殺した!!あんたが言うように強かったら、どんなに良かったか!!あんたみたいに自分を貫いて、立ち向かえたらどんなにいいか!!でもな、みんながみんな、あんたみたいに強くあれると思うなよ!!あんたは強いから言えるんだ!!そんなもん、俺に押しつけないでくれ!!！」

悲痛な叫び。

その言葉に、時風が思い出す。

『それを誰もができると思うな！そんなもの……できる奴の台詞だ！できない弱者に、貴様はそれを強いるのか！？』

かつて、彼に向かって吐かれた言葉。

誰もが皆強くあるなら、世界はこんなろくでもないことにはなっていない。

弱いのだ。誰もかれも。

だからこそ、そこから立ち上がった者は素晴らしいし、美しい。

(そう……だったな。だが)

蒔風は思う。

自分は

「俺は無視してきただけだ。全部、目を逸らしてきただけだ。乗り越えたことなんて、無い」

強くあったことなんて、一度もない。

今のこの「時風舜」も、長年積み上げていた「蓋」のたまものだ。

「俺だって、そうだったよ」

そうポソリと小さくつぶやき、それでも気概は落とさずに、翼刀をその両眼で真っ直ぐに見て叫ぶ。

「綺堂唯子はどつするー!!」

「それを……言うなぁッッ!!!!!!」

ドオッ!!!!!!

「ゴオッっ!?!」

ガゴウッッ!!

時風の体が地面を抉って滑り、大量の土砂を周囲にまき散らしてゆく。  
身体が跳ね上がり、二、三回転して時風が着地して翼刀を睨み付けた。

「その生き方で納得してるのか!!」

「うるせえうるせえ!!もう何も・・・言つなアアアああ!!」

ザアツ・・・

翼刀が柄を中心に剣を回し、その軌道に無数の刃が現出する。

一周し、しかしそれでもまだ翼刀は剣を回す。

「お前はうるさい・・・オレは・・・オレは・・・!!」

「おいおい・・・マジか・・・このバカ野郎が・・・!!」

翼刀の後ろに壁のように、刃の軍勢が出来上がっていく。  
刃の数は、見ただけではわからないほど。

同じようなものを、蒔風も見たことはあるが・・・

「ゲートオブバビロンとかの比じゃねエぞこれはッ!」

「消えるオオおおお!!」

ギイン……ドツツツ!!!

「ウオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

「行くぞツツ!!!」

それが順次射出されていき、蒔風がそれに向かって駆け出していった。

一本、二本と弾いている暇などない。

一振りで十や二十の刃を弾き飛ばしていかなければならない。

しかし、弾いた先にも刃は飛んでいるので、完全に退けることは出来ない。

それでも、蒔風は先に進んだ。

無論、そんな無茶な進み方をしては剣がもたない。

二振りか三振りで弾き飛ばされ、刃の奔流に流されて消える。

しかもここにきて刃が時空力を持ってきた。

その中を進む蒔風に、擦れたうねりが襲い掛かってきた。

しかし

「っシャアツッ！！！！」

ザクツッ！！

蒔風が掌を向け、その刃の一本を掴み取った。

とはいっても、射出されてくる刃だ。それは掌を貫き、赤い血を流させる。

だが、そんなものは気にしないでそのままその刃を手に、後続の刃を叩き落とす。

同じような空間湾曲の力を持った刃だ。面白いように落ちていく。それでもはじけ飛んでいく刃だが、そしたら次のを掴むだけだ。

その作業を繰り返し、蒔風は翼刀に向かって突っ込んでいく。

「こいつツ？不死身かよ！？」

「生憎だが一度消滅したことも相まって、余計に死ぬじついのちような状況耐性がついちまってな！！！」

「なッ！？」

「そんなの知ったこつちゃないんだよ!!」

バサツ!!と

翼刀の目の前にまで躍り出た時風が、銀白の翼を開かせて拳を握りしめる。

「ハツ……あんだ忘れたのかよ」

しかし、そこで翼刀が鼻で笑う。  
力が行使される。

銀白の翼が小さくなり、やがて畳まれて背中から消える。  
力全てが消えたわけではないが、その弱体率は75%。

全力の四分の一しか、力が出ない。

全速力の自転車から、放り投げられたようなものだ。  
今の勢いに耐えられなくなって足が崩れる。

頭が下がる。

そこに、翼刀が剣を振るう。

だが

「だから」  
スパァン！！

力が抜け、倒れる時風。

本来なら体勢を立て直そうと力を入れるその足から、あえて彼は力を抜いた。

頭が重量という加速を以って、さらに下がって剣が空振りされる。

それに合わせて地面に倒れていく時風が足払いし、翼刀の体勢を崩した。

「知ったこつちやねえって言ってんだろ」

崩れ、倒れる翼刀の身体。

起き上がる、時風。

身体の上下位置が、入れ替わる。

翼刀の落ちる頭に、時風の裏拳叩き落としが

ゴガンツッ！！！！

という音を時風の耳と、翼刀の脳内に響かせて叩きこまれた。



「ブツ！？ンゴあッ！！」

その一撃を顔面に食らい、さらに地面に落ちて後頭部を強打する翼刀。

倒れた翼刀に踵落としが落とされるが、それを転がって避ける。

「来いよ翼刀。剣捨そんなもんててかかってこい」

「はっ……………上等だ」

ガラン

「ただ……………後悔すんじゃないぞ！！」

「ああそうだな。いま必要なのは」

ゴウッッ

後悔よりも、反省だ

……………二人とも、な



男の頭に、別の男の声が聞こえてくる。  
その指示通りに攻撃、展開、動くことで、この二人を完全に手玉に取っていた。

一刀は相手の念動力をほとんど無効化できるが、クラウドは出来て弱体化させるだけだ。

しかも、相手が本気で拘束してきたら、逃れることは難しい。

その分、一刀がいるだけこの状況はまだマシなのだ。

もう一人いればその拘束を解けるし、そもそも邪魔が入ればそれだけの拘束は出来ない。

だが、その「マシ」な状況でも、二人はこれだけの苦戦を強いられていた。

「指示を出してるやつを見つけ出さないとどうしようもないぞ！」

「だけど視線は感じられない……どこから見てるんだ!？」

「そっちなか!?!」

「「!？」」

ボツ、グアツツ!!!

木の陰に隠れて対抗策を話しあう二人だが、突破口が見つからない。そうしていると、隠れている巨木が中から破裂して衝撃と木屑が二人を叩く。

「うおお!!」

「ウわっ!?!、これでも……喰らえ!!!」

衝撃に地面を転がる一刀が、弓を構えて一気に放つ。

弓自体は普通の弓だ。

しかしその連射速度によって、まるでマシンガンかのように矢が男に向かって飛んでいく。

その全てが力場で止まり、碎かれるがその隙に二人がダツシュして下がる。

「気配とか探れないですかね？」

「探ろうとしてもあの力場だ。いろいろ歪んで、まともな位置なんてわからないな」

「マジかよ……完全に攻略できたと思ったんだけどな……」

「いや、お前がいなかったらとつくにやられていたさ……!？」

クラウドが気付く。

直後に、ギチッ!という音。

一刀とクラウドの間に小さな、それでいてその音が表わす通りの強力なねじれが出現し

「ツツツ!?!?!」

「これはツ!?クソツツ!?!」

それを一刀が両手で握り潰して消滅させようとする。

しかし、その猛威は彼の手の皮を剥いでいき、猛烈な旋風をまき散らして破壊しようとする暴走し始めた。

「抑え・・・きれ・・・」

「出来るか!?!」

「・・・るといいなあツツ!?!?!?!?!?!? クソ!?!でアアアあ  
!?!?!」

希望的観測を口にする一刃だが、それはやはり希望にしかならなかつたようである。

スバチィ!?!という音がして、一刃が思い切り真上に向かってその力場球を、バレーのレシーブのように弾き上げた。それは白い衝撃波をまきちらしながら真上で花火のように拡散し、ものすごい音の衝撃がびりびりと鼓膜を叩く。

「逃がさないよ!?!?!」

「くっ!?!?一刀!大丈夫か!?!」

「チキシヨウ・・・両手が痺れて五分は使いもんにならない!?!」

「な・・・う!?!?オオツツ!?!?!?!」

ゴガッ、バグオツツ!?!?!

そんな天を轟かせるような音が、地面の奥底から大地を揺らして聞こえてきた。

直後、クラウドたちの立つ大地がせり上がり、まるでグランドキャニオンではないかと思うかのように地形が変貌していった。

「く・・・クエイ・・・グオアツツ!!!」

「クラウド・・・なアアアア!!!?」

その天変地異ではないかと思える大地の暴走。

もはや翼人をどうにかしようとか、相手を倒すような力ではない。

これは、土地を作りかえるほどの力だ。

そしてそれを、たった一人の男の念動力が可能にしていた。

「オオオオオオツハハハハハ!!! たっのしいね—————  
—————!!!」

宙に浮く男が、高らかに笑う。





周囲は静かである。  
今の所は

エリオの口が動く。

終わったのか

しかし、声にはならない。

だが、それから数秒しないうちに、足元のクリスタルが動き出した。正確にはクリスタルが砕けて流れ出た赤い液体が動き、クリスタルをもとに戻っていた。

そして、再び立ち上がってくる模造戦士。

それを見て、エリオがストラダを杖のようにして立ち上がる。片目に額からの血が流れて閉じてしまっているが、その瞳は確かに敵を睨みつける。

まともにも動く、四肢などない。

しかし、それでもエリオの目に「負け」の光は微塵もなく。

ストラダーダを手に、咆哮を上げ。

足元から這い上がってくる三体をなぎ倒し。

飛びかかってきた二体を雷撃で碎き。

しかしそこで、腕だけのクリスタルがエリオの足を掴む。

「ツツ!?」

動きのとれなくなったエリオめがけて、また数体がジャンプして襲いかかってきた。

瞬間

「火龍 一閃 ！！！」

ゴバアツ!!という轟火の音が、連結刃にもってその数体を一瞬で焼き払った。

「え……」

そして、足元のクリスタルも、猛烈な速さで動く赤き太陽の戦士によつて砕かれていった。

「大丈夫か、エリオ!!」

「やっと体が言うことを聞いてくれた。遅くなってすまない」

「あ……ありがとうございます……」

駆けつけてくれたカプトとシグナムに安堵したのか、膝からドツ、と落ちてしまふエリオ。

目の前のクリスタルはもう殲滅されかけている。  
大丈夫だろう。

「うおおおおおおおおおおおおお!!!!!!!!?」

ドツゴオウアツツ!!!!!!

だが、そうした彼らの想いもむなしく、その場に一人の男が突っ込んできた。  
いや、突っ込まされてきた。

そして、彼らの間を抜け、地面にぶつかってクレーターを作る。

「ま、時風!!!!」

「舜さん・・・!?!」

森の中から時風が弾き飛ばされてきて、そのクレーターの中で胸を押さえて痛みに悶絶していた。

さらに背中もい打ったのか、のけぞってまで上半身を蠢かせている。

彼らの視線がそちらに向くが、直後にマイカゼが飛び出してきた森の方を見た。

そこから、一人の青年が出てくる。

大量の刃を携えて、対翼人兵器の最高傑作が姿を現した。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

「人」の「良さ」故の「弱さ」（後書き）

鉄翼刀、その心境。

彼は良き（善きではない）人間だからこそ、こうなってしまったのです。

もし私が読んだらあれですね、こう思います。

「何やってんだ！！それくらい乗り越えて見せろよ！！」

しかし、決してこの事情は軽いものではありません。

猛烈に重いものです。

それをポンとは解消できないでしょう、と真面目に考えました。

私たちにとっては「物語」でも、彼らにとっては「現実」ですからね。

彼らは眼をそらし、逃げもします。

今回はそれを考えたら、なんだかこうなりましたWWW

さて、ここからどうやって翼刀が戻って行くのか。

そして、第四章「RE：BIRTH」のタイトルの意味は!?

物語はここからが佳境!!というか書きたかった部分!! W W W W

今までは前座だったのさ!!

ちなみに今回の翼刀VS蒔風のシーンは今までと少し書き方が違うかも知れません。

きつと新約禁書三巻読んだからですね W W W W

そして途方もない力を発揮するエスパーさんには勝てるのか!?  
なんだかメチャクチャ強くしてしまったが W W W W W

ではまた次回

## 蘇る 赤銅

地形の変化した戦地。

そこから二キロほど離れた場所に、ある男がいた。

その男の足元には、何やら陣が敷かれていた。

魔法陣とも、はたまた円形のマップとも取れるようなものだ。

その図が、円形の中でボコボコと二次元上で変化して形を変える。

遠くではこの変化が、同じように起こっていた。というか、あちらが変わっているからこちらに反映されているのか。

そして、その図の上に、三つの点が。

それぞれには「Cloud Strife」「Kazuto Hongo」「Konononoki Tanasa」と人名がふられており、その位置を表していた。

「ああ、そつだそこだな。周りの大地ごと擦じって叩きつけちまえ」

指示を飛ばす男が、言葉を発する。

眼は閉じている。



だが、その閉じている瞼の裏には、位置関係だけではなく、その行動などの細かい情報も入ってきていた。

「出てきた？漆黒の方は魔法を使ってくるな。弾き飛ばせ。蒼青はたぶん隙について遠距離攻撃だろうから、うっすい膜でも張っとけ」

『オケー。あ、膜に引っ掛かった』

「じゃ、お返ししましょう」

『うーい』

『だウっ！！？』

『くっ……どっ……どっにいる！？』

攻略したはずの相手に、手玉に取られる二人。

その理由であるもう一人の相手が、全く見つからない。



「紫電!!」

《1、2、3》

「ライダー……」

「っなみ槍薙巴」

剣から世界の歪みが放たれて、波状攻撃がカブトとシグナムに襲い掛かる。

その攻撃に、カブトがライダーキックを中断、ハイパーゼクターを腰に装着し、ハイパーフォームになってそこから新たにキックを放った。

ハイパーライダーキックは見たままの歪みを携え、その波状攻撃とぶつかり合った。  
どこからかはわからないがバチガチと弾けるやら硬いやらの音をまき散らして、両者の力は拮抗して止まってしまう。

そこから、さらに

「ハイパー……」

ギョルツ！！

「スクリユーキック！！！」

ギャヴツツ！！！！

カブトが身体を回転させ、その波状攻撃を一気に押し返した。回転キックとなったハイパーキックが、それを霧散させる。

しかし、カブトは地面に着地するやいなやひざから崩れてしまい、迫ってきた翼刀に蹴り飛ばされた。

「天道！！！」

「油断するなシグナム！そいつ……意識あるぞ！！！」

「なに！？」

連結刃が舞い、翼刀を全方位から包むように襲い掛かっていく。

それを翼刀は剣を振るい、一振り一本だけ刃を飛ばして弾き、押し返す。

その動きもまた舞いのようであり、円舞だった。

連結刃が弾かれ、シグナムがもう一度放つためにいったんレヴァンティンを戻す。

そして両者とも同じ構えを取った。  
肘を引き、剣を突き出す構え。

「フンツッ!!」

「シャアツッ!!」

そして、同時に放った。

連結刃と、連続刃。

それが真正面からぶつかりあって

ガツギヤツギヤツツギヤツギヤツギヤツギヤツギヤツギヤオツツ!!!

連続刃が連結刃の刃を、次々に弾いてシグナムに迫って行った。  
しかし、シグナムもそうなることはわかっていたようである。

確かに、連結刃の刃は弾かれたらそれまでだが、相手の連結刃はその相続いくらでも来るのだ。

だから、シグナムは連結刃が弾かれ、地面に墜ちそうになったところで、腕を振った。

ビュヤオツ！！という張りつめた音がして、落ちかけた連結刃が息を吹き返す。  
縦に波打った連結刃が、翼刀に向かって迫り、その肩口を斬り裂いた。

それと同時に、翼刀の連続刃もシグナムの肩を貫き、地面に倒れ伏せさせる。

肩に穴が開くシグナムだが、肩を押さえながらもしてやつたりと口が笑っていた。

「ぐツ……だが、こちらも利き腕はもらったぞ！！」

「流星は本人だ……発展力が違う……」

ヴァルクヴェインを左手に持ち替え、右肩を少し上げてみる翼刀。動きはするようだが、痛みに顔をしかめる。

「洗脳が溶けてるって・・・どういこと!？」

「それは変わらない。ブチのめして、O・H・A・N・A・S・Iして、目覚まさせるだけだ。お前向きだろ？」

「なるほど!・・・ってどういこと?」

「さあな」

「あとでオハナシね」

「本家の怖さに全俺が泣いた」

なのはの言葉に返し、その会話で「参ったね」と笑う蒔風。砲撃が襲い掛かり、それを翼刀が蹴り飛ばして進撃する。

「おい、お前がいった方がいいんじゃないか？」

「ん？」

なのはを送り出し、腰を落としてしまう蒔風に、ランサーが問いかけた。

相手の力は、翼人に匹敵する。

優位性というのもあるのだろうか、それを差し引いても強者だ。

援護くらいに入った方がいいのではないか。  
ランサーは言う。

しかし

「……だめだな」

「？」

「俺じゃあ役不足だ。あ、役不足の使い方って違うんだっけ？」

「知らねえ。で、役不足ってどういうことだ」

「アイツを元の道に戻せるのは、俺じゃない。鍵はある。だけど、俺には無理だ」

「鍵？」

「綺堂唯子」

「なる。だがお前さんじゃ無理ってのは」

「どうやらあいつの踏み込んだ領域は、非生者<sup>オレ</sup>じゃもう届かないってこった。それに」

「それに？」



ガオツツ、ズゴウツツ!!!

「なのはは、弱くない。俺よかよっぽど、適任さ」

.....

封印自体に異常はなし  
面がむき出しになっているが、問題はなし。

封印も強めたから、今までどおりには解けないはず。

これで解けるなら

「もう、打つ手なしじゃな」



翼刀の咆哮。

空に向かって突きあげられるヴァルクヴェイン。

その先から刃が一齐に射出されて行き、拡散。

傘のように広がった刃群は、一瞬中で止まってから、雨のように降り注いできた。

蒔風はエリオを引き寄せ、その体を庇うように覆いかぶさる。

その二人を足元に、ランサーがゲイボルグを振り回して雨を叩き落とした。

シグナムの元には起き上がったカプトがクロックアップし、刃をクナイガンで弾き落とした。

なのはは自前で魔法陣のバリアを展開、その刃を防ぐ。

そこから離れた、はやてや唯子の倒れる一帯。

皆の意識も疎<sup>まば</sup>らだが戻り、はやてに肩を資して立つ唯子が空を見上げるが、なおも展開される「林山」のバリアで守られた。

そのころ、クラウドたちは

「ダあああ!!」

「オアツ!!」

「ゼアあ!!!!」

ドゴウツ!!!!ドン!!!!バアッン!!!!

刃が降ってくることなど意識していないようで、それでいて一本も

当たることなく戦闘を続行していた。

「雨」と入ったが、実際にこの刃はそんなに振ってはいない。傘のように拡散して、そこから落ちてきただけなのだ。

だから、最初の一回だけ回避すればそれはもう大丈夫……だが。

剣を振るい、押しきり、弾かれても徒手空拳で追い込んでいく。ここまで来て、すでにクラウドや一刀は策をめぐらせて攻めることをやめていた。

9028

つまりは、ゴリ押しである。

どうせ読まれるのであれば、対処できないほどの猛攻を叩きつけるのみ……!

「凶、斬りッッ……!」

「ウわっ!?!」

ゴイン、ガアン、ギャアン……!

「青龍ッ！！」

「ツツオ！？」

「逆鱗陣！！！！」

ギャゴゴゴゴゴゴオアッ！！

クラウドの三連重撃が力場を押し込んで火花を散らし、一刀の偃月刀による回転剣舞が男と交差して、反対側に抜けていく。

その勢いに、反動で弾かれよろける相手に、クラウドと一刀が全く同じ剣を握りしめて、その切っ先を突き出して突っ込んでいった！！

「ゴブレイ・・・バアッ！！！！」

大剣による、一点突破突進。  
よろけた体制からも、男は何とかしてそれを力場で受け止めるが、ジリジリと押し込まれている刃に汗を垂らす。

(ど、どうするー!?)

『最初に突っ走りすぎたんだよ！！燃料切れだろ！？』

(だ、だって！！)

『はぁ・・・しゃーない、じゃああれだ』

(あれは奥の手じゃ・・・)

『今が奥の手を使うシーンだと思っけど？』

(わ、わかったよぉ！！)

口に出す余裕もないのか、頭の中で会話すませる男。  
それが終わった瞬間、動いた。

「ハアツツ！！」

ギャツツ

体勢を整え、その成果力場が消える。  
二つの刃が、男に迫る。

「ぬんツツ！！」

ガチィツツ！！

そして、男の気合いと共に、その二つの刃がまとめて拳で挟みこまれ、止まった。

「なに!?!」

驚愕するクラウドと一刃。

その手に持つ剣が弾きあげられ

「オオお!!ダラアツ、フンツ、ハツ、セヤアツツ!!」

その胴体に男の拳と脚が叩き込まれ、地面に倒れる。

「クツ……こいつ……」

「近接も……!?!」

「まったくもう……思いこまないでよ。超能力戦士が打たれ弱いとか、徒手空拳が出来ないとかさ。ゲームのステ振りじゃないんだから」





「ぐッ・・・ア・・・!!」

力の抑圧に、クラウドは立ち上がることが出来ず

「カハツ・・・ウゲ!!」

一刀の手から剣が落ち、それが消えて四肢が痺れる

翼刀の射出した刃一本一本から歪みが出、それが彼らの力に干渉して抑え込む。

そして、その力は大元のヴァルクヴェインへと向かい、さらに一つの機材に流れてゆく。

「翼刀一人の渡航力では、この歪みは正せません。しかし、かれは翼人三人の力を、こちらに流すことができます」

ジャコ

「そして、これで増幅させることにより、より確実に」

カチッ

「成功につながります」

ドンッッッ！！！！

漆黒、銀白、蒼青、の三色が束ねられ、渦を巻いて封印面に突きささる。

封印とは、解かれてはいけないものである。  
しかも、これは世界に干渉するレベルでの封印。

その衝動に空が震えて、大地がうなる。

「ついにこの時が来たんだねえ」

男は地面に倒れる二人を目に、感慨深そうに言う。

『うちの組織最大の目標だからな』

その言葉に、別の男が通信で答え

「やりましたよ・・・我らの終着。ここに成就せり！！」

レジエスが歓喜の声を上げ

「・・・・・・・・」

翼刀が、一言も発さずにその光を見た。

直後

パウンツツツ!!!

歪みが正され、封印が解ける。

最悪の翼

破壊の翼人

かつて11の世界を消し去った兵器

「此処は……何処ぞ……?」

赤銅の翼人が、目を覚ました。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 蘇る 赤銅（後書き）

超能力戦士の名前が地味に出てきた回でした。  
ちなみに名前は「多那砂 此之道」です。

そして結局復活するという。  
封印の翼人は「赤銅」！！

ワー、ダレダッタカナー

というバレバレですよね W W W W

何を書けばいいのかわかりませんので、とりあえずこの辺で。

次回、赤銅の実力  
ではまた次回

## 赤銅の力

「おお・・・おおお!!!」

上空に浮かぶ、赤銅の翼をもつ一人の人間。  
その「彼女」の姿を見て、レジエスは歓喜していた。

「あれが赤銅の翼人・・・なんと美しく、そして素晴らしいのだろ  
う・・・!!!」

一方として、蒔風たちは

「あれが・・・赤銅?・・・」

「女性・・・だったとはな」

「目覚めてしもつたか!!!」

「卑弥呼!?!」

倒れた蒔風をランサーが肩を貸し立ち上がっていると、卑弥呼が全身から汗を迸らせて寄って来た。





「はははははは！！では、デモンストレーションです！！！！」

タンツ！！

レジェスが、腕のコンソールを叩く。

直後、カプトやシグナムの周囲にあるクリスタルの残骸が再び結合し、二十、三十の模造戦士になって立ち上がってきた。

「こいつら……まだ!？」

「いや待て。様子がおかしい」

立ち上がってきたそいつらに武器を構えるシグナムだが、カプトがそれを制する。  
模造戦士はそのすべてが上空の赤銅の翼人を見上げており、一体たりともカプト達の方を見ていない。

ダウツツ！！

「うおー!？」

「な……」

そして、それらが一斉に飛び上がり、赤銅の翼に向かって武器を向けて行った。

とんでもない軍勢だ。

物量だけでも相当なもの。

だが、それに対して赤銅は手を下に向けて「パン」と静かに叩いた。

直後

ヴァオ、オウ！！！！

そこから衝撃波が一気に噴き出して、模造戦士を一つ残らず粉碎し、存在そのものを掻き消した。

「なに！？」

「ばかな……」

驚愕する「EARTH」

「おおおお！！さすがにこれは簡単でしたかね！！では此乃道、行きなさい！！！」

歓喜し、自分の成果を試すレジエス

「あーいよっ！！！」

それに従う、此乃道

此乃道が飛び出していく、念動力をマックスにした拳を突き出して突進していった。

何をされても、拳の力場にゆがめられて本人には当たらないという突貫技だ。

いままでこの攻撃を初見で躲したものはいない。あの翼刀を含めてだ。

恰好の的だと、皆が攻撃して逸らされ、直撃を食らう。

しかし、その猛進が止まった。

「グ……ぎ……!?!」

赤銅まであと一メートル。

もうほとんど同じ場所に立っているとでもいい位置で、此乃道の体がそのまま止まっていた。

「こ、この僕が……サイコキネシスで……負け……!?!? うブツ!?!」

赤銅はただ見ているだけだ。

だが、彼女から発せられる力場に、此乃道の体は完全に停止していた。

「か……は……ウ」

そして、そのまま此乃道は死んだ。

目も閉じることなく、歯も食いしばることなく、拳を突き出して突進したその体勢のまま、心臓を停止させられて死んだ。

その死体はメキメキとボールにされ、ピンポン玉にまで圧縮されて

地面に落ちた。  
思ったほど、音はしなかった。

「おいおいマジかよ。あっさり過ぎるだろー!!」

それを離れて見ていた司令塔の男。

あまりにも簡単にやられた此乃道に、驚愕しかない。

しかし、次の驚愕に彼の思考は止まる。

「え?」

赤銅が、こちらを見ている。

手を向け、デコピンの形にしている。

いくら上空身体度いって、この位置はわからないはずだ。

そもそも、いきなり見て此乃道に司令塔がいるとわかるわけが・・・

・! ! ! ! !

ピン

そして、指が弾かれる。

その指先から一閃の光が伸び、司令塔の男の腹部を貫通した。  
更にその部分から全身が炭化していった、塵芥となって消滅する。

「ウソだろ……」

その光景に一刀が驚愕と焦燥の色を表し、何とかして立ち上がる。  
クラウドを抱えあげるが、とてもじゃないが戦える状態ではない。

「だが……だからと言っていかなくてどうする……!!!!」

「はははははは!!!!やはりあの程度の念動力ではだめか!!!!やはり本命は」

パウツ!!

「翼刀オ!!!!」

時風達の目の前から、鉄翼刀が飛び出していた。

いくつもの刃を振り飛ばしながら、赤銅に向かうその姿はやはり兵

器と呼べるものか。

赤銅に襲い掛かる刃のすべてが半径二メートル以内に入った瞬間、バラバラと崩れて消滅していく。

そして、強力な力場が翼刀に向かっていき、赤い一閃光が三つ翼刀に伸びた。

その力場をヴァルクヴェインに絡めて叩き落とし、翼刀が先行を回避していく。

そして、接触。

ガン！という金属の派手にぶつかる音がして、ヴァルクヴェインと衝突したのは世界四剣が一つ、開剣・キーブレード。  
しかも、ただのキーブレードではなく、その始祖たる一本「ブレード」。

赤銅はそれを持つことなく、力場で浮かせて使用する。

赤銅の眉が少し上がり、翼刀と数回打ち合ってから離れる。

「主が、吾が舞い手ぞ？」



「舞えるかはわからないが、お前の相手となる人間だ」

「左様か」

ギヤ、バツ、ギイツツ！！

そして両者がその場から移動していく。

剣技を、拳技を

己の肉体と己の刃を衝突させて、流れるように交錯していく。

「はははははは！！やはり、やはり！！単純に力で対抗させるよりも、特性を伸ばした方がよかったようで！！」

「やめ……させる……！！！！」

興奮して上空の戦いを眺めるレジエス。

その背後に時風がよろけながら現れ、「火」の切っ先を向けている。

だがその剣はカタカタと震えており、全身から力が抜けているのが、見て容易にわかった。

「止める・・・？なぜですか。彼らは今、自らの存在意義を世界に刻んでいるのですよ？」

「それで迷惑をこうむるものがあるだろうが・・・！！！」

「目的は達成されましたから、問題はありません」

「このやろつ・・・お前だって死にたいわけじゃないだろう！！  
お前の最終目的は」

「これが最終目的ですよ。これ以上なんてありません」

「・・・・・・な・・・・・・に？」

「最終兵器の対となる兵器の開発。それが目的です。こうして達成した今、これい以上望むものはありません！！」

「こいつは・・・・・・」

レジェスは笑う。

これ以上ない喜びに、顔を歪ませて。

彼は、否、彼らは  
遙か先祖からの遺志を継いで生きてきた。

ある代からは、記憶の継承も（人格を破壊しない程度に）行われた。  
ゆえに、この男にはこれしかないのだ。

開発した

その先には何も無い。ここが、彼の終着点。

「舜君！！ここは危ないよ！！」

「なのは！？」

赤銅と、翼刀の戦いで周囲が戦渦に巻き込まれていく。  
その中で、なのはが時風を連れ戻そうとするが時風はレジエスを引  
つ張り出そうと前に進もうとする。

「おいこの野郎！！このままだと死ぬぞ！！」

「舜君だってこのままじゃ死んじゃうって！！」



いまこの封印地の情景は、そのみであった。

世界を破壊する翼人と、それに対応すべくして存在する対翼人兵器。この程度で済んでいるのは、翼刀が抑え込んだの戦闘をしているからか。

「なんで……あいつはまだ戦ってるんだ……？」

レジェスは死んだ。

機関は壊滅。

ならばなぜ、鉄翼刀は戦うのか。

「楽だからだ。何も考えず、ただ戦えばいいのは」

それに、蒔風が応える。

クラウドが大剣に寄りかかって空を見上げ、一刀が座り込みながら肩を抱え、下を見る。

確かに

何も考えることなく戦い、身体を動かすことは何より楽だろう。

走ってる時にごちゃごちゃ考える陸上選手はいない。

全力で拳を交える時、頼るのは主に直感だ。

死闘を演じているときに、余計なことを考えれば自分が死ぬ。

だから、人は戦う前に覚悟を決める。

ゆえに、人は戦う前に信念を固める。

なので、人は戦う前に誇りを抱く。

その戦いののちに、未練を、後悔を遺さないために。

その三本で、心を支えるのだ。

穢れぬために、誇りを持ち

止まらぬために、信念を貫き

恐怖に負けぬよう、覚悟を決める

だから、この戦いで

「鉄翼刀は……この戦いで終わりにする気だろう……」

「そんな!?!」

綺堂唯子が、悲痛な声を出す。

しかし、身体は動かない。

無理もない。翼人ですらこの体たらくなのだから。

しかし、その希望を受けて、一人の男が立ち上がる。

「連れ戻すことは出来なくても……」

勝ち目がなくても、立たなければならないという

「戦いを、止めにでも行こうか……」

翼が開く。

希望を乗せて。

銀白の輝きを、放っていく。

しかし

希望は、打ち碎かれる。

「ガアウッ!？」

時風が、胸を押さえて倒れる。  
上空の煙が晴れ、その中の赤銅が時風に  
ブレードを向けていた。



「其の方は何ぞ也？」

「う……が……」

「不可思議為る心境の」

「開け……るな……!!!!」

「其の方は一体何ぞ？」

「それを……開けるなあああアアアアアアあああああ!!!!」

パン

時風が咆哮し、それと同時に何かが開く音がした。

t o b e c o n t i n u e d

## 赤銅の力（後書き）

はい！！

実は女性だった赤銅の翼人！！

そしてレジェスの死、機関の壊滅でした！！

では、語られることのなかった裏設定をば

レジェス

本名：リヨウマ・J・スカリエッティ

あのジェイル・スカリエッティ（オリジナル）の子孫

ただし、この研究はその代からの物ではない。

人体改造技術を「古臭い」と言ったのはそのため。

現代でその名前がテロリストとして知られ、本名を語るのを嫌がっている。

だからイニシャルで「R・J・S」で、「レジェス」

あくまでも自分はただの科学者である、という考えらしい。

どうであれ、人生の目標を達成できた彼の人生は、最期には幸せなものだった。

赤銅の翼人

本名と言われるような呼び名はない  
性別は女性

卑弥呼曰く「破壊そのもの」であり、救うことは不可能らしい。

かつて彼女を救おうとして奔走した観測者もいたが、最終的に彼女を救うことが出来なかった。

それはその人物の力不足ではなく、作戦が成功したにもかかわらず、彼女は救えなかった。

そんな彼女の救いは、もはや消滅にしかない。

翼色は赤銅（黒みがかった赤）

司る感情は「怒り」

使用する剣は世界四剣「ブレード」

見た目はキングダムハーツバースライスリーの物と同じ。  
取っ手だけは赤い。

司る感情、世界四剣

そのどちらも、特性は「解き放つ」こと

一体、蒔風はどうなるのか。

ここから先が、RE：BIRTH！！

次回は短くなるかもです

次回、蒔風・回帰  
ではまた次回

みなさん！！

コミケですよ、コミケ！！

蓋 開かれるとき

心が軋む

押し込めていたものが、溢れ出す。

(止めてくれ)

タガが外れ、それが胸から広がって全身の末端にまで染み渡る。

重い

暗い

辛い

(出て……来ないでくれッ……!)

「それ」に向かつて

手を伸ばす

掴む

だけど、「蓋」<sup>それ</sup>は様々なモノにほどけて行って、手の中から消えてしまった。

脳が知覚する。

目の前の状況と、そこから導き出される、結果を

心が、悲鳴を上げる。

耐えられない 絶対に嫌だ 逃げ出したい

俺は

今

なんで

声が聞こえる。

でもそれどころじゃない。

抑えられない。

自分は何処かに行ってしまった。

見えない　できない

あの自分じゃなきゃダメだ。

あれが完成形だったんだ。

あれが憧れの形だったんだ。

あれがなくちゃ、俺は何もできない

震えるだけの、哀れな人間。

そんなのは嫌だ。

だから組み上げたのに。

外して、そのまま消されてしまった。





弾けたように倒れた蒔風が、上空の赤銅を見上げて震える。

ブレードが振られ、蒔風の足元に横一文字の切り目が出来た。

だが蒔風は何もできず、地面にその後が出来てからあわてはじめた。

「く、来るなッッ!!」

「……面白き、者よな」

その蒔風を見て、赤銅が短く呟く。

そして、翼刀に視線を戻した。

もう興味はないとでもいうように。

赤銅は翼刀と再び交戦、焦土を作り出す。

「しゅ、舜君!!大丈夫!？」

「だ……ダメだ……動かない……」

蒔風の首が、震えながら向く。

その顔は半笑いで、どうすればいいのかわからないという表情で。

「え？」

「身体が……心が……!!ビビッて……動かないんだ・  
……」

自分の体を抱え、地面に座り込む時風はカタカタと震えていた。

噴き出してきた恐怖。

自分の命を脅かす存在に、全身全霊が警告音を上げている。

逃げる

忘れていた感覚が、よみがえってくる。

押し込み、蓋をしていた、自分が。

理解し、恐怖することもなかったものが。

「俺は……もう戦えない……!!」



「弱体化された状態であの戦い……赤銅の翼人はどこまで……」

別次元。

それが目の前の状況だ。

自分たちが万全なら、まだ余地はあったかもしれない。

だが力を吸われた状態で、しかもここから先は翼刀の干渉を受けるのだ。  
勝てるわけもない。

9067

「……止める……か？」

「止めない。俺も同じ考えだし」

が、クラウドは剣を担ぎ上げていたし、一刀も流星剣を取り上げていた。

この二人は、この戦いを止めるつもりだ。  
無理かもしれないどころか、まず無理な話だ。

だが、行かねばなるまい。

そして、最初の一步を踏み出そうとしたところで、上空の二人に動きがあった。

ガッツ、ドオン!!

「ゲアツ!？」

「.....」

翼刀が無数の刃をまき散らしながら、大地に叩き落とされていた。その落下地点に向かって、赤銅もまた、膝を下に向けて落下していた。

落下地点から上空の赤銅に刃が飛ぶが、それはすべて空中停止し、塵になって消滅していく。

ズ、ゴガンツッ!!

重い音。

翼刀の倒れていた場所はさらに深いクレーターになって窪んだ。

「……………む？」

だが直撃を食らいながらも、その足首を翼刀は掴んでおり、思い切り振り上げて投げた。

そこから着地する赤銅だが、自身の体の調子確かめるかのように掌を見て、腕を曲げる。

9069

「そうか……………其の方、先の戦にて疲労、溜まっておるのな？」

「……………だ……………からなんだ……………」

その言葉にゲホツ、と息を吐きながら、翼刀がゴキゴキと肩を回して立ち上がる。

それに対して

「吾が体も、永久の眠りより覚め、まだ真なる力、無く」

「全力じゃないってか？お互いに」

「肯定せり。故に、吾も、其の方も、体を休むる要有りとす」

「休め・・・だど？」

赤銅の提案。

しかし、その真意は読めず

その言葉に、翼刀は反発し

「俺は休みたくない・・・あんたと戦つてると楽なんだ！！辛いことを思い出さなくて済む・・・闘ッ・・・」

赤銅に胸を打たれ、ぐったりと気絶する。

「其の方には、やらねばならぬ事在り。吾が願いを、果たさんが為に」

その体を、赤銅が抱えて上空へ

それを追って、クラウドと一刀が飛び上がっていく。

が、クラウドは空中で雁字搦めにされてから錐揉みで地面に激突。一刀は力場の大砲のようなものに叩きつけられ、クレーターを作ってその中心に埋まった。

「クラウドさん!! 一刀くん!!」

「グお・・・お・・・」

「ゲはっ・・・ガハッガハッ!!・・・」

その場にはやとリインフォースが駆け寄るが、二人は满身創痕。立ち上がるうとするが、その手足は地面をはうばかり。呻き声だけで、応答も何もありません。状態だ。

「夜天乃書・・・真なる姿なる也？」

「なに？」

「・・・気になす事無し。其の方に関わり無き事」



地上の様子を見て赤銅が呟く。  
それに反応するリインフォースだが、それには答えない。

赤銅が、天に手をかざす。

すると、その場に巨大な雲が浮遊してやってきた。

「あれは……」

その雲は、積乱雲のような形。  
大きさにして、高さ十キロはあるうか。

その雲が、晴れていく。

風でもなく

彼女の力場でもなく

それはその雲の中から、巨大なモノが出てきたことによるものだ。

「ッ……！！　なんだ……あれは……」

「都市？……いや、要塞、か？」

空中都市や浮遊要塞

人によって表現は違うだろうが、それはそういった類の物だった。

空を行く、巨大な物質。

上方は都市のようになっており、下方は尖った岩がむき出しの状態。その中層に当たる場所には、リング状に岩が均されている。

あまりにも巨大な、要塞都市。  
それが、宙に浮いている。

「な……」

「あれが……赤銅の翼の戦力!？」

翼刀を抱えた赤銅は、それに向かって飛んでいく。  
点ほどにも見えなくなったそれに、一同は啞然とするばかりである。

「あれは……なんなんだ……!!」

「……天空要塞」

ハクオロの言葉に、リインフォースが答える。

「あれは……超巨大天空要塞ラピュタ……」

その巨大な物体が、バチバチという音と共に姿を消していく。  
光学迷彩か、赤銅の力かは分からないが、途方もないものだという  
ことだけは明らかである。

「どうする……?」

「……翼人の三人もこれや……いまは……引くしかあらへん」

はやてが、最終決断を下す。

翼人三人のうち、二人は重傷、一人は戦意喪失。他のメンバーも、戦える状態なのはごくわずか。

「……帰ろう」

一同、帰還

しかし、残された傷跡はあまりに大きい。

t  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d

## 蓋 開かれるとき（後書き）

みなさま、あけましておめでとーございます！  
でももう一日たってからという遅さwwww

一応活動報告では上げたんですけどね

機関の兵器たちは、すべてこの赤銅に対抗すべく作られました。

恐ろしい切れ味の刀

世界四剣を破壊すべく作られた（結局かなわず）

超威力の銃

物量でいけばいいのか（作ったはいいが、人数的な問題でアウト）

死人兵士

渡航能力者を弄るうちに獲得。のちに資金獲得のために売り出す。

模造兵士

渡航能力者の戦闘訓練人形。これも資金の為に売り出される。

ガイアメモリ、G4システム

上記の銃では無理だった理論を再構築して押し上げたもの。

超能力兵士（多那砂 此乃道）  
赤銅の持つ「念動力」に対抗したもの

また、この機関はおおまかに「先祖からの課題を成し遂げる者」と「あとから入ってきた者」の二つに分かれます。

つまり、あの場にいたのは全員ではないということです。  
機関としては壊滅しましたが、まだ残党はいるわけですよ。

実は

この機関への資金援助しているのが「財団X」だったということも考えた（死人だし、超能力だし）のですが、設定あったところで話に出てこないのがカットしました。  
でもどこかで出てくるかも。また数章後くらいに。思い出したように。

さて、赤銅の翼の特性「怒り」と「ブレード」によって、時風の「蓋」が外されてしまいました。

元々の時風は怖がりの人間です。  
まず戦いに身を投じる人間ではありません。

だからそれが嫌で「蓋」を構築して、理想の自分になりました。  
自覚したうえでの自己催眠に近い感じですよ。

「蓋」の構築は高校生の時にして、完成した物です。  
それに少しずつ手を加え（パッチ当てる感じ）、今の状態にしたので、もう作ることはできません。

その完成に至るまでに、好奇心で至ってしまったのが「死の理解」だから蓋を外されれば、当然こうなるわけですよ。

天空要塞ラピユタ。

ジブリ映画のやつの木がない奴だと思えばいいですよ。  
ただデカイ。

最初からこれは考えてました。

まさか去年（もう去年なんだよなー）テレビでやっちゃったとは思わなかったけど。

対比の感覚としては……

人間：聖王のゆりかご⇨聖王のゆりかご…ラピユタ



みたいな感じで。  
デカス・ギル

一体、赤銅は何処に消えたのか。  
そもそも、破壊を振りまくことをやめられるのか？

恐怖を感じ、戦えなくなってしまった時風はどうなるか……  
立ち上がれ！！銀白の翼！！

そして、気になるあいつは！？

次回、束の間の休息？

ではまた次回

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1043/>

---

世界をめぐる、銀白の翼

2012年1月2日01時52分発行